Book 一: 真の神　True God

第一章 神様の本体

一　神様は無形の主体であられる

一) 無形でおられる神様

神様はどんな形態ももっていらっしゃいません。大きいと言えば無限大です。小さいと言えば無限に小さい方です。

神様は果たしていらっしゃるのでしょうか。誰かがつねって「あっ」と叫ぶことよりも、おなかがすいて御飯を食べるよりも、もっと事実的に感じることができる神様がいるのでしょうか。問題はそこにあります。本当に神様がいらっしゃるとするならば、問題はすべて解決されます。

人間には心があります。心は見えないので、ないようですが、あります。心はどこにあるのでしょうか。頭にあるのでしょうか、心臓の中にあるのでしょうか。心は、私の体の中のどこにでもあります。私の体の中にないところはありません。同じように神様がいらっしゃるならば、神様もこの世界が神様の体のようなものなので、この世界のどこにでもいらっしゃいます。

神様を見ることはできません。皆さん、力が見えますか。神様はエネルギーの本体であるので、霊界に行っても見ることができません。

知恵の神様、全知全能なる神様は、中央で思いどおりに振る舞うことができる無形な存在としていらっしゃいながら主管することが一番便利だと考えられたのです。神様は無形であるだけに、存在世界を思いどおりに突き抜けてきたとしても少しも支障を感じません。皆さんは体がありますが、神様が来て思いどおりに過ぎたとしても皆さんには分からないのです。神様がこくりこくりと居眠りしている皆さんの体を思いのままに踏んでいったとしても分からないのです。それでどんなに便利でしょう。ですから神様は考えた末に見えない神様としているのが一番便利だろうと思い、見えない神様になったという論理は妥当な論理です。

私たちは空気が通っていることが分かりません。空気が通っているのにそれを感じられません。空気が通っているのを感じられないのに、神様が通っているのが分かるのかというのです。神様は無形の神としていらっしゃるのが最高の便利な方法です。そうしながら、この大きな宇宙をふろしきで包んでも余りある、そのような神様でなければならないのです。無形の神様ですが、神様の心はこの宇宙よりも大きいものを要求しているのです。

皆さん！　愛をもっていますか。生命をもっていますか。皆さんの血統を継ぐことができる精子と卵子をみなもっているでしょう。良心ももっていますか。それでは愛を見たことがありますか。生命、血統、良心を見ましたか。その存在の現象は知っていますが、触ることも見ることもできないことを知らなければなりません。ただ心で感じてこそ知ることができるのです。同じ論理で神様がいるのかいないのかと言う時、または神様を見たのか見なかったのかと尋ねる時、見なかったと言うことができないのです。

心の中に神様が入ってきて、いらっしゃれば心が分かります。神様が心の中に入ってくれば壁も突き通して見ることができ、じっと座って何千年前に死んだ聖人たちを運行させることもできます。永遠なる神様が心の中に入ってくればそのようにすることができます。永遠を時間ではとらえることはできませんが、永遠の中に時間があります。ですから神様は見えなくても心は分かるのです。

神様はどのように愛するのかと言う時に、答えるのが大変でしょう。神様は無形の神なのでどこでも通ることができることを知らなければなりません。若奥様の目の中に入って心臓の中にも入って……。どこにでも行かないところがないのです。すべてに通じるのです。それでは、神様はどこに住んでいるのでしょうか。神様の住んでいる家は私たちの心の真ん中です。男性の心には神様の男性的心情がとどまり、女性の心には女性的心情が入って生きるというのです。

全知全能なる神様、すべての天下を料理される神様がここにいるとしましょう。力で言えば太白山も吹き飛ばし、地球にも穴を開けることができる能力の神様なのですが、そのような神様を皆さんの目で見ながら生きるとしたら生活することができると思いますか。神様が見えなくて良かったというのです。見えれば皆さんは神経が衰弱して一時間も我慢できないのです。ですから神様が見えないことを有り難く思わなければなりません。これは笑い話ではありません。今までの話は私がそのような問題を中心として深刻に通過してきた経験談です。他人のことを言ったのではなく、私が今までたどってきた経歴報告のような話です。

もしこの世界に空気が一升しか残っていないとすればどうなるでしょうか。神様が意地悪い方ならば、世界統一は問題ありません。多分五分以内に統一されるでしょう。神様が空気をすべてもっていって「お前たち統一するのか、しないのか」と言えば、世界人類が合唱して「統一します」と言うのです。そのようにすれば一遍に統一することができますが、神様が空気をもってそのようにされないことは有り難いことです。空気がなければ私たちは生きることができません。このように空気は生命に絶対に必要な要素です。ところが空気に対して有り難く思いもせずにどろぼうみたいに使っています。*

天宙の大主宰なる神様が人間の目に見えるようになれば、神様をお互いが奪い合おうとしてけんかをするでしょうか、しないでしょうか。このけんかを防ぐ道がないのです。神様が見えなくて良かったのです。もし神様が見えたとしたらアメリカとソ連がお互いに自分の神様だと争うでしょうか、争わないでしょうか。争うのです。その争いを誰が止めることができますか。神様は全知であられ、こんな争いが起こるかもしれないので無形でいらっしゃるのです。神様が見えることを願うのはばかげた行為なのです。見えなくて良かったのです。

この宇宙は神秘に包まれています。その大きさが二百十億光年にもなる大宇宙です。一光年とは光が一年間かかって行く距離を言います。一秒間に地球を七周半も回ることができ

る光ですが、この光が一年間かかって行くのが一光年です。それではこのように大きい宇宙を支配することができる主人はどれほど大きいでしょうか。背が高いとすればどれほど大きいでしょうか。神様がそれほど大きければ神様自身が足手まといな体を引きずって歩き回ることができるでしょうか。ずるずると歩き回るとすればどれほど大変でしょうか。一度動けば、宇宙が全部驚き倒れるのです。神様は知恵深い方です。それで「見えない主人になろう」と考えたのです。

それでは神様がどれほど重いですか。それを考えたことがありますか。神様がどれほど重いですか。斤数で量れば何斤になるでしょうか。何億万トンになるでしょうか。重ければその体で歩き回るのは大変ですが、神様は無形でいらっしゃるので理想的です。財布に入れて歩いても重くありません。また、無形なのでどんなに狭い針の穴も通り抜けることができます。思いどおりに運行できるのです。大きいと言えば大きいのに、小さいと言えば無限に小さく、この宇宙どこにでも思いどおりに運行することができるのです。

一番貴重な物があったとしたら、いつも持ち歩きながら、一時もその物と離れたくないのです。それでは最高の宝物といえる神様を持っているとすれば、その方をどこにしまっておきたいでしょうか。安全にしまっておくことができる倉庫があるとしたらどこでしょうか。その倉庫が私たちの心です。人間の心が神様を安全にしまっておくことができる倉庫です。

神様は無形なので、有形の存在を自分より重要視しなければならないという結論が出るのです。そうでなければ回らないのです。また、人は自分の体より見えない心と神様をもっと重要視しなければならないのです。

二) 本来は自然に分かるようになっていた

人類が堕落しないで本性の善なる父母を通じて生まれていたならば、神様がいるのかいないのかという弁論は必要ではなかったはずです。生まれながらにして自然に分かるというのです。赤ちゃんがおなかの中でお乳を飲む方法を習ってから生まれますか。生まれてすぐに目の前にお乳があれば吸うようになっているのです。自動的に分かるようになっているのです。人類が堕落しなかったならば、神様との関係を自動的に知り、自動的に解決し、自動的に行かなければならない立場であることを知るようになっていたはずです。ところが堕落することにより全部忘れ去ってしまったのです。それで神様がいるのかいないのかを疑う、結果の世界になったのです。これは悲惨な事実です。

人はこの宇宙の被造万物の中の傑作品です。どのくらい傑作品かというと、皆さんが察することのできないくらい大きく素晴らしい傑作品です。それでは絶対的な神様がいらっしゃって、人を造られたとしたら神様自身が言うこと、見ること、感じることを人間には分からないように造られるでしょうか。*

神様に似たアダムとエバが人類の父と母になったならば、その姿を通じていつも神様がいらっしゃることを歴史を通じて認知できるはずでした。もしそのようになったとすれば神様に対して疑うようなことはできなくなるの

です。堕落しなかったならば、いつでも見ることができ、呼べばすぐ現れるようになっていたのです。そのような基準になったならば、誰が神様は存在しないと否認するでしょうか。否認することができないのです。

「神様がいる、神様がいる」というのは言葉だけではないのです。原理を通じて主体と対象の関係を中心として見る時に、神様は不可避的にいなければならないという立場ではなく、神様は私が考える前にいたのです。私のすべての感覚、私の一切を主管する天ではないかという立場なのです。それを認識することが何よりも重要な問題です。知って認識するのが原則ではなく、認識して知るようになっているのです。
私たちは寒ければ寒いというのを知って感じるのではなく、寒いことを感じて知るのではないですか。これと同じように神がいらっしゃるなら神がいらっしゃることを皆さんが感じなければなりません。細胞で感じなければなりません。その境地が問題なのです。言い換えれば体恤的立場をどのように私たちが確定するのかという問題、これが問題なのです。

皆さんが寝ていても「お父様」と言うことができ、独り言でも「お父様」と言えなければなりません。御飯を食べるのも忘れ、寝るのも忘れながらその生活の裏面で父に対する懐かしさをもって「お父様」と言えば、父の手に捕まるようになるのです。夢のような事実が起こるのです。「お父様」と言えば父の懐に抱かれるのです。このような表現的圏において体恤的感情をどのように体得するのかということは信仰生活で何よりも貴いということを知らなければなりません。そのような体恤の感度、感じる度数、その量いかんがその人の信仰基準になり得るのです。そのような愛の心情をもったならばどこかに行って「私がこれをしなければならない」という時は、「天よ、共にいてくださるように」と言う前に既に神様は共にいるのです。このようなことを皆さんが感じれば、「有り難い神様」と言うようになるのです。

統一教会の原理は、神様は無形の絶対的主体として、二性性相の中和的主体としていらっしゃる方だと言います。二性性相であられる神様自身の分性的実体としてアダムとエバを造り、彼らが成長して愛を中心として横的に連結されるとき、縦的な立場で中心になろうとされたのです。それは何のことかと言えば、アダムとエバが成熟すれば神様の男性性相はアダムの心の中に、神様の女性性相はエバの心の中に入っていくということです。だからといって神様が分かれるのではありません。そのような二性性相の主体としていらっしゃる神様なので、アダムとエバの心の中に臨在することができるというのです。

神様は二性性相の中和的存在だというでしょう。中和的立場で愛を中心とした統一的存在ということは今まで話さなかったのです。そこに愛を中心とした統一的存在だということをつけ加えなければならないのです。

二　無形の神様は体が必要

一) 体をもつためにアダムとエバを創造

神様はどうしてアダムとエバのような形を必要とするのでしょうか。万物は形状的な形をもっていますが、神様は無形の存在です。神

様はどのような形ももっていません。大きいと言えば無限大です。小さいと言えば無限に小さい方です。そのような方がどんな標準的な形を形成し、形体を現したとしても実体をもった万物はその神様に直接主管されません。ですから実体をもった被造世界においては、実体をもった主人的人格と形を備えた存在がなければならないのです。神様は地上万物の主管だけではなく、無限な霊界も主管しなければなりません。天使長や様々な形体をもった実体、そして無形の実体までも主管するにはその中心的タイプ、すなわち形状が必要です。それで神様はアダムを創造されたのです。

アダムを中心に霊肉両面の世界、無形実体世界と有形実体世界を主管されようとするのが神様の人間創造の目的です。したがって一つの人格的実体と関係を結ばなければならないので、アダム完成とともに神様の形状完成、すなわち形が完成するのです。神様はアダムを造られる時、彼の形態、人相、人格などが無形世界の中心にいらっしゃる神様のような姿にならなければならない、という考えをもってアダムを造り出されたのです。形がなければ形の世界を主管できないのです。

神様はなぜアダムとエバを造られたのでしょうか。神様は無形でいらっしゃる方なので、実体の形状をもった父母になれなければ形状の子女を愛することができないので、体を着るためなのです。アダムとエバの創造目的は第一に、アダムの体を無形の神様が着ることであり、二番目は、体を着ることによって震動的な衝撃が来るようにするためです。言葉だけでは駄目なのです。この衝動的な刺激に喜びを感じるのです。三つ目は、神様は中心軸をもった垂直の父で面積がないので、面をもとうということです。

霊界に行っても神様を見ることができません。神様は見えないのです。皆さん、力が見えるでしょうか、力が見えますか。神様はエネルギーの本体なので、霊界に行っても見ることができません。体がないのです。ですから実体世界を指導して主管するためには実体をもたなければならないのです。神様はどのような神様ですか。アダムが堕落しないで完成して地上で暮らし、天上に行くようになれば、アダムの形状をもった神様になるのです。それで見えない神様と見えるアダムが一つになるのです。そのようになればアダムが「ははは」と笑うのは神様が「ははは」と笑うことになるので、それはすなわち宇宙が「ははは」と笑うことだというのです。何のことか分かりましたか。

無形の神としていらっしゃる神様では、この宇宙を相手に刺激を感じることができないのです。心自体だけをもってしては、どんなに刺激しても感動しないのです。無形では、同じなので刺激が来ないのです。これが互いに相反するもの、熱いお湯と冷水が合わされば爆発するでしょう。そのような刺激が必要だというのです。

神様は霊界でも無形です。形がありません。それで姿をもった人間の父母になるためには、姿をもたなければ中心になることができないのです。

神様の最後の創造目的は体をもつことです。実体世界を主管するためには無形の神様では

駄目なので万民の父母として体をもって現れなければならないのです。感覚器官をもって刺激を感じることができる主体と対象として立つためには、体を着なければなりません。

実体世界を造られた神様が無形であっては、実体世界を支配することはできません。それで体が必要なのです。（アダム・エバが）創造された目的は、神様も実体をもって実体の父母になるためです。その実体がアダム、エバです。アダム、エバが完成したならば神様は、アダム、エバの心の位置に入って神様を中心とした王権を成すのです。王権が成立するとともに父母権が成立するのです。父母権とともに本然のアダムは長子権をもつのです。

今日、次子権は必要ないのです。アダム自体が長子中の長子で、エバも長女中の長女でしょう。そのようになれば二人の息子、娘は、人類の父母中の父母になるのです。父母であると同時に、永遠な世界の王になるのです。

なぜ神様が人に体をもたせたのでしょうか。体のない神様がいたならどれほどいいかというのです。神様が一人でいればいいのに、問題となるような体をなぜ造られたのかというのです。神様自身は無形の神です。無形の神様が体をもった人間の先祖になることができないのです。体をもった息子、娘に対そうとするので、体をもった神様の立場へ出ていかなければならないのです。それでアダムの体が神様の体のようになるのです。しかし神様は、アダムの心のような位置より一層次元が高い世界の段階に上がっていくのです。何のことか、分かりましたか。

結局、神様は無形で形体が見えないので、形体を得て現れるのです。また、形体をもっている人間と万物を主管するために神様がアダムとエバの形体を着て現れます。そのようになればアダムとエバは神様と一体となるので、神様はアダムとエバの心のような方になるのです。アダムとエバの心の位置に神様が臨在して一つになったので、結局はアダムの内的な主人、内的なアダムのような方が神様だということを知らなければなりません。

なぜ人を創造したのでしょうか。この宇宙は実体があるので、実体の主人であるアダムとエバを中心として管理主導することができる立場に立つためです。神様は霊界で無形でいらっしゃるので支配することができません。それで実体の仮面をかぶり、実体の体をもつことによって、あの世で、地球で生産されてくる自分の息子、娘となる子孫を実体をもって支配することができる王になるために人を造ったのです。その王の顔がアダムの顔です。王を造ったので、王妃が必要なのです。王妃とは誰ですか。エバが王妃にならなければならないのです。アダムとエバは地上の祖先であると同時に、天上世界の祖先になるのです。

二) アダムは宗の祖先、有形の神様

神様は第一に、体を着るためにアダムとエバを創造され、第二に、愛を完成するために創造されたのです。このようなアダム、エバが完成し二人が一つとなることができる愛の実体になれば神様が臨在し、人類の前に愛の父母となるのです。そうして、神様の形状的実体の父母になったアダムとエバが実体の子女を繁殖することによって理想世界ができるの

です。そのようになれば、人間を通じて霊界と地上世界が連結されるのです。その目的もあって人間を造られたのです。それで神様が愛を中心としてアダムとエバに臨在されることによって人類の真の父母、実体の父母としていらっしゃってから、アダムとエバがあの世へ行けば、霊界でもアダムとエバの形状で体をもって父母の位置に顕現することができるのです。

実体をかぶった、神様の体で造ったアダムが、人間の先祖になるのです。言い換えれば、アダムは実体の神様です。無形の神様が実体の世界を主管するためには実体の体がなければなりません。それがあってこそ見たり聞いたりできるので、神様が実体の体として造られたのがアダムだというのです。それでは、エバとは誰ですか。エバはアダムの妻です。実体の妻です。それゆえアダムが実体をもった神様ならば、エバは実体をもった神様の妻です。神聖な神様が妻を得るというので驚くかもしれませんが、アダムは実体をもった神様の体です。エバは実体をもった神様の妻として創造されたのです。

神様がアダムとエバを必要とするのには二つの目的があります。一つは、愛の理想を成就しようとすることです。もう一つは、無形の神様が形状をもって現れるためなのです。ですから、無形の神様が有形の形状をもって有形世界と関係を結ぶことができるその基礎、その核心がアダムとエバなのです。

天の国に無形の神様が一人でいて何をしますか。見えない神様では何の意味もないのです。人間の父母になるには、体をもって感じることができなければならないのです。このような人間と同じ体を着なければならないので、体をもつために仕方なくアダムとエバを二重的存在として造らざるを得なかったということを知らなければなりません。

体をもった父になることで、見えない無形と有形が一つになるのです。それは宇宙が一つになることを象徴します。ですから神様の形状に似たそのような体をもつことができる姿として、アダムとエバを造ったのです。そうしてアダムとエバを天の国の王宮に、王座へ上がらせ、その王と王妃の心の中に神様がいらっしゃり地上世界と無形世界を統治するのです。神様の王国を造るのです。王国は愛の王国だというのです。愛の王国。愛を中心としてのみ霊と肉が合わさるようになっているのであって、他のものをもってしては合わさることができないのです。

エバは未来において、神様の王女です。王女であると同時に、将来の神様の相対でした。エバを愛の相対にしようとしたのです。神様の夫人となるのです。なぜそうなのかと言えば、愛を分かち合うためには体が必要です。体が必要なのです。あの世へ行ってみれば神様は無形です。空中で太陽のような光が二十四時間いつも浮かんでいるのです。空中から神様がみな無形で管理しているのです。その無形の神様が、実体をもった人間の愛の対象ではむなしいのです。ですからアダムとエバは無形の神様の愛の理想の絶対作品です。パートナーとして体をもったアダムとエバを造ったのです。神様は誰の姿かと言えば、アダムとエバの姿です。一つは内的な父であり、

一つは外的な父なのです。一つは内的な父母であり、一つは外的な父母だというのです。

神様は愛を共にするために天地を創造したのです。ですから男性と女性を、無形の神様が永遠の愛の実体として登場させるのです。愛の中心の実体として登場させるのが人類の善なる真の先祖、真の父母なのです。皆さんは真の父母をもてませんでした。しかし今日、統一教会には真の父母の教理があります。

神様はアダム、エバをなぜ造ったのでしょうか。無形の神をもってしては実体世界を主管できないからです。無形の神をもってしては、見えない神をもってしては、この見える世界、創造物、宇宙世界を支配することができないのです。ですから神様は、愛を中心として体を着なければならないのです。それで創造をしたのです。愛を中心として体を着れば、内外共に刺激が起こるのです。刺激が起こるのです。

無形の神様は実体がないのでその形体を身代わりしたのが真の父母だというのです。真の父母は個人的な父母、家庭的な父母、氏族的な父母、民族的な父母、国家的な父母であり、霊界に行ってもこれからは真の父母の形状で神様が現れるのです。統一教会が偉大なのはそれです。レバレンド・ムーンが偉大なのは何かと言えば、レバレンド・ムーンの形状を神様が使うというのです。何の話か分かりますか。

神様は、無形の神様なのです。無形の神様が、有形の神様として現れようというのです。有形の神様とは何ですか。堕落していない、私たちが言う真の父母です。

究極的に神様は霊的で無形なので、人間は直接神様から教えを受けたり重生の体験をすることができません。それで神様は中心人物を立てて、人間が彼を通じて教えを受け重生を体験することができるようにされました。この方が正に有形、無形の真の父母です。

神様がアダムとエバを造った目的はどこにあるのでしょうか。私たち人間の形状を見なさい。体をもっているのです。しかし無形の神様は体がありません。体を着なければ、体をもたずしては霊界世界や地上世界を治めることができないのです。それで神様がいらっしゃったとしても、神様が人間の父母として現れるためには体を着なければならないのですが、その体を着た代表が誰かと言えば、アダムとエバだというのです。堕落していないアダムとエバの体をもって現れるのです。そうすることでアダムとエバは人類の始祖であると同時に、天地を主宰する神様になるのです。

実体をもった神様、すなわち永遠な無形世界の神様の形状を代わりに着て現れた立場で、父母の立場で世界を統治する責任がアダムとエバにあったのです。

神様は、神様と人間が主体と対象として縦的な愛の関係を完成することだけを目標にされてはいませんでした。縦的な愛を完成し、アダムとエバの横的愛の結実をもたらそうとされたのです。その瞬間が正に、内的父母であられる神様が外的父母であるアダムとエバと完全一体を成すために臨在される、愛の理想の成就の瞬間です。無形の父母であられる神様が、アダムとエバの形状を使って有形世界

に永存される父母になるのです。この時アダムとエバは、真の父母、真の先祖となるのです。

三　神様は人格的な神

一) 神様は知情意をもった人格神

今日、多くのキリスト教信者たちは、神様は唯一無二のお方であり、絶対的な方であり、創造主であり、至高至善の位置にいらっしゃるので、被造人間すなわち被造物と創造主は関係をもつことができないと考えます。被造物は俗なるものであり、創造主は絶対的で神聖な方であると見ます。しかし愛の概念を中心として見る時、至高至善の神様であり、どんなに低俗な被造物だとしても愛の関係を結ぶためには人格的内容が同じでなければなりません。心情的内容が同じでなければなりません。人格を備えた人間と性稟が同じでなければならないのです。

神様は、どんな神なのでしょうか。人格的な神です。知情意を合わせた内容をもった人格的な神です。そのような人格的な神が最高に願うのが愛なので、その愛の対象として私たち人間を造ったというのです。これは驚くべき事実です。

神様は第一原因的存在ですが、人間をどのように造ったのでしょうか。神様と同じように造ったというのです。神様と同じように造るのに、神様の形状をかたどって、形状どおりに造りました。その言葉は何を意味するかと言えば、私が父に似ると同時に父は誰に似ましたか。私に似たというのです。それで答えになります。ですから神様を模索してみると き、神様はどんな方ですか。私のような方だと言えば、さっと入ってくるのです。

神様は誰に似たのでしょうか。神様の必要とするものが愛ならば、神様が愛するのに、神様に似たものを愛するでしょうか、神様と似ていない動物の子を愛するでしょうか。神様は喜ぶことができ、愛を分かち合うことができる相対的なものを必要とするのです。ですから人間がそのような相対ならば、人間を中心として見る時、神は人格的神でなければならないという結論が出てくるのです。そうでありながら、人間とはすべての要素が一〇〇パーセント和合しなければなりません。体と心の素性において、すべてが和合することができる神でなければなりません。ですから神様は、知情意をもった神でなければならないのです。

神様がいらっしゃるのならば、人間とはどんな関係なのでしょうか。神様が人間と関係をもつためには、人格的神でなければならないのです。人格的神になるには、人間と同じでならなければならないのです。人間には心があり体があるのと同じように、このような素性がある人間を造られた神様も、人間と共に共同目的をもつことができるその本体ならば、人間に似なければならないというのです。二性性相という概念はここから出てくるのです。

さあ、それでは、神様も人間のような人格をもっていますか。人と同じならば神様は男性でしょうか、女性でしょうか。それでは男性と同じようにぶら下がったものがあるでしょうか、ないでしょうか。神様は何性相と言いましたか。二性性相の主体なのですが、凹凸

があるでしょうか、ないでしょうか。それを考えたことがありますか。

神様が笑うでしょうか、笑わないでしょうか。神様が笑うのを見ましたか。神様も目があるでしょうか、鼻があるでしょうか、口があるでしょうか、耳があるでしょうか、体があるでしょうか。既成教会の信者たちをよく見てみると、でたらめです。神様に目があるのか、ということも知りません。目を本当に見たかと言えば、知らないのです。神様は誰に似ましたか。誰に似たのでしょうか。神様に似たと言うのです。そんな答えがどこにありますか。神様は誰に似たのですか。息子、娘に似たのです。それで神様は人格的神でなければなりません。人格的神として神様が、私に人格的最高の基準を要求するのです。人格的最高の基準とは何ですか。それはお金でもなく、権力でもなく、愛なのです。

神様がいらっしゃるのならば、神様も人格的神でなければなりません。人と同じでなければなりません。人格的神だということは、知情意を備え、感情とか、またはみ旨を中心として目標とか、そのようなすべてのものが具体的でなければならないのです。

神様は、知らないものがありません。知識の大王であられ、能力の大王であられ、全知全能であられるというのです。また、遍在されます。いらっしゃらない所がありません。この方が必要なものとは何ですか。ダイヤモンドですか。それはいつでもつくることができます。黄金ですか。宝石ですか。神様が必要なものは愛です。神様が一人でいて「ああ、愛があってとてもいい」と言い、「ひひひ」と言いますか。神様が必要なものとは何ですか。神様も人格的神ならば口があるでしょう。鼻もあり、目もあり、耳もあり、手足もあり、心もあり、心情もあるでしょう。人格的神ならばです。

神様はいったいどんな方なのでしょうか。全知全能で、遍在され、ただ一言で世界を殺したり生かしたりする……。そのような神様を私たちは必要としません。私たちの本心は、どんな神様を願うでしょうか。「愛をもって、私のお母さん、お父さん以上の愛で愛さざるを得ない方なのだな。我が国に義なる国王がいるとすれば、義なる大統領がいるとすれば、その国王以上、その大統領以上の方なのだな」と、こんな方を願います。大統領は四年ごとに変わるので慌ただしくて、別に尊敬するほどでもありませんが……。

今日、この世界を探し求めてこられた神様がいらっしゃるとしたら、その神様は知情意を備えた神様であることに違いありません。なぜでしょうか。人間がそうだからです。それは人類を中心とした知情意ではなく、天倫を中心とした知情意です。

絶対的神様は、悲しむことができるでしょうか、できないでしょうか。全知全能なる神様は、悲しみの場を避けることができるでしょうか、できないでしょうか。その悲しみとかかわることができるでしょうか、できないでしょうか。これは深刻な問題です。私たちのような人間は、それをそのまま通り過ぎることはできません。絶対的である神様は絶対的に悲しみがあってはならないと言うならば、その神様は知情意をもった、喜怒哀楽の感情

をもった人間の父となることはできないのです。論理的に矛盾します。ですから神様は、私たち人間よりももっと喜怒哀楽を感じることができる主体とならなければなりません。

神様に対して正しく証した宗教団体はありません。仏教でも儒教でも、みな同じだというのです。神様と言えば、すぐにあぜんとして物が言えなくなります。彼らは人格的な神様、知情意を兼ね備えた神様を知らないのです。しかし統一教会は、神人一体を主張しているのです。それが偉大だというのです。

統一教会が誇ることができるのは、神様をよく知っているということです。神様をはっきりと知っているというのです。神様は、知情意を備えた人格的神であると同時に、愛の主体だというのです。それを私たちははっきり知っています。その愛の神は、天情が中心なのです。天情の中心位置は行ったり来たりできないのです。

二) 神人一体の人格神を要求

神様も知情意をもった方であられるだけに、神様にも願いがあり、事情があり、心情があります。神様の願いは何で、神様の心情が何で、神様の事情とは何でしょうか。人間の事情よりも先に知らなければならないこととして、これさえ知ればいいのです。これさえ知れば、自然に人の願いが何であるか一遍に分かるのです。なぜでしょうか。人間の目的は神様であり、神様の目的は人間なので釣り合うのです。人間の事情をよく知って、願いをよく知って、心情をよく知る人は、神様の願い、神様の事情、神様の心情と通じることができるのです。

愛を論じるならば、人格的神でなければなりません。情緒と、人格的に人と同じ素性をもった神でなければならないのですが、そのような神を提示した宗教はキリスト教以外にはないのです。神様を父と言ったのは偉大な発見だというのです。神様を父だと言ったのです。神様を父だと発見したという事実は今先生が話す、神様を内的父と外的父と見て実体に一致する愛によって統一的な権限をつくろうとするその基準、確実にこの基準までは発見できませんでしたが、そんな内容を暗々裡に解明することができる標題を掲げたという事実は驚くべきものです。そして唯一神を論じました。ですからこの宗教は世界的宗教であり、世界がこの宗教を中心としてまとまることができるというのです。この宗教によって世界が一つになることができる道を立てていくと、このように見るのです。

今日、数多くの道がありますが、心情を通過することができる一つの道が歴史路程において現れませんでした。そのような道は必ず現れなければなりません。もしそれが現れないとするならば、神様はいらっしゃらないのです。人間が守らなければならない社会的倫理と道徳を教えてくれる道もあり、無限な霊界を教えてくれる道もありますが、倫理道徳と無形世界に対する教えを統合し、一つの心情の骨子の上にあげられた宗教がなければなりません。そんな宗教を探してみると、キリスト教だったというのです。キリスト教は心情の宗教です。人間は堕落することによって神様を失ってしまい、神様が私たちの父だとい

うことが分からなくなったのです。実体をもった真の父母を失いましたが、キリスト教はその真の父母を紹介することができる宗教です。

哲学の最後の終着点は、神様を発見することです。その神様はどんな神でしょうか。絶対的な神、不変の神、唯一の神です。神様を発見することにおいて、その神様は私たち人間に必要な人格的神でなければなりません。私たち人間と関係を結ぶためには、私たち人間が考えるすべての内外を備え、意志を備え、理想を備えた人格的神でなければならないというのです。すべての面で通じることができる、情緒面やみ旨的な面や、または知識的面で私たち人間と通じることができる、完全に関係を結ぶことができる神様でなければ、どんなに神様がいると言っても私たちとは完全にかかわることができないのです。このように見るとき哲学は、人格的神にならなければならないという標題のもとであがめ尊んでこなかったのです。

神様は誰に似ましたか。息子、娘に似ました。皆さんは誰ですか。神様の息子、娘です。神様に似たのです。そして神様は人格的な神です。神様がつまらない神様でいいでしょうか。キリスト教の驚くべきことは、人格、愛を中心として、知情意を中心として情緒的な人格的神を論じたということです。これが偉大です。そして唯一神を論じました。
神様が人格的神ならば、神様に愛が必要でしょうか、必要ないでしょうか。私たち人間が神様の息子、娘として生まれ、神様に対して父だと言うなら、父が必要なように私も必要なのです。私も必要なように父も私が必要なのです。

人格的な神がいるとすれば、その神を中心として何が連結されなければならないでしょうか。皆さん、神様と言えば高いところにいらっしゃると言うでしょう。そこに私の体が連結されるでしょうか。違います。心が連結されるのです。人格的な神であり第一原因なる存在の神様を中心として人生を生きていくのに、垂直のような心を中心として生きていくのであり、地球星が太陽系を中心として角度を合わせて軸を成して公転しながら一日、二日、三百六十五日と回るのと同じように、回りながら生きていくのです。このように見なければなりません。

神様がいらっしゃるならば、神様の摂理を通して行かなければ、世界が未来に希望を残す何ものもないという、論理的な結果として結論を下すことになりました。ここにおいて統一教会が出てきて、神様がいるという実存性と、知情意の完成基準に立った人格的神を認定し、心情圏を中心とした理想世界を実現しようとしたのです。統一教会が初めて、神と人間の関係を確実にしたというのです。

四　神様は父であられる

一) 神様と人間は父子の関係

神様と人間は父子の関係ですが、どのようにしてそのような関係が結ばれたのでしょうか。神秘の境地に入ってこの宇宙の中心が何であるかと尋ねると、父子の関係だという答えを得るのです。宇宙の中心とは何でしょうか。一言で、父子の関係です。

天地の中心と宇宙の根本とは何ですかと、神様に祈祷してみれば、父と息子、娘の関係、父子の関係だと言います。分からない人は、

肉親の父、母、息子、娘との関係だと思うでしょうが、神様との根本関係を言っているのです。

神様がなぜ人間を創造されたのかといえば、一人でいれば刺激がないからです。喜びとは相対関係によってわきいずるものです。一人では喜びの刺激を得ることができません。神様の相対的位置に立って初めて最高の愛を得ることができるのです。そのようになれば、神様の性相がそのまま実体化されます。神様が悲しくなれば人間も悲しくならざるを得ません。ですから人間と神様の関係は離そうとしても離すことのできない不可分の関係です。どんなに研究してみても、ここに到達するようになるのです。

神様と人間が父子の関係だと言いましたが、父子の関係がもつ特定内容とは何でしょうか。父と息子が出会うことができる最高の場は、愛が交差するその中心、生命が交差するその中心、理想が交差するその中心です。そのようになれば愛と生命と理想は一つの場所にあります。その場所に行けば神様も愛であり、私も愛であり、神様も生命であり、私も生命であり、神様も理想であり、私も理想です。それを決定することができる最初の因縁が、父子の関係です。

神様は私たちに愛を与えるとき、どれくらい与えたがるのでしょうか。神様の愛はこれくらいならいいだろうという限界を引いて与える、そんな愛ではありません。無限に与えようとする愛です。神様はすべて与えても、「お前によって、お前の中で生きたい」と言います。そのようにさせる本質とは何でしょうか。愛です。神様も愛の中に入って僕になってもいいというのです。父は愛する息子が自分の食卓の上に上がってうんこをしても、それを眺めて喜びを感じるのです。愛は法を超越します。

神様が今まで人間に愛を与えたからといって、「私は完全にすべて与えたのに、お前たちはなぜくれないのか」と、このように言えますか。絶対的な愛をもった神様は、今でも与えたい愛をすべて与えられずに、もどかしがっています。自己を主張することができない神様です。完全な愛を与えようとしたのが神様の人間創造の目的ならば、神様は今まで完全な愛を与えられなかったので、人間世界に対して愛を与えたがる神様です。そのような神様なので、考えるほどいいのです。「私はすべて与えたので、これからはお前たちがもってこい」と言う神様ならば必要ないのです。

神様は人間の父であり、人間は神様の息子、娘です。神様の骨の中の骨、肉の中の肉、骨髄の中の骨髄をすべて投入して創造した人間なので、神様を引っ張れば引かれてこざるを得ないのです。

神様は愛のために創造しました。愛ゆえに創造したので、男性と女性が愛し合うのを見るのがもっといいのです。それゆえ、神様は存在世界の前に現れるとき、愛の本質として現れます。

子供は、お母さんとお父さんの愛の実現体であり、投入体です。お母さん、お父さんの生命の延長体です。またお母さん、お父さんの理想の具現体です。子供はお母さん、お父

さんの愛と生命と理想の基盤から生まれるので、父母はその子を見れば見るほど愛らしく、見れば見るほど生命が躍動し、見れば見るほど理想的な相対なのです。

神様と人間は、絶対的な相対として愛の関係を中心として生まれた存在です。その位置が、神様は父となり、私たちは息子、娘となる位置です。もしそれ以上の位置があるならば、人間の欲望はまたその位置を占有しようとするのです。人間の欲望は最高を追求するので、それ以上のものがあったとしたら私たち人間に与えなければならないのです。このような点から見るとき、当然神様は人類の父であり、人間は神様の息子、娘です。

神様が人間を造るとき、無価値に造ったのではないことを知ることができます。無価値に造ったのならば、神様は異常な神様です。神様は絶対的な方なので、何でもすべて知っています。それなのにそれを知らずに造ったならば、その神様は不完全な神様です。神様は絶対的な方なので、私たち人間を造るときも絶対的な相対として造りました。

天地を創造した神様はどんな方でしょうか。極めて善なる方であり、すべての万物の根本となる方であり、愛の主体です。ですから神様は天地万物を創造したのち、全宇宙の貴いすべてのものを人間に与えたかったのです。神様は自分が本当に信じることができ、愛することができ、すべてのものを任せることのできる人がいれば、一番貴いものをそっくりそのまま与えたいのです。

神様が私たちの父ならば息子、娘を造るのに、いい加減に造り、駄目なものを造りたくなかったのは間違いないことです。神様は人間を全知全能なる神様のような同等の位置、同位の立場に立つことができるように造られたので、私たちの良心は最高のものを希望するのです。

神様が絶対的な方であられるのなら、その絶対的な方がなぜ人間を造られたのかというのです。お金のために造ったのでもなく、知識のために造ったのでもなく、権力のために造ったのでもなく、神様の愛を感じることができるただ一つの道のために人間を造られました。このような観点から見るとき、神様は父であり人間は息子、娘だというのが一つの軸を成すのです。この軸がもし連結されていたならば、人間と神様が愛によって一体になった関係に、何が作用しても絶対に離すことはできないのです。

神様は人間を創造するとき、完全に投入することによって、より価値があり理想的な完全な形で展開しました。神様はアダムとエバを造られて、彼らのために生きるというのです。神様のためにではありません。自分のために生きていたときから、相手のために生きるときに展開されました。理想的な存在は自分を中心としません。理想的な存在は、人のために生きるところに、対象のために生きるところにあります。この原則が宇宙の根本です。

神様がどんなに素晴らしく、どんなに絶対者であられ、全知全能な方であったとしても、お一人ではうれしいはずがありません。「幸

福」という名詞、あるいは「うれしい」という言葉は一人では成立しない言葉です。必ず、相対的な関係を備えた立場においてこそ「うれしい」、「幸福だ」という言葉を語ることができます。一人でいて「幸福だ」と言う人がいますか。どんなに全知全能な神様であっても、お一人でいては幸福ではありません。歌が上手な声楽家が、誰もいないところで歌を歌ったとしましょう。それで幸福ですか。そこには相対がいなければなりません。与えたり、受けたりすることができてこそ、うれしいのです。それゆえ、神様も喜ばれるためには、必ず対象がいなければなりません。

神様は完全に投入して愛の対象を創造しました。そのようにしたのは神様も愛の対象が必要だったからです。ところが愛は一人ではできません。どんなに絶対者であっても、その絶対者の前に愛の対象がいてこそ愛することができるので、その愛の対象として人間を造りました。それで人間を造るとき、いい加減に造ったのではありません。聖書にみ言で造ったとありますが、いい加減ではありませんでした。千辛万苦を経て、自分の一二〇パーセント、何百倍を投入して造ったのです。

神様の天地創造を考えるとき、既成教会の信者たちは「神様は全知全能なのでみ言で造られた」と信じています。しかし魔法を使うように、そのように造ったのではありません。知性の限りを尽くし、自分の身を全部投入して息子、娘を創造しました。ですから愛するのです。私たちも精誠を尽くさず、血と肉を投入しないものは愛しません。私の骨の中の骨、肉の中の肉、私の思想の中の思想、私の全体中の全体を投入したので希望の対象とするのです。

神様は、創造の理想的出発点をどこに置いたのでしょうか。神様の前にすべて「ため」に生きよ、というのではありません。「お前、私の所に来てくっつけ」という吸収ではありません。投入です。「くっつけ」ではなく投入です。その言葉を振り返れば、「ために存在する原則」に理想的出発点を置いています。ですから神様は、人間のために投入しました。神様自身は人間のために存在します。

神様が「私は愛である」と言いましたが、それは何でしょうか。夜も喜び、昼も喜び、働きながらも喜び、休みながらも喜び、踊りながらも喜び、泣きながらも喜ぶということです。それで「私には愛がある。すべてある」と言ったのです。「すべて」という言葉は、その中に全部入っているということです。愛が一番好きな方は誰かと言えば、神様です。そんな愛をすべてもっている神様なので、その愛の味を占めれば死んでも離せないのです。

神様は全知全能で、遍在されるお方として、惜しむものがなく、もっていないものがありません。すべてのものをもっていますが、その全部の価値よりも貴く立てて誇りたいものがあるとすれば、それは何でしょうか。神様は、ただ愛のほかは必要ないというのです。愛以外は必要ないというのです。

創造理想完成はどこから始まるのでしょうか。創造理想完成は神様から始まるのではなく、人間から始まるのです。創造理想完成なので創造物から始まります。創造物の中心は

人間です。ゆえに人間の完成がない限り、神様の完成はあり得ません。神人一体なのでそうなのです。

神に一致することができる、神のみ旨に一致することができる、神のみ旨を中心としては過程的み旨ではなく、完成的み旨の中心の核と一致することができるそれとは何でしょうか。それが神様の全知全能なのでしょうか。全能性をもってしても駄目なのです。全権でしょうか。違うというのです。それでは遍在する素性でしょうか。それも違います。それは何でなければならないのでしょうか。神様自身も生きて生活するのは、もちろん霊界があって時空の関係を超越したところで生きていくのです。生きていくには何を中心として生きていくのでしょうか。無限な力がある、遍在する、全権的権限がある、それではありません。神様も愛を中心として生きていく、このように見るのです。生きていくには始まりもそうで、過程もそうで、永遠にそうなのです。神様も真なる愛の対象をもつようになれば喜ぶからです。

神様は絶対的であり、全知全能なので、愛をひたすら与え与えて、また分け与えても限りなく補充することができる愛の倉庫をもっています。それでは、神様の倉庫から愛を多く盗んで、夜も昼も限りなく愛を取って分け与え分け与えるとき、神様が「やあ、こいつ！　盗人、愛どろぼう！」と言って処罰するでしょうか。全知全能な神様なので、「そのようにしろ、してもいい。いくらでもやってみろ。お前が永遠にやってみろ。お前が入ってきても余る。それで私が神様だ。だから私が主体だ！」と、神様がそのように言われるのです。「私が主体なので、客体に与えても残ってこそ主体だ。お前たち客体である人間に与えても余ってこそ主体としての神様であって、そうでなければ神様になれない。私がそうなのだ！」と言われるのです。「私から愛を盗んで神様の愛の発電所のように限りなく与えたいならば、いくらでも補給してあげよう」。それで「これが全部なくなれば私はまたもっていきたいのですが、神様の愛のパイプに私を連結したらどうでしょうか」と言う時、「そうしたければしなさい」と言うのです。

二) 神様は一番近くにいらっしゃる方

真理中の最高の真理とは何でしょうか。それは父母であり、夫婦であり、子女です。それ以上はないのです。それでは真理の中心とは何でしょうか。愛です。このような原則を中心として見るとき、最高の真理の中心とは何なのでしょうか。神様は真理の本体であり、善の本体であり、愛の本体であり、生命の本体だと言うのですが、それは何を意味しますか。みな同じ言葉です。真理が成立するには愛と生命がなくてはならないのです。ですから最も核心である生命の本体、愛の本体、真理の本体は神様ですが、神様はどんな方でしょうか。私たち人間の父であると同時に母です。核心は父母です。このように見れば、神様は簡単な方であられます。

神様は白い髭が生えているでしょう。それが似合うのです。さあ、神様が髭をそっと触るとき、息子が「僕は長い髭が好きだ」と言えばその髭は長くなり、「短い髭が好きだ」と言えば短い髭になるのです。そうなるはず

です。全知全能な神様なので、神様の顔は男性に対するときは粗雑で乱暴に見え、男性格が好きなアダムには男性のように見え、エバのような女性には女性が喜ぶことのできる姿を見せるのです。

神様は天地創造の以前からいたでしょうか、いなかったでしょうか。それでは神様の年は何歳でしょうか。そう、七十しか知らない人は七十だと言ってもいいです。そのような人には神様は「ほほ、私は七十だ」と言うのです。五つしか知らない人が「神様何歳ですか」と言えば「ほほ、五つだ」と言うのです。それ以上知らないからです。数がどんなに多くても、その数で数えられるような神様ではありません。私たちの神様がそうだというのです。

神様も冗談が本当に好きです。ユーモアが好きです。ユーモアの大王は誰でしょうか。誰かと言うと、神様です。全知全能なのでユーモアも多いのです。笑うときもにこにこ笑い、おなかをよじりながら笑い、転げ回って笑わせることができる大王とは誰ですか。神様です。そんな大王が神様だというのです。

神様は外的に男性に似たとするならば、内的には女性に似たのです。神様は、強く、全知全能でもありますが、お釈迦様のほほえみに花を添えることができる慈悲の心もあるというのです。女性の中の女性のような心もなければなりません。そうしてこそ両面がみな生きるのです。

神様が宇宙の大主宰であり全知全能であられて、もっていないものはないくらい能力が多い方ですが、どんなにそうだとしても愛の因縁をもって孝子の立場に立った息子が尋ねもしないで胸をかき分けるからと言って「おい！　やあ！　お前、いつ見たというのか」と言いますか。いつ見たのかと言ったとしても知らないふりをして幾度も胸をかき分けて、昔、自分のお父さんの乳を触ったようにこうして……。「私は昔、うちのお父さんの乳を触ったように触りたくてそうしたのです」と言えばどうしますか。気分を悪くするでしょうか。お父さんが本当に幸福を感じるでしょう。だんだん大きくなれば自分のもとを離れ、壁を越え、川を越え、山を越えて、消えようとしていたのが、越えていった息子が、壁を越え、門を越え、服を越え、昔のように自分の乳を触ろうとする時、お父さんは気分はいいでしょうか、悪いでしょうか。もうすぐ死にそうなおじいさんも、「早くここに来て触れ、早く！」と、気分が良くてそうするでしょう。

神様は創造主ですが、つけ足すものがどこにあり、引っ張るものがどこにありますか。大きくなろうとすれば吸収して引っ張るとか、誰かがつけ足してくれるとかしなければならないのです。自分が吸収するか、第三者の存在がもってきてつけ足してくれるかしなければなりません。ところが神様自身において、つけるものもなく引っ張るものもないのに、自体がどのように大きくなることができる概念を立てるのかというのです。これが重要な問題です。私がこれを話せば皆さんがむやみに話して困るので話さないのです。研究してみてください。宿題を出すので研究してみてください。論文を書いてみなさい、私が点数をつけてあげます。

本来、絶対者なる神様はどのように始まったのでしょうか。一度にさっと出てきて生まれたのでしょうか。それが気になりませんか。そんなことを言えば既成教会の信者たちは、「うう一、創造主は聖なる方なのに、その冒・も普通の冒・ではない。ばかげたことはやめなさい！」と言うのです。神様が生まれて出てきたのでしょうか。ただそのままいたのでしょうか。気になりませんか。その問題に対するには、論理的背景を備えなければなりません。尹博士。どのように出てきましたか。物理学の博士様がそれを知らなければならないではないですか。博士様がそのように顔を隠せば恥ずかしいではないですか。統一教会員も仕方なく「自然にいらっしゃる？」と言うでしょうが、違うのです。神様も発展していかなければならないのです。そのように言えば正しいのです。

調和の無限な力をもっているのは何ですか。神様も研究したことでしょう。神様が人格的神として人と同じならば、全知全能なるその方もそれに対するとき、その中に行って安息の睡眠を取りたいのです。神様がいつも目を大きく開いて「こいつ、昼夜休まずに蕩減復帰をしろ」と、このように言うことができません。神様も道理がそうではないですか。息をする道理と同じです。息を吐けば吸わなければなりません。神様も働けば、休まなければなりません。神様が働くのもすべて、休む喜びを感じようとするからなのです。神様もそのすべてのものが、相対的授受関係の因縁になっています。

神様が愛することができる相対は、私たち人間しかいません。被造物の中で、神様自身がまた別の神様を造ることはできないのです。どうしてですか。全知全能なる神様なので神様と同じ、もう一つの神様を造るだろうと、それも可能だと思いますが、神様がそのように造ればどうなりますか。同じ神様が御飯を食べるとき、一緒に御飯を食べ、手入れをするときは一緒に手入れをして、立つときは一緒に立ってついて回りながら、神様が座れば一緒に座り、このように億千万年一緒に行動するならば生きていけますか。考えてみなさい。どんなに気が遠くなるでしょうか。一日もたたないで目が回ってひっくり返ってしまいます。また、話はどうしますか。話をすれば何日話すと思いますか。三日間ですか。「あれ、あの、同じではないか！　死にそうだ」と言うでしょう。

宗教の中心とは何でしょうか。神です。神様です。もちろん神に対する名前はたくさんあります。しかし名前が問題ではありません。その神は二人になることができないのです。根源は一つなので、一つの神です。一つの神について話すとき、各国の言語が違うので一つの神を表す名詞は違っていますが、その本体は一つなのです。

天と地自体も自ら存在したくて存在するようになったのではなく、必ず存在するようになった動機と根源を通じて、ある力の源泉に立脚して生まれたということを考えるとき、ここからももっと上がって必ず中心的な主体を備えて天地を動かすとか、あるいはここに創造するという力の作用体、根本の作用体がいなければならないのです。このような立場にいるその方を私たちは神様と言いますが、民族が違い、言語が違うからといって、違う表現をするその名詞が問題ではありません。

いずれにせよ、この宇宙の中心がなければならないのです。その中心は全体、この存在世界の前において、存在が作用し移動するとしても、その移動するのに従って移動するのではなく、この動く相対的な世界の中心において億千万年動かない中心的な本体がなければならないのです。

五　法度の中での全知全能である

一) 原則的基盤の上での全知全能である

神様が天地万物を創造するようになった動機とは何でしょうか。根本に入っていくのです。神様はお金が必要ありません。お金のためでもありません。知識のためでもありません。知りたくて造ったのではありません。何かの権力のためではありません。全知全能で遍在されるその方は、知らないことがありません。知恵の王であり、能力の王であり、黄金の王ではないですか。ダイヤモンドもいくらでもつくることができるでしょう。神様にはダイヤモンドが必要ありません。いつもあるのにそれが必要ですか。ないから必要なのでしょう。また知識というのは……。この宇宙のすべての原理原則を中心として運動し作用する一つの構成体を全部コントロールすることができる法理、法度を造られたその知識に比べれば、今日の科学者たちがどんなに研究しても、自然界の法則一つ発見してそれでもって博士になったと威張ったりして、そんなものは何でもありません。芸術もそうなのです。芸術というものが他のところにあるのではなく、全部自然から学んできたものです。自然にはないものがないのです。

神様は全知全能なる方なのに、力がなぜ必要でしょうか。宇宙を動かすことができる主体であられるのに、そうではないですか。力の大王だから力は必要ないのです。歴史上の英雄豪傑が偉いと言っても、歴史において大国を統治した君王、帝王たちが過ぎ去りましたが、彼らはみんな神様の権威のもとで踊りを踊っていった人たちです。神様は、私たち人間が必要とするお金も知識も必要ありません。

神様自身は絶対的な存在です。全知全能なる方です。遍在されます。その方には知らないものがなく、できないこともありません。そのようにすべてのものを備えた主体として絶対的な位置にいらっしゃる神様において、何が必要でしょうか。神様が絶対的な主体だとしても、主体自体が主体となると同時に相対となりたい心もなければならないのです。なぜそうでなければならないのでしょうか。人には東だけ必要なのではありません。東があれば西が必要であり、東西があれば南北が必要であり、南北があれば前後、上下が必要であり、一つの球形を成すことを願うのです。ですから宇宙は球形を標準にして動くのです。

さあ、あの星の国にはどんなものがあるでしょうか。ダイヤモンドの星があるでしょうか、ないでしょうか。全知全能なる神様が宇宙を造ったのならば、ダイヤモンドの星一つだけ造ったでしょうか。

そう、神様が一番好きなものは何ですか。学者、有名な学者ですか。有名な学者も大したことはありません。自分が何を研究して何をどうしたとしても、神様が造ったすべての自然界のある公式とか原則を発表しただけで

あって、それ自体を造ったのではありません。神様は、学者も好きではないというのです。その次は大統領ですか。レーガン・アメリカ大統領を神様が好まれますか。世界大統領ですか。宇宙大統領なる方が神様です。全知全能なる絶対者なのに何が必要でしょうか。権力も神様は好まれません。その次には何ですか。お金ですか。口にもするなというのです。

神様は全知全能なる方です。憤って一度地面をけられるならば、めちゃくちゃにすべてが崩壊してしまうのです。大統領や世界の偉大な人たちも、一度叫んだならば、もれなくすべて流れていってしまうでしょう。その方に権力が必要でしょうか。神様の前には権力は必要ありません。それはちんぴらが好むものです。誰が好むのかと言えば、悪魔が好むのです。

神様は、天地創造をなぜしたのでしょうか。「力を誇ろうと、全知全能性を誇るために一度造ってみたのだ」と言えばすてきですか。そのようなとき、力によって生まれたものたちが「神様ありがとう。力でもって造ってくださって！」と、このように有り難いと言うでしょうか。神様が知恵が多くてお前を造ったのだと言うとき、気分はいいですか。能力が多くてお前をこのように造ったのだと言うとき、気分はいいですか。能力や知恵で造ったならば私の喜びと何の関係があるでしょうか。それが神様の能力でしょう、私の能力ですか。神様の知恵でしょう、私の知恵ですか。私を見れば無気力この上もない私なのに……。このように考えるのです。それで問題になるのです。

今日、キリスト教で「父なる神様、全知全能の神様」と言いますが、全知全能なる神様も原則的基盤の上での全知全能であって、無原則的基盤の上での全知全能ではありません。自分勝手にする神様ではありません。自分が法を立てたならば、永遠なる方が制定した法は永遠なものです。自分が立てたものを自分勝手にしないのです。それに順応して越えていこうとするその神様の権威、それが驚くべきことなのです。公義を立てるにおいては、すべて天理の原則にかなう公法を立てるにおいては、絶対に神様がまず踏んで越えていったのちに万民が従うようになっており、宇宙が従うようになっているのであって、それを二番目にすることはできないのです。そのような人間創造の理想的基準があるのです。

神様一人ではできないのです。今日、既成教会の牧師は「全知全能の神様が、創造能力をもった神様がいつでも思いどおりにできるでしょう」と言うかもしれませんが、とんでもありません。天地すべての存在物は法則、大原則によって作用するのです。いくら神様でもこの法則を破壊して行動することができないのです。この国の大統領でも憲法を中心として制定したすべての法、立法を通じて制定した法を重要視しなければならないのです。そのようにしていないので、今騒いでいるのではないですか。

このように言えば少しおかしいですが、神様が愛をしたいならばつくればいいでしょう、なぜ愛をつくれなかったのでしょうか。それは思いどおりにつくったならば神様が立つ位置がなくなるからです。それでつくらないのです。それはつくれないのと同じなのです。

何のことか分かりますか。「ええ！　神様は全知全能なのにつくれないとは……」。そうなると二元論や多神論という結果に陥ってしまうのに……。しかし、疑えばそうです。

最近人々は神様の属性について、神様は絶対的であり、全知全能であり、遍在し、唯一無二であり、その次に永遠不変だと言うのです。しかし、絶対的で何をするのですか。唯一だとして何をするのですか。神様が唯一なのと私たちとは何の関係がありますか。大きな問題です。全知全能ならば何をしますか。何の関係があるのかというのです。永遠不変ならば何をしますか。神様自身にはいいですが、私たち人間には何ら関係がないならば、それは邪悪なことになるのです。必要ないのです。盲目的な信仰をすることができないというのです。このようなことを全部分別してあげなければなりません。

神様は知らないものがありません。全知全能であられ、全権者であられ、遍在されるというのです。それが私と何の関係がありますか。私と何の関係があるのかというのです。

「ああ、全権があるので私を支配するのにいいですね、どこにでも遍在しているので私を監視するのにいいですね、知らないものがないので私をすべて精密に分析して身動きできないように造ったのですね」と、神様が私を全知全能で支配されるとすればいいことがあるでしょうか。

神様は天地を何をもって主管しますか。法で主管しますが、その法も愛で治める法です。そして治める方向を後押しするために宇宙の法も存続するというのです。それで神様は人間創造をなぜしたのかといえば、愛が恋しくてです。一人でじっとしていればいいのに、何のためでしょうか。刺激的で衝動的な愛が必要だからです。

二) 愛のみが絶対基準である

神様が一つだけどうすることもできないものがあります。神様は全知全能でしょう。全知全能ですが一つだけ思いどおりにできないものがあるのです。それは何だと思いますか。金がつくれないでしょうか、ダイヤモンドがつくれないでしょうか。力がないでしょうか。全知全能なる方が一つだけつくれないものがあるというのです。それは何ですか。愛だというのです。愛です。先生の心にも愛がありますか。あると思いますか。皆さんの心にも愛がありますか。あることはあるのです。あることはありますが、自分一人で「私の愛する人、私一人の愛、私の恋人！」と言っていれば気違いになるのです。

神様一人で愛を成すことができますか。全知全能であられ、唯一無二であられる神様一人で、「ああ、気分がいい！」と、そう言いますか。そうすれば神様も気が狂ったと言うしかありません。レバレンド・ムーンも愛を感じることができるものをもっているからといって一人で「ああ、うれしいな！　ああ、私の愛する人よ！」と、こう言うならば、それは気の狂ったやつだと言われるのではないですか。しかし、相対となる紙のかけらでも、このような手拭いを中心としても「愛するお前、手拭いよ！」と言うならば、誰が悪口を言いますか。宇宙に代わって登場することが

できる相対的価値と権威は、愛の世界でのみ可能なのです。

どんなに絶対者の神様だとしても、一人では愛をもつことはできないのです。愛は必ず相対的関係でのみ見つけられるものなので、どんなに全知全能なる方だと言っても愛だけは一人で所有することができないのです。もちろん愛の素性をもっていますが、愛の刺激と愛の信号は相対を通じてのみ再現されるのであって、自体だけでは顕現することができません。これが愛だというのです。愛の力です。

寡婦と男やもめをかわいそうだと言いますが、なぜかわいそうだと言いますか。愛はその中にありますが、発動する何かがないからです。神様がいくら全知全能で遍在する神様だとしても、相手がいないときは愛が作用しないのです。天宙を造られた神様は、誰を中心として相対したいのでしょうか。アダムとエバを中心として愛の作用をしたいのです。

神様は愛が好きですが、神様が一番好きな愛はどんな愛でしょうか。真の愛です。ところで真の愛ですが、どのようなものが真の愛ですか。真の愛というのは愛の根をどこにおいて言いますか。その根を神様においていないのです。それはおかしな話でしょう。全知全能の神様が真の愛の主人公なのにもかかわらず、その愛の根は神様から始めたくないというのです。その愛の対象になることができる人に根を植えたいと考えるのです。

神様が天地を創造するとき、誰のためにしたのでしょうか。神様自身のためにしたのか、相対的な創造物のためにしたのでしょうか。神様はもちろん自分のために造ったと見ることはできますが、相対を重要視することにすべての創造の基準をおいたということを知らなければなりません。その相対の主体が誰かと言えば人間です。人間を中心として、すべての人間の幸福を中心として考えたのです。神様自身こそ全知全能な方ではないですか。

神様は絶対的であり、また全知全能で遍在する神様ですが、神様も愛だけは思いどおりにできないのです。神様も愛の支配を受けます。それでは神様は何ですか。神様は全知全能ではないのではないでしょうか。「神様、あなたは全能ではないのではありませんか」と言えば、「私は全能だが、愛には全能ではない」と言われるのです。神様がなぜそうなのですか。

神様一人では神様の本分を尽くせないのです。それは何のおもしろ味がありますか。食べ物が心配ですか。寝るのが心配ですか。着るものが心配ですか。思いどおりに供給を受けることができるのです。飛行機に乗って空中を回るとしても、一時間も回ったらおもしろくないのです。どんなに全知全能なる神様であり、どんなに威張った神様でもおもしろくないのです。私たち人間と同じなのです。それで神様も仕方がないのです。自分が努力して貴いとするものを創造しておいて、行ってみるおもしろ味がなければならないのです。このようになるのです。

神様は、何が恋しくて創造したのでしょうか。絶対的なのに神様は何が恋しくて創造をしたのかというのです。その方は黄金も必要なく、知識も必要ない全知全能なる方なのに、

備えていないものがない方なのに、何が必要で人を造ったのかというのです。創造の根本動機とは何でしょうか。権力でもなく知識でもなく、所有物でもないというのです。神様に何がないでしょうか。愛の基盤がなかったのです。神様もやはり一人でいては愛を成せないのです。ですから天地創造の動機、アルファ的起源も愛だというのです。

神様に何の愛が必要なのでしょうか。神様も愛をもっていますが、相対がいなければ愛せないというのです。皆さん、愛をもっていますか。ところが一人で「ああ、いいな！　ああ、私の愛する人よ！」と、それがいいですか。愛というのは相対が現れなければ作用しないのです。これが宇宙の原則です。どんなに全知全能なる神様でも、愛の相対がいなくなれば孤独な神様であり、悲しい神様なのです。

神様がどんなに素晴らしく、どんなに絶対者であられ、全知全能な方だとしても、一人ではいいことはあり得ません。「幸福」という名詞、あるいは「良い」という名詞は、一人でいて設定される言葉ではありません。必ず相対的関係をもった位置にいてこそいいのであって、そうでなければ幸福という言葉はあり得ません。どんなに全知全能なる神様だとしても、一人でじっとしていてみよというのです。それが幸福でしょうか。歌が上手な音楽家が一人で歌を歌ったとしましょう。それが幸福ですか。相手がいなければなりません。授受するものがあってこそいいのです。それと同じです。神様が喜ぶためには、神様が一人でいてはならないのです。

神様自身を存在させる起源とは何ですか。何から生まれたのでしょうか。神様が存在するための起源とは何でしょうか。全知全能ですか。絶対的権限ですか。絶対的権限があれば何をするのですか。一人でいるのに、一人でいる両班が絶対的権限があって何をするのですか。誰もいないのに。一人で絶対者になっていれば知識があって何をするのですか。神様の本質が何かという問題が重要な問題です。それが愛です。「ため」になれという愛ではなく、「ため」になろうとする愛です。

全知全能なる神様も、真の愛の前にはどうすることもできません。大韓民国の大統領がどんなに素晴らしいとしても、真の愛の場ではどうすることもできません。妻を本当に愛するというときは、妻の前に敬拝したいですか、したくないですか。敬拝しても足りません。宇宙の中で偶然にも、私がこうして心から愛してやまない妻がどこから来たのでしょうか。その人がいないと考えたら、四肢がすべて麻痺します。実際にいないと考えるときは大変です。しかし、いるのでどんなにいいですか。いいので大統領でも仕方なくお尻を天にして「思慕する人よ、愛し給え！　愛します！」と言います。そんなとき、小柄な女性が座って見るとき、気分がいいでしょうか、悪いでしょうか。

神様がどんなに全知全能だとしても、愛を一人で思いどおりにできません。「全知全能だから愛も思いどおりにできるだろう」と言うかもしれませんが、それなら問題が大きいのです。愛の対象が必要ないという論理に逢着するのです。ですから神様も絶対的な中心存在として自分自身の愛、神様的愛に対する刺激と喜びを感じるためには、愛の対象が必要なのです。

神様自身も相対が必要なのです。神様も愛を一人では成せません。私が人もいないのに一人で立って、「ああ、きょうは本当にいいな」と、このように熱烈に語るならば、気が狂ったと言われるのではないですか。しかし相手がいて熱心に語ったなら、それが筋道に合い環境与件にかなうようになっているでしょう。どんなに全知全能なる神様でも、一人で「うれしい、うれしい、ああ、私の愛がいい！」と踊りを踊れば、それは何ですか。それを知らなければなりません。神様も愛を成すためには一人では駄目です。相対を立てておかなければ刺激的な愛を感じることができません。これが問題です、これが。

世の中に存在するものの中で神様と相対になる力はありません。神様は全知全能であり、絶対的だからです。または永遠不滅の自存の方が神様です。そのような神様が願われるものがあるとすれば何だと思いますか。お金でもなく、知識でもなく、権力でもない、その何を願っていらっしゃるのかというのです。神様が絶対に必要とするものがただ一つあります。それは人間に絶対に必要なものであると同時に、神様にも絶対に必要なもので、真の愛です。

三) 神様も愛の前には絶対服従である

神様も愛が好きなので、神様も愛に及ぶことができるでしょうか。天地を造られた全知全能なる素晴らしい神様が？　神様が愛に及ぶことができるでしょうか。家の中で虎みたいなおじいさんが、小柄なおばあさんにどうすることもできないこともあるのです。それは何の鼻をつままれてそうなのかというのです。愛の鼻です。愛には偉大な力があるというのです。ですから神様も、愛の前にはどうすることもできません。

能力が多く全知全能なる神様がいらっしゃるならば、神様はどんなものを好まれるのでしょうか。神様は人間より優れているので、愛を好まざるを得ないという結論が最も理論的に妥当なのです。それでは神様の愛とはいったい何でしょうか。永遠の昔から永遠に「ため」に生きる愛をもっておられ、そのような愛をしようとする方が神様だというのです。

皆さんは神様を中心として息子にならなければなりません。神様を中心として息子になるには何を中心としてなりたいですか。お金ですか。神様が「私が全知全能なる神様なので、大きい権力を中心とします。父子の関係にならなければ」と言いますか。知識ですか。それはすべて付録です。神様は愛を中心として、その愛と私は一つにならなければならないのです。「その愛だけが最高だ」。そうでなければなりません。この愛を完全に占領する日には、天下にどんなに権能が多い神様でも「うん、うん」と言うのです。

いくら神様が全知全能だとしても、男性、女性は愛に絶対服従だと命令することができますか。「私も真の愛には絶対服従するから、私のようにお前たちも真の愛に服従しろ！」と、こうすればこそ父なる神様として堂々たる神様になるのであって、神様は守らずに「おい！　息子、娘、お前たちは愛に絶対服従しろ！」と言えば、それは話になりません。先生の位置にいる神様が、独裁者の神様になるのです。神様も同じように「私が真の愛に

永遠に永遠に絶対服従するように、息子、娘も真の愛を中心として永遠に服従すべきだ！」と言うとき、息子、娘が「アーメン！」と言うのです。そうでないときには「父は自分勝手にして、私たちだけに服従しろと言うのでしょうか。ふん！」と言うのです。問題になります。このように見るとき、神様も真の愛には絶対服従するという論理を立てなければならないのです。

どんなに全知全能なる神様でも、真の愛の前には絶対服従するのです。どうですか。この言葉を聞くのはいいですか、悪いですか。その真の愛は東から聞けば良く、西から聞けば悪いでしょうか。西から聞いても良く、南から聞いても良く、北から聞いても良く、上から聞いても良く、下から聞いても良いのです。夜も昼も四季も越えて、青年時代と老年時代を越えて、真の愛は永遠に聞いても悪くないというのです。

絶対的な力を主張する神様も、愛が定着できるところ、愛が立つことができるところを探されるのです。神様も愛を中心として絶対に好まれるのです。絶対に好まれますが、どのくらい好まれますか。絶対的、全知全能、遍在されるよりも好まれるのです。神様はすべてのものを捨てたとしても、愛を中心として絶対服従しようとするのです。そうしてこそ話が通じるのです。神様は人類の父であると言うでしょう。それでは、父自身が愛を中心として生きずに、「子供たちよ、お前たちは愛に絶対服従して生きろ」と言うことができますか。根源がなければ駄目なのです。それゆえ神様自身も愛に絶対服従して生きるとき、「私がこのように生きるので、お前たちもこのように生きなければならない」という教育をすることができるのです。

絶対的な神様も「ああ、私が絶対的で全知全能で遍在するのですべてをもっているが、私もその何かに順従して生きることができたらいい」と言うのです。神様も「ため」に尽くしたい心があるのです。そんな神様なので、私のために尽くせという愛をしないのです。「ため」に尽くせという愛はいけないのです。

神様が全知全能だと言ったので、全知性を中心としてですか。知識を中心としてですか。違います。それでは何を中心としてですか。力でもってですか。力をもってしても駄目です。どんなに春に力があるとしても、花を咲かせる環境を越えることはできません。どんなに夏に力があるとしても、生い茂らせることができるそんな時期を越えることはできません。秋を迎えれば、それが全部枯れてしまうのです。秋がどんなに結実の時期だとしても、冬を克服できないのです。これを克服するためには、いつも太陽を中心に仕えていなければなりません。そこで春夏秋冬を克服することができます、それ以外はできません。それは何のことかと言えば、息子、娘、姉、弟、兄弟同士けんかしている場面において、父母の伝統であられる神様がそこに入ってきて、中心となり「このようにしろ！」と言うとき、統一ができないでしょうか。「統一できない」と言う者は狂った者です。

今日、現代神学が滅びざるを得ない内容とは何かと言えば「神様は全知全能なる神様なので、その方は愛も思いどおりにすることができる」と考えることです。自分一人で思い

どおりに愛することができますか。うちの奥さんなくして、できますか。できると言う者は狂った者です。それでは神様一人で愛することができますか。

神様は全知全能ですが、神様のように全知全能なものがもう一つあって、二つの全知全能なものが愛するようになれば、その世界はどんなものだと思いますか。これがバランスが合わないで、かえって逃げてしまうというのです。その二人の中で引っ掛かって、行くこともできないし、来ることもできないのです。横に外れてしまうのです。弱いものは強いものに行き、強いものは弱いものに入っていってこそ、ちょうど真ん中にはさまれて身動きがとれないのです。

弱いものは強いものを、強いものは弱いものを願います。女みたいな男が好きな女は、死んでしまえというのです。女のような男を愛するという女は、死んでしまってもいいというのです。女が女の手を触れば気分がいいですか。女同士で手を握ると気分がいいですか。ソフトな女性の手がソフトな手を握れば、それはどれだけ気分が悪いでしょうか。二つのソフトな手の感じが、どれだけ気分が悪いですか。それは死ぬよりももっと嫌なのです。だから死んでしまえというのです。

神様がいらっしゃると言うとき、その神様はいったいどんなお方でしょうか。全知全能な方、遍在される方、それもいいです。全知全能で遍在され、できないことがない方……。しかしどんなにできないことがない力をもっていて、どんなにすべてのものより優れた立場に立ったとしても、自分だけのためにさせようとする神様ならばどうなりますか。千ならば千、万ならば万、数多くの人類、多分数千億になるでしょうが、その人類が集まって住むそのような霊界があるとすれば、霊界において神様が「ああ、私は全知全能の方で、絶対的な存在なので、お前たちは絶対的に私のために生きよ」と、このように言われたらどうでしょう。全部神様だけのために尽くさなければならない立場に立ったならばどうなりますか。私たち人間の良心の本質から見るとき、それを永遠に歓迎することができないのです。それは必ず相反するのです。皆さんの心は相反するしかないのです。いつでも、そうではないですか。

六　愛によって遍在される

一) 愛だけが境界を出入りする

神様の心は神様のみ言の中だけにあるのではなく、神様が造られた万物の中にもあるのです。天地のどこに行ってもそこに神様の心があるというのです。ですから天はいらっしゃらないところがないのです。すなわち遍在すると言いました。神様の心の中にいることを願うのなら、皆さんが眺める物の中に神様の心があるので、その物を自分の物として、天地のすべての存在物を私の物として抱こうとする心をもたなければなりません。それが天の心です。最高の道に通じた人がいたとすれば神様の心に所有された人です。自分が鳥一羽、香りを放つ花一束を見ても、永遠を歌うことができる境地に入る心をもった人は、万物の中にあるのではなく、神様の心の中にあるのです。

それでは神様の遍在性をどのように感じるのでしょうか。空気を神様の息吹のように感じなさい。台風が吹いてきたら、それを神様がこの世界のために受難の道を克服してこられながら流された汗のように感じなさいというのです。太陽を眺めれば、その太陽がこの宇宙全体の生命の要因を象徴していることを知って、神様の愛を太陽に学ぶのです。神様の心情を体恤する一つの教本であり、教材として展開させたもの、愛する息子、娘を喜ばせるための教材として立てられたのが自然です。木の葉を見て自分の息子、娘のように思って一人つぶやくことができる人がいれば、彼は聖人に近いのです。

神様が遍在されるので私たちも遍在するものに似たいし、神様が全知全能なので私たちも全知全能になりたいし、神様が唯一無二なので私たちも唯一無二を願うのです。これが似ました。私自身が神様に似たので、私を神様に似るようにつくりたいのです。私自身がすべての天下を治めたいのです。これがすべて同じように神様に似たのです。

愛を通じて体恤的な生活をしなければならないのです。それで神様が悲しまれるときに私が悲しみを感じ、神様が喜ばれるときに我知らずうれしくなるのです。孝子は千里万里離れていたとしても、父母の愛はいつもその孝子のそばにあるのです。神様の遍在性において神様はどこにいるのでしょうか。知識的内容に存在するのではありません。しかし、愛はそうではありません。極と極を越えて遍在を妥当に、可能にするのが子供を愛する父母の心、子供に向かう父母の心です。愛を通じるその道に父母の愛は遍在します。どこでもいないところがないのです。それは愛だけが可能です。愛だけがその息子を完全に支配することができるのです。全能な権限はそこに該当するのです。このようになっています。

愛には偉大な属性があります。神様の絶対的な愛、不変的な真の愛と一致した立場に立つようになれば、神様がいらっしゃるところに私が加勢することができ、いつでも同居することができる権限をもつようになります。そのようになれば私が目をつぶらなくても神様に出会い、神様の悲痛な心情を体恤した者は道を歩いていても立ち止まって痛哭する、そのような体恤的世界があるのです。堕落した世の中でも母の愛は、もし息子が外地で不慮の事故に遭ったとしたら第六感で分かる場合が少なくありませんか。寝ていたとしても「あっ！　誰々よ」と叫んで起きるのです。

動脈が偉大か、静脈が偉大か、どちらが偉大ですか。同じです。それでは神様が偉大か、人間が偉大か、同じです。愛を中心として見れば、神様が動脈的だとしたら私たち人間は静脈的な存在なので、神様と対等になることができるそのような特権をもった人間の価値があるのです。「天上天下唯我独尊であり、全知全能であり、遍在し、私を通じないものはない」。それは何を中心としてですか。愛を中心として、それが理解できるのです。

神様はどんなお方でしょうか。神様は欲張りの中でも大王の欲張りです。いらっしゃらないところがない、遍在される神様です。いらっしゃらないところがない神様なので、どれほど欲張りですか。欲張り者とか欲張りと言ってはいけませんが、ともかく欲が多いのです。

神様は絶対服従できる道があるでしょうか、ないでしょうか。絶対主管しようとするそのような絶対、独裁者的な性格をもった神様が、絶対服従できなくなるときには、高いものは主管することができても、低いものは主管することができません。遍在性という言葉自体が、矛盾した言葉になります。神様も私たちに似たので……。母、父が自分の息子、娘に似ているでしょう。そうではないですか。神様を私たちの父だと言います。神様も絶対服従して生きたいのです。そういう道がないというときは、神様はどれだけ孤独でしょうか。

自分が描いた作品を持って、夜も昼も酔い、眺めて涙を流し感嘆する人がいれば、それを描いた画家は気分が悪いでしょうか。そのような人がいれば連れてきて、部屋に招待し「どうしたのですか」と言いながら、その理由を話させるのではないですか。「ああ、とてもいい。ああ懐かしい。ああ、一緒にいたい」と言ったからといって、狂ったと言うでしょうか。皆さんは神様を知らなくても、神様が全宇宙にいっぱいに満ちている遍在性を知識的な主体としておられるよりも、愛としておられるので「私がどのように同感権を各分野で体恤することができるのか」という立場で神様を再認識し、再発見しなさいというのです。

二) 宇宙には愛がない所がない

神様は絶対的な神様ですが、なぜ絶対的なのでしょうか。愛に絶対服従するからです。気分がいいですか。悪いですか。また神様は遍在します。遍在。神様の愛がない所がありません。

神様の愛は宇宙を抱いても余りあるのです。中心的な基盤をもっています。最も大きい基盤を包容する愛の中心者が神様です。もし神様が動くという場合には、小さいものも全部ついて動かなければなりません。一つの大きな円の中に全部入っているでしょう。それで神様が全世界、全宇宙をカバーすると言っても理論的な言葉になるのです。

神様がいなくなるときは、宇宙がすべて空になるのです。空みたいなのです。しかし神様がいるようになれば、宇宙はいっぱいに満ちているのです。なぜですか。愛があるから。ですから私が一人でいても神様がいることを知れば、宇宙はいっぱいに満ちるのです。どこにでもいらっしゃるのです。どこにでもいらっしゃることを感じるようになるのです。それで遍在の感動を知ることができるのです。愛の中にいて……。しかし私が神様を分からなくなるときは、すべてのものが空になるのです。ないのです。同じだというのです。

愛の主体がいなければ、何もないように感じます。しかし愛の主体がいれば、すべてのものが満ちるのです。愛がいっぱいに満ちてこそすべてのものが満ちるので、無限に与えることができるし、真実に与えることができるという結論が出てきます。授受することは理想の実現です、理想の繁殖です。愛の世界は距離を超越します。愛がどれほど速いのかといえば、光もついて行くことができません。一番速いのが愛です。一番明るいのも愛です。一番完全なものも愛です。一番完全に満ちるのも愛です。

愛とは何でしょうか。回ることができる潤滑作用と軌道作用をしてくれるものです。愛なくしては潤滑作用ができません。自動車も動かそうとすれば油を入れなければなりません。運動するのに潤滑作用がなければなりません。何でも運動しようとすれば潤滑作用をしなければなりません。ですから最高の喜びの潤滑作用をするものは愛しかありません。それは根が遍在する神様なので、なくなることはありません。

愛は神経のようなものです。私たちが髪の毛一本を引っ張れば体全体が引っ張られるのと同じように、愛さえ引っ張れば宇宙が引っ張られ、愛が動けば宇宙がすべて和して回るようになります。

この宇宙にすべての人々の心を満たしてくれる一つの主体があるとすれば、それはどんな主体でしょうか。絶対的な一つの中心者でないわけにはいかないのです。どのような心の位置にも愛をいっぱいに満たすことができる絶対者がいなければなりません。ですから彼は無限な絶対者でなければなりません。今日、数十億になる人類の心をすべて満たしてあげなければならない神様のその愛の量が、どれほどでしょうか。それは絶対的でなければなりません。全知全能で遍在という言葉が、だから必要なのです。その言葉は神様に必要な単語だというのです。これは理論的です。

七　既存神観の問題点

一) 既存神観は二律背反的である

宗教の教えに対する反問にはいろいろあります。「神様は果たしているのでしょうか」。「神様が全知、全能、遍在し、至善、至美で、愛であり、審判の主であり、人類の父などと表現しますが、そうだということをどうやって知ることができますか」。「じっとしていてもいいはずの神様が、なぜ宇宙を創造したのでしょうか」。「神様の創造の目的は何なのか」。「創造には方法があったであろうが、その方法は何なのか」。「絶対的な神様が創造した世界に、なぜ弱肉強食という現状が起こっているのか」。「人間が堕落して罪の世界ができたと言うが、完全な神様が創造した人間がなぜ堕落するようになったのか」などがそれです。

神様は問題が多いのです。全知全能だと言いながら、なぜイエス様を十字架に架けるようにしたのでしょうか。十字架の道理でなくては救援することができませんか。それにどうやって答えるのですか。全知全能だと言いながら、十字架上のイエス様を救うことができないのなら、そんな神様は残忍な神様です。人間の前から追放しなければならない神様です。信じるとは、何を信じますか。

神様は人間を堕落するようにしておいて、なぜ悲しまれるのかという根源を暴いて、人間と神様との関係がどのようになっており、また全知全能だという神様が、なぜこのように無能な神様になっているのか、ということを知ろうとした人がいませんでした。

今まで神学者たちや霊界に通じる数多くの人たちは、サタンがいることは知っていましたが、全知全能なる神様の前に反対するサタンをなぜ防御できなかったのかという問題は分かりませんでした。これが霊界に通じても問題です。いつでも神側に行こうとすれば、

必ずサタンが妨害するようになっているのです。多方面から、一方ではなく八方から反対するようになっているのですが、それをなぜ神様が干渉できず制裁できないのでしょうか。このような問題が今でも謎です。霊界に通じても、これだけは分からないのです。

全知全能なる神様が、今まで数万年の歴史を通じて人類を導いてきましたが、どうして善の目的を成すことができる世界に導くことができず、しまいにはこのような失望と絶望の世界に向かわなければならなくなったのでしょうか。これは深刻な問題です。神がいないと断定することができる内容にもなるのです。神がいないならば、私たち人間が願う理想とか、あるいは平和な世界、人間が追求していくユートピア的な内容が、未来に可能なものとして人間の前に到来するのでしょうか。今まで長い歴史路程を通じて考える人、あるいは無数の哲人たちがそのような世界を追求したのにもかかわらず、それにまだ到達できず、現在にとどまっているという事実を見るとき、私たちの未来にそのような希望の世界をもたらしてくれるとは考えることができないのです。

全知全能の神様が、なぜサタンをそのままにほっておくのでしょうか。それをなぜほっておくのですか。一朝にして首を切って処断してしまえばいいのに、なぜほっておくのでしょうか。それが宗教において一番の難問題なのですが、それは簡単な内容でしょうか。

今、数多くの宗教人たちは「神様」と言えば、栄光の宝座に座って、全知全能であられ、遍在される方、また絶対的な権限をもっておられる方だ、このように考えているのです。それで神様は苦痛とか悲しみとかそのような概念と関係ない方だ、このように考えています。そう言いながらキリスト教では神様をどのような方と言うかといえば、天のお父様だ、とこのように呼ぶのです。そしてお父様と呼ぶすべての信者は罪悪の世の中で悔い改めなければならず、信仰をしなければならないと言います。父子の関係にあるのに、神様と人間がこのように二律背反しているというのです。

今日、キリスト教で「神様は聖なる方であり、全知全能なる方として、公義の審判主として宝座に座って万民を審判する審判長だ」と言うのですが、皆さん、裁判長がいいですか。裁判長を十年したら病気にかかって死にます。死ぬと言うより病気になってのけぞって倒れます。病気にならなければ偽物です。人の命を奪う死刑宣告を下したりもしただろうに、自分が下した判決が、絶対的ではあり得ないというのです。論法、解説法はいろいろな方向があるのに、自分の判決によってその人の生死の問題を決定するようなことをしたので、そうだというのです。それは深刻な問題です。宇宙の公法に照らしてみるとき、法は絶対的ではあり得ません。ですから考える人であれば、十年判事をしたら病気にならないといけないというのです。

さあ、それではこの天地の大主宰なる神様がいるならば一度尋ねてみましょう。神様を中心として、今日既成教会ではこの宝座に座って全知全能なる神様、審判主として来られて、悪いやつは地獄へ送り、善い者は天国へ送り……。それを見て喜ぶ神様ならば狂った

神様でしょう。神様は善悪を超越した絶対善の立場にいらっしゃいます。

既成教会の牧師たちは、神様は宝座に座って、全知全能であり、遍在者と言いますが、それのどこがおもしろいのでしょうか。宝座に、王座に何万年もただ座っていたとしたなら、お尻が全部ぶよぶよになるのではないですか。皆さん、座っているのが好きなら、三日間だけ座っていてみなさい。それで神様は何をしているのですか。キリスト教で言えば神様は宝座に座って永遠に栄光の中で……。一人座っていて何が栄光でしょうか。永遠の以前から今日まで一箇所に座っていて、「おお、私の権力はすごいな。私のこの全知全能で重大な……」。それが何ですか。ぺっ、とつばを吐きます。神様も愛を中心として、今でも生きているのです。このような論理を否定することはできません。

神様が自分勝手にするようであれば、今日までの数万年の歴史、人類歴史を言えば、八十五万年、百五十万年と見てきましたが、そのように長久なる歳月の間、なぜ人間をこのような姿に造ってきたのでしょうか。もしそうであれば、神様がいないという結論を出すことができるのです。全知全能なる神様という言葉も使えません。これはみな荒唐無稽な論法です。なぜできないのかというのです。なぜできないのですか。条件に引っ掛かったからです。

神様はどんな方かと尋ねてみると、キリスト教の人たちは、「絶対者であり、唯一無二であり、全知全能な方だ」と言います。それではそのような方と人間との関係はどんな関係なのでしょうか。今日、キリスト教では「父なる神」と言っていますが、その父という言葉はどのような意味で呼ぶ父なのでしょうか。ただ名詞を尊重するために呼ぶ漠然とした父なのか、そうでなければ本当にそのような内容をもっている父なのでしょうか。その内容はどのようなものかという問題は考えもしないでいるのです。父ならば、どのような父なのでしょうか。私たちが肉体を通じて生まれたその父母と神様とは、どのような関係なのでしょうか。これが漠然としているのです。

堕落していなかったらどのようになるのでしょうか。今日、既成教会では神様は全知全能で、聖なる方であり、我々人間は俗なる者だと言いますが、間違っています。あの世に行ってみなさい。今日、この世で自分たちも「天のお父様」と言っていますが、この父というのは何なのでしょうか。神々しく相対できない関係から父という言葉が出てきますか。それは既に初めから論理的矛盾だということです。矛盾だらけです。しかし文総裁が言うことは事理にかなっています。

私がこのような話をなぜするのでしょうか。神様が始めて人間を息子、娘として造られたのですが、この息子、娘が神様を褒めたたえながら歌い踊る、そのようなことを見たでしょうか、見れなかったでしょうか。人間が堕落して追い出されたので、いまだにこのような日を迎えることができないのです。このような神様であるということを既成教会の人たちは知りません。神様が栄光の中にいながら全知全能であり、何でもすべてできる神様だと思っているのですが、このような神様なら

ば、なぜ数千年の間このように人間を救うことができなかったのかというのです。それをどのように答弁するのですか。それは人間が罪を犯したからです。人間が罪を犯したので、罪の清算も人間がしなければならないのです。

それでは神様は御自身において一つになったのは何のためでしょうか。神様の心が絶対に願うことは何でしょうか。これが問題になるのです。神様が願うことは何ですか。神様の体が絶対的に願うことは何でしょうか。能力ですか。今日、既成教会の既成神学では神様は全知全能であられるので、公義の審判主として来られ、善なる人は天国に送り、悪なる人は地獄に送ると言います。そんな裁判長がいいのですか。裁判長が好きですか。意地悪な神様になって地獄へ送り、天国へ送るように造りましたか。論理的に全部不当な仕打ちだという結論になるのです。

既成神学では創造主なる神様は聖なる方であり、神様から創造された被造物は俗なるものであるという論理をもって出てきます。これは宇宙生成の本性的原理に違反する論理です。キリスト教の伝統的主流思想が愛だと言ったのに、俗なる罪人と聖なる神とはどのように一つになることができますか。理論的根拠を出してみなさいというのです。理論を提示できないならむなしいことです。偽物です。ですから神様にも絶対的な神自身が絶対服従して、絶対者である神の生命を捨てでも「ため」に尽くしたい相対がいなければならないというのです。

今日、既成神学者が言うには、「信仰全体を我々は批判する時だ。今までの神観、人生観に対するすべてのものを再検討する時が来た」と言います。今までの神学思潮は「聖なる創造主と被造物は対等な立場に立てない」ということでした。それでは愛はどのようにしますか。神様一人で愛しますか。平和だ幸福だというものは、何ですか。神様一人でしますか、と尋ねたら、答えはどのようにしますか。対象がいなくてはいけません。

キリスト教では絶対的神さえ信じれば何でもできると言います。ですから独裁国家が出てきたし、血を流したのです。愛という論理を見いだせません。神のみが第一だとする前提のもとでは、どんなに行っても愛の神のお尻について回らなくてはならないのではありませんか。愛というものは対等な概念から始まるものですが、そのような概念では水平にならずしては垂直を探すことはできません。独裁の歴史が現れて流血の歴史がキリスト教を背負って出てきたのも、神のみを絶対視したからです。「私が神の代わりに刀を持ったのも神の僕だからだ」と言うのです。
しかし統一教会が偉大なことは、それを越えて、神も絶対者ですが、絶対者として絶対愛の前に屈服することができることを論ずるという事実、もう一つの世界を創造できる念願があるという事実をもっているということです。ですから神様も、愛に絶対服従することを喜ぶというのです。

この被造世界が生まれるようになった動機とは何でしょうか。神様も愛が必要で天地を創造したというのです。このような事実を知らない今日の既成神学の神観は、それで間違っているというのです。絶対的な力の神、力さえもてば何でもできるというふうにです。

ですからキリスト教文化が通過するところは血を流してきたのです。西洋文明がキリスト教に従って発展してきましたが、これからはキリスト教文化は終末世界に破綻的結果をもたらすだろうということを、このような論理から予測できるのです。

歴史は科学の時代に来ています。すべての根源を把握して種の起源を探究し、根本を追求する科学の発展時代が来ることによって、宗教もそこに歩調を合わせざるを得ないのです。そこに主体的な観をもって、世界がどうであり創造の内容がどうだということを説明して、神様を立証できる宗教が現れなければならないのに、そのような宗教がないので、神が生きている限りそのような宗教の内容を準備しなければならないのです。

人間が絶対者によって創造され、絶対者の愛を実践するように造られたならば、人間の創造に動機と目的があったことは明らかです。その動機と目的が明されるためには、絶対者がどんな方なのかという問題、すなわち正しい神観がまず立てられなければなりません。正しい神観が立てられることによって、その方の創造の目的と動機が明らかになるでしょうし、したがって平和のために絶対愛を実践しなければならない理由も明白になるでしょう。

絶対的であり、永遠であり、唯一であり、不変の神様がおられるならば、そのような神様によって新しい見地から真なる愛、真なる理想、真なる平和、真なる幸福の起源を要求せざるを得ないのです。このような立場から見るとき、神様自身から見る神観、神様自身から見る人生観、神様自身から見る物質観、これをはっきりさせるところから、初めて新たな平和と新たな幸福の世界を私たちは迎えることができると見るのです。

宗教紛争の根本原因もやはり本体論の曖昧さにあります。絶対者はただ一つであって、二つも三つもあり得ないにもかかわらず、各宗教の指導者たちは自分の絶対者だけが正しい神であり、それ以外の神は真の神ではないと見ているので、結局宗教ごとに絶対者がいることになり、絶対者が多数いるという背理が成立します。したがってすべての宗教の神は相対的な神にすぎないという結論になり、各宗教を通じて立てようとした絶対的価値観、すなわち神の愛と真理に関する理論は相対的なものにとどまっています。すなわちこれまでの宗教は、混乱を収拾することができる絶対的価値観を立てることができなかったという結論になるのです。これはすべての宗教が絶対者に対する正確な解明をすることができなかったので生じた必然的な結果だと言わざるを得ません。

各宗教ごとにその教理が成立する根拠としての絶対者がいます。ユダヤ教の絶対者は主なる神です。キリスト教の絶対者は God、すなわち神様です。イスラム教の絶対者はアラーの神です。儒教や仏教は絶対者を明確にしていませんが、儒教の徳目の根本である「仁」は天命と連結しているので「天」が儒教の絶対者だと見ることができるし、仏教では諸法は常に変化しており真理は諸法の背後にある「真如」から探し出すことができるとしているので、真如が仏教の絶対者だと見ることができるのです。

新しい宗教のための本体論は、従来のすべての絶対者が各々別個の神ではなく、同一な一つの神であることを明かさなければなりません。それと同時にこの神の属性の一部を把握したのが各宗教の神観であったことと、その神の全貌を正しく把握して、すべての宗教は神様から立てられた兄弟的宗教であることを明らかにすることができなければなりません。それだけではなくその本体論は、神様の属性とともに創造の動機と創造の目的と法則を明らかにし、その目的と法則が宇宙万物の運動を支配しているということと人間が守らなければならない規範も結局この宇宙の法則、すなわち天道と一致することを解明しなければならないのです。

統一教会の原理が偉大なのは何かと言えば、創造性が具体的だということです。創造がどのようにされたのかということが分かるようになっているのです。その次にどのように堕落したのかという実質的な論理があります。その次には歴史観があります。歴史時代において神が堕落した人間を放置したままにしないで、再創造するためにどれほど苦労されたのかということがはっきりしているというのです。そうして過程を通して目的の世界に到達するということを理論的に一目瞭然に明らかにしたのです。

第二章 神様と創造の役事

一 神様の創造の動機は愛

一) 創造の役事は完全投入

神様の天地創造は生命の接着を目的としたものではありません。愛の理想を同化させるためのものです。

科学者は、宇宙は力で形成されており、この力によって宇宙が発生したと言います。しかしそうではありません。電気は、先に力があって作用するのではなく、作用を通して電気が生じます。そして作用する前に、プラスとマイナス、すなわち主体と対象がなければなりません。作用は一人ではできないので、作用するためには必ず、主体と対象がなければなりません。結局プラスとマイナスがあってこそ作用し、その作用を通して電気が生じます。同じように力も主体と対象が作用をして初めて生じます。ですから今日、学者が言っているように力から宇宙が発生したのではありません。また、力が先なのではなく作用が先です。

愛が先でしょうか、生命が先でしょうか。愛が先です。地球が神様の生命から出たからといって、生命が一番だとは言いません。愛が一番だと言います。神様は天地創造をする時、まず生命からしたといっても、その生命の発源地、動機は愛です。生命が生じたのは愛のゆえです。

神様がなぜ天地を創造したのでしょうか。いくら絶対者だと言っても、一人で喜びを感じることはできず、たとえ喜んだとしても喜びの刺激を感じることができないので創造をしました。絶対者がたとえ「私は絶対者だ。私は愛の主人公である。生命の主人公だ」と言ったとしても、絶対者一人では愛の刺激を感じることができないのであり、天地が私の体の中にあるという生命の刺激を感じることができないのです。

神様が御自身だけを思ったとするならば、天地創造をしたでしょうか。創造とは力の投入を意味します。芸術家は最高の作品を作ることが願いです。芸術家は傑作品を作るために、ありとあらゆる精誠を投入します。すべてを投入したところからのみ完全な傑作品が出てきます。これ以上できないというときに初めて傑作品が生まれるのです。

創造は自分を投入するところから始まります。力を投入してこそ創造が可能です。力を投入せずしては、いかなるものも生じません。完全に投入するところに完全な対象が成立するという原則を考えると、神様は主体として対象を造るために完全に投入しました。神様自身が、御自身のためではなく対象のために存在しようと運動を始めたのが創造です。

創造するとは力の投入のことを意味します。投入をしたのですが、どれだけ投入したのでしょうか。神様がみ言によって造るときに、「こうなれ、ああなれ」といたずらに創造したかのように考えられています。違います。ここには真の生命を完全に投入し、真の愛を完全に投入し、真の理想を完全に投入しました。私たちも、精誠を尽くさず、血と肉を投入していないものは愛しません。
それゆえ創造する前と創造した後では違います。創造する前は自分のことを考えたのですが、創造を始めてからは対象のためを思いました。私が存在するのは私のためではなく、相対のためであり、息子、娘のためである、このようになっています。

神様が天地を創造するということは、御自身の本質を投入するということです。結局エネルギーを投入したということであり、エネルギーを投入したということは自分の本質の減少を意味します。対象世界の創造は愛によってなされたのですが、神様はそのみ旨をなすために自己を投入しました。投入したそのものが自分に実るようにしたのではなく、相対に実るようにしました。投入することによって神様が疎遠さを感じるのではなく満足を感じるのです。それは愛によって造ったからです。

私たちが朝食を食べて重労働をすれば空腹になります。そしてすぐ疲れます。なぜでしょうか。力を投入すると消耗するからです。世の中の万事において、損をして喜ぶということはありません。プラスとなってこそ良いのです。それゆえ神様も天地万物を造ったのは、良しとするために、必ずプラスとなり得る何かがなければなりません。それでは神様はプラスとなり得るものをいつ得ることができるのでしょうか。ここに被造物の完成という標準があります。「この時まで投入すれば、その時からはかえってくる」というものがあります。同じことです。何かをしようという望みをもって努力し、その限界点を乗り越えると、必ず結果がかえってきます。これが宇宙の法則です。

神様も同じです。人を造ったのは神様の力を投入したということです。力を投入しました。自分自身を消耗しました。ところが投入できるものを完全に投入して人を創造したとするならば、その完成した人はどこかに逃げるわけではありません。完成すればその次には神様に戻ってきます。戻ってくるにあたって、百を投入したときに、百よりも小さい価

値をもつものとして戻ってくるのではなく、神様の創造の価値を加えて戻ってくるのです。

宇宙はどのように出発したのでしょうか。神様を見てみると、すべてが「ため」に生きるところから、投入するところから出発したのです。自己を消耗するところから始まったのです。では、自己を消耗して相対を造って、何をしようというのでしょうか。二者共に消耗するのですが、消耗して得るのが愛です。愛さえ得るならば、いくら消耗してもいいというのです。そのような概念が愛であるゆえに、愛を中心として神様が創造を始めたのです。神様が損をするようなことをしたのではありません。投入することは損になりますが、神様はなぜそうしたのでしょうか。愛はすべてを満たしても余りある力をもっているがゆえに、消耗して投入しましたが、その代わりに愛を得るのです。愛は投入すればするほどだんだん小さくなるのではなく、動けば動くほど大きくなっていくのです。そうではなくて、真の愛が小さくなるという原理であれば、神様自体が投入して消耗するのです。反対になります。真の愛は投入すれば投入するほど大きくなっていくのです。

愛には創造の能力があるゆえに、くたびれることはありません。愛の心をもてばいくら投入しても、消耗したエネルギー以上にいつでも補充することのできる愛の力があるがゆえ、疲れ果てることがないのです。ですから困難で苦痛でも嫌ではないのです。それが嫌だとすればどうしますか。愛のための道には永遠に嫌だという心はあり得ません。神様の本質には怨讐という概念はありません。悪の概念がありません。真の愛の中にあるからです。

神様の創造理想を中心として投入、投入、投入しなさいというのです。投入すれば回りに回るのです。空気を例に挙げれば、絶対低気圧と絶対高気圧があればその中間の気圧が生じます。誰が呼ばずとも天が降りてくるのです。それゆえ一〇〇パーセント以上投入したがる人は、いつも天が満たしてくれるのです。宇宙の原則がそうなっています。完全に投入して忘れるところには永遠な運動が連結するために、その基準において永生の論理が出てくるのです。永生、永遠な生命、そうでなければ統一の原則をどこから引き出してくるのですか。「ため」に生きればぐるぐる回ります。ぐるぐる回ってどこに行くのでしょうか。だんだん小さくなって上がっていきます。上がっていくのです。ぐるぐる回って広がれば下りていきますが、だんだんすうっと上がっていくので、神様は自動的にアダムとエバの肩の上に両足を置くしかありません。何のことか分かりますか。

それでは神様が天地万物をなぜ造ったのでしょうか。造ったという事実は力を投入したということです。力の投入です。力の投入というのは自体の消耗を意味します。いくら全知全能の神様でも、力をすっかり引き出したのにそれが戻ってこなければ消耗するのです。

神様は万物と人間を創造するためにあらゆる力を投入されました。全部を投入し、また投入されました。他のものは投入すれば全部消耗しますが、真の愛だけは投入すれば投入するほどより栄え、生産するのです。真の愛は百を投入すれば百二十が戻ってきます。それゆえ真の愛

を実践する者は滅びるようでも滅びることなく、永遠に栄えて永生するのです。

神様がなぜ存在されるのでしょうか。何ゆえにおられようとするのでしょうか。愛ゆえにおられようとするのです。それゆえ愛の相対が必要なのです。ですから全知全能なる神様は、愛の相対を創造しなければならなかったのです。創造の本質的理想を、愛を中心として創造を始めたということをこれまで私たちは知らなかったのです。愛ゆえにすべての被造世界が創造されたのです。

神様の願いは真に与えることのできる世界的な足場をもつことです。神様は与えることにおいて誰も讒訴することはできず、受けることにおいても誰も条件を提示することができない、自由で平和で幸福な場を望んでいます。そのような立場を世界的に広げて、万民をそこで生きるようにすることが、神様の得ようとされる所期の目的です。

二) 愛を通じた創造理想の実現

愛の実現のためにこの世を創造された神様でした。人間と万物が神様の愛を中心として一つとなり、和気あいあいとした愛の世界を築くのを見て喜ぶために、そして人間が神様の愛を中心として真の夫婦の因縁を結び、真の愛の家庭と氏族、民族、世界を築くのを見て喜ぶために、そしてそのような人間と愛によって一つとなることで愛の喜びを味わうために被造世界を創造した神様でした。正にこれが神様の創造の理想だったのです。

無限なる神様の愛が目的を中心として愛することのできる本心の根本、これが正に心情です。その価値は変わることのないものです。神様の存在の価値を論じようとするならば、この愛について論じなければなりません。価値というものは相対的与件ができた中で決定されるものです。

喜びというのは神様の心情から出発するものです。その目的はどこで遂げられるかというと人間によって遂げられるのです。見えない神様の心情が目に見える人間の心情で顕現するのです。そのような心情をもった人間が横的に広がって家庭を築けば、その家庭が世界的に広がって世界の中心になるのです。そのような家庭を築くよう、神様はアダムとエバに、生育せよ、繁殖せよと祝福されたのです。天宙主義は生育し繁殖して万物を主管するという根本の上に成立するのです。

神様はなぜ被造世界を創造されたのでしょうか。神様は被造世界を通して喜びを享受されようとしたのです。神様がいくら絶体者だとは言っても、喜びを一人で感じることはできません。喜びは相手がいてこそ生じるからです。神様が必要とされるのは知識でもなく、お金でもなく、権力でもありません。神様自身が絶対的であり、全知全能であられるがゆえに、そのようなものは必要とはされません。科学がいくら発達しても、神様が造られたものに追いつき、越えることはできません。膨大な宇宙は、秩序の中で法度に従って運行しています。人間の考えや科学が及ぶことのできない宇宙を神様が創造し、また運行してお

られるということを考えると、神様は絶対的な科学者でもあられます。

神様の本然の愛に綱を結んでその愛の味を味わった人が離れるようなことがあるでしょうか。蜜を吸っている蜂のお尻を引っ張ると、その蜂はお尻が取れても蜜から口を離しません。皆さんがその味を感じたとするならばどうでしょうか。行っても途中で戻ってきて再びそこにくっつこうとすることでしょう。

神様の愛は統一教会の原理によれば、四位基台の完成という結論になります。だとすれば四位基台の完成とは何でしょうか。父母の愛は子女たちに伝達されて感じるようになっています。四位基台の中心は、父母の愛を中心に子女と一つとなり、男女の愛が一つとなり、最後に神様の愛と一つとなるのが四位基台なのです。

アダムは神様と一つとならなければなりません。これを結びつけるものは愛です。存在世界の平面的な代表者は人間であり、立体的な代表者は神様です。これを永遠に結びつける中心点がすなわち愛という絆です。肉体をもった人間が神様と一体となれば、その心情と感情は無限な体恤境と幸福感に酔うようになります。結局愛によって神様と人間は一つとなるのです。愛によって人間と世界が一つとなり、神様の創造目的である理想世界の実現はここから出発するのです。

神様を中心とした新たな愛、すなわち創造法度による愛が決定されたところから初めて神様の理想が出発します。

私たち人間が寝て朝起きたとき、その心に願うことは何でしょうか。朝食を取ることが問題ではなく、仕事に出掛けることが問題ではなく、全世界のことを気遣うのが問題ではなく、愛の心を夜も昼も春夏秋冬変わることなく、一生の間変わらずにもつことを願うのです。そのような男性、そのような女性が完全に水平線をなして、縦的な神様と共に九〇度に連結され、人情と天情が合わさることのできるそのような立場の愛、そのような愛の理想境、そのために神様は天地を創造されたのです。

神様が創造するにあたって、愛のために投入し、投入し、忘れるという本質から出発したがゆえに、相対もそれを受けるためには共に投入しなければならないのです。上から投入し、下から投入するのと同じです。こうして天地が合徳、一つとなるのです。天地を抱いて動かすことのできる愛を中心として一つとなるのです。そこに偉大なる力が来るのです。

愛を占領しようとするならば、投入しては忘れ、投入しては忘れなければなりません。なぜそのような愛をもたなければならないのでしょうか。愛は動けば動くほど大きくなるものだからです。力学の世界での自然現象は、動かせば動かすほど、作用すれば作用するほど小さくなります。自然世界は動けば動くほど小さくなりますが、真の愛の世界は動けば動くほど大きくなっていくのです。神様はそれを知っていたので、真の愛を中心に創造を始めることができたのです。

二　人間を創造された目的

一) 神様の愛の対象として造った

神様は人間を愛ゆえに造りました。人間はなぜ造られたのでしょうか。愛ゆえに造られました。人間が万物と違うのは、神様の息子、娘として造られたことです。神様の直系の愛を受けることのできる対象者として造られたのです。これが人間の特権です。

完全なプラスである神様は、完全なマイナスを創造するようになっているのです。それでは宇宙の主体の立場に立たれた神様の対象は誰でしょうか。これが問題です。神様はなぜ人を造ったのでしょうか。人は神様の無形の内的な相対的実体存在だということです。少し難しい言葉です。

人を創造して育てて、天宙の主人である神様の代わりに愛をもった者として、自分よりも高い座につくようにして、主人にしてやろうということなのです。

万有の中心は誰でしょうか。人なのです。その人というのは、どのような存在なのでしょうか。全知全能なる神様の前に相対的価値として登場したのが人間だ、と見るのです。人間は万有の愛の表象体として、一つの灯台のように光を放つことのできる一つの中心として現れた存在です。そのような存在が人です。

人とは何ですか。神様の愛の対象存在として造られました。神様が二性性相であるだけに、プラスとマイナスの二性性相の主体であるだけに、その主体の前に対象となるためには、プラスとマイナスのような二性性相の形態が必要です。その形態というのは、主体の性稟とは反対の形態ではありません。すべての性稟の相対性を備えて、愛という本質にぴったりと合わさる相対的形態のことをいうのです。

これが相対存在なのですが、それは他のものには合いません。愛にだけ合うようになっているのです。神様には知識といったものや他のものは必要ありません。愛が必要なのです。人間がこの宇宙の中心だというのは、愛の理想を果たすために被造世界を造ったからです。愛の神様に代わって、主人の前に最初に中心の位置に立って愛されるという特権をもっているがゆえに「人間は万物の霊長である」という言葉が成立するのです。

神様はなぜ人間を創造したのでしょうか。息子、娘の生命を見るために創造したのではありません。その息子、娘と共に愛をするために人間を創造したのです。いくら考えてもそうとしか考えられません。人間を創造した目的は愛のゆえです。神様の愛を中心として、その基盤の上で生命が創造されたのであり、生命を造って愛を誘発したのではないのです。言い換えれば、本来神様の心に愛が芽生え始めて生命が始まります。その生命は愛から始まったので結果も愛にならなければなりません。それゆえ愛を除けば私たち人間は不幸なのです。

神様はなぜ人を造ったのでしょうか。全知全能なる神様、遍在される神様が何が足りなくて人を造ったのでしょうか。キリスト教式にただ造りたいから造ったのだといえば簡単

です。しかし、それでは通じません。神様は何が必要でしょうか。神様がお金が必要であり、金塊が必要であり、ダイヤモンドが必要でしょうか。そのようなものはいくらでもあります。また、神様は知識が必要でしょうか。必要ありません。知識の王なのですから、知識はいくらでもあります。全知全能なる神様には権力は必要ありません。あればあったで、なければなかったで済みます。そのようなものは「ある」と言ってもいいし「ない」と言ってもいいのです。大した違いはありません。

神様に必要なものは何でしょうか。神様は生命も必要ではありません。生命の主体であるのに、そのようなものがどうして必要でしょうか。それでは何が必要でしょうか。愛が必要なのです。なぜ神様に愛が必要なのでしょうか。愛というのは相対的関係から成立するものだからです。神様も愛を必要とする神様にならなければ、この創造世界や人間世界と関係を結ぶことができません。それで愛をもって尋ねてこなければ存在世界と関係を結ぶことができないという結論になるので、神様は愛を標準に定めてきたのです。

神様は人を最も貴いものと思っていますが、なぜ貴いものと考えるのでしょうか。神様は愛の相対を必要とするので最も貴く思うのです。いくら神様が愛をもっていたとしても愛する対象がいなければ愛を感じることができないのです。相対的関係においてのみ愛を感じるのです。神様が人を最も貴く思うのは、人間は神様が愛することのできる対象の位置に、愛の対象の位置にいるからです。神様が最も貴く思うのは正に人間なのです。

神様がなぜ人を造ったのでしょうか。それは愛を完成するためです。その愛は神様から始まるのではありません。相対から求め得られるものです。相対がなければ見いだされることはありません。神様が最高に貴いものを成就させるためには相対が必要なのです。神様も相対がなければならないのです。それで相対を造ったのです。神様御自身も、相対から絶対的な愛をつくりあげることができるように相対を求めていくのです。それゆえ神様も愛のためにおられるのです。愛のために存在されるのです。愛の驚くべきところはここなのです。

人は神様のためにあり、神様も人のためにあるのです。それゆえ真の愛というものは「ため」に生きるところから始まるのです。本来人間はどこから生まれたのでしょうか。神様も愛から始まったのです。愛ゆえに生まれたのです。愛が起源なのです。

神様御自身が愛するための愛の対象が必要で人を造ったのです。一人で愛することはできません。対象圏がなければ愛は成り立ちません。神様も愛が絶対必要なので被造万物を造り、被造万物を代表した万物の霊長として人を造ったのです。人が絶対的に必要であるがゆえに、絶対的愛の対象圏の価値を与えたのです。愛を共有するために、その対象的存在として造ったのが人間なのです。ですから人間自体が神様の体です。神様の体となったアダムとエバの二人が夫婦になったということは、神様が夫婦になることなのです。そうなれば天上世界に行ってアダムとエバの姿で神様が人類の祖先となり、霊界と地上世界を

治めるようになっているのです。そのようになったのです。

神様はなぜ人を造ったのでしょうか。好きで造ったのでしょうか。違います。見るために造ったのでもありません。愛を求め得るために造ったのです。それが分からなければなりません。

二) 愛と生命の核心をすべて投入

神様はあらゆる万物を造り、その万物の主人公として人間始祖をエデンの園に造られました。人間を造るのに、神様がいたずらに造られたのではありませんでした。趣味で造られたのではありませんでした。人間を造り、万物を代表する中心として立てるまでの神様の苦労と精誠は、言葉では到底表すことができないという事実を私たちは知らなければなりません。神様が人間を造るとき、ありとあらゆる精誠を尽くし、心血と、御自身の生命の核心をすべて注いで造り、愛と心情をそっくりそのまま注いで造られました。どんな力をもっても離すことができず、離れようにも離れることのできない因縁の中で造られたのです。このように造られた人間であるゆえ、その人間を見つめられる神様に初めて平和が宿るのであり、すべての情と幸福はその人間を通してのみ宿ることができるのです。

神様は人間の父であり、人間は神様の息子、娘です。神様が骨の中の骨、肉の中の肉、骨髄の中の骨髄をそっくり注いで造った人間であるゆえに、このような人間が神様を引っ張れば、引っ張られるしかないのであり、また神様が人間を引っ張れば、引っ張られるしかないのです。神様はこのような因縁の中で、内容と目的が一致する人間として造られたのです。もし、そのように造った人を見て神様が賛美するみ言や詩があるとすれば、それはこの世のいかなる詩人や文人にも表現することのできない最高の作品となることでしょう。その対象は神様でもなく、万物でもなく、唯一万物を代表した人間なのです。

神様が被造万物の中で神様の愛の対象となることのできるその存在が我々人間です。神様は愛の対象を造るために全心全力を尽くして自己のすべてを投入したのです。神様はこのように御自身の全体を投入して何をしようというのでしょうか。宇宙の愛の核を設定しようというのです。それが創造理想でした。

愛について語るとき、神様にはそのようなものはありません。神様が造られた創造物にはありますが、神様にはそのようなものはありません。あったとしても心の中に内的にあるのであり、形として表れることはありません。それで何をするのでしょうか。それが誰にあるのかというと、人間であるアダムにあり、エバにあります。ですから神様よりも、もっと貴いものを人間がもっているということを知らなければなりません。

神様は自分の愛の相対が自分に優ることを願って創造を始めました。今日の私たちもそこから出発したので、自分の愛の相対は自分に優ることを願うのです。皆さんもそうでしょう。神様も同じです。

神様が御自身の愛の対象として人間を創造するとき、自分に優ることを願う立場で一〇

〇パーセント、一〇〇〇パーセント以上を投入しようとしたのです。投入しては忘れ、また投入し、より貴いものを与えようとしたのです。

神様が人間を創造するとき、御自身よりも立派な愛の相対を造ろうとしたので、神様のすべての要素、目に見えない無形の要素を一〇〇パーセント実体化させるために投入し、また投入しようとしたのです。それはどういうことでしょうか。投入して忘れることのできるところにだけ、真の愛の起源を発見することができるからです。簡単な内容です。これが宇宙の根本原理です。

人間の欲望の最終着点、人間は欲望の最大の完成基準に向かうことのできる方向性があるのですが、それが私たちに作用しているという事実を発見しなければなりません。聖書には「私たちの体は神様の聖殿である」とあります。それがどういうことなのか解釈できずにいるのです。たとえ神様でも、神様と私が愛をささやくことのできる愛の対象圏となり、その愛の対象圏と一つとなれば、宇宙を相続することのできる権限が生じるからです。愛という原則基盤を通して神様の造った世界、霊界、無形世界、実体世界、このすべて、宇宙の相続権を獲得することができるのです。この驚くべき事実を知らずにいるのです。

三　アダムとエバを通じた愛の理想

一) アダムは無形の神様の体として造った

神様がアダムとエバを造った目的はどこにあるのでしょうか。我々人間の形状を見てください。体をもっています。しかし無形の神様には体がありません。体をまとわずして、体をもたずして霊界や地上世界を治めることはできません。それゆえ神様が人間の父母として現れるためには体を着なければならないのですが、その体を着た代表がアダムとエバということです。アダムとエバは人類の始祖であると同時に、天地を主宰する神様の実体なのです。実体をもった神様、すなわち永遠な無形世界の神様の形状を代わりに着て現れた立場で、父母の立場で世界を統治する責任がアダムとエバにあったのです。実体世界を造った以上、実体世界の中心がアダムとエバなので、アダムとエバの形状に倣って霊界と肉界を連合させようとしたのです。そういう意味でアダムとエバを造ったのです。

神様はなぜアダムとエバを必要としたのでしょうか。二つの目的があります。一つは愛の理想を成就しようということです。二つ目は無形の神様が形状を着て現れるためです。それゆえ無形の神様が有形の形状をまとって有形世界と関係を結ぶためのその基礎、その核心がアダムとエバなのです。それでアダムとエバが完成して霊界に行けば、アダムとエバは神様の体のようであり、神様はアダムとエバの心と同じ位置に御座されるのです。一人の人、一人の霊的世界で完成した人を、実体世界の体と心のような一つの結果としようとしたのが、神様がアダムとエバを創造された目的です。

無形の神様が実体をもった神様として登場するというのがアダムとエバの創造なのです。アダムとエバを創造したのは、無形の神が実体の神様として登場するためなのです。それはどういうことでしょうか。南極と北極のよ

うな極を描いてこそ一つの磁石となることができるのです。それゆえ目に見えない神様と目に見える神様が調和を成すことのできるこのような原理が現れるのです。そうして初めてこれが回る作用をすることができるのです。上が下の位置へ行き、下が上の位置へ行き、内的が外的に、外的が内的に回って一つとなることができるようにしなければなりません。何によってするのでしょうか。愛です。

霊界と肉界は何を中心としたものでしょうか。霊界の代表は神様であり、地上の代表はアダムとエバなのですが、これが連合しなければならないのです。ゆえにアダムが生きている間アダムがもっている形態は、地上において地上の国の王であり、永遠な王権をもって現れたものです。エバは誰かというと、皇后です。永遠な皇后権を代表する皇后として登場するのです。そしてその永遠な王権を代表した夫婦がそのまま霊界へ行って神様に代わる役割をするのです。

天の国に無形の神様が一人でいて何をするというのでしょうか。見えない神様だけではどうすることもできないのです。私たち人間の父母となるためには、体をもって感じることができなければなりません。人間のような体を着なければならないので、体をまとうために、仕方なくアダムとエバを二重的存在として造らざるを得なかったということを知らなければなりません。

なぜアダムとエバを二重構造に造るしかなかったのでしょうか。無形の神様と同じくなるには、心と体が一生を通じて生きながらあの世に行くまでに、一つとなったという基準を立てなければなりません。そうせずしてあの世に現れればその形状が神様と一つとならないのです。実体的王権をもった父母が無形の父母である神様と一体となって永遠な天上世界に体をもった王権を顕現させるために、アダムとエバを二重構造に造りました。神様もアダムとエバに連結しなければ世の中と関係を結ぶ道がないのです。アダムとエバと関係を結んでこそアダムとエバの息子、娘と関係が結ばれるのです。そのようになるのです。

神様が人を造った理由は同じ父母の位置に立てるためであり、体を着るためなのです。ですから外的な神様はアダムとエバであり、神様は内的な神様なのです。体的な神様がアダムとエバであり、心的な神様が無形の神様です。その神様が人類の父母です。本来の父母です。その父母が何人もいるのではありません。一人です。一人なので、その一人の方が入ることのできるアダムとエバ、男性と女性の二性性相をもった分聖殿のようにしておいて神様がそこに入るのです。神様が臨在して作用してこそアダムとエバの二人が理想的作用をするのであって、神様が作用しなければ神様のみ旨も何も分からないのです。

神様は父の位置、父母の位置に立ったお方です。人間を地の神様として立て、創造主である神様は天の神様として縦的な神様として立てて、これが天地合徳し、こうして愛によって生きようというのです。神様も一人では寂しいのです。

創造主は縦的な真の愛を中心とした縦的な父であり、堕落していない本然の人間祖先であるアダムとエバは、完全に九〇度で一つと

なることのできる位置に立った完成した父母、横的な体の父母なのです。創造主は真の愛を中心とした心の父母であり、アダムとエバは横的な体の父母なのですが、この二つが合わさって天の父母と地の父母が一つとなり、天と人が合わさって息子、娘が生まれたならば、この地に生まれるすべての人々に宗教は必要ないのです。そのままで神様の国へ行くのです。堕落ゆえにこのような複雑な問題が生じたのです。そうなっていたならば私たちの体と心が分かれるということはなかったことでしょう。

神様が男性と女性を造られた目的は、二人が愛し合って一つとならしめるためでした。アダムはアダムのために、エバはエバのために造ったのではありません。アダムはエバのために、エバはアダムのために造られたのです。また、神様御自身の愛と喜びのためにアダムとエバを造られたのです。神様がアダムとエバを造ったのは、知識、金、権力などが必要だからではなく、唯一愛が必要だったからです。

神様がアダムとエバを造ったのは、知識を与えるためでもなく、権力を与えるためでもなく、たくさんの財物を与えて裕福に暮らさせるためでもありません。彼らを創造した目的は愛の実体として立てるためだったのです。

神様が人間を創造した目的は、家庭を通して愛の基盤をつくろうとしたのです。愛のない被造世界は地獄であり、神様御自身もまた存在価値が無意味なものとなるからです。神様が人間を創造された目的は愛のためだったというのが創造の絶対法であることを知らなければなりません。

神様がなぜ人間を創造したのでしょうか。男性は東であり、女性は西なのですが、縦的な神様を中心として東西四方、平面が必要です。そこでは三六〇度なので無限な面があるのです。その面を通して何をしようというのでしょうか。天国の民を生産する工場、出発地がこの地球です。それゆえ天国の民は、この地球で生きてから行った人です。行ってみてください。地球星のほかに国はありません。宇宙に人がいるなどと言っていますが、いったい何が住んでいるというのでしょうか。宇宙はすべて人ゆえに造られたものです。

私たち人間は、神様より優れているでしょうか、劣っているでしょうか。神様が人間を創造するとき、縦的なアダムとエバしか造ることができませんでした。しかしながら私たちは息子、娘を生めば二十人以上も生むことができます。それは神様にはできないことです。神様はアダムとエバしか造れませんでした。なぜでしょうか。縦的なものは絶対的な基準が一つなので、絶対的男性一人、絶対的女性一人しか造れないのです。

アダムとエバは神様の息子、娘として生まれましたが、神様の中にあった双胎が実体として現れたものです。無形の男性、女性の双胎が有形の男性、女性の実体として現れたのがアダムとエバでした。神様の息子、娘がこのように始まったのです。神様の無形の心情圏の内容を実体心情圏として完成させて、無形と有形が一つとなるためのものが創造理想

です。創造理想は愛を中心として対象圏を成そうというものです。

アダムとは何でしょうか。神様の内在的性稟の半分を実体として展開した表示体です。エバは何でしょうか。女性の性稟を実体として展開した表示体であり、表した存在です。表したと言うとき、表したということは実体をもっている、表示体であるということです。表れる前に、表れていない動機があって表れたということです。その表れていない動機が何であるかというと、私たち統一教会では無形の実体である神様です。このように見るのです。

一男一女は無形であられる神様の実体対象として表れた息子、娘です。男性は神様のプラス（＋）性稟を、女性は神様のマイナス（－）性稟を表した実体対象です。創造の理念は、両性の中和体としておられる神様の性相を二性に分立したのちに、再び神様の本性相に似た姿に合性一体化することです。一人の男性と一人の女性は、それぞれ神様の一性に似て出てきました。したがってこれらの一男一女の結合は神様のプラス（＋）性稟とマイナス（－）性稟が一つとなることです。すなわち神様に似た中和体となるのです。それゆえ人間二人、すなわち夫婦は神様の全体を表象する結合体なのです。

二) 夫婦は第二創造主の位置

夫婦が一つとなって息子、娘を生むことによって永続することができます。ですから創造した創造主の位置に上がって息子、娘を生んでみることによって神様が創造した喜びを平面の世の中で感じることができるのです。それゆえ自分の妻は息子、娘のようでなければなりません。息子、娘と兄弟の立場を合わせたものです。ですから分かれることができません。愛はそういい加減にはできていません。息子、娘を生んでこそ神様が本来の創造理想として願った本然的基準に到達するのです。それゆえ家庭が天国の基盤です。

このように夫婦が息子、娘を生んで父母の位置に上がることによって、神様の位置で神様が人間を創造するときに、どれほど喜ばれたかを体恤するのです。天地の大主体であられる神様の権限のすべてを相続することのできる位置に入り得る体恤的環境をもって、体恤的内容として伝授してあげるのが息子、娘を生産することです。息子、娘を生産して大切に育てて結婚させるまでが母親と父親の責任です。神様がアダムとエバを育てて結婚させなければならなかったのですが、できなかったのです。アダムとエバも息子、娘を生んで結婚させることができませんでした。この恨を解かなければなりません。これが教育の原論になるのです。結論は簡単です。

人間は横的な父母の立場に立つのです。アダムとエバは子供であると同時に兄弟です。兄弟であると同時に夫婦であり、夫婦であると同時にのちに息子、娘を生むことによって神様の位置に上がるのです。息子、娘を生んで愛するということは、神様が人間を創造して喜んだすべてを相続することなのです。

神様がアダムとエバを創造したのと同じように、創造主の立場でその喜びを感じさせるためのものが子女なのです。子女はアダムと

エバによる第二創造物です。無形の神様は有形の実体としてアダムとエバを造りました。アダムとエバが完成すれば、神様の有形実体の完成として愛の中心代表となります。その神様がアダムとエバを創造して喜びを感じたのと同じように、実体的に神様の創造の喜びを感じることができるように、体験させるために与えたのが子女だというのです。

神様が理想的な宇宙の円満な家庭理想を完成しようと、子女と兄弟と夫婦と父母の立場を備えて自分の愛を相続させようとされるのです。愛をもっているがゆえに私を第二の創造主の立場に立てるのです。それが息子、娘です。息子、娘はそれほど貴いのです。

女性が子供を妊娠すれば新しい世の中が生じるのです。その子供が活動を始めるとたくさんの夢を見ます。女性はそうでなければなりません。神様が創造されていたその夢、夢は多いのです。「将来この子が大きくなってこうなったらいいのに」というのは、神様が創造しながらアダムとエバを準備したその思いに似たものです。女性の立体的夢はそのようなものです。「私一人ではない。天下が私の息子、娘の手の中にあり、私の懐で育つのだ」このように考えながら愛を中心として天下を呼吸しているのです。

子供を生む立場は、結婚から上弦世界を占領するのです。神様の位置に上がることによって子女を愛することは、神様が創造以後に人間をいかばかり愛したかという内縁を体恤させることです。

神様はなぜ人を造ったのでしょうか。愛の相対が必要なので、横的な繁殖の基盤として人を創造したのです。

アダムとエバが神様のように愛してこそ、そこに神様が臨在するのであり、アダムが勝手に、エバが勝手にしてはならないのです。完全に一つとなってこそ無形の神様がここに往来するのです。そうして神様の愛の冠を、愛のふろしきをかぶせようとするのです。それが理想です。そうしてこそ神様がにおいをかぎ当てるのです。神様はどこへ行ってもくんくんとにおいをかぐのです。

それでは神様も口づけするのを好むでしょうか。無形の神様は二つが一緒に合わさっているので刺激を感じません。愛も一つとなったり離れたりします。夫と妻が最初、死ぬか生きるかというほど愛しているときは、雷が鳴り、稲妻が光るように愛するのです。次は雨ののちに雲が晴れるように、愛が一度燃えたのち、再びゼロに戻るのです。そうですね。一度燃えてからゼロに戻るではないですか。結婚生活をしたことがないのですか。どうして笑うのですか。

神様は二性性相の中和体であると同時に、格としては男性格をもっています。神様の父格の愛に対し、相対的立場にあるのが男性であるがゆえ、これは垂直関係です。垂直関係。女性は垂直関係ではありません。女性は何でしょうか。垂直の相対となる横的関係なのです。神様の人格を中心として格に従って見るとき、男性は縦的関係である上下関係であり、女性は左右関係である横的関係です。それでは縦が先でしょうか、横が先でしょうか。縦

が先なので先の位置に近づこうとするのが、すべての自然の道理が追求して求める道なのです。それゆえ神様の愛を中心とすると、娘よりも息子なのです。こうしてこそすべて整理されるのです。

女性には一カ月に一度ずつ生理がありますね。誰のためですか。子孫がどれほど貴いかを知らなければなりません。アダムとエバを造った目的は天国の民を生産することです。霊界では生産ということがありません。神様は縦的な愛の主人であるがゆえに、縦的なことにおいて軸が一つしかありません。一点しかないのです。一点では生産することができないので、横的な面積が必要なのです。それで人間と一つとなって天国の民をたくさん繁殖して移譲するというのが神様の創造目的です。このようなことを聞くのも初めてでしょう。

天国の民の生産者が夫婦であるということを知らなければなりません。それゆえ人間を創造しないわけにはいかないのです。これが天国の息子、娘、神様の息子、娘です。結ばれ得る天の皇族を中心とした連結を拡大して天国の民を、この地上に私たち人類始祖の肉身を通じて天国の民を生産するための基地だったということを誰が知っているでしょうか。

アダムとエバの二人が愛するのを御覧になった神様は孤独な存在ではありませんでした。御自身の中に内在した愛の素性というものが、こんなにまで強力なものだったのかと相対的な喜びを感じるのです。

皆さんが愛するのを神様が見るでしょうか、見ないでしょうか。天下時空を超越する神様がこの世界五十億人類が愛する夜に、目を閉じるでしょうか、どうでしょうか。見ているとすると、気分はどうでしょうか。善い婦人、善い夫がどれほど多いでしょうか。考えてみてください。あらゆることが繰り広げられるでしょうに、仕方なく妻の役割をして、仕方なく引かれていって、仕方なく機嫌をとって、そのように暮らすものではありません。それがどうして愛といえるでしょうか。それが人生ですか。世の中がすべて神様の願った創造理想どおりに、花の香りが漂うエデンの園のように蝶と蜂が飛び回り、天地が和動しながら暮らすことのできる環境となり、神様がそこに酔って眠ることができたらどんなにいいことでしょうか。そう考えたことはありますか。一度そのように暮らしてみてください。

神様は夫婦の立場に至ることができず、父母の立場に至ることができませんでした。これを復帰しなければなりません。そのためには真の父母が来なければなりません。真の父母が来て、縦的な父母と横的な父母となって初めて神様が創造当時に理想的子女を繁殖したのと同じように、そのすべてがここで実るのです。神様は縦的創造だけをしましたが、霊肉の実体が完成した位置にあるアダムは、横的創造をすることができます。神様は息子、娘の二人しか創造できませんでしたが、神様に代わって実体の父母の立場に立った人間は、アダムとエバを無数に生むことができるのです。十人生むこともできれば、二十人生むこともできるのです。しかし神様はそうすることはできません。このように横的な拡大の道を中心として多くの民が生まれて、天国の民として移っていくのです。

真の御父母様は数多くの宗教の結実です。神様の創造の偉業を代表することのできる結実です。歴史の終着点であり、宗教の目的であり、人類の最高の希望です。すべてがここに帰結するのです。ここは自由です。個人解放、天上天下がすべてここで解放されるのです。これらすべては愛から統一天下が繰り広げられるのです。

四　愛の理想は家庭を中心に完成する

一) 神様の創造理想は四位基台完成

神様の創造目的は何でしようか。アダムとエバを造って、ただ見るためではありません。男性と女性を造ったのは、男性は男性なりに、女性は女性なりに老いて死ぬようにするためではありません。息子が成長し、互いに異性に対する相対的な心情を通して神様を中心とした真の地上天国を建設するためでした。神様を中心とした愛の巣をつくるようにするためだったのです。ここで男性であるアダムは天を代表し、女性のエバは地を代表します。天地です。それゆえ彼らは二人ですが、彼らが横的に一つとなれば天と地が統一されるのです。神様の愛を中心として二人が統一されれば天宙は自動的に統一されるのです。

神様はアダムとエバを創造されたその当時よりも、彼らを通して繰り広げられる未来に、より大きなみ旨を置かれました。最も貴いものが来るようにしました。それは創造目的を完成することです。愛を中心とした四位基台を完成するのです。

神様は個体の性稟を中心としてプラス的性稟の代表として息子のアダムを造り、その息子を最高に愛されました。息子を愛するときに、女性的な愛を合わせて愛されました。また、娘であるエバを愛するときも、男性的な愛を合わせて愛されたのです。このように分立した二人が一つとなるので第三の出発の起源が生じるのです。それが子女です。それゆえ子女は、より新しい希望を触発してくれる愛の対象だというのです。

アダムとエバは神様の愛と父母の愛を代表した実体として生まれました。したがってその息子、娘を神様も好み、アダムも好み、エバも好むのです。皆さんは三対象目的ということを知っています。その三対象目的はこのようにして完成するのです。

人間に対する神様のみ旨は、創造目的を完成して創造理想を実現することです。創造理想の実現とは、男女が結婚して愛で一つとなることで終わるのではありません。その次には息子、娘がいなければなりません。なぜそうなのかというと、天地の道理は上下、前後の関係が連結することであるためです。きのうがあればきょうがあり、きょうがあればあすがあるのです。連結しなければなりません。それゆえ夫婦だけではきょうはあっても、あすはありません。あすがなければすべてが終わるのです。夫婦が上ならば下（子女）がいなければなりません。下がなければ終わるのです。それゆえ天地の道理は、上下があってこそ左右があるのです。

父母はその息子、娘を結婚させて初めて自分の責任を果たしたと言えます。夫婦である父母と、息子、娘が結婚してこそ上下関係となるのです。上下関係ができてこそ理想がかなうのです。左右として夫と妻が合わさり、

上下関係の父母と子女がいてこそ縦横が連結して、この宇宙の理想的球形世界を実現することができます。また、ここに兄弟姉妹がいて初めて球形が繰り広げられるのです。それで理想実現が完成すれば、横的に縦的に連結する十字的円形を描かなければなりません。その二つの理想実現圏を男性と女性が感じるとき、初めて自ら理想的な立場で暮らしているということができます。それが統一教会でいう四位基台です。それゆえ創造理想完成は四位基台完成であるというのです。

人は自分だけにとどまっていてはなりません。自分から始まって三段階を経ていかなければなりません。これが私と相対と子女なのです。神様を中心とした私と相対と子女の関係、これが四位基台です。そしてこの四位基台を完成することが神様の創造目的なのです。

四位基台を造成するためには、まず夫婦の心情を経なければなりません。そうしてこそ子女の心情をもつことができ、父母の心情をもつことができます。

二) 創造理想は家庭完成によってなされる

人間祖先を通じた神様の理想は、男性と女性が結合して理想的な家庭を築くことでした。そうなれば理想的な家庭の中心は男性でもなく女性でもありません。家庭というのは父母と子女、夫婦の結合からなる一つのまとまりなのですが、その結ばれた中心がすなわち神様の愛です。神様の愛を中心として家庭を完成することが神様のみ旨であるという結論が出てきます。

家庭は永久不変の起源であり、礎です。これは父親も変えることはできず、兄弟も変えることはできず、いかなる国のいかなる制度によっても変えることはできません。また世界的にも変えることはできず、天地も、神様も変えることはできません。それゆえ家庭というものには革命という名詞は永遠に必要ないのです。

人間には父子関係がなければならず、夫婦関係、兄弟関係がなければなりません。すなわちこの三つの関係が一点になければなりません。その中心点は一つです。上下、左右、前後の中心が異なってはならないのです。この中心点が異なれば、上下、左右、前後関係の均衡がすべて崩れるのです。それで結局、上、下、左、右、前、後ろ、そして一つの中心点まで合わせて七数となるのです。このように七数となるのは、すなわち神様を中心として完全な真の愛で一つとなり、このすべてが完全に球形を成して、調和と統一を成す家庭になるということです。

父母と子女、夫婦、そして兄弟姉妹がみな、真の愛を中心として合わさることを願うところが私たちの理想家庭です。ここから永遠な世界的平準化が始まることによって地上天国が出発するのであり、また地上天国も自動的に築かれるのです。

神様は真の愛の本体なので、真の愛と連結されればすべてが同じ体となります。父母は神様に代わる生きた神様であり、夫と妻はお互いにもう一方の神様であり、息子、娘は、もう一つの小さい神様です。このように三代が真の愛を中心としてつくられた家庭組織が

天国の基盤です。そのような基盤をつくらずしては天国が築かれません。家庭というのは宇宙の中心です。家庭完成は宇宙完成の基礎であるがゆえに、家庭で愛するように宇宙を愛すればどこでも無事通過です。このような場合神様は、宇宙全体の父母として愛の複合的な中心におられます。

神様を中心とした創造本然の家庭的基台には、男性の愛、女性の愛、息子の愛、娘の愛、父母の愛、神様の愛がすべて含まれています。このように消化された位置において父母を愛し、夫を愛し、息子、娘を愛すれば誰でも天国生活をすることができます。

一つの家庭は社会の倫理的基盤であり、人間世界において最も根本となり、根源的であり、一次的な組織です。このような家庭において、愛が最善の価値基準となるのです。

人の一生で最も重要な時はいつかというと、生まれる時、結婚する時、死ぬ時です。それでは生まれる時はどのように生まれるべきでしょうか。良く生まれなければなりません。次には結婚する時です。結婚というのは生きるためにするものです。すなわち四位基台の造成のためにするのです。このような宇宙の公法を地球上に立ててこそ神様のみ旨が完成し、人間の志が遂げられるのです。このような宇宙の法度が指向する内容を備え、その形態を備えるためのものが家庭です。

神様の創造理想は、人間始祖であるアダムとエバが、善なる子女を繁殖して神様を中心とした一つの世界をつくり上げることでした。

「家和万事成」という言葉があります。その家庭が平和であれば万事がうまくいくという意味です。完成した家庭は平和の家庭であり、これは天国の基礎です。家庭の原動力は真の愛です。私よりも神様を、そして対象を生命のように愛する純粋で美しい愛、これが真の愛です。神様はこの宇宙に、真の愛の力よりも大きい力を創造されませんでした。真の愛は神様の愛です。

この地球上に神様のみ旨が成し遂げられたならば、アダムを中心とした単一文化圏が形成されたことでしょう。今日のように多くの民族がそれぞれ異なった文化と文明を形成するのではなく、アダムを中心として一つの単一文化、単一思想、単一文明をもった世界となったことでしょう。そのようになったとすれば、文化、歴史、風習、言語、伝統などがすべて統一されていたことでしょう。

神様の愛圏の中で理想的な家庭を築き、氏族を築き、民族と国家を形成し、さらに拡大されて、アダムの理想が実現された一つの理想的世界を築いたことでしょう。木の根、幹、葉が一つの生命につながっているように、愛を中心として上には神様を父をして侍り、下には万民を兄弟のごとく一つの生命体、愛の生命体となるようにして、神様を中心とした永遠な理想世界を築くことこそが、神様のみ旨から見た世界観です。このような世界の人間には救いは必要でなく、メシヤも必要ありません。なぜならば、その世界に暮らす人間は神様の善なる息子、娘だからです。

五　神様が万物世界を造られた目的

一) 万物を造られた目的

本来、神様は天地万物を遊び道具として造られたのではありません。趣味で造られたのではありません。目的も方向もなく、何らの理念的な内容もなく、ただ造られたのではありません。それは大きな目的と大宇宙の理念をもって造られました。それゆえ極めて微少な物から宇宙に至るまで、すべての存在物には、神様の心情を通じた理念が宿っているということを私たちは否定することができません。それではこのような理念をもって造られた目的は何なのでしょうか。神様の愛を中心とした理念の世界、すなわち愛とともに通じ、愛とともに喜び、愛とともに生き、愛とともに死ぬという世界を目的とされたに違いないのです。

私たちが眠りから覚めて目を開ければ、目の前に広がった万象が見えます。見えるその万象を通して何か分からないけれども間接的な印象を受け、その反応する感覚で生活における感覚を高めていくのです。私たちの周辺にある極めて微少な物でも、必ず私たちと因縁が結ばれており、関係しています。私たちが無視しても、その万物はその日その日、天倫の理念によって存在の価値を示して人間と関係を結んでいるのです。なぜそうなのでしょうか。極めて小さい存在から、万物を主管することのできる万物の霊長である人間に至るまで、その存在目的を中心として見れば、神様の大宇宙の理念に通じることのできる愛の理念圏内に入っているからです。それゆえ小さなものは大宇宙の目的を達成するにあたって、大きな分野を担っているものに吸収されて動くのです。小さいものは大きなものに吸収されその材料となり、一つの要素となり、大理念を中心として一つの目的に向かうのです。歴史はこのように進展していくのであり、存在世界は天倫という原則の軌道に沿って一つの目的のために動くという事実を否定することはできません。

なぜ神様は万物を造ったのでしょうか。御自身が愛する対象を、対象者をもつためです。御自身が愛する対象圏を造るためです。その対象が食べて生きたのちに、自分の本然の世界に戻ってきて、永遠な神様の愛の本国に来て生きるようにするためです。それが分からなければなりません。

聖書には天地創造したことが簡単に述べられています。み言によって天地万物を創造したというのです。「星ができよ」と言うと星が生じ、「地球ができよ」と言うと地球ができたということになっています。しかしながらそこには無限な秩序と法度に従って前進的な原則を継承させ、小さなものから大きなものへと発展させてきたことを私たちは知らなければならないのです。そうしてこのすべての万物を造って、万物の精髄として集約したのがアダムとエバ、人類の祖先です。

今日のキリスト教信者が考えるところでは、神様は全知全能なので一言「このような天地となれ」と言って、このようになったと言います。しかしそうではありません。神様がすべてを投入したのです。もてる精力をすべて投入したのです。もてる愛の力をすべて投入して未来に自分の愛する息子、娘、自分の愛する家庭のための礼物として、贈り物として

すべての物を造ったのです。それゆえ私たちはそのような観念をもって万物を見なければならないのです。

創造するとき、何をもってしたのでしょうか。初めに神様のみ旨がありました。神様の考えがありました。神様の考えとともに計画がありました。人間を創造してこういう人間世界を造ろうという本来の神様のみ旨と計画があったということが分かります。

一つ知らなければならないことは、神様が世の中を造るとき、環境を先に創造したということです。環境の創造を先にしたのです。これを知らなければなりません。そこは必ず主体、対象を中心として作用する世界です。結果がそのようになっているのです。主体、対象が合わさって作用する現象の世界として自然界は展開されています。そのとおりになるのです。

天地創造の道理を見れば、核心を先に造ってから相対を造るのではありません。核心を造る前に、相対的な条件を造るのです。人を造るために土を造っておいて……。外的なものを基盤として内的なものを立てていくのです。それが天地創造の道理なのです。現在のものよりも大きいもの、無価値なところから、より価値のあるものを求めていくのです。道理がそうなのです。今日、人間創造を考えると、人間を造るときに体を先に造っておいてから霊を造ったのです。

神様が六日間造った万物を御覧になって誇りたかったのです。すべての被造物を御覧になって無限に喜ばれたのです。その喜びの心をもって「良し、良し」と重ねて言われたそのみ言は、誰に向かってのみ言なのでしょうか。万物に向かって言われたみ言だったのです。万物に向かってそれほどに懇切な気持ちを抱いて言われたということを私たちは知らなければなりません。

神様が被造世界を造るとき、そこには喜びがありました。造ってから見て、良しと言われました。喜びがあったということです。喜びとは何ですか。ある目的を成し遂げたときに感じるものです。造られた万物に神様の目的意識が内在していたがゆえに、創造された万物に神様は喜びを感じられたのです。それでは復帰の世界とはどのような世界なのでしょうか。一言で言えば、森羅万象の個体個体を見て神様を賛美することのできる心情的な因縁を立体的に備えた人々が住む世界です。天から見た人格の価値はそこにあります。それゆえ昔、聖フランシスのような人が、動物を見て、あるいは鳥を見て説教したというのも、うそではありません。夢のような話です。しかし夢ではなく事実です。

愛は一人でいるときにもありますが、愛の作用は相手がいなければ生じません。神様でもどうすることもできません。神様が最も好む愛なのですが、その愛は一人では完成しません。一人では愛の喜びを感じることができず、愛の衝動を感じることはできません。そのような理由から神様が宇宙を造ることになりました。神様が愛し、喜ぶことのできる相対として宇宙を創造したのです。そうして宇宙を創造してから、その宇宙の主人としてアダムとエバを創造しました。

二) 神秘の宇宙、その規模と構造

被造世界のすべての物は、神様の愛する息子、娘が愛の理想を見つけていくことができるように、教材として造ったものです。それゆえ相対的な構造になっています。鉱物も主体と対象の関係によって作用し、原子も陽子と電子が主体と対象の関係で作用するのです。作用しなければ存続することができないのです。運動しなければ永続、存続できません。それゆえ宇宙は人間を中心としてその中心点に到達することができるように創造された世界なのです。

宇宙とは何でしょうか。神様の体のようなものです。目に見える体と同じようなものです。神様の分身です。ですから私が本当に愛することができるという観念が成立するのです。宇宙を愛するということの実感がわくのです。皆さんの頭もこうやってなでてやったりするでしょう。服にも何かがついていれば、取り除くでしょう。それはなぜですか。私のものだから、私と一緒にあるから、このような観念があるのです。皆さんが今後どうすべきかというと、心の中に神様を迎え、心が一つとなり、体が一つとなり、万物が一つとなる、そのような統一の世界を築かなければなりません。

この宇宙がどれほど大きいかというと、何億光年です。光は一秒間に三十万キロメートル進みます。その三十万キロメートルとはどれほどかというと、地球を七回半回ることのできる距離です。その距離を一秒間に走る光が、一年かかって進む距離を、天文学では一光年といいます。そのような光年を単位として出発した光が、何億光年になってもまだ到達できないほど大きい宇宙です。グリニッジ天文台では今まで百億光年離れた世界の星まですべて発見しましたが、今では百五十億光年離れた世界の星も見ることのできる時代となり、それ以上の時代となってきているのです。

この宇宙がどれほど大きいかというと、今何と言いましたか。ざっと百億、それも原理的な数です。二百十億光年、それほど大きいのです。それがどういうことかと言うと、光がここから出発して、それが一日かかるのを一光日、一月であれば一光月、複雑で分かりません。皆さんが自分で考えてください。さて、これが出発して一秒間に三億メートル、光の速度で三億メートル行きます。距離でいえば地球の七回り半にもなる距離です。あっという間に七回半も回ります。

それほど速い光が一日かかっただけでも、腰が曲がって考えも鈍くなり「私には分からない」ということになるでしょうに、それが百年でもなく、百の何万倍でしょうか。百の何万倍ですか。百の千万倍が億です。そうでしょう。百の千万倍ですか。百の百万倍、それが一億ですが、一億光年。出発して一億光年。行っている途中なのに、人が百歳まで生きるとすれば百万人が死んでいくのです。一億光年にです。

一億光年ですから、百人が生まれて、百年生きては死ぬのを続けて、百万人が死ぬときになってもまだ続くのです。それでは二百十億光年ならばどれほどでしょうか。皆さんが計算してください。人がずらっと並んで生きては死に、また生きて、百歳まで生きて、この

ように二億百万人が生きてそれほど行ったのにまだ続くのです。その遠い距離は直線ではありません。これがぐるぐると回っているのです。このような宇宙なのです。

宇宙の完成とはいったい何でしょうか。宇宙を完成するには私が完成しなければなりません。いくら宇宙が完成したといっても私が完成できなければ何の関係もないのです。世の中がいくら良くても、外的世界が良くて踊りを踊るとしても自分が今苦痛にさいなまれているとすれば、その外的世界の喜ぶべき環境もすべて、自分と関係のないものであるということを私たちは知っています。

宇宙の完成は、外的な世界も良いのですが、内的な私自身、私にとっても良くなければなりません。私の細胞、すべての細胞にとって良くなければなりません。目の細胞と足の裏の細胞とでは異なります。異なるのですが、その細胞がみな喜び、手の細胞も喜び、すべての細胞が喜び、体と心、どれ一つ残らず全体が喜ぶものが、離れているのではなく、一つに連結されて連帯的な内容を中心として、共鳴的な愛の喜びを感じることのできる、そのような世界となってこそ宇宙が完成されるのです。

三) 自然は愛の理想を教えてくれる教材

祈祷する人は、自然は第一の聖書だと言いました。第二ではありません。イスラエルの歴史をつづってきた聖書を見ても、内容を確実に知ることはできません。その内容を見て、先生がどれほど頭を振ったことか、分かりますか。それは占い師の占いのように、耳にかければ耳輪、鼻にかければ鼻輪（韓国の諺：解釈によってどうとでもとれるということ）なのです。現実を逃避するための方便です。ですから事実の内容を判断して前後の事情を明らかにするのは難しいので、聖書よりも神様の造られた自然の世界が一番だというのです。

因縁というのは極めて小さいところから結ばれるものです。皆さんの個体も百兆個もの細胞で因縁が結ばれた生命体です。神様の愛を中心とした創造理念世界、すなわち大宇宙のすべての存在物はどれ一つをとってみても、神様の心情の外で生じたものはありません。このようなことを感じる詩人がいたとすれば偉大な詩人です。一枚の木の葉が揺れるのを見て天宙的な心情を感じ、それを表現できる詩人がいたとすれば、それは宇宙的な詩人だといえます。

私たちの周囲で無意識のうちに繰り広げられている天下万象は、神様の愛と共に存在するものであるという事実を知りませんでした。神霊な境地に入ると、小さな一粒の砂にも宇宙の道理があり、原子一つにも無窮無尽な宇宙の調和があるということを知ることができます。存在するものすべては、はっきりとは分からないけれども、ある複合的な力を通じて現れた結果だということを否定することはできません。分子を経て原子、原子を経て素粒子……。このようなものが無意識的に存在するのではなく、ある意識と目的を備えて存在するのです。それゆえ存在するすべての物は、神様の愛の手を経てできたものであり、必ず神様と心情的な関係を結んで存在しているという事実を、徹底的に知らなければなりません。

修道者とはどのような人なのでしょうか。一株の草をつかんでも「神様！」と言うことのできる心情で、自分の価値と同等にその価値を認識することのできる人が最高の修道者だと言えます。そのように、その価値をうたうことのできる人が最高の芸術家だと言うことができます。様々に存在する万象を見て、神様の様々な愛と心情の妙味を発見し、それらと友となり、共に楽しむことのできる感情をもった人がいるとするならば、そのような感情で細胞の一つ一つが動く人がいるとするならば、その人は全宇宙を代表することのできる人だと言えます。そのような人が万物の霊長です。ところが食べること以外に能のない人が万物の霊長と言えるでしょうか。

子供たちを見れば、子犬だとか、何かの虫だとか、飛ぶもの、動物といった、動くものを中心に好みます。それはどうしてでしょうか。本来、人はそのようになっているのです。それがどういうことかと言うと、人間は、自然世界や、この地球の動きを見て興味をもつということです。もちろん相対基準は違うかもしれませんが、それを鑑賞することに人間はおもしろさを感じ、興味をもつのです。そうすることで自分自身の愛の属性をすべて学ぶのです。虫たちが生き、昆虫が生き、また動物たちが生きるのを見ると、すべてがつがいになっているのが分かります。このように考えると、自然とは何かというと、人間一つを愛の対象として相対理想を教育するために展開させた教材、博物館なのです。

神様は宇宙を、被造世界のすべての物を愛する息子、娘が愛の理想を求めていくことができるように、教材として造りました。それですべては相対構造になっています。鉱物も主体と対象の関係によって作用します。物質の構成単位である原子も、陽子と電子が主体と対象の関係で作用します。作用しなければ存続することができません。運動せずしては永続し存続することができません。ですから作用しなければなりません。

人間は成長しながら自然を見て習得します。「昆虫の世界はこうなのだなあ」と学ぶのです。月が照らし、星が光る秋の夜にじっと耳を澄ますと、昆虫たちの鳴き声が一つのオーケストラの演奏として聞こえます。なぜ昆虫たちはそのように鳴くのでしょうか。それは相手を求めて理想を歌うのです。愛をささやくのです。鳥やその他の動物たちも悲しい声、喜びの声を何で示すかというと、愛という共通分母に従って声を出します。級は低く、軸から離れていますが、その軸を中心として平衡線をとって回っています。すべての存在はそのようになっています。

鳥たちの歌には三つの種類があります。一つは空腹の信号の歌であり、次は愛する相手のための歌であり、次は危険なときの歌があります。それらはみな異なります。私たちには、普通の人には分かりませんが、鳥たちの世界ではみな分かるのです。空腹で鳴けば、すぐに分かるのです。毎日の生活は何を中心としているでしょうか。空腹なのは一度食事をすれば解決します。だからといって毎日のように危険な場にいるのでもありません。大部分の歌は何を中心としているかというと、相手と授け受ける関係で歌が行き来するのです。

人間は主体と対象、すなわち相対的な双として造られ、また、人間のためにある万物世界もすべて愛の原理のもとに調和をなし、人間の愛によって生命と理想を実現するようになっています。万物世界は人間にとって、特に、成長するアダムとエバにとっては愛の教材であり、愛の真髄が無尽蔵に陳列された博物館なのです。

すべての鳥や動物はつがいになっています。互いに愛を中心として和動します。花と蝶は極と極ですが、互いに和合します。これは天地の調和です。宇宙の極と極が愛を中心として和動するようになります。渡り鳥も同じです。南にいた鳥が北に飛んでいき、北にいた鳥が南に飛んでいって地域を越えて愛します。愛を中心として永遠に回ります。人間はこのような愛を、神様の造った博物館の教材を通じて学びます。

人間と神様が好きで愛すれば、天下のすべての万物はそこに調子を合わせて和動します。神様が愛し喜べば、天使世界も喜び、このすべての被造世界が喜んで拍手を送り、賛美を送ります。歌を歌うことのできる鳥は歌を歌って賛美し、美しい花は香りを漂わせて賛美します。最高の愛の主人公たちが楽しむことのできる香りの雰囲気を拡張するためのものが、この被造世界です。見た目には気持ちの悪いひきがえるも愛するときには「ウッウッウッ」と言います。どれほど素晴らしいことでしょうか。足を打ちつけて後ろ足を上げたり下げたりしながら愛するその姿は、どんなに素晴らしいことでしょうか。それは最高の芸術です。

アダムとエバは成熟するに従って「ああ、あんなふうに愛するのだなあ」と分かるようになります。神様は万物世界を人間の愛の理想を成熟させるための教材として展開しておきました。それを学んでいくのです。だんだん大きくなるに従って「ああ、昔は妹のように、兄さんのように暮らしたけれど、こうしてみると……」このように感情が変化してくるのです。「ああ、そうか」と学んでいくのです。それで「お前と私は死んでも会わなければならない。他へは行けない」と平衡線で直行しつつぶつかるようになるのです。

最初は神様の子女として生を受けたアダムとエバも、神様の保護圏内で幼いときから成長するに従ってだんだん大きくなっていくのです。そうして知能が発達するので神様がなぜ被造世界を造ったのかを知るようになり、その被造世界を通して教育を受けるのです。被造世界の動くものすべては、私たち人間始祖、本来の祖先となるべきアダムとエバが生活するためのすべてのことを教えてくれる教材でした。完成したアダムとエバではなかったので、理想生活をしていくにあたっての標本であり、一つの博物館であったという事実を知らなければなりません。

四) 自然に対する私たちの姿勢

朝、目を覚まして自然を見れば、その自然が、かすかに私の本性と絆を結び新しい理想の感情を芽生えさせます。しかし人間の世の中を見れば見るほど、絶望と悲しみの感情が高まるという事実がよく分かることでしょう。本来、堕落していない本然の人間が住む世の中というのは、人間の価値はそのように見る

人をして悲しみを感じさせるようなものではないのです。一株の草や一輪の花、一本の木程度の価値のものとして造られた人間ではないのです。いかなる被造万物とも替えることのできない高貴な人間であり、その何ものとも比較することのできない価値ある姿で天上に代わって出てくるべき人間でした。

神様の愛が宿っている自然を見て、「この世の王や有名な人がもっている立派だと言われる物に比べることができるであろうか。骨董品と比べられるであろうか。有名な婦人が着ている豪華な服と比べ物になろうか」という思いをもたなければなりません。それができなければ私たちは自然世界の前に我知らず罪を犯しているのです。一つの生命体を見て「人間がつくった物と比べることがでようか。どんなに立派な人でも神様よりも立派であるはずはない」と、神様が心情を注いで造られた万物にすがって何よりも貴く感じる者がいるとするならば、その人は天の息子、娘に違いありません。このような人には祈祷が必要ありません。神様のように生きる人です。天は人間をそのような位置にまで押し出すのです。

人間は自分の愛する人のものは何でも好み、かわいがります。それなのに、最も愛すべき神様の造られた万物をかわいがらないのです。このような人々が神様の息子、娘でしょうか。嘆息する万物の恨を解怨すべき責任を負った皆さんは、一本の木、一株の草からも六千年前、それらを造られたときの神様の心情と創造のみ手を体恤しなければなりません。そのような心をもたなければなりません。それゆえ道の途中で一株の草を見ても、涙することができなければなりません。「主人を失ってどれほど寂しかったことか」と言いながらです。ここで話をしているこの私はたくさん泣きました。岩につかまって泣きもしたし、風が吹くのを見ても泣いたことがあります。なぜそうでなければならないのか、み言を聞いたので、もう理解できることでしょう。

「神様が造られた価値ある万物が、神様と永遠の因縁を結んだ貴い万物が、今日どこかの王宮で国宝だの宝物だのと、貴く思われている物ほどの扱いも受けていない悲しみを私が分かってあげなければ、私だけは分かってあげなければならない」と考えてきました。「この地で暮らす世界人類が誰も分かってやらなかったとしても、私は分かってやらなければ」という思いを皆さんがもったならば、その民族は今後、世界人類を支配し得る新しい民族となることでしょう。これは観念ではなく事実です。どこの誰が万物を、代々受け継がれてきた自分の家門の宝物よりも、この世で最も貴い宝石といわれるダイヤモンドよりも貴く思い、しっかりとつかんで離すまいとするでしょうか。そのような人はどこにいますか。神様は御自身が造られたものを心情的に分かってくれて、それにすがって涙する人を見て「よしよし」といわれるのです。

自然とは何でしょうか。神様が私のために、「ため」に生きる愛をもった息子、娘が生まれたときに、「ため」になる万物として、プレゼントとして下さった展示品です。鳥の声一つ、一株の草さえも、愛の息子、娘たちの生活の美化のために造られた装飾品なのです。道に転がっている岩も、息子、娘が国を治める主人になることを知って、その国の装飾品として造ったのです。流れる水も同じです。

無味乾燥として単調だといけないので、この上なく調和した和合の園、愛のための世界を見てそれを相続することのできる夢の王子、希望の王子とするために創造したのです。それゆえ万物を通して学ぶのです。雄と雌がチュンチュン鳴くときには、これは主人であるおばさんも学べというのです。お互いに「ため」に生きる世界に向かって自分の人生を、命を懸けて生きる本然の被造世界の美しさを賛美できなければなりません。そうなればその家の垣には小鳥もやってきて住もうとするのです。ひなを産もうとするのです。どういうことか分かりますか。

博物館のある作品がいくら貴重だといっても、生きている作品に優るでしょうか。神様の作品であるこの地球の万物博物館を、誰が神様以上に愛したでしょうか。自分の国の博物館以上に愛したかというのです。道端で踏みつけられる一輪のたんぽぽを、博物館にある新羅時代の金の冠に比べることができるでしょうか。神様が直接造られたものであるのに。そのような神様の心情をもって「神様のための本然の王の立場から、愛を受けていたその立場からお前を愛することのできない私が申し訳ない。恥ずかしい」と言うことのできる心をもって「ため」に生きるそんな王がいたとするならば、一株の草もその王に従って永遠不変に一緒にいたがるのです。そのように生きるべき人間なのです。

五) 自然を愛し、人を愛しなさい

自然を愛し、人を愛することができなければなりません。人を愛することができず、自然を愛することのできない人は、神様を愛することができないということを知らなければなりません。万物は神様の象徴的存在であり、人間は実体的存在であるゆえに、万物と人間を愛することのできる人は、神様を愛するようになるのです。

いつも自然を愛さなければなりません。自然を愛さなければならないのです。また、人間を愛さなければなりません。人間の中でも五色人種をみな愛さなければなりません。「私は白人だけがいい」。神様はそうでしょうか。それならばみな白い衣服ばかり着なければなりません。色のついた服は全部捨てなければなりません。黒い服をなぜ着るのですか。色のついた服をなぜ着るのですか。矛盾しています。

元素も微物もすべて愛の道を行くのです。神様と一体となることのできる愛と直接に接することのできる細胞を求めていくのです。それが人間です。ですから、愛のためには犠牲にならなければならないのです。投入しなければなりません。生命と財産をすべて投入した伝統があるがゆえに、低級のものはより高級なところへ自分のすべてを投入しようとするのです。それゆえダーウィンの進化論ではなく、愛を中心として吸収する論理です。第二の価値的な内容を創造するときに創造要素として適用されるならば、微物としてよりもどれほど価値的な内容が上がるかというのです。

神様の造られたすべての存在を愛の対象として感じなければなりません。すべての微物まで愛し、人はもちろんのこと、天にあるものまですべて、無形のもの、有形のものを愛することができ、愛されることのできる皆さ

んにならなければなりません。朝、鳥がチュンチュン鳴くならば「このすずめめ、ゆっくり寝ようと思ったのにどうしてチュンチュン鳴くのか」と言うのではなく、「ああ、有り難い。私を起こしに来てくれたんだ。大事なお客さんが私を迎えに来るのをお前が知らせてくれるのか」と考えなければなりません。思想が違うのです。これが偉大なのです。これが。

神様は人間世界を造ると同時に天使世界を造りました。それでは天使世界とはどのような世界でしょうか。人間が一つの結実のために、花のような存在としての美を備え、香りを放ち現れるときに、初めて愛の巣が完成するのです。それゆえすべての生命力はそこから出発するようになり、すべての生命の因縁をもった存在がそこから和動できるようになるのです。このように和動できるようになる起源が正に人間なのです。
そのような人間を中心として、天にいる天軍天使たちが人間と、蝶と蜂のように互いに授け受けることができる和動の主体圏を成すようになったなら、それこそ神様が喜ばれ、人間が喜び、天使が喜び、全被造万物が愛に浸る和動の花園になったことでしょう。また春の宴が始まったことでしょう。

第三章 復帰摂理歴史と神観の変化

一 旧約時代、神様は天使であった

一) 旧約時代は僕の時代であった

二)

人間が堕落することで無原理圏内に落ちました。どの程度落ちたのでしょうか。神様の僕である天使にも劣る世界に落ちました。主人となるべき、王子王女が僕にも劣る位置に落ちたのですから、再び上がらなければならないのです。それゆえ僕の僕の道理から始めて、僕の道理、養子、庶子、こうして直系子女まで、次に母を通じてアダム（父）の位置に戻らなければならないのです。復帰です。救いの摂理とは病気になる前の健康だった基準に再び戻すのと同じです。病んでいなかった位置に戻らなければならないのです。それゆえ救いの摂理は復帰摂理です。復帰摂理はむやみにするものではありません。とにかく「信じれば救われる」そのようにはなっていません。

人間は堕落しましたが神様に背くことはできないので、僕の僕の立場から上がっていかなければなりません。それでは「僕の僕」というのは何を意味しているのでしょうか。主人がいないということです。堕落した人間は「僕の僕」の立場から神様に忠誠を尽くさなければなりません。サタンは天使長だったのであり、神様の僕でした。その僕の前に引かれていった人間であるがゆえ、人間が神様の前に戻ってくるには「僕の僕」の立場から神様の前に忠誠を尽くしたという基準を立てなければならないのです。

旧約時代は祭物を犠牲にして、神様が僕として使うことのできる人を探し求める時代です。それが旧約時代です。人を失ったので反対になったのです。人が万物よりも低くなりました。人が万物よりも悪くなったので、神様の前により近い万物を二つに裂いて、お前の所有物、私の所有物として分けたのです。このように分別的な祭物を立てなければならなかった事実は誰のせいかというと、神様のせいではなく、サタンのせいでもありません。

人間が責任分担を果たせなかったからです。それを知らなければなりません。サタンの血統を受け継いだのは、人間が責任分担を果たせなかったからなのです。

摂理的に見ると、旧約時代前、ヤコブ以前は僕の僕の時代であり、ヤコブからイエス様までは僕の時代であり、イエス様以後は養子の時代であり、再臨の時期は息子の時代です。息子の時代が来るので、息子に父母がいなければなりません。それゆえ父母の時代を経て神様のもとに帰るのです。

旧約時代は僕の時代でした。僕の僕の位置にいる人間を僕の位置に復帰してくる時代でした。それゆえアブラハムも僕であり、息子にはなれませんでした。神様は僕の僕を立てて、忠誠の道理を立てられました。そしてこの歴史的な世界人類を引っ張って糾合させて、世界的な悪の舞台を天の側に占領しながら神様の摂理を発展させてきたのです。ヤコブも神様の息子として勝利したのではなく、僕の立場で勝利したのです。神様がこのように僕の僕から、僕の位置に復帰し、僕の位置から養子の位置へと復帰しながら摂理してこられたのです。

歴史的な復帰路程を総括的に見ると、神様は今まで蘇生、長成、完成の三段階を通して摂理してこられたということが分かります。旧約時代の僕の時代、新約時代の養子の時代、成約時代の真の子女の時代を越えて、真の父母の時代になるという復帰路程なのです。旧約時代の全人類に対する救いの摂理は僕の立場での救いでした。それゆえこの時代は、初めから終わりまで残って勝利することができる中心を立てなければ、僕としての復帰基台を立てることができませんでした。それゆえ神様はノアやアブラハムなどの中心人物を立てて四千年という歴史を導いてきながら多くの犠牲を払われました。

旧約時代は何をしたのでしょうか。この世がサタン世界となったので万物を犠牲にして天の側の人を立て、僕を求めました。神様の僕。養子を探すこともできません。僕の僕を探し出すのです。サタン世界の人々はみんなサタンの息子、娘となっているのに、それを奪ってくることができるでしょうか。ですからサタン世界で落胆した人を集めて引っ張ってくるのです。惨めです。廃品を収拾してきます。廃品を収拾してくるので、そのままではできません。犠牲にならなければなりません。祭物の過程を経なければなりません。

天はサタン世界の僕の子にも劣る人間を連れてきて、神様の世界の僕の僕にしようというのです。それが旧約の役事です。ヤコブとエサウを闘わせたのもそれです。ノアもそれです。遠い異国に連れていって、隔離された位置に、疲れ果てたところに天はサタン世界の僕の僕の子を連れてきて神様の僕にするのです。

神様がサタンの僕にも劣る人間を御自身の僕として立てようとされたのが、旧約時代の摂理でした。

サタンは一方では人間を怨讐のように扱います。人間はサタンの僕にもなれません。このような人間を神様の僕にする役事をしたのが旧約時代です。ここから再び僕を養子に、養子を直系子女に、子女を兄弟に、兄弟を新郎新婦として祝福して、真の父母の位置にま

で行くようにしようというのです。神様を中心とした真の家庭を失ったので、これを取り戻すのが復帰です。イエス様を真の父母の位置に登場させるのが小羊の宴です。

神様は僕を立てて、私がお前の父だと教えてやりました。僕を遣わし、天使を遣わして教えてあげました。次に息子に役事させました。その時代が新約時代です。その次は聖霊に役事させてきました。

今まで神様の願いは、人間が万物と因縁を結び、神様と因縁を結ぶことでした。それゆえ神様は堕落した人間を僕の立場から始めて養子の位置を経て、子女の位置、そして父母の位置まで引っ張り上げるということをしてこられました。それは嘆かわしい堕落の因縁を切り捨てて万物と人間と神様が、一体の因縁を結んで神様の喜びが人間の喜びであり、人間の喜びが万物の喜びになるようにしようというのです。神様は息子、娘のために生き、息子、娘を万物世界と天使世界にまで誇り、見せてやりたかったのです。

考えてみてください。旧約時代はイエス様が来るまでの四千年です。当時、祝福という言葉がありましたか。神様の名で家庭を祝福することができましたか。僕の時代だったので僕である天使長圏内にいるのです。天使長は結婚することができないのです。独身生活をしなければなりません。独身生活です。神様が家庭をもつことができず、神様の息子、娘が結婚できないのに、僕が結婚することができますか。そんなことができますか。

二) 旧約時代は天使が神様に代わって役事した

神様は汚された地を再び回復しようと、天使たちを通じて人間と関係を結ぶ救いの摂理をしてこられました。堕落によって神様に背いた立場にいる人間、万物とも比べられないほどに落ちに落ちた人間に、神様が再び対するために救いの摂理をしてこられたのです。サタンが支配し、サタンが讒訴する人間を神様が主管するために、橋を架けて役事してこられたのが、旧約時代を経て新約時代を経て今まできています。

旧約時代には本来、神様が直々に役事しなければならず、神様の栄光で人間に対すべき時代でした。ところが堕落によって摂理が完成しなかったので、悲しみを抱いて、第二次として天使を通じて人間に対する道を開拓してきたのが旧約時代なのです。天は天使に役事させる基準を立てられました。天使も神的な存在なので、イエス様が来るまでの方便として人間に神様のように現れて、仲保の使命をなしたのです。

旧約時代を見ると、天使たちをみ使いとして立てて、神様の自由の園、解放の天国を建設してきました。僕の立場から神様の息子へと解放される恩賜圏に入るには、命を失っても喜ぶことができなければなりません。そのような自由の心情をもった人だけが、僕の位置を越えて息子の位置を取り戻して入っていくことができたということを、皆さんは知らなければなりません。

皆さん、聖書を見てください。神様は今まで霊界にいる天使長に、息子に、聖霊に役事させてきました。神様が直接心情を接続させ

る役事ではありませんでした。旧約時代は天使に役事させ、新約時代は息子に役事させました。旧約時代は天的に見ると、民を収拾するための時代であり、新約時代は子女を収拾するための時代でした。

皆さん、見てください。イスラエル民族を立てるために、天上世界の天使たちが来て働きました。僕が来て働きました。次に息子が来て働きました。今は父が来ます。皆さん、来たるべき主は父として来られます。真の父母として来られ、真の子女を率いて愛するのですが、その時にはどうなることでしょうか。皆さんは一人を前にしても夜を明かすことでしょう。神様はアブラハム一人を全人類以上に愛し、イエス様一人を全人類以上に愛されました。それゆえ皆さんは神様の愛する息子、娘の一人がどれほど貴いかを知らなければなりません。

アブラハムに現れた主なる神も天使の姿で現れました。本来、神様は無形の神様であり、目に見えない神様なのですが、創世記では三人が神様として現れ、二人はソドム、ゴモラの審判をするために行き、残る一人は神様となってアブラハムと対話する場面が出てきます（創世記一八・一〜一八）しかし、彼らも神様の遣わした天使であり、天使を立てて方便として神様のように摂理されたのです。それを知らなかったのです。

ヤコブが二十一年間修道して、一日の願いを成し遂げるためにセイルの地、兄のいる故郷の山河を訪ねていくのですが、二十一年間、その一日を待ちわびていたのですから、神様は喜んで「行きなさい、行きなさい」と言うべきなのに、天使を遣わしてヤボク川で「おい、この息子！」と闘いをさせたのです。ここで天使に負けようものなら、二十一年間の苦労が水の泡になるのです。それでヤコブが天使にしがみついて、勝つまで離さないと言ったのです。腕が折れても離せないと言ったのです。どんなに執念深いでしょうか。

イサクの手を通じて祝福してくださった神様、すべてを捨てて故郷に帰るように命じた神様が、ヤコブの行く道を案内し、平坦にしてやることができず、さらには、ヤボク川で夜を徹して切ない思いで天に訴えるヤコブに勧告のみ言を下さるどころか、むしろ天使を遣わしてヤコブを打たせるという、こんな非情な環境を準備されたのです。

旧約時代に生まれて死んでいった私たちの信仰の先祖たちは、どのような人々だったのでしょうか。神様は無形の神なので現れても分からないので、神様の形状として、神様に代わって、その時代時代に合うように、その歴史の因縁を再現して因縁を結ぶために送られた人々でした。それゆえ私たちが神様の養子の位置にまで上がるためには、多くの人の歴史的因縁を連結して、個人的世界代表、家庭的な世界代表、また、氏族的な世界代表、民族的な世界代表、国家的な世界代表、このような多くの数を経て、終着点を代表する一つの代表者としてすべて結束させなければならないのです。

三) 天使がなぜ人間の救いに加担するのか

天使はどのような存在なのでしょうか。僕の立場で神様の前に忠誠の道理を尽くして、

アダムとエバの囲いとなってやるべき存在です。万世に天の世界に栄光の雰囲気をつくって、神様の愛を中心としてアダムとエバと共に幸福に暮らすべきだったのです。言い換えれば、天使長はアダムとエバのために創造されたのです。アダムとエバの父である神様が天使を創造した目的は、アダムとエバのためだったのです。

天使長が堕落してアダムとエバ、人類世界をこのようにめちゃくちゃにしたので、天使がその仕事を代行しているというのです。天使世界がその仕事を代行しているのです。したがって天使世界がサタンと対決しているというのです。悪なるサタンと善なる天使が対決しているのです。その闘いで善なる天使側が勝利してこそ一歩前進するのです。何の話か分かりますか。神様の思いどおりにすることができないというのです。原理がそうだというのです。

神様が堕落していないアダムとエバの前に僕として三人の天使長を造りました。誰にアダムとエバを保育させ、保護して育てさせたかというと、天使長に任せました。なぜそうしなければならないのでしょうか。主体と対象の関係です。地上が主体で天使世界が相対となる主体と対象関係です。二重的な環境を中心として神様の真の愛の前に平衡的な相対圏を拡大させることが、天上天下を創造した神様の理想だったのです。

アダムは誰が教育しなければならないのでしょうか。神様が教育するのではありません。天使長たちが教育しなければなりません。保護育成しなければなりません。結婚するときまで大切に、傷つかないように管理指導して教育すべき責任が天使長にあったのです。その原則に統一教会も従わなければ蕩減復帰完成ができないので、私は三十六家庭を立てて自分の息子以上に愛しました。

神様は生命の母体です。父母はその子供の生命を育ててくれるというのです。生命の母体であり、愛の母体であり、保護の母体です。生命を保護してくれ、育ててくれ、愛してくれるというのです。それゆえ、幸福はどこから出てくるのでしょうか。保護圏が成立しなければ命が危機にさらされるのです。命が危機にさらされると愛も成立しないのです。今死ぬというのに愛が成立することができるでしょうか。できないのです。それゆえに保護圏がなければならないのです。それで保護圏を造りましたが、保護するのは誰かというと天使長だというのです。アダムとエバは生命の起源であられる神様から生命を受けて、天使長の保護を受けて愛の教育を受けている途中だったのです。

二　主なる神の正体

一) 主なる神の属性

モーセが愛の神様を紹介することができず、全能の神様、能力の神様、審判の神様を紹介した理由は、イスラエルの民に律法を与え、律法によって天の民を保育するためであり、乳と蜜の流れるカナンの地に連れていくための復帰のみ旨を成就することに、その目的があったということを知らなければなりません。

乳と蜜の流れるカナンは荒野で十戒と律法を受けて契約の箱を担いだ生まれ変わった人

だけが行くところです。神様は出エジプトをしたイスラエル民族に、神様の民として再創造するためのみ言を下さったのですが、彼らがみ言どおりに行わなければ、むちで打ち、怖い刑罰を加える恐ろしい神として現れたのです。

サタンが王になっていた旧約時代は、メシヤが現れるまで悪魔が権勢を握る時代なのです。モーセにとって主なる神は恐ろしい恐怖の神、復讐の神、嫉妬の神として現れ、僕の僕となった人間を律法でむち打ち、法度に反すれば容赦なく刑罰を加えた時代が旧約時代です。旧約の主なる神の属性を見ると、嫉妬心の強い神として「私」以外の他の神に仕えるならば恐ろしく嫉妬される神様であり、イスラエル民族にカナン七族を残らず滅ぼせと命じた残忍な神様であり、律法と法度に反したイスラエルの民を目の前で倒した無慈悲な神様です。宇宙を創造された愛の神様であるのに、このように嫉妬と復讐と恐怖心とカナン七族を無慈悲にも滅ぼすという、こんな性稟があっていいのでしょうか。旧約時代は天使が仲保となって神様に代わった時代だからです。

命には命で、目には目で、歯には歯、手には手、足には足、やけどにはやけど、傷には傷、殴ったことには殴ることで返せという復讐に満ちた律法主義は、創造主神様の性稟であるはずはありません。神様は愛であり、許しの神様です。

モーセの前にも神様は何度か現れます。ホレブ山で柴の中の炎のうちに現れモーセを召命し、シナイ山の頂でも現れてモーセに十戒を与えました。今日までモーセの前に現れた主なる神が天使であるとは知らずにいますが、新約聖書の使徒行伝第七章を隅々まで見ると、天使だと記録されています。「四十年たった時、シナイ山の荒野において、み使が柴の燃える炎の中でモーセに現れた。あなた方は、み使いたちによって伝えられた律法を受けたのに、それを守ることをしなかった」。このように旧約に現れた主なる神とは天使であって、神様そのものではありません。旧約時代は僕の時代です。息子ではない僕に、父として神様が現れることはできないのです。

主なる神は、モーセが神様の名を尋ねたとき、神様は「わたしは、有って有る者」だと答えて、主なる神だと名を教えます。しかし民族の前に出たモーセは、先祖の神、すなわちアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と、主なる神は先祖の神様であることを強調します。主なる神とは天使です。旧約は僕の時代だったので、神様の本当の姿を現すことができない時代です。

さて、旧約聖書を見ると、神様が闘えと言いましたか、闘うなと言いましたか。サウル王が戦争に勝利したのち、女と子供だけ残して、男はすべて殺せと言われたのに、殺さなかったので罰を受けたことを知っていますか。どうしてそうなったか、考えてみましたか。サタンの男を生かしておけば、サタン世界が再び侵犯するので、そのようにさせたのです。サタンの男がいれば、自分の妻を連れていって思いどおりにするので、男さえ脈を断ってしまえば、子供と女は天の側に属することになり、その制度がなくなるのでそうさせたのです。そうしなかったことによって、異邦の

神をあがめ、あらゆる異邦の淫乱な風俗が入ってきて、天の国が侵犯されたので、サウルが罰せられたのです。

二) 宗教には新婦宗教と天使長宗教がある

神様がアダムを造る前に天使を造ったので、今日の宗教は何かというと、天使世界圏を地上に造ったものです。それが宗教世界です。その宗教世界圏内で何をすべきなのでしょうか。アダムを造り出すということをしなければならないのです。それでは宗教の中で世界的中心は何でしょうか。それはユダヤ教です。このようになるのです。そのユダヤ教は何をする宗教でしょうか。新郎を紹介する宗教です。それがメシヤ思想であり、救い主思想です。

神様がアダムとエバを創造するまでは、その伝統的思想を誰が受け継ぐかというと、天地長の立場にある方々が受け継ぐのです。そうしてアダムとエバが生活するための新しい風潮と伝統を誰が教えてやるべきかというと、神様が教える前に、僕である天使長が「主人の息子、娘はこのようにしなければならない」と教えてやらなければならないのです。主人の息子、娘が過ちを犯すのを制止して、正しく歩むように先頭に立って教えてやるのが、年上の僕の責任ではないでしょうか。

堕落した人間を救うために、神様は宗教を立てました。その宗教とは何でしょうか。エバの宗教と、天使長の宗教を世界に造ったのです。エバと天使長ゆえに堕落したので、人類をエバと天使長の宗教をもって復帰するのです。その道を通じて復帰されるのです。宗教は天使長圏の宗教です。百個、千個あったとしてもすべて天使長圏に属します。多くの宗教がありますが、それを大きく分けると四大宗教です。その中心はキリスト教ですが、キリスト教の主たる思想は新婦の思想です。

神様が真の神であり、その他の存在は神的存在の天使たちです。唯一神と多神に対する確実な区分をしようとするならば、多神教は神的な存在、天使たちが立てたものです。これらの宗教の中で、善なる天使たちが人間の神霊と精神を高揚するために誕生したものがあるのですが、これらが高等宗教であり、神様はこの善なる宗教を通じて人類の心を開墾してきたということを知らなければなりません。

天使長宗教は根本が明確ではありません。神様が何か分からないのです。終末にどうなるか分からないのです。ただ外的な遂行概念だけを中心として指導してきたのです。それゆえ終末になると、ふろしきをまとめて主人の家に世話をしに行かざるを得ないという立場になるのです。明白な伝統がないからです。

旧約時代に神様のみ旨に従った人と、新約時代に神様のみ旨に従った人を考えてみましょう。旧約時代は原始的な宗教形態をもち、新約時代は時代的な宗教をもっていました。すなわち、新約時代は近代の二十世紀文明まで連結されてきた宗教時代なのです。統一教会は何の宗教でしょうか。統一教会は原始的宗教、時代的宗教よりも新たな次元の未来的な宗教になるべきだと考えるのです。

三　イエス様が「父子関係の神観」明かす

一) 新約時代は養子の時代

イスラエルという名を得たヤコブが勝利したというのは、神様の息子として勝利したのではなく、神様の前に僕として勝利したということです。こうして僕の僕から僕の立場に復帰し、僕の立場から新約時代には養子に復帰するのです。ローマ人への手紙第八章二十三節には「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」とあります。アバ、父と呼ぶことのできる養子となることを待ち望んでいるとあります。新約時代にいくらよく仕え、よく信じていた信仰者たちも、牧師、長老、学士、博士はもちろん、みな神様の前では養子です。養子なのです。正直な話です。養子は養子です。養子というのは血統が違います。血統が違うのです。

イエス様は何によって一段階上がるのでしょうか。この地上には人間の堕落によって人類の先祖がいないので、先祖の位置に上がればイスラエル民族は養子の立場で接ぎ木され、神様の前で相続圏に対することのできる息子の名分をもつようになります。それゆえローマ人への手紙第八章を見てください。「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」とあり、「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。アバ、父よと呼ぶのである」と書かれています。養子にしかなれないのです。今のキリスト教信者は養子です。養子は血統が違います。

養子は直系の息子とは違います。養子は、もし直系の息子が来れば、夜でも昼でもいつでもすぐに自分のすべての所有物を直系の息子にあげることができなければなりません。その所有物は自分のものではないからです。養子の立場に立っても、養子に定められたとしても直系の息子が生まれたときに「こいつ、どうして生まれたんだ」と言ってはなりません。これはサタンの本性です。神様がアダムを造ったとき、天使長がそのアダムを見て喜ばなければならないのです。喜ぶべきなのに、「どうして生まれたのか」と言ってはなりません。養子はこれを知らなければなりません。養子は息子を保護しなければならないのです。直系の息子が腹中にいるときも「ああ、生まれなければいい……」と言ってはなりません。

それでは養子になるにはどうしなければならないのでしょうか。僕よりも優れていなければなりません。神側の僕よりも良く、サタンよりも良くなければなりません。なぜそうでなければならないのでしょうか。サタンは本来、天使長だったのですが、その天使長は僕だったので、その僕にも劣る人は養子になることができません。これは原理的です。それではその養子と言っても、どのような養子にならなければならないでしょうか。私が神様から相続を受けたとしても、それは私のものではなく、神様の本来の息子、娘の前に返すべき相続だという思想をもった養子にならなければなりません。そのような養子をつくらなければならないのです。

養子というのはのちに来る息子、娘のために、自分が死んでも命を尽くし、自分のすべてを犠牲にしても、神様の願われる直系の息子、

娘が生まれることを願い、そのために準備する心をいつももっていなければならないのです。養子の名を立てなければ、息子と関係をもつことはできません。天使長よりも一段階高い中間的な存在として生まれたのが養子だということを皆さんは念頭に置かなければなりません。

養子というのは血統が異なります。元来、新約の出発において、養子として立てられたのは誰かというと洗礼ヨハネでした。洗礼ヨハネは天使長の代表でした。神様の息子であるアダムの前で反対した天使長ではなく、最後までアダムのために生きる天使長側の地上の代表者として立てられたのが、洗礼ヨハネでした。ところがこの洗礼ヨハネがイエス様に従うことができず、イエス様と一つとなれなかったので、悲運の歴史が繰り広げられたのです。

旧約時代と新約時代が連結される歴史だということを知らなければなりません。旧約を信じてきた人は、僕として養子の恵沢を受けることを願うのですが、それがメシヤが来ることを望む理由です。すなわちメシヤによって僕の悲しい身の上を乗り越えて、養子圏の立場に進むことが彼らの願いです。養子の立場は、直系の息子、娘がいない場合に父母から相続を受けることのできる因縁が成立する立場です。ですから、僕の立場を超越し、神様のみ旨を迎えることのできる恵沢を受けるのを望むようにしたのが、僕の旧約時代を指導してこられた神様のみ旨です。それゆえ、彼らは僕の立場を免れて、神様の相続を受け得る圏内に入ることのできる特権的な一時を願ってきたのであり、それがイスラエルの選民思想でした。

万物から養子的勝利圏を経て、息子の勝利圏を経て、父母の立場で復帰して上がらなければなりません。ですから新約時代はいくら良く信じても神様の息子には絶対なれません。

今までの歴史を見れば、旧約時代は万物を祭物視しました。万物を犠牲にしました。万物を犠牲にした目的は、人間の解放のため、人間の復活を助けるためでした。万物を犠牲にして人を取り戻したのです。言い換えれば、万物を犠牲にするのは神様の子女を取り戻すためです。旧約時代は万物を祭物とし、新約時代は神様の子女たちが血を流して、この世界の復活圏に向かっていくのです。それがキリスト教を中心とした歴史でした。キリスト教の歴史はイエス様、そしてイエス様に従うすべての個人、家庭、民族、国家が今まで犠牲となりながら祭物的過程を経てきたものです。

旧約時代はモーセに能力の神様を証させました。能力の神様として信じなければ罰を下しました。次に、イエス時代には慈悲の神様を紹介しました。イエス様が病人を治さなかったならば追い詰められて死ぬことはなかったのです。神様がこの天下を統一して、万国を救う指導者を養成しなければならないのに……。病気になって死ぬのは、この世の先祖たちが過ちを犯したので、その罪の代価として死ぬのです。それをどうして生かしておくのですか。統一教会の文先生が病気を治したとすれば、数十万の病人を治したことでしょう。病気を治さなくても私たちのみ言を聞い

て喜べば、らい病が治らないでしょうか。どんな病気でも治るのです。

二) 養子は父と呼ぶことができる

旧約時代を経て新約の新しい朝を迎え、イエス様は神様を父であると宣言し、堕落人間を養子の位置に上げ、神様と父子の関係をつくってくださいました。養子は血筋が違います。しかし来られたイエス様に接ぎ木されることによって、息子の名分をもって神様を父と呼ぶことができるのです。神様との父子関係の成立は、イエス様以外には誰にもできない天の秘密だということを知らなければなりません。

イエス様が神様を父と呼ぶとき、当時、旧約の観念に浸っていた祭司長やパリサイ人は、神様を冒・するけしからぬ言葉として聞いたのです。それほどイエス様の父としての神観は革命的な神観だったということを知らなければなりません。

イエス様は一段階高めて神様の愛を紹介しました。旧約時代には、モーセが愛の神様を紹介できず、権能の神様、能力の神様、審判の神様だけを紹介しました。しかしイエス様は、愛を紹介しました。愛の神様を紹介し、愛のイエス様であることを紹介したのですが、当時の人間は受け入れませんでした。

旧約時代は僕の時代だったので、神様の正しい姿を現すことができない時代です。神様は父であり、愛の存在です。神様は愛そのものなので、すべての罪悪を許される愛の父です。目には目で、歯には歯で復讐した旧約時代の律法は消え去り、イエス様によって怨讐を愛し、兄弟の過ちを七回ではなく、七十回までででも許される愛の真の姿を現すのです。父がどうして子の過ちを許さないことがあるでしょうか。

神様は目に見える存在ではありません。その見えない神様が、目に見える神様として現れた存在がイエス様です。ですからイエス様はヨハネによる福音書で「わたしが父におり、父がわたしにおられる。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしい、と言うのか」と、神様との一体を主張しました。

ですからパウロも「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」（ローマ八・三八、三九）と言いました。イエス様も神様の愛のために来られたのです。

イエス様がヨルダン川で洗礼を受けて天が開けた時から昇天するまで、三年という短い歳月だったことを知らなければなりません。イエス様が父子の関係の神観を明らかにしながら、具体的な内容をすべて語れずに逝かれたという事実を知らなければなりません。

ユダヤ教のメシヤとして来て、世界的メシヤ路程を開拓しようとしている途中で死んだというのです。そうするとユダヤ教はどうなるのでしょうか。ユダヤ教のためだけの神様として仕える、そのような神様であってはな

りません。イエス様がこの地上に来て教えるべきことは何でしょうか。旧約聖書で教えてくれた神様をそのまま教えてはなりません。新約時代の神様として教えてあげなければなりません。「国家的次元の時代を越えて、今は世界的次元の時代に入っていくので、世界を吸収するためには世界のために精魂を込める基台を築かねばならない」。このように教えるべきなのがイスラエルの国家的メシヤとして来たイエス様の使命だったのです。そうして生涯を捧げて世界的メシヤの権威を取り戻すことができるようにすることが、イエス様の生涯になすべきことでした。

四　成約完成時代は神人一体の時代
真の子女は血統転換、
重生を経なければならない

復帰途上で僕の僕時代から僕の時代を経て、養子の時代、直系の時代へと上がっていかなければならないのです。それでは完全に僕の僕時代を経て、僕の時代、養子の時代を経て直系時代と因縁を結ぶことができるでしょうか。直系の時代と因縁を結ぶには、そのままでは結べません。必ず原理によって信仰基台を立て、実体基台を立て、メシヤを迎えなければならないのです。メシヤは神様の真の息子です。養子と真の息子は血統的な関係が異なります。それゆえ血統転換が必要なのです。

エデンの園で過った結婚をしたのが堕落なので、今真の父母が正しく結婚させることによってひっくり返すのです。偽りの父母が犯したことを、真の父母が清算することによって地獄を撤廃し、数千億の霊界の先祖まで結婚させるようになるのです。真の愛を中心とした地上の子孫が家庭基盤と通じて、霊界の先祖と地上の子孫が縦的に一つとなるだけではなく、このような家庭基盤を起点として東洋と西洋がつながるのです。

私たち人間は血統的にサタンの血統を受けているので、自分では天の前に戻ることができません。ですからメシヤが絶対血統を復帰して、サタンが汚した血統を改造しなければなりません。これを転換しなければなりません。それゆえメシヤは必ず来なければならないのです。メシヤが来なければ血統復帰がなされません。血統復帰をしなければなりません。

真の父母は何をしなければならないのでしょうか。サタン世界の根である間違った血統を正し、間違った生命を取り戻し、間違った愛の道を正しく開かなければなりません。聖書に「死なんとすれば生き、生きんとすれば死なん」とありますが、そのような逆説的な論理がどうして出てくるのでしょうか。サタン世界は死ななければならないからです。

神様が創造当時に理想とされていた真の愛、偉大なる愛を中心として人間との愛の関係を結び、一つとなることのできる神人愛一体の理想を完成したならば、今日の私たちは天国だとか地獄だとか心配することなく、皆そのままで天国に行くようになるのです。

人類歴史を見ると、旧約時代、新約時代、成約時代、このように三時代があります。ところで旧約時代とはどんな時代ですか。祭物を犠牲にして子女を救う時代です。神様の息子が来る準備をするのです。新約時代はイエ

ス様が祭物となって父母を迎える時代です。それゆえ、再臨時代を迎えて新郎新婦を立て、父母を迎えるための準備をしてきました。成約時代に先生が中心となり、真の父母という名をもって今まで四十余年間苦労してきたのは、神様を地上に迎えるためです。そうして神人一体となるのです。

神様と皆さんは元来父子の関係です。新約時代には、人間は神様の養子でした。しかし今は父子の関係なので、息子のすることは父のすることであり、父のすることは息子のすることです。一緒にすることになるのです。父のものは息子のものであり、息子のものは父のものです。統一教会が恐ろしいのは、このような父子の因縁を教えるからです。これが最も恐ろしいことなのです。

金博士、博士を売ってこんなもの買いますか。なぜ笑うのですか。博士が問題ではありません。自分の物は旧約時代、息子は新約時代、自分たち夫婦は成約時代なのですが、この三時代を捧げても手に入れたいのです。旧約時代に物質を犠牲にしたのは、真の息子が来ることのできる道を築くためです。イエス様は息子として来て犠牲になりましたが、それは父母様が来ることのできる道を築くためです。父母様が平面上に来て受難の道を行くのは、神様を迎えるためです。どこにですか。本然の垂直の位置にです。天地の大道の起源がここで切れたので、この根本の根を是正しない限り平和の起源はないのです。これは絶対的です。

文総裁のことを皆さんが「ああ、私たちと同じ人間だ」と考えてはなりません。文総裁の使命は何でしょうか。旧約時代は万物を犠牲にして息子、娘を取り戻す時代です。分かりますか。新約時代は息子、娘を犠牲にして父母が来る道を築くのです。父母が来て、この地で何をするのでしょうか。神様が来ることのできる道を築くのです。縦的父の水平世界を、万民世界を越えてつくらなければならないのが真の父母の使命です。それゆえこの水平の父の心情圏が造られれば、縦的な父の心情圏は自然にここに来て定着します。そうして縦的、横的な愛を抱くことのできる位置に行けば、ついに世界を越えて神様は核の位置に行って、本然の理想の権限を再び編成することによって「すべて完成した」と言うことのできる時代になるのです。どういうことか分かりますか。

堕落した人間が神様の前に出るための方法は、時代によって異なっていました。すなわち、旧約時代は祭物を捧げることによって、新約時代は神様の息子であるイエス様を信じることによって、成約時代は真の父母に侍ることによって神様の前に出ることができるのです。

皆さんの息子、娘は今後、同じ国の人同士結婚させることができません。神様は三代を見ているのです。今はこうですが、三代以後に一つにしようというのです。その中の一つが旧約時代です。ですから皆さんの結婚は旧約時代です。旧約時代。その次が新約時代と成約時代です。皆さんの息子、娘である二世が結婚して生んだ三代になって、伝統ができることでしょう。

成約時代は真の父母が犠牲になることによって縦的な神様を地上に迎えるのです。それが最

後です。神様は人類の前に真の愛を中心とした縦的な父であり、真の父母は真の愛を中心としてその縦的な父の前に横的に九〇度を合わせた横的な父母です。それゆえ縦横の愛を中心として初めて神様の愛と神様の生命が激動するのです。神人合徳が激動して、真の父母の愛を中心として新たな血族が広がるのです。そうなることによって、人類歴史の中で初めて本然的原理基準を中心として、神様の愛の中で出発した生命の種が地上に顕現するのです。これが分からなければなりません。

これからは所有権を復帰しなければなりません。旧約時代は万物を犠牲にし、新約時代は息子を犠牲にし、成約時代は父母を犠牲にして神様を迎えたので、今は何をすべきでしょうか。皆さんが母、父に代わってその立場に立たなければなりません。息子、娘は新約時代であり、万物は旧約時代です。この旧約時代、新約時代、成約時代が一遍に真の愛を中心として抜け出すことで、サタンが主人となっていたものをすべて蕩減して本然の主人に戻り、これを捧げなければなりません。捧げなければならないのです。

成約時代は成就する時代です。個人的に完成し、家庭的に完成し、氏族、民族、国家、世界的に完成するのです。何を中心としてでしょうか。神様の愛と神様の生命と神様の血統を中心として連結されるのです。単一の血統、単一の愛、単一の生命の伝統です。このようになればサタンは離れざるを得ません。接ぎ木することによってサタンの血統的因縁がなくなるのです。

五　創世以来初めて神様が顕現
初めて神様が姿を現される

統一教会時代は父母の時代です。神様が地に臨むことができ、神様が来ることのできる道をつくるのです。それで神様が来られて、侍ることによって救われるという言葉が成立するのです。歴史はそのように発展するのです。

最後に残るものは何でしょうか。神様プラス人間、神人、神人の生きる道、神人の生活観です。人生観も同じように、神人人生観、神人世界観です。それは漠然と神様のことを人が知ることのできる程度の位置ではなく、人が永遠に離れようにも離れることのできない位置です。なぜでしょうか。神様と人は本来離れることのできない位置で離れたので、離れることのできなかったその位置以上の位置に到達しなければなりません。そのような位置で神人が一つとなった生活的な舞台、世界的な舞台を要求していかなければならないのです。

神様は宇宙の中心存在なので、その近くに行けば、千年万年主管されてももっと主管されたいのです。神様を中心とした侍る道理がそのようになっているために、今日私たち人間もそうした立場で主管されればそれ以上の幸福はないという事実を私たちは想像すらできませんでした。

これから皆さんは侍る生活をすべきです。今までの信仰生活は信じることによって救いを得ましたが、今後は侍ることによって救いを得ます。本来、堕落しなかったならば神様に侍ることによって私たちが行くべき道を行

くのです。侍るには皆さんの生活と心で共に侍らなければなりません。

神様は絶対的な父であり、絶対的な真の父母、唯一なる真の父、不変なる真の父、永遠なる真の父なのです。そのような父は絶対的な息子、唯一、不変、永遠の息子を探します。そのような息子、娘たちは絶対的な夫婦、唯一なる夫婦、不変なる夫婦、永遠の夫婦を成さなければなりません。それで彼らが安着するための家庭は、絶対家庭、唯一の家庭、一つしかないのです。その次には不変なる家庭、永遠の家庭です。そのような家庭が神様と共に暮らせる地上天国の永遠の基地です。

侍義というのは生活化天国時代を言います。それで侍義を掲げてきたのです。復帰歴史は何かと言えば神様の創造理想を再現することです。

神様を心の中に迎え、私たち人間が体の立場で完全に一つとなることのできる起源をつくらなければ、この悪魔の世界を清算する道はありません。このような観点から、侍る時代、侍義の救援時代と考えるのです。侍ることによって救われるのです。神様はあの空中に遠く離れた神様ではありません。私たちの生活圏内の主体者としての神様に侍らなければなりません。

神様は、妄想的で観念的な神様ではありません。抽象的な神様ではありません。生活的な主体性を備えて、常に私たちの暮らしている生活の主人として共にいるのです。侍られるだけではありません。共同的な愛を中心として共同的な生活をしている神様なのです。

神様がアダムとエバを造った目的はどこにあるのでしょうか。私たち人間の形状を見てください。体をもっています。しかし無形の神様には体がありません。体を着なければ、体をもたなければ霊界世界や地上世界を治めることができないのです。ですから神様がいらっしゃるにしても、神様が人間の父母として現れるためには体をまとわなければならないのですが、その体を着た代表が誰かというとアダムとエバなのです。堕落していないアダムとエバの体をもって現れるのです。それゆえアダムとエバは人類の始祖であると同時に、天地を主宰する神様となるのです。実体をもった神様、すなわち永遠な無形世界の神様の形状を代わりに着て現れた立場で、父母の立場で世界を統治する責任がアダムとエバにあったのです。

無形の神様には実体がないので、その形体を表したのが真の父母です。真の父母は個人的な父母であり、家庭的な父母であり、氏族的な父母であり、民族的な父母であり、国家的な父母であって、霊界に行ったのちも、真の父母の形状で神様が現れるのです。統一教会が偉大なのはそれです。レバレンド・ムーンが偉大なのは何かというと、レバレンド・ムーンの形状を神様が使おうとしていることです。どういうことか分かりますか。

その父母というのはどのような父母でしょうか。何億もの人間の父母が一度に生き返ったとしても、今日皆さんの言う真の父母の栄光を備えた父母はいないのです。千万代の先祖がみな復活して、復活した栄光をたたえたとしても、それは堕落圏から抜け出していない栄光であり、称賛です。しかし今日統一教

会で言う真の父母という言葉は、皆さんの立場が悲惨でも、幾千万の先祖と共に、この地に勝利をもたらして、万民解放圏を備えた栄光の立場で称賛する以上に価値のある、誇るべき言葉だという事実を知らなければなりません。父母様に出会った中で、神様に出会うことのできる道がつながるのであり、統一教会に巡り会ったこの場は、近い将来、神様の国と父母様の願われる祖国を取り戻すための道につながっているという事実を知るべきです。

成約の侍義時代は、生活の中で直接神様に侍って暮らす時代です。その時が神様の幕屋が人間にある時であり、天にある新しいエルサレムが地上に降りてくるので、その時初めて真の神様の姿が人間の前に現れることでしょう。創世以来、初めてです。今までアダムの堕落以後、未完成級の歴史上では神様は現れることができないのです。

第四章 真のお父様の見た神様

一 歴史的な恨、苦痛の神様

一) 人間の堕落により父母の立場を失う

私たちの本当の父親は神様なのですが、サタンが父親に成り済ましています。それでヨハネによる福音書第十八章四十四節でイエス様は「その父の欲望どおりを行おうと思っている」ととがめられたのです。サタンの血を受けたという悔しい事実を知ったならば、憤りの思いがほとばしり、自分の体を刃物で刺し、汚れた偽りの血を出してしまいたいという義侠心が生じるべきです。そのように感じたことがありますか。「この肉の塊め」と体を打ちながら憤りを覚える人は天の忠臣です。

最後の心情の世界を連結させることのできる宗教があるとすれば、それは神様が最もかわいそうだということを詳しく教えてくれる宗教であると言うことができます。神様は善くて、素晴らしいというだけではありません。悔しい神様、憤りと恨に満ちた神様です。これを詳しく教えてくれる宗教が現れなければなりません。そうしてこそ孝子となることができるのです。

神様がどれほど悔しいかというと、王の座を怨讐に奪われたのです。神様が極光の神様となることができず、悲しみの歴史をもっていらっしゃるという事実を知らなければなりません。御自身の国の王として、宇宙の王としていらっしゃるにもかかわらず、王が生きているのに王は死んだとさげすまれているのです。御自身の理想を奪い取られ、御自身の愛する息子、娘を奪われ、完全に怨讐の籠絡の場としての地球となってしまいました。

今まで神様が主管することのできる統一された民族や主権国家がなかったがゆえに、全知全能の神様はその威信ゆえに来られなかったのです。その神様の怨恨を解いてさしあげるのが統一家の息子、娘の道理であり、統一家の孝子の道理であり、統一家の忠臣の道理であり、烈女の道理であることをはっきりと知らなければなりません。真理を知っているので、真理があなた方を自由にしてくれるでしょう。知る人は解放されるのです。これをはっきりと教えてあげるのです。

皆さんは神様のためにどれほど涙を流したでしょうか。神様の御苦労の前に、神様に代わって苦労するために、四肢が裂けるような

道でも行こうともがいたことがあるでしょうか。ないのです。皆さんが「子女」というその立場を追求するためには、公的な涙を流さなければなりません。そうして父なる神様にまみえ、「父よ、あなたの息子である私を、そして私たちの先祖を失ったとき、あなたの心はどれほど悲しみに痛んだことでしょうか。その子孫を通じて今まで歴史過程において受けた屈辱と苦痛と苦難が、どれほど大きかったことでしょうか」と慰労してさしあげながら、限りなく涙を流すことができなければなりません。

全知全能の権限で全世界とサタンまでも審判してしまうことのできる神様でありながら、能力をもっていながらも、今までひどく苦労する立場に立ち、手をつけようにもつけられず、神様御自身がもつべき環境をもてないまま孤独単身でサタンの前に讒訴され、サタン世界で足場をすべて奪われて呻吟する神様の立場を考えると、言葉も出ません。このような神様の立場に同情しながらどれだけ涙を流したでしょうか。問題はここに帰結するのです。

この世の親も自分の息子、娘が罪を犯して絞首刑に処されることになったとき、その子が死ぬことを願う親はいません。自分の思いどおりに子を助けることができるとすれば、百回でも千回でも助けてやりたいのが父母の心です。母親の気持ちはなおさらのことでしょう。堕落した世界の女性の心もそうであるのに、全知全能なる神様がいったい何ゆえに終わりの日になって審判をしなければならないのでしょうか。どうして神様が許してくださることができないのでしょうか。これです。神様はどれほど愛しておられるでしょうか。イエス様が七十回ずつ七回許すとすれば、神様は七十回ずつ七千回以上許すはずです。神様の心はそうなのです。

神様の救いの摂理は復帰摂理ですが、復帰摂理の出発はアダムとエバからでした。アダムとエバは堕落したのです。先生が現れるまでアダム復帰はできないのです。これを復帰するために、全知全能であられ、この宇宙を創造された神様が、一人の男性を探すために数千万年間、今まで被造世界に顔を現すことができなかった神様の事情と恨を皆さんは知らなければなりません。

神様のみ旨が何かというと、創造理想の完成なのですが、創造理想とは、私たち人間世界に三対象圏理想を実現することです。その愛を中心として理想が実現するとき、神様は「ああ幸せだ」とおっしゃることでしょう。神様が何をもって幸せだと言えるでしょうか。今日のキリスト教信者はみ座にいらっしゃる万軍の主は全知全能であられるので、「おい」と言えば「ははあっ」と万事が通じると考えていますが、いつも惨めで一人の神様はどれほど悲惨でしょうか。

愛する息子をそのように死なせるしかなかった神様の痛ましい事情を誰が知るでしょうか。それは聖書にはありませんが、息子を死なせるほどの事情があったのではないでしょうか。キリスト教のイエス様を信じると言ってあのように集まるのも悲惨だし、すべての選民の味方になるべき神様なのにこれを知っているのか知らないのか……。行く所々で血を流し、首が落ち、煮えたぎる油に入れられて死に……。

このような運命にぶつかるのを見て、「神様がこれを防ぐことができるのではないか」と言うかもしれませんが、全知全能であられながらその忍び難きを忍ばねばならない神様は、どれほど恨がしこりとなっていることでしょうか。そのように考えたことがありますか。それなのにどうして神様が最も高いところにいらっしゃることができるでしょうか。いつかきれいに清算できたらいいと思います。

自分の愛する人は命を投入してでも保護したいものです。本来創造理想がそうなっています。神様御自身も、息子、娘を愛するがゆえに、自分の命までも投入しなければならない悲しみの神様となったのです。

堕落しなかったならば、神様は創造主として永遠な主人になるはずであったのに、堕落することによってサタンが主人になりました。そうなるしかありませんでした。いくら官吏の屋敷の中の箱入り娘だとしても、その町のやくざ者に強姦され愛の関係を結んだとすれば、その娘は誰のものになるでしょうか。やくざ者のものとなります。全く同じ道理です。天国の王となることのできるアダムであり、天国の王妃となることのできるエバでした。

これを復帰するには、創造の原理原則を中心としてなさなければなりません。本来アダムとエバを中心として永遠な愛の法度を立てたので、その法度に従わなければならないのです。その法度を否定するならば、天理を破壊することになるのです。それゆえ人間はもちろん、神様自体まで否定される立場になるので、仕方なく再創造過程を通して収拾してきたのです。そのように恨多き歴史路程を誰が知るでしょうか。

今日、既成教会では「神様が栄光の中にある審判主として、地獄へ送り、天国に送る」と言います。この世で最もかわいそうなお方が神様です。最も悲痛で身もだえしながらも光明の天地が暗黒の地獄へと落ちるかもしれないのを克服して、そこで身を持ち直し、目を開けて意識を確かにもって、死にはしたが、この子らを生き返らせようという心をもった方が神様です。創造主の能力、絶体者の力があったのでそれが可能だと考えるのであり、そうでなければおしまいなのです。

それでは神様はどのようなお方なのでしょうか。神様は本然的真の父母の立場にあるお方です。ところが真の父母となるべき神様が父母の立場を奪われてしまったので、創造理想の本然的基準にはなかったことが生じたのです。この創造的世界にはあり得ないことが生じたのに対し、創造主であられる神様は干渉することもできず、それに責任を負って消化することのできる立場にも立てないのです。

二) 復帰の恨、子女を訪ねて六千年

私たち統一教会では原罪とは何だと言っていますか。誤って愛したことです。神様の愛と神様の生命と神様の血統が連結されなければならないのに、悪魔の愛と悪魔の生命と悪魔の血統が連結されてしまったのです。アダムとエバが悪魔の生命体になって悪魔の血筋を残したので、今まで恨めしい歴史となったのです。それでは神様のように全知全能で天地を根本から創造し、すべての自主的な権限を所有しておられる方がどうして悪魔の前に、歴史を通して人間をこんな姿、このようにし

たのでしょうか。ですから神はいないという結論は当然なものです。

過ぎし日にはいろいろなことがありました。悔しく、無念な内容が多くありました。私の性格では我慢できないようなことが多くありましたが、舌をかみ、カインの世界を占領しなければならなかったのです。カインの個人ではなく、カインの家庭ではありません。カインの世界を消化しなければなりませんでした。苦い、どれほど苦いことでしょうか。氷山くらいの苦いものを口に入れて、解かさなければなりません。神様を滅ぼし、人類を駄目にした億千万世怨恨の大怨讐の悪魔、この悪魔を黙って屈服させなければなりません。

堕落した人類の始祖は悪魔が父となりました。サタンの愛、サタンの生命を受けたがゆえに、救いの歴史は困難です。キリスト教では全知全能だと言う神様が、なぜ無力な神様のようになり、人類が滅びていくのに手をつけられずにいるのでしょうか。死んだ神様の立場にあるのです。人間が罪を犯したがゆえに、人間がそれを解決することのできる解放圏を備えなければ、神様は解放してやることができません。解放してやれるものならば、初めからエデンの園からアダムとエバを追放しなかったはずです。神様が思いどおりにできるのならば、エデンの園からアダムとエバを追い出しませんでした。しかし追い出さざるを得なかったのです。

神様の求める真の心をもたなければなりません。神様は真の愛を訪ねてこられます。救援摂理歴史、復帰摂理歴史の前線から探し求めてきた真の息子として、今まであかまみれになり、傷つき、悲痛な傷跡のある神様の心を大きく開いても余りある余裕満々の純潔な愛が滝の水のように流れ出て、神様が彼を抱き万事を忘れ、むしろ堕落があったことでより幸福だったと言うことのできる場はないのでしょうか。男ならば誰でもそうでなければなりません。分かりますか。

悪魔が神様に対して、「あなたの創造理想を中心として愛の絶対圏理想である真の単一氏族圏をつくるための愛の血統圏がこのように滅び、破壊状態になったにもかかわらず、今も創造理想的論理が適用されるというのですか」とあざ笑うのです。そういうとき神様は何と答えられるでしょうか。どれほど息の詰まるようなことでしょうか。本来、主人の息子となるべきであるにもかかわらず、怨讐の息子となり、抜け出そうにも抜け出すことのできない塗炭の苦しみの中に陥った人類を見つめられる神様がどれほど悲嘆にくれておられるかを、はっきりと知る既成教会の人々はいるのでしょうか。

人類の父母としてこられたのに、父母として侍ることができずに、自分のために血を流して死ぬために来たという父母がいったいいるでしょうか。愛の祝宴を催して「私の息子よ、私の娘よ、家庭よ、国よ」と、天下がすべて和合するときに一つの平和と栄光の一日をたたえるべき立場に立っている父母が、失った子に出会うべきであるのに、会ってみると、子女の手によって刃物で刺され、死んでいったとは……。考えてみてください、イエス様がどれほど悲痛か。無知な人類に向かって教えてやることのできない事情の中に埋もれた神様の心情はいかばかりであったでしょうか。

悔しい歴史的恨が先生にはあります。しかし、私の恨は何でもありません。神様が神様の本分を果たせずにいます。このような多くの事情を残した歴史過程に、神様の骨髄が溶けるような悲痛な涙と流された血の跡がこの地から喚声をあげているという事実を知らなければなりません。神様を解怨成就しなければならない使命が残っているということを知っているがゆえに、私は今までこのようなことをしているのです。

堕落した世界に責任を負って復帰してこられた神様は、高く、貴く、聖なるきれいなところにだけおられる神様ではありません。人間には想像もできない、形容することもできない悲惨で悲痛で残酷な背後をもっているのです。

皆さんは自分よりも悔しい立場にいる人に慰労されれば慰められます。しかしながら神様は誰よりも悲痛さを感じておられるがゆえに、神様を慰労することのできる立場にいる人は一人としていないのです。始まりも神様御自身であり、終わりも神様御自身なので、その心の中にしこりとなった怨恨をいかにして解くかということが、今までの神様の内情的な事情なのです。神様はこのような事情を抱いて、今まで復帰摂理をしてこられたのです。

神様に会いたくて泣いたことがありますか。涙、鼻水を流しながら口蓋垂が垂れ下がるほど泣いたことがありますか。それほど涙の出るような悔しく、悲痛な立場に立ったことがありますか。これはすべて心情世界を越えるにおいての一つの峠となるのです。

人間と永遠に共にいるべき神様が、人間と引き裂かれるときのその悲痛さと悔しさと憤りと悲しさは、どれほどのものであったでしょうか。人間は全宇宙を渡しても替えることのできない愛の基地を目指して、成熟し、平衡線上で縦横が結合する一つの軸をつくらなければなりませんでした。そうなったならば、それが基準となり天地のあらゆる存在、あらゆる万物の測定基準になれたのではないでしょうか。その愛と因縁を結んだすべての物はどこにでも合うようになっています。どこにでも。

悪魔は四代を蹂躙しました。まず皇后、その上は何ですか、皇太后、その次は王の祖母、次には娘、このように四代がみな生きているのを、王の目前で真昼に裸にさせて蹂躙してしまうのです。娘まで蹂躙してしまうのです。次にはみな殴り殺します。どれほどの怨讐でしょうか。これを処断することのできない神様の悲痛な事情を知らなければなりません。

では、神様にとって悔しいことは何でしょうか。偽りの血筋を受け継ぐことです。偽りの血統を皆さんは受け継ぎました。起源はサタンです。サタンという存在は被造物をすべて滅ぼすことを願っています。そのような宇宙、そのような所有権、そのような血筋が皆さんにつながっているのです。見て、考えて、においをかいで、話し、触る、五感のすべての根がサタン側にあります。皆さんの先祖はとても悪い父母の実です。そのようなものを神様が救おうというのですから、神様は本当にかわいそうです。（堕落した）アダムとエバを片づけてしまって、アダムとエバを再び造ることができないのはなぜでしょうか。造ることはできても、本来、永遠の真の愛を中心として永遠の因縁で造ったがゆえに、そうできないのです。

神様の悲惨さ、悔しい立場に立っておられるということを皆さんは知らなければなりません。「私が造らなかったならば、あのようにはならなかったものを。愛を求めて栄光の天国を願ったことがこのようになるとは」と言われるのです。なぜでしょうか。悪魔の血肉を受けたからです。悪魔の愛が注がれ、悪魔の生命、悪魔の血統がそこにあるので、これを取り除かなければ神様が所有することができないのですが、それを取り除けば死んでしまいます。ですからそこに徐々に新しい血管と生命と愛を注入して第二の創造物、救援物として神様のような代身者を探して立てなければならないのです。その怨讐を愛してやらなければなりません。その怨讐を我慢して愛さなければならないのです。とんでもないことです、全く。

神様が、日が昇ったと言っては休み、気候が良く、季節が良いといっては休むことがあるでしょうか。皆さんも同じです。怨讐を愛さなければなりません。この世の天地の背後にいたサタンを愛していかなければなりません。神様の息子の聖なることを私がたたえ、驚くべき価値をもっていることを知っているとするならば、その価値の前に悲惨でつらく、恨めしくとも行かねばならない道があり、それが大怨讐を愛するということなのです。

二　息子を失った衝撃、悲しみの神様

一) 永遠のひとり子を失った神様

純粋な本質的愛をもった神様の前に、理想的対象として描いていたアダムとエバが堕落して落ちたとき、神様の心はどれほど悲しかったことでしょうか。どんな人間よりも極めて悲しかったことでしょう。極めて、極めて悲痛だったことでしょう。その内容が深く価値的な内容であればあるほど、悲惨中の悲惨だというのです。そのような父なる神様が失った子を再び探し出すために復帰の道をたどっていかれたのです。

父母が愛する子をそれほどまでに信じているのに、子が裏切ったならば、信じていたのに比例して父母の受ける衝撃と苦衷、そして悲惨さは、言葉ではとても表現できません。また、命を懸けて互いに愛し合っていた人が裏切り、排斥し、不信するならば、やはり言葉にはできないほど悲惨です。そのような立場で身もだえしながら受ける苦痛は、経験した人でなければ分かりません。言葉だけでは理解できません。このことは世の中のことを見れば分かります。それでは神様はどうして悲惨になったのでしょうか。神様は漠然とした神様ではなく、具体的な神様です。私たち人間とは最高の関係をもった神様です。神様が喜ぶことがあったとすれば、それは人間と共に喜びで出発し、終わりのない永遠に向かって進み続けることのできる出発の起点をもつことです。ところがその出発の起点を人間ゆえに失いました。それがアダムとエバの堕落です。

この世でも、父母が還暦を過ぎてから生まれた七代続きの一人息子が死ぬことを考えれば、絶望中の絶望だといえます。若ければまた生むこともできますが、年を取ってから生まれた七代続きの一人息子が死んだとすれば、七代圏を継承しようとしていた先祖たちの心はいかばかりでしょうか。先祖たちは自分の子孫、自分の血統を通して世界にまたとない

万福を受けたいのです。ですから子が死んだとすれば父母は後を追って死にたいのです。アダムは七代続きの一人息子どころか、永遠の一人息子です。一人しかいないアダムをして家庭を築かせ、創造の大業を果たした立場に立たせようとしたのに、そのアダムが死んだのですから神様の心はいかばかりであったでしょうか。このように、よじれたのですからどうしたらいいのでしょうか。神様はアダムとエバの堕落によって六千年間、衝撃から抜け出せずにいらっしゃいます。

元来、創造原則から見ると、愛の一体理想圏内に入れば、永遠な所有主が、愛を中心とした主体者が中心となるのです。ところが神様がそのような中心となるべきであったのに、サタンが中心となったのです。天地が地天となり、すべてが反対になったのです。神様御自身が真の理想として願った愛の理想、真の愛を中心として一体となり、一つの体となったものは分かれてはならないものです。その血統も神様の直系子女となるべきであるのに、それが妨げられて反対となったのです。

人間の悲惨な姿を毎日毎日、時々に見つめられる神様のその心情はいかばかりでしょうか。自分の息子が不具者となり、王子、王女の栄光をたたえるべき存在が、肥だめのようになり地獄に逆さまに落ちたとするならば、全知全能だという神様の威信はどうなるでしょうか。絶対的な神様の威信はどうなりますか。顔を上げることができるでしょうか。

息子が犠牲になったとすれば、その父親は息子が死ぬようにほっておくでしょうか。このような観点から考えると、愛の神様は愛の対象である私たちを死の場に立たせることができないのです。全知全能の神様であるならば、理想的な世界を造って復活させなければならないのです。父母の愛というものを考えれば、それは十二分に可能です。神様がおられるとすれば、神様は必ずそうすることのできる立場におられるでしょうから、私たちをそのような理想的な復活圏へと移してくださらなければならないという結論になるのです。神様は、私たち人間に住まわせようとして、死ぬようなところ、悲惨なところに置いたのではなく、私たち人間を高次元的な世界に連れていくための一つの関門として、そのようなところに置いたとするならば、それは素晴らしいことではないかというのです。

創造主の威信までも、全知全能であられる神様の威信までも、あまねく臨在される神様の実存性までも忘れるような心情で、アダムとエバを愛したかったのです。そのような立場で堕落したアダムとエバを見つめられる神様の心はいかばかりであったか、これを知らなければなりません。

今日、私たち人間は神様の息子、娘ではありません。神様がいくら泣いても見て見ないふりをします。いくら悲しんでも見て見ないふりをします。それは人間がサタンの血肉を受け継いで生まれたからです。むしろ神様が悲しむのを見て賛美しています。滅びるのを見れば、喜んで笑うのです。神様がこのような人間を指導し、開拓の方向を教えてやろうというのですから、どれほど御苦労なことでしょうか。神様に、「ため」に生きようという心、憐れみの心がなかったならば、今まで摂理歴史を支えてくることができたでしょうか。

二) 神様の歴史的に悲惨な姿

神様が天から見下ろしているとするならば、どれほど憤慨されるでしょうか。この万民は御自身の血統的子孫であるべきなのに、悪魔が悲惨な境地に追い込んで「あなたの子孫はこのように凄惨な立場に処している」と、神様に向かって嘲笑しています。サタンがまた「全知全能の神様なのだから、この環境をどのように収拾するのですか」と言えば、神様は沈黙を続けるしかないのです。聞いても聞こえないふりをし、においをかいでもかがないふりをし、感じながらも感じないふりをしなければならない神様の歴史的に悲惨な姿を皆さんは考えたことがありますか。

今日の既成教会で信じているように、全知全能で栄光のみ座におられる神様であるとすれば、御自身の息子、娘が死んでいくのに、み座から「ここに上がってこい。私が座を離れることはできない」と言うでしょうか。み座でも何でも投げ出して下りていくでしょうか。どちらでしょうか。そのままでおられるでしょうか、下りていかれるでしょうか。王冠を脱いで急いで下りていくでしょうか。どうされるか考えてみてください。それではキリスト教の信仰は正しいでしょうか、間違っているでしょうか。

神様が泣き叫びながら「私の息子よ、私の娘よ」と何万年、何十万年、何百万年も呼び続けてこられたという事実を知らなければなりません。そのような神様の前で「父よー」と声がかすれるほど呼んだことがありますか。舌が乾き、息が詰まり、目がつぶれて開けられないほどに、切に父を呼んだことがありますか。生命の主体であるその価値を抱くために、どれほど身もだえしたでしょうか。身もだえした基準に比例して皆さんの人格の基準が測られるのです。

私たちは全知全能であられるそのお方に対することのできる何らの内容も持ち合わせていません。しかも堕落した人間として生まれた私たち、私たちの目は俗なるものです。私たちの五感の感情はすべて俗なるものです。神様に対することのできるものは一つとしてありません。一つもなく、公義の法をもっては相対することのできる内容が絶対にないのですが、愛の法をもってのみ対することができるという唯一の道があるのです。したがって皆さんが信仰生活において年を経るほどに愛の哲学をもって暮らし、愛の哲学をもってすべてのことを分別しながら生活する信仰者にならなければならないのです。そのような人は十年が過ぎ、二十年、三十年の生を経れば、自動的に神様の必要とする人になっていくのです。

神様が数千年の間復帰摂理をされながら受難の道を経てきたのは、神様が善なる心をもっていたので耐えてきたのでしょうか。神様が今まで人類歴史の数万年の間救いの摂理をしてきながらも、いまだに疲れ果てることなく続けてきた原因はどこにあるのでしょうか。全知全能であられるからですか。そうではありません。愛の道を求めてきたがゆえ、愛の息子、娘を探し求めているからです。それゆえ千年を一日のごとく受難の道を越えに越えることのできた偉大な力は愛であった。そうでしょうか。そのとおりなのです。

神様がかわいそうです。かわいそうではありませんか。全知全能の神様がどうしてかわいそうなのかと言うかもしれませんが、いくら全知全能だとしても愛する息子、娘を失った衝撃から抜け出すことができないのです。その衝撃から抜け出すための道が神様御自身にあるならば、神様は今まで六千年の歴史路程を経ながら苦労される必要はないのです。

人間が罪を犯したからといって「お前、なぜ罪を犯したのか」とおっしゃるばかりの神様ではありません。罪を犯した事情をよく知っていらっしゃる神様です。御自身の事情は考えずに、人間の事情を知ってくださろうとする神様です。悲しい者には悲しい事情をもって訪ねてこられ、苦痛を受けている者には苦痛の事情をもって訪ねてこられ、悔しくやるせない者には悔しくやるせない事情をもって訪ねてこられました。皆さんは神様とどれだけ事情を通じたことがありますか。神様は私たちの生活環境の中にもそのように訪ねてこられました。それだけではなく、心情をもって訪ねてこられました。お前が私を裏切ったとしても、私はお前の父親だという心があったがゆえに、六千年という歳月を訪ねてこられたのです。

統一教会とは何でしょうか。神様の心情を論じています。神様を解放しようとしています。既成教会は、私たちがそのようなことを言うと言っては私たちを異端だと言います。皆さん、立派な大統領でも自分の子が今死んだとすれば、その死んだ子の前で大統領の権威をもって「子供は死んだけれども、大統領は涙を流すことはできない」と言うでしょうか。陰で鼻を打ちつけ、痛哭し、人前では顔を拭って、そうだとすれば通じますが、そうでないとすれば死んだ息子の霊が「これが父親だなんて……。父親ではなかったのだ」と言うことでしょう。死んだ霊が活動するとすれば、その父親に協助するでしょうか、反対するでしょうか。世界の大統領でも誰でも、自分の愛する子供が死んだならば涙を流さなければなりません。

人間の創造本然の特権的な価値を喪失し、堕落のうじとなってあえぐ無価値な人生を見つめる神様の内情的心情は、どれほど悲惨なことでしょうか。あの者たちは本来、私の愛と私の生命と私の血統を通して直系の子となり、天国の栄光を占めたであろうに、敗者の仮面をつけ、呻吟と苦痛と絶望の中であえぎながら命を絶つ場にいるのです。ですから、それを見つめる神様の心はどれほど悲痛でしょうか。そのように神様が悲しみの神様であることを知らずにいました。それゆえ文総裁は神様を知ってから何日も何週間も痛哭しました。統一教会の出発には、そのような深いものがあるということを知らなければなりません。

神様の心の中に苦痛があるとは誰も知らないのです。歴史上に現れ、今ここに先生を通して現れて、その深い使命を明らかにしたので知ることができるのであり、そうでなければ分からないのです。どれほど驚くべき事実でしょうか。イエス様もそれを知らなかったし、知っていたとしても心の中にあることを語ることができなかったのです。また、宗教指導者の中で誰一人としてそのような隠された宇宙の秘密を知る人はいませんでした。歴

史上初めて世界の前に先生が現れ、宇宙の秘密が明らかにされたのです。

三　拘束された神様、囹圄(れいご)の神様

一) 神様が立つ瀬を失った

私の恨は何でもありません。神様が神様の本分を果たせずいます。このような多くの事情を残した歴史過程で、神様の骨髄が溶けるような悲痛な涙と流した血の跡がこの地で喚声を上げているという事実を知らなければなりません。このような神様の恨を解怨成就する使命があるということを知っているがゆえ、私が今までこうしているのです。

神様を解放しなければなりません。神様は今愛を中心として拘束されています。監獄に閉じ込められているのと同じです。解放されていないのです。全知全能の神様、宇宙を創造された神様が人間ゆえに愛を中心として築こうとされた理想世界をサタンに奪われたので、神様も心情的に解放されないのです。神様の心情的解放基盤がこの宇宙にできないのです。神様も拘束されました。愛する子供が死んだのに父母が安らかでいられるでしょうか。いられないのです。

神様を私の手で解放しようというのです。神様は解放された神様ではありません。拘束された神様です。息子、娘を失った父母、なおのこと孝行息子が死んだのちの父母の心を解くためには、その孝行息子以上にすべての面を備え、十倍以上功を尽くして孝行しても、その本来の心を解放することはできません。レバレンド・ムーンがそのような神様を解放しようというのです。

悔しい神様、神様がなぜ悔しいのでしょうか。人間世界では青春時代に苦労すれば必ず未来に希望が保証されるのですが、神様は歴史始まって以来今まで苦労しているのに、いつ希望があるのでしょうか。いつ神様の希望が成し遂げられるのでしょうか。神様は若い神様でしょうか。今は年老いた神様なのでしょうか。神様は何歳だと思いますか。神様は宇宙の外にいるので年齢もありません。神様は地球のように太陽系を一年に一度ずつ回るでしょうか。その外側にいるので数えられません。計算する必要がありますか。

神様がどれほど悔しいかといえば、王座を奪われました。王座を怨讐に奪われたのです。神様が神様となれず、悲しみの歴史をもっていらっしゃるという事実を知らなければなりません。自国の王、宇宙の王であるのに、王が生きているのにもかかわらず、王は死んだとさげすまれているのです。御自身の理想を奪われ、御自身の愛する息子、娘をすべて奪われ、完全に怨讐のもてあそぶ地球となってしまいました。

万民が嘆息圏を抜け出さない限り、父母の立場に立った神様は嘆息圏内から抜け出すことができないのです。愛する子供が悩んでいるのに父母が安らかな立場に立つことはできないのです。このような立場に神様がおられるがゆえに、神様を解放してさしあげなければなりません。何によって神様を解放してさしあげなければならないのでしょうか。神様は万民を愛することのできない拘束圏内にあるので、万民を自由に愛することのできる解放圏を神様の前に取り戻してさしあげるべき責任があるのです。堕落した人へと落ちぶれ

たので、堕落線を越えて勝利した息子、娘となって解放してさしあげなければなりません。

人間が堕落することによって何がどうなりましたか。神様が自由な神様になれませんでした。拘束の神様となりました。次に人類始祖が拘束されてしまいました。その次には天使世界まで拘束されてしまったのです。それだけではなく、歴史的に多くの宗教人が拘束圏内であがいています。人類もやはり同じです。

親不孝者をもった親は、その親不孝者によって拘束されるということを知らなければなりません。その親を解放するためには、親不孝をした以上の孝行を尽くさなければなりません。それだけでなく、大衆の前で公認されなければなりません。そうして初めて過去の罪を洗い流すことができるのです。これが天理です。同じ道理です。「先生だけのために……」というのは必要ありません。
隣人とこの国、この民族はかわいそうな群れです。五千年間「わらぶきの三間の家を建て、両親に侍って、千年万年……」（韓国の童謡の歌詞）。両親に侍るという言葉は有り難いのですが、千年万年わらぶきの三間の家に住むのですか。かわいそうな民族です。このかわいそうな民族を正しく指導しなければなりません。お金も何もないこの民族が、神様の恵みまで受けられなければ、どこに行って暮らしますか。

二) 神様が神様の本分を果たせずにいる

統一教会はいつまで残るのでしょうか。地球を解放し、霊界を解放し、のちに神様を愛の心情で解放するときまで統一教会は行かなければなりません。最後には人類を解放し、霊界を解放し、神様を解放しなければなりません。このような話を聞くのは初めてのことでしょう。神様が私たちを解放してくれるものと思っていたのに、私たちが神様を解放しなければならないのです。心情的には神様が拘束されているということを知らなければなりません。

愛する父母の前に親不孝者がいるとすれば、その親不孝者が父母の願う基準、解放される位置まで上がってくるのを見なければ、その父母の心情の解放圏はできないのです。同じように神様においても最高の愛の相対として造ったアダムとエバは、神様の愛の相対であると同時に縦的な面では父子の関係であり、横的な面では夫婦的な縁となるようになっていたので、彼らを中心として天地のあらゆる愛の理想を実践しようとしたのです。ところが堕落によってそのすべてを失ったのです。神様までも拘束の神様となってしまったのです。

天国を築いて生きる人でなければ天国へ行くことはできません。私が監獄に入って手錠をかけられて暮らす立場に立ったとしても、「私」を拘束することのできない愛があるのです。私が腰を曲げ、眠ることのできない立場にあるときに、夜に起きると手が光を放っていたのです。なぜ光るのでしょうか。神様が抱いてくださっているからです。それが分かったのです。ですから暗い部屋でも光を放ったのです。

私がうめき声と泣き声を聞きながら監房の隅で粛然としていると、次の日の朝には、皆は

ったい粉の包みを私に持ってきてくれたものです。通りを越えて「どこどこの監房の何号のところに、お前がこれを持っていかなければ、この監房全体が安らかではなく、お前の家が安らかではないので持っていってやれ」と言うのです。私の神様は愛の神様なので、このような神様を冷遇する恩知らずの統一教会の群れとなってはなりません。

「人類のゆえに神様が拘束を受けているのだ。私ゆえに神様が拘束されているのだ。私という一個体のために神様がサタンの讒訴を受けているのだ。私のゆえにイエス様も死んだのだ。私ゆえに聖霊が血のにじむ闘争の歴史を抱いて身もだえしてきたのだ。神様、私に力をお与えください。お父様を安息させ、解放の座に移してさしあげます」と言うことのできる、信仰に飢える者、希望に飢える者、愛に燃える者を神様が六千年間求めてこられたのです。このような事実を私たちは知らなければなりません。

神様とサタンが闘ったとすれば、止めることのできる者はいるでしょうか。そのままで闘いが終わるでしょうか。神様の前に孝子はなく、神様の前に忠臣の道理、聖人の道理、聖子の道理、聖者の道理、天国を守ることのできる主流の愛の体制がなくなったので、神様の立つ瀬がないのです。今まで囹圄の身で軟禁状態にある神様となったのです。天国は完全に廃虚となり空になっています。そのような痛みをもっているのが神様です。

では、神様の探し求めるおじいさん、おばあさんに会ったことがありますか。堕落したがゆえに、会うことができませんでした。神様の探している母、父に会ったことがありますか。神様の探している妻、夫に会ったことがありますか。神様の探している息子、娘に会ったことがありますか。この恨みをどのように解くのでしょうか。この心情の拘束の鉄条網を誰が切るのでしょうか。それは神様の愛以外にはありません。神様の本質的愛以外にはありません。

神様はあらゆる面において自由自在にできるお方であるのに、非法的な愛という条件ゆえに手をつけることができないという恨めしく悲しい神様の心、気が遠くなるほど嫌気がさすのを誰が知るでしょうか。

既成教会では「聖なる、聖なる神よ、栄光の神よ、私に恵みを下さい」と言うのですが、神様はそんな神様ではありません。悲惨な神様です。拘束された中にある神様です。良い息子を生んで解放されるべき神様であられるので、神様の運命は哀れな運命です。ですから皆さんは神様を解放してさしあげなければなりません。そうせずしては天道が正しく定められないので、この地上に理想世界は現れることができないのです。これを正すための歴史が統一教会の歴史であり、使命です。

統一教会のみ言、統一教会の内容、耳で聞く内容の中には何があるのでしょうか。心情的に拘束されている神様を解放することのできる内容をもっているのです。人間が堕落することによって神様は嘆息されたと言われています。嘆息の歴史は出発から世界的なものとなったのであり、世界的になったがゆえにパウロは「人類が嘆息し、私たちの先祖も嘆息し、全人類までもが嘆息している」と言い

ました。そうして神様の多くの息子、娘が現れることを願っていると言ったのです。それは嘆息圏から逃れることを、より分けていくことを願ったからです。

四　サタンを処断できない理由

一) サタンが讒訴する理由

今日、神学的な立場でも、もともと悪魔サタンがいたのか、いなかったのかということが問題となります。もし、もともとサタンがいたとするならば問題は大きいのです。全知全能の神様の摂理に対し、六千年間反抗してはそれを遮ってきた巧妙なサタンが初めからいたとするならば、このサタンを退治し、取り除くことのできる人があり得るでしょうか。問題となります。

サタンはどこから生じたのかと考えるときに、もともといたという人がいます。全知全能の神様に反対し、本然の人類始祖を堕落させたサタンがもともといてこのような結果を招いたとするならば、サタンがいる限り、私たち人間が救われるのを願うことはできません。そうなれば結局、世界は二元論となり、二つの目的をもって世界は永遠に続くという結論が出てくるのです。

本来、神様のみ旨として立てられた創造理想世界は、堕落することによって築くことができませんでした。しかし神様は絶対的な権限をもった方であるがゆえに、外的な世の中がすべて変化したとしても、御自身は絶対的に変わることができないのです。悪魔にアダムとエバを奪われ、万物をすべて譲り渡しましたが、神様は絶対的なお方なので本来、天使長である悪魔サタンまでも自然屈服させなければならないのです。神様はいてもいないと同様の立場に立って、絶対的な神様の権威を立てなければならないのです。神様は先に打つことができません。神様が悪なるサタンを打つことはできません。善なる神様が悪なるサタンを打つことはできないのです。

全知全能の神様がどうしてサタンを一息に片づけてしまうことができないのでしょうか。それを片づけようとするならば、アダムとエバ、創造したものまですべて片づけなければならないという、愛の理想圏を爆破しなければならないという結論になるので、そうすることができないのです。絶対的な主人には、一度しようとしたことは絶対的に完成させるべき責任があるのです。それゆえ、よこしまな悪魔がいくら攻撃し、いくら迫害したとしても、立てられた道理を回復するために、歴史を抱いていかれる主人が神様であるということを誰も知らなかったのです。

ところで、全知全能で絶対的な神様は、なぜ今まで人類がサタンに侵犯され、サタンの足の下で犠牲になりながらも、神様がいるのかいないのか分からないほどに、何も行使できずにいる神様となったのでしょうか。これは深刻な問題です。それは神様が治めることのできる国がなく、神様が治めることのできる民がなく、神様が治めることのできる氏族がなく、神様が治めることのできる家庭がなく、神様が絶対的に公認することのできる個人がいなかったからです。その個人が成立し、その家庭が成立し、その氏族が成立し、その民族が成立し、その国家主権が成立すれば、一時に悪なる国、悪なる国民、悪なる氏族、

悪なる家庭、悪なる個人を処理することができるのです。そうしてこそ善となるのです。そうしてこそ神様の権威が立つのです。

皆さん、サタンに勝つことができますか。知恵の王であられる神様もサタンの讒訴にかかればどうすることもできません。一国の大統領もそうです。ある条件に引っ掛かって国民がわあわあとデモをすればどうなりますか。首を切られるかもしれません。条件に引っ掛かれば全知全能の神様もどうすることもできません。大臣も条件に引っ掛かろうものなら、夕方には首が飛びます。ですから条件防御をしなければなりません。いかにして条件防御をするかという問題が信仰生活における極めて難しい問題です。ここに生死の問題がかかっています。

私たち人間はサタンの愛を中心としてサタンの生命、サタンの血統につながってきました。これが問題です。このような位置には神様がいることができません。神様が干渉することができません。今まで歴史において全知全能な神様がなぜ無能な神様となってきたのでしょうか。怨讐となる立場にサタンが立ち、その怨讐は何を奪っていったでしょうか。神様の愛を奪っていきました。神様の愛の圏、神様の生命圏、神様の血統圏を蹂躙したのです。この概念を常にもたなければなりません。

本来サタンは天使長でした。ところがその天使長が「私は堕落してサタンになったが、神様は全知全能の絶対者であるから、あなたの立てた法度を中心として解決しなければならないのではないか。私は法に背いてサタンになったとしても神様は全知全能な絶対者であられるのだから、あなたの設定した法を中心として実践すべきではないのか」と言うのです。

なぜ怨讐を愛さなければ私たちの道を越えていくことができないのか説明します。これは原理の本にはありませんが、とても重要なことなので知っておかなければなりません。堕落した天使長が神様を讒訴しても、神様であられるがゆえに、たとえ天使長は堕落したとしても神様が立てられた法度を遵守せざるを得ないのです。神様は絶対者であられます。それゆえ天使長が堕落したとしても、神様は被造物を御自身の立てられた法則、規則に従って主管せざるを得ません。これは、神様が堕落以前の天使長になさろうとされたことが何であろうと、堕落したのちもそうせざるを得ないということを意味します。それゆえ天使長は神様に「神様、あなたは私を完成期まで、完成期ののちまでも愛されることになっています」というのです。

アダムになろうとすれば、三人の天使長を治めなければなりません。天使長は絶対服従しなければなりません。絶対服従して絶対に愛さなければならないのです。神様に絶対順従せず、絶対服従できないサタンは、絶対服従すべき天理原則が残っている限り、原理原則が残っている限り、その原理原則をサタンの勝手にすることはできません。その原理原則に順応するしかないということをサタン自身が知っています。神様が全知全能であっても原理原則に反すれば除去されるのです。大統領でも憲法を通してこそ行使できるのと同じです。憲法になければ大統領も勝手にできないようになっています。

統一教会の文先生という人は深刻な人です。深刻でした。神様がいるのか、いないのか。神様は全知全能であられるのに、なぜ悪魔をほっておくのでしょうか。一日で清算してしまわずにいるのです。ヨブ記を見てください。あれほど無力な神様はどこにいるでしょうか。そのようなことが理解できなければなりません。ですからどれほど深刻でしょうか。死ぬか生きるかで身を投げ捨てて、一身を絞首台に差し出し、闘ってより分けて取り戻したのです。自分の本然の生命を取り戻さなければなりません。

ヨブ記を見ても、神様はどうして悪魔の願いを聞き入れるのでしょうか。「ため」に生きる愛をもった本体であるので、悪魔までも、悪魔に対しても悪魔の行動をもって対することはできないのです。ですから真だというのです。

神様は神様の神秘的な創造力を活用して、サタンを屈服させるのではありません。自然屈服です。

現在、悪魔は世の中が神様のところに戻ることができないようにめちゃくちゃにしました。フリーセックスやら何やら……。アメリカでは近親相姦がどれほど多いか知れません。父親が三人娘であれば三姉妹と連れ合って暮らします。そのようなのがぞろぞろとしています。フリーセックスなので叔父が母親とも一つになり、息子が自分の母親とも一つになり、そういった具合です。獣と変わりありません。ですからサタンが神様に「こんなところで神様の創造理想である愛の理想を立てることができるのか、神様。ハハハ」と笑っているのです。

二) 神様は法度を守られる

神様はどんなお方ですか。宇宙の心のようなお方です。この宇宙は体のようなものなのですが、その体の真ん中には誰が入っているかというと、悪魔が入っているのです。空中の権勢をつかんだサタンがこの宇宙を支配しているのです。これを消化するために神様はどうしなければならないでしょうか。力ずくで打ってしまうことはできないのです。宇宙の創造の本質は愛であり、宇宙の歴史的伝統が愛を通じたものであったので、誤った者がいたとしても、神様はその原則の立場に立たざるを得ないのです。それゆえ神様が堕落したこの宇宙を回復するためには、今まで本質的愛を中心として創造された真の愛の理念を実現するために投入した本然的基準を永遠に続けなければ、絶体者である神様の権威を取り戻すことができないのです。ですから神様はいかばかり大変なことでしょうか。

堕落とは何でしょうか。サタンを中心とした愛の因縁を父母の立場で結んだことです。堕落論だの、善悪の実の話は必要もないのです。否定することはできません。ですからサタンの愛、サタンの生命、サタンの血統を受け継いだ血族が今まで残ってつながってきたのです。サタンは愛の怨讐です。神様が創造理想として万年夢見てきた事実を破綻させたのです。官吏の家門の一人娘を僕が蹂躙したとすれば、その家の主人の娘だと言うことができるでしょうか。追い出されるしかありません。天地の大道の軌道を離れたということは、愛において過ちを犯したということです。これは否定することができません。

悪魔の子を自分の愛する息子、娘以上に愛さなければ、神様の本然の創造理想を実現することができないのです。悪魔は「私は堕落してこうなったのであり、私の血族が神様を裏切ったとしても、神様だけは、天理の道理を守ってこそ神様といえるのではないか」と提唱するのです。ここで引っ掛かっているのです。

サタンが神様に向かって、「あなたは永遠不滅の主体であられる神様であり、天地創造の大主宰であられることを私は知っています。真理の本体であり、愛の本体であり、原則の本体であるがゆえ、あなたはその法則、原則どおり、変わることはできません。ゆえに私は堕落したとしても、あなたはあなたの立てた原則を実行すべきではないですか。そのためにはあなたは原則的な存在として、堕落した天使を愛さずしては本然の世界に息子、娘を連れていくことはできません。あなたが私を愛し、あなたの息子までが私を愛さなければ天国へ行くことができないというのが、堕落前の天使長に対してあなたが立てた計画ですから、私が堕落したとしても、あなたはその原則を守らなければなりません。ですから私を愛さなければなりません。そうでなければ真の神様になることができず、真の息子、娘になることができません」と讒訴し、食い下がるのです。

悪魔が言うには「神様、私は変わる悪魔の親玉として変わり得る先祖になっているが、あなたは天地の大主宰であり、真理の本体であり、不変の主人公ではないか。生命の不変の原則を備えた愛をもったお方ではないか。私は堕落してならず者となってしまったが、あなたはあなたの立てた本来の理想基準というものを実践すべき責任があります。だから私を、このあなたのみ旨を成し遂げてしていく理想の門まで……。その世界に入っても、そこに住むことができなかったとしても、入っても自分で出てこれます。そこでは生きられないので出てこなければなりません」と言うのです。これがサタンの主張です。すると神様は「お前の言うことはもっともだ」というのです。

悪魔サタンは私たち人間が一つでも罪を犯そうものなら神様の前に讒訴します。「この者は罪を犯したので地獄に行かなければなりません」と即座に讒訴します。神様の前に人間の罪を讒訴するこのサタンは、罪を犯したことに違いないのですが、この悪魔サタンの罪を神様の前に告訴した人はいまだにいません。「絶対的な神様、あなたの権限を中心として考えると、悪魔サタンは、私たち人類の前に許されざる悪なる罪を犯し、神様の前に許されざる悪なる罪を犯したので罰してください」と言うことのできる人さえ現れたならば、罪を犯したサタンを除去する道があるのです。そのようにしてもサタンを除去できないとすれば、神様は全知全能の神様ではないと言うしかありません。神様は人間の側の神様ではなく、サタン側の神様だということになります。

サタンは天使長なので、アダムとエバが完成して天国に入るときには天使長もアダムとエバについて天国に入るのです。天使長が神様の愛を受け、アダムとエバの愛を受けたのちに、共に天国に行くことができるというのが原理であり、創造の原則です。サタンは途

中で失敗しましたが、サタンが「私は僕として裏切り者となったのですが、主人であるあなたは、天理の道理を定めた上で本質的伝統を立てました。あなたの立てた原則の上で、完成したアダムと天使長を愛してこそ天国に入ることができるというのが原則なのだから、あなたはその原則を捨てることができないのではないですか」と言うならば、引っ掛かるのです。「お前の言うことは正しい」と言うのです。「私はこのようになったとしても神様は私と同じというわけにはいかないのではないですか」と、サタンはこのように引っ掛けてくるのです。

悪魔は天使長なので「本来、天国に入ることのできる息子、娘は私を愛さなければならないのではないか。神様も、アダム自身も私を愛してから天国に入るのが本来の創造原理ではないか」と言います。悪魔はまた「そのようにならない限り私の讒訴条件を逃れることはできません。あなたは私を愛し、あなたの息子であるアダムも私を愛したという条件を立てなければなりません」と言うのです。このような問題を中心として怨讐を愛せよという言葉が宗教人の中から出てきたのです。

神様と父子の関係になれば、息子が痛哭する立場において父なる神様も痛哭するようになっています。そうなればサタンはびっくり仰天して逃げていくのです。その場にいられないのです。

人間として自分の本然の権威を取り戻すことのできる人、すなわち悪魔サタンよりも上になる人が現れなければ、この世の中を天側に取り戻すことができないのです。言い換えれば全知全能の神様の前に、サタンを引っ張っていって「神様、悪魔サタンがこのような罪を犯したのになぜ審判してしまわれないのですか」と告訴することのできる人が現れなければならないのです。

今まで私たちはサタンに主管されて引きずられてきたので、反対に私たちがサタンを捕らえて、神様の前にサタンを引っ張っていって讒訴しなければならないのです。ところが今日この世では、サタンがいるということは知っていても、サタンがどんな罪を犯したのかは知りません。いまだに全知全能な神様の前で「神様、この罪を犯したサタンをあなたの全知全能の権限でもって処断してください」と讒訴した人は誰一人としていないのです。

それでは神様は全知全能であられるのに、なぜ天使長を打ち捕らえることができないのでしょうか。なぜサタン悪魔をやっつけることができないのかというのです。サタンを打ち捕らえられないのは、神様もサタンを愛さなければならないからです。絶対者であられる神様が立てた天使長が悪魔になったとしても、神様は、天使長を本来の堕落していない立場で考えてやることのできる基準をいつももって歩まなければならないのです。ですから天使長を愛さなければなりません。神様の前に造られたアダムとエバは、神様の体です。ですから神様のみならず、アダムとエバもサタンを愛さなければなりません。

神様が六千年間、愛する息子、娘の首を数千万回も切り落としてきたサタンを追及できないのは、天使長の立場において彼を完全に愛してやれなかった責任があるからです。で

すから今まで誰かが過ちを犯せば、「神様、あの者がこのようなことをしようとしています」と讒訴するサタンの仕業が背後にあったのです。このような内容は今日統一教会が現れたので分かるのであって、誰も知らなかった内容です。

もし悪魔サタンを引っ張っていって神様の前に訴えるならば、神様が「お前、そうするものではない」とおっしゃられるでしょうか、喜ばれるでしょうか。神様は間違いなく「おお、私の息子よ、たった一人の我が息子よ」と万世の前に立てて祝福してやりたいことでしょう。そうしたい神様の内情がどれほど懇切で、それをどれほど願っておられるかということを私たちは推し量ることができます。神様は絶対的な神様であり、全知全能の神様であり、公義の審判主であられるがゆえに、もし悪魔サタンを告訴し、讒訴する人が現れたならば、神様はサタンを審判することができるのです。

アダムとエバは罪を犯したので、神様が思いのままにできないのです。自分の息子、娘が殺人をしたからといって、母親が変わりに責任を負うことができ、兄弟が代わりに責任を負うということができるでしょうか。できません。それが天の法です。アダムとエバが罪を犯したがゆえに、神様も思いのままにすることができません。そしてまた誰と罪を犯したでしょうか。サタンと罪を犯しました。アダムが罪を犯したのですが、サタンがどうで、アダムとエバがどうだということについて神様はいまだに審判していません。追い出しはしましたが、神様が今でも救いの摂理をしているので、サタンに讒訴されながらも審判することができなかったのです。このような問題は神学的に見て大きな問題です。なぜ処理できなかったのでしょうか。全知全能の神様がなぜ悪魔を処理できないのかというのです。

神様は闘いには関心がありません。神様の創造理想圏、その理想圏内には戦争、闘争という概念はありません。闘争の概念があるとするならば二元論に陥るのです。根本的にこれが一つの理想世界、絶対的な平和の世界とは関係ないところに落ちることになるので、神様の創造世界圏内には闘争という概念はないということを知らなければなりません。

サタンがどのようにして落ちたのでしょうか。それをはっきりと知らなければなりません。サタンは大きいもの、下がっていったものをすべて裂きましたが、天は小さいもの、下がっていったものをすべて合わせて大きくするのです。反対の道です。宇宙の原則、宇宙の生成の原則からすればどのようになっているかというと、真の愛を求めようとする宇宙の根本に立脚してみて、この根本に順応することにおいてサタンは根本的に反対したので落ちていくのです。全知全能で唯一無二であり、永遠であられる神様の本性はすべて一〇〇パーセント「ため」に生きるということです。

全知全能の神様も歴史を通じて愛の怨讐に報いるにおいて、力と権能であだを討つのではなく、愛の法度を通して屈服させるのです。怨讐が自ら神様の前に完全に屈服して、僕の立場で世界人類の審判を受けても感謝することのできる立場、怨讐をそのような立場にま

で引っ張っていこうとされるのです。そうでなければその罪を蕩減することができません。

五　神様を解放してさしあげよう

一) 神様は囹圄(れいご)の立場

誰が悪霊と善霊の闘いを終わらせることができるのでしょうか。それは神様でもなく、サタンでもありません。それでは誰でしょうか。真の愛から出発して真の愛をもっていく、世界万民がついていくことのできる愛の主人公が現れなければ、神様の闘いとサタンの闘いを終わらせることはできないのです。この闘いから解放されない限り、人間歴史世界において平和という言葉は妄想的なものです。理想という言葉は抽象的で感傷的な言葉にすぎません。それで神様はこの代表者を遣わすのですが、その主流思想をメシヤ思想というのです。救世主思想、救世主は人間だけではなく、神様までも解放する人のことを言います。悪を処断することを意味します。神様解放と悪を決算するための総責任者が救世主です。

救世主の使命は神様を解放することであり、サタンを処断することです。あれほど人間に食いついては讒訴した怨恨のこの元凶を誰が清算するのでしょうか。神様にはできません。唯一メシヤが、救世主だけができるのです。

私たちの願う統一教会とは何でしょうか。父母の宗教を求めていこうということです。甘い生活を求めるのではありません。道義的な関係ではありません。真の父母を中心として真の愛の道理の道を求めていこうというのです。そうして神様を解放しようというのです。愛の原則条件が結びついていなければ解放されないのです。

お父様が愛され、そのお父様が求めようとされる国を考えてみたことがありますか。監獄の道をもいとわずに行けば何らかの道があります。その生死の岐路を開拓してきたのが、民族が進むことのできる道であり、暗黒の淵を越えて希望ある道であるということを知る人はいません。世界万民を解放するためのトンネルを貫通するために、そのような事情を抱いて苦労したということを知る人はいないのです。神様に忠誠を尽くし私がこの道を行くということは、中心をお迎えした中で細心の注意を払って暮らしながら、愛を貴く抱いて侍るべきお方だということをわきまえていくということです。この道は時が移り、歳月が変わっても万世に変わることのない、たった一つの道であると考えて生きていくことです。

神様を解放しなければなりません。私が神様を救わなければならないのです。私が救われようとするのではなく、神様を解放しなければなりません。これが救いの摂理の総決算です。

統一教会は神様解放のための解放軍です。世界解放ではありません。世界解放は容易です。人間が団結すれば世界解放はできますが、神様の解放は心情圏を団結させなければなりません。愛の圏を団結させることのできる原理と思想体系を備えなければなりません。そうして霊界を解放し、地上に心情圏の橋を架けなければなりません。どんな革命よりも恐ろしい革命です。困難な革命です。ですから人類の解放は容易でも、神様の解放は困難な

のです。世界にまたとない困難なその仕事をレバレンド・ムーンが旗手となり、今日摂理史の総決算という表題を掲げて進み出たということは驚くべき事実です。

今日の宗教指導者はひれ伏して祈祷をして恵みを受けようとしますが、私は恵みを与えてくださいと祈祷したことはありません。「私一人が祭物となって神様を解放しよう」と祈祷したのです。旧約時代は万物を立てて神様の人を探し求めるための時代であり、新約時代は息子、娘を犠牲にして父母を探し求めるための時代であり、成約時代は今まで父母様の家庭を犠牲にして神様を解放するための時代です。本然の父母をこの地上にお迎えし、共に千年万年暮らし……。韓国の童謡の中に「月よ、月よ、明るい月よ、李太白が遊んでいた月よ……」というのがあります。月桂の木が植えられているのでどうこう、両親をお迎えして千年万年生きたいものだと、これはみな韓民族の啓示的なものです。天の父母をお迎えして千年万年生きたいものだ、私はこの歌を思うたびに胸に熱く込み上げるものがあります。

神様がアメリカに二百年間世界的な祝福をすべて与えたのですが、これをすべて自分たちのための福だと思い、自分たちキリスト教の福だと思い、アメリカだけの祝福だと思っているのです。アメリカとキリスト教を犠牲にして、世界万民を解放し、万民の福祉を建設すべき責任を忘れて、アメリカ第一主義、アメリカ単一主義、個国主義に陥ってしまったのです。世界主義的アメリカのために、自分の一国を犠牲にし、一キリスト教を犠牲にしてでも世界的基盤版図を築くのが神様のみ旨であるにもかかわらず、それに背き反対の立場に立ったのでアメリカ自体もまっさかさまに落ちるのです。家庭が崩れ、教会が崩れ、国が崩れ、すべてがめちゃめちゃです。すべてが病んでいます。

神様と真の父母を解放し、世界を救うために進み、地獄を貫かなければなりません。地獄の底を貫いていけば天国です。これを知らなければなりません。それが近いのです。地獄の底を貫くのです。ですから犠牲になり、奉仕せよというのです。「私が救われるために統一教会を信じる。この道を行く」というのでは零点です。それでは絶対に世界舞台には立てません。「神様を解放し、真の父母を解放し、世界を救うために私はこの道を行く」と言わなければなりません。分かりましたか。内容が違うのです。

死んでも生きてもこの道を正さずしては行けません。これを知っているがゆえに先生は、一生の間このようなことをするのです。はっきりと知らなければなりません。迫害を受け、あちこちの監獄に入りながらもこの荷を背負っていくのです。監獄に入るのが良くて入るのでしょうか。神様のため、神様の解放のために行くのです。人類の解放のため、サタン世界を解放するために行くのです。蕩減復帰の道を行かずしては解放圏ができないのです。安逸な中ではサタンを分立することができないので蕩減復帰の道を行くのです。

責任分担解放圏というのは心情の解放圏のことを意味します。神様が解放されなければならず、父母様が解放されなければなりません。悪なる父母が現れたので、それに対さざ

るを得ない立場に立った神様はどれほど苦痛なことでしょうか。ですから父母の解放、神様の解放をしなければなりません。そのような孝子とならなければならないのです。父母様がいまだに苦労をしており……。天の父母に苦痛を受けさせておいて、自分は楽に暮らそうというのですか。自分の息子、娘には良いものを食べさせ楽に暮らそうというのですか。そのようにしたり、そのように考えることができるのでしょうか。

神様を解放してさしあげるべき私たちの生活路程において、摂理のみ旨に対する神様を呼ぶときには、胸が締めつけられ痛哭する心情をもたずしては呼ぶことのできない神様であることを知らなければなりません。ですから洗礼ヨハネも荒野で「悔い改めよ、天国は近づいた」と叫んだのです。イエス様も「悔い改めなさい。天国が近くまで来ている」と言ったのです。悔い改めなければならないのです。皆さんが摂理のみ旨に向かう立場でどれほど無礼であり、どれほど厚かましかったかというのです。世界において解放できなかったとしても、自分だけでも神様を苦痛から解放してあげなければならないのです。

世界を統一するにはどうすべきであり、解放はどのようにするのでしょうか。サタン圏を統一することのできる神様のような能力をもった人が現れれば、霊界と肉界に分かれたものが一つになるのです。解放されるのです。サタンを主管することのできる人さえいれば、霊界も解放され、肉界も解放されます。神様に解放が必要でしょうか。神様は既に解放されています。神様に解放が必要だというのは、人間を解放するために必要だということです。神様御自身は解放されているのです。人間が解放されていないので、人間を解放するにあたって神様が解放条件に引っ掛かっているだけであって、神様御自身は解放されないお方ではないのです。人間にかかっているのです。

キリスト教思想は再臨思想です。イエス様が再臨して何をなさるのでしょうか。今日のキリスト教信者の中にはとんでもないことを言う人が多くいます。雲に乗って空中に上って千年の祝宴をするのですか。よく知ってみると、それは全く根拠のないことを信じているのです。イエス様が来て何をするのでしょうか。イエス様が来て誇れることは何でしょうか。神様の前に不義を立ててくれと抗拒するサタン、そのサタンを切ってしまわなければ神様はその永遠な抗拒を避けられないのです。
この地に再臨主が来てすることは何でしょうか。キリスト教信者、その数億人にすぎない人々に良い暮らしをさせるための再臨主ではありません。神様を解放しなければなりません。公義の道理の前に立って神様を解放するという責任を果たす主役として来られる方が、再臨主でなければならないのです。

二) 神様の解放は人間がしなければならい

世界を解放するには、まず神様を解放しなければなりません。神様が解放されてこそ世界を解放できるのではないでしょうか。神様を解放してから世界を解放しようというのです。ですから統一教会を地の果てまで伝播して心情的絆を結んでくいを打ち、世の中すべてを愛でもって溶かそうというのです。その闘いをするのです。分かりましたか。

神様を解放することのできるその位置まで行くべきことを知り、父母様の行く最後の終着点を目指して同調する群れが雲集するようにしなければなりません。そうすることによって個人から家庭がつながり、家庭から氏族がつながっていくことでしょう。氏族と民族、国家が犠牲となった祭物的価値を相対的世界、第二次の父母様を迎えた世界に再現させることによって、歴史的に犠牲となったすべての聖人たちを、復活圏の実体として代わりに蕩減復帰しなければなりません。そうせずしてはこの地を離れることができないのが人間の運命であるがゆえに、死んでもこれをなさなければならず、この溝を埋めなければならないのです。これは宿命なので誰もが行かざるを得ません。早く行かなければならないのです。

神様を解放しなければなりません。この地の隅々まで神様が訪ねてこられて「私の創造理想が夜も昼も、歴史を通して成し遂げられたのだ。感謝であり、驚くべきことだ」とたたえることができると同時に、どこへ行っても神様が愛さざるを得ないこの世界の舞台となり、宇宙となり、霊界や肉界も同じようにならなければならないのに、そのようにはなっていないのです。いまだに天のみ座の下までサタンの闇の権勢が占領しているのです。ですから神様を解放するためには霊界を解放しなければなりません。闇の世界から。

「私」という人は解放というのを本当に好む人です。また、統一ということを好みます。どれほど好きでしょうか。生きられないほど、死ぬほどに好きです。統一の門、解放の門はこの文という人にあるのではありません。よく知ってみると、万有の大主宰であられる神様にあるということが分かりました。ですから「神様が好まれるものと言ってもたくさんあるでしょうが、最も好まれるものは何でしょうか」と言うと、「私が一番好きなのは解放である」と言うのです。答えは簡単です。「私が一番好きなのは解放だ」と言うのです。それで「では、なぜ解放ができないのですか」と言ったところ、「一人ではできない」と言うのです。それが病気なのです。神様一人ではできないというのです。

国を愛しましたか。息子、娘を愛しましたか。息子、娘の道を開いてから民族を愛しましたか。世界が行く道を開いておいて、世界を愛しましたか。天に行くことのできる道を開いておいて……。そのようにできるところにだけ完全な解放の夜明けが訪れるのです。夜が明けるとき、その陽光は谷間にまでさし込み、死の中に閉ざされ拘束されていたすべての人間を完全に解放するのです。平和を謳歌し、解放とともに統一の世界が私たちの前に来たと言い、千年の歴史をすべて無視して解放の王子となり、統一の旗手となり、神様の前に褒められるのみならず、神様の愛の懐に抱かれて、永遠無窮の幸福を享受すべし、ということになるのです。そのようにする自信がありますか。

人類の解放も必要ですが、人類の解放よりも先に、神様を解放しなければなりません。そうしてこそ人類の解放につながるという事実を考えている人はいません。既成教会の牧師も、神様は栄光の中にいる審判の神様だと考えているのです。誤った考えをもっているのです。私の知っている神様はそうではあり

ません。神様を死亡圏から解放しなければなりません。

旧約時代、新約時代、成約時代、その次は完成時代です。完成というのは愛を中心とした完成です。完成は父母の解放、子女の解放、万物の解放、神様の解放です。それが一度になされなければなりません。堕落した父母によって一遍に地獄に行ったものが、天と地をかけて一度に成し遂げられるのです。

民族的背景と民族を代表した人、または団体が現れるとするならば、それはどんな人であり、どんな団体でしょうか。民族の歴史的伝統をもち、時代相を代表して世界へと進んでいくことのできる時代的な使命を、未来的な使命につなげることのできる、そのような団体と個人でなければなりません。それがレバレンド・ムーンと統一教会だということを皆さんは知らなければなりません。それゆえ統一教会の真理には侵略性がないのです。反対に救ってあげようというのです。解放しなければならないのです。万民をすべて解放しなければなりません。解放をもって進むのです。霊界と肉界が合わさって神様を解放しようというのです。

私が称賛され歓迎されるということは夢にも思っていません。祈祷してみてください。統一教会の思想は、統一教会を犠牲にして人類を救い、世界の人類を救って天と地を解放し、その次には神様を解放するのです。神様は御自身が回収したものすべてを再び投入して、完全に堕落のない次元の高い別の世界、天国大移動の局面を願われることでしょう。そのようなことをしているということを知ってほしいと思います。

先生は何でもありません。人類歴史は百五十万年だと言われていますが、永い歴史過程において自分の威信と権威とすべてを忘れて、失った子を探し求めて身もだえするかわいそうな父母の身の上を誰に訴えるのでしょうか。子が現れてそれを解いてさしあげるまでは、その胸の内にしこりとなった恨を解くこともできないし、打ち込まれた釘を取り除くこともできません。釘を取り除いて愛の涙で、血肉で、それが肉となるように解いてさしあげなければならない神様の怨恨の心情を、誰が解放してさしあげるのでしょうか。私の解放よりも先に、神様が解放されるべきであるということを知らなければなりません。これが宗教人の追求する究極的な解放の道だということを知らなければなりません。

幸福の種がどこにあるのか知らなければなりません。堕落して失ったのでそれを取り戻さなければなりません。ですから統一教会を中心として真の神様を求めていこうというのです。今までの神様は復帰の神様です。本来の神様ではありません。怨恨の神様、かわいそうな神様です。喜びの神様ではありません。落胆の神様です。それゆえ元どおりにするためには、復帰の神様を解放してあげなければなりません。お金でするのではありません。権力でするのでもありません。ある人によってするのでもありません。真の愛でしなければなりません。

苦労によって出発したので、苦労によって終着点を目指していこうと思います。「レバ

レンド・ムーンの名は悲惨であった」という結論を出そうと決心した人物です。私にはお金が必要ありません。名誉も必要ありません。唯一神様を解放し、人類を解放し、サタンまでも解放して永遠なる愛の基地をつくるのが、新しい祖国を訪ねいく希望峰なのです。皆さんはそれを知って、行く手を険しい山々がはばんでも、朝食を忘れ、昼食を忘れ、夕食を忘れ、昼と夜を忘れながらもその道を行こうと身もだえしなければなりません。そのような生涯が長ければ長いほど天の怨恨を越えた神様の理想的愛が、皆さんと共に、皆さんの家庭と共に、皆さんの一族と共に、皆さんの国と共にあるというのが天理の原則であるということを知って、そのように生きてくれることを願うのです。

偉大だというのは顔が偉大なのではなく、体が偉大なのではなく、思想が偉大なのです。神様までも動かざるを得ず、神様までも私についてこざるを得ないという精神、それが偉大なのです。愛の目的を達成できていない神様を、私が愛をもって解放することを主張するのです。愛の目的を成就できなかったという恨をもっている神様が、今日レバレンド・ムーンに出会って解放されたというのは理論によるものです。妄想ではありません。体系的な理論、科学的なデータによる実証的結果によってこれを主張するのです。

神様を解放するのです。そうすれば終わりです。神様が思いどおりにすることができるのですから全知全能の神様の全権全能を行使する時代が来るので、そこは泰平王国とならざるを得ないということを知らなければなりません。そうしてこそ「アーメン」です。言ってみてください。「アーメン」。

六　神様の解怨と孝子の道

一) 真のお父様が歩み来られた復帰の道

神様のみ旨を成し遂げてさしあげようと決意したことを私はよく知っています。神様の愛がこのようなものであるということを知り、ひざまずいて感謝し、許しの道を行かなければならないということをよく知っている人物です。血が吹き出しても解放の道を行かざるを得ない怨恨の神様だということを知る者はいません。私は拷問を受け、倒れそうな立場にあっても神様の前に祈祷をしませんでした。

私は追い回されましたが、私を助けてくださいと、神様の前に私の行く手を守ってくださいと、私を救ってくださいと祈祷するような人ではありません。私は男としての自分の余力をもっており、自分の気概をもっており、闘うことのできる自体力をもっている人間です。私の力が足りなくて意識を失い倒れたならば助けてくれるであろうから、それまでは自分の力で……。私が行く前に神様が先に準備して待っているということを知っているのです。

統一教会に神様がおられます。神様がおられるのです。もし私が「あいつ！」と憤りをこらえられずに口を閉じて「今に見ていろ。何カ月かたったときには」と考えようものなら、めちゃめちゃになるのです。それを見ると不思議です。ですから私は舌をかんで我慢するのです。私の口で呪うことはできません。真の父母の名をもった私が自分の口で呪うこ

とができずに唇をかんでいると、天がその怨恨をすべて解いてくれるのです。それを見ると、神様が愛しているということが分かるでしょうか。

主人としての国権をもって、アジアの五千年文化を誇ることのできる、白衣の単一民族の権威をもって主権国家の大統領となり、国会議員となった人は一人としていないのではないでしょうか。解放後に。私はそのような国会議員を立て、そのような大統領を立てようと考えています。これは私一人の願いにとどまるのではなく、神様がそれを願っているということを知らなければなりません。そうなったときアジアは私たちの手中に収まるのです。世界は私の指示どおりに、神様の目指されるところに向かわなければならないということは間違いないということを信じてください。

怨恨の種を抱いている私に安息ということがどこにあるでしょうか。行く道は急がれているのです。千年史をすべて解いていかなければならない道は忙しいのです。私は四十年の生涯、涙の道を逃れられない歩みをしてきた人物です。今も同じです。北の地が神様の新しい愛の園を迎えて、そこに神様をたたえることのできる若者たちの芽が出なければならないのに……。神様に背いた芽として染まっているのを御覧になって神様は顔をそむけられたのですが、その顔を振り向かせることができるようにしなければなりません。私が神様に侍ってそれを再び正常に回復しようという思想をもっているので、そのようなことを共産世界も有り難く思うのであり、民主世界はなおのこと有り難く思うことでしょう。そこを目指して前進すべし！

西大門刑務所で……。統一教会に死を覚悟して通っていたのに、私がひいきしてあげないので出ていった女性伝道師がいたのですが、その婦人が「ざまあみろ。神様の息子があのざまだ」と言いました。私は「監獄で消えるような男ではない。私は解放の世界に向けて跳躍するであろう」と言いました。その人の顔が忘れられません。以前悲惨に死んだというのを聞いてかわいそうに思いました。私はそのように生きている人なのです。この心に染み込んだ怨恨……。五大主権者が私にどのように対したか、みな知っています。しかしながら知らないふりをします。復讐しようとはしません。知らないからです。私が一度会って教えてやらなければならないのです。すべて話してから清算しなければならないのです。

それでは先生自身は、この地に来るときにどんな立場に立つのでしょうか。神様の怨恨の心情をもって、残った息子として完成した愛で愛することができなかったこと、兄弟として完成した愛で愛することができなかったこと、夫婦として完成した愛で愛することができなかったこと、父母として完成した愛で愛することができなかったことを、愛することによってその恨の峠を蕩減して解いてあげる立場に立っているのです。

利他的なものでなければなりません。神様が利他的な創造理想を中心として投入、投入、投入して真の愛を繁殖するようになっているのです。こうすることによって天下をカバーして本郷の地へと帰らなければならないので

す。帰る時には怨讐だからといって足でけ飛ばすのではありません。これを愛することによって自然屈服させなければならないのです。自然屈服しなければ神様が定着することができません。それゆえ文総裁が……。私が手段、方法を使えば誰にも負けません。しかしそれを知っているがゆえに耐えてきたのです。火のような性格で今まで四十年我慢するのはどれほど大変だったでしょうか。神様は私以上であろうに、いかばかりのことでしょうか。

私が後ろを振り返ってみると、神様が私を抱き締めながら涙を流されたことがあります。「あなたは私の愛の中心です。私はあなたに服従します。あなたに絶対に従っていきます」と祈りつつ、振り返ると、そのように私を抱き締められるのです。その立場はどれほど偉大な立場でしょうか。神様が私にそのような神様の立場を与えてくださるように、今、私もそれと同じ神様の立場を皆さんに与えるのです。何のことか分かりますか。

考えてみてください。歴史を振り返ってみるとき、四十年前、先生は国に追われ、既成教会に追われ、すべてに追われて、荒野に追い出された孤児のような立場にありました。このような立場から歴史的な基準を再び取り戻し、世界的な版図をつくらなければならないみ旨を前にして、このみ旨を成し遂げなければならない先生の立場はどんなに悲惨であったことでしょうか。第二次世界大戦以後に、神側として確定しておいた勝利的キリスト教文化圏と、自由世界を統治するアメリカの基盤をすべて失ってしまった立場だったのです。主人となった立場からこれを失ってしまった悲痛さと、再び四十年蕩減復帰しなければならないことを考えざるを得ませんでした。神様が有史以来、何十万、何百万年をかけても成し遂げることができなかった、人類歴史を終結させることができるという事実をはっきりと知っていた立場から見るとき、どれほど悲痛だったでしょうか。

私は雨が降り雪が降るのも知らずに、夜を朝のように早朝のように感じながら、食事をするのも忘れてこのようなことをしてきた人です。安楽に考えることができません。神様を知っているからです。神様を知った罪、誰よりも悲痛な神様であることを知ったがゆえに、私という一身がばらばらに裂かれることがあったとしても、粉になって吹き飛ばされることがあったとしても、この飛んでいく細胞は神様の一点の細胞であると泣き叫ぶことができるならば、男として生まれて価値のある死だと言いながら、死の道を訪ねてもがいているのです。もがいて滅びると思ったら、なくなると思ったらこのようになりました。

天と地に染み込んだ怨恨がどれほど大きいかを知っているがゆえに、血を吐く立場にあっても神様を慰めなければならないのです。「私は死にそうです、神様、助けてください」という祈祷をすることのできない真の父母の立場に立たねばならない悲痛な事情を、誰が知っているでしょうか。知る人は誰一人いません。唯一神様だけが、神様だけが……。いくら統一教会に従う人が多かったとしても、レバレンド・ムーンの思想に一つとなっていません。このようなことを皆さんは知らなければなりません。統一家というものは、今日、解放圏に立った統一家というものは安っぽいものではありません。祝福を受けたという者

たちが動くその挙動が今日、悪魔のいとこの立場に立っているということを私は知っています。

「私の闘いがまだ足らなくて、私が涙を流す資格が足らないと感じ、私が悲しめばお父様が涙されることを案じながら、私が打たれて耐え難い悲痛な立場に立てば、天が悲惨な立場に立つのではないかと案じる私の悲痛さは何でもありません。私の悲しみは何でもなく、私の悲しみは何でもありません」と歯を食いしばって私が涙をこぼせば、天が涙をこぼすのではないかと案じ、泣き叫んで怨讐に報いる途上に立ち、先鋒将として勝利の旗を掲げて勇み立つ勇士がいるとするならば、その勇士の前に神様は百倍謝礼するのです。「お前の名を忠臣としようか、お前の名を孝子としようか、お前の名を烈女としようか。地上の歴史上にたとえ貴い者がいたとしても、お前ほど貴い者はいないであろう」と神様御自身が頭を下げて謝礼するのです。

私文総裁は今まで個人的に孤独な道を歩んできた人です。孤独でも誰よりも神様をよく知っている人です。歴史時代に孤独な立場で悲痛な神様の心情を中心としてそれを呪いつつ自分に恵みを与えてくれという人は多くいますが、私はそのようには考えません。「神様、心配しないでください」と言いました。そこが違うのです。私は個人的な試練ゆえに後退するような男ではありません。世界の試練を越え、神様を解放して死のうという男が、個人的な過程で降伏することはできません。卑怯者にはなれません。自分の妻が反対しても切ってしまったのです。子が反対しても切り、父母が反対しても切り、国が反対し、四千万、六千万が反対する道を歩んだ人です。

時間が余りにも短いのです。一生においてこれを直し、満たすためには時間がないのです。先生の生涯がそうなのです。ですから世俗的に見れば先生の生涯はかわいそうなものです。神様に「先生はどんなお方ですか」と聞いてみてください。先生は痛哭するしかない痛みを感じながら、心臓をえぐり出すような痛みをもって身もだえするような悲痛さを体恤しています。先生は地上では悲惨な男です。そのような苦労を誰も知りません。皆、自分が立派な人だと偉そうに威張っているだけで、先生の苦労を知りません。お母様も知りません。

神様が六千年間苦労して残された功績をすべて失い、興南収容所へ行った先生の悲痛な事情を皆さんは知りません。故郷を離れることが問題ではありません。妻子が問題ではありません。天と地の未来の希望として解放の民族が、私を歓迎しようとしていたその群れが、雲の中の地獄へと消えていく、暗黒世界に去っていくのを見て、痛哭しながら再び会おうと叫んだのがきのうのようです。「お前たちは消えていったが、私は再び私の行くべき道を歩み、光明の朝日を抱いてお前たちを再び探し出して解放しよう」と宣言したのがきのうのようです。手錠をかけられ叫んだその声を忘れることはありませんでした。困難なとき、いつも祈祷したその姿を忘れることができません。

「神様、あなたはこのようなお方ですね。私の知っている神様はこのようなお方です」

と言うと、神様は手を握って痛哭し「お前にはそれが分かったのか。我が息子よ」と言うことになります。その言葉を聞けば、神様は痛哭するのです。大声で痛哭するその声はどれほど大きいでしょうか。その因縁は千年歴史に延長させることができないということを神様は知っているので、涙を拭き痛哭をやめて「我が息子よ」と言うのです。それができる息子が必要であり、娘が必要な神様の立場を知らなければなりません。

「私は神様の真の勇士となろう。神様のための戦場がどんなに悲惨であろうとも私はその前線に参与しよう」というのが先生の精神です。いくら世界の迫害が押し寄せても、孤独単身で迫害を受ける立場、苦痛の立場にあっても私は神様に一度も不平を言ったことがありません。これがレバレンド・ムーンの誇りです。

絶対的に神様を信じなさい。左にも信じることができず、右にも信じることができず、東西南北、前後左右、全部信じることができません。絶対的に信じれば中央線に行くのです。絶対的に信じれば一つの位置を求めていくのです。絶対的な位置、神様がいらっしゃるところを求めていくのです。そこからすべてが解かれるのです。それゆえに信仰には独裁性が多いのです。話し合うことができません。ねじれているので強制的にでも角度を合わせなければなりません。ですから神様がどれほど苦痛で、私たち人類がどれほど苦痛なことでしょうか。

二) 神様の解放のための生涯

私が悔しいとすればどれほど悔しいでしょうか。歴史上で私以上に悔しい人はいないでしょう。痛哭せよというとき、私以上に痛哭する人はいません。この地上で千年歴史を抱き、失った悲しみを抱いて痛哭する痛哭、文総裁が心から流れ出る神様の心情を感じながら痛哭するその痛哭には及びません。そのような根の上に意地を張って座り、そこで自分がよく食べ、楽に暮らすのですか。そんな者がくたばって死んだ死体は犬も食いません。はっきりと知らなければなりません。

いつも気分のいい男の姿をして困難な蕩減の峠を平気で越え、神様に侍り続け、神様を慰労しながら峠を越えなければ平和の地上天国はできません。その代表者、公的な人は孤独な人です。ある一人の人が立ち上がって「文先生はこのようなことをされ……」と一言言えば、先生は痛哭する心情をもっています。年を取って涙が渇れる七十のおじいさんなのに、誰もその悲しみの涙が流れるのを止められない寂しさをもっています。そのような父母がいるということを忘れてはなりません。

皆さん、考えてみてください。私は監獄生活をたくさんしました。五年以上監獄生活をしましたが、雨が降って軒先から落ちる水滴が岩に穴を開けるということを思い、「私の愛の涙の粒が神様の胸の中にしこりとなった恨の岩を貫通することができるならば、そうできれば……」と思いながら、その水滴を見て痛哭した事情が皆さんには分からないことでしょう。流れていく水を見て、この水の流れが神様をお迎えして神様が来られて沐浴することのできる澄んだ水の流れとなったらどれほど良いでしょうか。そのような愛の巣、

安息所を、人間として神様に準備してさしあげることのできる子となったらどれほど良いでしょうか。そのような心情の深い世界を皆さんが体験できないとすれば、神様と関係がないのです。

憤りをどれほど堪えてきたことか知れません。息が詰まり、この五感すべてが一度に詰まって痛哭したことがどれほどたくさんあったことでしょうか。皆さんに会うためではありません。人類の主権者たちを屈服させるためです。どういうことか分かりますか。こん棒や銃剣によってではありません。愛の血統を通して彼らを感化して自然屈服させなければ、天地に神様の願う平和の園ができません。平和の王国建設は不可能です。

この世で生きるのにどれほど困難なことが多いでしょうか。今日歩いていてどうなるか分かりません。その恐怖の環境から抜け出すことができないかわいそうな人生です。この恐怖の環境と混乱の中に立っている私に教えてくれる師は誰でしょうか。師がいません。ここに立っている私はそのような問題のゆえに痛哭し、身もだえしました。神様がいるならば、なぜ師の役目を果たせないのでしょうか。知ってみれば神様は愛を原則とした師だったのです。これを知らずに神様を恨みました。愛を中心とした師なのです。

最近は朝起きて顔を洗い、髭を剃りますが、夕方疲れて帰ってきて一時間ほど寝たことがありました。少し横になったのです。それから出ていって顔を洗い、髭を剃っていると、それを見て「どうしたのですか」と、朝ではないと言って笑うのです。そのように暮らすのです。心は一つです。精誠も一つです。先生がどんな方かと、神様に祈祷してみてください。痛哭されます。舌が出て戻らないほど痛哭されるのです。そのような事情をもって暮らす先生だということを知らなければなりません。

堕落した人間の側では救世主ですが、神様の側から見れば初めに失った真の愛の創造理想を完成する真の息子であり、真の父母です。救世主は堕落によってもたらされた神様の恨を解いてさしあげるために生涯を捧げて犠牲の道を開拓してきた方です。栄光としてだけいらっしゃるお方ではありません。常に神様の心情と共に痛哭し、サタンを屈服させるために心を痛め気をもむお方です。

誰の神様にするのですか。アメリカの神様にするのですか、大韓民国の神様にするのですか。私の神様にするのですか。どれですか。欲張りですね。そうするには民族以上に神様のために努力すべきです。神様が文総裁が好きだとしても、文総裁以上のことをすれば神様は間違いなく文総裁以上に皆さんを好きになることでしょう。それは間違いない公式ではないですか。そこには異議がありません。私は、私以上に神様を慰め、神様のみ旨のためにより奉仕し、功労を立てることのできる人を求めるのです。もし自分より劣る人を望むとすればそれは独裁者です。

マラソンの選手がスタートラインから八〇パーセントのところまで来た所で、百メートル、千メートル前に出ているとすればどうしますか。そこで転べばおしまいです。マラソンのチャンピオンが走るときに観衆は「ゆっ

くり走れ」と言うでしょうか。「速く走れ、速く」と倒れるまでそう言うことでしょう。同じです。記録を作らなければなりません。レバレンド・ムーンが最高記録をもっていてこそ、神様は最高の賞を下さるときに堂々と下さることができるのです。その時まで、その時まで押すのです。

出発において誤ったのです。あきれて言葉が出ません。出生において過ちがあったとは、大きくなって分かったのですが、養子といっても乞食の中から、孤児院から乞食を連れてきて育てたというのです。これは乞食よりもっとひどいのです。幼いときは自分の両親だと思っていたのに、大きくなってから自分が乞食の息子だったということが分かったのです。乞食の出だということが分かればその家はどうなるでしょうか。ひっくり返るのです。痛哭してひっくり返るのです。育ててくれた両親を自分の本当の両親だと思っていたのに孤児院で育った息子だという事実を知ったならば、どれほど驚くでしょうか。私たち人間世界でもこれほど大変なことなのに、天はそれ以上なのです。神様の王権、天国の王宮の皇太子が野良犬と関係をもってこのようになるとは。地獄の王になるとは。

文総裁と統一教会の夫婦の理念は、神様の血統を受け継いで生まれた息子、娘として千年万年、永遠な父母に侍り、永遠に我が息子、我が娘とたたえることのできる息子の資格、娘の資格をもつことです。その立場を通過してこそ神様の心の中に残っている堕落の傷を解くことができるのです。そのように神様にすがって「お父様、どれほど苦労されましたか」と言えば、その一言に神様が痛哭をするのです。胸が張り裂けるほど痛哭せざるを得ないのです。「ありがとう、私が数千年の歴史をこのようにしてきた」と言うのです。人類創造歴史が何千万年です。六千年ではありません。それを聖書では文化史を中心として言っているのであり、救いの摂理に着手するためのみ旨を中心としていえば、事実何千万年にもなるのです。

自分の欲心を中心として統一教会を利用しようという人、ありとあらゆることをした人を歴史上見かけても、知っていてもだまされたふりをしてやりました。なぜだまされてやるのでしょうか。神様が今までそのようにしてだまされてきました。裏切り、背を向ける姿を見るたびにあきれ驚いて「あいつ、雷を落として首を、日本刀があったら一気に首を落としてやりたい」という憤慨と悔しい思いが爆発するのですが、彼らが帰ってくることを願っている天の心があることを思うと、そうはできないのです。かわいそうな神様にすがって許そうという心をもってきたところ、そのたびに節ができます。分かりますか。統一教会の一つの節ができるのです。竹に節があるように、節ができるのです。そうして家庭的節目、氏族的節目、民族的節目を刻んでいくのです。

歴史的師が生きた苦痛、神様の歴史的苦痛を流し去ってしまってはならないのです。私の心の深い愛を大切にしまい、あの世に行って出会ったら首を抱いて「あなたが悲しかった事情をみな知り、その度数に合わせて生きようとしましたが、及びませんでした。これを許してください」と言いながら涙をのんで痛哭する心が先立つときは、神様にすがって

痛哭するとしても神様も共に泣きながらかき抱いてくださるのです。そのような日をもてずしては解放できないと考えている人です。妻の愛がどんなに大きいとしてもその立場に及ばず、父母の愛がどんなに大きいとしてもその立場に及ばないのです。それを知っているので、解放のためによそ見も寄り道もできずに歩んできたのです。

また会うときまで昼夜を分かたず、御飯が食べたければ先生のことを思い、御飯を食べないでみ旨のために先生がしていることをしなければならず、眠たくなったら眠らない先生を思ってみ旨のために闘っていかなければなりません。非難を受けながらも弁解せずに忍耐してきた師を考えなければなりません。それ以上の心をもち、あすの勝利に対する欲望をもって、自然屈服する怨讐の群れを見るために自らの実績をもって行こうという心をもたなければなりません。そうした努力をしてこそ、皆さんが生きる道があり、この民族が生きることができるのです。

ある時には、死刑宣告を受けたという連絡を受けたこともありました。そのようなときに統一教会の教主であるこの私が、どうして涙なしに夜を明かすことができるでしょうか。哀れにも私という人を知らなかったならば、そんなことにはならなかったのに。国境を越えに越え、一度も会ったこともない師に従って歩み、最後に東方の韓国に向かって「私は行きます」と両手を合わせて祈り、最後の道を行く彼らを、かき抱いてあげることもできず、助けてあげることができない心情を皆さんは分かりますか。悪魔の前に受難を受け、苦痛を受けて捕虜となっている彼らを哀れに思う天の心情を知りながらも、昼夜を分かたず前進しなければならないと追い立てたのです。

私は統一教会の教主になろうとは夢にも思いませんでした。今もそうです。私は教主という観念をもっていません。平民なのです。きょうも洋服を着ないでネクタイも結びませんでした。一つでも不足な装いをしてこそ気持ちが楽なのです。なぜでしょうか。統一教会の食口たちは全世界に広まって、この時間にも雨降る軒下でぬれた服を着て先生を慕いながら、「先生が御安泰であられるように」と敬拝していることを知っているからです。福を祈っている立場を蹂躙してはなりません。それで目さえ開けば眠れずに、このような罪人のような教主の生活をしているのです。それゆえに統一教会の教会員たちが文総裁を無視できないのです。

Book 二: 真の父母 True Parents

一、真の父母とは

一）真の父母という言葉の意味

我々統一教会員たちが平素使う言葉のうち、「真の父母」という言葉があります。その言葉は簡単な言葉ですが、その内容は実に驚くべきことです。歴史以来、どんな図書館にもありません。真の父母という言葉は、最も易しい言葉ですが、その言葉は我々だけが持っている言葉であり、我々だけが使う言葉です。

皆さん、考えてみなさい。キリスト教が二千年の歴史を経てきながら、人類の先祖が堕落したとしたら堕落した父母は偽りの父母、悪い父母で、堕落しない父母は善の父母であり、真の父母ということがいっぺんに分かるのに、それを今まで発表できなかったのです。それは、発表できる、この時を待ってきたのです。

過去の歴史時代に、真の父母ということを考えた人がいるかもしれませんが、その背後がどうだということまでは解く道理がなかったのです。統一教会の膨大な原理の全体の内容を備えずしては、それを確実に解けないので、誰も簡単に真の父母という言葉を言うことができませんでした。原理のみ言、あるいは、我々が知っている統一教会の歴史観、また、人類の本然的な根源に対する事実を明らかにしたということは、驚くべき事実です。

真の父母という言葉を確実に知ることによって、何が分かるでしょうか？　我々人類の始祖の堕落が不倫な関係によってなされ、神様と関係ない、創造理想を立てようとした真なる父母と関係ない、血統的な因縁を残したということです。すなわち、過った血筋を受け継ぐようになったということです。

それゆえ、真の父母という言葉は、人類始祖から歴史的にすべての人間が過った血統の中に生きることを清算してしまい、神様を中心として、新しい本然的な根を中心とした、愛と生命と血統がつながるという意味を中心として言う言葉です。これは本当に驚くべき言葉です。（二〇一・六〇）

二）真の起源

「真」とは

この天地間に真なる方がいるなら、その方は誰でしょうか？　絶対者です。この絶対者を、今日我々の韓国語で言うと「お一人しかいないご主人様」ということです。一人（韓国語でハナ）しかいないご主人様をもっと縮めて言うと、神様（ハナニム）になります。お一人しかいないご主人様が、神様だということです。

では、神様はどんな方か？　神様は、地上の良い人も好きで、悪い人も好きです。罪を犯して死刑場に出て死ぬようになる死刑囚も「神様！　私をかわいそうに思って下さいませ。私はあなたが好きです」と言って死ぬでしょう？　そうですか、違いますか？（そうです）。「神様、私は死ぬ！　あなたが私をこうなるようにした！」（笑い）そう言いますか？（言いません！）

では、どうして神様の前では、悪いことをして死んでいく立場にある人も、良い心で犠牲になって再出発に希望を誓いながら、その神様の前に最高に寄与し、また頼り、彼とともにいたがり、内心では父母を離れ、兄弟を離れ、誰よりも切に近くで事情を通じたがるかというのです。これは、神様が偽りだからそうですか、真だからそうですか？（真だからです）。真であるためにそう言うのです。

真なる方は好きな者だけ好むのではなく、自分を殺せと言う怨讐までも好まなければなりません。彼の前には、すべてを任せることができ、すべてを相談したくもあり、すべてを願うこともできる立場にある人であってこそ、真なる人です。分かりますか？　もう真なる人が分かったでしょう？（はい！）

では、お嬢さんたち、今まで育ってきた過程で、憎い人がいましたか、いませんでしたか？（いました）。では、憎い人がいる人は、真なる人ですか、偽りの人ですか？（偽りの人です）。ここの男たちも憎い人がいる人は、真なる人ですか、偽りの人ですか？（偽りの人です）。間違いなく偽りの人です。では、この世界には偽りの人が多いですか、真なる人が多いですか？（いつわりの人が多いです）。偽りの人が多いでしょう？（はい）。これをはっきりと知らなければなりません。

真なる人になろうとする人なら、両面を備えているべきです。統一教会の輩たちが、私を好きな人はとても好きで、私を憎む人は積極的に憎んだら、良い輩ですか、悪い輩ですか？（悪い輩です）。

それで、私を憎む人も好もうというのです。私を憎む人を私が好めば、その人が嫌がりますか？（好みます）。好むのです。私を憎む人に私が三回以上良く接してあげたら、彼が頭を下げるようになるのです。三回だけ良くしてやれば、頭を下げます。そうか、そうでないか、一度やってみなさい。人には良心があって、自分が過ったのかよくやったのか分かるのです。（三九・三〇二）

皆さん、我が国には良い人が多いでしょう？世の中には立派な人がたくさんいます。偉人もいます。それなら、大韓民国の偉人は誰ですか？　大韓民国の「偉人」と言えば、大概誰を言いますか？（李舜臣将軍です）。そうですか。李舜臣将軍！　李舜臣将軍も偉人です。皆さん、李舜臣将軍が好きですか、嫌いですか？（好きです）。全部好きですか？（はい）。

では、李舜臣将軍が真なる人ですか、そうではないですか？（分かりません）。分からないでしょう。分からないのに好きだというのです。ですが、先生はそのように好きではありません。私がこう言うから「おかしい。あの方はなぜああ言うか？　我が国の忠臣を嫌うとは。では、あの人は共産党か、民族反逆者か？」と言うかもしれませんが、私は李舜臣将軍が嫌いです。なぜ嫌いか知りたいでしょう？　答えてあげましょう。（笑い）

「李舜臣将軍」と言えば、韓国人すべてが、忠臣として知っています。しかし、日本人はどう思っていますか？　怨讐ではありませんか、怨讐？　日本人は、李舜臣将軍を怨讐と

思うのです。これは、日本の歴史の本にも明らかにされています。李舜臣将軍は、日本人の前には怨讐であり、韓国人の前には忠臣だということです。それで、先生は彼が好きでないのです。

「真」ということは、英国に行っても真であり、ドイツに行っても真であり、アメリカに行っても真であり、韓国に来ても真であり、アフリカに行っても？（真です！）日本に行っても？（真です）。真になるべきなのです。ですから、真は怨讐がないのです。真は好きでない人がいないのです。一方では好きで、他の一方では嫌うのは、完全な真になれないのです。そうでしょう？

李舜臣将軍が、完全な「真なる人」であるなら、日本人も韓国人とともに偉人として、真の人であれば真の人として崇拝すべきです。しかし、真なる人の基準で見ると、李舜臣将軍は完全な真ではないということです。少しは真になれますがね。大韓民国を中心として見ると真ですが、日本を中心としてはそうではないのです。ここに異議がありますか？ 異議がありますか、ありませんか？（ありません）。私は真なる人を願うので、李舜臣将軍のように真になりきれない人は好きではないのです。

では、この世の中で真なる人はどんな人か？ 前で言ったのと同様に、悪い人も好み、良い人も好む人です。良い人がいちばん好きな人を、悪い人はいちばん憎むべきですか？　悪い人もいちばん好きな人でなければなりません。ここには良い人と悪い人が混ざっていますが、願って希望することは、すべて最高のものです。最高を皆好むのです。皆好むということは、良い人も好むのであり、悪い人も好むということです。そうでしょう？（はい）。

それゆえ、悪い人だといって嫌ったら真ではありません。悪い人も最高に好み、良い人も最高に好むべきなのです。これが真なる人の定義です。真なる人とは、悪い人もいちばん好み、良い人もいちばん好む人です。そのような者がいれば、その方が真なる方です。ここに異議がありますか？　ないでしょう？（はい）。（三九・三〇一）

・ 真の起源

真ということは、個人に限ってあるのではありません。全体を越えに越えて、適用され、全体を越えに越えて価値的な因縁を結ぼうとするのが真なのです。真は誰もが好み、誰もが探すものであるために、どこにでもなければならないということです。（六三・八九）

我々は個人の目的のために集まったのではなく、全体の目的のために集まりました。それゆえ、自分個人より家庭のために、家庭より民族、民族より国家、国家よりまず世界のためであるべきです。また、自分個人が真になる前に、家庭が真になるべきであり、さらには国家、世界が真になるべきです。

人間は、自分個体としては、すべての福が動機になりえない復帰路程に立っています。では、その動機は何か？　真です。人間が真なる姿を成すには、すべて生死禍福の根源であられる神様と関係を結ぶべきです。その関係

を結ばなければ、人間個体内では真なる姿を成しえません。

真は、必ず神様が中心となるべきです。それで、人間は、全体的に収拾して主管しうる決定的な基盤を持つようになるとき、真が成されるのです。その基盤を持てなければ「真」という名詞は成立しえないということを知るべきです。

真の起源は、神様であられます。神様がおられることによって、真が成されます。神様が離れるようになるとき、真も離れるようになります。そこには真ではない、悪の起源が生まれるのです。

真があってこそ、真なる結果をもたらすことができます。言い換えれば、神様がおられることによって、神様の願いが成されうるということです。それゆえ、真だ、善だという名詞は、人間を主にして立てられたのではなく、神様を主にして立てられたのです。

このような観点から見ても、真は人間が勝手に考えることができるものではありません。すなわち、堕落した人間が勝手に管理する、そのような位置に従属しているのではなく、真が我々を主管しているということを知るべきです。それゆえ、我々は、いつも真の前に屈服すべきです。真を立てて、そこに順応すべきです。皆さんの現実的な生活や、あるいは良心生活を推し量っても、真は完全に天に属しているという事実を否定する道理がないでしょう。

我々は、祈るとき、「真なる神様、天におられる聖なる神様」という言葉を漠然と習慣によって言う場合がたくさんあります。しかし、本当の意味での真は、今までありませんでした。それがなかったので、真として連結しうる起源は、人間たちが歩んできた歴史の背景にあるのではなく、これを超越した位置にあるのです。そこから出発するのです。すなわち、その起源は、環境を超越した位置から追求しなければいけないので、宗教は人を中心として信じていくのではありません。

もちろん、教祖を中心として信仰の標準を立てておいていく人たちもいます。しかし、それを超越した立場から、神様を介在させ、真を追求してくる人たちもいるのです。これを見るとき、歴史過程を経てきた数多くの人間の生活路程においてや、現実社会においても、真の起源を持てなかったということです。

人間自体に連結された位置からは、真の起源を備えることはできません。真は、必ず絶対的基準です。それゆえ、神様、あるいは絶対者、神という問題がここに登場せざるをえません。それはなぜそうなのか？　今まで地上に真の愛がなかったためです。それゆえ、真を指向しながら生きる人自体としては、真の動機になりえません。その動機は、神様でなければなりません。必ず宗教や、人類歴史上において、最後の重要な分岐点に行っては、神が登場します。絶対者が必ず必要になるのです。

哲学が追求する目標、すなわち、真理を通じて最後の目標について追求していったり、あるいは、存在の起源を掘り下げていっても、

必ずここには神という問題、超越者、絶対者という名詞が介在するのです。それはなぜそうなのか？　絶対者と関係を結ばなくては、すべての学問や、すべての存在価値の起源が解決できないからです。それで、人間たちが、深刻な場では必ず真を通じて解決しようとしたのです。

このような事実を、我々は否定することができません。それゆえ、真の起源は、人間だけでなるのではなく、必ず絶対者、神様が介在すべきなのです。真を主張する宗教は、神様を離れては考えることができません。真を主張する人倫道徳も、神を否定できません。

ですから、孔子も「順天者は興り、逆天者は滅ぶ」と言ったのです。天を中心として言った言葉です。必ず天を介在させなければなりません。その興亡盛衰の起源が、人間自体にあるのではなく、天から左右されるのです。このような事実について見るとき、天が動機になりうる起源が備えられなくては真になりえないので、この地に生きている人類の中で、真なる人がいるかということが問題になります。

では、真が止まりうる場所はどこか？　勿論、天が起源になって真の位置を地上に立てようとされるでしょう。これは、神様の願いです。それで、人間のどこにとどまるかということが問題になります。我々の生活の周辺にとどまるのです。それでイエス様も「天国は汝の中にある」と言われたのです。真なる国の天国は、心の中にあるのです。何らの邪心がない、深々とした谷に位置しているのです。

我々の心の基礎を分析してみると、知情意になっています。その中でも、どこにとどまるか？　知情意のうち、何が根本であるかというとき、意でもなく、知でもない、情です。

皆さんは、自分にいちばん貴いものがあったら、それをどこに置きたいですか？　自分だけが知っている所に置きたいでしょう。そこは誰も触れられず、関与できない、すなわち自分だけが絶対的に管理しうる所です。そこがどこでしょうか？　心の深い所です。心の深い所に埋めておくのです。ここであれば安心だと言える所に置くのです。すなわち、人々がよく貴重品を入れておくタンスのような所に置くようになるのです。このような点から見るとき、真がとどまりうる所は、自分の心の深い位置です。（二四・三一七）

三）真の原器

真なる心は、変わりません。それゆえ、それがなくては、皆さんが基準を立てられません。こうだああだと評価できないのです。宇宙の核とともに、絶対的な基準に公証されうる内容の根を持てないのです。そうであると、そこに及びえないために、その及びえない基準から評価されたその存在は、流れていってしまうのです。

メーターのようなものも、その原器があります。それを中心として違っているのではないかということを判定することができるのです。全部問題が起きるなら、ここに合わせてみるようになるとき、ピッタリ合えば、それは万世に不平を言っていた人も一時に皆離れていくのです。（一八六・六六）

愛には革命もなく、変化もないのです。変わるものには貴いものがありません。ダイアモンドは、堅さにおいて変わらないためにそれが宝物扱いを受けるのであり、黄金は黄色い色が変わらない特異な権威を持ったために、その色が変わらないところにおいて貴いのです。真珠は、調和した色、優雅な色を持っていますが、それが変わらないために貴いのです。貴いという宝物を、なぜ変わらない特性を中心として策定したか？　それが宇宙の万物の存在価値を比較できる基準であるからです。

では、この宇宙の測定で、全体を測定しうる価値基準、いちばん最初の基準が何になるか？　それが問題です。金でしょうか、ダイアモンドでしょうか？　それは変わらない愛、壊れない愛です。壊れるようですが、壊れません。勝手にできるようですが、勝手にできないのです。そこに自分が含まれるのです。そこに策定されるのであって、自分が策定できないのです。

この宇宙において、そのような原因中の原因になりうる度量衡や原器が何かという問に対して考えるとき、それはある測定器の原器ではなく、変わらない本来の物ではありませんでした。

神様もその標準を変更させることができず、人間も変更させることができません。永遠不変的でありながら、内外のその宝の価値を持ち、地の果てや、地獄や、天上世界や、どこでも昼夜を克服し、地域を克服し、距離を克服し、時空を克服して、その絶対的測定の基準になりうる、比較の基準になりうるものが何だろうか？

地球にも緯度、経度において零点基準があります。それが英国のグリニッジ天文台を中心として、零点になっています。いくら変わらせても、変わらないのです。零点に照準を合わせたその基準、緯度・経度が会うことができるサの基準が、九〇度で交差していくというときに、その基準があるべではありませんか？　それがなければ、秩序の世界が形成されないのです。

この宇宙で測定しうる永遠不変のすべての存在が比重を合わせて、その等差位置を決定したいその本来のもの、神様もそこに従うことができ、全体がそこに従わざるをえない一つの基準が何かという問題について見るときに、お金？　黄金の固まり？　ダイアモンド？　それは神様が創ることができます。神様が一人で勝手にできるものです。

愛も勿論神様が創ることができると見ますが、その愛を所有するということは、一人ではできません。二人、二人、二人が所有すべきです。愛は神様も一人では見出せないのです。

それゆえ、その基準、測定原器が何か？　宇宙万象の存在世界、永遠の世界で測定しうる絶対的に一つしかないその原器が何だろうか？　根本問題です。それが愛というものです。それで、愛は春夏秋冬、季節の変化に影響を受けません。（一三七・二三五）

皆さんは、距離を測る尺度があるのを知っているでしょう。もし、一センチメートル単位なら、そのモデルというものは絶対的です。それは一つしかありません。そこに比較して、同じならそれは皆正しいというのです。しか

し、いくら自分がいちばんだと言っても、そのオリジナル・フォーム（original form；原型）ときっちりと比較してみるとき、合わなければ不合格者なのです。

また、一センチメートルは一〇ミリメートルです。そこから一ミリメートルというものも絶対的です。それが一〇であれば一センチメートルになり、百であれば一〇センチメートルになり、このように上がっていくのです。それでこそ、それが連結して、どこへでもそれは共通的であり、統一的な内容を持ちます。

では、人の世界には、そのようなものがないか？　人の世界が統一されるには、原則的な基準から体と心が闘わず、一つになったそのようなフォーム（form；形態、形）が、「こうであるべき」というフォームがあるでしょう。（一二八・七八）

皆さん、メートルがあれば、そのメートルが一メートル、一〇〇メートル、いくら大きくてもそれが問題ではありません。そのメートルの基本単位が何か？　一ミリメートルです。一ミリメートルはあまりにも小さいから、大概一センチメートルで言います。

いくら億万でも、その単位は一ミリメートルから全部合わなければなりません。これが合って、億万の数が全部きっちりと合って、一つも残らないですべてが一ミリメートルだったと言うようになるとき、それを今日我々は世界のものとして使用するのです。それは、アメリカの一ミリメートル、韓国の一ミリメートル、あるいは英国の一ミリメートル、すべてが同様です。変わりがありません。それが真理です。

皆さん、真理が何ですか？　真です。真が何か？　それ以上基準として数えられないという、その位置に立ったものを真理と言います。ここに物理学博士も来ていますがね。物理学を勉強するには、自然世界のすべての動きを知らなければなりません。その動くものが、漠然と動きません。

皆さん、考えてみなさい。この地球がどれほど大きいですか？　この膨大な地球が、一年に一回ずつ太陽系を巡回するのに、それが一分も差異がありません。一秒も差異がないのです。ピッタリ合うのです。それが差異があれば、大変なことになります。差異があれば、どんどん小さくなるか、どんどん大きくなるかという問題が起こるのです。そうなれば、陸地と海が全部分かれるのです。

地球の年齢は四五億年として決めるではないですか？　四五億年の間を動くのにおいて、異常なく公式的基準で、単位を中心とした公式基準の上に連結された運動と作動をしてきたのです。そこには何かの原理というもの、公式というもの、公理というものを中心として、測定する単位を必要とするのです。同様に、真というものが何か？　真というものは、一つにも合いますが、千万を合わせてもきっちりと合うのです。

金の中で純金を言うときは、二四金です。二四金は、真の金です。そうでしょう？　二五金はありませんか？　二六金はありませんか？　それも問題です。このように見るとき、

中央に立てて、均衡になりうるそのような位置を最小単位に、我々が視覚的なところにおいて最小単位として帰るとき、それに垂直的な平衡線上に合いうる…。これが垂直なら、これが平衡になるのに、このようになってはいけません。このようなものは、真ではありません。

それでも、二四金までは、これを入れればこれが直線になるのです。そのような基準圏内に立っているために、二四金が真だと言うのです。そこは垂直を持って合わせても、縦的基準の前に持って合わせても全部合うのです。宇宙的な縦の前に平行線として立ち、宇宙的な横の前にも平行線を成すのです。

宇宙の大運動、大運勢、それが漠然と動くのではありません。みな法度を中心として、主体と対象関係の循環法度運動をするところは、必ず垂直です。

その垂直が、二四時間変更されるものは、飛んでいってしまいます。流れていってしまうのです。壊れてしまうのです。垂直がピッタリと位置をつかんでこそ、そこで空間世界に自分の位置をつかんで存続の基盤を持つのが常なのです。このような言葉は、少し難しいでしょう。

同様に、我々人のはかりが何か？　人もはかりがなければならないでしょう。そうではないですか？　数学を解くには、世界的に共通の数理的基準を設定しておいたその基盤で「一つ」と言えば世界も「一つ正しい」と言い、「二つ」と言うとき「二つ」、「三つ」と言うとき「三つ」と言いながら正しいと言うでしょう。ある基準に合格した共通的な決議基盤が世界的舞台に立つようになるとき、そのようなものを真理と言うのです。

真理の中には、何があるか？　真理の中には、必ず東西四方があるのです。真理があるときは、必ず環境があるのです。では、環境が先か、真理が先か？　これが問題となるのです。環境が先なのです。

我々人間を見るようになるときどうですか？そのような存在的な人間を中心として見るとき、真なる人間がどのような人間かというのです。縦横の標準、「縦に見ても合う。ペチャンコにならなかった。横に見ても合う」と言える、その基準にならなければならないのです。

縦横が一致してこそ、公式的法度上において、前後・左右・上下が差異がありません。同じです。この同じものを、どこに持っていって合わせてもきっちりと合うというのです。東でも合い、西でも合い、北でも合い、南でも合い、地上世界でも合い、霊界でも合う、というとき「真である！」というのです。

ところで、いくら大きくても、ミリメートルで測定してみたら、残ったものが半ミリメートルにもならなかったとしても、その全部は否定するようになります。不完全なのです。それはごみ箱に入るべきです。そのような何かがなければならないのではないですか？測定する基準がなければならないのです。
（一八〇・一四）

四）真と真の愛

皆さん、真、トゥルー（true）という言葉は何の言葉ですか？　それが丸いものか、角張ったものか、平たいものか？　それの定義が何か？　そして、真に対する定義を下すのに、何を中心としてその定義を下すのだろうか？　それが問題なのです。

皆さんが「真の人」と言うとき、その真の人はどのような人ですか？　真の人も目が二つあって、鼻があって、簡単なのです。目、鼻、口、体が皆ある人です。

では、トゥルー（true）ということは、真ということは、ある一定の場所の制限を受けることを言いますか、一定の場所を超越することを言いますか？（超越することを言います）。それがどのように？　何を持って？

どうしてその制限線を超えなければならないか？　それは何を言うのか？　すべてを代表して測りうる内容を持たなければならないことを、我々は分かります。

皆さん、数学なら数学では公式を言い、物理なら物理では公理を言い、定義を言うのに、その定義がどのようなものか？　公式というものは、それが小さなものですか？　公式の単位というものは、簡単なものですが、その公式的というものは、すべての物を比較できる主体性を持つべきです。それでこそ公式や単位の基準が設定されます。これを知るべきなのです。それが違えば、全体、小さい論理を策定して計算したのが、膨大な宇宙にピッタリ合わないのです。
我々が、このすべてのメジャー（measure；尺度）のようなものを見ても、一二進法とか一〇進法のようなものなどがあります。それが小さいですが、形態は皆ピッタリ合うのです。そうでなくては、これが回っていかないのです。全体が回っていかないのです。ある部分では合いますが、全体が合わないようになるときには、これが成立しないのです。全体存在の成立が喪失されるということを知るべきです。

それは、人間世界も同様です。真なる人が何か？　人間が生きていくのにおいては、スケール（scale）とメジャー（measure）のようなものがあって、力を連結させて、世界に拡大していくのです。それが全部均衡に合うように拡大するということです。

人間の人生は、人間が生きていく道にも、そのような公式的な道がなければならないという言葉が出てくるようになるのです。（一三三・九）

皆さん、今人間世界には、五〇億の人類が暮らしますが、この世界の地球村に暮らす人たちの先祖たちは、どれほど多く地上で生きては死んだでしょうか？　それを考えてみましたか？　少なくとも現在に暮らしている人の何百倍、何千倍生きて死んだでしょう。では、その人たちの中で、人類が願う真なる人が何人いただろうか？　真なるということは、千年前も、今も、いつでも真です。

「純金」と言うようになれば二四金でしょう？　それは地形的距離や、時空に従って変わりません。どんな立場に処しても、変わらないというのです。その姿は、王の手に行っても、どんな不良の手に行っても、どんな変

化無双の環境に行っても、変わりえないのです。そのようなときに、黄金色を真なる色だと言うのです。分かりますか？（はい）。

黄金色好きでしょう？　色というものが何に似ているか？　黄金色に似たのです。そうではないですか？　明るい色は、黄金色に近い色です。太陽の光も白い光ですか、黄金色が多いですか？（黄金色です）。夕焼けは、もっとそうです。

それゆえ、我々人間において、千年、万年、億万年変わりえない色を持った、そのような真なる男がいるか？　これが問題です。真なる女がいるか？　どう思いますか？

宗教界では、人間は堕落したと見ています。もちろん、背景が異なる宗教もありますが、全部救いを受けるために、価値のある新しい人間を探していっています。その言葉は、どういう意味か？　真なる本然の人間、真なる本然の人間像に及ばなかったために、それをいつも追求するのです。それは、千年前も、何億年前も、今も、今以後の人類が存続するどんな環境でも、どんな時代も問わず、それを追求するようになっています。それを知るべきです。

皆さんたちも、その真なる人を探しているのです。真なる男、真なる女を探しているのです。歴史時代に生命を持って生まれた男女たちは、自他を問わずそこに首をかけて考えるようになっています。それゆえ、部落で暮らすようになれば、その部落でいちばん進んだ真なる人になろうというのです。（一七七・一〇〇）

五）真の父母は何か

・二つの石板と真の父母

イスラエル民族を荒野で導くとき、火の柱と雲の柱があったでしょう？　昼に導くのが雲の柱で、夜に導くのが火の柱でした。それは何を意味するか？　男女を代表して終わりの日に父母が来て、イスラエル民族から侍られるのを象徴的に見せてくれたのです。この火の柱と雲の柱の導きに従わない人は、皆滅亡するのです。

また、イスラエル民族が荒野に出て四〇年さすらい、方向をつかめないので滅亡するのを心配して、モーセをシナイ山に呼び上げて、四〇日断食をさせて与えた二つの石板が何かというと、アダム・エバ、真の父母を象徴したという事実を知るべきなのです。

契約の箱の中にどうして二つの石板を入れたかというと、二つの石板は、神様のみ旨を終結することができる中心本部としてアダム・エバを象徴したのです。それで、契約の箱の中に入れたのです。（一三四・一七四）

我々の願いが何か？　神様は縦的な父母であり、アダム・エバは横的な父母ですが、縦横の父母が一つになって喜びうる場で、愛されうる息子娘になるのです。ところで、そのようにできなかったのが恨です。そうでしょう？　そのような愛を一度受けてみたらという熱望を皆持っているというのです。宗教も全部そのようなものです。

縦的な神様と横的な面で一つになって、愛することのできる父母がこの地上にいたか？

いませんでした。堕落したために偽りの父母になりました。偽りの父母になったために、そのような父母がいませんでした。それで、真の父母が出て来なければならなりません。真の父母が歴史上に出て来なければなりません。

そのような歴史的指名を代行する一つの名詞を被せて呼ぶその存在が誰か？　これが救世主という存在であり、メシアという存在です。救ってあげるには、何を救ってあげるか？体を救ってあげるのではなく、理想的な愛の願いを成してくれるのです。

そうするには、どのようにしなければならないか？　その救いを成してあげるには、メシアはどんな存在として来なければならないか？　間違いなく、真の父母として来なければなりません。メシアは、真の父母として来なければなりません。イエスという方を、キリスト教ではメシアと信ずるのです。救世主として信じます。

真の父母として来るには、どのように来なければならないか？　一人ではだめなのです。真なる父に代わりうる一人の男として出てこなッればならないのです。今まで、数多くの宗教は、一人の男を探してきたのです。男の中でも、生活をよくする男を探してきたのが、儒教の教えと見ることができ、霊界を主にした男を探してきたのが、仏教の教えと見ることができるのです。

では、キリスト教は何か？　神様の息子になって、愛する家庭を作ろうというのです。もっと具体的な内容を持って来たのがキリスト教です。それゆえ、神様の前において「私はひとり子」だとイエス様が言われたのです。

ひとり子が出てきたのに、ひとり子が一人で暮らしたら大変なことです。ひとり女がいなければなりません。それで、ひとり女を探して、神様を中心として、ひとり子とひとり女が互いに好む場で結婚しなければならないのです。結婚して、神様が縦的な父母として喜び、横的な父母として喜びうる新郎新婦になり、地上で息子娘を産まなければなりません。そうしてこそ初めて、一族が広がり始めるのです。そういうことではないですか？

それゆえ、イエス様においてイスラエルの国に背いてでも、ユダヤ教に背いてでもいちばん必要としたのがありますが、それが何か？再び探しうる主体的動機が何か？　まさに女です。男の前に女がなくてはいけません。

イエス様は、そのみ旨を成せなかったために死んでいきながら「私は新郎であり、あなたがたは新婦だ」と言ったのです。こうして、キリスト教では二千年間新郎であられるイエス様を待ち、キリスト教信者たちが新婦になろうと、もがいてきているのです。

その標準が何か？　それがメシアですが、真なる父母の位置を持って合わせるのです。それが子羊の婚宴です、子羊の婚宴。（五八・二一八）

・真の父母の定義

統一教会で言う真の父母は何か？　これが問題です。堕落しなかったらどのようになる

か？　堕落しなかったら、神様が縦的な愛となり、アダム・エバは何かといえば、神様の体になるのです。神様の体と同じなのです。神様は骨のようであり、アダム・エバは体のようなものだというのです。神様も心があり、体があります。分かりますか？（はい）。

そう、皆さんは、誰に似ましたか？（神様に似ました）。神様と？（真の父母に似ました）。真の人。神様とトゥルーマン（true man；真の人）に似ました。そうだといって、アメリカ大統領のトゥルーマンではありませんよ。（笑い）

神様は、内的な場で内的な父母になり、アダム・エバは、外的な場で外的な父母になります。内的外的父母が一つになったその場が愛で綴られて、内的父母に侍るようになり、外的父母を持つようになります。神様と人間との愛の結託により、真の父母、完成した人間が成就されるのであったというのです。愛と結託されないなら、完成人間がいないのです。

それが何かというと、本然の我々の先祖であるのです。神様が創造された本然の人間です。そのような人から我々が生まれるのです。そのような神性を持った人により、我々が生まれなければならないのです。それゆえ、我々は神性を帯びた神様の性稟も持ち、人性を帯びた、神様の前の縦的な父母の性稟も持つのです。

ですから、アダム・エバの完成は、神様の愛に結ばれてこそ完成が出てくるのであって、これが結ばれなければだめのです。神様の縦的な愛と横的な肉的愛が、一点で結ばれたのが、まさに我々の先祖の血統の根です。分かりますか？（はい）。そこが、我々先祖の血統です。そこから全人類が生じるのです。

堕落のために、男の愛、女の愛、神様の愛が皆分かれました。堕落によって、男の愛、女の愛、神様の愛が結ばれませんでした。

堕落しなかったら、自動的に結ばれます。男女は愛で結ばれます、自動的に。なぜ、男女が一つになろうとしますか？　愛のためにそうです。愛で一つになった後に、何をしようと言いますか？　神様の祝福を受けようというのです。それが目的です。（一八四・七一）

摂理の時代を見れば、復帰摂理は終わりの日を通じて成されるのです。始まりから終わりに近づけば近づくほど、宗教の目的が成される時代が来るのです。その宗教の目的が成されうる最後の時が、父母様が現れる時だというのです。

その父母は、真の父母ですが、真の父母という方はどんな方か？　これが問題です。真の父母という方は、我々の原理で教えてくれているように、原理結果主管圏と直接主管圏、すなわち間接主管圏と直接主管圏を皆経て、責任分担を完成した位置で、神様の愛を中心として一体の理想を成した父母です。歴史上初めて、神様と人間が愛を中心として一体の理想を成して、神様の愛の理想が、初めて地上に真の父母の家庭を中心として着陸し始めたのです。

堕落することによって、この真の父母の理想が壊れてしまったのです。アダム・エバが責

任分担という使命を前にして原理結果主管圏、すなわち間接主管圏から直接主管圏に橋を置いて、これを皆完結しなければならなかったのに、そうできなかったのです。それによって、サタンがこの間接主管圏内を侵害し始めたのです。これを知らなければなりません。これを知らなければ、あの世へ行って登録できないのです。（一四三・七六）

真なる父母が一体何ですか？（愛の中心です）。何ですか？　この宇宙が生じて以来初めて、真なる愛が、理想的愛がスパーク（spark；誘発する）しうる出発点というのです。これを知るべきです。それで真なる父母というのです。

では、真なる父母の前には、何の息子娘がいなければならないか？（真なる子女です）。では、真なる子女は、何のために真なる子女ですか？　その真なる父母の最初の愛を受けるのに十分な内外の美を持った息子娘というのです。（一二五・一六六）

トゥルー・ペアレンツ（true parents；真の父母）、トゥルーマン（true man；真の男）、トゥルーウーマン（true woman；真の女）は何で、トゥルーチルドレン（true children；真の息子娘）が何か？　全部「トゥルー」を出して入ってこなければならないのです。根を神様を中心として連結しなければなりません。

愛を持って、上にいる神様が下に行くとき、愛は直短距離に行くために、その道は一つしかありません。バーチカルライン（vertical line；垂直線）は、一つしかないという結論が出てくるのです。（一八九・一九八）

統一教会で言う「真の父母」という言葉は何ですか？　トゥルー・ペアレンツ（true parents；真の父母）が何ですか？（神様が真の父母を指名されたのです）。神様が真の父母を指名した、それはどういう意味ですか？それが何かというと、神様の愛が初めて人間世界に着陸したということです。真の父母が起点だということです。それを知るべきです。

では、着陸した真の父母がレバレンド・ムーンなら、レバレンド・ムーンがアメリカに来て、真の父母になりましたか？　どこで真の父母になりましたか？　どこで、どこで？（韓国です）。何が？（韓国です！）韓国を誰が知ってくれますか？　ですが、知ってくれても、知らなくても、砂漠でも木の枝でも、岩の塊でも、神様の初愛が着陸した所は、貴い所になるのです。（一三〇・一一一）

真の父母が何か？　神様の愛を核としたその愛を中心として、アダム・エバが完全に絶対的に一つになって、出発しうる最初の我々人間先祖だったのです。それをはっきりと知るべきです。真の父母を知らなければ、真の子女ということは分からないという結論が出てくるのです。（一三五・一六一）

歴史的な核心になり、時代的な核心になり、未来の核心になる人は何か？　言い換えれば、歴史について見るときは、歴史的な実であり、時代について見るときは、時代的中心であり、未来について見るときは、未来的な起源になりうる、世界主義思想の中心は何であろうか？　それは、真なる男と、真なる女です。

では、その真なる男と真なる女の生活観は何であろうか？　世界のために甲斐を持って生きるのです。二人が愛するのは、世界のために愛するのであり、息子娘を産むのも世界をもっと愛しうる動機を作るため産むのです。

このような思想が、我々が今主張している思想です。このような内容を皆さんが細密に知っているかわかりませんが、私が知っている立場で見るとき、横的なすべての立体的な世界を中心として見ても、縦的な世界歴史全般を中心として見ても、必ず歴史はその基準で解明されなければいけないのです。それは、自動的な結論として出てくるのです。（二五・一四七）

堕落の起源がどこですか？　アダム・エバ、すなわち一つの父母から始まりました。アダム・エバが堕落して、偽りの父母になったことによって、すべて問題が起きるようになったのです。このために、心情問題、血統問題、人格問題、言語問題、生活問題、国家問題、世界問題が生じたのです。

では、これを一度に蓄積させることができ、このすべてを総合することができる真なる基準は、どこから始まるのか？　これは、ある宗族圏内で成されるのではなく、社会圏内とか、国家圏内で成されるのでもありません。世界圏内でも絶対不ッ能なものです。すべての問題の起源が、偽りの父母から始まったために、真なる父母の因縁を中心としてのみ、復帰されうるのです。

真の父母という名詞を中心としてこそ、初めて神様の心情と一致しうるのです。真の父母を中心として、本然の血統が始まり、真の父母を中心として、本然の人格が始まり、真の父母を中心として言語が本来の位置に帰り、真の父母を中心として生活が本然の形態に帰り。真の父母を中心として本然の国家形成が起こり、真の父母を中心として本然の世界が成されるのです。

では、この全体を総集約した核心的な母体が何か？　真の父母です。真の父母ひと方によって、すべてが決定されるのです。それゆえ、その方のすべての思想を自分が全部引き継がなければいけません。その心情、その人格、その生活観、その国家観、その世界観を全部引き継がなくては、中心となる位置に立てないのです。（二八・二四八）

真の父母を抜いては、教育もあってはならず、生活の基盤もあってはなりません。分かりますか？　真の父母と完全に一つにならなければならないのです。

一つになることは、何かというと、「真の父母の生活が私の生活であり、真の父母の理念が私の理念であり、真の父母の仕事が私の仕事であり、真の父母の愛の圏が私の愛の圏である」このようにならなければならないのです。皆さんはそうですか？（四四・一四五）

・真の父母は人格の実体

歴史上の聖賢たちの中で「私は人類歴史において、人間たちを代表して、体と心が闘わず完全に統一を成したので、私を見習え」と言う人がいましたか？　学校の教育で見れば、倫理生活について責任を受け持たれた教授たちも多いのに、何が重要かというのです。

体が重要か、心が重要か？　心も重要で、体も重要です。もっと重要なことは、私の体と心の統一圏です。それが重要なことです。それがだめな人は、いくら世界が統一されたとしても間違った人です。（一四二・三二五）

今皆さんは、体が違い、心が違います。では、これがいつ一つになるだろうか？　今、人類歴史路程において、体と心が闘うのを自分が統一させると、体と心が闘うこれを統一させると言える人は出てこなかったのです。

パウロのような人も嘆息したでしょう。「心の法と体の法、二つの法があって闘うので、私はなんとみじめな人か。この死の法から誰が私を解放するだろうか？　そこにはただイエス・キリスト、神の愛で…」まさにそう思ったのです。主イエス・キリストの中にいる神様の愛によって解放されるのです。（一六四・四一）

心と体が一つになれない原因がどこにあるか？　神様はどんな方かといえば、この宇宙の根本となる縦的な愛の主体です。その重りが地に降りてくるようになるときに、神様一人ではだめです。いくら神様といっても、愛を下すには水平線でこの基準を引き出すことができる力が必要です。

電気が強いと、マイナス電気が地上に近くに来るようになると、近い所で雷が落ちるのです。そうではないですか？　降りてこなければなりません。高い所にあっても、降りてこなければなりません。同様に、高い愛が降りてくるには、地上にマイナスの愛が、まず生じなければなりません。マイナスの愛がまず生じれば、プラスの愛は自動的に生じるようになっています。それがペア（pair；双）になっています。

作用するこの世界には、必ず対応と反作用があるのです。互いに対応し、互いに作用する反面に、反作用があるのです。一般の人たちは、この反作用が対応する力の作用に反対すると見ますが、そうではありません。反作用というのは、対応した存在を保護するために作用します。こうしてこそ、理論的に善悪のすべてが解決するのです。善を中心として悪というものに対して保護すべきであるという論理を見出さずには、歴史時代の善悪対決の歴史を処理する方法がないのです。

神様はどこを通じて往来するか？　縦的な愛が設定されなければなりません。その縦的な愛が縦的価値を持つためには、横的な基盤が築かれて入ってこなければなりません。

男女もそうではないですか？　皆さんが分別のないときは、何も分かりませんが、大きくなると女も世界を持とうとし、男も世界を持とうとします。ですから、そのような世界を持とうとするときは、どのようになるか？
このように行ってはいけません。どこへ行って会わなければならないか？　すっかり大きくなって、成熟して、会わなければならないのです。そうするには、世界が自分のものであると言える位置まで出なければなりません。

「これを占領しなければならないな」と言いますが、占領するには、自分の力をもってしてはできません。愛でなければだめなのです。その愛の力があるために、男にも女にも世界

征服のための理想と夢があるのです。皆さん、世界全部を自分のものとしたいでしょう？
天があれば、見えない世界があれば、その見えない無限の世界までも自分のものとしたいでしょう？　なぜそうですか？　縦的な欲望、横的な欲望があるためです。

横的な欲望は、横的な世界である地球星全体を自分のものにしようとし、縦的な欲望は、この宇宙を自分のものにしようとします。分かりますか？　体は制限されています。地球星の限界線を脱することができません。しかし、縦的な世界は、いくらでも大きくなります。

そのようなことを見るとき、心の位置を代表しうる父が神様であり、体の位置を代表しうる父が、堕落しなかった真の愛を中心とした人類の始祖であったということです。体の位置を代表する父が人類の始祖になるべきなのだ！　分かりますか？（はい）。

統一教会では、歴史時代に分からなかった事実を探って、このような自体を対置して対応しうる名詞として聞いて使う言葉が真の父母というのだ！（アーメン！）ですから、横的な真の父母の位置が本来創造した理想観として見る神様の息子娘の位置であったというのです。アダム・エバの位置であったということです。ですから、神様は何ですか？　体のようなものがアダム・エバなら、縦的な心のような父の位置にいるのが神様です。

心のような神様と、体のようなこの方が一つになるには、何で一つになるか？　力ではなく、知識でもなく、権力でもありません。何ですか？（愛です）。愛です。

我々の心的な人格、体的な人格が本来一つになりうる原則的モデルに似たのが私個人であるために、原則的根本を訪ねてみるときに、体のような父がいなければならず、心のような父がいなければならないのです。そこで、心的父の位置が神様の位置であり、体的父の位置が人類の始祖になるのです。

では、人類の始祖と心的父である神様が、どこで一つになるのか？　どこで一つになりますか？　真の愛を中心として、愛の球形の中で核の位置で一つになるべきなのです。縦的なものを中心として男女は訪ねていくのです。（一七七・三三七）

六）我々が知るべき「真の父母」の語義

・真の父母という言葉は貴い

皆さんは、真の父母という言葉がどれほど重要な言葉であり、どれほど貴い言葉であるかということを知るべきです。皆さんの国と大統領、先生、父母、兄弟は信じられなくても、真の父母だけは信ずべき義務があるのです。分かりますか、何のことか？（はい）。真の父母という観念の中には、地獄とか、悪なるサタン世界を救う、救いの観念がこもっているという事実を知るべきです。

これを考えなさい。皆さんが、サタン世界で死ぬしかない立場にいるのに、父母がいて皆さんの死の前に盾となりうる力となってあげることで、天地が公認し、歴史が公認しうるとしたら、それはどれほど誇るべきことですか？　神様が保障し、歴史が保障する真の父母！　みなさん、そうですか？　真の父母と

いう言葉がどのように出たきたか、それを知るべきなのです。

レバレンド・ムーンが真の父母になるんだと、このことを始めたのではないのです。レバレンド・ムーンを持たずしては仕事ができないから、仕方なくこの仕事をしているのです。分かりますか？（はい）。（一一六・一一三）

真の父母という言葉は誇るべきでありとてつもない

今まで我々継代の立場は、我々千万代の先祖たちが皆復活して、その復活した栄光を褒めたたえるとしても、それは堕落圏を脱しえない栄光であり、褒めたたえでした。

しかし、今日統一教会で言う真の父母というその言葉は、皆さんの立場は悲惨であっても、数限りない先祖たちとともに、あるいはこの地に勝利をもたらして万民解放圏を持った栄光の位置で褒めたたえる以上の価値を持った、誇るべき言葉であるという事実を皆さんは知るべきです。父母様に会った中で、神様に会うことができる道が連結するのであり、統一教会に出会ったこの位置は、遠くない将来に、神の国と父母様の願う祖国を探しうる道が連結しているという事実を知るべきです。

今まで人類は、生まれた国が違い、文化背景が違い、国境を異にして自分たちの祖国だと言いながら、歴史的な先祖たちが暮らしてきて、今の我々も暮らし、後孫たちも暮らすでしょうが、それは全部が堕落圏であることに間違いないのです。

皆さんは、その堕落圏を蹴って出て、今日の勝利を先祖たちとともに、自分の一族とともに、未来の後孫の前に誇り高く褒めたたえうる、勝利の栄光を褒めたたえうる、愛の祖国を探すべきです。その愛の祖国の中で、愛の父母を持つことができ、それだけでなく、祖国の中心である神様がおられるなら、神様に侍ることのできる位置だと言うときは、それ以上の栄光の位置はないというのです。皆さんはそれを知るべきです。（一三八・一〇六）

メシアは何か？　神様の愛を完成したアダム格であるために、本然の父の資格として来るのです。

それゆえ、その父を中心として、母がセンターとして、神様の本然の愛を中心としたその基盤を中心として、個人、家庭、氏族、民族、国家基準までの所有権が、真の愛を中心としてメシアのものとなった後に、国家のものであり、国民のものであり、家庭のものであり、個人のものであるという所有権版図が広がらなければならないのです。

ですから、メシア本然の愛が、初めて個人から国家まで形成されて、ローマと世界までその波紋が伝播されていたら、今日の再臨思想はありえなかったのです。

このように見るとき、アメリカが神様の愛の圏に属した国か？　どうですか？（違います）。ご覧なさい。この地球上に、そのような過程を通過した国があるか？（ありません）。そうなのです。キリスト教を中心とした数多くの教会が、このような神様の愛の原則に一致した所有権に属しているかというと

き、どうですか？（いいえ）。絶対的にありません。天国が地上にはないのです。

このように考えるとき、歴史を通じて真の愛、真の父母という言葉がどれほど偉大で、どれほどとてつもないかを知るべきです。

これだけが堕落圏内を貫いて、サタン世界を貫いて、上がっていくことができる一つの基地です。ですから、その真の父母という言葉をありがたく思うべきものであり、それ自体はさておいて、言葉だけ千回聞いて、万回聞いて感謝して余りうる内容だということを知るべきなのです。（一二九・一九四）

真の父母という言葉は驚くべき言葉

皆さんが知るべきことは、我々は堕落したことによって、我々の故郷を失ってしまったということです。また、国を失ってしまい、世界を失ってしまったのです。もっと進んでは、神様まで失ってしまい。神様の愛までも失ってしまったのです。このような膨大でとてつもないすべてを、再び探しうる一つの起源が何かというと、真の父母という驚くべき名詞なのです。

神様から見れば、今まで歴史的に願ってこられた摂理の目的が何か？　この（真の父母）基準です。人類が堕落した以後、今まで蕩減歴史をしてきたのは、何をするためか？　これ（真の父母）を探すためです。数多くのキリスト教徒たちが、今まで一日の願いを持って再臨の日を待つのもこのためであり、数多くの宗教が、全部この一日を願っているのもこのためです。このような事実を考えるとき、真の父母が生まれたのは、恐ろしくも驚くべき事件であることを知るべきです。

皆さんが故郷に行こうとするのは、そこに父母がいて、兄弟がいるためです。父母を中心として連結した人がいる所であるために、故郷をしのぶのです。そのような故郷を抱いている国、そのような故郷の人が連結しうるその国を、人々は自分の祖国だと言っています。一般的に祖国というのはそのようなものです。

そのような面で、本然の人を中心として見るとき、我々には故郷もなく、祖国もないのです。過去にもなく、現在もないのです。あるといっても、それは悪であって、我々とは何らの関係もないものです。真とは関係ないのです。（六七・二二七）

統一教会の真の父母という言葉は驚くべき言葉です。偽りの父母は、サタンの愛を中心として、落ちた愛でしたが、真の父母は神様の愛を中心として上がるので、愛の世界に前進していくのです。分かりますか、分かりませんか？（分かります！）

では、なぜ我々がその愛を探そうとするのか？　愛というものは、偉大なもㄱです。永遠に平等なものです。愛という名前だけ聞けば、いくら高い位置にでも一度に同参することができる資格をもつのです。女が字を一字も知らず、男が世界の大学者でも…。（一四四・二四一）

統一教会では、真の父母という言葉を言っています。これは驚くべき言葉です。真の父母が何ですか？　偽りの父母が生まれたので、

真の父母が出てこなければなりません。真の父母は何をすべきか？　サタン世界の根となる過った血統を正すべきであり、過った生命を取り返すべきであり、過った愛の道をまさに開かなければなりません。

聖書に「死なんとする者は生き、生かんとする者は死ぬ」とありますが、そのような逆説的な論理がなぜ出てこなければならないかというのです。サタン世界では死ななければなりません。（一六九・三九）

先生がハンサムではありませんがね、変わらない希望があるなら、神様のみ旨を追求しようとすることです。その理想的な目的の基準、その定着点が何かといえば、真の父母です、真の父母。分かりますか？　真の父母です。

では、神様のみ旨の完成が何か？　創造理想完成が何か？　アダム・エバが愛の理想を成して、直接主管圏内で父母の位置に立ちうることが、理想的基準ではないかというのです。み旨の完成の位置ではないかというのです。

皆さんは、先生がこの地上に真の父母という名前を持って来たことが、どれほど驚くべきことかを知るべきです。分かりますか？　真の父母という言葉。世の中の言葉の中でいちばん福となる言葉が、堕落した人間においてはその国を失って捜すことよりも、世界を失って捜すことよりも、真の父母という言葉です。それは天地の何よりも貴いということを知るべきです。（一二七・二二一）

真の父母という言葉は恐ろしい言葉

統一教会での恐ろしい一つの教えが何か？　それは「真の父母」という言葉です。この言葉は、神様も恐がる言葉であり、サタンも恐がる言葉です。我々人間は、サタン圏内にいる人間であるために、真の父母を中心として見るときに、彼に従っている人たちは、彼のみ言によって審判を受けるのです。

このような方が出てこなかったらいいのに、出てきたために審判しなければいけない立場に立つので、神様がその方の言葉を聞いてあげるのです。また、サタンがなぜ真の父母という言葉を恐れるか？　この言葉を信じて従おうものなら、自分のすべてが破壊されてしまい、破綻してしまうためです。それで、彼には極めて恐ろしい言葉になるのです。

サタンは、いつも真の父母の行く道を妨げ、倒れるのを願い、悪くなるのを願う立場にいます。ですから、皆さんがこの道に従って行くのに、どれほど信じて従うかというのが問題になるのです。皆さんが、そのような先端に立ったなら、一歩一歩、行動一つを千年以上の精誠を尽くして、感激しながら行こうとしないといけないのです、それが今日皆さんの行くべき道であることを知るべきです。（六五・二七七）

私は、真の父母の名前がどれほど恐ろしいかということをよく知っています。私は平穏な位置を探すために生きる道を取ったのではなく、このみ旨の使命を完結させるために、今まで闘ってきました。

過去を回想すれば、事情も多く、無念なこともたくさんありましたが、あなたの事情、あ

なたの無念さに比べられないことが分かったので、ひざまづいて涙をあなたの前に見せられない、恥ずかしい姿であることが分かるのでございます。そのようなことを感じる私の心をお分かりになり、この日を期して天上世界と地上世界の門を開いてくださいませ。（一三四・一一六）

問題は何か？　真ということ、すなわち真の父母ということです。真の父母が何か？　真の父母という言葉がそんなに簡単な言葉ではありません。いちばん恐ろしい言葉です。その言葉がどれほど恐ろしい言葉か分かりません。

この真の父母という言葉一言のために、歴史が左右されます。この言葉を見つけ出すために、今まで数多くの先烈たちが犠牲の道を行きました。連続的な血の闘争を経て、身悶えし、絶叫しながら希望を抱いて探し出した名前が、真の父母という聖なる名前です。
真の父母の前には、真の子女がいなければなりません。それで、皆さんが真の子女になりましたか？　考えてみて下さい。皆さんが真の子女ですか？　真とは、過去にも現在にも未来にも変わらないものです。（三三・一〇九）

二、メシアと真の父母

一）歴史と真の父母

・堕落と真の父母

今、歴史時代に人類の終末時代が来ていますが、これが何かというと、民主と共産が交差するのです。サタン世界の全権時代が来て、全世界に澎湃していたのが、皆狂うようになれば、行く所がありません。そうなれば下っていくのです。七〇パーセントになれば下っていきます。七千年の歴史を中心として蕩減するのです。

この七千年が問題です。第一次世界大戦も、七〇パーセントをドイツが勝ったのです。日本が大東亜戦争と言った第二次大戦も、七〇パーセント以上勝利しました。そうなれば、そこから下り始めるのです。このように、皆原則的な公式を通じて、歴史も発展するということを知らないでしょう。

このように、偽りの父母として生まれたので、これは曲折が過ったのです。その上に、父母を中心として、このようになるべきなのに、このようになったからこれを解かなければなりません。個人的に解かなければならず、家庭的に解かなければならず、氏族的に解かなければならず、民族的に解かなければならず、国家的に解かなければならず、世界的に解かなければならず、天宙的に解かなければならないのです。（二一一・三一〇）

今日、我々が暮らすこの世界に、真の父母を迎えましたが、この地には真の父母の息子娘だけが暮らしているのではなく、堕落した父母の息子娘も暮らしています。本来は、真の父母の血肉を通して神様の愛する息子娘になるはずだったのが、堕落によって堕落した息子娘になってしまいました。それで、我々人類始祖が過ったことを解怨成就してあげるために、再び来られる父母が再臨主であり、救世主というものです。

彼が来ては、前もって産んでおいた長子を復帰しなければなりません。その長子が庶子の

ようになりました。血筋が変わりました。本然的愛から神様の血統を受け取っただろうに、堕落することによって他の血筋を受け継ぎました。そうだといって神様は捨てることはできません。

これは、庶子のようです。野生のオリーブの木です。この野生のオリーブの木の畑を悪魔が支配するので、神様が野生のオリーブの木を自分の所有にしなければいけないのです。これを強制的に強奪するのではありません。銃剣でするのではありません。自然屈服できる環境を中心として、冷遇されて打たれ、一つ、二つずつ奪ってくるのです。

今日キリスト教が世界的な版図を成すまで、どれほど犠牲の代価を払ったかしれません。殉教の祭壇に絶えず犠牲にさせることで、悲惨なその喊声が地球上に響きわたり、その泣き声が聞こえない所がないほど、そのような歴史を経てきたのです。その血の祭壇が連続し、今日目前にまで到達した歴史的な恨がもつれているということを知るべきです。これを受け継いで解怨すべき厳粛な歴史的課題を抱いている我々は、神様を解放し、キリスト教を再度解放しなければなりません。（二一〇・三六〇）

堕落が何かというと、悪魔の偽りの愛と、偽りの生命と、偽りの血統を蒔いておいたものだというのです。この男たち！　男の中で愛がありますか、ないですか？（あります）。生命がありますか、ないですか？　血筋、先祖から受け継いだものでしょう？　では、この男がジェントルマンなら、歴史以来先祖から受け継いだ愛の結実であり、生命の結実であり、血統の結実だというのです。

それが何かというと、サタンの愛と、サタンの生命と、サタンの血を受け、神様の怨讐になりうるこのような立場に立ったその愛を受け継いだということです。これを振り切って脱ぎ捨てなければ、地上の平和はやってくることができないのです。それで、レバレンド・ムーンが真の父母の理想を持って出てきたのです。

トゥルー・ペアレンツ（true parents；真の父母）は、何をするか？　この偽りの愛をきれいに清算して、個人が分立し、家庭が分立し、氏族・民族・国家が分立しうるよう平和と反対の悪魔の要素をきれいに清算するために闘争したのです。（二一七・一八五）

・歴史の願い

我々統一教会では、真の父母という言葉を使っているのです、真の父母。皆さんが今、この堕落した世界歴史について見るとき、この世界には堕落した父母が生まれた、堕落した父母が生まれて堕落した世界を成した、ということが分かるでしょう。

この世界は、どんな世界かというと、堕落した父母と因縁づけられた世界であって、真の父母、神様が理想とした本然の世界とは関係のない世界です。それゆえ、長い人類歴史を経てきながら、この世に多くの人たちが生きては死にましたが、彼らが幸福を歌いつつ「ああ、私は人間として生まれてやはり幸せで、人間として成功した人だ。すべての面に

おいて成功した一人だった」と宇宙の前に誇って暮らしていった人は一人もいないのです。

それで、人間の歴史は苦海と同じだ、悲哀の歴史だ、戦争の歴史だ、疾病の歴史だというのです。なぜこのようになったのかというと、堕落の結果によってこのようになったのです。

今、人類の希望は何か？　人間がどのように完成した人になるかということです、完成した人。神がいるなら、その神の前に、完全な絶対者がいるなら、その絶対者の前に、完全でありうる人をどこで探し、どこで成すかということです。

それで、今まですべての哲学を通じて、宗教を通じて、人間たちはそれを探しに探しましたが、その解決点を皆見れず、今はすべて放棄状態に至ったのです、それが現世の人間の立場だというのです。（一三七・八一）

今まで人間たちの歴史的な願いが何かというと、真の父母に侍ることです。真の父母を迎えるためのものなのです。神様がイスラエルの国とユダヤ教を立てられたのは、メシアを迎えるためなのです。メシアが誰かというと、真の父母です。また、キリスト教とキリスト教文化圏を作ったのは、再臨主を迎えるためなのです。再臨主は誰かというと、第三次アダムとして来られる真の父母です。

真の父母が来られる時になれば、世界のすべての痩=が兄弟の因縁を持つので、第二次世界大戦後に、戦勝国家が敗戦国家を全部解放させるということが起こったのです。これは、兄さんの立場から弟を叩いて捕まえたので、そのような非正常的な歴史的現象が起こってきたのです。

歴史が願いつつ訪ね来たことが何かというと、真の父母に会うことです。宗教が出てきたのも、真の父母に会うためです。世界が出てきたのも、真の父母を探すため、国が出てきたのも、真の父母を探すためです。真の父母の道を備えるために出てきたのです。（五一・三五四）

歴史と真の父母

今まで宗教は何をしてきたか？　真なる息子一人に会うための努力をしてきたのです。神様は、真なる息子一人をお探しになるために、今まで苦労されたのです。それゆえ、宗教の教祖たちの中には女がいません。
皆さん、宗教の教祖の中に女がいますか、いませんか？　いないでしょう？　全部男でしょう？　これは、真なる息子一人を作るために、つないできたということを意味します。一段階、二段階、三段階、百段階…。このように上がって、最後のバトンを受け継いで勝敗を決定しうる一人の主人公、息子を探してきたのです。これが今までの歴史です。（四一・二八）

神様が宗教を作って何をするのだろうか？
何をしようというのか？　神様が宗教をなぜ作ったのか？　世界のぼろきれ、大きなぼろの版図を作るためのものではありません。目的は簡単です。神様が真なる愛で愛することができる人を探すためなのです。その一人を探すために、愛の環境的要件の中で、神様が守って、相対的な一人を探せばおしまいです。

愛が、二つ、三つ必要ですか？　同様です。（一七三・三四）

神様の復帰歴史は、真の父母を立てるための歴史であるとも見ることができます。それゆえ、カイン・アベルから今日に至るまで、天は内的に真の父母を復帰するため、摂理してこられました。誰でもこの目的を成すための根本摂理に敵対したり、妨害したりすれば、彼は天道の前に捨てられるようになり、結局滅びるしかありません。（九・一〇）

歴史に通じるものは何か？　神様の解放は、真の父母と一つになって、地上のすべての祭物を捧げることができるサタンの讒訴条件を清算しなければなりません。それを清算しなければ、皆さんが行くことができません。皆さんがどのように神様の心情的所有権に逢着するか？

皆さんの父母とみなさんと万物が、平行線上で神様の所有であると決定しうる場を持つことができなかったのです。これを蕩減復帰すべきです。（一三七・二六九）

復帰摂理歴史は真の父母を探すための歴史

神様のみ旨に代わって、この地上に現れるべき真の父母はどんな方か？

万物に代わって、サタン世界と闘い、万物を主管しうる立場を収拾して、人間に代わって人間世界を主管しているサタンを壊滅させなければならず、霊界とも対決して、数多くの霊人たちまで主管できる絶対的な位置を構築しなければならない方です。真の父母にはそのような使命があります。

それで、神様は堕落した世の中を復帰なさるために、万物から人間、天までつながった一つの世界を復帰するため、今まで真の父母を送りうる道を築いてこられたのです。

我々は、復帰原理を通じて真の父母が現れるためには、真なる息子娘がいなければならず、真なる息子娘が現れるためには、真なる僕がいなければならないということを習いました。

そして、神様の復帰歴史を見ると、僕の時代を経て、子女の時代を経て、父母の日を迎えることができるように、神様が役事してこられたことが分かります。また、僕の時代から、養子の時代、子女の時代を経て、父母の時代まで復帰してくる間、霊界にいる霊人たちも協助してきたということを、我々は原理を通じて習いました。
外的に一国家の基準を超えて、世界的な基盤が備わる前には、真の父母はこの地に来ることができません。それで、神様は、ノアとアブラハムを経る二千年の摂理歴史期間があった後、ヤコブをして初めてイＸラエル民族を形成しうる基盤を築くようになさいました。そして、その民族を通じて国家を形成するようになさいました。そうするまで、数多くの歴史路程を経てきながら、ご苦労されたのです。

そうするためには、個人の立場で神様に代わってサタンと対決して勝たなければならず、養子の立場で神様に代わってサタンと戦って勝たなければならず、直系の息子娘の立場でも神様に代わってサタン世界と戦って勝たな

ければなりません。そうでなければ、真の父母を迎えることができません。それゆえ、摂理歴史は旧約時代から新約時代を経て、今まで長い歴史を経てきているのです。

このように、僕の立場を復帰し、養子の立場を復帰した基盤の上で、直系の息子娘の立場を復帰し、すなわち勝利の基盤を築いておいた後に、真の父母の因縁を立てようとなさるのが、神様がこの地上にメシアをお送りになった目的でした。

イスラエル民族の不信で、神様が四千年間準備なさった僕の基盤が崩れ、養子の基盤も崩れました。それで、二千年前に来られたイエス様は、僕の立場で戦って勝利され、養子の立場で戦って勝利され、直系の息子の立場で進まなければなりませんでした。これがイエス様の立場であったことを我々は知っています。

養子の立場と直系の息子の立場を経た後、イスラエル民族を基盤として、真の父母の因縁を立てておいて行くのが、神様がイエス様を送られた目的でした。また、それをイエス様がこの地に来てなさるべき使命でした。ところで、イエス様が十字架にかかって亡くなられることによって、全体的な基準で勝利の基盤を築くことができず、霊界を中心として真の父母の因縁を開拓してこられたのです。

ところで、まだ個人的な位置、家庭的な位置、民族、国家的な位置をつかめずにいます。ただ、天のみ旨に対する個人と家庭と民族と国家を立てて、今まで回りに回ってきたということを、み旨を知った我々は知っています。

この世界的な時代を迎えて、天は必ず約束されたように、終わりの日になれば、新郎となられる主を送ってくださるでしょう。それで、新婦を選ばれ、真なる勝利の基盤をお築きになるでしょう。真の父母の位置は、本然の創造目的の位置であるために、そのような位置を築くため、神様は今まで六千年間闘ってこられたというのです。

それゆえ、六千年復帰摂理歴史は、この真の父母を迎えるための歴史だと言っても過言ではありません。その真の父母は、六千年摂理史全体に代わる方です。それで、その真の父母を探せなかったことが、人類の全体の悲しみに代わり、全体の苦痛に代わり、全体の悲哀に代わるということを、我々は知るべきです。

人類歴史は何の歴史かといえば、真の父母復帰歴史であると言うことができます。真の父母を復帰せずには、真なる子女が存在しえず、真なる子女の因縁を立てる前に、真なる家庭と真なる氏族と真なる民族・国家・世界・天宙が存在することができません。神様は、今までこの基準を立てるため、六千年という長い歳月を苦労してこられました。

今から二千年前に来られたイエス様は、この地上に初めて真の父母の栄光として来られた方でした。ところで、イエス様が真の父母として現れるためには、すなわち真の父母は、歴史的な結実体であるので、イエス様が歴史的な結実体として立たれるためには、一面的な勝利だけしてはいけないのです。息子の使命だけ果たしてもいけないのです。父母の使命を果たさなければならなかったのです。

イエス様は、この地上で肉的には息子の立場を復帰する路程を経ていかなければならず、霊的には父母の立場を復帰する路程を経ていかなければなりませんでした。このように、両面的な立場で責任を果たして、神様と一つになりうる起点を立てなければなりませんでした。

そうするとき初めて、その起点は、個人的イスラエルの基盤になり、家庭的イスラエルの基盤になるのです。民族的イスラエルの基盤になり、国家的イスラエルの基盤になり、このようになっていたら、霊的肉的に真の父母の基準を立てることができたのに、イスラエル民族がイエス様を不信することによって、その基準を立てることができませんでした。

本来、真の父母は、創造原理を見れば、霊的肉的に神様の祝福を受けた人でなければならないのです。ところで、イエス様はイスラエル民族の不信によって、真の父母になれませんでした。イエス様は、霊界に行かれても、真の父母を迎えることができる基盤を築いてこられたのです。

この言葉は、どういう意味か？　この地に再び来られる主は、霊的な父母の立場を復帰しなければならず、肉的な父母の立場を復帰しなければなりません。これをご存知のイエス様は、それで今まで二千年間、霊界に行かれて何をなされたのかというと、再び来られる主が霊界から迫害を受けないで、蹂躙されえない基盤を築かれました。イエス様を中心とした霊的な社会、国家、世界的な基盤を築かれました。

イエス様は地上ではなく、霊界で摂理してこられたために、キリスト教を信じる人たちは、全部霊的父母と因縁を結んできたのです。

この地に再び来られる主は、イエス様が洗礼ヨハネからすべての祝福を相続されたのと同様に、イエス様からイエス様が霊界で築いておかれた霊的な個人・家庭・国家・世界的な基盤を相続しなければなりません。そのような立場を経ずしては、真の父母の因縁をこの地に立てることができないのです。

地上で霊的な相続の基準を立てるのが原則です。これは、地上のキリスト教徒たちが、イエス様が再び来られる主に霊的な基盤を相続されるようになるとき、一つになれば、地上で相続の基準が築くことができたのですが、今までキリスト教徒たちがこのような基準を立てておけなかったために、霊的な勝利の基盤が、来られる真の父母の前にそっくりそのまま移されることができなかったのです。

それによって、再び来られる真の御父母様は、再度霊的相続の基準を復帰し、肉的な相続の基準を復帰する闘争歴史を経ていかなくてはならなかったのです。

本来、神様が六千年間摂理されたことは、来られる真の父母の基盤を備えて、当代に勝利の基盤を築かせるためだったのに、この地上にいる聖徒たちが霊的父母の命令に一致団結して従うことができなかったことによって、その命令に歩調を合わせられなかったことによって、今までイエス様が築いておいた霊的基盤を、再び来られる主が相続する基準が立てられなかったのです。

それで、再び来られる主は、真の父母となられる方は、再び霊的な世界から、個人的試練から、家庭、氏族、民族、国家、世界的な試練を受けなければなりません。その試練に勝たずしては、内的勝利の基準を立てずしては、地上に実体的な勝利の基準を立てられないので、内的な闘いをしてこざるをえないのです。（一三・二八一）

神様が復帰摂理をなぜなさるのか？　本然の父母、すなわち真の父母の因縁を立てるためです。では、真の父母はどんな方か？　真の父母は、神様が臨在しうる実体聖殿です。皆さんは、これが実際に実感できますか？　その価値がどれほど大きいでしょうか？　皆さんの家ぐらいになりますか？　でなければ、皆さんの体、皆さんの息子娘、皆さんが暮らしている国、世界と同じですか？
ところが、神様を知るのに、自分の家のタンスの中に入っている廃物よりも劣ると思っている人がいるのです。そのような人たちが、神様に「福を下さいませ！」と言っています。そのような人たちを通じて、神様のみ旨が成されうるでしょうか？　神様のみ旨が成されうるかというのです。皆さんは、それを知るべきです。（二二・四四）

二）メシアは真の父母

・メシアは真の父母である

来られるメシアは、どのような方か？　個人はもちろんであり、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙全部をかけておいて、信仰と希望と愛の実体として立ちうる方です。その方が、このような場に立ってこそ、初めて人類の歴史上に残っている信仰が、結実しうるのであり、希望が結実しうるのであり、愛が結実しうるのです。

そうでなければ、信仰と希望と愛が結実することができません。その方が言う言葉は、個人的な言葉ではありません。皆さんもそんな信念を持って叫ぶようになるとき、その言葉は個人の口から出てくる言葉ですが、世界史的な内容と因縁を備えた言葉になるということを知るべきです。

知恵深い人とは、どのような人か？　世界的な時を、希望の時をまず区別するすべを知る知覚を持った人です。それを予め知って、分析して、批判して、実践して、自分のものにする責任を負うことのできる立場に立っている人が、知恵深い人です。

メシアがこの地上に来られるとき、彼は個人として来られますが、個人ではありません。その方の価値は、全世界の人類が信じている信仰の結実体であり、全世界の人類が願っている希望の結実体であり、全世界が願っている愛の結実体です。

その結実体には、すべての歴史路程がつながっています。すなわち、過去、現在、未来が皆つながっています。そして、個人から家庭、氏族、民族、国家、世界が全部つながっており、天と地がすべてつながっているのです。（一三・一四三）

メシアは真の父母である。我々は真の子女である。同じ運命圏に立って、そこに加わらなければいけない。（五五・九九）

メシアの顕現過程

今まで宗教が出てきていますが、使命は何かというと、一人を探そうということです。数多くの宗教が救いを得て何がどうだと言いますが、世界的によりすぐって、最高の位置に上がりうる人、その位置を超えたその一人を探そうというのです。その一人を立てようというのです。

このように、すべての宗教の中心は、一人ですが、その存在が誰かというと、メシアというものです。言い換えれば、すべての宗教が一人を探してくるのに、その一人、中心存在が誰かといえば、メシア、救世主というものです。

メシアが来る所には、その場に一度に来るのではありません。七年路程を経なければなりません。メシアは男です。そのメシアが来て、サタン世界で血統的な関係を超越して、サタンに勝たなければなりません。

勝ったその男を中心として、家庭的に勝たなければならず、氏族的に勝たなければならず、民族的に勝たなければならず、国家的に勝った基盤を作っておかなければならないのです。男一人だけをもってしてはいけません。すなわち、サタン世界よりもましにならなければなりません。サタン世界に属した家庭より優位に立たなくては、メシアは彼らを率いることができる立場になれないのです。

サタン世界の最高の基準が何かというと、国家というものです、国家。サタンは、いつも国家を中心として反対してきました。サタンは、国を持ったために、その国を中心として個人的にも天を叩き、家庭的にも天を叩き、氏族的にも天を叩き、民族的にも天を叩いたのです。いつもこの国を中心として、天が築いてきた道をいつも妨害してきたのです。

結局、反対されて迫害されるのは、劣っているためであって、勝っているならかえって迫害することができ、支配することができるのです。人間が堕落したことによって、この世界はサタン世界になったために、この世界にはサタン側の個人もいくらでもいるのであり、家庭もいくらでもいるのであり、氏族もいくらでもいるのであり、国家もいくらでもあるのです。ですが、天の側はいないのです。個人はいますが、その基準に上がった家庭や、氏族や、民族や、国家がないのです。

結局、メシア個人として家庭に勝ち、メシア個人として氏族に勝ち、メシア個人として国家に勝ちうる基盤がなくては、一般の人が上がる道がないということです。

それで、神様は、この地上にメシアが来るようになれば、メシアに従って共に上がりうる圏を、個人から家庭を経て準備しておきましたが、それがイスラエル民族です。そして、その思想が選民思想なのです。

しかし、イスラエルの国は、まだここに上がれませでした。線に引っかかったのと同じです。それゆえ、選民の希望が何かというと、この線を越えることです。この線を越えるべきであって、越えなければ大変なことになるのです。ですが、この線を越えようとしても、自分たちだけでは越える道がありません。

ですから、神様はイスラエル民族にメシア、すなわち救世主を送るという約束をしたのです。神様がこれを国家的に越えるために、数千年間準備されたのがメシアです。メシアを送るという約束をされたのです。

それで、イスラエル民族の前にメシアが来るようになれば、そのメシアを中心として死ぬとしても共に死のうという立場になって、サタンが離そうとしても離すことができないように完全に一つになれば、そこから個人的に接ぎ木して、家庭的に接ぎ木して、氏族的に接ぎ木して、民族的に接ぎ木して、国家的に接ぎ木して、彼らを一時に皆ここまで引き上げあることができるのです。

それゆえ、この世界には、選民思想がなければなりません。そうして、神様が選んだ民族を中心として、神様が選びうる国家を形成しなければならないのです。選民がいるというその言葉自体は、神様がいるという事実を証すものなのです。メシアを送るという預言があるということは、このような原則で見るとき、神様がいることを証すものです。

では、我々がメシアを必要とするようになったのは、何の目的があってか？　それが問題です。堕落することによって、我々は偽りの父母を持ちました。神様と一つになった父母がなくなったということです。神様と一つになりうる父母の位置を、我々に持ってきてくれる方がメシアです。これが第一です。

第二は何かというと、我々を再び産んでくれるのです。結局は、我々の体にサタンの血があるから、その血を抜いてサタンの息子娘でないという立場で、我々を接ぎ木して再び産んでくれるということです。

第三は何かというと、メシアは我々人間を、サタン悪魔を僕の奴にして、僕として使うことのできる人に作り上げるということです。すなわち、我々人間たちの前にメシアが来て、我々をしてサタンを屈服させて僕にしうる、サタンを屈服させて彼を処断しうる資格者にしてくれるということです。

結局、人間が堕落したために、第一は、父母を失い、第二は、サタンの血を受け、第三は、サタンの支配を受けるようになったのです。ですから、それを復帰するためには、逆さまに上がっていかなければなりません。
原理を見ると、信仰基台があり、実体基台があります。信仰基台を成して実体基台を成してこそ、メシアを迎えることができるようになっているのです。これが原理なのです。それゆえ、信仰基台と実体基台まで成そうというのです、外的に。（五四・一八六）

メシアは、それ自体が信仰の目的体であり、希望の目的体であり、愛の目的体です。信仰と希望が成された目的体です。では、メシアを主として、目的を完成したそのときには、何だけが残るだろうか？　目的が皆達成したので、愛だけ残るしかありません。

それゆえに、最後に残るのは愛であると言いました。その愛は、信仰の完成実体を通じた愛であり、希望の完成実体を通じた愛です。その愛一つを主にした代表者として来られる方が、メシアだということを我々は知っています。（一三・一四一）

メシアの使命

メシアのみ旨は何か？　縦的な基盤完結を見て、横的基盤の出現を成立させることです。そうであるなら、メシアは何か？　天倫のすべてを、神様と人類が行くべき公の目的を縦的基準に一致させて、個人的な縦的完成標準、家庭的な縦的完成標準、国家的な縦的完成標準、世界的な縦的完成標準を完成させるために、その内的計画を全部掌握して来られる方が再臨主だというのです。（七一・八〇）

宇宙をじっと見ると、偉いという存在が二つあります。神様とサタンしかないのです。（笑い）そうではないですか？　善悪の主人が戦っているのです。人間を中心として善悪の闘争であるのです。

サタンがどれほど偉いですか？　今までの人間の歴史を人類学で見るなら、一五〇万年がどうだこうだと言いますが、悪の闘争をする総大将として、神様までひどい目にあわせてきて、びくともできないようにして、神様も足を持ち上げられてどうしようもできなくするサタンが、どれほど偉いかというのです。

この戦いを誰が終えなければならないか？
神様もその戦いを終えられず、サタンも終えられません。このような言葉は、初めて聞くのです。悪神と善神の戦いを誰が終わらせてあげることができるか？　それは、神様でもなく、サタンでもありません。では誰が？
人間が。どんな人間？（真なる人間！）真なる人間。

真の愛から出発して、真の愛を持って行く、世界万民がついていくことができる愛の主人公にならなくては、神様とサタンの戦いを終えることができないのです。この戦いから解放されない限り、人間の歴史世界において、平和という言葉は妄想的な言葉になるのです。理想という言葉は、抽象的であり感傷的な言葉に過ぎません。

では、誰がこの戦いを解決できるかというのです。それで神様は、この代表者を送りましたが、その主流の思想をメシア思想というのです。分かりますか？（はい）。救世主思想。救世主は、人間だけでなく、神様まで解冶キる人を言います。悪を処断することを言います。神様解放と悪を決算するための総責任者が救世主です。

救世主の「世」というのは、この世の中を言うのです。神様がこの世を愛されてひとり子を下さったのであって、キリスト教を愛されてひとり子を下さいましたか？　ヨハネ福音書三章一六節をすらすらとよく覚えるキリスト教徒たち！　神様がキリスト教会を愛されてひとり子を送られたので、誰もが私を信じれば滅びず救いを受けると言いましたか？
「神様が世の中をこのように愛されて」といったこの言葉を取ってしまって。

救世主の使命は何か？　神様を解放することであり、サタンを処断することです。そのように人間に食いついて、さっさと処理しながら讒訴していた怨恨の元凶を誰が清算するか？　神様はできません。神様はできないのです。救世主だけができます。（一三六・二二〇）

メシアが来て何をするのか？　初めて、歴史上において一つの国の主権と国土と民を探し、それを基盤として、横的な世界を奪うための戦いをコーチする司令官として来るのです。それがメシアの使命です。分かりますか？（はい）。これを知るべきなのです。

サタンを屈服させるには、国家だけ屈服させてはいけません。サタンは、世界的な主権を持っているために、世界主権まで追放しなければなりません。そうしてこそ初めて、この地球星に解放圏が生じるようになるのです。分かりますか？（はい）。

地球星のどこに行っても、サタンが反対する陰があっては、神様が自由と平和の園として創ったエデンの園の理想が実現されません。地球星に、サタンが反対しうる影がなくなってこそ、地上天国が完成するのです。地上でそのことが完了されてこそ、天上世界の解放運動を始めることができるのです。分かりますか？（はい）。これが統一教会の食口たちが行くべき道です。確実に分かったでしょう？（はい）。（五七・一三〇）

メシアがすべきことは何か？　個人的にサタンを屈服させ、サタンの血統を除去し、個人的に勝利の道を築くべきであり、家庭的に築くべきであり、国家的に築くべきであり、世界的に勝利の道を築くべきです。これがメシアの行く道です。言い換えれば、

第一は、個人が行く道を築くべきであり、

第二は、家庭が行く道を築くべきであり、

第三は、国家が行く道を築くべきであり、

第四は、世界が行く道を築くべきです。

個人的に勝った次には、世界的なサタンが動員して、国家と民主世界が合わさり、攻撃をしてきても、それと戦って勝たなければならないのです。家庭的にも全世界的にそうしなければなりません。言い換えれば、ヤコブが天使と戦って勝ったのと同じであり、アベルがカインに勝ったことと同様に勝たなければなりません。これは、一対一の戦いなのです。

ですが、今のときは、カインのサタン世界全体を打たなければならないのに、そうするには、そうすることのできる最も先端の代表的な国がなければなりません。そこが韓国です。（五四・一九八）

三）イエス様と真の父母

イエス様はどんな方か？　エデンの園で、アダム・エバが堕落することによって、真の父母になれず、偽りの父母になり、偽りの子孫を産んだので、これを再び復帰するための真の父母として来られたのです。アダム・エバは、真の父母になれなかったのと同時に、真の夫婦になれなかったので、真の子女にもなれませんでした。

それゆえ、イエス様を完全に信じて、イエス様と一つになれば、真の子女復帰、真の夫婦復帰、真の父母復帰をすることができるのです。それで、イエス様をいちばん愛せということです。皆さんはそれを知るべきです。（八・一〇九）

黙示録に見ると、終わりの日には、主が新婦を迎えにこの地に来られるという内容があります。皆さん「子羊の宴」が何か分かりますか？　それは、歴史以来初めて一人の新郎と一人の新婦が、神様の愛を中心として夫婦を成す宴の日を言うのです。

我々人類の始祖が堕落することによって、我々の先祖は善の父母ではなく、悪なる父母になりました。それゆえ、神様が構想された位置、我々人類の先祖が堕落しないで成すべきだった本然の父母の位置、真であり善の父母の位置は、まだ現れず、成すことができなかったのです。

聖書に見ると「私はアルパでありオメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終わりである（黙二二：一三）」と言われた所があります。創世記から成そうとされた目的を成すことができず、堕落したために、黙示録に行って終わりになるのです。

では、イエス様はどのような方として来られたか？　アダムが堕落したために、堕落しないで神様の愛に一致しうる完成したアダムとして来られたのです。それで、コリント人への第一の手紙一五章四五節に見ると「『最初の人アダムは、生きた者となった』と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった」と言いました。

聖書に見ると、イエス様を第二番目のアダムと指摘しました。神様が我々人間に賦与しうる真なる息子の位置、夫婦の位置、父母の位置を決定づけずには、神様が計画された家庭を探すことができないために、それが地上に現れなければならないのです。

皆さん、世界には数多くの宗教がありますが、その中で、キリスト教だけが四大要件を中心として、神様の息子になり、神様と一つの体になり、神様のみ旨の中で互いに新郎新婦を迎え、新しい家庭を構想する理念を持っています。イエス様がそのような理念を持って来られたために、イエス様を中心としたキリスト教は、世界的な宗教にならざるをえなかったのです。（五四・一〇八）

四）再臨と真の父母

・準備すべきメシアを迎えること

皆さんの暮らす所はどこですか？（天国です）。今そこに暮らしていますか？（いいえ）。では、その天国というのは一度に出てきますか？（出てきません）。

では、天国が出てくる前に何が出てくるべきですか？（メシアです）。メシアだけではだめなのです。イスラエルの国の前にメシアが来たではないかということです。しかし、だめだったのです。ユダヤの国に、イスラエルの国に、イエス様が来ましたが、天国がなされたのかというのです。

それゆえ、天国が来る前に、天国の民族が出てこなければならないということです。それを知るべきなのです。では、その民族が出てくるには、どうすべきでしょうか？　一度に民族がやたらに出てきますか？　特別な氏族

が出てこなければならないのです。その氏族が出てきて、民族を動かさなければなりません。

では、氏族が出てくるにはどうすべきか？
そうするには、親族がいなければならないのです。その親族が出てくるには、どのようにすべきか？　親族の中心になる家庭が出てこなければならないのです。また、その家庭が出てくるには、どのようにすべきか？　息子がいて、父母がいなければならないというのです。では、その子女が出てくるには、どのようにならなるべきか？　その父母がいなければなりません。その父母が出てくるには、どのようにすべきか？　天国のすべてを代表しうる一人の男がいなければならないのです。

それが誰か？　メシアです、メシア。その男は、どのようになるべきか？　男が父母になるには、相手を探して、一つにならなければならないのです。それがキリスト教の教えです。それが終末です。

このように逆さまに落ちたのを、世界的なキリスト教の基盤の上に二千年間イエスを中心として、反対に霊的な復帰をしてきたのです。これが霊的なキリスト教なのです。ここでメシアを迎えれば、すべてが終わるのです。

ここに再臨主が来るということです。これを逆さまにするのです。そうして、全世界が一つになり、国家どうし一つになり、そのようになるのです。国家の中で、キリスト教の宗派が一つになり、宗派の中ですべての祭司長たちが一つにならなければなりません。このようになるべきです。宗派が一つになるためには、祭司長たちが一つにならなければならないのです。祭司長たちが一つになって、イエスと一つになるべきなのです。そうしてイエスに侍ってＡ一つになるようになれば、一時に世界が復帰されるのです。これを二千年間準備してきたのです。

しかし、これが断たれたため、すなわちこれがすべてだめだったため、どのようにしなければならないかというと、再び準備をしなければならないのです。（六六・二七七）

・再臨主のすべきこと

来られる主がすべきことは何か？　サタンに勝利すべきであり、その次にはすべての霊人たちに勝利すべきなのです。

皆さん、今日道士たちが、自分が天下に何になると誇る人たちがいますが、この堕落圏を収拾しうる内容がどのようになっているかということを知らないで、ただ時だけ願って精誠を尽くすばかりではだめなのです。

サタン圏に勝利して、その次には何に勝利すべきですか？　霊界圏に勝利すべきです。それは、見える世界ではなく、見えない世界だというのです。見えない世界と闘争をして、サタンに勝利できないようになれば、霊界に進展しうる道が生まれてこないというのです。必ず妨害を受けるために、霊界に入ろうとしても、入ることもできないし、入っても戦って勝つことができないというのです。

それゆえ、サタン圏で勝利圏を持って、その次には、霊界に入って勝利圏を備えて、雑教から全部経て最高の宗教、キリスト教が最高

の主流の宗教なら、キリスト教どうしで屈服させることをしなければなりません。それは何かというと、彼らのすべてを相続しなければならないということです。

このような戦いの過程を経て、天地に勝利的公認を受けうるようになるときに、神様から「おまえはサタンと霊界の勝利者だ！」という立て札をもらって、地上の実践路程が始まるのだということを皆さんは知るべきです。分かりますか、何の話か？（はい）。そのような歴史が残っているのです。

では、来られる主は、どんな方か？　サタン悪魔を屈服させなければならず、数多くの霊人、数多くの教祖、数多くの指導者たちは、全部一対一を中心として、神様の人格を中心として・神様の人格完成というのは、必ず神様の真なる愛を中心としてできるために・神様の真なる愛を中心として、宗教とこの宇宙がどうだということを、全部納得させることによって屈服するのです。

言い換えれば、この地上のもっと高い愛の主人公のOに吸収されようとするのが、この万有の存在だというのです。そうではないですか？　鳥たちや犬たちも、自分をもっと愛してくれる町内、自分のために与えうる町内を訪ねていくのです。同じことです。

それゆえ、愛は、真の愛を中心としてここで屈服させて、彼らのすべての権限を相続しなければならないのです。統一圏の相続を受けなければなりません。分かりますか？（はい）。それがメシアという方がこの地上で果たすべき責任です。

一度にキリスト教だけ一つになったのではだめなのです。そうして、キリスト教だけ地上で一つにすることができるかもしれませんが、霊界の背景である仏教文化圏、回教文化圏、全体の文化圏が相対的に基盤ができた地上に、この境界線が残っている限り、これを全部打破できない限り、その根となる霊界に行って一つになりうる起源を形成できない限り、地上においてそのようなすべての特色のある文化圏の統一をもたらすことはできないのです。（一〇〇・一八）

本質的に天の本然の愛を持って、この国を一つにして、世界を一つにして、天地を一つにしうるそのような責任を持った人がメシアですが、メシアがそのようなことができますか？　神様ご自身もできないのに、彼ができるかというのです。

では、このような観点で見るときに、これからメシアが持って出てくるべき宗教、神様が立てるべき宗教がどのような宗教であるだろうか？　愛を中心として、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙を統一する、という強力な力を持った宗教でなければだめだという結論が出てくるのです。「それがメシアが来てすべき目的ではないか？　それが神様がメシアを送る目的ではないか？」サタンもこのように言います。メシアがすべきことがそれだということが決定されたのです。（一三〇・一七五）

三、真の父母の必要性

一）普遍的父母も必要

本来神様は、アダム・エバを創っておいて、自分の中に父母として子供に対する実を自分が持つと同時に、子供が父母に対する実を持つようになることで、二人とも完成させうることを願ったのです。このようになれば、神様は二人とも収めて持つことができるという言葉も成立するのです。

では、なぜ父母が必要であり、なぜ子供が必要かということです。神様は霊的でしょう？分かりますか？　神様は霊的です。息子は地的です。分かりますか？　神様は霊的であり、息子は地的です。父子関係がそうなのです。そのような見えない神様が、見える息子を通じて実を結ぶことによって、見えない神様が、息子の心の中に見える神様の価値として現れるのです。それはどういう意味か分かりますか？（はい）。見えない神様が、息子の心の中にも開かれて、息子の実も結ばれ、また、父の実までも息子の中に移してやることができるというのが可能だということです。ですから、神様に対しては、神様の実も結ばれ、父母の実も結ばれるのです。同等な価値を持つということです。

では、父母をなぜ必要とし、子供をなぜ必要としますか？　神様でも愛を持ったら、相対が必要なのです。我々は子供でも愛を持ったら相対が必要なのに、この相対的関係が何かというと、天と地の関係です。垂直条件です。

この半分を切ると、半分は霊的世界であり、半分は肉的世界です。見えない神様の息子娘として生まれて、役事してみなさい。相対的極です。極から生まれて、これが大きくなるのです。もっと大きくなりながら、見えない神様も見出さなければならないと言って、初めて新郎新婦になり、夫婦が愛で一つになることによって、霊的上弦と肉的下弦が統一をもたらすのです。

父母を必要とするのは、天国を占領するためであり、父母が子供の愛を願うのは、地を占めるためだという結論が出てきました。父母の心は天の心です。この天の心をいつ知るかというと、子供のときには分かりません。父母になってこそ分かるのです。分かりますか？

二つの世界を占領して、一つにするためのこのようなことをするのが愛だというのです。このようになるとき、父子関係は栄えある父子関係だということです。同じなのです。誰も後ろに回すことができず、誰も前に回すことができません。一つです、一つ。そうでしょう？　そうするとき、栄えある父子関係だということです。分かるかいな、分からんかいな？（分かります！）

それで人々は、父母がいない人をかわいそうだと言うのです。なぜ？　霊界と肉界を占領する道がないからです。また、子供がいなければ、かわいそうだと言うでしょう？　神様の創造理想が、子供と父母が合わさって天宙を愛で結ぶよう、創造的原則モデルがそのようになっているのに、一等モデルに不合格になりうる立場にいるから、等外品になることによって、これはごみ箱に入るのです。地獄

へ行くのです。それで、子供がなく、父母がない人は悲しい人です。（二二二・三一〇）
\

二）世の中の父母と真の父母

皆さん、世の中で皆さんを産んでくれた両親は、どのような立場にいますか？　トゥルー・ペアレンツ（true parents）という言葉の反対のイーヴル・ペアレンツ（evil parents：サタンの父母）という概念に該当するのです。では「レバレンド・ムーンがトゥルー・ペアレンツなら、我々のリアル・ペアレンツ（real parents：本当の父母）はイーヴル・ペアレンツだという言葉ではないか」と言いますが、それが問題です。

堕落しなかった世の中に「おお、あれは私の息子娘だ！」と主張しうる息子娘がいましたか？　二つの親の中で、一つの新しい父母を探すために、昔の父母を捨てなければならない、そのような概念がエデンの園にありましたか？（いいえ）。なぜ、このような運命の中に生まれましたか？　なぜ、このような運命を持って生まれましたか？　その運命は、神様が創ったのではなく、サタンが創りました。悪魔が創っておいた世の中です。堕落したために。

そこでサタンは、全部分けておいたのです。父母を分けておき、息子娘を分けておき、家庭を分けておき、国家を分けておき。世界を全部こっぱみじんに分けておいたのです。そのように分けておく日が終わりの日であるのす。終わりということは末世です。これを知るべきです。

世の中の終わりの日になれば、新しい日が出発します。我々の原理で言って、終わりの日でありながら新しい理想が出発すれば、神様はどうするか？　分かれたものを全部統合してくる運動をするのです。

トゥルー・ペアレンツが何ですか？　肉親の父母と真の父母と何が違いますか？　真の父母が何ですか？　何をするのが真の父母ですか？　何の愛を教えてくれるのが真の父母ですか？　愛を中心として言うとき、その肉親の父母と真の父母と何が違いますか？　愛に対する概念が違います。愛の概念が違うのです。皆さんの肉的父母は、肉親を中心とした愛を教えてくれるのであり、霊的父母は、霊的な世界を中心とした愛を教えてくれるのです。内容が違うのです。

皆さん、肉的な父母だけいればいいのに、霊的父母がなぜ必要ですか？　堕落したためです、堕落。今まで、堕落した父母が何を教えてくれたかというと、半分以上大きいものを皆取ってしまい、自分を中心として絶えず下っていくことを教えてくれました。それで、父母の愛を中心として、このサタン世界に永遠にいるようにするための一つの決定的な線が引かれました。これを断つ道はありません。（一二九・九九）

真の父母が生まれれば、神様を中心として愛するために、真の父母が愛するすべてを神様が愛さざるをえません。それを知るべきなのです。原則がそのようになっているのです。それで「我々はあのサタン世界で生まれたが、真の父母に従おう。うちの親も、うちよりも、

うちの息子娘よりも、真の御父母様の国とその家庭がもっといい。より良いものた神様の愛だ。」このように従おうとしなければなりません。

真の父母が愛するようになれば、いくらサタンが引いていこうとしても。神様と真の御父母様の愛の圏は本来の世界の理想圏であるために、この息子娘は、サタンが取っていくことはできないのです。

ムーニーたちの中には、五色人種がまだらになって皆いるでしょう？（はい）。皆さんも父母がいるでしょう？（はい）。それは何の父母ですか？　ノーマル・ペアレンツ（normal parents；通常の父母）です。その次に、統一教会には何の父母がいますか？（トゥルー・ペアレンツ（true parents；真の父母））トゥルー・ペアレンツは、スペシャル・ペアレンツ（special parents；特別な父母）ですか、ノーマル・ペアレンツですか？（スペシャル・ペアレンツです）。皆さんの父母とは違います。

皆さんの通常の父母は、皆さんがレバレンド・ムーンに行くのを拉致していこうとし、皆さんは特別な父母に行こうとして大変な大騒ぎです。大騒ぎです、大騒ぎ。しかし、特別な父母は、目をつぶってこのようにじっとしているのです。来いとも言いません。来るなら来て、そうでないならそうでなく。

皆さんの通常の父母は、強引に通そうとして「レバレンド・ムーンは、サタンである、異端だ！」と大騒ぎしますが、真の父母は「フンフン、おまえたちがこのように生まれて…。」そう言っているのです。しかし、皆さんの父母は「我々は特別な父母だ。」そう言うのです。（一二八・一三八）

先生は、何かというと三時代の父母です。旧約時代、新約時代、成約時代の父母だということです。それで真の父母です。皆さんが「父母」の名前で祈りますが、皆さんは父母の名前で祈ってはいけないのです。父母様の名前で祈ることができる人はたった一人の方、先生しかいません。それをはっきり知りなさい。教えてあげなさい。

では、皆さんを産んでくれた父母と、真の父母と、何が違いますか？　同じではありません。皆さんの父母は、一時代の父母の位置にいますが、先生は三時代、霊界や、これから生まれる人や、すべて三時代圏内の父母の位置であるということです。それが芽と根です。ここにつながったのです。

皆さんの父母は、枝の父母です。分かりますか？　枝について芽が育つでしょう？　ですから、その父母はその時代の枝の父母ですが、先生は三時代の父母なのです。根の時代の父母にもなり、幹と枝、葉の時代の父母にもなるのです。分かりますか？

それで、いつも真の父母という言葉を忘れてはいけないのです。私が父母の名前で祈るからといって、全部先生に従うのだと三六家庭も「父母様の名前で祈ります」と言いますが、太っ腹なのです。それは原理に引っかかるのです。分かりますか？　それを知らなければならないのです。

そうなれば、どんなことが起こるか？　父と母が父母だというので、子供が思うとき、「うちの親は誰だ？　何が違う？」このように混乱が起きます。そのようになってはいけません。ですから、それは一代に対する父母であり、先生は三時代の父母を備えているのです。茎です、茎。茎の父母です。ですから、先生に対しておじいさんも父母、お父さんも父母、孫も父母、三時代、三段階です。何の話か分かりますか？（はい）。それをはっきり知るべきなのです。

それゆえ、父母様は勝手にできないのです。根を離れては勝手にできないのです。「ああ、枝の姿が歩き回ればいい」と言えないのです。

根が勝手にできますか？　芽が勝手に行けますか？　枝が恋しいのです。億千万年その枝を守るのがどれほどもどかしいですか？そうではないですか？　この位置でこれがどれほどもどかしいですか？　一つの位置に枯れて死ぬほど芽をつけて…。そこは自由がないのです。自由がないのです。ですが、枝は勝手に通えるのです、枝は。そのようなことを知らなければなりません。（一四一・二二六）

三）真の父母が来るべき理由

皆さんの願いは何ですか？　天国の人になるとか、天国の子女になりたいでしょう？　それが願いでしょう？（はい）。天国の民、天国の子女にさえなれば、天国は自然に生まれるのです。

このように見るとき、天国が民主主義の世界ですか、どんな世界ですか？　民主主義の世界というのは、これから主が来て、政権交替をたやくするための一つの方便であり、過渡期的な現象の主義です。これから地上に主が現れれば、全世界の民が主に従うのであって、誰に従いますか？　分かりますか？　民は、全部主の前に進まなければなりません。そうすれば、全世界の国家組織を一つの国家として編成するのに便利なのです。

ところで、民主主義をもってしては世界が一つになれないのです。それはすでに実験済みです。アメリカが世界を指導できるか？　アメリカ自体が滅びるようになりました。それゆえ、どうしてアメリカを生かし、アメリカが世界を支配できるようにするかというのです。それが神様のみ旨ならば、これは必ず統一教会の思想、レバレンド・ムーン主義を中心として対処しなければなりません。そうする前には、アメリカが生きる道がなく、アメリカ国民を通じて天国に行く橋を置くことができないのです。

このようは原則で、霊界がなっているのに、肉界にこのようなものが現れたら、どれほど引っかかるでしょうか？　神様を中心として、第二は真の父母が現れ、第三は真の子女が現れ、第四は真の国民を通じた真の国家が現れなければならないのです。そうなるのをどれほど待ち望んだかというのです。皆さんが地上に現れて、本然のみ旨をなすことを、霊界に行った霊人たちが、数千年間どれほど待ち望んできただろうかというのです。

この世界を主管するものは何か？　第一は、サタンを中心として、第二は、偽りの父母、すなわち堕落した父母、悪なる父母を中心として、第三は、悪なる子女、第四は悪なる国家、このようになるのです。霊界の世界や、これからの理想世界は、これを全部否定しなければなりません。

統一教会で真の父母というので、皆さんの親は「我々は何か？」と反対するのです。真の息子娘になるという子供を拉致する事件が起きるのです。それで、悪なる世の中のすべての国が反対して追い出しましたが、今は反対できません。今は、戦ってみてもレバレンド・ムーンに勝てないのです。

ですからここ、サタン圏内から脱出しなければなりません。脱出するにおいて、サタンが個人、家庭、氏族、民族、国家、世界全部を総動員して、脱出できないようにしています。最後の決戦です。（一六一・二二四）

四）真の父母出現の前提条件

真の父母が出てくるために、どのようにすべきか？　天使長を復帰せずに、真の父母が出てくることができますか？（できません）。イエスを復帰せずに、真の父母が出てくることができますか？（できません）。また、新婦を復帰せずに、真の父母が出てくることができますか？（できません！）宗教世界では、これを解決しなければならないのです。

神様が復帰摂理をしてこられるにおいて、すべての難関を解決した立場で、新しく登場した名詞が何かというと、真の父母です。これをはっきりと知るべきなのです。真の父母は、いいかげんな人ではありません。皆さんの妻に及ばず、皆さんのお母さんにも及ばず、皆さんの兄弟にも及びませんか？　皆さんはこれをはっきりと知るべきです。

真の父母は、天使長復帰ができなければ出てきません。では、アダム復帰がだめならば？（出てきません）。また、新婦、すなわちエバ復帰がだめなら出てきますか、出てきませんか？（出てきません）。これは間違いありません。（四六・二一四）

五）真の血統は真の父母を通じてこそ

我々に必要なのが誰かというと、真の父母です、真の父母。偽りの父母から出発したのを、真の父母から出発させなければならないのです。偽りの父母は何かというと、偽りの愛から、偽りの生命、偽りの血統を受けたのです。

これをひっくり返さなければなりません。それで真の父母の愛を中心として、真の生命と真の血統をどのように受け継ぐかというのです。言い換えれば、生命の種を過って受けたために、これをどのように再び本然の種を受けるかということです。

この問題を考えるようになるときに、真の父母がいなければ受けられないために、この地上にメシアが来られ、そのメシアの種、真の父母の新しい生命の種を持ってきて、再度注入して接ぎ木しなければいけないのです。これを通じて、本然の真のオリーブの木の位置に帰るのです。簡単なことです。

それで、神様は本当に我々の父母です。ですからどれほど近いですか？　縦的な父母が神様であり、真の父母は横的な父母として理想の愛を成すのです。（二一八・二二四）

アメリカ政府をご覧なさい。民主主義ですがね。民主主義は兄弟主義です。それゆえ、けんかしてるのです。最近宣布したのです。「父母がいなければならない。父母がいてこそ、けんかをやめることができる。このような悲惨な中で必要なものが父母主義である。神様主義、神様を中心とした主義だ！」と。どんな父母か？　その父母は、サタン世界にいません。サタン世界にいる父母とは正反対です。それがいわゆる真の父母というものです。

なぜ、真の父母が必要か？　サタンの愛、生命、血統の基盤を清算するために必要です。どのようにして男女がそのような位置に落ちましたか？　それは、生殖器のためです、生殖器！　本来、生殖器は愛の王宮です。そうではないですか？　今、その愛の王宮がどのようになっていますか？　愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮であるものが、そのように貴いものが人間の生殖器です。これが汚いものですか？　聖なるものなのです。

それが堕落によって、汚いものになってしまいました。本然の神様の観点から見れば、それが汚いものではなく、聖なるものです。最も貴いのです。生命、愛、そして血統がここにつながっています。このように聖なるものをサタンが汚しました。（二一八・一七八）

六）真の父母が絶対必要な理由

今日、統一教会員たちは、私を見て何と言うか？　真の父母と言います。皆さん、この真の父母という言葉は、恐ろしい言葉です。また、真の父母という言葉があるということは、偉大なことです。

神様の愛を母体とした家庭をモデルとせずしては、氏族や民族、国家は編成されないのです。家庭を拡大させた氏族、民族、国家を編成するのです。それゆえ、悪魔の世界を打ち破るためには、真なる家庭のモデルを中心として処理していかなければなりません。

我々堕落した人間は、悪なる父母を持ちました。堕落した先祖から皆さんの数多くの先祖、皆さんの両親も堕落圏内の父母です。その言葉は何か？　堕落した父母の伝統圏内の父母、先祖たちだということです。ですから、真の父母という言葉が出てきたという事実は、驚くべきことです。

一体、真の父母はなぜ必要か？　アダム・エバが完成して、本然のみ旨を成すにおいて、心情一致圏を中心として、すべてが一つになり、すべてが確実であり、すべてが完全な環境圏を持って出発できる住みかが、堕落しないアダム・エバが神様と一体理想を成す愛の圏です。そうではないですか？　その愛の圏が出てこなかったのです。

今日、愛の圏が世界に出てくる日には、統一教会という言葉が必要ありません。世界も必要ありません。その世界を捨てて、その国を捨てて、後にはこの家庭を探さなければならないのです。また来なければならないのです。ですから、すべては皆捨てても、これを探さ

なければなりません。これが重要なことです。（一三八・二七七）

我々に必要な方が誰かというと、真の父母です。真の父母は誰か？　友達よりも、先生よりも、もっと貴い方です。それゆえ、友達を捨てても真の父母について行くべきであり、先生を捨てても真の父母について行くべきなのです。

統一教会に行くと言って、友達が「ああ、おまえは俺と離別だ」と言っても、この道を行かなければならず、先生が「おまえと師弟間の離別だ」と言っても、この道を行かなければなりません。また、両親が「離別だ」と言ってもこの道を行かなければなりません。皆が一度に良いと言える道を行ったなら、そこに歴史的な新しい天地開闢が起こるのです。（三三・三三八）

人類は、真の父母が必要なのです。なぜそうか？　愛の軸をつなぎうる原則的なこのことが、歴史以来初めて起こったのです。分かりますか？　これを知るべきです。歴史以来、前にもなかったし、後にもありません。はっきり知るべきです。

軸は一つです。二つではありません。その軸が何かというと、真の愛です。今、皆さんの両親が愛することは、真の愛ではありません。それゆえ「心をつくし、精神をつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ。これが第一のいましめであり、第二は、あなたの隣り人をあなたの体のように愛せよ」と言いました。神様がそのように生きてきたのです。（一三七・一〇八）

なぜ真の父母が必要か？　これは蕩減、真の父母が、個人の責任分担を完遂することによって、個人についている世界的なサタンを追放しうるのです。分かりますか？　家庭蕩減条件、責任分担を完成することによって、サタンを自動的に蕩減復帰するのです。個人の世界的な蕩減復帰、責任分担完成をしなければ、蕩減復帰ができないのです。分かりますか？　責任分担を完成してサタンを落とさなければ、復帰ができません。（一三七・一〇六）

父母が必要なのは、神様を着地させるため、地上に定着させるためなのです。これが父母様がこの地上で苦労する理由です。（二一七・三五四）

皆さんにトゥルー・ペアレンツ（true parents；真の父母）がなぜ必要か？　新しい血筋を受けるためです。原理で見ると、旧約時代は、信仰基台時代であり、新約時代は、実体基台の時代であり、成約時代は新しい理想時代です。ですから、愛の時代として、天国の善なる血筋を受けなければならないと言いました。今までは、血筋が違うのです。総合的な血を受け継ぎました。

先生は、天国の本然の伝統的血筋を相続し、このようなすべての真理を知って、サタンと戦っているのです。このようなことが分かるので、そうるすのです。分かりますか？

真の父母は真のオリーブの新芽です。皆さんは、皆切ってしまって、真の父母の芽を接ぎ木しなければなりません。父母の芽と神様の芽を接ぎ木しなければなりません。分かりますか、何の話か？　そのようになれば、体は

ありませんが、思想は神様、真の御父母様とそっくりだというのです。ですから、皆同じ実、善なる息子娘を産むことができるのです。サタン世界を中心としては、なりえないのです。その前に、息子娘を産むと、良いことではありません。

ですから、この三時代の勝利が、どれほどものすごいか分かるでしょう？　今分かったので、三時代と三国を代表して、戦って勝つことができる者にならなければなりません。それで、皆さんが今から、ドイツ、日本、韓国、この三か国をどのように消化するか？　どのように三国を消化するか？　これを消化することができる自信がない人は、出征できないのです。何の話か分かりますか？　決心しなさい！　世の中がこのようになると、誰が思ったでしょうか？「白人と暮らすと思ったのに、黒人種と黄色人種とともに暮らす？」しかし、そのようにしなければ、いけないのです。（笑われる）

このような三時代、三数を経ていく世の中で起こるすべてのことを代表しうる、このような勝利者は、旧約時代、新約時代、成約時代を集約した存在です。三時代の勝利者になるには、すべて三段階原則、世界の全体を表象して、代表的な勝利を決定するという思いを持つべきです。そのようになりたいでしょう？（はい）。

昔のノアの一〇倍以上、もっと捧げるのです。そして、スレイヴ（slave；奴隷）になると言えばですね、皆パス（pass；通過）です。皆できるのです。ただパスするようになるのです。絶えず門が開きます。苦労しようとするのに、絶えず門が開き、食事を抜こうとするのにご飯を絶えず持ってきてくれてですね、自分が働こうとすれば、代わりに絶えずやってくれることが起きるのです。仕方なくやるのではなく、自ら志願してやるのです。自ら志願してやらなければなりません。（一二五・二〇八）

七）真の父母の決定は先見的予知予定圏

終わりの日に至っては、どのようになるのですか？　これが交替するのです。悪魔の愛、悪魔の生命、悪魔の血筋を受け継いだために、ここに神様の愛、神様の生命、神様の血筋を受け継ぐためには、真の父母が出てこなければならないのです。真の父母が一人行く人ではありません。先生が「真の父母」という名前を宣布するまで、神様がどれほど苦労し、宗教がどれほど血を流したか分かりますか？

きのう、おととい見ると、何、『格庵遺録』というのがあるんだね。『鄭鑑録』よりもっと後に出てきたものですが、見ると、もうその時から文総裁の名前が預言されて出ていましたよ。（笑い）　私はそんな人です。

私が生まれもしない前に私を見た人がたくさんいます、通じる人は。何の話か分かりますか？　先生が生まれもしない前に、どうして私を見たでしょう？　霊界は先生が生まれる前からあったから、このような人が生まれなければならないということを教えてくれるのです。それでこそ、地上で受難を受け、苦痛を受けた人たちが、霊界では先生の統治圏内に入ってくるのです。

神様は、そのような作戦をするのです。何の話か分かりますか？（はい）。苦労した人を失わないために。その方に仕えて暮らしたために、その方が後に出てきても、仕えたその方に従うようになっているのです。それゆえ、愛する神様は、私を産む前に、何十年、何百年前に、皆見せてくれたのです。

ですから、歴史的な人物でしょう？（はい）。今は、歴史的な人物といっても、韓国人、世界の人に夜中や明け方に一言言っても、白昼に聞くようにそうだと言うのであって、違うという人は一人もいないのです。

今や、皆終わったのです。戦いは皆終わりました。もう少し行くと、その時は私に反対する人をピンセットでつまみ出すでしょう。何人の奴らしかいません。その人たちも、じっと見ると、昔私と関係があった人たちです。そのような奴らが反対しているのです。なぜ？　体制が習慣性圏内に捕虜になっているから、それを抜け出せないのです。その習慣性を抜け出せなければ、地獄行きです。

神様は、誰が正しいか、正しくないかを、即座に判断して記録するようになっています。見て知らない振りをしますか？　神様はそうはしません。（二一三・二七）

八）選挙で選出できない真の父母

先生は、今まで家庭を探すのが大変で、教会を探すのが大変で、その次には、キリスト教の方向を定めるのが大変で、自由世界が滅びていくのを方向を定めるのが大変で、共産世界が滅びていくのを方向を定めるのが皆大変でした。

それで、文総裁をして、長子権が復帰されたのです。カイン・アベル歴史を知っているでしょう？　長子権が復帰されたというのです。本来、アダムが堕落しなかったら、アダム自体が長子権を持ったでしょう。また、アダム自体が真なる真の父母になります。その次には、アダム自体が王の中の王です。

人間が堕落によって何を失ってしまったか？長子権を失ってしまいました。天地の大きな事業と財産を相続する、その長子の権限を失ってしまいました。誰のために？　悪魔のために！　これを知らずにいました。それだけでなく、神様の愛と、神様の生命と、神様の血統を中心として、天地の創造主である父母に侍りうる、永遠な血族になるべきなのにもかかわらず、アダムが真の父母になるべき権限を失ってしまったことが分かりませんでした。そして、堕落しなかったら、一つの文化であったでしょう。アダム文化です。アダム一族です。こうすることによって、一つの王権が成されるのです。

民主世界というのは、杖と同じです。これは、兄弟主義です。民主主義というのは、兄弟主義です。兄弟が多いので、これを相続するように代表を立てようとするので、兄弟たちが皆集まって、より犠牲となり、より奉仕して、より伝統を立てうる人を取り出さなければならないのに、それが民主主義式です。

民主主義は、世界主義ですが、その上が父母主義です。これから、父母主義時代がやって

くることを知るべきです。父母を選挙で選出しますか？　再臨主を選挙で選出できますか？　神様を選挙で採択できますか？　できないのです。

民主主義は、不信の風潮を造成しうる基盤になっています。なぜ？　全部自分の利益のためには、ありとあらゆることを皆します。金力を動員し、人力を動員し、謀略、中傷など、ありとあらゆることを皆します。（二一一・三四三）

四、真の父母の使命

一）真の父母の立場

この世の中を見ると、帝国時代、帝王時代、王国時代があり、その次には、今の民主主義子女時代、共産主義僕の時代があります。それが皆、愛の法を中心として統治していないことを見るとき、偽りの世の中だというのです。このように結論づけることができるのです。

それなら、ここで本然の心を中心として、本然の世界が生まれたら、本然の人がいなければならないのです。では、本然の人がどこにいるか？「人」というと、女・男が皆入るのです。そういう意味でしょう？

今日、歴史は、この世界が間違いなくサタン世界であるために、この世の中で本然の人を探しているのだ、こういう結論が出てくるのです。それで今日、四〇億という数多くの人類がいますが、真の世界を指導して、天地を指導する指導者を探しているのです。
では、本然の指導者は、どのようにして来るのか？　堕落した世界の個人、家庭、氏族、民族、国家、世界を越えて来るのです。その本然の人は、どのような人かというのです。（トゥルーマン（trueman；真の人）です）。トゥルーマンですが、そのトゥルーマンが、どんな人か？　真の人の定義がどういうものかというのです。完全な愛をなす人です。簡単なのです。では、その簡単な人が何ですか？　それは、どんな人を言うのですか？（トゥルーペアレンツ（true parents；真の父母）です）。簡単なのです。それなのです。

神様はどんな方か？　神様は、真の愛の代表です。代表ではないかというのです。それよりも神様はどんな方か？（すべての人を愛することができる方です）。それを知るべきなのです。神様は、すべての存在を愛することができる能力を持った方なのです。簡単に要約すれば、大きくて小さいもの、すべてを皆愛するのです。小さなもの、大きなもの、皆入れることができるのです。そこには大きいもの、小さいもの、すべてのものが皆入るのです。分かりますか？

それは事実なのです。それを整理しなければならないのです。世の中のすべての存在、大小のものが皆入るのです。分かりますか？（はい）。それゆえ、大きなものから小さなものまで、愛することができる能力を持った方が神様だというのです。（一二四・一一七）

我々の目的地は世界のために行くべきです。いくら難しくても、行かなければなりません。世界のために行くべきであり、世界のために与えるべきです。アメリカは、世界のために与えるべきであり、自分が行く所へはどこでも与えるべきです。

真の父母は、与えるべきです。これが原則です。そこに新しいものがあり、そこに新しい世界があり、そこに新しい因縁が生まれるのです。私は、アメリカを生かすために韓国を捨てました。国を捨てたのです。（一四七・一四三）

皆さんがレバレンド・ムーンを何と言うかというと、真の父母と言うでしょう？　同じように、神様に代わった立場で皆さんの前に、すべての良いものをあげようとし、皆さんもいちばん良いものをもらおうとするのを原則として知っているため、このような道を指導するのです。これを知るべきです。（一二七・三二九）

皆さんには、バックグラウンドがあります。これは完全なバックグラウンドです。真の父母のバックグラウンドです。

真の父母は、サタンが讒訴できないのです。それで、身分証をもらうのです。分かりますか？　そこには神様がサインして、サタンがサインしなければならないのです。（拍手）それだけではありません。天使長がサインしなければならず、その次には、アダムがサインしなければなりません。分かりますか、何の話か？（一一七・一六一）

二）真の父母の道

今、世界は戦いが起こっています。これを誰が手を着けるかというのです。誰がすべきですか？　我々がすべきでしょう。共産党と戦ってですよ、倫理破綻も防御しなければならずですよ、宗教が崩れるのも防御しなければなりません。

先生が、世界の学者と神学者たちを集めて会議をし、このような問題を深刻に討議しています。アメリカの国が夢にも見ないことをしているというのです。皆さんが活動するといいますが、皆さんが難しいでしょうか、先生が難しいでしょうか？

父母は、子供よりもと苦労しなければならないという原則があるので、先生はそれを実践しています。何かお金があれば、私がそのお金で食べて暮らすのではありません。未来の後孫のために、未来の後孫に良い道を開いてあげるのです。未来の後孫を愛する心を持って、お金を稼ぐのです。

レバレンド・ムーン、真の父母は何かというと、父と同じ位置で家庭を通じ、氏族を通じ、民族を通じ、国家を通じ、世界を通じ、宇宙を通じて行くべきなのです。これをつなげなければならないというのです。それをカバーするのです。そこで、夫を愛するように人類を愛さなければならず、息子娘を愛するように人類を愛さなければならないのです。自分の父母を愛するように、人類を愛さなければならないのです。いつも、それが即座につながらなければなりません。皆さんはそれを知るべきです。（一一八・二四二）

神様の願いが何かというと、神様とともに暮らしたがる人を探すことです。神様と永遠無窮にともに暮らしたい人、愛する息子娘と額を一度付き合わせれば、千年、万年経っても目を離したくない人、そのような人を探すこ

とです。分かりますか？　神様が愛する息子に指先で一度触れたら、千年、万年経っても離したくない、そのような愛を持って暮らしたいというのです。

統一教会は、そのような原則による父子の関係を教えようとします。そのような原則による夫婦関係を教えようとします。また、そのような原則による家庭を論じ、そのような原則による兄弟を論じようとするのです。兄弟でも、一度会って別れるのではなく、千年、万年ともにいても嫌でない、そのような兄弟のことです。

それが、五色人種を通じて実践されてこそ、神様の愛の圏が成され、神様が暮らすことができると思うのです。それが易しいですか？自分がご飯を食べることがあるなら、全部彼らに食べさせてから、その次に皆食べるまで待って、待ってから皿洗いまでして、寝ることまで皆みてあげなければならない、そのようなことをする父母がいなければなりません。

今日、真の父母は、そのような道を行こうとするのです。それが、真の父母が行くべき道であると思うのです。ある時には、お母様も先生を理解できないときがあります。毎日人に会うようになると、昼の時も忘れてしまい、話そうとしてですね、夕食の時も過ぎたのにもかかわらず話をして、ご飯がすっかり冷めて、固いご飯になったのですから。また、台所では先生と何人かがご飯を食べなければならいのに、何人かが待っているので大変なのです。ご飯を食べる時間になったと、何度も通告を受けても、ただ話を続けるのです、「そう、そう」と言いながら。

先生の哲学はそうです。ご飯が問題ではありません。千年、万年、あなたと私が暮らしても嫌になりえない、そのようなあなたを発見しようとして、探そうとするのです。一二時になり、夜明けの二時になり、明け方に鶏が鳴き、空が白んできても、夜を明かしながら愛さざるをえない息子を恋しがる人です。また、娘を恋しがる人です。兄弟を探している人なのです。（一二七・二八四）

もし、真なる人間がいたら、その真なる人間は、今日歴史を代表して「人類よ！　あなたたちが行くべき真の標準はまさにこれである」と教えてあげることができる道を模索するでしょう。真なる人がいるなら、その人は、そのような道を模索するために、人類に代わってむごい犠牲となっても、その道を訪ねて立ち上がるまで叫び、教えてあげ、その道を開拓してあげるのではないかというのです。もし、その道を知っているのにもかかわらず、自分だけ行ったとする人なら、彼は真なる人ではありません。（一六三・八九）

歴史路程に真の父母という言葉を与えることができるたらどうか、考えてごらんなさい。これが嘘か、事実か、考えてごらんなさい。真の父母まで行くには、何級まで経なければならないでしょうか？

そこには、トゥルー・サーヴァント（true servant；真なる僕）がいるべきなのではないか？　サーヴァントのサーヴァント（僕の僕）のことです。そこから始まるべきではありませんか？　そして、トゥルー・ベガー

（true beggar；真なる乞食）もいなければならないでしょう。トゥルー・レイバー（true labor；真なる労働者）もいなければならないでしょう。皆いなければなりません。トゥルー・パーセキュター（true persecutor；真なる迫害者）も、十字架についた人もいなければなりません。そのようなことを嫌だと思えば、トゥルー・ペアレンツというのは、絶対出てくることができません。罪人の中にもトゥルー・クリミナル（true criminal；真なる罪人）がいなければなりません。皆いなければなりません。

その道を行くべきであり、橋を置くべきです。世の中でいちばん悲惨な位置から始まって、これを越えることができる愛の代表者がいなければなりません。そうするためには、愛の十字架の道を行くべきであるということを知らなければならないのです。それが橋です。その言葉は合うようですか？　一級、一級を真の僕から上がっていき、真の養子から上がっていき、真の息子として上がっていき、真のカインとして上がっていき、真のアベルとして上がっていかなければなりません。

皆さんが統一教会の原理を習うときに、僕の僕とか、養子とか何とかいう道を誰が行くのか？　その道は、先生が行く道です。先生は、その道を行き、戦い、生き残って、迫害するのに対して勝利したために、その橋を置いてやるのです。

それゆえ、皆さんが通りでかわいそうな人を見れば、先生がそのような立場だということを知りなさい。私が、共産党の前にそのような立場で踏まれ、拷問を受けひったくられたりするときに、腹が立ったでしょうか、腹が立たなかったでしょうか？　そうだと言って「神様、私の怨讐たちに雷を落として全部殺してしまう！」と言うと思いますか？　違います。体から血が流れる立場で、福を願ってやったのです。その人たちまでも。レバレンド・ムーンを捕まえて行こうとしました。（一一六・一一四）

三）真の父母になる前の過程

人間の堕落によって、偽りの父母が生まれました。それで、先生は、このサタンを中心とした世界の上に、これを再び探して、天国の真の父母の位置を築くための受難の道を行かなければならなかったのです。それは、父母が復帰しなければなりません。ひっくり返ったものを、父母が全部責任を持って蕩減しなければなりません。（一三一・六三）

真の父母になるためには、カイン世界を愛さなければなりません。このカイン世界が、長男の世界でしょう？　カイン世界は、堕落した長男世界と同じであるために、それが反対しても天の愛を尽くしてやったという条件を立てなければ、サタン世界が復帰できないのです。それを知るべきなのです。

長子を先に愛さなければなりません。原則的にサタンが長子であるために、サタンが「神様！　あなたがアベルを愛するには、長子を先に愛したという条件を立てるべきです。そのような愛を私に見せずには、次子を愛することはできない！」そう言うのです。これが原理的だということです。

ですから、母が行くべき道は、エバが行くべき道は、カインとアベルを一つにして、アダムに帰ることです。それゆえ、母がいくら宇宙的な立場の愛を願うとしても、そのように愛してやれないのです。そのような位置にいるのです。（一二四・七四）

先生は、愛の関係においては世界的な記録を持っています。良心においては、天宙史的な記録を持ちうる群が生まれているのです。それは、観念にとどまるのではなく、実際だということを知るべきなのです。事実というものです。歴史的な事実です。サタンにおいては、どれほど脅威であり、神様には、どれほど希望的かというのです。我々統一教会の未来が希望的でありうるしかないという、このような驚くべき位置にいるという事実を、深く深く感謝できなければなりません。（拍手）

神様とレバレンド・ムーンが、神様と真の父母が、この仕事を築くためにどのようにしたか？　鉄条網を貫いて、かき分けていき、築いてきたのです。そこには血痕と涙のあととは言うまでもなく、悲惨な拷問のむちのあとまで残っているのです。そのような過程を開拓したのです。そのようは天の父母と血の父母の心を傷めてはいけないというのが、統一教会の人たちが持つべき心の姿勢なのです。これが宇宙の宝の倉庫であるということを知るべきです。ここから地獄をなくし、天国を創ることができます。（拍手）

今日、父母の日を迎え、父母の勝利圏を宣布するのです。父母の勝利圏を悪魔がどれほど嫌い、神様がどれほど待ち望んだか！　皆さんの先祖たちと、人類がそれほど待ち望んだ勝利圏を備えるようになり、皆さんにそのまま相続してあげようとするのです。一度も使用してみることができずに、全部子供たちに譲ってやろうというこのみ旨を、皆さんがきれいに受け継いで、大きな水晶にはならなくても、結晶石のような、そのような形を備えなければならないということを知るべきなのです。（二一六・三二六）

真の父母は、二人の方がいなければなりません。二人の方がいなければ、真の父母の基準の上に立つことができないのです。そして、霊的な闘いに勝利の基準を立てたとしても、地上に実体の真の父母が立てられなければ、自体世界で勝利の基準が立ちません。いくら霊界で勝利の条件を成したとしても、地上に真の父母が立てられなければ、その霊的世界の足場に該当する足場を、この地上に築くことができないのです。

それゆえ、これから来られる真の父母は、これのために命を捧げ、地と天に代わって闘っていかなければいけないのです。このような闘いの期間が四〇年期間だということを我々は知るべきです。

では、この四〇年期間に来られる真の父母は、どのような闘いを経なければならないか？
まず、霊界で霊的な試練を経なければなりません。その次には、地上で実体的な試練を経なければなりません。そのような中でも、倒れずに中心を持って立ち上がってこそ、初めて霊肉合わせて真の父母の因縁を立てることができるのです。すなわち、六千年の摂理歴史の希望を成すことができるのです。

我々は、一九六〇年に父母の日を設定しましたが、その日はどんな日か？　霊肉合わせて真なる勝利の起点をつかむ日であり、真の父母の理念が出発した日です。それで、その日は一日に過ぎず、その日の因縁は部分的な因縁に過ぎませんが、この因縁は、天宙史的な因縁を経ていくでしょう。

そして、神様は、その日を起点にして、霊界と肉界で同時に計画を実践なさることができたということです。すなわち、霊界と呼応しうる基盤、初めて神様が闘うことができる基盤が築かれたということです。このように勝利の基盤が築かれたために、ここに一致する家庭的基盤、氏族的基盤、民族的基盤、国家的基盤、世界的基盤のみ築いておけばいいのです。

イエス様が、イスラエル民族の反対で、全体的な使命を完成なさることができず、楽園に行かれて霊的にイスラエルを収拾して、霊的父母の立場に立っておられたのと同様に、世界的な勝利の版図を地上に築くことができるときがいつかというと、四年路程であるということです。この四年路程の間に霊界と肉界が一致して、勝利の起点を立てる日には、全世界の人類が楽園以上の霊界で行軍することができる時代的な恵沢圏内に入るというのです。

ところで、このような歴史過程を経ていくのにおいて、来られる真の父母は、個人的な十字架を背負うべき段階から、世界人類の十字架を代わって背負うべきであり、家庭的な十字架を背負うべき段階から、世界的人類の十字架を代わって背負うべきであり、氏族的、民族的、国家的十字架を背負うべき段階でも、世界人類の十字架を代わって背負うべきなのです。

イスラエル民族の歴史を見ると、ヤコブはエサウとの個人的な闘争で勝利したために、個人的な復帰の条件を立てることができました。そうしてから、ラバンの家に行き、天が協助する中で、家庭的な戦いで勝利したために、家庭を見出すことができました。その後、ヤコブの後孫は、民族を形成するため、サタン世界であるエジプトに入りましたが、彼らは、そこで天の協助で救い出されて出てきて、カナンに入ることができ、カナン七族を滅ぼすことができました。このようにイスラエル民族は、カナン復帰路程四〇年を経ていきながら、初めてサタン世界に対して攻撃することができました。

四〇年荒野路程以前には、三日路程がありました。イスラエル民族は、三日路程を経た後に、初めてカナン復帰をすることができたのです。そして、イスラエル民族は、カナンに入っては、また四〇数を探して立てなければなりませんでした。

復帰摂理がアのような路程を経てきたために、今まで先生も四〇年路程を経た後、三年路程を歩まなければならず、四年路程を歩まなければならないのです。それで、我々が三年路程と四年路程を合わせれば、七年路程になるのです。

このような過程を経てこそ、初めて復帰歴史を終結し、天の主権を立てることができるのです。イエス様も、本来は三三歳から七年路程を歩んで、神様が願う父母の基準を立て、

そこから万物復帰の基準を立て、四〇歳にすべてを終結して、天のみ旨を成すべきでした。これが、イエス様の使命でしたが、イエス様がこのみ旨を成しえず、十字架に亡くなることによって、このみ旨はそのまま残るようになりました。

それで、再び来られる真の父母が、内的外的な闘いに責任を持たざるをえないので、四〇年準備期間、あるいは、闘争期間を経ていくのです。外的に四〇年準備期間ですが、内的には闘争期間であったのです。こうして、霊的に勝利の基盤を築いて、初めて地上に霊肉を合わせた実体的な基盤を築くことができる土台を備えたのです。

真の父母が中心になっていく三年路程を経て、万物復帰の期間、すなわち、四方性を備えるための四年路程を経なければならないのです。それで、七年路程として蕩減復帰を終結していかなければならないのです。

真の父母を探すまでは、歴史路程についてみると、三年路程、四年路程、四〇年路程は短い路程ですが、歴史的なすべての悲しみを全体的に蕩減復帰する期間であり、歴史的な無念さを総体的に蕩減復帰する期間であり、歴史的な十字架を全体的に蕩減復帰する期間です。歴史的なすべての悲しみと苦痛と無念さにも屈服されないという、絶対的な基準を立てずには、真の父母の日、真の父母の勝利の日は、迎えることができないのです。
天に代わって、真の父母の因縁に代わって、み旨に責任を持って、奉ってきた我々統一教会は、それでこのような試練を自ら招いて受けていっているのです。

その過程でサタン世界と分別された自分を立て、真の父母が勝利の一つの手本を取って、サタン世界を審判しうる真の子女の基準を立ててておかずには、氏族、民族、国家基準を立ててておかずには、真の父母に対する本然のみ旨を、地上に成すことができないのです。

この期間に、私とともに闘っている皆さんは、真の父母の個人的な身代わりであり、家庭的な身代わりであり、民族的な身代わりであり、国家的な身代わりです。このような父母の身代わりとして、今まで韓国各地へ出て闘っているのです。今は、世界的な舞台に向かって出て、責任を持って闘わなければならないのが皆さんの責任であるのです。

このような観点から見るとき、今までの霊界と肉界の悲しみが何か？　本来は、真の父母がこの地に現れれば、その日から天地が平和を歌うべきであり、全天宙が幸福圏内に入るべきであり、神様を中心に地上天国が成されるべきです。（一三・二八五）

私が真の父母を宣布するまで、苦労をどれほどし、悪口をどれほど聞き、監獄生活をどれほどしましたか？　六回も監獄に出入りし、こうして今年に入って真の父母を宣布したのです。（ですから、真の御父母様であられます）。ですから、世界最高のかわいそうな王の中の王が文総裁です。お母さん、お父さんが、何、どうのこうのと言いますが、いちばんかわいそうな人が文総裁です。（二一一・一六一）

先生が世界のために、どれほど多く投入したかというのです。血涙をどれほど注ぎ、汗を

どれほど流し、どれほどため息をついたでしょう。私がご飯のために、出世のために、そうなのではありません。地上世界、天上世界、神様を解放するためです。このような人は、歴史時代に文総裁以外にはいません。真の父母以外にはいないのです。

そのような背後の歴史を持っているのです。それが観念だけではありません。実戦舞台で実際圏を形成するのにおいて、それ以上の基盤を築いてきたために、世界万国が粛然と頭を下げうる段階まで来たのです。（二一〇・三六四）

四）真の父母の権限と使命

真の父母が、この地上の人間たちの前に何をしようと訪ねてきたのですか？　人間がいちばん好きなものを作ってあげるために来たのです。それが何かというと、皆さんを真の父母、小さい真の父母にすることです。（一二五・一一七）

真の御父母様がすべきことは何か？　地上世界と天上世界とのふさがった道を皆開いて、ハイウェイを造っておかなければならないのです。それを知るべきです。地獄から、霊界の地獄から、天上の位置まで、ハイウェイを…。（一三四・一二九）

真の父母は、霊界と肉界を中心とした王権を持って来られたために、それを霊界までつなげるためには、霊界に統一基盤を築いて、霊界王権基盤、蘇生的長成基盤をつなげなければなりません。そうしなくては、真の父母が地上において、完成基準を成したという位置に、霊界が同参することができません。それゆえ、その準備をしておかなければなりません。（一四〇・五四）

皆さんの父母がどこにいますか？（ここです）。レバレンド・ムーンが、なぜ皆さんの父母ですか？　皆さんを産んであげましたか？（霊的な…）。（笑い）どのように霊的な父母ですか？　一つ違うことは何か？　神様の愛、本来の愛をつなげてあげることができる父母なのです。それを知るべきです。

アダムが何か？　皆さんの先祖になりうる父母ですがね、神様の愛をつなげられなかったのです。それをつなげられなかったのです。それゆえ、皆さんの父母たちは、神様の愛につなげることができないのです。何の話か分かりますか？（はい）。

真の父母が違うことは何か？　神様の愛をつなげうる特権を持って来たということです、特権を。皆さんが父母の言葉を聞かないで、統一教会の文鮮明の言葉を聞くとは、これが社会の正義ですか、悪ですか？（正義です）。どうして？　天宙の原則がそうであるためです。（一一八・一四八）

真の父母が何をする人ですか？　偽りの子女たちを率いてA真の父母の子女にする役割をするのです。ですから、サタンはそれをできないようにするために、ぶん殴り、ありとあらゆることを皆するのです。サタン側は、悪なる人です。それゆえ、真の父母は、息子娘を消化して段階的に家庭基準、氏族基準、世界基準まで消化しようとするのです。このように言いますが、問題は深刻です。（一四九・二八〇）

先生は、何かというと、この歴史時代に、すべてを見せてあげるのです。僕の僕と僕がどのように行くべきかを見せてあげるのです。どのように行き、一つになるべきかを見せてあげるためのことを、今までしてきたのです。先生についてきて、全部成しておいてこそ、後で神様の愛まで行くのであって、それ以外にはありません。それを知るべきです。（一三五・一四二）

真の父母はどのようになるか？　人間の先祖の堕落によって、ふさがった塀を崩すことができる責任的条件を立てることができてこそ、真の父母になります。我々統一教会を見ると、キリスト教もそうであり、天主教、仏教、儒教、モスラムが皆入っています。

あの仏教もここに至るでしょう？　それが分かりますか？　皆さん、それが分かりますか、分かりませんか？（分かります）。分からなければ恥をかくのです。ここに入ってくれば、宗教が一つになりうるということです。その次には、この氏族問題、人種問題ですがね、五色人種が一つになることができるというのです。（一一八・二七〇）

原理主管圏と直接主管圏の間に塀が生じたのを、蕩減しなければなりません。個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天地の塀を全部蕩減しなければならないのです、全部。原理主管圏がサタンに占領されたのです。ですから、サタンが中間の位置にいるのです。神様が上にいて、人間が下にいれば、サタンは中間に位置しているのです。それで、サタンの塀が生じたのです。

では、どのようのこの塀を貫いて、神様の位置まで進むか？　これが宗教の目的です。そこからサタンは、いつも間接主管圏を利用するのです、天地創造のときから今まで。ですから、これをもう一度つなごうというのが神様の摂理です。それで、歴史を通じて宗教を発展させてきたのです。それがユダヤ教でした。宗教を通じて、神様のみ旨が今まで流れてきました。　そうして、キリスト教まで下ってきたのが、現在の我々の状況です。

真の父母は、この間接主管と直接主管をつなげる責任があるのです。サタンに引っかかっている個人、家庭、氏族、民族、国家、世界の塀をどのようの壊すかというのが問題です。サタンはサタンなりに、神様の継続的なこの歴史をどのように妨げようかとしています。このように、二人が対決してきているのです。粘り強くサタンが神様を相手にしているのです。

それで、先生がサタンと神様の中間で、いつもサタンを除去することをしてきたのです。どのようのサタンの讒訴を受けない位置で、この仕事をはかどらせていくか？　それで、蕩減路程が出てきたのです。それが人間の責任分担です。今まで、人間が責任分担を成せませんでした。どのようにその責任を埋めていくのかということです。

サタンは、それがメシアの責任であることを知っているのです。それで、すべてのサタン勢力を総出動させて、真の父母を攻撃したのです。それで、先生は、サタンの塀を壊すことを、個人から家庭、氏族、民族、国家、世界、霊界まで経てきたのです。メシアは、この道をすべて経なければならないのです。

これが、我々の教会の歴史です。サタンに対して、いつも原理をしっかりと掲げてきたのです、愛をもって。サタンの血統を受けて堕落した父母として始まったことを、どのように人類の真の父母の位置として復帰させるか、ということに苦心したのが神様の立場だというのです。

それで、一九六〇年に父母様の聖婚式が、歴史上に初めて起こったのです。堕落した父母から復帰が起こったのです。イエスが来たのは、アダム・エバが堕落したことを復帰するためのものなので、イエスができなかったことを全部代わりにしなければならないのです。（一三一・七〇）

五）真の父母の愛

皆さんが本当の「私」を見出したというときは、神様が自分の心にいて、自分は解放圏にいるのです。本然の神様の愛と、本然の真の父母の愛を中心として、本然の血統の歴史をつないで生まれたのが、本然の自分です。その自分を見出せば、皆入るのです。そこに真の父母がいますか、いませんか？　そこには、真の父母の愛があります。

神様の愛から自分が始まったために、自分を見出したときは、自分の中にはすでに二つの愛の本然相が植えられているのです。それが根になっているのです。自分を神様から離してしまうことができず、真の父母から離してしまうことができないのです。その肢体ですが、その肢体となった自体を否定できないのです。何の話か分かりますか？

皆さん、細胞のようなものをごらんなさい。細胞は、葉の細胞を切り取っても、根の細胞を切り取っても同じなのです。この頃は、細胞を繁殖して、植物も繁殖するではないですか？　同様です。葉にも根があり、皆あるということです。

ですから、自分が偉大なのです。神様の愛と、真の父母の愛を、皆持っているのです。神様の愛と真の父母の愛は、宇宙のすべての主管性の核です。主体性の永遠な標準です。愛を中心として、全部主管しようとするのです。ですから、自分自身がすべての代表になるのです。神様を代表することができ、父母を代表することができ、兄弟がいればお兄さんを代表することができ、弟を代表することができ、お姉さんを代表することができ、妹を代表することができるのです。そのような代表者になりうるのです。そのようになるとき、一族が歓迎するようになっているのであって、ケンカしません。反発が起きないのです。吸収されるようになっているのです。言葉は簡単でしょう。これは、原理の核です。そうでしょう？（はい）。

自分を完成しなければならないのです。道を修めるのも自分が完成するためのものではないですか？　自分の完成の位置に行くには、結局、神様を探し、真の父母を探して、接ぎ木することです。すっかり大きくなって、再び産むことはできないので、しかたなく接ぎ木しなければならないのです。それだからメシアが来るのです。

メシアが持ってくるものが何ですか？　本然の愛、真の父母の愛を、完成した男が持って

くるのです。本然の理想的な身代わりが来るのです。「私」という言葉を言う度に、これを考えてごらんなさい。ですから、解放されるでしょう？　そういうものです。サタンから解放、生活圏から解放、血統圏から解放されれば皆終わるのです。

では、解放されて何をするのですか？　悪魔の代わりに神様に仕え、文化圏を形成しなければならないのです。真の父母の生活圏を形成しなければならないのです。完成したアダムの位置に立つので、生まれた目的を完成するのです。

それゆえ、自分には真の父母の愛が宿り、神様の愛が宿るのです。その愛が、自分を完成させることができる調和の根本です。それを言い換えれば、自分には愛があり、生命があり、血統があるということです。三位一体です。（二〇二・二八三）

五、天国と真の父母

一）「天」の字と「父母」の字のもう一つの意味

天というのは、二人です。仁というのも二人です。二人ですが、二人はどんな二人が天か？　完全な愛を中心として、天地が縦的に一つになり、横的に完全に一つになりうる人間…。その二人ではないですか？　天地調和を成しうる根本は、愛から始まったのです。（一八六・六二）

天地間において、天が先か、地が先か？　地天か、天地か？　父母も、父母か、母父か？夫婦も「夫」の字と「婦」の字が逆さまになった婦夫か、正しくなった夫婦か？（正しくなった夫婦です）。地天を願う人はいません。全部天地を願います。

それゆえ、何が先になるべきか？　天が先になるべきです。その次には、何になるべきか？　地が先になるべきです。そして、父母がいますが、父母は、なぜ母が先にならず、父が先か？　そうだといって女を無視するのではないのです。

聞いてみなさい。女も良くなるのです。（笑い）父母は「父」の字が先になければなりません。「母」の字をじっと見れば、これは面白いのです。じっと見ると、このようにして、このようにして、このようにして、こうなります。（板書される）これは何かというと「女」の字を二つ持って逆さまに固めておいたものです。分かりますか？　そうでしょう？　それは本当に面白いのです。それが「母」の字です。

女という字は、本当に面白いです。これも女、これも女ですが、これを逆さまにこのようにしておいたのです。女を二人くっつけておいたのです。そうでしょう？　逆さまに持ってきて合わせたのです。そうではないですか？それが母です。

それゆえ、天の心を持った母にならなければならず、地の心を持った母にならなければなりません。言い換えれば、天の心を持った女になり、地の女を代表した心を持った女になって、その二つの心を合わせておいてこそ母になるのです。面白いでしょう？

また、「父」の字を見て「エビ（A ボジの俗語）」と言うようになると、気分が悪いのです。先生が話すようになると「アバジ」という言葉をよく使いますが、その言葉は平安道のなまりです。

父の字を見ると、このようにしっかりとしておいたのです。（板書される） これが何か？　しっかりと離しておくと「人」の字が二つです。それがしっかりと合わさっているのです。そうでしょう？　それは、一カ所に持ってきて結んでおいたのです。

それが何か？　男は男ですが、人は人ですが、一人ではなく二人を持ってきて結んでおかなければならないのです。それでこそ父になるというのです。それは何かというと、天の人と地の人が結ばれて、一つの行動をすることができてこそ、父になるということです。これを考えれば、面白いでしょう？（はい）。

また、天の字をじっと見ると、それは何か？天というのは、一人でいるのではありません。二人がいてこそ天になるのです。それゆえ、天は、二人を持ってきて合わせれば天になるのです。このようになるでしょう？（はい）。これは本当に面白いのです。

また、夫という字は何か？　これがみっともないのです。冠を被って（官職に就いて）天よりも高く上がることです。これは何か？二人が互いに好きなら、天のてっぺんまでも貫いて上がるということです。それで、夫婦という言葉が設定されるのです。面白いでしょう？（はい）。（笑い）

では、「私はこれほど美男であり、これほど立派な男であるために、私には父母が必要ない」と言う人がいますか？　「私は男であるために、男である父が必要ない。父が死ねば、私が代わりに父になるために、私が主人になるから、父は死んで母だけ残って下さいませ」と言うそんな男がいますか？（いません）。

また、「私が女なら、うちで女の家長になろうとするので、母は死んで父だけ一人生きて下さいませ」というそんな娘がいますか？（いません）。いないというのです。では、何がいなければならないか？　二人がいなければなりません。父母がいなければならないのです。（五九・一八二）

二）地で真の父母に侍るべき理由

霊界が何かというと、我々の先祖たちがアダムを中心としてコントロールする国です。また、地上天国は、その後孫を中心として、世界がコントロールされる国です。このようになるのです。何の話か分かりますか？（はい）。それを知るべきなのです。

皆さんが死んで、行くようになれば、間違いなく先祖圏内を訪ねていきますが、その先祖たちが何千万名になるでしょう？　その先祖たちを皆経ていくのです。そうして、過ったら彼らに審判を受けるだろうというのです。審判をパスする原則が何か？　これが問題です。

先祖たちが家庭に行ってパスしようとするには、どのようにしなければならないか？　この原則に従わなければなりません。あの国でも、数多くの先祖、数多くの家庭、数多くの

民族がつながっており、世界が皆つながっているのです。このような観点で評価するとき、自分が引っかからないでパスするのは、このような概念です。それが何の話か分かるでしょう？（はい）。

それは、簡単な言葉で言えば、真の父母の理想伝統です。真なる家庭は、真なる父母の家庭です。そして、真なる父母は、家庭の大統領です。では、国の大統領が何か？　その国の真なる父母の位置に立っているのだいうことです。そうならば、アメリカならアメリカが真なる父母の国になるのです。例えば、アメリカのニクソンが今大統領ならですね、このアメリカの国の真なる父母の位置に立っているのだというのです。そのような心情です。

それゆえ、国民はその大統領に母、父のように仕え、もっと一つになるべきなのです。自分の家庭を越えて、自分の妻を越えて、自分の父母を越えて、国と一つになるというのが原則であるのです。家庭よりもっと大きなものが理想だというのです。自分の家庭の真の父母よりも、国の真の父母にもっと為になる立場に立つのが理想的だというのです。これを知るべきなのです。何の話か分かりますか？（はい）。

我々がなぜそのように暮らさなければならないか？　そのように暮らさなければ、霊界に行って、行く道がふさがってしまいます。そこで歓迎しないというのです。いくらドクター・ダーストとか何とか言っても、ドクターという名が付いたとしても通じないのです。分かりますか、何の話か？（はい）。そのようになるというのです。

だから、真なる父母を中心とした、家庭的真の父母圏を凌駕する国家父母の為にもっとしなければならないのが、本来天国の理想世界の原則だということを知るべきです。分かりますか、何の話か？（はい）。その次には、国家父母圏は世界父母圏の支配を受けなければならないということです。国家父母がもっと世界父母の為にならなければならないのです。

統一教会は、何をする所か？　世界的真の父母圏のために動いていく、人間の世の中の最高の道を準備するために、家庭的真の父母、国家的真の父母までも犠牲にする道を行こうということです。これが統一教会運動です。世界の真の父母圏のための家庭理想を実現させるために、すべてを克服していくのが統一教会運動だというのです。それをするために、我々は家庭父母、国家父母をすべて犠牲にしなければなりません。

そうして、世界の中心になるときには、個人と家庭をどれほど犠牲にし、国と国民を越えてどれほど努力したかということを中心として、新しい世界の伝統の要因として記録されるでしょう。何の話か分かりますか？（はい）。（一一八・二三六）

三）天国は真の父母を通じてこそ可能

皆さん自らは、天国を成せません。それは父母様が臨まなければなりません。聖霊とともに一つになって、イエスの愛とともに和合することができなければなりません。

それでこそ、天の側のオリーブの木に接ぎ木することができる可能性があります。そうだ

としても、接ぎ木はできません、霊的ですから。再臨時代に真の父母が来て、接ぎ木してあげるのです。

天国建設は、それが基本です。公式と同じです。既婚女性を中心として見るとき、カイン・アベルと同じです。神様と息子の関係は、絶対的です。それを誰も分ける人がいません。父子の関係を誰が分けることができますか？夫婦が愛で一つになれば、その愛を誰も分けられません。誰も分けられません。神様も分けられません。永遠なものです。

皆さん、夫婦が二人一つになって、夫婦としてアダム・エバと同様に、兄妹の立場で真の父母に侍ることができる夫婦になるかというのです。神様の愛と父母の愛が、我々家庭に臨むことができるか、その愛の圏内で息子娘を生まれさせるための愛をなしているかということが、深刻な問題です。そうせずしては、家族天国が開門しないということを知るべきです。（一三七・一八六）

我々が天国に入るためには、真の父母を経なければなりません。真の父母を経ずしては、天国に入ることができないのです。そのようになるのです。そうでしょう？　それで、真の父母が出てきました。真の父母が出てきたら、真の父母を中心とした真なる家庭が生じるのです。サタン世界でも、この真の家庭まで上がるために、ここから出発するのです。闘って、これを全部否定しなければなりません。（四四・一四〇）

皆さんは、国がありますか？　国のある人たちですか、国のない人たちですか？（ない人たちです）。大韓民国の国があるではないですか？　しかし、我々が行く国は違う国です。神の国というものです。

その国を経ずしてへ、皆さんがその国の公認された市民権を新しく受けずしては、天国に入ることはできないのです。公認された市民権を持った人には、サタンが東西南北を通じても、過去・現在・未来を通じても、讒訴しようとしても讒訴できないのです。そのような市民権を持たずしては、天国に入ることができる？（できません）。（一四八・二八八）

今日、世界的に見るとき、共産主義は滅びるのです。金日成は、赤い王として四〇年を栄光の中に降りてきましたが、今は一人あわれな存在になりました。しかし、文総裁は、迫害され、呪われてきましたが、世の中で絶えず上がるのです。あちらは悪なる先祖から出発し、悪なる先祖の代表として地獄に落ちていきますが、文総裁は悪なる世界の迫害を受けましたが、世界的途上を中心として、本然的父母の名を持って、悪なる父母の位置に代わって天に帰るのです。

全世界の人間たちは、真の父母の愛を通じて行かなければなりません。その門を通じなくては、天上世界の本然的故郷の地に帰る道がありません。地獄しか行く道がありません。これをさかのぼって行かなければなりません。反対する国と戦って、勝っていかなければなりません。

そうして、今日統一教会は、世界的メシア圏勝利を受け継ぎ、国家的メシア圏を越えて、氏族的メシア圏に訪ね降りてきたのです。サ

タン世界の氏族圏を中心として、サタン家庭に入って、世界と交替しなければなりません。

今日、文総裁が提示する統班撃破は、家庭基準で真の父母の息子娘を作るためのものです。家庭で真の父母の愛に代わりうる夫婦を作り、神様が見たかった、神様の愛の中で成されるべきおじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、妻と夫、子女の基準を中心として一族、一国、一世界を失ったのを、再現させなければなりません。そうして、世界万民を自分の息子娘として抱き、愛することができる世界になったと宣布してこそ、地上に解放圏が始まるのです。（二一〇・四三）

聖書を見ると、子羊のようでなければ天国に入れないという言葉があるでしょう？　それはどういう言葉か？　幼子たちには、お母さん、お父さんしかいません。ご飯を食べてもお母さん、お父さん、寝てもお母さん、お父さん、ただお母さん、お父さん、お母さん、お父さん！（笑い）そのように育って、分別がついて、いくら嫁に行き、妻をめとっても、そのお父さん、お母さんというのは忘れられないのです。その言葉を取ることができないのです。

神様も我々のお父さんです。父親です、父親。神様は、我々の縦的な父であり、真の父母は横的な父です。それで、その父母の言葉を習って、その父母の風習を習って、その父母のすべてする通りにしてこそ、故郷にも行き、どこに行っても、その国に適合するのです。

このようなすべての歴史的な蕩減を父母様がして、何をしようというのですか？　万民を解放しようというのです。なぜ？　どうして？　人類を解放させてこそ、神様が解放されるのです。（二二五・二一）

四）天国と真の愛

真の父母を中心とした所から、理想的な歴史の出発、新しい文化の出発、新しい愛の出発が起こるのであり、新しい人生の出発、新しい家庭の出発、新しい国家の出発、新しい世界の出発が起こるのであり、天国と神様の愛の出発が起こるのです。

この真の父母という言葉が、ただ言葉で言える、ただ今まで知っていたそのような内容の言葉ではないことを、皆さんは知るべきです。このような後世と関係を結ぶため、国も滅び、個人も滅び、家庭も…。それゆえ、この位置は、数多くの、数億数千万の犠牲の祭物の血が訴えている位置であるということを、皆さんは知るべきなのです。

聖書には、アベルが血を流すことによって、カインに殺されて血を流すことによって、天に讒訴したと出ています。そのような歴史を全部解怨成就することができる立場は、この立場しかないのです。

そのような使命を受け継いで、そのような驚くべき蕩減の使命の道を、真っ直ぐに置くために集まった群がどのような群かというと、まさに皆さんです。それを本当に知るようになるなら、自分の生命がどうだ、自分がどうだという不平は、夢にも、千回死んでも言えないのです。（六七・二二七）

本来、神様の創造理想が何かというと、真の父母の名前を通じて天国の王国と、地上の王国を成すことです。これを知るべきです。真の父母の名前を持たずには、地上天国と天上天国が生まれません。今日、キリスト教徒たちに「イエスが神様の愛する長子であり、息子なのにもかかわらず、なぜ天国に行けず、楽園に行っているのか？」と聞いてみると、答えられないのです。

天上天国と地上天国は、真の父母の完成と愛の基盤を通じてのみ成されるということです。霊界に行って王国を統一するのが、真の父母の使命であって、他の人の使命ではありません。イエスが真の父母になれなかったので、楽園に行っているのです。

堕落した世界には、まだ真の父母の愛を受けた物もなく、受けた人烽ㄴく、現れた痕跡もないのです。ですから、霊界にそのような基盤が生まれても、必要がないのです。縦的であり横的な原理基準、公式がしっかりとできているのです。公式ができているということを知るべきなのです。勝手にしたらいけないのです。（一三一・一八四）

天国は男女の愛から始まるのです。分かりますか？　何を中心として？　神様の愛を中心として。垂直線をセンターにして、水平線が統一されている所が本然の天国です。それで、神様がこの中に来て…。神様がおられるのに、男女がすっとその中で核になって、これが体と心が共にぴたりと丸くなるのです。

そこで心は何かというと、垂直的な自分です。体は何かというと、水平的な自分です。明確なのです。その次に、垂直的な心は、神様であり、垂直的な体は何かというと、真の父母なのです。水平的な体は、水平的な父母であるということです。それが一つになるのです。

皆さん、心を見ましたか？（いいえ）。神様を見ましたか？（いいえ）。心は垂直的です。見えはしませんが、垂直的です。体は見えますが水平的です。分かりますか？（はい）。九〇度、これは男が好むのです。（笑い）

家庭は大宇宙の縮小です。分かりますか？（はい）。我々人の中に霊界がありますか？霊が入ってきていますか、入ってきていませんか？（入ってきています）。それが何ですか？　それが心です、心。見えない心、見える体は世界の代表です。二つがセンターを中心として、完全に四方を歩き回っても、ひと所を離れなければ、理想的な人になるのです。簡単なのです。

見えない心と、見える体が、真の愛の核を中心に一つになるとき、これが理想的な男と女、個人の完成なのです。分かりますか？（はい）。

そう、皆さんの体と心が、いつ何で一つのなるのですか？　何で？（真の愛です）。真の愛で！　どんな真の愛ですか？　垂直的真の愛、水平的真の愛！　二種類の愛です。これは九〇度です。神様から、愛と生命と血統を受け継いで構成された実が自分です。これが真の愛を、縦横の真の愛を核にして、一つになるべきなのです。（二一七・一五〇）

五）真の父母と永生

皆さんが、相手に会って愛することができる子女をもらうためには、父母に従わなければなりません。そう、子女を得たら家庭だけでなく「ああ、私が天国に行って天国の一門を率い、天国を率い、天国全体を率いることができる道のために従う」と言うべきなのです。それが、どれほど素晴らしいですか！　地上世界でも同様なのです。家庭を持って統一教会を受け、氏族を受け、統一世界を受け、一つになった世界で統一の天を受けるため行くのです。

なぜ、真の父母に従うべきなのか？　この宇宙全体を相続するために、従うべきなのです。どれほど素晴らしいかというのです。神様と真の父母は、すべてを持っているのです。（拍手）これが真の父母主義というものです。天宙主義、愛情主義、真の父母主義が、このように立派なものだというのです。

皆さん、そうじゃないですか？　み旨のために忠誠を尽くせという統一教会の輩たちは、韓国に行っても統一教会が我々の教会ではないか、南米へ行ってもそうであり、アフリカのどこでも我々の教会ではないか、そうでしょう？（はい）。真の父母が驚くべきことが何というと、その方に会って絶対的に一つになって、永遠に一つになると決心して、永遠に一つになるようになれば、この宇宙全体を神様が相続してくれるというのです。そう、皆さんは先生について回りたいですか？（はい）。

これからどのようにしますか？　先生があの国に、あそこの星の国へ行っていたらどうやって探しますか？　どこに行って、どうやって探しますか？　愛の心で「ジジジッ」と方向を合わせるのです。「先生！　お父様！」こう言えばいっぺんに当たるのです。来るなと言っても、さっと来るのです、真の父母の位置にです。それが真の父母の愛主義です。そうすればきちっと方向が一致するのです。即刻分かるのです。（拍手）

皆さんは、死ぬまで父母を恋しがりながら、生活をしなければならないのです。皆さんが父母のために会う度に、嬉しくて涙ぐむことができる生活をして、行かなければならないのです。そうすれば死んで天国に行くのです。それが原則です。

それができないために、それをハンダ付けするため、継ぎ当てるために、今日真の父母が出てきて、その運動を再現させ、継ぎ当ててそのような条件を立てたということで天国に行くのです。（一二四・四〇）

統一教会において、主人が誰かというと、文総裁です。そこには異議がありません。なぜか？　誰よりも投入したからです。誰よりも為にしました。また、師でもあります。誰も私の代わりにすることができません。いくらやってみても、私ほどできません。一日も行かないでパンクします。それゆえ、私が山へ行って地の穴を掘って入っていたら、地の穴を掘ってでも侍っていこうとするでしょう。なぜか？　文先生のような先生がいないからです。

また、真の父母という言葉を中心として見るとき、世の中の天地の福を全部持ってきて与え、永生を保証しうる証書をくれます。サタ

ンと神様の前に、立証書をくれます。それが分かります。それが分からずにいたら、自分の先祖たちが来て敬礼します。それを受けた後、その日、自分の三代の先祖がやってきて敬礼します。それが分かりますか？　驚くべき事実でしょう。（二〇〇・七三）

六）真の父母と国

我々がこれまで、なぜ犠牲になったか？　それは、氏族の父母になるためです。それはどれほど素晴らしいでしょう！　このようになって、全部これがなくなって、「統一したら何をする？　私は統一したら風呂敷を包んで行けばいい」と言うでしょうが、それはなくなるのではありません。統一させるそこに、自分が父母の位置に立つのです。

父母の位置に立てば、どれほど神聖で偉大ですか？　父母はこのように行くのである！　ピッタリ合うのです。父母はこのように行くのが正常です。父母は愛を持って、いつも犠牲奉仕するではないですか？　それを思えば、真なる父母になるために生きるというとき、気分がいいでしょう？　それは、アメリカもそうなのです。レバレンド・ムーンが、今までアメリカに対してそのように出てきました。愛を持って、アメリカの人たちを一つにするようになるときは、父母の志を持ってしたという事実を知るようになるでしょう。そのようになるとき、ここから別れることができない、一つの世界と、一つの国が決定されるのです。

ここから父母がこの位置に入ってきてもオーケー、この位置に入ってきてもオーケーです。そうですか、違いますか？　この位置に入ってきてもオーケーです。それは、全部神様を中心としてつながった父母の位置として、縦的な心情圏がつながるのです。それを知るべきです。このセンターを通じなくては、つながらないという事実を知るべきなのです。

また、その次には、垂直は垂直ですが、このような垂直になっています。これが夫婦であり、その次には家庭の父母であり、その次には氏族の父母であり、民族の父母です。もっと大きくなります。この言葉は何かというと、いちばん最初、この真の父母の伝統を受け継いだこのセンターを中心として見るとき、父母は父母ですが、一つは家庭の父母であり、氏族の父母であり、民族の父母であり、国家の父母であり、世界の父母です。後は、父母権を中心として国がセンターとなり、父母権の国を中心とした世界を作るのです。（一一八・二六七）

皆さんは、長子権と父母権を受け継いだでしょう？　氏族的メシアになったからです。そうじゃないですか？　長子権を受け継ぎ、その次に父母権を受け継ぎ、その次には王権をつなぎうる国を探すためのことをしているのです。そうでしょう？　皆さんが韓国を訪ねれば、世界の国は皆見つかるのです。これが最後です。原理的に、理論的結論がここに帰着するのです。もうこれ以上ありません。

これから、その位置に標注として立てるものがあるなら、真の父母、真の先生、真の主人、この三人の方です。真の愛を中心とした父母は、真なる先生です。真の父母だから、この世の中が知らないことを皆教えてあげたでし

ょう？　天の秘密、地の秘密をくまなく皆教えてあげました。これ以上、誰が教えてくれますか？　先生の中の先生です。神様がそうです、神様が。神様は、主人の中の主人です。先生も主人の中の主人です。王権を復帰するようになれば、主人の中の主人になるのです。三大主体思想が何かというと。真の父母思想、真の先生思想、真の主人思想です。統一教会を中心として見るとき、統一教会は真の父母の輩です。

国もそうでしょう？　国にも大統領を中心として系列があります。国家組織を見ると、教育機関の文教部があるでしょう？　これは真の先生の輩です。その次に、国家の行政部署は、神経の主人と同じです。これが全部上がるために、行政部署は主人の位置に入らなければならないのです。そのてっぺんにいる大統領が主人です、国の主人。これが三大主体思想の中に皆入るのです。分かりますか？

それゆえ、真の父母はいつも縦的な位置に立っており、その次に教育機関と行政部署は相対的です。これがカイン・アベルです。カイン・アベルと同じなのです。このカイン・アベルが完全に一つになるときは、その王権は永遠不滅の王権になるのだ。（アーメン！）何のことか分かりますか？（はい！）

金日成の三大主体思想が何ですか？　何、自主性、創造性、意識性とかなんとか言いますが、それは人間論を中心としたものであって、思想になりえないのです。神を知らない奴らが何の…。そこには本体論が抜けているのです。このようなことを知って、皆さんは全部力強く前進しなければなりません。

今、皆さんの目で国を見ることができる時が来たのです。皆さんが国を救うための独立軍、独立勇士として一線に立つことができる、この驚くべき事実は、歴史を代表して、宇宙史を代表するのです。天がこれを見るとき、どれほど誇らしく、どれほど甲斐があるかというのです。それを知るべきです。分かりますか、何の話か？（はい！）

この地上に真の父母が出てきたということは、驚くべき事実です。偽りの父母として、このようにしていたものを、全部収拾して、これがこのように出てきたのを半分を切って、この基盤を中心としてここからこの反対の父母の門を通じて、全部追い込もうというのです。そうして、地獄に行っていた道を天上に上がることができるようにするのです。

父母の門を通じなくては、天国に行けないのです。分かりますか？（はい）。キリスト教のイエスを信じて天国に行けません。キリスト教に父母の門がありますか？（ありません）。統一教会には？（あります）。ですから、天国に直行しうるのです。その代わり、自分の過去を完全に清算しなければなりません。過去の友達の名前までも、覚えてはいけないのです。嫁に行った女たちが、過去の初恋の男が思い出されてはいけないのです。ゼロの位置に入らなければならないのです。過去に自分がどのように暮らしたかという思いをする人は、天国に入れません。ゼロの位置に入らなければなりません。

それゆえ、このおばあさんと同じように、あらゆる精誠を皆集めなければなりません。そこに他のものは何もありません。ただ真の御

父母様と神様の思いしかないのです。そこに他のものが混じっては、この直線に乗れないのです。愛の道を行けないのです。そのような課題が残っているのです。

地上で祝福を受けたと、そのままで済むのではありません。祝福も、教会の祝福、国の祝福、世界の祝福、このように三段階を経なければなりません。なぜそうでなければならないか？　ゼロの位置に入るために。自分の息子娘がいるといって、その息子娘が自分の所有ではありません。ゼロの位置に立たなければなりません。その息子娘は、神様の所有であり、真の父母の所有です。（二〇八・三四二）

六、真の父母と我々

一）統一教会の教えの核心

・父母哲学

今日は父母の日です。皆さんが孝行者になるには、父母がどんな方かということを知らなければなりません。皆さんは、果たして父母がどんな方かということを知っていますか？教えられて知っているのか、本当に知っているのか、考えてみたことがありますか？

皆さんは、統一教会に来て、孝子、孝女の道を行っています。しかし、皆さんは、大小便をする幼子です。お母さんのおっぱいをくわえて吸っている幼子です。そうしながら、父母の愛を受けて育ってきました。

この世に最高の哲学があるなら、父母哲学でしょう。父母哲学が最高だということです。もう皆さんは幼子ではありません。皆さんは、全部習わなければなりません。それが父母が願うことです。

皆さんは、お母さんのお腹を通じて生まれましたが、養子・養女です。ですから、その父母の前に忠誠を尽くすべきです。そうして、皆さんが父母になれば、四位基台が成されるようになります。しかしながら、皆さんだけでは、絶対に、天の子女を持つことができないようになっています。天の子女を持つためには、明らかに天の父母がまず出てこなければなりません

ところで、このような父母が出てくるためには、長男がまず出てこなければならないのです。なぜなら、長男であったカインが天道に背いたので、神様の前に背いたカインの路程を逆さまに踏んで、神様に代わりうる位置まで上がらなければならないためです。

そうして、四位基台を成さなければなりません。そうする前まで、みなさんは全部赤ん坊です。赤ん坊です。ですから、世の中で、いくら優れていて、何がどうだという人だとしても、赤ん坊のような心情をを持たなければなりません。そうして、お母さんのお腹の中と、お父さんのお腹の中を通じて、再び出てこなければなりません。（一六・一九一）

宗教の違いはあるといえども、どうせ良い道に従うようになっています。転がっていくようになっています。教派を主張した宗教は、退くようになっているのです。これが約三年にさえなれば、そのような時代に越えていくと見るのです。間接主管の心情圏でつながれなかったのを、完成期蘇生級から始まって、

完成期完成級、完成期完成級まで七年路程に該当する期間を残したここで、父母様を中心として、今まで世界的な蕩減をしたために、今は、本来の線上で、間接主管圏内に落ちて堕落したものを、再び引き上げて直接蜉圏の平行線上に接することができる段階に入ってきたのです。これは、真の父母を中心とせずには、だめなのです。分かりますか？

今、皆さんに必要な思想は、真の父母の思想以外にはありません。それ以外にはないのです。その誰のよこしまな思想もありえないのです。金日成の思想を受け入れることができません。誰の思想も受け入れることができません。ただ、真の父母の思想だけです。一つです、一つ。（一三六・五二）

真の父母の思想が何か？　歴史を代表したこれが全部壊れたために、アダム・エバから数千代が壊れたのです。ですから、真の父母は、その数千代に代わった、一つのセンター、その言葉です。（一二三・一三八）

・真なる家庭・宇宙の中心を決定

真なる父母が出てくれば、真なる家庭が成立するのであり、真なる人の目的も成すことができるのです。今日、皆さんが知るべきことは、過去や、現在や、未来に永遠に讃えられうる、その名が何かというと、真なる父母、真の父母です。真の父母がこの地上に顕現したという事実、真の父母がこの地上におられるという事実は、何よりも嬉しい福音中の福音です。そうではないですか？

今日、邪悪な人間たちの前に、悪が主管することによって、方向を整えられず、死亡圏を成しているこの世界に、真なる父母の因縁が成立したことは、今日韓国の領土を中心とした統一教会の歴史、一七年間に成されたのではなく、神様の六千年の歴史的な苦労の功績の実として現れたものです。また、多くの人間たちが、行く所を知らず、方向を選べないこの時代の前に、行く所を探してやり、行くべき方向を提示してやることができる、一つの中心的なモデルとして現れたのが、真の父母の名前というものです。

真の父母の名前が出てくることによって、神様の創造理想世界、エデンの園から出発するべきだった永遠の未来の天国が、ここから出発するのです。その事実は歴史的であり、時代的であり、未来的なのです。それゆえ、過去、現在、未来の全体の歴史をひっくるめて見るようになるときに、この地上に顕現した真の父母という名前は、宇宙の中心を決定する中心ポイントであるということを、皆さんは知るべきです。分かりますか？

歴史はここから実を結び、歴史はここから収拾され、歴史はここから出発するのです。歴史がここで実を結ぶために、過去がここで復活するのであり、世界がここで一つの世界に収拾されるのであり、一つの世界が起源となり、新しい天国が成されるのです。皆さんは、これをはっきりと知るべきです。

今まで、歴史時代において、人類の希望がどこにあったかというときに、その希望は、未来にあったのです。考えてみなさい。人類は、希望を未来のものとしてだけ考えてきたので

す。分かりますか？　人類は、どこに向かって行くかというとき、未来に成される一つの世界に向かって行くと言ったのです。未来について、一つの世界を模索したのです。

では、偽りの人類の中で、真なる父母を迎えうる道があるなら、人類は喜ぶのではないか。それゆえ、人類の希望が何か？　それは、真なる父母を迎えることでしょう。

真なる父母は、人間たちの最高の希望であるために、真の父母が顕現すれば、歴史的伝統は未来で成されるのでなく、真の父母が顕現した現実圏内で成就するのです。分かりますか？　真の父母が現れれば、真の父母が現れた過去が、歴史の完成の出発点であって、完成を願う出発点ではないということです。言い換えれば、願いが出発する場ではなく、願いの成就が出発する場であるのです。（四四・一三二）

真の父母の家庭は、どんな家庭か？　真の父母の家庭は歴史的な実であり、時代的な中心であり、未来的な起源です。それゆえ、我々人類が暮らしているこの世の中の前に、希望の天国ができるときに、そこに伝統の本国は、真の御父母様が暮らしていかれたその生活全体になるのです。分かるでしょう？　国家の思想的な母体が何かというとき、これがその思想的な母体なのです。また、世界を創建しうる起源が何かというとき、これが世界を創建しうる起源です。分かりますか？

いつでも真の父母とともに、真の父母の子女になる因縁を中心として、三代圏を成さなければなりません。神様、父母、そして皆さん、このように三代でしょう？　横的に見るようになれば、先生、先生の子女たち、その次に皆さん、このように三代です。この三代圏を備えて完成しなければ、天地が統一されないということを、皆さんは知るべきなのです。（四四・一六九）

基地は、家庭に着地しなければなりません。家庭に着地して、方向を定めなければならないのです。すべての家庭は、父母様と神様の名前を中心とした写真をかけ、そこに四位基台が敬礼しなければなりません。それで、三代が敬礼しなければなりません。四位基台は三代です。おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、子供たち、このように三代が敬礼をしなければなりません。

父母様の名前とともに、四位基台圏を成して敬礼する所は、堕落圏内ではあません。神様が直接主管をするために、解放圏が起こるのです。それによって、天上世界に行ったすべての霊人たちが地上に来て、天使長がアダム家庭を保護するように、保護するのです。そのような時代に入ってきたのです。

昔には、カイン圏が霊界になっており、アベル圏が地上になっていました。それで、アベルがカインを救うために、犠牲となるときであったために、利用されてきました。ですが、今は、長子権を復帰したので、霊界が天使世界であり、今日統一教会を中心とした家庭がアダム圏であるために、アダム圏を後援するようになっているのであって、利用するようにはなっていません。

こうすることによって、サタンが介在して活動しうる地がなくなるのです。そうする女がいないのです。サタンは、追放されるのです。強く雄々しく先頭基準を一歩も譲らない前進的姿勢と、平行的基準を備えて、前進するのです。そうすれば、悪魔の勢力圏は、崖に落ちるのです。家庭毎に火を付けるのです。（二一一・三五〇）

・ 神様の愛と真の父母の愛

神様の愛は、縦的な父母の愛であり、真の父母の愛は、横的な父母の愛です。それを受け継いだ人間の前において、皆さんの心は、縦的な神様と父母の愛を受けた伝統的な実であり、体は、横的な真の父母の愛を受けた伝統的な実です。

この実が互いに横的家庭基盤になり、縦的中心を中心として、球形をなそうとするので、夫婦をなし、息子娘を産まなければならないのです。それゆえ、息子娘を産まなければ罪なのです。息子娘がいない人になってはいけません。骨がない肉がありますか？　それは位置が定まらないのです。（一八四・三〇九）

エバは女性の性稟、アダムは男性の性稟を中心として分立して、何でまた一つになるか？別れてから合わさることによって、神様自身が内的に抱いていた愛が、どれほど強いかということが分かるのです。そうでなければ分かりません。自分に愛がありますが、愛が分かりません。相手に会うことで分かるのです。内省的な愛を人を通じて感じてみるのです。

神様は、縦的な父であり、アダム・エバは横的な真の愛を中心とした父母です。（一八五・一八七）

神様は、愛の骨です。それを知るべきです。愛を中心として、神様の愛は「骨の愛」であり、今日人間の愛は「肉の愛」です。分かりますか？　骨と肉が一つになって、形態を整えるのです。そのような道理になっています。

神様の愛は、何の愛ですか？（骨の愛です）。例えば、皆さんに骨があるように、神様の愛は、骨の愛です。真の父母の愛は何ですか？（肉の愛です）。肉の愛です。（一八一・二〇六）

・ 父母と食口

今日我々統一教会では、信徒たちを食口と言います。今日までの歴史途上で、この食口という名詞を悟らせてくれた者がいませんでした。食口という言葉は、家庭を離れては成立しません。食口が生まれるためには、必ず家庭がなければならず、その家庭があるためには、兄妹がいなければならず、兄妹がいるためには、父母がいなければなりません。そうでしょう？（はい）。

キリスト教でも、信徒や信者という名詞を使いますが、食口という名詞は使えませんでした。今日、この世界が外的な面で、世界大家族主義を叫んでいますが、大家族を成すためには、その大家族の父になることができ、母になることができる父母がいなければなりません。その父母として来られる方が、まさにメシアです。お分かりですか？（はい）。

ところで、今日統一教会で言う食口の中に、真の食口がおり、それとは反対になる食口がいます。また、中間の立場にいる食口もいます。では、神様が立てられた天的な家庭を中心として、食口という名詞を持った真の食口はどんな人なのか？　これが問題です。

食口になるためには、まず父母を持たなければなりません。兄弟になるためにも、父母がいなければなりません。兄弟は何人かいますが、父母は一人なのが原則です。すなわち、食口は何人でも、主人は一人だというのです。そうでしょう？

では、その父母や主人は、誰を中心とした父母であり、主人か？　自分を中心とした主人ではなく、自分を中心とした父母ではありません。兄弟を中心とした父母であり、食口を中心とした主人なのです。また、悪なる世界で悪と接することができる主人であり、悪と接することができる父母であるか？　悪とは関係ない主人であり、父母でなければならないのです。

真なる善としておられる父母であり、主人であるというからには、その父母は家庭や、あるいは韓国の民なら韓国の民を主とした父母であり、主人であるのか？　違います。全世界の三〇億の人類全ｱの父母であり、一つの大家族を主にした中心でなければなりません。

では、その主人であり、父母であり、中心の位置には、誰が立つべきか？　天地を創造した神様が立つべきです。その次には、誰が立つべきか？　悪なる世の中を世界的に収拾する、神様の身代わり、すなわち、救世主が立つべきです。そうして、神様と一体となった救世主を父母として、地上に迎えることができてこそ、初めて真なる家庭を成すことができ、救世主に真に侍る者だけが、真の子女と真の兄弟になることができます。（一五・二九五）

皆さんは、神様のみ旨の道だけを歩むべきであり、兄弟でない兄弟にならなければならず、父母でない父母にならなければなりません。統一教会で父母でない父母に侍り、兄弟でない兄弟が神様を中心として血肉の情を越えることができる、このような運動が起こるのです。

ここで民族を超越し、世界を超越し、新文化創造が起こるのです。何を中心として？　神様の何を中心として？　神様の生命力を中心として？　神様の創造の能力を中心として？　神様の知恵を中心として？　知識を中心として？　違います。神様の愛を中心としてこそ可能なのです。（八三・一七七）

二）真の父母の在世時の価値

この世に、真の父母が二組いることができますか？　今日北韓では、金日成を「お父さん」とし、統一教会では文先生を「お父様」と言っています。ですが、統一教会で言うお父様と、北韓で金日成をお父さんと言うのは、質的に違います。二人が対立したのです。貴いものが出てきたために、大韓民国が貴いのです。この二人が、互いに自分が父母だと言うのです。そして、神様もその父母は自分のものだとし、サタンもその父母を自分のものだと言いながら、互いに争うのです。

これを公的に、誰が公判しなければならないか？　人間がしてあげるのです。人間が「我々の父母は、このような方でなければならない」と父母を選定しなければならないのです。「堕落した父母はこのようにして悪い父母であり、善の父母はこのようにして善の父母です。善の父母を探してきたのは神様であるために、神様が善の父母の父です。」このように立ち上がって決定づけなければならないのです。そうしなければならないのではありませんか？　それゆえ、すべてはどこに帰結するか？　真の父母に会うところです。

それで、父母が二組存在することができますか？　一度死んだ父母が、千年後にも再びパッと現れますか？　人類の父母が一度現れるのが、歴史の願いであり、国家の願いであり、思想の願いであり、摂理の願いであるために、その父母が現れる時は、後にも先にもない時であり、歴史上に一度しかない、何と言うか、てっぺんなのです。狭いといえば、どれほど狭いですか？　永遠の世界について見れば、人間の一生というものは、一息つくのと同じです。そうでしょう？

皆さんが、運があってそうなのか、福があってそうなのかは分かりませんが、このようにしてこの時代に生を持ってこの一時に会い、統一教会に入ってきました。統一教会にどのように入ってきましたか？　皆さんをこの場に入るようにするまでには、数多くの先祖たちが精誠を捧げに捧げました。数多くの人たちが滅び、善が踏まれる場で死んでいきましたが、その千人、万人の因縁を経て、回りに回ってその因縁が天につながって、日が昇る高い山のような立場に立ったために、そこで日の光を眺めて集まった人たちが皆さんなのです。

このときは、人類歴史において、愛という因縁が出てくるなら、それは初めて出てくる時なのです。それゆえ、生命の価値を賦与することができる時があるなら、その時から始まるのです。国と世界の主権をより価値のある内容で肯定させることができる時も、この時しかないのです。この時は、歴史の起源であり、希望の焦点であり、万福の出発であり、永遠の生命の発源地なのです。そうすることができる時です。

堕落した世界は、未来の希望を探してきましたが、未来にはこの時が永遠の希望の基準になっていくのです。この時を中心として、皆さんがこのように進んでいくのを眺め、この時の心情を体得していき、世界を生かさなければならないのです。この時がそのような時です。考えてみなさい。それゆえ、そのような頂上の実体として来た真の父母は、真の父母の心情の位置に属しうる規範に従って暮らさなければならないのです。それは皆さんが分からないでしょう。

その父母は、どのようにしなければならないか？　善の父母であるために、悪の父母と違わなければならないのです。悪の子供についてはどのように対するのだろうか？　歴史上のどの父母よりも厚い徳を持って対さなければならないのです。

このような悲惨な運命に処した子供に対する父母の立場に立っても、そこに引っかからないで、むしろ泣きながら追いかけて、万世の

恨とともに哀願し、たとえ互いが過ったとしても、別れるのが嫌で慟哭する姿になるべきなのではないかということです。そのような立場に立つべき真の父母ではないかというのです。違うのです。父母として、持つべき心情的姿勢がどうだったか？　そのような何かがあるのです。

そのような父母を迎えることができる子女として、備えるべき心情的な姿勢と規範はどうか？　それがなければならないのです。万国の孝行者を代表した姿でなければなりません。世界マラソン大会に出場した各国のチャンピオンと同じで、自分の氏族の前に選出されたチャンピオンにならなければならないのです。何をするためのチャンピオンか？　孝行するためのチャンピオンであり、忠誠を尽くすためのチャンピオンです。皆さんが、そのようなチャンピオンの群にならなければならないのです。このようなことを考えてみましたか？

子女はこうであるべきであり、父母はこうであるべきだという、そのような意味では、統一教会の先生という人は、根が違います。その時を逃すようになれば、億千万年の恨を残すでしょう。お金で買うことができるか、知識を持って買うことができるか？　自分のその何かを持って合わせることができるか？　絶対できません。自分が引っかかっている世界、自分が引っかかっている民族、自分が引っかかっている氏族、自分が引っかかっている家庭にいる荷物をいっぺんに背負うと言って、その場を引き継ぐことができるか？　それもできません。

共産世界を滅ぼし、民主世界を滅ぼす恨があったとしても、これは滅ぼすことができないのです。三〇億の人類を全部犠牲にしたとしても、これを侵害させてはいけないのである、と神様がご覧になるでしょう。このようの考えるのです。

このような焦点上にいる皆さんが、言いたいことを皆言うことができますか？　自分が言いたいことを皆言って、孝行者になる道理がありますか？　自分が言いたいことを皆言って、したいことをみなして、忠臣になる道理がありますか？　そうはいかないのです。（五一・三五五）

現在の立場は、どのような立場か？　真の父母を中心として、同時代に処した時なのです。これは、一生に一度しかないのです。歴史の数多くの流れの中で、魚の切り身で言えば、いちばん真ん中の切り身なのです。そのような期間です。（四六・一六八）

神様のみ旨で見れば、韓国のいちばん大きな教団の教会堂が、神様を代表して祈りを捧げるのを願うのにもかかわらず、雪の上でひざまずいて、礼拝の代わりに慟哭しながら、哀れなこの教会、この殿堂を救ってくれと祈る立場…。お分かりですか、何のことか？（はい）。この統一教会を立てるのにおいて、悲痛な歴史の摂理的内容があったということを知るべきでしょう。

ですが、今は各国が歓迎するのです。アメリカでも今、朝野で問題になっています。日本もそうです。ヨーロッパもそうです。統一教会の祝福家庭が、初めて人類の希望的な家庭

として、家庭の崩壊を防御することができ、青少年の倫落を防御することができる道だと。希望的な一つの灯台のように考えることができる段階に入ってきたのです。そうするためには、先生の血肉がどれほど削られ、恨の涙と曲折をどれほどたくさん経たかを知るべきです。

誰も祝福家庭のカップルを離すことはできません。神様がそのようなことを願うのです。それを知るべきです。その一組が祝福を受けるためには、天は多くの血族を通じて、手を経て、一時に先生に会わせたのです。それが偶然のことではありません。歴史的な事件です。

真の父母が生きる当代に、共に生きているということ、同じ空気を吸って、同じ時代に地球上で共に生活をしているということは、驚くべき事実です。それに先だって、祝福の基盤を受け継いだということは、驚くべき事実です。百万長者が問題ではありません。ここの何か大宇、現代のなにがしが問題ではありません。先生が皆さんのようだったら、今日の統一教会が生まれたでしょうか？　行く所々に監獄を目標として、直行していくのです。監獄の正門を通って、裏門に出ていくのです。皆さんはそれを知るべきなのです。

先生が暮らすことのできる家庭、先生がとどまることのできる教会、先生がとどまることのできる一族を探していくのにおいて、今は、世界の版図を皆築きました。そこに備えうる外的条件を皆築きました。世界の学者世界、ＰＷＰＡ（世界平和教授協議会）百カ所以上、言論界の組織、その次に頂上会談・これはこの世界を動かしうる頂上のクラブです・を皆作っておきました。また、心を代表した宗教圏連合、体を代表した政治圏連合として、世界平和宗教連合と世界平和連合を作ったのです。

私個人で、体と心の闘争歴史として分かれたものを、今終わりの日に来て、これを収拾せずしては、人類の生きるべき道を収拾する道理がないのであり、平和の世界に行く道がないために、一人でこのようなことをするのです。反対されながらも一人でやるのです。（二一一・三三七）

三）真の父母の苦労と我々

・真の父母は我々に絶対必要

真の父母が必要なのは、蕩減条件を立てるため、そして、愛で一つになった基準で、伝授されるためです。（一三七・一一六）

アメリカが私の怨讐ですが、私が監獄に入って、アメリカを生かすために六つの団体を作りました、ワシントン・タイムズから。この世なら、復讐を皆するはずなのに、私はそうではありません。愛さなければいけないのです。何のことか分かりますか？　そうでなくてはいけないのです。

蕩減復帰をするためには、絶対真の父母がいなくてはいけないのです。また、真の愛を中心として一つになるためには、真の父母がいなければならず、その次には、血統的に重生するにも、真の父母がいなくてはいけないのです。このように三つです。（一三七・一一四）

・我々は真の父母に接ぎ木された枝

本来人間は、横的な父母として、神様を縦的な父母として、縦横の父母の愛を中心として喜びの出発を見なければならなかったのが、起源地でした。それがサタンによって侵犯されたために、これを再び奪って付けて、真の父母の息子娘にならなければなりません。そうするためには、野生のオリーブになったために、真のオリーブの枝をもらって、接ぎ木しなければなりません。

それゆえ、宗教は接ぎ木する仕事をするのです。これがキリスト教思想というものです。それで、新郎新婦の婚姻の宴が、この地上に現れなければいけないという言葉が出てくるのです。（五八・二一九）

人類の希望が何かというと、真の父母に会うことです。そうでしょう？　歴史的結実が何かというと、真の父母に会うことであり、時代の中心が何かというと、真の父母に会うことですあり、未来の出発の基地が何かというと、真の父母に会うことです。そこに接ぎ木された皆さんは、枝になるのです。そうではないですか？

今まで、歴史時代の願いは、全部未来にありました。しかし、今日皆さんの一生を中心とした真の父母との因縁は、永遠に一時しかないのです。一度しかない貴いものです。分かりますか？　皆さんの先祖たちも持てず、皆さんの後孫たちも持てないのです。（四六・一六八）

堕落によって、サタンが人類を全部連れていきました。地獄に全部連れていったのです。それで、このように行くここにおいて、神様が一つ二つ分けるのです。この世界が、サタン世界の野生のオリーブでしたが、そこで天の側のオリーブを作りました。半分を中心として、民主世界のキリスト教を中心として、天の側の野生のオリーブを作って、世界をリードさせておいたのです。このサタン側の世界が弱化して、キリスト教文化圏が強くなれば、再臨主が来ていっぺんに切って、完全に接ぎ木して一つにして、回して立てるのです。

今日、右翼と左翼が皆滅びました。右翼左翼が皆滅びるようになったのです。誰がそのようにしましたか？　神様と真の父母がそのようにしたのです。分かりますか？　それで、このような解放を宣布すると同時に、真なる父母と一つになった家庭は、世界のどこにいても、今まで真の父母がやってきた道を相続したために、そこで強く雄々しくあれというのです。そうなれば、神様とこの宇宙が先生を保護するように、その家庭を保護することによって、一国を消化するのは問題でないのです。これを宣布するのです。（拍手）

皆さん、今からどこの信徒かと聞いたら、誇らしく宣布しなさい、「私は統一教会の信徒だ」と。（拍手）統一教会のメンバーが何かというと、真の父母に属した者だというのです。我々は真の父母の子女だというのです。けんかしないでください。けんかするのは、サタンを受け入れることです。分かりますか？（はい）。宣布して回りなさい。「我々はナンバーワン・ムーニー！　ナンバーワン神様の子女だ！」と言いなさい。そうすれば、サタンが讒訴できません。そのような考えを確固として持って回りなさい。分かりますか？（はい！）（二〇一・一二九）

我々のみ旨の帰着地が家庭です。家庭がなければ、神様の定着地がありません。すべての家庭は、真の父母を中心として繁栄するので、家庭がなければ何も成すことができないのです。木で言えば、トランク（trunk；幹）を中心として枝が伸びるのと同じです。その枝を折って挿し木をすれば、その木は繁殖していくのです。

そのような枝の使命を完遂すべきなのが、宗族的メシアです。分かりますか？　トランクからずっと東西南北に伸びて、大きくなることで、中心の根も大きくなるのです。その中心の根が大きくなるには、枝が大きくなることで比例的に大きくなるでしょう？

それで、横的に大きくなれば縦的にも大きくなるのです。横的な基準を犠牲にして、ずっとこのように根が大きくなれば、枝もずっと上がるでしょう？　み旨を中心として、熱心にすれば、このようについてくるのと同時に、横的に拡大した力が圧縮されるために、為に生きることで天宙をつなげることができるという結論が出るのです。

それで、夫婦を中心として行くとしてもですね、神様を中心として縦的な基準において横的に奉仕の生活をすれば、そこで天宙統一圏が自動的につながるのです。このように一つになれば、必ず回ります。回っても倒れません。横的な基準があるために、倒れないのです。軸を中心として回るのです。必ず回らなければいけません。遠心力と求心力が一つになることによって運動するのと同じです。

自分自身が無の境地になれば、自動的に回ります。回り始めれば軸も上がって…。下がるようになれば、自然に反動が生じるのです。それで、上がったり下がったりするのです。呼吸するように運動するのです。そのような完成型のような人間が、天上世界で家庭を成せば、天国家庭の基盤になり、そのような基盤を築くようになれば、離れません。父母が行くのにおいて、共に永遠に侍ることができるのです。

それゆえ、真の父母を中心として、心情的共鳴体を成し、その生活の体恤を基準に永遠な心情世界の基盤になっているのです。

統一教会員は、真の父母とともに、神様とともに生きていくと言うでしょう？　真の父母の愛とともに生まれるのです。愛は永遠な因縁を結ぶために、愛の因縁は絶つことができません。死ぬときまで愛を忘れられないのです。そうでしょう？

父母は死んでいくときも愛の心情を持って、息子娘を愛しながら死んでいくのです。夫や妻も同じです。愛を忘れて死んでいく人はいません。愛は、死を越えて、永遠とつながるのです。それで、愛による生命圏を受け継いだ自分、男と女というものは、愛の根本である父母を忘れてしまうことができないのです。

父母は根であり、自分自身は幹であるとするなら、息子娘は芽です。それが共に大きくなれば、氏族圏、民族圏、国家圏に拡大するのです。そういうものでしょう？（二一八・一二六）

我々のための真の父母の苦労

真の父母が真の子女を産むのが易しいでしょうか、大変でしょうか？　失ったものを探すのが、どれほど大変かというのです。個人が反対し、家庭が反対し、氏族、民族、国家、世界、天地、霊界が全部反対するのに、これを率いてきたのです。商売心でそうしたでしょうか？（違います）。何のためにそうなのですか？　愛を中心として、愛を探そうとしたためです。それを知るべきです。

今、皆さんがそのような資格を持っては、その前に立つことができないということを知るべきです。皆さんが、百回訪ねてきても門前で蹴飛ばしてしまい、千回訪ねてきても蹴飛ばしてしまうのに、皆さんを訪ねてきてこうしているという事実を知るべきです。自分が難しい逼迫を皆一手に引き受けてしているのです。

皆さんが過ったのを、全部先生に持ってきてなすりつけるでしょう？　私がアメリカに来て悪口を言われるべきこと、反対されるべきことは、何もしなかったのです。それなのに、皆さんが過って、私が悪口を言われるのです。この世なら、皆さんを捨てて行くのに、捨てられずにいるのです。

アメリカの法廷にも、私が現れなくてもいいのです、放っておいてしまって。しかし、皆さんのために…。私がいなければ、皆さんがどれほど引き裂かれるでしょうか？　それで、私が打たれて、皆さんを守ってあげ、保護してあげるのです。（一一六・一一四）

・我々に対する真の父母の期待

ここに、西洋人たち、東洋人たち、まだらの人たち、本当にたくさん集まったな。（笑い）それ、何をしにみんな集まりましたか？何をしに訪ねてきたの？　文総裁に会っても、やれるものは悪口しかありません。（笑い）げんこつしかやるものがないのに、それでもいいと、こうして来ているのです。（笑い）それが何か？　愛を探して集まるジプシーの群です。真の愛を探してくるのです。その味を知っているのです。働き蜂が密の味を知った次に、花の香りを嗅いで千里の道も遠いと言わずに、飛んでいくのと同じように、そうするのです。お分かりですか？

それで、真の父母になるのは容易くありません。私が真の父母の権限を引き継いであげるから、引き継ぐという代表者がいたら出てきなさい。私が真の父母になるというのは、考えもしなかったのに、気がついてみたら統一教会の責任を持って、行かざるをえなかったのです。それで、行ってみたら真の父母になったのです。

いちばん最初から、私が真の父母になるだろうということを知っていたら、万民が皆分かったという理論になるのです。知らずに人生の根本問題を掘り下げてみたら、ここまで来たのです。ここに曲折がこのようになったのを、皆解いてみたら、真の父母のすべての解怨成就も起こり、神様が解放を必要としているのが分かり、その神様が私によって解放されたために、絶対的に文総裁を愛さざるをえないというのです。（アーメン！）（拍手）

こうして、皆さんが真の父母に会って、何をしましたか？　しておいたものが何ですか？ご覧なさい。先生は、今まで悪魔の世界でむち打たれながらも、家庭を守り、氏族を、民族を経ながら、個人編成・家庭編成・氏族編成をしてきました。この統一教会の祝福家庭は、氏族編成です。世界的です。

それを今は、サタン世界がつかんでどうすることもできません。なぜ？　じっと見ると、暮らすのが素晴らしいのです。東洋人と西洋人とけんかでもして、会うといってもいくらも暮らせずに、さっさと離婚するというそういう場面なのに、我々統一教会の人たちは、一〇年でもいいし、二〇年でもいいし、よく暮らすのです。（二一一・三二五）

・我々がなるべき水準

皆さんの夫婦、皆さんの一家で、これが起きるようになるときは、どのようになるかというとですね、おじいさんが自分の孫に対して、おじいさんのように侍らなければならないのです。

天地開闢という言葉があるでしょう？　お父さんが息子に対して、お父さんのように対さなければならないのです。なぜ？　これは堕落した世の中であり、これは完全な復帰の世の中です。この峠、分水嶺を越えました。今まで上がるときは、世の中のすべてが全部主導しましたが、今は後ろからついてこなければならないのです。それで、国の王は、あのていたらくで行くのです。こういうすべてを知るべきです。

皆さんの家庭に三大主体思想のその実体を備えうる真の兄弟・真の夫婦、真の父母が出てこなければなりません。実体存在です。真の兄弟になってこそ、真の夫婦が出てくるでしょう？　真の夫婦が出てきてこそ、真の父母が出てくるではないですか？　真の父母の位置に立てば、真の夫婦になるのはもちろんであり、真の子女になるのです。父母の意識、主体思想を中心として、そのまま対象的な立場に立って一つになるのです。愛で一つになるのです。分かりますか？　愛だけがこのすべてを和合することができます。

すべての元素も、微々たるものも、愛の道を訪ねていくのです。神様と一体となりうる、愛と直接接することができる細胞を訪ねていくのです。それが人間です。それゆえ、愛のためには犠牲にならなければならないのです。投入しなければなりません。分かりますか？生命と財産を皆投入した伝統があるために、級の低いものは、級の高いそこに自分のすべてを投入しようとするのです。

それゆえ、ダーウィンの進化論ではなく、愛を中心として吸収する論理です。第二の価値的な内容を創造するところに創造要素として作用するようになるときは、現在の微々たるものよりも、どれほど価値的な内容が上がるかというのです。（二〇四・一二九）
これから、最後に残る宗教はどんな宗教か？それは父母の宗教です。それで、父母の宗教が出てこなければならないと、宣布したのです。「歴史が長くなったとして、父母の宗教になるのではない。それは、僕の宗教だ！庶子の宗教だ！」と宣布したのです。

公式の演説内容がそれです。「父母の宗教の使命を受けた、そのような責任者はこの壇上に、この大会の主題演説をするレバレンド・ムーンであることを、皆さんは知らなければなりません。」このように発表しても、世界が粛然としたのです。ですから、キリスト教では統一教会の文総裁が再臨主だと噂が立ったと言って大騒ぎするです。西欧社会では、人として主が来るなら、文総裁以外にはいないというのが結論です。

君たちはそんな考えもしないだろう？「文総裁が再臨主だって、私と同じなのに。韓国語を話してね。言葉はなぜ早いか？」こう言っているでしょう？　忙しい歳月を治めるから、言葉まで早くなりました。言葉が早いから、逃げるのもひっ捕まえることができるじゃないですか？　それで、言葉の早いのも研究して早いのです。日本語を話してもそうであり、英語を話してもそうで、誰も私についてこれません。

では、皆さんがそのような先生によく会いましたか、過って会いましたか？（よく会いました）。会えませんでした。よく会ったら、良くあった人たちがうまくやるべきでしょう。こうして、宗教を中心として全部統合をしてきたのです。（二一四・一七五）

四）恩寵と自覚

・真の父母という言葉は初めて現れた言葉

皆さんは、復帰摂理を習って、神様のみ旨がなされるためには、父母がいなければならないということ、堕落した父母ではなく、真の父母が来なければならないということを知っているでしょう。

この真の父母という言葉は、皆さんが考えもしなかった立場で見出され、会うようになれるそのような言葉、そのような内容ではないことを、皆さんは知るべきです。これは、歴史上に初めて現れた言葉であり、初めてそのようだということを我々が感じているこの事実は、革命が問題ではないのです。これは、歴史にない奇跡的な大事件であることを、皆さんは知らなければなりません。

皆さんが、真の父母というこの言葉を習うようになったのは、真という言葉を言うようになったのは、今まで生まれては死んだ数多くの父母たちの愛を凌駕しうる、たった一度しか存在できない愛を持って現れたために、可能なのです。そのような基準を持ったために、真の父母という言葉を言うことができるのです。このときの愛の関係は、神様の愛があるなら、その神様の愛を人間が初めて最初に受ける最高の基準であり、イエス様がこの地に生まれては亡くなりましたが、そのイエス様も想像できない、そのような最高に理想的な立場ではないでしょうか？

このような立場まで来るときは、歴史過程でその代価を払ってきたのです。真の父母の基準が出てくれば、自分が根本的に敗北することが分かるサタンは、これを成せないようにし、この時がこれないようにするために、偽りの父母の立場で、億万の手段を選ばず、数多くの人を犠牲にし、数多くの血の代価を払うようにしたのです。この日が来るまで、む

ごたらしい犠牲が払われたということを、我々は考えなければなりません。

そのような思想を持って、そのような道を行こうとするすべての信仰者たちに対して、個人的に犠牲にさせ、家庭的に犠牲にさせ、あるいは、民族的に、国家的に、世界的に犠牲にさせてきたサタンの歴史がありました。そこに犠牲になった我々の先祖たち、善を追求して真の道、父母の道を探してきた善なる我々兄弟たちが、どれほどむごたらしい血の代価を払ったかということを、我々は知るべきなのです。（六七・二二五）

・真の父母という言葉は福音中の福音

皆さんがユートピア世界を探そうとするには、どこへいくべきか？　本然の家庭の愛の圏を経ずしては、行く道がないということを知るべきです。先生が原理主管圏内と直接主管圏内を神様の愛と真の父母の愛でつないだ基準があることによって、今日霊界と肉界がその愛の橋を通じて往来できる道が生じるのです。これを知るべきです。

皆さんは、原理を習っているでしょう？　神様が本来創られた通り、直接主管圏と間接主管圏に分けられているのです。では、それをどのように一つにするか？　それは、真の愛だけが可能なのです。これが一つになるときは、人間アダム・エバが成熟するときだけです。分かりますか？（はい）。そのようなときは、自動的に水平的真の愛が現れるのです。

その位置で、「おお、あなたは私の同伴者です！」と抱き締めるようになるとき、真の愛がその組の中心に現れるのです。分かりますか？（はい）。プラスの愛が完成して現れるようになれば、マイナスはすぐに現れるようになっているのです。プラスの愛がマイナスの愛に降りてきて、運行するようになれば、真の愛の標準を描いていくのです。そうすれば終わるのです。

真の愛が現れれば、すべてが皆自動的についてくるのです。真の愛だけが、すべてに作用するのです。それで、世界がユートピア圏に転換されるのです。分かりますか？

どこから真の愛が出発するか？　真の父母から。これは、福音中の福音です。世の中にどんな良い言葉があるとしても、夫という言葉が良い言葉で、妻という言葉が良い言葉だとしても、堕落した世界は真の父母が現れなくては、真なる夫と妻が現れないために、真の父母以上良い福音がないというのです。分かりますか？　これをはっきりと知るべきなのです。（一三一・一八七）

歴史過程において、悲しみがあれば、最高の悲しみ、困難があれば、最高の困難、血の代価を払ったなら、最高の代価を払った、サの結果として見出されたのが、この真なる家庭なのです。

この真なる家庭が見出されることによって、歴史的な悲しみが解怨成就されうるために、歴史的な死の代価が解怨成就されうるために、歴史はこのような悲惨な蕩減の条件を払ってきたというのです。従って、この真なる家庭が、この血に顕現したという事実は、我々人

類においては、それ以上の喜びがない喜びであり、それ以上の価値がない価値なのです。

そのような真なる家庭を成すためには、真なる父母がいなければなりません。真なる父母がなければならないと同時に、真なる夫婦が成されなければならないのです。真なる夫婦が成されて、真なる子女が誕生しなければならないのです。

この真なる父母は、サタンの前にいかなる讒訴の条件をも残してはいけません。真なる夫婦は、サタンの前にいかなる讒訴条件に引っかかって、うめく場にあってもいけないのです。真なる家庭に属している子女もまた、サタン世界に讒訴条件を残しうる位置に立っては、真なる家庭の息子娘になりえません。

今日皆さんは、真の父母という言葉を話しており、真という名詞を知っています。この真の父母という言葉は、歴史時代において、誰も呼んでみることができず、誰も考えられませんでした。しかし、今日、我々は呼ぶことができ、知ることができ、侍ることができる栄光の位置に立っています。このように我々は、歴史時代の誰よりも幸福な位置に立っているのであり、歴史時代の誰よりも高貴な位置に立っているということを、皆さんは知るべきです。

真の父母という名前とともに、歴史において今まで苦労してきたし、真の父母の勝利の基盤を備えるために、歴史的な数多くの犠牲の代価を払ったということを考えるようになるとき、真の父母という名詞こそ、今日我々人類に福なるみ言中の福なるみ言であるということを知るべきです。

真の父母というその名前四文字を考えるとき、真の父母によって歴史が治められ、真の父母によって新しい世界に入りうる起源が生まれ、真の父母によってサタンを屈服させることができる内的な因縁が決定し、真の父母によって外的な世界を占領しているサタンを征服して、初めて神様を解怨成就してさしあげることのできる中心が決定されるのです。それゆえ、真の父母とともに暮らし、真の父母の命令に従って行動することができる、この驚くべき恩賜に、皆さんがまず感謝しなければなりません。

自分の人生を皆犠牲にする恨があっても、真の父母の行く道に同調できる道があるなら、我々人類の前に、これ以上の幸福なことがないということを知るべきです。真の父母の命令に従って、敵陣に向かって行進する兵士がいるなら、彼は人類が願う最高の希望の頂上の中において、天と地が直視し、歴史が注目する神々しい勇士であることを、我々はよく知るべきです。

皆さんが真の父母の心情に代わって、あるいは、国家の民族に代わって戦うことができる立場に立ったとするならば、その心情によって、国家なら国家、民族なら民族が初めて幸福の園の門を開くことができ、行進して入り、勝利の栄光の場に参席することができる希望の国民と国家が顕現するという事実を考えるようになるとき、真の父母の心情の旗を掲げて立ち上がる皆さんこそ、歴史を呼び起こすことができ、希望の世界をもう一度審判する

ことができる旗手であることを、皆さんは自覚するべきです。（四三・一四三）

・真の父母という言葉は恐ろしい言葉

統一教会での恐ろしい一つの教えが何か？
それは「真の父母」という言葉です。この言葉は、神様も恐がる言葉であり、サタンも恐がる言葉です。我々人間は、サタン圏内にいる人間であるために、真の父母を中心として見るときに、彼に従っている人たちは、彼のみ言によって審判を受けるのです。

このような方が出てこなかったらいいのに、出てきたために審判しなければいけない立場に立つので、神様がその方の言葉を聞いてあげるのです。また、サタンがなぜ真の父母という言葉を恐れるか？　この言葉を信じて従おうものなら、自分のすべてが破壊されてしまい、破綻してしまうためです。それで、彼には極めて恐ろしい言葉になるのです。

サタンは、いつも真の父母の行く道を妨げ、倒れるのを願い、悪くなるのを願う立場にいます。ですから、皆さんがこの道に従って行くのに、どれほど信じて従うかというのが問題になるのです。皆さんが、そのような先端に立ったなら、一歩一歩、行動一つを千年以上の精誠を尽くして、感激しながら行こうとしないといけないのです、それが今日皆さんの行くべき道であることを知るべきです。（六五・二七七）

私は、真の父母の名前がどれほど恐ろしいかということをよく知っています。私は平穏な位置を探すために生きる道を取ったのではなく、このみ旨の使命を完結させるために、今まで闘ってきました。

過去を回想すれば、事情も多く、無念なこともたくさんありましたが、あなたの事情、あなたの無念さに比べられないことが分かったので、ひざまづいて涙をあなたの前に見せられない、恥ずかしい姿であることが分かるのでございます。そのようなことを感じる私の心をお分かりになり、この日を期して天上世界と地上世界の門を開いてくださいませ。（一三四・一一六）

問題は何か？　真ということ、すなわち真の父母ということです。真の父母が何か？　真の父母という言葉がそんなに簡単な言葉ではありません。いちばん恐ろしい言葉です。その言葉がどれほど恐ろしい言葉か分かりません。

この真の父母という言葉一言のために、歴史が左右されます。この言葉を見つけ出すために、今まで数多くの先烈たちが犠牲の道を行きました。連続的な血の闘争を経て、身悶えし、絶叫しながら希望を抱いて探し出した名前が、真の父母という聖なる名前です。

真の父母の前には、真の子女がいなければなりません。それで、皆さんが真の子女になりましたか？　考えてみて下さい。皆さんが真の子女ですか？　真とは、過去にも現在にも未来にも変わらないものです。（三三・一〇九）

・その価値は限りない

神様の摂理の目的が何かというと、一つの焦点です。神様の理想が実現される場も、まさ

にその場です。我々が、失ってしまった父母、失ってしまった真の御父母様に会うことができる所も、まさにそこです。それで、その基台がすべての中心です。その立場、それが「真の父母」というものです。歴史上に多くの立場がありましたが、この立場が最も価値のある立場です。

それがどれほど重要なものなのか考えてみなさい。すべての成人たちがこの基台、この問題のために戦いました。神様がこれを重要に考えられ、霊界にいるすべての霊人たちも、そのように考えています。それゆえ、この地上のすべての人類も、これを重要と認識しなければなりません。

皆さんは、これの本当の価値を知ることができませんでした。これは、数千個の国土をやっても替えられません。国土ほどのダイヤモンドをやっても替えることができません。皆さんは替えることができるだろうと思いますか？　替えられないのです。アメリカ全体を神様に祭物として捧げるとしても、皆さんはそれを得ることができません。

一度考えてみましたか？　皆さんの目で直接その立場を見ることができるなら、どれほど幸福でしょうか？　また、見ることができなければ、皆さんはどれほど不幸な人になるでしょうか？　もう一度じっくりと考えてみなければなりません。それで、神様の目、すべての霊人たちとすべての人たちの目が、ここに焦点を合わせなければいけません。

このような観点で歴史を見るようになれば、歴史というものはないのです。歴史はこれと何の関係もありません。この立場は、堕落する以前の人間の最初の先祖のための立場であるために、これ以後にはいかなる歴史も、堕落したいかなる歴史もありえません。

そうであるなら、民主主義の終末はどのようになるでしょうか？　民主主義もこのような観点によって、真の御父母様によって認められうるということを考えてみるべきナす。自らそれを判断してみなさい。国民学校の子供でも一〇〇点をもらうでしょう。笑うべきことではなく、重要な問題です。では、共産党がどのようになるでしょうか？　彼らには歴史がありません。幼子のように人生観もなく、何らの主観もありません。

ここから新しい内容が出発するでしょう。すなわち、すべての中心、すべての内容、そしてすべての結果がここから出発するでしょう。ここに参与することができる者たちが、地上の最初の勝利者になるでしょう。ここから、神様の愛を中心として、家庭を成し、サタンの主権を追い出し、この地上に新しい天国を建設するために、出発することができます。また、ここから歴史の実が結ばれるようになるでしょう。この立場が全世界の中心点です。

この位置が未来のための出発点になるでしょう。ここから過去の歴史の完成が成されるであろうし、現在の歴史の完成が保全されるであろうし、未来世界の完成が始まるでしょう。この点、この位置をつかむことができるなら、皆さんは一人の人間としてすべてを征服した征服者になることができます。そうであるようですか？（はい）。

では、価値がどれほど大きいでしょうか？
それがどれほど素晴らしいもので、皆さんがそれをどれほど愛し、どれほど讃え、どれほど尊重し、また、どれほど好むようになるでしょう？　この位置は、最高に高い位置になるべきであり、歴史において最高の高い位置に置かれなければいけません。そのすべての偉大な人たち、彼らがいくら偉大だとしても、これには比較されえません。皆さんがこれを見るようになれば、間違いなく嬉しくて感激するでしょう。

皆さんが眠る間に、夢の中で踊りを踊ったことがありますか？　皆さんがこの場、この位置を思うようになれば、その度に皆さんがそのような感情を持つようになって、眠りながらでも踊りを踊ることができるようになります。皆さんは他のどんな位置よりも、皆さんの生命や、他のいかなるものよりも、この位置に心がもっと引かれるべきです。再び見たがり、共に暮らしたがり、これなくしては生きられないというそのような感情を持つべきです。説明を聞いたから、真の父母がどれほど貴重かということを理解したでしょう。
（五二・九五）

父母になるには、天地が和答（互いに応じて答えること）しなければなりません。天上世界に行って神様に勝ってこなければなりません。何のことか分かりますか？　アダムが神様が違うというのを「イエス」と言って、事実を中心として事実を事実でないことにしたから、事実でないことを事実として肯定させられることをしなくては、本然的基準に入れないのです。

天地間に真の父母になるためのこのような内容を、実体的に解決しうるその内容が、天地を明らかにするのであり、すべての歴史的な曲折を解放させるのであり、神様の心中に打ち込まれている釘を抜くのです。神様が願う愛の解放は、このような息子娘を抱いて愛しながら、喜び、踊り、笑うことです。すべて全部が歓喜に満ちて、千年万年その喊声が、被造万物から全天地にいっぱいにならなければならないのではないですか？

否定する過去に、肯定的提示を持たずしては、地上に来られないのです。どれほど深刻ですか？　天上世界で孔子と釈迦とイエスが集まって、このような試験をするのです。それを皆押さえつけてしまい、神様の前に来て、談判するのです。

神様の創造理想には、言葉で言えない心情があります。このみ旨をアダムが完成期に自ら悟って、悪魔を屈服させなければならないのです。解放の主権者にならなければなりません。万国の統治者であり、万の救いの主人であり、万の兄弟の長男権を備えうる人がアダムなのです。

サタン世界が反対することとして、四〇日間霊界が混乱の中に陥るのです。そこでは、神様が審判官であるために、神様から正義の判定を受けなければなりません。そこで文総裁の勝利の判決を受けて、地上に来るのです。
（二一五・八六）

・感謝すべき我々

神様に対する感謝をどのように捧げることができるか。真の父母に対する感謝をどのように捧げることができるか。我々の教会に対する感謝をどのように捧げることができるか。皆さんを再創造してくれたことに感謝をどのように捧げることができるか。

私が経てきた後には、真の家庭が現れるのです。一段階もっと進めば、真の氏族が現れ、一段階もっと進めば、真の国家が現れるのです。一段階もっと進めば？（真の世界です！）一段階もっと進めば？（真の宇宙です）。一段階もっと進めば？（真の天宙です）。一段階もっと進めば？（神様です）。神様、これが我々の最終目標なのです。

それで、我々がどのように神様を解放しますか？　既成教会がそれを考えてみましたか？彼らが我々の生命をどのように救いますか？だめです。だめなのです。我々の目的とする基準とは違うのです。我々は、もっと高い基準、「私の手でどのように神様を解放しうるか？」という基準に進むのです。

人間は、堕落した以後にサタンの血統を受け継ぎました。これが問題です。数千万代を経て、神様の血統でないサタンの血統を受け継いだのです。それで、どのようにこのサタンの血統を清算するのか？　アダムとエバが堕落した以後に受け継いだ汚い血統を、どのように清算するのかというのです。
そのような内容を清算するために、真の愛、真の生命、真の血統を中心として現れられた方が真の父母です。サタンの血統を肥料にして、生命を育ててきたのです。しかし、新しい復活の時代には体が神様の愛と生命と血統を中心として、真の愛を肥やしにして育ててきたのです。そうしながら、一方は消え、一方は繁栄してくるのです。分かりますか？
ここから神様が共におられ、サタンとは永遠に離別するのです。

神様の心の中に苦痛があるとは、誰も思わないのです。歴史上に現れ、今ここに先生を通じて現れ、その深い使命を明らかにしたから分かるのであって、そうでなければ分からないのです。そうではないですか？　どれほど驚くべき事実かというのです。イエス様もそれを知らず、分かったとしても心にあることを言うことができなかったのです。また、宗教指導者のうち、誰もそのように隠された宇宙の秘密が分かりませんでした。歴史上初めて、世界の前に先生が現れ、宇宙の秘密が明らかにされたのです。分かりますか？

ここに座っている人たちは、理解するでしょう。この地球上にどれほどものすごい結果が現れたかということです。サタン世界が今までいくら強かったとしても、レバレンド・ムーンは皆消化するのです。問題がないというのです。分かりますか？

今から個人的基盤でなく、国家的基盤に方向を変えなければならないのです。分かりますか？　国家的基盤のことです。一国家の指導者も、過去を悔い改めれて振り返れば、神様が許されるのです。それは神様の新しい伝統に属するのであり、新しい血統を意味するのです。そうでなくてはサタンを分立することができないのです。分かりますか？　それはまた、統一教会の祝福式以前にある血統転換式を意味するのです。

皆さんは、そのような礼式に参加したでしょう？　自信感を持ちなさい。自分自身は神様の真の愛と真の生命と真の血統を受けた人であり、その中心はお父様であるのです。真の御父母様は韓国人ではなく、皆さんの父であり、その父の真の愛、真の生命、真の血統を中心として横的につながっているのです。分かりますか？　天地創造のときに堕落しながら、その三人が堕落世界の汚いものとつながりました。

しかし、今は、神様の真の愛、真の生命、真の血統を中心として、横的につながっているのです。これは一八〇度転換したのです。サタン側とつながったアメリカや、この世界には、希望をかけるなというのです。分かりますか？　全世界の人類が、初めから最も邪悪なサタン側の父母についていったのです。しかし、今は初めてその方向が一八〇度転換したのです。分かりますか？　そこは、始まりの点ですが〇点です、〇点。そこには意味も、存在も、観念も、伝統も、文化もないのです。これが再創造です。

神様が、初めにすべての環境的なものを創造されてから、土と水と空気で一つにして人間を創ったと言ったでしょう？　そのとき人間はなんらの観念もなかったのです。分かりますか？　〇点なのです、〇点。ここにのサタンの伝統から一八〇度振り返るのです。
機関車が方向を変える所があるじゃないですか？　人や貨物を積んで一八〇度方向を変える、そのような〇点です。許しがなければ出発もできず、ブレーキもかけられないのです。振り返ればまさに〇点です。一八〇度振り返るのでしょう。「私は日本人だ！　私はアメリカ人だ！　私はハーバード大学卒業だ！」そのようなことは役に立たないのです。〇点です、〇点。観念もなく、伝統もなく、汚い影響を及ぼす文化背景もないのです。神様は、そのようなものを願われないのです。

一八〇度振り返って生まれ変わるのです。分かりますか？　生まれ変わること？（はい）。生まれ変わるということは、再び生まれるということです。その最初が父母です、国ではなく。その次は、兄弟です。では三番目は何ですか？　夫婦、夫と妻なのです。四番目は？（子女です）。それが問題なのです。

神様は、三世代を願われるのに、この三世代を持てませんでした。一代は神様、二代はアダムとエバ、三代は？　今まで持てなかったのです。今まで神様を中心として、人類が繁栄できず、ただサタンに属すようになったのです。そのサタンは愛の怨讐です。分かりますか？

どのようにこの血統を清算することができるか？「私」は日本人でもなく、どの国の人でもない、神様の民として生まれたのです。何を中心として？　神様の愛、神様の生命、神様の血筋、この三つの根源が標準なのです。

ですから、感謝するのに、何を感謝するのか？　豊かに暮らすのを感謝するのではありません。十字架についたことを感謝すべきなのです。戦争で負けた敗残兵が倒れ、血を流し、腐って臭いがしているなら、それを誰が葬りますか？　それを埋める人が誰ですか？　誰が埋めてやるでしょう？　誰が敗残兵を教育して再び正規軍にするでしょう？　また、

食べるものがなければ、その人たちをどのようにするでしょう？　ただ殺してしまうのですか？（違います）。勝てば皆良いと思ったのに、もっと大きな十字架を背負うようになるのです。それを皆解決してから、それを再び建設した次にこそ、自分の時が来ることを知るべきなのです。自分が新しい家庭を立て、新しい国家を立て、新しい世界を立てたあとにこそ、自分が幸福に暮らすことができるのです。分かりますか？

いくらそれが難しいといっても、永遠の世界、本故郷に汽車のレールがあるなら、このレールとこの地に暮らすレールと同じでなければなりません。霊界に入るレールと同様に、同じでなければなりません。皆さんはどうですか？　現在自分が暮らしているレールが、霊界のレールと同じだと思いますか？　自信がありますか？　ただそのまま神様の前に走っていけますか？　そのレールを同じようにするために、真の父母が必要なのです。分かりますか？（二一五・一七一）

・ 真の父母との因縁は宿命的な業

我々人間は、百パーセント愚かな立場に立っていますが、百パーセント以上知恵深い神様が友達になり、無限の霊界の先祖たちが、自分の同伴者になり、後援部隊になっています。そのようなことを考えるとき、ありがたいのです。自分は一線で冒険の場、ゴリアテの前にダビデが立ち上がるときのその気分が本当よくに分かります。神様が保護されて、百戦百勝することができるのです。「打てばおまえが破れ裂けるのであって、私が破れ裂けない！」という心を持って暮らしてみたら、本当にそのようになったというのです。

神様が私をこのように育てたのと同様に、私も皆さんをそのように育てるべき責任があります。それゆえ、皆さんが智者にならなければならない、という宿命的な課業を相続しなければならないというのです。因縁的な課業ではありません。何の課業ですって？（宿命的な課業です）。宿命的です。

真の父母と真の父母の子供ということは、永遠不変の宿命的な業です。これを誰も分けることができないのです。千年万年その道を行かなければなりません。行くべき道は二つの道ではなく、一つです。他の方法がありません。秘法がありません。その道を行かなければなりません。（二〇三・一九二）

・ 責任を持つべき我々

霊界に行き、一二の真珠門を経ていくためには、どのようにすべきか？　地上でどれほど天の民をサタンから探して回って入ってくるかというのが問題です。

そうするためには、涙と血と汗を流さなければなりません。再創造の真の愛の心情を中心として、サタンの父母以上、サタンの夫、妻、息子娘以上の心情を投入して、涙とともに、血と汗とともに交差するその過程を経ずしては、天国の自分の民を所有することができません。この数の比例に従って、あの国の栄光の位置に、神様の前に近く行くすべての条件の成立がより分けられるということを知るべきです。

文総裁は、一生を経て、国だけでなく世界を…。なぜ？　霊界に行っている人たちまでも、全部真の父母の恵沢を受けるべきです。ダンベリーの監獄に行き、二月一日、地獄と天の門を開く式をしました。それを開門するすべてのことを準備しなければいけません。ですから監獄も行かなければならないのです。

このように、千辛万苦恨の峠を越えに越えなければならず、大洋が広いといえばそれを泳いで渡っていくのと同様に、山が高いといえば、裸足でも白雪が積もっているヒマラヤ山頂を越えなければなりません。そのように、歴史の悲惨、それ自体を越え、すべての勝利の覇権的基盤を立てたという事実が驚くべきことです。悪魔自体がついて来ようとしても、ついて来れなくて、離れまいとしても、離れざるをえない受難の道を経てきたということを知るべきです。

自分の家、自分の息子娘が厳粛な場にいるのです。第二の神様です。おじいさん、おばあさんは、昔を代表した神様に代わり、お父さん、お母さんは、この時代を代表し、息子娘は未来を代表したのです。この三時代を過去、現在、未来の神様の顕現者として侍るすべを知るべきです。息子娘をたぶらかし、妻をたぶらかし、夫をたぶらかし、父母をたぶらかす人は、地獄に行くのです。為の愛、生命までも投入して忘れることができる真の愛の核・・Sとして、家庭と国家と天地がつながるようになっているのであって、それ以外にはありません。

そのような核を通じた心情的内容を持って、天国の民をどれほど復帰するかという問題が、今日私の国の統一の解決の秘訣です。他の所へ行って、今日の私の国の統一と同様に、その国を同じ立場に立って、あらゆる精誠を尽くし、どの国にも負けないよう、まず天の前に奉献しなければなりません。

旧約時代は物、新約時代は息子娘、成約時代は自分の夫婦、その次には神様です。堕落で神様を地上に迎えておけず、サタンを迎えておいて、神様と離別したから、今は神様を迎えておいて、全部つなげなければなりません。

それゆえ、皆さんの物は皆さんのものではありません。物は、旧約時代に該当するのであり、息子娘は新約時代に該当するのです。旧約時代には、物を犠牲にして、息子娘の行くべき道を築くためのものです。そして、来られる再臨主、真の父母がこの地に来て苦労することは、神様をこの地に迎えるためなのです。しかし、サタンを地に迎えたので、これが地獄です。神様を迎えなければなりません。これは真の愛でしなければなりません。

再創造は、投入して投入して忘れた、真の愛の起源を通じて、神様を迎えることができる物質と子女と自分の実体全部を結託させて、このすべてが、真の愛とつながった神様のものであるという言葉が設定された以後に、再び分配されて、子女の所有時代につながるのです。父母の所有、子女の所有時代に分配されるのです。（二一一・三五二）

五）我々のすべきこと

・我々の責任

復帰の道を行く皆さんは、個々人ですが、皆さん個人だけが行く道でないということを知るべきです。いつも復帰の道を行く皆さんは、真の父母に代わって行く自分であるということを肝に銘じなければなりません。そうでなくては、氏族的、民族的、あるいは国家的な真の父母の勝利の基盤を備えることができないのです。

皆さんが正しく真の父母に代わって行くためには、真の父母は世界的な霊的勝利の基準を立てるために行くならば、皆さんは国家的勝利の基準を立てるために行かなければならないということをはっきり知るべきです。霊的には真の父母の勝利の基準が立てられたので、地上に真の父母の勝利の基準を立てるべきですが、皆さんが民族的な基準を越えるべき真の父母の責任を代行しているのです。

これを他の面で説明すれば、皆さんが民族的な基準を越えて、世界的な基準に向かって行くなら、来られる真の父母は霊的に天宙的な勝利の基準を立てなければならないのです。真の父母の因縁を持って来られる主は、我々が背負っていくべき十字架を霊的に開拓し、実体的に勝利され、すべてに責任を持っていかなければいけないのです。これが父母復帰の難しさであることを、皆さんは知るべきです。

では、今日、天と地と人間を振り返るようになるとき、天がある一時、勝利の真の父母に侍ったか？　まだ侍られませんでした。地が侍ったか？　まだ侍れませんでした。人間が侍ったか？　まだ侍れませんでした。その途上にいるのです。

では、真の父母だけ侍ればいいのか？　そうではありません。真の父母に侍った次には、真なる家庭、氏族、民族、国家、世界を復帰しなければなりません。これのために準備したのがイスラエル民族でした。

真の父母の前に真の子女として立つためには、子女の個人的な復帰路程があるのあり、子女の家庭的な復帰路程があるのであり、子女の氏族的な復帰路程があるのであり、子女の民族的な復帰路程があるのであり、子女の国家的な復帰路程があるのです。父母の個人、家庭、氏族、民族、国家的な復帰路程と、子女の個人、家庭、氏族、民族、国家的な復帰路程を完結し、父母と子女が一体となり、勝利したという基準を立てておいてこそ、初めて民族復帰を終結して、世界的な舞台に向かって新しく出発することができるのです。

では、今日統一教会の使命は何であり、統一教会に入教した皆さんは、どんな立場にいるか？　先生を中心としたこの統一教会に呼ばれてきた皆さんは、悲痛な六千年の縦的歴史を横的に、実体的に展開しなければならない立場にいるのです。

我々は、今、何の決心をすべきか？　我々が行くべき目標はどこか？　世界的な基盤の上に真の父母の国を立てなければならないのです。世界的な真の父母の国を立てなければならないのです。この世界に未だ悲しみと苦痛と涙が残っているのに、これらを我々が一日も早く清算しなければなりません。これが今日統一教会が担っている責任であり、使命であるということを、我々は知るべきです。

それゆえ、皆さんは、今行くべき道に立ち上がったので、イスラエル民族がカナンに向かって行ったときと同様に、後ろを振り返ってはいけないのです。心でもそうすべきであり、体でもそうすべきなのです。

今我々が抱くべき希望が何か？　天に代わってこの地に来られる真の御父母様に、本当に侍ることを希望しなければなりません。侍るには勝利の基盤がなされた後に、万民が仰ぎ見、万民が恭敬するようになった位置で侍るのを願ってはいけないのです。悲しい歴史を経られる真の父母に侍るのを願わなければならないのです。

悲しい歴史を経てきた真の父母に侍れないことを、先祖たちは恨として考えているのです。真の父母に本当に侍ることを、すべての人類が希望するのです。それゆえ、栄光の場で侍ろうとするより、悲惨な場で侍る真の孝子、真の孝女にならなければなりません。

そのような真の孝子、真の孝女になるためには、難しい場、失望しうる場、悲惨で悲鳴を上げうる場に立っても「天よ、私を導かれる天よ、真の御父母様はイエス様よりももっと苦難の十字架の道を行かれるので、父母に侍る私としてはどのように加重された十字架を背負うようになっても当然です。私はそれを讃えますので、天は私によって心配しないでください」と言うことができなければなりません。自分に及ぼされる心配と苦痛と悲しみを天の前に背負わせないで、自ら蕩減していく術を知る人にならなければならないのです。それでこそ、個人的な基準で個人的な父母の勝利の因縁を接ぎ木することができるのです。

現在我々統一教会は、祝福家庭たちが韓国の至る所に広がっています。なぜ祝福家庭たちを韓国の至る所に広げておいたか？　天は韓国民族と韓半島を中心として摂理され、真の父母はこの韓国民族、韓半島のに来られるのです。そして、来られる真の御父母様を、韓半島が、すべての村々が、谷から谷が、山野はもちろんであり、全部が侍りたがるのです。それは、真の父母に侍ることが歴史的な願いであるためです。

それゆえ、子女の立場で個人的な蕩減基準を立て、家庭的な蕩減基準を立て、真の父母の身代わりとして、その村と部落が、後悔なく侍りたがることのできる、真の父母の実体の身代わりが行かなければならないのです。来られる真の父母は、もちろん中心の位置におられ、霊的に全部と関係を結ばれますが、実体は一つであるので、全体に対することができないのです。それで真の父母の実体に代わって、万民に対する立場に立てられたのが祝福家庭たちであるのです。

真の父母には、この民族を越えて世界的な十字架を背負って行くべき責任があります。それゆえ、民族的な十字架は地方に広がっている、真の子女の立場にある祝福家庭たちが背負って行かなければならないのです。祝福家庭全体が一つの氏族的な基盤、民族的な基盤になってこそ、天の役事はこの民族を中心として勝利の峠を越えることができるのです。（一三・二八八）

父母様を愛して、本然の愛の基準を中心として、サタンを分別して責任分担、世界完成基

準を越えなければなりません。（一三七・一一七）

・我々の使命

これから我々がすべきことは、真の父母に侍ることができる基盤を築き、その方の前に世界の兄弟を糾合することです。また、このような責任を背負った先祖たちとして、後孫たちが背負う十字架と迫害の道をなくしてやろうということです。これが我々の本然の使命なのです。

神様が人類世界に統一された父母の位置、アベル的世界とカイン的世界が互いに一つになった基盤の上に立って初めて、万有の主人公として、父母として登場することができるのです。

今日この地上に暮らしているすべての人たちは、今まで父母がなく暮らしている子供たちと同じです。そうして、戦っています。それゆえ、神様は父母の立場で現れて、初めて彼らを教育して「おまえと今戦っているあの人が誰かというとおまえの兄であり、おまえの弟だ」ということを教えてやらなければならないのです。それは、神様以外には分からないのです。

悪なる父母によって、真なる理想的父母が去ってしまい、理想的子女の因縁を失った基盤で、サタンのいけにえになったために、理想的な父母が出てこなければならず、理想的な子女の教育を天が再びしてやることができる時にならなければならず、そのような使命を受け継ぐ一つの宗教が出てこなければなりません。そのような宗教が統一教会であるということを知るべきなのです。

それで、統一教会では何を誇るか？　真の父母の歴史を誇るのです。（拍手）その次には、真なる子女が結束しなければなりません。真の父母といえば、自分の一族だけ愛するのではなく、世界的であり、宇宙的でなければなければなりません。真の子女とは何かというと「私はアメリカの国民しか知らない」という者ではないのです。

皆さんは何ですか？　そうであってはいけないのです。ここでは民族感情を超越しなければなりません。民族感情を超越しなければならないのです。誰の名で？（神様の名で！）神様の名で。堕落は誰の名で？（サタンの名で）。サタンの名で。我々は神様の名で堕落線以上をジャンプして上がらなければなりません。そうして、アダムの頭の上にいた神様と同じく、我々の頭の上に神様がいて、その方が直接指揮しなければなりません。

それゆえ、堕落しなかった真の父母と神様を中心として、真なる血肉を世界的に糾合して新しい世界に編成していくのが統一教会の道です。そうすれば、一家庭が氏族になるのであり、氏族が民族になるのであり、民族が国家を成して世界を制覇するでしょう。
堕落した世界が、このように落ちるようになったのを、我々は新しく出発して上がっていかなければなりません。このようになった世界と、このようになった世界的基準で、接触する接線地を逆さまにひっくり返しておく一時がなければなりません。その中間線に接続する時が、どんな時かというのです。皆さん

は、それを知らなければならないのです。（八六・二三〇）

現在我々統一教会は、真の父母がいますが、その真の父母は、どんな立場の真の父母ですか？　統一教会の中で真の父母であって、国を越えず、世界を越えなかったことを知るべきなのです。ですから、国家、世界のサタンが残っているために、まだにらみつけているのです。分かりますか？

それで、我々統一教会は、教会に真の父母を迎えることを、国家と世界と霊界まで拡大させる運動をするのです。これが今日、統一教会の運動であるということを知るべきなのです。今、時が近づいてきているのです。国家統一教会、国家ペアレンツ（parents）として迎えうる環境が、今近づいてきているのです。（一二四・三〇九）

六）生命視すべきこと

・自己主張不可

皆さんたちが持ったものは、銀舎利は銀舎利ですが、砂の中に入っている銀舎利、何かの鉱石や土の中に入っている銀舎利なので、それらを全部溶鉱炉に放り込んで、溶かしてしまわなければなりません。焼き出さなければなりません。それがコースです。オリジナル・コース（original course；本来の過程）、ノーマル・コース（normal course；標準の過程）です。では、そのときに体が溶けて水になってなくなるのに「ああ、いい」と言いますか、「ああ、私は死ぬ。私は死ぬ」と言い一大事が起こりますか？　それは、皆死ぬと言っても銀舎利は死なないのです。

皆さんはピュアリティー（purity；純粋）が多いですか、インピュア（impur；純粋でない）が多いですか？　どちらが多いですか？（インピュア）。では、どちらが主体ですか？　ピュアが主体ですか、インピュアが主体ですか？（ピュア）。皆さんが皆ピュアなら、心配しなくてもいいです。

皆さんが、一〇〇パーセントピュアになるには、九八パーセントまでは否定しなければいけないということを知るべきです。我々のものは二パーセントにしかならないのです。どちらを歓迎しますか？　どちらを取るべきですか？　これを取るべきですか、これを取るべきですか？（板書されたものを差されながら語られる）どれほど悲惨ですか？　その言葉は何かというと、女より男の段階がもっと早いのですか？　それがそのようになっているのです。

どれほど悲惨か考えてみなさい。ムーニーの生活が悲惨か、幸福か？（幸福です）。（笑い）では、ムーニーのセンターであるレバレンド・ムーンは幸福なのですか、悲惨なのですか？　初めは不幸でも、後には幸福だというそのような希望を持っているのです。（拍手）
迫害すれば「溶鉱炉に入る。私がまだでき上がっていないからこうだ。」このように考えるのです。迫害が来るなら来いというのです。迫害できるならしろというのです。純金になるまで、溶鉱炉に入っているのを願うのです。それが早く純金になる方法です。

アメリカでレバレンド・ムーンに反対するのに、世界の溶鉱炉にレバレンド・ムーンを放り込むならそれはどうですか？　一〇〇名を放り込んだのに、一〇〇名が出てきたというときは「あっ！」と言って驚くでしょう。（拍手）全アメリカが即座に木っ端微塵になるのです。全部木っ端微塵です。どうですか？（その通りです）。アメリカ国民は、気分がどうですか？「ううっ」と言うでしょう。（笑い）敗北するしかないのです。

ですが、レバレンド・ムーンはどうですか？レバレンド・ムーンは勝利するのです。レバレンド・ムーンは勝利して、アメリカは敗北するでしょう。そうなれば、アメリカがどれほど悲惨でしょうか？　そしてレバレンド・ムーンは、どれほど素晴らしいでしょう？（笑い）そこには異議がないのです。そこには反対する人がいないのです。

何を持ってそのようになったのか？「ああ、愛だったのだなあ！」と言うときは「ああ、私が今までは奥部屋暮らし（本妻が妾に実権を奪われること）だったけれど、これからは同参できる」と言うのです。どうですか？その概念がどうですか？（グレイト（great；素晴らしいです）！）

それゆえ、九八パーセントを捨てて一〇〇パーセント純粋なゴールドになるための道を行く人は、我慢するのがどれほど大きくなければならないでしょうか？　苦痛がどれほどひどいでしょうか？　それでも行くべきだという信念を持って行かなければなりません。

世の中の人たちが、一〇〇パーセント純金だと鑑定したのに、神様がピンセットでつまんで鑑定するとき、一〇〇パーセントになるのかというのが問題です。それが心配です。神様が純金だという一〇〇パーセントと、私が純金だという一〇〇パーセントを比較するとき、私が一〇〇パーセントだと主張するのがもっと大きければいいのですが、どうですか？　私は、私が主張するのがもっと大きくあってほしいと願います。そうするには、自分を主張する不純分子が一つでもあってはいけません。では、神様は自分を主張しないのかというのです。神様も自分を主張するのです。神様も自分を主張しうる素の性質があるのです。

自分がもっと純粋になるためには、自分を主張するのが一つでもあってはいけません。そうなれば、自分が一〇〇パーセント純金になり、神様が鑑定する純金以上の位置に行くのです。そのように考えられるのです。どうですか？　自分を主張する心が、自分がセンターだと思う心が、永遠に何もないというときは、一〇〇パーセント以上純粋なものになることができます。

では、純金は何か？　不純な要素が一つも介入しない、ただそのままの姿を言うのです。ですから、完全に自分がない、百年、千年愛に酔って暮らす人たちがいる国は、愛においてピュア・ゴールド（pure gold；純金）の中の標準になることができます。その概念はどうですか？　最も素晴らしいではないですか？　そのような愛の所有者は、偉大な女王や王子と同じです。それはどうですか？（立派です）。私は、皆さんにそのような妻、そ

のような夫になれというのです。そうなれば、皆さんはどれほど素晴らしいですか？

そうして、純金になったのに、神様が必要ですか？　神様がその中に既にいるのです。必要とする必要がないのです。それゆえ、皆さんはそのような人にならなければなりません。（一二八・二〇六）

皆さんは本当の純金ですか、偽物ですか？偽物です。では、私は何ですか、私は？　みなさんが本当なら、私は何ですか？（笑い）それで、皆さんが本当なら、私は偽物ということではないですか？（笑い）　そのときは、我々は本物です！　そう言うのですよ。ただ「本当です」と言うようになれば、困るのです。

統一教会では、私が最高の位置ではないですか？　そうでしょう？（笑い）本当という言葉を付けるなら、私から先に付けるべきであって、皆さんから付けるべきかというのです。言葉について言うならば、正しい言葉は「我々も本当です！」それはいいのです。ただ本当だと言うと、それは失礼です。

私が皆さんを見るようになるとき、本当ではありません。皆さん三、四人、四、五人を合わせてぶん殴って、再び作り出せば本当になるか、このように見るのです。私が売る本当の市場、本当の商店に皆さんをそのまま置いて、本当だと言いながら売れないのです。売り出すことができないのです。分かりますか？　そのように見るのです。ですから、鍛錬と試練、製錬の過程がまだたくさん残っていると見るのです。

「おまえたちは純金か？」というとき、私は純金だと見ません。まだ錬磨を受けるべき宿題の過程が残っているから、嫌でも良くても製錬所に全部突っ込まなければなりません。突っ込んで悪いものは焼いてしまい、純粋なもの、一つの結晶体として連合したもの、表も中も間違いない一つに現れうるその形態を備える前には、統一教会員だと言えません。（一三八・二〇〇）

我々には、自分を調整するための調整装置、調整する期間、調整する時が、調整する時間が必要なのです。標準の時計があるでしょう？　標準の時計のように合わせておかなければなりません。はかりもですね、標準のはかりがあります。一つあるのです。それは世界に一つあるのです。メートルならメートルの原器というものは、二つでなく一つです。二つですか、一つですか？　一つです。一つなのです。

では、本来は人間の調整の基準があるか、ないか？　ある！　ある！　では、人間のその絶対基準と、現在勝手になった自分の基準がゼロ点の調整で自然に合う自分ですか、「無理やり的」にでも合わない自分ですか？　無理やり的に合わせても合わないのです。「無理やり的」という言葉は、ありませんが表現しようとするので…。それでも、聞き分けはするのです。

このような自分が本来の原器、メートルならメートル原器のように、自分を認めてくれというのです。それでは、それを認めてくれる人が狂った奴でしょう。そのような奴は、殴って捕まえなければなりません。神様が、

「おい、こいつ！　おまえは顔つきがそうなのに認めるか？　否定して殴って捕まえなければならないのに、同情して協力しろ？」と言うのです。

今日、祝福家庭という群、家庭ではないか！「家庭」と言いながら、家庭という名詞は尊重して、家庭の内容は無視する輩が多いのです。（一二七・二〇三）

・一つになるべし

皆さんは、真の父母の心情的な内容をどれほど知っていますか？　また、血統問題、人格問題、み言の問題、生活の問題、そして国家観、世界観、天宙観が、真の父母とどれほど一つになっていますか？　これは、皆さんが本当の意味で神様の真の息子娘になりうるかという問題を決定づける母体になるのです。分かりますか？（はい）。

皆さん自体だけ持っては不安なために、どのように皆さんを真の父母とつなげるかというのが問題です。根源がなければいけません。すなわち、その核心がなくてはいけないのです。（二八・二四九）

真の父母が何かというと、皆さんの父母の代わりです。本来の父母が真の父母です。皆さんの父母と皆さんは、一つになければなりません。では、おじいさんは誰ですか？　神様です。神様。神様の命令には、真の父母も勝手にできません。父母は自分の息子娘をおじいさんが願う道に連れていかなければなりません。それが父母が行く道です。

真の父母が復帰の道を行ったら、皆さんも復帰の道を行かざるをえないのです。最小限度の責任分担五パーセントを完遂しなければなりません。分かりますか、何のことか？（はい）。それを知るべきなのです。皆さんの妻を愛する以上、父母を愛する以上、神様を愛さなければなりません。皆さんの息子娘を愛する以上、神様を愛せということです。それを基盤として、世界に拡大するのが、統一教会の理想世界です。本然の世界です。それを知るべきです。はっきり分かりましたか？（はい）。（一二八・三一）

先生は、もう一次アダムの根、二次アダムの根を皆持っています。それゆえ、皆さんは第一アダムと第二アダム、第三アダムを接ぎ木さえすれば、すべて終わるのです。分かりますか、何のことか？　根が一つです、根が。

それで愛と、何ですって？　三つが何ですか？　愛、生命、その次には何ですか？　血統です。縦横の神様の愛が生命の交流をすることによって、血統が生まれたのです。

それゆえ、皆さんは、誰よりも先生を愛さなければなりません。誰よりも真の父母と一つになければなりません。真なる愛を中心とした血統であるために、そこには相続権があり、同位権があり、同参権があるのです。分かりますか？　それでサタンが接近することができないのです。（一八九・二二三）

・真の父母を愛すべし

真の父母がどれほど多くの愛を受けているか？　それを一度考えてみましたか？　神様

が死んだということに対して、誰でも抗弁する人がいたら、彼は真の父母を神様が愛する以上に愛するでしょう。

もし皆さんが、このような人に会うことができるようにしてくれ、と神様に祈るなら、それで皆さんがこのような人に会って、真の父母を愛するようになるなら、神様も喜ばれるでしょう。その人がいちばん賢い人なら、皆さんがそのように思うなら、皆さんは霊界にいる霊人たちに絶対に負けません。皆さんが真の父母を愛するなら、絶対に負けません。もし、皆さんが霊人たちに、「私は真の父母をこれほど愛するのに、皆さん霊人たちは何をしましたか？」と言いながら、彼らを讒訴することができるなら、皆さんがいちばんの金持ちになるでしょう。

もし、真の父母を互いにもっと愛すると食口たちの間にけんかが起きるようになれば、神様がそのけんかをご覧になって何と言うでしょう？（笑い） そのようにけんかして、もし一人が死ぬようになれば、神様がどのように審判するでしょう？　皆さんが考えてみなさい。神様がかれを絞首台に引っ張って行かれるでしょうか？　疑いもなしに、神様はその二人を呼んで、彼らを真の父母を愛するモデルとして立てられ、他の人たちにも彼らが愛したように真の父母を愛せと言われるでしょう。これがまさに基準です。すなわち、神様と霊人、すべての人たちは、真の父母を注視しなければならないのです。今、我々は我々の生活の中で、これを考えなければなりません。

先生が言うことが事実なら、その問題は重要です。皆さんは、その基準からどれほどかけ離れていますか？　今からでも我々はこれのために祈らなければなりません。

真の父母に従うすべての人たちは、涙なしには行くことができません。それゆえ、我々の表情が明るくなりえません。我々は為に生きなければなりません。そして、たとえ我々が最善を尽くすとしても、我々は天に対して申し訳ない心を持つべきです。我々の行動がどうでなければならないかを皆さんが想像できるだろうと思います。（五二・九七）

・真の父母に侍るべし

皆さんが荒野路程を歩み、ヨルダン川を越えたとしても、カナン七族と戦う途上で倒れれば、それは勝利の死になれないのです。カナン七族を屈服させておいて、そこに新しい国イスラエルを立てておいてこそ、神様の前に立てられる本然の人になるのです。そうでなければ、楽園にとどまるのと同じなのです。天国に入ることができないのです。（一三・二九八）

我々が知っている真の父母は何か？　人間の先祖です、人間の先祖。ですから、真の父母に自分の父母のように侍らなければならないのです。（一一八・一四七）

事実、父母様に三年以上侍らなければならないのです。父母様に三年以上侍るには、家庭が侍り、その次には国家が侍り、世界が侍らなければならないのです。事実はそうでなけ

ればならないのです。そうであってこそ、世界復帰圏まで出ていくようになるのです。

三数を中心として見るとき、三年以上を侍らなければいけないのです。それゆえ、三年間は父母様を中心として、ご飯も一緒に食べて、共に相談しながら、共に暮らさなければならないのが原則です。皆さんの家がそうでなければならないのです。父母に侍って暮らす家庭として、平和で幸福で、言葉を話しても良い言葉だけ話し、互いが喜びながら暮らす三年の期間がなければらないのです。（四四・一七〇）

・従順であるべし

本来、神様の名を持ってきた父母の前に、子供は絶対服従しなければなりません。そこには異議がないのです。これは、強制で言うのではありません。愛を中心として、そうすることができるよう、環境を作るのです。

妻は夫を愛し、夫は妻を愛すのです。愛を中心とした父母になり、愛する子女を自然、絶対屈服させうる環境を率いていってこそ、天国基盤が崩れないのです。（一〇一・二八三）

・伝統を受け継ぐべし

今まで人類はですね、人間がどのようになるかを知りませんでした。自分がどのようになるかを知りませんでした。歴史を知らなかったのです。今現在がどこで何になるかを知りませんでした。これからどのうようになるのか、目的を知らなかったのです。

それがなぜそうなのか？　真なる父母、先祖を持てなかったためです。ですが、我々は真の父母に侍ることによって、「ああ、私は歴史が分かった、神様と私と、どうだという歴史が分かった」というのです。また、現在が分かったというのです。未来が分かったというのです。分かっただけでなく、そのような伝統を受け継ぐことができるというのです。歴史に勝ち、未来に勝ちうる伝統を今自分が持つことができるというのです。

誰から？　なぜ？　真の父母に会ったためです。真の父母が教えてくれることを、その方がすることに自分がついていって、その方が願うことを自分が願う、これを受け継ぐのです。それを引き継ぐのです。（七一・二一）

今まで、この宇宙には父母がいませんでした。父母というのが悪なる父母、子供を利用して、滅ぼす父母です、全部皆。そうすることによって、何が壊れたか？　完全な兄弟が壊れていったのです。その次には、完全な新郎新婦が壊れていきました。その次には、完全な父母が壊れていきました。それで、善なる子供を持てませんでした。結局は、家庭を失ってしまったという話です。その家庭は、宇宙史的な代表です。世界を代表し、天国を代表し、国を代表し、家庭全体を代表した家庭でした。

そのセントラル・ポイント（central point：中心点）を神様は探そうとされるのです。人類歴史もそれを探してくるのです。今日の人類、現在生きている人たちも、この中心に連結されなければなりません。言い換えれば、神様と人間が願う共同目的がこれ一つであり、

過去、現在、未来が結束しうる道は、ここしかないのです。

では、それを誰がすべきか？　アダム・Gバがすべきことを、真の父母がしなければならないのです。それゆえ、今皆さんが持つべきものは、サタンが持てなかったものとして、悪なる世界にはない兄弟中の兄弟、サタン世界にはない兄弟を持たなければなりません。皆さんはそうでなければなりません。それは、二〇代、結婚する前までなのです。そのような伝統を皆さんが残さなければなりません。

皆さんの息子娘の前に、このように暮らさなければならない、という伝統を残さなければなりません。皆さんがこのように各国に行き、骨の折れる戦いをして暮らすことは、これから皆さんが後孫の前に伝統を残すための、「我々はこのように難しい中で働いた」と息子たちに教育することができ、遺言を残すことができる伝統的資料を収拾する立派な、一度しかない期間であることを知るべきです。それゆえ、伝統が問題です。これは、変更することができないのです。永遠の伝統です、永遠な伝統。

我々は世界を超越する人たちなので、白人と黒人が一兄弟にならなければなりません。それが何かというと、堕落しなかった人類、アダム・エバの兄弟之園に、我々は訪ねて入るのです。分かりますか？（はい）。

では、そこにそのような伝統を立てる基本の思想は何か？　為にすればいいのです。為にすればいいです。では、ここから皆さんの息子娘は、このような環境で苦労しないで育って、天国に直行することができる、サタン世界を凌駕する一つの実績圏を持った、天と直通する後孫になるのです。その次には、そのような兄弟たちが結婚をするのです。我々において、結婚というのは超国家的です。黒人としろと言えばし、白人としろと言えばし、黄色人としろと言えばすることができる、このような圏内に入ってきました。

このような伝統が今から成立しなければなりません。今は、できていません。今から一つ作らなければならないのです。このようになったために、その資料を持って、皆さんの後孫と世界を指導しなければなりません。その代わり、二人が一つになれば、悪なる息子娘を産んではいけません。善の息子娘を産もうとするので、夫妻が完全に一つにならなければなりません。一つにならなくては、善の息子娘が出てこないのです。それゆえ、神様のみ旨を中心として、完全に一つになければならないのです。（七一・一九）

皆さんは先生を平面的に見ては、先生がどのような顔つきで、どのような姿であるかということが大体分かるでしょう。しかし、先生がこの場に来るまで、その背後でどのうような道を経てきたかは知らないのです。

この道を出発するときから、確かな信念がなく、ただ従ってきてみ旨が成されるか？　そうではないのです。確かな信念がなければなりません。絶対的で間違いない道と知り、間違いない勝利を誓って出発して、このような勝利の結果をもたらしたということを、皆さんは知るべきです。このような信念を曲げ、この道を妨げるために、数多くの個人から、

家庭から、氏族、民族、国家が反対し、世界まで反対したのです。そのような道が繰り広げられていました。残ってきたのです。

そのような伝統を、皆さんが受け継がなければならないのに、それを知らずに受け継ぐことができますか？　そのような驚くべきものを受け継ぐときは、新しい決心をして受け継がなければいけないのです。言い換えれば、「世界の果てまで、天の果てまで走って行っても余りがあります。」という信念を持って、強く雄々しい場で、神様がご覧になるとき、驚くほど感謝する場で、受け継がなければならないのです。

そのような皆さんの姿勢を見て、それを相続してあげたいのが、天の心であり、先生の心ではないか。何も知らない者たち、世の中がどのようになるかを知らない者たちを連れて、教えてやるこれ自体がわびしいのです。わびしい場面だというのです。そうであってはいけないということを、皆さんが知るべきなのです。（六七・二二八）

・真の父母を誇るべし

皆さんが誇るべきことは、神様の愛を誇り、真の父母の愛を誇らなければなりません。これは自分のこと、国のこと、世界の何よりも誇らなければならないという結論が出てくるのです。この愛は、神様の愛と父母の愛が一つだというのです。これは何か？　直接主管圏という愛の理念を中心として、家庭という基盤の上に一つになりうる出発を、地上に実現しているのが統一教会であり、父母様が行く足の甲の上だ、脚だ、版図だということを知るべきなのです。直接主観圏です。（一三一・五〇）

・真の父母に借りを返すべし

真の父母という観念が明白でなければなりません。皆さん、真の父母に負債を負いましたか、負いませんでしたか？　負いました。その負債がどれほど多いですか？（……）。負債を返す道理がないのです。負債を負ったのを計算すれば、返す道理がないのです。ですが、ただ小さな愛の表示だけ一つあれば、皆返すことができます。それを必要とするのです。（日付未詳）

七、真の父母を中心とした生活

一）真の父母の日と真の父母

皆さんは、みんな先生に関心があるでしょう？　先生がどこかに行き、何か言葉を言うようになれば、全部電話線をつけて回りながら聞かなければならないのです。

皆さんは、この父母の日を迎え、今父母様の苦労がどれほど大きかったか、父母様の心がどれほど苦痛を受けたかということを知るべきです。今、父母様に対して、知るべき時が来たのです。そうでなくては、伝統が分からないのです。伝統を持てないのです。（一三一・六四）

本来、父母の日の理念は、神様の創造理念の中で、中心理念でした。神様が万物を創造された後、その万物を主管する人間を創造され、人間たちに万物を主管せよと祝福された目的も、まさに真の父母を立てるためでした。

本来は、アダム・エバが神様を中心として一体となり、真の父母になるべきでした。そうすれば、父母の日が立てたれるようになるのです。そうなれば、全宇宙が父母の名前とともに、誦詠を捧げるようになるのです。このように、父母の日は、前宇宙が父母の名前とともに誦詠を捧げる喜びの日なのです。

この日を迎えるのが、神様の願いでした。しかし、人間始祖が堕落することによって、このような父母の日を天も失ってしまい、地も失ってしまいました。それで神様は、本来計画されたところを成されるために、父母の日を探されるために、今まで経綸してこられたのです。

父母の日を迎えるには、まず真の父母を迎えなければなりません。その真の父母は、歴史を審判し、現在を主管し、未来を開拓なさるべき中心存在であられます。それで、人間が歴史的に羨望してきたことも、真の父母を迎えることでした。（一三・二八〇）

我々が民族を探そうとするのは何のためか？この民族をして、勝利の真の父母に侍らせるためです。そして、サタン世界から讒訴されず、天に代わって、地に代わって、人類に代わって国家基準の上に万天宙7前に、孝子、孝女として自由天地を成し、真の父母に真実に侍るためです。

今までは、我々が悲しい場で侍り、苦痛の場で侍りましたが、今からは喜びの場で、自由な場で侍らなければなりません。神様が我々の心と共にされることができてこそ、我々が喜べば神様が「そうか、おまえの喜びは私の喜びだ！」と言われるのです。そして、我々は全人類が「あなたたちの感謝は、我々の感謝です！」と言う基準を立てなければなりません。

今日は、父母の日です。この父母の日を、皆さんが本当に皆さん自身の父母の日として立てなければならず、皆さんの家庭の父母の日として立てなければならず、社会の父母の日として立てなければならず、国家の父母の日として立ててこそ、世界の父母の日として立てられるのです。世界の父母の日として立てられ、天宙の父母の日として立てられてこそ、本来神様が真の父母を立てようとなさった創造理念が完結するのであり、人間が堕落によって父母の日を立てられなかった恨を解くことができるのです。さらにこの全天上天下に父母の日を立ててこそ、復帰の恨が完全に解怨されるのです。

我々が父母の日を立て、子女の日を立てましたが、個人的な父母の日から家庭的な父母の日、民族、国家、世界、天宙的な父母の日として立てられておらず、子女の日もそうです。万物の日もやはりそうですが、父母の日と子女の日と万物の日が、世界性を持ち、勝利したという基準の前に主管されうる圏内に入ってこそ、初めて天地を創造された神様の本来の創造目的が完結するのです。

そうなってこそ、初めて父母の日が人間の父母の日になると同時に、天の父母の日になるのです。また、子女の日と万物の日も、人間の子女の日と万物の日になると同時に、天の子女の日と万物の日になるのです。このような立場に立つようになるとき、初めて天から皆成したと言うことができるときが来るのです。

個人的な父母の日、子女の日、万物の日を設定してこそ、この日々がその国家の中心の日になり、世界的な日になりうるのです。これが問題です。（一三・二九四）

二）真の父母という言葉を完全に知るべし

我々統一教会には、貴く使う言葉があります。初めて聞く人もいるでしょうが、それは真の父母という言葉です。真の父母という言葉を言うでしょう？　何、「我々の真の御父母様！」と言います。イエス様の前に真の父母がいましたか？　イエス様が持てなかったものを持ったのです。

イエス様に真の父母がいましたか？　子供を保護してやらないのが父母の責任ですか？　違います。父母なら子供を保護してやらなければならないのです。サタンから垣根になって「おまえは私の懐の中で幸福であるべし」そう言わなければならないのです。イエス様がそうでしたか？　三〇の生涯をかわいそうな連れ子として育ったのです。それを知るべきなのです。

ですから、聖書に何か真の御父母様という言葉が出てきますか？　出てこないでしょう？　真の父母、真の兄弟という言葉が出てきますか？　出てこないでしょう？　この言葉は全部統一教会の術語なのです。それは、文先生が作り出した言葉ではありません。本来の天理原則にあったのを探し出した言葉です。

我々は真の父母という言葉を言い、真の子女という言葉を言います。真の子女はどのようにしなければならないかということを知るべきです。息子に対して自分の生命を捧げることができ、自分のすべてをその前に捧げることができ、自分は地獄に行っても感謝することができなければならないのです。そのような過程を経なくてはいけないのです。そうして、真なる子女の因縁を通じて、父に帰ることができる道が分かりました。（七六・七三）

統一教会では、真の父母という言葉を言っています。真の父母に侍っていこうと、神様に侍っていこうと言うのです。その次には、真なる兄弟になろうと言うのです。何を中心として？　それは、イエスを中心として言った言葉です。お分かりですか？　イエスの父母がイエスに侍れなかったのを蕩減復帰して、侍ることができる父母、それ以上の父母の位置に立つことができなければならないのです。（六七・三二六）

私が神様に対して父母と言うのと、皆さんが先生に対して父母と言うのと、どちらが易しいかとというのです。答えてみなさい。先生がどれほど苦労したか知らないでしょう。どれほど、障害が多く、どれほど複雑だったか知らないでしょう。今まで数多くの人たちが、その道をもがいて全部どん底に落ちたのです。皆さんは、統一教会に入ってきて、先生を理論的に見るとき、「ああ、この方は真の父母だな！」という言葉を容易く言うことができたでしょう。

では、神様が真の父母というのを私が分かるときの喜びと、皆さんが分かるときの喜びとどちらが大きいでしょうか？　先生が苦労を死ぬほどして、父という言葉を言うことができますが、皆さんは苦労もしないから。皆教

えてあげたのです。ですから、「それ真の父母分かった、まあまあ！」と言うでしょう？誰がもっと喜ぶでしょう？　先生が神様に父子関係で会ったときに喜ぶのと、皆さんが先生に会って喜ぶのと、どちらがもっと大きくなければなりませんか？（お父様と神様です）。違います。反対なのです。

先生は、苦労してこそ会いましたが、苦労をしないで会ったから、もっと嬉しくなければならないでしょう。私は、億千万ドル払って買ったのです。皆さんは一銭も払わなかったから嬉しいでしょう？　皆さんが何を払いましたか？　やってきて原理のみ言を聞いてみたら、みんな分かって、「真の父母」と言えば、「そのようになったのだな」とみんな分かるのではないですか。（一一六・一二二）

三）真の父母の言語を習え

何よりも言語がいちばん問題なのです。ここのドクター・ダーストがですね、今韓国人たちが来ていれば、じっと座ってばかりいるので、それは実にあきれるのです。かわいそうに見えます。ですから、言語が一つになれば、どれほど良いかというのです。そうなればどれほど良いですか？　先生もアメリカに初めて来てですね、本を通じて勉強しましたが、何、イエス、ノーしか知りませんでした。（笑い）ですから、どれほどもどかしかったでしょう？　言語統一がどれほど必要か分かるでしょう。

皆さん、先生の言葉を通訳を通して聞きたいですか、先生から直接聞きたいですか？（笑い）　どちらを願いますか？（韓国語で）。

どうして？　韓国語が原語であるからです。それゆえ、原理を勉強するのにおいて、原語を知らなければその言葉の意味が分からなくなります。英語でですね、ジョーク（joke）とユーモア（humor）というその言葉が通訳で通じますか？　通じないのです。二〇パーセントも通じないのです。（笑われる）

そして、これから皆さんが霊界に行って、「ああ、私は先生の言葉をそのまま聞いて話して生きた！」というのが誇りでしょうか、「ああ、通訳を通して私は話しを聞いた！」というのが誇りでしょうか？（一番目です）。しかも、愛の理想世界を言う言葉です。愛という言葉を通訳を置いてささやけばそれが通じますか？（笑い）　それがいいですか？（いいえ）。

我々が前に覚えた誓いの文を見るとですね、五番目に「一つの文化を誇る」となっていますが、一つの文化がどのようになるのかというのが問題です。心情世界では、一つにならざるをえないという事実を知るべきなのです。本当に一つの心情世界を願う人ならば、これを知らなくてはいけません。

「さあ、私がおまえたちをこのように愛する」と言って、このよう行ってタッチするときは、愛をどのように考えるだろうかという、そのような考えより、すでに足が出ていくのです。足が先であって、愛するという考えが先ではないのです。何のことか分かりますか？　それがどれほど愚かですか。食べ物で言えば、食べ残したカスを食べて喜ぶということです。分かりますか？（はい）。それで、通訳を必要とする他の国の言葉を話すのがア

イディアル・ファミリー（ideal family；理想家庭）ですか？（いいえ）。これを考えてみなさい。さあ、もう分かったのです。理想家庭の伝統と精神がなくては、理想世界が顕現することができません。（一一八・二三八）

霊界に行っても全部真の父母、真のおじいさんが使う言葉を使うのであって、「ああ、私はそれを知らない！」といって通じますか？（いいえ）。皆さん、外国人たち、東洋人たちが英語を習うのにどれほど大変かということを、そのときに分かるのです。先生の年がもう七〇を越えたのです。この年に英語を習うのが易しいですか？（いいえ）。皆さん、言い訳ができますか？（できません）

それで、統一教会は、若い人たちが入ってくるのです。これをしないといけないのです。分かりますか？（はい）。道を歩きながらブツブツ言いながらでも習いなさい。韓国語をトイレに行ったり来たりしながら反復して習えというのです、アボジ、オンマと言いながら。これはほかに方法がありません。
先生が韓国語を習えというのは、先生が真の父母になったから仕方がないのです。韓国人でも、どこの国の人でも、何がどうだと言っても仕方がないのです。（笑い）

それゆえ、皆統一されれば、「真の父母の栄光だ！　世界言語を瞬く間に統一してしまった！」と言うのです。表彰をするなら、何の表彰をすべきでしょうか？　韓国語を世界のどの国の言葉よりもいちばん尊敬しなければならないのです。

韓国人が、頭が良いのは、この言語のためなのです。そのような意味で、朴普熙の英語の発音がどうですか？　完璧でしょう？（はい）。そうじゃないですか？　韓国語では、発音できないものがありません。日本語は、何、足元にも及ばないのです。（笑い）
「メクドゥノルドゥ（Macdonald）」をちゃんと発音できずに「マクドナルド」と言うのです。（笑い）それ、聞き取れますか？

皆さんは、これを知るべきなのです。ですから、新しい文化に通じなければならないのです。レバレンド・ムーンが韓国人だから、そう言うのではなく、原則であるためです。原理原則に通じないのに、韓国語を習うというのなら、最初から追い出されるのです。原理原則を話すから、皆さんがじっとしてながら「理論が合うので仕方がない」と言うのです。

皆さんが、今先生の言葉を聞いて笑えばいいのであって、通訳して言って笑い、これはどれほど不便ですか？　皆さんが韓国語を知るようになれば、先生が言うのと、通訳するのとを見るとき、通訳がどれほど難しいかが分かるでしょう。これから学者たちには、全部原語が韓国語になるでしょう。韓国語が原語になるのです。分かりますか？（はい）。（一三〇・二七二）

四）民謡の中の啓示

皆さんが神様に侍り、「千年万年も生きたいものだ」と言うならどれほどいいでしょうか？　今日、我々の童謡にもある「月よ、月よ、明るい月よ、李白が遊んでいた月よ、あそこ、あそこ、あの月の中にカツラの木が刺

さったから、玉の斧で突き刺して引き出し、金の斧で切り取って整え、わらぶきの三間の家を建てて両親父母を迎えて…」このような良い言葉です。

ところで、両親父母がどこにいますか？　その父母が、自分の欲のための父母なら皆流れていきます。天地の大道を明らかにして、伝統を植えておくことのできる両親父母がどこにいますか？　今日、我々の民謡にある、そのような歌の節回しに合うような、その道を世界の前に作っておいて死んでみようというのがレバレンド・ムーンの生涯です。（一二七・二八二）

今日、宗教指導者たちが、ひれ伏して祈祷して、福を受けると言いますが、私は福を受けようと祈ってみたことがありません。私一人が祭物になって…。旧約時代は、万物を立てて神様の人たちを探すための時代であり、新約時代は、息子娘を犠牲にして父母を探すための時代であり、成約時代は、今まで父母の家庭を犠牲にして神様を解放するための時代です。本然の父母をこの地上に迎え、その方と千年万年暮らし…。

韓国の民謡の中で「月よ、月よ、明るい月よ、李白が遊んでいた月よ…」というのがあるでしょう？　カツラの木が刺さったから、何どうのこうの、両親父母を迎えて千年万年生きたいものだ。それが皆、韓民族の啓示的な話です。天の父母を迎えて千年万年生きたいものだ。私は、その歌を思う度に、いつも胸の痛む心を忘れることができません。（一三七・一八五）

皆さんは、韓国人として生まれたことを絶対に嘆かないでください。過去には、韓国人として生まれたことを嘆いたでしょう？「はからずもこの貧しい韓国の民、五千年歴史を過ぎてきたと誇るが、あのわらぶきの三間の家に生まれた」というのです。

また、ｱうのを見てもそうです。「月よ、月よ、明るい月よ、李白が遊んでいた月よ、あそこ、あそこ、あの月の中に、何どうのこうの、わらぶきの三間の家を建てて、何どうのこうの、両親父母を迎えてどうのこうの…」わらぶきの三間の家を建てて、千年万年生きるだって？（笑い）　私はそのような民謡を聞くようになるとき、気分がよくありません。やっとわらぶきの三間の家ですか？　そこに何の民族の願いがありますか？

ですが、「わらぶきの三間の家を建てて、両親父母を迎えて、千年万年生きたい」というとき、その両親というのは何かというと、人間の理想的な父母であると言うことができるのです。キリスト教で言えば、再臨思想と通じるのです。万民、万国を通じて見れば、救世主思想と通じることができるこのような内容になっているのです。分かりますか？（はい）。このような話をしたら、終わりがないでしょう。やめますか？（もっとしてください）。（八五・八一）

「ああ、あの目、あの面、これ、これ…」こう言ってはいけないのです。その面がどうであっても、「千年万年生きたい」と言わなければなりません。我々の童謡もあるではないですか？　月よ、月よ、明るい月よ、李白が遊んでいた月よ、あそこ、あそこ、あの月の

中にカツラの木が刺さったから、玉の斧で突き刺して引き出し、金の斧で切り取って整え、わらぶきの三間の家を建てて、千年万年何を迎えて？　両親父母を迎えて。それが民族的な願いを讃えたのです。

それゆえ、真の父母の思想があるのです。千年万年生きたいと言うことができる愛が、真の父母から…。分かりますか？　両親父母を迎えて。（一二六・一九二）

みなさん、真の父母という言葉を聞いて、神様のチャンピオンの権威を持った男性を代表し、女性を代表した、そのような表象的な人物が真の父母だと知っていれば、真の父母の息子娘の権威も、その影ぐらいにはならなければなりません。サタン世界で拾って食べた習慣性をそのまま持って、欲の包みをそのまま持って、ここの統一教会に入ってこようとしてはいけないのです。既成教会と違います。愛の祭壇を集め、愛の矢を狙っていきながら、生死の圏を全部勝負を決める所がここだというのです。分かりますか？（はい）。
神の国に行き、神様が直接あの空中で審判するのではありません。ここに座って、我々の一日一日の生活を審判しています。神様に侍ることによって、文総裁とともに神様と苦楽を共にする生活を経たために、波瀾万丈な曲折と、艱難時代に滅びず死ななかったのです。神様が死ぬことができますか？　生き残ったのです。

そうして、今日世界的覇権を皆処理して、国に帰ってきて、国が二つに分かれているので、これを統一国にしなければならないというのです。統一国を作るのと同時に、皆さんの国を立てなければならず、民を立てなければならず、氏族を立てなければならず、家庭を立てなければなりません。

知恵深い人は、生命を尽くしてわめいてでもこれに（板書される）乗って越えなければなりません。分かりますか？　統一教会の教徒たちは、父母様がすべての蕩減の使命を果たしたために、今は簡単なのです。本当に神様を知り、本当に真の御父母様を知り、本当に真の妻と真の夫を知り、本当に真の息子娘を知れば、皆終わるのです。

その息子娘を知ろうとするので、妻と夫を知ろうとするので、戦って勝たなければなりません。彼らを愛さなければなりません。愛してサタン側的兄弟、一二弟子、一二〇門徒を解放することによって、自分の息子娘を千年万年生きたいと愛することができるのです。

「月よ、月よ、明るい月よ、李白が遊んでいた月よ、あそこ、あそこ、あの月の中にカツラの木が刺さったから、玉の斧で突き刺して引き出し、金の斧で切り取って整え、わらぶきの三間の家を建てて、両親父母を迎えて千年万年生きたい」それが皆韓国の民が選民権を受け継ぐことができる、選民が歌を歌うことができる、それが永遠をかけて讃える祈りです。

両親父母を迎えて何をするって？　千年万年生きるのです。どこで？　わらぶきの三間の家で。わらぶきの三間の家がどこだか分かりますか？　どん底から上がらなければなりません。わらぶきの三間の家で父母を迎えられなくては、王の父母を探せません。わらぶき

の三間の家の家庭から迎え、氏族を編成し、氏族から民族を編成し、民族を編成してこそ王権が生まれるのです。国を探さなければなりません。

すでに世界と国では先生が、勝利の立て札を持って、垂直の立場にいます。先生が横に行くことはできません、垂直の立場に立っているために。先生を中心としては、個人的垂直、家庭的垂直、氏族的垂直、民族的垂直、国家的垂直、「界的垂直、天宙的垂直が、神様を中心として一体的にぴったりとなっています。（二一二・五三）

人間の愛と神様の愛の合徳の基地がどこか？神様を愛するために、人間を創造したのに、神様がなぜ愛のために人間を創造したか？神様一人では孤独です。愛を中心として、千年万年生きたくて、人間を創造したというのです。
「わらぶきの三間の家でも、両親父母を迎えておいて、千年万年生きたい」そういうでしょう？　理想的な神様も同じです。わらぶきの三間の家より、もっと小さい所に入っても、天下を抱いて息をして生きるのが、驚くべきことです。その家が小さい家ですか？　神様が入っておられれば、天国の王宮であり、宇宙の王宮になりうるのです。（二〇四・一〇六）

五）真の父母の名で祈祷

神様は、我々堕落した人間にとって、師のうちでいちばん大きな師というものです。先生のうちで、大王先生というものです。それは、神様が知らないことがないためです。また、父母で言うなら、父母のうちでも第一の父母です。すなわち、真なる父母です。王としては万王の王です。誰が？（神様です）。神様です。分かりますか？

神様は、先生のうちで第一に優れた先生であり、父母のうちで第一の父母です。父母のうちで何番目の父母ですって？（第一の父母です！）第一の父母なら、その父母が偽物の父母ですか、真の父母ですか？　真の父母というのです。そのような真の父母が、人間が堕落することによって真の父母になりましたか？

統一教会では、祈祷を終えるとき、「真の父母の名によってお祈りします」と言います。神様を中心として見るとき、いちばん始めに真の父母は神様がなるのではないでしょうか？　それで、祈祷しながら願うときに、誰を通じて願いますか？　何かをするときも、父の名で呼ぶようになっているではないですか？　そうでしょう？

皆さんが、水に溺れているとき、誰が救ってくれるのを願いますか？　救世主が来て救ってくれるというとき、隣の町内のおじいさんが救世主になって救ってくれるのを願いますか、自分の弟が救世主になって救ってくれるのを願いますか？　自分を救ってくれる救世主がお兄さんだったら良いでしょうか、弟だったら良いでしょうか？

誰が来て、救って欲しいでしょうか？　自分の妻が救ってくれたらいいですか？　違います。自分の父母が来て救ってくれるのを願うのです。救世主のうちでも、一等救世主であ

る父母が来て、救ってくれるのを願うのです。父母は、子供の苦痛を自分の骨髄に徹して苦痛を知る方であるために、子供は父母である救世主を探すのです。

皆さんが祈祷するとき、真の父母の名で祈りますが、その真の父母が何か？　その言葉を先生とお母様だけについて考えないでください。より高い次元で世界を抱き、民族感情や国家感情を越えて、万民を真実に等しく愛すことのできる母、父という境地の真の父母の基準を考えろというのです。それで先生も真の父母の名で祈るのです。（三三・一四三）

六）真の父母の名の威力

聖書で見ると、人間は堕落しました。ですから、神様を解放しなければなりません。堕落によって、すべての自分の所有の息子娘、自分の夫婦、国と世界までいっぺんに失ってしまったのです。それを真の父母が来て、物と子女と家庭と国と世界を収拾して、神様に返さなければなりません。所有主が神様だったのが、愛の道理において失ってしまったことによって、偽りの愛になってしまいました。

愛を中心として、所有されうる原則で創られたのが、敗亡の愛によって破綻したのを、真の父母の愛で収拾して、物と子女と夫婦と国と世界を再び神様の前に奉献してさしあげなければならないのです。

そうして、神様が「神様の宇宙は、真の愛を中心として神様の所有として取り返すのだ！」このように勝利を讃えながら、その捧げられた物を真の父母の前にくれるのです。神様の所有になって、真の父母の所有になるのです。真の父母の所有を中心として、真の息子娘の所有になり、これを東西四方に再び分配される世界になる前には、地上に天国は顕現することができないのです。

今日、我々がする統班撃破は何か？　南北を統一して、神様の名で、真の父母の名で、万国の勝利の版図を中心として、大韓民国を全人類の祖国光復として、神様の前に捧げなければならないのです。

ここには、民主と共産が一つになっています。真の父母と偽りの父母を中心として見るとき、神様の前に互いに怨讐ではありません。金日成がまだ死んではいけません。今、金日成と我々の輩が会っています。安企部でもそれを知りません。反共法に私が抵触するでしょう。私がそのようなことをたくさんしてきました。日本にもそうであり、アメリカにもそうであり、ソ連にもそうであり、全部投入したのです。

それゆえ、統一教会は乞食の輩というのです。なぜ乞食の輩ですか？　統一教会は、すでに何十年前に皆捧げました。統一教会の人たちは、家に行ってみれば小さな鍋とクズ物しかないでしょう？　どこか私が見るでしょう。家具をよく入れて置いている家に行くようになれば、子供から整備するでしょう。神様のものとして皆取り戻さなければなりません。物も皆返してさしあげなければなりません。

息子娘のために自分の父母が下人暮らしをしてはいけません。神様のために下人暮らしをしなければなりません。「ああ、教会だ何だ、

皆やめて、大学に行かなければならない！」そういう奴の子供たちは、私がきれいに人事をうまくしてやるでしょう。

今、南北を一つにして、神様の名で、真の父母の名で、歴史的なすべての所有権をサタンから奪ってこなければなければなりません。そうして、神様の本然的父母の位置に所有権を返還して、そこから歴史的なすべての国の中で、最初の先祖国として登場させるためのことをしようというのが、文総裁の終着的愛の目的です。（二一一・一二七）

七）真の父母の名でいつまでも栄光

捧げたと言うようになるなら、神様の名とともに、再び神様の名から…。真の父母だけではいけません。創造主である神様の名から真の父母…。アダム・エバの所有になるものでしょう？　再び回してもらわなければなりません。それで、真の父母の家庭を中心として、相続が起こらなければならないのです。

それで、その次から、第一が再分配時代が来るのです。永遠な天国になるのです。そこはサタンの分立がありません。

第二は、創造理想生活が可能なのです。そうではないですか？　サタンの讒訴がありません。そこに闘争だとか、決裂がありえないというのです。真の愛を中心として、完全に統一された体制において、創造理想の生活が始まるのですから、完全な地上天国が生じ、ここで暮らしてそのまま天上天国に行くのです。宗教が必要ありません。

第三は何かというと、真の愛のための天上天国、地上天国が実現されるのです。

その次に、結論は全部神様の名で、真の父母の名で、我々の名でいつまでも栄光を極めるだろう！　アーメン！（アーメン！）何の名？（神様の名で！）神様の名、真の父母の名、我々の名でいつまでも栄光を極めるだろう！　永遠、永遠、無窮に、栄光を極めるだろう！　アーメン！（アーメン！）そこには宗教もなく、闘争もなく、全部そのようなものです。終わりです。そうでなければ何がありますか？　今、目標が何か分かったでしょう？（はい）。（二一二・一四三）

八）真の父母の心情伝授と相続

・心情の伝授

皆さんが、今、真の父母の心情と神様の愛とその心情をどのように体恤するか？　これが問題です。その境地にどのように入るかというのです。そうするには、堕落しなかったアダム・エバにならなければなりません。サタンが讒訴できてはいけません。では、サタン世界でどのように解放されるか？　サタンと戦って勝たなければならないのです。そうするには、どれほど苦労しなければならないか？　どれほど苦労して、どれほど苦しくなければならないかというのです。

ヤコブも一〇回だまされ、モーセも一〇回だまされ、イエス・キリストもそのようにだまされました。先生も同じです。それを克服していかなければなりません。そのときに、神様の心情を知るようになるのです。父母様の心情を知るようになるのです。そうでなけれ

ば、絶対分からないというのです。そうでなくては、サタンが離れないのです。サタンの前に勝利できない限り、父母の心情を知ることができず、神様の心情を知ることができません。ですから、我々は一線に行かなければなりません。全部が一線に行かなければなりません。

このようにせずに楽な考えをする限り、神様の愛と父母の愛、父母の心情圏、神様の心情圏に訪ねていくことができないのです。ですから、一線に送り出さなければなりません。全部迫害され、蔑視され、殴られ、ありとあらゆることをされてこそ、そこで心情が伝授されるのです。伝授式がそこで起きるのです。

ですから、レバレンド・ムーンのように、いつも先頭に立って行かなければならないのです。そうでしょう？　一線で受ける迫害がどれほどひどかったか！　ですが、それは当然なのです。皆さんがそれを消化すれば、神様が保護するでしょう。同じ立場に立つことによって、同じ心情を体恤することができるのです。分かりますか、何の話か？

その心情をどのように体恤するかというのが問題です。真の父母が本当の父母であり A 神様が自分の父であるというのを、どのように自分が分かるかというのです。どのようにこの骨肉が知るか？　自分が考えなくても、この細胞、肉体が分かるかというのです。サタンの讒訴を受けえない立場を克服しなければなりません。何のことか分かりますか？（はい）。それがいちばん問題です。どのように父母様の愛を体恤するかという問題が質問の中心ですが、答は簡単なのです。世界的舞台でサタンに勝利した、本然のアダム・エバと同じ立場に立ちうる自分にならなければならないのです。

そうするには、どれほど血涙をたくさん流し、どれほどサタンの前に讒訴されるでしょう？　蕩減路程を経ていき、勝利してからこそそれが起こりうるので、どれほど苦労なことかという事実を知るべきです。はっきり分かりましたか？　いくらその立場が嫌で、いくら祈っても、いくら何かをしても行けません。直接体恤しなければならないでしょう。その立場に行けば、すぐ体験するのです。直接指導するのです。分かりますか、何の話か？（はい）。父母の心情を知るためには、一体ということをどのように感じるかということが、大きな問題なのです。そして、サタンに勝利する前には、絶対できません。来ないのです、来ません。来ないのです。

私が昨日おとといも話しましたが、送電所を作っておいたというのです。送電所を作って、電線をかけておいて、そこに個人的、家庭的、氏族的、民族的、国家的、世界的、天宙的、神様まで、このような塔をを作っておいたというのです。それなら、今、心情の電線を歩かなければならないのです。これは、誰が歩くべきか？　先生がするのではなく、神様がしてくださるのではありません。皆さんがしなければならないのです。（一二五・二〇六）

・息子娘は父母のものを相続

神様が人間の前に与えうる贈り物があるなら、その最高の贈り物が何だろうか？　皆さんが

人類の先祖になり、真の母、真の父になることです。それがどれほど素晴らしいですか？それ以上はないのです。長官や大統領も皆ついていけません。それが神様から人間に下さることができる最高の贈り物です。

真の父母になれば、真の子女が出てきて、真の家庭が出てきて、真の氏族が出てきて、真の国、真の世界がここから自動的に生じるのです。そうではないですか？　ですから、いちばん重要な名前が何ですって？（真の父母です）。真の父母という名前が、真の愛という用語がいちばん重要です（一二五・一一七）

堕落が何ですか？　自分勝手にしたのが堕落です。それゆえ、神様と真の父母を中心として、そのようにできなかったのを砕かなければならないのです。砕かなければなりません。それで、男たちはお父様の分身にならなければならず、女たちはお母様の分身にならなければなりません。

神様が皆さんの目の中に入っても、どこに入っても、皆さんが喜んであげるべきであって、「ああ、入れません」そう言えますか？（言えません）。皆さん、垣根を残したいですか？（いいえ）。神様の愛は、皆さんを通じて来るのです。それを皆研究しなければならないのです。おろそかにしてはいけません。皆さんがそのようにしなければなりません。

皆さんがその伝統を受け継げば、真の父母なら真の父母が、皆さんを訪ねるのです。真の父母が皆さんに神様の使者として来て、相続させてくれるのです。（一一八・二七二）

今まで真なる父母が出てこなかったので、真なる子女が出てくることができませんでした。まだ地上に真なる人がいなかったために、真なる父母が出てこなかったのです。それで、統一教会では、真の父母を認め、その真の父母を発見して侍ろうというのです。真の父母の息子娘になろうというのです。

その息子娘になれば、何をするか？　真の父母が持っているものを相続するのです。真の父母が持っている相続権は、天地、神様までです。神様までも相続しようというのです。天地に主人がいなければ、その天地は何の価値もありません。その天地の価値を百パーセント認めることができ、その価値を永遠に主張することができ、そうだと言える自分にならなければなりません。また、それを公認してあげることができる方に会わなければなりません。その方が神様です。それゆえ、真の父母の相続権を持たなければなりません。

では、真の父母の相続権が何か？　天地だけでなく、神様まで相続されるのです。（二四・三二三）

我々が行く道は、まだ終わっていません。皆さんは天の前に感謝することで、祝福を受けるでしょう。皆さんは、個人的に感謝すべきであるだけでなく、自分の氏族を代表して、金氏なら金氏、朴氏なら朴氏を代表して、さらには三千万（韓国）民族を代表して、世界の人類を代表して祝福を受けたという、その価値を忘れてしまってはいけないのです。また、真の父母が地上で果たすべき責任を相続したということを知るべきなのです。

祝福家庭たちは、なぜそれを相続しなければならないか？　祝福家庭たちが民族復帰の過程を経ていっているなら、真の父母は世界的な復帰の過程を経ていかなければならないのです。すなわち、一段階先に進まなければならないのです。しかし、民族復帰の勝利的基準が立てられなければ、真の父母は世界的な路程を行くことができないので、真の御父母様が世界的な路程を行かれるようにするため、民族復帰の責任を相続しなければならないのです。それで、皆さんは死ぬまで、この民族の恨が除かれるときまで、民族復帰の責任を背負っていかなければなりません。（一三・二九三）

九）留意すべき内容

我々は、心情圏に入らずしては、復帰ができないのです。それゆえ、復帰の責任者は、父母の名を持って行かなければなりません。イエス様も真の父母を通じなくては、行く道がないのです。真の父母が行くべき道ではありません、これが。

皆さんは、真の父母を中心軸にして、真の父母の愛を中心として、ぴったりと水平線になっていなければなりません。皆さんには、不平がありえないのです。不平は言えないのです。不平を言えばぺちゃんこになるのです。（一三六・七〇）

皆さんは、真の父母に対して、こうしようああしようと言っています。皆さんは、真の父母を皆さんの部落にいる有名な金持ちの父母ぐらいに考えるなら、それは大きな間違いです。世界を一つにするには、真の父母を迎えなければいけません。世界を一つにする道を、人間としては発見できません。

真の父母という方は、歴史の希望の結実体です。望みの結実体です。すべてを蕩減した勝利の結実体です。これを知るべきです。真の父母とアメリカと換えることができるか？（五五・一五五）

八、三大主体思想と真の父母宣布

一）三大主体思想と真の父母主義

・三大主体思想は我々の願い

人間の願いが何か？　堕落した人間の願いが何か？　息子娘を産んでも、その息子娘がサタン世界から迫害されず、天国に直行するよう育てることができる、真なる父母になるべきだったのです。そにようになれなかったのです。真の息子娘を産んで、天国に直行させうる真の父母の身代わりになるのが願いです。皆さんも全部良い息子娘を産みたいでしょう？（はい）。世界でいちばん優れた子女をです。それができませんでした。それをどのようにするかが問題です。

その次は何か？　天使長が、神様の息子娘であるアダム・エバを教えられませんでした。我々がどのようにしてでも、我々の子女たちを神様の息子娘として育てて、神様に必要な人として教育するかということが、最も重要な問題です。

皆さん、みんな先生になりたいでしょう？手本になりたいではないですか？　それで、

皆さんは、熱心に働いて、国を代表しうる大統領の身代わりになりたいし、その国の会社とか、すべての行政部署の主人になりたがるのです。出世しようというのです。そうじゃないですか？　それが何か？　真なる主人になろうということです。

これが我々の三大念願です。一つは真なる父母、その次には真なる師、真なる主人。皆さんもそうでしょう？　出世してアメリカの州知事になりたいし、大統領になりたいでしょう？　そうですか、違いますか？　それになる前に、家の主人になければなりません、家の主人に。家庭の伝統を相続して、先祖に代わりうる、神様に代わりうる主人の立場に立たなければならないのです。そうすることによって、すべての家庭と国が尊敬するのです。この三つなら世の中のすべてが、皆入るのです。真なる父母、真なる師、真なる主人です。分かりますか、何の話か？（はい）。
皆さんがすべて真なる父母になるべきであり、真なる師になるべきであり、^なる主人になるべきです。これが三大主体思想です。分かりますか？　この三大主体思想の根が何か？真の愛です。この真の愛は何かというと、自分の百パーセント以上を投入し、また投入し、また投入しようということです。そのような思想を持った父母であり、師であり、主人であるということを知るべきです。根が一つです。

それゆえ、「真の父母」というときは、必ずその右に師が来て、左には主人が来なければなりません。いつもついて回るのです。誰でも息子娘を産むからといって、真の父母になるのではありません。息子娘を産んで育てなければなければなりません。息子娘がお母さん、お父さんに乗って回らなければなりません。教えなければらないのです。（二〇五・二〇）

・三大主体思想は真の父母思想

三大主体思想の中心思想は、真の父母思想です。ここに、なぜ真の父母が中心になるか？垂直を通じた縦的基準は、一つしかないのです。何の話か分かりますか？（はい）。真の愛の垂直は一つであるために、真の父母と縦的な神様の決着点を持った家庭を中心とした代理基盤というものです。

それゆえ、父母の思想を模範として真似た師、父母の愛を模範として真似た主権者は、天国の環境的与件を指向するようになりますが、ここにはサタンが侵犯できないのです。悪魔の愛の圏の寝室の内容をもって侵犯できないために、解放圏が繰り広げられることによって、地上に天国形成が繰り広げられるのです。（二一三・一二四）

・三大主体思想の骨子

今はソ連が私の手に捕まるようになりました。アメリカの手には捕まらなくても、私の手には捕まるようになったのです。また、アメリカも同じです。ソ連の手には捕まりませんが、文総裁の手には捕まるのです。アメリカを右手に、ソ連を左手につかんだのです。今や終わりの日になったので、そのまま行こうが、地獄に落ちようが、後ろ向きになるのです。

後ろ向きになるには、何を中心として後ろ向きになるべきか？　偽りの父母が、愛の天理

に背いたために、滅びの兆しが来てしまったのです。これを真の父母によって後ろ向きになることにして、本然の故郷に帰ることができるようになったのです。分かりますか、何の話か？（はい）。

今、先生について移動して、前進的な路程に回るための総決算時代に来ました。すべてが終わりです。キリスト教も終わりであり、仏教、儒教、全部終わりです。政治も終わりです。それで、これを収拾して、宗教圏を中心としては、世界平和宗教連合を結成し、政治圏を中心としては、世界平和連合を結成したでしょう？　心が分かれたのを一つにして、世界的に実を結んだのを収めたのです。収めるのに、何を中心として収めたか？　真の父母の愛を中心として。

真の父母と真の師と真の主人が、三大主体思想の骨子でしょう？　この三大主体思想をもって、世界の優れたという人たちまでも、先生の前にひざまずいて「指導してください」と言うようになっているのです。自分が主人だと言っていた世界の政治家たち、この偽物の主人たちが先生と全部因縁づけられています。その三大主体思想が、誰々ですか？　先生について言う言葉です。

では、先生が暮らすには、どこで暮らすか？師の立場にだけ立つのではありません。主人の立場にだけ立つのではありあません。そうじゃないですか？　大学の総長も夜になれば父母として家に帰り、大統領も何ですか？青瓦台（大統領官邸）に帰るのです。満廷の百官を従えたとしても、寝るときは家に入って寝なければならないのです。父、父母になるのです。そうではないですか？

そのようなことを見るとき、父母が中心です。父母的学校であり、父母的主人の立場です。皆出ていっても、父母のところに帰ってくるようになるのです。帰らないで暮らすことができる所は、父母を迎えた所です。それがすべて、真の愛を中心としてそのようになっているのです。君師父一体という言葉もそこで成立するのです。分かりますか、何の話かH先生が今、真の教えを教えているのです。分かりますか？　ですから、師のうちの師でしょう。

主権者のうちで、愛を中心として治める人がいましたか？　それゆえ、皆さんの体と心が、先生と方向を合わせて、千年万年暮らしたがるのです。本当に統一教会を愛し、また、統一教会で神様を愛し、人類を愛し、人間の根本を愛することができる心を持った人は、先生を離れることができないのです。なぜ？父母の心情圏、師の心情圏、主人の心情圏を持っているためです。先生を通じれば、父母の立場にも行くことができ、主人の立場にも行くことができ、師の立場にも行くことができます。（二一五・八〇）

・父母主義

イエス様が生まれましたが、そのイエス様が男ですか、女ですか？（男です）。男です。神様の愛と、神様の生命と、神様の血統を受け継いだ、そのような男性が、彼に対することができる一人の女性に会って初めて赤ん坊を産んだとしたら、それこそ神様を中心とし

た新しい直系の子女が、この地上に生まれたことだろうということです。

そうであったら、今日キリスト教とか、ローマ教皇庁が必要ないのです。イエスの直系の息子娘が出てくることによって、この地上に初めて一つの王権が始まるようになって、一つの世界になっただろうというのです。

その王権というのが、全世界に対する王権ではありません。一家庭からの王権です。家庭から始まって、家庭の王、氏族の王、国家の王、世界の王、天宙の王、このようになるのです。そうなっていたら、今日、キリスト教の牧師たち…。

牧師たちがここにも来ましたね。あんな牧師たちが必要ですか？　長老教とか監理教とかいう教派が、なぜ必要ですか？　ローマ教皇庁が必要ですか？　民主主義が必要ですか？　民主主義というのは何ですか？　兄弟主義です、兄弟主義。ですから戦うのです。兄弟どうし互いに戦うのです。こうして兄弟主義が父母主義に帰り、父母主義が神様主義に帰るのです。

では、父母主義が何か？　地上において、アダム・エバが完成した真の父母主義です。その次に神様が何か？　真の父母が横的な父母なので、縦的な父母も必要なのです。それゆえ、縦的な父母が神様主義です。ですから、頭翼思想という言葉は、真の父母主義であり、ゴッディズム（Godism；神様主義）という、縦的な神様主義だ、このようになるのです。

横的真の父母主義と、縦的神様主義、縦横が一つになって、天の生命、地の生命、天の愛、地の愛、天の血統、地の血統がつながって、人間が生まれるために、人間は、二重存在になっているのです。内的人と、外的人とになっています。内的人は、縦的な自分であり、体的な人は、横的な自分だというのです。実になるのです。（二二四・二二七）

民主主義はどのような主義か？　これは兄弟主義です。兄弟が多いから、その多い兄弟の中で、誰が父母の愛をもっとたくさん受けるかというのが、いつも家庭で問題になるのです。父と母がいれば、あの息子はお母さんに似た、あの息子はお父さんに似たといって、自分に似た息子娘を中心として、お母さんの組とお父さんの組が生まれるのです。それは何か？　愛を中心として、このような形態が起こるのです。

それで、第二次大戦後に、戦勝国が敗戦国を独立させる現象が起こったのです。これは、世界が兄弟主義圏内に入ってくるということを意味します。神様側の主義が現れるためのいちばん近い距離に行けば、お一人の神様の前に二人の兄弟が戦うのです。

歴史の終末時代において、統一的基盤であるアメリカのキリスト教文化圏を中心として、アメリカが主体になり、それに加えた世の中を全部審判してしまうのではなく、敗戦国を独立させたという事実は、神様のみ旨の中で、捨てられた息子娘、放蕩息子を収拾することができる、天の摂理時代に入ってきたということを意味します。それゆえ、民主主義というものは、兄弟主義です。この兄弟主義が終

わった次には、父母主義が来て、父母主義が来てこそ統一が繰り広げられるのです。摂理史がそうです。（二一三・一〇）

二）真の父母宣布

・真の父母宣布の背景

真の父母をなぜ宣布することができるか？
民主世界と共産世界は、カイン・アベルの兄弟です。民主世界と共産世界が、二人の息子と同様ですが、戦うのです。ところで、私が二人の息子たちが戦ったのを和解させ、歓迎されうる立場に立ったために、初めて父母の特権を持って、韓国の地に来て真の父母宣布を国を挙げてしたのです。

この知らせは、全世界に噂になるのです。そうではないですか？　レバレンド・ムーンが動くのは、アメリカのＣＩＡではいちいち報告するようになっているのです。ソ連のＫＧＢもそのようになっています。ですから。私についてどれほどよく分かるでしょう？

このようにして、真の父母宣布ができたということは、世界的な立場に立つことです。世界的に備わった全部が、韓国で接ぎ木しようと待つのです。問題が何か？　「私の国の統一」を早くしなければなりません。統一された基盤の上に接ぎ木しようと待っているのです。ぴったりとそのようになっています。そうでしょう？（はい）。（二〇四・一八九）

・真の父母宣布の基準

厳格に言えば、先生の故郷が皆さんの故郷ではありません。枝と芽と葉は、皆同じですが、枝々のある位置が自分の故郷と同じです。それゆえ、皆さんがこのよう氏族復帰決定ができなければ、皆さんの故郷がないのです。

故郷がない人は、生まれることができません。ですから、父母復帰ではないですか、父母復帰？　そうでしょう？（はい）。三代を中心として、氏族的メシア圏を完成しなければなりません。家庭を中心として、蘇生、長成、完成は、先生を中心として接ぎ木することによって…。

責任分担完成圏、直接主管圏と間接主管圏が一体化しうる基盤を誰かがして、神様が愛を中心としてあなたと私とこの被造世界が愛のものだ、という宣布式をしなければならないのに、それができなかったのです。それゆえ、神様の所有権が決定できずにいるのです。その所有権は、完全にサタンの愛を中心として…

神様の愛を中心として一つになって、宣布式をしなければならないのが、原理型の偽物の立場のサタンの愛を中心として一つになって、宣布式をすることによって、サタンの所有になってしまったのです。（二一三・一二三）

民主主義もけんかをするのです。兄弟どうしけんかするでしょう？　兄弟どうしけんかするのは、近所の町内の人がけんかするのより、もっと恐ろしいです。なぜそうかというと、一人は東なら、一人は西なのに、東西が位置が合わなければ、その横が近いではないですか？　東も南と北が、西も南と北が近いでは

ないですか？　近いのです。兄弟どうしけんかすれば分かれるのです。

ところで、近所の人どうしでけんかしても、分かれないのです。風呂敷を包んで逃げないではないですか？　そうでしょう？　けんかのうちでいちばんよこしまなのが、兄弟どうしのけんかなのです。

兄弟主義の時代において、二人が争う国は、滅びるようになっています。大韓民国はけんかをしますか、しませんか？　お兄さんがだれか分かりません。弟が誰か分かりません。なぜ分からないかというのです。どこで生まれたのか分からない無礼な奴として生まれたために、父が現れてこそ、父母が現れてこそけんかをしないのです。それで、父母主義が、救世主が来るのです。お分かりですか？　父母主義。それゆえ、民主主義時代は、けんかが終わりませんが、父母主義時代に来ては、けんかが終わるのです。

今日、統一教会が真の父母を発表しました。エデンの園で、アダム・エバが堕落しなかったら、神様も真の父母であり、アダム・エバも真の父母になったでしょう。神様は縦的な真の父母であり、アダム・エバは横的な真の父母です。分かりますか？　縦横が一致した真の父母なのに、それを見るようになれば、東西南北が皆同じです。上を下に持ってきて、下を上に持ってきて、西を東に、東を西に、どこに持ってきても皆合うのです。

アメリカがアメリカのための立場に立っては、世界を取り戻せません。転換させられません。分かりますか？　共産主義も、共産主義を主にしてはいけません。世界のための共産主義にならなければなりません。民主世界も讃える共産主義になり、共産主義自体も讃える共産主義にならなければならないのです。「皆良い！」と言える主義にならなければなりません。それが何の主義か？　兄弟どうしけんかする輩たちが、けんかをやめるためには、お母さん、お父さんが現れなければなりません。

そのような意味で、今日よこしまなけんかの場が繰り広げられた、過ったこの世の中に、先生が真の父母を宣布しました。真の父母を世界的に宣布するためには、個人的真の父母、家庭的真の父母、氏族的真の父母、民族的真の父母、国家的真の父母、世界的真の父母、天宙的真の父母、神様と人間を中心として、神様も真の父母、真の父母自身も真の父母と言うことができる位置まで行かなければならないのです。そのような言葉を発表したという事実は、歴史的なことです。

真の父母宣布するとき、五〇億の人類の三分の一は率いなければならなにのに、このざまは何ですか？　原理がそうですか？　それゆえ、私が、三分の二は条件をかけておいてするのです。日本も私に引っかかり、アメリカも私に引っかかり、中共も私に引っかかりました。ソ連は私に引っかかりませんでしたか？（引っかかりました）。

父母の時代が来れば、けんかは終わります。八〇になり、一〇〇歳になった兄弟どうしも、九〇歳になった兄弟どうしけんかしても、お母さん、お父さんが来れば飛び出さなければならないですか、けんかを続けなければならないですか？　千年、万年待っていた父母が

来るというのに、どのように飛び出さなければなりませんか？

今日の世の中の人たち、何、イエスを信じる人たちも、救世主が来るのをどれほど願いますか？　救世主が何か分かりますか？　求める「求」の字、税金の「税」の字、主人の「主」の字です。それが救世主です。税金があるでしょう、税金？　それが何か？（笑い）　このごろで言えば、けちんぼうです。そんな輩ではないですか？　それも救世主というものです。

文総裁は、愛を通じて占領しました。そうです。何の愛？　自分のための愛でなく、人のための愛を持って。（二〇二・一六五）

・真の父母宣布の場所

皆さんは、文総裁がなぜ苦労したかということを知るべきです。私の国のためなら、私がなぜ苦労しますか？　私は賢い人です。私が韓国の風俗をよく知っている人です。世界のために、天国のためにしようとするのでそうなのです。

韓国が四〇年間、ありとあらゆることを皆しました。私に対して罪が多いのです。兄弟の荷を私が背負い、父母と姻戚の八親等に因縁づけられたすべての韓国の民の荷を、私が背負い、皆備えたものを、今回やってきて祝福をしてあげたのです。それで真の父母宣布をしたのです。

真の父母宣布をどこでしたか？　モスクワからしたのではありません。韓国でしました。ありがたく思わなければなりません。分かりますか？（はい）。（二〇四・一八七）

・真の父母宣布は驚くべき事実

先生は、左翼・右翼を収拾しました。この道を歩んでくるまで、先生がどれほど苦労をしたか分かりますか？　頭翼思想を中心とした神主義が、学校からすべての指導層の認定を受けて、それを公認することができる版図をつづらなければならないのです。それで、ソ連政府、アメリカ政府が今、レバレンド・ムーンを中心として暮らすようになれば、アメリカも生き、共産党も生きると言えるようにならなければならないのです。

私がモスクワに入ったときに、ＣＩＡは一目で見ましたが、レバレンド・ムーンが共産党を消化しこそすれ、共産党に消化されないというのです。アメリカの政策の方向において、六カ月以内に行くべき道を教えてあげた人が私です。軍事力を削減しようというソ連の政策を、アメリカが心配して躊躇している局面を、全部教育することによって、そのすべての峠を越えさせておいたのです。

今、振り返るから、振り返れば、どこに行くべきですか？　どこに行くべきですか？　世界に再び還故郷して、国を越えて再び故郷に行かなければなりません。アダム・エバの家庭から、堕落の先祖が始まったから、この仮面を脱がせなければなりません。三代の時代に、三代先祖の過ちをぬぐわなければならないのです。

アダムが堕落したでしょう？　悪魔が人類の真の先祖を殺してしまいました。一代のアダムが堕落することによって、神様の怨讐になってしまったのです。その次には、第二次真の父母として来られた方がイエス様です。メシアです。救世主として来たこのメシアを、人類の民たちが、自分の息子娘たちが、人が、捕まえて殺しました。真の父母を捕まえて殺したので、その国のその罪がどれほど大きいですか？　逃れることができないのです。

それゆえ、イスラエル民族が、二千年間、流離弧客（さすらいの一人の旅人）したという事実を知るべきです。すべてのこの歴史的背後をたどってみれば、数多くの人が剣により血を流し、馬のひづめに蹴られ、怨恨と呪詛（呪い）の露と消えていったのです。そうして、やっと二千年の歴史が過ぎて、初めてアメリカの後援の下に独立することができたのです。

悪魔が我々の父母を殺してしまい、悪魔の息子娘たちが第二次の真の父母を殺してしまい、第三次に来る真の父母を全世界の悪魔が、すべての思想と、すべての体制を動員して、殺そうとしました。しかし、死なずに千辛万苦生き残り、今は父母の道理を、真の父母を地上に宣布することができるという驚くべき事実！　これがどれほど天が願った事実ですか？（二一九・三三四）

・真の父母宣布後我々の処世の方向

先生がゴルバチョフに、レーニンの銅像とマルクスの銅像も撤去しろと言いました。共産党の歴史に、そんなことを言った人はレバレンド・ムーンしかいません。ソ連の共産党の幹部たちは、すべて「我々の前で神主義を言う？　どうしてあのように傲慢に言えるか？」と言いながらがやがやとしました。（笑い）

彼らが、いくら先生を憎んだとしても、今共産世界はそのようになったのです。彼らが世界でいちばん恐れた存在が、彼らの唯一の希望的な存在になりました。他の希望がありません。ですから、「私の言葉を聞いてついてこい。そうでなければ道がない！」と、先生がはっきりと教えてやりました。分かりますか、何の話か？（はい）。

神様が、「私が今までソ連にたいして、そのように宣布したかったのに、立派な私の息子だなあ！」と言われながら、レバレンド・ムーンを見下ろされ、どれほど誇らしく思われたでしょう！「私がおまえを全人類のために立てたい」と言われたために、それ以後に先生が相当に有名になりました。そうでしょう？（笑い）

アメリカの指導者が、「うっ！　どうしてそのようにできるか？」と、ヨーロッパの指導者たちが「どうしてそうできるか？」と、共産世界が「クレムリン宮殿でどうしてそんな行動がでるか？」と言いました。（笑い）神様が見下ろされ「それは面白いな！」と言ったでしょう。先生がそれが分かったのです。それで、先生がはっきりと宣布したのです。分かりますか？（はい）。

それで、全部がこうだということです。真の父母にすべてが皆つながっています。皆さん

の耳が、真の父母を探したいし、皆さんの鼻も同じで、口も同じで、目も同じです。すべてが皆そうです。なぜ？　真の父母は、すべてを引っ張る強い力があります。先生はそれが分かりました。（笑い）　このカーペット、毛布、草、水のすべてが、皆このように真の父母を願います。（拍手）　すべての自然も同じです。「真の御父母様、どうかここにずっといらしてください」と言います。自然が叫びます。しかし、アメリカ人はそうではありません。そうじゃないですか？（そうです）。そうでしょう？（はい）。

アメリカ全体を、完全に何で満たしたがるか？　真の父母。真の父母という音が良いです。「私は真の御父母様に会ったよ」「どこで？」「ついて来なさい」と言えば、すべてがついて来たがるのです。それが真の父母です。真の母、真の妻、真の子女、真の孫、真の愛国者が、そこから出てくるのです。すべてがそこから始まります。理解できますか？（はい）。それが最も希望に満ちた福音です。我々には、聖書が必要ありません。聖書の目的が、真の父母一人を探すことです。違いますか？　ですから、よく分かるでしょう？　真の父母の名前が、いちばん貴いということが理解できるでしょう？（はい）。

ですから、皆さんは、真の父母の何になりたいか？　これが問題です。それで、真の父母を木で考えれば、皆さんは枝です。この枝は、どこに差してもよく生きます。この枝は、どこに行っても、愛さえあれば夜に差しても、昼に差しても、冬に差しても、春に差しても、梅雨時に差しても、それに関係なく、よく生きるのです。分かりますか？　なぜ？　すべてを受け入れるからです。

我々の目的は、神様と人類、そしてサタン圏に属しているすべてを解放し、救うことです。それが我々の目標です。はっきり分かりますか？（はい）。それが真の父母の目的です。我々は、このような父母の心情を宣布するのです。前進するのです。そこには、サタンが存在しえません。これが原理観です。

また、すべての万物はを考えてみなさい。救われる皆さんを見て「万歳！」と言うのです。皆さんがそのような声を聞くすべを知らなければなりません。どこに行っても、万物が歓迎して、人類が歓迎するのです。真の愛を中心とした本然の世界には、万物の真の愛の声でいっぱいになっているのです。真の愛の世界においては、すべてが神様のようにすべてのことを理解できます。真の愛、真の相続。相続するには、すべてを相続するのです。そして、どこでも同参することができる同参権があるのです。この三つのコンセプト（concept；概念）が真の愛を持ちます。分かりますか、何の話か？

この言葉は、自分が自動的に真の愛をキャッチするようになるという言葉です。神様を相続します。神様が自分のものになります。神様がいるところは、どこでも皆同参することができるようになります。どれほどいいでしょう！　我々がどれほど幸福でしょう！　誰もこのようなコンセプトを否定できません。

我々には、このような驚くべきものがあります。どうして自分の心に心配がありえるでし

ょうか？　影がありえません。真昼のように明るいのです。これがムーニーたちの誇りです。分かりますか？

ですから、今からムーニーが行くところは、サタンの反対がありません。今から叫ぶとおり吸収され、叫ぶとおり復活し、叫ぶとおり生まれるようになっています。今までは、なぜ反対があったのか？　今までは、上がってきた過程にあったために、反対がありました。しかし、今は皆上がってきました。それで、ここに左翼・右翼が皆ないので、ヘッド・ウィング（headwing；頭翼）が生まれました。ヘッド・ウィングがもっと高いのです。もっと高いから、もっと良いというのです。

共産主義は僕の主義です。僕と主人主義です。自由がありません。民主主義は何かといえば、兄弟主義です。兄弟主義であるために、自由です。自分たちどうしは、自由があります。それで、戦いが続けて起きます。互いに自分たちが優れているといって戦うのです。
頭翼思想は何かと言えば、父母主義です。上院議員と下院議員が戦って、共和党と民主党が戦うでしょう？（はい）。それがなぜそうなのですか？　父母がいないため、そうなのです。

父母がいて「こいつ、なぜ戦う？　おまえたちは僕ではないか！　息子よ」と言えば、皆終わるのです。黒人と白人と結婚することを、父母がいちばん喜ぶ、それは合っていますか？　父母は思うに、子供が父母のための孝行するより、兄弟どうし互いに父母を愛する以上愛することを願うということを知るべきです。分かりますか？（はい）。それがまさに父母を愛することです。

それで、皆さんも先生を愛しますか？（はい）。私は信じられません。（愛します）。皆さんは先生と違うじゃないですか？（いいえ）。なぜ、いいえか？　愛の人種であるためです。神様の真の愛を中心とするようになれば、絶対的に永遠に一つです。そこから先生とつながります。そのようにつながる因縁は、誰も絶つことができません。

我々も真の父母の路程を歩むだろう、そうじゃないですか？　我々が、今は木の枝のようになっていますが…。同じです。「私」もこれから根を下ろし、トランク（trunk）になって、枝を伸ばし、花を咲かせ、実を結ぶのです。すべてが同じです。これは、我々もこれから真の父母になるということです。では、これからそのようになるということですか、今そのようになるということですか？　これからそのようになるというのです。同じです。

ですから、我々がどれほど誇らしい人たちでしょう！　門を開いて出ていき、「ここを見ろ。ここに今登場しているのがどれほど驚くべき主人か！」と叫んでみなさい。気分がいいのです。すべての動物たちも同じです。霊界でも「あなたはメシアであられたイエスのように、真の愛を中心とした救世主だ。あなたが行く先々に、そこにいるすべての人たちが救われるだろう」と言うのです。それが事実ですか？（はい）。

真の父母宣布を発表することによって、サタンの権限がなくなり、宗教を中心として闘争していたすべての蕩減法もなくなるために、善の霊たちが天使世界に匹敵するため、堕落のない世の中になって、気ままに地上に協助

することができる時になります。その天使たちが、皆さんの先祖たちです。分かりますか？（はい）。ですから、今から統一教会に反対したら、ありとあらゆることが皆起こります。病気になって死んだり、ありとあらゆることが起こるのです。

皆さんが雄々しくならなければなりません。この言葉は、所有権を持つべきだということです。そうすれば、いくら難しい環境に処したとしても、問題がありえません。このようなことは、神様も願いません。「私の前から消え失せろ！」と言えばいなくなります。すぐに降りていきます。霊界も同じです。「私はこのようなことは願わない！」と言えば、即時になくなります。すべての周囲に、そのような力があります。愛の中心が現れるようになれば、すべてがそちらに向かって回るようになるのです。東から朝日が上れば、山川草木のすべての中心が、その太陽に向かうではないですか？　それが生命の本質、愛の本質です。

真の父母は、宇宙的な真の愛の中心基盤です。それで、そのような真の父母が現れるようになれば、朝にすべての山川草木が、上る太陽に向かうように、すべての被造世界が真の父母に向かうようになるのです。すべての被造物が、葉や枝と同じです。霊界では、すべてが神様に向かっています。同様に、統一教会でも、先生がどこかに行けば、食口たちのすべては神経が自動的に先生についていくのです。同様です。何の話か、分かりますか？（はい）。

皆さんのすべての目的が真の愛であり、世界のセンターが真の愛です。神様は、真の愛の父母です。そこからすべて解放が起こります。そのような立場に立てば、四方の門が自動ドアのように開くのです。大きなビルに自動ドアがあるでしょう？　霊界がそれと同じです。霊界で真の愛の主人が行くところは、門がありません。どこでも自動的に開きます。どこでも歓迎です。高い人たちが、その後ろから「いらっしゃいませ。長い間あまりにも退屈でした。面白いことは何でも歓迎します」という、そのような状況が起きるので、どれほど素晴らしいでしょう！　そのようなことが好きですか？（はい）。
ですから、今からはっきりと知るべきです。我々は、真の父母のすべてのコンセプトを相続しました。だれも「私」にああだこうだ言えないのです。自分は自動的に主人になります。師になり、真の父母になるのです。他の誰も皆さんを指導できません。我々には他の師、主人と父母が必要ありません。皆さんが近い将来に、そのような立場に立つことができるようになるのです。（二〇二・三五一）

今までは、堕落することによって、神様の心が地上の人の心と垂直につながるのが大変でした。これが、真の父母が出てくることによってつながるのです。そこで反対しない親戚の環境は、カイン圏ではありません。天の側に立ったアベル圏として入ってくるのです。それゆえ、今宗教圏の打破が起きるのです。

今までは、選民を中心として宗教圏を通じて、霊界と肉界が、主流的な関係を結んでつなげてきましたが、今は、旧約時代、新約時代、成約時代が完成したのと同様になって、宗教圏

の権限がなくなったために、カイン・アベルの環境がなくなったというそういう意味です。

それゆえ、皆さんを中心とした反対しない家庭たちは、天の側のアベル的な立場に立ったということです。分かりますか？　ですから、皆さんがかき回すとおり、回るのです。時がそのような時です。何の話か分かりますか？　ですから、我々の世の中になるのです。

この時を知るべきです。真の父母を宣布することによって、サタンの血統的父母は、皆けりがつくのを見るのです。真の父母がサタン世界と戦って、皆備えて上がってきて、民主世界、共産世界が倒れる段階に来たために、勝利的条件をもって帰ってきて、宣布することによって、サタン世界は終わるのだということです。

サタン世界が終わるということは何か？　サタンから解放されるのです。今までは、サタン世界の文化圏・サタン世界の生活圏でしょう・とその環境内で暮らしたのです。ですが、今は、サタン世界とサタン生活圏とサタンの血統から解放されるのです。

サタンから解放され、どこに行くのですか？　神様に帰らなければならないのです。今、世の中は、神様を知りません。サタンがこのようにしました。人本主義も神様を知りません。今、アメリカの人本主義は神様を追放した人本主義になりました。

人本主義の基準が何か？　体です。体は体ですが、自分を中心とした体なのです。これは享楽を取っていくのです、これを訪ねていけば、滅亡するのです。そのようになっています。

それゆえ、サタンから解放されなければならず、サタンの生活から解放されなければなりません。生活は文化圏を言うのです。アメリカ人と儒教を信じる人たちの生活が違うでしょう？　生活圏から解放されなければなりません。その次に、血統から解放されなければなりません。

では、サタンから解放されれば、どこに帰るのか？　神様に帰るのです。神様に帰らなければなりませんが、共産党も神様を知らず、世俗的人本主義も神様に帰るすべを知りません。

また、生活はどこでするのですか？　自分勝手に動物のように暮らすようになっていません。生活は、本来から真の父母を中心として出発すべきなのが理想的です。真の父母を中心とした世界的理念圏内の版図を中心として、生活しなければならないのです。それゆえ、真の父母を信じなければ、天国に行けないのです。今は、接ぎ木できない枝が多いのと同じです。そのような言葉が成立するのです。（二〇二・二七六）

この場に参席した皆さんは、今どのようにすべきか？　地方に出て真の父母の基盤を築かなければなりません。真の父母は天の基盤を築かなければなりません。神様は、真の父母より先に真の父母の行くべき道を築かれ、真の父母は皆さんが行くべき道を築くのです。それゆえ、皆さんは、真の父母についていけばいいのです。

神様は、来られる真の父母より一段階先に進まれるのです。それゆえ、復帰摂理を見るようになるとき、復帰基台摂理時代、復帰摂理時代、復帰摂理完成時代があるのです。

天は、真の父母が知らないうちにこの基盤を築いたのです。また、真の父母は、我々が知らないうちにこの基盤を築いたのです。皆さんも皆さんの後孫が知らないうちに基盤を築かなければなりません。それで、国家的な基準を越えなければならないのです。そして、世界的な基準も越えなければなりません。
そのようになれば、神様は天宙史的な基準を越えていかれるのです。我々食口たちが国家的な基準を越えれば、真の父母は世界的な基準を越え、神様は天宙史的な基準を越えられるのです。このようにして、神様を主にして、全人類が天宙的な基準を越えていかなければなりません。

このように見れば、皆さんは神様より二段階落ちています。二段階落ちている皆さんは、それで落胆して疲れる立場に立つことができないのです。自分が行く道の前に、自分のために真の父母が行かれ、その真の父母の前に神様が自分のために行っておられます。神様の苦労と、真の父母の苦労は、どのようなものでも、死でも返すことができない苦労です。そのような負債を追って行くということを皆さんは知るべきです。

神様のみ旨を、真の父母が相続し、真の父母のみ旨を皆さんが相続して、その伝統的な思想を失ってはなりません。その伝統的な思想は何か？　人間が怨讐サタンの血統を受けて生まれたために、この怨讐サタンの血統を除去した後、神様を中心として真の父母を中心とした血統的な復帰をしなければなりません。そうするには、神様と心情的に一致しなければなりません。

心情的な一致を基盤にして、天の血統を受け、神様を根とする木の一つの枝になり、葉になり、神様の代わりの実体になって、サタンを屈服させうる絶対的な基準を、地上に立てて置かなければなりません。そうしてこそ、復帰の歴史が推進されていくということを、皆さんは知るべきなのです。（一三・二九七）
・ 真の父母宣布後我々のすべきこと

イ）宣布の前に感謝しよう

真の父母を宣布することによって、どのようなことが起こるか？　神様を中心として為になっていた霊界のすべての善の霊と、サタンを中心としていた悪の霊が、しっかりと分かれるのです。真の父母を中心とした立場に立てば、完成したアダム・エバの立場に立つようになりますが、完成したアダムは、天使長がいつも保護して、育ててくれ、協助するようになっているのです。

完成したアダム圏に立てば、協助だけではなく、愛の理想によって、実体的な主人として侍らなければならないのです。命令することができる段階です。そのような位置に上がるのです。それゆえ、世の中の終わりです。サタン世界の偽りの父母の愛で始まったすべてが終わりになり、新しい真の父母の愛を中心とした新しい世界になるのです。これを肥やしにして新しい世界が繰り広げられるのです。

これを発表することによって、これからは統一教会を無条件に反対したら、長わずらいして全部倒れていくのです。樹液の切れた木のように、枯れていくのです。そのようになれば、いっぺんに虫のエサになるのです。何の話か分かりますか？（はい）。

それゆえ、皆さんが新しい生命の生活圏を中心として行くのです。新しい生命の起源は、新しい愛です。新しい愛が何か？　真の父母の愛です。そうじゃないですか？　創造理想的な新しい愛です。
それゆえ、皆さんは、先生に感謝しなければなりません。何を感謝すべきか？　サタンから解放されたので、感謝しなければなりません。父母様によって、サタン世界から解放されたでしょう？　その次に、何から解放されたか？　サタンの生活から解放されました。その次には、何から解放されましたか？　サタンの血統から解放されました。生活には文化背景があり、習慣性が同伴して入ってくるのです。

何の話か分かりますか？　何から解放されたのですか？（サタンからです）。そ7次には？（サタンの生活からです）。生活と言うことは、文化背景に従って違います。英国は英国人文化を中心として暮らし、アメリカはアメリカ文化を中心として暮らすのです。全部違います。生活環境が違うのです。その生活から解放しなければなりません。

その次には何か？　血筋です。三代の解放が起こります。それゆえ、統一文化が自動的に起こるのです。違いますか？　解放されれば何をするか？　サタンから解放されたので、どこに行くのですか？　神様に行くのです。サタンから解放されれば、偽りの父母と因縁づけら、拘束されていたものが解放されることによって、自由な父母の心情に帰るのです。帰るには、サタン世界の生活圏、習慣性を持って帰るのではありません。きれいに清算しなければなりません。

「真の父母」と言うようになれば、縦的真の父母である神様と、横的真の父母である真の父母がいますが、この二つが一つになった愛を中心として、創られなければならないのです。ゼロの位置、愛がない所から初めて主体性を持つので、愛を探そうとすればゼロから出発しなければならないのです。存在の起源を無視しなければならないのです。それゆえ、聖書に「死なんとする者は生き、生かんとする者は死す」という逆説的な論理が形成されています。分かりますか、何の話か？　それをはっきり知るべきです。

それゆえ、サタンから解放されたことを感謝すべきです。その次には、生活です。韓国民族はコチュジャン（とうがらしみそ）を食べて皆そうするでしょう？　文化圏が背景になり、歴史と伝統を立てるのです。文化圏を言うのです。その次には、何ですか？　血統です。

血統は、愛を中心としてひっくり返ることをするのではないですか？　ここで解放されなければなりません。それゆえ、皆さん自身が

「私は神様の血統だ。神様が私の中に入ってきている」と言わなければならないのです。体と心が戦ってはいけないのです。

今からは、心に聞いてみるのです。神様が皆さんの心まで皆入っているのです。これが神様の芽であり、葉です。分かりますか、何の話か？（はい）。真の父母に侍り、根を持ったためにそのような作用が起きるのです。

空気一気圧を中心として、すべてが押してやっているでしょう？　それが均衡がとれているために、刺激が分かりません。出ていけないように、全部保護してやっているのです。均衡がとれているために、刺激が分からないのであって、少しだけみ旨の前に非良心的に行動してみなさい。宇宙の力が「こいつ！」と言って、吹き込むのです。その力がどれほど強いか、このように行こうとしても、体がぐるっと回るのです。何の話か分かりますか？

それゆえ、皆さんが、神様は自分の心にいて、父母様は自分の肉に入っていると祈るようになれば、神様は、その十字に入って座り、ヘソを中心として自分の体と心の度数を一つにするのです。ヘソではないでしょう。生殖器でしょう。それをヘソだと象徴的に言うのです。分かりますか？（はい）。

三大サタン圏から解放されなければなりません。第一が何ですか？（サタンから解放）。縦的な代表サタンから解放されなければなりません。その次には、肉的な父母から受け継いだ文化圏、生活伝統です。韓国なら韓国民族の文化があるでしょう？　このようにアメリカ文化、ありとあらゆる五万の文化が、一つの中心に向かって全部伸びているのです。遠いほど全部、がらくたなのです。（二〇二・二七四）

ロ）実績を積むこと

世界的に誇るアメリカのいちばんの放送局であるＮＢＣ、ＣＢＳ、ＳＢＣが、すべて文総裁を打って捕まえようと、ありとあらゆるあくどいことをしながら、新聞で叩きましたが、私たちが宣伝する前にレバレンド・ムーンをすでに皆知っているので、（民衆は）のみ込みません。新聞に出して太鼓を叩いてそうしましたが、踊りを踊る人がいないので、太鼓を叩く奴も元気がありますか？　みな途中でやめるようになるのです。

その次には、我々が攻撃をするのです。言論社を持っているので、新聞社から詰め寄るのです。編集局の編集責任者を呼んで、私が殻をはいでおきました。今、そのような戦いをしているのです。

ですから、実績が問題なのです。天下を統一することは、実力でなく実績なのです。分かりますか？（はい）。それゆえ、皆さんは実力はなくても、実績を持てというのです。先生が言ったでしょう？　実績は天下の力を稼ぐことです。文総裁にはどの大統領、ブッシュやゴルバチョフが問題ではありません。一代の実績、ビジネスとして私を比較する所がないので、ひざまずくようになるのです。

皆さんも、後代に残していくことのできる実績がなければなりません。霊界に行けば、贈り物を持って行かなければならないでしょう。嫁に行くには、舅のおじいさんから始まって、その一族に足袋一足でも持っていってあげてこそ嫁を誇って、皆そうなのです。

霊界に行けば、先祖たちが、前に呼んでおいて「おまえは我々の先祖たちの功労を通じて統一教会に入ったのに、何をしてきた？　氏族的メシアの仕事をしたか？」と言いながら、先祖たちがなじるのです。自分が行うことによって、自分の先祖七二代が解放されるのに、なじらないでしょうか？　しっかりしなさい。

サタン世界に奪われて失った天の民たちを、全部天の世界に接ぎ木して、取り戻さなければなりません。自分たちが努力して、天の民をどれほど探してきたか？　その次に、自分の息子娘をつなげて、自分の血族とともに、復帰された民とともに、永遠の創造理想的伝統を、愛の伝統をどのように作っておくかということです。

あの世に行っては、これが一群となって、自分の永遠の生命の権威、生命の位階を探すのです。一族を処理して、一二〇家庭以上連れて行かなければなりません。これが分かりますか？　今、それほど言ったら分かるでしょう。恥ずかしさを免れることができるように、準備しろというのです。恥ずかしさだけでなく、裸になって追い出されるのです。

今は、世界に先生がすでに皆宣布しました。世界の選民権時代は過ぎて、文総裁を歓迎する時期に入ってくることによって、全世界がイスラエル圏に入る万民圏時代が来るのです。ですから、実績を基準にして、編成するのです。（二一三・一三九）

ハ）真の父母歓迎大会開催

大韓民国の人たちが、この頃真の父母歓迎大会をすることによって、ぐんぐんと、ひそひそと、議論が全国に波及したでしょう？（はい）。「やあ！　真の父母が何か、真の父母？」と言うのです。

回らなければなりません。真の父母を探さなければならないのです。偽りの父母を起源にしたので、偽りの父母の終着点を越えて、真の父母をつなげられないようになれば、神様が行けという方向性を探すことができないのが原理であり、理論的なことです。それが違うと言う人はいないのです。

堕落したので、偽りの父母になったでしょう？　追い出されたので偽りの父母です。追い出されない立場で、神様とともに、両親父母を迎えておいて、千年万年生きたいと言うことができる、その父母の立場を探してこなければならないのです。我々韓民族がそうです。「両親父母を迎えて千年万年生きたい…」このような民謡を持っているという事実、これが予示的な民族だからそうなのです。分かりますか？

その次に、西の国のお月様という歌もあるじゃないですか？　それが何か？　西が何だかんだ、星の国が何だかんだ言う歌があるでしょう？　何と？（青い空の天の川です）。そう、青い空の天の川というのがあるじゃないですか？　それを見ると、啓示的な民族です。これから人工衛星が現れて、世界がそのように暮らすことができるということを全部見せてくれるのです。そうじゃないですか？　それは、どれほど風流的な民族ですか？

そのような文化的背景、そのようなこう次元的な思想を、その風刺的な時代の背景を持ったという事実は、偉大なことです。（二〇六・八〇）

文総裁は、今回帰国して、大韓民国国民と民族の前に、真の父母歓迎大会を通じて、真の父母を宣布したのです。これを宣布しなければなりません。そうしてこそ、サタンが退いていくように、天が陣を張るのです。今に見ていなさい、どうなるか。今後の行くべき道を見てみなさい。

真の父母歓迎大会を全国でしましたが、それが何か分からないのです。文総裁が狂ってしたのではありません。真の父母歓迎大会を通じて、真の父母を宣布することで、悪の集団に対峙することができる天の側の基盤を確立するのです。（二〇四・一四四）

今回、全国的に真の父母歓迎大会を通じて、真の父母を宣布したことを皆知っていますか？　私がもっと話してあげなくてもいいでしょう？　今、皆さんが何をすべきか？　先生が世界的な版図の上に、国家と世界がつながったその基盤の下で、父母様歓迎大会をしたので、今は皆さんの祝福を受けた家庭たちが、氏族的父母歓迎大会をしなければならないのです。そうすれば皆終わるのです。分かりますか？

氏族的メシアを完成しなければならないのです。国家を中心として、世界的メシアを完成した後に、氏族圏…。氏族は、世界に広がるのです。そうなれば、国家形成は自然に繰り広げられるのです。そのような時が来ました。このようになることは何か？　民主世界も皆実験済みです。共産世界も実験済みであり、キリスト教や世の中にあるすべての宗教も実験済みです。なぜ実験済みかと言うのか？　統一教会に反対しない所がありません。全部打ったのです。（二〇二・二七〇）

全国に父母様歓迎大会が終わってから、新しい時代に入りました。霊界に通じる人たちは、この世の中が終わり、新しい世界に行くという啓示を皆受けるのです。それゆえ、霊界が再臨します。旧約時代、新約時代、成約時代ですが、昔には主流宗教を通じて、宗教を信じて善なる名を残した善なる霊界に行っている霊たちが、神様のみ旨に従って地上の摂理を助けてきました。分かりますか？　そこを通じなくては、地上と関係を結ぶことができる道が、今まではありませんでした。

しかし、真の御父母様がこの地に出てきて、個人、家庭、民族、国家、世界的に伝統を立て、全部戦って勝利して越えてきたために、今は宗教圏解脱です。真の父母時代には、宗教がなくなります。そうでしょう？　世界的な勝利の版図を持ったために。アダム・エバ自体が堕落しないで、真の父母になっていたら、宗教が必要ありませんでした。そうなったら、それ自体を中心として、永遠に天と一体に合徳（夫婦が一体となること）するようになり、その一体的理想を中心として、先祖たちがいつでも地上に暮らす自分の後孫とつながるようになるのです。

堕落することによってふさがったために、この道を開くためには選民権がなければなりません。イスラエルの民族的選民権、キリスト

教の世界的選民権、統一教会の天宙的選民権を中心として、すべてを蕩減復帰するために、宗教圏解脱時代が来るのです。それで、霊界が全部地上世界と平面的に接することができる時になるのです。

それゆえ、宗教を信じない人たちも、選民権を通じて宗教を経て霊界とつながり、過去の時代が過ぎるのです。真の父母の勝利によって、宗教を信じない人たちも、宗教主流圏内で旧約完成時代、新約完成時代、成約完成時代に入って、霊界に行ったすべての先祖たちが、いつでも地上の自分の後孫たちを訪ねてきて、協助する時代が来るということです。分かりますか？（はい）。霊界がそうです。

それゆえ、これから統一教会を信じなければ、先祖たちが来て悪夢を見せたり、病気を起こさせたり、治したりするのです。今までは地上世界をサタンが分割占領していましたが、善なる天使長圏内の善なる霊たちと、宗教圏にいた善なる霊たち全体が入ってきて、地上で悪なる世界を完全に追い出すために、金日成でも誰でも、今まで悪魔の影になっていたのが、全部片づけられるのです。

それで、一か国、二か国、三か国、四か国だけ統一教会とつながれば、全世界は完全な解放時代を迎えるのです。一九八八年から二千年までが、このことを成すべき使命時代なのです。先生が八〇歳まで。分かりますか？（はい）。

それで、宗族的メシアが設定されたのです。世界的メシア、その次に国家的メシア圏に向かうために、宗族的メシアを宣布したために、今、世界的メシア圏の前に宗族的メシアをつなげる国家的メシア圏が繰り広げられるのです。そうして、天国の一つの州と同様であり、道（県）と同様の設定が繰り広げられることによって、統一王国時代に入るのです。（二〇二・二五五）

・北の父母と南の真の父母

我々が原理で習ったように、旧約時代は、物を犠牲にして息子娘が来る道を築き、新約時代には、息子娘が祭物になって父母様が、再臨主が来る道を築くのです。成約時代に父母様が苦労されたのは何か？　神様をこの地上に迎え入れるための受難の道を歩んだのです。分かりますか？

先生の一大願望は何かというと、神様をこの地上に迎えてくることです。先生が故郷で神様を迎えられなかったでしょう？　世界的な勝利の旗を掲げて、故郷に行かなければなりません。北韓では、悪の再臨主です。悪魔の父母です。それゆえ、金日成をオボイ（父母）首領と言うでしょう？（はい）。

父母という言葉が何ですか？　南韓に真の父母が出てくるのを知って、北韓が真の父母の故郷であることを知って、首（故郷に行く通路）を守って、首を切ろうとするのです。それゆえ、文総裁を捕まえて殺そうと、ゴルバチョフと金日成と、一九八七年二月に約束して行動したのです。二五名の赤軍派をアメリカに派遣して、我々の別荘の住所を全部書き留めて回ったことを、全部霊界から引っぱり出したのです。ＣＩＡが捕まえて調査するう

ちに、私はモスクワに入城したのです。冒険なのです。

神様のみ旨を解怨成就するのに、歴史を短縮させ、一日でも短くすべき責任を持っているために、文総裁が行く道は冒険なのです。一身のすべての資本を太平洋に投資して、山あいに投資するのと同様に、全力を尽くしながらこの道を築いてきたのです。そのようなところに、歴史的な汚点を残すようにしてはいけないのです。分かりますか？

それで、聖なるものです。聖なるものなのです！　それで我が国に神様が臨むことができるのです。南北は、体と心と同じです。一つになれば、そこに神様が臨むのです。愛で二つが一つになるそこに、神様が臨むのです。

それゆえ、南北を統一しなければなりません。まず、南韓において何をすべきですか？　父母に侍らなければなりません。父母様に侍らなければなりません。分かりますか？（はい）。父母様に侍るのを、北韓で金日成に侍る以上にすべきです。北韓では、金日成のバッジを付けて歩くでしょう？　それ以上、統一教会では、世の中に恥ずかしくなく堂々としろというのです。

北韓では、全部主体思想で武装されているのです。ですから、我々は神様の鉄石のような絶対的な愛を中心とした三大主体思想で武装して、北韓が関係できないほどの格差を設けなければならないのです。分かりますか？
そのような道を行くべきなのが、我々の使命であるということを考えるとき、今までどれほど、のらりくらりとしてきたかというのです。（二一二・五七）

金日成は偽者の父でしょう？（はい）。金日成をオボイ（父母）と言うでしょう？（はい）。それがなぜ歴史時代に現れますか？
共産主義国家の中で、いちばん悪辣な、悪魔のうちの大悪魔のような人が出てくるのです。

そこに文総裁も真の父母と言うでしょう？（はい）。真の父母なのか偽りの父母なのか私は知りません。それは行ってみれば分かるでしょう。信じるなら信じて、信じないなら信じないでください。

真の父母が何かというと、偽りの父母を自然屈服させることができなければならないのです。力で叩いて捕まえてはいけません。神様の救いの摂理と、神様の勝敗の決定は、力でするのではありません。力ですると、その即座に皆終わったでしょう。共産党式にしたら、皆終わったのです。

地上世界に、闘争歴史をつないだ軍隊を持って力を誇示していた、サタンの伝統を継承した堕落した世界の歴史時代の終末は悲惨です。そのようなことをご存じの神様は、自然屈服させようとするのです。おまえがしたいとおりに、皆やってみろというのです。皆するようにしてから、天は打たれて奪ってきます。

おまえが正義の側を打ったから、損害賠償をしろというのです。世界の果てに行っては、行く所がないのです。世界の果てに行って、屈服するのです。それを神様が終わらせるのではなく、それを受け継ぐことができる人を

地上に準備しなければなりません。それで、終わりの日には、メシアを送るというのです。（二一〇・二三一）

・宗主たちと真の父母

本来、旧約時代、新約時代、成約時代を通じて、何をしようというのか？　神様を自分の中に迎えようということです。根が誰が？神様ではありませんか？　そうでしょう？人間の根が神様です、本来、真の父母が根ではありません。真の父母も神様から、根から出てきたのです。二つの芽が出てきたのです。そういうことです。根になる方が神様であるために、結局は救いの摂理歴史が…。全部失ってしまったのです。

アダム・エバが堕落する前には、息子娘の立場でしょう？（はい）。しかし、堕落した後、万物がアダム・エバより、ましな立場にあるのです。アダム・エバが堕落したからそうでしょう。それは、二人ではなく、一人になったために、堕落することによって万物よりもっと俗なものになりました。ですから、万物が人間の前にあるために、万物が自分の代わりに死んでくれるのです。自分の代わりに血を流して、立場をすり替えるのです。

それゆえ、旧約時代は、すべての祭物を犠牲にして、息子娘の行く道を築いたのです。その次に、新約時代は、イエス様が来て、息子娘として犠牲になって、父母様の道を築いたのです。多くの殉教の血を流して、再臨時代に父母様が来る道を築いたのです。イエス様と父母様と、どういう関係にあるか？　イエス様は息子の立場で、父母様は父母の立場です。お分かりですか？（はい）。

私がいつか、釈迦牟尼が私の弟子で、イエスが私の弟子で、孔子が私の弟子で、マホメットが私の弟子だと言うとき、ホメイニは私に死刑宣告という言い渡しを下したのです、「文総裁、捕まえて殺すべきだ！」と。この野郎たち、自分が霊界に行ってみたのか？我々のような賢い人が嘘を言わないのです。霊界に通じる人が祈ってみれば皆分かるのに、誰がだまされますか？

見ていなさい。統一教会がいちばん最後に、棒を持って宗教統一しうる中心になって、すべての国の大統領、首相たち、優れたという為政者たち全部の基準を定めてやるでし蛯、。それが私です。それは強制ではありません。自然屈服させるのです。

アメリカのブッシュ大統領が、私に自然屈服して生まれ、ゴルビーも同じです。ゴルビーも統一教会の文総裁でなければ、いけないと言ったのです。民主世界の頂上たちと、ソ連の国会でも文総裁の思想でなければいけないと言うのです。共産党が先頭に立てば、アメリカもついて行かざるをえません。今回そのような大会を中心として、皆築いておいて来たのです。（二一一・三一五）

宗教圏の版図が、教条主義者たちがどれほど厳格か知っていますか？　シリアは回教文化圏です。それでキリスト教とは怨讐です。それゆえ、回教の指導者が、キリスト教圏の集会に行って参席するようになったら死刑です。

しかし、文総裁はシリアのいちばんてっぺんの輩たちを捕まえて、アメリカのイーストガーデンに集めておいて、聖書原理を教えてやったのです。我々統一教会もキリスト教の分派なのか？　主派でしょう。（笑い）イエスが死んで救いを受けたから、イエスの父母が来なければならないのではないですか？　違いますか？　息子を産めなかったから、父母になる立場の圏を持って来るべきでしょう。真の父母という言葉が、そのように偉大な言葉です。

私が「イエスは私の弟子だ」ということを言ったと、既成教会で殺すのだと大騒ぎするでしょう？　霊界に行ってみなさい。私に会えば、イエスが私たちよりもっと挨拶をよくするか、できないか。釈迦、孔子、マホメットも挨拶をするかしないか見なさい、死んで行ったら。このようなことを言うと、何のもちが生まれますか、ご飯ができますか？　そのようなことを言えば、悪口のひさごが転がって入ってくることを明らかに知っていながら、なぜそんな話をしますか？

ホメイニは、レバレンド・ムーンに死刑宣告を言い渡しておいて、死にました。捕まえて殺せというのです。「うちのマホメット、聖なる君主様をこのように冷遇するとは！」と言いながらです。しかし、その人がそう言うから、私より先に死んだのです。金日成が先に死にますか、私が先に死にますか？（笑い）

今日、既成教会で私に反対していた…。その奥の間でクソをしてぐずぐずして、汚くしておいたのを、我々統一教会の食口たちを通じてきれいに片づけて、教団を超越して礼拝をした後に、私が霊界に行こうと思います。礼拝を済ませた後に、行こうと思う人です。

自分たちは知りませんが、すでに統一教会の原理を活用している牧師が相当たくさんいます。皆分かります。ある者は、布団の上に原理の本を出しておいて見ていて、執事、長老が入ってきたら、さっと隠して、出ていった後に再び出して、ひたすら夜を明かしながら、ひそひそと覚えて使うのです。

落ち葉が一日にして落ちるのではありません。落ち葉が落ちるとき、一度に全部落ちますか？　一度に落ちません。ひと葉、ふた葉、落ちるのであって、がらがらと落ちますか？　ひと葉、ふた葉落ちますが、いくらもしないで青い服を着ていた大きな木も、一枚の葉も残さないようになるのです。分かりますか？　そのように処理するのです、知らず知らず。（二一三・三五）

三）真の父母宣布と王権

・本来はアダム家庭が王宮出発地

本然のアダムを中心として完成することが、神様のみ旨です。アダムは長子です、長子。そうでしょう？　最初の愛を受けた息子です。長子権です。アダムは最初の愛を受け継ぐことができるために、最初の愛を中心として父母になることができるのです。縦的な愛として受け継いで、横的な愛としてつなげることができる夫婦になれるのです。父母権復帰という言葉が、そこから出てくるのです。分かりますか？

今まで、歴史時代は、父母が登場することができる基盤がありませんでした。戦いです。カイン・アベルの戦いの歴史です。歴史は戦争の歴史として綴られてきたのです。これを終結することができるためには、兄弟が一つになければなりません。気がついてみたら怨讐が兄弟です。兄であり、弟であるというのです。
それを誰が教えてくれるか？　父母が教えてくれるのです。そうではないですか？　先祖が分かれたのを自分が知らずにいるのに、誰が分かりますか？　父母が教えてくれるのです。父母が教えてくれることによって、和合するのです。それで、父母を中心とした子女です。子女たちが一つになってこそ、父母権を行使することができる権限が生まれるのです。父母権復帰です。そうではないですか？失った子女を探して、父母の前に…。父母が子供に対して行使しうる権限を探すことができるようになるのです。

その次には、王権を失ってしまいました。この父母出発の理想は何か？　王宮出発です。アダムは何かといえば、長子権・父母権・王権を占有して、神様の愛を中心として定着しなければならないというのです。その定着したのが、王権の起源地であり、父母の起源地です。そうでしょう？

その次には、長子権の起源地です。天下は、この伝統に従って、全部順応するようになっているのです。それが設定されれば、天使長も頭を下げなければならないのです。

民主主義世界と共産主義世界が、カイン・アベル関係ではありませんか？　カイン・アベルが戦ったでしょう？　宗教圏と政治権は、縦的な面においてのカイン・アベルです。この縦的な面を横的なものが打ってしまったのです。それで、長子権を復帰することができる基盤を失ってしまいました。長子権復帰することができる基盤というものは、父母権を自動的に内包するのです。長子の上に父母が生じるのではないですか？　父母権が設定されれば、王権が育つのです。

アダム家庭というものは、王宮の出発地です。分かりますか？　皇族から多くなれば、民が生じるのです。そうでしょう？　それで、長子権を中心として、氏族を中心として、その氏族が王権を受け継ぐとすれば、その次の傍系的氏族たちは、民になるのではないですか？　それが原則です。ですから、皇族たちです。自分が天国の皇族だという意識を持ってこそ、アダム家庭本然の基準に帰るのです。

それゆえ、皆さんは何かというと、宗族的メシアというのです。宗族的メシアというのは、父母であり、またそれは王ではありませんか？　長子権を代表し、その宗族王権、宗族父母、宗族長子まで相続して…。

蘇生アダム、長成アダムは、完成アダムによって皆生き返りました。そうではないですか？　それは何か？　長子権、宗族的メシア権は、イエスが復活した家庭形態です。そして、その前に蘇生アダムは、イエスが復活をさせられません。イエス自身が復活させられないのです。

それで、完成した再臨主が来て、イエスの使命を世界的な圏で完成することができる勝利

的圏を、サタンの前に勝利的覇権をつかんで来たために、再臨主だけがイエスの権限を奉行（目上の者がさせる仕事を謹んで挙行すること）することができ、アダム権限を奉行することができるのです。

それで、その基盤で勝利したアダム完成した代表、イエス完成した代表が再臨主です。蘇生・長成を全部連合して完成させることが、三次アダムになるのです。三次アダム完成基盤というものは、イエスも、アダムも、皆入っているのです。ですから、三次アダム完成基盤を中心として、勝利的覇権の上で、世界的メシア権を確立しなければならないのです。（二一八・六九）

・ 王権設定

今日、父母の日を通じて考えられることは、第一は、兄弟権復帰が終わり、第二は、父母権復帰が終わったということです。次は第三に、王権復帰が残りました。

今回、ソ連に行けばどうですか？　ソ連がどうなりますか？　ソ連がサタン側なのに、そこに行って今日話したこのような話をするでしょう。他の話はしません。（拍手）ソ連二億七千万が、皆聞くようになるのです、放送を皆するようになっているから。彼らは、テレビのチャンネルがいくつにもならないのです。ですから、皆さんがしっかりしなさい。彼らに勝ちますか、負けますか？（勝ちます）。

前にソ連の言論界のある人が来て、私を見て静かに話をしませんでしたか？「レバレンド・ムーン、四〇年間に、何、何百万の統一教会員がいると誇らないでください。今、私がソ連の言葉で原理を翻訳しようと思いますが、今まで原理の翻訳をしたものはあまりにも複雑で分かりません。それで、易しく作って、三千万部をソ連の若者たちに持っていってまくのに、そのときは、三年以内に統一教会の世界の教徒の何倍になるか分かりません」と話したのです。（拍手）中国はどうですか？　中国の閣僚部では、レバレンド・ムーンをすでに注目しています。

今、父母権復帰したために、神様が再臨主として送ったのと同様に、神様がイエス様を送ったのと同様に、宗族的メシアを送って、全部収拾するのです。縦的な基準を築いたために、縦的なものを中心として…。ここで縦的にアダム時代、イエス時代、再臨主時代の三つの基準を築いたのです。これを私が全部戦って築いたために、このすべてを再臨主時代にここから伸ばさなければなりません。

こうして、何をすべきかというと、自分の家庭を作らなければならないというのです。そうして、円形が繰り広げられるのです。先生によって、三つがこのようになったのです。これがアダム父母、イエス父母、再臨主父母です。ですから、これを取り除いて（板書されたものを差されて）神様の立場ナ再臨主を送るの同様に、アダムを再び送るのと同様に送ってやるのです。

三次アダムが来たことは、二次アダム、一次アダムを救おうとするのです。三次アダムが来て二次アダムを探したので、一次アダムである自分の父母を救うのです。自分の父母が

アダムの位置に上がるのです。何の話か分かりますか？　そうなることによって、宗教圏の伝統がなくなるのです。キリスト教とか何かの宗教が必要なくなるのです。全世界が選民圏に入るのです。

このようになることによって、何が起きるか？　横的に見れば、自分を産んだ父母が宗族的メシアになり、自分が産んだ血統が国家的メシアになるのです。それが可能なのです。横的だというのです。そうすることによって、この全体が一つの父母を通じてつながった立場に立つのです。これも一つの父母です。三次アダムも一つの父母です。

それゆえ、自分が生まれた地、自分の故郷が天国になるのです。天国になるのです。そして、故郷の父母が全部先祖になるのです。真の先祖になるのです。

第一が何ですって？　神様の側に立つのです。その次は何ですか？　家庭が天の側に立つのです。そうなれば、どうせ父母様を中心として、世界的版図が全部つながるのです。

故郷が一つでありえますか？　本来の故郷はどこですか？　本来の故郷は、先生が生まれた所ですが、すべての宗族の故郷が定州になりえません。それは皆さんが生まれた所になるべきなのです。分かりますか？　故郷が間違ってサタンが占領したのに、皆さんの故郷で天を中心とした父母が生まれるので、そこがエデンの園だというのです。

そうして、堕落しなかった本然の園を中心として生まれた皆さんの善の後孫は、この世界に向かって伸びていくのです。この垂直線を中心として、先生の一族を中心として、皆さんが全部つながって結ばれていくのです。縦的なものを愛し、これを自分の一族よりもっと愛さなければなりません。これが先ですから、これを愛し、その次にこれを愛するのです。そうすれば、サタンが占領できないのです。このようなことが成立することによって、今は王権復帰が可能なのです。
本来、アダムが完成したら、天国の父が完成し、エバが完成したら、天国の母が完成し、それで家庭の主人になるようになれば、家庭的天国の王権が生まれるのです、それゆえ、アダム・エバは、個人的王であり、家庭的王であり、宗族的王であり、民族的王であり、国家的王であり、世界的王になるのです。

今、このような国家基準を越えることができるときに来たために、サタン世界の王権を踏んで、天の世界の王権を設定することができるのです。その日が、一九九〇年三月二七日だというのです。こうすることによって、世界は今、レバレンド・ムーンが風を巻き起こすとおりに回るようになっているのです。
（二〇一・一三〇）

・王権復帰

皆さん、父母権がなぜ必要なのですか？（王権復帰のために必要です）。王権を復帰するには、東西南北四方に邪魔になるものがあってはいけません。皆さんの家の中に王が来るようになるとき、二四時間三六五日、いつでも侍ることができなければなりません。三ひろになる竿を振り回しても、三六〇度どこにも引っかかるものがあってはいけません。い

つも歓迎することができなければなりません。そのようなことが今分かったのです。

そこには、一族がついてくるのです。これが祝福された愛の宗族です。何の愛？　真の愛。

何が真の愛か？　永遠に投入しても忘れて、また投入する愛です。なぜそうなるべきか？愛の相手が自分より優れるのを願い、息子が自分より優れるのを願う、その原則を成すためには、神様もご自分以上投入されなければならないので、投入して忘れなくては、自分以上投入する道がないために、真の愛の道を、与えて忘れる道を行かなければなりません。そこから統一が、天地の統一が始まるのです。

自分の生命を投入して、「私は神様のために、統一教会のために死にました」その思いを持つべきですか、持たないべきですか？（持たないべきです）。そうでなければなりません。自分自身を犠牲にしなければならないのです。「私がこれくらいしたのに、教会は分かってくれず、自分が統一教会を数十年信じたのに、先生が分かってくれない」そんなことが言えますか？　私が一生の間苦労しても、神様が私を分かってくれませんでした。しかし、私は、分かってくれなかったという思いもしません。神様のように打たれて投入し、また投入しようとするのです。

そうしてみたら、終わりまで投入してみたら、それがなくならないで、絶えず積もるので、私は自然に山のてっぺんに上がるのです。それが不思議でしょう？　その論理は合っていますか？　絶えず投入してみたら、私は山のてっぺんになり、世界の頂上の立場に立って、長子権から父母権、王権は、自動的に復帰されるというのです。それが再創造論理に一致しうるコンセプト（concept；概念）です。（二〇六・二六九）

・先生が真の父母であられる

今、真の御父母様を宣布することができる基盤を皆築きました。「文総裁が真の父母ではない！」と言える人は出てこいというのです。既成教会の牧師が私の前に来てみなさい。我が国の大統領、政党の党首の中で「違う！」と言える人は出てきてみなさい。

アメリカ大統領なり、ソ連のゴルバチョフなり、この地上の国を治めて声を大にする人が出てきて、文総裁が真の父母でないということを否定できる論理を立ててみろというのです。その次に私の言葉を聞いてみろというのです。百発百中、びくともできなくなっています。（二〇四・八四）

私が愚かな人ではありません。皆さんより賢い人なのです。世界の口八丁手八丁の人たち、羽ばたく輩たちを、全部翼の下に抱き、治めて生きてきた人ではありませんか？　うちの教授アカデミーだけでも、一二〇か国にあります。そこにはノーベル賞受賞者もたくさんいます。

そんな背景があるために、・ワールド・アンド・アイ（The World and I）・を四年にもならずに、世界の名のある雑誌として、世界のチャンピオン雑誌として作っておいたのです。私はそのような囲いを持った人です。（二〇四・八四）

今日統一教会で、私が真の父母という看板を持っています。では、文総裁は何をする人か？　神様を誰よりも好きな人です。神様を誰よりもよく知っている人です。そして、永生の道をはっきり教えてあげる人です。それでいいでしょう。息子娘を産んで死ねと言う奴はいますか？　永遠に福を受けながら生きろと言うじゃないですか？
真の父母がすべきことが何ですか？　死亡圏内にいる皆さんを、解放させて、永遠の生命の道に委譲させるための責任を持っている世界的、歴史的人類の代表者が文総裁であり、その方が真の父母です。分かりますか？（はい）。

真の父母は、真の愛を持っているために、その人と神様の愛と内容が統一的に一致する帰結点、帰一点を持っている人であるというのです。

それゆえ、真の愛を中心として、偽りの愛を片づけてしまうのです。偽りの愛は、一度でも投入するすべを知りません。もらっていこうとだけするのです。ですが、真の愛は、投入すれば全部解消することができ、贖罪による救いが可能なのです。分かりますか？　真の愛からのみこれが可能なのです。それゆえ、文総裁によって神様を知るようになるのです。その次に、真の父母は真の愛を教えてくれなければなりません、真の愛。それが先生の責任です。（二〇三・三六一）

今は世界において、文総裁をつまみ出す人がいません。力でも私にかなう人がいないのです。私が悪宣伝してみればどのようになるか分かりますか？　この大韓民国が困難になるのです。

左傾学生たちを誰が収拾してくれたか分かりますか？　去る五月、大韓民国建国以後。いちばんの混乱期というときに、ゴルバチョフの看板でサッと全国をさらったので「ああ、政府は信じられないな！　文総裁を信じなければならない！」このようになったのです。こうして方向をしっかり収拾しておいたのです。そんなことが分かりますか？（はい）。

そこで何をしましたか？　真の父母宣布をするのです。私が真の父母として来たら真の父母だと宣布すべきであって、しないでどうして天上世界に行って、神様の前に顔を上げますか？　違いますか？　本当の真の父母の使命を持ってきたなら、民族の前に、世界の前に真の父母だと宣布しなければなりません。そうでなくて、どうして顔を上げて行きますか？

イエスが、自分をメシアだと宣布したか？（しませんでした）。ですから問題です。宣布したなら、キリスト教が血を流しませんでした。血を流すことの十倍蕩減することができるのです。宣布ができなかったために、その世界的な基準が現れるまで、サタンが勝手にするのです。私はそれを知っています。

北韓では、サタン側の父母の立場を占領して、金日成という偽りの父母が出てきたでしょう？　略奪です。全部が略奪です。キリスト教を滅ぼしたのです。今は私が真の父母を宣布することによって、金日成は下っていくの

です。このようにして、回して捕まえるのです。分かりますか？（はい）。

そのような時が来るために、私が平壌に入城して、平壌大会をしようと計画するのです。それは、私がするのではありません。アダムが天使長と戦いますか？　そうしないでしょう？（はい）。アダムは天使長と戦いません。天使長が堕落したので、天使長にさせなければなりません。

それゆえ、今までの世界の天使長のソ連にさせて、今までのアジアの天使長の中国にさせて、エバである日本を通じて、エバを中心として天使長と一つにして、金日成を屈服させるのです。

その人たちを一つにして、私が乗って入るのです。こうして、そこで世界平和連合を宣布してしまえば、どれほど素晴らしいでしょう。ゴルバチョフを来させ、江沢民を来させ、日本の総理を呼んでおいて、ブッシュ大統領を呼んでおいてするのです。

そのようなことを言う人も、韓国に私しかいないのです。盧大統領がこれができますか？できません。それは何をもってできるのか？そのような基盤を皆築いたのです。（二〇四・一七八）

先生は流れていく男ではありません。歴史時代に、どの為政者の背後のすべての道も知らずに生きる人ではありません。既成教会の指導者たちは分かりませんが、私は確実に知っているのです。

歴史時代に、極めておろかな代表者として烙印を押された、統一教会と文総裁が、亡国の僕になりましたか？（いいえ）。神様が滅びますか？　滅びますか、栄えますか？（栄えます！）文総裁と神様とどういう関係ですか？　真の父母が何ですか？

文総裁が真の父母だと宣布したでしょう？真の父母ではないのに真の父母だと宣布すれば、霊界に行って地獄にいる霊たちが刃物で刺して、善なる霊たちが刃物で刺すはずなのに、それほど恐いことを知らずに私が真の父母だと宣布するでしょうか？

真の父母が何ですか？　今朝、李載錫が話したのか？　円仏教（韓国の新興仏教）と我々と教理の討論をするのに「円仏教は救世主論理を言うが、統一教会は真の父母論理を言う。救世主は信じて捨ててもいい。しかし、父母は宿命的なのにどうして捨てるか？」そう言ったというのです。そのようなものです。（笑い、拍手）捨ててみろというのです。万宇宙の天地のすべてが「こいつ！　地獄に行くべき輩よ！」と言うのです。

堂々とした立場が、統一教会の真の父母の立場です。これを悪魔が知るために、全世界を動員して、私を四方から攻撃しました。そこに共産党が加担し、すべての教派という教派、宗派という宗派が、私に反対しませんでしたか？　そこにマフィアからテロ団まで、全部合わさって、私を追放しようとしました。あぜんとするでしょう。ありとあらゆることを皆やって、射撃をしたのです。（二〇三・一四六）

皆さん、文総裁について真の父母だと言いますが、私はその真の父母という言葉が嫌いな人です。それがどれほそ恐ろしい言葉でしょう。真の父母になったら、真の息子娘を産まなければならず、真の息子娘を育てなければなりません。これが問題です。

真の父母になったら、真なる家庭を率いなければならないのです。ここに一門がつけば、真の一門を率いなければならず、これが民族に拡張されるときには、民族を率いなければならず、国家に拡張されるときは、国家を率いなければならず、世界に拡張されるときは、世界を率いなければならず、天地の前に霊界と肉界にいっぱいになった人類に拡張されたというときには、それを率いることができる能力がなければならないのです。とてつもないことです。そのようなことを皆知っている人です。

では、なぜ真の父母という言葉を発表したか？　私も発表するのが嫌です。ですが、発表をしなくなれば、統一教会の教理が間違うようになります。お分かりですか？　この発表をしないようになれば、統一教会の教理が嘘になります。真理が嘘になるようにできないので、仕方なく、真理が真理らしくなるためには、私の体が裂けて踏まれてどんな醜態をさらす恨があったとしても、受難と迫害を受けたとしても、断然と断行しなければならないのです。それで、そのような男になったのです。これが統一教会の文総裁が、他の宗派の宗派長、教祖たちと違う点です。（二〇三・三二六）

四）父母様の写真を奉ること

・父母様の写真を奉る理由

今は、皆さんが自分の故郷に行って一族を復帰しなければなりません。皆さん、故郷で復興会をしたでしょう？　復興会をしたのと同じように、全部面単位を中心として活動しなければなりません。今、宗族的メシアになれば、先生の写真を額に入れて…。

それを、そのままあげてはいけません。アルバムを何百個作って、担いでいき、良い写真だと良いながら分けてあげては、承諾を受けるのです。写真を分けてあげて承諾された人の家には、部屋に入っていちばん良い所に場所を取ってあげなさい。

そうしておけば、その家の主人にとっては、皆さんが霊的にお兄さんです。分かりますか？　縦的に見れば、お父さんの立場であり、横的に見ればお兄さんの立場です。ですから、縦的なお父さんの立場で、横的なお兄さんの立場で、その家の主人を中心として指示して、「これはここにかけなければならない！」と言うのです。こうして写真を分けてあげる人が宗族的メシアになるのです。一二〇軒以上の家に、写真を早くかけて奉らなければならないのです。

写真を何個持っていてつけろって？（一二〇個です）。写真をつけた家が統班撃破にもなるか、ならないか？（なります）。条件がそれです。そうすることによって、霊界の先祖たちが毎日明け方にやってきて、敬礼をするのです。一時、二時、三時以後に明かりをつけておけというのです。そうして、先祖たちがやってきて敬礼が皆終わるようになれば、

再び二時間経って、五時には自分たちが敬礼してそうするのです。

霊界の霊人たちが真の父母に侍りましたか？ 霊界に行ったのは兄で、ここは弟です。長子権を弟がしたために、逆さまになったために、全部霊界から降りてきて、敬礼するのです。敬礼するのは何かというと、自分の後孫たちがうまくいくようにしてくれるというのです。違いますか？　神様がくれるのでしょう？ そうでしょう？　その先祖たちが、神様の立場ｻ福をくれるのと同様に、後孫たちに福をくれることにおいて、協助してくれるのです。投入するにおいてです。

それで、霊界から協助するのに、愛する自分の親戚が協助するのがいいですか、近所の町内の誰かのおじいさんがやってきて協助するのがいいですか？　おじいさんが来て協助するようになれば、協助する分量の何パーセントかを分けてあげなければなりません。それゆえ、互いに誰が入ってきて手をつけるかと思って、夜を明かしていきながら走るべき時です。

父母様の写真が大きいのがいいですか、小さいのがいいですか？（大きくすればいいです）。それは協会で定めなさい。分かりますか？（はい）。それを説明すれば、互いに買うと言うでしょう。文総裁が波瀾万丈の歴史的混乱の渦中で、死なずに生き残ったのは、神様が保護してくださったのだ！　世の中で皆滅びて痕跡もないのに、残ったものは神様が保護して残った！　文総裁を神様が歴史以来、いちばん愛するために、いちばん難しい艱難の中で、いちばん偉大な業績を立てた！ それは理論に合うのです。

写真を奉るようになれば、父母の代わりに奉る立場に立つようになれば、皆さんの家庭が保護されるということを疑いません。説明するようになればそうでしょう。

この前、凡一殿（釜山ポムネッコルの記念館）に来て、そのような説明もしなかったのに、写真を買っていった人たちがいたって？ 「なぜ、写真を買おうとおっしゃいますか？」と言うと、「心が絶えずそうなのです。写真を買いに行けば、すべての悪運が逃げていくようで、良いようです」と言ったそうです。そう言いながら、大きな写真を買っていったとか？　そのような時が来たのです。

若い青年たちが、今先生の写真を持って歩きます。この前、ソ連から来たカメラマンが誰だったか？　その人がソ連人ですがね、自分のポケットの中に、一つの秘密の宝物を持って歩くと言います。何かというと、紙で作った袋をがさがさとして出すのですが、先生の写真を持っていたのです。なぜこれを持っているのかと聞くと、それを持って歩くと心が楽だからそうだというのです。そのようなものです。

十字架をかけて歩けばキリスト教徒であることを表示するでしょう？　父母様の写真を持っていれば、真の父母の息子娘を象徴します。象徴、現象、実体になるのです。蘇生、長成、完成の蘇生圏内に入るために、保護を受けるのです。分かりますか、分かりませんか？（分かります）。そうすれば、写真を全部宗族的メシアが作ってあげなければなりません。分かりますか？（はい）。

統班撃破は何をするのですか？（父母様の写真を持っていて奉ることです）。それは簡単だな。父母様の写真だけ持っていって、上げておけば修練を受けざるをえません。（笑い）「修練を受けて、あなたが感化され、どれほど価値があるか分かり、とてつもないお金をやっても買えないのに、写真代はその価値に比例して出しなさい！」こう言って統班撃破の費用を使っても大丈夫です。アメリカに行って教育を受けてきた人たちは、一括的に分けてあげるのです。（二一二・一〇九）

・父母様の写真の威力

今までは、長子権復帰を中心として、アベル・カインのために犠牲にならなければならなかった時であったために、霊界が地上世界を利用してしまいました。しかし、第三一回子女の日を中心として、霊界と肉界を全部交替するのです。今は長子権が復帰されたために、アダム圏が中心になって長子権になるのです。それゆえ、天使長はアダムの言うことを聞かなければならず、侍らなければならないのです。そうでしょう？

これが逆さまになることによって、今は霊界が地球上にいる統一家（食口）を中心として…。昔には、人類が文総裁に反対して、殺すべき人だと言いましたが、今は、文総裁を尊敬するその基準にあるために、悪魔が来て協助しろと言っても協助できないのです。自分の側に率いていけないのです。文総裁を紹介してあげて、案内してあげるのです。分かりますか？

それゆえ、家庭を探して立てなければなりません。それがどこで振り返るべきかというと、家庭です、家庭、家庭で堕落したでしょう？（はい）。それで、先生は世界的な蕩減を、個人から始めて、先生の家庭を中心として、氏族を中心として、世界的版図のカイン・アベルに全部勝利して、長子権を持って帰ってくるのです。

そうして、勝利したこのすべての価値をどこに立てるか？　アダムは全体価値の中心です。アダムを失ってしまったことによって、神様の家庭を失ってしまい、神様の社会、神様の国家、神様の世界、神様の天宙、神様の愛まで失ってしまったのです。これを全部蕩減して、今は、家庭に帰るのです。すべての家庭が万民平等の家庭基準に立つのです。

この家庭を中心として帰るとき、誰を中心として帰るのか？　全部先生を中心としてついていくのです。ここに悪魔はついていけません。悪魔は血統的に汚れた者ですが、こちらは堕落世界の血統を清くした者です。それゆえ、ここには祝福を受けた家庭たちが入るのです。家庭の天国の長子権になっているので、家庭の天国の次子権は少数なのです。これは皆さんが自由に管理できるようになっています、摂理的に。

今、その家庭を探して入っていくのです。それゆえ、統一教会の家庭たちが、基地になれというのです。そうするためには、食べて暮らす費用、貯金通帳にあるものを全部はたいて使わなければなりません、本来は。こいつら、いつ私が全部検閲するかというのです。家は買えない！　何の話か分かるか？（は

い）。こうして国のためにすべてを捧げなければならないのです。そうすることによって、宇宙と交替するのです。

これが天の原料です。その日をつかむためには、高い原料一つが必要なのです。皆さんがそのような原料になれというのです。それで、各家庭に入っていって定着するのです。

イスラエルの国で羊を捕まえて、その血を塗ることによって災いを皆越えたでしょう？
それと同様に、その家に先生の写真さえあれば、サタンが侵犯できないのです。先祖たちが明け方にやってきて挨拶してですね、その家を霊人たちが全部引っ張って回るのです。自分の心を全部コントロールするのです。こうすることができる時が来たのです。（二一三・一二一）

これから三つの運動をしなければなりません。まず、協会願書を書いて、その次には、真の御父母様の写真を奉って、教会の旗を立てなければなりません。その三つを皆しなければならないのです。第一は何ですって？（協会願書を書かなければなりません）。二番目は？（お写真を奉らなければなりません）。その次には？（旗を立てなければなりません）。

その三つをするようになれば、何でも皆できるというのです。旗は統一教会を代表するもので、その次に先生のお写真は何ですか？
真の父母です。その次に協会願書は何ですか？　入籍です。入籍できる国が生まれるのです。そこから出発が繰り広げられるのです。

真の父母を中心として、真の父母に侍るということは、真の父母と我々の家が一つになったということです。では、旗は何か？　世界的統一教会を指す環境的代表です。相対的代表なのです。分かりますか？　旗は、自分個人の代表でもありますが、夫婦も代表するのです。我々の家庭も代表しましたが、我々の氏族も代表し、我々の国も代表するのです。統一教会全体、超人類を代表したのです。
その旗を絶対的に立てなければならないのです。旗を立てるようになれば、イスラエル民族がエジプトから出てくるようになるとき、長子圏が全部虐殺されたのを、羊の血を塗ることによって死を免れ、犠牲になることができたのと同じようになるのです。ちょうどそれと同じです。

モーセとイスラエル民族が、蛇に噛まれて死んでいくときに、銅の蛇を見た人たちは生きたでしょう？　同様に、サタン世界が滅びていくときにおいて、イエスを信じることで生き返りました。何のことか分かりますか？
今この地上でサタンが持ったすべての権限を奪ってくるためには、旗を立てて、真の父母の写真を奉り、入籍さえすれば終わりです。所属がもう変わるのです。

それゆえ、今年に入って、特別に先生が強調するのが、父母様の写真を奉ることと、旗を立てる運動です。それがもう三年目でしょう？　このような時がくることが分かるので、このようなことを始めるのです。

それゆえ、協会願書をもらえというのです。
そして、協会願書をもらうときには、「お願いします！」と挨拶をしなければなりません。

分かりますか？　何の話か分かりますか？（はい）。サタンがアダムに屈服しなければ救われません。その次には、父母様に侍るのです。今まで真の父母に侍れなかったではないですか。真の父母に侍らなければならないのです。自分の父母の写真よりも、先祖たちの写真よりも真の父母の写真をいちばん良い所に奉らなければならないのです。自分のおじいさん、お母さんの写真を貴く思うことはいいです。

しかし、自分の父母の写真をまず置いて、その横に真の父母を奉ってはいけないのです。先祖です、先祖。先祖を設定するのです。そうではないですか？　そうすることによって、平面家族基盤からの伝統的基盤を中心として、機械が回りうるのです。そこはサタンと関係ないのです。原理がそうじゃないですか？

この宗族的メシアは、誰は行って、誰は行かないと言えません。しなければ、自分の一族が引っかかるのです。この地上で後孫たちがこれをしなかった人は、あの世に行くようになれば、先祖たちが堕落したアダム・エバを呪うことの何百倍も呪うだろうというのです。それは、先生が責任を持ちません。讒訴するそれを、するなと言えないのです。しなかったから讒訴されなければならないでしょう。人間に与えられた五パーセントの責C分担があるでしょう？　その責任分担ができなければ完成がないのです。（二二〇・九〇）

サタン世界でも父母の写真をかけるでしょう？　終わりの日が来たから、天の父母を奉って教育の材料として使うのです。文総裁が有名です。国のための愛国者だという言葉は皆認めるべきでしょう、既成教会の牧師だとしても。行って聞いてみなさい。愛国者です。また、私がなした功績には、天下が皆頭を下げるのです。ですから、「あの写真をかけた以上、あの方の前において、夫婦どうしけんかもむやみにできない！　文総裁の教えが何か？」と考えるのです。

息子娘の前でも、教育をしなさい。「おい、おい、あの文先生の前ではだめだ！」そう言うのです。自分の父母の写真以上に奉ることによって、先祖たちが来て先祖として侍るのです。分かりますか？　先祖たちが来て、その家に侍ることができる祭壇になるのです。そうすることによって、天上世界の福を受けることができる道があるために、明け方三時になれば、自分たちは寝ますが、一家の周辺のサタン悪魔をすべて追い出すのです。

また、旗を立てろと言ったでしょう？　写真をつけて、旗を立てれば、皆終わったのではないか？　部屋の中に先生の写真をつけて、統一教会の旗を立てればそれは天国の一族ですか、サタン世界の一族ですか？（天国の一族です）。天国の一族になるのです。天国の一族にしてあげるのです。

今回、旗を立てることについて呪ったら、雷に打たれた人が多かったでしょう？　本当に不思議でしょう。先生を指差す手が病気になって、このように持ち上げて、夜を祈って悔い改めてこそ治るという、そんなことが起こるじゃないですか？

なぜそんなことが起こるのか？　天運が訪ねてくるのに、個人の運勢で妨げられません。

宿命的な道です、これが。運命的な道は東西南北を交換して対することができますが、宿命の道は、上下は上下で、左右は左右です。交換することはできません。

それで、写真をつけろという言葉は、大韓民国に時が来たためです。今までの堕落した世界は、偽りの父母で因縁づけられたので、真の父母を中心として侍れば横的に接ぎ木されやすいのです。お分かりですか？　家庭でできるのです。

そうしなければ、国を経て、世界を経て帰ってきて、こちら側に帰ってきて、接ぎ木しなければなりません。それで、私が愛の心を、万民の求道の心を持ったために、その立場で接ぎ木することができる環境を作ってあげるので、どれほど幸福でしょう！　言うことを聞かなければ、悪口を言ってでもつけさせなければならないのです。そうすることによって、天の一族になりうるのです。

モーセの杖を眺めた人は、皆行きました。お分かりですか？　統一教会の旗を眺めてみて、行く度に敬礼して、来る度に敬礼して、写真を見て行く度に敬礼して、来る度に敬礼すれば、生きるというのです。（二一九・九〇）

九、真の父母に関係した指示のみ言

一）一九九一年七月一日のみ言

・父母権設定のための宗族的メシアの使命

これが何かと言えば、父母様の権限を皆さんの家庭に分けてあげるのです。分かりますか？　それを嫌がる人は、天国に行けないのです。皆さん、未来では地上天国は関係ありません。それは、絶対的なのです。言葉がそうじゃないですか、言葉が？　アダム・エバが家庭から出発したのであって、氏族から出発しましたか？

家庭に帰って勝敗を決めなければなりません。根がそこでまかれたので、そこで根を抜いてしまわなければなりません。根を抜いてしまって、新しい根を植えなければならないでしょう。新しい種を植えるのに、昔のものを切ってしまったそこを掘って植えれば、昔の根が腐って肥やしになります。肥やしになるのです。六千年育ったものが、いっぺんに瞬く間に育つことができる時になったために、世界がいっぺんに回る時が来るのです。

それで、父母権設定ができていますか？　今できていないでしょう？　皆さんの家庭にできていないでしょう？　どうですか？　各自責任を持つべきです。十字架を背負う恨があったとしても、死ぬ恨があったとしても、そのことを判決せずにはあの世に行って、天国に入れません。この世に来て、また再びそのことをしなければいけません。このように眺めて行って、帰ってくる道はありません。祝福家庭がどうして帰ってきますか？

祝福を受けた家庭が、地上に帰ってきて、救いの摂理ができますか？　もっと悲惨だというのです。祝福を受けなかったら帰ってくる道でもあるのであって、祝福を受けたら帰ってくる道がありません。自分の責任を果たせなかったのに、どうして帰ってきますか？
国家が解放されて、全体が恵沢を受けうるときまで待つとか、世界が解放されて、全体が

恵沢を受けるときまで待つとかしなければなりません。勝手に帰ってくることができません。責任を果たしてこそ、自分の先祖たちも帰ってくるのです。祝福家庭が帰ってくるようになっていますか？　答えてみなさい。完成をしては帰ってくることができますが、完成できなければ帰ってこられません。

・王権復帰と天上地上天国還元

天上地上天国還元！　王権が復帰されてこそ地上天国、天上天国がどのようになりますか？　還元されます。還元されるのです。そうでなければ、還元できません。根本に帰ってこなければ、主人になれません。還元できなければ主人になれません。主人になれないのに、どのように神様が天上天下に王権を…。

王権復帰できなければ、主人になることができません。その言葉がその言葉なのです。王権復帰！　天上、地上天国還元！　帰らなければならないのです。そこから法が生まれるようになるとき、地獄世界、邪悪なサタン世界の処理方法が生まれるのです。統一教会に対する法が生まれます。

家庭を還元するというのではありません。王権を天上世界に還元するのが、我々の使命です。これが終わる前には、あの世に行って永遠の世界の幸福の基礎を築くことができないのです。

・真の父母侍衛と世界国家

今父母様に侍らなければなりません。侍衛、侍ること、囲いを張って侍るというそのことなのです。包囲という言葉があるじゃないですか。侍衛と世界国家…。真の父母侍衛、真の父母に侍らなければならないのです。ですから、写真が必要なのです。ですから、旗が必要なのです。家庭でいくら忙しくても…。

この頃、あの「ソウルの土鍋（テレビドラマの題目）」で、息子が死んだ父の写真をかけておいて、頼みの話をするのを見て「おい、あれ…。統一教会の教徒たちがすることをしているな」そんな思いがしたのです。父が何、どうのこうの言いますが、それが本当に素晴らしかったのです。写真を見てですよ。それは祈祷です。「真の御父母様、こんなことがありえますか？　こんな事情が皆こうなので、これをサタン世界がそうしているので、無念で悔しいのです」と言えば、「おお、そうか！　そうか！」そう言うようになっているのです。分かりますか？　侍らなければならないのです。

写真から侍らなければならないのではないですか？　愛するなら写真を持って歩くでしょう？　それによく侍る人が実体を迎えるのです。そうすれば福が来るのです。福が来るのです。先生の福がどれほど大きいか分かりますか？　私が福を受けた王のような人なのです。私によく侍れば、福を無限に受けることができるのです。

私の言葉に食い違うと、くず中のくずになります。天下に今、そのようになっているのです。天の霊界に行ってみなさい。地上にもそうです。地上にも今、皆現れていません。霊界が今、全部合徳（一体）になることができるということです。分かりますか？

今、父母様に侍らなければなりません。ここに写真を、あそこに親戚たちの家に…。皆さんがこれをしないようになるといけません。おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、どの家もみんな写真を、息子の家、娘の家に持っていってつければいいのです。違いますか？　誰が何と言いますか？「この野郎！　私が好きでつけるのに、婿の奴がどうのこうの言うのか？　孫の奴が何だかんだ言うのか？　どけ！　おまえの家に福を受けるようにするためのものであって、滅びろというのではない。この方が今まで七〇の生涯をそのように迫害を受けて、四方から射る矢を受けたが、生き残ったぞ。何百回死んでも残りうる環境で生きてきたんだ。神様が守ってくださって運があって、福があるために、生き残ったのだ。その方の写真をかければ、その懐に抱かれたようになって、その影に避難所のようにいることができる環境になるのに、何を言うんだ！　福を受けるのが当然なのに」と一言言えば終わるのではないですか？

おじいさん、おばあさんを遣わせて、父方のおばさんの家、母方のおばさんの家にできるじゃないですか？　おじいさん、おばあさんがいなかったら、五代前のおじいさんの下の五代の孫を全部集めておいて、一大演説をしなさい。「きのう、夢の中でおじいさんが現れて、このように教えてくれました！」と言うのです。そうかといって、嘘は言わないでください。そのように祈れば教えてくれるのです。おじいさんが現れて「おい、このようにしろ！」と教えてくれるのです。「五代前のおじいさんが、このような顔で、このような表情でした。私は、会えなかったおじいさんがこのようにしてこそ、我々一家が福を受けるのだと、今日お祝いの日に、どうか文先生の写真を奉って、統一教会の旗を立てなければならないと通告するので、皆さんしなければなりませんか、しなくていいですか？　私が解放させて助けてあげるべきであって、そうでなければ皆さんのおじいさん、おばあさんが死にます！」と言うのです。その運動をしなければなりません。

写真をつけた人たちは、我々の人たちになるのです。そうですか、違いますか？　何か分からなくてもいいです。原理を理原と言ってもいいです。東を西と言ってもいいです。方向が分かって何をしますか？　愛が分かればいいでしょう。息子娘を産めばいいじゃないですか。嫁たちが東西南北をもっとよく分かって、八卦を解いて指図をしたとしても、息子を産めなければ滅びるのです。分かりますか？

真の父母の侍衛と何ですか？　世界国家。どの国が国家の命令を通じて、「我々統一教会の文先生を我が国に善なる代表者として迎える！」と言い、「我々国民は、この写真を大統領とともにかけよう！　アーメン！」と言えば、福を受けるのです。国がいっぺんに復帰されるのです。分かりますか？　国が復帰されて入ってくるのです。一族が復帰されて入ってくるのです。

「選挙のとき、当選しようとするなら、文総裁が生きている限り、行ってサインをもらってこなければなりません！」と言うようになるのです。「写真をもう何十年も前からかけているのに、どうしてその写真の見る前で私が嘘を言いますか！」と言えば、野党、与党、そ

こに統一党が生まれるのではないですか？　違いますか？　自然屈服が皆できるのです。分かりますか、分かりませんか？（分かります）。

いつもこのような話はしてあげないのです。訪ねてきて祭祀をしても、してあげないのです。してあげるだけでも過分なのに…。これは皆必要な言葉なのです。

・真の愛創造理想と神権時代

父母様に侍ってそうすれば、真の愛の創造理想時代が来るというのです。自分も知らずに愛が恋しくなるのです。父母が恋しくなるのです。先祖が恋しくなるのです。昔の師たちが恋しくなるのです。分かりますか？　そのようなことが起こるのです。真の愛の創造理想と神権時代が来るというのです。

今日言ったとおりにするようになれば、自分も知らないで昔の愛の因縁についていって、一〇年前、一生の前に帰り、今現世に生きているこの時代に展示品として横的に展開されてくるのです。

そうして、年老いた人たちが鼻歌を歌うことができ、子供の踊りを踊ることができる時代になるのです。何の話か分かりますか？　おばあさん、おじいさんが、小学校の生徒たちの歌を歌えるのです。そうしながら、同化するのです。そのように同化しうることを通じて、幼かったときから一生を通じて心情的に和合して暮らすことができ、幼い経験をもたらしてこそ…。天上世界に行けば、子供の時代がないと思いましたか？

自分がそこに和動することができるかというのです。そこから真の愛の創造理想と神権時代が来るのです。だまそうとしてもだませません。子供たちが「お母さん、お父さん、なぜ嘘を言うの？」と言うのです。子供たちが、お母さん、お父さんをコーチします。神権時代が入ってくるのに、そうするしかないではないですか。

今、何ですか？　真の愛の創造理想と神権時代！　皆さんの家庭に父母様を迎え、天国の国賓を迎えて、忠誠を尽くし、我々の家庭が国の代表的な家庭であり、我々氏族が国の代表的な氏族になり、民族が国家の代表民族になり、国家が世界の代表になろうというのです。

そのような道を行く人は、天の一族に到達することができます。天国の一族になるのです。その権限の中に属そうというのです。天権時代が来れば、そのような人たちを保護するのです。これを滅ぼそうとすれば、天が保護してくれて、防御してくれるのです。（二一八・五一）

二）一九九一年一〇月二〇日の指示のみ言

・真の父母圏主体

皆さんは全部その氏族において主体的父母です。真の父母圏において、氏族的主体の父母になるのです。分かりますか？（はい）。三代前のおじいさんが、皆さんをおじいさんとして侍るようになります。孫がおじいさんになるということは、天地開闢です。山を越えるようになるとき、誰が先頭に立つかとい

うと、反対された統一教会が先頭に立って越えていくのです。

越えていくとき、だれがまず越えますか？孫が先に越えるでしょう。お母さん、お父さんはついていかなければなりません。三代がその道をついていかなくてはいけません。自分一人勝手に行くと言うようになれば、遭難して全部木っ端微塵になるのです。ただこの道だけが生きる道であるために、ついてこなければならないのです。

それゆえ、父母圏主体です。我々の故郷における新しい先祖として、全体的勝利の真の父母の伝統を受け継いで、それを再び氏族の前に植え付けるのです。分かりますか？（はい）。それが皆さんの責任です。それゆえ、皆さんが夜も昼も涙を流さなければいけません。

先生がそうです。先生は、すべての友になることができます。ですが、どれほど寂しいか、皆さんは分からないのです。友達がいません。

見なさい。北で監獄に行くとき、六千年の歴史の精魂込めた基盤が、一日にして皆崩れていきました。新婦の道理を果たすべきキリスト教が裏切りました。新婦を捜してきたその新郎が、一人しかいない新婦に裏切られたので、行く所がどこにありますか？

その新婦に天が備えてくれたすべて、全部が世界の財産であり、そこに民主世界がつながっており、キリスト教世界がつながっていたのです。そのときが統一天下になる第二次大戦直後でした。

うらやむことなく、必要なものがない、そのような環境において、先生が四〇代にアメリカのすべての君主を治めて率いるべき歴史セったのに、四〇代に出発をする結婚式をしたのです。帰ってきて死なずに蕩減しなければいけないのです。

その一四年間、イエスが宗族的メシア活動をしていた一四年間、長成期完成級でしょう？長成期完成であるために、七数、七数、一四年である一九六〇年に帰ってきて、お母様を迎えたのです。それで、この七年路程が残ったのです、七年路程。

それで、これを中心として、初めて一九六〇年から一九六八年まで、ここに父母の日、子女の日、神の日まで結成して、初めて世界的な途上に現れるのです。そのとき、皆さんを全部追い出したでしょう。三年路程に行ったでしょう？（はい）。先生とともに行ったのです。その基盤の上にアメリカに飛んでいったのです。世界的出発をするのです。今、全部数理的な路程を経てきたのです。

歴史はそのようにして明けてきたのです。先生が門を開いてあげたその道について、歴史の黎明が過ぎ、朝が訪ねてきたという驚くべき事実を知るべきです。今は、統一教会に春の時代が来たのです。分かりますか？（はい）。春の時代がきたので新しく…。
これが天の一族のみ旨ではありません。万族のみ旨であるために、二万四千名以上の家族を、全世界の宗族的メシアとして送ったために、これを掃討しうるサタンの力がないのです。これがいつも主体思想として残りうるものです。

今まで、国際高速道路理想とか、地上天国理想とか、大学連盟理想、また、世界の学者界を結んでＰＷＰＡ（世界平和教授協議会）の百個以上の世界組織を持つなど、世界のどこの誰も持てない版図をつくって、王権、王者、全部頂上たちを中心として、言論界から学界、政治世界、また、実業界、文学界の最高の頂上を集めて、このような準備をしてきたのです。

それが言葉だけではありません。事実の背景にどれほど血のにじむ曲折の事情が秘められているか、皆さんは知りません。夢にも分からないのです。お母様はそれを知っています。その言葉を言おうとすれば、喉が詰まるのです。

先生がどれほど身悶えしたかということを、お母様は知っています。お母様自身は眠りますが、先生は夜を明かして勉強するのを見るときに、お母様がただ立って泣くのを私が何度か見ました。不足なこの女性は眠っていたとして恥ずかしがるのを見ました。このような暮らしを私が知っているのです。そのような事情が身にしみるようになるとき、先生に対する話は、喉が詰まるということを知るべきです。分かりますか？（はい）。

神様の前に祈るようになれば、神様が祈る人の喉を詰まらせて、泣かせて慟哭させるということも、そのような事情があるためです。ですから、私は寂しくありません。神様が私を知ってくださり、妻が知ってくれて、息子娘が知ってくれるうる環境になっているために、統一教会は滅びえない版図ができているのです。
その伝統的勝利の特権を任せて、全権時代として皆さんの国に、皆さんの故郷に、皆さんの一門の前に、この柱を打ち込んで、求道の王の場を築けというのが宗族的メシアの使命だということを知るべきです。分かりますか？（はい）。

天地の歴史があれば、これ以上の福がないのです。皆さんは長子権の主体にならなければなりません。皆さんは、値打ちのない立場に立ちましたが、内容は貴いということを知って、厳かにして腰を伸ばさずに、先生が頭を下げて三年間興南で監獄生活をしようと背が曲がりましたが、皆さんはそれ以上頭を下げて、顔を上げられない負債を追った者の恥を忘れず、民族と国家が、南北が統一されるその日を見通し、アジアの統一を誓い、民族を指導することができる旗を掲げて、東西四方で喊声をとともに、世界の戦いに出ていくべき使命が残っているということを知るべきです。分かりますか？（はい！）

その訓練過程が宗族的メシアとつながるのです。これが最初の段階です。今から蘇生・長成・完成段階が残っています。三段階がまだ残っています。アジア的宗族的メシア、世界的宗族的メシア、これがいっぺんになされてくるのです。

これをつなげる責任を、先生が死ぬ前にしなければなりません。そうしなければ、万国の統治権体制を作ることができません。それを誰がしますか？　協会長がするか、洪性杓が？　朴普熙がするか？　誰も知りません。

先生が霊界にいつ行くか分かりますか？　時日がどれほど切迫しているかということを知るべきなのです。先生がいる間に、この体制

を皆備えて終えるべき厳粛な使命があるのです。過去・現在・未来の讒訴を逃れうる運命が、我々の二つの肩にかかっているという事実を知り、ひと足、ふた足、一歩、二歩、気を付けて行かなければなりません。千斤、万斤になりうる価値が、自分の足跡に残るという、このような高貴な歩みを残して、褒めたたえられながら、民族が皇族圏として王の場を築くべき責任があるということを知るべきです。

それでこそ、その天国の故郷に真の勝利的三代が、初めて自分の故郷と言えるのであり、アダム先祖、イエス先祖が完成するのです。一次アダム、二次アダム、三次アダムの恨多き歴史的先祖たちが、「自分の故郷である！」と言える、このような伝統を再び移植させてこそ、解放圏が繰り広げられるということを知るべきなのです。分かりますか？（はい）。（二二一・一六）

・真の王権主体

皆さん、宗族の王権を立てにいく宗族圏は、真であるために、偽りのサタン圏では永遠に手を出すことができないのです。神様だけが支配することができる基盤を築くため、王の場を築くために行くのです。今、王権と言ったでしょう？　王の場を築くということがそのことです。

では、生命の王宮がどこですか？　愛の王宮がどこですか？　血統の王宮がどこですか？　家庭ですか？　夫婦ですか？　夫婦の愛の基地ではないですか？　違いますか？　男の生殖器、女の生殖器がそこです。皆さんが王の継承者の長子を産まなければなりません。神様の愛を中心として、天国の真なる王子、王女を産まなければなりません。それが真の生命でしょう。真なる血統を残さなければなりません。後世を残さなければなりません。

皆さんの後孫の中で、堕落の痕跡を再び残す、このようなことがあってはいけないので、これを歯を食いしばって、天上と地上の天倫の大道の前に誓って立ち上がる群にならなければならないのです。その主体性を持って再創造して、我々の後孫が自分の過ぎし日の歴史的資料を見て、夢でも脱線することができないと言いうる材料を持たなければならないでしょう。分かりますか？（はい）。

大きな松の木を見ると、「私が艱難を受けた過ぎし日の歴史時代に、私を知り、私が離れたことを見たおまえは、今日どのように思うか？」と尋ねる術を知るべきです。また、過ぎし日の庭を眺めて、自分の友を呪ったその庭を、今は愛の友として抱き、流れる水辺で全部忘れまいとしましたが、今は主人の立場で皆忘れ、その水辺で泳ぎもし、そこに住む魚も釣ってやると思わなければならないのです。それでこそ主人です。

初めてエデンの園のアダムが川に入って、初めて王権の代表者として魚を釣って食べられないのを蕩減復帰するという心を持って、釣りもして、魚を捕まえて食べたりもして、山にいるウサギやキジもそのような心を持って捕まえて、父母を奉養し、神様の前に祭物として、生活の一つの食べ物として、生活の資料として消耗すると言える歴史を残さなければなりません。分かりますか？（はい）。

・本然的我々の価値

価値観の没落時代が来たでしょう？　なぜ価値が没落したかというと、体と心が分かれることで、価値が定着する基地がなくなったためです。

皆さん、体と心が分かれて戦うでしょう？　戦わずに永遠に平和の起点になるべき、帰着の礎石になるべきなのが戦いますが、どのようにして落ち着きますか？　皆さんの家庭で、夫婦どうし戦うでしょう？　個人的価値、家庭的価値が皆崩れていきます。社会も戦うでしょう？　戦いますか、戦いませんか？（戦います）。価値没落です。国家も戦うでしょう？　全部戦場です。民主世界と共産世界が戦います。価値没落時代に来ました。

本然的我々の価値、個人から家庭、氏族、民族、国家、世界、天地から、本然的価値を設定すべきだったのに、真の父母の堕落しない本然的アダム家庭の伝統を受け継ぐはずだったのに、皆失ってしまったので、このような破壊的起源地を爆破してしまわなければなりません。そうして、統一的起源地を探して立ち上がってこそ、価値的世界が展開するのです。それゆえ、皆さんの体と心が、統一されているかということが問題になるのです。分かりますか？（はい）。

本然的価値は、どこに立つべきか？　自分から。絶対的な心と絶対的な体が、絶対統一された絶対愛の上に立ったという自負心を持たなければ、個人的価値の平等基準は自分から離れるのです。分かりますか、分かりませんか？（分かります！）

私が大学を出たと褒めてやり、このように信じたら、くずにならないだろうか？　先生は、くずを作るか、金持ちを作るか？（金持ちを作ります）。本当ですか？（はい）。

イ）祖父母は神の代わり

祖父母に神様のように侍ることができる価値観、それは世の中にありますか、ありませんか？（ありません）。天国から神様が派遣して送った、過去の先祖として登場したのが我々の祖父です。分かりますか？　一家が全部、おじいさん、おばあさんに神様のように侍れば、あの世に行ってまず伝統がそこに立つのです。この頃侍るその基準がないのです、価値基準が。祖父の絶対的価値基準は、過去を代表します。

ロ）父母は現在の王

自分の父母は、この家庭世界の全体を代表した王です。自分の父は、家庭の王であり、母は家庭の王妃です。ですから、世界のどこの誰の父・母よりも貴く考えて、その命令に絶対に服従しなければなりません。

これは私の言葉ではありません。先生が作って言った言葉ではありません。原則的な内容がそうすべきなのではないですか？　原理がそうであるべきではないですか？　そうでしょう？（はい）。買って言う言葉ではありません。原理的な内容を話すのです。先生がここにいて、サタンがケンカを仕掛けて、サタンを追放したのです。「サタンの王権を出せ、この野郎！」と言ったのです。分かりますか？（はい）。

父母は現在の家庭の王です。うちの家に全部が集まっています。うちの家庭は小地上天国、小天上天国です、王権、真の父母圏、すべてを皆持っています。

このように幸福でありうる平和の基地が、自分にあったということが分かりませんでした。これを崩すためにサタンは階級的闘争、母・父の闘争概念、父子間の闘争概念、兄弟闘争概念を全部突っ込んだでしょう？　こいつのものが悪魔の哲学でした。何と言いましたか？　父母は現在の王、王を持っているのです。

ハ）子女は未来の王

子女は未来の王権を伝授されるのです。皆さんが、今まで結婚しないで、これから未来の氏族の前において、王の血筋を引く者を育て、大きな国の王として送るために、王の血筋を引く者を育てているという心を持つべきです。分かりますか？（はい）。

それゆえ、産んで、教育して、育てて、出世させるのを願うでしょう？　生まれたときに真の父母になり、真の師になり、真の主人の立場に立てようとするのが、人類のすべての父母たちと国家が願う望みではないかというのです。それは同じです。子女は未来の王です。（二二一・一六）

Book 三: 真の愛　　True Love

第一章　真の愛というものは

一　愛は平和と幸福の源泉

愛は、もてばもつほどうれしく、一度もてばうれしくて手放したくありません。人間の努力では生命の根源を支配することはできません。私の生命の動機や過程、生命の終末までも動かすことができるのは、真の愛しかありません。人間は愛で生まれたので、愛の道を行き、死ぬ時も愛のために死ななければなりません。

愛の色はどのような色だと思いますか。夜は黒く、昼は白く、夕方になると黄色いと思いますか。愛の色とはどのような色だと思いますか。愛の中心色には平和と統一、人類の平等思想を成すことのできる力があります。ですから愛の至聖所にむやみに入れば、火で焼かれて死んでしまいます。

愛する相対が現れれば顔に花が咲きます。何がそうさせるのでしょうか。愛の力のみがそのようにすることができます。銃ではありません。脅しではありません。その愛はどのような愛でしょうか。宇宙の主人となる愛、宇宙の中心となる愛、宇宙の源泉となる真の愛です。

愛は公式性を帯びた無形の秩序であり、平和であり、幸福のかなめです。世界人類のための共同の財産であり、神様の意志と力の象徴です。

愛は最高の価値をもっています。真の愛さえ引っ張っていけば、神様もついてくるし、世界もついてくるし、みなついてきます。愛の場でなら、すべてのものがみなついてきます。

真の愛とは、永遠に共にいても、ただただうれしい愛です。永遠に共にいても、共に住んでも、共に見ても、共に話しても、共に感じても、共に聞いても、ただただうれしい愛です。

愛は、小さいと言えば極めて小さいものであり、大きいと言えば極めて大きいものです。愛し合う者同士は、目が一度だけ瞬きをすれば、天地がひっくり返るように感じ、また愛する人が一度にっこり笑う表情をするだけでも、天地が出たり入ったりするように感じます。鋭敏ならばとても鋭敏で、小さいならとても小さく、大きいならとても大きく、見えるなら見えるし、見えないなら見えないのです。その境界線を破ることができるものは愛しかありません。ゆえに、愛する人は愛に占領されているので、一言の言葉をも愛を中心として言おうとします。

愛の力は、原子爆弾の威力よりも大きく偉大です。愛は人間に死から新しい生命を賦与しますが、原子爆弾は人間にただ死をもたらすだけです。原子爆弾は創造ではなく、審判であり破滅です。世界を一つに一致させるのは武力を伴った力ではなく、真の愛なのです。

国ごとに国境があり、文化的背景があり、風習がありますが、これらを超えることができる武器があるとすれば、それは真の愛しかありません。

一生の間、愛のために生きる人には万物も祝福を送ることでしょう。花もその家の庭で咲くことを願い、一羽の鳥もその家の庭の木に巣を作って、歌を歌うことを願うでしょう。それは万物の価値を知って、万物を心から愛してあげるからです。

すべての生命力の中心である愛は、変わりません。愛は理想的な要件の中心の位置を占め、神様と一致しているので、神様がいらっしゃる限り残っています。

真の愛とは何でしょうか。縦横を通じ九〇度の角度をもって、どこでも角度が合わなければなりません。東洋の家にも合うし、西洋の家にも合うし、五色人種、文化的背景、宗教的背景がみな違うとしても共に行くことのできるもの、それが正に真の愛です。

宇宙は縮小し、拡張する作用をします。息をしているのです。縮小させ拡張させる喜びの縮小圏と拡張圏を、何が調整するのでしょうか。政治権力ではありません。知識ではありません。お金ではありません。愛がするのです。

愛の目でこの世を見れば、飛んでいく鳥を見ても、「ああ、あの鳥はなぜ鳴くのでしょうか。ああ、愛するものを恋しがっているのだな」と言います。そこで詩が詠まれ、文学作品が出てきます。私たちの人生の歴史も、自然の中に合わせて愛の交響曲が再現されています。それゆえ、愛の息遣いも、愛の手も、愛の歌声も、愛の言葉もすべて好きなのです。

真の愛の前にはどのような力も溶けてしまいます。それは見るだけでも良く、通り過ぎるだけでもうれしいのです。人を構成する本質的な内的要素は、生命に先立って作動し、根源にならなければならない愛に違いありません。

愛のために生きる人生は、生産的な結実の人生であり、愛を知らずに生きる人生は、消耗的な滅亡の人生です。神様も人間も宇宙も愛のための人生を生きることを願いますが、それが本然の人生なのです。

真の愛は、絶対的であり、不変であり、永遠なものです。

愛には発展もなく、いかなる革命もあり得ません。愛は原型そのままが完全なもので、不変なもので、永遠なもので、絶対的なものです。

愛は、自然な中で、最高に自然な雰囲気の中でなされるのが、真実な愛です。

人間が愛の目を開けば、自分の心と体は宇宙の中で立体的な関係を結びたがります。それで秋風で落ちる落ち葉を見て自然の理を悟り、ほほえみ、春の山に咲く花の中で、美しさを競いたくて一束の花を作ったりするのです。

世の中で一番早い作用は、愛の作用です。この地の果てと向こうの地の果てにいる人同士が互いに愛し合えば、その地の果てを越えて引き合うのです。愛はそのような力をもっています。

恵みを受けた人、神様の愛を受けた人は、美しく見えます。私たちが神様の愛を感じることができる境地に入れば、すべてのものと通じることができ、超越することができます。根源的な愛の感情を中心とすれば、すべてのものをもつことができます。

私たちの人体にあるいろいろな器官も、愛という一つの目的を中心にして生まれました。目は愛を探すために、鼻は愛の香りをかぐために、耳は愛の声を聞くために生まれました。私たちが聞く声の中で、聞いても聞いても嫌でなく、好きな言葉は「愛する」という言葉です。すべての存在がみな喜ぶことのできる主題は、愛以外にはありません。その愛とは、大宇宙が歓迎できる真の愛です。

愛の属性は、好きなものだけ愛するというものではありません。とても低いものをも、高いもの以上に愛することができるのが真の愛だ、と定義を下すのは妥当なことです。

愛は、神様も微動だにできないようにする権威をもっています。神様も愛には弱いのです。全能の神様も人間の愛の香りをかぐならば、満面に笑みを浮かべられるのです。神様も愛の話を好まれます。

神様も愛を願い、愛が大きいので神様も愛の中に入らなければなりません。そうしてこそ理論に合うのです。神様も希望をもって願うのが愛なので、愛は神様より大きいのです。

この世で最も聖なるものとは何でしょうか。真の愛です。真の愛は神様から出発します。神様が心から願うのは真の愛の道であり、真の愛の道を通じなくては神様の前に出ることができないことを知らなければなりません。神様は愛を通じて、見たり、聞いたり、食べたり、触ったりしたいのです。

愛を通じて生きる時、人間世界には幸福が始まります。人間自身が成そうとする完成とか理想の実現は、愛の基準を離れてはあり得ません。ですから宇宙万物は、愛をパターンにして生きていくのです。創造されたすべての万物は、神様の根源の愛を中心として始まりました。

世の中のすべてのものは、一度与えればなくなりますが、愛は、与えれば与えるほどより多く返ってきます。それで愛を好みます。愛はいつも与えることができ、満たすことができ、いつも喜び楽しむことができる内容がありますが、お金はいくらいいといってもあげればなくなり、権力がいくらよくても、使えばすり減ってしまいます。しかし愛は、与えれば与えるほど無限に通じるようになっています。

真の愛とは何でしょうか。おじいさん、おばあさんでも、死んだとしても永遠に、それなしでは生きることができません。それさえつかんでおけば永遠にうれしくて、それなしでは生きられないのが真の愛です。年寄りはもちろん、男性も女性ももちろん、青少年ももちろんそうです。

おじいさんたちが愛の味をみては、「ああ、昔食べたのは嫌だ。今日の文明の香りとは違う！　嫌だ！　愛の香りをほうり出して、他の香りだったらいいのに！」と言いますか。すべての細胞が「ああ、おいしい！」と言え

る味は、パンでもなく御飯でもありません。それで愛は、すべてのものの核を、焦点を成しています。精髄のようなものが愛です。そのような愛で相対すれば無事通過します。

真の愛とは、永遠に続く愛です。春にもその愛、夏にもその愛、秋にもその愛、冬にもその愛、少年時代にもその愛、壮年時代にもその愛、老年時代にもその愛、永遠な世界である霊界に行ってもその愛です。変わらない愛です。

愛の主人は誰でしょうか。男性でもなく女性でもありません。正に神様です。愛を中心として愛を通じてのみ神様と人間が一つになるのです。なぜならば、神様にも人間にも愛は絶対に必要だからです。

愛の調和を成せば円形運動をなします。愛で一体となり愛の実を結べば神様は降りてこられ、人間は上がって中間で出会うようになります。神様がこの円形の球心点になり、球形運動がなされます。球心点は愛の調和が成されるところで、生命が胎動するところであり、平等主義と共同主義の始発点なのです。そこには愛の力があります。ですから宇宙のすべての作用の力と包容する力は愛なのです。

愛は一人では絶対に感じることができません。幸福も同じです。平和というものも一国について言う言葉ではなく、相対国家との間で成立する相対的関係を言います。相手と同等な相対的関係を結びながら、愛することができてこそ、真の幸福を感じるのです。自由もそうです。一人では本当の自由が成立しません。愛の中で愛と共に得られる自由が、真の自由です。真の愛の中ではたとえむちをもって独裁をするとしても、それが拘束ではなく、さらなる深い喜びと喜悦をもたらしてくれるのです。愛は相手のために与えるもので、自分が犠牲になって人を生かすものだからです。

愛とは、私の心と体が自動的に一つになるその中心の柱です。個人、家庭、氏族が同じ点、国家、世界、神様が同じ中心、一つの柱に位置します。その中心は動きません。ですから真の愛の場は永遠の定着点です。

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ一四・六）と言われたイエス様のみ言に、一つ抜けているものがあります。それは一番重要な愛です。「私は道であり、真理であり、命であり、愛である……」と言わなければならないのに、愛が抜けています。これを聖書に入れなければなりません。このようなことを言えば、クリスチャンたちは「おお、何と不敬な！」と言うでしょう。しかし神様に聞いてみると、「然り、然り」とおっしゃいます。このように見る時、神様は愛を好まれます。愛の中でも、真の愛を好まれます。

二　愛は無限に与え、また与えること

宇宙を造った神様、法度を立てた神様はどんなお方ですか。宇宙を通じて誰よりも「ため」に生きる代表的な立場に立った方です。その方が神様だというのです。ですからその方に会おうとするならば「ため」に生きなければなりません。その方は知識の大王ですが、知識をもってこいと言いません。能力の大王

ですが、能力をもってこいと言いません。権力に対する、お金に対する、物質に対する主人であり、大王ですが、それらをもってこいとは言いません。「ため」に生きてくれば、みんな私のそばに来ることができるというのです。

人のために与え、また与えるのは、再創造する上で、神様が創造時に御自身を消耗させた立場と一致します。私を投入するということは、第二の私をつくるためのもので、神様が創造する時、御自身を投入されたのと同じです。再創造の歴史は蕩減復帰路程であり、蕩減は再創造の歴史を通じてするので、御自身を投入するところにおいてのみ再創造が展開されます。ですから犠牲になるのは不可避だというのが理論的な結論です。

愛は、自分を一〇〇パーセント投入することです。神様が天地を創造する時、愛ゆえにすべて一〇〇パーセント投入したのです。ですから真の愛は、「ため」に生きるところから始まるのです。

投入し、投入し、また投入するところから真の愛の論理が始まるのです。「ため」に生きるところは滅びません。小さいところから大きいところに、そして大きいのがその次にはどこへ行くのかといえば、中に回るのです。

愛とは、与えて満足するのではなく、与えてももっと与えたいのに、与えられなくて恥ずかしさを感じる、そのようなものが愛です。与えて恥ずかしさを感じる人であればあるほど、本当の愛の主人です。愛は、与えれば与えるほど、もっと大きいものに加えられます。また作用すればするほど、入る力より出ていく力がもっと大きいのです。ですから滅びるのではなく、栄えるのです。愛なくして栄えることはありません。

愛には消耗がありません。動けば動くほど大きくなります。力学の原則は、動けば動くほど消耗しますが、真の愛は、動けば動くほど消耗がなく、大きくなります。

愛の本質は、「ため」に生きようとする時は大きくなりますが、自分のために生きようという時はだんだん小さくなります。

真の愛とは何でしょうか。与えて忘れるものです。与えて、また与え、また与えるのです。

愛の世界は、与えて与えて与えても、無限に続くものです。

愛という言葉は、本当に偉大です。「言葉一言で千両の借金を返す」という言葉があります。言葉一言で蕩減できるという言葉です。億万の借金があったとしても、愛の言葉一言で蕩減しても余ります。

無限大のこの宇宙を中心として牛耳って生きることのできる権限は、真の愛の家しかありません。愛のために生きるところから、それが出てくるようになっています。神様がいくら大主宰で偉大だとしても、愛の前には頭を下げるのです。

愛は、神様も一人で成すことができません。愛は、必ず相対的基盤を通じて成されるのです。愛は、どこから始まるのでしょうか。自

分から始まるのではく、相対から育ち上がっていくものです。

宇宙の根本は人間であり、人間の根本は生命です。生命の根本は愛で、愛の根本は神様です。しかし、愛は一人でいては成立しません。必ず相対的関係を必要とします。神様が愛の根源地ならば、その愛に相対する資格をもっている存在は、人間しかいません。

愛という言葉は、一人についていう言葉ではありません。希望という言葉も、一人についていう言葉ではありません。生命も、一人独断的に出てくるものではなく、連結された立場から出てきます。

神様は、人間をどのような存在として造ったのでしょうか。神様の絶対、唯一の価値になることができる愛の相対者として造りました。神様の前で宇宙を与えても替えられない高貴な価値、愛の相対圏を備えて男を造り、女を造りました。人は愛から生まれて愛で大きくなり、愛によって生き、愛で死にます。しかし、ただなくなるのではありません。主体である神様は永遠、不変、唯一ですから、その前に相対的愛の場に立つ時は永生するのです。

神様がアダム・エバを造った目的は、喜ぶためです。見て喜ぶためではなく、話して喜ぶためではなく、触って喜ぶためではなく、愛を中心に喜ぶためです。したがって、喜びを成就するために人間を創造したのです。

神様は絶対的存在ですが、愛の相対になれる存在がいなければなりません。神様の相対者は正に人間なのです。神様の愛の相対者として人間が、完成された愛をもって神様の前に現れる時、神様は幸福な神様、喜びの理想を取り戻した神様になるのです。

神様の夢はただ一つ、愛の理想を実現することでした。しかし愛の理想の実現は、神様が一人で成すことはできません。愛や幸福、喜び等は一つの個体を中心として成されるのではありません。相対圏がなくては絶対に成立できません。

愛はどこから出てくるかといえば、相対から現れます。相対が醜く憎ければ愛も後退しようとし、相対がきれいで良ければ愛の作用もそれだけ早くなります。相対の言葉、美しさ、におい、味等、相対の要素によって愛の作用が決定します。

愛はどこから出てくるのでしょうか。私から出てくるのではなく、相対から出てくるのです。相対から出てくるので、私が頭を下げて、相対のために生きなければなりません。「ために生きよ」という天理がここから出てくるのです。極めて高貴なものが私を訪ねてきますが、それを受けるには、「ため」に生きるべきだという「ために生きる哲学」を成就しなければなりません。

私が生きて動くこと、私が活動することは無意味なことではなく、ある目的があるからです。その目的とは何でしょうか。愛の世界を具現することです。人間は愛の具現のために、愛を成さなければならないという目的によって存在するのです。人間の生の目的が真の愛の具現にあるので、人間の存在価値もこの真の愛によって決定されます。これがどれほど素晴らしいことでしょうか。

人は自分の愛する相対が自分より何千倍、いや無限大の価値的な存在として現れることを願います。このように神様も、御自身が愛する相対である人間が無限の価値的な存在になることを願われます。人間が完成すれば神性を成して、天の父が完全であられるように完全で神的な価値を成すのです。

真の愛とは何でしょうか。相対に出会って、百年、千年共にいたいし、永遠に愛したがる愛です。そこには地獄があり得ず、サタンが付け込むこともできません。

神様が絶対的な愛のパートナーを求めるとすれば、誰を選んで立てるでしょうか。正に人間です。したがって創造主の永遠な愛と一つになった愛のパートナーは、永生するという論理が出てくるのです。愛の関係を中心として永生論理をどのように立てるかという問題は、宗教において極めて重要な話です。男性に永生があって、女性に永生があるのではありません。神様に永生があるのではありません。神様の愛に永生があるということを、はっきりと知らなければなりません。

愛の主体がいなければ、誰もいないように感じます。しかし愛の主体がいれば、すべてのものが満たされます。愛が満たされてこそすべてのものが満たされるので、無限に与えることができ、真実に与えることができるという結論が出てきます。与え受けるのが理想の実現であり、理想の繁殖です。愛の世界は距離を超越します。愛がどれほど早いのかと言えば、光もついていけません。一番早いのが愛です。一番明るいのも愛です。一番完全なものも愛です。一番完全に満たされるのも愛です。

生命を求めて愛を犠牲にするという人と、愛を求めて生命を犠牲にするという人のうち、どちらがより中心でしょうか。どちらがより真に近いのでしょうか。愛を求めて生命を犠牲にするのがより中心であり、真に近いのです。生命を求めて愛を犠牲にするのは自分中心ですが、愛を求めて生命を捧げるのは、自分中心ではないからです。

私が五大洋六大州をさまよいながら切実に叫んだのは、正に愛の道でした。愛のない砂漠のような人類の前に、愛の光を照らしてあげようとしたのです。人間が究極的に行くべき道が愛の彼岸だとすると、人類の前に何よりも重要なものは「愛の灯台」でないはずがありません。正にその愛の灯台のみが、人間を本郷の地に導くことができるのです。

神様と一つになる時は、千態万象（千差万別）に回ります。ですから、兄弟間でも父母が子女を愛するのを見習って、兄は弟を愛さなければなりません。そのような愛で一元化された家庭には、家庭愛が花咲きます。これがまた社会愛になり、さらに民族愛になります。このように進めば世界愛になります。

神様は、愛に酔って億千万代を生きられるように人間を造られました。それで、人が老いることは怨讐ではありません。人は愛から始まって、愛をもって生活し、愛の実として収められます。死ぬことが愛の実を収めることです。私たちが父母の愛を受け、子女の愛を受け、夫婦の愛をもって父母として子女を

愛し生きたので、神様の愛、内的な愛の世界に蒔いたすべてのものを、生涯を経て実を結び、これを収めてからあの世に行くのです。

三　愛が介在する時、調和が成される

愛は、考えでも良く、形でも良く、味でもいいのです。これが愛です。

愛とは、東西が合わさるものであり、南北が合わさるものです。その次は天地が合わさるものです。ですから愛は球形を成すようになります。

口が真の愛に酔っているならば、ほほえむその唇がどれほど恍惚だろうかと考えてみてください。人間の五感が真の愛によって動く姿、神様に向かって動く五感の調和がどれほど美しいかを想像してください。美しさを通じた喜びは、神様一人では体験できないものです。美しさは、相対がいてこそ体験できるもので、それが神様が人間を創造された目的です。神様は天地を創造された以上に、美しい内容を所有した人間の心情世界を旅行したいのです。

神様も息をします。真の愛の呼吸をされるのです。神様も宇宙の拍子に合わせるので、真の愛を中心に宇宙が永遠に続くのです。ですから皆さんがここまで行ってこそ、神様の呼吸圏内に入って永生するのです。

宇宙は丸い形をしています。太陽も丸い形です。すべての丸いものは何を中心とするのでしょうか。自分一人では丸くなることができません。誰かを中心として関係を結んでこそ丸くなることができます。このような関係圏を集約させる一つの物体、一つの存在物として登場する世界は、円形圏を基盤とするようになっています。ここでこの円形をつくることのできる物体とは何でしょうか。調和の母体は、愛の作用だというのです。

愛は神経のようなものです。私たちが髪の毛一本を引っ張れば、体全体が引っ張られるのと同じように、愛さえ引っ張れば宇宙が引かれてくるし、愛さえ動かせば宇宙がみな和して、回るようになります。

人は酔って生きなければなりません。酔って生きる人が、幸福な人です。芸術家たちは、芸術に酔って生きます。文学をする人たちは、自分が構想する本を書くとか、ある名作に酔って生きます。そのような人が、幸福な人です。ですから人間の四肢五体は、立体的な神様の理想的な愛に酔って生きなければならないし、その方だけについて回らなければなりません。

男性が求め、女性が求めている最も貴いものとは何でしょうか。愛です。愛は人も永遠に好み、神様も永遠に好まれます。愛とは、全宇宙が永遠に一番好むものです。

愛は見えませんが、最も貴い贈り物です。それは不変性をもっているからです。黄金は不変の色、ダイヤモンドは不変の硬さ、真珠は不変の調和の色があるので貴いのです。しかし宝物には生命がありません。真の愛は、生命がある宝物なので、もっと貴いのです。

愛とは、みな好きなことです。愛とは結局、好きになることです。

平等という言葉は、愛を抜けば何でもありません。愛を中心として「ため」に尽くす時、真の平等が成されるのです。愛をもてば、男性と女性が対等になることができるし、愛をもてば、息子が大統領だとしても、その息子と母は対等になれるというのです。愛をもったすべてのものは、平等になれる内容があります。私たちはこれを知らなければなりません。

万物の中心は人間です。人間の中心は何でしょうか。真の愛です。神様の愛は垂直線一本です。天地の中心を立てるためのものが男性の愛の線であり、女性の愛の線ですが、女性は男性のところに行き、男性は女性のところに行って、その線が回るようになるのです。男性と女性が真の愛をもって現れる時に、神様の前に完全なマイナスの愛が生まれるのです。完全な真のマイナスの愛が生まれる時には、縦的な神様のプラスの愛が自動的に臨みます。宇宙のすべての原則がそうなっています。

私が宇宙と授け受ける関係に置かれるには、愛をもってこそ可能です。愛でなくては永遠に与え受けることができません。愛が温柔で謙遜なものだと言ったのも、抵抗なくそれをもっと多く、完全に運動させるためです。温柔で謙遜で犠牲になれば、いつでも通じるようになっています。どこでも抵抗なく行くようになります。これは犠牲ではありません。抵抗なく作用するための一つの方法が「ため」に生き、犠牲、奉仕することです。それではなぜ奉仕しなければならないのかといえば、第二の生の呼吸気管を完成させるためです。

繁殖するすべての存在は、必ず対が連合して繁殖しますが、繁殖の調和を起こすその内容が愛です。自然界のすべての存在物の繁殖は、みなそうです。水も陰性の水があり陽性の水がありますが、陰性の水と陽性の水が混ざったところには魚がよく棲みます。寒水と温水が和合するところには魚がたくさん棲むようになっています。それが理想的です。和合しなければならないのです。

北に棲む鳥が南に行って雛を産み、南に棲んでいた鳥が北に行って雛を産みながら交流するのも、みなリズムによってそうするのです。そこで生まれたので、そこに行って雛を産むのです。冷たい水にいる魚は温かい水の所に行って産卵し、温かい水にいる魚は冷たい水に接してこそ産卵するようになっています。陰陽の一致の和合が成されなければなりません。それで移動するのです。

愛は、相対的関係がなければ成立しません。絶対的な神様だといっても、一人では愛に出会う道がありません。相対者を立てずして出会うことができないので、絶対的創造主の前に絶対的相対の資格者を備えておくためのものが創造であり、創造の傑作品が正に私たち人間です。神様も愛を探すために相対が必要だからです。

神様の愛に酔えば、砂の一粒を千年見つめても嫌になりません。私たち自身が愛の宇宙の中で生まれたと思えば、無限に幸福になるのです。

真の愛は、無理になされるのではなく、自動的に喜びの中でなされるのです。愛する時

も、もらおうとだけしないで、互いに授け受ける作用になってこそ理想的な愛が成立するのです。

もし愛が誰でも描くことができ、触ることができ、形態がどうだと分かるようになっているならば、そのような愛は一日もたたないうちに嫌になるでしょう。しかし愛はあるようでつかめず、ないようであるのです。悪いと思えば良く、良いと思えば悪い、千態万象（千差万別）の奇怪な蜃気楼のような内容を作動させるのが愛です。

宇宙統一理想を完成させる内容とは、真の愛です。いくら名作だといっても、その中に真の愛の味がなければ吐き出してしまいます。夫婦間の真の愛においても同じです。

人間が愛を一番好むのも、愛が全体を統一させ私のものにすることのできる主体だからです。人々には、愛がどれほどいいものかを知るすべがありません。

愛は、父母が子供を愛するように、すればするほど喜びが膨れ上がるのです。愛は一つになることです。もし神様の愛と一つになった人がいるとすれば、その人はどこの誰も切り離すことができません。ですから、どれほど素晴らしい愛でしょうか。

花の中に入っている蜂たちは、蜜を吸おうとお尻を上にもち上げ、頭を埋めています。それをピンセットで引っ張っても離れません。強く引っ張ってお尻が外れても離れません。その蜜の味がどんなに良くてそうするのでしょうか。蜜の味がそうならば、愛の味はどうでしょうか。愛の味と蜜の味では、どちらがもっといいですか。

愛でなくては一つにすることができません。二つを一つにするには言葉をもってはできません。二人が一つになるためには、何がなければならないのでしょうか。物質をもって一つになったならば、物質がなくなれば逃げていくのです。第三者の紹介によって何らかの事情を通じて一つになったなら、その人がいなくなれば去ってしまうのです。二人が一つになるためには、そして永遠に一つになるためには、何がなければならないのでしょうか。愛がなければなりません。

愛のみに、あらゆる色の刺激を統一することのできる力があります。その愛が何かは分かりませんが、世間の人が「嫌だ」と言うおじいさんの臭いが、おばあさんの鼻には心地良いというものです。おじいさんの顔と手に皮しかなくても、おばあさんはその顔と手がいいというのです。まさしく愛がそのようにします。愛の風が吹いた時は、天下がすべて美しく見えます。愛のふろしきを取り込めば、詩人でない人がなく、風流でない人がいないというのです。

私たちは一つの草を見つめても神様の立場で見つめられなければならず、花を見つめても神様の心情の代身としての立場、神様の心情と通じることのできる立場で見つめなければなりません。昆虫や鳥、あるいはある動物を見る時も、神様の心情と因縁が結ばれるそのような内的な感情を体得できなければなりません。神様の愛のように生きる人が神様の息子であり、娘です。天を主管することがで

き、地を主管できる全天宙の主人公です。人間が子供の立場に置かれ得る本質的な内容は、愛です。

心情で私たちの心は無限に大きくなることができますが、知識で無限に大きくなることはできません。愛の心情は宇宙を含んでも余りあるので、このように偉大な本然の地を開発すれば、神様もその中に来て昼寝をしたがります。知識によって神様を包括することができないので、そこにおいて愛の心情が偉大だということを知らなければなりません。

愛は国境を超越します。神様の愛には国境がありません。五色人種を超越するのです。黒人、白人、黄色人種と言って差別しません。それで神様の愛は偉大なのです。愛の流れにおいて環境を介さず、流れていけば環境が同化され、発展するのです。そうすることのできる思想的な内容を備えてこそ、神様が好まれるのです。そのため愛の道を行かなければなりません。

四　愛の特権は同位権、同参権、相続権

絶対的な神様の前に、私がどうしたら相対的な立場で出ていくことができるのでしょうか。努力でできますか。力を使ってできますか。何をもってしてもできません。しかし愛の因縁を結んでいけば、一度に同等な立場に行くことができます。愛の核を掌握する時には、神様をコントロールすることができます。素晴らしい夫の妻がたとえできが良くないとしても、その妻が愛の因縁をもって妨げると、素晴らしい博士も仕方なく引っ掛かってコントロールされるのです。愛にはそんな力があります。

神様と同等な立場、同位権の立場に立つには、神様の愛を所有しなければなりません。

愛には同参権があります。父が高ければ、子供は低いところにいても、すぐに父の立場に飛び上がることができます。同参権が愛に内在しているという驚くべき事実のゆえに、私がたとえ遠くに離れていても愛によってそこに同参できるのです。

真の愛を体得した人は、神様の本来の理想的な世界で、神様が願うすべてのものをすぐに所有できる能力と権限をもちます。そのような資格は地上で成されなければなりません。神様の真の愛は、同胞を愛するとか、世界の人々を愛するとか、万物を愛することによって、感じることができます。

神様の愛を所有した人だけが、神様が造られた天と地のすべての権勢を相続できる特権をもつことができます。

神様と愛の因縁を結べば、必ず主管性と独立権、その次は相続権をもち得る特権が与えられるのです。

愛の圏内の最大の人格を構成した人は、その世界では神様のような能力行使を可能にするのです。

神様の愛と人間の愛は、本質的に同じです。愛は一つになろうとするのです。男女が互いに慕い合う理由は何でしょうか。男性と女性、女性と男性を通じてのみ神様を所有すること

ができるからです。愛は、互いに好きになることです。

生命と愛のうち、どちらがより貴いのでしょうか。人間の生命は、人間の至聖所を身代わりすることができません。男性の生命があっても、女性の生命があっても、その生命には至聖所が連結されていませんが、愛には至聖所が連結されるので、愛が生命より貴いのです。

誰が主人になるのでしょうか。より「ため」に生きる人です。より「ため」に生きる人が支配し、より「ため」に生きる人が主管し、より「ため」に生きる人に相続がなされるのです。それが天理です。愛には同参権があります。昼でも夜でも、どこでも同参することができるのです。自分の息子、娘の部屋に許可をもらって入りますか。自分の部屋に許可をもらって入りますか。そうではありません。神様を愛するそのような愛の作用をもったならば、神様がどこに行っても私が同参できるのです。

真の愛と権勢とは、何が違うのでしょうか。真の愛は、愛して忘れてしまいます。記憶しません。善と悪の基準は何でしょうか。悪は与えて利益を全部もらおうとするもので、善は自分のものを与えても忘れてしまうものです。家においても、より「ため」に生きる人が善なる側です。「ため」に生きる人は、結局その家の主人になることを知らなければなりません。十人の友達がいるとして、その中で一番いい友達は誰でしょうか。十人の友達のために尽くす友達です。そうすれば十人が、「ため」に生きるその友達を中央に置いて侍るようになるのです。宇宙はそのように相続されていきます。

人間において、永遠に残すべきものとは何でしょうか。第一に愛であり、その次が生命です。愛と生命を残さなければなりません。人間においては、存在する前から愛があるのではなく、存在してから愛があるのです。神様においては生命が先で、愛が二番目です。人間においては愛が一番目で、生命が二番目です。

すべての元素から人間に至るまで、この宇宙全体に対して「お前はどこの何をもった人の所有になりたいか」と聞けば、みな同じように「愛をもった人の所有になりたい」と答えます。すべての万物は愛の主人を探すというのです。

神様はすべての権勢を人間に与えようとします。このようになるためには、神様と人間が愛で一つにならなければなりません。神様の創造理想は一体理想です。愛を中心とした一体理想が創造理想です。

人間は実体をもった神様の体です。神様の実体をもった体なので、人間は外的な神様です。神様はそのような特権を人間に賦与しようとされます。

なぜ「善なることをしなさい」と言うのでしょうか。善なることをしようとすれば犠牲にならなければならないし、犠牲は自分を投入することです。投入すればなぜいいのでしょうか。天運の根本、原因と結果、すべての力の主体、主流に接続できる場に入るからです。それで無限な力を受けることができるか

らです。善なる人には無限な力が供給されるので、すべてのことに通じます。

五　愛で完成する

神様の創造目的は、神人愛一体の愛の理想世界です。人間は、神様の最高最善の愛の対象として造られました。ですから人間は、創造物の中で唯一神様の実体をした対象です。人間は、無形の神様の前に見える体として生まれました。完成すれば神様の聖殿になります。神様が自由に、また平安に、いつでも入ってきて臨むことのできる有形の実体です。神様の絶対的な真の愛の理想は、人間を通じて父母と子の縦的関係で実現、完成されます。

人間は何のために生きるのでしょうか。「愛のために生きる」とすれば、どれほど素晴らしい答えでしょうか。人間は愛の実として生まれ、愛しながら生きて、永遠の愛である神様の懐に帰るようになっているのが創造本然の人生です。

人間は、神様の愛の核と一致する立場に立った時、心と体が一体を成すようになり、神様の愛の圏内に心と体を一体化させ、入れば、成熟した人間になります。その時、初めて堕落する前の本然の人間として個人完成が出発するのです。

神様は、真の愛の王であられ、主人であられます。もし真の愛の王になられ、新郎のほうが神様ならば、相対者となる妃が必要だということが絶対的な原理だというのです。それでは神様の前に、絶対的なその方の前に、真の愛の相対になれる方が誰かと問うならば、それは真の人間です。神様の愛と一体となる、アダム・エバだったのです。

男性や女性が行く道は、愛ゆえにあるのであり、愛のためにあります。私の道は愛の道です。愛を得るために、愛を守るために、愛の環境圏を築くために行くのです。

人が目的をいくら良く立てたとしても、その目的を主管する主体的な愛の権威を立てられない時には、再び新しい目的を追求しなければなりません。限界点が愛より上ではあり得ません。

アダムは神様と一つにならなければなりません。これを結び付けるのは愛です。存在世界の平面的な代表者は人間であり、立体的な代表者は神様です。これを永遠に結び付ける中心点が正に愛というひもです。

貧しい田舎の農夫として田舎で草取りをして、農業をする立場にいたとしても、その農夫に心と体に膨れ上がる愛の情熱が燃え上がっているとすれば、心の五感と体の五感が完全に合わさって、この上もない喜びを味わうことでしょう。このように神様の愛が皆さんに臨むことのできる安着点をもっているならば、時計の振り子の振動のように神様の胸が一度だぶんと揺れれば、皆さんの胸が一度だぶんと揺れ、それで皆さんと神様が共に回るというのです。一度回り始めれば、うまく回ります。行けば行くほど加重された力は遠心力が作用して、家庭を愛しなさい、社会を愛しなさい、国家を愛しなさい、世界を愛しなさいと要求するようになります。

すべてのものを包容して許す愛は、誰から始まると思いますか。愛は人間から出発するのではありません。愛は主体であられる神様から始まります。神様は愛で人間を創造されました。そうして人間から愛を迎えることを願われます。その愛をまた人間に返すことによって愛を完成するようになります。

愛は絶対的です。その絶対愛の前には、絶対知識、絶対能力、絶対権限をもった神様も、絶対服従します。

真の愛というものは、一から始まって三六〇度を回りきって到達しなければなりません。そうしてこそ真の愛です。到達する前には真の愛になれません。

人生の目的は、神様の愛を占領することです。神様の愛を占領できなければ、人間がいくら願いをかなえたとしても、それは成就したことになりません。いくら幸福だとしても、その幸福は永遠な幸福になれません。それで愛すれば永生を成すことができます。永遠によく授けよく受けられるようにする動機が、神様の愛です。

この世で一番聖なるものとは、真の愛です。真の愛は神様から出発します。神様が存在するならば、それ以外の道はありません。神様が本当に願うものは真の愛の道であり、真の愛の道を通らずしては神様の前に出ていくことはできません。神様は愛を通じて見て、聞いて、食べて、触ってみたいのです。人間も神様から愛の口づけを受けたならば、内部が爆発するような喜悦を感じるでしょう。神様の願いはここにあるのであって、ダイヤモンドや宝石を所有してうれしいとは言われません。

神様の愛は、「ため」に生きる愛、ひたすら「ため」に生きようとする愛です。このような愛、真の愛があれば、回るようになっています。宇宙はどこから始まったのでしょうか。回るところから始まりました。存在するすべてのものは回るようになっているのが本質です。それではどのようなものが永遠に行くのでしょうか。永遠に与えるということ、永遠に愛を中心として、永遠に与えようとする愛が永遠に回るのです。与える力と受ける力が一つになって、よくあげようとするので拡大する以外にありません。

真の愛の起源であられる神様を父母として、人間は息子、娘の位置に立たせられました。父母は子女のための愛の最高の主人です。父子の関係が従的な垂直関係であるのに比べ、夫婦関係は横的な水平関係です。したがって、父子の関係と夫婦の関係が互いに直角（九〇度）をなし、ここに前後関係である兄弟の関係が合わさることによって、愛の関係は球形を成します。それで、愛で構成されたすべての存在は球形です。宇宙全体が球形になっているのです。

人類歴史において、真の愛を完成すれば、政治、経済、文化的問題はもちろん、すべての紛争と・藤問題もきれいに解決できるはずです。今日世界人類が抱えているすべての難問題は、真の愛の完成によってのみ根本的な解決が可能なのです。

人間が神様に会うことを望むように、神様も真なる人間に会いたがっていらっしゃいます。ところで、人間のうちで、男性と女性のどちら側かに先に会いたいといえば、互いに不平を言うことでしょう。ゆえに、神様は、愛を掲げざるを得ません。愛のみ掲げれば男性と女性が共に会うことができ、共に触ることができ、共に分け合うことができるためです。世の中で、貴いものは互いに争って自分の物にしようとしますが、愛というものは、二人の人がお互いに一つとなり、相手のために所有しようとするので、争いがありません。

愛は誰もが好むだけでなく、愛のみが欲望を均等に充足させることができるので、この原則を置いてこそ、神様の救援摂理も可能なのです。

真の愛を探さなければなりません。真の愛にはどこに行けば出会えるのでしょうか。真の愛は昼夜なく不変で永遠なものです。自分一人だけのためのものが真の愛になることはできません。真の愛が私個人だけの所有にはなり得ません。真の愛は万民のものであり、宇宙共有のものです。真の愛は家庭、社会、国家、世界、宇宙まで連結されるのです。

真の愛とは、根をどこに置いて言う言葉でしょうか。神様がいくら全知全能なる方でも、その根を神様に置いていません。全知全能なる神様は、真の愛の主人公なのに、愛の根を神様に置こうとしません。愛の対象になれる人に根を植えようと考えます。

愛はどこから始まったのでしょうか。神様から始まりました。神様が愛の理想相対を必要とされてこの世を造ったので、天地創造も愛を起源としています。

心の力の源泉は愛です。ですから心が授け受けて生じる爆発的な力を神様に連結しさえすれば、それは何百倍、何千倍も統一できるでしょう。そして世界万民が待ち焦がれた願いを成就できるでしょうし、永遠に共に生きることができると同時に、天国も私のものにすることができるのです。その秘訣が正に愛です。

人間が神様と一体を成す時、その心情と感情は、無限な体恤の境地と幸福感に酔うようになります。結局、愛によって神様と人間は一つになるのです。愛によって人間と世界が一つになり、神様の創造目的である理想世界の実現も、ここから出発するのです。

人間が神霊的境地に入れば、小さな砂粒一つにも宇宙の理が入っていて、一つの原子にも無窮無尽な宇宙の調和が宿っていることが分かります。存在するすべてのものは、ある複合的な力を通じて現れた結果であることを否定できません。分子を越えて原子、原子を越えて素粒子に至るまで無意識的に存在するのではなく、ある意識と目的をもって存在しています。ですから存在するすべてのものは必ず神様の愛のみ手を経ており、必ず神様との心情的な関係のもとに存在しています。喜びは、ある目的を成し遂げた時に感じます。造った万物に神様の目的意識が内在されているので、創造された万物によって神様は喜びを感じるのです。

神様の愛の圏に進んでいくためには、どれほど強い愛でなければならないのでしょうか。今日、人間世界の間違った愛は、天使長級以下の愛です。堕落したこの世の愛は、サタンが侵入した愛です。このような愛の圏で生まれて生きながら、愛ゆえに死ぬか生きるかと大変です。この愛は、秩序もなく方向もない渦巻きです。渦巻きには、汚いものだけが集まります。しかし人間が神様の愛と関係を結べば、その愛の方向を教えてあげなくても自然についていきます。

神様を中心とした新しい愛、すなわち創造の法度による愛が決定された場で、初めて神様の理想が出発します。

愛をなぜ好むのでしょうか。好まざるを得ないようになっているからです。お父さん、お母さんを完全に一つに結び付けるのは、愛のロープです。鉄で作った鎖は時間が過ぎれば錆びて切れてしまいますが、愛のロープは永遠のものです。そして父母と子の間は、法でもお金でも結ぶことができません。ただ愛によってのみ結ぶことができます。

人間の完成は、知識や権力、あるいはお金によって成されるのではなく、愛によって成されるのです。その愛は俗化された愛ではなく、本来の愛であり、その愛によってすべてのものが完成します。

第二章　愛の実際

一　神様の愛

一) 愛は神様から始まる

神様は、愛の神様です。パウロは「キリストの中にある神様の愛の綱を誰が切るか」と言いました。キリストも、神様の愛がなければ何でもありません。それで神様の愛を何よりも好むのです。神様の愛は生命の源泉であり、幸福の源泉であり、平和の源泉です。霊的体験をしてみれば、これが分かります。

神様の愛は太陽より強いのです。朝日が出れば、すべての植物の芽は太陽に向かいます。これと同じように、神様の愛は生命の起源であり、私たちの本心の起源であり、理想的要素の主体的起源です。そのようになっています。

神様は、愛の実体、愛の中心存在なので、アルファとオメガがありません。真正な愛は、始めと終わりがあり得ません。

心情の世界で一時間生きるのは、千年の歴史に誇ることができ、一日生きるのは、万年の歴史に誇ることができるように、高貴なことを体験できるようにするのが真の愛です。愛は、細胞が膨張する気運まで感じることができます。そのような世界が、神様の愛がある世界です。その世界は、言葉で表現するのが難しいですが、あたかものどかな春の日に雲に乗って飛んでいくような感じを与える恍惚な世界であり、すべての細胞が踊りを踊るような気分になる世界です。

天地を創造した神様は、どのような方でしょうか。極めて善なる方であり、万物の根本なる方であり、愛の主体です。ですから神様は、天地万物を創造したのち、宇宙の貴いすべてのものを人間に与えたかったのです。神

様は、御自身が本当に信じることができ、愛することができ、任せることができる人がいれば、一番貴いものを、そのまま譲りたいのです。

神様はどのような味を一番好まれますか。神様が臭いをかぐならばどのような臭いを一番好まれますか。聞くならば何を聞くことを好み、感じるならば何を感じることを好まれますか。神様が好まれるものは一つしかありません。それは愛です。神様の五感を集中させることができ、喜びを充満させることのできるものがあるならば、それは愛よりほかにありません。

神様が絶対的な愛のパートナーを求めるとすれば、誰を連れてきて立てるのでしょうか。それは間違いなく人間だという結論を出すことができます。ですから「万物之衆　唯人最貴（万物の中で人が最も貴いの意）」という言葉が出てきたのです。

神様の愛は、父母の愛、夫婦の愛、子女の愛を代表します。もちろんそこには兄弟の愛も入り、これを拡大すれば国家や世界の愛も入ります。神様の愛は父母の愛であり、夫婦の愛であり、子女の愛だというのです。これが最高に素晴らしい言葉です。

神様が必要とする愛は、果たしてどのような愛でしょうか。絶対的愛を願われます。私たちも同じです。神様が絶対の愛、唯一の愛、不変の愛、永遠の愛を必要とされるように、私たち人間も、絶対、唯一、不変、永遠の愛を必要とします。すべて神様に似なければなりません。

神様は愛ゆえに創造されました。愛ゆえに創造したので、男性と女性がお互いに愛し合うのを見るのがもっといいのです。ですから神様は存在世界の前に現れる時、愛の本質として現れます。

子女として造られた人間が兄弟を成し、夫婦となり、そして、父母の位置に進みながら育っていくのを見ながら、神様はそのすべての段階の愛の主人として位置を占めることができるのです。ゆえに、そのように神様を愛の主人にさせた人間こそが、神様より貴い存在であると見ることができます。ちょうど、自分自身より愛する人が何千倍も価値があり、貴く思うのと同じです。

神様は愛の骨です。それを知らなければなりません。愛を中心として、神様の愛は「骨の愛」であり、今日の人間の愛は「肉の愛」です。分かりますか。骨と肉が一つになって形態を備えるのです。そのような理になっています。

愛とは何でしょうか。回ることのできる潤滑作用と軌道作用をしてくれるのです。愛なくしては潤滑作用ができません。自動車も動かすためにはガソリンを入れなければなりません。運動するのに潤滑作用がなければなりません。何でも運動しようとするには潤滑作用をしなければなりません。ですから最高の喜びの潤滑作用は愛しかありません。それは根が永遠の神様なので、なくなりません。作用すれば発展するようになっています。

神様の愛は変わらないところに現れます。神様の愛は不変なので永遠です。神様の愛が

私に現れるならば、変わらない心の土台の上に現れます。ですから一生の間、食べるのもその愛のために食べ、寝るのもその愛のために寝、活動するのもその愛のために活動しなければなりません。愛のために変わらない完全な基準をもっている限り、神様の愛は現れます。そうでなければこの宇宙の公約全部がむなしいものです。

神様は私たちの父です。夜も昼も子供が侵害を受けないかと心配し、子供に何か問題が生じないかと保護してあげ、またある反対の用件が現れないかと防御してくれる父母です。そのような父母の本質を求めていく道が、善の道、愛の道です。人間は息子、娘として神様の完全な愛を受けなければなりません。

神様は今まで、御自身と近い側にいる人たちと、氏族、国家にまで愛を与えました。少ないと言って受け取らないのではないかと、加えに加えて祝福してくださいました。それも不足で、愛する息子の生命までも与えました。神様は一人しかいない息子を殺されてからも、再び愛を加えて与えようとされます。ですからその愛が返ってくる日には、天地が丸ごと理想的な天国に変わることになります。愛を受ければ、もっと多くを返してあげるのが愛の原則です。私たちが神様に百の愛を捧げるならば、神様は千の愛、万の愛で報いてくださるでしょう。

神様の愛さえもてば、神様の胸の中に入っていてもいいし、神様の鼻をつかんでもいいし、世界のどこに行っても境界線がありません。どこでも通じるようになっています。

神様から愛の口づけを受けたならば、内部が爆発するような喜悦を感じるでしょう。神様の願いはここにあるのであって、ダイヤモンドや宝石を所有してうれしいとは言われません。

神様と人間はどこで連結されるのでしょうか。生命が交流するところ、愛が交流するところ、理想が交流するところです。その点とは、どのような点でしょうか。親子関係です。このように見る時、神様は愛の主体であり、生命の主体であり、理想の主体なので、子女に対しては威信と体面を超越します。いくら罪人のできの悪い子供でも、神様をつかめば神様が「やい、こいつ、駄目だ！」と言われるのではなく、神様が抱き締めてほお擦りして愛してくれるのです。このようなことを体験すれば、骨と肉が溶けてしまうでしょう。

神様は千年、万年与えてもまた与えたい、そのような心を絶えずもっておられる方です。そのような方なので私たちが神様を求めるのであって、与えたのちに「おい、これはいくらいくらだ」と言う商売人の神様なら、そのような神様は必要ありません。

神様の愛に接すればどうなるのでしょうか。髪の毛も踊り、細胞も踊るというのです。一〇〇パーセントその愛に酔えば、手を引くのではなく、千年、万年共に住みたくなります。誰かが起こそうとすれば、「起こすな」と言います。このような境地になります。「神仙の遊びに斧の柄の腐るのも気づかない（注：遊びに夢中になって月日のたつのを忘れてしまうの意）」という諺があるように、それほど人間が想像できない高次元の愛に酔うことのできる道があります。

神様がおられるところには愛が充満します。与えれば与えるほどもっと与えたいし、受ければ受けるほどそこに千万倍加えて与えたいのです。ですからそこが、天国ですか、地獄ですか。そこでもっと与え、もっと受けることができるので、爆発的な刺激を感じるようになります。すべての細胞が張り裂けるような刺激を感じるのです。神様の愛はそのようなものです。

愛ならどこでも埋めることができ、愛ならどこでも及ぶことができます。愛する人が抱き締めたらどうですか。手を取って「ああ、愛している」と言いますか。おそらく目の玉が飛び出して鼻水、よだれが出るほど抱き締めてくれることを願うでしょう。そのように抱き締めてじっと立っていないで、ぐるぐる回ります。そのように愛によって一つになってこそ、宇宙が回ります。

神様は人間の父であり、人間は神様の息子、娘です。神様の骨の中の骨、肉の中の肉、骨髄の中の骨髄を丸ごと投入して創造した人間なので、人間が神様を引っ張れば、引いてこられざるを得ず、また神様が人間を引っ張れば、引いていかれざるを得ません。

人間はなぜ神様が好きで、ついていくのでしょうか。神様は千年、万年すべてのものを与え、また与えても恥ずかしがりながら「今はこれしかできないが、もう少し待ちなさい。何百倍、何千倍もっといいものをあげるから」と言いながら、きょう与えることで満足するのではなく、未来にもっと多くのことを与えると約束する心をもっておられる方だからです。

人間はなぜ永生するのでしょうか。なぜ誰でも永生を求めるのかというのです。絶対的主体者であられる神様の前に、愛の対象としての価値をもつことができ、絶対的な愛の神様の前に永遠であらざるを得ないので、私は永遠な愛の相対圏を求めるようになるのです。この場に立つ時には、上も下も同様に神様であり私になります。愛で一体となりさえすれば、神様を私のポケットの中に入れることもできるのです。

私たちがこのような神様の愛の圏に通ずればどのような気分がするでしょうか。春の日に、いい香りのする園で美しい花々を見つめ、香りという香りをすべて嗅いで酔った気分のようなものです。そういう時には、私たちのすべての細胞が踊りを踊ります。

神様の愛が縦的な愛ならば、男女間の愛は横的な愛です。男性と女性が出会うには、横的な愛を縦的な愛に接ぎ木しなければなりません。九〇度の角度に合わせなければなりません。これを合わせない愛、縦的な基準と連結されない愛は、さすらいの愛として破壊されてしまいます。ですから縦横が一致した愛の圏内に入るには、愛を中心として全宇宙を支配することができるのです。全宇宙と関係を結べば、知識も権力もお金も生命も必要ありません。生命も、その中では永生するのです。

神様はアダム・エバの体を好まれるのではなく、二人の間の愛を好まれます。神様が人間に対して願う終着点とは何でしょうか。息子、娘に会って愛する場です。そして人間が願う終着点も神様を父として侍り、息子、娘として愛される場です。

神様においてアダムは自分の中の自分であり、未来の理想的な愛の中の愛です。それでアダムは神様の体です。またエバは神様の夫人であり、体です。アダムは神様の体に相対する霊的相対であり、エバは肉的相対です。ですからアダムとエバが夫婦になって愛するのは、誰と共に愛するのでしょうか。神様と共に愛するのです。それで結婚は極めて神聖なのです。

神様に知識は必要ありません。神様は知識を創造した方です。神様に権力は必要ありません。全知全能だというのです。神様にお金は必要ありません。ダイヤモンドや黄金も思うままに造ることができます。神様に必要なものは、たった一つです。それが何かと言えば、愛です。神様一人で愛を受けることができますか。神様は愛を思うままにできるのではないかと言うかもしれませんが、とんでもありません。神様において一番必要なものとは、真の愛を分かつことのできる対象者だというのです。人々はこれを知りませんでした。

神様は私たちに愛を与える時、限りなく与えようとします。神様はすべて与えても、「お前の中で生きたい」と言われます。そのようになる本質は、愛にあります。神様も愛の中に入れば、僕の暮らしをしてもいいと言うのです。愛は法を超越します。

神様の愛は、どのような味がするのでしょうか。すべてのものを総合した最高の味です。好きでつかめば果てしなくつかむことができ、開けば果てしなく開け得る力をもっています。ですから愛によればいくらでも満たすことができ、どこでも及ぶことができるというのです。

神様は愛の母体です。ここから父母の愛がわき出たし、夫婦の愛がわき出たし、子女の愛がわき出たし、親戚の愛、民族の愛がわき出ました。

愛の中でも見えない愛が、最高の愛です。愛が見えるならばおもしろくないでしょう。愛は見えないので、最高に高くあり得るし、最高に広くあり得るし、深くもあり得ます。それで「愛はロッキー山脈のようだ。愛はナイアガラの滝のようだ」という言葉は合っています。見えない愛がこのように貴いように、見えないところにいらっしゃる神様も貴い方です。その貴い神様を探すためには、無我の境地に、すなわち自分というものがない境地に入らなければならないという言葉が正しいのです。神様は私たちが見ることができるものよりもっと深い、見えない静かな世界にいらっしゃいます。

男女の間で愛し合うようになれば、いろいろなことが起こります。そうでしょう。しかし神様を訪ねていける道を知って神様の愛の味を本当に知れば、神様のその愛はこの世のどのようなものとも比べられないものです。そのような愛の味を知った人がいれば、どのような苦難も彼を占領できないし、どのような悲しみも彼を占領できないでしょう。そのような絶対的な解放圏があるのではありませんか。これを探すことが問題になるのです。

神様は絶対的な方なので、そのような神様に他のところで侍ることはできません。愛する人同士は、共に行きたがるし、共にいたがるし、共に住みたがります。どのように共に住みたいのでしょうか。神様に深く染み込ん

で一つになって、共に住みたがります。それが愛の本質です。

心は狭いですか、広いですか。心の形を皆さん自身はよく知りませんが、心は無限に大きいのです。それでは、その心がどれほどいいでしょうか。世界人類一人一人に数百億円をあげても、またあげたいのが心です。心はこのように素晴らしいものです。ですから人間は無限の愛、無限の希望の花として咲くことができるのです。それは、なぜそうなのでしょうか。無限に神様の性稟に似たからです。

皆さんの心はどれほど大きいでしょうか。これは測定できないほど大きいというのです。また小さいと言えば、とても小さいのです。針の先も入れないほど小さいのが、人の心だというのです。心は大きく広げれば、無限に広げることができるし、狭めれば無限に狭めることができます。そのような本質、本性をもっているのです。なぜ心がそのようになっているのでしょうか。それは、神様が臨在できる神様の家になっているからなのです。

愛は一番近い距離を通ります。簡単な言葉ですが、貴い言葉です。なぜ垂直にならなければならないのでしょうか。これが問題です。なぜ水平になって、平衡にならなければならないでしょうか。愛を中心として垂直になるには、愛は直短距離を通らなければなりません。愛する人を探していく時、隣近所を訪ねるようにのろのろ行きますか。矢のように直行しますか。夜も昼も関係なく、春夏秋冬いくら歴史が長いといっても、愛は一番直短距離を通ろうとします。

愛だけは万有において直短距離を通れるようになっています。ですから上にあるものが下に降りてくる時、直短距離で降りてきますが、その場が垂直です。

二) 愛の目的は、神人愛一体理想

天地の中心と宇宙の根本とは何でしょうか。神秘的な境地に入って神様に祈ってみると、父と息子、娘の関係、すなわち「親子の関係である」と言われました。知らない人たちは、肉親の父、母、息子、娘の関係だと思っていますが、それは神様との根本関係を言うのです。

父と息子が出会うことのできる最高の場所とはどこでしょうか。愛が交差する中心、生命が交差する中心、理想が交差するその中心で出会うのです。そのように見れば愛と生命と理想が一つの場所にあるというのです。その場に行けば神様も愛であり、私も愛であり、神様も生命であり、私も生命であり、神様も理想であり、私も理想になるというのです。それを決定できる最初の因縁と最初の統一の場所が親子関係が成される場でなければ、それはあり得ません。これは間違いない事実です。

本来はアダム・エバが互いに最高の喜びの中で、最高の生命力が発揮され、最高の力が合わさり、全体の理想の力まで合わさった中で、愛の花が咲かなければなりません。そこで花のように咲いて、その香りが全天下を覆っても余りあり、神様がその花を見つめ、花の香りを嗅ぎながら自らそこに酔うことのできる、そのような愛を神様は夢見ていたのです。

神様が創造当時、理想として願った真の愛、偉大な愛を中心として人間との愛の関係を結び、一つになれる神人愛一体の家庭を成したならば、今日私たちは天国だ地獄だと心配することもなく、ただそのまま天国に入るようになるのです。

真の愛を中心として、男性と女性が神様を身代わりした立場に立てば、宇宙のすべてのものに連結されます。そのようになる時、神様のすべてのものが私のものになるのです。真の愛が偉大な理由は、真の愛によって私自身が神様の対象になることができ、神様も私自身になれるからです。聖書に「神様が私の中にいて、イエス様が私の中にいる」という内容があります。父が息子の中に、孫がおじいさんの中に、おじいさんが孫の中にいるという言葉は、ここから生まれた言葉です。おじいさんとおばあさんは、孫を中心として情を結ばなければなりません。このようになってこそ愛の垂直線が始まるのです。また孫は、おじいさん、おばあさんと一つにならなければなりません。おじいさんとおばあさんは神様のような立場にいるので、神様のように侍らなければなりません。そうでなければ愛の軸を見つけることはできません。これを立てたのちに、横的に展開するのです。

人間の完成は、神様と縦的な関係を結ぶところから出発します。

神様が絶対的な方なら、その方がなぜ人間を造ったのでしょうか。お金のために、知識のために、権力のために造ったのでもなく、神様の愛を感じることができるたった一つの道のために人間を造られました。このような観点で神様は父であり、人間は息子、娘だというのが一つの軸を成すのです。もし軸が連結されれば、人間と神様が愛によって一体となった関係を、何が作用しても絶対に切り離すことはできません。神様の本然の愛に綱を結んでその愛を味わった人が、別れるでしょうか。蜂は春に蜜の味を味わいます。蜜を吸っている蜂のお尻を引っ張れば、お尻が離れても蜜から口を離しません。

神様から愛を受けたがる、その最高の場とはどのような場でしょうか。その場はまさしく息子の場であり、娘の場です。神様には天情があり、私たち人間には人情があります。この人情と天情が互いに合わさることのできる帰着点はどのようなところでしょうか。そこは絶対的な神様も願い、人間も願うただ一つの場、すなわち一つの父母を中心とした息子、娘の立場で、互いに愛を授け受けできる場です。

愛の巣の中で抱かれ、愛の巣の中で生まれる息子、娘には、どれほど価値がありますか。神様が毎日のように訪ねてきて、見物したいし、触ってあげたいし、ささやきたい宇宙の主人がいるならば、どれほど価値があり幸福でしょうか。そのような宇宙の主人公として生きられるようにするのが愛です。

アダムと神様が一つになって、互いに愛があふれる時、アダムは神様になることができます。アダムが愛によって神様と完全に一つになる時に、神様はアダムの中におられます。聖書にも、「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知

らないのか」（コリントⅠ三・一六）とあります。私たちが神様の聖殿だというのです。

私たち人間は、神様が造った創造的な傑作品として神様に似ています。神様が永遠であられるので私たちも永遠な性稟をもたなければならないので、私たちの心は年を取らないのです。人は永生しなければならず、永生してこそ傑作品の存在的価値をもつことができるのです。ですから人間は万物の霊長になるのです。神様の愛は神様の愛だけで終わりません。その愛は必ず人間によって横的に広がります。電気のプラスとマイナスがやり取りすれば、反応する極ができます。そのようなものが他のところでまた展開します。このように神様の愛は横的に広がってきます。

人類は世界舞台で一番になることを願う前に、本然のアダムとエバの家庭で一番になることができなければなりません。アダムとエバが神様の前に直系の王子と王女の立場を備えれば、彼らは男性として最高であり、女性として最高になるのです。しかし堕落することによって占めなければならない長子権王子、長子権王女の立場を失ったのです。これが人類歴史に恨として残りました。それで人類は神様の真の愛を再び探そうと、初めの息子と初めの娘の立場を探してくる人生の道を歩んできたのです。

堕落していないアダム・エバの体は、神様が臨在できる家です。アダム・エバが神様を心の中心として真の愛によって永遠に統一された愛の体、生命の体、血統の体になったならば、今日私たちの心と体は闘わなかったことでしょう。堕落とは悪魔の愛を中心として、悪魔の生命体と血筋を引き継いだことです。ですからこの血筋を改造しなければなりません。オリーブの木を真のオリーブの木に改造してこそ、救援摂理の完成が成されます。

二　真の父母の愛

一) 原罪のない真の先祖、人類の救世主

今日まで、歴史は何を求めてきたのでしょうか。時代は何を求めてきたのでしょうか。未来は何を求めていくべきでしょうか。真の父母です。ですから全体がここに帰結されずしては、幸福の基準は歴史過程や宇宙の中では見つけることができません。

真の父母とはどのような存在でしょうか。真の父母は全体の希望の象徴です。堕落した人類の前に、絶対的な希望の象徴なのです。彼は歴史的な結実体であり、時代的な中心であり、人類が生きている今日、この世界に連結され得る未来線上においての出発点です。

人間の願いは真の父母に出会うことです。死の道を行くとしても出会わなければならない人が、真の父母だというのです。歴史をすべて失い、時代をすべて失い、自分の後孫をすべて失うようなことがあったとしても、真の父母に出会うならば歴史を取り戻すのであり、時代を取り戻すのであり、未来を取り戻すのです。そのような方が正に真の父母だということを知らなければなりません。

皆さんは、神様と真の父母のために涙を流さなければなりません。涙を流さずしては誰も復帰の道を行くことはできません。神様は今まで人間を救うために涙の道を歩んでこられました。

メシヤがこの地に来て、代行しなければならない立場とは、真の父母の立場です。それでは真の父母とは何でしょうか。縦的な真の父の代わりに、横的な真の愛を中心とした横的な父母です。キリスト教ではメシヤが神様であり、神様がメシヤだと言いますが、それは違います。神様は縦的な真の父です。これは一つしかありません。他の道に行くことはできません。メシヤは横的な真の父母だというのです。

真の父母がこの地に出現するまでには、その背後に皆さんが想像もできない涙ぐましい事情が多かったということを知らなければなりません。皆さんが知らないところで、どれほど多くの涙を流したか知れません。その内容は神様だけが御存じです。

人類は真の父母が必要です。なぜそうなのでしょうか。愛の軸に連結され得る原則的なことが、歴史始まって以来初めて起こったのです。歴史始まって以来、以前にもなかったし、これからもありません。これをはっきりと知らなければなりません。軸は一つです。二つではありません。その軸とは何かと言えば真の愛です。今皆さんの父母が愛し合うのは真の愛ではありません。

神様の摂理の目的とは何かと言えば、一つの焦点です。神様の理想が実現される場も正にその場です。私たちが失った父母、失った真の父母に出会えるところも正にそこです。それでその期待がすべての中心です。その場、それが「真の父母だ」というのです。歴史上、多くの場がありましたが、この場が最も価値ある場です。それがどれほど重要なのか考えてみてください。すべての聖人たちもこの基台、この問題のために闘ってきました。

人類が願うものは何でしょうか。真の父母に侍ることです。六千年前にアダムとエバが成婚して全人類が神様の後孫になるべきだったにもかかわらず、堕落によって人間たちは、サタンの後孫になってしまいました。ですから私たちは六千年前に失った天の側の真の父母を、再びこの地上に探し立て、真の父母の愛の因縁を通じて重生しなければなりません。そうしてこそ天国の民になれるのです。

神様は、真の父母を絶対的に必要とされます。善なる神様も、真の父母なしには摂理を成し遂げることができないからです。霊界に行っている数億の霊人たちも、真の父母を絶対的に必要としています。真の父母が生まれない以上は、天使長界の霊人たちも、地上でみ旨が成就できるように役事したかいを見いだすことができないからです。神様の前に立つためにも、真の父母が必要なのです。

すべての歴史は、真の父母を迎えるためのものです。宗教も真の父母を求めてきたし、世界も真の父母を求めてきたし、国家も真の父母を求めてきました。真の父母を探す道を模索してきたのです。

人間は歴史時代に真の父母を失って孤児になったので、一つになる道がありません。本然の父母の愛からすべてのものが連結されなければなりませんが、そのようにできませんでした。ですからすべての人が必要とする方が、真の父母です。

今までの歴史的な願いとは何でしょうか。真の父母に侍ることです。神様がイスラエルの国とユダヤ教を立てられたのも、メシヤを迎えるためのものでした。メシヤはどのような方かと言えば、真の父母です。またキリスト教とキリスト教文化世界をつくったのは再臨主を迎えるためでしたが、再臨主は第三アダムとして来られる真の父母です。

すべてのものはどこに帰結するのでしょうか。真の父母に出会うところに帰結します。人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり、国家の願いであり、思想の願いであり、摂理の願いです。それで真の父母が現れる時は歴史上に一度しかない頂点を成す時であり、空前絶後の時なのです。

真の父母とは何ですか。肉親の父母と真の父母と、何が違いますか。真の父母とは何ですか。何をするのが真の父母ですか。愛を中心として言う時、その肉親の父母と真の父母とは何が違いますか。愛に対する概念が違います。愛の概念が違うのです。肉的父母は肉身を中心とした愛を教えてくれるのであり、霊的父母は霊的な世界を中心とした愛を教えてくれるのです。内容が違うのです。

二) 真の愛で人類を生んでくださる

皆さんは真の父母と関係のない場で、天の前から追い出された偽りの父母の血筋を受けて生まれたので、真の父母の血筋に生まれ変わるためには、偽りの血筋を踏みつぶし、完全に抜き取ってしまわなければなりません。そうして血統を根本的に替えずしては天の国に行くことができません。

堕落した人間が要求する救世主とは、どのような救世主でしょうか。堕落した父母の立場からではなく、堕落していないアダムとエバのような立場で神様のみ旨と一致し、神様の愛を受け、神様の祝福を受け得る真の父母の立場で、人類を生んでくれる救世主でなければなりません。そうでなければ、人間が原罪と関係のない立場に上がることができないのです。

血統を転換するのはメシヤがするでしょうが、転換するように行動するのは自分自身でなければならないと言いました。このような基準が成されない限り、私たちは救いの道に至れません。それは決してたやすく成されず、生きるか死ぬかの境地を通過しなければなりません。四十日断食祈祷だとか、血を吐く死の境地に行ってこそ血統転換が可能です。

真の父母が必要なのは、何のためでしょうか。心情圏を中心としてその根を下ろさなければならないからです。今は根が違います。堕落によって幹と枝が全部違います。ここで新しく根が真の父母から始まって、何が出てきたのでしょうか。ここで幹と枝が出てきて接ぎ木するのです。切り取って接ぎ木するのです。接ぎ木してそれが宇宙の大きい主流になるのです。サタン世界のすべてのものを切ってしまわなければなりません。根っこまで切らなければならないというのです。幹と枝が全部違います。

今日、万民が願うものとは何でしょうか。世界国家を迎える前に真の父母を迎えようとするのです。また未来の後孫たちは誰から出発したがるのでしょうか。皆さんの息子、娘は皆さんの血筋を通じて生まれたいのではありません。真の父母の血筋を通じて生まれたいのです。ですから真の父母は、新しい未来の出発点になるのです。

真の父母は何をしなければならないでしょうか。サタン世界の根となる間違った血統を正さなければならず、間違った生命をもとがえさなければならず、間違った愛の道を正しく開かなければなりません。聖書に「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」とありますが、そのような逆説的な論理がなぜ出てこなければならないのでしょうか。サタン世界は死ななければならないからです。

真の父母は世界の人々を呼んで、父母の立場から結婚させてあげます。ここでは人種の違いを越えるだけでなく、善人と悪人も共に結婚させてあげるのです。
真の父母は悪なる愛、悪なる生命、悪なる血統はすべて否定しますが、アベルを殺したカインは取り除いてしまわず、同じ位置で祝福してあげます。
海の潮の干満を見るとき、出ていく水と入ってくる水が合い、水平を成した時のように、救援摂理（蕩減復帰）が終結する善悪の転換期で善人と悪人をすべて共に祝福してあげることによって、サタンを完全に追放するようになるのです。

エデンの園で結婚を誤ったことが堕落なので、今や真の父母が正しく結婚させてあげることをもって、もう一度ひっくり返すのです。偽りの父母が犯してしまったことを真の父母が清算することで、地獄を撤廃し、数百、数千億の霊界の先祖たちまでも祝福結婚させてあげるようなことが起こるのです。
真の愛を中心とした地上の後孫たちの家庭基盤を通して、霊界の先祖と地上の後孫が縦的に一つになるだけでなく、このような家庭基盤を基点として東洋と西洋がお互いに連結されます。

養子はどのようにしなければならないのでしょうか。真の息子に接ぎ木されなければなりません。オリーブの木を切って、真のオリーブの木の芽に接ぎ木しなければなりません。オリーブの木が真のオリーブの木になる運動をしなければなりません。重生するためには真の父母の血統を引き継がなければなりません。それで人類が願うのは真の父母であり、イエス様と聖霊が願うのは小羊の婚宴です。

まず何よりも父母を心から慕わなければなりません。私の生命の動機も父母であり、私の希望の一切も父母であり、私のすべての理想と幸福の根源も父母だという基準を中心として父母に侍らなければ、救いを受けられないのです。皆さんはそのように侍ったことがありますか。皆さんはこれをはっきりと知らなければなりません。ですから「私は真の父母と永遠に一つになれる息子、娘だ」という信念を、自分の存在意識を超越できるくらいに堅くもたなければなりません。そうでなくてはなりません。

肉的な父母さえいればいいのに、霊的な父母がなぜ必要なのでしょうか。堕落したから

です。今まで堕落した父母が何を教えてくれたのでしょうか。大きいものを半分以上みな取ってしまい、自分を中心として降りていくことを教えてくれました。それで、父母の愛を中心としてサタン世界に永遠にいさせるための一つの決定的な線が引かれました。これを切る道がありません。それでは真の父母とは何でしょうか。そのような基盤で、もっと大きいものをだんだん教えてあげるのです。それで天の国、永遠の国に合うように教えるのです。永遠の国に行って拍子が合うように教えるのです。呼吸に支障のないように教えるのです。

三　父母の愛

一) 父母の愛は本質の愛である

子供は父母の愛の実現体であり、投入体です。父母の生命の延長体です。また父母の理想の具現体です。子供を生んで愛したことのある人たちは分かるでしょう。それで愛する息子に対して「これは私の愛の実体であり、生命の延長体であり、理想の具現体だ。第二の私だ」と言うのです。

子供は愛と生命と理想的基盤から生まれるので、父母はその子供を見れば見るほど愛らしく、見れば見るほど生命が躍動し、見れば見るほど理想的な相対として登場するのです。

父母は変わることができますか。父母の愛を革命することは歴史時代になかったことを知らなければなりません。いくら革命が起こるとしても愛を革命することはできないので、愛は永遠に存続しなければならないことになります。そのような父母、そのような愛の主体である父母が、私を絶対に必要とするのです。唯一に必要とし、不変に必要とし、永遠に必要とするのです。

子供はなぜ父母を恋しがるのでしょうか。そこに自分の愛の家があるからです。

父母の愛をなぜ尊重視するのでしょうか。見返りを願わず犠牲になるからです。そこでは、ある結果を願わないのです。それで満足し、それで幸福だというのです。与えることで幸福だというのです。すべてのものが、もらうことによって幸福なのではありません。与える者が、もらう者より福があります。なぜ福があるのでしょうか。神様の側を身代わりできるからです。

父母の子供に対する愛は、ただそのまま生活的な因縁を通じるだけの愛ではなく、骨髄からわき出る愛なのです。忘れようとしても忘れられず、切ろうとしても切ることのできない愛の心を父母はもっているのです。子供と生命の因縁が結ばれているということを感じる時、父母には子供を愛する心が自然にわき出るのです。

真の愛とは何でしょうか。「ため」に生きる愛ですが、与えてはただ忘れるのです。ことさら与えたことを覚えていません。またいくら注いであげても疲れません。七十歳になった息子に対して「おい、車に気をつけなさい」と言ってもぎこちなくはなく、数十年その言葉を何回繰り返しても、嫌になったり疲れるということはありません。堕落したこの世の父母がこうならば、ましてや本質世界で神様の愛を授け受ける時、疲れるはずはありません。

父母は子供を愛するのに自分を主張せず、自分がない立場で子供を愛するのです。父母は権限をもって、いつも堂々とした立場で子供を愛するのではありません。父母は自分を犠牲にしても子供が立派に育つことを願います。父母は変わらない愛の主人です。父母という存在は、子供が千態万態に変わってどのようなことをやっても、子供のためにという心だけは変わりません。ですから変わらない父母の愛は貴いのです。

父母は愛する子供のために骨が溶けるほど苦労しますが、大変だとは思いません。なぜでしょうか。愛しているからです。自分の血と肉を削って与え、その価値がいくらなのか帳簿に付けておきますか。しないでしょう。かえって、全部を与えられなくて、もどかしがるのです。

親子関係はどのようなものでしょうか。愛を中心としてどのような関係でしょうか。親子関係は父母の愛が原因ならばその子供は愛の実であり、結実です。このように見るのです。結実と原因が掛け離れたところから出発するのではなく、一つの場から出発したものです。父母の愛が原因ですが、その愛の中で私が結実として現れたという言葉はどのような意味でしょうか。父母が愛した結果として登場したのが、現在の「私」だというのです。ですから愛と共に一体化した原因と結果の立場を対等にもって生まれたのが、親子の関係において子供だというのです。

親子関係は縦的な側面を代表します。ですから親子関係の愛は、変わることができません。私たち人間の歴史上でもそうでしょう。夫婦の愛は、横的な因縁なので四方性を備えたものです。ですから父母が子供を捨てることはできず、子供が父母を捨てることはできないのです。

子供において父母に対する喜びは、それこそ世界を代表した喜びにならなければならず、父母において子供に対する喜びは、世界を代表した欲望を充足させられる喜びにならなければなりません。親子の関係は、それこそ宇宙の根本でないはずがありません。喜びの根本がそこから芽生えるでしょうし、悲しみが始まるならこれ以上の悲しい場がないと、結論づけることができます。

親子の関係は何について言うものですか。これは血筋が連結されたものです。父という言葉の中には愛が介在しており、血筋が介在しているのです。直系の子女になるためには、愛によって一体とならなければなりません。血筋によって連結されなければなりません。血は生命を構成するものです。父母の伝統を受け継いだ生命をもつのです。何によってですか。愛によってです。

私は、どこから生まれたのでしょうか。私は、父母の愛が最高に花咲くところから生まれたというのです。花咲くには美しく花咲き、美しく咲くだけでなく香りを漂わせ、その香りは父母も好み、神様も好み、万宇宙も好む、理想的な花として咲くことのできる、そのような中から私が生まれたというのです。

宇宙を総合した男性、女性として生まれたその父母が、愛の花を咲かせるその場に、喜びのその場に、一つの種として植えられたのが子女なのです。

私は誰でしょうか。父母の愛の出発の根源に同参した者です。これは原因と結果が一箇所で出発したので、離そうとしても離すことができません。原因的な父母の愛と、結果的な私の生命の愛の根源は一つです。そのような意味から見る時、愛を中心として父子一身という言葉が可能だというのです。

愛を抜けば、一身や一体という言葉はあり得ません。私は腹中から父母の愛を受けます。愛の本質によって腹中に私を懐妊したその時から、父母の愛とすべての関心が集中するようになっています。なぜそうなのでしょうか。愛の結実だからです。それで愛によって生まれ、愛から生命の因縁を受け継ぎ、愛を受けながら大きくなって相対を迎えられる時になれば、相対をめとるのです。

親子の関係は、いかなるものをもってしても壊すことができません。原子爆弾でも壊すことができません。絶対に壊すことができないし、別れることができないし、捨てることができない関係です。

父母と子女の因縁は、切ろうとしても切れません。私の愛と私の生命の主体性をもったものが子女なので、これを切れば私を否定し、私の生命を否定する立場に立つので、愛の結実を否定できないのです。ですから父母は、子女のために生命を捨てられるのです。このような論理を得ることができます。

夫婦同士暮らしながらどんなに楽しく愛すると言っても、子供がいない夫婦が幸福な夫婦ですか、子供がいる夫婦が幸福な夫婦ですか。子供がいないのは未完成品です。未完成夫婦だというのです。そうでしょうか、そうではないでしょうか。

父母が子供を愛するのを誰も打つことができません。打てないというのです。宇宙が保護するようになっています。それを知らなければなりません。愛する父母が愛する子女を抱いて愛するその場は宇宙の法が攻撃できず、保護するようになっているのです。今までこれを知りませんでした。

子供が病気になって体が不自由になっている時は、高く深い父母の心情は、その体の不自由な子供に流れるのが原則です。違いますか。そのような不具者の心情は、谷底にあります。父母の心情は、てっぺんの大きいところにあります。そのような父母の心情が、頂上からその深い谷底に流れていきます。

子供のために生きる父母の胸には、悪いものがありません。服がぼろであればぼろであるほど、悲惨なら悲惨なほど、それが涙の深い谷底を深く掘っていくのです。

皆さん、赤ちゃんがうんこするのを恥ずかしがればどうなりますか。うんこをしておしっこをしても恥ずかしがらずに、母親がうんこを片付けるのを見て、きゃっきゃと笑っているのです。それはどれほど純真でしょうか。それは愛によってのみ可能です。愛には醜いものがないのです。愛によってのみ、すべて克服できるのです。

胸の中で乳を飲ませて育てる母親の切なる心、子供がうんこをし、おしっこをして臭くても、愛によってその環境を忘れられるのが

父母の心です。堕落した父母が子供を思う心もそうだとすれば、ましてや愛の主体であられる神様が、本然の心情を通じてアダム・エバを愛したかったその心がどれほど切なるものだったでしょうか。一度考えてみてください。

父母の心は与えても足らないと感じ、愛しても十分愛し切れないところがあるのではないかと、もっと愛したい心、与えてからもやり切れなく気の毒に思う心、このようなものがあるので、永遠の愛と通じる本質に属することができるのです。これが愛の、出発の伝統的動機です。

父母が離婚するのは、刀で子供を半分に切るのと同じです。それは宇宙の公法が許しません。これに逆らう親は、どこに行っても禍いを受け、不幸がついて回るのであって、幸福になることはできません。

赤ちゃんのおなかがすけば、母親の乳が張ってきます。乳が張って痛くなると、きしまないところがありません。おなかがすいた赤ちゃんを抱いて乳を飲ませる母親の気持ちは、表現し難いものです。張った乳が赤ちゃんに飲まれて小さくなると、母親は心地よく、気分が良くなります。それは母親でなければ分かりません。また赤ちゃんがちゅうちゅう乳を吸いながら乳を触るのを見る時は、愛がどっとわき出るのです。

鮭の一生を見れば、鮭は卵を産んでから死にます。卵をはらんで産むために雄と雌が無条件に一つになって……。それを見ると、死ぬ日が決まった死刑囚の立場で夫婦が愛する、それ以上に愛し合うのではないかというのです。雌が卵を産めば、雄は地を掘って保護してくれます。それこそ理想的なカップルです。そして卵を産めば死ぬのです。死にゆく雄、雌のいろいろな姿を見る時、本当に大きな衝撃を受けます。そうやって、その親の体は赤ちゃんたちの餌になるのです。

創造主がいるならば、なぜそのように造ったのでしょうか。それを見れば赤ちゃんがどれほど重要か、愛がどれほど重要かということが分かります。愛が最高のものであり、赤ちゃんが最高のものだということを見せるための一つの表現として、鮭をつくったのだろうという理論は極めて当然な言葉です。鮭の一生は本当に驚くべき人間の教材です。

二) 分け与え、また分け与えても完全な愛

子女をなぜ愛するのでしょうか。なぜ愛さざるを得ないのでしょうか。それは神様の創造の偉業を、私たちが横的な実体圏から受け継いだのと同じだからです。アダムとエバを造っておいて神様が喜んだ、その喜びを私たちも感じるのです。神様の愛を受け継いで、神様の創造的権限を受け継ぐのです。

子供をたくさん育てた父母は、何かしら愛の心情が広く、大きく、深いことを知ることができます。子供をたくさん育てた人は、悪い怨讐も打つことができないということを自ら感じることができる人です。それほど何かしら広い土台に立っているし、広い法度をもって生きているのです。

赤ちゃんは、生まれると母親の愛の電波に従って、自動的に乳を探していきます。醜女でも美人でも関係なく、母親ならいいのです。これこそ調和した無二の、聖なる姿なのです。

人は愛によって生まれ、愛を受けながら大きくなります。「私」という存在は、父母の愛の実なのです。お母さん、お父さんの愛がどのようなものかを、実際の実で見せてくれたのが「私」です。父母は愛の実である「私」を愛さなければなりません。その実を通じて無限の愛が実を結ぶのです。個人的愛、家庭的愛、氏族的愛、世界的愛、宇宙的愛、そして本質的神様の愛まで連結され得る道がここにあるのです。

私は、父母の前に二つとない愛の同参者、同伴者です。愛をもってお母さん、お父さんと同等になることができ、同等な場に上がっていくことができるのです。それが愛の特権です。真に愛する息子、娘に自分のすべてのものを相続させようとします。宇宙の相続は、愛の伝統上で同等な愛の価値的位置を得る時、すべてのものを心置きなく一〇〇パーセント相続するようになっているのです。それで父母は孝子（親孝行）を願うのです。孝子は、父母の永遠の愛の同伴者として愛の相続を受けるのです。

父母の愛によって生まれた赤ちゃんはどのようなことをしても憎くなく、ただただ好きなのは、その赤ちゃんが自分の血と肉によって、また愛によって造られた分身体だからです。おしっこをして、うんこを垂れ、鼻を垂らしても、ただかわいく、愛らしいのです。その中に愛が染み付いているからです。

父母と子供の間の愛は、父母から来ます。私たちは生まれながらにして父母の愛を受けます。父母の愛を受けて成長し、横的な夫婦の愛を体験するようになり、夫婦の愛が継続するためには、また子女を生んで愛さなければなりません。父母は子供がいてこそ真の愛を感じることができます。兄弟同士の愛だけでは、父母の愛がどのようなものか分かりません。言い換えれば、父母から始まって一回り回って父母に帰ってこそ、その愛を知るようになるのです。

私には父母の愛の綱、理想の綱が連結されていますが、この綱は誰も切ることができません。かえって宇宙のすべての力がこれを擁護しています。ですから私がどこに行っても、父母はついてくるのです。霊界までも父母はいつも共にいようとします。ですから、父母が同行するのを嫌うのは罪です。したがって私たちは、父母を自分の体のように思い、愛し、親孝行するのが、人間にとって最高に価値があることを知らなければなりません。

私たちが生まれたのは、父母の愛からです。父母の愛から接ぎ木して出てきたのです。生命の連結を言う前に、血筋を言う前に、愛によって血筋がつながり、生命がつながったのです。「私」というものがなぜ貴いのでしょうか。生命をもったから貴いのではなく、父母の愛に同参したから貴いのです。愛は父母が成しましたが、愛の実は「私」です。始まりと結実をもって生まれたのが、正に「私」なので貴いのです。

真の父母は、愛の伝統を継承させようと骨を折ります。そこには東洋人も西洋人も関係

がありません。氏族を超越してすべての父母たちが立てようとするものとは、普遍的な愛の伝統です。人は誰でも、自分の家庭を完全にむつまじく結合し、幸福で平和な生を営もうとします。洋の東西を問わず、すべての人は、そのような人生を渇望します。このような場合、その伝統は本質なのです。なぜならば、伝統のみが未来と連結されているからです。

夫婦間の愛と親子間の愛の中で、どちらが大きいでしょうか。西洋の人々は夫婦間の愛が大きいと思っています。しかしそうではありません。夫婦間の愛より、子供のための愛がもっと大きいのです。夫婦同士の愛では、自分を愛してくれなければけんかが起こりますが、親子間では、愛さなければいけないといってけんかが起こります。父母の愛が中心であり縦的なもので、天の法度に近い道に従っていくからです。ですから「ため」に生きる愛がより真の愛に近いということを、私たちは知ることができます。どんなに強い男性も、どんなにきつい女性も、その愛の前には頭を下げるのです。

父母が貴いのは子供のために与えるからです。それがあとで入れ替わるのです。父母は年が多くなれば、また子供になるのです。昔は父母が子供の先生でしたが、年が七十、八十歳になると再び子供になるのです。その時は子供が父母を身代わりするのです。父母が自分を育ててくれた代わりに、子供がその父母を愛さなければなりません。それが天地の道理です。

四　夫婦の愛

一) 夫婦の愛は全宇宙の花

男性は神様の陽性的形状であり、女性は神様の陰性的形状です。夫婦は天下を一つのふろしきに包んだようなものです。それゆえに、夫婦は神様の理想的な愛の心情を感じることができます。

神様は縦的二性性相であり、人間は横的二性性相です。その二者が合わさって完全な丸いりんご模様を成し、四つの性相形態をもった東西南北に愛の理想を引きつけることのできる母体にしよう、というのが夫婦の理想です。

夫婦が神様を愛し、人類を愛する心のパターンの上で爆発するように互いに愛し合うならば、その家庭によって神様が酔い、宇宙が酔うことができるようになるのです。その愛は、神様のための愛であり、人類のための愛でない訳がありません。その愛の根は、どこにあるのでしょうか。自分にあるのではありません。神様が愛の根源であり、人類の愛の根源なのです。

理想的夫婦とは、どのような夫婦でしょうか。最高の芸術を実体に展開できる夫婦、最高の文学を実体に展開できる夫婦なのです。最高の理想、最高の文化世界に接する前に、最高の愛によって夫婦が授け受ける甘味な愛が世界最高の芸術作品にならなければなりません。夫婦生活自体が最高の文学作品であり、それ自体が文学の実体にならなければなりません。

人にはいつも刺激が必要です。幸福は刺激なしには成されません。刺激がなければなりません。いつも食べる御飯も、おなかがすいていてこそ食べるたびに新しいように、夫婦

間の愛も同じように、いつも新しくなければなりません。妻と夫が、互いに見れば見るほどもっと見たいし、一日中共にいたがらなければなりません。そのために自らに対する研究をしなければならないし、神様に対する研究をしなければなりません。

神様の愛が人間の三大愛を中心として、共に花咲くことのできる家庭を成すことが世界の願いであり、人類の願いであり、未来の願いだというのです。これにより、初めて天地の法度の前に歴史の香りを香らせることができるのであり、新しい花として登場できる貴く美しいものが夫婦の愛だということを知らなければなりません。

愛は永遠です。愛は二つではなく一つです。男女の間が愛で結ばれたなら地上で百年偕老（注：共に年を取ること）しなければならず、死んでも永遠に共に生きていくようになっています。体は二つですが、一つになって回ることによって一体となるのです。二つの体が一つになれば神様と回るようになり、愛の四位基台を成すようになるので、これが正に理想世界なのです。そこには偽りの愛が侵犯できず、ただ真の愛のみが臨在するようになるのです。

心情的な愛によって結ばれた夫婦は、あふれ流れるその愛情が、生活圏を通して生涯を乗り越え、神様の目的と完全に一致したという家庭を成さなければなりません。そうしなければ神様のいらっしゃる天国に入ることができません。

男性と女性の愛の完成が宇宙の完成です。この愛が壊れる日には、宇宙の秩序が破壊され縦的な世界がみな断絶してしまいます。切れてしまいます。

夫婦の愛を通じて一つになり、神様のような立場で創造能力を成したのが子女です。

純粋な男性、女性として赤い愛の情熱の心をもって天地を代表することのできる男女、そのように結ばれた夫婦を天は探しています。そのような夫婦の愛をもって、そのような愛で息子、娘を育てなければなりません。

最近、インスタント食品のような愛し方をする人々が至る所にいますが、それが問題です。香水のおふろに入るからといって、愛が深まるのではありません。田舎に住みながら、冷水に体を浸して洗ってから寝床に就く夫婦の愛が、もっと純粋で長く続き、深くなるものだといえます。

新郎新婦はお金や権力、名誉を中心として一つになるのではなく、神様の本然の愛を中心として一体にならなければなりません。妻は夫のために、夫は妻を愛する中で、夫婦が神様を愛する家庭を築いていかなければなりません。

男性は真の父の分身であり、女性は真の母の分身です。ですから夫が妻を無視すれば、真の母を無視することになり、妻が夫を欺けば、真の父を欺くことになります。

男性が女性を主管し、女性が男性を主管できる力は愛です。愛以外にどのような力も男

女間において互いに主管できません。ただ愛のみが主管できるのです。

男性と女性を力で比べれば相手になりませんが、愛が介在すれば、妻と夫が互いに押し合い引き合って一つになるのです。人間が神様の前に愛の対象的存在になったならば、神様は喜ばれるでしょうか。喜ばれるのです。

最高に好きなメロディーとは何かと言えば、男性と女性が互いに好きで喜ぶ夫婦の笑い声なのです。そのような夫婦がこの世を抱くことができ、宇宙全体を受け入れることのできる心で生を営む時、そのほほえみは自然に発生します。そのような夫婦の美しい姿が、神様の前に一束の花でなくて何でしょうか。これは単純な理想や抽象ではありません。本来の世界のことを言っているだけです。

愛する夫婦間の対話を見れば、この世のどのような詩や絵画よりも美しいのです。また「愛する者同士」、「二人っきり」、「私たち二人」という言葉が、どれほど美しく素晴らしい言葉でしょうか。

男性と女性が祝福を受けて完全な愛を交わし、喜びを分かつ時、神様の目には地上に咲いた花のようだというのです。また彼らの愛によって成されるすべての造化万象は、神様には香水のようなものです。このような美しい香りの中に神様は住みたくて訪ねてこられるのです。神様の愛が訪ねてくることのできる土台が正に夫婦の愛の場です。その場は万物と宇宙が和動する場となるのです。

二) 夫婦の愛は分散すれば不完全

人間は本性的に、自分に対する相対の愛が分散することを願いません。夫婦間の横的な愛の関係は、親子間の縦的な愛の関係と違って、分散すれば既にその完全性が破壊されます。それは、夫婦間に絶対的な愛の一体を成すようになっている創造原理のゆえです。人には自分の相対に絶対に尽くし、「ため」に生きなければならない愛の責任性があります。

愛の強力な力によって結ばれた夫婦ならば、相対がどのようなことをしてもうれしく、愛らしく思えなければなりません。夫の体から出る臭いが嫌だと言ったり、妻のしぐさが気に入らないと思ったり感じたりするのは、二人の間に完全な愛が成されていないからです。そのような夫婦は、目的のために利害関係で結ばれているからです。

夫婦が一緒に暮らすのに、一生の間楽に暮らすよりは、愛を中心として曲折を経ながら、台風も来て、暴風雨も降って、雷も落ちる、そのような多様性を感じながら、理想の愛を追求するのがもっと幸福なことでしょう。男女の問題を解決するためにはお金や知識ではなく、愛が必要です。

人の言葉をよく聞いてみると、女性の声のほうが男性の声より高いのです。なぜそのように高く造ったのでしょうか。力においては男性よりも弱いのですが、情においては女性のほうが高いというのです。
それでは男性はどうでしょうか。男性は広い愛をもっています。自分の夫と息子、娘だけを思う愛においては女性が高いですが、親戚や国を愛する心は男性たちがもっと高いのです。それで息子、娘を愛したり、家庭を愛す

るのは母親に習って、世の中を愛するのは父親に習うようになります。
どちらか一方だけでは不安ですが、これらをつなぎ合わせることによって均衡を成すことができます。

最初の三年間は接ぎ木しようとしても合いません。家が違い、風習が違い、礼節が違う男性と女性は、合うはずがありません。一つになるまで、合わせていく努力をしてこそ合うようになります。

愛を通じてのみより大きいものが出てきます。「ため」に生きる愛からのみ数が増えていきます。ですから、夫婦が闘う愛からは亡国の種が生まれます。しかし「ため」に生きる愛からは、天地のすべての精髄を取った、神様のような知恵の王子、王女が生まれます。

夫婦はなぜ争うのでしょうか。互いに愛を受けようとするからです。互いに愛を受けようとする輩は長く立ち行きません。互いに愛を受けようとする家庭は壊れます。しかし互いに愛そうとする家庭は、「壊れよ」と願っても壊れません。互いに「ため」に生きようとする愛は永遠なものです。

愛は愚鈍で間抜けなものです。どのような状況も意に介しません。本当に愛するならば、横で誰が見ていようが関係ありません。誰かが見ることを意識する愛は、限界圏内の愛です。誰が見ても意識しないそのような境地にある愛なので、どれほど愚直で愚鈍でしょうか。

経済問題を中心とした困難が、夫婦の因縁にひびを入らせることはできません。有識と無学が夫婦の愛を薄くすることはできません。純粋な男性、女性として赤い愛と情熱の心をもって天地を代表することのできる男性、女性、そのように結ばれた夫婦を天は探していらっしゃいます。

愛する人たちの間になぜ、離婚問題が生じるのでしょうか。離婚した人や離婚を考えているという人みんなが、初めは生死を共にするほど愛する関係だったことを考えれば、何かが間違っているというのです。離婚するようになった理由はいろいろあるでしょうが、結局何かが変わったということで、二人の間が変わったということを意味します。彼らは愛を守り、培うことができなかったので、そのようになったのです。愛それ自体は変わりませんが、人の心が変わったのです。

この世の夫婦関係においては、夫がお金を稼いでくる時に力が出ます。妻は夫が稼いできたお金を見て力が出、夫も力の出る妻を見て力が出るようになります。それで彼らはお金を稼ぐことができなければ、不安で夫婦関係が壊れたりもします。しかし真の夫婦は、神様を中心として愛の一体を成さなければなりません。

ある男性は、自分の妻がいてもきれいな女性を見ると、「自分の妻だったらいい」と思います。このように二つの心をもった男性を指して、「泥棒根性をもった者」と言います。二つの心から始まったのがサタンなので、二つの心をもった男性を指して、「サタンだ」と言っても間違いではありません。そのような人がいれば、サタンと変わりありません。

夫婦は対だと見ることができます。顔がそれぞれ違うように、人の運も違います。一生の運命が違います。夫の運命が悪くても妻の運命が良ければ、それによって夫の運が良くなることができます。反対に妻の運命が悪くても夫の運が良ければ、それもやはり良くなります。ですから夫婦の運命は、山と谷を崩して平地を造るようなものだと考えることができます。平地を造ってそこに夫婦の理想をもって木を植え、畑を耕し、いろいろな愛の計画を推進することができます。そのような道理を考えてみる時、相対を外面的にだけ見て結び合わせてはいけません。結婚とはそのように恐ろしいものです。

夫に会えばいいかと思っていたら、悪い時もあるというのです。良いものだけを願ってはいけません。二十四時間ずっと日差しだけ照りつけたらどうでしょうか。夜もなければなりません。高ければ、低くなるのが原則ではありませんか。

幸福な家庭は、夫が出て帰ってきたなら、外であったすべてのことを妻と共に相談して、新しく開拓できる要因を発見する家庭です。お互いに力を合わせて研究する家庭が幸福な家庭です。父母がそのようにすれば、子供たちもそこに力を加えて、私たちもこのような家庭を築こうと同調するようになります。

愛する夫婦同士、一方的に相手の顔がどうだと決めつけてはいけません。自分の相対の顔が一つの模様でのみ感じられるならば、それほど嫌なものはありません。相手の顔はうれしい気持ちで見れば、うれしい状態で現れ、愛の心をもって見る時は、美しく見えるのです。水が流れる時、曲がりくねるのと同じように、一つのうねりが回るたびに新しい模様が現れるように、いつも相手の顔を新しく感じなければなりません。

人間の美というものは、顔だけにあるのではありません。四方八方から見て感じることができます。美はボールのように立体的なものです。上から見ても、横から見ても、どのような方向から見ても、自分なりの完成された美をもっています。ですから、自分の妻の顔をむやみに評価してはいけません。美人の中には貧しい人が多いのです。しかし徳や福を備えている女性は違います。顔がきれいな美人も、子供を二、三人産んだだけで顔がおかしくなる場合があります。ですから、子供を産んでも美を維持できる人が美しい女性だと言えます。

夫と妻が互いに愛し合うのにも、神様の代身者として、夫なら夫、妻なら妻を愛さなければなりません。人間的な立場で愛すれば、互いに不足な面が現れ、結局は離婚する事態まで起こります。

愛は互いに慕い合う時、価値があります。口があれば口を開き、目があれば目を開いて愛を下さいと言ってこそ、愛を与える人も気分がいいのであって、ぼうっとしていたら、愛が来ても逃げていくことを知らなければなりません。愛する人が深刻ではなく、消極的に出てくる時、どれほど気分が悪いですか。

夫婦がキスするために歯を磨くとすれば、それは自然な愛ではなく、歯磨き粉の臭いのために、人だけがもつ固有の体臭を味わうこ

とができません。歯を磨いてキスする人を見ていれば、その人が愛の味を見るためなのか、歯磨き粉の臭いを味わうためなのか分からないほどです。最近の世態を見れば、人間の幸福がどのようなものか混同するほどに計算的で、人為的で、虚飾的な愛が蔓延しているのを見ることができます。そのような愛は滅亡の道に導いている主犯だと言えます。

味噌煮込みは、煮込み鍋で炊いてこそ本来の味が出ます。さっぱりして風味が良い味噌汁の味は、一度味が付けばどこに行っても忘れることができないでしょう。同じように、人も風味良くさっぱりした味のような愛に、一度味を付ければ変わらないでしょう。甘いだけのインスタント食品はすぐに嫌になるように、愛もインスタント食品のようにどこででも簡単に手に入るならば、それは「真の愛だ」と言えないでしょう。

エデンの園で裸になって踊るのを誰が見ていたでしょうか。人がいない所ではそんなこともできるのです。部屋で夫婦が裸になって踊るからといって、それが心配なことですか。夫婦同士なら裸になって踊るどころか、どのようなことをしても、誰が何と言うでしょうか。夫婦同士ですのに、何の関係があるでしょうか。

鳩も互いに「くっくっくっ」と声を出しながら愛し合うのに、夫婦同士が出会う時、本当に愛する人同士が出会う時、出会う声があるとすればどのような声でしょうか。雷が鳴る音よりも大きいことはあっても、小さくはないでしょう。

夫婦が床に入ってささやく蜜語は、この世のすべての疲れや憎しみを解かす清涼剤になるのです。夫婦がささやく言葉の中で「あなたは私を愛さなければならない」という言葉はあり得ません。愛が自然なように、愛の蜜語も柔らかく美しいものでなければなりません。

夫婦が愛し合うのに、夫の父が横で寝ていても夫の母が横で寝ていても、クライマックスになる時は率直に声を出してもいいというのです。「あの家はどんなに夫婦の仲がいいのか、夜にこれくらい声が出ると町内のねずみたちがびっくりして、鳴いていた鶏たちもさっと鳴きやむ」と言うほど、町中に愛のうわさを立てなさいというのです。「ねずみたちが驚いて、鶏が鳴きやむほどに声が出る出来事がなぜ起こるのか」と聞けば、「なぜかって、どうして？　天地が振動する愛の喚声がわき出るからそうでしょう」と言ってもいいのです。

夫婦の愛の場は全宇宙の花です。歴史時代、総合実体として現れた新郎新婦が愛によって一つになる新しい部屋には、神様が来られて住み着かれます。ですから愛の中で成される新婚夫婦の新しい部屋が、どれほど厳粛で恐ろしい場でしょうか。神様との道をつないでおいて、完全な愛のマイナス的役割をしていると考える時、ここから天地の愛の太陽が昇り始めるのです。生命の安息の場、理想の安息の場に和して、妻の部屋を訪ねなければなりません。

愛の火がつけば、二つの生命が一つになり、次に血統が合わさって愛で沸き始めれば、その渦巻く中で私の生命が主人として種が植え

られるのです。男性の生命体、女性の生命体が愛によって運動し始めて回れば上がるでしょうか、下がるでしょうか。上がる場で芽生えれば息子になり、下がる場で芽生えれば娘になります。理論的にはそうです。私はそうなのかそうでないのか分かりません。理論的に合っているので、事実がそうなのかそうでないのか研究して一致させれば、博士学位、ノーベル賞受賞ものになるでしょう。

最近は足袋を履きませんが、昔は足袋を履く時は、一カ月でも二カ月でも足の指が出るほど履きました。そうすると悪臭が出て、すっぱくて渋くてありとあらゆる臭いがしますが、愛する妻の鼻は「その臭いがどのような香りよりもっといい」と言うのです。悪臭のする足の指も愛する時は、行ってなめるのです。行ってなめてみると味が辛く、甘く、すっぱく、変だというのです。愛のアンテナを立てて測定すれば、測定値が「嫌だ」という計数よりも、「いい」という計数がさっと上がるというのです。

息子、娘を再創造するのは簡単ですか。ありとあらゆることをやってこそ、新しい息子、娘が生まれるのです。とても大変なことを全部しなければなりません。ですから愛する夫のつばが汚いですか、汚くないですか。仮に夫が自分の手につばを吐いたとして、絹の服を着ていてこするところがなければ、それをなめてしまいたいですか、そうしたくないですか。率直に話してください。「なめてしまいたい」と言ってこそ真の愛です。愛には汚いものがないのです。

愛を中心とした生活で、すべてのものが解決されます。欲張りじいさんの虎のような目も、愛するようになれば絵に描いたお月様のような姿になり、硬くこわばっていた口も、にたりと開きます。凍っていたものが完全に溶かされるのが愛であり、溶けていたのを凍らせることができるのも愛です。極と極を包括しても余りあるのが愛です。「好きだ」という「好」の字をよく見てください。男と女を合わせて「好きだ」という字を書きました。「夫婦げんかは刀で水を切るようなものだ」という言葉がありますが、刀で水を切れば跡が残りますか。残りません。一度けんかをしても、面と向かって笑えば、また平和が訪れます。夫婦が愛するのは、神様まで連結するためです。

女性はなぜ髭がないのでしょうか。神様は、アダムが髭を生やした姿を御覧になって気分が良くなかったので、エバを造られる時、髭なしに造られたのです。したがって、神様の創造物の中で一番の傑作品は誰でしょうか。女性たちです。女性たちが傑作品ですが、誰のための傑作品なのでしょうか。正に男性のための傑作品なのです。そのように考えてみてください。

五　性愛

一) 性は愛の本宮、天の至聖所

神様の至聖所とはどこでしょうか。愛が宿る男女の性です。ここが天の至聖所です。

男性と女性の愛の象徴は何でしょうか。愛の終着地点がどこでしょうか。男女を一体にする性の器官です。

それは愛を中心として、心と体が完全に合わさることのできる通路になるのです。

男性と女性は何が違いますか。性の器官を含むその体がまず違います。それでは男性の生殖器は誰にとって絶対に必要ですか。男性の生殖器は女性のためにあるのです。人間の生殖器が一つは凹で、一つは凸ですが、なぜそのようになっていますか。二つともとがらせるとか、二つとも平べったくすることもできるのに、どうしてそのように異なってできているのでしょうか。すべて相対のためです。男性のものは女性が絶対に願い、女性のものは男性が絶対に願います。絶対に女性のものが男性のもので、男性のものが女性のものだという事実を今まで知りませんでした。それを占領することによって愛を知るのです。

男性と女性の生殖器は王宮の宝庫です。天の国の王宮の宝庫です。神様も自分勝手にできません。その鍵は祭司長だけが開けることができます。女性として生まれ、服を二度脱いではいけません。主人の前で服を脱ぐのは許されますが、ほかは悪魔です。

生殖器とは何かと言えば、愛の王宮であり、永遠の生命が誕生する王宮であり、永遠に変わらない天の伝統を受け継ぐ血族、血統を受け継ぐ王宮だというのです。真の生命の王宮、真の愛の王宮、真の血統の王宮だというのです。最も貴いところです。自分勝手にできません。神様の公認がなければ開けられないのです。神様と宇宙の公認を受けた自分の夫、自分の妻以外には触れることができません。

生殖器は何のために存在するのでしょうか。愛のためです。愛を見つけるために生まれたというのです。

生殖器とは何ですか。それは真の愛を中心とした王宮であり、真の生命を中心とした王宮であり、真の血統を中心とした王宮です。一番貴いものです。これがなければ神様の理想、神様の家庭、神様のみ旨が成就できないのです。これは全体の完成を成すことのできる一つの起源です。

生殖器を絶対的に貴く思う世界になるならば、その世界がいい世界でしょうか、悪い世界でしょうか。栄える世界でしょうか、滅びる世界でしょうか。神様が人間を創造される時、最も重要なものとして精誠を込めて造られた箇所とはどこですか。目ですか、鼻ですか、心臓ですか。そうでなければ頭脳ですか。これらは全部死んでなくなるのです。事実がそうではありませんか。

生殖器は愛の王宮です。今その愛の王宮がどのようになっていますか。愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮であり、そのように貴いものが人間の生殖器です。聖なる箇所です。それがサタンによって汚い箇所になってしまいました。本然の神様の観点から見れば、汚いのではなく、それは聖なるものです。最も貴いものです。生命、愛、血統がここに連結されています。このように聖なるものをサタンが汚しました。

私の生殖器は愛の本宮です。私の生殖器は生命の本宮です。王宮だというのです。私の生殖器は血統の王宮です。このようになって

こそ、神様が臨在できる王宮になることができるのです。神様は、万王の王であられ、本宮に訪ねていって住まれる方であるので、神様に侍るために、愛の本宮にならなければならず、生命の本宮にならなければならず、血統の本宮にならなければならず、良心の本宮にならなければなりません。アーメン、アーメン、アーメン。み言のとおりになるでしょう、アーメン。

愛が中心となって二人が生命の合一体となり、一つとなる場所、男性の血、女性の血が一つのるつぼで一つとなる場所が生殖器です。その場所は息子、娘よりも貴く、夫より、神様よりも貴いということを知らなければなりません。このような話をするので異端者と言われるのでしょうが……。その場所がなんですって？　子供より貴く、夫より貴く、父母より貴い場所です。それがなければ父母も無価値なものであり、夫婦も無価値なものであり、息子、娘も無価値なものとなるのです。

そのように貴いので、宝物の中の宝物として、世の中のどこの誰にも見えないように、一生の間、錠がかけられているのです。そして、そのかぎは男性のものは女性が持ち、女性の物は男性が持っているのですが、各々一つしかありません。一つのキーのみ持たなければなりません。フリーセックスのように、十個、二十個持ちたいですか。門を開けても主人がいない家のように、通り過ぎる人がみな出たり入ったりする廃虚の家のようになりたいですか。

女性、男性の貞操を守り保護するということは、宇宙を保護することと同じです。男性、女性の愛の秩序が宇宙の根本であるためです。

善悪の実とは何でしょうか。愛を間違えば永遠な悪の実を継承するのであり、愛を正しくすれば永遠の善の実を継承するのです。その善の実とは、どのような果物ですか。善悪の実とは男女の生殖器をいうのです。それを間違って使えば天下が滅び、国が滅びるのです。世界を滅ぼし天宙を滅ぼし得る妖邪な武器が一番恐ろしく、一番いい武器です。愛もそこで結ばれるのです。ですからそこは愛の王宮です。真の愛の発源地です。真の愛の王宮がそれであることを今まで知りませんでした。生命がそこで結合するのです。男性の生命と女性の生命がそこで結合するのです。ですからそこは生命の本宮です。血統もそこから始まるでしょう。億千万の歴史に接し導くことのできる、未来にまで接続させることのできる血統が連結されるのです。それでそこは血統の王宮です。このように私は三大王宮をもっているので、驚くべき私自身の価値を褒めたたえます。ですから、それに神様のように侍らなければなりません。神様が怖いでしょう。これを知らなければなりません。三大王宮を蹂躙する者は、統一の世界、生命の世界、愛の世界から追放されるのです。

なぜ男性と女性が地球上に生まれたのでしょうか。互いに愛し合うために生まれました。神様は知恵の大王であられるので、男女の愛の器官を取り替えたのです。男性のものだと言っても、その主人は男性ではありません。女性の場合も同じです。主人を残しておいて自分勝手に行動した人は、愛を違反したことに対する審判を受けなければなりません。法の中で最も恐ろしい法の罰を受けることを知るならば、自分の妻をおいて、あえておかしいことを考えることができますか。反対に婦

人たちは夫をおいて、他のことを考えることができますか。

神様は公平な方です。それで互いに「あなたのもの」、「私のもの」と言ってけんかをするといけないので、男性のものは女性に植え付けて、女性のものは男性に植え付けておいたのです。それで愛は陰険なようで、本当に凄まじいものです。

愛は調和です。それで愛には汚いものがありません。私たちの生殖器を見ても、生殖器は最も貴いものなのに、人体の一番汚い箇所の近くにあります。なぜそうでしょうか。和合するのが天地の調和の道理なので、最も貴いものをそこに配置したのが男女の生殖器です。それで一番良くない、汚い部分に良く装置したのです。

男女の生殖器は、どこにありますか。それは一番安全地域、一番の安全地であると同時に一番汚いところです。それを見れば神様は本当に知恵の王様です。人間の世の中に「愛はそのような汚いものも支配する」ということを教えてくれるのです。肛門の近い箇所にあります。小便が出る道と、また違う道が同じです。

人間にとって愛のアンテナは生殖器です。それで男性は凸で、女性は凹です。この二つが合わされば、丸くなりながらなくなります。それは、陰電気と陽電気が合わさって、雷が落ちればゼロに帰るのと同じです。初めに戻ります。

もし男性が男性の生殖器を自分のものとしてもったならば、絶対にあげようとしないし、女性も女性のものをあげようとしないでしょう。そうすると男性と女性はただそのまま対立して千年も万年も耐えるしかないのですが、愛を中心として互いに交換したのでお互いが必要となり、授け受けて回るようになるのです。授け受ける作用を必ず交換してこそ、価値が現れるようになっているのです。

堕落した世界において愛は最も危険なものになってしまいました。愛をよく管理できなければ天下が崩れ、ひっくり返るのは堕落したからです。人間は愛がなぜ偽りとなり醜くなったのか知りませんでしたが、その愛を守り保護しようとしたのは真の愛が現れてくれることを願う本能のためでした。

愛する時、なぜ男性が上に上がらなければならないのでしょうか。そうしてこそ縦になるからです。種はどこから来るのでしょうか。天から来ます。何を通じて来るのでしょうか。愛を通じて来ます。それ一つが全部を証明します。そして、種というのは父から縦的な愛の凸を通じて来ます。凸が凹と合えば天地が振動します。

愛するようになれば幸福になり、愛に酔って感じる感情はこのようなものだと言って、早く経験してみようとして走れば大変なことになるのです。愛の門は時が来てこそ開くのであり、門が開く時を待って入らなければなりません。自分が愛の主人になったという時、堂々と開かなければなりません。

男性と女性はなぜ愛を好むのでしょうか。人間の体は大体百兆個にもなる細胞で構成されていますが、その細胞全体がいつ作動するのかといえば、愛する時なのです。人体のすべての細胞を動かすことのできる時が、正に男女が愛し合う時なのです。

男女が互いに愛し合う時、「ああ、電気が通じる」と言います。その時、生じる電気は天使長から始まるもので、単細胞的なものです。本然の世界で生じる愛の電気は宇宙的な愛の稲妻で、強度において数千倍を越えるだけでなく、人体の各器官の細胞が動く音も雷の音と同じです。本然の世界において真の愛で愛し合う男女は、愛の稲妻が出会う接触点に向かって総力を結集しなければ神様と出会えない、というのが愛の原理観です。

誰が神様の愛の対象になりますか。男性一人ででしょうか、女性一人だけで対象になるでしょうか。神様はどのような対象を願われるでしょうか。お金の対象ですか。知識の対象ですか。権力の対象ですか。違います。神様は愛の対象を願われるので、男性と女性が性の器官を通じて一つになるその場を中心として顕現され、人間と出会われるのです。

自分の体を全部自分のものだと言いますが、愛だけは自分のものではありません。愛は全部相対のものです。旧約聖書を見れば聖所や至聖所という言葉が出てきます。聖所は人を象徴するものであり、至聖所は愛の家を象徴するものです。人はそれぞれ聖所をもっており、至聖所をもっています。言い換えれば、聖所は神様に侍ることのできる家です。至聖所は神様だけが特権的愛の主管圏をもつことができるので、神様との関係を結ぶことのできるところです。至聖所を守る祭司長は絶対に二人ではありません。一人です。昔エバの前にその至聖所の鍵をもっていたのはアダムで、アダムの至聖所の鍵をもっていたのはエバだったことを知らなければなりません。

男性と女性の口は聖所だということを知らなければなりません。口は蘇生で、女性にとっては胸が長成で、その次に陰部が完成です。それらが私たちの体の聖所という箇所です。その聖所を開くことのできる鍵は誰でももっているのではなく、天道によって相続しなければ、鍵をもつことができないことになっています。

宗教は受難の道を行かなければなりません。体と闘わなければなりません。一番の怨讐とは何かと言えば、悪魔の血が激動する色です。淫乱から解放しなければなりません。その次に愛から解放しなければなりません。サタンの血でつづられた血統から逃れるためには淫乱から解放しなければなりません。そうして、生命に接ぎ木しようとするには神様と関係を結ばなければなりません。そうしてこそ愛が始まります。愛の伝統的中心は神様です。生命の祖先も神様です。

この宇宙で一番恐ろしいものとは男女問題です。

愛するようになれば血が沸くでしょう。ぞくぞく震えるでしょう。それはなぜ震えるか知っていますか。混じりなさいというのです。東西南北が混じり上下が混じって一つになり、愛の火花が散る方向にすべての焦点が行列の

方向性を備え、男性のために完全投入、女性のために完全投入、私の生命、財産をすべて尽くして投入、また投入しようと飛びつくのです。それが永遠に終わらない愛の道なので永遠に好むのです。

神様が人間に贈り物をするのに、悪い贈り物をしたでしょうか。いいものの中でも一番いい贈り物をくれるようになっています。それがどこにあるものでも、深いところにあるもの、自分の奥の奥の深いところから取って、愛する人に与えたいのです。それで愛がいいのです。

真の自由は責任性を前提とします。もし責任性なしに個々人の愛の自由だけを主張して実践するならば、どれほど大きい混乱と破局が来るでしょうか。至高なる愛の理想を成す人間の完成は、愛に対する責任性をもつ時、可能となるのです。

人間は、愛の自由を下さった神様に感謝しながら、自己修養、自己主管によって自由の主体となる責任性をもたなければなりません。人間において愛の責任性は、法や耳目によって守られるものではなく、神様との生命的、縦的関係の中で、自己主管、自己決断によって守られるものです。

生殖器を目の見えない人のように方向を失ったまま使用すれば、地獄に行き、反対にこれを神様の絶対愛に基準を合わせて使えば、天国の高い所に行くのです。これはきれいな結論です。

エデンの園でアダムとエバが、青少年期に木陰で淫乱によって堕落しフリーセックスを植えたので、収穫期である終わりの日には必ず、世界的に青少年たちのフリーセックスの風潮が蔓延する現象が現れるのです。

二) 愛の法は習って知るものではない

皆さんは家庭で愛する法を習いました。どこのお父さんが子供に、お父さんから愛する法を習いなさいと言いますか。またお母さんも子供に、お母さんから愛する法を習いなさいと言いますか。また、父母が子供に対する愛し方を誰かに習いましたか。新郎新婦はこのように愛さなければならないと誰かから習いましたか。習ったことがありませんが、よく知っています。それは本当に神秘的なことです。

父母が子供を愛するのに、誰かに教えてもらって愛しますか。ここにいるおばさんたち、赤ちゃんを生んで愛する時、その愛する方法を習いましたか。どこに愛を教える学校がありますか。そこに何の学士、博士がいますか。何もありませんが、誰でもその基準は満点です。不足だと感じれば感じるほど、さらに完全だというのです。完全なものは手を出す必要もなく、習う必要もありません。加減が必要ないほど完全なものなのです。完全なものは変わらないものであり、変わらないものは永遠に行くというのです。

愛というものは言葉ではよく理解できません。父母の愛をいくら説明しても、父母がいない人には分かりません。夫婦の愛をいくら

説明しても一人で暮らしている人には理解できません。結局、自分が感じることができる主体や対象圏から、行動の一致点を備えることができる所から、彼が好むことができるものを私が好むことができる所から、また彼の一切が私の一切に連結され得るその場から、相対の愛を感じるのです。

赤ちゃんが生まれるとすぐに母親の乳を探し、動物たちが生まれながらにして母親の乳を求めるのは、教育と訓練を受けなくても、自然に行為に移されるのです。これは正に愛の力が作用しているからです。

真実な愛は天理の法度なので、教育される前に、自然に成されるのです。父母の愛が、生まれた子供の顔が醜いかかわいいかによって、大きくなったり小さくなったりして現れないし、父母が立派か立派でないかによって、父母に対する尊敬と愛が変わる子供はいません。顔が醜いので私のお母さんでないと言う子供がいますか。お前は私が生むには生んだが、醜いので私の子ではないと言う父母はいないでしょう。もしそのような父母や子供がいれば、彼らを人間だと言うことはできないでしょう。

真の愛は経験を通じて得られ、体恤を通じて知るようになっています。真の愛は言葉や文字、あるいは一般教育を通じて体得できるものではありません。生活を通じてのみ完全に体得するものです。赤ちゃんとして造られたアダムとエバは成長しながら真の子女の心情、真の兄弟の心情、真の夫婦の心情、真の父母の心情を段階的生活を通じて経験し、体験することによって完成するようになっています。神様の真の愛を全体的に体得する時、初めて創造目的を完成した理想的な人間になるのです。

結婚して、年老いて死ぬまで子供をもつことができなければ、子供に対する愛は千年、万年たっても知ることができません。子女に対する愛を千年、万年勉強しても知ることができませんが、息子、娘が生まれるや否や、瞬時に知るようになります。

六　子女の愛

一) 子女は父母の愛の結集体

愛する父母の前に、子供というものは極めて世界的な代表です。

子供がいなければ、なぜ孤独な人だというのでしょうか。子供は、愛を中心として全宇宙を造られた主体者であられる神様の心情的事情を体恤するためのものです。子供は、私が動機となって生まれたけれども、その子供を生んで愛することによって「ああ、神様が人間をこのように愛したのだなあ」ということが分かるようにするのです。

父母が子供のために犠牲になるのは、父母として子供を通して神様に帰っていきたいという願いがあるがゆえです。子供を愛する中で父母の愛を体恤するようになり、さらには神様の愛を感じて悟るようになるためです。これは本然の発露です。子供をもったことのない人は、父母の愛を感じることができないだけでなく、神様に対する愛までも悟ることができないので、その人がもっている愛はいつも不完全なものなのです。

天国に残ることのできる子供とは、どのような子供でしょうか。父母の愛によってつくった借りを自分自身が返さなければなりません。父母が年を取ってぼけた時には、自分が幼い時に大便をし、小便をしたものを拭いてくれた父母の心で困難を耐えて、父母に仕えてこそ孝子になることができます。

愛をもった父母にむち打たれ、しかられても、その子供はうれしいのです。

父母が、子供のために生命までも与えてくれました。ですから、子供も父母のために生命まで与えなければなりません。生命が愛から生まれたので、本質的な愛の前に生命線を犠牲にしていくのが理論的な結論です。矛盾的な理論ではないというのです。

子供が父母に借りをつくるまいと努力をする時、父母も生きがいを感じます。

愛を中心としてむちを振るったとしても、打ったのちに痛哭する父母に対して子供が反抗したり、悪口を言ったりできますか。真の愛は調和の両面的価値をもっているのです。

立派な母親は子供を懐に抱き、世界を動かすことのできる善なる存在になるために、どのような困難な立場でも耐えることができなければならない、と子供に教えるのです。母親は、善は滅びないという天理に通じているからです。

皆さんが子供を産んでお乳をあげ、かわいいと言いますが、なぜかわいいと言うのでしょうか。それは天と地に代わって、神様の子供を抱いているがゆえにかわいいと言わなければなりません。神様の愛に従った天倫の運勢は世界を越え、天地を抱擁するために動いています。子供を抱いてお乳を与える母親は、天と地に代わって神様の愛する息子、娘を抱いているという徹底した心情で、息子、娘を抱かなければなりません。

子供の愛と幸福の基地は、父母の愛です。子供は真の愛によって和合一体となった父母を通して生命が生まれ、そのような愛の中で養育されることを願います。子供に対する最も貴い責任は、外的な養育だけではなく霊性を完全なものにしてあげる、真の愛の生命的な要素を提供することです。

父親がいくら子供を愛するといっても、母親の愛にはかないません。母親は、精誠を捧げたとすれば誰よりも精誠を捧げたし、苦労をしたとすれば誰よりも苦労したし、愛したとすれば誰よりも愛したと見るしかありません。

そのような意味でも、女性が情緒的な分野において高く貴い位置を所有しているのであって、父親がいくら子供を愛するといっても母親ほどに子供に対する愛は分かりません。ですから天国に行くならば、女性が心情の天国に行くでしょう。そのような観点から見れば、女性として生まれたことは悪くありません。また神様は公平だということも分かります。

二) 真なる子女の道理は「孝」

父母を知ったなら父母の前に何をしなければならないでしょうか。孝行をしなければなりません。孝子にならなければならず、また父母を中心としてその国の忠臣にならなけれ

ばなりません。父母が国を抱え、世界を抱えてきたからです。忠臣になる前に、孝子にならなければならず、孝子になる前に、真なる兄弟を愛せる食口（家族）にならなければなりません。食口とは、兄弟間で褒めたたえ合える圏を立てた者の名前です。そうではありませんか。

孝子が貴いのは、変わりのない愛によって幼い時も、成長する時も、老年時代も父母を敬うからです。そのような人を、孝子と言うのです。

孝子になろうとすれば、どのようにしなければならないでしょうか。常に、父母の心の方向と一致しなければなりません。孝行者の道を行く人は、父母と全く違った行動をする人ではありません。父母が東に行けば東に行かなければならないのであり、父母が西に行けば西に行かなければならないのです。そこに異議があってはなりません。十回行って、十回帰れと言われても、また振り返ってついていかなければならないのです。

家庭で「孝行をしなさい」と言うのですが、これは父母を中心として、父母が行かなければならない愛の道の同参者になりなさいということです。父母の真の愛の道には、天倫がついていきます。父母のみ行くのではなくて、見えない縦的な天倫がここに因縁づけられて、共に行くのです。ですから父母と一つになりなさいというのは、縦的な歴史と横的な歴史の心情圏をつなげていきなさいということです。これが父母の前に孝行だというのです。

家庭を中心として見る時、父母の前に孝行をすることが息子、娘としての責任ですが、なぜ孝行しなければならないのでしょうか。孝行する道は、国に対する忠臣の道と連結されるのです。竹のように連結されるというのです。忠臣、つまり国に忠誠を誓う人はどのようにしなければならないかというと、世界に対して聖人の道を行かなければならないのです。それが一人の子供にならなければなりません。このように見る時に、孝行はできなくても、国の忠臣になるなら、その父母が「ああ、お前は私に孝行をしなかった」と言うことはできないのです。「本当によくやった」と言うのです。父母を捨てて家を出て親不孝をしたとしても、国の忠臣になる時は、母親や父親が死んで霊界に行っても、「やあ、本当にお前はよくやった」と褒めるというのです。

孝子とは何でしょうか。孝子は父母の悲しみに代わって責任をもつために、困難な場を探していって、責任を果たすことによって父母に喜びを捧げる人です。父母が十の仕事をするのに子供は十五ほど努力をしたならば、父母は五に対する喜びを感じるようになります。そのような分野をどのように補充して、父母のために捧げることができるかを考えながら努力する人が孝子なのです。

真の父母とは、どのような父母でしょうか。子供を永遠無窮に愛することに切りのない父母です。

それでは真の子女とは、どのような子女でしょうか。真の子女は、真の父母の愛の前に永遠無窮に父母を愛し、また愛があふれることのできる愛の心をもった子女です。そのような立場が真の孝子の立場です。

神様が子女に願うこととは何でしょうか。お金をたくさんもうけた百万長者になることでしょうか。国の最高権力を手中にする大統領になることでしょうか。神様が息子、娘であるアダム・エバに願われたのは、彼らが育って孝子、忠臣、聖人、聖子になることでした。それでは皆さんは、神様が願われるように家庭では孝子になろうという気持ち、国では忠臣になろうという気持ち、世界では聖人になろうという気持ち、そして天地の前に聖子になろうという気持ちをもったことがありますか。歴史的に見る時、すべての聖人は、孝子となり、忠臣、聖人、聖子になれと教えてきました。

愛の伝統の中で育った子女たちが、もし父母が離婚しようとしているなら無関心でいられるでしょうか。絶対にそうではありません。子供たちはすべて「私はあなたの子女です。私はあなたの結合体です。私のためにはどのような妥協もしなければならず、私の立派な父母とならなければなりません。私は父母が必要です」と主張するでしょう。私たちは若者に「父母とはその子女のゆえに離婚する権利がない者だ」と、父母の責任を悟らせなければなりません。

七　兄弟の愛

一) 兄弟愛は万民同胞愛の模型

兄弟をなぜ与えられるのでしょうか。兄弟がなぜ必要なのかと言うと、男性は妹や姉を見ながら「お母さんはこんなふうに育ったのだなあ！」ということが分かるのです。そこに母親が育っていくのを見るのです。また女性は、兄や弟が育っていくのを見て、父親がそのように育ち生活してきたのだという内容を見るのです。それが兄弟愛だということを知らなければなりません。そのように育って一つになるというのです。ですから兄弟を愛さなければならないでしょうか、愛してはいけないでしょうか。

兄の立場で妹を愛し、妹の立場で兄を愛するのですが、ただ愛するのではないのです。必ず父母を介在させて、幼い時父母の懐で育ったことを重要視しながら愛さなければなりません。そうしてこそ、大きくなりながら共に上がっていくのです。小学校、中学校をずっとそのようにして上がっていくのです。

この世をいくら行ったり来たりしてみても、家庭にある兄弟の愛、血を分けて生まれた兄弟愛のようなものはないのです。社会に出ても自分の兄弟よりも近い人がいるでしょうか。近くなったとしても別れるのです。

なぜ兄弟が必要でしょうか。縦横を中心として連結されるのが兄弟です。アダムとエバを東西とすると、神様とアダム、エバは縦的な関係です。これは平面にしかなりません。ですから横的な基準が必要で、前後が必要です。家庭愛を超越できるのは兄弟しかありません。万民同胞愛という言葉と同じです。それがあって球形が成されるというのです。

同胞愛、兄弟愛をもって世界を抱いてこそすべてが理想的な球形になるのですが、ぶつかっても衝撃がないのです。そうしてこそ初めて、神様が考えたすべての実体がここに来て結実されるのです。神様の子女の理想がここに来て結実されて合わさることによって、子女の愛の結実体になるのです。その次に、

兄弟の愛の結実体、夫婦の愛の結実体、父母の愛の結実体になるのです。無形の神様が創造当時に構想した実体をすべて成したなら、神様と上下・前後・左右が一致できるのです。

兄弟を通して国民が形成され、人類が形成されるのです。兄弟は前後を表示するのですが、それが肉になるのです。平べったいものだったのですが、肉が付いたのです。そこから円形が生まれるのです。ですから円形をつくるのが兄弟であり、国民なのです。兄弟が拡大されて国民になるのです。

兄弟愛というものは世界愛と通じるのです。たくさんの兄弟が育つ家庭は、世界の人類を抱き、理想的な天国、地上天国と天上天国をつくるモデルのようなものです。ですから兄弟は、ここで拡張されるのです。

兄弟が多ければ、御飯を食べるにしても、一つの器で二人で分けて食べなければならないのです。御飯が一つしかないと言ってけんかをするのではないのです。兄弟が多くて生活が大変でも「私がひもじい思いをしても分けてあげなければ。弟にあげなければ……」このような愛の心をもてば最高だというのです。

八　愛国、愛世、人類愛

一) 孝子、忠臣、聖人、聖子の道に

神様と一つになる時は千態万象に回るようになります。そうして兄弟間でも、父母が子供を愛するのを見本として、兄は弟を愛さなければなりません。そのように愛で一元化された家庭には、家庭愛が花咲きます。これがまた社会愛となり、さらには民族愛となります。このように行くと世界愛になります。

人類の共同的な目的のために生きる人がいれば、その人は人類愛を中心として一つになるでしょう。同じように国民が祖国愛をもっているならば、愛国思想を中心として一つになるでしょう。愛国の心が強ければ強いほど、国家を成すために愛国思想を中心として一つになるはずです。愛国運動は一人ではできないという立場を知ったならば、横的な因縁を連結させなければなりません。これが同志糾合というものです。

真の愛が定着できる基地が家庭です。ゆえに、本来の家庭は宇宙愛を掌握し、宇宙の保護様相を体得しながら、宇宙愛圏を拡大させ、家庭を越え、国家を愛する愛国の道を行くべきであり、さらに、民族と国家を越え、世界を愛する道に行かなければなりません。家庭を愛する人を孝子あるいは烈女と言い、国を愛する人を愛国者と言うならば、世界を愛する人を何と言いますか。その人はすなわち、聖人であると言うのです。

愛は、生活と歴史から取り除くことのできない、実在の内容を動かしている実体です。そして、社会制度だとかすべてのものを動かしている内的な力の母体です。ですから教育する時も、国家愛を教えます。兄弟愛、父母愛、夫婦愛、世界的な博愛、全部愛が入っています。これは何を意味するのでしょうか。人類の生活圏だとか歴史過程を経ながら愛をたどらずには、歴史を連結させることはできないということを言っているのです。

皆さんはどうしなければならないのでしょうか。忠臣にならなければなりません。忠臣とは何でしょうか。国の中心者のために精誠を捧げるのが忠臣でしょうか。違います。国民のためにも、国の中心者のためにするのと同じようにできる人が忠臣であることを知らなければなりません。孝子とは何でしょうか。父母だけのために精誠を尽くす人ではありません。父母のためにするように、兄弟のためにも精誠を尽くす人が孝子だということを知らなければなりません。

その次に聖人とは何でしょうか。聖人は世界人類のために今まで犠牲になった人です。聖子とは何でしょうか。神様を中心として世界に行こうとし、神様のためにしたように世界の人々のために尽くすことのできる人だというのです。歴史的な聖人は、今まで世界の人のために死んだ人です。神様の息子である聖子とは何でしょうか。神様にも忠誠を尽くすけれども、神様がそうであるように万民のために生きる人です。

ですから孝子、忠臣、聖人です。では、聖人の次は何でしょうか。聖人であっても、そのまま聖子にはなれないのです。神様の息子になれないというのです。聖子にならなければなりません。いくら国の中心者を愛して国民を愛したとしても、聖子になるためには天国の王宮法を知らなければなりません。王宮法に統治され、そこに拍子を合わせることのできる一つの法を知らなければなりません。

本来、孝子は心が変わらずに父母にまっすぐに行く人であり、忠臣は心が王様にまっすぐに行く人です。同じように、聖人は心が変わらずに神様にまっすぐに行く人です。別の言葉で言えば、死ぬ立場になっても、その心が変わらずまっすぐに行ってこそ孝子であり、忠臣であり、聖人になることができます。

家庭で父母のために暮らし愛する人は孝子であり、国のために暮らし愛する人は愛国者であり、世界のために暮らし愛する人は聖人です。皆さんは世界と宇宙を愛する聖子にならなければなりません。そうするためには、神様のような愛をもたなければなりません。孝子は家が滅びても生きています。そして孝子妃がいて、忠臣の妃がいて、聖人の妃がいるのです。聖子は聖人とは違います。聖子は人間世界の国の法だけでなく、天国の王宮法まで守ることを知っている人です。したがって孝子の道、忠臣の道、聖人の道をすべて直通できるのが、聖子の道です。それは太くて縁が広いけれども、その核の流れは垂直です。

人間はどのように生きるのでしょうか。私たちの人生航路の骨子を選び出すと、孝子が行く道、忠臣が行く道、聖人が行く道、聖子が行く道の根本があるはずです。共にいたくて、共に住みたい心、上下にかかわらず共にいたくて、前後、左右、昼夜を超越して、生涯を越えて共に生きたい心に徹した人生ではないでしょうか。このような結論が出てくるというのです。

人間がどんなに立派だとしても、愛がなければ使いようがありません。また幸福というものも何を中心として連結されるのかというと、それは愛です。兄弟間、友人間、同胞間、人類間、天地間など、このすべてのものの間を

連結させることのできる媒介体が、すなわち愛だというのです。愛は麹のようなものです。

九　自然愛

一) 神様が万物世界を造られた意義

神様は、なぜ万物を造られたのでしょうか。人間に愛する対象を、対象者をもたせるためです。人間に愛する対象圏をつくるためです。人が食べて暮らして、その本然の世界に戻ってきて、永遠なる神様の愛の祖国に入って生きるためです。それを知らなければなりません。

今日、キリスト教の信者たちは、「ああ、神様は全知全能なので、何、言葉一つで、『このような天地になれ』と言ってこのようになった」と考えています。しかし、そのようにはなっていないのです。神様はすべてのものを投入したのです。もっている精力をすべて投入したのです。もっている愛の力をすべて投入して、未来に、御自身の愛する息子、娘、御自身の愛する家庭のための礼物として、贈り物としてつくったのです。すべての物を。ゆえに、そのような観念をもって私たちが万物を眺めなければならないのです。

神様が被造世界を造られるとき、そこには喜びがありました。造っては、それを見て良しとされました。喜びがあったというのです。喜びとは何ですか。ある目的を成し遂げたとき感じるものです。造られた万物に神様の目的意識が内在されていたので、創造された万物を見て、神様は喜びを感じられたのです。それでは、復帰の世界とは、どのような世界なのでしょうか。一言で言えば、森羅万象の個体、個体を見ながらも、神様を褒めたたえることができる心情的な因縁を立体的に備えた人たちが、暮らす世界です。天が御覧になる人格の価値は、そこにあります。それで、昔、聖フランシスのような人が、動物に向かって、あるいは鳥に向かって説教したという話もうそではありません。夢のような話です。けれども夢ではなく事実です。

被造世界のすべてのものは、神様が愛する息子、娘が愛の理想を見つけ出していけるように、教材として造っておかれたものです。それで相対的構造なのです。鉱物も主体と対象の関係として作用し、原子も陽子と電子が主体と対象の関係として作用するのです。作用しなくては存続できないのです。運動しなくては、永続、存続することができません。それゆえ、宇宙は人間を中心として、その中心点に到達できるように創造された世界なのです。

宇宙は神秘的な世界です。いたずらや遊びの材料として造られたのではなく、精誠を込めて、愛する人間のために造られたとすれば、なるほど、この世界はいかに美しいことでしょうか。ですから、私たちがこの宇宙を眺めるとき、天の父が私のために造られたという、この上ない有り難い心をもたなければなりません。そのような心をもって、丘を散策し、草木や花を眺め、鳥を眺め、水が流れるのを見て、風が吹く、このようなすべてのものを見れば、本当に感嘆せざるを得ません。

宇宙の完成は外的な世界も良いのですが、内的な私自身、私も良くなければなりません。良いところにおいては、心もうれしく体もうれしくなければなりません。私の細胞を見れ

ば、細胞の全部がうれしくなければなりません。目の細胞と足の裏にある細胞は違うでしょう。違うのですが、その細胞がすべて喜んで、手の細胞も喜び、すべての細胞が喜び、体と心のどこ一つも残さずに全体が喜ぶことができ、それがただ離れているのではなく一つにつながって、連体的な内容を中心として共鳴的な愛の喜びを感じることができる、そのような世界であってこそ宇宙完成になるのです。

因縁というものは極めて小さい所から結ばれるのです。皆さんの個体も百兆ほどにもなる細胞で因縁が結ばれている生命体です。神様の愛を中心とした創造理念世界、すなわち大宇宙のすべての存在物はどんなもの一つとっても、神様の心情の枠外で生じたものがありません。このようなことを感じる詩人は、偉大な詩人です。一枚の木の葉が揺れるのを見て天宙的な心情を感じ、それを表現できる詩人がいるとすれば、その人は宇宙的な詩人であるはずです。

私たちの周囲で私たちも知らずに繰り広げられている天下万象が、神様の愛と共に存在するものであるという事実を知りませんでした。神霊的な境地に入ってみると、小さな砂一粒にも宇宙の理致が入っているし、一つの原子にも無窮無尽の宇宙の調和が入っているということが分かります。存在するすべてのものをよく知ることはできませんが、ある複合的な力を通して現れた結果であるということは否定できません。分子を越えて原子、原子を越えて素粒子……。これらのものは無意識的に存在するのではなく、ある意識と目的をもって存在するのです。ゆえに、存在するすべてのものは神様の愛の手を通って出てきたものでり、必ず神様と心情的な関係を結んで存在しているという事実を徹頭徹尾知らなければなりません。

道人とはどのような人ですか。草一株をつかんでも「神様！」と言える心情で、自分の価値と同等にその価値を認識できる人が最高の道人であるはずです。そのようにその価値をうたうことができる人が最高の芸術家であるといえるでしょう。色とりどりに存在する万象を見て、神様の色とりどりの愛と心情の妙味を発見し、それらのものと友達となり、共に楽しめる感情をもった人がいるとすれば、そのような感情で細胞の一つ一つが動く人がいるとすれば、その人は万宇宙を代表することができる人であるはずです。そのような人が万物の霊長です。ところで、食べることしか知らない人が万物の霊長になれますか。

小さい子供たちをよく見るとですね……。子供たちはみんな子犬とか、何かの虫とかいった、飛ぶ動物、野生の動物、このような動くものが好きです。それはどうしてそうなのですか。本来、人間はそのようになっているのです。それはどういうことでしょうか。人間は自然世界やこの地球の動きを見て、趣を感じるようになるのです。もちろん相対基準が異なることがあり得ますが、それを鑑賞することにおいては、人間は本当におもしろさを感じ、興味を感じるのです。それゆえ、自分自体の愛の属性をすべて教わるのです。虫たちが生き、昆虫たちが生き、あるいは動物たちが生きるのを見れば、すべて対になっているのが分かります。このように見る時、自然は何かと言えば、人間一つを愛の対象とし

て、相対理想を教育させるために展開させておいた教材、博物館であるというのです。

神様は宇宙を、被造世界のすべてのものを、愛する息子、娘が愛の理想を探し出すことができるような教材として造っておかれました。それですべてが相対構造になっています。鉱物も主体と対象の関係で作用します。物質の構成単位である原子も、陽子と電子が主体と対象の関係で作用します。作用しなければ存続できません。運動をしなくては永続、存続できません。ですから作用をしなくてはなりません。

二) 自然は愛の理想を教えてくれる教材

人間は大きくなっていきながら、自然を見て習得します。「昆虫の世界はこうなっているのか！」と学ぶのです。月が照り星が光る秋の夜、耳を澄ませてみると、虫たちの鳴き声が一つのオーケストラの演奏に聞こえます。何のために虫たちがそのように鳴くのでしょうか。それは相対を探し求め、理想を歌っているのです。愛をささやいているのです。鳥や、他のすべての動物たちも、悲しい声、うれしい声を何で表示するかといえば、愛という共通分母に従って鳴き声を出すのです。軸から遠い距離にありますが、その軸を中心として平衡を取りながら回っています。すべての存在がそのようになっています。

鳥たちの歌には三つの種類があります。まず第一におなかがすくときに合図する歌であり、次は、互いに愛する相対のために歌う歌であり、その次は、危険なときに鳴く歌です。それはすべて異なっているのです。私たちは、なに、普通の人たちには分かりませんが、自分たちの世界ではすべて分かっているです。おなかがすいて鳴けば、すぐに分かるのです。毎日の生活が何を中心として成っているのでしょうか。おなかがすくことなどは、一度食べれば終わるものなのです。そうかといって、毎日のように、何か危険な立場にあるのでもありません。大部分の歌は、何を中心として歌うのかといえば、相対と授け受けする関係で、歌が行ったり来たりするというのです。

人間は主体と対象、すなわち相対的なペアに造られていて、また人間のために存在するすべての万物世界も、愛の原理のもとに調和をなし、また人間の愛により生命と理想を実現するようになっています。万物世界は人間にとって、特に成長するアダムとエバにとっては、愛の教科書であり、愛の真髄が無尽蔵に陳列された博物館なのです。

すべての鳥や動物は対になっています。お互いが愛を中心として和動します。花と蝶は極と極ですが、互いに和合します。これは天地の調和です。宇宙の極と極が、愛を中心として和動を繰り広げます。渡り鳥も同じです。南方にいた鳥が北方に飛んでいき、北方にいた鳥が南方に飛んでいき、地域を行き来しながら愛を成します。愛を中心として永遠に回ります。人間はこのような愛を、神様が造られた博物館の教材を通して学びます。

人間と神様が喜び、愛せば、天下のすべての万物たちはそこに拍子を合わせて和動します。神様が愛し、喜べば、天使世界も喜び、このすべての被造世界が喜び、拍手を送り、称賛を送ります。歌える鳥は歌を歌って褒め

たたえ、美しい花は香りを放って褒めたたえます。最高の愛の主人公たちが楽しむことができる香りの雰囲気を拡張させるためのものが、この被造世界です。見かけがぞっとするようなヒキガエルも愛を交わすときには「うっうっうっ」とします。どんなに素晴らしいことでしょうか。足をたたいて、後ろ足を上げたり下げたりしながら愛し合っているその姿がどんなにすてきですか。それは最高の芸術です。

春になって鳥が歌を歌えば、その鳥の歌を聞くや否や、自分の妻を思い、自分の子供を思い、自分の国を思い、世界を思い、神様まで思わなければなりません。そうすれば、すべて完了です。鳥は鳥同士でのみ考えますが、人間は関係性をもっています。動物世界、植物世界、天上世界の中間媒介体としての関係性をもったのは人間だけの特権です。すべてを連結させることができます。これは人間だけの特権です。

アダムとエバは成熟していくに従って、「ああ、あんなふうに愛するのだなあ！」と知るようになります。神様は万物世界を、人間の愛の理想を成熟させることができる教材として広げておきました。それを学んでいくのです。だんだん大きくなるに従って、「あは、昔は妹のように、お兄さんのように一緒に過ごしていたのに、よくよく見れば……」このように感情が変化します。「あ、こうなんだ！」と学んでいきます。それで「お前と私は死んでも会わなければならない。他の所には行けない」といって、平衡線を直行しながら出くわすようになります。

愛は神経と同じです。私たちが髪の毛を一本引っ張れば、体全体が引き上げられるのと同じように、愛のみ引っ張れば、宇宙が引き上げられ、愛のみ動けば、宇宙がすべて和するようになります。そのため、愛があれば踊りも踊るようになります。踊りはなぜ生まれましたか。愛のために生まれました。また、歌も愛のために生まれ、笑いも愛のために生まれました。愛を取り除いてしまえば、すべてが固まってしまいます。

人は蜂よりは蝶を好みます。蝶は踊りを踊りながら飛ぶからです。すべて飛ぶものは、拍子に、調子に合わせて飛びます。早く飛ぶものも拍子に合わせて飛び、ゆっくり飛ぶものも拍子に合わせて飛びます。飛び方は様々ですが、いずれにしても全部拍子に合わせて飛びます。また、山で鹿が跳び回ったり、うさぎが遊ぶのも音楽的です。何かを食べるのも音楽的です。人も何かを食べる時、とても音楽的です。それはすべて音楽の象徴です。このように考えるとき、そのようなこの宇宙を永遠に私のために造り、私のために取り付けたとすれば、その方に対して私たちは有り難く思わなければなりません。見物人のように、隣村のことのように考えてはいけません。

山にも高い山があれば低い山もあります。それでは、私たちは山が高くもあり低くもあるのが好きですか、のっぺりしていて平坦なのが好きですか。高くもあり低くもあるのが好きです。それはなぜでしょうか。その形が踊りを踊ろうとするある型を具備しているからです。あらゆる形の曲線を描きながら、上がっていったり、下がっていったりしながら、様々な形態を表現しながら形づくられている

からこそ良いのです。そうなれば、それが正に踊りです。自然の中には素晴らしい踊りがあり、素晴らしい音楽があります。素晴らしい芸術があります。それらのものが自然の中には実にたくさんあります。

一番最初に神様の子女として生まれたアダムとエバも、神様の保護圏内で幼かったところから成長していくに従って、だんだん大きくなっていくのです。そうして、知能も発達していくので、神様がなぜ被造世界を造られたのかを知るようになり、その被造世界を通して教育を受けてくるのです。被造世界で動くすべてのことは、私たちの人間始祖、本来の先祖になるべきアダムとエバが生活できるように、すべてのことを教えてくれる教材でした。完成されたアダムエバではないので、理想生活をしていく際の標本であり、一つの博物館であったという事実を知らなければなりません。

朝、目を覚まして自然を眺めれば、その自然がおぼろげに私の本性と因縁を結び、新たな理想の感情を芽生えさせます。しかし、人間社会は眺めれば眺めるほど、絶望と悲しみの感情を高めてくれるという事実をよく知っているでしょう。本来、堕落しない本然の人間たちが住む世の中といえば、人間の価値は、そのように眺める者をして、悲しみを感じさせる程度のものではないのです。草一株や、花一輪、一本の木と同じ程度の価値で造られた人間ではないのです。被造物のその何ものを与えても替えられない高貴な人間であり、その何ものにも比べられない価値の姿で、天上に代わって現れるべき人間でした。

神様の愛が宿っている自然を眺めて、「世の中の王様、あるいは有名な人がもっている見事だという品物に比べられるだろうか。骨董品と比べられるだろうか。ある有名な婦人が着ている豪華な服と比べられるだろうか」という心をもたなければなりません。そのようにできなければ、私たちは、自然世界の前に、自分でも知らずに罪を犯しているのです。一つの生命体を見るとき、「人間が造ったある物に比べられるだろうか。どんなに素晴らしい人であっても神様より素晴らしいだろうか」といって、神様が心情を傾けて造られた万物をつかんで、何よりも貴く感じる者がいるとすれば、この人は間違いなく天の息子、娘であるはずです。このような人は祈祷が必要ありません。神様と共に暮らす人です。天は人間をそのような位置まで駆り立てるのです。

自然はどんなにつまらないものでも、そのどんなものとも比べられません。道端に価値なく立っている一本の木も、有名な画家が描いたどんな絵画とも比較ができません。どんなに名のある画家が最高の傑作品として花を描いたとしても、描かれたその絵画からはいくら凝視しても花は咲きません。香りもしません。また、種も結べません。しかし、価値なく道端に立っている木からは花が咲き、実を結び、種を残します。そして、その種を植えれば、その木よりももっと良い木がいくらでも出てくるのです。ゆえに、その有名な画家が描いた絵画とも比較できません。

人間は自分が愛する人のものは何でも好み、慈しみます。そうするくせに、一番愛さなければならない神様が造られた万物を慈しむことを知りません。このような人たちが神様の

息子、娘になれますか。嘆息している万物の恨を解怨してあげるべき責任を負った皆さんは、一本の木、一株の草にも六千年前、それらを造られた時の神様の心情と、創造に差し伸べられた手を体恤しなければなりません。そのような心をもたなければなりません。そのため、道を歩いていて、一株の草を見ても涙を流すことができなければなりません。一本の木をつかんでも、泣くことができなければなりません。「主人を失ってしまってどんなに寂しかったことか」と言いながら。ここで話をしている文鮮明先生はたくさん泣いたのです。岩をつかんでも泣き、風が吹くのを見て泣いたのです。なぜ、そうでなければならないのか、今、み言を聞いたから理解できるはずです。

神様が造られた価値のある万物が、神様と共に永遠なる因縁を結んだ貴い万物が、今日、ある王宮で、なに、国宝だとか宝物だとか言って、貴く思われている品物ほどの取り扱いも受けられないやるせなさを私は分かってあげなければなりません。「私だけは分かってあげなければならない」と言いながら生きてきました。「この地上に生きている世界人類がみな分かってくれなくても、私は分かってあげなければならない」という心を皆さん方がもつならば、この民族が将来、世界人類を支配できる新しい民族になるはずです。これは観念でなく事実です。どこの誰が万物をおいて、代々受け継がれてきた自分の家門の宝物より、世の中で一番貴い宝石だというダイヤモンドより、貴く思って手放さないようにしますか。そのような人がどこにいますか。神様は御自身が造られたものを心情的に理解してあげ、それをつかんで涙を流す人を見て「良し」と言われるのです。

自然とは何でしょうか。神様が私のために、慈しむ愛をもった息子、娘が生まれるとき、慈しむことができる万物として、贈り物として下さった展示品です。鳥の鳴き声一つが、成長していく草一株が、愛する息子、娘たちの生活の美化のために造られた装飾品なのです。路傍にころがっている岩も、息子、娘が国を治める主人になることを知っていて、その国の装飾品として造ったのです。流れる水も同じです。無味乾燥で単調であってはいけないので、造化無双な和合の園として、愛のためのそのような世界を見て、その相続を受けることができる夢の王子、希望の王子を造るために創造されたのです。そのため、万物を通して学ぶのです。雄と雌が「ちゅんちゅん」するとき、これをその主人になるおばさんも学べというのです。互いに慈しむ世界に向かって、自分の一生を命を懸けて生きている本然の被造世界のその美しさを、褒めたたえることができなければなりません。そのようになれば、その家の垣根に鳥も飛んできて暮らそうともするのです。雛を産もうとするのです。何の話か分かりますか。

博物館にある、何かの作品がどんなに貴重だと言っても、生きている作品にかないますか。神様の作品であるこの地球星の万物博物館を、誰が神様以上に愛したのかというのです。自分の国の博物館以上に愛したのかというのです。道端で踏まれるたんぽぽ一株が博物館にある新羅時代の金環と比べられますか。神様が直接造られたものであるのに。そのような神様の心情をもって「お前を、本然の神

様が慈しむことができる王の位置で、愛を受けたその位置で、愛することができない私自身が申し訳ない。恥ずかしい」と言うことができる心をもって慈しむ、そのような王がいるとする場合、その草もその王に従っていき、永遠不変、共にいたがるというのです。そのように生きなければならない人間なのです。

自然を愛し、人を愛するすべを知らなければなりません。人を愛することができず、自然を愛することができない人は、神様を愛することができないということを知らなければなりません。万物は神様の象徴的な存在であり、人間は実体的存在であるために、万物と人間を愛するすべを知っている人は、神様を愛するようになるのです。

いつも自然を愛さなければなりません。自然を愛さなければならないのです。また、人間を愛さなければなりません。人間の中でも、五色人種をすべて愛さなければなりません。「ああ、私は白人たちだけが好きだ」と、神様がそのように言いますか。そうであれば全部白い服のみ着なければなりません。白人たちはみな白い服のみ着なければなりません。色の付いた服はすべて捨てなければならないのです。黒い服をどうして着ますか。色の付いた服をどうして着ますか。矛盾しているのです。

神様が造られたすべての存在を愛の対象として感じなければなりません。すべて、虫けらまで愛し、人は言うまでもなく、すべての天にあるものまで、無形のもの、有形のものを愛することができ、愛を受けることができる皆さんにならなければなりません。朝、鳥がちゅんちゅんちゅんと鳴くときは、「やい、このすずめ、私が朝寝しようとするのに何でちゅんちゅん鳴くのか」と言わないで、「ああ、お前、有り難い、ああ、私を起こしに来たのだろ、大切なお客様が私に会いに来るのをお前が教えてくれるのか」と、このように考えなければなりません。思想が違うのです。これが偉大なのです。

第三章　愛と結婚

一　真の結婚は宇宙的合一の愛を成すこと

結婚はなぜするのでしょうか。神様の姿に似るためです。神様は二性性相としていらっしゃる方であり、各一性が合体化した一体的な存在であられ、神様の分性的な人格が男女なのでこれらが合成一体化して種のようになって、神様の本性の立場に戻らなければなりません。

結婚の最高の神性を私たちは謳わなければなりません。男女が愛することのできる道は結婚生活です。そのように一つになることによって誰に似るのでしょうか。神様に似るというのです。男女が一つになってこそ、人を御自分の形状どおりに造られたと言われる神様に似るのです。そうしてこそ神様が臨在されるのです。

男性は天を象徴し、女性は地を象徴します。二人が合わさって調和し、平行線を成さなければなりません。

男女が合わさることは、天地が合わさることです。

男性と女性が互いに好み合い抱擁するそれ自体が、宇宙が一体を成した立場です。神様の理想の中で成される創造本然の姿は、そのようなものです。

結婚は、なぜするのでしょうか。世界を愛する訓練を受けるためです。また万民を愛することのできる資格をもつためです。

結婚の目的は、男性と女性の心の世界を一致させようとすることであり、男性と女性の愛の完成のためのものです。それで結婚したということは、そのような証拠を見せて宣布をすることです。結婚生活を通して愛の完成と心の完成を成したなら、家庭の理想を実現したと言うことができます。それで死ぬ時これを成したなら、間違いなく天国に行くというのです。

結婚とは何でしょうか。なぜ結婚が重要なのでしょうか。結婚は愛を探していく道だからです。愛する道、生命を創造する道です。男性と女性の生命が一体になる道です。男性と女性の血統が混合されるところです。結婚を通して歴史が生まれ、ここから国が生まれ、理想世界が始まるのです。

結婚は誰のためにするのかといえば、人類のためにするのであり、人類の共同利益のためにするのです。ですから結婚は世界を代表したものです。その男性は世界を代表した男性であり、女性もまた世界を代表した女性です。では、どこから出発しなければならないのかというと、世界を代表した立場から出発しなければならないのです。結婚する意味は、人類が公的に願っているみ旨のためのものなのです。

妹のように育て、妻のように愛し、母のように仕えてあげるという心をもつことが必要です。愛は妹から、すなわち妹として愛することを始めとし、妻として愛さなければならないし、妹、姉、新婦、母のように愛さなければなりません。そうしてこそ人間が堕落したことによって失い、神様が愛することのできなかったものをすべて復帰することができます。

国を愛するためには何を愛さなければならないでしょうか。まず男性は一人の女性を、この国の代表的な女性だと思って愛せる者にならなければなりません。また女性は男性に対してただ一人の男性としてではなく、全世界の男性の中で代表的に選び出した人だと思うのです。このように代表者の立場に立った男性と女性が合わさって家庭を成すようになると、この家庭は天の国の家庭になるのです。

女性にとって本当の幸福は、愛の主体者に出会うことです。愛は一人では感じることができません。幸福も同じです。相手と同じ相対的関係を結びながら互いに感じ、愛することのできる真の幸福を感じるのです。

結婚する時はその男性がハンサムだといって喜んでいたのに、その男性が一週間後に事故に遭って体が不自由になった時、離婚しようとするのは真の愛ではありません。それは偽りの愛です。真の愛は絶対的であり、不変であり、永遠なのです。

結婚は私のためにではなくて、相手のためにするという信条をもたなければなりません。結婚を、立派な人、きれいな人としたいというのは間違った考えです。人間は他のために生きなければならないという原則を知ったなら、結婚も相手のためにするという考えをもたなければなりません。いくらみすぼらしい人でも、美人よりももっと愛そうという信念をもつのが原則的な結婚観です。人間として生まれて相手を神様のように愛し、人類のように愛し、この世界の誰よりももっと愛することができるという考えに立たなければ、天の国に復帰することはできません。一人の男性として一人の女性を愛することを知らなければ、神様と人類を愛することはできません。

結婚とは、幸福の宮殿のドアを開けて入っていく儀式だと言うことができます。したがって、結婚は人倫の大事なのです。愛は時空を超越し、人間史において最も偉大なものであり、結婚はそのような愛を表し、確認する儀式なのです。

結婚する時は、美人の夫になろうと思わないでください。醜女の夫になり、誰よりも立派に生きる夫になると言わなければなりません。そしてこの世のどのような美人も敬うことのできる、そのような夫にならなければなりません。そのようにすることのできる観をもって、女性に対さなければなりません。

どのような妻、どのような夫に会って結婚するのでしょうか。最もみすぼらしい人に会って、烈女になって愛そうとする原則を立てて結婚し、暮らさなければならないということを知らなければなりません。愛の度数が高いほど、無限の宇宙の舞台で活動することができます。

人間において、愛は永遠なものであり、二つでなく一つです。男性と女性が愛によって結ばれると地上で百年偕老（注：共に年を取ること）しなければならず、死んでも永遠に共に生きなければなりません。体は二つだけれども、一つになって回ることによって一体になるのです。二つの体が一つになれば、神様と共に回るようになり、愛の四位基台を成すようになり、それがすなわち愛の理想世界なのです。そこには偽りの愛が侵入することができず、ただ真の愛のみが存在できるのです。

個体完成、相対完成を成したのちに神様を中心とした愛によって公認されてこそ、本当の理想が成されます。

新郎新婦はお金や権力、名誉を中心として一つになるのではなく、神様の本然の愛を中心として一体にならなければなりません。

神様の最高の傑作品として造られた美しい男性と女性が、神様を中心として愛することができるなら、それは最高の愛であり、超越的な愛であり、この世的な愛ではありません。その愛は最高に美しい愛であり、愛の中の代表的な愛であり、永遠に輝くことのできる愛です。

真の愛の味を感じるためには理想圏をもたなければなりませんが、男性には女性が必要であり、女性には男性が絶対的に必要です。真の愛のための絶対的な男性と女性は、一心に努力することによって結ばれます。一つに

結ばれた時は、神様が二人の中に臨在されるようになることを知らなければなりません。

全世界の人種が一つになるための最も早い近道は、国際結婚しかありません。二つの全く違う文化圏と環境から選択された男女が、神様の愛によって一つにならなければなりません。これが完全な調和と統一です。このような偉大なことを成就するために私たちは、巨大な愛の力を見つけなければなりません。最高の愛のみが国境を越え、人種の境界を越え、文化の境界を越え、知識の境界を越えるのです。

神様の愛と人間の愛は、本質的に同じです。愛は一つになろうとするものです。男女が互いに慕い合う理由は、男性は女性、女性は男性を通してのみ神様を所有できるからです。愛は、互いを好むことです。

結婚しない人は、天国に絶対に行けません。結婚しない人には、天国は絶望の美しい山河です。寂寞とした山河は希望がありますが、絶望の山河は希望もない状態ではありませんか。

男性は女性のために生まれ、女性は男性のために生まれました。自分という存在を主張するところには、神様が共にいらっしゃるはずがなく、他人を尊重する時に、神様が共にいらっしゃいます。原則的で原理的な思考によって、私たちは二本の足で歩いているのです。

女性は男性に会うために生まれ、男性は女性に会うために生まれたのです。それが最高の真理です。それで、このような原則に従って祝福圏を探していかなければなりません。最高の真理圏を離脱するのは、最高の悪です。

韓国の伝統婚礼を見ると、互いに向かい合って大きなお辞儀をします。どうして大きなお辞儀をするのか知っていますか。互いに「ため」に生きようと大きなお辞儀をするのです。互いに「ため」に生きなければ愛は逃げていってしまいます。

韓国の民法では同姓同系の結婚を禁じ、異族結婚を奨励していますが、これは統一を思慕する民族だからそうなのです。

二　男女の愛、互いが必要とする愛

成長の中で最も花のような時、最も美しい時が青春時代です。その青春時代の姿が最高のつぼみのような時期です。それをしっかりと愛することのできる人がいるなら、その人は神様の家の奥座敷にでも招待される人です。そのような愛を授受することのできる男性と女性は神様の福を受けることができ、神様の奥座敷にまでも招待されるはずです。

人間の幸福とはどのようなものでしょうか。お金が有り余ってダイヤモンドを体に着けると幸福だと言えるのでしょうか。本当の幸福とは相対者と共に愛によって笑い、歌ってささやくところから見つけることができます。そうできる人は幸福な人です。愛する恋人からささやく言葉を聞くことのできる人は、幸福な人だと言うことができます。ほおをつけて愛をささやくことは、ちょうど夢を見るような幸福感を感じることができるからです。

幸福な時は年齢的に見る時、若さが最も華麗に咲く時だといえます。愛によって力いっぱい膨らんで一つになることのできる時が、青春時代です。

自分の一生一代に男女間で愛する愛よりも、世界を愛し神様を愛し人類を愛したあとで自分を愛することのできる、そのような愛をもった相対を迎えようとする人が、理想的な人です。

女性にとって本当の幸福は、愛の主体者に出会うことです。

男性が一人でいくら愛を探しても、その人は狂った人としか思われません。

男性と女性がいくら素晴らしいといっても、愛がない時は意味がありません。

男性と女性は、生理的にみな反対です。女性は一方的なのに比べて、男性は三方、四方的です。また女性は家にばかりいますが、男性はあちこち世の中を歩き回ります。このように性格がみんな反対です。このような主体的な男性と相対的な女性が、何を中心として一つになるのでしょうか。愛を中心として一つになるのです。人間と神様を一つにするのも愛です。

神様は愛の理想完成のために人間を創造しました。そして人間と神様の関係は、最高の愛を中心とした主体と対象の関係です。では人間はいつ完成されるのでしょうか。男性も女性も愛の因縁を結んで愛の価値を知った立場に立った時、初めて完成されます。

ある男性がハンサムで健康な人だとしても、女性がいなければ意味がないのです。自分の容姿や健康に酔って生きる男性は、どうしようもない存在であるだけです。そのように自我に陶酔して回っていくこの世を改善して、変化させていくのが神様の摂理だったということを知らなければなりません。

この世で最も良いものとは何でしょうか。男性には女性、女性には男性ではないかというのです。男性が好きな愛は男性のものではなく、女性が好きな愛も女性のものではありません。そうでしょう。一人でいる時、愛したい気持ちになりますか。

男性は神様の愛を中心として女性を愛するにおいて、「完全に愛した。最初から最後まで永遠に変わらずに愛した」と言える立場に立たなければなりません。また女性はそのような立場に立つために自分の体をしっかりと封じておかなければなりません。蓮の花が多くの花びらで何重にも包んであるように、しっかりと埋めておかなければなりません。そうして春という季節に、天地の調和に合わせ、そこに和合して新しい人生を出発しなければなりません。これを、しっかりとしなければなりません。

皆さんは花の中で、美しい花は何だと思いますか。皆さんはどのような花が好きか分かりませんが、先生はラッパのような形をした花が好きです。なぜかと言うと、ラッパのような形をした花は香りを遠くまで漂わせます。ラッパのような形をした花は深い愛を意味します。ラッパのような形をしていてこそ、香りが遠くまで広がります。ですからラッパの

ような形であるほど香りが多く出ます。ですから女性が花であれば、深い愛の心情をもっていなければなりません。美しい香りをもった花は万民が喜びます。そしてゆりは単調ですが優雅な味があります。清く優雅なゆりの花は、葉なのか茎なのか分からないように同じ色で咲いているのを見ると、感傷的で情緒的な花だというのです。そのように結婚前の女性は、水仙、またはゆりのようにならなければなりません。優雅で清い花にならなければなりません。

いくら美しい娘にも、思春期はたった一時しかないのです。その時は花の中の花であり、一生で最も貴い時なのです。それにもかかわらず「私一人で生きるわ」と思っている女性がいるでしょうか。その人は女性ではありません。また男性の中でも見てくれの悪いところのない、これ以上良い時はないという青春の時に、自分一人で生きると言う者がいるでしょうか。そのような時には、必ず相対を探すようになるのです。誰に似てそうなのでしょうか。神様に似てそうなのです。人生の最も貴い時である思春期の時に、相対を探そうとするのは男性も女性も同じです。

男性はなぜ生まれたのでしょうか。男性は多くが自分一人で生きることができるので、そういうことに関心がないとも言いますが、男性は女性のために生まれたというのです。女性がいなければ男性は必要ありません。自分のために生まれたものは一つもないというのです。

私たちの五感を見てください。私の目は私の目を見るために生まれたのでしょうか。鼻や耳、口、手もすべて相手のために生まれました。五感を総動員して集中できるその力が何かというと、真の愛です。目、鼻、耳、口そして手は、真の愛のために生まれた真の愛の道具です。

女性にとって最も貴いものとは何でしょうか。男性です。どのような男性が必要でしょうか。立派か立派でないか、体が自由か不自由かが問題でなくて、その男性から価値のある愛を見つけ出すことができるかどうかが問題なのです。

男性の心の中には神様が愛される女性がいて、女性の心の中には神様が愛される男性がいて、共にたたえるようになる時には神様もそれを見て喜ばれるので、万物も互いに喜ぶようになります。彼らが抱擁する喜びの内容が、天と地と共に喜ぶ価値になります。男性と女性が互いに好んで抱擁するそれ自体が、宇宙が一体を成す立場になります。神様の理想の中で成される創造本然の姿が、そうです。

本来、男性が生まれた本当のみ意はどこにあるのでしょうか。女性のために生まれたということを否定することができません。反対に、女性は女性のために生まれたのではありません。男性のために生まれたという事実を本人が確信できない立場で、問題が起きるのだということを、私たちは知らなければなりません。これを天地創造の大主宰であられる神様が創造の原則とされたので、その原則に従わずには善であり、真であり、幸福であり、平和な世界、または愛と理想の世界に入ることができないのです。

この世に多くの男性がいるとしても横目で見てはいけません。貞操は生命より、もっと尊いものです。夫が愛することができ、息子、娘が愛することができ、国が愛することができ、世界が愛することのできる歴史の道が、女性によって開かれるというのです。このような女性の美しさと高貴さと情緒的な伝統が輝くことのできる基準をつくっていく厳粛な課題の前に、皆さんは真実と真の姿でいる誠心を尽くさなければならないのです。

最も花のような時期、花がさっと咲いた青春時代がいつかというと、思春期の時です。その時期がすなわち十八歳から二十四歳までの七年間です。この七年間は人生に二度とない花のような、愛の花が咲く時期です。一度しかない花のような時代が、どんなに貴いでしょうか。

蓮の花を知っているでしょう。つぼみは何十もの花びらでしっかりと包まれていて、それを簡単につぶすことができないようになっています。このように、男性も女性も同じです。皆さんの赤い愛、黄色い花のようなその愛のつぼみを、いつぱっと咲かせるのでしょうか。天地の調和の中の美が最もよく現れる時が、青春の時期です。人間として見る時も最高に咲く時です。神様の傑作品となり、最も中心の絶頂として光る期間が青春の時期ですが、その時に神様の祝福の中でぱっと咲かなければならないでしょう。

青春時代に純潔を失ったアダムとエバの恨みを踏んで蕩減することのできる貴い時である思春期に、純潔を汚してはいけません。その純潔を清く大切に保存して、「千代、万代一人で行っても愛が蹂躙されることは絶対にあり得ない」という操と決意をもたなければなりません。

青少年として堕落して汚れず、染まらずに、聖なる純潔を大切に保管して、これをどこにもっていくのでしょうか。天が最も喜ぶことのできる祭壇に掲げて神様が喜ぶ、そのような純潔をもった男性と女性が出会って一つに結ばれる貴い基台が、新郎新婦の出会う場にならなければなりません。

三　祝福結婚式は神様の愛の伝授式

統一教会では、結婚することを「祝福」と表現します。

祝福は真の父母と真の子女が出会い、創造目的を成就することを意味します。

祝福とは何かというと、神様と共に一つになることです。神様と一つになると、全体をもつことができます。神様のすべてのもの、主体がもっている全体をもらうことになるのです。

皆さんは今まで、真の父母と完全な因縁を結ぶことができませんでした。ですからその因縁を結ぶために、してあげるのが祝福です。

祝福は天国の門を開くことであり、子女と共に入るのです。

この世には大勢の人がいますが、大きく二つに分けてみると、男性と女性に区分されま

す。この人たちが一つになることのできる秘法を模索するのが、私たちの根本目的であるのです。今までそのような一つの結実的な家庭の起源が出てこなかったので、私たちはそれを模索していくのです。そのような起源が現れて種を蒔くと、新しい木になるのです。これが祝福結婚式です。

祝福結婚式は、単純に男女が出会って一つの家庭を成す婚礼式ではありません。今までの結婚式は自分を中心としたものでしたが、私たちの結婚式は、神様に喜びを帰すほどの内容をもって歴史を蕩減する貴い条件として、聖なる雰囲気をもって盛大に挙行されなければなりません。私たちの結婚式とは、アダム・エバの堕落に始まった神様の恨みを解怨してさしあげ、イエス様が成すことのできなかった新郎新婦の基準に通ずることであることを、原理ははっきりと説明しています。

神様の摂理で信仰を立てたとしても、神様の子供として復帰させるためには接ぎ木しなければなりません。

もう一度生まれなければならないということは、堕落したアダム・エバの後孫である父母の血肉を通してもう一度生まれなければならないというのではなくて、堕落と関係のない父母の血肉を通してもう一度生まれなければならないということです。そうせずには神様の元に帰ることができません。罪の根本の根はアダム・エバから始まったのでこれを踏み越えて、すなわち原罪と因縁のない立場で生まれたという資格をもたずには、神様のそばに帰ることができないのです。

重生する（生まれ変わる）には、アダム・エバよりできが悪くてはできないし、また根本の復帰もできません。重生するにも個人が重生しなければならないし、家庭、民族、国家、世界が重生しなければなりません。この事実を、今日のクリスチャンたちは知らずにいます。

八十歳を越えたおばあさんたちも、祝福を受けずに死んだなら天国に行けないという事実を知っているので、死にゆく最後の瞬間にでも何千里離れた所に男性がいたり、何千里後ろに男性がいたとしても、二人を糸で結んで祝福を条件としてだけでも受けたいというのです。祝福はこのようになっています。先生は、このことをやり遂げなければならないので、運の悪い人です。

真の父母というのは、完全な男性と完全な女性ということです。縦的、横的九〇度になった男性と女性ということです。それで先生が、これを接ぎ木するために青年男女を集めて頭を切り捨ててしまって、母親の芽と父親の芽をもって植えるのが祝福です。

祝福式は正に愛の伝授式です。神様の愛をもって父母が生きるように、皆さんも父母の愛を神様の愛の代わりに受けて、「このように生きよう！」という人の伝授式が祝福式だというのです。神様の愛を父母から受けるのです。ある名の知れた人から受けるのではありません。それは天使長がしてくれる結婚式です。名の知れた人が一人で前に立ってしてくれる結婚式は、みな天使長から受ける結婚式です。

血統が違うということは、父親が違うということです。ですから父親の違う血統をもって生まれた人間は、本来堕落しなかった本然の父母によってではない罪を、蕩減することができません。ですから今日まで、歴史は堕落しない始祖になり得る権利をもったその一人の方が来る時まで、宗教の理念を中心として連結させてきました。

祝福を受けたということは、メシヤが二千年間の苦労によって地上に基盤をつくり、選ばれた民族と教団と自分の氏族を中心として、新郎新婦の名前によって出発できる時が来たということです。皆さんは氏族的なメシヤになることができるでしょうか。先生と父子の因縁を結んだので、サタンもどうすることもできません。このように祝福は、本当にすごいことです。

天宙主義とは、どのような主義でしょうか。真の父母主義です。結局この二つの主義は父母の主義です。これは私たちの家の主義であり、私たちの国の主義であり、皆さん個人の主義です。人間が堕落しなかったなら、世界は誰の主義になるでしょうか。アダムの主義になるはずです。そのアダム主義がすなわち、真の父母主義です。父親母親主義なのです。ほかにこれ以上の思想はあり得ません。ですから統一教会は心情的な問題を、本然の理想的な家庭の枠の中で、真の父母という理念を中心として天宙主義とつながるようにしなければなりません。このような理念で制度化された家庭の因縁が残っている限り、滅びることはありません。滅びてはいけないというのです。

天宙主義とは何でしょうか。家庭において言えば、自分が暮らしている家庭が金銀財宝でぎっしりと詰まり、それでも余りがあるとしても、それによって生きるのではなくて、それを忘れて、いつでも神様の愛によって暮らすことができるそのような家庭です。息子のものは父母のものであり、父母のものは神様のものとして、そっくりそのまま連結できなければなりません。

真の家庭主義とはどのような主義でしょうか。真の家庭主義は神様の愛主義です。愛がなければいくら世界一だといって胸を張って歩き回っても、その人は不幸な人です。真の家庭主義は、父母が行けば息子、娘は父母のあとに永遠についていく主義、また兄が行けば弟が永遠についていく主義、弟が行けば兄が永遠についていく主義です。ですから弟の国があれば、兄の国がついていき、兄の国があれば、弟の国もついていくと言わなければなりません。

第四章　愛と家庭

一　愛の理想実現は家庭から

家庭は、万古普遍の起源であり礎です。これは父も変えることができないし、兄弟も変えることができないし、どの国も、どのような制度でも変えることができません。また世界的にも変えることができないし、天地も、神様も変えることができません。ですから、家庭というものには永遠に革命という名詞が必要ないのです。家庭は愛の場なので、革命が必要ないというのです。

なぜ父母が良いものになるのでしょうか。そして夫と妻、子女がなぜ良いものになるのでしょうか。愛があるからです。父母の愛、これは子供に絶対に必要です。夫婦の愛、これは夫と妻に絶対に必要なものになります。そして兄弟間の友愛、子女が父母に対してもつ親孝行の心も、一つの家庭に絶対に必要なものです。

家庭がなぜ良いのでしょうか。家庭は互いが自由に授受できる基盤になっており、栄えることができるので、人は故郷を懐かしがり、父母と兄弟がいる家庭を懐かしがるのです。

真の家庭は、自分の母のように妻を愛し慈しみ、自分の父のように夫を慈しんで愛し、弟や兄のようにお互いを愛する所です。その次には、神様のように自分の夫を愛し尊敬する世界が、理想家庭が住む天国です。このような伝統が、この地球上に立たなければなりません。

神様を中心とした永遠の父母の愛、永遠の夫婦の愛、永遠の子女の愛、この三つの愛があるところが理想家庭です。

父母と子女、夫婦、そして兄弟姉妹たちがすべて、真の愛を中心として一つとなることを願うところが、私たちの理想家庭です。ここから永遠なる世界的平準化が始まり、地上天国が出発するのであり、さらにまた、天上天国も自動的に成し遂げられるのです。

幸福はどこから来るのでしょう。鼻歌を歌い合える、そんな環境はどこから来るのでしょうか。家庭から来るのです。家庭の幸福は、情緒的に問題があれば成せないのです。また、心情、愛がなくても成せないのです。

不幸は、どこから出発するのでしょうか。愛の安息地がなくなる時から始まるのです。幸福な家庭は、その家の垣根である父母に仕えて生活する家庭です。その家庭は上では天を代表した父母に仕え、横では夫婦が結ばれ、この夫婦が天倫の法度を貴び、その代を継ぎながら住む家庭です。

皆さんは、どのような愛を探し求めましたか。神様の愛を探し求めたならば皆さんの心と体が完全に一つになり、神様の愛が臨在することができるのです。それで夫婦の天国となり、家庭天国を成すようになるのです。お母さん、お父さんが完全に一つとなって愛し合うようになり、息子、娘もお母さん、お父さんのような相対をもらうことができれば、家庭天国が実現されるのです。父母がプラスになり、息子、娘がマイナスになれば、家庭天国が実現されるのです。

父母、夫婦、子女で形成された家庭は、世界の縮小体です。家庭の愛を拡大して、すべての人を愛することが、人類を生かす道だということを知らなければなりません。年を取った人はおばあさん、おじいさんのように、中年はお父さん、お母さんのように、自分より少し年上のように見える人はお兄さん、お姉さんのように、年下のように見える人は弟、妹のように考え、愛さなければなりません。

天国はどこででき上がるのでしょうか。私たちの家庭からでき上がるのです。それならば私たちは何主義なのでしょうか。家庭主義

です。私たちが標榜する天宙主義は、空である「天」の文字に家である「宙」の文字、すなわち空の家主義というのです。このようになれば、天宙という意味が明確になるのです。

家庭は小さな社会に立脚した小さな国家です。小さな国家であり、小さな世界であり、小さな天宙なのです。それで、家庭を離れては何もできないのです。

一家庭は、社会の倫理的基盤であり、人間世界では手本になり、根本的で一次的な組織です。このような家庭で、愛が最善の価値基準になるのです。

人の一生涯で一番重要な時はいつかと言えば、生まれる時、結婚する時、死ぬ時です。それでは生まれる時は、どのように生まれなければならないのでしょうか。よく生まれなければなりません。次には結婚する時です。結婚とは生きるためにするのです。すなわち、四位基台を成すためにするのです。このように宇宙の公法を地球上に立てておけば神様のみ旨を成すことができ、人間のみ旨を成すことができるのです。このような宇宙の法度が指向する内容をもち、その形態をもつためのものが家庭です。

家庭は、天国完成の基本単位です。天国は、一度行けば戻りたくなく、十回、百回会ってもまた会いたい方がいるところです。万民が共通にそこに行きたがり、その方に会いたく、その方と共に住みたがれば世界は統一されるのです。そこに向かっていくのが目標です。しかし、そこは一度に成されるのではありません。まず個人の基台が立ち、次に家庭の基台が立ち、その次に民族、国家、世界に広がっていくのです。

天国はどこにあるのでしょうか。空中から降ってくるのではなく、お父さんとお母さん、そして子供の間に授受できる生活舞台を育て、またすべての被造物を私たちの生活に利用し、私たちの理想の条件を利用するおもしろさ、そのおもしろさを一〇〇パーセント享受できるところが天国です。

天国へは一人では行くことができません。祝福は天国の門をさらりと越えていくのです。天国は、家庭に帰っていくところです。三代の因縁をもって入っていくところです。

宗教は、最も偉大な教えです。神様の最も偉大な教えとは、人類を教え、人類を愛してみようということです。そのほかにはありません。それで真の父母は、子供に対して世界を好きになり、神様を好きになることを教えてくれるのです。

天国は誰かが教えてくれて行くようになっていません。良心的に生きる人は自動的に行くようになっているところが天国です。太陽が昇れば、すべての木の芽は太陽に向かいます。草までも自ら方向性をもって帰っていくのに、まして万物の霊長である人間が自分の行く道を知らないわけがないのです。このような現象が起こってくるのです。

天国は愛の世界です。中心者である神様のためにある世界、神様のために生きる世界です。

天国へは愛の軌道に乗って行くのです。このように話せば実感するでしょう。その愛のひもは、引っ張れば引っ張るほどゴムのように細くなるのではありません。ゴムは引っ張れば引っ張るほど細くなりますが、愛のひもは引っ張れば引っ張るほど反対に太くなるのです

人間には、親子の関係がなければならず、夫婦関係、兄弟関係がなければなりません。すなわち、この三つの関係が一点になければなりません。その中心点は一つです。上下、左右、前後の中心が違ってはならないのです。この中心点が違えば上下、左右、前後関係の均衡がすべて崩れるのです。それで結局、上、下、左、右、前、後、そして一つの中心点まで、すべて七数を成すようになるのです。このように七数を成すのは神様を中心として完全な真の愛で一つになり、このすべてが完全に球形を成し、調和と統一を成す家庭になるのです。

世界にはおじいさん、おばあさんのような人たちが住んでいて、お母さん、お父さんのような人たちが住んでいて、夫婦のような人たちが住んでいて、息子、娘のような人たちが住んでいます。何種類かと言えば、このような四種類の人たちが全世界に住んでいます。それゆえ、世界の数多い人たちに、天国人になれる教育の教材、経典としてみなされるのが、私たちの家庭だという観念をもたなければなりません。

家庭というものは、天国と因縁を結ぶための教材です。教育の教科書なのです。それは、軸を中心として、国に適用すれば愛国者になります。世界に適用すれば聖人になります。天地を中心とするようになれば神様の息子、娘、聖者になるのです。

家庭は、死ぬ時に天の国、平和の王宮に入籍できる手続き券を得られる、愛の教科書です。愛の修練所です。これを拡大したのが世界です。おじいさんのような世界があり、おばあさんのような世界があり、お父さんのような世界があり、お母さんのような世界があり、夫のような世界があり、妻のような世界があり、息子、娘のような世界があるのです。このように拡大すれば、すなわち世界になるのです。

愛の王国を成したいのが神様のみ旨です。愛の理想世界を発展させ、世界化させようとするのが神様のみ旨だとする時、小学校から大学の卒業、博士号の取得までパスできる実験場がどこかと言えば家庭です。家庭を拡大すれば世界です。世界を細かく見れば、おじいさん、おばあさんが住む世界、その次におじさん、おばさんたちが住む世界、お兄さんお姉さんのような人たちが住む世界、その次に青少年たちが住む世界、子供たちが住む世界だと言えるでしょう。それで老年から壮年、中年、青年、青少年たちが住むここは模様が大きく、数が多いだけで、家庭を拡大したものです。

家庭の中心は父母ですが、なぜ父母になるのでしょうか。父母はすべて家庭全体のためにあるからです。

人には家庭が必要で、国が必要で、世界が必要で、本然の世界、宇宙が必要です。

愛を中心とした家庭で、父母は国の代表者です。神様の代表者だと見るのです。それを訓練するための第一段階の訓練舞台が家庭です。地上で天国を成せる第一教化場が家庭で、そして国家が第二教化場です。ここに愛国者が必要なのです。その次に第三教化場が世界です。ここに聖人が必要です。霊界は第四教化場です。その次には神様の息子、娘になるのです。聖人といっても、神様の息子、娘ではありません。それで、すべてが神様の息子、娘にならなければならないのです。聖者の位置に入り、神様の愛と一つになって、永遠に神様を所有できる位置に入るようになります。

二　家庭は天国生活のための愛の訓練場

天国は愛の世界です。神様のためにある世界、神様のために生きる世界です。

天国とは何でしょうか。自分の家庭のように世界の人たちを愛することができるところが天国です。そのような人が、天国の民です。おじいさん、おばあさん、お母さん、お父さん、自分の妻や夫、兄弟、子女の四代とは何でしょうか。天国の民として愛を、宇宙の真の愛を体験するための教材としてあるのが家庭です。教材として私に教えてくれる基盤が家庭だということを知らなければなりません。

神様の愛は被造万物に現れます。父母の愛はどこに現れるのでしょうか。子供に現れます。また夫がいるところに妻の愛が現れます。子供を見て父母の愛を知ることができ、夫の服の端を見て妻の愛を知ることができるように、この世界に現れた事実を見て神様の愛を知ることができます。神様の愛は順序によって人に現れます。まず父母の愛、次に夫婦の愛、子女の愛、兄弟の愛です。愛だけをもてば神様と友達のように付き合うこともでき、お父さんのように付き合うこともできます。

人生の航路は旅人の道ですが、私たちは縦横の愛を体恤していかなければなりません。真の父母の愛、真の夫婦の愛、真の兄弟の愛、真の息子、娘の愛を中心とした家庭を成したのち、これを横的に拡大し、東西南北に多くの家庭を置かなければなりません。それで彼らが縦横に連結させることができる真の家庭の形態を成して氏族圏、国家圏、世界圏、神様に連結される時、真の愛で連結されたその世界を天国だと言うのです。

救いの門を開くのは神様の愛です。私たちは神様の真の愛と、真の生命と、真の血統を受け継がなければなりません。そうしなければ、救うことができないという事実を知らなければなりません。

踏みにじったり壊してしまうのは罪の中の罪です。怨讐の中でも一番ひどく憎い怨讐は、愛を破綻させる怨讐です。一家庭を中心として子供が父母を愛することができなくしてしまい、夫婦同士愛せなくし、壊してしまう悪魔以上の悪魔はいません。人類の始祖が堕落することにより一番目は兄弟の愛を、二番目は夫婦の愛を、三番目は子女の愛を失ってしまいました。私たちはこれを再現させて愛さなければ、天国に入っていけません。

神様の真の愛と一つになって生活して入っていくところ、神様の真の愛の血族を準備して共に入っていくところが天国です。この真

の愛を占領できなければ、永遠に天国に入ることができません。その日のために、数千万年を待って準備しなければならないことを知るべきです。

神様は真の愛の本体としておられ、真の愛と連結されれば、すべてが同じ体になります。父母は神様の代わりとしての生きた神様で、夫と妻は互いに片側の神様で、息子、娘はまた一つの小さな神様です。このように三代が真の愛を中心として成す家庭組織が、天国の基盤です。このような基盤をつくらなければ天国は成されません。家庭とは、宇宙の中心です。家庭完成は宇宙完成の基礎になるために、家庭で愛するように宇宙を愛すれば、どこでも無事に通過です。このような場合、神様は全体宇宙の父母として、愛の複合的な中心位置にいらっしゃいます。

神様を中心とした創造本然の家庭的基台には、男性の愛、女性の愛、息子の愛、娘の愛、父母の愛、神様の愛がすべて入っています。このような消化された位置から父母を愛し、夫を愛し、息子、娘を愛せば、誰でも天国生活をするのです。

天国生活はどこから始まるのでしょうか。家庭です。違うところから起こるのではありません。天国は家庭を立体的に拡大させただけで、家庭圏を離れたものではありません。そのために自分の妻や夫を懐に抱く時、これは世界の男性と女性が一つになるのだと考えなければなりません。このように世界人類を愛したという条件を立てることができる位置が、すなわち家庭です。

皆さんの血族を大切にしなければなりません。お父さん、お母さんを大切にしなければならなりません。おじいさん、おばあさんは天国の王権を代表した、うちの主人です。しかし今は、年を取ったと疎まれる者になったでしょう。そのようにしておいて、何が世代の差ですか。これは誰がつくりましたか。サタンがつくっておいたのです。世代差がどこにありますか。愛に世代差がありますか。千年前の愛する方法と、千年後の愛する方法と違いますか。方法も同じで、そのようにするのも同じです。内容が違ったのです。堕落しなければ、愛の内容は公式になるので、億万年が過ぎても変わらないのです。

千万回の天地開闢があったとしても、おじいさん、おばあさん、お母さん、お父さん、息子、娘の三代が一つになり、鉄城（注：堅固に取り囲んだもののたとえ）のようにくるくる巻き固め、そこに神様を核として迎えれば、どこでも天国を実現できる一つの種になるのです。これは神様の愛の種です。生命の種として血統の根本だと言えるのです。これを探し出さなければなりません。そうしなければ地上天国、平和の天国、幸福と自由の世界という、すべての願いは成り立ちません。

天国とは何でしょうか。極楽あるいは天国に行くと言っても、自分一人で行くところではありません。自分の父母と兄弟すべてが、共に行かなければならないところが天国です。

第五章　愛と霊界

一　霊界の空気は愛、愛が生命要素である

私たちは神様の愛によって生まれ、愛によって生きて、息子、娘を生んで、愛の目的地に到達し、永遠に神様と共に生きるために神様の元に帰っていくのです。すなわち私たちの一生は愛によって始まり、愛によって成熟し、愛の実として収穫されるのです。人が死ぬということは、愛の実を刈り入れることです。

死とは、人間が肉身生活を終えたのちに第二の出生をすることです。第二の出生をするところ、死んでから行く世界がすなわち霊界です。その霊界に入って、第三の父母である神様から宇宙全体を代表する真の愛を供給してもらうのです。霊界は愛を呼吸して愛を中心として生きる世界です。それで完全な真の愛の人格を成すことができなければ、行ったり来たりする道が制限され、四方に通じることができません。ドアを通っても、一つのドアしか通れないのと同じです。春夏秋冬いつでもどこでも、合わせて生きることのできる資格をもつためには、地上生活において完全な愛の人格を具備しなければなりません。

神様の愛の中に生まれることは死ぬことですが、人間世界では「ああ、死んでしまう」と大騒ぎになります。そうすると神様はそれを見て大笑いされるでしょうか。人間の世界で泣きわめく姿を見て神様は悲しまれるでしょうか、喜ばれるでしょうか。制限された愛の圏から無制限の愛の圏内に突入できる喜びを迎えることのできる瞬間が、第二の出生である死の道を通る、その瞬間ではないでしょうか。それでその道は、昇華の道です。

死を屈服しなければなりません。第二の生を促進させる変化の過程が死です。それゆえに、死は悲しいものではありません。新しい世界に飛躍するものであり、昇華なのです。

この世では死が生命の終わりを意味しますが、死は他の世界に新しく生まれることを意味します。それで死のゆえに憂欝になったり、悲しんだり挫折してはいけません。代わりに与えられた使命のために一生を生きて、霊的な勝利の中でもう一度生まれることを喜ばなければなりません。私たちが地上であまりにも悲しみに沈んだり悲痛に思うと、天上に上った人を地の下に引っ張るようになるのです。赤ん坊が第一の母の胎内から生まれ出たように、第二の宇宙的な母の胎内からまた別の世界に誕生する昇華式は、実際に男女が出会って結婚する、その式に比べることができます。悲しみの瞬間では絶対にありません。それは昆虫が堅い皮を破り繭から出て、新しい形態に、新しい存在として、新しい本質になるのと同じです。

人間が死ななければならない理由は、肉身によって制限された愛しかすることができないからです。無限な神様の真の愛の対象的実権をもって現そうとする時には、制限された肉身のみをもってしては駄目なのです。ですから無形の霊に和するほかありません。さらに真の愛の理想を全天地と共に同一化するためです。ですから死は、苦痛の道ではなくて、宇宙的真の愛を所有することのできる幸福の門を開門する時間だというのです。

私たちが父母の愛を受けて、夫婦の愛を分かち合って子女を愛したので、私の一生にわたって蒔かれた神様のすべての愛を刈り入れて、自分の国に行くのです。そして私たちが

完全に愛によって一つになれば、神様と似るようになります。夫婦が合わさって三段階の愛を完全に成して霊界に行くと、永遠の主体であられる神様の前に、永遠に相対的な神様になるのです。真の愛を中心として夫婦が死ねば、そのようになるのです。神様で始まり、神様で終わりを結ぶのです。

人間は母親のおなかの中にいてから生まれ、一定期間を地上で生きて、死を迎えるようになっています。そうして大部分の人間は、年を取れば取るほど死に対する恐れを感じるようになります。人間が年を取るほど死に対する恐怖や不安を感じるのは、死後の世界を信じないからです。

霊界は愛の成分によって覆われているところです。地球は空気で覆われていますが、霊界は愛で囲まれているところです。人間は地上で空気を吸いガスを吐き出しますが、霊界は愛を吸って生きているところです。霊界で授受する愛は、真の愛だというのです。

私たち人間の一生は腹中時代十カ月、肉身時代百年、そして霊魂時代千年、万年を永遠に生きるのです。赤ん坊は生まれてすぐに泣くと同時に、鼻の穴で息をする第二の世界、すなわち空気の世界につながるのです。腹中から空気の世界につながる時には、腹中の世界で生きていたへその緒と水袋をみんな破壊して出てこなければなりません。それら死（破壊）と同時に、地球星という母親から生まれたのです。生まれると口で食べ、鼻で息をします。ところで地上で食べる食べ物は肉身が生きるのに必要な栄養分であり、本質的生命要素ではありません。本質的生命要素はすなわち愛です。それで、この世で愛という空気を吸わなければなりません。母親、父親から愛の空気を吸わなければならないのです。

霊界における愛の宮殿は真の父母から始まります。霊界に宮殿があるとしても、真の父母が行って、「ここを宮殿にする」と宣布して初めて、そこを中心として全霊界が位置を決めるのです。そのような責任が残っているので、霊界でも真の父母を絶対に必要としているのです。

霊界の裏通りまでも通いながら調べてみると、天地の道理は簡単なものでした。二人が絶対的な力で合わさって真空状態になったところに神様が入ってきて、骨髄のような芯になるのです。
ここに男性の愛と女性の愛の二つのかけらがぴったりとくっつくのです。これが宇宙の核です。愛の理想的実体が合わさって愛の軸になるのです。

地上の生活と霊界の生活は別々ではありません。地上の生活も重要で霊界の生活も重要です。霊界の生活は地上生活から連結されているのです。両方とも重要ですが、今日この地で生きている人は地上生活が重要であると思っています。問題はこれです。現在の生活が永世を保障する基盤であることを知らない人が多いのですが、それは本当に不幸な人たちです。

もしアダムとエバが完成して霊界に行くとアダムとエバは神様の体になり、神様はアダムとエバの心になります。ですから霊界に行っても神様は見えません。完成した人を実体世界の体と心のような一つの結果として成し

て置こうというのが、神様がアダムとエバを創造した目的です。

地上世界と霊界は、互いに向かい合って動きます。地上世界が上がると霊界も上がり、地上世界が下がると霊界も下がります。一方が回ればもう一方も共に回ります。それで現世でそれを実感して、永世にプラスさせる生活をしなければなりません。永世と現世は分けられていないのです。

私たちは結局どこに行かなければならないのでしょうか。霊界とは何なのでしょうか。死後の世界だと大抵は言いますが、死後の世界ではありません。なぜ死後の世界ではないのでしょうか。
愛と関係のある世界だからです。愛と関係のある世界なので、死後の世界ではありません。真の愛を中心として出発したものなので、私が真の愛の真理に立つようになる時は今ここが霊界なのです。ですから愛が偉大だというのです。

神様は愛に酔って億千万世を生きるように人間を造りました。ですから人が年を取るのは怨讐ではありません。人は愛から始まって、愛をもって生活して、愛の実を刈り取ります。死ぬことは愛の実を刈り取ることです。私たちは父母の愛を受け、子女の愛を受け、夫婦の愛をもって父母として子女を愛して生き、神様の愛、すなわち内的な愛の世界に蒔いたすべてのものを一生を通して実を結ばせ、これを刈り取ってあの世に行くのです。

この地上で肉身の皮はだんだんと年を取りますが、夫婦生活をして愛すれば愛するほど霊人体はもっと若くなります。それはどういうことでしょうか。人間が長生きすればするほど、内的な人間である霊人体は最高の厳粛な美男、美女になるというのです。

私の生涯に何をするのでしょうか。愛の墓を残していこうというのです。愛の墓の中で生きられれば恨みはないというのです。人生というものは永遠において成功するものです。そのように皆さんが生きて死ぬ時には神様が祝福してくださるでしょうし、霊界では神様が息子、娘を連れて歓迎するために出てこられるはずです。

霊界では、神様の愛がなければ食べられません。食べる権利がないというのです。地獄は、見ながらも食べられず、知っていながらも行うことのできないところです。ですから神様の愛を中心として地上で霊肉が一つになって天国生活をした人以外には、永遠の理想的世界をもつことはできないのであり、天国を所有できないということを知らなければなりません。

あの世で必要なことは、世界よりも、自分よりも、自分の妻や夫よりも、自分の息子や娘よりも、神様をもっと愛したということです。愛の圏内の最大の人格を構成した人は、その世界では神様のような能力行使が可能です。

あの世は愛の空気でできています。愛によってすべてのものが生まれ、愛によって生き、愛によって「ため」に生きることのできる愛の道理によって満たされてこそ、今まで歴史時代に願われた神様の希望の実体を完成したという立場に立つことができ、天国のどこに

行っても歓迎されるのです。皆さんの家庭が、天国に向かう修練所です。家庭で修練を受けたものを四方に拡大させて、「ため」に生きることのできる愛の圏をもって生きる人は天国に直行するのです。

霊界という世界は無限に膨大な世界ですが、何百万里の距離も瞬時に愛を中心として行ったり来たりできる世界です。愛は最大の速さをもっています。

霊界で神様が見る時、皆さんの心の中で愛の鐘の音が鳴るようになると明かりがだんだんと大きくなります。この光は神様の目にはダイヤモンドの光よりももっと美しく見えます。またその光は味のある、見れば見るほどいいものです。ですから神様は愛だというのです。

霊界の空気は愛です。愛が生命要素になっています。その世界は鼻で息をするだけでなく頭のてっぺんでも息をし、細胞全体が息をします。ですから完全な霊界生活をしようとするならば、地上生活で完全な愛の人格を具備しなければならないのです。

霊界に行ってみると父母、夫婦、兄弟姉妹、子女という、家庭生活で深い愛の経験をした人は多くの自由を得ることができ、その人はどこへでも、何の制限もなくどの方向にも行くことができます。その反対に愛の経験のない人は心が狭く、霊界でも自分一人で孤立していて自由がありません。

霊界では神様の愛がすなわち法です。

霊界とは、永遠の要素を望む永遠のところです。ですから愛を体験した霊人体は間違いなく、自動的に磁石に引っ張られてその世界に行くようになります。霊界はどのようなところでしょうか。すべてが愛で充満した、愛で詰まった調和の世界です。今日の人間は誰でも愛の関係を結ぼうとします。これは霊界の拍子に合わせるためです。愛の力で動かない存在はないし、愛の力の対象にならない存在もないので、愛の言葉で聞いてこたえないものもありません。愛はすべてのことを可能にすることができ、起こすこともできます。再現させることのできる能力があります。したがって霊界は、直感的な愛の心をもってすべてのことを可能にすることのできる自由自在の世界だというのです。

霊界を結束しなければならないのですが、霊界を収拾することのできない人は天下を統一できません。天運の根が天なのですが、天を収拾できない人がどのように世界を統一するのでしょうか。ですから地上を統一する前に、霊界を統一しなければなりません。

皆さんは全部先祖の顔に代わって生まれた歴史的な復活体です。その歴史がどのくらいになるでしょうか。何十万年にもなるというのです。そのように長い歴史過程は、結局は私自分一人をつくるために苦労したというのです。金氏ならば金氏という自分一人を誕生させるために、数多くの先祖たちが来ては去っていきました。ですから私たちは歴史的な結実体です。

おじいさん、おばあさんが亡くなったなら、お墓参りをしなければなりません。神様がお

墓に埋められたと言って、お墓参りをしなければなりません。

今まで霊界に行った霊人たちは全部別れています。霊界では横的には通じません。縦的にはこの程度に通じます。

あの世に行けば殺人を犯した人、殺された人、様々な人が一箇所に集まっているので、そこでは包丁ざたが起こり、復讐しようとする出来事も起こります。ですから数多くの塀に囲まれているところです。ですから悪なる霊が怨讐の子供を捜し回って事故を起こさせて連れていくような、そういうことが起こるのです。これを全部解かなければなりません。解くためにはまず地上世界で解かなければなりません。解くためにはもっといいものをあげなければなりません。死ぬよりももっといいもの、怨讐関係になったものよりももっといいものをあげなければ解けないのです。

人はどこに行くのでしょうか。霊界に向かって行くのです。霊界は海と同じです。どうせ行かなければなりません。海にも流れがあるように、そこにはこの上ない調和の取れた変化があるのです。海では主流の流れを中心として、淡水にはない調和の存在があります。海には数多くの魚族があるように、そこには数多くの新しい天地家庭があります。あの世に行っても同じなのです。

二　愛の人格体は地上生活で具備しなければならない

地上にいる時の生活がどんなに重要でしょうか。地上生活は一度しかありません。瞬間ですが一度しかありません。地上生活を永生に比喩すると、これは一点にすぎません。あまりにも短い瞬間です。この期間に肉身生活を越えて霊界のために準備しなければならないのです。常にそのような思想をもって、中心に立って一体をコントロールして征服できなければなりません。そうでなければ完成を成すことができません。それを知らなければなりません。

もし生涯の中で三分の二以上が罪の生活をしたならば、その三分の二の生活をすべて切り捨てることができるでしょうか。できません。切り捨てることができないのです。これは必ずついて回るのです。

皆さんの心をフィルムに撮って、その写真を自分が見ると思ってください。

完成は地上でするのであって、霊界でするのではありません。地上でこそ真の愛を中心として可能なのです。霊界ではありません。

今日、信仰生活をしている人は蕩減法を知りません。無責任な立場で天国に行くと思っている人は多いけれど、責任をもって蕩減し歴史的な罪を清算してから天国に行こうとする人はいないというのです。ですから私たちは肉身をもっている地上生活で責任を果たし、歴史的なすべてのことを清算した条件を立ててから行かなければなりません。霊界に行った人は蕩減できないので、もう一度来て蕩減しなければなりません。今まで来て去っていった歴史時代のすべての霊人たちは蕩減復帰をすることができなかったので、全部この法に引っ掛かって、霊界に行ってからもう一度

来て蕩減条件を立てなければならない運命にあります。地上に住んでいる人が霊界の人より一つ有利なこととは何でしょうか。直接蕩減条件を立てることができる肉身をもっているということです。

皆さんが天国に行く人か、地獄に行く人か、確実に知らなければなりません。レバレンド・ムーンは霊界をよく知っている人です。いろいろな人が生きては去っていきます。死を避けることのできる人は一人もいません。死は避けることができないというのです。ここで生きて去っていくのですが、自分のために生きた人は、この世界に行ってぐるっと回って地獄に行くのであり、他のために生きた人はぐるっと回って天国に行くのです。

なぜ結婚しなければならないのでしょうか。父母の愛、夫婦の愛、子女の愛を体験するために結婚するのです。それでは、それがなぜ必要でしょうか。愛の空気が充満するところが霊界です。霊界の拍子に合わせる訓練をするためには、家庭をもたなければならないことを知らなければなりません。これを感じられずに行く人は、あの世に行って拍子を合わせることができません。このような人は愛の空気をかぐことのできる鼻のない人と同じなのです。

父子間の愛は縦的な関係であり、夫婦間の愛は横的な関係であり、兄弟姉妹間の愛は旋回して取り囲む関係です。この三つの関係はすべて違います。それで地上でこの三つの違った方法によって深い愛の経験をもってこそ、霊界に行って制限なく縦的、横的、円として旋回できるのです。例を挙げると、父母が早く亡くなったことによって父母の愛を味わうことのできなかった人は、とても重要な愛の経験ができなかったので多少悲劇的な人であり、夫婦関係を経験できなかった人は、人生の重要な部分が不足しているので霊界ではとてもみすぼらしい人です。また兄弟姉妹がいない人はすべての分野が欠けているので、完全な人生を生きることができずに霊界で寂しい立場に立つのです。

地上で子女を立派に育てて残していかなければなりません。将来その子女すべてが霊界に行きます。霊界に行って天国の国民になるのです。自分が天国の国民として何人捧げたかという時、地上ではつらいことだったけれども、永遠の世界ではそれが高貴な光栄の道になるのです。

あの世に行くと、霊界に行ったすべての次元の高い人たちのことが、地上のことと同じなのです。地上とはどのようなところでしょうか。天国の国民を生産する生産工場です。分かりますか。広大無変の天国です。無限大です。あまりにも広いのです。人は数億年の間来ては去っていきましたが、どこにいるのか分かりません。そのように広いのです。一人が百人ずつ子供を生んでも天国は広いので、過人生産ということがありません。あの世は、いくらでも収容できる世界です。産児制限しなければならないでしょうか、してはいけないでしょうか。あの世に行く時、天国の民をどのくらい引き連れていくかということが問題になります。真の天国の息子、娘をたくさん引き連れてくる時、それが自分の権域になり、天上世界で表彰を受けることのできる等

級の等差を設定できる資料になるということを知らなければなりません。

これから霊界に行って自分の所有権が何かというと、天国の民をどれくらい連れて入っていくかということです。それは自分の財産です。永遠の財産なのです。

道端の乞食や体の不自由な人を悪く言ってはいけません。皆さんの霊人体がその姿ではないかと思いなさい。

霊界には繁殖がありません。神様は縦的な父母の立場におられ、軸は一つなので一点しかないのです。

皆さんは霊界に行って保護官生活をしなければなりません。何千年も待たなければなりません。祝福を受けた人たちもこれから息子、娘がみな「お母さん、私をどうしてこんなふうに産んだの。どうしてここに引っ張ってきたの」と言わないと思いますか。皆さんの息子、娘がじっとしていると思いますか。皆さんの家庭によってレベルがみな違います。それで行くのも、自分の級に合うところに行って長い間とどまるのです。そうすると皆さんの先祖たちが、息子、娘が「なぜこうですか。なぜできなかったのですか、いったい何ですか」と言いながら讒訴します。皆さんはそれに該当するほどの長い時間そこにとどまらなければなりません。そのように簡単なことではありません。それで地上でしっかりしなければならないのです。

皆さんは父母として生まれました。その次にもっと根本的なことは、母親のおなかを借りて神様によって生まれたという事実です。皆さんは宇宙の父母を通して、肉身の父母を通して、真の父母を探していくようになるのです。肉身の父母は通過の父母です。それで死の瞬間は真の父母に会いに行く歓喜の時間です。そこを天上天国と言います。そこの構成要素は愛であり、父母の愛によって充満しています。その愛は私のためのものではなく、奉仕と犠牲の原則の元の法度を通すことのできる愛です。そこに合格するためには宇宙を愛し、人類を愛さなければなりません。地上生活はそのような愛のための訓練所です。皆さんはこのような内容が宇宙の根本だということを知って、生きている時にこのような観をもって愛を実践し、合格したのちにそこに行けば間違いなく神様に会えるという結論になるのです。

霊界に行くと、必ず行ったとおりに返さなければなりません。祝福を受けた家庭は先生が祝福を授けたので天国に行く門は開きますが、前進するにおいては心情の軌道に乗ってあちらから引っ張ってくれなければなりません。それで、これからそのような世界があらわになる時になると、皆さんはたくさんの審判を経て、初めて運命ではないかと思うようになるのです。

人が生まれたのは愛の実を地上に結ぶためです。地上で神様が望んだ愛の実を結実するのが地上に来た目的です。ですから短いのです。一つの季節にしかなりません。短いというのです。分かりましたか。

魚は水の世界を離れては生きていけません。水が絶対的な生命です。川の水に棲む魚が川

の水だけにいてはいけません。海の水にも行ったり来たりして生きなければなりません。なぜそうしなければならないのでしょうか。淡水の魚は海水と接するその水を味わわなければ子供をはらめないのです。それを知らなければなりません。それを知っていますか。また、海に住んでいる魚は淡水に来て味わって子供を産むようになっています。二つの世界に通じなければなりません。地上と霊界も二つの世界ではありません。ですから二つの世界で生活できる、ある内容をもたなければならないということを知らなければなりません。

Book 四: 真の家庭 True Family

はじめに

今までの人類歴史において、天道と三綱五倫という古い法度が、世の中を収拾する人倫道徳の一つの母体となってきました。しかし、終末である今、それらのものがすべて崩壊してしまい、その結果、極度の個人主義、愛の秩序を破壊するフリーセックス、同性愛のホモ・レズが乱舞する時代となりました。そして真の愛を中心として理想家庭を願ってきた天の側を完全に破壊する地上地獄の時代となったのです。

エデンの園における人間始祖の堕落によってその種が蒔かれたがゆえに、そのような現象が世界的に展開し、堕落の実を刈り取る収穫期が来たのです。堕落した偽りの父母の因縁を中心として、神様と関係のない伝統を受け継ぐことによって、この世界は混乱と混濁の世界となりました。

言い換えれば、人間始祖が自らの責任分担を完遂することができずに不倫な血縁関係を結んだために、その後の人類はサタンの子女として、忠実な僕として、サタンの主管を受けるようになったのです。

そのため、復帰摂理は、サタンの血統と生命と愛を分立し、神様の善なる血統と生命と愛を復帰してきたのです。したがって全人類は、サタンと関係のない、本然の血統と連結された神様の真の息子、娘として生まれ変わらなければなりません。

それゆえに、真の父母がこの地に来られて新しい主義を立てなければなりません。それが真の家庭主義です。真の家庭主義は、神の真の愛主義です。神の真の愛主義は、家庭を越えて国境を超越し、この平面的な世界をすべて超越します。そして互いが授け受けするにおいて、まず自分が先に授けようとする主義なのです。

本書は、真の御父母様の真の家庭に関する愛の言葉が満ち溢れ、読む者の本心を目覚めさせるに余りあります。そして、神様が本来人間に対して願っていた真の子女の心情と真の兄弟の心情、真の夫婦の心情、真の父母の心情を体恤し完成していくにおいて、適切かつ貴いみ言がこの本に盛り込まれています。ゆえに真の自由と平和と幸福に満ちた家庭を成そうと願うすべての方々の良き道しるべとなることを確信します。

本書を訓読される皆様の家庭が、日ごとに真の家庭として成長し復活する生活となることを祈願いたします。

日本語版発刊によせて

これまで十二冊からなる小冊子シリーズとして多くの人々に親しまれてきた『真の家庭』が、このたび一冊の本として出版されることになりました。元来このシリーズは真の家庭運動を推進するためのテキストとして、まだ統一原理を学んだことのない一般読者の方々にも、人類の真の御父母様であられる文鮮明先生の説かれる真の愛の理想が理解できるようにという意図で編纂されたものです。しかし、既に原理を学んでいる私たちが改め

て読み返してみても、家庭のあるべき姿について実に多くのことを教えられ、心動かされることが少なくありません。

文鮮明先生の語られるみ言には、常に普遍的な真理の力がみなぎっていますが、このテキストはそれが最も平易な言葉で表現されたものであり、まさにすべての人が読むべき「真の愛の教科書」であると言えるでしょう。これまで文鮮明先生は「四大心情圏」について数多くのみ言を語ってこられました。そして私たちが日々唱和している「家庭盟誓」の中にも、四大心情圏の完成という目標が掲げられています。それは私たちが日々の家庭生活の中で、子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛という四つの型の愛を啓発し、それらすべての愛を授け受けすることができるような心情を自らの中にはぐくんでいくことを意味しますが、そのための具体的な方法や心構えが本書の中には実に丁寧に解説されています。

今日、私たちのまわりの社会では、「家庭とは何か」という概念そのものが危機にさらされています。伝統的な父母と子からなる家庭の概念を相対化して、離婚・再婚がもたらしたステップ・ファミリー（継母、継子など、血縁のない親子関係を含む家族）、未婚・非婚の母と子の家庭、あるいはゲイやレズビアンのカップルまでも「アルタナティブ・ハウスホールド」（もう一つの生活体）として認めさせようとする動きが米国を中心として活発化し、国連にまで影響を与えようとしています。また日本においては「失楽園」や「援助交際」といった言葉に代表されるように、大人から青少年に至るまで、性倫理の崩壊は深刻な事態になっています。私たちはこのような風潮に対し、家庭は本来こうあるべきであるという標準をはっきりと示さなければなりません。

家庭は「愛の学校」です。私たちが真の愛をはぐくむ場所は、家庭をおいてほかにありません。訓読会を通してまず私たち自身がその愛の理想を学び、それを実践するとともに、より多くの人々にその理想を伝えるため、本書が活用されることを願ってやみません。

二〇〇〇年二月

第一章　創造本然の真の家庭

一　アダムとエバを通じた神様のみ旨

多くの人たちが神様のみ旨について語っています。しかし、この話は簡単なようで、いざ「神様のみ旨とは何か」という質問を受けた場合、答えるのは非常に難しいものです。

また、今日まで多くの信仰者が「神よ、み旨を成さしめ給え」と祈ってきました。そして神様のみ旨を成すために現在、私たちも信仰生活をしています。しかし神様のみ旨が何であるかもよく分からずに、神様のみ旨が成されることを祈り、またそのみ旨のために信仰生活をしているというのは、一つの矛盾だと言わざるをえません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－二九八）

統一教会で見る神様のみ旨、すなわちレバレンド・ムーンが知っている神様のみ旨とは何でしょうか。それは神様が宇宙をつくった創造理想、すなわち創造目的を完成すること

です。神様はすべての被造万物を創造するとき、必ず目的をもって創造されたので、そのような神様の創造目的を成すことが神様のみ旨です。

その目的の中心は誰でしょうか。アダムとエバでした。それゆえに私は、創造の理想を実現すること、すなわちアダムとエバを中心とした理想を実現することが、神様の創造目的だと見るのです。

では、その理想実現とは何でしょうか。それはまさに四位基台を成すことです。四位基台とは、神様を中心としてアダムとエバが、神様の愛の圏で離れようとしても離れられないように完全に一つとなり、理想的な夫婦となり、彼らが子女を繁殖することによってつくられる神様中心の家庭の基台をいいます。この四位基台が造成されれば、神様を中心としてアダムとエバが夫婦の愛で一体となり、神様の愛の圏から離れられなくなります。（祝福家庭と理想天国Ｉ－二九八）

人間始祖を通しての神様の理想は何だったのでしょうか。神様の理想は理想的な男性と理想的な女性が結婚して理想的な家庭を完成することでした。

それでは理想的な家庭を成す中心は何でしょうか。それは男性でもなく女性でもありません。家庭とは結局、父母と子女、夫婦の結合によってつくられる一つの束で、その結ばれたものの中心は何かといえば、まさに神様の愛です。

神様の愛を中心にして夫婦が結婚し、神様の愛を中心にして家庭を完成させることが神様のみ旨であるとの結論が出ます。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇一）

神様の創造目的とは何でしょうか。アダムとエバをつくったのは、ただながめるためではありません。男性と女性をつくったのは、男性は男性として、女性は女性として年老いて死んでいくためではありません。彼らが成長し、互いに異性に対する相対的な心情を通して、神様を中心とした人類の真の地上天国を建設するようにするためでした。神様を中心とした愛の巣をつくるようにするためだったのです。

ここにおいて男性であるアダムは天を代表し、女性であるエバは地を代表します。それゆえ彼らは二人ですが、彼らが横的に一つになれば、天と地が統一されるのです。神様の愛を中心に二人が統一されれば、天宙は自動的に統一されるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－二九九）

二　神様が絶対に必要とするもの

神様はなぜ彼造世界を創造されたのですか。神様は被造世界を通して喜びを味わおうとされたのです。神様がいくら絶対者だといっても、喜びを一人で感じることはできません。喜びは相対がいてこそ生じるからです。

神様が必要とされるのは知識でもなく、お金でもなく、権力でもありません。神様ご自身が絶対的で全知全能なので、そのようなものを必要とはされません。科学がどんなに発

達しても神様かつくられたものに追いついたり、越えたりはできません。膨大な宇宙は秩序の中で法度に従って運行しています。人間の思考と科学が及ぶことのできない膨大な宇宙を神様は創造され、運行しておられることを考えるとき、神様は絶対的な科学者でもあられます。

世の中に存在する物の中で、神様と相対となる力はありません。神様の力は全知全能であり絶対的だからです。また永遠不変で自存的なお方が神様であられます。そのような神様が願われることがあるとすれば何でしょうか。お金でもなく、知識でもなく、権力でもなく、何を願っておられるのかというのです。神様が必要とするものは何であるかが問題です。

神様が絶対必要とするものが一つだけあります。それは人間に絶対的に必要なものであると同時に神様にも絶対に必要なもので、それが真の愛です。それでは神様お一人で愛を受けることができますか。神様はご自身で愛を思うままにすることができるのではないかというでしょうが、とんでもありません。神様において最も必要なものは、真の愛を分かつことのできる対象者なのです。これを知らなかったのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇四）

神様が絶対的なお方ならば、その絶対的な方がなぜ人間をつくったのかというのです。

お金のためにつくったのでもなく、知識のためにつくったのでもなく、権力のためにつくったのでもなく、人間の創造が、神様の愛を神様ご自身が感じることのできる唯一の道であるがゆえに人間をつくったのです。

この観点から見るとき、神様は父であり人間は息子・娘だということが一つの軸をなすのです。この軸が万一連結されたならば、人間と神様が愛で一体となった関係は、何が作用しても絶対に引き離すことができないのです。

神様の本然の愛と絆を結んで、その愛の味を味わった人は神様から離れていくでしょうか。蜂は春に蜜を味わいます。蜜を吸っている蜂のお尻をつかんで引っ張るとお尻が抜けても、その蜂は蜜から口を離しません。皆さんがその味を味わったらどうでしょうか。離しても離しても戻ってきて、再びそこにくっつこうとするでしょう。

この軸の愛に連結された全時空が作用する基準になっていれば、人間の家庭は、個人的に完成した男性と女性が一つになって、愛を中心とした家庭が現れるのです。さらにこの愛を軸として成された氏族、民族、国家、そして世界が現れるようになるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇五）

三　神様の永遠なる愛の相対者

神様がこの世界を創造されたのですが、私たちが神様に、何ゆえにこの世界をつくられたのかと尋ねるならば、神様は間違いなく「善くて……」と答えるでしょう。「善くて」すなわち喜びのために、喜びを得たいがために、神様はこの世界を創造されたというのです。

ところで善い状態、すなわち喜びはどのようにして得られるのかといえば、愛の形態を通して得られるのです。ですから神様は、愛の実現を通して喜びを得るためにこの世界を創造されたのです。そのような結論を私たちは得ることができます。愛の実現のためにこの世界を創造された神様であられました。

人間と万物が神様の愛を中心に一つとなり、和気あいあいとした愛の関係を築くのを見て喜ぶために、そして人間が神様の愛を中心に一つの真の夫婦の因縁を結び、一つの真の愛の家庭と氏族、民族、世界を成すのを見て喜ぶために、そして、そのような人間と愛で一つになることによって愛の喜びを味わうために、被造世界を創造された神様であられました。

まさにそれが神様の創造の理想だったのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇二）

神様の夢はただ一つ、愛の理想を実現することでした。ところが愛の理想の実現は、神様お一人では果たせないのです。愛とか幸福、喜びなどは一つの個体を中心として成り立つようになっているのではありません。相対圏がなくては絶対に成立することができないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇三）

神様は絶対的な存在ですが、愛の相対となる存在がなければなりません。神様の愛の相対者はまさに人間なのです。

神様の愛の相対者として人間が、完成した愛をもって神様の前に現れるとき、神様は幸福の神様、喜びの理想を得た神様となるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇三）

神様には人間がなぜ必要なのでしょうか。神様の理想を実現するのに人間がなぜ必要なのかというとき、「神様の愛を完成するために必要なのだ」と言うことができます。神様の愛とは何でしょうか。それは、人間同士、永遠に見て愛し合うのはもちろんですが、神様をして人間を永遠に愛し得るようにさせるものだともいえます。人間はこのように神様の永遠の愛の相対者なのです。

アダムとエバを創造されたその日から、神様は永遠無窮に、アダムとエバをどんなに見ても、もっと見たいし、どんなに一緒にいても、もっといたいし、どんなに一緒に住んでも、もっと住みたいという対象として愛したかったのです。そのような対象をもつことが神様の創造理想です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇六）

四　アダムとエバを創造なさった目的

私たちが旧約聖書創世記第一章二十七節を見ると、神の形どおりに人間をつくり、一男一女をつくられたという聖句があります。

そこから帰納的に推理すると、神様は一人の男性と一人の女性を合わせたお方であるとの結論が出るのです。

そういう神様が一人でいてはいけないので、対象を必要としてこの世界を創造せざるを得なかったのです。そういうわけでつくられたのが、一人の男性であり一人の女性なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇七）

神様は第一に、体をもつためにアダムとエバを創造され、第二に愛を完成するためにアダムとエバを創造されたのです。このようなアダムとエバが完成し、二人が一つになることのできる愛の実体となれば、神様が臨在し、彼らは人類の完全な愛の父母となるのです。そして神様の形象的実体の父母になったアダムとエバが、実体の子女を繁殖することによって、理想世界が成就されるのです。そうなれば人間を通して霊界と地上世界が連結されるので、霊界と地上世界を連結させることをも目的として人間をつくられたのです。

そういうわけで、神様が愛を中心にしてアダムとエバに臨在されることによって、神様は人類の真の父母、実体の父母として存在されるのです。そしてアダムとエバが霊界に行けば霊界でもアダムとエバの形状をもって父母の位優に顕現することができるのです。ところがアダムとエバが堕落することによってこれが成されなかったという事実を皆さん方が理解してくださるようにお願いします。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇八）

神様は見えません。その無形の神様が実体相をもつためにアダムとエバを創造されたのです。

心の中に神様を抱いているアダムとエバが完成し、結婚して子女を生めば、神様は内的な父になり、アダムは外的な父となるのです。そうなればアダムは神様に完全に似るようになります。神様に似たアダムとエバが人類の父と母になれば、その姿を通して、いつも神様がおられることが歴史を通して認知されたことでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇九）

神様が男性と女性をつくられた目的は、二人が愛し合い一つになるようにするためでした。アダムはアダムのために、エバはエバのためにつくられたのではありません。アダムはエバのために、エバはアダムのためにつくられたのです。また神様ご自身の愛と喜びのために、アダムとエバをつくられたのです。神様がアダムとエバをつくられたのは知識、権力、お金のためではありません。全知全能なる神様は知識、お金、権力が必要だったのではなく、ただ愛が必要だったのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇八）

神様がアダムとエバをつくったのは知識を与えるためでもなく、権力を与えるためでもなく、多くの財物を与えてよい生活ができるようにするためでもありません。彼らを創造した目的は愛の実体として立てるためだったのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三〇八）

五　アダムとエバの初愛の時期

神様がアダムとエバを見て「取って食べるな」と言ったのは、彼らが愛することのできる時機になっていなかったからです。彼らは成長期にいたので成熟するまで待てとの戒めだったのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一〇）

人間は思春期に向かいながらその一時を中心に生きてきました。そのときまで待つべき理由がどこにあるのかを知らなければなりません。ただちに男性、女性が一つになり愛すればいいのに、なぜ待たなければならないのでしょうか。愛のゆえにそうせざるをえなかったのです。成熟することのできる思春期時

代までの期間が必要であるため、その期間まで過程的な要件を整えなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一二）

それではアダムとエバが教育を受けられる姿勢とは何でしょうか。神様とアダムとエバは、父母と子女の間柄なので、その父母が行く所にはいつもついていかなければならず、主管を受けなければならないのです。にもかかわらず、二人はその立場を離れることによって本然の姿勢を離脱したのです。神様は絶対的なお方なので、絶対的にそのお方に従って服従しなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一一）

アダムとエバは万物の霊長として、父なる神様が定めてくれた期間、すなわち霊肉ともに成熟する時を待たなければなりませんでした。神様もアダムとエバに「生育し繁殖せよ」と言いました。それは肉体と霊人体が完全に成長した後に、夫婦となって愛し合い息子・娘を繁殖せよとのみ言なのです。アダムとエバが身体的に成熟しながら一緒に出歩くようになります。一緒に行き来していてびっくりするような場面を見れば、エバが「まあ、怖い！」と言いながらアダムの胸に抱かれたり、後ろに隠れることが起こるようになったのです。

エバがアダムの胸に抱かれれば、怖かったのが安心でき楽になるのと同時に、アダムから強力な男性的衝動を受けるのです。アダムもまた嫌な気もせず、エバから自身とは違う性的衝動感を受けたでしょう。このようなときアダムとエバのうち、性的モーションをどちらが先にかけたのですか。「怖い」とアダムの胸にかけ込んだエバが先にかけたのです。そのときから彼らには次第に愛の接線ができるようになったのです。

神様は愛で被造世界を創造されました。それゆえアダムとエバは、神様の愛を中心にして被造世界を愛の組織体としてつくり、神様に連結させなければなりませんでした。そのような任務をもったアダムとエバは、どんな姿勢をもって神様が許された愛を共有するようになるべきかを、考えていなければなりませんでした。この愛の問題は極めて重大なことで、彼らの生死を狙うものになりかねないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一一）

愛はどこから出発するのでしょうか。個性を完成するところからです。原理で見れば個性を完成した後に愛するようになっています。思春期を経て異性に対することのできる資格を備え、天地の調和に一致して通過することのできる責任を担えるときに初めて、愛の因縁が始まるのです。

ところがアダムとエバにおいてはそうではありませんでした。彼らの愛はどういう愛でしたか。天地のすべての万物を統一させることのできる位置での愛ではありませんでした。主体的な愛ではありませんでした。彼らの愛は主体的で必然的な愛でなければなりませんでした。ところが彼らは必然的な愛で愛することができなかったのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一七）

六　すべての存在は愛を通じてのみ完成する

個体完成とは、心と体が本来神様がつくられた愛の型に従って、完全に一つとなった中で成長し成熟するように、授受作用を永続させていくことを言います。愛を中心にして出発し、愛を中心に成熟し、その上に愛の芽が出、実を結んでこそ完成するのです。このように愛の基台が立つようになれば、その中に神様は愛の因縁をもって臨在されるのです。愛が成熟しなければ、実を結ぶことのできる型を造成できないのです。

すべての被造物は愛の法度によって創造され、また存在しているのです。植物を見ても花が咲けば、花の中のおしべとめしべが授受作用、すなわち循環運動をすることによって実を結ぶようになるのです。動物世界もそうだし、人間世界も愛の循環運動によって存在しているのです。このようにすべての被造物は愛の関係を経て完成するようになっています。すべての存在は愛を通してのみ完成できるといえます。

人間は神様の愛の核と一致する位置に立ったとき、体と心が一体となるようになるのであり、神様の愛の圏内に、体と心を一体化させて入っていくようになれば、成熟した人間となるのです。そのとき初めて、堕落しない本然の人間として、個人完成が始まるようになります。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一四）

心と体において心は天を中心とし、体は世の中を中心とするのですが、この心と体が一つになったというとき、その理念はどういう理念だといいますか。天宙主義理念だといいます。天宙主義理念が何だか分かりますか。天と地、すなわち無形世界と有形世界が一体となる立場をつくっていこうという主義が天宙主義です。

この天宙を支配しようとすれば、支配しようとする人は心と体が一体とならなくていいですか。一体とならなくてはここで滅びます。そして神様を中心にして心と体が一体となるとき、神様は内的な神様で自分は外的な神様になるのです。ところで何を中心にして一つになるかといえば愛を中心として一つになるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一四）

アダムは神様と一つにならなければなりません。これを結合させるのは愛です。存在世界の平面的な代表者は人間であり、立体的な代表者は神様です。これを永遠に結合させる中心点がまさに愛という絆です。

肉体をもつ人間が神様と一体となるとき、その心情と感情は無限なる体恤境と幸福感に酔うようになります。結局、愛によって神様と人間は一つになるのです。愛によって人間と世界が一つになり、神様の創造目的、理想世界の実現は愛から出発するのです。

アダムとエバは、十六、十七、十八歳になれば自然と思春期になり、異性に目が開くようになります。花が一面に咲くとき、人がその香りに酔うように、アダムとエバが成熟すれば異性を考えるようになります。この香りに神様も一緒に引き込まれていくのです。神様の愛とアダムとエバの体と心、この三つが一つになれば宇宙の核が生じて、すべての愛をコントロールする本軌道に入ることができるようになります。

ところがここで脱線しました。脱線しなかったならば完全に一つになったでしょう。このように一つになったなら、神様も離れられず、アダムとエバも離れられなかったはずです。そして子々孫々に連結され、氏族、民族、世界を形成したことでしょう。ここが素晴らしい世界、地上天国になるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一二）

七　人間たちが誇ることのできる最も大きな自慢の種

神様は一人の男性と一人の女性を創造されました。そして彼らが完成した状態に至った後に、彼らをして天的な結婚生活をするようにされ、一双の天的夫婦として立てようとされました。神様はアダムとエバをして、最初の夫と最初の妻になるようにされ、天国建設を始めようと計画されたのです。万一それが実現されたならば、「生育し繁殖せよ」と言われた神様の祝福はそのときに成されたはずでした。

神様は彼らに神様の子女を繁殖できる力を賦与されたのです。そうなったなら、彼らの子女も罪のない完全な人間になったのです。アダムとエバはまたどのようになれたでしょうか。罪は絶対に人類に継承されなかったでしょう。そのような子女をもつことによって、アダムとエバは神様を中心とした真の父と真の母となり、人類の真の父母になったでしょう。

堕落せずに完成の位置まで上がったならば、アダムとエバは個人完成のみならず、宇宙史的な完成をしたことでしょう。また神様の愛を中心にした新しい家庭が出発したことでしょう。このように家庭から氏族、民族、国家、世界が成されたならば、神様に侍る一つの大家族社会ができたことでしょう。この大家族社会の中心は神様とアダムです。それで、その世界では神様を中心としたアダム家庭の生活や一生の路程が歴史的伝統として残ります。彼の生活方式、風俗、慣習、そして生活的な背景が歴史的伝統になるのです。それは神様の愛でつづられた伝統にならざるをえません。

神様の愛は生命の根源でありすべての理想の源泉なので、その懐を離れようとしても離れられず、離れたとしても再び戻らざるをえません。堕落したこの世界でも、父母のもとで生活していたものがその懐を離れたり、兄弟のもとを離れたら、いつも寂しく感じ、父母や兄弟を懐かしがるのを見ます。同じように、生命と理想の主体であられる神様の愛でつながっていたら、その懐を離れられないのです。離れれば寂しくなり悲しく、喜びがあるはずがないので、神様の愛の圏内で一つになるほかないのです。

そのような立場で人間たちに誇るものがあるとすれば、第一に神様は私の父だということであり、第二に自分たちは神様の愛を受けられる息子・娘だということであり、第三に自分たちは神様が創造した宇宙の相続者だということです。今日世の中の人たちは、金持ちの婿になっただけでもたいそう誇ります。ところが神様が私の父であられ、その父の愛を完全に受けられるならば、それ以上大きな誇りがどこにあるでしょうか。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三一九）

アダムとエバが神様を中心とする理想家庭を築いたならば、神様のみ旨は成就されたでしょうし、アダム家庭は、上は神様を父として侍り、下は人類始祖の立場で、一つの結合した愛の基点を整えられる家庭になったでしょう。

その家庭は、神様が創造したアダムとエバの理想を完成するために、愛の結合によって一体になることのできる基となったことでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三二〇）

八　真の家庭として伝統を立てるべきだったアダム家庭

人間始祖が堕落しなかったならば、皆さんは誰の息子・娘として生まれたでしょうか。当然神様の息子・娘として生まれたのです。

堕落しなかったならば、すべての人間は神様の真正なる息子・娘になります。今日のように怨讐の前に弄ばれ、怨讐に支配される氏族ではなく、怨讐の前に讒訴される群れではありません。絶対的な権威をもった神様の息子であり、どこへ行こうと神様の全権全能を代表できる神様の息子です。その息子を中心に家庭を築くとき、その家庭は全宇宙の存在が屈服しなければならない神様の家庭となるのです。またその家庭を成した氏族が活動する場合においては、あらゆる彼造万物は彼らを擁護し、彼らに吸収されなければならないのです。ところが堕落したゆえに、人間たちは神様の息子・娘になるどころか、怨讐に弄ばれる群れになったのです。

人類の始祖が、本来神様の法度を犯さずに神様と永遠に一体となったならば、その一体となった愛の因縁の中では誰も彼らを連れていけません。すでに息子・娘として生まれ、またすでに成人したのちに彼らを見て「おい、おまえの父親は誰だ？」と言って説明して、神様が父であることを否定できる理論や学説はないのです。銃剣を突き付けてもだめなのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三〇）

もし堕落がなかったならば、エデンの園に天の最初の家庭が立てられたのであり、その家庭はサタンの讒訴とは何の関係もなく、神様の主権下に繁栄したのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三〇）

アダムとエバが堕落しなかったならば、神様の完全な愛を受けたでしょう。このように神様の完全なる愛を受ける息子と娘として、彼らが神様の愛で結合したならば、神様の愛を中心とした息子・娘を生んだでしょう。

そして真なる神様の愛の中で、夫としての伝統、妻としての伝統、息子としての伝統、娘としての伝統を立てることができたでしょう。そして神様の愛を中心とする家庭の伝統が確立されたならば、神様のみ旨は成就したことでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三一）

アダムとエバは神様のみ旨どおりに完成して祝福を受け、家庭から出発した神様の国を築かなければなりませんでした。彼らの完成は、真の愛を中心として成されなければなりませんでした。神様に侍り、アダムとエバが横的な相対を成したならば、創造目的の世界

が出発したでしょうし、その世界は拡大され宇宙にまで至ったことでしょう。アダムとエバが夫婦一体となり、一つになる伝統の中に一つの世界を築いたでしょう。しかし、アダムとエバは神様のみ旨に背いて堕落してしまいました。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三二）

第二章　家庭を中心とした愛の法度

一　家庭を中心とした神様の愛の法度

神様の愛は父母の愛、夫婦の愛、子女の愛の形で現れます。この三大愛が人間において絶対的な観を超越できる永遠の実存的権限をもっています。それゆえ、この三大愛が結合するとき、人間は幸せになるのです。これが完全であれば、幸せも完全なものであり、これが欠如すれば不幸が巣くうのです。

お母さんのいない愛が幸せですか。お母さんがいない分だけ、不幸せなのです。また、お父さんがいないのに、幸せですか。お父さんのいない人はお父さんのいる人がうらやましいのです。幸せというものは、うらやましいものがあってはなりません。愛もうらやましいものがあってはなりません。

うらやましいものがあれば、幸せだとはいえないのです。お父さんがいなくとも幸せではありえず、お母さんがいなくとも幸せではありえません。男性がいくら太っ腹であり、大口をたたいても女性がいなければなりません。妻がいなければならないのです。また、夫婦同士、面白く暮らしてから、夫があの世に逝くようになれば、夫人は涙を流します。男性がいなくてもだめであり、女性がいなくてもだめなのです。

それから、夫婦同士、いくら愛し合って生活をするとしても、子女がいなければ不幸せです。息子だけが必要ですか。息子も娘も必要なのです。ところが、例えば父母に息子と娘の二人しかいないとすればどうでしょうか。息子に関していえば、彼にはお姉さんが必要であり、またお兄さんが必要です。また、娘にはお兄さんが必要であり、お姉さんが必要です。また、彼らには弟と妹が必要です。

お兄さんがいなければならないし、お姉さんがいなければならないし、弟と妹がいなければなりません。これが皆、そろっていなければ不幸せなのです。妹、弟、姉、兄、皆そろっていて完全に一つになった家庭は、神様が保護します。これが氏族と民族と国家の起源になるからです。自分を中心としてお父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、それから弟、妹、そこに自分まで合わせれば、七名です。ですから、七数が完成数だというのです。ここでの完成とは、愛を中心としていうものであることを知らなければなりません。

どうして七数が完成数でしょうか。何ゆえに、キリスト教でいう天地創造が七数を中心として完成したのでしょうか。そのような内容があるからです。三数は天の数であり、四数は地の数だといったことがあります。ここで三数は父、母、私の三数です。では、四数は何を意味するのでしょうか。兄弟姉妹たちを合わしたものが四数です。（二〇－四〇）

七数が完成数だということを知らなければなりません。父なる神、み子、み霊は神様を中心としたアダムとエバをいうのです。父なる神は上下、すなわち縦的な因縁をいうのであり、父母の愛は天地の身代わりなのです。皆さんを中心としてみるとき、兄と姉は東西を意味し、弟と妹は南北を意味するので、それが完成すれば、一体となるのです。これが愛の法度です。それゆえ、科学のすべての法則も数理に立脚した公式法度に摘要されないものがないのです。神様の愛の法度から由来する創造原理的な概念が出てくるのです。このような愛の法度が定着するようになるとき、平和の起源が成り立つのです（精選五－一八）

二　家庭に三代が共存すべき理由

祖父、祖母、舅、姑、小姑、孫までいっしょに暮らそうというのです。暮らす場合においては、センターを中心として蘇生、長成、完成、三代が定着するのです。

お父さんとお母さんだけを愛するのではなく、おじいさんを愛してこそ、神様を愛することになるのです。父母の上におじいさんを置いて愛してこそ、神様を愛することになるのです。

では、なぜ夫がいなくてはならないのでしょうか。なぜ父母がいなくてはならないのでしょうか。なぜ子女がいなくてはならないのでしょうか。彼らがいてこそ、神様に侍ることができるからです。

父母がいなくてはならないし、子女がいなくてはならないのが原則です。父母が必要であり、それから、夫婦が必要であり、赤ん坊が必要です。それをなぜ必要とするのでしょうか。神様と関係を結ぶためには、父母が必要であり、夫が必要であり、子供が必要だという論理が成立するのです。

ですから、父母が必要であり、夫が必要であり、子供がなぜ必要なのか、はっきり知らなければなりません。これを知らなければだめなのです。自分が下にも行かなければならないし、センターにも行かなければならないし、上にも行かなければならないし、横にも行かなければならないし、四方に行かなければなりません。いくら幼い孫だとしても、愛をもっておじいさんを好きになるなら、「ああ、うれしい！　うれしい！」と応えてくれるのです。

ですから、統一教会で、本然の世界をつくるために、本然の愛を中心として、このような家庭編成を標準とすることを宗教世界を通して初めて教育したということは、驚くべきことです。（一二八－一七）

皆さん、夫が死ねば、妻がなぜ泣くのでしょうか。子女がいなければなぜ泣くのでしょうか。寂しくて泣くのではありません。宇宙の根本原則においては東西四方を全部、備えなければならないからです。宇宙の存在の力は、相対理想を擁護する力からなっているのです。ですから、すべてが授け受けします。

南北が授け受けし、北極と南極が授け受けするのと同様に、星と星が授け受けするのです。相対がなくては存在できません。完全に一つとなった理想的な相対は、完全に授け受けする存在は、この宇宙が擁護するのです。

永遠に維持できるように、それを擁護する天運が離れないのが原則なのです。全部、それを助けるのです。

子女がいなくてもだめです。今日、西欧では子女が必要ないという主義になりつつありますが、必要がないかどうか、見ていなさいというのです。霊界に行ってみなさいというのです。自分が立っている所には、必ず上があり、下があるのです。三数を通じなければならないのです。三段階を経なければならないのです。

それゆえ、すべてのものは三段階からなっています。父母に侍らなければならないし、夫婦がいなければならないし、子女がいなければならないのです。子女がいなくては、天理原則に合わないのです。これをぴったりと分けておくと、男性三段階、女性三段階ですが、これを合わせて、統一的な三数の形態を備えて、理想世界が始まるのです。すなわち、おじいさんとおばあさんがおり、お父さんとお母さんがおり、自分がいてこそ、理想的だというのです。

統一教会の家庭倫理はここから始まるのです。（七〇－七六）

三　父母はまさに愛の起源

孤児は父母と因縁を結ぶことができません。人はだれでも愛を受けたく思います。その愛の理想型は父母です。そのような父母の愛を受けたくとも受けられず、また、父母に対して愛したくとも愛することのできない人は不幸せな人だということができます。

いくら孤児よりも百倍、千倍醜い人だとしても、父母に侍り、孝行して暮らすことのできる人は、孤児たちに威張ることができるのです。「おまえに父母がいるのか。いないだろう顔が美しくて何になる。父母もいないのに」と威張るのです。また、「私は醜く、病身だが、おまえは母親もなく、父親もいないではないか」と、いいうるのです。

父母とはいったい何でしょうか。力も頭も世界的なチャンピオンである息子が、たんこぶのような存在である父母を、指一つで片づけ、勝手にやろうとすればできるはずなのに、どうして勝手にできないのでしょうか。それを知らなければなりません。力でも一番であり、頭でも一番なので、力で「こいつらめ」とやりこめることもできるし、頭を使ってもそのようにすることができるのに、そうすることができないのです。

愛の起源がどこでしょうか。愛がどこから出てくるのでしょうか。自分からでしょうか。違います。それは父母から出てくるのです。愛の起源は自分ではなく、父母にあるからです。原因を知らない結果はありえないのです。愛を中心として見るとき、主人が自分ではないことを知っているので、そのようにできないのです。ですから、父母の前に来ては、「はい、お母さん、お父さん、そうです」というのです。

父母が「おまえがいくら名高く、力が強いといっても、お母さんとお父さんの前では道理にはずれることをしてはだめだ」といえば、「はい、はい、はい、お母さん、お父さん、そうです」というのです。なぜでしょうか。

愛があるからです。父母は主体であり、子供は対象だからです。主体は対象のために生き、対象は主体に従わなければならないのが天理原則です。これを破綻させたなら、その家はすっかり無価値な結果をもたらすのです。いくら無知な人間であっても、天性をもって生まれているために、天理原則というものが分かるのです。ですから、いくら外的に力が強いチャンピオンだとしても、父母の前では頭を下げなければならないのです。（五〇－一三五）

人の世は力の争いが続いており、知識の争いが続いています。まだ愛の争いができる時にはなっていないのです。ですから、宗教指導者たちは末世になれば、自分の時が来ると言うのです。その末世になれば、こぶしの力や知識の力の時代はすべて過ぎ去り、愛の力だけが残るのです。そのような最後の世界的な覇権時代、その時がまさしく終わりの日になるのです。

力の強いお兄さんが家に帰ってきて、大将の役ができるでしょうか。できません。いくら力の強いお兄さんでも家に帰ってくれば、大将の役ができません。リングでは世界的なチャンピオンになることができても、家に帰ってきては、大将になれないのです。また、博士の学位を数百個ももったお兄さんでも、家に帰ってきて、大将の役ができるでしょうか。できません。なぜ、できないのでしょうか。父母がいるからです。（五〇－一三五）

四　兄弟姉妹が必要な理由

兄弟がなぜ存在するのでしょうか。兄弟がなぜ必要なのかというと、男の人には妹や姉を見ながら、「うちのお母さんがこんなにして育ったんだなあ！」ということが分かり、また、女の人にはお兄さんや弟の意地悪な姿を見ながら、お父さんが育った過程が分かるようになるからです。それが兄弟愛というものです。ですから、兄弟を愛さなければなりません。

そして、父母を愛するように、兄弟を愛することを学ばなければなりません。学ばなくては、愛することができないのです。ですから、兄弟たちをお母さんとお父さんが育ったその時の姿だと思って、愛することによって、あの世に行っても、いつでもお母さんとお父さんを愛することができるのです。恥ずかしがらずに愛することのできる主人になるために兄弟が必要なのです。

では、兄弟たちが、お母さんとお父さんを愛するよりも彼ら兄弟同士がもっと愛し合うのがいいでしょうか、愛し合わないのがいいでしょうか。もっと愛し合うのがいいのです。なぜでしょうか。子女にお母さんとお父さんの育つ時の姿を見せてあげ、彼らを愛することによって、生まれてから死ぬ時までお母さんとお父さんを愛したという立場を立てるための、愛を中心として因縁づけられたそのような兄弟たちなので、そのように考えるのです。

それから、父母においては、子女が多ければ多いほど、お母さんが思うに、男の子たちがあのように意地悪く育つのを見ながら、「ああ、うちの夫はああして育ったんだなあ」と分かるようになるのです。ですから、

子供たちを愛することは夫に会う前の夫を愛する立場になるのです。また、男性は「ああ、あの女の子を見ると、お母さんがああだったんだなあ！　幼い時のお母さんを見せてくれているんだなあ」と、学ぶのです。彼らを愛することによって、今までのお母さんの全体を愛したという条件が成立するのです。

父母は「おい！　男の赤ん坊だけかわいがって、女の赤ん坊はかわいがるな」とはいいません。父母は子女を同じように愛するのです。区別なく愛するのです。ですから、このように兄弟をもつのは家庭に美しい愛の円和、丸い球形を形づくるためなのです。

父母は、兄弟たちが、父母に対するのと同じように、互いに接してくれることを願います。すべての父母がそうです。ですから、兄弟を憎むことはお母さんを憎むことよりも大きな罪です。これが家庭教育において第一条です。今まで、皆さん、兄弟同士争い、仲が悪くなっているなら、行って、宴会をして、満足させてあげ、許してくれといいながら、うちのお母さんとお父さんを愛するように愛し合おうといわなければなりません。

兄弟がお母さんとお父さんの身代わりなので、残されたお母さんとお父さんに侍ろうといって、兄弟が貧しければ自分が助けてあげ、お母さんのためにしてあげたように、してあげるなら、それより美しいことがないのです。そこから天国が始まるのです。（一八四－六五）

五　おじいさんは家の神様の立場

今日のアメリカの制度は、全部、若い人たちの天国であって、おじいさんとおばあさんの天国ではありません。幼児たちの天国ではなく、おじいさんとおばあさんの天国ではなく、若い青年男女たちの天国なので、全部、滅びの地獄の穴を掘っているのです。それは本然の形態に合わないからです。（一〇七－三二八）

アメリカの家庭ではおじいさんが息子たちの家に行くとき、電話をして行きます。人間なら、どちらを好むでしょうか。皆さんはどちらを好みますか。

美しい嫁が白髪まじりのおばあさんとおじいさんに、愛らしい気持ちをもって愛する夫よりもいいものを買ってあげようとすれば、それがどれほど美しく、どれほど愛らしいかというのです。美しい嫁が、老いたおじいさんとおばあさんがしわくちゃであるにもかかわらず、何かを買うのに自分の愛する夫に買ってあげる以上の喜びで買ってあげるその場面がどれほど素晴らしいかというのです。そうなれば、おじいさんとおばあさんは隠してあったすべてのものを、愛に関するすべてのものを全部、与えるのです。

世の中で年をたくさん取ったおじいさんはだれでしょうか。神様です。ですから、そのおじいさんのために尽くす愛を自分のおじいさんから学ぶのです。このような伝統を学び、おじいさんである神様のすべての秘密の倉庫にある愛の宝物を自分がもらうことができるのです。どれほど素晴らしいかというのです。（一〇七－三二九）

世の中で一番経験が豊かで、豊富な経歴をもった神様がだれかというと、おじいさんとおばあさんです。年を取っているので、あまりたくさん寝ないのです。ですから、「ああ、おじいさんはわが家を寝ずに守ってくれる神様だなあ！　私たちを守ってくれるために、こんなに年を取ったんだなあ！　しわを見ると、年を取ったなあ！」と、そう考えなければなりません。それが美しいのです。そのようなおじいさんとおばあさん、年を取ったおじいさんとおばあさんに仕えるなら、火事にもならないし、泥棒にも遭わないのです。

おじいさんとおばあさんが寝なくて何をするのでしょうか。祈祷をするのです。「神様、うちの子女に恵みをお与えください。恵みをお与えください」と、祈祷するのです。祈祷して、「おい、だれそれや！　おまえ、きょう、出歩いたら危ないよ。言うことを聞きなさい」と、このようにすべてを教えてくれるのです。「きょうは出かけてはいけない！　けんかをしてはいけない！　息子よ、どこかに行かないようにしなさい、娘よ！　嫁よ！　きょうは遠くに行ってはいけない」このように教えてくれるのです。

ですから、孫たちにそのようなおじいさんとおばあさんが必要でしょうか、必要ではないでしょうか。愛をもてば、おばあさんとおじいさんも小躍りし、お母さんとお父さんも小躍りし、兄弟同士も小躍りするのです。このような形態を備えて暮らす人は、宇宙が保護するのです。だれかがその人を殺そうとすれば、自動的に宇宙が防いでくれるのです。（一〇七－三二七）

父母は孫をどこか送ろうとすれば、必ずおじいさんの承諾を得なければなりません。父母の勝手にはできません。おじいさんが神様の立場になるのです。（一〇七－三二六）

六　祖父母と孫との関係

考えてごらんなさい。孫がですね、よちよちと歩き回る孫が家に入ってきて「ああ、おじいちゃん、おばあちゃん、どこ行った」といえば、どうですか。お母さんとお父さんも座っていて、自分の兄弟たちもたくさんいますが、入ってくるやいなや、「おじいちゃん、おばあちゃん、どこ行った！」というなら、それがふさわしいですか、変ですか。それはどれほど変でしょうか。言葉もぞんざいに使って。「おじいちゃん、どこ行った」

では、その言葉を考えてごらんなさい。今、八十歳を越えたおじいさんとおばあさんにこれはほんの子供が大胆にふんぞり返って、突っ立って、お父さんとお母さんも全部いるのに、お兄さんとお姉さんが自分よりも立派なのに、そこにふんぞり返って、突っ立って、「おじいちゃん、おばあちゃん、どこ行った！」といっても、全部、目をまん丸くして、「おい、こいつめ！　この子は！　何だ」と、叱る人はいません。

それはなぜでしょうか。ふつうならば、ほかの所からほかの人たちが来て、そういったなら、「うちのおじいさんに向かって、おまえ、そんなことがいえるか」と、大騒ぎになるはずですが、孫がふんぞり返って、突っ立って、そのような話をすれば、喜びます。

「そうか、そうか、おじいさんに会いたいのか」となるのです。

それが何かというと、おじいさんに対して、「どこに行った」というのが、餅をくれということですか、ご飯をくれというのですか。その内容が問題です。内容が何かというと、おじいさんに会いたいということです。そうなれば、会いたがるのはいいことですか、悪いことですか。それはいいことだというのです。

天下が会いたがり、また、会いたいと同時にその次には、どうしたいのですか。じっと四方を見渡しても、お兄さんをじっと見て、お姉さんをじっと見ても、今、どこかの膝のところに行って少し座りたいのに、こちらを眺めても、あちらを眺めても、お兄さんの顔色をじっとうかがって、行って三分だけ座れば、追い払われるのが分かり切っているのです。また、お父さんもよく見ると、忙しくて疲れたお父さん・・。それは皆、経験を通して知っているのです。行って、お尻を載せて十分だけ座っていても、嫌がります。それは、皆、測定感覚が早いのです。さっと見て・・。

けれども、おじいさんは、おじいさんをよく見れば、おじいさんのように年を取った人たちは、膝に座れば、一時間座っても、じっとしており、二時間座ってもじっとしているのです。そのように座っても、家族の中で一番自分をたくさん抱いてくれるのです。抱いてくれて、「この子はどうで、この子は耳がどうで」といいながら、触ってくれるのは嫌ではありません。整えてくれ、なぜてくれ、触ってくれ、あるときは、触らないところがないくらい、すべて触ってみますが、それでも嫌ではありません。それがどれほどすてきですか。どれほど素晴らしいかというのです。それは木の一番てっぺんが、本の幹のてっぺんが根と一つになろうという、その話と通じるのです。

では、中心の根と中心の芽とが愛し合うようになれば、どのようなことが起こるでしょうか。そこにつながったすべての根とすべての枝は、愛し合うまいとしても、愛し合わざるをえなくなるのです。それを考えてみなさい。中心の芽と中心の根とが愛し合うようになれば、それが何かというと、全体を抱くことのできる因縁だというのです。このように見るとき、根の中で中心の根が家庭の中でだれですか。孫、長男の長男だというのです。それゆえ、おじいさんはいつも目を開けて長男の長男を見上げ、また見下ろすのです。これを知らなければなりません。（一三九－一五）

七　家和万事成の真なる意味

わが東洋の教訓の中で「家和万事成」という言葉がありますが、それはとてもいい言葉です。家といえば、そこはもちろん人が中心になっています。おじいさんとおばあさん、父母、子供、このようにいますが、それだけではありません。家自体は万物を縮小したものです。そこにすべて集まっているのです。

そのように考えるとき、わが家といえば、ふつう「そこは父母がいるところであり、妻子がいるところである」と考えるのです。しかし、わが家といえば、それだけではないというのです。おじいさんとおばあさんがいて、そのほかにも家があり、庭があり、すべての

ものを縮小したものの中に環境がよく調和しています。そうしてこそ気分がいいのです。合わない環境に、うちのおじいさんとおばあさんがいれば、気分もよくないのです。

おばあさんとおじいさんが互いに向かい合いながら笑う姿は、若い夫婦がうれしくて、大声で「へへへ」と笑う姿とは比較できません。「ほっほっほっ」といいながら、しわが寄ったおじいさんとおばあさんが笑う笑みはすてきだというのです。知らないからそうなのであって、全部、和合する、互いが相応する立場で笑うそのおじいさんとおばあさんの笑みがあることによって、すべてのことが和動するというのです。おじいさんの笑いは深くて、「はっはっはっ」と笑います。手ぶりをしても、動作はのろいのですが、広く、気高く、深く、大きくするのです。

すべてのことが上・中・下の三段階で連結されてすべての調和が始まらなければなりません。それゆえ、調和というものは一線上の二点では成されません。二点を通過するものを線といいますが、二点上では調和の美がないのです。直線なのにどうして調和の美が生まれますか。ねじれ、曲がっていてこそ調和が生まれるのです。それゆえ、三点以上を経る、ここに調和が生まれるのです。ですから、おじいさんがいるかと思えば、中間にお父さんがおり、次には、その下がいます。だいたい家庭を四代として見るのです。おじいさんとおばあさん、お父さんとお母さん、それから自分の夫婦、それから子女がいます。

層々侍下（父母・祖母など世話すべき人が元気でいること）という言葉があるではないですか。層々侍下が何層になるでしょうか。いくら多くとも、もちろん四代、五代まで暮らす家庭がときどきあるでしょうが、ふつうは四代です、四代。おじいさん、お父さん、それから私たち、子女、このようになっているのです。こう見れば、私たちの統一教会の原理は三段階です、三段階。蘇生、長成、完成。

ですから、「和」する家庭、「家和万事成」といいますが、その「家和」になれば、なぜ「万事成」でしょうか。「家和」になれば、すべてのことが成されるというのですが、なぜそうでしょうか。言葉でだけでそうでしょうか。詩的で詠みたくてですか。そういうことではありません。違います。「家和」、これはおじいさんとおばあさんを中心とした四代が上に、下に、東西南北に、前後左右上下に和合して、笑顔の花が咲くことをいうのです。（一三九－一二）

第三章　家庭は天国の中心模型

一　家庭はすべての存在の中心モデル

人が空間の世界に立つようになれば、必ず上下が必要であり、左右が必要であり、前後が必要です。それでこそ自分の存在位置が確定されるのです。皆さんが上下を正しく備えているか、左右、前後を正しく備えているかによっていろいろな姿になるのです。

皆さんの上下、左右、前後関係、そして家庭の問題や国の問題、世界の問題を扱う上で、公式は一つです。個人を中心として上下、左右、前後があるように家庭でも父母と子供がいなければならないし、夫と妻がいなければならないし、兄弟姉妹がいなければならない

のです。同じように、国にも国の主人を中心としてすべての家庭が東西の文明、南北の文明をすべて抱き、その次に世界万民を兄弟姉妹のように抱き、結局一つの家庭モデルを実現するのです。モデルは同じです。そして私自身がそのモデルの中心です。

自分がいて次には自分の家庭がなければならないし、国と世界と天と地、そして神様まで行かなければならないのと同じ道理です。皆さんは宇宙の中心になりたい思いがあるだけでなく、皆そのようになることができます。

このように宇宙においてその核のようなものが家庭の概念です。天を父母と見れば地は子女です。東西を見れば東方は男を象徴し西方は女を象徴するので、女は結婚することによってどこでも夫の位置に従っていくのです。西方が太陽の光を浴びて光り輝く時東方と同じ価値をもつのと同じです。兄弟関係も同じです。長子である兄さんを中心として行動するとき、弟たちが協力するようになるのです。

ですから人間は親子の関係がなければならず、夫婦関係、そして兄弟関係がなければなりません。すなわち、この三つの関係が一点で結ばれなければなりません。その中心点は一つです。上下、左右、前後の中心が違ってはいけないというのです。この中心点が違えば上下、左右、前後関係の均衡がみな崩れるというのです。それで結局上、下、左、右、前、後、そして一つの中心点まで全部で七数をなすようになるのです。

このように七数を成すというのはまさに神様を中心として完全な真の愛で一つになりこのすべてが完全に球形になって、調和と統一を成す家庭になるというのです。私たちがよくラッキー七というのもこのような観点から一理あるというのです。

真の愛が永遠に変わらない限りこの中心核も変わらず、永遠に回るようになり真の家庭の理想が成されるようになります。またすべてのものが核から連結されるのでこの中心核から一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、全部が同等です。おじいさんが願えば孫が反対せず、息子・娘もそれを願うようになり三代がみな共に願うようになるのです。おじいさん、おばあさん、夫婦、息子、娘みんな中心に合わせるようになります。

この愛を中心として見るとき、親子の関係も一つなので一体と言うし、夫婦関係も一体と言うし、兄弟関係も一体と言います。一つの体です。何を中心としてこのような関係を一体と言うのかといえば愛の中心である神様の真の愛を中心として言うのです。真の愛を中心として父母と子供が一つになり、夫婦も一体となり、兄弟姉妹も同じです。このようになることによってすべての価値が同等になります。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五七）

二　家庭は宇宙の愛に接する愛の教材

宇宙とは何でしょうか。被造世界のすべてのものは神様が愛する息子・娘が愛の理想を求めていけるように教材としてつくっておいたものです。それですべてがみな相対的な構造です。鉱物も主体と対象の関係で作用しま

す。原子もそうです。陽子と電子が主体と対象の関係で作用します。作用しなくては存続することができません。運動をせずしては永続、存続ができないというのです。ですから宇宙は人間を中心としてその重点に到達できるように創造された世界だというのです。（一三七－五九）

宇宙とは何なのでしょうか。家庭を拡大したものです。家庭の愛を完全に成した家庭を見れば上中下（父母・夫婦・子女）がいて、左右がいて、前後がいます。これが原則です。それで上下を言うときは父母と子女のことを言うし、左右を言うときは夫と妻のことを言うし、前後を言うときは兄弟のことを言います。このような全体が何によって一つになるのでしょうか。力でもなく知識でもお金でもできません。ではどんなものでできるのでしょうか。愛です。間違いのない真理です。そうでなければ球形にならないのです。

それなら上中下は私たち家庭において何なのでしょうか。愛の教材です。宇宙の愛に接することのできる愛の教材です。そのようなことを社会に出てしなさいというのです。どのように愛さなければならないのでしょうか。イエス様も「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」と言いましたが、どのようにすればいいのでしょうか。漠然としています。

世の中に出ていっておじいさんに接するときは皆さんのおじいさんのように対しなさいというのです。お母さんのように対し、お父さんのように対し、息子のように対しなさいというのです。

世の中に出れば、みなそのようにしなければなりません。上中下と前後左右の人が世界という展示場に展示されています。人の博覧会が世界だということを知らなければなりません。皆さんがそのような愛を持ってすべてのものを愛することができればその中に神様が共にあります。（一二八－二三）

天国とは何でしょうか。自分の家庭のように世界の人々を愛することのできるところが天国であり、そのような人が天国の民です。おじいさんとおばあさん、お父さんとお母さん、自分の妻、兄弟、子女、この四代は何でしょうか。天の国の民として愛を、宇宙の真の愛を体験するための教材としての家庭です。教材として私に教えてくれる基盤が家庭だというのです。（一二九－九八）

私たちは宇宙の愛を習わずしては生きられません。神様は教本や経典のようなものをつくって「あなたのおばあさんとおじいさんを愛しなさい。地上にいるおばあさんとおじいさんは霊界のおばあさんとおじいさんを代表して送ったのでそのおばあさんとおじいさんを愛することは全体を愛することにしてあげる」と公約するのです。

その次には「あなたかお母さんとお父さんをこの上なく愛することはこの世界の数多くのお母さんとお父さんを代表する教本のように愛するモデルにしたので全体を愛した条件にしてあげる。また男性として女性を愛したことは世界の男が世界の女を代表的にまとめて愛したこととして見てあげる」というのです。

またその次は「あなたの息子・娘を愛したことで全体の息子・娘をみな愛したことにしてあげる」というのです。ですから家庭はその訓練を受ける訓練所です。経典による世界の愛の訓練過程ですが、その訓練を受けた人に今からこの世に一度出て皆さんのおじいさんとおばあさんの代わりにこの世のおばあさんとおじいさんを愛することができるのかというとき「イエス」と言えば、それは世界を救うことができるのです。（一三〇－二七三）

三　愛の王国に入籍するための愛の訓練場

愛の王国を実現したいのが神様のみ意です。愛の理想世界を発展させ世界化させようとするのが神様のみ意だというとき小学校卒業から大学の学士・博士卒業までパスすることのできる実験場がどこかといえば家庭です。

家庭を拡大すれば世界です。世界をよく見てみるとおじいさんとおばあさんが住む世界、それからおじさんとおばさんが住む世界、兄さんと姉さんのような人たちが住む世界、青少年たちが住む世界、子供たちが住む世界があります。ですから老年から壮年、中年、青年、少年たちが住むここが、形が大きいだけであり数が多いだけであって家庭を拡大させたものです。（一四七－二八一）

家庭は天国に入ることのできる最小単位の修練所であり、教材です。そこにはおしいさん級、お母さん級、夫婦級、兄弟級が皆あります。これをおじいさんとおばあさん、あるいはお母さんお父さんの年齢、その次には自分の年齢、息子・娘の年齢に拡大させたのが世界人類です。この人類を自分の妻のように愛し父母のように愛し、息子・娘のようにために生きることのできる家庭だけが天国を相続できるのです。これは驚くべき事実です。神様がつくられた天と地のすべての権勢を相続できる特権がここにあるのです。（一四三－二八五）

家庭は死ぬとき天の国や平和の王国に入籍する手続き権を得ることのできる愛の教科書です。家庭が愛の修練場だというのです。この家庭を拡大したものが世界です。おじいさんのような世界があり、おばあさんのような世界があり、お父さんとお母さんのような世界があり、夫のような世界があり、妻のような世界があり、息子・娘のような世界があるというのです。これを拡大すればそのまま世界になるというのです。ですから自分の家庭を愛するように、その家庭を中心として神様を愛するように全世界の人々を愛すればそれが天国にまっすぐ行く道になるのです。

したがって「心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして主なるあなたの神を愛せよ」というのが第一の戒めです。第二は「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というものです。神様を愛し人類を愛せばすべて終わるのです。それができなければいくら修養しても意味がありません。宗教でいくら修業を積んだとしても神様を愛することを知らず、人類を愛することを知らず、全宇宙を愛することを知らないならばすべて落第になるのです。

家庭で全体宇宙を縮小させた修練所のような公式過程の愛を体験して拡散させ、世界を

愛さなければなりません。そうすることのできる訓練場として引き継いだのが皆さんが育った、お父さんとお母さんが住む家庭だというのです。

ですから自分の妻を愛する以上に父母を愛し、自分の妻を愛する以上に息子・娘を愛し、自分の妻を愛する以上に人類を愛し、自分の妻を愛する以上に神様を愛するならすべてオーケーです。だからといって自分の妻を捨てろというのではありません。そのようにみんなを愛するようになればその愛を受けたすべての人々が自分の妻を愛するようになるのです。それ以上の栄光の場がどこにあるでしょうか。自分の妻を愛そうとするならば、そのようにしなさいというのです。（一四二ー二四二）

四　家庭は天国の模型教科書

子女の立場にいる人はどんな運勢を受けなければならないのでしょうか。祖父母と父母の運勢を引き継がなければなりません。祖父母はなぜ必要なのでしょうか。過去を代表するからです。祖父母は過去の生きた歴史を代表します。その次に父母は現在を代表します。それから子女たちは未来を象徴します。そこには東西も入っているし、南北も入っています。そして全体の中心です。祖父母の中心、父母の中心、子女の中心、神様の中心、このすべてのものが真の愛を中心としたものです。

ですからおじいさんを愛しおじいさんを尊敬するのは過去をすべて引き継ぎ、過去の世の中を学ぶことです。お父さんからは現在を学ぶのであり、子女を愛することは未来を学んでいくことです。おじいさんとおばあさん、お母さんとお父さんを通じて何を引き継ぐのでしょうか。真の愛を引き継ぐのです。おじいさんとおばあさんは年を取っていますが二人が真の愛に一つになっており、お母さんとお父さんが一つになっているので私たちもあのようになって未来を引き継ごうというのです。ですから絶対に真の家庭にならずしては未来を引き継ぐことができないのです。

家庭のこの三つを見る時、それは宇宙を見るのと同じです。宇宙の愛は現在と未来を代表した真の家庭にあるのです。動物世界を見ても雌を愛し雄を愛しますがこれは宇宙の愛を学ぶことのできる教科書です。おばあさんがいなければ不安定です。おじいさんがいなくても不安定で、どちらがいなくても同じです。このようになればそのまま天の国へ移っていくのです。祖父母、父母、子女がそのまま天国に行くのです。真の祖父母を愛し、真の父母を愛し、真の子女、真の家庭、真の国家、真の宇宙を愛した人が天国に行くのです。その模型教科書が家庭です。（一六二ー一四〇）

家庭は天国をつくることのできる教材です。天がつくっておいた教材です。世界にいるおじいさんの年齢の人をみな自分のおじいさんのように愛すればその人は天国に行くようになっています。自分の父母のような年齢の人を自分の父母のように愛すればどこに行っても通じます。万国共通です。霊界に行っても境界線ができないのです。万国の若者を自分の子女だと思う心をもてば彼は十二の真珠門があり方向があっても天国のどこでも通じるのです。ですから家庭というのは天国と因縁を結ばせるための教材です。

それを国に適用すれば愛国者になるのであり、世界に適用すれば聖人になるのであり、天地を中心とすれば神様の子女、聖子になるのです。人はみな、そのような欲望をもっています。（一三七ー七八）

皆さんは五色人種の子女を抱きその孫たちを抱くことができなければなりません。ですから神様の真の愛をもって真の父母として世界人類を愛する家庭の主人になったという立場に立たなければなりません。神様の愛を中心とした本然の父母の因縁の中で真の愛の家庭基準を代表することのできる立場に立つことによって、初めて天国に入ることができるのです。（一七六ー二一〇）

五　家庭は三時代の愛が結集した核心体

歴史を抱き、時代を抱き、未来を抱くことができるのが家庭です。ですから神様が今まで六千年を経ながら求めてきた最後の基点は何でしょうか。家庭です。その家庭は愛が連結された、愛によってすべてが結束された家庭です。存在するすべてのものはみなこれに主管を受けるのです。根源的な愛、絶対的な愛との関係を離れることはできません。このような家庭をつくるのが神様が創造当時にアダムとエバにくださった本来の使命ではなかったのでしょうか。

神様は男性アダム、女性エバとして終わるのではなく互いに結合した新しい家庭を夢見られたのです。これが神様が男女を立てられた第一次的な出発の起源です。ですから家庭を求め、家庭圏内で神様の愛を中心としてこの世で充足感を感じることのできる境地に入って生きてこそ天国も無事に通過するのです。そうしてこそ、この世界も切り抜けられます。（三〇ー八六）

愛の家庭園を形成するためには絶対的でなければなりません。父母は歴史に代わることができるものであり、夫婦は時代に代わることができるものであり、子女は未来に代わることができるものです。自分が一つの時代で一人の相対を愛することは、神様が世界に対されるのと同じことです。ここで父母と夫婦と子女が一致し、天雷を代表して私たちの愛を見習いなさいと言うことができるし、後孫たちに対して私たちに従いなさいと言うことができるし、内心や外心で主張できる心の本郷、天情が通じるそこは天地に記憶されることでしょう。（三〇ー八〇）

今まで神様は何を探してこられたのでしょうか。主体を探してこられたのではありません。理想的な対象を探してこられたのです。神様に似て、ご自身がつくられた世界の内外の内容を備えているものを探してこられたのです。このような結果的な一つの基点が何でしょうか。家庭です。家庭より宇宙を代表することができるものがないのです。

父母と一つになることは歴史と現実が出会うことです。ここで「私」は父母を愛することで過去を愛することができるし、相対を愛することで現実を愛することができるし、子女を愛することで未来を愛することができます。ですから私は、三時代の愛を体験することができるのです。三種類の愛が結集した核心体がまさに家庭です。（三〇ー八〇）

では天国生活はどこからでしょうか。家庭からです。他のところから始まるのではありません。天国は家庭を立体的に拡大させただけであって、家庭園を離れたものではないというのです。ですから皆さんが自分の妻や夫を抱くときにはこれは世界の男性と女性が一つになるのだと思わなければなりません。このように世界人類を愛したという条件を立てることのできる場が、まさにこの家庭なのです。

皆さんはそのように生きていく道を求めなければなりません。父母を愛することは歴史と現在を連結させることであり、神様が訪ねてくることのできる道を整えることです。ですから父母を愛さなければなりません。歴史的な存在と時代的な自分を連結させること、すなわち過去と現在を一つにすることが父母を愛することです。また自分を中心として子供を愛することは、現実と未来を連結させることです。そしてこのような愛を千年万年たたえるようにしようという思想が統一思想です。（三〇－八三）

六　家庭は心情的な訓練場所

私たちは心情を離れては生きられません。自分が大統領だとしても、あるいは世界的なすべての権威をもったとしても心情的な喜びを表せるところがなければ生きられません。自分が率いる人たちや閣僚たち、あるいは追従する人たちには心情的な満足を感じることができません。それは家庭で感じなければなりません。

家庭に帰ってきて夫婦が互いを通じて喜びを感じ、また子女を通じて喜びを感じることができなければなりません。そうしてその喜びを他の人に誇ることができなければなりません。その喜びは第一次的な喜びであって二次的な喜びではありません。神様も同じです。この世界をすべて復帰したとしても家庭のない神様は喜ぶことができないのです。結局、家庭がなければならないのです。（二五－八六）

家庭では父母を中心としなければならないし、社会を代表する教育機関では先生を中心としなければなりません。父母は自分に乳を飲ませて育て、すなわち生理的な発展を助け、それで情緒的な面を助けてくれるのです。では、学校は何でしょうか。社会的な生活、将来の生活舞台を中心として訓練させるのです。家庭が情緒的な訓練場なら、学校は社会においての実験的な訓練所です。

社会で終わるのではありません。それがどこに行って帰結するのでしょうか。国に帰結します。国には国王がいます。人々がみな大統領を慕い、大統領の近くにいようとする理由は何でしょうか。家庭から社会まで、すべてのことを知ってから、それからどこに行くのかというと、もっと大きなところに行くのです。

大統領といえば蘇生、長成段階を越えて三つ目の段階の結実です。種が根から始まって循環作用をして分かれます。分かれてここで統合され花が咲き実を結ぶのです。ですから学校も国のための貴重な棟梁、人材を養成し国に必要な人を育てなければならないのです。学校でする勉強とは何でしょうか。訓練です。ですから学校は訓練場所、実験場です。訓練

は実戦ではなく準備段階です。準備を誤ってはなりません。

家庭とは何でしょうか。心情的な訓練場所です。愛を中心として心情的に訓練する場所です。ですから情をもって兄弟のように学校で生きなければならないし、情をもって国でも兄弟のように生きなければならないのです。父母のこのような教育は学校のための教育であり、社会のための教育であり、国のための教育になるのです。

父母は情緒的なすべてのことを子供たちに伝授してあげなければならないのです。父母が生きたのと同じように家庭ではこのように生きなければならないし、社会ではこのように生きなければならないし、国のためにはこのように生きなければならないという情緒的なパターンを築いてあげなければならないのです。（一八〇－一三〇）

皆さんが家庭のことを見るとき、家がよく、その周りの環境がいいからといっていいのではありません。反対にいくら環境が悪く、家がみすぼらしくてもそれを安息所として、そこに自分の事情と生涯と生活のすべての基準を因縁づけようとする家庭がいい家庭なのです。そこには親と子の間に、互いにために生きようとする心情があります。これが思い出の本郷であり、すべての生活の動機になるので私たちの生活において幸福を左右する基礎になるのです。（二九－一七）

七　人間の永遠の本郷は家庭

家庭、家庭はいいところです。どうしていいのでしょうか。お母さんとお父さんがいるからいいところであり、お姉さんとお兄さんがいるからいいところであり、弟妹がいるからいいところであり、親戚がいるからいいところなのです。ですから人間なら誰でも本郷の地、故郷を懐しがる郷愁の心情をもっているのです。国よりも故郷にもっと想いを馳せます。大韓民国で暮らしながらも懐しがるところが故郷です。大韓民国が好きで大韓民国に住みたく思いながら、また大韓民国で暮らしながらも懐かしいところはどこでしょうか。故郷です。故郷。故郷なのです。

故郷はどのようなところでしょうか。私の心情を四方に、立体的に全部引き上げるところです。その心情とは何でしょうか。愛で結びつけるものです。上には父母が結びつけられ、左右には夫婦の因縁が結びつけられ、下には子女、親戚が立体的な愛で堅く結びつけられているところが本郷です。人は愛を中心とした幸福の基点を最高に望むので本郷を慕わざるをえないのです。

では神様の本郷はどこなのでしょうか。この地球星において神様の本郷の地はどこなのでしょうか。これは考えなければならない問題です。愛の神様ならこの地上で生きていける基点を必ず準備されたはずですがその基点はどこでしょうか。それを知るためには神様がその基点を準備するためにどのようにしてこられたのかを知らなければなりません。

神様の家庭を準備することのできる本郷の基点になりうるところはどこなのでしょうか。他のところではありません。神様を本当の父

だと思う息子がいるところです。すなわち、神様の愛を独占することのできる息子、ひとり子がいるところです。またそのような娘がいるところです。そうしてその息子・娘が結婚して完全な家庭を築くところです。（二三一一五一）

ではその本郷の地には誰がいなければなりませんか。見たい人たちがいなければなりません。父母がいなければならないし、兄弟がいなければなりません。また会いたい方がいなければなりません。またそこにはいっしょに住みたいしいっしょに住みたいのに一瞬会うだけでいいでしょうか。ちょっとだけ会って済むでしょうか。彼らに会って彼らと共に住むにおいては永遠に永遠にいっしょに住んでも嫌になってはいけません。そのようなところを探していかなければなりません。そこが今日、宗教で目指す天国なのです。（二三一八一）

今日私たちが本郷の地を慕うのは、その本郷にはどこの誰よりも近い父母がいるし、兄弟がおり、親戚がいていつも私を導いてくれ、また私がいついかなる時に訪ねていっても私を昔のように迎えてくれ、私に困難なことがあればその大変な事情に同情し慰労してくれ私を喜んで迎えてくれるからです。もしそれがなければ本郷が懐かしく好きで訪ねていっても切実に慕っていた当時の心情はなくなりかえって嘆息の条件をもって帰ることになることを知らなければなりません。本郷の地には必ず迎えてくれる人がいなければなりません。（二三一八〇）

八　家庭は天宙主義を完結させる最終基準

すべてのものは一つから多くのものに分かれて結局一つの大きなものに統合されます。すなわち一つからいくつかに分かれてから一つに統合されるのです。ここでまた分かれてより大きなものになるのです。そこには家庭がありますが形態は統合される前と同じです。家庭は夫婦を成したところであり、その夫婦を一つにするところです。氏族は家庭を一つにするところであり、民族は氏族を一つにするところです。民族が集まって一つの国家の前に全部入ります。ここにおいてはどこまでも家庭が中心になります。この家庭を展開させれば横的な世界になるのです。ですからどのような社会であったとしても家庭を除くことはできないのです。

家庭を復帰することができなければ世界を復帰することができません。その次にはその家庭を中心として天宙主義を成就しなければなりません。天宙は天と地を総合したものです。天と地は人間において心と体のようなものです。心と体が一つにならなければなりません。一つの主体があれば一つの相対が必要なように一人の男性には一人の女性が必要なのです。男性と女性が一つになるのが家庭です。この一つの家庭を中心にしなければ神様の愛の基盤が定まりません。

天宙主義というのは心と体を合わせたのち、神様の愛の本体となる家庭を築いてその理念を霊界と肉界に連結させる主義です。天宙の宙という字は家を意味する字です。家を表す宙です。ですから天宙主義という言葉を使うのです。天宙は無形世界と実体世界を合わせたものです。これが私たちとどのような関係があるのでしょうか。私たちは家庭が必要で

す。皆さんが家庭で一つになれなければ天宙主義とは関係がないのです。家庭が天宙主義を完結させる最終基準になるのです。ここで平和の歌を歌うことができず幸福をたたえられない人はこの地上でも霊界に行っても不幸な人になるのです。（二六ー一八九）

天国はどこから成されるのでしょうか。私たちの家庭から成されます。では私たちは何主義でしょうか。家庭主義です。私たちが標榜する天宙主義は天の字に家を意味する宙の字、すなわち天の家主義だというのです。このようになってこそ天宙という意味がはっきりするのです。ですから聖書六十六巻はすべて理想的な家庭を願ったみ言です。

また万民が願うものは何でしょうか。理想的な妻をみな迎えることです。また女性として生まれて最も願うことは理想的な夫に出会うことです。女がいくら学士博士になって世界に大言壮語するとしてもその願いは理想的な男性に出会うことです。愛することのできる理想的な男性に出会って恵まれた子女を生むことです。これが幸福の根です。統一教会の理想は他のところにあるのではありません。出発も家庭であり、結論も家庭です。（二六ー一〇三）

では天宙主義とはどのような主義でしょうか。真の父母主義です。結局この二つの主義は父母の主義です。これはわが家の主義であり、わが国の主義であり、皆さん個人の主義です。人間が堕落しなかったならば世界は誰の主義になるでしょうか。アダムの主義になるのです。そのアダム主義がまさに真の父母主義です。父母主義だというのです。これ以上の他の主義はありえないのです。ですから統一教会は心情的な問題をこの本然の理想的な家庭の範囲の中で真の父母という理念を中心として天主義と結びつけなければなりません。このような理念で制度化された家庭の因縁が残っている限り統一教会は滅びません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五〇二）

第四章　愛を中心とした人生行路

一　人間はなぜ生まれたのか

生命が先か、愛が先かというとき、互いに先だということができますが、果たしてどちらが先でしょうか。愛が先です。宇宙の根本は、存在起源に先立って愛の流通がなくては、存在価値が出てくることができません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六二）

私たちの生命の起源がどこなのかを見るとき、生命が先か、愛が先かが問題です。今までこれを見分けられませんでした。生命が先ではなく、愛が先です。先どなったものの前に、次となったものは順応しなければならないので、愛のためには生命を捧げるのが当たり前なのです。このように、これは収拾しておかなければなりません。そうすれば、人生を真に生きる道はどこなのかという結論が出てきます。

生命が愛から生まれたので、愛の道を行かなければならず、愛のために死ななければならないという結論が出てきます。小宇宙ではなく大宇宙が歓迎できる愛を探して、神様が公認し、天使世界が公認し、万物が、ひいてはわが父母が公認できる大宇宙愛の中に現れ、

その中で愛し、死んでいくのが人間が生まれた目的だと見るのです。

人間とは、自分が希望して生まれた存在ではありません。それなら、お父さんとお母さんの希望によって生まれたのでしょうか。そうではありません。神様の希望によって生まれたのです。神様の身代わりである父母の愛を通して生まれたのです。神様の身代わりである父母の愛を通して、新しい生命体として生まれたのが「私」です。そして、愛は全体を創造する力をもっています。宇宙の愛のすべてを受けて、全天宙の中心的な存在として生まれたのがまさに「私」です。

愛によって生まれ、愛によって育てられ、愛によって生き、また愛を残すのが人生において最高の目的です。自分の家庭で、天宙の中心である愛の使命を果たすことが最も価値あることです。人がなぜ生まれたかということを知らなければなりません。人は、知識や権力ゆえに生まれたのではありません。人は、愛のために生まれました。また、愛から生まれました。それでは、愛は何ゆえにそのように偉大なのでしょうか。それは生命の源泉であるからです。

皆さんは父母の愛の中から生まれたのです。お金を数えたり、知識をたたえる所から生まれたのではありません。このように愛の中で生まれたので、愛によって結実しなければならないのです。ですから、子供が必要なのです。夫婦が一つとなり、息子・娘という相対がいるとき、完全なのです。

人間自身も愛を離れては存在することができないのです。ですから、「私」の存在は、愛を元として生きていくといえます。すべての万物も、その存在の始まりが神様の愛から出発しています。万物の存在が愛を元として始まったとするなら、彼造世界の中心存在である人間は、より一層愛によって出発した存在だということを否認することはできないのです。人間は愛から出発し、愛によって円熟するため、愛の基準を離れては生きることができない存在なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六二）

二　愛を中心とした創造本然の人生

人間というものが存在するようになった原因は何でしょうか。人間は愛から始まったのです。それでは、人間存在の目的はどこにあると考えますか。人間という存在の目的は愛の理想を完成することです。人間が愛を原因として存在するようになったので、愛の基台を成して、拡張させ、連結して完成することが目的となるのです。

すなわち、出発が愛なので、目的も愛をもって到達しなければならないというのです。そうしながら、相対的関係にある男性と女性が愛を中心として一つになり、前後・左右・上下に連結させることができなければなりません。

私たちがいくら絶対的な存在を確定し、いくら絶対的な目的を確立したとしても、そこでうれしくなければ何の役にも立ちません。生きて生活するのがうれしくなければなりません。生活するのは目的のためにするのです。

その目的を成就したとき、そこには存在、それ自体以上の新しい何かがあることでしょう。それは何でしょうか。

男性なら男性、女性なら女性を中心として見るときに、彼らに何よりも最も貴いものは何でしょうか。愛です。愛だけがこれと連結させることのできる幸福の要因となるのです。人が目的をいくらよく立てたとしても、その目的を主管すべき主体的な愛の権威を立てられないようになるときには、再び新しい目的を追求しなければなりません。目的の限界点が愛より上にはなり得ないのです。

皆さんは何ゆえに生きていますか。食べるためにと答える人もいるでしょうし、あるいは仕事をするために、または何の目的もない生を生きているという人もいるでしょう。人間は何のために生きるのでしょうか。愛のために生きるというなら、どれほどすてきな答えかというのです。人間は愛の結実として生まれ、愛し合いながら生き、永遠なる愛の神様の懐に帰るようになっているのが、創造本然の生なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六四）

愛によって生まれ、愛の中で成長し、さらに異なる次元の愛に連結されるのは、父母の愛を離れ、相対の愛を求めていくことなのです。父母の愛は蘇生的愛ということができ、夫婦の愛は長成的愛ということができます。夫婦同士がいくら愛し合っても、子女がいなければ愛の完成を見ることはできません。それゆえ、子女を願うのです。これが完成的愛です。ですから父母の愛、夫婦の愛、子女の愛を経る過程が生涯の根本であり、神様の創造的愛の理想の根本の道です。（四八－二）

生命は愛から生まれます。愛から生まれ、父母から愛を受け、愛によって成長して、愛する妻に出会ってまた愛し合い、その愛の中に死んでいきますが、これが人生だというのです。ですから、悲しみと苦痛があり得ないのが本来の人生だというのです。

本来の宇宙の根本位置は、愛を中心として総合的に縦横に同時に結合することのできる基準となることによって、父母の愛と夫婦の愛、子女の愛が結合することのできる根本位置となります。その位置は全宇宙が集中する位置となり、全宇宙細胞の方向が集中する位置となります。霊界のすべての善霊たちが全部ここに集中します。

それだけでなく、この位置を誰も侵犯できないよう、保護するようになっているというのです。ですから、この位置が破壊されるなら、大変なことが起こるようになります。ですから、完全に保護されるためにはある形態が必要なのですが、その形態を統一教会の用語で四位基台というのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六六）

三　人間の永遠なる生命の要素は愛

人間は胎児でいる時、お母さんから供給される栄養を受けただけでなく、愛を供給されたことを忘れてはならないでしょう。それと同じように、地上で暮らしている人間たちも、宇宙（自然）から物質的な栄養を供給されて

いるだけでなく、生命の本質的要素である愛を神様から供給されているのです。

すべての植物が太陽の光を生命の要素として吸収するのと同様に、人間たちには愛が生命の要素となるのです。私たちの希望は、永遠に愛と共に欽慕しながら暮らすことのできる地上天国や天上天国が建設されることです。

人間は生まれる時、愛によって生まれ、生まれてからは愛を受けながら成長するようになります。しかし、ある程度まで成長すると、父母の愛だけでは不足になり、兄弟間の愛と氏族の愛を中心として、横的な愛を広げ始めるのです。すなわち、天地間のすべての愛を受けながら、成熟していくのです。特に思春期に近づくと、異性間の愛を求めるようになりますが、異性間の愛によって総合的な愛の圏内に進入するようになり、初めて愛の中心を求めていくことができるようになるのです。

男性や女性が行く道は、愛ゆえにあるのであり、愛のためにあります。「私」の道は愛の道です。愛を得るために、愛を守るために、愛の環境圏を成すために行くのです。

女性が化粧をしたり、マッサージをするのも愛のためです。何かを願うのも、仕事をするのも、すべて愛のためなのです。高貴な愛を得るために苦難を勝ち抜いていくのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六六）

私たちは生まれる時から父母の愛を受けるのであり、父母が生存している限り、少年時代、青年時代、壮年時代、どの時代を問わず愛するのです。父母の愛を受けて成長するようになれば、横的な夫婦の愛が各自に生じるようになっています。

結婚とは何でしょうか。男性は女性について知らなかったことを学ぶために、女性は男性について知らなかったことを学ぶために家庭という学校に入学するのです。すべての履修単位がＡプラスになってこそ、夫も喜び、妻も喜ぶことでしょう。息子・娘を産むのは、世界を愛する方法を学ぶためなのです。息子・娘がいなければ未来と連結されません。未来の世界と連結することのできる教育の材料として息子・娘を与えたのです。

そして、先祖たちやおじいさん、おばあさんの前に孝道するのは、霊界からの教育を受けるためであることを知らなければなりません。このすべてのものが、愛を中心として連結されます。おじいさんとおばあさん、夫と妻、息子・娘が一つの愛を中心として全部連結されているのです。

この愛をもてば霊界の千万代の先祖までも上がっていき、降りてくることができ、遠い後孫までも通じることができるのです。つまり、これが霊界の組織であり、宇宙の組織だということを知らなければなりません。愛の僕となり、愛の奴隷となるのが最大の幸福だということができます。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六六）

四　神様の愛はどのようなものか

皆さんが神様の愛を一度探ってみてください。神様の愛を何と表現することができるでしょうか。それは、さながら暖かい春の日和

に、空には白い雲がふわりと浮かんでいて、地にはかげろうがぼんやりと立ちのぼり、虫が出てき、アリたちも世の中を見物しようとちょろちょろと出たり入ったりし、さらさらと流れる小川のほとりにはコウライ柳がもえいで、蛙は春の日和の新しい歌を歌い、群れになって飛んでくる蜂、蝶が喜ぶ、そのような環境と同じです。そのような環境に酔って眠り込むようですが、眠り込まず、気分がよくて永遠にいいということのできるそのような味だというのです。

神様が探される理想相対を中心として感じる気分は、蝶が飛び、蜂が飛んでくる花の園のようなものです。これは考えただけでも気分がいいですか、悪いですか。この鈍い男性たちはそれを知らないでしょう。それは気分がいいというのです。

懐かしい人に会えば、手をぎゅっと握って握手をします。握手するとき、懐かしくて「ああ、これは久しぶりだね」と言いながら手をぎゅっとつかめば、気分がいいですか、悪いですか。気分が悪いという人がいたなら「えい、こいつめ」と言って、足でけってしまいなさいというのです。

懐かしければ、手をぎゅっと握りますか、握りませんか。皆さんはそうすれば喜びますか。（喜びます）。喜びたいのであれば、どうすればうれしいのでしょうか。知ってこそうれしいのであって、分からずにどうしてうれしいのですか。そのようにうれしくてつかめば、手をほどくことができないというのです。

ここにいる女の子たち、お嫁に行って夫が自分を愛してくれれば気分がいいでしょうか、悪いでしょうか。一度考えてごらんなさい。いいでしょうか、悪いでしょうか。人は率直でなければなりません。愛してくれるなら、この世の中にそれほどうらやましいことはないのです。初めから夫の横にぴったりくっついて暮らすのです。

男性が牛の前足のような手で、女性の手をぎゅっと握ってあげることはいいことです。映画を見ても、そのような映画を見たくなります。女性が男性に「まあ、あなたの手は本当にきれいね」と言えば、気分が悪いというのです。そのようになっているのです。

愛は永遠です。愛は二つでなく一つです。一つになるということです。男性と女性がカップルを成して愛し合えば、ぴったりくっついてしまうのです。そこまではいかなくても、これ以上の心情まで行くというのです。それがまさに神様の愛だというのです。そのような愛をもって暮らすなら、一つになるでしょうか、ならないでしょうか。考えてごらんなさい。全部一つになるようになっているのです。

男女の間で愛し合うようになれば、ありとあらゆることが起こります。そうでしょう。しかし、神様を尋ねていく道を知り、神様の愛を本当に味わうなら・・その神様の愛はこの世のどのようなものとも比べられないのです。

そのような愛を味わった人がいるなら、どのような苦難も彼を占領することはできないし、どのような悲しみも彼を占領することはできないでしょう。そのような絶対的な解放

の圏があるのではないでしょうか。これを探すことが問題となるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六八）

神様の愛は大きく、三代の愛に現れます。それは父母の愛、夫婦の愛、子女の愛です。この三代の愛が一つに一致する中心は神様の愛です。

五　愛と喜びの相続のための神様の祝福

神様において、一番の栄光の時は、肉（体）を使うことのできる時です。その次には、愛することのできる人（夫婦）をもつ時であり、その次には、孫を愛することのできる時です。息子・娘より孫を愛することのできる時が、一層栄光の時だと見ます。

ところで、神様がアダムを造っておいて、どんなによかったかということを、どのように教えてあげたでしょうか。「やあ！　私はお前を造って、こんなによかった」ということを教えてあげなければなりませんでした。それは、息子・娘を生むことによって教えてあげることができます。分かりますか。

人は幼い時、父母の愛がどういうものかを知りませんが、のちに家庭を築いて赤ん坊ができるようになれば、父母の愛がどのようなものかを知るようになるというのです。自分の父母が私を育てるときこのように愛してくれたなと、知るようになっています。

それゆえ、子女が相対を得る日が栄光の日であり、その次には、その息子が子女を得る日が栄光の日です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九三六）

神様の愛を知らなければなりません。父母の愛を知り、父母に侍ろうとしなければならず、夫の愛を知り、夫に侍ろうとしなければなりません。子供の愛を知り、子供に侍ろうとしなければなりません。子供に命令をするだけではなく、侍ってみようともしなければなりません。理解しようともしなければなりません。そうしてこそ、神様の愛が理解できます。

子供がいなくては、未完成状態です。神様の愛を知ることができません。神様が子供としての人間を、どれほど愛したのか分かりません。また、夫になってみなくては妻が分からず、妻になってみなくては夫が分かりません。子供も、父母になるまでは、父母の愛がどのようなものかが分かりません。ですから、息子・娘がいなければ、真なる夫婦となれません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九三七）

父母が子供の結婚を願うのは、子供たちに父母の愛をすべて相続させてあげたいし、伝授してあげたいからです。父母は死んでいきながら、後孫にその実体を残しておきます。ですから、後孫が必要なのです。

愛は永遠に続くのです。愛は人間の最高の願望なので、万民が両手を挙げ、相続しようとします。その愛を残しておくことによって、霊界でも堂々と神様の前に出ていくことができます。そのような愛を完遂できる所が家庭です。家庭を通して天国に行くということは、すなわち、そこにおいて愛の一休園が成されるということです。

人間は原理・原則に従っていかなければなりません。春になれば種をまき、夏になれば

生い茂り、秋になれば実を結び、冬になれば全部整理して、新しい生命の根源を自分の内心に備えなければなりません。そうしてこそ、再び春を迎えるようになれば、またこれが植えられ得る種になるのです。

これは何の話かといえば、これから皆さんは父母となり、皆さんのような息子・娘を生まなければならないということです。皆さんの息子・娘を、皆さんのように育てなければならないというのです。

皆さんは、息子・娘がいなければなぜ寂しいですか。それはサークルラインを形成できないからです。鳥たちがひなにえさを食べさせてあげるのを見たとき、母のこの上ない愛を知るようになります。

西洋の人たちは知りませんが、東洋では大人より子供たちを好みます。大人たちに向かっては礼儀正しく敬いますが、息子・娘たちにはこの上ない愛を惜しみません。息子・娘を生み育ててみることによって、父母が子供をどれほど愛したのかを悟るようになります。

人間は誰でも、結婚をしたのちに子女を生み育ててみなければなりません。そうしてこそ、子供の愛と父母の愛を所有することができます。しかし、西洋の人々はそうではないようです。息子・娘を生み育てることを、忌避しています。息子・娘が、結婚して離婚するのに妨害になるという考えゆえに、自分の子供をもつことをはばかっています。

しかし、人間は生まれて四位基台を成せなければ、神様が人間を愛する心情を知ることができないので、天国に行けないということを知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－九三七）

六　愛の中心を求めていく人生行路

人間は愛によって生まれ、父母の愛の中で大きくなり、横的に愛を広めながら成熟するようになります。横的な愛は異性の相対に出会うと、一段階愛を完成するようになり、天地の愛を代表することのできる基準に入れば、その実を結んで子供を身ごもるようになるのです。子供は、核心的な心情の立場から生じた愛の結果として生まれるようになります。

男性と女性が心情的に愛し合って生まれた息子は、愛の核心に通じる道をつくってくれ、その中心を通過すれば、まさに神様と出会うようになるのです。人間は愛の実として子供を身ごもることによって、神様が万物を創造し、人間を創造されたときの愛を体恤するようになるのです。

また、父母の愛によって生まれて受けた愛を、子供を愛してみることによって、父母の心情を体恤するようになるのです。父母が子供に注いできた愛は物質的な愛ではなく、本質的な愛です。天地が変わっても、歴史時代が変わっても変わらないのは、父母が子供に与える愛です。父母になって子供を愛することによって、神様が人間をどのように愛してこられたのかを考えることができるようになり、体験を通して確認するのです。

父母になって子供を愛することによって、父母が私をどのように、どのくらい愛じてく

れたのかを感じて悟るようになります。そして老いた父母に対して、さらに敬い、心から孝行の道理を立てるようにするのです。そのようにできなければ、父母としての自覚がないだけでなく、子供に対する愛も偽善だといわざるを得ないでしょう。

人間は父母になり、子供を愛してみることによって、神様が人間をどれだけ愛してこられたのかを感じて悟るべきでしょう。また、神様をいっそう心から愛すべきでしょう。子供に対する愛よりも、老いた父母をもっと愛さなければならないし、老いた父母に対する愛よりも神様をもっと愛さなければならないのが、愛の秩序であり、法度であることを知るべきでしょう。

人間は生まれる時、愛によって生まれ、生まれてからは愛を受けながら成長するようになります。しかし、ある程度まで成長すると、父母の愛だけでは不足になり、兄弟間の愛と氏族の愛を中心として、横的な愛を広げ始めるのです。すなわち、天宙間のすべての愛を受けながら、成熟していくのです。特に思春期に近づくと、異性間の愛を求めるようになりますが、異性間の愛によって、総合的な愛の圏内に進入するようになり、初めて愛の中心を求めていくことができるようになるのです。

天地は球形の世界なので、横的な愛を授受し、回転しながら、円形を一次的に成すようになります。特に異性を相対者として選び、愛し合うとき、その結実として子供を身ごもり、父母になりますが、このとき互いが相互間で愛を授受し、回転するようになれば、横的な愛に続いて縦的な愛も実現するようになり、球形世界を成すのと同時に、愛の中心を求めるようになるのです。

愛の運動を通して生じた愛の中心は、すべての抜道世界の存在の核でもあります。地球が存在するのも、この愛の中心を中心として運動を続けているからです。そこは、愛の中心運動を継続できる無限な力が集まった所です。このような愛の球形を通じて生じた中心は、間違いなくその場に神様がいらっしゃる所でもあります。ですから、世の中に存在するすべての被造物は神様の愛によって創造された存在であり、神様の愛の中心を求めていくのです。神様は、まさに愛の溶鉱炉であられたのです。（一二六－二四三）

七　三時代を行く人生路程

人間は、お母さんのおなかの中にいてから生まれ、一定期間を地上で生きてから死を迎えるようになっています。人間はこの世に生まれる前には、お母さんのおなかの中で十ヵ月を過ごします。

おなかの中にいる時、幼い胎児の自由には限界があります。抜はお母さんの栄養をへその緒で引いて育つとき、二本の手を伸ばしたり引っ込めたり、口を開けたりつぽめたりしました。二本の足でばたばたするのが精一杯です。しかし、その胎児には、お母さんのお腹の中が自由天地であり、生の全領域であることでしょう。

その胎児は十ヵ月目にこの世に生まれて育つようになりますが、それ以後の世界が今日私たちが生きている現在の地上世界であり、

人間社会なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇七一）

人は、なぜ生まれたのでしょうか。愛のために生まれました。それゆえ、真なる父母の愛に根を張り、お母さんとお父さんの保護と愛の懐である腹中で育ち、二十歳まで分別なしに父母から大切に育てられ、汚い物を汚い物であることを忘れて、すべてを喜んで消化させられる愛の中で成長してから愛の相対者に出会い、互いのために天理の愛に接ぎ木されなければなりません。

そのような人生路程を行きながら、神様の愛がどのようなものかということを体験すれば、神様の対象愛の実休園が完成するので、息子・娘を産んで愛するようになるのです。（一四三－二八五）

この世に生まれた人間は、胎児期のお母さんのおなかの中に比喩される宇宙での生を生きているのです。一言で言って、お母さんの懐のような宇宙で、人間百年の生涯を生きているのです。胎児がお母さんのおなかとは違う人間の世界を知らなかったように、今日地上世界で生きている人間たちは、死後の無形実体世界に対する実在が分からずにいるのです。お母さんのおなかの中では人間世界について分からなくても、実在として人間世界があったように、死後の世界もあることだろうと、ただ漠然とした心証をもっているだけなのです。

けれども分明なことは、人間の死後の世界に対する心証的な存在可否にかかわりなく、確実に存在しているということです。しかし死後の世界は、人間が感知することのできる五宮作用外にあるので、宗教を通した信仰をもって不信を克服しなければならないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇七一）

人間には三時代があります。動物界にも水中時代があり、陸上時代があり、空中時代がありますっすべてのものが三時代を経なければならないのです。ところで、人は万物の霊長であり、すべての万物を主管できる資格を備えるためには、人にも水中時代があって、どんな存在よりも完全な生活体を備えなければなりません。次に陸上時代においても、どんな動物よりも最高の資格をもった存在でなければなりません。

次に、空中時代がなければなりません。ところが、人間には翼がありません。翼がないのにどうやって飛ぶことができますか。飛び回るのは、どんな鳥よりも、どんな昆虫よりも、高く飛ぶことができて、遠くまでも飛べなければならないのです。そうであるなら、どうすればいいのでしょうか。それは実体である肉身をもってしてはできません。どうやっても飛びません。

そうですが、人間は万物の霊長であり、神様が霊的な存在なので、主管園や相対的な立場に立つためには、その活動舞台が神様と同じでなければなりません。今日、電気や光でいうならば、光の速度は一秒に三十万キロメートル行きます。それよりも、もっと早く作用することができるのが人間です。それが何ですか。霊人体です。（一一二－二〇二）

私たちはこの世に住んでいますが、この世の中だけにいるのではなく、霊界があります。では私たちが行くべき所、私たちが行って住むべき所がどこでしょうか。霊界です。霊界とは、愛の空気が充満した永遠の世界です。ですから一生は永遠の世界に入るための準備期間です。（一四〇－一二一）

八　地上生活は霊界の拍子を合わせるための訓練場所

私は霊界での体験をたくさんもっていますが、霊界は愛の成分で覆われている所です。地球は空気で覆われていますが、霊界は愛で包まれている所です。人間は地上で空気を吸ってガスを吐き出しますが、霊界では愛を吸って生きるようになっています。霊界は、今日の人間の世俗的な愛を中心として授け受けるようになってはいません。霊界で授け受ける愛は、真なる愛なのです。

皆さんが霊界に行ってみれば、その世界は次のようになっています。すなわち、父母、兄弟姉妹、夫婦、子女に対する愛を十分にもった者、すなわち家庭生活で深い愛の経験をした人は、多くの自由を享受することができるでしょう。彼は何の制限もなく、どこでも、どの方向にでも行くことができます。その反対に愛の経験のない人は心が狭く、霊界でも自分一人孤立していて、自由が全くありません。

父子間の愛は縦的な関係であり、夫婦間の愛は横的な関係であり、兄弟姉妹間の愛は旋回して取り囲む関係なのです。この三つの関係は、互いに異なります。ですから、地上でこの三つの互いに異なる方法で深い愛の経験をもってこそ、制限なしに縦的、横的に行くことができ、円で旋回することができます。

例えば、父母が早く亡くなることによって父母の愛を味わうことができなかった人は、とても重要な愛の経験ができなかったために、多少悲劇的な人であり、同じように家庭生活すなわち夫婦関係を経験できなかった者は、生の重要な部分が不足するために霊界ではとてもみすぼらしい人になります。また、兄弟姉妹がいない人は、すべての分野の欠乏で完全な生を生きられないので、霊界でみすぼらしい立場に立つようになります。

皆さんはなぜ結婚しなければならないのでしょうか。父母の愛、夫婦の愛、子女の愛を体験するために結婚するのです。それでは、それがなぜ必要でしょうか。そのような愛の空気が充満した所が霊界だからです。

霊界の拍子に合わせる訓練をするために、家庭をもたなければならないということを知らなければなりません。これを感じないで行く人は、あの世に行って拍子を合わせることができません。このような愛の空気をかぐことのできる鼻がない人と同じだというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇六七）

皆さんはお父さんとお母さんから生まれました。次に最も根本的なことは、お父さんとお母さんのおなかを借りて、神様から生まれたという事実です。皆さんは宇宙の父母を通して、肉身の父母を通して、真の父母を見いださなければなりません。肉身の父母は、通過の父母です。ですから死の瞬間は、真なる

父母に会いにいく歓喜の時間です。そこには、真なる父母の真なる愛があります。そこを天上天国といいます。

そこの構成要素は愛であり、そこは父母の愛で充満しています。その愛は「私」のためのものではなく、奉仕と犠牲の原則の下に、すべての法度を通ることのできる愛です。そこに合格するためには、宇宙を愛し、人類を愛さなければなりません。地上生活は、そのような愛のための訓練の場所です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇七二）

この地上での生活がどれほど重要でしょうか。一度しかありません。瞬間なので、一度しかありません。地上天国を永生に比喩すると、これは一点ほどのわずかな時間に過ぎません。あまりにも短い瞬間です。この瞬間の時間内に肉身生活を越えて、霊界のために準備しなければならないのです。（一〇七－九九）

第五章　創造本然の男女の愛

一　創造本然の男女の愛

神様の最高の傑作品として造られた美しい男性と女性が、神様を中心として愛し合うことができるならば、それは最高の愛であり、超越的な愛であって、世俗的な愛ではありません。その愛は最高に美しい愛であり、愛の中でも代表的な愛であり、永遠に輝くことのできる愛です。

男性と女性が愛し合っても、それが神様が立てようとされたみ旨と一致するか、また神様が人間に願われたその基準と一致するかが問題となります。男性と女性が愛し合うとき、神様が考えられるモデル的な愛と一致するかということです。

神様を中心として最初の男性と女性が愛で一つになったならば、それは、愛を中心にした宇宙のモデルになったという結論が出るのです。神様も人間の前にそのような愛を願われたのです。男性と女性も互いに相手に対し、そのような愛を願ったのです。そのような真の愛は、宇宙の核であらざるを得ません。メートル法と同じ一つの標準型になるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三五）

神様の愛と人間の愛は本質的に同じです。愛は一つになろうとします。男女が互いに恋しがる理由は何でしょうか。男性は女性、女性は男性を通してのみ神様を所有することができるからです。男女が愛で一つになる所に必ず、神様が臨在されるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三六）

二性性相の母体が神様であることを考えるとき、男性と女性の尊厳なる価値をほめたたえると同時に、神様の尊い価値を一層ほめたたえることができる人にならなければなりません。

男性の心の中には神様が愛しておられる女性がおり、彼の相対である女性の心の中にも神様が愛しておられる男性がいて、共にたたえるようになる場合には、神様もそれを見て喜ばれるのであり、すべての万物も互いに喜ぶようになるのです。彼らが互いに抱擁する喜びの内容が、天と地が共に喜ぶ価値ある内容になります。男性と女性が互いに愛し合い抱擁するそのこと自体が、宇宙が一体となる

場となるのです。神様の理想の中で成される創造本然の姿はそういうものなのです。

元来男性は自分が喜ぶことのできる女性を迎えなければならず、女性もやはり自分が喜ぶことのできる男性を迎えなければなりません。そればかりか、人間の喜びというその限界を越えて、神様も喜び、すべての万物が喜ぶ出会いでなければなりません。そうすれば、この世のすべての存在物がその夫婦のために動員され、彼らに主管を受けることを願うようになります。

鳥たちは彼らのために歌を歌い、蝶は喜びひらひら舞うようになるのです。神様も喜ばれ、人間も喜び、すべての万物も喜ぶようになるのです。このような立場で人間始祖が歴史を出発させていたならば、それこそ創造本然の理想世界になっていたのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三六）

二　男性と女性が生まれた理由

本来、男性が生まれた本当の意味はどこにあるのでしょうか！　それは女性のために生まれたということを否定することができないのです。その反対に女性は女性のために生まれたのではありません。男性のために生まれたという事実を自らが確信できないところに問題が生じることを、私たちは知らなければならないのです。

これを、天地創造の大主宰であられる神様が、創造の原則として決められたために、その原則に従っていかなくては、善なる、真なる、幸福なる、平和な世界、あるいは愛と理想の世界へ入ることができないのです。

女性は男性と出会うために生まれ、男性は女性と出会うために生まれたでしょう。これが最高の真理です。ですから、このような原則に従って祝福圏を探し出さなければなりません。最高の真理圏を離脱することは、最高の悪になるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三三八）

男性と女性は生理的に全部反対です。女性は一方的なのに比べて男性は三方四方的です。また女性は家の中に居ますが、男性はあちらこちら世の中を巡るのです。このように性格が全部反対なのです。こういう主体的な男性と相対的な女性が何を中心にして一つになるのでしょうか。愛を中心にして一つになるのです。人間と神様を一つにさせようとするのも愛なのです。

男性が生まれたのは何のためですか。学問やお金、権力のためではありません。女性のためです。女性のために男性が生まれたということです。男性の骨格が女性よりも大きいのは自分だけが稼いで生活するためではなく、子女と妻を養うためです。

男性がもっている器官と女性がもっている器官はそれぞれ違います。それを誰のためにもっていますか。それは自分のためにもって生まれたのではありません。男性のものは女性のために生まれ出たので、女性のものです。女性のものは、もちろん逆に、男性のものです。そのように考えてみましたか。（笑い）笑い話ではありません。

男性と女性の愛の象徴は何ですか。愛の終着地点はどこですか。男女を一つの体に成さしめる性の器官です。それは愛を中心として心と体が完全に一つになることができる通路となるのです。男性がもっているものは男性のものではなく、女性がもっているものは女性のものではありません。男性は女性のものをもっており、女性は男性のものをもっています。ですから、生まれたのは自分のために生まれたのではありません。相手のために生まれたということを、はっきりと知らなければなりません。

なぜ男性と女性が地球上に生まれたのでしょうか。互いに愛し合うために生まれたのです。神様は知恵の大王であられるために男女の愛の器官をそれぞれ変えてくださったのです。男性のものだといっても、その主人は男性ではありません。女性の場合も同じです。

主人を差しおいて自分の思いのままに行動した人は、愛をたがえた審判を受けなければならないのです。法の中でも一番恐ろしい法の罰を受けることを知ったならば、自分の妻をさておいて、あえてとんでもない考えをすることができますか。反対に夫人たちは夫をほったらかしにして、とんでもない考えをすることができますか。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四〇）

三　男性と女性は互いに絶対的に必要な存在

皆さん、愛は絶対に必要なものでしょう。そうでしょう。その愛に絶対必要な要素は人間です。男性と女性です。女性には男性が必要であり、男性には女性が必要なのです。どれだけ必要なのでしょうか。大韓民国よりも世界よりも、さらには神様よりも必要なのです。また、女性がいなければ百年以内に人類はすべて滅亡するのです。それゆえ男性がいくら天下を統一したとふんぞり返っても、女性がいなければ百年以内にいなくなるのです。ですから女性は絶対必要なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四〇）

「人」といえば男性と女性をいいます。一人の男性を考えてみると、女性がいなくてはならないのであり、女性を考えてみても男性がいなければなりません。その男性は自らが願って生まれたのではありませんが、その男性にとって必要なその女性も、自分が願って生まれたのではないのです。生まれてみると男性になり、女性になっていたのです。男性として生まれたとき、女性がいることを知って生まれましたか、知らずに生まれましたか。生まれてみて、男性一人だけだと気分が悪くないですか。また女性として生まれてみて女性だけだと気分が悪いのです。そうではないですか。

だから女性が生まれたとき男性がいることを知って生まれましたか、知らずに生まれましたか。私はたとえ知らずに生まれたとしても、私を生んでくださった方は知っていたというのです。私が女性として生まれたのは、私を必要とする男性がいるためなのです。同様に、私が男性としてこのように生まれたのは、私を必要とする女性がいるから、男性として生まれたのです。そうでしょう。すべて知ってみるとそのように生まれていたのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四〇）

男性にとって絶対に必要な存在は女性です。神様を絶対に必要とする前に女性という相対的な存在がいなければなりません。人類歴史が不幸だったのは、男性が、絶対に必要な存在として女性を正しく認識できなかったからでした。同様に、女性にとって絶対的に必要な存在が男性であることを知らなかったのです。

真の愛の味を感じるためには、理想圏をもたなければなりませんが、そのためには男性には女性が必要であり、女性には男性が絶対に必要なのです。真の愛を慈しむ絶対的な男性と女性は、一生懸命努力する．ことによって結ばれ、絶対的男性と女性が一つに結ばれたとき、神様が二人の中に臨在されるようになることを知らなければなりません。

真の愛で結ばれた夫婦が別れることは、神様も嫌いなので、絶対的男性と女性の愛は永遠なのです。神様は全知全能であられる方ですが、その絶対的な存在も、一人では何ら意味がありません。それと同様に、一人の男性がいくら美男で健康な人だといっても、女性がいなくてはその意味がないのです。自分の容姿や健康に酔って生きる男性は、どこにも使い道のない陰険な存在にすぎないのです。

そのように自己陶酔に陥って生きる男性が世の中に多いということが問題であり、歴史が悲劇として流れてきた原因であるというのです。自己陶酔に陥ってしまっている世の中を改善し、変化させてきたのが、神様の摂理だったということを知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四一）

四　愛は相対から来るもの

愛は一人では成されないのです。愛はどこから出てくるのですか。「私」から出てくるのではなく相対から来るのです。相対から出てくるので、「私」が頭を低くして相対のために尽くさなければならないのです。「為に生きる」という天理が、ここから生まれるのです。極めて高貴なものが「私」のところに訪れるのに、それを受け入れようとするなら、それを尊く思い、敬わなければならないという「為に生きる哲学」を確立しなければならないのです。

人には愛があります。しかし愛というのは、「私」　一人では現れません。男性が一人いるときには、愛は現れません。男性の前に相対的な女性が現れてこそ、愛が生じてくるのです。このように相対が現れて初めて、愛が生じるのです。

父母の愛が素晴らしく、夫婦の愛が素晴らしいというとき、本当の愛は自分を中心とした愛ではありません。愛というのは、「私」から始まるのではなく、相対から始まるのです。皆さんはこれを知らなければなりません。夫から、妻から愛が生じるのであり、息子から、兄弟から愛が始まるのです。愛は自分一人から始まるのではなく、相対から始まるのです。それゆえ、愛の主人は誰でしょうか。相対が愛の主人となるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四二）

愛はどこから出てくるのでしょうか。相対から現れるのです。相対が醜くて憎ければ愛も後退しようとするし、相対がきれいで好ましければ、愛の作用もその分早くなります。相対の言語、美、香り、味など、相対の要素

によって愛の作用が決定されるようになるのです。

愛の根拠地はどこでしょうか。愛の根拠地は「私」ではありません。愛という名詞は相対的観念からいうものです。相対がいなければ、いくら美男子であっても一人では愛することができないので、だめです。愛の根拠地は「私」ではありません。愛は「私」からだというのは、サタンが今まで利用してきた言葉です。愛の根拠地は「私」ではありません。愛の根拠地が自分だと考えますが、これを残らず改めなくては、歴史を変えることはできません。今まで夫人は夫人なりに自分が中心であり、夫は夫なりに自分が中心だから私のために尽くしなさいというので、破綻が生じたのです。

愛の根拠地は「私」にあるのではなく、相対にあるので、その愛を「私」が見つけるためには、その愛の前で犠牲にならなければなりません。愛は必ず犠牲を要求するのです。また、愛は克服を必要とするのです。

このような観点から見るときに、今日サタン世界を克服できる内容をもっているものは、この天地間において、ほかでは探すことができません。神様を中心とした愛の原則によってのみ見つけることができるので、神様は愛をしっかりつかんでいるのです。世の中で、慈悲という言葉も、愛がなくては出てこないのです。仁という言葉も、二人がいなくては出てこないのです。慈悲や仁という言葉も全部残らず相対的観念からいうのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四三）

五　異性間で愛の調和を成せば

男性は天を象徴し、女性は地を象徴します。二人が一つになって調和しなければなりません。男性と女性は互いに異なっています。男性の筋肉はごつごつしていて、女性のは滑らかです。男性はひげが生えますが、女性はひげが生えません。声も違います。男女を比べてみると相対的に釣り合っています。調和がとれているのです。人間という肉的構造を見るとき、左右に相対的です。半々をぴったりとくっつけたからです。

皆さん、高いだけあるいは低いだけでよいですか。調和を成すのがよいのです。水平線を中心に下には魚が住み、上には哺乳類、鳥類などが住んでいます。女性は一月に一度ずつ生理が生じます。月を中心にして潮が満ち引きするように、女性も同じです。呼吸作用と同じです。男性と女性が調和して平行線にならなければなりません。

昇ったり降りたり回ったりする各種施設のあるディズニーランドを、人々がなぜ好むのかといえば、宇宙がそうだからです。男性だけで和動するのと、男性と女性が和動するのでは、どちらが気持ちよいですか。男性と女性が和動するほうがよいのです。宇宙がそうだからです。宇宙が陰陽の調和を成して和動するから、人間が拍子をとらなければならないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四四）

異性間にあって愛の調和を成せば、一つの円形運動をするようになります。異性が愛で一体となって愛の実を結ぶようになれば、神

様は降りてこられ、人間は上っていくようになり、中央で出会うようになります。神様はこの円形の求心点となり、球形運動が行われるのです。求心点から四方どこでも通じることができるのです。その求心点は愛の調和が成される所であり、生命が胎動する場であり、平等主義と共同主義の始発点なのです。そこには愛の力があるからです。ですから、宇宙のすべての作用と包容する力は愛なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四五）

人間において愛は永遠なるものであり、二つではなく一つです。男性と女性の間が愛で結ばれれば、地上で夫婦が年を取るまで仲良く連れ添わなければならないし、死んでも永遠にともに生きていくようになっているのです。体は二つですが、一つとなって回転することによって、一体化するのです。

二つの体が一つになれば神様のように回るようになり、愛の四位基台をつくるようになるので、それがまさに愛の理想世界なのです。そこには偽りの愛は侵犯することができず、ただ真の愛のみが臨在するようになります。神様を中心にして、男性と女性が祝福を受けて完成した位置に立ったならば、神様はいつでも訪ねてこられるようになります。愛の四位基台をつくるようになれば、相手側の体を通して心までも愛するようになり、心を愛するようになれば体まで従ってくるようになっているのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四六）

六　真の愛に酔った本然の人間

この世で最も神聖なものは何ですか。世の中で最も神聖なものは真の愛です。真の愛は神様から出発します。神様が存在されるならそれ以外の道はありません。神様が心から願われるのは真の愛の道であり、真の愛の道を通らなくては、神様の前へ出ていくことができないということを知らなければなりません。

神様は愛を通して、見て、聞いて、食べて、触れてみたいのです。人間も神様から愛の口づけを受けたなら、内部が爆発するような喜びを感じるはずです。神様の願いはここにあるのであり、ダイヤモンドや宝石を所有してうれしいとおっしやるのではありません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三八一）

人間を見れば、人体は五宮をもっています。人間は誰でも五宮の認識によって、真の愛を感じ、確認するようになっています。目が真の愛に向かっているなら、その目は真の愛に染まって酔うようになっています。酔った瞳の色はどれほど美しく光るでしょうか。口が真の愛に溺れているなら、ほほえむその唇はどれほど恍惚としたものか、考えてごらんなさい。人間の五官が真の愛に酔って動く姿、神様に向かって動く五宮の調和がどれほど美しいだろうかと想像してごらんなさい。そのような美しさを通した喜びは、神様お一人では体験することができないのです。そのような美しさは相手がいてこそ体験するようになるので、神様が人間を創造された目的でもあるのです。

真の愛に酔った瞳の手入れをしてあげたい、唇に口づけをしたい、心の旋律を一度奏でてみたいという美しい男性と女性がいるなら、

神様はどのようにされるでしょうか。真の愛のエバがいるなら、そのエバの心情世界を一度は旅行したいという思いをもたれるはずです。美しいエバの心情世界、心情圏がどれほど広く深いかを確認したいという衝動をもたれるはずだというのです。神様は天地を創造した以上に美しい内容を所有しているアダムとエバの心情世界を旅行したいと思われることでしょう。神様は真の愛の人間に対して宇宙を旅行すること以上に、その心情世界を旅行したいと思われるのは確実であり、アダムとエバの真の愛の心情世界を永遠に離れたくないという思いをもたれるでしょう。

神様が人間を造られたのち、人間の真の愛に溺れ、愛の迷子になったなら世の中はどのようになっていたでしょうか。人間の中に神様が住まわれるようになるので、神様と人間が一つになってつくりだした世界は、喜びと美しさが充満した世界であるのは確かです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三八二）

真の愛が完成したなら、感応の神様はその真の愛にどっぷりつかっても後悔なさらないはずです。真の愛の中でならどんなことが起こっても、ひたすら喜ばれる方が神様であられます。真の愛の世界で人類が生きるとすれば、一生後悔のない幸福な生涯になることでしょう。また世の中に戦争の歴史もないでしょうし、不満や不幸のない世界になっていたでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三八三）

七　愛はきわめて自然なところで成される

先生が幼いときにあった話ですが、ある日、鳥を一つがい捕まえて、二羽のくちばしを口づけさせる遊びをしたことがあります。二羽が互いに口づけするのを見るために、巣を作ってえさをあげながら観察したのです。その鳥たちが互いに愛し合って楽しそうに歌を歌うのを見たい子供心からそうしたのです。それはすべての自然の道理をはっきりと知るための、一つの好奇心、子供の実験のようなものでした。

今考えれば、全く意地悪な行いをよくも続けたものです。愛は自然な中に築かれることを長らくして悟ることができました。愛は自然な中、最高に自由な雰囲気の中で成されるものが真実の愛なのです。先生が愛について正しく知っているのは、長年の実験を経てはっきりと分かるようになったからです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五三）

愛の価値を失った人を、大学で教育させて、何が変わるというのでしょうか。彼らはみんな知識を蓄えるだけで、個人主義者になり、物質主義の信仰者をつくり出すだけなのです。テンジャンチゲ（注・肉、野菜などをみそとともに煮た煮物）は土焼きの器に入れられて、もろもろの味を出すのと同様に、人格修養も、愛を基にしてこそ所期の目的を達成することができるのです。

世界文明は、美術的調和を整えた基盤の上で花咲かせなければなりません。焼きカルビは皿に盛らなければならないし、テンジャンクッ（注・韓国風みそ汁）は土焼きの器に入れられてこそ、もろもろの味を味わえるのと同じです。風味のよいテンジャンクッの味は、一度味わえばどこへ行っても忘れることができないのです。同じように、人間も風味のよ

い味に似た、そういう愛を一度味わえば変わることがないのです。

甘いだけのインスタント食品には飽きを感じるように、愛もインスタント食品のようにどこででも簡単に求めることができれば、それは真の愛だとはいえないのです。

最近はインスタント食品のように愛する人たちが、至る所に広がっていますが、それが問題なのです。香水風呂に入って休浴したといっても、愛が深まることはありません。田舎に住みながら冷水に体を入れて洗い、寝床に入る夫婦の愛のほうがもっと純粋で、長くたてば深まるものだといえるのです。

夫婦がキスをするために歯をみがくとすれば、それは自然な愛ではなく、歯みかき粉のにおいのために、その人だけがもっている固有の体臭を味わうことができないのです。歯をみがいてキスをする人を見ていると、その人は愛を味わうためにキスをするのか、それとも歯みかき粉のにおいを味わうためにするのか分からないほどです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五四）

皆さんが好きな、愛する人と出会えば抱擁したいし、口づけもしたいのは、自然な異性間の本能なのです。「私」が環境と接しているのは、この宇宙を好きになるためです。それは、相手を探し出すための人間の自然な行為です。すべての人間が相対的理念のもとで、男性は女性に対し、女性は男性に対するとき、ここには愛の秩序に違反する行為や事件はないのです。真の愛の秩序は、相対的な理念をもとにして男性と女性が出会うとき生まれるものです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五五）

第六章　思春期の変化と真なる結婚

一　結婚の意義

結婚とは幸福な宮殿の門を開けて入っていく儀式であるといえます。それゆえ、結婚は人生における重大事となるのです。愛は時空を超越し、人間にとって最も偉大なものであり、結婚はそのような愛を現して確認する儀式なのです。

なぜ結婚式を「祝福を受ける」と言うのでしょうか。私たちの原理から見るとき、アダムとエバが堕落せずに完成していたなら、祝福の席に参加していたはずです。言い換えれば、アダムとエバは神様の実体対象として、神様が主体であれば彼らは対象になるのです。そして、愛の主体となられる神様から対象的な立場の愛を連結させることのできるその祝福の基台は、アダムとエバが個性を完成し、結婚することによって成されるのです。

完成とは結局、結婚のことをいうのであり、結婚とは神様の愛の顕現のことをいうのです。言うならば、結婚がなければ、今日、人間世界における愛というものが始まらなかったというのです。その愛の主人は誰でしょうか。人間ではなく神様であられることを私たちは知らなければなりません。その神様の愛が人間の中に現れるようになるとき、神様の喜び、誇りとなり、神様の愛としてこれを感じることができるのです。

愛というものは一人で成り立つものではなく、相対的関係において成り立つものなので、男性が愛を成就しようとすれば男性自体だけではだめなのです。女性も同じです。このようにアダムとエバが愛で一つになることによって初めて、神様の愛を受けることができるのです。このような観点から見るとき、私たち人間は神様から生まれたものであることが分かるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五六）

天地間のすべての道理が主体と対象から成っているように、男女が結婚するのも天地間の道理なのです。男性が右側なら女性が左側になるのは宇宙間の横的な関係を築くためであり、男性が主体なら女性がその対象となるのは、神様との縦的な上下関係を築くためでもあります。ですから結婚をするのは、男性だけのためでもなく、また女性だけのためでもなく、天理の法度を合わせるためにするのです。それゆえ、男性と女性は互いに違う形を備えています。天理の法度を一致させることができるように生まれたのです。

結婚というのは、愛する二人が寂しいときは慰め合い、うれしいときは共に喜び、困難なときは助け合うことのできる相対的な位置で授け受けしながら、神様の前へ出ていく場合において、神様の愛を土台として生活するために結ばれることなのです。これがすなわち結婚生活です。

神様が男性と女性を天に造らず、地に造られたのは、平面的基準で神様の愛を横的に成すためです。すなわち、主体と対象の関係を造成し横的に一つになるとき、主体であられる神様と、二人で一つになった愛が、縦的な愛の因縁を結び得るというのです。この事実は極めて重要です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五七）

二　なぜ結婚するのか

男性は女性を探すために生まれ、女性は男性を探すために生まれました。女性と男性は二人合わせて、より次元の高い神様の愛に接するために生まれました。一人ではその愛に触れることはできません。一人で接してもそれは一方的なのです。立体的で球形的な愛に接することはできません。それゆえ、男女がより高い次元の立体的な愛の圏内にジャンプするために結婚するのです。

本然の世界にあっては、男性と女性が一つになればなるほど、その力の作用においては偉大な中心が生じ、球形になるのです。横的に連結されればされるほど、縦的な力の愛の母体が連結されて入ってくるというのです。そこにおいて心と体が一つになるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五九）

結婚はなぜするのですか。天国へ行くために役に立つから、そうするのです。なぜなら、天国には結婚をしなければ行くことができないからです。それゆえ、天国へ行く資格者になるためには結婚をしなければならないのです。天国へ行く資格とは何でしょうか。神様に似ることです。どのようにして神様に似るのでしょうか。神様のみ言を実践する人になることです。神様の愛を「私」の愛にすることであり、神様が語る言葉を「私」の言葉として語ることができればいいのです。

それゆえ、「私」は神様に代わり世界に向かって、「人類よ、お前は天国に行かなければならない」と言うのです。その次には「天国に行くためには神様のように『私』が人類を愛して連れていく」、となればよいのです。そういう人は、神様の人であり、天の側の人であり、天国へ行くことのできる候補者だといって間違いないのです。このようになるときには、結婚する資格が整うというのです。さあ、結婚はなぜするといいましたか。天国に行くために、そして人類のためにです。

男性の前にいるその女性は神様の娘であり、人類の女性を代表した娘であることを男性たちは知らなければなりません。人類が愛する女性として愛することができ、神様が愛する娘として愛することができれば、夫になる資格がありますが、そうでなければだめです。女性はその反対です。「あれは『私』　の夫である」と考えてはいけないというのです。「私」の夫であるという前に神様の息子であり、人類の男性を代表した男性であると考えなさい。

人類が愛する以上に愛することができ、神様が愛する以上に愛することのできる女性になればいいのです。そして「私」が男性として右足になり、女性として左足になり、人類のため、神様のための愛の足跡を家庭を通して伝えるのだと考えて結婚しなければなりません。
結婚の目的は、男性と女性の心の世界を一致させようとすることであり、男性と女性の愛の完成のためなのです。そして、結婚したということはそのような証拠を見せますと宣布したことになるのです。

結婚生活を通して愛の完成と心の完成を成したならば、家庭の理想を実現したと見ることができます。そして死ぬとき、これを成していたなら間違いなく天国へ行くというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三六〇）

三　真の結婚観

本来、心と体が完全に一つになったアダムとエバが、縦的に完全に成熟し、新郎・新婦として神様の前に喜ぶことのできる対象圏を成し、神様の祝福を受けることを通して神様の愛による家庭が形成されていたなら、それが本来エデンで堕落せずに成されていた完成圏でした。その完成圏に現れたアダムとエバになっていたなら、それはどういう立場でしょうか。祝福を受ける立場です。
恵みの中で一番貴い恵みは神様の愛です。その次は神様の創造の権限を引き継ぐことです。神様が愛を中心としてアダムとエバを創造されたように、創造的権限を賦与されるのが子女なのです。皆さんはなぜ子女を愛しますか。神様の創造の偉業を横的に実休園で引き継いだのと同じであるため、アダムとエバを造って神様が喜ばれたその喜びを代わりに感じるためです。

その次は、神様が天地万物を主管されたように万物を主管させるために、横的な立場にいる私たちに、神様は主管権を賦与されました。その権限をもって秩序的段階にとどまることのできる、そんな世界が理想的天国であると見るのです。それゆえ、結婚するその時には、神様の愛を相続し、再創造の権限と主管権を、完成圏に立って引き継ぐようになるのです。ですから結婚式というのは、愛の顕

現をいうと同時に創造権と主管権を賦与されることなのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五六）

私たちの結婚観は宇宙の座布団を・・。宇宙の座布団、分かりまか。宇宙で一番いい絹は何ですか。洋緞（注・高級な絹織物の一種）ですか。洋緞の布団、ねんねこを敷いておいて新婚生活をすることよりも、宇宙の洋緞布団を敷いておいて、その中で愛し合う！そう考えるのです。

愛を中心として、所有権を「私」　一代で決定する瞬間だというのです。「私」の当代に所有権が来るのです。その所有とは女性の所有が決定されるのです。その女性はどのような女性ですか。宇宙の半分です！　これをひったくる日には、私の後ろに宇宙がぶらさがってくるのです。考えてみなさい。

また、女性はなぜ結婚をしなければならないのでしょうか。男性にくっついて、一八〇度と一八〇度が合わさって、二人で宇宙の価値と対等の作用圏をつくるために結婚するのです！　このように考えるとき、統一教会の思想が素晴らしいというのです。

結婚は私のためではなく相対のためにするという信条をもたなければなりません。結婚するとき、ハンサムな人、きれいな人を得ようとするのは間違った考えです。人間は人のために生きなければならないという原則が分かったなら、結婚も相対のためにするという観念をもたなければなりません。いくら醜い人でも美人よりも愛そうという信念をもつことが原則的な結婚観です。人間として生まれて相対を神様のように愛し、人類のように愛し、この世の誰よりももっと愛することができるという観念が確立しなければ、天の国に復帰することはできません。一人の男性として一人の女性を愛することができないなら、神様と人類を愛することはできません。

結婚は誰のためにするのかといえば、人類のためにするのです。人類の共同利益のためなのです。世界を代表したものです。その男性は世界を代表した男性であり、女性は世界を代表した女性です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三六三）

四　思春期とはどのような時か

皆さん、思春期の時は、天下の王子になる気分なのです。すべてのことを自分を中心としてひっくり返して考える時期です。このように思春期は反駁する時代なので、自分を分かってくれなければ、いくらでも危険な道へ行く可能性があります。それゆえに今日、青少年たちの問題が世界的な問題になったのです。

思春期の時代はどんなことでも自分を中心としなければ気に入らないのです。しかし自分と関係を結んだときは、それがいくら微々たるものであっても得意になるのです。二十歳前後の女性たちをよく見ていると、訳もなく「ふふふふふ・・」と笑います。秋に葉のすべて落ちた柿の木から、熟した柿がぽとんと落ちるのを見ても、「はほほ」と笑います。

それは何か分からなくとも通じるというのです。すべてのものが、全部自分と関係を結んでいるので最高の感情が誘発されるのです。

ですから、思春期というのはすべてのものに接して因縁を結ぶことのできる転換点なのです。それはなぜでしょうか。神様の愛を中心として男性と女性を完全に百八ーセント一つにするための神様の創造本性が基盤となっているからです。

いくらきれいな娘でも思春期はただ一時しかありません。その時は一番の花の時であり、一生で一番貴い時なのです。それにもかかわらず、「私一人で生きよう」という女性がいるでしょうか。それは女性ではありません。また、男性たちの中にも格幅のよい十六歳前後の青春期に、自分一人で生きようという者がいますか。そのような時には必ず相対を探すようになるのです。誰に似てそうなのですか。神様に似て、そうなのです。

神様がそうでないのに、そのような人間ができるでしょうか。神様がそうなのです。一生のうちで一番貴い時である青春時代に、相対を探していくのは男性でも女性でも同じです。

最も美しい花のような時期、花がぱっと開いた青春時代がいつかといえば、思春期の時代です。その時期がまさに十八歳から二十四歳までの七年間です。この七年間は一生に二度とない愛の花が咲く時期です。一度しかない花のようなこの時代がどれほど貴いでしょうか。

皆さん、芍薬の花を知っているでしょう。その花のつぼみに色の違う黄色の花房があるでしょう。それは何枚から成っているでしょうか。花に全部しっかりと取り巻いているのです。それを押し開くことができますか。たやすく押し開けないようにしっかりと取り巻いているのです。男性や女性もこれと同じです。皆さんの赤い愛、黄色い花のようなその愛のつぼみ、その愛のつぼみをいつ、ぱっと咲かせるのですか。

天地の調和の中で美しさが最もよく現れる時がその時期です。人間として見ても最高の時です。神様の傑作品になり、最も中心の、絶頂としてきらめく期間です。大きくなりながら最もきれいな花のような時代、一番美しい時代が青春時代です。

その青春期の姿は最高の花のつぼみです。それを十分に愛することのできる人がいるなら、その人は神様の部屋に招待を受けることができます。そのように愛することのできる男性と女性は、神様の恵みを受けることができ、神様の部屋に招待を受けることができるというのです。それを知ったなら皆さんは、男性なら男性としてそのような準備をしなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三六七）

五　思春期に起こる身体的変化は何のためか

少年期には漠然とした夢の中で健康に育つことだけを望みますが、思春期になり身体的、生理的変化が生じるようになれば、異性に対する関心が高まり、瞳は好奇心と美しさできらきら光るようになります。体もおしゃれをするため、着物の身だしなみを整えるようになるし、顔もよりきれいにするために、整えることに余念がなくなるのです。そのような時に唇を見れば彼が思春期にさしかかっているのか、そうでないのかを知ることができます。

女性たちにおいても、思春期にさしかかれば月経が始まり、身体的に多くの変化が起こるよう

になります。お尻が大きくなり、胸がふくらみ、唇は赤くなり、瞳は神秘的に輝いたりします。そのような女性の変化は、どうして、誰のために起こるのでしょうか。女性の身体的変化は、直行していた道をくるくる回るための変化なのです。くるくる回っていくことのできる運動を始めるための変化だというのです。

直行する道には何の調和もありません。直行する道は二回行ったり来たりすればすべてのものが消耗され、何も残るものがないのです。直行する道を行ったり来たりすれば環境を破壊するだけで、環境の調和は起こりません。環境の調和と保存のためには回っていかなければなりません。それゆえ、すべてが回っていくべきです。回っていく場合は、自分を中心にしては回っていくことができないので相対を中心として回っていかなければなりません。

回っていく場合は相対とぶつかってこそ、回っていくことができます。相対者とぶつかれば自動的に反作用が起こり、回る運動が始まります。これは天地の道理です。それゆえ、女性に身体的な変化が起こるのは相対者と出会い、回っていくためです。ぶつかれば回っていくための力が生じるようになります。女性が化粧をしてきれいに飾るのは、自分のためというより相対のためであるといえます。

美しく身なりを整えた女性を見ると、その女性が男性を見る目はひときわ輝きます。自分の相対を見つけるため、自らをきれいに装うのは自然の現象といえるでしょう。しゃれた男性に出会うため、理想的男性に出会うため、心を焦がしながら歩き回るようになります。

皆さんのような思春期の独身男女がともに会って話をする時は胸がはずむのです。はずむでしょう。はずみますか、はずまないですか。分からないのですか。はずみますか、はずみませんか。（はずみます）。それみなさい。興奮するでしょう。そして興奮するようになれば心のうちに変化が生じます。ところが、その心が神様を中心とせず、反対の立場に立てば悪になるのです。心は誰を中心とするのでしょうか。神様です。その神様を中心とした心と心情が、一つになることのできる所に上がれるようにするのが愛です。何の話か分かりますか。

このような立場で一つの生涯を送らなければならない人間であるために、人間は愛を中心とした理想と希望をもたなければならないのです。そして、最後の場で輝くことのできるのが愛なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五七）

六　思春期の初恋

思春期には愛を探して心と体が衝動を起こすようになります。父母の言葉を聞かず、自分勝手に歩き回ります。心の目と体の目が一つになって動きます。また、愛の鼻をもてば、ふだん嫌いだったにおいまで好きになります。愛の口をもてば、ふだん嫌いだった味までも好きになります。夜を徹しながらでも愛の話を聞きたがります。愛する対象は、触れば触

るほど、もっと触りたいというのです。このように思春期になり、愛の感情に襲われるときは、目がおかしくなり、すべてのものを良く見ようとします。

心と体が一つになり、愛の銃を撃てば、愛という弾丸が相手の心臓に打ちこまれるようになるのです。男性のそのような愛、女性のそのような愛を願う人は手を挙げてみなさい。愛は消化できないものがありません。すべてのものをおいしく食べることができ、すべてのものをみな消化することができるのです。真実の愛をもったなら、いくらぶ男であっても美男に見えるようになります。愛は驚くべきものです。ですから、良くても悪くても思春期時代に結んだ初恋は、男性でも女性でも永遠に忘れることができません。

死ぬほど好きな恋人のいる女性が、父母の反対で別の男性に嫁いだとしたら、その女性は一生の間幸福でしょうか、不幸でしょうか。その女性は、自分が初めて愛した男性がたとえ鼻がつぶれ、目が不格好だとしても、花のように良く見えるのです。父母が決めてくれた男性は外見からしても学閥からしても、千人なら千人がみないいと言える人であり、昔自分が心の中でささやき、愛した男性は至って不出来なのにもかかわらず、その初恋の男性のほうが良いというのです。初恋はすべてを占領するのです。

愛の主体は誰ですか。神様です。愛の主体が神様であるために、愛することができるのも神様お一人しかいないのです。元来、初恋は神様とするようになっていました。ところがそのようにできなかったことが堕落です。エバは誰と愛し合いましたか。（天使長と愛し合いました）。ところが喜びながら愛さなければならないのに、顔をしかめて泣きながら愛し合ったのです。

皆さん、堕落するときエバが「あかいいわ！　善悪を知る木の果を取って食べると本当においしい、おいしいわ」と言ったでしょうか。エバが天使長に強姦されたとき、その心はどうだったのでしょうか。良心の呵責を受け、嫌がりながら天使長の誘惑に引かれていったのです。すべての細胞がうれしくて花が早春を望むように愛し合うべきであったにもかかわらず、細胞が朽ち果て、心情が朽ち果てた場で顔をしかめながら愛し合ったのです。

もし堕落しなかったなら、誰と初恋をしたのでしょうか。神様としたはずです。アダムとエバの神様を中心とした初恋には、すべてがつまっているのです。初恋を中心とした父母の愛、初恋を中心とした夫婦の愛、初恋を中心とした子女の愛、すべてに神様の愛と根がしっかりとくっついているのです。皆さんのように何千年の歴史的距離をおいて、個人復帰や家庭復帰という段階を経なければならない愛ではありません。一遍にぱっとくっつく愛です。父母の愛、夫婦の愛、子女の愛がひとまとめに全部くっつく愛なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三七四）

七　結婚の適齢期－愛はいつから連結されるのか

全知全能の神様は、人間において華やかに花開くことのできる時を造られました。その時期が青春時代だといえます。神様は愛の青

春時代を中心として、自ら幸福を培っていくように造られたのです。それゆえ、神様が存在する同一の理想的な人間世界にあって、男女が華やかな青春の時期に幸福になることができる関門として、結婚という祝福をしました。この世に存在するすべてのものは、相対的理想を経なければ存在価値がなくなるのです。ですから人間が成長したのちに祝福を受けて結婚をするのは至極自然の摂理なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－二七こ

愛はいつから連結されるのでしょうか。愛の力はいつから押し出してくれるのでしょうか。男女も思春期を迎え、すべての器官が百パーセント完成圏に到達するようになるとき、停止状態へ入っていくのです。すべてのものが飽和状態になります。運動というのは必ず飽和線を経ます。それで、いったん停止して、また回るようになります。そのような飽和状態に入っていって停止します。そのような飽和状態に入っていく前段階が何かといえば思春期です。思春期というのは「私」の肉体の発育において、すべての器官が完成した時期をいいます。気球でいえば空気がなくてぺちゃんこの状態から、空気を入れてぱんぱんになり、破裂する直前になったということです。もう少し入れば破裂します。

その破裂するとはどういうことでしょうか。それが愛が完成して破裂するのならどれほどいいことでしょうか。同じく人間も十八歳ぐらいになればゴム風船のように張り詰めてきます。そして破裂直前の立場まで行き、そこから見事に永遠に転がっていくことができます。

霊肉が完全に一体となるときは、本然の愛が私たちの中に訪れてくるときです。堕落した世界の人間たちの場合も、思春期とは霊と肉体の細胞が和合する平行線上に立つこのとできる時期であるというのです。思春期のときの霊と肉体の細胞は、すべての門を開き喜んで迎えるのです。神様を中心とした思春期時代に人間世界を眺めるとき、喜びと幸福のみが満ちるようになるのです。

愛するようになれば幸せになり、愛に酔って感じる感情は、実に、のぞきめがねのようだといって、早く経験してみようと飛びつけば、それは大変なことだと言わざるを得ません。愛の門は時になれば開くのであり、門が開く時を待って入らなければなりません。自分が愛の主体になったと思った時、堂々と開かなければならないのです。

結婚適齢期はいつごろだと思いますか。心と体が最も完成した力をもつときが結婚することのできる最適齢期であるといえます。青年期を越えればだんだんと気力が衰えていくために、いくら純情を保ったといっても相対者を求めるのが難しくなるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三六九）

それでは完成した人、すなわち完成した男性と女性が住むようになる場とはどのような場でしょうか。天の公的なみ旨を中心として神様の愛を受けることができ、心と体が完全に一つになり、神様を主体として侍ることのできる場です。このような場に住むようになるとき、完成したアダムとエバの立場に立つようになります。このような人々が家庭を築いて出発するのが歴史的な出発なのです。こ

れが歴史的な人生行路の第一歩です。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－三七八）

八　心と体が一致した愛

皆さん、三点が分かりますか。三点。この三点が一つになれる点は、神様とアダムとエバが一つになれる場です。神様がアダムとエバと一つになれる場は、彼らの心と体が一致する場です。

男性は、心と体が主体と対象の関係になっていますが、心と体は縦と横の作用を継続することによって存在の力を発生させます。女性もやはり心と体が縦と横の関係をなしており、存在の力が起こってくるのです。男性でも女性でもすべて縦横の相対的関係をもっていますが、その力は愛なのです。愛だけが心と体の理想的関係を永遠に成すことができます。

貧しい農夫として田舎で草を取り、農作業をする場にいたとしても、その農夫の心と体に愛の情熱が燃えあがれば、心の五宮と肉の五官が完全に合わさって、これ以上にない喜びを味わうようになるのです。このように神様の愛が皆さんに臨むことのできる安着点を皆さんがもっているなら、時計の振り子の振動のように、神様の心が一度揺れれば皆さんの心が一度揺れ、それゆえに皆さんと神様が一緒に回っていくというのです。

一度回り始めればどんどん回っていきます。行けば行くほど加重された力、遠心力が作用して、家庭を愛しなさい、社会を愛しなさい、国家を愛しなさい、世界を愛しなさいと要求するようになるのです。

皆さん自身の心と体が一つになる中で愛の門が開かれる時が近づけば、皆さん自身の心が宇宙に共鳴して小説家や詩人になったりするのです。愛を主題として詩や小説を書くことができるのは愛を美しく幸せに結んでゆく資質を発揮するようになるからです。人間が愛の目を開けるようになれば、自分の心と体は宇宙の中で立体的な関係を結びたくなります。そして秋風に舞う落ち葉を見て自然の道理を悟りほほえむようになり、春の園に咲く花の中に美しさを見詰めたくなって、自分が一輪の花になったりするのです。

男性も女性もどうして愛を好むのでしょうか。人間の身体はおよそ一億兆にもなる細胞から構成されていますが、その細胞全体がいつ作動するかといえば愛する時なのです。人体のすべての細胞を動かすことのできる時が、まさに男女が愛し合う時であることを知らなければなりません。心と体が一つになって恋しい涙を流すようになれば、骨が鳴り騒ぎます。動物の場合においても同じです。皆さんも知っていると思いますが、雌牛が発情すると、どうなりますか。食べることさえ忘れてしまいます。

その時、すべての神経がそのことだけを願うようになります。それと同じで、心と体が一つになった場所で愛し、互いに恋しがるようになれば、体の中で動かない細胞はありません。細胞の一切が本来の方向感覚を忘れてしまい一つに集中されます。こうして相対に出会うようになれば爆発するようになります。その爆発力はものすごい力になります。そのように愛して何をしようというのでしょうか。神様に似ようというのです。神様が喜ばれる

ことに同参することのできる場に出ていこうとするのです。言い換えれば、神様が喜ばれることをともに感じようとするのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三七八）

第七章　真なる夫婦の愛

一　創造本然の夫婦関係

神様はプラスとマイナスの二性性相であられます。これをプラスに分立させたのが男性のアダムであり、マイナスに分立させたのが女性のエバです。一男と一女は、無形であられる神様の実体対象として現れた息子・娘です。男性は神様のプラス（十）の性稟を、女性は神様のマイナス（この性稟を代表した実体対象です。

創造理念は、両性の中和体としておられる神様の性相を二性に分立し、再び神様の本性相に似た姿に合性一体化するものです。一人の男性と一人の女性は、おのおの神様の一性に似て現れました。したがって、彼ら一男一女の結合は、神様のプラス（＋）性稟とマイナス（この性稟が一つになることです。すなわち、神様に似た中和体となるのです。それゆえ、人間の二人、すなわち夫婦は神様の全体を表象する結合体です。

男性は神様のプラス（＋）の性稟を代表することによって真の父の分身となり、女性は神様のマイナス（この性稟を代表することによって真の母の分身となるのです。彼らはおのおの神様の身代わりでもあります。夫婦が愛で一つになることは、天宙を抱くことと同じです。これは宇宙的な出会いです。

夫は多くの男性を代表して現れた存在なので、夫であると同時にお父さんの身代わりでありお兄さんの身代わりであって、妻は多くの女性を代表した存在なので、夫人であると同時にまたお母さんを身代わりし、同時にお姉さんを身代わりしているので、互いに愛し合い尊重しないようにしようとしても、せざるを得ないのです。

男性は神様の陽性的形状であり、女性は神様の陰性的形状です。夫婦は天下を一枚のふろしきに包んだのと同じです。ゆえに夫婦は、神様の理想的な愛の心情を感じることができます。男性は天を象徴し、女性は地を象徴します。二人が一つとなって調和を成し、平衡線を成さなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八六八）

夫婦というのは自分一人に限った夫婦ではありません。天地を代表した夫婦だということを知らなければなりません。男性と女性の愛の完成が宇宙の完成です。この愛が壊れる日には宇宙の秩序が破壊され、縦的な世界がすべて台無しになります。男性と女性が互いに好きで抱擁すること自体が、宇宙が一体を成す場となります。神様の理想の中で成される創造本然の姿がそうなのです。

人間が男性と女性として生まれたのは愛のためです。愛は夫婦となって一つとなることにより、実を結ぶことができます。男性と女性は神様の愛が二性性相によって分立した実体なので、分立した実体が合性一体化するために、神様の愛を尋ねていかなければなりません。

神様の愛に出合おうとするなら、男性と女性が愛で一つとならなければなりません。男性と女性が一つにならなくては、神様の愛に出合うことはできません。神様の愛に出合うことによって、私たちは神様の同位圏にとどまるようになるのです。

同位圏とは、神様の横に立つことのできる位置をいいます。夫婦が完全に神様の愛を中心として一つとなるようになれば、その夫婦は神様の位置まで出ていくことができるということを知らなければなりません。神様の位置に上がっていくことができるだけでなく、神様がもっているすべてのものが自分の所有圏内に入ってくるようになるのです。愛の力はこのように驚くべきものです。

神様が皆さんに同参的権威を許されると同時に、皆さんは神様がもっておられる所有権限全体を伝授されるようになるのです。アダムの願いは天宙を治めることでした。アダムが愛した夫婦の価値は、世界の中心的価値を代表したものです。堕落しないで神様が立てる本然の人、すなわち本然の男性と女性を中心としたその愛はどのくらい貴い価値があるのかをはっきりと知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九六九）

二　夫婦の愛が必要な理由

皆さんは、天国がどのような所だとお思いになりますか。天国は一言で言って、完成した人が入り、暮らす所だということができます。天国が真なる愛を備えた完成した人が入る所であるとするならば、その真の愛を備えた人とは、どのような人でしょうか。

人間は男性と女性で成り立っています。神様の理想的愛の完成が、地上でどのように成り立ち得るかを見るとき、男性と女性を離れては成り立ち得ないという結論に至るのです。完成した愛の主体性を備えた男性と女性でなくては、神様の愛が完成されません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九五一）

真の家庭は家庭天国を築かなければなりません。家庭天国を築くようになれば、間違いなく地上天国が築かれます。なぜ、そうでしょうか。未来の天国に対する実感を現在の立場で刺激しようとするので、不可避的に相対が必要ですが、家庭において相対からその刺激を受けることで、未来の天国理念を今日の生活感情から体得することができるからです。それを体得するために、夫婦が必要なのです。その刺激によって、夫婦は永生することができます。発展は刺激がなくてはできないのです。

夫婦の愛は、理想天国を建設することのできる刺激を与えるのです。言い換えれば、未来の喜びを現在圏内に引き込み、刺激を与えて推進力を補給させ、その場まで行くようにするのが夫婦の愛です。その愛の中には、国の愛も入っており、世界の愛も入っており、神様の愛も入っています。したがって、その愛はどこでも無事通過です。

結局、天国には互いに愛し合う夫婦だけが入ることができます。それゆえ、この地上でそのような思想をもって互いに愛し合う夫婦は、いつも天国生活をしているのです。イエス様は「天国はあなたの心の中にある」と言われたでしょう。けれども今日、統一教会で

は、「あなたの家庭に天国がある」と言うのです。

家庭で天国を築くことができないというときには、統一教会のみ旨が成されないのです。けれども、築くことができるというときには、そのみ旨が成されます。このような観点から、皆さんは原理を中心として正道の道を選んでいかなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八七五）

今後、天国を築こうとするなら、夫婦同士が愛し合うのと同じように、結婚した男性は世界のすべての女性たちを自分の妻を愛する心で愛そうと思わなければなりません。「世界のすべての女性の中から代表的な伴侶として私は妻を選んだのです」。このように考えなさいというのです。

また女性たちは、自分の夫なら夫に対して、ただ一人の夫としてではなく、全世界の男性の中から代表として選ばれた人が夫だと考えなさいというのです。女性の皆さんがどうしなければならないかと言えば、一人の男性を愛しますが、その男性一人としてだけ愛するのではなく、世界の男性を代表した男性として愛さなければなりません。その男性はお父さんを代表し、お兄さんを代表し、夫を代表するのです。

それはどういう意味でしょうか。夫をお父さんのように思い、おじいさんのように思い、その次にはお兄さんのように思い、弟のように思わなければならないということです。このような縁を通してお父さんを愛し、おじいさんを愛し、お兄さんを好きになり、弟を好きになることのできる、そのような女性こそ相対を迎えることができるのであり、「お父さんも嫌い、お兄さんも嫌い、おじいさんも嫌い、弟も嫌い、みんな嫌い、ただ自分の夫だけ好きだ」、それは神様の公約を外れた立場です。

だから、どうしなければならないかと言えば、全世界の男性すべてをも愛することのできる心を内包し、その結実のような男性を「私」が抱いて愛するのは、全世界のすべての男性を代表して愛するのだという観念をもたなければなりません。「私」のお父さんのように、「私」のお兄さんのように、「私」の弟のように万国を超越して、国境を超越して愛し得る心をもつようになれば、その人は神様の息子だということができ、娘だということができます。これが統一教会の思想です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八七五）

三　理想的な夫婦の関係

真の夫とは「私が生まれたのはあなたのためですから、あなたのために生き、あなたのために死ぬでしょう」と言う人です。真の妻も同様です。このように相応しながら、自らを越えて相対のために生きる原則をもつことのできる家庭なら、この家庭こそ理想的な家庭であり、幸福の家庭であり、平和の家庭であらざるを得ません。

男性がいくら優れているとしても、男性が生まれるようになった動機は、男性自身にあるのではありません。女性のために生まれたというのです。女性がいなければ男性がこのように生まれることができますか。その反対

に、女性はいくら美しい化粧をし、「私」がアメリカのある俳優だと誇っても、その女性は女性のために生まれたのではありません。

ですから男性は肩が大きく、女性はおしりが大きくて、それを合わせれば、よく合うようになっています。それゆえ真なる愛の妻、真の理想的な、幸福な妻と夫はどこに存在するのでしょうか。「私」のためにではなく、互いのために生き、またそのような心が一致するとき、理想的な夫婦が現れます。それは間違いない事実です。

このような原則から見るとき、理想的な愛や、また幸福で善なる人をどこで探すことができるかといえば、自分のために生きようとするところでは探すことができず、人のために生きようというところに根拠を置けば探すことができるのです。夫は妻のために、妻は夫のために生命を捧げることができなければなりません。その夫婦は神様の愛の圏内に連結され、直接的な保護を受けるので、堕落はあり得ません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八八二）

男性が自分の妻を愛することにおいては、世の中のどの男性が自分の妻を愛するのよりも愛さなければなりません。女性も自分の夫を愛することにおいては、世の中のどの女性が自分の夫を愛するのよりも愛さなければなりません。それが真の家庭を築いた夫婦が守るべき愛の倫理なのです。

真なる父母は、子供のために生きて死にます。そこには愛が成り立っているからです。同様に、真なる愛の妻と夫、幸福な妻と夫とは、互いのために生き、愛で一つとなるときに現れ得るのであり、また、それが理想的な夫婦です。

新郎・新婦はお金や権力、名誉を中心として一つとなるのではなく、神様の本然の愛を中心として一体とならなければなりません。この世の夫婦関係においては、夫がお金を稼いでくるときに力が生じます。妻は夫が稼いできたお金を見て力が出るし、その妻の姿を見て夫も力が出るようになっています。

ですから、彼らはお金を稼ぐことができなければ、不安で夫婦関係が壊れたりもします。真なる夫婦は、神様を中心として愛の一体を成し、愛を中心として前進的発展を成していかなければなりません。妻は夫のために生き、夫は妻を愛する中で、一級の夫婦が神様を愛する家庭をつくり上げていかなければならないのです。

夫と妻が互いに愛し合うことにおいても、神様の身代わりとして夫なら夫、妻なら妻を愛さなければなりません。人間的な立場で愛するようになれば、互いに足らない面が現れるようになって、結局は離婚する事態まで起こるようになります。

最近、済州道の娘が嫁ぐとき、田畑を与えれば登記するのに娘自身の名前でするというでしょう。いつでも夫と別れれば自分の主張をするために、そうするのです。それは本当に理想的な夫婦でしょうか。お金を使っても、これは夫のお金、これは自分のお金、お金を持っても、つるつるしたのは自分のお金、し

わが寄ったお金は男性のお金・・。それは愛ではありません。

お金の包みを広げて使っても「どうなった？」「私が使った」「そう？　いい時に使ったわね・・。もっと使って・・。」これでこそいいのです。口をぶるぶる震わせ「ああ、また使ったわね・・！」これでは落第者です。ですから、いつも与えても、無限に与えることができ、いつも思いのままに、深い所でも低い所でも、夜でも昼でも授け受けることができるようになるときに、幸福なのです。

それゆえ、与えようとしても与えることができないときは不幸なのであり、受けようとしても受けることができないときも不幸なのです。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－八八二）

四　神様も酔うことのできる真の夫婦の愛

私たち個々人は心と体が相反しているので、心を中心として体を一つにし、心の中に神様が臨在できる相対的基盤を造成しなければなりません。このような男性と女性が祝福を受けて、完全な愛を授け受けながら喜びを享受するとき、神様がご覧になると、地上に咲いた花のようだというのです。

また、彼らの愛によって築かれたすべての調和的万象は、神様には香りのようなものです。このような美しい花と香りの中に神様は暮らしたくて、訪ねてこられるのです。神様の愛が訪ねてくることのできる土台が、すなわち夫婦愛の場だというのです。その場は、すべての万物と宇宙が調和する場となることでしょう。このような内容と道を教えてくれるのが統一教会であり、統一教会の原理です。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－八八九）

神様が最高に喜ばれるメロディーが何かといえば、男性と女性が互いに好き合って喜ぶ永遠なる夫婦の笑い声なのです。そのような夫婦が世の中を理解して抱くことができ、宇宙全体を受容できる心で生を営むとき、笑いは自然発生的となりまず。そのような男女の美しい姿が、神様の前に一輪の花でなくて何でしょうか。これは単純な理想でも抽象でもありません。本然の世界を語っているだけです。

夫婦同士、家の前にある山を眺めながら、あの山が生まれたのは誰のためかを尋ねてみて、全宇宙を考えながら、この宇宙が生まれたのは誰のためかを尋ねてみます。そうすれば、自分のためであると同時にあなたのために生まれたのだと答えるのです。夫婦とはまさにこのようなものです。この宇宙の存在価値を重要視することが、夫婦が一つとなる道です。夫婦は心を中心として、人格を中心として、愛を中心として話をするのです。夫婦は同じ道に行くのです。

田舎者の娘だといっても、大臣と結婚すればどうなりますか。同じ道に行くのです。その田舎者の女性が小学校も出ていないといっても、すべての人が大臣の奥様だといいながら、頭を下げなければならないのです。このように夫婦は共に行くのです。夫婦に「あなた」の愛が別にあり、「私」の愛が別にありますか。「あなた」の愛であるとともに「私」の愛なのです。「お前」の愛であるとともに「私」の愛なのです。心情と血統がすべて一つになって愛するのです。

このように愛し合うことができる人は誰ですか。夫婦です。夫婦なき世の中ならば生きる味わいがありますか。愛し合う夫婦が対話する姿を見れば世の中のどんな詩や絵よりも美しいのです。また「愛し合う者同士、私たちだけ、私たち二人で」という言葉がどれくらい美しく素晴らしい言葉ですか。

良いには良いのですが、その中で最も良いものは何でしょうか。相対者しかいません。私が「あなた」と呼べば、相対的に「お前」と答えるし、「やあ」と呼べば「うん」と答えるのです。

夫が愛する妻を慕わしくやさしく「お前」と呼べば、親しくやわらかく「どうしたの」と答えます。しかし、無愛想に呼べば同じように「何だよ」と答えるのです。山びこと同じで、みな相対的だというのです。

愛に酔った人々の笑いを見れば、それも相対的です。男性は笑うとき目を一層大きく開くのに、女性は笑うときそっと目を閉じます。夫の目が大きくなり、妻の目がだんだん小さくなれば、彼ら夫婦は愛に酔った幸福な夫婦だということができるでしょう。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－八八八）

五　会えば会うほどいっそう会いたいのが夫婦の愛

男性が幸福な時はいつであり、女性が幸福な時はいつだと皆さんは思いますか。二人が相対を成して愛を授け受ける時が、幸福な時だということができます。男性が女性に対するとき、こぶしを振り回したり物理的な力を動員するなら、彼ら夫婦は決して幸福であるとはいえないでしょ男性が女性に対するとき、力で胸に抱いて保護しながら愛するとき、女性は本当の幸福を感じることができるでしょう。男性と女性の間の愛において、力だけでもだめであり、心で愛するといって、それだけでいいのでもありません。

愛する心を、力をもって確認してあげたとき、女性は本当の幸福感を味わうことができるでしょうし、また、女性が男性に対して心と体で愛を返すとき、本当に幸福な夫婦となるでしょう。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－八九〇）

人はいつも刺激が必要です。幸福は刺激なしには築かれません。刺激がなければならないというのです。いつも食べるご飯も、食べるときごとにおなかがすいていてこそ、新鮮であるように、夫婦間の愛も同様に、いつも新しくなければならないというのです。

妻と夫が互いに見詰め合えば見詰め合うほど、もっと見詰めたいし、一日中共にいたくなければなりません。愛は互いに恋しがるとき価値があります。口があれば口を広げ、目があれば目をあけて愛をくださいといえば、愛をくれる人も気分が良いでしょう。ぼうっとしていると、愛が来ても逃げていくということを知らなければなりません。

愛する人が真剣でなく、消極的に出るとどれだけ気分が悪いでしょうか。皆さんは愛する者同士共にいることがいいですか、離れているのがいいでしょうか。近くに共にいればいるほどいいのです。なぜでしょうか。すべ

てのことが一遍に作用するのでいいというのです。

一番いいことが何でしょうか。食べることですか。おなかがすいた時、ご飯を見てよかったといって食べますが、そのようなことは一時的だというのです。飽きるほど食べたのに、また食べ物を上げれば嫌になります。けれども、自分が愛している人に対しては、そうではないというのです。

愛する人を「私は忘れてしまいたい。嫌い」と言う人がいますか。見ても見ても限りなく見たくなるのです。そうでしょう。見てもまた見たいし、また見てもまた見たくなるのです。だから互いが、お前が前に立ち、私が後ろに立つといいながら、車輪のように回るというのです。ここから統一が始まるのです。

愛を知った妻は、夫の胸に頭をうずめて昼寝を楽しみたいという衝動が起こったりもします。それは幸福に酔って、ふらふらになるからなのです。結婚する前には、恐ろしくて気持ち悪く見えた男性が、結婚して夫となってからは、会いたくて一日に何度も見なければだめなほど、心境の変化を引き起こすのが女性です。だから、電話をして、昼食の時間にちょっと家に立ち寄りなさいと呼び出したりもします。

愛を知った男性も、同様です。暇さえあれば、妻のひざをまくらにして、眠りたがります。だから昼食の時間やコーヒーを飲む時間はもちろん、時間があれば家に飛んできたりします。また、結婚する前には「そのようなことは女性がやることだろう、男がすることか」と言いながらしなかったことも、妻が願いさえすれば、ためらいなくしたりします。このようなことが、愛を知った男性と女性においてよく起こる変化だといえます。

神様は人間をお造りになり、祝福してくださるとき、夫婦が幸福になれるようにしてくださいました。そのような祝福の門を開いて入った夫婦は、二人でささやくのに余念がないというのです。「私はあなたに会うために、このように待ってきました。私の生命はあなたを通してその価値を花咲かせるでしょう。あなたを愛するために生まれ、また、きょうのために待ってきました」などなど、互いをたたえ合う甘い話だけだというのです。

この世に愛の蜜語ほど甘ったるいものは存在しないでしょう。夫婦が寝床に入っても、ささやく蜜語はこの世のすべての疲労と憎しみを溶かす清涼剤となるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八九四）

六　夫婦の愛の発展過程

男性と女性が神様を仲保として出会うとき、どのように愛の表現をするでしょうか。愛の発展過程を見れば、最初が口であり、二番目が胸であり、三番目が生殖器です。女性が初めて男性に出会って愛し始める前に、恥ずかしさを感じて隠すのは口であるので、手で口を覆うのです。

愛が口付けから始まるからです。愛が次第に成熟すれば、その結実として息子・娘が生まれるようになるのです。女性において生殖器は、愛の聖所ですが、その門を開けることのできるかぎは、夫だけがもっているのです。

夫が妻の愛の聖所を開けることのできるかぎを二つやそれ以上もっているなら、その夫はサタンです。また妻の聖所が開くのは、夫がもっているかぎだけでなければならないにもかかわらず、どんなかぎでも開くならば、それもまたサタンなのです。

夫がもった愛のかぎが妻の聖所を開けて入れば、そこから世の中で最も貴く価値のある息子・娘が誕生するようになるのです。その息子・娘の価値は、この世の何ものとも取り換えることのできない愛の結晶体なのです。息子・娘を通して、神様が人類の先祖であるアダムとエバを創造された心情を体得するようになるのです。だから父母は、息子・娘を見ながら「こう見てもわが愛する人、ああ見てもわが愛する人・・（パンソリ『春香伝』）」と歌い、喜ぶようになるのです。

愛で生まれた赤ん坊が、何をしても憎くなくてひたすらかわいいのは、その赤ん坊が自分の血と肉で、そして愛でつくられた分身体であるからです。小便をし、大便をし、鼻を垂らしても、ただひたすらかわいく愛らしいのです。それらの中に愛が染み込んでいるからです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八九四）

夫と妻の関係でも、愛の強力な力で結ばれたなら、相対が何をしようと、どのようなことをしても、うれしく、愛らしく感じなければならないのです。夫の体から出るにおいが嫌だといったり、妻の身振りが嫌だと考えたり、感じたりするのは、二人の間に完全な愛が築かれていないからです。そのような夫婦は、目的のために利害関係で結ばれたからです。

結婚後の家庭生活は、神様を真ん中に奉り、その神様がともに喜ばれる姿を見ながら、互いに愛し合うことのできる関係になってこそ、本当の喜びを感じることができます。男女が結婚して互いに愛し合うことは、本来恥ずかしがることではありません。これは最も尊厳なことであり、神聖で美しいことであるにもかかわらず、神様の戒律を犯したために、愛の歴史は、罪悪によって恥ずかしい方向に流れてきました。

エデンの園で裸になって踊りを踊るのを誰が見たでしょうか。ですから人かいない所では、そのようなこともできるのです。部屋で夫婦が裸で踊るといって、それが心配することでしょうか。しかし人が見る前でそうであるなら、それは社会から非難を受けて当たり前なのです。夫婦だけでこそ、裸になって踊るのみでなく、何かをしたとしても誰が干渉するでしょうか。

ですから祝福家庭も、二人で裸になって踊りを踊りなさい。夫婦同士なのに何のかかわりがありますか。この世に男性と女性がいくら多いといっても、私たち二人しかいないという心をもたなければなりません。精誠を尽くすその女性しかいないという思いの中に、精誠を尽くすのが原理です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八九一）

真実の幸福といえば、相対者とともに愛に酔って笑い、歌い、ささやくところで見つけることができます。愛する恋人からささやきの言葉を聞くことのできる人は、幸福な人であるといえます。耳元で愛をささやくことは、まさに夢を見るかのように幸福感を感じるこ

とができるからです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三七一）

七　愛する人が死ぬとなぜ悲しいのか

夫を失えば、女性はどうして泣くのでしょうか。恋しい人を失ったので、悲しくて泣くようになるという、そのような漠然とした理由のためだけではありません。愛は四方性を備えなければなりません。

そうしながら、立体的に前後・左右と相関性を備えなければなりません。このような愛であるので、夫はその女性と左右の側で、相対として愛の四方性を成すようになるのであり、したがって、このような妻は夫がいないことによって、全宇宙が保護するその立場から、保護を受けられない立場に落ちることになるので、宇宙から受ける力が苦痛に感じられるようになるというのです。

愛する妻を見れば、なぜいいのでしょうか。一人だけでいるときは、宇宙の球形的な四方から保護され得る基準に立てなかったのに、相対がいることによって、その相対と授け受ける横的な愛の関係を結び、縦的な宇宙の力と接することのできる場をもつようになることで、宇宙の保護力によってその相対をもつ者は、無限にうれしくなるのです。

ですから、愛する妻を見れば、全精神が統一され、その妻しか見えないというのです。ですから、踊りを踊り、歌を歌うようになり、共に一団となって回るのです。

踊りを踊り、歌を歌って喜ぶ、そのようなことをなぜ、何のためにするのでしょうか。保護圏を拡大するためです。多くの人々がレバレンド・ムーンに反対しますが、そのようなレバレンド・ムーンがアメリカに行って、アメリカの若い彼らと徹夜しながら、彼らを教育して運動をさせながら、時には彼らとともに踊りを踊り、歌を歌って楽しむのは何のためですか。保護圏の拡大が私と関係があるからです。宇宙保護圏の拡大作用が私とともに始まるので、反対を受け監獄に入るようになるとしても、恐れることなく押し続けていくのです。

いくら幸福をうたい、何がどうだといっても、一人で生きるのが幸福ですか。夫婦のうち、一人が死ねば悲しくてわあわあ泣きます。一人で自分の行く道を準備できるでしょうか。なぜ片方だけだとかわいそうだといいますか。天地が喜ぶことのできるすべての重要な日々の前に、不合格者であるからです。天地法度の規律の前に外れたというのです。明らかにその法度を通してだけ、天地の運勢は回り、幸福の要件とその動機が決定されるのです。

悲しいというのも、それだけ法度から遠のいたからであり、そのような悲しみが生じるのは、天地法度とは順応しない立場にあるということです。心がうれしく、いいというのは何ですか。その人を世界で歓迎してくれる場があるということです。悲しいのは追い出される立場だからです。喜びと悲しみがそのように分かれるようになっているのです。夫婦が共に暮らして、一人が先に死ねば、泣くようになります。

なぜそうなのかといえば、この宇宙の公法の前に不合格の基準に該当すれば、この宇宙の公的な力がその人を押し出すようになり、またそのようになるときに、悲しみの度合いが強くなるからです。それでは、喜びはどのようにして生じるのでしょうか。そのような宇宙の公法に一致する自分となれば、宇宙の力が彼を抱こうとします。

その力が大きければ大きいほど、強く抱き締めるようになり、強く抱けば抱くほど、彼はその内的な中心に入っていくようになるので、喜びが来るというのです。ですから、悲しみと喜びは、どこから生じるのでしょうか。皆さん自身から生じるのではありません。これは力の原則、すなわち宇宙の公法を中心として生じます。

それでは、その宇宙の公法とは何でしょうか。男性と女性が最初から最後まで一致していく道であり、またこの道は、天運が行く道です。一人で行くのではなく、男性と女性が一致して、すなわち夫婦が一心となって行く道です。

皆さん、今までこのような話を聞いたことがありましたか。ですから互いに争い合い、泣きわめき、死んでやると大騒ぎをする人々は、早く除去されます。公的法度圏内で、合格品でない不合格品として見なされるのです。そうして、どこに行きますか。ごみ箱に行くというのです。心はそれを知っているので、それに対しては、即時に悲しみを感じるのです。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－九〇二）

八　死ぬときまでに永遠に成すべき夫婦の愛

夫婦が互いに愛し合うことにおいて、いつまで愛し合うのかと尋ねるとき、若いときだけ愛するというなら、気分がいいでしょうか、悪いでしょうか。いつまで愛することを願うでしょうか。「永遠に」とも言いますが、死ぬときまで、その次に永遠に愛することを望むというのです。永遠は未来を中心として、全体をいうのです。

死ぬときまで愛するということは、自分のすべてのものを根こそぎ与え、愛するということです。そうでしょう。「永遠に」は全体的であり、「死ぬとき」まではすべて愛するということです。そうしてこそ、相対が喜ぶのです。

この場にいる娘たちが今からお嫁に行けば、夫に間違いなく「あなた、私を愛しますか」と聞いてみることでしょう。愛するといえば、「私をすべて愛しますか、少し愛しますか」と、このように尋ねたとき、すべてを愛すると返答してこそ、気分をよくするのです。男性もそうです。仕方がありません。神様の調和がそのようになっているのです。

人々は結婚するとき、互いに死ぬまで愛するといいます。愛するという言葉を語るとき、ただ死ぬまで愛するという言葉と、「ずーっと」十年、百年、億万年愛するという言葉の中で、どれを願いますか。ただ死ぬまで愛するという言葉を願いますか。ここにいる女性たち、返答してごらんなさい。ただ死ぬまで愛するという言葉より、ずーっと億万年愛するという言葉を語れば、もっと喜ぶことでしょう。これが十年、百年、このように長くなるほど、もっとよいのです。

夫が妻と出会い、「ずーっと」、その次に十年が過ぎても「ずーっと」、また五十歳、年を取っても「死ぬまで愛する」と言うことができるなら、その妻は、自分の年取った旦那さんがどれほどいいか分からないのです。そういうものです。おなかが出て、うんうんとうなるとしても、喜ぶのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八八四）

真の妻、真の夫とはどのような人でしょうか。人はある程度成熟すれば家庭を築くようになりますが、自分の相対を永遠なる愛の相対として考え、初恋とともに日がたてばたつほど、その初恋にプラスされる愛の家庭を築かなければなりません。

その家庭的な愛が拡大され、氏族を成し、永遠に愛を拡大させていくことのできる、永遠なる愛の実体としてつながれるようになるとき、そのような夫婦は真の夫婦であり、真の妻と夫となるのです。また、そのような夫婦が神様の愛に同参できるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八八二）

妻の目には夫が最高であり、一番に見えなければなりません。夫の目にも妻がそのように見えなければならないのです。初恋で結ばれた縁が最高の縁です。人が何をいおうと最高です。このようなものは何億上げても買うことができないのです。

このような世界を自分が永遠にもつことができるなら、どれほど素晴らしいことでしょうか。すべての人がその程度にはならなければならないというのです。妻は夫によく従い、よく助けなければなりません。そのようなことが、文学作品や映画の一場面にだけ現れてはいけません。

現実に一生の間、そのように暮らさなければならないのです。最高の歴史と最高の文化が崩れたので、先生はそのような世界を立てるために、そのように暮らすために、新しい歴史を創造してきたのです。

統一教会でいう理想的夫婦とは、どのような夫婦でしょうか。最高の芸術を実体をもって展開することのできる夫婦です。最高の文学を展開することのできる夫婦です。最高の理想と世界最高の文化世界に触れる前に、最高の愛で夫婦が授け受ける甘い愛が、世界最高の芸術作品とならなければならないのです。それ自体が最高の文学作品であり、それ自体が文学の実体とならなければならないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八八四）

第八章　真なる父母の愛

一　父母の限りない愛の心

子供を産んで育ててみた親たちは分かるでしょう。愛している大切な息子・娘を通じて恵みを受けたいし、幸福も感じたいのです。また、うれしいこと、恵みを受けることがあればその息子・娘に永遠に残してあげたいでしょう。

そのような希望の心を抱いてその息子・娘がまっすぐに育ち万国から崇められ万世にたたえられる息子・娘になることを堕落した人間も願っています。夜も昼もその息子・娘がけがをしないかと保護し、切ない心情でもど

かしがるのが父母の心です。堕落した父母の心でさえもそうだというのです。

胸に抱き、乳を飲ませて育てる母親の切ない心、子供が大便をし、おしっこを漏らしてにおいがしても愛でその環境を忘れることができるのが父母の心です。堕落した父母が子供を思う心がそうであるならば、ましてや愛の主体であられる神様が本然の心情を通じてアダムとエバを愛されたかったそのお心がどれほど切なかったでしょうか。

皆さん一度考えてみてください。皆さんが子供を抱いて育てるとき子守歌を歌ってあげ、独り言で話しかけ、立派になることを願うその心は父母ならば誰でももっていることでしょう。いくら甲斐性がなく、足りない父母でもその子供に欠陥があれば、父母の心はその胸が涙でずぶ濡れになるほど、この上ない苦痛を味わうのであり、これが解かれればその苦痛に比例して喜びが伴うのです。堕落した父母の心でもそうなのですから神様のご心情はいかばかりでしょうか。（二〇ー二〇九）

父母は息子が罪を犯して牢獄へ行けば「あの野郎よく行った」と言うのではなく、その子を許し、涙を流して愛そうとします。それが父母の愛です。それで父母の愛が貴いのです。もしもその息子が死刑囚になって死ぬ時刻となれば、息子の死刑執行の時をお母さんが知っていれば、慟哭するでしょう。

この世のすべての法をみな変えてしまうことがあったとしても、息子を救うことのできる道が一つでもあるならばどのような冒険でも生命を懸けてやるのです。そのような変わらない愛をもっているので、父母の愛は貴いのです。自分の体を打ち、自分の体を失ってでも自分を犠牲にしながら子供のためには死んでもかまわないというのが父母の心情です。（九一ー一四八）

子供を愛する父母は子供を愛するとき、「私がお前に何日にゴム靴を買ってあげ、服を買ってあげ、お前のために血と汗を流したんだ。その価値は何千何百何十銭だ」と言って帳簿に付けますか。

父母が子供を愛するのに、この世の王宮の王子・王女以上にしてあげたいのですが、それ以上してあげたい気持ちを感じる場で、「私が精誠を尽くしてもこれだけしかできなくてすまない」と言うのです。「もっとよくしてあげたい」という気持ちを父母はもっているのです。

それで父母の愛を好むのです。皆さん、それを知らなければなりません。与えても不足を感じ、愛しても愛し足りないことがないかといってもっと愛したい心、与えてからも物足りず、やりきれない思いこのようなものがあるので、これは永遠の愛と通じ、本質に属することができるのです。それが愛の出発の伝統的な動機です。（六〇ー八四）

父母は子供に対して自分の一番いいものを全部あげたいのです。それが父母の心です。これは誰に似てそうなのかといえば神様に似てそうなのです。それでは神様はどのようなお方でしょうか。子供となる人間が本当に現れれば彼には自分よりもっと貴いものをあげ

ようとずるお方が神様なのです。（五六ー一四七）

二　子供がより素晴らしくなることを願う父母の心

ここで中年以上の皆さんに「昔、若い時に自分の相対を探すのに自分よりできの悪い人を求めましたか、それとも自分より素晴らしい人を求めましたか。」と聞くならば、答えはみな同じことでしょう。できの悪い人ではなく、素晴らしい人です。東西洋の誰に聞いてもそのような結論を下すことでしょう。ましてや、愛する父母が子供に対する時は、その子供が父母である自分よりもできの悪いことを願う父母はいないのです。

ある美男・美女が結婚して初めて子供を産んだ時、その子の顔を見るとその父母の順に比べると何でもないようなでたらめな顔でもその父母に対して、あなたの子供はあなたよりもきれいだと褒めれば褒めるほど、その父母はとても気分がよくなるのです。

父母の心情について考える時、おばさんの顔がきれいだとしてもそのおばさんが抱いている赤ちゃんを見て通り過ぎるおじさんが「わー！　この子はお母さんより何千万倍もかわいい」と言えば喜びます。それは、お母さんがその赤ちゃんよりも何千万倍もブスだという言葉です。

でもそんな言葉を言われて「何ですって？私より何千万倍もかわいいって？　そんな私は何千万倍もブスだってことじゃないの？」と言いながら食って掛かるお母さんはいません。ただうれしくてどうしていいか分からないのです。これが母親の心です。このような心は誰に似たのでしょうか。お母さんは結果的な存在であって、動機的な存在ではありません。

息子が父親よりもできの悪いことを願う家庭があるならばその家は滅びるのです。父親は大統領なのに息子がそれより劣るようになって、そのような形態が数代か続けばその家はだんだん滅びるのです。しまいには肩身の狭い立場になるのです。息子がお父さんに「お父さん以上にやりたいのですが、いいでしょうか。」と言えば、お父さんが「やいこの野郎！」と言うでしょうか。「そうかやってみなさい」と言うでしょうか。後者を選ぶのです。（四一ー二八三）

どのような父母でも家庭の責任を任せるために自分の身代わりを立てる時は、自分よりもできない者を身代わりに立てることを願いません。なぜそうなのでしょうか。子供が自分より優れてはいけないと考える父母は絶対にいないからです。また国を中心として見る時も、やはり同じです。

国の主権者は、自分以上の主権者が現れることを願う主権者にならなければなりません。家庭においても、国家においても、誰彼を問わず、自分より素晴らしく、自分よりすべてのものを備えている後継者が現れることを願わなければなりません。これは歴史の変遷を超越する、永遠に近い要求条件です。

父母の愛が永遠に持続するためにはその伝統を継承した誰かがいなければなりません。

明らかに子女たちが相続者です。私たちが子女たちを、そのような伝統の相続者になるように教育しなければなりません。そしてその伝統をより高い価値に向上させることのできる方法が私たちには必要です。

各世代ごとに既存の伝統の重要さを認識しなければならないし、その伝統を継承するだけでなく未来に向かって発展させなければなりません。そのような伝統は、いつも父母が自分たちよりも子女の勝ることを熱望する、そのような真の家庭からのみ出発することができます。

このような熱い望みをもった父母たちは絶えず、子女たちに注意を傾け励ましてあげることでしょう。そのような父母は子女たちが彼らよりもっと素晴らしくなれるその日を待ち望んで、子供たちにできる限り最善の条件を準備してあげようと精誠を尽くすことでしょう。このような父母は子女たちの幸福のためにすべてのことを犠牲にするでしょうし、甚だしくは子女たちを父母よりもっと素晴らしくしてあげる方向に、進んで強要したりもするでしょう。

父母は子供が自分より素晴らしいとき幸福を感じます。ですから女性として生まれて自分よりもできの悪い息子・娘を産めば、天の国に入る面目を失います。お父さんとお母さんは、自分を愛する以上に自分の息子・娘を愛することができなければなりません。また子女もそのように考えるとき自動的に愛の世界が現れて、天国が築かれることでしょう。（祝福家庭と理想天国ＩＩ一〇〇七）

三　父母の愛は永遠不変の愛

父母が子供を愛する愛のその起源的な動機はどこから始まったのでしょうか。男女を中心とする愛は変わる愛ですが、そこから生まれた息子・娘を中心とする愛はなぜ変わらないのでしょうか。これは、その男女を中心とする愛から来た愛ではありません。変わらない愛は横的な夫婦の因縁でできたものではなく、縦的なある流れの起源を通じて関係ができたものに違いありません。そのような縦的な主体は誰でしょうか。

そのような主体を私たちは神様といいます。その愛は夫婦が思いのままにできる愛ではありません。その愛の前に私がしたければするし、したくなければしない立場には立つことができません。それは切っても切れないものです。横的な因縁では触れることができません。ですから、父母が子供を愛するその愛は永遠不変です。

今日、民主社会において、個人主義思想が澎湃したこの時代において、子供たちは「新時代と旧時代は次元が違う」と言いますが、子供たちはそのように変わってもその父母の心は旧時代であるとか新時代であるとか叫ぶからといって「お前がそうなら私はこうしよう」と言うようにはなっていません。父母の愛はそうではないのです。それは動物も同じです。赤ちゃんを愛するにも自分の生命を超越するのです。（四八－一五五）

それではそのような愛はどこから来たのでしょうか。私自身が第一のある相対的な結果の存在ならばそれは第一のある力の因縁の中

から来たものです。それは、私たち人間として触れることができるものではありません。ですから「父母が子供を愛する愛を革命しよう！　革命の旗手になろう！」と言う入を見ましたか。

もしある父母がこの愛を革命して人類歴史を改造してしまうといって「私は父母は父母だけれど、子供を愛さない」と主張したとしましょう。しかしその父母は、子供のへその緒が離れる瞬間、子供を愛する心が自然に湧くことでしょう。すべての生物はものの高低を問わず自分の子供を愛さざるを得なくなっているのです。

愛するために生命を投入して、生命を踏み台にしてでも愛したく思う作用があるのを見る時、永遠不変という概念に近いのが父母の愛です。それは「絶対性」を求めていくにおいて「絶対」それ自体にはなれませんが、人間の前に一番近い支石にはなれます。ただ一つの土台になり得るのです。その次に、これが人間の世の中においてそれでも、歴史を見るとき永遠の土台になっているのではないかというのです。

そのような父母の愛はどこから来たのでしょうか。それはお父さんから何か勧められて習ったのでもなく、自分の相対に忠告されて習ったのでもなく、自分自身がこうだろうと思って出てきたのでもありません。自然にそうなるのです。愛というものは自然にそうなるところで成立するのです。（四八ー一五六）

本質的な愛を分析してみれば愛には革命がないことを知ることができます。父母が子供を愛するのは真の愛に該当します。ですから人間始祖の時から人が子供を愛した心や数千年後の後孫である私たちが子供を愛する心は同じなのです。また数千年後に私たちの後孫たちが子供を愛する心も同じことでしょう。

愛には発展もなく終わりもないのです。革命の必要のない純粋なものが真の愛です。それでは神様の愛とはどのようなものでしょうか。神様がある存在を絶対的な基準の立場に立ててその存在性を認定し、彼を愛されるならばその愛は、それ以上革命の必要のない愛です。（一八ー一二）

四　すべてを投入する父母の愛

愛は一人では成されません。生命が投入されずしては愛が成り立たないのです。親子関係の愛を見てみてもそこには生命の因縁が宿っているのです。このように生命の因縁が残っている限り、生命の因縁の中で希望をもっている限り、そこには必ず愛の因縁が残るのです。生命の因縁を離れては愛の関係を結ぶことができないのです。ですから愛には必ず生命の因縁が投入されなければなりません。また生命をどれほど投入して愛するかによって、より価値を感じるか感じないかという問題が決定されるのです。（三二ー一五）

例えば、子供に対する父母の愛はただ単純に生活的な因縁だけを通じて愛する愛ではなく、骨から湧き出る愛なのです。忘れようにも忘れられず、切ろうにも切れない愛の心を父母はもっているのです。それで生命の余力が残っている限り父母は子供を愛するのです。子供と生命の因縁が結ばれているということ

を感じる時、父母からは子供を愛する心が自然に湧き出るのです。

あの子は私の息子だから愛するという意識的な心が先立って愛するのではなく、その心よりも、その因縁よりも先立った自分の生命力が子供と連結されているので愛さざるを得ないのです。このようなことを私たちは家庭生活でよく感じているのです。（三二ー一五）

それでは神様はどのようなお方かという時、千年万年与えてもまた与えたいそのような心を絶えずもっていらっしゃるお方です。そのようなお方なので私たちが神様を求めるのであって、与えてから「ああ、これはいくらいくらだ」と言われる商売人の神様なら、そのような神様は必要ありません。万民はなぜ神様が好きで、ついて行かなければならないのでしょうか。

神様をなぜ愛さなければならないのかというと、神様は万民のためにすべてのものを下さり、また下さりながらも恥ずかしがり、「今はこれしかできないが、もう少し待ちなさい。何百倍何千倍もっといいものを上げるから・・」とおっしゃりながらきょう現在、下さったことで満足するのではなく与えられながらも未来にもっといいものを上げると約束され、与えることのできる心の余裕をもっていらっしゃるお方だからです。

そのような方と共にいればたとえ食べられず、貧しくても、幸福だというのです。食べられない立場に立つならば、未来の希望となる刺激が現実圏内に衝撃的に感じられるのです。何の話かといえばかえって新しい決心ができるというのです。与えながらも恥ずかしがる立場、そのような父母をもった子供が「お母さん」と言って抱きつくようになれば、体だけ抱きつくでしょうか。どれほど有り難いですか。

その場は未来のために互いに慰労の涙を流すことのできる場です。絶望が共にあるのではなく明日の希望を現在の刺激として感じ、決意し合ってぶつかり合い、激励することのできる爆発的な場がまさしくそのような場です。

ですからそこで現れる現象は悲惨なものではありません。未来に対する刺激を引き込み現実圏内で価値をたたえることのできる場は、そのような愛の圏内においてのみ成されるのです。ですから愛の圏内に生きる人は不幸がないという結論が出ます。（三六ー二九一）

父母は愛する子供に対してすべてを投入しようとします。神様と同じだというのです。それは何を物語るのでしょうか。神様は神様のために投入するのではありません。自分のために存在するのではなく、相手のために存在しようとする、相手のために生きる神様の立場に立とうということです。

神様が神様のために存在しようとすれば、それは真の愛ではありません。自分をすべて子供に投入し、その子供と共にいようとするところに愛が、生命が、希望が成されるのです。（六九ー六二）

五　子供に対する父母の愛は絶対的

先生は幼いころ、かささぎのような鳥の巣をたくさん見ました。鳥の巣を見ようと木に登ってみると親鳥が来てつつきます。ですから、それは決死的です。一度だけではありません。追い払うとたたかれながらも飛んでいってまた来ます。これを見る時、自分の生命を越えて、愛する雛を保護しようとする動物世界の力があることを否定できません。

人も同じです。愛のために生命を投入できなければなりません。そのような人が真の人です。本当に善なる人とはどのような人でしょうか。愛を根本とし、自分の生命を投げ出して、愛する人を保護しようとする人です。そこには主体的な善があるのであり、相対的な善の論理を立てることができるのです。これは永遠不変です。（一八六ー一八）

私がアメリカのダンベリー刑務所にいた時おもしろいものを見ました。坂道を平たいテニスコートにするために毎日ブルドーザーで押す作業を、長い間しました。また、雨期になると作業が中止になったりし、乾期になるまで待つのです。二、三週間ほどたってから作業をする時そこに水鳥が雛を生んでいました。そこに囚人たちが運動がてら散歩するコースがあるのですが、そこからわずか三メートル離れた所に水鳥が巣を作りました。

その水鳥の色がちょっと見ただけでは分かりません。ですから通り過ぎる人には分かりません。その保護色がどれほどよくできているでしょうか。卵から生まれ、割れるまでは人々が通りながらも分かりませんでした。うつぶせになった姿を横から見ると黒い砂利の色のような保護色だったので分からなかったのです。それから雛が孵化し、何かをくわえて食べさせ声がちゆんちゆんとして、ようやくみな分かるようになりました。

意地悪い者たちは、いろんなことをしてからかっていました。しかしその水鳥が自分の子供たちに対してどれほど保護力があるのかといえば、えさを探してくわえてくる時絶対に自分の子供の近くに飛んできません。他の所に下りて、雛がいる所まで引きずってくるのです。

なぜそうするのかといえば、雛たちを保護するために方向を変えるのです。そのように雛を育てていきます。この雛たちがだんだん大きくなって、人がそのそばに近づこうものなら親鳥がつついて大変です。雛を見るなというのです。

誰がそのように教えたのでしょうか。それが宇宙の力です。神様の愛を軸としてすべての水は平面的位置にあるので位置は低いですが、その平行線上の基準は変わらないようになっています。
二三六ー二三)

蜜蜂が花を探し回って蜜の味を味わったら足を深く入れ、お尻を突き出して吸いつきます。先生は蜂についてよく知っています。蜜を吸う蜂をピンセントで引っ張ると尾が取れても花から離れません。真の愛はそのような愛です。自分の生命までも忘れて捨てられるのです。

計算していくらの利益になるからというものではありません。生命までも捨てて忘れて

いくことのできる道が真の愛の道です。父母はその道を行きます。子供を愛する父母は子供が死地に行くなら子供のために死地に立とうとします。愛の前に自分の命をうずめていこうとするのが父母の心です。その愛が真の愛です。

ある人がこの世で誇ることのできる金銀財宝を得て血と汗を流して多くの財産を築いても、子供が死ぬ運命にさらされたならその子供を生かすためには外的なものが問題ではなく、自分の生命までも投入して生かそうとします。（三四ー一六一）

六　限りない父母の愛

私たちが愛というものを中心として見るとき、父母の子供に向かう愛の限界点はどこまでなのでしょうか。父母は子供が幼い時だけ愛そうとするのではなく、生涯を通じて、さらには永遠を通じて愛そうとするのです。愛することによって生きがいを感じることができ、愛することによってさらに価値を感じることのできる親子の関係が結ばれるなら、無限の力と無限の刺激と無限に新しい何かがその関係圏内から生じるというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇一九）

お母さんの愛やお父さんの愛は人間世界において最も偉大な愛の中の一つです。この世でいくら高い地位にある人も、自分の子供の前ではどうすることもできません。父母の愛は子供の前に無条件であり無限定です。父母の愛は愛の母体だからです。

ですから父母の愛を受けられずに大きくなった孤児たちは何よりも父母の愛を渇望するようになるのです。孤児たちは寝る家があり、食べものがあったとしても、彼らの胸にいつも満たされない思いと慕わしい気持ちがありますが、それが何かといえば父母の愛です。

皆さんは愛する父母の子女として生まれました。父母の愛を受けて育てられ、大きくなったことを知るようになります。年を取っても若くても父母はその子供をいつも愛するようになっているのです。もし七十歳になる息子がいたとしても昔自分が育てたその基準をもっていつも子供を見つめるのが父母の心なのです。

年を取っても心情はだんだん近くなり、息子に対する責任が大きくなるほど息子に尽くす心はもっと広くなることを私たちは、この世で子供に対する結びつきを見るとき、よく知ることができるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇二〇）

父母は愛する子供のために骨が溶けるほど苦労しますが、疲れることを知りません。なぜですか。愛するからです。自分の骨身を削ってその代価がいくらか帳簿に付けておきますか。そうしないでしょう。かえって、すべてを与えられないことをもどかしく思うでしょう。赤ちゃんに乳を与えるのに、飲まなければどうして飲まないのかともどかしく思います。

乳を飲むことは、実は、ホースをつけておいて自分の血と肉を取っていくことではありませんか。ある意味ではどろぼうの中の最高

のどろぼうではありませんか。それでもそのお母さんは赤ちゃんが乳を飲まないのをもどかしく思うのです。どうしてそんなにも愛するのですか。愛の法度だからです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇二一）

お母さんの胸に埋もれている赤ちゃんを見るとき父母は愛を中心として愛の感触に触れ、またその赤ちゃんを抱くことによって自分の幸福よりも天地が平和の境地に入るので、いい雰囲気が芽生えることを感じるのです。

それゆえ、赤ちゃんがいくら気性が激しくても「さあさあやってみなさい」と言うことのできる雅量の心があるのです。ですから父母は、子供を無限に愛することができるというのです。ある意味ではその赤ちゃんはホースをつけて血と肉を吸う怨讐です。しかし、そのように考える人はいないのです。

それは何かといえば、お母さんとしての新しい希望の刺激、夫に対する新しい刺激、その赤ちゃんによって見つける新しいものが多いからです。そのような時には通じる何かがあります。その境地は、誰も思いのままにすることができないものです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇二一）

七　父母の愛はすべての愛の基準であり、伝統になる

何よりも父母の愛が初めなのです。その愛を動機としてその愛で円満に育った人なら愛がどのようなものかということを知っています。お父さんとお母さんを愛するので、父母の間の愛がどのようなものかを父母を通じて習うのです。それが子供には二つとない喜びになるのです。愛を体得することは、父母をもった立場でなければできないことです。

子女の間の愛はどうでなければならないでしょうか。何を基準にして愛さなければならないでしょうか。お父さんとお母さんが愛するように、兄弟姉妹たちも愛し合わなければなりません。愛は誰から習うのかというと、それは父母から習わなければなりません。息子・娘がお父さんとお母さんに対して「私のお父さんとお母さんは世界で一番素晴らしい人だ。神様のような存在だ！」と言うことができなければなりません。

夫婦間の変わらない心といちずな愛を見て、子女たちが「その愛を見本として、子女である私たちも一つになろう！」と言うとき、理想的な家庭を築くことができるのです。また子供が成長して思春期になれば、心と心情が一つになることのできる相対を求めるようになります。これは結婚を通して成すことができます。

ですから相手をこの上なく大切にして、愛と心情の基準を立てるために努力する道は男性が行くべき道であり、女性が行くべき道でもあります。ですからお母さんとお父さんも神様の心と神様の愛に一致し、子供も父母に似て、神様の心と神様の愛に一致できる家庭にならなければなりません。

父母の愛を中心として兄の立場に立った人が自分を犠牲にしつつ、父母の身代わりとして弟たちを愛するのが愛の秩序であり、伝統です。兄という立場は兄弟たちの中で一番苦

労をたくさんしなければならない責任ある立場です。父母の立場も同じです。子供に代わって、子供よりももっと苦労する立場が父母の立場です。父母が愛を中心として子供のためには、涙が交差する場をも甘受しようとするなら、子供たちは涙を流しながらもその父母についていきたく思うのです。

神様を中心として一つになるとき、千態万象となって回るようになるのです。ですから兄弟間で愛することも、父母が子供を愛することに倣って兄は弟を愛さなければならないのです。そのように愛し、一元化した家庭には家庭愛が花咲くのです。これがまた社会愛になります。これがさらに民族を愛する民族愛になります。そして、このように愛すれば世界愛になるのです。

皆さん自身が父母の愛を受けるのはなぜでしょうか。夫婦であるお父さんとお母さんが互いに支え合い、愛し合うその動機が皆さんによって成されるからです。分かりましたか。ですからその動機を中心として兄弟同士愛し合うその愛は変わらないでしょう。

それを中心として隣人を自分の体のように思って生活するとき、正しい社会環境が展開されるのです。家庭を中心として見ればその家庭が蘇生であり、社会が長成であり、国家が完成です。必ずそのような過程を経なければなりません。家庭と家庭をみな合わせなければなりません。そうすればこそ、その中で愛が広がるのです。

こうして国家の範囲でも一つに合わさるのです。ここで社会はいろいろな階層に分かれるようになっています。会社には社長という代表者がいるでしょう。そうでしょう。国家の責任者が今何人ですか。一人でしょう。一人の責任者がいます。このような姿に統一されるのであり、形だけが大きくなるのです。このように、分かれていても一つになるのが四位基台の原則です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九一七）

第九章　真なる子女教育

一　父母は子女をどう教育すべきか

父母は息子・娘にどのような教育をしなければならないでしょうか。知識教育をするのではありません。愛の教育をしなければなりません。父母が一つになる姿を見せて教育しなければならないのです。天が好むお父さんとお母さんであり、またお母さんが好むお父さんであり、お父さんが好むお母さんであり、二人とも愛し合うと同時に私が好む父母であり、父母が好む私だということを教えなければなりません。

ですから初めにアダムとエバも、神様の愛を中心として神様の前に愛の教育を受けなければなりません。では、その起源はどこでしょうか。人間から始まるのではありません。神様が父母なので、アダムとエバは神様から愛の教育を受けなければなりません。

そのアダムとエバの価値基準の設定はどこから成されるのでしょうか。神様の愛の教育からです。それでは愛の教育を受けるのはいつまでなのでしょうか。お父さんが知っているすべての価値基準を推し量ることのできる時まで、言い換えれば、成熟する時までは父

母の愛を受けて育たなければなりません。しかし、アダムとエバが神様の愛を受けて育ったという記録が聖書にありません。愛を受けたという話はなく、気分悪く堕落したという話から始まります。だめになったというのです。

それでは愛の神様を中心として愛の教育を受けなければならなかったアダムとエバには愛の基準があったのでしょうか。もしなかったならば、神様の理想というものはあり得ません。その愛の教育基準が何なのかということが問題です。

私たちは天国に行きたく思います。しかし天国に行ってからは、そのような教育は受けられません。地上で教育を受けて生活したのちに天国に行かなければなりません。地上でその教育をしなければ大変なことになるのです。教育を受けなければ大変なことになるのというのです。その教育とは何なのでしょうか。天国は心情の世界です。教理の天国ではなく、教派の天国でもなく、心情の天国です。

神様がこの地上で民と信徒を探そうとされるのは何のためでしょうか。息子・娘をつくるためです。どのような息子・娘をつくるためでしょうか。「私の心がこうなのだ」と言いながら、その心情を吐露することのできる息子・娘をつくるためです。

それではアダムとエバが教育を受けようとすれば、どのような姿勢をもつべきでしょうか。親子の関係ですから、父母が行く所にはいつもついて行かなければなりません。父母が山に登れば山について行き、谷に下りれば谷について行き、洞くつの中に入れば洞くつの中について行かなければなりません。いつも父母と共にいなければならないのです。

もし神様が息子と離れなければならないとしても、離れることができるでしょうか。神様は絶対的な方ですから絶対的に会いたく思われるのです。絶対的な方ですから、好きになるのも絶対的に好きになるのです。「あー神様、来るなら来て、来なければ来ないで、どこかにいるならいて、いないならいないで」ではいけません。絶対的でなければなりません。（五一－七一）

もし神様と内外とも一つになった立場にいれば習わないでもみな博学になるというのです。研究して知るよりも、もっとそうだというのです。天地がどうなっているのか、霊界がどうなっているのか、人生がどうなっているのか。生ま出たすべての昆虫の赤ちゃんですら食べ物を探すのに、万物の霊長は、習ってから食べ物を探したり、死ぬこと生きることを知るのではありません。神様に対すればすぐにさっと分かるようになっています。

そのように素晴らしい人にならなければならないにもかかわらずそのような人になれなかったのは堕落のためです。堕落したとしても、主体と対象の関係で本性は作用しています。作用するこのすき間には、今まで積もってきた汚いものが覆っているのでこれを取ってしまえば、だんだん作用が強くなるでしょう。完全に取ってしまったという日には、ぱっとつながるのです。そうすることのできる道を、今まで人々は追求してきました。（五六－一五三）

二　父母は子女に何を教えるのだろうか

真理の内容とは何でしょうか。真理の内容がいくらいいといっても自分の父母に代わることはできないし、真理の内容がいくらいいといっても自分の夫に代わることもできないし、また自分の妻や息子・娘たちに代わることはできません。真理中の最高の真理とは何でしょうか。それは父母であり、夫婦であり、子女です。それ以上はないのです。

それでは真理の中心とは何でしょうか。愛です。このような原則を中心として見るとき、最高の真理の中心とは何でしょうか。人々は、神様が真理と善と愛の本体であり、生命の本体だといいますが、それはどういうことですか。みな同じことです。真理が成立するには愛と生命がなければできないのです。人間が真の真理を論じることができる人になるには、自分の生命の中に、真理に対する意欲と欲望がなければなりません。

ここで欲望とは、自分の人格基準とは相対的な立場です。ですから一番の核心は何でしょうか。

生命の本体、愛の本体、真理の本体は神様ですが、神様はどのようなお方なのでしょうか。私たち人間の父であると同時に、母です。ですから核心は父母なのです。（二一一一八三）

また、私たちの最も貴い遺産は何でしょうか。神様の愛と真の父母の愛を子女に相続してあげることが最も偉大な、この世にない相続です。神様をよく紹介しなければなりません。神様の愛がどのようなものかをよく紹介しなければなりません。それを子女が分からないので、神様の代わりに神様のように愛し、自分の父母を求める以上に神様を求める子女となるように教育する、そのような父母にならなければなりません。（九三ー三三六）

私たち統一教会員は何をしようというのでしょうか。「最高の愛のために死のう。神様と人類と世界のために死のう」と言うのです。「このような作用も愛のために始まったし、このような方向も愛のために始まったし、このような目的も愛のために始まったし、男性も女性も愛のために始まったし、父母も愛のために始まったし、息子・娘も愛のために始まったし、宇宙のすべてのものも、愛の贈り物のために始まった」ということを教えるとき、これ以上の教育はありません。このように生きていった人は間違いなく、神様の前に行っても恥ずかしくないことでしょう。（九三ー一九一）

祝福家庭の人たちを見ると、自分の子供である二世たちに「勉強しなさい」と言います。自分の息子・娘に勉強しなさいと言ったからといって、その息子・娘が親孝行になり忠臣になるのではありません。とんでもありません。「統一教会でお父さんとお母さんは苦労したけれど、私はそのような道は行かない！」。このようなことがあり得ます。それを消化させることのできる愛の道理を教えなければなりません。

ですから父母が息子・娘を連れて回りご飯を抜いてでも自分の町を愛し、国のために祈祷し涙を流せば、このようなことが分別のつ

かない時は悪いことだと思いますが、分別がつくようになる時には「うちのお父さんとお母さんが最高だ」と言うようになるのです。父母が我が子のためだけに涙を流したのではなかったということが分かるようになります。

自分の子供を捨ててでも国を愛し、神様のみ旨のために生きて人類を救おうとしたという事実を分別がつけばつくほど知るようになるのです。自分勝手に生きてはいけません。皆さんが子供を案じるからといって、その子供たちがよくなるのではありません。愛の糧を食べさせて育てなければなりません。正しい愛を求めていくことのできる方向感覚を教えてあげなければなりません。

分別がつけばつくほど、年を取れば取るほど、そこで黄金を見つけるとき、一塊の金しかない山だと思っていたのに掘れば掘るほどその山自体が金の塊になり得ることを知るようになりま
す。（二二九ー七七）

三　父母がまず手本を示すべきである

子女を教育するためには、父母が先に実践しなければなりません。父母がお手本となって、み旨の前に忠誠を尽くさなければなりません。そうして、父母がどのような言葉を語っても子女たちが一言半句も口答えせず、父母をおそれ敬うことのできる立場に立たなければなりません。そのようにしなければ子女たちがついて行かないというのです。そのためには天の教育をしなければなりません。

教えてあげるには、父母が先にお手本にならなければなりません。子供に親孝行しなさいと教える前に先に親孝行しなければなりません。皆さん自身がまず天の法度に従って親孝行な息子・娘になってこそそこから天の伝統的親孝行の因縁が成立するのです。お父さんが家庭で親孝行するようにお前も親孝行しなければならないし、お父さんが国のために追われながらも闘争の歴史をつづってきたように、お前も忠臣にならなければならないと教えなければなりません。（三〇ー一一三）

父母が子供に親孝行しなさいと教えてあげて親孝行な息子をつくるのではありません。自ら親孝行しようという心が湧き出るようにしなければなりません。ですから、そのようなことは一朝一夕にしてできるものではなく、長い期間を通じて影響を及ぼさなければなりません。ここで影響を及ぼすというのはどういうことでしょうか。お父さんがするように子供がついて来ることができるように生活を通して子供にお手本を見せてあげなければならないのです。このようなことを実践する専門家にならなければなりません。（二九ー九九）

自分の子供に教える時は「お前は立派な人になりなさい」とだけ言わないで、「立派な人になるためには、このような道を経てからなりなさい」‘と言わなければなりません。お父さんはお父さんなりに責任を果たし、お兄さんはお兄さんとしての責任を果たさなければなりません。お姉さんはお姉さんとしての責任を果たさなければなりません。

言い換えれば、真の男性、真の女性の道を行くことのできる因縁をわきまえることので

きる、法度からそれない皆さんになってこそ、順理的な路程を経て一国の民になることのできる道が生じるのではありませんか。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇四一）

父母はどのようにしなければならないでしょうか。父母が互いに愛し合うように兄弟姉妹同士愛し合えるように教えると同時に、私が国を愛するので、お前も国をこのように愛しなさいと教えなければなりません。そのようになれば他の教育は必要がありません。祈祷する時も私がこのようにするので私の子供もこのようにするようにしてくださいと祈祷しなければなりません。

自分が先に標準になったのちにこそ、子供をそのような位置に立てることができます。自分が先にそのような位置に立てば、神様は自然にその子供もそのような方向に導いていくのです。ですからここで私たち白身を中心としてその方向を変えることができなければ、霊界に行っても責任追求を受けることになることでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇四〇）

皆さんの家庭で子供たちが、うちのお父さんとお母さんは世界のどのような王宮の王や皇后よりも素晴らしいと思うようにしなければなりません。また子供たちにお父さんとお母さんの関係が天下にない近い関係だということを見せてあげなければなりません。祝福家庭の皆さんがそのような伝統を立てなければなりません。そうして「うちのお父さんとお母さんは世の中の誰よりも誇らしいお父さんとお母さんだ」と言えるように、子供たちの骨髄にその伝統を植え付けてあげなければなりません。

世の中の親たちを見れば、子供たちがその横で、「お父さん、お母さんどうして喧嘩するの！どうして喧嘩するの？」と言っても乱闘します。涙を見せない家庭で育った皆さんの子供たちがそのような世の中の姿を見て、「やっぱりうちのお父さんとお母さんは世の中で一番だ！　本当に素晴らしく聖なる両親だ」ということが感じられるように、皆さんは子供たちにお手本を見せなければなりません。

父母は、子供たちが骨髄からあふれ出る心情であこがれる父母と子の紺一を立て、黙々と天の家訓・家法を立てていかなければならないのです。そのようにすることによって子供たちも後代において、自分のお父さんとお母さんのような立場に立とうとするのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇四二）

四　父母は友達の中の友達、先生の中の先生

愛というものはどこから来るのでしょうか。愛は自分から来るものではありません。愛とは相手から来るものです。相手かいなくなれば愛も来ることができません。私たち人間を中心として見れば男性の前の女性も相対的であり、また父母の前の子供も相対的です。愛というものは相手なくしては成されないのです。これを「三対象の愛」といいます。

三対象の愛を体得できない者は完全な神様の愛を体験したという立場に立つことができません。「神様がアダムとエバを創造して喜ばれたように、私も息子・娘を産んで、それ

くらい喜ばう」これが統一教会の原理の教えです。神様がアダムとエバを造られて、「これから世界を主管するのだ。世界の中心家庭になるのだ。早く大きくなれ、早く大きくなれ」と言いながら希望をもって保護育成する中で、喜びと満足を感じながら彼らが大きくなって結婚する日を願われたのが神様の願いです。

これと同じように、お父さんとお母さんは息子・娘をよく育てて素晴らしい相対を選び、いい夫婦の縁を結んであげなければならないというのです。いい夫婦の縁を結んであげれば、その家は栄えるのです。

神様と一つになって「神様がアダムとエバを造られて愛されたように私たちも神様のその愛を見習って息子・娘を愛さなければならない」と言ってどこにでも連れて回りたがり、いつでも抱いて歩きたがり、仕事をする時も連れて行きたがり、ご飯を食べる時も一緒に食べたがればそのようなお父さんとお母さんを息子・娘が好むのです。友達の中の友達とは誰でしょうか。近所のもじやもじや頭の若者が自分の息子・娘の友達ではありません。

友達の中の友達は誰かといえば、まさにお父さんとお母さんです。そうならなければなりません。さらには、友達よりももっと好きな父母にならなければなりません。そのように考えなければなりません。ですから父母は友達の中の友達であり、先生の中の先生にならなければなりません。

父母が「こらっ、お前、そのようにしたらだめだ」と言ったり、先生が「こらっ、こいつ、やらなかったらふくらはぎをたたくぞ。そのようにしたらだめだ」と言ったりしながら教育してはいけません。愛の教育をしなければなりません。「こら、お前それでいいのか。」と言えば「そうだ、ぼくがこうしたらお父さんとお母さんが悲しがるからいけないや」と言うことができるように教育しなければなりません。

ですから父母は、子供の友達の中の友達であり、先生の中の先生にならなければなりません。

エデンの園にいたアダムとエバに友達がいたでしょうか。アダムに友達がいたとするならば、エバしかいませんでした。その次には神様しかいません。天使長とも友達になることは願われませんでした。天使長は僕です。それなのに間違って友達になって滅びたのです。ですから父母は先生の中の先生であり、友達の中の友達であり、愛の中の愛にならなければなりません。

愛は神様から始まります。ですから結局、相対の愛も誰によるものかといえば父母によるものです。ですから父母が「おい、お前たちが愛し合うのはお前たちによるのではなく父母の恩徳によるものだ」と言う時子女たちは「うちのお父さんとお母さんが私をこのように育てて、このような相対を得てくれなかったら大変なことになるところだった」と、こうならなければいけません。

ですから恋愛結婚は落第だというのです。その愛の教育は誰から受けなければならないのでしょうか。父母からです。お父さんとお

母さんが一つになって鳩のように楽しくクゥクゥクゥと愛し合うのを見てそれを見習わなければなりません。「ああ、うちのお父さんとお母さんがあのように愛し合うのを見ると、自分一人では寂しい。私もうちのお父さんとお母さんのようにクゥクゥクゥと愛することのできるそのような相対が必要だ」このようにならなければならないし、父母はそのようになるように教えなければなりません。

そのようになればその息子・娘たちがお父さんとお母さんがしてきたように繰り返すので世界は善なる世界になるのであり、人類歴史は善なる歴史になるのです。統一教会でこれをしようというのです。（五七ー一一九）

五　愛の鞭

ヨハネの黙示録を見ると、「冷たいか熱いかであってほしい」、中途半端ではいけないとあります。愛の世界で中途半端な態度はいけないのです。愛の心をもてば鞭打ってもいいというのです。子供を育てるとき、愛を与えたのにその心を忘れてしまった時は冷たく対すべき時もあります。子供が間違った時、皆さんが叱ってあげなければ分別力を失います。先生がよく見えても一方では厳しいことを知らなければなりません。悪に対しては無慈悲です。しかし善に対しては何千度の溶鉱炉のように熱いのです。

最近学校で先生が学生をたたいたという理由で刑務所に行ったという話を聞いたとき、「アメリカはもうだめだな」と思いました。自ら進んで「たたいてでも、善なる方向に導いてください」と言わなければなりません。韓国の諺に「憎い人にはご飯もっと上げて、かわいい人には鞭を上げなさい」という言葉があります。正しい伝統を受け継いでいくためには仕方がありません。

父母の鞭が痛いのを忘れてその愛の前に涙を流すことのできる人にならなければなりません。
人は近ければ近いほど賞金を上げるのではなく、「こら、お前どうしてそうしたんだ？」とかえって懲らしめるのです。隣り近所の子なら間違っても知らないふりをするでしょうが、自分の子供なら「ふくらはぎを出しなさい」と言ってたたきながら「お前、いいことをしたのか、悪いことをしたのか。」と言います。それはたたくことよりももっと多く思ってあげるからです。しかし思いやりよりも多くたたけば、それは罪です。自分が思ってあげるよりも、もっとたたけば怨讐になります。怨讐の中でも大きな怨讐になるというのです。

愛するとしてもこん棒を持った以上の愛をもってたたかなければ、すべて台無しになります。しかし、それ以上の愛をもってたたくなら大丈夫です。すなわち、十くらい愛して五くらい鞭打てば五くらいの愛が残っているので有り難く思うというのです。

子供が受け入れなくても子供を悔い改めさせるためには、昔愛したその愛よりももっと大きな愛をもって現れ、愛するようになればその不良のような子供でも悔い改めて帰ることができます。しかし子供に対して自分が育ててきた功労を自慢しながら子供を三回でもとがめれば、その子供はふろしきを包むので

す。しかしその子供に対して骨髄が溶けるほど涙を流し、もっと大きな愛をもって愛するようになるとき、その子供は帰ってくるのです。もっと大きな愛は小さい愛をすべて消化・統合することのできる主動性があるからです。

この世でも子供がきついからといって「勉強するな」と言う父母は本当に子供を愛する父母ではないというのです。鞭打ちながらも、「寝ないで勉強しなさい」と言わなければなりません。なぜそうなのですか。今よくなろうというのではなく、未来によくなろうというのです。父母は子供の未来に大きな夢をかけてそうするのです。

子女を生んで育てるためには真の愛で生んで育てなければなりません。そうして家庭が一つになり、家庭を中心として国を愛せば、彼を愛国者だといいます。ですから父母は子供の成長を見守りながら教育し、正しく成長しなさいと「愛の鞭」を加えたりもします。間違ったという理由で父母に叱られたりたたかれたりしたといって不満をもったり抗議してはいけません。それを教訓として密かに自重しながら反省し、奮闘努力して間違った点を直していかなければなりません。そのような人は正しく成長し神様がいらっしゃる中心に接近して行くことができるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇二七）

六　勉強は何のためにするのか

勉強したくて学校に行く学生がどこにいますか。みな初めは仕方なく通うのです。なかでも、特に小学生たちは我が怖くて仕方なく通うのであって、勉強したくて通うのではありません。初めはみなそうだというのです。仕方なく通ってみると、あとでその味を覚えて、学ぶために通うようになるのです。そのようになると、お父さんとお母さんは驚くのです。その味を感じ、そのような刺激的な内容がそこにあるということを知れば勉強するのがおもしろくなるのです。

そのおもしろさということ自体を見れば悪いものです。しかし相対的に勉強してみると自分が思いどおりにできる範囲が広くなるので、そこに味を覚えて勉強するのです。勉強すること自体が好きな人は一人もいません。勉強することによって自分の活動できる範囲が広がるので好きになるのです。（三六－一二〇）

学校に行く学生に対して我は「一生懸命勉強しなさい」と言います。それは易しくない道です。苦痛の道です。しかしそれは未来のために準備しなさいという予告です。教授たちが壇上に立って弟子たちに一生懸命教えるのも、未来のための準備です。農夫が田畑へ行って一生懸命働くのも、未来のための準備です。この国に天国を建設するための準備です。（一四七－二〇五）

皆さんは学校へ何のために行きますか。学校へ行って勉強してどこに使おうと思いますか。それは幸福のためでしょう。幸福は愛を抜いてはあり得ません。ですから学校へ行くのは愛の道を短縮させるためだといえるでしょう。人間において幸福の門が開かれる時とは、結婚の時です。

幸福の門を開くために勉強するのはとてもいい方法だといえるでしょう。しかしその勉強がお金もうけのために、権力をもつためにするのなら間違いだといえます。勉強は真の愛で愛することができるように学ぶものでなければなりません。お嬢さんたちが大学へ行って学士になろうとするその結論が何ですか。いい新郎を得ようというのです。それ以外に何もありません。そしてある男性がいくら立派になったとしても、その家庭が一つにならなかったならその男性は不幸な人です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三七二）

勉強するのも真の男性に出会い真の母になるためにしなければなりません。真の母になるためには、まず国のために勉強しなければならないし、夫を真の夫として侍り真の夫に侍る真の妻にならなければなりません。このような自分になれなければ真の夫に侍ることもできないし、真の息子をもつこともできないのです。女性は真の妻となって一家庭の主婦として夫と百年偕老（夫婦になって仲睦まじく共に老いること）しなければなりません。

お嫁に行くために勉強するなら大学を出た人たちはみな百年偕老しなければならないでしょう。しかし百年偕老する人が多いですか、離婚する人が多いですか。調べるまでもないことです。文字を一字も知らない者たちがもっと長く共に生きるというのです。男性や女性が生まれて長い教育期間を経て成熟した人格者になるのも、愛の理想的相対者に出会い幸福な暮らしをするためであるといえます。最近の世の中では結婚相手に出会うために勉強するのではないといいますが、結局は素晴らしい相対者を得るためのものであり、相対者と美しく愛し合いながら幸福に生きれば財物もついてくるし名誉もついてくるのだといえます。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三七三）

七　真の父母と先生の教え

父母は自分の息子・娘のために働きます。自分が食べるために仕事をする父母はいません。子供が多い父母が農村であるいは仕事場できつい仕事をする時、貧しくとも背負子を背負い畑の草取りをし、畝間や田んぼで耕したりするのは、千年万年、子供の幸福のためです。父母の額から流れる苦労の汗は自分のためのものではありません。その汗の結実が子供を愛する心とともに絡み合えば、そこには新しい創造の役事が展開されるのです。いくら畑で草取りをし仕事場で荷物を背負ってもその足取りには新しい希望が宿っているのです。（二五－九七）

わが国（韓国）　に四千万の国民が住んでいますが子供を愛さない親もたくさんいます。彼らの中で誰よりも子供を愛する気持ちを、十年、二十年以上持続できる父母がいるなら、そこには親孝行の子供が出てこざるを得ません。息子と娘たちはその父母の顔を見るだけで、手を見るだけで、自分たちのために苦労したということを知るようになるのです。このように骨髄から湧き出る父母の愛を感じるとき、そこからは長い歳月の深い事情が流れてくるのです。

このように、子供を国のために貢献させることによってその父母は国家的な父母、あるいは世界的な父母になるのです。また皆さんが父母の願いを叶えてあげようとする心情に

徹して勉強するようになるとき、新しい担い手になるのです。皆さんの中にそのような感情と思いをもてない人がいるとすれば、その人は勉強するといってもまともにすることはできません。

もし父母が子供に「私がお前を愛し、お前のために骨を祈り、お前のために苦労して汗を流すのは、私を思うよりは、この国をもっと愛しなさいという意味からだ」と言う愛国の志士の心情をもって教育すれば、そのような父母の下で愛の教育を受けた子供は父母が願う愛国の志士になるために努力することでしょう。彼は父母の愛を回想するたびに四千万民族のことを思うことでしょう。そして民族のために勉強するでしょうし、自分の民族が悲惨な目に遭う時は自分の父母以上に悲惨さを感じることでしょう。

しかし、そのような立場にだけ立ったからといって愛国者になるのではありません。そのような立場に立って成し遂げた土台がなければなりません。それでこそ、国民が千年万年慕うことのできる要因になるのです。そうでなければそれはすべて過ぎ去ってしまいます。このようなすべての問題を考えるなら深刻です。皆さんの学校に、どのようなことがあっても自分の弟子たちに正しい思想を引き継がせるために苦労する先生がいるならば、彼は大韓民国という国家の運命を心配しながら、皆さんの手をつかんで涙を流し、次のように勧めることでしょう。

「私のために順応しないで国に対して順応しなさい。私のために尽くすよりも国のために尽くしなさい」。このような教えを受けた弟子たちは、その先生が果たせなかった意志を果たすことでしょう。このように、先生は自分の生涯を捧げて弟子たちのために精誠を尽くし、父母は自分の価値よりも国家と世界の価値を大切に思いながら子供のために精誠を尽くせば、その先生と弟子とその父母と息子・娘たちは棟梁の器（一国を支える人材）になることでしょう。（二五ー九八）

八　世界とともに生きることのできる教育

宗教は元の教えです。神様の元の教えは人類を教え、人類を愛そうというものです。それ以外にはありません。ですから真の父母は子女に対して、世界が喜び、神様が喜ぶことを教えてあげます。人倫では、父母を愛し、夫婦同士愛し合い、子女を愛しなさいと教えます。皆さんは誰のために父母を愛さなければならないのか、考えてみましたか。誰のために夫婦が愛し合わなければならないのか、誰のために子女を愛さなければならないのかを考えてみましたか。

愛することに責任を取ってくださる主人公を失ってしまった人間です。神様は無限の愛を語られました。最後に残るものは愛だとおっしゃいました。その愛は神様の愛です。皆さんは慕うその目的を知らなければなりません。愛する目的がなければなりません。誰のために愛しますか。神様のためです。神様のために愛さなければなりません。

自分のために愛する者は死んでみてください、どこへ行くか。皆さんが子供を産んで乳を飲ませかわいいと言いますが、誰のためにかわいがりますか。それは天と地の身代わり

としてかわいがらなければなりません。この国、この世界のために、神様のためにかわいがらなければならないのです。神様の愛に従った天倫の運勢は世界を越え、天地を包容するために動いています。それなのにその縁を通じて生まれた息子・娘を自分のために愛するならば、それは許されないというのです。

子供を抱いて乳を飲ませるおばさんたち、天と地を身代わりして神様の愛する息子・娘を抱くという切実な心情で自分の息子・娘を抱かなければなりません。皆さん、恵みを受けることを願いますか。永生することを願いますか。そうするためには、公的な人にならなければなりません。子供を教育するとき、自分の息子・娘としてのみ愛してはいけないというのです。世界の人々のための祭物的な息子・娘として愛する父母にならなければなりません。そして、子供を胸に抱いて乳を飲ませる時にはこの地球上の人類を代表した母の立場で、人類を代表した赤ちやんに乳を上げるという心で与えなければなりません。そして自分の子供にだけかわいいといって乳を飲ませるのではなく、他人の子供にも自分の子供だという心情で対するお母さんになってください。

そのようなお母さんの乳を飲んで育つ赤ちやんたちは必ず偉大な人物になることでしょう。すぐにはならなかったとしても、一代二代を経ていくうちに必ずその後孫の中に世界を動かすことのできる人物が生まれることでしょう。これが公式です。そのようになるのです。

素晴らしいお母さんたちは子供を胸に抱いて、世界を動かすことのできる善なる存在になるためには、どのような困難な立場でも耐えられなければならないとその子供に教えます。それはお母さんたちが、善は滅びないという天理を知っているからです。善は何によって動くのでしょうか。私のためにではありません。ご飯を食べるのも私のために食べるのではなく天宙のために食べなければなりません。

花嫁を迎えるのも自分のためではなく、み旨のために結婚しなければなりません。世界を目標にしなければなりません。経験するのも世界を中心としなければなりません。そのようにする人は格好が悪く見えても本当に味のある素晴らしい人です。七十年ないし八十年の瞬きするような人生を過ぎれば永遠に生きる道があるのに、人間はそれを知らずに生きています。永遠に生きる世界の時間圏内に入ってその世界と連結させることのできる道を知れば、その永遠は私のものになるのです。

ご飯は栗飯を食べ、服はたとえ見すぼらしい風呂敷のようなものをまとっていたとしても、世界を中心として「昔、家がこうだった時、このような人はこのように生きてこのようになった」と言うことのできる、幅広く絶え間ない話題をもっている人が住んでいる所ならば、そこにいる子供たちは優秀な人になるというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－一〇四七）

第十章　復帰すべき人類の真の家庭

一　神様の救援摂理の目的

神様の一番必要なものが何かが問題です。神様を何と言いますか。神様は真の愛の王であり主人です。もしも、真の愛の王であり、新郎であられる方が神様ならば、相対者になる皇后が必要だということが絶対的原理なのです。では神様という絶対的なお方の前に真の愛の相対になれる方が誰なのかと尋ねてみると、それは真の人間です。神様の愛と一体になるアダムとエバだったのです。皆さんはお金を必要とし、知識を必要とし、権力を必要としますが、妻がいなければすべて無駄なことです。夫は妻が必要であり、子供が必要です。妻は夫が必要であり、子供が必要なのです。そのような愛の対象が暮らす場所が家庭という所です。

良心の欲望をいっぱいに満たすことのできる愛の主体である神様に侍り、その神様の愛の相対である男性と女性が一つになり、その愛の中で息子・娘をもち、幸せに暮らすことのできるその家庭で、神様の真の愛を中心とした地上天国の初出発の基地とならなければならないのです。私たち人間も、愛する対象が自分より何千万倍、無限大の価値ある存在として現れるのを願うのと同じように、神様も自分の愛する相対が無限の価値ある存在になることを願われるのです。そのような人が真の人間なのです。皆さん！　そのような男性と女性が堕落しないで完成しなければならないのが、まさにアダムとエバだったという事実を知りませんでした。（祝福家庭と理想天国Ｉ－七九）

堕落によって神様は、アダム家庭の真の母と息子・娘をみな失ってしまいました。神様が所有できる真の息子・娘がいなかったのです。神様の真の愛を中心として血統的な因縁をもつことのできる神様の家庭がなかったのです。

堕落した父母によって、偽りの愛と偽りの生命と、偽りの血統の因縁を結ぶことによって、私たちの心と体の闘いが起こりました。アダムとエバが怨讐になりました。アダムの息子・娘の間に殺戮戦が起こりました。

それゆえ、神様がこのようになったことを復帰するための救援摂理は復帰摂理なので、失った真の心と体が一つになった息子・娘として絶対的に一つになる夫婦、息子・娘が絶対的に神様の真の愛を中心として完全に一つになり、神様と永遠に共に暮らすことのできる真の家庭を築き、新婦宗教格であるキリスト教と連結させ神様と結縁関係を結ぶことによって、神様の真の愛に統一される家庭、氏族、民族、国家、世界を再び編成しなければならないのが神様の救援摂理の完成なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八〇）

神様が宗教を立てた目的は何でしょうか。神様が一番愛する息子・娘、神様の骨と肉を一つにでき、そのような愛する息子・娘を中心とした愛する家庭、氏族、民族、国家を形成することが神様のみ旨だと言わざるを得ないということを皆さんは、はっきりと知らなければなりません。次に、メシヤはどのような方なのかということを、皆さんは知らなければなりません。

永遠な神様の真の愛を根にして、初めて地上に来られ、すべての宗教が願う理想を完成する方が再臨のメシヤだということを私たち

は知らなければなりません。そうして真の父母になり、失ってしまった真の愛を中心として真の生命と真の血統を全地上に理想家庭として立てようとするのが、神様の救援摂理の目的でした。（祝福家庭と理想天国Ｉ－八〇）

二　サタンの所有物になったアダム家庭

アダムとエバが堕落することによって、神様は彼らを真の人類の祖先として、人類の父母として、ご自身の息子・娘として対することができなくなってしまいました。アダムとエバは神様の前に掛け替えのない息子・娘であったにもかかわらず、神様が息子・娘として対することのできない位置に立ってしまったのです。神様はまた、アダムとエバが成人したのちには夫婦として祝福し、慰労の対象にしようとされました。ところが彼らは、息子・娘としての慰労の対象になれないのはもちろん、新郎・新婦としても慰労の対象になれませんでした。

神様も願われた所願が大きいゆえに、彼らに無限なる価値を賦与し、眺められたのですが、彼らが堕落することによって、神様は彼らから、子女として慰労してくれる心情を感じられず、新郎・新婦として、すなわち夫婦として慰労してくれる心情を感じられなかったのです。神様はアダムとエバが未来に希望ある祖先として、すべての人類の前に一つの王として、神様の前に忠孝の道理を立てる立場に立つことを願われたのです。しかしながらこのような願いをもつ神様の前に、彼らは慰労の対象となることができなかった事実を、皆さんは知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三二七）

堕落はどこから始まったのですか。家庭で堕落したというのは何をしたのですか。善悪の実を取って食べたのですか。家庭的に堕落するというのは愛以外にありません。善悪の実を取って食べて堕落しますか。善悪の実を取って食べて原罪が生じますか。父親が善悪の実を取って食べたことが罪だというのですが、何千代何万代後孫が罪人になる善悪の実とは何なのでしょうか。これは血統的関係です。血統的に罪の根を植えておけば、遺伝の法則によって永遠に続くのです。そうであり得るのは愛の問題だけです。過った愛が堕落の原因です。

不倫な淫行関係によってエバは天使長と一つになり、アダムもまた、天使長と一つになったエバと一つになることによって、アダムとエバは結局神様を中心にしたのではなく天使長を中心にした夫婦関係を結び、家庭を築くようになったので、アダムとエバの後孫であるすべての人間はサタンの血を受け継ぐようになったのです。

したがって、本来のアダムとエバの息子は神様の長子、次子にならなければならなかったにもかかわらず、エバが不倫な情で天使長と関係を結んだため、神様の息子である長子と次子はサタンの所有物になってしまったのです。

本来、創造理想の中では愛は所有を決定するようになります。愛の関係を結べば、その愛を中心に主体と対象は必ず互いの所有権をもち合うようになるのが原理です。したがって、この原理的な基準でよく見るとき、エバが天使と不倫なる愛の因縁によって堕落する

ようになったので、エバの後孫として生まれる人間の所有権は天使長であるサタンにあるようになったのであり、サタンはその所有権を堂々と主張できるようになったのです。

アダムとエバが堕落することによって神様の創造理想は成就されず、むしろ堕落した父母になったことによって、原罪のある子女を繁殖するようになりました。そして堕落したアダムとエバの家庭を中心にして氏族、民族、国家、世界へと発展してきたのが人類歴史なのです。それゆえに堕落以後今日まで、神様の本然のみ旨を完成した立場に立った真の父母の理想が残されてきたのです。そして真の父母を中心とした真の家庭と真の氏族、民族、国家、世界は今でも理想として残っているのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三二五）

三　堕落人間の願い

人間始祖アダムとエバは、堕落することによって堕落の血統をつくってしまいました。彼らは神様が願う本然の理想世界、堕落していないその世界で神様と一体となり、神様の直系の血統を受けて息子・娘を生むべき真の父母の立場になれず、サタンと因縁を結び、死んだ子供を生んだサタンの魁首になったのです。ですから今日人類は、すべて偽りの父母に出会ったのです。ゆえに偽りの父母の血統を否定し、真の父母に出会わなければなりません。

堕落人間の願いは、神様の息子に出会うことです。カインの息子として生まれた無念さをもって嘆息し、神様の真の息子を探し、さまよっています。私たちは、神様の息子を探し出さなければなりせん。しかし、個人的な神様の息子、家庭的な神様の息子を探し出そうとするなら、人類はどれほど苦労することでしょうか。そこで神様は、国家的基準の息子圏を代表したメシヤを送られたのです。

ですから、人間たちがこのメシヤを迎える日には、個人的な神様の息子、家庭、氏族、民族、国家的な神様の息子まで探し出すことができるのです。このように、神様の国家的な息子まで探し出すことができるという喜ばしい知らせを伝えてあげるのが、メシヤの降臨だということを、皆さんは知らなければならないのです。

堕落の因縁をもって生まれた私たちは、サタンの讒訴条件を超越することができる、神様の息子に出会わなければならないのです。神様の息子に出会ったのちは、父母に出会わなければなりませんっ皆さんは、堕落した父母はもちましたが、堕落していない真なる父母はもつことができませんでした。それで、神様が愛することのできる真なる父母を探し出さなければなりません。次に父母の家庭を探さなければなりません。

父母の家庭を探し出したのちに、神様の愛を探さなければならないのです。そして、神様の愛を探し出したのちには、神様に出会うのです。このように、堕落人間は、神様を中心として兄弟を探さなければならず、父を探さなければならず、母を探さなければならず、私の家、私の故郷を探さなければなりません。このような道を歩いていかなければならなかったのが、この地上の人類だったという事実を皆さんは知らなければなりません。

それで、神様の愛を受けられる父母と、神様の愛を受けられる息子・娘が、神様の愛を中心に互いに愛し合う家庭を築くようになれば、「家和萬事成（家和して万事成る）」と言うことのできる環境において、愛の歌を歌いながら、自動的に栄えることができるというのです。そうなれば、自動的に神様の愛を中心とした民族が形成されるのです。

ところが、アダムがそのような家庭を失ってしまったので、宗教を通じてそのような家庭の基準を探さなければならないのです。家庭を探し出さなければ氏族や民族、国家、世界は探し出すことができないのです。

人間の理想、願い、希望は何かというと、次のように結論づけることができるでしょう。第一に、神様を私の父として侍ることが最大の希望であるというのです。第二に、神様の愛を受ける息子・娘になることであり、第三に、神様が所有しておられるものすべてを相続することです。それ以上大きな人間の願いはあり得ないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四八〇）

四　復帰の最終目的はアダム家庭を復帰すること

復帰の目標は、アダム家庭復帰にあります。神様は、アダムとエバが堕落するとすぐに救援摂理を始められました。しかし、カインがアベルを殺害し、アダム家庭を中心とした救援摂理は、ノア家庭に移されました。神様は、ノア家庭を中心として、世界のすべての人々を洪水審判で滅亡させ、サタンの侵犯条件を越えた家庭を立て、地上摂理の基盤を構築しようとされました。それが、再びアブラハム、イサク、ヤコブを経て、モーセの時代に移り、イエス様につながれ、私たちの時代まで来たのです。ですから、復帰摂理の最終目的は、失ったアダム家庭を捜し立てることです。

今まで、神様は何を捜してこられたのでしょうか。主体を捜してこられたのではありません。理想的な対象を捜してこられたのです。神様を模範として、造られた世界の内外の内容を備えているものを捜してこられたのです。このような結果的な一つの基点は何でしょうか。家庭です。家庭よりも宇宙を代表できるものはないのです。

歴史全体が何で帰結されるのかといえば、物質と子女と父母、さらに家庭を基準として帰結されるのです。これが宇宙の根本です。父母がいなくては子女が生まれることができません。父母から生まれた子女が父母を中心として万物を主管しなければなりません。これがすべて一遍に作用されるのです。

結局、神様が六千年の間復帰摂理をされたのは、何を捜し出すためだったのでしょうか。一つの国を捜し出す前に、あるいは民族と教会を捜し出す前に、何を捜し出さなければならないのでしょうか。家庭です。つまり、ご自分の相対を捜し出し、家庭を捜し出すことでした。一つの国が形成されるためには、家庭がなくてはならないのです。ゆえに、全体の根本が何かといえば家庭です。

人類の祖先であるアダムの家庭が破壊されたので、これを復帰しなければなりません。イエス様は堕落しなかったアダムとして来ら

れなければなりません。ですから、イエス様は第二のアダムとして来られた方です。人類の最初の祖先であるアダムは堕落した祖先となったので、神様は本然のみ旨を立てるために、堕落していない真の祖先としてイエス様を送られたのです。そういう真の祖先を中心に、アダム家庭を捜し出さなければなりません。聖書を見れば、人類始祖が堕落したとなっています。

では、その始祖が堕落する時、一人だけで堕落しましたか、二人が堕落しましたか。（二人とも堕落しました）。それが問題です。堕落したとしても、一人だけで堕落したというなら問題は簡単です。一人だけで堕落したとすれば、神様は創造の神様でいらっしゃるので、もう一度造ることができるのです。

なぜ家庭から出発するのですか。すべての事件が家庭から広がったからです。つまり、アダムとエバの家庭から始まったのです。神様を失ったのも、天使世界を追放したのも、万物世界を失い、人間の価値を失い、人間の愛を失ったのも、すべてアダム家庭で男性と女性が過って出会ったからです。

今日まで宗教団体、特にキリスト教が目標とし、信仰してきた個人の救いは、完成ではなく、第一段階の始まりにすぎない原初的な救いなのです。救いの目標は、家庭の救いを単位とするのですが、その家庭の救いの基盤というのは、世界を指導でき、世界の救いまで責任を負える家庭のことをいうのです。そのような心情圏が確立された家庭を築くことが、信仰生活の最高の理想にならなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四八四）

五　イエス様がなさるべき家庭の復帰

イエス様は、何をしに来られたのでしょうか。家庭を探しにこられました。救いの歴史は、復帰歴史です。病気になれば治さなければならないのです。イエス様は、堕落した人間を救うために来られました。では、救いとは何でしょうか。家庭を失ったので、それをもう一度探し出すことです。もう一度探し出そうとすれば、どうすべきでしょうか。失った本来の場所に帰らなければ探し出すことはできません。

では、どうして人間が家庭を探し出さなければならないのでしょうか。イエス様は、どうして家庭を探しにこなければならないのでしょうか。それは本来の家庭を失ってしまったからです。病気になったので、病気を治さなければなりません。つまり、堕落したので、復帰しなければならないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四八四）

神様は、原理・原則に従って運行される方であられるということを知らなければなりません。

アダムを失ったため、サタン世界からもう一度捜してこなければなりません。アダムが過って、夫の役割を遂行できなかったため、アダムはエバを支配し、治めることのできる位置にいたにもかかわらず、エバをサタン世界に奪われました。それで、サタン世界からもう一度捜してこなければならないのです。

ですから、エバを再び捜してくるなら、闘わないですむでしょうか。国の基盤から教会

の基盤、氏族の基盤、家庭の基盤を神様は準備されました。そうしてヨセフ家庭を立てられ、ザカリヤ家庭を立てられました。それゆえ、ヨセフ家庭のイエス様と、ザカリヤ家庭の洗礼ヨハネが一つになったならば、短い期間に神様のみ旨が成されたはずです。

洗礼ヨハネがイエス様を信じたならば、どうなったでしょうか。また、洗礼ヨハネの妹を、イエス様が新婦に迎えていたならば、どうなっていたでしょうか。み旨は成就できたはずです。こう言えば、キリスト教徒たちは、すぐさま反対するでしょう？　大変なことになったと大騒ぎすることでしょう。しかし、いくら反対してみても・・。皆さんが、今反対していますが、霊界に行ってみれば、レバレンド・ムーンがうそを言わなかったことが分かるはずです。

元来、アダムとエバが、実体の父母として一体となり、神様の創造理想である家庭の完成、すなわち愛の家庭理想を完成しなければなりませんでした。ところが、これができなかったので、それを完成させるために、イエス様が来られなければならなかったのです。そして、イエス様が来られ、新郎の位置で新婦を迎えなければならなかったのです。そうして、神様の愛と一つとなり、エデンの園で堕落せず完成できた本然のアダムの位置を復帰し、その愛で結ばれれば、誰も二度とは堕落させることができないのです。

神様のみ旨が何かと言えば、男性完成の基準と女性完成の基準を立てておき、アダムとエバが神様の愛を中心として、神様の家庭を築くことでした。ところが、神様の家庭は築かれましたか。神様の家庭は築かれませんでした。イエス様はこのような神様のみ旨を知っておられたし、また信じました。しかし、ユダヤ民族の不信で、イエス様のためのイスラエル民族の四千年歴史の基盤とユダヤ教が崩れ、イエス様は十字架で惨めに亡くなられました。

このような胸が詰まるイエス様の事情を今まで誰が知っていましたか。誰も知りませんでした。今日、この文という人が、このような話をしてあげるので皆さんが知るようになったのです。これが事実ならば、イエス様がどれほど喜んでおられるでしょうか。新郎になられたイエス様が、新婦になられる真の母を探し立てなければ、神様の家庭完成は不可能です。イエス様の家庭が築かれない限り、神様のみ旨は永遠に成されないのです。

神様を中心とした家庭を復帰できなければ、国も探し出せないし、世界も探し出せないので、イエス様も、この地に来て、神様が愛する家庭を築こうとされました。ですから、一人の新郎として、新婦を探し出さなければなりません。一人の男性を中心として、真の父母も現れ、真の夫婦も現れ、真の兄弟も現れることができるので、これを決定的に成すと預言したのが、小羊の婚宴の時に新郎・新婦を迎えようというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四九〇）

六　再臨主を中心とした家庭の復帰

復帰の家庭とはどのような家庭でしょうか。歴史的な願いの実体です。神様は、今まで六千年の間、この一つの家庭を探し出すために

摂理されました。この歴史的な願いの実体は、どこで築かれなければならないでしょうか。とりもなおさず、この現世の、現実社会で築かれなければなりません。未来に築かれてはなりません。これが歴史的な願いの基準であり、現世万民の願いの基準です。人類の過去、現在、未来の願いの基準です。人間として生まれ、行き来した数多くの聖人、賢哲たちも、この家庭を慕いました。

再び来られる主が、新婦を迎えることによって、初めて復帰の家庭という言葉が現れます。再び探し出さなければならない復帰の家庭、それは人類が願う家庭です。六千年の歴史の中で、信じて現れた数多くの宗教指導者たちが、数多い怨讐の執権者たちや為政者たちに犠牲にされながらも、懇切に願ったのは、主が来られ、自分たちの恨みと怨讐に報いてもらうことでした。

しかし、彼らの怨讐を討つにしても、主お一人ではできません。一人でできるのであれば、既にやったでしょう。ですから、天の家庭が現れなければなりません。天の家庭が編成され、地上に新しい足場を築くのです。そうして、心情のダイナマイトをもって、サタン世界を爆破しなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四九四）

復帰の家庭といいますが、その復帰された家庭の中心に誰がなるのでしょうか。神様がお捜しになる真なる息子・娘によって築かれた一つの家庭が、神様の創造目的ですから、その家庭の中心は、神様の本当の息子・娘でなければなりません。では誰でしょうか。この宇宙を相続できる全権をもってこられるお方です。その方が再臨主です。その再臨主が来られて、家庭を築かなければならないのです。今日、私たちの恨みは何でしょうか。アダムとエバがエデンの園で真の父母として真の家庭を築き、歴史を出発できなかったことです。

これは人類の恨みである前に神様の恨みです。神様が人間をお造りになった目的は、そのような家庭を立て、この地上に平和の王国を創建することでした。それにもかかわらず、その家庭が壊れることによって、神様は六千年という長い歳月の間、恨みを抱き、復帰の歴史を繰り返してこられたのです。その過程で、数多くの恨みの峠を限りなく踏み越え、今までの歴史を築いてこられたのを、皆さんは知らなければなりません。そのような歴史に責任を負い、解決するために来られる方が、再臨主です。では再臨主は何をしなければならないのでしょうか。家庭を築かなければなりません。家庭を築くのも、空中でではなく、地上で築かなければなりません。そうしてこそ、そこから氏族が現れ、民族が現れ、国家が現れ、世界が現れるのです。

来られるイエス様は、必ず神様が願われる家庭を立てなければなりませんが、その家庭は真の家庭でなければなりません。今まで人類は、真の愛を追求してきました。いずれにせよ偽りの愛の形態は、家庭や社会をだめにするのです。ですから、万民が共有できる神様の愛を中心とした、人類全体が願う最大の愛を中心とした、一つの真の家庭が出現しなければなりません。

そのような家庭が現れなければ、氏族を編成することができないのであり、そのような

民族が現れなければ、国家や世界を築くことはできないのです。それゆえ、神様が人類の前に提示された救いの摂理で、人間が対し得る最高の基準と、神様として願われる最高の理想的基準点は、家庭にあると見るのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四九四）

七　統一教会は本然の真の家庭を探すためにある

歴史時代のすべての宗教は、今まで何をしてきたのでしょうか。今まで、男性一人を再び探してきたのです。今までの宗教は、相対の因縁を許しませんでした。新しいものを許しませんでした。そのように進んでいけば滅びるようになります。けれども、一人を探してくる歴史時代において、男性を見つけ出したということのできる基準まで行くようになれば、そのあとには女性を探し出さなければなりません。ゆえに統一教会は何をする所かと言えば、家庭を探し出す教会です。

今までの宗教の目的は、個人を教うことでした。しかし統一教会は、個人の救いよりも家庭の救いを目的としているのです。救うのも家庭を救い、天国に行くのも、一人では行かないというのです。統一教会の救援観は、夫は天国に送り、妻は地獄に送ろうというものではありません。二人とも天国に行こうというのです。また、お母さんお父さんを地獄に送るのではなく、お母さんお父さんに侍り、また息子・娘も連れて天国に行こうというのです。統一教会は、自分が愛する家庭、自分が愛する氏族までみんな連れて天国に行くことのできる道理を教えてくれる宗教なので、他の宗教とは次元が違うのです。

ですから、今までの宗教は、独身生活を強調しましたが、統一教会は家庭を重要視するのです。家庭を中心として行くのです。その家庭は世界のための家庭であり、神様のための家庭です。これが、統一教会の信徒たちが行くべき道であり、今後、皆さんが生活していくべき道であることをはっきりと知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四八五）

法を超越し、制度を超越し、環境のすべての背景を超越し、自分も超越し、永遠に共にいたい因縁を結ぼうというのが父母の愛であり、夫婦の愛であり、子女の愛なのです。

これを無視した社会制度はあり得ないし、これを無視した国家は形成され得ないのです。ですから、統一教会は個人教会を願うのではなく、家庭教会を願うのです。統一教会は、個人の救いを願うのではなく、家庭の救いを成就しようというのです。統一教会はこの点が違います。

すべての人間たちが、最後にもつべき共同的な目標であり、行くべき共同的な関門は何でしょうか。国でもないし、世界でもありません。共産主義世界でもなく、民主主義世界でもありません。共産主義世界がある前に、本然の家庭がなければなりません。また、民主主義世界がある前に、民主主義世界を創建できる、本然の家庭がなければなりません。それでは、今までここに対する秩序がどこにあり、ここに対する教育がどこにあり、ここに対する目的、基準がどこにあったでしょうか。このような決定的基準が、この地上に現れなかったというのです。これが現れる前に

は、平和の王国、平和の理想国家、平和の国はあり得ないのです。

ですから、私たちが願うのは、このような理想的家庭、本然の家庭、生きるべき家庭、出会うべき家庭、探し出すべき家庭が、この地球上に必ず現れ、人類歴史と共に、運命を共にできる一時が来ることです。そうしてこそ、地上に対する神様の摂理が成就されるのであり、安息の福地、安息の巣が出発するというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四八八）

私たち統一食口の願いは何でしょうか。復帰の家庭になることです。私たちの願いもここにあり、アメリカの平和の起源もここにあり、天上天下の幸福の基点もここにあり、一つの摂理の基点もここにあります。天と地がひっくり返る天地開闢の基点もここにあり、すべての人生の価値の根源もここにあり、願いの出発もここにあります。すべてここです。では、復帰家庭の中心は誰でしょうか。真の祖先です。真の祖先は、真の父母です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－四九六）

八　真の家庭主義と真の父母宗教

堕落した父母の因縁で、神様から離脱した伝統を受け、この世界がこのありさまになりました。ですから、真の父母が来られて、新しい主義を立てなければなりません。それはどのような主義でしょうか。世界主義でしょうか。天宙主義でしょうか。真の家庭主義です。真の家庭主義が現れなければ、世界主義が現れ得ません。

この真の家庭主義の代表者は、神様の真の息子でなければなりません。彼は、神様の心情的なすべてのことを相続する内情的相続者であり、外形的相続者、そして万物所有権の相続者にならなければなりません。言い換えれば、神様の心を相続できるお方であり、体を相続できるお方であり、万物を相続できるお方でなければならないのです。そのような息子であってこそ、神様の代身者になれるのです。

その息子が来られてこそ、初めて天国が築かれるようになります。真の家庭主義とは、どのような主義ですか。真の家庭主義とは、神様の愛の主義です。簡単でしょう。愛がなければ、いくら世界一だと腹を出して歩いても、その人は不幸な人です。そうですか、そうではないですか。真の家庭主義は、父母が行けば、息子・娘は父母の後を永遠についていく主義、また、兄さんが行けば、弟が永遠についていく主義、弟が行けば、兄さんが永遠についていき、兄さんの国があれば弟の国もついて行こうというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五〇一）

神様の愛の主義は、どのような主義でしょうか。国境を超越し、このすべての平面的な世界を超越し、互いに授け受ける場合において、互いがまず与えよう、受けることは後にしようとする主義です。そのような主義の世界が、今後来る理想世界です。

理想世界は何か大きな権勢をもって「この野郎」と怒鳴りつける世界ではありません。理想世界というのは、自動的に心が動いて神様の愛に和することができる、万民兄弟主義

の世界です。今後、そのような世界になるでしょう。これからは家庭救世主の宗教が現れなければなりません。それが真の父母主義です。真の父母の宗教です。

真の父母の宗教というのは、四位基台を成す真の父母の生活宗教です。そうなれば、お父さん、お母さんがその家庭の息子・娘の救世主になるのです。

皆さんが、黙示録の一番後ろを見れば、復帰歴史が出ています。ですから聖書は偉大だというのです。このような復帰の原則があったので、聖書の終章に復帰の内容を入れるようになったのです。ヨハネの黙示録第二十二章十七節を見ると、「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」と記録されていますが、花嫁、御霊が何であるか分かりますか。

花嫁は、主の妻になるのであり、御霊は霊的なものなので、ここから霊肉が合わさった母が現れなければならないのです。イエス様は人類の父として、男性なので女性の中から母を探し出し、新しい世界へと救わなければなりません。これを、キリスト教徒たちは知りません。教えてあげるといっても嫌だといい、かえって異端だというのだからあきれるでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五〇二）

天宙主義とは何でしょうか。家庭についていえば、「私」が住んでいる家庭に、金銀財宝が天下をぎっしり埋めても余るほどあるといっても、そこに酔って生きるのではなく、それを忘れ、いつでも神様の愛に酔って生きられる、そのような家庭です。

息子のものは父母のものであり、父母のものは神様のものとして、そっくりつなぐことができなければなりません。天宙主義とは、どのような主義でしょうか。真の父母主義です。結局、この二つの主義は父母の主義です。これはわが家主義であり、わが国主義であり、皆さん個人の主義です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五〇三）

第十一章　家庭は永遠の幸福の土台

一　家庭はなぜいいのか

家庭はなぜいいのですか。家庭では、愛を互いに授けて受けることが自然にできる基盤になっており、栄えることができるからです。それゆえ、人は自分の故郷がなつかしく、父母と兄弟がいる所を恋しがるのです。（三八－二三八）

家庭はいい所です。なぜいいのでしょうか。お母さんとお父さんがいていい所であり、お姉さんとお兄さんがいていい所であり、弟と妹がいていい所であり、親戚がいていい所です。ですから人間なら誰でも本郷の地、故郷に対してなつかしい郷愁の心情をもっているのです。国よりも故郷をもっと考えます。大韓民国に住みながらも懐かしい所は故郷です。（二三－一五一）

皆さん！　家庭がなぜいいのですか。それは父母の愛を中心として自由運動の価値になるからです。同じように神様が自由に活動で

きなければなりません。どんなに見た目にはみすぼらしくても、光る愛の核をもった内的な人間が成し遂げた社会になれば、神様は自由です。皆さん、そうではありませんか。どの家でもお客様として行けばお金持ちのようでしょう。なぜそうですか。それは愛の因縁がないからです。愛の因縁が四方性を備えられないので、ぎごちないのです。ですから、私たちが行くべき道は人格の道です。

一つの家庭を中心として、一番いいものは何かというとき、一番いいものは皆さん自身で決定することではないのです。それでは、家庭の最上の価値は何でしょうか。父母です。皆さん一個人を見ても、皆さんにとってあらゆる権力や知識、または名誉やお金が貴重なものになるかもしれませんが、そのあらゆるものよりも、もっとも大切なものは「父母」以外にはないのです。次には、皆さんの妻や夫になるでしょうし、また次には、皆さんの子女になるでしょう。

事実、皆さんの家庭で皆さんの父母や妻、そして子女たちよりもさらに大切にしているものがありますか。ないのです。では、なぜ父母がいいのでしょうか。そして、また夫と妻、そして子女がなぜいいものになるのでしょうか。「愛」があるからです。父母の愛、これは子供にとって絶対に必要なものです。そして兄弟間の友愛などや、子女が父母に対してもつ真心も一つの家庭に絶対的に必要なのです。（二二ー二九〇）

皆さん、家で一番いい人は誰ですか。父母でしょう？　なぜ父母が一番いいのですか。愛を中心として、一生涯関係を結ぶことのできる最も近い立場にいるからです。その次は、愛する夫と妻になるでしょう。その夫と妻の愛は、ある条件的な愛ではなく無条件的な愛、この愛は、たとえ絶対的に天が下さった永遠の愛と密接な関係ではなくとも、夫婦間の相対的関係から結ばれる愛になるならば、その愛がその家庭に幸福と和睦をもってくる最も、よいものではないだろうかとみるのです。

その次は、父母に対する子供の愛、父母のための子供の愛です。絶望ではなく、あすの望みとして芽生えることのできる理想的な環境を慕いながら、肯定的な姿勢で子供が父母のために犠牲になり、愛することができるなら、その子供の愛は、その家庭の幸福のための純粋で真実な価値としての愛となるでしょう。

このように父母の真の愛と夫婦の真の愛、そして子女の真の愛が完璧に具備された家庭があるなら、その家庭は私たち人間世界の中で、最も理想的な家庭だと言わざるを得ないでしょう。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九一四）

二　家庭は永遠なる幸福の基盤

人間の生活で、ある人を幸せな人だというとき、何を基準として幸福といいますか。外的にある能力、権勢、権威を備えたなら、幸福な人だということができますか。そういうことはあり得ません。また、他人がうらやましいくらいお金があったとすれば幸福な人ですか。そうではありません。また世界的な知識をもっていて、世界を思うがままにできる位置にいるとして、彼が幸福な人になることができますか。決してそれだけで人が幸福なのではありません。（二三ー一一）

ある人がこれくらいなら天上天下にうらやむものはないといって、幸福をうたうとしても、そのような外的なものは幸福になり得ません。幸福を見いだす条件にはなり得ますが、幸福それ自体にはなり得ないのです。それでは何が決定すれば、幸福を感じることができるでしょうか。愛する父母がいて、夫婦がいて、子女がいなければなりません。これはどこの誰も否定できません。ここにその一つだけでもなければそこに該当する比例的な悲しみを感じるでしょうし、比例的な不満がその胸の中に残されざるを得ないでしょう。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－九一三）

この地のすべての人間が、幸福の基盤は家庭だと一般的に感じています。家庭には父母がいなければなりません。世の中では父母かいない子供は孤児と呼ばれ、その孤児はかわいそうな人として扱われます。家庭には父母がいると同時に夫婦の因縁があります。父母がいないのもかわいそうなことですが、夫婦で片方がいないのもかわいそうなことです。どんなに愛おしく暮らした夫婦だといっても、愛する配偶者を失うときは、この上なく悲惨で不幸になるのです。それだけでなく、夫婦が子女を身ごもることができなければ、それもやはり不幸でないわけがありません。三三－一一）

家庭には必ず父母がいて、妻子がいなければなりません。そうしてこそ、その家庭が幸福の土台となるのです。神様が人類を探し求めてきた目的も、神様ご自身の幸福を模索するためであることに間違いありません。それゆえ、神様ご自身が幸福の土台を探し求めるには、人間を離れた場では、そのような理想があり得ないというのです。

人間とともに関係を結んでこそ、その一致点をもたらすことができるのです。私たちが家庭で、情緒的なすべての内容を備えた立場で幸福を感じるのと同様に、神様もやはりそのような立場で幸福を感じられるのです。

幸福はどこから来るのでしょうか。鼻歌を歌いながら迎えることのできる、そのような環境はどこから来るのでしょうか。家庭から来るのです。家庭の幸福は、情緒的に問題があれば成され得ません。また心情、愛がなくても、成され得ないのです。父母の前に子女がいないときには、その父母の幸福はあり得ません。子女に父母かいなくても、子女の喜びはないのです。あるいはある男性がいれば、相対たる女性がいなくてはならないでしょう。女性も同様です。

ある夫婦がいれば、その夫婦の願いは、彼らの主体と対象の関係をおいて、より高い次元で愛を維持することです。そして、夫婦の前には必ず子女がいなければなりません。そうしてこそ一つの家庭が築かれますが、上には父母がいて、下には子女がいなければならず、また夫婦がいなければなりません。このようにして、一つの家庭は縦と横に一つとならなければならないのです。それでは、誰を中心として一つとなるのでしょうか。

人間だけでは不可能です。人間だけでは、より高い価値を追求することができないので、絶対的な愛の主体がいるなら、その主体を中心として、父母は一つとなることを願うでし

ょう。そこで、夫婦と子女がその主体を中心として愛で一体となった場が、幸福の場であり、望みの場となるでしょう。すべてのことを一つに帰結させ、より価値的で、刺激的な面で統括させなければなりませんが、それは、私たち人間の愛だけではいけないのであり、絶対的な立場でこそ可能なのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九一三）

三　家庭は天国完成の基本単位

私たちの家庭と天国は、類型のようなものです。私たちの家には父母がおり、夫婦がおり、子女がおり、兄弟がいます。私たちの家は愛で一つにすることができます。ここでは統一が成され、生命が連結され、理想を実現させることができます。ですから皆さんは、夫婦の愛を尊重でき、父母の愛を尊重できてこそ、天国に行くことのできる資格者となり得ます。

祖父母は父母の前に愛を相続させてあげています。ここでどの愛を否定しても天国は成されません。自分たち夫婦同士が愛し合う以上にお母さんとお父さんを愛し、自分のお母さんとお父さんを愛する以上におじいさんとおばあさんを愛さなければならないという結論です。これがすべての天国の核心となり、理想的モットーとなるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四六）

天国の起点は個人でもなく、国家でもありません。家庭なのです。それゆえ、イエス様は新郎・新婦の因縁を尋ね、この地上に来られるのです。個人が天国の起点ですか。家庭が天国の起点だというのです。家庭は天国完成の基本単位です。天国は一度行ってみれば帰りたくないし、十遍、百遍会っても、また会いたいその方がおられる所です。

万民共通にそこに行きたがり、その方に会いたがり、その方と共に暮らしたがるなら、世界は統一されるでしょう。しかし、それは一度に成されるのではありません。まず個人の基台が立ち、その次に家庭の基台が立ち、その次に民族、国家、世界に伸びていかなければならないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四二）

天国はどこにあるのでしょうか。空中からどさっと落ちてくるのではなく、お父さんとお母さん、そして子供の間に授け受ける、その生活的な舞台を育て、またその中にあるすべての被造物を私たちの生活に利用し、私たちの理想の条件に利用する面白み、その面白みを一〇〇パーセント享受することのできる所が天国です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四五）

皆さんの家庭は、天の国の主権を代身した立場であることを知らなければなりません。父母は主権を代身するものであり、子女は国民を代身するものであり、物質はその国の地を代身するものであるため、父母に孝を尽くすことが国に忠を尽くすことであり、父母に孝を尽くすことが聖人の道理を果たす道と通じるのです。今、家庭があらゆる醜態に満ちたものの起源となっていますが、神様は家庭が聖なる土台となることを望んでこられたのです。

人間たちは、必ず家庭をもたなければなりません。家庭を中心として見れば、家庭には父母がおり、子供かおり、物質があります。

それでは、旧約時代、新約時代、成約時代においての縦的な歴史全体を、横的に展開させて代身することのできる実体とは何でしょうか。万物と子女と父母です。すなわち、父母と子供と彼らの所有物です。これらは家庭の一つの囲いの中で必要なものです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四三）

神様の愛を中心として二人が一つとなる所でのみ、夫婦天国は成されます。一つとなったものを、その誰も引き離すことができないし、別れたり離れたりする心配がありません。皆さんはどのような愛を求めましたか。神様の愛を求めたなら、皆さんの心と体が完全に一つとなって、神様の愛が臨むことができなければなりません。

ですから、夫婦天国が生まれ、家庭天国を成さなければなりません。お母さんとお父さんが完全に一つとなって愛し合うようになり、その息子・娘もお母さんとお父さんのような対象を得てこそ、家庭天国が実現されるのです。父母がプラスとなり、息子・娘がマイナスとなれば、家庭天国となるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四三）

四　愛の理想実現は家庭から

愛の理想実現はどこからしなければなりませんか。私たち統一教会からですか。国からですか。世界からですか。世界をどんなに統一したとしても、自分の家庭を統一できない人は不幸な人です。愛の理想実現は家庭からしなければなりません。家庭は幸福のすみかです。それゆえ、天国は家庭から始まるのです。この地上に天国を築こうとして来られたイエス様が「私は新郎であり、あなたがたは新婦である」と語ったのも家庭を標準としたことです。

家庭には誰がいますか。第一に父母がいて、第二には子女がいて、第三には夫婦がいて、その次には兄弟姉妹がいます。では家庭は何で絡み合っていますか。愛によって絡み合っています。ゆえに、家庭は何によって一つにできますか。愛で一つになります。愛は変わらないので、祖父母の愛が一つになり、父母の愛が一つになり、夫婦の愛が一つになれるのです。愛には統一性が介在されるので、おじいさんとおばあさんの生命が連結できるのです。そして、理想がここに連結できるのです。

祖父母は父母に相続してあげるのです。すなわち、子女に相続してあげるのです。祖父母の子女は父母であり、父母の子女は私たちです。このように、愛を中心とした所が天国です。そこであることを否定すれば天国は成されません。神様は愛の主体であられ、過去、現在、未来を統合できるお方なので、自分たち夫婦同士が愛し合う以上に、お母さんとお父さんを愛さなければならないし、自分のお母さんとお父さんを愛する以上に、おばあさんとおじいさんを愛さなければなりません。

男性は天を象徴し、女性は地を象徴します。男性は主体なので、誰かの干渉を受けることを嫌います。女性は愛するよりも、愛されることを好みます。男性は天を象徴し、女性は地を象徴するので、男性と女性が一つになることは宇宙が一つになることです。愛することによってのみ宇宙を主管できるので、愛することによってのみ宇宙の主体になれるので

あり、自分の相対を宇宙よりもっと大きいと考えなければなりません。天と地、この二つの世界を連結できるのは変わらない愛です。地上で愛によって育まれた人生を生きた人は天国に行くことができます。愛を中心とした世界を霊界というのです。

神様と人間の個人個人が完全に一つになれば、自動的に男性と女性が一つになるようになり、完全な夫婦が生まれれば天地は統一されるようになっています。神様はどこにいることを願われるのかというと、愛は男性と女性の二人の中から生じるので、真の男性と真の女性が愛し合う所にいることを願われるのです。神様がおられるので、その愛が永遠であり得るし、その愛が永遠の統一を成し得るし、その愛が永遠の生命をもつことができるし、その愛が永遠の理想をもつことができます。

それゆえ、その愛をつかむ者は、すべてのものを占領できます。真の愛を中心として成された家庭の目的は、家庭だけのためではなく、天国を築くためのものです。宇宙が一つになるために、このような目的が一致するよう標準を合わせて、家庭から民族、国家、世界、天宙まで拡大していくのです。そして、世界まで行ったなら再び、帰ってこなければなりません。（四八ー一〇）

五　天国は家庭単位で入る所

天国とは何でしょうか。極楽または天堂に行くといいますが、自分一人で行く所ではありません。自分の父母と兄弟が一緒に行かなければならない所が天国です。天国に行く秘訣は何でしょうか。天国は個人だけが入るのではありません。家庭的に入らなければなりません。家庭的に入らなければならないだけではなく、血族を率いて入らなければなりません。この地上で神様の前に多くの血族をもったということは、福を受けるということです。

ある家庭に息子・娘が多く、財物が豊かなら、福を受けた家庭だというでしょう。このように福を受けて、天国に入ろうとすれば、個人が一人で行くのではなく、家庭的に入らなければなりません。天の国には絶対に個人では入れません。先生が探ってみると、天国は今までキリスト教徒たちが信じている、そのような妄想的な所ではありませんでした。

本来、天国は家庭単位で行くようになっている所です。家庭が行くようになっているのです。家庭が行くのです。お父さんとお母さんと息子・娘が共に行って、神様を中心として共に暮らすことのできる所が、理想的な世界なのです。ところで、お父さんは地獄に行き、お母さんは天国に行き、兄姉は地獄に行き、弟妹は天国に行く、そのようになれば、自分は天国に行ったとしても、うれしいでしょうか。天国は家庭として行くのです。家庭が行くのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四八）

天国とは、人間が堕落しないでこの地上で神様の愛の懐において聖婚をして、神様が好まれる息子・娘、神様が喜び得る孫たちを迎え、神様の愛を受けてその家庭がみんな一緒に入る所です。子供が入ることができなくても、自分だけ入れば天国ですか。しかし、楽園はいくらむつまじい夫婦や父母、子供でも、

別れて入る所です。家庭とは何ら関係がありません。そのような所が天堂ですか。

父母に侍り、全家族すべてが入り、神様を中心として授け受けることのできるその世界が天国です。息子が地獄で死ぬと騒いでいるのに、父母は天国で満足に生きればいいのですか。そのような所が天国ですか。

統一教会でいう天国は、一人で入る天国ではなく、家族が一緒に入る天国です。神様の創造理想を見るとき、男性と女性が別れて入る所が天国でしょうか。違います。二人で入る所が天国です。お父さんが入ればお母さんも入り、父母が入れば子供も共に行く所が天国だというのです。お父さんとお母さんが一緒に行ってこそ天国であり、お父さんは天国に行くのにお母さんが地獄に行けば、天国になるでしょうか。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四九）

本来、創造原則による天国は、家庭を中心として入る所です。父母が入り、子供が入り、自分の一家全体、一族が入ってこそ幸福なのであり、父母は地獄に行き、子供だけが天国に行くなら、それが何の天国でしょうか。ですから、統一教会がこれから天国に行くことのできる道を立てるためには、家庭的な基準を立てなければなりません。そうでなくては、天国に行くことはできません。家庭を中心として、サタンが讒訴できる基準から脱しなければなりません。歴史的な讒訴基準、時代的な讒訴基準から脱しなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九五〇）

本来神様は、夫が天国に入り、妻が地獄に入るように創造なさったのではありません。創造当時の理想の主人公たち、すなわち、父母と息子と娘が、氏族を成し、民族を成し、国を成そうというものでした。それでこそ、いいのではないでしょうか。ところが、人間が堕落したために地獄が生じたのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四九）

六　愛する人が死ぬとなぜ悲しいのか

愛する人が死ぬと、なぜ悲しいのでしょうか。愛する人が死ぬと、それを即時に感じますが、それはこの宇宙に満ちている超人的な力の作用によってです。人は自分にこの力が入ってくれば入ってくるほど、神様との縦的関係を中心として、宇宙的な力を感じるようになるのです。ところで、愛する人が死ぬと、その力が自分から離れるようになります。そして、離れた結果を即時に感じるようになるのです。

これは悲痛なことです。自分が完全な合格品にならなければならないのに、それによって不合格品として決められるのです。私たちの人生は、完成を追求します。ところが、それと反対の不合格の要素をもつときは、そこに比例する要件を宇宙の力が追い出すのです。そうなれば、それが苦痛として現れるのです。皆さんはこれをはっきりと知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九〇一）

愛する父母を失ってしまえば、言葉にできない悲痛さを感じてこそ孝子です。父母も子供を失ってしまえば、悲痛さを感じます。夫

婦同士も、同様です。私たちの後孫たちも、同様です。これは千年万年変わらないのです。

皆さんの夫や妻が死ぬと悲しいでしょう。なぜなら、宇宙の原則は父母と夫婦と子女・・。三段階が一つとなって、神様を中心として四位基台を形成するようになっています。この宇宙の原則によって、不合格者は合格圏内から追放されるので、苦痛と悲しみを感じるようになるのです。

皆さん、妻が死ねば、夫がなぜ涙を流すのでしょうか。第三目的である、息子・娘を得ることのできる道がふさがれたからです。それを成すことができなければ、倒れるしかありません。死ぬしかありません。ですから、泣くしかないのです。電気を見れば、陽（十）電気と陰こ）電気がありますが、この二つのうち一つがなくなれば、残りのものも何の作用もできないのです。人が行く道もそれと同様です。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九〇三）

自分の息子・娘がいなければ、不幸を感じるのです。「息子・娘がいなければ、夫婦だけで仲良く過ごせばいいだろう」と考えるかもしれませんが、そうではありません。天理法度が四位基台原則になっているために、男性と女性が出会って一つとなったなら、必ず息子・娘を生んで、四基位台を成さなければなりません。これが宇宙の公法です。四位基台を成すことができなければ、合格できないのです。

また、息子だけいてもいけません。息子だけいれば、息子に対する愛の味は分かりますが、娘に対する愛の味は分からないからです。皆さん、蜜の味がどうだと、誰かが説明して分かりますか。それは、説明だけではだめなのです。説明する前に、直接口を開けて食べさせてあげてから、これが蜜の味だと教えてあげなければならないのです。

それでは、息子がいなければなぜ寂しく不幸だというのでしょうか。娘だけをもった人は、息子をもった人を見れば、この世でそれ以上望むものはないといいます。西洋の人々は、そのような面で少し鈍いです。彼らは個人主義思想を強調して、そのような感情はすべて失ってしまったのです。失ってしまったために、再び探さなければなりません。ですから、今それを再び探すために、東洋思想に帰ってくるようになるのです。

ですから、夫がいて、妻がいて、息子・娘がいる家庭にならなければならないというのです。そうして、彼らが完全に一つとなって、初めから目的地点まで天運と歩調を合わせていけば、この家庭は永生するのであって、一人では永生できないのです。たとえ永生するとしても、永遠の世界で苦労というふろしきを包んで、行き来するようになります。幸福という要件を受けることができません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九〇四）

七　家庭を通して人間が行くべき天道

人間は自分の父母を愛するかのように隣り村の父母を愛し、自分のおじいさんを愛するかのように隣り村のおじいさんを愛さなければならないし、自分の息子・娘を愛するかのように隣り村の息子・娘を愛さなければなり

ません。そうすれば上下関係が広がり、左右が広がり、前後関係が広がるのです。それが繰り広げられ、この縦的な心情の基準が築かれ、天道が生じるのです。ですから、それを実践しようというのです。私たち統一教会はそれを実践するために理想的な家庭を建設するのです。そのようになるのです。教会という所は、その縦的な基盤を横的に四方化させることができる所です。その数が多くなるほどいいのです。

なぜ多いといいのですか。家庭時代から氏族圏を越えて、氏族圏から民族圏を越えていくからです。それゆえ、伝道をたくさんするほど天的な基盤が自分を通して繰り広げられるので、神様の前に人格的価値基準が前進するのです。それで、私たちは、この縦的中心で何をしなければなりませんか。これを横的に再現させようというのです。（七〇－一五二）

お父さんとお母さんが一つとなる日には、その家庭は発展し、子供と父母が一つとなる日には、より次元の高い家庭に発展することを知らなければなりません。それでは、家庭と親戚間において一つとなる日には、どのようになるでしょうか。そこには新しい民族の正気が起こるでしょう。それがより高い次元に向かっていこうというときには、環境的に全部結束し、国家基準まで忠臣の血族として残されるようになるということを忘れてはなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九二一）

もう先生は、遠からずおじいさんになります。皆さんも年を取ると、おばあさんやおじいさんになります。同じです。息子・娘に生まれ、結婚してお母さんやお父さんになり、おばあさんやおじいさんになっていくのが一生です。それゆえ、おばあさんやおじいさん、次にお母さんやお父さん、その次に自分たち夫婦、その次に息子・娘、これが人生の公式的路程なのに、それを愛さなければ天道にはずれるのです。これを根本的にまとめておかなければ世界を収拾する道がありません。

西洋のような所を見ると、おばあさんやおじいさんがかわいそうです。彼らは東洋の風習がどれだけうらやましいか分かりません。「ああ！　東洋思想は、おばあさんやおじいさんたちに神様のように作り、七十、八十歳の老人のすべての世話を息子がするのだから、それがどれだけいいだろうか」そう思っているのです。

それゆえ、おばあさんやおじいさんを愛することが分からない人は、神様を愛することができないのです。一番、年を取ったおじいさんは誰でしょうか。そのお方は神様だというのです。おじいさんよりも、お年寄りの方が神様であり、子供よりも若い方が神様なので、すべての人を愛さなければ神様を愛することができないのです。

それゆえ神様が年を取っておられるとすれば、一番、年を取っておられる方ですし、未来に対する青春ならば、誰よりも青春です。その方を私が愛するために、その中にいるどんな人類も私が愛さなければならないし、歴史の時代に霊界に行った方たちも、その圏内で今、希望を求めて生きようとしているので、その方たちまでも愛すべきであり、神様に従

って愛することのできる道を求めていくというのが理論的です。（七〇－一五二）

八　統一教会は家庭天国を築こうとするもの

私が今、教会をつくらないのは、すべて考えがあってのことです。教会にたくさんの人が必要なのではないからです。天国は教会から成されるのではなく、家庭から始まるのです。家庭、すなわち新郎・新婦から始まるのです。女性は男性に巡り会うために生まれ、男性は女性に巡り会うために生まれました。

赤ん坊が眠りから覚め、初めて目を開けながら呼ぶのが、「お母さん」です。赤ん坊がお母さんを呼ぶ以上に、夫は妻を呼ばなければなりません。このように呼んでみなかった人は、かわいそうな人です。また、妻も夫以上にそう呼ばなければなりません。互いがそうできる夫婦として対さなければならないのです。

琴瑟之楽（＝夫婦仲がとてもよいこと）の夫婦として、互いにそのように呼び合いながら暮らさなければならないというのです。そのように千年万年暮らせば、老いても青春がうらやましくないというのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四四）

男性と女性はみ言の時代を経て、実体の時代を経たのちに初めて、相逢うひと日が成されるのです。そして、相逢うひと日が成されたのちに初めて、天国生活をすることができるのです。相逢うひと日には、彼の心が「私」の心であり、彼の心情が「私」の心情であり、彼の姿が「私」の姿であり、彼の困難が「私」の困難であり、彼の傷が「私」の傷として感じられ得る境地にまで入らなければなりません。

そのような境地に入って、彼の心情も「私」の心情となってこそ、天国家庭が成されるのです。これがこの地上で完結されてこそ、天国家庭が生まれるのです。

真の愛とは何でしょうか。父母の愛、夫婦の愛、子女の愛です。愛は互いが犠牲になる伝統を備えなければ、長くは持続できず、壊れる定めです。父母が子供のために犠牲になるがゆえに、父母が子供を愛する因縁は壊れないのです。そして、真なる父母の愛を受けて育った息子・娘なら、自分の父母に絶対に不孝をすることができないのです。

また、夫は妻に、妻は夫に対して「あなたは私のために生きた」という立場で、互いが与え合い、一層犠牲になる立場が広がるようになるとき、その家庭には福が訪ねてくるのです。そのような家庭が、神様が訪ねてこられる福地なのです。

天国生活はどこから始まるでしょうか。家庭からです。ほかの所から始まるのではありません。天国は家庭を立体的に拡大させただけであり、家庭圏を外れたものではないのです。それゆえ、皆さんが自分の妻や夫を抱くときに、これは世界の男性と女性が一つとなるのだという考えをもたなければなりません。このように世界人類を愛したという条件を立てることのできる場が、まさにこの家庭です。

今、先生は家庭に対する規範、天国家庭としてもつべき生活に対する規範を教えてあげなければならないということを感じています。わが統一教会の組織は、家庭組織です。家庭を主とするのです。これからは、わが統一教会で礼拝を捧げるのも、説教形式ではなく、報告形式でしなければなりません。報告の内容は、その家庭が誇ることのできるものでなければなりません。

ですから、家庭全体が来て、礼拝を捧げなければならないのです。そうしながら、立派な家庭を見ては倣い、劣った家庭を見たならば、うまくいくように導いてあげなければならないのです。そうして、家庭天国を建設しようというのです。家庭天国を先に成せなければ、地上天国は成されないということを、はっきりと知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－九四五）

第十二章　真の家庭を求めて

一　自己のために生じたものは一つもない

どこに個人主義がありますか。自己において自己だけを主張する部分は一つもありません。子供が父母の愛によって母親のおなかの中で、卵子から育って生まれるとき、九九・九九九パーセントは母親の骨と血と肉です。そして〇・〇〇一パーセントの一つの父親の精子が合わさって生まれるのです。そこには自己という概念はあり得ません。

誰でも生まれるとき、自分自身だけという概念はなかったのです。いかに立派な人であっても、自分一人で立派に生まれついたという人は一人もいません。骨や血や肉もすべて母親のおなかの中で譲り受けたものです。この体の重要な部分は、母親の体の延長という事実を認めなければなりません。私たちの体のあらゆる要素は、卵子と精子に含まれていたのです。例外はありません。ですから、個人主義というものが存在する根拠がないのです。

上という言葉が成り立つときは、下を認めたうえでいう言葉です。上ということだけで、個人主義が成り立つでしょうか。個人だけという概念はあり得ません。右というのは、左というものをあらかじめ前提としたうえでいう言葉です。前後について見ても、前というのは後ろを前もって認定していう言葉です。男性という言葉も、男性一人を念頭に置いていう言葉ではありません。女性を前提条件にしていう言葉なのです。これは、誰か一個人の言葉なのではなく、宇宙的な事実です。

男性はなぜ生まれたのでしょうか。男性たちは自分一人で生きていけるので、そのようなことに関心がないなどとよく言いますが、男性は女性のために生まれたのです。女性がいなければ、男性は必要ありません。絶対的に必要ないのです。結局、自分のために生まれたものは、一つもないのです。

私たちの五官を見てください。自分の目が、自分の目を見るために生まれたのでしょうか。鼻や耳、口、手もすべて相対のために生まれました。五宮を総動員して、集中させることのできるその力が何かといえば、真の愛です。目、鼻、耳、口、手は、真の愛のために生ま

れた真の愛の道具です。自分のために生まれたものは一つもありません。

反面、人のものを自分のものにする人を泥棒といいます。人のものを持ってきて、自分のものとして使う人は泥棒ではないでしょうか。ですから女性のために生まれた男性の五官と体を、自分勝手に使う人は泥棒なのです。

男性と女性は、何が互いに異なるのでしょうか。生殖器を含んだ体が異なります。では、男性の生殖器は、誰にとって絶対に必要なのでしょうか。男性の生殖器は、女性のためにあるのです。人間の生殖器の一つは凹であり、一つは凸ですが、なぜそのようになったのでしょうか。二つとも、とがらせるとか、二つとも平べったくすることができるのに、なぜそのように異なって生まれたのでしょうか。すべて、相対のためです。

男性のものは、女性が絶対に願い、女性のものは、男性が絶対に願います。女性のものは、絶対に男性のものであり、男性のものは絶対に女性のものだという事実を知らなかったのです。それを占領することによって、愛を完全に知るのです。

二つが一つになるような経験を通してのみ、最高の高い境地の愛を知ることができるのです。どこの誰であれ、このような事実を絶対に否定することはできません。誰でもみな、認定しなければならないのです。二つが完全に一つになるその場で、理想的な夫婦が生まれます。まさに、その場に絶対愛が存在するのです。絶対的に変わらないそのような愛の場に、神様が臨在されるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－六二）

二　神様が臨在できる至聖所

神様の属性とは何ですか。神様は絶対的であり、唯一であられる方であり、永遠不変な方です。では愛の主人は誰でしょか。男性でもなく女性でもありません。そのお方が、まさに神様であります。愛を中心として愛を通してのみ、神様と人間が一つになるのです。なぜなら、神様でも人間でも愛が絶対に必要だからです。

神様が必要とする愛はどのような愛でしょうか。神様は絶対的な愛を願われます。皆さんはどうですか。私たちも同じです。神様が絶対的な愛、唯一の愛、不変の愛、永遠の愛を必要とされるように、私たち人間も絶対、唯一、不変、永遠の愛を必要とするのです。みな、神様に似なければならないのです。

神様の至聖所はどこでしょうか。愛が宿る堕落以前の男女の性です。ここが天の至聖所です。愛とは何でしょうか。愛とは神様が臨在できる至聖所です。愛を通して、堕落した世の中をきれいに掃除しなければなりません。堕落とは、人間が思春期を正しく送らなければならないのにその時期を正しく過ごせず、脱線したことを意味するということを既に明らかにしました。

人間始祖エバがまず天使長と霊的に不倫の関係を結ぶことによって堕落し、それからエバがアダムと肉的な関係を結んで肉的に堕落

したのです。それゆえ、彼らの罪の血統が後世の人間たちにまで遺伝してきているのです。

サタンの痕跡が残っている所には、神様が絶対に臨在され得ないという事実を知らなければなりません。人間が神様の愛を受けるためには、死んでも再び生きなければなりません。人間社会でも、二度目に結婚した時、前の夫が忘れられない妻を、新しい夫が好きになれるはずがないではないですか。それゆえに神様も蕩減復帰を通して人間たちが罪を清算するようにさせながら、救援摂理をしてこられたのです。

愛の色はどんな色だと思いますか。夜には黒く、昼には白く、夕方ごろならば黄色だと思いますか。愛の色はどんな色だと思いますか。愛の中心の色には、平和と統一そして人類の平等思想を成就できる力があります。ですから愛の至聖所にむやみに入っていこうとすれば焼け死んでしまうのです。統一教会の愛の理念は素晴らしいと思いませんか。

今日の米国社会における愛の色は、一言で言えばおぞましい死の色です。男女間の愛を通して永遠なる創造理想の世界を築くのではなく、死のどん底に落ちています。祝福を受けるまで、男女は愛の至聖所を清潔に守らなければならないし、一度愛すれば守り続けていかなければならないのに、米国人たちは愛の至聖所を侵犯する悪党たちであり、悪女たちなのです。

結婚を祝福として受け入れない米国の男女は、愛の目が遠くて、前を見ることができない患者たちばかりです。米国社会がこのまま行けば、明日に対する希望もなく絶望が満ちているばかりです。結局は神様の審判によってではなく、人間性を失った人間たちによって自滅してしまうのが、火を見るよりも明らかなのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四七）

統一教会は六千年間秘められてきた愛の摂理を知って、神様の愛を中心にして創造理想の完成を成すために、祝福の足場を広げてきたのです。祝福を通して愛の至聖所をつくってきたのです。ここから生命が新しく生まれ出ることを知らなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四六）

三　男性の主人は女性であり、女性の主人は男性

主体と対象、すなわち陽性と陰性が一つになるとき、何を中心として一つになるのでしょうか。キスすることによってでしょうか。愛は概念であって実在ではありません。愛が定着することのできる実在は何でしょうか。男性が男性になり、女性が女性になるようにするものが何であるかを知らなかったというのです。それがまさしく生殖器です。

それを卑しく思う人かいますか。貴く思うとすれば、どのくらい貴く思うでしょうか。今までは、それが善くないものと考えたとしても、今からは貴く思わなければなりません。

未来の世界はどのような世界でしょうか。生殖器を絶対的に貴く思う世界になるなら、その世界が善い世界でしょうか、悪い世界でしょうか。栄える世界でしょうか、滅びる世

界でしょうか。冗談でいっているのではありません。神様が人間を創造なさる時、最も重要視して、精魂を込めてお造りになった所とはどこでしょうか。目ですか、鼻ですか、心臓ですか。そうでなければ頭脳でしょうか。これらは全部、死んでなくなってしまうのです。実際、そうではないでしょうか。

「世界平和統一家庭連合」の目的とは何でしょうか。道徳と宗教、すべての分野を完全に超越し、生殖器が一つとなって、神様までも拍手で歓迎することのできる人が暮らす世界があるなら、どのような世の中になるでしょうか。男性と女性として生まれるのですが、彼らの生殖器の主人は誰なのでしょうか。

夫の生殖器の主人は妻であり、妻のものの主人は夫です。生殖器の主人が互いに取り替えられていることを知りませんでした。これは明快な真理です。これを否定できないというのです。千年、万年、歴史がいくら流れても、この真理は変わりません。あらゆる男性たちは、それが自分のものだと考え、またあらゆる女性たちも、それが自分たちの所有だと考えたために、世の中がこのように滅びつつあるのです。互いが主人を間違えているという話です。

すべての人々は、愛は絶対的であり、永遠なるものだといいながら、夢のようなものだけ考えていますが、その永遠の愛の主人がひっくり返っているということをはっきりと知るなら、世の中がこれほどまでにはならなかったはずです。

博士や学者は数多くいますが、これ一つ考え抜いた人かいないのです。さあ、皆さんはこの真理を否定できますか。皆さんの父母、祖父母、曾祖父母、そして人類の先祖たるお方と、さらには宇宙の根本であられる神様に尋ねても、すべてこれに同意するようになっているのです。これが鉄則です。

この真理こそ、宇宙が億万年過ぎても原理・原則として残る鉄則です。そして、神様の前に出ていけば、この鉄則によって、正しい人と間違った人の判定を受けるようになるのは当然です。アダムとエバの堕落を知ってみれば、まさにこの鉄則に背いたところに由来しているのです。

アダムとエバは、自分たちの生殖器が自分たちの所有だと錯覚したのです。問題を誤って、宇宙のどこからも公認を受けられなくなったので、追放されてしまったのです。

鉱物界や植物界や動物界の雄と雌もすべて、愛の相対のために自分の生殖器を保管しているということを、アダムとエバが知らなかったのです。

では、生殖器は何のために存在するのでしょうか。それは愛のためです。愛を探すためにそのように男性と女性として生まれたというのです。

すべての男女が自分たちに所属した生殖器が、実は、自分のものではなく、主人が自分の相対だということを認定するようになれば、私たちすべては頭を下げ、謙虚な姿勢で愛を受け入れるようになることでしょう。

愛は相対なしには来ないのです。相対から来るということを知らなければなりません。ために生きないところには、愛があり得ないのです。絶対に為に生きるところで、絶対愛を見いだせるということを肝に銘じてください。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五三）

四　愛には発展も革命もない

愛には発展もなく、どんな革命もあり得ません。愛は原型そのままで完全なものであり、不変で永遠で絶対的なものです。

愛は発展もなく革命もないのです。愛が永遠で完全なことは、永久不変の真理です。ところで愛が発展すると考えて試験してみようと思えば、それは間違った考えです。愛を生活の手段として考える米国は、そのような意味から滅亡するしかないのです。

神様はそのような米国の未来を祝福してくださるはずがなく、米国自らが滅びなければ先生が愛の爆弾を爆発させてでも滅ぼすのです。はっきりしていることは、愛が生活の一つの方便や手段に利用されては絶対にだめだということです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五一）

夫は妻に対して、初めて愛した姿から、どんな革命や発展も望みません。それは女性が夫に対して願う望みでもあるのです。初めて愛を出発させたその純粋な姿を保つよう願うのは、夫や妻、みんなの願いであることをはっきりと知らなければなりません。純粋な愛に、ある色が加味されることを願わなければ、革命を必要としないのです。純粋な愛、それ自体が永遠に保存されるのを願うということを知ってください。

愛する人の間になぜ離婚という問題が生じるのでしょうか。離婚した人や、離婚をしようとする人たちすべてが、最初は生死をかけた愛の関係だったことを考えてみると、何かが間違っているのです。離婚をするようになった理由はいろいろありますが、結局何かが変わってしまい、二人の間が変化したことを意味するのです。彼らは愛を守り、育てることができなかったので、そのようになったのです。愛それ自体は変わりませんが、人の心は変わるのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五二）

ある男女が夫婦となれば、「お前と私」の間に不変的な統一をどのようにして築くかが重要です。そのように一つになった立場で幸福をうたうようになるとき、それは永遠なる幸福といえるのです。理想的な愛情も、やはり変化しない主体的な何かをもっている所にだけ、そのような基準が設定されるのです。

結婚するときはその男性が美男子だといって愛していたのに、一週間過ぎたのちに事故が起こり、体が不自由になった場合、離婚しようとなっては真の愛とはいえません。偽物の愛です。

今日、先進国家の白人たちは世界を主導して動かす高い地位にあり、黒人たちは大部分が被支配者として低い地位にあります。しかし父母が子供を愛する場合は、その濃度において白人と黒人の差はないのです。誰かが誰か

の支配を受けることはないのです。またそれは、永遠に変わることがありません。

父母が子供を愛する心、妻が夫を愛する心、夫が妻を愛する心、真に愛し合う人たち同士の愛する心は、歴史がいくら変動し、発展し、革命の過程を経ていったとしても変わり得ないのです。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五一）

五　女性は貞節、男性は志操

皆さんは今、思いのままに愛することができるようになっていますか、なっていませんか。道で男性からふいに声をかけられて、ついて行くようになっていますか、なっていませんか。（ついて行きません）。皆さんは、ついて行くようになっているでしょう。そのような素質をもっていてはいけません。

皆さんは時が来るまで、自分の体をよく守らなければなりません。純情を化け物のような男性にゆだねてはいけません。街頭で威張りちらして、ぶらぶらして役に立たずにいる男性たちは、全部化け物たちです。自分の運命をそのような男性にゆだねますか。これは簡単な問題ではありません。一生に一度しかないので、一歩踏み違えた場合には自分の人生が狂ってくるのです。そうでしょう。これは男性にもいえるのです。

それゆえに、今までは女性に貞操を守りなさいといいましたが、これからは男性も貞節を守らなければなりません。そうしてこそ復帰されるのではないでしょうか。いくら世の中が悪く、いくら世の中がせち辛くても、皆さんは行くべき正道からはずれる行動をしてはなりません。

青春時代に純情を失ってしまったアダムとエバの恨みを踏み越えて蕩減できる貴い時期である思春期に、純情を汚してはならないのです。その純情をきれいに貴く保存して「千年、万年一人で行っても、愛が蹂躙されることは絶対にあってはならない」という志操と決意をもたなければならないのです。

ある男性たちは自分の妻がいてもきれいな女性を見れば、自分の妻だったらいいのにと思うのです。このように二つの心をもった男性を指して、泥棒の心をもった人と言います。二つの心から始まったものがサタンなので、二つの心をもった男性を指して、サタンだといっても間違いありません。そのような人々がいるならば、その人はサタンにほかなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三四九）

男性も貞節を守らなければならない時が来ています。男性が貞節を守ることができなければ、その一門がみ旨の前に重罪を犯すようになるのです。大臣だといっても、浮気をしてもいいようになってはいないのです。男性が間違えれば、その一門は滅びるのです。そのような時が来ています。統一思想を知るようになれば、そのようなことはできません。

これからは、男性も貞節を守らなければならない時代です。男性も貞節を守って歴史的な純潔の伝統を残さなければなりません。イエス様の血と肉を食べる儀式は、イエス様の純潔なる血と肉の伝統を立てるためのものです。

女性は貞節、男性は志操（意志）という言葉があります。この言葉はどういう言葉かといえば、み旨（愛）を成就するための貞節であり、目的を果たすための志操なのです。ですから女性は貞節というからには、一つの愛のほかは知らないでこそ成され、男性は志操というからには、一つの目的だけのために精進してこそ成されるのです。

アダムとエバを中心にして見るとき、自分が行く道を知り、志操と貞節を守らなければならなかったのに、守ることができなかったので堕落したのです。男性は神様の愛を中心として女性を愛するときに、「完全に愛した。初めから終わりまで永遠に変わらず愛した」と言うことのできる立場に立たなければなりません。また女性はそのような立場に立つために、自分の身を固く封じなければなりません。

数多くの花びらが幾重にも重なり合っている芍薬の花のように、固く埋めておかなければなりません。そして春という天地の調和に合わせ、そこに和合して新しい人生を出発しなければなりません。これを正しくしなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ｉ－三五〇）

六　堕落はフリーセックスの根であり個人主義の祖先

神様はエデンの園にアダムとエバを創造されながら、彼らに生殖器をもつことを共に許されましたが、何のためにそうされたのでしょうか。彼らが成長すれば、神様が彼らを結婚させてくださるでしょうか、させてくださらないでしょうか。問題は彼らの堕落にあります。堕落ゆえに血統が変わったのです。

それゆえ、神様は彼らをエデンの園から追い出されたのです。本来、神様の体となるべきアダムと、神様の婦人格に立つべきエバが堕落することによって、神様ご自身の体と理想を病気にかからせ、怨讐になったので、それをご覧になった神様のご心情がどれほど大変だったでしょうか。堕落は自らを埋葬する墓です。人のものを奪い取っていく行動です。言い換えれば、堕落はフリーセックスの根になり、個人主義の先祖になりました。

今日、アメリカはどのような国ですか。極度の個人主義、分に過ぎる私生活の追求、フリーセックス、このようなことを神様が好まれると思いますか。

極度の個人主義を追求すればどうなるでしょうか。彼らの言うとおりにすれば、天と地、世界、国家、社会、家庭そのうえ、おじいさんやおばあさんまでも、すべてを放り投げてしまい、父母と兄弟までも失ったまま、ジプシーやヒッピーになって好きなようにさすらいながら雨が降り、雪が降れば、行く所がないので、自殺して一生を終えようという話ではありませんか。

しかし、人間の本心は極度の個人主義やあきれるほどの私生活の保障を願っていません。宇宙と国家、町と村、そして父母の愛を受けながら暮らしたいのが私たちの本心の願いなのです。しかし、そうできない反対の道を行くので良心に火がついて本心との葛藤を感じるようになり、簡単に薬を飲んで自殺するこ

とがよいと判断し、自ら首を締める現象がだんだんと増えつつあるのです。「蒔いたとおりに刈り入れる」という真理がとてもよく合うのを目撃するのです。

アダムとエバがエデンの園にどのような種を蒔いたでしょうか。フリーセックスの種、すなわち、節制のない性関係の種を蒔きました。それを否定できますか。そうしたために、彼らは下半身を覆ったのです。幼子たちも父母が隠しておいた大切なお菓子を盗み食いして、見つかれば手や口を隠すのが本性の作用ではないでしょうか。

もし、善悪の実を取って食べたなら、その取って食べた手や口を覆うべきなのに、なぜ下半身を覆ったのかというのです。堕落は淫乱によって引き起こされたということを否定することができません。

では、どこで天国と地獄が分かれるのか調べてみましょう。空中ですか。どこでしょうか。まさに皆さんの生殖器です！　深刻なことです。これが天地をひっくり返しました。この事実を誰が否定できますか。レバレンド・ムーンが発表した原理の本の堕落論に、説明がなされています。疑問に思うならば神様に尋ねてごらんなさい。

皆さんとしては夢にも想像できない内容と理論をもって、体系立てておいたレバレンド・ムーンの原理の本に、誰も反対することはできないのです。生殖器を目がつぶれた盲人のように、方向を失ったまま使用すれば地獄行きであり、反対にこれを神様の絶対愛に基準を合わせて使えば、天国の高い所に行くのです。これは明白な結論です。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－四九）

ですから、絶対純潔（絶対性）は神様を中心としたものであり、フリーセックスは自分とサタンを中心としたものです。歴史的に政治家や経済人たちは、文学作品やメディアを通してフリーセックスを刺激することが多くありました。ですから、今から私たちはみな、政治家や経済人、文人、作家と言論人たちと一つになって先頭に立ち、フリーセックスを防がなければなりません。フリーセックスは、完全になくならなければなりません。（祝福家庭と理想天国Ⅰ－六三）

七　絶対純潔と真の家庭運動を通した平和世界実現

今、青少年の問題が深刻な問題です。エデンの園でアダムとエバが、青少年期に日陰のもとで淫乱によって堕落して、フリーセックスの種を蒔いたので、取り入れの時期である終わりの日には、必ず世界的に青少年たちのフリーセックスの風潮が蔓延する現象が現れるのです。

終わりの日に神様はサタンが何を願うかをご存じなのです。サタンはフリーセックスを通して、ただの一人も神様の前に帰ることができないように、言い換えれば、全人類を完全にだめにしてしまい地上地獄をつくろうとするのです。

今日、私たちが生きているこの世界が、地上地獄となっていく世界でなくて何でしょうか。したがって、このように地上地獄になっ

たこの世界と一八〇度異なる、正反対の道を求めていけば、天国に行く道があるのです。再臨主が来られて、この世の中を救ってくださるのも、まさにこのような一八〇度反対の道を教えてくれて、天国に導くということなのです。

それでは、フリーセックスの道と一八〇度異なった正反対の道とはどのような道でしょうか。偽りの父母が現れて、つくっておいた道がフリーセックスの道なので、真の父母が現れて、この間違った道を正してあげなければならないのです。神様はそれに干渉なさることはできません。この地の主権や軍事力、経済力、政治力でも手をつけることのできない問題です。

偽りの父母によって引き起こされたことなので、真の父母がメスをもって手術しなければ、決して人類は救われる道がないのです。罪を犯した者がその罪を蕩減しなければならないのです。間違った結婚で家庭を築いて、血統が一八〇度ねじれてしまったので、真の父母が来られて、結婚させてあげ、一八〇度原状に戻すことによって、天国に行く道を開いてあげるようになるのです。

人間の堕落が愛によって起こったので、人類は真の愛を失ってしまいました。それゆえ、この真の愛をどのようにして取り戻すのかという問題が提起されます。真の愛を失ってしまったというのは、淫乱によって堕落したという意味です。

すなわち、生殖器を中心として過ったので、これを取り戻そうとすれば、その反対に正しく使わなければならないのです。そのように過った愛がエデンの園でなされ、終わりの日にその結果として現れる現象が青少年問題です。それで性の混乱時代が来るのです。

それを清算するためには、絶対純潔でなければだめなのです。このセックスの概念だけが、家庭崩壊を廃止し、青少年の倫落を防ぐことができるのです。

神様がアダムとエバに期待したものとは何だったのでしょうか。絶対純潔愛を期待したのです。絶対純潔愛が存在する所には絶対純潔夫婦が誕生するようになり、自動的にフリーセックス、ホモ、レズビアンという言葉は消えるようになるのです。このような絶対純潔愛を探す運動を世界的に広げるためにレバレンド・ムーンは一生を捧げて、受難の道を克服してきましたし、今は勝利のファンファーレを響かせ、世界に号令をかけ得る時が来たので、天の前に感謝をするのです。

世界平和に向かっていくことのできる礎石を置くのも家庭であり、世界平和への道を破壊し得るのも家庭です。人類の希望と幸福の土台が破壊された所がアダム家庭でした。したがって、きょう、このように世界平和家庭連合を創設し、皆さんの家庭も、今からはサタン世界と一八〇度異なる方向に行くことのできる道を開くようになったことを、天の前に感謝せざるを得ません。この道でなくては、自由も幸福も理想もありません。

皆さんは今、絶対純潔、唯二不変、永遠の生殖器を中心として、これを基盤にして、神様を求めていかれるようお願いします。この

基盤が真の愛の基盤、真の生命の基盤、真の血統の基盤、真の良心の基盤にならなければならず、ここから真の家庭が、真の国家が、真の世界に連結することによって、平和世界、理想世界が形成されるでしょう。

どこに行かれても、テレビやその他、言論機関を通してレバレンド・ムーンの話を伝えてみてください。そうすれば絶対に滅びません。地獄になったこの世界を、果たしてどんな力で変えることができるでしょうか。神様の愛、すなわち絶対、唯一、不変、永遠の基準に立って、生きていかなくては不可能なのです。私たちの生殖器の本来の主人は神様であられます。（祝福家庭と理想天国Ｉ－五一）

以上

真の家庭（合本版）2000（平成 12）年 2 月 10 日　初版　発行

Book 五: 地上生活と霊界
Earthly Life and the Spirit World

はじめに

真の御父母様が訓読会を定めてくださったのは、天国家庭の伝統として家庭に神様を迎えて暮らすためだと思います。訓読とは、み言を通して神様の深いみ意を悟り、真の御父母様の勝利の聖業と役事を知ることによって、み言の内容と一致させようとするところにあります。み言は真の御父母様が一生の間、千辛万苦によって探し出されたダイヤモンドの鉱山のようなものです。真の御父母様は、一つしかない貴い宝物、億千万のお金を払っても買うことのできない貴い宝物がたくさん埋められているとおっしゃいました。

真の御父母様は生涯を通じて珠玉のような生命のみ言を私たちに身に余るほどにたくさん下さいました。そのみ言の中でも、特に神様の実在性と霊界の実相、真の愛と真の父母、罪と蕩減復帰についてはっきりと知る人は罪を犯すことがなく、善なる人になるだろう、とおっしゃいながら、機会があるごとに、この部分をたくさん教育されました。

このような真の御父母様のみ意に従いながら、さらにみ言の中から、蕩減復帰時代に私たちが実践しなければならない信仰的内容、そして成約時代を迎えた私たちが永遠に実践しなければならない生活的な内容を探し出し、教育教材として使用する必要性を深く感じてきました。

今回、愛する日本食口のために、これらのみ言を選び出し、訓読教材用として『真の神様』、『真の父母』、『真の愛』、『地上生活と霊界』、『罪と蕩減復帰』、『礼節と儀式』、『成約人への道』など、七巻として発刊しました。このうち、『真の父母』と『地上生活と霊界』の二巻は、韓国で既に発刊され、訓読教材として使われているものを、日本の事情に合うように、またすべての人に読みやすく編集し翻訳したものです。

これらの書籍は完璧に編纂されたものだとは言うことができませんが、少なくとも真の御父母様の内的なみ意を体系化したものですので、訓読を通して本然の道理を理解するにおいて、必要な教材になるものと思われます。

この本によって、神様の正しいみ意を受け継ぎ、真の御父母様が願われる真の子女となり、天的な理想家庭をつくることで、この地上に創造本然の理想世界を立てるのに大きく貢献されんことを切に願うものです。
み言を下さった真の御父母様の愛に心から感謝するものです。

一九九九年十月

日本語版発刊によせて

歴史を通して洋の東西を問わず「人間は死後どうなるのか?」という素朴な疑問は、多くの人々の心を悩ませてきました。この疑問にどう結論をつけるかで、その人の人生観が大きく変わってきます。

霊界を否定する思想のもとでは、人間は一個の動物と理解され、人間の尊厳性を認めることができず、人生観も表層的となり、やがては刹那的快楽主義に陥ってしまうのです。一方、逆に霊界の存在を受け入れる人生では、人間としての尊厳性や価値の永遠性を認めて、豊かな霊的・精神的文化を生み出すこととなります。一時的な肉体的享楽に溺れる人生は虚しいものとして退けられます。

文鮮明先生は、御自身の豊かな霊的体験を土台として「霊界と共に暮らす生活」を教えてこられました。教えられる霊界の事実は驚愕する内容が多いとともに、一貫した原理によって説明されています。

この本によって霊界の実相に関して理解を深め、希望ある新しい人生を出発される契機としていただければ幸いです。

一九九九年十月

第一章　有形、無形世界での人間の存在

第一節　人生路程

一　人生路程に対する祈祷文

愛するお父様７　天が屈辱を受けるその恥ずかしさを恐れながら、幼い時から今まで戦ってきた小さな者を守ってくださったお父様の恩賜に感謝申し上げます。

この地に何が良いといっても、お父様が運行される本然の心情につながったもの以上に貴い基準がないことを思うとき、その立場を無限に恋しがらなければなりません。お父様のその愛に接する人は、世の中の万事をみな放棄しても未練の残らない立場にあるということを、私たちは知るべきです。

今私たちは、お父様の愛で暮らす理想世界、本然を訪ねていかなければなりません。第三の生の自由権限をもち得る解放児として出生するその日を、今日この地上世界で準備しなければなりません。

赤ん坊が胎中にいるとき健全であってこそ、地上に生まれてからのその一生が健全であり得るのと同様に、地上生活が健全であってこそ、天国の生活が健全であり得る、ということを知らなければなりません。天と地が協助し、万宇宙の動的な運勢に拍子を合わせることができる立場に立つためには、今日の世の中とは相いれず、悪が主管する世の中であるために、死を覚悟しなければいけないという事実を、私たちは知るべきです。私たちの後孫たちは私たちと同じ立場に立てられては絶対いけない、ということを悟らなければなりません。（四九―三〇八）

愛するお父様、今まで春の環境を開拓するために、絶えず苦労されたお父様がいらっしゃるという事実を思うとき、私たちはお父様に無限に感謝し、無限に歓迎しながら、自分の生命と愛全体を、そっくり移してさしあげられる自らになれなかったことを嘆息し得る息子、娘になるべきです。私たちが新しい春を迎えるためには、私の生命が同化することができる因縁をもって、そこに完全に吸収されなければならないということを知るべきでございます。

そうしてこそ、初めて春を迎えて花を咲かせることができるという事実を知るべきでご

ざいます。「一生で、どのひと時に春を迎えたことがあるのか」と聞かれるとき、いつだと答えられない、春を迎えられずに逝ったかわいそうな霊になってはいけません。一つの花が咲いて実を結ぶためには、夏と秋を経なければならないように、私たちも一つの実を結ぶためには、そのような過程を経なければならないのでございます。

一つの生命が投入され、実が結ばれるまでには、夏の季節を過ごし、その根と幹と枝の全体から生命の要素を吸収してこそ、完全な生命力をもって第二の生を出発できるという事実を思うものでございます。同様に、この体は死んだとしても、その心の中に、新しい世界に再び生まれ得る生命の気運が膨れ上がり得るかという問題を、自ら推し量ることのできる息子、娘になるべきです。

いくら歳月が過ぎていき、暴風雨が激しく吹き荒れても、内的な生命力は、その環境の侵犯を受けずに絶えず発展の路程を行ってこそ、春を迎えて再び蒔かれ得る、第二の生命の母体である種になれることを知るのでございます。

同様に、私たちの外的な姿はみすぼらしいものですが、無限の生命力を集約できる母体、あるいは結実体として再び無限の世界に植えられ得る価値ある人がいるならば、いくら外的に悲惨であっても、悲惨な人ではないということを思うのでございます。その外的な姿が悲惨になれば悲惨になるほど、内的な価値はより充実するということが保障されるという事実を、私たちが知るようにお許しくださることを切にお願い申し上げます。（三二―三七）

お父様７　お父様に侍り、謙遜に敬礼を捧げたい心のない人は、永遠のあの世でお父様と因縁を結ぶことはできない、ということを知るべきなのでございます。

今、私たちが、心の門を開いてお父様の心情を感じさせてくださいまして、今日我々の心から聞こえてくるあなたの音声を聞き、失った自分の体を探すことができ、お父様が私一人を探すために、私の背後において艱難と苦労の歴史過程を経てきたことを感じて、自ら頭を下げることのできる私たちになるようにお許しください。（四―二八〇）

二　人が願う目的

神様には体がありません。それで、すべての万物を神様の体として、アダムを神様の顔で表したのです。それが創造理想です。

神様は、本来の霊的な焦点であり、アダムは本来の肉的な焦点です。その二つの焦点が九〇度をつくるのです。それが神様の創造目的であり、人が願う目的です。

アダム・エバが堕落しなかったなら、あの世に行ってお父さん、お母さんとして永遠に現れることができるのに、堕落したためにそうできないのです。堕落しなかったなら、自分の父母に神様のように侍れば、誰でもみな天国に行くようになるのです。（一一九―一〇九）

三　生まれた理由

今日、この世界は丸くなっています。太陽も丸く、地球も丸く、星も丸く、口も丸くなっています。どんなものでも、みなそのようになっています。それゆえ、宇宙は丸く丸く

回りながら関係を結ぶのです。そして、丸くなっていても個別的に存在するのではなく、全体に連関性を結んでいます。

では、なぜ自分が生まれたのでしょうか。この大宇宙と拍子を合わせるために生まれました。大宇宙と拍子を合わせるために生まれたということです。

それで海の波がざぶんざぶんと音を立てれば、自分の心もざぶんざぶんと音を立て、風が気分良く吹けば、自分の心も気分が良く、花が咲いて香りを放てば、自分の心も香りを放てるというのです。（一〇四―一二二）

愛から生まれ、愛から育って、愛から生きて、愛から死ぬようになるときは、生むのも有り難いことであり、生きるのも有り難いことであり、死ぬのも有り難いことです。

皆さんは、母、父がこの上なく愛する場に同参して生まれたというのです。同参者であるということです。

皆さんは、父母の愛から生まれたために、父母様の愛が差してある旗だと思いなさい。それゆえ、旗が動くのは愛を表示するためなのです。一生の間、愛のために生きるのです。それで、母のためにも愛の旗を振ってあげ、父を見ても愛の旗を振ってあげ、兄弟たちのためにも愛の旗を振ってあげるのです。（一〇三―二五八）

四　瞬間（一日）と一生の関係

皆さんの生活全体が栄養素を吸収し得る基盤にならなくては、生命体を完成することができません。これが、自然の現象世界で繰り広げられるのです。生命の分岐点は、長い期間にあるのではなく、一瞬間にあるのです。

瞬間を無視する人は、貴いものをもつことができません。偉大な人にもなれず、神様の王座と王冠を受け継ぐこともできません。それゆえ、瞬間を輝かせるために、皆さんは言葉一言、行動一つにも注意すべきであり、考えることも注意すべきです。自分の生活で繰り広げられるすべての内容が、世界と関係する現象として残るという信念で解決できる所でのみ、勝利圏が決定されるのです。

このように、勝利圏が決定されるのは瞬間です。したがって、歴史的な勝利圏、天宙的な勝利圏も瞬間に決定されます。瞬間を輝かせることのできる無限の価値を感じて生活する人は、偉大な人になることができるのです。聖人にもなることができ、神様の息子、娘にもなることができるのです。このように、生死の分岐点は瞬間にかかっています。（三一―二一八）

今日、我々の姿勢が問題です。まず、み旨にかなった国が来ることを願い、そのみ旨が成されることを願うのも必要でしょうが、それより、自体がどのようにすればみ旨と一致していくかということが重要です。

一時間なら一時間を、どのようにすればみ旨と一つになるかということが、み旨の国が成されるのを願うことより重要だということです。それゆえ、まずみ旨を継承し得る個人的な環境、家庭的な環境、氏族的な環境、民族的な環境を成してこそ、み旨の国と関係を結ぶことができるために、神様を中心として、一日の生活圏内で、一時間なら一時間をどのようにみ旨と関係を結ぶかということが、重要な問題であらざるを得ません。

復帰摂理歴史を見れば、アダム家庭からノア家庭、アブラハム家庭、モーセ家庭とイエ

ス家庭まで、四千年の歴史が下ってきていますが、彼らが失敗するようになった動機は、ある一年を中心としたものではありません。

アダム家庭において、アダム・エバが堕落したのも、一年や十年、あるいは何十年を計画して失敗したのではありません。その失敗は、一瞬にもたらされ、一瞬の失敗が、億千万年続いてきたということを考えるときに、その瞬間がどれほど恐ろしく、どれほど怖いものであるかを知ることができます。

その一瞬の失敗で歴史時代に修行の道を行った数多くの人たちが、受難の応報を受けなければならず、そのみ旨についていかない数多くの民族が、滅亡のどん底に落ちなければなりませんでした。それが、とてつもない蕩減の祭物の起源になったというのです。このような事実を考えるとき、一時間、カチカチという瞬間が恐ろしいのです。それゆえ、永遠の天国も一瞬を離れてはあり得ないのです。

永遠の出発は、自分が死んで始まるのではありません。永遠の出発は、自分がみ旨を知った瞬間から続くのです。ここに一日のうちの瞬間でも、時間の関係において飛躍があったり、どん底が生じれば、永遠は中断されるのです。

それゆえ、我々が生涯の路程を中心として、信仰の道を行くのに、今年行けなければ来年に行き、来年に行けなければ再来年に行き、十代に行けなければ二十代に行き、二十代に行けなければ三十代に行き、三十代に行けなければ四十代に行き、四十代に行けなければ五十代に行きと、このようにしてはいけません。一生をこのように生きていくなら、彼は、一生をみ旨と一つになった一日の生活をもってみることができずに死ぬでしょう。もしそのように生きたなら、その人は天国に行けません。

いくら自分が暮らしているその国が良いといっても、一日の勝利基準をもてなければ天国に行くことができず、一年の勝利基準をもてなければ永遠の世界に入ることができないのです。それゆえ、信仰者は永遠を夢見ていくことも重要でしょうが、それより重要なことは、現実においてどのように悪を清算して善の旗手になるかということです。このような問題が何よりも重要です。

このような点から見るとき、アダムの瞬間的な失敗が億千万年の恨を残してきたのです。アダム家庭で、カイン・アベルが父母の恨を解いて、兄弟の壁を崩して、一つの家庭の起源をつくらなければなりませんでした。このように、復帰摂理の代表として立てられたアベルが死んだのも、瞬間的な事件でした。

百二十年かかって箱舟を造ったノアの苦労の路程でも、神様が「願いを成就する日が来たので、船に乗れ」と言われた命令も、一瞬に下されました。この命令に同調した人は、永遠の神様の祝福を受けることができましたが、そうできなかった人は、永遠の審判圏内に埋葬されたというのです。

アブラハムも同様です。神様が「あなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のする。……もろももの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」（創世記二二・一七、一八）と祝福されましたが、その祝福の命令もカチカチという一瞬に下されたというのです。アブラハムが供え物をした時間も、何十年間供え物をしたのではなく、たった一日でした。祭物を裂いて供え物をする時間は、一時間未満でしたが、ここで歴史的

なすべての生死禍福の起源が組まれてくるのです。

今日、信仰者たちが恐れるべきことは、終わりの日に訪ねてくる審判ではなく、一日一日の生活圏内で訪ねてくる時間です。それを、どのようにみ旨と一致させるか、どのようにみ旨と交差路を形成していくかという問題です。（三七―二一九）

五　幼児期と三段階秩序

アダム・エバを神様が造ったのなら、それをどのように造ったのでしょうか。土でこねて造ったなら、どのような土で造ったのでしょうか。どこで出発したのでしょうか。どこから始まったのでしょうか。アダム・エバを、成人になった人として造ったとは考えられません。

赤ん坊から造りました。神様が、赤ん坊をはらんだ母が、抱いて育てるのと同様な、そのような過程を経て造ったという論理を立てなくては、このすべての三段階の秩序を通じた存在の形成というものは、説明する道理がありません。それで、アダム・エバに幼児期があったというのです。その次に、成人期がありました。これは天理です。その次に完成期がありました。

幼児期とは、どのよう期間だったのでしょうか。無形の神様が、無形の世界から有形の過程を経てくることができる、赤ん坊の存在を抱いて育てたという論理から始めなければなりません。（二二五―一九八）

六　我々の人生の道

我々が暮らしている社会、国家、世界は、自分の意志に符合する環境になっていないので、すべての苦衷が生じており、善悪の分岐点が重なり合っています。百人なら百人、各々自分なりの一日の生活を営むために環境と闘争しており、その環境を押して進んでいます。それゆえ、朝に計画した一日の仕事に対して誰も自信をもつことができないということを、我々は一日の生活の中でよく体験します。その上に、その環境の範囲が大きければ大きいほど、自身の一日の生活を勝利として結果づけるためには、それに比例した決意と推進力をもたなければなりません。そうでなくては、その日が勝利の日になり得ないのです。そのような一日一日が加わってひと月になり、ひと月ひと月が加わって一年になります。

そのひと月も、我々が計画したとおりに暮らせる環境になっていません。我々がひと月の勝利をもたらすためには、そのひと月の環境に備わった複雑なすべての事情、すべての与件を打破することができる推進力と決意がなければなりません。それがなくては、ひと月の計画を勝利したものとして終えることができないのです。

一年を押し進めるためには、三百六十日を克服することができる闘志力、あるいは推進力を備えなければなりません。そうでなくては、一年を勝利で飾ることはできません。このような一年に十年が加わって、二十年、あるいは三十年が加わった日々を過ごしているのが、我々の人生の道です。（三一―三〇）

今日、この地に暮らしている人間たちは、時間性を外れることができません。人類歴史について見ても同様です。個人、家庭、氏族、

民族、国家、世界もそのような時間圏内で動いていっています。

人が生きていく所には、必ず達成すべき目的があります。その目的を中心として、十年、二十年、三十年、七十年、一生の間行くべきなのです。目的が大きければ大きいほど、内的にもっと強く誓わなければなりません。そうでなくては、その目的に到達することはできません。時間という過程を通じて、その目的を凌駕し得る内的な決意を続けない限り、その目的を達成することはできないのです。（三一――一四九）

七　我々が訪ねるべき本郷

皆さんは、霊界の事実を知らないかもしれませんが、先生は神様の特別な恵沢を受けて、未知の世界についてよく知っています。

その世界の根本を掘り返してみると、原則は簡単でした。その世界は、神様の天地原則の世界であるために、生きた人だけが行く所です。そのような内容で形成された世界が、理想天国です。

そこが、我々人間が訪ねるべき本郷です。今日、我々は堕落した人生として、本郷から追放された人間になったために、本郷の地に向かって帰るべき運命にあるのです。しかしそこへは、その人間自体としては入ることができないために、神様は、人間が入ることができる道を歴史過程に設定せざるを得ません。

それで、その民族の文化背景、風習、あるいは伝統が異なることによって、数多くの宗教を立てて収拾していきました。そのように収拾するための訓練場として立てたのが宗教です。ですから宗教は、本郷の地に入ることができる資格者を錬磨させる訓練場です。東西四方の文化背景によって、高い所に前進することができる一つの統一された宗教世界を率いてきています。

そのような本郷の所へ導くべき宗教であるために、宗教は何を教えているのでしょうか。「ため」に生きなさいということを教えていると言わざるを得ません。そして、高次的な宗教であるほど、「ため」に生きるべきだという原則を強調しなければならず、「温柔謙遜」であれと言うのです。数多くの人を高め、彼らのためにする立場に立てというのです。「犠牲奉仕せよ」と教えるのです。なぜでしょうか。その国の法度に合う訓練をしなければならないからです。（七八――一七）

八　人生最高の行くべき道

人生の行くべき道とはどのようなものでしょうか。神様の愛を占領することが、人生の行くべき道です。神様の愛を占領することが、人生の行くべき最高の終着点です。この道は、男も女もみな行かなければなりません。すべての人が行くべきなのです。

人生の行くべき道は、無限であられる愛の神様を探すことです。十回でも百回でも、死の峠を経てでも、死んでも絶えず探していくべき、神様の愛を探すのが人生の最高の行くべき道です。

欲望の終わりとはどこでしょうか。神様の愛を占領する所です。神様を占領したといっても、その中にもっと貴い愛を占領できなければ、神様は自分の神様ではありません。それゆえ、神様の愛を占領しなければなりません。愛だけ占領すれば、神様はいらっしゃらなくても大丈夫なのです。彼のものが私のものであり、私のものが彼のものになるとき、

初めて内外が一つになるのです。そのような国が、上下の等級のない理想の本国になるのです。

そのような場に横たわるようになれば、天下にある存在の中で、良く見えないものがなく、天下にいる存在の中で、自身のために存在しないものはないと感じるのです。そのようなものが神様の愛なので、今日人間が行くべき天上世界、すなわち天国は、愛で充満した所なのです。（三九―二一〇）

九　出生の基準と生涯の基準

一)　過った出生の基準

今日、世の中の人は、自分自身は高貴な人だと言っている人でも、いくら博士だと言っている人でも、自分の出生が間違ったということを知りません。神様の怨讐であるサタンの愛と、生命と、血筋をもって生まれたということを知らないというのです。重要な問題です。

堕落によって人間は、サタンの愛により生まれたのです。サタンの愛がその父母にまでつながってきました。母の生命、父の生命にその血が流れていて、その血が今日、自分につながってきたというのです。そのような三種類の結実が、正に自分です。

ですから皆さんは、サタンに属したのです。いわば皆さんの血管に乗ってサタンの血が流れているのす。したがって、自動的にサタンは自分の理想的な結実を結んだのであり、神様は、そのような男女を本然の純粋な完成人間として救おうとされるのです。

皆さんは、サタンの愛から出発したのです。皆さんは、サタンの血統をもって生まれたのです。それゆえ、出発が過ってしまいました。

出発が過ったので、再び帰らなければなりません。帰るには帰るのですが、どこに帰るのでしょうか。原点に帰らなければなりません。偽りの父母として始まったので、帰って「真の父母」として再び始めなければなりません。ですから、どれほど深刻ですか。自分が、神様の愛と、神様の生命と、神様の血筋を再び引き継がなければなりません。

それで、出発するとき、血統転換式をします。それを、自分の生命よりもっと信じなければならないのです。統一教会の一つの礼式だといって、ただ一般の宗教儀式として考えてはいけないのです。これは、死んだ立場から回生させる注射の薬と同じです。解毒注射です。

我々の先祖が過ったのです。これのために、歴史を経ながら多くの人々が犠牲になりました。これを知る私たちは、再びその道を行くことはできません。絶対行けないのです。堕落天地に不倫の愛を残すことによって、歴史を通して受けたその代価が、とてつもなく大きかったのです。個人、家庭、社会、国家、世界に及ぼした影響が、とてつもなく大きかったというのです。（二一六―一〇九）

二)　生涯の基準

ここで、生涯とは、永遠の生涯を言います。地上界だけを言うのではありません。それは生きている永遠の暮らしです。

「私」という存在は、神様の愛の対象として造られました。絶対的であり、主体的な神様の対象が、正に自分です。神様の愛の相対が私というものです。神様が自分より、もっと貴く考えるものが、真の愛の概念です。神様は、絶対的であり、永遠であられる生命の

中心です。そして神様の理想は、もっと永遠なものですが、その理想の中心が、正に真の愛です。その愛の相対が自分です。

愛の属性は、主体と対象が一つにすることです。それは、国家を一つにします。それゆえ、どんな場でも同参することができ、どこにでもついていくことができます。全財産を、みな相続することができます。神様の心情までも、みな相続するのです。先生が悲惨な過程を経てこれを発見することによって、その基盤の上に立つようになりました。これは何とも換えられないし、崇高で高貴なものなのです。驚くべき恩賜です。

それゆえ、神様と同じ立場に立つのです。永遠の真の愛の場に同参するのです。あの世界は、制限された地球星とは次元が違います。制限された所では自由に動くことができませんが、あの世界は次元が高い世界であるために、何でもできる所です。時間を飛び越えられるのです。愛を中心として何でも願いさえすば、いつでもどこでも、みな得ることができるのです。

我々は元来、永生体として造られました。真の愛を中心とした対象体である自分は、永遠の生命体なのです。だから、霊界に行けば自由なのです。

それで、生涯の基準として、第一が善悪の基準です。皆さんは、それを知るべきです。善悪の基準が第一であり、第二が本然の出発点であり、三番目は永生です。（二一六―一一五）

第二節　人間の位格

一　神様が人間を創造した目的

神様は、人間をなぜ造ったのでしょうか。第一は、神様自身が父母の立場に立つためです。その父母は、霊界でも無形です。形がありません。それで、形をもった人間の父母になるためには、形をもたなければなりません。そうでなければ、中心になり得ないのです。

二番目は何かというと、垂直線は一点にとどまります。面積がありません。すなわち、霊界では繁殖をすることができないのです。垂直の次元で、それを横的に展開して三六〇度の球体になってこそ、多くの空間が生じるようになります。

三番目は、愛の相対圏の永遠性を維持するためです。神様の相対になるのは、アダムとエバだけではないということです。アダム・エバが相対の位置に立つのと同時に、その子女たちも相対の位置に立つようになるのです。ですから、神様の相対の位置を永続的に保存するため、人間を創造したのです。

アダムもエバも神様をお父さんと呼びます。では、その子女たちは神様を、おじさんと呼びますか、おじいさんと呼びますか。お父さんと呼びます。

相対というのは、平等なものです。神様の愛を横的に繁殖し、その愛の価値を完成しなければなりません。完成した愛の価値は、一つです。平等なのです。

そこには、三つの理由があります。一番目は、形が必要なのです。形態が必要です。父母としての形が必要です。アダムの父のような顔で、霊的にその形態を得るということです。

二番目は、天国の国民の生産地が必要です。ですから、夫婦は生産工場です。生産工場なら、大量生産するのがいいでしょうか、少量生産するのがいいでしょうか。大量生産するのがいいのです。

生産工場が自動化され明確に大量生産するようになれば、天国はいっぱいになるのです。

ですから、女性は多くの赤ん坊を産むようになっています。（二二二―三三八）

二　人間は、霊界と肉界の媒介体

本来、神様の創造過程を考えてみれば、神様は万物を造って、人間を造ったのです。神様を中心としてすべてが始まりました。人を造ったことによって、神様と人間と万物が平行的な立場で統一を見るのを願われました。これが神様の創造のみ旨です。神様がいて、この被造世界があり、その中に人がいます。このような中間的立場に立ったのが人間であるために、人間は霊界と肉界を接触させることができる媒介体であるです。（六七―一四三）

三　体と心、そして霊人体

今日、我々が暮らしているこの被造世界には軸があります。その軸にも、二つのものがあります。見える軸と見えない軸、二重構造になっています。

一つの主体を中心として回るのに、その主体自身も回ります。体と心が授け受ければ、回るようになるのと同じことです。

すべての存在物は、このような原則によって存在します。同様に、今日堕落した人間世界からの復帰の道も、軸を直さなければいけません。

人間において、体の中心とは何でしょうか?　心です。心を中心として、体がつながっているために、体は霊を中心として回るのです。心の命令に体が動きます。心が「東に行け」と言えば、東に行かなければならず、「西に行け」と言えば、西に行かなければなりません。体は勝手にできません。（一三六―一四）

人間には、体と心があり、心の上に霊があり、霊の上に神様がいらっしゃいます。それゆえ人間は、神様と完全に一つになってこそ、完全な人になるのです。人は、たとえ小さな一つの個体であっても、全体の歴史に代わった存在であり、未来のすべての因縁に代わる存在であるために、天宙的な価値をもっています。

人は、自分の生涯の因縁を訪ねていくのにおいて、自分の心を前に侍っていかなければなりません。これが天倫です。心の命令に服従しない者は、天がたたきます。今まで天は、歴史路程で人間に良心のとおりに生き、物質的な悪の条件に引っ掛かるなと言いました。

では、人間の良心は、天倫に一〇〇パーセント似たのでしょうか。そのようになっておらず、数多くの障壁で遮られているのです。天国の関門の前に、曲折の門が横たわるようになるというのです。これがキリスト教で言われる審判の関門です。今日の思潮は、恐怖と不安と混乱の時期を迎えています。中心をつかもうとしてもつかむことのできない時代ということです。

今日、我々は、物質を多くもっていてもいけません。なぜなら、神様が人を造るとき、体と霊人体を造りましたが、霊が中心であるからです。（四―二六八）

四　完全作動と共鳴

共鳴とは、振動するときの周波数が同じことをいいます。

人間は、永遠に生きることができる我々の内的人と、地上天国に暮らすことができる外的人が、愛を中心として共鳴することができなければなりません。共鳴するときは、音波が同じであってこそつづられるのです。そうしながら回ります。回るには、そのまま回るのではなく、核を中心として回るのです。

同様です。霊人体と肉身が神様の愛を中心として調和するようになるときは、霊的細胞、肉的細胞が完全に作動するのです。

それゆえ、目が完全作動するときは、目を開くようになれば、天上天下、地上天下がみな見えるのです。完全作動をするためです。マイクもそうではないですか。性能が良ければ、一〇〇パーセント響きわたります。

同様に、愛の力で肉身と霊人体が一致して、爆発し得る境地になれば、天上世界、地上世界が、神様がすることなく、みな共鳴するようになるのです。（一七一―一〇三）

人間を見ると、心と体が二重構造になっています。男もそうであり、女もそうです。男も女も心の人と体の人から成っています。それで、男女を合わせれば四人だと言うことができます。分けておけば四人ですが、これがどのように一つになるでしょうか。

神様は、なぜこのように四人に造られたでしょうか。神様の真の愛を中心としては、完全に一つになるのです。真の愛で完全に一つになるのです。

皆さんには、霊的人、統一教会で言う霊人体があり、肉身があります。霊人体は我々の目に見えませんが、存在するのです。

では、霊人体と肉身はいつ一つになるのでしょうか。これが問題です。これは、音叉と同じです。音叉の一つを鳴らせば、他の側も振動数が同じように共鳴するのと同じ道理で、神様の愛の作用が我々の心に来れば、自動的に体に反応するということです。

それゆえ、体と心を一〇〇パーセント共鳴させ得る圏内に追い込むことができるのは、神様の知恵でもなく、能力でもなく、力でもなく、ただ愛です。（一三八―二五四）

第三節　人間の生命の本質

一　霊的なものが人間の本質

ある一つの核心があれば、それを中心としても相対的な存在が必ずあります。陽子を中心として電子が回っているのと同じように、神様と人間との関係もこれと同じです。電子のような我々人間の心が、陽子のような神様の心の核心と関係を結んで作用しているため、神様が人間に対して復帰摂理をなさることができるのです。

我々が真理のみ言を探せば、神様の生命が躍動すること、神様の愛が和動するのを感じることができます。このように、真理の道を経て、神様の生命と愛を探していくのが、価値あることです。

パウロが言ったのと同様に、世の中の光になることができる自分になったのも、中にある神様の愛のためです。

真理は、永遠不変です。では、我々はこの悪なる世の中で、どのように善悪を分別しながら真理を探していくべきなのでしょうか。自分を中心とした心を捨てて、いつも低い位置に下りなければなりません。聖書でも、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」（マタイ二三・一二）と言いました。

人間の本質は、霊的なものです。それゆえ、あの世に行けば、そのような人間の本質が人のためになるようになっていることを、もっと実感するようになるでしょう。ところで人間は、どうして自分だけのためにという心で万事に臨んでいるのでしょうか。

これは、すべての人間が、天倫に背いた天使、言い換えれば、サタンと血統的な因縁をもっているためです。（二―一三七）

今我々は、霊的な御飯を食べなければなりません。皆さんは、肉的な御飯と霊的な御飯のうち、どちらがおいしくなければならないでしょうか。自分が生き残って神様の側に立つためには、霊的な御飯の味が、肉的な御飯の味よりももっと良くなければなりません。霊的な力を中心として暮らす生活の味が、肉的な力をもって暮らす生活の味よりも、もっとおいしくなければならないのです。（一三一―二一一）

二　万物の霊長であるという意味

万物の霊長という言葉は、何を意味しているのでしょうか。万物の霊長とは誰でしょうか。「人だ」と言っていますが、万物の根本となった霊長は神様です。皆さんは、霊があるということが分かるでしょう。人間には、霊があります。人間は、その霊の中の長であるために、結局神様と直結させて霊長だと言うのです。

万物の霊長だというのは、人間自体だけではなり得ません。人間も被造物であるのに、どのように万物の霊長になるかということです。被造物とは、相対的な結果体です。被造物だけでは、原因に通じることができず、原因を占領することができないのです。被造物は、原因に占領されるようになっています。

皆さんは、結果的存在であることは間違いありません。霊長と言えば、長は霊の中で中心であるという言葉です。この言葉は、本来、神様と人間が一つになった関係について言う言葉です。

それゆえ、霊長は、神様と通じるのです。しかし、人間が万物の霊長だといって、すべてが霊長ではありません。霊長になり得る人は、別にいます。その霊長になり得るクラブに加入できる資格者は、少なくとも個人のために生きる人ではありません。全体のために生きる人です。神様は、そのような人を中心として願いを成そうとされるのです。そうなれば、誰の天国になるのでしょうか。神様の天国ではなく、その人の天国になるのです。（三二―一三六）

人は、どのようにすべきでしょうか。永生しなければなりません。悪なる世の中で、八十年ほど暮らしますが、犬が死ぬことや、人が死ぬことには、違いはないと考えるかもしれませんが、それは違います。人は霊長であるために違います。

万物の霊長になり得るのは、何のためでしょうか。年を取らない心のためにそうだというのです。万物は、みな変わり得ます。純金も変わります。風化作用により、減少します。ですが、心だけはそうではありません。変わらないところにおいて、最高の権威をもっています。（一五九―二七八）

万物の霊長だということは、何を中心として言うのでしょうか。お金を中心として、知識を中心として、権力を中心として言う言葉

ではありません。それは、神様の最高の愛を中心として言うことです。（二一〇―三〇九）

三　内の人と外の人

人間の本然の因縁とは何でしょうか。神様の絶対的な愛の圏内で、互いに完成した愛を楽しむことができ、褒めたたえることと尊敬の価値を現すことが、本然の因縁です。そうする中で、天の因縁と地の因縁が、すっかり和合して、一つに調和して現れたのが人間です。それゆえ、見えない心があり、見える体があるのです。

本来の因縁をもって生まれたなら、体と心が分かれて一つになるのです。

皆さんも、内の人と外の人が互いに闘っています。この闘いは、いつ終わるでしょうか。約十年ほど過ぎれば終わるでしょうか、死んでも終わらないのでしょうか。神様が人間をそのように造ったなら、その神様は一つの目的をもった神様ではなく、二つの目的をもった神様です。そのような神様は、混沌とした神様だというのです。

宇宙のすべての法則は、前後左右が行き違いなく秩序整然と一つのはっきりとした目的があります。これを見るとき、人は本来このように創造されたのではないのです。それで、体をほうり投げて、本然の心を探さなければなりません。（四四―一九四）

我々人間の肉身と霊人体の中で、より重要なものとは何でしょうか。肉でなく霊なのです。肉は七十、八十年の時間圏、限界圏内で生きては去ってしまいますが、霊は時間圏を超越し、空間まで超越する権限をもっています。したがって、歴史的な責任を悟って、責任を果たすことが人間の本務です。

皆さんがいくら肉身を中心として豊かに暮らしても、結局は死ぬようになるのです。どうせ肉身は死ぬようになっているのです。そのようになっているのです。では、霊的な基準と肉的な基準のうちで、どちらがより重要なものでしょうか。我々は、肉的な基準を中心として生きていくのではありません。肉は霊のために、霊は肉のために存在するのです。皆さんは、世の中の人たちが生きていくのと同じ立場にすがってはいけません。

皆さんは、肉を救ったという立場で、霊肉が合わさった実体を備えて、より甲斐のある立場から出発しなければなりません。（二〇―三二六）

四　地上生活の目的は霊肉完成

み旨とは何でしょうか。結局、人間の霊肉を完成させることです。自分自身を中心として、過去は霊的であり、今日は肉的です。過去は霊的であり、現在は肉的であるということです。二つの世界の侵犯を受けました。現在の立場がサタン世界だから、サタン世界に勝った肉になるべきであり、過去のサタン世界に勝った、霊的基盤を築かなければならないのです。過去と現在に勝利すれば、霊肉をもつことができる基準が、未来に対する祝福に広がるのです。（七三―九六）

我々が知るべきことは、霊界が主体ではなく、肉界が主体だということです。完成させるのには、霊界が主体でなく、肉界が主体です。肉界の完成は、霊界と肉界の完成なのです。ですから、肉身生活が貴いというのです。（九一―一七八）

第四節　肉身生活の高貴性

一　肉身生活は霊界生活のための準備

神様が、万物と人間を造られ、良しとされたのは、互いに闘うなということです。体を打って心の前に屈服させることが、宗教の教えです。悪から善に越えられなければいけません。

自分の体が完全に勝利したということは、サタンまでも完全にその根を抜いて征服したということです。天国へは、サタンを征服してこそ行くことができます。サタンに勝つことは、肉身を脱いではできません。なぜなら、肉身が地で事故になったので、直すのも肉身を使って、地で直さなければならないのです。地上ですべきことをみなできなければ、永遠に地獄に行きます。

それゆえ、地で勝利して天の側の善なる立場に立つようになれば、永遠に天国に行くのです。（六五―二九四）

この肉身世界は、短い期間です。長くありません。それを知るようになれば、寝る時間が惜しいのです。御飯を食べる時間が惜しいというのです。そうなると御飯を歩きながら食べ、寝るのも、歩きながら寝て、遊ぶのも、歩きながら遊ぶのです。そうであるほど、世界の誰も受けられない福を受けるのです。（八〇―二二六）

私がたとえ制限されたこの地で八十年くらいはいるといっても、我々の舞台は世界の祭壇です。それゆえ、ここにある万物は、世界の万物であり、自分の体は、世界人類の体であり、自分の心は、世界人類の心です。そのような心情は、神様と一つになっています。これが全部一つの祭壇です。（七五―一六六）

偶然に物事が起きるのではありません。準備というものは、たやすいものではありません。それゆえ、一生について見るときに、少年時代は青年時代のための準備です。壮年時代は、老年時代のために準備しているのであり、老年時代は、霊界に行く準備をするのです。一生は、大宇宙の人格を備えるために、一つの訓練過程を経ている修練期間です。準備期間であるというのです。（一四七―一八八）

我々は、この世に暮らしていますが、この世の中だけがあるのではなく、霊界があります。世の中と霊界は、二つの世界ではなく、一つの世界につながるべきです。

では、我々が行くべき所、我々が行って暮らすべき所とはどこでしょうか。もちろん、我々は肉身生活をしながらこの地にいますが、永遠の世界に向かって行っているのです。一般の人たちは、世の中に生まれ、青春時代を過ぎて、壮年時代を過ぎて、老年時代を経て、沈む日のように人生を終えます。しかし、霊界があるという事実を知る人たちは、一生というものがしばらくの間であり、死んだ次に迎えるべき世界が永遠だということを知り、準備するのです。ゆえに、一生の期間は、永遠の世界に入るための準備する期間です。

学生を例に挙げて言えば、一学年に単位を取るべき、学校で制定する単位の基準があるのです。その基準にどれくらい到達したかという対照によって、学校で認められる学生になるのです。

しかし、単位に達しなければ、学校が立てた価値基準から遠ざかるのです。それゆえ、ある標準を中心として、すべてを測定するようになります。

我々が肉身世界で暮らすのは、まるで学校で定めた単位基準に合わせようとして準備する期間と同じです。我々は、一生の間に積むべき実績を追求しているというのです。言い換えれば、責任を追及するある基準の前に、どれほど一致するかという、その基準値を中心として生涯路程を行っているのです。（一四〇―一二一）

皆さんは、すべてを自分のために消化してはいけません。神様のために、天地のために消化し、自分の国と自分の氏族と、自分の家庭と、自分の相対のために消化するということを考えるべきであって、自分のためにしてはいけないのです。

一生の間、自分を中心として暮らせば、全部が心配です。しかしながら、「ため」に暮らすようになれば、すべてが自分の友達になるのです。絶えず「ため」にしてみれば、自分は真空状態になるために、真が訪ねて入ってきます。

我々統一教会の誇りとは何でしょうか。第一が真の愛であり、第二が　「真の父母」です。これは、統一教会にだけある言葉です。辞書にもありません。第三が真の子女であり、第四が真の氏族です。これが我々の四大目標です。（二〇三―一〇一）

二　肉身生活の貴重性

自分が解放されれば、神様が解放されます。家庭が解放されれば、天国の家庭がそうなり、この地上がそうなら、天国がそうなるのです。それゆえ、聖書に「あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」（マタイ一六・一九）とあるのです。このような二重構造の一体性で解明されます。

皆さんは、肉身を使ったこの期間が、どれほど貴いかを知るべきです。神様も復活させることができ、宇宙も復活させることができ、すべての天下を統一させることができるのは、肉身を使っているこの期間しかありません。

神様と万物を合わせても、この肉身世界と換えることができません。なぜでしょうか。神様とこの宇宙を合わせても、肉身をもった人間がいなければ、完成されないからです。人間の体がどれほど貴いかを知るべきです。我々の肉身は、宇宙とも換えることができません。聖書の「全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」（マタイ一六・二六）という言葉も、それで成立するのです。（九一―一九一）

肉身生活は八十年ほどにしかならない短い生涯路程で、歴史的に絡んだすべての善の圏を収拾しなければならないのです。

この短い肉身生活に因縁を結ぶべき善の圏が膨大だということを知るこの心、良心は、どれほどせきたてるでしょうか。死ねばできないのです。生きている間に本郷の地を訪ねて、祖国の主権回復をすべきです。そのようにして天の主権者に侍り、その国で生きていってこそ、天上天国に行くのです。（一五五―二七）

霊界、無限の世界は永遠です。そのような世界に行くためには自分自体をどのように収拾すべきでしょうか。そんなことを考えてみましたか。肉身生活をする間に収拾しなければなりません。これを正すことができるのは、この時しかないのです。それを正すのは、絶

対自分のためにしては正す方法はありません。自分のためにして正す方法があるなら、統一教会の文先生が、今まで絶対苦労しなかったのです。（五九―五〇）

統一教会が提示する原理の道は、千年、万年過ぎても行くべきです。生きている間に行けなければ、億千万年の永遠の霊界に行ってからでも行かなければなりません。（一三五―二九七）

三　習慣性が重要である

今日、我々はサタン世界の習慣を捨てて、神様の新しい秩序を確立しようというのです。（二一三―一九）

皆さんは、キムチとコチュヂャン（注：とうがらしみそ）が好きでしょう？　（はい）。西洋人たちは、キムチとコチュヂャンが好きですか？　見ただけでも逃げるのです。（笑い）このごろも、優れているという輩のアメリカ研修を続けていますが、今回も二百三十名ほどが行きました。行って、ホテルでキムチを出しておいて食べるから、西洋人たちが、「ああ７　これは何のにおいだ。何かのにおいより、もっとひどい」と、こう言っては逃げていくのです。しかし、韓国の輩はどうですか？　「ああ７　蜜の味よりいい」と言って、舌なめずりをするのです。

習慣性を打破するということは、とても大変です。その言葉は、今まで皆さんがサタン世界で自分を中心とした習慣性をもって生きてきましたが、その習慣性が固着したものです。そのように固着してしまったその習慣性は、韓国人たちがキムチ、味噌、コチュヂャンを食べる習慣性よりももっとひどいのです。

これは歴史性をもっているのです。悪魔が出発したその日から、根が刺さった習慣性をもっているますが、これをどのように抜いてしまいますか。

穴を掘って根まで埋めようとしても、埋められないのです。深刻な問題です。天国に行くには、神様を中心とした習慣性もたなければなりません。（二一三―二〇）

四　肉身生活の標準

先生の生活は、神様のために生きる生活です。この世界のために生きる生活です。自分のために生きるという考えをしてはいけません。それで皆さんは、神様と「真の父母」と人類のためにしなければなりまん。

神様と「真の父母」と人類を結ぶためには、自分を中心として四位基台をつくるためには、真の愛がなければなりません。神様も真の愛を願い、「真の父母」も真の愛を願い、人類も真の愛を願います。真の愛を中心として、真なるこの宇宙を相続することができる人になければなりません。これをいつでも考えなければななりません。

それゆえ、今まで皆さんがどれほど天が願う生活と一致したかということを、比較しなければなりません。そして、人類を代表した自分になるべきです。父母を代表した自分になり、神様を代表した自分になるべきです。そのように生きた人は、霊界に行っても、地上のどこへ行っても、境界線がないのです。

自分が千名の友達と共に食物を食べたい場合、そのような環境も、愛を通じた世界でだ

け可能なのです。神様が創造主の能力を行使するとき、その愛を中心として造ったのです。

霊界の世界では、真の愛がつながれば、すべてを調節することができ、すべてを創造することができます。それが我々の理想郷です。真の愛と関係を結ばなければ、みな不可能なことなのです。（一四七―一一五）

五　肉身を使って記録される

皆さんの生涯の中で、もし三分の二以上が口で言えない悲惨な生活をしたとするなら、その三分の二の生活をすべて取り除いてしまうことができますか?　取り除くことができません。必ずついて回るのす。（三四―一三九）

蕩減、なぜ必要ですか。復帰するためです。復帰とは、再創造でもあります。それゆえ、皆さんは価値のある生涯を残さなければなりません。ある人は、「ああ、年を取ったらイエス様を信じて、死んだら天国に行こう」と、このように言っています。しかし、年を取れば、何かを正すことは難しいのです。

それゆえ、若い人でなければならないのです。それで、二十歳に入ってくるより、十五歳に入ってくるのが良く、十五歳のときよりも、赤ん坊のときから知って大きくなったというのが、もっと価値があるのです。

皆さんの中に、水がいっぱいになっていれば、それは清い水ですか、泥水ですか。そこに砂粒が混じっているし、小石が混じっています。大雨が過ぎたのちに、川辺にありとあらゆる汚いものが引っ掛かっているのと同じで、皆さんの中にもありとあらゆる汚いものが混じっているのです。

ですから、振り回して、みな排泄しなければなりません。濾過装置を経なければならないのです。したがって自分があってはいけないのです。自分があれば、引っ掛かります。水自体に砂粒のように汚い　塊　が混じっていれば、流れることもできず、引っ掛かるようになっています。

霊界に行くようになれば、そのような装置、レントゲン写真のようなものに照らされるだろうと考えてみませんでしたか。神様も、そのような濾過装置を経た人たちを必要とします。（九七―六〇）

六　地での暮らしがあまりにも重要である

皆さんは、霊界に行って、保護官生活をしなければなりません。何千年も待たなければならないのです。

皆さんの家庭の基準がみな違います。それで、行くのにも、みな自分の級に合う所に行って、長い間とどまるのです。では、皆さんの先祖たちが、息子、娘たちが、「なぜそうしたの?　なぜ、そのようにうまくできなかったの?　それは何?」と言いながら讒訴します。皆さんは、そこに該当するほどの長い時間、そこにとどまらなければなりません。そのように易しいことではありません。それで、地ですべきなのす。先生が「しなさい」と言うことをみなしなければなりません。

ボルトがあれば、これに合うナットを作って満たさなければなりません。ナットが合ってこそ、満たされるのです。分かりますか。それが合わなければいけません。

この地上にいる生活がどれほど重要でしょうか。一度しかありません。瞬間ですが、一度しかありません。地上生活を永生に例えれ

ば、これは一点にすぎません。あまりにも短い瞬間です。これは重要ではありません。肉身生活を越えて、霊界のために準備をしなければならないのです。

いつもそのような主流思想をもって、センターに立って一切を調節し、一切を征服することができなければなりません。そうでなければ、個性完成をなすことができません。（二〇七―九九）

七　肉身を使って責任分担遂行

皆さんは暮らしながら、神様を思い、「真の父母」を思わなければいけません。そうすることで、愛によって心身が円満で、安全な、満足な圏内に暮らすようになるのです。

そのような生活をした人は、霊界に行けば、そのままになるのです。地上には内面的に拡大した生活がありますが、内面的に拡大したその基準は、霊界に行けば表面化されるのです。愛が内面化されているために、神様と人類が一つの体の細胞と同じです。自分自身が、その細胞のうちの一つになる世界が霊界です。そのような境地に入れば、神様が間違いなく自分の心の中に入ってくるのです。「神様7」と呼べば、自分の心の中で「誰が私を呼ぶのか。何だ?」と言うのです。すなわち、神様と共に暮らしていく世界です。

責任分担は、それほど重要なのです。それで先生が責任分担という原則を立てたのです。皆さんが毎朝鏡を見るとき、男として女として生まれて、責任分担をどのように果たすかを考えなければなりません。それは深刻な問題です。五官が、責任分担を完成した愛に酔っていると思うのです。感覚のすべては、愛の実体圏に立つためのものです。（二一八―一二八）

責任分担を遂行するには、皆さんはどのようにしなければならないでしょうか。責任分担を果たすことができる人になるためには、どのようにすべきでしょうか。サタンの情、サタンの血筋を受けて、生まれたすべてを否定する立場に立つべきです。（一三九―二五六）

人間が霊界に行けば、どのようになるでしょうか。神様の体になります。アダムは、神様の体になるのです。コリント人への第一の手紙に、「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」（三・一六）と記録されているのと同様に、神様が臨在し得る聖殿、家です。

では、神様とどのように似るのでしょうか。責任分担完成段階に至って、神様が臨んで一体化がなされるのです。（一三〇―二二）

第五節　祝福と永生

一　永生問題を知るべき理由

なぜ今、世の中の家庭が壊れていっているでしょうか。また、お母さん、お父さん、子女が、怨讐になるでしょうか。真の愛がないためです。

一番重要なものは永生です。しかし、霊界があるか、ないかということを知らずにいます。

間違いなく永生するということを知るようになれば、他の人が「罪を犯せ」と言っても犯さないのです。「自分のために生きろ」と言っても生きません。これを知らなければ、既成教会を信じても、何かの宗教を信じても、

絶対に天国に行けません。神様の理想世界に行けないのです。真の愛、生命を投入せずには、駄目なのです。（二〇五―二六一）

我々の教会が原理で武装しておけば、永生問題が確実になります。この永生問題とつながらなければ、社会革命も不可能です。現在の立場で暮らしていることよりも、もっと疲弊して没落した環境に陥るなら、誰もがその場に行かないのです。

しかし、永生問題、永遠の生命の問題となると、環境的与件をすべて克服することができるのです。宗教は、それで偉大なのです。永生問題が懸かっているのです。永生の概念だけしっかりと立てておけばできます。

今まで宗教は、習慣性で結ばれた文化背景を消化できませんでした。越えられませんでした。なぜそうでしたか。永生という概念をつくっておけなかったからです。

キリスト教は、環境が変われば変わるほど、なぜ揺らぐのでしょうか。永生という概念がないからです。永生問題に自信がないのです。生命を差し出して、環境を越えていくことができるかという問題について見るとき、皆そこに所属して、四方を見回しながら現在の生活に落ちていっているのです。

その人たちに永生の概念を入れなければ、中間に落ちるのです。では、永生の概念を入れるのは何でしょうか。人です。これは、統一教会だけが完全に入れることができるのです。

信仰の道は肉身生活の準備ではなく、永遠の世界の生活のための準備です。このような信念さえもつようになれば、それはほっておいてもいいのです。人は、四十を越え、五十を越え、死ぬ日が近づくと、永生に対し、深刻になるのです。年を取るほどに、だんだん深刻になるのです。

愛というものは、年を取るほど希薄になりますが、永生の概念を入れれば、年を取るほど、だんだん深刻になるのです。それゆえ、宗教理念だけが、これから世界を料理することができるのです。環境が頻繁に変わっても、悲喜劇がぶつかってこようとも、永生の概念さえ徹底すれば問題にならないのです。

それゆえ、問題は、永生という概念をどのように入れるかということです。

神様はアダム・エバを、愛の対象として造りました。それは間違いありません。そのために、愛の対象となって生きるべきなのです。それを言葉だけでなく、実感しなければなりません。また、体恤しなければなりません。

真の愛の力が偉大だということを知れば、「行くな」と言っても、行くようになっています。

それゆえ、永生の概念だけ入れれば、みな終わるのです。これを入れるにも、理論的に一致し得るとき、心にどかんと響き、体まで一番近い級で一つになり得る時が、青少年期だというのです。

そして、十五歳以前は、堕落前の本性基準を一〇〇パーセント活用し得る時です。十五歳以前は、アダム・エバが堕落する以前だから、本性基準が生きているのです。それゆえ、青少年の時に、神様を知らなければなりません。神様を知ることによって、自分と神様との不可避の関係を知るのです。その関係が不可避だということを分からせるためには、永生概念を入れなければならないのです。

これさえ入れれば、我々統一教会の二世たちに、「他の道を行け」と言っても行きません。それゆえ、世の中を早く救い、すべて天

国に連れていかなければなりません。それが自分の所有になるのす。その持っていったすべてで、あの世での等級が決定されるのです。ですから天国は、今完全に空いています。
（一九九二・四・一五）

二　永生の道

一)　一生と永生問題

皆さんは、どれくらい生きそうですか。全部「七十年、八十は生きるだろう」と、このように考えているでしょう。その前には死ぬと思いません。皆さんは、欲張りです。一生を生きるのに、八十歳に死ぬとか、百歳に死ぬだろうと信じるとしても、あす死ぬか、きょう死ぬか分からないのです。皆さんの考えには、「ああ、私は若いので、今後少なくとも四十年、五十年は生きる」と、そんな欲をみなもっているでしょう。それが神様に保障されましたか。皆さんは、できるだけ一年以内に死ぬものと思いなさいというのです。この短い時間にみな準備すべきです。このような観念をもって生きなければなりません。できるだけ短くつかむほど、幸福です。短くつかむほど、損害を見ないのです。その期間に真になるように、準備するその内容が、自分の永遠の生命の家を建てるのです。

では、その短い期間に、神様を愛してみましたか。神様と一つになって愛したいのに、愛することができないのです。神様は、「愛せよ」と言われるのです。そのように生きて死ねば、それが永遠の生命の主体になるのです。

皆さんが、二年後に死ぬと思うならば、どれほど深刻ですか。共同墓地にも、葬式をする所にも行ってみるのです。これは、信仰生活に絶対必要です。それゆえ、「生きよう」と言う人たちは死ぬのであり、「死のう」と言う人は生きるのです。その短い期間にみ旨のため死のうと、天のため死のうと思えば、永遠に生きるのです。同様な道理です。独身のときに死ぬと思って、愛する妻を迎えるようになれば、どれほど有り難く思うでしょうか。結婚できずに死んだ男が、復活して結婚することができる日をもつようになれば、どれほど喜ぶでしょうか。

さあ、皆さんは、何歳まで生きて逝きますか。神様の命令によって、すぐに死ぬ立場に進むならどうしますか。天が自分を褒めることができる何かを残すべきです。そうなれば寝る時間が惜しく、食べる時間が惜しく思われます。心配しようにも、心配する間がないのです。

一生と永遠の問題で、一生を短くつかむほど価値があるのです。個人を愛し、家庭を愛し、氏族を愛することとは何でしょうか。全人類を愛するための教材なのです。彼らを愛するのは、全体を愛するための教材なのです。そして、時間と空間を超越したあの世界へ行って、すべての人を愛するための教材だというのです。（一〇二―一二二）

二)　人間は永遠の生命を追求

永遠の生命の世界を追求するのが、信仰生活です。永遠な神様の愛を追求するのが、信仰です。永遠の生命とともに永遠の愛と一致するために、神様の喜びを自分の喜びとして感じられる決着点を探していくのが、信仰の道です。それゆえ、信仰生活をする我々の個

体が、どれほど前進的愛と生命力をもって生きるかというのが、何よりも重要な問題です。

五官を通じて感じる感覚の一切が、生命、愛とどの程度の関係を結んで生きるかということによって、人間としてどれほど価値をもっているかという問題が左右されるのです。それゆえ我々は、我々自身が生命力と加重された愛の心で社会生活をしてきたかという問題を考えなければなりません。もし、そのような立場に立っていられないならば、それは停止したり、でなければ後退するのです。
（三二―一九）

三) 永生と宗教

人は永生するのです。宗教は、今まで地球星でなくならず、文化背景と風習が異なるすべての環境を経てきながら、世界的な版図を拡大させてきました。それは、人の一生が問題ではなく、永生すべきであるためです。

人が生きるには、宇宙と共に生活しなければなりません。一生は百年くらいの短い生涯ですが、生涯の限界でそのままなくなるのではありません。その限界線を克服すれば、限界としていた地球村を越え、超越した場で生存を続けることができるのです。

それゆえ、厳然と永生しますが、そうでないとしても今まで苦痛の中でうめいて生きてきた人類に同情し、助けるためには、仮想的な永生論であっても主張すべきであり、仮想的な神を中心とした理想国家形態を推理し抜かなければならないのです。そのような面でも、宗教が必要なのです。

それで、皆さんの永生問題とともに、神様の問題まで解決しなければなりません。このような諸般の問題がつながっているのです。
（一六二―二六四）

四) 永生しなければならない理由

神様は人をどのような存在として造ったのでしょうか。神様の絶対唯一の価値になり得る、愛の対象者として造りました。これは驚くべき事実です。このごろ、一人の人間の生命の価値がどれほどになりますか。何文にもなりません。本来、そのような無価値な人間ではありませんでした。宇宙とも換えることができない高貴な価値がありました。

今日、すべての文学世界について見ても、その骨子は愛です。人は、愛から出て、愛で生きて、死にます。しかし、そのままなくなるのではありません。主体であられる神様が、永遠、不変、唯一なので、その前に対象の愛の立場に立つようになるときは、永生するのです。永生という理論が、ここから出発するのです。生命から始まるのではありません。
（一四二―一四三）

真なる人とは、どんな人でしょうか。神様と内外で一つの体になって、子女の立場で完全に愛されることができる人が、真なる人です。そのような人が暮らしていく生活を、真の人生の道だというのです。

人は、誰彼を問わず最高を願っています。人間が最高の立場に行くようになれば、神様は自分のものです。また、自分は、神様のものです。そのようになれば、自分は神様の息子になり、神様自身にもなるので、宇宙も私になるのです。

神様が一番愛して、貴く考える物があるなら、それを一日、あるいは十年や百年ぐらい

共に過ごしたのちに、ほうり投げるように造りましたか、永遠に共にいるように造りましたか。永遠に共にいるように造りました。永遠に共にいるように造られたのです。人も同じです。

人は永生すべきです。なぜでしょうか。絶対者の神様が、絶対的な愛を中心として、喜ぶことができる対象であるためです。一日や二日、あるいは十年、百年喜んで、投げてしまうなら、それは愛ではありません。愛すれば愛するほど、共にいたがるのです。愛する妻が死んだので、その妻のハンカチを持って独身で生きた人もいませんか。インドのネルーのような方は、自分の妻が若くして死にましたが、その妻がバラを好んだといって、一生の間バラの花を身に着けて歩きながら暮らしたといいます。

それなら神様が、一人しかいないこの上なく貴い息子、娘を造るとき、百年ぐらい生きたのちに滅びるように造られたのでしょうか。違います。それゆえ、人は永生するのが原則です。永生するには、より強い力が排出され得る作用の基盤の上に立たなければなりません。それゆえ、愛の力は、時日が過ぎれば過ぎるほど、授け受けすれば授け受けするほど、消耗するのではなく、もっと強くなり、もっと大きくなるのです。そこでは、うれしかったらうれしいものとして終わるのではなく、その喜びが拡張して、無限の喜びとして発展し得るのです。そのような世界が、我々が理想とする国であり、神様がいらっしゃる天国です。

では皆さんは、永生を願いますか、願いませんか。漠然とですが、永生を願っています。自分に貴いものがあれば、避難する時それを持っていきますか、持っていきませんか。持っていきます。それを誇りたがりますか、誇りたがらないですか。誇りたがります。では、それを一日、二日誇ってやめますか。やめません。自分が死ぬようになれば、それを自分の後代に永遠に残したがるのです。

それは、神様も同様です。神様が永生される絶対者なら、その方が愛する対象も永生しなければなりません。それで人々は、昔から永生するのを願うのです。それゆえ、絶対者である神様は、永生の価値をもった愛する息子、娘を探さざるを得ないのです。（三九―四二）

我々人間は、神様が造られた傑作品として、神様に似ました。神様が永遠であられるので、我々も永遠の性稟をもたなければいけないために、我々の心は老けないのです。

それゆえ、人は永生すべきです。永生してこそ、その傑作品の存在価値をもつことができるのです。それで万物の霊長なのです。ここで、霊が出てくるのです。人は、永生しなければなりません。ですから、我々が八十年ほど生きて、死ねば終わりだとは考えられません。（一五九―二八一）

五) 永生のための人生

人は誰でも、各自自分なりに生活しています。「生活」するとは、一日一日暮らすことを言い、「生涯」は、一生の人生、一生を生きることを言います。さらには、宗教をもった人たちは、永生という言葉を使っています。永生というものは、一生ではなく、永遠の人生を生きることです。

生涯路程を永生にどのようにつなげるかということが重要ですが、それをすべきなのが、

生涯の責任です。また、永生ということは、一日一日の生活をつなげてこそ決定されるのです。皆さんの一生というものは、日々がつながったものです。

生涯の価値的な内容は、どこから決定されるのでしょうか。生涯をみな生きて、決定されるのではありません。一日一日の暮らしの日々が、決定するようになっています。それゆえ、うまく暮らさなければならないのです。

では、いったい、うまく暮らすこととはどういうことでしょうか。うまく暮らすのは、生涯のすべての路程を代表し得る日々を、意味深く送る生活です。きょうをうまく暮らしたというのは、自分の一生で誇らしくあり得る記憶の日です。「うまく暮らす」ようになれば、生涯路程において、必ず一番価値があるように暮らす日でしょう。価値があるように暮らした日があれば、生涯の中でその日は、忘れられない日になるでしょう。（一九七―一八六）

六)　永生論理とは

それで、永生の論理をどのように探しますか。神様は、知恵深いお方です。もし、神様が愛の理念を立てなかったら、神様は孤独単身です。喜怒哀楽を感じることができない神様だというのです。

絶対的なこの愛を失われた神様は、歴史始まって以来、誰も体験することができない、深刻で、あきれる、絶対的に悲惨な立場に立ったのです。誰も永遠に慰められないのです。本然の願いだった息子、娘を犠牲にして、御本人が夢見た希望の理想形態を再現させたものとして満足するのではなく、それを抱いて、千里、万里移動しながら、もっと輝くように装って、もっと美しく表示することができなければならないのです。万宇宙をそのように造ったのです。（二〇四―一〇一）

大気が一〇〇パーセント絶対低気圧圏になれば、高気圧圏が自動的に生じ、循環運動が起こるのです。神様は、知恵の王です。そのように自動的循環原理を通じて、永遠の回転が始まるために、永生論理が論理的に設定されるのです。

投入して、投入して、また投入するところから、永生の論理が繰り広げられるのです。「ため」にするところは、滅びません。（二〇四―一〇七）

神様が絶対的な愛のパートナーを求めるとすると、それは間違いなく人間です。それゆえ、「万物之衆、唯人最貴」という言葉が出てくるのです。これは何でしょうか。創造主の永遠な愛と一つになった愛のパートナーも、永生するという論理が生じるようになるのです。永生というのは、自動的な産物です。永生は、ここから繰り広げられるのです。愛の関係を中心として、永生論理をどのように立てるかという問題は、宗教において極めて貴重な話です。男に永生があり、女に永生があるのではありません。神様に永生があるのではありません。神様の愛に永生があるというのです。（二一八―二一一）

七)　一番重要な永生問題

今日、キリスト教徒たちは、「イエスを信じれば永生する」と言います。永生は、継続的な作用を続けていかなければなりません。人生の道を永遠に行こうとすれば、心臓の動

脈と静脈のような、循環器官が恒常的に動かなければならず、神経系が恒常的に動かなければならず、大脳、小脳のすべての作用が恒常的に動かなければならないのです。そうするには、莫大な消耗が繰り広げられます。（一二一―一七二）

寝床に就くとき、脱いでおいた靴を、次の日の朝に再び履く自信がありますか。いくら忙しいといっても、永生問題以上に重要なものは、この世にありません。それで、この世の中で永生問題を決定づけること以上に深刻なことはありません。（一〇―二四九）

八) 結局人間は永生に帰結すべし

新しい潮流の波である「真の父母」の愛の道理を植えて、堕落の恨を解消し、神様が君臨することができる真の愛の家庭を築いてこそ、天国に直行し得るようになるのです。

地上天国と天上天国のレールは同じでなければなりません。レールが同じでこそ貨車が走ることができるのと同様に、地上と天上の世界のレールが合わなければなりません。地上天国から天上天国をつなぐための道が、真の愛の道です。それゆえ、個人が行く道、家庭が行く道、全部つながらなければなりません。方向が一致しなければならないというのです。

それゆえ、一生の間、自分がするすべてのことは、全部真の愛のための実績として、自分の後ろに永遠に固着されるために、あの世に行くようになれば、一生の間残された功績にふさわしいその級に自然にとどまるのです。（二一一―二八八）

九) 信仰と永生問題

どのように永生するでしょうか。キリスト教徒たちは「イエス様を信じれば永生する、救われる」と言うが、とんでもないというのです。愛でだけ救いを受けるのです。神様の創造原則から見るとき、真なる人だけが神様の愛の同伴者であるために、真の愛をもてば永遠に暮らすことができるようになっています。その愛の圏内に入っていれば、霊界や地上に暮らすようになるときに、自分がどこで暮らすべきか分かるようになります。

大洋を通う大きな船が破損する危険が生じれば、その船の中に暮らしていたねずみたちは全部陸地に逃げるというのです。微々たるものにすぎない動物も、自分の生死圏をわきまえていくすべを知るのに、ましてや万物の霊長である人間はどうでしょうか。

なぜ、そうなったのでしょうか。堕落のためです。この堕落の仮面を悪魔の愛と、悪魔の生命と、悪魔の血筋をどのように解脱するでしょうか。この解脱という言葉は、抜け出すという意味です。完全に抜け出して、関係ない立場に、自主的な立場に立つという言葉です。（二一五―五三）

九十歳を超えた母親は、七十歳を超えた息子がどこかに出掛けるとき、「車に気をつけて、いってらっしゃい」と言います。九十の老年になるほど、そのように毎日のように繰り返しても、疲れません。それは、永遠に続いても疲れません。そのようにさせる原動力とは何でしょうか。愛です。堕落した世界の父母の愛もそうなのに、本然の世界である神様の愛に属していればどうでしょうか。

このようになるとき初めて、真なる神様の対象圏を確定づけることができます。神様の愛が永遠不変なことを知るようになるとき、我々人間の愛を中心として、永生の論理を妥当化させることができるのです。愛を中心として永生するのです。（一四三―二三〇）

十)　統一教会と永生

先生は、統一教会の教徒たちに、苦労をたくさんさせようとします。苦労させても逃げません。なぜ逃げていかないのでしょうか。永生があるために逃げないのです。統一教会で離れられないのは、永生があるためです。（二〇四―八二）

人々にはみな欲望があります。全部神様の息子、娘になろうとします。孫も嫌で、神様の婿も嫌で、神様の息子、娘になりたいのです。誰でも欲望を成就、完成する所は、家庭なのです。（二二一―二五）

十一)　永生に必要な観念

皆さん、「自分は永生する人だ。真の愛を実践する人だ」という姿勢で生きるべきです。ですから何をするのでしょうか。「永世のためだ」と「永世を訓練することだ」と、考えなさいというのです。皆さんには、永生と真の愛との観念は、いつも必要です。永遠に必要なのです。（二一六―一二七）

三　愛と永生

一)　愛と直結した永生

我々は、永生を願っています。永生を願うのに、変わらないものとは何でしょうか。愛です。他のものはみな変わります。環境的に変わるのです。では、愛はなぜ変わらないのでしょうか。

愛は、すべての生命力の中心であるために、変わらないのです。愛は理想的な与件の中心に位置を占めるためです。中心は、その周囲が全部なくなる前には、なくならないということです。愛は宇宙の中心になっているために、愛と一つになれば、神様が残っている限り残っているのです。（一五七―二六七）

二)　真の愛と永生

真の愛とは何でしょうか。結婚するとき、結婚相手が自分より良い人を願います。自分の息子、娘が、自分より良いことをを願わない父母はいません。それは誰に似たのでしょうか。神様に似たのです。神様が愛の相対が自分よりより良いのを願うのです。

絶対的な神様が我々人類の父なら、その父は絶対的に行わないで、その息子、娘にだけ、絶対的に行えと命令できるでしょうか。できません。神様が愛の相対を自分よりより良いのを願われる原則から見るときに、人間の価値が最大の価値です。愛は中心として神様より高い価値があるということです。

それゆえ、皆さんの心は、最高のものを願っているのです。それが不可能なことではありません。万人平等に可能なことです。堕落しなかったなら可能なのです。

高く貴い立場で、この宇宙を眺めて管理して主導するようになっているのであって、引かれて回り、服従するようになっていませんでした。皆さんの心がそうでしょう？　解放

された心です。誰の支配も受けたがりません。これは、万民が共通です。真の愛の位置にいれば、神様の位置、天国の宝座に自由に行くことができます。神様の友達になることができるのです。

愛のために人間を造ったというときは、神様が永遠で、絶対的であるがゆえに、人間自体も永生をもつというのです。これは、自然的な論理です。それゆえ、真の愛は永遠です。永生するには、その真の愛の圏内で暮らさなければなりません。（二一一―二七二）

真の愛により、永生が可能です。なぜでしょうか。創造の出発、動機、過程、目的などすべてのことが、愛を中心として完成するからです。過程を通じて結果が出てくるのです。

自分の体と心の完成は、真の愛によって、根本的に可能になっています。理想の結実を結ぶものは、愛しかありません。真の愛しかないのです。真の愛により、神様も永存しています。

永生は、愛によりつながるのです。それで、永生の環境を成すには、愛の環境を中心として生活しなければいけません。愛の実体圏をもつには、愛を中心として、実体的な体恤をしなければいけないのです。（二一八―一三四）

三) 絶対必要な真の愛

神様は霊界のどこにいらっしゃるでしょうか。絶対的な中心、愛の中心にいらっしゃいます。その愛は真の愛であり、直短距離を通じます。

皆さんは第一に、神様を知らなければならず、第二に、永生を知らなければならず、第三に、真の愛を知らなければなりません。これは投入です。一〇〇パーセント以上投入します。一〇〇パーセント以上投入するところに永生があります。真の愛をもたなくては永生がありません。永生しない人は、神様に会うことができません。（二〇五―一二九）

これから、世界をどのように収拾するのでしょうか。第一は利他主義、第二は真の愛、第三は永生に世界が収拾されるのです。

真の愛とは、何でしょうか。自分の生命以上の投入をしなければなりません。生命以上を投入しない所には、真の愛はありません。生命以上に投入するところから真の愛が成立します。「真の父母」が成立しなければ、永生はないのです。

なぜそうなのでしょうか。皆さんがサタンの血を、サタンの血統を受け継いで生まれたからです。それで、聖書には、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な第一のいましめである」（マタイ二二・三七、三八）とあります。この言葉の意味は何でしょうか。心を尽くして、思いを尽くせと言ったのは、生命まで懸けなさいということです。これが第一の戒めです。

第二の戒めは、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ二二・三九）ということです。「隣り人を自分を愛するように愛せよ」というのはどういうことでしょうか。生命を懸けて愛しなさいということです。生命を投入しなければいけません。なぜ、生命を懸けなければいけないのでしょうか。第一は、サタンを屈服させることができず、第二は、サタンの環境から抜け出すことができず、第三は、サタンの血統から抜け出すことができないからです。

サタンの環境からは抜け出すことができるとしても、サタンの血統は仕方がありません。しかし、真の愛は生命を超越するのです。

男女が生まれたのも、利他主義です。男が生まれたのも女のためです。これは、絶対的な真理です。永遠の真理です。なぜ、そのように生まれたのでしょうか。真の愛のためです。

男もそうであり、女もそうです。世の中では、「二人で永遠に一つになりたい」と言いますが、二人が一つになって何をするでしょうか。神様を占領しようというのです。真の愛でなければ、神様を占領できません。

皆さんの家の中で、主人には誰がなるでしょうか。その家の全体のために、一生を生きていく人が、中心者になるのです。神様の代わり、父母の代わりに中心者になるのです。

百名の友達がいるとき、その百名のために一生の間を生きれば、その友達百人からあがめられる中心になるのです。ですから、永遠の世界で、永遠に「ため」にする主人がいれば、永遠の主人になるのです。その方とは誰でしょうか。神様です。ところで、その方は我々の父であるために、すべての宇宙が「私」と共にいるというのです。そこに永生があります。そうでなかった所には、永生がありません。

それで、聖書に、「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」とあります。それはどんな言葉でしょうか。死を越えるべきで、越えなければ生きることができないという言葉です。（二〇五―二五八）

四) 愛と関係した死後の世界

皆さん、考えてみなさい。神様がおられますか。（はい）。神様には時間があるでしょうか、ないでしょうか。（ありません）。なぜありませんか。時間がなければ、永遠に終わると同時に永遠に始まるという、そういう言葉ではないですか。過去も、現在も、未来も、同じだということです。そのようになっても、嫌であり得ない作用を引き起こすことができる、神様が安息され得る本来の基礎とは何でしょうか。そのようなことが問題になります。

それは何でしょうか。全知全能であられる能力をもって可能でしょうか。駄目なのです。神様の知恵、全知全能、分からないことがないことをもってしては、駄目だということです。何にもならないのです。愛の力だけが可能なのです。神様も、「愛」と言えば「そうか 7」と言うのです。それ以外は、神様に必要ではないのです。

我々は結局、どこへ行くのでしょうか。霊界です。「死後の世界」と言いますが、死後の世界ではありません。なぜ、死後の世界になり得ないのでしょうか。愛と関係している世界であるためです。愛と関係している世界であるために、死後の世界ではありません。真なる愛を中心として出発したものであるために、自分が真なる愛の立場に立つようになるときは、今ここが霊界です。それゆえ、愛は偉大なのです。

球形運動をしてこそ、上下、前後、左右が和合することができます。縦は縦で、横は横になって和合ができなければ、上下、前後、左右全体が和合できないのです。統一が繰り広げられません。愛だけが統一することができるのです。

それゆえ、統一教会が、真の愛を中心とした統一理想世界を論ずるのも、原理観において一致した結論です。（一四四―一九九）

神様は、人間を率いてくださろうとします。神様も息をするのです。愛の呼吸をされるのです。愛を中心として、宇宙が永遠に続くのです。愛に永生があるのです。

愛も息をするのです。宇宙の脈拍がこのようになっているために、男や女が「ああ7私、嫌だ」と言えません。拍子が合えば、互いが愛さなければならないのです。一方向です。全部神様を中心とした一方向だというのです。（二〇一―一九一）

五)　「ため」に生きてこそ永生する

おじいさん、おばあさんも、千年、万年後代の後孫も、霊界に行っている霊人たちも、永生できるその公式的路程は同じです。

永世へは、「ため」に生きた人たちだけがパスすることができるます。（二〇三―一九三）

四　祝福と霊界

一)　愛の威力

霊界も肉界も、愛によって動きます。真なる愛を中心として、環境的与件は拍子を自動的に合わせるのです。（一八五―二〇）

過去の人も、現在の人も、永遠にできる資格とは何でしょうか。我々人間世界で必要とするそのすべての欲求の要因とは何でしょうか。それは愛です。つまらない愛ではく、真の愛です。

では、真の愛とは何でしょうか。縦横を通じて、どこでも九〇度に合うのです。東洋の家にも合い、西洋の家にも合い、南型の家にも合い、北型の家にも合い、五色人種、文化背景、すべての宗教背景が全部違ったとしても、合わなければなりません。それが何でしょうか。真の愛です。（一八〇―八六）

今日、この世には、多くの人たちが暮らしています。その人々の中で、統一教会で言う祝福という意味を知る人は、多くありません。この祝福という言葉は、統一教会で初めて始まった言葉であり、その言葉を中心として、今まで祝福行事をしてきました。

これから、人類はどこに行くのでしょうか。すべての人類は、祝福の門を通らずしては、天国に行くことができません。数多くの人たちが、既成教会を信じますが、その既成教会自体も祝福という門を通らずには、天に行くことができないのです。

このように言うと、既成教会では、「統一教会のレバレンド・ムーンは独善的な言葉をたくさん言う」と言うでしょう。統一教会で言う祝福は堕落した人類が、必ず行くべき道です。いくら反対したとしても、霊界と肉界をつなげて入らなければならない、非常に重大な問題になるのが、この祝福です。

今日、一般の宗教を信じる人は、「救い」と言うと、個人の救いだけを考えます。自分がよく信じれば、天国に行くと信じるというのです。しかし、本来の神様の理想について見るとき、天国は一人で行くようになっていません。愛する夫婦、愛する家族が共に入るようになっています。（一四三―二三五）

二) 夫婦の霊人体

我々は、愛の理想を探していく群れです。ですから、霊界の代弁者として立つために、愛の理想を横的な世界に扶植させるべきです。種として蒔くべきです。ここで愛の心を授け受けしながら育つのです。大きくなるのです。

こうして、愛の実を結んで、その夫婦が霊界に入るようになるとき、神様の永遠の愛の圏内に抱かれ、神様と一つの体になるのです。神様と一つになるのです。（一四四―二二四）

皆さんは、真の愛の論理をたくさん習わなければなりません。我々統一教会の霊神（注：草創期からいるおばあさん）たちは、五十になったのに、顔を見れば四十代のようです。五十歳を越えたのに、人々でいえば大体三十代しかならないように見えます。ですから愛するほど若返るのです。

人はこの地上で、殻（体）は老けていきますが、夫婦生活をして愛すれば愛するほど、霊人体は若くなるのです。どういう意味かというと、人間が長く生きれば生きるほど、内的人間である霊人体は、最高の円熟した美男、美女になるのです。その殻は服のように脱がなければなりませんが、若返ってくっついたらどうしますか。

ですから、外的な殻は、老ければ全部駄目になりますが、内的な中身は、丈夫になって未来の相続者になり、美人になるのです。それゆえ、秋の栗のいがのようになるのです。秋になり、丈夫だった栗のいがが、熟れれば、殻はぶよぶよになって割れ、栗の実が落ちるようになっています。それと同じです。（一六四―一〇二）

三) 結婚と霊界

キリスト教では、神様を愛すると言いますが、漠然としているのです。聖書で言うには、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」（マタイ二二・三七～三九）とあります。そうなればいいのです。

神様を愛する前に、皆さんが食べる食物を愛さなければなりません。万物を愛し、体を愛さなければならないのです。

皆さんの第一の父母は、皆さんを生んでくれた父母ですが、第二の父母は地球です。この地です。皆さんは地から、皆さんの体が大きくなれるよう、その要素を供給してもらうのです。地が体の第二の父母です。第二の父母を経て、第三の父母に入るのが死ぬことです。第三の父母に行くには、そのまま入るのではありません。第三の父母に帰るには、本来の父母だった神様の形に似なければなりません。

したがって、結婚はなぜするのでしょうか。神様の形に似るためです。神様は、二性性相が合体化した一律的な存在であり、その神様の分性自体が男女であるために、彼らも合性一体化して種のようになって、神様の本性の位置に帰らなければならないのです。

しかし、その種をつなげるためには、愛の道を通じなくてはいけないために、生まれながらも愛され、育ちながらも愛を目標として育ち、暮らしながらも愛を中心として暮らし、行きながらも愛に帰るために行かなければならないのです。

その道は、「ため」にする目標を中心として訪ねていかなければ、方向が異なってしまいます。（一三八―九八）

四)　祝福家庭の霊界の立場

我々統一教会の信者たちは、霊界が確実にあるということを知っています。信じているのではなく、知っているのです。多くの体験を通じて、否定しようとしても否定できないのです。今日、統一教会が世界的な基盤を形成するまで、多くの体験過程を経てきました。それゆえ、霊界がないと言うことのできない立場にいる人たちが、統一教会の信者です。

では、霊界の中心とは何でしょうか。霊界は絶対的神を中心として構成された世界です。その絶対的神がいるなら、その神は、宇宙の起源になる方です。彼によらないものがありません。彼に属しているために、彼に属した全体は、彼と共に感じ、彼と共に因縁をもって過ごしているのです。

そのような愛の圏が成される所には、サタンはいません。それゆえ、サタン世界は、自分を中心として愛するのです。天が一番ではなく、自分が一番です。天を否定し、地を否定して始まるのです。

しかし、その反対に、天を認めて地を認め父母の平均的愛のもとで一つになれば、サタンが主管することができないと見るのです。それが本然のアダムの位置です。その基準を回復しなければなりません。

ある町内に、統一教会の夫妻が住めば、その町内で話題になければなりません。先生がどこへ行っても話題になるのと同じです。「あの夫婦は、この町内に実によく来た。あの奥さんは、この町内のすべての男たちが好み、おばさんたちがみな好む。子供たちまで好む」と、そうでなければなりません。

それができなければ、霊界に行って再び帰ってこなければならないのです。帰ってくるには、先生がサインをしてあげなければいけないのです。祝福を受けた家庭たちが、地に勝手に来ることができますか。先生が祈祷をしてあげてこそ、可能なのです。それで、まず行った人たちが、みな縛られています。今まで統一教会の祝福家庭は、みな縛られているのです。

それゆえ、地が問題です。（一四〇―一二三）

五)　祝福は約束

統一教会の祝福家庭は祝福を受けたとき、永遠の家庭として暮らすと約束しました。先生は、永遠の家庭を治める人です。永遠の国を治める人です。永遠の国の家庭を設定するのです。その約束を守る人が、家庭はもちろん、永遠の国を引き継ぐのです。（二〇五―三五九）

六)　祝福の栄光

真なる女は、どうあるべきでしょうか。真なる男を中心として、男がしようというとおりにしてあげなければなりません。家庭のために奉仕して、氏族のために奉仕するようになれば、その周囲が全部拍手するようになります。

皆さんは、先生が好きです。なぜ好きでしょうか。苦労しながらも皆さんを生かしてあ

げようと、人類を解放させてあげようとするからです。先生が苦労しなければ、皆さんが霊界に行って、億万年待っても祝福を受けられないのです。不可能なことなのに、先生が苦労して、価値ある祝福の版図が繰り広げられたというのです。これは天の霊界とこの地上世界に、栄光なもので、華やかなことです。（一六二―六八）

第二章　死と霊界

第一節　人生必然の道

一　永生と距離が遠い体

地球も息をして運動をするのです。皆さんの細胞も息をします。

皆さんは、地上で永遠に暮らしますか、無形の愛の実体になった所で永遠に暮らしますか。無形の愛の実体になった世界で永遠に暮らさなければなりません。神様が御自身を見せてあげたいと思われても、皆さんの体では神様を見ることはできません。ですから、霊人体が必要なのです。

見えない精神の中心になる神様ゆえに、神様は相対的存在である人間に、自分の永遠の理想圏を全部与えたいのです。（一一一―一一二）

二　大部分の生涯

今、我々は、知る知らないにかかわらず、あるところに向かって行っています。私が動いている時間にも行っていて、休んでいる時間にも行っているのです。単に私だけでなく、この民族、あるいはこの世界、さらには天と地までも、あるところに向かって今行っているのです。これは、否定することのできない事実です。

一生を経たのちに、自分はある所へ行くのでしょうか。これが、人間たちが解決すべき重要な問題です。宗教もこの問題を解決するために、哲学も歴史もこの問題を解決するために動員されています。ですから、皆さん自身も、このような運勢に引きつけられ、率いられていっているということを、否定することができないのです。

では、どうせ行くべき自分自身だというのに、この体はどこへ行こうとし、この心はどこへ行こうとするのでしょうか。また、この生命はどこに向かって傾いていて、自分の心情はどこに行こうとするのか、自分の願い、あるいは希望と理念は、どこへ行こうとするのでしょうか。この問題を解決できなかったとしても、我々はどうせ行くべき運命に置かれているのです。

我々が生きて死ぬ日、この体は土に埋められて終わるのです。それなら、体が埋められるその日、この心も、この生命も、この心情も、この理念も、あるいは希望までも共に埋められてしまうのでしょうか。ここに、内容と、解決点と、目的観を提示しておかなければなりません。

それで、行く歩みをつかまえて、動く心と傾く心情を妨げておいて、「お前はどこへ行くのか」と聞いてみて、これを解決しようと闘ってきた人たちが、聖賢、賢哲であり、数多くの道主たちです。彼らはそれを解決するために出てきたのですが、今まで「私の体はこのような所に行き、私の心と私の心情、私の生命と私の理念は、このような所に向かって走っていく。ゆえに、全天下に存在するすべての存在物は、ここに向かって行け 7」と、

自信をもって命令した人はいないのです。（八―一九四）

宗教は、私的な欲望から出発したこの世の中が滅びるのを願います。公的な世界を、一つに統一された平和の世界を、数千年前から待ち望んできたのが宗教です。

では、宗教人は、どのように生きるべきでしょうか。自分の夫婦だけでおもしろく生きることより、もっとおもしろく生きることができるのは、この歴史的距離を短縮させ、世界とつなげて、天宙とつなげて生きることです。そのような家庭が、解放された家庭なのです。また、その家庭は、絶対的な家庭にならざるを得ないのです。

明洞の街を過ぎてみると、若い男女たちは仲むつまじいのです。それは誰のためにそうなのでしょうか。一度しかない若い青春時代なので、楽しむためにそうだと言うのですが、それでいいというのです。では、その楽しむことにおいて、主人は誰でしょうか。これが深刻だというのです。皆さんは、いつまでも楽しむことができますか。二十代から楽しく六十、七十、八十歳と過ぎるようになれば、楽しいはずはないのです。

しかし、統一教会式は違います。食べるのも何のために食べますか。世界のために食べるのです。悪なる世界をなくすために食べるのです。見るのも、悪なる世界を討ち払うために見るのです。悪の側になるために見るのではなく、悪を討ち払うために見るのです。聞くのも、考えるのも、歩くのも、行動するのも、全部世の中と違います。（三六―七二）

もし、人を、何日間かいてなくなる、そのような存在として創造したなら、神様は絶対者ではありません。神様は、人間を永遠に見ていたい、貴い存在として創造したのです。

人間が神様の喜び得る対象なのに、神様が永遠であるなら、人間も永遠であるしかありません。そして、永遠な神様は、永遠の世の中を相手にするのです。

ところで、人々は「八十年生きればいいのであって、死んでしまえば終わりだ」という考えで、今まで生きてきた人たちがたくさんいます。しかし、歴史路程を通じて考えを深める人たちは、「どのようにすれば人が死なずに永生することができるのか、もっと生きることができる道はないか」という考えをもちました。志を抱いたことがある人であればあるほど、「人生とは何か?　人間はなぜ生まれて旅人のように行くか」と言い、「人生は苦海」とか、「草露の人生」とかと言いました。しかし、永生できるなら、そのように悩む必要はないのです。（三九―二二九）

三　死は人生必然の道

皆さんは、いつかは霊界に行かなければなりません。間違いなく霊界に行くのです。

大韓民国に訪ねてくるのに、金浦空港に降りるといって金浦空港に来たのではありません。金浦空港からどこへ行くのでしょうか。全羅南道に行くか、慶尚南道に行くか、平安道に行くのか。平安道に行って、またどこに行くのでしょうか。郡を訪ねなければなりません。また郡でもどこへ行くでしょうか。面を訪ねていかなければなりません。また面に行って、どこを訪ねていきますか。里です。

里でも、ある班を訪ねていかなければなりません。簡単ではありません。

自分の居所を確定づけられない人間たちが出世して、何をするのでしょうか。問題です。

神様が霊界から呼び出し命令をすれば、文先生もきょう偉いとしても、あすの夜に連れていけば行くのであって、他に方法がありません。どんなに大きな声を出しても、行くのです。私が声を大にしながら行くときには、正しい言葉を言って行くのです。国が行くべき道を提示しなければならず、世界が行くべき道を提示しなければなりません。過ってやれば死ぬのです。（一七七―四二）

四　生命の主人は神様

先生の起源は何でしょうか。私ではありません。先生の起源も自分を超越したものでなければならず、目的も自分を超越したものでなければなりません。自分の生命は、父母や社会や民族、国家を通じて生まれたのではなく、それを超越した絶対者である神様から始まったと言うべきです。動機を、絶対的な立場にある超越的な動機と結びつけなければなりません。時代的な因縁とか、環境的な因縁、あるいは社会的な与件に結びつけてはいけません。超越的な原因に結びつけ、超越的な目的に結びつけてこそ、飛躍して、超越して、脱出することができるのです。

自分の生命を超越的な動機に結びつけなければなりません。自分の生命の出発は、自分から始まったのではありません。絶対者であられる神様から出発したのです。自分を超越的な動機に結びつけるようになれば、死んでも超越的な過程で、神様のみ旨によって死ぬようになるのです。（三六―六四）

五　生涯はあまりにも短い

人間は、何千年、何百年生きるのではありません。百年ほど生きて、みな死にます。

数多くの歴史時代を経てきながら、多くの我々の先祖たちが死んでいきましたが、全体に良いこと、全体の利益を考えたなら、百年生きたことが、千年たってもそのまま残されたことでしょう。ところで、個人を中心として現れたなら、全部滅びました。全体を滅ぼしてしまうのです。

そのような人生の暮らしをしてきたために、問題が起きたのです。ここで一番問題になるのは何でしょうか。自分を中心としたすべての測定方向を、どのように全体測定方向に代替するか、自分第一主義を強調したのを、全体に利益になり得る面で、どのように投入するかということです。

それで、個人主義、自体の利益を追求する人生行路の出発を、ひっくり返えさなければなりません。ひっくり返すには、ただそのまま、何もなくひっくり返してはいけません。

一着しかない服を着ているのに、これを誰かが脱がそうとすれば、死んでも脱ぐまいとするのです。春夏秋冬の服を持って、春に冬の服を着れば、春服を持っていき「これは冬の服だ、脱ぎなさい」と言い、夏に春服を着れば、夏の服を持っていって「脱ぎなさい」と言うべきなのです。そのようなことを知らなかったのです。代替し得る、より価値があるものが何かを知らなかったのです。（二〇〇―九一）

この地上には父母がいて、師がいて、親戚たちがいます。この地には、そのような因縁を結んでいくことができる道がありますが、霊界にはそのようなものがありません。霊界では、全部神様を中心として全体のために暮らすのです。位置が全部区別されています。それゆえ、上にいる人が下に来ることもできず、下にいる人が上に行くことも難しいのです。本来は、地上で完成してこそ霊界に行くことができるようになっています。一度あの世に入れば終わりです。どちらにせよ人間は死にます。

生涯の路程は、あまりにも短いのです。一生はあまりにも短いのです。人の寿命が八十年だとすると、あまりにも短いのです。霊界の時間では八時間にもなりません。永遠の世界の時間で考えれば、八時間にもならないのです。

ですから、真の愛の力は偉大なのです。早いのです。真の愛の速度は、我々が認識できないくらいです。（二〇五―六五）

第二節　死に対する理解

一　「亡くなる」という言葉の意味

間違いなく霊界はあります。間違いなく霊界はあり、我々人間は、どうせ霊界から生まれたために、霊界に帰らざるを得ません。

我々韓国の言葉の中で、おもしろい言葉は「トラガンダ（帰る、亡くなる）」という言葉です。どこに帰るのでしょうか。共同墓地に行くのは、帰ることではありません。出発した本処に帰るということです。その出発が共同墓地ではないというのです。果てしなく遠い歴史の起源を越えて帰るということです。

人間が帰る（亡くなる）ということは、韓国人として生まれて、韓国人として帰る（亡くなる）ということを言うのではありません。韓国人として死にましたが、韓国人として帰るというその道ではないのです。我々人類の先祖の根源の世界に帰るのです。

それは何を言うのでしょうか。創造主がおられるなら、その創造主がおられる所に帰るということです。そこから出発したので、そこに帰るのです。

宇宙は、循環作用をします。山に積もっている雪が解けるようになれば、小さな渓谷を通じて流れていき、多くの支流を通じて大海に流れ込みます。大海に入るようになれば、それが水蒸気になって、再び帰るのです。

循環運動をします。帰ろうとすれば、どこに帰るのでしょうか。高くあり得る所に、もっと良くあり得る所に帰るのを願います。

誰も小さくなるのを願いません。しかし、すべての自然界の運動法則というものは、作用すれば小さくなるようになっています。作用すれば、だんだん小さくなるのです。我々が何かを転がしてみても、それが永遠に転がらないのです。早く転がって、だんだん遅くなり停止するようになります。（一一四―二六九）

二　我々が行くべき所

我々は、この世の中に暮らしていますが、この世の中だけがあるのではなく、霊界もあります。世の中と霊界は、二つの世界ではなく、一つの世界としてつながっています。

では、我々が行くべき所、我々が行って暮らすべきその所とはどこでしょうか。もちろん我々は、肉身生活をしながらこの地にいま

すが、永遠の世界に向かって行っているのです。一般の人たちは、世の中に生まれれば、十代、二十代、三十代、中年、壮年、老年時代を経ていきます。青春時代を過ごして、壮年時代に入るようになれば、だんだん一つの峠を越えて、その次には老年時代に入るようになるのです。このように沈む日のように、一生を終えます。

しかし、霊界があるという事実を知る人たちは、一生はちょっとの間であり、死んだのちに我々が迎えるべき世界が永遠だということを知っています。ゆえに、一生は、永遠の世界への準備するための期間です。（一四〇—一二一）

三　亡くなる日は貴い日

アダムが生まれた日と成婚の日、そして、亡くなった日を記念する、世界的な統一圏が形成されていたなら、そのような日々を記念する人類は、一つの兄弟になり、一つの民になったでしょう。すなわち、一つの世界に暮らす人間になることができたということです。そのようになっていたなら、アダムが生活したすべての風習は、人類歴史に継承されたであろうし、その時に形成された文化は、永遠に継承されたことでしょう。（三一—二三一）

四　二つの死

皆さんがいくら「死なない」と言っても、死ぬ時になれば死ぬのです。

霊界に行く人にも種類があります。自分の寿命どおりに生きて行く人と、自分の寿命どおりに生きられずに行く人がいます。自分の寿命どおりに生きられずに行く人にも、罰を受けて早く死ぬ人と、民族や世界の罪を蕩減するために早く死ぬ人がいます。

もしある町内で、屈指の若者が三人だけ死ぬようになれば、その町内には福が来るというのです。ある一族を例に挙げるなら、その一族から期待を受けた若者が、三人だけ死ぬようになれば、その一族には福が来るというのです。すなわち、蕩減を払わなければならないということです。どこでもそうなのです。因果法則はどこでも作用します。

神様が、千人の価値をもった一つの存在を中心的な立場に立てて、代わって死の道を行かせたとき、千人がその人の恩徳の前に感動して、その人を慈しみ、その人の生涯を見習い、その人のように生きるというようになれば、その民族はその人のような恵沢圏内に入ってくるのです。人々が忠臣の思想を見習おうとし、聖賢の思想を見習おうとするのも、彼らと同じ恵沢圏内に入るためにそうするのです。

昨年も何人かが霊界に行きましたが、今年も何人かが霊界に行くでしょう。言いはしませんでしたが、先生は既にみな知っています。これはなぜそうなのでしょうか。一段階越えていくときには、必ず蕩減を払わなければならないためです。（三三—一〇）

この地上に生まれた人間たちの中には、希望をもって生きる人たちがいて、希望をもてずに生きる人たちがいます。しかし、希望は人間を中心とした希望と、天を中心とした希望の二つがあります。

我々は、生まれたその日から、母の懐の中が何よりも自分に一番いいものと思って育ちますが、母の懐を離れ友達と付き合って、友

達が一番いいものと思って過ごします。しかし、結局は友達とも別れてしまうのです。

それで、人間たちは、だんだん育ちながら、愛する父母も自分の希望の全体になれず、愛する夫婦も自分の希望の全体になれず、さらには、愛する子女も自分の希望の全体になれないのです。

人間たちが多くのことを希望しますが、その心が薄れてなくなってしまうのです。家庭に対する希望、あるいは国家に対する希望、さらには世界に対する希望をもっていますが、年齢が多くなるに従って、その希望する心がだんだん弱くなっていくのです。

地上に生きている人間たちの中に、その希望を自分の全体の希望として誇り、自分の生命を失う恨があっても、それを離れては生きられないという確固たる信念をもって生きていく人は多くありません。人間は、そのように生きて、最後には死と戦って越えなければいけない運命に逢着するようになります。

人間は、一生の間、すべての希望を抱いて生きますが、のちには死にぶつかり、自分が抱いていた希望をみな捨てたまま行ってしまうのです。きょうも生きるのを願い、あすも生きるのを願い、新しい希望を探してさまよっていますが、死にぶつかるようになるときには、希望をもてなかったまま、絶望しながら最後の道を行くのです。

人間が自分を中心として見るときは、希望をもったようですが、死の峠を越えることができる希望をもてずにいます。そのような希望をもてなかったまま、消えています。これを人生の手本と思って死んでいくのでしょうか。そうでなければ、死もあざ笑って、一つの希望を探して行くのでしょうか。これが今日、地上に生きている人間たちが考えなければならない、重要な問題です。

今日、世の中の万事は、みな過ぎ去ってしまいます。家庭も過ぎ去り、国家も過ぎ去り、世界あるいはある主義も、みな過ぎ去ってしまいますが、最後に残されるものとは何でしょうか。死と戦って勝利することができる一つの希望です。我々にそのような希望がなければ、人生の敗北者です。

反面に、生まれながら世の中の人たちが願う一切の希望を拒否し、人間的なものを一切拒否し、天の希望、永遠の希望を抱いて生きる群れがあります。

天は、人間的な希望を中心として生きている地上の人間をして、新しい希望をもって死の峠を越えることができ、永遠の世界を欽慕しながら生きることができるようにするために、無限に苦労されました。それゆえ、信仰生活をする人たちは、地上のある希望を抱いて生きるのではなく、死までも越えて立つことができる永遠の希望の世界を夢見て生活すべきなのです。（六―四四）

五　死の意味

「死」という単語を使った目的は、人生の意味を知るためです。では、人生の価値は誰がよく知っているのでしょうか。生きると言う人は分かりません。死の窮地に入って、生死の岐路で、天にしがみついて人生の価値を打診してみた人でなければ分からないのです。（七四―二四三）

今日世の中には、睡眠薬のようなものを飲んで自殺する人がたくさんいます。それは、女が多いですか、男が多いですか。女が多いのです。なぜ女が多いのですか。女は一方的

にしか考えるすべを知りません。男はどんなに不細工でも、ああだこうだと考えるすべを知っています。女は決心が一つしかありませんが、男はああだこうだと引っ掛けて、死に得る道を避けていくのです。ですから、女より男に自殺が少ないのです。（二二二―七〇）

六　死は三世界を連結する過程

自分も神様に似ようとし、そして自分が神様の息子、娘であるなら、神様も似させたいという観念をもつのは必然的です。ですから、自分は神様に似たいし、神様は自分を連れていきたいのです。これを可能にし得る道を模索するでしょう。それで人は、再び神様と似ることのできる体を着て生まれなければなりません。そのように生まれる日を神様も待ち望むのであり、人間も待ち望むでしょう。そのような人として生まれる日が必要です。それが何ですか。死です。

では人間は、死を歓迎すべきでしょうか、歓迎してはいけませんか。歓迎すべきです。死ぬのに、何のために死ぬのかというときに、「神様の真の愛のために死ぬ」と言うべきです。それゆえ肉身を脱ぐのは、無限の神様の愛の活動圏に自分が同参するためであり、神様の愛の世界のためにそうするのです。

神様の愛の中で生まれることが、死ぬことですが、人間世界では「ああ、死ぬ」と大騒ぎするのです。制限された愛の圏内から、無制限の愛の圏内に突入し得る喜びを迎えることができる瞬間が、死ぬ瞬間です。ゆえに死ぬ瞬間が、第二の出生の瞬間です。

そうであるなら、神様は、皆さんの肉身が生まれた日を喜ぶでしょうか、第二の無限の世界の愛のために活動する息子として生まれるその瞬間を喜ぶでしょうか。なぜこんな話をするのでしょうか。皆さんが死の恐怖から解脱せずには、神様と関係を結ぶことができないないためです。

人は、蘇生、長成、完成時代を経ます。腹中の水の世界、地上の地球星世界、その次には天上の空中世界で暮らします。言い換えれば、腹中の水の時代、地上に生まれて生きる百年の地の時代、飛んでいく空中時代、このように三時代を経ます。

人は生まれるとき、一番深い水の中から生まれるのです。腹中時代は水の中の時代です。赤ん坊がお母さんの胎中にいるときは、水の中に浮いています。水の中に暮らすために、水を吸って送り出さなければならないため、赤ん坊はホースをおなかにつなげて生きるのです。

赤ん坊は、栄養分をどこから供給されますか。へそから供給されます。へそが入り口なのです。ですから、それをばかにしてはいけません。「へそや、お前は昔苦労した」と言い、たたいてやれというのです。へそをたくさんたたいてやれば、健康になるのです。そのように運動しろというのです。へその運動をたくさんすれば、健康になるのです。いくら寒い部屋で寝たとしても、へそだけよく覆い被せて寝れば下痢になりません。

腹中では、皆さんの口はへそです。この息をする器官が、へそを踏んで上がるのです。その次の口は何ですか。この口です。絶えず上がるのです。

では、へそに緒をつけたのを、どのようにすべきでしょうか。切ってしまうべきです。

同じです。空気の世の中で、霊人体が体にくっついて、胎児のように肉身をすすっているのです。そうして、肉身が老いれば、捨て

ていくのです。胎児が生まれて、お母さん、お父さんの前に愛の対象になるように、霊人体が、霊的父である永遠の神様と相対することができる人として、再び生まれなければならないのは、原理原則です。

胎児が生まれて、お母さん、お父さんと友達になることができる所が、地上世界です。お母さん、お父さんと、愛を共にすることができる地上世界に生まれるのと同様に、霊的に無限の世界に通じることができる父母の代わりの神様と、愛を分かち合うことができる霊界に生まれなければなりません。

水の中の時代があり、陸地の時代があり、飛んでいく時代があります。今日、人間が飛んでいくのをどれほど待ちましたか。飛んでいくというなら、世界で一番の注目の的になります。

地上で愛を呼吸する人は、死んだのではなく、生きたのです。腹中で呼吸するときは、パイプの仕掛けを通じていました。生きていますが、へそにつながった胎盤を破壊して生まれ出るようになるときは、新しい次元、高い次元に上っていきます。高い次元で供給されるのです。空気を供給されて出てくるのです。

腹中から出て何を発展させるのでしょうか。空気ではなく愛です。愛の要素を受けるということです。御飯だけを食べていてはいけません。御飯だけを食べていれば、死んでいくのです。水を飲んで、皆このように生きるのは、全部袋、水袋です。全部死んでいくのです。それは、第二の存在です。地上生活では何を満たすべきでしょうか。この期間には、新しい愛の人格を形成しなければなりません。

この地上で、皆さんに必要なものとは愛です。お母さんとお父さんの愛を受けられない子供を、なぜ「孤児」と言うのでしょうか。あの霊界と永遠につながり得る愛がないためです。それで、一人で独身暮らしをするを、「かわいそうだ」と言います。

死ぬということは、第二の呼吸をしていた肉体につながった器官を壊して愛の要素を受け継ぐのです。愛は見えません。父母の愛、夫婦の愛、愛を中心として、一つの内的な構造が育っているのです。

それで、神様の法則のとおりに胎内で正常的な赤ん坊として育つのと同様に、地でよく育つべきです。

とんぼの卵が初め幼虫になって、水の中で泳ぎ回って、地上に上がってきてしばらくの間、はい回ります。その次には、ひらひらと飛び回り、地ではい回っているときには食べるだろうと思いもしなかった虫を捕まえて食べます。天下を自分の舞台として、飛び回るのです。

昆虫類の中には、三段階の世界を経るものがたくさんいます。昆虫といえば、大概羽があります。昆虫も水で、陸地で、空中で暮らすのに、万物の霊長という我々人間に羽があるでしょうか。次元の高い羽があるのです。

死が第二の出生の、幸福なる関門です。

死ぬということはどういうことでしょうか。地上生活は空気中で、胎内のように泳ぎ回って暮らすのと同じです。空気のおくるみの中で、生きているのです。死ぬということは、別に変わったことではなく、第三の人生へと出生することです。その瞬間が、死ぬ瞬間です。（一一六―一七二、四九―二八五、一三九―二一四）

七　死ぬ前にすべきこと

一)　最後の境界線を越えよ

どうせ一生に一度は死にます。ですから、いくら恐ろしい暴風雨がたたきつけても、最後の峠を越えなければなりません。うまく進んで、境界線の前で倒れてはいけません。皆さんは、このような境界線に立って何をするのでしょうか。皆さんは統一教会に入ってくるのは、うまく入ってきました。皆さんの姿は、各自で自分勝手にできていますが、よく入ってきました。しかし、気をしっかりして走っていっても終わりまで行くか分からないのに、慌てたなら、行って途中で終わってしまうのです。最後の決勝点まで行き、境界線を突破しなければ勝利者になることはできないのです。

人として生まれるのは、価値のあることです。後ろから反対し迫害したとしても、自分の行くべき道を行けばいいのです。人が反対しても、関与する余地がありません。一歩一歩運命の道を経ていく人が、最後の境界線を越えることができるのです。皆さんは、そのように行かなければなりません。（二四―七七）

二) 形状と心情と神性に見習え

我々は、いつか肉身を脱いで霊界に行かなければなりません。それゆえ、この世に生まれた我々は、死を覚悟しなければなりません。また、善なる自己を永遠の世界に第二の自分として立てるためには、苦労をしなければなりません。お母さんの腹中で胎教をよく受けてこそ、健康で善なる赤ん坊として生まれるのと同様に、この地上世界での生活は、腹中での生活と同様なのです。

それゆえ、神様の形状を見習い、神様の心情を見習い、神様の聖なる神性を見習って育たなければなりません。育って、また生命を懸けて越えていかなければなりません。（一四―一七）

三) 罪を犯すな

皆さんは「心がまっすぐだ」という話をします。電信柱がまっすぐだというとき、一直線に立っていることを言います。心がまっすぐだというのも同様です。それで、人は立って歩くのです。垂直にならなければなりません。

自分の心を完全に垂直になるようにすべきです。そして体が水平線になるのです。遠心力、求心力があるべきです。垂直から引いてくれる力と、回る力が均衡を取らなければならないのです。それゆえ、自分を探さなければなりません。

自分が「自分だ」というときは、神様が「そうだ」と言うべきであり、「真の父母」が「そうだ」と言うべきなのです。その次に、親戚、一族、一国が正しいと言わなければならないのです。糾弾される者は、問題になります。

これからは、大陸を中心として、寒帯地方と温帯地方を分けるのです。罪をたくさん犯した人は、北極に送るという時が来るでしょう。

伝染病患者を隔離するようにするのです。（二〇二―二八〇）

四) 世界のために生きて死ぬべし

先生は、アジア情勢や韓国民族を中心として苦労したのではありません。世界的な分野で、どのように責任を果たすでしょうか。そのために、死ぬことができなければなりません。

このようなことを考えてみるとき、皆さんは世界のために生きて死ななければなりません。世界的でなければなりません。では、どんな立場で死ななければならないのでしょうか。世界的な場に立って、愛する妻を抱き、家庭を抱き、氏族を抱き、民族を抱いて死ななければなりません。統一教会は、今、氏族を編成して、民族を編成していっています。

それゆえ統一教会の先生は、死んでも、どんな立場で死ぬのでしょうか。民族と大韓民国までそっくり抱いて、世界のために死ぬでしょう。韓民族が一つになって、世界のために死のうとするときは、世界と共に生き得る道があるために、その道を探していくのです。（三四―一九三三）

五)　多くの仕事をせよ

皆さんは、どの版図で働くでしょうか。お金が必要なら、お金をかせいで、人がいなければ、人を育てるために寝ずに、食べずにしなさいというのです。誰かに助けてくれと、絶対言うなというのです。本部にも絶対そうせず、助けてあげなければなりません。普通の人の三倍以上をすべきです。

それゆえ、私が七十年を生きたとしても二百十年生きるのと同じです。皆さんも百歳まで生きると思わずに、七十歳まで生きても三倍働くようになれば、二百十歳まで生きることになります。十倍するようになれば、七百年を生きるのです。二十倍するようになれば、千四百年を生きるのです。一生の間、二十四時間を働くのです。そうしてこそ、霊界に行って実を結び、愛の所有が多くなるのです。愛の財産が多くなるのです。自分の所有が多くなって、活動舞台が広くなるのです。（一〇二―三八）

六)　公的な仕事をせよ

天の法度とは何でしょうか。公儀を優先することです。私的なことはサタンのものであり、公的なことは神様のものです。皆さんは、公儀のために行くべきです。そのような路程で、すべての人たちがいくら反対したとしても、自分に損害を受けずに、難しい道も生命力をもって行く人がいるなら、彼は春を迎える天国人になるでしょう。（四七―二七二）

皆さんが市場に行って見ても、店の主人が自分の欲ばかり張るようになれば、お客が物を買いに来ないのです。自分の欲ばかり張れば、誰でも嫌がります。公的な仕事や、私的な仕事を中心として見ても、治め得る方法と秘訣を知らない人は、一人もいません。それゆえ、「知らなかったので天国に行けなくなった」と言い訳をすることはできないのです。なぜでしょうか。公的か、私的かということは、教えてあげなくても分かるのです。

例えば、皆さんのお母さんが、皆さんのお姉さんや皆さんにおいしいもちを全く同じに分けてくれたのに、皆さんは皆さんの分をみな食べて、お姉さんは食べずに真心込めて保管しておいたとします。それを、寝てからそっと起きて、一人で食べようとすれば、「こいつ7」と言うでしょう。そのような気がしないなら、人ではありません。そうなるべきなのです。なぜでしょうか。皆さんの心は、公的なものを追求するためです。私的なことについていけば、滅びるのです。

本来、天法に従っていけば、自分自身が滅びるのを防備してくれ、保護してくれようとする心があるのです。本来あるものとは何でしょうか。これは、神様に本来からそのような心があるので、人間にも本来からあるようになったのです。自分が作った法でないということです。「良心よ、私がこのようなためにこうだ」と、そう言いますか。「私の考えがそうであるために、そうであるべきだ」と命令するとして、良心が作用しますか。どこだか分かりませんが、他の所から命令を受けるのです。そのような感情が、自分を支配することを見るとき、これは公私問題を中心として支配するということが分かるのです。（三一―二四一）

今日、人々は、自分の生活を中心として、善悪の分岐点と公私の分岐点で、内外にひっくり返って行ったり来たりして、結局は私的におぼれる場合がたくさんあります。しかし、そのようになれば、滅びるのです。ですから、過去は私的な生活であったと悔い改め、再び公的な生活のためにこれを歯を食いしばってやらなければなりません。そうして行ったり来たりして私的な側に入り込むときが多くなり、そうしてみると公的な善とは遠ざかる生活をします。これが今までの信仰生活です。それゆえ、私的な生活をするすべての人たちは、悔い改めなければなりません。（三一―二四一）

皆さん、福を受けるのを願いますか。永生するのを願いますか。そうするには、公的な人にならなければなりません。子供を教育するのに、自分の息子、娘だけ愛するなというのです。世界の人のための、祭物的な息子、娘として愛する父母にならなければなりません。そして、子供を　懐に抱いてお乳を飲ませるときは、この地球星の人類を代表した母の立場で、人類を代表した幼い赤ん坊にお乳をやるという心で飲ませなければなりません。そして、自分の子供だけかわいいというように対そうとするのではなく、人の子も自分の子のようだという心情で対する母になるべきです。そのような母のお乳を飲んで育つ赤ん坊たちは、必ず偉大な人になるでしょう。すぐには駄目でも、一代、二代を経ていく間、必ずその後孫の中に、世界を支配し得る人物が誕生するでしょう。これは公式です。（三一―一六八）

では皆さんは、私的な蕩減のために自分の一生を投入しますか。そうでなければ、公的な蕩減のために自分の一生を投入しますか。一生を投入するのは同じですが、公的な蕩減のために公的な環境に一生を投入すると生命を懸けて立ち上がる人は、偉大な人物になるのです。そのような群れによって、新しい歴史は創建されるでしょう。

では、そのような主管を前にしている我々は、残った時をどのように埋めればいいのでしょうか。これが今から皆さんが行くべき試練の路程です。それで、自体の生活で、個人的な生活をするのか、公的な生活をするのかということが問題になります。自分自身の生活で、自分が何を食べて、何を買って売ってというすべてが、誰のためのものでしょうか。自分のためのものでしょうか、神様のためのものでしょうか。また、問題になるのは、それが公的な生活か、私的な生活かということです。そして、皆さんの感情が私的な感情か、公的な感情かということも問題になるのです。

公的な道を行くために誓うべきです。歴史を蕩減させるべき使命を負った人なら、誰でも願う立場まで進まなければなりません。それゆえに、生活の中で私的な感情を超越して、公的な感情をどのように体得するかという問題が、信仰者が重要視すべき問題です。

罪とは何でしょうか。罪は、私的な所で生まれるのです。滅びるのも、私的な基準で繰り広げられるのです。悪も同様です。私的なことが度数を超えるようになれば、悪として現れるのです。私的なことには限界があり、その限界を超えれば、悪くなり、滅びるようになり、罪を犯すようになるのです。

では、永遠に善であり得、永遠に繁栄することができ、永遠に福を受けることができる立場とはどこでしょうか。滅びることを避け得る立場、罪となることを避け得る立場、悪くなることを避け得る立場とはどこでしょうか。それは、正に公的な立場です。御飯を食べても、公的な立場で食べなければなりません。仕事をしても、公的な仕事で、言葉を話しても公的な言葉で消化しなければなりません。このように、一切を公的なことと関連づけて暮らさなければなりません。そのような人は、地獄に行こうとしても行くことができないのです。（三一――一六四）

七) 愛を体恤すべし

皆さんは、自らが「私だけだ 7」と、自分だけを考えればいいのでしょうか。皆さんは、皆さん自身だけで存在しているのでしょうか。皆さんから、お母さん、お父さんの要素を抜き出して、供給されたすべての万物の元素を抜いていけば、皆さんはなくなります。それゆえ、「私」という存在とは何でしょうか。お母さん、お父さんに代わる立場です。お母さん、お父さんを通じて生じた腹中時代を経て、お母さん、お父さんの血と肉を受け継ぎ、供給されて生きるのです。

それで、今日地上時代には、「宇宙の母、万物の母」です。これが地です。地球星が母なのです。元素を皆さんに供給してくれます。他の段階の元素を供給してくれる母なのです。母の腹中で育つようになるときに、腹中で呼吸するのに、何で呼吸するでしょうか。へそで呼吸します。へそが母の体とつながったホースです。

しかしながら、第二世界、空気の世界につながったことを知っています。腹中で暮らしてから、けってしまって出てくれば破壊です。そのときは、泣くのと同時に何につながるのかというと、ひよめき、鼻の穴で息をするようになっている、空気の世界につながるのです。鼻の穴が絶対補給路です。では鼻の穴をふさいで生きることができるでしょうか。息ができなければ死にます。二重構造になっています。

腹で空気の世界に出てくるときは、腹中世界で暮らしたへその緒と水袋をみな破壊して出てこなければなりません。その器官、腹中のへそと胎盤は破壊されて死ぬのです。死ぬのと同時に、何が出てくるのでしょうか。この宇宙、地球星の母に現れるのです。こうして、口で元素を補給されて生きているのです。

腹中から出て、この体は何をすべきでしょうか。腹中でへその緒で息をするのと同様に、空気のパイプである鼻の穴を準備して、どっと出てくるときに取り替えて息をするのです。そして、今この世界ですべきこととは何でしょうか。生まれてすべきことは、愛というものを体恤することです。愛という空気を吸わ

なければなりません。お母さんから、お父さんから、愛の空気を吸わなければなりません。愛の空気を供給され、経ていかなければなりません。一家庭に赤ん坊として生まれて、サインカーブと同様に、上がれば下がらなければなりません。赤ん坊として生まれて成長して、年を取って死ねば分解されていくのです。赤ん坊として生まれて、赤ん坊に帰るのです。

そのようになるときは、どのようになるのでしょうか。第二の腹中世界をけってしまい、第三の愛の呼吸器官につながらなければなりません。父母の愛、兄弟の愛をけってしまい、大宇宙の神様の本体に和した愛の世界に入ります。霊界は愛の空気です。愛の空気でいっぱいに満ちています。それゆえ、皆さんは、今この地上世界で愛の息をすることができるパイプ装置をしなければなりません。それで、霊界の体験が必要で、霊的愛を感じることができて、呼吸することができる人になってこそ、死なないというのです。

この地球星の母の腹の中をけってしまって立ち上がるとき、皆さんは愛の呼吸器官で息をするのです。第三の愛を受け継いでこそ、永生を得るというのです。それで、愛をつなげてどこに帰るのでしょうか。神様に帰るのです。愛の呼吸器官につながって、霊界に帰りますが、神様の本体に帰る道が残っているのです。種が出てきたなら、それは本体から出てきたために、結果を結んで本体に帰るべきです。

それで、人生行路は、旅人の行路ですが、ここで備えるべきものとは何でしょうか。愛の体恤をして行かなければならないのです。母と父の愛をよく受けられなかったのが堕落だから、真の父母の愛、真の兄弟の愛、真の夫婦の愛、真の息子、娘の愛を中心として、縦的な家庭をなして、横的な環境を、東西南北に多くの家庭たちを並べておかなければなりません。それで、彼らが縦横をつなげることができる真の家庭の形態をなして、氏族圏、民族圏、国家圏、世界圏につながるようにするとき、愛でつながったその世界を天国というのです。（一三九―二一二）

八　霊界に行く前に残すべきこと

一）　愛の墓を残すべし

普遍的に人は永生を中心として十年、百年だけでなく、千年、万年、億千万年を考えるようになります。人が死ねば、動物と同様ですが、それを残して何をするでしょうか。このごろは、宗教を信じないで、神様を知らない人も、「ああ、名誉を残さなければならない」と言いますが、その名誉を残して何をするでしょうか。アメリカの愛国者になって、記念館に入っていても、アメリカが滅びるようになるときは、消えるのです。名前を残して何をするのでしょうか。ですから、滅びたり繁栄したりする歴史時代に残ったとしても、良いというものも、悪く扱われるのです。（一〇三―一六）

地上に生きている神様の息子、娘を残すためのものが、神様の目的です。それゆえ、自分が霊界の神様の前に行っても、地上に生きた神様の息子、娘を残す立場になるときは、自分も神様と同じ立場に立つようになるのです。それが聖書の「うめよ、ふえよ、地に満ちよ」というみ言の意味です。（一四六―二二三）

生涯に何をすべきなのでしょうか。愛の墓を残すべきです。愛の墓を残していこう 7
愛の墓の中で暮らせば、恨がありません。墓のような所で、いくらじっと暮らしても、愛の中で暮らせば恨がないのです。我々が暮らしながら愛の墓を残せば、人生は永遠において成功するのです。そのように皆さんが暮らして死ぬときは、霊界で神様が息子、娘を連れて歓迎に出てくるでしょう。そのときには、指輪をはめられなかった手なら、天国のダイヤモンドをはめてくれるだろうし、服を着れなかったなら、天国の皇族たちが着る最高の服を着せてくれるでしょう。（九七―一六九）

二) 霊界の所有権は伝道で決定

霊界での自分の所有権とは何かというと、天国の民をどれほど連れていったかということです。それが自分の財産です。永遠の財産です。今からは、それを問いただすべき時が来ました。一日に何百万が伝道される時が来ます。統一教会には、そのようなすごい内容があるのです。世の中を見てください。今死ぬか生きるか、人生とは何か、空中にさまよい歩きながら、落ち着くことができず、狂ったように回って自殺する人がどれほどたくさんいますか。（二一八―二二七）

霊界に行けば、愛の懐が大きいほど、その懐に入ろうと列をなすようになります。その人は、あの世で尊敬されるのです。千人、万人に囲まれて、「あ 7　この人と一緒に暮らしたい」という声を聞くようになれば、その人はそれほど領土が大きい金持ちになるのです。

あの世の金持ちは、どんな人でしょうか。愛のために投入した人が金持ちなのです。

伝道とは福を集めることです。愛の福を集めるのです。天のものを奪っていったサタン世界のどろぼうたちに、主人が愛で探すのです。お前のお母さん、お父さんを私がもっと愛するという、愛の心で訪ねていき、愛に因縁づけられたすべての福を取り入れるということです。

冷遇を受けるとしても滅びるのではありません。その後ろには数限りない聖徒が従い、万物がついてくるのです。ついてくるから、自然に金持ちになるのです。（二〇五―三四七）

霊界に入っていくとき、お金を持って行くのではありません。サタンの息子、娘を収拾すべきです。一人が百二十名以上収拾しなければなりません。天国の民をみな失いました。それを接ぎ木して、失わなかったという条件を立てなければならないのです。

霊界の十二の真珠門を経ていくためには、地上でサタンから天の民を探さなければなりません。そうするためには、涙と血と汗を流さなければなりません。再創造の真の愛の心情を中心として、サタンの父母以上、サタンの夫と妻以上、息子、娘以上の心情を投入して、涙とともに交差する過程を経ずしては、天国の自分の民を所有することはできません。この数の比例に従って、あの世の栄光の立場に、神様の前に近づく条件が成立します。（二一一―三五二）

これから、霊界に行くとき、何をもっていくかというと、お金をもっていくのではありません。統一教会の名前をもっていくのでもありません。これから皆さんがすべきこととは何でしょうか。神様が愛することのできる

息子、娘を、どれくらいたくさんつくるかということが問題です。人々が赤ん坊を産むとしても、何人かしか産むことができません。それは、誰もができることです。

復帰過程で経ていくべきこととは何でしょうか。皆さんがサタン世界で、神様が愛することができる多くの息子、娘をつくるようになるとき、その功労は先祖とつながって、また、先祖を解放させることができる道が繰り広げられるのです。これが復帰路程において、自分が取ることができる最大の贈り物です。

いくら教区長をしたといっても、信仰の息子、娘がいなければ、あの世に行くとき、空き缶を持って行くのです。自分を中心として一人もぶら下がっていないために、そうなのです。

天国は、無限の世界なのに、そこでは愛の心情でつながることができる橋がなければならないのです。それゆえ、自分が伝道した人が世の中にたくさん広がっていれば、霊界に行っては、それほど広く往来することができる道が生じるのです。全部が自分と因縁を結ぼうとします。

地で解いてあの世に行くようになれば、霊界で解くことができる相対的関係になっているから、膨大な活動基盤になるのです。それが全部、自分の所有になるのです。それゆえ、自分が活動する舞台は、その基準を中心として全霊界に通じることができるのです。それがなくなれば、コーナーに追われて活動しにくいのです。ですから、歳月を送って休む間がありません。

御飯を食べて暮らし、息子、娘を食べさせて育てることは、あの世に行くようになれば大したことではありません。それゆえ、天国の民を訪ねていかなければならないのです。それが天国では自分の所有になるのです。

それゆえ我々が、早く世界人類を、この世を消化しなければなりません。早く消化すれば、霊界のすべての霊たちも再臨復活していくようになっています。今、長子権がサタンの基盤ですが、神様の基盤として逆さまになれば、アダムが長子権をもてば、天使長はアダムの言うことを聞いて、ついてくるようになっています。絶対服従する位置に行くようになれば、神様の愛とともに、アダムの愛の圏内にあるために、自然に天国に入るのです。原理がそうなのです。

地上で人間が、この責任を果たせないことによって、裏返しになったために、人間がすべきことは、裏返したものを再び解かなければならないのです。蕩減復帰して、道を開いてあげなければなりません。ですから、伝道という仕事がどれほどとてつもないことかを知るべきです。それゆえ、自分が何人を永生圏内に受け付けさせるかが問題です。統一教会という看板をつけては、何の役にも立ちません。

イエス様がエルサレムに上ったとき、いちじくの木に実があると思って行ってみたのに、実がなくて、それを呪うことによって、いちじくの木が枯れて死んだのです。ちょうどそのようになるのです。うわべだけ良くてどうしますか。それゆえ、自分が祝福家庭を何家庭つくったかということが、皆さんに収穫となるのです。

百二十名、何百名を伝道しなければなりません。それもできずに、自分の息子、娘を愛するというのはあり得ません。原理を見ると、百二十名を伝道しなければなりません。百二十家庭は、イエス様の世界国家を代表したの

です。四百三十家庭は、一国を中心として、その中にある名字と同じです。四千三百年を中心とした四百三十家庭です。それは名字と同じように、国民が天国に入ることができる門を開いておいたのです。門を開いておいたのであって、入ったのではありません。

これは、空論ではありません。理論です。歳月をそのまま送るなというのです。青春時代に息子、娘を産んで、育ててこそ、後代に誇り得る基盤を残すのと同じです。また、その子供たちが、立派な人になってこそ、歴史に誇ることができるのです。そのような歴史に対して、誇り得る実績がなければ、自分の一家や町内ではグループに入れますが、国には入れないのです。国に入るためには、歴史の伝統に残り得る実績がなければなりません。

それゆえ、誰でも国に何かを残すのを願い、世界に何かを残すのを願い、天地に何かを残すのを願うのです。同様な道理です。それゆえ、自分の所有版図をどのように確定するかという問題が、終生の目的だという観念を確実にもたなければなりません。それゆえ、み旨の道で「嫌だから辞める」と考えることはできません。

先生が監獄に入って苦労を一人でしたとしても、その責任をもつということは何のためでしょうか。その環境で、苦労する人たちを救ってあげるということです。苦労する環境で、自分たちが利益になり得るなら、ついてくるのです。ついてくることによって、収穫になるのです。霊界に行くとき、これを全部公的なものとしてもてなされるために、その人は天国の一番高い位置に行くのです。

国民教育をよくすれば、その国が繁栄するのです。同様の道理です。天国の生命圏を中心として、これをどれほど悟らせて、精神を正して、自分以上の実績を残し得るかということが問題です。そのようになるとき、世界は早いうちに復帰されます。それゆえ、精誠を尽くして育てなければなりません。

先生もそうです。先生が今までみ言を語るようになれば、五時間、六時間ずつしますが、そのようにしたくてするのではありません。その骨子は簡単です。十五分話す内容にもなりません。しかし、それを中心として多方面の人たちに、来たすべての人たちに、いろいろな例を挙げて分かりやすく説明して、その人たちをその圏内に共に同参させようとしてそうするのです。目的は、春が来るようになれば、何としてでも種をたくさん蒔こうということです。種をたくさん蒔いておけば、たくさん生えるのです。

では、種を蒔くには、どこに蒔かなければならないのでしょうか。汚れない場に蒔こうとすべきです。汚れない場とはどこでしょうか。青少年たちです。分かりますか。その時一度植えておけば、一生もつのです。その時一度植えておけば、抜いてしまうことができません。

人は、どの時が一番鋭敏でしょうか。小学校の時が一番そうなのです。中高等学校に行けば、だんだん希薄になるのです。大学に行くようになれば、その隣町を経ていくのと同じです。旅をしてきて何かをするようになるのです。一番難しいのが小学校の時です。その次に中高等学校の時です。時がたつほど、だんだん薄らぐようになります。ですから、その時に生命の種を蒔かなければならないのです。

子供たちと遊びながら、童謡も教えてやり、話もしてやれば、それが自分の将来のための永遠な財産を積むのです。年取った人たちも、

会いさえすればみ言を証すのです。統一教会の指導者たちは、このようなことがよくできていません。

バスに乗るようになれば、十人に、どこに行くのかと聞きながら、親しくなればもう一度会って話をしようと言って、また会えば原理のみ言を伝えるのです。いくらでも伝道することができるのです。材料はいくらでもあるのです。伝道しようとするなら、自家用車に乗って回ることより、バスや地下鉄に乗って回るのが良いのです。通勤時間に一つのコースだけ行っても一年十二カ月を毎日通ってみると、顔が分かるようになります。ですから、あいさつするようになれば、互いが受け答えすることのできる人脈がつながり得るのです。そのような道が通じているのに、なぜ歳月だけ送るのかというのです。

御飯を食べることよりもっと重要なことが、天国の民を取り入れることです。それが我々には、うまくいっていないのです。それが本職です。この地上に生きる我々の本業です。生涯にすべきことの中で、それ以上貴いものはありません。就職して出世したり、お金を集めたりしたものは、みな流れていくのです。あの世で、お金は何の役にも立ちません。あの世では、物質が必要でなく、知識が必要ありません。習わなくても、心が先に分かるのです。一週間以内に、何でもみな通じるのです。

そして、あの世では、権力が必要ありません。霊界で必要なのは愛を中心とした和合力です。愛を中心とした感化力です。それゆえ、愛を中心として感化力をもてなかった人は、愛で感化され得る本然の世界に行っては、本質的に和合をせず、反発するのです。それは地獄に行くのです。

皆さんが、今まで統一教会に入ってきて、暮らしながら働くと言いますが、どの立場で働いたかを考えなければなりません。方向がどこで、位置がどんな場なのかをいつも考えなければなりません。そのようになって、祈祷すれば、神様が自分と共にされるというのです。そのようになって、目をつぶりさえすれば分かります。祈祷をしなくても分かるのです。どこかに行って話せば、言葉がすらすらと出てきます。良心のある人に行けば、自分がずっと引かれて入っていくのです。

全部が相対的です。花も、自分と相対し得るものを引っ張る力があるのです。自分の主体や対象になれば、引っ張るのです。初めて会ったと言って、相手にならないのではありません。磁石がそうです。その本質は、永遠に不変です。それと同じように、そのような所に行くようになれば、心がうれしく、言いたくなるのです。その境地に入れば、話すまいとしても口が開くのです。

皆さんが、これからあの世に行って、復帰歴史をされる神様の前に、一人のアダムを探すために、今まで苦労した神様の前に行って、何と言うでしょうか。神様は創世以後、今までアダム完成者を探してきました。そして皆さんは、原理を知りました。これは数千、数万の民を救うことができる武器です。今まで神様が人間に教えることができず、知らないうちに摂理されました。それに代わって、地上で神様の理想の仕事を我々がするのです。我々には原理で数百、数千のアダムを教化して連れていくことができる道があります。

ですから、生命とつなげなければなりません。永生問題は、深刻なことです。春になれば、娘たちが山菜を摘みに探し回るのと同様に、自分が要求するものがどこにあるかを探

し回るのと同様に、皆さんは一生をそのように生きていかなければなりません。そうして、相手が現れれば、夜通しで彼のために原理のみ言を伝えてやるという心をもたなければならないのです。一度会って感動を与えるためには、精誠を尽くさなければなりません。

皆さんがすべきことは、天国に連れていくことができる息子、娘を探すことしかありません。いくら億千万の金をもって、豊かに暮らしても、そのようにみな流れていくのです。自分のすべての物質と知識と生命まで、投入してでも、しなければなりません。それを別々に投入するのではなく、「一遍に投入して天国の民をつくる」と言うべきなのです。投入する全体が加重するに従って、その価値は比例していくのです。

ここの統一教会の長という人たち、肩に力を入れて誇り、そのように考えるかもしれませんが、恥ずかしいことです。自分を中心として、いくつの生命を救ったかが問題です。

皆さんが、どれほど永遠に天の前に功績を褒めたたえられるかということは、どれほど天国の民を収穫して取り入れたかという問題にかかっているのです。それを取り入れる鋤が今まではありませんでした。知らないからできなかったのです。ですが、皆さんには背負子があります。熱烈にみ言を伝えるようになれば、爆発的な収穫を収めることができるのです。しかし、そのような内的な実力をもって歳月を送っているので、神様が雷を落としたいはずです。

夜十二時が問題ではありません。明け方が問題ではありません。夜も昼もそれが問題ではないのです。天は、それを受け入れるのを願いますが、「ああ、私は眠りたいです」と、そう言えません。その立場は直行する立場です。

永生問題を教えてあげなければなりません。これからは、皆さんが責任をもたなければなりません。それゆえ、今まで私は、統一教会に反対する人を呪うことができませんでした。天は、自分と関係を結び、決定づけるのを願うのに、その人が落ちれば、我々の統一教会の責任だというのです。先生が責任を取らなければなりません。サタンによって、世の中が反対するようになりましたが、その反対される環境を早く克服すべきことが、我々の責任なのです。それができないことによって、被害を受けるすべての環境は悲惨なのです。

それは、赤ん坊にお乳を飲ませるのと同じです。赤ん坊を産めば、お乳を飲ませなければなりません。それゆえ、会いに訪ねてくるのです。訪ねてくれば、絶対冷遇してはいけません。先生も一生をそのように暮らしています。誰が夜十二時にここに入ってきても、その人が行きたがらなければ、自分が座り続けるのであって、「行け」とは言いません。その人は、必要なものがあるために行きたくないのです。それなら、み言を語ってあげなければなりません。先生は一生をそのように暮らすのです。絶対事務的ではありません。霊界はいつも覚めています。

皆さん、統一教会員たち同士けんかをし、一人でも落ちれば、その被害は大きいのです。その人がこれからみ旨を知って、天の前に自分の責任を果たすとき、何千名、何万名を救うことができる、自分よりましであり得る、驚くべきこともあり得るのです。ですから、人事措置を誤れば、全部引っ掛かるのです。それゆえ、自分が低い所にいて、みな高い所に置こうとすれば、引っ掛かる所がありません。それが謙遜だというのです。

しかし、誤れば下がります。夜に妻と子供たちがいる部屋に入るとき、父として責任をもって、夫として責任をもたなければなりません。夫がうまくすれば、あの世で妻が自分についてくるのです。もちろん、その父の家に入るためには、訓練過程がありますが、ただそのまま行くことができれば早いのです。あの世は、許しのない世界です。その世界に拍子を合わせるために、今準備をするのです。

そのことのためには、飢えてもしなければならないのです。「御飯を食べてきて、しよう」と言ってはいけません。今ダイナマイトの導火線に火がついて、爆発するはめになったのに、御飯を食べてはできないのです。深刻なのです。それゆえ、永生問題をどのようにつなげるかということが問題です。

電気で言えば、全部送電所を経て、配線器具につながってこそ明かりがつくのと同じです。発電所の電気がここに来ているのです。つながってこそ残ります。

それで、信仰の息子、娘を自分の息子、娘よりももっと愛し、信仰の息子、娘は、信仰の父母に、自分を産んだ母よりももっと「ため」にしなければならないのです。自分を産んでくれたのは、サタン世界の父母ですが、信仰の父母は天の世界の父母のために、自分を産んでくれた母よりももっと「ため」にしなければならなりません。そして、信仰の息子、娘たちは、全部自分を救ってくれた人の子供たちを精誠を込めて育てて、結婚させてあげるべき責任があるのです。み旨がそうなのです。ですから、その子供たちを全部育ててあげなければなりません。

それゆえ、永生問題とつなげなければ、すべてが無駄です。彼らがみ言を聞いたとして終わるのではありません。催促し、催促して、祝福の場にまで出させなければなりません。祝福を受けなければならないのです。それで、祝福を受けて伝道するようになれば、それは自然につながるのです。難しい環境のサタン世界で、迫害を超えていくことができれば、その人は、既に生命の道に入るのです。祝福を受けるところまで行けば、終わるのです。

そして説教をしても、「私」というものが生きていてはいけないのです。血と汗を流しながら、話さなければならないのです。出産の苦労をしなければなりません。涙を流しながらしなければなりません。皆さんの目から涙が乾くようになれば、それは偽者です。

（一九九二・四・一五）

三)　息子、娘をたくさん生むべき理由

統一教会の人たちは、神様を知らない人がいません。霊界を信じます。愛から始まって、神様から分かれて出てきて、結局は神様に帰る路程です。

霊界に行けば、本当に一心同体になった夫婦は、いつでも男が女になり、女が男になることができるのです。愛は一体だと言います。女の中をのぞいてみれば、男が入っています。その夫が入っているのです。神様の二性性相と全く同じです。性相と形状、それが分かれて出てきたために、その本体に帰るには、愛のはしごに乗らなければなりません。創造の基準が愛から始まったために、このはしごに乗って入らなければなりません。結局終着点は、神様と共にするのです。

霊界では赤ん坊を産みません。霊界は縦的な世界です。神様を中心として円形を成した世界なので、赤ん坊を産む必要がないのです。横的な基盤が必要であるために、人間を、体

として造ったのです。繁殖する畑です。霊界の民は、全部この地球から行くのです。このように考えてみれば、今産児制限をなぜすべきなのか分かりますか。それは、天命によるものです。悪なる血統をこれ以上繁殖させるなというのです。

統一教会の祝福家庭は、どれほど天国の国民を繁殖させるかということが財産です。信仰の息子、娘より、自分が生んだ息子、娘がもっと価値があるのです。信仰の息子、娘は、祝福という関係を知りません。そのような息子、娘をどれほど残していくかによって、天国で自分の位置が決定されるのです。（二〇五―九九）

完成は地上でするのであって、霊界でするのではありません。地上で「真の父母」を中心として、可能なのです。霊界ではありません。それゆえ息子、娘を生まなければなりません。息子、娘が正に天国の民になるのです。皆さんの息子、娘が、理想的な天国の民になるのです。ですから、皆さんが息子、娘をたくさん産まなければなりません。本来は十二方向以上にならなければなりません。それで、先生が十二方向以上を願います。（二一七―一三〇）

息子、娘がいなければ、天国が繁栄しません。ですから祝福家庭たちは、地上で産児制限してはいけません。飢えて死んでも、全部霊界に行きます。飢えて死んでも、愛の中で飢えて死ねば、天国に行くのです。それゆえ、サタン世界は産児制限しますが、統一教会では産児制限をしてはいけません。

先生がみ旨のために苦労しましたが、飢え死にはしませんでした。我々は飢えて死ぬような場に行っても、生きることができるのです。そのような訓練が、みなできているのです。

絶対的な愛のために、すべてを犠牲にするようになるとき、神様も調節することができ、サタン世界も調節することができ、天運も調節することができるのです。調節するのは何でしょうか。神様がついてくるということです。神様がついてきて、この世界がついてきて、天運がついてくるのです。（二〇一―一三三）

皆さんは、地上で子女を立派によく育てて残していかなければなりません。将来、その子女はすべて霊界に行くのです。霊界に行って、天国の国民になるのです。自分が何人を天国の国民として捧げたかというとき、地上ではつらいことでしたが、永遠の世界では、それが高貴な栄光の道になるのです。

地上では、教育とか、食べさせることの問題で、とても苦労します。しかし、霊界では、食べるものは問題ありません。着ることは問題ありません。暮らすことは問題ありません。できるだけたくさん、たくさんいればいいと思うのです。（二一八―三一九）

霊界に行けば、繁殖がないのです。神様は、縦的な父母の立場でいるために、一点しかないのです。（二二一―二〇四）

神様がすることとは何でしょうか。世の中を救うことです。霊界に行ったすべての次元の高い人たちの仕事とは、地の仕事です。地とはどんな所でしょうか。天国の国民を生産する生産工場です。広大無辺な天国です。

一人が子供を約百人ずつ産んでも、天国は広いので過剰生産ということはありません。あの世は、いくらでも収容することのできる

世界です。産児制限してはいけません。あの世に行けば、天国の民を、どれくらいつくって率いてくるかということが問題になります。真なる天国の息子、娘をたくさん率いてくるとき、それが自分の権益になり、天上世界で表彰され得る等級の等差を設定し得る資料になるというのです。（二〇二―四〇）

九)　死の前での姿勢

イエス様がみな教えてくれました。「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」と教えてくれました。世の中に、そのようなでたらめな言葉がどこにあるでしょうか。そのような言葉はありません。しかし、その言葉は事実です。

では、死ぬのはなぜ死ぬのでしょうか。死ぬ目的とは何でしょうか。生きるためにです。生きることには何かの目的があるのです。生きていく人間の目的は、全部違います。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）というのは、何のためでしょうか。神様の息子になるためです。神様を愛するために、首を差し出せということです。その首が一つしかないのに、差し出せというのです。どこに行って死ぬべきでしょうか。あのどん底に行って死ぬのではなく、最高の立場で死ななければなりません。

それゆえ、天国を中心として死ぬべきです。天国は世界のどの国よりも大きいのです。天上天下の、一つしかない天国で死ぬのです。

では、どこで死にますか。これが問題です。死ぬのにも方法があるのです。死ぬのにも場所があるのです。つまらない韓国的なものをもってしてはいけません。韓国的なものをもってしては、いくら死んでも駄目なのです。最高の立場、神様の心情の国を中心とした、最高の立場で死ぬべきです。天国の真ん中で死ぬべきなのです。その天国が一番です。天下が、旗を掲げて歓迎する立場で死ぬべきです。（三四―一八四）

今日、我々は最後の復活の一日、希望の一日を願っています。すべての人が願っている、その希望の時は、万民が楽しむことができる希望の時とはいえ、その時はたやすく近づいてくるものではありません。そして、その希望は、死に勝った者だけが所有することができます。その希望は、神様と共に、サタンと戦った者だけが占有するでしょう。その希望は、天のために、神様と共に迫害を受けた者であってこそ、占有するでしょう。

このような時が、我々の前に来るということを考えるとき、この生活環境を乗り越え、死の恐怖までも乗り越えることができる切なる心をもたなければなりません。そのような切なる心が、皆さんからわき出なければ、その希望の一日を皆さんの生活圏内に引き込んで暮らしていくことができないのです。

それゆえ、真の生活をするという人は、「私がどんな姿で死ぬのか」ということを考えるのです。八十年生きて死ぬその時間になってやっと、「私はどんな姿で最後の一日を飾るだろうか」と言ってはいけないのです。イエスは死の場に行って「すべてが終わった」、「父よ、私の霊をお受けください」と言いました。やはりその方は、人生行路に勝利された方でした。

皆さんは、これからある一日に死ぬようになります。そして死を前にして過去を回顧しながら、そのとき、どのような一言の言葉を

残して行くか、ということを考えなければなりません。

この道は、友達もいないのです。愛する父母もいない道であり、愛する兄弟もいない道であり、愛する夫婦、愛する子女もいない道です。ただ一人で行くべき道です。再び行ってみることもできず、行って帰ってくることもできず、一度行けば永遠に帰ってくることができない道です。このような道を行くようになるとき、皆さんはどのような心をもって行くのでしょうか。皆さんが死に逢着するその瞬間に、その死を乗り越えることができる希望がなければ、そこで最後です。

今日まで神様のみ旨を奉じて、神様のみ旨を立ててきた数多くの人たちは、どのような人たちがいるかというと、死の道の前で後退した者たちではなく、死をあざ笑い、死を堂々と乗り越えた人たちでした。そのような人たちが、天の道を立ててきました。

皆さんは、死に逢着するようになっても、それを乗り越えることができる希望を抱かなければなりません。そして、この道を越えてしまえば、自分は天の前に堂々と立つようになるだろうという希望と、心で憧れた本郷に向かって、喜びで走ることができなければなりません。神様の理想世界を希望する心が切実であってこそ、死に勝つことができる存在になるということです。

世の中の万事は、みな過ぎ去ってしまいます。愛する父母、愛する妻、愛するすべては、みな過ぎ去って、あとには死の前に逢着するようになります。しかし、その死までも過ぎ去ってしまうようになる勝利的な希望をもった人であってこそ、この天の前に立つことができます。

今日、地上に生きている人間たちは、苦痛の道や悲しみの道を願いません。ある喜びの場面があれば、その喜びの場面が過ぎ去るのを惜しく思い、懐かしむのが人間の心性です。

我々が生きているこの地は、悲しみと喜びがひっくり返っている世の中です。我々が楽しんでいるこのすべての喜びは、死とともに消え去る喜び、すなわち死を越えて残り得る喜びになり得ないというのです。

では、悲しみが死とともに消え去り、楽しみも死とともに消え去れば、人間が喜びを探して、もっと良いものを願い、永遠の世界に憧れるその心も、死とともに終わるでしょうか。違います。心がそのような方向に動き、心情がそのような方向に動くということは、そのような世界が実際にあるという証拠です。

人間は、霊的な存在であるゆえに、その生命は永遠です。天の前に忠誠を尽くし、天のために死の道も行き、多くの人が嫌だという道も希望を抱いて行った人がいれば、彼は普通の人たちが感じられないものを感じ、普通の人たちが分からない価値を知ったのです。そうなったので、死の道も行くことができるというのです。

皆さんの憧れることが、現実生活でぶつかるどんな逆境と困難と悲しみ、あるいは死よりも、もっと強くなれなければ、皆さんは死の前で後悔する者であり、悲しみと苦痛の前から後退する者にしかなれないということです。イエス様が死の峠を越え、永遠の世界に行かれたので、復活の世界を建設されたので、今日我々も、どうせ死の峠を越えなければならない運命に置かれているのです。

では、天の希望を抱いて生きる人は、どんな人でしょうか。人間が悲しむ死の峠も喜びで乗り越えることができる人です。それは人

が天の希望を抱く者です。それゆえ、皆さんは死を前にして、世の中の万事を恨んで嘆息する人にならず、天の前に立って自分の死の価値を誇り得る人になるべきです。天は、このような希望の息子、娘たちを探しておられます。

このような立場に立って、天の喜びを感じた人がいるならば、彼は神様が愛すまいとしても愛さざるを得ないのです。そのような立場で天に対して泣き叫ぶ群れがいるとしたら、天がその泣き叫びに答えまいとしても答えざるを得ないのです。（六―五三）

み旨のために「死なんとする人は生き、生きんとする人は死なん」というこの言葉はどういう意味でしょうか。み旨のために死ぬべき立場では、死ななければならないのです。

では、死ねばどのようになるのでしょうか。死ぬ前までは自分のものですが、死んだのちには神様のものになります。それは、我々が堕落した血統を受けたためです。それゆえ、死ぬ前までは、我々の生命が、サタン側の因縁を逃れられないのです。しかし、死んだのちには、神様と因縁が結ばれるのです。

生命と死について見るとき、どちらが強いでしょうか。死より生命がもっと強いでしょうか。生命より死がもっと強いですか。サタン世界では、生命より死がもっと強いのです。それゆえ、み旨を知ったのちには、死ぬべき立場で死ぬのを嫌がってはいけないのです。

サタン世界では、どうせ死ななければなりません。死ななくては、復活することができません。一つの時代が過ぎなければ、他の時代を迎えることはできないのです。

では、聖書で言う、「死」とは何を言うのでしょうか。神様が、永遠にもつことができる生命を殺せというのではありません。サタン世界の堕落した血統を受け継いだ生命を殺せというのです。ですから、み旨のために死のうとする人は、生きるのです。この言葉が、逆説のようですが、堕落と復帰の内容を中心として見るとき、そのようにしなければ復帰ができないのです。これは、復帰の正常的な論法です。

それゆえ、生命を差し出すことができるかというのが、最も大きな問題です。先生がこの道を出発するとき、生命を差し出すことができる覚悟ができているかを考えました。

先生は、死ぬ覚悟をしました。死ぬとき、どのように死ぬかも考えました。そうしながら、死ぬ時は、どんな言葉を残して行くのかを考えました。どのようにすれば生きるかを考えたのではありません。

大韓民国を中心として、役事しなければならないために、死ぬ立場を訪ねていったのです。死ぬ立場とは、どこでしょうか。怨讐と対決する立場、すなわち怨讐を訪ねていったのです。怨讐の本拠地を訪ねていったのです。韓国のキリスト教を中心としたみ旨の基盤が、サタン側に回ったために、それを探すためにサタンの巣窟である北韓に行ったのです。

先生が、今後の世界的な共産党と戦わなければならないために、それのために北韓を訪ねていったのです。手錠をかけて牢屋の身になるのを覚悟して、不倶戴天の敵の国を訪ねていったのです。いくら暴悪な試練が私に襲いかかってきても、私はそれに屈服しませんでした。いくら極限の飢えの立場でも、神様の威信を失いませんでした。組織的な生活圏内で、いくらつつかれる生活をしても、天の法度に背きませんでした。

先生は、すべてのことが拘束されても、その拘束される基準で、すべてを探すことができ、さらに神様の前に新しい出発の動機と、新しい生き甲斐を探してきました。そのようにして出発したのです。先生は、「ありとあらゆる重労働をする立場に入っても私は負けない、他の人はみな死んでも私は死なない」という信念をもってきたのです。

統一教会は、生きようとする所から出発したのではなく、死のうとする所から出発したのです。しかし、皆さんは統一教会のみ旨を知ってから、死を覚悟しましたか。自由党時代の特務隊長金昌龍殺害事件の首謀者である、許大領（大佐）が死刑を受けるときに、「今回のことを計画して指示した者として恨がないか」と聞くと、彼は「何の恨もない」と言いながら男らしく死んでいきました。そのような殺害事件や銃殺事件が起これば、それを自分と比較してみなさいというのです。比較してみながら、自分は果たしてどのように死ぬだろうかと考えなさいというのです。

怨讐の謀略で、国家の大反逆者として追い込まれて死ぬこともあるでしょうし、同志の妨害や、友達の妨害、あるいは愛する人の妨害など、いろいろなことによって死ぬこともあるでしょう。しかし、死ぬときには、世の中のためになる心で死ななければなりません。恨みを抱かずに死ななければならないのです。どうせ死ぬからには、恨みを抱かずに何かを植えておいて死ななければならないのです。怨讐を怨讐ではない友達として愛しながら死のうということです。そのような意味から見るとき、イエス様が十字架上で怨讐のために祈ったのは、偉大なことです。（三四―四七）

十　霊界に入るとき

一)　死が差し迫ったとき

人生の勝敗は、何十年の期間によって決定されるのではありません。それは一瞬に決定されるのです。我々の人生について見ても、皆さんが生まれるその瞬間は、長い時間ではありません。もちろん、生まれる前までの腹中の時期がありますが、その腹中の十カ月という期間は、出生する一瞬のための準備期間です。ところで、十カ月間いくらよく準備したとしても、決定的な一瞬をうまく越えられなければ、生まれるその赤ん坊は悲運の運命を迎えるようになるのです。

十カ月の期間を安全な生命体として絶えず育ててきたのは、生まれるその一瞬を飾るためです。言い換えれば、出生を見通す目的の一瞬のために、腹中時代があるのです。それゆえ、腹中時代がいくら立派だったとしても、生まれる一瞬に誤るようになれば、悲運の結果を迎えるようになります。（三一―一八五）

この地上に生まれて、運命の瞬間を迎える最期の場で、過去を悔いる人がいるなら、その人の心には、過去のすべての事実が、映像として過ぎていくでしょう。これこれこういう人だということを、誰が教えてくれなくても、自ら分かるでしょう。先祖から受け継いだ生命体をもって、今まで因縁づいた環境と、残しておいた事情など、過去のすべてが一生の最期の瞬間に、自分の心に映像として現れるでしょう。

その中で、「真があった、自分の生命よりも貴い何かを残した」という人がいるなら、彼はたとえこの地に生まれて死んでも、甲斐ある一時を残す人になるでしょう。しかし、「生まれて死ぬこの一生の行路が、通行人の

ようにただ通り過ぎるものだった」という人もいるのです。そのような人のすべての過去の事情を回想してみるとき、そのすべての事情が、頭を振って回想したくない過去をもったなら、彼は悲惨な人です。過去を回想すれば回想するほど、自分の顔に歓喜があふれ、自分のすべての問題が理想に浸ることができるなら、死の恐怖も彼には慰労の一場面として飾られるでしょう。

このようなことを見るとき、過去を回想する瞬間が、恐怖の瞬間でなく、他の何かを残したなら、彼の過去も死なないのであり、現実も死なないものとして現れるでしょう。そうできる過去をもった人は、必ず民族が従ってくることができる因縁をもった人であり、世界万民がついてこざるを得ない因縁を残した人だと見ることができます。

では、それはどのような事情でしょうか。ある民族に、当面した問題を解決できない悲惨で非情な時があるとき、その問題を自分が責任をもって解決するために、命を懸けてそこにぶつかった時があったなら、それはその過ぎ去った時の中で忘れられない一時であるでしょう。

生涯路程で、自分のために死の場まで行くことより、兄弟なら兄弟、親族なら親族、他人なら他人のために、自分の命をみな捧げて彼らを救ったなら、彼らを救うためにぶつかった時があったなら、そのような事実が最後の運命の場で、彼の心の線上に映像として現れ得るということになるでしょう。いくら自分を中心とした幸福な時があり、数多くの群衆から歓迎されて、自分が光栄にたたえられた聖なる時があったとしても、それはその瞬間には効力を発揮できないようになっています。

善であったか、真になったか、神様の前に一人立つことができたかという問題について見るとき、真と善は自分から始まり、自分に終わるのではありません。自分から始まり人に結果を結ばせるとか、人によって始まって自分に結果をもたらすことができてこそ、善になり得るのです。我々の原理で、天地のすべての存在は与えて受ける因縁を経なければならない、というのと同じです。

過去の生活が与える生活だったなら、死の道にも恐怖がないでしょう。人のためにすべてを与えて、人のために犠牲になり、真に近い生活をしながら、涙も人によって流し、自分の命も人によって投入し、自分の願いも人によったものなので、自分の脈拍から流れ出るすべての生命力を引き集めて、人のために投入したというなら、その過去は輝き得る過去でしょう。

そのような過去を懐かしがりながら、民族を思うようになるとき、希望の民族はこのような民族であるべきだという結論が出てくるでしょう。彼がそのような過去を懐かしがるようになるとき、人のために犠牲になり、希望する本然の善は、こうであるべきだという決定を下すことができるのです。「私がそれのために戦ってきた過去があるために、必然的にそうすることができる未来がなければならない」という内容をもって、神様の前に行くというとき、その内容は、自分の永遠の生命の基盤になります。

聖賢が行く道と、凡人が行く道は違います。聖賢は、歴史とともに生きようとし、世界とともに生きようとし、未来とともに生きようとした人です。しかし、凡人は、自分によって生きようとし、世界も自分によってあるようにしようとした人です。

二) 霊界に入るとき

我々人間が暮らす生活を見ると、生まれてみな同じ生活をします。転がっていっていますが、これがだんだん弱くなるか、だんだん強くなるのでしょうか?

自分を知って、ある決心をしたのに、その決心したものが十年になり、二十年になり、三十年の生涯路程を経て、五十、六十、七十、八十年、老後の生活圏に入っていけばいくほど、だんだん小さくなります。これが問題です。作用すればだんだん小さくなるようになっています。自然力学世界でなされるのと同様に、ある力があれば、その力を中心として作用すれば、小さくなるのです。

それゆえ、入力、入ってくる力、電気で言えば入ってくる力が、どのようなモーターを回しても、作用をしていくときには小さくなるのです。ここには、必ず消耗が起きます。

このように見るとき、我々は一生の間、停止していることができません。一生の間動くのです。否応なしに動くのです。動くのに、正しく動くか、間違って動くか、いろいろあります。

では、人間が行くべき、自分が転がっていくべき方向とはどこでしょうか。どの方向に行くのでしょうか。それを知らずに転がっています。岩にぶつかるか、あるいは、ある下水のたまりに落ちるかもしれない立場で転がっていく生活をするというときに、それがどれほど危険千万なことか。どれほど不幸なことか。どれほど不安定なことか。これが問題です。

霊界に入るようになれば、今日我々人間たちが、空間と時間圏内の内容をもって測定したすべてのものでは、相関関係もなすことができません。その世界は、時空を超越した世界です。（一四一—二七〇）

霊界に行くようになればどうでしょうか。心霊基準があります。一度なら一度の限界内においての心霊基準があるために、一番最初にあの世に行く時は、祝福された人たちも、ある時は分かれます。なぜでしょうか。心霊の程度が違うからです。（一六四—六二）

皆さんは、天国の何になるでしょうか。大使になりますか。その大使館で使いをする僕になりますか。大使にならなければなりません。大使になるのは易しくありません。死ぬことがあれば、彼が先に死ななければなりません。

私たちは、霊界があるということを知っています。この世界よりももっと確実なのです。その世界は、どんな世界でしょうか。神様が良いと言うことができる構想で、すべてが可能な世界です。（一〇七—五六）

皆さんは、天国に行く時に、礼物として持っていくものがあるでしょうか。霊界に行けば、殉教した功臣たちが前にずっと並んでいるのに、彼らの前に、皆さんが包んでいったふろしきを開いておくことができるでしょうか。

統一教会が何の苦労をし、皆さんが何の苦労をしましたか。それだけの苦労もせずに、どうして国のため、世界のためだと言いますか。「苦労をしたにはしましたが、私は苦労したと思いません」と、それでこそ当然なのです。

まだ行くべき道が残っています。霊界に行ってふろしきを開いておいて、「これは一生

の間、私が準備した贈り物なので、お受けくださいませ」と言えなければならないのです。女たちが嫁に行くときは、一包みずつ持っていきながら、天国に行くときは、ひょいひょいと体だけ行くことができますか。（三二―七一）

皆さん自身において、自主性をもたない人は、霊界に入れません。霊界にも霊界なりの世界があり、国があり、氏族があり、家庭があり、個人がいます。個人を中心として見るとき、「そこで絶対的に必要な存在だ」と言うことができる自主性がなくては入れない所が、天国です。

家庭を中心として見るときも、氏族を中心として見るときも、やはり「自分が絶対的に必要だ」と言うことができる、そのような自主性がなければなりません。そこで自分が絶対的に必要だという自主性があってこそ、行くことができる所が天国です。（一九―四五）

霊界では、天地というもの、地球というものは、ほこりの一点のようなものです。霊界はどれほど広大か知れません。時空を超越した無限の世界です。そして、「ある時代に、これこれこういう心情をもって、地上で生まれて暮らして行った人がいれば、ここに直接出てきてみろ7」と言えば、瞬く間に現れます。そのように、直感的感覚が現実化する世界です。

一度に百万名の宴会をすると言っても問題です。「私がこのような理想的な愛の喜びを、みなに分けたくて、晩餐会をもとうと思いますが、女はこのような服、男はこのような服を着て現れろ7」と言えば、すぐに現れるのです。食事も、果物も問題ありません。瞬く間に願うとおりに現れます。そして、おなかがいっぱいになれば、残ったものはどのようになるのでしょうか。

そこでは炊事場もありません。そこでは、何の心配もする必要がありません。そこには食糧を作る工場もなく、自動車を造る工場もなく、何もありません。花は、いろいろな花があります。家も、愛の心情の基準に相応する、そのような家を自分が願うとおりに、いくらでも造ることができます。（二二四―一〇五）

凡人は過去を思えば暗黒ですが、聖人は過去を思えば光明です。その光明とは何でしょうか。それは、自分のためのものではなく、希望の民族を描き出すことができるのです。それゆえに希望の天国があるなら、その天国は彼らによって出発を見なければならないのです。それが天国です。

皆さんは、見るからに険しい環境を備えたこの堕落圏内で、皆さん自身が行く姿を図表を書いてみるようになるとき、一年はこのように行き、一年はあのように行くだろう、あるいは十年はこのように行き、十年はあのように行くだろうと言って、自分なりに一生の行路を計画しながら、高低を予測するでしょう。その高低が、自分を中心として高くなった、低くなったという人は、最後の運命を迎えるようになるとき、自分のために生きながら、人を犠牲にしたそのすべてが、自分をがんじがらめにするでしょう。（三一―三〇八）

皆さんが「七十になっても私はこのように行く」ということを一度考えてみましたか。「年が八十になって死ぬ瞬間にも、私はこのように行く」ということを考えてみましたか。死ぬ場でも、「私はこのように歴史を明らか

にし、今までこの時代にこのようなことをし、これからもこのようなことをすることができる私が死ぬが、お前たちが代わりにしてくれ」と言える証拠物を提示できなければなりません。

それを言葉だけで言ってはいけません。彼が死んだときに人々が彼にしがみついて、涙を流して「そうだとも、そうだとも」と、そのように言えなければなりません。（七三―一一六）

三) 霊界の手続きに必要な証明書

皆さんは、最初にどこで証明書をもらってくるのでしょうか。「私はこのようになった。このようなことをした。これが勝利の証明書だ」と言い得る証明書をもらうべきでしょうか。

そのような証明書を自分自身が使うことはできません。では、誰が使うのでしょうか。初めには、サタンが使います。神様は使うことができません。サタンから、その勝利の証明書をもらわなければいけないのです。イエス様は、それはよく知っていらっしゃいます。それで、三年の公生涯路程の出発のときに、四十日間サタンを呼び出して証明書をもらう戦いをされました。それが三大試練でした。

イエス様が三大試練を勝利すると、サタンは「あなたは、民族的に勝利しています。ですから、私が証明書を書かざるを得ません。そうでなければ、私の活動舞台をすべて天の側にすぐに捧げなければならないためです」と言ったのです。

それゆえ、皆さんは、まずサタンに証明書をもらい、イエス様の証明書をもらわなければなりません。その次に、神様の証明書をもらわなければなりません。この三つの証明書が必要です。（一五―一二一）

十一　死んでみてこそはっきり分かる

皆さんが、祈祷で霊界と通じるようになれば、霊界では後孫たちを天の前に近く立てるために努力しているということを知るようになるでしょう。しかしここでは、先祖の悪口でも言って、自分だけよく生きようとします。

それゆえ、死んでみてこそ分かるのです。先生の言葉が合っているかいないか、死んでみれば分かります。しかし、死んで生き返ることができればいいですが、死ねば終わりです。ですから、人々は、統一教会の文先生が恐喝をしても、とてもすてきな恐喝をする、誰もできないとてもすてきな恐喝をすると言います。しかし、死んでみなさいというのです。先生が何か言うことがなくて、このようなことを言っているのではありません。（二二―三三八）

神様の最高の愛は、どこで発見するでしょうか。王宮ではありません。死んでいくあの地獄のどん底に、血を流して倒れていくその中に、神様の最高の愛を占領し得る道があります。

先生が共産地下の監獄にいるとき、言葉を話さなくても霊界から伝道しました。それで、先生のために死を覚悟して、どんなことでもできる弟子たちをもっていました。私が世の中の悪党なら、監獄を爆破して出てくることができる道が、いくらでもあったというのです。そのような立場に神様が共にするのです。（九一―一七五）

十二　「ため」に生きれば神様の近くへ行く

霊界は三段階になっています。霊界では、誰が高い所に上がるのでしょうか。より「ため」にした人です。

自分のためにした人は、反対の世界が繰り広げられます。それも同様に、三段階です。「ふん 7　我々はお前のようなのは嫌だ 7」と反対するのです。自分のために生きた人は、全部反対し、人のために生きた人は、全部歓迎します。

地上に生きて霊界に行った人たちで、高い所に行く人たちは、全部人のためにした人たちです。世界四十カ国なら四十カ国を回りながら、自分の母と家庭を拡大したような心情で「ため」に生きた人たち、世界の人々を全部悪から救ってあげる聖人の心をもった人たちが、高い所に行くのです。

それで先生は、「私は一人の男として、歴史時代の孝行者を代表した総大将であり、愛国者の総大将であり、聖人の総大将だ。神様の息子という名前をつけたすべての人たちは失敗したが、私は勝利した息子として生まれた」と考えます。そのように言えるようにしてくれるものは、たった一つありますが、それは何でしょうか。簡単です。絶対「ため」に生きることです。与えて忘れ、「ため」にして忘れてしまって生きる人だけが、その世界を消化することができます。

皆さんが天国に行く輩か、地獄に行く輩か、はっきり知るべきです。レバレンド・ムーンが、ただ考えて言う言葉ではありません。霊界をよく知っている人です。

死を避けることができる人は一人もいません。死を避けることはできないのです。自分のために生きた人は、地獄に行くのであり、人のために生きた人は、天国に行くのです。この二つの世界が、死から分かれるのです。（二〇三―一〇〇）

これからどんなことが起こるかというと、自分の財産を天のものとして捧げるための仕事が繰り広げられます。

「ため」に生きなければなりません。全体のために、より大きいことのために生きなさいというのです。世界のために、神様のために、人類を解放するために生きなさいというのです。自分によって、新しい血筋に転換させなければなりません。

血筋が引っ掛かっているために、今まで神様が無力な神様になりました。今は、転換時期に入ってきたので、自由天地が訪ねてくるのを知って、皆さんが善の種を植えなければなりません。自分がどのようにすべきか、よく分からなければなりません。これから、メシヤの一族、天国の国民、永遠の天国とつながり得る、永生をもった群れになるべきです。（二〇三―一八七）

これから何の競争が起こるでしょうか。互いが「ため」にしようとすることです。なぜでしょうか。天国では「ため」にする人が高い位置に行くために、その高い人のために自分がなれば、その人に乗って飛躍できるからです。ケープ・ケネディ（現ケープ・カナベラル）に行けば、人工衛星の発射台がありますが、そこで人工衛星が発射されて空に飛んでいくのと同様に、そのようになるのです。

その人のためにすることは、神様が創造して相対を造ったのと同じであるために、その人の愛の対象圏に立つというのです。誰かについていって、「ため」にするのも、みなそのためです。

先生のためにするのは、先生を利用しようしてしまおうということです。先生の愛の対象になって、飛躍して、神様を占領しようというのです。

人工衛星が出てきたのは、今日信仰者たちが跳躍して、天国にどのように行き、何千里、何万里をどのように行くかということを表示するものです。

どうせ、人間は本然の故郷に帰るようになっています。世の中の故郷もあるでしょうが、それよりも本然の故郷に、永遠の故郷に帰るようになるとき、そこで歓迎され得る内容を備えられなかった人は、悲惨なのです。グループに入れないということが、どれほど途方もないことかが分かるでしょう。（二一三―一九四）

今までは家庭がありません。しかし、今から家庭の組織が始まるのです。全部分かれていったのです。なぜでしょうか。文化背景が異なり、心情的背景が異なり、暮らす風習が全部異なるので、みな分かれたのです。

ですから、家庭とは何かというと、新しい風習と新しい文化をつくって、習慣化する所です。しかし、家庭がないから、社会があり得ません。一国の社会がありません。その次には国がなく、世界がないのです。

それゆえ、今主流を成しているのが宗教です。仏教圏とかキリスト教圏とか言って、ここにとどまるのです。他の国の人同士は共にいられませんが、宗教圏は共にとどまることができるのです。宗教圏は、一つの世界を願ってきて、一つの神を祭ってきたために、共にとどまることができるのです。しかし、すべての宗教が神様の圏に属しているのに反して、すべての国は神様の圏に属していないのです。

統一教会から、個人が生じ、家庭が生じ、氏族的メシヤ、国家的メシヤ、世界的メシヤが出てくるのです。個人が行く道が家庭につながり、家庭が行く道は氏族が行く道につながるのです。

では霊界は、どんな世の中なのでしょうか。真の愛を中心として、他の人のために生きる所が霊界です。自分のために生きるのではなく、全体のために生きる所です。ここの地上でも、一〇〇パーセント人のためにする人は、「私を踏み越えて行け 7」と言うのです。いくらアメリカという国が大きくても、アメリカの大統領より、その国の民のためにもっとする人がいるなら、その人が大統領を踏み越えていってもみな歓迎するのです。しかし、自分の利益だけを取るようになるときは、全部怨讐になるのです。

霊界に行っても同じです。より大きなことのために生きるというときは、自然に通過するのです。より大きなことのためになれば、自然に通ずるのです。ですから、世界のために生きる人は、アメリカのために生きなくてもいいのです。世界の中にアメリカが含まれるのです。韓国も同じです。すべての国が含まれるのです。

では、行くのにおいて、家庭もそのまま通り過ぎて、すべてが歓迎し得るその方向の内容とは何でしょうか。それは「ため」に行く、愛の道しかありません。

この二つは、地上のサタン世界でも妨げられません。この二つは、サタン世界も絶対順応しなければならないのです。いくら悪徳な父母、いくら悪い者でも、真の愛をもって自

分のために与えようとする人は、すべてが歓迎するのです。（二一五｜一七四）

十三　審　判

皆さんに霊界の大審判の法廷に出廷しろという命令が下るだろう、ということを考えてみましたか。いつかは大審判の法廷に出廷しろという命令が下るのです。

その法廷を管理して支配するためには、判事がいなければならず、検事がいなければならず、弁護士がいなければなりません。では、その判事は誰で、検事は誰で、弁護士は誰でしょうか。判事は神様であり、検事はサタンであり、弁護士はイエス様です。（一七―一七七）

第三節　高い霊界に行くには

一　宗教人たちの標準は霊界

宗教を信じる人たちが、信じない人と違うこととは何でしょうか。彼らは一生の間、霊界を標準として信じます。宗教というものは、神様に会って生活しようとするところから始まるのです。

すべての教祖たちが、残していった経書の内容は、人間の暮らしを紹介したものではありませんでした。これは、永遠の世界、超然とした世界の内容を中心として、神様なら神様がおられる所を中心として、我々が関係を結ぶことができる内容を教えてくれたのです。（一八七―二八六）

二　霊界での所有権決定基準

昔、我々は、麦飯もなく、食べられずに冷たい部屋で震えていた、そのような日が多かったのです。かえって、そのような日が神様の前に近かったのです。その時は、国を心配し、世界を心配しました。すべてが大きくなって、すべての基盤が拡大されるに従って、「私」という人を、無数の人が、どのようにすれば喜ぶのかを考えたのです。

知識が多くても、権勢があっても、お金をもったとしても、そのようなものはみな流れていくのです。死ぬとき、みな置いて行くのです。もって行くべきものは、神様の愛を中心として、この愛を世界に拡大するために努力したのです。人類を愛し、神様を愛したことが最後に残って、あの世の所有権決定の基準になるのです。（一二七―三八）

復帰の道には、値引きというものはありません。我々がこの世に来るときは、一人で来ましたが、行くときは一人では行けないのです。多くの人たちを連れて行かなければなりません。（一四―一〇五）

皆さんが霊界に行けば、伝道した人の数によって、皆さんの霊界の所有権が決定されます。自分は責任者だった、という看板を持っていくのではありませ。（一二五―一七）

三　人を愛すべし

霊界では、神様の愛がなければ食べられません。食べる権利がないのです。地獄は見ながらも食べることができない所であり、知りながらも行うことができない所です。

それゆえ、神様の愛を中心として、霊界と肉界が一つになり得る、このような価値的な

中心を立てておいて、神様の愛を中心として、地上で霊肉が一つになった天国生活をした人以外には、永遠の理想的世界をもつことができないのであり、天国を所有することができません。（九一―一七三）

霊界に行って、誇るべきこととは何でしょうか。先生は霊界に行ったのですが、「お前は地上で何をしてきたか」と神様が尋ねるならば、「お金をたくさん使ってきました」と言うことが誇りではありません。どれほど人を恋しがり、愛して生きたかということが誇りです。（一八七―三一〇）

四　神様をもっと愛すべし

あの世で必要なことは、ほかでもありません。世界よりも、自分の国よりも、自分の妻よりも、自分の息子、娘よりも、神様をもっと愛さなければなりません。それが原則です。

あの世に行けば、金もうけをしますか、億万年眠りますか。億万年眠るのも、金もうけも必要ありません。自分の程度によって、食べることはいつでもできます。（一二六―一四二）

五　家庭の基台を成すべし

なぜ息子、娘がいなければいけないのでしょうか。必ず愛がなければなりません。神様がいなければなりませんし、夫婦がいなければならないし、男女がいなければなりません。その次には、血が混合しなければなりません。神様の血、愛の血、縦的な血、横的な血が混合して生まれたのが後孫です。それゆえ、後孫をもたなくなれば、あの世に行っても、遊んで休むことができる場がないのです。

夫妻が八十になって、九十になるまで二人だけで、額を突き合わせて暮らしながら「幸福だ」と言いますか。おもしろく暮らすことはできません。息子の嫁がいなければならず、孫がいなければなりません。おじいさん、おばあさんは、孫を連れていって抱かせてあげれば、それ以上の幸福はありません。孫をもてなかった人は、霊界に行って天地の調和を成せず、東西南北に拍子を合わせられないのです。（一九七―三二）

仕事をしてから「ああ、大変だ」という考えをする余地がありません。「ああ、大変だ。眠れなくて疲れてだるい」という考える余地がないのです。そうすれば、霊界が開かれます。霊界が見えるのです。皆さんが目を開けて霊界を見、霊的に御飯を食べれば、一日御飯を食べなくてもおなかがすかないのです。そのようなことが起こります。体が軽く、一日中走っても疲れないのです。

そのようなことを体験すれば、世の中がおもしろいのです。横的に、息子、娘を産んでそうするために必要であって、事実上世の中にいる必要がないのです。あの世に家庭を連れて入らなければならないために、仕方なくこうしているのです。（九一―一七六）

六　心情圏の伝統を中心として暮らすべし

霊界で宗教が必要でしょうか。必要ではありません。そこでは長老派とか、カトリックとか言う必要はありません。神様との生活圏内に入るのです。ですから、宗教は必要ありません。

では、何が必要でしょうか。貴いものが必要ですが、その貴いものとは何でしょうか。神様の愛を受けられることが貴いのです。

今日、統一教会では、心情圏ということを言いますが、心情圏の基地とはどこでしょうか。神様を中心とした、真の父母の愛、真の夫婦の愛、真の兄弟の愛が普遍化し得る世界が、心情圏の世界です。

そのような本然の世界では、夫婦を主にするのではありません。天地、天宙を主にした夫婦の愛なのです。それゆえ、天宙をもっと重要視するのです。また、夫婦の愛をなしますが、世界を主にした夫婦の愛をなすべきです。

ですから、その世界に合格し得る愛の基盤をどこで築くか、どこで探すかということが、この上なく深刻な問題です。それゆえ、今日統一教会は、この世でそれを築こうとするのです。数多くの宗教、この世で貴いという、数多くのその何かと異なり、世の中で初めてこのようなことを始めた所が、統一教会です。ここでは何を教えてくれるのでしょうか。心情圏の世界における合格者になることを教えるのです。

では、あの世に行くようになれば、民族を愛する数多くの人、数多くの夫婦、愛国者、忠臣、烈女、聖人たちが、みないるでしょう。しかし神様の本然の心情圏の伝統を中心として生きた人は、一人もいません。（一二六―一三九）

七　あの世にパスするチケット

今からでも、何かのことを出発させるときは、神様を中心として出発すべきです。これが原則です。霊界に行けば、そのような原則にどれほど同化して、どれほど一致するかということが、地獄から中間霊界、楽園、天国にまで、全部つながるのです。

そうかといって、世界的に有名な学者だからと言って、霊界に行けば、天国に行けるのでしょうか。行けないのです。それゆえ、宗教界は、すべてを捨てて行けと教えるのです。みな捨てて行かなければならないのです。そのような論理が成立します。

では、何が一番貴いものでしょうか。天のためにどれほど苦痛を受け、世界のためにどれほど苦痛を受け、涙を流したかということが、あの世にパスできるチケットです。

それを神様の立場から見れば、神様は、うれしい神様でしょうか。うれしい神様だと思う宗教は、頭もなく、ただ常識外れの輩です。一番悲しい方が神様なのです。その神様が、今まで涙を流し、苦痛を受けたなら、それは神様自身のためではありません。神様が造ったこの宇宙のために、堕落した人類のために、今も涙を流しているということです。なぜそうなのでしょうか。心情の神様であるためです。（九七―一七二）

第三章　霊　界

第一節　肉身をもって体恤可能な霊界

一　霊界と時

今我々が、どの段階まで来たかというと、霊界と肉界を世界的舞台でつなげ得る段階に来たのです。

霊界と肉界が世界的に一つになり得る場は、静かな場ではなく、世界が揺れ動く場、天地が揺れ動く場です。世の中はできないようにし、天はしようとし、二つが粘り強く戦いをして、天が勝つことによってできるのです。

それがいつかというと、ワシントン大会の時なのです。

一九七六年を起点に、サタン世界が神様に対して讒訴できなくなったのです。サタンは直接神様を讒訴できないのです。霊界に行った先祖たちを讒訴することはあっても、神様を讒訴することはできません。

そして、霊界のすべての霊人たちを動員して、地上にいるサタン勢力を追い出すのです。それで今まで、サタンがやった以上の善なることをできる基盤が形成されるのです。

「統一教会を信じろ」と教えてくれるのです。イエス様が現れて、孔子が現れて、釈迦牟尼が現れて、マホメットが現れて、自分の先祖が現れて、統一教会を信じなければ全部霊的に制裁をし、霊的に罰を与えながら追い込むのです。

霊界が今まで分かれていたのを全部収拾して、今日世界が分かれたのを全部心情的に結んでいくのです。超民族的基準を中心として、ここに世界的代表を集めて、心情的に一つになるこのような運動をするために、霊界も一つになって接触するようになれば、ここから光を発して世界的な運動が大々的に繰り広げられます。

今までは、西洋の霊界と東洋の霊界は互いに異なっていました。それを、どのようにして一つに結ぶことができたのでしょうか。一つの愛で結ぶことができました。神様の愛を中心として、東洋、西洋の人々を統一教会の合同結婚式を通じて、民族として結んできました。それで、個人的基準、家庭的基準、氏族的基準、民族的基準、国家的基準、世界的基準をみな築いておきました。天国、霊界は、永遠に我々にかかっているのです。（九一―一六二）

二　これからの時代

最近、統一教会に新しく入ってきた食口たちを見ると、霊的に先生と出会い、教えを受けて来た人たちが多いのです。そのような人たちは遠くない将来に、一国の王になることもでき、一国の大統領になることもできるのです。いつ、どのようになるか分からないのです。全世界的にそのような人たちがたくさんいるのです。

これから、アメリカのような国には、一人で歩きながらぶつぶつ話す人が絶えず増えることでしょう。

これから全霊界が、地球上に襲撃して入ってくるでしょう。そのようになれば、これを誰が総指揮しますか。これは先生の責任です。（六七―七七）

皆さんはこれからいい加減にしては、先生の前に絶対に現れることができないない時が来ます。その時になって、先生が霊界の門をすっかり開くでしょう。門の前に来ていて、そのような者が現れれば「こいつ、何しに来た」と言いながら、門前から追い出してしまうのです。これからは専門的な面を中心として、世界を収拾する時に入るでしょう。

今世界には、どんな人たちがいるのでしょうか。イエス様の時と同様の人たちが、世界にいるのです。復帰時代であるからには、そうなのです。先生がまだ、そのようなことを言ってはいけないために、言わないのです。

神様はさせませんが、先生の代わりに、ありとあらゆることをする人たちが世界にはいます。空中を飛ぶ人もいるし、水の上を歩き回る人たちもいるし、千里、万里を瞬く間に行く人が、今いくらでもいるのです。間もな

く先生がそのような人たちを、あのヒマラヤ山脈から、修行の世界から呼んでくる時が来るでしょう。

そのようになるのに、世界が統一されますか、されませんか。神様の全権が平面化して、再創造歴史に、理想的な愛にこたえられない一切の与件は全部破綻して、新しい世界に入るでしょう。

これが先生の見る、今後における超感覚時代の世界観です。愛だけが超感覚時代の世界観をなすことができるのです。超感覚時代で愛するようになれば、ただしがみついて離すまいとします。神経線を越えようと、それゆえ、神様の愛だけが、それを平面的に歓迎し得る世界時代に入るのです。

先生は祈る中で、そのようなことを知っています。皆さんの知らない、そのような何かがあるのです。皆さんに話をしないから、先生は何も知らない人のようですが、みな知っているのです。今がどんな時かというと、実体の体で霊界を完全に支配する時です。

先生が霊界の内容をもって、真理と体をもったために、サタンも屈服しなければならず、天使世界も完全に屈服しなければなりません。それゆえ、仏教に精通した人とか、キリスト教に精通した人たちは、全部先生の前に屈服しなければなりません。

霊通する人たちが、先生が「死ね」と言えば死ぬことができてこそ、実体完成圏をなして、地上天国を開門するのです。

「そのような世界になった」と思ったとき、仕事をする時がありますか。その時、先生の考えを知ったなら、皆さんはあきれかえるでしょう。「どうして、あのようになったか。どうして私があのようにしたか」と、そういう時が来るのです。冗談ではありません。恐喝、脅迫ではないのです。（六〇―一九四）

三　霊的体験も必要

皆さんは涙を流しながら、「私はこの顔では、そのまま帰れません。死ぬことがあっても、帰れません。死ぬよりもっと悲惨です」と、そのような祈祷をして回らなければなりません。皆さんが祈祷しながら霊的体験をたくさんすれば、復活するのです。

そう思いながら、「ああ７　自分はアメリカ人として生まれなくて、本当に幸いだ」と思うのです。今、アメリカに来て仕事をしながら感謝するのです。人間の習慣は実に恐ろしいのです。ですから、皆さんもその場に行くには、苦労をしなければならないのです。苦労を通じなければ、行くべき道がないという結論を下すことができるのです。

皆さんが考えに先立って、いつもそのような心情で立ち上がるようになれば、神様が役事するのです。皆さんが言葉を話して教えるすべての言葉の前に、神様の心情を感じるべきです。言葉のあとに立つのではなく、言葉の前に神様の心情が先立たなければなりません。それゆえ、いつも謙遜でなければならないのです。

ですから、自分は言うことができずに、後ろに行かなければなりません。しかし、見れば神様の心情が前にあるのを感じるのです。それは何ですか。自分を絶えず引いていくのです。そのような場に行けば、多くの群衆が集まっても、みな教育することができるのです。

そこでは何だか分からずに、全部教えてくれます。それでも自分が言う声だから、自分

の耳にも聞こえます。自分が話す声を聞けば、不思議なのです。その境地に至れば、言いながらジェスチャーをしても実に自然なのです。どんな表情をしても、それがみな自然なのです。ぎこちなくないのです。そのようなことを感じながら働いてこそ、生命の運動が繰り広げられるのです。（九六―一六八）

霊的世界を体験するということは、四次元の世界に通じるということです。また、そうするときに、何千年前に生きて死んだ先知先烈たちも、今日の自分と因縁を結んで対話することもでき、相談もするというのです。すなわち、今日、実際生活的な時間圏内で、自分が経験することができ、また肌で感じることができるのです。（四―二二五）

四　霊的体恤の過程

我々が信仰の主体である神様を敬うその立場に立っているとしても、それは曖昧です。では、それ自体をどこから探すべきでしょうか。

主体は確定していますが、自分は感じることができないのです。我々が五官で分かるように、そうだということを確定づけることができないのです。これをどこから調べることができるかという問題を考えるとき、主体から調べることはできません。神様から調べることはできないのです。これはどこまでも、自分から調べなければなりません。

自分という存在には、体と心があります。体と心があるのに、体を中心としてはこれを調べることができません。心を中心として調べなければならないのです。

今日、堕落した我々人間たちを見るとき、その心自体が千人なら千人、万人なら万人が全部同じでしょうか。その根本は同じかもしれませんが、心自体は素性に従って違うのです。

全部が同じではないのです。それは、なぜそうなのでしょうか。顔が違い、趣味が違い、我々の感じる感情が違うのと同様に、その度数を描くことができる平行線と垂直線が違うのです。その度数を合わせなければならないというのです。

そうするには、どのようにすべきでしょうか。天が主体なら、その主体の前に自分が対象的な立場に立つのです。主体となる神様は、人間に対象として感応することができる基礎を必ず与えたために、平面的な心の根本の基準の前に垂直に向かう、そのような方向がなければなりません。必ずあるということです。

我々が水平線を見るようになるなら、これは平面になっていますが、これが垂直に立つようになれば、この垂直線の基準が全部違うのです。では、そのゼロ点基準をどのように合わせるかというのです。こちらに行けば、必ず反対になるために、そのゼロ点を合わせなければなりません。皆さんが発電所に行ってみれば、メーター器がたくさんあります。メーター器にゼロ点基準のようなものがあって、それを中心としてすべての加減の調整をして、その方向というか、力というか、量の対比をつかむのと同様に、そのようなゼロ点基準がなければならないのです。

では、ゼロ点基準とは、どんな位置でしょうか。ありながらもないようであり、ないながらもあるような位置です。その位置があるのです。それゆえ、今日座禅をする人たちが、

「無我の境地」とかという言葉を使いますが、それもやはりそのような境地なのです。そのような霊的基準に接近することができる自分にならなければなりません。そのような基準になれば、必ず自己の水平線基準が反応することができる、そのような何かがあります。

それゆえ、心も見てみると、心の門があります。心門と言います。そうでありながら、その門がいつも一面でだけ開かれているのではなく、心自体が回っているために、その門も移動するのです。それゆえ、この門を通らずには、プラスならプラスを中心として、マイナスの立場で関係を結ぶことができないのです。人にはこのような心門があるのです。

皆さんが祈祷をしてみれば、時間によって感じが違います。午前一時に祈祷するのと、三時に祈祷するのとは違います。それは皆さんが体験してみれば分かります。神秘的な深い境地に入って祈祷してみれば、祈祷する時間によって違うのです。感じが違うのです。朝に感じるのと、真昼に感じるのと、夕方に感じるのと、夜に感じるのと、すべて違います。

そのように、我々の心の状態からも、感じるその基準が違うのです。我々の肉体的な感情が、四季の季節の変化によってその感じる感度が変わるのと同様に、心の世界もそうなのです。それゆえ、祈祷をするにも、どんな時間にうまくいくかを知るべきです。それはどういうことかというと、神様との感応の度が近いのです。うまくいくというそこに、だんだん入るようになれば、門に出会うようになるのです。神様の心の門と、人間の心の門がぴったりと合って、ある基準まで合わせて入るようになる場合には、神様が感じることを体恤する道が生じるのです。

皆さんがこのような場に入るためには、どのようにすべきでしょうか。心を磨かなければなりません。神様のみ旨を中心として広がった宗教もありますが、サタンの意を中心として広がった宗教もあります。これらが全部混ざっているために、それをより分けて行くということは、限りなく難しいのです。

このような結果と同様に、我々の心の世界も同じなのです。心も、善の心があるのと同時に、悪の心もあります。では、皆さん自身の心が「ああ７　私は善だ」と、このように考えていますが、そのような心自体も善ではありません。堕落の結果によって成されたために、悪の心の圏、悪なるサタン圏に感染した心をもった人もいて、善の圏内の心をもった人もいます。千態万状の差で広がるのです。

それゆえ、信仰生活で一番重要なこととは何でしょうか。心の門をどのように合わせるかということが、最も重要な問題です。それゆえ、皆さんが信仰生活でいつも注意すべきことは、心の門が開く時を知って、天の心の門とどのように合わせるかということです。それは、皆さんがいつも準備しなければならなりません。随時、探して合わせる生活態度が必要です。

それゆえ、いつも深度をわきまえていきながら、心の門を開くようにして、そうしながら天が向かう門とどのように一致化させるかという問題が、信仰生活で最も貴いと思います。

だんだん、この相対的立場に立てば、どんな現象が起きるでしょうか。今まで感じたことのない、新しい立体的な感じが来るのです。それが、何だか分からずに来るのです。

昔には、冬のような気分だけ感じたのに、秋のような気分を感じるようになり、秋のよ

うな気分だけではなく、夏のような気分も感じられ、春のような気分が感じられるのです。なぜそうなのでしょうか。この宇宙は回っています。心も回ります。それゆえ、回りながら春夏秋冬の変化を引き起こすのと同様に、我々の心の世界も、回りながらそのように変化する感じを感じるようになっています。

それが一年について見れば、春夏秋冬があり、一年を縮小したのが一日ですが、一日にも春夏秋冬があるのです。朝は春に該当し、昼は夏に該当し、夕方は秋に該当し、夜は冬に該当するのです。

このように、春夏秋冬の季節的形態が、一日の間に繰り広げられているのです。また、春に該当する朝にも、そうです。そこでも、春のようなものを感じ、夏のようなものを感じ、秋のようなものを感じ、冬のようなものを感じることができます。大きなものは大きなものを中心として単位の形態を備えていますが、小さいものも相対的なその単位の形態を備えているのです。

我々の心もそれと同様です。それゆえ、心に感じられる感じがいつも同じではないということです。季節によって自分が春だというのを知ればいいのですが、分からないのです。秋だということが分からないのです。これを多くの体験を通じて、多くの祈祷生活を通じて「あ7　今、こんな時に処しているな」ということを、わきまえるすべを知らなければなりません。

そのような境地に入るようになれば、どんな現象が起こるのでしょうか。我々の言葉に暗示という言葉あります。それはどういう言葉でしょうか。自分が道を何気なく行くのに、ある良い家の塀にとどまっていた鳥が飛んでいくのを見たとき、鳥は飛んでいってしまうのですが、ばたばたと鳥が飛んでいくそれ自体を通じて、内的に何かを教えてくれることが繰り広げられるようになるのです。

実際の生活において、そのような形態が展開され始めるのです。暗示的条件が多くなるのです。ある人が偶然に言ったことに何かを悟らされるようになります。このような事実が、だんだん多くなるのです。

この段階を過ぎるようになれば、どんな形態が起こるでしょうか。夢のお告げのようなことを体験するようになります。夢の中で起こることですが、夢も深い眠りの中での夢ではありません。パウロも、夢うつつの間に第三の天を体験しました。

そのようなことを、何気なしに流して過ごすなというのです。それを総合して、どんな方向の因縁を自分につぐために現れるのかということを、科学的な面でデータを出せというのです。必ずその結果が現れます。それゆえ、皆さんが忘れることができない夢のお告げのようなことは、一〇〇パーセント的中するようになります。そんな体験があるでしょう。

夢うつつの間に、ある人なら人、物なら物が因縁づけられたので、それが事実の中で実際につながるのです。誰かが夢の中で誰かと歌っているのに、その歌が夢の中の歌ではなく、そばで誰かが歌う歌が正にその歌だった、このようなことが起こるのです。これはどういうことを言うのかというと、霊的次元において、心の状態が共鳴することができる圏内に入ることを言います。音叉というものがあります。共鳴することができる圏内に入ることを言います。このようなことを、限りなく貴く思わなければなりません。

そのようになれば、どうなるでしょうか。神様がいるなら、その神様がどこに現れるのでしょうか。空中に現れるのではなく、心を通じて現れるのです。皆さんが、そんなことを感じられないのは、なぜでしょうか。心がまだ存在を確立できなかったためであり、体に引きずり回される人になったからです。その心が存在を確立して、また他の一つの主体だという、そのような人格的な次元の立場が形成されれば、それは必ず違ってきます。

祈祷をして次元が高くなれば、心と話すのです。共鳴する現象が起こるのです。これは次元の高いことですが、そのようになれば、心の中で言うことを自分が聞くのです。そのような境地で発展していくのです。最初の段階では、暗示のような事実が皆さんの生活で起こります。

それゆえ、信仰者はこのような膨大な資料を収集しなければなりません。接する人がいれば、何気なく接するなというのです。彼が自分に何をもたらしてくれるのか、いつもおなかのすいた者の心情になるべきです。彼が自分に何をもたらしてくれるかと、そのように探す心がなければなりません。結局、彼自体は何でしょうか。自分がいつも主体になるとか、対象にならなければなりません。確定的な主体であり、確定的な対象の立場にいるという事実を言うのです。

それゆえ、主体となり得る存在が現れて、対象的な存在が現れれば、一遍に分かります。自分が誰か伝道する人がいれば、一遍に分かるのです。むしょうにただ心がうれしくて行くのです。それを「心波」と言います。心の波長があるのです。そんなことがあるのではないですか。皆さんを見れば、肉の商売をする人は、肉屋のにおいがして、布（生地）の商売をする人は、布のにおいがします。皆さんの体からもにおいがするのと同様に、心のにおいがするのです。その心のにおいをかぐのです。そんな形態が繰り広げられるのです。

我々の体には、触覚のようなものがあって、全部接触します。それで、見えない電波のようなものを発射して、対象を探しています。

それゆえ、信仰する人の態度は、全部自分と関係していると考えなければなりません。なぜそうすべきなのでしょうか。堕落によって、すべての関係を失ってしまったのです。自然に対する関係、本然の人間に対する関係、神様に対する関係を、全部切断してしまったのが堕落です。切断した関係の世界を、我々が再び接続させるためには、いつも自分自体が接続させることのできる作用をしなければなりません。そのような作用をしてこそ関係が開拓されるのであって、接続しようとする態度をもたなければ開拓されません。

皆さん全部が何かを探す心がなければなりません。皆さんが朝に祈祷し終えると、「あ、きょうは良いことがある」というのが分からなければなりません。「良いことがあるから、ただ良いことが現れるだろう」と、これではいけません。それを探さなければなりません。このような生活態度が、皆さんの信仰生活にならなければなりません。それゆえ、体恤と実践ということは、生命の因縁をもたらすというのです。夢うつつの中に、このような事実が繰り広げられます。

その段階が高くなれば、どのようなことが起こるでしょうか。啓示とか指示とか、このようなことが起こります。啓示というものを、我々は分析しなければなりません。指示というものは、直接教えてくれるものですが、啓示は違います。それゆえ、問題が起こるので

す。これは、必ず解釈をしなければなりません。何かを教えてくれるには、声で聞かせてくれたりもしますが、幻想でも見せてくれます。良い春の日を迎えて、鹿が一対、小川のほとりで水を飲みながら、遠い山を眺める、このような幻想は、限りなく幸福な希望を象徴するのです。そのように、いろいろな幻想が繰り広げられるのです。

そのようなことは、偶然の事実ではありません。自分の心の畑を啓発するための、天の役事です。なぜそうすべきなのでしょうか。我々の心の畑というものが、ガラス板のように平らになっていないのです。でこぼこしているのです。形は水平のような面をもちましたが、それ自体はでこぼこなのです。でこぼこしたここに、天の感度が反射して来るようになると、光の屈折と同様に、入ってくる方向と反対の方向に反射して出ていくのです。それで、全部が違うのです。部分部分を啓発しようとするので、そのような役事をするのです。

啓示の段階を過ぎるようになれば、次は黙示の段階です。一日中霊界に入って体験をするとか、そういうものです。そのような世界にまでつながるのです。神様に対する、生活的な感情圏まで到達することができます。皆さんがこのような体恤的な信仰をしなくては、偉大な天のみ旨の結果世界を、我々の生活の場、生活舞台に適用させることはできません。それゆえ、体験をもたない信仰者は、信じることができません。体恤的な信仰が高貴なために、啓発していかなければなりません。

我々食口たちは、祈祷する中で役事をします。役事というものがあります。霊的な力が電気作用と同様に入ってきます。皆さんが体験をしてみれば分かりますが、高圧電気に接したような、我々の意識より強い力が入ってきます。超自然的な、超人的な感情が訪ねて入るようになれば、我々の体が、堕落性をもっているために、必ず反発するようになります。神様の神性と反発するようになります。

それゆえ、堕落した人間の前に、どんな神の性稟が強力に入ってきても、自然的に純化され得る立場になれないのです。これが入ってくるには、プラス・マイナスのように、音波も強弱で伝播されていくのと同様に、必ずその力も一遍にすっと入ってくるのではありません。強く入ってきたり、弱く入ってきたり、こうしながら開拓して入ってくるのです。そこに震動が起こり、自分の意識がなくなり、霊的な力が強く作用する現象が起こるのです。それが役事として現れるのです。

このような役事を絶えずするようになれば、どうなるでしょうか。この体が、肉性というものが、堕落性が純化され、自然に一〇〇パーセント受け入れることができるようになるのです。そのようになれば、そのような現象がなくても、役事以上の立場に入って、天が教えてくれることをみな受けながら、寸分も違わないのです。このような現象の過程を経て、純化される立場まで上がらなければなりません。その過程で、啓示とか指示とかいう過程を皆さんは経なければなりません。

皆さんがそのような体恤段階に入れば、皆さんの心が皆さんに命令するのです。誰かにこのように話をしようとするのに、言葉が話せないようにするのです。あるいは、自分が良い言葉でその人のために言わなければならないのに、しかる言葉ばかりが出てくるのです。このような現象が起こるのです。このように理解できない現象が時々起こるために、これを調整するすべを知らなければなりませ

ん。過ったなら、狂人として扱われやすいために、それを調整するすべを知らなければなりません。

このような体恤的信仰を、必ずもたなければなりません。心で感じたことを、体恤したことをもって、実験を通じた体験の立場に入るようになれば、その人は強くなるのです。誰の言葉も聞かないのです。体恤と実践、これは我々の信仰生活に最も必要なことです。

そのような境地に入るには、どのようにすべきでしょうか。大概、我々人間は二つの種類に分けられます。一つは知性的な人で、真理で何かを探求して、道理に合えば認めて、道理に合わなければ否定するタイプの人です。また他の一つは、そのような道理よりは、思いで把握する人です。それを我々統一教会の術語で言えば、「知的だ」、「霊的だ」と言うのです。霊的な人は、内的な面から感じて、外的に作用しようとする人であり、知的な人は、外的な面から感じて、内的に適用しようとする人です。一つは出ていき、もう一つは入ってくるのです。この二つの種類があります。

そのような立場にあるために、知性的な人は、大体祈祷を嫌います。それを考えると、迷信のようであり、信ずることができず、自分自体が否定されるような感じがするのです。これは、知性的な人です。理論を明らかにして、何かを探そうとする人、そのような人がいるのと同時に、生まれつき「神様 7」という言葉が、とても好きな人がいます。説明する前に無条件に喜ぶのです。「お父様」と言うようになれば、御飯を食べなくてもいいというのです。そのような人がいます。

大抵霊的な運動において、革命的な運動をすることができるのは、どのような人でしょうか。知性的な人はできません。大抵信仰世界で偉大なことをする人は、知的な人ではなく、無学で愚鈍な人です。そのような人は、霊的な人です。

世の中がどうであれ、感じるままにするのです。神様が「せよ」と言ったからするのです。やってみると、それが実践する環境に伯仲する、そのようなことが起こるのです。これによって、偉大な人物として登場することができるということも起きるのです。パウロのような人も、知性的な人です。しかし、ダマスコで天の霊的な雷に一度打たれてから、気が狂ってしまったのです。ですから、外的に探求することよりも、内的に爆発的な道があるということを感じたために、全部否定して尊重視したのです。そこから、新しいキリスト教の革命の旗手になったのです。

それゆえ、理性的に問いただす人は、宗教的な心霊世界では指導者になれません。

我々人間には、二種類がありますが、自分はどんなタイプの人かということを知るべきです。大抵霊的に感じる人は、霊的には大きいのですが、真理の面では大きくありません。初めは太いのですが、細くとがれば始終如一（注：始めから終わりまで同じ調子であること）でないために、永遠に行けないのです。ある時には、必ず転がり落ちます。また、真理は大きくても、霊的な面が小さければ、永遠に行けません。それゆえ我々は、これを調整する生活をしなければなりません。

祈祷と真理、心霊と真理で礼拝せよという言葉があります。それは何かというと、平行をつくって和する場に入れというのです。
我々人間は、霊界と肉界を調整しなければなりません。霊的世界の中央に立つべきです。真理の世界の中央に立って、調整し得る人間

にならなければなりません。そのような人間にならなくては、完全な立場に立つことはできないのです。（七六―一二五）

五　霊的感覚の発展方法

ある人を恋しがる心情をもっていれば、その人に接することができないように塀で妨げておいても、その塀を乗り越えるということが起こります。

先生が口をつぐんでいても、そのようなことが起こります。霊界からその間隔を埋めてくれます。私が興南の監獄にいる時も、言葉では伝道しませんでした。無言で伝道したのです。霊界が動員されて、協助してくれました。してくれなければ大変なことになるためです。

同様です。それゆえ、皆さんが地方に出ていっても、このようにしなければなりません。先生は一九六〇年代に、名が知られた所へはみな行ってみました。

きょう、道を歩いていて、「どんな人に会うだろうか」と考えなければなりません。最初に会う人はどんな人か、二番目に会う人はどんな人か、三番目に会う人はどんな人かを考えて、「お父様、どんな人ですか、私はこのような人に会うのを願いますが、どんな人ですか」と祈らなければなりません。自分が考えて、祈ったその基準とぴったりと合うなら気分がいいのです。このような体験をすることによって、皆さんの霊的触覚が発達するのです。

そのようになれば、道に出ると「きょうはある人に会うだろう」という感じがするのです。人の霊は、無限的に通じるのです。「きょうはある人に会うだろう」と思うのに、実際そのような人に対するようになれば「ああっ 7」と言ってびっくりするようになります。このように、自分の思いと霊界から教えてくれた霊感が、実際の事実と一致するときが多いのです。このような体験を積んで、上がらなければなりません。（三〇―一五〇）

六　君臨（実体役事）

霊と肉は、本来真の愛を中心として一つになるようになっているのであって、偽りの愛を中心として一つになるようになっていません。それゆえ、真の愛の起源を探さずには、これが一つにならないのです。その立場を皆さんが越え、天の祝福を願って行かなければなりません。

寂しい立場に行くほど、なぜ天が近くにいらっしゃるのでしょうか。世の中の愛を忘れ、天の愛の圏内に入るから、天が近くに来るのです。

天が直接的に現れて、関係するのです。神様の直接主管圏内ということです。神様が現れても、皆さんは分からないために、先生が現れて代身になるのです。そのように直接主管を受ける圏内で生きなければなりません。（九一―一八四）

皆さんは、先生とどんな因縁がありますか。祈祷の中で、あるいは夢の中で、先生を毎日見なければなりません。

世界の統一教会の信者は、そのような体験をみなしなければなりません。霊界に対して知らなければならないのです。また、目を開けても、先生をみな見なければなりません。そのような人もいるでしょう。それで、これは歴史始まって以来、世界に初めて起こるこ

とです。それは、前にもなく、あとにもないことだというのです。

そのことがだんだん強くならなければなりません。アダム・エバが堕落する以前に、神様に干渉を受けたのと同様に、皆さんの生活圏を先生が干渉しながら、全部指導してあげるのです。

先生が「せよ」と言うことを、うれしい心で、浮かれて動けば、その世界に入るのです。先生は、一番難しいこと、できないようなことをさせましたが、「先生よりもっと楽しんでしよう」と言えば、その世界に一遍に入るのです。自分の生命を捧げてその場に立ち上がれば、一遍に先生が指導してあげるのです。（九一―一七四）

我々統一教会の信者たちは、祈祷や夢のお告げの中で先生から指導を直接受けなければなりません。我々食口たちの中には、どこへ行っても、その立場で先生の指示を直接受ける人たちがたくさんいます。

イエス様の時以上に実感のわくことがたくさん起こります。我々統一教会の信者たちは、先生に直接侍って暮らすのです。それで統一教会では、イエス様の時にあったこと以上のことが時々あるというのです。そのようなことがあるために、世界が統一教会と一つになることができるのです。

今日、この死亡圏を通り過ぎようとすれば、決死的な祈祷をしなければなりません。祈祷は、一瞬だけするのではなく、二十四時間しなければなりません。このような自由な時代に、そのような体験をできずに直接侍りながら暮らせない人は、かわいそうな人です。

祝福を受けた人は、本来そのような基準と経験があって、そのような内容に全部結びつかなければなりません。本来は、先生と霊的に接ぎ木して、一つになってこそ祝福対象者として祝福を受けることができるのです。（三一―三三一）

我々は、「神様の心情」を言います。神様の心情は、どこにあるのでしょうか。祈祷の中で声を聞いてみれば、「先生の言葉をよく聞け。先生を悲しくしてはいけない。先生を喜ばせてさしあげなさい」と言うのです。それしかありません。そのように教えてくれるのです。そして、先生に会いたくて眠らずにいると、霊界が開いたというのです。それゆえ、体恤がなくてはいけないのです。（七六―一五二）

第二節　霊界はどのような所か

一　霊界と肉界

一)　霊界、肉界の中心

皆さんは、霊界について相当に気掛かりでしょう。世界には、多くの宗教がありますが、その宗教が行く道は、霊界と関係を結んで、永生という世界、永遠に生きる世界、すなわち神様と共に生きる世界を探して行くのです。そのような世界が宗教の目的地です。

しかし、今になっては、宗教はどのようになるでしょうか。だんだん脱落して、「宗教は、弱者たちが信じるものだ。我々人間に必要ないものだ。それは道義的な一つの表象として、人間たちが操作しておいたものだ」と、このように結論を下す時代に入ってきました。

宗教の中心になるキリスト教だけを見ても、そのようになりました。アメリカが全世界のキリスト教国家の代表国ですが、そのようなアメリカの家庭で育った人たちが、宗教を離れて、今まで自分勝手に暮らしています。

世界の中心であり、すべての理想の中心が神様なのに、その神様がいらっしゃる霊界を中心として理想を描いたそのようなキリスト教の中にいて、なぜ出てくるようになったのでしょうか。

第一に、永遠の霊界があることを確実に知らなかったからです。知能をもった比較の能力がある人間であるために、良い所があれば、悪いものを捨てて、そこへ行くようになっています。より次元の高い価値のある所があれば、そこに行くようになっています。それが人間の本性です。

第二の原因は、神様を知らなかったからです。

第三の原因は、霊界の中心になり、神様の中心になる愛と関係を結べることが分からなかったからです。この三つが分からなかったのです。たとえ神様を知り、霊界を知ったとしても、愛を中心とした世界ということが分からなかったのです。

愛がある所では、上がっても良く、下がっても良く、間にいてもいいというのです。愛する夫が自分より高いといって嫌だと、愛する妻が自分より低いといって、それを憎みますか。一つになれば、勝手に低い所から高い所に上がることもでき、高い所か低い所へ下りてくることもでき、中間にいることもでき、どこでも行くことができます。制限がありません。それで世の中では、「この世界は、一つの世界であるべきだ」という言葉をたくさん言います。

霊界と肉界、霊的な存在と肉的な存在も同じです。ここは神様の愛、神様が中心になっています。我々が普通考える堕落した人間は、神様が中心になっていません。

人間は、心と体から成っていますが、それは違います。次元が違うのです。心と霊界は違うのです。霊界と肉界とは、神様の愛を中心として言うのです。したがって、霊界と肉界が一つになるためには、必ず神様が介在しなければなりません。神様の愛を介在せずには霊界はありません。神様を中心として霊界というものがつながるのです。

皆さんには良心があります。良心と霊界は、どのように違いますか。心と霊界は、どのように違うのですか。「自分の心も霊だろう」と、このように考えるかもしれませんが、混同しています。

心は霊界ではありません。堕落したために、心は霊的世界と関係を結んでいません。いわば、骨のない人のようなものが、堕落した人間たちの心です。「骨のない人のようなものが、堕落した人間たちの心である」と考えれば実感がわきます。骨のない人のような形態が、堕落した人間たちの心というものです。

霊人体を見るようになると、霊人体も体的な要素があり、心的な要素があります。霊人体の心のようなものが、霊的世界です。それは必ず神様と関係を結んでいます。

それゆえ、神様と関係を結ばずには、霊人体の心のようなものが生じないのです。霊と心が違うということを知るべきです。心は、神様と関係ないのです。神様が離れたのです。神様自体が関係することはできません。神様が直接主管することはできないのです。

皆さんの心は、「こうだ、ああだ」と変わります。しかし、霊的世界、霊的存在は変わ

りません。それは、永遠に一つの目標を立てて、絶えず行くのです。それは、なぜそうなのでしょうか。神様の側に立っているためです。心は、人間内に属しています。行ったり来たりする人間内にいるのです。

皆さんは原理を習っているので分かるでしょうが、生心とは何でしょうか。生心は、心と霊と合わさって、新しく一つの目的に向かって動くものです。神様を中心として、我々の良心と一つになって、理想的な自分をつくり上げることのできる動機的心です。それで、その生心がなくては、霊界と真なる愛と関係を結ぶことのできる、自体の根源を探すことができません。

生心が自分に生じれば、体も喜び、全部それについていきます。自動的にこれらが一つになるのです。今まで、人間において一番問題になることとは、体と心が互いに離れているということです。霊的な力が自分に臨んで生心的起源にさえなるようになれば、心と体が自然に一つになるのです。そのような根本から革命が起こり、根本から是正する根源を発見できない限り、我々は理想を尋ねていく道理がありません。動機があってこそ結果が出てくるのです。

宗教は生心を植えておこうということです。生心を中心として多くの宗教があります。ありとあらゆる形態があるのです。（九一――一四〇）

二)　霊界、肉界の一体

神様は、尊厳な方です。それで、霊界と肉界は一体化を成さなければなりません。真の愛が現れなかったために、霊界、肉界が統一できなかったのであり、真の愛が現れなかったために、個人と体が分かれたのであり、真の愛が立たなかったために、宗教と政治が分かれたのです。

真の愛を中心として、全部一つになるのです。個人、家庭、社会、国家、世界、天宙が、みなつながるのです。我々の手で、そのようにしなければいけないのです。そうでなければ、本然の天上天国、地上天国を相続することはできません。

霊界と肉界の一致をどのようにするのでしょうか。真の愛で一つにするのです。（二一六――一〇六）

二　明らかに実存する霊界

世界三十億の人類の中で、霊界を知らない人は八〇パーセントになります。信じる人たちも、霊界があるか、神様がいらっしゃるか、はっきり分かりません。しかし、霊界はあります。

考えてみてください。世の中の金持ちが、これから幸福の郷をつくろうとするとき、自分のすべての財産を使ってもつくりたい気持ちがあるのと同じように、天地創造の天の神様が自分のお住まいになる所をいかにつくったでしょうか。霊界はある部分を探して凝視して、千年を眺めても飽きない美の世界です。想像もできません。ああ、何やら、「世界一だ」と言っても何でもないのです。霊界の一角にもなりません。だから、この地上が欲しい所ではないのです。先生に言わせれば、この地上は先生の目的にかなわないので、帰り

たいのです。（一五―一五四）

一般の人の大部分は、今も霊界を考えません。生まれたから、ただ父母に仕えて、家庭に暮らすと思って暮らします。

そのように暮らすすべての生活の中心とは何でしょうか。どのように暮らすかということです。それゆえ、一番重要なことを衣食住ととらえます。

どのように暮らすかという問題、どのように食べるかという問題、どのようにつくろって暮らすかという問題、これが中心だというのです。そこは、もちろん人間関係において、人倫道徳があって向上する、互いが発展して、互いが良くあり得る内容がありますが、民族が異なり、国家が異なり、世界すべての文化背景の違いの差によって、道徳基準であるとか、社会制度が全部変わるのです。

このように見れば、今日、歴史上に生きている人間たちが行くべき本然の基準、本来の基準と、今日、我々が暮らしている生活の標準として立てていく人倫道徳の基準が、いろいろな方向に向いているのです。これが一つに収拾され得ていません。

本然の世界に基づいて、我々が生まれて生きていくべき所とはどこでしょうか。これが確実ではないのです。それゆえ、一般の人たちは、霊界があるのか、ないのか、神様がいるのか、いないのか、分からないでいるのです。

しかし、我々統一教会の信徒たちは、霊界が確実にあるということを知っているのです。信じているのではなく、知っているのです。なぜでしょうか。多くの体験を通じて知っています。今日、統一教会がこれほど世界的な基盤を形成するまでの背後を調べてみるとき、多くの体験過程を経てきているのです。それゆえ、「霊界はない」と言うことができない立場にいる人たちが、統一教会の信徒たちです。（一四〇―一二二）

我々統一教会の信徒たちは、どんな道を行くべきでしょうか。神様が願う道に従っていかなければなりません。天意の道に従っていくのです。天意とは何でしょうか。個人が行くべき天意の道があり、家庭が行くべき天意の道があります。そして、社会が、国家が、世界が、霊界までが行くべき天意の道があります。その専門家が、先生です。霊界は、間違いなくあります。（一二一―一四六）

神様がいて、霊界があるなら、どのようになるでしょうか。ある人は、「神様がいるとしても我々と関係がない」と思うかもしれませんが、それは考え違いをしているのです。「霊界があるとしても、私と関係がない」という言葉はまるで、「自分は家庭の一人として、国が必要なく、世界が必要ない」と言うのと同じです。

それゆえ、もっと大きな神様がいて、もっと大きな霊界があるなら、もっと大きいものと自分は、関係を結ぶことを願います。関係ができて、そして何をするのでしょうか。一つにならなければなりません。天の目的に向かって行くべきなのです。（一〇四―一一九）

三　霊界は信仰の原動力（使徒パウロが見た第三の天）

聖書を見れば、パウロが十四年前に見た第三の天について述べています。十四年間パウロはどのよう生きてきたのでしょうか。第三の天を見たこと、それが力になって、十四年間を生きてきました。

パウロは、それ以上のことを知ったために、パウロは第三の天のことを述べても、また行くことができたのです。（六二―四七）

使徒パウロが霊界の第三の天の世界を見て体験したことは、彼が十四年間絶えず宣教活動をし得る原動力になったのです。分かりますか。そのような体験がなければならなりません。先生もそれと同様です。（二七―一二八）

先生は、死を恐れません。何がそのようにしたのでしょうか。愛です。獄中にいくらぶち込んでも、文先生はそれも消化することができます。ですから、今日このように反対する環境を消化して屈服させなければなりません。私の手で全部屈服させておいたのです。（二〇二―二七）

四　霊界を創造されたとき

霊界は天使世界と似たり寄ったりです。分かりますか。そして、今日の世の中は、アダム・エバのような立場にあります。ところで霊界は、アダム・エバを造る前に造られました。

霊界が神様のみ旨に反対することによってサタン世界が生じたために、霊界が神様のみ旨を歓迎してこそ、その世界が復帰されるのです。また、霊界を屈服させずには、地上世界に主が来ることはできません。それで、統一教会が今まで霊界を屈服させてきたので、霊界は統一教会に協助しなければならないのです。（二五―二三三）

五　霊界とはどこか

霊界とは、どこにあるでしょか。皆さんの体の中にあります。ですから、霊界を背負って回り、侍って回るのです。ですから逃げることができません。（一六二―一一六）

霊界はあります。霊界は、この世界のためにあるのです。この世界も、永遠の世界のためにあります。世の中に神様がどこにいて、霊界がどこにあるのでしょうか。神様がいらっしゃる所が霊界です。（一一七―三〇七）

六　霊界はどのような所か

我々の人生が七十、八十年で終えれば、別に問題がありませんが、永遠の問題を中心として生きていくから深刻です。

では、霊界があり、死後に霊界に行くようになれば、何をもって考えるのでしょうか。霊界は広大な世界です。皆さんは知りませんが、広大無辺な世界です。

この地に、民族間の差別があり、文化的な格差とか、相いれない生活像があります。もまれて暮らしながらも、自分の主張と自分の価値を残したかったことが過ぎ去るのではなく、霊界に行っても生き生きとよみがえるのです。（一八七―二八五）

今日、電気とか、宇宙とかと言って大騒ぎするのは、愛の理想世界を成すための一つの内的な潤滑剤のようなものです。霊界という所は、愛の電気で充満した世界なのです。

愛の電気をもってして、できないことはありません。ここから、我々の意識構造をもって治め得る可能圏が霊界だといえます。霊界とは何でしょうか。永遠の要素を願う所です。

霊界は、すべてが愛で充満した、愛でいっぱいになった調和の世界です。ですから、愛のボタンを押せば、宇宙が作動するのです。

地上天国とは何でしょうか。すべての愛のバルブに火がつく所が地上天国です。天上天国とは何でしょうか。愛のバルブに火が完全につくことのできる所が天上天国です。

それゆえ、皆さんが愛の心さえ抱いて、愛の綱さえ引けば、みな引かれてきます。後ろに引けば後ろに行き、前に引けば前に行きます。思うがままに操縦されるのです。嫌でそうするのではなく、自動的にそうなるというのです。

それで、霊界という所は、「愛の空気で充満した所」という概念を探すことができます。愛の神様が、愛の心で、世界の人類に一度に全部食べさせ、喜ばせたくて、「御飯よ、生じよ」と言えば、生じるのです。

霊界では、愛の食べ物を食べます。互いに見るのも、愛の目で見るのです。そして神秘さが形容できない所です。聞いても絶えずもっと聞きたいし、眠りとか、疲れとかという観念はあり得ないのです。

霊界とは、愛の電気で充満した所なので、今日人間たちは、何でも愛に関係を結ぼうとします。なぜ、愛の関係を結ぼうとするのでしょうか。霊界に拍子を合わせるためです。そのようになっているために、そこに応じるしかないのが我々、存在物です。その位置を離れることができません。

皆さん、夢で先生を見るようになるのはどうしてでしょうか。それは神様の愛の波長を通じて現れるのです。そうしようとすれば、自分があってはいけません。自分があってはならないのです。自分を犠牲にするということです。真空状態をつくらなければなりません。真空状態になった次には、抵抗がない黄金になるとかしなければなりません。黄金というのは他の要素がないのです。純粋な、そのままです。黄金をなぜ宝物と言うでしょうか。黄金は抵抗力がないのです。（一一二―一七）

第三節　霊界の内容と状況

一　堕落で生じた霊界に対する無知

我々の体には、百兆に達する細胞があります。先祖たちは死んで霊界に行きましたが、我々の体の一部分には、先祖たちが愛を受けた細胞が伝授されています。

生命を中心としてつながった細胞が伝授されており、血がつながった細胞が伝授されて、生きて動くのです。

秋になれば木の葉が落ち、新しい春が来れば、新芽が出てきて、夏になれば青い園になるのと同様に、我々人間も、自分の中にある数多くの先祖たちの血縁的因縁を経て出てきたのです。今は後孫的立場にいますが、自分自身の人生は、その先祖たちを代表して生きるのです。先祖の真なる愛を中心として、先祖の生命力に従って、先祖の血筋を残すためなのです。

ですから、先祖を圧縮したのが、正におじいさん、おばあさんです。天の前に我々の氏族の代表として、我々の家庭の代表としてつながった方が、おじいさん、おばあさんです。

お母さん、お父さんとは何でしょうか。お母さん、お父さんは、家庭の中心です。この世界のすべての家庭たちの母、父を代表しています。おじいさん、おばあさんが過去の時代なら、お母さん、お父さんは現在の時代です。

息子、娘とは何でしょうか。未来の永遠な神様の理想世界、天国と一体化され得る、天宙統一を完成させ得る後孫として、我々の家庭の出発存在として抱いているのが息子、娘です。

ですから、過去の世界の代表者、現在世界人類の家庭の代表者、未来の後孫を代表する代表者を抱いて、一つの所に圧縮させておいたのが家庭です。

それで、堕落しなかった家庭はそのような立場に立っているために、霊界と肉界にみな通じることができます。地上世界が、父子の関係の愛を貴く考えるのと同様に、その愛をもって生きたなら、天上世界も神様を父母として侍り、息子、娘のような立場で暮らすことになります。（二一四―二六八）

二　霊界は即時的感知可能圏

霊界では何でも一遍に分かるようになっています。あいさつをしなくても、何億年前に、何千万年前に、何百万年前に生きていたなにがしとかいう、そのような者が来るのです。そのように早い世界です。

先生も難しい問題について、三角地帯で「この点だ」というとき、その点がどこなのか、指が、体が分かる時があります。それゆえ、いつでも焦点を合わせて、正しい心をもって歩かなければなりません。

人に接するとき、その人を利用しようと思わず、利益を得ようと思うなというのです。そうしてはいけません。本性が一度ぺちゃんこになると、修正するのに半年から三年までかかります。それで、行動が恐ろしいのです。そのようになれば、地獄の中でもそのような地獄はありません。それを分かる人たちは、最初から考えもしません。（二〇四―三〇四）

我々の根源には、まだサタンの血がうごめいています。サタンの愛が、自分の体に根を下ろしました。その愛が、自分の生命の血筋を通して、神経を通してつづられています。そこで百兆ほどにもなる細胞でできた「私」という体が生じたのです。

サタンの血とともに生存権を維持するこの悲惨なありさまを自ら嘆き、これを破壊させるための行動を一生の間、何百倍するという覚悟と決意をしなければいけません。

それなのに、この体を抱き締めて愛することができるでしょうか。おなかがすいたと、狂った犬のように口を引きずって歩けるでしょうか。このような体を中心として、情欲を満たすために、相手を訪ねていけるでしょうか。

霊界に行くようになれば、あいさつは必要ありません。さっと会えば分かるようになります。何千年前の人であるということが分かります。何百年前の人だということが分かるのです。今日、「聖書の歴史は六千年だ」と言いますが、分からないことを言うなというのです。彼らは霊界を知らない人たちです。

聖書の歴史は、何百万年、何千万年です。その時代の我々の先祖を呼べば、一遍に現れるのです。さっと見れば、話さなくても既に分かるようになっています。自分のすべてが現れるようになっています。高めてあげるべき人なのか、下げてもいい人なのか分かるようになるのです。それゆえ、あいさつは必要ありません。自動的に秩序が維持されるのです。

すべての秩序は、何でなされるのでしょうか。愛でなされます。愛で位が決定されるの

です。それで、神様の息子、娘にならなくては、天国に行くことはできません。

神様の愛に接するためには、垂直線に入らなければなりません。聖書に「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）とあります。それはどういうことでしょうか。すべての中心は、愛というものです。それで、あらゆる作用と意識する全体を合わせて、主なる神を愛することしかないというとき、そこからエレベーターに乗って垂直圏に上がっていくのです。そのような驚くべき世界です。（二〇三―一四二）

三　霊界の中心

霊界の中心は何でしょうか。それは、一つの絶対的神を中心として構成された世界です。その絶対的神様がいるなら、その神様は、この天地創造の時の宇宙の起源であられるお方です。彼によらないものがないのです。彼に属しているために、彼に属した全体は、彼と共に感じ、彼と共に因縁をもって過ごしているのです。

例えて言うなら、我々人間は百兆ほどにもなる細胞をもっていますが、すべての細胞自体がどのような部分でも感じさえすれば、直接頭脳に連絡されるのです。天地創造の時の創造主を中心としてつながるすべての存在も、それと同じです。しかも人間として生まれて、意識しながら生きており、善でより次元の高い価値のものを追求しながら、悲哀を感じる全部が人間から始まったのではなく、人間の根源から始まったのです。それゆえ、過程を経て、根源と通じることのできる結果の世界に行っているのが人生であると、このように見るのです。（一四〇―一二三）

四　霊界の組織（階級体系）

霊界はまだ未完成です。なぜ未完成なのでしょうか。本来、霊界の階級体系は、神様と真の父母、真なる子女を中心としてつながっていなければならないのに、それができていないのです。地上もやはりできていません。

言い換えれば、堕落しなかったアダム主義であると同時に、真の父母を中心とした階級体系になるのが霊界ですが、それができていないのです。今まで、その中心の中には、仏教を中心とした釈迦牟尼クラブがあり、孔子クラブがあり、マホメット・クラブがあります。

それで、霊界では真の父母主義とアダム主義が現れるのを、イスラム教や、儒教や、仏教などが、みな願っています。ですから、統一的な方向を経なければならないために、地上にも真の父母の歴史が世界的な基準を探して上がっていくようになれば、すべての宗教の境界線はなくなり、統一運動が霊界の動きであることによって、自動的に現れるようになります。

それで、統一教会が世界主義になれば、どんなことが起こるでしょうか。霊界の霊人たちが霊界に存在しない、ということが起きます。目的が、地上で完成して、逆さまに入らなければならないために、全部再臨するようになります。全部活動するのです。

世界の至る所にいる統一教会員たちが行動することは、霊界の数千億の霊人たちの願いです。

霊界の組織体系の中心とは何でしょうか。第一は神様、第二は真の父母、第三は真の息

子、娘、第四は真なる国です。ここで真の子女は、真の父母の直系の血統を受けた子女です。ここで国を中心として、全部分かれて国民になるのです。

天国の王宮で、一番先に暮らすべき方とは誰でしょうか。天国の王宮の席に座って、統治する方とは誰でしょうか。本来神様を中心して真の父母になったアダム・エバが、天国の王権を支配できる立場にいなければなりません。堕落しなかったなら、そのようになっただろうけれど、堕落したことによって、そのようになれなかったため、再び真の父母が出てきて移さなければなりません。

このような原則で霊界ができているのに、肉界にこのようなものが現れれば、どれほど引っ掛かりますか。神様を中心として、真の父母が現れ、真の子女が現れ、第四は真の国民を通じた真の国家が現れなければならないのです。（一六一―二二三）

五　霊界での衣食住

皆さんが、けさ御飯を食べたといって、あすの朝は食べなくてもいいですか。皆さんの生命が死ぬまで、「ああ、御飯 7　ああ、パン 7　ああ 7」と言いながら死んでいくのです。

同様に霊界では、毎日のように神様のみ言を食べなければなりません。ですから、ここで訓練をしなければなりません。あの世に行っても、「神様がどんなみ言を語られたか。あのみ言はどんな意味か」ということを知るのが願いです。

見てください。あの世にパンの工場がありますか、ないですか。コーラやジュースを作る工場がありますか、ないですか。ありません。そこに自動車を造る工場がありますか、ないですか。あの世に行って、「私は良い車に乗って回る」と言いながら、こうして回りますか。ここでは、何かベンツに乗って回り、何がどうだこうだと誇りますが、そこでは、それらはみな必要ありません。

あの世に行って何をするのでしょうか。食べるでしょうか、食べないでしょうか。それで、食べるのに何を中心として食べるでしょうか。愛を中心として食べるようになっているために、愛をもてなかった人は、行って食べようとしても、口が開きません。それが決まりです。

自分を愛する心だけあり、全体を愛する心が中心になっていなければ、口が開きません。箸で食べる物をつまんで口に持っていこうとしても、箸が他の所に行くのです。ですから霊界は、真の愛をもってこそ、すべてが可能な世界であって、真の愛のコンセプトをもたなければ、すべてが不可能な世界です。

レバレンド・ムーンが教えることは、心情の潮流です。天国の神様の宝座と神様の心情まで経て、万国が通じることができ、全体と関係を結ぶことができる心情の潮流を言うのです。

霊界ではいい家があるというとき、その家に暮らす人が、自分より級が低ければ自分の家にすることができます。それは、その家に訪ねていくと、自然と分かるようになっています。

神様の息子、娘になれば、膨大な宇宙が、全部自分のものになります。皆さんが霊界に行けば、先生に付いて回れません。それは、皆さんの心情の門が狭いからです。真の愛は、大きい門でも、小さい門でも自由に行くこと

ができます。真の愛でなければ行けません。（二〇七―九四）

霊界は、我々の故郷の地です。本然の故郷の地です。この地は、本然の体の故郷の地であり、霊界は、本然の心の故郷の地なのです。この次に行く所が、心の世界、霊界です。それゆえ、地上で霊界に合わせて訓練をしてこそ、霊界に行っても支障がありません。（二〇七―七二）

霊界には、自動車もなく、食べ物もありません。我々は霊界で創造主であられる神様のように、すべての種類のものを真の愛を中心としてつくることができるのです。

愛を中心として、どんなものでもつくることができます。「ある工具、現れよ7」と言えば、すぐに現れます。また、晩餐会場に、数十万、数百数名が参席したとき、どんな食べ物でも願いさえすれば、準備されて出てくるのです。金色の正装を願えば、即時にそのような正装が出てくるのです。

また霊界では、眠りません。霊界は眠りがないために、真夜中にも自分の体を通過して、すべての部分で踊りを踊ることができるのです。霊的に自分がそうするのは、永遠に楽しみが満ちるようにするためです。

空気も愛の空気、食事も愛の食べ物、服も愛の衣服を、真の御父母様が真の愛を中心として下さるのです。（二一七―二九三）

地上では、御飯を食べて暮らすのが心配です。ですから、自動車工場、肥料工場、服の工場、食べ物を作る工場など、工場が必要です。家でも食べ物のために大騒ぎです。霊界に行くようになれば、それがみなありません。自動車が必要なく、飛行機が必要ありません。瞬く間に億万里でも行くことができます。太陽の光よりも速いのが、この霊力です。神様がつくった太陽の光でも、一秒間に三億メートルを走るのです。

ところで、神様の本然的な愛の力、生命の力というものは、それより何千倍も速いというのです。誰かに会いたいと言えば、何億万里、何百万里離れているとしても、すぐに現れます。広い天国に行っていますが、自分が会いたい人、自分が愛した人に会いたいと言うようになれば、その場で相手が現れるのです。

それゆえ、今から何百万年前に生きた人も来て、あいさつするのです。何千年前と今の時が、どれほど変わったかというのです。その時、人たちは今暮らす人より、心では天をよく感じることができたのです。

ですが、文化生活の面では、反対なのです。文化生活とともに、霊的世界の啓発が共になって出てくるのです。知識に通じるようになれば、知識の測度によって理解し、すべてを分析するのにおいて鋭敏なのです。それゆえ、霊感を摂取することができる基盤が、もっと拡大されていくのです。それゆえこれからは、自然にそのような知識が多くなり、世界の流れを心配する人たちには、すぐに霊界から教えてくれるのです。

霊波を通じて、どのようになるのかが分かるのです。最高の立場に行くようになれば、終わりは一つしかないのです。（二〇六―一三八）

六　霊界での知識と権力の使い道

霊界ではお金をいくらでも作ることができます。神様は知識の王です。知識とお金と権

力は、一生において追求する価値的なものの一部分にしかなりません。

教授たちの知識を千年、万年誇ることができるでしょうか。持って回りながら誇れるでしょうか。一生にとどまるのです。それが自分と共にあるのは、一生だけです。お金もそうであり、知識もそうです。ですから知識を、お金を、権力を誇るなというのです。神様は、それを無価値なもののように見ます。霊界では全部無価値なものです。（二〇三―二九一）

神様を知るべきです。神様は、人格的神でなければなりません。神様が漠然としてはいけないのです。我々自身が具体的です、知情意を備えた人格的人なら、その主体であられる神様も知情意を備えた人格的神であるのです。

では、神様がもっている多くの属性の中で、一番の中心は何でしょうか。情です。愛というものです。神様も生きるのに、愛が一番必要なのです。天国では、知識で暮らすのではありません。

皆さんは霊界を知らないからそうであって、霊界に行って知るということは、一週間以内にみな終わります。心を鏡のように見ることができる世界が霊界です。

霊界は、いくら優れて、いくら立派な知識人がいるとしても、彼がもっている知識を一週間以内に凌駕し得る、直感の世界です。

心の光を通じて見るために、そこに関係している因縁の世界は、自動的に理解されるのです。それは、情の心情を通じて見てこそ、自分と相対的関係をもつとか、主体的関係をもつのであって、知識とか、神様の他の属性では駄目なのです。（二一〇―三一二）

霊界では何億万里の距離にいる世界の人でも、愛の心が強くて会いたいと言えば、さっと現れることができます。「どのように来たか?」と言えば、「あなたが呼んだから現れました」と言うのです。「どれほど遠くから来たか?」と言えば、「何億万里離れた所から来た」と言うのです。距離を超越するのです。宇宙が自分の活動基地です。

ところで、その世界にはない物質で首を絞めています。お金、知識、権力で首を絞めているのです。その世界は、そのようなものは一つもありません。この世界では、お金、知識、権力が必要ですが、その世界ではそのようなものは必要ないのです。今までサタン世界の人々が、それを願ってきたのです。

霊界は権力の真空地帯です。それは、皆さんがどこにも暮らせないとうことを意味するのです。霊界のどんなものも皆さんを歓迎せず、霊界がいくら皆さんに関心をもって一つになろうとしても、皆さんは何ももつことができないのです。反対的なもの、本質とは反対のもの、それは一つになることができないのです。霊界が関心をもてる立場とつなげられません。（二〇五―一二八）

神様も、愛のために創造しました。神様に、何を一番好むかと聞いてみれば、どのように答えるでしょうか。神様は、好むものがありません。お金も必要なく、知識も必要なく、権力も必要ありません。

我々統一教会員たちには、何が必要でしょうか。同様です。愛の中では、お金もあり、知識もあり、権力もあります。愛の権力は、万年権力です。本当の愛が分かる人は、天上世界に行って習うものがありません。

そのような人は、いつでも神様の心の中を出たり入ったりします。神様の体を通じて、東西南北を自由に行ったり来たりできます。これが中央停車場のようになっています。それは何の話か分かりますか。それがなぜ必要でしょうか。そこに入って出てくるときは、東西南北の力が集中するために、強力な力で出てきます。見知らぬ国も、その中央を通じて出てくるときは、高い神様と対等な位置に上がるのです。愛には、このような偉大な力があります。

知識とは何でしょうか。知識があることによって、知ることによって、すべて環境的与件を所有するようになります。知識の中で、最高の知識である愛だけもてば、天下がみなつながります。知る人が支配者です。知ることが力だと言いました。力のある人が支配するという論理です。それゆえ、愛をもった人には、知識は必要ありません。あの世では、習わなくてもみな分かります。

先生は、そのようなことを明らかに知っているために、地上で暮らしたいという考えはありません。その膨大な世界が、愛を中心として全部つづられているのです。その愛に和する神様の心情圏を所持するようになれば、すべて終わります。創造歴史は、永遠に続くのです。そのような境地の心に和して、自分が構想したすべてのことをすべきです。決心して命令すれば、即座に成るのです。（二〇二―八六）

七　霊界での人間関係

神様は、天地を創造された方であり、今日この世の存在の起源になる、最も母体であられる方です。その方は、存在価値の起源です。その方がいらっしゃることで、今日この現象世界が始まりました。

そのような絶対的な方は、ある時代に変化があったとしても、変わる方ではありません。絶対的なものは、変わることはありません。また、時間や空間に制限を受けることもありません。すべての制限を超越した立場に立って、すべての制限を主管される方です。神様を、そのような方だとばかり言うではありません。

その方は「父」です。皆さんは「天のお父様」と呼ぶべきです。その父は、皆さんを生んでくれた父です。人間が堕落をしたので、再び生むという言葉が必要なのであって、その方は本来皆さんを生んだ父です。肉身の父は、皆さんへの橋渡しを頼んだ父です。その父を霊界に行けば、「父」と言うのではなく、「お兄さん」と呼ぶようになっています。母に対しても、「お母さん」と呼ぶようになっていないのです。

父母の根をもった人たちは、神様を何と呼びますか。全部が、キリスト教で呼ぶように、神様を「父」と呼びます。一つの家の中で、おじいさんも神様を「父」と呼び、お父さんも神様を「父」を呼びます。孫もやはり神様を「父」と呼びます。家の中の家族すべてが、神様を「父」と呼びます。

このように、神様は人間すべてに父になられる方です。それゆえ、神様は人間に父となられ、人間は互いに兄弟になるのです。先生は時々、本当にそのようになるなら、霊界に行けば実におもしろいだろうと思ったりします。

人間は互いに兄弟だと言いました。それでは、霊界で一番近い兄弟とは誰でしょうか。霊界で一番近い兄弟は、横的な兄弟ではありません。この世で父子関係と兄弟関係のうち、

どちらの関係がより近いですか。兄弟の関係より父子の関係がより近いから、霊界に行っても自分の父が一番近く、次はおじいさん、その次はおじいさんのおじいさん、またその上のおじいさんになるでしょう。そのように上がっていけば、最後のおじいさんとは誰でしょうか。その方が正に神様です。

それゆえ、世の中に友達がいないと寂しがることなく、一人で暮らして死んだといって悲しがることもありません。霊界に行けば、上を見ても横を見ても、近い兄弟が無尽蔵にいます。しかし、兄弟にはそのままなるのではありません。神様を父として侍ることができる特権を備えてこそ、このすべての方たちと兄弟になることができるのです。

父を兄にして、おじいさんを兄にしたとしても、気分が悪くありません。ある考えでは気分が悪いでしょう。世の中においては父と呼んだのに、霊界に来たといって「お兄さん」と呼ぶとは、お父さんはどれほど気分が悪いでしょうか。しかし、そのように呼ばなければなりません。

なぜそうであるべきなのでしょうか。それは位置でだけ本家の息子になるためです。そうであるなら、「本家の息子は一人しかいないのに、全部本家の息子になればどのようになるのか」という思いがするでしょうが、霊界では全部本家の息子になることができます。神様を中心とすれば、すべてが本家の子孫になれるのです。世の中でも、金持ちの主人が死ねば、その財産を子供に相続してやります。そのときに、本家の孫になる長男に財産を半分やって、それ以外の息子たちは残りをもらうのが通常の礼法となっています。

しかし、霊界ではそうではありません。霊界にいる霊人たちは、すべて本家の子孫にならなければならないために、神様はもっておられるすべての財産を分けてやる必要はありません。それゆえ兄弟が一つになれば、お兄さんのものになると同時に自分のものになるのです。

それゆえ、兄弟同士が一つになるのが問題です。皆さんが先祖の代数を計算してみれば、代数は互いに差が出るでしょう。ところが、本家の先祖たちが完全に一つにさえなれば、それ以後の後孫たちは宇宙を相続するのです。言い換えれば、その本家の子孫を中心として、天上世界を治めるということです。（二一―二四九）

あの世ではおばあさん、おじいさんが、皆さんよりもっとかわいいです。愛があれば、そのような世界にとどまることができるのです。そこは統一された世界であり、とても美しい世界です。自分の先祖のおじいさんとは誰ですか。一番最初のおじいさんとは誰かといえば、神様です。（二一六―一八〇）

霊界に行って見てみれば、男女が一つの大きな人のように見えるのです。人々とは何でしょうか。皆さんはすべて、一つの細胞と同じです。全宇宙がすべて男女のように見えます。そのように見えるというのです。それが合わさったのです。その間に入った人たちは、神様の細胞と同様です。一つの体になっているのです。（二〇七―九八）

八　霊界の中心は愛

一)　霊界の空気は愛

霊界は、どんな組織になっているでしょうか。あの世では、空気が愛です。愛が空気になっています。体と心が、このような地上で愛の感触を受けて和することができる要素と

して、体恤しなければなりません。体恤圏をつくっておくようになれば、ただそのまま通じない所がないのです。木の樹液が木の芽と木の根を通じるように、通じるのです。神様が喜ぶのを自然に自分が感じるのです。東方に向かって、神様のうたげが繰り広げられるということが分かるのです。（一六二―二八七）

霊界には、愛のねじがあります。愛の機械があれば、そこに軸があります。モーターで言えば、回る軸があります。あるというのです。軸を全部解けば愛です。

回るものも愛のために回るのです。その秩序の調和というものは、心配する必要がありません。本質的な愛を中心として生きていけば、その世界はどこに行ってもみな、細胞と同じです。（一二六―二四〇）

霊界で、呼吸できる空気は、愛です。愛の道理を果たしてこそ、神様が歴史時代に願った希望の実体を完成したという格をもつようになり、天国のどこに行っても歓迎するのです。

それで皆さんの家庭は、天国に行くことができる訓練所です。修練所なのです。そこにはおじいさん、おばあさんのような人も暮らします。拡大すれば全く同じなのです。お母さん、お父さんの年齢級、自分の夫、妻の年齢級、息子、娘の年齢級を拡大したものです。家庭で修練された者を四方に拡大して、「ため」にすることができる愛の圏をもって生きる人は、天国に行くことができます。家庭は、天国に直行することができる修練所です。ケープ・ケネディ（現ケープ・カナベラル）のように、人工衛星を飛ばすことができる基地のような所です。このように、愛の原子爆弾を、愛の衛星を撃つことができる基盤が、皆さんの家庭なのです。（一四三―七二）

二）　霊界は愛中心の暮らし

あの世では、霊人たちが愛を中心として暮らします。それゆえ、愛の福をたくさん分けてあげなさいというのです。そこには涙が流れなければなりません。

人は、良いときに、悪いときにも涙が出ます。良いときにも涙が出るでしょう？　笑うのと泣くのには何パーセント差がありますか。笑うときは目を開けて笑いますが、泣くときには目を閉じて泣きます。笑うとき、あまりにも笑うと涙が出ます。顔の形も別に差がありません。目一つの差です。（二一二―一六六）

これから、芸術だけが残ります。愛に対する詩を詠むことができない人は、落第です。（二一一―二四六）

宇宙の核、愛の核はどこにあるでしょうか。愛の核があります。前にアメリカでウプシロンという一つの素粒子を発見しましたが、「人間の能力ではその素粒子に接近できない」と言いました。それを見ると、霊界を自動的に公認すべき段階に入ってきたのです。

驚くべき事実です。科学的に証明できてこそいいのですが、そうできないのは一つの良い契機ではないかと見たのです。それゆえ、それが四次元世界の起源を備えたのです。自動的に物質の世界が限界線に来ることで、霊界が明らかになるのです。限界線があるのではないのです。霊界と我々の心の中に限界がありますか。我々の心も霊界と同じなのです。

程度の違いはありますが、同様の感覚があるために、霊物だというのです。（八三―二〇九）

我々が霊界に行くようになれば、真の愛の力でいくら遠い所にいる人でも、瞬く間に会うことができ、いくら遠い所にいる人でも、愛のため訪ねていくときは、瞬く間に故郷に帰ることができるというのです。

霊界は、無限に膨大な世界ですが、何百万里、何千万里の距離も、瞬く間に愛を中心として行き来することができる世界です。

愛は、最高の速度を出すことができます。しかし、皆さんの体と心の統一的愛の基台をもてないときには、その世界と自分は関係ないのです。ですから、統一の起源が相対世界から起こるのではなく、自分から始まります。（二一六―一九二）

九　霊界は心情の世界

霊界とはどのような所でしょうか。霊界について話せば「精神病者だ」と言うために、話をしないようにしていますが、霊界とはどんな世界でしょうか。神様の心情と同級に立つことができる心情をもてば、何でも可能な、そのような世界です。

心情の世界は、無限な幸福の世界です。しかし、そこへ行くには、千段、万段の訓練の階段を踏んで教育を受けなければなりません。無限の試練を受けていきながら、一段階、一段階、何億万年もかかって行かなければならないのです。誰でもそのような運命の歩みをすべきなのです。西洋人や東洋人、みな行かなければなりません。自分のために涙を流す人ではなく、人のために涙を流す人でなければなりません。

それゆえ、まごまごしないで、「さあ、しなさい。私は死ぬ。死んでも行く。さあ、しなさい。勝手にしなさい。この心情の中で死ぬ」と立ち向かい、「お前が死んでも、私の心情が生きている限り、殺せない。私は霊界にこの心情をもって行き、接ぎ木するだろう」と、「お前が神様の心情圏を侵犯する? サタンの心情圏を侵犯することはできるが、神様の心情圏を侵犯できないのが天理の原則ではないか」と、神様の側から言うのです。

サタンは、サタン世界の心情圏は主管しますが、天の心情圏は主管できません。

それゆえ神様の心情圏を中心として、サタン世界を同化させてきたとすれば、霊界も同化されると見るのです。そのようになれば、天国の王国になり、東西南北十二の真珠門の中のどの真珠門を通っても、妨げる者がいないのです。みな歓迎するのです。

なぜそのようになるのでしょうか。神様の心情を通じれば、どこからでも一つになることができ、どこからでも和することができるためです。（一〇六―二二九）

世の中の「主義」というものは、良心基準で意識革命の段階になるかもしれませんが、これからは宿命的に勝利することができ、最終的に勝利することができるものが出てこなければなりません。それが正に「心情」です。

これから人類の心情を革命して、天道の基準を立てることのできる新しい歴史観が出てこなければなりません。この歴史観を基準に、新しい人生観と世界観を創建することができる心情的な主義が出てこなければなりません。では、その主義とはどのような主義でしょうか。それは心情的な人生観、心情的な世界観、心情的な宇宙観を中心としたものであり、統

一教会は、正にこのようなことを教えてくれるのです。（一六―二五二）

十　霊界の状況

愛以上に和した神様の前に相対になることのできる人は、考えるすべてを即座に実現化することのできる人です。何千万名が宴会をするというとき、瞬く間に準備をすることができる世界が霊界です。自分が服を豪華絢爛にして、愛の対象として神様を一度楽しくしてさしあげるというときは、豪華絢爛になります。想像するすべてのことが可能な世界です。

そのような世界が分かる人は、地上では生きる楽しみがありません。それゆえ、先生を監獄にぶち込んでも、先生にはそれが問題とはなりませんでした。しばらくの間となる世の中での暮らしは、永遠の世界で息を一息つくかつかないかの間と同様です。（二一一―二四四）

霊界に行けば飛び回るのです。真の愛は最高のスピードをもっているために、広大な二百二十億光年にもなるこの宇宙も、真の愛をもった神様は、ぴょんと一歩で飛び越えるのです。皆さんも、すべて同じです。霊界では、いくら大きい宇宙があっても、そこは自分自身の活動舞台です。（二一三―二七七）

霊界に行けば、うらやましいことはありません。愛の化身体をダイヤモンドと比較できません。黄金の塊や、真珠と比較できません。宝石が問題ではありません。愛と化した化身体は、もっと美しいのです。

あの世で芸術家に会うようになるなら、自分が芸術的なすべての素質を瞬間的に啓発して、ついていけます。万事が可能な世界です。ですから、あの世に行くようになれば、歌うところでは歌い、踊るのです。

神様は、絵を描くのも一番だというのです。神様が傑作品の絵を持ってきて、張り付けて眺めるでしょうか。傑作に行動する創造物を眺めるでしょう。どちらが好きでしょうか。行動する創造物が好きなのです。そして、その世界は愛の心に酔う最高の立場にあるために、老いません。

いつも晴れた日だけであれば、退屈なのです。そこに霧もかかって、月にかさもかかって、そうしてこそ退屈ではないのです。それが美術の世界です。芸術の世界です。

地上でいつも、晴れたり雲がかかったり、ありとあらゆる変化無双の気候を見るとき、それが芸術的なのです。（二〇一―一〇一）

十一　霊界の生活

霊界の生活はどうでしょうか。食べることの心配、生きることの心配、着ることの心配は必要ありません。なぜでしょうか。自分の心霊状態どおりに、願うすべてのことが可能だからです。あの世でも食べます。あの世でも、自分をまず見れば、血筋が、脈拍がどきどきするのを感じることができます。同様です。霊的な体ですが、同じです。

自分が何かを食べたいと言えば、食べたい物が食べることができるようになって現れるのです。それがどこから来るのでしょうか。根源の世界を動員することができる、能動的自主性を行使することができる世界が霊界です。それゆえ、全体を動員することができる

主体的能動圏をもったものとは何でしょうか。権力でもなく、知識でもなく、お金でもありません。愛です。

神様がいくら高い存在だといっても、「神様 7」と愛の心で呼べば、「何だ」と自分の心の中で答えます。「神様、どこにいらっしゃいますか」と言うと、「どこにいるかとはなんだ、お前の心の根本にいるだろう」と言うのです。神様が、本来根本です。心の根の根本にあります。

自分の愛に酔って、直感で感じるのを実現するため、命令すればそれがただそのまま繰り広げられるのです。そして、あの世に行くようになるなら、乙女で暮らして一人で行った人たちや、男一人で暮らして行った人たちは困ります。

そのような人たちはどこかに行っても、和合ができません。女たちの世界に行ってもそうであり、男たちの世界に行ってもそうであり、行く所がありません。（一九四―四一）

十二　霊界ですべき仕事

我々が死んだのちには、どのようになりますか。死ぬことでみな終わるのではありません。

お父さんがもっている愛を引き継いだ息子は、その家の中など、どこへ行っても歓迎されます。それが原則です。霊界にいるすべての霊人たちも、すべて歓迎します。霊界は、永遠の世界です。一生の間、愛して疲れた人は、老いて死んでも、あの世で愛の若者として生まれるのです。愛の美男子として生まれるのです。思春期の愛の歌を歌っても余りある、そのような無限で永遠な生命体として生まれるというのです。

皆さんが霊界に行って、する仕事とは何でしょうか。その国でする仕事とは何でしょうか。そこで金もうけをしますか。服が必要で、家が必要ですか。皆さんが願うものは、即座に補給されます。霊界は、自分の程度で解決することができる世です。

願うものはすべて、「現れろ」と言えば即座に現れるのです。しかし、自分のために現れろと、いくら「死ぬ」と大声で大騒ぎしても駄目です。反対に、天国の王子の立場で王に侍る中で、「すべてが必要だから現れろ」と言うようになれば、即座です。想像できるものはみな可能な世界が霊界です。（一二九―一〇〇）

霊界に行って何をしますか。愛の歌を歌うのです。愛で言葉を話すのです。霊界では、対象がオペラ式に言葉を話せば、自分もオペラ式に答えなければなりません。踊りで言葉を話せば、踊りで答えなければなりません。ただ永遠に喜び、飽きません。一箇所で踊りを踊れば、天国が全部踊り、一箇所で歌えば、全部歌うのです。

霊界ではいつも、すべての器官が働いています。どんなことをするのですか。永遠に寝なくても喜ぶことができる、そのようなこととは何でしょうか。愛です。そのような愛の理想だけもてばいいのです。そこで、愛を除いておけば何の話がありますか。そこでは愛をもって、本然の愛を中心として暮らすのです。

そのような世界を知るために、世の中にいくら難しいことがあっても越えていくことができ、好きだったことも断つことがことができるのです。普通の人ができないことを、無慈悲に断つことができます。我々は、それを

基準として測定していくのです。（一〇七―三三一）

第四節　霊界の立場と実像

一　霊界の立場

皆さんがこの時代に考えるべきことは、霊界です。今までの霊界は、天使世界と似たり寄ったりです。

我々統一教会の信者たちは、堕落しないアダム・エバと同じです。すなわち、堕落しなかったアダム・エバ圏にいるのです。これは霊界から見れば、この地上に現れた楽園と同じです。（五一―二二九）

霊界は、時間と空間を超越した世界であるために、六千年前の悲しみも、歴史時代圏内に永遠に残るのです。もし、自ら祭物を捧げたという体験で喜びを感じたなら、それが生活圏の内容であっても、一生において忘れられないのです。歳月が過ぎれば過ぎるほど、その幅と広さが大きくなってあがめられる対象になり、それが無限の根源と因縁が結ばれるのです。

これから皆さんがこのような神霊的な体験をして実行するようになれば、神様が今まで受けてこられた悲しみが一時的なものではなく、連続的につながって出てくるということが分かるでしょう。それは、間違いない事実です。（二九―二九四）

人間世界で生じるたった一つの問題とは何でしょうか。愛の光は明るくなければなりません。愛の光が明るくあるためには、内的、外的に燃えなければなりません。何で燃えるべきでしょうか。愛するための発動力で燃えるべきです。そのようなことがみな分かってみるとき、世の中の万事は、過ぎ去る一つの旅行地でのことです。（一九四―五六）

二　霊界の実像

霊界に行ってみれば、霊界全体が一人の人に見えます。それで、主体である神様と、大きな一人と一つになるのです。そうなれば、全霊界と肉界が、みなとろとろになります。神様が跳ねれば、地も跳ね、神様が笑えば、地も笑い、そのようになっています。

霊界に行ってみれば、一人のような組織になっているというのです。（九一―二八〇）

霊界に行けば、通じない所がありません。霊界の動きを妨げるものが何もないからです。天の本性稟の存在なのに、それを妨げるようになっていないのです。みな通じるようになっています。時空を超越しているので、何億年前にいた人が、今もいます。その人たちも、自分が願う年齢で現れるのです。それゆえ、そのような人たちにいくらでも会うことができます。

ですから、説明が必要なく、弁明が必要ありません。さっと見れば、すぐ分かるようになっています。あの人が自分の下なのか、横なのか、高い位置なのか分かるのです。何億の愛の位階が分かるのです。その位階は絶対的です。その位階が高い人は、自然にその位階に合わせて、自分が立つべき位置に立っています。地上世界と違います。謀略中傷して出世する人は、逆さまになるのです。その反対になります。それで正道を見ろ、正道を見ろというのです。（一九四―一三三）

三　霊界の誇り

年が多い人たちがみ旨の道を行くには、これからどのようにすべきでしょうか。肉身が老衰すれば、生理作用でも制約をたくさん受けるようになりますが、これを何で補強すべきでしょうか。先生はこれを研究しています。霊と肉を中心として活動しなければならない時代に、絶えず弱化したとすればどうするでしょうか。先生がそれを今準備しているところです。

では、問題は何でしょか。新しい出発をしなければなりません。新しい出発をするには、毎日のように新しいものを発見しなさいというのです。新しいものを発見する人は、絶対に落伍者になりません。難しい所にやられても、絶対に失望しません。かえって楽しみがわくのです。

霊界に行けば、誇るべきこととは何でしょうか。生命をどれほど生かしてやったかということです。これが誇りです。甲なら甲、乙なら乙、あるいは氏族を超越して、数多くの民族を立てた生命と関連させて、どれほど生かしてやったかということが財産です。財産はそれしかありません。

霊界には、ない物がないので懐かしい物はありませんが、最も懐かしいものがあるとするなら、真なる人です。それゆえ、真なる人を養育するために功を捧げたその功臣は、天上世界で当然、栄光の息子、娘になることができます。それゆえ、誇ることができるのは、それしかないのです。（三〇―一四七）

霊界で、皆さんの心が愛の鐘の音が鳴る場に入るようになれば、明かりがだんだん大きくなります。この光は、五色燦然としたものなのです。神様の目には、ダイヤモンドの光より、もっと美しく見えるのです。

そして、その光だけが良いのではなく、その光の中には味があるのです。それは、見るほど良いというのです。絶えず、見れば見るほど酔ってしまいます。それゆえ神様は、愛という言葉を言うのです。

それゆえ、愛の涙をどれほど流したか、愛の切なさをどれほどもったか、それが皆さんの財産なのです。（一〇三―二八）

四　統一教会と霊界

神様は、どれほど大きいでしょうか。この宇宙を創造した方です。この太陽系だけでも、とてつもなく大きいのです。

統一教会員たちは、世界の主権をもった天国の民です。それだけでなく、天国の大使です。大使は、自分の命を捧げる恨があっても、怨讐と徹底して談判するときには、天命に従って絶対譲歩しないのです。我々はサタン世界に入ってきていますが、サタンの命令を受けるのではなく、天国の命令を受けて生きる、天の国の大使です。

統一教会は、背後の霊界という膨大な基盤をもっています。アメリカの国民が、あのアフリカの一つの村で暮らして被害を受ければ、アメリカの国務省で直接問題になって、ホワイト・ハウスで直接問題になるのと同様に、我々があの田舎の悲惨な場で、もし被害を受ける立場にあるなら、天国で問題となって、統一教会で問題となって、損害賠償請求が論議されるのです。自分がこのような立場に立っているのです。皆さんがそのような立場に立っていると思ってみましたか。そのように考えてみましたか。ですから、卑屈になるな

というのです。悪口を言われても堂々と受けて、堂々と行かなければなりません。（九六—八五）

統一教会は、霊的な個人を動員することができ、先祖を動員することができる能力をもっています。今までの宗教は、霊界と肉界をつなげられなかったために、霊的な精誠を捧げて、縦的な面に拍子と波動が合ってこそ接触をしましたが、今はその放送局自体に入ってきました。振動板のような立場に立ちました。波動ではなく、波動を起こす送信機自体だというのです。

ここから何千周波数にするとか、何十周波数にするとか、短波にするとか、持っていってつければ、その波長の電波を全部出すことができます。自分が放送局をもったために、「霊界にいる我々の先祖たちが来て、私に協助してくださいませ。善の先祖よ、来て協助してくださいませ。そのような震動が必要です」と言えば、来るようになっています。個人を呼んで動かすことができ、家庭を呼んでも動かすことができ、氏族圏、民族圏、世界圏を中心としてつなげることができる基盤が、地上にできて入ってきたために、それが動いて降りてくるのです。このようになって、今まで自分の体が自分も知らずに引かれていくのです。（一六二—一〇五）

天の前に行くときは、死ぬようになるときは、うまくやったことから報告するのではありません。過ったことから報告して、うまくやったことを報告しなければいけません。世の中は「お前は何をした?」と言えば、「私はこれこれこのようにしました」と悪いことはみな隠します。しかし、霊界は違います。霊界は、悪いことから報告しなければなりません。順序がそうです。何をしたかというとき、悪いことから報告するのです。

統一教会の信者たちは、いったん地獄に入ります。入ってから弁護士を立てて、全部抜いてこなければなりません。この人は、過去にみ旨を中心として御父母様の時代にある仕事をしたと、弁護して引き出すのです。適当に暮らしてはいけません。適当にしてもいいなら、先生が監獄を何しに訪ね回り、一生の間、「あいつはたたき殺す者だ」と指さされて暮らしますか。そのように暮らさなくてはいけないのです。ちょこちょことはできません。（一九六—二八五）

我々は、すてきな人たちです。世界がうらやましがり、天地がうらやましがり、霊界のすべての聖人と賢哲たちがうらやましがる、堂々とした人生の生涯を歩んでいる者たちです。天が捨てることができず、天が褒めるだけでなく、訪ねてきて「愛する」と言える、そのような背景と内容をもって暮らす、すてきな男たちです。（一七一—二九）

五　韓国の風習と霊界

韓国民族は、長い歴史をもっている特殊な民族です。他の国を一度も侵犯したことがありません。今まで打たれてきました。強国の間で残ったことは奇跡です。天が保護してくださったために残りました。

韓国のすべての風習は、ユダヤ民族の風習と、かなり似ています。先生が霊界を知ってみると、その霊界の風習ととても似ています。赤ん坊を産むときとか、結婚するときとか、また生活態度とか、することを見ると、霊界

の原理型と同じものをたくさん発見するようになりました。

韓国の食卓を見れば、箸が二つ置かれています。そして、その横には必ずさじがあります。食卓には、いつもそれが主になるのです。また、お膳の上に置かれた器を見ても、必ずプラス・マイナスの相対的関係、すなわち陰陽に調和させて食べ物を準備し、食べます。

そして、七数を中心とした数を合わせています。赤ん坊を産んだのちには、三日の聖別期間があり、結婚後にも三日の聖別期間があり、死んだのちにも三日の聖別期間があります。そして、伝統的なものを相当に尊重視する歴史的な伝統があるのです。（五四―二三七）

六　韓国語と霊界

天国に入るとき、「祖国語」というのが一つのタイトルになったなら、どうしますか。「祖国語を話せるか、話せないか」と聞くのです。そのような原理観です。原理原則に入って、アダム・エバの息子、娘が、アダム・エバが話していた言葉を話すようになっているのであって、他の言葉を話すようになっていません。英語は天使長の言葉なのです。堕落した天使長のものです。それは恥ずかしいことです。

それが原理観です。皆さんは霊界に行けば、皆さんの先祖たちに「先生に侍って暮らしながら、韓国語を習えなかったか」と言われながら、指さされて讒訴されるようになります。

韓国語は「真の父母」の言語です。韓国で生まれたから仕方がありません。（一二八―二四五）

七　霊界の活動舞台

宇宙は、霊界の活動舞台です。この地上も霊界の活動舞台であると同時に、膨大なこの宇宙も、霊的な活動舞台です。

この地上に、そのような外的な世界、宇宙と関連を結ぶことができるということは、神様の摂理で見るとき、地上に暮らしている天国の民たちが、あの大宇宙に拡大されている数えきれないほどの先祖たちと、いつも連絡することができる基準になったということを、象徴的に見せてくれるのです。この外的な世界で、それを象徴的に表示することが、衛星を通じた宇宙探索です。（一九六―二一五）

八　霊界の所有

大宇宙を眺めるとき、ダイヤモンドの星のような宝石の星があるはずです。それが全部自分の所有なのです。その楽しみで暮らすのです。宇宙を愛するすべての群れが、神様の愛する群れが、大移動をしながら暮らすことができる理想世界です。そこに同伴者になり、同参者にならなければなりません。

同役の者として、犠牲を自任して立ち上がることができれば、あの世の主役、堂々とした責任者になるかもしれませんが、適当にする人たちはあの世で、脱落者であるしかありません。（一二六―一四五）

九　神様と霊界

霊界に行っても、神様は見えません。霊界に行っても、神様は絶対見えません。声は聞こえますが、皆さんの目には見えません。ですが、誰が神様の代わりに、形状的な実体と

して現れるのでしょうか。今まではイエス様が現れました。これから来られる主がいれば、その主が神様の形状を身代わりします。では、イエス様は何になるかというと長男、息子になるのです。イエス様はどのようになるかと言えば、息子になるのです。（一五五―三二〇）

第四章　天　国

第一節　天国に対する理解

一　天国の所在

聖書に「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」（ルカ一七・二一）とあります。天国は、この世界の果てにあるのではなく、自分の心にあります。その心とは、どんな立場でしょうか。死のいかなる要素も内包している立場ではなく、それを克服して一つの生命が波及し得る立場です。

天国は、肉身の世界では探すことはできません。この世界ではありません。ですから、天国の起点というものは、心の中に描くことが実現される、ある所です。そのある所を探すことによって、天国を迎えることができるのです。

それゆえ、天国はある終末世界を経て来るのではなく、自分の心で描く一つの起点とともに来るのです。はかりを水平にすることができる一つの支持点と同じものです。はかりは、水平になるのが目的ですが、これは水平から右に傾かなければなりません。重さが左に傾いてはいけません。右に傾くことが出発です。

それで、天国は心から始まってくるのです。心のどこからでしょうか。世の中に勝った心から始まるのです。いくら環境的に天国が築かれたとしても、自分の心が悪で、それを描くことができず、そこに動ずることができない立場にいるなら、天国が来ても、その天国は役に立たないものです。それゆえ、天国を迎え得る基盤になるのは、環境ではなく、自分自身です。自分自身が問題です。天国を維持することができる支柱、支持するその支持点とはどこかというと、環境に先立って、自分の心なのです。（四六―二三）

イエス様は、従っていた弟子たちが現実を清算できずに、これから天国で幸福の基盤を備えるという出世意識をもっているのを見て、その根本を撃破してしまうために、「神の国はあなたがたのただ中にある」と言われたのです。心の天国を描けない人は、天国の環境になっても、その天国を動かすことはできないのです。心で決心ができずには、完全な行動をすることはできないのです。完全な決心から、完全な行動が生じるのです。

それゆえ、自分の心が善にどれほど憧れるかが問題です。歴史的善を憧れながらその善と同行するために、いくら血のにじむような環境があったとしても、それを克服して、いくら孤独な環境の中で闘争の路程があるとしても、それを避けていくのではなく、撃破していくという心で、不変の道を開拓しなければなりません。その心に、一体となり得る体の生活環境を開拓すると決意して誓うところから天国が始まるのであって、心と体が別々に行動するところに天国があるのではありません。心と体が一体となったところから、天国に向かった前進が繰り広げられるのであって、心と体の行動が分かれるところには天国はできません。

そのような観点でイエス様は、心と体が一致し得る内容をもち、左右に傾く環境を除去しながら前進できる主体性を備えてこそ、天国を迎えるようになるという事実を教えてくださったのです。

天国は、他人によって来るのではありません。自分によって来るのです。我々は堕落した人間であるために、自分を否定しなければなりません。自分自ら天国を提示できなくなるときには、他人を通して提示するようになるでしょう。そのようになれば、私は天国を提示した人と一つになってこそ、天国に行くことができます。ついていかなければなりません。絶対的に歩調を合わせなければなりません。彼が東に行けば、自分も東に行かなければならないのです。彼が東に行くのに、自分は西に行く、彼がこのようにしたのに、このようにしてはいけない、という心をもってはいけません。そこに批判があってはいけないのです。（四六―二四）

天国は、自分の心にあると言いましたが、その天国とはどのような所でしょうか。神様の愛を中心とした環境圏を設定した所が天国です。では、その圏に行ってとどまる人は、どんな人でなければならないでしょうか。神様の愛の本質と和合できる人でなければなりません。そのような人以外には、行くことはできないのです。

神様の愛の本質と和合できる人とは、どんな人でしょうか。自分を中心にする人は、価値がありません。相手のために自分の生命を投入し、自分のすべての精誠を投入し、自分のすべてを投入しながら与えようとする人だけが、神様の愛の圏内に存続し得るのです。歴史上の偉人もそのようにし、聖人もそうしました。（四六―三六）

二　キリスト教と天国

教会に何百年通ったとしても、自分を中心とする心をもって通えば、天国には行けません。救いを受けられません。もしここで、文なにがしが言うことが間違いだと思うなら、死んでみなさい。そうなのか、違うのか。天国には行けません。

真の宗教とはどのような宗教かということを知るべきであり、真なる人とはどのような人かということを知るべきであり、真なる国とはどのような国かということを知るべきです。（七八―一一八）

霊界に行ってみれば、昔に殉教した信徒たちの中で「私がこのように殉教すれば、天国に行けるだろう」と言った人たちは、天国に行けないというのです。

反面、「天の父が私に訪ねてくるために受難の道を歩まれ、血を流されたのだ。主に恩返しをするためには、どんな道でも行く」と言いながら、「その恩返しできる立場で、私が同参できる栄光の一時を迎えたことは、どれほど有り難いか」と言いながら死んだ人は、間違いなく天国に行ったというのです。

そのような人は自分のために死んだのではなく、天地のために死んだのです。「私がこのように信じて死ねば、天国に行くだろう」と言って死んだのなら、それは自分のために死んだのです。堕落した人間は、自分を主張しては、絶対に天国に行けないのです。（四一―三五五）

聖書に「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである」（マタイ二二・三七、三八）と言いました。ここに引っ掛かる人は、天国に入れません。二番目の戒めとは何でしょうか。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（同二二・三九）と言いました。神様を第一に愛し、隣人を第二に愛する人が、孝行者になるのです。（一九八―二五九）

キリスト教で言うように、イエス様を信じて天国に行けますか。イエス様御自身も、相対理想を成さなければ行けないのです。イエス様お一人で、真なる人を成すことができますか、神様も成せなかったのに。ですから、再び来なければなりません。そうであれば、雲に乗って来ていいですか。今は、現実的内容をみな目で数えることができ、測ることができるこの民族が、私についてくるようになっています。（一七六―二一〇）

今日キリスト教を信じる人たちは、「イエス様を信じれば救われて、天国に行く」と言います。天国に行くにも、「自分一人で行く」と言い、「自分の母や父を連れて天国に行く」と言う人は少ないのです。これから、宗教は個人の救いのみを主張してはいけません。神様が立てた真の宗教なら、宇宙的で、最後まで残り得る宗教にならなければなりません。

人類が願う最後の宗教があるなら、その宗教は「個人だけを天国に行かせるのがみ旨だ」とは言わないでしょう。天国を個人だけに紹介してはいけません。母と父にも紹介しなければなりません。そのように紹介して、族長までその内容を知るようになれば、一遍について入るようになるのです。（四一―三四一）

三　イエス様と楽園

「イエス様を信じて天国に行こう」と言いますが、誰が天国に行くというのですか。自分個人が行くのですか。今までお母さん、お父さんに仕えて、家庭が共に天国に行こうという、そのような宗教はありませんでした。今までの宗教は、個人圏を中心にしました。しかしこれからは、「家庭が共に天国に入らなければならない」と言う宗教が出てこなければなりません。家庭が一時に救われ得る宗教理念が出てきてこそ、天国の門が開かれるのです。今までの宗教は、一人で綱にぶら下がってぶらりぶらりと上がっていくような、個人の救いの宗教でした。

それゆえ、修行の世界では、独身生活を強調したのです。家庭をもっていることが怨讐なのです。イエス様も、「家の者が、その人の敵となるであろう」（マタイ一〇・三六）と言いました。みな上がってきては、地の主権をつかまなければならず、独身男女は祝福行事に入らなければならないのです。天国は、本来の息子、娘が結婚して、神様の愛を受けて入る所です。それが、本来人間が堕落しないで完成すべき天国です。

イエス様は、霊界に一人で行きました。そのために、天国に入れず、楽園に行ったのです。楽園は、天国に行くための待合室です。楽園は、理想的な天国ではないのです。天国は、夫婦が家族たちを連れて入るべきなのです。それゆえイエス様は、再び来て、新郎新婦を迎え、新しく編成された家庭と民族を連

れて天国に入らなければならないのです。そのようにするために、神様がイエス様を楽園にとどめさせたのです。それゆえ、再び地上に来て、その原則的な内的基盤を築いて、天国に入らなければならないのです。大ざっぱな計算にはなっていません。

それで、これからはお母さん、お父さんが救われるのです。家庭が全部天国に行くことができる宗教、そのような救いの道理を教えてくれる宗教があれば、そこから国が立てられるのです。個人では、国が立てられないのです。それゆえキリスト教には、国がないのです。結婚できなかった独身男女を集めておいたのが、キリスト教なのです。カトリックの神父と修道女を皆さんは見たでしょう。

この地上に、キリスト教国家がたくさんありますが、その国家の主権者は、キリスト教指導者、すなわち教区長や牧師ではありません。厳然として違います。キリスト教は、霊的な国です。地上には国がありません。地に国がないために、今まで数多くのキリスト教徒が殺されたのです。地上に主権があったなら、キリスト教徒は国家の保護を受けることができるために、死なないというのです。しかし、国がないために、流離弧客（注：さすらいの一人旅）をして、群れを成して歩き回り、集団で殺されたのです。これから我々は、世界のキリスト教徒を合わせて、その国の主権をもって、自分の家、自分の国、自分の世界を探さなければなりません。それをキリスト教徒はしなければなりません。（四一―三四六）

今まで神様は一度も、霊と肉が完成したという条件を備えた人を抱き締めて、愛してみることができなかったのです。イエス様も愛してみることができませんでした。それゆえ、イエス様は今も楽園で祈っていらっしゃるのです。

我々は我々の霊と肉、その全体を抱こうとされる神様の愛を知り、そのような圏内で初めて神様の子女という名分を立て、万物を主管することができなければなりません。そのような世界が、神様が復帰しようとされる主管世界であり、安息の園であることを知るべきです。そうであれば、今我々は個体の問題に帰り、復帰の運命に置かれたことを知り、新しい理念を探してさまよわなければならないということです。そうすべき時が来ました。これからは、真の人生観の問題、宇宙観の問題が台頭するでしょう。（五―四九）

イエス様が、どうして天国に入れなかったのでしょうか。天国は、堕落せずに生きた者が入ることができるように、神様が人間に造ってくださったものです。人間は、本来の原則的な基準に立ってこそ、天国に入ることができます。それゆえ、イエス様御自身も堕落した人間を救い、堕落しなかった人類の父母であるアダム・エバの立場で、息子、娘を率いて入らなければならないのです。しかしイエス様は、一人で生まれて、一人で死んだので、子孫がいません。いないために、楽園に行くようになったのです。天国に入れずに、楽園にいるのです。天国に行くための待合室のような所に行っているのです。

それで、イエス様は再び来て、新婦を探さなければならないのです。本来のエデンの園で、アダム・エバが新郎新婦になってこそ天国に行くようになっています。人類始祖は堕落しましたが、その原則は残っているために、その原則どおりに花咲かせるため、イエス様

は来られなければならないのです。「再び来て、地で解かなければならない」という聖書のみ言と同じです。（四一―三〇〇）

堕落がなかったなら天国は、ひとり子、ひとり娘が神様の愛を中心として神様の家庭をつくり、神様の愛で暮らしてから、引っ越していく所です。天国へは家庭が入るようになっています。個人は、天国に入れないのです。イエス様は、家庭を成せなかったことによって、天国に入れず、天国の待合室に行って待っているのです。それが楽園です。楽園は、天国に入る準備をするための待合室のような所です。

このように見るとき、天国は空いています。これを考えれば、神様の復帰摂理歴史は、悲しい歴史なのです。

神様は、アダム・エバを失ってしまいました。二人を失ってしまったことだけで終わるのではありません。アダム・エバを失ってしまったということは、アダム・エバの一族を失ってしまったことなのです。その一族が拡大して、民族になり、一つの国家を成し、一つの世界に拡大したはずですが、それらを失ってしまったのです。ですから、アダム・エバを失ってしまうことによって、天国の王権を中心とした王国を失ってしまったことになり、ひとり子、ひとり娘まで失ってしまったのです。（一四三―二五）

四　心情と天国

天国とはどのような所でしょうか。準備したものを持って誇る所であり、侍る生活をしたのを誇る所です。では、その天国とは、どのような人が行く所でしょうか。主を信じて福を受けようと、福を先立たせていく者が行く所でしょうか。違います。天国は、侍るために心情的に準備する生活をした人が行く所です。準備する期間に死ぬとしても、侍る生活を残して、喜んで逝くことができる者が行く所です。そこに復活があるのです。

生活の内幕は現れていません。どのように生活すべきかということが、今我々が侍る生活の中で、考えるべき重大な問題です。（八―三〇四）

天国という所は、心情を通じなくては行くことができない所です。天国は、全体を主管し得る本然の国であり、本性の国です。その国は、事情をもっては所有することはできません。深く染み込む心情の因縁をもってこそ、所有することができる国です。それゆえキリスト教は究極的に、事情に通じる教会ではありません。心情に通じる教会です。地に対して摂理される天には、事情の因縁を越えて、心情をうたうことができる基盤を築こうという目的があるのです。

堕落とは何でしょうか。神様の事情を論ずることができないのではなく、心情を論ずることができないのが堕落です。堕落した人間を探してこられる神様は、失った息子、娘に対する心情はもっていても、その心情を分かち合うことができる人がいないので、その人たちを探して立てる役事をされます。それが救いの役事であり、その人たちを立てるために送られた者が、救世主です。

我々は、天国を望む前に、神様の心情を願うべきであり、また神様の心情を願う前に、私自身がどのように生きていくべきかを考えなければなりません。私自身が、まず侍る心情をもたなければなりません。高く貴いもの

については、頭を下げて恋しがるのが、人間の本性です。堕落したとしても、高く貴い天の心情に対して侍りたがるのが、我々造られた人間の本然の心情です。心情に通じることができる、侍る生活をしてみることができなかった人は、天国と何らの因縁もないというのです。

侍るためには、侍ることができるようになる準備が必要です。その準備の過程を経たのちには、侍る生活が必要です。侍るための準備の過程を経て、侍る生活を経たのちにこそ行く所が天国です。心情で侍る人が行く所が天国です。侍ることができる準備と、侍る生活をたたえ、高くとどろかせる世界が天国です。我々は、このような目的の世界に向かっていくべき運命に置かれているのです。

堕落の血統を受け、生まれたその日から今日まで、全世界の人類が心情を尽くして天に侍った一日があったかといえば、なかったのです。堕落する前に、我々の先祖のアダム・エバは、創造理想を通じて育ちましたが、心情の因縁を立てて神様に侍ったことがなかったのです。

神様の恨とは何でしょうか。心情を中心として神様に侍るべき人間が、侍ることができない立場に落ちたので、心情を中心として侍られるべき神様が、侍られることができなかったのです。信じる者がいないのが恨ではなく、神様を知る者がいないのが恨ではありません。心情を通じて神様に侍り、心情を通じて神様に対し得る人がいないことが、天と地の恨なのです。（八―二九〇）

今日、数多くの宗教人たちは、「天国は自分の宗教を通じてのみ成される」と言います。それは、すべて妄想的な言葉です。数多くの宗教が、各々その教祖が教える教理を通じて天国がなされる、と言います。キリスト教だけ見ても、数十の教派に分かれています。自分の教派でなければ異端視し、サタン視する現実において、その教団が神様から公証を受けてそんな言葉を言うなら分かりませんが、ただ自分の教派を立てて、自分の教派を残すための欲からそう言うのなら、動機が純粋ではありません。そのような教団は、すべて滅びるようになります。もし統一教会がそうなら、統一教会から滅びるべきです。

このように見るとき、宗教の先決問題は、天国を成すことではありません。それが一次的な目的ではありません。天国が出てくる前に、天国を受け継ぐことができる、一つの特定の民族が必要なのです。神様は、そのような民族をつくるために選民を立てられたのです。歴史上にこのような選民思想があるという事実は、悪の世の中に善の一派を残すための主導的な思潮が歴史の背後にあることを証すのです。

悪の世界で選民が出てくるようになれば、天国は成され始めます。しかし、天国の民が出てくるには、天国の子孫が出てこなければなりません。また、民と国が出てくる前に、天国を成すことができる家庭が出てこなければならないのです。家庭が出てくるには、天が保障し得る一人の男性が出てこなければならず、一人の女性が出てこなければなりません。

そのような男性と女性だけが出てくればいいのでしょうか。違います。その男性と女性を通じて、息子、娘が出てこなければなりません。そうして、神様が永遠の息子、娘だと保証することができる、一つの家庭が出てこなければなりません。このような家庭なしに、氏族と民族を成すことができず、そのような

民族なしに、国家と世界を成すことができないということは、極めて当然な事実です。

神様が訪ねてこられる拠点は個人です。個人に囲いを巡らせているのです。それで、今まで宗教は、個人の救いを目的にしてきたのです。しかし、神様が探している救いの目的は、個人の救いではありません。家庭です。それゆえ、天国の家庭の基盤を探して立てる前に、天国氏族、天国民族、天国国家、天国世界などはあり得ないのです。（四七―二五〇）

天国と地獄はどこから分かれるかというと、聖書をよく知って、言葉をよく話すことで天国と地獄が決定されるのではありません。実績と心情が問題になるのです。結局、天国と地獄の境界線は、心情の境界線、実績の境界線に左右されるのです。（三二―二三一）

五　肉身と地獄

アダム・エバは神様の体です。コリント人への第一の手紙第三章に、「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」（一六節）と言われたように、この体には、神様が臨むことができるのです。その体は、今日堕落した人間たちの体ではありません。イエス様を信じて救われようとする、故障して修理工場を経てきた体に、神様が臨むというのではありません。純粋な、初愛を含んだ創造理想的人間でなければなりません。しかし、神様の愛の圏内から脱した人間なのです。

地獄とは何でしょうか。悪魔の愛の圏内を言います。悪魔は、憎悪と嫉妬とねたみと分裂と破綻だけを崇拝するのです。それで、悪魔の圏はそのようなものだけが盛んなのです。それが戦争として現れます。そのような悪魔をなくしてしまわなければなりません。

神様の胸にくぎが刺さった事情とは何でしょうか。悪魔が生じたためです。悪魔の血肉を愛で植えたという事実、悪魔の種を植えたというこの無念な事実、悪魔の家庭を見たというその事実のゆえです。神様の管理下で千年、万年愛し合いながら暮らすことができる家庭が、悪魔の家庭の顕現とともに、破壊されたのです。その代わりに、悪魔の氏族を中心とした家庭が、世界的に広がりました。今、世界には百八十余りの国があります。それも、数多くの氏族が互いに戦い、弱者が強者に吸収されたので、この程度です。これを神様のみ旨の中で一つにしなければなりません。

では、サタンはどこに根拠地を立てたのでしょうか。サタンも神様が分かります。神様は、創造本性の起源であり、悪魔は本来その起源を通じて造られたために、相対的基準に立っているのです。愛で見るとき、この起源的基準が良心です。良心は、誰に似たのでしょうか。神様に似たのです。それで、神側だと言います。体は誰に似たのでしょうか。悪魔に似たために、サタン側だと言います。

良心が、体のためにどれほど犠牲になりましたか。夜も昼も自分を管理するのに疲れたものが、良心です。それでも疲れを見せずに、体が悪い行動をしようとすれば妨げるのです。自分に一番近いもの、父母の代わり、神様の代わり、師の代わりになる存在が、良心です。心自体には教育は必要ありません。しかし、体には教育が絶対必要です。

それゆえ、体がしようとするとおりにすれば、地獄と通じるのであり、心がしようとするとおりにすれば、天国と通ずるのです。天国と地獄の分岐線が自分です。三十八度線を

中心として南北に分け、サタンが乗っています。それが分かるために、分けておいたのです。これを分けておかずに死ねば、個人的な三十八度線によって霊界がふさがってしまいます。家庭的三十八度線、国家的三十八度線で全部ふさがってしまいます。世界的三十八度線、宇宙的三十八度線をどのように越えますか。

皆さんが、胸の痛むほど悔しく思うべきこととは、正に自分の体が悪魔の舞踏する場になっているという事実です。悪魔たちの愛の場になっています。悪魔の愛を通じて、悪魔の血統を受け継ぎました。その血が今、自分の体から本然的人格を蹂躙するために、その勢力圏で自分を支配しているという、この驚くべき事実を知らなければなりません。これを清算するには、国でも清算する道がありません。自分自身がしなければなりません。

宗教というものは何でしょうか。罪の根と闘うのが、宗教の本質的闘争歴史です。しかし、自分は全部地獄に行く版図になっていながら、自分自身が悪魔の舞踏する場になっていながら、宗教の旗を掲げて社会を救うと、大騒ぎするのです。

自分を憎まなければならないのです。この体を憎むべきです。自分の体に怨讐の血が蠢動するのに、これを刀で断つこともできず、火で焼くこともできない自分であることを知るべきです。神様の保護を受けることのできない立場に立って、万物を消化し消耗する、消耗工場になっているという悲痛な事実を知るべきです。（二一四―二八一）

復帰摂理で見て、これが最後のみ旨だと思うなら、瞬間瞬間を深刻に考える自分になったかを反省してみなければなりません。世の中に巻き込まれて回る姿勢ではいけません。

一度も深刻な場に立てず、一瞬も深刻な瞬間をもてなかったなら、彼は神様の前に恥ずかしい人です。

私は、どれほど天地の公法をよく守って、天地が公認することができる立場で生きているでしょうか。死が差し迫って、今までどのように生きたかと自問したとき、生涯を通じて善に生きるという心が、六〇パーセントを越えなければ地獄行きです。

体は制限を受けても、心は制限を受けまいとする闘争の歴史をもたなければなりません。天と地、歴史と現実を、そして後孫についても、「私は解放されるのだ。だから、私の伝統を受け継げ」と言うことができなければなりません。そのような瞬間をもてなかったなら、彼は容赦なく地獄行きです。（一九―二七）

世界も混乱です。では、霊界はどうでしょうか。そのような混乱した人間の群像が霊界に行って一箇所に集まっているので、混乱せざるを得ません。どろぼうすることも習慣になれば、いつもどろぼうするようになります。ですから、地球星でどろぼうしていた者たちが天上世界に行っても、ただで得ようと願います。それで、処置に困るので、地獄というものができたのです。

地獄は、神様が造ったものではありません。地獄は生まれたのです。ごみ箱を作っておいて、家を建てたりはしません。家を建ててみると、ごみ箱が必要になったのです。同様です。既成教会員たちはみな、根本を知りません。（一四八―二八）

もし、偽物の包みを持っていたなら、いつ清算するでしょうか。皆さんには、そのような心がありませんか。片方の目が見えなければ、その目を抜いてしまうとか、治しておかなければなりません。分別しなければなりません。神様がいらっしゃるなら、このようなことを是正できる方法を教えてあげなければなりません。それで宗教が出てきたのです。

神様は、ねたみの心や嫉妬が多いために、地獄を造っておいたのではありません。偽物が生じて、偽物を処理する処置の倉庫として、地獄を造ったのです。誰がごみ箱を先に作って、家を建てるでしょうか。キムチを漬けようと、良い白菜を買ってきたのに、漬けてみると虫が食ったくずのようなものが出てきたので、ごみ箱に入れるようになるのです。堕落は、人間の最初の先祖が犯しました。それゆえ、これを蕩減して罪を清算するためには、「真の父母」の資格をもってこそ可能になるのです。（二〇―一一八）

宇宙の最高のおじいさんとは誰かといえば、神様です。その次に、この世界を一つにするのに、全天地を一つにするのに、その終わりの子孫とは誰かというと、未来の後孫です。これをつなげなければなりません。何でつなげるかといえば、家庭です。国ではありません。天国に行くのに、「アメリカ人だ」と言っても認めてくれません。「後進国の者だ」と言っても排斥しません。

この主流家庭の組織を中心として、神様のみ旨とともに、過去、現在、未来をつなげ得るモデル型だけを認めます。これが公式だということを知るべきです。そのようになった実を持っていって、貯蔵する倉庫が天国です。

今まで、人間の世の中に生まれた人たちには、神様が救うことができる条件が一つもなかったために、全部地獄行きでした。虫が食って、うじがわきましたが、それを豚にでも食べさせるとか、他のものに使うとか言って、仕方なく持っていって貯蔵した所が地獄です。地獄と楽園があるというのです。このように話せば、天国は空いているということを実感できます。（一三五―一一八）

霊界に行ってみれば、人々が、いろいろな段階の所にとどまっていますが、その人たちは、どのようにしてそのようになったのでしょうか。どれだけ愛の道理に従い、孝行をし、国に忠誠を尽くしたのか、世界で聖人の道理を果たしたのかという度数の差に従い、該当する立場にとどまっているのです。

人間がこの地で行くべき道は、正道です。正道には個人の正道があり、家庭の正道があり、氏族の正道があり、民族の正道があり、国家の正道があり、世界の正道があり、宇宙の正道がなければならず、神様御自身にも正道があります。このような、たった一つの道がなければならないのです。その道とは、何の道でしょうか。本然の愛の道です。（一四七―一八三）

あの世に行くようになれば、愛の理想に符合し得る、訓練された素性を備えられなかったときには、反作用が働きます。誰かが「地獄へ行け」とは言いません。それゆえ、聖書には「怨讐を愛せよ」とあります。本当の愛は、怨讐にその愛を及ぼして、一次、二次、三次、四次さえ過ぎるようになれば、怨讐は必ずなくなります。このような偉大な力をもったために、イエス様も怨讐を愛したのです。

今日、キリスト教徒たちは、怨讐とは個人の怨讐であると思っていますが、違います。

無限の価値をもった、この愛の法度に背いた者です。サタンとは誰でしょうか。サタンとは、神様の前に姦夫だったという事実を知るべきです。

私があの霊界に行って、持ち上げて出して調べるというのです。このようなことを言って、「異端だ」と言う声を聞きました。「異端の魁首だ」、「キリスト教世界を滅ぼす」とか、「死ぬべきだ」とかいう、ありとあらゆる悪口を聞きました。ですが、「死ね」と悪口を言った牧師の死んでいくのを見ても、私はまだ死にませんでした。それは何によってでしょうか。天意によってです。まだすべきことが残っているからです。（一二一―一七三）

皆さん７　自分の子供の中に、殺人強盗になるとか、国家の犯罪を犯して、死刑を受ける息子がいるとしましょう。息子が死ぬ場に行くときに、その父母がついていって、「お前は死ぬ場に行くが、死ねばいい」と言う父母がいますか。その息子にしがみついて、自分も死ぬ場に共に臨もうとするのが父母です。

子供の死が永遠に続くなら、父母がそれを眺めてじっとしているでしょうか。永遠をかけて死んでいくというなら、永遠をかけて生かしてやりたい心をもつであろうし、子供を生かすためにいかなる苦労もいとわないはずです。このように考えるとき、神様はかわいそうなお方です。

人間が死んで地獄に行くのを見るとき、神様は永遠に生かしてやりたくて、やきもきするのです。そうすべき父母の立場で責任を果たすのであって、「えい７　みな掃いて捨ててしまおう」と言えば、父母の立場に立てはしないのです。それゆえ、地獄まで解放しなければならないという論理が成立します。

息子が、自分を生かすためにやきもきする情景を見れば、「うちのお母さん、お父さんは、私のゆえにあんなふうなのだな」と言い、千万回罪を悔い改めるようになります。そんな母がいて、父がいれば、その子供は、骨が溶け、肉がやせ細るほど悔い改めるようになるのです。父母によって、そうし得る道が生じるのです。

サタンも、人類を救おうという神様の愛の前には、讒訴できないのです。父母の愛を通じては、悔い改める者を許せない法がありません。

それで、そのような心情を通じて、地獄までも解放しなければなりません。それが真の孝行者として行くべき道ではないでしょうか。それで統一教会では、地獄までも救おうと言うのです。なぜでしょうか。それは、神様がそのようなお方だからです。（六二―五一）

地獄という所は、一度引っ掛かれば、永遠に脱することができない所です。それなのに皆さんは、自分のお母さん、お父さん、そして親戚が、地獄に行くということを実感できません。ただ「何とかなるだろう」と言って、おしまいです。しかし、愛する父母が、本当に地獄に行くと考えてみてください。世の中の監獄にさえ入るとしても、泣き叫びながらありとあらゆることをしてでも、引き出そうとするのが人情なのに、まして天情で結ばれた息子、娘が、自分の父母と親戚、兄弟と姉妹すべてが、永遠に出てこれない監獄に行くことが分かるなら、そのようにしますか。

皆さんは、まだ何も知りません。地獄があるのか、ないのか、あるにはあるようだが、

どのようなものか知らずにいるのです。確信がなく、ぼんやりとしているでしょう。しかし、死んでみれば分かるのです。死んでみれば、一遍に分かりますが、その時はもう遅いのです。

それで、今まで死んだ父母たちが霊的に現れて、伝道をたくさんします。自分たちが、統一教会に通う息子、娘に反対して死んで、霊界に行ってみると大変になったのです。それで、霊的に現れて、伝道する霊人たちがたくさんいます。そのようにしなければ、三世界で引っ掛かるからです。自分の息子、娘が統一教会に通うのを反対して、行けないようにすれば、三世界で引っ掛かるのです。

それゆえ、天上世界であらゆる精誠を捧げて、善なる先祖の名前で特使を受けて、自分の子供に現れて教えてあげるのです。誰にでも現れることができるのではありません。そのような世界に行ってこそ、統一教会がとてつもない所だということが分かるようになるのです。その時、どれほど驚くかというのです。

「統一教会は、ただこのように集まって別かれる所だ」と言うでしょうが、そうではありません。ここで線を引けば、永遠に引けるのです。この門を閉めれば、永遠に開ける者がいないし、開けば再び閉める者がいません。地上で結ばれたことは、地上で解かなければならないために、皆さん自身が結んだことは、皆さん自身が解かなければなりません。これが問題です。それゆえ、皆さんが伝道をするにおいて、これからはほかの所に行ってするなというのです。（三四―二六六）

六　地獄人も天国を願う

死に際に、「神様、私は今まで神様のみ意のままにできませんでしたが、私の心としては、天国に行こうとしました。ですから、私を蕩減条件を立てたことにしてください」と言えば、神様も公平であるために、そのような人は、天国に行けそうな場所に連れていくのです。

どんな場所に連れていくのでしょうか。行こうとしたために、天国に行こうとする場所に連れていくのです。行ったとおりに返してくださるのです。行くには行くのですが、天国に行こうとする場所に行きます。その場所は、楽園以下の場所です。地獄にいる人も天国に行こうとするのです。（五七―二六五）

七　地上天国と天上天国

個人が安息しようとするなら、家庭の安息圏をつくるべきです。言い換えれば、家庭の囲いをつくるべきなのです。家庭が安息するには、氏族的囲いをつくるべきです。囲いがなければ、いつも侵犯されます。

その次に、氏族が安息するには、民族が囲いになるべきです。その次に、民族が安息するには、国家が囲いになるべきです。そして、国家が安息するには、世界が囲いになるべきです。それゆえ私たちが、国家の囲い、世界の囲いをつくっておいて、中で安息することができる時が来ます。

この世界が安息するには、霊界と肉界を統一させて、囲いをつくらなければなりません。そうしたのちにこそ初めて、神様の愛が地上の全世界のどこにでも及ぶことができる地上の天国が完成し、天上天国が自動的に完成するのです。（六八―二〇）

我々が暮らしたい所は天国です。天国には境界線がありません。天国では二つの言葉を使いません。人種の差がありません。人はすべて神様の懐から生まれたので、人類はみな兄弟です。神様を中心として見れば、神様の息子、娘だから、みな兄弟で、地上天国を中心として見れば、すべてが民です。地上天国の民というものです。

国を形成するには、三大要因があります。国が形成されるには、第一は主権、次には民、そして国土がなければなりません。そのため世界は、神様が統治する世界になれませんでした。地球星全体が、我々の国になれずに、世界の民が、一つの国の民になれませんでした。我々は、天国についていろいろ言いますが、天国はこのような条件が備えられたのちに成立するのです。これが成されなかったために、いまだにカイン・アベルが戦いを続けるので、我々は安息することができないのです。

我々は、復帰過程で暮らしたいのではなく、天国で暮らしたいのです。それゆえ、我々が天国を築くというのは、我々が暮らす所を準備しようということです。我々の暮らす所は、天国をつくっておいてこそ生じるのです。これをつくれなければ、我々の後孫はいつも追われる民族になるでしょう。我々はあらゆる精誠を尽くして、後孫にそのような荷を残さない先祖にならなければなりません。（六六—二八一）

天国に行こうとすれば、「罪を犯さなかった」、「神様の愛を直接受けることができる」、「イエス様を信じる必要がない」、「救いが必要ないという息子、娘の資格を得ることができる」、これらの過程を経なければなりません。そのように生きた人が天国に行ってこそ、神様の理想の天国がなされます。

イエス様は、血族を通じてそれを成せませんでした。それゆえ、イエス様が再び来て、これを解怨成就しなければなりません。そうせずには、天国に入れません。天国を開く条件は、どこにあるのでしょうか。地にあります。それゆえイエス様は、天国の鍵を地に残して逝かれました。

イエス様と十二使徒が家庭を成せなかったために、今日統一教会で祝福家庭を通し、七十門徒、百二十門徒の家庭を再び探し立てなければならないのです。そうしてこそ、天国が開きます。（一六〇—八九）

神様がアダム・エバを創造しておいて、婚姻のうたげをしてあげようと、相続することを待たれましたが、彼らが堕落したので神様はみ旨を果たせず、四千年ぶりに堕落しない立場でイエス様とイエス様の新婦が合わさって、偽りの父母が出発することによって失った、真の父母の基準を再び探すのです。

真なる父母が産んだ息子、娘たちは、偽りの息子、娘ではなく、真なる息子、娘です。そこから真なる家庭が出てくるのです。真なる家庭が出てきて、真なる氏族が出てきて、真なる民族が出てきて、真なる国が出てきて、そうすることによって真なる世界になります。その世界では、神様を中心として、家庭で天国生活をして、氏族で天国生活をして、民族で天国生活をして、世界で天国生活をしなければなりません。それでこそこの地が、地上天国になるのです。

そのように生きて、この地上で体を脱いで永遠の天国に入れば、そこが霊界の天国です。これが、神様の摂理の概観です。

今日、この地にサタンの血統を受けて生まれた人間は、真の息子、娘とは血統が違いま

す。それゆえ、ローマ書第八章を見れば、養子の立場で「アバ、父よ」と呼ぶとあります。血統が異なるため、橋を架けて神様を呼べるのであって、直接には呼べないようになっているというのです。

しかし、イエス様だけは、神様の直系の血統の因縁をもって来ました。それで、「ひとり子だ」と言ったのです。（一六〇―四四）

今、再臨の一日が来れば、天国でない楽園と地獄のどん底に、新しい理想圏をつくっていかなければなりません。

地獄のどん底で、カイン・アベルを探して、新しい神様の家庭圏を形成するのです。新しい神様の氏族圏、新しい神様の民族圏、新しい神様の国家圏、新しい神様の世界圏を成して、地上にいる人たちを、全部蕩減復帰しなければなりません。カイン・アベルを蕩減復帰して、すべてを吸収、消化して、統一した世界を地上で編成せずして、天国を築こうとする神様の希望を、解怨成就する道はありません。

それでイエス様も、「あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」（マタイ一六・一九）と言いました。地で天国を成さずには、天上世界に天国が生じません。地上に天国の主権を立てなくては、霊界で善の主権を回復することができないという、とてつもない事情が内在しているのです。（一四三―三〇）

皆さんは、天国に行くという考えをしてはいけません。地上に天国を建設するという考えをすべきです。天国を建設する前に、まず皆さん自身が天国人にならなければなりません。天国人になるには、「父の心が自分の心であり、自分の心が父の心である」と自信をもって言うことができる程度に、父と心情一体をなさなければなりません。それで、地上で父の心に代わり、主と先祖たちの心に代わらなければなりません。それでこそ、歴史的なすべての問題を解決することができるのです。（三―二九五）

八　天国に対する正しい観

風が吹き、暴風雨が吹きつける恨があっても、自分が死んで滅びても、「この信念だけは間違いない。自分が間違うことはあっても、み旨は間違いない」という確固不動の信念をもたなければなりません。朝の信仰と、夕の信仰が違う信仰姿勢をもっていながら、天国を恋しがるなら、それはあまりにも愚かなことです。

天国に接近することができる道とは、どんな道でしょうか。自分を考える立場では、天国に行くことができる道は生じません。自分が天国と距離が遠いということを発見するようになれば、自分というものを打破してしまわなければなりません。自分を攻撃する所でのみ、天国、あるいは間接的な天国でも開放され得る道が開かれます。しかし、自分を擁護する立場で、相対を自分に適用させようとする人、自分自らを主体的立場に置いて相対を引っ張っていこうという人は、天国とは関係を結べません。

明らかなことは、天国は自分から成されるのです。いくら相対的天国が完備されたとしても、その天国が呼ぶときに、答えることができる自分自身になれないでいるなら、その天国とは関係がなくなります。

天国とはどのような所でしょうか。サタンを屈服した所です。自身を屈服した所ではありません。自体だけを屈服した所ではありません。堕落した世界圏、習慣的な環境圏、あるいは常習化した所には、天国は臨むことができません。この常習化された環境を、サタンが凝り固まって支配しているために、サタンがここに寓居しているために、このサタンの環境を克服してしまってこそ、天国が来るのです。天国は、サタン世界の内容と相反する所で成されます。もし、そのようでなかったら、天国に成り得ません。天国という名前がついていても、それは環境をたぶらかすためのトリックにしかならないのです。

天国という概念は、サタンを屈服した場所で、サタンが相対することができる一切の要因を否定した場所で、否定するだけでなく清算した場所で、成立することができます。サタンの否定的与件が残っている、歴史的な遺物であるとか、生活のすべての内容を否定して清算した基盤で、天国が肯定され得るのであって、それを残しては、天国の内容を提示することはできないのです。天国は、このように高貴なものです。

絶対的基準の前に一致し得るものが天国だといいますが、我々が描く天国の概念は、あまりにも混み入っています。あまりにも邪となった立場で、天国を待ち望んでいます。このような生活環境で、絶対的な信仰基準をもって克服するところから天国が始まるのは間違いありませんが、それだけでは天国は決定され得ません。その基盤で、数千年間神様を苦労させ、数多くの人類をもてあそんだサタンを克服してこそ、天国が繰り広げられるのです。

そのまま素直に信じてだけ行く立場では天国が成され得ないということは、言うまでもありません。信じる心だけもっては、絶対に天国が成され得ません。その過程でサタンがいつも戦いを提示するために、戦いの路程を克服してこそ、天国が成されるのです。ここには主権がなければならないし、数多くの民がいなければならないのです。数多くの家庭が、国家なら国家自体を成して、一つの目的のために克服していかなければなりません。

神様の立場から互いに相いれないことなく、主体と共に、どんな時、どんな環境、どんな所でも、こたえて和動することができなければならないのです。生命を捧げる覚悟をして信じる立場では、心に臨在する天国を感じるかもしれませんが、実体的な天国は成されません。二千年の歴史を通して、数多くの殉教と受難の代価を払っても、現実の舞台で天国は成就され得ませんでした。天国は、そのように簡単に成されるものではありません。

聖書に、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）という句があります。「主」という言葉は、永生について忘れられない、絶対的な内容を備えた立場で認識することができる言葉です。主なる神を信じるところから、天国が到来するのではなく、主なる神を愛するところから、天国が来るのです。父のみ旨は愛するところから成されます。信じるところからではなく、愛するところから成されます。

今まで我々の信仰がどれほど至らず、原則に到達するのに、どれほど遠い距離にいたかということを悟るべきです。ひょっとして、ここに初めて来た人がいるかもしれませんが、個人を中心としては、慰められ得る立場に行

くことができるかもしれませんが、まともに天国は成されません。個人の心に天国が成されて、個人を中心として神様が喜ばれるといって、天国に成るでしょうか。それが、個人の天国にはなるかもしれませんが、全体の天国にはなれません。

神様が願うことは、個人の天国ではありません。個人が成立させた天国を眺めて喜ばれるのではありません。一人が喜ぶのを見て、天国がすっかりできたと言えるでしょうか。神様は、喜ぶことができる一人、イエス・キリストをこの地に送ったのは、彼を中心に万国を横的につなげて、全体の天国を模索しようとされたのです。それゆえ、メシヤをこの地に送り、犠牲にしたのです。（四六―七四）

第二節　天国に行くための準備

一　天国の拠点

我々が真理に近ければ近いほど、真理に心酔するればするほど、その真理は、もっと誰もが奪っていけない中心になるでしょう。千万回混乱する地であっても、宇宙がにわかに破壊されても、中心を心にはっきりと立てた人は、決して変わらず、動揺もしないでしょう。

しかし、心の中にそのような中心を受け入れる準備をしていなければ、いくら真の真理が現れても、それを知らず、真の生命が現れても知らず、真なる愛が現れても知ることができないでしょう。

今日のキリスト教が、真なる真理と真なる生命、そして真なる愛を探そうとするなら、終わりまで自分を捨てて、誰も奪っていけない心の中心を立てる宗教になるべきです。

今まで地球は、新しい大陸が発見され、だんだん広くなると思ったのに、むしろ日がたつほど狭くなってきています。言い換えれば、文明が発達できなかった時には、世界が広いように感じましたが、歴史が流れて文明が発達しながら、世界はだんだん狭く感じられるようになっているのです。このようなことを見るとき、真理の歴史を経てなされる理想世界は、すべてが自分と直接的な関係を結ぶようになる宇宙的な世界であることが分かります。

天国人の基準、すなわち天国の生命と、天国の愛は、私たち自体から結実されなければいけません。

真理と生命と愛は、一つの家庭のようなものであるために、真理には必ず愛と生命が伴うべきであり、愛にも生命と真理が伴うべきなのです。生命について見るときにも、同様です。そこにも愛と真理が伴うべきなのです。

真理と生命と愛は、なぜこのようにつながっているのでしょうか。一つの物事が存在するためには、必ずその物事を中心として、上下、前後、左右がなければならないのです。存在するものは、何でもこのような三数の圏を脱することができません。これが存在の基本形態です。

このように、三つが出会い、一つの統一的な形態を成していますが、力が逆順に進めば、本来とは異なった力の作用が現れるのです。

それゆえ、本来、愛と生命と真理の神様であられますが、堕落した以後の人間が、愛と生命と真理が均衡の取れた三角形態を成せなかったので、神様はみ旨を成せなかったのです。（二―一三三）

イエス様に従う弟子たちは、イエス様がローマ帝国を一時に占領して、イスラエルの王

として君臨するようになれば、自分たちは一つずつの職位をもてると思ったのです。そのようなことは、問題ではありません。まず、自分の心の中に天国の基盤を築くべきであり、その心を中心として、体が神様と一つになり得る基盤を築くべきです。これが一番大きな問題なのです。天国は、自分自身から始まるのです。それゆえ、天国の拠点は、自分の心であるのです。（四七―二七三）

天国の拠点とは、どこにあるのでしょうか。キリスト教徒の中には「イエス様を信じて天国に行く」と言う人がたくさんいます。それならば、天国の拠点はどこにあるのでしょうか。「天国はどこにあるか」と聞くペテロにイエス様は、「あなたの心の中にある」と言いましたが、その天国の拠点とはどこでしょうか。悲しむ心が天国の拠点になり、自分を主張しようとする心が天国の拠点になるのでしょうか。それは、我々が願う内容の拠点ではなく、神様が賛同することができる天国の拠点ではないのです。

天国の拠点を探す人は、この地上の誰よりも孤独な立場にぶつからなければならなりません。それは、なぜそうなのでしょうか。神様が孤独であるために、その人も孤独でなければならず、神様が克服の歴史を経てきたために、その人も克服の歴史路程を経ていかなければならないのです。

天地に悲しみがいっぱいだとして、人間がその悲しみを感じながら悔い改め、慟哭の涙を流すなら、その立場が天国の拠点になり得るでしょうか。それをもってしても、駄目なのです。新しい喜びを感じ得る時を願いながら教団に仕える反面、この世の罪悪を解決しなければならないと決意できなければなりません。そのような責任を誓う一つの方向がなくては、天の拠点はあり得ないのです。

人々の中には、自分は良心的で、社会的に人々が仰ぎ見る立場にいるために、「天国は自分から始まる」と堂々と主張する人がいますが、それはその人が、善と悪は共に出発するという認識をもったからです。しかし、善と悪は、同時に出発し得ないのです。悪が東に行けば、善は西に行くべきであり、悪が動けば、善は停止しなければならないのです。また、悪が欲望をもてば、善は欲望をもってはいけないのです。善と悪は反対です。

天国を探すための出発は、人間の世の中に対する希望をみな失ってしまったところから始まりました。それゆえ、現実生活で満足する人たちの中には、真の宗教人は存在し得ないのです。

世の中が行き違う運命にぶつかり、自分の存在を認識できない絶望に落ちるとき、習慣的な生活におぼれているのではなく、自分の生命までも否定しながら、新しい価値を探していかなければならないのです。このように進むところから、真なる善の出発ができます。

このような観点で見るとき、「自分の人格が天の拠点である」と自信をもって言える人がいるでしょうか。いないのです。また、「私が今率いている家庭が、天の拠点である。神様がおられるなら、うちの家庭を知らないとは言えない」と自信をもって話せるという家庭も、やはりないのです。また、「我々の氏族は、これこれこのような善の功績をもっているために、神様が我々の氏族に知らぬ振りをすることはできない」と、自信をもって言える氏族がこの世界のどこにいて、そのよ

うな民族がどこにいるか、国家がどこにあるか、主義思想がどこにあるかというとき、呆然としてしまいます。

それで、「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」と言うのです。では、その言葉はどういう意味でしょうか。悪の世界で、自分自身を千年以上守るために努力する人であってこそ、千年生きるという夢を見ることができるのであり、自分自身を万年以上犠牲にしても、それを有り難く考えることができる心をもってこそ、万年生き得る希望を見いだすのです。

同様に、永遠の生命、永遠の幸福、永遠の天国を叫ぶ人がいれば、彼は永遠を目標として現時点を克服しなければならず、現時点で自分を犠牲にしながら、耐えて越えていかなければなりません。このような立場に立ってこそ、永遠の拠点が生じるのです。（四七―二四七）

二　天国に行く基準

神様を愛さずには、サタン圏内を脱することができないのです。それゆえ、自分の妻より、自分の夫より、神様をもっと愛さなければいけません。堕落した人類がサタン圏内の愛のなわ目の中から、端まで出てきましたが、まだ完全に出てこれませんでした。それゆえ、自分の父や母を神様より愛してはいけないのです。（四一―二九九）

天国に入ることができる人とは、どんな人でしょうか。まず、神様の心に合う人でなければなりません。どのくらい合わなければならないでしょうか。神様が永遠の目的を中心として、永遠の理想を描いていく方であるなら、永遠の基準で心が合うべきです。十年ぐらいは合っていたのに、また合わなくなってしまったのではいけないのです。永遠な神様に、永遠に心を合わせるべきです。そうするには、どのようにすべきでしょうか。永遠に互いに好むことができる息子になるべきです。そのような息子になるには、悲しみの対象としての姿を見せてはいけません。

その次には、神様の体に合わなければなりません。ここで体というのは、方向性をいいます。考えは四方の中心点に代わりますが、体は方向性として現れるのです。神様の心に合う息子になろうとするには、神様の体が東に行くとき、神様と共に東へ行かなければならないのです。神様は、温かいものを好むのに、イエス様が冷たいものを好めばいいでしょうか。神様は今、笑いたいし、話したいのに、イエス様が「寝たい」と言えばいいでしょうか。外的な体を中心として現れるすべてが、一致しなければならないのです。

それだけでいいでしょうか。違います。神様は、和気あいあいとした雰囲気を好むのに、殺伐としていてはいけません。神様が和気あいあいとしているときは、和気あいあいとしていなければなりません。内と外が合わなければならないのです。このように、内外だけが合えば済むのでしょうか。その次には、神様のみ旨と一致することをしなければなりません。そうするには、心にないことがあり得ますか。体が嫌がることがあり得ますか。体と心が好むことをしなければならないのです。神様がいらっしゃるなら、神様が好まれることがあるのです。また、イエス様が神様の息子なら、イエス様もそのようなことを好まなければならないのです。（四七―二五七）

天国は、命を懸けなくては絶対に行くことができない所です。命を懸けない人が天国にいるか、いないか、天国に行ってみてください。信仰の本質がそのようになっているのです。（三七―二五〇）

三　天国の始まり

天国は、どこから始まるのでしょうか。神様の悲しみを解かずには、天国に入ることができません。我々人間が、堕落して以来今まで、悲しい歴史をつづってきたために、悲しい歴史のすべての因縁を直接探さなければなりません。アダム・エバから、六千年歴史から、その因縁を探さなければならないのです。そのような悲しみの神様を教えようというものが、統一教会の原理です。

世の中の人たちは、悲しみがあれば、みな嫌だと逃げます。そのある悲しい事情よりも、もっと悲惨な神様の悲しみを教えてくれるのが、統一教会の原理です。世の中なら、悲しいことがあれば回避して逃げますが、統一教会の原理は、この悲しい所を経ていこうとするのが信条です。世の中では、悲しいことがあれば全部避けていこうとしますが、本来人間は、そうできないようになっています。

神様に対する悲しみを知れば知るほど、神様の悲惨な内容を知れば知るほど、実際においての統一教会は、強力な力が出てきます。それを解いてさしあげようとする力は、無限に爆発作用を引き起こす動機になります。これが、統一教会がもった偉大な力です。（二一―一一三）

四　天国の本質

天国とは、どんな世界でしょうか。そこは、本然の世界であるために、サタンに讒訴され得る個人や家庭や氏族は、入ることができません。天国に入ろうとすれば、個人と家庭と自分の親戚である氏族が一つにならなければなりません。言い換えれば、三代が一つにならなければなりません。アダム家庭について見るとき、アダム一代、カイン・アベル二代、カイン・アベルの息子が三代、このように三代が一つにならなければなりません。神様を中心として見るようになれば、神様が一代、アダム・エバが二代、カインとアベルが三代になります。（二一―五四）

天国は「ため」にしてあげる世界であるために、「ため」にするという観念だけ中心にもっていかなければなりません。「ため」にされるという考えだけをもてば、壊れていくのです。

天国は、神様の愛が充満した世界です。愛の本質は「ため」にされるのではなく、全体のためになるというものです。それゆえ、天国は世の中とは違います。

宗教の教えは、「ため」にして、絶対服従して、犠牲奉仕せよというものですが、世の中にはこのようなことはありません。これは、世の中の何も分からない乞食の輩がすることのようですが、天法を知らなくとも福を受けることができるようにするための、サタン世界に対する神様の暗号による作戦でした。（四六―四二）

五　天国の枠

私たちは、本郷の地を見つけることができませんでした。本郷の地を見つけられなかったから、本郷の祖国を失ってしまいました。本郷の祖国は、地上天国をいいます。天国といえば、地上天国があり、天上天国があります。

国になるためには、三大要素が必要です。第一は、主権がなければならないし、その次には、国土がなければならず、国民がいなければなりません。しかし、神様には主管できる主権がありません。主管し得る人類がいません。ですから、祖国がないのと同じです。このようなものが、本然の人間が暮らすべき世界ではないのです。（一五五―二六）

第三節　天国に行くことができる要素と条件

一　天国に行くことができる要素

一)　苦労が必要

永遠に残るものがあるなら、それは公的な苦労です。公的な苦労をして霊界に行ったのに、そこで滅びたなら、先生に抗議をしてもいいです。

民族と世界、天地のために働いて霊界に行く人は、知恵深い人です。（一九―三〇）

一国の責任者が怨讐に捕まっていき、優待を受けるようになれば、責任者を失う国の人々は団結ができません。捕まっていった責任者が悲惨に死ねば死ぬほど、彼と因縁をもった人々は、鉄の石のように団結するのです。

そのため、霊界が我々と結束され得る内容は、苦労だというのです。我々が苦労すれば苦労するほど、霊界は私たちと関係ができて団結するのです。

そうしないで、ただうかうかしていれば霊界も同じです。そのような意味で、神様はサタンを通じて作戦されるのです。執拗に苦労させ、殺したりもするのです。死ぬこと自体はかわいそうですが、反作用で結合するようになります。（四九―一〇八）

天国に行こうとする人は、「悲惨に暮らせ、悲惨に死ね、悲惨に行け」と言うのです。その言葉は善い言葉ですか、悪い言葉ですか。善い言葉です。それでは、「死ぬほど出て伝道しなさい」という言葉も善い言葉です。「人のために命を捨てろ」というのです。自分のためではなく、人のために、世界のために、天下のために命を捨てれば、大宇宙の主人として立ててくださるのです。

貴いものは、万物と人間と神様ですが、「この世界を善なる立場で抱く」と命を懸けて犠牲になった人は、その三つを懸けて犠牲になったために、神様は、その三つ以上のものを返してあげなければならないのです。イエス様はそのような観点で、「あなたの家の家族が怨讐だ」、「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」と言ったのです。そうしなくては天国に行けないために、これが一番幸福な教訓になるのです。一番高く、一番貴く、一番なくてはならない、絶対的な福音なのです。

それで、統一教会に来るようになれば、地上で豊かに暮らそうとしません。ひどく貧乏で、ひどく苦労して死んで、道端に倒れて犬もかみついていかない死骸になったとしても、その場には花が咲く日が来るでしょう。そこには、すべての聖なる人たちが集まって、城を築くでしょう。統一教会の群れを、国のために、世界のためにひどい苦労をさせて、孝

行者、忠臣にしてみようというのが、先生の考えです。「行かない」と言うなら張り飛ばすべきです。足でけって、現在の悲惨さを、現在の困難を克服させるのが愛です。

それゆえ、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）とおっしゃったのが、第二の戒めではなく、第一の戒めです。

その次に、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ二二・三九）とおっしゃいました。あなたの隣人とは誰ですか。世界万民が隣人であり、兄弟です。世界万民のために心を尽くし、精神を尽くし、命を懸けなさいというのです。命を懸ければ、すっかり成したということです。み旨のために一度死んでみようというのです。どこで死ぬのでしょうか。自分の死ぬ所を探さなければなりません。

一つの爆弾として生まれたら、きれいに岩に落ちて爆発すべきであって、下水のたまりに落ちるなというのです。我々は撃ってしまった爆弾です。「磐石の上に落ちよう。ひどいもの同士、一度やってみよう」と言うのです。このような決心をしたために、今日統一教会の文先生が五十を越えても、まだ行くべき道が遠のかず、躊躇しません。

あすの希望を実現するために精誠を捧げながら涙を流し、努力と精誠を、熱と誠を尽くすのです。この目標に符合し得る一つの帰一点、その一点を備えるために、命をちりあくたのように捨てる覚悟をしていくのが、統一教会の先生がもった主流的な思想です。ここには、冒険が内外につながっているのです。無慈悲な決闘を展開していっているのです。

命を限りを尽くしても、死なずに生き残る基盤になるなら、これは人類歴史に手本になるであろうし、万民の幸福の基調になるでしょう。全天下がそれを和動の起点として、大運動を展開することができる軸になる立場で、神様を動かして、人類の希望を結束させ得る立場で、自分が動ずれば全体が動き、自分が静ずれば全体が静ずるようにするという宇宙史的な責任感を感じながら暮らす男なら、決して臆病者ではないのです。（四九―三〇三）

修行の道に入っては、人は死ぬときまで死の道を行かなければなりません。死んですべき苦労を、生きて蕩減しようとするから、そのような道を行かなければならないのです。死んで億千万年苦労することを、縮小して、生きている間に蕩減してしまおうというのです。このように修行の道は、永遠に行くべき受難の路程をこの地上で苦難の道を歩んでいくことで蕩減しようというのです。（三一―三二〇）

二）　愛が必要

天国へは、愛の軌道に乗って行くのです。このように話すと実感がわくでしょう。その愛のひもを引けば引くほど細くなるのではないのです。ゴムひもは引けば引くほど細くなりますが、愛のひもは、引けば引くほど、反対に太くなります。

ですから、み旨のために苦労の親分になることが、世界を占領し得る秘法なのです。苦労の親分が、天国の栄光を独り占めするのです。

今日、宗教を信じる人たちが「天国に行こう」と言いますが、天国にそのまま行けますか。まず、地上で天国を迎えてから、行かな

ければならないのです。地上で天国を迎えるためには、愛の法度を経なければなりません。

皆さんの家庭に、子女たちがたくさん生まれれば生まれるほど、神様の国をもっと愛すべき十字架が加重されるということを感じなければなりません。その家庭に息子、娘をたくさん送るのは、背負う十字架が多いということなので、国のために捧げるべき責任が多いという意味です。そのような内容を知って、責任を果たす人になるべきです。そのような家庭であってこそ、その家庭に後代を相続することができる運勢をもった息子、娘が生まれるのです。（三二―二三二）

どのように天国に行くのでしょうか。神様の愛に狂って生きるべきです。理想のアダム・エバとして、神様を愛すべきであり、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ以上にイエス様を愛すべきです。そうしなければ、神様の国を愛して、真の愛の相対圏を復帰することができません。これだけ復帰するようになれば、万事が思いどおりになります。

お金がないと心配せず、息子、娘がいないと憂慮せずに、十年、二十年その道を続けて行ってみれば、大きな山や険しい峰にも登れるようになります。自分には、だんだん下っていき、苦労ばかりするように感じられるのですが、だんだん高くなるのです。統一教会は、打たれながら大きくなります。一つの家の中で、十人が暮らしているとすると、公的目的のために九人の反対を受けながらも我慢する人が、その家庭の主人になるのです。すぐ天国の主人になるのです。（一四二―二八九）

皆さんは、五色人種の息子、娘を抱いて、その孫たちを抱くことができなければなりません。それで、神様の真なる愛をもって、真なる父母として、世界人を愛する家庭の主人になったという立場に立つべきです。神様の愛を中心とした、本然の父母の因縁の中で、真の愛の家庭基準を代表し得る立場に立つことによって、初めて天国に入ることができるのです。

天国に入るには、真なる神様と真なる父母の、真の愛に一つになるべきです。その血統的関係から生まれた息子、娘と共に、この地上に生きてから行く所が天国ですが、今までそのように生きて行った人は一人もいません。それゆえ、天国は空いているのです。（一七六―二一〇）

天国に行く道は、兄弟を神様のように愛するところから開かれます。皆さんは、先生についていこうとしますが、その心で兄弟に従って共に行こうと努力しなければなりません。

天国に一番高く、早く、良く導く者は、神様でもなく、先生でもなく、兄弟だという結論を下すようになります。（六六―一二五）

では皆さんは、世界天国に向かって行きますか、個人天国に向かって行きますか。世界天国に向かって行くと言えるでしょう。先生も欲が深くて、世界天国に行く愛の綱をぎゅっとつかむために四十年間、迫害されながらこのことをしたのです。個人の愛の綱を残して、家庭の愛の綱、氏族の愛の綱、民族の愛の綱、国家の愛の綱、世界の愛の綱をぎゅっとつかむためにです。ぎゅっとつかんでどこに行くのでしょうか。世界の愛の綱を探した次には、福を受けて出世したから、還故郷するのです。故郷に行って、かわいそうな人た

ちを生かしてあげるべきではないですか。（一四三―一四一）

三)　実績をもつべし

過去には、祈祷をして精誠を捧げても、瞬間しかその宗教の教祖と会えませんでした。会ってはみな別かれました。それで、また上がらなければなりません。しかし、今は全部宗教圏を中心として、地上に再臨することができる時が来ました。そのような時代が来たために、皆さんが過去と、現在と、未来を動かせる実績をもてなければ、天国に行けません。

過去の時代は、天使と善なる霊人たちの時代であり、現在の時代は、父母の時代です。そして、未来の時代は、神様の時代です。それゆえ、霊界を動員し、父母様を動員し、神様を動員した実績をもたない人は、天国に入れません。アダム・エバに天使が動いて協助し、神様が動いたのと同じです。そうした次に、宇宙はアダム・エバが動かさなければならないのです。

皆さん、神様を中心とした三世界すなわち、過去、現在、未来を支配し得る人だけが、本然の天国に入ります。そうしてこそ、本然の世界である天国に行くのです。（一六一―一九九）

天国に行くことができる条件は、自分の息子、娘よりも神様をもっと愛すべきなのです。夫より、妻よりも、主をもっと愛するべきなのです。自分の体よりも、聖霊をもっと愛するべきなのです。これが三位一体です。（一〇―一〇〇）

では、天国に誰が入って暮らすのでしょうか。神様を喜ばせた息子、娘が入って暮らすべきなのです。ところで、堕落という名詞が生まれた以後、数千年の歴史を経てきながら、数多くの人類が膨張、繁殖しました。そのように繁殖した人たちの中で、神様を幸福にしてさしあげた人が、この地に生まれませんでした。（四三―二三）

皆さんは、統一教会を信じて天国に行くのを願っているかもしれませんが、自分がこの地上で実績を積むことができなければ、たとえ天国に行くとしても、恥ずかしいのです。我々は、観念的に信仰生活をして、天国に行くという群れではありません。すべての努力と精誠を注いで、天国を建設するという群れです。これに反対したり、制止する人がいるなら、許すことができません。天国を建設するためには、自分の心身はもちろんであり、自分のすべての所有物と環境まで全部投入しなければなりません。そして、国家の運命に責任をもつべきであり、さらにアジアの運命にまでも責任をもたなければいけません。（二二―二二六）

四)　「ため」に生きるべし

皆さんが五十年の生涯の中で、二十五年以上をこの宇宙のために、天倫に従って生きたなら、天国に行くのです。それならば、あの国に行って良い霊界にとどまることができますが、自分を中心にして生きたことが多くなったなら、残念ですが善なる本郷の世界に行くのではなく、自分だけのためにしようとする悪の本郷の地獄に行くのです。そのような事実を知り、今から皆さんは自分のために生

きた過去の生活を清算して、全体のために、国のために、世界のために、天地のために、神様のために生きる余生を残すために努力しなければなりません。そうするなら、ここから地獄ではなく、天上の理想世界に行進するであろうことは間違いありません（七八―一一九）

霊界がどのようになっているかという事実については、誰にも負けない体験をし、また、霊界は私の専門的な分野です。あの霊界の秩序的起源を尋ねてみれば、どのようになっているでしょうか。「ため」に存在するようになっている世界が、天国です。その所は、我々の本郷です。

我々は良かれ悪しかれ、どうせそこに行くべき運命に置かれています。それが我々の一生の道です。我々は、そこに向かって旅人の道を行っているのです。では、ここで問題となるのは、自分のために暮らしたか、人のための生活をしたかということです。その差に従って、人のために生きたことが多いというときは、天国に行くことができるのです。その反対になるときは、地獄へ行くのです。この原則は、この場では信じられないでしょうが、死んでみれば分かるようになります。

神様は、人類を救うために、宗教を立てて摂理してこられます。それゆえ、高次的な宗教であるほど、その本郷のみ旨と本郷の原則に一致する教訓を述べざるを得ず、「犠牲になれ、奉仕せよ」という勧告をせざる得なかったのです。

このように、神様が歴史と宗教の背後から摂理しているという事実を否定することができません。このような原則について見るとき、「ため」になろうとする宗教は発展することができますが、自分を中心にして世界に問題を起こしながら、主体的な立場に立とうとする宗教は下っていくという結論も、ここから見いだすことができるのです。（七四―五一）

天国は愛の世界であり、中心者である神様のためにある世界、神様のために生きる世界です。（九八―三五）

二　天国に行くことができる生活

一)　我々の立場

人間の創造は、神様が人間を神様の愛に同参させたことです。神様の愛から出発し、神様の愛の懐でそれを相続し、次に家庭を成して世界的な愛をつなぐ完成者になり、神様の愛の懐に帰らなければならないのが、人生の道です。

堕落することによって、これが根本的に破綻しました。神様と人間との関係が隔離されてしまったのです。いくら神様の前に帰ろうとしても、帰ることができず、また、神様が我々人間の所にいくら来ようとしても、来ることができない間隔が生じました。壁が生じて、国境が生じたのです。

その壁は、神様も越えることができず、神様を父母として侍る人間も越えることができません。

この壁が、我々個人の心と体の間に入り込むようになりました。夫婦の間にも、壁が入り込むようになりました。家庭がそうであり、氏族と民族と国家と世界、全霊界の天国と地獄の間にも、このような塀が生じたのです。この塀を取り除かなくては、神様がいくら天国の栄光の宝座にいらっしゃるとしても、地上にいる我々は、包囲されたこの塀を越えることができません。

これが、この地上に生きている人間の悲劇です。この悲劇をどのように打破するか。
我々人間が、神様を父母として侍って生きるべきであり、神様からすべての生活を指導されるべき立場にあるのにもかかわらず、神様がいるのか、いないのかも分からず、あるいは「決定的に神がいない」、さらには「神は死んだ。我々人間世界で神を掃いて捨てなければならない」という悲惨な歴史的な環境が、我々が生きている世界に展開されています。（一三五―二六七）

二)　天国に行けない場合

み旨が動機になるでしょうか、自分が動機になるでしょうか。自分が動機になってはいけないのです。それなのに、いつもみ旨をあとにして、自分を動機とする時の多いのが、今日の人間たちです。み旨は受難の道を要求していますが、「私」はそれに背こうとします。相反する立場なのです。み旨は右に行けというのに、自分は左に行こうとします。
「私が統一教会に入ってきて、誰ほど苦労できなかったか」という条件を提示して、自分を弁明しようとします。

自分を弁明しようとする者は、天国に入ることができません。絶対的な信仰というものは、自分を弁明する立場ではないのです。弁明される立場になるべきです。そこには一言半句、何かを提示する内容もありません。弁明される立場です。うまくやっても、「うまくやった」と言える立場ではありません。自分が一〇〇パーセント認めることのできるものだとしても、神様が見るときは一つです。自分が百と認めるものが、神様には一つなのです。それゆえ、天国は自分を中心として提示する立場では、訪ねていくことはできないのです。

天国はどこから始まるでしょうか。絶対的な信仰を起点として出発するのです。絶対的な信仰というものは、自分を主張できるものではありません。その立場は、自分を絶対否定する立場です。自分を絶対的に否定する立場に立たずには、絶対的な信仰が出てくることはできません。皆さんが、世の中の万事を肯定しながら信仰の道を行くときには、絶対的な信仰が出てきません。

このような根本問題について、今日大部分の人を見てみれば、一日の生活圏内で、朝に起きて御飯を食べてする習慣的な生活をしながらも、「私は神様に対して堂々としている」と言います。そのように信じる人がたくさんいます。そのような人たちは、天国を所有することはできません。堂々とすることができないのです。自分を公認する相対的な要因がなくては、絶対的信仰基準ももてないのです。絶対的な信仰基準ももてなかったのに、絶対的な信仰基準を克服してしまったのちにこそ成される天国が成就され得ますか。とんでもないことです。なぜそうなのでしょうか。その立場には、サタンがとどまっているためです。（四六―七九）

今までの歴史上に、神様の前に呼ばれた人たちは、全部五十代以上、六十代以上でした。年が多くて、やつれて、間もなく共同墓地に行くしかない人たち、葬送曲を歌う日が近い輩だったのです。そのような背後から、神様は今日、このようにやつれてやせた老年層を捕まえて摂理しますが、これからは壮年層を捕まえて摂理しなければならないのに、彼らを捕まえてどのように摂理を展開させるかと

いう心配をされたのです。神様は、そのような事情を抱いて歴史路程を歩んできたのです。

老年時代が過ぎて壮年時代に、壮年時代が過ぎて青年時代に、青年時代が過ぎて少年時代に、少年時代が過ぎて幼児時代に、そのように皆さんは再び生まれなければならないのです。そうでなけば、天国に行けないのです。皆さんは、少しも汚れなく無邪気な幼子のように、かわいがられることができなければなりません。それで、イエス様はニコデモに、「新しく生まれなければならない」（ヨハネ三・七）と言いました。生まれ変わらなければ、すなわち「重生しなければいけない」と言われたのです。それで、神様は最高の収拾する役事として、母の腹中から救いの役事をしようというのです。どれほどすごいことでしょうか。（二〇―九五）

三)　天国のための我々の生活

皆さんが七十年、八十年を生きると見るとき、その中で三分の二が悲しい生活だとするなら、この三分の二をどのようにすべきでしょうか。神様を中心として、うれしい生活にしなければなりません。天国化させなければならないのです。天国は与えながら生きる所です。神様も与えなければならないのです。父母は、子供に与えなければならないのです。良いものを与えてしまっても、もっと良いものがあれば、それもまた与えたいのが父母の心です。（三四――四一）

皆さんは、今戦っています。自分の一生の間、大砲を撃っているのです。世の中に対する前に、自身の体と心が戦っているのです。これをどのように平和にするか。この戦いで体が勝つか、心が勝つか。「私は間違いなく心が勝つ」と言える人にならなければなりません。心が勝つ人は、善の側であり、体が勝つ人は、悪の側です。

では、体と心が戦っている戦場で、心が体を倒して勝つことができる秘法、または体が心をたたいて捕まえる秘訣とは何か、その戦法とは何でしょうか。これが問題です。その武器とすべての装備が、どのような方向を経て動員されるかという問題が、善になるか、悪になるかを決定づけるのです。ここにおいて重要なのは、この対立を解決し得る要因とは何かということです。悪の世界に暮らしている人間に、善が成立し得る必要要件とは何でしょうか。悪が成立する要件とは何でしょうか。これを知って、取ったり、取り除いたりしようというのです。この要件は、知ってみれば簡単です。（三六―六一）

優れているという男、優れているという女がいるときに、男が男の権利をもって「祝福を自分一人で受ける」、また、女が女の権利をもって「自分は一人で祝福を受ける」と言えますか。神様のみ旨を絶対視して、人類の希望として提示されたすべての条件を越えなければならないのです。そのままでは、できないのです。これからの地上天国ですることとは何かというと、夫婦が互いの相手から世界的な歓迎を受け、世界から尊重される妻と夫になるための道を尋ねていくのです。それが、地上天国で暮らす生活方法です。（一六二―六九）

「私」という一人は、善だけを捕まえて行くことはできません。これは世界的に善が占めるとか、悪が占めるとかになれば解決され

ますが、善が占めるときには生き、悪が占めるときには滅びるのです。このようにこの世界は、死ぬか、生きるかという興亡の道を走っているのです。

個人は、歴史的所産物です。家庭も歴史的所産物であり、国家と世界も歴史の所産物です。その歴史の所産物の中で、善の所産物がどれほどになるでしょうか。自分の個体について比重を計算してみるとき、善の所産物がどれほどになるでしょうか。我々が暮らしている生活環境の中で、善の所産物が何パーセントになり、個体の人格の中で、何パーセントになるかというのが問題です。

悪に接する要因をたくさんもっているか、善に接する要因をたくさんもっているかを見るようになるとき、全体が悪に接する要因として囲まれています。悪が行く道においては、教育は必要ありません。教育を受けなくても、誰でも行くことができるのです。悪から始まった歴史であるために、教育を受けなくても誰でも行くことができるのです。悪の道を行くように教育する必要性がありますか。自らそのようになったために、今日人類道徳を中心として、良心の標準の前にわきまえて行けと教育するのです。

何を中心とした教育でしょうか。善を中心として、良心を中心として教育をしたのにもかかわらず、その教育の標準に立脚した人がどれほどいるでしょうか。悪のことは習わなくても、誰でもみなすることができるのです。誰でも、満点になることができるのです。

このような環境の中で暮らしている我々に、良心はいつも「善であれ」と勧告します。我々の心は、いつも善の人になれと、休まず自分を刺激し、自分に勧告するにもかかわらず、善の自分になったでしょうか。このような問題を考えてみるときに、きょうも嘆息であり、あすも嘆息であり、今年も嘆息であり、青春時代も嘆息であり、中年時代も嘆息であり、老年時代も嘆息なので、嘆息で一生を終えるのではないでしょうか。言い換えれば、悪のことで終わりを見るのではないかというのです。このような結論を下すしかないのです。悪から生まれたために、悪でのたくり、悪に行くのが、今までこの世の中に生まれては死んだ数多くの人間たちの生涯であり、今この地に生きている数多くの人類の行路というものです。

今日、統一教会は何をする所でしょうか。悪くなれと教えてくれるものでしょうか。それなら統一教会は必要ありません。悪は教えてやる必要がないのです。悪の道は教えてやらなくても、楽に行くのです。（三六―五六）

四)　我々と天国

イエス様は死を目の前にしても、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」（マタイ二六・三九）と言いました。死に際にも、神様に抗議するのではなく、父のみ旨がもっと大きいように、もっと大きな犠牲も当然捧げますという姿勢でした。この立場では、もっと深く入れるために、神様ともっと近い立場に入るのです。そのような人の前には、神様も微動だにされません。そのような人を打つ人は、すぐに滅びます。神様自らが制裁をされるのです。それゆえ、「右の手のしていることを左の手に知らせるな」（同六・三）と言いました。

ある日、「誰かに何千万ウォンをあげたから、それに対する利子をいくら持ってこなければならないのに」と言いながら、与えたものを記憶する人は、天国の主人になり得ません。与えたものを忘れなければなりません。父母が子供を育てるとき、いくらいくらを投資したから、その利子をもらうと言う、そんな父母がいますか。与えても、みな忘れるのが父母の心です。与えたものを忘れるだけでなく、もっと良いものを与えられなくてふびんに思うのが父母の愛です。その愛は永遠に続くために、父母のいない人を孤児と言い、孤児になるのを好む人はいないのです。（三六―八五）

天国とはどんな所か分かりますか。「ため」にする人たちが行く世界が天国です。自分のためにする人は、絶対行けません。そのような人は、地獄に行くのです。有名な牧師だからといって行けますか。行ってみれば分かります。我々統一教会は、怨讐まで救ってやり、共産党まで救おうとするのに、共産党は統一教会を全部首を切ってなくそうとします。これが違うのです。

ですから、どんな思想がこの世界を支配すべきでしょうか。我々は共産党よりもっと強くなければなりません。悪なる人になって強くてはいけないのです。「ため」にする愛を中心として強くなれば、世界を救っても余るのです。

今我々は、天国で暮らす人ではなく、天国に行こうとする人です。このような生活がどれほど続くでしょうか。きょう終わるのですか。十年、百年かかるでしょうか。しかし、死ねばどのようになりますか。それで接ぎ木されなければならないのです。ぷつりと切ってしまって、接ぎ木されなければならないというのです。（九一―一七三）

最後に、どのような世界に行くでしょうか。地獄に行くでしょうか、天国に行くでしょうか。皆さんは行きながら、「先生７　私を助けてください」と言う人になりますか、「先生７　どうぞ来てください」と言う人になりますか。死ぬか生きるかなのです。皆さんは、「結婚して豊かに暮らす」と言いますが、先生が「豊かに暮らせ」と言うのは、「変わらない夫婦になれ」ということです。変わらない夫婦になるには、変わる夫婦の世界に行って、共に修練を受けて、四方に分かれて暮らす世界に行っても、分かれてはいけません。このような修練をされた立場に立たなければなりません。（一二九―一八二）

三　四位基台と天国

一)　天国は家庭が入る

先生が、今まで家庭的にだけこのことをしてきたなら、迫害を受けることがありますか。先生は、お父さん、お母さん、親戚一家、姻族の八親等まで、全部集まった場で、み言で彼らを感動させる自信があります。間違いなく、親戚や一家全体をみ旨の前に立てる自信があるのです。それが天のみ旨ではないために、そうすることができませんでした。イエス様もそうすることができなかったために、自分の親戚の前から追い出されました。

しかし、皆さんはそのようなすべての時を過ごした立場なので、親戚を伝道することができ、父母を捕まえて涙でも流しながら、自分の切なる心情を吐露することができる時代的環境を迎えました。そのため、皆さんの立

場は先生の立場よりいいのです。今は、皆さんの親や親戚たちがみ旨を受け入れまいとするなら、泣き叫んでどんな手を使っても感動させることができる時です。

お兄さんは、どうしても対話するのが少し難しいですが、弟ぐらいは、「やあ、お前、信じるのか、信じないのか」と言いながら、小突いて強制的にでも信じるようにできる自由な時が来ました。このような時を迎えているのに、皆さんが責任を果たせなくては、天の前に面目がないのです。先生もこれからは、そのような人たちに対することができません。これをしなければ、天国に行けません。天国へは、家庭を成してこそ行けるのです。（二一―六六）

統一教会は、個人では絶対救われ得ないと見ます。個人としては、天国に行けないのです。一人では行けません。原則がそうです。エデンの園のアダム・エバが二人一緒に天国に行くようになっているのであって、夫または妻だけ天国に行くようになっているでしょうか。夫婦が合わさり、家庭が合わさらずには、天国に行けないのです。それが理想であって、父は地獄に行き、母は天国に行けば何の天国ですか。天国は、夫婦が行くべきなのであり、家庭が行くべきなのであり、家庭だけでなく、家庭の一族が行くべきなのであり、国家全体が行くべきなのです。（五〇―六三）

天国は、どこから始まるのでしょうか。自身が生まれた心情的起源までも否定するところから始まるのです。それで、修行の道を行く人は、独身生活をするのです。しかし、ここには難しい問題があります。再臨主が来て、この問題を解決してあげる時までは、個人的問題に逢着するするようになるのです。

個人の救いを中心にしては、これから行くべき道がないために、人類を救うためには、家庭を救わなければなりません。このような家庭全体が救われ得る道を開いてあげるために、再臨主が再びこの地に来られるのです。今日キリスト教徒が、「イエス様を信じて天国に行く」と言っていますが、全部個人主義に陥っているのです。本来天国には、一人で行くようになっていません。アダム・エバが堕落しないで、神様の愛の圏にとどまっていたなら、彼らは天国に行くでしょうか、行けないでしょうか。そのようになったなら、地獄はありもしません。

天国は、夫婦が息子、娘を率いて行く所です。息子、娘、孫たちと共に、その一門を率いて行く所です。さらには、国全体が行く所です。それゆえ、天国になるのです。天国は、このようにして成される所です。（四一―三〇〇）

一人で座って「ここが天国だ」と言えば、神様が考えるとき、どれほどもどかしいでしょうか。これをもって「良し」と言えますか。しかし神様が、人間世界を見るとき、宗教の世界を見るとき、どれほどもどかしいですか。（九六―七一）

我々統一教会は、どのような水準にまでなるべきでしょうか。釈迦牟尼よりも立派な人になるべきであり、イエス様や孔子よりも立派な人になるべきです。今までの宗教の目的は、個人を救うことでした。しかし統一教会は、個人の救いよりも、家庭の救いを目的と

するのです。統一教会が一般宗教と違う点は、これです。救いを目的としますが、家庭を救い、天国に行っても自分一人で行かないのです。

統一教会の救済観は、夫は天国に行き、夫人は地獄に送ろうというのではありません。二人とも天国に行こうというのです。母、父を地獄に送るのではなく、母、父を連れて、息子、娘も連れて、天国に行こうというのです。統一教会は、自分が愛する家庭、自分が愛する氏族までそっくり連れて、天国に行くことができる道理を教える宗教であるために、他の宗教とは次元が違います。それゆえ、今までの宗教は、独身生活を強調しましたが、統一教会は家庭を重要視するのです。家庭を中心として行くのです。その家庭は、世界のための家庭であり、神様のための家庭です。これが統一教会の信徒が行くべき道です。（三四―三五九）

今日、幸福とは何でしょうか。一番最初に話しましたが、我々人間の本性が、より次元の高い未来の幸福の基盤のために前進するとき、現在暮らしている家庭で幸福の対象者が誰かというとき、夫には妻であり、妻には夫であり、父母には子供であり、子供には父母です。この基地から天国建設が可能なのです。

「天国はあなた個人にある」という話はされましたが、「天国はあなたの家庭にある」という言葉は言えなかったイエス様が、どれほどかわいそうであり、孤独であられたかを考えてみてください。それでも、皆さんは家庭をもち、幸福を謳歌しています。あるときは、靴を脱いで、世の中が何だかんだ、国が何だかんだと反対しても、それをけ飛ばして、漢江の橋から二人が投身自殺して流れていって、魚の餌になっても有り難いと言えば、それが幸福なのです。そうでしょう。我々にはそうすることのできる一瞬があるのに、天下を救うための求道者の主人であり、神様のひとり子であられるイエス様が、このような環境、天国基地を夢にも見ることができず、「天国はあなたの心にある」と言いながら、心で天国を犠牲にしようと歩き回って三年も満たせずに十字架に帰られたので、その方の生涯が、どれほど孤独であり悲惨かというのです。

イエス様が願った天国が心の天国ならば、心の天国を越えて環境の天国を築くということは永遠に不可能なのです。家庭天国を越えて、社会天国を築き、国家天国を築くというのは永遠に不可能です。世界天国はいつ成されて、天上天国はいつ成し遂げられるのでしょうか。メシヤには、万民を救い、霊界を解放して、神様を解放させるべき責任があるのです。このような立場を考えるとき、どれほどあきれるでしょうか。イエス様は、十字架にくぎ打たれて死んだのは何でもないのです。そこから倒れれば、天の前に面目が立てられないのです。天国理想、理想社会の覇者として立つようになるから、面目を隠すことができ、覆ってくれるふろしきがあれば訪ねていきたかったのです。百回死んでも、その恥ずかしさを免れる道がないイエス様の心情を分かる者が、誰かいたかというのです。（一二〇―四八）

天国という所は、一人では行けません。天国という所は、必ず相対理想を決定づけてこそ入るようになっているために、堕落人間が天国に入るためには、復帰の歴史、復活の歴史、再創造の歴史を経なければなりません。

皆さんに祝福をしてあげるのは、天国の門をすっかり開けておくことです。祝福は、閉じている天国の門を開けてあげることです。

その門から家庭が入るのです。息子、娘をもって入らなければならないのです。家庭は、すべての実績をもった歴史的な実にならなければなりません。神様の六千年の復帰歴史が、一次アダム、二次アダム、三次アダムの時代を経たので、家庭でも三人の息子を経て、その三人の息子にも相対を立てておかなければならないのです。それで、家庭的に入るのです。（一五二―二四〇）

二) イエス様と家庭

神様を中心として、永遠に共に暮らすことができる愛の家庭を標準として教えてくれた宗教が、キリスト教です。神様が人間に会おうとするのも、家庭をつくるためです。人間の願いがこれです。これ以上の願いはないのです。

イエス様が家庭を成そうとしましたが、そのみ旨を成せずに十字架に亡くなりました。新郎新婦の名前を残して逝かれたのです。それでイエス様は、再び来て小羊の宴をすると言いました。これは何かというと、神様が安定し得る理想的な家庭を出現させることです。それによって、イエス様は「真の父母」の立場に行くようになるのです。「真の父母」の立場から、真の子女を生んで、真の兄弟を成し、このような真の家庭を中心として、真の氏族と真の民族を成し、新しい民族と新しい国家を形成なさらなければならないのです。これをするために、イエス様は再び来なければならないという結論が出てくるのです。（三九―三四四）

三) 四位基台と天国

うちに一緒に暮らす夫と赤ん坊たちと、うちのお母さん、お父さん、おじいさんは、天国を案内する三天使だということを知るべきです。おじいさん、妻、息子、娘なので、三天使です。対になっているから、三天使の代表者たちであることを知るべきです。それで、お母さん、お父さんは、おじいさんに習い、息子、娘に習うのです。分かりますか。夫は妻に習い、妻は夫に習うのです。これは事実です。これが家庭の伝統です。

結婚とは何でしょうか。女は男に対して知らなかったことを習うためのものであり、男は女に対して知らなかったことを習うためのものです。これを知るべきです。結婚とは、異性について習うためのプログラムです。それは、学校に入学することが、結婚であるということを知るべきです。それで、単位も百点を取らなければなりません。それでこそ夫も喜び、妻も喜ぶのです。百点を取らなければなりません。そのような話を全部細密に話せばいいのでしょうが、時間がありません。皆さんが微動だにできないように話をしたらいいでしょうが、時間がありません。

息子、娘を生むのは、また息子、娘のためにすることは、世界を愛することを習うためです。息子、娘が世界とつながって、未来とつながります。息子、娘がいなければ、未来とつながらないのです。未来と世界につながり得る教育の資料として、息子、娘を与えたことを知るべきです。その次には、先祖たち、おばあさん、おじいさんは、霊界に対する教育のためです。おじいさん、おばあさんの前に孝行をすれば……。霊界にそのシステムが

できているのです。霊界に対する教育を受けるためのものです。これを知るべきです。

それは何を中心としたものでしょうか。愛というタイトルのもとに、全部つながります。愛を中心として、全部がつながります。おじいさん、おばあさん、夫、妻、息子、娘が、愛を中心にして全部つながっているのです。その愛をもてば、霊界にいる千万代の先祖にも上がっては下がり、あの後孫にもこの愛だけが通じるのです。血管と同様の組織が、霊界の組織であり、この宇宙の組織だということを知るべきです。愛の圏がどれほど素晴らしいでしょう7　驚くべきことだ7　ライト（right：正しい）？　（はいそうです）。ライトにはマイト（might：権力、力）とパワー（power：力）という意味もあるのです。すべては正義に従いたがります。皆さんはどうですか。愛の僕になり、愛の奴隷になるのが、最大の幸福だという結論が出てきました。（一三五―一二〇）

復帰といえば、四位基台復帰をいうのです。四位基台復帰をするには、父を復帰し、母を復帰し、息子、娘を復帰しなければならないのです。それゆえ、祝福された皆さんは、夫婦が完全に復帰されて、息子、娘を生んで、堕落しなかった立場に立てておかなければなりません。そうするためには、新しい伝統をほうり込まなけばなりません。そうしようとすれば、聖人より良くなければならないというのです。（五八―三五）

家庭天国を成すところで、初めて神様が理想とする地上天国が落ち着くようになるのです。これが四位基台になるべきです。「統一原理」の創造理想の完成は、四位基台完成だと言います。

それがなぜそうでしょうか。神様とアダム・エバを中心として、三段階を経て縦的世界と横的世界が繰り広げられると、四位基台を成そうとするからです。アダム・エバの息子、娘がいてこそ、横的な世界が繰り広げられるのです。このようになれば、縦的な世界が自然的に生じるのです。体を中心としては、体の横的基準が息子、娘であり、心の横的基準が霊界だというのです。そこで初めて神様が臨在なされることができるために、地上に天国が実現するのです。（九六―二九）

第四節　天国の門と天国入城

一　人間の心門

釈迦牟尼のような方も、神秘的な境地に入って、「天上天下唯我独尊」という言葉を言いました。修道しながら精神を統一して、霊的世界に入って神様の前に完全な対象の位置に入ると「天上天下唯我独尊」という言葉が可能なのです。先生が世の中をぎゅっとつかめば、世の中がこの握りこぶしの中で溶ける気持ちがするのです。そのような境地に入るようになれば、奇跡は自動的に生じます。病気を治すのは、自然に信仰生活の付属物としてついて回るのです。

それゆえ、心門に合わせて、心田を啓発しなければならないのです。この心の畑を啓発して、方向基準を開拓するためには、必ず主体であられる神様を発見すべきです。ところで、主体であられる神様は曖昧です。曖昧な神様につながるには精神を集中させて、自分の心から出発する道以外にはないのです。心から、心を明らかにしておけば、必ず方向を

知るようになるのです。自然についていくのです。皆さんもそれを感じるでしょう。東に向かって祈祷をしたのに、神秘の境地に入れば、方向が変わるのです。そのようなことが繰り広げられるのです。それゆえ、心の門があるのです。

祈祷は良くできるときもあるし、いくら斎戒沐浴をし精誠を捧げても、できないときがあります。部屋によって、また部屋の位置によっても違います。一つの中心には東西南北があるために、その位置によって違うのです。また、方向によって違うのです。山に行っても、祈祷が良くできる所もあります。また、サタンが集まっている所もあります。それは陰地です。陰地と陽地は、霊的にそのようになっているのです。何回か体験すれば、そのようなことがみな分かります。

すべての暗示や夢のお告げや、啓示や黙示が繰り広げられるのは、人間と神様との関係を結ぶために広がる、開拓的で発展的な不可避の現象であるために、これをおろそかにせず、生活に適用できるよう努力しなければなりません。

そのために皆さんは、心の門を開いて、心の畑を啓発することを今までしてきているのです。心の畑が啓発される場合には、それで終わるのではなく、それを相対的な世界に適用させることができなければならないのです。（七六―一四三）

二　開天門とは何か

一)　開天門すべき理由

なぜ、開天門があるようになったのでしょうか。アダムとエバが失敗しましたが、すべての責任を神様がもったのです。責任をもった神様が、門を開いてあげなければなりません。個人が行く門を開くべきであり、家庭が行く門を開かなければなりません。その次には、氏族が行く門を開かなければなりません。すべての門がふさがっています。民族が行く門もふさがりました。国家が行く門もふさがりました。世界が行く門もふさがりました。これをみな開いておかなければなりません。レバレンド・ムーンが、統一教会の家庭を通じて門を開こうとするのです。

神様は、もっと大きなものを探すために、小さいものを準備してくる作戦をします。個人から家庭、氏族、民族、国家、世界、その次に天宙、霊界までも、地獄と天国にふさがっています。これが、誰のためにそのようになりましたか。アダム・エバが真なる父母になっていたなら、これが一つの世界になったのに、堕落して偽りの父母が生じることによって、地獄と天国がふさがるようになったのです。

この歴史的な恨みの塀を、誰が克服してしまうべきでしょうか。真の御父母様が克服してしまうべきです。そのことは、国の王権をもち、宝座でするのではありません。人類が地上の地獄に暮らしていて、霊人たちが霊界の地獄で苦痛を受けているから、地上地獄の門と天上地獄の門をすべて開いて、地上の個人から国家と世界を連結させ、その次に、地上から天上世界まで通じ得るように道をつなげなければなりません。ハイウェイをつなげなければなりません。主流と通じることができる、たった一つの道としてつなげなければなりません。それで、皆さんの心と体が一つになり、一つになった基準で家庭を経て、氏族を経て、民族と国家、世界を越えて、天上

世界に行ってもふさぐ塀があってはいけません。みな克服してしまうべきです。

最後の問題は、ふさがっている霊的な地獄の門と天国の門を開くことです。地上地獄の門を開き、天上地獄の門を開かずしては、天国に入ることはできません。地獄に勝った人だけが天国に行くことができます。何によって勝つべきでしょうか。祈祷で勝つことができるのではありません。神様の愛をもって勝つべきです。そうせずしては、天国に入れないために、レバレンド・ムーンは神様の愛を中心として地上を経て、天上世界の地獄の門まで開いて、地上から天上まで行ける道を築いておきました。国際平和高速道路という言葉も、それで出てきました。ふさがった塀を壊してしまうのです。

イエス様が、天国の王子、ひとり子の権威をもつことができたのは、サタン世界だけを愛したのではなく、霊界まで愛したためです。

霊的世界も塀でふさがっています。これを全部、より高い神様の心情を通じて払いのけておかなければなりません。天上世界の高い宝座から、存在する塀を壊してしまい、逆さまに下りてこなければなりません。何万年の我々の先祖の塀から、その次に何千年の我々先祖の塀、何百年のこの時代の塀、今何年前に行ったすべての人たちの塀まで、全部壊し、地上のすべての塀を壊して、これを地獄までつなげることができる道を築かなければ、開天門がなされないのです。（一四〇―四三）

二) 開天門の始原

今回、先生が有り難く思うのは、お母様です。お母様は先生がダンベリーにいる間、たびたび深い次元の心情的谷を経験しただろうと思います。分別のなかったころに出会って、その時から平行線で上がってくる人生でした。そのように生きたために、基準がだんだん上がってきているのです。その前には、心情の深い谷は体験できなかったでしょう。ダンベリーによって別れてみたから、先生の貴い価値を知るようになったのです。女性が、夫に対して、その孤独な事情がどうであるかということを知ることができたのです。

それで、二月一日を期して、天上世界と地獄の門を開く式をするようになったのです。今は、駄目なのです。極と極の立場に立ててておいてこれをつなげ得る立場でだけ、初めて一つの解決点が生じるのです。霊界と肉界をつなぐのです。一九八五年二月一日午前三時（アメリカ時間）ダンベリーとイースト・ガーデンで、そのような基準を立てたのです。

神様の心をもって、愛の力がつながり得ることを、皆さんがしなければいけません。ずうずうしい責任者になって、神様が救ってあげるべき立場で行こうとするのか、この垂直線から行こうとするのか。

天性に向かって行く道は、男と女が一つになって行くべきですが、どこで一つになるのでしょうか。軸で一つになるべきなのです。軸で一つになって、軸に従っていかなければなりません。上がっていくときは、軸に向かって上がっていくべきであり、下がっていくときも、軸に向かって下がっていくべきなのです。そのような道を、家庭を中心として、氏族圏、民族圏、国家圏、世界圏まで蕩減復帰の原則により、誰でもが行かなければならないのです。誰でも、そのような道を経なければなりません。なぜなら、堕落圏にいるためです。（一三六―四七）

先生は一生の間、怨讐を愛することをしました。個人段階からそのことをし、家庭段階でそのことをし、氏族、民族、国家、世界段階、その次に天宙段階までそのことをしました。ダンベリーになぜ入ったのでしょうか。霊界と肉界が塀でふさがっています。堕落した父母によってもつれてしまったものを解くためには、霊界と地獄に道を築いておかなければならなかったのです。

一九八五年二月一日午前三時を期して、お母さんと特別祈祷をすることによって、そのような条件を立てました。その時から、地獄のすべての塀が崩れて、誰でも努力すれば、天上世界に上がることができる道が生じました。また、霊界において自分の親戚たちの中で善の霊がいれば、地獄に来て教育をして、率いていくこともできるようになりました。霊界の救世主の役割が始まったのです。救世主の役割が霊界にはなく、この地にだけあったのに、このような道を築いてあげることによって、あの世の善の霊たちが地獄にいる悪の霊たちを教育して、善の先祖が救世主の役割をしながら、発展して上がることができる道が開かれるようになりました。（一三六―一八七）

三)　真の父母と天国の門

統一教会の使命とは何でしょうか。統一教会は、過去の宗教とは異なり、個人的な救いだけを願う宗教ではありません。堕落しなかった本然の理想世界を願う宗教です。本然の理想世界は、完成した人間が、神様の愛の中で夫婦の因縁を結んで、息子、娘を生んで天国に行く所を言います。

お父さんが地獄へ行き、お母さんが天国に行っては、それが何の天国ですか。父母は天国に行って、子供が地獄に行けば、それが何の天国かというのです。天国は、父母と子女、氏族、民族、国家がみな入る天の国です。

人類が偽りの父母として出発したので、天国の門を開いて入るには、「真の父母」が出てこなければなりません。神様も、自ら天国の門を開くことができません。神様が自ら天国の門を開くことができるなら、そのような能力がある方が、なぜしないでしょうか。堕落は、人間がしたために、罪を犯した人間が罰を受けなければなりません。人間が天国を失ってしまったから、人間が探さなければならないのです。それで六千年もかかったのです。

では、天国を開門するためには、どのようにすべきでしょうか。僕の僕の立場にいる人を、養子として直系の息子と因縁を結ぶようにして、その直系の息子に絶対服従させなければなりません。ここにおける直系の息子とは誰かというと、堕落する前のアダムです。また、養子は誰かというと、堕落する前の天使長です。本来、養子は僕の立場なので、愛することができません。（四二―二八六）

堕落しなかったなら、霊界に行った人たちが、神様の愛と「真の父母」の愛の核につながって天国に入るでしょうが、歴史始まって以来、そのような因縁をもてなかったために、天国行きが全部保留になりました。どこで保留になったかというと、地獄で保留になり、その次には楽園で保留になっています。それゆえ、天国は空いているのです。

天国には誰が先に入るべきかというと、「真の父母」が先に入らなければなりません。

「天国は空いている」と言えば、レバレンド・ムーンを見て「ばかげた話をする」と言うでしょうが、イエス様も天国に入れませんでした。天国は一人では入れません。人間の先祖が、思春期を過ごし、神様を中心とした愛の理想をなして生き、真なる愛の種を残して父母になり、先に入るべき所が天国です。しかしまだ、神様の愛を中心として、父母としてこの地上に愛の種を残した父母がなく、そのような後孫を残した基盤が生じなかったために、天国は空いているのです。

天国に行くには、地獄を経なければなりません。天国に行くには、地獄に勝たなければなりません。地獄に勝った人が、天国に行くのです。地獄を越えて、天国に入る道端にとどまっている所が楽園です。

人類を一人の男と一人の女として見なさいというのです。四十億の人類がいるなら、「四十億の人類の半分である二十億の人類は男であり、二十億の人類は女である。二十億個の細胞をもった男が生まれ、二十億個の細胞をもった女が生まれた。私は、これを愛する」と、このように考えなさいというのです。四十億の人類を植えて、アダムの再創造とエバの再創造の役事をするのです。

その言葉はどういう意味かというと、二十億の人類の中から、初愛をすることができる一人の男性を選び、二十億の人類の中から、初愛をもって結ばれ得る一人の女性を選び出すためのものなので、このような代表者を二十億の人類の愛の実として見るのです。それで、「二十億の人類の愛の実になる実体を、自分を生んでくれたお母さん、お父さんよりも、もっと愛し、四十億の人類を自分のお母さん、お父さんより、もっと愛する」というようになれば、神様の愛の圏を中心として、一つになった立場で、人類を愛することができるので、自分はサタン世界とは関係ない立場に立つのです。

その代表的な方が真の父という方であり、真の母という方です。「真の父母」を愛する以上の心をもって人類を愛せば、万事がＯＫです。天上地獄の門も開いて、地上地獄の門も開くのです。そのような人になるところは、どこでもハイウェイです。その代わりに、ガソリン代は皆さんが出さなければなりません。

本然の世界では、天国に行く道は、真の御父母様が導くのではなく、天使たちが導くのです。

真の御父母様が皆さんを導くのは、原理ではないということを知らなければなりません。真の御父母様が道を築いておいたから、真の御父母様を愛すれば、この道をついていくようになっています。今、その道についていきながら、真の御父母様を愛する立場に立って、人類を真の御父母様以上愛するようになれば、皆さんが行く道は、万事が都合よく運びます。ふさがる道がなく、小道がないのです。ですから、皆さんは地上から天国まで直行することができるのです。（拍手）

世の中を眺めれば、二人、男と女がいます。父母様の愛する心をもって、皆さんはサタン圏を超越した心情圏に入るのです。父母様の前に引っ掛かる条件があれば、皆さんはまた行かなければなりません。それで、先生が一生を経て、父母の立場で子女たちが行くべき道を、責任をもってみな築いたのです。

皆さんが父母様を愛する心で、人類を愛する立場にあるなら、皆さんは、「真の父母」と一つになって水平線に立つようになります。そうなれば、堕落した心情圏は下になるので、

サタンが皆さんに触れることはできません。皆さんは、天国に直通することができるのです。そのようなことを始めるためのものが、開天門の日の宣布です。（一四〇―四五）

四)　開天門に先立つ我々の姿勢

「真の父母」が地上にハイウェイをつくっておき、天上において勝利の覇権をもたらして伝授してあげたから、伝授してあげたその立場で、体と心に神様の愛の根を張り「真の父母」と一つになることによって、サタンは皆さんを離していくことができないのです。

そうなれば、皆さんはどのようになるのでしょうか。「真の父母」と世界のために代表として、カインの息子、娘を救ってあげる蕩減復帰の役事をしたから、皆さんも「真の父母」を愛する以上の心情をもって、世界を愛したというようになれば、皆さんが地上世界や天上世界に行く道を、邪となったものが妨げることはできないのです。皆さんが地上から出発して、世界を越えて、天上世界、天国にまで直行することができるのです。しかし、そのようにできないときは、皆さんの行く道が、幾重にも重なった大きな山と険しい峰になります。これを先生が知ったために、今まで命を捧げて準備して、今日皆さんに開天門の日の記念に参席することができる特権を与えたから、どうか、そのような心情圏をなして、皆さんが無事通過することができる勝利者になることを願います。（一四〇―六二）

三　責任分担を通じた天国行き

皆さんは、今どこにいますか。自分の位置を知るべきです。皆さん自身が、どこにいるか知るべきです。サタンと神様が、人間の責任分担の遂行可否について、「これは、あなたのものであり、これは私のものである」と分けています。人間は責任分担を果たせなければ、神様のものになれません。サタンが、「これは私のものだ」と主張します。

皆さんが、神様の愛、夫婦の理想的な愛、子女の理想的な愛を慕いながら責任分担を果たすようになっているのであって、「お金が必要で、何が必要だ、知識教育しなければならない」と、このような言葉を言いながら責任分担を果たすようになっていないのです。

天国に入ろうとすれば、門番が責任分担を尋ねるのです。「あなたの責任分担を果たしましたか」と。堕落した世界には、絶対天国に行く人はいないのです。それゆえ神様は、アダム、イエス様の時代を経て、再臨時代を迎え、三次アダムを立てて、責任分担基準を撃破するための運動をしてくるのです。

今、すべての宗教人たちが、宗教を信じるのは、全部天国に行くための責任分担を果たそうということです。責任分担についてサタンは、すべての宗教人たちを一遍に燃やして祭物として捧げても、責任分担というものを人類の前に出してやることができないと考えるのですが、神様は、この宗教人たちを犠牲にする恨があっても、責任分担を探してこなければならないと思うのです。（一四九―三二三）

四　天国と地獄は自身が選択する

信仰生活をしながら、我々は不平を言ってはいけません。不平を言える内容がありません。喜ばなければなりません。涙を流しながらも、喜んで行かなければなりません。涙を

流しながら、笑って行くべきなのです。このように教えてあげましたが、それをどうしますか。しなければ、できません。神様もできません。先生もできないのです。

それゆえ、天国に行き、地獄に行くのは、自身が決定するのです。レバレンド・ムーンが決定するのではなく、神様が決定するのではなく、自分が決定するのです。不平を言えば地獄であり、不平を言うところを感謝していけば、天国なのです。（九六―一二二）

天国へは、誰かが教えてあげて行くようになっていません。良心的に生きる人は、自動的に行くようになっている所が天国です。太陽の光が差せば、すべての木の芽は太陽に向かいます。草木までも、自ら方向性をもって回るのに、まして万物の霊長である人間が、自分の行くべき道を知らないはずがないのです。このような現象が起こるのです。（七五―四二）

第五節　天国と地獄に関係した指示のみ言

一　天国、地獄観設定

自分の家庭を中心に、氏族圏を復帰することは、メシヤの使命です。このような氏族的メシヤの使命を果たすことによって、天国、地獄観を設定し、「そこに行けば天国であり、ここに行けば地獄である」ということをはっきりと分別して、地獄側に行かず、他の人も行かないようにしなければなりません。氏族がそのようになった場合には、その周辺の多くの氏族、町もみな追いかけてこざるを得ないのです。

二　永生と地上生活の重要性

地上の生活と霊界の生活とは、別々ではありません。地上の生活も重要であり、霊界の生活も重要です。霊界の生活は、地上生活からつながるという、そのことです。二つとも重要ですが、今日この地に生きる人たちは、永生の概念が分かりません。この地の生活が重要だと思っているのです。これが問題なのです。我々統一教会員にも、現在の生活が永生を保障する基盤であるということを知らない人がたくさんいます。

それゆえ、「永生は今からだ」という天国観を設定した基盤上に、永遠の生命のために、自分が生きるという、その重要性をいつでも感じなさいというのです。これを知らなければ、他のことをするのです。今自分がするすべてのことで、永生の価値が決定するということです。

地上世界と霊界は、互いに見つめ合って動きます。地上世界が上がれば霊界も上がり、地上世界が下がれば霊界も下がります。一方が回れば、他方も同様に回ります。それで、現世においてそれを実感して、永生にプラスさせる生活をしなければなりません。永生と現世は分かれないのです。天国と地獄を明らかにしなければ、それが分かりません。永生と地上生活の重要性を感じながら、働きなさいというのです。それは、誰も面倒を見てくれる人がいません。誰よりも自分自身が、神様をよく知っているのです。そのようになれば、皆さんが進んでいくときは天運が抱擁し、その村を離れれば、その村の人たちが、「あの人はどこに行ったか。何日間見ないけれど、どのようになったのか。朝晩に聞いたその声が懐かしい 7」と言いながら探すようになる

のです。そのようにならざるを得ません。天運が共にあるために、良心をもった人は、自動的にその方向に、鉄粉が磁石にくっ付くように、すべての生命が光を向けるのと同じで、合わさるのです。

先生がいなければいけません。日本人も、韓国人も、アメリカ人も同じです。なぜそうなのでしょうか。永生の観念は、一致化させようとする主体があるべきだからです。それを、すべての地上的な標準、永遠の標準にすることができます。それは、最も重要なことなのです。（二一七―八四）

第五章　メシヤと霊界

第一節　イエス様と霊界

イエス様は、洗礼ヨハネの使命を果たす路程で、十字架を背負って亡くなられました。それで、息子の使命を果たすことができませんでした。イエス様は亡くなられたのち、今までどんなことをされたかというと、天使長を探されたのです。天使長を探した次には、息子の道を行かなければならないのです。それゆえ人間は、僕として行くべき道と、養子が行くべき道を探すのです。イエス様は、直系の息子の使命を果たせなかったのです。天使長の道、僕の道、養子の道を行ったのです。

それゆえ、イエス様を信じても、せいぜい養子にしかなれないのです。この養子は、血筋が違う立場にあるカインと同じ存在です。今まで摂理歴史は、その血筋をつなげるための戦いをしてきているのです。

イエス様は、十字架で息子として死んだのではありません。イエス様が霊と肉が一つになった息子の立場で、神様に勝利をお返しする立場で祭物になっていたなら、再臨する必要はありません。完全に捧げられませんでした。半分しか捧げられませんでした。体は失ってしまい、霊だけ捧げられました。これでは、霊界の天使世界と似たり寄ったりです。

それゆえ、キリスト教を信じていく人たちは、天国に入れず、楽園級以下の霊界に行って待つのです。楽園級以下の霊界は、天使長が支配する霊界、すなわち天使長圏に該当するのです。それゆえ霊界で勝利圏を保障されるためには、地上に勝利圏をつくっておかなければなりません。それを継承させるのが、神様のみ旨であり、イエス様が生まれて死んだみ旨であるために、キリスト教は霊界の勝利圏と地上の勝利圏を一遍に探して立てて、天使長圏を継承しなければならないのです。これがキリスト教の使命です。キリスト教では、実体的完成があり得ません。霊的完成だけがあるのです。それゆえキリスト教は、霊界を主にして来たのです。

再び来られる主は、霊界の天使長圏を屈服させ得る権限をもたなければなりません。それがなくては、地上での出発を見ることができないのです。再び来られる主は、洗礼ヨハネから継承されたのと同様に、霊界で勝利したイエス様以下の霊的世界全体を継承される立場で来なければなりません。言い換えれば、イエス様が洗礼ヨハネから継承されたものと同様に……。洗礼ヨハネが、イエス様に霊的な継承はしましたが、その約束どおりには実践できなくて、分かれました。それで、これを再度なすために、キリスト教を立ててきたのです。（四七―一五七）

イエス様は、この地で十字架に亡くなったことだけでも無念なのに、死んで三日間地獄

に行っていました。それが試験です。人間には、死が最高の恐怖なのに、イエス様には、地獄に行くことが最高の恐怖だというのです。ではイエス様は、その地獄で恐怖の主人になったか、でなければ幸福の主人になったでしょうか。イエス様は地獄に行って、三日間、苦痛を克服するための試練がありました。（三四―一四四）

神様は公平であられるので、メシヤは平等な思想をもって訪ねてこられるのです。メシヤは、堕落した人間を全部救うための救い主として来るために、どんな人間にも公平に対してくれます。公平な目的と、公平な時代的環境をもって来ます。それゆえメシヤと一つになる人は、メシヤの弟子になることができます。

メシヤは、人間世界の一番底の地獄から、一番栄光の立場まで行くという言葉が成立します。人類の救いのために生命を差し出して、行かない所がないという結論が出てきます。

このような原理で見ると、メシヤが雲に乗って空中に来るというのは、全く荒唐無稽なことです。真っ赤なうそです。そのように言う人は、霊界に対して何も分からない人です。先生の教えることが事実であるか否か、霊界に行ってみなさいというのです。死んでみれば分かります。メシヤは、そのような公式によって動きます。

なぜ、霊人たちが人間の世の中と接しようとするのでしょうか。これが今まで分かりませんでした。それが、なぜそうですか。地で解決しなければ完成の道を解決できないために、そうなのです。優れた人も、劣った人も、この法度にみな引っ掛かっているのです。

このように、メシヤと共に霊界を全部開いていくのです。これをなすには、地で相対的関係がなされなければならないのです。ですから、メシヤの個人時代があり、家庭時代があり、氏族時代があり、世界時代があります。これが、霊界までつながるのです。地で個人の勝利基盤、家庭の勝利基盤、氏族の勝利基盤、民族の勝利基盤、国家の勝利基盤、世界の勝利基盤まで築かなければなりません。このために、すべての霊界を地上に動員するのです。中心を探していくためには、メシヤが世の中に来て、苦労しながら行かなければなりません。苦労しながら個人、家庭、氏族、民族、国家、世界を順番に復帰しなければなりません。それで今、人々が一つの目的点を、一つの世界を探して入るようになります。（九一―二七八）

第二節　再臨主と霊界

再臨主は、第三イスラエルだけではなく、第一、第二イスラエルの先祖として来なければなりません。統一教会員は、イエス様当時の第一イスラエルが疑ったのと同じ立場を越えて、父の心情を通じて、父の腹の中にある子女のような立場に立つべきです。

再臨主は、霊界を収拾しなければなりません。霊界を収拾することによって、第一イスラエルを立てた基台の上から出発しなければなりません。霊界にいる人たちは、「真の父母」と因縁をもつことができないので、この過程を経なければなりません。霊界には十二支派型がありますが、第二イスラエルになるべきキリスト教は、支派を編成する中心を失いました。ゆえに、統一の理念を立てて、支

派編成をしなければなりません。（一〇―二一八）

神様は無形なので、霊界に行っても見えません。それゆえ神様は、体をもった父にならなければならないのです。体をもった父になることによって、無形と有形が一つになるのです。それは、宇宙が一つになることを象徴します。

神様は、体をまとうために、アダム・エバを造りました。体をまとえるようにすることは、愛だけが可能なのです。愛があってこそ、神様の形状に似た体を備えるようになります。神様が、アダムとエバが神様の体を備えれば、彼らの心の中に神様がいらっしゃって、地上世界と無形世界を統治するというのです。神様の王宮を造るのです。神様の王宮は、愛の王宮だというのです。愛を中心としてのみ、霊と肉が合わさるようになるのであって、他のものをもってしては合わさることができません。（一四三―九三）

第三節　「真の父母」と霊界

一　肉身の父母と「真の父母」の違い

肉身の父母と「真の父母」は、愛に対する概念が違います。肉身の父母は、肉身を中心とした愛を教えてくれて、「真の父母」は、霊的な世界を中心とした真の愛を教えてくれます。

肉身の父母だけでいいのに、「真の父母」がなぜ必要ですか。堕落したためです。今まで堕落した父母は大きなものをみな取ってしまって、自分を中心として絶えず下っていくことを教えてくれました。それで、父母の愛を中心として、このサタン世界に永遠に存在させるための一つの決定的な線が引かれました。これを断つ道はありません。

では、「真の父母」とは何でしょうか。このような基盤から、上がれば上がるほど、だんだん大きいことを教えてくれるのです。天国、永遠の国に行って拍子が合うように、呼吸に支障がないように教えるのです。肉身の父母から教育を受ける人が霊界に行けば、すべて壁のようなコーナーに行って、とどまっていなければなりません。振り返って見れば、全部自分を否定して、犠牲になるという人たちだけなので、窒息するほどなのです。

誰がこれをつくったのでしょうか。サタンがつくりました。それで、「真の父母」が来て解放してくれるのを願っています。それを解放するには、そのまま解いてはいけません。反対に解かなければなりません。（一二九―九九）

神様に帰るには、三次元の世界である霊界の訓練までも受けなければなりません。霊界を愛し、霊界と一つになる訓練場所が、神様を愛して、「真の父母」を愛する場所です。この地上で「真の父母」として霊界と実体世界に神様をつなげる使命を果たすために、メシヤが来るようになります。メシヤの使命は、それしかないのです。

メシヤは本当に我々を愛し、その誰よりも我々のためにしているのです。

メシヤ、すなわち「真の父母」がこの地に来る前までは、霊界が全部分かれていました。世の中が一つになっていないのと同じです。このように多い塀を、「真の父母」が実体をもって全部崩していくのです。そうしてこそ通じるのです。それで「真の父母」は、肉身

世界だけでなく、神様に代わって霊界を代表するのです。

初めて「真の父母」に侍り絶対愛することによって、霊界と通じる道を築くことができるのです。メシヤの前に絶対服従することによって、霊界のある霊人にも絶対服従したという条件を立て、神様の命令の前に絶対服従したという条件を立てるようになるというのです。神様の代身である「真の父母」に絶対服従すべきだというのです。それはなぜ、そうすべきなのでしょうか。天国の民と一つになり得る伝統を立てるためです。

「真の父母」になぜ侍らなければならないのでしょうか。「真の父母」が、霊界と神様を代表するためです。その次に、第一父母、第二父母、第三父母が心情的絆を結び、愛の中に結んでおく心情的勝利圏に同参できる資格を得るためです。（一〇五―一一二）

二　「真の父母」が軸である

真なる父母がどこにいて、真なる兄弟がどこにいて、真なる家庭がどこにあり、真なる社会がどこにあり、真なる国家がどこにあり、真なる世界がどこにあるのでしょうか。ここになければ、不幸の中から出て、不幸の中に行く人生ですが、これが本然の人生の道ではありません。それゆえ、真を探し、身もだえしてもがくのが我々の人生です。これは、今まで宗教や哲学を動員して、いくら解決しようとしても解決できないのです。これを人間の力で解決することはできません。（一五五―二八二）

我々は、「真の父母」と世界を一つにしなければならないというのです。何を中心としてでしょうか。「真の父母」です。神様の心情で、霊界の軸と地上の軸が「真の父母」と一つにならなければなりません。霊界でも地上でも「真の父母」というのは、中心から抜くことはできません。

悪なる父母が生じることによって、横的な面で戦いが起こり、二つに分かれました。また、縦的な善の神と、悪の神の世界に分かれました。偽りの父母が生じ、このようになったので、ここに「真の父母」が来ることによって、これらが授け受けするのです。偽りの父母によって堕落が生じたので、これに対峙するためには「真の父母」が出てこなければなりません。真が出てこなければならないのです。（一四九―二七九）

三　「真の父母」中心

民主世界は右翼を代表し、共産世界は左翼を代表します。これらが今崩れています。アメリカも同じです。両世界には中心がありません。今必要なのは、頭翼思想と神主義です。どんな人道主義も、神様の前に立ち上がることはできません。神様だけが絶対的であり、永遠のセンターです。頭翼思想だけが、全人類の中心になり得ます。

「真の父母」は、真の霊界と肉界の中心になります。頭翼思想と神主義は真の愛を中心として見るとき、すべて同様の概念です。（二〇五―二六三）

「真の父母」を必要とする限界線とはどこでしょうか。これには限界線がありません。世の中もそうであり、霊界もそうであり、どこでも永遠なのです。ですが、アメリカの大統領の限界線とはどこでしょうか。四年から

八年後になれば、転がり落ちます。しかし、「真の父母」は転がり落ちません。限界線が違います。アメリカの大統領は、四年から八年にさえなれば、ふろしきを包まなければなりませんが、「真の父母」はそのようになっていません。

この地上世界だけが真の御父母様を必要とするのではなく、霊界も同じです。どうしてでしょうか。そこには、地上で愛をもって暮らした人が行って宮殿をつくらなければならないのに、人がいないのです。愛の宮殿は神様もつくれずに、霊界の人もつくれないのです。真の御父母様がつくらなければなりません。

霊界において、愛の宮殿は「真の父母」から始まるのです。霊界に宮殿があっても、「真の父母」が行って「ここを宮殿にします」と言って宣布すれば、それを中心として全霊界が落ち着くのです。そのような責任が残っているために、霊界でも「真の父母」を絶対に必要としています。（二〇五―一五五）

四　「真の父母」と結ばれた因縁の強度

「真の父母」は、人類が探すべき真なる父母です。その「真の父母」がいることによって、真なる善が成立するのです。「真の父母」とは、どんな方でしょうか。父と共に行くことができる一つの足場になる方です。「真の父母」は、人間と神様との間隔とくぼみを埋めるための一つの祭壇であり、死亡世界を越え得る橋だと言うことができるでしょう。

その立場は、神様と自分が共にいることができる立場であり、神様と父子の因縁を結ぶことができ、神様と一体をなし得る一つの焦点です。すなわち、堕落によって分かれた神様と、再び一つになることができ、分かれた二つの境界線が一致し得る一つの起点になります。蕩減の祭物の立場に立たれた方とは誰でしょうか。「真の父母」なのです。

我々が切迫して神様を呼ぶとき、神様が千年の事情をみな忘れて、自分と因縁を結ぶことができる立場があるなら、その立場は世の中のいかなるものとも換えられない立場です。

救いが必要な我々自身において、父と共にいることができるたった一つの因縁、神様と共にいることができず、神様と因縁を結ぶことができない人類が、自由な環境で神様と因縁を結ぶことができるよう神様が送ってくださった方が、「真の父母」です。

では、「真の父母」を自身に無条件の因縁を結んでくださった神様に、何をもって感謝しますか。皆さんは、どれほど感謝を捧げましたか。そして、皆さんが救われるようにしてくれた、その恵みに対して、歓喜で和合しながら勝利を誓わなければならない自身であるということを、どれほど考えてみましたか。無限の希望をもって、無窮の価値をもって、再出発するという考えを、どれほどしてみましたか。これが問題です。

息子、娘を探してこられた歴史的な願いが、「真の父母」を通じてなされるということを御存じの神様が、その「真の父母」をどれほど憧れてこられたか7　それなのに、「真の父母」を憧れる基準と、死亡世界で救いを憧れる我々の基準を比較してみるなら、我々は「真の父母」を神様よりもっと貴重に思って、神様よりもっと貴く思って、神様よりもっと価値あるように感じるべきなのに、今までそうできませんでした。

人間が「真の父母」と共にいることができ、「真の父母」と因縁を結ぶことができ、「真

の父母」と再会することができる立場を、神様がどれほど期待なさるでしょうか。そのような立場に自分が行き、「そのような勝利の基盤を自分が築こう」と言えなければなりません。どんな困難があっても克服し、その成果を自分の生涯の価値を左右する転換点として、また、その因縁を自分の生涯の原動力にしようと、どれほど誓うかが重要です。このように見るとき、我々がどれほど偽りであり、流れていく風の便りのように落ちつ着かず、彷徨するのかを悟らなければなりません。

神様と共にいることができる自分になっているのでしょうか。そうではありません。救い主が必要なのです。救い主は、どのような方でしょうか。「真の父母」の因縁を備えた方です。このように見るとき、この「真の父母」の因縁とは、どれほど驚くべき因縁ですか。「真の父母」によって、自分の真なる一生が始まるのであり、新しい生命が因縁づけられるのです。この生命の因縁によって、新しい家庭が出発するのです。新しい社会と国家と世界が出発するのです。そして、二千年のすべての生死の道を解決する勝利の与件が備えられるという事実を、悟らなければなりません。

そこには自分がないのです。神様は、堕落した世界を救うために受難の道を歩まなければならない方ではありません。堕落した世界に対すべき神様ではありません。神様は真の愛の因縁をもって出てこられる方です。新しい希望と、新しい復帰の基盤を備えて来られる方です。そのような立場で、神様と自分の因縁が結ばれるのです。四方が一致し得る因縁が、一つの起点からつながって、死亡の世界を爆破して、新しい光明の天地の基盤をもつようになるのです。このように、父母と子供の間の因縁が実現することによって、世界は新しい出発をすることができるのです。

「真の父母」と皆さんの因縁は、どんな剣や、権力をもっても断つことができず、サタンの力でも断つことができません。なぜでしょうか。この因縁は、今日のすべての問題を突破して、人間たちを救うことができる勝利の特権をもっている因縁であり、人間たちが歴史的に願ってきた力が結集している本拠地であるためです。ある一時代的な力を結集させては、歴史的な力が結集したこの関係を断つことができないのです。このように、すべての悪を除去して、新しい因縁を備えて、勝利のための出発点に神様が歴史的な祭物として立てた方が、「真の父母」です。

神様が深刻な立場にいらっしゃるならば、自分も深刻な事情にいるべきです。父の事情が、自分の事情として感じられなければならないのです。子供の道理を果たし、神様を慰めてさしあげる人がこの地に出てこなくては、歴史的な問題を解決する道はありません。

我々は、限りなく難しい立場に立っても、神様の同情を願うのではなく、神様に同情してさしあげるべきです。そのような因縁に従ってきた歴史の結晶体が、イエス様でした。ですが、イエス様がみ旨を成せなかったために、再び来られる主が、そのみ旨を成さなければなりません。再び来られる主も、その道を行かなければなりません。「真の父母」は、歴史的な希望の集約体です。神様が、全体に代わる歴史的な実体として立てた方が、「真の父母」なのです。

「真の父母」との因縁には、霊界からではなく、地上からつながらなければなりません。「真の父母」は、実体を備えて地上に来られるため、自分が呼べば答えてもらうことがで

き、自分が難しい立場にあれば、同情してもらうことができるのです。このように平面的な途上で「真の父母」に会うことができるということは、人間たちにとってどれほど幸福なことか分かりません。

神様は、今までどんな困難があっても、それを克服して、決定的な勝利を収めようとされました。ここで、自分が勝利の王者になるか、なれないかということが問題です。その心情に一体となって、「離そうとしても離すことができない自身になった」と言えなければなりません。言い換えれば、神様と共にいるという信念、「真の父母」と共にいるという信念が、生涯路程の軸にならなければなりません。それで、我々が行く方向で動揺がなく、千年、万年持ちこたえ得る自我になってこそ、地上天国と天上天国がつながるのです。すなわち、天上の主人として臨むのであり、地上の主人として臨むのです。ここで初めて、天上天国と地上天国が開かれるのです。

このような因縁は、楽な立場で結ばれるのではありません。難しい立場、それ以上ない深刻な立場、死ぬか生きるかというさなかにおいて、より一層冒険する立場で結ばれるのです。

それゆえ、聖書を見れば「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」と言いました。これは、イエス様の時代錯誤的な言葉のようですが、このように行くのが復帰の道を行くにおいて、心情の世界に似ていくにおいて、正常な姿勢であり、正常な態度だと言えます。このような境地を追求していく自分であることが明らかであるなら、自分の行く道は真なる路程になるのです。（三一―七四）

皆さん、今四十を越えて五十になった人が多いけれど、「それまで何をしたでしょうか」と聞くならば、何と答えますか。十年、二十年以内に死ぬかもしれません。死を前にしたとき、み旨を知り歩んできた過程を振り返り、私が、悪魔の後孫として残った世界人類を復帰する責任を果たせないことによって、神様がまだ落ち着けず、僕のように恨めしい仮面を脱げなかったと考えるとき、霊界に行ってどのように顔を上げるでしょうか。どのようにそこへ行って、自分の姿勢を備えて回ることができ、どのように暮らしていくべきでしょうか。ただとどまっていなければならないのであり、そうでなければ、白日のもとに一〇〇パーセントがあらわになるのです。

霊界に行かないということはありません。みな行くべきです。何をもって行くでしょうか。

貧しい家の娘が、自分のみすぼらしい姿だけ見ても一族の前に頭を上げることができないのに、婚礼家具も備えられず、その兄弟の一族だけでも、百名近く世話すべき人が元気でいる中、四代の組が集まって暮らすお金持ちの息子の家に、入って暮らすことができますか。手ぶらで行って、その嘲弄をどうやって避けますか。「うちの伝統によれば、誰々はこうであり、おばさんは全部こうであり、うちの姉さんもこのようにこうこうして、皆そうなのに……」と言うようになるとき、そこで落第生のような身の上になって、顔を上げて座って御飯を食べることができますか。さじを持つことができますか。考えてみてください。

軸に入り込めないことは、我慢できないことなのです。皆さんは、何を持っていきます

か。統一教会を四十年信じたならば何を持ってきました 7

霊界は、ここよりひどい所でしょうか、いい所でしょうか。皆さんが死んだとき、行く所がここよりひどい所でしょうか、いい所でしょうか。千万倍いい所です。自分が、すべてのものを正確に測定できる世界です。

霊界は、自分がどんな立場にいるかという、その悲痛さを実感できる所です。一段階上がろうとすれば、何千年、何万年もかかるのです。

皆さんは、祝福という貴いものを受けたために、門は開いていますが、入っていくことのできる礼服を着ていないのです。祝宴を行う家には、礼服を着て行くべきです。新郎の付き添いに行くのに、労働服を着て行っていいでしょうか。考えてみてください。そこに合う装いをしてその場に行ってこそ、その環境の歓迎を受けるでしょう? そうできなければ追放されるのです。「こいつ、どけ 7」と言うのです。

昔、木浦に金持ちがいましたが、木浦の北部地方の土地が、全部その人のものだというほどの金持ちでした。ところで、先生の友達がその人の一人娘と結婚して、その家の婿になりました。その時は、日本の統治下だったために、結婚式をしても今のようにモーニングコートを着て、礼服を着て新式の西洋式の結婚はできませんでした。国防服を着て、胸に花を一つ差して結婚する時です。

ところで、その人は、金持ちである上に友達も多いので、新式の結婚式をさせました。その時、先生を含めて四人が新郎の付き添いに行きました。付き添いの服を新婦の家で準備したのですが、それらをすべて自分の婿と同じ背丈に合わせました。先生と新郎は背が同じですが、新郎は先生のようには体が太っていませんでした。ぺちゃんこで板のようです。この前後が薄いのです。私は、この前後がもっと厚いのです。力士型でしょう?

ですから、会わせたワイシャツが、ボタンをかけても、へそがみな見えるのです。裂けている服を着て背筋にひどく力を入れると、あとにしびれが出てくるのです。その場で声を出すことができますか。壁のある所に行ってうつ伏せになり、しびれを解いたことを思い出します。

全羅南道の何かをするという名前のある人は、皆が集まったその大衆の前で、何千名が集まったその場面で、付き添いがそうしているから、「ねずみの穴でもあれば入るのがたやすいのであって、そこに座ってこらえられなかった」と言うのです。

軸に入れないことが、そのように我慢できないことなのです。先生が霊界をよく知って、聖者たちだとか何とかいう、ましだという教祖たちを、みな知っているのに、お前たちに負けることができないというのです。その軸から抜けてはいけないのです。（二一二―二二四）

第四節　先生と霊界

一　先生の霊的条件成立とその基盤

完全なマイナスは、完全なプラスを自動的に生じさせ、完全なプラスは、完全なマイナスを自動的に創造するのが原則です。それがこの宇宙の創造原則であり、存在の法則です。それで、この地上で原則的で完全な運動をすれば、霊界がつながるのです。歴史始まって以来、このようなことが初めて起こりました。ですから、霊界で問題となることは、この地

でも問題になり、それをこの地で解決すれば、霊界でも解決します。

そうするたびに蕩減が必要です。先生は蕩減の道を、一人で責任をもって、歴史と宇宙、そして霊界と肉界の問題を解決してきたのです。ある時に、蕩減すべきことを知り、それが崩れる場合には、霊界がどのようになって、地上がどのようになるということを、はっきり知っているのです。

聖書では、「あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」（マタイ一八・一八）とあります。地で解くためには、蕩減が必要です。しかし、皆さんは蕩減の道を知りません。個人的環境での主体・対象蕩減時代、家庭的環境での主体・対象蕩減時代、氏族的環境での主体・対象蕩減時代を経て、民族的主体・対象蕩減時代、国家的主体・対象蕩減時代を経て、世界的主体・対象蕩減時代に行くべきです。これを皆さんは知りませんが、先生は知っているため、先生が言ったことがそのまま霊界に反応して現れるのです。（一三一―二二六）

天国は、地上の一番悲惨な所で成されます。地上の一番悲惨な所とはどこですか。監獄中の監獄、そこでも一番のどん底です。

霊界と肉界の基盤を、統一教会の文先生が築きました。地獄のどん底、監獄のうちで一番悲惨な監獄から、霊界と協力しながら基盤を築いてきたのです。基盤を広げてくる過程で多くの反対を受けました。家庭でそうであり、氏族でそうであり、民族でそうであり、国家でそうであり、アジアでそうであり、世界の中心国家であるアメリカでもそうであり、全世界が反対しました。

先生は、万民に道を開いてあげなければならないために、死刑囚とも友達になり、窃盗犯と手錠を一緒にはめて回り、共に御飯を食べながら彼らを慰めてあげました。この前は、ラスベガスまで行って、刑務所に収監された人たちのために祈祷をしてきたのです。ニューヨークのニューヨーカー・ホテルを買ったのは、これからニューヨークの一番の悪の巣窟から掃除をして、新しく基盤を築こうとしたからです。

そこに行って、交わってあげ、慰めてやらなければなりません。そうしてこそ、各界、各層、サタン世界の滅びるべき人にまでも、その道を開いてやり、道を築いてあげることができます。そうしながら、地上で道を築いてやってこそ、霊界のふさがったものが開かれ、世界が一つになり得るのです。それゆえ、超民族的に黒人も結婚させてあげ、白人も結婚させてあげ、白人にも家を買ってあげるであろうし、黒人にも家を買ってあげるでしょう。このように先生は、世界にないことをしている人です。（九六―一六〇）

先生は、霊界で勝利しました。このことを誰ができるでしょうか。広く世界にいる数多くの修行を積んだ人たちは、これから先生の所に来て、習わなければなりません。間違いなく、そのようになるのです。それゆえ、一民族の民衆が反対し、世界の人類が反対しても、問題ありません。霊界にいる数千億の人たちは、全部先生の言葉を聞くのです。（一三―五〇）

二　霊界に行く特許権

今からは、霊界にどのように橋を架けて、飛び越えさせるかということを話しましょう。

おもしろいでしょう？　ここにいる文なにがしという人は、韓国人ですか、アメリカ人ですか。東洋人ですか、西洋人ですか。東洋の韓国人でしょう？（いいえ）。なぜ、いいえですか。そうでしょう。ですが、一つ特許権があります。皆さん、文明時代の発展の要素は、大部分特許権でつながれます。服を作る特許権、何でも全部特許権です。特許権だけもてば、どこへ行っても世渡りすることができるというのが、世の中の実状です。霊界でもそのような法があるというのです。

特許権は白人にだけ通じる、という法はありません。黒人は駄目で、アジア人は駄目だという法はないのです。どこに行っても、通じます。

霊界に行ける特許権を取るために、歴史上に苦労した宗主たちと宗教人たちがたくさんいましたが、そのような宗教人たちの中で、チャンピオンの特許権をもった人がいます。

霊界に行くことができる特許権をもった人を何で知るようになるでしょうか。ここに集まったまだらになっているこの人たちが、全部一つになって、「どこでも上がっていく」と言うから、それでいいというのです。では、神様はどうですか。先生が、「駄目だよ」と言えますか。神様が、「先生のサインがなければ行けない」と言うかもしれません。

アメリカの立派な大統領でも、ある王、ある聖者、ある宗主でも、「先生のサインが必要だ」と言うときは、全部頭を下げて先生の所に来ざるを得ないのです。

博士学位を受けるには、指導教授の下の世話もしてあげ、その教授が足でけっても、「ああ、ありがとうございます」と言ってこそ、サインしてくれるのであって、そうでなければしてくれないのです。「私が鼻を見ても、顔を見ても、格幅を見ても、何を見ても良くできて、相撲をしても勝ち、御飯を食べてもたくさん食べ、何でも一等になり得るし、十も百もいいのに、それを一つくらい知らないといって、博士学位をくれないのですか」と言っても通じないのです。先生が、そのような霊界の特許権をもったかもしれないというのです。

先生が監獄に行き、よこしまなうわさが出て、「みな滅びてなくなる」と思ったのに、今も生きて、堂々と大きな声を出しています。アンテナをもって、全部見て、聞いて、やって、知って、大きい声をどんどん出しているのです。

神様も、先生のサインができているか、できていないかを見て、その次に決済するでしょう。先生のサインがあるかないかを見て、先生のサインがあれば、「ＯＫ」と言い、ないときは「ノー」と言われるでしょう。

言葉で言うのは易しいのであって、事実がどれほど難しいかということを、皆さん考えてみてください。先生が、もしそのような印のレッテルさえもっていれば、これからの世界、霊界は、全部先生の手中に動いているのであり、この肉界は、どうせ一つの谷を行かざるを得ないという結論が出てきます。（一三四―一七）

自然界は、真理に満ちているのです。皆さんは霊界についてよく分からないでしょうが、先生は霊界の専門家です。そこは、二十一世紀ではなく、二十二世紀、三十世紀になっても、先生がいなければ開門することができません。理論的に霊界を教示して、霊界を開門するにおいて体系的内容を明らかにしてくれ

た元祖が文先生だという名声が、永遠に残るでしょう。

世界的に優れているという霊通人であっても、先生の所に来て、習わなければならないのです。それゆえ、先生が統一教会の教祖になったのです。世界のキリスト教を統一するというのです。先生の言うことさえ聞いたなら、既にみな統一されたでしょう。（二〇三—三二五）

先生がアベルの立場で長子権を復帰して、一度宣布してしまえば、それまで霊界が地上を利用していたのを中断します。むやみに霊界に対して「これから地上に協助せよ、地上に屈服せよ」と言えば、そのようになりますか。内容もないのに、「こうせよ」と言えば、そのようになりますか。これはこうで、あれはああだということを説明して、それが可能になるようにしなければなりません。それでこそ南北が統一されて、東西が一つになり、みな収拾されるのではありませんか。（二一〇—一九三）

三　霊界の統一と地上世界の統一

霊界を統一しなければ、地上を統一させることはできません。では、霊界を統一した主人がいらっしゃるなら、地上の統一は問題でしょうか。それは難しくないのです。

これから我々は、霊通する人同士主管しなければならないのです。今、霊界に通じる人たちの大将が先生です。彼らもここに来て、習わなければなりません。

彼らは一方向しか知りません。それゆえ、霊界から教えてくれるといって、それを絶対視してはいけないのです。それを原理で解読して、方向をわきまえていかなければ、霊通人たちはサタンになりやすいのです。

今は、霊界が先生を証し、先生についてきています。先生は、霊界の内容を専門的に知っているために、サタンだ何だということをよく分類して、今までここまで率いてくることができました。それで滅びないのです。

霊界には、何千億の霊人たちがいます。それに比べて世界の人類は、あまりにも少ないのです。これから我々が国家基準さえ超えるようになれば、霊界を動員することができるのです。世界人類は、問題にもなりません。そのような時が来れば、我々の時が遠くないということを知るべきです。このように見るとき、世界はこれからどのようになり、共産世界はどのようになるのか、大体の輪郭が出てきます。（五四—二三三）

あの世に行ってみると、殺人した者、殺された者、ありとあらゆる人が一箇所に集まっているので、そこでは刀を持って闘おうともするし、復讐しようともするのです。ですから、数多くの塀でふさがれています。

それゆえ、悪なる霊たちが怨讐の子供たちの所に行って、急死するように事故を起こして連れていくというようなことが起こるのです。これを解かなければなりません。これをみな解くためには、地上世界で解かなければなりません。そのためには、もっと良いものを与えなければ、解くことはできません。死ぬよりもっと良いもの、怨讐関係になったことよりもっと良いものをあげなければ解かれないのです。

何をもって霊界を解放し、神様を解放するのでしょうか。このような関係は、人間の先祖がこれを結ばせて天上世界をめちゃくちゃ

にしたから、今日後代の後孫は、先祖たちのすべての過ちを償わなければなりません。真の孝行者の伝統を受け継いだ子供なら、父母の借りを支払わなければなりません。父母が借りたものを支払わなければならないのです。

そのような意味で、霊界の先祖のすべての塀を崩す運動をしなければなりません。そうすることによって、先祖たちがここに来て、皆さんに教えるようになるのです。これは夢のような事実です。

先生は皆さんをさっと見れば、先祖がどうで何をやったのか分かります。悪なる霊人の後孫を見ると、真っ暗になります。その先祖の顔がさっと見えたかと思ったら、ふっと消えるのです。それゆえ、悪なる霊、善なる霊を分けるのです。

霊界を結束しなければなりませんが、霊界を収拾できない人は、天下を統一できないのです。天運の根が天なのに、天を収拾できない人が、どうしてその結果をこの世の中の道理にして、世界を統一しますか。それゆえ、地上を統一する前に、霊界を統一しなければなりません。（一九一―二〇五）

皆さん、先生に夢の中で会ってみたことがありますか。みんな会わなければなりません。このような団体は世の中にありません。国もありません。なぜ、統一教会が世界的に成長しているのでしょうか。どこに宣教師として送っても、霊界を実感する生活をしなければなりません。

どんなことが起こるのでしょうか。宣教師は三カ月が過ぎれば、その国を離れて再びビザをもらわなければなりません。そうでなければ、その国にいることができません。それだけでなく、その国をたって、他の国に行くにも、自由にたつことができません。そういう時は、霊界が教えてくれます。「どこどこにある川を越えろ」とです。

その川にはわにがたくさんいます。そのような川を泳いで越えれば、わにが丸ごとのみ込んで跡形もなくなります。そのような危険な所を通って、国境を越えていくようにするために、霊界がよく教えてくれます。「何時何分から、何時何分の間に越えればいい 7」と言ってです。

そうする以外に方法がありません。そのような命令を啓示として受けながら、行き来する宣教師が多いというのです。

共産圏はすべて「神様がいない」と言って、神様の存在に反対する世界です。共産党は、どの国でもみんな宗教が入ってくると、それを撲滅します。そんな状況の中で、神様は準備しなければなりません。

そのような経験をしてみれば、神様がいないと否定する人は一人もいなくなります。そのような事実を実感する感動は、生命を越えて永遠に残るのです。そのような境地で神様を愛し、真の御父母様を慕いながら通過した経験は、永遠に残るのです。それが人生の中心になります。そうなれば、霊界との境界線、そのような壁は、瞬間的になくなるようになります。直行することができるのです。

信じるのが先ですか、知るのが先ですか。信じることは事実と遠い所にあり、知ることは事実と一致します。

「信仰生活」と言いますが、信仰を生活化していますか。そこには、体恤圏が表面化していくのです。内面化ではなく表面化した実体圏とつながって生活しているという誇りが、どれほど大きく有り難いことか分かりません。そのような境地もあるのです。

「霊界は間違いなくあります。神様は、間違いなくいらっしゃる７　誰が否定しても、いらっしゃる」と実感しているという事実は、恐ろしいことです。それは神様の世界に属する心です。いくら地上で苦難を通過するとしても、その人は神の国の国民です。神様の子女です。

皆さん、いくら難しいことがあっても、自分の心が絶対変わらないという境地に入っているか自問してみてください。そこまで行かなければなりません。それが峠です。サタン世界の城壁を越えて入れば、神様の存在が実証されるでしょう。そうでないときには、城に入る橋を越えたのに宮中に入れなかったのと同じです。一度入ってみなければ、何も分かりません。城の外でいくら眺めてみても、そこに行けません。（二二四―一〇八）

四　心情と実績で異なる霊界での待遇

統一教会の先生の誇りは、神様を知っていることです。霊界で知っている以上に知っているのです。いくら多くの人がいたとしても、神様の心情を知る人を、神様は一番好まれます。

宗教人たちが涙に浸り、ひざが切れてえぐれるほど一生涯祈祷を捧げても、イエス様に出会い、導かれるかどうかというところです。それなのに、皆さんはこうして先生に会って、このような話を聞くことができるということは歴史的な事件なのです。

皆さんが先生にいかなる資格をくれてもくれなくても、先生は既にあらゆる資格をもっています。

先生は多くのことを成しました。誰の話にも耳を傾けない世界の学者たちを一つにつなぎ合わせました。また、互いに争っている宗教界もつなぎ合わせ、民族同士で争っているのをつなぎ合わせて世界的な合同結婚式をしたことは、これまでの歴史になかった事件です。

今までに先生が成してきたことは、霊界の誰が成したことにも勝ります。誰よりも多くのことを成してきました。ですから統一教会が、霊界のどん底にいるでしょうか、最高の位置にいるでしょうか。最高の位置にあります。これは先生の作り話ではありません。（一四六―三三三）

五　霊的体験の生活化

先生があらゆることを調べ、霊界の裏道まで尋ね歩いて調べてみると、天地の道理は簡単なものでした。真理は簡単なのです。二人が絶対的な力で合わさり、真空状態になったところに神様が入ってこられ、骨髄のような芯になるのです。ここに、男性の愛と女性の愛の二つのかけらがぴったりとくっつくのです。これが宇宙の核です。愛の理想的実体が合わさって愛の軸になるのです。（一七〇―一七一）

先生は霊界に対してたくさん知っていますが、霊界の話はあまりしません。霊界を知ると、狂う人が多いのです。特に女性たちは、「あんな夫と長生きする必要なんてない。早く天国にでも行ったほうがいい。ああ早く天国に行きたい」と言うことでしょう。しかし、夫を教育して率いなければ天国に行くことはできません。（一八二―六一）

先生は、霊的体験をしても、多くは話しません。体験があるのかないのか、皆さんはよく分からないのです。それをどのようにするのでしょうか。真理で調整しなければなりません。「これは、これこれこうであるために、このようになるのである」と言いながら、中庸の道を行くのです。そうしていつも天の摂理観に方向を一致させることによって、霊界の発展をもたらすことができ、地上世界の発展をもたらすことができると見るのです。

そうするには、霊的世界がどのように動いており、真理とどのように関係を結ばれるのかを知った上で霊界と関係を結ぶことを生活化しなければなりません。神霊と真理が必ず一つにならなければならないのです。この調和が取れていなければなりません。なぜそうなのかと言うと、我々人間自体がそのようになっているからです。（七六―一三八）

六　愛を残して行くべき霊界

先生についてくる中で、霊界に行った人たちがたくさんいます。先生に従う人たちを、あのソ連の衛星国家、ソ連の重要都市に浸透させておきました。ある時は、「宣教活動をしていると死刑宣告を受けた」という報告を聞きました。そのような報告を聞く指導者の心は、深刻なものです。子供が寝込んでいたとしても、その子供を心配するようになっていません。彼らが私を尊敬するのは、世界を尊敬することなのです。彼らのために涙を流してあげるべきであり、心配をしてあげるべき立場に立っているのです。それゆえ、先生は平安な生活ができないのです。

私が越えるべき峠を越え、私が果たすべき責任を果たすためには、休もうにも休むことができず、止まろうにも止まることができません。そのように走っているうちに、このような年になったのです。しかし、心は「今からまた始めなければならない」と言うのです。そうして霊界に行くのです。

そのように生きている生活の裏面に、何を残すのでしょうか。人類を愛したということです。他の何ものでもありません。国を愛したということ、統一教会を愛したということ、それ以外に残し得る何かがあれば、それは滅びる歴史とともに流れていってしまうでしょう。（一三六―一三五）

第五節　真の父母の家庭と霊界

一　霊界の長子権成立

興進が霊界に行くことによって、地上と天に分かれた天使とアベルが、双子のように一つに結ばれるようになりました。その一つになった基盤の上に、父母が出動するのです。これが原理観です。

興進は息子格のアベルですが、その息子は、「真の父母」の愛の原理主管圏の蕩減条件を立てた基盤から霊界に行きました。サタン主管圏から勝利して直接主管圏を成した立場で、霊界に行ったのです。それゆえ、堕落以後、最初に完成した資格を備えた息子として天上世界に行ったという条件をもっているのです。本来堕落しなかったなら、霊界に行ったすべての人たちが「真の父母」の心情圏を中心として、原理結果主管圏と直接主管圏が一つになった家庭的基盤に愛を中心とした主人や息子の資格をもつのです。これをもたずには、

天上界に行けないようになっているのが原理です。

イエス様やキリスト教は、今までその立場を経ることができずに行ったために、全部中間霊界にいるのです。ところで、興進が行くことによって、神様と接ぎ木することができる中心が繰り広げられるのです。また、興進は祝福を受け、自分の相手が地上に残っているので、家庭生活をしてから死んだのと同じ立場になるのです。それで、興進の家庭を中心として、地上家庭を訪問することができる霊界基盤が設定されます。これが貴いのです。興進の家庭基盤を設定したということが、最も貴いのです。

イエス様が死んだとしても、このようなことができたなら、今日キリスト教はそのように犠牲になりません。しかし、仕方がないというのです。なぜでしょうか。「真の父母」の心情圏で結果主管圏内のサタンを除去し、直接主管圏内に愛の基盤を備えられなかったために、イエス様自身があの世に行って再臨しなければならないのです。しかし、興進は再臨する必要がないのです。

興進は霊界と肉界、二つの世界に暮らしているというのです。そうなれば、どんなことが起こるのでしょうか。霊界と地上を双子のような心情圏として見るとき、父母が長子の立場にいるのです。家系の代数で見れば、すなわち縦的に見れば、父母が先立ったのです。興進が二代なのです。下だというのです。

ところが、霊界では反対だというのです。地上で先生と興進の出生について見るとき、先生は兄の立場にいて、興進は弟の立場にいます。先生がカインの立場にいて、興進がアベルの立場にいるのです。これが霊界に行っては、興進が長子になります。興進が兄の立場にいて、それ以外のすべての霊人たちは、弟の立場にいるのです。心情圏を中心として、そのようになるのです。神様の立場から見れば、先生は父なので長男であり、興進は小さい息子になるのです。

霊界で見れば、興進が愛の圏を中心として最初に生まれた息子であり、そして霊界にいる人が弟の立場に立つのです。逆さまになるのです。それで、長子権の心情基準が興進をつかんで入るという結論が出てくるのです。これは原理講義するとき、よく説明しなければならないのです。今霊界にいる霊人たちの前に、イエス様の前にもそうであり、すべての善の聖者たちの前にもそうですが、心情圏を中心として誰が長子として先に生まれたかといえば、興進だというのです。ですから、心情圏を中心としては、興進が長子であり、他の霊人は次に生まれる次子だということです。

それゆえ興進が、長子権の福を次子圏に相続してやることができるのです。サタンは、相続してやるまいとしたのです。サタンは、相続をしてやらず、自分が強奪するのに、長子の興進は、地上に行っていた福を全部残してくれるというのです。ですから、つながります。今までサタン世界は、全部残してやるまいとするのに、興進は絶えず残してやろうとするのです。（一三一―五二）

二　霊界に立った愛の中心

興進は全世界の人を自分の生命以上に愛したという条件を残したために、皆さんにも生命以上に愛することができる因縁がつながったのです。興進は「真の父母」の代わりに行きました。それゆえ、興進を愛することは、「真の父母」を愛する条件になります。興進

を愛するということは、「真の父母」を愛するということと連結されるのです。

霊界では、今までそのような中心がありませんでした。霊界とつなげ得る中心がなかったのですが、興進が行くことによって、興進を愛するすべての霊界の霊人たちには、父を愛する条件がつながるのです。これは、統一教会と連結されます。統一教会として見れば、興進は、地上で生命を捧げて戦うにおいての標準になり、霊界では愛をつなげるのにおいての、今までの歴史にない霊界の代表になったのです。

地上では、統一教会の信徒たちに生命を捧げてもみ旨を愛すべきだという手本を見せてくれました。「真の父母」を愛しなさいというのです。世界のために「真の父母」を愛していくべきなのです。ですから、興進が霊界に行くことによって、霊界が興進を愛することで、地上の「真の父母」と愛の関係が成立するというのです。

それで霊界では、興進を迎える日が、歴史始まって以来一番うれしい日になるのです。興進は愛のメシヤとして、霊界の門を開き、地上では標本的な殉教の道を開いたというのです。それで、統一教会の信徒たちは、興進を愛すべきなのです。

霊界でも興進を愛し、統一教会でも興進を愛するから、我々の「真の父母」はどのようにすべきでしょうか。天の愛を歓迎して、地上の愛を歓迎する意味で、自分の息子を祭物として捧げることを栄光として思わなければなりません。誇りとして思うことができなければならないのです。また、神様が今まで青少年のアダム・エバを息子、娘として愛せなかったのですが、霊界では愛せるようになったと考えなければなりません。

それで先生が、「私自身が青春時代に、韓国に基盤を築いて栄光の神様にすること、私一代に世界的基盤を築いてあなたを慰安してさしあげること、これらのできなかったことを、この息子によって蕩減してくださいませ」という祈祷を捧げました。

今、霊界も愛して、地上も愛するので、父母も愛しなさいという標語を立てるべきです。先生は、興進が霊界から地上世界と霊界で、愛の復活圏を成すのだと考えます。興進が死を通じて、愛を復活させるというのです。霊界をつかまえて、地上をつかまえて、愛の復活圏を宣布するでしょう。

そうするようになれば、死亡圏と決別をするのです。それゆえ、葬式の時も悲しんではいけないのです。（一三〇―二〇二）

三　地上と霊界の王権確立

興進が霊界に行く前の日、統一式を終えてから祈祷したこととは何でしょうか。「お前は地上を離れても、地上にいるのと同様に、お前の養子を選んでやり、息子の班列に同参させてやろう」と祈祷で約束したのです。そうするには、地上で祝福をしてやらなければならないのです。そうしなくては、そのことが不可能です。神様は、地上を救うためにメシヤを送りましたが、今日「真の父母」は、霊界を救うために父母様の代わりに全権大使として愛の王者を送ったということを知るべきです。なぜ、地上にそのような世界的基盤を立てるべきなのでしょうか。イエス様もその立場に行けなかったのです。神様が初めて歴史始まって以来、「自分の息子」と言い、愛することができる少年をもったという事実を知るべきです。

初めて、霊界で神様が愛し、地上で「真の父母」が愛しているというのです。それで、二つの世界がつながるのです。この世界は、堕落の愛の圏内、すなわち原理結果主管圏内にあるために、「真の父母」の愛の因縁は今までありませんでした。しかし、これが初めて出現したという、驚くべき事実を知るべきです。

では、あの世に行ってどのようになるのでしょうか。

韓国人として生まれたために、韓国の善王の実を現すということを知るべきです。霊界のそのような王権が興進の立場です。そのような立場で、韓国の善王たちを比べるとき、興進は年は幼いですが、アベルの王だというのです。霊界は、この地上のように事情が完全に分かるのです。完全に一つになるのです。

カインとアベルが一つになれば、その上に天の父母が運行することができるのです。天の父母の運行圏が生じるのです。それで、興進の王権と韓国のアベル王権が一つになることによって、韓国を中心とした主管圏が形成されます。それが一つになることによって、アベル王権の位置に立つようになるのです。

その次には、すべての国の王たちが、アベル圏に立つのです。皆さんは、地上にいるから分かりませんが、霊界では一遍に一つになるのです。それで、すべての王権、韓国を中心として百二十の国家が完全に一つになり得るのです。その王の前にアベルになり得る人たち、ユダヤ教を信じて逝ったとか、キリスト教を信じて逝った人たちにおいては、全部王権はメシヤとして侍るためのものであったために、それをあがめ尊ぶすべての宗教界のアベルの民は、次々と完全に一つになるのです。

ところで、ここに一つ問題があります。王権を立てるには、興進が一人でいてはいけません。女王権をどのように探すかということが問題になるのです。これが第一の問題です。王権を結合しようとすれば、女王権を探し、王の相対を決定してあげなければなりません。そのようになれば、この王権が霊界につながるのです。また、女王が地上にいるために、百二十カ国の王権の民を連れて、地上につなげることができる基盤がつながります。神様の愛を中心とした霊界と肉界の統一です。このように結婚させてやることによって、興進は思いどおりに地上に来て活動するようになります。

このとき、興進が一人で来るのではなく、王権を統一したすべての王が地上についてくるようになります。ですから、このような式をせざるを得ません。今出れば、反対する人はありとあらゆることを言うでしょう。興進を愛の代表として送って、「真の父母」が霊界に行ってすることを代わりにさせようというのです。

それゆえ、興進が昇華してから五十日になれば、五旬節と同じです。百二十名がマルコの屋根裏部屋で聖霊が降臨するとき火を受けて、世界的役事が繰り広げられたのと同様に、薫淑嬢が結婚することによって、どんなことが起こるかというと、百二十カ国の王たちが、この地に来て復活して、世界的役事を展開することができる運動として繰り広げられると見ます。それが五旬節を代表した今日であることを、皆さんは知るべきです。ですから、霊界にいる百二十の王権がこの地に訪ねてきて、地上と一つになるのです。このような二つの、とてつもない意味があるのです。

それで、百二十カ国のうち、どこでも「真の父母」に侍ることができる一つの国さえ生じるなら、そこから天国が開門するのです。（一三一―一四）

第六章　我々と霊界入籍

第一節　人生の結実と生霊体

我々の生の一代というものは、わずかの間です。この一代が、永遠と瞬間を上がったり下がったりするのです。この生が延長されれば、無限に延長され、反面、これを折ればも、ここから新しい天地が起こるのです。秤と同じように、上がったり下がったりするのです。

皆さんは全部、先祖たちに代わって先祖の顔を被って出てきた復活体です。その歴史は、どれほどになるでしょうか。何十万年になったと言われます。そのように長い歴史過程が、結局は自分一人をつくるために苦労してきたのです。金氏なら金氏という自分一人を誕生させるために、数多くの先祖たちが生まれて死んだと考えるのです。ですから我々は、歴史的な結実体です。

このような結実体が、虫が食って穴がぽかりと空いた果実であればいいでしょうか。開いてみると、真っ黒な種が、ころころと転がって出てくるリンゴがいいですか、その種が、べたべたして付いているリンゴがいいですか。

皆さんをぽっかりと裂けば、よく熟した種が出てくるでしょうか。皆さんの二世が間違いなく、天の実になると思いますか。皆さんの心の中を裂いてみれば、よく熟した統一教会が出てくるでしょうか。

六千年の人類歴史の結実体が、熟さずに落ちる果実のように落ちていいでしょうか。「ああ、私は落ちそうだ。風がもう少し吹けば落ちるだろう。先生、揺すらないでそっとしておかなければなりません」と言っていいですか。ここにそのような輩もいるでしょう。反面、「先生がおのでぶん殴って、自分を思いどおりに揺すっても、自分で下りる前には、絶対落ちません」という群れもいるでしょう。皆さんはどちらの輩に属しますか。（四六｜一五五）

人の一生において、生まれる時、結婚する時、そして死ぬ時が重要だということを我々は知っています。

ある個人が生まれ、成長して、実を結ぶためには、必ず相対と因縁を結ばなければならず、その次には、最後の道を行くようになっているのです。これは、一つの国も同じです。どのような国も必ず創建期があり、次には繁栄期があるのです。その次には、夕方のような期間を必ず経ていくのです。

一つの生命体として、自体内で生命が実を結ぶことのできる内容が備わっていなければなりません。そうでなければ、いくら結実の時が来たとしても、結実を見ることができないのです。

それゆえ、自分の環境を克服しなければなりません。それだけでなく、結実され得るすべての与件を受け継ぎ、その結実のための動機となる自らの力をもたなければなりません。そうしてこそ結実の過程を経て、新しい歴史過程であるとか、人類社会が必要とする一つの結実体となることができるのです。

人は生まれて、必ずそれ自体として環境を克服しなければなりません。かといって、それを克服することだけで終わるのではなく、未来に新しい生命を受け継いで、結実の内容をもち得る過程を経ていかなければなりませ

ん。この過程を経たのちには、正しく実効を現し得る一つの位置を占めなければならないのです。

例えば、穀物は種が蒔かれて、芽が出て、育って、実を結んだのちにこそ主人の手によって収められ、倉庫に蓄えられるのと同様に、必ずある目的において必要で、収められる過程を経なければならないのです。

それゆえ皆さんは、皆さん自体にそのような願いを引き継ぐことができる内的要因を準備して、内的要因を中心として外的な環境に再び適用しなければいけないという立場にあることを知らなければなりません。これは、守勢的立場ではなく、必ず攻勢的な立場で表さなければなりません。

柿の木を見ると、春に花が咲きます。柿の花は、他の花のように際立って華やかではありません。また、柿の花は葉の色と似ています。それで、ちらっと見ただけでは、花があるのかないのか、よく分かりません。また、実が結ばれても葉に包まれているときには、実があるのかないのか、よく分かりません。その葉があまりにも青々としているために、実があるのかないのか、感じられないのです。実は、夏を過ぎて秋になれば、色が変わり始めます。これが完熟すれば、実の中まで赤くなります。そうして、葉はみな落ちても、その実だけが一際輝きながら、木についています。

統一教会員も、これと同じです。統一教会自体について見るとき、一九七〇年代が結実の時代だとするなら、葉のようなすべての要因は全部消えるべきでしょう。枝だけが残ったところに、一つの結実の価値をもった実が、全体の価値として現れる、そのような柿の木の実のような存在になり得るかということが問題です。

このような実には、宣伝する必要がありません。それ自体を見て、内外に備わったその価値を、誰もが一〇〇パーセント評価することができるのです。そうするために、その柿の木なら柿の木自体が、実として完成する時まで、どれほど苦労の過程を経たことでしょうか。

その実は完熟するまで、枝に咲いた他の多くの花の実よりもっと闘争をし、もっと努力したという事実を、我々は知るべきです。夏の間、風が吹いて雨が降り、暴風雨が吹きつける、そのような険しい環境と、栄養が足りず未熟なままで実が落ちるかもしれないといった、いくつもの環境をみな克服したのです。

その木が実をたくさんつけられずに、実を一つだけ残したとすれば、その実は、木の全体のエキスと外的な闘争力を総合した内容をもった実なのです。そのような実だけが残ったならば、その一つの実が、その木の価値に代わり得るのです。それが柿の木なら、その一つの柿の実によって秋を迎えるとき、自らの価値と威信と権威を立てることができるのではないだろうかというのです。

木に花がたくさん咲き、実もたくさん結んだでしょうが、それらが全部落ちてしまって、秋になったのに一つの実も結べず枝だけ残ったならば、その木はどれほどみすぼらしく、悲しいでしょうか。しかし、多くの実は結べなかったとしても、どんな木の実とも比較できないほど完熟した一つの実をつけたなら、その一つの実をもって、数千、数万の実の前に堂々と誇ることができるのです。

現代社会に数多くの宗教があります。キリスト教ならキリスト教の中にも、数多くの教派があります。このような現実の中で、結実の時代を迎えた統一教会自体を中心として見

るなら、神様が我々に、ある結実を要求しておらるのです。先ほど言ったように、一つの木に多くの実が結ばれなければなりませんが、そうできずに一つの実だけを残したとしても、その実が、その木としてはそれ以上出すことのできない完全な実なら、その木は、その実によって秋を迎えた価値と権威と威信を立てることができるのです。

これと同様に、我々統一教会も、必ず結実がなければなりません。統一教会が出発して、今まで激しい波風と試練を経ながら、一つの結実に向かって進んでいます。ここから、どんな結実になるかということが、大いなる問題であらざるを得ません。

このような立場で皆さん自らが、果たして自分は正常な春を迎えたか、正常な夏を迎えたか、そして、正常な秋を迎えて完熟した実になり得るだろうか、ということを点検してみなければならないでしょう。

実自体を見れば、そこには木の枝もあり、木の葉もあり、根もあり、また種もあるのです。その実を摘んだということは、その木自体をもったというのと同じ立場です。実には種が多いために、その実を中心として数十あるいは数百本の木をもつことができます。

一つの木の実は、その木が十年過ぎても、二十年過ぎても、その木が引き継がせてあげようという全体的な生命の要因を、相続してもらわなければなりません。それでこそ、完全な実として収められるのです。

そして、実が育つ過程に、その要因を一度でも切断してはいけません。絶えず育つように置いておかなければなりません。生命が始まったその日から、実として収められ、主人の手を経て倉庫に入って蓄えられるときまで、その要因が、どのひと時も途切れてはいけないのです。風が吹く時や、あるいはそれよりもっと暴風雨が吹きつける時や、どんな試練の過程があっても、この要因が途切れてはいけないのです。その要因は、終始一貫、連綿として、それ自体に保有されていなければならないのです。

このような観点から見るとき、皆さん自身は信仰の道に入ってきて、自分の新しい生命が発生するのを感じ、喜悦を感じ、新しい希望を感じるでしょう。「私はこのような木になり、このような人格者になり、世界の前にこのような存在になる」という決心をして立ち上がったその日からは、秋の収穫期のために準備するすべての内的な要因が、絶えることがあってはいけません。時がたてばたつほど念を押し、そこにプラスする過程なくては、完熟した結実を見ることができないのです。（三六｜一〇）

第二節　審判と公認

一　審判の種類

怨讐を愛さなくては行くことのできない道が、原理の道であるということを御存じの神様が、終わりの日に審判を通じて世界人類を滅ぼされるでしょうか。違います。神様は、人間に対しては父母の立場にいらっしゃいます。今日キリスト教で言う、いわゆる「火の審判」というものは、言葉そのままの「火の審判」ではないのです。（三一｜一六七）

師弟の間にも、先生が守るべき法があり、弟子が守るべき法があるのです。統一教会でも、先生が守るべき法があり、皆さんが守るべき法があるということを知るべきです。ですからみ言に対する審判は、み言を聞いてい

る皆さんが受けるということです。み言を誤って聞けば、審判を受けるのです。

その次には、実体を成すのです。実体を成すべきなのに、実体を成すための活動ができなければ実体審判があるのです。審判には、み言の審判があり、実体の審判があり、心情の審判があります。三大審判過程を経なければならないのです。

まず、原理のみ言が審判し、その次には実体の審判をするのです。誰が審判するのでしょうか。伝道やいろいろな活動を熱心にし、すべての法度を守り、実体を成した人たちが審判するのです。一生懸命にした人たちが審判するのです。それが審判です。み言どおりにしないときは、サタンも審判するのです。他人が、実体が、讒訴するのです。皆さんは、先生が審判し、統一教会の幹部たちが審判し、み旨に従ってきた人たちが審判するのです。

皆さんは、どのように行くべきでしょうか。サタン世界で食口を経て、先生の認定を受けて、霊界を経て、神様の所へ行くのです。それが行くべき道です。法です。そのように行くのが正しい方向です。

讒訴条件があれば、これが合わさって、実体的に讒訴するのです。実体審判です。そこで、うそが通じますか。仕方なくするのは、しないのと同じです。神様と先生を思いながら、その仕事をすれば、神様の中身が、先生の中身が、その中に刻み込まれるのです。栗のいがに中身が入ったのと同じようにです。このように、心の中で神様を思い、先生を思えば、先生のみ言が、神様のみ言が、中身になるのです。

皆さんは、神様と先生と食口たちが歓迎し得る人になるべきです。それで皆さんは、むいてみたとたんに栗の実のようでなければなりません。我々は、神様のために、「真の父母」のためにそうならなければなりません。そのような仕事をするのです。霊界に行って、神様のために「真の父母」を中心として生活しようとするならば、ここで拍子が合わなければなりません。それでこそ調和するのです。

それゆえ、恐ろしい実体判断を受ける過程を経なければならないのです。これが法です。このようになる日には、心情的基盤が自動的に生じるのです。皆さんが熱心に伝道したり苦労しているのに、なぜ悪口を言われて迫害されるのでしょうか。それは、皆さんに心情がないからで、心情を探すためなのです。愛を探すためです。そのような人たちを愛することができる人になるためなのです。皆さんがこのような訓練過程を経ないことには、いくらの人になろうとしても駄目なのです。言い換えれば、サタン世界の愛以上の愛を、自分が見つけなければならないのです。そうでなければ、天国に行けないのです。愛を探し求め、天国に行こうと、そうするのです。愛を探し当てた人が、天国に行くのです。

その時の審判主は誰でしょうか。神様が審判主になり、イエス様が審判主になり、先生が審判主になるでしょう。ですから、実践をしなければなりません。これが、我々の当面の課業であり、神様の命令だという事実を知るべきです。（一〇三｜二三六）

二　天国に行くパスポートを準備せよ

誰にも最後の日が来ます。サタン世界で最後の理想世界を立てるためには、あらゆる体験をして、そこに合格しなればいけません。

天国に行くパスポートをもたなければなりません。パスポートをもらった個人と家庭と

国家がたくさん現れなければなりません。パスポートをもった国家があってこそ、神様が天地を任せることができるのです。

パスポートは、サタンを追放するのです。サタンは来れないというのです。生活の中で、サタンが関係しません。サタンの干渉を受けないようにするには分立しなければなりません。個人分立、家庭分立、氏族分立、民族分立、国家分立、世界分立、天宙分立までしなければなりません。「統一原理」でサタン分立歴史を習ったでしょう？　何をもって分立するでしょうか。蕩減の道を通じて分立しなければなりません。

学者も大統領も、例外ではありません。蕩減の道は、探して行かなければなりません。蕩減の道は、教えてもらって行く道ではありません。自分が探して行かなければなりません。これをしないと、地獄に行くのです。地獄の鎖が、皆さんの目に、鼻に、考えに、みな引っ掛かっているという事実を知るべきです。これは脅迫ではありません。堕落ということを、ひっくり返すために必要なことなのです。

白い紙に書いてある文を消すのは、どれほど大変ですか。サタンが書いた文字を消すのは、インクの字を消すよりも難しいのです。それを消すには一度死んでから生き返らなければなりません。生きているとは名ばかりで、死んでいるということを知るべきです。これが残っている限り、サタンが、「私のものだ」と言うのです。それでイエス様は、「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」と言いました。（一二九｜一八三）

霊界には、イエス様とか孔子、釈迦のような立派な人たちがいます。聖賢たちも多く、偉人たちも多く、立派な人たちが多いのに、何をもって上がっていきますか。

またそこには、ローマの迫害時代に殉教して死んだ人が多く、公的に犠牲になった人たちがどれほど多いでしょうか。それなのに、何をもって、どのように上がっていきますか。

ここでは、アメリカの軍隊のある小隊に入るには、証明書があってこそ入ります。それなのに、霊界という高次元の立場まで踏んで上がることができますか。数千億が集まって、時間と空間を超越して眺めているのに、「あの人は歓迎する」と言われるほどになりましたか。皆さん、自信がありますか。霊界は距離がありません。彼らは、皆さんが上がっていくのを見守っているのです。それなのに、どのように上がっていきますか。

そこを通過するためには、証明書が必要です。証明書がなければ通過できません。「私は文学博士の学位をもって行く」と、そのように言って行くことができますか。それは、霊界のトイレの紙くずほどにもなりません。

私がなぜこの堕落世界で、この悪なる世界で反対するのを突き抜けて、上がっていかなければならないのでしょうか。証明書をもらうためです。この世的なことではありません。私が世の中に出ていったなら、誰もうらやましくないほど出世をしたことでしょう。そのような能力をもった人です。（一四六―三三〇）

イエス様は、天国は相続しましたが、この世は相続できませんでした。では、この世は誰が相続したのでしょうか。カインが相続しました。それゆえこの世は、カインの国です。ですから、アベルは天国を相続したのちに、この世のカインが保証する証明証をもらわなければなりません。天国に行くには、サタン

の証明証をもらって行かなければならないのです。

堕落人間は、この二つの原則に引っ掛かっているのです。このような原則が解けなかったために、今までの六千年の歴史が、繰り返しの連続だったのです。ですが、今分かったのです。聖書を見ると、「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ八・三二）というみ言があります。それが分かったのなら、歯を食いしばってでも愛さなければなりません。どの程度まで愛すべきでしょうか。怨讐であるカインまで愛さなければなりません。（三四｜二七八）

人間の堕落は、神様の立ち会いのもとでなされたのではなく、サタンが主体となってなされたので、堕落圏から逃れるには、サタンを屈服させなければなりません。「サタン、こいつ7　お前と組んで私がこのようになったから、お前を屈服させて、私は帰る」と言うべきです。それで、サタンを屈服させた証書をもらわなければ、神様の愛を受けることはできません。イエス様も三大試練で勝利しました。歴史的に勝利したというサタンのサインをもらわなければ、天国に行くことはできないのです。

どのようにしてでも、サタンのサインをもらわなければなりません。イエス様がサタンから三大試練を受けて勝利したとき、その立場でサタンが涙を流しながら、「あなたと私は永遠に違う」と認めました。（二四｜三三七）

カインを屈服させるためには、終わりまでカインを愛し切らなければなりません。そのような人でなくては、カインを救うことができないのです。

皆さんが天国に行くには、サタンの証明証をもらわなければなりません。サタンの証明証とは何でしょうか。罪人が釈放されるには、まず検事を通じ、弁護士を通じてから、判事によって釈放されるのです。このような立場で見るとき、サタンは検事であり、神様は判事であり、イエス様は弁護士です。サタンが、「お前はこれこれこのようにしただろう?」と言って、さっと罠にかけて神様に、「この人は、このようにしなければならない7」と言えば、神様もどうすることもできないのです。すると、イエス様は弁護士の立場で、「神様、この人の先祖はこのようなことをしました。本来、血統は悪くない人です。これこれの条件に引っ掛かったので、その条件に該当した蕩減条件を立てさせ、罪を脱がせてやらなければなりません」と言うのです。このようなことをしてきています。

それゆえ、皆さんが天国に行くには、サタンの証明書をもらわなければならないのです。サタンを愛したと認定されなければ、永久に天国に行けません。それで統一教会は、そのようなことをしようというのです。反対する人を怨讐として対すべきなのにもかかわらず、愛さなければならないとは、あきれたことです。怨讐を愛せというのです。彼らのために福を祈ってやらなければならないのです。そのようにしなければいけません。カインとアベルが一つにならなければ、復帰ができないのです。父母に帰ることができないのです。（四八｜三一六）

キリスト教は、歴史時代に数多くの人々と共に、悲惨な運命を開拓しながら、真のオリーブの木を探す歴史を経てきたのです。真のオリーブの木は、すなわち神様の息子です。その息子が来れば、その方の津液を受けて、

枝をもらわなければなりません。その枝に自分を接ぎ木しなければならないのです。そのようになると、歴史時代のすべての先祖たちが蕩減条件を提示して、サタンに引っ掛かって倒れ、今まで結ばれている歴史的な条件が、その場で全部なくなるのです。

沃土、暖かいねぐらのような基盤ではなく、砂利の多い土地のような所で、接ぎ木されるというのです。

今までサタン世界にない本性を備えたので、神様の息子になり得るという証明書を、サタンからもらわなければならないためです。それは神様がしてくださるのではありません。神様が自由にしてくださるなら、六千年前にすべてしてくださったのです。

刑務所から出てくるために、判事が公認してくれるのではありません。では、誰がしてくれるのでしょうか。検事が公認してくれるのです。公判廷では、検事はサタンです。それゆえ、裁判の場で検事の公認を受けなければ出てくることができないのです。それゆえ、サタンの公認を受けなければ、神様は「お前は私の息子だ。私が生かしてやろう」と言えないのです。必ずサタンの公認を受けてこなければならないのです。皆さんは、サタンの公認を受けましたか、受けていませんか。サタンの公認を受けなければなりません。

統一教会は、何を教えてくれる教会でしょうか。サタンから公認を受ける方法を教えてくれる所です。サタンから公認を受けると言っても、霊的にだけ公認を受けたのではいけません。霊肉を合わせた実体として公認を受けなければならないのです。（一七｜一二四）

天国に行くパスポートを、何もせずにもつことはできません。ただ座って、試験も受けないで、論文も書かずにもらった学位は、偽物です。統一教会にも本物と偽物がいます。正確な尺度で測ったのちにこそ、本物になるのです。（一二九｜一八六）

天国へは、どんなにきれいで純粋な心をもっていたとしても行くことができません。天国に入る手続きを踏まなければなりません。登録をするには、資格証を出すべきでしょう？　いくら「私は絶対的に純粋な心をもった純粋な人である」と言っても、天国に行けないのです。通過し得る形式がなければなりません。

滅びゆくこのアメリカに行ってくるためにも、ビザとか何とか、どれほどややこしいですか。天国に入るのは、アメリカに入ることよりも難しいのです。あらゆる法の手続きを踏まなければなりません。それを学ばなければならないのです。それゆえ、統一教会でなく、統一大学です。天国の大学だというのです。ですから、先生が地上で指示したすべてが、あの世に行く時において条件になるのです。「これができなくては行けません 7」と、このように言えば、先生を見て「何もしないで命令だけするのではないか」と言うでしょうが、先生はそれをみな実践して命令するのです。なぜそうなのでしょうか。「真の父母」なら、教えてあげなければならないからです。

先生は相談する相手がいないのです。アメリカの大統領にも、復帰摂理について相談できません。ここにドクター・ダーストが来ているとしても、復帰摂理路程を相談できないのです。相談するようになれば、天使長が讒訴するのです。天使長は、人間を堕落させた

張本人です。それゆえ、神様と先生以外は知らないのです。

今は、統一教会が世界の峠を越えていくのです。今は、統一教会を誰かがなくすことはできず、先生を誰も監獄にほうり込むことはできないのです。皆さんが今、結婚して、生活して、息子、娘を生むことは、忙しいことではありません。皆さんは、いつ死ぬか分かりません。行く途中に、車の事故に遭って霊界に行くかもしれません。ありとあらゆることが、たくさん起きるのです。いつ、どの瞬間に行くか分かりません。

祝福された家庭が、これから霊界に行く問題を等閑視して、自分たちだけでおもしろく暮らして霊界に行くならば、統一教会の先生の前に出ることができますか。祝福を受けた家庭というものは、長成期完成級圏内にいるために、世界圏にまで上がることができていません。長成期完成級にいるために、世界を越えなければなりません。そのような過程にいるために、越えなければならないのです。

先生が、霊界に行くことができる道をみな準備したのに、皆さんがしないでじっとしていたら、どれほど悲惨でしょうか。

先生は無能力な人ではありません。性格を見ても、誰にも負けない性格です。先生は、踏まれることを嫌いますが、踏まれても生きてきたし、反対されるのが嫌ですが、反対されて生きてきたのです。そのような基盤で、統一教会に入ってきた皆さんは、どのように行くべきかということがはっきり分かる人です。早く国と世界を越えていかなければなりません。皆さんは、お嫁に行くのが忙しいですか、暮らすのが忙しいですか、霊界に行く準備をするのが忙しいですか。

自分が生きるということは、霊界に拍子を合わせるためのものです。誰もが、霊界に拍子を会わせて生きなければならないのです。我々、統一教会を信じていった人たちが霊界に行くときには、先生が教えてあげた条件が、霊界の門前にしっかりと打ち込まれていて、皆さんに質問するのです。

先生が今まで教えたことすべてが条件になって、書かれているのです。そこで答えられなければ入れないのです。中間ぐらいの霊界で待たなければなりません。そこで、先生が霊界に来るのを待たなければなりません。「先生が霊界に早く来たらいい」と待つのに、先生が霊界に行っても、先生が行く所に皆さんがすべて入れるわけではありません。（一四六｜三三七）

「悪魔を追放しよう 7」、これが先生の標語です。人類歴史の数多くの人々を蹂躙してきた悪党、サタンのしてきたすべての行動を、公儀の裁判長である神様の前に、検事となって讒訴しようというのです。我々が検事になって、悪魔サタンを讒訴しようというのです。そうすれば、悪魔が検事に屈服するでしょうか、屈服しないでしょうか。そこには弁護士がいません。悪魔には、弁護士がいません。しかし、人間には弁護士がいるのです。

イエス様があの世に行って、弁護士の役割をしているのです。イエス様が弁護士になって、「この人は、私の名を信じ、善なることをしました。善であろうとし、公理の法度を守った人は、悪魔も連れていけないということは、悪魔と神様と協定した条約ではないですか」と言うのです。そうすると神様も、「そうだ」と言うのです。

イエス様の名で善なる立場に立てた人たちは、悪魔が引いていくことはできません。それで、「イエス様を信じなさい」と言うのです。よく調べもしないで、イエス様を信じさえすれば天国に行きますか。私が霊界に行って、立派な牧師たちが地獄に行ってひれ伏して、「私は文先生がこのような方だとは知らなかった7」と言っているのをたくさん見ました。夢のような話です。皆さんの従う先生は、そのような人です。高次元の世界、五次元世界以上の理論をもっている責任者なのです。私に従おうとすれば、そのような内容を知らなければなりません。（一四九｜九八）

我々には、国がなければなりません。国はありますが、我々が行く国は、ほかの国です。その国の公認された市民権を新しくもらわなくては、天国に入ることはできないのです。公認された市民権をもった人には、サタンが東西南北を通じても、過去、現在、未来を通じても、讒訴しようとしても讒訴できないのです。（一四八｜二八七）

第三節　霊界入籍

一　天国市民が楽しむ自由

女性が美人として生まれれば、間違いなく外的についていくのです。醜い女性は、外的に行くのではなく、内的に行くようになっているのです。外的に行けば行くほど、サタン世界に染まったサタンのぼろきれになりますが、内的に行くようになれば、神側に近づきます。内的に行くすべを知る人は、外的な側にも思いどおりに行くことができますが、外的な側に行った人は、内的な側に絶対来ることができないのです。

では、統一教会の人たちは、どのような人になるのでしょうか。内的世界にも入るすべを知り、外的世界にも出ていくすべを知り、また、出てから入ってくるすべも知り、東西南北を訪ねていくことができる人になるのが理想的です。内的世界が主体になって、外的世界を支配し得る人をつくろうというのです。

外的世界は、悪が侵犯したために、その世界に行けば地獄に行き、内的な世界に行けば、善なる霊界である天国に行くのです。この外的世界と内的世界を自由に往来することができれば、地獄にも行くことができ、天国にも行くことができるということなのです。それを知っているがゆえに、「どこに行っても歓迎され得る人になってみよう」というのが先生の主張です。それが神様の主張です。

神様は、地獄に自由に行くことができます。手続きを踏まずに行くことができます。また、天国の王宮に行くにも、手続きを踏まずに行けます。どこでも思いどおり行けるのです。（一一六｜一七七）

二　霊界に行くときもっていく贈り物

霊界の神様の前に行くときに、もっていく贈り物とは何でしょうか。お金でもなく、学士、博士の名誉でもありません。自分の愛する夫がいいとか、豊かに暮らしているとか、そのようなことではありません。そのようなものは贈り物にはならないというのです。そこには世界のため、神様のための愛をもっていかなければなりません。それが残るのです。ヨハネによる福音書第三章十六節に、「神はそのひとりごを賜わったほどに、この世を愛して下さった」とあります。神様が世の中を愛するとあります。それで、ひとり子を与え

てくださいました。ひとり子は、世の中を愛するために来た人です。

それゆえ、愛を中心として信ずれば、滅びないのです。救われるのです。主人が世界を愛するので、世界を共に愛さなければならないということなのです。今日のキリスト教は、教派の名で全部分かれていきました。世界がどうで、神様がどうでということは考えもしないのです。自分の教派と自分の国だけを愛して滅びていくこのキリスト教を眺めるとき、我々は教派を超えて、国を超えて世界を愛し、神様を愛さなければならないのです。（九八｜三二九）

いくら殺人強盗だとしても、証拠物がないときは、判事でもどうすることもできません。強盗が、「私が殺人をしたのをいつ見たか」と立ち上がれば、どうしようもないのです。しかし、証拠を突き付ければ、微動だにできません。証拠がなければ、証拠を探さなければなりません。賛美歌に「イエス、イエス、信じることは、もらった証拠が多い」という句があります。皆さんは、もらった証拠がありますか。もらったと威張って伝道に出るものの、そのようなものが証拠だと思いますか。そのような証拠をもって何をしますか。伝道して残った人もいなければ、何の関係もないということです。

皆さんは、天国に行くときに贈り物としてもって行く物がありますか。霊界に行けば、殉教した功臣たちが前にずらりと並んでいるのに、彼らの前に皆さんがもって行ったふろしきを開いて見せることができるでしょうか。大した物でもないのに開いて見せることができるでしょうか。皆さんがどのような苦労をしましたか。それぐらいの苦労をしただけで、どうして国のため、世界のためだと言えるでしょうか。「苦労をするにはしましたが、私は苦労したと思いません」と、それでこそ当然なのです。まだ行くべき道が残っています。霊界に行ってふろしきを解いて、「これは一生の間私が用意した贈り物ですので、お受け取りくださいませ」と言えなければならないのです。女性たちが嫁に行く時は、荷物をしっかりと持って行きながら、天国に行く時は手ぶらで体だけ行くことができますか。

皆さんは統一教会の信徒として、神様からどんな使命をもらった者たちですか。皆さんは、神様の精兵として、神様の息子、娘として、結婚するようになれば、その家の中の家門を受け継がなければならないのです。そうするために、皆さんは暮らすようになります。独立性を育てなければならないのです。このような高潔な使命が、皆さんにあるのです。それゆえ、先生と毎日生活できず、離れていても、また、神様がいつも皆さんに直接命令しなくても、皆さんは、神様の管理圏で使命を賦与された人たちであるということを忘れてはいけません。

皆さんは、自身を絶対視しなければなりません。そうして、その絶対的な価値によってなされた成果が万民のものとして、後代の後孫のものとして、天上世界の宝物として、永遠に保障されるという決意をもたなければなりません。これが任命された者の責任です。その責任を果たせなければ、乞食よりもっとかわいそうです。乞食たちは時が来れば、もらってでも御飯を食べますが、責任を果たせない人は、時間に合わせて御飯も食べられないのです。

このような責任を完遂するのに、神様が「十年間にせよ」と言ったなら、十年間、忠

誠と精誠を尽くさなければなりません。歴史を輝かすことができる子女の道を、価値ある道として復帰してくる期間を、どのように短縮させますか。神様が計画した十年という期間を、七年に短縮させるためには、自分の汗が必要であり、自分の血が必要であり、自分の努力が必要であり、自分の苦労が必要なのです。その消耗の代価を通じて、量と質をそこに補充しなくては、国家的で世界的な版図を収拾することはできないのです。統一教会の信徒たちは、このような責任を負って行く人たちにならなければなりません。

そのような時代が来たのです。既に基礎を築いて、外部工事はみな終わり、これからは装飾をする時代です。内部装飾は、主人の手が必要なため、私がいなければいけないのです。壁などは直接関係がありませんが、直接関係してくる、必要とされるすべての与件を備えるためには、必ず段階的期間が必要です。それゆえ、準備時代、実践時代、成就時代があるのです。

自分の生涯を、時期に合わせて計画し実践していかなければなりません。準備時代には、あらゆる精誠を尽くして準備し、実践時代には、あらゆる精誠を尽くして実践し、成就時代には、あらゆる精誠を尽くして成就しなければなりません。それでこそ、内部装飾がうまくいくのです。その装飾は誰が見ても、「その精巧さにおいて、精誠を込めた度数がずば抜けている」と言われなければなりません。

ですから、皆さんはみ旨の世界において、準備時代が来て「準備しなさい」という任命を受ければ、準備しなければいけないのです。その次には、実践時代が来ます。その時は、昼夜を問わず実践をしなければなりません。その次には成就時代が来ますが、その成就時代は希望が宿る時期なのです。（三二｜七一）

三　三大主体思想と入籍

心は、神様の代わりです。心は、烈祖、先祖たちを代表するのです。心は師を代表し、心は国王を代表するのです。ところで、これまでこの心を、どれほど蔑視し、ないがしろにしてきましたか。宇宙の中心として真なる父母の立場にあり、真なる師の立場にあり、真なる主人の立場にある、真の愛の主体としていらっしゃる方の代わりであるその心が、この地上で、自分一人を収拾するためにどれほど犠牲になってきましたか。

蔑まれ、引きずり回されながらも、人が悪い考えをもって明け方にどろぼうでもするようになれば、「おい、こいつ 7」と、再び忠告するのです。皆さんがそのような心を、どれほどもてあそびましたか。心は、父母の代わりであり、師の代わりであり、主人の代わりです。心の世界では、公判が必要ありません。皆さんが、皆さん自身を誰よりもよく知っています。第三者、証人は必要ないのです。

父母の前で堂々とできない自分、師の前で恥ずかしい自分、国の君主の前で恥ずかしい自分、神様の前に恥ずかしい自分です。そうであるために、「悔い改めよ」と言うのです。本郷に帰るには、悔い改めなければならないのです。

本郷では、神様を王として侍らなければなりません。神様は、宇宙の王であり、国の王であり、氏族の王であり、家庭の王です。神様は、宇宙の師であり、国の師であり、氏族の師であり、家庭の師です。神様は、宇宙の主人であり、国の主人であり、氏族の主人で

あり、家庭の主人です。これが三大主体思想です。ここには、「ため」にする愛、「ため」にして忘れることができる愛の本質があるがゆえに、この三大主体思想が天国を代表するのです。

自分自身が、その三大思想を全部備えるなら最も理想的ですが、それを全部備えられなくても、「真の父母」の立場に立てば、主は右、主人は左に立つのです。それゆえ、この三つのうち、どの一つでももてばいいのです。真なる父母になるなり、真なる師になるなり、真なる主人になるなり、いずれか一つの立場だけにでも立つようになれば、天国入籍は問題ないのです。（二〇九｜一五四）

四　入籍の条件

堕落とは何かというと、み言と実体と心情の因縁が離れていったのです。ですから、皆さんがみ言を知って、み言を実践しなければなりません。み言を実践するには、父母の心情を備えて動いていかなければなりません。蕩減復帰をすることができる実体的な行動を経た者となって、初めて祝福してあげることができます。口先だけではいけません。こうして、天の一族、言い換えれば、この国の生命体になるのです。

我々の生命現象において、霊形体と生命体と生霊体があります。これらは霊界の反応的な現象なので、この世で霊形体、生命体、生霊体と同様の因縁を経るのです。生霊体になればそこに入籍して、自分の位置を見つけて入るのが復帰の路程です。ですから今からは、皆さんが入籍するのです。

もしそのようにつながって入籍される場合には、皆さんがいくら過って、いくら失敗をしたとしても、サタン世界で立てた法をもっては、処理できないようになります。アメリカ人たちを韓国の国法をもって処理することができますか。国籍が違うからできません。

そのような圏内に入れば、その圏内の法だけが適用されるようになります。ですから、サタン世界の法は、いったん越えさえすれば、いくらどのようにしても適用されないのです。サタン世界の法が適用されないのですから、結局はこの世の法をもってしてはいけないということです。ですから、地獄には行かないようになるのです。

人は一度生まれたなら、一度は死ななければならないのです。それは公式です。では、死んでからどこに行くのですか。統一教会員は、霊人体があるということを知っています。その霊人体は、育たなければならないのです。

これから、皆さんに問題となることとは何かというと、時が来れば、全体が自分の自叙伝を書かなければならないのです。統一教会に入ってきて何をしたか、その記録の内容が何かというのです。ここにおいて、どこかの会社に就職して生活したといった内容は、何の条件にもならないのです。かえって、統一教会に入って会社にいたという事実は、恥ずかしいことです。今に、そういう時が来ます。

これから、入籍が始まります。南北が統一されれば、入籍をしなければなりません。宗族的メシヤという言葉が問題なのではありません。その内容と事実が問題なのです。そのようなすべてのみ言の内容が、今後自分が永遠の道を行くための蕩減条件になるのです。あの世に行って、皆さんがその道を行くために、心で体恤しながらどれほど努力したか、努力だけでなく実績をどれほど残したかということが問題になるのです。

救いの道というものは、今まで生きてきた、そのままの習慣的生活を通じて得ることができるものではありません。完全に蕩減の道を行かなければならないのです。救いの摂理は、復帰摂理であり、復帰摂理は再創造摂理です。それゆえ、再創造されるためには、堕落する前と同様に、本然の位置、ゼロの位置に帰らなければならないのです。

そこには、意識もなく、習慣もなく、金氏とか李氏とか、自分の姓もないのです。そのようなゼロの位置に帰らなければなりません。天の創造本然の基準から見ると、造られたすべての万物は、ゼロから出発したのです。

ところで、人間が堕落することによって、天国に行く途中、その道に反することが人間世界にあふれているのです。これを切ってしまわなければなりません。それは言葉ではできません。すべての民族が、サタンの愛を中心として、サタンの生命、サタンの血統と因縁を結んで歩んできた歴史的文化背景の中で、習慣性、あるいは風習が混在しているために、これはそのままでは除去されないのです。

聖書は、「死なんとする者は生きん」と言いました。歴史的な論理がそれで成立するのです。死のうとしてこそ生きるのです。自分の生命を投入しなければならないのです。それで、このすべてを洗濯すべきです。言い換えれば、蕩減して、復帰しなければならないのです。そのような過程が、絶対に必要なのです。

堕落世界で所有していた習慣性とか、罪悪性が残っている限り、神様と関係を結ぶことはできないのです。（二一三｜九七）

皆さんが霊界に行くとき、一週間以上神様のために断食ができなければ、あの世に行って入籍ができません。なぜでしょうか。神様は、六千年の復帰歴史路程で苦労されたので、それを考えながら断食をしなければならないのです。それで、統一教会では、七日断食期間があります。それは、皆さんを苦労させようというのではなく、神様の前に肉身を打ったという条件を立てさせるためなのです。（一七｜一八三）

我々はどのように暮らすべきでしょうか。その方法は、個人は家庭、家庭は氏族、氏族は民族、民族は国家、国家は世界、世界は天地、天地は神様のために、神様の愛のために生きることです。このように生きて、死んでいくのです。

我々は、他の人たちとは違うのです。伝統がしっかりと立っているのです。なぜそうでしょうか。伝統を立てなければ、あの世に行って入籍する所がありません。あの世がそのような組織になっているから、そこに合わせなければ、入籍することができないのです。

堕落していない本来の人として再現して、帰らなければなりません。そのような人にならなければ、入れません。これが原理観です。（一三一｜五六）

皆さんは、天国に入籍をしなければいけません。アブラハムは、神様の近くに行くため、祭壇の上に自分と共に万物を捧げました。万物を失ったために、それを復帰の条件とし、人を失ったために、アベルの位置に立って、万物をアベルの立場に立ててカインに条件を立てさせ、神様に捧げるのです。そのようにして初めて、神様は受け入れてくださるのです。（一五｜一五三）

皆さんが入籍するのに先立って、絶対的人間として生まれるためには、どのようになるべきでしょうか。これをはっきりと知らなくては、絶対的に完成品に代わり得る位置、すべてに勝ち、自分の主体性を天の前に主張することができるその位置に訪ねていくことができないのです。

我々人間は、神様を中心として生まれました。どこまでも出生の動機は、創造主です。創造主によって生まれたのです。創造主の何によってできたのでしょうか。これが問題です。創造主がダイヤモンドが好きで、ダイヤモンドを任せるために我々を造ったのか、権力が好きで、権力を相続させるために造ったのか、知識が好きで、すべて知識を伝授するために造ったのでしょうか。始まりの起源、出発の起源とは何でしょうか。これが問題です。

絶対的な神様が起源となり、彼によって内的に因縁を結んで生まれた自分を主張したとしても、これから本郷の地に帰るプログラムを正確に知らなければ、その進行上のすべては未完成として結論づけられるようになっています。

自分の出生の動機は、どこまでも我々の父母によるのです。父の生命、母の生命が、自分をつづって出生させたのに、二人の内外の人格を伝授されるにおいては、生命同士がぶつかって出てきたのではないのです。生命に先立って、このことをつなげる根元的な作動があったのですが、その作動の動機とは何かというと、愛というものです。

生命が貴いか、愛が貴いかという問題について見るとき、生命は第二の位置にあるのです。愛が第一の位置です。

入籍のために本郷の地に行くべきですが、本郷の地に帰ることは簡単ではありません。手続きを踏んで、完全に合格しなければなりません。どの窓口に行っても、どの地へ行っても、大韓民国のどこへ行っても入籍することができる窓口があります。そこへ行けば甲という人、乙という人、丙という人、ありとあらゆる男女が入り口に座っていても、その人が判を押してあげなければならないのです。（一七七｜三〇五）

五　霊界の族長になる人

神様と一つになったなら、カインを愛さなければなりません。神様の愛を受ける立場に立ったなら、心を尽くして、命を尽くして、思いを尽くして神様を愛するのと同じように、氏族と民族と国を愛さなければなりません。これが地上の第一の戒めです。天国の戒めではなく、地上天国の戒めです。天上天国の戒めは、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）ということですが、地上天国の一番の戒めは、「あなたの心を尽くし、命を尽くし、思いを尽くして、あなたの国とあなたの民族を愛せよ」ということです。

それゆえ、神様の愛をどのように植えつけるか、神様の権能と天国の畏敬性にどのように因縁づけるかということが問題なのです。そうするには、自分を中心として、横的に広がった舞台をもたなければなりません。そのような人が、霊界に行って、神様の威厳を永遠に相続することができる支派長や族長、祭司長になるでしょう。（三四｜七〇）

これから神の国を中心として、入籍時代が来ます。十四万四千の群れに入ると言うでしょう？　十四万四千とは何か分かりますか。

入籍時代に向かっていくには、自分の氏族圏が、天国の故郷の地と同じ立場にならなければなりません。それでこそ天国の入籍時代に、氏族的に入籍するのです。

個人の救いの時代は、過ぎるのです。一国の大統領が、統一教会に入教して宣誓すれば、その人たちも天国の眷属になり、教会が提示する礼式を経てさえいけば、みなサタン圏から脱するのです。（二一九｜一〇〇）

いつか我々が考えるべき重要な問題は、自分の体と心を統一して、妻と一族を結ばなければならないということです。体が蘇生なら、夫婦は長成、氏族は完成です。それゆえ、皆さんの氏族を一つにしなければなりません。南北統一されれば、その次には、入籍が起こります。

そのような時代に、恥ずかしくないように、同参することができなければなりません。その時は、皆さんが統一教会に入ってきた以後の歴史を、みな記録しなければなりません。間違っていれば、あの世で引っ掛かります。何をしたかというすべてを、いちいち明らかにしておいて、それを踏んで越えていくとき、この事実が自分をつかむようなことがあってはいけません。讒訴条件にならないように、記録を残しておいて越えていってこそ、初めて入籍時代に入るのです。（二一三｜二〇六）

第七章　我々と霊人との関係

第一節　霊的現象と霊人の解怨

一　善霊界と悪霊界

霊界は、二つのグループになっています。霊界は、サタン世界と神様の世界になっています。霊界のサタン世界で、善の神様の世界に早く行くことができる道さえさらけ出せば、地上は自然に解決するのです。その道は、どのように行く道でしょうか。霊界のサタン世界に行って、個人、サタン家庭、サタン氏族、サタン国を全部天側に引き継ぐ秘法さえもてば、それが可能なのです。

霊界にそのような時が来れば、地上にもそれが反映するために、すべての変遷が早くその世界に転がって越えていくというのです。（一三四―一五）

我々が実践する新しい運動とは、何の主義でしょうか。神様がいるなら、神意による主義です。神様がいるなら、霊界があるでしょう。霊界があるなら、霊界は今まで歴史始まって以来、数多くの我々の先祖たち、今生きている数多くの人たち、これから来る数多くの人たちがみな行ってとどまる所です。

霊界にも善の霊界、悪の霊界があるでしょう。悪の人たちは、必ず悪の霊界に行かなければならないでしょう。もし神様と何かの関係を結ぶことができる人間が残り得る一つの集合体が霊界なら、その霊界も不可避的に二種類になるのです。これは悪の種類、善の種類です。

では、いったい悪の種類とは何で、善の種類とは何でしょうか。神様も悪の霊界と善の霊界が和合して、人間世界が和合できることを望むでしょう。それで各自がもった目的も達成すると同時に、各自が全体目的も達成することができる、理想的二重結果の立場を追求するだろうというのです。人間には、二重目的、個体目的と全体目的があります。

今まで人類歴史は、何を追求してきたのでしょうか。善とは何であり、悪とは何でしょうか。なぜこのように塗炭の苦しみの中に暮

らさなければならず、壁にぶつからなければならないのでしょうか。その出発点から、行く過程、終着点の内容が異なるためです。内容を分析すれば、簡単なのです。（一二六―八三）

霊界がどのように発展し、どのように動き、この地上と関係を結んでいくかという全般的な内容を知らずには、これをはっきりと知ることはできません。霊界というなら、善の霊界と悪の霊界、このように二つに分けることができます。その世界は、実在する世界です。地上世界の人たちには分かりませんが、そこは、確実にある世界です。

霊界でも、善の霊人たちと悪の霊人たちが闘争しているのです。霊界にも闘争があるのです。善の霊は、悪の霊を扇動しながら良い所に連れていこうとし、悪の霊は、善の霊を何としてでもいい所へ行けないように妨げる闘いを続けています。

サタンを中心として、悪の霊がつながっていますが、その悪の霊の統治圏内に、今日地球星の人間たちが暮らしているのです。それは、なぜそうなのでしょうか。今まで行った先祖たちは、善の霊も悪の霊も、全部霊界に行っているために、その善の霊も、堕落した世界と区別されたという条件をこの地上で立てて善の側に立っているのかと、神様が御覧になるとき、完全な善の立場に立っていることはできないのです。

神様の本然の理想世界、本然の人間になることができる、理想的善圏に向かっていくにおいて、善の霊たちはそこへ前進しようとし、悪の霊たちはそれを妨げようとしているのです。悪の霊界と悪の世界というものは、いつでも通じます。いつでも連絡できます。善の霊は、悪の世界で対立して、反対される立場で生き、死んだ霊なのです。それは、宗教を信じて行った霊人たちです。（一三四―九）

二　霊的現象

最後に、もし宗教同士互いに戦うなら、どのようになりますか。そのような現象が起こりやすい時代にあります。そのような時代を防備するために、統一教会が生まれたのです。統一教会は、それを防ぐための防備材です。

それで、宗教戦争時代には、霊肉共に防備するのです。霊界は、地所を占領しているのです。

霊界には、霊人が何千億もいるでしょう。日本の一億は問題ではありません。それは、足の下のほこりほどにもなりません。数千億、数万億の霊人たちが、地上を占領するための攻略をしてくるのです。ノイローゼ現象がその一つです。

二〇〇〇年代を越えれば、その時はみな霊的に通じるかもしれません。悪霊に通じるなり、善霊に通じるなり、霊的に通じるようになれば、「戦争をするな」と言っても、戦わざるを得ません。そうする時が来るかもしれません。それを防備しなければならないのが、「統一原理」の使命です。

高いアンテナには、ピーピー音が出ます。それがノイローゼ現象です。最も恐ろしいことは、悪霊だけが動員されて地上攻略をしてくることです。そうした場合に、どのようになるかが問題です。いくら人が全地球星に満ちたとしても、悪霊に攻略されてしまうのです。それで、神様はそこまで準備していらっしゃるのです。善霊たちを中心として、霊界の基台を広げてきているのです。（五五―三〇）

三　霊界から来た手紙

この前、李相憲さんの奥さんの閑淑さんから、霊界から手紙が来たのです。その手紙の内容はどのようなものかというと、「霊界がどれほどいいか、祝福がこのようにとてつもないとは思いませんでした。天国の皇族圏内に入ってきているという事実が、夢のような話です。あまりにも素晴らしくて、あなたより私が先に来たのが申し訳ありません。許してください」というものでした。夫より先に死んで、霊界に行ってみると、統一教会を信じて行ったために、豪華絢爛な夢のような事実が繰り広げられたので、あなたよりも先に来たのが申し訳ないと言うのです。あまりにもいいからそうなのです。

私のような人は賢い人です。その世界がよく分かるために、そのプログラムに合わせるために、一生の間暮らすのではないですか。根源から来たので、根源に帰らなければなりません。

海に集まった水が水蒸気になって大気中に上がり、雨となって降り、川ができたのではないですか。ですから、本然に帰らなければならないのです。すべては循環運動を通じて生命が連続するのです。循環しなくなれば、全部元素に帰るのです。

神様はどんな方でしょうか。神様は、宇宙の存在世界の心のような方です。神様は宇宙の心のような方です。

皆さんは、心を見ることができますか。霊界は心のようなものが体と化した生活の世界ですが、これは時空を超越した所です。そこでは、御飯を思いどおりに食べることができます。御飯の心配をする必要がありません。水の心配をする必要がありません。飲料水の心配をする必要がありません。服の心配が必要ありません。衣食住のすべてを超越します。

そこに自動車が必要ですか。自動車工場、食品工場、服の工場、織物工場があるでしょうか。みなありません。そこでは、億千万里を瞬間的に往来するのです。何の力をもってするのでしょうか。愛の力をもってそのようにします。愛する人に会いたいとすれば、すぐに現れます。

愛の速度というものは、最高に速いのです。愛の行く道は、直短距離を通じるのです。それは世の中の愛ではありません。神的な愛です。神的愛が真の愛です。真の愛の圏内に入るようになれば、直短距離を通じる最高の速度で行き来することができるために、宇宙を自分の考えの圏内の舞台として活動することができるのです。先生は、そのようなことをみな知っているために、世の中の万事に対して、悲しい苦痛の谷の道を一人で行きながらも、生涯、開拓者の一線に立って経てきながらも、恨まずに来たのです。今も、死ぬ日まで直行しようと決意をしているのです。

死ぬようになれば、霊界の軌道があります。レールがあるのです。地上のレールと霊界のレールは、国境を越える線路と同じです。これは狭くてもいけないし、高くてもいけません。合わなければならないのです。そのようなことが分かるのは、宗教の中で統一教会しかありません。いくらキリスト教が何だかんだと言っても、それは分かりません。イエス様が霊界の話をしましたか。

二十世紀後半期、先端科学を誇るこの時代に、公式的な発達の論理を追求する現時代に、公式的過程を通じた宗教的理論を通じて、神様を実証することができる内容をもった所は、統一教会しかありません。（二一〇―二二五）

今は、イエス様が反対された時代ではありません。韓国全体が世界的な版図をもった歴史性を中心として、先生をたたえることができる時代が来たために、皆さんは氏族的メシヤの責任を果たさなければなりません。今、一族たちは、瞬間的に姻族の八親等まで復帰されるのです。六カ月に百二十家庭は問題でもありません。今、このような兄の立場に立ったのです。

天地が開闢するのです。おじいさんが孫になり、お父さんが息子の立場に立つのです。孫が王になるようになれば、おじいさん、お父さんが自分の先祖たちに侍らなければならないのと同じ道理です。メシヤが王権を代表するのです。その国では、すべての聖徒たちが再臨して、キリストの名で王の役割をするのです。ですから、これは氏族的王権になるのです。そのようになれば、国家的世界の版図圏に、王権が同参ができる解放圏になるのです。

今回、李相憲先生の奥さんの閑淑さんが霊界に行って、そこから送った手紙があるのです。「霊界に来てみると、いいのです。祝福されたら、こちらに上がってくることができるのです。天の皇族が何のことか分からなかったけれど、今来てみると、本当にとてつもなくいいのです。あなたより私が先に、このようにいい所に来てごめんなさい」と言ったのです。そのような所です。

広大で永遠な世界が本郷に繰り広げられるのに、そこで活動地域を制限され、方向感覚を失ってしまい、かわいそうな行動をする男たちにしたくないから、広い大宇宙でも東西南北、四方を自由に旅行することができる、明らかな解放圏をつくるために、こうするのです。

後代を準備するためには、何かを残しておかなければなりません。自分の後孫たちを、豊かに暮らさせるために、国に良いものを残しておかなければなりません。そうすれば、国の人たちが保護するようになります。お金や知識や権力を残しておかずに、愛国的な功績を残しておきなさい。すべての人が「滅びる」と言いましたが、先生は滅び得ない準備を鉄石のようにしたのです。ですから、滅びようとしても滅びないのです。（二一三―一四六）

四　霊人の願い

霊界に行っている人間たちは、何を願うでしょうか。霊界は、自分が置かれている基準で、すべてを補給され得る世界です。

自分が願うなら、即時的です。消化して動かすことができる主体的な能力がある人ならば、不可能がない世界です。このような話をすると、「気が狂った人だ」と言うから、私は話をしません。

もし百万人の宴会をするなら、考えると同時に百万人が広場に現れて、すべての準備が可能であるために、百万人の宴会を瞬間的にすることができるのです。今日、この地上世界がどれほど悲惨ですか。このごろの韓国社会を見れば、失業者が多いではないですか。そのような世界です。何が可能になるでしょうか。原子力の分裂作用において熱が出るのと同様に、皆さんが愛の分裂作用をすれば、瞬間的に可能になります。そういうことが、あるようではないですか。（一四一―二七八）

あの世界は、どのようになっていて、つながっていくのでしょうか。あの世界において

も、現在の立場より、あすの立場が良くなるのを願うことは同じです。

地上で暮らす人間たちが生活する中で、きのうよりきょうが良いことを願い、きょうよりあすが良いことを願うのは、共通真理です。西洋人も東洋人も、昔の人も今の人も未来の人も、誰に限らず、現在生きているより、良くなることを願うのは、共通真理だというのです。これは変わりません。

霊界に行っているすべての霊人たちも、それと同じなのです。現在より良くなるべきだというのです。地上で生活した時より、良くなるのを願うのです。（一四一―二六九）

今までの六千年の歴史は、アダム一人を探してきた歴史です。アダム一人を再創造する歴史です。それゆえ皆さんは、先生についてこなければならないのです。エバはアダムが出てこなくては、創造されることができません。それゆえ、たった一人のアダム、たった一人の男性を創造するのです。

その一人を創造するためには、復帰摂理の途上に生まれては死んでいった数多くの人たちの血と肉が材料にならなければなりません。億千万の霊人たちの恨みが、ここにまとまらなければならないのです。そうして、この実体が登場する日に初めて、激しい迫害の中で血を流して死んでいった殉教者たちは、殉教したことに喜びを感じるようになるのです。

たとえ霊界にいたとしても、地上にいる実体と関係を結ぶことによって、自分たちにも解放がやってくるのです。このようになっています。それが観念的で漠然としていてはいけません。この自覚を、どのようにするかが問題です。（二九―二七一）

我々は、そばで誰かが食べていようと、休んでいようと、何をしても関係なく、その道を行くべきです。ずっと前まで、数千名が一様にみな行っているのです。休まず動きながら、精誠を捧げて身もだえしながら行くようになれば、他の人たちもその縄を巻いてくれるのです。ですから、数多くの人たちがそこから落ちるのも、感じるようになるのです。

マラソン大会をするのと同じです。走ってみれば、一等も出てくるし、二等も出てくるのです。歴史がそうです。今まで数千年間、数多くの霊人たちがその縄にしがみついてきました。その中で、一等になってあの世に行って、その巻く装置と因縁を結んで、丸ごと巻いてやるようになれば、霊界と肉界が復帰されるのです。（三二―一四五）

五　霊人の解怨

我々は、三時代の使命を完結しなければなりません。霊界に行っている霊人たちを解放し、今日この罪悪の世の中に生きている人たちを解放し、これから来る後代の人たちも、ここから解放しようというのです。このように三時代の解放圏をもって出てくるのです。

これは膨大でとてつもないことです。このような夢のような内容が、事実として現れればどうなるでしょうか。目が真ん丸くなり、口は限りなく開き、耳はぴんととがるでしょうが、頭は下がるようになるのです。（二八―二〇一）

統一教会は、何をする団体でしょうか。平和をつくるための団体であり、和解をさせるための団体です。ところで、誰と和解をつけるのでしょうか。イエス様と聖霊が今まで、

このことをしています。出産の使命を果たすのです。イエス様と聖霊が果たすべき使命は、息子、娘を出産することです。

聖書を見れば、「子を産むことによって救われるであろう」（テモテⅠ二・一五）とあります。女性たちは出産すれば救いを受けるとあるのに、既成教会の人たちは「女は赤ん坊を産んではいけないのだ」と言います。そうであるなら、神様が女性に赤ん坊を産む器官をなぜつくったのでしょうか。それは、女性を代表したエバに代わって再び出産しなければならないということを象徴的に言ったのです。

エバは霊と体を身にまとって本然の母の性稟を結実すべき本性的主体性をもった立場にありましたが、相対的基準に立てなかったこととによって、実体化することなく、神様がそれを再び神様のもとに収めたのです。そうして、それをイエス時代に、主体の前に対象として送ったのです。それで、それには体がないのです。イエス様は体がありますが、聖霊には体がないのです。それで聖霊を、火のような聖霊、油のような聖霊、風のような聖霊と言うのです。

ですが、母的使命を果たして、我々人間の心に入ってきて感動を与えて罪を洗う役事をするようになれば、きれいになるのです。それは、母が妊娠をして、赤ん坊を育てるのと同じです。そのようにするには、父の保護を受けなければならないように、イエス様の保護を受けて、再び生まれたという条件に立ってこそ、重生になるのです。生まれ変わるという言葉が成立するのです。

イエス様と聖霊が、今まで休んだことがありますか。休めませんでした。キリスト教が休んでみましたか。休めませんでした。神様は今まで六千年間、堕落した人間を救う摂理において、休んでみたことがありますか。休んでみることができなかったのです。みな休めませんでした。では、統一教会は休んでみましたか。統一教会の先生が休んでみましたか。今も、年が五十歳を越えても、驚いた鹿のように跳んで回るというのです。

なぜそうなのでしょうか。和解をさせ、神様を休ませ、イエス様と聖霊を休ませ、我々の先祖たちをみな楽にしてあげるためです。

神様も先祖でしょう？　キリスト教で言えば、生まれて死んだ先知先烈たちが全部先祖なのです。宗教で言えば、昔から生まれて死んでいったすべての宗教指導者たちも、全部先祖なのです。そのような先祖たちを解放してあげなければなりません。先祖の恨みを解怨成就してあげなければなりません。（七五―三八）

先生は目が覚めさえすれば、もう便所に行きながらも考えるのです。寝ても覚めても二十四時間考えるのです。それゆえ、皆さんに借りをつくる男ではありません。借りをつくる男ではないのです。どれほど劣っていれば、責任者が借りをつくるかというのです。

先生が若い人に負けてはいけないと思うのです。このごろも、船に乗って毎日のように出掛けるのです。アメリカにおいて、これから海に関心をもつ人が無限な繁栄圏をもつようになるということを知っているために、そういうことをしているのです。

海で死んだ霊界の霊人たちを解怨してあげるために、先生がそのことをしているのです。ある時は、台風が吹くという警報を聞いても、船に乗って出るのです。そのようにして死んだ霊たちが、多くのことを知っているために

そうするのです。私が一九七五年にケープ・コッドに行って何をしたかというと、霊人たちを解怨させてやったのです。解放運動をしたのです。それは、世の中の誰も知らないのです。

では、反対されるのに、なぜそのようなことをするのでしょうか。それは、霊界の解怨のためにするのです。（九三―九六）

六　霊界統一

肉的世界はサタンの活動舞台であり、霊的世界は神様の活動舞台になって、いつも食い違ってきました。これが復帰摂理時代に恨の与件として残っているというのは、間違いない事実です。これを食い違えさせてはいけないのです。神様を中心とした心の圏と、神様を中心として治められる体の圏を備えなければなりません。生活圏内でこれをどのように発展させるかというところから、統一基盤の基準が確立されるというのです。（四五―二一三）

この世界が統一されるためには、霊界から統一しなければなりません。皆さん、霊界が分かりますか。霊界を知らなければなりません。霊界を統一しなければなりません。霊界を統一するのは、たやすいことでしょうか。霊界の統一なくしては、地上の統一がないのです。今日、この地上の戦いが実に大変でしょう？　地上の戦いが大変です。しかし、霊界の戦いは、地上の戦いより難しいのです。このようなことを考えるとき、今日、「大変」という名詞を口を開いて言うことができません。（一五三―五六）

理想を探していく過程で、霊的なものと肉的なものが一つになるのは、何によってでしょうか。霊的な世界は霊界であり、肉的な世界は地上世界ですが、霊的世界と地上世界が一つになるためには、すり替えなければならないのです。自分のものをもってはいけないのです。全部与えてこそ、あちらが来て、またあちらから全部与えてこそ、こちらがあちらに行くのです。失ってしまった立場に行くのです。（一四七―九四）

我々がこれから霊界と肉界をつなげるには、まず世界的な信念の自覚、統一的な理念の自覚をして、世界的に打開するための受難の道を甘受していかなければなりません。こうするようになれば、霊界と肉界が自動的に一つになり、ここから統一が繰り広げられます。統一の道を行く方向が決定されるのです。（二九―二八五）

統一教会が霊界を統一する前に、肉界を統一することができますか。できません。それが原則です。それゆえ先生は、霊界を統一するために、肉界にいる皆さんを死地に追い出すのです、無慈悲にたたいて捕まえるのです。

そのようになれば、霊界は皆さんに協助せざるを得ないのです。皆さんが悲惨な立場に入れば入るほど、それを中心として、霊界は霊界なりに団結するようになるのです。皆さんが深い立場に入るようになれば、三千万の民族の中で天国圏が繰り広げられるのです。この圏は、昔から地獄に行っている輩までも含まれるのです。（四九―一〇九）

第二節　地上人と霊人との関係

一　地上人と霊人

この世界は、悪魔の世界です。悪魔の世界を訪ねてこなければならないのです。皆さんは、いつ死ぬか分からないではないですか。誰でも死ぬのです。死の峠を越えて往来することができる基盤を地に築いて行かなければ、地上天国ができないのです。地上天国ができなければ、天上天国ができないのです。皆さんが霊界に行っても、この地上に思いどおりに来ることができるようにしておかなければなりません。それでこそ地上天国に暮らし、天上天国が成されて暮らすようになるのです。

霊界に行ってから、来ることができなければいけないのです。地上に天国を成せなければ、地上に来れないのです。これは妄想ではありません。そのようになっているのです。永遠をかけて、しなければならないのです。先祖たちが、全部責任分担と蕩減条件に引っ掛かって、霊界に行っても行くべき道を行けずに、地に再び下りてきて蕩減するのと同様に、その道を皆さんは残してはいけないのです。原理のみ言が事実なら、皆さんはそこにみな引っ掛かるのです。（一四六―二二三）

宗教として行くべき道、あるいは、一般の世界が行くべき道が、互いに塀でふさがっています。不信者がどのように信仰する人と和解することができ、また信仰する人が、どのように世紀末時代に来て和合することができるでしょうか。これを解決しなくては、人類は二股に分かれて、新しい一つの世界に入れないようになっているのです。

もし二股が一つの世界に入っていくことができるというなら、その世界は二股の世界の結果をもたらすようになるのですが、それは絶対的な神様が理想とするものになり得ません。一つであるしかない神様の理想世界に、二つとも到達することができないと見るのです。それゆえ今日、多事多端な世界的事件が問題解決の焦点ではなく、体と心をどのように一つにして、目的に向かって飛躍することができる自分自身を発見するかという問題が引っ掛かっているのです。

宗教と世界統合を、自分自身から探さなければならないという観点で見るとき、統一教会は、何をする教会かという問題がここに台頭するのです。統一教会は、宗教だけのための宗教ではありません。統一教会は、この世と一致和解して、宗教的活動基盤が、社会的活動基盤に同伴することができる道を探していくべきであり、また、世の中が宗教分野の道を探していくことができ、これが一つになり得る道を模索しなければなりません。ここには、大きな塀が横たわっているのです。宗教と社会が一つになるにおいて、個人的、家庭的、民族的、国家的、世界的に、霊界まで塀で妨げているのです。

この塀をどこから壊すのでしょうか。故障はどこから生じたのでしょうか。世界の果てで生じたのではありません。個人に生じました。個人が、自分を中心として故障する結果、体と心が分かれました。体と心が分かれて、いく筋も指向する、自分なりの目的をもって行くようになる結果になったのです。ここから問題となるのは何でしょうか。目的をどのように一つに帰一させるかという問題、分かれた体と心をどのように一つにつなげるかという問題があります。

神様とサタンがいるとするなら、神様とサタンが働いています。神様は、今まで人間を救うための復帰摂理をしてこられ、人間を救うための求道の摂理を指導してきています。それに反してサタンは、神様の摂理に反対し

てきています。善側の神様は、摂理の方向において一つの理想世界を目的として、毎日毎日より分けていきながら、その目的に接近できる道を推進させていく反面、悪神のサタンは、そちらに行ってはいけないと言いながら、反対の道に妨げているのです。

一つの境界線、一つの塀を中心として、神様は「塀を越えるな、お前は右に行かなければならない」と言いながら妨げて、サタンは「お前は左に行かなければならない」と言いながら妨げているのです。それで分かれるのです。右に行くための人間の出発が実を結んだのが右翼であり、左に行けというのを世界的に展開させてきたのが左翼です。この左翼と右翼の世紀末的な歴史時代に対するようになる時が、今です。この右翼と左翼は、心と体が戦う結果を表したものです。

では、これをどのように一つにするか、これが問題です。世界が一つになり、国家が一つになり、氏族が一つになり、家庭が一つになって、個人が一つになるのでしょうか。違います。出発をどこからしなければならないかと言うと、個人からしなければなりません。ですから、この世界において、急がなければならない問題は、個人から一つにする運動をしなければならないのです。それで、宗教の中で現実がつながり、現実の中で宗教がつながって、互いが否定できない自分自身を発見しなければなりません。

ところで、ここで問題となるのは、悪神が体を支配しているのです。悪神の根は自分の体を中心としており、先生の根は自分の心を中心としているのです。それで、唯物史観と唯心史観に分かれるのです。世の中の言葉は、ただ出てくるのではありません。その時代的な時が来るに従い、罪人は罪人であることを告げなければならないようになっているのです。「私はこうだ」という事実をありのままに告げなければなりません。我々人間が、世界的舞台を中心として一つになれるかなれないかという結果的事実は、善神と悪神が世界の基準で証すのです。自分がそこに包括されており、包容されているために、それを測定できず感じられないだけであって、善神と悪神はそのような立場で、世界舞台で戦っているのです。（一四五―一五）

二　霊人たちの霊界での立場

今日地上には、四十億の人類が暮らしていますが、霊界には数千億の霊人たちが暮らしています。それゆえ、地上のこの世界と、我々が眺める主体となる霊界が、どのようにつながっているかというのが問題です。我々が貴く思う物質を中心としてつながっているのでしょうか、知識を中心としてつながっているのでしょうか、我々が地上で重要視する権力と同じ内容を中心としてつながっているのでしょうか。そうではないのです。

なぜかと言えば、あの世界は、物質世界を超越した世界だからです。あの世界は、知識の世界を超越した世界です。時空を超越している世界であるために、きのうの喜びがきょうの喜びになり得、きょうの喜びがあすの喜びになり得る世界なのです。

このように見るとき、その本質の世界は、今日人間世界に暮らしている我々が必要として、重要視する内容を中心としては動かないのです。霊界の生活のすべての価値的な中心とは何か、それが重要なのです。

霊界に暮らす人たちは、各個人が霊界の社会に属しています。霊界にも人間世界と同様

に、霊界の家庭があり、一族がいて、一つの国があり、世界とつながっています。

今日、地上に暮らしている人は、好きでも嫌いでも、誰に限らず、死んでとどまる所が霊界です。そこには未開人から文明人まで、歴史時代に生まれて死んだ千態万象の人間の群像が集結しているのです。

今までの人類歴史が、平和を中心とした人類歴史になれず、幸福を中心とした人類歴史になれず、理想を中心とした人類歴史になれなかったなら、霊界に行っている人たちは、どのようになるのでしょうか。どのように治められるのでしょうか。ここで暮らした人が、あの世界に行って突然変わることはできません。「三つ子の魂百まで」という言葉があるでしょう? 生まれもった性格は直しにくいのです。

このように見るとき、あの世に行っている霊人体たちは、我々が今まで暮らしたのと特別に違うのでしょうか。突然変わるのでしょうか。そうすることはできないのです。ここで暮らしたその形、そのままで収穫されていくのです。

霊界に行っているすべての霊人体は、結局は地上に暮らしていた人たちの霊人体です。そのように見れば、今日この人たちが暮らしている世の中と、別に違いのない世界なのです。（一四一―二六八）

霊界は、今まで数多くの部類の歴史をもっています。ところで、この霊人たちは、思いどおりにここに来て働くことができないのです。ふさがっているのです。

それで、宗教で橋を架けなければ、特定の人以外には、再臨することができないのです。ユダヤ教の中にも派閥が生じました。霊界から下りてくるとき、その主流が直線では駄目なのです。ユダヤ教の互いに違う系統が精誠を尽くすようになれば、その主流が移って、行ったり来たりするのです。

それゆえ、霊界にいる人が下りて来るには、直線に該当する人以外には下りて来れないのです。再臨役事の協助ができないのです。そうして、一世紀もたてば、またその人も霊界に行くのです。霊界に行って、その次の時代に来るには、やはりこのような原則で下りて来るのですが、特定の霊人たち以外は下りて来れないのです。

霊界の塀は、だんだん多くなります。だんだん複雑になるのです。その次の世代が全部霊界に行くのです。それで、だんだん壁が大きくなるのです。全部壁です。今の時は、世界的時代なのです。どれほど複雑か考えてみてください。これを探してくるには、どれほど回り回って来なければならないかを考えてみてください。それゆえ、時になったなら、塀を崩さなければならないのです。霊界から下りて来る道と、入って来る道をつくっておこうというのです。このことを統一教会がするのです。（一〇二―二九）

今まで霊界に行った霊人たちは、全部分かれています。霊界では横的には通じません。縦的にはこの程度に通じます。（二一八―一二五）

三　霊人の数が地上人より多い

皆さん、霊界がどれほど大きいか分かりますか。霊界にどれほど多くの人口があるか考えてみましたか。今霊通する人たちが言うのを聞けば、一人に対して三千三百二十余名の

霊人たちがついて回ると計算しています。我々の側がそのようにいると考えるとき、世の中に負けるでしょうか、勝つでしょうか。

霊人たちが原子爆弾を怖がりますか。それと同様に、皆さんも銃弾を怖がらず、原子爆弾を怖がらず、国を怖がらなければ、絶対負けないのです。間違いなく勝利するのです。超越しなければなりません。皆さんは反対しますが、私は「行け」と言い、後ろについて行ったのちに、門を閉ざして主人の役をするというのです。みな過ぎれば門を閉ざしてしまうのです。そのような考えをしながら、今戦っているというのです。（八六―一九三）

四　放浪する霊たち

飢えて死ぬ人より、もっとかわいそうな輩が、神様を否定する人たちです。飢えて死ぬ人は、自分の善意の道理によって、あの世に行くようになっても級がありますが、神様がいないと言う人は、霊界を否定するために、基盤がないのです。霊界で雲のように放浪します。さすらいの霊になるのです。雲が集まって雨が降るのと同様に、集結して全部悪い影響を及ぼすのです。ですから、全部地獄に訪ねていって、地獄を煩わしくするのです。そのようなことをちゃんと知って、これらを生かしてやらなければならないために、このことをするのです。

その次には、死ぬ人が問題です。今、一日に六万名が死んでいっています。それを父母、子供、兄弟たちが見るとき、胸が絞めつけられ慟哭する出来事が繰り広げられています。ところで、「真の父母」という人が、同情せず、それに対する準備をしなかったなら、地上において在世当時、自分たちと共に生きたという条件が恨みになります。

私がそのような考えをもって、海洋事業を中心として、万民の食糧問題を解決し得る道を準備するのです。二重、三重に苦労しても、統一教会が一番近い人たちになり、助けてあげることができる道のために、世界的宣伝をして準備をするのです。ワシントン・テレビジョン・センターを造ったのも、みなそれです。募金運動をするつもりです。

人が百年生きられないのを考えるとき、五十億の人類の中に、一年に五千万が霊界に行きます。これらが地獄に行くのをどのようにしますか。サタンが蒔いておいた種を、全部天に収めるのを神様が願うのに、これが遅れれば遅れるほど、どうなりますか。今まで四十年間に、どれほど地獄に行きましたか。数十億が行ったのです。深刻なことです。あの世に行って、霊たちに会うようになれば、「先生の在世当時に我々に対して責任を果たせなかった」と言われれば何と言いますか。心だけでもしなければなりません。心だけでも食口たちに話し、未来についても責任をもつという行動を中心として行くようになるとき、「あなたは驚くべき方です。我々を考えてくださった」と言うのです。（二一三―三五五）

五　霊人の区分は心が知ってする

深刻な心情の立場で話をして、汗を流し、帰ってきて飲む水の味を、世の中の普通の人たちは知らないのです。その味は、どうだったでしょうか。コーラとか、蜜の味とは比較にもなりません。味が違うのです。毎回違います。

そのようなことも発見しなければなりません。そのようなことを感じなければ、霊感を感得することはできないのです。霊界に対するすべてに感応することができないのです。そのようなことを感じるようになれば、耳が鋭敏になって、あちらで話せば、すぐに何の話をしているか分析してしまうのです。目をつぶっていても、誰が過ぎ去るか、良い人なのか悪い人なのか突き止めるのです。霊感が来るのです。それを知らなくては、霊界の悪神なのか善神なのか見分けがつかないのです。見て分かるのではなく、心が分かるのです。心の目は、見て分かる目よりも、高次的な立場にあるのです。

皆さんはまだ行くべき道が遠いので、先生がこのような話をするのです。それを知るべきなのです。自信をもつべきではありません。それで聖書には、「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」（マタイ五・三）とあります。同様の道理です。みな通じる言葉です。（九六―一七〇）

皆さんもそのような立場に立ったということを知るべきです。ですから、皆さんはいつも「三世代を代表した私だ」と考えなさいというのです。

それゆえ、霊界が自分の肩にかかっているのです。皆さんの先祖が、皆さん自身にかかっているというのです。過去、現在、未来を全部このように集めて、二つを合わせて引っ張っていけば、走ってくるのです。そのような使命を果たすべきです。

ですから、霊界が自分の肩にかかり、親戚が自分の肩にかかり、親戚だけでなく国が自分の肩にかかり、これから来る後孫の前に正しい伝統を立てておかなければならないのも、自分の肩にかかっています。これをいつも考えるべきです。皆さん一人が、うまくできるかできないかによって、霊界に行った皆さんの先祖たちも解放することができ、皆さんの親戚たちも解放することができ、皆さんの後孫たちは解放の選民として決定され得るのです。（六六―七六）

六　地上人の暮らしの価値

我々は、アダム・エバに対して、今まで数千年下ってきながら、数多くの人たちが讒訴したことを知っています。今、皆さんが新しい先祖になるのです。皆さんの後代の前に讒訴され得る先祖になるか、栄光を受け得る祝福の先祖になるか、この二つの道の岐路に立ったのです。アダム・エバが公的な立場に立てなかったことによって、讒訴の条件を残しましたが、より公的な立場に立って犠牲の道を克服していたならば、今日人類の後孫の前に讒訴されなかったであろうことは、当然の道理です。

神様が標準を六千年間合わせようとしましたが、今まで一つの標的にも当たらなかったのですが、今何万年目に撃ってぴたりと当たったのです。その合う時間を考えれば、一番眠気が差す時です。一番眠気が差し、一番疲労困憊する時なのです。神様がその時、居眠りしたり、疲労困憊の状態でいるでしょうか。神様御自身が撃つ時、疲労困憊して眠気が差すか差さないかという時、気を引き締めて撃ったのです。その時、撃ってから居眠りして、疲労困憊して倒れるでしょうか。神様が体面も何もなく「うわ7」と喜ばれるのです。

霊界では、どれほどあきれるでしょうか。天使世界から見るとき、「天使が過って神様

をあのようにしておいたのに」と言い、どれほどあきれるでしょうか。どうか合えと、どうか合えと願ったことが、何万年続いたのに、それがぴたりと的中すれば、霊界はどうでしょうか。

世界の人たちが、そのような素晴らしい所があるなら、入場券一枚が一万ドルするとしても、買って入るでしょうか、入らないでしょうか。そこにありとあらゆる人たちが来て、「ああ、チケットを買って損した 7」と不平を言って出たのに、あとでその町内のある乞食がお金を借りて、物乞いしてチケットを買って入り、神様が標準を合わせるのを見たらどうでしょうか。乞食がそこで踊りを踊るでしょうか、踊らないでしょうか。

そのようになれば、神様も気分が良くて誇るでしょう。「おい、当たった、当たった 7 誰かいないか。誰かいないか」と、このように探すのではないですか。その時、神様がその乞食を見たなら、「おい、こいつ、乞食よ 7」と、そう言うでしょう。「ああ、うれしい」と言って踊りを踊られるでしょう。（一〇三―八七）

第三節　先祖たちと我々

一　我々を見下ろす先祖たち

皆さんが霊界に行ったなら、先祖たちが現れるでしょうか、現れないでしょうか。「うちの孫たちが統一教会に入って、文先生に会ったって 7」というところから、天国の宮殿、皇族が始まるのです。今まで天国に宮殿がありませんでした。

「真の父母」が教えてあげたとおりに、ただ愚鈍に「しなさい」と言われるとおりにする孫と、自分の思いどおりにうさぎの子のようにするすると抜けていく孫娘とを霊界から先祖たちが見るとき、どちらを褒めるでしょうか。うさぎのようにする孫娘を褒めるでしょうか、亀のようにする孫を褒めるでしょうか。亀のようにする人を褒めるのです。

うさぎは小便をよくします。亀はよく分からないでしょう。亀が小便をするのを見たことがないので、亀はよく分かりません。うさぎは少し行っては小便をして、少し行っては小便をするのです。それはなぜですか。他のうさぎたちが来ることができないように、自分の領土を決定するために、小便をするのです。

亀のようにしなければならないのです。「しなさい」と言えばして、夜が来ても昼が来ても、歳月が流れても、春夏秋冬を忘れてただまめに行く人は、みな歓迎します。あの世のすべての先祖たちが、皆さんの暮らしをみな見ています。隠れる所はありません。先祖たちが全部見ているのです。霊界に行くようになれば、壁もみな通じるのです。地球の固まりも、みな通じるのです。

そのような世界に行って、永遠に暮らさなければなりません。神様の愛の対象として造った人間であるために、神様が永遠であられる限り、愛の対象になる存在も永遠に必要だというのです。神様が永遠であられるように、我々も永遠なのです。愛の相対にならなくては、永生がありません。

あの世では、どんな人が一番高い位置に行くのでしょうか。千年、万年、自分が何度も生まれて、神様のように人類のために生き、神様に同情し、神様を慰めることができる自分になるという人が、神様の前に一番近くに行くのです。良いものがあれば、全部人類のために使おうとする人です。おじいさん、おばあさんは、行く日が近くなれば、良いもの

は全部息子、娘の前に残してくれるでしょう？　自分が努力したすべての代価を譲ってくれるのと同様に、そのような心を世界人類の前に残してあげると言い、世界の前に譲ってあげると言える生活をしなければなりません。（二一三―一九六）

二　我々が先祖よりより良くあるべし

先祖が生きてきたこの家の中に、自分の曾祖母、曾祖父が暮らしたその部屋に、うちのおじいさんを産んで、うちのおばあさんを産んで、自分を産んだその部屋に、おじいさん、おばあさん、曾祖父、曾祖母が愛したその愛より、もっと大きな愛を残すことによって、天が見るとき、愛光沢で光るのです。百ボルト、千ボルト、一万ボルト、何億ボルトの光がずっと輝くのです。その輝く光がどこに行くかというと、故郷に行くのです。先祖、先祖、先祖と上がっていくのです。霊界に行くようになれば、神様を中心とした天国に行くのです。その天国が、本来我々の本然の故郷です。我々の本来の父が神様でしょう？

アダム・エバは、神様の体です。アダム・エバは、横的な父母であり、神様は縦的な父母であるために、我々が横的なこの体を脱いでしまい、縦的に還故郷して、天国で永遠の王として侍って暮らすのです。その王とは誰でしょうか。アダム・エバが堕落しなかったら、神様の体として和して、その体を身にまとって完成して、この地上で神様の愛で直接主管圏と間接主管圏をつなげる責任分担を果たした人の王になるのです。そうすれば、神様は、そのアダムの心においでになり、アダムの霊は、神様の体になるのです。一身になるのです。永遠に神様の愛と人間の愛を共に分けて、それを呼吸するのです。

それゆえ、神様の愛を受けなければならず、その次には、先祖になったアダム・エバの愛を中心として、誰がもっと本質的な愛に近いかというのが、あの世に行って修行していく永遠の路程です。（二一三―一九〇）

三　墓参りもしなければならない

おじいさん、おばあさんが亡くなったなら、墓参りをしなければなりません。神様が墓に埋められたとして、墓参りをしなければなりません。今亡くなられるいう時になれば、慟哭して泣きなさい。おばあさん、おじいさんに侍られなかった恨を、自分一代で贖罪しなさいというのです。

自分の泣く声を聞いて、天上世界の神様が全部認める立場で、うちのおじいさんを自分を見て、「そうだ。よし」と言える伝令が来るまで、精誠を捧げなければなりません。収穫の時になれば、そのおばあさん、おじいさんをそのまま残しておいてはいけません。春夏秋冬四季の佳節全部に訪ねていって、侍ることができなければなりません。統一教会のお化けになったと思い、流れていく鬼の子だと思ったのに、王孫（注：王の血筋を引く者）が生まれたとたたえるのです。

父母に侍ったこの地のある王よりも、家庭的に侍らなければなりません。皆さんの父母が王になればいいと思うでしょう？　皆さんの父母が、神様よりも、王よりももっと高ければいいというのが皆さんの心なのです。それがみな許されていたのです。「自分が王宮の道理の法を守ってでも、父母を世界のどんな王よりも幸福にする」と言うことができる

王孫の資格を備えて生きなければならないのです。

そこでは、父母たちが口を開くようになれば、自分の息子を誇らざるを得ないのです。天国の先祖たちもたたえ、後孫たちもたたえるために、ここからその父母を中心として、統一圏が繰り広げられるのです。父母を中心として統一圏が繰り広げられ、おじいさんを中心として侍って統一圏が繰り広げられ、全部が統一圏が繰り広げられるようになります。孫の統一圏、父母、孝行者の統一圏、息子、娘が侍るのに、将来、万世一系の主流の統一圏がここから決定されるのです。統一の種を完全に蒔くことができる基盤になるのです。これをもつようになれば、夢を見ていくのです。（二二〇―三五〇）

今まで長子権復帰をしたので、先祖たちは全部おじいさん、お父さん、お兄さんの三代を中心として、この長子権、父母権、王権の立場に屈服して、孫を先祖として、おじいさんとして侍るのです。自分の子供をお父さんとして侍らなければならず、自分の弟をお兄さんとして侍ることができる天地開闢、一八〇度ひっくり返る道が繰り広げられることによって、地獄でもこれと同様に、天国に向かうことができる方向に転換されるのです。

それで、故郷に行って百六十家庭をしなければなりません。故郷を中心として、行ったり来たりしながら、み言を聞かせなければなりません。先祖の根である本家がいいと言えば、分家の孫が全部ついていかなければならないのです。このように百六十軒を訪ねて、一箇所に集め宴会をして、統一教会の宣誓式をするのです。「神様の王子、王女の命令に絶対服従する」と言って、先祖の墓に集まって、先祖の墓の前で即位する王のように侍らなければなりません。

「我々は『真の父母』によって、新しい血統を引き継ぐことができる先祖になることで、解放圏が繰り広げられる、祝福された氏族になります7　この氏族は、永遠不変の神様の眷属であり、血族になります7」と、このようになれば、サタンと完全に決別します。

それで、統一教会は、先祖たちに仕えることを許すのです。キリスト教が祭祀をするのを許しましたか。統一教会は、今その伝統を立てなければならないのです。これは、世の中の伝統ではありません。

天の父母、天の国、天の先祖に仕えるにおいて、その代を受け継いだ氏族的メシヤ圏、伝統的血族を、千年、万年侍ることができる王の領土になるのです。王に侍り、永遠の太平盛大を謳歌できるその国になるのです。その国で暮らして行ってこそ、皆さんの父母、一家、一族が天国に直行するのです。（二二〇―二二二）

四　我々が会うことができる霊界の先祖たち

自分の家がどうだということを知るべきです。自分の家は、人間たちがこの地上で一生を生きる家の中で、代表的な家です。それだけでなく、霊界まで代表している家です。それが自分が暮らすことのできる家です。そのように暮らした人は、自然に根本の本郷の世界、故郷に自動的に行くことができるのです。おじいさん、おばあさん、誰に会っても、そこでは・藤がありません。

あの世に行ってみれば、数千代の先祖たちが一遍に集まっています。そこに、地獄に行った先祖たちがいます。何代は地獄へ行き、

何代はどこへ行き、先祖ごとに全部級が違います。「ため」に生きた人たちが行く所が天国です。それゆえ、「家和萬事成」は自分によって成されるのです。自分が家庭のために生き、おじいさん、おばあさんに三回だけためになれば、おじいさん、おばあさんも間違ったことが分かるのです。

モーセがエジプトで奇跡を行いながら、「ため」になろうとしたことが何回ずつですか。七回、十回、十二回以上、全部「ため」にしようとしたのです。「ため」にしようとしたのに、受けてくれなければ、天が導いてくれるのです。天が導いてくれます。自分が「ため」にしたすべての公的な基盤が、他の世界へ行って、成してくれるのです。それで、サタン世界であるこの地上で信仰する人の中に、神様のように「ため」に生きた人たちは、世の中では反対され、迫害されましたが、イスラエル民族が選民圏として選ばれて、荒野を過ぎて本郷の地に入ったのと同様に、自分の本郷の地である神の国で豊かに暮らすようになるのです。

皆さんは、頭の白くなったおばあさんによく仕えましたか。神様は、白い神様です。高い山には、白雪が積もるでしょう？　神様はきれいな方です。ですから、みな分かるのです。また、そのようなおばあさんは、自分の姑、夫の祖母によく仕えましたか。姑、夫の祖母があの世に行くとき、「私が先に行ってお前がしたように、あの世でお前の来る道をきれいに準備しよう」と、こう言えなければなりません。（二一三―一八二）

第四節　霊的新時代到来

一　超感覚時代到来

今に超感覚的な時代が来ます。霊通しない人がいない時が来ます。サタン、悪魔が今襲撃していますが、善なる霊たちが襲撃する時が来るのです。そのような道を築くために、私がこうしているのです。子供に対する父母の立場を見ても、愛する立場、愛する心をもって、その子供のためにしてやれる父母がいるからいいのです。

誰が否定しても、行かざるを得ない道です。死の道は、行かざるを得ないのです。一人で行くようになるときは、どうしますか。荒涼とした霊界が繰り広げられればどこに行くでしょう。国籍がない民族はどこに行きますか。一番恐ろしい世界になります。そこにはサタンが来るだろうし、そこには天使も来るでしょう。

死んでから目をぱっと開けたなら、霊界があるのが分かるようになるでしょうし、その時、サタンが引いていこうとすれば、どのようにしますか。「おい、お前が先に立て」と言い、こうして飛びかかってくるでしょう。そのようなことが起こるのです。そのような道があると考える時、ここで眠気が来ますか。それは必然的な道です。

先生は、死後にどのようになるか、そのようなことについて深刻です。私が霊界に行く日には、誰々が泣くだろうというのを、みなつくっておきました。孔子とか、釈迦とか、イエス様とか、彼らの秘密を私がみな知っているのです。

イエス様に、「あなたはこうして死にませんでしたか」と言えば、「そうだとも。どうして先生はそんなことがみな分かるのですか」と、そう言うのです。そのようなことが分かるので、イエス様と友達にもなることができるのです。

皆さんやキリスト教信徒は、イエス様を「主様 7　主様 7」と言うかもしれませんが、先生はそう言わないのです。友達の間柄なのです。このようなことを言うから「異端だ」と言われますが、誰が異端か、行ってみれば分かります。先生が霊界に行くときは、予想外に大騒動が起きるということを知っているために、こういうことをするのです。それが信じられないなら、すぐに祈ってみて、調べてみなさい。これが、統一教会の一つの脅迫のような言葉です。祈ってみて、本当か、本当でないか、大きく違っていたら、このようになりますか。そのような内容がみな準備されているために、そう言うのです。

それゆえ、その道をついていくには大変ですが、私はその道を行くのです。皆さんはどこに行きますか。準備できていますか。死ぬようになった時には、「ああ、先生、私が死んで霊界に行くからお願いします」と、その時言っては準備できないのです。その準備は、地上でしなければなりません。（六一―三二七）

二　「天勝日」発表で新しい時代進入

イエス様を中心として見れば、イエス様は蘇生、十二弟子は長成、七十二門徒は完成です。三段階です。これができなければ、皆さんは天国に行けません。本来は、これをしておいて初めて、祝福をされるのです。そうすれば、イエス様も結婚するのです。

これから、家族が全部信じるようになるとき、おじいさん、おばあさん、息子、娘、孫、三代がこちらを受け持ち、あちらを受け持てば、三代の役割をすることができます。それが繰り広げられれば、父母を復帰することができるから、皆さんは、父母、父母、父母、数千数万代の先祖たちを一遍に、全部復帰することができるのです。霊界から地に再臨することができる時代になります。地上の組織が、霊界の組織までも編成するのです。一つになるのです。このような驚くべきことが起こります。霊界でどれほど喜ぶか、考えてみなさい。

それゆえ、宗教の勝利の時代が来たのです。霊界の勝利の時代が来たのです。（九六・二五一）

今は、皆さんが祈ってください。「先生のみ言とともに、『天勝日』である十月四日（一九七六年）とともに、我々の善なる霊たちは、再臨して、この地上にいる悪なる後孫たちを、善なるあなたの懐を通じて天国に導いてください 7」と命令すれば、その命令が可能であり得る時代に入ってくるのです。
我々は、アダム時代圏内で生きるのであり、霊人たちは天使世界圏内で生きるために、アダムのために天使が協助すべき原理原則のため、動かざるを得ないという結論がしっかりと出てくるのです。（八九―一一三）

精神的な世界が、どれほど統一圏であるか分かりません。私が「誰かに会いたい」と言うと、二十四時間待てば、その人が来るのです。それが実現されるのです。集中するようになれば、現れるのです。それは、方向性の電波を送るのと同じです。そうするとその人は、受信機のような自分の心の基礎があるために、無性に気掛かりで行きたくてそうなるのです。（七六―一四二）

三　「統一式」と霊界協助

今日、父母様の御聖誕日（一九七六年陰暦一月六日）には、どのような意義があるのでしょうか。今回、先生が帰ってきて陰暦の二月一日に何をしたかというと、「統一式」というものをしたのです。「統一式」とは何かが、皆さんは分からないでしょう。

復帰の路程を歩んでいくにおいて、個人完成し、家庭完成し、氏族完成し、国家完成し、世界完成し、これが直線でつながらなければならないのです。

地上で先生が個人基準を中心として、家庭基準、氏族基準、民族基準、国家基準を中心として歩んできましたが、霊界とつながっていないのです。霊界もつながっておらず、統一教会の家庭を中心としてもつながっていません。道は築いておきましたが、この道を中心として、霊界とつなげなければならず、地上とつなげなければなりません。それでこそ、統一の式が繰り広げられるのです。

統一の式というものは、いつ起こるのでしょうか。今キリスト教が、世界的民主主義国家を中心として発展してきたために、世界的基盤が築かれるようになる時に、初めて統一することができるのであって、その道が築かれなければ、統一の基準をつなげることができないのです。その時までは、国家的基準を中心として世界基準まで向かうだけであって、これをもって決定は下せないのです。それを固着させることはできないのです。

今まで先生がアメリカに行って築いた基盤によって、今これをつなげることができます。国家と世界がつながり得る時が来たのです。そのような世界的基準を中心として、この霊的基準が世界基盤につながり得るようになる時に、初めて霊界もつながるのです。

霊界では、大韓民国の霊人や日本の霊人など、みなつながっていないのです。各国の国の霊人たちが、自分の国にだけつながっているのであって、世界的な一つの道に集まって「どこに行け」と言っても、全体が動員するようにはなっていないのです。地上で解決してやる前には、霊界においてこのような整理はできないのです。

それゆえ、霊界を見るようになれば、日本人と韓国人とが怨讐になります。日本人たちと中国人たちとが、全部怨讐です。国家と国家の間に、どれほど怨讐の霊たちが多いでしょうか。その怨讐の霊たちが全部反対するために、それをつなげなければならないのです。

それで昨年（一九七五年）五月一日に何をしたかというと、「総解怨式」をしました。全体を解放してあげ、全体を許してやる解怨式をしたのです。サタンまでも解放することができる道を開いてあげたのです。「総解怨式」をすることによって、怨讐を怨讐として対することができず、みな許すのです。先生の立場から見るなら、サタンは怨讐ですが、サタンまで許すようになれば、神様が怨讐として考えないようになり、怨讐がいなくなるのです。

今は、統一され得る時が来ました。地上と霊界が一つになれば、どのようになるでしょうか。

堕落によって霊界と地上とが分かれたのです。神様とアダム・エバが分かれたのです。アダムとエバの間に心情的決裂が起きたのです。それゆえ、地上と霊界と一つになった立場に、アダム・エバの家庭を中心として、氏族を中心として、民族を中心として、国家を中心として、世界を中心として、超民族的な構成形態が繰り広げられれば、世界的な統一

圏を形成することができるという論理が形成されるのです。

そのようなことを解決してやらなければならないために、アメリカの地では、駄目なのです。アメリカの地ではできません。

韓国を中心として、個人基準を築き、家庭基準を築き、氏族基準を築き、民族基準を築き、国家基準を築いて、世界に来たために、韓国が中心国家であるために、先生が大急ぎで訪ねてくるようになったのです。

それで、「統一式」をしておいてみると、今年の先生の誕生日は、歴史的な誕生日なのです。なぜならば、統一された立場に立って、霊的世界にいる霊人たちは、「真の父母」の誕生日を一度も迎えたことがありません。一度祝おうとしても、祝う資格がないのです。また、世界にいる万民、世界にいる後孫たちが、「真の父母」の聖誕を祝い得る恵沢圏内にいることができないのです。なぜならば、霊的基準と肉的基準が結束できないでいるからです。

霊肉を中心として、そのような恵沢圏が繰り広げられ、霊界が加担することによって、その後孫を通じて復帰するでしょう？　そのような原理的立場で、先祖は天使長型であり、後孫はアダム型になるのです。天使長がアダムを創造する仕事に協助したのです。霊界に行っている先祖が統一されることによって、地上にアダムを創造することに協助できる圏が繰り広げられ、後孫たちに対して干渉することができる時代圏に入るという論理が成立するのです。

今年先生が韓国に来て、誕生日を祝うこの日は、歴史的な一つの起源を備える日です。言い換えれば、霊界に行った数多くの霊人たちが、「真の父母」の聖誕を祝うことがきる同参の恵沢を受けるようになるのです。

そうすることによって、この地上にいるまだ統一教会を知らない後孫たちまでも、再創造することができるのです。天使長の協助を通じて、神様がアダムを造ったのと同様に、先祖たちを動員して、後孫のアダムのような立場にいる地上の人たちを再創造して出発することができる時代圏に移るのです。そのような論理があるために、今日全世界の万民も、父母様の聖誕を祝うことができる恵沢圏内に入るのです。（八三―一〇九）

四　「一心式」と先祖協助

先生自身が、文氏の一族で、族長になりました。先生が強制的に命令するのではありません。自分たちが進んで侍ろうとしました。そのような歴史が過ぎました。先生が、そんなことが分かりますか。会うのは、初めて会ったのです。とにかく、因縁ができて、宗氏一族たちが先生を韓国の一つの父母として登場させるようになったのです。このようなことをするためには、この式がなくてはいけません。

統一教会で言う「真の父母」の立場は、韓国の民にだけではありません。本来は人類全体の先に行った先祖たちにまでも、「真の父母」の血族として天上世界、霊界に行くべきですが、堕落によって、全部過ってしまいました。アベル的立場が地上であるために、アベルたちが長子権復帰していく道に順応することによって、天上世界を解放させることができます。

今からは地上が長子権を復帰したために、霊界は我々の動きを押してくれ得る時が来ま

した。それで、この時間によって、確定づけて宣布する式が「一心式」です。

皆さんは、霊界の事実を知らないでしょう？　このようになることによって、皆さんの善の先祖たちが、一族の会長たちを通じて協助する、万端の準備をするのです。これがXとYのように、地上に連結されます。堕落した世界は、地上が眺める立場と霊界の立場は、互いに違います。霊界がこのように行こうとすれば、地上は反対になるのです。何で経ていくのでしょうか？　それが真の愛です。（一九〇―三一四）

第五節　再臨復活と霊人協助

一　過去の先人たちの霊界の位置

歴史的な悲しみの中で摂理される神様の心情を体恤しながら生きていく人は、どこにとどまっても、神様を涙なしには見つめることができないでしょう。そのような立場で神様のみ旨を知り、その方の息子、娘になるために戦うようになるとき、彼と意を共にする同志がいるなら、神様はその場に訪ねてこられて、涙を流されるでしょう。

神様の悲しみは、我々の一身にあると同時に、この国、この世界、この万物の中にあるのです。我々はこれを清算して、神様の喜びを復帰してさしあげる運動を展開しなければなりません。そのような我々において、生命の中心は神様の悲しみを体恤することです。

人間たちが知らない霊界の霊人たちを動員して、証させることができる基準が自分にあるかが問題です。霊界もそのようなことを要求しています。霊界は神様の心情を知っているために、地上にそのような人がいて訴えれば、霊人たちを動員して、天国理念の実現のための地上の仕事に協助するようになるのです。

霊界の霊人たちがこの地に来れない原因は、この地に嘆息の囲いができているためです。（四―六〇）

皆さんが今立っている立場は、昔アダムが堕落したその立場ではありません。その峠を越えた立場です。言い換えれば、神様とアダムと直接的に対話することができる時であり、直接的に神様の目的のために、直行できる期間です。

このような観点で見るとき、三次七年路程になる前の歴史と、三次七年路程になったのちの歴史は、全く違うのです。三次七年路程を中心として、悪の勢力は下らなければならず、善の勢力は上がっていくのです。それゆえ、三次七年路程は、霊界と肉界が交差する時期にもなるというのです。

霊界を中心として見ると、悪の霊がいるのと同時に、中間の霊がいて、善の霊がいます。蘇生、長成、完成の三段階にとどまるのです。三次七年路程がつながることによって、善の霊たちが地上に連絡することができる道が生じるのです。そうするしかないのです。蘇生、長成圏がサタンの主管圏内にとどまっているために、悪の勢力の版図圏内にいる悪霊たちが主導的な役割をして、悪人たちが世界を全部料理してきました。しかし今からは、霊たちが交差し始めるのです。

交差するときは、霊界が下りて来ますが、悪霊から下りて来ます。交差する時は、中間霊界を越え、善霊界に越えていく時です。これが越えていく日には、善霊たちと善人たちは上がり、悪霊と悪人たちは下りていくのです。今までは、善悪が互いに上がったり下り

たり交差しながら、ごちゃ混ぜになりながら来ましたが、今からは、善と悪が完全に分かれ得る、新しい次元の時代に入ると見るのです。（七五―一九三）

霊界に行ってみれば、昔、新約時代に現れた立派な人、尊敬されて殉教をした人が、高い所に行くと思ったのに、一番悲惨な立場に行っているのです。死ぬときに「自分がこのように死んでこそ天国に行く」と考えて死んだ人は、天国に行けません。そのように死んだ人は、気の狂う病気にかかって、天国のために自殺したのと同様の心の姿勢になっているのです。しかし、それとは異なって、殉教はしなかったとしても、苦労をしながら、「ああ７　私一人犠牲になって国を天国にして、数多くの人を天国に行かせた」と信じて行った人は、天国に行っているというのです。

我々は、信仰の本質を改めなければなりません。キリスト教がそのような思想をもったために、多くの波風が立ちました。この波風を打破してしまおうというのが、統一教会の思想です。たたきつぶさなくても、滅びるようになっているのです。ところで、なぜ早くたたきつぶさなければならないのでしょうか。滅びるようになれば、神様の前に全部捨てられるために、これをたたきつぶして救ってやらなければならないというのです。（六四―一一〇）

皆さんの先祖の中には、地獄に行った人たちがたくさんいます。これを全部解放させなければなりません。この道が父母が行くべき道であるために、皆さんもこのような父母についていくべき道に置かれているのです。それゆえ皆さんは、この道を最後まで行かなければならない運命にあるというのです。

それで、霊界が我々に協助するのです。個人的に協助し、家庭的に協助し、氏族的に協助し、民族的に協助し、一遍に協助して統一運勢を経ていくのです。世界さえ統一するようになれば、霊界は自動的に合わさることができるようになるのです。霊界にいる霊たちが地上に下りて来ますが、善霊よりも悪霊たちが先に下りて来ます。それゆえ、地上の人には、ノイローゼ現象が起きるのです。このような事実を知らないから、そうなるのが分からないのであって、今悪霊たちが、全部下りてきて、人間世界を侵犯しているのです。

そして、民主世界と共産世界を中心とした思想の混乱時代が来るとともに、霊界の悪霊たちが下りて来て、霊肉が混乱時期に陥るようになります。そうですが、善霊たちが下りて来るようになれば、悪霊たちの周囲に力が及んでいくのです。地上に下りて来て、悪霊たちをかき分けて、悪霊たちが占領した地を占領するようになるのです。善霊たちが、この地球星を占領するようになる時は、悪霊たちはこれ以上行く所がないから、屈服し始めるのです。

霊的サタンが地上に来て屈服するようになれば、悪霊までも復帰するのです。それで、終わりの日には、サタンまで復帰しなければならないのです。（五四―二二八）

二　霊界動員と協助

皆さんは伝道ができない時にも、伝道をしなければなりません。石を海に投げるのと同じです。それで海の水をみな埋めて、山になるまで限りなくするのです。そうすることに

よって、自分が心情的に育つのです。体は何も変わるものはありませんが、心情が育つのです。

夜明けに起きて、その町内のために、自分が任された責任地域のために祈って、涙ぐまなければなりません。その道は、心情的でありながら霊界と霊的な因縁を結ぶ道なのです。神様が町内を見下ろせば、全部地獄に行くしかない人間たちであるために、涙を流さざるを得ないのではないかと言って、神様に代わって自分が涙を流すのを自ら感じるのです。神様の心情で涙を流すことができる共鳴力が入るようになれば、霊界が総動員するのです。

人間として、神様の前に感動的な涙を流さなければなりません。神様が「おお7　有り難いな7　堕落したアダム・エバの後孫は、昔のアダム・エバよりましだな7」と感動して、涙ぐむことができる立場に入らなくては、霊界と通じません。

「堕落したアダム・エバの後孫として、天に背いた後孫であるお前たちが、こうすることができるか」と言いながら、神様が感動的涙を流してこそ、霊界が協助するのです。そこから霊界が開かれるというのです。それ以下は、絶対に駄目なのです。絶対に駄目です。それが原理です。（九六―二八二）

皆さんは霊界に行くのがいいですか。地上の皆さんが霊界に行くという心と、霊界の人たちが地上に再臨するという心のうち、どちらがより切なるものですか。原理的に見るとき、皆さんがより熱烈でなければなりませんか、霊界がより熱烈でなければなりませんか。霊界は天使長世界であり、ここはアダム・エバの世界、息子、娘の世界です。息子、娘がより熱烈であるべきですか、僕がより熱烈であるべきですか。

皆さんが霊界を協助するようになっていますか、霊界が皆さんを協助するようになっていますか。霊人たちが協助しようと待っていますが、なぜ待つのでしょうか。地上に天国を成すために働く所に協助するでしょうか、皆さんがよく食べて豊かに暮らすのに協助するでしょうか。地上に天国を成すために働く所に協助するのです。（一六一―二二七）

霊界が動員されなければなりません。霊界が動員されなければ、どのように天国を形成しますか。形成できません。天国は「真の父母」から始まるようになっているのであって、今までの堕落した後孫から始まるようになっていません。

アダムを創造する時、天使長世界の協助を受けたのと同様に、再創造も霊界から下りてきて、全部地上に協助しなければなりません。そうでなくてはいけないようになっています。原理がそうではないですか。復活原理がそうでしょう？　復活原理がただそのまま結果として現れてこそ、真だと言うのです。（一六二―一一五）

先生が皆さんを貧しくさせてみな苦労させるのは、皆さんが憎くてするのではなく、皆さんを生かしてあげるためにするのです。すべて皆さんを生かしてあげるためのものであることを知るべきです。皆さんを生かしてあげるために苦労をさせるということを知って、有り難く思わなければなりません。そうすれば、天の心情世界、新しい心情世界が繰り広げられるのです。そのようにするのが順序です。そのようにして、心情的結びつきをもっ

てこそ、天の命令なら、どこでも飛んでいくのです。

「世界を率いていく機関車のような責任を果たす」と言うようになれば、霊界が協助します。そのように考えれば、霊界が間違いなく協助するのです。（九六―二七九）

皆さんが基準を立てて、統一教会と歩調を合わせていくようになれば、国家的な運勢によって動いた霊界にいる善の霊人たちや先祖たちが、皆さんのために働くでしょう。

皆さんは、外的に見るに、顔がぺちゃんこで、耳がすっと入って、薄幸に見えますが、霊界では皆さんを「福を呼ぶ」と思っています。さらに、十代の圏内にいる先祖たちは、気が気ではありません。なぜなら、復帰歴史は十代を中心として成されるためです。ところで、もし悪なる後孫が現れれば、十代圏内にいる先祖たちが、「こいつ７　お前が我々を駄目にしたな」と言って審判します。

それゆえ、善の先祖をもった後孫がここにいれば、先祖たちが積極的に協助するのです。そのような立場に皆さんが立っているのです。そのような立場にいる皆さんが、喜んで見事に戦っていく所々で、百戦百勝の戦績を立てる時に、霊界では永遠に喜ぶのです。それゆえ、このような先祖たちは、皆さんを王様に仕えるように仕えるでしょう。

今日、我々は神様のみ旨の前に「神様の伝統を汚すものか７　神様の威信を汚すものか７」という心で勝利の基盤を築かなければいけません。皆さんは、どんな伝統を立てるかについて、祈らなければなりません。今は幸せな時です。（一四―二〇）

三　霊界と先祖

先生は、人々の顔を見れば、その先祖が良いか悪いか、大体分かります。ある人は、良い先祖がいて、福を受けるかと思えば、ある人は、悪い先祖がいて、ひどく苦労ばかりするのです。そのような人は、伝道しに任地に出ても、ひどく苦労ばかりします。（三七―一四四）

自分の性格の足りないところを埋めるためには、証を聞けというのです。これを聞いて、自分のものとして吸収するのです。補強しなければならなりません。それゆえ、多くの人の体験談を聞かなければなりません。人が言ったことを批判してはいけないというのです。批判するのはサタン側になるか、天の側になるか、二つのうちの一つを決定するということを意味するのです。

批判した時は、サタン側になるか、天の側になるか、二つのうちに一つに分かれてしまうのです。それゆえに、批判することは、自分が発展するにおいてのがんなのです。サタン側になった者が、神側に行くことができず、神側になった者が、サタン側に行くことはできないのです。我々人間生活において行くところにには、直行は絶対できません。じぐざぐに行くのです。

先祖も善の先祖だけいるのではなく、悪い先祖たちも全部関係しています。自分自体が素性的に見るとき、善の先祖の素性をたくさんもっているときはこのように行きますが、悪の先祖の素性を受けた部分もあります。自分の人生においてそのような時が来ます。そういうときは、必ずこのようにするようになります。批判すれば大変なことになるのです。それゆえ、「判断するな」という言葉も、み

なそのような道理から出てくる言葉です。
（日付未詳）

真の愛をもてば、神様が宴会をするその場にいつでも同参することができます。時間と空間を超越するために、霊界に数千の先祖たちがいても、一目でみな見るのです。これを管理して、超越するのは、真の愛の心をもった人だけが可能なのです。神様の相続権を受け得る特権を得ることができる道は、愛の道にだけあるのです。真の愛をもった人が、自分の体をかすめて通り過ぎても、全部喜ぶのであって、反抗しないのです。全部が歓迎するのです。あの世がそのようになっているために、ここでそのような訓練を受けなければならないのです。

先生がこのようなことを教えてあげるのは、天の世界に行くことができる人、天の世界で呼吸することができ、拍子を合わせることができる人をつくるためです。それでこそ踊りを踊る場で、踊れるのです。そうでなくては、拍子が合わないのです。先生ももう霊界に行くべきではないですか。先生の後ろには、サタンがついて来れないのです。（一四七―一一六）

神様からの真なる精神を通じて、一つにならなければなりません。人間が根本から生まれたために、根本主体から動機になって、過程的人間の肉体まで動かすことができる基準をつなげてきてこそ、完全な統合になります。そうでなくては、不完全な統合だという結論が出てきます。

自分たちが勝手に行こうとしても、霊界からブレーキをかけて教えてくれる霊的体験を通じて、すべてを収拾していく背景が確実な現実生活圏内に動いているのです。この事実は驚くべきことです。それで、皆さん一人を中心として見るとき、体は精神を中心として善の先祖たちが全部ぶらさがっているのです。善の先祖たちは、体が悪の世界に行くのを妨害して、善の世界に行くことができるように追い込むのです。（一六二―一〇四）

この地にすべてを管轄することができる真なる父母と、真なる家庭と、真なる社会と、真なる国家と、真なる世界になっていたら、この世の中がどれほど素晴らしいでしょうか。しかし、そのような世の中になれなかったのです。

世の中がなぜこのようになったのでしょうか。堕落したからです。大体見れば真になれなかった動機をもって出発し、今まで存在しているこの世界が、堕落した世の中であるために、そのようになったのです。

人がこの一生だけで終わるなら、どれほど簡単でしょう。人は永生するようになっています。永生するようになっているというのです。それは、良いことは良いのですが、大変なことになりました。人は永生するようになっています。皆さんが霊界に対する体験がないために、知らないからそうできませんが、霊界の体験がある人たちは、昔のアダムから何千年前までの先祖たちにみな会うことができるというのです。（一五九―二七七）

霊界に行くようになれば、数多くの先知先烈たちと、数多くの先祖たちと会って、討論するのです。「あなたはどこから来たか。地球星のどこか。どの国か。どこだ」と聞いて回想して言うのです。友達同士会うようになれば、自分の昔話をすべてするでしょう?

霊界に行くようになれば、皆さんの最初のおじいさん、数千数万の先祖たちに会うようになります。ところで、「こいつ、どうやって暮らした」とぞんざいな言葉を遣うとき、気分がいいですか。考えてみなさい。（一四八―三二一）

四　霊人たちの願い

我々ムーニーが、「ああ、何とかして、私の一生に御父母様を一度喜ばせてさしあげることができないか」という切なる愛の心をもつようになれば、あの世と拍子が合うのです。

霊界の人たちは、どうでしょうか。先生が何かを一つ食べるところを見たくないですか。霊人たちは皆さんより熱心です。それは事実です。皆さんは分かりませんが、霊人たちは、みな知っています。これからどのようになるということを、みな知っているのです。皆さんは、何も知りません。反対に、あの世は確実に知ってそれを理解するのです。

霊人たちはどうすれば先生のために献身して、どうすれば先生のために奉仕することができるのかをはっきりと知っているのです。五感全部は、先生から来るそのような刺激的な力を感じるのです。今までは、そのような経験をした時がありませんでした。ですが、今の時は、先生につながれば、そのようなことを感じるようになるのです。（二〇七―九八）

五　再臨復活と重生

一)　再臨復活

イエス様が地上に来られることによって、それ以前の善なる先祖たちが霊形体級の霊界から生命体級の霊界に入ることができたのと同様に、皆さんの先祖たちも地上にいる皆さんを条件にして、再臨することができる特別な恵沢圏内に入ってきました。皆さんがこのようなみ旨を知って、勝利の枝になれば、一つの生命体を成すことができる立場になるために、皆さんの先祖が皆さんに協助するのです。このように、皆さんは、数千代の善なる先祖たちが再臨し得る基盤になるべきです。

イエス様当時には、霊界で条件的に生命体級の復活のための協助をした時代でしたが、今は、霊界が無条件的に生命体級の復活のための協助をする時代です。このような時代が来たために、これ以上の福はありません。もう一度言うと、霊界から協助するということです。（一四―二二）

世界が、先生に反対しました。私を殺そうとし、統一教会をなくそうと、どれほどそうしましたか。その中を切り抜けてきたのは、私が狂っていなかったから可能だったのです。

天地の道理に従って、高い綱を神様に結びましたが、その綱を持って引ったくろうとしても引っ掛からないのです。結局は、その戦いがそこに及ばず、教会の戦いが起こり、国の戦いが起こり、亡国の路程に脱落してしまいました。統一教会に反対していた既成教会との戦い、統一教会に反対する政党との戦い、統一教会に反対する民主世界、共産世界との戦いで、それを全部倒したのです。高い所から綱を垂らしておいたから、ここで引っ掛かっているのを切ろうとしますが、自分の力をもって切れますか。統一教会を断つことができますか。哲学でも、宗教でも、霊界を通じても、理論的に我々はやられないのです。

私がアメリカに行っている時のことです。アメリカに霊通人協会があり、そこの会長で

あるフォードという人がいます。その人が、アジアにレバレンド・ムーンという、これこれこういう人がいるといううわさを聞いたのです。我々の宣教師が行って宣教するときは、人を訪ねて回りません。霊界に通じる人に原理の本を手渡しながら、「この本がどんな本か調べてみてください。一週間後にまいります」と言っておいて、一週間後に行けば「ああ、先生いらっしゃいませ」とあいさつするようになっていました。（二〇八―一九五）

我々は、霊界が屈服し得る理論的体系と、実戦的基台を中心として、神様の前に祭祀も捧げなければならないのです。祭祀を捧げる式が、けさの敬礼式（一九九〇年十一月十七日、第三十一回「真の子女の日」）だったのです。

その場で先生が祈った内容は、時が至ったので、今まで天上世界と地上世界に逆さまに流れていた潮流が、今や正しく流れるべきだということです。天が長子権を復帰したために、これから生まれる次子たちと、今のすべての次子たちは、天の治める圏内にいるのです。それゆえ、長子権復帰以後の次子権時代には、悪魔の活動舞台を天法で許すことができません。

そして、霊界に行ったすべての霊たちが、今まで地上のアベル圏を利用しました。長子が次子を殺して祭物にしたのと同様に、これからは長子権がここにあるために、霊界までコントロールするのです。

今は、我々に協助することで自分たちが福を受けるようになっているのであって、反対すれば反対するほど、絶えずどん底に落ちていくのです。天運が急変して入ります。これからは家ごとに先生の写真を掛けろと大騒ぎになるでしょう。霊界で自分の先祖が忠告するのです。それで、旗を掲げて、先生の写真を掛けて、その前に毎日のようにあいさつをする人は、自分の先祖たちを復活させ得る役事が起こるのです。

自分を中心として絶対服従しろと教育するなら、先生がこのような話をする必要はありません。私はそのようなことは嫌いですが、仕方がないのです。

それゆえ、今まで数多くの雑霊界を通じる霊人たちは、「統一教会に行くな」と言いました。しかし、今からは、釈迦牟尼、イエス様、孔子、マホメットも、「統一教会に行け」と教えなければ、天法に引っ掛かるのです。なぜそうなのでしょうか。先生が言う宗教は、父母の宗教であるからです。（二〇八―一五四）

二)　重生論に対する質問と答え

アジアで言うのは、重生論ではなく、輪廻説です。輪廻説は、仏教思想です。それは再臨現象をその一時だけ見て感じるために、そのような現象として見るのです。全体を知らないために、そうなのです。霊界にいる霊人たちは、地上の人間を通じて自分が恵沢を受けるのを願います。これが霊人たちの要求なのです。

堕落しなかった本来の人は、天使世界と宇宙を主管することができる価値的存在です。人間が堕落することによって何段階も下に落ちたために、再びその位置まで上がっていかなければなりません。上がっていくにも、一遍に上がっていくのではなく、段階を経て上がっていくのです。段階を経て、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙まで復帰して上がっていかなければならないのです。

本来の人間は、この世界に訪ねていくべきです。ところで、この世界に訪ねていくには、一遍に上がっていく道がないために、一段階、一段階を開拓しながら、個人から家庭に、家庭から氏族に、氏族から民族に、段階を経ていかなければならないのです。

神様の摂理について見れば、旧約時代、すなわち個人を救い得る個人的な摂理時代以前に死んだ霊人たちは、その時代に入って恵沢を受けようとするのです。それで、一段階を上がっていくためには、必ず蕩減が起こるのです。一段階を越えるためには、カイン・アベルの場合のような蕩減役事が、必ず起こるのです。

ある霊人が、この時代を経てきながら、甲という人に協助してきたとしても、一段階を越えていくためには、ただでは越えられないのです。ここには必ず蕩減期間があるのです。それは、一日、二日に成されるのではなく、七年とか、四十年、七十年、あるいは何世紀を経ていく時があるのです。

それゆえ、ここで協助した霊人は、その蕩減期間が終わらないうちは続けて上がっていくことができないので、霊界に帰るのです。その霊人は、地上にいる甲という人が基盤をすっかり築いてくれるのを願っているのに、その人がその期間内に蕩減を果たせず死ぬことになれば、その霊人は、第二次に乙という人を選んで、乙に再臨するのを待ち望みます。ですから乙に再臨する霊人は、甲に再臨していた霊人なのです。

その霊人がパウロなら、パウロが時代的に一段階一段階上がっていくためには、第一次に再臨した甲という人が、蕩減期間内に蕩減を果たせずに死ぬようになれば、第二次として乙という人に再臨して協助して上がっていくのです。必ず蕩減期間があるのです。

蕩減期間は、原理的な期間があって、短期間にはなされません。それゆえ、第二次に選んだ乙という人が蕩減できなくなれば、その次には、丙という人を選んで再臨するのです。それで、結局、丙という人にパウロが再臨したということになるのです、この時に、乙がある文字を書いておいたり、何かをするようになると、「私はパウロの霊の協助を受けて、今役事する」と言うのです。その次の時代に丙という人においても、ある文字を書くようになれば、彼もやはり、「パウロの霊の協助を受けて役事する。私がパウロだ」と言うのです。このようになるので、結局は全世界にパウロの霊が、乙に現れ、再び丙に現れたのと同じようになるのです。

このような現象が起きるために、これだけを見て輪廻だと言うのです。リーインカネーション現象のようなものとして現れるのです。全体を知らないために、そのように言うのです。それがこの時代と同様で、世界天宙時代まで起こるのです。

本来の人間は、サタンの支配を受けず、神様の直接主管圏内で暮らさなければならないのに、堕落することによって堕落圏に暮らすようになったので、それを脱するためには個人として蕩減し、家庭として蕩減しなければなりません。これを蕩減せずには、脱することができないのです。霊人は、必ずその時代ごとに再臨現象を経て現れるために、その段階、段階が輪廻、すなわち生まれ変わる現象として見えるのです。

このような観点で見るとき、皆さんも同様です。皆さんが個人的にただ信じて死ぬようになれば、家庭をもてなかったために、家庭

基準、氏族基準、民族基準、国家基準、世界基準といった段階をみな越えていかなければなりません。それゆえ、何億万年がかかるかもしれないのです。それは無限に該当します。イエス様も国の基準を越えられなかったために、国の峠を越えるために再びやって来て、国の峠を越えて初めて天国に入ることができるのです。イエス様は、今楽園にいますが、同様の道理です。

イエス様が、この中のある人に再臨して、その人を直接指導するようになれば、イエス様が臨在したその人は、「自分がイエスだ」と言うのです。それゆえ、それだけ見れば、昔のイエス様が自分として生まれ変わったと思うために、輪廻説のような現象が起こることになるのです。皆さんは、このような霊的世界をよく知らなければなりません。

人は、本来神様が直接主管なさる善主権内で暮らさなければならないのに、堕落圏内で生きているために、悪主権を脱しなくてはいけない運命にあるのです。それゆえ、このような問題があるのです。イエス様は、霊的にそれを成しました。キリスト教も霊的にそのことをしてきているのです。

このような観点で見るとき、統一教会の復活論は、霊界の事実にそのまま当てはまるのです。言い換えれば、統一教会の復活論は、霊界の公式を皆さんに教えてくれているのです。今までの数多くの宗教人たちが、そのような未知の霊界の事実を体験はしましたが、それがどのようになっているか、その事実を知らなかったのです。

皆さんは、この原理自体が理論的にそのようになっているのだとだけ考えて原理を学ばないでください。この原理自体を探すのも大変ですが、これを実践して、勝利の基盤をつくらずには、皆さんに教えてあげることはできないのです。

言い換えれば、ノア家庭の内容を知って、アブラハム家庭の内容を知って、ヤコブ家庭の内容を知って、モーセ時代の内容を知って、洗礼ヨハネの内容とイエス時代の内容を知って、それで終わるのではなく、それらのことを知って、全部蕩減して復帰した勝利の基盤を備えるのが問題です。その基盤が備わって初めて、皆さんに教えてあげるのです。

過去にサタンに負けたものを、勝った立場で復帰しておかなければ、神様のみ旨を成していくことができないのです。今まで復帰摂理を担当してきたノアとか、アブラハムとか、ヤコブとか、モーセのような人たちも、これを知らなかったのです。

しかし、この地に来られる主は、個人として失敗したのを復帰しなければならず、家庭として失敗したのを復帰しなければならず、氏族として失敗したのを復帰しなければならず、民族として失敗したのを復帰しなければならず、国家として失敗したのを復帰しなければなりません。来たるべきその世界を得る時まで、それらを全部知って、実践することができる代表者です。実践しなくては、成すことができないのです。

皆さんがメシヤに出会い、その方を信じて従えばどのようになるでしょうか。その方が、個人、家庭、氏族、民族、国家時代を中心として完成する時、皆さんがその方に会えば、皆さんは、個人、氏族、民族時代の恵沢を受けて、国家時代とともに上がっていくのです。ところで、個人時代にいる人が、メシヤを迎えて家庭時代に上がっていくためには、霊界にいる霊人たちと同様に、肉界で蕩減をしなければならないのです。また、家庭時代から

氏族時代に上がる時にも蕩減路程を行かなければならないために、結局、統一教会に入ってきて長くなった人であるほど、蕩減をたくさん果たしたということになります。長くなるほど、先生と近い立場にいるという結論になります。

国家時代まで上がっていくには、縦的に上がるようになります。ここで国家体制を決定して、越えていかなければならないのです。ところが、その過程において、上がっていってこれ以上上がっていけなくなったときは、落ちることもあります。なぜなら、霊界の現象は、いくら高い段階まで上がってきて役事したとしても、同様の現象が起こるのです。ここには、蕩減があるためです。蕩減とは行こうとする所に対して行けないようにすることなのです。反対になることをさせるのです。それゆえ、うっかり過ったら、落ちやすいのです。ここで失敗するようになれば、みな崩れるようになります。

イスラエルの国とユダヤ教が、イエス様を迎えるために四千年間準備してきましたが、み旨をなせずに死ぬことによって、準備した基台がすっかり崩れたのです。それゆえ、ここから上がったり下がったりする過程で、数多くの犠牲者が生まれたのです。

それは、神様の主流摂理を通じてすることですが、支流的にも世界の数多くの民族を中心として、このような適用が起こるのです。このような適用が起こることによって、世界的に蕩減が繰り広げられるのです。

一つの主流としてこのように上がっていくなら、ここに従って全世界的にあるものは別の立場で蕩減が起こるのです。このような蕩減を果たして、収拾していくのです。それゆえ、今まで数多くの宗教が、多くの犠牲を払いつつ、復帰の路程を通過してきているのです。

霊界の霊人や、宗教家が、最高の善であるこの基準をどのように越えていくか、言い換えれば、国家基準を越えて、どのように落ち着くかということが問題です。メシヤは、蕩減する方法を知っているために、もし国民がまだ蕩減できなかったとしても、彼と共に一つになれば、蕩減期間が短いのです。もし、メシヤと共に国が落ち着けば、すべての個人は、全部ここに適用されます。国家が蕩減を果たしたなら、家庭は家庭なりに世界的になり、氏族は氏族なりに、民族は民族なりに、そして国家は国家なりに世界的に上がっていくのです。このように見るとき、国家を探せば世界復帰がどれほど早いかということを、皆さんは考えなければなりません。

国を立てておいてこそ、楽園を越えることができるのです。楽園とは何かというと、天国に行くための待合室と同じです。それゆえ、アダム、ノア、アブラハム、ヤコブが、このような過程を通じて復帰してくる時に過ったことが残っているなら、それは全部蕩減しなければなりません。蕩減しなければ、横的に発展させていくことができないのです。

このような観点から見るとき、国がどれほど重要かが分かります。国さえあれば、落ちないのです。ここでもドイツ人以外の外国人はドイツ政府の干渉を受けるのと同様です。もし、間違えるようになれば、追い出されるのです。追い出されるとき、自分の国家がなければ、どこに行くかというのです。そのときは、行く所がないのです。そのような人は、死んでしまうとしても、どこにも訴える所がないのです。

サタン世界も同じです。サタン世界において、我々は彼らの怨讐です。神様を信じる人たちは、彼らの怨讐ですから、その国で我々をどれほど憎み、いじめるでしょうか。それだけでなく、彼らが我々を追放しても、あるいは殺しても、訴える所がないのです。このように国が重要であるために、神様も国を探してこられるのです。

皆さんが国家を探していくには、個人、家庭、氏族、民族、国家まで蕩減しなければなりません。個人的な蕩減路程と、家庭的な蕩減路程、氏族、民族的な蕩減路程を行かなければなりません。そうしなくては、世界を行く道がないのです。このように国家が中心になるために、各国もこのような中心となった国家を通じなくては、この道を行くことができないのです。

もし、皆さんが国家を復帰できずに死ねば、この地上に再臨しても、せいぜい個人を後援し、家庭を後援することができるだけであって、堂々と権勢のある後援はできません。サタン世界を征服するための戦いをすることができる資格者になれないのです。

それゆえ、国が生まれてこそ、皆さんは入籍することができます。皆さんは入籍しましたか。皆さんは、統一教会には入籍しましたが、統一された神様の国には、入籍できていません。国がないのに、民になれますか。なれないのです。

それゆえ、霊界にいるすべての霊人も、その国の人にどのように協助するかということが、望みです。その国さえ存在するようになれば、再臨現象は横的に起きるのです。

横的に起こるために、自分が苦労すれば、苦労した基盤が残ります。その国を探して上がっていくときは、いくら蕩減しておいたとしても、崩れるようになればみななくなります。このどん底からどこまで上がってきたとしても、崩れてしまえばなくなるのです。これの繰り返しですが、これを横的な基準でするときは、自分の実績は横的に永遠に残るのです。

言い換えれば、復帰して上がっていくときは、蕩減してなくなる時代ですが、国を探して、横的にするときは、それが蕩減ではなく、実績として残る時代なのです。（五四―二二七）

Book 六: 人間の生と霊魂の世界
Our Life and the Spiritual Realm

はじめに

「人生の夕暮れは美しい。夕暮れの美しさは、日が昇る日の出の美しさよりももっと感激的である。人生が夕暮れにさしかかった時、うろたえることなく最後の光を輝かせていくのが勝者の生き方だ」。

人間の死は、日が西の山に傾くように、神様が下さった精気と知恵と時間をすべて使い果たし、最後をより美しく飾っていくことだということです。しかし、まだ多くの人々は、死に対する疑問と不安と恐怖から抜け出すことができず、死後の世界に対しても確信をもつことができずにいます。

死は「存在の終わりなのか」、そうでなければ「また別の何かの始まりなのか」、「死んだのち、来世はあるのか」、もしあるとすれば「その世界はどのような世界か」という疑問をめぐり、今まで多くの論争が続けられてきました。

このような人間最大の関心事である死と死後の世界に対する究極的な疑問について、真の御父母様はそのみ言を通して明快に明らかにされました。それだけでなく、人間の根本と、霊界と肉界の調和する人生の生き方についても教示されました。

霊界は本質の世界です。地上よりもより深く、より広い世界であり、神様を中心として永遠に生きていく心情の世界です。その世界は、真の愛の成分で満ちあふれた世界であり、真の愛さえもつならば万事が通じる愛全能の世界です。

霊界は、人と調和して喜びと幸福を満喫しながら、お互いが「ために生きる」共生共栄の世界です。

果てしなく広がる霊界は、神様と人間、そして人間と万物が自然な関係をもちながらも、天理法度がより厳格に適用される世界です。そして、そこは地上生活の延長線上にあるので、そこでは鏡に映るように地上での生活の姿がそのまま映し出されます。ゆえに、霊界を訪ねていく時は、自らが審判し、自らの霊的基準に合わせて訪ねていくのです。それゆえに、真の御父母様は、地上での生活がとても重要であるとおっしゃいました。

この本は、真の御父母様のみ言選集の中から霊界の実相に関する部分を抜粋したものであり、人間の正しい地上生活と永生の本体である霊人体の成長の秘法を明らかにしたものです。ゆえにこの本は、人間が真の人生を生きていく上でこれ以上ない貴重な本となるはずです。

どうか真の御父母様のこのみ言を通して真の生命の道を悟り、地上生活がより価値のある生活となることを切に望みます。

二〇〇一年三月

第一章　人生の行くべき道

一　私たちの人生の道

一) 一寸先も見通すことのできない人生

人々はしばしば、「人間は来ては逝くものだ」と言います。古来より、いくら立派な聖賢君子も来ては逝きました。このような歴史の動き、このような天倫の動きは、この瞬間、私にも続いているということを考えなければなりません。来ては逝くべき私たち自身です。何の因縁と関係しているのかは分かりませんが、この地に来て、この万象と、あるいはある理念的な形態の中で身もだえして逝くことをよく知っています。では、私たち人間は何のために来て、何の目的のために逝くのでしょうか。これを数多くの哲人たち、数多くの宗教人たちが心血を傾けて解決しようとしました。しかし、解決できないままに、人類歴史はそれによる寂しさとともに今まで動いてきました。また今も、ずっと動いていっています。

私がなぜ来て、なぜ生きなければならず、どこに行かなければならないのでしょうか。生まれたことを、皆さん自ら生まれたものと考えてはなりません。生まれはしましたが、何の動機で生まれ、何のために生まれたのか、私を生むようにした動機と目的が分からない私たちです。生まれることは生まれましたが、私が生まれようとして生まれたのではなく、生きるには生きますが、私が生きようとして生きるのではなく、死ぬには死にますが、私が死のうとして死ぬのではないというのです。

それなのに、自分をもち上げて何を誇るのでしょうか。自分自身が生まれたくて生まれることもできず、自分自身のその何かをもって生きることもできず、死の道を避けることもできない自らをもって何かを誇ってみても、哀れで物悲しいだけです。生まれたから生きなければならない運命であり、またそのように生き、逝かなければならない運命です。

今私たちは、知っていようがいまいが、ある所に向かって進んでいます。私が動く時間にも進んでいるのであり、休んでいる時間にも進んでいるのです。単に私だけではなく、この民族、あるいはこの世界、さらには天と地までもある所に向かって今、進んでいるのです。これは否定できない事実です。この一生をたどったのちに、私はどのような所に行くのでしょうか。これが、人間が解決すべき重要な問題です。宗教もこの問題を解決するために、哲学も歴史もこの問題を解決するために動員されています。ですから、皆さん自身もこのような運勢に捕らわれ、引っ張られているということを否定できないのです。

行く歩みを捕まえておいて、動く心と傾く心情を阻んでおいて「お前はどこに行くか」と尋ね、これを解決するために闘ってきた人々が聖賢賢哲であり、あるいは数多くの道主たちだということを私たちは知ることができます。彼らはそれを解決するために現れましたが、この日まで「私の体と私の心、私の心情、私の生命と私の理念はこのような所に向かって走るものなり。ゆえに全天下にあるすべての万民、あるいは天地に存在するすべての存在物はこちらへ行け」と、自信をもって命令した人はいないのです。

今日、人間の生活というものは七十年、八十年しかありません。七、八十年しかないこ

の短い生涯路程において、歴史的にこんがらかった善の圏をすべて収拾しようとするなら、億千万年かかってもできないということを、心は知っているというのです。ですから、この短い七、八十年のこの期間において、善なる圏を因縁づけるべきことが、そのように膨大にあるということを知っているこの心、良心はどれほど催促するかというのです。

死んでは駄目だというのです。死ねばできないのです。生きている間、因縁を結んで地上で祖国光復をし、本郷の地を求めて天の主権者に侍り、その民とその国で生きて逝ってこそ、天上天国に行けるはずですが、その世界に行くことができず、その世界を見つめることができないこの心が、どれほどせわしいかというのです。

どうせ逝くべき私自身だとするなら、この体はどこに行こうとするのでしょうか。この心はどこに行こうとするのでしょうか。またこの生命はどこに向かって傾いていて、私の心情はどこに行こうとするのでしょうか、また私の願い、あるいは希望と理念はどこに行こうとするのでしょうか。

この問題を解決できないとしても、私たちはいずれ逝くべき運命に置かれているのです。私たちが生きたのちに死ぬ日、この体は土に埋められることによって終わるはずです。では、体が埋められるその日は、心も、この生命も、この心情も、この理念も、あるいは願いまでも共に埋められてしまうのでしょうか。消えてしまうのでしょうか。ここにはっきりとした内容と、はっきりとした解決点と、はっきりとした目的観を立てておかない限り、人は不幸な人であらざるを得ないのです。

私たちは何を中心として生まれ、何を中心として行くべきであり、何を目的として行くべきでしょうか。これは神様を抜きにしては絶対に駄目なのです。神様を抜きにしては動機のない因縁になるのです。動機をもつことのできない人は、あることを成就しようとしても、その結果を収めることができないし、価値を認めてもらえないというのです。ある建物を建てるときは、設計者が設計した設計図によって建築をします。設計の原本もなく造られた建築物は、設計者が目的とした建物になり得ないのです。

出発を誤れば、とんでもない所へ行くのです。それゆえに船が大海を航海しても、出発した港から羅針盤を中心として、行くべき目的地に向かって方向性を描いておいてこそ行くのです。それでは、人間が出発した港はどこでしょうか。分からずにいます。羅針盤をもって彼岸の世界に到達できる、目的地を描いて行くことのできる方向性はどこにあるでしょうか。ないのです。これがくねくねと、自分勝手に行ったり来たりしました。このように考えると、人間はいくらやってみたとしても、人間として終わるのです。

二) 私たちはどこに進んでいるのか

人生をこのように生きていく目的は何でしょうか。この問題を再び考えてみなければならないのです。動機が自分によるものではなかったので、目的も私だけのものではないに相違ないのです。暮らすことにおいて幸福な立場を嫌う者はいないし、豪華絢爛な立場で生きたくない者はいないと思いますが、思いのままにできないのが私です。しかし、また

自分自身を誇ってみたいし、思いのままに生きたいし、思いのままに残りたい私です。このような心情の交差点をもった私だというのです。

秋の季節が来たという事実は、冬が迫っているということをいうのです。冬は、生命があるもののみが通過できる過程です。生命をもっていないものはすべて、ここで後退せざるを得ないのです。それで、冬が来る前に新しい生命を注入しろというのです。新しい生命は新しい愛を中心とした新しい主義と思想、そして、新しい人生観、新しい世界観、新しい宇宙観をもたなければならないのです。そうでなくては冬の季節を通過できません。冬の季節を通過できる生命力をもつようになれば、それを通過する過程は難しいけれど、行けば行くほど春が近づくのです。春が訪ねてくるというのです。統一教会はその道を行くのです。

私たちはこの世に生きていますが、この世だけではなくて霊界があることを知っています。この世と霊界は二つの世界ではなく、一つの世界として連結しています。私たちが行くべき所、私たちが行って住まなければならないその場所とはどこでしょうか。私たちは肉身生活をしながらこの地にいますが、永遠の世界に向かって行っているのです。一般の人々はこの世に生まれ、十代、二十代、三十代を過ぎて青春時代を過ぎて壮年時代に入っていくようになれば、どんどんと一つの峠を越えて、その次には老年時代に入っていくようになるのです。このように、沈む太陽のように一生を終えます。

霊界があるという事実を知っている人たちは、人生というものがわずかの間で、死んだのちに私たちが迎えなければならない世界が永遠だということを知っています。ゆえに一生の期間とは、永遠の世界を準備するための期間だというのです。世の中とはそのようなものではないですか。

人はどこへ行くのでしょうか。霊界に向かっていくのです。霊界は海と同じです。どうせ行かなければならないのです。海にも流れがあるのと同様に、そこには調和無双な変化があります。海には主流の流れを中心として、淡水にはない調和の存在があります。海に数多くの魚族がいるように、そこには数多くの新しい天地の家庭がいます。あの世に行くようになっても同じです。

人はどこへ行くのでしょうか。天国へ。このようになるのです。天使はどこへ行くのでしょうか。天国へ。父母はどこへ行くのでしょうか。天国へ。それだけでなく、育てた子犬はどこへ。地獄ではありません。昔避難する時、北韓でとても良い生活をする金持ちの家に、とても高い犬だと自慢していた人がいました。その人が避難するとき、犬をしっかり門に結んでおいて、「おい！　元気でな。私だけ行ってくるから」と言うのです。私たち統一教会の食口たちは、それではいけないのです。今からは犬も天国へ。すべての万物も天国へ。主人が行く所には、どこでもついて行くことができるというのです。

霊界と肉界、人間の混乱した思想界の複雑なことをすべて打開して、このように単調で簡単な一つの方向が設定されて、明確な一つ

の価値観を私が見つめていくようになったという驚くべき事実を知らなければなりません。その段階ごとで力が分散されるのではありません。段階が発展すれば発展しただけ、力が共にあるのです。愛の原動力が私の生活圏に反応するのです。ですから、愛から生じ、愛を受けて愛したのち、愛の世界へ行くのです。神様に帰っていくのです。結果は原因へ帰らなくてはならないでしょう。ですから、神様のような考え方をもたなければならないというのです。

私たちはどこへ行くべきでしょうか。死線を越えてでも行くべき所とはどこでしょうか。神様を求めて、その神様に仕え心から喜んで楽しむことのできる日、私の心の世界で「これ以上の願いはありません」と言うことのできる一時を迎えなければなりません。そのために、私たちは困難に耐えて、無念さに耐えて、悔しさに耐えながら、この世界を越えていかなければならないのです。このような世界を越えていく自分自身になっていない限り、世界と共に消えるのです。

人間は何も考えずに流れに任せて生きながらも、死ぬことを嫌い、「なぜ生きなければならないのか。根源がどのようになっていて」と、皆さん、疑問が多いでしょう。そのすべての疑問は、人間の哲学書だけでは解決できないのです。哲学というのは、今まで神様を求めて行く道を開発したのです。宗教は何ですか。神様を知って、共に生きる生活から始めることが宗教生活です。

霊界を無視しては駄目です。これが行く原則であるゆえに、いくら優秀な人もその原則に合うようにこの地上に生きて一体理想、均衡的な平準化を成し遂げなければならないのです。相対的平面です。均衡を取って、九〇度を中心として引っ掛からないで水平に回らなければならないのです。それで、三六〇度を回りながらも、ここで引っ掛かってはなりません。サタンが少しだけ口出ししても引っ掛かるのです。ですから、回っても、回っていないように見えるこのような歴史をもつ人が入っていかなければならないのです。家庭の本格的な再検討時代が来るのです。統一教会検討時代です。これからは教会がなくなるのです。神様に侍って暮らすことのできる本然の時代です。

生命圏、愛圏、血統圏の堕落、全世界が引っ掛かっているこのことが、同じ条件と同じ公式なのです。同じ公式の条件に引っ掛かっているのです。それゆえに、どんなことがあってもサタン圏の、自分の肉体が要求するすべてを放棄し、良心圏が願う所に一〇〇パーセント移動すれば地上天国圏に立つので、神の国、地上天国世界と天上天国世界を境界なしに無限に通じることができる自由圏を得ることができるのです。そちらへ越えていかなければならないという自覚をもたなければなりません。このような難しい問題があるということを、人間は知らずに生きているのです。人間は、このようにもつれた背後の内容があるということをみな知らずに生きて霊界に行くので、地獄に行くのです。

私たち人間は、生まれると一度は死ぬようになっています。ところで、死ねばどこへ行くのでしょうか。煙が消えてしまうように消えてしまうのではありません。必ず霊界に行

くようになっています。霊界に行くようになれば霊界の国があります。では、その霊界の主人は誰ですか。神様です。それゆえにその神様の息子、娘にならなければなりません。神様の息子、娘になることができなければ天国に入れないのです。

霊界があるならば、霊界はああしたりこうしたりと変わると思いますか。「人の心は朝夕に変わり、山の色は古今同じである」という言葉もありますが、霊界は変わりません。神様がいるならば、その神様は変わりますか。神様は変わりません。神様が統治する霊界の国があるならば、その国は変わりません。億千万世に定めた法に従って生きながらも、不平不満を感じないで順応と柔和の道理に従って、厳然と存続し生存するのです。そこには革命家は必要ないのです。革命をすれば、すべて滅びるのです。

皆さんはカナン福地に入らなければなりません。この地球星がカナン福地になっているために、天国の外的世界が近づいてきたがゆえに、地球村時代が来ます。人工衛星というものがあって、座っていても天上世界を旅行できる時代が来ました。相対圏の人工衛星時代が来るのです。その次にはコンピューター時代が来るのです。霊界にコンピューターがあって、一生のすべての記録が現れるのです。人生の歴史やすべてのものをあっという間に知ることができる時代になったのと同じように、統一教会を中心として地上地獄膨脹主義時代から地上天国出発時代へと交代するのです。

アダムとエバがエデンの園で、食べ物のお金を払って食べたのでしょうか。すべてただです。このように見るとき、霊界に行って住むときも、すべての環境的条件をつくられた神様が、人間に無限な価値をただでくれたがゆえに、霊界に行っても無限な価値の存在がすべて自然に供給されるのです。その霊界は、神様が住まわれる本郷の地です。ここでは、お金を出して買って食べないのです。私たち人間の想像が及ばないほど、すべてのことが可能な補給地です。皆さんはその霊界を知らないから、分からないのです。本来の堕落しない後孫ならば霊界を知っているのです。

なぜ本郷を恋しがるのですか。父母に対する愛、兄弟に対する愛、夫婦に対する愛、その地に対する愛、故郷山河に対する愛と同じです。あの世でも真の愛という全く同じ公式になっています。本郷には父母がいて、夫婦がいて、兄弟がいます。すべてのものがそこにあります。立派な食べ物もあるのです。食べ物も、見える食べ物と見えない食べ物を合わせてこそ本当の食べ物になるのです。なぜ私たちがこのように苦労をするのですか。故郷に行くためです。そのような希望に満ちた霊界の相続を受けようとしてそうなのです。

故郷というのは、制限されたここだけのことをいうのではありません。どこに行っても、故郷で暮らすように生きなければならないのです。どこに行っても、一生を恋しい故郷で暮らすのと同じ心をもって生きなさいというのです。大韓民国の四千万を中心として和合し、そのように暮らすことのできる人は、あの世に行けば霊的な人格の価値が大きくなります。このようなことを知って、故郷を考える時は必ず霊界を思いながら愛の人格を備えて、父母のように、お兄さんのように、お姉

さんのように「ため」に生きなさいというのです。それとともに、自らの愛と生命を投入し息子、娘を育てて、もっと立派な子孫を故郷の地に残すという心をもたなければなりません。そのような思想をもって暮らしてあの霊界に行くようになれば、すべてが私の故郷の地になるのです。

私たち統一教会の食口たちは、どのような道を行かなければならないのでしょうか。神様が願う道に従って行かなければならないのです。天意の道に従って行こうというのです。天意とは何ですか。天意には個人が行くべき天意の道があり、家庭が行くべき天意の道があります。そして、社会が、国家が、世界が、霊界まで……。皆さんは霊界を知らないでしょう。その分野の専門家が文先生です。霊界は間違いなくあるのです。

三) 一生は霊界へ行く準備期間

いくら考えても自然世界の摂理はやむを得ないのです。皆さんも死なないことを願うでしょう。死なない自信がありますか。自然が調節するのです。霊界の法に従っていかなければならないのです。それと同じ道理です。

霊界が私たちの故郷の地です。本然の故郷の地です。この地は本然の体の故郷の地であり、霊界は本然の心の故郷の地なのです。この次に行く所が心の世界、霊界です。それゆえに、ここであらかじめそこに合わせて訓練をしてこそ、そこに行っても支障がありません。アメリカの人々は、ハンバーガーを食べなければなりませんし、チーズを食べなければならないでしょう。韓国の人々は、キムチを食べ、唐辛子みそを食べなければなりません。霊界にもハンバーガーがあるのか、キムチがあるのか知りませんが……。ですからここで、そこに拍子を合わせるようにすることによって、あの世に行って苦痛がないのです。

今まで一般の人々は死ねばすべてなくなると考えたのですが、そうではありません。霊界があるので、そのままつながるのです。その霊界に行くためには地上で準備をしなければなりません。霊界に行けば愛によって呼吸するために、地上で愛を中心として生活してこそ、そこでも自由に呼吸できるのです。地上で愛を中心として生活しなければ、そこで自由に呼吸できないのです。霊界は、愛を呼吸する世界です。愛が空気のような世界だと自由に考えればいいのです。第二の新しい出発を「死」というのです。それゆえに、そのように怖がる必要はありません。死は新しい出発の門を開くのです。

霊界が故郷です。故郷に帰って永遠に暮らすことのできるその基準を、地上で合わせて逝かなければなりません。地上生活で自分の思いのままに、今までの世の中の何も知らない人々のようには生活できないのです。霊界を知って、そこに合わせて生きることによって、この世を離れるようになる時、神様の前に行って天国と関係を結ぶことができるのです。そうでなければ、不可能だというのです。それゆえに皆さんは、霊界に対する事実をはっきり知らなければなりません。

霊界は愛の空気でできていますが、皆さんの霊人体が準備をせずに天国に入っていけば、息ができないのです。ここは空気で成ってい

ますが、あの世界は愛の霊界です。皆さんの霊人体が愛を感じることができるように準備をしなければなりません。そのようにできなくて霊界に行けば、関係を結ぶことができないのです。これが問題です。問題が大きくなります。何千万年はかかるのです。

皆さんは、本然の愛で愛さなければならないのです。それゆえに霊界に行くようになれば、霊界は愛が空気になっています。細胞が愛化することを体験してこそ、すべてのものが自然らしくなるのです。細胞はすべて呼吸するでしょう。愛の細胞をすべてどこで育てていくかといえば、真の夫婦になって神様の愛を中心として育て、神様の世界に行き愛の空気を永遠に吸いながら暮らすのです。それでこそ死にません。愛が根本であるがゆえに、愛をもてば何でも自由に実践躬行できる世界だというのです。愛する人のために何でもつくり、何でも創造できるのです。そのような霊界があるのです。私たちの本郷があります。

塩水と淡水は何が違いますか。味が違うのです。塩水は塩辛く、淡水は何の味もありません。同じです。この地上では味がありません。しかし、霊界に行けば味があるのです。水は生命を伴うことができる力をもっていますが、塩は生命を生産するために必要なものです。

水は、海深くまで行かなければならないのです。いくら大きい川を流れる淡水であっても、海に入っていけば塩水になります。いくらきれいだといわれる有名な河川水でも、海に入っていけば間髪を入れず、さっと変わるというのです。全く異なる色合いと味とに変わるというのです。これと同じように人間たちは、すべて霊界へ行くのです。淡水で生きたそれが、そのまま通じないのです。海水になるのです。

ですから、宗教人たちは、生きていきながら塩水を加えることができる資格をつくらなければならないというのです。そうすれば、霊界に行って相反しないのです。万一、淡水がそのまま入っていってしまえば問題が起こります。人間もそのまま霊界に入っていくようになれば、大変なことになるのです。

河川水はどこへ行きますか。海へ行くのです。海水と河川水は違うのです。地上は河川水と同じであり、霊界は海水と同じです。それゆえに人間はどのような者も、地上で生きた者は霊界にすべて入っていきます。淡水と塩水と混ざった場合には、淡水魚は塩水ではどのようになりますか。淡水魚は塩水では死んでしまいます。突然に入っていけば窒息します。それゆえに、慣れなければならないのです。

水の色合いも同じで温度も同じだった場合には、どこにある水を飲んでも何でもないのと同じです。地上世界と霊界の世界が突然に連結した場合には、淡水魚が塩水と出合って死ぬのと同じになるのです。どのように呼吸しますか。大変なのです。鮭が塩水から淡水へ上っていくのには二週間の期間を費やして、少しずつ慣らしながら上っていくというのです。呼吸が苦痛でないようにしながら、歩調を合わせて移動していきます。

海へ入っていく時の気分はどうでしょうか。「ああ、入っていきたくない！」と言うでしょうか。皆さん、そう思いますか。皆さんに、

死んでしまってどこへ行くのかと尋ねると、みな「霊界へ行く」と、そのように言うでしょう。それでは、その霊界へはどうやって行くのですか。死んで行くのです。かといって、誰でも死んでみたくはないものなのです。

それでは、河川水が流れてついに海に入っていくようになれば、どのようになりますか。河川水が海水をかぶると、どのようになりますか。「ああ、気分いい！」そのように言うのですか。すべてのものが小さくなってしまったような衝撃を受けるのです。縮小されたとでもいいましょうか……。最も大きいものから最も小さなものになってしまったような、大きい衝撃を受けるというのです。

霊界に行きたくないとしても、誰でも行かなければならないでしょう。ここで自分は絶対に死なないという人、手を挙げてみてください。いくら刀をテーブルの上に刺して誓っても、人間は死なざるを得ないのです。死ねばどこへ行きますか。霊界に行きます。そこは大きい川と同じです。いくら大きい川といっても、流れていってすべて海に行くのです。「海に行くことができない。海に行きたくない」と言うのは、生きているけれど死んでいるというのです。それは存在の価値をもっていないことと同じです。

私たちが霊界に行く前に、私が何をして暮らしたのかと、私たちの生活を一度ずっと反省してみる時、それは深刻な問題です。皆さん、霊界は未知の世界です。霊界はどうせ行かなければならない世界ですが、未知の世界だというのです。無限拡大の世界です。そこに行くようになれば、皆さんの先祖にすべて会えるのです。数千、数万の先祖と一遍に会える所です。彼らが皆さんを迎えるようになる時、評価するのです。

準備といっても、易しい準備はありません。それゆえに一生を見る時に、少年時代は青年時代のための準備時代であることを知っている人は将来性があるのです。壮年時代は老年時代のために準備しているのであり、老年時代は霊界に行く準備をするのです。一生自体は大宇宙の人格を備えるために一つの訓練過程をたどっている修練期間であり、準備期間だということを私はよく知っています。

今はビザとか国境が問題になるためにできませんが、言語だけでも統一されれば、どこでも私の故郷のように、私の国のように暮らすことのできる時代になるというのです。どうせ、そのように行かなければならないのです。ですから、ソ連でもアメリカでも、みな一つの家族のように生活しなければなりません。今後はテレビのようなものも、財布のように小さいものを作るのです。今でもそうではないですか。ポケットに入る小さいテレビも出ているでしょう。ですから人工衛星を中心として、すべて見ることができる時代に入ったというのです。どこに行ってもです。そのように集約された小さな世界が、すべて入ってくるというのです。

人間生活が便利に、どこでも移動できるようになるのです。そのような小さなものを車一つにすべて積んで、行き来しながら暮らすことのできる時代にならなければなりません。そうなれば、いいでしょう。韓国を離れて七十、八十歳まで世界一周をしながらですね。そのような時代が間違いなく来るのです。先生は、そこに対する準備をしているのです。

四) 生涯はあまりにも短い

人間の一生は短いのです。生涯において十年がいつ過ぎたのか知らないのです。結婚して三十年以内に、すべてのものが決定されるのです。それゆえに、人生の道はいつも待っていません。忙しいのです。そして、一回ずつみな死ななくてはなりません。死なないですか。死なない自信がありますか。死ななくてはなりませんね。死ねばどこへ行きますか。霊界があることを知っていますか。先生は霊界を知っているがゆえに一生をかけてこの仕事をしています。世界をすべて料理しながらです。この世はつかの間です。十カ月の腹中生活と同じです。

統一教会は、その霊界へ行くことができる準備をするのです。ですから統一教会は、霊界で合格するための準備をする所です。では、そこで完全に合格するか、不完全に合格するかというのです。また、落第生になって不合格になることもあるというのです。このように見る時、皆さんは霊界に行く準備を地上でしなければなりません。地上という所は、旅人の旅路のようなものです。いろいろな過程を通過します。女性としてある父母から生まれて育ち、今は年も取るだけ取ってどこで生まれたのかも分かりませんが、そのように育ち男性に出会い、共に道を歩んできながら愛を通して子供も生むようになります。そのようなことをしていきながら苦労するのです。ちょうど苦労して馬車を引っ張っていくように……。

ところが、その車がいつ故障するか分かりません。険しい岩の道を通ることもあるでしょう。そこで誤ってしまうと故障するのです。故障すればどのようになりますか。これ以上行くことができません。それを修理しなければなりません。修理する能力がないと大変です。それで、力や能力がない場合には一年もかかり、二年もかかり、十年もかかるのです。そこを抜け出てくることができなければ死ぬのです。そのような旅路を行くのです。時には旅館に入っていっていろいろな人に出会ったり、時には立ち寄る所もいろいろあるでしょう。人生は、一つの旅行の道のようなものです。そうして行く所が結局は霊界なのです。

一生というものは早いのです。一生は本当に早いのです。物事の分別がつき事情を知って、ああだこうだしているうちに四十を越えればすぐ五十であり、十年はつかの間です。五十ならば六十はつかの間で、六十になれば七十がつかの間で、私も静かに考えてみると「一場春夢」という言葉を実感するのです。

私たちの人生の一代というのはつかの間です。この一代が永遠の尺度を上げたり下げたりするというのです。秤と同じように上がったり下がったりするのです。そのようになっているというのです。

皆さん、見てください。皆さんが八十年生きたとしましょう。その中で夜に寝る時間を除くと四十年に減ります。半分に減るのです。寝ることも生きていることですか。寝ることは死んだことと同じです。寝ることは死んだ命なのです。それゆえに、二十四時間の中で生きようとあくせくする時間は半分にしかなりません。

またここで御飯を食べる時間を一時間ずつ抜いてしまうとどうですか。御飯を食べる時

間を一時間と考えなければなりません。またその中で友人の祝宴の日、町内の人の還暦日、誰かが死んだ日、葬式を執り行う日、病んで横になっている日、あらゆる日を除くと、生涯において生きている日が半分にもなりますか。この前計算してみると、生きているということが七年と出てきます。その七年の中で「本当に生きた」と言うことのできる日が何日出てくるかです。何日にもなりません。

この肉身世界は短い期間なのです。長くないというのです。それを知れば眠る時間が惜しいのであり、御飯を食べる時間が惜しいのです。御飯を食べることも行きながら食べます。寝るのも行きながら寝て、遊ぶのも行きながら遊んで……。それはどれほど悲惨ですか。そうであればあるほど、世界の誰も受けられない福を受けるのです。これは歴史的な内容だということを、皆さんが知らなければなりません。

自分が運を百ぐらいもって生まれたのに、百二十ぐらい生きて逝く人は、子孫が滅ぶのです。人の運はゴムひもと同じで、縮められるのです。しかし、八十ぐらい生きて死ねば二十ぐらいの福を残し、その運勢を子孫の前に相続してあげて逝くことができるというのです。そうでなければなりません。

二　死に対する正しい理解

一) 死は人生必然の道

人々は七、八十年生きればよい、死んでしまえばそれまでだ、といいながら死ねばおしまいだと思って今まで生きてきた人々が多くいます。しかし歴史路程を通じ考え深い人々は、どのようにすれば人が死なないで永生できるだろうか、もっと生きることのできる道はないかと考えてきました。み旨を抱いた人であればあるほど「人生とは何か。人間はなぜやって来て旅人のように逝くのか」と言い、「人生は苦海」とか「草露の人生」だという話をしてきましたが、永生することさえできるならば、そのように悩む必要がないのです。

歩みをとどめて、揺れ動く心と傾く心情を抑え、「お前はどこへ行くのか」と尋ねて、それを解決するために闘ってきた人々が聖賢賢哲であり、あるいは数多くの道主たちだということが分かります。彼らはそれを解決するために出てきましたが、今日まで「私の体はこのような所へ行って私の心と私の心情、私の生命と私の理念はこのような所に向かって走るのである。だから天下のもとにいるすべての万民、あるいは天地に存在するすべての存在物はこちらへ行きなさい」と自信をもって命令した人はいません。

皆さん、ここで永遠に生きますか、無形の愛の実体になったところで永遠に生きますか。神様が無限な創造世界を見せたいと思う時、皆さんはこの体で神様についていくことができますか。ですから霊人体が必要なのです。これは妄想ではなく、事実なのです。見えない精神の中心となる神がいるならば、その神が相対的存在を必要とするならば、人間を連れてきて自分が創造した永遠なそのすべての理想圏を見せてあげたいし、与えたいことでしょう。

一つしかない服を着たならば、それを誰かがはがそうとすると、死んでも脱がないようにするのです。春夏秋冬の季節の服をきちん

としておいて、今は春なのに冬服を着ていたならば「これは冬服だ、脱ぎなさい」、夏に春の服を着ている人には夏服を持っていってあげて「脱ぎなさい」と言わなければなりません。そのようなことを知らなかったというのです。人間の死の問題も同じだというのです。代替することができる、より価値のあるものが何かを知らなかったというのです。

天は人間的な希望を中心として生きている地上の人間をして、新しい希望をもって死の峠も越えることができ、永遠の世界を欽慕しながら暮らせるようにするために無限に心を砕かれたのです。それゆえに信仰生活をする人々は、地上の希望を抱いて生きるのではなく、死までも越えることができる希望を抱いて、永遠なる希望の世界を夢見て生活しなければならないということを教えてきました。

皆さんは、すべて霊界に行かなければなりません。それが一つの国ですか、二つの国ですか。一つの世界です。それでは、その世界で生活する内容とは何でしょうか。それを考えてみましたか。水の世界の魚は水の世界を離れては生きられないのです。水が絶対的な生命です。河川水に暮らす魚が河川水にだけにいては駄目です。海水にも行ったり来たりしながら生きなければならないのです。

なぜそうあるべきですか。淡水の魚は海水と接するその水を味わうことなしに繁殖することができません。それを知らなければなりません。海に暮らすものは必ず淡水に来てその水を味わってこそ繁殖するようになっています。二つの世界に通じなければならないのです。心と体もそのようになるのと同様に通じなければなりません。

死の道は、友もいない道です。愛する父母もいない道であり、愛する兄弟もいない道であり、愛する夫婦、愛する子女もいない道です。ただひたすら一人で行かなければならない道です。行ってみることもできず、行けば戻ってくることができない道、一度行けば永遠に帰ってくることのできない道ですが、この道を行くようになる時に、皆さんはどのような心をもって行くのでしょうか。皆さんが死に逢着する瞬間、その死を越えて立つことができる希望がないとするならば、そこでおしまいです。

韓国語の中にどういう言葉があるでしょうか。年を取って死ねば、「帰られた」と言います。おじいさん、おばあさんがなぜいらっしゃらないのかと尋ねると、「帰られた」と言うでしょう。どこへ帰ったのでしょうか。霊界へ帰ったのです。

本来、無形の神様から出発したがゆえに、本然の故郷は無形の世界です。無形の世界から有形の世界を経て地上で繁盛して暮らして、その次には再び無形の世界へ帰っていくのです。そのように帰るのです。無形の父から出発し、有形の父の体を借りて生まれて暮らして、有形世界の体を脱いで本然の形態へ帰ることが、霊界に行くということです。

人間の男性、女性は、すべて五官をもっています。その中で頭に四官があります。目、鼻、口、耳、手、これで五官ですね。ここで一番重要なものは頭にあります。この頭にある四官というものは、神様を中心とした霊界を象徴します。肉体とは別個の世界でしょう。その頭は思いのままに回ります。それはなぜ回るのかといえば、四方を見るために、四方

を聞くために、四方のにおいをかぐために、四方に向かって話すためにです。それゆえに、もし頭が回らなければどのようになりますか。とんでもなく不便だというのです。

この地上に生きている人間は、第三世界である本然の世界に帰らなければならないために、愛の世界に行って暮らすことのできる私になるため、愛の世界において呼吸器官のようなものを準備しなければなりません。この肉身を破裂させて出ていくのです。赤ん坊がみな、赤ん坊の家を破裂させ、破壊しておなかから出てくるのと同じです。それで、産みの苦痛を受けるでしょう。同じように第二の産みの苦痛が死です。

肉身が生きている間には何を準備しなければならないのでしょうか。水の中で空気とすべてのものに合わせることができる呼吸器官を準備したように、この肉身の世の中で準備することは、霊界に行き愛の器官を中心として呼吸できる準備をしなければならないというのです。そうして、体をすべて破裂させて出ていくようになれば、愛の器官を中心として呼吸し、制限的環境に生きてきたことを越えて、無制限に自由奔放な人間として生きなければならないというのです。

私も神様に似てみたいし、神様も私が神様の息子、娘であるならば似るようにしてみたいという観念をもつことは必然的なのです。ですから、私は神様に似てみたいし、神様は私を連れていきたいということを可能にする道を模索するはずです。それで、人は再び神様と似ることができる体をつけて生まれるべきだという結論が出てくるのです。そのように生まれる日を神様も待ち焦がれるはずであり、人間も待ち焦がれるはずです。

そのような人として生まれる日、そのような体で生まれる日、それは必要ですか、必要ないですか。これが、死だというのです。それでは、人間は死を歓迎しなければならないでしょうか、歓迎してはならないでしょうか。死ぬにおいて何のために死ぬのかというときに「神様の真の愛のために死ぬ」と言うべきです。ですから、肉身を脱ぐことは無限な神様の愛の活動圏に私が同参するためであり、神様の愛の世界のためだというのです。

神様の愛の中に生まれることが死ぬことなのですが、人間世界では「ああ、死ぬ」と大騒ぎするのです。それでは、神様はそれを見てゲラゲラ笑いますか、それとも「うー」と言うでしょうか。人間世界では泣いたりわめいたりしているのを神様が見るとき、悲しむでしょうか、喜ぶでしょうか。制限された愛の圏内から無制限の愛の圏内へ突入できる喜びを迎えることができる瞬間が、第二の出生の瞬間、死の道を通過するその瞬間ではないでしょうか。

それなら神様が皆さんの肉身が死ぬ日を喜ぶでしょうか、第二の無限拡大世界の愛のために活動する息子として生まれるその時間を喜ぶでしょうか。なぜこのような話をするのでしょうか。皆さんが死の恐怖から解脱しなければ神様と関係を結ぶことができないという事実を知らなければならないからです。

神様の息子として本当に生まれる日には……。あの無限な星の中で、ダイヤモンドの星の世界があると思いますか、ないと思いますか。それを考えてみてください。ダイヤモン

ドが欲しいでしょう。「金だけでできている星はない」とは言えないのです。それはあり得ます。

私たちの父である神様が、どれほどお金持ちでしょうか。考えてみましたか。無限なこの宇宙をあっという間に往来できます。それに関心がありますか。本当に関心がありますか。そうしようとするならば、神様が「やってはいけない、やりなさい」というその法度を守ればよいのです。そうすればそれが可能であって、自分勝手にしては可能ではないということは理論的に正しいのです。皆さん、神様が「やってはいけない、やりなさい」ということを守ることができますか。「人は二重になっていて、心が主体で体は相対なので、心と体が一つになりなさい！」。これは正しいですか、間違いですか。

神様の恨とは何ですか。真の息子、娘を心情的完成者として教育できず、兄弟的心情を教育できず、夫婦の心情を教育できなかったことです。この地上において夫婦がこうでなければならないというその心情的基準で教育できず、夫婦になって母となるところにおいてはどのようにしなければならないかという教育をすることができなかったというのです。これが、人生の教本だったのに、その教本をすべて失ってしまい自分勝手に生きる人間像になってしまったので、霊界に行く時は地獄に行くのです。

地獄に行くにも、一つの所に行けないのです。地獄に行っても放浪するあらゆる群れがいるのです。これを収拾しなければならないのがアダムとエバですが、知らずに堕落したから完成がないのです。それゆえに、すべてのことを知っている神様が責任を負うのです。救援摂理を誰が主導するのかといえば、神様が主導し、復帰摂理も神様が主導しなければならず、再創造摂理も神様が主導しなければならないのです。

二) 死は三世界を連結する過程

私たち人間の一生は腹中時代十カ月、肉身時代百年、そして霊魂時代の千年万年を永遠に生きていきます。私たちの顔を見れば口、鼻、目、三段階になっていますが、これは人間が生きていく三時代の姿を見せてくれているのです。口は物質の世界である腹中時代を象徴し、鼻は人の世界である地上時代を、目は霊界の天上時代を表しています。

皆さん、人は最初生まれる時、最も深い水の中で生まれるのです。腹中時代は水中時代です。赤ん坊が母の胎内にいる時は、水中にふわふわ浮いています。さっと考えれば、母の腹中時代には息が詰まって生きるのが難しいように感じられます。しかし赤ん坊は胎内が宇宙です。そこが水中でも、赤ん坊にはその世界が自由天地なのです。水中に生きているので当然、水を飲んだり出したりすることをしなければならないでしょう。そのために、腹中の子供たちはホースをおなかに連結して暮らすのです。

人は三世界、蘇生、長成、完成時代を経るのです。腹中での水世界、それから地上での地球星世界、その次には天上での空中世界で住みます。言い換えれば腹中水時代、地上に生まれて暮らす百年地上時代、それから飛び回る空中時代、このように三時代を経るのです。

腹中にいる時は外側の世界へ行こうとしますか、ここにくっついていようとするでしょ

うか。このくらいの穴から私が抜け出さなければならないならば「うー」と言いますか、「ああ、これはいい！」と言いますか。「そうするならば、あなたがいる家がすべて破壊されて、あなたが住んでいた所の栄養価値とすべてのものが壊れてしまい、あなたの頭も長くならなければならないし、体も伸ばさなければならないのに、それでも良いのですか」。そう言えば、その時すべて「ノー」と言いますか、「イエス」と言いますか。生まれる直前まで、母は死にそうになりながら、力を入れて子女が生まれるその時間まで「ノー、ノー、ノー」としつつ、ぐっと……。追い出すので出てくるのです。それで、一つの世界はなくなり、次の世界でまた「ふうふう」息をするのです。

この地球星が母親のおなかです。このことをはっきり知ってください。腹中時代には何によって食べて息をしますか。口で息を吸い、鼻で息を吸いますか。どこで息をしますか。食べるのもへそで食べて、息もへそで吸うでしょう。へそですべてするから食べる口も必要ないし、息を吸う鼻も必要ないのです。それでは、見ることができる五官が必要ですか、必要ではないですか。必要ないのになぜぶら下がっていますか。目があり、鼻があり、口がなぜありますか。外に出て使うためにあるのです。

腹中時代には五官を使いますか。五官が必要ないでしょう。おしっこもしないし、うんちもしないし、すべて死んだようになっています。十カ月そのようにしているということが不思議ではないですか。おしっこやうんちは真の愛より先んじることができないというのです。おしっこやうんち自体が人より先に出てくることができないのです。アダムが出てきた次にそれが始まるのであって、先になることはないのです。そのようになっているというのです。

人間を見ると腹中時代には水を飲まなくてはなりません。人間の四分の三は水です。人間の世界は空気の世界をいいます。それゆえに水中にいる時は目、耳、鼻など五官は必要ないでしょう。水で五官が必要ないから目を閉じて微動だにしないのです。腹中で十カ月育つとき、鼻で息を吸ってみましたか。鼻で息を吸っては死んでしまいます。五官が完全にふさがっているのです。ところが、鼻がなぜ必要ですか。次期の世界を準備するのです。

これが、順次に呼吸器に入っていくならば、このあらゆることを破壊して出てこなければならないのです。ただこれも切ってしまわなければなりませんし、母の子宮や水の家すべてを破壊して出てこなければなりません。それはどういうことかといえば、子宮と水の袋、その環境がすべて破壊されるのです。死ぬのです。水中世界に破壊と終末を告げて、新しい出発が始まるのと同じです。

へそに緒がついているのを再び使わなければなりませんか、切って捨てなければなりませんか。切って捨てなければなりません。「その人の命綱であるのに、人と人との命綱を切ってしまうのですか」と言うかもしれません。それを見る時に赤ん坊は「死ぬ」と「わーわー」泣くけれど、神様が見る時は笑いますか、泣きますか。全く同じです。

空気の世の中で今まで、霊人体が体にくっついて胎児のように肉身を吸い取っていまし

たが、肉身がすべて老いてしまったのでけ飛ばして出ていこうとしているのに、肉身が「ああ死にたくない。死にたくない！」と言うとき、神様が見ればほほえみますか、「ああ」と同情しますか、「この娘め、こいつめ」と言うでしょうか。赤ん坊が生まれて父母の前に愛の対象になり、父母と愛の友になることができるのが地上世界です。そして、父母と愛を共にすることができる地上世界に生まれるのと同じように、霊的無限な世界に通じることができる父母であられる永遠な神様と愛を交わすことができる霊界に生まれなければならないのです。

地上で愛を呼吸する人は死んでいるのではなく、生きているのです。腹中で呼吸をするときは、未来の空気世界でのパイプを装置して生きています。生きていますが、へその緒に連結された胎を破壊させて死んで出てくるようになる時には、新しい次元、高い次元によってどれほど変化しますか。高い次元で供給を受けるのです。空気の供給を受けて出てくるというのです。ここで出てきてからはまた何によって発展させますか。愛です。愛の要素を受けるのです。御飯だけ食べていてはいけません！　御飯を食べることは、死に向かって進んでいるのです。水を飲んでこのように暮らすことは、すべて死に向かって進んでいるのです。ここで何のために、この期間に何を満たせばよいのですか。この期間には、新しい愛の人格を形成しなくてはなりません！

腹中から空気世界へ連結させて出てくる時は、腹中世界で生きたへその緒と水の袋をすべて破壊させて出てこなければなりません。その器官、腹中のへその緒と胎は破壊されて死ぬのです。死と同時に何が出てきますか。この宇宙、地球星の母のところに現れるのです。このようにして、口によって元素の補給を受けて生きているのです。

せみを知っていますね。せみが飛ぶ前の幼虫のとき、「私は幼虫として生きるぞ。ああ殻を脱ぐのは嫌だ！」と言っても、脱いでしまえば、パタパタと飛ぶようになるのです。幼虫からせみになるときに、それを脱ぎたいですか。「ああ、陸地も空気もみな嫌だ」と言うでしょうか、「いい。早く脱ぐようにしてください」と言うでしょうか。飛ぼうとは考えていないのです。とんぼも初めは幼虫になって水中で泳ぎ回っていますが、地上に上がってきて一時ははい回ります。その次には、パタパタと天下を自分の舞台として飛び回るのです。

昆虫類の中には三段階の世界を経るものが多いのです。昆虫といえば、羽のない昆虫がいないのです。大概羽があるでしょう。昆虫もこのように水で、陸地で、空中で生きるのに、万物の霊長である私たち人間が地上でだけ生きて良いですか。皆さんも「嫌だ」と言うけれど、死んで脱いでみると「ふう」と言うのです。それは嫌ですか。事実がそうなのです。うそではなく事実がそうであることを知らなければなりません。三段階の世界を経ることがそっくり同じだという事実を、皆さんは知らなければなりません。死が私たちにとって、第二の出生で、幸福になる関門だということを皆さんは知らなければなりません。

昆虫も飛び、小鳥も飛び回ることができるのに、人が飛び回ることができないのですか。植物の種も、風が吹けば飛び回ることができ

るのです。皆さん、あのたんぽぽの種は自然に飛ぶようになっています。飛び回るようになっているのです。このように鳥も飛び、昆虫も飛び、植物の種も飛ぶのに、万物の霊長である人が飛べませんか。それなら神様を見てじっとしていられますか。「神様、みんな飛んでいるのに、私はなぜ飛ぶことができないのですか」と抗議したくないですか。神様が「まあまあ！　じっとしていなさい。あなた方も何十年か過ぎればそのようになるはずだから、それまで待ちなさい」と言う時、「ああそうですか。それならそうします」と言うのはかまわないのです。

それではその時まで何をすべきでしょうか。その世界に行って合うように、ここで訓練しなければならないのです。父母を見て愛してこそ、神様を愛せるのであり、新郎を愛してこそ、あの世に行って神様を愛することができるのです。訓練場が地上世界だというのです。それでは、死なないでそれを願うことが可能ですか。この体を脱がずに可能ですか。体を脱がなければなりませんか、脱がなくてもよいですか。

人は水の世界で一度生きてみたし、地上の世界で一度生きてみたでしょう。それでは、空中の世界で一度生きてみたいですか、生きてみたくないですか。皆さんが腹中から生まれるとき「私は陸地の世に出て口で蜂蜜も食べ、餅も食べ、御飯も食べ、牛肉も食べ、みんな食べる」と考えてみましたか。そういうことを考えてみたことがありますか。「ああ、ここから出れば死ぬ」と言いつつ、へそで息をしながら生きているのです。

そう考えると、どれほど苦しいでしょうか。窒息するほどでしょう。それでも腹中から外に出ていくのではないかと思って「ああ、出ていかなければいいのに」と言うのです。しかし「出ていかないほうがいい」と言うかもしれませんが、時になればすべて破裂してしまうのです。羊水がぱっと破裂し出ていくのに伴って外に出れば、安産になるのです。よく生まれたということです。

地上時代には、宇宙が母で、万物が母です。これが地上です。地球星が母なのです。元素を皆さんに供給してくれるでしょう。別の段階の元素を供給してくれる母なのです。母の腹中で育っている時には腹中で呼吸をするのですが、何によって呼吸しますか。へその緒で呼吸するでしょう。これが、母の体と連結されたホースなのです。よく知っておかなければなりません。しかし、第二の世界、空気の世界に連結されたことを知っています。腹中で暮らしていたのをけ飛ばして出てくれば破壊です。その時は、涙と同時に何に連結されるかといえば、息をする穴、鼻の穴によって息をするようになっている、空気の世界に連結されるのです。空気の世界に連結されて、鼻の穴が唯一の補給路となります。

水は腹中時代を象徴します。その次には上に上がっていくでしょう。鼻は空気の時代です。母の腹中から生まれて空気の時代です。その次には目の時代です。太陽の時代、太陽の光の時代です。「愛は光だ」と言います。明るくなるというでしょう。光の世界です。人生は三時代を経て暮らすというのです。とんぼも水中で暮らし、地上に来て暮らし、殻を脱いで飛び回りながら虫を捕まえて食べます。三時代を経るのです。

万物の霊長である人間も同じです。腹中時代。母の腹中から出てくる時は、自らの暮ら

していた所帯道具を抱き締めて出てきますか、すべて破壊させて切り捨てて出てきますか。一つでもつけたまま出てくれば大変なことになるのです。へその緒で食べたり息を吸ったりしていたのに、それを切って捨てれば死ぬでしょう。しかし、母の腹中から出てくる時はそれを切って捨てなければなりません。無慈悲に切って捨てなければなりません。すべてを破壊させて出てくるのです。

死ぬこととは何ですか。地上生活は、空気中で胎内にいた時のように泳ぎ回って暮らすことと同じです。空気のふろしきの中で生きています。そうではないですか。死ぬこととは何ですか。死ぬことは特別なことではなく、第三の人生として出生することです。その瞬間が死ぬ時です。そのように考えると気分が良いでしょう。

この体が今何をしなければなりませんか。腹中においてへその緒で息を吸う時と同じように空気のパイプである鼻の穴を準備し、破裂して出てきた時にへその緒に代わって息を吸うのです。それと同じように、生まれてしなければならないことは愛の体恤です。愛という空気を吸わなければなりません。父と母から愛という空気を吸い込まなくてはなりません。愛の空気の供給を受けて、すべて経ていかなくてはなりません。

一家庭に赤ん坊として生まれ、サインカーブと同じように上がっていってみな死んでいくのであり、赤ん坊として生まれ、大きくなって、その次には分解されていくのです。赤ん坊として生まれ、赤ん坊として帰っていくのです。そのようになる時は第二の腹中世界をけ飛ばして、第三の愛の呼吸器官に連結されなければならないのです。父母の愛、兄弟の愛をけ飛ばして、大宇宙の神様の本体に和する愛の世界へ入っていきます。

霊界は愛の空気です。愛の空気がぎゅっと詰まっているのです、愛の空気！　それゆえに皆さんは、今この地上世界で愛の息をすることができるパイプを装置しなければならないというのです。ですから、霊界の体験が必要で、霊的な愛を感じることができて呼吸できる人になってこそ死なないというのです。

私たちは、いつかは肉身を脱いで霊界へ行かなければなりません。ですから、この世に生まれた私たちは、死を覚悟しなければならないのです。また、善の自我を永遠な世界で第二の私として立てるためには苦労をしなければなりません。母の腹中で胎教をよく受けてこそ健康で善なる赤ん坊として生まれることができるように、この地上世界の生活も腹中での生活と同じなのです。ゆえに神様の形状を見習い、神様の心情を見習い、神様の神聖な神性を見習って成長しなければなりません。成長し、また命を懸けて愛でもって越えていかなければならないのです。

三) 死はもっと良い世界へ移ること

人間は、自分を中心として見る時は希望をもっているようですが、死の峠を越えることができる希望をもつことができずにいます。そのような希望をもてないまま消えています。これを人生のパターンだと思って死んでいくべきか、そうでなければ、死を嘲笑して越えることができる一つの希望を求めて、その希望を楽しみながら逝くのか。これが、今日地

上で生きている人間たちが考えなければならない重要な問題だと思います。

私たちは、結局どこへ行かなければなりませんか。霊界です。それはどういうことですか。死後の世界だといいますが、死後の世界ではないのです。なぜ死後の世界になり得ないのでしょうか。愛と関係している世界であるために、死後の世界ではないのです。真の愛を中心として出発したために、私が真の愛の位置に立つようになる時は、今ここが霊界です。霊界肉界、二つの世界が一つのものです。それゆえに愛が偉大だというのです。

皆さんの第一の父母は皆さんを生んでくれた父母ですが、第二の父母は地球です。皆さんは、体が大きくなるように、地からすべての要素の供給を受けます。地が体の第二の父母です。第二の父母を経て、第三の父母に入っていくことが死ぬことです。第三の父母の所に行く時は、そのまま入っていくのではありません。第三の父母の所に帰ろうと思えば、本来の父母だった神様の姿に似なければならないのです。

皆さんが「七十になっても、私はこのように逝く」ということを一度考えてみましたか。「年齢が八十になって死ぬ瞬間でも、私はこのように逝く」ということを考えてみましたか。死ぬ場においても「私はこのように歴史を明らかにして、今までこの世代にこのようなことをして、今後もこのようなことをし得る証拠物を提示する」と言うことができなければなりません。言葉だけでは駄目です。そうしてこそ彼が死んだのちに、人々が彼をつかんで涙を流して「そうだとも、そうだとも」と言うのです。そのようにさせなければなりません。そのようなことができますか、皆さん。

人生の行くべき道とは、無限であられる愛の神様を探すことです。十回でも百回でも死の峠を経たとしても、また死んだとしても絶えず探していかなければならない神様の愛、その愛を探すことが人生の最高の行くべき道です。

人が生きていくにおいては必ず達成しなければならない目的があります。その目的を中心として十年、二十年、三十年、七十年、一生の間行かなければならないのです。目的が大きければ大きいほど、内的により一層強く決意しなければなりません。そうでなくては、その目的に到達できないのです。時間という過程を通して、その目的を凌駕できる内的な決意を続けない限り、その目的を達成できないというのです。

心の終着点、すなわち欲望の終着点とはどこでしょうか。神様の愛を占領する所です。神様を占領したとしても、その中でもっと貴い愛を占領できなければ、神様は自らの神様ではありません。ですから、神様の愛を占領しなければならないのです。その愛だけ占領すれば、神様はいらっしゃらなくてもかまわないというのです。その方のものが私のものであり、私のものがその方のものになるとき、初めて内外が一つになるのです。

そのような国が上下の等級がない理想の本国となるのです。そのような位置に横たわるようになれば天下にあるすべての存在が良く見え、天下にあるすべての存在は自分自身のためにあると感じられるのです。そのような

ものが神様の愛ならば、今日人間の行くべき天上世界、すなわち天国はどのようになっているでしょうか。そこは愛によって充満している所です。

統一教会の先生はどのような位置で死ぬのでしょうか。民族と大韓民国まですべて抱いて、世界のために死ぬことでしょう。韓民族が一つになり世界のために死のうとするときは、世界と共に生きることのできる道があるので、その道を探し求めていくのです。

おじいさん、おばあさんも、千年万年後代の子孫も、霊界に行っている霊人たちも、永生へ行くその公式的路程は同じなのです。そこには「ため」に生きた人々だけがパスできる正門があり、そこを門番が守っている事実を知らなければなりません。そこにパスできる資格者をつくってあげるために先生がお願いするのだということを、よく理解してください。

四) 死は新しい次元への昇華である

堕落しなければ、人が死ぬことは幸福です。それで今日、統一教会は、死を悲しみで迎える教会になってはならないと教えるのです。それゆえに、死を「昇華式」と言います。

皆さんも肉身を脱いで死ぬことが嫌だというでしょうが、実際死んで肉身を脱いでみると、私たちは、霊人体として第二出生の幸福の関門を通過するために、さっと飛んでいくのです。私たちは、初めに母の胎内にいました。その胎が私たちを育てたふろしきです。そのふろしきの中から出てくる時、すべてけって、切ってしまって生まれるのと同じように、私たちの霊人体に対して肉身はふろしきのようなものであるために、これを切ってしまって飛んでいくのです。ですから、人間は結局、水の世界、陸地の世界、空中の光の世界を経て、永遠なる真の愛の世界で生きるようになるのです。

統一教会は、死んだのちの葬儀もそのようにしません。「昇華式なのです！」。どこかに行くと思って生きています。天下において怖いものがどこにありますか。罪悪の世界、混乱した世界において自主的な中心の形態を備えて、天地の度数を合わせて神様の愛の圏内の垂直の位置に入っていくようになります。なぜ垂直の位置に入っていくのでしょうか。その場には影がありません。垂直の位置に影がありますか。すべてのことが完成です。それからこれが回るようになるために、その回る環境全体が垂直化されます。

自らの死の一日を行くときに、私がどのように九〇度で天上に跳躍して昇華し、上がっていくかということが問題です。四五度で行っていては、そこにたどり着くことができません。ただ九〇度でのみ上がっていってこそ神様の愛の相対になれるのです。神様の愛は直短距離を通じるために、九〇度以外にはありません。垂直しかないのです。

統一教会では死んで葬儀をすることを「昇華式」と言います。死んだ人にすがりついて泣くのを見れば、死んだ霊が嘆息するというのです。「こんなに無知だから、私の行く道を綱で引っ張って行くことができないようにしている」と言うのです。そのようなことを知っているために、統一教会では「昇華」と

言うのです。高潔に飛翔するというのです。愛の力をもって押してあげなければなりません。引っ張らず、押してあげなければなりません。昇華式とは何ですか。変化して一段階上がっていくということです。

今日、人間が死んでいくとはどういうことかを知らなかったのです。それは悲しみではないというのです。それは次元が低い世界から次元の高い世界へ、愛の橋を通じて移動することだと思うのです。ですから統一教会は死を「昇華式」と言います。次元高く昇華するということです。それは愛でのみ可能です、愛でのみ。

神様は誰のためにいらっしゃるのでしょうか。愛の主体である神様は愛の相対を探すために、立てるためにいらっしゃるというのです。何を中心として。真の愛を中心として。真の愛は「ため」に生きて投入して忘れてしまうのです。そこに永生があるというのです。世の中万事がそうです。私たちのような人はそうです。永生問題を知っているために、絞首台が問題ではありません。怖いものがありません。

それゆえに統一教会では死を「昇華」と言って、その式を「昇華式」と言うのです。統一教会員たちは、霊界に行っている妻と話しながら生きているのです。今この世ではそのようなことを理解できずにいるので、あきれかえります。それは、お金を払って買うことができますか。

昇華式は、私たちの興進が行った時から生じました。その時、成立したものなのです。病院で酸素マスクをしているのを先生が外さなければならなかったのです。霊界へ行く道をすべて整理しておかなければなりません。そうすれば、堕落圏がありません。それゆえに興進がこの前来て役事しながらも、「お父様に対する負債は返す道がない」という話をしたのです。真の父母の家庭で育った青少年として、霊界に行ったのは初めてです。興進が行くことにより、霊界の再臨主と同じように霊界のメシヤとして行ったのです。それで、彼と一つになることによって高い所に上がっていくのです。

霊界に行くことは、悲しいことではありません。解放のラッパの音とともに天国の旗を掲げて、足どりも堂々と百戦百勝し、天下の故郷に錦を飾る旗を掲げて、民族と人類の歓声を受けて堂々と入っていくことができる還故郷の道です。悲しいことではありません。統一教会では泣きません。それを何と言うのですか。「昇華式」と言います。

ゆえに興進君が行くことによってこの死亡の垣根を、死の垣根を壊してしまうのです。それで、「昇華式」と言うのです。死は落胆や気落ちではありません。落ちるのではなく、跳躍するのです。昇華するのです。統一教会の食口たちは死に対する恐怖をもってはいけないのです。死はこのような自然循環の法度によって来るものです。もっと良い世界に移してもらうための手順なのです。

愛ですべての死亡圏に勝ったのです。「真の愛は死亡圏に勝つのである！」。これが創造原理です。それで、「愛勝日」を宣布しました。今興進君がそのように霊界に行くことによって、私たち統一家のすべての息子、娘たちが昇華式を行うようになるとき、サタン

が讒訴する何らの条件もないというのです。あの世に行く船に乗るようになっても、義人たちがすべて迎えにくるのです。そのような歴史的で大革命的な次元に連結される時間です。

「愛勝日」という言葉は何ですか。皆さんはそれを知らなければなりません。先生は興進が死んでから送り届けるまで、涙を一滴も流しませんでした。死亡圏に勝たなければならないのです。愛をもって死亡に勝ったという、このような立て札を立てなくては昇華式がなされないのです。「昇華式」という言葉は興進君から出てきたでしょう。そうでしょう。その愛勝日という、その愛勝とは何ですか。死亡に勝つことです。

他の人々と同じならばお母様も身もだえして痛哭しかねないことですが、お母様が涙を流すといけないのです。三日以内にこの式をしてあげなければならないのです。死亡に勝ったのだと宣布しなければなりません。それゆえに、統一教会では昇華式が生じたのです。死亡を越えて喜びに向かっていくのです。昇華式を経ていく人々は、霊界のすべての谷間をひゅーと越えていくのです。もちろんそうでない者たちは、行って中間にとどまっています。それを知らなければなりません。昇華式というものは、興進君から始まったのです。

統一教会で人が死ねば、昇華式をするでしょう。それは跳躍して別個の世界へ移動する瞬間です。それゆえに歓声を上げなければならないのです。死んでいく人は、霊界をよく見るのです。泣くような所へ行くのではないのです。楽しい所に移動していくのです。堕落したため、目がすべてめちゃくちゃになって分からなくなったので泣くのです。

痴呆が起こることもそうなのです。世の中で良心自体が麻痺して肉体に主管されれば、地獄の霊人体と対話しながら痴呆が起こるのです。そのような人は、善の霊人を通し天国の理想を記憶させて、順次浄化して昇華、昇天するようにしてあげなければなりません。

すべての人々は生まれて、結婚して、死ぬ時に戸籍地に申告をするでしょう。私たちもそのようにしなければならないのに、私たちの国がありません。私たちの国があれば私たちも生まれて、結婚して、昇華する時に登録をしなければなりません。あの世に行けば、皆さんはアメリカ人として入っていくはずです。「どこから来たか」、「アメリカから来た」、「天国に入りたいか」と、そこの門番が尋ねてくるのです。「どこから来たか」、「真の父母に侍っていた地上天国から来た」と言えば、天国に入っていくのに何ら問題がないのです。これは事実です。コンセプトではなく、事実なのです。

五) 死の前での姿勢

人々が死ぬ時、最初に誰を呼びますか。神様を呼びます。最も難しい立場で神様を求めることは、その個人にあっては最高の真実です。死ぬ時、本当に神様を呼んで死ぬ者には許される道が開きます。それはなぜでしょうか。死の道理がそのようになっているためです。その原則に近い立場で、その原則だけつかんで死ぬようになれば、回生できる道が開かれるのです。

それゆえに、すべての人々が死ぬ立場に行くと「ああ神様」と神様を求めるというのです。これは教訓中の真実の教訓です。人が死ぬ時は、それでも正しい言葉を残して死ぬの

が普通でしょう。そのようなことを見る時、誰が教えたのか分かりませんが、よく教えたものです。それは正しい言葉の中の正しい言葉です。

死ぬ時も四位基台を備えなければなりません。四位基台を備えることができずに死ぬ人は、死への道も正しく行くことができません。それゆえに死んだのちも、霊魂が行ったり来たりするのです。それでは、このような原則を知っている皆さんは、死ぬ時には誰をつかんで死にますか。神様、その次には真の父母です。生まれる時もその方を通して生まれて、死ぬ時もその方を通して死んでこそ、霊界でも永遠に共に暮らすのです。その方を通して出て、その方を通して結末をつけるのです。すべてこの原則のもとで生きていくことが孝の道理であり、忠の道理なのです。このような孝と忠の道理を果たした人が、人生行路において果たすべき責任を全うしていく人だという結論が出てくるのです。生き方はこのようにしなければならないのです。

皆さんが死ぬ時、何を中心として死にますか。愛をすべて忘れてしまって死にますか、しっかり抱きかかえて死にますか。愛の中でも誰の愛をつかんで死にますか。父母の愛を先につかまなければなりません。それから夫婦の愛と子女の愛をつかまなければならないのです。死ぬことも四位基台の原則に符合しなければならないのです。

今後、皆さんの子女にどういう遺言を残すべきかというのです。どういう遺言をするのですか。父母がしていないのに子女に「しなさい」と言えますか。そのような父母は、子女を利用しようと思っている父母です。ですから、皆さんが先に実践してから、死ぬ前に息子、娘に「私はこのように恥ずべきことがないように生きたから、お前たちもこのように生きろ」と遺言をすれば、その遺言は神様が永遠に守ってくれるのです。皆さんは死ぬ時に、後孫にそのように遺言する自信がありますか。これは深刻な問題です。

普遍的に人は歴史をおいて、永生を中心として十年、百年だけではなく千年万年、億千万年を考えるようになるのです。人が死ねば動物と同じなのに、それを残してどうするのですか。

近ごろは宗教を信じず神様を知らない人も「ああ、名誉を残さなければならない」と言っていますが、その名誉を残してどうするのですか。アメリカの愛国者になって記念館に入ったとしても、アメリカが滅びる時は記念館がすべて壊れるのにです。知っているのはアメリカ国民ぐらいです。名前を残してどうするのですか。ですから滅びまた興隆する歴史時代にいくら残したところで、「良い」と言っていたものも悪く取り扱われるのです。

しかし、すべての主権者は百年も生きることができずにみな死に、国も何百年、何千年も経たないうちに滅びますが、永遠に死にもせず滅びない方がいるならばどうでしょう。そのような方がいるならば、名前、名誉を残したことをその方の前にすべて任せて依託したいものなのです。皆さん、そのように考えてみませんでしたか。

天国を中心として死ななければなりません。天国は世界のどの国よりも大きいでしょう。天上天下に一つしかない天国で死ぬのです。

それでは、どこで死ぬのでしょうか。死ぬにも場所があるのです。これは、韓国的なつまらないことではいけません。韓国的にいくら死んでも駄目だというのです。最高の位置、天上天下を通過した神様の心情の国を中心とした最高の位置で死ななければなりません。天国の真ん中で死ななければならないのです。その天国が最も良いのです。それでは、世界がすべて反対するとき、どのようにしますか。逃げればいいですか。違います。平然と耐えて、天下がすべて旗を掲げて歓迎する立場で死ななければならないのです。

神様のみ旨を信奉して、神様のみ旨を立ててきた数多くの人々はどのような人々だったのかといえば、死の道の前で後退した者たちではなく、死をあざ笑い、死を堂々と越えた人々でした。そのような人々が天の道を立ててきたという事実を、私たちは歴史を通じてよく知っています。

皆さんは各自が死に逢着したとしても、これを越えることができる希望を抱かなければなりません。そして、この道を越えていけば、私は天の前に堂々と立つようになるはずだという希望と、心で憧憬した世界、その本郷に向けて喜んで走ることができなければなりません。神様の理想世界を願う心が切実であってこそ死に勝つことができる存在になる、ということを皆さんは悟らなければならないのです。

天の希望を抱いて暮らす人は、どのような人でしょうか。人間が悲しむ死の峠も、喜びによって越えることができる人です。そのような人が天の希望を抱いて暮らす人だということを知らなければなりません。それゆえに皆さんは、死を前にして世の中万事を恨んで嘆息する人にならず、喜んで天の前に立って自らの死の価値を誇ることができる人にならなければならないのです。

天はこのような希望の息子、娘を探していらっしゃるという事実を私たちは知らなければなりません。このような立場に立って天の喜びを感じた人がいるとするなら、彼は神様が愛すまいとしても愛さざるを得ないのです。そのような立場で天に対して泣き叫ぶ群れがあるとするなら、天はその泣き叫ぶことにこたえまいとしても、こたえざるを得ないのです。

み旨のために死のうとする人は生き、生きようとする人は死ぬというのです。これはどういう話ですか。み旨のために死ぬべき立場では死ななければならないというのです。それでは、死ねばどうなるでしょうか。死ぬ前には私のものですが、死んだのちには神様のものになります。それは、私たちが堕落した血統を受けたからです。ですから、死ぬ前までは、私たちの生命すべてはサタン側の因縁から抜け出すことができないのです。しかし、死んだのちには神様と因縁が結ばれるのです。

生命と死を見てみるとき、どちらが強いですか。死より生命がもっと強いですか。生命より死がもっと強いですか。サタン世界では、生命より死がもっと強いのです。したがって、み旨を知ったのちには、死ぬべき立場で死ぬことを嫌がれば駄目なのです。

劉孝元協会長がこの世を去る時、「先生に会って今までこのようにやってきたが、終わりをどのように結ぶのか」と私が尋ねたところ、劉協会長は「永遠に変わらない」という言葉を残して逝きました。そうでなければな

らないのです。サタン世界はいずれ死ななければならないのです。死ぬことなしに復活はできないのです。一つの時代を過ごさなければ、他の時代を迎えられないのです。

聖書でいう死とはどういうことですか。神様が永遠にもつことができる生命を殺せというのではありません。サタン世界の堕落した血統を受け継いだ生命を殺せということです。ですからみ旨のために死のうとする人は生きるというのです。この言葉は逆説のようですが、堕落と復帰の内容を中心として見るとき、そのようにしなければ復帰ができないのです。これは復帰の正常な論法です。それゆえに、生命を差し出すことができるかということが最も大きい問題です。先生がこの道を出発する時は、どうだったでしょうか。私は、生命を差し出す覚悟ができているかを考えました。

私の生涯に何をするのでしょうか。愛の墓を残していこうというのです。これが結論なのです。「愛の墓を残していこう！」。愛の墓の中で生きれば恨がないというのです。墓のような、いくらうんざりするような所で生きても、愛の中で生きれば恨がないというのです。「私たちは生きながら愛の墓を残していこう！」。そうすれば、人生は永遠において成功するのです。

そのように皆さんが生きて死ぬ時は、神様が祝福してくれるでしょうし、霊界では神様が息子、娘を連れて歓迎に出てくることでしょう。その時には、指輪をはめることができなかった手ならば天国のダイヤモンドをはめてくれるでしょうし、服を着られなかったとすれば天国の皇族たちが着る最高の服を着せてくれることでしょう。私の一生は何を残すのですか。愛の墓です。そのように理解して、それを忘れないでください。さあ、一度そのように生きてみるという人は手を挙げてみましょう。みんな挙げましたね。神様の祝福が皆さんと共にあることでしょう。

六) 祝福によって永生の道が開かれる

① 最も重要なことは永生問題

人は誰でも、自分なりの生の道を願って生活をしています。「生活」といえば一日一日暮らすことをいい、「生涯」といえば一生の生、一生を通して暮らすことをいうのです。さらに宗教をもった人々は、「永生」という言葉を使っています。永生とは一生ではないのであり、永遠な生活を送ることです。永生するためには、生涯路程をその永生にどのように連結させるかということが重要であり、それをすることが生涯の責任です。

皆さんは、どのくらい生きると思いますか。みんな「七十、八十までは生きる」と考えているでしょう。その前に死ぬとは考えませんか。皆さんは欲張りですね。私が一生を生きていくのに、八十で死ぬとか百歳になって死ぬはずだと絶対的に信じるとしても、あす死ぬかきょう死ぬか分からないのです。御飯を食べている途中で死ぬかもしれません。今夜、帰ってきて履き物を脱いで、眠っている途中で死ぬかもしれません。

そうです、皆さんの考えでは「ああ、私は若いのでこれから少なくとも四十年、五十年は生きる」と、そのような欲をみんなもっているでしょう。神様に保証を受けていますか。皆さんはできるだけ短く、一年以内に死ぬと思いなさい。この短い期間に準備をすべてしなければなりません。この観念をもって生き

なさい。できるだけ短く計画するほど幸せだというのです。短く計画を立てるほど損害を見ないのです。その期間に真実に準備するその内容が、自らの永遠の生命の家を建てるのです。

夜に寝床に入る時、脱いでおいた履き物を翌朝再び履く自信があるのですか。いくら忙しいといっても、世の中に永生の問題以上に重要なことはありません。離れていく人々がいることは、この世で永生問題を決定づけるという深刻な感じが彼らにないためです。

信仰の道とは今生きている人生、肉身生活の準備ではなく、永遠な世界の生活のための準備であるに違いないという信念だけもつようになるならば、それはほっておいてもかまわないのです。人は時が過ぎていけばいくほど、四十を越え五十を越えるほど、死ぬ日が近づいてくるために永生概念が深刻化するというのです。年を取るほどますます深刻化するというのです。

愛というのは年を取るほど希薄になりますが、永生概念だけ入れると、年を取るほどますます深刻化するのです。それゆえに宗教理念だけが今後世界を主管できるのです。邪悪な環境、混乱した変化がどれほど頻繁に起こっていますか。頻繁に変わる環境を貫き越えて、いかなるところで悲喜劇がぶつかってきても、永生概念だけ徹底すれば、すべてのことが問題にならないのです。

神様は人をどのような存在として造ったのでしょうか。神様の絶対唯一の価値をもつことができる愛の対象者として造ったというのです。これは驚くべき事実です。このごろ、人間一人の生命の価値がどのくらいになりますか。いくらになりますか。そのような無価値な人間ではないというのです。神様の前では宇宙を与えても取り替えることができない高貴な価値、愛の相対圏を備えて男性を造り女性を造ったという驚くべき事実、それはすてきでしょう。

私たち人間は、神様が造られた創造的な傑作品として神様に似て生まれたというのです。神様が永遠であられるので、私たちも永遠な性稟をもたなければならないために、私たちの心は老いないというのです。それゆえに、人は永生しなければならない、永生してこそその傑作品の存在的価値をもつことができるというのです。

人々は誰彼を問わず最高を願っています。人間が最高の位置に行くようになれば、神様は私のものであり、また私は神様のものなのです。そして、そのようになれば私は神様の息子になって、神様御自身にもなるので、宇宙は誰のものになるのですか。神様が最も愛して、最も貴く思う物があるならば、それを一日、あるいは十年や百年ぐらい共に過ごしたのちにほうり投げるようにつくったでしょうか、永遠に共にいるようにつくったでしょうか。永遠に共にいるようにつくられたのです。人も同じです。人が生まれて死ねば、それまでとなるのがいいですか、永生しなければなりませんか。永生しなければならないのです。なぜでしょうか。絶対者、神様が絶対的な愛を中心として喜ぶことができる対象であるためです。

神様が永生なさる絶対者ならば、その方が愛することのできる対象も永生しなければなりません。それで、人々は古くから永生することを願うのです。これをはっきり知らなければなりません。それゆえに、絶対者である神様は永生する価値をもった愛する息子、娘を求めざるを得ないというのです。

愛すれば愛するほど共にいたいのです。愛する妻が死ねば、その妻のハンカチを持って独りで生きた人もいます。ネルーのような人は、自分の妻が若くて死んだのに、その妻がバラを好んだからといって一生の間バラの花をつけて行き来しながら過ごしたのです。それなら神様が一つしかない限りなく貴い息子、娘たちを造る時、百年くらい生き、その次に滅びるように造られたでしょうか。それゆえに、人は永生することが原則です。

人は愛で生まれ、愛で大きくなり、愛で生きて、愛で死にます。ところが、そのままなくなるのではないのです。神様、主体であられるその方が永遠、不変、唯一だから、その前に対象的愛の位置に立つようになる時は永生するのです。永生という理論がここから生じるのです。生命から始まるのではないのです。

愛のゆえに人間を造ったとするならば、永遠であられる神様、絶対的な神様、永生する神様であるために愛に一致した人間自体は永生を備えている、ということは自然的な論理です。それゆえに永生しようとするなら、その真の愛圏内に生きなければなりません。

「私たちは、永遠であり得る！　永生を願う！」。永生を願う時に変わらないのは何ですか。愛です！　このようになるのです。ほかのものはみな変わります。環境的に変わるのです。それでは、愛はなぜ変わらないのでしょうか。愛は、すべての生命力の中心であるがゆえに変わらないのです。愛がなぜ変わらないのでしょうか。愛は理想的な要件の中心の位置を占めるからです。中心は、その周囲がすべてなくなる前にはなくならないというのです。愛は宇宙の中心になっているために愛と一つになることによって、その愛は神様を中心とした愛と一致しているために、神様がいらっしゃる限り残っているというのです。

永生、私は永生する人です。それから、真の愛を実践する人です。永生と真の愛を私はここで実践する人だというのです。ですから、私がここでしているすべての仕事、工場で仕事をして何かをするということが、永生を延長させることができる材料だというのです。「永生を訓練して永生を育てる、このような訓練材料を生産することが、今私がしている仕事だ」と考えなさいというのです。皆さんに永生と真の愛は、いつも必要なのです。永遠に必要なのです。

自分の体と心の完成とは、真の愛に属することにより根本的に可能になっています。無限の根本、原因から過程、それから理想の結実を結ぶのは愛しかありません。真の愛しかないのです。真の愛によって、真の愛を中心として神様も永存しています。神様が永存するのは何を中心として永存しますか。永生は愛によって連結されるのです。それで、永生の環境をなすには愛の環境を中心として生活しなければならないのです。愛の実体圏をも

つには、愛を中心として実体的な体恤をしなければならないのです。

「どのように永生するか」と尋ねれば、皆さんはどのように答えますか。イエス様を信じれば永生しますか。信じれば救われますか。とんでもないというのです。愛によってのみ救いを受けるのです。神様の創造原則の本質的原則から見るときに、真の人だけが神様の愛の同伴者であるので、真の愛をもてば永遠に生きるようになっています。その愛の圏内に入っていれば、霊界や地上で生きるときに、自分がどこに行って生きるべきか、すべて見ながら生きるのです。

② 愛から永生概念が出てくる

神様の性稟がどういうものか、漠然としているというのです。神様は絶対的です、唯一、永遠、不変なのです。それは否定する道理がないのです。そのような愛をもった人は、絶対的な幸福者であり、唯一的な幸福者であり、永遠的な幸福者であり、不変的な幸福者です。そこに初めて永遠な自由があり、絶対的な自由があり、不変の自由、唯一の自由があるのです。そこで初めて幸福も、絶対、唯一、不変、永遠なものがあるというのです。そこに連結されてこそ、永生は自動的な結論だ、となるのです。

愛をもてば、食べても食べなくてもかまわないというのです。愛する人同士であれば寝ても疲れないし、食べなくても腹が減らないというのです。愛する人同士は、会って時空を克服するのです。神様もそのような愛する相対が来る時は、夜になれば寝なければならないですか。愛する相対が現れることにより、夜を克服できるというのです。ここから永生概念が出てくるのです。永遠な愛の力が続く限り永生できるのです。すべてのものを克服して愛化できるために、喜びの永生が連結されるのです。

神様は絶対的な愛であるというとき、その愛の前に絶対的な相対になって一つになるときは、神様が永存する限り人間も永生するという論理が理論的に決定されるのです。それを知らなかったのです。私たち人間が神様の前に絶対的に必要な、対象的な存在になったということを知らなかったのです。そうでなければ、神様は一人で生きなければならないという論理が成立します。それは違うというのです。

絶対的な価値の基準は神様です。絶対愛を中心として神様と絶対愛を探していく人は、相対主権を絶対否定できません。神様が絶対的な方であることを否定できないので、私が立てられた位置を絶対否定できないというのです。絶対安着が生じるのです。ですから神様の愛は永遠であり、神様は永遠な方なので、そのような愛の関係を結ぶことによって永生が論理的な、理論的な相対圏として着地できるのです。それゆえに、真の愛をもった人は地上世界から天上世界まで永生するというのです。この理論を否定できません。堕落した世界には真の愛の関係がないから、地獄へ行くのです。

愛は永遠性をもっています。離れることを嫌います。真の愛は永遠な愛であるので、永遠に離れたくないというのです。それゆえに、真の愛に永生があるのです。別に離れるとこ

ろには永生がないのです。それゆえに愛は偉大だというのです。愛は不変で、永遠なものだというのです。真の愛を中心として血統関係を結ぶとき、人間は永生するようになっています。神様は変わらない愛の主体ですが、その主体と一つになったので、神様が変わらず永遠であるように、その愛と一つになり一体なったその対象も不変で永遠だということは理論的です。

父母が子女のために無限に投入して犠牲になれば、真の愛が背後にある限り子女はその真の愛に無限に感謝するようになるのであり、父母は大きい喜びによってその犠牲の跡を埋めるのです。このように犠牲的な真の愛の力を授け受けする作用を発展させて、真の家庭で、そして真の世界で永遠な喜びと平和の関係を結ばせます。このようなところに永生の理想世界が顕現するのです。

この宇宙は、小さなところから大きくなってきました。そして、相対をもらって無限運動をすることで生成されてきたというのです。この空間に存在する慣性により、無限に運動してきたのです。言い換えれば、その相対的基準を中心として、この太陽系であれば太陽系において備えてぴったりと成熟した立場に立ち、無限運動をするというのです。

これと同じように、アダムとエバも愛を中心として完全に「ため」に生きる愛で一つになれば、無限運動をすることによって永遠、永生が始まるのです。直線には永遠がありません。永生圏がありません。回転するところに永遠が生じます。それゆえに、回転しながらだんだん大きくなっていくのが歴史発展の現象です。その中心は一つです。

宇宙の大原則の起源と和合できれば、永存できるのであり、そうでないものは永滅するのです。神様が永存するので、その対象、「ため」にあり得る対象は永存するのです。それは理論的であり、永生論理は自動的な結論です。明らかでしょう。

「私」という存在は、神様の愛の対象として造られました。絶対的神様の、主体的神様の対象の位置が正に私だというのです。神様の愛の相対だというのです。神様が自分自身よりもっと貴く思うものが、真の愛の概念です。神様は絶対的で永遠であられる生命の中心であり、その神様の理想はもっと永遠なものであって、その理想の中心が正に真の愛の理想です。その愛の相対が私です。そのような永遠な立場にどのように行きますか。「永遠のパートナーの立場がどれほど貴い立場ですか！」。それは主体と対象が一つになるのです。どの位置にでも同参でき、どこへ行こうがついて行くことができます。全財産をすべて相続することができます。神様の永生の位置、その心情までもすべて相続できるのです。

神様の愛の心、神様の被造万物と共にあるその心、神様が皆の心にとどまりたいという心まで、すべて相続できるのです。ですからどれほど貴いでしょうか。その高貴な価値を発見したので、どれほどうれしいことでしょう。どんなものとも取り替えることができない崇高で高貴な位置です。驚くべき恩賜なのです。

大気が一〇〇パーセント絶対低気圧圏になれば高気圧圏が生じて、自動的に循環運動が起こるのです。神様は真の知恵の王です。な

ぜ投入して忘れてしまわなければならないのでしょうか。自動的に循環原理を通じて永遠の回転が始まるために、永生論理が論理的に設定されるというのです。投入して投入して、また投入するところで永生の論理が生まれるのです。「ため」に生きるところでは滅びません。小さなものから大きいものに移りながら、その次にはどこへ行くかといえば、中心へ入っていくのです。

神様が絶対的な愛のパートナーを求めるとすれば、誰を連れてきて立てるかというと、それは間違いなく人間だと結論づけることができます。それゆえに「万物之衆、唯人最貴（注：あらゆる万物の中で、人間が最も貴いの意）」という言葉が出てきたのです。これは、何ですか。創造主の永遠の愛のパートナー、創造主の愛のパートナーになることができるという論理的結論を出すようになるとき、その愛と一つになった愛のパートナーは永生するという論理が生まれるようになるのです。

永生というものは自動的な産物です。永遠である永生は、ここから生じるのです。愛の関係を中心として永生論理をどのように立てるかという問題は、宗教では限りなく貴重な話です。男性に永生があり、女性に永生があるのではないのです。神様に永生があるのではありません。神様の愛に永生があるという結論が出てくるのです。

今から神様と同じ位置に立つのです。永遠の真の愛の位置に同参したのです。外の世界のどこへ行っても、この永生概念はないのです。自分が永遠の生命によって生まれたので、死んで霊界に行ってみなさいというのです。一瞬に飛躍するのです。この制限された地球上とは次元が違います。制限された所では自由に動くことはできませんが、あの世は次元が高い世界であるゆえに、何でもすることのできる所です。時間を跳び越えるのです。愛を中心として何でも願いさえすれば、いつ、どこでも、すべて得ることができるのです。無窮無尽なのです。

永生、私は永生します。神様を中心とした真の愛が私と連結され、神様を中心とした真の生命が私と連結され、神様を中心とした真の血統が私と連結されるのです。結論がはっきりしています。私は永生する、神様のように真の愛を中心として。神様がこのように創造されたのです。皆さんもその責任分担を果たすようになれば、皆さんは成功したということです。

神様も息をするのです。愛の呼吸をしていらっしゃるのです。神様も宇宙の拍子に合わせているために、愛を中心として宇宙が永遠に続くのです。愛に永生があるというのです。ですから、皆さんがそこまで行かなければなりません。それでこそ、神様の呼吸圏内に入っていって、さっと越えていくのです。

神様の摂理が生きて地上の歴史とともに動くのは、永遠の道を築くためだ、ということがしっかりと入れば、信仰化させやすいというのです。そうでなければ着陸させることができる、地上で信仰化させることができる基盤が、あいまいになるというのです。この時代的限界性をはっきり教えてあげることによって、地上に着陸できる信仰基盤が確定されるというのです。

神様のこのような仕事を私が地上で協助するので、神様のみ旨がなされたあの霊界が私たちの現在の実生活と関係をもつようになって、神様と共に永生できるという概念をもつことができるのです。それゆえに、この地上生活は永生する準備の生活だというのです。直結するのです。それが連結していないまま信仰生活をすることはできないのです。

③　祝福と永生

堕落人間は、血統を転換しなければなりません。これが根本的な問題です。神様と人間の関係は父子の関係ですが、このようなことすべてが未知の事実として残ったので、歴史が解けず、今まで神様の摂理を知らなかったというのです。血統転換も個人圏、家庭圏、民族圏、国家圏、世界圏、すべてしなければなりません。これは、メシヤが来なくてはならないのです。父母が出てこなければ血統が転換されないのです。このようなすべての問題に個人が責任をもたなければなりません。個人がすべて、このようなことをして越えていかなければなりません。これを知らないので、知っているメシヤが来て身代わりしてあげるのです。

皆さんは、新しい血統を受け継がなければなりません。受け継ぐために、メシヤが父として来てサタン世界に勝ったという、サタンが干渉できない超世界的である基盤で、エバに侍り蕩減復帰しなければなりません。そして、夫婦の因縁を中心とした、家庭を中心とした息子、娘を立てて、横的に接ぎ木をすることが起こらなければなりません。それで、統一教会では祝福をしてあげるのです。統一教会は違います。統一教会は、血統がどこから始まったのでしょうか。神様から始まったというのです。それゆえに、サタン世界においていくら反対してみても、反対したほうが損害賠償を支払うようになるのです。

私たち人間は血統的にサタンの血統を受けたので、それ自体としては天の前に帰れないのです。ですからメシヤは、絶対に血統復帰をしてサタンが汚した血統を造り変えなければなりません。これを転換させなければなりません。それで、メシヤは必ず来なければならないのです。メシヤが来なければ血統復帰はできないのです。血統を復帰しなければなりません。

終わりの日には、どのような時代が来るのでしょうか。同族相姦関係が起こるのです。近親相姦関係が起こります。同族も近親も同じです。なぜそのようになるのでしょうか。イエス様の父は誰ですか。ザカリヤです。キリスト教ではみんな「聖霊によって妊娠した」と言いますが、うそなのです。無精卵を知っていますか。無精卵とは何ですか。卵は卵ですが、種が入っていなかったというのです。今日、堕落した人間は無精卵です。神様とは関係がないというのです。ですから永生がありません。

真の父母は何をしなければなりませんか。サタン世界の根である誤った血統を正さなければなりません。また、誤った生命を元に戻さなければなりませんし、誤った愛の道を正しく開かなければならないのです。聖書に「生きんとする者は死に、死なんとする者は生きん」とあるのですが、そのような逆説的な

論理がなぜ出てこなければならないのですか。サタン世界は死ななければならないからです。

血統的転換は誰がするのでしょうか。それは誰もができるのではないのです。先生がこのことをするために、涙ぐましい十字架の道を歩んだということを知らなければなりません。このような基準があるので、皆さんは何の功労もなく、祝福という新しい伝統を継ぐようになりました。転換の勝利圏を立てるために、数千年に及ぶ神様の労苦と、実体を中心とした先生の苦難の生涯がありました。これを基台として立った所が、正に皆さんが立っている位置です。祝福というものは接ぎ木することであり、接ぎ木することによって血統が変わるのです。

それで、真の愛を中心とした縦的な父母と横的な父母が合徳してこそ、そこに愛の定着地、生命の起源地、血統の因縁地が交錯するのです。そこで生まれたすべての人々は、神様の愛を受けて生まれた息子、娘であり、神様の生命をもって永生できる存在になるのです。ですから、永遠な天国に皇族的継代をつなぐことができる皇族になるのです。

愛に同居すれば永生が連結されるのです。真の愛が神様が願う愛だとするならば、神様が絶対不変の神様であり、永世の神様であるので、その愛の相対者である人間も永生するという結論が出てくるのです。これは理論的な結論なのです。何も疑問の余地がありません。

皆さん、祝福される時、血統転換式をしましたね。それを「私」の生命より、もっと信じなければならないのです。統一教会の一つの礼式だとして、ただ一般宗教儀式だと思ってはいけないのです。これは死んだ人に対する、回生という薬の注射と同じです。解毒注射です、解毒注射。

血統を転換することはメシヤがするかもしれませんが、転換されるように行動することは自分自身でしなければなりません。このような基準を成さない限り、私たちは救いの道に達することはできません。それは決して容易になされるのではなく、生きるか死ぬかの境地を通過しなければならないのです。四十日断食祈祷とか、血を吐く死の境地に至ってこそ血統転換が可能です。

まずは父母を心から慕わなければなりません。私の生命の動機も父母であり、私の希望の一切も父母であり、私のすべての理想と幸福の根源も父母だという基準をもって父母に侍らなくては、救いを受けることはできないのです。皆さんは、そのように侍ってみましたか。皆さんはこれをはっきり知らなければなりません。それゆえに「私は真の父母と永遠に一つになることのできる息子、娘だ」という信念を、自身の存在意識を超越できるくらい堅くもたなければなりません。そうでなくてはならないのです。

エデンの園で結婚を間違ったことが堕落なので、今真の父母が正しく結婚させてあげることによって、再びひっくり返すのです。偽りの父母が犯したことを真の父母が清算することで、地獄を撤廃し、数百、数千億の霊界の先祖まで祝福結婚させてあげることが起きるのです。真の愛を中心とした地上の後孫の家庭基盤を通し、霊界の先祖と地上の子孫が

縦的に一つになるだけでなく、このような家庭基盤を起点にして東洋と西洋がお互いに連結されます。

皆さんは先生をどれだけ愛さなければならないのでしょうか。根本問題に帰っていくのです。サタン世界の愛の痕跡がある、その愛が染まった立場で愛しては駄目です。それ以上でなければなりません。それは何ですか。皆さんがサタン世界で生まれた父、母、妻子、その誰よりももっと愛さなければなりません。

それで、聖書では「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」（マタイ一〇・三七）と言ったのです。すべてそのような結論を下したのです。そののちには「自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない」（同一〇・三八）と言いました。「十字架を背負わなければならない」と言いました。反対に引っ張っていく力を押さえて越えていこうとするので「十字架だ」と言うのです。ここで悲痛な涙を流さなくてはなりません。

霊界に行けばそうです。そこには、影がない、永遠な朝の太陽の光があふれています。白い光があまりにも明るくて、紫色の光に変わるのです。銀の光、金の光に変わるのです。電気の光が何かというと、愛の光です。プラス電気とマイナス電気が一つになって現れるものが、電気の光です。同じように、神様の性相と形状も一つになって稲妻のように現れるのです。永遠なる真の愛の光です。それが永生の本質です。その最後の目的点に到達しなければなりません。

三　地上生活の価値

一) 地上は愛の実を収める所

地上生活が絶対に重要です。地上がどれほど重要かということを知らなければなりません。キリスト教徒たちは「死んで天国に行く」と考えますが、妄想的です。地上で完成しなければならないのです。地上生活の重要さを知らなければなりません。地上生活の重要さに覚醒しようというのです。地上生活の重要さを忘れるなというのです。いつでも、千年万年霊界に行ってその生活に反映されるのです。これはすべて種です、種。ここで種を蒔いたことが天上世界で実を収めるために、完全な種をうまく蒔かなければならないということです。「地上世界の重要さに覚醒しよう！」。もう一度覚醒しなければなりません。

地上人は体をもっていますが、すべてのことが限定された生活です。霊人たちには体がありませんが、無限の世界で活動します。また地上人は体をもっていますが、永遠に定まる所をもてません。霊人たちに体はありませんが、永遠な所に落ち着いています。このように地上人と霊人との対比点を羅列すれば、無限に多いのです。

ここで地上人と霊人との一致点を調べてみましょう。地上生活や霊人たちの生活はみな半分ずつもっているだけなので、半分ずつしか成し遂げることができません。それでは、体と霊人の結実は各々どのようにしたら完全な実を結ぶことができるのでしょうか。地上生活で肉体と霊魂が分離する前に、地上での生をよく締めくくってこそ完全な実を結ぶようになります。ところが、霊魂がよく成熟で

きずに霊界に来るようになれば、問題が生じるのです。

種の結実は、すべての期間、時間圏や時空圏をすべて超越させ、圧縮させなければなりません。そこには種も存在し、根も存在し、枝も存在し、実も存在し、すべて存在するというのです。花もあって実もあるというのです。それで、そのようにして出発できる私たちにならなければならないのです。それでこそ、愛を中心として神様も私のものだということができるのです。そこには異議がないというのです。

生涯の目的とは何ですか。愛の実を結ぶことです。その愛の実が天国の倉庫に入っていくとき、神様が「私は嫌だ！　ぷうー」としなければならないですか。どこに行っても「ああ、私をこの宇宙のどこに置いても良い！」と言うことができるのが愛の実です。それを天国の秘密の倉庫に置いておいても、自分を中心として、すべての中心として立っていることができる愛の結実だと考える時、どれほど貴いかというのです。愛によって蒔いたので、愛によって刈り入れなければならないでしょう。

なぜ私が貴いのでしょうか。愛の伝統を受け継いだからです。この宇宙のすべての理想的力の核の伝統を受け継ぐことができる立場に立ったがゆえに、愛が貴いのであり、私が貴いのです。その愛によって私が生まれ連結されのであり、またそれによって拡大的な愛の実を結ぶことができるために貴いのです。それで、父母をなぜ尊敬しなければならず、父母をなぜあがめなければならないかが分かりますか。根を深くしなければならないのです。分かりますか。

神様の愛を中心とした男性、女性の心と体が、垂直線と均衡的九〇度を備えなければなりません。そのような正常な男性、女性が現れて、神様の愛を根っことした一つの生命体として東と西が互いに極となり、一度にぱっと火がついて、宇宙の本性に雷が落ちて稲妻が炸裂すれば、そこには男性、女性、神様を問わず、全体が一緒くたにくっつくようになるというのです。

それを誰が離すのですか。男性が離すことができますか。女性が離すことができますか。神様もそこから抜け出てくることができないのです。そうしておいて、人類の本性の基準である愛というものを中心として、男性、女性の心の根になって、その愛の花が咲き、実も愛によって結ばれ、循環法度を通した球形理想を通して螺旋形に発展し、世界へ前進するはずでした！　アーメン！　この話がどういう話か、みな研究してみなさい。

皆さん、生命を何によって伝授しますか。生命体ですか、血ですか。血統という言葉はありますが、生命統という言葉はないのです。愛統もありません。血統という言葉だけあるのです。血を合わせることによって生命が出てくるのです。男性、女性の血を一つにすることによって生命が一つになり、それが投入されて愛の実体である実を結ばせるのです。それで、どのようになりますか。母の血と母の生命と、父の血と父の生命がこの愛を通して実を結んだのが「私」です。ここのこの人の中に父母の血が入っていますか、入っていませんか。父母の生命が入っているのです。

父と母の愛が入っているのです。それゆえ「私」というものは、父母なしに主張することができないのです。

「私」は愛の結実ですが、その結実には千年の歴史を通じた中心の根、幹、枝、花、全体の芽を一つにしたすべてのものが入っています。ですから、その結実をもっていくようになれば歴史を運搬するのと同じです。また、それを植えれば、その歴史がどこでも継承されるのです。何によってそのようになりますか。愛を通してです。男性、女性の愛を通して、主体、対象の愛を通して、これが連結されるのです。それゆえに愛を侵犯する者は、宇宙秩序を破壊する最も放縦な者であるゆえに、地獄へ行くのです。

父子関係の愛は、母の中に息子に対する実が熟すようになり、また息子の心に母に対する愛が熟し、熟した二つの愛が現れれば、神様がこれを摘み取りたく思うのです。愛の主人は神様であるので、母の中で子女を愛するその実、子女の中で母を愛する円熟したその実を結ばせるのです。完成した結実を摘み取って神様が食べるでしょうか、愛の完成のためにそれを摘み取ろうとするでしょうか。創造主もアダムとエバを造っておいて、自分の中に父母として子女に対する実を「私」がもつと同時に、子女が父母に対する実をもつことによって、二つとも完成させることができるのです。それゆえに、神様は二つとも摘み取ってもつことができるという言葉が成立します。

私たちは、神様の愛によって生まれ、その愛によって生きながら、息子、娘を生んで愛の目的地に到達し、永遠に神様と共に生きるために神様のもとに帰るのです。すなわち私たちの一生というものは、愛によって始まり、愛によって成熟して、愛の実として摘み取られるのです。人が死ぬというのは愛の実を摘み取るということです。私たちが父母の愛を受け、夫婦の愛を分かち合い、子女を愛したがゆえに、神様の愛が内的な愛の世界に蒔かれたすべてのものを、私が一生をかけて実を結び、摘み取ってあの世に行くのです。

ですから、私たちが完全に愛で一つになれば神様に似るようになります。夫婦が一つになって、このような三段階の愛を完全に成し、霊界に行くようになれば、永遠の主体である神様の前に、永遠に相対的な神様になるのです。真の愛を中心として夫婦が死ねば、そのようになるのです。ですから、神様によって始まり、神様によって締めくくるのです。

愛の実を摘み取って倉庫に送っていたならば、天国が成され、天国の家庭と天国の国と天国の民になっていたはずですが、これが中間で腐って落ちて、すべて腐るようになったので、地獄の家庭になり、地獄の民になってしまったのです。そのようになったことを「堕落」と言います。落ちたというのです。私たちが堕落し、地獄に生きているというこの二つのことは、嫌でも認めなければなりません。愛の実を結んで天国の倉庫、天国に行かなければならないのに、堕落したがゆえに地獄の倉庫で腐っているというのです。

子女、兄弟、夫婦、父母がすべて一点に行って実が結ばれるのです。真の愛を中心として定着が始まるのです。子女の心情、兄弟の心情、夫婦の心情、父母の心情が真の愛を中

心として連結されるのです。それが焦点なのです。神様と愛で一つになることによって霊肉が完成したので、ここで父母が出てきて息子、娘を生むのです。神様が創造当時に感じたことを再び感じるようにするために、私たちに贈り物としてくれたのが息子、娘です。

霊界というのは、真の愛の実を保管する倉庫です。今まで、真の愛の実が出てきませんでした。真の愛の言葉とその結実を今初めて話すので、それが霊界にあるはずがないというのです。ですから、「私」という存在はどれほど素晴らしい存在でしょうか。

家庭の隅々に手を付けるのは男性ではなく女性です。男性は中心に立っているために何も触りませんが、女性はすべて触るのです。それはどういうことですか。地を愛し、宇宙を愛するということです。ずっと手をかければかけるほど愛がしみ込み、宇宙の津液（注：体内からしみ出る液）、核が集中するというのです。そうして、夫が絶対に愛してあげることで、女性に力を補充してあげるのです。このようになった家庭こそが、神様の天国の倉庫に入っていくことができるのです。天国の倉庫とは何ですか。神様が、よくできた実を入れておく倉庫が正に天国です。

愛も同じです。春夏秋冬があってこそ均衡が取れるようになるのです。暑いのが長くなれば寒いのも長くなります。それゆえに愛を中心として夫婦生活をするにおいて、秋もあって、夏もあって、春もあって、それから何ですか。冬もなければならないのです。それをすべて消化できてこそ、天上世界に行って顔を上げることができるのです。

お父さんがおじいさんを「お父さん」と呼ぶのは恥ずかしくなく、そのお父さんが息子、娘に「おい、何のなにがしや」と言うときに恥ずかしくなく、その息子がお父さん、おじいさんを呼ぶのは恥ずかしくないというようにならなければなりません。何を中心としてそうならなければなりませんか。お金をもうけることができなくて、おじいさんのお世話になったお父さんだからといって、責任を果たせなかったということではないのです。お金をもうけることができないからといって、知識がないからといって叱責できないのです。

なぜですか。血族とは、愛とは、生命とは、知識を通して、お金を通して、権力を通して伝授するものではないからです。何を通してですか。「愛を通して！」。その愛を通して実を結ぶのです。その愛を通して生命の実を結び、その愛を通して血統が連結されるのです。お金ではないのです。

神様はなぜ天地創造をしたのでしょうか。神様と人間と被造世界との関係を何を中心として結ぶかという問題を見てみるときに、それは知識でもなく、権力でもなく、お金でもないのです。それは愛の因縁を結ぶためだというのです。それゆえに、皆さんが生まれたのは、愛のために生まれたというのです。愛のために生まれて、愛を中心として暮らして、愛の結実の世界、愛の実の世界へ行くのです。愛の実の世界とは、どのような所ですか。そこが霊界なのです。その行く所が、愛の結実を収穫する所が霊界なのです。霊界は、真実に生きた愛の内容を中心として評価を受ける世界です。それでは、その評価する主人が誰かというと、神様というお方です。

愛の種になりなさいというのです。結論がそれです。愛の、真の愛の種になる時は、宗教を通じて歴史時代の統一圏を越えるのです。分かりますか。種には根がありますか、ありませんか。幹がありますか、ありませんか。枝がありますか、ありませんか。花がありますか、ありませんか。香りがありますか、ありませんか。蜜がありますか、ありませんか。実がありますか、ありませんか。生命がありますか、ありませんか。すべてあるのです。

それで、皆さん、種になりましたか。今見てください。気候学的に見るならば、古代は熱帯地方で、中世は温帯文明圏です。一時はシベリアの北風が……。これが、春夏秋冬を中心として一周回るその期間が六十年ないし七十年です。この期間に世界を飛び回るのです。

人間がどれほど素晴らしいかというと、愛のオーケストラを奏でている、愛がすべての脈拍を中心として宇宙をすべて生かしていくことのできる動物世界、植物世界を食べるということは、愛の結実を食べて生きるということです。実を食べて生きるということなのです。食堂で食事をするとき、パンが一つ残っていても「これが、世界的に数多くの手を経てここまで来るために、旅行手段がどれほど多く、どれほど多くの苦痛に勝ってきたのだろうか。すべての人の努力の結実、愛の結実としてつくられたものをもってきて私に進上されたので、愛の主人である私がパートナーのように思いながら食べてあげなければならない」と考えなければならないのです。

ところが、それを嫌がる人には病気がついてくるようになっています。好む人には病気が退くようになっています。どうですか。「愛に満ちた世界の実を取って食べた神仙が人間たちだった！」。どうですか。愛の実として消化して食べて生きるという概念を中心として愛し、愛する神様の本質的愛の父母の内容と一致した立場で食べて、感謝する人は病気にもならないという、これは理論的な結論です。

二) 地上は天国の民の生産地

天国の民を生産できる生産工場が地球星です。霊界で人が生まれるのではありません。地球星です。では、神様の人を生産できる工場のように造ったのが私たち人間が暮らす地球星ですが、なぜアダムとエバを分けて置いて堕落するようにして、この姿、この有様になったのかというのです。神様の縦的位置では繁殖の場がありません。

神様はなぜ人間を創造したのでしょうか。横的基盤、面積が必要だったからです。面積と球形には無数の細胞が分かれて出てくることができるために、その面積が必要なので、人間世界にアダムとエバの体を通じて天国の民を製造していくのです。その民族製造工場が私たちの夫婦生活です。そのようなことも知らずに大口をたたく、そのようなでたらめな者がどこにいますか。とんでもないあきめくらになり、大口をたたいているのです。霊界に行けばそのような世界がすぐに展開するのです。文総裁が教えてあげた話が、事実として展開するのです。

なぜアダムとエバを実体として創造したのでしょうか。霊界というものは垂直の世界です。垂直とは面積がありません。霊界に行ってからは繁殖がありません。天国というもの

は広大無辺な所です。その天国をつくっておいて天国の民を出産させるための基地がアダムとエバの家庭、後孫の家庭です。なぜ体を着たアダムとエバが必要だったのでしょうか。神様の直系の息子、娘は、垂直には一点しかないために面積はありません。生産できる基地がないのです。しかし、垂直を中心として、東西を中心として、前後を中心として分けて、球形になれば無限の宇宙になるのです。無限のスペースが生まれます。

アダムとエバは、神様がアダムの後孫の家庭を中心として天国を満たすための民を創造する工場として造ったのです。アダムは本工場で、皆さんの家庭が天国の民族をつくる分工場だというのです。分工場でも本工場でも生産品は同じなのです。価値は同じです。

霊界は膨大な天国です。故郷の地であり、本宮です。私たちが生きる本宮です。膨大な世界をつくりましたが、そこは神様の息子、娘を生む所ではないのです。垂直を中心として前後左右となり、球形をつくるようになれば無限な空間が生まれるのです。宇宙のような空間が生じるというのです。この空間が多いために莫大な民を生産し天国に移動していくのですが、この天国の民を生産するその分工場が何かというと、皆さんの家庭だというのです。

霊界では生産をしません。地上は天国の民の生産地です。なぜかというと、神様は垂直の位置では繁殖ができません。それゆえに神様は面積が必要なのです。アダムとエバを実体としてつくっておいたのは、神の国の民を繁殖するためなのです。天国の息子、娘でしょう。傍系的な次子圏になる三番目の息子と四番目の息子がすべて従うようになれば、彼らが天国の民になり、直系の主流は地上世界の王権、天上世界の王権を受け継ぐのです。

この宇宙は愛の博物館です。その博物館で王にならなければならない存在が人間です。鉱物世界も、植物世界もすべて愛の因縁を中心として繁殖しています。愛がなければ歴史が停止してしまいます。繁殖があるために歴史が続くのです。それゆえに男性、女性が結婚して息子、娘を生まなければ、霊界に行って自分の位置を見いだすことができません。

赤ん坊が生まれれば、その赤ん坊が神様のもとに行くとき、贈り物になるのです。そのような贈り物がなければ、自らの体面を立てることができないのです。皆さんが故郷に帰るとき、父母の前に行って何を誇るでしょうか。そのときに息子、娘をよく育てて誇るように、霊界に行くときも同じです。神様の前に行くときにも神様の子女、天国の民を地上で育てて連れていく、それ以上の贈り物はありません。お金と権力と知識が重要なのではありません。

地上は何かというと天国の王孫を、天国の国民を生産する生産地です。それゆえに天国は無限な世界です。したがって、地上で息子、娘をたくさん生んで愛することができる訓練をし、東西南北、前後左右、上下でもって、ありとあらゆる人を愛によって消化し、一つにすることのできる体験をした人は、あの霊界に行って活動できる範囲が広くなるのです。

天国に行くようになれば生産地がありません。神様が人を何のために造ったのですか。垂直には繁殖がありません。垂直の位置には

一点しかないのです。神様が一点、垂直の位置で愛を行うから、そこでは繁殖することができません。霊界では繁殖ができません。それゆえに横的な三六〇度が必要です。

横的世界には東西南北に繁殖できる場がいくらでもあるのです。それゆえに女性と男性が霊界に行くようになれば、一つの体になって神様に似ていくのです。のちには神様化するのです。神様に似なければならないのです。神様は二性性相だといったでしょう。二性性相は何から出発したかといえば、愛から出発しました。愛の結実によって、本然の神様に似て帰ってくるのです。ですから、神様も独りでは孤独なのです。

霊界では赤ん坊を生みますか、生みませんか。なぜ生みませんか。霊界は縦的な世界です。神様を中心として円形を成した世界です。それゆえに赤ん坊を生む必要がないのです。横的な基盤が必要なので、人間を、体を造ったのです。ところが、産児制限をなぜするのですか。それは天命によるのです。「悪なる血統をこれ以上繁殖させるな」と言うのです。考えてみてください。このごろは子供が誰の子か分からない人が多いでしょう。毎日、毎週、他の男性たちに会うのです。そんな汚いことを考えると、言葉でみな話すことができないのです。そのような人に息子や娘がいると考えてみてください。それゆえに、みな産児制限をするのです。

地上はどのような所ですか。霊界では繁殖がありません。行ってみてください。ないのです。息子、娘をもたずに行くようになれば、あの世に行っても息子、娘がいません。地上でこしらえて霊界に行ってこそ、神様の心情を中心として創造した理想を身代わりした心情圏に同参して、愛の刺激を感じて暮らすことができるのです。ですから、息子、娘をもつことができずに逝っては駄目です。また、相対を愛さずに逝っては駄目です。結婚は絶対的です。息子、娘を絶対的に出産することが原則になっています。

霊界という所は、どういう所でしょうか。霊界では出産をすることができません。霊界の国の民を生産する所は、地上です。なぜそうなのでしょうか。神様は縦的にいらっしゃる方です。縦を集めるのは一点しかないのです。面積がありません。この縦の価値が出てこようとするためには横を連結しなければならないのです。縦が必要とするのは横だというのです。横が必要とするのは縦です。これも「ため」にあるのです。縦はなぜありますか。横のためにあるのです。本来、創造理想がそうです。縦が生まれたのは横的相対のためです。このような論理の定着をもたらしてこそ、理論的体制において矛盾が起きないというのです。

霊界に行けば出産できません。出産は横的な基盤を中心としてなされるのです。ですから数多くの横的な基盤を拡大させて、数多くの氏族を中心として数多くの民族、数多くの国家を通じて膨大なその世界を満たそうとするのですが、霊界は無限な世界です。一人、二人をもってしては駄目だというのです。ですから、世界的な横的家庭基盤を拡大させて生産したその人々を地上で完成させなければなりません。神様が願われる完成した個人、完成した家庭、完成した氏族、完成した国家、完成した世界編成をなして生きてきた人々が、

全世界で神様の血族として生きてきた人々が地上で生涯を終えて還故郷する所が天国です。神様から始まったので、神様の傍らへ帰るのです。そこが霊界です。

三) あの世の所有権を地上で決定

神様が創造した目的とは何ですか。地上に生きている神様の息子、娘を残すことが神様の目的です。ですから、「私」が霊界で神様の前に行っても、地上に生きた神様の息子、娘を残す立場になるときは、「私」も神様と同じ立場に立つようになるというのです。それが聖書のみ言にある「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」という意味ではないかというのです。皆さんは何を残そうとしますか。皆さん、妻とおもしろく生きて息子、娘を生むこと以外に残るものがありません。

これまで、皆さんは統一教会に入って何をしましたか。それは深刻な問題でしょう。五十を越えるまで何年間統一教会で仕事をしましたか。その時から何人伝道しましたか。一年に何人しましたか。それは深刻な問題です。今後霊界に行って、そこでの個人所有権は何かというと、天国の民をどれほど連れて入っていったかということです。それが自分の財産、永遠な財産です。これからはそれを問いたださなければなりません。そのような時が来ました。今からは一日に何百万と伝道できる時が来るのです。統一教会にそのようなすごい内容があるのです。世の中を見てください。今死ぬとか生きるとか、人生が何だとか、空しく放浪し落ち着く所がなくて、狂ったように歩き回って途中で自殺する人がどれほど多いでしょうか。

霊界に行けばそうです。愛の懐が大きければ大きいほど、その懐に入っていこうと列をなしているのです。そういう人は、あの世で尊敬を受ける人だというのです。千人万人に囲まれて「ああ！　私はあの人と一緒に生きたい」という声を聞くようになれば、その人はそれだけ領土が大きい金持ちになるのです。ですから、ある家の門前を過ぎながら立ち寄らないというのはいけないのです。「立ち寄らなければいけない」と、「そのまま過ぎることができない」と言うほど愛の心をたくさん植えつけた人があの世の人格基準となり、愛を中心として関係しているその舞台があの世の所有権になるのです。

あの世の金持ちは特別なものではありません。それだけ愛のために投入した人が金持ちです。皆さんが福を与えてあげられる群れが、ソウルだけでも一千二百万も待っているのに、なぜ交流できないのですか。行って、「福を祈ってあげよう」と言って訪ねなければならないのです。犬がほえれば、「お前たちは福を受けることを知らない犬だ。お前たちの家にあるすべての福のふろしき包みは私が抱えて歩き回る。私は磁石だ。福をすべて引っ張ってくっつけることができる完全なプラスだ。マイナス要素はすべて切ってしまって、サタンのプラス要素だけすべて残していくが、そのプラス要素はサタン圏だけなので、地獄しか占有することができない」と、このように見るのです。福を集めに回るのです。

霊界に行って十二真珠門を経ていくためには、地上でどれだけ天の民をサタンから再び復帰して帰ってくるかということが問題です。そのためには涙と血と汗を流さなければなり

ません。再創造の真の愛の心情を中心としてサタンの父母以上、サタンの夫、妻、息子、娘以上の心情を投入して涙とともに、血と汗とともに交差するその過程をたどることなくして、天国の自分の民を所有できません。この数の比例によってあの世の栄光の位置に、神様の前に近づくすべての条件の成立が識別されるということを知らなければなりません。

今後、霊界に何をもって行くのかといえば、お金をもって行くのではありません。統一教会の名前をもって行くのでもありません。「地区長をした」と言っても通じないというのです。ですから、今後皆さんがしなければならないことは、神様が愛することができる息子、娘をどれだけたくさんつくって行くかということです。人が赤ん坊を生もうとしても、何人しか生むことができないのです。しかし、それは誰でもすることができるのです。今復帰過程で経ていくべきこととは何かというと、皆さんがサタン世界において神様が愛することのできる多くの息子、娘をつくるようになるとき、その功労は先祖と連結され、また先祖を解放させることのできる道が生まれるのです。これが、復帰路程において自分が受ける最大の贈り物です。何の話か分かりますか。贈り物なのです。

御飯を食べて生き、息子、娘に食べさせて育てたことは、あの世に行って大したことにはなりません。それゆえに天国の民を復帰しなければならないのです。それが天国では自分の所有になるのです。ですから、私たちが早く五十億人類を、この世を消化しなければなりません。早く消化すれば、霊界のすべての霊たちも再臨復活していくようになっています。今、長子圏がサタンの基盤になっているのが逆さまになり、アダムが長子圏になれば、天使長はアダムの話を聞いてついてくるようになっているのです。そうではないですか。絶対服従する立場に至れば、神様の愛とともにアダムの愛の圏内にあるために、自然に天国についていくのです。原理がそうなのです。

私が教会に入ってから何年になったということを自慢するなというのです。何人を教区長にし、何人を祝福させ、何人を先生の一族と血縁関係を結ぶようにしたかが問題です。これは深刻な問題です。ここに先生の姻戚である朴普熙、郭錠煥、劉正玉がいますが、かといってこの人たちがそれですべて終わるのではありません。その背後に何千倍になり得る氏族メシヤ圏を早く拡張して、今後の歴史時代において恥ずかしくない天国の民を立てなければならないのです。

歳月をただ何となく送るなというのです。青春時代に息子、娘を生んで育ててこそ、後代に誇り得る基盤を残せるのと同じです。また、その子女たちが立派な人になってこそ歴史に誇ることができるのです。そのような歴史に対して誇ることができる実績がなければ、自分の一家や町内ではグループに入れますが、国には仲間入りできないのです。

国に仲間入りするためには歴史の伝統に残り得る実績がなければなりません。それゆえに、どこの誰でもみな国に何かを残すことを願い、世界に何かを残すことを願い、天地に何かを残すことを願うのです。同じ道理です。ですから、自己の所有版図をどのように確定するかという問題が終生の目的だ、という観

念をはっきりもたなければなりません。それゆえにみ旨の道で、「自分が嫌ならやめる」という考えはもつことができません。

神様がしていることとは何ですか。世の中を救う仕事です。あの世に行ってみれば、霊界に行ったすべての次元の高い人々の仕事は、地上での仕事です。地上とは、どのような所ですか。天国の国民を生産する生産工場です。広大無辺な天国です。無限大です。あまりにも広いのです。人々が数億年の間に来ては逝きましたが、どこにいるか分からないのです。そのように広いのです。

一家庭で子女を百名ずつ生んでも、天国は広いので過剰生産ということがありません。あの世はいくらでも受け入れることができる世界です。ですから、産児制限をしなければなりませんか、してはなりませんか。あの世に行けば、天国の民をどれだけつくって率いてくるかということが問題になります。真の天国の息子、娘をたくさん率いてくるとき、それが自らの権益になって天上世界で表彰を受けることができる等級の等差を設定できる資料になるということを知らなければなりません。

御飯を食べることよりもっと重要なことは、天国の民を刈り入れることです。それが私たちにはうまくできなくなっているのです。考えてみてください。それが本職です。この地上に暮らす私たちの本業なのです。生涯にしなければならないことの中で、それ以上貴いことはないのです。この世で就職し、出世したりお金を集めたものは、すべて流れていくのです。あの世では、お金を集めても何の効果もないのです。あの世では物質が必要ないのです。知識が必要ないのです。学ばなくても心が先に知っているのです。一週間以内に何でも、すべて通じるのです。

皆さんが今後あの世に行き、復帰歴史をされる神様の前に、一人のアダムを取り戻すために今まで苦労した神様の前に行って何と言いますか。創世以後、今までアダム完成者を探してきたのではないですか。そして、皆さんは「原理」を知りました。これは数千数万の民族を救うことのできる武器です。今まで神様が人間に教えることができなかったため、分からない中で摂理なさる神様の切なさ、それを身代わりして地上で神様以上のことを私たちがするのです。私たちには「原理」で数百数千のアダムを教化させて連れていくことができる道があるのです。考えてみてください、これ以上にすべきことがどこにありますか。

皆さんは天国に連れていくことができる息子、娘を何人つくりましたか。皆さんがしなければならないことは、それしかないのです。いくら億千万金をもって良い生活をしてみても、すべて流れていくのです。そこには自らのすべての物質と知識と自分の生命まで、堕落した私の生命まで投入してもやらなければならないのです。それを別々に投入しなければならないのです。投入する全体が加重するに従って、その価値は比例していくのです。

天国は無限な世界ですが、そこでは愛の心情で連結され得る橋がなければならないのです。ですから、自分が伝道した人がこの世にたくさん広がっているならば、霊界に行くと、それだけ広く往来できる道が生じるのです。

すべてが自分と関係を結んで因縁を結ぼうとするのです。それは地上において思想を武装し連結させたのと同じような体制が、自分を中心として連結されるというのです。

息子、娘をたくさん育てた人は、愛の内的な核が大きいのです。天国に行く時は、これが行くのです。他のものではありません。お金や名誉や良い暮らしをしているという、それが福ではないのです。息子、娘を育てるにおいて、春夏秋冬四方を中心として自分の世界になれば、地がそこに合わせて平面的な地になるのです。東西南北に私が思いのままに与えることができる立場になれば自分が満足するようになりますが、そのようにできない時は、いつでも一方的にしかなりません。

この地上が天国の民の無限な生産地であるというのです。これをどこの誰も知りませんでした。本来の夫婦は、息子、娘を天国民族として生み、完成した人間として育てていくことが、この地上で生きていく生涯路程だというのです。

多くの息子、娘をもった父母は、多くの愛の相対を迎えたので、天国に行っても四方八方誰でも思いのままに会えます。息子、娘をたくさん生んだ女性の中で、悪い女性はいません。なぜでしょうか。自らの息子、娘をかわいがる母の心をもって、自らの息子、娘と比較していつでも考えるようになるのです。ですから、生活圏内で自動的に愛の境地に高く上がっていくことができる立場に立つのです。ですから多くの息子、娘を育てた人は、霊界の最も高い所にいます。

皆さんは氏族的メシヤとして、天国の民をたくさん繁殖してから逝かなければならないのです。それが自分の生涯において最も貴重であり、人生の希望です。それが自らの非常に貴重な所有権です。今までそのような人が霊界にいなかったというのです。それゆえに、呼びさえすれば皆さんの周辺に多くの友人たちが現れることができるように、百名以上、千名でも連れてこなければならないのです。

皆さんは地上で、子女を立派に育てて残していかなければならないのです。将来その子女たちすべてが霊界に行くのです。霊界に行って天国の国民になるのです。自分が何人を天国の国民として捧げたのかというとき、地上では苦しいことでしたが、永遠の世界ではそれが高貴な栄光の道になるのです。

四) 肉身をつけた地上生活が日ごとに記録される

皆さんは霊人体と肉体が水晶のように清く生きてこそ、のちに霊界に行って問題がないというのです。そこにいかなる汚点があっても天国に入れません。地上での生活がこのように重要だというのです。生きたそのままが霊界に行くのです。ここには誰も例外がありません。自分自身が透明に、すべて表れて見えるのです。分かりましたか。

あの世に行けば、金なにがしならば金なにがしだと、ぽん、ぽん、ぽんとボタンを押せば、あっという間に生きてきた歴史が出てくるのです。その世界は時間と空間を超越するために、これを捕らえるのは直感のように速いのです。どうにも避ける道理がないという

のです。それゆえに良心とは何かというと、永遠の世界に行くための地上生活の記録帳です。コンピューターと同じように一つ二つ、すべて入力されるというのです。間違いなく入力されるのです。

人の行動一つ、表情一つ、すべてのものがビデオ・テープに撮られるように映っているのに、霊界に行って隠すことができますか。自分の心を隠せないのと同じように隠せないのです。心よりも表面的な世界が、表れた世界が霊界です。弁解が必要ありません。弁解をすることができません。口を開けば開くほど宇宙の恥が迫るのです。それゆえにその世界へ前進できません。後退だけがあります。怖い時代が尋ねてくるのです。

良心を知っていますか、知りませんか。良心が知っている良心世界の本宮が霊界であるので、霊界のコンピューターに入力されるのです。「なにがし」と言えば、ぱたぱたっとして何代前からずーっと出てくるのです。こいつの父母が何をしたかということ、良いのか悪いのかすべて出てきます。自分が一生の間何をしたかということが、あっという間に出てくるのです。何年もかかるのではありません。瞬時に分かります。それだけ拡大された人間世界に入るのです。

霊界に行けば自らの記録が一〇〇パーセント、コンピューターに入っています。すべて現れるのです。良心は永遠の世界に展示するコンピューターのディスクのようなものです。すべて入っているのです。ボタンを押せば、子供が母に抱かれてお乳を飲む時から一生の間ずーっと何をしてきたのか、すべて心の映像によって知ることができるようになっているのです。そのような世界が、皆さんの完全な感情のために日ごとに記録しているのです。その日がいつ来るのかといえば、死ぬ時です。万能になった感情コンピューターの前に立てば、誰もうそをつくことができません。霊界の映像が、影のような世界で現れるのです。すべてが記録されているのです。

良心は、一生の間において自分がしたことを知らないことはありません。自己のすべてのことをみな知っています。このことが、そのまま天国のコンピューターに入るのです。間違いなく入るのです。霊界に行ってみてください。

優れているという人々は、浮気をし、ありとあらゆるばかげたことをするでしょう。天国に行けないのです。私が霊界に入ってひっくり返してみて、このような事実を知るようになって、「ああ！　知らなければよかったのに」と思う時が、どれほどあると思いますか。行ってみると幾重にも重なった山また山です。サタンによって失ってしまった愛のために、永遠に包囲された監獄生活をしているというのです。

皆さんの心、堕落した心もそうでしょう。自分が一生の間どのような者だったか、よく知っていますか、知りませんか。だますことはできません、みな知っているのです。良く振る舞っていても、霊界に行けば一〇〇パーセント表れるのです。悪いのが先に表れます。悪いことを先に清算して霊界に入っていくのです。そうでなくては霊界に入っていくことができません。

目をつぶっているとしても、悪いのが表れて処断を願うようになるのです。それで、それがなくなる時まで教育を受けなければなりません。修練を受けなければなりません。猛訓練を受けなければなりません。霊界では今そのような教育体制をつくるために、興進君を中心として全体的に修練しているのです。

良心は欺くことができません。皆さんは、すべてビデオ・テープと同じように記録されます。一生の間生きて、霊界に行くようになると、そこに自分の番号があります。心霊状態の光を既に知って、「誰それが来た」と言って連れてきます。連れてくれば「どのナンバーか」と言って、十八番ならば十八番をぐっと押せば、あっという間に分かります。生まれてからが、あっという間に分かるのです。やむを得ません。良心が痛哭するのです。その比例によって地獄と天国の境界線を行き来する、このようなことが連結されたということを皆さんは知らないのです。その世界が、そのままむやみに大ざっぱな計算で動いているのではありません。数理的な世界です。理論的に動くのです。科学者の王が神様だというのです。天国は自分勝手にはなっていないのです。

習慣性は永遠にそのままです。そのように難しいものなのです。しかし、地上では直すことができます。今まで習慣になったことよりも、もっと新しいことを習慣化させれば地上では清算できます。今しなければなりません。今しなければ霊界に行って問題になります。霊界に行って引っ掛かってしまうのです。

殻を脱ごうとするとき、へびも通路にしっぽを入れて逆に死ぬほどの力を尽くして、木を巻いていって血を流して脱皮するのです。逆理的な過程を経なければ順理的な過程を行くことができないという、堕落を認める人間には不回避な非原理的公式的路程となっているというのです。それが順理の立場で私の個人の心と体が一つになり、順理の立場で夫婦になり、順理の立場で父母となって生きた人間は逆理的条件に引っ掛かりません。霊界は堕落した讒訴条件に逆に引っ張られ得る、木が逆に引っ張られるのと同じです。根が引っ張られれば順理になるはずですが、枝を引っ張っていけば逆理になって、すべてのものが行けば行くほど傷を受けるのです。もっと難しい路程が……。ぴったりとそのようになったのです。

そこでは許しがありません。偽りが通じません。皆さんはビデオ・テープを見るでしょう。笑えば笑ったとおりに、その実相を見せてくれるのです。ここではビデオの時間的観念圏内を抜け出すことはできませんが、そこは超時間的世界です。カチッといえば、千年の生活がすべて現れるのです。さっとつけて見れば、誰かが「行きなさい」とも言わないのですが、自分たちが霊界でいるべき所を探していくのです。我知らず押されていくのです。押されていけば、もっといい所に行こうと思っても、どんどん押されていくのです。行ってぴたっと三角地帯にとどまるのです。その時、行って嘆息しますか。私は霊界を知っているので、このようなことをするのです。霊界を中心としてこのようになるのです。皆さんは福が多いのです。分かりましたか。

見てください。霊界の輪郭がすべて表れるので、死後の世界がどれほど現世と連結されているか、その内容を知れば、むやみに生きられないのです。地上の生活が、どれほど怖いかということを知らなければなりません。地上の生活が永遠の自らの生涯圏を左右するという事実、それを知らないので自分勝手に暮らすのです。

地上生活を本当に良くしなければならないのです。精誠を尽くし、一日に何十回も原理基準を中心として反省しながら、このようにして朝、昼、夕、二十四時間、天上の法に引っ掛からないように生きなさいと懇切にお願いするのです。

天の前に行くときに、あらゆることを清算して行くときは、良くやったことから報告するのではありません。誤ったことから報告して良くやったことを話さなければなりません。世の中は反対でしょう。「君は何をしたか」と言えば、「私はこのようにしました」と悪いことはすべて隠すのです。しかし、霊界はそうではありません。霊界は悪いことから報告しなければなりません。順序がそうです。何をしたかというとき、さっと現れます、テレビのように。悪いことから報告するのです。なぜですか。カインが先です。悪いことが先に現れて、それから良いことは何か、となります。アベルは二番目に現れて、比較して善なるもの、アベル的基準が多くなる時は再教育し、そこから霊界を教えてあげるのです。

五) 肉身で犯した罪は地上で蕩減しなければならない

地上で結ばれたことは地上で解かなければなりません。そのまま霊界に行っては大変なことになるのです。自分自身が刺激を通し、そこから抜け出てこなければなりません。そうでなければ、永遠に地獄に落ちるのです。

私たちは好むと好まざるとにかかわらず、今から死んでも蕩減の峠を越えていくべき運命的な堕落の後孫だというのです。それを否定できません。この道を越えなければならないのです。それを自分の一生において越えずに霊界に行くならば、何百万年かかるかもしれないのです。あの霊界には蕩減がありません。そこは解放された完成圏なので、愛の波で充満した所です。蕩減や再創造はありません。再生産もありません。そのような刺激がないために、一度固着すればそれで終わりです。大変なことだというのです。それで、神様はそのようなことを知っていらっしゃるので、この地上にメシヤを送られたのです。

へびは脱皮すればするほど大きくなりますか、小さくなりますか。一日に十回脱ぐことができれば、十回脱ぎなさいというのです。霊界に行っては、そのような刺激がありません。そのような装置がないのです。再び地上に尋ねてきてそれを解怨成就できるようにといくら願っても、それは不可能です。一度行けば、勝手に来ることができないのです。

あの世、霊界には愛の刺激的な要素はありますが、罪悪を取り去ることのできる蕩減的な要素がないために、数多くの歳月がかかるというのです。そのようなことを知ったので、先生は四十年間にすべて築いて片づけたのです。昼夜を忘れて過ごしてきました。一日に

夕方一食だけ食べ、あるいは朝一食だけ食べる生活が普通だったのです。そのように生きてきました。

地上で肉身があるときは大変ですが、共に抱き合い、痛哭しながら感動させることのできる道がいくらでもあるのです。しかし、霊界で肉身をもった地上の人間を感動させることはとても難しいのです。

この地上にいる生活がどれほど重要でしょうか！　一回しかないのです。瞬間ですが一回しかありません。地上生活を永生と比較すれば、これは一点にすぎません。あまりにも短い瞬間です。これは重要ではありません。私の肉身生活を越えて、霊界のために準備をしなければならないのです。常にそのような主流思想をもってセンターに立って、一切をコントロールし、一切を征服することができなければなりません。そうでなければ、皆さんは完成することができないのです。

霊界で最も嫌うことは堕落圏を中心とした風習、習慣性です。風習によって習慣性になってしまうのです。日本人は日本で生まれましたが、食べ物は何を最も好みますか。汁と御飯なのです。アメリカ人はハンバーガー、韓国人はコチュジャンとキムチ！　しかしこのようにだけ考えて生きれば、その習慣性は永遠になくすことができないのです。

それならその習慣性をどのようになくせばいいのでしょうか。自らの習慣性をなくすことがこのように難しいのに、固着した堕落性、頑固な習慣性をもって霊界に行くならば、どれほど難しい立場になるでしょうか。それを、この地上で整備しなければならないのです。霊界に行くとき、それがどれほど難しいでしょうか。ですから夫が問題ではありません。息子、娘が問題ではありません。夫と妻、息子、娘は、自らの習慣性をみな解決したのちにもたなければならないのです。

地上で結ばれたそれは、地上で解いて逝かなければなりません。霊界に行って解こうとしても、そのような刺激的な環境がないのです。反対する悪役が、善に反対する世界がありません。それが悪かった場合にはそれに反対するのではなく、悪い方向に押しやってしまうのです。それに決別させてしまうのです。

皆さんは霊界に行き、保護館での生活をしなければなりません。何千年も待たなければならないのです。祝福を受けた人々も今後……。息子、娘たちがみな「お母さん、私をなぜこのように生んだのか。なぜここに引っ張ってきたのか」と言わないと思いますか。皆さんの息子、娘たちがじっとしていると思いますか。皆さんの家庭のレベルはみな異なっています。ですから、行くにもすべて自分の級に合う所に行って、長い間とどまるのです。

そうなれば、皆さんの先祖が、息子、娘たちが、「どうしたのか。なぜそのように良くすることができなかったのか。何だそれは」と言いながら讒訴します。そうなれば、皆さんはそれに該当するだけの長い時間、そこにとどまらなければならないのです。そんなに易しくありません。ですから、地上でしなければならないのです。先生が「しなさい」と言うことを、みなしなければなりません。

皆さん、まだ真の家庭になっていないでしょう。霊界に行けばすべて別れます。霊界は

永遠に堕落せず、天国の家庭を成して生きた人々が入るようになっているのです。いずれ永遠をおいて皆さんは帰らなければなりません。地上においては七、八十年以内に解決できる問題が起こりますが、霊界に行けば永遠をおいて、何千万年かかったとしても、その解決の道は難しいのです。皆さんは地上で清算しなければなりません。地上で解決しなければならないのです。地上で解けば天で解かれ、地上で結ばれれば天で結ばれる、とあります。地上で失ってしまったので、地上で取り戻さなければならないのです。

体をたたいて三年間制裁すれば、三年ないし五年制裁するようになれば、その世界に行くものなのです。そうではないですか。肉的なことを大きくすれば、霊的なことは小さくなるのです。肉的なことをなくしてしまえば、これが高まるのです。同じです。ですから、外的なものを無視して縦的なものを重視するようになれば霊界が近づいて、本然的良心的基準に接ぎ木をすれば電気線のプラス・マイナスが、発電所の電気が通じるように爆発するというのです。それゆえに天地の変化の作用が起こるのです。そのような霊的体験がなければならないということを知らなければなりません。

聖書の「地で結べば天でも結ばれ、地で解けば天でも解かれる」という論理も、このような二重構造の一体性を知ることによって解明できるという結論が出てくるのです。きょう、私たち人間は肉身をもったこの期間が本当に、どれほど貴重なのかを知らなければなりません。神様も復活させることができ、宇宙も復活させることができ、全天下を統一させることのできる期間は、肉身をもっているこの期間しかないという結論になるのです。神様と万物を合わせても、この肉身世界と取り替えることができないのです。

なぜそうなのでしょうか。神様とこの宇宙を合わせても、肉身をもった人間がいなければ完成できないためです。それゆえ、今日私たち人間の体がどれほど貴重なのかを知らなければなりません。それは素晴らしいでしょう。

天国に行き、地獄へ行く二つの道があるとすれば、天国を訪ねてくる人と地獄へ行く人とでは、どちらがより多いでしょうか。地獄へ行く人々が、より多いことでしょう。それを見つめる神様の心情はどうでしょうか。どれほどあぜんとするでしょうか。地獄とは関係なく天国に来て、膨大なこの国の民になって、愛を中心として神様とともに生きなければならない息子、娘たちが、みな地獄へ行くのを見るとき、どれほどあぜんとするかというのです。皆さんの息子、娘が死の地に行くと考えてみてください。このようなことはいずれ霊界に行けば、皆さんすべてが知ることです。

霊界でみんな尋ねるというのです。「先生の教えはこうだったが、この基準に対してあなたは合格者か、不合格者か。霊的五感と肉的五感が一つになり、この基準に合わせようと努力したか」と聞くのです。皆さんはどのように考えますか。「天国はどうあってもいい」と考えて、ただで通過できる所ではありません。祝福を受けても、でたらめに生活した人が集まる所ではありません。深刻な人が集まる所です。皆さんは、先生よりもっと深刻でなければなりません。

霊界に行けば、まず誰に一番に会えるかというのです。誰に会ってみたいですか。そのようなことも考えたことがないでしょう。自分の母親に会おうと思っても会えません。真の父母が解放させる前には会えないのです。いくら愛する人だといっても会うことができません。少し離れた場所から見ることはできますが、近くでは会えないのです。

人間は霊界に入籍する時、地上生活を証明する証明書をもっていかなければなりません。「私はこのように生きた。このようなことをした」と言うことのできる生涯の証明書のことです。そのような証明書は、自分自身で書くことができないのです。初めはサタンが書きます。先にサタンから証明書をもらってから、イエス様の証明書をもらわなければならないのです。それから神様の証明書をもらわなければなりません。

今後、皆さんは自叙伝を書かなければなりません。自叙伝を書きなさい。統一教会に入ってからの生き方を、一つのうそもなく自叙伝を書かなければなりません。そうすれば、霊界に入っていく時、その自叙伝を前において「私がこのような役事をすることができたのか！」と痛哭をすることができなければなりません。これを地上で書き天国に行って、百六十名、二百四十名、三百六十名に該当する霊通人たちが前に立っている列をたどっていく時、うそをつけばそこで雷が起こるのです。欺くことはできないというのです。

皆さんが行動したすべてが、あの世に行ってスイッチだけ押せば、あっという間に一生がテープにすべて現れるのです。それは悲惨なことでしょう。ここで先生がすべて許してあげるようになれば、そのテープがすべて消えてしまうのです。そのようなことを知っていますか。

六) 自然の中への順応的生き方が貴い

自然に向かい合う人は、宗教的な人です。宗教の世界は貸しのない世界です。大地は、自然はうそをつきません。一〇〇パーセント私が努力すれば、そこに対する結果をもたらすのです。そこには投機性がありません。一獲千金がありません。また、そこには賭博性がありません。年齢が五十になれば自然に帰り、自然の土とともに生きながら信仰生活をすれば、霊界に行く準備としてこれ以上良いことはありません。

先生は将来ここに農場をつくって、世界の食口たちを連れてこようと思います。皆さんが年を取って六十歳、七十歳になれば、自然の中で万物を育てながら、子供を育てるのと同じような心情を体恤し、神様の創造の心情圏を体恤するのです。そうしてから霊界に行けば、高い霊界に行くことができるのです。ですから統一教会で苦労した人は、晩年に農場に連れていって別荘で自給自足させる計画なのです。それが理想郷です。先生はそのような大きい構想をもっています。

六十を越えれば下野し、故郷の農村に帰って土地を耕し、霊界に行く準備しなければなりませんが、その準備が忙しいのです。ですから精誠を尽くして先生のように農村に埋もれながら、農村を指導できる、このような責任を果たさなければなりません。ですから、

趣味産業、趣味生活をやり終えて霊界に行ってこそ、高い霊界に行くことができ、情緒的な人になって霊界の舞台を活用できる皆さんとなるのです。どうですか。

満六十歳まで仕事をしますが、その後は公的活動時代から解放されます。しかし、三年間は公的に無報酬で仕事をするのです。霊界に行くためには報酬を願ってはならないのです。霊界に行くための訓練をするのです。実績があれば七年まで延長するかもしれません。それでは、何歳まで。六十七歳、六十歳で終わって七年もできるというです。霊界に行くことができる基盤を中心にして……。そのようになれば、どこに行っても誇ることができるのです。統一教会の基盤をもって逝けば「ああ功臣様が来られたのですね」と言って、先生の代わりに接待を受けるかもしれないのです。「ため」に生きるその基盤を通して霊界に行くと考えるとき、そのような年輪が必要だというのです。「アーメン」と言わなければならないでしょう。

陸地旅行、水中旅行、宇宙旅行をしながら暮らしてから霊界に行ってこそ良いのです。それで、海にも入って暮らせるようにするのです。五人が入っていって、いくらでも暮らすことのできる潜水艦を研究しているのです。ですから、地上で定着生活をしながら旅行をするというのです。陸地旅行、水中旅行、宇宙旅行をしながら暮らしてから霊界に行かなければならないのです。

鹿みたいな獣も育ててあげ、魚も育ててあげ、それから穀物も自然に人工を入れて育て、すべて育てるというのです。それがどれほど素晴らしいでしょうか！　神様が創造したすべてのものは何であっても再生させ、それを願いながら神様を考えて、自然と調和を成し、このすべてのものがお互いに助け合って生き、趣味をもって暮らしてから霊界に行くのです。このようにすることによって、都市集中の世界をすべて分散できるのです。何の話か分かりましたか。

神様が願う未来の家庭システムはどのようなものでしょうか。それで、先生は趣味産業、趣味世界を考えたのです。今後各国にどのような組織をつくるべきでしょうか。建築をするのですが、コンドミニアム・システム建築、四つの家庭が一つになって暮らすことのできるそのようなシステムで訓練しなければならないというのです。お金をもうけて、食べるのも一緒に食べて、息子の教育も一緒にさせて、一つの家族のように暮らさなければなりません。一緒に暮らせず、和合することができなければ、霊界に行って制限された環境に押し出されるというのです。一緒に和合できないのです。

このおもしろみ、趣味文化というのはどこにもあるのです。創造の時から復帰の時、完成の時、地上生活、天上世界までおもしろくなっているのです。アメリカ人だけ良い生活をしなさいという法はないのです！　アフリカも良い生活をすることを願いますか。「アメリカ人の中で最も良い生活をしている人の家で、アフリカで最も良くない暮らしをしている人を一カ月住まわせてあげなさい」と言えば、どうですか。それをすることができなければ、レバレンド・ムーンがします。

故郷に定着する時はどのようになりますか。天地のすべてのものが故郷になり、天地のすべてのものがそこに連結されているので、何ももって行く必要がなく、置いておかなければならないのです。それを置いておいて霊界に行けば、これを連結させることができるというのです。世界のものをここに移すことができ、また私がそこに行けば自分の家も引っ張ってくることができ、私のものになるというのです。もって行く必要がありますか、ありませんか。

ボートさえあれば一人で行って瞑想をすることもでき、小さい天幕だけ張っておけば、そこで寝ることもできるのです。天国のような観光をすることができるのです。人がいない所でです。自然に埋もれてこのような観光をするためには船が必要です。絶対必要だというのです。そのようになると思いますか、思いませんか。駄目ならそのようにさせるのです。

霊界に行けば、寝ることもなく食べることもせず行動できる世界なのです。考えてみなさい。千里万里をあっという間に行き来するというのです。この宇宙をすべて行動半径圏内に消化させることができるというのです。ここの自然において、南米にどのような木があり、どのような鳥がいてという、関心事がどれほど多いでしょうか。この前、大蛇で八メートル近いその抜け殻があったのです。やー、それを一度捕まえたいです。それ以上の大蛇を捕まえたらいいというのです。

一生の間の生活の中で、人生の趣味生活が人間の歴史とともに、人間の理想生活とともに和合し、霊界と連結されなければならないのです。自然的幸福の世界と連結することができなければならないというのです。

地上世界でいつも晴れたり雲がかかったり、ありとあらゆる気候の変化を見るとき、それが芸術的なのです。その環境で愛することを感じれば、あの霊界の澄んだ世界に行き、自分が雲がかかるようにしてみたければ雲をかけることができ、霧がかかるようにしてみたければ霧をかけることができる、愛によってそのすべての多様な感応圏をつくることができる特性をもった、そのような人間になることができるのです。ですから、すべての霊界が関心をもっているのです。「ああ、その人のところに行けばおもしろい」と言うのです。

私は、山に行って草を見れば、どれが食べられるものか、みな分かります。芽が出てくるときは、すべてのものを食べます。子牛たちや子羊たちは、芽をみなかじって食べるのです。毒草を食べても毒がないのです。その時は毒がないのです。そのようなことをみな学んだのです。山に行けば食べるものがどれほど多いでしょうか。また、茂みに入れば昼寝をするのにどれほど良いでしょうか。蒸し暑い夏には腹を出して涼しくごろごろして過ごせれば、どれほど良いでしょうか。雨が降ったとしても、どれほど涼しくていいでしょうか。

腹を出して藤の下で大の字になって寝て、おならもぶーぶー鳴らしながら、いびきをかいて寝る男の姿を過ぎゆく尼なら尼が見て、南無阿彌陀仏……。それはなぜですか。あまりにも立派なのです。石仏ではありません。何の話か分かりますか。それを知らない女性

は木石です。それは息子、娘も生むこともできず嫁ぐこともできません。しかしそれを見つめて南無阿彌陀仏する時、胸がどきどきし、おしりが突き出る時は、僧侶たちも一次元上がっていくのです。本当なのです。霊界に行ってみればそうです。愛を知らない僧侶たちは落第です。キリスト教徒たちがよく信じて天国に行こうといくらしてみても……。私がくまなく、すべてかき回して見ました。金活蘭がどこに行っているか知っていますか。患乱世界に行っています。

四　天国に入る秘訣

一) 天国は皇族の名誉をもって入る所

度数を合わせることができなければ天国に入れないのです。天国にそのまま行くことはできないのです。公式があるでしょう。メートルの原器はフランスのセーブルの国際度量衡局にありますが、それは気候や温度に対しても変化しません。数多くのメートルの物差しがあったとしても勝手気ままなものです。勝手気ままでは、それが正しいか間違っているかということは話になりません。必ず原器に合わせてみて判断するのです。そのような公式があるということを知らなければなりません。天国に誰でも行くものと思っていますか。

皆さん、天国に行きたいでしょう。天国に行きたいならば、天国に行くことができる内容をもたなければならないのです。同じことです。天国に入る時、チケットが必要でしょうか。そのまま無事に通行できるでしょうか、何かの条件をもってチェックするでしょうか。無事通行ではありません。すぐに分かるというのです。霊界にコンピューターがあると思いますか、ないと思いますか。人間が造ったものもすごいけれど、霊界のコンピューターはさっと押すだけで一分の間に生涯全体を知ることができるのです。うそをつくことはできません。このような息子、娘として生まれてこのような生活をしたということが、悪いいたずらをして、良くない年輪をたくさん残した女性ならば、それがすっと出てくるのです。

堕落しなければ、神様の血族をもって神様の直系の息子、娘が天国に入るようになっていました。その家庭が天国に入るようになっていたのに、堕落し、怨讐の血統を受けたのです。愛の怨讐となり、怨讐の血統を受けたその怨讐の子女だということを忘れてしまい、堕落しない直系の子女のように考えることができるその立場をもたなくては、本然の神の国に入ることのできる基準が立たないのです。神様の息子、娘、神様の血族である自分の息子、娘を直接愛した人が天国に入るようになっていますが、サタン世界の怨讐の子女をそれ以上に愛することができる基盤をもつことができなければ、天国に入れません。それゆえに、怨讐の子女を自分の子女よりも愛さなくては、天国に入る基盤がないのです。

サタン、怨讐の血統を受けた、そのことが問題です。神様の血統を受けて霊界に直通しなければならなかったのです。神様の愛をなした心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになって天国生活をし、地上天国で暮らして天上天国に入っていくのが創造の原則です。神様の直系の血統として、直系の一〇〇パーセント真の愛の因縁を結んで、統一的個人と、統一的夫婦と、統一的家庭の枠組みを中心として、彼らが地上で生きてから

入る所が天国なのです。それが原理原則の基準となっています。

堕落したのちに地獄が生じたでしょう。それゆえに天上世界と地上世界、すべて真の父母の愛の門を経て入っていくその世界が天国です。アダムとエバが堕落せずに真の父母の愛を通じて天国に入ったならば、万民の家庭のモデルになったはずです。一つの本然的モデルの家庭形態が天国に入るのです。そうすることによって、その伝統的歴史を受け継いだ皇族圏の愛を連結したすべての家庭は、一つの中心的幹の前に東西南北の枝と同じです。それゆえに、同じ圏統合の原則によって天国に入るのです。それでこそ統一世界になるのではないですか。これをはっきり知らなければなりません。

皆さんの家庭におじいさんがいますか、いませんか。ですから真の父母がおじいさんの位置にいるのです。皆さんの家庭に真の父母がいれば、皆さん祝福家庭は父母の位置以上だというのです。皆さんも真の子女として生まれたでしょう。そして、皆さん、子女をたくさん生んだでしょう。彼らが未来には王族たちになるのです。神様が最初に王家をつくり、完成して霊界まで連れていくのです。そうではありませんか。理想的最高の家庭です。それが天の王族です。本然のアダムとエバが完成するのです。真の愛を中心とした王家だというのです。そののちに完成して行く所が天国なのです。

先生が皆さんの家に行って暮らせれば良いと思います。なぜですか。一生を喜んで父母様に仕えるようになれば、自動的に天国に行くのです。それが伝統です。真の父母は一生をそのように生きたがゆえに、自動的に天国に連結されます。それゆえに皆さんとも連結されるのです。このことがどれほど驚くべきことで、楽しく、価値があって、貴いことですか。誰とも取り替えることができないのです。

蕩減復帰原則についてもう一つお話ししましょう。蕩減復帰の原則は不変の真理だというのです。エデンでエバが犯した罪を後代のエバの世界において蕩減しなければ、復帰していくことができないのです。これはみんな知っているでしょう。それを復帰することによりサタン世界は消えていくのです。ですから、真の父母を中心として本然的基準のこれが、全世界的に成されるようになる時は堕落しない本然的天国、理想世界が成されるのです。その世界が人類の願うたった一つの方向へと訪ねていく、平和の世界以外にないということをはっきり知らなければなりません。

真の父母と一つになり伝統の相続を受けて、皆さんの家庭が主体的伝統で万国を統治できる基盤となり、主体性をもつことができる家庭になるとき、天国の皇族圏内に入籍するのです。このようにして入る所が天国です。天国は誰でも入れる所ではないのです。その道を行こうと三代が決心しなければなりません。おばあさん・おじいさんから母・父、夫婦、息子・娘まで段階は四段階で、系列は、夫婦を備えたものは三代です。

本来堕落しなければ、私たち人類の先祖は神様の息子、娘で、地上天国、天上天国の王子、王女になるはずでした。それは世界的です。根源と同時に一番終わりです。アルファとオメガです。アルファから善の父母が出てくることができず悪なる父母が出てきたので、

これをすべて抜き取ってしまわなければなりません。そして、悪なる父母で始まったすべてのことを消化させることのできる真の父母が出てこなければならないのです。

本来アダムとエバは神様の息子、娘でしょう。神様の息子、娘なので天国の王子であり、この地上の王子なのです。天国の王子であると同時に、大きくなれば地上の王になるのです。王孫です。それゆえに天国の王宮での法度を守り、その道理のすべてを実践して神様の愛を中心として縦横、前後、左右に一つの理想的なモデルになるのです。

東方に行くとしても、西方に行くとしても、南の方に行くとしても、北方に行くとしても、前の方に行くとしても、裏側に行くとしても、どこへ行くとしても理想的モデルになるのです。なぜそうなのかというと、この中心位置に立っているためです。その位置というものは、中心を中心として東方、西方、南方、北方、上下関係どこでもすべて核です。そのような立場を考えてみるとき、どこに行こうが、皆さんが見本にならなければなりません。

愛の所有を中心とするならば故郷が私の故郷となり、家庭が私の家庭となり得るのです。そこで子女の完成、兄弟の完成、夫婦の完成、父母の完成がなされるのです。神様の教本に提示されたすべての内容をなせなかったことを、今日真の父母を通じて再現し知るようになり、それを再度実行することによって、堕落しない本然的立場で神様が完全に恨の峠を越えて教育に対する定義を下すことができるのです。そのようにすることによって、天国の民として合格者、合格家庭となるのです。霊界はこの地上の愛の大海が連結された世界で、そこが天上天国です。それゆえに、あの世では愛の体恤的心情をもたなければ生き残ることができないのです。

五十億人類は長子権、直系王権を受け継いだ王家の親族たちです。その皇族圏の心情を体恤した人たちが天国に入るようになっているのです。それゆえに、全世界的に平面化された王族圏を中心として、それを実体化させた世界の統一心情圏を体恤する生活をしなければならないというのです。そこから真の父母も、長子の上の真の父母です。真の父母の王権なのです。このような王権を中心として周辺の王族を率いていかなければなりません。天国はこのような家庭の兄弟はもちろん、父母を中心として、王権を中心として、王族を率いて、王権に仕えて入っていく所です。そのような心情を体恤して入る所が天国です。

天国というものは何ですか。アダムとエバが双子で生まれて、暮らして成長し、結婚して二人が父母になったのと同じように、その心情圏を体恤し、王権をなしてその権限をもって王族を率いる人々が入る所です。そのように王が入ったのちに、王族を連れて入るようになっています。そのようにして平面的に四大王権になるのです。

今から地上天国時代に入るので、私たちの家庭が王の一家だということなのです。ですから、どれほど模範的にならなければなりませんか。王が勝手気ままに暮らせますか。女王が勝手気ままに暮らせますか。その息子、娘が勝手気ままに暮らせますか。王と王妃、王子、王女たちは、その国の法をすべて守らなければなりません。それだけでなく、王宮

の法があります。法の中には王宮の法があるのです。

宮で貴族たちが暮らす法があるでしょう。英国でも韓国でもみな、王孫が生きることがどれほど難しいでしょうか。先生がその道、復帰の道をすべて歩んできたのです。そのようにしてみなければ天国を意識できないのです。皆さんが天国を治める王の位置に上がることはできません。女王に仕えることができないのに、どうして男性の王になれるでしょうか。そうではありませんか。

今、皆さんは真の愛を中心とした皇族にならなければなりません。皇族、アダムがそのようになれば、アダムが直系の子女ならば傍系の子女であるその兄弟姉妹たちは、すべて民になるのです。それゆえに天国に入るには、天国の王子、王女の愛を備えて、その権威と威信をもって入るのです。そこが本郷の国、天国であることを知るべきです！

二) 四大心情圏の愛の実体が天国に行く

天国はどのような人たちが入るのでしょうか。四大心情圏を完成した愛の実体が入るのです。自分より何千倍も優れたことを願う愛の対象者として、天の国と地の国と未来の三王権を身代わりした中心家庭が私の家庭だということを知らなければならないのです。これを失ってしまったがゆえに、復帰された家庭でこのような概念と、このような内容を実践して結実させなければならないのです。それを息子、娘を通して繁殖させなければならない責任があるのです。

このように本然の道を失ってしまったので、これを完成して帰らなければならないのです。「それが復帰の道であり、再創造の道であることを知らなければなりません。アーメン！」。これは文総裁の話ではありません。神様が語られたみ言なのです。

皆さん、このような話は初めて聞いたでしょう。四大心情圏と三大王権を復帰し、皇族の愛をもっていくべき祖国が天国です。死んでみてください。いくら優秀な人でもここにすべて引っ掛かります。その時になって「文総裁の話を聞いていればよかったものを！」と後悔せず、早く決定して祝福を受けなさい。それが最も早い解決方法です。

それとともに学ぶのです。男性、女性が和合し、天国の失ってしまった家庭を取り戻して、神様を王として侍らなければなりません。ですから、おじいさんは神様の身代わりです。おじいさんを神様の身代わりとして侍らなければなりません。自分の父母は、五十億人類の家庭を中心とした王です。その息子、娘には未来の王のように侍らなければなりません。神様のように、現代家庭を代表した王のように侍る父母の道理を受け継いで、千年万年にその道理を残していく世界が地上天国となるのです、アーメン！

四大心情圏と三大王権を完成した家庭が理想的な家庭です。それで、おじいさんは神様と同じで、父母は世界の家庭の王で、自分自身は天上と地上の王権を継承する未来の王です。これは天国の王権であり、これは地上でしょう。これを相続する王なのです。このよ

うな三大王権が結実しなければならない所が私たちの理想家庭です。

父母権復帰の目的は王権復帰であり、王権復帰の目的は皇族圏復帰です。それが四大心情圏です。おじいさん、父、自分の夫婦が三大王権を象徴します。おじいさんは過去を象徴し、自分の父母は現在を象徴し、自分たち夫婦は未来を象徴するでしょう。おじいさんは霊界の特権大使として自らの家に送られたお方なので、おじいさんの言葉に絶対服従する家庭は繁盛します。

私たちの地上生活がそのまま霊界に移るのです。それを知らなければなりません。それでは、霊界に行きどのように横的に連結されるでしょうか。私の家庭で感じたことが宇宙の家庭で感じる、その世界に入るのです。世の中では縦的父母を中心として、もちろん神様圏を中心として縦的父母になっていますが、横的父母を中心として家庭で暮らして、永遠な縦的世界、父母の世界へ行くのです。

その世界が天国であるので、それは一代ではなく、数千代がすべて入ると考えるのです。神様を中心として世の中でおじいさん、父母、自分の息子、娘と暮らしたのを拡大させた世界なので、そこに入って暮らせば、この地上で姉として、妹として、それから妻として、母としての責任、また兄として、弟として、夫として、父として一つの家庭で感じた責任を横的に感じることができる因縁ができてこそ和するのです。

男性は絶対に女性と一つにならなければなりません。女性は男性と絶対的に一つにならなければなりません。また、父と息子、娘が、神様と息子、娘が絶対的に一つになり、兄弟が絶対的に一つにならなければならないのです。神様の愛を中心として神様のように一つの家庭で暮らし、死んでそのまま移る所が霊界です。

アダムは神様御自身です。家庭の主人ですが神様御自身の体です。国の中心も神様御自身です。世界の中心も神様御自身です。それで、人は生まれてこのような家庭において、家庭が一つになり、国が一つになり、霊界が一つになる三つの段階を越えていかなければならないのです。

アダムは神様の愛を受けましたが、アダムの息子、娘は、神様の愛とアダムの愛、二つの愛を受けることができるのです。霊界の王権と地上の王権を受け継ぐのです。地上天国から天上天国に入っていくので、このカテゴリーは分けることができないのです。

おじいさん、おばあさんが絶対必要で、父母が絶対必要で、夫婦が絶対必要で、子女が絶対必要だという心をもち、国は自分の家庭よりもっと愛さなければなりません。世界はそのように四段階の人類が分布していることを知って、自分の国よりもっと愛するのです。過去、現在、未来が一つになった霊界に行って暮らそうとすれば、そこは四段階のすべてを愛した人々が行く所なので、それを愛さなければなりません。そのような世の中を地上に成し遂げたのが地上天国であり、天上天国は地上天国によって自動的に形成されるのです。

四大心情圏は夫婦によって愛一体を成したところで結実し、三大王権はアダムとエバが

息子、娘を生んでこそ完成するのです。息子、娘を生んでこそ三大王権が完成するというのです。霊界を代表するのはおじいさんを代表した神様であり、アダムとエバは現在を代表します。過去、現在、未来です。現在を代表したアダムとエバを中心として未来を代表した息子、娘が出てきますが、「正」から「分」になったのが、合わさらなければならないのです。

霊界においても、神様が過去に感じたすべての現れなかったことをアダムとエバが感じることによって、結婚時においてアダムとエバが一つになることによって、神様とぴたっと上下左右が合わさるのです。ここから兄弟が発生するのです。それで、円形的球形を成していきます。この球形を成していくのが皇族圏であり、夫婦を成したのが王権です、王権。三代一体圏が生じるのです。三代が一つになるということです。

おじいさんは過去の王です。神様の位置であり霊界を代表する、天国から派遣した特権大使です。そして、父母、アダム・エバ圏は、この世の国の王と王妃だというのです。おじいさん、おばあさんは天国の王と王妃の位置で、父母はこの世の家庭を中心として家庭世界の王と王妃だというのです。霊界を代表したおじいさんの王権と現在のこの地上天国を代表した王権、この二つの王権が一つになったその継代を受けるのが後孫です。それゆえにいつもこの息子、娘は父母と一つにならなければならず、おじいさんと一つにならなければならないというのです。また、おじいさんはいつも父母を中心として孫と一つにならなければならず、父母もやはりおじいさんと一つにならなければならないというのです。これを離れては天国の基台が崩れるのです。

天地がいくら高低の差があり、広狭の差があったとしても、天地にとどまる者たちは四段階になっているというのです。霊界にもおじいさん、おばあさんがいるのです。父母のような年齢、青年のような年齢、少年のような年齢がいます。これをもう少し集約すれば二人です。 二人 ！

四大心情圏、三大王権を知っているでしょう。皆さん夫婦は、これを成さなければなりません。そのようになれば、思いのままに霊界から地上までいつでも来臨できるというのです。四大心情圏の完成は、結婚して愛を中心として一つになることによって可能です。もしこれが壊れれば、子女心情圏の未完成、兄弟心情圏の未完成、夫婦心情圏の未完成、父母心情圏の未完成になるのです。霊界にはこのような心情圏を完成して行くべきですが、堕落したので、その心情圏を今まで成したことがありません。それゆえに蕩減復帰をしなければならないのです。

三) 心に同化された生活をしなければならない

良心が神様の代わりに私に植えつけられた第二の神様、私の中心存在であることを知らなかったというのです。神様以上に仕えなさいというのです。道主以上、イエス様以上に仕えなさいというのです。そうすれば、イエス様を信じた以上の位置に行くことができるのです。統一教会の文総裁を信じないでください。統一教会の文総裁の教えを受けて良心

と完全に一つになるならば、統一教会の文総裁についていかなくても天国に行くことができます。教材を買って勉強をしなければならないのです。

良心を解放し、解放的自我を確立させて統一圏をもたなければなりませんが、それができない人は天国に行けないのです。天国をすべて探してみましたが、そのようにして天国に行った人がいません。今でも修養過程にとどまってだだをこねて、牧師や長老や優れているという人々の中に、みな逆さにされて串刺しにされている人が多いのです。

良心を解放しなさいというのです。皆さんの心は天国の監視所であり、皆さんの体は地獄の監視所だというのです。皆さんの体が心を引っ張り回しますか、心が体を引っ張り回しますか。宗教を信じる人々は心が体を引っ張り回し、宗教を信じない人は百発百中、体が心を引っ張り回します。自分を中心として生活します。それが違うのです。それゆえに地獄の出発地が私であり、天国の出発地も私です。心のとおりにすれば天国に行くのであり、体のとおりにすれば地獄に行くのです。他のために生きれば天国に行くのであり、自分のために生きれば地獄に行くのです。きょう帰れば、良心の解放を宣言しなければなりません。

心と体はどのようなものですか。それは主体と対象です。相対のために存在しなければならないというのです。心は体のために生き、体は心のために生きるのです。一つになれば、皆さんは五官ではなく、十官になるのです、十官。天の霊界もすべて見えて分かるのです。天国から聞こえてくる音楽の音もすべて聞くことができます。

今後は天国へ入っていくとき、霊通人たちが現れて、イエス様の横腹をローマの兵士が槍で刺したように、萩の茎で良くない行いをした人を、刺すのです。無慈悲な時代が来るということを知らなければなりません。人民裁判があったでしょう。そこまではいかないでしょうが、それは自分が願うからといってやらないわけにいかず、絶対うそをつけません。そのような時代が来るということを知って、心と体が一つにならなければなりません。

神様は一つになっていらっしゃるということになれば、堕落して争う存在は、神様の反対の所に行くしかありません。そのような所を指して、霊界でも地上でも地獄というのです。悪いものは地獄に行くしかないのです。これを論理的に整理しておかなければなりません。はっきり分かりますか。良心と体がずっと闘って一体になることができなければ、地獄に収納されますか、天国に収納されますか。地獄！　死ぬ前に、いつかはそれを一つにしなければならないのです。それを一つにせずして天国に行こうと考える者は、とんでもない者だというのです。そのような結論が出ました。

サタンは遠くにいるのではありません。自分と共に連結されています。自分というのは、天国と地獄の境界になるというのです。自分に地獄があり、天国があります。良心は天国、地獄は肉身なのです。良心は主体であるにもかかわらず、堕落したので……。愛によって良心が愛と一つになって、完全に霊的、地的、

地上天国、天上天国の永遠なプラスの立場に立たなければならないのです。

体は何かというと、地獄の中心核です。核心の中の核なのです。それでは、良心は何ですか。天国の中心の核です。この二つが闘うのです。ずーっと毎日闘うのです。これが問題なのです。どのようにこれを解決するかということが私たち一生一代の課題です。ですから、体を打って弱めることを趣味と考えなくてはなりません。その反対領域をどんどん占領して広めて自分の所有をつくらなければならないのです。そうすれば、肉身はだんだん小さくなるのです。

それで、制限領域を無限な世界へと広げるのです。永遠な世界のために生きること、ですから、肉身をずっと征服して霊界まで行くのです。水平になるまで行かなければなりません。このようにしなければ、地上天国を成すことができません。堕落しない本然の真の愛を中心として、平面上で心と体が一つになることのできる起源的位置を復帰することができないのです。

悪魔が支配する地獄があり、善の神が支配する天国があります。天国はどのようなものでしょうか。天国は建設するものであり、地獄は破壊するものです。これが違うのです。それで、この建設と破壊が私の一身においてぶつかるのが、心と体の闘争です。

神様は心と体が一つになっているために、心と体が一つになった理想的な息子、娘として生まれた人々が、地上で一つになって暮らしてから天国に移されるようになっているのであって、闘う者は絶対にあり得ないのです。神様はそのような存在形態を見るのも嫌うというのです。では、人類が願うこととは何ですか。このような闘いを停止させることのできる主人が、父母が来なければならないというのです。偽りの父母で始まって分かれたがゆえに、真の父母が来てこのような事実をはっきり理論的に教えてあげなければなりません。故障したがゆえに、その故障した箇所を取ってしまい、け飛ばすことができる、このような運動が地上で起こらなければ、地上天国は永遠に遼遠なものです。

良心が体のために、どれほど犠牲になったでしょうか。一生の間蹂躙される良心の事情を、皆さんは知っていますか。昼夜私を管理するのに疲れているのが良心です。それでも、へたばらずに体が悪い行動をしようとすると防ぐのです。「それだけすればもういいではないか、私の話をちょっと聞かないといけないじゃないか」と、そうでしょう。自分の前に最も近い、父母の代身、神様の代身、先生の代身の存在が良心です。心自体には教育が必要ありません。しかし体には教育が絶対必要です。

すべての人間は各々自分自身の中に、最も大切な先生を一生の間終始大事に保管しています。それにもかかわらず、その先生を誤って待遇し、踏みつぶして乱用します。その先生が正に人間の良心です。私たちの良心は、常に私たち自身にも助けになるように語り、私たちを真の愛と連結させてあげようとします。父母のように私たちの良心は、私たちをして善なる非利己的な人になれと促し、神のみ旨に従って行動するように導いてくれます。しかし各自の心の中にはまた、良心の声を常

に拒む反乱者がいます。その反乱者は正に肉体なのです。

皆さんの体と心の統一も、真の愛でなければできません。それゆえに心は体のために犠牲になりながら忘れに忘れ、また忘れてしまうのです。心とは、神様を身代わりした立場であるので、皆さんの先生の中の先生です。その心は、神様が御自身の代わりに派遣してくれた私の中心です。縦的な私です。

先生は若い時、自分の体を制御するためにありとあらゆることをしました。一週間、目を開けて寝るのです。いくら千万の美人たちの中で寝ても、男性のそのスティックが美人たちの三角地帯に接しても動いてはならないのです。自分の体をコントロールできない人は、天国へ行くことができません。

地獄の根、天国の根がどこかといえば、世界ではありません。終わりの日の世界が地獄と天国ではありません。地獄と天国の根はどこにあるのでしょうか。あくまでも皆さんの心と体にあるということを知らなければなりません。今までそれが分かりませんでした。数多くの聖人たちが来て教えてくれ、相対的世界に適応しようとはしましたが、自体において闘うこの根拠地を爆破させることができなかったのです。この統一はここから始めなければなりません。ここから始めなくては駄目なのです。

サタン世界は地獄へ行くのであり、神様の世界は天国に行くのです。そうなれば、自主的な、自分のために生きる世界は悪なる世界へ行き、公的な世界、全体のために生きる世界は天国に行くというのです。善悪の分岐点が自分から始まります、皆さん、ここに、一つは公的に行こうとする心と、もう一つは私的に行こうとする肉体があるのです。心は公的であり、体は私的な立場で闘争するのです。

偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統によって生まれたことを否定し、ここで切ってしまい、真の愛を中心とした真の愛、真の生命、真の血統に接ぎ木をして再び生きる、このような道を行くことが人類の行くべき道であり、個人全体が行くべき道です。これが結論なのです。宗教が出てきたのは体を征服させて一つにするためです。このような立場で真の愛と一つになって、この地上に暮らして天国に行くことのできる息子、娘を皆さんが生まなければなりません。宗教を信じないで天国に行くことのできる真の息子、娘を生むことができる人にはなれずにいます。

それゆえに宗教が出てきて体を征服し、一つにし、真の父母と一つになって接ぎ木をし、偽りのオリーブの木が真のオリーブの木となり、真の息子、娘を生んで、この地上で暮らしてから永遠にあの世に上がっていく、天国に入っていけるのが創造理想だというのです。

皆さんの体において、この戦争を早いうちに解決しなければなりません。この戦争を終えて生きることなしに天国に行くことはできません。永遠にあの世で引っ掛かるのです。深刻な問題なのです。父母が問題ではなく、家庭が問題ではなく、一族が問題ではありません。一遍にこれが引っ掛かるのです。

心身が統一されていない人は天国へ行くことはできません！　偽物です、それは！　国

が成立しても再び家庭を中心とした七年路程があるということを知らなければなりません。無慈悲なこのような過程を経なければなりません。へびが殻を脱ぐために岩のすき間を抜け出るのに、大きいへびであればあるほど、どれほど難しいでしょうか！　小さいものはたやすいけれど、大きいものは難しいというのです。大きいものが抜け出ながら皮をはがすことができる、そのような狭間がありますか。ですから平たくこのように行きながら、すべてはがれなければならないというのです。ですから、大きければ大きいほど難しいのです。世界の統一が難しいですか。霊界の統一がどうなのか考えてみなさい！

皆さんがいつも考えるべきことは、サタンの血統が自分の体で蠢動しているという事実です。これをどのように停止させるか、どのようにこの根源を清算するかということが、私たちの日々の生活から始まって、生涯路程の使命です。これを清算することができずに逝けば、永遠な世界で引っ掛かるのです。天国に入るためには、モデルがなければなりません。天国に入るためには、神様が創造なさった公式に従わなければならないのです。そうでしょう。公式です。皆さんが学校を卒業しようとするなら、みなその学課を経て、単位を取って、卒業証書を受けるのと同じような過程があるのです。「これで終わる」という過程があるというのです。同じなのです。天国に入るにも公式がなければなりません。

霊界に行けば良心が霊界の体のようになり、その体に対する良心の立場に神様が現れるのです。自分の良心は神様の体になるのです。皆さんが神秘的な世界に入って、「神様、どこにいらっしゃいますか」と言えば、自分の中から「ここだ、ここだ」と言うのです。人々はそのような体験を多くします。それで、人間はすなわち天だという話が出てくるのです。

神秘的な霊界の世界に入って、「神様はどこにいるのか」と祈祷すれば、腹の中から「どうしたのだ」と答えるというのです。そのようなことを体験するのです。自分も知らないうちに話をするというのです。「そこに行ってはいけない」と、そのように言うのに、そこに行けば事故が起こるのです。それは誰が言うのですか。神様が言うのです。熱心に祈祷すれば、そのような神秘的な体験をする境地に入るのです。

四) 絶対「性」を中心として天国、地獄が分かれる

男女の初愛とは神様に出会う時間です。結婚して初愛を交わす瞬間は、男性として完成する場なのです。すべての神様のプラス世界、すべての男性型、右弦型を代表するそのアンテナとして君臨するのです。アンテナのてっぺんで陰電気と陽電気が出合う正にその場と同じなのです。女性と男性が愛し合うその場は男性完成、女性完成をする場なのです。また、初めて天地の中心として地上に定着できる愛の王宮がそこから始まるのです。初めて愛の本源地が出発するのであり、また生命がそこから連結されるのです。そうではありませんか。血統がそこに連結されるのです。それと同時に、そこから国が生まれるようになります。地上天国、天上天国は、初愛の門を開くその場から、愛から始まるのです。これを知らなかったというのです。

本宮、分かりますか。その愛の出発地は地上天国の出発地であり、天上天国の出発地です。男性と女性が絶対的に一つになる位置です。その絶対的な位置で神様が見えない性相と形状を分立して人を創造し始めたのと同じように、女性と男性が愛で一つになって息子、娘を生むのです。見えない神様が創造したのを、見える実体になって成し遂げるのです。血を混ぜることのできる力は愛です。血を混ぜることができるその軸はどこでしょうか。どこが発電所かといえば、女性と男性の凹凸が初愛を交わす所です。そこで初めて初愛によって発電し始めるのです。真の愛の発電、真の生命の発電、真の血統の発電、真の地上家庭と共に地上天国の発電、天上天国の発電の震源地がそこです。これを無視する者はあり得ないのです。いれば、地獄しか行かないのです。とんでもないというのです。

男性と女性のその器官がどれほど貴いか分かりましたか。神様が降りてくるのです。神様の解放がここから始まり、神様の歌と踊りもその上から生まれるのです。それが愛の王宮、永遠な王宮と通じるのです。地上天国、天上天国の初愛の門がそこから始まるのです。そうだと思いますか、うそだと思いますか。皆さん、独身のとき、そのように貴く思っていましたか。

初愛がどれほど怖いでしょうか。初愛を間違えれば、天下がすべて地獄へ行くのです。ここで愛の王宮を失い、生命の王宮を、血統の歴史とすべてを失ってしまい、地上天国と天上天国の起源を失ってしまいました。その人はどこに行くでしょうか。原理原則があるのにどこに行きますか。存続する所がないのです。ごみ箱に入るのです。永遠に暮らせるようになっていた人間ですが、逆さまになってごみ箱に入っていかざるを得ないのです。

男性完成、女性完成、神様まで完成させることのできるその本郷はどこでしょうか。どこで神様の愛を完成させることができ、どこで男性、女性を完成させることができるのでしょうか。その中心の定着地はどこでしょうか。これが問題なのです。これを知らなければ、地上に愛の理想天国を拡張、拡大できません。それが目ですか、鼻ですか、手ですか、足ですか。どこですか。（凹凸です）。

男性、女性が、凹凸が一つになることは、神様が完成し、半分である女性、半分である男性が完成する立場です。男女が結婚し初愛の関係を結ぶその場から、神様の愛的理想が完成する定着地が生まれるのです。男性、女性の愛を中心とした神様の相対的位置としての完成の位置が決定するのです。これは宇宙の核です。これが動けば、宇宙全体が行ったり来たりします。地上天国の本拠地であり、天上天国の本拠地だというのです。

ここは愛の本然の地ですから、愛の本宮といいます。多くの王宮の中で中心宮を本宮といいます。これが愛の本宮であり、生命の本宮であり、血統の本宮であり、それから天上天国と地上天国の出発地であり、人間が願っている自由と幸福と平和がここから始まるのです。そこは愛、生命、血統すべてのものの王宮であり、個人、家庭、氏族、民族がそこから連結されるのです。天上天国と地上天国の本然の地であり、出発地だということを知らなければなりません。それから、自由と幸福と平和の起源です。女性にとって男性がい

なければ絶対に暗黒であり、男性にとって女性がいなければ絶対に暗黒です。

男性が崇拝できる最高の場所とはどこでしょうか。女性の顔ですか。女性の胸ですか。女性の体ですか。どこですか。凹凸を合わせることのできる所は一つしかないのです。そのために準備的環境が、社会が連結され、国家が連結され、世界が連結され、地上・天上天国、宇宙がすべて連結されるのです。これが、存在世界の鉄則であり公式です。

平和の基地もそうであり、地上天国、天上天国、すべてのものが愛から始まります。どのような愛ですか。男性の愛ですか、女性の愛ですか、男性と女性が一つになった愛ですか。一つになった愛です。その男女の愛のどこで一つになりますか。顔で一つになりますか、指先で一つになりますか。凹凸で一つになるのです。

神様の結婚式がアダムとエバの結婚式です。それゆえに、地上天国と天上天国が同時に生じるのです。愛の巣から出発するのです。男性、女性の生殖器を中心として、堕落せずに出会うその時間が、地上天国、天上天国出発の起源地なのです。三大王圏を樹立しなければならないその基地が、そこです。その場でなければ愛の巣をつくることはできません。

愛が理想的な天国をなすことのできる出発地なので、愛の中心です。王宮だというのです。生殖器は愛の中心だというのです。それが王宮になるためには結婚しなければなりません。夫婦生活によって愛の王宮がなされるというのです。何がそれを連結しますか。男性と女性がキスして唇が連結しますか。何が連結しますか。凹凸が連結するのです。これは偉大な偉業です。この愛によって男性のすべてと女性のすべてが混ざるのです。一つになるのです。それから、そこから男性と女性の血統が連結されます。血統が連結され、渦巻きの中で、その中央で初めて新しい生命を中心として歴史が創建され、歴史が連結されるのです。一代で終わるのではありません。永遠な歴史が連結されるのです。地上天国、天上天国がその場から出発するのです。

女性は、男性の愛の器官のために暮らすのです。愛のために生き、生命のために生き、息子、娘のために暮らすのです。女性は子供が好きなのです。女性の胸が大きく、おしりが大きいのは、赤ん坊のためにそのようになったのです。それを満たさなければならないのです。それゆえに、三代の本宮がどこにあるのでしょうか。人間の根本問題です。これが、家庭の根本であり、社会の根本であり、国家の根本であり、地上と霊界、天国世界の根本出源地です。

愛の本宮は、神様まで完成させて安息させることができる王宮です。これが、どこで一つになるのかといえば、凹凸一箇所です。アダムとエバの生殖器、その場が偉大だというのです。それゆえに、その生殖器は愛の本宮といいます。驚くべき言葉です。天地創造の全体、神様まで完成させて安息させることができる王宮ですが、本宮です。天国も最初ではなく、地上の国も最初ではありません。この家庭から始まるのです。これが本宮です。驚くべき言葉です。

それからその場は真の愛を中心とした本宮ですが、真の生命を中心とした本宮でもあります。それからまた、血統を中心とした本宮であり、地上天国の出発地であり、天上天国の出発地だというのです。それがなければ地上天国と天上天国、天国と人間の国が成り立たないのです。真の愛のこの驚くべき所が、下品な言葉になりました。天地を滅ぼす亡国の種になったがゆえに、今まで最も悪いものとして取り扱われました。本来は神聖なものです。先生方、お分かりですか。朝起きてあいさつをする時、生殖器に「よくお休みになりましたか」と言わなければならないというのです。先祖よりも、先祖の愛に仕えることができる場がその場であることを知らなければなりません。

愛の器官をむやみに扱えば罰を受けるようになっています。それが愛の王宮であり、愛の先祖の園です。愛はそこから出発しました。生命がそこから出発しました。歴史がそこから出発しました。地上天国の起源であり、天上天国の起源であり、神様の幸福の出発の起源がそこから形成されるというのです。神様の笑いの基台がそこから出発するのです。愛を求めて神様が踊ることのできる場がその場です。その場を訪ねていかなければなりません。それは正しいですか、正しくありませんか。このように貴いのです。

神様の花が愛から、人間の花が愛から、地上天国、天上天国はこの花が愛で咲くことによって始まるのです。ゆえに「真の愛はすべての完成の花だ」という、このような言葉が通じるのです。このように見るとき、夫婦の因縁を通じて神様が創造した第二の創造を私に与え、神様が感じた喜びを感じ、永遠に実存的な神様の存在を実体的に体恤できるようにした栄光の場が、どれほど偉大かというのです。

天国において美しい人になろうとするなら、愛の花がぱーっと咲いて、そこに和合し相対的世界で花の美しさを現し、花の香りを現して、その花を通じて新しい種をもつことができる、このような姿をもって地上で生きなければならないのです。そのように暮らして霊界に行くようになれば、永遠なるその世界でもそのような姿で現れるのです。

女性の生殖器が宇宙的な本源なのです。愛の関係を交わすその場が愛の本宮となっているのです。本然の宮中なのです。愛はそこから始まるのです。結婚初夜の愛が愛の本宮の出発なのです。女性の生命、男性の生命が初めて一つになるのです。それゆえに理想的な生命の本宮がそこであり、血統がそこから始まるので、血統の本宮がそこだというのです。そして、天国がそこから始まるので、そこが地上天国の本宮であり、天上天国の本宮であり、人間完成の本宮であり、神様の完成の本宮なのです。

人間が堕落する時、愛のために堕落したので、この性器が最も怖いのです。宗教では姦淫することを最も恐ろしい罪として取り扱っています。ですから、アメリカのフリーセックスは悪魔の地獄膨脹主義ですか、天国膨脹主義ですか。地獄です。地上地獄であり、天上地獄です。これはすべて滅亡するのです。

文総裁がすべての真理を探求して、霊界、肉界を探査し、あらゆる経典を探査しても、

これは解決する道がありません。神様がいるかいないか。神様がいるならば、世界をこのようにさせた神様を私がそのままにしておかないのです。決着をつけるために闘ったのです。人間が生まれた根本原則が何であり、なぜ生まれたのでしょうか。男性は女性のためにです。それが真理全体の中で最高の真理です。女性の前に理想的な男性は最高の真理です。宇宙全体を完成した以上の真理の本体だということを知らなければなりません。男性の前にそのような女性も、宇宙の真理の本体の中の本体です。絶対的な真理体です。

今まで人間が悩んだ根本問題がこのように簡単で、こんなに易しいものだとは、私は本当に知りませんでした。大変な苦労をしました。まさかこうなっているとは知らずに、正しいもの間違ったもの、霊界に入って、使い道のないものまでくまなく探し、あらゆることをしました。ところが、気がついてみると自分がすべてもっています。「ああ、これを知らなかったのだなあ！」と思いました。大概すべてあるのです。気分が良いでしょう。宇宙がすべて私の中にあります。宇宙がすべて私に入っています。

真理が他の所にあるのではありません。私自身にすべて備わっています。学ぶべきものはありません。先生もそれを尋ね求めてきましたが、真理の世界が宇宙の他の所にあるのではありません。霊界だとか何だとか世の中をすべて調べ、苦労して、すべて探ってみると、結局、神様がすべて与えてくれていました。あぜんとしました。すべて私にあったということを知らなかったのです。このことを知らなかったというのです。

五) 夫婦愛が愛の理想の中心の花

神様は縦的二性性相をもった方であり、人間は横的二性性相をもった実体として、二つが一つとなって、完全な丸いりんごの形をなして、四つの性相形態をもった東西南北に愛の理想を引っ張ってくっつけることができる母体にしようというのが、夫婦の理想です。

結婚をしたとするなら既に平面的ではありません。平面的な基盤しかありませんが、高いものが低いものと連結される時は、垂直的概念が生じるのです。平面的な歴史は宇宙を収拾したり、天宙を収拾できないのです。垂直と水平が出合って九〇度を成す時、それは天を地にしても、地を天にしても、前を後ろに、後ろを前にしても、右弦左弦、上弦下弦、前弦後弦どの面を付けてもぴったり合うのです。地上完成基準は、霊界のすべての完成につながるのです。

絶対的な夫婦の理想を描いて、芸術的な夫婦を地に築き、今までの地上にない愛の絵を描くのです。その絵をもって天上世界の永遠な世界で旅行しようとするのが、霊界に行くことです。霊界は無限世界へ旅行することです。そこはお金も必要ありません。御飯も必要ありません。服も必要ないのです。愛する相対に与えたければ、すべて特権的に、すべて与えるようになっています。金のような服、世の中にない想像だけしていた服を着せてみたければ、愛する心が切実になって与えたい気持ちがあれば、相対が現れるのです。どこでも旅行でき、どこでも自由です。

家庭を芸術化させなければなりません。おもしろい夫、芸術的な夫にならなければなりません。何かの雑誌に良いことが載っていれば、さっと抜き出して、寝ようとする夫人の前ですてきな声で読んであげるのです。感動を受けて寝る妻の姿を夢に描けば、それが再現されるのです。霊界と連結されるのです。それがどれほど素晴らしいでしょうか。そのように生きたいですか。そのままおもしろ味のない夫婦として生きたいですか。素晴らしく生きようとするならば、素晴らしくあり得る姿勢、素晴らしくあり得る方向をとらなければなりません。それが第一条件です。

霊界に行けば農作業もせず、食べて遊ぶばかりなのに、どのようにしておもしろく生きますか。これを考えてみてください。退屈で、どうやって生きますか。けんかもできずに暮らすのに、どのようにおもしろく生きるかというのです。千年見ても嫌でなく、千年触っても良く、万年聞いても良く、億万年良いというものがなくて、どのように生きますか。御飯は毎日のように食べるのです。思いのままに食べることができるし、思いのままに得られる所です。何でも思いどおりにできる所です。その時は旅行をして暮らすのです。

この世の生活は、一カ月だけテレビを見ればすべて分かります。見るべきものはありません。それはみな飽きます。ですから霊界を知らなければなりません。祈祷と精誠を捧げるならば、霊界の幻想が広がるのです。それはどれほど素晴らしいでしょうか！　天使たちが降りてきて踊りも踊るのです。どれほど素晴らしいでしょうか！　何百年前の有名な人々も集まって踊るのです。どれほど素晴らしいでしょうか！　私は妄想家ではありません。

本然の地にすべての元素が連結されています。根と同じです。根が同じならば津液（注：体内からしみ出る液）も同じで、葉も同じで、花も同じではないですか。本質の元素が一体化し得るその期間だけ和するようになれば、学ぶ必要もありません。人は、自らの顔を一〇〇パーセント描けないではないですか。絵以上のものを自分がもっているのに絵が必要でしょうか。違いますか。男性、女性、二人を中心として美しい愛の理想的夫婦の花が咲いているのに、絵を描いてどうするのですか。そのように貴いというのです。絵が慕うことができ、称賛できる主題をもっているのに、それを分からずにいるというのです。しかし、人は服を着るとき、様々な柄で、季節によってこれが環境的調和をつくり出すように着ます。環境に合わせるために、様々な文化芸術だとかいうものが必要になったのです。

霊界に入っていき、霊人体が永遠に生きていくならば、誰を訪ねていきますか。父母？　兄さん、姉さん？　子女？　それは子女でもないのです。兄さん、姉さんでもなく、父母でもありません。自分の相対者なのです。なぜですか。子女を生んで育てる喜びというものは、途方もないものです。夫婦生活をしながら初めて赤ん坊を生んだ喜びは、最も刺激的です。その中でも最初の男の子に最も情がいき、夫も夫人も一心に心情を投入するのです。それで、初めて生んだ子女を最も愛します。長男と次男の差というのは、長男は愛をよりたくさん受けたということです。長女も

そうです。その長男、長女とは何かというと、父の延長、母の延長なのです。間違いないのです。

人間が完成すれば、男性の心の中には神様の性相が入り、女性の心の中には神様の形状が入るのです。アダムとエバの実体の結婚式は、神様の結婚式だというのです。霊界に行ってみれば、それがはっきり分かります。知り得ないこのような理論がみなぴったりと合うのです。それで、神様はどこにいるのか、夫婦を中心としてもどこにいるのかというとき、それは子宮です。そこにいるというのです。愛の根っこがそこだというのです。歴史始まって以来、文総裁によって、霊界がこのように構成されていて、このような内容によって成っているということが明らかにされたのです。

皆さんが夫婦関係を交わすのを神様が見ていないと思いますか。公開的なのです。これは宇宙的に公開するのです。それを知らないのは大きな過ちです。皆さんの先祖がみな見ているのです。霊界でもすぐ目の前に見えています。手のひらに立ってしているように見えるのです。ですから、それを恥ずかしいと思えば大きな過ちです。

愛によってなされるすべての調和と万象は、神様にとっては香りのようなものです。神様は、このような美しい香りの中で生きたくて訪ねてこられるというのです。神様の愛が尋ねることができる基盤が夫婦の愛の場だというのです。その場は、すべての万物と宇宙が和動する場になることでしょう。

愛を中心とした王宮といえば霊界の王宮と地上の王宮がありますが、これらがどこで接触するようになるか、それが問題だというのです。人間と神様がどこで合わさるかという話です。それゆえに真の愛と一体となったその生殖器というものは本源地です。それが本源地なので、宮と見れば本宮になるのです。それは神様が出発した宮、最初に始まった宮であり、それが本宮です。

夫とそのようにむつまじく暮らして、死ぬ時には何を考えるかといえば、いつも愛の器官を考えるようになるのです。彼の顔、キスを考えるようになるのです。あの霊界に行って残る記憶というのは、愛する夫、妻とキスして愛し合う、その生殖器を合わせた、それ以外にはないというのです。それをつかんで、キスしながら死んでいきたいですか。

愛によって神様の代わりに生まれて、愛によって生きて愛の目的地に到達するために息子、娘を生んで、永遠に神様と共に生きるために神様のところに帰っていくのです。それゆえに皆さんが完全に愛で一つになれば、のちには神様に似るのです。夫婦二人が一つになり、このような三段階の愛を完全に成して霊界に行く人々は、永遠な主体である神様の前に、相対的な神様になるのです。そうではないですか。愛を中心として夫婦が共に死ねば、そのようになるのです。ですから、神様から始まり、神様に帰るのです。

男性、女性たちは、愛し合う夫婦の愛に酔って生きなければなりません。これが課題です。父母に侍っているならば、父母の愛の中で、家庭の愛の中で生きたいと思わなければ

なりません。それが理想であり幸福です。幸福がほかにあるのではありません。霊界に行って、霊界がいくら良いからといって独りで何をしますか。文総裁で言うなら、気分が良ければお母さんを求めます。お母さん、母を求めます。母も二人の母がいます。自分を生んでくれた母と、息子、娘を生んだ母。一家に二人の母が暮らしています。そうではないですか。自分を生んでくれた母、それから？息子、娘の母がいます。それから父の母、おばあさんがいます。母はいいものなのです。そうではありませんか。

私は神様に似たし、完成したアダムとエバに似たというのです。二つの父母に似たというのです。これが一つになっているために心と体が闘いません。男性、女性が闘いません。完全に一つです。霊界と肉界と神様と、創造主と創造物が一つになることのできる完全な位置において、新しい泉がわき出てくるのです。これが平和の起点です。平和の出発です。幸福の出発です。理想の出発です。希望の出発だということを知らなければなりません。しかし、これを失ってしまったので、再び復帰しなければなりません。

霊界に行って、男性に生まれて一人で生きてそのまま行った者たちを見ると、良い所に行っていません。良い所に行けません。神様を見つめる時も視線を下げます。「こいつ、なぜ視線を下げるのか」と言うのです。男性で生まれて天地調和の、陰陽の合徳を知らず、愛を知らずして来た僧に、天地大道の中心である愛の道理がどうして分かるでしょうか。

息子、娘を生むことができずに霊界に行けば、片側だけにいなければならないのであって、思いのままに行き来できないのです。恥ずかしいのです。それゆえに独身生活を強調する者たちは悪魔の直系です。終わりの日に追い出される群れは悪魔、サタンしかないのに、彼らはサタンのあとをついていく者たちです。悪魔は天使長であったため相対理想がないのです。それゆえにその世界になってみると、青少年たちは淪落に陥り、年を取った男女は愛に疲れて、悪魔の愛に失敗して独身生活をするのです。独身生活をする者たちはすべて、地獄行きで終わるのです。

独身生活をする人は、神様の本意のみ旨の前に犯罪者の立場です。赤ん坊を生まないで産児制限をした人は、あの世に行って、「あなたの息子、娘を通して天下を統治できる王子、王女を送ろうとしたのに、この有様は何ですか」と審判されます。霊界に行けばすぐに分かります。すぐに分かるというのです。千年万年の恨の歴史の中で苦労した先祖の功を自分一代、一族を通して福を与えようとしたのに、その首を切ったというのです。

乙女で暮らして一人で逝った人々、男性も一人で逝った人々、そのような者を何というのですか。死んだのちにモンダル鬼神（注：独身のまま死んだ男の鬼神）と言いますが、死ぬ前だと何と言いますか。モンダル鬼神は死んだのちに言うではないですか。そんな言葉はないのですか。それは何というのですか。独身女性。これでは困るのです。

どこに行っても和合できません。女性の世界に行ってもこのように立ち、男性たちの世

界に行ってもこのように立ち、行く所がありません。方向は陰になった所、陰の世界、かといって自分は振り返ることができないのです。和合は愛を中心として東西南北に通じるようになっているのに、方向がぴたっと固着されているために振り返れないのです。私は分からないので、死んでみてください。

祝福を受けた血統を汚してはなりません。それを皆さんはよく知らなければなりません。天国を受け継ぐことができる、相続を受けることができる財産です。それは血族の文書、血統の家の権利書と同じです。族譜と同じなのです。純潔をどのように守るかというのです。

六) 天国は家庭単位で入る

私たちの家庭と天国は類型のようです。我が家には父母がいて、夫婦がいて、子女がいて、兄弟がいます。我が家は愛で一つにすることができます。ここでは統一がなされ、生命が連結され、理想を実現させることができます。ですから、皆さんは夫婦の愛を尊重でき、父母の愛を尊重できてこそ天国に行くことのできる資格者になれるのです。

祖父母は父母の前に愛を相続してあげたのであり、父母は夫婦の前に愛を相続してあげたのであり、夫婦は子女の前に愛を相続してあげています。ここで、どの愛を否定しても天国はなされません。自分たち夫婦の間で愛し合う以上に父母を愛し、自分の父と母を愛する以上におじいさん、おばあさんを愛さなければならないという結論です。これが、すべての天国の核心になって、理想的モットーになるというのです。

神様は真の愛の本体なので、真の愛と連結されればすべてが同じ体になります。父母は神様を身代わりした生きている神様であり、夫と妻はお互いに他の片方の神様であり、息子、娘はまた一つの小さな神様です。このように三代が真の愛を中心として成された家庭組織が天国の基盤です。そのような基盤を成さなくては天国が成されません。家庭というものは宇宙の中心です。家庭完成は宇宙完成の基礎になるので、家庭で愛するように宇宙を愛すれば、どこでも無事通過です。こういう場合神様は、全宇宙の父母として、愛の複合的な中心の位置にいらっしゃいます。

統一教会の「原理」でいう四位基台は、三代愛圏をいうのです。三代が一つの家に暮らしながら愛によって和睦して幸福になるとき、天地創造の理想が実現されるのです。夫婦が愛し合わなければならないということはもちろんですが、子女たちを愛で祈祷してあげて精誠の心で見守ってこそ、家庭が和睦して幸福になるのです。これが縦的に成って横的に連結されるとき、完全な愛が成されるのです。いとこと、またいとこ、兄弟たちまで愛で一つになってこそ、初めて愛の円形になって完全になります。

家庭は天国完成の基本単位です。天国は一度行ってみると戻りたくなく、十回、百回会ってもまた会いたい、その方がいらっしゃる所です。万民が共通にそこに行きたいと思い、その方に会いたいと思い、その方のように生きたいと思うならば、世界は統一されるはずです。そこに向けて進んでいるのが統一教会です。しかし、それは一度になされるのではありません。先に個人の基台が立ち、それか

ら家庭の基台が立ち、それから民族、国家、世界へと伸びていくのです。

天国生活はどこからですか。家庭からです。他の所から始まるのではありません。天国は家庭を立体的に拡大させたにすぎないのであって、家庭圏を外れたものではないというのです。それゆえに皆さんが自らの妻や夫を抱くときに、これは世界の男性と女性が一つになるのだと考えなければなりません。このように世界人類を愛したという条件を立てることのできる位置が、正にこの家庭です。

神様の創造理想世界とはどのような世界ですか。真の父母圏を通じ、地上天国と天上天国が成された世界です。天国は愛の基盤を通じてのみ成されます。堕落した世界には、真の父母の愛を受けたことのある人が一人もいないし、現れた痕跡もありません。霊界も同じです。真の父母の愛を受けて逝った者がいないからです。神様を中心とした創造本然の家庭的基台には男性の愛、女性の愛、息子の愛、娘の愛、父母の愛、神様の愛がすべて入っています。このような消化された位置で父母を愛し、夫を愛し、息子、娘を愛すれば、誰でも天国生活をするのです。

統一教会の使命は何ですか。統一教会は過去の宗教とは違い、個人的な救いだけを願う宗教ではありません。堕落しない本然の理想世界を願う宗教です。本然の理想世界は、完成した人間が神様の愛の中で夫婦の因縁を結んでその息子、娘を生んで天国に行く所をいうのです。父は地獄に行って母が天国へ行けば、それが天国でしょうか。父母は天国へ行って子女が地獄に行けば、それが天国かというのです。天国は父母と子女、氏族、民族、国家がすべて入っていくところです。

家庭天国を成す所で、初めて神様が理想とする地上天国が定着するようになるのです。これが、四位基台にならなければなりません。「統一原理」では「創造理想完成は四位基台完成だ」と言います。それはなぜですか。神様とアダムとエバを中心として三段階を経て、縦的世界と横的世界が生まれれば四位基台が成されるからです。アダムとエバの息子、娘がいてこそ横的な世界が生まれます。このようになれば縦的な世界が自然に生じるのです。体を中心とした体の横的基準が息子、娘であり、心の横的基準が霊界だというのです。そこで初めて神様が臨在なさることができるので、地上に天国が実現されるのです。

統一教会の救援観というのは、夫が天国に行って夫人は地獄に送ろうというものではありません。二人とも天国に行こうというものです。父母を地獄に送るのではなく、父母に侍り、息子、娘も連れて天国に行こうというのです。

統一教会は自分が愛する家庭、自分が愛する氏族まで一切を連れて天国に行くことのできる道理を教えてあげる宗教なので、他の宗教とは次元が違います。それゆえに今までの宗教は独身生活を強調しましたが、統一教会は家庭を重要視するのです。家庭を中心として行くのです。その家庭は世界のための家庭であり、神様のための家庭です。これが、統一教会の食口たちが行くべき道です。

統一教会では、個人としては絶対に救いを受けることができないと考えます。個人とし

て天国へ行けないのです。一人では行くことができません。原則がそうです。エデンの園のアダムとエバの二人が一緒に天国へ行くようになっているのであって、夫または妻だけ天国へ行くようになっていますか。夫婦が一つになり、家庭が一つにならなければ、天国へは行けないのです。それが理想であって、父は地獄に行って母は天国へ行けば、それが天国ですか。天国は夫婦が行かなければならないのであり、家庭が行かなければならないのであり、家庭だけでなく、一族が行かなければならないのであり、国家全体が行かなければならないのです。

おじいさんに神様のように侍り、父母に天下統一させることのできる父母として侍らなければなりません。おじいさんは天上世界の特派員です。全権大使です。お父さんはこの世の全権大使です。自分は二つの国、地上天国と天上天国の全権大使として、息子、娘として、後継者として育っていると考えなさいというのです。そうすれば、間違いなく霊界に直行するのです。霊界へは、本来そのような人々が入っていかなければならないのです。ところが、今日キリスト教では「信じれば天国に行く」と言いますが、いい加減な話はやめなさいというのです。行ってみなさいというのです、どうなるのか。あぜんとすることでしょう。

「こういうことになっていようとは。こんなはずではなかったのに」と言うことでしょう。こんなはずでは、とは何ですか。原則と異なればすべてそのようになるのです。原則があります。数万数千いるとしても、誤ったならばすべて肥だめに入るのです。火で燃やして捨てるでしょう。同じです。原則的な基準を探さなければならないのです。

自らの祖父は天の特権大使です。万一アダム家庭が堕落しなかったとすれば、おじいさんに神様に対するように侍るのです。歴史を通じて霊界に行った先祖の中で、一番最後の人として残された主人がおじいさんです。ですから神様の身代わりです。そして、お父さんはこの世界の家庭の王です。皆さんの父母はみな、現代の六十億人類の家庭の王なのです。

おじいさんは、天国である霊的世界を象徴するのです。ですから、おじいさんに神様に対するように侍らなければなりません。天国の全権大使です。それから父母は、現在を象徴するので、世の中のすべての人類家庭を代表した王と王妃です。父母は、人類を代表した王と王妃だというのです。そして、息子、娘は未来です。未来において霊界と地上世界、二つの世界の王権を受け継ぐことができる王子、王女だというのです。

おじいさんは過去を表徴するのであり、過ぎた時代の主体は天国、霊界です。おじいさんは霊界と地上を連結した代表者だと言うことができます。神様と善なる天国のすべてのものを、地上にある自らの家庭に連結させる神様の大使です。神の国の大使とは誰ですか。おじいさんです。

国を形成するには家庭がモデルになります。家庭が第一段階です。家庭から始まるのです。それを知らなければなりません。そこを見れば、おじいさん、おばあさん、父と母、子女の三段階がありますが、これを拡張するとき

は三つ、四つ……。これをくっつけるのです。これを中心としてこの世にも通じますが、霊界にもそのまま通じるのです。世界を見れば世界にもおじいさんレベル、それから父母レベル、その次には自分のレベルがみなあるのです。ここで練習するすべてを世界へ拡張すれば、どこでもすべて合います。

家庭を見れば、そこにはおじいさん・おばあさん、父母、息子・娘がいます。これが三代ですが、歴史をおいて過去からつながってきたのです。おじいさんは、先祖から今まで霊界に行っている天国の私たちの先祖を代表し、我が家の中に派遣された全権大使なのです。ですからおばあさん、おじいさんに誰に対するように侍らなければならないかといえば、神様に対するように侍らなければなりません。そのように侍ることによって、天国の出発を見るようになるのです。

霊界には、家庭を連れて入らなければならないという原則があるのです。なぜ息子、娘がいなければ駄目なのですか。子孫というものは本来、縦的な神様の愛と横的な父母の愛、神様と父母の血が縦横に混ざり合って生まれたものです。したがって、後孫をもつことができなかった人は、霊界に行って天地の調和を成すことができず、東西南北に拍子を合わせられないというのです。後孫をもたなければ、あの世に行っても、遊んで休むことのできる場がないというのです。

息子、娘を生んで正統的な家庭訓練をすることができなければならないし、また一族を率いた長になって霊界に入らなければなりません。霊界に入っていくときは、子女の完成、兄弟の完成、夫婦の完成、父母の完成をみな成さなければならないのです。

家庭では父母を中心として孝子になれというのです。その次には、国を中心として忠臣になれといいます。また、世界を中心としては聖人になれといいます。聖人とは世界を愛する人です。聖子は神様の息子になるために、神様と天国の宮法と天国の宮に暮らす人まで愛するのです。

このような人は、愛を中心として暮らす人なので、愛の生命を尊重視し、愛の血統を尊重視するのです。このようなことを尊重視しながら、世界のどこでも、故郷のように暮らすことのできるそのような所が人間の求めていくべき理想郷です。このように暮らす人が霊界に行くようになるときは、神様の前に躊躇することなく直行できるということを、皆さんが記憶してくださるようお願いします。

七) 「ため」に生きれば天国に行く

天国は犠牲になった者が主人となるのです。家庭は氏族のために、氏族は民族のために、民族は国家のために、国家は世界のために、世界は天宙のために、天宙は神様のために犠牲になるのです。結局、目的は神様に到達することです。神様を占領するのです。生命をもったすべての存在の最高理想は、神様の愛を占領することです。それを最高の目標とするというのです。その特権をもっているのが人間です。

霊界に行けば、相対を重要視し、全体のために奉仕し、犠牲になった人が高い所に行くのです。それが天国民の共通した性格です。どのような人が高い霊界に行くかといえば、

すべてのものを投入して、神様のように投入し、投入して忘れてしまう人です。人類救援のために多くの人々を神側に引き寄せた人が天国に行くのです。天国の国民をどれほどたくさん連結させるかによって、霊界での自らの立場、位置が決定されるのです。

「ため」に生きる経験ができず、愛をもって生きられなかった男性、女性がどれほどかわいそうか、霊界に行ってみればはっきり分かるようになります。あの世はすべて、「ため」に生きる人だけです。ここでそのように生きれば、そのまま神様のところにひゅっと上がっていきます。それを知っているために文総裁は、今まで現れることを嫌いました。弟子たちをみな前面に出して、栄光ある立場をみな譲ったのです。

真を求めて行くならば、心は絶対「ため」に生きることができ、体もそうならなければなりません。これが一つになって天地に神様を中心として九〇度で連結されれば、東西南北、上下、高低どこに行こうが分かります。自動的に霊界が通じます。学ばなくてもみな分かります。文総裁のような人がどのようにして天地の秘密をすべて知ったのでしょうか。その境地に入ると、みな分かるようになります。真の愛を中心として心と体が共鳴する境地にぴたっと入ると、みな見えたというのです。神様も見え、天上世界がすべて見え、歴史が見え、すべて見えます。

なぜですか。真の愛を通して関係を結び、因縁を結び、理想的生活をすることのできる環境的要件が、本来、神様の創造理想の原則であったため、その境地に入ると、通じないところがありません。霊界の先祖も、呼べばさっと出てきて、会って何かを尋ねてみることもできるのです。

宇宙を造った神様は、宇宙の法度を立てた神様は、どのようなお方なのでしょうか。全宇宙を通じて誰よりも「ため」に生きる代表的な立場に立った方です。その方が神様だというのです。それゆえに、その方に会おうとするなら「ため」に生きなければなりません。その方は知識の大王ですが、「知識をもって神様の前に来い」とは言わないのです。能力の大王ですが、「能力をもって来い」とは言わないのです。権力に対する、お金に対する、物質に対する主人であり、大王ですが、「それをもって来い」とは言わないというのです。「ため」に生きて来れば、すべてが来ることができるというのです。

私たちの本郷は、神様のために存在する者たちだけが入る所であり、「ため」に生まれ、「ため」に生き、「ため」に死んでいった人々が入る所です。これが、私たちの本郷の理想的構造であるがゆえに、神様は本郷に訪ねるようにするために歴史過程に数多くの宗教を立てて訓練させてきたのです。宗教が柔和謙遜にし、犠牲にならなければならないと教える理由は、霊界の法度がそうであるがゆえに、宗教が霊界に帰らなければならない人間たちを地上生活の過程でその霊界にふさわしくなるように訓練せざるを得なかったのです。それゆえに、高次的な宗教であるほどより次元の高い犠牲を強調し、奉仕を強調したのです。それは、普段の生活を通してその世界に一致させようというところに、その原因があるのです。

お金についていきたい人は、永生の道を行くことはできません。知識についていく人も、永生の道を行くことはできません。知識に、学問に、永生がどこにありますか。知識は多いほど、知れば知るほど驕慢になるのです。驕慢の主人が、驕慢の親分がサタンです。サタン世界の近くへ行くのです。教授の方々、済みません。私が知っている真理はそうです。死んでみてください。私が間違ったことを言ったでしょうか。霊界へ行ってみてください。行ってみて、その時私に抗議してください。正しく教えてあげるので、正しい先生でしょう。そこでも先生で、ここでも先生です。取るに足りない先生ではありません。

霊界に行けば、固執というものが大きい怨讐です。国会議員をしていた人々が霊界に行けば、本当に困るのです。それをはっきり知らなければなりません。教授たちを再教育すべきですが、皮をはいで労働者の立場から汗を流させるのです。汗を流して、地も耕してみなければなりません。そうしなくてはなりません。そのような意味で私が教授をすべて結び合わせましたが、今まではこの人たちを厚遇しました。そのようにしていては、霊界に行って讒訴します。「先生はこのことを全部知りながら、なぜそうしたのですか。なぜ正しく教えてくれなかったのですか」と言うのです。これは事実の話です。行ってみてください、私の話が正しいか正しくないか。

霊界に行ってみれば分かりますが、すべて「ため」に生きる人が行くのであって、「『ため』に生きろ」と言う人は行くことができません。ですから、学者になり、世の中で大統領になり、王になった人々は地獄へ行くのです。「ため」に生きなかったからです。牧師たちの心情を見ると、自分が恵んでもらうことを考えるのであって、与えて生きようとしないのです。父母というものは、いくら子女に与えても、また別の何かを準備し与えようとするのです。与えたい心が連結されるそのような基盤には、発展があるのです。

霊界と人間が関係を結べば隠すことができないのです。水を見れば、水は必ず上から下へ流れ落ち、空気は空間があれば満たそうとするのです。これと同じように、霊界が動く所には空の所がありません。満たされるというのです。水を受けようとするなら器が空でなければなりません。器がいっぱいであれば、空いている残りの所にしか満たされないというのです。同じように、空気も空いている部分にはみな入りますが、ふさがっていれば、そのふさがった部分には空気を満たすことができないのです。

霊界にさっと行ってみると、千年万年になる人々が、すべて自分を中心として集まろうとするのです。自分が動くと、群れをつくってすべて集まってくるのです。皆さんも先生と近い所で生きたいでしょう。近い所で「このように見ながら生きたい」と、そう思うのです。それは誰がそのようにしますか。自分ではないのです。天運が、宇宙の法則がそのような人を中心として、みな集まって一つになるようにしようとするのです。それが原則です。いくら「離れなさい」と言っても、離れることができません。

「ため」に生きる人になりなさい。これが、天宙生成、形成の根本なのです。神様も「た

め」に存在するのです。このように見れば、平和の世界が目前に展開するのです。天宙のすべてのものの中で、これに逆らうものはありません。このように主体的、生成の根源、エキス的、核心的な立場に立ったその人は、天宙、神様までも歓迎するのです。先生のような人がそうなのです。今、皆さんは、そのようなことを知らないために実感できません。霊界も先生を中心として動いているのです。そのような世界を知らないでしょう。それゆえに、いい加減にしているのです。

真の愛を中心として「ため」に生きる人は、夜でも昼でも天宙万宙どこに行こうが歓迎を受けるのです。皆さんは、いずれ霊界の展示場に展示されるのです。人間の博覧会をする所が霊界です。霊界では、地上でどのような生涯を生きた人間なのか、すぐ展示されるのです。そこでびりになりたいですか、皆が称賛する人になりたいですか。どちらですか。最高に称賛を受ける人になりたいでしょう。そのようになるためには、先生が話すとおりに生きなければならないというのです。最高に称賛を受けようとする前に、最高に「ため」に生きなさいというのです。そのような人は、間違いなく中心者になるのです。

青年たちはそれを知らないのです。二十人の友人たちがいるとするならば、友人たちの中心として残る人は誰ですか。「お前たち、すべて私のためにしろ」と言えば、すべて逃げてしまうのです。二十年、十年、一生を終える時まで、死んでもその友人のために生きた場合には、霊界があるならばそこに行き、すべて彼を中心として集まるのです。それは間違いない真理です。「ため」に生きる、より「ため」に生きる、より犠牲になる人が中心者になるのです。

「ため」に生きる人は滅びません。また、「ため」に生きる人は霊界でどんどんコーチしてあげます。どんどん新しいものと関係を結ぶようにしてあげるというのです。新しいものと関係を結ぶから、その人は自然に有名になり、世界的に知られるのです。

父母は苦労する息子、娘を先に考えるのです。それゆえに心情の潮流というものは何でしょうか。かわいそうな人々を訪ねて、いかにして自分のようにさせるか、ということを実践できなければならないのです。そのようになれば、世の中はすべて私に反対して冷遇しますが、神様と天国は私を擁護するというのです。神様を中心として、霊界の霊人たちが私を擁護し、保護して回るのです。雲のように私を擁護してくれるのです。

それゆえに、そのような人々は滅びません。それが過ぎるようになれば、雲が環境をすべて巻き込んで整理するのです。ですから投入して苦労した代価ぐらい、創造することができるというのです。私は苦労して迫害されましたが、天運があとから来て、その基盤を築いてくれるのです。聖人たちは当代では迫害を受けますが、後代において名を残すのは、霊界が、天が、天運がそうしてくれるので、そのような現象が起こるのです。

天国に行こうとする人は悲惨に生きろ、悲惨に死ね、悲惨に逝けというのです。その言葉が良い言葉ですか、悪い言葉ですか。良いというのです。それなら、死ぬほど出ていって伝道しろという言葉も良い言葉です。他人

のために命を捨てろというのです。自分のためにではなく、他の人のために、世界のために、天下のために命を捨てれば、大宇宙の主人として立ててくれるのです。

永遠に残るものがあるならば、それは公的な苦労です。公的な苦労をして霊界に行ったのに、そこで滅びたなら先生に抗議してもかまわないのです。民族と世界、天地のために働いている途中で打たれる人が賢い人です。

悟りの道に入った人は、死ぬ時まで死の道を行かなければなりません。死んでする苦労を生きて蕩減するので、そのような道を行かなければならないというのです。死んで億千万年苦労するのを縮小させ、生前に蕩減してしまおうというのです。このように悟りの道は、永遠に行くべき受難の路程を、この地上で苦難の道を歩いていくことで蕩減しようというものです。

統一教会に来るようになれば、「地上で良い生活をしなさい」とは言いません。この上なく貧しく、この上なく苦労して死んで道端に倒れ、犬もかみつかない死骸を残したとしても、その場には花が咲く日が来ることでしょう。そこには、すべての神聖な人々が集まって都をつくることでしょう。統一教会の群れを国のために、世界のためにうんざりするほど苦労をさせて、孝子、忠臣にしてみようというのが先生の考えです。「行かない」と言うならば、張り飛ばさなければならないのです。足でけ飛ばしてでも現在の悲惨さを、現在の難しさを克服させるのが愛です。

第二章　霊界はどのような所か

一　霊界の実相と法度

一) 霊界は時空を超越した無限の世界

霊界がどれぐらい広大無辺な世界か知っていますか。今日、この宇宙だけで見てもそうです。二百二十億光年以上になる宇宙です。これがどれほど大きいかといえば、光が一秒間に三億メートル、一秒間に地球を七回り半回ることのできる速度で一年間進む距離を一光年と言いますが、それが二百二十億年かかるというのです。二百日ではありません。ですから、宇宙がどれほど大きいでしょうか。それがすべて私たちの活動舞台だというのです。

神様は、時空を超越して存在するお方であられます。今日の時間や空間世界を超越して存在するのです。霊界に行けば、一年という年がありません。一年、二年、一日などというものがないのです。それは便利なことでしょう。寝もしないのです。霊界に行けば寝ないで暮らすことができます。食べないで暮らすことができます。思いのうちで食べて生きていくことができるのです。例えば、目である物を一度見て「いいなあ」と思えば、千年も万年も忘れられないというのです。そうであったら本当にいいでしょう。

天国は太陽系のように一年を三百六十五日として地球のように軌道を回って、一日は二十四時間でという、そういうものはありません。私たちの言う一年、二年というのは、地球での話です。太陽系を中心とする惑星の立場から一年を定め、地球が一回り自転することを一日と定めているのです。霊界は、地球が一回り自転するように回ったり、太陽を中

心としてその軌道に従って一年を回るという決まりがありません。朝なら永遠に朝です。そこには日や年の概念がありません。

霊界は時間と空間を超越しているので、一秒間に何億万里も行くことができます。広大な世界が時空を超越しているので、一秒間でも何億万里も行くことができるのです。広大な世界が時空を超越しています。千年前が見え、何万年前が見えるのです。見えるのですが、何を見ようとするのでしょうか。他のものは見ません。誰に会いたがるかと言えば、男性であれば女性に会いたがるのです。そして、会ってからは、その人の心中にある本然の愛の大きさがどれくらいなのか、その人のもっている愛の量がどれくらい多いのか。これが測定基準となるのです。

霊界の中心は何ですか。それは絶対的な神様を中心として構成された世界です。その絶対的な神様がいるなら、その神様は天地創造の時の宇宙の起源になられる方です。彼によらないものがないというのです。それに属しているために、それに属した全体はそれとともに感じ、それとともに因縁をもっているのです。例を挙げれば、私たち人間は約百兆個になる細胞をもっていますが、すべての細胞自体がどのような分野であろうと感じさえすれば、直接頭脳に連絡されるのです。

天地創造の創造主を中心として連結されるすべての存在もそれと同じだというのです。しかも、人間として生まれ、善でより次元の高い価値のものを追求しながら生きることは、神様を根源として始まったものです。それゆえ過程を経て根源と通じることのできる結果の世界にあるのが人生であると、このように見るのです。

神様はどのようなお方なのでしょうか。神様は宇宙の存在世界の心のような方です。神様は宇宙の心のような方です。皆さんは心を見ることができますか。霊界は心のような生活の世界ですが、これは時間と空間を超越した所です。そこでは御飯を思いのままに食べることができます。御飯の心配をする必要がありません。水の心配をする必要がありません。飲み物の心配をする必要がありません。服の心配をする必要がありません。衣食住すべてのものを超越しています。そこでは億千万里をあっという間に往来するのです。何の力をもってでしょうか。愛の力をもってそのようにします。愛する人に会いたいと思えば、さっと現れます。

動物がそうなのに、万物の霊長である人間は飛んでみたいでしょうか、飛んでみたくないでしょうか。ですから人間は飛び回るようになっています。霊界は飛行機なしに何百光年になる世界をあっという間に行ったり来たりします。一度行ってみたくないですか。

神様に「あらゆる昆虫までも飛び、鳩のような鳥も飛んでいるのに、人はなぜ飛べないのですか」と聞けば、神様が何と言うでしょうか。神様があの霊界の高い所から尋ねてくる時に歩いてくるでしょうか、さっと飛んでくるでしょうか。霊界は無限大の世界なのです。このごろは人工衛星が金星に行くのに、十四年間かけて飛びながら、キャッチして写真を撮って送ってくる時代ですが、この霊界は十四年ではありません。一瞬のうちです。

霊人体は稲妻より速いというのです。それゆえ、霊人のように活動する神様についていきながら、共に愛の主体の対象になって生きようとするならば、飛び回らなければならないでしょうか、歩き回らなければならないでしょうか。この体では何歩も歩けません。

あの世の広大な大宇宙を見つめる時、ダイヤモンドの星がないと思いますか。黄金の星がないと思いますか。それがすべて自分の所有だというのであり、その楽しさで暮らすのです。神様がつくってくださった驚くべきものを自分が見て……。愛するすべての群れが、神様の愛する群れ全体が一つになって、大移動しながら暮らせる理想世界だというのです。そこに同伴者になり、同参者になってみたいですか。

霊界があるということを知っていますか。どのくらいはっきり知っていますか。この世界よりももっと確かなものです。その世界はどのような世界ですか。神様が「良し」と言える構想でもってすべてのことが可能な世界です。

考えてみてください。数多くの人が行っているのですが、一瞬のうちに彼らに祝宴を催しても余りがある理想世界です。霊界に行っているあらゆる国の人、何百億になるその人々を集めて、瞬く間に祝宴を催しても余りがあるのがそのような理想世界です。そのような世界、レバレンド・ムーンはそのような世界に向かっていくのです。この世を見つめていくのではありません。ここで、そこに合わせていくのです。

霊界に行ってみれば、男性、女性が一人の大きな人に見えるというのです。人は何ですか。皆さんはみんな一つの細胞のようなものになります。全宇宙がみな、男性、女性のように見えます。そのように見えるというのです。それは合わせたものです。このように歩けば、宇宙が歩くのです。その中に入った人は神様の細胞と同じです。一つの体になっているのです。

霊界では説明が必要なく、弁解が必要ありません。ちらっと見ればすぐに分かります。あの人が私の下なのか、横なのか、高い位置なのかすぐに分かります。何億年前のおじいさんであった人にも会えば、愛のその位階というものはすぐに……。その位階は絶対的です。その位階が高い人は自然にその位階に合わせて自分が立つ位置に立つようになっているのであって、いい加減ではいけません。世の中とは違うのです。中傷、謀略して出世したり、そのような人はそれがすべて逆になっているのです。その反対になるのです。ですから正道を見なさいというのです。

霊界に行っている人間は何を願うのでしょうか。霊界は自分が置かれている基準ですべてのものを補給できる世界です。願えばすぐです。主体的な能力がある人なら不可能がない世界です。もし、百万人の祝宴を催すなら、考えると同時に百万人が広場に現れ、すべての準備が可能なので、百万人の祝宴を一瞬のうちにできるのです。そのような世界です。何が可能にするのでしょうか。原子力が分裂作用において熱が出るのと同じように、皆さんが愛の分裂作用をすれば、瞬く間に可能になります。それはありそうな気がしませんか。

霊界がそうです。私が「どこかに行く」と言う時は既に行っているのです。あの大宇宙が自分の活動舞台になると考えてみなさい。愛が先んじなければなりません。「ああ、会いたい。会いたい」と、こうでなければなりません。自分の相対のように、自分の愛する人のように、会いたければさっと行くのです。あの世で芸術家に会えば、自分が芸術的なあらゆる素質を一瞬のうちに啓発してついていくのです。万事が可能な世界です。ですからあの世に行けば、歌う所では歌い踊るのです。みな喜んで心と体が和動して踊ったり歌ったりするというのです。どれほど美しいでしょうか。神様が絵を描くにも一等ではないですか。そうでしょう。神様が傑作品の絵をはって眺めるでしょうか、傑作として行動する創造物を眺めるでしょうか。どちらを喜ぶでしょうか。傑作品は必要ありません。そして、その世界は愛の心に酔う最高の場であるがゆえに、年を取りません。年を取らないというのです。お母様も年を取りましたが、私が見るにはいつも最も美しい時の姿なのです。

いつもかんかんに晴れた日だけあれば、どれほど退屈するでしょうか。そこに霧もかかったり、月に雲のかさをかけたり、このように月も見えなくて……。ありとあらゆる気候の変化を見れば、どんなに芸術的でしょうか。考えてみなさい。一つの美術世界です。芸術世界です。あの霊界の澄んだ世界に自分が雲をかけたければ雲をかけることができ、霧がかかるようにしたければ、霧がかかるようにできる、愛によってそのすべての多様な感応圏をつくることのできる特性をもったそのような人間になれるというのです。ですからすべての霊界が関心をおきます。「ああ、あの人の所に行けばおもしろい」と言うのです。

霊界では距離と時間を超越します。時間がありません。何でも見たいと思えばすぐに現れます。膨大な天国がすぐに通じるのです。この地上で電話も距離の問題がないでしょう。そのようにどこでも通話ができるようになっています。そのような世界が背後の動機地、発電所のようになっているのです。

霊界に行けば夜があるでしょうか、ないでしょうか。霊界に行けば、この地球星にも通じることができ、この物質世界にも思いのままに通じることができます。水中にも行くことができ、大地を垂直に通ることもできるのです。宇宙には星が無数にありますが、真の愛の相対として神様の愛をもって行く所は道がぽんぽんと通じるのです。愛の速度が最も速いです。最も速いのです。光の速度は一秒間に三億メートルという距離を進み、地球を七回り半を回ることができると言います。これは、それより何千倍も速いのです。億千万里でも、真の愛ならば瞬時に行くのです。膨大な霊界でも一瞬のうちに活動できます。

皆さんが霊界に行ってすることは何だと思いますか。あの世ですることとは何でしょうか。考えてみなさい。そこで金もうけをするのでしょうか。服が必要で、家が必要でしょうか。皆さんが願うことは瞬間的にすべてかなえられます。霊界では私のために現れなさいと、いくら死ぬと大声を出して騒いでも駄目です。これを知らなければなりません。反対に、私が神様を愛し、世界を愛し、天国の王子の立場で、王に仕える中で「あらゆるも

のが必要だから現れなさい」と言えば瞬間的です。瞬く間にもてなかったものを……。想像が及ぶことはすべて可能な世界が霊界であるということを知らなければなりません。

愛は熱に例えて表現されます。熱で例えるでしょう。「胸が熱い」と言うでしょう。霊界に行けば、神様は愛の本体であるゆえに光と熱で現れるのです。霊眼で見れば、皆さんの愛の光がどれだけ出るか、どんな光が出るか、まだらな光が出るか、虹の光が出るかということがみな分かるようになっているのです。家庭が一つになって光る星にならなければなりません。太陽のように星もすべて衛星のようになっていて、星を率いる星もあるのです。

神様が創造する時、最も好きな色を先につくったのでしょうか、最も嫌う色を先につくったのでしょうか。早春に咲く花の色は何色でしょうか。紫色です。紫色は赤色も入っていて、ピンクも入っていて、それから何色が入っているでしょうか。すべて入っているのです。紫色が好きでしょう。ですから高尚な物はすべて紫色です。あの世に行ってみれば、最も良い色は紫色なのです。

霊界に行けば色がありません。あまりにも明るくて銀色のように見えます。銀色のように見えながらも、あまりにも明るくてきらびやかなので紫色に見えるのです。フィラメントに電気が入れば、本来黒だったものが明るい白に光るのです。同じです。霊界に行けば黒人はいません。地上にいる時は黒人に見えた人が、霊界ではそのように見えないのです。真なる良心をもって生きた善人は、高い級の霊界に行くのです。障害者も霊界にはいません。足の不自由な人、病を患っていた人も、肉身を脱げばいかなる障害もありません。

霊界ではどのような年齢で暮らすのでしょうか。最も美しい年齢の時の姿で暮らします。天国に行けばそうです。そして、永遠に暮らすのです。そして、その人が考えるすべてのものが変われば変わるほど、その容貌がさらに美しく見えるのです。霊界を知れば、ただそのままそれがすべて連結するのです。

霊界に行けば、地上のことは思い出しません。窮屈なこの手のひらほどの地上で何をするのでしょうか。大宇宙があるのに、一つの砂粒のようなものを思い出しますか。しかし、霊界の民族を生産する工場はここしかありません。宇宙に一つしかありません。何ですか、金星にも人が暮らしているというのですか。人は、この宇宙でここにしかいないのです。

二) 霊界は愛全能の世界

真の愛の概念でぎっしり詰まっている所が霊界です。真の愛を五官によって感じるように、まんべんなくすべて体験してから行く所が天国です。その場に立てば、あらゆることがすべてできます。理想的な生活環境がそこで展開するというのです。どれほど驚異的なのか皆さんは知りません。

霊界はどのような所でしょうか。すべてのものが愛で充満した、愛でいっぱいの調和の世界です。皆さん、スイッチさえ押せば、このスイッチ一つでニューヨーク市の何百万世帯に電気がぱっとつくとすれば、これは信じ

られますか。それでは、愛のボタンを一度押せば、この宇宙が作動するということがうそのように思えますか、本当のように思えますか。

地上天国は、すべての愛の電球に明かりがつく所が地上天国です。そして、天上天国とは何ですか。愛の電球に明かりが完全にともることのできる所が天上天国です。それゆえに、皆さんが愛の心だけ抱き、愛のひもだけ引けば、すべて引っ張られてくるのです。後ろに引けば後ろに行き、横に引けば横へ行き、このように引くとこのように入っていこうとして、このように引けば上がっていこうとするのです。思いどおりに操縦できるのです。無理やりそのようにするのではなく、自動的にそのようにするのです。自動的にそのようになるのです。それを理解できますか。

皆さん、一度考えてみてください。霊界に行けばうらやましいものがありません。皆さんのその愛の化身体をダイヤモンドと比較しますか、黄金の塊と比較しますか、真珠と比較しますか。宝石が問題ではありません。もっときらきら輝くのです。愛と化した化身体はもっと美しいのです。ダイヤモンドに愛のダイヤモンドがありますか。生命のダイヤモンドがありますか。しかし、私たちはダイヤモンドも感動させることができ、すべてのものに影響を及ぼすことのできる価値的存在だというのです。貴い愛のダイヤモンドなのです。貴い生命のダイモンドなのです。それが私なのです。ですから私はどんなに素晴らしいでしょうか。

霊界という所は、愛の電気で充満した所です！　事実がそうなのです。私が知っている霊界はそうだというのです。ですから、今日人間は、何でもすべて愛と関係を結ぼうとします。なぜ、愛と関係を結ぼうとしますか。霊界に拍子を合わせるためです。これが理論にぴったり合うのです。そのようになっているために、そこに応じざるを得ないのが私たち存在物です。その立場を離れることができないということを皆さんは知らなければなりません。

霊界に行けば夢の鉱山がいくらでもたくさんあります。金、銀、宝石がいくらでもあります。花も好きな人が来れば、愛する人が来れば、眠っていても突然ぱかりと口を開け、目を開けて歓迎するのです。「少し待ちなさい」と言ったのに、ただそのまま行ってしまえば「ああ」と言って枯れてしまうのです。

神様が笑えば全体が共に笑います。霊界に行けばそうです。霊界に行けば直感の世界と同じです。神様が喜んでいるのか、そうでないのか、きょうは気分が悪いのか、良いのか、すぐに分かります。地上世界に何かあって喜ぶのを見ると、全体がふわっと膨らむというのです。ぽんと浮かぶというのです。

霊界に行って何をするのでしょうか。愛の歌、愛の話をするのです。霊界では、オペラ式に話せば、私がオペラ式に答えなければなりません。踊りで表現すれば踊りで答えなければなりません。永遠に喜び、踊りを踊っても永遠に飽きません。一箇所で踊れば天国がすべて踊り、一箇所で歌えばすべて歌うのです。その時は自分の愛する妻と踊るのです。他の女性と踊るなら「ああ、私の愛する妻をあなたより百倍愛するために私があなたと踊るのです」とこのように考えるのです。他の

女性と手を取って踊るなら、それはすべて自分の愛する対象を千倍、万倍、もっと刺激的に愛するためにこうするのだというのです。

霊界から神様が見れば、皆さんの心は愛の鐘の音が聞こえる所に行けば、灯がますます大きくなるというのです。この光は五色燦然と輝くのです。神様の目にはダイヤモンドの光よりもっと美しく見えるというのです。そして、光だけが良いのではなく、その光の中には味があるというのです。それは見れば見るほど良いというのです。何度も見れば見るほど酔ってしまいます。

それゆえに、神様は愛という話をするのです。皆さんの心の愛の鐘を鳴らせば天地を動かし、すべての万民を動かすのです。そのようにすれば、神様も「あ！」と言って動かすことのできる鐘があるということを知らなければなりません。それゆえに、愛の涙をどれほど流したか、愛の切なさをどれほど味わったか、それが皆さんの財産だというのです。

今後私たちが真の愛の力をもって霊界に行くようになれば、いくら遠い所にいる人でも一瞬のうちに会うことができ、愛ゆえに訪ねていく時は瞬く間に故郷へ帰ることができるというのです。霊界という世界は無限に膨大な世界であるので、何百万里、何千万里の距離も一瞬のうちに愛を中心として行き来することができる世界であるというのです。愛は最高の速度をもっているのです。皆さんの心と体が統一された愛の基台をもてなくなる時には、その世界と私は関係がないというのです。ですから、統一の起源が相対世界から起こるのではなく、私から始まるということをはっきりと知らなければなりません。

神様がいくら高いといっても「神様！」と愛の心で呼べば、すぐに「なんだ」と自分の心の中で答えます。「神様、どこにいらっしゃいますか」、「どこにいるかって、お前の心の根本にいるではないか」と答えるのです。神様が本来根本ではないでしょうか。心の根の根本にいるでしょう。このようになっているのです。

あの世で必要なことは、世界よりも、自分の国よりも、自分の妻よりも、自分の息子よりも神様をもっと愛さなければならないということです。それが原則です。お父さん、お母さん、子供たちみんな……。お母さんが言うには「あ、あなたは私を愛するより神様をもっと愛してから私を愛してください」それでこそ夫から高い次元の神様の愛を受けることができるようになるのです。父母に対しても「どうか私たちは置いておいて、本来の父母の愛を先に受けてください。その父母の愛を受けたお父さん、お母さんを私は愛したい」と、そのようにすがりついて哀願しなければならないのです。

愛の理想を中心として神様の前に相対になれる人が、考えるすべてのものを瞬間的に実現化させ得る世界です。何億、何千万名も一瞬のうちにバンケット（祝宴）を準備できる世界です。私が服を豪華絢爛に着て、愛の対象として神様を一度楽しくさせてさしあげようという時は、豪華絢爛になります。こうこうこのように想像できる以上のことを想像しても、それが可能な世界です。そのような世界を知っている人は、地上では生きる楽しみがありません。ですから、私は監獄にほうり込まれても、何の問題もありません。この世

でのわずかな生活は、永遠な世界で息を一度止めるのと同じです。

神様の心情、天国の心情に通じたならば、どこでもすべて一つになることができ、どこでもすべて和合できるからです。そうなれば、その門を通ることのできる階級に暮らす人は「わあ！　万歳！　神様好きです！」と言うのです。ただついて行きたがり、皆が喜ぶのです。食べたいものがあれば何でも食べることができ、着たいものがあれば着て、遊びたければ遊んで、したいことを思いどおりにできます。この地球上で百年生きても感じられないあらゆる幸福を、有り難さを、一瞬のうちに感じられるというのです。

霊界はどのような世界ですか。神様の心情と同等に立てる心情をもてば、何でも可能な、そのような所なのです。今後ムーニーが何千万人になっても「皆さん、全員このような新しい服に着替えなさい」と言えば、さっと新しい服にみな着替えることができます。それから「バンケットの場所、これこれこういう場所に現れなさい」と言えば、すぐにそのようになるのです。テーブルは、金の装飾や銀の装飾で五色きらびやかに飾られ、またそこにあるいすもそうですし、そこに座ったすべての人々は歓喜に、喜びに、愛に酔って踊ることでしょう。千年踊っても喜ぶことのできる所です。

何億万里の距離にある世界の人でも、愛の心が強くなって「会いたい」と思えばさっと現れるのです。「何の用ですか」と聞けば、「あなたが呼んだので現れました」と言うのです。「どのくらい遠くから来たのですか」と聞けば、「何億万里から来た」と言うのです。距離を超越します。宇宙が私の活動基地です。

それなのに、その世界にない物質でもって首を絞め、お金、知識、権力でもって首を絞めているのですか。あの世ではそのようなものは一つもありません。そのようなものは、残るものが一つもありません。皆さん、この世ではお金、知識、権力が必要ですが、あの世ではそのようなものは必要ありません。霊界のどんなものも皆さんを歓迎せず、霊界がいくら皆さんに関心をもって一つになろうとしても、皆さんは何ももてないのです。本質とは反対のこと、反対的なこと、それでは一つになれないというのです。霊界が関心をもてる位置と連結できません。

私が「このような人に会いたい」と言えば、すぐ前に現れるのです。「あなたがこれこれこういう人ですか」、「はい、数百、数千年前に私は地上のどんな所で暮らしていた。私に会いたいですか。私に尋ねてみたいことがありますか」、「はい、あります。私はこのように教えました。私とあなたがどんなに違いますか！　分かりますか」と言いながら、話をぴいぴいと交わすことができます。時間がかかりません。始めるや否やすぐに分かるようになるのです。この世に住むというのはどんなに不便でしょうか！　車が必要ありません。愛の感情は、あらゆるものをつくることができます。観念をもってあらゆるものをつくることができます。真の愛の観念を中心として何でもみなつくることができます。

今から何百年前、八百年前、一千万年前に生きた人間も来てあいさつするのです。聖書では人類歴史が六千年となっていますが、と

んでもないことです。何千年前と今の時がどれほど変わったかというのです。その時の人々は、今生きている人よりも心では神様をよく感じることができたというのです。しかし、文化生活の面では反対なのです。霊的世界の啓発は文化生活とともになされてくるものです。そうでしょう。

知識に通じれば知識の尺度によって理解し、すべてのものを分析するにおいて鋭敏だというのです。したがって、霊感を感得できる基盤がもっと拡大していくというのです。ですから今後は、自然にそのような知識があり、世界の行く末を憂慮する人にはあらかじめ霊界から教えてくれるのです。霊波を通じてどのようになるのか分かるのです。最高の位置に行けば、終わりは一つしかないでしょう。同じなのです。

「誰に会いたい」と言えば、何億万里、何百万里離れていたとしてもすぐに現れます。広い天国にいたとして、「自分が会いたい人、自分が愛した人に会いたい」とぴたっと情緒を整えて言えば、その場で相手が現れるのです。それはどんなにいいですか。そうでしょう。さっと現れれば既に自分がどの級にいるということが分かります。「私はどのような級だ」と知っています。自分が高いか低いか分かります。いくら親しい友人でも、自分のほうが天の前に愛の級が高ければ、来るや否やあいさつするのです。いくらお母さんでも、それよりもっと先祖でもあいさつするのです。そのような世界なのです。

考えてみなさい。ここでは御飯を食べて暮らすことが心配でしょう。ですから、自動車工場、肥料工場、服の工場、食べ物を作る工場など、工場が必要でしょう。家でも食べ物ゆえに大騒ぎするでしょう。霊界に行けばそれはすべてありません。自動車が必要なく、飛行機が必要ありません。一瞬のうちに億万里でも行けるのです。太陽の光よりもっと速いのが霊力です。神様が造った太陽の光だけでも一秒間に三億メートルを走ります。電気もそうでしょう。光の速度も同じです。ところが、神様の本然的な愛の力、生命の力というものは、それより何千倍もさらに速いというのです。

霊界に行って、ある家に暮らす人の級が自分より低い時は、その家が良い家であればその良い家を私の家にできます。さっと訪ねていけば、主人は既にちらっと見れば分かるのです。額をちらっと見れば、顔をちらっと見れば分かるのです。さっと見て自分より高い人なら自分の茶の間に案内するのです。「いらっしゃいませ」と言って案内するのです。

神様の息子、娘になれば、その膨大な宇宙がすべて自分のものになるのです。皆さん、霊界に行けば先生についていきたいでしょう。ついていけません。先生が行く所に皆さんはついてくることができません。皆さんは心情の門が狭いのです。真の愛は大きな門でも小さな門でも自由自在に行けます。真の愛でなければそれはできません。この位置は全体を代表した位置です。それゆえに、どこにでも入っていくことができ、どこにでも出掛けることができます。

どれほど人類を愛したのか、神様が愛を中心として創造した被造物に接する時、神様のようにどのように愛したのかということがす

べての測定基準です。すぐに分かります。コンピューター以上です。嫁に行った女性は、自分の夫がどれくらい愛しているかということについて誇るでしょう。あの世では、神様の愛を中心として、神様の愛をどれだけ受けた人なのかということが誇りです。本然の真の愛、これが高い級の愛なのです。これによって等級が決定するのです。

天国に神様の心情の架け橋があれば、どのように上がっていくのでしょうか。ヘリコプターのようなものに乗って行ったり来たりしながら上がっていくのでしょうか。エレベーター式に直線で上がっていくのでしょうか。ヘリコプター式ですか。エレベーター式です。万年エレベーターです。垂直です。神様の愛に接するためには垂直線に入っていかなければなりません。

聖書に「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）と記されています。それは何だと思いますか。すべてのものの中心は愛だというのです。それで、あらゆる作用と意識のすべてを一つにして「主なるあなたの神様を愛することしかない」と言う時、ここでエレベーターに乗って垂直圏に上がっていくのです。そのような驚くべき世界を知らなければなりません。

あの世、霊界に行けばそうです。誰でも九〇度になれば、東西南北のどこに行ってもきちっと合います。ある社会、数多くのクラブになっている社会、千態万状の社会……。皆さん、ここに何名いますか。およそ五百名集まったとすれば、五百のタイプがあるのです。各々みな違うでしょう。似たグループにみんな集まります。それはコンピューター以上に分析されています。さっと行けば、さっと過ぎれば既に自分の角度が分かります。一週間以内にすべての背後まで、あの秘密世界の倉庫の底までのぞきます。言葉が必要ありません。心で言おうとすることを感じるのです。コンピューターのおじいさんのような世界なのです。

神様も愛のために創造したということは知っているでしょう。神様に「一番好きなものは何か」と聞いてみれば、どのように答えるでしょうか。神様は好きなものはありません。お金も必要なく、知識も必要なく、権力も必要ありません。何が必要ですか。愛の中にはお金もあり、知識もあり、権力もあります。愛の権力が万年権力です。本当に愛を知っている人は天上世界に行って学ぶことがありません。そのような人はいつでも神様の心の中を出たり入ったりします。神様の体を通して東西南北思いどおりに行き来できます。これが中央停留所のようになっています。そこに入って出てくる時は、東西南北の力が集中するために強力な力で出てきます。低い国も、その中央を通って出てくる時は、高い神様と対等な位置に上がっていくのです。愛にはこのような偉大な力があります。

私は、今日世界で電気とか、宇宙とか、何だといって大騒ぎすることが、愛の理想世界を成し遂げるための一つの内的な潤滑剤のようなものだと考えます。このような時、皆さんは「アーメン」と言わなければなりません。そうだとすれば、その世界は愛の電気で充満した世界という結論が出てくるのです。霊界という所が愛の電気で充満した世界ではない

かというのです。そうだとすれば、この世でも愛の電気でできないことがなく、調和が起こるのです。愛の電気ならばできないことがないというのです。

ここで私たちは、今私たちの意識構造をもって処理できる可能圏が霊界だということを、決定づけることができるのではないかと思うのです。それでは、霊界とは何ですか。永遠な要素を願う永遠な所です。それゆえにここで愛を体験した霊人体は、間違いなく自動的に磁石に引かれてその世界へ行くはずです。それを自分が感じた霊界に行くというのです。

三) 霊界の空気は愛である

霊界はどのような組織からなっているかといえば、あの世は空気が愛です。愛が空気になっています。心と体が愛の感触を受けて和することのできる要素として、この地上で体恤されなければなりません。体恤圏をつくっておけば、そのまま通じない所がないというのです。木の樹液が木の芽と根に通じるように通じるのです。神様が喜ぶのを自然に感じます。東方で神様の祝宴が催されるのが分かるのです。そこに行こうとすればさっと行けます。自由天地です。

霊界で呼吸する空気は愛からなっています。愛によりすべてのものが生まれ、愛によって生き、愛によって「ため」に生き、愛の道理で和してその内容を満たしてこそ、神様が今まで歴史時代に願った希望の実体を完成したという格位を備えるようになり、天国のどこに行っても歓迎されるのです。

霊界は愛の成分で覆われている所です。地球は空気で覆われていますが、霊界は愛で包まれている所です。人間は、地上では空気を吸ってガスを吐き出すのですが、霊界は愛を吸って生きるようになっています。霊界は、今日のような人間の世俗的な愛を中心として授け受けするようにはなっていません。霊界で与え受ける愛は真の愛なのです。

皆さんをたたいて純金をつくらなければなりません。純金をつくらなければなりません。そして、犠牲になりなさいというのです。自分を犠牲にしなさいというのです。自分がなくなるように死になさいというのです。自分をなくしなさい、自分を犠牲にしなさい、犠牲にしなさい、なくしなさい、ゼロになりなさいというのです。このごろ、なぜ宇宙時代に入り、電気時代に入ったのでしょうか。このような時代が近いからそうなのです。「原理」で言えば、真が来る前に外的なもの、カイン的なものが先に来るというのです。この世がカイン的なのです。このように見ると、神様の愛の電気学を語ることにおいては、レバレンド・ムーンが先祖になることでしょう。

霊界に行けば、原則にどれだけ同化し、どれだけ一致にしたかということが地獄から中間霊界、楽園、天国まですべて連結されるのです。そのような原則がなければならないのではないでしょうか。だからといって、アメリカ大統領をし、世界的なノーベル賞ももらい、世界的に有名な学者だといって霊界に行けば、天国に行けるのでしょうか。行くことができないのです。通ることができますか。

それゆえに、宗教界はすべてのものを捨てて行きなさいと教えるのです。すべて捨てて

いかなければなりません。それでは、何が最も貴いのでしょうか。天のためにどれほど苦痛を受け、この世界のためにどれほど苦痛を受け、どれほど涙を流したか、それがあの世をパスするチケットです。これは間違いありません。絶対的だというのです。これは理論に合うのです。

霊界で、永遠の世界に拍子を合わせるために、再生のために息が詰まり、窒息して注射を打ち、酸素呼吸する皆さんになりますか、自由に活動できる、自由な神様の愛の圏で暮らすことのできる皆さんになりますか。ここは世界のために生きなければならないので、これが生涯の行く道です。将来のために行くことが、生涯において行くべき必然的な道だということを皆さんは知らなければなりません。

四) 霊人たちの生、霊人たちの相互関係

神様は、天地を創造なさった方であり、この世の存在の起源となる一番の母体となられる方です。その方は存在価値の起源です。その方がいらっしゃるので、今日この現象世界が始まったのです。そのような絶対的な方は、ある時代に変化があるといって変わる方ではありません。絶対的なものは変わることはありません。また、時間や空間に制限されることもありません。すべての制限を超越した位置で、すべての制限を主管される方です。

そのような方が誰ですか。「神様」とだけ言うのではありません。その方は「お父様」です。皆さんは「父なる神様」と呼ばなければなりません。神様を何と呼ばなければなりませんか。そのお父様は皆さんを生んでくれたお父さんです。人間が堕落したがゆえに、「再び産む」という言葉が必要なのであって、その方は本来皆さんを産んだお父さんです。肉身のお父さんは皆さんを仲介するお父さんです。そのお父さんは霊界に行けば、お父さんというのではなくお兄さんと呼ぶようになっているというのです。お母さんもお母さんと呼ぶようになっていないというのです。

霊界に行けば、アダムとエバも神様に対して「お父様」と言い、数千万代の子孫である皆さんも神様に対して「お父様」と言うでしょう。「兄なる神様」と祈祷しますか、「父なる神様」と祈祷しますか。それでは、自分のお父さんは何になりますか。霊界に行けば、お父様が何になりますか。お兄さんです。お兄さんとは何ですか。私より先に生まれたのがお兄さんです。私より先に生まれたのがお兄さんだというのです。それで、内的なお兄さんが神様で、外的なお兄さんが自分のお父さんだというのです。それ以上の理論を立てることができないことを知らなければなりません。

父母の根をもった人々が、神様を何と呼びますか。キリスト教で呼ぶようにみんなが神様を「お父様」と呼びます。一軒の中でおじいさんも神様を「お父様」と呼び、お父さんも神様を「お父様」と呼びます。孫もやはり神様を「お父様」と呼びます。家族みんなが神様を「お父様」と呼びます。このように神様は、すべての人間にとってお父様になられる方です。したがって、神様は人間にとってお父様になり、人間はお互い兄弟になるのです。先生は時々、本当にそのようになるなら、霊界に行けば実におもしろいだろうと思うのです。

私たちの最初の先祖まで私が見ることができるのに、先祖を造られた神様は見ることができないのでしょうか。神様も見ることができるのです。それは何の話か分かりますか。ですから、家庭というものは何かというと、見えない神様の愛の表現場所です。愛を中心として歴史時代に生きたすべての先祖は、愛の統治をあの世で受けているのです。同じ愛です。

すべての家庭が真の愛で一つになって霊界に入っていけば、神様の血肉を食べて永遠に生きるのです。そこに入っていけば農作業もなく仕事がありません。真の愛の食べ物はにおいをかいでも永遠に生きることができ、見るだけでもおいしいというのです。愛の食べ物を分けて食べるのです。神様の体、血肉と愛を分けてもらって生きるのです。

神様とは誰ですか。あなたの友人です！最も高い友人だというのです。そして、お兄さん、お父さん、王であり、創造主です。ですから、皆さんが膨大な霊界の天国世界に入っていくようになって、そこでそれ以上のものを神様に願ったとしても神様がつくってくれるというのです。それは問題ないというのです。それはどんなに誇らしいでしょうか。その位置は神様の代わりの位置です。その位置に行った人間を神様が憎むでしょうか。いいえ、「私の息子、ナンバーワン、私の息子！」と歓迎するというのです。これが父母が願う最高の望みです。

地上世界で親子関係の愛を貴く思うように、愛をもって生きていけば、天上世界でも神様を父母として侍って息子、娘のような立場で生きることになるのです。これが堕落しない家庭で生きる生活と同じであり、性格、性稟が似たのであらゆる方面で会うのです。

堕落しない家庭は、霊界と肉界のすべてに通じることができます。「おじいさんのお父さんは誰ですか」と言えば、見ることができるというのです。また、そのおじいさんのおじいさんが誰なのか、四代の先祖が誰なのか、五代の先祖、百代の先祖、千代の先祖、その次の先祖まで見ることができるのです。

そして、「アダムとエバがどんな顔つきか」と考えれば「こんな顔だ」と現れるのです。「私の目もアダム、エバに似たなあ、私の鼻も似ているなあ、私の口も似ているなあ」と言うのです。輪郭が似ているでしょう。顔にあるものの種類は四種類しかありません。もっとありますか。目、鼻、耳、口の四種類でしょう。「ああ、手足も同じだ！　私のように目もぱちぱちしますね！　言葉も話しますね！　似ている！　ああ、こんなに似ているんだなあ！」と言うのです。

あの世では、しわくちゃのおばあさん、おじいさんが皆さんよりもっと美しいのです。もっときれいなのです。愛があればそのような世界にとどまることができるのです。そこは統一された世界で、とても美しい世界です。それで、おばあさん、おじいさんに会って昔のおじいさん、おばあさんのように思って行動できますか。美しいおじいさん、おばあさんを見ればどんなにいいでしょうか。

さあ、それではその時に見るものが……。孫娘が来て、おばあさん、おじいさんに会おうと叫んでいるのが霊界では見ものです。そのおじいさんの上のおじいさんは誰ですか。

自分の先祖のおじいさんは誰ですか。一番最初のおじいさんが誰かといえば神様です。それで、おじいさんが喜んで「神様、ああ、とっても良いです」と言えば、神様が「ウェルカム」と言うのです。大声で「ハハハハ！」と言えば、神様が「うん、そうだとも！」と言うのです。

皆さんが霊界に行って見れば、この地で生きた皆さんのおじいさんやお父さんを見分けられません。なぜなら、そのおじいさんとお父さんが若くてすてきな姿に変わっているからです。年老いた姿ではありません。そのように若いおじいさんだから、初めは見分けられないけれども、徐々に徐々に話をしてみれば、「そうだ、それは合っている。だから私のおじいさんだ」と言って抱き締めるのです。そのような世界なのです。

霊界に行けば、皆さんの顔は最も美しい二十代の青春に帰るのです。愛の花を咲かせることができ、香りを漂わせることのできる時期が創造の原則であるゆえに、その本郷である天国に入っていくようになれば、そのような顔で帰るのです。それで、世の中で年老いた人があの世に行けば会っても分からないのです。二十代の青年の顔に戻るからです。知っているのは八十になった老人として知っているのに、その老人はいないのです。ですから分かりません。世界の有名な歴史的な人物もあの世に行っているのに分からないのです。写真を見てその時死んでいった年齢を知っているけれども、最も美しい時に戻っていくので分からないのです。

霊界で最も近い兄弟は誰でしょうか。霊界で最も近い兄弟は横的な兄弟ではありません。この世で親子の関係と兄弟の関係の中でどのような関係がもっと近いですか。兄弟の関係より親子の関係がより近いので霊界に行っても私のお父さんが最も近く、その次はおじいさん、その次はおじいさんのおじいさん、またその上のおじいさんになるでしょう。そのように上がっていけば最後のおじいさんが誰でしょうか。その方が正に神様です。

したがって皆さんは、この世に友人がいないと寂しく思うこともなく、一人暮らしをしていて死んだとしても悲しむこともありません。霊界に行けば上を見ても、横を見ても近い兄弟が無尽蔵にいます。しかし、兄弟にただそのままなるのではありません。神様を父として侍ることのできる特権を備えてこそ、このあらゆる人と兄弟になれるのです。

お父さんをお兄さんとし、おじいさんをお兄さんとしたからといって、気分が悪いことがあるでしょうか。気分が良いでしょうか、悪いでしょうか。考え方によれば気分が悪いのです。世の中ではお父さんと呼ぶのに、霊界に来たからといってお兄さんと呼ぶのですから、お父さんはどれほど気分が悪いでしょうか。しかし、そのように呼ばなければなりません。

霊界に行けば黒人はどうでしょうか。黒人は黒人でしょうか、どうでしょうか。自分の願いどおりに、黒人が白人の姿になろうとするならいくらでもなれるのです。人間の世界で成し遂げられるただ一つの問題は何ですか。光が明るくなければなりません。何の光がですか。愛の光です。愛の光が明るくなるためには、内的にも外的にも燃えなければなりま

せん。愛するための発動力によって燃えなければなりません。東西にたくさん吹き出さなければなりません。そのようにできる愛だというのです。そのようなことをすべて知って見ると、世の中の万事は過ぎゆく一つの旅行集です。

天国において美しい人になろうとするなら、愛の花がぱっと咲いてそこに和合し、相対的世界で花の美しさを現し、花の香りを漂わせ、その花を通じた新しい種をもつことができる、このような姿で地上で生きなければならないのです。そのように生きて霊界に行けば、永遠の世界でもそのような姿で現れるのです。

霊界に行って、自分の夫と地上で愛した愛より拡大したい、より刺激したいと思うようになるのです。霊界に行けば、愛する女性がいればその中に男性がいるのです。

夫婦の愛はどの境地まで入っていくのでしょうか。霊界に行けばこうです。私は座っていても夫が歩けば、私も心で歩きます。帰ってくれば、心で既に帰ってくるのが分かるのです。心の中で夫と一緒に歩いているのです。どこから来るのかをすべて知っていて、どこへ行くのかをすべて知っています。この世では、男性が酒場に行ってどこに行くか、女性は知らないからえんえんと泣いてだまされるではないですか。しかし、霊界に行けばすべて分かるのです。

皆さんは、あの世、霊界に行って神様に似なければなりません。神様に帰るのです。神様の二性性相、性相と形状がぴたっと一つになっているように、男性、女性が完全に一つになってその殻を覆うようになる時、この二人が一つになったその基盤の上で神様に帰るのです。

霊界に行けば、本当に一心同体になった夫婦は、いつでも男性が女性になり、女性が男性になることができるのです。「愛は一体」と言うでしょう。女性の心をのぞいてみれば男性が入っています。夫が入っているのです。神様の二性性相とちょうど同じです。性相と形状、それが分かれて出てきたのですから、その本体に帰るには愛の架け橋を渡らなければいけないでしょう。創造の基準が愛から始まったので、この架け橋を渡って帰らなければなりません。結局、終着点では神様のようになるのです。

男性が地上で楽しく生きて霊界に行き、さっと見れば、男性の中に女性がいるというのです。「あの女性は誰ですか」と聞けば「私の妻です」と答えるのです。また、女性の中に男性が見えるというのです。このようにして二人が一つになれば、東西南北の方数になるというのです。男性、女性、二人でしょう。男性と女性のプラス・マイナスで東西南北になれば、神様にしっかりと侍るというのです。神様が垣根になるというのです。

そうすることができれば、神様が私の神様です。共に生きるのです。父母が年を取って百歳を越えれば、八十歳になった息子と友達になるのを知っていますか。「や、息子や！」とそのように言いません。「おい、君」と呼ぶのです。友人として呼ぶのです。神様に帰らなければなりません。

真の愛を実践する夫婦は、神様が本性相と本形状としてあられるように、霊界に行けば神様の本然的な基準に入っていくようになるのです。本然的で絶対的な神様も真の愛には絶対服従されるので、彼ら夫婦も本然的な基準に達するようになり、その点は一点であるから彼らは神様化するのです。神様に帰るのです。アルファとオメガです。

それを何が可能にするかと言えば、真の愛です。世の中に生まれた息子、娘は父母に帰るでしょう。同じ理屈です。それゆえに霊界に行ってこの地上で仲良く生きた人をちらっと見れば、男性に見えるのに、じっとよく見れば女性が笑顔でその中にいます。それが愛した妻だというのです。それが最高の理想です。そうすれば神様の友人になるのです。それでこそ共に生きるのです。愛ゆえに生まれたのです。

霊界では、愛を中心として神様が私たち人間と和し、人間は神様と愛で一つになるのです。神様化するというのです。神様の二性性相が分立されたことを見ると、完全に愛によって一つになれば、霊界に行ってみれば二人が一つになっているのです。ただ見れば明らかに男性ですが、じっとよく見ればその中に女性が座っているというのです。愛の目はすべて統一です。憎い人もきれいに見え、きれいな人も憎く見えますか。きれいに見えるのです。

真の愛の相対になろうとすれば、零の位置に立たなければなりません。そのようになる時、神様が「良し良し」と言い、地上世界を見る時は地上の太陽のように光るのです。その二つが爆発する瞬間、霊界の神様の目もあっと驚くというのです。神様が「良し」と言うのです。それが信号弾なのです。神様がその信号弾を受けて零の位置で完全に開き、太陽のように光る愛の火がぼうぼうと勢いよく燃える所にお出ましになり、その中に入っていき初めての夜を過ごしたいというのです。

霊界がそうです。何千、何億万里離れていた人が、ここに来て心情基準が合うので離れることを嫌がるのです。「ああ、早く行ってくれたら！」とは思わないのです。その世界では、御飯のようなものが必要ありません。すべてのものが自らの直感で解決するのです。それは愛の直感です。このようなあらゆる愛の体恤を中心として万国に拡大していくのです。そうして神様の代わりの心情さえもつようになれば、その下にすべての必要な存在が集まり、そこに千万人を一度に満たせる演壇ができるのです。

神様は、他の所にいるのではありません。神様はどこにいらっしゃるのでしょうか。「在らざる所無し」という言葉は、神様はどこにでもいるのではないというのです。愛がある所にいるということです。これを知らなければなりません。愛を中心としては「在らざる所無し」ということです。私も愛を中心としては「在らざる所無し」と言えます。特権です。それゆえに愛がある所には主人がいます。よく主人を知っているから主客は転倒できません。あの世はそのようになっているのです。愛を基調に、すべてのものが操縦されるようになっているのです。

それでは、男性とは何ですか。これは半分だけです。女性は何ですか。これも半分です。

また、いくら至高な神様であっても神様にも対象がいなければなりません。それゆえに、上は下が必要であり、下は上が必要なのです。霊界とは何ですか。霊界は半分の世界です。肉界も半分の世界です。

霊界に行ってもそうです。霊界に行ってどのようにするのでしょうか。歴史時代のすべての人、今後全世界的な版図を越えてみんなに会ってどのように生きるのでしょうか。お互い「ため」に生きるのです。霊界に行ってもやはり理想的な愛を中心として、これを再現する生活をするのです。ですから同じようにもっと高い、価値あるものに私が投入するのです。それがうれしいというのです。

霊界は肉界の延長です。平面的な面の愛の理想を地上で追求したとすれば、霊界に行ったら楽しく、天のより深い立体的な外郭的な球形だけではなく、外郭的な球形と内角の核心まで通じなければなりません。ですから、結局は深く、浅く、高く、低く、すべての面に愛を投入できるそのような行動をしなければならないというのです。神様の代わりに再創造するそのような生活をしなければならないというのです。

霊界を動かせる代表者になりたいですか。人種主義者は力を発揮できないのです。また、人本主義者も力を出せず、物本主義者も力を出せず、教派主義者も力を発揮できません。ひとえに統一主義だけが力を発揮できるのです。霊界に行ったと考えてみましょう。霊界では食べるものの心配がなく、着るものも心配ありません。暮らすことも心配がありません。そこでは趣味が何でしょうか。神様を中心としてバンケット（宴会）に参加すること、神様を中心として喜べる集いに参加すること以外には希望がないことを知らなければなりません。神様を中心とした祝宴に参加することだけが最高の理想です。そこに愛があり、そこに喜びがあり、そこから幸福の起源が生ずるのです。

霊界に行けば何百里、何千万里から一瞬のうちに来るのです。さっと会えば、額を見れば分かるのです。どこから来たのか、見てから頭を下げ……。これが通じません。何百年前の人でも、愛の人格基準が高ければ、会うと、相手が先に頭を下げるのです。何をもって感動するのかといえば愛です。愛でもってどれほど人類を愛し、神様が愛を中心として創造した被造物に接する時、神様のようにどのように愛するかということがすべて測定基準です。すぐに分かります。コンピューター以上です。

嫁いでいった女性が、自分の夫がどれほど愛するかということについてを誇るでしょう。あの世では、神様の愛を中心として神様の愛をどれだけ受けた人かということが誇りです。本然の真の愛、これが高い級の愛なのです。これによって等級が決定するのです。

本質的な本然の愛を実践すれば、年老いた人にでも花が咲くのです。ですから、霊界に行けばすべて青春です。思春期の最もかわいかったその時の姿で行って、とどまります。ですから愛が偉大です。それが信じられなければ、きょうにでも腹を切って死んでみなさい。うそか、本当か。若くなれば本当にいいでしょう。

五) 霊界での衣食住問題は自由自在

あの世の生活はどうでしょうか。食べるものも心配ありません。住むのも心配ありません。着るものも心配ありません。なぜでしょうか。自らの心霊状態のままに願うすべてのものが可能だからです。あの世でも食べます。あの世でも自分を触ってみれば血管が、脈拍が走るのが分かります。同じです。霊的な体ですが同じなのです。私が「何々を食べたい」と言えばすぐに現れます。「このような物を食べたい」と言えばすぐに現れます。それはどこから来るのでしょうか。根源世界を動員できる能動的な自主性を行使できる世界が霊界です。ですから、全体を動員できる主体的な能動権をもったものとは何ですか。権力でもなく、知識でもなく、お金をもった勢力でもありません。愛です。

神様が創造したこの巨大な宇宙！　そこには自動車もなく、飲食店もありません。しかし、私たちは、霊界でまるで創造主であられる神様のようにあらゆる種類のものを、真の愛の概念を中心として創出することができるように、愛を中心として本来の力を発揮してすべてのものをつくることができるのです。私が愛を中心としてこのようなもの、あのようなものなどを指摘すれば、実在物が完全に姿を現すことができるのです。「どのような工具、現れなさい！」と言えば、正にその工具が生じるのです。どんなにすごいでしょうか。

また、晩餐会場に数十、数百万名参加した時「このような食べ物を準備しなければ」と願いさえすれば、食事が問題なく出てくるのです。金色の正装を願えば、すぐにそのような正装が出てくるのです。どんなに素晴らしく、すごいことでしょうか！　それは本当に良いのです！

考えてみてください。あの世に自動車工場があるでしょうか、ないでしょうか。このような物に乗って一瞬のうちに、一秒間に何億万キロを行くことができます。先生がそのようなことをはっきりと知っているので、地上で生きたいと思わないのです。その膨大な世界が、愛を中心としてすべて編成されているというのです。その愛に和した神様の心情圏をしっかりと所持すればすべて終わります。創造歴史は永遠に続くのです。そのような愛の心に和して、自分が構想したすべてのことをしなければなりません。瞬時にしっかりと決心して命令すれば、すぐに展開します。

霊界に行けば小便をするでしょうか、しないでしょうか。今度行ってみなさい。私は小便をすると思いますが、しないと思う人は、小便をするか、しないか、行ってみなさい。それでは、大便をするでしょうか、しないでしょうか。みんなします。みんなするけれど、すぐ元素に帰ります。宇宙の根本元素が百七個だと言いますが、どんどん増えていますね。その元素に帰ります。したがって、掃除する必要がありません。愛の心をもって手入れをすれば、きれいに本故郷へ帰るのです。それから愛の心で「何々出てこい、何々出てこい、何々出てこい」と言えば、すーっと出てきます。愛の心で言えば、すべてのものが出動可能です。

あの世にパン工場があるでしょうか、ないでしょうか。コーラとかジュースを作る工場

があるでしょうか、ないでしょうか。どうしてないのですか。分からないでしょう。そこに自動車を造る工場があるでしょうか、ないでしょうか。あの世に行って「私は、いい車に乗り回るんだ」と言って、こうして乗りますか。ここではベンツに乗って、何がどうだこうだと誇りますが、そこではそれはすべて必要ありません。

永遠に目を開けることができ、永遠に聞くことができ、永遠に食べないでいることができるのに御飯など……。ああ、今が良いのに、御飯を食べなさいと言われて食べるでしょうか。御飯を食べなさいと言えば食べますか。私は食べません。服を着るのも、私の思いどおりに服を着ることができるのです。

「けさは、すべて黄金の服を着なさい。さあ、ダイヤモンドの何カラットをつけなさい。英国の王妃は五百十七カラットをもちましたが、それ以上の一万七千カラットのものをつけなさい」と言えば、さっと！　そのようなものは、みんなもつことができます。あらゆるのものをつくることができます。そのように見ると、レバレンド・ムーンは妄想家なのです。しかし、可能な理論圏内で話しているということを皆さんは知らなければなりません。

霊界という所は愛の空気で充満した所であるという概念を、私たちがこの地上にある認識構造をもって見つけることができるというのです。愛の神様が愛の心をもって、世界人類を一度にすべて食べさせたくて、喜ばせたくて「御飯よ出てきなさい」と言えば出てくるのです。霊界でも食べさせなければならないので、そのようにするというのです。それゆえに、愛の食べ物を食べるのです。お互いに見るのも愛の目で見て、すべてそのようにするというのです。

みんなたたかれてけがをしても、またたたかれようとするのです。形容し難いほど不思議な所です。聞いても、もっと何度も聞きたくて、眠いとか、疲労だとか、何だという観念はあり得ないのです。疲れる余裕があり、興奮する何かがなければならないでしょう。退屈で妨害する何かがなければらないでしょう。それがないのに、どうして疲れるでしょうか。

霊界では、衣食住は問題になりません。衣食住は完全に自由自在です。愛の一体圏、神様の相対圏に立てば、神様ができることもできます。何でもできるのです。何億万年の歳月も一瞬にして超越できます。愛の速度は超スピードです。愛する人がいる所に行って来る時、時間がかからないのです。すぐ行って来ることができます。ですから、愛の相対者に会うことは瞬間です。そこは絶対圏なので何の障害もありません。そのような限界を越えた世界、時空を超越した世界なのです。そのような無限の世界が人間のために準備されているということを知っている人はいません。真の父母によってそのようなことを知るようになりました。

霊界に行けば何を中心として生きているか知っていますか。霊界には工場があるでしょうか、ないでしょうか。霊界に自動車があるでしょうか、ないでしょうか。消耗品工場があるでしょうか、ないでしょうか。霊界で御飯を食べるでしょうか、食べないでしょうか。服を着るでしょうか、着ないでしょうか。このようなものは霊界にはありませんが、自分

の人格構造が神様の対象的価値基準をもてば、神様ができる能力を受け継ぐことができるのです。

霊界では百万名が一瞬のうちにバンケット（宴会）を行うことができます。自分が真の愛の心をもって「彼らをこのように食べさせなければならない」という、神様のように本当に愛する心がしっかりとできていれば、万事が不可能ではありません。それゆえに愛の園で、愛の世界で泳ぎ、愛の世界でそのすべての波長に拍子を合わせることのできる生活の訓練をした人は、神様の心の中にも入っていくことができるのです。なぜですか。真の愛の波長は同じなので、相いれないことは起こらないのです。

霊界に行けば食べることだけでも「今日はこのような食べ物で……」と言えば願いどおりにすぐ現れ、愛する人に会いたければ「さっ」と一体化してこのように頼めばすぐに現れるのです。そして、一瞬にして何万、何十万のバンケット・ルームを造ることもできるのです。これは虚構ではなく、理論自体がそのようになっています。そして、そこでは食べて残ったものは原形に戻ります。元の状態の元素に戻るのです。そのように便利な所です。ですから、先生が行く所は、天宙すべてが慕って従っていこうとする、そのような所です。

創造理想世界では天国が我が家です。そのように膨大な天国ですが、それが私の生活圏の舞台になっているのです。私の国ではありません。国には制度も多く、職種も多いでしょう。しかし、霊界はそうではありません。単純です。考えてみなさい。霊界に経済支援する工場があるでしょうか、ないでしょうか。服を作る工場があるでしょうか、ないでしょうか。御飯を作る工場があるでしょうか、ないでしょうか。

生活必需品やこの世で必要な物は一つも必要ありません。ですから工場があるでしょうか、ないでしょうか。花だけ咲く理想的な社会だというのです。食べるものはいつでも食べられるようになっています。自分の考えるものがぴたりと現れるのです。食べて余れば……。そこにはごみ箱があるでしょうか、ないでしょうか。ごみ箱がありません。手ぶりさえすれば元素に帰る世界です。

天の永遠な世界、あの世に行けば政治体制はあるのです。経済体制は必要もないのです。いつでも自分が必要とする物はすべて供給できるようになっています。経済的なことは副次的な問題です。霊界に行く時、米を入れるひさごを持って入っていくと思っていますか。人から食べ物を恵んでもらって生活をしていくと思いますか。霊界は食べたければすぐ御飯が現れるというのです。それを食べ残しても「零に帰れ」と言えば帰るのです。ですから、すべて人格的な能力をもって活用できる対象にすぎないのであって、それが主体的な影響は何にも及ばないのです。

霊界がどんなにいいかは、言葉ではすべてを言い表せません。そこは衣食住が心配ない所です。家もみんなあり、服もすべてあり、食べる物もすべてあって自分が願うとおりにできます。愛の心情の価値内容によって相対的基準を自由に供給できるのです。愛を中心として完成した人格基準によって、その相対的環境要件を自由に補給できるというのです。

私が寝ていても朝御飯、夕御飯を食べることのできる場所に体が引っ張られていくというのです。霊界を見ればそうだというのです。そのように自由だというのです。寝ながらも食べたり寝たり、また、思いどおりに訪ねていくのです。体がそのようになっているというのです。

霊界に行けばどのようになりますか。そこでは食べることが心配ありません。稼ぎません。あの世に行けば稼ぐ必要がありません。食べたい時はいつでも食べることができます。実におもしろいことに、食べたあと、そのかすはどのようにするのでしょうか。「帰れ」と言えば元素に帰ります。根本の世界、元素に帰ってしまいます。そのようなことが可能な世界で、四方八方に起動することのできる人とはどんな人ですか。神様の愛を中心として酔いしれる生活をする人です。全知全能な神様の愛を中心とした理想が、あらゆる方面に実現される所が霊界なので、神様の愛を中心として酔いしれて生きた人間が主導的な立場に立つのです。

霊界では元素を吸います。水であれば水の元素を飲みます。元素のようなものを知っていますか。そして、思う存分食べて手ぶりさえすれば元素に帰ります。ごみ箱がありません。

霊界に行けば仕事が必要ですか。そこでも八時間仕事をしなければなりませんか。夜がありますか。夜がないのです。いつも目覚めているのです。いつもこのすべての器官が働いているのに、何をするのですか。どんなことをしますか。永遠に目を開けていても、永遠に寝なくても喜べるようなものとは何ですか。愛です。そのような愛の理想だけしっかりともっていれば「や、何々出てきなさい！」と言えば、すぐに出てくるのです。ここに一万名が集まれば「一万名の食堂と食卓準備！」と言えばすぐに準備できるのです。

霊界にも空気がなければならないでしょうか、あってはならないでしょうか。なぜ空気が必要ですか。呼吸をしないで暮らせばどんなにいいですか。なぜですか。どうしてですか。呼吸をしないで生きれば大きくなることができません。二つの世界を連結させることができません。二つの世界を連結させなければなりません。肉身と霊魂を連結させなければならないのです。霊人体も大きくなろうとするなら、体が大きくならなければなりません。固着してはなりません。それならどのようにしなければなりませんか。見えないものも、神様が見えない愛の空気で呼吸するのと同じように、生命の源泉となる元素の供給をするのです。

この目がぱちぱち瞬きするのは、この世の空気中にあるほこりが入るのではないかとそのように瞬きするのです。霊界にはほこりがありますか、ないですか。霊界では神様が目を千年万年開けている、それは気分が良いですか。地上では、習慣性でぱちぱち瞬きしたので、霊界にほこりがなくても瞬きしなければならないのです。なぜですか。私たちに似たからです。

霊界に行ってみたいですか、行ってみたくないですか。文総裁がうそをついているかもしれないでしょう。うそでも神様の言葉のように信じれば、神様は創造の能力があるので、

彼が願う以上のものをつくることができる主体であることを知らなければなりません。悪魔が「や、神様がこのように言った」と言うならば、悪魔が言う以上のことまで信じて行動すれば、神様は創造して成し遂げることのできる道がいくらでもあるというのです。

六) 霊界の権力は愛の権力である

霊界に行ってみれば、お金が必要ありません。知識が必要ありません。私が行ってみるとそうです。権力が必要ありません。お金を創造して余りあり、ダイヤモンドも創造できる神様です。絶対者です。知識の大王です。権力の大王です。それをいつも春夏秋冬、四季を超えて永遠に自由自在に行使できる方です。その方に何が必要でしょうか。

霊界に行けば天上世界に、無限なる世界に数百億の人類が生きています。そこに行けば会えない人がいないのです。皆さんは歴史を学ぶ必要がありません。そこで「誰に会いたい」と言って誰かを呼び出す時、彼を愛する尺度があって呼んでこそ現れるのであって、私が欲をもって、その人が立派な博士だから「知識を得るために私が会う」と考えれば絶対に現れません。会えないのです。愛がなければならないのです。彼がそのように有名な人になるまでの過去に苦労した、その苦労の代価を認めて彼を愛する心で呼べば、東西四方、誰でもみんな接することができます。

お金、お金はいくらでも作ることができるのです。知識、神様は知識の王様です。権力、大韓民国の大統領になってみても……。このような話をして失礼になるかもしれませんが、小さい国、ソ連の百分の一にしかならない国の大統領が……。知識とお金と権力は、一生において追求する価値的なものの一部分にしかなりません。

教授の知識を千年万年誇ることができるでしょうか。もって歩きながら誇りますか。一生にとどまるのです。それが自分とともにあるのは一生だけです。お金もそうであり、知識もそうです。優れているという人を見れば、知識をもって優れているということであり、お金をもって優れているというではありませんか。権力をもって優秀だというではありませんか。この世界ではそうかもしれませんが、神様はそれを何の価値もないと思うのです。霊界ではすべて無価値なのです。

人間と歴史が何を中心として解決して完成しますか。神様を知らなければなりません。神様は、人格的な神様でなければなりません。神様が漠然としていてはいけないのです。私たち自身が具体的であり、知・情・意を備えた人格的な人ならば、その主体であられる神様も知・情・意を備えた人格的な神であるというのです。そのように考えるのです。それでは、神様がもっている多くの属性の中で一番の中心とは何ですか。情だというのです。愛だというのです。神様も生きることにおいて、愛が最も必要なのです。

天国では知識だけもって生きるのではありません。皆さんが霊界を知らないのでそう思わないのであって、霊界に行って知るということは一週間以内ですべて終わります。心を鏡のように見ることのできる世界が霊界です。霊界はいくら優秀で、いくら立派な知識人がいるとしても、彼がもっている知識を一週間以内に凌駕できる直感の世界です。心の光を

通じて見るので、そこに関連している因縁の世界は、自動的に分かるのです。それは情の心情を通して見てこそ、私と相対的関係をもち、主体的関係をもつのであって、知識であるとか他の属性をもっては駄目だというのです。

知識とは何ですか。知識があることによって、知ることによってすべての環境的条件を所有することになります。知識の中に最高の知識である愛さえもてば、天下がすべて連結します。知っている人が支配します。「知ることは力なり」と言ったでしょう。力のある人が支配するという論理です。ですから、愛をもった人は知識が必要ありません。あの世では、学ばなくてもすべて分かります。

宇宙が私の活動基地です。ところが、その世界にない物質でもって首を絞めており、お金、知識、権力でもって首を絞めています。その世界には、そのようなものは一つもありません。それによって残るものが一つもないのです。皆さん、この世界ではお金、知識、権力が必要だけれども、あの世にはそのようなものが必要ありません。今まで、サタン世界の人がそれを願っていたのです。

霊界でお金が必要ですか。食べる物、知識、権力が必要ですか。それが必要ならば、願えば一瞬のうちに生じるのです。そこには食べ物の工場がありません。学校もありません。権力者もいません。ただ神様が力の根源であられます。そこが私たちの永遠の故郷です。その安息の場が待っているのです。皆さんは誰しも願おうと願うまいとその場に行くのです。私はそれをよく知っています。

あの世では権力が必要ありません。霊界は愛を中心とした和合力です。愛を中心とした感化力です。その世界はそのような世界です。したがって、愛を中心とした感化力をもてない人は、愛でもって感化できる本然の世界に行ったら、本質的に和合ができずに反発するのです。それは地獄に行くのです。これは深刻な問題です。

愛を嫌う人は手を挙げてみなさい。お金はなければ稼げばいいのです。勉強は今しなくても霊界に行ってすればいいのです。霊界では東大を卒業するのに、三日もかかりません。東大を卒業した基準を備えるのに三日もかかりません。心の中を見ながら、本心を話そうとすれば、先に聞くことができるのです。それゆえに、そこでは隠すことができません。便利でしょう。最高の能力をもって分析できる力をもったコンピューターでもついていけないというのです。

この宇宙のすべてのものは愛で連結されています。霊界も、万物もすべて愛によって連結されているのです。真の愛を中心としてそのように連結しています。ですから、真の愛さえもっていれば、どこでも連結することができます。真の愛さえもっていれば、みんな頭を下げるのです。霊界に行けば教育が必要ありません。誰でも一週間以内に、東大を卒業した人より数十倍たくさん知ることができるのです。東大を卒業したことを強調しないでください。良心的な人は一瞬にしてすべて通じるのです。説明が必要ありません。

霊界に行けば言葉は学ぶ必要がありません。一週間以内にあらゆることを知るのです。心

の中で考えることが、すべて分かるのです。話す前にすべて分かるのです。ですから、だますことができません。そのような世界で皆さんは、サーチライトで照らしながら見守っているのです。その光の中で何の問題もなく無事通過して本来の位置に接することができるかということが、人生の路程においての課題だということを知らなければなりません。

どれほどこの世は不便でしょうか！　稼ぎが必要でしょうか、必要ないでしょうか。勉強が必要でしょうか、必要ないでしょうか。勉強をしなくてもみんな分かります。言う前に心で、既に分かっています。あの世に行けば、高い、低いということがすべて表示されているのです。ちらりと接すれば、すぐに分かります。ちらっと測定し、レベルを測るのです。東西南北がどのようになっているということを知っています。またこのようにじっとしていても、誰かが私を呼ぶのが分かります。そのような時には、私は無に入って相手を主体として立てるのです。愛の力を育ててつくられるのがあの世です。

霊界の組織とは何かといえば、生活を中心としてすべて系列になっているのであって、政治というものはないというのです。神様の直属の愛を中心としていて、強力に軍事拡張であるとか政治的目的のために、この世では手段、方法を選ばないのですが、そのようなことがないのです。経済の平準化運動を中心として、どのように豊かな生活をするかということです。地上もそのようにならなければなりません。

神様も愛ゆえに創造したということは知っているでしょう。神様に「一番好きなものは何ですか」と聞いてみれば、どのように答えるでしょうか。神様は好きなものはありません。お金も必要なく、知識も必要なく、権力も必要ありません。統一教会の食口は何が必要ですか。同じです。愛の中にはお金もあり、知識もあり、権力もあります。愛の権力が万年権力です。

本当に愛を知っている人は、天上世界に行って学ぶことがありません。そのような人はいつでも神様の心の中を出たり入ったりします。神様の体を通して東西南北を思いのままに行き来することができます。これが中央停留所のようになっています。何の話か分かりますか。それがなぜ必要ですか。そこに入って出てくる時は、東西南北の力が集中するために、強力な力によって出ます。低かった国もその中央を通じて出てくる時は、高い神様と対等な位置に上がるのです。愛にはこのような偉大な力があります。

七) 霊界は神様の法則と秩序の世界

この地球自体がそうですが、太陽自体も自転しています。地球の百三十万倍にもなる質量をもった太陽が休みなしに動いているというのです。宇宙ではこのような太陽系の質量の二千億倍にもなる広大な銀河系があります。このような銀河系を小宇宙と言いますが、宇宙には銀河系のような星雲が数えきれないほどたくさんあります。これをまとめて大宇宙と言います。

私たちはこのような広大無辺な大宇宙の世界を、心を広げて考えなければなりません。半径だけでも数千億光年にもなるものすごい

大宇宙を創造された神様は、その大宇宙を変わらない法則に基づいて数億千万年を動かしていらっしゃいます。私たちが考えることができず、感じることもできないほどに偉大な力をもって、このすべての天体を動かすというのです。

このような宇宙を創造された神様を考えれば考えるほど、私たちは、その雄壮さと偉大さに自然に頭を下げざるを得ません。このような大宇宙を創造なさったその方が私たちを見守ってくださるお父様であり、私たちを保護してくださる神様、実存なさる偉大な主人公であられるという事実を、私たちは心を広くして考えなければならないでしょう。

人が精密に計算してレールをつくっていくことは、汽車の速度が少しだけ違っても脱線して大騒ぎするのですが、大宇宙は自然の法則に一致してぴったりと合い、自然に帰ります。この太陽系だけでも、太陽が広大な九個の惑星を抱えてこのようにみんな回転しているのに、そのような太陽系が一千億個も入っている大宇宙が、今でもあらゆるコースをたどりながら活動していると考えてみなさい。一千億個が入っているそのような宇宙があるというのです。それがすべて動いているというのです。これが「ただそのままできた」と言って、「自然だ」と言っています。

根本を明らかにしなければなりません。本然の神様がいるなら、その神様は絶対的な方でなければなりません。唯一、不変、永遠でなければならないのです。そうでなければなりません。神様が定めた法則は絶対的でなければなりません。それゆえに、この宇宙はその法則によって千年万年、何億万年運動を続けるのです。動物世界や植物の世界もそのような科学的公式の法則による基盤の上で存続するのです。ですから、数学ですべて解くことができるのです。

人が死ねば霊界へ行かなければなりません。霊界に行けばどうですか。霊界はすべての秩序が構成された世界です。霊界を知らなければなりません。霊界はどのような世界ですか。理想世界であると同時にしっかりと秩序が構成された世界ですが、愛を中心とした世界です。呼吸は愛でするのです。ここでは空気で呼吸するでしょう。魚は水で呼吸するでしょう。では、霊界では何によって呼吸するのですか。愛の呼吸です。愛によって呼吸するのです。

神様は天地を何で主管するのでしょうか。法で主管するのですが、法も愛で主管する法です。そして、主管の方向を後援するために、宇宙の法則も存続するというのです。それで、神様がどうして人間を創造したのかといえば、愛が慕わしいからです。一人じっとしていればいいのに、何のためですか。刺激的で衝動的な愛が必要だからです。

多くの人々が霊界を体験しています。その霊界は特別な世界です。それがどのような原則が起源になり、どのような結果で運行するというそのような膨大な背景を悟るということは極めて難しいということを知りました。皆さんが統一教会の主張している「原理」の内容を見れば、霊界は、公式的な法則で私たちが認識できる圏内に入るという原則を知るようになるでしょう。その原則を明らかにしたという事実は、今後の歴史時代に大きな問題になるだろうと考えています。

全宇宙が動くすべての法則を主管し、一方では人間を再創造し、その人間を神様の代わりに全宇宙を主管する価値的な存在として立てられるために、摂理なさったということが、どれほど驚くべきことであり、かつ有り難い事実かを、皆さんは骨身にしみるほど感じたことがありますか。

二　天国と地獄

一) 天国は愛の理想の世界

天国とは、どのような所ですか。神様の愛が中心になっている所です。神様の愛を中心とした環境圏を設定した所が天国です。それでは、その圏に行ってとどまる人は、どんな人でなければならないのでしょうか。神様の愛の本質と和合できる人にならなければなりません。そのような人以外には行くことはできません。

天国は「ため」に生きる世界であるので、「ため」に生きようという観念のみを中心として行かなければなりません。「自分が受ける」という考えをもてば壊れていくのです。天国は、神様の愛が充満した世界です。愛の本質は受けるというのではなく、全体のために生きるということです。したがって、天国は世の中と違います。宗教の教えは「ため」に生き、絶対服従し、自分を犠牲にしなさい、奉仕しなさいというのですが、世の中にはこのようなことはありません。これは、世の中の何も知らない乞食の群れがするようなことですが、天法を知らなくても福を受けることができるようにするための、サタン世界に対する神様の暗号作戦でした。

天国へは愛の軌道に乗って行くのです。このように話せば実感がわくでしょう。ゴムのひもは引けば引くほど細くなりますが、愛のひもは引けば引くほど反対に太くなります。ですからみ旨のためには苦労の王になることが、世界を占領できる秘法なのです。苦労の王が天国の栄光を独占するのです。

天国とは、どのような世界でしょうか。お互いに反目、嫉視しながら、他人がうまくいけば嫉妬し、他人が喜ぶとたまらないという、そのような世界ではありません。一人がうまくいくことは、全体を代表してうまくいくことです。また、一人が喜ぶことは全体の代わりに喜ぶことなので、一人が喜べば全体が喜ぶのであり、一人がうれしがれば全体が共に喜ぶ所が天国なのです。

天国とはどのような世界かといえば、神様の愛の世界です。愛の空気を吸う世界です。そこには生命がぎっしり詰まっています。どこに行っても生命が躍動しない所がありません。そして、すべて血縁的な因縁によって結ばれています。神様の一つの血筋であるがゆえに、神様が悲しむそのような何かがあれば、全霊界が一つの細胞のように、一つの体のように悲しみを感じるのです。また、神様が喜べばすべてが喜ぶのです。そのような世界です。それで、神様の愛が膨大な大天国を動かしているのです。

生命圏がそこに呼応して、すべての万物の主体・対象を中心として、芸術的な美化の対象になっているのです。血筋のように連結していて、神様が喜べば私もうれしく、神様が悲しければ私も悲しくなります。やむなくそのようになっています。

天国では闘いがあるでしょうか。闘いのない永遠な世界で何をして生きるのでしょうか。その世界が一年生きて終わるのではなく、永遠に続くというのです。それなら、退屈ではないでしょうか。そこで何をして生きるのでしょうか。一人で生きますか、霊界にいるあらゆる存在と関係を結んで生きますか。何をもって関係を結びますか。真の愛です。

それゆえに、その世界の本質は何ですか。食べることも、愛を感じながら食べなければなりません。着ることも、愛を感じながら着なければなりません。生きるのも、愛を感じて生きなければなりません。旅行することも、愛の神様が母体となって旅行しなければなりません。そうでなければ、和動できないというのです。その愛というものは、神様の本質的な愛でなければなりません。神様の本質的な愛に近い内容を備えた人格があの世で高い位置を占め、そのような人格を中心として、すべての霊界の万有の存在が和動して生きるというのです。そのような人々が和動する世界だというのです。

人間を中心とした真の愛、それが絶対価値の花です。神様がなぜ生きているかといえば、真の愛ゆえに生まれ、真の愛ゆえに生きるのです。人もなぜ生まれ、なぜ生きているかといえば、真の愛ゆえに生まれ、真の愛ゆえに生きるというのです。そのような時は神様も不平なく、人も不平なく宇宙の花のように咲いて香りが漂うというのです。真の愛をセンターとして両側が一つになるのです。右側も左側も「万歳！」、両手を挙げて「万歳！」、真の人も「万歳！」、霊界も見下ろして「万歳！」、こちらもあの上も「万歳！」と言うのです。すべて一つになって香りが漂うのに酔って ……。

霊界がそうです。気が合う兄弟同士が集まって暮らします。ここでそのように暮らす訓練ができていなければ、あの世に行ってぶつかります。あの世に行けば問題が大きいのです。人の心に合わせるとは、どういうことですか。神様に侍る訓練の中で、人の心に合わせること以上に正しい道はありません。神様がどれほど気難しい方だと思いますか。原則に外れれば許しがありません。それゆえに、人の心に合わせることができ、人と和合することができなければなりません。神様に侍る訓練の中で、それ以上早い訓練はありません。

完成した人が霊界に入っていけば、どこに行っても友人です。子女の位置に行っても友人、兄弟の位置に行っても友人、夫婦の位置に行っても友人、父母の位置に行っても友人で、すべて通じるというのです。神様の玉座でもどこでも通じることができるというのです。

どのようにして天国へ行くのですか。神様の愛に狂って生きなければなりません。アダムとエバ以上に神様を愛さなければならず、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ以上にイエス様を愛さなければなりません。そうでなければ、神様が私を愛し得る真の愛の相対圏を復帰できません。これさえ復帰すれば、万事思いどおりになります。

お金がないといって心配せず、息子、娘がいないと心配せず、十年、二十年その道を続けて行くと、大きな山にも、険しい峰にも上がるようになります。自分では少しずつ下り

ていきながら苦労だけしているように思いますが、だんだん高くなるのです。統一教会は打たれながら大きくなります。一つの家に十人が住んでいるなら、公的目的のために十人の反対を受けながらも我慢する人が、その家庭の主人になるのです。すなわち、天国の主人になるのです。

天国は、愛の世界であり、中心者である神様のためにある世界、神様のために生きる世界です。

天国には誰が先に入っていかなければならないかといえば、真の父母が先に入っていかなければなりません。「天国が空いている」と言えば、「レバレンド・ムーンはばかげたことを言う」と思うかもしれませんが、イエス様も天国に入れませんでした。天国へは一人では入れません。人間の先祖が思春期を過ぎて、神様を中心とした愛の理想を成して生活し、真の愛の種を残して父母になって先に入るべき所が天国です。ところが、まだ神様の愛を中心とした父母として、この地に愛の種を残した父母がいません。また、そのような子孫を残した基盤を成せなかったがゆえに、天国は空いているのです。

皆さんは世界天国に向かって行きますか、個人天国に向かって行きますか。「世界天国に向かって行く」と言うでしょう。先生も欲が深く、世界天国へ行く愛の綱をぎゅっとつかむために、四十年間迫害されながらもこのことをしたのです。個人の愛の綱を越えて、家庭の愛の綱、氏族の愛の綱、民族の愛の綱、国家の愛の綱、世界の愛の綱をぎゅっとつかむためです。ぎゅっとつかんでどこに行くのでしょうか。世界の愛の綱を探してからは、恵みを受け出世したので還故郷するのです。故郷に行って、かわいそうな人々を助けてあげるべきではないでしょうか。

天国に行く道は、兄弟を神様のように愛することから開かれます。皆さんは先生に従って行こうとするのですが、その心で兄弟を伴って一緒に行こうと努力しなければなりません。天国に最も高く、早く、良く導く者は、神様でもなく、先生でもなく、兄弟だという結論を下すことができます。

今日、宗教を信じる人々が「天国へ行こう」と言うのですが、天国へただそのまま行けますか。まず地上で天国を迎えて行かなければなりません。地上で天国を迎えるためには愛の規則を経なければなりません。皆さんの家庭に子女がたくさん生まれれば生まれるほど、神様の国をより一層愛さなければならない十字架が加重されるということを感じなければなりません。その家庭に息子、娘をたくさん送ることは、担う十字架が多いということなので、国のために捧げるべき責任が多いという意味です。そのような内容を知って、責任を全うする人にならなければなりません。そのような家庭であればこそ、その家庭に後代を相続できる運勢をもった息子、娘が生まれるのです。

天国に入っていける人とはどのような人ですか。まず神様の心に合う人にならなければなりません。どれくらい合わなければならないのでしょうか。神様が永遠な目的を中心として永遠な理想を描いていく方なら、永遠に

心が合わなければなりません。十年ぐらい合わせて途中で合わなくなれば駄目です。永遠であられる神様に、永遠に心を合わせなければなりません。そのようにしようとすれば、どのようにしなければなりませんか。永遠にお互いに喜べる息子にならなければなりません。そのような息子になろうとするなら、悲しみの対象として現れてはなりません。

天国という概念は、サタンを克服した位置で、サタンが相対できる一切の要因を否定した位置で、否定するだけでなく清算した位置で成立できます。サタンの否定的条件が残っている歴史的な遺物や生活のすべての内容を否定して清算した土台の上で天国が肯定できるのであって、それを残しては天国の内容を提示できません。

天国に行こうとするなら、罪を犯さず、神様の愛を直接受けることができ、イエス様を信じる必要がなく、救い主が必要ないという息子、娘の資格を獲得し得る過程を経なければなりません。そのように生きた人間が天国に行ってこそ、神様の理想天国が成されます。

宇宙の最高のおじいさんとは誰かといえば、神様です。それから、この世界を一つ造るのに、全天地を一つ造るのにおいて、その最後の子孫とは誰かといえば、未来の後孫です。これを連結しなければなりません。何によって連結するかといえば、家庭です。国ではありません。天国へ行くのに「アメリカ人だ」と言っても認めてくれません。「発展途上国の人だ」と言って排斥しません。この主流、家庭組織を中心として神様のみ旨とともに過去、現在、未来を連結させることのできるモデル型だけを認めます。これが公式だということを知らなければなりません。そのようにしてできた実をもってきて貯蔵する倉庫が天国です。

侍るためには、侍ることのできる準備が必要です。その準備の過程を経てから、侍る生活をする必要があるのです。侍るための準備の過程を経て、侍義の生活を経て初めて行く所が天国です。心情で侍る人が行く所が天国です。侍ることのできる準備と、侍る生活を称賛し、高くとどろかせる世界が天国です。私たちは、このような目的の世界に向かうべき運命に置かれているのです。

天国という所は、心情を通さずには行くことができない所です。天国は全体を主管できる本然の国であり、本性の国だというのです。その国は、いかなる事情をもってしても所有できません。深くしみ入る心情の因縁を備えてこそ所有できる国です。それゆえに、キリスト教は究極的に事情を通す教会ではなく、心情を通す教会です。事情の因縁を越えて心情を謳うことのできる基盤を築くのに、地に対して摂理なさる天の目的があるというのです。

天国とは、どのような所ですか。準備したことをもって誇る所であり、侍る生活をしたことを誇る所です。それではその天国とは、どのような人が行く所ですか。主を信じて恵みを受けるといって、恵みを前面に立てていく者が行く所ですか。違います。天国は、侍るために心情的に準備する生活をした人が行く所です。準備する期間に死んだとしても、侍義の生活を残して喜んでいくことのできる者が行く所です。そこに復活があるのです。

生活の内幕は現れません。どのように生活するのかということが、今私たちがこの侍る生活の中で考えるべき重大な問題です。

天国がそうです。天国に行けばどこも明るいのです。李相軒氏が言う霊界の実相がそうでしょう。間違いありません。神様の愛の光がこの宇宙の四方を照らして、その懐の万物は万歳しているようです。何の万歳ですか。万万歳ではありません。「解放万歳！」、解放したならすべて「解怨万歳！」、恨みを解かなければなりません。

神様の愛を中心とした本然の父母の因縁の中で、真の愛の家庭基準を代表できる位置に立つことによって初めて天国に入っていけるのです。天国に入っていこうとすれば、真の神様と真の父母の真の愛と一つにならなければなりません。その血統的な関係において生まれた息子、娘と共にこの地で生きてから行く所が天国ですが、今までそのように生きてから行った人は一人もいません。それゆえに天国は空いているのです。

教会に何百年通うとしても、自分を中心とした心をもって通えば天国に行けません。救いを受けることができません。真の宗教がどのような宗教かということを知らなければならず、真の人がどのような人かということを知らなければならず、真の国がどのような国かということを知らなければなりません。

神様の愛の本質と和合できる人とは、どのような人ですか。自分を中心としていく人は価値がありません。相手のために自らの生命を投入して、自らのすべての精誠を投入して、自らのすべてのものを投入しながら与えようとする人だけが、神様の愛の圏内に存続できるのです。歴史上の偉人もそうでしたし、聖人もそうでした。

二) 天国はお互いのために生きる世界

自分自身を投入して忘れなければなりません。食口が全部で百人ならば、百人の食口の中で自分の息子、娘よりも良くない服を着ている人がいれば、寝ることができずにいなければなりません。与えなさいというのです。神様の心情、父母の心情がそうです。統一教会の主流思想は何ですか。父母の心情で僕の体を使い、汗は地のために、涙は人類のために、血は天のために流しなさいというのです。天とは何ですか。息子、娘を連れていく愛の世界なのです。愛をもって全宇宙の前に与えるのです。先生は神様を愛しました。霊界からここまで、そのすべてをよく知っているのです。

霊界は今まで未知の世界でした。その世界は、神様の存在原則のために生きた人間だけが行く所です。そのような内容によって形成された世界が理想天国です。

発展しようとすれば、どのようにしなければなりませんか。利他主義でなければなりません。統一教会は絶対に利他主義、「ため」に生きるのです。ここで分かれるのです。一方は地獄に落ち、もう一方は天国に行くのです。霊界に行けばそうです。霊界に行けばすぐに分かるのです。「ため」に生きた人間は、行く所を知っているのです。ですから、より「ため」に生き、「ため」に生きる聖人の思想を受け入れなければなりません。救世主の

思想を受け入れなければなりません。神様の思想を受けなければなりません。神様の思想とは何ですか。絶対に「ため」に生きることです。

小さなものは大きなもののために投入しなければなりません。それゆえに、家庭は氏族のために犠牲になりなさいという論理です。氏族は民族のために犠牲になり、民族は国家のために犠牲になり、国家は世界のために犠牲にならなければなりません。国家財産を取って自分の家庭のものにする者は、みんな地獄に逆さまに差し込まれるのです。滅びるのです。ここで滅びなければ、霊界に行って逆さまに差し込まれるのです。

地上生活と天上生活は反対です。堕落した人々は、地上で自分のために生きていますが、霊界は全体のために生きるようになっています。堕落を否定して全体のために生きる人になることによって、神様の相対になることができるのです！　永遠に「アーメン！」と言わなければならないのです。

霊界は、自分のために生きていく人には行くことができない所です。悪なる人とはどのような人ですか。一から十まですべて自分を中心として一元化するという人です。そのような人が独裁者、悪党なのです。そのような人は地獄に直行だというのです。統一教会では、それはいけないことです。個人は家庭のために生き、家庭は氏族のために生き、氏族は民族のために生き、民族は国家のために生き、国家は世界のために生き、世界は宇宙のために生き、宇宙は天宙のために生き、天宙は神様のために生きなければならないのですが、神様は誰のために生きるのでしょうか。私のために生きるのです。

本郷の地に導かなければならない宗教であるゆえに、宗教は何を教えるのでしょうか。「ため」に生きなさいということを教えざるを得ないということを知らなければなりません。高次的な宗教であるほど、「ため」に生きなければならないという原則を強調しなければならないので、柔和、謙遜になりなさいというのです。なぜですか。多くの人を高めて、彼らのために生きる立場に立てというのです。犠牲、奉仕しなさいと教えるのです。なぜですか。それは、その国の法に合うことのできる人を訓練しなければならないからです。

地上で暮らしてから霊界へ行くのですが、高い所に行く人はみな他人のために生きた人です。世界の四十カ国ならば四十カ国を回りながら、そこと自分の母と家庭を拡大したという心情をもって「ため」に生き、世界の人々をすべて悪から救ってあげる聖人の心をもった人が高い所に行くのです。先生はそのように考えます。

「私は一人の男性として、歴史時代の孝子を代表した総帥であり、愛国者の総帥であり、聖人の総帥である。神様の息子として名づけられたすべての人々は失敗したが、私は勝利した息子、娘として生まれた」というのです。そのように言うことができるようにしてあげることがたった一つあるのですが、それが絶対に「ため」に生きることです。与えて忘れ、「ため」に生きて、それを忘れて生きる人だけが、その世界を消化できるというのが結論です。簡単なのです。

死を避けることのできる人は一人もいません。死を避けることはできないのです。ここで生きて死ぬのですが、自分のために生きる人は、この世界へ行ってぐるっと回って地獄へ行くのであり、他人のために生きた人間は、ぐるっと回って天国に行くのです。この二つの世界が死を境に分かれるのです。

今後は自分の財産を天のものとして捧げるための綱が、世の中で最も長い綱になると考えるのです。ですから、すべて無一文の乞食になりなさいというのです。すべて捧げました。捧げるものは鼻水と涙と血しかありません。先生自身がそうです。捧げるものがないのです。生命と財産をすべて捧げました。皆さんに息子、娘のための預金通帳があれば、それは自分の息子、娘のために使わなければならないでしょうか、世界の救いの道のために使わなければならないでしょうか。そのような考えをし、そのような行動をしてこそメシヤと同等の立場に同席できるのです。

「ため」に生きなさいというのです。全体のために生き、より大きいもののために生きなさいというのです。世界のために生き、神様のために生き、人類解放のために生きなさいというのです。自分によって新しい血統に転換しなければなりません。

今後どのような競争が起こるでしょうか。お互いが「ため」に生きるということです。なぜですか。天国では「ため」に生きる人が高い位置に行くので、その高い人のために私が生きるようになれば、その人に乗ってジャンピングできるというのです。ケープ・ケネディに行けば、人工衛星の発射台があるのですが、ここで人工衛星が発射されて天に飛んでいくのと同じように、そのようになるというのです。

人のために生きることは、神様が創造して相対をつくったのと同じなので、その人の愛の対象圏に立つということです。そうでしょう。誰かに従って「ため」に生きることも、すべてそのためです。皆さんも先生のために生きるでしょう。先生のために生きることは、先生の愛の対象になってジャンピングして、神様を占領しようというのではありませんか。そうですか、そうではありませんか。人工衛星は目標物に向かって飛ばさなければならないでしょう。同じです。人工衛星が出てきたのは、今日、信仰者が跳躍して天国にどのように行くのか、何千万里、何万里をどのように行くのかということを前もって示すためなのです。

霊界はどのような世の中ですか。真の愛を中心として他の人のために生きる所が霊界です。自分のために生きるのではなく、全体のために生きるのです。この地上でも人のために生きる人は、一〇〇パーセント「ため」に生きる人は「私を踏んで越えていきなさい！」と言うのです。いくらアメリカという国が大きくても、アメリカの大統領よりもっとその国の民族のために生きる人がいれば、その人が大統領を踏んで越えていってもみな歓迎するのです。しかし、自分の利益だけを取るときは、みんな怨讐になるのです。

霊界に行っても同じです。より大きいもののために生きるときは、自然に通過するのです。より大きいもののために生きるようになれば、自然に通じるのです。ですから、世界

のために生きる人は、アメリカのために生きなくてもいいのです。世界の中にアメリカが含まれるのです。韓国も同じです。すべての国が含まれるのです。それでは、行くにおいて、家庭もただそのまま過ぎ、すべてが歓迎できる方向の内容とは何ですか。それは真の愛を中心として「ため」に生きていく愛の道しかないという結論が出てくるのです。

皆さんが五十年の生涯の中で、二十五年以上をこの宇宙のために生き、天倫に従って生きたとすれば天国に行くのです。そうすれば、あの世に行っていい霊界にとどまることができますが、自分を中心として生きたことが多かったとしたら、残念ですが善なる本郷の世界に行くのではなく、自分だけのために生きようとする悪なる本郷、地獄に行くというのです。そのような事実を知って、これから皆さんは、自分のために生きた過去の生活を清算して、余生を全体のために生き、国のために生き、世界のために生き、天地のために生き、神様のために生きなければなりません。そうすれば、ここから地獄ではなく天上の理想世界へと向かって進むことは間違いありません。

イエス様は死を目前にしても「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」（マタイ二六・三九）と言いました。死んでいきながらも神様に抗議するのではなく、お父様のみ旨がもっと大きいので、もっと大きい犠牲でも当然捧げるという姿勢でした。このような位置では、より一層深く入っていくことができるので、神様ともっと近い位置に入っていくのです。そのような人の前では、神様もどうすることもできません。そのような人を打つ人は、すぐに滅びます。神様が自ら制裁をなさるのです。

霊界（天国）とは、どのような所か知っていますか。「ため」に生きる人が行く世界が霊界です。自分のために生きる人は絶対に行けません。そのような人は地獄に行くというのです。有名な牧師だといってそこに行けるのかどうか、行ってみれば分かります。統一教会は怨讐まで救ってあげ、共産党まで救おうとするのですが、共産党はすべての首を切って統一教会をなくそうとします。これが違います。ですから、どのような愛がこの世界を支配しなければならないのでしょうか。私たちは共産党よりもっと強くなければなりません。悪なる人になって強くなってはいけません。「ため」に生きる愛を中心として強くなれば、世界を救っても残るというのです。

天国は与えて生きる所です。神様も、与えさえすればよいのです。親は、子女に与えさえすればよいのです。良いものを与えてからも、もっと良いものがあれば、それをまた与えたいのが親の心です。

百を与えて忘れることのできる神様の前に、私は千を与えても忘れることができるようになれば、神様が私の相対になってくださるというのです。このようなことを知っていますか。これは素晴らしいでしょう。主体と対象の関係が交換できるというのです。それでは、「私が一度善のために、神様以上にやってみて生きる」と言った人が地獄に行くでしょうか、天国に行くでしょうか。天国に行って神様が暮らしている朝の食卓の召使になります

か、一緒に座って愛の御飯をお互いに分け合って食べながら生きることのできる位置に行ってとどまりますか。どちらですか。

霊界がどのようになっているかという事実に対しては、誰にも劣らない体験をしましたし、また霊界は私の専門的な分野です。霊界の秩序的な起源を調べてみれば、どのようになっていたでしょうか。「ため」に存在するようになっている世界が天国です。そこが私たちの本郷です。

三) 天国は地上天国を経ていく所

今までの歴史上に神様の前に呼ばれた人々は、みんな五十代以上、六十代以上でした。年老いてやつれ、遠からず共同墓地に行くしかない人々、葬送曲を聞く日が近い者たちだったのです。そのような背後で神様は、今日このようにやつれてしまった老年層をつかんで摂理するのですが、今後は壮年層をつかんで摂理しなければならないので、彼らをつかんでどのように摂理を展開させるかを心配なさったのです。神様はそのような事情を抱えて歴史路程を歩いてこられたのです。

釈迦も神秘な境地に入って「天上天下唯我独尊」と言いました。修道しながら精神を統一して、霊的世界に入って神様の前に完全な対象の位置に入っていけば、「天上天下唯我独尊」という言葉が可能だというのです。先生が世の中をしっかりとつかめば、世の中がこの握りこぶしの中で溶け出すような思いが生じるのです。そのような境地に入っていくようになれば、奇跡が自動的に起こります。病気を治すことは信仰の付属物として自然についてくるのです。

今日大部分の人を見れば、一日の生活圏内で朝起きて御飯を食べるという習慣的な生活をしながらも、「私は神様に対して堂々としている」と言います。そのように信じている人が多いのです。そのような人々は天国を所有できません。堂々とすることはできません。私を公認する相対的な要因がなくては、絶対的な信仰基準ももてないのです。絶対的な信仰基準ももてなかったのに、絶対的な信仰基準を克服したのちにこそ成される天国が成し遂げられるでしょうか。とんでもないことです。なぜでしょうか。その場にはサタンがとどまっているからです。

今日、数多くの宗教人は、「天国は自分の宗教を通じてのみ成される」と言います。それはすべて妄想的な話です。多くの宗教がそれぞれ、「我が教主が教える教理を通じて天国が成される」と言います。キリスト教だけ見ても数十の宗派に分かれています。自分の宗派でなければ異端視してサタン視するのが現実です。その教団が神様から公証を受けてそのようなことを話すなら分かりませんが、ただ単に自分の宗派を立てて、自分の宗派を残すための欲からそのようにするなら動機が純粋ではありません。そのような宗団は、すべて滅びるようになります。もし統一教会がそうならば、統一教会から滅びなければなりません。

霊的世界も塀ですべて遮られています。仏教圏があり、儒教圏があり、すべて塀でふさがれています。これをより高い神様の心情を

通じてすべて取り除かなければなりません。天上世界の高い玉座から塀を壊して逆に下りてこなければなりません。何万年の私たちの先祖の塀から何千年の私たちの先祖の塀、何百年のこの時代の塀、何年前に亡くなったすべての人々の塀をすべて壊して、地上のすべての塀を壊して、これを地獄まで連結させ得る道を築かなければ、開天門が成されないのです。

統一教会の食口はどの水準にまでならなければならないのでしょうか。釈迦よりも立派な人にならなければならず、イエス様や孔子よりも立派な人にならなければなりません。今までの宗教の目的は、個人を救うことでした。しかし、統一教会は個人の救いよりも家庭を目的とするのです。統一教会が一般宗教と違う点がこれです。救うけれども家庭を救い、天国に行くにも自分一人で行かないというのです。

天国という所は一人では行けません。天国という所は必ず相対理想を決定してこそ入っていけるようになっているので、堕落人間が天国に入っていくためには、復帰の歴史、復活の歴史、再創造の歴史を経なければならないのです。皆さんを祝福してあげることは、天国の門をぱっと開けておくことです。「祝福」という名詞を立てて閉まっている天国の門を開けてあげることです。

「天国はあなたの心にある」と言われましたが、「天国はあなたの家庭にある」と言えなかったイエス様がどれほど哀れで孤独であられたかを考えてみなさい。それでも皆さんは家庭をもって幸福を謳歌しています。私たちには、そのようにできる瞬間もあるのですが、天下を救うための求道者の主人であり、神様のひとり子であられるイエス様が、このような環境天国の基地を夢にも見ることができず、「天国はあなたの心にある」と言いながら、心で天国をよみがえらせようとしている途中で、三年もたたずに十字架で亡くなったので、その方の生涯がどんなに孤独で悲惨かというのです。

地上天国と天上天国は、レールが同じで二つが合うのです。国境を越えれば、この世のレールとあの世のレールと合わなければなりません。それでこそ貨物列車が走ることができるのと同じように、地上と天上世界のレールが合うようになります。ここで走る愛の機関車を担った家庭が、ただそのまま天国まで、天の玉座の前まで直行できるレールを連結させるための道というものは、真の愛で「ため」に生きる道です。個人が行く道と家庭が行く道を、すべて連結しなければなりません。方向が一致するのです。

私たちは、好きでも嫌いでも、いずれそこへ行くべき運命に置かれています。それが私たちの人生の道です。私たちは、そこに向かって旅人の道を行っているのです。それでは、ここで問題になることは、自分のために生きたのか、人のために生きる生活をしたのかということです。その差によって、すなわち人のために生きたことが多ければ天国に行くことができるのであり、その反対になるときには地獄に行くというのです。この原則はこの場では信じられませんが、死んでみれば分かります。

霊界に行ってみれば、人々がいろいろな段階の所にとどまっているのですが、その人々がどのようにしてそのようになったのでしょうか。愛の道理に従ってどれくらい孝行を果たしたか、どれくらい国に忠誠を尽くしたか、どれくらい世界で聖人の道理を果たしたかという度数の差によって該当する位置にとどまっているのです。人間がこの地で行くべき道は正道です。正道には、個人の正道があり、家庭の正道があり、氏族の正道があり、民族の正道があり、国家の正道があり、世界の正道があり、宇宙の正道がなければならず、神様御自身にも正道があります。このような、ただ一つの道がなければならないのです。その道がどのような道ですか。本然の愛の道です。

最後にはどのような世界へ行くのでしょうか。地獄へ行くのでしょうか、天国に行くのでしょうか。皆さんは行きながら「先生！助けてください」と言う人になるのでしょうか、「先生！　いらっしゃいませ」と言う人になるのでしょうか。死ぬか生きるかというのです。皆さんが結婚して仲良く暮らすというのですが、先生が仲良く暮らしなさいということは、変わらない夫婦になりなさいということです。変わらない夫婦になろうとするなら、変わる世界に行って一緒に修練を受けて、南北が分かれ、四方に分かれて暮らす世界に行っても分かれてはなりません。このように訓練された位置に立たなければなりません。

真の父母が生んだ息子、娘は偽りの息子、娘ではなく、真の息子、娘です。そこから真の家庭が出てくるのです。真の家庭が出てきて、真の氏族が出てきて、真の民族が出てきて、真の国が出てきて、真の国が出てくることによって真の世界になります。その世界では、神様を中心として家庭で天国生活をして、氏族で天国生活をして、民族で天国生活をして、世界で天国生活をしなければなりません。そうしてこそ、この地が地上天国になるのです。この地上でそのように暮らしてから肉身を脱いで永遠なる天国に入っていけば、そこが霊界の天国だというのです。これが神様の摂理の概観です。

皆さんは、「天国に行こう」と考えてはなりません。地上に天国を建設しようと考えなければなりません。天国を建設する前に皆さん自身が先に天国人にならなければなりません。天国人になろうとするなら、「お父様の心が私の心であり、私の心がお父様の心だ」と自信をもって言える程度にお父様と心情一体を成さなければなりません。それで、地上でお父様の心に代わり、主と先祖の心に代わらなければなりません。そうしてこそ、歴史的なあらゆる問題を解決できるというのです。

死にながら「神様、私は今まで神様のみ意のままにできませんでしたが、私の心では天国に行こうとしました。ですから私を蕩減条件を立てたものとしてください」と言えば、神様も公平であるので、そのような人は天国へ行こうとする位置に置いておくというのです。どのような位置に置いておくのでしょうか。行こうとしたので、天国へ行こうとする位置に置いておくのです。言ったとおり返してくれます。行くことは行くのですが、天国へ行こうとする位置へ行きます。その場は楽園以下の位置であり得るのです。地獄にいる人も天国へ行こうとするというのです。

「統一教会は、ただこのように集まって別れる所だ」と言うでしょうが、そうではありません。ここで線を引けば、永遠に引かれるのです。この門を閉めれば永遠に開ける者がいないし、開ければ再び閉める者がいません。地で結んだことは地で解かなければならないがゆえに、皆さん自身が結んだことは、皆さん自身が解かなければなりません。これが問題です。それゆえに、皆さんが伝道をするにおいて、これからは他の所に行って伝道するなというのです。

「二十億の人類の愛の結実である実体を、私を生んでくれたお父さん、お母さんよりももっと愛し、四十億の人類を私のお父さん、お母さんよりもっと愛する」と言えば、神様の愛の圏を中心として一つになったという立場で人類を愛することができるために、私はサタン世界とは無関係な立場に立つのです。

堕落しない本然の人間として、サタンと関係がない人間として、理想的夫婦の愛を中心として家庭を築き、暮らしてから天国に直行できるようになっているのが本然の人間です。それで地上天国というのです。地上天国は天上天国を受け継ぐのです。それゆえに、ペテロに天国の門の鍵を与えたとはどういうことかといえば、天国を成すことのできる道が地上にあるというのです。はっきりと知らなければなりません。

四) イエス様と楽園

堕落がなかったならば、天国はひとり子、ひとり娘が神様の愛を中心として神様の家庭を築き、神様の愛で暮らして引っ越して行く所です。天国は家庭が入っていくようになっています。個人は天国に入っていけないというのです。イエス様は家庭を成せないことによって天国に入れず、天国の待合室に行って待っているのです。それが楽園です。楽園は、天国に入る準備をするための待合室のような所です。

イエス様は、血族を通してそれを成し遂げることができませんでした。それゆえに、イエス様が再び来てこれを解怨成就しなければなりません。そうでなければ天国に入れません。天国を開ける条件とはどこにありますか。地にあります。したがって、イエス様が天国の鍵を地に残していきました。イエス様と十二弟子が家庭を成し遂げることができなかったので、今日、統一教会で祝福家庭を通して七十門徒、百二十門徒の家庭を再び探し立てなければならないのです。それでこそ天国が開きます。

キリスト教で言うように、イエス様を信じて天国へ行けると思いますか。イエス様御自身も相対理想を成せなければ行けないのです。神様も成せなかったのに、イエス様一人で真の愛を成すことができますか。ですから再び来なければなりません。それなら、雲に乗って来るのでしょうか。今では、現実的内容をすべて目で推し量ることができ、測ることができるこの民族が私についてくるようになっています。

今日のキリスト教を信じる人々は、「イエス様を信じれば救われて天国へ行く」と言います。「天国へ行くのも自分一人で行く」と言うのであって、「自分のお父さん、お母さ

んと一緒に行く」と言う人は多くありません。今後、宗教は個人のみの救いであってはなりません。神様が立てておいた真の宗教ならば、宇宙的で最後まで残り得る宗教にならなければなりません。人類が望む最後の宗教があるならば、その宗教は「個人のみ天国へ行くことがみ意」とは言わないでしょう。天国を個人にだけ紹介してはなりません。お父さん、お母さんにも紹介しなければなりません。そのように紹介して族長までその内容を知るようになれば、一度についていくようになるのです。

イエス様がどうして天国に入れなかったのでしょうか。天国は堕落せずに生きた者が入っていけるように、神様が人間に対して造ってくれたのです。人間は、本来の原則的な基準に立ってこそ天国に入っていけます。したがって、イエス様御自身も堕落した人間を救って、堕落しない人類の父母であるアダムとエバの位置で息子、娘を率いて入らなければならないのです。しかし、イエス様は一人で来たので子孫がいません。いないので楽園に行くようになったのです。天国に入ることができず楽園にいるというのです。天国に行くための待合室のような所に行っているというのです。

天国は空いています。これを考えれば神様の復帰摂理が、悲しい復帰摂理の歴史であるというのです。神様がアダムとエバを失ってしまいました。二人を失ってしまっただけで終わるのではありません。アダムとエバを失ってしまったということは、アダムとエバの一族を失ってしまったのです。その一族が拡大して民族になり、一つの国家を成し、一つの世界へ拡大されたはずですが、失ってしまったのです。ですからアダム一人を失うことによって、天国の王権を中心とした王国を失うようになり、天国の民族を失い、天国の氏族を失い、天国の男性、女性、ひとり子、ひとり娘まで失ってしまったのです。

本来、霊界は家庭が入っていかなければならないのですが、家庭がありません。イエス様も夫婦生活をしていない独身です。聖人の孔子、釈迦、マホメット、王たちはどうだったのでしょうか。すべて天使長圏の子孫なので、独身生活です。相対理想がありません。このようなことを話して、無知で知らない人がどんどん知って、自分が王のようになるという非法的なことが起こってはなりません。王になるなら真の愛でならなければなりません。自分が人のために生きなければならないのです。

神様は人類を救うために宗教を立てて摂理してこられます。それゆえに、高次的な宗教であるほど、その本郷のみ旨と本郷の原則に一致する教訓を言わなければならず、「犠牲になりさい、奉仕しなさい」という勧告をせざるを得ないというのです。このように、神様が歴史と宗教の背後で摂理しているという事実を否定できません。このような原則について見ると、「ため」に生きようという宗教は発展できますが、自分を中心にして世界に問題を起こしながら主体的な立場に立とうという宗教は下がっていくという結論も、ここで出せるのです。

聖書に「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な、第一のいましめである」（マタイ二二・三七、三八）と記されています。ここに引っ掛かる人は天国に入れません。二つ目の戒めは何ですか。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（同二二・三九）と言いました。神様を第一に愛し、隣り人を第二に愛する人が孝子になるのです。

イエス様に従う弟子たちは、イエス様がローマ帝国を一時に占領してイスラエルの王に君臨すれば、自分たちは一席ずつ占領することができると思っていたのです。そのようなことが問題ではありません。まず私の心の中で天国の基盤を築かなければなりません。その心を中心として体が神様と一つになり得る基盤を築かなければなりません。これが最も大きい問題なのです。結局は、私自身から始まるのです。したがって、天国の拠点は私の心だというのです。

神様は仲むつまじくすることを喜ぶのですが、荒々しく激しくてはいけません。神様が仲むつまじくする時は仲むつまじくしなければなりません。内外が合わなければならないのです。このように内外だけ合えば、それでよいのでしょうか。その次は、神様のみ旨と一致することをしなければなりません。そうするならば心に何もないことがあり得るでしょうか。体が嫌がることがあり得るでしょうか。心と体が喜ぶことをしなければならないのです。神様が存在するなら、神様が喜ばれることがあるというのです。またイエス様が神様の息子ならば、イエス様もそのようなことを喜ばなければなりません。

神様を愛さずにはサタン圏内を抜け出すことができないのです。それゆえに、自分の妻よりも、自分の夫よりも神様をもっと愛さなければなりません。堕落した人類がサタン圏内の愛のわなから家庭の位置まで出てきましたが、まだ完全に出てくることはできませんでした。ゆえに自分のお父さん、お母さんを神様よりも愛してはいけないというのです。

霊界に行ってみれば、昔殉教した信徒の中で「私がこのように殉教してこそ天国に行くことができるだろう」と言った人は、天国に行けなかったというのです。反面「父なる神様が私を探すために受難の道を歩んで来られ、血を流された。主の恩に報いるためにはどのような道でも行く」と言って、「その恩に報いることのできる位置に私が共に参席できる栄光の一時を迎えられたことがどんなに有り難いことでしょうか」と言って死んだ人は、間違いなく天国に行ったのです。そのような人は自分のために生きて死んだのではなく、天地のために死んだのです。「私がこのように信じて死んでこそ天国に行く」と言って死んだとすれば、それは自分のために生きて死んだのです。堕落した人間は、自分の主張をしては絶対に天国に行けません。

五) 地獄は神様の愛と関係ない所

堕落とは何ですか。堕落したがゆえに、真っ暗な夜中になってしまったという結論が出てくるのです。天国へ行くことのできるチケットをもらうべきなのに、地獄へ行くチケットをもらったというのです。それを実感するでしょう。天国へ行けるチケットが地獄行き

のチケットに変わってしまったのは、堕落のためだというのです。

地獄とは何ですか。神様の愛と血統と生命、神様との因縁がない所が地獄です。

地獄は、すべて遮られてしまって自分一人でいるのです。すべてのものを慕いながらも、何もできないのです。直感的にこの宇宙の膨大な幸福圏をすべて見て感じることができるのに、全然身動きができないでいるのです。それで、レバレンド・ムーンがすることとは何ですか。このような世界的な思想を中心として天地を愛し、神様を愛する運動をするのです。これは、皆さんが未来に霊界にもって行くべき道を今から準備させるのです。このような準備をするということは偉大なことなのです。

霊界は無限の世界です。私たちを包容する故郷は、そのように大きいというのです。永遠な故郷、霊界は本当に巨大な所です。霊界が好きですか。どんなに大きいか分からないというのです。その世界を活動舞台とするのです。その心が世界的になって、宇宙的であればそこに拍子が合うのであって、個人主義では駄目だというのです。個人主義は全体と通じることができないので、どれほど地獄でしょうか。鷲を捕まえて、汚い穴に動くこともできないように閉じ込めておいて、えさだけ与えるのと同じだというのです。鷲はアメリカを象徴する鳥でしょう。食べるものだけ食べて生きるとすれば、どんなに悲惨でしょうか！　それが幸福ですか、不幸ですか。悲惨なのです。

自殺することは罪の中の罪です。宇宙を破綻させるための邪悪な行動です。そのような人は地獄の中の地獄に行かなければなりません。

皆さん十分の一の鼻の穴、十分の一の口で息を吸って生きると考えてみなさい。それが地獄なのです。地獄はそれと変わりません。変わらないというのです。受けたい時に受けることができず、与えたい時に与えることができないのが地獄です。皆さん、息を吸いたいとき、空気を吸いたいとき一度我慢してみなさい。何分我慢できるでしょうか。息を吐きたいとき吐くことができず、吸いたいとき吸い込むことができなければ、どれほど我慢できますか。それが地獄です。

霊界では神様の愛がなければ食べることができません。食べる権利がないというのです。地獄は見ながらも食べることができない所であり、知っていながらも行くことのできない所だということを知らなければなりません。それゆえに、神様の愛を中心として霊界と肉界が一つになり得るこのような価値的な中心を立てておいて、地上で霊肉が一つになった天国生活をした人以外には永遠な理想的世界をもつことができないのであり、天国を所有できないということを知らなければなりません。

あの世に行って何をするのでしょうか。食べるでしょうか、食べないでしょうか。食べれば良いでしょうか、食べなければ良いと思うでしょうか。それでは食べるのに何を中心として食べますか。愛を中心として食べるようになっているために、愛をもっていない人は行って食べようとしても口が開かないのです。それが罰です。

世界も混乱しています。それでは、霊界はどうですか。混乱した人間像が霊界に行って集まっているので、霊界は混乱せざるを得ないのです。盗みも習慣になれば、いつも盗みをするものです。ですから、地上で盗みをしていたならば、天上世界に行ってもただを願います。それで、処置が困難なので地獄というものが生じました。地獄は神様がつくったのではありません。ごみ箱を作っておいてから家を建てるのではありません。家を建てて暮らしてみると、ごみ箱が生じました。同じです。既成教徒はみんな根本を知りません。

地獄とは何かというと、廃物収集場所です。廃品収集場所なのです。神様の愛とは関係がなく、すべて偽りの愛で出発した全人類は、みな地獄へ行きます。それで、天国に行く人は、神様の愛と心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになって神様の愛を中心として神様のように生きた人間です。神様も心と体が絶対的に一つになっているのと同じように、男性や女性やその家庭全体の家族が心と体が絶対的に一つになることによって、主体なる神様の前に、その家族が対象として一緒に暮らし、この地を離れて霊界へと移動していくのです。

地獄に送る神様が絶対ではありません。霊界に行けば、自分で地獄に行きます。邪悪に生きた人は、善なる所に行けば呼吸が合いません。呼吸できなくなります。ですから、仕方なく自分に合う所を探さなければなりません。地獄の暗い所に行って「おお、ここだな」と言うのです。そこが地獄です。私のような人は、「地獄へ行っていなさい」と言われても、いることができません。呼吸が合いません。私がかぐにおいが違い、味を知っているのに……。地獄に誰が送りますか。そのような神様ではありません。地獄は自分が訪ねていくのです。

天国に行けば、地獄にも思いのままに行ったり来たりできます。皆さん、霊界で制限される人になりますか、自由天地に解放された人になりますか。皆さんの横にいる人を「ああ、この人は天国の門番だ。番人だ」と言いながら、その門を通過するために訓練しなければなりません。「その門を通過しなければならないのですが、あなたが門番ですね。あなたの心をとろけさせ、あなたを感動させ、私が入っていく時、案内してもらえるようにします」と言わなければならないというのです。

地獄とは何かといえば、未来がないというのです。天国には未来があるのであり、地獄には未来がありません。天国に入ったならば未来があるのです。堕落はどこから始まったのでしょうか。堕落とは公的な意味の未来をもたない位置から、自分だけが中心となったところから始まったということを皆さんは知らなければなりません。「私のために生きなさい」という道は地獄であり、「人のために生きなさい」という道は天国です。このような概念がはっきりと生じるのです。

気球があるでしょう。水素を入れれば、ゆっくりすっと上がっていきます。上がっていくのですが、それがどのくらい上がっていくでしょうか。最初に上がっていく時は、無制限に上がっていくようですが、上がっていくには限界があるのです。自らの重さと均衡が取れる所にとどまるのです。自分と同じ同類

の空気圏内にとどまるのです。霊界も同じです。欲深い人は下がっていくのです。重いというのです。ですから、地獄という所は重い者たちが集まってぶつかるのです。そのようになっています。

もし霊界に白人と黒人が行って、白人が天国に入っていく時、黒人の番人を立て、黒人が天国へ入っていくとき、白人の番人を立てたとすればどうするでしょうか。後ろに戻りますか。では、どうしますか。行けないと悪口を言って殴れば「私を殺してください。昔は分からなかった」と言いながら、ただ取りすがって「助けてください！」と、このように頼みますか、逃げますか。自分が生前、黒人たちに反対したことの何千倍、何百倍生き地獄でしょう。私が神様でもそのように番人を立てます。

皆さんは、宇宙からどこにも行くことができないのです。どこかへ逃げる、そのような所はないというのです。自分の思いどおりに逃げることができないのです。宇宙の法と秩序圏内から抜け出せない人間だということを知らなければなりません。道に従って行かなければならないというのです。

皆さんは愛の秩序、人倫、家庭、社会、国家、世界、天宙、神様、全体を通じることのできる公式的な憲法基準を中心とした、宇宙法の治下に生きている自分自身だということを知らなければなりません。自然をはじめとするすべての法が支持し、擁護して、解放圏をもてる道は、愛して「ため」に生きる道しかないという事実を知らなければなりません。地獄までも……。統一教会の食口は地獄の観念がありません。地獄があるという事実を知らなければなりません。愛のバーナーをもって行くその道を行くことができなければ、もっとひどい、もっと怖い地獄があるという事実を知らなければなりません。それを分かったでしょう。法廷に立って勝利する皆さんになるように願います。

「私的なこと」と「公的なこと」という言葉は、はっきりしているのです。公的なことは、大きなもののために生きることです。私的なことは、自分を中心にするのです。自分を中心にすることは地獄と通じるのであり、公的なことは天国と通じるのです。

統一教会の食口は安物ではありません。聖書を抱えて礼拝に行けば天国へ行き、いくら献金すれば天国へ行くと考える、そのようなつまらない群れではありません。それはつまらない群れです。そのようなひどい群れではありません。信じたなら、ひたすら最後まで信じるのです。どのくらいすごいかといえば、自分が死のうと生きようと、夫がつかんで行けないようにしても離婚も辞さずに信じるというのです。そのようにものすごいのです。

神様がそれを見て、「おい、お前は離婚して私についてくれば、お前を地獄に送る！」と言われますか。離婚をしてでも、け飛ばしてでも正しい道を行くという時、神様が「お前は離婚することをよく決心したな」と言われるでしょうか。どのように言われるでしょうか。一度答えてみてください。

今苦労するのは天国の自由を求めるためです。地獄までも天国につくるためです。地獄に行って裁判長のようなことをしても、地獄で懲役生活をした人たちがみな「あなたはす

べて経たので讒訴することができない」と言うでしょう。この位置に降りてくる時、高い位置から一段階降りてくる時、世の中ならどんなに大騒ぎするでしょうか。「私がなぜそこに行くのか。私がなぜ行くのか」と言うでしょう。それは兄弟社会ではあり得ないことですが、父母の心情圏でのみ可能なのです。この上なく高い神様が、地獄のどん底まで降りてくることができるというのです。これが父母であり、真の父母です。自分の顔に傷ができ、体がどのようになってもそのようにするのです。

目をむいて「酒を飲んではいけない。この者たち、滅びなさい！」とこのように言うならば、どれほどいい加減な者たちでしょうか。そこには余裕がありません。こうしたキリスト教徒たちを見れば、ばからしくて私はうんざりします。「聖句のマタイ福音書何章に引っ掛かった。あなたは地獄に行きます」と言うのを見れば、えい、この者たち……。人を殺しても、国を生かすことができれば、国を生かすことのできる道のために人殺しを釈放する法がないと思いますか。この者たち！

あなた方はそれを考えるのです……。このように成長すると……。あの尾根にある大理石の間に根を下ろしたあの小さい松、そこには通りすがりの犬が来てもおしっこもできないのです。陰があってこそおしっこをします。おしっこをするのは恥ずかしいので、犬もどこかに行ってくっついてするのです。それは人間よりましです。そうなのです。陰に行ってするのです。なぜですか。人が見るといけないからです。

天国へ入っていくのに一番の問題とは何ですか。自分が怨讐だというのです。地獄やサタン世界は自我覚醒から生じたのです。天使長が自分を中心として考えたというのです。深刻に考えたというのです。逆賊とは何ですか。自分を中心として国と主権者を越えて考える人を「逆賊」と言うのです。自分を中心として上がっていくその頂上は、すべて逆賊の道と通じるのです。地獄の道と通じるのです。人間自体において敗亡の道と通じるのです。自分を中心とするこの基盤は、死亡と通じるのです。

自分が愛を受けるということは地獄へ行く道であり、サタン側です。私が愛するということは天国へ行く道であり、神側です。確かだというのです。そのような愛が世の中には一つしかありません。父母の愛一つしかないというのです。子女が「受ける」と言わなくても、しきりに愛するのが父母の愛です。堕落したけれども、父母の愛を通じたその道だけは残っているというのです。神様がそうですから、神様が父母になるので、そのような愛が人間にも残っているというのです。

皆さん、終着点とはどこですか。どこに行ってとどまるのでしょうか。レバレンド・ムーンは、あの世の霊界に行ってすべての愛の極点にいるでしょう。北極、南極と同じように愛の極点に……。中間でいくら探しても、いくら歩き回ってもレバレンド・ムーンはいないでしょう。いないから「レバレンド・ムーンは地獄へ行った」と言うでしょう。それが易しいことでしょうか。「愛の火だるまのように北極でも凍え死なない」これが素晴らしい理想であり、素晴らしい思想ですか。そ

れならば、すべて成し遂げました。神様も私の中にいます。また世界の人も私の中にみんないます。愛の相続を受けるという人は、私の一族です。それは気分が悪いですか。

神様が地獄に行けば、地獄の悪魔まで頭を下げるのです。神様の前には頭を下げるのです。サタンも絶対的な愛には反対できません。神様は地獄に行っても地獄が順応しなければなりません。地獄も神様の所有なのです。神様が行けば、地獄が門を全部公開しなければならないのです。簡単な内容ですが、このすべての存在の作用の原則がこのようになっているということを知らなければなりません。

心には境界線がありません。神様を考えてみなさい。神様の心には境界線がありません。それゆえに、神様はどこにでも行けます。神様が天国に行きたければ、天国に行くのです。神様が地獄に行きたければ、地獄に行けるのです。どこにでも行けるのです。それは神様の心の中に境界線がないという意味です。

服がいくら良くても、死刑場に行く時に着る服はこの上なく嫌なのです。しかし、いくら良くない服でも、妻が愛のみ手を通して作ってくれた服は、限りなく光るのです。愛という内容を中心としたすべてのものは、神様がどこでも歓迎するという結論が出てくるのです。地獄に行っても愛のために地獄に行ったとすれば、神様もそこに共に行くことができるのです。ここに愛の地獄をぴたっとつけておけば、どうですか。気分が良いですか、悪いですか。地獄でも、愛の地獄ならどうですか。地獄に行っている人が「この！」と、このようにしていても、「愛の地獄！」とこう言えば、「ほう」と言うのです。それ、分かりますか。そうなると思いますか。

愛する人のために監獄に入っているのであれば、そこは監獄ではありません。愛する人をもっと光らせ、もっと深く因縁を結ぶようにしてあげる場所になるのです。それゆえに、真の愛というものは、高さは神様まで、深さは地獄まですべてコントロールできるというのです。それでは、この愛は人の世界でのみできるのでしょうか。違います。万物世界、すべての動物世界もそうであり、地もそうであり、植物もそうであり、すべて愛の歌は好むのです。

皆さんが朝起きた時、鳥がお互いに愛する歌がいいですか、闘う歌がいいですか。愛する歌がいいのです。この宇宙では、真の愛をもった所には境界線がありません。境界線がなくどこにでも通じることのできる内容があり、神様と地獄までもコントロールできる内容があるために、どこでも境界線を押し倒していけるそのような力があるという事実を皆さんは知らなければなりません。

愛が宇宙を存在させる柱になったのと同じように、これが地獄を成す柱になっているという事実を知らなければなりません。このようになったのを直すのは、どれほど大変でしょうか。何百パーセント強い漂白剤で細胞をすべて洗っても、これが根源になっているので、また染まるのです。

真の愛の力だけが一〇〇パーセント一つにできます。「真の愛」と言えば、神様も「うん」と、地獄にいるサタンも「うん」と、世の中もすべて「うん」と言うのです。何の力

が一つにさせるかといえば、真の愛の力が一つにさせるのです。「先生のその話は違います」と言う人がいますか。

最高の頂上の神様がいらっしゃる所と、地獄の最もどん底にいる人間世界の間に、ケーブルカーを置こうというのです。そのケーブルカーの綱は何の綱ですか。お金の綱はすぐに全部切れてしまうというのです。お金の綱では駄目です。では、知識の綱でできますか。権力の綱でもできません。上下を超越した愛の綱をもって、その綱にケーブルカーを連結しなければなりません。

クァンデノルゥム（注：陰暦一月十五日にする全羅道の民族祭り）とは何ですか。クァンデは遊んだり踊ったりするのです。その時に行って踊ることができなくても、リズムは取らなければなりません。「ああ、統一教会の教主としてそれにリズムを取れば地獄に行く」というそんなつまらない神様ではありません。神様は、とても傑作な神様なのです。神様がそのような犬の足のつめより小さく、ありの前足のように心が狭い神様ではありません。口を開ければ空気をすべて吸い込んでも余るほどの偉大な神様であることを知らずにいたのです。

神様の摂理から見ると、霊界に行っているこの人たちはみんな地獄に送って、その残りの人だけ救援摂理をするでしょうか。神様が真の意味の愛であられるならば、その愛の限界はどこでしょうか。このように反問すれば、その地獄の限界線まで越えた救援摂理の完成を願う神様ではないでしょうか。このような答えが出てくるようになるのです。

人間の心は固い石ではなく、氷なのです。そこにはありとあらゆるがらくたが一つになって凍りついたというのです。これを溶かして、がらくたはみんな片づけてきれいな氷の塊を作ろうというのです。きれいな水で氷の塊を作って神様が召し上がることのできる氷にしようというのです。「氷の中にはサタンが好むことのできる氷があり、神様が好むことのできる氷があるが、神様が好むことのできる氷になってみよう」と、そのような考えをしてこそ、地獄の氷の塊から天国の氷の塊に復帰できるのです。

六) 天国と地獄は自らが選択する

天国へ行くか、地獄へ行くかは自分自身が決定するのです。レバレンド・ムーンが決定するのでなく、神様が決定するのではなく、自分が決定するのです。不平を言えば地獄であり、不平を言いたい時に感謝していけば天国だというのです。

神様は猜疑心や嫉妬が深くて地獄をつくったのではありません。偽物が生じたので、偽物を処理する処理倉庫として地獄をつくったのです。誰がごみ箱を先に作って家を建てるでしょうか。キムチを漬けようと良い白菜を買ってきたのに、漬けてみると虫の食ったくず葉のようなものが出てきたので、ごみ箱に入れるようになるのです。堕落は人間始祖が犯しました。それゆえに、これを蕩減して罪を清算するためには、真の父母の資格をもってこそ可能です。

今まで人間世界に生まれた人には、神様が救うことのできる条件が一つもなかったので、

みな地獄行きでした。虫が食べてうじがくっついたので、豚にでも食べさせて、ほかに使おうかと思って仕方なくもっていって保存した所が地獄です。地獄と楽園があるのです。このように言えば、天国は空いているという話を実感できます。

堕落の血統を受けて生まれたその日から今日まで、全世界の人類が心を尽くして神様に侍った一日があったのかといえば、ありませんでした。堕落する前に私たちの先祖アダムとエバは、創造理想を通して育ちましたが、心情の因縁を立てて神様に侍ったことがなかったというのです。

地獄とは何ですか。神様の愛と血統と生命、神様との因縁がないことが地獄です。いくら地上でよくやり、いくら地上で努力したとしても、神様を中心とした天国とは関係を結べない地上世界になりました。これが地上の悲惨さであり、悲痛だというのです。

神様の恨とは何ですか。心情を中心として神様に侍るべき人間が、侍ることのできない位置に落ちたことです。心情を中心として侍られるべき神様が、侍ってもらえないのです。信じる者がいないことが恨ではありません。神様を知る者がいないことが恨ではありません。心情を通して神様に侍り、心情を通して神様に対することのできる人がいないことが天と地の恨です。

自分を憎まなければならないのです。この体を憎まなければなりません。私の体に怨讐の血が蠢動するのですが、これを刀で切ることもできず、燃やすこともできない私自身であることを知らなければなりません。神様の保護を受けることのできない位置に立って、万物を消化して消耗する消耗工場になっているという悲痛な事実を知らなければなりません。

天国と地獄がどこから分かれるかといえば、聖書をよく知り、弁がよく立つことによって天国と地獄が決定するのではありません。実績と心情が問題になるのです。結局、天国と地獄の境界線は、心情の境界線、実績の境界線に左右されるのです。

あの世に行くようになれば、愛の理想に符合できる素性を訓練して備えることができなかった時には、反発作用が及んできます。誰かが「地獄に行け」とは言いません。それゆえに、聖書では「怨讐を愛しなさい」と言いました。真の愛は、怨讐にその愛が及んで一次、二次、三次、四次さえ過ぎるようになれば、怨讐は必ずなくなります。このような偉大な力をもっているので、イエス様も「怨讐を愛しなさい」と言ったのです。

人間が地獄で死んでいくのを見れば、神様は永遠に生かしてあげようととても気をもむのです。そうであってこそ天の父母の立場で責任を全うするのであって、「えい！　みな掃き捨てよう」と言えば、父母の立場に立てないのです。それゆえに、地獄まで解放しなければならないという論理が成立します。

息子が自分を生かすために気をもむ父母の情景を見れば「私のお父さん、お母さんが私のためにあのようにしているんだなあ」と思い、計り知れない罪をすべて悔い改めるようになります。そのようなお母さんがいて、お父さんがいるならば、その子女は骨が溶けて

やせるほど悔い改めるようになるのです。父母によってそのようにすることができる道が生じるというのです。

サタンも人類を救援しようという神様の愛の前では讒訴できません。父母の愛を通して悔い改める者を許せないという道理はありません。そのような心情を通して地獄までも解放しなければなりません。それが真なる孝子として行くべき道ではないでしょうか。それで、統一教会では地獄までも救援してあげると主張するのです。なぜでしょうか。それは神様がそのような方であられるからです。

地獄という所は、一度はまれば永遠に脱け出せない所です。それでも、皆さんは自分のお父さん、お母さん、そして親戚が地獄に行くということを実感できません。ただ「どうにかなるだろう」と思って、それでおしまいです。しかし、愛する父母が本当に地獄に行くと考えてみなさい。この世の監獄にさえ入るとなると、泣いたりわめいたりしながらありとあらゆることをしてでも引っ張り出そうとするのが人情であるならば、まして天情によって結ばれた息子、娘が、自らの父母と親戚、兄弟と姉妹が永遠に出てくることのできない監獄に行くということを知れば、そのような考えをするでしょうか。

三　霊人と地上人の関係

一) 霊界は善の霊界と悪の霊界に分かれている

今まで霊界に行った霊人たちは、みな分かれています。霊界では横的には通じません。縦的にはこの程度で通じるのです。

霊界は二つの群れになっています。霊界はサタン世界と神様の世界になっています。霊界のサタン世界から善なる神の世界へ早く行ける道さえできれば、地上は自然に解決するのです。その道はどのようなものですか。霊界のサタン世界に行ってサタンの個人、サタンの家庭、サタンの氏族、サタンの国をすべて神側に引き継ぐ秘法さえもてば、それが可能だというのです。霊界にそのような時が来れば、地上にもそれが反映されるので、すべての変遷が速く、その世界へ転がって越えていくというのです。

霊界がどのように発展し、どのように動いてこの地上と関係を結んでいくのかという全般的な内容を知らなくては、霊界をはっきりと知ることができません。霊界といえば、善の霊界と悪の霊界、このように二つに分けることができます。その世界は実在する世界です。地上世界の人には分かりませんが、そこは確実にある世界だというのです。

霊界は、様々な部類の役事をもっています。ところが、その霊人たちは思いのままにここに来て仕事をすることができません。遮られているというのです。それで、宗教によって橋を架けないと特定の人以外には再臨できません。ユダヤ教の中でも派閥が生じました。霊界から降りて来る時、その主流が直線ではありません。ユダヤ教の別の系統が精誠を尽くせば、その主流が移されて行ったり来たりするというのです。

ですから、霊界にいる人が降りて来るには、直線に該当する人以外には降りて来ることができないというのです。再臨の役事の協助ができないというのです。そして一世紀がたて

ば、その人も霊界に行くのです。霊界に行って次の時代に来ようとすれば、やはりこのような原則で降りてくるのですが、特定の霊人以外には降りてくることができないのです。

霊界の塀はだんだん多くなります。ますます複雑になります。その次の世代がみな霊界に行くのです。それで、ますますこれが大きくなるのです。これがすべて壁です。今の時は世界的時代です。どんなに複雑か考えてみなさい。ここでこれを探してこようとすれば、どんなに回りに回ってこなければならないのか考えてみなさいというのです。ですから時になったら塀を押し倒さなければならないのです。霊界から降りてくる道と入る道をつくっておこうというのです。これを統一教会がするというのです。

神様の本然の理想世界、本然の人間が行くことができる理想的な善の圏に向かって行くにおいて、善霊はそこに前進しようとし、悪霊はそこをふさいでいるのです。悪の霊界と悪の世界というのは、いつでも通じるのです。いつでも連絡がつきます。善霊は悪の世界で対立して反対される位置で生きた霊です。それは宗教を信じて逝った霊人です。

霊界でも、善の霊人と悪の霊人が闘争しているのです。霊界にも闘争があるというのです。善霊は悪霊を先導して、良い所に行けないようにするのを遮ろうという闘いを続けています。サタンを中心として悪霊が連結しているのですが、その悪霊の統治圏内に今日地球の人間が生きているのです。なぜでしょうか。今まで逝った先祖は善霊でも悪霊でもすべて霊界に行っているために、その善霊も堕落した世界と区別されたという条件をこの地上で立てて善の方に立っているだけなのであって、神様が御覧になる時、完全な善の位置に立っていないというのです。

あの世に行けば人を殺した者、殺された者、もろもろの人が一箇所に集まっているので、そこでは刃物で相手を脅かしたり、復讐しようとすることも起こるのです。ですから、数多くの塀でふさがっているのです。それゆえに、悪霊が怨讐の子女を訪ねていって事故に遭わせて連れていったりするようなことが起こるのです。これをすべて解かなければなりません。これを解くためにはまず地上世界で解かなければなりません。解くにはもっと良いものを与えなければなりません。死ぬことよりもっと良いもの、怨讐関係になったことよりもっと良いものを与えなければ解くことができません。

イエス様は、この地上において十字架で死んだことだけでも無念なのに、死んで三日間地獄に行きました。それが試験です。人間には死が最高の恐怖ですが、イエス様には地獄に行くことが最高の恐怖であるというのです。それでは、イエス様はその地獄で恐怖の主人になったのでしょうか、でなければ幸福の主人になったのでしょうか。イエス様には地獄に行って三日間苦痛を克服するための試練がありました。

何をもって霊界を解放して、神様を解放するのでしょうか。このような関係は人間の先祖が成し、天上世界までめちゃくちゃにしたので、子孫は先祖の過ちを償わなければなりません。真の孝子になろうという子女なら、

父母が負った負債を返さなければならないのです。そのような意味で霊界にいる先祖のふさがった塀を崩す運動をしなければなりません。そうすることによって先祖が訪ねてきて皆さんに教えてくれるようになります。これは夢のような事実です。

二) 霊人たちの霊界での立場

肉的世界はサタンの活動舞台であり、霊的世界は神様の活動舞台になって、いつも行き違いになってきました。これが復帰摂理時代に恨の要件として残っていることは間違いない事実です。これが行き違いになるようにしてはいけないのです。神様を中心とした心の圏と神様を中心として統治を受ける体の圏を準備しなければなりません。生活圏内でこれをどのように発展させるかで、統一基盤の基準が確立されるのです。

統一教会が統一するためには、霊界から統一しなければなりません。皆さん、霊界を知っていますか。私たち統一教会の群れは霊界を知らなければなりません。霊界を統一しなければなりません。霊界を統一することは易しいと思いますか。霊界の統一なしに地上の統一はありません。今日、この地上の闘いは、本当に大変でしょう。地上の闘いが大変です。しかし、霊界の闘いは地上の闘いよりもっと大変です。このようなことを考えると、今日統一教会の食口は、難しいという形容詞を口を開けて言うことができません。

理想を探し求めていく過程で、霊的なものと肉的なものが一つになるのは何によってでしょうか。霊的な世界は霊界で、肉的な世界は地上世界ですが、霊的世界と地上世界を一つにするには、入れ変えなければならないのです。自分の物をもっていてはいけません。すべて与えてこそあちらが来て、また向こうからすべて与えてこそ、こちらがあちらへ行くのです。失った位置へ行くのです。

私たちが今後霊界と肉界を連結させるには、まず世界的な信念の自覚、統一的な理念の自覚をし、世界的に打開するための受難の道を甘受していかなければなりません。このようにするならば霊界と肉界が自動的に一つになり、ここから統一が展開するのです。統一の道を行く方向が決定するというのです。

霊界を統一する前に肉界を統一できますか。できません。それが原則です。それゆえに、先生は霊界を統一するために、肉界にある統一教会の群れを死地に追い詰めるのであり、無慈悲に打ちのめすのです。そのようになれば、霊界は皆さんに協助せざるを得ないというのです。皆さんが悲惨な位置に入っていけば入っていくほど、それを中心として、霊界は霊界なりに団結するようになるのです。皆さんが深い位置に入っていくようになれば、三千万の民族の中に天国圏が展開するというのです。この圏は、以前から地獄に行っている者までも含まれるのです。

この世界は悪魔の世界です。悪魔の世界を訪ねなければなりません。皆さんは、いつ死ぬか分からないでしょう。誰でも死ぬのです。死の峠を越えて往来できる基盤を地上に築いていかなければ、地上天国ができないのです。地上天国ができなければ、天上天国はできません。皆さんが霊界に行っても、この地上に

思いどおりに来ることができるようにしておかなければなりません。それでこそ地上天国で暮らし、天上天国が成し遂げられてそこで暮らすようになるのです。

あの世は物質世界を超越した世界です。あの世は知識の世界を超越した世界です。時間と空間を超越している世界なので、きのうの喜びがきょうの喜びになり、きょうの喜びがあすの喜びになり得るのです。このように見ると、その本質の世界は、今日、人間世界に生きている私たちが必要とし、重要視する内容を中心としては動かないということです。すべての霊界生活における価値的な中心とは何かということが重要なのです。

私たちは、三時代の使命を完結しなければなりません。霊界に行っている霊人を解放し、今日この罪悪の世に生きている人々を解放し、今後来る後代の人もここから解放しようというのです。このように三時代の解放圏をもってくるのです。これは膨大で途方もないことです。このように夢のような内容が事実として現れれば、どのようになるでしょうか。目がまん丸くなり、口はとめどなく開き、耳はそばだつかもしれませんが、頭は下げるようになるのです。

今日、地上に生きている人が、好きでも嫌いでも誰彼を問わず、みな帰ってとどまる所が霊界です。そこには未開人から文明人まで、歴史時代に生まれて逝った千態万状の多くの人間が集結しているというのです。今までの人類歴史が平和を中心とした人類歴史にできず、幸福を中心とした人類歴史にできず、理想を中心とした人類歴史にできなかったとすれば、霊界に行っている人々はどのようになるでしょうか。どのように統治されるのでしょうか。ここで生きた人があの世に行って突然変わることはできません。「三つ子の魂百まで」という言葉があるでしょう。もって生まれた性格は直すのが難しいのです。

あの世に行っている霊人体は、私たちの今までの生き方と特別に違うのでしょうか。突然に変わるのでしょうか。そのようなことはないのです。ここで生きた、その姿どおりに収穫されていくのです。霊界に行っているすべての霊人体は、結局は地上で生きた人々の霊人体です。そのように見ると、今日この人たちが生きている世の中と、別に違わない世界だというのです。

あの世は、どのように連結していくのでしょうか。あの世においても、現在の立場よりあすの立場が良くなることを願うのは同じです。地上で暮らす人間が生活する中で、きのうよりきょうが良いことを願い、きょうよりあすが良いことを願うのは共通心理です。西洋人でも東洋人でも、過去の人でも今の人でも未来の人でも、誰彼を問わず、現在生きていることよりも良くなることを願うのは共通心理なのです。これは変わりません。霊界に行っているすべての霊人体も、それと同じなのです。現在よりも良くなればよいというのです。地上生活した時よりも良くなることを願うというのです。

三) 霊人たちの完成も地上人を通さなければならない

今まで世界はサタン世界だったので、悪人が国を動かすのに先頭的立場に立ったのです。しかし、善人はその反対にいるので、霊的な天使世界が先祖の善の実績をもった子孫を訪ねてきて協助しようとするのですが、協助しようとするその対象は高い位置の人ではありません。反対の位置にいる人だということを知っているために、高位層だけを考えてはいけないのです。

先生も同じです。生涯へとへとになりながら世界を見回り、家に行けば何も残っているものがありません。そうして見ると、一つだけ彼らの前に植えつけたこととは何かというと、夜が来ても、季節が変わっても、先生を思慕する心だけが大きくなっていくということです。どの国に行ってもその村に真の愛の心を、思慕の心を中心として生活すれば、天使が来て活動でき、善の先祖が来て堕落と関係ない遊び場となって、希望の峰になるというのです。

霊界にいる霊人たちが地上に来るとしても、いつでも来ることができるのではありません。みな一年中の一節気に従って、自分の心の門が合うのです。ある時は皆さんの友達にも良い時があり、悪い時があるのです。心の門が合えば、この地上に霊人たちが来て協助できるようになるというのです。

主流宗教は、すべてイスラエル民族圏を通して行くのではないのです。主流圏をすべて変えて、このように出てくるのです。その霊を通して協助し、再臨の役事をしてきましたが、これから統一教会を信じていく皆さんにおいては、主流宗教圏のすべての権限を平準化させたので、皆さんの先祖がみな、これからは統一教会を信じる人を中心として一つになります。

先祖は、皆さんより先に生まれたから天上天使です。先に造ったのは天使と同じで、私はアダムと同じなので、自然に天上の位置にいる先祖は、今アダムとエバの位置にいる子孫を後援することが原則になるというのです。ですから易しいのです。しかし、地上で築かなければなりません。霊界でするのではありません。心情圏は地上で築くようになっているのです。

過去にアダムとエバを守るべきだった天使は堕落させましたが、今や先祖はそのようなことをしないというのです。子孫はすべてその天使長の息子、娘です。そのような立場で、自分の先祖が来て後援できる基盤になるので、先祖が霊界において讒訴する条件を立てない生活をしなさいというのです。それが原理原則に出ているのです。原理原則に従って生きなさいというのです。生きながら実践しなければなりません。実践すれば霊界が協助するようになっていて、そうすれば必ず発展するようになっているのです。問題はそこにかかっています。

さあ、会ったので決断をしなければなりません。何を中心として決断しますか。韓国が生きるか、死ぬかという問題を中心として、神様が願う位置に立って生きるためです。それはこの民族に対する先祖が願う思いであり、神様が願うみ意であり、今日この四千万の民族が願う心であり、私たち後世の者が願う心です。このような歴史的な起点においてこの責任を果たせない時は、すべての先祖の怨声

と、現時代の民族の怨声と、後代の子孫の怨声を避けることができません。

皆さんは、皆さんの先祖の中のいかなる先祖よりも、現在この時代の誰よりも、後代のいかなる子孫の誰よりももっと深刻な位置に立っています。そのような哲学をもって生きなければなりません。そのような生活哲学をもって生きて闘いながら身もだえするので、神様が協助するのです。そのようになれば相手が滅ぶのです。理由がありません。コーナーに行くのです。あなたが落ちるか、私が落ちるか。これほど追い込んできました。

文化圏がいくら違うといっても、生命の連結や愛を中心として連結する根本が一つなら、どのようにしようとそれを中心として「私たちは絶対的に一つだ」という概念をもつことが重要なのです。人は「絶対的に一つ」という概念が重要です。日本人も、韓国人も、中国人も、西洋人も、絶対的に一つです。それで、現世に生きている地上人も、霊界に行っている数多くの霊人たちも、すべて根本は一つです。出発して、結局は霊界に行ってとどまるというのです。

横的な面において自分の先祖がみな来て、先祖が橋を架けてくれるのです。先祖は天使長であるがゆえに、再創造するのに協助して真の父母の愛の因縁に従って上がっていくのです。地獄にも、門が開いて天上世界へ上がっていくことができる道があるがゆえに、自分たちが教育を受けて……。

自分の父母、先祖が天使長でしょう。しかし今は、神側を滅ぼす天使ではありません。堕落した世界を滅ぼす天使、蕩減復帰の原則によって反対の立場で、昔と違って天を滅ぼす位置ではない神側の天使長の使命を果たして、自らの子孫、アダムと同じ立場の者を協助してあげるのです。霊界にいる霊人たちが協助する、そのようなことが起きるのです。そのようにすることによって、その霊人たちも地上人のように越えていくことができるのです。

霊人たちは、現在の自己の位置で解放されようとするなら、地上人を通さずには苦痛を免れることができません。また犯した罪を脱ぐこともできないので、自分が生きた所に必ず訪ねていきます。自らの血縁や関係のある人に訪ねていって信号を送ります。

霊界に行っても来ることができなければなりません。しかし、地上に天国を成せなければ、地上に来ることができないのです。これは妄想ではありません。そのようになるのです。永遠にわたってしなければなりません。先祖がみな責任分担と蕩減条件に引っ掛かり、霊界に行って、行くべき道を行くことができずに、地上に再び降りて来て蕩減するのと同じように、その道を皆さんが残してはいけないというのです。原理のみ言が事実なら、皆さんはそこに引っ掛かるのです。

先生が皆さんに厳しい生活をさせ、苦労させることは皆さんが憎くてそうするのではなく、皆さんを生かしてあげるためにするのです。すべて皆さんを生かしてあげるためであることを知らなければなりません。皆さんを生かしてあげるために苦労させるということを知って、有り難く思わなければなりません。そうすれば天の心情世界、新しい心情世界が展開するのです。そのようにすることが順序

です。そのようにして心情的紐帯をもってこそ、天の命令ならばどこでも飛んでいくことができるのです。世界を引っ張っていく機関車のような責任を果たすといえば、霊界が協助します。そのような考えをすれば霊界が間違いなく協助します。

皆さんは霊界に行くのが良いですか。地上の皆さんが霊界に行くという心と、霊界の人が地上に再臨するという心のうち、どちらがより切実でしょうか。原理的に見ると、皆さんがもっと熱烈でなければならないでしょうか、霊界がもっと熱烈でなければならないでしょうか。霊界は天使長の世界で、ここはアダムとエバの世界、息子、娘の世界です。息子、娘がもっと熱烈でなければならないのであって、僕がもっと熱烈でなければならないのでしょうか。

皆さんが霊界を協助するようになっていますか、霊界が皆さんを協助するようになっていますか。霊人が協助しようと待っているのに、なぜ待つのですか。地上に天国を成すためのみ旨に協助しますか、皆さんが豊かに暮らそうとすることに協助しますか。地上に天国を成すためのみ旨に協助するのです。

霊界を中心として見れば、悪霊がいると同時に中間霊がいて、善霊がいます。蘇生、長成、完成の三段階にとどまるのです。三次七年路程が連結することによって、善霊が地上に連絡できる道が生じるというのです。そのようにする以外にはありません。蘇生、長成圏がサタンの主管圏内にとどまっているために、悪なる勢力の版図圏内にいる悪霊が主導的な役割をしながら世界をすべてこのようにしてきました。

これからは霊が交差し始めるのです。交差する時は、霊界が降りてくるのですが、悪霊から降りてきます。交差する時は、中間霊界を越えて善の霊界へと越えていく時です。これを越えていく日には、善霊と善人は上がっていき、悪霊と悪人は下りていくのです。今までは善悪がお互いに上がったり下がったり交差しながら、混ざって出てきましたが、これからは善と悪が完全に分かれることのできる新しい次元の時代へ入っていくと見るのです。

人間が知らない霊界の霊人を動員して証させることのできる基準が、「私」に立っているかが問題です。霊界もそのようなことを要求しています。霊界は神様の心情を知っているので、地上でそのような人が訴えれば、霊人たちを動員して天国理念の実現のための地上のみ旨に協助するようになるというのです。霊界の霊人たちがこの地上に来ることができない原因は、この地上が嘆きの垣根になっているからです。

これから皆さんは祈祷してください。「先生のみ言とともに、善霊は再臨して、この地上にいる悪の子孫を、善のあなたの懐を通して天国に導いてください」と命令すれば、その命令が可能な時代に入るというのです。私たちはアダム時代圏内で生き、霊人たちは天使世界圏内で生きるので、アダムのために天使が協助すべき原理原則があるので、動かざるを得ないという結論がしっかりと出てくるのです。

早朝起きてその町内のために、自分が引き受けた責任地域のために祈祷しながら涙を流さなければなりません。その道は心情的であ

りながらも、また霊界と霊的な因縁を結ぶ道です。神様が町内を見下ろせば、みな地獄に行くしかない人間なので、涙を流さざるを得ないのではないかと思って、神様の代わりに自分が涙を流すということを自ら感じるというのです。神様の心情で涙を流せる共鳴力が生じれば、霊界が総動員するのです。

皆さんは伝道ができない時にも伝道をしなければなりません。石を海に投げるのと同じです。それで海水をすべて埋めて、山になるまで果てしなくするのです。そうすることによって、私が心情的に成長するというのです。体は何も変わらないけれども、心情が育つというのです。

今までの六千年の歴史は、アダム一人を探してきた歴史です。アダム一人を再創造する歴史です。それゆえに、皆さんは先生についてこなければならないのです。エバはアダムが出てこなければ創造できません。それゆえたった一人のアダム、たった一人の男性を創造するのです。その一人を創造するためには、復帰摂理の途上に生まれて逝った数多くの人々の血と肉が材料にならなければなりません。億千万の霊人たちの怨恨がここに一つにならなければならないのです。そして、この実体が登場する日に初めて、激しい迫害の中でも血を流して死んでいった殉教者は、苦労した甲斐を感じるようになるのです。

たとえ霊界にいるとしても、地上にいる実体と関係を結ぶことによって、自分たちにも解放が来るのです。このようになっています。それが観念的に漠然としていてはなりません。この自覚をどのようにするかが問題です。

私たちは、横で誰が何をしようと、食べていようと、休んでいようと関係なく、その道を行かなければなりません。前には、数千名が一様にみな行っているというのです。ひもを引きながら休まずに精誠を尽くして苦闘しながら行けば、他の人もそのひもを巻き上げてくれるのです。そのようにしながら、多くの人々がそこから落ちることも感じるようになるのです。

マラソン大会をするのと同じです。走ってみれば一等もあり、二等もあるのです。歴史がそうです。今まで数千年間、数多くの霊人がそのひもを結んできました。その中で一等であの世に行って、その巻く装置と因縁を結んで丸ごと巻き上げれば、霊界と肉界が復帰されるのです。

四) 霊界の協助と確信

今や霊界がこの上なく近い距離に来たので、善の霊人たちが地上に定住する時代が来たのです。来て暮らすというのです。今まではサタン、悪魔が地上をすべて分轄して主管してきたのです。しかし、これからは善霊がその地域を奪って主管するのです。そのために統一教会の食口が涙を流して、血の汗を流して精誠を尽くさなければならないのです。キリスト教が精誠を尽くした以上、イスラム教、仏教、どんな宗教よりも、私たちは切実な心情をもって祈祷しなければならないのです。「あなた方を中心として地上に実体基盤が復帰されたので、霊的基盤を中心とした霊界圏を通して統一教会は前進しましょう」と祈祷するのです。

霊界に行っている人々も、私たちを通じてこそ救われるということは知っています。ですから、霊界に行った人々のために与えれば、霊界の恵みが皆さんを訪ねてくるのです。そのように霊界のために蕩減してあげ、悔い改める人になれば、その霊界が皆さんに従ってくるというのです。霊界が皆さんを中心としてすべて動いていくというのです。蕩減と悔い改めがこのように重要だということを知らなければなりません。

霊界は境界線がないので、霊界の領域は終わりがないのですが、どこに行ったとしても「私が協助した。あなたがそこの責任者だった時、その時代に行って協助した」と言うのです。みんな友人です。一つの時代圏内に立っている同僚者になるのです。先生が話すように霊界が動員されなければなりません。霊界が動員されなければ、どのように天国を形成するのでしょうか。形成できません。

天国は真の父母から始まるようになっているのであって、今までの堕落した子孫によって始めるようにはなっていません。アダムを創造する時、天使世界の協助を受けたのと同じように、再創造も霊界から降りてきてすべて地上に協助しなければなりません。そうでなければならないようになっているのです。原理がそうではないですか。復活原理がそうでしょう。復活原理がそのまま結果に現れてこそ「真」と言うのです。ですから、霊界が先生に対してどれほど喜ぶでしょうか。

強い信念だけしっかりともっていけば、皆さんの先祖がお母さんや、親戚の誰かを押さえてどうすることもできず、口がきけないように圧力を加えるというのです。「私の話を聞きなさい！」と言うのです。なぜでしょうか。堕落した悪霊は退いて、善の圏内の本然の氏族的基盤を中心として、父母と連結できる国家的基準まで連結した御父母様と世界的基準までサタンを押してきたすべての基盤の上に立ったので、サタンを退けて天使長型の霊界にいる皆さんのすべての先祖が協助するようになっています。

霊界にいる皆さんの先祖もこの世を見下ろしながら、誇らしい子孫に協助したくて地上に降りてきたいと思っているのです。それで、多くの先祖が皆さんの周囲に降りてきます。これが氏族を中心とする宗派を超越した宗教世界です。理解できますか。皆さんの先祖が皆さんを信じて、皆さんを愛しながら皆さんについていきたがるのです。それで、皆さんに協助するために献身したがるのです。

今日、地上では統一教会に入って祈祷すれば、一週間以内に先祖が現れてすべて教えてくれます。そのような位置に入ったのです。それはどういうことかといえば、今まで宗教が世界的な版図を築いて、心情的紐帯によって縦的な行路を築いてきたのですが、それを世界的な横的版図に広げておき、この世界の果てまで連結しておいたので、霊界に行った先祖が氏族を中心として初めて地上に再臨して協助できる時代になったのです。

ホーム・チャーチがそのような世界的な版図を縮小させた基盤です。それで、善霊がどのようになりますか。以前は来て協助して帰りましたが、今は地上に定住するのです。そのような時代に来たというのです。定住、分かりますか。定住といって先生の故郷の定州（注：韓国語で定住と定州の発音が同じ）ではありません。霊界に行った善霊が初めて定

着して暮らすことのできる時代に入るという話です。それで、皆さんが統一教会に入って活動するのですが、善の先祖が皆さんと共に暮らしながら協助します。それゆえに氏族復帰が可能なのです。

世界的な時代に入った皆さんは、個人的な立場にあったとしても、世界最高の聖人と連結しているので、必要とする時、彼と同じ心性をもって、彼と同じ心的な生活をした人には、どこでも縦横無尽に協助できる基盤が霊的にできてくるというのです。それで今、統一教会の動きに伴い、全世界の各国の愛国者は、統一教会の基盤を中心として、その背後に囲いを巡らしてすべてこの地上に再臨し、定住しています。

これは部隊でいえば、その国の民族の何十倍、何百倍にもなる人々が死んでいったのではなかったでしょうか。その人々が来て陣を張って拡大工作を待っているというのです。それゆえに、すべての宣教師は国家的な運動をして総動員し、霊界と共に全体を代表し、犠牲を覚悟して総進軍命令を下せば、その霊が協助するようになっています。

今までの宗教は霊界と肉界を連結させることができなかったので、霊的な精誠を尽くして縦的な面に拍子と波動が合って初めて接触できましたが、今はその放送局自体に入りました。振動盤のような位置に立ったというのです。波動ではなく、波動を起こす送信機自体だというのです。

ここで何千周波数にしようが、何十周波数にしようが、短波にしようが、くっつければ波長、電波をすべて出せます。私が放送局をもったので「霊界にいる私たちの先祖が来て、私に協助してください。善の先祖よ、来て協助してください。そのようなバイブレーションが必要です」と言えば、さーっと来て……。個人を呼んでも動かすことができ、家庭を呼んでも動かすことができ、氏族圏、民族圏、世界圏を中心として連結させ得る踏み台が地上にできてきたので、それが動いて降りてくるというのです。

このようになれば、今まで私の体は、このように行こうとしたのですが、我知らず回ってみんな引っ張られていくのです。二つの霊人体が来て一つをつかんで引っ張れば、自分自身はそのつかんだものが分からないので引っ張られていくのであって、仕方ないでしょう。一人で走って入っていくのです。皆さん、それを信じますか。これは空論ではありません。理論的です。

統一教会が動けばマホメットが協助し、儒教、仏教の代表者がみな協助し、神様も協助するという話は理論的だというのです。ですから、私は人類を代表し、霊界を代表し、神様を身代わりしているので、全体が協助する立場で動くという自負心をもたなければなりません。

今まで御父母様に対して霊界が支持できず、協助できない理由は、完成した父母の位置には堕落した霊界が協助できないというのです。本来、原理がそうでしょう。完成した父母の位置であるということは、神様と堕落しない天使長が後援するようになっているのであって、サタン圏内にある霊がいくら多くても父母を協助できないのです。

今霊界に行っている霊人は、真の父母を通して生まれずに偽りの父母を通して生まれた

ので、真の父母を協助できないのです。しかし、天使長が失敗したすべてのものを蕩減し、子女の位置でアダムとエバが育つそのような立場にはいくらでも後援できるようになっています。それゆえに、霊界が協助することによって、世の中がだんだんと遠からず崩れていくというのです。

五) 流離する霊たち

皆さん、霊界がどれほど大きいか知っていますか。霊界にどのくらい多くの人々がいるだろうかと、考えたことがありましたか。今霊通する人々が言うことを聞けば、一人当たりに三千三百二十余名ずつ霊人たちがくっついていると計算しています。私たちの側にそれほどいると考えると、世の中に負けるでしょうか、勝つでしょうか。

人は百年も生きられないことを考えると、五十億の人類の中で一年に五千万人が霊界へ行きます。地獄に行くのをどうしますか。サタンが蒔いた種をすべて天に収めることを神様が願うのに、これが遅れれば遅れるほど、どのようになるでしょうか。今まで四十年間にどのくらい地獄に行きましたか。数十億人が行ったのです。深刻なのです。あの世に行って霊に会い、「先生が在世当時に私たちに対して責任を果たせなかったではないか」と言われれば、何と言いますか。心からでもしなければなりません。心からでも食口に話して、未来に対しても責任を果たすという行いを中心としていけば、「あなたは驚くべき方です。私たちのことを考えてくださいました」と言うのです。

今も一日に六万名が死んでいます。今一年に二千万名が飢え死にしているので、一日に六万名です。六万名が死んでいくのを父母、子女、兄弟たちが見れば、胸を痛めて痛哭する事情が起こっています。ところが、真の父母が同情せず、それに対する対処をしなければ、地上で在世当時に自分たちと共に生きたという条件が怨恨になります。

飢え死にする人よりもっと哀れな者たちが、神様を否定する人々です。飢え死にする人は、あの世に行くようになっても、自分の善意の道理に従った級がありますが、神様がいないという人は、霊界を否定するので踏み台がありません。霊界で雲の塊のように漂います。さまよう霊になるのです。雲が集まって雨が降るのと同じように、集結してすべて悪い影響を及ぼすのです。ですから、みんな地獄に行って地獄を困らせるのです。そのようなことを十分に知って、彼らを生かしてあげなければならないのでこのことをするのです。

四　先祖と私たち

一) 私たちは先祖の結実体

皆さんはみな先祖の代わりとして生まれてきた歴史的な復活体です。その歴史がどのくらいになるでしょうか。何十万年になったと言います。そのように長い歴史過程を、結局は「私」一人をつくるために苦労したのです。金氏なら金氏という「私」一人を誕生させるために、多くの先祖が生まれて逝きました。ですから、私たちは歴史的な結実体です。

先生は人の顔を見れば、その先祖が良いのか、悪いのか大概分かります。ある人は良い先祖がいて福を受けるかと思えば、ある人は

悪い先祖がいて実に苦労ばかりしているというのです。そのような人は伝道しようと任地に行っても、ひどく苦労ばかりします。

皆さんが基準を立てて統一教会と歩調を合わせていけば、霊界にいる国家的な運勢に従って動いた善の霊人や先祖が、皆さんのために仕事をすることでしょう。皆さんは外的に見ると顔が平たく、耳がぐっと入って不幸せに見えるけれども、霊界では皆さんを福を受ける人だと考えます。また、十代圏内にある先祖は気をもんでいます。なぜなら、復帰歴史は十代圏を中心として成されるからです。ところが、万一悪い子孫が現れれば、十代圏内にいる先祖が「こいつ！　お前が私たちを滅ぼそうとするんだな」と言って審判します。

イエス様が地上へ来られることによって、それ以前の善の先祖が霊形体級の霊界から生命体級の霊界に入っていくことができたように、皆さんの先祖も地上にいる皆さんを条件にして再臨できる特別な恵沢圏内に入りました。皆さんがこのようなみ旨を知って勝利の枝になれば、一つの生命体を成し遂げることのできる立場なので、皆さんの先祖が皆さんを協助するのです。このように皆さんは、数千代の善の先祖が再臨できる基盤にならなければなりません。

霊界に行くようになれば、多くの預言者、烈士たちと多くの先祖に会って討論するのです。「あなたはどこから来ましたか。地球のどこですか。どこの国ですか。どこですか」と聞いて回想して言うのです。友達同士が会えば自分の昔話をするでしょう。霊界に行くようになれば、皆さんの最初のおじいさん、数千、数万の先祖に会うようになります。ところが、「この者たち、どのように生きたのか」とぞんざいな言葉遣いをすれば気分が良いでしょうか。考えてみなさい。

今は、私たちを協助してこそ自分たちが福を受けるようになっているのであって、反対すれば反対するほどますますどん底に落ちていくのです。天運が急変していきます。今後、家ごとに先生の写真を掛けようと大騒ぎするでしょう。霊界で自分の先祖が忠告するのです。それで旗を掲げ、先生の写真を掛けてその前で毎日のようにあいさつする人は、自分の先祖を復活させることができる役事が再び起こるのです。

今まで、入り乱れた数多くの霊界に通じる霊人たちは、「統一教会に行くな」と言いました。しかし、これからは釈迦、イエス様、孔子、マホメットも統一教会に行けと教えてあげなければ、天法に引っ掛かるのです。なぜでしょうか。先生が言う宗教は、父母の宗教だからです。

「私たちは、真の父母によって新しい血統の代を継ぐことのできる先祖になることによって、解放圏が広がる祝福を受けた氏族になったのです。この氏族は永遠不滅の神様の眷属であり、血族になりました」このようになれば、サタンと完全に決別です。それで、統一教会は先祖を祭ることを認めるのです。

キリスト教が祭祀を行うことを認めましたか。統一教会は、今やその伝統を引き継いで打ち立てなければなりません。これはこの世の伝統ではありません。天の父母、天国、天の先祖に侍ることによって、その継代を継ぐ

氏族的メシヤ圏、伝統的な血族を千年、万年侍ることのできる王土になるのです。王に仕えて永遠な太平の世を導き得る国になるのです。その国で暮らしてこそ皆さんのお父さん、お母さん、一家、一族が天国に直行するのです。

皆さんが祈祷して霊界と通じてみれば分かると思いますが、霊界では子孫を天の前に近く立てるために、どれほど努力しているか分かりません。ところが、ここでは先祖にでも悪口を言って私だけ満足に生きようとしています。

二) 先祖の救いは私たちがする

先祖が住んでいたこの家の中に、自分のひいおじいさん、ひいおばあさんが暮らした部屋に、おじいさんを産み、お父さんを産み、私を産んだその部屋に、おじいさん、おばあさん、ひいおじいさん、ひいおばあさんが愛した愛より大きな愛を残すことによって、天が見れば、愛の光がぴかぴか光るというのです。百ボルト、千ボルト、一万ボルト、何億ボルトの光をずっと照らすというのです。その照らす光がどこに行くのかといえば、先祖、先祖、先祖に上がっていくのです。霊界に行くようになれば、神様を中心とした天国に行くのです。その天国が本来、私たちの本然の故郷です。私たちの本来のお父さんが神様でしょう。

あの世のすべての先祖が皆さんの生き方をすべて見ています。隠す所がどこにもありません。先祖がすべて見ているというのです。霊界に行くようになれば、壁もすべて通じるのです。地球もすべて通じるというのです。そのような世界に行って永遠に生きなければなりません。神様の愛の対象として創造された人間であるがゆえに、神様が永遠であられるので一つの愛の対象になる存在も永遠に必要だというのです。神様が永遠であられるように私たちも永遠だというのです。愛の相対がなくては永生がありません。

霊界が私の手に懸かっており、親戚が私の手に懸かっており、親戚だけでなく国が私の手に懸かっており、今後来る子孫の前に正しい伝統を立てておかなければならないということも私の手に懸かっています。これをいつも考えなければなりません。皆さん自身一人一人が正しくできるか、できないかによって、霊界に行った皆さんの先祖も解放でき、皆さんの親戚も解放でき、皆さんの子孫は解放の選民として策定されるのです。

皆さんはいつでも「三時代を代表した私だ」と考えなさいというのです。ですから、霊界が私の手に懸かっているというのです。皆さんの先祖が皆さん自身に懸かっているというのです。過去、現在、未来をすべてこのように集めて、二つを重ねて引っ張っていけば走ってくるのです。そのような使命を果たさなければなりません。

今から世の中が急変します。悪なる人が事故でたくさん死ぬというのです。我知らず死にます。今は蕩減がありません。即決処断時代が来るのです。しっかりしなさいというのです。誰がするのですか。悪魔に蕩減させません。自分の先祖が処理します。今現在祝福してあげたその基準は水平になっているので

すが、ここから落ちていきそうになれば、霊界に入れば落ちないので、失わないためにも連れていかなければならないというのです。そのような時代が来るのです。先祖が薬をくれ、病気を与えます。先祖が「真の御父母様の写真を置いて侍りなさい」というのです。

天地が願う以上の切実な心をもって協助を受けなければならないのです。みんなそのように行くのです。三代です。三代なのです。自分の先祖が一代、それから自分が二代、息子、娘が三代です。そこに切実な心で縛っておけば、新しく生まれるこの地上の三代圏の子孫が、父母と天上の先祖にまで及ぶようになるというのです。そうでしょう。

この地上に来て協助しようとするなら、自分が先生の母として立つことのできる位置を整えて来なければならないので、今来たと言うのです。皆さんによって復活をするのです。皆さんの先祖までも皆さんによって救われるのです。ですから、積極的に後援しようとするのです。ですから、その部落で休まず仕事をしなければなりません。

皆さんが一つの鉄則として知らなければならないことは、その地方で生まれた忠臣、愛国者、孝子、教会の牧師たちが尽くした精誠以上に精誠を尽くさなければならないということです。それ以上精誠を尽くしさえすれば、彼らがみな協助するというのです。それが条件です。そうすれば、サタンの讒訴圏以上の位置に立つようになるのでサタンが反対せず、霊界の協助によって皆さんの先祖が、皆さんの子孫に「みんな統一教会に入れ」と霊的に追い込むのです。どのようなことが起きるかといえば、皆さんのおじいさんが協助しようと現れてみんな伝道するというのです。

お手洗いに行って座っていれば、霊界では「お前はきょう、何々をしなさい」とプログラムをすべて教えてくれるのです。そのようなすごい事実が起こってくるのです。ですから、街頭にいれば関連する人々は、あらかじめ霊的にすべて連絡がついていて、会う事実がいくらでもあるのです。ですから、霊界の協助を受けなければなりません。霊界の協助がなければなりません。皆さんも今や先祖が協助するようになっているのです。堕落していない圏内の世界において、アダム完成圏を天使が保護して育て、祝福の位置に行くことができるのです。霊界がそのような本然の使命をすることにより、天使長圏の霊界が復帰されて彼によって地上圏が復帰されるのです。

堕落は天使長がしたでしょう。それで、皆さんの先祖が来て善の天使長がなすべきことをすることによって、皆さんはアダムが堕落しない本然の位置に立って、神様の心情圏内に到達できるのです。皆さんは、そのような道を皆さんの先祖が協助する垣根の中で行くことができるので堕落圏ではありません。本然の心情圏の勝利圏に立ち、解脱圏に向かって前進するのだというのです。それゆえに、天国に直行できるのです。それが蕩減復帰原理にすべて合うのです。先生は適当に言うのではありません。

霊界が協助するのです。霊界が協助してその一族、親戚すべて、近い群れをすべて集めて皆さんの前に追い込むのです。このようにすることによって皆さんを中心として霊界が、神様を中心として霊界の霊が降りて来てアダ

ムを取り囲むのです。そこは善霊が囲むために悪なるサタンが侵犯できない圏内となるというのです。それで、その基準を中心として、本然の真の先祖の位置を心情的因縁によって受け継ぎ、新しく植えた基盤ができたので、その基盤を中心として、皆さんの一族のおじいさん、おばあさん、誰彼なしに頭を下げることができます。

今や皆さんの先祖が協助するようになっています。以前は悪い先祖が子孫を利用したのです。しかし、今では善の先祖が降りて来て活躍できる時が来ました。それゆえに、皆さんはそれこそ十字架を背負わなければなりません。氏族圏の十字架を背負い民族の代わりに蕩減し、国家と世界の十字架を背負って、国家と世界のために蕩減するという人がいなければなりません。

世界的理念時代に身を置くことが、国家と民族の希望でしたが、霊人たちは今まで高い位置に立てずに、どん底に押さえられているのです。しかし、世界的恵沢圏内で皆さんが十字架を背負って闘うならば、皆さんによってさっとすべて復活できるというのです。そうすれば、平面的な立場で先祖代々に救援できる踏み台がすべて築かれるのです。それでこそ皆さんの一族の解放が起こるのです。私の話が分かりますか。何の話か理解できますか。

善霊が降りてきて皆さんを協助し、先祖がみな協助するというのです。それで、皆さんも、以前は誰かが統一教会に反対すれば、冷や冷やして震えたりしたことがすべてなくなるのです。今では天下が騒ぎ立てても、心は太平だというのです。心が動揺しないというのです。それはどういうことかといえば、既に時がそのようになったというのです。悪なる霊的な雰囲気が私たちと接することができないのです。善の先祖をもったすべての子孫は、じっと見ると、彼らの心は皆さんが自分の家に訪ねてくるのを喜ぶのです。また来れば何かを貴いものを与えたがるのです。

皆さんは分かりませんが、心にその先祖が協助することによって皆さんがかわいそうな人を助けたくなるそのような心をもてば、皆さんの先祖も恩恵を受けるのです。したがって、皆さんも発展して……。今は再創造時代なのでアダム圏を天使世界が協助したその道理によって、先祖が天使圏であり、アダムの子孫である皆さんを後援し、再創造するのに協助することによって、天のみ旨の前で成長していくことができるのと同じ位置に立つというのです。

おばあさん、おじいさんが死んだとしても私のためによみがえり、お父さん、お母さんが私のために生き返ることができます。真の愛によって、真の愛を中心として「生き返ってください」と言えば「よし」と言って、おばあさんが現れ、死んだお父さん、お母さんに会うことができます。そのような道が真の愛にあるので、おばあさん、おじいさん、私たちの先祖はみんな霊界にいるのですが、「私がこのような難しいことがあるので協助してください」と言えば、さっさっさっとするのです。そのような時代に入ります。教えてくれるのです。

神様は私たちの先祖であり、私たちは孫です。ですから「このように告げるので成し遂げてください」と言えば、「よし」と言うのであって「駄目だ」と言わないのです。神様はすべて通じるのです。

霊人たちは霊界で地上人の協助を受けるために、いろいろな方法を動員して地上の子孫を訪ねてきますが、地上の子孫が解決する方法を知らないために、だんだん家運が傾いて、行く道が厳しくなるなどの困難が繰り返されます。地上人の助けによって昇進する霊人たちは、現在の自己の位置からもっと良い位置に移っていくことで自らの生活が楽になり、地上にいる子孫の生活もまた平和になるのです。

三) 祝福家庭と祭祀

統一教会は先祖を祭ることを認めるのです。統一教会は今その伝統を引き継いでいかなければなりません。これが今後、真の父母を中心として反対の立場に立つのです。この世、世の中の伝統ではありません。天の父母、天国、天の先祖に侍ることにおいて、その継代を継ぐ主流思想的、伝統的な血族を千年、万年侍ることのできる王土になるのです。王に仕える永遠な太平の世を導き得る国になるのです。その国で暮らして行ってこそ皆さんのお父さん、お母さん、一家、一族が天国に直行するのです。

先祖が死んだ日になれば、みんな来るのです。そして、先祖のために祭壇を整えて祭祀を執り行います。先生の写真を置いた部屋で執り行えば、敬礼をしても罪にはなりません。餅を作って祭祀を執り行うからといって罪になるのではありません。

選民圏と血統を重要視しなければなりません。選民圏は長子権です。韓国は長子の国です。韓国が族譜（注：家系図）を愛する民族になったのも、すべて血統を受け継いでいくためなのです。先祖を崇拝して先祖に祭祀を執り行うのは悪いことではありません。今後、儒教思想以上に父母を尊敬する時が来るのです。何の話か分かりますか。

おじいさん、おばあさんが亡くなったら墓参りをしなければなりません。神様が墓に埋められたと思って墓参りをしなければなりません。そして、私の一代におばあさん、おじいさんに侍ることができなかった恨をその日に贖罪しなさいというのです。

長子はどのようになるのかといえば、根を深く打ち込まなければなりません。それは誰も抜くことができません。おじいさんも抜けません。叔父さんも抜けません。それゆえに、祭祀を執り行う時はいくら叔父さん、いとこ、八親等、ひいおじいさんがいたとしても長子を先に立てるのです。そのようなことを知っていましたか。

韓国の伝統的な文化背景に先祖を尊重視することにおいて、長子を前面に立てたのを見ると、この民族は長子権を尊重視する民族であったというのです。それは驚くべきことです。

今までキリスト教において、祭祀を行うことができなかったのも一理あります。祭祀は神様と全人類の真の父母が受けなければなりません。上の代の先祖が天でまず侍られなければなりません。ところが、堕落することによって今までは禁止してきましたが、今復帰時代において祝福を受けたので、今後先祖に侍らなければなりません。

祭祀の日が来れば、祭祀を執り行う時間は長子が決定するのです。ですから、明け方一時にしたのを朝五時にでもできます。朝五時にしようとしていたのを事情によって朝七時にでもでき、昼にでもすることができるのです。誰がそれを決定するかといえば、亡くなったおじいさん、先祖がするのではありません。長子が決定するのです。

亡くなったおじいさん、おばあさんたちも長子が決定した時間に来てこそ祭祀の膳に対することができるのであって、それが嫌ならば対することができないのです。地上が中心ではないですか。地で解けば天で解かれるというのと同じなのです。それゆえに二つが一つにならなければなりません。

先祖を愛しなさいというのです。先祖のために生きることは罪ではないというのです。サタン世界でも先祖のために生きるのに、キリスト教では「先祖のために生きるな」と言うでしょう。しかし、今後天の世界の先祖のために生きて、またさらに「ため」に生きなければならないのです。それで、統一教会は祭祀も認めるのです。キリスト教では「お、偶像なのに……」と大騒ぎするでしょう。しかし、堕落した世界にいる祝福を受けた家庭は、このような伝統を子孫に伝授してあげるべき責任があるというのです。

韓国の歴史は実に見事なのです。祭祀の時には長子の家で、叔父さんも長子に侍って祭祀を執り行うでしょう。神様の摂理の中で長子の民族をつくるための歴史的背景があるという事実を知らなければなりません。このように知っていれば、韓国民族の優越性がどんなものか、韓民族がどれほど偉大なのかが分かるので、皆さんの息子、娘が憶することがありません。このようなことをはっきりと知らなければなりません。

「長子」と言えば、おじいさんも祭祀を執り行う時は、長子の前でその指揮下に入らなければなりません。尊敬しなければならないのです。長子の血統、その次は族譜（注：家系図）と血統を尊重視する事実、これは神様の復帰摂理におけるその心の根本の根本を忘れることができない記録的な歴史性に代わってきたという事実は驚くべきことです。

アダムの息子、娘がいくら多くても長子を中心として国が連結するのです。そうすれば、その長子を中心として横にいる兄弟たちは広がって氏族になり、国家になるのです。長子が系統を継ぐのです。韓国を見ると長子です。実に驚くべきことです。韓国が偉大で、神様の祝福を受けることができるのは、長子を守ってきたということです。最初のおじいさんの息子が長子になれば、ひいおじいさんたちや、おじいさんの弟になる人たちは祭祀の時、長子を中心として侍らなければなりません。長子に仕えてきたことは驚くべきことです。絶対服従しなければなりません。

韓国民族がそうです。長子の歴史、ひいおじいさんも祭祀の時は長子を立てるのです。それは驚くべき歴史だというのです。この話がそうなのです。それより高い血族的な基準、より高い生命基準、より高い愛の基準が関連性をもつようになる時は、神様が願う最高の基準として、天を中心とした影響圏を地上に合わせれば、その影響圏に必ず吸収されるので、地上天国に改善することが可能だという

のです。これがすべて理論的なのです。妄想ではありません。理論的です。

聖子の道理とは何ですか。「聖子」と言えばこれは縦的です。垂直概念を言います。「聖人」と言う時は東西南北の横的です。儒教思想もそうではありませんか。「天」といえば天子だけが関係を結ぶと考えませんか。ですから縦的なのです。韓国の礼法を見て驚くことは、叔父さんも祭祀の時には長子を前面に立てます。それはなぜですか。縦的です。縦が先だというのです。

五　霊界を知らなければならない

私は彼らに、「今や科学が先端に来ているので、霊界と接触できる周波数を研究しなさい」と言いました。霊界の作用はすべて振動によって作用するというのです。振動数を通じて霊界と連絡できる、霊通する人の振動数を発見して霊界を科学的に証することができる時代に入っていくので、「それを研究しなさい」と言いました。霊界に対する内容をずっと説明してあげると、目を丸くしているのです。

それで、きのう心理学の作用が現象世界にどのように関係していて、霊界がどのように関係しているということを話してあげました。心理学が絶対的な力の作用をするというのですが、なぜそうでなければならないのかという問題について一人しか知らないというのです。

それは電気がプラス・マイナスで作用するのですが、作用するサークル圏内でプラス・マイナスが力を現すのと同様の現象であるということを知りません。それゆえに、これに対する開拓をすれば、新しい次元の世界が……。未知の霊界を合理的にすべて知ることのできる時代に行けば、宗教時代はすべて終わるのです。人類は「神様を信じるな」と言っても神様を信じることができる時代になります。これが大きな課題なのです。

六　審判

一) 神様には怨讐の概念がない

神様がなぜ人間を創造しましたか。神様が一人でいればよいでしょうか、寂しいでしょうか、喜ぶでしょうか。今日、宗教はそれも解決できずにいます。キリスト教では「神様は大審判主になり、裁判長になって、悪い者は地獄に送り、良い者は天国に送る」と言います。神様が裁判長になれば、神様の資格がありますか。それなら怖い神様でしょう。接したくない神様です。何の神様になりたいと思われるのかと言えば、人類に対して真の愛の神様になるということです。

「神様が審判主」という論理は神様にはないのです。もし、恨みを晴らすという概念があれば、今後神様の理想世界が出現しません。それゆえに、神様には火の審判という概念がありません。怨讐の概念がないので、アベルを立てカインを強制ではなく自然に屈服させるのです。

この世でも裁判長が死刑宣告を五回すれば、夜夢見が悪いというのです。もし、神様が億千万の人類をすべて審判して地獄に送ったとしたら、地獄に行ったその霊がじっとしているでしょうか。神様を殴り倒そうとするでしょう。夢見がどんなに悪いでしょうか。そん

なことをするわけにはいかないかもしれませんが、それが理にかなった話です。

全知全能であられる神様が、思いのままに審判して、キリスト教を信じる人だけ天国に送り、そうでない人は地獄に送り、すべて思いどおりにすれば、そこでは理想論を探すことができません。理想というものは普遍、妥当でなければなりません。どこでも、過去、現在、未来いつでもすべて同じでなければなりません。海水が理想的なのは、深い所は埋めていつでも水平だからです。変わることがないのです。このようになれば二元論、三元論になります。

神様は誰も打つことができません。愛の理想をもって創造した神様が、愛の理想を実践しようという神様が、審判の鉄棒をもって打つことはできないのです。神様は打つことができません。なぜですか。創造する時に愛の理想をもって創造したので、その理想が実現されなくても打てないのです。もし、打つようなことが起こったとしたら、打つ伝統、打つ習慣を残しておいては、これを解く道がありません。今日、習慣性という言葉もあるでしょう。それゆえに、絶対的な神様は打たなくても絶対的な教化ができなければなりません。

神様は歴史始まって以来、闘いながら打たれて奪ってくる作戦をします。神様が先に打つことができません。神様が先に打つことができるという論理を立てれば、審判できるという原則を神様が立てたという論理が起こります。善と悪を分別すべき責任を神様が負っているという時、善悪の概念が神様自体内にあったという論理が展開されるために二元論に落ちるのです。それゆえに、神様は打つことができないのです。

「神様は何をして生きているでしょうか」と聞けば、既成教徒は「玉座に座って悪人は地獄に送り、善人は天国に送る」と言っています。それが神様のすることですか。皆さん、最高裁判所の判事を五年間だけやってみなさい、それができるでしょうか。

自分の息子、娘を審判し、自分の妻、自分のお母さんを判定することにおいて、死刑の宣告を下すと考えてみなさい。自分のお母さん、お父さんに死刑を宣告しておいて寝ることができるでしょうか。苦闘する心の世界の患難を誰が遮ることができますか。国も遮ることができず、世界も遮ることができません。そのような悲惨な位置にいる神様を、一方通行の論理をもって世界平和の主人だと侍ること自体が矛盾しているのです。ですから、既成教会は滅びなければなりません。

皆さんは霊界をよく知らないかもしれませんが、霊界に行くようになれば、神様が公義の裁判官になって「ガンガン（注：木槌でたたく音）、あなたは地獄行き！」と言うのではありません。絶対そのようには言いません。神様がそのような神様であり得ますか。人類の父であられ、善の王の中の善の王であられる神様が、地獄に行けと地獄をつくっておいたのでしょうか。予定論のようなことを言う人は狂った人です。

私は霊界をどれほどよく知っているでしょうか。イエス様の秘密のすべてまでみな知っているのです。ですから、聖書の秘密をすべて解き、今日誰も分からない漠然とした聖書体制を中心として一貫した思想体制をつくっ

たのです。そのような大先生が誰でしょうか。ここに立っている悪口をたくさん言われる文総裁ではないですか。

親は自分の愛する子女が病気になった時は幸福ではありません。神様が、今日の世界人類が亡国の種となり、地獄の門に向かって垂直に落ちる実情を見ながら胸が痛まずに「お、お前は審判を受けて滅びていくのだなあ」と言って喜ぶ方ならば、そのような神様は雷に打たれなければなりません。父母の立場を代表した理想の神様であるがゆえに、その実情を見てじっとしていられないのです。国の法を無視してでも子女を助けたい父母の心情が隠れていることを考えると、神様も同じだというのです。

サタンさえいなければ、人間を許して助けてあげたいにもかかわらず、サタンの讒訴から抜け出すことができないので、切ない心情をもちながらもそれに順応せざるを得ないのです。そのような神様の苦痛を誰が知っているかというのです。それを解放してあげなければなりません。そのようにしようとするなら、サタンを処理して地獄に落ちた人を救ってあげることのできる息子、娘がいなければなりません。そうでなくては不可能なのです。

空の牛車を引っ張っていくのも大変なのに、神様はこの世界人類を逆に引っ張っていくのです。これは順路ではありません。逆に引っ張っていくのです。逆路の道を行くので、逆に引っ張っていかなければならないのです。今日宗教を信じる人々はそのようなことをしている神様だということを考えもしません。仏教思想で見ても、キリスト教の思想でも、神様は全知全能で思いのままに殺し、生かし、審判し、罰を与えたり福を与えたりできると思っているのです。とんでもないことです！

このように見ると、宗教圏にあっても統一教会は、次元の高い世界の内容をもって解決方法を探そうと苦心する宗教に間違いないというのです。ですから、次元の高い宗教です。神様を解放するという宗教は、今統一教会以外にはありません。

今日キリスト教信者が「不義と正義を審判する公義の裁判長として生きていらっしゃる神様」と言いますが、そのような神様は心が平安ですか。ここに判事をしたことのある人はいますか。死刑囚を殺す時は、その刑場に判事が立ち会わなければならないのです。判事のように悲惨な人がいません。裁判長がよいですか。

皆さんは何を中心として生きたいですか。裁判長ですか。権力者になって号令をかければ、天下のすべてのものは私が願うとおりに無事通過できる環境で何日間生きられると思いますか。一カ月くらい生きてみれば、こうではないというのです。嫌になるのです。牛肉定食を毎日のように食べてみなさい。それを食べてから出るガスのにおいも違います。そのように生きてみなさい。人は高い低いによって、前後左右をすべて備えて生きるようになっているのです。

神様に「あなたは何をして生きたいですか」と聞いてみれば……。皆さん、私は直接聞いてみて返事を聞いた張本人です。裁判長ではありません。弁護士でもありません。検事でもありません。「愛に酔って生きたい」と言うのです。答弁は簡単です。何に酔って生きたいと言いましたか。愛に酔って生きた

いというのです。愛に酔うようになる時は、目も一つの所へ行き、においをかぐ鼻もそちらへ行き、話す口もそちらへ行き、聞く耳もそちらへ行き、すべて一つの所へ行くのです。五官を完全に統一できる刺激的な要素が、私たち人間において何だというのですか。それが愛です。

今日キリスト教において「神様は神聖で全知全能であられる方で、公義の審判主として玉座に座って万民を審判する裁判長です」と言いますが、皆さん、裁判長がよいですか。裁判長を十年したら病気になって死にます。死ぬというより病気になって倒れます。病気にならなければそれは偽者です。

他人の生命を奪う死刑宣告を下すこともしたはずですが、自分が下した判決が絶対的ではあり得ないというのです。論法が、解説法が様々な方向があるのに、自分の判決によってその人の生死問題を決定づけたので、そうなるというのです。それは深刻な問題なのです。宇宙の公法に照らしてみれば、韓国の法が絶対的ではあり得ません。ですから、人は「十年間判事」と言えば「病気になるはずだ」と言うのです。

キリスト教式に言えば「神様が天国の玉座に座って、公義の裁判長として善悪を判別し、よくやった者は天国に送り、できなかった者は地獄に送るのです。それが神様の趣味生活です！」。アーメンですか、ノーメンですか。死ぬことができないというのです。裁判長は判決を下したら、夜寝ることができないというのです。正しくても間違っていても苦痛を受けるのです。審判者は一つです。私たちがこのような人なのに、私たちが神様に似ているとしたら、神様は、裁判長をすることを好むのですか、嫌うのですか。

神様が悲しい神様で、苦痛の神様であることをキリスト教徒は知らなかったのです。神様が神聖な王として、審判主としていらっしゃいますか。神様が何が切なくて審判主ですか。審判主がいいですか。そのように生きることが神様の生活ですか。堕落によって仕方なくそれをするのであって、その清算方法を誰も知りません。宗教世界でも誰も知りません。統一教会以外には知っている所がありません。

二) 真の御父母様は愛の統治法で審判

救世主とはいったい何ですか。救世主が何をしに来るのかというのです。政治をしようとして来る方ではありません。救世主は何をするために来ますか。今日、キリスト教では、「主が来ればすべて空中に上げられて自分たちはぽんぽんと上がり、地上の人々はすべて審判する」と言います。違います。そうではありません。「審判する」と言うのですが、救世主は、何かを審判しようとして来られる方ではありません。

その方は神様の息子、娘であると同時に、人類の父母として来るのです。人類の父母として父母の心をもって来られる方が、病気になって死ぬ場でうめいているこのような息子、娘を見て「おい、お前はあの地獄へ行きなさい！」と言って片づけることができますか。堕落したこの世の親でも自分の息子が死んでいく悲惨な姿を見れば、のどが詰まったり痛哭したり自分の生命を失うことがあったとしても、生かしてあげるためにはどんなことも

したいという心が先立つのです。それが堕落した世界の父母だと言うなら、本然の父母の心情をもって来られる救世主はいかばかりでしょうか。審判というものは考えられないというのです。そうでしょう。

聖書には「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ三・一六）と叫びながら……。世の中をこのように愛していると言いました。世の中の救いのためにイエス様が来たのであって、キリスト教の救いのために来たのではありません。終わりの日に審判するのですか。それでは、神様が世の中をこのように愛するという定義とは違います。キリスト教徒だけ愛するのですか。いつも愛していることを知らないでいます。それを教えてあげて悔い改めさせなければならないのです。教派主義者たち、行ってみなさい。

今日、既成教会では、神様が審判してどのようにすると言いますが、神様が思いどおりにできるのなら、今までこのようにする必要はありません。堕落したその次の日にすべてしてしまったはずです。打って勝利したその基盤の上に神様の愛の理想を立てることができるという原理はないというのです。

今日、既成教会の哲学が間違っているのは何ですか。神様を公義の裁判長と言います。裁判長を五年やれば、腰が曲がり始めるというのです。なぜですか。腰を伸ばすことができないからです。キリスト教がこれを知らなかったというのです。ただ力の神様、全能の神様を追慕して、それとともに一つになれば何でもできると信じているのです。ここで人を殺してもかまわないという論理が出てくるのです。今日キリスト教を中心とした西洋文化が力の哲学を培養してきたがゆえに、西欧文明の背後には血が連結されています。

神様もそうなのです。この地上の悪なる人々を審判し整理するのは、神様がするのではありません。サタンを前面に立ててするのです。

神様がこの世界を審判しようとする時、「少し待ってください。神様、これを見てください。実におもしろいことがあります」と言って、「それは何だ」と言われれば、「私の手のひらです。どんなにいい手相をしているでしょうか。あなたの手相より良いので、私がこれをしています」とこのように言えば、神様が何と言うでしょうか。

手相を比較しながら、このような者と話していれば、悔しいことがみんななくなるのではないですか。「神様、あなたが私の手を切って捨てますか。審判しますか」と聞けば、「ヒヒヒ、この者、この者」と言うのです。醜くても、そうすれば喜ぶのです。何の話か分かりますか。陰陽がなければなりません。傑作品になろうとするなら、バックグランドが立体性を成さなければならないのです。すべてのものがそうです。

人は日なたと日陰があって格位を備えてこそ人格者になるのです。神様がいくら怒ったとしても「神様そのように怒らないでください」と言うより、「神様、あれを見てください」と言って「なんだ」と聞かれれば、「あの鷲が鶏を捕まえて食べようとしています」と言うのです。「鶏を捕まえて食べようとし

て、食べてしまって……」と言えば「その鷲があなたのようです」それで、神様が引っ掛かるのです。「お、こいつなんだ。私が……」そのようにすれば、話すことができずに「ふむ……」と言うのです。

神様に尋ねてみると、公義の審判主になるというのではありません。神様は審判しません。霊界を知らないのでそのようなことを言うのです。キリスト教で説教しているものをちょっと読んでみなさい。でたらめです。霊界をあまりにも知らないのです。そのようにして天国に行きますか。どうなるのか、行ってみなさいというのです。ですから、すべてからすの群れ、鷲の群れが食いついていきます。世の中の人たちより悪いのです。私はそのような人とは相対しません。犬がほえるのに一緒にほえれば、犬のようになるのです。相対しません。哀れなので、今後飢え死にするようになる時は、私が食べるものをもって訪ねていって食べさせてあげようと考えているのです。

全人類は、しっかりしなければなりません。統一教会の文総裁の教えは、救世の真理なのです。人類が永遠に必要とする真の愛と生命のみ言です。再臨主が世の中を救おうとして来られるならば、人類を鉄の杖で審判してはなりません。打ってはたったの一人でも完全に屈服させることができないのです。

自分のために生きて、手がひきがえるの背中のようにでこぼこにゆがんで開かないほどに苦労した母の犠牲的な愛は、親不孝者を悔い改めさせて帰ってくることができるようにする力があるのです。棒をもってはできません。審判の大王であり、天地を思いどおりに主導する神様でも真の愛なくしては、天宙統一は不可能なのです。真の愛はいかなる困難も問題になりません。自分の生命を投げてでも行くことのできる力が、真の愛にはあるのです。

怨讐を溶かすことができるものも愛です。最高の親不孝者を孝行者につくることのできる力をもったものも愛です。逆賊だと主張する人を忠臣のように屈服させ得る力も愛にだけあるのです。それは可能なのです。それで、古くから人間は、優秀でも愚かでも愛を中心として命を懸けたり、生きたりしたがるものです。誰が「アーメン」と言いなさいと言いましたか。アーメンは私の特許品ですが。

長老派教会の教理は、神様は公義の審判長になって、予定して救援なさるというのですか。そのようなたぐいの狂った、ばかげた話がどこにありますか。それこそ詐欺師です。私が調べてみると神様はそうではありません。本来、人間が生まれる時、神様が天国に行くようにつくっておき、地獄に行く人をつくっておくなら、それがどうして善の神様ですか。理論として通じません。理論として通じてこそ常識に合うのです。常識に外れた真理はありません。常識にも合わないことをもって……。

考えてみなさい。裁判長が殺人犯を裁判して死刑を言い渡し、五人だけでも殺してみなさい。そのたびに行って検診しなければなりません。また考えてみなさい。大韓民国の法と北朝鮮の法は違います。ここで死刑宣告を受けた人が、向こうで愛国者にもなり得ます。天地の大道を中心として、公義の法を中心として考える時、弁護士の心が平安でしょうか。

審判の大王であり、天地を思いどおりに力をもって主導する神様ならば、天宙統一は不可能なのです。これはお金をもっていてもできず、知識があってもできず、権力をもってもできません。ただ一つできるものがあるならば愛しかありません。

悪魔でも神様は審判できないのです。ヨブ記を見てください。サタンがあのようについて回りながら支配するようになっても、なぜそれに応じてあげるのですか。応じてあげざるを得ません。サタンは「あなたが私を愛で消化せずには、愛で消化して本然の基準に合わせておかなくては、私を支配できないのがあなたの道理ではないですか。愛の道理を、原則的な愛のすべての完成的な道理を越えて私を主管するようになっているのに、その道理が満ちていないので私を主管することができない。私を主管しようとするなら、私を屈服させようとするなら、その道理の形態に合わせたその基準に……。個人基準ならば個人、家庭基準ならば家庭、氏族基準ならば氏族、民族基準ならば民族、ここで私が順応できるのであって、そうでなければならないのではないでしょうか」このように言うのです。これに身動きできずに引っ掛かっているのです。これを知らなければなりません。

皆さん、そうでしょう。この世で「あなたは何をしたいのですか」と聞けば、「私は最高裁判所の判事がしたい」と言います。「判事」と言えばみな喜ぶでしょう。今日、既成教会で信仰する人が「神様は天地の大主宰であると同時に、善悪を見分けて善人は天国に送り、悪人は地獄に送る、天地を公義の法を通して治める裁判長です」と言いますが、そのような裁判長が良いですか。今まで歴史始まって以来数千億の人を地獄に送ったとすれば、その神様の気分は良いでしょうか。そんなことはあり得ません。それゆえに、玉座に座って公義の審判長の権限をもって行使して暮らすことが、神様の生活目標ではないというのです。神様がそのようなことは嫌だというのです。

神様よりも自分が自分自身をよく知っています。それゆえに、私たちには審判主が必要ありません。事実、神様が必要ないというのです。自分の良心がよく知っているのです。このような原則について見てみると、解放的な基準を中心として私は何パーセントの解放の目的をもって参加したかという事実はパーセントで出てくるのです。私が本物なのか、偽物なのか分かっています。知らないですか、知っていますか。知らなければ望みがないでしょう。知らなければそれは共同墓地に行かなければなりません。そうでなければ、ごみ箱に入っていくか、そうでなければ、投げて太平洋にほうり込まなければなりません。それは処理困難なのです。

皆さんは善なることと悪なることを知っています。一言言うのも私が悪いことを分かっています。見る視線も悪いことを知っています。聞くこの音声も、感じるこの触覚もみな知っているのです。霊界に行くようになればそれがすべて現れます。頭をこのようにすれば、すぐに自分がどのような人なのかすべて現れます。その心の鏡、心の光彩がさっと現れるのです。説明が必要ありません。霊界を知らないのでそうでしょう。私はよく知っていますから、世の中の人に非難されてもじっとして耐えながら今まで来ました。

この世の中にはどのような人が生きているかと言えば、僕の僕が生き、僕が生き、養子が生き、庶子が生きています。このように混じっています。この秩序を立ててあげなければならないのです。何によって秩序を立てるのでしょうか。愛しかないというのです。そのような愛の伝統的な道理を受け継ぎ、引き継いできた宗教が、世界的宗教にならなければならないのに、その愛の道理に外れた宗教と、この愛を中心として従っていけない人は、歴史をかけ、時代を代表して審判されるようになるのです。

その愛が、天地を愛するその愛の伝統が、世界を愛するその伝統が、国を愛するその伝統が、民族を愛するその伝統が、自分の家庭を愛するその伝統が、父母と妻と兄弟を愛するその伝統が、自分が自分を愛するその伝統が世界を審判するのです。

神様は審判者であられ、イエス様は弁護士のようですが、今まで天の側の検事がいませんでした。今まで悪魔が検事をしていたのです。天の側の検事が生じなければならず、天の側の裁判長が生じなければならず、天の側の弁護士が生じなければなりません。このような意味から統一教会はすべてのものを備えているので、サタンを永遠に、人本主義を永遠に、淫乱主義を永遠に、破壊主義を永遠に地球において打破しなければならないのです。これが統一教会の主義です。

神様が願うものはほかのものではありません。愛です。終わりの日になったら、何が最も怨讐ですか。審判の第一の条件は何ですか。終わりの日には自分が愛するものが、審判の第一の条件です。学者には学者意識、学ぶというそれ自体が審判の要件になります。自分が最も喜ぶことが審判の条件になります。お金を最も喜ぶ人、お金を集めるためにすべてのものを犠牲にする人は、それが審判の条件になります。名誉を喜んで、権力を喜ぶ人はそれが審判の条件になります。女性なら女性のすべての素性によって、特定の素質によって喜ぶものがあります。それが審判の条件になるというのです。

悪口を言われながらも忘れて、むちで打たれても忘れて……。先生はそのような歴史の事情が多いのですが、私がそれをもって審判しようとするのではありません。愛をもってそれ以上のことまで消化しようとする道を行くので、それで神様が私を好きなようです。私もそのような人が恋しいです。少しやって代価をもらおうとするそのような人を、私は嫌う人です。誰か私の前で「代価をもらう」と言う人がいますか。顔を上げて出てみなさい。話を少ししましょう。

悔い改めなければ、皆さんは公義の審判を受けなければなりません。愛の統治法の前に立つ者がいないのです。その時に先生が弁護士になってあげて、先生の家族の一族が弁護士になってあげ、皆さんを指導する統一教会のすべての人々が弁護士になり、神様もそうであり、先生もそうであり、先生の家庭から指導者までそうすることができ、弁護の範囲が讒訴圏よりも多くあってこそ、善の天国の民族として入籍できるのであって、その讒訴圏より小さくては入籍できません。

法の道理を私も行っているのです。ですから皆さんは黙ってこの道について来なければ

なりません。黙ってこの道に従って行く日には、そこに共に参与した恩恵を受けることができますが、そこに自らの家を建てて自らの丘を造っておいては、審判の条件に引っ掛かるのです。刑務所に入った人が国家の法律の何条に引っ掛かったということと同じです。国家全体の法に引っ掛かったのではありません。ある条目に引っ掛かるというのです。同じように皆さんも審判の項目の何条かに引っ掛かれば、行くことができません。

共に滅びることがあっても、背信者の道を行くなというのです。滅びれば霊界に行って良い立場に立つのです。背信者にならなければ、その背信者にならないグループで今後いくらでも発展できますが、背信者は発展できません。それがいつも遮っているのです。それを消化して越えていくことのできる力が自分にはないのです。ですから、国に対する背信者や……。より大きな目的のための立場でついていかなければならないという決意をしたのにもかかわらず、裏切ればそこに大きな目的が私をいつも審判する位置で責任を追及するのです。そこから脱け出す道がないというのです。

今後、社会が一箇所に出て国を設定し入っていくようになる時は、皆さんの経路をすべて一つ残らず書いて、あの公義の審判場でパスしなければなりません。再審査を経ずしては国家祝福の位置に行けないのです。世界祝福まで行くべき道が残っているのです。統一教会がする祝福は教会祝福です。審判はどこから、統一家から、祝福を受けた息子、娘から、祝福を受けたお父さん、お母さんから、それから……。これをしておいてその秘法により比例する世界の審判圏に越えていくでしょう。はっきりと知らなければなりません。

祝福を受けたというこのでたらめな女たちからしっかりとしなさい。原理は後回しにしておいて自分勝手に生きて、原理の世界が、み旨の世界が皆さんと関係を結ぶことができると思いますか。とんでもないことです。そのようなことができるならば、私がこれほど苦労しません。

神様の愛と神様の生命と神様の血統を通して、鉄槌で審判するでしょう。そのような時が来るのです。その時にメシヤが来るのです。メシヤがどのような方か知っていますか。救世主がどのような方か知っていますか。本然的な愛の秩序を求め、本然的な神様の永遠な生命と愛と血統の本宮を求めて、幸福の基地を正しく立て直して、それと連結した家庭と一族を越えて、民族と国家、世界に一つの愛の主導権に立てるために来られる方であることを知らなければなりません。

神様の家庭とは何ですか。このような真の愛を中心として、神様の位置にいるこれは、下にもっていって合わせてもよく、これをすべて離してどこかにもっていって合わせてもすべて合うのです。おじいさんの肩に孫が上がっても、家法で審判しません。孫がおじいさんのふとんを持っていって、おじいさんが隅に体を曲げて寝るからといって、親不孝者だと審判しません。そこではすべてのものがＯＫです。

「御父母様」と言葉ではよく言いますが、父母様に侍ったことがありますか。私が夜を明かせばさらに夜を明かしてこそ侍る位置に

立つのです。私が苦労すればもっと苦労してこそ侍る位置に立つのです。ついていきながらみな寄生虫になりました。寄生虫は寄生の虫というのです。この者たち、寄生虫という名前にぴったり合います。偽物を喜ぶこの者たち！　統一教会の者はそのようなものが多いです。今粛清しなければなりません。

本当に怨恨をもった文総裁は、統一教会の遊んで食べて教会をむしり取って食べる食口を、ガソリンをかけて私の手で火をつけようと思います。世の中を審判する前に、この者たちを審判しなければならないのです。私が教えてあげた道理に一致しなければ、きれいに整備しなければならないでしょう。

この悪魔の世界が天国を成し遂げるのに提供するものは何もありません。それはすべて火で燃やしてしまわなければならないのです。それで、聖塩を作って聖別させてそれを代わりに使うというのです。堕落したこの人間まですべて火で燃やしてしまわなければならないのです。火の審判を受けるのです。それで、人を私の手で再創造しなければならないのです。心情を投入して生かして天国に連れて行くというのです。

今まで私の手で一人の生命も血を流すようにしませんでした。私が手をつける日は恐ろしいのです。どうかそのような結果をもたらさないように皆さんが肝に銘じてください。分かりますか。血を見る日には問題が大きいのです。原則がそうです。それで、金日成までも私が生かしてあげようとするのです。

私が酒を飲んでここに来て座っておしっこをもらしながら、「あなたたちなぜ来たのか」と追い出せば、残る人が何人になるか考えてみましたか。なぜ笑うのですか。そのような審判が天地の誰も分からずに引っ掛かり得る審判方法です。真の愛で愛するための参与者を探すためには、丸裸になって、半気違いになって横に行っておしっこをもらしても残る人が何人になるのか、そのような考えまでする人です。

なぜですか。私が経てきた道がどんなに驚く道か分かりません。それを皆さんは知りません。私の母も知りません。今ここのお母様も知りません。それゆえに、霊通したおばあさんたちが、先生がかわいそうだと大いに泣くそうです。話さなければそれを誰が知っていますか。難しい問題を今まで一人でぶつかってきて、内外共に倒れていることを誰も知りません。

三) 罪を犯せば家庭裁判に、一族が審判する

皆さんの父母は何かといえば、公義の法廷の裁判官です。それを知らなければなりません。皆さんの家庭では必ずお母さんが弁護士の役割をします。そして、兄弟が間違ったら、その兄弟がすべて検事の役割をします。「ああ、姉が先にそうしたのであって、私が先にそうしたのではありません」。それで、お母さんはただ聞いて「うんそうか、お前が正しかった。お前が正しかったのではない。この子が正しかった」と言うのです。

ですから弁護士のようなものです。お母さんが弁護士の役割をするというのです。兄、姉、弟たちがけんかをしたら、検事は誰ですか。姉も検事になり、兄さんも検事になります。それを知らなければなりません。皆さんの家の中に判事、検事がいることを知らなけ

ればなりません。若い青年たち、そのように考えてみたことがありますか。

妻が見て恥ずかしい夫になるなというのです。妻は神様の特使です。息子、娘が神様の特使だというのです。私を監視して教育し正しい道へ行くようにするための一番の側近者としての特使だというのです。子女の前に恥ずかしい父親になるなというのです。その天の特使は盗んだ物を食べさせるなというのです。詐欺を働いて天に侍ることができますか。先祖に侍ることができますか。それなら、皆さんがあの世に行けば、先祖が瞬間的に審判します。神様は審判しません。先祖が審判して結局は世界的な公判廷まで引っ張り出すのです。

先祖がここで報告して公判廷に引っ張り出さなければ、その先祖は善人になれません。そのようになっているのです。その統治法を背後に置いて未来に希望の基盤を決定すべき、またそのような日々を迎えていくべきこの生涯の路程というものは深刻だというのです。

今後、理想時代には法廷が必要ありません。この世で人生の過程は永生の基盤であり、あの世に行って生きるべき準備の過程であるがゆえに、一族の中で誰かが誤ったら一族が処理するのです。一番の裁判長が誰ですか。妻が誤れば夫が裁判長になるのです。子女が間違った時は父親が裁判長になるのです。それで公法により指導を受けてその一族が処理するのです。

今後、あの世に行けば誰が審判するようになるのでしょうか。自分の先祖が審判します。今後は国に裁判所がなくなります。一族が処断するのです。裁判長は誰がするのかといえば、自分の父母がなります。最も近い人になるのです。エデンの園で誤った時、誰が裁判しましたか。神様がしたでしょう。お父さんがしたでしょう。自分の一族にとって恥ずかしい事実なので、そのようにするのです。検事は誰がするのでしょうか。最も愛する人になるのです。夫が誤れば妻が讒訴するのです。

誰が審判しますか。最も愛する人が審判するのです。アダムとエバを誰が審判しましたか。アダムとエバは兄さん、妹です。怨讐になりました。誰が怨讐に判決しましたか。アダムがエバを、エバがアダムを判決しました。そのような時が来るのです。

天地と運命が左右され得る法を設定すべき仕事が、私たちが行く道の前に待っているということを知らなければなりません。その法が設定されるようになれば、今までむやみやたらに生きた人間は許しがありません。自分の一族で処理するのです。法廷に行きません。自分の氏族が中心になります。文氏ならば全国にいる文氏の宗族でその文氏の宗族法によって族長が審判するのです。そこには許しがありません。

今後、罪を誰が審判するのでしょうか。もちろん霊界でも審判するのですが、自分の周辺にいる人々が審判します。誤れば町内の人が審判するでしょう。町内より高い段階の郡ならば郡の人が審判します。郡の人が誤れば道の人が、道の人が誤れば国が、国が誤れば世界が審判するのです。それゆえに、その秩序的基準に合格できる制度がこの制度です。

今後、罪を犯すようになれば、法廷に引っ張っていって断罪するのではありません。自分の一家ですするようになるというのです。そのような時代が来るのです。ですから、呪うこともできないでしょう。自分のお父さんとお母さんが審判し、妻が間違えば自分の夫が審判するのです。それゆえに、今後統一家の祝福家庭の二世が誤れば、誰が処断するのでしょうか。父母がするのです。

アダムとエバのお父さんは神様でしょう。それでは、アダムとエバが罪を犯したのですが、誰が審判しましたか。その次は誰ですか。その次は自分の相対です。夫を妻が審判しなければならず、妻を夫が審判しなければなりません。その次は誰ですか。息子、娘です。愛の源泉を中心としてすべてこのようになるのです。

最も近い人が最も嫌うのです。息子、娘が最も嫌い、夫が最も嫌い、妻が最も嫌い、父母が最も嫌うのです。それにもかかわらずそのような行動をしては、父母を欺き、相対を欺き、息子、娘を欺き、天地の前に「お父さんだ、お母さんだ、兄弟だ、父母だ」と言えないというのです。ここにもそのような男性、女性がいるとするなら、今後あなた方だけでみなブルドーザーで押し出してしまいなさいというのです。

統一教会の家庭に対する審判時代が来るというのです。みんなヨルダン川を渡っていくのに、こちらに立って見つめながら渡ることができないのです。モーセがピスガ山上でイスラエルの地を見つめながら入っていけなかったのとちょうど同じです。家庭もちょうど同じです。ですから警告するのです。

警察が必要ありません。刑務所が必要ありません。一族の責任者が集まって警察に代わり、判事に代わってその家庭を審判するのです。その部落の法に外れることがあれば、問題が起こるのです。

完成した子女、完成した兄弟、完成した夫婦、完成した父母はこうであるべきだという神様の公式的なモデルがあるでしょうか、ないでしょうか。それがあってこそ永遠な審判の基準になるのです。「君は天国の第一合格者、第二合格者、第三合格者……」という系列を定めることができ、位置を決定できるのです。そのようなものがあるでしょうか、ないでしょうか。なければならないのです。そのような愛の理想相対を地上に実践し完成しようというのが創造理想だというのです。それで、神様が子女を造られたのです。

今後、一族の中でもし犯罪者がいれば、なにがしの一族、その一族の族長を中心として統治するのです。氏族的メシヤが神様の代わりの裁判長になるのです。自分の一族に事件が起これば、雷が落ちるのです。その一族からそのような悪者を輩出したという事実は、一族の看板に泥を塗るのです。部落がこのように滅び腐敗していく国ではいけません。全体が一つになって一族を保護するのです。

若者の中で悪者が生じれば捕まえて「こいつ！」と張り飛ばすのです。一番最後におじいさんが裁判長になり、お父さんが検事になり、お兄さんが弁護士にならなければなりません。天地原則の大道を明らかにするためには、私たちの家庭の検事になり、お兄さんが弁護士にならなければならないのです。

「天理原則の大道を明らかにするためには、私たちの家庭の血族ですが、血族になることができません」このようにして無慈悲に公的な審判をしてしまわなければなりません。それで、警察がなくなるのです。軍隊がなくなるのです。

今後は警察がすべてなくなるのです。罪を犯せば、家庭が絶対権限をもって家庭で解決するのです。その父母が責任を負うのです。夫が間違えば妻が審判するのです。最も近い人が審判しなければならないのです。なぜですか。偽りの愛の種が残したものを真の愛の相対的基準が処理しなければならないために、最も近い人々が審判しなければならないのです。

罪というものは何ですか。罪は私的な所で生じるのです。滅びるのも私的な基準で起こるのです。悪も同じです。私的なことが度数を越えれば、悪として現れるのです。私的なことには限界があるのですが、その限界を越えれば悪になり、滅びるようになり、罪を犯すようになるのです。それでは、永遠に善であり得る、永遠に発展することができ、永遠に福を受けることのできる位置はどこでしょうか。滅びるのを避けることのできる位置、罪になることを避けることのできる位置、悪になることを避けることのできる位置はどこでしょうか。

それは正に公的な位置です。御飯を食べても公的な位置で食べなければなりません。仕事をしても公的なこととして、話をしても公的な話として消化しなければなりません。このように一切を公的なものと関連づけ生きなければなりません。そのような人は地獄に行こうと思っても行けないのです。

本来、天法の道理に従っていく人間には、自分自身が滅びることを防ごうとしたり保護したりしようという心があるのです。これは神様に本来そのような心があるので、人間にも本来あるようになったのです。自分が作った法ではないというのです。

「良心よ、私がこうなのでこのようにする」と言いますか。「私の考えがそうであるがゆえに、そうすべきだ」と命令するからといって良心が作用しますか。どこか分かりませんが、違う所で命令を受けるのです。そのような感情が自分を支配するのを見ると、これは公私問題を中心として支配するということが分かるのです。

罪をたくさん犯した人は、どんどん北極に送るのです。そのような時が来るのです。そのような人々に御飯をなぜ食べさせますか。熊の子を食べて生きるのです。何年間かその境界線にほうり込むのです。「何でも捕って食べて暮らして死ななければ、何年かあとに来い」と言うのです。そのような隔離時代が来るのです。

その世界で死んだなら死に、死なないなら死ぬなというのです。虎を捕まえて食べるならそのようにしなさいというのです。氷の家を建てて生きるなら生き、建てないなら建てるなというのです。そのような隔離時代が来るというのです。伝染病患者は隔離するでしょう。そのように完全に隔離するのです。ですから予防薬として強調することが、罪を犯すなということです。

第三章　真の御父母様と霊界

一　真の御父母様の権限と使命

一) 真の御父母様は肉体をつけられた神様

神様は無形でいらっしゃるので霊界に行っても見えません。それゆえに神様は体をもった父にならなければならないのです。体をもった父になることによって、無形と有形が一つになるのです。それは宇宙が一つになることを象徴します。神様は体をもつためにアダムとエバを造りました。体をもつには愛だけが可能です。愛があってこそ神様の形状に似た体を備えるようになります。アダムとエバが神様の体を備えれば、彼らの心の中に神様がいらっしゃって、地上世界と無形世界を統治するというのです。神様の王国をつくるのです。神様の王国は愛の王国だというのです。愛を中心としてこそ霊と肉が一つになるのであって、他のものでは一つになることができないのです。

神様は、神様と人間が主体と対象として縦的な愛の関係を完成することだけを目標とされたのではありませんでした。縦的な愛を完成してアダムとエバの横的愛の結実をもたらそうとされたのです。その瞬間が正に内的父母であられる神様が外的父母であるアダムとエバと完全一体を成すために臨在される愛の理想成就の瞬間です。無形の父母であられる神様が、アダムとエバの形状をかぶって有形世界に永存なさる父母になるのです。この時アダムとエバは真の父母、真の先祖になるのです。

神様が体をもった父になることによって、見えない無形と有形が一つになるのです。それは宇宙が一つになることを象徴します。それゆえに神様の形状に似た体を備えることができる姿としてアダムとエバを造ったというのです。そしてアダムとエバを天国の王宮に、王座に上がるようにして、その王と王妃の心の中に神様の王国をつくるのです。王国は愛の王国だというのです。愛の王国。愛を中心としてのみ霊と肉が一つになるのであって、他のものでは一つになることができないのです。

神様が心と体に入った愛をもった男女が結婚すれば、それは誰の結婚になりますか。誰の結婚になるのかというのです。人間の結婚であると同時に神様の結婚です。驚くべき話です。既成教会の信徒たちは驚き倒れる話です。「あんなことを言うから異端だと言うのだ」というのです。異端は誰ですか。本当の異端は誰なのか霊界に行ってみてください。

本来アダムとエバは何ですか。神様の長男、長女です。神様は天宙すべてを創造した万能の王であり、アダムとエバはその王の子女なのです。王の息子と王の娘が絶対者である神様の愛を中心として一つになって、神様と一つになったその基準に立たなければなりません。それがアダムとエバの位置です。言い換えれば、アダムとエバは地上天国と天上天国の王にならなければならないというのです。皆さん、神様の姿は霊界に行っても見えません。姿が見えないのです。神様の創造目的は何ですか。自身の形をもつことです。姿をもちたかったというのです。

無形の神様は実体がないので、その形態を身代わりしたものが真の父母だというのです。真の父母は個人的な父母であり、家庭的な父

母であり、氏族的な父母であり、民族的な父母であり、国家的な父母であり、霊界に行っても、今後、真の父母の形状で神様が現れるのです。統一教会の偉大なことがそれです。レバレンド・ムーンの偉大なこととは何かというと、レバレンド・ムーンの形状を神様がかぶられるということです。何の話か分かりますか。

先生が監獄に行って、悪いうわさが立ち、すべて滅んでなくなると思っていたのですが、今でも生きて堂々と大口をたたいています。アンテナを張ってすべて見聞きして分かっていて、大声をあげているのです。神様も先生のサインが出ているか、出ていないかを見てそれから決裁するはずです。先生のサインがあるかないかを見て、先生のサインがあれば「ＯＫ」、ない時は「ノー」と言われるのです。言葉は簡単ですが、そのようになることがどれほど難しいかを考えてみてください。今後の世界、霊界はすべて先生の手中で動くはずであり、この肉界はいずれ一つの谷間へ行くしかないという結論が出てきます。

自然世界は真理でぎっしり詰まっているというのです。皆さんは霊界に対してよく分かりませんが、先生は霊界の専門家です。そこは二十一世紀ではなく二十二世紀、三十世紀になったとしても、先生がいなければ開門することができません。理論的に霊界を教示して霊界を開門する時、体系的内容を明らかにしてくれた元祖が文先生だという名声が永遠に残るのです。

霊界を結束させなければならないのに、霊界を収拾できない人は天下を統一できないのです。天運の根が天であるのに天を収拾できないのです。天運の根が天であるのに天を収拾できない人がどうしてその結果をこの世の道理として世界を統一できますか。それゆえに地上を統一する前に霊界を統一しなければなりません。

天国に王宮がありますか、ありませんか。そこの王は民主主義の王でしょうか。どのような王でしょうか。霊界は真の愛を中心とした所なので、霊界の王は一度中心になれば永遠です。それゆえに、高い所、低い所を一つと見るのです。全体を球形と見るのであって、分離されたものとしては見ないというのです。

二) 宇宙の中心軸、地上・天上の統治者

霊界に行けばアダムとエバが家庭の王であり、氏族の王であり、民族の王であり、国家の王であり、世界の王であり、天宙の王なのです。ですから、霊界に行っては神様の代身者となるのです。神様は無形の神であるので見えません。あの世に行っても神様は見えないのです。しかし神様も体が必要です。それで、神様が造った万物世界は体をもっています。無形の神が体をもつことのできる相対的な存在を必要として万物を創造したがゆえに、完成したアダムとエバは神様の体になるのです。

アダム家庭とは何かというと、将来アダム一族の族長になり得る立場であり、アダム一国の王になる人であり、世界の王の中の王になる人です。神様の代身と一体となることができる世界です。神様がなぜ創造をしたのでしょうか。地上で人間アダムの後孫を通じ天

国の民を育てることがアダムを造った目的です。ですから、地上でアダムとエバに通じることなしに子女を……。

霊界で子女繁殖はできません。縦的であるために霊界に行っては息子、娘を生むことができないのです。ここは縦的ですから縦的なものは一点の上に立つのです。面積がありません。それゆえにアダムとエバが縦的な基準の前に三六〇度で……。これは無限であり、無限の面積が必要なその中で生まれた無限な息子、娘を天国の民とするためのものだというのです。そうなれば天国で王になることができる方が誰かといえば、神様です。神様が王にならなければならず、神様と一つの体となり得る、体をもつことのできる人が必要です。その体が誰かといえば、アダムとエバです。

堕落しなければアダムが誰ですか。霊界に行くようになれば神様になるのです。霊界で体をもつ主人になるのです。神様はあの世に行っても見えません。なぜ人を創造しましたか。この宇宙は実体があるので、実体の主人であるアダムとエバを中心として管理主導できる立場に立つためです。

神様が霊界で無形でいらっしゃるので、支配できないから、実体の仮面をかぶって実体の体をもつことによって、あの世において、地球星で生産されてくる自分の息子、娘たる後孫を、実体をもって支配することのできる王になるために実体の人を造ったのです。その王の顔が誰の顔ですか。アダムの顔です。王をつくったから王妃が必要なのです。王妃とは誰ですか。エバが皇后にならなければならないのです。地上の先祖であると同時に、天上世界の先祖になるのです。

霊界に行けば先生がすべて統治しているのです。先生ではなく、神様です。神様の体なのです。皆さん、体のあるところに心があるでしょう。心と体が一つです。もう少し深い話をすれば良いのですが、ひっくり返る人々がいるために話をしてあげることができません。ひっくり返るようになっています。「ああ！　そんなことがあるものか」と、このようになるのです。本当にそのようなことがいくらでもあるというのです。神様は遠方にいるのではありません。そのようなことがある、限りなく近い所にいらっしゃる方であるのを知らなかったのです。

霊界に行けば神様が見えるのではありません。神様がアダムとエバを造ったのは、実体的万物世界を、今後後孫にすべて管理させるためです。神様も形状が必要だというのです。アダムとエバの形状をもち、あの世に行ってお父様の役割、すべての中心存在の役割をするのです。父母様があの世に行けば、神様が心にあって一つの体になって、全霊界とこの地が一つになるのです。神様が心に入り、父母様が神様の身代わりに入っているのです。私たちの体と心の関係のようなものです。そのような原則になっているので、地上の皆さんの家庭は、霊界の中心家庭である父母様の家庭と神様が一つになったその形態を、小さいけれど皆さんの家庭に一単位として実を結ばせたのと同じだというのです。

アダムとエバが堕落しないで完成し、人間の責任分担を果たせば、この地上世界と天上世界に地上天国と天上天国が成されて、愛を中心として一つの世界になるというのです、真の愛を中心として。結局は最初であると同

時に最後になる日は何ですか。「真の父母の日」です。「真の父母」と言えば、神様は縦的な父母をいい、真の父母は横的な父母をいうのです。縦的な神様は霊界を代表し、横的な真の父母は地上世界を代表して一つになるのです。真の愛によって一つになる世界です。その二つの核心的な内容が真の父母です。真の父母の中に縦的父母と横的父母があることを知らなければなりません。

三) 真の御父母様を通して天国に行く

宇宙の中心が何かというと、霊肉の真の父母です。その基準を中心としてそこから東西南北が生じ、家庭が生じ、氏族が生じ、民族が生じ、国家が生じ、世界が生じるのです。これが、宇宙の根本です。これを中心として霊界が生じるのです。これが、九〇度、三六〇度になってこの中に宇宙が入るのです。

先生が幼い時から霊界問題に当面しながら、このようなすべてのものを探し出してくる中での伝承的な記録が、「原理」のみ言だということを知らなければなりません。漠然とした話ではありません。それで、李相軒氏もこの地上に生きているとき、先生を一〇〇パーセント信じられませんでした。先生が「右手は霊界をつかみ左手は地上をつかんで、反対に引き抜かなければならない責任が真の父母にある」と話したのですが、それが何のことか分からなかったのです。

今私が神様に「神様、私は堕落したこの世界と霊界を見たくありません。新しい、これよりももっと良い天国を再びつくれば良いです」と言っても、それが可能だというのです。まだサタンが解放されていないのが問題だというのです。サタンを底無し地獄に押し込んで、影も見たくないし、恨みの声も聞きたくないというのです。解放されたとしてもまだ処理すべきことが残っています。

皆さんは霊界についてよく知らないでしょう。私は霊界の専門家です。おそらく歴史の中で霊界を開門することにおいて、理論的基盤と体系的内容によって霊界を教示し明らかにした元祖が文総裁だという名が残るでしょう。元祖を知っているでしょう。貧しくて助けるという意味の援助（注：韓国語読みでは元祖と同じウォンヂョ）ではありません。「根本の意味の元」と「先祖の祖」です。

皆さん、文総裁に対して「真の父母」と言いますが、私はその「真の父母」という言葉を最も嫌う人間です。それがどれほど怖い言葉でしょうか、真の父母になったならば、真の家庭を率いなければならないのです。ここに一門がくっつけば真の一門を率いなければなりません。また世界へ拡張される時は世界を率いなければなりません。天地の前に、霊界と肉界に人類がいっぱいに拡張された時には、それを率いることができる能力がなければならないのです。途方もないことです。そのようなことをみな知っている人です。

堕落しない本然の真の父母が来て初めて、神様の垂直と人間の水平の九〇度を合わせられるようになるのです。真の父母が来て九〇度に合わせることができる教育をするのです。霊界へ行ってみてください。私が言っていることが間違っていれば首を切ってしまうのです。真の父母が来て水平垂直を九〇度で合わせられるようになるのです。九〇度で合わせ

られるように教育をするのです。この教育に絶対服従しなければなりません。体をつかんで打ち、九〇度にしなければなりません。

真の父母は宇宙的な真の愛の中心基盤です。ですから、そのような真の父母が現れれば、朝にすべての山川草木が昇る太陽に向かうように、すべての被造世界が真の父母に向かうようになります。すべての被造物が葉や枝と同じです。霊界ではすべてのものが神様に向かっています。同じように統一教会でも先生が韓国へ行けば食口たちのすべての神経が自動的に先生についていくのです。同じことです。

博士の学位を受けようとするなら指導教授のおしりもふいてあげ、その教授に足でけられても「ああ、ありがとうございます」と言ってこそサインしてくれるのであって、そうでなければしてくれないのです。「私が鼻を見ても顔を見ても体つきを見ても何を見ても優れていて、相撲をしても勝つし、御飯を食べてもたくさん食べ、何でも一等になることができ、十箇所、百箇所良いところがあるのに、一つくらい知らないからといって博士学位をくれないのですか」と言っても通じません。先生がそのような霊界の特許権をもつかもしれないというのです。

天地を与えても取り替えることができない高貴な価値の存在である人間が、なぜこのように脱落してしまったのでしょうか。堕落のためです。それを解放しようとするなら、レバレンド・ムーンを通じなければなりません。レバレンド・ムーンを通じることなしに、この原則を知ることはできません。いくら学者であり、いくら世の中でずばぬけているとしても、霊界に行く時はレバレンド・ムーンのサインを受けて入っていってこそパスするのです。

考えてください。先生を中心として霊界が協助する、それが普通のことですか。霊界もそうですが、今からは私が深刻にしなければなりません。先生が血を見るようになれば恐ろしいのです。無慈悲なのです。歴史的なすべての蕩減を何倍もかけて打ってしまうのです。血を御覧になった神様を、歴史過程のその神様を慰労する道がないのです。それを涙でふさいであげようというのが先生の考えです。

霊界でも関心は先生以外にはありません。父母様以外にはいないのです。それが生命の根源であり、愛の根源であり、良心の根源であり、すべてのものの根源です。そこを通じなければ大きくなりません。

この地上世界だけが真の父母を必要とするのではなく、霊界も同じです。どうしてですか。そこでは地上で愛をもって生きた人が行って宮殿をつくるべきですが、そのような人がいないからです。愛の宮殿は神様もつくることができず、霊界の人もつくれません。真の父母がつくらなければならないのです。霊界で愛の宮殿が真の父母から始まります。霊界に宮殿があっても、真の父母が行って「ここを宮殿とします」と宣布してこそ、それを中心としてすべての霊界が落ち着くのです。そのような責任が残っているので、霊界でも真の父母を絶対に必要としています。

先生は常にいる人ではありません。歴史始まって以来、二百年の間に一世紀前にもなく、

あとにもない、永遠に一回しかないこの期間に生まれた人です。いつでも生まれることのできる人ではないのです。そのような期間に皆さんが先生から直接秘密の内容を学ぶということは、無限の価値があるのです。そのまま実践して霊界に行けば、間違いなく天国に行くのです。その未来の国が皆さんを待っているのです。その天国は今まで空いていました。真の父母が本来入るべきはずでしたが、真の父母が現れなかったというのです。

統一教会の先生の誇りは、神様を知っていることです。霊界で知っている以上に知っているというのです。人がいくら多いといっても、神様の心情を知っている人を最も喜びます。宗教人たちが涙に濡れて膝までへこむほど一生の間祈祷をしても、イエス様に出会い導きを受けるかどうかくらいです。にもかかわらず皆さんがここに来て先生に会い、このような話を聞くことができるというのは歴史的な事件です。

復帰の真理だとか、死だとか、霊界などを知るにおいては、何もせずに分かるのではありません。先生は何も食べないで十七時間ずっと祈祷だけをしたことがあります。十時間、十二時間は普通です。ですから、ここがすべて固まってしまいました。今は祈祷を長くしなくても神様が近くにいらっしゃるために、すぐ通じます。この膝にもそのような痕跡があります。

先生が祈祷する時は、冬でも綿ズボンが濡れるほど痛哭したのです。そのような功績を立てて探した「原理」を、皆さんはどのように取り扱いましたか。霊界に行ってそのような事実を知れば、先生の近くにどうやって来るのでしょうか。お母様も先生に対しては用心するのです。分からないことが多いのです。知ればその道に同参しなければなりません。そのような恨の峠を越えるとしても、ここで自分が死んでいきながらも、愛をプラスして死のうとしてこそ、天の死として扱ってくれるということを知らなければなりません。ここは死亡に勝つことができる位置です。死亡が干渉しない位置です。

先生を知っていて損をした人は手を挙げてみてください。いますか、いませんか。いるという者はどろぼうです。誰が損害を受けましたか。私が損害を受けましたか、皆さんが損害を受けましたか。私が一生の間損をしたでしょう。かといって、それを取り返そうとは思いません。代わりに皆さんの後孫の前に返してあげなさいというのです。皆さんの息子、娘にすべて、先生の代わりに父母として侍ってもらえというのです。それをすることができなければ、先生の功をすべて再び蕩減しなければならないのです。霊界に行き、がちっと引っ掛かってしまいます。許しがないのです。

「真の父母」という言葉は驚くべき言葉です。皆さんの中で霊界に通じる人は祈祷してみてください。「神様が高いですか、文総裁が高いですか」と祈祷すれば、文総裁が高いと答えるのです。このような話をするから異端でないはずがないでしょう。

悟りの世界においては、霊界に行って神様にまで認められなければなりません。なぜそうなのでしょうか。「原理」の勉強をすれば

みんな分かるでしょう。そのように難しいのです。それをすべて暴き体系を作らなければならないのです。私たちのような人はしぶとい者なので、そのような体系を作ったのです。その世界があまりに膨大なので手を付けることができません。継ぎはぎのふろしき包みをくまなくすべて解いて一つの服を作るとするならば、君王が着て出掛けることのできる服を作ることができなければならないのです。そして、神様をして「お前は歴史始まって以来において私より勝っている」と言わせなければならないのです。

真の愛を中心として生涯を投入し霊界に行けば、どこででも「先生！」と言うと、すぐに会えるのです。すぐ会えます。心配することはありません。愛の心情に合わせれば同参、同位、同居権をもつことができるので、先生を呼べばすぐに会えます。それはいいでしょう。そのような人々には先生が全霊界を見物させてあげることでしょう。ダイヤモンドの星もあり黄金の星もあります。その時、先生の特権で一つぐらいあげるかもしれません。先生にはそのような特権があるのです。

分かりますか、分かりませんか、この者たち。この者たちと言うのは、私が条件を残してあげることなのです。「文総裁、どうしてそのように悪口を言うのですか。文総裁に私が初めて会うのに、そのように非難されてはすべて信じることができません」と言うかもしれませんが、その時になって許してあげようと悪口を言うのです。そして、あの世に行き「あなたが悪口を言うので、統一教会を信じることができなかった」。それは理にかなった話なのです。

それで、霊界に行って許す条件を立ててあげるために悪口も言うのです。非難されても心が痛くないのです。帰ってみてください。「ああ、悔しい！」そう思っていたのに、故郷へ行く前にすべて忘れてしまうというのです。心がそのようになるのです。分かりますか、分かりませんか。「分かります！」と言う人は手を挙げてください。ぼーっとしなくなりましたね。

神様は負債を負われる方ではありません。千倍万倍返そうとされるので、文総裁はしがない一人の兵士として監獄に行き来しながらも、先生の所有版図は国を越え、世界を越え、天地を越えて、霊界と肉界の統一的な一つの位置をつかむことができるこの時が来ました。ですから、アダム家庭の天地に統一的な家庭的基盤形態を万民の前に付与できる、このような特権時代を得た先生の権威がどれほど偉大かというのです。全体全般です。一つも欠けることなく全体全般です。その次には全権全能の時代に向かうことができる結果が、先生の未来の世界に待っているというのです。

天宙は霊肉の世界ですが、天上世界の中間霊界にとどまっている霊たちと地獄に行った霊たちをすべて解放し、門をすべて開いてあげてこそ、神様が解放の立場に立つことができるというのです。神様が解放された立場に立ってこそ、全人類が呼吸を共にして太平の時代に入っていくことができるのです。それが統一教会の行く道です。それゆえに、神様が解放される日まで統一教会は行かなければならないのです。偉大な事実です。大ざっぱなのではありません。

今霊界は形態をもっていないのです。真の父母によって形態をもつようになるのです。霊界祝福とともに天地総合地上天国統一の愛の主権世界宣布をするようになれば、先生が霊界に行かなくても、神様は先生の父母の形態をもって霊界を主管できるようになるのです。それゆえにそれを待つのです。別れてしまったものが結合するのを待っているというのです。先生が早く霊界に来ることを待っているというのです。ですから、地上の仕事が終われば霊界の仕事を始めなければなりません。皆、待っているのです。霊界の王として立つのです。地上の王がそのまま霊界の王になって、原理原則に一致した故郷の地に帰るのです。

文総裁の願いは何かというと、教主の中で真の愛のための代表的な教主になろうと考えています。歓迎しますか。皆さんは霊界をよく知らないのです。私は霊界の専門家です。死んでどのようになるかということをはっきり知っているので、世の中の万事がいくら騒々しく反対しても、それが私の目にはとまりません。なぜですか。それよりあの世界を見るからです。あの世に拍子を合わせて暮らすのです。

それゆえに、今後世界の霊通人たちは私のところに来て教育を受けなければなりません。僧侶でもどんな人でも……。天地の秘密を知っている人がいなかったのです。初めてこの時代に文総裁という人が出てきて発表することによって、天国の博物館にもなかった記録の蔵書になり、それを見て数多くの善霊たちが知って、地上の自分の後孫に夢での啓示を通じて、あるいは啓示を通じて教えるようになる時、地上の図書館にぎっしりいっぱいになることでしょう。今ここで言うことは、どのような図書館にもないのです。

神様の心情世界までも発見したレバレンド・ムーンが、偽物でないということを知らなければなりません。このようなすべてのことを聞いてみてください。世の中にないのです。先生が教える内容は世界のどんな図書館の本にもなく、霊界の図書館にもありません！　初めてなのです、初めて！　このような内容は地上のどこにもなく、霊界のどこにもない新しい真理のみ言です。これは神様と霊界と地上の人間が求めることのできない宝の倉庫にある記録だということを知らなければなりません。

地上で先生を見ただけでも霊界に行っては自慢の種になることでしょう。「私は先生に侍った」と言ってです。草木を見てください。植物たちの芽はすべて太陽の光に向かっているのと同様に、皆さんの本性こそ愛の太陽の光に向かうのです。神様は愛の太陽です。霊界に行けばそうなのです。

総結論は何ですか。アダム完成です。アダム完成とは何ですか。アダムができなかったことが何かというと、責任分担の完成ができなかったのです。責任分担とは何ですか。祝福家庭世界の伝統的、世界の礎石的基準が、家庭的礎石であり、氏族的礎石であり、民族的礎石であり、国家的礎石であり、地上天国の礎石であり、天上天国の礎石になることのできるすべてです。その礎石が汚されてしまいました。それを清算しなければなりません。ですから霊界の清掃、地上の清掃、すべてのことをしなければなりません。

二　真の御父母様と天国建設

一) 真の父母になるためにみ印を受けなければならない

再臨主になるためにはどのようにしなければならないでしょうか。霊界に入っていってイエス様を中心としてすべての宗教関係にある原理の内容、天地はこうですべての原則がこのようになったという道理を解いて霊界で承認を受けなければならないのです。その内容を発表しなければなりません。

これは霊界でも分からない話なのです。神様とサタンだけが知っている内容ですが、これをすべて発表するので霊界で反対が起こるのです。それで、四十日間霊界の混乱時代が来ます。サタンが神様を否定する条件を立てて反対するので……。そこで霊界の半分が別れて反対しました。ですから混乱が起こるのです。最後に至っては神様が「どれが真なのか」ということで判決しなければなりません。それで、真の父母が霊界を完全に屈服させて、神様のみ印を受けて地上に降りてくるのです。

天下を統一するためには霊界を統一しなければなりません。霊界の先祖から「文総裁は異端者だ、反逆者だ！」と言われます。のちには神様までも「そうだ。捨ててしまいなさい」と言うのです。蕩減原則がそうです。アダムとエバが神様を否定したので、神様もアダムとエバを条件的に否定しなければならないのです。否定する立場から肯定し、私の神様として取り戻さなければなりませんし、私の天国として取り戻し、神様のみ印を受けなければなりません。そうして神様がここに共に立って讒訴してから、あとではすべて……。

先生の性格は、一度始めれば最後を見届けるまでやめません。死ぬ前には後退をしないのです。この「原理」がどうだということを私がはっきりよく知っていて、自信満々なので、食ってかかるのです。イエスだとか孔子とか、何を知っていますか。彼らは「ああ、私が学んだのはこのようなものでしたが……」と言うのです。彼らは自分たちが教えた教理にはないと否定的事実を質問するのです。また、「そうではない！」と言うのです。

四十三日間霊界全体に対して闘争の役事をしたのです。ですから最後には何かというと、四十日目は神様までも「レバレンド・ムーン、こいつめ。なぜこの天上世界に来て平穏な天の世界を混乱させるのだ、このどろぼうめが」と言うのです。皆「わっ！」と言いました。かといって私は後退しなかったのです。

私の話を聞いてみてください。再臨主になろうとするなら、霊界に入っていって神様のみ印を受けて来なければならないのです。文総裁が霊界に入っていくことによって、四十三日間霊界で闘いが生じました。地獄の底から天上まですべてが「文総裁は異端者だ！」と言うのです。それを下から整理していかなければなりません。

一番あとは聖賢たちです。彼らと神様の前で談判して、正義の主人が誰かという勝敗を決める闘いをしなければなりません。その時の題目は何ですか。霊界に来たすべての人々は血統が変わったというのです。血統転換をしなければならないことを知っていたのかというのです。二つ目は何ですか。所有権転換です。「地上で生きながら個人の所有権をもつことは天国の背信者だ！」と言うのです。

道主たちがいくら優れているとしても、ここに引っ掛かっているのです。

ですから、先生が霊界で闘う時、自信満々に「異端が何だ」と対抗して闘ったのです。今後は、霊界に大混乱が起きるので神様が審判長として判決を下さなければなりません。ところが、神様まで反対するのです。「文総裁はお前たちが言うように異端者だ！」と言うのです。なぜですか。アダムが天を裏切ったがゆえに、蕩減復帰の原則によって神様もアダム完成者を裏切らなければならないのです。それでこそ神様の心にわだかまった塀が崩れるのです。そして、全体がみな反対し、神様まであちら側に立っていて、ただ一人文総裁が残ったのです。

かといって混乱の渦中にある霊界を、そのままにしておくことはできないのです。神様が最後の判決を下さなければならないのです。「文なにがしが言う血統転換、所有権転換、心情圏転換が事実である！」と言うのです。そのような勝利の覇権者として、み印を受けて降りて来なければならないのです。

皆さん、世の中を収拾するためには、霊界を収拾しなくてはなりません。それをせずには世の中が収拾できないのです。先生がこのような真理のみ言を探求し「こうでなければならない！」と主張する時、サタンも反対し神様も反対したのです。人が神様を捨てたので、神様も人間を捨てなければならないのです。蕩減法則です。それで、霊界で四十日間闘いが生じるというのです。四大聖人たちがすべて来て、「レバレンド・ムーン、異端だ！」と言うのです。霊界のすべての宗教指導者たちが私に反対したのです。

このようにして神様のみ前で大会をし、誰が正しいか攻防戦をしました。四十日間、全霊界が大騒ぎしました。「レバレンド・ムーン、異端だ！」と言いながら大騒ぎしたのです。「霊界が複雑だ。私たちは、それは嫌いだ。追い出しなさい！」と言いながら騒いだのです。しかし、神様もこのみ旨でなければならず、このようにしなければすべての世の中を理論的に収拾する道がないというのです。

孔子は神様の人格体を知らないではありませんか。神様をよく知らなかったのです。人格的な神様は分かりませんでした。「天」とは言いましたが漠然としています。質問戦でノックダウンするのです。イエス様に対しては「あなたは再臨論に対してなぜこれこれこういう問題を言わなかったのですか」と言うので、ノックダウンするのです。空中に千年王国を成すですって？　霊界に行けばみな間違っていることが分かるのです。私が質問する時、相手は口を開くことができないのです。あとで神様に対しても「あなたが判定しなさい、誰が正しいのか」と言うと、神様があとで「レバレンド・ムーンが正しい！」と言ったのです。

霊界に入っていき、四十三日間一番下からぞんざいな扱いを受けるのです。「お前がなんだ」と言ってです。僕、朴氏おばあさんの親類の詐欺師、異端者の魁首だというのです。霊界に入っていって全宗教を中心として、選民たちを中心として、一番あとには四大聖人たちを中心として面談し……。すべて反対するのです。神様まで一緒になって「この逆賊め、たたき殺せ」と言うのです。「歯には歯、目には目」です。四十日期間、霊界全体が反対するのです。

ここで後退しては駄目です。四十三日間を闘うのです。最後には神様までもみな反対したのです。先生が後退できますか。後退すれば大変なことになるでしょう。それで、あとではすべて神様まで屈服させるのです。ですから、神様が霊界に対して「気をつけ！」をするのです。このようにして、「霊界の闘いに対して私が判定しなければならないようだが、実は、すべて当たっている証人は文鮮明だ」と発表をするのです。

それで、神様の前に答弁するのですが、後ろを振り返れというのです。振り返って答弁するのですが、文鮮明の話が合っているとして「気をつけ！」と言い、神様御自身とともに全霊界が先生を証するのです。ですから霊界まですべて終わりました。み印を受け公認を受けて地上に来るのです。

世の中を統一するには、天上世界に入っていって統一しなければなりません。どのように統一をするのでしょうか。歓迎するのではありません。天上世界に行って「天理の道理は私が言うように、このように解かなければなりません」と言えば、サタンも知り神様も知っているといえども答弁できません。すべての道主たちは初めて聞くのです。血統転換、所有権転換、心情圏転換、そのような言葉がどこにあるかというのです。イエス様さえも日ごとにそのように言うのです。聖人たちがすべて反対します。これで四十三日間大霊界の混乱の役事が起きるのです。「あの異端の魁首レバレンド・ムーンを追い出せ！」と言うのです。「追い出せ」と言うからといって、追い出したとしたらどのようになっていたでしょうか。統一教会は出てきません。これでその試験の中で四十三日をすべて押しまくらなければなりません。

先生はそのようなところにおいては専門家です。正しいことと間違っていることの分別については専門家です。それで、サタンなのか神様なのかすぐに分かります。すべて見たところ、違っているのです。ですから押しまくるのです。すると最後に神様も大騒ぎするのです。霊界が混乱して、レバレンド・ムーン一人を中心として、霊界がすべて動揺して大変なことになったというのです。神様は審判の主人なので、最後に主人が責任を負わなければなりません。全霊界がレバレンド・ムーンを前に立て神様に讒訴する局面なのです。それで、神様が定義を立て審判しなければならないというのです。二つの闘いを停止させるためには、正しいことと間違っていることを明らかにしなくてはなりません。二つの輩になっているというのです。

先生は一人であり、霊界はすべてが反対です。神様まで反対するのです。「こいつ、悪いやつ。そんな話がどこにあるのか」というのです。アダムが反対して堕落したがゆえに、神様が反対しなければなりません。父母がたたかなくてはならないでしょう。罪を犯した子女ならば踏んでけって、このように許してあげるのと同じように、一番あとで文総裁を立てておいて「前を見なさい」と言って神様が判断するのです。「今まで数多くあれこれ言い立てていたが、文総裁が主張することが正しい」と言ったのです。

統一教会にもがらくたがたくさんいます。たまに「自分がメシヤだ」と言う人がいます。「レバレンド・ムーンは洗礼ヨハネで、私がイエスだ！」と言うのです。レバレンド・ム

ーンがただでそのようになったのではありません。天国に行って、み印を受けなければならないのです。天上世界の霊界を統一したがゆえに、霊界が先生を後援するのです。全体がそうです。混沌となった霊界が先生によって収拾されるのです。

今まで仏教であれば仏教圏、儒教であれば儒教圏が垣根になって様々な派が多いのです。これがすべて一つの方向をとらえました。二つの方向ではなく一つの方向です。霊界がそうであるがゆえに、一つの方向の権限をもって地上に来て……。地上にも様々な方向があります。五十億人類であれば、五十億の方向があるのです。すべて成して一つの方向をつくるのです。サタン世界が反対してレバレンド・ムーンを殺そうとありとあらゆることをしましたが、レバレンド・ムーンを中心として、だんだんと一つの方向の世界が広がるのです。一つの方向に進んでいます。「世界平和のための平和主義者は文先生だ」と、このように今言っているのです。それゆえに先生に対して関心が高いのです。それは知っていますか。

霊界の混乱をすべて収拾すれば、地上で混乱したこともすべて一つの方向にしなければならないのです。それで、世の中の政治家たち、世界で最高に有名な学者、言論人、経済人、有名な人々をすべて連結するのです。その人々が先生を尊敬しますか、しませんか。みな自分なりに様々な試験をして、あらゆるチェックをしたのです。ですから霊界の混乱を収拾したので地上の混乱を収拾する段階が今見えているのです。どうですか。見ることができますか。目前に一歩だけ越えていけばどのようになるか、みんな分かります。ここに集まった人々はばかではないでしょう。賢い輩である皆さんが見る時、「世界は私たちの手にある」と思いますか、思いませんか。真の父母は永遠に一つです。誰でもないのです。ですから霊界がすべて順応しなければならず、地上がすべて順応しなくてはなりません。二つではなくてただ一つです。終着点は真の父母です。

宗教もいろいろなものがあります。文化背景が違うのでそうなるしかありません。五十億人類がキリスト教文化圏と同じではないのです。キリスト教は何も知らないのです。イエス様を信じないとすべて地獄ですか、とんでもありません。霊界に行ってみてください。孔子様とイエス様は友達です。釈迦とマホメットも友達です。キリスト教の名をもつ聖人たちや仏教を信じた高僧たちも、みんな友達です。とばり一つだけ違うのであって、すべて神様の一族なのです。このとばりを開け放たなければならないのです。

宗教が統一される時、とばりがすべてはがれて、一つの家族として大声を出して激しく泣くことのできる、そのようなことが起こるのです。その天上世界の一日を待つのです。歴史時代に宗教の背景に無知であり、このような闘いをしたという事実を知らなければなりません。それゆえに歴史的なすべての恨みに対して各宗団者、教主、全歴史的指導者たちが集まって悔い改めをしなければなりません。悔い改めさせることのできる人が誰かと言えば、真の父母です。

「孝子」とは何ですか。愛を中心として命懸けで父母に侍る息子のことをいうのではないですか。では「忠臣」とは何ですか。愛を基台として、天の代わりに君主のために生命

を捧げて犠牲になりながら行く人を「愛国者」と言います。「聖人」とは何ですか。聖人は世界の人のために生きる人のことです。文化背景が違い、国境が違い、人種が違っても、万民を愛することに生命を捧げようという人です。一時的にではなく永遠に愛することのできる道に導こうという人が聖人です。一段階さらに上がって「聖子」とは何ですか。世界だけではなくあの霊界、無限な世界のためにまで、神様のためにまで、愛を中心として自分の生命以上に「ため」に生きようとするお方が聖子ではないかというのです。すべて愛です。

霊界に行ってみなさい。統一教会の文先生はどのようになっているでしょうか。「釈迦や孔子、マホメットはレバレンド・ムーンの弟子だと言った」と言って、ホメイニのような人はレバレンド・ムーンを死刑にすると大声をあげていましたが、みな死んでいきました。行ってみなさいというのです。その聖人たちをすべて祝福してあげたではないですか。祝福してあげたでしょう。ですから、霊界から送ってきた相軒氏の手紙によれば、有り難いというあいさつをどれほどしているでしょうか。

生きて祝福を受けた皆さんは、霊界に行って復活した数百万、数千万、数億の人々やその教主たちよりも高い位置にいるということを知っていますか。今までむやみに生きてきました。それを知らなければなりません。先生は自分勝手に暮らしているようですが、どこに行って座ろうが、どこに行って何をしようが、神様の法度を守って霊的に整理して座っています。法を守るからそうだというのです。皆さんはむやみに生きているでしょう。

二) 天国建設と地上、天上世界の統一

一国を見れば、国が形成されるためには、その国の主権がなければならないのです。民がいなければならないのです。国土がなければならないのです。そのような観点から地上に天国を実現するという問題を見てみる時、天国の主人は誰ですか。主権者は誰ですか。間違いなく神様が主権者です。そして、民とは誰ですか。民とは万民です。では、国土はどこでしょうか。地球星です。

アダムとエバが堕落しなければ、神様が何をしてあげようとしたのでしょうか。神様が祝福によって結婚式をしてくださり、神様が喜ぶことのできる息子、娘を生むようにし、神様が喜ぶことのできる家庭を編成して、これを繁殖させて氏族と民族を編成しようとしました。これが、もっと広がればその世界は何主義の世界ですか。神主義の世界であると同時にアダム主義の世界です。

その世界に理念があるとすれば、これはアダム主義理念であり、そこに宇宙観があるとすればアダム主義宇宙観であり、天宙観があるとすればアダム主義天宙観であり、生活観があるとすればアダム主義生活観だというのです。そして、五色人種がまだらになってそうするのはかまわないというのです。それは環境によって変わったことなので、数多くの民族の皮膚の色合いが異なってもかまわないというのです。では、どうして数多くの民族の言語が異なってしまったのですか。人類始祖が堕落することによって、天は分立させたというのです。

私が行き来するのも、その国を取り戻すための、祖国光復のための、建国の功臣になるためにそのような使命を担い、あるいは天の密使としての指令を受けて、今日の悪なる世に来て、このことをしているという事実を思いながら生きていかなければならないのです。そうでなくては皆さんが今後復帰する国の国民として、その威信と体面を立てることができないということを知らなければなりません。

人間の力、人間の知恵、人間の文化、その何をもってしても、真の意味の平和の世界や一つの統一された世界を願うことのできない時点にあるということを、私たちは知っています。このような立場で世界文化を解決するにおいて、最も中心問題とは何ですか。神がいるか、いないかという問題をはっきり解明することが、何よりも重要な問題だと思います。万一神様がいるということを全人類が知るようになった場合には、神様のみ旨がどのような所を指向するのかということがはっきり分かるようになるはずであり、その指向するみ旨を知るようになる時は、その世界こそ一つの世界であり、平和の世界であり、理想の世界であらざるを得ないのです。

祝福結婚と永生は真の父母から始まります。真の父母でなければできないのです。真の父母がこのような膨大な内容を解決して、霊界と肉界の統一、地上世界の統一をしなければなりません。見てください。世界が私に反対していたのが、すべて従ってくるようになっているのです。神様の前に行ってみ印を受けることなしに、霊界を統一し、地上を統一することはできないのです。いくら地上が反対しても文総裁の行く道を妨げることはできません。天使世界と霊界が動員し、先祖が動員しても「行かない」と言うなら、悪夢を見させ、首を押さえてサタンの行動を代わりにする時が来るというのです。怖い時が来ます。

今や霊界の解放圏まで成し遂げました。霊界と地上の平準化運動を今しているというのです。春がやって来るのです。天国の春、地上の春が訪れるのです。今までは天国には春が来ましたが、地上は夏であったのです。今は地上において、夏が去り冬が去って、天国の永遠に続く幸福の理想、すべてを消化して新しい生命を復活させることができる春の季節が訪ねてきます。ゆえに地上の時代には平和がやって来ます。それで、統一教会の先生が今選んだ言葉は何ですか。世界平和統一家庭連合をはじめとして、すべて「平和」という言葉が入っているのです。

霊界、肉界が上に上がっていっても、下に降りてきても、左右になってもかまわないのです。前後左右がいくら入れ替わっても同等な価値をもっているので、天上世界と地上世界を完成した理想愛の圏時代、天宙的愛の圏時代が出発するというのです。それを私たちは、地上天国、天上天国というのです。全体解放圏です。何の話か分かりますか。

過去の人、現在の人、未来の人、霊界に行った人も、祖国光復のために協助できる時が来ました。ですから、多くの人々が、先祖が入ってきて、統一教会に行かなければ良くないことが起こるのです。文総裁の力でそのようになるのではありません。神様と先祖が、天使世界と先祖が一つになって、地上をすべてコーナーに追い込むのです。家庭問題を中

心として、コーナーで手をつけることができないのです。ただ文総裁だけが全権をもって行使することができる、驚くべき事実をこの民族が希望峰として、その国の、祖国の基盤として歓迎する時は、天下無敵の国になるのです。

霊界が今までお兄さんの立場で地上を蹂躙してきましたが、今からはそのお兄さんが地上を助けることのできる環境に入ることによって、地上のアベル圏は今のように、これ以上利用されません。欺き一方通行はできないのです。この方向を越えることはできません。東西南北において東方は侵犯できませんが、西方、南方、北方を行ったり来たりしながら、地上でそのことをしているのです。それによって多くの霊的な犠牲が地球星で続いてきましたが、今からはそれが解消されていくというのです。ですから、今地上と天上が統一圏へ近づいてきたというのです。

歴史を通じた全般的な自分に対する根本問題を解決する道は、先生の教え以外にはありません。永遠にありません。霊界に行ってみなさい、先生がうそをついているか。先生はすべて知って教えるのではなく、成して勝利してから教えているのです。良心はそれを知っています。それゆえに、真の父母と成約時代を宣布したということは、それを成したということです。

サタンと対決して屈服させ、先生が向かう世界、展望する世界には、サタンがその姿を現すことができないのです。それを平面圏において個人、家庭、氏族、民族、国家、天宙、霊界の天国まで平面化させています。それを平面化して連結すれば地上天国です。地上天国で生きた人間とその一族がそのまま天上天国に移行するようになっているのです。天上天国とは何かというと本家です。

今時が来たがゆえに李相軒先生が霊界に行ったのです。霊界の事実をすべて地上に知らせるために摂理のみ旨の中で逝ったと見るのです。霊界全体を知るためには神様の指示を受けることができなければならないし、接ぎ木をしなければなりません。これをすべて体系化できなければならないはずですが、今まで霊界はそのようなことのできる基準に到達できていなかったというのです。

それゆえに、数多くの宗教が現れて霊界の事実を紹介したといっても、それは一部分であり、その宗教の内容を中心として教えたのであって、全体を把握できなかったというのです。しかし今、成約時代を迎えたがゆえに、神様の許諾を受けて、霊界全体の様相を地上に説明できる時代になったのです。それを知らなければなりません。それゆえに霊界の事実を知らなければならないというのです。

霊界が完成しましたか。霊界は未完成でした。なぜ未完成だったのですか。本来、霊界のヒエラルキー・システム（hierachy system : 階級体系）とは何かというと、神様と真の父母を中心として、真の子女を中心として全霊界が連結されなければならないのに、そうなっていないというのです。地上もやはりそうなっていません。この内容だけ地上にもってきてくっつけておけば、霊界は自動的です。言い換えれば、堕落していないアダム主義、神様を中心としたアダム主義、アダム主義であると同時に真の父母を中心としたヒエラル

キー組織が霊界ですが、そうなっていないのです。

今までその中心には、仏教を中心とした釈迦クラブができていて、孔子クラブができていて、イスラムクラブができているというのです。ですから、霊界は真の父母主義とアダム主義が現れることをイスラムの輩、孔子の輩、釈迦の輩、すべてが願っているというのです。ですから統一的な方向をたどらなければならないので、地上にも真の父母の役事が世界的な基準に上がっていく時、すべての宗教の境界線はなくなり、統合運動が霊界の動きに従って自動的にその結果が地上で現れるようになるというのです。

ですから、統一教会が世界主義になることによって、どのようなことが起こるのかと言えば、霊界の霊人たちがすべて霊界にいなくなります。目的が地上で完成し、逆に入っていかなければならないので、すべて再臨するようになります。すべて再臨するのです。すべて活動します。世界に散在している統一教会の食口たちが先端になり「動け！　動け！動け！　動け！」と言われることを願っているのが、数千億になる霊界の霊人たちです。ですから、ここに合わせて霊界で一つにしておけば、神様が主管される世界になるのです。真の父母の名のもとに一つの統一された世界が永遠に続くのです。

今から国家、民族的なグループが連合できる時代に入るのです。ですから、地上の国と氏族と家庭が連合し、統一圏に越えていくのです。このように越えていくことによって、世界は急速に変わるのです。ここで反対している人々は、サタンたちが来て黙っていないというのです。サタンが今まで地獄に連れていこうとしましたが、天国に連れていくというのです。そうやって協助して先祖まで天国に連れていこうとするために、天国に行くことを妨害する者がいないので、解放圏になり、それによって急速に未来の世界化時代へと越えていくというのです。

先生が霊界と地上世界を清算でき、理想的な地上天国・天上天国を完成できる実力があると見ますか、ないと見ますか。それが可能だと見ますか、不可能だと見ますか。どうですか。ですから、そのような全体、全般、全権、全能の時代、それを行使することができる時代が来ました。世の中の組織が、いろいろな国の全体組織が一般化されるというのです。全体、全般的にすべての能力をもったサタン世界は、完全に天の権限の前に無能になり、神様の全権時代、全能時代へ越えていくというのです。そうすることのできる人は真の父母です。真の父母から始まるのです。

霊界からすべて出動すれば、良いことがたくさんあることでしょう。抱き合うことも多いでしょうし、喜ぶ人もいるでしょうし、統一教会を呪って逃げた人々が地をたたきながらこう言うでしょう。「全く、こんなはずでは！」と。

三　真の御父母様と愛の役事

一) 聖人と殺人鬼も同席で祝福

考えてください。先生が聖人と殺人鬼まで許してあげたでしょう。では、自分の息子、娘が罪を犯したことは許してあげることができますか、できませんか。スターリンやヒトラーは人を何百万名、何千万名も殺したので

す。そのような悪魔の中の悪魔までも許してあげ、祝福してあげました。それをしてあげなければ地獄の門を開くことができません。それはよくやったのですか、よくやらなかったのですか。仏教では「ああ、私たちの釈迦を連れていって結婚させる。そのようなことができるだって」、そして「ああ、イエス様を結婚させるだって！」と言っています。

行ってみるとすべて楽園です。中間霊界にいます。彼らに「あなた方の願うことは何ですか」と聞くと、「先生が願うことですから、私たちの願うことは簡単でしょう。祝福していただきたいです」と言うのです。「祝福してあげればどうしますか」と言うと、「地獄の門が開き、天国へ行くことができる道がなかったので、私たちが生前世界を一つにしようとした時の十倍以上努力する力があり、自信があります。聖人たちを後ろにつけて引っ張っていきます」と、そのように言うというのです。

このような決心をして自信満々に改心するようになるならば、使徒パウロをも反対している途中で改心するようにしてキリスト教の忠臣にされた神様ですから、反対の悪党たちが霊界に行ったとしても引き抜いて、神様がうまく使うことができる忠臣の王になることができるというのです。

聖人と殺人鬼を解放してあげたので、その原則において、統一教会に猛反対していた夫であれ自分が願う人を引っ張って、地獄にいる人までも連れてきて解放させ、祝福できるのです。そのようなことが起こっているのです。聖人と悪人をすべて一つにする、このような原則があったがゆえに、そのようなことが可能なのです。そして、霊肉祝福一体圏をなして三日儀式までするようになっているので、残りの霊界において、地上で生きられず結婚することができずに死んだ哀魂たち、十六歳以上の年齢になったすべての人々まで、今解放してあげるのです。その人々まで祝福してあげるのです。

地獄の門を開けて、霊界に行ったすべての人々の前に祝福をしてあげ、神様の血族的権限を認めることによって、サタンは完全に後退せざるを得ないということを知らなければなりません。これは革命です。革命の中でもこのような革命はないのです。堕落によってすべての死んだものが天国に行くことができるという、その環境をつくっておいたのです。アダムとエバが堕落して以後、結婚することができずに死んだ子供たちも、結婚して天国へ入って暮らすことのできるすべての基盤、すべての先祖が祝福を受けた圏内において霊界に入ることのできる環境をつくり、天国に行くことのできる高速道路を築いておいたのです。そのような基盤をすべて蕩減復帰したというのです。

先生が霊界を知らなければこの道を行くことはできません。霊界のお父様が私のお父様です。ですから、霊界の秘密を誰よりもよく知っているのです。避難の渦中においておなかがすいている時は先祖を動員するのです。道端の過ぎ行く人のために宴のお膳を準備させたものもたくさんもらって食べました。そのような話をすればうそのようなことが多いので話をしません。私たちのように優秀な人が科学を学んだのに信じられない話をなぜしますか。皆、理論的に考えるので、これらは信じられない話ですが、先生の話を聞けばすべて信じるでしょう。

神様がお造りになった霊界には堕落した人間は暮らしていないというのです。その霊界は完成した祝福家庭たちだけが暮らすことのできる所です。そこはアダムが完成した以後に生活すべき天国のような環境です。ですから神様が全権をもって、世の中のすべての小さなものから大きなものまで思いどおりにできるのです。祝福を受けて「真の祝福天宙化とサタンの血統根絶」です。打ち砕くのです。ですから、八十代に入り、すべての地上の一族たちは天国行きです。出エジプトのように地上世界の出発が始まるのです。モーセが八十歳に出エジプトしたのと同じように、これからは真の父母、家庭の王として世界地球星の出発をするのです。

先生は世界高速道路プロジェクトをまだ発表していないというのです。どこへ行かなければならないかということをはっきり明らかにして、すべて道を開けておいたのです。それで、霊界の地獄まで降りていって地獄の門をぱっと開けたのです。殺人鬼まで祝福してあげたのです。李相軒氏が、霊界の実相を見て一人で泣いて祈祷していると、その使者が「一緒に帰ろう」と言って神様のもとに帰ってきたというのです。神様のところに行くと「悲しいのか」と言うのです。痛哭すると神様は、そのようなすべての者を救わなければならないが、どのようにするつもりかというのです。神様が話されるには、「お前の息子、娘たちは良い生活をしなければならない」と言われたのです。

それと同じように、全人類は神様の息子、娘なので良い生活をしなければならないが、その道を解放してあげたくとも神様御自身ではできないので、お前が責任を負わなければならないというのです。それが『霊界の実相と地上生活』に出てきます。あなたが責任を負えというのは、なぜかというのです。統一教会に反対して死んだので文総裁に対して、教えてくれること、解放してくれることを願うのです。それで、私が痛哭をしたのです。「神様がなぜこのようになったのですか。私のような者に頼まれる神様、なぜこのようになったのですか」と言ったのです。それで、昨年五月十三日から十五日まで、霊界すべてをひっくり返して私が責任をもったというのです。度胸も良いでしょう。「私が責任をもって断行します」と、このようにして祝福をしてあげました。

一次アダム失敗、二次アダム失敗、三次父母も失敗して、荒野路程でこれをすべて蕩減して解放され、第四次アダム圏祝福時代は地上天国出発時代です。この理論がすべて合わなければなりません。大ざっぱな計算でくっつけてはならないのです。それが霊界や地上で先生が「原理」を中心として解明した結果的基準で評価する時、右手と左手がぴったり合わなければなりません。こうしてこそ音がするでしょう。それを合わせるのが愛です。絶対愛を中心としてです。

地上世界、天上世界がカイン・アベルに分かれたものが、初めて兄弟の因縁、真の父母の愛、真の血統の因縁によって一つになることができるので、同じ祝福を中心として死んでも共に死に、生きても共に生きようというのです。ですから、死なんとする者は生き、生きんとする者は？　（死ぬ）。違います。真の父母がいる時は、生きようとする者は生きるのです。真の父母に従って生きようとする者は生きるのであり、真の父母がいないた

めに、すべてを反対にしなければならなかったのです。

逆説的に死のうとすることなしに、真の父母の行く道を、侍ることのできる位置を探すことができないのです。霊界も解放であり、地上も解放です。アダムとエバの歴史始まって以来、神様の胸に打ち込まれた大きな釘を抜く者がいなかったのです。そして、歴史時代の善の先祖たちがみな血を流してきました。彼らの恨を解くことができなかったのです。

先生が八十歳を越えれば天地が合徳する時代です。先生が八十歳まで一代ですべてのことを、霊界を完全に解放するのです。地上天上、夫妻なら夫妻、家庭が天国に入るのです。夫婦で天国に入るべきであって、一人では入れません。地獄の門、天国の門をすべて開いておいたのです。すべて回りながら上がっていくのです。自分の先祖が列をつくって見張りになり、案内してくれるのです。

昔はサタンたちが自分の欲望を中心として穴を掘っておき、千年万年行けないようにしたのです。使いをさせていたのです。今それをすべて撤廃してしまいました。うそのようでしょう。そのようになるのです。見ていてください。なぜですか。霊界の事実がすべてどのようになっているかよく知っているためです。それをしなければ後代に行って引っ掛かるのです。

二) 真の祝福の天宙化、霊界・肉界平準化

真の祝福天宙化とその次が何ですか。サタンの血統根絶です！　根を切るのです。偽りの結婚をして地獄へ行ったので、真の父母が結婚で正さなければならないのです。ですから、霊界の天使長が地上にいるエバを愛して堕落させたことを蕩減復帰するためには、霊界にある家庭的天使長の立場が地上に来て、地上にいるアダムとエバの家庭と同じなので、アダム家庭を再編成するところにおいて開拓者になるのです。そのようにすることによって、この家庭が皆さんの家庭の周辺に来てサタン追放運動をするのです。これが原理観により、きちんと理論的に整理されるのです。

これからどのようなことが残っているのかといえば、地上において霊界の人たちと愛し合うことができる愛の門が開く時になったというのです。夫が死んでいったとしても、地上で共に暮らすのです。今そのように暮らす家庭もあるのです。それで、今回統一教会に通うことに反対されていた人たちを中心として、反対した自分の夫を許し祝福してあげたのです。祝福しただけでなく、私がアメリカに行く前に、四億組祝福を行う前に霊的な祝福をしてあげた人たちは、実体の三日儀式までするようにしたのです。

三日儀式までして霊界に本格的な家庭出動命令を下したがゆえに、残りは何ですか。今まで結婚できずに死んだ哀魂を中心として、霊界で大きくなって結婚を待つ数千億の霊がいるので、この門を開けてあげ、四億双の四倍である十六億双を結婚させてあげました。

先生がそうです。私がみ旨の道で誇ろう思ったことは一度もありません。私が世界的にしたことは多いのですが、まだすることも多いというのです。霊界が残りました。地上でしたならば地上で整備して逝かなければならないのです。それで、今回一人暮らして結婚せずに死んだ男女、父母の愛を受けたが地上

で嫁をもらえず、嫁ぐこともできなかった人を……。

また、生まれてすぐ死んだ赤ん坊たちです。赤ん坊たちが霊界で成長するのです。そのままではありません。母が泣いたりわめいたりして思ってあげることにより、その心が大きくするのです。父母が子女の死んだことを悲しむのは悪いことではありません。知ってみれば死んだ相対が霊界で大きくなるのです。夫が死んだと妻が気にして悲しく考えれば、その恩恵を受けるのです。

地上で生まれたすべての人間たちで、真の父母を通じて生まれた人は一人もいません。真の母、真の父、真の父母の血統を受けないで生まれた者は、天国に入る道がないのです。神様の創造理想によると、真の父母の血統を受け継いで、真の父母に天上天国、地上天国の王権の主人として仕え、親族圏内で愛を中心として真の御父母様と共に暮らし自分も結婚して後孫を残し、そのまま移る所が天国です。ですから皇族圏の愛を中心として、体恤的な経験をもたない人は、天国に入ることができないのです。明らかだというのです。

私は私の責任を果たしました。何かやることがあるでしょうか。霊界まで統一圏によって祝福してあげて怨讐まで生かしたので、サタンが私の前で讒訴できる何らの条件もないのに、何をもっとするのでしょうか。今では蕩減がありません。

霊界に水平をつくっておかなければなりません。今まで地上に来て霊界に行った人々はどんな人たちですか。自分勝手に愛の関係を交わして生きた人たちです。浮気をし、男性も女性も自分勝手に生きた人たちです。女性も姦婦たちが多いでしょう。浮気をしてです。そのようにして地獄に行くのです。地獄のどん底に行くのです。

最近では法的な契約夫婦がいます。それは知っていますか。彼らは赤ん坊を生むことを嫌います。家庭をもつことを嫌うのです。天使長時代にはそうなのです。赤ん坊のいない人が父母の愛を知っていますか。子女を愛することができますか。契約では永遠に愛することができないのです。これは流れ者です。霊界に行けば流れ者になります。定着できる根拠がありません。このような者たちも先生を通して結婚させてあげればどれほど喜ぶでしょうか。

霊界は何ですか。霊界は天使長世界であり、地上はアダム世界です。息子の世界と僕の世界は違うのです。では、霊界が一生懸命しなければなりませんか、この地上が一生懸命しなければなりませんか。そうするためには、この地上の四万双というものが……。今私たち祝福家庭が四万双出てきているのです。四万と五千組ほどになるのです。いや、四億を越えるのです。それゆえに一つの家庭で一双ずつだけ未婚の男女を駆り出せばよいということなのです。

そのためには霊界も同じです。霊界にいる霊人たちはみなアダムの後孫ですが、堕落することによって天使長の血統が霊界に行っているのです。これはあってはならない事実なのです。カイン形態が広がった霊界をそのままにしておいてはなりません。すべて祝福してあげなければならないのです。祝福をしてあげて、これがすべて水平にならなければなりません。それゆえに、結婚できずに死んだ

霊たちをすべて集めて祝福させたのです。また、生まれて赤ん坊のうちに死んだ霊たちが育つというのです。十六歳以上で、結婚もすることができなくて霊界に行った人々を、すべて祝福してあげるのです。それは全部で数千億にはなることでしょう。それで、祝福を今しているのです。すべて。

潮水が出ていく時は悪いものが出ていきます。入ってくる時は一番後に出ていったものが先に入るのです。蕩減復帰するので同じ水、同じ月を見れば、中間に立ち、この二つが入ってきて一つになる時、そこにぴたっと合うというのです。歴史的にこれが、ぴたっと一代で水平になる時、プラス・マイナスのように祝福してあげることによって、サタンを完全に追放することができるのです。偽りの父母は追い出し、真の父母と一つになるのです。それをしたがゆえに地獄を撤廃し、霊界にいる先祖を結婚させてあげるということが起こるのです。

今数億、数百億、数千億が結婚するのです。霊界を天国にリードするのが私たちの先祖です。地上で後孫はお父様の位置、息子の位置を、縦的に真の愛を中心として一つにするのです。東洋と西洋を連結させることができる始点が、真の愛を中心とした家庭基盤です。

祝福とは神様の真の生命の血統が連結され得る基盤を相続することです。祝福を通し神様の血統を相続した人が霊界や肉界にいるために、神様が思いのままに主管することができるのです。ですから、神様の思いのままに再創造、復帰歴史を今でも蕩減条件なく全権をもって押し出すのです。ですから、皆さんがそのような信念をもった相対的立場に立つか立たないかということが問題なのです。決心のされたそのような絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準と一つになる時には、一遍にすべてのものが水平世界に線を引くことができるというのです。

父を愛の主人にしてあげるのは息子であり、夫を愛の主人にしてあげるのは妻であり、お兄さんを愛の主人にしてあげるのは弟なのです。反対に子女に父母がいなければ、妻に夫がいなければ、お兄さんに弟がいなければ各々愛の主人の位置を見いだせないのです。真の愛の主人になるには、相対を自分よりも敬い、「ため」に生きなければならないのです。ですから、個人では心と体の一体、家庭では夫婦一体、兄弟一体、国家一体圏を形成して、八段階の理想モデルである愛の圏を完成するのです。

すなわち、腹中時代、乳児時代、兄弟時代、思春期時代（婚約時代）、夫婦時代、父母時代、真の祖父母時代、真の王と王妃の時代を経て、永遠に変わらない真の愛の伝統を立てて、父子関係である真の愛のモデルが完成するのです。そして父母と子女、夫婦、そして兄弟（姉妹）、国家などがすべてこのような真の愛を中心として、八段階のモデルである主人になることを願う所が、私たちの理想家庭と国家です。ここで永遠な世界的平準化が始まることにより、地上天国が出発するのであり、また天上天国も自動的になされるのです。

三) 地上・天上地獄、真の愛による解放

地上世界と天上世界の地獄まで平準化させなければなりません。その道を開拓し平和の天国基地まで、地獄の門を打破してしまって

天国の門を開門することができなければならないのです。神様が自由自在に往来できるようにしなければならないのです。地上世界と霊界どこでも……。地獄という恨のその敷居は、神様にはいらないというのです。それをみな押し倒しておかなければなりません。それを誰が知っていますか。では、文総裁がしたことは何ですか。個人的門を、地上世界と天上世界の地獄までふさがっていたものを「キック！」して壊してしまったのです。ですから、ハイウェイを築いておかなければなりません。平準化させなければならないのです。

それは地上だけではありません。霊界をすべて平準化しなければならないのです。それで、家庭的平準化、氏族的平準化、民族的平準化、国家的平準化、世界的平準化、天宙的平準化ができなければなりません。それは何によってできますか。男性と女性の家庭形成によってできるようになっています。

今、祝福が可能なのでいくらでも祝福するのです。一人も残さず、すべて祝福してあげなければなりません。先生が行く前に、霊界では祝福しない人々がいないようにしなければなりません。祝福がなかったものが生じるようになったのです。地上でも天上世界でも、先生が逝く前に祝福を受けた人が霊界でも地上でもぎっしりいっぱいにならなければなりません。そうでなくては、今までアダムがばらまいた堕落のすべての血統が根絶されないというのです。

それゆえに今年の標語が何ですか。「真の祝福天宙化とサタンの血統根絶」です。完全に霊界を祝福してあげなければならないのです。先生が逝く前にそれを残しておいてはいけないのです。逝く前に、霊界をすべてクリーンにしなければならないのです。サタンを根絶することを考えていますか。先生が霊界を既に整備しました。皆さんは分かりませんが、すべてそういうことをしているのです。霊界をすべて祝福してあげ、先祖を解怨し祝福できるペースに入り、赤ん坊で死んだり結婚できなくて霊界に行った人々をすべて解怨してあげることにより、祝福圏内にみな入るのです。このようにしてサタンの根を根絶するのです。

それで、肉界で三日儀式をするのと同じように、私が二十日前、ここに帰ってくる前に、霊界の霊人たちにも三日儀式ができるということを、すべて指示したのです。それは複雑です。地上のことと同じです。ここで青少年を中心として結婚するので、霊界でも未婚男女を中心として同じ立場で祝福してあげるのです。

今赤ん坊たち以上のすべての人々を祝福してあげたので、全霊界が来て……。祝福とは「原理」で見れば何ですか。人間の責任分担です。責任分担が何かというと祝福を受けることです。人間の責任分担を果たしたなら、神様の息子として完成の立場に立つのです。天使世界を支配できる圏内に立つというのです。それゆえに、祝福の因縁をもったということは、既に戸籍が違うのです。韓国人もアメリカの市民権を得ればアメリカの法に統治されるのと同じです。今そのような世界にはなっていないのです。

それをえり分けるためには、天地を中心として平準化させ、個人の長孫、氏族の長孫、これを反対にひっくり返すのです。個人長孫圏、氏族長孫圏、民族長孫圏、国家長孫圏、世界長孫圏、天宙長孫圏、霊界がそのように

なっています。反対に今、先生が合わせていくのです。

愛の道は分けることができないというのです。水平です。愛は水平なので、息子が逝ったからといってなくなりません。霊界に行って水平的な相対圏をもって育つというのです。ですから、赤ん坊たちが生まれてから死んでも、霊界で育っているというのです。それを知らないでしょう。私たち統一教会は知らなければなりません。

それゆえに、今後霊界に行った子供たちが堕落せずにいれば、再び来て生活するのです。霊界と祝福した人々の三日儀式まで許したので、これから統一教会を信じて逝った人は、夫でも妻でも地上に来て共に暮らせます。四十九歳を越えたならば、慰労祝福をしてあげるなというのです。今までそうなっていないのです。慰労祝福をしました。四十九日という言葉があるでしょう。それで、今からは五十歳前の人々からは、慰安祝福もしてあげるなというのです。なぜですか。霊人祝福してあげた人々にも三日儀式を許したからです。

再臨主は条件的な蕩減復帰ではなく実体蕩減復帰です。そのような闘いを経てきたので……。この世で勝利するためには、霊界で闘うのと同じようにそれを中心として、すべて実体圏を蕩減復帰していかなければならないのです。それが今まで、キリスト教文化圏で一つになって先生を信奉すべき理由でした。キリスト教が信奉したならば、そのような迫害もされなかったのです。すぐに天が立てた何人かを探して復帰したはずなのです。新婦は一人です。霊的な複雑な内容を中心として、ハンダづけができませんでした。そのような式を踏まえなければ、今後国家基準を越えるために全世界的にそれを再びしなければならないのです。

祝福は教会祝福、国家祝福、世界祝福です。これを受けることができずに霊界に行けば引っ掛かるので、受けなければならないというのです。これを受けるためには千年万年かかるかもしれません。受けることができなければ、皆さんが霊界に入っても活動をすることができず、すべて待合所で待たなければならないのです。ですから、地上がどれほど貴いかということを知らなければなりません。

それゆえにおじいさんの立場が孫の立場になり、父の立場が息子の立場になり、息子の立場が父の立場になって、逆さまになるというのです。ですから、再臨主を軸としてアダムが第一の父、イエス様が第二の父、再臨主が第三の父になるのです。今、再臨主が、第一の父、第二の父の失敗を蕩減して完成圏に上ることによって……。この三人の子女の息子、娘がこの世だけに生きているのではなく、霊界でも生きているのです。

先生がこの世にいるので皆さんは先生を見つめていきますが、先生が霊界に行ったあとはどうしますか。今後、後代の統一教会はどこへ行くでしょう。後代の統一教会は先生の過ぎし日の歴史をそのままついてこようとするでしょう。ヤコブが行った道をイスラエルの一族が行かなければならないし、モーセが行った道をイスラエルの国が行かなければなりません。イエス様が行った道をキリスト教が行かなければならなかったように、今日、統一教会において文先生が行った道を統一教会の食口たちが行かなければなりません。行かなければならないというのです。行かなけ

れば渡り鳥と同じように、大洋を渡り南極と北極を通じさせることができないのです。飛んで行かなければなりません。

今回もすべて婚約をしてあげるのに、写真を送った女性を、私は一度も見ることができませんでした。婚約をしてみると女性が足りないのです。女性が足らないので、日本の女性一千名の写真が貼ってあるアルバムの中から選んであげたのです。そして「君の夫です」と渡してあげるのです。かといって日本の女性は「見ることもせず婚約する法がどこにあるか」とは言わないのです。その写真について行って暮らしているのです。それがどれほど素晴らしいことでしょうか。ですから、統一教会は世界を正すことができるのです、世界を！　それが偉大なのです。また、そして、皆さんが先生を通し……。

先生のような人がいつもこの地に来るわけではありません。過去にもなかったし、未来にもないのです。過去にもなかったし未来にもあり得ないのです。ただ、今日先生が在世している時、先生が地上に暮らしているこの時しかないのです。その方を通し、皆さんが結婚したという事実を考えてみてください。霊界に行けばそれを売りものにするのです。「私は先生に祝福された」と。

地上で自分の愛する妻が今霊界に行くようになれば、みんな別れていくのです。今までは別れて行きました。霊界に行けば霊界の基準に合う度数に従って入っていくのです。霊界にさっと入っていけば、ビデオのようなボタンだけ押すと、自分がどのようにしたのかすべて出てくるのです。すべて記録されているのです。そして、「何番です！」と言えば、何番かに自分を連れていく人が来ていて、そこに行くのです。家庭に十人がいても心霊基準が違うために、みんな別れなければなりません。会うことができないのです。今それが解放されるのです。分かりましたか。

地上に愛する人がいれば、また霊界に行っている愛する人がいれば、その人を祝福してあげることができるのです。大母様もそうで大兄様もそのように祝福してあげたのです。忠母様も祝福してあげました。霊界の人を祝福してあげたのです。その門が開くのです。そうしてこそ地獄の解放が可能です。それでこそエデンの園の堕落しない本然の世界、天国に入っていく一方的な通行として、天国編成を完成したということのできる基準を、地上で分かれたすべての個人、家庭を広げて世界的に編成するというのです。これを一時でもって合わせることにより、地上・天上天国の統一圏が広がり、神様が解放を受けることのできる時代が来たのです。

真の御父母様は実体世界において、超民族的な祝福の因縁を中心として祝福をしています。これが連結されることにより、地上で個人解放、家庭解放、氏族解放、民族解放、国家の解放圏がなされます。その解放圏は霊界でなされるのではありません。このような天国の愛の国、天宙の愛の国まで連結させることのできる基盤が地上にあるので、真の父母を中心としたすべての霊界と肉界が一つになって、統括的な面において総清算をし、個人祝福、家庭祝福、氏族祝福、民族祝福、国家祝福、世界祝福、天宙まで祝福の完成をなさなければなりません。

それで、霊界と肉界の祝福家庭一体化圏が展開することによって、堕落しないアダムを

中心とした天国理念の基盤が、歴史始まって以来のすべての家庭を中心として、同一的な価値の立場で成立して地上天国と天上天国が顕現するところに神様が臨在するのです。神様は縦的な父母であり、真の父母は地上を平準化できる横的な父母です。ですから、「七・八節」を中心として天地父母天宙安息圏を宣布して新しい時代が出発し、「九・九節」を中心として完全に越えていかなければならないのです。

皆さんが今、「九・九節」を中心として「総蕩減献金」をしなければなりません。「総蕩減献金」は何をするかと言えば、怨恨と解放式です。解放式をしなければなりません。神様の怨恨を解いてさしあげ、解放をしてさしあげなければなりません。のみならず天宙を解放し、皆さんを解放させることができるのが「総蕩減献金」だということを知らなければなりません。

今解放時代を迎えたということを考える時、この地球を中心とした宇宙が、どれほど称賛しているか知れないのです。どれほどきょうを喜んでいるか知れないのです。それで、今年に入って今日まで祝いの雰囲気一色になったと見るのです。

今、私たちがしようとするすべてのことに、天運が付いて回りながら手助けをするのです。天運に追いつこうと苦労しますが、天運が私たちのあとを付いて回りながら助けるというのです。どういうことかと言うと、神様と霊界が数多くの先祖と数多くの善なる人々を動員し、この地を助けることのできる時が来たというのです。解放圏をなすことができ、変革できる時代が来たというのです。

今からは皆さんの家庭が理想的家庭になって、父母様と神様に直接侍り、父母様の身代わりにならなければなりません。皆さんは旧約時代、新約時代に来たメシヤ、新約時代を越えて成約時代に来たメシヤ、一次アダム、二次アダム、三次アダムの代身家庭になることにより、神様に侍るようになって、万民が天国に直行できるようになるのです。そのようになることで、第四次アダム圏解放祝福時代に入るのです。

万国に聖酒を配布しなければなりません。聖酒を飲ませて生き返るでしょう。堕落圏解放が加重されるのです。万物にまで飲ませてあげなければならないのです。すべて神側へ帰っていかなければならないのです。

ですから、今から全世界、地球星に聖酒を配布しながら祈祷するのです。父母様が祈祷することがどれほど怖いかということを知らなければなりません。

四) 天国入籍と祝福家庭の霊界

① 入籍をするためには

今まで天の国に入籍がありませんでした。天国に国がありませんでした。家庭もなく国もなかったのです。霊界に行けば、父母であれ何であれ、十人家族であれば十人家族がみな別れてしまいました。しかしこれからはそうではありません。本来堕落しなければ父母と一族が共に入っていくようになっているのが天国だということを知らなければなりません。

真の愛を中心として、祖父から父母、自分たち夫婦、息子、娘が一つになって、「ため」に生きる神様の真の愛をもつようになれ

ば、そこには神様も絶対服従するのです。そのような愛の伝統に服従しながら、「ため」に生きる愛だけをもって動くその世界、「ため」に生きようとするその世界には、平和の基地が生まれまいとしても生まれざるを得ないというのです。

真の父母を中心として入籍する人が今後先祖になるのです。あの世の先祖になってそれがすべて主流氏族を中心として、主流民族を中心として、そこに傍系になるすべての人を中心としてこれを編成するようになっているのです。

ですから入籍しなければなりません。入籍はそのままするようにはなっていません。百六十家庭、あるいは百八十家庭を完了しなければならないのです。これをすることができなかった人は脱落するのです。三十六家庭であってもそれを主張する時代は過ぎ去るのです。平等化時代に入ったので、ここではその数に誰が先に至るかが問題なのです。統一教会でその氏族が多ければ恩恵を受けるのです。

血統が変わったがゆえに、血統を転換しなければ神の国に連結されて入籍できないのです。血統の主人は神様でいらっしゃいます。堕落の血統を受け継いで、すべて盗んで神様の所有権をめちゃくちゃにしてしまったので、神様の愛により血統を連結することによって、これが整理されます。それゆえに血統転換をしなければなりません。堕落の愛の関係によって血が異なってしまったのです。血統が逆さまになったので、血統転換しなければ神様のもとに帰る道がないのです。

祝福の日も教会の祝福、国の祝福がなければなりません。世界の祝福、天国へ行って永遠な祝福の礼式を経てこそ、本然の世界に帰ることのできる道があるということを知らなければなりません。皆さん、統一教会の祝福を受けたといって、「簡単に、便宜的に、さっと先生に分からずに祝福を受けた」と言っても通じません。国の祝福を経なければなりません。そこでは経歴がすべて出るのです。それから世界祝福を経なければなりません。それで、天上に行って大入会式とともに入籍式を経て、十二支派の編成を終えて、神様を中心として真の父母があの世に行ってお座りになってこそ、場を定めて座られてこそ、すべての万民は順次に場を定めて座るようになるということを知らないでしょう。

血統転換、所有権転換、心情圏転換です。心情圏が氏族です。これを転換しなければなりません。ですから、氏族を復帰しなければなりません。イエス様は国を復帰するために来ましたが、入籍できませんでした。戸籍を作っておくことができませんでした。それを蕩減復帰しなければなりません。

それゆえに、統一教会では結婚しても三十三歳が過ぎる前には生活できませんでした。次には三十歳です。イエス様が出家する前の三十歳から生活する立場になりました。南北が統一される日には、そのような受難の道をすべて越えるのです。ですから、統一教会の祝福は教会祝福、南北統一時代祝福、世界統一時代祝福です。三大祝福を経てこそ解放の立場に進むことができるということを知らなければなりません。

国家がなければ入籍できないのです。教会には入籍できたのですが、国家に入籍できていないのです。南北統一をすることで入籍時代に入るようになるのです。その時が来るので、先生が「氏族メシヤを中心として百六十家庭を早く収拾しなさい」と言ったのです。そうなれば、南北統一がなされた場合には、先生が第一代として入籍して第一の先祖になり、それから誰が来るのかと言えば、百六十家庭を祝福した人が続くのです。先祖の順序が入籍によって違ってくるというのです。ここに千六百名を越える人が座って祝福を受けたとしても、千六百代の差が出るのです。

今後、十二支派を中心として世界がすべて入籍をしなければなりません。それをする時は皆さんの一生、統一教会に入ってきてから今までのすべてのことを一つ残らず記録しなければならないのです。ここの教会から何か一つ、ふろしき一つでも持っていけば、それをすべて記録しなければなりません。それが霊界に記録されたコンピューターの記録と合わない時、皆さんは入ることができないのです。

王族心情圏を中心としたそこには歓待だけであって、丘とか壁になるものは何もないのです。平地なのです。全体が歓迎し、万年の愛の世界が連結されるのです。そこの主人として立つのです。自分の一族がそのようになるというのです。一族がすべて集まったその霊界の価値をもって入籍し、天国に入っていくのです。入籍するでしょう。新しく入籍し天国に入れるように、清い解放の氏族長として、メシヤとして、父母として、自らが一族を引き寄せてあげましょう。

霊界に行ってみなさい、私の話が合っているかいないか。女性はすべて私に差し出せというのです。かといって売り飛ばしたりしません。天に入籍させるのです。それから息子、娘を入籍させれば、その夫も入籍できるのです。そのようにして本然的峠を越え、三十八度線を越えて、統一のみ旨の世界で家庭が再祝福を受けて、天国の堕落しない本然的基準で出発するようになるのです。そうすることによって、罪を犯さない天国の民を生んで、天国に直行できる道を行くのです。メシヤが必要ないその立場にまで道を築いてここに案内しようとするのに、ここで行動しなければ、それは滅びるのです。

入籍をしなければなりません。入籍のためにどこへ行こうというのですか。故郷の地へ帰らなければならない運命は避けられません。生前にできなければ、霊界に行って反対に億千万代をぐるぐる巡りながら、涙と嘆息とともに越えていくべき堕落圏の支配を逃れる道がないのです。ですから、そのために直行することを願い詳細に語りましたから、それを忘れず肝に銘じて勝利の天国の門を入っていくことのできる王権を受け継ぎ、このような相続を受け継ぐことのできる、天国と故郷の地の本籍を立てて入籍できる皆さんになるよう願うものです。そうしようという人は両手を挙げて宣誓しましょう。手を下ろさないでください。

② 統一圏霊界も中間霊界、監獄がある

地上で祝福を受けた夫婦は永遠の世界である霊界に行っても共にいるのです。この世の夫婦、息子、娘はいくらたくさんいても、霊

界に行けば散り散りになって別れるのです。別れて、みなどこに行ったのかも分からないというのです。会うのが大変なのです。相対的な関係がなければ会うこともできません。心霊状態の基準によって、すべて霊界で別れるというのです。それは途方もないことでしょう！　しかし今先生が言ったように、愛を中心として一つになればそのまま一族が霊界に入っていくのです。それは幸福なことですか、不幸なことですか。

霊界に行っても誰かが「地獄に行きなさい」と言うのではありません。自分が訪ねていくのです。自らの程度に合う所を訪ねていくのです。統一教会だけ考えても、すべて同じ圏に行くことが目的ですが、自分の心霊状態の基準によってとどまるのです。それで、祝福を受けた家庭はどのような面において違いますか。祝福を受けた家庭は離れようとしてもお互いに離れることはできません。霊界に行くようになった時、自分の妻が責任を果たせなかったなら、共同責任を負って夫が解怨してあげなければならないのです。妻が間違っても引っ掛かり、夫が間違っても引っ掛かり、息子、娘が間違っても引っ掛かるというのです。

天上世界の霊界に行けば、その階級によってとどまる所が決まります。そして、長い期間そこで教育を受けるのです。その世界は堕落圏ではありません。神様の原理圏です。一国家の国民が罪を犯しても、その国の民として罪を犯したのです。天国の民として天国の法に抵触したので、その法に従って処理を受けて、天国を侵害したすべてのものを、全体の前に手助けできる内容を提示することによって……。

これから天国に楽園が生じます。ここで待たなければならないというのです。天国に中間霊界が生まれるのです。天国に地獄が生まれたのです。監獄が生じるということを知らなければなりません。それを知ることによって、皆さんがどこに行くのかがはっきりと分かるのです。分かるようになっています。分かるようになっていますか、分からないようになっていますか。はっきり教えてあげるのです。

祝福されて編成したのに入れない人は、アダム家庭が堕落したのと同じです。霊界に入って何が生じるかと言えば、天の側の監獄が生じます。中間霊界が生まれるのです。祝福家庭の楽園が生じることを知らなければなりません。このごろ相軒氏の証言が代表となっていますが、そこでも罪を犯した人は名札を付けて行き来しなければなりません。角度が異なる分だけ、九〇度に合わないその度数の差に対して制裁を受けなければなりません。一切許されないのです。

強制的にでもひねり出すのです。角張ったものは削ってしまわなければなりません。それが駄目になった時は隔離しなければならないのです。北極へ、南極へと隔離するのです。そのような時が来るというのです。見ていてください。霊界がそのようになっています。

霊界に行った三十六家庭たちは霊界の栄えある所に行っているのです。李相軒氏が霊界の実相に対してすべてを話しませんでしたか。祝福を受けた三十六家庭は栄えある所にいるというのです。しかし、誤れば名札を付けて

行き来するというのです。そこに地獄が生じます。楽園があるのです。それが今後サタン世界が除去されれば……。天国は天国ですが、天国ではないというのです。中間霊界、霊界の監獄に閉じ込められているのです。地獄のような国が遠くにあるのではなく、一日生活圏にあるというのです。地上は時間圏内で生活するのですが、そこは一年を一単位にして生活するような理念をもって暮らすことができるのです。そのような差が生じるのです。

地獄にいるすべての人々も解放の恩恵を受け、家庭を備えると同時に息子、娘に再び会うことができ、孫をみな集めて天国の門に入っていく時は、堕落しないアダム家庭と同じ位置に至らなければならないというのです。ここはサタン世界圏から抜け出した世界、サタンの讒訴がない所なので復帰が早いのです。霊界で見れば、相軒氏が祝福家庭の最高の位置に行っていると言ったでしょう。この最高の位置がこれから生まれる霊界のモデルです。霊界のモデルだというのです。

天国があり、家庭的楽園が生じるのです。家庭的中間霊界が生まれ、家庭的地獄が生まれるというのです。皆さんが現在の暮らしの中で良心の影として残っているものが、白昼にすべて底までのぞき見ることができる時代なのです。そこでは弁明が通じないのです。そこにも監獄があるというでしょう。監獄があります。祝福家庭も霊界、天国に入っていって家庭が神様に近い所へ行き、父母様の近くに行くことのできる階層が生じたというのです。

四　真の御父母様の家庭と霊界役事

一) 興進様の霊界長子権成立

興進が霊界に行くことによって、地上と天で別れたアベルと天使が双子のように一つに結ばれるようになりました。その一つになった基盤の上に父母が出動するのです。これが、統一原理観です。

興進は息子格のアベルですが、その息子は真の父母の愛によって原理主管圏の蕩減条件を立てた基盤で霊界に行きました。サタン主管圏で勝利し、直接主管圏をなした立場で霊界に行ったのです。それゆえに、堕落以後初めて、完成した資格を備えた息子として天上世界に行ったという条件をもっているのです。本来堕落しなければ、霊界に行った人々が真の父母の心情圏を中心として原理結果主管圏と直接主管圏が一つになった家庭的基盤において、愛を中心とした主人や息子の資格をもつというのです。これをもたなければ天上世界に行けなくなっているのが原理です。

興進が逝く前に統一式をしたのです。このすべてのことを準備しておき、先生が医師に酸素マスクを取ることをＯＫしたのです。このように道をすべて築いておいて送ったのです。この世ならば、息子が死んでいくのにそうしているので、「狂った人だ」と言うことでしょう。天の前に捧げるのです。このような歴史時代の三角地帯において、人類と韓国と統一教会の輩たちと世界のために、また霊界のために捧げるのです。イエス様が昇天し再び来られるのと同様に、そのようなことが起こるのです。

それゆえに霊界で見るならば興進が再臨主です。霊界の救世主なのです。そのようになっているのです。真の父母から愛のメシヤとして送られたのが興進様だというのです、霊

界で見る時。その興進が地上の父母様を協助しているので、この地上に再臨時代と統一世界が展開されるのです。それで、二世が祝福される時が来たのです。分かりますか、何の話か。

統一式をしてあげるのにどのようにしますか。何でもつかまえて式をしてあげるのではないのです。生殖器を中心として式をしてあげるのです。愛のみ旨を成し遂げられずに逝ってしまう息子の前に、愛の統一式をしてあげてこそイエス様と直結され得るのです。お母様もすべては知らないのです。そのように死んでいく環境で統一式をしてあげることによって、悪魔たちが見つめる立場のすべてを越えるのです。息子が死ぬのが問題ではなく、泣くことが問題ではないのです。神様の愛する家庭がどうなっているのだと、皆が恨めしく思うそのような場面で、それをすべて退け、父として息子の行く道を収拾してあげなければならないのです。

興進を生きた祭物として送ったので、それが橋になったのです。それは愛を中心として家庭的背景を中心とした天上世界の橋なので、イエス様も興進君についていかなければならないのです。家庭の橋を経なければならないでしょう。初めてこの地上で真の父母の子女として、真の父母の愛を受けて、祭物の勝利者として天上世界に行ったのが、興進ただ一人であるので、天上の全権をもって統治できるのです。

興進君が青少年で逝くことによって、真の父母の愛を受けた後孫が行くことによって、興進君と霊界が一つになる立場に立つようになって、これが真の父母の家庭と連結されるのです。霊的世界の長男になるのです。お兄さんになるのです。それゆえに真の御父母様の愛の圏が霊界に移されるのです。それによって、地上と関係を結ぶことのできなかった霊界のキリスト教から始まって、すべての宗教が興進によってみな……。

イエスが興進をお兄さんとして侍らなければなりません。そうして連結されるのです。そして、地上再臨をすることによって、地上に霊的な後援が激しく押し寄せることによって、サタン世界は崩れ始めます。急進的に下降してしまうようになるというのです。堕落後に生じた霊界と肉界の境界線がすべて崩れるという話です。興進が逝くことによって、真の父母の愛の圏を中心として霊界と連結されるので、地上世界と天上世界の塀が崩れて交流できる時代に入ったのです。

この時代において直系の子女と養子圏がどのように交代するのでしょうか。ここで興進に重要な責任があるのです。この時が来る前に霊界を収拾してあげなければなりません。イエス様から今まで霊界に行ったすべての霊たちは真の父母と関係がなく、真の父母の血肉となんら関係がないのです。また真の父母の愛と関係を結ぶことができなかったというのです。ですから、あの世に行った人々は、みな未婚の男女と同じです。イエス様御自身もそうなのです。再び来て関係を結ばなければなりません。

興進君を結婚させたでしょう。霊界家庭総司令官という立場なので、結婚をしなければならないのです。その下にみなぶら下がっているのです。そして、霊界で大母様と忠母様

を中心として……。霊界に行けば大母様から祝福を受けなければなりません。多くの教派、イスラム教とかキリスト教などの宗教が一つになって……。大移動が始まるのです。この地で父母様を通じてこそ、それを中心として連結されるのです。そうするためには、孝子にならなければなりません。忠臣にならなければならず、聖人にならなければなりません。それが伝統だというのです。

今回、イエス様の家庭と興進の家庭を、一軒の家で過ごすことができるようにしてあげました。興進君とイエス様とは、一軒の家で生活しなければならないのです。イエス様に養子を託してあげなければなりません。これは天ができません。真の父母がしなければなりません。神様ができないことを真の父母がするというのです。神様が「アダムが名づけたとおりになるであろう」と、言ったでしょう。何の話か分かりますか。

先生が今、清平に行ってイエス様の家庭をよくしてあげ、興進君と兄弟の関係を結んであげて、キリスト教のすべての使徒を祝福してあげなければなりません。統一教会はアベルの立場であり、キリスト教がカインの立場だというのです。これをどのようにして一つにしますか。霊的な観点からでも肉的な観点からでもすべて一つにしなければなりません。

真の子女である興進君はアベルの立場です。長子の立場です。カイン側の長子はイエス様です。地上世界と霊界を連結し、統一教会とキリスト教世界を一度に祝福してあげるのです。また、白人も黒人もすべて祝福し、未来にはすべて混ざり合うのです。そうすれば、闘うことがないのです。アメリカの悩みの種である白人と黒人の問題を誰が解決しますか。その闘いを誰がやめさせることができますか。それはアメリカの誰もすることができません。どのような団体もできないのです。宗教圏もできません。ただレバレンド・ムーンだけが可能なのです。

キリスト教文化圏の長子権の国であるアメリカに発表したのです。興進君とイエス様が一つになって……。興進君は統一教会を中心とした父母様を中心として、キリスト教を中心としたイエス様を中心として、彼らが主体、対象の関係だというのです。これがカインです。反対してきたのが今からは統一教会に屈服することによって弟の立場に立ち、弟が兄の立場に立つというのです。弟の立場に立つには、興進君と統一教会が一つになった立場に立ったがゆえに……。

長子権とはアメリカだけではありません。父母様に侍ってから、統一教会に侍ってから、興進君に侍ってから、統一教会の食口たちのために侍ってから一つになったので、二人が一つになって長子になるのです。天上世界、地上世界の長子の立場に立ち、統一天下、地上天国完結、統一圏に越えていくのです！アーメン！

霊界では興進を迎える日が歴史始まって以来最もうれしい日です。興進は愛のメシヤとして霊界の門を開き、地上では標本的な殉教の道を開いたのです。ですから、統一教会員たちは興進を愛さなければならないのです。ですから、興進が長子圏の福を次子圏に相続してあげることができるというのです。サタンは相続してあげないようにしたのです。サタンは相続をしてあげないで自分が強奪する

のですが、長子圏の興進は地上で受けた福をすべて譲り渡すというのです。ですから連結できるのです。今までサタン世界は譲り渡そうとしませんでしたが、興進はどんどん譲り渡そうとするというのです。

霊界では興進がいるので、興進が垣根になって責任をもって教育をし、地上でできなかった恥ずかしさを逃れるために努力することを決心し、霊人たちが訓練を受けるのです。父母様は中身のない殻だけではないというのです。霊界を中心としたすべての実体的権限を中心としてやっているのです。それゆえに霊界を祝福できるのです。霊界に父母の実体圏があることによって、地上と霊界に統一的な祝福をして、祝福を受けた人々が天国に行くようになっているのです。天国は空いています。天国を満たすためには、地上で祝福がなされなければなりません。地上の祝福なしに天上に祝福があるということはあり得ないのです。

霊界でも今、教育体験館を立てようとしています。信仰世界、宗教世界の伝統を教えてあげ、その次には傍系である世の中の思想も教えなければなりません。「統一思想」を教えなければなりません。そのような教育部署をつくり……。霊界ですべて別れているために分からないのです。神様が自分の父母で、自分は愛する息子、娘となり、理想的家庭を成すという教育をしなければならないのです。

先生の家庭に今回、信春が生まれることによって、家族が四十人になりました。ぴたっと四十を満たしました。それで、信春です。信春とは何ですか。新しい「新」という字ではなく、信じる「信」という字です。信仰において統一教会に春が来るのです。今からは蕩減数で見ても、すべてのものを見てもそうだというのです。先生の家庭には今後、息子、娘がたくさん生まれることでしょう。孫たちがたくさん生まれることでしょう。

私たちの息子、娘は何人ですか。なぜ十二ですか。十三でしたね。惠進は生まれて八日目に逝ってしまったのです。今後、興進も養子をとってこのようになれば……。産児制限しなければなりませんか、してはなりませんか。サタン世界では産児制限をしなければなりませんが、私たち祝福を受けた者たちは産児制限をしてはいけないのです。汚れた体になって「私はこうであっては息子、娘を生むことができない」という時は、生んではいけないのです。

歴史的全体勝利圏を身代わりした真の父母の家庭がこのようになったのは、根まで浄化するための歴史を経てきたからです。惠進様はエデンの園の堕落した女性の血統を切ってしまって犠牲になったとすれば、喜進君は旧約時代です。すべて母が違います。それで、喜進君は旧約時代に該当し、興進は新約時代です。結婚できなかったのです。イエス様と全く同じなのです。結婚をしたので、地上で霊界と連結して、キリスト教の祝福を受けていない霊的な完成を広げてきた歴史に、肉的な完成のキリスト教の基盤を連結させるのです。家庭的な祝福が連結されるのです。

二) 先祖解怨式と清平役事

清平に行くのはなぜですか。自分自体において霊的に引っ掛かったことを清算しなけれ

ばならないし、自分の先祖をすべて解怨しなければなりません。検証を受けなければならないのです。興進君が行っています、興進君が霊界の最高の長子です。興進は誰の弟ですか。興進の兄が孝進でしょう。ところが、興進は孝進よりもお兄さんの立場にあります。興進が最高のお兄さんの立場にあるというのです。すべて王として侍らなければならないのです。

今は国家時代に入ったのです。焦点を合わせなければなりません。それで、霊界解放と祝福をするでしょう。百二十代まで祝福するつもりです。過去には四代です。四代であれば何親等ですか。八親等までいくのです。七代まですればもっと多くなるのです。数百家庭、たくさん栄えた家庭は数千家庭になるのです。四代祝福、それから七代祝福をするのです。七代やれば一族を越えるでしょう。その次には世界版図である百二十代です。清平でそのことをするために、すべての祝福家庭たちは競争して、自分の先祖をすべて解怨してあげなければならず、祝福の門を開けてあげなければならない責任があるということを知らなければなりません。

先祖解怨式をみなしましたか。七代を解放しなければなりません。七代が解放されれば百二十代まで、七代からどんどん上がっていき、百二十代までしなければなりません。その先祖を中心として解放すれば、分別して、一度に百二十代を祝福できるのです。それゆえに完全にすべて祝福を受けます。

では、地獄の門が壊れていきますか、壊れていきませんか。イエス様がいる楽園、その楽園だとか中間霊界は堕落ゆえに生まれました。霊界もペア・システムになっています。それをしなければ自分たちが霊界に行って困るというのです。霊界で引っ掛かれば駄目です。霊界を整理しておき、地上はいつでも霊界を通して解決しなければなりません。

自分の先祖、百二十代を解怨するために清平に行って修練しなさい。「四代を解怨しなさい」と言ったところ、清平で大騒ぎでしたが四代をしました。それから、「七代をしなさい」と言ったので七代をするのです。今回は「百二十代をしなさい」と言ったところ「ああ！」。「ああ」が何ですか。死にかねないことをしなさいというのです、霊界に行って。興進やおばあさんがそこにうつ伏せになり、霊界に行ってからは死ぬようなことをしなさいというのです。祭物になれというのです。それで、百二十代を解怨すればみな、興進やおばあさんが先祖を引っ張り出してくれるのです。

アダムが天国に入っていく時、中間霊界に夫婦たちが暮らし、地獄に行っている人たちの泣き声を聞けば、アダムの心は安らかでしょうか、安らかではないでしょうか。そのようなことは、あってはならないことではありませんか。原理がそうでしょう。ですから解放するのです。「四・四節」をコディアックで宣布しましたが、宇宙的な「四・四節」をプンタ・デル・エステで一月八日に宣布しました。

大母様以外に忠母様もいるのです。大兄様もいるのです。先生の一家の人たちは今、先生が命令すれば、どこに行ったとしても大母様がしていた仕事をすることができるのです。興進は大母様の教育を受けなくても大母様を

リードしています。先生の息子、娘がたくさんいて、孫まで合わせれば四十名以上になりますが、それを準備し、受け入れることのできる人々がいません。どうですか。関心ありますか、ありませんか。先生が冗談半分に言うから、全部そのように聞いているでしょう、この者たち！　深刻な話です。

孝南氏！　各州に清平のような修練所をつくらなければなりません。自分が六大州を二カ月に一回ずつ行って、巡回しながら支部をつくらなければなりません。一つの所に引っ張ってきていると費用が多くかかってしまいます。清平に行くのに費用がたくさんかかります。そのような必要はありません。六大州に支部をつくり、自分が一人で行って何千名も一度にできれば、費用も節約でき、神霊の役事も霊界を動員し、アフリカの人々も動員できるのです。

清平のような所を六大州につくり、その六大州につくったものを各国で立ち上げれば、均衡的な霊的教育の場が生まれるのです。そうすることができなければ、私が清平から追い出すのです。「清平ではこのくらいにして、誰かを代わりに立てて、あなたはヨーロッパへ行け」と言えば、興進君から大母様、忠母様が一緒に行って、三カ月だけすれば支部が生まれるのです。今後、霊界に通じる人がたくさん生じるのです。

五　ただ一つの願いが残っているとすれば

堕落した世界で迫害を受ければ受けるほど、より理想的な、より高い所に行くのです。霊界に行けば高貴な天国人になるのです。神様が見下ろして「これは私の愛する息子だ！」と言われるのです。その時は五官が神様の愛に酔うのです。全宇宙が頭を下げて称賛するのです。そのような世界が待っているのです。聖子が来るのを待っているのです。それが私たちの究極の目標です。分かりましたか。すっきりしましたか。

文総裁は闘いませんでした。最後まで耐えに耐え、また耐えて頭を下げて行ってみると、その道は、闘わずに最高の立場、神様の相続権を受けることのできる立場まで行くことのできる道だったというのです。そうしてみると、滅びずに、「滅びろ」と言う世の中の前に勝利の覇権を握って、国を越え、世界を越えて歓迎を受けることのできる環境をつくりました。地上世界と霊界まで平準化できるこのようなことをすべて終えたのです。アーメンです。アーメン！

私が韓国に対して血肉を削って奉仕した時代は過ぎたというのです。国家を中心として、時は来ているのです。私が立てた手本を見せてあげたならば、「先生以上に死ぬ前に仕事をして自らの生涯に残さなければならない」と言わなければなりません。これをしなくては、天上世界の父母様のあとをついていけないのです。

今や、相続権を受けたので、父母様の影のような姿でも、その国、その地で家庭周辺に影響を及ぼすことができなければならないのです。幹になれないなら枝にならなければならず、枝になれないなら葉にでもならなければならないという、木の存在に所属するのです。自らの霊界と接近できるというのです。

私が手に力を入れて夜に寝ると、これが固まるから、天が私の手を握って広げてくれます。そのようにするなといわれるのです。そうすれば、解けていくのです。そのような神様を信じて暮らす人にとって何が心配でしょう。統一教会の背後にはそのような奇跡がいくらでもあるのです。霊界に対して相軒氏が証したことは何でもないのです。私はそれを知っています。世の中は信じようとしませんが、私は一〇〇パーセント、一〇〇〇パーセント知っている人です。信じるのではなく、知っている人なのです。

人類はそのようなことを信じないので、天が支援しません。霊界に行けば、先生に対して有り難いと思うのです。李相軒氏も統一教会を信じて霊界に行けば苦労すると思ったのですが、最上の立場で仕事をしているというのです。驚くべき事実で、こうであるとは思わなかったというのです。かといって笑って過ごさないでください。深刻な問題です。それを信じることができなかったなら、そばに刀を刺しておき、うとうとすれば死ぬと決心して祈祷してみてください。そのような談判祈祷をしなければなりません。適当では駄目です。

先生はおかしな人です。一度しっかりと記憶すれば忘れてしまわないのです。それが心配なのです。何も知らないで、今……。何、痴呆？　八十になったのですが、まだそうなっていないのです。おじいさんでも賢くてはっきりとしたおじいさんです。コンピューターが私に来てあいさつをするおじいさんだと思えば間違いないのです。私の頭に入れれば永遠に忘れません。霊界まで行っても記憶するのです。地上で自分が誤ったことがあれば解かなければなりません。

先生は一九六〇年以後に、山に行ってハンティングをしたりします。国のためのすべての責任を全うするために、動物世界を経て水産事業まで、六三年から準備したのです。海を占領しなければならず、陸地を占領しなければなりません。それから占領する場合は祭事を捧げます。祭物を捧げてアベル的基盤に立ち、カインを愛したというそのような因縁を結ぶことができる人は、真の父母以外にはないのです。誰もできないのです。統一教会の食口たちはすることはできません。

偽りの父母によって分かれたすべてのものを、真の父母によって成さなければならないので、雨が降っても雪が降っても海を中心としてすべて……。その海で犠牲になったすべての霊人たち、地獄の、地上に生きて死んでいった霊人たちの霊界解放が展開されるでしょう。それと同じです。海で死んだ霊人たちをみな祝福してあげるのも、すべてそのためなのです。ですから、真の神様という言葉を主張したということが、どれほど深刻なことであったかを知らなければなりません。何の話か、分かりましたか。

皆さんのような、そのような闘いも知らない純潔な人たちの前に、王の座をすべて譲ってあげて、ふろしき包み一つもなしに気楽に霊界に行こうと思うのです。霊界も準備されているので地上でもっていくべき何かがありますか。もっと良い天国が願っているのに。

今は大体すべて終わりました。先生がすべて教えてあげました。複雑な世界で疲れ果て、

いじめられ、責められ、今ではそのようなことは嫌です。嫌いになるのです。ですから、静かな所で松一つを見て十年も生き、岩を見つめて十年を生き、このようにしながら霊界に行く準備をしなければならないのです。霊界の複雑なすべてのことを収拾しなければならないのではないですか。それは知っていますか。

先生は万人に道を開いてあげなければならないので、死刑囚とも友になり、窃盗犯と手錠を一緒にかけられ、共に御飯を食べながら彼らを慰労してあげました。この前はラスベガスにまで行って刑務所に収監されている人々のために祈祷してあげてきました。ニューヨークのニューヨーカー・ホテルを買ったのも、今後ニューヨークで一番のサタンの巣窟から掃討して新しく基盤を築こうとしたからです。

そこに行って、付き合ってあげ、慰労してあげなければなりません。それでこそ各界各層、サタン世界の滅びゆく人にまでも道を開き、道を築いてあげることができます。それとともに地上で道を築いてあげれば、霊界のふさがったものが開き、世界が一つになることができます。それゆえに超民族的に黒人も結婚させてあげ、白人も結婚させてあげ、白人にも家を買ってあげるし、黒人にも家を買ってあげます。このように先生は世界にないことをしている人です。

この国の扱いを考えれば悔しく思います。おじいさんが使って捨てた杖のように考えて、肥だめをつっつこうとする統一教会の群れがたくさんいます。どのようになるか霊界に行ってみてください。烈祖の審判台の前に、千年万年の恨を抱き痛哭の涙を止めることができない悲運が宿っていることを知らないでいるというのです。レバレンド・ムーンはそれを知っているためにここまで来ました。

気楽に寝る者は、誰かが夜に毒薬をばらまくかもしれません。これは千万年の道を汚すことです。ですから先生は生涯をかけ、針の座布団に座ったような気分で生きているのです。気楽に座ったこともなく寝ることもできないのです。横になって体を曲げて寝るのです。使命を果たす前には自らの肢体を天に向けることができないのです。先生はそのような生活をしています。皆さんはみんなネクタイを結んでいますが、私はこのように着ています。いつでも走っていくというのです。ですから誰よりも先に行くというのです。

家にいる時は靴下を脱ぎ捨てて裸足で過ごしています。できるだけ服を脱いで暮らすのです。なぜですか。そのようなことがすべて預金です。飢えた人のために与えるのです。それがくせになってしまい、靴下をはいただけで煩わしいのです。どこに行っても脱いでしまうのです。一生の間でいくらになるかを計算するのです。私が霊界に行けば、これが何千ドルになるならば、預金し、アフリカのかわいそうな人を生かしてあげなさいというのです。基金をつくっておいて逝こうとするのです。

本来、神様の創造理想とは何ですか。真の父母の名前を通して天国の王国と地上王国を成すのです。真の父母の名前をもたずに地上天国と天上天国は生じません。今日キリスト教徒たちに「イエス様が神様の愛する長子であり息子ですが、どうして天国に行っていな

くて楽園に行っているのですか」と尋ねてみると、返事ができないのです。天上天国と地上天国は真の父母の完成と愛の基盤を通じてのみ成されるというのです。霊界に行って王国を統一することが真の父母の使命であって、他の人の使命ではないのです。

先生は生涯の間、命を懸けて闘ってきました。世の中で苦しい仕事は避けることができますが、この仕事は避けることもできないのです。腕力や暴力をもってしてもできることではないのです。原理原則によってしなければ、四方から打ち込まれる矢を避けることができません。このような闘いは神様が天地を創造なさることよりも、もっと難しいことではないかとも思います。そのようなことをしながら、蕩減条件を立てて内的基盤を築いてきたとは、皆さんは夢にも思わなかったことでしょう。そのような基盤を土台として転換点をなしたというのは、「天宙的な勝利だ」と言うことができます。

文先生がこの道を探すために死の道を何百回も越えてきたことを、皆さんは知らなければなりません。神様を数百回も泣かせた人が文先生です。歴史始まって以来、誰も文先生くらい神様を愛した人がいないのです。それゆえに、いくら世の中が私をなくそうとしても、文先生は絶対滅びません。神様が保護してくださるからです。皆さんも文先生が教える真理圏内に入れば、神様が共に保護してくださいます。

新しい開拓精神で生きていけば年を取りません。私が性格のゆえに横になって死なないし、死ななければいつも動くのです。はってでも動き、そうやって見ればいばらの道でしょう。年を取って周辺の注目を浴びてお世話になりかねない、このような立場で生きるというのは、恥辱の中でもこのような恥辱はないのです。私たちは、霊界を知っているために、体を脱ぎ捨てればどれほど自由でしょうか。

今後は海、水を占領するというそのような主張、そのような思想をもてば世界を主管できます。水が一番重要なのです。それで、私が霊界に行く前に、大きい地域を中心として着手しておいて逝かなければならないのです。ですからせっせとみ言も多く語り、すべて語っておけば、後世の人たちがなすと考えています。

先生は性格的に、霊界に行って静かに玉座に座って命令できる先生にはなれません。レバレンド・ムーンが霊界へ行くようになれば、今まで霊界に行っているすべての人々が開拓することができなかった神様の心の世界、次元の高いその世界を、考えることもできなかった世界を、また開拓する勇士になることでしょう。

ある霊通人は、文先生が偽物か本物かと祈祷をしている途中で痛哭をするのです。我知らず痛哭するというのです。一日、二日、毎日痛哭するのです。彼らは不思議に思うのです。文先生を知るためには痛哭する心情を知らなければなりません。それを知らずして文先生が分からないのです。

誰かが私に対して一言だけ言えば、私が千年の恨を抱いて痛哭できる事情をもっていることを、誰が知っていますか。私が神様を知らなかったならそのように非難されはしない

のです。神様をあまりに知った罪で……。私だけを信じるしかない神様がどれほどかわいそうですか。二千年間誤った歴史を二十年間で蕩減復帰しなければならないのです。ですから易しいですか。言うことがたやすいですか。

私が霊界に行った時、最高の希望とは何でしょうか。私が慕い、私が愛した最高のクライマックスの時に考えたその心情圏内でお父様を呼んで、お父様の愛を受けたその基準を願うのです。涙で分かれたので痛哭したあとにすすり泣くその息子をつかんで、「お前の願いがこれではなかったのか」と、祝福のみ言を伝授されてこそ、永遠の勝利の真の父母の覇権が伝授されることを知っている人なのです。深刻です。その一日のために一生を捧げているのです。

霊界に行く時、神様の前にどういう贈り物をもって行くのか、それが先生の問題なのです。神様が願う国と世界のために働いたし、今後来る理想的な社会と理想的な世界を成すことのできる二世のために生きてきました。神様のように愛しました。それゆえに霊界に行っても不自然ではありません。そのままの延長です。ほかのことではありません。そのことをするのです。神様がそのことをしているので、私も神様に近い所へ行き、そのことを共にせざるを得ないという結論が出てくるのです。

ですから、お父様におかれても「私の国はお前の国だ」と言われるのです。なぜですか。「変わらない愛をもって、お前が私を知ったのちにも変わらなかった」、これが理由でしょう。「お前は私が愛する愛をもって変わらない立場で、台風が来て暴風が吹いても、監獄にほうり込まれ、どんなに蔑まれても、個人の反対、家庭の反対、社会の反対、国家の反対、世界の反対、全霊界の反対を受けても変わらないで、私のような不変の姿勢をもち、その愛と理想を追求したので、お前が成した国は私の国であり、お前が人類のために探したものは私の国に違いない」と言われるのです。

ただ一つの願いとは何でしょうか。私が霊界に入る時、神様が私にどのように対するかということが問題です。私がそのみ前に立つ時、神様が王座に座っていて、御自身でも知らずに矢のように駆け降りてきて、「御苦労だった」と抱き締めてキスをされながら「永遠の祝福がお前にあるよう祈る！」と言ってくださるその一日が願いです。そのことを地上に残さないでは死のうとしても死ぬことができないのが真の父母の事情であることを知らなければなりません。

家庭を救ったならば国家を救わなければならないし、国家を救ったならば世界を救わなければならないし、世界を救ったならば天宙を救わなければなりません。そののちには神様まで解放しなければならないのです。すべてのサタンまでも、神様までも解放しなければならないのです。そのような立場にはまだなっていないのです。その立場にまで行かなければならないのです。先生がそのような立場で仕事をすることができなければ、霊界に行って罪人の生活をしなければなりません。自己の責任を果たせなかったという恥ずかしさ、ですから冒険をしているのです。

霊界をすべて解放してあげるのです。解放してあげ、「私があなた方を解放させてあげたから私のために生きなさい」というのでは

ありません。「霊界では神様のために生き、私がつくった基盤の上で、世界のために生きなさい、生かしなさい」と言うのです。それが孝子の心であり、忠臣の心です。自分というものが中心になり得ないのです。

アダムが責任を果たさなかったことで地獄の谷間に入っていったのを、逆に立って、羞恥と謀略と恨の心情をもって再び生命の道を開拓しなければならない道がどれほど悲惨なものか、誰も知らないのです。神様だけは知っていることでしょう。霊界に通じる人が文総裁のことを誰であるか祈祷する時、痛哭でしか答えられないという天の心情を聞くたびに、私が「お父様、何でもありませんでした」と答えると、神様は感謝の涙をどれほど流されるだろうかと考えました。

そのような心情をもって出ていって、このようなことを宣布することによって、神様が捕らわれの身から解放されるのです。そしてそのことによって、私が霊界に帰る時、神様がアダムの千倍万倍の価値的存在として私を迎え、何千倍の喜びをもって私を歓迎したいと思われるような自らにいかになるかということが、先生の生涯の目標だったということを皆さんは知らなければなりません。

Book 七: 礼節と儀式
Etiquette and Ceremonies

第一章　神様に対して侍る礼法

一　神様に侍って生きるべし

一) 神様と人間は親子の関係

因縁の中でも標準となる因縁は、神様と人間の間に結ばれた親子の因縁です。この因縁から始まった心情は、どんな存在の権限にも曲げられない永遠で不変で唯一なものです。また、この心情の権限は絶対的なものです。それゆえこの権限をもって現れる時、すべての存在物はその前に頭を下げざるを得ませんし、この心情の権限をもって動かす時、全天下はついて動かなければなりません。これが宇宙の鉄則です。

神様が創造当時、理想として願った真なる愛、偉大な愛を中心として人間との愛の関係を結び、一つになり得る神人愛一体の家庭を成したならば、今日私たちは天国だ地獄だと心配することなく、ただそのまま天国に入るようになるのです。

父と息子が出会える最高の場所とはどこでしょうか。愛が交差する中心、生命が交差する中心、理想が交差するその中心で出会うのです。そのように見ると、愛と生命と理想が一つの場にあるというのです。

その場に行けば神様も愛であり、私も愛であり、神様も生命であり、私も生命であり、神様も理想であり、私も理想になるというのです。これを決定づけることのできる最初の因縁と最初の統一の場所が、親子関係が成される場でなければなりません。これは間違いのない事実です。

皆さん、父子一身という言葉はいったい何を中心として言う言葉ですか。これは愛を抜いてはいけません。愛と生命と血統が連結されています。この三つの要件が必要です。父子一身だと言う時、そこには必ず愛と生命と血統が連結されなければなりません。

言葉で結ばれる親子の関係、予約だけで結ばれる親子関係は必要ありません。心を尽くし、精誠を尽くして父のみ旨のために生き、骨肉が溶けるような苦痛の中でも耐えて勝利する時、私たちは神様と親子の関係を回復できます。

神様から愛を受けたがるその最高の立場とはどんな立場でしょうか。その立場はまさしく息子の立場であり、娘の立場です。神様には天情があり、私たち人間には人情があります。この人情と天情が互いに合わさることのできる帰着点は絶対者である神様も願い、人間も願うただ一つの場、すなわち一父母を中心とした息子、娘の立場で互いに愛を与え受けることのできる場です。

本来はアダムとエバが互いに最高に喜ぶ中で、最高の生命力が発揮され、最高の力が合わさり、全体の理想の力まで合わさった中で、愛の花が咲かなければなりません。それで花のように咲いて、その香りが全天下を覆っても余りあり、神様がその花を見つめて花の香りを味わいながら、自らそこに酔うことのできるそのような愛を、神様は夢見ていたのです。

アダムと神様が一つになって、互いに愛があふれる時、アダムは神様になることができます。アダムが愛によって神様と完全に一つになる時に、神様はアダムに臨まれます。聖書にも「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」（コリントⅠ三・一六）とあります。私たちが神様の聖殿です。

神様は皆さんの近くにおられ、誰より皆さん一人一人を心配しておられる方だということを知らなければなりません。この世では肉親の愛が一番大きいと思っていますが、神様の愛はそれよりもっと大きく深いのです。この世のどんな人間的な愛よりも深く大きいものであることを知らなければなりません。

このような神様の愛の懐に抱かれて、お父さんと呼ぶことのできる皆さんにならなければなりません。「お父様の悲しみを私は知っております」と言える立場で、神様の内的な心情を体恤する真の息子、娘にならなければなりません。そのような息子、娘となって、神様に侍る天国を所有するならば、その天国は誰も奪っていくことができません。

父子一身という愛の論理圏において、父の所有は息子の所有になるのです。夫の所有は妻の所有になるのです。愛を中心としては相続権が永遠に保障されるのです。真なる神様の愛の対象者として因縁を結んだ息子、娘においては神様の体も私の体であり、愛も私の愛であると同時に、造られたすべてのものも私のものになるのです。

ですから皆さんの中には、天下を占領しようという本性の欲心が残っているのです。これが神様の人間に共通に分配してくださった、宇宙を所有できる神様の息子、娘の権限を引き継がせるための贈り物だったというのです。

二) 一体となった生活をしなければならない

すべての宗教では見るものをむやみに見ないで、聞くものをむやみに聞かないで、言うことや対するのをむやみにするなと言います。見るのも、聞くのも、言うのも、感じるのも、愛するのも、すべてが神様を中心としてしなければならないのであって、自分を中心としてしてはいけないということです。

皆さんは神様に侍る者として、うれしい時に神様をどれほど喜ばせましたか。皆さんがおなかがすいた時に御飯を食べながら感じる有り難み以上に、神様に侍ってさしあげましたか。皆さんはいいものを食べる時や着る時、そして悲しい時や大変な時にも、いつも神様に侍らなければなりません。そうすることによって、神様の心に覚えられる理由を残さなければなりません。

私の意識と直感と感覚器官一切までも父のものであり、私が感じ意識する全体が父のものだという観が決定されなければなりません。そのようにならない限り、心情を通じて動く天を所有することができないということを、はっきり知らなければなりません。

人間は誰でも、心情的に神様と一つになるようになっています。お父さんである神様と子供の人間は、正に心情で連結されています。

私たちが話をし、見て、感じ、また感情的に体感する一切も、神様を中心として因縁をもったものでなければなりません。

私たちは神様に侍り、父母に侍って生きるのです。話をするときも、行動をするときも、寝ても覚めても侍る生活をしなければなりません。このようなコンセプト（概念）さえもてば、二十四時間サタンが侵犯することは全くありません。

朝、寝床から起きて初めの言葉を天の前に捧げ、家を出る時も、第一歩を右足から踏み出し、天の前に捧げなければなりません。平素の習慣がこのようになれば、皆さんの生活は侍義生活になり得るのです。このような観点で、皆さんは原則的な基準で生活態度を取っていかなければなりません。

私たちが朝起きて感じるすべての感覚、動作が一つの目的を中心として、いつも直線上に帰一できなければなりません。その点を喪失すれば、み旨と私とは関係を結べないということを否定できません。

天国は、侍る生活をしたことを誇るところです。それならその天国とは、どのような者が行くところでしょうか。主を信じて福を受けるために、福を先立てていく者が行くところではありません。天国は、侍るために心情的に準備する生活をした者たちが行くところです。準備する期間に死ぬとしても、侍る生活を残して喜んでいくことのできる者が行くところです。そこに復活があるのです。

今は三合（神様、真の父母、皆さん）が一致しなければなりません。歩調を合わせなければならないということです。生死の決定的内容がかかっているので、三者が一致する点で一つにならなければなりません。その点に生命の復活圏があります。その点が、真の父母と皆さんが一つになって一致できる連結点です。そこで一心統一が起こるのです。ですから皆さんは、み旨と一致した生活をしなければなりません。

一日二十四時間の生活圏内で私が見聞きしたすべてのことは、何のためでしょうか。神様のためです。神様のために見たり聞いたりしなければならないし、感じるのも神様のために感じなければなりません。私たちは地上で生活していますが、天上世界の生活と連結させて生活しなければなりません。

毎日のように慕わしく思えない人は、神様に侍ることはできません。皆さんは誰を慕うとしても、いつも慕わしさに浸っていなければなりません。しかし、夜十二時になると「では、寝よう」と言う人は神様を心配させる人です。心情の因縁を抱いて出る時、夜が問題ではないというのです。

本来神様と完全に一つになったのちには、私を中心として生き、私を中心として考え、私を中心として愛するのが原則です。その時は自分を中心として考え、自分を中心として愛しても、それは神様を中心とした考えにな

り、神様を中心として愛することになるのです。それが原則だというのです。

お父様である神様に出会うために、神様と因縁を結ぶために、どれほど精誠を尽くしたかということが自分の財産です。

皆さんは涙の谷間で父を呼ぶ時、応答を受けることのできる息子、娘にならなければなりません。涙を流す場で「お父様！」と言う時、「おお、私がここにいるから耐えなさい」と、血と汗を流す苦痛が染みる場で「お父様よ」と言う時、「私が忍耐したのだからお前も耐えなさい」と、死が迫りくるその瞬間にも、「私がいるから安心しなさい」という言葉を聞くことのできる皆さんにならなければなりません。そのような場でどれほど父に侍り、どれほど父と共に相談し、どれほど父と共に生きたのかということが問題になるのであって、栄光の場では父をいくら呼んでも問題にならないというのです。なぜならば、まだお父様が栄光の日を迎えておられないからです。

「ああ、おなかがすいた。ああ、御飯御飯御飯！」と言いますが、それは誰のために食べるというのですか。神様のために食べると、そうでなければなりません。どのようにすれば神様のために食べることになるのでしょうか。私が神様の完全な聖殿になったならば、「神様の聖殿である私がおなかがすけば、中におられる神様が御飯を食べようと言う」このように考えなさいというのです。分かりましたか。そのように御飯を食べれば、その御飯は聖なる御飯になるのです。御飯が御飯様になるのです。

二　侍る心構えと態度

一) 侍ることによって生活の天国化を成す

神様は妄想的で観念的な神様ではありません。抽象的な神様ではありません。生活的な主体性をもって、いつも私たちが生きている生活の主人として共におられるのです。侍られるだけではありません。共同的愛を中心として共同的な生活をしている神様です。夢のような話です。

神様を心の中に侍り、私たち人間が体の立場で完全に一つになることのできる起源をつくらずしては、この悪魔の世界を清算する道がありません。このような観点から見る時、侍る時代、侍義の救援時代だと見るのです。侍ることによって救われるのです。神様はあの空中に掛け離れている神様ではありません。私たちの生活圏内の主体者としての神様に侍らなければなりません。

皆さんは神様がいらっしゃることを一日に何回自覚しますか。二十四時間の中で何回神様がおられることを感じますか。「侍ることによって救いを受ける」と言う人たちが、二十四時間の中で一、二時間ぐらい侍っていていいでしょうか。空気よりも切迫して必要なのが神様です。水よりも切迫して必要なのが神様です。御飯よりももっと貴いのが神様です。ところで皆さんはそのように感じられますか。

これから皆さんが侍る生活をしなければなりません。今までの信仰生活は信仰によって救いを受けましたが、これからは侍ることによって救いを受けます。本来堕落しなかった

ならば、神様に侍ることによって私たちが行くべき道を歩むことができたのです。侍るには皆さんの生活と心で共に侍らなければなりません。

侍る生活をしなければなりません。願いの天国は迎えましたが、侍り実践しながら生活できる天国は迎えられませんでした。すなわち、生活的な主体の神様を知りませんでした。

私たちがこのように習い、聞き、侍る生活をするのは何のためですか。六千年間、人類があえいできた目的は何ですか。それは聖書に流れている神様の事情を知り、神様の心情を知るためです。民族や国家は言うまでもなく、個々人をおいても父母の心情をもって対し、傷つき、蹂躙され、排斥され、引き裂かれてこられた神様が私の父だということを知るためです。

成約時代は、愛の時代です。ですから結婚できるのです。今まで宗教時代には愛を許さなかったので、高次的な宗教は結婚を許さなかったということを知らなければなりません。

神様は宇宙の中心存在なのでその前に近く行けば千年、万年主管されてももっと主管されたいのです。神様を中心とした侍る道理がそのようになっているので、今日私たち人間もそのような立場で主管されればそれ以上の幸福はないという事実を、私たちは考えることすらできませんでした。

信仰の義であるとか、行いの義であるとか、侍る義を追求するのはなぜでしょうか。義でなければ善悪を分別できません。悪なる世界と善なる世界が分かれません。その善の中心点とは何でしょうか。神様です。神様が信じるのと同じように、神様が行うのと同じように、神様が侍るのと同じように、いつも神様が中心にならなければなりません。それはなぜそうでなければならないのでしょうか。サタンは神様のように義なる者に対しては、讒訴できないというのです。神様が信じ、神様が行い、神様が生活する、侍る環境に処していればサタンが干渉できません。サタン圏内にいてもその環境に神様のようにできる義なる基準が生じれば、サタンはそこから後退するのです。

行いの旧約時代が過ぎ去り、信仰の新約時代が過ぎ去り、侍る成約時代だけがあるのではありません。新約時代にも行いが必要で、成約時代にも信仰が必要で、侍る生活もみな必要だというのです。成約時代にも信仰が必要で、行いが必要で、みな必要です。それは蘇生、長成があって、長成の上に完成があるのと同じだというのです。それは切っても切れません。

統一教会では侍ることによって救われると言います。侍義、すなわち侍ることによって救いを受けるというのです。春夏秋冬、洋服を仕立てて着る男がいるならばお父さんにも仕立ててあげなければいけません。その方が体をもった方ではないので、代わりに精誠をためておいて、ある時が来ればその込められた精誠を、誰が見ていても見ていなくても自分一人、教会のために神様に侍る心で涙を流しながら献金箱に捧げれば、その精誠は契約の箱に積まれるのです。これが観念的ではな

く、感情的に体化され表現できる生活にならなければなりません。

侍る生活は、なぜしなければならないのでしょうか。それは神様の愛を受けるためのものです。

今までの信仰生活は信仰によって救いを得ましたが、これからは侍ることによって救いを得ます。本来堕落しなかったならば、神様に侍ることによって、私たちが行く道をみな行くのです。信じるといって、何を信じますか。侍って生活することによって、みんなできるのです。侍るには、皆さんの生活と心で共に侍らなければなりません。

今は個人なら個人として神様に侍る生活、家庭なら家庭として神様に侍る生活、教会なら教会として神様に侍る生活、あるいはこの民族を中心として、神様が要求される侍る基準を、どのように新しい伝統として設定するのかが問題になります。

統一教会時代は、御父母様の時代です。神様が地に臨むことができ、神様が来られることのできる道を磨くのです。それで、神様が来られることによって、侍ることによって救いを得るという言葉が成立するのです。歴史はそのように発展するのです。

侍る場に同参するためには、今まで悲しんでこられた神様を慰労してあげることができ、悲しい精誠の事情に同参することのできる内容を備えなければなりません。これを紹介し、それに伴う蕩減条件を神様の前に立てるために出てきたのが復帰原理です。

皆さんは侍る生活をしなければなりません。侍る生活はなぜしなければならないのでしょうか。神様の愛を受けるためだということを知らなければなりません。ですから神様に先に侍らなければなりません。神様に侍らなければならないというのです。

二) 法度に背けば怒られる

侍義というのは生活化天国時代を言います。それで侍義をもって出てきました。復帰歴史は何かと言えば、神様の創造理想を再現するのです。

神様に侍るには法度があります。その法度に背く時には神様は怒られるのです。

皆さんは生活の中で法度を守ることができなければなりません。天が要求する天国の法度を守り、また天国の法度を守ることができると同時に、天国生活をすることができなければなりません。そして天国生活をすることができると同時に、天国の愛によって一つにならなければなりません。

神様が喜ばれ、悲しまれることをいつも鑑別しながら生きる人は、悪い人になろうとしてもなれないし、天の法度に背こうとしても背くことができません。そのような男は、いくら美人が誘惑しても堕落しません。そこに同化されないというのです。

今日、家庭を脱皮する不幸な青年男女が多い原因は、どこにあるでしょうか。天倫の法度に一致した愛が喪失されたからです。それで家庭を中心に、神様にその家庭にお座りに

なっていただくことのできる天地父母が顕現しなければならないのです。

天理は順序を正しく守るところで成立します。ですから主体と対象の関係で天は絶対的な主体の立場に立たなければなりません。その主体を無視する人は対象になれません。絶対的な主体の前に絶対的な対象になろうとするので絶対的に一つです。ですから見て、聞いて、感じるすべてのことは、家庭に入り愛することまでも全部対象と主体の立場に立って、天のためにするのです。一切がそうなのです。そのような家庭は滅びません。

最後に残るものとは何でしょうか。神様プラス人間、神人、神人の生の道、神人生活観です。人生観も同じように神人人生観、神人世界観、それが漠然と神様に対し人が知ることのできる程度のところではなく、人が永遠に落ちようにも落ち得ないところです。なぜですか。神様と人は本来落ちることができないところから落ちたので、落ちることができなかったところより以上のところに到達しなければなりません。そのような立場で神人が一つになった生活的な舞台、世界的な舞台を要求して出ていかなければなりません。

勝利的な主管権を立てるために、神様と共に生きなければなりません。ですから皆さんは絶対的な信念をもって侍る生活を中心として、立体的な立場で生活していってこそ勝利的基台を成すことができるのです。復帰の道がそのようになっています。

主体のための対象の立場には、不平があり得ません。不平は妄動であり、破綻です。ですから信仰の道は不平を許さないのです。感謝のみでなければなりません。皆さんはそれを知らなければなりません。天はいつも主体としておられるので主体と共に相関した運命をもって、それを離脱する生活の法度、生活の形態はあり得ません。

三　真の御父母様が神様に仕える法

一) 至誠感天

心を尽くし、思いを尽くし、精誠を尽くせという言葉は何を意味しているのでしょうか。それは生命を捧げなさいということです。それ以上、何がありますか。心を尽くせというのは生命を差し出せという言葉です。思いを尽くせというのも、精誠を尽くせというのも、生命を差し出しなさいという言葉です。至誠なら感天という言葉があるでしょう。至誠の限界点、私の心の果てがどこでしょうか。生命を懸けて精誠を尽くせというのです。首を差し出し、死ぬ覚悟で精誠を尽くす人は、神様が知らないと言えないのです。

生命を差し出すにも無理やりするのではなく、狂うように喜んで差し出せというのです。どうせ生命を差し出すのに泣きながら差し出すことを神様が願われるでしょうか。でなければ喜んで狂うほど、死んでもいいと踊りながら差し出すのを好まれるでしょうか。どちらでしょうか。

先生が床に伏して祈祷する時は涙が乾きませんでした。ここ（膝）にたこができました。「精誠を尽くした塔は倒れない」という言葉があるではないですか。神様のために精誠を尽くさなければなりません。神様が慕わしく

て狂うほど胸が張り裂けそうな境地にまで入らなければなりません。神様がおられるところが地上ならば一日に千回行ったり来たりしたい気持ちがありますが、そのような地上ではないので、仕方なく先生を送ったのです。

そのような何かがあるので、皆さんが先生を愛さずにはいられないようになっているのです。どうしてわけもなくそんなに情が移りますか。涙を流し祈祷する時、真冬に綿入りのズボンを涙でびしょぬれにしたことがありました。どれほど気が遠くなりそうだったか考えてみてください。ナイフを立てておいて談判祈祷をしたのは、一度や二度ではありませんでした。

皆さん、ここにダイヤモンド鉱があるとしましょう。自分だけが知っている、そんなところがあればどうなるでしょうか。それのために自分の家庭も売らなければならない場合が起こるでしょう。妻を売って多くの家庭を救うならば罪ではありません。自分の子供を売って国の多くの息子、娘を救うならば、それも罪ではありません。しかし自分の欲心のために売ってはいけません。

その鉱山が、国と民族を生かすことのできる道であり、世界万邦の人間たちが生きることのできる道だという時は、自分の妻と子供を売ったとしても歴史の罪になるのではありません。国を生かすために、世界を生かすために、妻や子供を売るのはいけないことのようですが、かえって世界が褒めたたえることのできる宝の根源が宿ることができるのです。

御飯を食べても水を飲んでも、座っても立っても、誰に対しても、父母の前に、天の前にすべての心情を見せることができれば満点です。知識や学識があるからできるのではありません。神様の前に「私、誰々博士です」と言って生きますか。それは必要ありません。ですから神様の愛を私がどのように導くことができますか。ただ一つの道は「至誠なら感天」、これ以外にありません。

先生の一生のモットーは「神様の代弁人」でした。今日、皆さんは天的な代弁人になってくれることをお願いします。そして神様の代弁者になり、神様の代わりの存在になり、さらには神様の代死者になってくれることを願います。

とてつもない歴史的終末時代に、誰も信任できない孤独なところにおられる神様の前に私たちが信任の対象になれるならば、それ以上願うことがありますか。死んでもいいというのです。私の肉身が水となって流れていったとしても何の恨があるでしょうか。粉となり飛んでいったとしても何の恨があるかというのです。この世には、豚のように死んでいく無価値な人生がいくらでもあるのです。死んだ者は犬もくわないのです。

不平を言ってはいけません。不満を抱いてはいけません。自分を考えてはいけません。神様を思いながら「私が不平を言えば神様がどんなに痛いだろうか。その方の事情を私が知り、その方の伝統を相続することのできる一瞬が私の前に訪れたらそれを引き継いで、その方についていきながらその方を慰労しようという心をもつのです。そうしながら涙を流すその場に天が共におられるのです。間違いありません。神様のために泣き、御父母様

のために泣かなければなりません。これが統一教会の祭壇であり、統一教会の侍る生活だということを皆さんは知らなければなりません。

神様の愛と共に生きると言いましたが、さて皆さんの生活目標はどうでなければならないでしょうか。愛の心情をもって侍る生活をしなければなりません。そのような心でハンカチに向かって敬礼しても偶像崇拝ではありません。愛の心情をもって頭を下げるのに何がそれを支配できるでしょうか。自分の栄光を超越して心情で敬礼するならば、サタンがこれ以上そうするなと言うのです。天宙の心情を通じていくなら偶像がないのです。

二) 孝子の道

先生はおなかがすいて疲れて倒れる恨があったとしても、どうすれば神様が心配するその道を私が先立って行くか、背負うことのできる十字架の道があるならばどのようにその道を行くかということを考えました。しかし皆さんは、このような道を行こうと準備してはいません。今日皆さんは、侍ることによって救われるということを知りながらもずうずうしく眺めています。そんな心でとどまってはいけません。

先生が何をされるか分からなければ眠れないで、夜中にでも飛んできて尋ねていくことのできる、そんな生活をしなければなりません。それで侍ることによって救われると言いました。先生は神様に対して、いつもそのように生きています。瞬時も気を抜けません。

皆さんは侍義時代、すなわち侍る生活において正確な中心をもっていかなければなりません。神様に侍るには法度があります。その法度に背く時には、神様はとても怒られる方です。子供を愛する父母が子供の言葉の一言に胸に釘を打たれたり抜かれたりするのと同じように、神様も人間を愛していらっしゃるがゆえに怒りが多い方です。ややもすると間違えて神様から怒りを買うことになります。ですから先生も、いつも先生なりに神様を喜ばせてあげようとします。服をきれいに着た人を見れば気分がとてもいいです。それで先生もそうしなければと思い、洋服を着て出てきました。そうでなければジャンパーを着て出てきたことでしょう。

皆さんも皆さんを思ってくれる人を訪ねていくでしょう。神様も同じです。その神様を占領できる道は誰よりも神様を思い、神様のために奉仕しようとするその人を中心として神様は訪ねてくるのです。

先生は神様の前に綿入りのズボンがびしょぬれになるほど祈祷したことが何回あったか知れず、ナイフを持ちおなかにあてて誓ったことが何回あったか知れず、死の峠を越えながら心に堅く決意したことが何千万回あったか分かりません。

人間において神様を愛するのが第一の戒めですが、愛するのに死ぬほど愛すべきですか、一時的に愛すべきですか。皆さんは神様を死ぬほど愛したいですか、死ぬほど愛したくないですか。雷に打たれて死ぬとしても愛さなければいけません。神様を死ぬほど愛さなければならないというのです。死ぬほど愛さな

ければならないなら、死ぬ前まではできないことがないというのです。

皆さんは目が崩れ鼻がふさがるほど泣きながら慕わなければなりません。人が泣きすぎると胸が痛くなります。それほど激烈に慕わなければなりません。「お父様！」と呼ぶのに死刑場に引かれていく息子の立場で父を呼ぶ人もいるでしょう。遠い他国に旅立つ息子の立場で哀絶に父を呼ぶ人もいるのではないでしょうか。それゆえ神様、お父様を呼ぶ時、そのような基準以上にならなければなりません。

白頭山の頂上に登ってそこで岩を砕き、畑を耕し、じゃがいもを植え、そのじゃがいもを神様に奉養できますか。それをしなければなりません。その時は牛がいなくて愛する妻を牛の代わりにして畑を耕したなら雷に打たれるでしょうか。打たれないでしょうか。妻を牛の代わりにして畑を耕すという時、神様が「おい、やめなさい」と言えばやりますか。あなたの心を尽くし、思いを尽くし、精誠を尽くしなさいと言いました。やりますか。しなければなりません。

皆さんは現在どこにいますか。昼も夜もいつも、どこに行っても先生と共に歩調を合わせて生きていますか。今まで先生はこの頭をもって生きてきたのではありません。神様と共に神様が行く方向に歩調を合わせながらすべて、生命をすべて投入して生きてきたのです。

先生は一日一日の生活において、重要な問題は必ず神様に祈って解決します。いいかげんにはしないというのです。

この道を行くためには愚鈍でなければなりません。忠臣たちは、ある意味で間抜けな人たちです。少しは愚鈍に見えます。熊のような性格があるというのです。自分の腕が切られても「ああ、ここがあまり切れていない。もっと切りなさい」という愚鈍な面がなければなりません。熊や猪は、銃に撃たれて足手まといになる部分があれば、その部分をかみ切って逃げます。死はあとで考え、いったん足手まといになるものを切ってしまいます。そのような愚鈍な何かがなければなりません。忠臣烈士は愚鈍でなければなりません。少しは愚かでなければならないというのです。

神様を解放しようというのです。真なる神様の権威を中心として、理想郷で人類始祖と共に無限の幸福を褒めたたえつつ生きることのできる侍る生活の中で、侍られながら過ごされるべき神様がこのように悲惨になったという事実を知ったので、その神様を私たちの手で解放しようというのです。これは驚くべき提案です。そのような内容が宗教界から出てきたという事実は、神様において極めてうれしい知らせです。福音中の福音です。このように見る時、仏教を立てられた方も神様であり、儒教を立てられた方も神様であり、イスラム教を立てられた方も神様であり、キリスト教を立てられた方も神様なので、すべての宗教が両手を挙げて歓迎しなければなりません。

先生は今までみ旨のために苦労してきたし、今も寝ても覚めてもその道を歩んでいます。先生の近くで侍ったことのない人は先生のことをよく知りません。先生は寝ていても目が覚めさえすればうつ伏せになって祈祷します。

なぜそのような生活をしているのでしょうか。この夜にも世界に散らばっている愛する子女たちが私を頼り、神様のために祈祷しているからです。私が精誠を一緒にできなくてもそれに劣らず拍子を合わせてあげなければならないのではないでしょうか。先生が寝る時は分からないので神様も許してくださるのです。その時間には、子供が疲れて寝たら父が見守るのと同じように神様が代わりに祈祷してくださるのです。

レバレンド・ムーンはどんな人ですか。一つの才能しかない人です。愚鈍にひたすらまっすぐにのみ行く人だというのです。ああ、口をちょっとつぐんで適当に回っていけばいいのに、どうしてよく悪口を言われるような作用をしたりするのでしょうか。それは多くの人々の反対を受けてこそ一つの峠を越えていくからです。しかし皆さんは帰ることを考えているでしょう。それではなぜこの世のすべてのものを切ってしまって行かなければならないのでしょうか。お母さん、お父さんの愛に引かれればまっすぐに行くことができないからです。神様は今まで正しい道を求めてこられたので、正しくまっすぐに行かなければならないというのです。

皆さんは、み旨の道を歩んできながらどれほど深刻でしたか。先生は一生の間そのような道を歩んできたのです。妻子も知りません。神のみぞ知るです。孤独単身、寂しい男が行く道を誰も知らない中、神様が協助して驚くべき実績をもって、今日この社会に問題を提示し、また疲弊していくこの民主世界の思想圏内に新しい波及を提示する問題の人物になりました。このようになったのは私が立派だからではなく、神様が共にされたからです。

神様がそのように寂しい方であり、神様がそのように孤独な方なので、私が死ぬ日までそのみ旨とその願いを一つでも解いてあげ、その分野の一つの土台でも拡大させて神様のために生きられる人を集めるのが使命だと思ってきたのです。悪口を言われても、むち打たれても復讐せず、愛によって耐えてきたのは、神様の子供として生まれたからで、その方のみ旨を立てるべき責任があるからです。ですからこの伝統をどのように立てるかを考えながらよろよろになって、あるいは腰を曲げ腹ばいになりながらこれだけは残さねばならないと言って、闘ってきたのです。

人間は自分が立ったと自慢してはいけません。自分が立てておいたとしても倒れるというのです。しかし人間が立ててくれなくても天が立ててくれれば必ずできるというのです。

「真の父母」がしているのは何ですか。すべてのことを勝利して、神様の心の深いところまで訪ね入り、恨を解怨し、その勝利圏を地上に成すことです。そのような「真の父母」が出現したということを皆さんは感謝しなければなりません。

第二章　真の御父母様に対して侍る礼法

一　真の御父母様は祝福家庭の中心

一) 真の御父母様の息子、娘になるには

皆さんはこれから「真の父母」と共に生きなければなりません。ですから「真の父母」はおじいさんの立場で、自分のお母さん、お

父さんの立場で、自分たちは長子の立場だというのです。これが違うのです。三代にわたって共に生きるという結論です。神様が私と共にあり、「真の父母」が私と共にあり、自分の父母が共にあるのを感じて生きなければなりません。神様がいないとか死んだとか考えられない時代に入りました。

一切を父母と共に相関して、父母と共に決定し、父母と共に相談し、父母と共に解決しなければなりません。

いい食べ物を食べたり、いい服を着る時は、ただ食べたり着たりしてはいけません。一番いいものは神様に先に捧げなければなりません。道を歩くときも右側には父を、左側には母を、と侍って行かなければなりません。

父母の愛を受けるには何をしなければならないのでしょうか。父母様が愛するすべてのことを愛さなければなりません。そうしてこそ愛を受けるのです。家庭で言えば、自分の父母に愛されることを願うならば、その息子は、父母がもっているすべてのものを愛したのちに、愛されなければならないということを知るべきです。これをしないで愛されようとする人は泥棒です。父母が貴く思うものを全部自分がいいかげんに、勝手に引き継いでは愛されません。

皆さんが思いのままにするのではなく、先生がするとおりに従ってやりなさい。先生が行くとおりについていくのです。統一教会の伝統を引き継ぎなさい。統一教会の文先生がするとおりに、皆さんがすればよいのです。先生も家庭を捨てて、父母を捨てて、この道を歩んできました。皆さんもそのようにしなければなりません。皆さんは従順に従っていかなければなりません。

「真の父母」と皆さんはすべての関係を結ばなければならないし、永遠にその関係が変わってはいけません。

皆さんは先生の血と汗の代価で買ってきた人たちです。先生の体を与えて買ってきた人たちです。ですから皆さんは先生と同じ仕事をしなければなりません。先生は食口たちを誇りたいのです。このような立場で公約しましょう。

サタンが天に反逆し、天地の法度を狂わせたので、皆さんが天を支持する天使の立場に立って、天の前に忠臣の道理を立てなければなりません。そうするとそこから初めて新しい復帰の道が開かれるでしょう。それで皆さんを先頭に立てるのです。

神様の心情を感じることができず、涙で別れたアダムなので、涙で会わなければならず、涙で別れたカインとアベルの怨恨を涙で解かなければなりません。その道でなければ合わさる道がありません。世界的に男性たちの中には先生に会いたくて泣く人もいます。さて、ここにそのような人がいますか。このでたらめな人たち。昔はみんなそのようにしてきました。草創期にもみなそうでした。

統一教会に通う婦人たちが先生に従うので、夫たちは妻が自分のそばに来ないと言ってひどくしかりました。これと反対に女性たちも、夫たちが先生に従うので、自分のそばに来な

いと言ってかんかんになるのです。そのようになっているのです。また男性たちも先生に会いたければ涙を流さなければなりません。そのようにできない人は統一教会天国時代に天国に入れません。

皆さんは実体の神様の立場に立っている「真の父母」が慕わしくて泣かなければなりません。いつも会いたい気持ちがなければなりません。御飯でも一杯炊いて、水でも一杯ついで侍りたがらなければなりません。そのような切実な心をもたなければなりません。涙が先立つ心情をもっていればいいのです。そのようにすれば、先生を中心として心情一致し、先生と共に呼吸することによって先生の人格基準とそれを裏づける先生の過去、そして、そこに絡んだ事情がどうなっているかを知り、さらにそれを相続することができるのです。

二) 真の御父母様にどれほど侍ってみましたか

堕落した人間が神様の前に出ていくための方法は時代によって違いました。すなわち、旧約時代には祭物を捧げることによって、新約時代には神様の息子であるイエス様を信じることによって、成約時代には「真の父母」に侍ることによって神様の前に出ていくことができるのです。

エデンの園でアダムとエバは堕落し、その堕落圏内で生きたので直接的な侍る生活をしたことがありません。侍る内容をもったことがない人たちは、天国に入る資格がないというのです。しかし皆さんは、堕落の血統を受けて生活したとしても、蕩減復帰するために、地上で実体をもって、アダムとエバが侍ることのできなかった神様に侍り、真の父母に侍って生きていくのです。そういう条件が天国に入ることのできる資格になるというのです。それで天国の市民権を得るようになるのです。

私は愛すべき万物の父母の前に孝子になれず、私を生んでくれた父母の前に孝子になれず、霊界と神様の前に孝子になれませんでしたが、先生を中心として「真の父母」に侍ることによって、孝子の資格を代わりに受けることができます。ですから皆さんは執念をもってついていかなければなりません。

「真の父母」に遠く接する時は国の王であり、近く接する時は父母です。そのようになっているのです。

皆さんは先生のためにどれほど祈祷し、どれほど会いたいと思いましたか。本当に会いたく、本当に祈祷し、本当に思慕したならば、この体を見ることだけが問題ではありません。

御飯を食べる時も「お父様、お先にお召し上がりください」と言わなければなりません。

皆さんがお父様に侍ることができるその時、その時間が来ればどうしますか。どのように孝行するか、そしてどんな姿で父母様に侍るかを考えなければなりません。

祈祷室を設けて、先生の写真を掛け、千回、万回敬拝しなさいというのです。昔再臨主に侍るために準備した許浩彬氏の団体では毎日三千回敬拝をしました。皆さんも一度やってみてください。縫い物も布目一つずつ一つず

つ手で縫いました。ミシンでやれば不敬だというのです。そのように精誠を尽くしても不足なのです。

皆さんが鏡を見ながらこの目がどれほど父母様に会いたくて涙を流し、この口が父母様の解怨成就をどれほど叫び、この手がどれほど父母様の地で血を流して仕事をし、自分の体が砕けるほど父母様が願う土台の上で働いてきたでしょうか。「それができなかったのが恨です」と言える心を感じながらその道を求めていくのが幸福な道であり、その道で天と共に因縁を結ぶのが幸福な人です。そのような人は誰も支配することができません。その人を動かすことができるのは父母だけであり、その人を感動させられる人も父母だけであり、その人を幸福にできる人も父母だけです。そしてその父母を幸福にできる人はその息子以外にいません。父母の希望は父母にあるのではなく、息子にあるのです。

皆さんが考える、神様に対する侍る生活とはどのようなものですか。神様を一体と考え、父母様を一体と考え、生活すべてのものが一体となって私が生きるならば、「このすべてのものは神様のものであると同時に『真の父母』のものであり、『真の父母』のものは『真の父母』の国のものであり、『真の父母』の国のものになれば私のものだ」。このような観念をもたなければなりません。この宇宙も「真の父母」のものであり、この家も「真の父母」のものであり、国も「真の父母」のものなので、私は「真の父母」の息子だからすべてのものは私のものだという結論が出るのです。

先生に差し上げようと家でよもぎもちを作り、そのもちが汚れないようにと密封したまま本部まで来て、御覧くださいと言わんばかりに開けてみると、もちが腐って青かびが生えていたこともありました。もちに青かびが生えてうじがわいてもいいというのです。そのもちは食べられなくても億千万金に該当するのです。そうであるほど情が移るのです。

愛は愚鈍で間抜けなものです。そうではありませんか。本当に愛するなら横で誰が見ていても関係ないというのです。誰かが見ていることを意識する愛は、限界圏内の愛です。誰が見ていようが見ていまいが意識しない、そのような境地の愛がどれほど愚直で愚鈍なのかというのです。ある時は、山奥で掘って採ったききょうを先生の前に持ってきて涙を流すのです。そのようなことが霊界に行けば、彼を解放させることのできるいい材料になるのです。

皆さんは先生が苦労した話をすれば、それが自分に遭ったことのように感じられ、胸が痛く、悲しく、涙が出るし、悔しく、憤慨する、このように同感できなければなりません。皆さんを同感させるための材料が先生の苦労です。

先生を知ったと言ってはいけません。先生は原理しか知りません。原理原則に立脚した人だけを知っています。

先生が約三カ月間だけ毎日のように皆さんの家に行けばどうしますか。「ああ、うんざりだ」と言いながら嫌がるでしょう。そうではないと言う人、手を挙げてください。先生

はあれこれと話すことが本当に多いのです。そのようなことをみんな知っている先生はあきれてものが言えないではないでしょうか。ですから「あきれてものが言えない」という言葉が出てくるのです。このように皆さんは自分の威信も知らず、身の振り方も知らずにいるのです。ですからこのようなことを教育しなければならないのです。

先生が生きている時は先生の歴史を書きませんが、先生が死んだのちには先生の歴史を書くことでしょう。ですから原理に公認されないことをしたならば大変なことになるのです。なぜこのように生きたのかということを裏づける原理的内容があるかどうかが問題です。もしもこれができていなければ今まで成されたことをすべて失うことになるでしょう。ですから責任者は大変だというのです。

二　真の御父母様を愛し誇ろう

一) 真の御父母様は人類全体の希望

統一教会で言う「真の父母」とはどのような方ですか。堕落しなかったならば、神様が縦的な愛になり、アダムとエバは神様の体になるのです。神様の体と同じです。神様は骨のようで、アダムとエバは体のようなものだというのです。神様も心があり、体があります。神様は内的な立場で内的な父母になり、アダムとエバは外的な立場で外的な父母になるのです。内的、外的父母が一つになったその場で愛によって結ばれ、内的父母に侍るようになり、外的父母をもつようになります。神様と人間との愛の結合によって「真の父母」、すなわち、完成した人間ができるはずだったのです。愛で一体となれなければ完成人間になれないのです。

「真の父母」は何をしなければならないのでしょうか。サタン世界の根である間違った血統を正さなければならないし、間違った生命をもとがえさなければならないし、間違った愛の道を正しく開かなければなりません。聖書では「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」と言いましたが、そのような逆説的な論理がなぜ出てこなければならないのですか。サタン世界は死ななければならないからです。

皆さんは、「真の父母」の本当の息子、娘ですか。真の子女とは何を中心として言うのですか。真の血統です。もちろん真の愛を通じて因縁が結ばれますが、成されるのは真の血統を通じて連結されるのです。ですから真の血統を通じて連結されればお母さん、お父さんに似るのです。そう、皆さんは先生に似ましたか。皆さんの目は青く、私は黒く、髪の毛も違うでしょう？　髪の毛がみんな白いではないですか。私は東洋人だし、顔が平たいです。では、何が似るのかと言えば、骨子だけ似るのです。骨子だけ似るとは、サタンに勝つことと神様を絶対に愛するところだけ似るのです。それだけ似るのです。そうしてサタンを主管しコントロールするのです。

皆さんが先生をどれほど愛さなければならないのでしょうか。根本問題に帰るのです。サタン世界の愛の痕跡がある、その愛が染みついた立場で愛してはいけません。それ以上でなければなりません。皆さんがサタン世界で生まれたお母さん、お父さん、妻子、その

誰よりももっと愛さなければなりません。それで聖書に「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者はわたしにふさわしくない」（マタイ一〇・三七）とあるのです。そのような結論を下したのです。

そう言いながらあとでは「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」（同一六・二四）と言いました。十字架を背負わなければならないと言いました。反対に引いていく力を押さえて越えようとすると、十字架です。ここで悲痛な涙を流さなければなりません。

「真の父母」とはどんな存在ですか。「真の父母」はすべての希望の象徴です。堕落した人類の前に絶対的な希望の象徴なのです。彼は歴史的結実体であり、時代的中心であり、五十億の人類が生きている今日、この世界国家圏の中心です。真の父母は将来の理想世界に連結できる未来の線上においての出発点です。

万民が願うことは何でしょうか。世界国家を迎える前に、「真の父母」を迎えようとすることです。誰から出発したいのでしょうか。皆さんの新しい息子、娘は皆さんの血筋を通じて生まれたいのではありません。「真の父母」の血筋を通じて生まれたいというのです。ですから「真の父母」は新しい未来の出発点になるのです。

今日、神様は何を願っておられるのかと言えば、この終末時代に御自身の姿を現すことを願っておられます。それで完全に心情的で縦的に復帰され完成した男、言い換えればメシヤとして再び現れようとされるのです。完成したアダムを身代わりし、完成したエバを身代わりする中心人物が出てこなければなりません。

成約時代は神様自体が真の父母の姿をして、万民の前に現れるようになります。統一教会が、政治によるどんな力を投入しても、主管されない偉大な力をもっているのは正にこのためです。生きている神様を私たちが直接目で見て、感覚をもって体恤できる圏内で、体験を積みながら出ていくのが私たち統一教会の道なのです。

人間の願いは「真の父母」に出会うことです。死の道を行くとしても出会わなければならない人が「真の父母」だというのです。歴史をみな失い、時代をみな失い、自分の後孫をみな失う恨があったとしても、「真の父母」に出会うならば歴史を取り戻すのであり、時代を取り戻すのであり、未来を取り戻すのです。このような方が正に真の父母だということを皆さんは知らなければなりません。

「真の父母」というその名前の文字を考える時、「真の父母」によって歴史が治められ、「真の父母」によって新しい世界に帰ることのできる起源ができ、「真の父母」によってサタンを屈服させることのできる内的な因縁が決定し、「真の父母」によって外的な世界を占領しているサタンを征服して初めて、神様を解怨成事してあげることのできる中心が決定するのです。ですから「真の父母」と共に生き、「真の父母」の命令を奉じて行動できる、この驚くべき恩賜に皆さんがまず感謝しなければなりません。

皆さんが「真の父母」と完全に一つになる時、国家があるのであり、氏族もあるのであり、民族もあるのであり、家庭もあるのです。天地のすべての栄光の価値を総合した実体基準が「真の父母」です。「真の父母」をこの世のお金と換えますか。自分の生命を与えて換えられますか。ですから昔と違うというのです。皆さんがどこに行っても、「真の父母」に侍るために大韓民国を訪ねてこなければなりません。皆さんの息子、娘も千世万世の後孫たちもそうしなければなりません。ですから統一教会は違うというのです。

すべてのものはどこに帰結するのでしょうか。「真の父母」に出会うことに帰結するのです。人類の「真の父母」が現れるのが歴史の願いであり、国家の願いであり、摂理の願いです。それでそのような「真の父母」が現れる時は、歴史上に一度しかない頂点を成す時であり、空前絶後（前無後無）の時なのです。永遠な世界を通して見ると、人間の一生というものは一度息をする期間と同じです。

二) 家庭ごとに真の御父母様のお写真に侍る

今日以後、皆さんは先生の写真を持ち歩くのがいいでしょう。そうすればどんな苦難に遭うとしても無事に耐えられるように保護してもらえるでしょう。モーセがイスラエル民族をエジプトのパロのもとから脱出させ、カナンへ導くために奇跡を行う時、長子が艱難に遭い病気になって死にましたが、羊の血を門に塗った家は、その艱難がみな避けて行ったのです。霊界は私たち人間のすべての行動を見ることができるだけでなく、保護してくれたりもするのです。

文総裁が有名です。国のための愛国者という言葉はみな認めています。また私が立てた功績には天下がみな頭を下げます。そして「あの写真を掛けた以上、あの方の前においては夫婦げんかもむやみにできない」と言い、息子、娘の前にも「こら、あの文先生の前ではいけません」と言うようになれば、何が悪いことがあるでしょうか。自分の親の写真以上に侍ることによって先祖たちが来て、先祖として侍るのです。また先祖たちが来て、その家に侍ることのできる祭壇になるのです。それゆえ天上世界で福を受けることのできる道があるので、夜中の三時になれば、皆さんは寝ますが、（先祖たちが）一家の周辺の邪なる悪魔たちをみな追い出すのです。

イスラエル民族がエジプトから出てくる時、門に血を塗って禍を免れたのと同じように、お写真を持っていればそのようなことができるかもしれません。霊界は先生の写真をポケットに入れておくだけでも分かるのです。このように小さな条件が門に血を塗ったのと同じになるのです。

先生のほほえみは、モナリザのほほえみほどにも神秘なところがあるという経験をしたことでしょう。ある時はこうで、またある時はこうで、数十万種の姿に見えるこの神秘的な姿が、霊界が皆さんを協助できるようにしてくれるという経験を大部分がしているだろうと思います。霊界の霊人たちはみな先生をよく知っていますが、この写真を見れば霊界が喜ぶでしょうか、悪く思うでしょうか。皆さんの先祖たちがこれを媒介体にして連結できるのです。このようないい材料だということを知っていてください。

今、レバレンド・ムーンの名声は国境を越えました。至る所にいる為政者たちの中には書斎にレバレンド・ムーンの写真を掛けておいて慕い仰ぐ人が多いということを私がよく知っています。尹博士も私の写真を掛けましたか。毎日あいさつしますか。毎日キスしますか。熱情的でなければなりません。キスしなければなりません。だからと言って失礼ではありません。神様の愛を代表してキスすることによって、霊界に行った人たちが私がキスすることで同参権、同位権をもつようにするためにこうすると言う時、神様が「ノー」とは言われません。「そうだ。お前の言葉が正しい」と言われるのです。どうですか、尹世元博士？　そのようにされたら。

父母様の写真を貼って統一教会の旗さえ揚げれば、それは天の国の眷属（一族）になるのです。天の国の眷属にしてあげるというのです。ですから今回、旗を揚げることを呪って罰にあたった人が多いではありませんか。本当に不思議です。先生に後ろ指をさして病気になり、何日も夜祈祷して悔い改めたら治った、そのようなことが起こっているではありませんか。なぜですか。天運が訪ねてくるので個人の運勢では止められません。宿命的な道です。モーセがさおにかけた青銅のへびを上げている時、それを見上げた人はみな生き残りました。統一教会の旗を見つめて行くたびに敬拝し、来るたびに敬拝して、写真を見て行くたびに敬拝し、来るたびに敬拝すれば生きるというのです。

統一の旗を揚げるのは、通り過ぎる食口たちがおなかがすいたらここに来て休みなさいという表示であり、お昼時なら昼食でも食べていきなさいという表示です。ですからいつもお客さんをもてなすことのできる準備をしなければなりません。父母様を身代わりしてそのような準備をしなければなりません。ですから部屋もなければならないでしょう。しかし父母様が来られないので、父母様の代わりにお客さんに侍るというのです。この思想は天の最高の基準の前に平準化思想を連結させるためのものです。そのような意味で、お客さんを神様のように、父母様のように侍りなさい。そのような人は福を受けます。

三　真の御父母様に侍るにも法度がある

一) 侍義時代の法は最高の法

皆さんが挙動すること、座ること、すべてのことが条文化されなければなりません。先生に対する時のあいさつ法のようなものも条文化されなければなりません。先生に対する時のあいさつ法、それはみなあるのではないですか。そうではないでしょうか。社会にもそのような法があるのですから、そうなるべきではないですか。

今日までの人倫道徳は父母が子供を愛し、子供は父母に孝行し、夫婦には区別がなければならないというものでした。これは三綱五倫の礎石として今まで伝わってきましたが、これがやはり変わりつつあります。このように既存の慣習や規範などが自然に変わる気勢が社会環境に、生活環境に浸透して入ってくる日が終わりの日だというのです。メシヤがこの地上に現れるとするならその方がこの問題を収拾しなければなりません。

堕落した習慣に対するすべてのことを正すための新しい法があるのではありませんか。私たちの前には数多くの法的過程が待っていることを皆さんは知らなければなりません。それを越えていかなければなりません。

韓国の法（風習、しきたり）では目上の方から何かをもらう時、両手でもらうようになっています。それは水平になってこそ愛を受けることができるというのです。受けるのは垂直を通じて九〇度で受けなければなりません。人心は天心だと言うでしょう。私たちのすべての規範は良心の道理に従って相対的につくられて出てきたものなので、水平にならなければなりません。また、道を歩くときも東洋思想は目上の人が先に立たなければなりません。なぜですか。先に出てきたからです。そのように、環境を合わせようとしてそうするのです。あとの者は後ろに立ち、高いものは高いものに、低いなら低いところに、前のものは前のものに、後ろのものは後ろのものに、上のものは上のものとして、前後を整えなければなりません。そのような観は変わるものではありません。それは永遠不変のものです。

一国の王様と臣下の間にも毎朝、調和があるのです。韓国の家庭を見れば、朝父母が起きれば父母に先にあいさつをします。このようなものが韓国の法度ではありませんか。皆さんは歴史時代を蕩減するためには法の中の法、孝行する法なら孝行する法の中でも最高の法度を立てなければならず、国家においても最高の基準を越えることのできる法を立てなければならないというのです。

この世には父母が死んで、三年の喪に服す時には毎日朝夕に上食（注：喪家で朝夕霊前に供える食事）を供え、出ていく時や入ってくる時、霊座（注：位牌の奉安所）に告げてあいさつする法度があるではないかというのです。皆さんはそれ以上にしなければなりません。皆さんが今していることが、み旨から見る時、天の格式にぴったり合わせた生活ですか。とんでもないというのです。

家庭の伝統を立てる最も早い道は先生が生きている時にすることです。元来は毎朝、沐浴斎戒し、一里の外から歩いてきて先生に敬拝を捧げなければなりません。このような伝統を立てられなければ、自分の後孫たちの道がふさがるのです。

統一教会の中に、先生がたまに映画を見に行くと「私たちも映画を見に行かないと……」と言います。とんでもありません。昔は先生は劇場の前に行ってみたこともありませんでした。そのような訓練を経て、そのような所へ行っても自分が汚されず、支配されない自主的な人間になったので問題にならないのです。しかし先生がするとおりにみなすると……。私が地方へ行ったときある者が、私が良くない言葉を使うと言うのです。このような輩たちがいます。

私がぞんざいな言葉を使う時までは、幼子にまでも仕えて敬拝し、神様の前に侍る生活をしてきました。み旨を知ってみると、先生が皆さんに敬語を使えば（皆さんは）決まりが悪くて顔を上げて話ができないのです。礼儀正しく対してみましょうか。どれほどばつが悪いでしょうか。

二) 人間が貴いのは人倫道徳のため

ローマ法が現在、世界法の基礎になっていますが、人倫道徳はどこまでも良心を根拠にします。法よりは良心だというのです。良心の基礎は善です。善を標準とするのです。善を外れて間違う時は、良心がその間違ったことを正していきます。そして良心に一致できる普遍的な社会体制を形成しようとすると、法令も必要なのです。ですから結局、人倫はどこに根拠を置くのですか。天倫に根拠を置くのです。

人倫は何を通じて形成されるのかと言えば、情を通じて形成されます。家族関係や道徳観念、社会制度、秩序というのは、全部情緒的な面です。情を先に感じたそれが長くなったとか次元が高いということになれば、そこに頭を下げるようになります。皆さんはそれを知らなければなりません。人倫形成の動機は情からです。父母が子女を愛するところから人倫が始まります。子供が父母を愛するところから真の人間関係は成立するのです。

皆さんは父母を愛し、必要とします。いつも父母に会いたがり、一緒にいたがります。それはなぜでしょうか。年齢で見ても差があり、秩序的関係を見ても上下の関係があるからです。ですからそこには礼を備え、尊敬し、孝行しなければなりません。このようなすべての社会生活の人倫道徳的な内容を備え、上下関係において、一つは主体であり、一つは対象の立場に立たなければなりません。ここで孝子になるには、従順や服従という内容を介在させて、自分が会いたいと思わなければならないというのです。これが親子関係です。

人間が貴いのは人倫道徳があるからです。人倫は人と人の関係を言います。一人の人のみでは人倫という言葉は使いません。人倫という言葉は二人以上になってこそ成立します。男性と女性が結婚した家庭から社会の倫理という言葉が成立するのです。倫理は人間関係の道理であり、法則です。

宇宙の日月星辰の創造の法則、すなわち、天道によって縦的秩序の体系を成しているのと同じように、家庭においても祖父母、父母、子女に成される縦的秩序と兄弟姉妹に成される横的秩序の体系が立てられると同時に、相応する価値観、すなわち、規範が成立されたことを明らかにしなければならないでしょう。

私たちは超民族的、超国家的な新しい伝統を立てていかなければなりません。その伝統を私たちの思いのままにするのではなく、神様が願うとおりに伝統の相対的基盤を磨いていかなければなりません。皆さんの習慣性や過去の風習、現在の流行というものに歩調を合わせるのではありません。完全に違うということを皆さんが知らなければなりません。

世界を見れば全体が調和するようになっているのです。ぎこちないところがないように、自然ながらも全部和合するための一つの刺激的な動機になれるようになっているのです。そのように、見た目に良くないところを注目するようにはなっていないのです。

第三章　礼拝と教会生活礼節

一　教会に対する正しい認識

一) 教会はみ言と人格を総合するところ

教会が目指すべき目的は、神様の国を求めて建てることです。神様の本来の創造理想は、国を中心として一つの世界をつくることです。そういう創造理想であるがゆえに、教会が目指すべき目的地は、教会を建てることではなく、国を建てることなのです。

今後、教会時代は過ぎ去っていきます。人類が願うのは、教会ではありません。教会は堕落圏内で、復帰の運命の道を行く際に必要なのであって、新たな時を迎えれば、教会時代は終わるのです。それゆえ統一教会は、教会活動をするのではありません。教会の名で社会に適応し、社会を改革し、社会の廓清（浄化）運動をするのです。そうすることが、その国と民族、そして世界に住む人類には果たすことのできない、開拓者の使命を成し遂げることになるのです。今こそ皆さんは、この道を行かなければなりません。

教会は、過去、現在、未来の因縁の本拠地です。それゆえ、蕩減条件を立てるための媒介体であり、み言と人格と心情を総合する所だと言うことができます。

教会は、天地をつなぐ至聖所です。教会は、世界への門戸であり、すべての人に相互扶助の因縁をもたせ、国家存亡の霊的支柱となるのです。教会は、霊的生活の源泉であり、日々の生活に力を補給してくれます。

家庭に忠誠を尽くす前に教会に忠誠を尽くし、社会に忠誠を尽くす前に教会に忠誠を尽くすのが原則です。教会が主体であり、家庭と社会は対象だからです。賢い人はどこに立つでしょうか。主体の立場に立ちます。主体の立場は、一つしかありません。対象は東西南北四方にあり、三六〇度回転しなければなりませんが、主体は中心のたった一カ所にあるだけです。そこは絶対的な圏内です。二つではありません。中心が二つになることがあるでしょうか。中心が行ったり来たりすると、滅びる可能性が増すのです。

「全知全能で慈悲と愛に満ちた神様であるゆえ、千回、万回罪を犯しても許してくださる」と、クリスチャンは言っています。そう言って教会で祈祷して出てくるや否や、けんかをするのです。教会は、罪を犯してから悔い改める懺悔堂ではありません。それほど多くの罪を許せる神様であるとするならば、エデンの園で一度犯した罪を、どうして許すことができないのでしょうか。そうではないですか。また、サタンが許される道があったとするならば、サタンは悔い改めたことでしょう。千回、万回涙を流して悔い改めたことでしょう。

教会が一つから二つに分かれ、そのようにして三回分かれると、神様は去っていきます。天理の原則はそうなっています。そうして家庭的に集まります。恵みのある人は家庭的に集まるのです。教会に行きません。家庭でひれ伏して祈祷します。そのようになるかならないか、見ていてください。

統一教会の目的とは何ですか。人類に対して、神様とメシヤとで地球星で踊りを踊り、サタンまでもみんな福を受けるようにしようということです。これが統一教会の道です。どれほど偉大でしょうか。そこまで行こうというのが統一教会です。さあ、話を聞いてみ

ると、統一教会は素晴らしい所でしょう。この世の人々は統一教会がどうで、異端で、何かの邪教だと言いますが、私たちは「フンッ！」とも言いません。聖なる人たちが道を行くのに町内の犬がほえている、このように考えるのです。

終わりの日、この時代の統一教会の使命は「神様の願いとは何か。人類の願いとは何か。神様の愛とは何か。人類の事情とは何か。神様の心情とは何か。人間たちの心情とは何か」ということを教えてあげることです。そのために出てきた教会です。そのような世界を教えてあげることができ、千人、万人をみな教育するとすれば、この理念圏内の世界は、統一されまいとしても統一されざるを得ません。

二) 教会は家庭の延長である

「私は誰々のために教会へ行く。私は愛する息子、娘のために教会へ行く。愛する夫のために、妻のために教会に行く」と言う人は、みな乗り越えていくことはできません。誰のために教会へ行くのかというと、神様のために行くのです。神様を私の神様として侍るために、神様の愛を私の愛として得るために教会に行くのです。

公的な教会は、自分の家よりも貴いものです。

天国は教会を通して連結されます。すなわち、家庭は教会を通さなければなりません。それゆえ、教会は家庭が勝利するための基盤であり、家法を結実させる所であり、人格の認定を受ける所であり、天国生活の訓練場です。

顔が良くて若くなければ伝道ができないというのですか。とんでもありません。教会は家庭の延長です。家庭の延長であることを知らなければなりません。おばあさん、おじいさんがいなければならないし、おばさんがいなければならないし、おじさんがいなければならないし、若い人もいなければならないのです。教会に若い人しかいなければ荒廃します。これを早く是正しなければならない、というのが先生の考えです。

年上の人に侍ることができなければなりません。おばあさん、おじいさんは神様の代わりであり、お母さん、お父さんは父母であり、自分と息子、娘まで四段階なのです。おばあさん、おじいさん、父母、私、こういう段階で見ると三段階です。この運命圏を外れることができないのが人生だというのです。おばあさん、おじいさん、お父さん、自分たち夫婦、息子、娘、三段階は線を四本引いて初めて三つの段階ができるでしょう。 七数の基準なので、これを結び合わせなければ三段階はできないのです。これを結ばなければ、すべてが勝手にばらばらになります。三段階ができるにはこれを結ばなければならないのです。

教会生活で神様から公認を受け得る立場に立っていない人は、社会生活において神様に代わる生活をすることはできません。内的な教会生活で、神様の公認を受けるかどうかが問題です。ところが今、皆さんの教会に対する観念について考えてみると、教会で集会するその時間がどれほど貴いかを忘れています。教会の公的集会に対する観念が希薄なので、み旨の進んでいる方向に対しても希薄になるのです。内的に自分がどういう立場に立ち得

るかを確実に知らないがゆえに、外的基準も確実ではないのです。

教会生活は良くできても社会生活は良くできないという人もいれば、社会生活は良くできても教会生活は良くできないという人もいます。このような点から見ると、社会生活は良くできても教会生活が良くできない人は、実を結ぶための要因とその内容がありません。教会生活は良くできても社会生活が良くできない人と、社会生活は良くできても教会生活が良くできない人とでは、どちらのほうが良いかというと、教会生活が良くできる人のほうがいいのです。結実の要因をもった人は、あすの希望をもって動いていくことができますが、結実の要因をもっていない人は、結実と関係を結ぶことができないのです。

皆さんは血統を通して神様の息子、娘であることを証し、真理を通して神様の息子、娘であることを証し、生活を通して神様の息子、娘であることを証し、仕事を通して神様の息子、娘であることを証し得る基準を求めて立つことができなければなりません。この基準を求めることができないならば、教会に来て信仰生活をしていても、それは小間使いのすることにすぎないのです。

家庭と教会と社会の三角圏を中心として考えると、皆さんは家庭を中心とした思いが強いですか、教会を中心とした思いが強いですか。 それとも社会を中心として自分が出世しようという思いが強いですか。 皆さんはどの思いが強いかを考えてみてください。神様は、どのような人に協助し同情するでしょうか。教会を考えるというのは、神様に代わって人を愛することなのです。そして人を救うことなのです。

人格者となるためには、組織的な訓練が必要です。集団的な教会生活を通過しなければなりません。すなわち、全体的な理念や制度に通じることができるかが問題です。そのような関門が、教会になるのです。

皆さんが 今まで習慣的に生きてきた社会生活全体と、教会を中心とした生活全体を考えて、どちらが内的であるかというと、教会生活が内的です。それでは皆さんは、どれほど内的生活の価値の基準を立ててきたでしょうか。ある人は、み旨を中心として行くと言いながらも、「私がこうすることがみ旨になるだろう」と勝手に考えます。そのようなところに神様は、いることができるでしょうか。

統一教会に反対する人が教会で御飯を食べていったとしても、笑いながら送りなさい。食べ物をけちってはいけません。 統一教会員ではない人が来て御飯を食べたからといって、「なぜ食べるのか」と言ってはならないのです。先生がこのようなことを言うのは、今まで八道江山（国中）の誰もが、統一教会員はもちろんのこと、統一教会員ではない人も、ここに来て御飯を食べたことのない人はいないと思うからです。

人が最も好むのは赤ん坊であり、最も嫌がるのは先の短いおじいさん、おばあさんです。極と極です。天の運動とはどのようなものかというと、極と極を包括するための運動ではないかということです。子供と一つになろうとして、おばあさん、おじいさんが杖をつい

て来ては、遊んで御飯を食べていったり、そうなればそこは栄えるのです。皆さんがおじいさん、おばあさんの友達になり、おじいさん、おばあさんは皆さんに夢中になって夜も眠らず、自分の家の良い庭や、床の間、鯨の背中のような（とても大きくて立派な）家をさておいて、教会の板の間で寝るというようになれば、そこ、その団体、その人がいる所はどんどん栄えるというのが原則なのです。

おばあさんが「ここに教会長はいるか」と訪ねてきた時に、遠くから見て「いないよ、いない」と言えば罰を受けます。「教会長は出掛けたけど、おばあさん何の用。 年寄りのおばあさんは要らないよ」と言ってごらんなさい。神様が御覧になって「こいつ、お前はどこから来たのか」と引っ掛かるのです。年を取ったおばあさん、おじいさんを否定するということは、お母さん、お父さんを否定することです。ですから年を取ったお母さん、お父さん、おばあさん、おじいさんを良く奉養してこそ、孝行者なのです。

ある男性が、気の合わない女性と結婚しておもしろくない生活をしていて、楽しく暮らしている家に行くと、その家の人が本当に幸福に思われるのです。だからといって二度結婚しろというのではありません。幸福になるためには教会が必要なのです。人は刺激を受けなければなりません。刺激というのは、いつもいるところに来るのではありません。対比されるところから刺激は来るのです。天だけでは天になることはできません。地があってこそ天となるのです。それゆえ、すべてのものはみな相対性をもっているのです。

二　礼拝は神様に最高の敬意を表す儀式

一) 礼拝時間は神様に出会う時

安息日を聖なるものとして守る目的は、神様が願う国を建て、人類を救うことでなければなりません。キリスト教が安息日を守ってきたのは、この日を聖なるものとして守ることにより自分自身が昇華され、自分自身を思う、すなわち救いという目的に重点を置いたためです。私たちが安息日を守る目的は、自分の救いの道を促進することでもありますが、さらに進んで全体を救い、今後神様の摂理である国と世界を救うという目的に、より重点を置いているのです。これが、より高い責任をもつ神様の願いであることを知らなければなりません。

礼拝を捧げる時間は、祭祀を捧げる時間です。自分の過去を神様に贖罪しなければなりません。ゆえに礼拝の時間は、自由のない時間です。

礼拝時間は、押し寄せるいかなるサタンの権限も防ぎ止め、父の前に勝利の栄光をお返しすることを約束する時間です。

礼拝を捧げる時間は、怨讐と一騎打ちをするよりも深刻な時です。

礼拝の時間に早く来た分は、神様のために捧げた時間となりますから、千金、万金を出しても買うことのできない価値があります。礼拝の時間は神様に捧げる時間であるために、その時間に遅れることは神様から盗みをすることと同じです。礼拝には決められた時間に来なければなりません。そうすることによっ

て、それだけ神様の前に面目を立てることができます。そうなれば、きのうよりも良い心をもって天の前に近づくことができますが、遅れて来て、祈祷するときも目をパチクリさせながら、「先生はきょうどんなみ言を語られるか」と座っている姿を見ると、惨めで仕方がありません。

神様の前に出て侍る場に、礼服を着ないで参席できるでしょうか。目に見える礼服ではありません。心情の礼服です。このように集まった皆さんのその心から、み言とともに賛美とともに感激した心情が流れ出てきたならば、天は皆さんを通して役事されます。堕落した人間がエデンの園から追放されたとき、涙を流しながら追われましたが、皆さんは涙を流すとしても、喜びの涙を流しながら、笑い顔で神様に会わなければなりません。悲しみの涙も流したことのない者が、喜びの涙を先に流してはなりません。

礼拝時間のために、三日前から心を焦がして準備しなければなりません。万民の幸福を祈り、万民を蘇生させるための復活の権限と生命の因縁を結ぼうと苦悶しながら教会に入らなければならず、神様の前にのどの詰まるような心で礼拝に参席しなければなりません。それでも足りないのに、皆さんは行商人よりもずうずうしいのです。

主日（聖日）礼拝の時は沐浴斎戒して神様の前に敬拝をして、聖地へ行って祈祷しなければなりません。たとえ訪ねてくる人がいなくても、神様がその部落を照覧されて役事することのできる心情的な基盤をつくっておかなければなりません。神様の前に一人祈祷し涙するという立場は、絶対に孤独ではありません。神様が共にあられるので、絶対に寂しくはないのです。皆さんが三年以上精誠を尽くしたにもかかわらず、その町で訪ねてくる人がいなければ、その町は滅びるのです。

礼拝に来るにしても、ただ何も考えずに来るよりも、見えない心を尽くして一日、二日と、精誠を尽くした時間が長ければ長いほど光るのです。ですから見えないものが多いほどに、天が自分を保護し守ってくれるのです。妻が、目には見えない心で一日中夫のことを思った上で、目に見える顔で、口でほほえむと、光るというのです。栄光の光がです。その笑顔には、夫を引きつける魅惑的な力があるのです。同じような道理です。

今後は礼拝をするにも説教形式ではなく、報告形式でしなければなりません。報告の内容は、その家庭が誇ることのできるものでなければなりません。ですから家庭全体が来て、礼拝を捧げなければならないのです。そうして良い家庭があれば、見習い、あまり良くない家庭があれば、うまくいくように導いてあげなければなりません。そのようにして、家庭天国を建設するのです。先に家庭天国をつくることができなければ、地上天国はつくられないということを確実に知らなければなりません。

まず、教会生活を徹底しなければなりません。そのためには、公式的な礼拝時間を厳守しなければなりません。公式的に参席すべき時間を守る模範とならなければなりません。

天の前に出るときに、約束は絶対的に厳守しなければなりません。約束を守らない人が、どうして恵みを受けることができるでしょうか。そのような人は、途中でやめてしまいます。途中でやめてしまうというのです。今後、先生は皆さんが動くとおりに指導します。嫌だったらおやめなさい。誰が滅びるか見てみようというのです。

聖日の公的な集会に出席する模範とならなければなりません。礼拝に来るとき、子女たちがうらやましがってついてきたがるように、夫婦が一緒に仲良く来なければなりません。十時前に教会に来て、聖日の準備をしなければならないのです。

礼拝時間はサタンと闘う時です。一騎打ちする時なのです。それなのに眠っていていいでしょうか。そういう人がいれば、揺すって起こしてあげなさい。「サタンよ退け」とイエス様がペテロに言ったように、横腹を一発たたきなさい。それは愛なのです。先生は礼拝の時に居眠りをする者がいれば、そのままほってはおきません。

精誠を尽くすべき人が、礼拝時間に遅れてもいいでしょうか。そのような人は、恥ずかしくて顔も上げられない、罪人中の罪人だという思いをもたなければなりません。そして、今後は時間をきちんと守ることを誓って、人よりも多くの精誠を尽くさなければなりません。時間も守らずに「ああ、天よ」と言うことができるでしょうか。精誠は、人に知られるように尽くすのではありません。教会に来て精誠を尽くそうとするならば、車に乗ってくるのではなく、歩いてこなければなりません。ここに来て祈祷するのではなく、祈祷して来て、もっと懇切な祈祷をしなければなりません。精誠というのは、このようにして尽くすものなのです。

天は、懇切に慕い苦労する人に対されます。誰でも訪ねていったからといって対してくださる天ではありません。ですから時間だけは絶対に厳守しなければなりません。今後、時間を守らなければ前に立たせて恥をかかせます。

本来は礼拝時間が過ぎれば戸を閉めてしまわなければなりません。遅れてきた人を集めて話したくありません。このような皆さんを集めて、ある基準まで引き上げようとして二時間、三時間話をするのです。そうして初めて、私が天の前に祈祷し、覚悟した心情的な基準と、つながれるのです。

神様の前に出ていく上で、時間というのは何よりも重要なものです。時を知らなければ滅びるのです。時を逃せば滅びるのです。神様は極めて聖別された環境を要求し、聖別された心を要求するのに、時間も守れずに後ろの方で賛美歌を歌っているのです。天はそのような賛美を願われません。

公式的な礼拝の時間を守らなければなりません。分かりましたか。そうすれば間違いなく発展します。

二) 夜の礼拝（夕拝）、早朝集会、徹夜精誠

夕拝に力を注ぎなさい。

土曜日の夜は、教会で徹夜をしなければなりません。

今後、集会は夜に多くしようと思います。闇の世界を切り開いていかなければならないからです。そのためには、懇切な心情をもたなければなりません。

夕拝には、伝道をして来なければなりません。そうしなければ、教会の威信が立ちません。礼拝時間には、引導者（司会者）よりも先に来ていなければなりません。

人が眠る時間にぐっすり寝て、食べるだけ食べて、楽に来て座って礼拝を受けたらいいのに、どうして早朝から礼拝を受けるのでしょうか。どうして早朝から礼拝をするのでしょうか。 人とは違わなければならないというのです。他の宗教集団や信仰者と同じではいけないのです。違わなければなりません。

私が早朝三時に集めて一年なり何年なり伝統を立てて眠らせないようにすることでしょう。人は怠惰になってはなりません。楽にしてはならないのです。楽な世界では発展がないのです。それゆえ、どの国家でも新たに復興したからといって、それに満足し陶酔していれば滅びるのです。

昼間は働かなければなりませんが、宗教的なことは夜にしなければなりません。夜が効果的なのです。また早朝に教えても効果的です。そして、一度来た人が、来ないではいられずに家から逃げてくるほどにしなければならないのです。皆さん自身が、そうならなければなりません。動機がないのに結果があるでしょうか。今までできなかったのであれば、もっと一生懸命に、もっと上手にやりなさい。他の方法を研究してでもやりなさいというのです。

十二時が過ぎて、鶏の鳴く声が聞こえるまでみ言を伝えてみなさいというのです。どれほど神秘的なことでしょうか。しんと静まり返った夜に、近所の犬がほえるのを聞きながらみ言を伝えてみなさいというのです。あたかも明るい陽光を求めて新たな人生の道を打開していくようでもあり、灯台の光を求めて新たな航海に出る船長のような気分を感じるのです。周囲が神秘でいっぱいの世界を一人で行くような勇敢な姿、たくましい姿、荘厳な姿を感じることでしょう。このような心情的な絆をもつためには、夜の時間を中心として指導しなさいというのです。夜や早朝に、このような活動を展開する必要があります。

夜、深夜は神秘性があります。それゆえ復興会をするなら、昼間するよりも夜するほうが恵みが多いのです。なぜかというと、昼間は私たちの感情がみな分散しているからです。視聴覚、五感で感じるすべての感覚が、昼間は分散しやすいのです。しかし、夜はむしろ集中します。すべてが私を包囲し、私というものをはっきりとさせます。そのような圏内に私が自動的に立つために、夜は神様と共に恵みの役事をしやすいのです。神様も良く役事をしてくださることができるのです。

早朝に起きて、自分の一日の生活が父の前に感謝の実体となることができるよう祈りながら、花の咲く春の園のごとき自由の園で、神様が私を立てて摂理することのできる希望

の結実体になろうとしなければなりません。昼になって仕事場に行けば、希望の結実体が育つ夏のようにもう一歩発展し、神様が共におられる価値を現すことのできる存在になろうとしなければなりません。

また夕方は、全体をみな集約して一つの決心を父の前に捧げることのできる秋のごとき時なので、祭物になれる立場に立とうとし、冬に当たる夜は、生命力を携えて神様と内在的な父子の起源を結び、すべての価値を受け止め得る自身となろうとしなければなりません。このように一年三百六十五日を勝利の日としながら感謝する生活をする人であれば、その人は父と関係を結んで生き、生きがいのある生活をしていると感じることができるでしょう。

皆さんが時間の過ぎるのも忘れているのは、神様の愛に酔っているからです。ですから草創期には、夜を明かしてみ言を聞き、み言を語るのが常でした。

眠る時間を計算して「きょうは眠れなかったから、あすはもっと寝なければならない」と言ってはなりません。皆さんはそうでしょう。「聖日の朝は断食だから土曜日の晩に御飯をもっと食べよう」、このような断食は、してもしなくても同じです。むしろ断食をしないほうがいいくらいです。断食をするからといって前の日にたくさん食べると、かえっておなかがすくのです。そのように食べてみなさい。胃を広げておいて突然空にするのですから、おなかがすいて当たり前でしょう。

三　教役者（牧会者）がもつべき姿勢

一) 教役者（牧会者）は公的でなければならない

千人以上を率いる人は、霊界の鑑定を受けて立てられた人です。

自信があって責任者になるのではありません。先生も「自分に自信がある」と考えたことはありません。自信よりも、神様が慕い、神様が訪ねるその人を慕うべきだということを知っていたがゆえに、いかにしてその心情をもって立ち上がるかということが問題でした。その心情さえ通じれば、できないことがありません。慕うその人をより高め、悲しむ人を慰労できる心をもつべきだということを知らなければなりません。

真の牧者（牧会者）は、自分が真の牧者だとは言いません。いつも黙々と神様のみ旨とすべての万象を自分の心に抱いて進むのみであり、自分の立場を弁明しないのです。

公的なことのために疲れも忘れて走り、いつ寝たのかも知らずにぐっすりと寝て朝起きると、体がどれほど軽いか知れません。そのようなことを思うと、「ああ、天に行く道はこうして行くのが原則なのだ」と思われます。ところが「ああ、きのうは三時間しか眠れなかったからきょうは五、六時間寝なければならないのだが」と思いながら寝て起きると、腰が痛く、体中がとても重いのです。ですからそのように思ってはならないということです。

責任者は、いくら疲れても先に横になるのではありません。みんなを寝かしてから横にならなければなりません。祈祷をする時も一

番最後までしなければならないし、信仰生活をするにおいても食べられず、いいものを着ることもできず、貧しいながらも精誠を尽くさなければならないのが責任者の立場です。そのようにすれば、「滅びよ」と言っても滅ぶことができないのです。

先生は、精誠を尽くす人の前ではどうすることもできません。今まで教会を指導してきながら、二人の人がいて、その二人のうちのどちらが優秀かという問題を解決すべき時は、顔の良し悪しを見るのではなく、心がどこに向いているかを見ました。すなわち、私的であるか、より公的であるかを見たのです。

朝第一歩を踏み出す時も、公的な一歩であるか、私的な一歩であるかを反省しなければなりません。そして一日の仕事を終えて床に就いた時も、公的な一日を送ったのか、私的な一日を送ったのか反省しなければなりません。また、一年を中心として公的な生活をしたか、私的な生活をしたか、一生を中心として公的であったか、私的であったかを反省しなければなりません。

公職に就いている人はかわいそうです。もてる精誠を尽くしたのに、仮にみ旨の前に誤って、自分のせいで千年の功績が駄目になってしまったらどうなるでしょうか。そんな心情で生活しているのです。

過ぎゆく歳月とともに流れていってはいけません。新たな日に備えて前進する群れとならなければ、荒野ではげたかの餌食となります。私たちは歴史的開拓者だという事実を知らなければなりません。開拓者は困難な環境を突破して、あすへと向かう希望の前に準備態勢を整えて進むべきです。

いったん責任を負ったならば、次は戦闘です。闘争です。お前が負けるか、私が負けるかという戦いをしなければなりません。皆さんはその戦いで、皆さんの一代で少なくとも三人以上、反対する立場にいる人を自然屈服させ得る基盤をつくらなければなりません。

皆さんはまず理論に対する知識をもち、次に、できるという信念をもつべきです。自分の考えが及ばず、自分の信念が及ばなければ、自分のものにならずに人に奪われやすいのです。しかし、自分が実践してつくった基盤、根をしっかりと張ってできた基盤は、それ以上の力を加え、それ以上の信念を加えない限りは、絶対に奪われることはありません。

責任をもつ前に、どのような心をもたなければならないでしょうか。責任を負えなければ命に替える、という信念をもたなければなりません。そのようになれば、問題の核心を解決する解決点が生じるのです。

「人間としてできる限りの最大の努力をしました。夜も昼も心のすべて、精誠の限りを捧げました」と言うことのできる立場、天が見てもそれ以上できないという立場でそこを去る時、たとえその人がすべてを成し得なかったとしても、天は成した価値以上に報いてくださるのです。皆さんはそれを知らなければなりません。

教会長はその地方の祭司長です。寝られなくても、恵みを祈ってあげなければなりませ

ん。多くの人を救うために祭物を扱うのですから、精誠を尽くす苦労をしなければなりません。祭祀には実体（教会長）と主人（神様）が一つとなって初めて、返ってくるものがあるのです。

祭祀は、誰が管理するのでしょうか。祭司長が管理します。客が管理してはいけません。それゆえ公的な和合の場を重要視しなければ発展することができません。

祭物の前に立った人たちは頭を下げなければならない、というのが天法です。その祭壇には神様が臨在して干渉されるのです。心情的に私は、きょうこの祭壇の前に情熱とすべての力と努力を捧げきり、自分の生涯で最高の誠心誠意を尽くして口を開くとき、神様が協助されるのです。祭物は深刻な立場で捧げられるものなのです。

一生の間、嫌になるほど食べて、笑って、踊って生きたのちにお墓に行けば、福となることが何かあるでしょうか。そのような人のお墓には草が生えるだけですが、国のために血を流して死んだ人のお墓には、その国が生きている限り花が咲くことでしょう。

統一教会の先生になるのは易しくありません。それは罪人のように、囚人服を着て死刑場への道を歩いていく、そんな気分で歩んでいる人だというのです。皆さんは刑務所生活をしたことがないので分からないでしょう。豪華な家に住んでいますが、私はその家を必要とする人ではありません。私は草屋にも住める人です。草屋にも住めるように訓練されています。服を脱いで、それを持って労働の場に行けば一等労働者になれる、そのような訓練をした人です。そこに神様が愛する人がいれば、私が行って抱き締め、環境をすべて収拾してそこで涙を流し、友達になれる、このような心情的な訓練をした人なのです。

二) 食口の指導は精誠によって

教会員（食口）を慕うのも、初恋をするような心で慕わなければなりません。

核心要員は、夜を徹してでも精誠を尽くして育てなければなりません。そのように三日間精誠を尽くせば、その人は一生忘れることのできない恵みの因縁を結ぶのです。伝道対象者が夜遅くまでいて帰る時にも、帰らずにもっといてほしいと思うようであれば霊界が協助してくれます。

まず自分自身がみ旨に酔ってこそ相手にも伝わるものです。

先生が食口を育てるために千辛万苦したように、皆さんもそうしなさいというのです。夜に客が来たならば、ひざまずいて天の恵みを祈ってあげ、昼間に来た客には奥の間に通して自分の親戚よりもうれしい客としてもてなし、「私の家はこういう家です」という家風を立てなければなりません。そのような家風を立てるならば、その人は誰のために生きるでしょうか。他人をもてなす伝統をもった人たちが教役者（牧会者）を飢えさせるでしょうか。教役者を飢えさせておきながら恵みを受けようという人たちには、口に砂を入れてやらなければなりません。

夜を徹して話をする時も、楽しくすべきです。夜の十二時が過ぎて、夜中の二時、三時になり、「帰ったらいいのに。寝なければならないのに……」という思いがあると、みな逃げていってしまいます。明け方の三時、四時になっても「帰ってほしくない。時計が止まればいい」という思いがなければなりません。そのような場に因縁を結んでいけば、その人の霊は分かるのです。霊は申し訳なくて食事をするや否や、お尻は後ろを向こうとするのです。先生はそのようにしたのです。

誰に会うにしても、会っただけで終わってはいけません。天を中心として会った人ならばなおのこと、絶対にその因縁を忘れてはいけません。教会に来ていたのに来なくなったからといって切ってしまったり、呪ってはいけないということです。その人が離れて出ていったとしても、その人と結んだ因縁だけは捨ててはいけません。

もし悪いことがあれば、悪いことをすぐに処理するなというのです。悪いことがあっても、その悪いことが良くなり得る条件を探し求めつつ、それを保留にして処理し得る余裕をもたなければなりません。もし一年前に間違ったことを見て切ってしまったなら、その人は完全に死んだでしょうが、一年、二年、三年と切らずに保留にして、それを番外のことと考えながら処理するならば、一年、二年、三年以後にはその人が生き得る道もあるのです。

新しく入った食口を愛すれば、蕩減条件を早く立てることができます。教会が発展できない原因は、食口たちがそのようにできないところにあります。ですから神様は、互いに愛し合い、和睦しなさいと言われました。

食口が離れて出ていったとしても、落胆してはいけません。不思議なことに、食口が一人出ていけば、その人と性格や話し方、歩き方まで似た人が来るのです。どの面から見ても不思議なほどに出ていった人にそっくりでありながらも、すべての面でずっと良い人が来るのです。そのようなことを考えると、精誠を尽くしたことは失われることがないということが分かります。これは間違いのない事実です。

教会の草創期に、韓国で食口を育てるときには眠りませんでした。一対一の作戦をしたのです。一人の人の前で講義をするにしても、千人の前で講義をするような思いでしました。その一人の人に数千、数万人がかかっていると考えたのです。どんな命令でも聞くことのできる、そのような人にするためには、それだけの精誠を尽くして、そうなるための動機をつくってあげなければなりません。

皆さんは、欽慕の心情をもった食口にどれほど会いましたか。先生は、そのような人にたくさん出会いました。地の果てからやってきて先生に敬拝するではありませんか。それはなぜでしょう。先生が地の果てまで愛の心情的な綱を投げたがゆえに、既に電気を通したので、方向が分かるからです。そうでなければなりません。

指導者になるためには、心から病人を治療する医師の立場に立たなければなりません。病んでいる人の心霊状態が下がれば、夜でも

昼でも時間を問わず、共に涙しながら心霊を治療するために努力しなければなりません。それが霊的指導者なのです。皆さんは生命を救うために幾晩も夜を徹したことがありますか。 生命を救うためにどれほど忙しく歩き回りましたか。そのようなことが今後霊界に行けば、表彰の対象になるのであり、人格的な基準になるでしょう。

三) 男女問題、公金に厳格でなければならない

今後、男女問題に許しはありません。許しよりも天が願われません。堕落というのは何ですか。 性の問題を自己主管できなかったために堕落したのではありませんか。男性にとって最も問題となるのが衣食住の問題、性欲、次に物質に対する欲望、欲心、これらが罪悪の根です。これを主管できない人は責任者にはなれません。

男女問題が大きな怨讐です。これが天地の法度に背き、世の中を滅ぼしたからです。これに自信のない人は祝福の場に出てはならないということをはっきりさせるために、話しているのです。万が一、皆さんがこれを破り、あの世へ行って引っ掛かっても私は知りません。私の責任ではありません。引っ掛かった場合には逃れる道がないのです。歯を食いしばってでも脱線してはいけません。

今後、男女問題には特に注意しなければなりません。男性でも女性でも、愛し合っているというううわさがある人は、今後絶対に責任者になれません。それは、そうしてはいけないようになっています。

男女問題に関してはっきりさせなければなりません。責任者はこの原則に厳格でなければなりません。そうでなければ誤解を受けるのです。弁明する道理がありません。ここで一度この問題に引っ掛かると、それこそ永遠に道がないのです。

宗教の背後には、いつも男女問題がつながっています。霊的な集団は、必ず男女問題にぶつかりました。それはどうしてなのでしょうか。 エバが堕落する時、自分の夫アダムと天使長を相手にしたからです。ですから終わりの日になって、女性は二人の男に対して善悪を判断すべき運命に置かれるのです。そういうわけで、男性が宗教に入門して修道すると、最後の峠で美人が現れて誘惑するのです。もしその誘惑に乗せられるようなことがあれば、千里、万里の崖から落ちるのです。

教役者（牧会者）たちが息子、娘を育てていますが、非良心的な、良心の呵責を受けるようなことをしたり、あるいは公金をむやみに使ったりするよりも、いっそのこと食べないほうがましだというのです。食べなければ天と地が同情します。食べない人に同情しない人はいません。子供も飢えている時、食べさせてやらなければなりません。もうすぐ死ぬ人には同情するのが人情の原則なのです。それゆえ殺人犯が死刑場で死刑になる時、彼に「最後の願いは何か」と尋ねて、その時だけは願いを聞いてやるではないですか。そのように、悲しみ、困難に陥った人に同情すべきだと見るのです。

統一教会の幹部の中に、公金や物質の扱いを誤って、人情で自分の家庭を中心として公

金を使い、心情的に蹂躙する人がいます。それは自分の息子、娘の前に毒薬を配給するのと同じです。間違いありません。サタン世界ではこれが引っ掛かるのです。公金に対してはどうすべきか、 公的な人にどうやって対すべきか、公的なことをどう決定し処理すべきか、統一教会の牧会者は今後一大革新をしなければなりません。

霊界の法の中で最も恐ろしいのが、公金横領と公的な人を冷遇することです。最も恐ろしいのがこれです。責任者や神様が送った人をないがしろにすれば国が引っ掛かり、世界が引っ掛かるのです。

人間の生活において物質をないがしろにしてはならず、公金をきちんと扱わなければなりません。公金をきちんと扱わなければ天国の憲法に引っ掛かるのです。また、自分が出世したからといって勝手に人を人事措置することはできません。自分が出世して入った所に自分の怨讐の息子、娘がいたからといって、引き抜いて他の所に回して死ぬような立場に送ると問題が起こります。

先生が公金を使うときは、全体のことを案じる気持ちで使います。

これからは公私の問題を徹底的にしなければなりません。公金はサタンが配置した毒薬です。そのような公金を誤って使おうものなら滅びるのです。その公金から事が起こるのです。奸臣もそこから出てくるのです。そのために国が滅びることもあり、国を売り渡すこともあるのです。

私が血と汗を流して稼いだこのお金を、むやみに使うことはできません。むやみに使うことがあろうものなら、手足どころか自分の先祖まで引っ掛かるのです。公務員が国の国庫金を横領すると罰を受けますが、神様の公認を受けた天の公金を横領すれば天罰を受けるのです。

四　説教は恵みと感動がなければならない

一) 説教の実際

説教する時は女性がお産の時に苦痛を感じるような立場で説教しなければなりません。すべての精神をそこに集中させなければなりません。説教の壇上に立つときには、産婦が産室に入るような感覚がなければならないのです。その境地に達すれば準備が必要ありません。説教の内容が問題なのではなく、そのような心情になっているかどうかが問題なのです。

説教の時間はある人を天国へ行かせるか、地獄へ行かせるかという境界線になります。「今まで統一教会のことが気がかりだったけれど、一度行ってみよう」と教会に来たのに、「この説教は何だ」ということになれば、その人の首を完全に切ることになるのです。公廷で判事が宣告をする場よりも深刻な場が、説教の場なのです。

人にとって最も大変なのが、前に出てみ言を語ることです。人前で話をすると、みんなが注目します。甲は甲なりに、乙は乙なりに、丙は丙なりに、また金氏ならば金氏、朴氏ならば朴氏と、みなそれぞれに聞いて批判なり

判断をするのです。ですから人前で話をする人は、とても大変なのです。

牧会者は説教についてのことを常に補充し、特に教会員に必要で、ためになることをいつでも供給してあげなければなりません。

霊的指導者には体恤的な信仰なしにはなれません。本を見て説教の準備をし、本を見て説教しても、その本の中に神様がいますか。いません。神様は霊的な中におられるので、神霊を通さなければならないということを皆さんは知らなければなりません。

皆さんが説教する時、昔その題目で説教したことがあるということを食口が知れば、気を悪くします。それは、人が春夏秋冬の四季によって変化を感じるのと同じだからです。朝だからといって、いつも気分がいいとは限りません。何も心配なことはないのに、とりわけ憂うつな日もあります。朝の日差しも明るく、そうかいな天気でも自分では憂うつな日があるのです。

そのような時、どうすれば解決できるでしょうか。これを急に変動させる刺激的なものがなければ、もっと憂うつなところを求めて入りなさいというのです。このように正反対の新たな刺激を与えるなり、それを克服し得る新たな刺激を起こして補充していかなければなりません。皆さんが解決方案を立てて一日一日の生活を調節していくことができなければ、今後多くの人の心霊を指導することはできないのです。

新たなものを提示しなければなりません。どのようにしてでも刺激を与えなければなりません。祈祷してでも補充すべきです。それでも駄目ならば、命を懸けてでも談判しなければならないのです。

準備のできていない説教をして恵みを与えられなかった時、ありったけの力を尽くしても駄目だった時は、振り返り、帰ってきて、ただただ大声で痛哭する時間がなければなりません。恥ずかしいのです。自分の恥ずかしさを知るべきです。そうしてこそ発展するのです。

朝御飯を食べる時、新しく炊いた御飯を食べるでしょう。新しい味がしなければならないのです。説教するにも新しい説教をすべきです。霊的な面で新しい何か、保養剤とでもいうか、そのようなものを供給して、そこにつけ加えて説教しなければなりません。そうでなければ調味料を入れて酸味をきかせ、塩味をきかせ、さもなければ苦みでもきかせて新しい味を出さなければならないのです。

恵みを与えられずに説教を一時間してきたならば、三時間悔い改めなければなりません。皆さん、それを知らなければなりません。説教がうまくできずに恵みを与えられなかった時には、三倍以上悔い改めなければならないのです。一つの生命のために命の水を与え、育てるべきなのに、水をやるどころか水を奪い、土を掘り起こしてきたとすれば、その責任を取らなければなりません。その人たちが帰ったあとでも、きょうのみ言を中心として恵みを施さなければならないのです。

聖日ごとに「聖書はどこを読もうか、賛美歌、出てこい、聖歌、出てこい」と言うのではありません。それではいけないのです。人にとっての生きた材料を中心として、聖書からそのような歴史を取り上げて、その人のことと聖書の内容を対照しながら興味深く説教するのです。そうすると聞く人は、自分の話なのですっかり引き込まれるのです。喜ぶのです。本を見てしようとしてはいけません。本も人から出てくるのです。人自体が本の原本だということを知るべきです。

牧会者は苦労をたくさんしなければなりません。人生の修練をたくさんしなければなりません。かわいそうな労働者から乞食、あるいは高級官吏、あるいは権勢圏にある立場まで一度は経験することも必要です。そしてそのような状況を中心として、その時に公的立場で経験した事実などを取り入れた体験談には実感がわくのです。

二) 真のお父様の説教

先生は、説教のために祈祷する時間よりも食口のために祈祷する時間を多くもちます。「父よ！　この者たちを引き上げなければならないのですが、どうすればよいのですか。これですか、あれですか」と、精誠を尽くしてから心の命ずるままに説教します。

先生は、説教のために準備をしたことがありません。生きた体験で事実を語る時は、みな感動せずにはいられないのです。

一時先生は（北韓にある）咸興でトンネルを貫通する仕事をしました。おなかをとてもすかせて仕事をすると、つるはしを強く握りしめた手が上がらず、精根尽きていました。「昼飯だ！」という声を聞いた時、その声がどれほどうれしかったか分かりません。その時の御飯！　その御飯を食べるためにつるはしを地面に突き立てて振り向くその瞬間の気分、先生にはそのような生きた歴史の材料が数えられないほど多いのです。

悲惨だった復帰歴史の事情は、私を滅ぼすのではなく、青史に永く光り輝く資料であることを知らなければなりません。それで、神様が秘めた宝物をかき集め得るその日まで行かなければなりません。その受難の事実を世界万民の前に打ち明け、話せば、他の内容で一時間説教するよりも、この内容で十分だけ話せば痛哭するというのです。そのようにいい説教の内容がどこにあるかというのです。

神様と密接な関係にあれば、説教の準備をしなかったと心配するなというのです。そのような訓練が必要です。私は、有名な人に会って一日に十回話をしたことがあります。その時は、場所によってみな内容が違う話をしなければなりません。ところで、それをみな準備してするでしょうか。そういう時の心は、完全に祭物としての自覚をもつのです。祭物の自覚。「私」というものはありません。存在意識がないのです。所有観念もないのです。完全に捧げられる立場に立てば、天が共になされるのです。

皆さんがいつも注意すべきことは、先生が今どの方向に向かっていくのかということです。そこに歩調を合わせていくのが、皆さんが説教する上で一番効果のある方法です。恩

賜を施すことのできる動機になるのです。先生がこの時間に、何のために、どんなことをするのかを知ろうとするならば、相対的に心情的基準を先生と一致させるために自分の心を引き上げて、先生の心をどのように身代わりできるかが問題なのです。皆さんが先生の前に相対的立場で動くようになれば、天運はそこに訪れることでしょう。

聖日の説教をする時は深刻でしょう。私が皆さんだったら、夜寝ることができません。どうして寝ることができますか。人の生命を生かすために注射するのです。強壮剤注射をするのと同じです。食口たちに一週間分の薬をあげ、強壮剤注射をしなければならないのです。生命を扱う医者が、生死の岐路に立たされた人に注射する時、深刻なのと同じように、そのような立場で指導しなければなりません。ですから壇上に立つ時は、死刑場に出ていくのと同じなのです。

説教する時は汗を流さなければなりません。後頭部に汗が流れなければなりません。涙と汗がなければなりません。それが鉄則です。説教は心配する必要がありません。先生が一生の間に説教した二百巻を超える説教集があります。皆さんが霊界に行って問答する時、「私は見ることも読むこともできませんでした」と言いますか。英語には翻訳させないでしょう。これを読まないで逝けば大変なことになります。指導者たちがこれを読まなければ大変なことになります。

五　献金は法度に合うように捧げるべし

一) 十分の一献金を捧げる法

公金に対して厳しくなければなりません。十分の一献金は徹底しなければなりません。自分の総収入から十分の一の献金を必ず神様の前に捧げなければなりません。

十分の一献金は、所有している物質中の十分の一を神様に捧げることにより全体を捧げるという意味をもっています。父に全体を捧げるのではありませんが、その中の十分の一を精誠を込めて捧げることにより、残りの十分の九も聖なる物として取り扱い得るようになります。このように十分の一献金を捧げて生活する人は、絶対滅ぶことがありません。日がたてばたつほど、倉庫がいっぱいになっていくのです。

精誠を込めて十分の一献金をしてみなさい。絶対に飢え死にしません。その子孫は物質に対して窮乏しないのが原則です。十分の一献金を捧げるために精誠を込めなさい。それが信仰の本質です。適当にすればいいだろうと、それは通じません。祭物は、自分の生命の代わりに捧げるのです。それで、一番貴重な物を捧げるのです。

蕩減するために物を条件にします。私たちが十分の一献金を天の前に捧げる理由もここにあります。九数は堕落世界の数です。十数はこれを超える数です。天の世界の数です。

レビ族が治める教会の祭壇の前に、十一支派は全部十分の一献金を捧げなければなりません。これからは十分の一献金を捧げなければ教会員ではありません。もともとは十分の三献金を捧げなければなりません。一つは自分の国のために、一つは世界のために、一つ

は教会のためにです。十分の三献金を捧げなければなりません。

私たちが生きていく上で生活の十分の一献金を出すのは絶対的です。それを自分の物だと侵犯してはいけないのです。なぜそうなのかといえば、九「三三が九（３×３＝９）」は、サタンが今まで支配したのです。サタンが支配するこの地上を、九数を天の前に返し連結させれば、神様が主管できるようになるのです。そうすることにより十数を探し出すことができるので、私が神様を信じて九数を引っ張っていけば、この九数圏内のすべての所有権をサタン世界から分離できるのです。それで十分の一献金という言葉が出てきたのです。

復帰途上を越えていく過程にあって、私たちは十分の一献金ではなく十分の三献金をする覚悟をしなければなりません。一つは国へ捧げ、一つはこの世の中の人たちに施さなければなりません。復帰過程ではしなければならないのです。また一つは天の国へ捧げなければなりません。十分の一献金というのは天の責任を担う人として、絶対に侵犯してはならないのです。そのようにして誠心誠意を尽くさなければならないのです。

皆さんが献金する時、何かを買って食べて、残ったお金で献金してはいけません。そのようなお金は汚れた物です。また市場に行って何かを買って、残ったお金で献金をしても、神様はそこに共にいらっしゃることはできません。

祭物は、他人が残した物でしてはいけません。それは汚れた物です。恵みを受けた者ならば一遍に分かるのです。それで不浄な所には行けないようにするのです。

これからのすべての物は、最後に世界の物にならなければなりません。そうしながら同時に世界的な神様の物になり、世界的な「真の父母」の物になり、世界的な真の子女の物にならなければなりません。すべての物はそのような物質として復帰しなければならない責任が、私たちにはあります。これを徹底的に感じなければなりません。

自分が使うところからいくらか献金して、それで教会を支えるというのは極めて良いことのようですが、それは悪いことだと思うのです。神様の前に捧げることは自分の生活より、自分全体よりも先にしなければなりませんが、それの何パーセント捧げるという観念によって自分の生活が主で、神様が次の段階に立つのが習慣化されやすいのです。神様が二番目になり一番最後になってしまうのです。そうだと思いますか。そうではありませんか。

皆さんが献金をする時はどうでしょう。子供たちが聖日の朝教会に行く時に、「お父さん、お母さん、献金！　献金！」と言えば、いくらかを渡しながら「さあ、献金だ、聖日礼拝で献金しろ」ですか。神様が乞食ですか。教会の牧師が乞食ですか。そのような牧師、教会は駄目です。献金は自分の財産の金額を捧げなければなりません。自分の金庫の一番奥に入れておいて精誠を込めて準備しなければなりません。収穫の秋になりすべての蔵に穀物を刈り入れる時も、十分の一献金を別に取っておかなければなりません。そのようにして一年の間、息子、娘、一家が共に精誠を

込め、愛の心を重ねて祭物として捧げなければなりません。

祭物を捧げておいて祭物を取り戻す法はないのです。取り戻す道理がありません。それはより高いところで、その責任者がより高いことのために使えばそれでいいのです。低いところのために使いません。皆さんのために使わなくてもよいというのです。

宇宙を創造された絶対全能であられる神様が、乞食に投げ与えるようなそんなお金でもって喜びながら、「ああ、福を受ける者たちよ！　お前たちは愛らしい宗教人だ」と言うことができますか。サタンの前に威信が立つのかというのです。献金箱を回しながらお金を出しなさいというでしょう。それは、看板を付けた乞食です。それは、何ですか。それは、神様は喜ばれないのです。

皆さんが先生に献金をしますが、先生はそんなお金は受け取りません。先生は受け取らない主義です。皆さんがそれを集めるためにどんなことをしたのか、それを私が知って、それに対して恥ずかしくない主体的な立場に立てるようでなければ受け取れないのです。心の姿勢がそうなので、与えてもまた与えたい心が神様に宿るのです。

精誠を込めた献金や礼物に対する時、その価値を知らないで対すれば、精誠を込めた礼物に審判されるという事実をはっきりと知らなければなりません。王様も自分の身の振り方を間違えば、すなわち精誠を尽くした人には、むやみに接したなら滅んでしまいます。精誠を尽くす人を間違って接すれば、天の逆賊として追われるようになります。ですから先生は、精誠を尽くす人にはむやみに接しないのです。

私的な物を公的な物より重要視する人は、天道に反する人です。私的な自分の人格を公的な人格より重要視する立場は、み旨に反する立場です。

既成教会で、献金することを何と言いますか。それは何かの袋を持って回すでしょう。私たちの教会も、献金をそのように受け取りますか。何の献金箱を持って受け取るのですか。出ていく時、みんなあの門前の献金箱に集めておくのです。精誠を尽くし恵みを受けていく代価として感謝献金をするのです。出さない人たちは帰っていって……。そのようなお金をもらっても、それは天が願わないのです。

精誠のこもったお金でなければいけません。お父さん、お母さんのポケットにあったお金では駄目です。全部自分の体に三日以上持って聖別して、献金しなければなりません。昼食一回分にも満たないものをどこに献金するのですか。自分の生命、財産を全部はたいてでもしなければならないのに……。

一番最初の物は、神様の前に捧げなければならないのです。聖なる物は、神様の前に捧げなければならないのです。聖なる物がないところには、神様が共にされないのです。皆さんの生活習慣は、このようにしていかなければならないのです。

十分の一献金は、一番精誠を尽くした聖なる物でなければなりません。それが祭物です。

祭物を捧げるには、聖なる物を捧げなければなりません。息子を祭物として捧げなければならないとするなら、どんな息子を祭物に捧げなければなりませんか。憎い息子ですか。望みのない息子ですか。そんな息子は祭物にはならないのです。一番良い息子でなければならないのです。なぜですか。祭物は「私」の身代わりだからです。

今自分が持っている物、または自分所有の財産は、自分が少しの間管理する過程にあるというのです。皆さんは管理人です。それで、各自がよく管理して奉献しなければならないこの万物は、真の父母の懐を通し、神様の懐へ帰っていかなければなりません。もう一度言えば、神様の物であると同時に「真の父母」の物という過程を通さなければ、私の物にならないという事実を知らなければなりません。

復帰路程の原則的基準で見る時、万物はまず人類始祖の物とならなければなりません。もちろん神様の物ですが、神様が人間の前に下さった祝福の基準を中心として見る時、人間始祖の物とならなければなりません。堕落しない善の父母の物にならないといけないのです。

堕落は、自分のものをつくろうとし、自分が所有しようとすることから始まります。神様とメシヤが来られるのに、このようにすれば必ずサタン側になるのです。それで従順の道理を通らなければならないというのに、いつも堕落した世界に執着する事情が残るようになるのです。皆さんは皆さんの所有を神様のために使おうとする時、どのようにしますか。私は自分が稼いだ物でも、夢にも私の物にはしません。

私のものはあなたのものであり、あなたのものは国のものであり、国のものは世界のものであり、世界のものは神様のものであり、神様のものは私のものだというのが、私たちの主流思想です。

まず物質祝福時代を通して人間祝福時代が来て、その次に神様を主とした心情祝福時代が来るようになっています。

今まで人間が復帰されるのに、万物がどれだけ多くの貢献をしたか分かりません。また万物と人間が一つになれなければ、父の前に行くことができません。

二) 生活にも十分の一献金がある

教会の十分の一献金生活も、食口の家庭が十あれば引導者一人を食べさせなければなりません。そのようにできなければ天民権をもつことができません。

十人が住めば、天の人一人を扶養しなければなりません。

十分の一献金は、すべてに該当します。学校も、十教室中の一教室は、かわいそうな子供たちのための無料奉仕の教室として使わなければならないのです。

これからは皆さんが持っているすべてのもの、時間までも十分の一を捧げなければなりません。過去と同じように物質だけではあり

ません。仮に家族が十人いたら、一人を差し出さなければなりません。そのような基準で出なければなりません。これからは、私たちの教会食口は十分の一献金ができなければなりません。十分の一献金ができない人は食口ではありません。これは義務です。天的な義務だというのです。

聖日は十分の一献金の日であり、自分の日ではありません。ですから天の命令どおりに服従する日なのです。天の物を私の物として使おうとするのが罪です。私の子供の中の一人を天の前に捧げなければならず、そのようにできなければ他人の子供でも勉強をさせ天の前に捧げなければなりません。

そうめん一杯を食べるにしても一人で食べてはいけません。天の父に仕えている者として一人で食べて申し訳なければ、「共におられる父の前に私一人で食べるしかないので心苦しいです」と言い、父が参与できる条件を立てて、必ず父母をまずもてなす立場に立てておいて生活しなければならないのです。服を買って着ても、一人では着れません。そんな生活をしなければならないのです。

三) 蕩減基金

堕落人間が父母を殺した罪、子女を殺した罪、万物を失ってしまった罪をどのようにして蕩減しますか。ユダがイエス様を売って旅人の墓地を買いました。ゆえに蕩減基金で聖徒たちがとどまることができる家を準備しなければなりません。元来は本部を買わなければなりません。十二弟子が売ったために、四年間に一万二千ウォンを献金しなければなりません。蕩減基金は、お金の中でも一番貴いお金を捧げなければなりません。この基金献納は、父と兄（アベル）を殺した罪の血の代わりに蕩減として基本的なお金を納めるのであり、子女たちにおいては父と兄の血の代価となるのです。これからこの基金に加えて、聖殿を建てなければなりません。

蕩減基金を精誠を尽くして返さなければなりません。蕩減基金は、食べる物を食べなくても、着る物を着なくても精誠を尽くし、他人の手を通さないで自分自身が直接出さなければなりません。蕩減基金を伝統にし、私たちの子孫たちも全部この峠を越えなければなりません。これをすべてがするようになれば、国家の運勢を越えていきます。表面には見えませんが、千の道、万の道の中に泉がわいており、穴を掘れば爆発する力があります。私たちは他人が知らない中で、このような神聖な祭事を行う祭事長、祭官としての責任をもって祭物を捧げることができなければなりません。

一人の誤った行動によって、真の父として来られたイエス様をこの地上から追い出した立場になり、神様の摂理は、四方八方が完全にふさがれてしまいました。これを蕩減する条件として四年間に三数に該当する金額を、イエス様を売ってしまったその実体の額を神様にお返しするのです。四年間というのは東西南北に該当し、韓国では一年に三千ウォンずつ四年間にわたって納めるという条件で、一万二千ウォンを献金しなければなりません。

私たちは天と地の恨みを解き、この地にふさがれている城を壊さなければなりません。そうして、今まで道を磨いてきながら犠牲に

なった道人たちを中心とした本部をつくっておかなければなりません。この蕩減基金は、世界的な蕩減をするものです。蕩減基金は、血と汗を流し精誠を尽くしたものを出さなければなりません。銀行に貯金しておいたものを引き出してはなりません。

主は、歴史の蕩減条件を立て血を流すような道を歩かれました。そうして天地の恨みを解きました。しかし、子女たちが恨みを解けなかったので、これを解くようにするための条件が蕩減基金です。父母は勝利しましたが、子女たちが侵犯を受けたので、勝利した父母の基盤の上に父母を売った恨みを解怨成事しなければなりません。蕩減基金を納入すれば飛躍的に発展するようになります。子女がどんなに父母を迎えても、天地をもったとしても、「真の父母」が流した血の恨を解かなければならないのです。

食口たちは蕩減基金を率先して納入しなければなりません。涙と汗と血の恨を蕩減する条件を立て勝利してこそ、また新しい摂理が出てきます。民族的な基盤の上に、国家的な逆境をかき分けて行かなければなりません。先生は、韓国民族が一番かわいそうな民族になることを願います。それは、私たち民族が一番悲惨な位置にいてこそ蕩減をすることができるからです。それで私たちは今、民族的な蕩減条件を立てて進んでいるのです。

蕩減基金は、お金の中で一番貴いお金です。この基金に逸話が多くなければなりません。悲惨なことが多くなければならないのです。

六　神様は公的な祈祷を受けられる

一) あいさつをするにも方法があるのではないか

信仰者はより大きなことのために公的な祈祷をしなければなりません。

先生は興南の監獄で三年近い歳月を過ごしましたが、その中で何人かの食口たちのための祈祷を、御飯を食べる時から寝る時までしなかったことはありません。たとえ離れていった人であっても、彼のためにずっと祈ってあげました。それで、霊的に先生を探して物悲しく涙を流しながら報告をするのです。肉身（体）が弱くて仕方なく先生から離れるようになったとあいさつをしましたが、去るようになった悲惨な情景には同情せざるを得ません。そのようにして離れていっても、その人のために祈祷してあげないといけないのです。なぜでしょうか。その人が責任を全うできないで行ったために、継承者が出てくるまで祈祷してあげないといけないのです。そのような精誠の土台さえ残っていれば、どんなに食口が落ちていったとしても、神様が必ずみ意にかなう人を送ってくださいます。

私が拷問を受け血を吐いて倒れたとしても、「天よ、この血を見て私のために涙を流さないでください。これは恥ずかしい血となるのであり、嘆きにぬれた怨恨の涙になるので、ここに天が同情することを願いはいたしません」と言うのです。ですから、監獄に入るようになっても祈祷はしないのです。心情世界にあっては、そのようにしなければならないのです。

この世でもあいさつをするのに、その方法があるではないか。祈りにおいても研究してやりなさい。

神霊な世界に入って祈祷するようになれば、まず神様のために祈ります。そしてイエス様のために祈ることができれば、歴史的な心情を知ります。その次に、天地創造以後今までキリスト教系の素晴らしいみ旨に代わって闘ってきた数多くの人たちに代わって祈ってあげなければなりません。堕落以後アダム・エバから今まで数多くの預言者たちが歩んできましたが、「彼らにつのった恨を解怨する祭物になるようしてください」と祈りました。これがすべて終わったのちに、愛する息子、娘のために祈り、その次に、自分のために祈るのです。天法がそのようになっているのです。

涙を流し、骨髄が溶けてしまうような深刻な境地に入り、一対一で勝敗を決めようというのです。私が涙を浮かべる時神様も涙を浮かべ、神様が涙を浮かべる時私が涙を浮かべるそのような立場で、従順に従う心で神様とやりとりできる境地に入らなければなりません。どんなことでも、そのようにしなければなりません。そうするために祈らなければなりません。根がないといけません。その根が祈祷です。

精誠を尽くすにおいて、「絶対信じます」という位置へ入らなければなりません。「神様を絶対信じます」。み旨ならばみ旨に対して「絶対信じます」という位置に入らなければなりません。そのような位置にのみ、神様が協助されるのです。祈祷していても、祈りが成されるか成されないかと疑ってはいけません。「父よ！　私だけ残りました。私でなければこの国がなくなり、この世界がなくなるでしょうが、父よ、あなたが六千年間苦労してこられたこの一つの境地に、この境界線に一人残りました。あなたが成就させるみ旨の近くにいる者が、私しかいないではありませんか。国にはこのような存在が重要ですが、私はまだ準備が十分ではありません。しかし、そのような者に命令され私がそのようにできる条件、そのようにできる基盤を備えて、全体のこの民族に代わってやります。これが復帰摂理ではありませんか」と言えなければなりません。祈祷は、目的の完成のためにも必要なのです。

祈る時、一番最初に国のために祈らなければなりません。その次は世界のために祈り、次には神様の解放のために祈らなければなりません。神様が平安な位置にいらっしゃると思いますか。自分がしなければならないことが何であるかも知らずに、世の中の運勢がどのように動いているかも知らないで「おお、主よ。私を天国に送ってくださいませ」と言っています。

責任者として、本質的な原理的軌道をどのように行かなければならないかということを知らなければなりません。それで祈祷をしなければならないのです。祈祷です。神様と私の関係、神様が私をどれだけ愛しておられるか……。また、食口のために精誠を尽くさなければなりません。私が食口と共にどれだけの関係を結んだか、これが丸くなるように……。そのために祈祷しなければなりません。

自分の利益のために宗教を信じる人たちは、福を受ければ神様を捨てます。福を受けるのが目的だからです。少し豊かに生活するようになると落ちていくのです。皆さんは、神様が願われることが何なのかを探してさしあげるという観点で祈祷しなければなりません。そして世界に福を賜るようにと祈祷しなければなりません。

師匠を師匠としてつくるためには、皆さんが責任を全うしなければなりません。父の前に祈祷をするにも、「父よ、あなたの息子、娘が来ました。あなたが会いたがっていた息子、娘が来ました」と堂々と言うことができる環境をつくっておいて祈祷しなければならないのです。

誰が見ていようが見ていまいが、私がすべきことは私がしなければなりません。私たちが神様と約束を守らなければならないのです。夜でも昼でも全体のために祈らなければ、それは生きた祈祷とならないのです。それで自分の願う祈りが変わり、題目が変わりながら発展するのです。今、時がどのような時なのか知らなければなりません。そのような裏面の生活を、祈祷を通して身につけなければならないことを知らなければなりません。

先生も自然を愛し、一人でいる時間を趣味としています。物静かな夜がとても好きです。しかしそんな話はしません。先生にそのようなものがないでしょうか。皆さんに見えないだけです。そんな生活の豊富な底辺基盤を磨くことができるのも、祈祷以外にはないということを知らなければなりません。

福は他のところにあるのではありません。自分の心情的姿勢によって福が来るのです。皆さん、祈って精誠を尽くすのはなぜですか。精誠を尽くして「アーメン」と言って出てきて、泣いている赤ん坊がいればお尻を足でけって突く、このようならばその家はどうやっても駄目なのです。美しい祈り、懇切に願う祈りをしたならば、懇切な心と美しい心で環境を処理して、祈祷する基準の相対的な立場で、その結実を結ぶことができる姿勢を備えなければなりません。今日、既成教会の人たちは、賛美歌を歌い、礼拝に行けば天国に行くと言います。とんでもありません！　教会に行ってきて、けんかをし拳をふるい、ありとあらゆることをして天の国に行けるというのですか。

二) 真の父母様のみ名を通し祈祷する

祈祷する時、「真の父母」のみ名で祈祷しますが、「真の父母」とは何ですか。その言葉は先生とお母様だけだと考えないでください。より高い次元で世界を抱き、民族感情や国家感情を超えて万民を真実に、一筋に愛することができるお母さん、お父さんという境地の基準を考えなさいというのです。それで先生も「真の父母」のみ名を通して祈祷するのです。

今は、「イエス様のみ名で祈祷」する時ではありません。今はみ名の救援時代ではありません。実体救援時代です。キリスト教徒たちはイエス様の名前で祈ります。しかし先生はそのように祈りません。イエス様が必要であって、イエス様の名前は必要ないのです。お父さんという言葉は千個、万個あります。

しかし実体は一つだけです。そうでしょう。ですから天の国には、イエス様の実体に乗って行かなければならないのであって、名前に乗って行くのですか。

統一教会ではイエス様のみ名で祈りません。統一教会に初めて入ってきた人たちは「えー、なにー、『真の父母』が何だ。なぜ『真の父母』のみ名で祈祷するのか」と思うのです。皆さん、「真の父母」とは何か知っていますか。「真の父母」というのは、エデンの園で堕落せず神様の栄光の中で千世、万世に誇ることができる先祖を言うのです。ところが立てられた人類の先祖が堕落したために、新しい先祖がいなければ、神様または新しい先祖の名前で祈祷するのです。道理にかなっているのです。イエス様お一人では通じないので、イエス様と聖霊を通さなければなりません。イエス様は父の神で聖霊は母の神なので、堕落した人間たちは誰でも、父母の因縁を通さずしては天国に行くことができません。

統一教会は、イエス様のみ名で祈りません。父母を求めていくのです。父母の中でも「真の父母」だというのです。すべて改め直さなければならないのです。改め直さなければならないものを知らないから、礎石を正さなければならないのです。そうしなければ、台風が吹いたら完全に駄目になってしまうのです。

七　伝道は愛を探す運動である

一) 伝道は第二の私をつくること

伝道とは何ですか。道を教えてあげることです。神様に戻っていく道を教えてあげるので、それはどれだけ偉大なことでしょうか。本性の人間を見て「お前はどこに行くのか」と問えば、「いやー！　世界を通し天の国に帰っていかなければ」と言うのです。その道を開拓してあげるのでどれだけ素晴らしいかというのです。迫害を受け、ひたすらに何かを受け、何を受けても、いつも世界を通して天に帰っていくのです。

私が生命を捧げ悪を屈服させれば、神様の愛が私に来ます。これは公式的です。秤の分銅と同じです。片方が下がればもう一方は上がるようになっているのです。悪を多く取り除けば善が上がり、悪が多くなれば善が下がるのです。悪を取り除いただけ愛を受けるのです。ですから、誰よりも私を愛しなさいというのです。神様をもっと愛しなさいと言うのは、神様を愛するほど神様の愛をたくさん受けるというのです。すなわち、神様を愛したので神様の愛を受けるということなのです。

皆さんが、春を迎えるために伝道するのはなぜですか。伝道して何をしようとするのですか。夏の日を迎えようというのです。もっと良い日があり、枝を伸ばし葉を出して花が咲き実を結ぼうというのです。それでは統一教会はどうですか。「ああ、私は三年の間伝道したのでもう家に帰ってじっとしていてもいいでしょう」。そうすればどうなりますか。それは実を結んだとしても、その実を証することができる生命の余力をもっていなければ、冬季の北風寒雪が押し寄せる時には干上がり、縮んでしまうのです。

伝道は第二の自分をつくるためのものです。

どんなに時代的な一日の生活であっても、伝道するその一日は永遠と関係を結ぶのです。そんな秩序の基礎の上に、私たちの一片一片の行動が全体、または永遠と関係を結び、それがなくならずに残るようになるというのです。

伝道すればうれしい。反面、伝道しなければうれしさがこみ上げてきません。先生もこれをしなければ苦しいので、するのです。伝道をすれば罵倒されてもうれしいのです。

神様が生きておられることを体験すれば、「伝道するな」と言っても伝道したくなります。伝道すると、新しいことをつくってくれるからです。十人がいるとして、彼らと真摯に対話すれば十人が新しい人になります。そうしてから教会に来て祈ってみなさいというのです。そのようになれば彼らが発展する時、必ず自分自身も発展するようになっているのです。私自身が高まるのです。

霊界に行けば誇れるのは伝道しかありません。霊界はお金を多く持っていたとしても何の誇りにもなりません。また世の中で権力をもっていたと誇ることもできません。生命をどれだけ生かすことができたか、これが誇りです。甲ならば甲、乙ならば乙、または氏族を超越し数多くの民族を新しい生命と関連させ、どれだけ生かしてあげたのか、それが財産です。財産はそれしかありません。

霊界にないものはなく恋しいものはありませんが、一番恋しいものがあるとすれば、それは真なる人です。ですから真なる人を育てるため骨を折ったその功臣は、天上世界で当然、栄光の息子、娘になることができます。ですから誇れるのは伝道しかないのです。

皆さんは伝道対象者を前にして、夜を明かし痛哭して祈祷したことがありますか。自分のお母さん、お父さんが死んだ以上に悲しんで、または愛する恋人が死んだ以上に悲しんで痛哭してみたのかというのです。していないのならば、してみなければなりません。夜を明かしながら痛哭しなければなりません。一つの生命を生かすことさえできたならば、何も惜しいことはないのです。お金や服や家が問題ではないのです。人を愛するのに狂わなければなりません。

皆さんが教会に来る時は自分の父母、妻子をみんな連れて来なさいというのです。兄、姉みんな連れてこなければなりません。皆さんがお母さん、お父さん、親類や遠い親戚まで伝道するために、どれだけ血の涙を流しましたか。一人の生命を引っ張ってくるために夜を明かし、精誠を込め、祈祷しながらどれだけ身もだえしたのか、これが問題となるのです。皆さんは逆境の環境にあっても中心にならなければなりません。皆さんが中心になっていかなければならないということを知らなければなりません。

伝道をするには人々の心理を研究しなければなりません。表情や歩き方だけ見ても、その人が喜んでいるのか嫌がっているのかが分からなければなりません。その人の感情を公式的に鑑定できなければならないのです。

伝道に出掛ける時、「お金がなくて出掛けられない」と言わないでください。イエス様がお金を持って出ていきましたか。神様が復帰摂理をお金でもってしましたか。生命でもってしたのです。血でもってしたのです。それでキリスト教の歴史は、血で蕩減する歴史なのです。血でもって、生命でもってしたのです。お金でしたのではありません。皆さんがそういう心でもって出掛ければ、天が役事をされると私は信じます。

伝道に出掛ける時は、お金を持って出掛けてはなりません。心情をもって行かなければなりません。

皆さんが伝道をしようと出掛ける時、ただそのまま出ていってはいけません。どのくらい精誠を尽くして出掛けるのかということが問題です。ある人を伝道するのに一週間や一カ月、または一年、二年、三年はかかるだろうと思えば、その期間精誠を尽くさなければなりません。雨が降っても雪が降っても、御飯を食べ、寝て起きて、行ったり来たり、または休んだり、ある行動をしたり、一切の心でもって人の前に完全にすべてを与えなさいというのです。完全に与えれば完全に返ってくるのです。これが原理です。

神様を愛するのにどれだけの精誠を通して愛し、人間を愛することにおいてどれだけ精誠を通し愛したのかが問題なのです。これが霊界に行ってからの人格になるのです。栄光の基盤になるのです。

伝道するために夜を明かしましたか。先生は、夜を何度も明かしました。あの世で尋ねられることでしょう。伝道するために幾度夜を明かしたのかを。皆さんは、すべての力を尽くし伝道しなければなりません。

投網で魚を捕る時、錘が少しでも前に出れば一匹でも多く捕まえることができます。私たちはこのような錘のような立場で、サタン圏にいる人たちを少しでも天の側に引っ張ってきたい心で動かなければなりません。

他の人を伝道できるくらいまで育てないといけません。このようになれば、皆さんは伝道した人を一人も失うことはないのです。

精誠を尽くして、どれだけ天が協助するのかを見てみなさい。地で自分の親戚と知り合いを伝道しなければ、あの世へ行って彼らの讒訴を免れることができないのです。

伝道をするのも、商売をするのと同じようにしなさい。効果的にしろというのです。昔は伝道に行くとか、どこに行くにも何の準備もなく行きましたが、今は準備して行きなさい。精誠を尽くして行きなさい。昔と変わらなければなりません。

皆さんは「生きた人間」の哲学を探究しなければなりません。いつも私がどのようにすればあの人を先生に、または皆さんに導いて来ることができるのかを考えなさい。その人たちが、皆さんに引かれてくることができるようにしなさい。このようにするためのただ一つの方法があるのですが、先生はその方法を知っています。それは他の人に仕える精神です。人間には自分自身に利益になるものが

あるときは、いつでもそちら側に行こうとする本性があります。

人を探すためには、春の季節のような、夏の季節のような、秋の季節のような、冬の季節のような地方に行って、涙と血と汗を流そうと考えなければなりません。「私が春の季節の人、夏の季節の人、秋の季節の人、冬の季節の人、春夏秋冬の人を愛していく。冬の季節の人、あのソ連の人までも愛していこう」と言わなければなりません。そうしてこそ自分の相対を愛することができるのです。それが復帰の過程なのです。

精誠を込めて与えたのに「彼が言うことを聞かない」と、寂しく思ったり、悲しく思ったりしてはいけません。「天理の原則がそうなのだ」と考える人は福を受けることでしょう。そのような人は、絶対に寂しくなったり、悲しくなったりはしません。時が近づいているので春風が吹くのです。しかし、精誠を込めて与えたのに、それを受けない人には秋風が吹くことでしょう。それは、自分の時が近づいていることを知らせているのです。

二) 修練過程と七日断食

統一教会では、二日修練と七日修練、二十一日修練、四十日修練を合わせて、原則は六カ月以内に七十日修練を受けなければなりません。これはみ言であり、法条項です。そうしてこそ、統一教会がどのようなものかが分かります。

百二十日修練を受ければ、統一教会の威信と体面を立てることのできる正会員になります。

二日から百二十日修練までを制度化しておいたので、世界のどこへ行っても共通です。

終わりの日には三大審判を経なければなりません。三大審判は、真理の審判と、人格の審判と、心情の審判です。ここでの教理は真理です。この三大審判を通過してこそ、「真の父母」と因縁を結ぶ場に参席できる権限をもつようになるのです。

皆さんが霊界に行く時、一週間以上天のために断食ができなかった時には、あの世に行って入籍ができなくなります。なぜですか。神様は六千年復帰歴史路程で苦労されたので、それを思いながら断食をしなければならないというのです。それで統一教会では七日断食期間があります。それは皆さんを苦労させるものではなく、天の前に肉身を打ったという条件を立てさせるためのものです。

肉身を打たなければなりません。私たち人間が「この怨讐の体、肉の塊よ！　その中に血がうごめいているのだな」と言いながらナイフで刺さなければならないのを、有り難いことにイエス様が代わりに刺されたのです。それではイエス様が私たちに何を残してくださいましたか。イエス様の血と肉を残してくださいました。私たちはそのようなイエス様に代わることのできる人にならなければなりません。

八　蕩減と奉仕と献身的な生活

一) 蕩減の道を行かなければならない

統一教会員たちは、蕩減の道が好きではないのです。それは復帰が好きではないということです。「ああ、私は復帰するのは好きですが、蕩減は嫌いです」。こんな言葉はないのです。何が先ですか。復帰が先ですか。蕩減が先ですか。皆さんは復帰が好きで蕩減は嫌いですが、神様は反対です。皆さんはどちら側ですか。神側ですか。サタン側ですか。これをはっきりしなければなりません。皆さんは復帰が好きですが、神側では復帰を好むことができないのです。蕩減を通過したのちにこそ復帰されます。

蕩減という言葉を知ると、みんなが一番好きになるのです。蕩減がなければ福もありません。統一教会の無限な黄金の塊とは何かというと、蕩減です。蕩減は、死を覚悟してすべてのものを犠牲にし、すべての困難を克服することができる驚くべき単語なのです。

責任分担と蕩減は、一つは右側の立場であり、一つは左側の立場なのです。一つは右腕のようなもので、一つは左腕のようなものです。両腕のような責任分担と蕩減復帰を連結しなければ前進が不可能だということを知らなければなりません。そのようなことを考えてみましたか。蕩減は嫌いでしょう。神様も摂理もすべて嫌いですか。きょうからは新しく御飯を食べることを忘れても、寝ることを忘れても、自分が愛する人を思うことを忘れても、これを忘れてはならないことを知らなければなりません。そのように深刻なのです。

神様もこれを通過しなければならないし、レバレンド・ムーンもこれを通過しなければならないし、全世界もこれを通過しなければいけないのです。通じないのです。みんな、ただそのまま通過したいでしょう。博士や教授の地位をただで取れますか。そのコースを経てこそ博士になるのでしょう。ただそのまま取れますか。その過程を通らなければ、それは偽物です。

蕩減条件は、自分自身が立てなければなりません。他の人が代わって立てることができるものではありません。堕落は、主管圏を失ったことを意味します。復帰のためには、他の人がある関心をもったとしても自分自身の確固とした主体性をもっていかなければなりません。他の人はどんな道を行くとしても、私が行く道は忙しいのです。横でどんな言葉を言ったとしても、ここに気を使う暇がないのです。夜寝る時間がありません。定着してゆったり座って御飯を食べる余裕もありません。そのような切迫した心情をもたなければ、復帰の道を行くことはできません。

病気になった人が病気を治すためには、薬が苦くて飲みたくなくても飲まなければなりません。私たちが薬を調べてみると、いい薬は味が苦いのです。苦いのが本当の薬になるというのです。蕩減条件を立てるのは、苦い薬を飲むように難しいことです。しかし、蕩減条件を立てなければ復帰ができないのです。

天国は、神様を絶対的に中心として侍り、それを通して愛の因縁を結んで暮らす所です。この根本を正しく立てるために神様は救援摂

理をされるので、自分を前面に出せば絶対に駄目なのです。

救援の道は、蕩減し、復帰する道です。蕩減とは、堕落した経路をたどって、さかのぼって行くことです。反対に行くことです。

二) 奉仕と献身

真の愛の道は、どのように鍛練することができるのでしょうか。献身、奉仕、そして犠牲を通して鍛練することができます。これは再創造コースだということを意味するのです。再創造コースでは、皆さんは犠牲を払わなければなりませんが、そのような蕩減の道が奉仕の道となるのです。犠牲の道を通らなければなりません。私たちが蕩減の道を通ってこそ神側に立つことができます。これは明らかな事実です。ですから皆さんは蕩減の道を通過しなければなりません。

どちら側が主体で、どちら側が対象でしょうか。誰がついていかなければならない立場にあり、誰が引っ張っていかなければならない立場にあるのでしょうか。神様はこれをはっきり知っていらっしゃるのです。神様は知っていらっしゃるのです。神側になるのです。この世の中を見下ろすと、いつも二人がけんかしているので、「どちらが私の側になるのか」と言えば、既によく知っていらっしゃる神様は「うん、ははは……」とおっしゃるのです。「私の側になる人は、いつも犠牲になり献身し奉仕する立場に立つ人だ。その方に立っている側が正義のために闘う側で、私はその群れを選択するだろう」とおっしゃるのです。いつも中心は、犠牲になり奉仕するのです。

統一教会は「ため」に行く道を取りなさい、「ため」に生きなさい、「ため」に生まれたという天理を教えるのです。

天国に行く公式は簡単です。天と地を愛したという条件さえあればいいのです。このために苦労しなければなりません。まだ、本当にこれを成した人は一人もいません。

善なる道を行く人たちは、いつも犠牲になるようになっています。それで私たちは犠牲になれと教えるのです。「他人のためになりなさい」というのは利益を得ることではありません。犠牲です。自己投入です。投入するにも、極まで達することができるその基準まで投入しなさいというのです。生命までも捧げなさいというのです。

統一教会の主流思想とは何ですか。「ため」に生きるということです。神様が「ため」に存在するのと同じように、私たちも「ため」に存在する日には民族が反対しても世界のために生きることができると知ったために、統一教会はこのようにしてきたのです。

お客を多くもてなして外部の人に多くの世話をしてあげた人がいる所には、サタンは越えて来ることができません。皆さんはこのことを知らなければなりません。

皆さんを犠牲にし、皆さんに苦労をさせてこの愛に貢献できる貢献者をつくるのは、世界を代表した愛の結実をもたらすことに貢献

することによって、神様の愛を受けることができ、人類の愛を受けることのできる人をつくるためです。その運動を今しているということを知らなければなりません。神様の愛を受ける人をつくり、人類の愛を受ける人をつくるのが統一教会の目的です。

世界はより大きな摂理のために、蕩減の目的に向かっていくのです。神様が喜ばれると考える時、自分の一族が餓死するのを見て胸を痛め、心に傷を負うよりもそれ以上にそれを知り、神様を受け入れなければならないでしょう。そのような一日においてどんな十字架の道が来てもその十字架上で祈祷し、誰よりも苦労の道を行こうと決意しなければなりません。投入し投入して、忘れなければならないのです。

世界のために自分を犠牲にしようという人は、乞食のような姿であっても恥ずかしくないのです。統一教会の群れは安物のパンを食べても、麦パンを食べても、水を飲みながらも「ああ、けさの冷やしたお茶は、ごちそうよりもおいしいな！」と言って、舌鼓を打ちながら「感謝します」と言えば、天下が泣くのです。天下のためにそのような立場に立てば主体がいないので、天下が自分よりもっと低いものとなってくっつくのです。

昔は牛を引いて「どうどう、こっちだこっち」と言って畑を耕す時、気分が悪いことが多いではないですか。牛のお尻をたたきながら「この牛め、お前どうしてこうなんだ。私が精誠の限りを尽くしてこの一時のために使おうと育てたのに、何で言うこと聞かないんだ」と言いながら、むちで容赦なくひっぱたきますか。

そうするよりも「おお、冬の間休んでいたお前にあいさつもしないで、春になったので引っ張り出し、よく食べさせもしないで仕事をさせてごめんよ」という思いで、牛よりももっと忍耐心をもっていたらどうでしょう。そうすれば天が見る時、かえってその人を近く感じられるのです。賢しく、ずばずばと臨時処置がよくできるよりも、純情をもって福を待たなければなりません。そのように、福なる心をもって生活してこそ福が訪れるようになっているというのです。

歴史始まって以来、神様のみ旨に従った数多くの宗教者は自分自らを否定する修行をしました。「犠牲になり、奉仕しなさい！」。しかし、なぜそうなのかを今まで知らなかったのです。それは本然の世界が「ため」に生きる本郷だからです。ですからその世界に行くためには、そこに行ける訓練と準備をしなければなりません。したがって高等宗教であるほど犠牲と奉仕を強要したのは、歴史時代に、神様が歴史過程を通じ摂理してこられたからです。それが歴史的な事実であることを、ここで公認することができます。神様がおられるということを公認することができるというのです。

信仰生活をする上で皆さんの心の中に、爆発的で刺激的な力をもってみ旨の世界に向かって行こうという余力がありますか。そのような心があれば、神様が皆さんと共にいらっしゃるという証拠です。反面、そのような力がないならば、神様が皆さんと分離している証拠です。

人類を愛する心がわきあがり、人類と共に自分の生命を分かちたい心が絶えないということは天に属していることを証すものですが、自体を中心とした愛と自体の価値を誇る生命力として終わるならば、自分から既に神様は離別しているという事実を知らなければなりません。そのような人の行く道の先は天ではありません。そのような人は自己を中心とした限界点に到達するでしょう。

皆さんは神様とサタンの作戦法を知らないでいます。打たれて奪ってくる道はアベルが行く道です。サタンは先に打つので勝ったように見えますが、あとになると自分がもっている自分の善なるものまでプラスして返さなければならなくなるのです。悪の側だということは、相手を打って占領したとしても栄えるのではなく、悪なるものの中にある善なるものまで奪われるのです。言い換えれば、神様はもちをついて渡しておき、それを返してもらう時にはもちにきなこがついてくるのと同じような役事をされるのです。一時は悪が栄え、善を打つ立場に立ちますが、だからと言って天が滅びるのではありません。

一瞬一瞬、必死の決意をする皆さんにならなければなりません。神様が今まで求めてこられたこの一時を無意味に失う人になってはいけません。これは千年の歴史とも替えられない価値をもったものなので、これを逃せば大変なことになります。この世をみな失って、探し出したものをすべて手放すとしても、これだけは絶対に手放さないと決意する皆さんにならなければなりません。私の生命がなくなってもこれだけは残して行くのだと、もう一度固く誓いながら、精誠の限りを尽くして前進しなければなりません。

九　食口間の法度と礼節

一) 食口は天情で結ばれた因縁

統一教会員たちを、私たちは食口と言います。食口というのは兄弟の因縁をもたなければならないし、父母の心情を同じくして生まれなければなりません。そうしてこそ食口となれるのです。同じ父母をもち、同じ兄弟の因縁をもたなければなりません。父母の生活と習慣と伝統を、ただそのまま相続しなければなりません。そうして天が喜ぶことができる家庭形態をもたなければなりません。そうしてこそ食口となるのです。

今日、私たちは手と手を取り合って集まりました。老若男女を問わず、見知らぬ他人同士が集まりました。私たちには血が通じています。私たちには天情が通じています。出発が聖なるものだったので、結果も聖なるものでなければならないのではありませんか。

私たちがもって生まれた因縁は、立体的な因縁だということを知らなければなりません。今まで歴史上にあったある思想を基調として出てきたものではありません。神の心情と神の創造理想を基調として、本性の人格を標準にして始まった因縁なのです。これはすべての因縁の核心なので、絶対視しなければなりません。

私たちは違う因縁によって集まった者たちです。ですから兄弟ではない者たちが集まり

ました。兄弟ではない者たちが集まって、肉身の兄弟たちを主管しなければなりません。それが違うのです。兄弟ではない者たちが自分の肉身の兄弟を主管しなければなりません。そうでなければ皆さんの家は皆さんと因縁がないのです。事実それは自分が直接できないのです。ですから私たちは、兄弟にもっとよくしてあげなければなりません。

食口に対する時には、その人を傷つけないように注意して、また信仰生活の助けにならない言葉を言ってはいけません。

食口がある困難があったり、ある環境にぶつかって苦難に遭う時、お互いに自分のことのような心情で、同情する心をもたなければいけません。

先生は、食口を非難し、食口を謀害する（注：謀略で人を害する）のを見ると我慢できない人です。世界を愛したい心があれば、その愛をどこからしなければならないでしょうか。私たちの間からしなければいけないというのです。東西南北から別れて一つの因縁に従って集まった私たちが、お互いに愛し合おうということです。顔を見なければ生きられないのです。会わなければ駄目だと言うのです。このような因縁で連結されているので、統一教会はそれでも、この悪なる世の中とは違う何かをもっていると自負しているのです。これを忘れてしまっては私たちは何にもなりません。

私たちは素晴らしい人たちです。世界がうらやましがり、天と地がうらやましがり、霊界のすべての聖人と賢哲たちがうらやましがる堂々とした生涯を歩んでいる、天が捨てることのできない、天が称賛するだけでなく訪ねてきて愛そうとすることのできる、そのような背景と内容をもって生きる素晴らしい男たちです。

善なる先祖をもった後孫がここにいれば、先祖たちが積極的に協助するというのです。そのような立場に皆さんが立っているのです。

このような立場にいる皆さんがよく素晴らしく闘い、行く先々で百戦百勝の戦績を立てる時、霊界では永遠に喜ぶのです。このような皆さんになれば雑神（注：正体の分からない様々な鬼神）が出てきても驚いてひっくり返るでしょう。そのようになっています。ですからこのような先祖たちは皆さんに、王様に仕えるように侍るでしょう。皆さんはこのように感じなければなりません。

六千年の結実体が落果のように熟さずに落ちてもいいでしょうか。ただ風が吹くのではと心配しながら「ああー、私が落ちそうだ。もうちょっとだけ吹けば落ちてしまうでしょうから、先生、揺すらないでじっとしていさせてください」と言っていいでしょうか。ここにはこのような輩もいるでしょう。反面、「先生が斧で強く襲いかかり、枝を思いのままに揺らしても引き裂かれるまでは絶対に落ちません」という群れもあるでしょう。皆さんはどの輩に属しますか。風が吹くかと心配する輩ですか。揺らしても落ちない輩ですか。

皆さんがここに来た目的とは何ですか。それはある環境的な問題を解決するために来たのではなく、人間の根本問題を解明し、絶対

者から認定を受け、確定を受け、その絶対者の前に立つことができるようになるために来たのです。

統一教会では争いがあってはいけません。ここは、お互いに愛し合うために集まった所です。愛を受けようとするのではなく、愛を与えるために集まった所です。それでは、愛する方法はどこで学びますか。先生から学ぶのです。先生と会って、先生を愛したい気持ちが生じなければいけません。そしてお互いに会いたいし、与えたい愛を、兄弟たちに与えなければいけません。そうすれば神様は、その何倍も返してくださるというのです。親は、兄弟がお互いに愛し合うことを喜ぶからです。

二) 食口の間にカイン・アベルの関係がある

統一教会員たちを中心に見る時、カイン、アベルとは誰かと言えば、横的には先に入ってきた人がアベルで、縦的には新しく入ってきた人がアベルです。縦横関係を見る時、横が縦を重要視するのであって縦が横を重要視するのではありません。このようになるのです。

アベルになる秘訣とは何ですか。伝統を守ることです。死に遭遇しながらも反発しない人が、アベルになるのです。皆さんは、これを知らなければいけません。イエス様を小羊だと言ったでしょう。ですから、たとえ刺されたとしても反発してはいけないのです。

アベルはカインを愛さなければいけません。愛で自然屈服させなければいけません。血と涙で愛する立場に立たなければいけません。誰よりももっと高い愛を与えなければいけないのです。そうでなければ屈服させることができず、復帰ができないのです。私たちは既成教会のために、大韓民国のために、北韓のためにそのようにしなければいけません。それで先生が今北韓のために祈祷しているのです。

アベルは何をしなければいけないのでしょうか。三代復帰をしなくてはいけません。最初に、カインを復帰しなければいけません。次に、父母を解放してあげなければいけません。その次には、神を解放してさしあげなければなりません。このように三代の使命があるというのです。言い換えれば、サタン世界を解放してあげなければ、父母が出てくることができず、父母を解放してあげられなければ神が解放されません。この三代解放圏の責任をもつのがアベルの使命です。

教会を中心に誰がアベルで、誰がカインかを分別することができなければいけません。二人いれば必ず一人はアベルで一人はカインだということ、三人いれば二人がアベルになることもあるし、カインになることもありますが、一番中心的なアベルとカインがいるということ、これを皆さんが確実に分別することができなければなりません。

カインとアベルが一つになれず、分かれてはいけません。一方は正しいほうであり、一方は悪いほうです。ですから誰でも私の神様であると同時に、あなたの神様であり、私を愛するだけでなく、あなたを愛する神様であるという信仰の立場で、お互いにアベル的な存在を求めて侍り、カイン的な立場を避けて最大の努力をしなければいけません。もしそ

のような人になれなければ、いつか一度は天の審判にかかってしまうということをはっきりと知らなければいけません。

カインとアベルは、どんなところで決定されるでしょうか。カインとアベルは、楽ない所で決定されるのではありません。カインとアベルが必要なのは何のためですか。それは蕩減復帰するために必要なのです。蕩減復帰しようとするにはどのようにしなければいけませんか。祭物にならないといけないのです。

神様はアベルをどんな場で決定するでしょうか。サタンの讒訴を受けない場で決定するのです。サタンの讒訴を受けない場はどんなところでしょう。神様と一体となった立場ですが、その場は喜びの場ではなく一番悲しい立場、一番大変な立場です。言い換えれば、死のうとする場、一番悲惨な場で神様と一体となることができるというのです。

三) 誰がアベルで誰がカインなのか

統一教会員の中で「私が先に入ってきたのでアベルで、あとから入って来た人はカインなので、私に侍りなさい！」と言う、このような気違いたちがいます。アベルとはどのような人ですか。神様のみ意どおりにする人がアベルです。より公的な人がアベルです。カインとは何ですか。サタン側です。サタンは、自分を考えるところから出発したのです。アベルは、自分を考えず神様を考えるところから始めたのです。これを知らなければいけません。

先に入ったといっても我欲を張る人はカインです。自分の思いが先に立つ人はカインです。先生はこのような原則で人に対します。どんなに古い食口でも、その心が自分のためにするようになる時は見向きもしません。今は仕方なくそのままにしていますが、時が来れば荷物をまとめさせて追い出すのです。先に来たからといってアベルではありません。私的な基準が先になることはカインです。自分より公的な問題、天をもっと考えることがアベルです。

ここの統一教会員同士、兄弟を決める上で、先に来た人はアベルの立場であると同時にカインであり、あとから来た人はカインの立場であると同時にアベルです。

原理的な立場ではアベルが中心です。この中心の中には神様が入っていらっしゃらなければいけません。ところで皆さんはアベルになりましたか。アベルになるには従順に従わなければいけません。神様に従順に従って一体にならなければいけません。神様と一体になるには神様が「しなさい」と言うとおりに、すべてしなければいけません。神様が「しなさい」と言うことをすべてできなければアベルになれません。九十九までしたとしても、一つができなければアベルになれないというのです。

統一教会員の中でどんな人がカインですか。頭を突き出し、あごで人を使う人たちがカインです。それではアベルはどういう人ですか。責任を果たそうとする者がアベルです。本来は先に入ってきた人がカインなのに、先に入ってきた者がアベルの位置で威張り散らしま

す。それは自縄自縛になるのです。そんな人がどんなにいろいろなことをしても、原理原則どおりにしなければ先生が使ってあげないのです。

アベルはどんな存在で、カインはどんな存在ですか。原理で見て端的に言えば、カインは自分に心配事があれば、その心配を他の人に覆いかぶせようとする人です。アベルは自分に心配事があっても、他人の心配事まで引き受けようとする人です。その差です。

どんな人がアベルで、どんな人がカインかと言えば、侵害される人がアベルで、危害を加える人がカインです。例えば、父母の前に二人の息子がいて、上の息子は年を取っていて下の息子は年が若いとしましょう。ところがその父母の相談相手とかすべての面において、父母に代わることができる息子は長男だけだとしても、下の息子が何も失敗せず間違いも起こしていないのに、この長男が下の息子に手を出せば、父母は上の息子の側に立つのではなく下の息子の側に立つのです。これが今日、社会で適用される善悪の批判基準だということを知らないでいるのです。危害を加えた者がカインになるのです。

教会のために熱心に働いて精誠を捧げる人を見て、「あの人は他の人と違ってあれは何だ」と悪口を言えば、既に彼はカインになるのです。皆さんがそれを知らなければなりません。カイン・アベルはそのように分けられるのです。罪がない立場で批判される人、被害を受ける人は必ずアベルになるのです。批判する人、危害を加える人はカインになるのです。

話をしたとしても、他人に利益を与える言葉を言う人はアベルになるのです。害を及ぼすような話をする人はカインになるのです。私が他人に利益を及ぼすというのは利益を与えることですが、自分の利益のために何かをするというのは害を与えるのと同じです。ですから他人の利益になるようにするのは公的な立場です。自分の利益のための立場は私的な立場です。このような意味で、公と私を中心としてアベルとカイン、善と悪が分かれるのです。これを皆さんは知らなければなりません。

より公的な存在がアベルです。統一教会の教会員の中には、先に入ったのでアベルだと考える人がいますが、先に入っても公的な立場に立てなければカインです。間違いなくカインです。カインも自分が先に生まれましたが、アベルより公的な立場になれなかったのでアベルに従わなければならなかったのです。統一教会員の中でも先に入って来たと傲慢に「私が先に入って来たのでアベルだ」と言っている人がいるかもしれません。しかし、あとで入って来た人より公的な立場に立てなければカインです。アベル的な存在はより公的な立場に立った人です。

先生が一生涯をすべて捧げて自分の利益より公的な利益のために犠牲になり、そのような材料ならば材料、量ならば量を多く投入したことを隠しているので、皆さんが自然に敬うようになるのです。それが原理です。それが天運なのです。

アベルの完成は、個人的アベルの完成、家庭的アベルの完成、氏族的（宗族的）または

民族、国家、世界的アベルの完成の基盤を引き継いでいかなければ、世界天国復帰というのは不可能なのです。それを知っている私たちは、夜昼やって来るその日その日にこの原則を適用させ、この原則の発展を連結させるために休みなく走ることができなければなりません。そのような人を「天の人」と言うことができるのではありませんか。分かりましたか。

十　他人との人間関係

一) 人にむやみに対するな

人にむやみに対するなというのです。それで一九七〇年まで本部では、「通りすがりのおなかをすかせた人は誰でも食べていきなさい」と言っていたのです。おなかをすかせた人に御飯をあげるのは人間の道理です。もらった御飯でも分けて食べるのが道理です。米櫃にお米を入れておいて、「通りすがりのおなかをすかせた人が御飯をもらって食べる」と言ってけなせば、その家は長く続きません。

かわいそうな人を見れば、助けてあげるために、すべての物をあげたくなる時もありました。与えたい心、助けてあげたい心をもって欲するようになる時は、神様も褒めたたえます。自分だけ食べて生きようとするのではなく、全体を良くするために、現在は苦しいけれども未来を良くするために欲心をもつのは良いことなのです。

ただ飯をたくさん食べさせてはいけません。ただ飯を食べさせると同時に、公的な心を多く働かせなければならないのです。それが福を受ける道です。ただ飯をたくさん食べさせると同時に公的な心を多く働かせた人、そのような人は誰も嫌いません。

人を無視してはいけないのです。「一寸の虫にも五分の魂」と言うでしょう。それは必ずそうだというのです。死ぬ時、恨みを抱く、その恨みを買う人は先が長くないのです。

人に対することを面倒くさがってはいけません。義務的な過程では復活の役事が起こりません。おもしろさがなければなりません。時が過ぎるのも知らずに夜を明かし、天国がここしかないというところからのみ、天国に行くことができる価値が発見されるのです。そうではありませんか。木も完全に密着されてこそ接ぎ木できるのではないかというのです。

先生は、私たちが食べられなくても訪ねてきた人に良くしてあげようとします。彼らが百ほどの基準の道を修めれば、その基準以下で対しては私たちがふさがってしまうのです。審判されるのです。そのような時は倍以上、三倍、五倍、十倍以上してあげるのです。そのようにしてあげたとしても滅ぶことはないのです。そうすれば天が感服するというのです。「こいつ、天より優れている！」と言うのです。

じっと見てみると、良い家は犬が糞をしてもその家の庭の隅に行ってします。ところが主人が「こらっ、この犬め！　この町の犬はなぜみんなうちの庭の中に来て糞をするのか」。このように不平を言う人は福を追い出すのです。「さあ来てやりなさい、さあおいで」そのようでなければならないのです。

闘うなと言うのではありません。二人ともよくなる時は闘うのです。一人が滅ぶ時には闘ってはいけません。闘うとしても、自分の味方をつくり教育するために闘わなければならないのであって、怨讐になるために闘ってはいけないのです。

与える時は、父母の心をもってあげなければなりません。自分の欲望と野心をもってあげてはいけないのです。父がそのようにされたので皆さんもそのようにしなければなりません。

人を愛するのに惜しむな。何を投入したのか記憶するな。もっとあげたい……。ですから皆さんが良い食べ物があったとき、隠して一人で食べる人ならば、くたばって死んでしまう者だというのです。食べ物があればそれを食べないでとっておき、私が食べられなくても与えたい、一人では食べられないと食口を思う、そのようにできる人にならなければなりません。そのような父母の心をもった者とならなければならないのです。

与えるには、どのようにして与えなければならないのでしょうか。食べ残した物を与えてはいけません。残り物をあげれば、食べ終わっても気分が悪く唾を吐くのです。おもちをあげるとしても、五つあれば五つの中であれこれ取ったり置いたりして選んであげる時は、かえってあげないよりも気分が悪いというのです。他人にあげるのに、五つあれば半分くらいそのまま取って相手にあげれば、有り難いと思うでしょうが、あれこれ取ってからあげれば世話になった人は、世話になったあとで批評するのです。ですから相手にあげるには、神様と共に父母の心で与えなさいというのです。

二) 他人との人間関係

今日、人間たちは人に対してとても無関心です。横的関係において、横的な因縁を中心として互いに尊重することが少ないのです。老若男女を問わず、人に対してみな面倒に思っています。人が面倒に思うようになれば道義の道を行く人になることができません。

神様と一致した人になって万物世界、またはこの世界に、神様の愛に代わって一人で、全体に対して情緒的な基準で横的関係を広げ結んでいくのが、信仰者たちがしなければならない生活だと見るのです。生活でこれが結ばれなければなりません。生活でこれを成さなければならないのです。そうするには、皆さんがそのような神様の心情に代わって対人関係を結ばなければならないのです。

人と人が会うところは……。ビリーヤードをすれば玉同士が当たってあちこちに転がるでしょう。これがおもしろさです。おもしろさ。人と人の出会いもそのような作用をするのです。それがぶつかれば引っ張って一つになり押し出す、そんな気分になるのです。皆さんがサッカーボールをけっても、そのボールが上がったり落ちたり、変化が多いほうがいいでしょう？　同じなのです。

私たちが五感を通し感じる、感覚の一切を統合して、この命、または愛とどのくらいの関係を結んで生きるかによって、人間としてどれくらいの価値をもっているかという問題

が左右されるのです。ですから私たちは、私たち自身が生命力と加重された愛の心をもって対人関係を結んで社会生活をしてきたのか、という問題を考えざるを得ないのです。もしそのような立場に立っていることができなければ、停止するか、そうでなければ後退するということを知らなければなりません。

神様が復帰摂理をしてこられるのに、私たちの大韓民国だけを必要とするのではありません。世界人類をすべて必要とされるのです。ですから人に対する深い関心をもって出てこられるのです。これは今まで神様の摂理の中で一番重要な目標でした。私たちがその目標を成すために集められたとすれば、神様と同じような立場で関心をもって対することを知らなければなりません。

すべての人に対する時、欲心をもって対してはいけません。

善なる人になるためには、悪を他人のことと考えるのではなく、自分の痛みとして感じ、夜を明かして彼らのために涙で祈ってあげ、彼らの罪を贖罪するために祭祀を捧げる心をもって暮らさなければなりません。そのような人は、悪なる人の本性の中心存在にならざるを得ないのです。

良い人は少年も愛し、青年も愛し、壮年も愛し、お年寄りも愛することができなければなりません。また、自然に対して人が主体的な立場に立ったならば、その主体的な人は春も好きになり、夏も好きになり、秋も好きになり、冬も好きになるのです。

愛することにおいて、最も愛し尊敬し敬わなければならない人はお年寄りです。若者には会うだけでもいいですが、活動するにも不自由で力も不足し第三者のお世話にならなければならない老人たちには、もっと愛さなければならないし、同情もしなければならないのです。ところが、そのような風潮をこの世の中では見いだせないのです。

人を愛するといって、若者だけを愛してはいけないのです。愛するのは、お年寄りから幼い子まで、すべての人を愛さなければなりません。最近の青年たちを見れば、お年寄りを相手にしないようにしますが、それではいけないのです。お年寄りも愛さなければならないし、若者も愛さなければならないのです。

人を愛さなければなりません。人を愛し、人を恋しがることにおいてどんな団体よりも強くなければなりません。これが人間のみ旨ではなく、神様のみ旨を中心とした集まりだとするならば、必ず全世界に愛の実として残ることでしょう。木々が山を覆うように生い茂る時には、どれが松でどれが柾なのか見分けるのが難しいです。しかし秋になり、冬になれば分かります。冬になって、枝と幹だけの木々の中に緑の木が見えたならば、それは希望を呼び起こすのです。それは新しい因縁が結ばれることを象徴するというのです。

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）これが一番目の戒めであり、二番目は「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（同二二・三九）というのです。一番目の戒めは神様を愛し、二番目の戒めは

人類を愛することです。隣町ではありません。人類を愛せよというのです。人類とは、兄弟であり隣人なのです。

驕慢は怨讐です。驕慢と固執はサタンの本職です。サタンの要素です。それで私たちは驕慢の代わりに謙遜、固執の代わりに和合をしなければなりません。和而有親です。この人にもよくしてあげ、あの人にもよくしてあげる人にならなければなりません。そのようになってこそすべてのことに通じるようになるのです。あの人この人、二人が一つにならなければ大きいものが出てこないのです。和合しなければそのようになるのです。サタンの本質にはねたみと嫉妬のようなものもありますが、驕慢と固執は私たちには許すことができないものです。

第四章　祝福家庭の伝統と生活礼節

一　祝福家庭の生活法度（方式）

一) 家法と礼節がしっかり立たなければならない

今まで私たちはめちゃくちゃに生きてきたし、言葉もめちゃくちゃに話してきました。しかしこれからは、私たちの家庭でも規律を立てなければなりません。父母が、怒りがわきあがるといって子供を自分の気分でたたいて「こいつはどうしようもないやつだ」と言うような、この世的な俗な言葉を使ってはいけません。これからはすべてが一新されなければなりません。神様を中心として言葉から、態度から、生活から一新された立場に立たなければならないのです。

習慣性で生きる家庭になってはいけません。家庭は四位基台を成すことのできる基点です。ここでは家庭の一体化が要求されます。神様が願われる本来の基準の前に一致しなければなりません。

本家が栄えるためには、先祖から引き継いできた家法というか、礼法を良く受け継いで実践しなければなりません。「そんなものどうでもいい、私と何の関係があるのか」と言うような人は、本家の子孫になることはできません。もしそのような人が本家の長男として生まれたとしても、そうなることができないというのです。

神様から受けた純粋な血統を私たちがどのように保有するのかが問題です。堕落した血統ではなくて、純粋な血統をいかに保存するのかというのです。そのために本当に悩まなければなりません。汚染されていなかったエデンの園でも堕落したのに、この罪悪世界できれいになっていくということは、とても難しい問題なのです。罪悪世界で生まれた父母は苦労をしたとしても、祝福を受けて生まれた子供たちには汚染されていない環境をつくってあげなければなりません。私たちが犠牲になっても二世たちのためにそのような環境を早く準備しなければならない、というのが先生の考えです。急がなければなりません。

罪の世界から解放されようとするなら韓国の国民であっても、私が韓国の国民であるという観念をもってはいけません。韓国の国民だと思う前に「私は神様の人だ。天の民だ。天の人だ」という観念をもたなければなりません。世界が使っている言語、着ている服、

はいている靴、女性が使っている化粧品、このような風習と習慣の中に染まった罪の本性を無慈悲に切れるように、刃物を持った生活をしなければなりません。これが罪の世界から解放されるための生活です。この世の歴史、習慣、環境の悪習に勝利しなければ、罪の世界を主管する道はありません。真の人になりたいなら、真の国を見つけたいなら、天国に行きたいならば、環境的なすべての悪の条件から解放されなければなりません。

習慣的で世俗的な家庭ではいけません。「今はこうだが、後日には良くなるだろう」と思ってはいけません。既に完全になっていなければなりません。現在が問題になります。過去と現在が完全であってこそ未来も完全になることができます。エデンの園でもこのような一日をもてなかったことが、堕落したという証拠です。過去と現在と未来が一致する立場が理想的な立場です。現在を捧げることができなければなりません。地上で永遠の足場になってほしい、というのが神様の願いです。これが歴史的な総合点です。

イスラエル民族がカナン復帰をしたのちに滅亡してしまったのは、彼らが既存の環境に同化し習慣化してしまったからです。彼らはより良い生活をし、より多く食べる豪華な生活に気持ちを奪われてしまったので、滅亡したのです。異邦人であっても金持ちだったら結婚しました。また権力を貪欲に欲し、知識を好みました。彼らは結局既存のカナン文化に同化して、選民の精神をないがしろにしたので滅亡してしまったのです。

習慣は最も直しにくい悪い癖です。皆さんが結婚して子供を育てながら習慣的な生活をするようになると、それが身についてしまいます。そのような環境の中では特別な精誠や祈祷をする時間がないのです。子供たちがそばで騒ぐので、祈祷の時間がないのです。

これからは刃物を持って切るものは切り、解剖するものは解剖しなければなりません。皆さんが自分勝手にしてはいけません。統一教会は天国を成さなければならない教会なので、個人でなく、家庭を見つけなければならないのです。家庭生活で手本になることのできない人は世界的な非難を受けるでしょう。全天宙的な非難を受けるはずです。

祝福とは責任を果たしてこそ貴いものです。男性はこぶしを使い、女性は口を使ってはいけません。この世的な悪口を言ってはいけません。何かが変わらなければなりません。すなわち、家庭は小教会です。天の代行機関として行わなければなりません。天が訪ねていきたい家庭にならなければなりません。最低限三家庭が一カ所に住まなければなりません。特別にきょうを期してお話ししたいのは、まず大勢の人が往来できる家庭にならなければなりません。人の和が最も大切です。それから二番目には天の家庭同士が団結しなければなりません。最低限三位基台になった家庭同士だけでも完全に一つにならなければなりません。

私たちは個人を主とするのではなく、家庭を主としなければなりません。かといって家庭のみを中心としてすべてのことを清算するのではなく、全部連結しなければなりません。

ですから昔一人で修行生活をした時の努力をもってしてはなせません。昔努力したことの何倍もの努力をする、という決意と覚悟を付け加えなければなりません。悪に対して挑戦していく生活は、うっかりすると疲れて後退しがちです。家庭をもったときは一人のときよりも何倍も努力しなければなりません。家庭は中心をつかんだ立場です。私たちは現実を避けることはできません。前後、左右、上下の関係を家庭で成さなければなりません。過去の信仰形態をもってはいけません。過去の一方的な信仰態度ではいけないのです。

家庭の伝統を立てて、祝福家庭は家法を作らなければなりません。そして子女の教育基準と家庭の規範を作らなければなりません。そうしなければ、もし父母に何かあった時とか、子女に追及された時には言い訳ができないというのです。

二) めちゃくちゃな生活をしてはいけない

個人の生活をこうしなければならないということを確実に究明しなければならないし、また家庭の生活はこうしなければならないということも確実に究明しなければなりません。過去には漠然と生きて生活してきましたが、これからは具体的に生きていかなければなりません。

神様のために、静かに自分にあるすべてのものを犠牲にする時には、神様が私を擁護します。神様は必ず私の味方になります。

皆さんの家庭は愛の家庭にならなければなりません。そして皆さんは愛を中心として公的な夫婦になり、父母にならなければなりません。自分たちを中心とした私的な夫婦や父母になってはならないのです。父母が天に行く道から脱線しまいと精誠の限りを尽くせば、子供は絶対に親不孝ができません。

家庭を復帰しなければなりません。それ以上の伝道はありません。夫婦が早朝に起きて、子女の手を握って、涙を流して祈祷しなければなりません。そうして父親や母親が外出していない時、子供たちが父母を待ちながら慕って歌うことができなければなりません。

一人でいる時には、祈祷するとすべてのことがうまくいきました。しかし家庭では、反対する人がいると、その十字架を背負って本然の基準にまで突き抜けて行かなければなりません。個人は客車であり、家庭は機関車と同じなのです。個人が失敗したものを復帰するのは簡単です。しかし家庭的に失敗すると破綻します。

子供たちがよく「お父さん大好き！　お母さん大好き！」と言います。そのように、お父さん、お母さんが好きだと誇れることが、子供たちの安息の場なのです。

家庭を中心として父親が「よいしょ」と言うと息子も「こらしょ」、息子が「よいしょ」と言うと父親も「こらしょ」と言うことのできる基盤が必要です。しかし子供がいると言っても、国がなければ何の意味があるでしょうか。国がなければ一番も何も、何の意味もないのです。

祝福家庭はすべての人々の希望の標的です。しかし付加された責任を果たせなければ失望の家庭になります。

二　信仰生活で模範となる家庭

一) 信仰生活が子女教育になる

聖日の礼拝時間の前に行って、準備する人が何人いるか考えてみてください。聖歌を全部歌って説教の時間になると、その時にぴったり合わせて入ってくるのです。そのような人たちをどうしてみ旨に従っていく人たちだということができるでしょうか。いくら弁解しても、公的な生活ができずに私的な生活をしているということなのです。そのような人たちには希望をかけ、期待する何の内容もないのです。ですから皆さんは新しくみ旨の前に覚醒して、公的生活の徹底化、私的生活の模範化を決意していかなければなりません。

祝福家庭は残らず礼拝時間の前に来て、礼拝に参加する大勢の生命に恩恵の雰囲気をつくってあげて、恩恵を及ぼさなければなりません。そして牧会者が壇に立つ前に心情的な基盤をつくって支えてあげるようになると、説教をするにおいて食口たちの切実な表情を眺めて刺激を受けることができるのです。そのような要因が多ければ多いほど教会は発展します。

公式的な記念日や集会があればそれを生命視して動かなければなりません。そうでない家庭は祝福家庭として落第です。

礼拝時間を迎えるために早朝から精誠を捧げ、その日を神様の前に捧げることを生活化するように、子女たちに教育しなければならないにもかかわらず、自分勝手に何でもしています。み旨のための生活をすると言いながらも祈祷をするでもなく、精誠を捧げるでもなく、原理の勉強をするでもなく、伝道をするでもなく、何もしなくてもいいのでしょうか。聖日の礼拝時間が十時三十分ならば、その時間に合わせて参加するためには、九時三十分とか十時には出発してこそ礼拝時間の前に到着するでしょうに、時間になってから家を出発して、礼拝中に入ってきてそっと座るというのです。そうなると必ず批判されます。いくら父母の立場で子女を教育したとしても受け入れてもらえないのです。

父母がみ旨のための生活の模範にならなければなりません。家庭で祈祷生活とか、家庭礼拝とか、どのような面でも一生懸命にする信仰生活を、子女たちに見せなければなりません。また、敬拝の時間がどんなに重要かということを認識させてあげなければなりません。その時間には敬拝式だけで終わるのではなくて、み旨を中心として、父母として子女たちを教育しなければならないのです。

祝福家庭は天に侍る生活で手本にならなければならないし、献金、敬拝式、伝道などを生活化しなければなりません。

聖日は一週間を節約して計画しておいて、食口たちが喜べる内容を与える日です。また聖日には共に集まって準備しておいた食事を分けて食べ、各家庭が互いに自分の夫や妻を自慢しなければなりません。

早朝敬拝、精誠、礼拝の時間を厳守できないのに自分の息子や娘の幸福だけを願ってはいけません。したがって先生を中心として四位基台を成さなければなりません。それからここで後孫を立てるなら父母がしっかりしなければならないのです。

祝福家庭は聖日や公的な集会に参加する手本にならなければなりません。

食口はどこに行ってもまず聖なるところ、すなわち聖地や教会をまず訪ねたりしますが、そうできなければ、そのような条件でも立てなければなりません。皆さん各自は個人でありながらも、個人にのみとどまった存在ではないということを心に刻まなければならないのです。また皆さん各自は先祖の立場に立たなければなりません。

各家庭は白い座布団を作りなさい。そして、きれいな場所を準備しなさい。その座布団に座って精誠を捧げる時間をもつようにしなさい。

寝ても覚めても、食べても、休んでも、見ても、何をしても、すべてみ旨を中心としてしなければなりません。

精誠を尽くして皆さんの父母を伝道しなければなりません。一つのみ旨の前に共に天の祝福を受け、祝福家庭の囲いをつくるようになれば、それ以上の幸福はないのです。

二) 祈祷生活は御飯を食べることよりも重要

祈祷をしなければなりません。祈祷の時間を定める時は早朝にしてみて、朝もしてみて、昼にもしてみて、夕方にもしてみて、夜にも十時にしたり十二時にしたりしてみるのです。そのように長年の間祈祷生活をしてみて、何時から何時まで祈祷するのが自分に一番合う時間なのかを知らなければなりません。それを知って、自分に合う時間に精誠を捧げなさいというのです。

できれば恩恵基準の高い人を中心として共に祈祷しなさい。そうすると、その人によって恩恵を受けるのです。もし夫が自分より恩恵の基準が高く信仰生活も模範的ならば、その夫によって恩恵を受けるようになるのです。そのように恩恵を受けるようになると、夫がこの世に二人といない美男子に見えるというのです。また夫が妻を通して恩恵を受けるようになると、その妻がこれ以上の美人はいないというくらいに美しく見えるというのです。この世の女性の中でも一番だというのです。本来夫婦はそうでなければなりません。それで目を開けさえすればじっと見ていたいし、夜を明かしてもひそひそと話したくなるのです。それは滅びることではなくて栄えることです。

御飯を食べる時間が一日にどのくらいになりますか。一時間半くらいにならないですか。一日に平均一時間半御飯を食べて生きるとすれば、霊的なことには御飯を食べる時間よりももっと多く投入しなければならないのです。それは、先生の今までの長年の間の信仰生活で分かったことです。

祈祷すれば必ず成されます。祈祷することによって力を受けます。祈祷することによって、これからこの問題がどうなっていくかと

いう展望をみな教えてくれるのです。「このことはこうして、このことはこうするのだ」と教えてくれるのです。それを知ってこそ大きなことができるのです。祈祷によってのみその道を開拓することができるのです。祈祷が御飯を食べることより重要だということを知らなければなりません。

私たちが行かなければならない道は、いずれにしても、かき分けて行かなければならない道です。それが、私たちの力のみでは不可能なことを、生活するほど感じるようになります。ですから信仰者は祈祷をしなければならないということを知らなければなりません。

祈祷しなさい。祈祷は心情の補給倉庫です。時間がなければ、していることを通してでも祈祷できなければなりません。

洗濯をしながらも、道を歩きながらも祈祷しなければなりません。倉庫にどんどん積まなければならないのです。空けておいてはいけません。

常に祈祷する生活をしなければみ旨の道を行くことができません。皆さんは生活化するにおいてお金のことを考えるのではなく、み旨をまず考えなければなりません。

皆さんは神様を背後とすることのできる、神様の息子や娘になったのでしょうか。神様を背後とするなら常に神様が共にいて、皆さんが神様と共にいられる人になっていなければなりません。小犬のように母親の懐を離れて独りで歩き回っては母親の保護を受けられないのです。

三) 祝福家庭は族長

一九六八年度に四三〇家庭を祝福した時、先生が指示したとおり氏族的メシヤになれというのです。その使命を果たさなければなりません。先生を中心として協会に三十六家庭が組織されているように、金家ならば金家で先に祝福を受けた家庭を中心として金家の三十六家庭型がなければなりません。三十六家庭にならなければ十二家庭型の先祖でもつくらなければなりません。そうして皆さんが、皆さんの氏族の先祖になって新しい支派編成をしなければならないでしょう。 それが十二支派型なのですが、それを形成したらその十二支派圏内に全部入るのです。これが直系の氏族です。

現在の祝福家庭は伝統の先祖なので重要です。氏族の前にメシヤ的家庭になってこそ伝統が立てられるのです。

これからは祝福家庭を中心として氏族が成されていきます。そうすることによって皆さんは、氏族的メシヤとしての使命を果たさなければなりません。これからの教会は族長を中心として成されます。祝福を受けた人たちは全部族長たちです。

新しい家庭と氏族の基盤をつくったので氏族復帰という歴史的な驚くべき恵沢圏内に入ったのです。それで皆さんには父親、母親を伝道することができ、お兄さんやお姉さんを伝道することのできる時が到来したのです。復帰歴史は家庭を探し立てるためのものですが、他の家庭を復帰するよりも自分の血肉を通して復帰したらどんなに早いでしょうか。

皆さんが、父母や兄弟を伝道しなさいという話を聞くことができるのは、先生一代においては夢のような話です。

皆さんはその基盤の上で、皆さんの代に氏族的な基盤をもつことができるというのです。ですからどんなに栄光でしょうか。これを知って感謝しなければならないにもかかわらず、その責任に耐えることができなければ、その家庭が責任追及を受けなくて済むのかというのです。このような立場で責任も責任ですが、これからはその家庭が氏族的メシヤの使命を果たさなければなりません。

地獄という所は、一度はまったら抜け出すことのできない所です。それでも皆さんは自分の母親や父親、そして親戚が地獄に行くというのを実感することができません。何とかなるだろうと思っているのです。しかし、愛する父母が本当に地獄に行くと思ってください。この世の監獄に入るといっても、泣きわめいて、できることならどんなことをしてでも引っ張り出そうとするのが人情なのに、ましてや天情で結ばれた息子や娘、自分の父母と親戚、兄弟と姉妹、すべてが永遠に出ることのできない監獄に行くのを知ったなら、そうするでしょうか。

祝福家庭の男性はイエス様の実体の立場であり、女性は聖霊の実体の立場です。すなわち、イエス様と聖霊がイスラエル民族を救おうとしたのと同じように、生きてこの民族を救おうと躊躇せずに進んで行く立場が正に祝福家庭の立場です。ですから祝福家庭は氏族的メシヤとして出発することができるのです。

皆さんは家庭を率いてイスラエルの地を訪ねていかなければなりません。皆さんにはそのような責任があります。イスラエルの十二支派が、自分に分配された地を訪ねていかなければならなかったように、皆さんはこれから家庭を導いて氏族的な基盤の相続地を訪ねていかなければなりません。

皆さんを氏族的メシヤとして送ったのは、どうしてでしょうか。昔はイエス様が霊界からこの地上に縦的な過程を通して送りましたが、今日文総裁は天を代表した神様の立場で氏族を代表することのできるメシヤ型の数万の家庭を世界に派遣したのです。これからは滅びません。一九八九年一月三日午後二時三十分に氏族的メシヤを宣布したのです。

氏族的メシヤは一代において、氏族を中心として歴史的な故郷を案内する先鋒者だということを知らなければなりません。モーセのような出エジプトの先鋒者であることを知らなければなりません。盲目的ではないのです。モーセは何も知らずにしましたが、私は具体的に全部知っているというのです。理論的にみな知っているのです。故郷を訪ねて行かなければなりません。しかし、カインを探し立てなければ故郷に入ることはできません。

なぜ氏族的メシヤとして責任分担を果たさなければならないのでしょうか。一番目の理由は、皆さんの父母を救わなければならないからです。父母は第一のアダムの立場であり、皆さんは第二のアダムの立場にあります。父母を復帰して、再創造してアダムの使命を完遂しなければなりません。二番目の理由は、

皆さんには故郷が必要だからです。氏族的メシヤの使命を果たすことによって自分の故郷がもてるようになるのです。結局、氏族的なメシヤの責任分担を果たさなければならない理由は、アダム家庭の完成のためなのです。具体的には氏族を教育しなければならないのです。

個人が安息しようとするならば家庭がなければならないので、今まで統一教会は家庭を探し立てるために闘ってきたのです。また家庭が安息しようとすれば、氏族圏がなければなりません。氏族が囲いとなって、吹きまくる風とそれ以外のすべてのものを、責任をもって防ぐことができる、そのような舞台をつくらなければ平安な家庭で生存できないのです。そうしようとするならば親戚を中心として族長になるのです。族長になれば、戦いが起こっても親戚が一線に立って闘うので、族長は作戦を指示しながら休むことができるのです。それで皆さんに、先生は氏族的メシヤの使命を果たしなさいと言ったのです。その次には国家的メシヤの使命を果たしなさい。これから世界に行って伝道をするときには国家的メシヤの使命をするようになるのです。

皆さんは金家であれば金家のメシヤと同じ使命を果たさなければなりません。金家であれば金家、朴家であれば朴家において、天の国を創建するために、この氏族を代表しては「私がメシヤだ」と思いなさい。救世主だと思えというのです。金家を救う救世主だと思わなければなりません。そのためには金家全体に代わって祭司長的な責任を果たさなければなりません。

さて最後に残された終着地とは何でしょうか。解決方法が何なのかというのです。すべての壁を壊して処置をすることですが、このような恵沢を受けるためには、どうしなければならないのでしょうか。氏族的メシヤになれというのです。氏族的メシヤ。これさえ終われば、個人的讒訴条件、家庭的讒訴条件、氏族的讒訴条件、民族的讒訴条件、国家的、世界的讒訴条件を提示するものは何もなくなるというのです。

三　真の愛で「ため」に生きる生活

一) なぜ「ため」に生きなければならないのか

宇宙を造られた神様、法度を立てた神様はどのような方でしょうか。宇宙を通して誰よりも「ため」に生きる代表的な立場に立った方です。その方が神様だというのです。ですからその方に会うためには、「ため」に生きなければなりません。その方は知識の大王ですが、知識をもって来いとはおしゃいません。能力の大王ですが、能力をもって来いとはおっしゃいません。「ため」に生きてくると、皆が神様のそばに来ることができるというのです。

再創造において他人に与えまた与えるのは、神様が創造時に自分を消耗させた立場と一致します。自分を投入するということは第二の自分をつくるためで、神様が創造する時、御自身を投入されたのと同じです。再創造歴史は蕩減復帰路程であり、蕩減は再創造歴史を通して成されるので、自分を投入することによってのみ再創造が成されるのです。ですか

ら犠牲になることが不可避であることは理論的な結論です。

神様は独裁者ではありません。神様も人間のために投入しました。神様が人間の前にいるのは、人間のためにいるのです。ですから千年、万年、神様に従っていこうとするのです。「ため」に生きる天理の宇宙存在世界の前に自分自身の存在位置を維持するためには、「ため」に存在しなければなりません。「ため」に生きることによってのみ、東洋、西洋に通じることができ、古今に通じることができます。

自分を主として動くのは悪をもたらしますが、全体を主として動くのは発展をもたらします。これを知らなければなりません。全体のために行くものに対しては、すべてのものが門を開けるというのです。個人も門を開け、家庭も門を開け、氏族も門を開け、民族も門を開け、世界も門を開け、天の国も門を開け、すべてのものが門を開けて歓迎するのです。

真の人生が行く道に、一つの公理として立てなければならないのは「ため」に生きるということです。これはどこでも通じる原則であり、永久不変です。過去、現在、未来がないので、「ため」に生きなさいというのです。ここに孔子様やイエス様やお釈迦様やマホメット、すべての聖子といわれる人たちの前に神様が現れて、「あなた方はどう思うか」と言うと、「そのとおりです」と言うでしょうか、「そうではありません」と言うでしょうか。それが宇宙の法則です。それが、人間が生きるにおいて、真の姿で生きるための一つの方法だということを知らなければなりません。

歴史的な伝統として残る実績とは何でしょうか。犠牲精神による、「ため」に生きた実績のみが今日の世界に残ってきました。そうかどうか調べてみてください。そういう人たちが聖人として、歴史的な偉人として、または忠臣として残ってきました。そのような犠牲精神のもとでのみ、功績が残ったのです。ですから犠牲になることは功績を残すためのものだということを知らなければなりません。

神様の愛とは、神様自身を愛し、人類を愛するものです。それだけでなく、来ては去っていった、過去、現在、未来の人類すべてを愛する愛です。ですから地獄に行った霊人たちまでも解放してあげる運動をする神様である、ということを知らなければなりません。人は真理の道を行かなければならず、生命の道を行かなければならず、愛の道を行かなければなりません。いくら素晴らしくても「ため」に生きる基盤がなければ、すべてのものはついてこないのです。このように生きる人は自然と主体になります。真の生命の人になるのです。

レバレンド・ムーンの思想が今後二十一世紀の主体思想として登場できるのは、今までの「自分のために生きろ」という世界で、反対に「ために生きよう」という世界を発見したからです。論理的な観点において、今までと反対の世界が顕現できる可能性のある、不可避な結論です。ですから希望は統一教会しかありません。自分のために生きるという世界ではなく、「ため」に生きようとするこの群れのあとを、二十一世紀以降の数千、数万年の世界がついていくのです。私のために生

きろという世界にはついていきません。嫌だと言うのです。

どのように統一されるのでしょうか。先生はどのように統一するのでしょうか。こぶしで、力で、お金で、権力で、知識で？　違います。愛を中心とした、「ために生きる」立場で万事は解決されるのです。結論は簡単でしょう。真の愛を中心として、「ため」に生きていくときに、悪魔の世界が天の国として再創造されていくという結論です。それは理論的なのです。

二) 「ため」に生きる者が中心である

私たち統一教会はよく食べ、楽しく生きながら行こうというのですか。食べる物もなく、苦労しながら行こうというのですか。よく食べて、楽しく生きようというのでしょうか。食べる物もなく、苦労しながら行こうというのでしょうか。誰のためにでしょうか。統一教会の文先生のためにですか。神様のためにです。神様の心をとりこにする方法はそれしかありません。

私がその人を屈服させる方法は、闘って勝とうとするのではなく、その人のために父母の立場でまず考えてあげるのです。そうすることによって私が勝つというのです。三年だけ「ため」に生きれば、間違いなく私の言葉をよく聞くようになるのです。心はそうです。心は。自分の居間のドアまで開けて、「あなたは勝手に私の家に入ってきてもいい」と言うのです。そのような宇宙の原則的な作用が、この本心を動かしているということを知らなければなりません。

神様の立場と父母の立場は、どんな立場でしょうか。先に考えてあげる立場です。神様は私よりも先に考えてくださるのです。父母は私より先に考えてくださるのです。それで良いというのです。それで主体なのです。二人で住むという時に、「ああ、あの食口がしなければならないことを、私がしてあげなければならない」と言わなければならないのです。神様がそのようなお方です。その人が中心です。「ため」に生きる人が中心になるのです。

相手が小さなもので私を愛し、「ため」に生きてくれたなら、私はそれ以上のものを返してあげたいのです。これはだんだんと拡大していくのです。拡大、拡大しながら日時が過ぎて、一生の間そうしていくと、これが国を越えて、世界を越えて、永遠の世界、天国を越え、天上世界を越えていくのです。

人はどうして高いものが好きなのでしょうか。多様なものと因縁を結ぶことができるので高いところが好きなのです。なぜ低いものが嫌いなのでしょうか。単純になるからです。多様な関係から遠くなるというのです。人において最も貴い人は高い理想、高い観、高いものと関係を結ぼうとする人です。そのような人が貴い人だという概念を、ここで見つけることができます。

より「ため」に生きなければなりません。より「ため」に生きるとはどういうことでしょうか。より「ため」に生きる人が責任者に

なるのです。十人の中で誰が中心になるのかというと、その十人のために愛し、そのために生きる人です。その人には十人がみな訪ねていくというのです。「ため」に生きることはつまらないことだと思っていたのでしょう？　しかし主人に、中心者になるということを知らなければなりません。天理がそうです。「ため」に生きることはつまらないことだと思ったのに、これが中心になるためのものであり、責任者になるためのものであり、すべてのことを相続するための道だというのです。ですから「ため」に生きようとすることを知らなければなりません。つまらないことではありません。損することではありません。商売の中でもこのような商売はありません。

四　父母が立てるべき愛の法度

一) 父母は友達よりも近く

父母は子供のためにいます。もし父母のために父母がいるとすれば、父母という言葉は出てきません。これから統一教会の原理を中心として倫理観が形成されなければなりません。父母はどうあるべきですか。子供を生んだ父母は子供のためにいなければなりません。それが倫理の第一条です。それは説明する必要がありません。息子のためにいようとするのは不幸な立場ではなく、幸福な立場です。

自分の子供に間違ったことを教える父母はいません。師匠は弟子に間違えるように教えることもあります。怨讐の立場にいる師匠ならば滅びるように教えることもあるのです。師匠には二つの種類があるのです。兄弟も二つの種類があるのです。しかし父母はただ一つです。いくら悪い父母だとしても子供には正しく教えてあげるのです。

皆さん自身は誰のものですか。父母のものであり、息子のものです。そうなると、父母は誰のものですか。父母は子女のものであると同時に神様のものです。ですから皆さんはまず神様のものになって、子女のものになったのちに、自分のものになるのです。そのようになる時に初めて完成されるのです。ですから父母を敬うその法度が地上に残り、人間の生活に残っているのです。ここで、父母を敬い子供を愛しなさいという言葉が出てくるのです。父母がいなければ孤児です。父母の愛を受けたり、子供を愛してみましたか。そうしてこそ「私」という人が、四方を区別するすべが分かるようになるし、上も下も区別するすべが分かるようになるのです。

子女たちが「天下に私たちの父母のような人はいない」と言えなければなりません。世界の人たちが韓国に模範家庭を探して訪問するでしょう。その時見せるものがあり、言う言葉がなければなりません。

父親は友達の中の友達にならなければなりません。自分の父親が現れたら、友達を捨てて父親に走っていかなければなりません。そして師匠の中の師匠にならなければなりません。ですからできれば「私の父は大統領よりも良い、一番だ、神様の次だ」。このように考えなければなりません。「どんな友達とも換えることのできない友達だ。どんな師匠を与えられても換えることのできない父親だ。私が愛する妻を捨てたとしても父親は捨てられない」。このようにならなければなりません。

先生は外出して家に帰れば必ず寝ている子供の顔をなでてあげます。親の役目を果たすのは簡単なことではありません。そのようにすることによって、「うちのお父さんが私を愛してくれたように私も息子、娘を愛さなければならない」ということを自動的に植え付けるようになるのです。また「お父さんは世界一だ」ということを分からせなければなりません。

人は誰でも立派な息子をもちたいと思います。それでは、立派な人として育てるためにはどのように教育したら良いのか、それが分からないのです。教育は一生涯しなければなりません。精誠を尽くさなければなりません。父母が精誠を尽くして育てた子供に家を引き継がせる時、その代身者として立てる時は、父母の心と一致するようにさせるのです。その父母の因縁について行くようにさせながら代身者として立てるのが常例です。

父母は愛する子供のために骨の髄まで溶けるような苦労をしても、つらいと思わないのです。なぜでしょうか。愛しているからです。自分の血肉を分けて、その代金がいくらなのかを帳簿につけておくのでしょうか。つけないでしょう。かえって全部あげることができなくて残念に思うのです。

子供に対する父母の愛はただそのまま生活的な因縁だけで通じる愛ではなくて、骨の髄からわき出てくる愛なのです。忘れるに忘れられず、切るに切れない愛の心を父母はもっているのです。それで生命の余力が残っている限り父母は子供を愛するのです。子供と生命の因縁が結ばれていることを感じる時、父母には子供を愛する心が自然的にわき出るのです。私の息子なので愛するという意識的な心が先に立って愛するのではなく、その心よりも因縁よりも先立つ自分の生命力が、子供と連結されているので愛さずにはいられないというのです。このような事実は私たちが家庭生活でよく感じていることです。

家庭で起こる是々非々は男性が責任を取らなければなりません。男性は家庭の中心的権威を守らなければなりません。

二) 伝統を相続させてくれる父母

先生が心配するのは、どうやって統一教会の名前を後世に残すかということではなく、どうやって先生の伝統を相続した人を後世に残すかということです。ですから今まで伝統を重要視しなさいと教育をしてきたのです。

未来に対してどのように生きることが豊かに生きるということになるのでしょうか。私が豊かに生きるのが問題ではありません。後孫を教育しなければなりません。後孫に残してあげなければなりません。今まで統一教会を指導してきた私自身もそうですが、皆さんもかわいそうな道を歩んできました。避難民として歩みながら、立場をつかむことができませんでした。荒野路程を歩んできました。これから私たちは定着しなければならないし、定着しようとするなら闘って勝たなければなりません。カナン七族を滅ぼしたように、闘って勝たなければ定着はできません。この民族を中心とした闘いで勝たなければなりません。

子女たちを教育する時に、お前たちはお父さんやお母さんのようになりなさいと教育することができなければなりません。皆さんが伝道期間中に食べられず、豊かでなかったとしても、ぼろをまとっていたとしても、恥ずかしいことではありません。後代が千万金を払っても買うことのできない教育資料になるのです。

苦労は素晴らしいことです。それで私たちは千秋万代の後孫が誇ることのできる伝統を立てておかなければなりません。

祝福家庭の娘、息子たちが、三代をどのように先生と共に生きることができるかということが大きな問題です。三代がみな功臣になると、天下にもないあの天上世界の功臣になるということを考えてみましたか。ですから自分の息子、娘を抱いて今から教育して、そのような思想を植え付けるために精誠を捧げなければなりません。

伝統を残さなければならないし、その次には善良で立派な後孫を残さなければなりません。器量の狭い男の後孫ではなくて、強くて雄々しい立派な後孫を残さなければなりません。そうなるとその国は滅びる運勢圏にあるといっても滅びないのです。滅びる立場から新しい恩人が現れるのであり、追い出される立場から新しい勝利の旗を掲げるのだという事実を知らなければなりません。残さなければならないその伝統が大韓民国のみでなく、万民が喜ぶことのできる伝統にならなければならないし、善良な後孫も残さなければならないというのです。これができなくなる時、天の前にもっていくべき礼物（贈り物）がなくなるのです。

父母は死んでも天道は残していかなければなりません。その家庭は何のためにあるのでしょうか。自分の子供のためにあるとしてもまず神様のためになり、国のためにならなければなりません。これは結局は自分の子女のための道です。そうしてこそ神様の運と世界の運と共にある国の運と共にすることができるからです。そうして祝福を受けて生まれた貴い子女たちが苦労をしても、その子女たちに拍子を合わせるのではなくて、神様と世界と国の運勢に拍子を合わせなければなりません。

皆さんは一代のために生きる家庭にならずに、世界と永遠のために生きる家庭にならなければなりません。また愛の基盤を広げて万民の心情を集め、ろうそくに火をともし、香をたいて、祈りを捧げ、天と地、万民と共同の因縁を結んで、生きて死ぬという家庭にならなければなりません。そのような家庭になると、どのような艱難にぶつかっても、神様がその家庭を保護してくださるのです。天が本家の長男として残してくれるというのです。

五　夫婦が守るべき礼節

一) 夫婦は生活の同伴者

一度結婚したのちには自分勝手に暮らすことはできません。結婚して家庭をもった運命の道は、生命を懸けて行かなければならないのです。

愛が成される瞬間から皆さんは二人ではなくて一人なのです。夫婦になると独自的な行

動はできないし、連帯責任をもたなければなりません。

個人が滅びるのはいいですが、家庭が滅びてはいけません。夫においては妻になる人が、妻においては夫になる人が世界で最も必要な人です。互いにアドバイスをしながら杖になり同役者にならなければなりません。

妻は職場から帰ってくる夫に対して夕御飯を準備してあげることによって夫に対する義務を果たしたと思ってはいけません。夕飯の食卓に座って愛の蜜語を分かち合い、和気あいあいとした時間をもつことが、何よりも重要なことです。初めて会った時、優しくささやいたその声で、愛の姿そのままで、一日の労苦を慰労してあげると、夫の疲労は洗われるように消えるのであり、愛もまた深まるのです。

女性は本来、男性の平均の声よりも小さな声で話さなければなりません。女性のその声は愛のささやきのようでなければなりません。

先生が七十歳に近づいた体で、海に出ていく、とお母様に話すと、お母様は海に行くすべての準備と精誠を尽くしてくれます。海に出て一晩泊まる準備までしてくれて、海で成そうとするみ旨のためにお祈りまでしてくれます。これはどんなに素晴らしく美しい内助者の姿でしょうか。

夫が帰ってきて夕御飯も食べず、話もしないで、いびきをかいて寝てしまうなら、そのいびきを聞きながらそれ以上の泣き声が自分の心からわき上がる女性にならなければなりません。先生はそのような家庭が見たいのです。もしそれが見られなければ、先生の苦労は無駄になってしまいます。神様の六千年の犠牲は無駄になってしまうのです。皆さんはそれを知らなければなりません。

夫が巡回に行くと言うとき、「行ってらっしゃい。私は疲れているので寝ます」と言ってはいけません。夫が巡回して帰るまで、妻も精誠を捧げなければなりません。子供もその父母が帰ってくるまで待たなければなりません。

妻は夫を出世させなければなりません。内助をしっかりしなければなりません。

夫婦の間で夫が、することに干渉するなと言ったからと、妻が干渉しなくて良いのでしょうか。妻も夫と対等の立場に立つことができるのです。夫がいない時は妻でもその立場に立つことができなければなりません。

夫ができたらさぞ良いだろうと思ったのに、良くない時もあるというのです。良いことのみを願ってはいけないのです。二十四時間ずっと太陽の光が差せば良いでしょうか。夜もなければなりません。高ければ低くなるのが原則ではないですか。

妻は貧乏だと悲しまず、着るものも着られなかったと寂しく思ってはいけません。夫がそれを知らないのではありません。心の中では申し訳ないと思うところに深い愛があるし、ダイヤモンドよりも貴い宝が隠されているのです。

夫が横になって寝ていると、なぜこのように寝てばかりいるのかと言って起こすことの

できる妻になるようにアドバイスしたいものです。

少しでも慰労すると女性はすぐに怒りが解けます。

夫婦が互いに「私を愛してくれない。私を分かってくれない」という、つまらないけんかをしてはいけません。けんかをしても、み旨のためにしなければなりません。

妻の誕生日には、近所のおばさんたちを集めて、妻をこの上なく愛しているという心で妻のために、その人たちの前で踊りを踊り、歌を歌わなければなりません。

妻や同じ家に住んでいる人の足音を聞いただけでも、その人に良いことがあったのか、悪いことがあったのか分かるのです。そして妻が部屋に力なく入って来たら「あなたはどうして気分が良くないのか」と聞くのです。そうすると妻は、見てもいなかったのにもう夫は全部知っているので何も言えないのです。そのようなアンテナをもって暮らさなければなりません。関心をもって祈祷するようになると、私に関心をもつようになります。

愛の深い夫はその家の中で悪口を言ったとしても、これは全部愛の刺激にすることができます。愛のない夫の一言は、その一言が肉をえぐるような破壊の動機になるのです。愛があったらむちを打っても良いけれど、愛のないところではすべてが嫌なのです。

二) 夫婦は信仰の同役者

皆さんは農村に行って仕事をする時にも、一人で行って仕事をするようにはなっていません。夫妻が共に、その日の仕事を神様の前に報告して、行って仕事を始め、終えて帰ったときも神様の前に報告をしてから御飯を食べるようになっています。そのようなことをすべて規範化させる、神様を標準とした生活がどんなに厳格かということを知らなければなりません。 女性にも女性として守らなければならない家庭生活の規範があるし、男性にも男性として守らなければならない家庭生活の規範があるのです。このような膨大で天的な規範を体系化して、生活するのが、皆さんが行かなければならない路程であるにもかかわらず、その路程を行くことができなければとんでもないことです。

歩くのも男性は右足をまず踏み出し、女性は左足を最初に踏み出さなければならないのです。どこかに行って座るにも男性は東側に座り女性は西側に座るのが原則です。御飯を準備する時、服を掛ける時など、すべてのことには方式があるのです。

男性は女性のために見下ろし、女性は男性を下からだんだんと見上げなければなりません。女性は水の流れて来る方を見るのではなくて、流れて行く方を見なければなりません。水の流れてくる方を見上げる女性は尻の軽いタイプです。本来男性が座るところは女性が準備してあげなければなりません。たんすを使う時も男性が右側なら女性は左のものを使わなければならないし、男性が上ならば女性は下を使わなければなりません。例を挙げると、男性の上着の上に女性のスカートや下着

を置いてはいけません。男性の服の上に女性の服を載せてはいけません。

責任者の夫人は夫が玄関を出る時、絶対に夫の悪いところを指摘してはなりません。妻が指摘をすることによって夫一人の心を暗くした波動は世界を暗くするのです。悪いところを指摘する時は夜にしなさい。そうするとすべての問題が夜の間にすべて解決されるのです。男性は朝戦いに行くのです。そういう夫のために妻は朝早く起きてサービスをたっぷりしなければなりません。

夫に殴られても感謝の祈祷をしなければなりません。「夫として妻を一度殴ることもできなくて良いでしょうか。ありがとうございます」と。

夫婦間の一人が傾けば心情と精誠で補充しなければなりません。

パウダーをたたき香水をかけても、女性はいつも美しくなければなりません。女性は情緒生活において借りをつくってはいけません。また夫の体や衣服などについて、いつも関心をもたなければなりません。夫が家に帰ってきた時、疲れているようだったら洗顔のための水も持ってきてあげて、歯を磨く準備もしてあげて、足も洗ってあげ、髪もとかしてあげなさい。女性の笑いは家の中の花です。円満な家庭を成そうとするなら女性は喜悲劇の一等女優にならなければなりません。夫が喜んでいるときも完全に溶かし、悲しいときも完全に溶かさなければなりません。

服は少なくとも三日に一度は着替えなければなりません。髪もそのようにしょっちゅう洗わなければなりません。そしていつもほほえんでいなさい。ほほえみは心の花です。いつも花を咲かせて香りを漂わせなさい。ヘアー・スタイルや化粧で相手をテストすることを知らなければなりません。自分の顔や姿で相手の心を喜ばせてあげられなければ、趣味でそれに代えなければなりません。音楽とかすべての芸術を総動員してみなさい。雑誌などを見て女性の生理について説明してもよいし、文学書籍を読んでおいてそれを説明してもいいのです。夫が幼子のようにスカートのすそに包まれて暮らすようにしてあげなさい。

夫婦はせっかく会ったのだから両腕をつかんで死んでも生きても共に行かなければなりません。どうせ行くのなら格好良く行きましょう。

結婚したのちには皆さんは勝手に行動できません。結婚後、どこに行かなければならないのでしょうか。神様の愛を受け持たなければなりません。人間が男性、女性として生まれたのは愛のゆえにです。愛は夫婦になって一つになることによって結実を結ぶことができます。皆さんは神様の愛が二性性相によって分立された実体であり、分立された実体が合成一体化されるために神様の愛を求めていかなければなりません。

祝福家庭が子供を抱いて愛し方を知っているなら、その娘、息子が何ゆえに生まれたのかということを心に刻まなければなりません。神様のゆえに生まれたということを知らなければなりません。神様という因縁を通して生

まれました。夫が貴く妻が貴くて秘密に何か話すとしても、その相手が自分同士で決めて出会った相手ではありません。公的な天道を前において出会った人です。神様が介在して出会った人です。そのような自分たちが悲惨になれば悲惨になるほど神様が悲惨になるということを、私たちは知らなければなりません。

家庭的な基盤を築くために、夫に妻が合わせてあげれば福を受けるし、妻に夫が心を合わせてあげれば福を受けるのであり、子女たちが一つになれば福を受けるのです。今は家庭救援時代なのです。

女性は天道に従って順応して、女性として行かなければならない道を行かなければなりません。夫が一緒に死のうといったら死ねなければなりません。死んでもあの世に行って一緒に生きれば良いのです。夫の命令を絶対視し、夫の命令に従順に従ったのちには解放される道があるというのです。人倫の世界の道徳観において悪の堕落圏内にいるとしても、三綱五倫を中心として順応する人たち、絶対従順であるという基準を立てた人たちには、もう一度解放される道が依然として残されているのです。

六　子女を信仰的に育てる

一) 懐に抱いて天法を教えなければ

皆さんは、皆さんの息子、娘に何を語るつもりですか。皆さんは公的な人生、それも模範的な公的な人生を生きることによって皆さんの息子、娘に見せてあげ、その伝統を受け継ぐことができるように教育しなければなりません。人は本来、自分の父母に教育されるようになっています。学校に行ってのみ教育を受けるのではありません。特に伝統を受け継ぐ教育は、学校では学ぶことができません。

子供はすべての価値を父母を通して探します。家庭で育っている子女は誰に似たのでしょうか。父母に似ました。その子女たちは誰についていくのでしょうか。父母についていくのです。このようになっているのです。

間違いがある時に子女を生むと、その間違いは遺伝します。

家法を準備しなければなりません。子供たちの教育基準など、家庭の規範をつくらなければなりません。しっかり育てられずに子供の追及を受けても何も言えません。

子女を教育するためには、父母がまず実践しなければなりません。父母が見本になってみ旨の前に忠誠を尽くさなければなりません。そうして父母が何を言っても、子女たちが一言半句も口答えせずに敬意を表すことのできる立場に立たなければなりません。そうでなければ子女たちがついていかないというのです。

子女たちが、自分が知っているみ旨と原理を中心として見る時、教会生活において父母が本部から指示している原則を等閑視してその指示に従う生活をしていないのに、子女たちだけに原理原則どおりの生活をしろと言えば、鼻で笑うというのです。

父母はどんなことをしても息子、娘が統一教会の正道を行くようにしなければなりません。それから自分自身も正道を行かなければ

なりません。自分がまず行ってから子供に教えなければならないのです。子供を教育するために、自分がまずそのようにしなければなりません。その次に子供を教育しなければならないのであって、自分はせずに教育しようとするのは天道に外れるのです。先生が皆さんに話すすべてのことは、先生がまず実践して勝利の基盤を築いたあとで教えているのです。信じられないなら祈祷してみてください。うそなのか、事実なのか、祈祷してみなさいというのです。

祈祷をする時にも、私がこのようにするので私の子供もこうするようにしてほしいと祈祷しなければなりません。自分がまず標準になったのちにこそ子供をそのような位置に立てることができます。自分がまずそのような位置に立つと、神様はその子供も同じ方向に導いていくのです。ですから私たちが、私たちを中心としてその方向をもとがえすことができなければ、霊界に行って責任追及を受けるようになるのです。

子女たちを教育する時、お前たちもお母さん、お父さんのようにならなければならないと教育できなければなりません。

子供は父母の心情を学ぶのです。

自分の子供を教える時は「立派な人になれ」と言うだけでなく、「立派な人になるためには、このような道を経て何かになれ！」と言わなければなりません。父親は父親としての責任を果たし、兄は兄としての責任を果たさなければなりません。姉は姉としての責任を果たさなければなりません。別の言葉で言えば真の男性、真の女性の道を行く因縁を選んでいく方法を知って、法度に外れない皆さんになってこそ順理的な路程を経て、一つの国の民になることのできる道が生じるのではありませんか。

「お父さん」という言葉は、恐い言葉です。「真」でなければ子供に食べさせてあげることができません。子供に血の功績と善なるものを食べさせなければなりません。間違ったものを食べようとする時は涙を流しながら指導してあげなければならないし、福を祈ってあげなければならないのが父母です。ゆえに父母は子供の世話にならないのです。

これから皆さんは父母として子供を抱いて天法についていかなければなりません。皆さんの生活がどんなにつらく、どんなに困難にもまれて生きているとしても、子供には涙を見せてはいけません。絶対にいけません。

子供を教育するとき、どのようにしたらみ旨のとおりに使命を尽くす人として教育できるのかを考え、乳飲み子にお乳をあげるときもこのように考えながらあげなければなりません。

皆さんが「あの家門は良い家門だ」と言うことのできる基準になっているとしても、その家の子供たちは何にでも注意しなければなりません。立派な家門に育った息子たちは何にでも注意しなければならないというのです。一歩踏み出すにも注意しなければならず、一言話すにも注意しなければならず、行動をするにも注意しなければなりません。礼法が複雑なのです。威厳のある家柄には子供を教育

することのできる資料がたくさんあります。目上の人に対する時、兄弟に対する時、父母に対する時、どのようにしろと、育っていく子供たちを集めて教えるのです。

二) 信仰教育がもっと重要

子女たちの信仰教育が学校教育よりもっと重要です。お父様の考えはみ旨を中心とした考えであり、皆さんの考えは個人的な考えです。信じて行うものには創意力が生じます。

祝福家庭の子女は心情教育を通して人格者として育て、規範教育を通して誇り高い選民として育て、天才教育を通して天が与えた才能を一〇〇パーセント発揮させて、み旨の発展に寄与しなければなりません。

勉強するときになぜ疲れを感じるのでしょうか。自分のために勉強するので疲れを感じるのです。しかし三千万が死ぬか生きるかの問題がここ一ページにかかっており、一つの文句にかかっていると思ってみてください。一つの単語を付け加えることによって三千万が生き、一つの単語を減らすことによって三千万が滅びるという心で、もっと精誠を尽くしてその一つの単語を付け加えるという、深刻な心で勉強してみなさい。頭が悪いはずがありません。皆さん、深刻な立場にいたことを忘れることができますか。生命を懸けてしなさい。皆さんはどきどきする心臓の鼓動を感じる時があるでしょう。深刻な時はそうです。そのような深刻な立場で皆さんが決心したのを忘れることができますか。頭が悪いというのもみな程度の問題だというのです。

先生も苦学を通して学業をしました。虎は子供の野性を育て、山中の王として育てるために、過酷な試練と酷烈な訓練をさせるということを知らなければなりません。金属の塊も火に当てるほど強くなるという原理も、子女を教育する時には一度は考えてみなければなりません。

父母が生活に困って心ゆくまで物質的な恵沢をもたらすことができなかったとしても、骨の中に染み込んだ愛の心をもって子供のために生きる時、彼らは父母に借りをつくるというのです。それで孝子は貧乏な人の家庭から多く出るというのです。父母がそのような伝統を残したので、その子供が借りをつくるまいと努力する時、父母も生きがいを感じます。

七　兄弟間の友愛

父母に息子と娘の二人しかいなかったらどうでしょうか。息子を見るとき、彼にはお姉さんも必要であり、またお兄さんも必要でしょう。また娘には、お兄さんも必要であり、お姉さんも必要です。また彼らには妹と弟が必要です。お兄さんがいなければならないし、お姉さんがいなければならないし、弟、妹がいなければなりません。これらがそろわなければ不幸なのです。妹、弟、お姉さん、お兄さん、全部そろって完全に一つになる家庭は、神様が保護されます。これが氏族と民族と国家の起源になるからです。

お兄さんとお姉さんは東西を表し、弟と妹は南北を表すので、それが完成されれば一体になるのです。これが愛の法度です。このよ

うな愛の法度がしっかりと立つ時に平和の起源は成されるのです。

父母の心は自分のための心よりも、兄弟同士がもっと「ため」に生きることを願います。父母の面倒を見られなくても、「お母さん、ちょっと待って。弟をかわいがってくるから」と言うと、「この子はこれから使える人になるなあ」と言うのです。そうでしょう。

兄弟を父母以上に愛するという人は、天国で永遠に生きることのできる人です。兄弟を父母のように愛することのできない人はここから外れるのです。その道理の根本を悟ってみると簡単です。それを知らないから今までできなかったのです。私たち食口同士が一つになったのか、なっていないのかということが問題です。父母の前に親孝行できない立場に立ったなら、父母のために自分が精誠を捧げたものを、自分の父母にあげる代わりに食口にあげなさい。そうすると父母に親孝行した以上のものとして天が受け入れてくれます。そのような人は必ず福を受けます。

天国に行く道は兄弟を神様のように愛することによって開かれます。皆さんは先生についていこうとするのですが、その心で兄弟と共に行こうと努力してみてください。このように見る時、天国に最も高く、早く、よく導いてくれるのは神様でもなく、先生でもなく、兄弟だという結論を下すことができます。父母と夫婦の愛を凌駕する愛をもって努力する者は、最高の愛の主体者として相手を選択するのです。

弟一人が間違った時には、全兄弟が支えてあげる家庭、またお母さん、お父さんが愛し合う、その家庭はどんなに美しいでしょうか。お母さん、お父さんは子女に対し、「後代の私たちの神様よ」と言うのです。それはなぜでしょうか。神様の愛に通じる時も同じです。お父さんがお母さんを愛し、お母さんがお父さんのために生きれば、その家庭には神様が共におられ、その息子と娘は将来神様の代身者になるということを知らなければなりません。

兄弟とは何でしょうか。同じ愛の同参者です。父母の愛の同役者なのです。ですから互いに闘えるでしょうか。闘えないのです。ですから右手を挙げる時は父親の手、左手を挙げる時は母親の手、右足をあげる時は父親の足……。善進に、この足は誰の足かと聞くと、右の足はお父さんの足で、左はお母さんの足だと言うのです。本当にそうだというのです。それはどうしてでしょうか。もう愛を中心として、そうなっているというのです。

兄の立場で妹を愛し、妹の立場で兄を愛しますが、ただ愛することはできません。必ず父母を介在させて、幼い時父母の懐で育ったことを重要視しながら愛さなければなりません。父母と子女が一つになった基盤で連結された兄弟でなければなりません。そうしてこそ成長しながら共に上がっていくのです。小学校、中学校をずっとそのように上がっていくのです。

この世をいくら歩き回ってみても家庭にある兄弟の愛、血を分けて生まれた兄弟愛のようなものはないのです。社会に出て自分の兄

弟以上に近い人がいますか。近くなっても分けられるのです。

兄弟が多ければ御飯を食べる時も一膳の御飯を二人で分けて食べなければならないというのです。御飯が一膳しかないとけんかをするのではないのです。兄弟が多くて生活が大変でも「私が御飯を食べなくても分けてあげなければ。弟にあげなければ」という愛の心をもつならば、いくらいても良いというのです。

兄弟を通して国民が形成され、人類が形成されるのです。兄弟は前後を表示するものですが、それが肉になるのです。これが平べったかったのに肉がつくというのです。そこで円形ができるのです。円形をつくるのが兄弟であり、兄弟が拡張されて国民になるのです。

なぜ兄弟が必要でしょうか。縦横を中心として連結されたものが兄弟です。アダムとエバを東西と言うなら、神様とアダム、エバは縦的です。これは平面にしかなりません。ですから横的な基準が必要であり前後が必要です。家庭愛を超越できるものは兄弟愛しかありません。万民同胞愛という言葉と同じです。それがなければ球形が成されないのです。

兄弟愛というものは世界愛と通じるのです。兄弟の多い家庭は世界の人類を抱き、理想的な天国、地上天国と天上天国をつくるモデルのようなものです。ですから兄弟はここから拡張されるのです。

八　勤倹節約、質素な家庭生活

一) 質素な生活

妻という人は夫のために生き、子供という人は父母のために生き、また父母は家庭のために生き、おじいさん、おばあさんも家庭のために生き、孫も家庭のために生き、このように、愛によって互いに「ため」に生きていくのが幸福ではないでしょうか。すべての食口たちが自分のものを作ろうと努力するのではなく、私たちのものを作ろうと努力するのです。

おじいさんも使わずに節約して私たちのものにしようとし、お母さん、お父さんも私たちのものにするために使わずに節約し、息子、娘もそうであり、全家族が私たちのものを拡大させるために努力する、その家は繁栄するでしょう。ですからお金を使わずに節約して全体のために生きるところから、このような愛の安息の場は拡大されるのです。そのような家庭を中心として、社会や世界に広まるようになる時、理想実現が可能なのであって、自分のもの、自分を中心としてはいけないのです。

所有権は神様に返さなければならないのです。ですから先生は何も持っていません。それを知っているので質素な生活をするのです。一家族が、かばん一つ背負って、どこにでも行って生きることのできる時代がだんだん近づいています。「富んでいる者が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」（マタイ一九・二四）という聖句は一理あるのです。

確固たる経済的基盤をどのように築くのでしょうか。まず節約しなければなりません。それで節約しなさいと言うのです。しかし、

いくら強調しても駄目なのです。私たちが物質を自由に授け受けることのできる環境でも、責任を果たせずに追い出される日には、統一教会は第二次の受難の道を行かなければなりません。

私たち宣教師はヨーロッパ文明社会の豪華な要素を必要としないほどに訓練されています。私たちは新しい文化をもっているからです。それが「寝袋文化」です。私たち若者はどこに行っても不慣れな所はないはずです。統一教会の宣教師の家は豪華な家具のない、最も質素な家具だけがあるままで見つけられるでしょう。

二) 節約精神

すべての面で模範にならなければなりません。良く食べて幸せに暮らし、豊富な生活をすることが絶対に模範ではありません。これを節制をもってして、不可避なことに対して、必要に応じて適切な消耗をするのが模範的生活だということを知らなければなりません。

先生は聖日には仕方なくこのように正装をしますが、服を着る時はできるだけネクタイをしないで過ごすのです。家にいる時はジャケットを着ずに、セーターのようなものを簡単に着ようとするのです。ヨーロッパ社会でネクタイの値段がどれほど高いか考えてみてください。ピンまで全部合わせるとこれはどんなに……。さあ、それができずに、ノータイ（ネクタイをしない）で一生を生きた人と、ネクタイをして世界を考えることができずに生きた人が霊界に行く時、どちらが神様の前に近づくことができるか、考えてみてください。

断食をしてみると時間がどんなに長いか分かるでしょう。三食の食事をするために、どんなに長い時間を要して食べていたかが分かるはずです。また精神的にも、りんご一つでももらって食べようと冷蔵庫を開けてみたり、コーラ一本でも飲もうと行ったり来たりする、そんな精神的な消耗がどんなに多いでしょうか。食事の時だけ食べる習慣が必要だというのです。そうすると病気にもかからないし、健康になるのです。

先生は毎日のように風呂に入ることに賛成ではありません。三日に一度を原則にしなければなりません。汗を流したので仕方なく入るのです。毎日入ると、それがどんなに水をたくさん消耗するかというのです。健康にも悪いし……。「えー、先生は野蛮人だ」と言うかもしれませんが、野蛮人だと言われてもいいというのです。エデンの園の神様もアダムとエバも野蛮人でした。昔はこのごろのようなトイレがあったでしょうか。トイレットペーパーがあったでしょうか。何もなかったというのです。ですからそのようなものを感謝して、このようにしてでも、この世界を生かさなければならないでしょう。

御飯を食べても昔と違わなければなりません。トイレに行っても昔と違わなければなりません。このごろ汽車に乗ってトイレに行くと、トイレットペーパーが壁にかかっています。「よし、このように使ったとして誰が見るか」と、やたらと使ったりもしたでしょう。他人のものだからとずるずる一度に引き出し

て、また引き出し、また引き出し……、それではいけないのです。節約して一度にしなければなりません。変わらなければならないのです。

おなかがすいて御飯を食べるときも、食器に御飯を山盛りにして食べるのではなくて、五分の二を除き、五分の三を食べて満足できる基準をもちなさい。そうしてこそ賢い人です。何でも節約できなければなりません。最高に節約していくらで生活できるか、このような訓練をして最小限三カ月の間は各自が記録し、自分自身の最大の限界点までしてみなければなりません。そのようにして、どのようになるか見ようというのです。

神様のみ旨のために、この国の復帰のために一銭でも節約できる道を模索しなければなりません。ですから経済的管理において、より一層節約できる道を私たちは開拓しなければならないというのが先生の考えです。

先生はこれから生活費の半分をもって生活するようにさせるのです。コーラのようなものも、果物も食べられないようにしようというのです。食堂でも見ると、皆さんは食べるものなら自分勝手に入って来て、何でもよいから持っていって食べていました。豚のように食べているというのです。節約にはこつは要りません。着るもの、食べるもの、買うのにおいて節約すればよいのです。

私たち食口はあんなネクタイはしてはいけません。それは外部の人たちに誤解を受けるかもしれないので、するなというのではありませんが、できるだけそのような面で節約しなければならないのです。さあ、そうすることによって偉大な革命の基地が爆発するのです。分かりますか。アメリカにおいて絶対に必要です。

私がお金をたくさん持っているからと、ある人は私を百万長者だと言います。しかし、私は二十四時間休まずに血と汗を流して、たったの一銭でも節約しようと、すべてのお金をみな世界にちりばめて、文書も一切私には残っていないのです。印鑑一つもないのです。私が精誠を込めて集めたこのお金は誰も勝手に消化することはできません。神様が共にいらっしゃるのです。分かりましたか。

人が寝ている時に寝ず、人が食べる時に食べず、節約をして、人ができないことをするのです。先生の考えはもともとそうなのです。

このように大切にし、節約して、苦労して何をしようというのでしょうか。後代のために良いことをしようというのです。それで世界に誇ることのできる基盤をつくる思想をもとうというのです。十年、そのような思想の伝統を残して、百年、そのような思想の伝統を残し、千年そのような思想の伝統を残すようになる時は、大韓民国は世界から推戴される民族になるとことは間違いありません。ですからこのような原則で指導しようとするのが先生の思想です。打たれている現在では最も悪い思想として見られますが、後々にはこの思想のみが残り、この思想のみが勝利するのだと思うので、このような道を行くようになったのです。

「お金を大切に！」という時、私が金持ちになるためというよりは、国を生かすために

大切にするのが公的だということです。私が大金持ちになるために大切にするのではありません。国を生かすために大切にするのです。

アメリカにおいて「アメリカは節約しなければならない。大切にしなさい」と言うのは、世界を生かすためなのです。アメリカは世界でも税金を最も多くかける国なのですが、世界のために税金を多く取ったら、世界から尊敬されるのです。それをアメリカの国民のためにしたのであれば、アメリカの国民も政府に反対し、世界も反対するのです。世界を駄目にする行動と文化をもっていると思うのです。ですからそのような世界のために私が、「反対されてもレバレンド・ムーンが行く道が正当な道だ」と言うのです。私が聞き、語り、私がするすべてのことがみなそうだというのです。

九　日常生活の礼節

一) 服

服を掛けるときもすべて原理的に掛けなければなりません。男性の服は右、女性の服は左です。服を置くにも男性の服は上に置き、女性の服は下に置く、というのが原理的です。全部そのような訓練が必要なのです。皆さん、このようなことを初めて聞いたでしょう。そうしてこそ良いのです。男性の服をみな下において、女性の服だけ上に置くとはいったい何ですか。原理に反することです。

さて、服を脱ぐときもズボンを先に脱いで上着を上に置かなければなりません。上着を先に置くのではありません。そのような原理的な生活によって環境を整理する方法を知らなければなりません。男性の靴は右側、女性の靴は左側、また二部屋しかない家に住む時は、男性の靴は上に女性の靴は下に、それを全部原理的に整理する方法を知らなければなりません。

女性は服を着る時どんなものを最初に着ますか。上のものを先に着ますか、下のものを先に着ますか。女性は下のものから着るのが原則です。原理では下から着るのです。男性ももちろんそうですが……。男性は時々上のものを先に着ても良いと思います。それは原理的です。皆さんはそのようなことを全部知って生活から整理しなければなりません。原理が生活哲学だということを知らなければなりません。

二) 顔

顔はつくられたそのままですが、その表情はどうでしょうか。これは皆さんが習慣的に調整しなければなりません。歯が内側に曲がっているなら、できるだけ笑うなというのです。それはなぜでしょうか。毒蛇の歯のように見えるからです。ですからそのような女性は絶対口を開けて笑うなというのです。女性がそうだとしたら相当にきつい人に見えるからです。ですからできるだけ口を開けずに笑いなさい。

女性が「ははは」と笑ってはいけません。女性は花であり、花が咲く時は音もなく「ぱっと」咲くのでしょうか。しゃなりしゃなりと咲くでしょう。そのような女性が女性らしいのであって、「ははは」ではないのです。西洋の人たちは「はっはっは」と笑います。

それが男性ならばまだ分かりませんが、女性は見ていられません。本当に見ていられないのです。いくら西洋人だとしても、私たちムーニーはそうであってはいけません。

笑いというものは本当に妙なものです。ちょっと笑うのも笑いです。笑うとどうなるかというと、すべてのものが丸くなるのです。年取った男性が「はっはっは」と笑って、のけぞらずに、おなかを抱えると「くくく」というのです。なぜおなかを抱えるのでしょうか。変ではないですか。のけぞって笑えば良いのに、なぜおなかを抱えるのでしょうか。丸くならなければならないからです。にこにこ笑う時には口元がちょっと上がりますが、「ははは」と笑う時には口が丸くなるというのです。ですから丸く笑う人の中には悪い人がいないのです。今骨相学を語っているのではありません。おもしろいでしょう。

さて、皆さんが笑う時、目と鼻が別々に笑いますか、みな一緒に笑いますか。目が笑い、鼻が笑うのですが、口がこのような人（笑っていない人）は食べることに苦労するのです。また鼻が笑わずにこわばっている人は、娘や息子を授かりにくいのです。また、笑うには笑うのですが、このように目が笑っていない人は情が薄いというのです。全部このようにパーッと笑い、鼻が笑わなければなりません。

三) 頭

男性も女性のように髪を整えなければなりません。化粧をするのもそうだし、髪も自分が見て、分け目を左にするのか、右にするのか決めなければなりません。西洋もそうだし東洋もそうだし、みなこのようにするのです。西洋風ならば大抵左を分けるのです。しかし右を大きくするのが良いというのです。これを女性がよく考えなければならないのです。

四) 手の爪と足の爪

先生が西洋に来て最も恐ろしいと思ったのは、女性の前に行くことです。手の爪だけ見ても、これはもう危険極まりありません。先生は爪をいつもこのように短くしています。これは必要なのです。ちょっとでも伸びると手足の爪を切るのです。手足の爪を切るのが趣味なのです。手の爪を伸ばす女性たちは「仕事をしません」と言っている女性たちです。わー、あの爪でタイプを打つときはどうやって打つのでしょうか。私はそれを見る時、「あの人は道端にいる女性だ」と思うのです。お金をあげなければ爪で「さっ」と金をくれと……私はそう思うのです。

女性が靴下を脱ぐときに、足の爪が長くて伸びていてはいけません。西洋の女性たちは長いと足の爪が痛くていけません。ハイヒールを履くときに痛いでしょう。

五) 歩き方

歩くときは端正に歩かなければなりません。立って歩くということは均衡を保たなければならないのです。均衡を保って、安全に歩かなければなりません。ある人を見るとこのように歩き、またこのように歩き……。立っているということは均衡を保たなければならないことなのです。だらりと立っていても均衡

が保たれていなければなりません。そのようなことが必要なのです。

女性は背中が丸まってはいけません。男性もそうですが。ベッドを使う女性たちを見ると胸がへこんでいるのですが、これは良くありません。頭からまっすぐに立たなければなりません。ですから座るときもいつもまっすぐ座る練習をしなければなりません。男性たちも同じです。また女性は座るときお尻をつけて座らなければなりません。これができなければみな腰が曲がってしまいます。歩く姿が重要だというのです。

六) 座る格好

女性たちがどこかに行って座る時、東洋では絶対寄りかかって座らないようにします。男性はそれを許されます。なぜそうかというと、女性はお尻が大きくて、座ると自動的に楽だというのです。男性はお尻が小さくて上体が大きいのです。ですから座る時、特に女性たちが寄りかかって座ると赤ん坊に支障があるというのです。妊娠していたら大変だというのです。

七) 寝方

西洋では寝るときのマナーがどうなっていますか。うつ伏せに寝ますか、横になりますか。ぐっすり寝なければなりません。寝る姿が美しくなければならないのです。いびきをかくのも図体の大きな男性がかくのであって、女性がかいてはいけないのです。女性が寝るときはすやすやと寝なければなりません。女性がいびきをかくのは困るというのです。そのようなときあごを引くともっと音がするというのです。そうではないですか。ですからできるだけ枕をこのようにあてるのです。それが必要です。

女性が、夫が寝ているところに入らなければならないときは横にすっと入らなければなりません。横を向いてです。夫が先に寝ているのに、女性がどたどたと入ると大変なことになります。そっと横に、それが必要です。

八) 健康

健康が第一です。いくら具合が悪くても、風邪を引いても健康な気持ちを……。自分の表情を見ても、他の人が何も分からないという表情が必要です。ちょっと風邪を引いても具合の悪い表情をし、ちょっと大変でも大変だという表情をするのですが、そうしてはならないのです。男性が心配しても、何でそうするのかと言いながら慰めることのできる、常に健康な表情が必要です。女性がそうだと、そのような女性と暮らしている男性は慰労されるのです。

九) 言葉

東洋では、女性の声が塀を越えるとその家は滅びる、と言うのです。男性がわー、わー言うのは自然なことで、塀を越えるようになっています。女性は声が小さいのです。本来そのようになっているのです。ですから塀を越えるようになると原則から外れるので、その女性と暮らしているうちに滅びるということなのです。そして女性が話す声を聞くと、すぐに分かるというのです。この人がどのよ

うな生活をするか、福を受けて生きられるのか、愛を受けて生きられるのか、それが分かるのです。ですから女性の声は重要です。そんなことを考えたことがありますか。

言葉は言葉だけで、行動は行動だけでしてはいけません。全部神様の息子、娘の位に立てられているので、神様の息子として語り行動し、神様の娘として語り行動しなければなりません。

皆さんは心情にない言葉を語ってはいけません。絶対に語ってはいけません。引っ掛かるのです。天法に引っ掛かるのです。

皆さんは言葉を瞬時に語りますが、その一言を間違えると、それが一年間も影響するのです。一瞬に間違った言葉を一年間もかけて清算するようになるというのです。

愛を中心として語る言葉は、いくら悪口を言っても、何を語っても栄えるのみであり、発展するのみであり、全宇宙が喜ぶのみであるというのです。

十　純潔に対する教え

一) 思春期の戒律をよく守れ

皆さん、思春期になると異性に目覚めるようになり、全体の思いがそこに集中するでしょう。すべての細胞の作用がそこに集合するのです。

皆さん、思春期になった青少年たちを見てください。女性を見ると、目をぱちぱちして、カラフルな服を着、お尻を包んで歩き回るというのです。お尻が大きいと大変なことになるのです。傷がつくかもしれないと小さくして歩き回るというのです。皆さん、人において、知恵とすべての肉的な作用を一〇〇パーセント活用できる時が思春期です。細胞全部が作用するのですが、一〇〇パーセントするのです。その時のみ一〇〇パーセント活動するというのです。女性がかわいらしいもの、カラフルなものをなぜ着ようとするのでしょうか。それはみな信号機と同じだからです。

このごろの世の中には様々なことが起こりますが、この天地では統一教会の者たちは絶対巻き込まれてはいけません。思春期というものが「思考」の「思」を使った思春期ではなくて、「死亡」の「死」の死春期です。皆さん、これ（思春期）を選びますか、これ（死春期）を選びますか。

イエス様には思春期があったでしょうか、なかったでしょうか。イエス様にも思春期があったのです。イエス様も思春期があったのですが、何の思春期？　この（「思考」の「思」）思春期を歩まれたのでしょうか。この（「死亡」の「死」）の死春期を歩まれたのでしょうか。どんな思春期を歩んだのでしょうか。誰にでも口笛を「ぴーっ」と吹いて合図する、そのような思春期ではありません。「思考」の「思」の思春期を歩んでいくというのです。

まず皆さんは思春期をしっかり過ごさなければなりません。生きようとするのはこれ（思春期）であり、死のうとするのはこれ（死春期）です。死のうとしてこれを外れて一回りひっくり返して、一八〇度回すと死春

期が変わって思春期になります。それでイエス様は死んだ死春期を通して希望の春の日、新しく生きる春の日である新郎新婦の思春期に向かって探してこられたのです。それがキリスト教の新郎新婦の歴史です。

人間の堕落とはどういうことでしょうか。神様を中心として春の日を迎えることができなかったことです。春の日が来たら孝子になろうという者たちが、自分だけ春の日を迎えるのでしょうか。父母に、「お母さん、お父さん！　きょうは春です。私たち、一緒に行って、きょうを楽しみましょう」と言ってこそ孝子です。「お母さん、お父さん！　きょうは春ですが、春には昼寝をするのが適当です」と言って、ぐっすり昼寝をするようにしておいて自分たちだけで行って、歌を歌い、踊りを踊る者たちが孝子でしょうか。親不孝者と言われるだけでなく、殴り殺されなければならない者たちです。そうでしょう。

堕落とは何でしょうか。神様を中心として神様の側にいると、死春期として始まったのです。「死亡」というときの「死」の字を使う死春期です。死春期の歴史が始まったというのです。ですから死のうとするものには春が来るのです。新しい時代が来るのです。このようなことを今までしてきたのが、キリスト教の歴史です。

今日のティーンエイジャー（十代）が重要だと言われていますが、それは何でしょうか。これはプラスでもマイナスでも、どこでも……。目がひっくり返って歩き回ろうとするというのです。それで社会に破綻をもたらし自分自体に破綻をもたらすのです。また思春期は変化の時なので誰かが一言言っただけでも、「なーんだ！」と言う。全部そうだというのです。すっかり変わる時なので歩き回ろうとするのです。それで秩序に従って、状況を見つめながら行かなければならないというのです。皆さんは今これを整理しなければなりません。びくともしないものをみな整理しなければなりません。さあ、善悪の中で悪とは何でしょうか。破壊するためのものです。何の保護作用も成立できないということを知らなければなりません。

思春期の時は、男性や女性が危険な時です。ですから思春期に間違えると一生を駄目にすることもあるのです。しっかり選択すると一生を繁栄に導いて生きることができるのです。そのような問題が起こるのです。

今日の青少年たちが父母に逆らい家庭を破綻させるのは、法度の秩序を破綻させることだから悪だというのです。それによって家庭が破壊され、社会が破壊され、国家が破壊され、人間が破壊されるのに、これが悪でないはずがありません。思春期の時は力を出して、映画に出てくるスリルのある場面を実践してみたがったりするのです。それのどこが悪いのかというのです。しかし、そのようなふしだらなことをして環境を破綻させてしまうようなことが起こるので、制裁をしなければならないというのです。皆さんの知性が明るくなって、社会の体験と環境的なすべてのことをコントロールできるその時には良いとしても、今は駄目なのです。

皆さんは今最も美しく咲こうとしているつぼみが良いですか、ぱっと咲いた花が良いですか。先生はぱっと咲いた花が良いのですが。

皆さんはちょうど今咲こうとしている人たちでしょうか。咲く時には自分勝手にぱっと咲きなさいというのです。他人の力で咲くのではなくて自分の思いのままにぱっと咲きなさい。それはどういうことかというと、皆さんが自然と育って、自然と思春期を過ぎ、自然な環境でぱっと咲いて、愛する夫に出会わなければならないというのです。咲くこともできずにしわくちゃになってはいけません。葉が落ちて粉が落ちてから咲く花になってはいけないのです。男性も同じです。男性もぱっと咲かなければなりません。

まだ咲いてもいないつぼみなのに、手紙を書いて恋愛ごっこをするような悪い者になってはいけません。自然とぱっと咲かなければならないのです。神様が御覧になる時、「わー！　純粋に本性的に咲いたのだなあ。香りをかいでみると汚れていない初物だ」と言えなければなりません。ですから神様も希望に胸を膨らませているというのです。そのような神様が初物を望むしょうか、しわくちゃなものを望むでしょうか。では皆さんはどうですか。初物を望みますか、しわくちゃなものを望みますか。堕落した皆さんも新しいものを望むのに、神様はそれをもっと望むのではないでしょうか。ですから純情をもってぱっと咲いて、今日の堕落した世界の悲しみの峠に引っ掛かるのではなくて、それを越えていくことのできる、価値のある皆さんになってくれるように願います。

二) 私は天の子女

私たちは父の息子にならなければなりません。娘にならなければなりません。本当に父の血統を受け継いだ娘、息子にならなければなりません。父の心情が私たちの心情と因縁を結び、父の心臓の動脈が私たちの心臓の動脈と因縁付けられる一体的な関係を成し、父が行かれる道が私たちの道であり、父の心情が私たちの事情であり、父のみ旨が私たちのみ旨にならなければなりません。

皆さん考えてみてください。二十代に近い青少年として汚れに染まらずに聖なる純情をしっかりと包み込んで、どこに置いておくのでしょうか。天が最も喜ぶことのできる祭壇の前において神様が喜ばれるのです。その次には、自分のような純情をもった男性と女性が出会って神様と共に結ばれる聖なる基盤が、新郎新婦が出会う場であるにもかかわらず、皆さんはそのような価値を知らずにいます。

自分の体は貴いものです。これを汚さずに親孝行をするのです。神様に認められる体をもって、責任性をもってサタンの死亡圏から脱出しなければなりません。これは人間としての最高の目的であり、またそれが基準なのです。創造原理的に言えばそうなるようになっているのです。

皆さんは神様の純種になることができなかったので、純種になろうとすると従順でなければなりません。そして皆さんが言うことを聞かないと、たたいてでも従順になれるような法度を教えるのです。神様の愛を教えるというのです。これが統一教会です。それで統一教会はすべての宗教の中心になる宗教なのです。

これから従順の種を作らなければなりません。種を割るとその種の中心は胚乳です。胚乳の中心は神様の愛だというのです。では皆さんの頭を割ったらその中心は何でしょうか。神様の愛だというのです。種の中心、すなわち根になることのできる動機が神様の愛です。神様の愛から出発するのです。ところで皆さん、「私には神様の愛がある。私はたとえ見てくれはみすぼらしく、肉身は五、六尺にもならないけれど、この男の赤い心には神様の愛があふれている」と、そう言ったことがありますか。

地上は貴重だと思います。特に若い人たちは体を正しく保存しなければなりません。従順で清い心、従順で清い体が親に対する真の親孝行になるのです。

初愛の心をもって神様の前に行かなければなりません。

あの世に初愛と共に行った人が、天の国では最高の立場に行くということを知らなければなりません。

この地に生きる人で、天国に行くことのできる人は初愛を中心として行き、初愛によってすべてのことをあきらめ、初愛のゆえに死に、生きるという人です。ですから初愛を正しくしなければなりません。

十一　聖別儀式の生活化

一) 聖塩

※聖塩は一九六〇年三月十六日（陰暦）、真の御父母様の成婚された日を基点として初めて聖塩を作って使用した。これによってすべての家庭は聖塩を使用して生活と環境を聖別する生活をした。

聖塩は麹のようなものです。ものを購入したときに聖別し、外出して家に戻ったときも塀（門）のところで聖別するのが原則です。

聖別したものをサタン世界に出してはいけません。それが不可避なときは左手であげなさい。

聖別は「父と子と聖霊と真の御父母様と私の名によって聖別いたします」と唱えながら聖塩を十字（北南東西の順）にかけます。

聖別した不動産などを処分しなければならないときは、段階を追って許しを得て処分するのが原則です。

私たち食口が聖別した土地をもって、すべての土地をだんだん占領していかなければなりません。

皆さんがどこかに行って座る時、塩をまいて座りますか。心の中で「ふー、ふー、ふー」と三回吹く条件を立てて座りなさい。サタン世界に美男子がいたら、「ああ、美男子と一緒に暮らしてみたい」そのように思わずに、美男子が手を一度握ったとしても「ふー」と吹いてしまわなければなりません。塩をまかなければならないというのです。心の中で「ふー、ふー、ふー」と三回吹きなさい。塩を三回まくのです。

食口たちはすべてのものを聖別しなければなりません。聖別をするのに聖塩をまいて聖別するのは何の問題にもなりませんが、御飯を食べたりそうめんを食べたり水を飲んだりする時に、いつ聖塩をもってそうするのでしょうか。ですからこれからどうするのですか。イエス様が復活したのち、「ふーっ」と吹きながら聖霊を受けなさいと言ったのと同じです。アダムを造っておいて鼻に息を吹きかけて実体の新生命を誕生させたのと同じように、これからは皆さんも生命の実体を代身して、水を飲んだり御飯を食べる時には息をかけてから食べなければならないというのです。

韓国の風習は妙だというのです。水を飲むときも息を吹きかけてから飲みます。また息を吹きかけて座ります。それは天がこの民族のために実践することのできる自然的な良心を動かして私たちに一つの風習として残すようにしたものです。これはすべて偶然に成されたのではありません。ですから心でいつもそのような聖別をしなければなりません。私たちは三時代、蘇生、長成、完成、六千年の長い時代を三時代として経ながら、汚れたものを聖別するために三回息を吹きかけて食べなければならないというのです。どこに行っても、皆さんが小便をしても、これからはそれをしなければならないのです。どこに行ってもみなしなければならないのです。

二) 聖なるろうそく

① 心情のろうそく

※心情のろうそくは一九六一年一月五日にお作りになり、祝福家庭に伝授。心情のろうそくは真の御父母様を象徴するものであり、神様の心情を慰労してみ旨の成就を誓う祈祷をする時に使用する。

「アダムは堕落以降真の生命と愛（心情）の源泉を失ってしまいました。人間は神様を心情的にずっと失望させてきました。このような失敗によってあなた様は堕落人間を復帰するために身もだえせずにはいられませんでした。あなた様の労苦を心の中に大切にしまいながら私たち一人一人は復帰されたアダムの位置に上がるための一念で生きてまいりました。万物を復帰するための私たちの決心をもっと堅くしてください。この心情のろうそくが燃える時ごとにこの火花があなた様の心情を慰労してくださり、あなた様のみ旨を成すための私たちの献身があなた様に記憶されるようにしてください。私たちがこの心情のろうそくに火をともし、祈祷する時ごとに、復帰歴史において私たち自身の決意をさらに強くさせてください」

② お産のろうそく

※お産のろうそくは誉進様の誕生時から始まった。「三十六家庭」が結婚生活を始めて以降、真の御父母様が各家庭に伝授してくださった。

「私は今真の御父母様が三十六家庭に伝授してくださった伝統的なお産のろうそくを各家庭にもう一度伝授しようとしています。私が持っているお産のろうそくを、本来の真の御父母様が持っていらっしゃったお産のろうそくの象徴として使用しましたので、この家庭にも同じ内容をもつお産のろうそくを持てるようにしてください。あなた様のみ名と栄

光をもって祈祷しますので、子女たちを出産する間、このお産のろうそくが燃える時に霊的な雰囲気を聖なるものにしてくださり、サタンが一切接近できないようにしてくださるように、祈祷いたします」。

③　愛天のろうそく

※愛天のろうそくは一九八四年五月十六日、真の御父母様が作られ、五月二十日、祝福家庭に伝授された。愛天のろうそくは人類に対する愛の表示として心情のろうそくとは違って二本一組になっている。

ろうそくはそれ自体が犠牲となって光を発します。このように神様を中心として人類が一つになるためには、犠牲にならなければならないということを象徴しています。火がつく所はろうそくでもなく芯でもありません。ろうそくと芯が合わさって火がつき光を発します。同じように、主体と対象である夫婦が互いに犠牲になる時、光を発するということを象徴します。そこにはサタンが存在することができません。

愛天のろうそくを中心として統一心情圏に完全に一つになりなさい。そうするとすべてのものが整理されるのです。

「愛する神様！　愛天日を定めたこの勝利の標的を消えないろうそくの火によって象徴してくださったのでここに父母様の愛、神様の愛が共にあってくださり、このろうそくの光をともす所ごとに、その場の光と共に一つになるその家庭には平和が掲げられ、あなた様の愛の主管圏が連結されて暗い勢力を防ぎ、すべての不義の条件を防ぎ、不和の根源を防止できる勝利の聖なるろうそくになるように許してください。これを愛し、特別に祈祷する所ごとに、あなたが常に共にいてくださって父母様が共にいてくださり、全霊界と肉界が愛の統治権をもって共にいて保護してくださるようにお願い申し上げます。これから始まるこの愛天のろうそくの上にあなた様の栄光と共に歴史に長々と連結されることのできるように、そうして天国が完成される時まで継続することができるよう祝福しますので受けてくださいませ。父母様の名前で祈祷し宣布いたしました。アーメン」。

④　統一のろうそく

※統一のろうそくは一九九五年九月五日から一九九六年一月二日まで、真のお母様が真の子女様と共に夜十二時に統一のろうそくをともして百二十日の間精誠を捧げられたのを起源とする。

今回お父様は、九月五日から米国巡回講演をされ、私も日本での講演を行いました。私は家を出てくる時、子供たちと話し合いました。集まることのできる子供たちをみな集めてから、「お父様が、再び人類を抱かれるために、アメリカを相手に、第一線に出てお話しされようとしておられるので、私たちは精誠を尽くしましょう」と言いました。

子供たちは一言の異議もなしに、皆「そうしましょう」と言いました。子供たちは離ればなれに分かれて勉強しているのですが、どのような環境にいたとしても、夜十二時になれば、ろうそくをともして祈祷することにしました。来年の一月二日までの百二十日間、

精誠をささげることにしたのです。（真のお母様のみ言）

私が、きょう持ってきたろうそくがあるのですが、これを伝授します。ですから皆さんには、御父母様の前に誇れる息子、娘として、この地上で実を結ぶ立場になってほしいのです。そして、みんなを天国に一緒に連れていきたいのです。

精誠をささげる基台を、真の御父母様の家庭の子女たちまで拡大して、幼くとも皆さんがその隊列に共に同参して、同じ心情で、各自、責任を果たすことのできる者となってほしいのです。

このろうそくは一本ですが、これは三つのろうそくが一つになったものです。そして、ここに真のご子女様たちの愛が込められています。（真のお母様のみ言）

この「統一のろうそく（統一燭）」を連結して、永遠に消えることのない火で燃えるあなたの前に、忠誠と愛の心をもって全人類を燃やす時まで愛することを、重ね重ね誓い、約束する時間となりますように。そして、そのような人生を生きることのできる各自すべてとなることができますように、お父様、激励し、お守りください。

そのためにこの生命をささげるほどに、忠誠を尽くすことをお誓い申し上げるとともに、そのような立派な者たちとなることができますように、いま一度祝福してください。すべてのみ言を真の御父母様のみ名によってお祈り申し上げました。アーメン。（真のお母様のみ言）

十二　祝福家庭の日常生活儀礼

一) 敬拝式

毎月一日は、朝の五時に各家庭で、夫婦が共に本部に向かって敬拝しなければなりません。喜びの雰囲気の中でしなければなりません。日曜日にも朝五時にしなければなりません。その時は一週間のすべての生活を報告しなければなりません。日曜日が早く来るのを願う喜びの日にならなければなりません。

敬拝式は日曜日の朝にだけするのではありません。本来は毎日しなければなりません。朝起きたらまず本部に向かって敬拝式をしなければなりません。それが公式的な礼式です。しかし毎日そうすると副作用があるので副作用を避けるために、その条件をかけて聖日と毎月一日の早朝だけにしているのです。本来は毎日しなければならないのです。

早朝の敬拝の時間だけでも天と直線上に立ちましょう。その時間は本当に深刻な立場です。その時間に一秒遅れても悔い改めなさい。その時間には聖物として飴一粒でも準備しておいて子供たちに分けてあげなさい。ちょうど聖晩餐の時のように……。

早朝の敬拝、精誠、礼拝時間を厳守できないのに自分の息子、娘のことがうまくいくように願ってはいけません。先生を中心として四位基台を成さなければなりません。そして後孫を立てようとするなら父母がしっかりしなければなりません。

二) 家庭礼拝

父母がみ旨の生活において模範にならなければなりません。家庭での祈祷生活とか、家庭礼拝だとか、どのような面でも負けることのない信仰生活を、子女たちに見せなければならないのです。

また敬拝の時間がどんなに重要かということを認識させなければなりません。その時間には敬拝式だけで終わるのではなく、み旨を中心として、父母として子女たちを教育しなければなりません。

自分の一族を中心として家庭礼拝をどこでも捧げることのできる環境を広めていかなければなりせん。ですから皆さんが公式の集会に参加したかどうかが問題になるのであり、その次には公式活動での責任遂行をしたかどうかが問題になるのであり、その次には家庭生活で子女の前に父母として模範になれたかなれなかったかが問題になるのです。

三) 訓読会

訓読会はすべての祝福家庭の夫婦同士だけでもしなければなりません。毎日朝に一時間ずつ。もし朝にできなければ夜寝る前に十二時にでも、一時にでもしなさい。私はしているのです。今回南米の巡回をする時も十二時を過ぎて疲れてだるくてもそれを実践したのです。抜かすことができません。一日でも。分かりましたか。読んでみるのです。「祝福家庭と理想天国」この本は祝福家庭の内容を全部教えてくれ、理想天国の内容を全部教えてくれるものです。先生がこれのために闘ってきた勝利の基盤を、またハイウェイを築いておいたので、ここに高速道路をつくって皆さん全員が自動車になり、ガソリンになり、自動車でこれを最高のスピードで走らなければなりません。

時間さえあれば訓読会をしなければなりません。一人でも、会長室にいても訓読会、一日に何時間でもどこを読んだか記録しておいて、ポケットにはみ言集を入れておいて、いつも訓読会をしなければなりません。

訓読という言葉をもう一度書いてみてください。（「み言」という意味の）言偏にこのように書く、これは何でしょうか。「川」です。「み言」が「川」の横に行くと、何ですか。神様のみ言がまっすぐな小川に出会ったのです。これを見ると蘇生、長成、完成です。「読む」という字は（「み言」という意味の）言偏に（「売る」という意味の）「売」です。売らなければならないのです。もっていると大変なことになります。売らないならば、あげなさいというのです。商品を積んでおいて腐らせては罰を受けます。

『御旨の道』を読み、『原理講論』を読むのはもちろんですが、『祝福と理想家庭』とか、今まで先生が語ってきたみ言の中で重要なみ言は、サタン世界に対して闘ってきた勝利の記録なのですべて読まなければなりません。ですから私たち統一家においては、父母様と一つになるためには、父母様の歴史的記念である過去、現在闘っている内容が全部含まれているので、その内容と一つになれるようにしながら、ここにあるこのみ言とともに相対的な気分をつくっていかなければならないのです。それは自分を中心として、家庭を中心として、自分の一族、七代まで、そしてこれを横的には百六十家庭、百八十家庭が完

全に一つになって、み言を定着させなければならないのです。

先生のみ言は先生が語ったのではありません。先生が語ったのではないというのです。天が先生を通して語られたみ言です。そのみ言は、皆さんがいつどこで聞いても心が動くようになっています。心が感動して体一帯に革命的な変化が起こるのです。そのような力があるのです。

集まりがある時には勉強です。夜でも昼でも時間さえあれば勉強です。何百回、何千回、読んで自分のものになるまで。自分がその相対的実体圏をもつ時まで。これからそのようなことをするのです。統一教会は座っていると病気になるのです。病気にならないためには一生懸命読み、試験をし、努力するのです。

訓読会は私が千辛万苦、一生積んできたすべての宝箱を民族のために解いてあげることです。誰にでもみな。翻訳もしてはいけないと言ったのです。翻訳してはいけないのです。民族にはっきりと知らしめるまでです。それを知らなければなりません。分かりましたか。

四) 家庭盟誓

人間は本来盟誓した内容（家庭盟誓文）の因縁をもって生まれたのであり、この盟誓の中で生きては死んでいかなければなりません。何の呵責もなくこの盟誓文を読むことができなければなりません。

これから皆さんは自分の家庭において日曜日には敬拝式をしなければなりません。これは何かというと、祝福を受けた人たちの宣言式です。この家庭はサタンが侵入できないというのです。ですから私たちが家庭盟誓を暗唱するのです。家庭盟誓。それは何かというと、サタン世界と関連がないという宣布です。一週間に様々なことをしたすべてを清算することのできる一つの宣布式です。ですからそれを抜かすと問題になるのです。

五) 祭祀（祭事）（先祖供養）

昔の忠臣の家庭では、良いものがあるとまず国を治めている人に捧げました。これが韓国の忠臣の生活法です。そのような観点から見る時、韓国の礼法はどんな国にもない天国の中心の内容だというのです。儒教では孔子の教えに従うのですが、その孔子の教えを中心とした礼法を見ると天法に近いものが多いのです。これから皆さんの後孫たちは、皆さんに対して祭祀を捧げなければなりません。まだ生活規範や葬式の仕方など原理を中心として定められていませんが、その礼法が定まったら、その時からは適当にしてはいけないのです。

これから皆さんはどんな内容でも、神様が共にしてくださるという信仰をもって自分の環境を屈服して根を深く下ろし、どのような風雪の中にも育つことのできる生命力をもたなければなりません。そのようになる時神様が法を立てることも問題になりません。しかしそれができない時は問題だというのです。

先祖が亡くなった日には皆集まって先祖のために祭祀の壇を飾り、祭事をします。先生の写真を掲げたその部屋でするなら、（先祖

に）祈っても（敬拝しても）罪ではありません。おもちをついて祭祀を捧げても罪にならないのです。

統一教会は先祖に侍ることを許すのです。統一教会はこれからその伝統を受け継いでいかなければなりません。これがこれから真の父母を中心とした反対の立場に立つのです。この世の国、この世の伝統ではありません。天の父母、天の国、天の先祖に侍るにおいて、その代を継ぎ、主流思想的、伝統的に、血族たちに千年、万年侍ることのできる王土になります。王に侍ることができ、永遠の太平のみ代をうたうことのできる国になるのです。その国で生きて過ぎ去っていってこそ皆さんの母親、父親、一家、一族が天国に直行するのです。

選民圏と血統を重要視しなければなりません。選民圏は長子権です。韓国は長子の国です。韓国が族譜を愛する民族になったのもみな血統を受け継ぐためなのです。先祖を崇拝し、先祖に祭祀を捧げるのは悪いことではありません。これから儒教思想以上に父母を尊敬する時が来るのです。

統一教会は祭祀を捧げても良いでしょうか。解放ですね！　これからは祭祀を捧げてもかまいません。今までは祭祀を捧げることを天が望みませんでした。先祖を崇拝する韓国の法が天の法です。世界でも独特な民族です。韓国だけがそうなのです。

祭祀を捧げる時間は後継ぎが決定するのです。ですから夜一時に捧げていたものを朝の五時にすることもできるのです。朝五時にしようとしたのを事情によって朝七時にすることもできるし、昼間にすることもできます。誰がそれを決定するのかというと亡くなったおじいさん、先祖がするのではありません。後継ぎが決定するのです。亡くなったおじいさん、おばあさんも、後継ぎが決定した時間に来なければ祭祀の壇につくことはできないのです。それが嫌でも席につくことができません。地が中心です。地で解かれれば天でも解かれるというのと同じです。ですから二人が一つにならなければなりません。

祭祀をする時は叔父（三親等）、従兄弟（四親等）、八親等、ひいおじいさんがいたとしても後継ぎをまず立てるのです。韓国の伝統的文化背景に、先祖を尊重視するために後継ぎを立てるのを見る時、この民族は長子権を尊重視する民族だったというのです。

父母に親孝行したなら死んだのちに祭祀を捧げなくてもよいのです。写真をおいて生きている母親、父親のようにその日を記憶すればよいのです。霊界になんの境界線がありますか。これからは墓地まで行かずに家に集まって、生きている父母のように侍ってお祭りをし祝えばよいのです。そうすると墓地に行かなくても祝うことができます。

ですから母親、父親の墓は、自分が生きている園に造らなければならないでしょう。西洋では教会の庭に埋めるでしょう。その母親、父親の墓の前に恥ずかしい行動をしてはいけません。亡くなった母親、父親が忠告するのです。愛の定義に外れることがあれば直接先祖たちがついてきてチェックするのです。

今までキリスト教で祭祀を捧げられないようにしたのも一理があるのです。祭祀は神様と全人類の真の父母が受けなければなりません。上の代の先祖たちが天でまず侍られなければならないのです。ところが堕落によって、それを今までは禁止してきましたが、復帰時代において祝福を受けたので、これからは先祖たちに侍らなければならないのです。

十三　祝福家庭の生涯儀礼

一) 出産、奉献式

愛する息子と愛する娘というのは極めて貴いものです。分かるでしょう。天と地の極めて貴い宝物です。それはお金で買えないし、この世に代えられない宝物です。神様にもそうですし、父親、母親にもそうです。息子、娘を代えることができますか。息子と娘は神様が下さった貴い贈り物です。

子供を見ると神秘的なのです。それを考えると神秘的だというのです。「やー！　こいつどうやって出てきたんだ」という具合にです。どんなに神秘的か考えてみてください。皆さんがそのように人をつくるとしたらどうでしょうか。それは何千年かかってもつくれないでしょう。

皆さんが生まれる時、母親の腹中から出る時、どんなに大変だったかを覚えていますか。神様はなぜ子供を産む時、このように産むようにされたのでしょうか。ただ簡単に、言うがごとく簡単に、おいしい食べ物を食べるように簡単に、香水の香りが漂うように簡単に、ただうれしくて口を開け「ははは」と子供を産めるようにしたらどんなに良いでしょうか。なぜそのように産ませずに、汗を流して死ぬか生きるかという限界で産むようにしたのでしょうか。なぜそうしたのでしょうか。どうして？　光り輝く愛を見るためにです。

その死ぬような境地で目の玉が飛び出し、すべてのものがみな壊れ、天地にこれは大変だという境地で子供が「おぎゃー」と泣いて生まれると、はっとするのです。痛いことは瞬間に消え去るのです。このように産んだので、その困難以上に愛するのです。「あらまー▪（かわいい）」と言うのです。それは何のことか分かりますか。

娘は生まれたら七日目に奉献し、息子は八日目に奉献式をします。

二) 祝福、祝福式

皆さんは真の父母と完全な因縁を結ぶことができませんでした。ですからその因縁を結ぶためにしてあげるのが祝福です。

祝福が何かというと、神様と一つになることです。神様と一つになると全体を背負うようになります。神様のすべてのもの、主体がもっている全体を受けるのです。

祝福の場はどんな場ですか。祝福の場は世界で最も良い立場です。その祝福の立場は誰と関係を結ばなければならないのでしょうか。皆さんは自分自身で完成するのではありません。父母様の愛によって完成されるのです。子供が父母の懐から生まれれば立派であってもそうでなくても、その父母の形態に似るのです。それと同じように統一教会では真の父

母の道理を教えてくれるのです。それが皆さんには福の中の福です。

祝福をしてくれるということは天の全権を移すということを意味します。

祝福は天地で最も貴いものです。同時に極めて恐ろしいものです。もし夫婦が互いに他のこと（いけないこと）を考えたなら、それは相手を蹂躙することです。

皆さんからまず善なる先祖、地、国が生まれるのです。ですから祝福を受けた人は目さえ開ければ天地を考えなければなりません。祝福は人に福を与えるためのものです。堕落によって汚れた血統を継承するものを転換しなければなりません。これをしなければ原罪を脱ぐことはできないし、原罪を脱ぐことができなければ真の子女として祝福を受けられる段階に上ることができません。原理がそうなっています。堕落によって生まれた原罪を脱ぐ血統転換、すなわち血肉を交換する式が聖酒式です。

聖酒にはサタンの讒訴のない万物の要素がみな入っています。その聖酒を受けて、真の父母と一つになった自分自身を汚す行為をしたなら、サタンよりももっと汚れた立場に立つようになります。サタンは長成期完成圏を汚し、蹂躙したのですが、祝福を受けた者が間違えると完成期完成圏で神様の実体を犯した罪が残るようになり、永遠に許されません。これは実に恐ろしいことです。

結婚式はすなわち愛の伝授式です。神様の愛をもって父母が生きたように、皆さんも父母の愛を神様の愛の代わりに受けて、このように生なさいという、愛の伝授式が結婚式です。

祝福を受けた人は霊界に行っても先生が永遠に責任を取ります。先生が主管して指導します。祝福とはこのように先生と永遠の因縁を結ぶものでもあるのです。

祝福を受け、間違えたなら必ず蕩減があります。間違いなくあります。過去には許されませんでした。だから統一教会は恐ろしいところです。原理がそうなっています。

先生は今まで新しい祝福、新しい家庭のための蕩減条件を皆さんが立てられるようにしてあげ、皆さんの重い荷物を私が責任をもとうとしてきました。しかし先生が責任を遂行したにもかかわらず皆さんが天法を犯したとしたら、その罪は何十代の子孫まで引っ掛かる恐ろしいものです。

祝福の過程を通過した人ともう霊界にいった多くの人との価値は、どう違うでしょうか。信仰の基準から見る時、それは相手になりません。このような天的な恩恵を投げ捨てるようになった場合にはサタンが皆さんを讒訴するようになります。天使長は長成基準でサタンになったけれど、皆さんは完成基準で堕落したのでサタンが審判するようになるのです。

三) 昇華、昇華式

今日人間が死んでいくということが何かを知らなかったのです。それは悲しみではありません。次元の低い世界から次元の高い世界に愛の橋を通して移動することだというので

す。ですから統一教会は死を昇華します。次元高く昇華するというのです。それは愛でのみ可能です。愛でのみ。

堕落しなかったら人が死ぬことは幸福です。それで統一教会は死を悲しみとして迎える教会になってはいけないと教えるのです。ですから昇華式というのです。

統一教会では死んでお葬式をすることを昇華式といいます。死んだ人にすがって泣くのを見ると、死んだ霊が嘆息するというのです。「このように無知で、私の行く道を綱で引っ張って行けないようにするのだ」と言うのです。そのようなことを知っているので統一教会では昇華式というのです。天に向かって聖なる飛翔をするというのです。愛の力をもって押してあげなければなりません。引っ張るのではなくて押してあげなければなりません。

昇華式という言葉は興進君の時から出てきたでしょう。愛勝日というものの、その愛勝とは何でしょうか。死亡に勝つことです。他の人だったら母親も身もだえし、はいつくばりながら痛哭することですが、母親が涙を流してはいけないのです。三日以内にこの式をしてあげなければなりません。死亡に勝ったのだと宣布してあげなければなりません。ですから統一教会では昇華式が行われるのです。死亡を越えて喜びに向かって行くのです。昇華式を経ていく人たちは霊界のすべての峠をひゅうっと越えていくのです。もちろんそうできない者たちは途中で留まりますが……。それを知らなければなりません。昇華式とは興進君から始まったのです。

興進君が蕩減してこの死亡の塀を、死の塀を壊してしまったのです。それで昇華式と言うのです。死は失望や落胆ではありません。落ちるのではなくて跳躍することです。昇華するということです。統一教会の教会員たちは死に対しての恐怖をもってはいけません。死はこのような自然の循環の法度によってくるのです。もっと良い世界に移してあげるための手続きなのです。

自分の息子である興進が亡くなっても涙を流しませんでした。霊界に行くことは悲しいことではありません。解放のラッパの音とともに天国の旗を掲げ、足取りも堂々と百戦百勝して天下の錦を飾った旗を掲げて故郷に帰り、民族と人類の歓声をあびて、堂々と入ることのできる還故郷をするのです。悲しいことではありません。統一教会では泣きません。それをなんだかんだと言いますか。昇華式だというのです。

私の義理の母になる方も亡くなりましたが、統一教会は葬式とは言いません。何と言いますか。昇華式。昇華されるのです。横的なこの世で生きて縦的な世界の活動舞台に、無限な世界に行くのです。サタン世界では泣きわめくと悪霊が来ますが、そういう立場は悪霊が訪ねてくることができません。

では、統一教会では葬式を何というのですか。昇華式とは何ですか。変化して一段階上がるというのです。今回おばあさんが亡くなった時も私は泣きませんでした。彼女の行く道を選んであげるのに忙しかったのです。孝子と言うならそれ以上の孝子がどこにいますか。

統一教会は死んだのちの葬式もそのようにはしません。昇華式です。どこに行くと思って生きますか。この世に怖いものがどこにありますか。天下に怖いものがどこにありますか。罪悪の世界、混乱した世界において自主的な中心の形態をもって、天地の度数に合わせて神様の愛圏内の垂直の立場に入るようになります。なぜ垂直の立場に入るのでしょうか。その立場には影がありません。すべてのものが完成です。その次に、これが回るようになるので、回る環境全体が垂直化されます。男性を中心として女性が一つになれば、その男性と女性を中心としてその環境は全部幸福圏になるのです。

十四　記念日を迎える心の姿勢

一) 記念儀式の意義

公的な日を思慕する心をもたなければなりません。このような伝統を立ててこそ後孫たちの生活的伝統を立てることができるのです。公的な日は天が喜ぶ中で、すべてのことを互いに共に分け合って楽しく過ごさなければなりません。この日は家庭を基準として天的な法度を立てていく日です。

人間が堕落して以降、歴史過程を通したこの人間世界に現れた記念日は、神様を喜ばせるのではなくてサタンが喜ぶ日として現れたという事実を知らなければなりません。国が独立した日を記念するとか世界的なある行事をする日はすべて堕落圏内で成されているというのです。

原理的観点から見る時、人間が最も願う祝いの日、希望の日があるとすればその日は自分が生まれた日でもなく、自分が結婚した日でもありません。自分の国を失った国民の一人として国を取り戻した、または国家が独立した日でもないというのです。皆さん、それを知らなければなりません。人間において最も希望の日、願う日があるとすれば「神の日」、「父母の日」です。その日が地上に生まれる、それだけが私たち全体の願いになったという事実を知らなければなりません。「神の日」と、「真の父母の日」が始まるようになると、その次には「子女の日」も、「万物の日」も自然と連結されるのです。

今日この地上に生きている人は誰も「神様の日」を祝った人はいないし、「真の父母の日」を祝った人もいないし、「真の子女の日」を祝った人もいないし、「真の万物の日」も祝った人がいないというのです。一年三百六十五日というならば三百六十五日が連結されるすべての日の中で最も重要な日とは何かというと、今語っている摂理史に現れるこのような日であるという事実を確実に知らなければなりません。その日はその中でも王の日のようなものです。そのような年があったなら年の中でも王の年だという事実を知らなければなりません。

統一教会で私たちが祝っている名節や記念日は、サタン世界と闘って血のにじむ闘争を通して成就した摂理的な勝利の日なのです。絶対的な勝利の成就を記念する日であるだけに、神様と真の御父母様に対する感謝と有り難い心でこの日を迎えなければなりません。

二) 儀式のための礼服は端正に

先生は最上の高い立場、天の補佐になるのですが、皆さんは皆ついて来られません。祝福という貴いものを受けたので門は開いていますが、行こうとしても行くための礼服を着られませんでした。祝いの家に行くのに田舎の農夫のズボンをはいていってもよいでしょうか。考えてみてください。そこに合う装いをしてその立場に行ってこそ、その環境に歓迎されるに足るのであって、そうでなければ追放されるのです。「こいつ、どけ！」と言われるのです。

ここには誰でも来られるのではなく、また、ただ来ることもできません。必ず礼服を備えて来なければならないのです。

祭物はその人の生命に代わり、その人の理念に代わります。祭物として捧げるものを買う時は値切らずに少しでももっとあげなさい。礼服の生地を買う時も同じです。

Book 八: 罪と蕩減復帰
Sin and Restoration Through Indemnity

はじめに

今、この時代は神様のみ旨が地上に実現する成約時代です。真の御父母様によって、もつれた歴史の中に存在する数多くの曲折と複雑な事情が一つ一つ解明され、解怨されながら、新世紀への歴史移行が成される時です。根源的な神様の実存から、人間始祖の堕落、復帰摂理上の未知なる事実などが天意を中心として明らかにされつつ、新時代が開かれるのです。

人間の堕落も「不倫な愛」によってサタン、悪魔を父に取り替えたことであり、サタン中心の血統転換が正に堕落だという観点を明らかにしました。したがって救いもサタンとの父子の関係を切って神様との父子の関係を回復すること、すなわち、神様中心の血統復帰、それが正に祝福であるという救いの観点を明確にしたのです。このような意味で祝福は、六千年のサタンの血統から抜け出す道であり、それが原罪の清算と重生摂理の核心となります。これなくしては、いかなる者にも人間完成はあり得ないし、天の国に入ることができないのです。

また今まで難題であった歴史的な未知の事実、すなわち歴史発展の法則も人間の責任分担と蕩減法、また長子権復帰を中心として明快に解き明かされました。

既成神学では組織神学や教義学の体系は膨大に立てていますが、長子論、人間の責任分担論、蕩減法等、根本的な神学はほとんど確立されていないのです。それは、人間の先祖である父母の秘密だけは、真の父母が再び来て、その真の父母によって糾明、解読されて、正されなければならないからでしょう。

本書は、文鮮明先生の御言選集三百巻の中から、責任分担、罪、蕩減復帰にかかわるみ言を選び出したもので、真の御父母様のみ言を母の国に伝授するために作られた訓読教材です。

私たちはみ言に接するたびに、その深く広い生命のみ言に感激し、また本当に恵みの多い恩恵の時を生きていく成約の子女となったことを重ねて感謝せずにはいられません。

本書が私たちの生活において、人格の生霊化を成すために大きな役割を果たすことができるよう祈るものです。

一九九九年十月

日本語版発刊によせて

『原理講論』には「蕩減」について次のように述べられています。

「どのようなものであっても、その本来の位置と状態を失ったとき、それらを本来の位置と状態にまで復帰しようとすれば、必ずそこに、その必要を埋めるに足る何らかの条件を立てなければならない。このような条件を立てることを『蕩減』というのである」。

罪とは、私たち人間が堕落により本来の位置と状態を失ったことを意味しています。この本には罪とは何か、また罪を犯したら必ず蕩減復帰の道を歩まなければならないことなど、私たちが避けて通ることのできない蕩減復帰原則に関するみ言が集められています。

神様を信じない人の多くは、「神がいるなら、このような悲惨な世界を、なぜ救わないのか」という動機をもっています。神様は、人間の責任分担があるがゆえに、「蕩減復帰」という原則を通してしか人間を救うことができないのです。罪に苦しみ、互いに傷つけ殺害し合う姿を見ながらも、人間を愛すればこそ、無条件に救うことのできない神様であったのです。蕩減復帰の道は、実は神様の赦しと真の愛があってこそ成り立つものなのです。本書を通して、歴史の背後にある神様の愛を発見するでしょう。

文鮮明先生は、親なる神様の苦しみと、失った子女たちを堕落世界から救おうとされる神様の深刻さを知って、神のみ国建設のためにすべてを捧げてこられたのです。

この本によって、困難や苦労の多いように見える人生の根底に、神様の深い愛と計らいのあることを理解していただけたら幸いです。

一九九九年十月

第一章　蕩減・復帰原理の根拠

一　間接主管圏と直接主管圏

一) 間接主管圏

統一教会の原理を見れば、間接主管圏と直接主管圏があります。しかし人間が堕落によって間接主管圏にとどまるようになり、直接主管圏には連結されていないのです。それで復帰摂理も責任分担ゆえに何度も延長されていくのです。それを知らなかったのです。直接主管圏に連結され得る神様の愛の圏に行くためには間接主管圏で何をしなければならないのでしょうか。自分の責任分担を完遂しなければなりません。

人間が成長するための間接主管圏をおいたのは、人間が成熟することを願う神様にとっては不可避なことだったということを論理的に解明できなければなりません。原理結果主管圏をなぜつくったのでしょうか。これをつくらなければ成熟したという限界、その時をつかむことができません。思春期という時をどこに定めるのかというのです。それで原理結果主管圏において、思春期になる時まで待つのです。ゆえに愛は、神様が全部干渉してはいけないのです。人間が必要とするものは何かと言えば、絶対的な愛です。

統一教会の原理という言葉は何を意味しますか、なぜ原理と言いますか。原理結果主管圏と直接主管圏の限界線をつくること、それが原理です。アダムとエバが長子として蘇生、長成、完成圏に上がらなければならないこと、それが原理です。この間接主管圏内でも人間が完成するためには責任分担を果たさなければなりません。成熟するまでは絶対に愛の因縁を結ぶなというのです。大人になる前にアダムとエバがそれをしてはいけないのです。ですから限界線を定めておいて、「待ちなさい、取って食べるな！」と言ったのです。

アダムとエバが堕落しないで、神様の前で間接主管圏を通過し、直接主管圏と連結され得る思春期になれば、すべての宇宙の力がここに和合できるし、ここに凝結され、作用するのです。その焦点で男と女が出会うと同時に、天と霊界と肉界が出会うのです。それは霊界で結ばれるのではありません。それで天国に入った人がいないというのも、この焦点に照準が合って写真を撮って（霊界に）行った人がいないということです。これはよく撮れていない写真と同じようにピントが合っていないのです。平面的焦点とともに垂直の焦点がぴったり中央点に合ってぱっとやらなければならないのに、そのように写真が撮れなかったというのです。愛の完成的写真が撮れなかったということを知らなければなりません。分かるでしょう。皆さんの中で誰がそのような愛をしていますか。そのような夫婦になっているのかというのです。

直接主管圏は、アダムとエバが愛を中心として同参することのできるところです。ですから間接主管圏は、まだ責任分担未完成圏です。責任分担完成と同時にアダムとエバが愛を中心として夫婦になって、神様は内的父になり、アダムとエバは外的父母となって内外に一つとなる時に初めて直接主管圏が設定されるのです。ですからこの過程では結婚が絶対に必要だというのです。独身では越えていけないのです。

天国はどこから始まるのでしょうか。サタンを分立しただけのところで始まるのではありません。責任分担完成圏から始まるのです。それは直接主管圏、間接主管圏が責任分担を完成したアダムとエバを通じて初めて連結され、天の愛が地上の愛に連結されるのです。これが原理です。それができていないので、サタンはこれを妨げるのです。天の愛の道を妨害するのがサタンなのです。

いくらキリスト教文化圏が大きいとしても、新婦と共に真なる神様の愛と結合することのできるアダム完成者が来なければなりません。ですから責任分担を完成して直接主管圏内に入り、愛を中心として上下、前後、左右に一体化し得る家庭的真の愛の基盤を備えなければならないというのです。それは易しいことですか。

真の父母は全体の責任分担を完成した立場で、間接主管圏と直接主管圏の心情圏を一元化させなければなりません。天国化させるためには、天上世界や地上世界を一元化させ得る基盤が築かれなければ天国はできないようになっています。それが創造理想です。

人間が堕落しなかったならば、一度に責任分担を果たすようになっていました。しかし、堕落することによってサタンが生じたので、父母様は堕落した後孫たちの前に世界的な基準で一度に越えていける蕩減基準を立ててあげなければなりません。そのような責任分担圏を立てることによって一度に蕩減基準を立て、間接主管圏内から直接主管圏内に飛躍して入ることのできる基準をつくってきたのが、今までの先生の一生の仕事だったというのです。

二) 直接主管圏

責任分担を完成することによって間接主管圏と直接主管圏が連結され、地上天国と天上

天国が連結されるのであって、それがなければすべて無効です。ですから私たちは責任分担を完成した愛の実体、愛の化身となって、神様を愛し、全宇宙を愛し、自分の家庭を愛さなければなりません。そのような人だけが天国に入るのです。それが天国に入る公式です。

責任分担圏は、愛を中心として一つになったところです。完成に向かって縦的な神様の愛と連結されたとき、間接主管圏と直接主管圏が連結されます。そこにはサタンがいないのです。間接主管圏が連結されれば心情圏が連結されるので、サタンがそこに存在できないのです。その前に堕落したので問題なのです。

神様の完全な愛が顕現するとき、サタンは現れることができません。それが責任分担完成です。責任分担を完成したならば、間接主管圏と直接主管圏において愛の因縁が結ばれるのです。そこで神様の縦的愛とアダムとエバの横的愛が連結されるのです。

本来アダムとエバが堕落しないで、責任分担を完遂して神様と愛の一体圏内で天地が一体化して勝利的基盤を築いたというときは、神様とアダムが一つになったその愛の圏内で天使長を連れて天国に行くのです。それが道理です。それが原則です。

責任分担は成熟する時まで必要なものです。成熟して思春期に入ればすべて終わるのです。愛の圏内に入れば直接主管圏内です。神様であると同時に私であり、私であると同時に神様です。

原理の責任分担という言葉は何を意味しますか。責任分担完成というのは人間の愛と神様の愛が一つになることです。神様の愛は永遠の愛なので、永遠の神様の愛を中心として人間は相対の立場で永遠の一体を成すのです。そこには分立があり得ません。

神様が人間を創造されるとき、直接主管圏と間接主管圏をおいてつくられました。それではなぜ間接主管圏をおいたのですか。直接主管圏と間接主管圏はいつ一つになるのでしょうか。本来の真の人類始祖であるアダムとエバが成熟して互いに横的な立場で愛によって一つになろうとする時、神様が臨在し、縦的な愛を中心としてアダムとエバを横的な愛によって接ぎ木するためのものがアダムとエバの結婚です。それで天地の一体化を成すのです。

直接主管圏がなぜ必要なのでしょうか。直接主管圏に連結せずには神様と愛の連結ができないからです。この愛が連結されなければ神様から宇宙を相続することができません。相続は愛を中心としてするようになっています。ですからすべての国やすべての家庭も愛する子供を中心として相続させようとします。原理がそうなっています。

責任分担という言葉は先生の時代に初めて出てきた言葉です。ある人は「間接主管圏や直接主管圏という言葉は、文先生が頭がいいので、合うように作った言葉だろう」と言うかもしれませんが、それなら私がどうして苦労しますか。適当に作ったのならば、私が一生の間何のために監獄に出入りしながらこのように苦労するでしょうか。口にもしてはいけません。私が作ったのならばどうして楽に

行けないのでしょうか。楽な道を行ったらいいのに、なぜこのように、花のような青春を犠牲にし、ぼろのふろしきをまとって、このように生きなければならないのかというのです。レバレンド・ムーンが作ったという言葉は成り立たないのです。作るに先立って、それ以上の何かがあるということを知っているので、死の峠でも行こうとし、迫害の道も自ら進んで行ったのです。迫害の道を好む人がどこにいますか。神様しかその事情は知らないでしょう。

祝福を受けて否定するのは、サタンよりももっと悪いです。サタンが讒訴するというのです。これは直接主管圏内に入って堕落したのと同じです。皆さんは知りませんが、その原則、その天理の法度が適用されるということを知らなければなりません。ですから、頑張らなければなりません。皆さんが、どのようにその伝統を立てるのかということが重要な問題です。

その世界は、皆さんが考えるような漠然としたところではありません。直接的にお父さん、お母さんが私の皮膚にぶつかって来るし、私の精神にぶつかって来るのです。心の感動が爆発して私を刺激することを感じれば、彼は既に天国内で生きている人です。このようになれば、ちょっと人に接すれば分かります。「あの人は悪い人で、あの人はいい人だ」というのです。そのようになれば、皆さんが想像できない次元の高い直接主管圏内に入ったことを発見するでしょう。そう見るのが原理観です。そのように生きなさい。

間接主管圏と直接主管圏を連結させるために責任分担を完成しなければなりません。責任分担完成というものは男性が成熟し、女性が成熟しなければならないのです。男性と女性が完成したとはどういうことですか。エデンの園での完成は神様しか知らないのです。神様を第一に愛さなければなりません。その次に男性は女性を第二に思い、女性は男性を第二に思う、そういう人にならなければなりません。このようになるとき、責任分担を完成することによって、みな間接主管圏から直接主管圏内に行くことのできる新しい次元に越えていくのです。

堕落した人間世界で一番必要とするものは、堕落圏を乗り越えた真の父母です。私たちの原理で言えば、責任分担を完成した、その圏内を越えた人だというのです。間接主管圏内から直接主管圏内に入った人です。直接主管圏とは何ですか。愛に一致した世界です。こうなれば他の主人が生じることができません。絶対的です。愛にぴったり一致すれば二人の主人を願いません。神様も他の主人を願わず、人間も他の主人を願わないというのです。そうしてそれが家庭に拡大し、氏族、民族、国家に拡大され、その愛の軸を中心として天運は回るようになっています。

神様を中心として責任分担を完成した基準で愛を中心として統一され、天運が回るのです。このような回転圏内に誰が来てぶつかるでしょうか。サタンは影も現すことができなくなるのです。このような基盤さえできれば地上天国は自然に形成されるのです。

原理結果主管圏を通過し、人間の責任分担を完成することによって愛を中心として連結されるので、直接主管圏に入るのです。そうすれば縦的な役事も横的にできるし、横的な役事も縦的にできるというのです。下に押せば横的になり、引っ張れば縦的になります。その言葉がそれです。引っ張れば縦的になり、下に押せば横的になるのです。それゆえ縦的にも占領できるし、横的にも占領できるのです。

神様の完全な愛が顕現するとき、サタンは現れることができません。それが責任分担完成です。責任分担を完成したならば、間接主管圏と直接主管圏において愛の因縁が結ばれるのです。そこで縦的愛と横的愛が連結されるのです。そうなればその縦横の愛を通じて神様の血統的な因縁が、血縁ができるのです。血筋が生じます。その血筋、神様の愛を中心として一つになり縦横の愛と因縁を結んで生まれた血筋は、サタンが干渉できないのです。サタンと因縁がないのです。ですから心情を受け継ぐためには、純粋な神様の愛を中心とした本然の伝統的血統を受け継がなければならないというのです。それが問題です。

責任分担の統一的直接主管圏の一致点というのは理想的父母の愛からのみ可能なのです。

責任分担は直接主管圏、間接主管圏を克服するのです。思いどおりに天上世界と地上世界に通じることができるようにするのは、神様の愛を中心として、一体的心情圏に入らなければならないのです。それが原理基準です。神様の愛を中心として自分の縦的な面の父母の立場を代表することのできる横的な面さえきっちり決まれば、そこからはサタンがいないのです。直接主管圏です。いまだに責任分担圏を越えることができていないので問題です。

責任分担完成は、結果主管圏と直接主管圏の過程を通過し、愛をもって一体化します。一体化して直接神様の指導圏に入るのです。主管圏に入る、それ自体が神様の心情圏に属するのです。

二　人間に責任分担がある

一) 責任分担を下さった理由

神様が人間を愛されるとしたなら全天下が丸ごと屈服することのできる愛であり、権威を下さるとしたなら全宇宙が彼に従い、完全に頭を下げることのできる権威です。そのような最高の愛と最高の権威を考えて人間に責任分担を下さったのです。

神様はどうして人間に責任分担を下さったのでしょうか。全知全能なる方なので、その全知全能な創造性までも賦与し、また永遠不変な愛の主体であられるので、その愛の主体を代表することのできる位置に立てるために責任分担を下さらざるを得なかったのです。これは福の条件になるのです。全体を占領することのできる一つの鍵のようなものなので、これを下さらざるを得なかったのです。しかし、この責任分担が問題になり、堕落したということを私たちは知らなければなりません。

人間は神様の創造の偉業に加担しなければなりません。もともと人間が堕落していなかったとしても、そのような責任はあるのです。堕落して人間の責任分担が設定されたのでは

なく、堕落していなかったとしても人間は責任を負っているというのです。人として完成することのできる神様の九五パーセントの創造理想的形態をみな備えたとしても自分の五パーセントの責任を完遂しなければなりません。人間自体の完成を神様がさせるのではなく、自分がそこにプラスして完成しなければならない責任があるのです。堕落していなかったとしてもです。

私たちは再建するのではなく、再創造しなければなりません。神様の責任分担九五パーセントに人間の責任分担五パーセントを合わせて新しくつくらなければなりません。

人間に責任分担をなぜ与えたのでしょうか。創造の偉業に加担することのできる権威を与えて、神様の前に対象的な価値を賦与するためです。それは驚くべき事実です。

原理には絶対性があります。原理には許しがありません。どうせ行かなければなりません。死んでも行かなければならないというのです。永遠に行かなければなりません。神様自身がこれを思いどおりにできれば、今まで復帰摂理の路程で受難の道を行く必要もないのです。しかしそのように制定しておいたので、責任分担的限界線のゆえに神様もそれにかかって今まで人間を復帰するために数多くの受難の道を歩んできたのです。その責任は神様にだけあるのではないということを知らなければなりません。人間と共同で責任を負っているのです。堕落しなかったとしてもそうだというのです。

人間が責任分担を果たすことができなかったことによって蕩減復帰という怨恨の言葉が出てきたということを知らなければなりません。蕩減復帰の過程では、絶対に神様も後援しないし、本部も後援しないので、一人でしなければなりません。助けてあげたら蕩減になりません。どうしてですか。人間の責任分担という原則があるのでその原則において、助けては蕩減にならないからです。それを助けることができたならば、人間が堕落するとき、神様が干渉して堕落しないようにしたでしょう。責任分担があるからできなかったのです。人間の責任分担があるからできなかったのです。

レバレンド・ムーンを神様が愛されますが、人間の責任分担を果たす過程で蕩減路程を行くときには神様が協助できません。私自身がサタンに勝って行かなければならないのです。サタンとサタン世界に勝って行かなければならないのが本来のアダムに許された理想圏でしたが、その理想圏を凌駕しなければならないというのです。

結局責任分担があるから蕩減も生じるようになったという事実を知らなければなりません。もし責任分担がなかったならば神様はいつでも主管することができるのです。堕落するとき、「おい、そうしたら駄目だ」と言うことはできますが、人間の責任分担があって、神様が干渉することができない立場にいたので、人間が堕落しサタンが活動するのを防止することができなかったという事実を知らなければなりません。

アダムとエバが、彼らが堕落する前に神様に先に尋ねていたならば堕落しなかったでしょう。「天使長がこれこれこうするのですが、どうしましょうか」と尋ねなければなりませんでした。そうしていたならば、神様が答えたはずです。この尋ねてみることが責任分担の五パーセントです。尋ねてみるのは自由です。しかし、尋ねないで横的関係を結んでしまったのです。それが問題です。尋ねないで行動したので問題が起こったのです。いつもそうです。皆さんは自分の責任分担の五パーセントを果たす自信がありますか。ないのにはしゃぐ雑多な鬼神たちが多いというのです。そのような精神をもって、いつ統一させますか。

人間には責任分担があります。神様が人間に責任分担を与えた目的は創造の偉業に同参させるためです。九五パーセントは神様が造り、五パーセントは人間が造ることによって、創造するとき神様だけが創造したのではなく人間も自ら創造したという条件になるというのです。このような同等な価値を賦与するためのものが責任分担です。これが偉大なのです。人間だけに責任分担があるのです。しかし歴史始まって以来、責任分担を完成した人がいないというのです。責任分担、これを知らなかったのです。

能力の多い神様、全知全能なる神様、絶対的な神様がどうして地上に御自身が願う天国を実現できなかったのかということが問題です。神様が思うとおりにされたなら既に一瞬のうちにすべてこれを解決することができたでしょう。しかし人間が堕落したので、人間の責任分担が残っているので、人間がその責任を果たさずしては神様が願う天国実現が不可能なのです。

アダムとエバは愛を中心として完成しなければならないのに、愛を間違って、その責任分担に問題が引っ掛かりました。責任分担はすべての分野の過程にあります。目的を完成しようとすれば、過程を経なければなりません。過程には必ず責任分担が連結されるのです。それを知らなければなりません。ある時限的な過程を経るときは必ず責任分担があるのです。それを果たさないときには、すべてのものが破壊されるというのです。

アダムとエバがなぜ堕落したのかと言えば責任を果たせなかったからです。責任分担はアダム一人でできるのですか。まず神様を中心として神様と一つにならなければなりません。神様と一つにならなければ責任分担を完遂することができない、ということを皆さんは知らなければなりません。その次は原理と一つにならなければなりません。このような二つの条件が成立しなければなりません。責任分担を完成しなければなりません。責任分担、責任という内容を喪失してしまいその世界に生きることができなかったのが恨です。血統転換という怨痛な、この悲運の運命をもった堕落の後孫になったことが気の遠くなるような悲痛な事実です。これを抜け出すためにはありったけの力を尽くして責任を果たした息子の姿、娘の姿として立ち上がり、神様に対してためらわずお父さんと言うことができなければなりません。

先生が行く道は泰山峻嶺（注：とても険しい峠の道）でした。いつ神様が手でも一度つ

かんで「おいおい、お前大変だな」と言われたと思いますか。夜も昼も保護し、喜んで迎えてくださると思いますか。見ながらもじっとしているのです。どこに行けという話もしません。教えてくださることができないのです。責任分担を果たさなければなりません。神様は本然の愛をもった人間を愛そうとしたのであって、愛を求めていく過程の人間を愛そうとはしなかったのです。

責任分担を完成した立場の人間とはどんな人間でしょうか。神様のように完全な人間だというのです。神様が九五パーセントを創造しましたが、人間が共に一〇〇パーセント完成した創造の資格を賦与される位置に立っているので、人間の完成であると同時に神様の創造の偉業の完成になるのです。創造の偉業の完成であると同時にみ旨の完成であり、み旨の完成であると同時に神様の完成になるのです。このようことが言えるのです。

責任分担を完遂できなかった私たちの先祖の罪によって死亡の深淵、どん底が生じたのです。サタンの愛の領域が天国の門の前の境界線まで連結され、直接主管圏内と間接主管圏内の違いをもたらしたのです。

責任分担を完成すれば、サタン悪魔がいなくなります。讒訴する存在がいないのです。この基準を越えられなければ讒訴条件があるのでいくら天上世界に、天国に入ろうとしても入ることができません。讒訴条件の内容をもてば入ることができないのです。絶対的な愛、不変・唯一・永遠の愛の内容を中心として神様の愛と関係を結んだ基準に立てばサタンがそこに讒訴条件を立てることが　できません。そのような立場に立てばサタンが居座ることができません。私が行けば、サタンがいても出ていかなければなりません。

アダムとエバが堕落しなかったならば、神様の体に和してその体を着て完成し、この地上で神様の愛によって直接主管圏と間接主管圏を連結させ得る責任分担を果たした愛の王になるのです。そうすれば神様はそのアダムの心におられ、アダムの霊は神様の体になるのです。一身になるのです。永遠に神様の愛と人間の愛を共に分かち、それを呼吸するのです。

人間が責任分担を完遂して神様と対等な立場に立とうとするのは、真の愛を授受するために、対等な愛を与えるためであり、同じ愛を授受するためです。互いに同じ立場で中心になり、同じ立場で授受するというのです。それを知らなければなりません。

堕落していなかったならば、責任分担は易しいのです。ただそのまま育てば思春期が来るようになっているので易しいのです。それは自然に来るようになっています。自然に来るので難しいことはないというのです。間違った愛によって責任分担が難しくなったのです。それでは責任分担の中心とは何ですか。神様が九五パーセントの責任を果たし、人間が五パーセントの責任を果たして、人間が神様の創造の偉業を相続することだというのです。それでは相続するための中心とは何ですか。真の愛です。

二) 責任分担を果たせなかった結果

統一教会が言う責任分担という言葉は偉大な言葉です。皆さんもみな責任分担を果たせなかった立場にいるでしょう。人類始祖が責任分担を果たせなかったその場は、サタンの支配圏になってしまったのです。ですから責任分担を果たせなかったその位置以下から、悪主権の世界ができたのです。ですから復帰時代においての善主権の世界は、責任分担を完成した線以上のところから始まります。理論的にそうです。責任分担線以下では悪主権であり、責任分担線以上では善主権が始まりますが、悪主権の出発は何によって始まったのでしょうか。堕落した愛から始まったのです。

責任分担の未完成によってサタン世界が形成され、この地がサタン主管圏内に残されたことを知っています。この責任分担未完成によって、神様も今まで苦労の道をたどってきたことを骨身にしみて感じなければなりません。

責任分担圏を侵犯されることによって何が生じたのかと言えば、もう一つの父母ができたのです。もう一つの父母がサタンです。はっきり知らなければなりません。

アダムとエバが責任分担を果たせませんでした。責任を果たせなかったことがアダムとエバ自体だけで終わったのではなく、アダムとエバが根となり、幹となり、枝となり、葉となって全人類は結局責任を果たせなかった、そのような立場にとどまっているという事実を、はっきりと知らなければなりません。

神様が今まで人間の責任分担圏以上の立場で接しているというのです。しかしそれ以下に落ちた人間はどんなことをしても橋を架けて上がらなければなりません。その圏にすべての人類が引っ掛かっているのです。世界が引っ掛かっており、歴史が引っ掛かっており、霊界に行った人、現在この世界の人類、今後生まれてくる後孫全体が、この運命圏を抜け出ることができずにいるというのです。これが怨恨の堕落圏です。

堕落した人間は人間の責任分担だけではありません。全体創造の九七パーセントを蹂躙してしまったのです。ですから再創造しなければなりませんが、再創造過程全部が倒れたというのです。ゆえにどんなに難しいかというのです。したがって人間が九七パーセントに該当し得る責任を果たさずしては、責任分担を完成する道が永遠にないというのです。再創造しなければなりません。復帰摂理は再創造摂理ですが、再創造がなぜ必ず必要なのでしょうか。人間の責任分担のゆえです。人間の責任分担を果たし、その場まで出ていくためには、必ず再創造の過程を経なければなりません。再創造過程を通過するためには、必ず蕩減しなければなりません。蕩減条件を立てなければなりません。受難の道を行かなければならないというのです。

蕩減復帰して解怨成就したのちにこそ初めて責任分担が展開されます。恨を残した責任分担、このために神様も参って……。今まで人類がこの責任分担を果たすことのできる世界的な一時を迎えることができなかったので、恨の歴史は繰り返し流れてきたことを知らなければなりません。恨の多い責任分担の峠を、どのように越えるのかということを皆さんがはっきり知らなければなりません。

アダムが責任分担を果たせなかったことによって天地にこのように数多くの壁（韓国語でダム：垣根・囲いの意味）をつくってしまいましたが、アア、ダムをどうしたらいいのですか！　ダム（壁）をつくってしまったので、エバはどのようにしてこなければならなかったのですか。ですから人類歴史での女性の道は悲惨な道だったのです。こちらに行っては引き裂かれ、向こうに行っては踏みにじられたのです。ひょうたんのように、割れたひょうたんのようにけられて割れてもまた転がっていかなければならないのです。ぱんとけられて靴の跡がついても転がっていかなければなりません。また向こうでもけられて穴が十個あいても転がらなければならない境遇にあるのが女性だというのです。全身傷だらけになって転がっていかざるを得ない道を歩んできたのが女性です。なぜですか。してくるために（韓国語でヘオギウィヘソ：エバを意味するヘワをもじって）。エバになるためにです。

アダムとエバに悪口を言うとき、アダムから言いますか、エバから言いますか。エバから言うというのです。エバ（ヘワ）という言葉は、韓国語で「仕事をして（ヘ）復帰して来い（ワ）」ということです。それを覚えておきなさい。本当です。「アダム」は堕落して壁（ダム）ができたというのです。責任分担を果たせなかったことによって、いろいろな壁ができたのです。ですからその壁を壊していかなければなりません。

三　責任分担を完成すれば

一) 責任分担の自由化圏が必要

アダムとエバが責任分担を果たしていたならば、後孫は責任分担圏にいるのではありません。その次は統治法的家庭倫理時代に入るのです。そのときは地上に真の父母がいるので、即刻、平面的な面から教えてあげることができるのです。しかし今までは三六〇度の平面をもちましたが、神様は教えてあげることができないので、中心が来る時まで待っていたのです。それで問題が生じたのです。そのようなことを、はっきり知っていかなければなりません。

真の御父母様は個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙蕩減路程を経なければなりません。サタンによって失った責任分担を完遂して、サタンを分別させることによって愛をもたらすのです。怨讐を愛し、怨讐の国を愛する人にはサタンが侵犯できないのです。自分を中心とした愛をもっては駄目なのです。サタンは自分を中心として愛し始めたので、これを除去するには自分を中心とした愛をもってはできないのです。

蕩減復帰は、責任分担の自由化圏をつくるためのものです。堕落していない本然の責任分担の自由な環境を復帰するためのものです。理論的になっているのです。先生もそこに引っ掛かっているのです。ゆえに先生が世界的な反対を受けるのです。世界的な迫害を受けるのです。世界的に攻撃を受けるのです。その世界的迫害を受ける中で、世界的にサタンを分立するのです。

蕩減復帰は不可避なものです。なぜ蕩減復帰しなければならず、なぜサタンを分立しなければならないのでしょうか。自然な本然の

責任分担、自由な環境基盤を必要とするからです。そうすればサタンが讒訴できず、サタンが因縁を結ぶことができないところを私が占有するようになるからです。それで蕩減復帰、責任分担完成という基準は、論理的にも不可避です。ですからサタンを分立しなければなりません。それゆえ御飯が食べられずに座っていても、サタン世界とは関係がないという考えをもっていなければなりません。ここが分水嶺です。それが境界線です。

責任分担がどれほど重要かを、みな知らずに生きてきました。蕩減復帰とは何ですか。責任分担を完成することのできる自由な環境をつくるためのものです。サタンが侵犯するので、サタンを防御しなければなりません。サタンを防御するにはどうしなければならないのでしょうか。サタンよりも神様をもっと愛し、人類をもっと愛さなければなりません。サタンは神様を憎み、人類を憎みますが、私たちは「神様をもっと愛し、人類をもっと愛する」と言えなければなりません。堕落していない人間がもっていくべき、責任分担完成圏を越えて行くべきその基準で一方通行させることのできる、このような立場に立たずしてはサタンを分立させることができません。

責任分担を完成するためには、蕩減条件が必要です。先生がそのような蕩減条件を払ったので、皆さんは先生が歩んできた生涯の目的観を受け継いだ者として、愛の旗手として、堂々と国に現れれば愛国者になるのです。家庭に入れば孝子、孝女になるのであり、夫婦の位置に立てば烈男、烈女になるのです。世界に向かっては聖人の道理を行くのであり、天の国の王宮の法に歩調を合わせる王子の位置まで行くことになるのです。無事に通過することのできるただ一つの道があるとすれば愛のために「ため」に生きようとすべてのものを捧げる生活です。これは驚くべき事実です。

アダムとエバの責任分担、神様の前に頭を痛くしたその怨恨の峠に五十億人類がみな引っ掛かっているし、霊界に行った数多くの先祖もみな引っ掛かっています。これを見つめる神様は、堕落がなかった本然の基準をどうやって再び回生できるのでしょうか。それで神様はかわいそうな神様なのです。ですから早く早く、もっと早く早く蕩減の道を行き、このすべての責任分担を完遂して世界人類が解怨成就することのできる道を、その道に向かって「時間よ、行け」、「歳月よ、行け」、「解放の日よ、早く来い」と言いながら歩んできたのです。

神様は今まで蕩減復帰の過程を待ちながら変わりませんでした。最後の峠、愛の理想を成して万民の前に解放の鐘の音とともに天下に宣布する、そのようなところまで耐えてきたのです。耐えてきた心を抱いて涙とともに復帰の使命を成し遂げることのできる再臨主がこの地上に来て、そのみ旨を成し、サタン世界全体の所有権を相続して天の前にお返しすることのできる、それこそ平和統一の世界を地上で成さなければなりません。強制ではありません。所有権を伝授して天の前にお返ししなければなりません。

二) 完成した立場は天地一体化家庭

地上と天上を統一し、心身を統一するのが責任分担の完成です。縦的な神様と横的な真の父母は一つだというのです。そこに統一さ

れた愛、天と地上を連結する愛、体と心が一つになった愛、男性と女性が一つになった愛が問題です。統一された愛の基盤を築くことができ、そこで初めて天の愛と天の生命と天の血統が連結され得るし、それの横的な拡大が八方に展開されることによって王権ができるのです。内容は簡単です。

男性と女性は、天宙の圧縮された核です。夫婦が真の愛で愛するところには、全宇宙がかかってきます。男性と女性は、愛のために生まれました。本来人間は縦的、横的にできています。責任分担を完成することによって縦的な主人が設定され、次に横的な主人が設定されるのです。それは真の愛によって成立するのです。

アダムとエバが責任分担を完遂することによって神様は彼らの縦的な存在になり、アダムとエバは横的な存在になるのです。真の愛によって一体化するのです。そうして初めて縦的なものが横的に連結され、そのように連結されたところは宇宙的な愛の根を下ろす基盤になるのです。それが定着できなければ、軸が正しく立つことができません。その軸を正しく立てるにはメシヤ思想、父母の思想が軸となるのです。それで立ったとすれば、それは自動的にその軸と一つになることによって繁殖するのです。そして神様の愛、神様の生命、神様の血統が永遠に固着するのです。

責任分担は第一に真の子女になることです。第二に真の兄弟になることです。第三に真の夫婦になることです。第四に真の父母になることです。それで息子、娘として生まれ、子女になり、兄弟になり、夫婦になり、父母になる、父母になって神様の代わりに創造するのです。神様がアダムとエバを造って喜んだその事実を内的、外的に体恤するのです。どれほど貴いか、分かりますか。

真の父母の勝利圏は第一は個人、第二は家庭、第三は国家、第四は世界、第五は天宙、第六は神様の真の愛です。その次は一体理想の実現で、このすべてのものが真の愛によって一つになるのです。神様が真の愛の主人ですが、この真の愛によって全部が連結されます。一体理想の実現で神様の愛が一つに連結されているので、一体理想です。家庭も個人も離れているものがないというのです。一体理想実現で天上、地上が統合され、本然のアダムとエバが長子権を取得することによって霊界が地上に順応するようになります。それは愛を中心としてそうならなければなりません。真の愛によって。私たちの原理で言い換えれば、責任分担を完成することです。

神様の心情圏をどのように伝授されるのでしょうか。堕落していない本然の人間は、責任分担を完成することによって神様の縦的愛の核を中心として、左右にアダムとエバの愛が連結されなければなりません。そこが根源になり、根となって息子、娘が生まれるようになっています。そこから心情圏が勃発し、根を下ろすようになっているのです。血統基盤がよみがえるというのです。深刻な問題です。

神様の摂理は四千万人、六千万人が全部動いて成されるのではありません。祭司長から成されるのです。はとを裂くことによって国が行ったり来たりするのと同じです。

何よりもまず責任分担をはっきり知らなければなりません。責任分担を完成するために、天と地とすべてのものは、一つの愛の共鳴圏だということを知らなければなりません。親子関係、夫婦関係、兄弟関係がすべて真の愛を中心として統一を成しているのです。神様を中心とした愛を掲げていくのに、妻が掲げていくときには夫がついて行かざるを得ないし、お母さんが掲げていくときにはお父さんがついて行かざるを得ないし、孫や息子、娘が掲げていくときは祖父母、父母、兄弟たちがみなついて行かざるを得ません。それで家庭がすべてのものの基盤になるのです。それは責任分担を完遂することによって天の愛、地の愛、親族の愛、父母の愛、兄弟の愛が成されるのです。

天の愛は縦的で、地の愛は横的です。そして兄弟の愛は前後の愛です。立体的です。ですから父母と息子、娘が一つの統一体になれば神様が地上に臨在することのできる基盤になるのです。それで神様が正に人間の先祖の立場に立つのです。人間がその神様の前に子女の関係で連結されて初めて、天地一体化の家庭が設定されるのです。責任分担を完成した立場で、それが可能です。天と地上の愛が連結されなければなりません。内容は簡単です。

神様の愛、それは神様の血統を言います。アダムとエバの堕落によって神様の血統が切れたのです。それゆえ原点を復帰するその立場においては、どのように神様の生命を連結し、神様の愛を連結し、神様の血統を連結するかということが問題です。この場が再創造完成の場です。

血統復帰は根本復帰です。条件では復帰ができません。愛は、条件的愛でいいでしょうか。根本的な愛でしょう。血統は根本的な愛から始まったので、条件的愛では全体復帰ができません。蕩減復帰は苦労したこと、何か牛どろぼうしたこと、人のまくわうりを取って食べたこと、かぼちゃを取って食べたこと、すいかを取って食べたこと、そのように蕩減復帰されるのではありません。愛は根本を蕩減しなければなりません。

アダムが責任分担を完成すれば長子の立場に立つのです。それで真の父母です。父母権復帰です。王です。天地の王です。今までずっとサタン世界と闘って長子権を復帰したということは、いかなるものとも比べられない大変なことです。父母権復帰というのはなぞなぞのようなものです。王権復帰というのも、このような難しい時期に民主主義の世界の中でやったということを考えてみてください。そのようなことを話すことができたでしょうか。しかし今は「ああ、文先生がそんなことを話すとは、素晴らしいところがある」と言うことのできる環境になったのです。

完成基準に立った真の男性、完成した主体となる本然のアダムの立場から見たとき、責任分担を果たした場合には子女の種、人類元来の子女の種を受けたはずです。それは神様の愛と神様の生命と神様の血統を受け継いだ立場のものでなければなりません。そのような種を受けなければなりませんでした。堕落によってそれが根本的に狂っているのです。

アダムとエバは神様の体です。アダムとエバは横的な父母であり、神様は縦的な父母な

ので、私たちが横的なこの体を脱ぎ捨てて、縦的に還故郷して天の国で永遠の王に侍って生きるのです。アダムとエバが堕落しなかったならば、神様の体と和してその体を着て完成し、この地上で神様の愛によって直接主管圏と間接主管圏を連結させ得る責任分担を果たした愛の王になるのです。

責任分担というものを失ってしまいました。それでは責任分担とは何でしょうか。男女に任された責任分担とは男は東側、女は西側で互いに成熟することです。男性が生まれたのは女性のためであり、女性が生まれたのは男性のためなので、結婚しなければならないのです。どこで出会うのですか。中央線です。垂直線、プラス、マイナスが接すれば、愛が爆発して神様の愛、神様の生命、神様の血統的基盤になります。これが根となり、抜こうとしても抜くことができないのです。絶対的な愛の起源、絶対的な生命の起源、絶対的な血統の起源を中心として人間が生まれるのです。

皆さんの心に残すべきことは、神様の心がそうであるように、責任分担、蕩減復帰というものが残らなければならないはずです。他のものはありません。本然の基準をどのように探すかというのです。蕩減復帰、その次は血統、真の愛を中心とした血統！　それを知らなければなりません。責任分担、蕩減復帰、血統、この三つです。蕩減復帰が易しいですか。血統をひっくり返して合わせなければなりません。接ぎ木しなければなりません。完全にサタン世界と私は別の人です。お母さんの顔、お父さんの顔、みな忘れてこそ復帰ができるのです。

四　責任分担の発見とその重要性

責任分担という言葉はこの世ではあまり使わない言葉です。しかし統一教会では、どんな言葉よりも特別に重要視する単語です。統一教会において、この責任分担と蕩減という言葉、責任分担と蕩減復帰、この二つを知らなければ歴史的なすべての内容を悟ることができず、間違った歴史、あるいは歴史の未知の事実を解決できません。そのような重要な言葉です。

責任分担ということを今まで知らなかったので、歴史の曲折を知りませんでした。なぜ善なる人たちがみな犠牲になり、悪なる人たちがうまくいくのですか。歴史を見ると、独裁者がなぜこの世を支配し、善なる王が出てきても平和の世界をつくることができなかったのでしょうか。歴史を調べてみると、独裁者の世界統一の夢だけが記録されているのです。それはサタン世界だからです。責任分担圏を侵犯されたので、それ以下のすべての被造物、それ以下の人間全体、地上世界の万民、以前に来ては逝ったすべての霊界にいる先祖たちまで見ても、責任分担完成圏を越えた人は一人もいないというのです。それが原理です。文先生が適当にもってきて付けたのではありません。この責任分担という言葉が分からなければ、歴史が解けません。歴史の曲折を解決することができません。なぜ戦争史ですか。責任分担という善の条件が悪なる世界の条件を克服しなければならない立場にあるので、堕落して、サタン世界になり、落ちたものを覆す闘いをしなければなりません。ですから歴史は善悪の闘争史なのです。

この宇宙の矛盾した事実と歴史の悲運の曲折、このすべてが歴史上の責任分担というも

のを知らなかったので生じたのです。責任分担がどれほど重要かということを、皆さんは知らなければなりません。皆さんは責任分担を自分勝手に考えているのです。「責任分担は原理で教えてくれるものであって、私たちとは関係ない」。このように考えているのです。このように見るとき、先生が責任分担という言葉を発見したということは、偉大な発見だということを知らなければなりません。皆さんは責任分担をどれほど重要に思いましたか。この責任分担には宇宙が引っ掛かってあえいでいるのです。

今日統一教会で人間の責任分担というものを見つけたという事実は、宇宙的な発見だということを知らなければなりません。原子爆弾を発明したことや、アインシュタインが相対性原理を発見したこととは比べものにならないのです。それを知らなければ、歴史のすべてのものが解決されないのです。皆さんが人間の責任分担というこの真理を知ったという事実は偉大なことです。しかし今私たちは人間の責任分担を一番嫌っているのです。一番好まなければならないのが私たちなのに、人間の責任分担を一番嫌っているというのです。

復帰摂理を知らないので、人類歴史が解けないのです。歴史を通じてみれば、必ず因果原則によって悪なる者は滅びるようになっているのです。ところで、なぜそうなのか知らなかったのです。また、人類の理想がなぜ成就していないのか、神様の愛が現れなければならないのに、どこで現れるのかを知らなかったのです。学者の頭からは現れません。それは本然の父母の骨髄から現れるのです。本然の父母からです。ですから真の父母の歴史が始まったということは、天国の起源がこの地上に連結され得る一つの基盤が設定されたということです。真の父母を通さずしては天国は出現することができません。

神様の愛は絶対的であると同時に、その愛は絶対的な責任分担の上に立たずしては見つけることができません。皆さんが朝、御飯を食べることと生きることを考えるよりも、これがもっと根本です。責任分担という言葉は先生が発見しましたが、皆さんのようにただ座って発見したと思いますか。闘争して発見したのです。これを発見すれば、サタン世界は完全に倒れるので、サタンは隠し、覆って、ひたすら泰山のようにして、それを全部隠してきたのです。

統一教会において、責任分担という言葉を誰が作りましたか。私は発見したのであって、作ったのではありません。神様が作ったのです。神様がです。それでは先生がそれを発見する前にその言葉がありましたか、ありませんでしたか。太初からありました。この法は永遠の法です。それを知らなければなりません。

統一教会で言う責任分担という言葉は、重要な言葉です。この責任分担が成就されることによってアダムとエバは初めて人間として完成するのです。完成した人間になるのです。また人間の完成とともに、神様が人間を創造した目的が成されるのです。それは何かと言えば、創造主として権威を立てることのできる結果をもたらすことになるというのです。このように重要なのです。人間が責任分担を完遂したというその立場は、神様のすべての

創造理想を完成することのできる結果になるということです。

レバレンド・ムーンが責任分担という言葉を発見したということは、偉大な発見だということを知らなければなりません。皆さんは責任分担をどれほど重要に考えていますか。この責任分担には宇宙がかかっています。このために神様も解放されず、宇宙も解放されず、地獄の門も解放されず、社会の矛盾したすべての不義の歴史が責任分担という囲いに、責任分担という壁に引っ掛かって、みんながあえいでいるのです。

人間の責任分担という言葉は、私がいる前からあり、私がいるこの時代、そして私が去ったのちまでも永遠に残る法であると考える人がいますか。「人間の責任分担という言葉が何のために私たちに必要なのでしょうか。何で必要ですか」と言う者たちがいます。神様の愛が絶対的であると同時に、その愛が絶対的な責任分担の上に立たずしては見つけることができません。絶対的です。皆さんが朝、御飯を食べること、生きることを考えるよりも、これがもっと根本です。

統一教会が出てこなかったならば、神様が分からないようになっています。人間の歴史始まって以来、霊界と肉界に対する関係、人間がどうしてこのように受難の道を行き、神様がいらっしゃるならなぜ悪なる世界をつくって人間をこのように悲惨な運命に追い込まなければならないのか、という問題を解決する道がないのです。しかし今日統一教会の信徒たちは、これが人間の責任分担のためだということを知っているのです。それは驚くべき事実です。

もし堕落した人間の前に神様が責任分担を設定しなかったならば、蕩減復帰という言葉は出てこなかったでしょう。復帰するならただそのまましたでしょう。蕩減しなければなりません！　なぜ蕩減しなければならないのでしょうか。人間には責任分担があるからです。人間が完成すべき責任分担を自ら壊してしまったので、その賦与された責任を果たしていかなければなりません。そうするためにはサタン世界のすべてのものに勝って、サタンを主管する立場に立ち、堂々と神様の愛を受けることのできる位置に入らなければなりません。そうなればサタンは離れるのです。

五　責任分担を遂行する姿勢

一) 責任分担はすべての分野の過程にある

蕩減復帰歴史は幼いときから年老いて死ぬときまで、また霊界に行ってもいつも付いて回るのです。責任分担というものは付いて回るのです。霊界に行っても責任分担は残っているのです。霊界に行って、高い世界に上がれば上がるほどもっと高い次元の法があるのです。すべて責任分担が付いて回るのです。それを知らなければなりません。

先生の時代に法を立てるのは、責任分担法の延長であり、拡大であることを知って、その法に順応しなければなりません。教会の規範のようなものも、みな責任分担です。それで礼拝時間はぴったり守らなければなりません。礼拝が始まる前に来なければならないし、

礼拝の時間は絶対に動いてはいけません。先生もそうしました。先生も昔、学校の時間に遅れそうになれば、その日は昼御飯を抜いて、ちょうど五分前に行くのです。そういうことをやりました。あらかじめ行っても時間を無駄にすることはないではありませんか。ですから思考がとても科学的だったのです。

すべての制度が責任分担の管下に所属するということを知らなければなりません。統一教会の法を守らなければなりません。朝、敬拝時間を守るのも責任分担です。それ一つもできなければ、この次の皆さんの人生の問題がここで左右すると考えなさい。

責任分担はどこでもあるのです。御飯を食べれば、自分が食べた食器をみな片付けなければならないのも責任分担です。責任が多いのです。責任分担をたくさんつくることのできる人が偉大な人です。統一教会の先生が責任分担制度をたくさんつくりました。会社でも全体のためになる原則、法を立てて、その規約を守らなければなりません。異議があり得ません。ああしたりこうしたりしていたら追い出されるのです。アダムとエバが、ああだこうだと行動してどうなりましたか。追い出されたのです。

二) 責任分担を遂行する姿勢

堕落した人間は、人間の責任分担だけではありません。全体創造の九七パーセントをみな蹂躙してしまったのです。創造過程全部が崩れたというのです。ゆえにどれほど難しいかというのです。ですから人間が九七パーセントに該当し得る責任を果たさずしては責任分担を完成できる道が永遠にないというのです。ですから復帰摂理というのは再創造摂理ですが、再創造摂理がなぜ必ず必要なのでしょうか。人間の責任分担のためです。人間の責任分担を果たし、その場まで出ていくためには必ず再創造の過程を経なければなりません。再創造過程を経るには必ず蕩減条件を立てなければなりません。受難の道を行かなければならないというのです。

責任分担をよく知らなければなりません。救いの歴史は復帰の歴史であり、復帰の歴史は再創造の歴史です。再創造は原理的にするのです。責任分担を果たさなければなりません。責任分担は私たちの絶対的な信仰です。絶対順応です。これしかありません。自己主張があり得ません。エバは自己主張して堕落したのです。教会に入って不平を言ってはいけません。

皆さんは責任分担を一日に何回考えてみましたか。御飯を食べるときも責任分担、スプーンを握るときも責任分担、お皿を洗うときも責任分担、便所に行ってうんこやおしっこをしながらも責任分担、歩きながらも責任分担を唱えよというのです。アダムとエバが責任分担というものを考えなかったので滅びたのです。私たちはアダムとエバのように責任を果たせないで堕落する人になってはいけません。復帰して勝利する人になるためには二十四時間責任分担を尊重し、考えなければなりません。

神様は今まで人間の責任分担圏以上の立場で人間世界に接していらっしゃいます。しかし、それ以下に落ちた人間はどんなことをし

ても橋を架けて上がらなければなりません。その圏内にすべての人類が引っ掛かっているし、すべての世界が引っ掛かっているし、歴史が引っ掛かっています。過去に霊界に行った人、今後生まれてくる後孫全体がこの運命圏を抜け出せないでいるというのです。これが怨恨の堕落圏です。それで再創造していくには必ず闘争過程を通過しなければなりません。再創造過程に必要とする圏は誰が支配していますか。サタンが支配しているのです。九七パーセント圏をサタンが支配しており、九七パーセント圏以上から神様が支配します。このように見なければなりません。

人間が自分の責任分担を果たせなかったので、アダム完成者が責任分担を果たさなければなりません。ですから未知の世界を開発していくのです。ゆえに原理の道は開発していかなければなりません。求めていかなければなりません。原理の道は探していく道であり、蕩減の道は踏んで行く道です。ただそのまま踏んでいかなければなりません。ヤコブが蕩減したもの、イエス様の蕩減、モーセの蕩減路程を、今日の統一教会の文先生の蕩減路程を通して踏んでいかなければなりません。千里の道ではなくても、三歩、四歩ずつでも踏んでいかなければなりません。そのような条件が貴いのです。

天使が来た時、ヤコブは神様の使者として来たことを知っていました。それで「私を滅ぼすための使命をもって来たのですか。でなければ福を与えるための使命をもって来たのですか」と尋ねると、「福を与えるために来た」と答えました。それに対して、「福を与えようと来たのならくれたらいいのに、どうしてくれないのか」と言うと、「それは責任分担が残っているから、ただ与えることができない」と言うのです。すなわち、ヤコブが相撲をして勝たなければ福を与えられないというのです。言い換えれば、命を懸けて闘わなければ与えられないというのです。そのような条件をかけて立ち上がった時、ヤコブは「そうか、よし、私の指が抜け、私の腕がなくなっても決して負けない」と決心し、刀で打たれても離さないし、首を切られても離さないという心をもって相撲をしたのです。どれほどやったでしょうか。夜を明かしてやりました。死んでも離さないという心で闘ったのです。

責任分担圏の蕩減路程は立てなければならないものです。その責任分担は何を中心として果たさなければならないのでしょうか。より天を愛すること、より絶対的な信仰とより絶対的な愛をもたずしてはサタンを屈服させることはできません。

責任分担という言葉に対して感謝したことがありますか。この責任分担を果たせなかった人間が行く道において、解放を追求する前に通過すべき蕩減という怨恨の道が、壁が、どん底が残っているのです。この事実を知ったので、この道を行くために身もだえする統一教会の群れにならなければなりません。その道が残っているので、先生もこの道を埋めるために身もだえしてやってきたのです。

皆さんは責任分担を完成したと思いますか。アダムとエバが責任分担を完成できずに死んだので、皆さんも責任分担を完成した立場にいないのです。いくら素晴らしく、いくら大

統領で、この国の有名な学者になったとしても責任分担を完成した立場に上がれなかったというのです。責任分担を完遂できなかった圏内ではサタンがぎゅっとつかんでいるのです。これを離すためには蕩減しなければなりません。蕩減せずしては、祭物にならずしては離れないのです。蕩減するまでは、ただでは離れないのです。

皆さんは天国に行く道を知りません。蕩減の道を知りません。蕩減の道を知っていますか。責任分担を完成できなかったので、責任分担条件に引っ掛かっているのです。責任分担を果たせなかったことによってサタンが侵犯したのです。個人、家庭、社会、国家、世界、また霊界まで、みなサタンが侵犯しているのです。

五パーセントの人間の責任分担を果たさなければなりません。先生も責任分担と蕩減法のゆえに一生の間、苦労するのです。これを知ったのでサタンが統一教会を一番恐れるのです。これがサタンを屈服させる武器です。ですからサタンの一線に行かなければなりません。サタン世界に行って反対行動をして、その基盤を築いて、カインを救わなければなりません。カインもサタンを解放してあげなければなりません。カインを救ってこそサタンが解放されます。カインを探してくることができなければ、追放ができないのです。

私たちになぜ蕩減法が必要なのでしょうか。サタンを分別するためです。責任分担を果たせなければサタンを分別できません。責任分担を完遂できずしてはサタンが分別されないというのです。ですから皆さんは蕩減の道を行かなければなりません。先生が責任分担と蕩減法を知らなかったら、今日統一教会は成り立たないのです。神様のみ旨を中心として見るとき、神様が私に協助できないというのです。統一教会が特別なのは、責任分担を中心として蕩減法を知ったからです。先生が生涯をかけて苦労するのは、蕩減の道のためです。先生が一生の間なぜこのことをするのでしょうか。いつも牢獄に出入りし、なぜこんなことをしなければならないのでしょうか。それは蕩減法のためです。蕩減法のゆえなのです。

第二章　罪、人間堕落の内的意味

一　換父易祖（注：父が換わり、先祖が替わったこと）がすなわち堕落

一) サタン悪魔が私たちの父

本人が糾明した原罪と堕落の曲折は、人間の最初の家庭で起こった天使長との不倫の事件でした。統一原理でのサタンは、観念的存在や仮想の存在ではなく、霊的実体です。神様の愛の理想を破壊し、神様の血統をサタンを中心とした血統に変えた元凶です。イエス様もヨハネによる福音書第八章で、人類の父が悪魔であることをはっきりと語られました。神様が御自身の外的な体であるアダムとエバを通じて実現しようとされた愛の理想を剥奪した愛の姦夫が、正に悪魔サタンなのです。皆さんには聞き慣れないことでしょうが、本人が霊界を開拓して宇宙の根本の曲折を糾明しようと血と汗のにじむ闘争をした結果、得た結論がこれです。皆さんも真剣に祈祷してみれば、解答が得られるでしょう。

堕落の実相とは何でしょうか。善悪の実を取って食べて堕落したという聖書のみ言は、比喩です。今までそれをそのまま信じてきたのは、本当に健気です。善悪の実を取って食べたのが堕落だというそんな盲目的な信仰基準をもってしても今までキリスト教が世界的に発展して、二十世紀の文明を創建したことを見れば、神様が背後からたくさん協助してくださったということが分かります。しかし内容が確実ではないものは、結果がどのように出るでしょうか。無知では完成することはできないのです。

聖書の内容を観察してみれば、人類始祖が不倫の愛によって、サタン悪魔を中心として父子の関係を結んだという事実を否定することができません。神様の血筋を受け、神様の絶対的な愛の中で、神様の直系の息子、娘として生まれなければならない価値をもった人間が、サタン悪魔の血統を受けてサタンの息子、娘として生まれたというのです。ローマ人への手紙第八章に「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」（二三節）と記録されています。養子は、血筋が違うのです。これが私たち人間の正体なのです。

ローマ人への手紙第八章を見てください。「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」（二三節）とあり、「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのである」（一五節）とあります。養子にしかなれないのです。クリスチャンたちは養子です。養子は血筋が違うのです。ヨハネによる福音書第八章四十四節を見れば、「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている」とイエス様が言いました。ここで父と言いましたから、血筋が、先祖が悪魔ではありませんか。ですから割礼はどうするのですか。陽部を裂くのです。このようになっています。善悪の実とはどんな善悪の実ですか。

堕落した結果、どうなったのでしょうか。私たちは死亡圏内に落ちました。神様が善悪の実を取って食べたなら必ず死ぬであろうと言われたみ言のように、死亡圏内に落ちていきました。堕落した結果どうなったのでしょうか。ヨハネの福音書第八章四十四節を見れば、サタン悪魔が私たち人類の父になった、とイエス様は指摘しました。神様を父として侍るべきアダムとエバが堕落することによって、サタン悪魔を父として侍るようになったというこの口惜しく恨めしい事実が堕落の報いであることを知らなければなりません。

堕落によって人間は、偽りの父であるサタン悪魔に屈服せざるを得なくなりました。人間は、自分たちの父を替えたのです。私たちは真の父である神様を捨てて、偽りの父であるサタン悪魔と一つになったのです。こうして最初の男性と女性は、サタンの息子、娘になってしまったのです。

もともとサタンはどんな存在なのでしょうか。悪魔とはどんな存在かといえば、神様の

僕です。しかしこの僕の者が、主人の娘を強姦したのです。これが堕落です。聖書に出てくるその堕落とは何かといえば、エバが善悪の実を取って食べたのが堕落だと言いますが、善悪の実は果物ではありません。僕の者が主人の娘を強姦したことです。将来、代を継ぐ息子、娘を生み育てて、神様の理想を成そうとしていたのに、僕として造った天使長という者が、主人の娘を強姦したのが人類の堕落の起源になりました。この世にそんなことがあってもいいのでしょうか。天地がそのようになったのです。複雑にもつれた内容を、皆さんは原理を聞けば大体分かるはずです。

エデンの園にあるすべての木の実は取って食べたとしても、園の中央にある善悪を知る木と命の木の実は取って食べるなと言いましたが、それは何を意味するのでしょうか。尹博士！　他の木はどんな木で、命の木と善悪を知る木はどんな木ですか。同じ木なのに。他の木は何の木ですか。それが何かといえば、兄と妹として暮らしながら、手を握ってもいいし、なでてもいいし、かわいいと言ってどんなことをしてもいいですが、善悪の実は見てもいけないし、触ってもいけないというのです。それが何か分かりますか。他のところはみな触っても、そこは触るなというのです。そのように解釈すべきでしょう。何のことか分かりますか。

兄と妹が手を握ってもいいし、抱き締めてもいいというのです。兄と妹、二人しかいないではありませんか。子供たち同士は体を触ったり何でもするでしょう。大きくなる過程で、家でみなそうではないですか。兄なら兄が、それを知っているでしょうか。そのようにみな触ってもいいのですが、いけないところがあるというのです。命の木の実である男の棒は凸で、善悪の実は凹です。それは触ってもいけないのです。取って食べれば大変なことになるのです。聖書はそのように比喩で書かれているのです。神様がどれほど風刺的か分かりません。

聖書を見れば、善悪の実を取って食べて堕落したとありますが、下部を覆ったというのはどういうことでしょうか。既成教会で聖書をもう少し知性的に解釈できる心さえあれば、すぐに堕落の起源を知ることができます。どうして下部が恥ずかしいものなのでしょうか。下部をなぜ覆ったのでしょうか。口を覆い、手を覆わなければならないのに、下部だからといって欠点になることはありません。しかし下部で堕落することによって天の愛を蹂躙した恥ずかしい宮殿になったというのです。真の愛の泉がわかなければならないのに、悪魔の愛を中心とした偽りの愛の泉があふれ出てきたのです。それで、これが愛の土台の中で一番悪い愛の土台になったのです。

アダムを追い出すとき、息子、娘を生んでから追い出したでしょうか。生む前に追い出したでしょうか。見ることはできませんでしたが、息子、娘を連れていたら追い出すことができるでしょうか。涙をもっと多く見なければならないでしょう。「おじいさん、おばあさん、どうしてこのように追い出すのですか」と言って、つかんで痛哭するでしょう……。四人が四肢をつかんで騒げば、それをみな刀で切り捨てなければならないではありませんか。罪を犯したアダムとエバは分かりませんが、罪を犯していないアダムとエバの息子、娘がそれに気づくのです。それを知って

いる神様が息子、娘を生む前に追い出したのです。彼らが追い出されたのちに勝手に結婚して赤ちゃんを生みました。神様が追い出すとき、お前たちは出ていって結婚し、息子、娘を生めと訓示して送ったでしょうか。そんな話をしないで送ったでしょうか。答えてみなさい。いずれにしても彼らは息子、娘を生んだのです。追い出されてから。

こんな話をどこかでお金を払って聞くことができますか。自分の家を売り、財産をはたいて千年、万年祭司をしても、教えてくれる人はいません。統一教会の文先生しかいません。これは宇宙の秘密です。聖書にもこのような内容はないでしょう。聖書では、善悪の実を取って食べて堕落したとあります。善悪の実とはどんな果実ですか。そのように幼稚園生にもなれない実力でありながら、博士号を検証し、博士号の総会長になった文総裁に異端だと言えますか。異端だというのは端が異なるのではなく、端が見えないという言葉です。私の言葉が合っていますか、違いますか。合っているというのです。

堕落することによってどんな結果になったのかといえば、エバが未成年時代に僕に唆されて堕落してしまったのです。堕落とは何ですか。今日聖書で言う善悪の実を取って食べたことではありません。神様が一番貴く思うことをサタンは知っていました。また神様の息子になり、神様の娘になることができる一番貴いものが何なのかをサタンは知っているというのです。それで神様が一番愛し、アダムとエバが一番愛することのできるそれを、自分も一度もてたらいいと考えざるを得なかったのです。

終わりの日になって、再びそれを再編成して、神様の恨を解き、天倫の恨を解くと同時に人類の恨を解かなければならないのです。このようにならなければならないのに、これを知らずに善悪の実を取って食べてどうのこうの……。ここで言う人の言葉が違っているというなら首をくくって四十日間祈祷してみなさい。統一教会の文先生がうそをついたのでしょうか。皆さんは正常な血筋を受けて生まれたのではありません。ですから独身生活を強調したのです。子供を繁殖しては困るというのです。

神様は淫乱を憎みます。なぜでしょうか。人間が不法に愛して天地をひっくり返したからです。この悪の血はどうすることもできないものです。それで道の世界では独身生活を主張するのです。もし男性が神霊なる祈祷の境地に入れば、必ず女性が現れて試験をします。必ずこのようなことが起こります。道の道を妨げてくるというのです。なぜですか。不法な愛によって歴史がふさがったからです。善悪の実を取って食べて堕落したという教理をもって二千年まで残ったというのは健気なものです。

宇宙の根本は脱線があり得ないのです。しかしこの悪魔が、大きくなる前、未成年の十五、十六歳と見て、十代の時に……ちょうどその時です。その時に、エバが天使長ルーシェルをじっと見ると、天地の理致（道理）をみな知っているのです。神様のお使いをして天地創造に対しても話すことができるのです。一方アダムはむっつり無口で……アダムは最近でいえば、鳥の雛でも捕まえようと歩き回り、こん棒でも持って蛇の子でも捕まえよう

と歩き回り、かえるの子でも捕まえようと歩き回り、こうして……自然に吸収されたすべてのことを将来、主管し管理し親しくなろうとし、その和合者になろうとするので、エバに対して関心があるでしょうか。ついて回りたくても力の強い男についていけず、一人で陰に座って休んだりすれば、ルーシェルがひそひそとささやいて誘惑して犯したのです。ところで神様がなぜそれを干渉できなかったのでしょうか。人間の愛は、人間を通じて主管するのです。天地のすべての愛は主体者が主ではなく、相対者が主なので、相対者の願いを中心として「ため」に生きる神様がそれを主管すれば、根本が破綻するのです。逆理的立場で主管者になるので仕方なく、見てもどうすることもできなかったのです。

二) 堕落しなかったならば……

それでは、堕落したのちに一番嘆いた方とは誰ですか。歴史をもって一番痛哭し、身もだえした方とは誰ですか。神様です。なぜでしょうか。神様はとてもよく御存じです。「アダムとエバが堕落しなかったならば、天地の偉業を受け継ぐはずなのに、こんなことがあり得るのか」と言うのです。アダムとエバは未成年時代だったので、知らなかったのです。世間知らずだったので、知らなかったのです。知らなければ、痛哭できますか、身もだえできますか。

神様の性相は、男性格である父なる神様と女性格である母なる神様から成っています。ですから神様から造られた人間と被造世界が、男性と女性の二性の神様でもあります。神様は第一に体を着るためにアダムとエバを創造され、第二に愛を完成するためにアダムとエバを創造されたのです。このようなアダムとエバが完成して二人が一つになることのできる愛の実体になれば、神様が臨在され、人類の完全な愛の父母になるのです。そうして神様の形状的実体の父母となったアダムとエバの子女を繁殖することによって理想世界が成就するのです。そうなれば人間を通じて霊界と地上世界が連結されるので、霊界と地上世界を連結させるための目的もあって人間を造られたのです。それで神様が愛を中心としてアダムとエバに臨在されることによって、人類の真なる父母、実体の父母として、アダムとエバの形状である体を使って父母の立場に顕現できるのです。しかしアダムとエバが堕落することによって、このようなことが成されなかったという事実を皆さんが理解されることを願います。

アダムとエバが堕落しなかったならば、神様を中心としたアダムの直系の長孫の子女たちが出てきたはずです。アダムは長孫であり、真の父であり、王です。地上の国と天上世界の王です。また真の父母であり、真の長子です。ですからアダム家庭は天の国の王室です。それではアダム家庭のおじいさんとは誰でしょうか。神様がおじいさんです。その次に、お父さんとお母さんは、アダムとエバです。そして過去の立場を身代わりした観点から見れば、おじいさん、おばあさんは神様の代身であり、また神様は父母の代身です。縦的に見れば、神様が一代圏、二代圏、三代圏を中心として家庭に着陸がなされるのですが、一代圏が横的に展開されたのがおじいさんで、二代圏がお父さんで、三代圏が私です。それ

で息子、娘を中心として万世一系の王室の代を継ぐのです。

真の長子権、真の父母権、真の王権、これがアダムとエバが出発しなければならなかった原点です。そこに神様の王宮があり、神様の愛があります。そして人間と創造主が一つに連結され、真の愛の基盤になるのです。そこが完成した本然のアダムの家庭基盤であり、神様が永遠に臨在できる神様の王宮です。

統一教会でいう神様とはどんな神様かといえば、真の愛を中心とした縦的な父母だというのです。それではアダムとエバは何でしょうか。縦的な父母は一つです。縦的なものは一つしかありません。神様が人間を愛するにおいては縦的関係です。中心です。縦的な愛です。そうだとしたらアダムとエバとは何でしょうか。縦的な基準の前に横的な父母を身代わりしなければなりません。それではなぜ横的なものが必要だったのでしょうか。繁殖が必要だからです。繁殖。縦的基盤を中心としては生むことができません。横的な基盤を通じて繁殖が必要なのです。繁殖、これは三六〇度を中心としてこの平面基準に無限数が包括されているというのです。それで繁殖が東西南北を通じてこれを縦に合わせることのできるこのような球形体を形成するために神様は、神様の愛を中心として体に通じることのできるアダムとエバを造ったのです。

アダムとエバを中心として見るとき、父母がそこから出てきます。人類の元の父母が出てきます。アダムとエバを中心として、そこから人類の真の夫婦が出てきます。アダムとエバを中心として、初めて息子、娘が出てきます。アダムとエバを中心として、神様と息子、娘、父子の関係までみな出てくるようになっています。

神様がなぜアダムとエバを造ったのか分かりますか。神様も父母の立場で息子、娘を愛する愛を一度もってみたいというのです。その次はアダムとエバのように新郎新婦が愛する愛、その愛を一度体験してみたいというのです。おじいさんの愛、その次は国を一度愛してみたいし、世界を一度愛してみたいし、みなもちたいのです。みなもちたいものが私たち人間世界に伝授されて、それを受け継いだのが皆さんの一族であり、皆さんの民族であり、皆さんの国であり、この世界です。この地であり、あの世、霊界だということを知らなければなりません。

堕落せずに完成の立場まで行ったならば、アダムとエバは個人完成だけでなく、宇宙史的な完成をしたはずです。また、神様の愛を中心とした新しい家庭が出発したはずです。このように家庭から氏族、民族、国家、世界が成されたならば、神様に侍る一つの大家族社会になっていたはずです。このような大家族社会の中心は神様とアダムです。それでその世界では神様を中心としたアダム家庭の生活や日常の路程が歴史的伝統として残るのです。彼の生活方式、風習、慣習、そして生活的な背景が歴史的伝統になるのです。それは、神様の愛で結ばれた伝統以外の何ものでもありません。神様の愛は命の根源であり、すべての理想の源泉なので、その懐を離れようとしても離れることができず、離れるとしても再び帰って来ざるを得ないのです。

堕落はアダムとエバだけに制限された問題のようですが、彼らは人類の先祖であり、根本となる泉のような存在なので、個人、家庭、民族、国家、世界と未来全体に影響を及ぼしたのです。

アダムとエバの堕落は、アダムとエバだけの堕落ではなく、全般的な人類歴史を総合した立場での堕落です。言い換えれば、アダムとエバが堕落したということは、善なる父母になれないで、悪なる父母になったということを意味します。悪なる父母によって悪なる子女が生まれ、悪なる子女が生まれることによって悪なる氏族、悪なる国家、悪なる世界が形成され、この世界圏内に五十億人類が存続しているのです。このような堕落圏内にいる今日の人類歴史は喜びの歴史ではなく、悲しみの歴史であり、人類も喜びの人類ではなく、悲しみの人類であることに違いありません。

愛を知るようになるときには、すべてのものが通じます。地上世界の平面的な事実だけでなく霊眼が開いて立体的な世界までも分かるので、神様を直接見て、接することのできる境地に至るのです。しかし愛の自覚が発達する前に堕落してしまいました。天使長と不倫の関係を結んだというのです。これが宇宙を破綻させた根本原因になったのです。

先生の時になって、堕落が愛によって起こった結果だという事実を明らかにしたことは驚くべきことです。これは歴史的背景を通じて理論的に体系化されたもので、否定できない内容です。

二　堕落はサタンを中心とした血統転換

一) 怨讐の血統を受けた

アダムとエバは、堕落のゆえに血統が変わったというのです。誰の愛によってでしょうか。神様の怨讐、姦夫であるサタンの愛によって、サタンの生命体になったのです。男性の生命体、女性の生命体がサタンの愛に入り混じって一つになり、その二人によって結実したのが息子、娘です。それゆえ、その息子、娘はサタンの愛、サタンの生命、サタンの血統を継承しているのです。

堕落人間は偽物になったので、接ぎ木しなければなりません。血統的に見れば、皆さんは先祖が違うのです。なぜ養子にしかなれなかったのかといえば、お父さん、お母さんが違うというのです。ですから堕落は血統的なものだったという論理が出てきたのです。堕落とは何ですか。血統を間違えて引き継いだことです。間違った愛によって堕落したという論理を立てても妥当です。ですから統一教会で愛によって堕落したと主張するのを否定することができません。聖書を見れば、善悪の実を取って食べて堕落したと書いてあるでしょう。善悪の実とは何か分かりますか。善悪の実とは単なる実ですか。風が吹けば落ちてころころ転がる実ですか。違います。

アダムとエバの心にサタンが入って一つになったので、サタンの血統を受け継いだということです。愛の多い神様がなぜサタンを許せないのでしょうか。殺人強盗も許し、みな許すと言ったのに、イエス様を信じれば許されると言ったのに……。サタンを許すことができない理由とは何かといえば、人類の血統を汚したことです。それは何を意味するので

しょうか。神様の立場から見るとき、サタンは姦夫です。愛の姦夫。何のことか分かりますか。

サタンを中心として結婚式をしたので、サタンを中心とした愛、サタンを中心とした生命、サタンを中心とした血統を受けなかったと否定することができないのです。もし善悪の実を食べずに堕落しなかったならば、神様を中心として結婚式をしたはずです。統一教会の父母様が皆さんを祝福してあげたように、アダムとエバが成熟したのちには彼らを呼んで神様を中心として祝福してあげたことでしょう。

アダムとエバが善悪の実を取って食べないで、完成したなら、天地を創造した王様の息子、娘になるのです。王様の息子、娘なので、その直系の長孫、長女は何になるのですか。王子、王女になるのです。天の国を代表した地上の国の王国を治めることのできる基盤になるのです。王権は二つではありません。一つだというのです。

神様の手で自ら造られたひとり息子、ひとり娘が、アダムとエバです。アダムとエバが堕落したので、問題になったのです。それでは堕落することによってどうなったのですか。取って食べるなと言った善悪の実を取って食べて堕落しましたが、取って食べるなと言ったその言葉を実践していたならどうなっていたでしょうか。キリスト教はそれを考えることができませんでした。考えてみても分かりません。蒼蒼大海です。深いのか浅いのか、大海の深さを測ろうとしても、それを測定することのできる計器がありません。知ろうとしても知ることができないので、無条件で信じなければならないという冠をかぶせたのです。しかし無知には完成がありません。

体を打つようなことを、どうしてするのですか。サタンの血、神様の怨讐の血を受けたからです。神様の怨讐とは誰かといえば、姦夫です。神様の愛の怨讐です。姦夫です。姦夫の血を受けたのです。天の国の王権を受け継いで王妃になるはずだったエバが悪魔の配偶者になり、僕の相手になったというのです。これは天地の秘密ですが、先生の時代になって初めて暴露されたので、サタン世界は退かなければなりません。

無知には完成があり得ません。サタンとは誰ですか。神様の姦夫です。姦夫。このような問題を明らかにしてあげましたが、これをみな覆っておいて天国へ行きますか。隠しておいて救いを受けますか。とんでもないというのです。偽り多く、でたらめな者たち。そのように信じて救われるものなら、私たちのような人は既にみな救われても余りあるというのです。このように苦労しません。

悪魔がなぜ神様を憎みますか。神様はなぜ悪魔を憎みますか。キリスト教の論理でいえば、キリスト教は怨讐を愛せよと言いました。怨讐を愛するとすれば、神様の怨讐はサタンですが、神様はなぜ愛せないのですか。愛の怨讐を愛すれば天地がなくなるというのです。治める法がなくなります。存在法がなくなるのです。

サタンが神様の理想的愛を破壊させ、理想的生命、理想的血統を蹂躙したのです。そう

して赤ちゃんを生んだのが人間たちです。サタンの愛の表示、生命の表示、血統の表示であるその息子、娘を神様が干渉することはできません。

サタンがなぜうんざりするほど人類歴史で道の道を行こうとする人々に間違いなく訪ねてきて、首を押さえ、背中に乗って、犠牲にするというようなことをやってきたのでしょうか。そのサタンのやつが何かといえば、神様においては神様の家族を奪っていった、強姦していった姦夫だというのです。私たちのお母さんが本来神様に侍り、平和の王国を成して、平和の天地を築かなければならないのに、お父さんと私たちを追い出したというのです。サタンが入ってきて、今日人間をこんな哀れな姿にしたのです。何か他の罪を犯したのではありません。

その悪魔が堕落させたのが何ですか。善悪の実ですか。善悪の実を食べてどこを隠しましたか。口を隠しましたか。手を隠しましたか。下部を隠したでしょう。これが悪を蒔いた種になりました。ティーンエイジャー時代、成熟する前に堕落しました。この歴史的な人間の世の中の血統がそこから広がったので、それが人間終末時代において盛んになるのです。全世界的に青少年たちがアダムとエバのように、陰で独自的に愛の倫理を破壊させ、天地が恐ろしいことを知らない時になったら、サタンの全権時代が地上に到来したと思えというのです。その時は神様の鉄槌が目前にやってくるのです。

血統を転換しなければなりません。なぜ血統を転換するのですか。サタンの血統を受けて継承したので、血統を正さなければなりません。皆さん、これをはっきり知らなければなりません。

二) 血統的な原罪は遺伝する

堕落は血統の否定的動機から始まった事件でした。ですから堕落の結果が今日まで、原罪として遺伝されてきているのです。

サタン圏に属している人々は神様の血統とは全く関係がありません。すなわち、善なる父母の子女として生まれるべき人類が悪の父母と因縁を結んで生まれました。それで悪を中心とした家庭、氏族、民族、国家、世界に拡大されました。

不倫なる淫行関係によってエバは天使長と一つになり、アダムはさらに天使長と一つになったエバと一つになることによって、アダムとエバは結局神様を中心としてではなく、天使長を中心とした夫婦関係を結んで家庭を築くようになったので、アダムとエバの後孫であるすべての人間はサタンの血統を受け継ぐようになったのです。

堕落は、神様を中心としてアダムとエバが一つにならなければならないのに、神様の僕である天使長と一つになったことを言います。神様の血統を受け継ぐべき人間が僕の血筋を受け継いだということです。ですから堕落した人間がいくら神様を父と呼んでも実感が伴わないのです。これは神様であれ何であれ関係なく、すべてのものを自己中心に連結させて考える堕落性本性が遺伝されたからです。それでみな相反する存在になり、宗族と民族

を成したので、少したてばすべて分かれるようになるのです。このようにして立てられたのがサタン文化圏です。二つに分かれ、三つに分かれて、みな分裂するのはサタン圏に属するものです。

堕落によって真の父母を失ってしまい、真の夫を失ってしまい、真の子女を失ってしまいました。失った動機はエバと天使長のゆえでした。このような観点から見るとき、この地に生きている女性たちは天使長のお父さん、天使長の夫、天使長の兄に頼って生きているのです。ゆえに女性たちは悲惨なのです。お金持ちの家の令嬢が自分の家の下男と住むかたちになったのです。すなわち、僕の血筋を受け継いで生まれたというのです。ですから本来の夫、本来のお父さん、本来のお兄さんの愛を受けられなかった女性たちなのです。

血統的に曲折が詰まっているので六千年かかるのであって、そうでなければ、全能なる神様が一日でみな復帰するというのです。血統的にこれが固まってしまったので、これを一度にみな抜けば死んでしまうのです。ですから六千年かかってきたのです。善悪の実を取って食べて堕落したというのですか。それならどれほどいいでしょうか。

罪の基盤、堕落の基盤、悪の基盤、地獄の基盤、このようなものは具体的にどのように生じるようになったかということが問題です。アダムとエバまで戻って考えてみましょう。アダムとエバがどうして堕落したのかという根源を探ってみると、アダムとエバは神様が命令した「善悪の実を取って食べるな」という言葉を不信して堕落しました。二番目には自己中心的だというのです。三番目は自己を中心として愛そうとしたのです。これが堕落した中心の骨子の内容なので、この内容と同じものはサタン側だという結論が出てくるのです。堕落した人間たちはみな不信の愛、自己中心の愛をした人たちです。結局自己中心の愛を主張するのがこの世界の人たちだと見るのです。

三　サタンは神様の愛の姦夫

一) サタンは堕落した天使長ルーシェル

サタンとはいったいどんな存在でしょうか。特にイエス様を信じる人たちは神様の前において、サタンの正体をはっきり明かさなければなりません。サタンとは何ですか。姦夫、愛の姦夫だというのです。こいつが……そのサタンがお父さんを殴り殺し、お母さんを強姦して生んだ子女が正に皆さんです。気分が悪いでしょう。とても信じられないなら、先生の言葉が本当かうそか命を懸けて神様の前に談判祈祷を一度してみなさいというのです。

私たちの先祖がサタンに讒訴され、蹂躙されて、虐殺の祭物になってきた恨を解かなければならないキリスト教信徒であり、道の道を行く人だとするなら、このサタンの正体を解明しなければならず、歴史的な神様の心情と時代的な神様の心情、未来を心配される神様の心情を知らなければなりません。そうして神様が涙を流し、「おお、私の息子、娘よ」と言うことができてこそ世の中は回るというのです。

神様においてエバは未来の妻でした。なぜならば、アダムは神様と一体になるので、神

様自身です。神様の妻をサタンが犯しました。サタンは神様の怨讐であり、私たちの怨讐です。

サタンとは誰ですか。神様の妻になるエバを強姦した姦夫です。アダムの妻であると同時に神様の妻です。神様の妻となるエバを強姦した姦夫です。サタンは愛の怨讐です。ですから神様が怨讐を愛しても、サタン姦夫まで愛せとは言いませんでした。サタンは許すことができません。サタンに属した人は愛しますが、サタンは許すことができません。それは原理なので、皆さんがみな知らなければなりません。

エバはアダムの妻であり、神様の娘ですが、そのエバをサタンが強姦したのです。ですからサタンは神様の前に姦夫になるのです。今まで既成教会の人たちはこれを知りませんでした。

本来の主人を追い出し、彼の妻を奪ってその息子、娘までみな死の立場に引っ張っていく魁首の立場がサタン悪魔だというのです。このように見るとき、神様の怨讐であり、人類の怨讐であるサタン悪魔を許す道がありますか。結局サタン悪魔は神様と愛を中心として姦夫の関係になってしまったというのです。ゆえに許すことができますか。そのようなサタンを許せば世の中をみな破綻させてしまうのです。ですから皆さん、ただそのままで神様の息子、娘になれると思えますか。ですからこれをすり替える日まで、神様と人類は呻吟と苦痛の道を免れ得ない立場で歴史をつづってきたということを知らなければなりません。

皆さんの家庭が神様の公認された愛によって築かれた家庭ですか。違います。皆さんの家庭は、お父さん、お母さんがサタン世界の堕落した愛の因縁によって結ばれた家庭です。そのような家庭で生まれたのが、正に皆さんです。それで血統が違うというのです。それは強盗にお父さんが追い出され、お母さんが強姦され、その間に生まれた退廃物のようなものです。結局、神様がいらっしゃることも知らない姦夫の一族、悪魔の社会になってしまいました。

皆さんの愛の綱はどこから始まりましたか。どこから出発したというのですか。悪から始まりました。この悪の魁首がサタン悪魔です。どんな因縁をもった悪魔かといえば愛の姦夫だというのです。その姦夫の血と肉を受け継いで人間が生まれたのです。それなら私たちが受けようとする愛は姦夫の愛ですか。姦夫の血統を通じて受け継いできた不浄な血統の愛を受けようとしましたか。違います。これが問題です。

元来人間は神様を中心として真の命と真の血統を受け継ぎ、宇宙の権限をもって栄光の生活をしていなければならなかったのですが、堕落することによってサタンの愛を中心にサタンの血統、サタンの命を受けたのです。サタンは神様の怨讐です。神様の愛の怨讐です。それは姦夫です。姦夫。女が三人集まれば「姦」という字を書くでしょう。姦夫が何か分かりますか。姦夫とは何かといえば、自分が愛する女性を奪っていった者を姦夫というのです。

サタンは神様の前に姦夫です。そして人類はその姦夫の子供です。ですからサタンは怨讐です。この怨讐に対して敵を討とうという考えに激しく燃えている人であってこそ神側の人になるのです。

神様はもてる限りの精誠を尽くして、希望に満ちた大業を夢見て、宇宙を創造されたのですが、そのすべての大業と命と理念のすべての条件が一時に破綻して滅びるとき、天地が真っ暗になったというのです。ここに怨讐として登場したのが、天使長ルーシェルでした。このルーシェルを討ち取らなければならないでしょうか、討ち取ってはならないでしょうか。神様が最も愛していた骨の中の骨であり、肉の中の肉である息子、娘をルーシェルが自分の息子、娘にしたのです。こんな怨讐の首を切らなければなりませんか、そのままほっておかなければなりませんか。このような問題をめぐって歴史始まって以来初めて苦心した方が神様です。

神様が願っていた王子、王女の資格を破綻させ、王子、王女の家庭的愛を破綻させ、王子、王女以後の王孫を破綻させ、神様が理想とする家庭、天の国を破綻させた元凶がサタン悪魔だということを知らなければなりません。この元凶が神様の怨讐であるだけでなく、私たち人類の怨讐です。その怨讐の敵将にその国の王宮にいる王族、王族の王子、王女が捕まっていって、僕の暮らしをしながらその僕の世界の赤ちゃんを繁殖させるのと同じです。王子、王女を中心として王権のもとで展開されなければならないにもかかわらず、悪なる悪魔の王権のもとで繁殖された群れのようなものが堕落した人類だというのです。

二) サタンは愛の怨讐

天使長とは誰でしょうか。神様の妻を奪った姦夫です。すなわち、悪の主体サタンとは何かといえば、神様の妻を奪った姦夫だというのです。姦夫といえば、何かの機関の幹部（注：韓国語では発音が同じ）ではありません。愛を取って食べた姦夫だという意味です。これを知らなかったのです。

人間は本来、神様の王子、王女になるはずだったのに、僕の子になり、僕の赤ちゃんを生み広めたのです。サタンが何か知っているでしょう。姦夫です。姦夫とは何ですか。愛の強盗だというのです。それは順理を通じた愛の道理を逸脱したものです。ですからサタンは愛の強盗です。

サタンとは誰でしょうか。サタンは神様の姦夫です。姦夫。自分のお父さんを殺し、自分のお母さんを強姦し、その家の主人になりすますのです。世界の人類はこのような大怨讐を逃しておいて怨讐に対して敵を討つことのできない群れになったのです。

皆さんは姦夫を愛することができますか。それが神様の苦痛です。神様がどれほどかわいそうかというのです。その姦夫はどんな姦夫ですか。三代を蹂躙しました。おばあさん、おじいさん、お母さん、お父さん、自分まで、三代を蹂躙したというのです。それは何を意味しますか。この天の国の王宮を全部サタンが占領して、おばあさん、自分のお母さん、自分の妻までもみんなその場で強姦して殺してしまったのです。サタンはこのような怨讐だというのです。

愛の怨讐、サタン悪魔を許せば、天地がひっくり返るので、本然の愛を取り戻すためには許すことができないというのです。これを審判せずしては取り戻すことができないというのです。ですから不倫な愛の関係を神様が一番怨讐視するのです。これが膨張したので、神様が安着できないのです。

人間世界の知識が何に必要で、権力が何に必要で、富が何に必要ですか。人間世界の愛だとか家庭だとか何が必要ですか。否定しなければなりません。堕落人間はサタン、姦夫の血を受け継いだ血族です。「ぺっ！」とつばを吐かなければなりません。

神様の息子、娘には誰でもみななりたがります。本来の創造原則がそうで、そうならなければならないのに、そのようになれる血族から生まれるべき人間たちが怨讐に引っ張られていって、神様の愛の怨讐であるサタンの血を受けたのです。神様の血を受けて生まれなければならないのに、とても悔しいことです。

サタンは何を主張するのでしょうか。「あなたは神様ですが、私は悪魔になりました。それを認めます。私は悪魔です。それではあなたの原理を見れば、天使長を造ってアダムとエバを造るとき、天使長であるルーシェルという存在を永遠の愛の標準のもとで造りましたか。ちょっと一時的な愛の標準として造りましたか」と質問するのです。そのとき、神様はどのように答えなければならないでしょうか。「臨時に愛する標準のもとでお前を造った」と言うでしょうか。言うまでもなく「永遠を中心として造った」と言うのです。そうするとサタンが「私は変わったとしても、あなたは変わることができないのではないですか」と言えば、神様が「そうだ」と言うのです。「私が変わって破壊的行動をしたとしても、あなたは破壊されてはいけないのではないですか」と言えば、「そうだ」と言うのです。たった一つ、これをつかんでいるというのです。

怨讐を愛さずしては天国に入れません。怨讐を愛さずしては天国に入れないと言いましたが、その内容を霊界で知ってみると、どんなにうらやましいかというのです。なぜそうかといえば、アダムとエバは堕落したとしても、神様の原理原則は変わりませんでした。天国に入る原理原則はアダムの堕落前も後も変わりがないのです。それでは本来堕落しなかったアダムが完成していたならば、完成と同時に神様とアダムが合わさって……よく聞きなさい。天使長であるルーシェルを愛して天国に連れて入らなければならないのが原理原則だったというのです。そのような原理原則は残っているのです。サタンがそれをもって主張するのです。

この世で犯罪を犯した者でも自分の罪の実状を知っている人がいないときには、どこに行っても堂々と罪を犯していない人のように振る舞うことができるのです。しかし、とても小さい少年でもその人が罪を犯す現場を目撃したと指摘するときには、その犯罪者はそれに屈服するのです。ですからサタン悪魔を屈服させるには、サタン悪魔の正体を暴いて罪状を暴露し、天上と地上で追放運動をすればいいのです。

神様は永遠の公法の主人公であられるので、神様の前にサタンを引っ張っていって讒訴しなければならないのです。サタンを告訴しなければなりません。サタンが弁護するのを見て、検事の立場で論告をして微動だにできないように締め付けておかなければなりません。そうして堕落した天使長ではなく堕落していない天使長たちが「正しい！　まさしくそうだ！　正しい」と言わなければなりません。

四　善悪の実はエバの生殖器

一) 下部を覆ったのが罪の表示だ

皆さん、エバが善悪の実を取って食べたのか、りんごを取って食べたのかよく分かりませんが、取って食べるには、まず目で見て、次に手が行って取って、その次に口で食べたはずです。取って食べるには、目、手、口が動機です。行動した実体なので、取って食べたのちには目を覆い、手を隠し、口を覆わなければならないのに、アダムとエバは取って食べたのちに、下部を覆ったのです。これが問題です。

人は心情的な子女の立場で生まれましたが、ここで生まれて大きくならなければなりません。成熟して宇宙を主管できるようになるためには、回らなければなりません。それで神様もここに降りてきて、軸と一つになり、宇宙を回さなければなりません。原理において「善悪の実を取って食べるな」と言ったのは、成熟する時まで待ちなさいという意味です。それは何かといえば中央の点が決まるときまで、そこに定着できるその時まで待ちなさいというのです。

愛が先ですか。自覚が先ですか。愛が先です。そうすれば万事に通じます。そうなれば人生が行く道には壁がなく、谷間の道があり得ないというのです。天理のギアが歯をぴったり合わせて、ぐるっと回ることができるようにする天理の大出演だったのにそれを離れて、女性が自分の自覚で始めたというのです。聖書に何を取って食べたいと言いましたか。善悪の実を見ると食べるによく、目が開けるという自己自覚！　これが問題になったのです。ですから自分が自覚する立場、自己主張できる立場に立っているのは妖邪なサタンの侵犯圏、堕落性の侵犯圏にあるということが分かるでしょう。これをはっきり知らなければなりません。

悪魔がどこに根を打ち込んだのかといえば、体に打ち込んだのです。神様はアダムとエバを造りましたが、彼らは未成年の時に堕落しました。善悪の実を取って食べるなと言いましたが、それは果実ではありません。善悪の実を取って食べるとき、手で取って口で食べたなら、手を隠し、口を覆ったはずなのに、なぜ下部を覆いましたか。これが死亡の落とし穴です。人類文化を滅ぼし得る根源地です。皆さん、愛という言葉が極めて聖なる言葉であるにもかかわらず、なぜ下品な言葉として使いますか。なぜ下品な言葉だというのですか。それが天地の大道を破壊したからです。

それが何ゆえに神様がこのように手をつけられず、無力になりましたか。何の堕落のゆえにそんなにひどいのですか。善悪の実を取って食べたなら、なぜ下部を覆ったのですか。血を汚しました。血を汚したということは命を汚したということです。命を汚したという

ことは愛を汚したということです。天地の大道の神経器官になるべき人間が、未成年期に堕落しました。女性を誰が強姦したのですか。僕である天使長が神様の娘、未来には神様の王妃になることができ、神様の外的な体になることができるエバを強姦してしまったのです。血筋をひっくり返したのです。こんな話は初めて聞くでしょう。

善悪の実とは何ですか。何だか知っていますか。女性の陰部を言うのです。韓国語で「俺はあの女を取って食べた」と言うでしょう。韓国語は妙だというのです。男たちはそんな言葉を使います。「あの女を取って食べよう」と。聖書も知らない人たちがそう言うのです。それは心にあるままを告げるのです。すべての者が良心にあるままを告げなければなりません。終わりの日にはみなありのままを告げなければなりません。

善悪の実を取って食べて原罪が生じますか。お父さんが善悪の実を取って食べたのが罪だと言いますが、善悪の実が何であるがゆえに千代、万代の後孫が罪人になるのですか。これは血統的関係です。血統的に罪の根を植えておけば、遺伝法則によって永遠に行くのです。それができるのは愛の問題しかありません。間違った愛が堕落の原因です。

人間がキリスト教で言うように善悪の実を取って食べて堕落したならば、復帰も一朝一夕にできます。神様が善悪の実よりもっとおいしくいいものをつくって食べさせれば、蕩減になるのではありませんか。理論的にいえば、そうだというのです。

アダムとエバがどこで出会うのかといえば、垂直線に行って出会うのです。出会うには愛を中心として一つになるのです。愛をどこに合わせますか。中心、中心に合わせるのです。それが何かといえば、男性と女性の生殖器です。そこに合わせるのです。男性と女性の生殖器はそのように貴いものです。ですから男性と女性は一生の間、それに侍って生きなければなりません、神様のように。それが至聖所だというのです。

アダムとエバが堕落したのちになぜ下部を覆いましたか。そのような問題をキリスト教は知らずにいるのです。何、善悪の実を取って食べたというのですか。神様がなぜ愛する息子、娘を追放してしまったのでしょうか。どれほど重要な問題なので追放してしまったのかというのです。

エバは二つの世界の母体になりました。善と悪の中間の立場になったというのです。それでは善悪の方向を誰が決定しなければならないのでしょうか。自分自身が決めなければなりません。そうするには悪をたたきつぶし、サタンをたたきつぶして、神様にしがみつかなければなりません。サタンを打つことよりも数倍も強く神様にしがみつかなければなりません。悪を打つためには渾身の力を傾けなければなりません。それと同時にそれ以上の力で神様にしがみつかなければならないというのです。

堕落とは何でしょうか。キリスト教では「善悪の実を取って食べたことだ」と言います。それで善悪の実は木の実だと思っています。しかし木の実は人間の価値と対等ではあ

り得ません。本来植物というものは造るときに、すべての存在の中で人間の下にいるように造りました。それが自分以上のものを堕落させることのできる内容の要素をもつようには神様が造らなかったというのです。

既成教会では善悪の実を取って食べたことを堕落と言います。そのような解釈は唯物論的なものです。物質を食べて霊魂が堕落したとすれば、物質の中から精神が出てくるという共産党の理論と何が違うでしょうか。物質を食べて霊魂が堕落するのでしょうか。物質を食べて堕落することができるでしょうか。霊魂によって物質が堕落したなら、話が分かりますが、物質によって霊魂が堕落したというのは話になりません。物質の中に霊魂があるというのは唯物論だというのです。

二) 善悪の実は命と死亡の分かれ道

聖書を見れば、エデンの園の木の実は取って食べてもいいけれども、園の中央にある命の木と善悪を知る木は見てもいけないし、触ってもいけないとあります。それは何を意味するのでしょうか。すべての木は何ですか。兄弟の関係なので、手を握ってキスをしてもいいけれども、すべての木の実を取って食べてもいいけれども、善悪の実と命の木、男性の生殖器と女性の生殖器は触らないようにしたのです。そのように警告したのです。

それが死亡の落とし穴です。悲運の落とし穴であり、滅亡の落とし穴です。ですから善悪の実だというのです。正しく使えば国が栄えるし、天下がすべて明るくなりますが、間違って使えば天下が真っ暗になるのです。最近はエイズ（AIDS：後天性免疫欠乏症）まで出てきました。終わりの日が来たので、種の滅亡が起こるのです。

人類始祖の堕落の起源になった善悪の実とは何か分かりますか。男性と女性の生殖器です。それを正しく使えば国が栄え、間違って使えば国が滅びるのです。それが善悪の実です。王様でも正しく使うときには国が栄えますが、間違って使えば国が滅びます。それによって家庭が壊れ、社会が壊れ、すべてのものが地獄と天国に分かれます。善の実が結ばれるべきところに悪の実が結ばれたのです。それが善悪の実ではありませんか。善悪の実はみなもっていますか。もっていませんか。男性の生殖器、女性の生殖器が善悪の実です。毒蛇の頭です。イエス様がなぜサタンをまむしだと言ったのですか。サタンをなぜ蛇だと言ったのですか。それが蛇の頭です。それを知らなければなりません。毒蛇の頭です。女性も男性もみなそれをねらっているでしょう。女性も男性も、みなそうではありませんか。

善悪の実とは何でしょうか。愛を間違えば、永遠の悪の実を継承するのです。愛を正しくすれば、永遠の善の実を継承するのです。その善悪の実とは何かの果物ですか。狂った者たち！　善悪の実というのは男性と女性の生殖器を言うのです。

男性よりも女性が堕落し得る素質が多いので、神様が「善悪の実を取って食べてはいけない！」と警告されたのです。女性の生殖器が善なる人を迎えれば、善なる実が出てくるし、悪い男を迎えれば悪なる実が出てくるのです。善悪の実は女性の生殖器のことを言う

のです。男性にはそんなことがありますか。男性にはそんなことがないというのです。

アダムとエバに善悪の実を取って食べるなと警告をするとき、誰にしたのでしょうか。アダムにしませんでした。アダムは思春期になって出て遊ぶのに忙しく、疲れて寝るのに忙しかったのです。女性（エバ）はいつも座って、「太陽の光が暖かい！　ああ、花が咲く！　水もきれいで、空気もおいしい！」とこんなことばかり言っているのです。そうしながら「花のように美しくありたい！」と言ったりしたのではないでしょうか。ですから思春期もどちらが早いのかといえば、女性のほうが早いのです。

善悪の実とは何ですか。善悪の実を見た人がいますか。ローマ教皇は善悪の実を見たのではありませんか。善悪の実を見たことのある人がいますか。見た人がいるでしょう。それが何ですか。女性の陰部を言うのです。それが善悪の実ではありませんか。罪を犯したら息子、娘が悪くなるのであり、善なる夫と一つになれば、善なる息子、娘を生むことになるのです。

善悪の実とは性器のことを言うのです。性器。それは善の実が結ばれ得るし、悪の実が結ばれ得るのです。悪なる者とくっつけば悪なる種子を受け、善なる者とくっつけば善なる種子を受けるでしょう。それが女性の生殖器なのです。エバが堕落することによって悪魔の血を受けました。悪魔が誰かといえば、天使長です。この天使長は僕の代表でした。

神様が警告することに何があるでしょうか。神様として一番理想的なアダムとエバを造っておいて、警告する条件物として何があるかというのです。若い男女に、お母さん、お父さんが警告することとは何でしょうか。注意することは何でしょうか。同じ道理です。神様に注意することのできるものは何でしょうか。神様はお金が必要ありません。知識が必要ではありません。権力が必要ではありません。それらはいつも自分の思いどおりに自由自在に所有することができるものです。しかし愛だけは神様も思いどおりにできません。

「善悪の実を取って食べたら目が開ける」という言葉があります。「目が開ける」という言葉は何を意味しますか。人々が、男性が女性を知り、女性が男性を知ること、すなわち、異性に対することを知ること、それ以上はないというのです。男性として生まれて女性を知らなければそれはばかでしょう。最高の理想とは何ですか。男性が行くべき最高の理想的焦点は女性です。女性ですが、どんな女性ですか。自分の心にぴったり合う女性、若いときも合うし、年を取ってからも合うし、永遠に合うことのできる、このような女性ではありませんか。

神様が人間を造るとき、一番苦労して造ったところとはどこでしょうか。目ですか。口ですか。鼻ですか。手ですか。人間は考えもしないでいるというのです。それが愛の本拠地です。愛の本拠地。愛の本拠地とは男性と女性のそれを言うのです。それが愛の本宮だというのです。そこから男性が愛を知り、女性が愛を知り、それなくしては愛が分かりません。愛の主人が現れることができません。

愛の王宮、命の王宮、血統の王宮とはどこですか。男性と女性の重要な器官です。これは神様の創造当時の聖所です。聖所だったというのです。これを侵犯されれば、すべてのものが壊れていくのです。この一箇所に三つの貴いものが連結されるのです。愛もそこに連結され、命もそこに連結され、血統もそこに連結されるでしょう。重大な三要素の起源地が性器です。

これは本来神様の創造理想から見るとき、一番貴い至聖所です。聖所、至聖所です。至聖所は誰でも入れるところではありません。大祭司長、責任をもった人以外にはそのふたを思いのままに開けることはできないのです。聖書の雅歌に出てくる封をした泉とは、それを言うのです。

命の王宮であり、愛の王宮であり、血統の王宮である貴重なものを、放蕩息子のように何の価値もないもののように扱ったその罪の代価をどうやって払うのですか。深刻な問題でしょう。それは聖所です。神様が最高の貴重なものとして造っておいた器官としての至聖所です。それを汚す場合にはどうなるでしょうか。モーセの路程において契約の箱を汚す者はその場で殺してしまったでしょう。それと同じです。至聖所と同じ愛の本拠地を汚すのは許されません。男性と女性が抱擁をします。愛するというのは天宙的なものです。神人一体圏を成す試金石です。有限が無限に連結される因縁が与えられる瞬間なのです。

聖なる男性と聖なる女性が、聖なる愛、聖なる命、聖なる血統が動いてそこに連結され子女を生むときは、その子女は天国に直行するのです。宗教が必要なく修養が必要ありません。心と体が九〇度の角度を備えて、愛とすべてのものが損失なく育って内外が整えば、教えてあげなくてもみんな分かるのです。私たちのような人はそうです。習ってから統一教会の先生をしているのでしょうか。さっと分かります。既に何がどうだということを知っているのです。教えてくれなくても分かるのです。

善悪の実とは何でしょうか。それは今まで秘密でした。話すことができないものです。先祖の粗です。先祖たちが間違ったので、将来来る真の先祖が出てくるまではこの言葉を公開できないのです。サタンも公開できず、神様も公開できないのです。

五　堕落の恨、神様の復帰の心情

一) 愛の怨讐、堕落の恨

堕落したという事実は、長男長女を追い出したということと連結されます。長男というのはひとり子です。長女はひとり娘です。アダムとエバは、神様の億万代のひとり子、ひとり娘として生まれました。善悪の実を取って食べて、その億万代のひとり子を追放したと考えてみてください。皆さん、息子を一人もち、娘を一人もっていて、息子一人が死んだというとき、父母の痛みはどれほど大きいでしょうか。

七代のひとり子の死は町内とそのすべての村と知り合いたちがみな痛哭するという言葉があります。七代のひとり子を失った父母の悲しみは推し量ることができないので、周辺にあるすべての家庭をもった父母たちと子供た

ちと兄弟たちが同情するということを考えるとき、これは何代のひとり子ですか。億万代です。億万代。それで、父子の関係が成されませんでした。億万代のひとり子を失った神様がそれを再び取り戻すためには、億万代の苦痛を越えずしては取り戻す道がないというのです。そのような天の父母がいたということを知りませんでした。

サタンとは何ですか。神様の愛の姦夫です……その怨讐サタンにエバを抱かせて今まで千回、万回讒訴すれば聞いてあげ、それを愛する立場に立っていたのです。それが神様の立場です。どれほど神様の立場が難しい立場かということを皆さんは知らないでしょう。愛する妻を怨讐に抱かせておいて福を祈ってあげることのできる男の立場、それ以上の立場が神様の立場であることを知らなければなりません。あなた方はそうすることができますか。

サタンはエバの姦夫です。ゆえに神様の愛の怨讐です。その愛の怨讐が数千年の間、来て讒訴しても嫌な表情一つしないで、今まで真の主人としての仕事をやってきたのです。それで神様がこの地に一つの中心を育てあげるまでは、誰でも不平を言ったり、それを反対してはいけません。なぜでしょうかといえば、天使長がいるからです。

サタンは神様の愛の姦夫です。愛の姦夫。これは文総裁が世界的に初めて発表した言葉ですが、悪魔とはいったい何でしょうか。僕が未来に神様の妻になることのできる人を強姦したのです。アダムとエバとは何ですか。神様の体です。聖書のコリント人への第一の手紙を見れば、「あなたの体が聖殿であることが分からないのか」と言いました。神様の家です。家。聖書にアダムが名前を付けたようになったということばがありますが、それは何を意味するのでしょうか。神様がその心の中に入っていらっしゃるということです。

サタンは神様の立場から見れば姦夫です。エバは姦婦で、サタンは姦夫だというのです。そのような立場にある婦人とその娘を、純潔な女性として純潔な娘として考えなければ復帰することができません。そうでなければ、もともとのままに取り戻すことができません。そのような心情圏に処している神様の悲惨な心境は、誰も知りません。先生以外には、誰も知らないというのです。

怨讐に引かれていった自分の愛する妻が、子供を産んで再び帰ってこなければならないとき、そのような母と子を結婚前の純粋な心で迎えることができるでしょうか。サタンは愛の怨讐であり、愛の姦夫です。それこそアダムとエバが堕落した立場と同じです。しかし神様の心情圏では、その峠を越えていかなければ平和の世界はできないのです。その基準が成立してこそ、サタンは自然屈服するのです。

考えてみなさい。愛の怨讐になった悪魔のその息子、娘たちを怨讐の子として扱っていたら、神様のようなことはできません。それを、堕落する前の本然の息子、娘として愛するのと同じ心をもって愛したという基準を立てなければなりません。そうせざるを得ない悲痛な神様の立場を考えたことがありますか。

キリスト教や他の宗教の最高基準が怨讐を愛せということです。神様もこのような原則的な立場にあるので、サタン悪魔を愛さざるを得ないのです。これは愛の怨讐ですが、その怨讐を堕落していないアダムとエバ以上に愛さなければならないのです。なぜそうなのでしょうか。怨讐の懐に抱かれたエバが庶子三、四人を連れて入ってくるとき、お父さんは彼らを自分が生んだ子供たちよりも愛さなければ、エバが本然の立場に帰ってくる道がないからです。何のことが分かりますか。

自分の愛する妻を怨讐に抱かせてあげて、福を祈ることのできる雅量のある男にならずしては神様の息子、娘になることができないという結論にまで到達します。なぜですか。エバとは誰ですか。神様の妻です。サタンが抱いて今まで弄んだ姦婦のようなものを今まで六千年間、六千年ではありません。数万年です。人類歴史を一千万年までと見るではないですか。その間、彼が讒訴しても今まで相手にしてきた神様のその痛い心情の谷間を誰が知るでしょうか。ですから自分の愛する妻を自分の怨讐に抱かせてあげて、福を祈ることのできる心情圏を出入りする経験をしたことのない人は、神様の心情を知ることができないというのです。

結婚の前日に神様を捨てて怨讐に引かれていき、姦婦になり、息子、娘を生んで暮らしていたのを再び本然の、そのような傷のない立場として受け入れなければならない神様の心情を思うとき、お母様を偉大なお母様につくらなければならないと考えるのです。昔のエバよりももっと素晴らしいお母様にしてこそ、エバによって傷つけられた悔しく悲痛な神様の心情の傷を埋めることができるというのです。父母様の家庭がそのことをしなければならないのです。何のことか分かりますか。

先生がこの道を備えてくるには、先生の愛する妻までもサタン魁首に抱かせてあげ、祝福してあげることのできる心がなければならないというのです。何のことか分かりますか。神様がそのような立場に立ったのです。悪魔は愛の姦夫です。怨讐ですが、終わりの日になってメシヤになることのできる資格者ならば、自分の新婦までも犠牲にしてサタンに与え、神様を解放しようとすることのできる立場に立たなければ、神様を解放できないのです。

二) サタンの讒訴条件

神様の愛の姦夫が悪魔です。今まで愛の悪魔である姦夫が讒訴するとき、彼を相手にしてきたのです。彼を人類の前に、全体の人間たちの前に、愛したという条件を取り戻すために今まで耐えてきたのが神様の心情だというのです。なぜですか。堕落しなかったら天使長でしたが、天使長も神様が愛してこそ天国に入るのです。神様と神様の息子、娘たち、天使長を愛した人たちが天国に入るのです。それでサタンが讒訴するというのです。「私は悪魔になったとしても、あなたの創造原理、本然の原則的基準は残っているので、神様も私を愛し、神様の息子、娘も私を愛さなければ天国に行けないのが原則ではありませんか」と言うとき、「うーん！」と言うのです。ここに襟首をつかんで今まで讒訴してきたのです。

サタンとは何ですか。神様の愛の姦夫です。この妖邪なやつが天理の大道を破綻させておいてもずうずうしくいまだにこの地球星で、人類を離さず、かじり食い、はぎ食い、削り食っているというのです。こいつを私が地獄に行って、全部ごみ箱にぶち込むでしょう。ほっておけば神様に帰る本心があるので、ぐるっと回っていくのです。春になりさえすれば、がりがりに枯れた木の枝も朝の日差しに、春の日差しに芽がふくのと同じように、人の心はじっと自由さえ与えれば、本心は自然に神様に帰ろうとします。ですから生きられないようにどっとぶち込むのです。そのようなことを知らないでしょう。自分の運命がそのように悲惨になっていることを知らないこの人類をすべて解放させて、一つにしようというのです。統一しようというのです。

私たちはどんな犠牲でも投入して父の姦夫に恨みを晴らさなければなりません。恨みを晴らすには銃や刀で晴らすようにはなっていないのです。より大きい愛でなければ晴らす道がないと見るのです。ゆえにその怨讐を愛してこそ、本来の創造理論に合格した神様のところに登場するのです。なぜですか。サタン悪魔、天使長も本来、創造当時は神様の愛を受けるようになっていたからです。永遠に受けるようになっているので「あなたが神様になるには、私が堕落したとしても、私を愛したという原則を立てなければこの宇宙を支配できる立場に行けません」と言ってしがみつくのです。ここに引っ掛かっているのです。本当にあきれる事実です。

人間は本来、創造原則に従って神様の息子、娘でなければならないのに、堕落することによってサタンの息子、娘になりました。それで神様は姦夫であるサタンと額を突き合わせて闘ってこられました。讒訴の条件を防ぎながら、今まで人類を取り戻してくる作戦をしてこられたのです。このような気のふさがる神様であることを既成教会の人たちは知らなかったというのです。栄光の神様としてのみ考え「おお！　天地の栄光の中の偉大な神よ」と言っているのです。

皆さん、サタンとは何ですか。神様の姦夫です。したがって姦夫を許してあげれば天理の原則にそぐわないので、許すことができないのです。それゆえサタン世界の人間たちは百回、千回許すことができてもサタンだけは絶対的に許すことができないというのです。それで大審判があるのです。大審判は誰を審判するのかといえば、人を審判するのではなく、人間の心の中に主人の如く臨在しているサタンを審判するのです。

サタンは愛を蹂躙した怨讐です。お母さん、お父さんが寝ているところに入ってきて、お父さんを殴り殺し、お母さんを強姦したどろぼう野郎です。サタンとは何ですか。神様の愛するエバ、神様の実体的相対であるエバを強姦した愛の怨讐です。そのような姦夫に自分の愛する人を渡して祝福してあげることのできる心をもたなければなりません。怨讐を愛するには許してあげるくらいではいけません。そのくらいでサタンが「ありがとう」と言うでしょうか。かけがえのない愛する人を怨讐に与えても祝福してあげることのできる心までもたなければならないのです。これが最後の峠です。それなのにただ信じれば天国に行くというのですか。

今日、人間の堕落をキリスト教徒たちは、蛇がひそひそささやいて取って食べたと言います。原則がどうなっているかも知らない人たちです。ですから神様がどれほどもの悲しく哀れで悲惨で、残念がったでしょうか。アダムとエバが善悪の実を取って食べる瞬間、心臓が爆発するようなもどかしい心情をもたれた方でした。しかし神様は彼らを愛さざるを得ませんでした。皆さんはそれを知らなければなりません。

アダムとエバが善悪の実を取って食べようとするとき、神様が「私が心配したとおりになったな。もう少しやれ」と言ったでしょうか。いいえ。心臓が縮み、すべての感覚が一箇所に吸い込まれていくそんな立場だったでしょう。「それを取って食べてはいけない」。血を流し、震え、形容できない哀絶なもどかしさのゆえに何も考えられない、そのような立場に立たざるを得ない神様だったのです。そのような神様がアダムとエバが善悪の実を取って食べているとき、見物だけしていただろうかというのです。刀があれば歴史を斬り、この天下を斬り、切ってしまいたい心でしたが、そのようにできない立場にいることを、自ら嘆かざるを得なかった神様でした。

神様の前に立っていたアダムとエバ自身が神様の内情を察することができたなら、堕落しようにもできなかったはずです。父母は父母として子供に対して愛の心をもっていますが、子供は父母の深い心情まで知らなかったのです。もちろん幼くて堕落したのでしょうが、その年齢の幼さが堕落の動機になったのではなく、心情が足らずに堕落したのではないでしょうか。「あの方は私に対している。あの方は私と離れようにも離れられない」と、神様が一切の問題に関係しているということを、もしアダムとエバが感じることができたなら、彼は堕落することができなかったのではないでしょうか。結局心情の一致点をもてなかったので堕落したのです。天の願いと自分たちの願いが食い違い、自分の考える方向が天の考えることと食い違っていたから、堕落したのではないでしょうか。

強盗が本来の父を殴り殺し、お母さんを強姦することによって生まれたような立場にあるのが、今日の堕落した人類です。サタンとは何かといえば、神様の愛の怨讐です。サタンは神様の子女を強姦した姦夫なので、愛の神様もサタンを許すことができません。愛の姦夫を許す法はないのです。ですから他のことは許すとしてもサタンだけは許すことができません。サタンを許せば天法がみな壊れるのです。

私たちは神様の心情に背反した堕落した後孫です。皆さん、私たちの先祖が何に背反したと思いますか。取って食べるなという善悪の実を一つ取って食べたことだと思いますか。とんでもありません。心情に背いたのです。神様の心情に背反したのです。問題はそこにあります。どんな心情に背反したのか、創造理想の心情、希望の心情に背反したのです。

サタンをなぜ一度に分別できないのですか。なぜ神様は全能な方なのに一度に引き離せないのですか。血筋が連結されているからです。血筋です。一度に引き抜いてなくしてしまえば、人類の種をみな滅亡させることになってしまいます。サタンの血を受けたのを一度に

引き抜けば人類がいなくならなければなりません。アダムとエバまでいなくなります。たたきつぶさなければなりません。もう一度造るようにはなっていません。愛はアルファでありオメガなのです。初めであり永遠なので、そのような理想的基準になったので、その愛の対象としての人は打つことができません。それを知らなければなりません。

サタンがどのようにして神様の前に六千年間対抗してきたのですか。サタンは今まで神様の前に原理をもってやってきました。「神様、私を処罰することができますか。私を処罰するにはまずこの天地を壊してしまわなければなりません。神様は私を創造されるとき、たとえ天使長が受ける愛であっても完成基準で愛してくださろうと創造されたのではありませんか」と言うのです。天使長も天使長級完成基準で愛を受けなければならないというのです。それで天使長は神様にいつ私を完成段階で愛してみたのかと聞くのです。神様もここにすっぱり引っ掛かるのです。神様が完成段階の愛を天使長に施しましたか。施せませんでしたか。できなかったというのです。自由天地であるエデンの園で天使長にも完成段階の愛をし尽くしてこそ、神様も責任を果たしたといえるのです。そうでなければ微動だにできず、引っ掛かるのです。

神様が六千年の間、息子、娘の首を切ることを数千万回ほしいままにしてきた天使長を追及できないのは、天使長を完全に愛してあげることができなかった責任があるからです。それで今まで誰かが間違えば「神様！　誰々がこのようにしようとします」と言いながら讒訴しなければならない悲しい歴史の背後があったというのです。このような内容は今日統一教会が出てきたので分かるのであって、誰も知らなかった内容です。

神様の前に孝子がいなかったし、神様の前に忠臣の道理、神様の前に聖人の道理、神様の前に聖子の道理、その国を守ることのできる主流の愛の体制がなくなったので、神様が立つ位置がないというのです。今まで囹圄（牢獄）の身として軟禁状態にとどまった神様になっているというのです。天の国は完全に廃虚となって空いています。その痛みを感じているかわいそうな神様であられます。

六　真の父母の祝福と血統復帰

一) メシヤとして真の父母が必要だ

皆さんは真なる父母と関係のない立場で天の前に追い出された偽りの父母の血筋を受けて生まれたので、この血筋から抜け出すためには血筋を踏んで踏んで、引き抜いてしまわなければなりません。そうして血統を根本的に変えなければ天の国に行くことができません。

血統転換を成すためにはアダムの骨髄まで、骨肉の中心部まで入って、将来の子供となるその種に神様の愛と結束された勝利的条件を充足させなければ、神様の子女として生まれることができません。これは理論的に間違いないものです。聖書にそのようにしてきた記録があるからです。そうだとしたら、聖書は神様のみ言だというのです。

メシヤとは誰ですか。真の父母です。それなら真の父母がなぜ必要ですか。真の父母の愛によって再び接ぎ木しなければならないか

らです。ですからメシヤである真の父母が現れなければ、堕落した人間は原罪を脱いで罪のない解放された立場で完成段階の祝福を受けることのできる立場に出ていくことができないのです。

メシヤがこの地に来て、代行しなければならない立場が真の父母の立場です。真の父母の立場。それでは真の父母とは何でしょうか。縦的な真の父の代わりに横的な真の愛を中心とした横的な父母です。キリスト教ではメシヤが神様であり、神様がメシヤだと言いますが、それは間違いです。神様は縦的な真の父です。これは一つしかありません。メシヤは横的な真の父母だというのです。

堕落した人間が要求する救い主とはどんな救い主ですか。堕落した父母の立場ではなく、堕落していないアダムとエバのような立場で神様のみ旨と一体となり、神様の愛を受けて、神様の祝福を受けることのできる真の父母の立場で人類を生んでくれる救い主でなければいけません。そうでなければ人間が原罪と関係のない立場に上がることができません。

皆さんは新しい血筋を受け継がなければなりません。受け継ぐにはメシヤが父として来て、サタン世界に勝った、サタンが干渉できない超世界的な基盤でエバを迎え、蕩減復帰しなければなりません。そうして夫婦の因縁を中心とした家庭で息子、娘を立てて、横的に接ぎ木するということが起こらなければなりません。それで統一教会で祝福をしてあげるのです。統一教会は違います。統一教会は、血筋がどこから始まったのか、神様から始まったというのです。ですからいくらでもサタン世界で反対してみよというのです。反対していたら損害賠償を払うようになるのです。

私たち人間は血統的にサタンの血統を受けたので、それ自体では天の前に帰ることができないのです。ゆえにメシヤは絶対に血統復帰をして、サタンが汚した血統を改造しなければなりません。これを転換させなければなりません。それでメシヤは必ず来なければならないのです。メシヤが来なければ血統復帰ができないのです。血統を復帰しなければなりません。

血統が違うというのはお父さんが違うということです。それゆえお父さんが違う血統をもって生まれた人間は本来、堕落していない本然の父母によらずしては罪を蕩減することができません。ですから今日まで歴史は堕落していない元の先祖になることができる権利をもったそのお一人が来るときまで、宗教の理念を中心に連結させてきました。

真の父母が必要なのは何のためでしょうか。心情圏を中心としてその根を下ろさなければならないからです。今は根が違います。堕落によって幹と枝が全部違います。ここから新しく根が真の父母から始まり、幹と枝が出て、接ぎ木するのです。切って接ぎ木するのです。接ぎ木してそれが宇宙の大きな主流になるのです。サタン世界のすべてのものを切ってしまわなければなりません。根まで切ってしまわなければなりません。

人間は堕落によって神様とは関係のないサタンの実体をもった存在になってしまいました。これは神様の愛とは正反対になるので、

蕩減しなければなりません。蕩減とは原罪を除去することです。原罪を除去するには血統的なものが根本的に存在します。血統的なものは堕落人間としては到底解決できないものです。それでメシヤが必要なのです。

真の父母は何をしなければならないのでしょうか。サタン世界の根である間違った血統を正さなければならず、間違った命を取り戻さなければならず、間違った愛の道を正しく開かなければなりません。聖書に「死なんとする者は生き、生きんとする者は死なん」とありますが、そのような逆説的な論理がなぜ出てこなければならないのでしょうか。サタン世界は殺さなければならないからです。

エデンの園で結婚を間違えたのが堕落なので、今真の父母が正しく結婚させてあげることによって再びひっくり返したのです。偽りの父母がしでかしたことを真の父母が清算することによって地獄を撤廃し、数百数千億の霊界の先祖たちまでも祝福結婚させてあげるということが起こるのです。真の愛を中心とした地上の後孫たちの家庭基盤を通じて、霊界の先祖と地上の後孫が縦的に一つに合わさるだけでなく、このような家庭基盤を起点として東洋と西洋が互いに連結されます。

まずは父母を心から慕わなければなりません。私の命の動機も父母であり、私の希望の一切も父母であり、私のすべての理想と幸福の根源も父母だという基準をもって、父母に侍ることができなければ救いを受けられないのです。皆さんはそのように侍ったことがありますか。皆さんはこれをはっきり知らなければなりません。ですから「私は真の父母と永遠に一つになることができる息子、娘だ」という信念を、自分の存在意識を超越することができるくらいに堅くもたなければなりません。そうでなければいけません。

皆さんが先生をどれほど愛さなければならないでしょうか。根本問題に帰るのです。サタン世界の愛の痕跡がある、その愛がしみ付いた立場で愛してはいけません。それ以上でなければなりません。それはどういうことですか。皆さんが、サタン世界で生まれたお母さん、お父さん妻子、その誰よりももっと愛さなければなりません。それで聖書で「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」と言ったのです。すべてそのような結論を下したのです。そうしながら後では「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」（マタイ一六・二四）と言いました。十字架を負わなければならないと言いました。反対に引っ張っていく力を押さえて越えていこうとするので、十字架です。ここで悲痛な涙を流さなければなりません。

血統を転換するのはメシヤがするでしょうが、転換できるように行動するのは自分自身でなければなりません。このような基準が成されない限り、私たちは救いの道に至ることができません。これは決して易しく成されるのではなく、死ぬか生きるかの境地を通過しなければなりません。四十日断食祈祷だとか血を吐く死の境地に行ってこそ血統転換が可能です。

蕩減条件を立てる方法については先生から教えてもらわなければなりません。もし昔、日本でそれを知ろうという考えをもった一人の人がいて、日本全部と交換してでもそれを買ってきたとするならば、日本は既に世界を統一していたかもしれません。世界でそれよりもっといい事業はないでしょう。聖書に「たとえ人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」というみ言があります。命はそれほど貴いものです。私たちは蕩減条件を立てる方法を正しく悟って自分の貴い命を復活させていかなければなりません。

二) 再臨思想の核心は血統復帰

血統転換は誰がするのでしょうか。それは誰でもできるものではありません。先生がこのことをするために涙ぐましい十字架の道を歩んだということを知らなければなりません。このような基準があるので、皆さんは何の功労もなく祝福という新しい血統を継ぐことになりました。転換の勝利圏を立てるには数千年にわたる神様の労苦と実体を中心とした先生の苦難の生涯がありました。これをパターンとして立ったところが、正に皆さんが立っているところです。祝福とは接ぎ木することであり、接ぎ木することによって、血統が変わるのです。

血統の同一性が必要なので、神様の心情圏に従わざるを得ないのです。なぜそうかといえば、根が違います。幹が違います。ゆえに根が同じでなければならないし、幹が同じでなければならないし、芽が同じでなければなりません。そこには絶対的に血統転換という大変な問題が起こるのです。それは一人ではできません。真の父母がいなければなりません。

神側ではサタンの偽りの愛圏にいる人間をより大きい神様の愛で奪ってきて重生させるのです。人間が偽りの愛の父母、偽りの愛の先祖、偽りの愛の血統を通じて生まれたので、真の愛の父母、真の愛の先祖、真の血統を通じて再び生まれてこそ神様の子女、神様の民になるのです。イエス様の宝血（注：人類の罪を贖罪するためイエス様が十字架にかけられて流した血）の貴さも、聖晩餐の儀式もすべて血統転換を通じて神様の子女になる摂理を形状的に象徴的に現すものです。

統一教会の祝福を受けるところに血統転換式があるのです。皆さん、血統転換式をしたでしょう。蕩減棒行事だとか三日行事だとか……どれほど複雑ですか。そこにはサタンが入って来ることができません。それは真の父母と神様の法によって天国の門を開き、解放を宣言して出てきたものなので、長成期完成級で行使していたサタンは関係することができません。祝福を受けた家庭は血統転換式をしたことを知っていますか。それを経なければならないのです。

復帰家庭には血統転換という絶対語が必要です。皆さんも祝福を受けるとき、血統転換式をしたでしょう。その血統を転換するために聖酒がなければなりません。そして聖酒という酒が出てくるためには二十一種類の聖別過程を経なければなりません。それが何か分からないでしょう。それは空中で実を結ぶものと地で実を結ぶものと地のもとで実を結ぶものを中心として、その次には鉱物世界、植

物世界、動物世界で最も貴いもの、このように二十一種類の聖別されたものを通じてその過程を経るのですが、そのすべてのものが讒訴条件に引っ掛かってはいけません。七カ月の間使わずにおきますが、そこに不祥事が起こってはいけません。皆さんはそれを飲みましたが、それが簡単に出てきたのではありません。

皆さんは血統転換、これが実感がわかないでしょう。皆さん、いつこのようになりましたか。そのカイン・アベルがいつ……先生がアベルになるときには、皆さんはカインとして完全に一つになるのです。この関係があるので、皆さんが先生と一つになれるのであって、この関係がなければ大きい問題が起こるというのです。

この烏合の衆、足りない者たち、みんな何と言うか、人間のいとこみたいな者たちを集めておいて……統一原理の特約とは何ですか。神様の息子、娘になる特権的な内容を中心としてサインしてもらって、真の父母様のサインをもらって真の父母を通じて血統転換をしたという立場に立って、解放者という名前をさっともらえば天国にも入ることができるというのです。入るには礼服を着て、入らなければなりません。服を脱いで行くことはできません。天国に入るには礼服を着て入らなければならないというのです。その礼服とは何ですか。統一教会の原理で武装してそのとおりに実践した人だというのです。特権はすべてもらったのです。この世にそうすることのできるものはありません。

神様の心情はどこで連結されますか。理論で連結されるのではありません。血統を通じてこそ連結されるのです。皆さんは神様の心情の血統を受けましたか。今まで知らなかったというのです。それで皆さんは祝福を受ける前に血統転換式があるのです。その時は私は何もないという無の境地に入らなければなりません。私の体はないという立場に立って、父母様の血肉を再び受け継ぐ結着点が私から始まるという信念をもたなければなりません。

皆さんが祝福を受けるとき、血統転換式をしたでしょう。皆さんは何も知らずに先生がさせるとおりに従ってやっただけですが、それがそんなに簡単なものではありません。イエス様が夫婦関係を成すことができなかったので歴史がこんなに混乱してきたということを考え、その目的に合う一双を立てるという心情的基準から見るとき、祝福で血統を汚すようなことがある場合には大変なことになります。これは刑罰が問題ではありません。エデンの園では未完成期に堕落したのも追い出しましたが、完成の心情的基準で罪を犯したとすれば言うまでもありません。それは後ろ姿も見たくない神様であられます。先生もそうです。

祝福を受けるとき皆さんは血統転換式をしたでしょう。その次からは完全に変わらなければなりません。真の父母が出てこなかったならこのことが可能でしょうか。創世以後どれほど大変な道を歩んできたでしょうか。真の父母が出てきたことだけでも有り難いですが、真の父母から祝福を受けたということはもっと驚くべきことです。こうして伝統、その伝統が何かといえば、血統の伝統です。真の愛と真の命と真の血統を植えたことが伝統になっているのです。これをいつも考えなければなりません。

祝福家庭はどんな意味をもっていますか。祝福家庭を中心としてみるとき、サタンが祝福家庭を支配することができないというのです。先生を完全に信じてどんな国ででも真の父母様に属しているという信念をもって立っているとき、サタンはそれを侵犯できないのです。なぜでしょうか。父母様の心情を中心として血統転換した心情圏に連結されているからです。ですからここからはサタンが手をつけることができないのです。

「私は堕落してあなたの血統的すべてのものを蹂躙しましたが、あなたがあなたの息子と天国に入るためには血統転換をさせなければならないのではありませんか。あなたの血筋と連結された一つの根……あなたが命の主体ならば、あなたからアダムが命の種を受けたのです。ですからあなたからアダムが受けた命の種がエバを中心として連結され、根になることができる本然の基準を成して、その基準であなたの血族の立場に立たなければなりませんが、そうするには今私の血族の中に立っている彼らの血統を転換させて、根を改造しなければ天国に入れません。天の国にはアダムの根の人が入るようになっているのであって、天使長の根の人が入ることができますか。入れません！」と言うのです。何のことか分かりますか。

血統転換という怨痛な悲運の運命をもった堕落の後孫になったことが、息が詰まる悲痛な事実です。これを抜け出すためには力の限りを尽くして解放された息子の姿、娘の姿として現れなければならず、神様に対してためらわずに、お父様と言えなければなりません。自信がありますか。先生は神様に対して「お父様！」と呼ぶ自信があるでしょうか、ないでしょうか。自信があります。

復帰途上で僕の僕の時代から僕の時代を経て、養子の時代、直系の時代に上がらなければならないのです。それでは完全に僕の僕の時代を経て、僕の時代、養子の時代を経て、直系時代と因縁を結ぶことができますか。直系の時代と因縁を結ぶにはただ結ぶことはできません。必ず原理によって信仰の基台を経て、実体基台を経て、メシヤのための基台を経なければなりません。すなわち、メシヤを迎えなければならないというのです。メシヤは神様の真の息子です。養子と真の息子は血統的な関係が違います。ですから血統転換が必要だというのです。

堕落人間は血統を転換しなければなりません。これが根本的な問題です。神様と人間の関係は父子の関係ですが、このようなすべてものが未知の事実として残っているので、歴史が解かれなかったし、今まで神様の摂理を知らなかったというのです。血統転換も個人圏、家庭圏、民族圏、国家圏、世界圏と、すべてしなければなりません。これはメシヤが来なければならないのです。メシヤが。父母が出てくることによって父母から血統が出てくるのです。父母が出てこなければ、血統が転換されないのです。このようなすべての問題に個人が責任を取らなければなりません。個人がすべてこのようなことをして、越えていかなければなりません。これを知らないので、知っているメシヤが来て、代わりにしてあげるのです。

堕落人間は出発が間違ったというのです。ですから再び戻らなければなりません。戻るには戻りますが、どこに行くのですか。原点に帰らなければなりません。偽りの父母で始めたので、戻って真の父母で再び始めなければなりません。ですからどれほど深刻でしょうか。私が神様の愛と神様の命と神様の血統を再び受け継がなければなりません。それで皆さんが祝福を受けるとき、血統転換式をしたのです。それを私の命よりもっと信じなければなりません。統一教会の一つの儀式だと、ただ一般の宗教儀式のように考えてはいけないのです。これは死んだ人を回生させる注射の薬と同じです。解毒注射です。解毒注射。

聖書の歴史を見れば、ヤコブはお母さんと一つになりお父さんをだまして祝福を受けたし、タマルの役事を中心としてもこのように背倫の行為をしたのに、ユダの支派を通じてイエス様が来るということばは何を意味しますか。血統転換という問題があるからです。血統を清めなければなりません。ここにキリスト教だけが血統を重要視して、血統浄化を主要思想としてきました。他の宗教にはこのような歴史がないので、ここについていくべきだという結論が出てくるのです。ですから血統転換ということを中心として見るとき、文総裁はキリスト教を抜くことができなかったのです。それで選民思想を受け継いだキリスト教を抜くことができなかったのです。すべての宗教が同一だと言ったならどうして私が迫害を受けるでしょうか。何のことか分かりますか。骨子の思想がこのようになっているからです。はっきり知らなければなりません。

第三章　蕩減と復帰の公式

一　母性復帰から見たリベカ、タマル、マリヤの役事

一) エバの堕落とリベカ、タマルの欺きの役事

堕落は母の胎内から始まりました。それゆえ復帰も母の胎内からなされなければなりません。そこが悪の根源地となり、出発点になったので、復帰においてもその原点に戻らなければならないのです。それで神様は二人の兄弟を立てて、長子権を復帰する摂理を行うことになったのです。すなわち、カインはアベルの位置に下がらなければならず、アベルはカインの位置、すなわち長子の位置に上がらなければならなかったのです。しかしカインはアベルを殺してしまいました。この行為は、アダムとエバの時の堕落行為の反復でした。すなわち復帰された立場はおろか、再び天使がアダムを主管した立場に立ってしまったのです。

考えてみてください。エバが堕落するとき誰をだましましたか。神様をだましました。神様に隠れて、神様に相談せずに勝手に神様を否定する立場で堕落したのです。次に、アダムは自分の夫であると同時に神様の息子です。父子を否定する立場で堕落したがゆえに、アダムを失いました。このようになったのを蕩減復帰するために神様はリベカを立て、神様の代わりに父イサク、アダムの代わりに息子エサウ、この二人が分からないように祝福を奪ってくるのです。言い換えれば、逆になったものを取り替えるために、リベカはヤコブを通して、失った祝福の長子の嗣業を奪ってくることのできる条件をもつようになった

のです。条件です、条件。その実体を得たのではなく、条件を得たのです。

天使がエバを誘惑しましたが、今度は逆に、エバが誘惑するのです。そのようなことを蕩減復帰しなければなりません。ですからタマルは舅 と関係を結ぶことになったのです。
関係を結ぶ時の約束で、やぎの子をやるというのを、印と紐と杖の三つのしるしとなるものをくれと言って受け取り、保管しました。
「私のはらんだ子の父親が誰かということを確認させるためには、たとえ死ぬとしても、それを残して死ななければ」という覚悟で、タマルは証拠物を受け取って保管したのです。

マリヤも、エバとほとんど同じではありませんか。自分の夫であり、兄であるアダムと父である神様、神様と兄と夫をエバが欺いたように、タマルもそのようにしたのです。自分の未来の夫となる人、そして舅、夫と兄とすべての兄弟を欺いたその内容は、すべてエバの行為と一致する蕩減の内容となるのです。それがタマル自体を中心として、マリヤを中心として相似しているのです。

エバが三人の男性を欺いたように、いつも三人の男性を欺くのです。リベカが三人の男性を欺いたでしょう。神様、自分の夫、自分の息子を欺きました。またタマルも三人の男性を欺きました。舅と一番目の息子、二番目の息子を欺きました。またマリヤは誰を欺きましたか。マリヤも神様、そして自分の父母、自分の夫。同じです。エバが父を欺き、兄を欺き、夫を欺きました。アダムが兄であると同時に夫です。同じなのです。

マタイによる福音書第一章に四大遊女が出てきます。そこにバテシバが出てくるでしょう。タマルが出てくるでしょう。その次に遊女ラハブが出てくるでしょう。次にはルツが出てくるでしょう。四大淫女が出てきます。彼女たちはみな淫女です。夫がいるのに他の男と関係をもったのですから淫女ではありませんか。聖書を一度読んでごらんなさい。よく読んでみなさいというのです。それゆえイエス様は正妻を通して生まれることができないのです。めかけを通して出てきたのです。

聖書は聖なる経典であるのに、許されないような内容がたくさんあります。そうではないですか。ヤコブがリベカと一つになって、兄エサウと父を欺いて祝福を受けるというようなことがどうして起きたのでしょうか。またタマルが舅と関係を結んで生まれたペレヅとゼラを中心として、ユダの支派が祝福を受けるようになったのはなぜかという問題、人類の道徳観では解決できないこのような問題があるのはなぜかということです。
マタイによる福音書第一章には四大淫女が出てきます。タマルとバテシバとラハブとルツが出てきます。マタイによる福音書は創世記に匹敵するものですが、歴史時代において最初のページにこのような女性たちを中心として清くない汚点をもつ女性たちがこのように出てくるのはなぜかということです。このような問題は、すべて堕落原理を知らずしては解決する道がありません。謎として残っているのです。ところが文総裁の時代になって初めてそれをすべて明らかにしたのです。

二) タマルを中心とした腹中根本復帰

考えてみてください。カインとアベルが、エサウとヤコブが生まれてすり替えようとしました。そこにはいつも母子協助が必要なのです。エバがアベルを擁護したのです。次にエサウとヤコブ時代には、リベカがヤコブの側になり、うそをついて助けたのです。ところが、神様が祝福をしてくださったのはなぜかという問題については誰も知らないのです。そしてヤコブの時に双子として生まれてすり代わったのです。それでも駄目だったので、ペレヅとゼラを中心としてタマルの腹中から出るときに争って、すり代わって次子が長子を押し退けて出てくるということが起こったのです。これはすべて、本然の父母の血統的基準に接近するための運動であったという事実を知らなければなりません。

神様はリベカに「二つの国民があなたの胎中にあり、二つの国民があなたから分れるであろう」（創世記二五・二三）と言われたのです。二つの国に分かれるということです。一つの国は天の国であり、もう一つの国はサタンの国です。ここから争って血統復帰をしようとしたので三代を要したのです。腹中で争ってひっくり返して、腹中から血統を継承したという基準を立てなければならないのです。ヤコブが三代目にして外的に勝利しましたが、内的な勝利の基盤はタマルの腹中から生まれたペレヅから成されたのです。これが復帰の原則です。

タマルの役事を中心として考えると、タマルは天の天道を引き継ぐために自分の生命を懸けたのです。文総裁と同じように生命を懸けたのです。そしてヤコブは天使と命懸けで戦いました。ももの骨が折れても一晩中手を離すことはありませんでした。それはどういうことですか。ももの骨を打たれなければなりません。ももの骨を誤って用いたことが淫乱ではありませんか。それゆえ、我々統一教会では結婚をしたあとで蕩減棒儀式をするのです。蕩減棒儀式とは何でしょうか。どこを打つことですか。腰を打つことです。この腰を誤って用いたのではありませんか。この聡明な文総裁がどうしてそんなことをするのでしょうか。しかし仕方がないのです。

昔、天使長がエバを誘惑したのとは反対に女性が舅を誘惑して、天命を賭けてアブラハムの理想を相続するために、自分の身は肥しとなり、今にも石に打たれ死んだとしても……その当時ユダヤの法は寡婦が子をはらむと石に打たれて死ぬというものでしたが、それを覚悟の上でした。どういうことか分かりますか。「ユダヤの血統を残すことが私の願いであり、そのためにはこうするしかない。殺すなら殺しなさい」という志を立てて、死を覚悟して進んでいったのです。祭物的死を覚悟して決断して勇み立ったタマルのこの役事は、驚くべき女性の役事となったのです。

イエス様の先祖が、そこから生まれたのです。これは驚くべき事件なのです。これを考えると堕落論を否定することはできません。なぜ神様がこのような摂理をしなければならないのでしょうか。人類は腹中から汚れたので、腹中からすり替える転換点を立てなければならないので、タマルがそのような悲運の運命の中に立ったのです。

さあ、歴史始まって以来、初めて兄と弟が腹中ですり代わるということが起こったので

す。ユダの時になってタマルという不法的な行動をした女性によって、初めて歴史が正されたという事実を私たちは知りました。このようなタマルの勝利の伝統を受け継ぎ、信じて進む人にはサタンが侵犯することができないという起源が、ここから始まるのです。タマルのような心情的歴史的伝統を受け継いで、ユダの支派の伝統を受け継いで信じて進む人には、サタンが侵犯することができないのです。すり替えられたことを中心として、伝統が受け継がれてきたのです。

タマルという女性は神様の血統、すなわち祝福というものを重要視した人物です。血統を受け継ぐためには、どんな冒険でもするという歴史的な代表の女性です。これはどんな位置と同じかというと、エバの位置と同じです。エバは人類の母として神様の直系の伝統的継代を受け継ぐべきであったにもかかわらず、これをないがしろにして破綻させたのです。それを復帰するためには、エバの上を行く女性が出てこなければならないのです。死んで滅びることをものともせずに、ひたすら神様の祝福を受ける血統の代を残すことを、自分の生命よりも価値あるものと考える女性が出てこなければならないのです。そのような女性がタマルです。

ユダはタマルの舅でしたが、父の立場にありました。父と娘が一つとなることによって彼女は妊娠しました。結局タマルは舅によって息子を妊娠したのです。創世記第三十八章を見ると、ユダには三人の息子があり、タマルはその長男の妻でした。彼女の夫は死に、このような場合、ユダヤ民族の慣習ではその二男によって息子を生まなければならないのですが、二男も死に、三男は幼なすぎました。それでタマルは神様の復帰してきた血統を継承することが何よりも重要であり必要なことだと思い、舅ユダによって子を妊娠するという最後の手段を使わざるを得なかったのです。その時、彼女は誇りも捨て、生命までも投げ出す覚悟をしました。彼女は遊女の衣をまとい、舅が通る道端に座って、農場に行くユダを誘惑して関係を結んだのです。

タマルは舅と血縁関係を結ぶために生命を投げ出しました。今すぐにでも石に打たれて死ぬかもしれないし、二つの家門がすべて打ち殺されるかもしれないというものでした。タマルはそのような状況の中でも、自分の体面と威信を捨てたのです。自分の夫が死んで、夫の弟を迎えたのですがその弟も死にました。ところが三男は幼くて、彼によっては天の祝福を受けた血統の代を受け継ぐことはできませんでした。そのような立場でタマルは、自分の威信と体面を捨てて生命を犠牲にしてでも天の祝福を受けた代を残さなければならないと誓ったのです。タマルのその心、それが貴いのです。

エサウとヤコブのときを考えてみると、リベカの腹中から闘ったのですが、先に生まれたエサウはサタン側です。ヤコブは生まれてから長子の嗣業を奪ったのです。ところがペレヅとゼラはタマルの腹中で闘い、ペレヅが長子の嗣業を奪い返したのです。母の腹中は息子、娘の生まれる根本ですが、その根本からすり替えられたのです。生まれてから替えたのではなく、腹中から替えられたのです。

腹中ですり替えられて先に生まれた息子に向かって、サタンは「お前は私の息子だ」ということはできないのです。腹中ですり替えられずに先に生まれたならばサタン側ですが、腹中ですり替えられて先に生まれたならば天の側なのです。タマルの腹中で闘ってペレヅがゼラを押し退けて生まれたので長子の嗣業を奪ったのです。ですから生まれつき長子なのです。ペレヅは必然的に次子となるべきであるにもかかわらず、長子の立場で生まれたので、善が先に生まれたということができます。

天の祝福が貴いものであるがゆえ、天の選民思想を残すことは重要なことです。それゆえその血統を受け継がなければならないのですが、自分の夫は死に、夫の兄弟がいないというのです。ユダヤの風習では兄が死ねば弟が兄嫁をめとらなければならないのですが、弟は死んでいないのです。それで血統を受け継ぐために、仕方なく遊女の衣をまとって舅を欺いて子をはらんだのです。どういうことか分かりますか。サタンの世界に行って奪ってこなければなりません。それゆえ舅は夫の代わりであり、兄の代わりです。そのような立場に立てて長子権を……アブラハム、イサク、ヤコブ、ユダ、四代すべての祝福を受け継ぐために、タマルは生命を懸けて断行したのです。

サタンがどこに子の種を蒔いたかというと、子宮に蒔きました。それゆえ、ペレヅとゼラも双子として生まれたのです。一つの腹中に二つの種が蒔かれたのです。ですから双子なのです。タマルの腹中から生まれる二人の子がペレヅとゼラなのですが、その兄が先に出てこようと手を出したときに赤い糸を結んだのです。これはのちに、再臨の主の時に、共産主義世界から全権を代表した独裁者が先に現れることを意味するものです。それで第二次大戦時代はヒトラーのような独裁者が現れ、ソ連にはスターリンのような人物が現れたのです。スターリンは一九五三年に死にました。その時から中国とソ連が分かれたのです。先生が獄中から解放されて出てから三年目に死んだのです。歴史はすべて偶然ではありません。

三) イエスの路程におけるマリヤの使命

タマルは複数の男性を経て息子を生んだので、駄目なのです。ですから養子です。それゆえ、タマルのそのような志操を受け継いで、処女の身で精誠を尽くして神様の前に召命を受けることのできる女性がいなければなりません。そのような処女がいなければなりません。その処女がマリヤなのです。

マリヤはその時代において、自分の生命を懸けて神様のみ旨を誰よりも一生懸命追求する女性でした。あたかもタマルのような志操と忠節を尽くし、貴い天の血統を残すためにはいかなる冒険も強行することのできる大胆な立場に立っていた女性が、すなわちマリヤでした。天使ガブリエルが現れて、マリヤに遠からず懐妊するであろうと予告したとき、マリヤは「どうして、そんな事があり得ましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」（ルカ一・三四）と答えました。天使が再び「神には、なんでもできないことはありません」（同一・三七）と言うと、マリヤは「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」（同一・三八）と答えたのでした。

イエス様はどのようにして生まれたのでしょうか。イエス様は血統を清めてこられました。兄弟から生まれ、双子時代を経て、エサウとヤコブを通して長子権を復帰し、タマルの腹中でペレヅとゼラの歴史に例を見ない、熾烈な闘いを通してひっくり返し、順序を変えて、血統転換を子宮でしたのです。先に出る兄を押し退けて出てきたのでペレヅと名づけられました。兄ゼラを押し退けて先に出てきたということです。タマルの腹中から兄ゼラの手が出てきたとき、産婆が赤い糸を手に結んだのは、今後この世界の継承者が現れるとき、共産主義が先に現れるということ予示したのです。これを退けて長子権復帰ができなければ、世界が統一されないのです。

タマルのような立場にあったのが、ヨセフの婚約者マリヤです。マリヤも母を欺き、父を欺きました。そして自分の夫ヨセフを欺いて子を妊娠しました。アダムとエバがそうして堕落したので、蕩減復帰原則がそうなっているのです。婚約時代に天倫に背いたので、マリヤはタマルの伝統を受け継いで、子宮に神様の伝統的歴史を受け継がなければならないのです。神様の祝福を受けた血統を尊重するマリヤは、自分の生死を越えて、自分が死んだとしてもそうしなければならなかったのです。ユダヤの法では、処女が妊娠すれば石に打たれて殺されることになっていました。そうでしょう。女性はみな、生命を捧げる覚悟をしなければならないのです。

ヨセフと婚約をしたマリヤという女性は、エバと全く同じです。アダムとエバが堕落したとき、どのような立場にいたかというと、婚約した立場にいたのです。アダムとエバが婚約した段階で堕落したのと同じなので、それを蕩減復帰するためにはリベカの伝統を受け継ぎ、タマルの伝統を受け継がなければなりません。そうして血統を清めた女性を代表した基準において、それを相続することのできる位置に立った人物がマリヤだったのです。

蕩減復帰原則によってこのように欺いたマリヤは、その時代の法からすれば石に打たれて死ななければなりません。石に打たれて死ななければならないのに、妊娠したイエス様を殺すわけにはいかないので、天がヨセフに「ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである」（マタイ一・二〇）と伝え、ヨセフは仕方なくマリヤを迎えたのです。

天使長の血を受け継いだので、天使長と同じような人物を通してイエス様を懐妊させたのです。聖霊によって身ごもったですって。そんなばかげたことはもう終わりにしなさいというのです。蕩減復帰原則がそうなっているのです。神様が特別に愛する天の側で、一〇〇パーセント永遠に変わらない天の側の忠臣になることのできる天使長のような人物を立てれば、サタンが天使長の位置から去っていくのです。ですから、天使長級の天の側の人物を通してイエス様を生んだのです。このようにしてイエス様は長子として生まれたのです。堕落した長子権から新しい血統へと清められ、天の側の長子権として生まれたのです。それゆえイエス様を信じる人が神様を中心として神様の愛に接することになるので、その血統はサタンとは異なるのです。

ヨセフとマリヤが婚約したのは、アダムとエバが婚約段階にいたのと同じ立場です。それで神様は、婚約した関係にいるマリヤとヨセフの間からマリヤを奪わなければならなかったのです。神様がマリヤを奪わなければならないのは、失ったエバを復帰するためです。それでヨセフは、誰の立場ですか。天使長の立場です。ヨセフは元来、アダムの立場に立たなければならないのです。しかし、どうしてヨセフが天使長の立場ですか。堕落した後孫なので、種が違うからです。すなわち、根が違うというのです。ヨセフは堕落の種をもっているというのです。それゆえこれをひっくり返すには否定しなければなりません。それではその種は、どこから出てこなければなりませんか。神様から出てこなければなりません。

その子がどんな子かと言えば……。堕落した世界において、アダムのような立場の人が初めて成熟して天の側の天使長の立場に立つことのできる代表者になって、天の側の天使長の種を受け継いで本然の種以上の立場に上がってこそ神様の直系の子女ができるのです。ですからイエス様のお父さんは誰ですか。お父さんが違うのです。ヨセフではありません。天の側の天使長圏ですが、堕落した天使ではありません。だからと言って、神様が来て赤ちゃんを生んであげたのではありません。サタンは天使長でしょう。天の側で忠臣になることのできる、堕落した天使長以上の天使長格でなければなりません。サタンが讒訴できる位置ではありません。サタンが讒訴できない血統的土台とその種の内容がなければなりません。堕落は落ちて下がっていきましたが、再び上がることのできる心情圏を受け継いで、神様の息子の権威を受け継いでくるのがメシヤだというのです。複雑だというのです。それで、初めてこの地上に神様の初愛を受けた長男が生まれたのです。

イエス様が歴史的な背後のもつれたすべてを蕩減することができる過程を経ていくためには、母の絶対的な支持が必要でした。ガリラヤのカナの親戚の婚礼で、イエス様の母がぶどう酒がなくなったと言った時、イエス様が「婦人よ、あなたは、わたしと、なんのかかわりがありますか」（ヨハネ二・四）と言ったのは気分が良くて言った言葉でしょうか。「親戚の婚礼で何をばかげたことを言っているんだ。母としてすべきこともせずに」とはねつけたのです。それが分かりますか。

イエス様は公的に立った人物なので、公的なすべての規約を、天法に従って結婚するようになっているのであって、適当に出会って生活する男と女のようなわけにはいかないのです。歴史の方向に照準を合わせ、その摂理の時代に照準を合わせなければなりません。蕩減復帰のためにはそれが絶対に必要なのです。それが合わないがゆえにイエス様は結婚できなかったのです。

万王の王権をもってくるイエス様は、どのように来られましたか。血統を転換させ、勝利的な伝統を受け継いで来ました。それゆえ、マリヤの腹中に妊娠してもサタンは「それは私の息子だ」と言うことができないのです。タマルの心情的伝統を受け継いだ歴史的な基準の上に、国家的次元でマリヤが懐妊したので、エバの過ちを蕩減復帰したのです。それと同時に、歴史的願いである女性の行くべき道の前に結実の場に立って血統転換、長子復

帰完成基準の心情圏の上で懐妊したので、腹中からサタンが自分の息子だと主張することができないのです。タマルにおいてペレヅは、生まれてから天の長子として主張することができるのであり、腹中では主張することができなかったのです。

イエス様が、仏教の釈迦牟尼、儒教の孔子、イスラム教のマホメットのような方と違うところは、どこでしょうか。血統を清めて来られた方は、歴史上イエス様しかありません。そこが違うのです。釈迦牟尼とイエス様のどこが違いますか。マホメットとはどこが違いますか。イエス様が釈迦牟尼やマホメットと違うところは、血統を清めて来られたということです。それがメシヤの特権です。そこが違うのです。歴史においてこのような歴史が繰り広げられることによって、イスラエルの国に初めてイエス様を中心としたキリスト教の出発がなされたのです。こうして真の父の立場に立つのです。

イエス様は万民に対して、このように宣布しました。「誰よりもわたしを愛しなさい」。誰よりもというのは、堕落した世の中を意味するものです。堕落した世の圏内は、堕落した愛の基準のもとにあるということです。その基準を越えなければなりません。ですから集約すれば、過程を中心とした自分の母、父よりも神様を愛するべきであり、本然の父母であるメシヤのために生きるべきであり、自分の妻や夫よりもイエス様を愛するべきなのです。それはどういうことでしょうか。蕩減復帰原則において、サタン側の愛を凌駕することのできる愛が、初めて出発することのできる基準を立てて宣布したということです。

祝福というのは、男性と女性の二人が出会うことではありません。イエス様はザカリヤの家庭、ザカリヤの族属、ザカリヤの一族の者とヨセフの一族の者、二つの家門、カイン・アベルの関係にある氏族的基盤の上に立たなければなりません。これが、イエス様の結婚の立場です。ところが、これができずに死にました。それゆえ、これを蕩減復帰するためのものが祝福です。イエス様とヨセフの家庭は、アベルの位置を意味します。そしてザカリヤの家庭は、カインの位置を意味します。

イエス様と洗礼ヨハネとの関係は、カインとアベルのような関係です。イエス様と洗礼ヨハネとは兄弟です。明らかにされていませんが兄弟です。洗礼ヨハネは最初の妻から生まれ、イエスは二番目の妻から生まれました。最初の妻から生まれてはいけません。それゆえ終末には淫乱が蔓延するのです。女性が身を売るという風潮が広がるのです。女性を解放しなければなりません。最初の夫ではならないのです。終末には放蕩な女、淫女、通りの女を通して偉大な人物が生まれるのです。どういう意味か分かりますか。めかけは堕落した世界から愛を奪ってくるのです。ですから今日、本妻であれ何であれ、めかけが逆に勢力をもつような時代になってきているのです。なぜそうなのでしょうか。最初のものはカイン側の愛であり、二番目のものは天の側の愛であるので、二番目のものを通して役事するのです。それゆえヨセフといった人物もイエス様も、二番目です。分かりましたか。

二　真のお父様の歴史的蕩減路程

一) 蕩減路程を行く心構え

私が四十年前に、四十年後にはこれこれこういう時が来ると言いました。その時は本当に小さな存在でした。服がなくて、二重のパジ（注：ズボン）も大切に表地と裏地を別々に青く染めてはき、上着がないので米軍の青い作業服を着て、靴は運動靴、その運動靴も日本人がくれたものでした。そのように三カ国の服を着て歩いたのです。そんな身なりで歩きながらも「これはみな蕩減復帰のためだ。蕩減復帰するためにアメリカのぼろ、韓国のぼろ、日本のぼろを私が着て歩くのだ」と言ったものです。それはどれほど素晴らしいことでしょうか。

私たちの教会は蕩減復帰の道を歩んできました。蕩減復帰をするために事情の多い道を経て、先生は今までこれくらい基盤を築いてきました。滅びることなく、サタンの鼻にかかって釣られることなく残りました。この基盤は誰のために築いたものでしょうか。自分のために築いたのではなく、人類のために築いたものです。これを統一教会のものとして残してはいけません。人類のためのものです。統一教会は今後なくならなければなりません。一つの主権の中に入っていかなけなりません。それがすべての宗教が望むところです。

イスラエル勝利圏の出発者ヤコブからキリスト教文化圏まで、四千年基盤を築いてきたものが失敗したのを、レバレンド・ムーン一代の四十年間で、どんな辱めを受けても、これを元に戻し蕩減復帰しなければなりません。それが四十年荒野路程でした。

イスラエルの歴史は、ヤコブからイエス様を経て今まで四千年の歴史です。この四千年の歴史を四十年で蕩減復帰できなければ流れてしまうのです。すべて壊れてしまうのです。四千年の歴史を四十年に圧縮して、すべてを蕩減しなければなりません。全世界が反対するのです。一つの国も例外があってはなりません。それはユダヤ教から、キリスト教から、アメリカから、共産党まで、すべてが先生に反対したのです。

イスラエルの路程は蕩減復帰路程です。モーセに従っていけばいいのです。しかしモーセは六十万の生死の圏に責任を取って天と地を抱いて倒れたのです。モーセがシナイ山で四十昼夜を徹夜断食しながら石板を受けようとしたことは、どれほど悲痛な事実でしょうか。モーセが安楽な立場にあったでしょうか。あなた方は何ですか。今までやくざのような格好をして。大家に来て暮らしながらも、その大家の歴史も知らず、何をするのかも知らずに、何も知らずに目を気にして飯を食い、人目ばかり気にしてきたのです。みな恥ずかしい事実を知らなければなりません。

荒っぽい人を見ると、足も大きく手も大きいのですが、先生の手足を見ると、苦労をしないお方だというのです。このように貴い体をもって生まれた方が苦労をしてはならないというのです。自分で考えても、苦労をしてはならないお方が苦労をしたという事実がおかしいのです。それは蕩減復帰を知らないからです。

皆さんは偽物です。偽物、偽物なのです。本物になることが易しいと思いますか。溶鉱炉に何百回も出たり入ったりしなければならないということを知らなければなりません。

蕩減復帰、心情圏の復帰のために自分の息子、娘を刑場に送る父親となるとき、涙なしにはできないのです。アブラハムもそうでした。天理の大道を切り開き、神様のために、神様を愛の圏の中に解放するためには、このまま座っていてはならないのです。今日このような位置を備えたのも、偶然にそうなったのではありません。血の涙の出るような、血の涙が凝り固まってたまるような、そのような過程を経て統一教会の基盤が築かれたのです。その基盤を知れば涙なしに座ることはできず、痛悔の念なしには座ることができないという事実を知らなければなりません。

私は一生の間苦労してきましたが、私は豪華な高い位置で歴史を蕩減していこうというのではありません。私が享受することのできる福をあとに残しておいて、皆と苦労を共にし、先生が高く上がるそのような民族的な尊敬心も皆さんと同じ立場で、国家の解放とともに歓喜の一日を望むのが先生の希望だということを知らなければなりません。

監獄に入る人はみな、監獄に入るときから絶望と落胆の思いをもちますが、ここに立っているこの人は、監獄生活のあとにやってくる結果はどんなものであろうか、ということに相当な関心をもちます。皆さんは蕩減復帰を学んだので分かると思います。この峠を越えれば何が起こるか、今受けている苦痛が問題ではなく、その苦痛のあとに来る新しい歴史的な一つのプレゼントが何であろうかということを、いつも考えていたことが今も記憶に新しいのです。

責任分担を完遂できなかった私たちの先祖の罪により、サタンの愛の領域が天国の門前の境界線まで連結し、死亡の深い淵が生じたのです。それで先生は、世界から反対を受けながら国家基準を越えて蕩減復帰路程を行くのです。こうしてアメリカが民主主義世界のキリスト教文化圏を中心として本来の水平線、直接主管圏と完全に一つとなった位置で、世界的蕩減条件を立てた基台の上でカイン・アベルが蕩減復帰してきたのです。

蕩減復帰の道は厳粛なものです。間違いなく四十年間に失ったものを取り戻してくるのです。四十年前にキリスト教とアメリカが一つとなり、韓国を抱いて統一教会を支援したならば世界復帰は七年以内に終わったことでしょう。今日このような問題を四十年かけて、ヤコブから再臨時代までの四千年の再蕩減歴史を四十年間かけて家庭を引っ張って蕩減復帰し、監獄に入ってでもありとあらゆる苦労をし、これを一つにして清算しなければならないという使命、召命を受けたがゆえに、先生は生命を投げ出してその道のために闘ってきたのです。そのような歴史路程にこの者たち、あれこれ考えては勝手に遊んでこのようになったのです。悔い改めなければなりません。今からそのような人とは、私は会いません。これからは法で治めます。法で。

蕩減の道を歩みながら不平を言ったとするならば、既に消え去っていたことでしょう。蕩減復帰の道がどのようなものか、私がよく知っているからです。蕩減の道においては、世界的な迫害を受けなければなりません。万民が個人的立場から、世界五十億の人間が一対一ですべて反対する立場で、私が敗者にな

らないためにその反対する五十億の個人、彼ら以上のことをすべて成すという度胸をもたなければならないのです。そうでなければできません。

第二次大戦直後に、世界はすべて長子権復帰することができたはずでした。キリスト教が統一教会の文先生と一つになっていたならば、今日のような四十年の歴史は生じませんでした。共産主義は既になくなっていたはずです。先生の言うことさえ聞いていたならば、韓国は分断されることはありませんでした。キリスト教を中心として神霊な団体が、すべて私の言うことを聞いていたならば……ところがエデンの園を復帰するために準備されたすべての団体が、この世的な考えをもつことによって、洗礼ヨハネのような運命へと流れていってしまったのです。そうして解放以後、統一教会が反対を受けることによってこれを再び収拾するためにキリスト教の二千年歴史、ヤコブからの四千年の歴史を繰り返すということを、四十年間に蕩減復帰してきたのです。

先生は一人で蕩減復帰するのです。この世は知らないのです。こうして個人復帰、家庭復帰、このことをしてきたのです。サタン世界が蒔いたとおりに実ったのですが、この実った世界にメシヤが来て、これを再び救わなければ救う道がありません。解放直後、先生と一つとなりさえしたならば、七年路程を中心として一時に個人カイン、家庭カイン、氏族カイン、民族カイン、国家カイン、世界カイン、全体カインを蕩減復帰することができたのに、信じなかったので四十年延長されたのです。

先生がキリスト教とアメリカ、韓国の反対を受けることでどのような立場に立ったかというと、国のない一人の人になったのです。国がないのです。国がないと同時に民族もなく、氏族もなく、家庭もない孤児のような立場に落ちてしまったのです。ここから四十年の間に取り戻して、国家的、世界的霊的版図基盤の上に立たなければなりませんでした。しかし、霊的版図だけではならないのです。霊的版図基盤をキリスト教文化圏から引き継いで、国家基準の実体文化圏を再び取り戻し、その基盤の上に世界の実体キリスト教文化圏をすべて蕩減復帰しなければならないのです。

イスラエルの歴史は、ヤコブの時代から始まりました。イスラエルという勝利した伝統的な歴史を世界的勝利の基盤に、キリスト教文化圏を通して統一圏がつくられていたのに、これが反対することによって分かれたので、四千年を四十年で再び蕩減復帰しなければなりません。もしこれを四十年でなすことができなければ問題は大きくなります。この四十年間が歴史上大変遷の時代なのです。ですから、サタンが最も脅威を感じていた第二次大戦の直後に、サタンが全面的に後退するはずだったのですが、すべてがサタン側に立つことによって天が全面的に後退し、サタンが世界を全面的に支配し、天の側の統一教会を責め立て始めたのです。

僕の僕から始めるこれは、内的蕩減分別路程なのです。サタン世界のすべての縦的な蕩減条件をすべて立てれば、サタンが攻撃しようとしても攻撃する条件がないのです。ですから先生自身が僕の僕から僕に、僕から養子に、養子から庶子へと、このように蕩減復帰

してきたのです。その次は息子復帰、母復帰をしなければならず、アダム復帰をしなければなりません。男性として最高の位置に上がり、女性として最高の位置に上がったという条件を立てて初めて父母の位置に上がるのであり、ただ上がっていくのではありません。内的蕩減条件、これを確実にしなければなりません。

復帰のためには、人がどんな干渉をしたとしても、自分自身の確固とした主体性をもって進まなければなりません。人がどんな道を行こうと、私の行く道は忙しいのです。横からどんなことを言われても、そこに神経を遣っている暇はありません。夜寝る時間がありません。落ち着いて、楽に座って食事をする余裕もありません。そのような切迫した心情をもたなければ復帰の道を行くことができません。

先生は生涯命懸けで闘ってきました。この世なら苦痛を避けて通ることができますが、これを避けることもできません。腕力や暴力をもってできることではありません。原理原則に従ってなさなければ、四方から押し寄せる矢を避けることができません。このような闘いは、神様が天地を創造されることよりも、もっと困難なことではないかと思われます。そのようなことをしながらも蕩減を立て、内的な基盤を築いてきたということは、皆さんは夢にも考えることができないことでしょう。そのような基盤を礎にして転換点を築いたということは、天宙的な勝利だということができます。

私が今死んだならば、私のように神様を愛し、私のように人類を愛する人がこの地にいるだろうかという懸念が先立ちます。そのような意味で私が長生きしなければならないのです。先生は皆さんの中からそのような人が早く出てくればどんなにいいかという目で、皆さんを見つめているということを知らなければなりません。神様がこのレバレンド・ムーンに祝福してくださるとすれば、神様が私にそのような人を下さることが一番のプレゼントであり、祝福であると考えるのです。今まで不信され苦難を受けてこられた神様を、先生以上に愛し、先生以上に人類を解放するために努力するという人がこの時間に現れるならば、きょうは栄光の日なのです。

ある霊通人が、文先生が偽物か本物か祈祷していて痛哭したのです。我知らず痛哭するのです。一日、二日、毎日痛哭するのです。どうしてでしょうか。文先生を知るには痛哭する心情を知らなければなりません。それを知らずには文先生が分からないのです。誰かが私に向かって一言ったならば、私は千年の恨を抱いて痛哭できる事情をもっているということを誰が知っているでしょうか。私が神様を知らなかったとすれば、それほど悪口を言われることはありません。神様をあまりにも知っているという罪によって……私だけを信じるしかない神様がどれほどかわいそうなことでしょう。二千年間のもつれた歴史を、二十年間で蕩減復帰しなければならないのです。ですから容易でしょうか。容易に言うことができるでしょうか。

蕩減原則をもって、歴史時代に神様が悲しまれたすべての事情と苦痛を解いてさしあげ

なければならないのです。そうしてこそ、その子が、過ちを犯して神様を苦労させた不孝者だということを知り、父母に仕えるにおいて不孝をした以上に、孝行の限りを尽くすことのできる真の孝行息子となるのではないかということです。それゆえ神様に仕えるにおいて自分のすべてを犠牲にして、御苦労される父母様の労苦を、歴史時代にどれほど苦労されたかを知らなければなりません。一歩一歩少しずつこのように清算することのできる時代になったので、神様に侍り、皆さんが今からでも神様の苦労を代わりに背負い、神様を解怨成就してさしあげなければなりません。

救世主はいったい何をしに来るのでしょうか。政治をするために来るお方ではありません。今日キリスト教で言うには、主が来ればすべて空中に上げられ、自分たちは連なって引き上げられ、地上の人々はみな……。違います。そうではありません。審判するというのですが、救世主は審判しに来られるお方ではありません。その方は神様の息子、娘であると同時に、人類の父母として来られるのです。人類の父母として父母の心をもって来られるお方が、病気で死にそうになって呻吟している息子、娘を見て「お前はあの地獄に行け」と突き放すことができるでしょうか。堕落したこの世の父母でも、自分の子が死んでいく悲惨な姿を見ればのどを詰まらせ痛哭して、自分の生命を失ったとしても、子を生かすためならどんなことでもしたいという気持ちが先立つのです。それが父母であるのに、本然の父母の心情をもって来られる救世主はいかばかりでしょうか。審判というのは考えられないのです。そうではありませんか。

さあ、先生と神様が会うとしたら、笑って会うでしょうか、痛哭して会うでしょうか。考えてみてください。私が思うには、昏睡状態に陥ると考えられます。涙を流すとすれば体面があり、死ぬとすれば体面があるからです。体面がありません。四十年の生涯をやったとはいえ、誇るものは一つもありません。恥ずかしいばかりです。そのように思うのです。

統一教会の文先生という人が現れたので幸いです。人間の百五十万年という歴史的な恨がもつれ、絡み合ったものを元に戻すために、どれほど苦労したか知れません。限りなく転がっていくこの歴史的な悲惨な姿を、天の前に戻すための道を、誰が切り開くかということが問題です。統一教会の何年かの歴史の上に数千年の歴史が展開され、数十万年の歴史が背後でかみ合って動くのです。悲しみの歴史を、統一教会が蕩減の悲運を負って取り戻してきたということを忘れてはなりません。

私がこの地に人間として生まれ、本然の地上の万物を神様のように愛し、動物を神様のように愛し、人間を神様のように愛したがゆえに神様の愛の相対になったのです。神様から出発したので神様に帰るのです。神様は皆さんが生きている間に、何億万倍も素晴らしくなることを願っておられます。それゆえ御自身よりも素晴らしい息子となって帰ってくることを願っておられるという事実なのです。

先生の名前には興味深いものがあります。「文」という字をこのように早く書けば父という字になります。そして「鮮」という字は羊と魚を意味します。このように父を中心として陸地と海を合わせたものなのです。次に

「明」は日と月です。海を一つにし、陸地を一つにする、カインとアベルを一つにする統一的真理を教え、日と月が一つとなる統一的真理を教えてくれる方とは誰かというと、神様だというのです。神様は知恵の王です。知恵の王であると同時に、神様は父母なのです。

二) 真のお母様を選ぶこと

キリスト教を通して二千年の間再臨主が来ることができるようにしたがゆえに、キリスト教文化圏を中心として、第二次大戦直後にキリスト教とアメリカを中心とした勝利的基盤の上に先生が立ったならば、先生が苦労をしたでしょうか。その当時に先生を受け入れたならば誰がお母様になっていたでしょうか。聖進様のお母様が駄目ならば誰がなったでしょうか。イギリスの女性です。み旨からしてイギリスの女性です。イギリスの王宮が先生と関係を結ぶのです。そこはキリスト教文化圏ではありませんか。アメリカはイギリスが生んだのです。ですから李博士（注：李承晩）がなぜ西洋の女性を妻にしたかというと、そのような象徴的な意味があったのです。それゆえキリスト教が反対することによって、お母様が福を得たのです。

エバ復帰のために、七数を蕩減復帰しなければなりません。お母様を一九六〇年代に立てて一九六八年まで七年路程を経て「神の日」を定めるまで、お母様は迫害の時代に入ったのです。それで統一教会の女性たちはみなお母様を虐待して、あらゆる謀略中傷をする期間なのです。そのことをお母様は知らないので、お父様の言葉に絶対服従してこそ越えることができるのです。「ああしてこうして私の言うとおりにしなさい」と。ですから聖婚式ののち三年間は外に追い出して、三年を経てから先生と一緒に部屋の中に入ったのです。これはすべて事実です。我々統一教会員はそれが分かりますね。蕩減です、蕩減。個人蕩減路程、家庭蕩減路程を経てくるのです。

「父母の日」、「子女の日」、「万物の日」を立てて「神の日」まで……一九六〇年度から七年路程を経て一九六八年に心情一致圏を中心とした「神の日」を定めることができるようになったのです。お母様も長成期完成級から完成期完成級まで七年路程が残っているのです。そうしなければ心情圏が同じにならないのです。それゆえ先生は一九六〇年に結婚しましたが、七年を経て一九六八年の一月一日に「神の日」を定めたのです。原理的なのです。七年路程は誰にもみなあるのです。祝福家庭も七年路程を行かなければなりません。例外はありません。七年路程をみな行かなければなりません。祝福家庭が七年路程を行くことができなければ天国には入ることができません。統一教会に家庭楽園級が生じるのです。すべてが理論的なのです。

お母様を迎えたのは解放後十四年ぶりのことでした。一九六〇年度です。なぜ十四年なのでしょうか。人間始祖が長成期完成級で堕落したので二次の七年路程を経るという立場で、すなわち第三次七年路程を前にして第二次七年路程の終結時代に堕落したからです。ですから蕩減復帰原則によって十四年の迫害の路程で韓国に着陸して、統一教会という祭壇をつくり、既成教会と大韓民国と闘いなが

らお母様を選んで立てたのです。お母様を立てたところから初めて地上に着陸したのです。

お母様は二十歳を過ぎていてはならないのです。それはなぜでしょうか。アダムとエバがティーンエイジャーの時に堕落したからです。その時に堕落したのでお母様はそのような年齢でなければならないのです。どんなにもどかしいことでしょうか。この複雑な統一教会、統一教会を動かすために、お母様を選ぶのに大学を出た博士のお嬢さんもぞろぞろいて、目をぎらぎらに燃やして先生の相対になろうとありとあらゆる工作をしているのを眺めながら、何も知らないティーンエイジャーの女性を探さなければならない運命も大変なものです。仕方がないのです。蕩減復帰の原則があるがゆえに勝手にはできないのです。

蕩減復帰の原則を知っているがゆえに、四十になるまで槍柄のように年を取らなければならなかったのです。そして年の多いお嫁さんをもらえるわけでもなく、十八歳……十八歳を越えてはならないのです。統一教会に大学を出た博士、学士がぞろぞろいて、目をむいて射て捕らえようとするような女性の群れがおおかみのようにほえている所で、それにかまわず何も知らないお母様を迎えたのですから、どれほど大変なことになったことでしょうか。

結婚してからは妻の母（注：洪ハルモニ・大母様）に「三年間は絶対に正面の門から出入りしてはならない。母親だからといって訪ねてくるな。エデンの園でエバには母親がいなかった。正門を通ってはならない」と言ったのです。こんなことがあっていいのでしょうか。この世から見れば、妻の母親の前で婿たる者が「お母様の部屋に入るときは絶対に後門から入らなければならない。正門から来てはならない、三年間」と言ったのです。それゆえ私が最も恐ろしいのです。見た目にはただ……。

お母様は、エバがアダムを通して造られたように、何も知らないところから来なければなりません。親戚が多くてはなりません。三代がついてくるようではならないのです。縦的な基準において駄目なのです。正常的ではならないのです。今のお母様がまさしくそのようなお母様です。そうではないですか。兄もなければ父親もなく、一人です。母と娘の二人しかいません。また、そのお母さんは、主に仕えるために精誠を尽くすことにおいては韓国の代表です。主が肉身をもって来られるといって、腹中教から従ってきた人々なのです。また、知るところによるとお母様は、そのようなあらゆるエバ的な責任を果たした韓国の歴史を代表するおばあさんたちから祝福を受けていたのです。

三　八段階蕩減路程と八定式

一) 縦横の八段階の蕩減復帰路程

六千年の歴史は個人から家庭、氏族、民族、国家、世界へと来た歴史なのです。統一教会は個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神様の愛復帰まで八段階を経るのです。祈祷するとき、八段階を中心としてするでしょう。お父様、個人復帰完成し、家庭復帰完成しました。それがどういうことかというと、個人復帰完成は最も中心にあり、家庭復帰完成は氏族の中に、氏族復帰完成は民族の中に、民族復帰完成は国家の中に、国家復帰完成は

世界の中に、世界復帰完成は天宙の中に、天宙復帰完成は神様の愛の中にあるのです。すべて神様の愛を中心として天宙的に一つになれという意味なのです。

皆さんの体が、サタンの支配から逃れて神様と一つとなっていますか。自分を完全に否定しなければ、サタンに打ち勝つことができません。ですから三年半苦労をしなさいというのです。乞食、僕の僕から上がっていかなければなりません。縦的に僕の僕から僕、養子、庶子、直系子女、次には母、父、神、このように八段階です。また、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神、これも八段階です。ですから縦的に八段階であり、横的に八段階です。それが原理観です。先生の言葉ではありません。

二) サタンの活動と八段階の勝利

サタンが今まで歴史的に個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神、この八段階を中心としてついて回るものは何でしょうか。「神様、あなたは原則的な主人であり、神様の息子、理想的なアダムとエバ、すなわち真の父母というのは原則的な息子であり、その原則的な父が私を天使長としてつくったがゆえに、天使長の私が堕落する前に神様の愛と神様の息子の愛を受けられるというのが原則だった。そのように愛し尽くさなければ、あなたが原理的な父として原理的な息子を愛する立場に立つことができないのではないか」と言うのです。これが問題です。
私が堕落したとしても、あなたが私を愛してくれなければ私の所有を、本然のエデンでアダムの愛、神様の愛の圏内で主管することのできたすべてのものを取り戻すことはできないということです。個人的には、神様とアベルが一つとなり私を愛して、個人的な愛の条件をもって取り戻すことができるのであって、そうでなければ取り戻すことができないというのです。次に家庭もそうであり、氏族、民族、国家、世界もそのような立場にあり、天地もそのような立場にあると主張するのです。それがサタンが私たちの胸ぐらをつかむ、何というか、首を絞める綱なのです。

統一教会の原理は一つの原則的な道であり、その道を原理の道といって、そのまま入っていくことはできません。八段階を経ていくべき運命の道なのです。個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神まで八段階です。八数は再出発数です。その次に再出発は出てこないのです。

歴史上数多くの苦難の道がありましたが、先生の歩んできたこの八段階の苦難の道は、歴史時代にあった道だという事実を知らなければなりません。だからといって困難さゆえに「神様、私はこの立場を耐え忍ぶことができません」と、涙を流してはならない蕩減の道であったということを知らなければなりません。天国へ行く人は、涙を流しながらその道を行ってはならないのです。涙を流すところを喜びをもっていくことのできる基盤ができていなければ、天国の足場はこの地上世界に残らないという天理原則があるのです。

蕩減復帰は、肯定の条件が少しでも残っていてはなされません。絶対否定の条件によって蕩減条件が立てられるのです。そのように絶対否定の基準が個人、家庭、氏族、民族、

国家、世界、天宙、神に至るまで立てられなければなりません。それで八段階が充足されれば人類歴史の理想郷に連結されます。その段階ごとに必ず絶対否定の過程を経なければ、神様と通じる理想郷を連結することができません。

「その八段階というのはレバレンド・ムーンがつくったものだ。私には蕩減は必要ない」と言うかもしれませんが、とんでもありません。人間の責任分担が事実ならば、人間の責任分担によってこのような形態の過程があるのです。堕落しなかったならば一度に、二十一年間自動的に越えるはずなのですが、このように壁で遮られているので一つ一つ処理しなければなりません。一度に処理することができないのです。サタンがいるがゆえに、一つ一つ処理して代置していくしかないのです。堕落したがゆえにサタンが生じ、蕩減条件が生じたのです。その蕩減条件は人間の責任分担があるがゆえに不可避な過程なのです。

復帰路程は個人復帰、家庭復帰、氏族復帰、民族復帰、国家復帰、世界復帰、天宙復帰、神様の愛復帰まで、八段階を経なければならないのですが、一度にそうすることはできません。アダムとエバが堕落しなかったならばそのまま完成したはずですが、これが歴史時代において僕の僕に落ちたがゆえに一度に上がることができないのです。それゆえ段階を開拓しながら続けていくこの過程には、過程ごとに必ず蕩減条件が必要だったのです。蕩減条件を立てることによってサタンが分立されます。サタンゆえに蕩減条件が必要なのであり、サタンがいなければ蕩減条件は必要ないのです。

個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神までの八段階を上がっていくには、どのように行かなければならないのでしょうか。どこからこの茎を探し出すかというと、横に出て個人勝利をしなければならないのですが、心を中心として横に上がり、カインと闘って勝たなければなりません。このように八段階をカインと闘い、屈服させて上がっていくのです。なぜでしょうか。私にはサタンが付いているからなのです。これを知らなければなりません。

先生はこの世の天地の中でこのような蕩減法を知り、個人から愛の焦点を合わせて家庭的愛、氏族的愛、民族的愛、国家的愛の焦点を合わせてきました。そのたびにサタンがこれを撃破しようとありとあらゆることをするのです。それゆえ宗教は迫害の道を行くのです。涙と血を流さなければなりません。一番高いところに上ってはならないのです。日陰にいなければならないのです。そこが安全地帯です。サタンは驕慢なので、困難なところを嫌います。それゆえ最も悲惨なところが安全地帯なのです。

アダムが個人の立場で堕落したのですが、彼は全体の中心なので、復帰は世界を中心としてしなければなりません。復帰するときには、一時に復帰することができません。一つ一つ復帰していかなければなりません。個人の位置を整備し、家庭的な環境と氏族、民族、国家、世界、天宙的な環境まで整備をしなければなりません。すべて八段階を経るのです。理想世界を求めていく人間は、必ずやこのような問題を解決してこそ愛の主体である神様に出会うことができるのです。どこかがふさ

がっているならば、その基準以下では通じるかもしれませんが、それ以上の世界では通じません。それは絶対的な神様と一つとなる道を得ることができないのです。ある段階まで行けば、蘇生圏と長成圏の霊界までは霊人の協助を受けることができますが、神様と通じることは困難なのです。

僕の僕から僕へ、養子へ、庶子へ、直系子女へ、母へ、父へ、神様まで八段階です。八段階が残っているのです。きちんと分かっていなければなりません。統一教会の責任者となる前に、その国の僕にならなければなりません。そうしなければ解放の道がありません。僕の僕になり、養子の扱いを受けなければなりません。庶子の扱いを受けなければなりません。そして直系子女に……こうして上がっていくのです。この段階に上がるときは必ず蕩減がなければなりません。サタンと決闘して神様の公判による勝敗を決定しなければ蕩減路程を行くことができません。家庭蕩減路程を歩まずに氏族蕩減路程を行くことができますか。とんでもありません。氏族蕩減路程を歩まずに民族蕩減路程を行くことができ、民族蕩減路程を歩まずに国家蕩減路程を行くことができ、国家蕩減路程を歩まずに世界蕩減路程を行くことができ、世界蕩減路程を歩まずに天宙蕩減路程の道を行くことができるでしょうか。はっきり知っていなければなりません。

先生のことを言うと、個人アダムであると同時に家庭アダム、氏族アダム、民族アダム、国家、世界、天宙アダムの歴史を結び合わせてきたのです。僕の僕からずっと縦的に八段階を上がっていくのです。また八段階を上がるだけではなく、横的に個人、家庭、氏族、民族、世界まで、すべてを抱かなければならないのです。世界五十億人類まで、世界まで縦横を中心として蕩減路程をすべて経て上がっていくことによって、サタンが讒訴することのできない解放圏を成就するのです。その道は容易でしょうか。

今までの人類歴史は八十五万年と言われています。約八十五万年と見るのです。その期間、宗教運動は未開な時から迫害を受けてきたのです。それでは、このような歴史は誰がそうさせるのでしょうか。神様です。神様なのですが、僕の僕から段階的に分かれてくるのです。それでは僕の僕の中では、僕が主人となるのです。主人が僕を使うのではなく、僕が主人を使うようになるのです。そうなるには、このように天国の僕の主人になるには、サタン世界をすべて合わせた僕の迫害を受けて勝利しなければなりません。それゆえに死ぬ覚悟をしなければならないのです。それで死のうとする者は生きるという言葉が出てきたのです。

僕の僕から僕の位置に上がり、次に僕から養子の位置へと上がるにも必ず迫害があるのです。ここも同じです。七段階まで。神様まで八段階です。それではこの迫害を誰が受けるというのでしょうか。人は変わりますが、神様は変わることがありません。ですからこの世界の宗教の中には僕の僕の宗教、僕の宗教、養子の宗教、庶子の宗教、息子の宗教、母の宗教、父の宗教、真の父母の宗教があるのです。一番最後には父母の宗教が出てくるのです。終末には真の父母を中心とした真の父母の宗教が現れるのです。統一教会という

言葉ができ、宗教を統一するというのは、真の父母の内容をもった宗教の教理を通さなければそれが不可能なのです。

三) 八定式

縦的な蕩減と横的な蕩減、八段階の蕩減がすべて終わったので、去年（一九八九年）八月三十一日（陰暦八月一日）を中心として八定式というものを、西洋社会でも最も高いアラスカに行って行いました。最も高い所です。そうして九月一日に天父主義を発表しました。天父主義です。愛援主義であると同時に父母主義です。父母主義とは愛そうということです。愛することは、サタンが反対することができません。統一教会が行く道の前にサタンが反対しなければ、あっと言う間に世界的なものへと展開されるのです。

八定式とは何か分かりますか。それは何ですか。縦横です。縦的に上がるには僕の僕から上がったのです。横的には個人、家庭、氏族、民族、国家、世界に広げていくのです。縦的な基準が立たなければ、横的な円形を描くことはできません。円形がすべて一つの八段階にぴったりと合わなければならないのです。これを一九八九年九月一日にアラスカで終えたのです。アラスカは「アラッスムニカ（分かりましたか）」という意味です。

国家的基準と世界的、天宙的基準を中心として八定式を既に宣布することによって、縦的に天が思いのままに往来することができ、横的に天が思いのままに地球星のどの表面までも自由自在に通じることのできる時代が来たので、地球村という言葉が生まれました。地球村だけでなく、地球家族を訴えている統一教会、地球家族的役事が地上に展開し得る時代が来ました。世界全体が、昼と夜に二分されていた世界が、今は一日生活圏内に入り、すべてのものが瞬間的に世界と通じることのできる時代になりました。

八定式が終わったので何をすることができると言いましたか。父母権が解怨成就されるのです。ですからこの時が来るがゆえに、先生は父母の立場から皆さんを氏族的メシヤの立場に立てて、イエス様の立場の解怨成就、アダム家庭の解怨成就をするのです。皆さんの一族を通して、父母の過ちの基盤をすべて解消することによって初めて、すべての人が生まれた故郷が、天国の故郷の地へと転換されるのです。

アラスカで先生が、一九八九年八月三十一日に宣布したのが八定式です。そうすることによって世界人類の前に蕩減が必要のない時代に越えていくのです。それは何を意味するかと言えば、先生が行く所や統一教会の信徒たちが行く所には迫害時代がなくなったということです。これからは天の国に王国をつくるとか、私たちだけで様々なことをやっても、誰も讒訴できません。それで、その基地として定着する式が八定式です。
この八定式を基盤として一九八九年九月一日に天父主義を宣布しました。八定式が終わるまでは長子復帰時代です。長子復帰時代です。今こそ完全に長子権が復帰されたのです。長子権も天の側に復帰されることによって、サタンが反対できない世界的頂上圏に上り立つのです。これから私たちは強く大胆に押せばアメリカも押され、共産世界も押され、韓国

も押される時が来ました。日本も押されるのです。ですから強く大胆でありなさいというのです。

八定式は縦的な蕩減歴史的路程、横的な個人、家庭、民族、国家、世界蕩減路程、八段階の縦横の路程を経て、定着することで、長子権復帰がなされ、この地の世界の人間の前には蕩減の路程が解消されるのです。八定式をすることによって、そうなるのです。長子権が復帰され、父母様が抱くことによって父母の愛の圏内から長子権復帰のための歴史時代の戦争史、闘争史がなくなり、愛によって和合することのできる蕩減の必要ない時に突入したのです。そのようにするためには八定式をしなければなりません。八定式をすることによって、その息子、娘を、長子と次子をもった父母が、このような子供たちを許してくれたので、その次には父母の許し圏の時代が来るのです。

八定式を宣布したアラスカは有名になります。今回私が帰るときに、北極の中央に教会を建てるように言いました。ソ連の共産党が反対すれば、私が責任を取るというのです。ちょうど北極の中央に私たち統一教会が世界万民のための祝福の基盤のために一生の間生きて、死ぬ前には北極の統一教会に来て四十日精誠を尽くして逝かなければならないと言えば……。考えてみなさい。氷山の世界に理想都市ができるのです。そうすれば何百里の道、何千里の道もすべて空中から補給して……。そのように一度やってみなさい。それは素晴らしいことです。それは今日の科学の力をもってすれば何でもありません。今から組立式にして……。そこに飛行場を造り、住もうとするのに何の問題がありますか。それで観光地コディアックに基地を造っておいて……。考えてみなさい。歴史時代にない関門になるのです。

四　長子権勝利と父母権、王権復帰

一) 長子権復帰

本来神様の創造理想から見ると、長子は神側から始まるべきであり、もちろん次子も神側で始まらなければなりません。ところが堕落によって長子権がサタン側になり、次子権が神側になりました。これを替えなければなりません。ですから聖書に出てくるエサウとヤコブの問題を見ると、ヤコブが母の協助を受けて母と一つとなり、エサウにレンズ豆のあつものとパンを与えて長子の嗣業を奪う役事をしたのです。今まで聖書の役事がなぜそのようになっているのか分からなかったのです。統一教会が現れることによって初めてこれが確実になったのです。

堕落圏を越えて長子権も神側の長子権、次子権も神側の次子権を成してこそ、堕落しなかった本然の世界に立つことができるのです。これが本来の創造理想です。神様が絶対的であるからには、その理想も絶対的なものとして残っているので、これを再び取り戻すための歴史過程を経て蕩減復帰し、これを越えなければならないのです。

長子権復帰。それはどれほど難しいことでしょうか。これゆえにすべてひどい目に遭ったのです。修道者が数えきれないほど犠牲になり、キリスト教がローマ帝国で四百年の間苦労し、サタン世界の版図を越えるために血

を流したのです。皆さん、ローマに行って、その洞窟に入ったことがありますか。壇を作って先祖の死体をすべて壇の下に埋め、そのにおいをかぎながら暮らしました。天がそうするように言ったのでそのようにしたのであって、そうでなければ誰がするでしょうか。人間的にはできないことです。ですから天がどれほど苦労したかというのです。歴史上のその功を皆さんは知りません。それを知らなければなりません。

皆さん、原理でカイン、アベルを考えたとき、カインが貴いでしょうか、アベルが貴いでしょうか。どちらが貴いですか。アベルが貴いとみな思っているのですが、それは間違っています。アベルは弟の立場であり、カインは長子の立場です。正しく知らなければなりません。アベルよりも、次子よりも長子の立場が貴いのです。長子は一人ですが、次子はそうではありません。長子が何人もいるということがありますか。長子というのは一人しかいないものです。長子がなぜ貴いかというと、一人しかいないからです。次子は何人にもなり得るのです。それを知らなければなりません。

神様が復帰摂理をしてくるにおいて、長子をサタンの側に立ててきたのが恨でした。それゆえ今日歴史は病んでいるのです。どんな病気にかかったのですか。愛の病にかかっています。愛の病気で過ちを犯して長子を生んだのです。ですから今までの歴史は、順理的な法度の基準を取り戻すために億万年かかったとしてもこれを復帰するための蕩減の恨を抱いて長子を探し求めてきた歴史だったのです。

アベルを立てた目的は何でしょうか。アベルの子を救うためではなく、長子権を立てて家の伝統を正すためだということを知らなければなりません。「えへん、私がアベルだ」と言いますが、責任者たちは心得なければなりません。「私たちはアベル的位置にいるのでこれでいい」というものではありません。皆さんを立てたのは、長子権の一族を定めるためなのです。自分たちが福を受けたいならば、長子権をつくって、その長子が福を分けてあげれば受けるのです。その長子権は自分ではありません。来たるべき主を中心として、縦的な天上世界と因縁を結ばなければなりません。横的世界だけではならないのです。原理で解釈すべきところですが、皆さんはみな知っていると見てこのようにお話をするのです。統一教会の文先生がこの道を知っているがゆえに「ために生きよ」という論理を立てないわけにはいかなかったのです。生まれたのもために生まれたのです。男性が生まれたのも女性のために生まれたということを知らなければなりません。「私」というものはないのです。

サタン側はカインです。兄です。天側はアベルです。この闘いなのです。神様は上の息子を愛してから下の息子を愛するようになっているのです。カインである上の息子はサタン側です。長男がサタン側になったのです。その長男を救うためにアベルを立てたのです。アベルを立てて長子権を復帰するのです。長子権を復帰するのに力づくで奪うのではなく、愛で感動させなければなりません。愛で溶かして復帰しなければなりません。愛したという立場に立たなければ、愛することによって彼らが変わらなければ自分の息子、娘を愛す

ることができません。神様の創造理想から見ると、本来は長子が先に愛されるのであって、次子が先に愛されるようにはなっていないのです。

自分の妻よりも、自分の子よりもサタン世界をより愛したかということが問題です。妻や子のほうをより愛してはいけません。神様はアベル圏を愛する前にカインを先に愛さなければなりません。それ以前にアベルを愛してはならないのです。

自分が勝利するには出ていかなければなりません。出ていって長子権を復帰しなければなりません。長子が弟のような次子を兄として侍り、祝福はすべてお前によって受けるというほどにならなければなりません。そうして長子が次子の立場に来て、次子が長子の立場に上がらなければなりません。そうして長子が「お前が私の代わりに上がりなさい」と押し出してくれて初めて長子権氏族から長子権民族へと進みます。こうして初めて一段階ずつ上がっていくのです。長子が代わりに押してくれてこそ上がっていくのです。そのままでは上がっていくことができません。このような原理的な内容があるがゆえに、この内容をもって長子権復帰基準を完成しなければなりません。そうせずしては神様の摂理を成し遂げることができないというのが歴史の秘密です。ですから真の宗教の道を行くためには家を出なければなりません。国を捨て、家を捨てて出家しなければならないという言葉がここから出たのです。

宗教が今日までなぜ受難の道を行き、宗教がなぜ歴史路程で迫害を受けたときに発展するのか、その原因が分からなかったのです。すべての霊界と宗教世界、神秘の世界の背後でもつれた、サタンと神様のみぞ知る秘密の内容を暴いたのは、歴史上レバレンド・ムーン、先生しかいないのです。これは空論ではありません。そのように動くのです。そのまま、そのとおりに動くのです。皆さんが伝道をしてみてください。その人が決心して統一教会に行くというならば必ずサタンの役事が起こります。間違いありません。公式的なのです。

個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙まで七段階、神様まで行くためには八段階を越えなければなりません。八段階の過程的長子復帰の基盤を通して堕落していない本来の長子の位置に行かなければならないのです。アダムとエバは長子であり長女でした。長子、長女が原理結果主管圏を通して直接主管圏まで、長子権の愛を中心として連結されるのであって、次子的愛をもっては連結されません。それゆえこの位置に戻って長子権を復帰して、一段階、一段階上がっていかなければなりません。この闘いをするのです。

長子を復帰する秘法は何でしょうか。サタンが言うには「神様も完全な神様、神様の求めるアダムとエバも完全なアダムとエバなのだから、堕落しなければアダムとエバは本然の天使長である私を愛するのが原理の基準だ。それゆえ私が堕落して悪い立場にいるとしても、あなた方が善なる正しい立場にいるのならば私を愛したという条件を立てなければなりません。そうしなければ私の前で神様だということはできない」と主張するのです。それが問題なのです。「私があなたと一つにな

ることのできる秘訣が一つあるとすれば、それは何か。あなたが遣わした人が私を愛さなければなりません。神様と一緒に私を愛する立場に立ち、愛したという条件を立てなければ、私が占めている長子の権利と嗣業を取り戻すことはできない」とブレーキをかけるのです。ですからイエス様が怨讐を愛せよと言ったのです。

怨讐を愛するということは怨讐個人だけを愛しなさいということではありません。怨讐の家庭、怨讐の氏族、怨讐の民族、怨讐の国家、怨讐の世界を愛さなければ世界の長子権を取り戻すことはできないのです。それが神様が復帰摂理する歴史的路程だということをよく知っているサタンは、そのように主張してきているという事実を知らなければなりません。

長子権復帰をするためには必ず、サタンが迫害し生命を奪おうとする一線に出て闘って、愛で屈服させて、私たちのもっているすべてを教えてやらなければなりません。そうして彼らが私たちの伝統が良いということを知って、自然に心に感動を覚え、涙で悔い改めて、生命を捧げてあなたのために祭物となりますと宣誓しなければ、カイン世界の祝福権を取り戻してくる道はないという事実をはっきりと知らなければなりません。

愛をもたずにサタンを屈服させることはできません。それゆえ、天国に行くことのできる家庭となるためには、神様も堕落した天使長を愛したという立場に立たなければならず、神様の息子、娘の家庭も、サタンを愛したという条件を立てなければなりません。そして皆さんが出ていって闘い、サタン世界を愛で屈服させたという条件の上に立たなければならないのです。「私は怨讐をみなたたきのめしたのではなく、怨讐を愛で屈服させて長子権を回復した」と言わなければならないのです。

神様は怨讐をたたき殺すのではなく、怨讐を愛したという条件と、怨讐であるサタンを、アダムに代わる立場に立つ人として愛したという条件を立てなければなりません。迫害を受けながら涙と血の汗にすべて打ち勝って、耐えに耐えて自然屈服させて、神様の愛を抱いて戻ってきて初めて祝福を受けることができるのです。そこでサタンは放してくれるのです。「あなたはこれから天国へ行くことのできる子女となれる」という公認を受けなければなりません。誰がサインしなければならないかというと、サタンがしなければならないのです。サタンがしたあとで皆さんがサインし、皆さんがサインしたものを真の御父母様がサインしなければなりません。真の御父母様のサインを通してこそ神様の前を通過できるのです。それが天国です。

世界的にサタンを愛したという条件さえ立てれば、私に従う人はすべてサタンが連れていくことはできないのです。それではどうなるのでしょうか。カインとアベルが入れ代わるのです。皆さん、アベル圏は今までは追われる立場にありましたが、これからは天国の長子権をもって立つのです。そこでは、サタンの天下は崩れていくしかないのです。後退の一路ばかりで、ここに対峙するものはありません。対峙しようものなら、たたきのめされてしまうのです。それが原理観です。

蕩減路程において、世界長子権復帰の基準を成就することによって初めてこの地上に原理結果主管圏と直接主管圏が真の御父母様の名で連結されるのです。この連結された基準、一致した線上にはサタンは存在することができなくなるのです。

二) 父母圏復帰

それでは、蕩減復帰や父母権復帰、長子権復帰、王権復帰といったものがなぜ必要なのでしょうか。サタンの愛とサタンの血統が問題なのです。もともと神様から出発すべきであったのに、悪魔から出発したのです。その悪魔は愛というとてつもないものを中心として出発しました。愛ゆえに宇宙ができました。創造は、すべての創造の起源になる愛を中心としてなされたのです。その根本をサタンがひっくり返したのです。ですからひっくり返った根本を元に戻さなければならないのです。

本来神様の創造理想とは何でしょうか。真の父母の名を通して天の王国と地上王国を築くことです。真の父母の名をもってせずしては天上天国と地上天国ができません。今日キリスト教徒に「イエスが神様の愛する長子であり息子であるのに、どうして天国に行かずに楽園にいるのか」と聞くと答えることができないのです。天上天国と地上天国は、真の父母の完成と愛の基盤を通してのみ築かれるのです。霊界に行って王国を統一することが真の父母の使命であり、他の誰かの使命ではありません。

神様と真の父母のことさえ確実に分かればすべて解放されるのです。生き返るのです。ですから皆さんは神様と真の父母を見せてやらなければなりません。皆さんが神様と真の父母を見せてやる証の実体になりさえすれば、すべて解放されるようになるのです。ですからその人にすがり、真の父母にすがるのです。その人にすがるということは神様にすがるということです。本心を知っているのでとっさにそうするのです。今日私がなぜこのような話をするのかというと、この日がそのような転換期を乗り越える一つの宣布の日なので、お話ししているのです。

このように大変なことなので、歴史時代において苦労しながら今まで延長してきたのです。能力のある神様が、なぜこのように苦労をしてきたのでしょうか。教えてあげられるものならばもう既に教えたことでしょう。アダムが知らなかったので、アダムが責任を取って取り戻さなければならないのです。天地を分けて探さなければならないのです。そのためにどれほど涙を流したことでしょう。涙を流して追い出されたので、復帰路程でどれほど涙を流したかというのです。

そのような点で、文総裁は涙をたくさん流した大王です。歴史を代表して真理の道を探し求めて涙を流し、血肉を裂きながら受難の路程に打ち勝ってきた代表だということを知らなければなりません。そのような驚くべき父母に仕えているという事実を知らなければなりません。これが最後の峠です。それゆえ父母権復帰基準とともに、次子権を一つつくらなければならないのではないでしょうか。先生は先生を中心として長子権、父母権を立てました。王権まですべて備えたので、一つとなれば、お母さんと次子の間に母子協助基盤さえ成せば終わりです。

長子権復帰、父母権復帰、王権復帰の代行者だけが一族だという心をもたなければなりません。そうすれば先生がいなくても自然と天下統一されます。二万四千双以上を祝福しました。二十四数。三×八＝二十四、蘇生、長成、完成の三時代を中心として八数を取り戻して立てました。それゆえ世界氏族的メシヤ権を完全に設定したのです。今は私がいなくても、すべてこのみ旨を中心としてその国を救おうと夜も昼も動けば、世界は一つ所に集まることでしょう。また世界的なあらゆる学者組織、政治組織、あらゆる文化背景組織、レバレンド・ムーン以上に思想的な内容をもった文化的基盤は歴史上ありませんでした。どれを見ても、今やすべて終わったのです。

三) 王権復帰

本来アダムが完成すれば天国の父が完成し、エバが完成すれば天国の母が完成し、そして家庭の主人になれば、家庭的天の王権が生じるのです。したがってアダムとエバは個人的王であり、家庭的王であり、氏族的王であり、民族的王であり、国家的王であり、世界的王になるのです。今やこのような国家基準を越えることのできる時になったので、サタン世界の王権を踏んで、天の世界の王権を定めることができるのです。その日が一九九〇年三月二十七日だということです。これによって世界は今やレバレンド・ムーンが風を起こすとおりに回るようになっているのです。

では、天父主義とは何ですか。第一に兄弟権復帰、第二に父母権復帰、第三に王権復帰です。民主世界には王という概念がないでしょう。民主世界は兄弟主義です。平面的に見るのです。それが兄弟主義ですが、兄弟主義は互いにけんかするのです。お前のもの、俺のものと言いながら争奪が起こるのです。民主主義は争う概念ではありませんか。与党と野党が争い……。その内容は何ですか。王権を互いにもとうとするのです。大統領とは何ですか。王権ではありませんか。これが行ったり来たりして、みな搾取するので、うまくいかないのであって、絶対的な王が出てくれば問題がないのです。絶対的な平和な世界が来るのです。

民主主義の政治体制は闘争の体制です。ですから私たちが父母の立場に上がらなければなりません。そうしてこそ争いをやめさせることができるのです。兄弟たちがみな父母を中心として一つになるのです。そのように一つになるところから平和の世界が展開されるのです。他の方法はありません。まず真の父母を探し出し、そこから真の子女、真の国家、真の平和を含んだすべてのものを探し出すことができるのです。それ以外に他の方法はありません。

神主義は真の父母を中心とした思想です。神主義は垂直圏に属していますが、その垂直圏とバランスをとって、世界の兄弟全部を合わせて球体理想として現れるのです。愛の球体です。その球体はどこからも垂直と通じるのです。その表面は理想圏になるのです。ですからこの世は、表面圏は不平を言うことができません。サッカーボールが転がっていって止まるとき、どの面からも垂直と通じる平等な面をもっているので、価値観によって平等の世界、均衡の世界に到達するのです。はっきり知らなければなりません。

天父主義、神主義を中心として統一するのです。真の父母は家庭の王です。家庭は様々な他の家庭と合わさって自動的に氏族になります。そうすると氏族の王が出てきます。また氏族は他の氏族と合わさって民族になり、民族の王が出てくるのです。国家、世界、天宙も同じです。このように王たちが連結されて神様までつながるのです。ですから神様は王の王になるのです。

天の国に王宮がありません。地上にも王宮がありません。神様の愛を中心とした王宮がないのです。兄弟権を中心として今まで天の国の父母権に代わってこの地上に現れて、王権を立ててすべてを搾取しました。兄弟権王権時代にはなりましたが、本当の縦的父母権王権時代が地上に一度も現れたことはありません。

アメリカのＣＩＡが聞いているところで私が堂々と「統一国開天日」を宣言し「神様を中心とした王権復帰をしなければならない」、「民主世界の兄弟主義時代よりも、父母主義の方が優れている」と宣言したのです。民主主義は兄弟主義です。兄弟主義では争いが絶えません。父母が現れなければなりません。父母が「お前たち、上の者と下の者がこうこうこうしなければならない。父さん、母さんがこうすれば、お前は従わなければならないのではないか」、「はい」これが父母主義というものです。

統一教会では今、王権復帰ということを言っていますね。これは統一家、統一家族を離れてはならないからです。統一家族とは何でしょうか。父母になれるということです。神様が万国の父母の心をもっているように、国に対し、世界に対することのできる父母の心をもっているように、私が国に対し、世界に対することのできる父母の心をもったならば、その家庭から王の子孫が生まれるのです。この王の子孫を連結することによって、王権が回復するのです。それで男性も女性もその道を行くのです。皆さんもそうですね。それは愛し、「ため」に生きる道を通していつでも占領することができるのということです。

王権を復帰するには、東西南北四方に引っ掛かるものがあってはなりません。皆さんの家に王が来るとすれば、二十四時間三百六十五日、いつでも迎えることができなければなりません。三尋もある竿を振り回しても、三六〇度どこにも引っ掛かるものがあってはなりません。いつも歓迎できなければなりません。そのようなことを知らなければなりません。

もし国家の責任者が原理を知った場合は、どうなるでしょうか。国を収拾するのは時間の問題です。ですから王権復帰という時代になるのです。今後は国民がみな信じる必要はありません。その国の大統領が国の憲法を直して原理に立ち返るようにするならば、一度に復帰が可能です。

五　復帰歴史の展開と摂理国家の使命

一) 第二次大戦以後のキリスト教文化の流れ

私がこのような蕩減復帰原理を知っている立場で、第二次大戦直後にキリスト教さえ私を信じていたなら、李博士（注：李承晩）も私の前にひざまずいたことでしょう。李博士が大統領になったのちに私が祝福をしてあげ

なければならなかったのです。昔、ローマ教皇たちが王を祝福してあげたように出発していたなら、大韓民国は分断されなかったのです。三年半の間にそれをやっていたならば……しかしそのようにできなかったので、ざっくり二つに分かれたのです。

レバレンド・ムーンが韓国に生まれたのはイエス様がイスラエルの国に生まれたのと同じです。イスラエルの国はローマの植民地と同じ立場ですが、ローマはサタン側のローマでした。このような立場でイエス様が亡くなったので、終わりの日にイエス様が来るときは、そのような内容を蕩減復帰しなければなりません。サタンがそのように天を打ったことを世界的にすべて除去しなければなりません。取り除かなくては、清算せずしては越えていくことができません。そのような立場に立てたのが韓国です。アメリカの保護圏内で神様の氏族圏、神様のアベル圏独立国家としてアメリカを通じて独立させ、保護圏内に立てて、キリスト教とレバレンド・ムーンをカイン・アベルとして一つにしようとしたのです。ここで一つになっていたら、一度に大韓民国の国家基準を成立させたことでしょう。先生とキリスト教が一つになって、大韓民国を一つにし、その次にアメリカと連結していたら七年以内に世界を収拾していたことでしょう。これが神様のみ意でした。

もし先生がその時に成就していたなら、イギリスとアメリカとフランスが一つになり、韓国はアダム国家になったのです。天の国、縦的国の主権を中心としたアダム国家としてイギリスをエバ国家として率い、アメリカを長子として率いるのです。アメリカは何かと言えば、アベル圏として世界の主導権、世界の版図を率いるのです。世界国家的な主導権を初めてアベル的立場に立ったアメリカがもったのです。それ以外の国々はカイン的立場ですが、カイン的立場はアメリカについていくのです。ですから長子権復帰世界化時代に合わせて、統一的なキリスト教文化圏時代の上に主が来られて、母子協助基盤と連結させていたなら、すべての問題がみな解決されていたのです。

エバが堕落するとき、アダムを誘惑したのと同じように、必ずサタン側エバ国家がアダム国家を強制的にのみ込んで四十年間、四数蕩減路程を通過するようにするというのです。これが何かと言えば、四十年間韓国が日本に圧制を強いられたことです。それは四千年の歴史を蕩減するためです。ですからこの闘いでサタンが倒れるというのです。それでは誰が解放されるのかと言えば、アダム国家が解放されます。それによって天の側のキリスト教文化圏である英・米・仏は完全に一つにならなければなりません。そうすれば天の側がサタンが蒔いたものを取り除いて、アダム国家を取り戻し、エバ国家を取り戻し、アベル国家を取り戻し、その次にカイン国家を取り戻すのです。天の側が収拾するのです。こうして一度に天の復帰的天国開門が可能だというのです。

しかし、七年の間に、七数を完成できませんでした。第二次大戦が終わる一九四五年を中心として一九五二年までの七年路程で、そのようになっていたなら、李承晩政権を中心としてこの世界が完全に、アメリカとイギリスとフランスが一つになっていたなら、今日

本はエバ国家になっていませんでした。ドイツがカイン国家になっていませんでした。韓国を中心としてイギリス、エバ国家、アメリカ、アベル国家、その次はフランス、天使長国家が天の側の国家として一つになり、定着していたならば、その時に統一世界、キリスト教文化圏の統一世界になるのです。そうではないですか。初めてキリスト教文化圏を中心として統一世界が来るのです。なぜ来るのでしょうか。父の国が、アダム国家が顕現できる時を合わせたからです。

韓国はいったいどんな国ですか。イスラエル民族は滅びた第一イスラエルになりました。韓国はイスラエルを継いでサタン世界で栄光の出発とともに神様を中心とした王権を立てなければならなかったのですが、それを失ってしまったので、サタンを中心として苦労して血を流す歴史を経て、回りに回ってアメリカを通過して帰ってこなければなりません。帰ってくるにはどこに帰ってくるのでしょうか。アジアに帰ってきますが、イギリスが失敗したことを日本が蕩減しなければなりません。日本文明はイギリス文明と同じだということをみな御存じでしょう。ですから運転をするとしても日本は左側を行きます。みなイギリスのものを伝授されたのです。

原理結果主管圏というのは間接主管圏なので、サタンがいつも侵犯可能なのです。ですからイスラエル民族は個人的に犠牲になり、家庭的に犠牲になり、民族的に犠牲になり、国家的に犠牲になり、世界的に犠牲の代価を払ってきたのです。犠牲があるのが悪いことではなく、犠牲を払えばその代価として新しい時代が開門されてやってくるということを私たちは知らなければなりません。イスラエル民族はヨーロッパの戦争で、ほとんど全滅したかのようでした。六百万人が虐殺されたのです。この虐殺によって新しい開門が起こったのです。そうして一九四八年にイスラエルが独立したのです。韓国が独立することによってイスラエルも独立したのです。それが自然に三年の期間内に関係を結んで越えたのです。

西欧を中心として世界的な基準にカイン圏を蕩減復帰して、韓国に植えなければなりません。韓国はアジアです。アジアの真ん中です。ここに植えておいたので、この錨綱がここに来ることになるというのです。ですから西欧文明がアジアに向かう、回ってくる運勢の時代になったのです。

二) エバ国家、日本の使命

島国日本はイギリスの文化を一〇〇パーセント受け継ぎました。車もそれで左側通行でしょう。イギリスが左側通行だからです。左は日本の国を象徴します。そうしてどこに回っていくのかといえば、イギリスのような基準を中心として蕩減復帰するのに、半島の国イタリアのような韓半島に来ます。韓半島は何かといえば、男でいえば生殖器です。半島です。イタリアがなぜ世界の文化創造に歴史的貢献をしたのかといえば、半島だからです。半島。生殖器です。島国は女性の陰部と同じです。

カインとアベルが復帰されて誰を通じて入ってくるのでしょうか。お母さんを通じて入ってくるのです。この国が日本です。日本が

一九七八年から世界的な経済大国として登場したのは、エバ国家として選ばれたので、終わりの日にすべての物を収拾して、夫であるアダムにみな返すためです。なぜですか。堕落するときにすべての物をサタン、夫にあげたことを蕩減復帰しなければならないので、日本はすべての物質を収拾して、本然の夫であるアダム国家である韓国の前に捧げなければならないのです。

日本は西欧社会のすべてのものをもってきたのです。政治風土はイギリスのもの、法律はイタリアのもの、それから軍隊はドイツのもの、西欧社会のすべてのものをもって模倣して基盤を築いたのです。日本・ドイツ・イタリアを中心としたここに対して、イギリスとイギリスの息子……イギリスの息子が誰かと言えばアメリカでしょう。日本の息子が誰かと言えばドイツです。ドイツも「わあ、日本というあの小さな国がああだから、この西欧社会は瞬時の内に巻き込んでしまうな」と言うのです。それで戦うのです。エバ国家日本とドイツと同じように、イギリスと息子のアメリカです。その次にイタリアと同じ天使長国家、これがフランスです。フランスは行ったり来たりするでしょう。

先生が日本をエバ国家に立てなかったならば、悲惨な国になっていたことでしょう。キリスト教文化が先生を受け入れた場合は、イギリスがエバ国家です。アダム国家は韓国です。イギリスがエバ国家で、フランスが天使長国家、ドイツがアダム国家として自動的に一つにならなければならなかったのに、これらが神様に背いて反対しました。ですから怨讐が一番愛するもの、エバ国家を奪い、ドイツ男性国家を奪って、み旨の中で立てたのが統一教会を中心としたアダム国家、エバ国家、天使長国家だということを忘れてはいけません。ですから日本を祝福したのは日本のためではありません。世界のため、統一教会と韓国のためです。韓国統一のためにその祝福を使わなければ日本は滅びます。

アジアを見回すと、アダム国家韓国、エバ国家日本、その次に三つの天使長国家です。アダムとエバが堕落する前は、アダムとエバを中心として神様と三天使長がいました。アダムを中心として見るとき、エバはアダムについていかなければならないし、三天使長もアダムについていかなければなりません。アダムを中心としてエバと三天使長が神様と一つになり、天国に入るのが理想です。それで今、アダム格の代表である先生がエバ国家である日本を動かし、アメリカを動かし、中国を動かし、ソ連も動かしています。それで三天使長とエバ圏を迎える立場に回ってきたというのです。

日本文化圏はイギリス文化圏です。イギリスのすべての文明制度をもってきて移したのが日本です。アジアにおいてイギリスのような国、イギリスを中心として世界を制覇していたそのような時代を再び蕩減復帰したのです。それを再現させるための形態が日本だというのです。ですから自動車が左側通行するのです。ハンドルがみな右側にあるでしょう。イギリスと全く同じです。イギリスは島国なので、アジアにおいてそれに対比できる国がこれです。

人類の文明は世界を一周して、再び再臨時代を中心としたアジア圏を求めて入ってくる

のです。入ってくるには、それが蕩減復帰原則によって文明発展の歴史を中心として、サタン世界をすべて天のものとして蕩減したという条件を立てずしては一つにならないのです。それが今アメリカです。アメリカは天使長国家です。アメリカはイギリスが生んだのです。天使長、息子と同じです。アメリカがそのような型になっています。そうして、それがアジアのイギリスを訪ねてくるのです。イギリスの文化を受け継いだ、そのような立場の日本を中心として韓国に回って入ってくるのです。これが回って入ってきて一つにならなければなりません。一つになるには、ただできるのではありません。それを誰かが主導して結んでおかなければなりません。

三) 世界的なローマ国家、アメリカの使命

アメリカはローマのような国です。それでは、このようなときに先生がなぜ日本の食口と全世界の統一教会の食口をみなアメリカに連れてきたのでしょうか。イエス様が十字架で亡くなったのちに、すべての弟子たちはローマに集中しました。それと同じようにして、それを蕩減復帰しなければなりません。ここで追い出されて殺されるのではなく、歓迎されながら、天の国を建てて、天の前に奉献することのできる運動が起こらなければならないというのです。

私が新聞社をつくった理由は、少数民族を糾合するためです。インディアンの住む国はレバレンド・ムーンのいとこの国でした。アジアは兄であり、そこから離れて出てきたのが弟です。これを蕩減復帰しなければなりません。レバレンド・ムーンはアングロサクソン民族のように血を流さないで、蕩減復帰しなければなりません。ＣＩＡとＦＢＩも「レバレンド・ムーン、これは大変だ」と言うのです。いくら大変だとしても神様のみ旨です。神様がそのようにするのです。レバレンド・ムーンは神様のみ旨によって兄弟の関係を結びます。五色人種はみな兄弟です。神様が見るものにはカラーがありません。色盲です。色盲。その使命を中心としてこれをしないわけにはいきません。私が韓国に行っているときに、可能な組織をみなつくっておきました。私がアルプスの頂上に行って住むとしても問題がありません。世界は私の舞台です。私の活動舞台です。

イエス様の十字架上において右側の強盗と左側の強盗が争いましたが、私の前では一つになったというのです。それを蕩減復帰するのです。これが歴史的な蕩減条件になったということを知らなければなりません。それではこの人たちはどこに行くのですか。「お前たちはみな地上天国に行かなければならない」と言うとき、「イエス」と言えば終わるのです。さあ、そのようになりましたか、なっていませんか。歴史的にイエス様は右側の強盗と左側の強盗が争いながら、讒訴を残す立場で死んでいきましたが、右側の強盗と左側の強盗が互いに和睦して歓迎することによって、復活して新しい次元に出発しなければならないというのが原理的な観点なのです。これが原理的に合いますか、合いませんか。

それでこのアメリカにおいて今、法廷闘争にまで連結されたのです。アメリカでの法廷闘争は一九七七年にすべて終わったのに、先生が牢獄に行ったのはアメリカのために、ア

メリカを手放してはならないからです。その道はキリスト教と自由世界を再び取り戻すための受難の道であることを皆さんは知らなければなりません。それをするのに四代が引っ掛かりました。ニクソンからフォード、カーター、その次のレーガンまで四代にわたって蕩減復帰しなければキリスト教を捨て、自由世界を捨てなければならないのです。ゆえに復帰摂理がどんなに難しいかというのです。統一教会だけでできるのかというのです。

アメリカの文明は、どんな文明ですか。一番遅れた国です。野蛮人のように生きる人もいるのです。山に行けば原始人よりも劣る人たちがいます。猪と友達になって生きる人たちです。そんな国です。彼らが反対し、間違ったことをすべて、世界的に蕩減復帰しなければなりません。歴史路程に現れたすべてのものは、平面的に蕩減復帰しなければなりません。二十一世紀に向かうこの時代において、レバレンド・ムーンが摂理することができるように平面的にざっと展開した国です。歴史的に、すべてのものを代表的に蕩減しなければならない国だというのです。

韓国とアメリカは、イスラエルの国とローマのような立場です。ローマはその時太陽神に仕えましたが、アメリカという国はその時とは違います。今韓国はアメリカの保護のもとで自主独立した立場です。アメリカの立場がそうだというのです。ローマはイスラエルを滅ぼそうとしましたが、アメリカはローマの前にあるイスラエルのような国を滅ぼす立場ではなく、天の側の国として生かすための反対時代をつくったのです。それゆえ、ローマとイスラエルがイエス様の前にできなかったことを蕩減復帰することのできる自然的環境をつくって、韓国が連結されたのです。

先生が今までアメリカでしたこととは何かと言えば、アダム国家とエバ国家、その次はカイン国家とアベル国家の復帰です。アダムが堕落して植えたので、世界的国家的基準でこれを蕩減復帰しなければなりません。韓国がアダム国家、日本がエバ国家、その次はアメリカがアベルの立場です。長子権復帰を成すために、主権復帰をするために出てきたのがアベル国家です。その次にドイツはサタン側のカイン国家でしたが、日本がエバの立場に立ったので、ドイツが天の側のカイン国家になるのです。この四つの国家が世界的な舞台の上で一つの国の伝統を立てなければなりません。その舞台がアメリカです。

イエス様がユダヤ教に歓迎されなかったその時代を蕩減復帰しなければなりません。ですから、イスラエルの国とローマと一つになってイエス様に反対したのと反対です。韓国政府がアメリカと一つになっているその基準において、キリスト教が執拗に反対する、政府を中心として反対する、その立場に立って先生が蕩減復帰しなければならないのです。一代で国家的版図の上に基盤を展開させて大勝利したというのです。それで世界の二世たちを通じて霊的勝利基盤を再び実体の世界舞台に連結させるためにやってきたのが、一九七四年以後のアメリカ作戦です。三年路程を中心として、アメリカにおいて先生が一九七六年までの限界線を中心として、本格的に国家的次元で実体的戦争をしたのです。

アメリカの国民が協助していたなら、その時ニクソンさえ協助していたなら、今日統一教会は瞬時に世界的基盤を築いていたことでしょう。しかしニクソンが責任を果たせず、折れることによって、ニクソンからフォード、カーター、今のレーガンまで四代を経て十二年目に蕩減復帰したのです。今回の一九八八年を中心として、四十年前の世界の共産圏以上の立場に戻さなければならないのが、私たちの使命だというのです。何のことか分かりますか。

イスラエル民族の一世は四十年荒野路程でみな滅びましたが、二世たちが行くことのできる橋を架けたのでカナンの福地に入ったのです。同様に、今日第二次大戦以後、四十年の世界の荒野時代において、統一教会を中心として二世を収拾してカナン福地基準をつかんでいくのです。それで終わりの日にはソ連共産党の一番の熱烈分子の息子が統一教会の熱烈分子になるでしょうし、アメリカにおいて統一教会を一番積極的に反対していた牧師や官吏たちの息子、娘たちがみな統一教会の文先生のために立ち上がるでしょう。彼らの親たちが積極的に反対した数十倍も蕩減復帰することを知っているので、橋を架けなければなりません。何の橋ですか。愛の橋。愛の橋さえ架ける日には、行けと言ってけ飛ばしても決死的にしがみつくのです。

今回ダンベリーから出てくるとき、私を中心としてジェリ・フォルウェルと一つになるようにしました。右側の強盗、左側の強盗が争いましたが、一つになるようにしてあげました。全部蕩減復帰です。ですから私が出たダンベリー以後の百二十日期間、三、四、十二（三×四＝十二）、百二十日期間に、これを中心として世界のすべての言論は方向を決定しなければなりません。この期間において、ワシントン・タイムズを中心としてアメリカの言論をひっぱたかなければなりません。それでインサイト（Insight）という雑誌と月刊誌を作ったのです。世界の教授たちを先頭に立てるために雑誌を作ったのです。ワシントン・ポストとワシントン・タイムズ、名実共に地上世界の人々における判定は既に終わったと見るのです。

アメリカはイギリスが生んだので、息子です。息子が天使長になる前はアベルです。息子を生みましたが、これが長子権です。長子権をもったので、天の側の長子になって帰ってくるときには、天の側の長子として天の側の母に侍らなければならないのに、向こうから落ちるようになったのです。ローマから島国イギリスに離れて出てくるとき、エバの以前には天使長の立場にいたのです。堕落した天使長ではなく、復帰された天使長の位置にいたというのです。それが何かと言えば、アベル的位置です。アベル的位置、長子権を受け継ぐことのできるアメリカになって、蕩減復帰のために帰ってくるようになるのです。

エリヤがバアル神を屈服させたのちに七千の群れがあるように、神様のみ旨を中心として、キリスト教を中心として七千名の氏族的基盤がなければなりません。それを蕩減復帰するために、私が牢獄に入っていながらキリスト教七千名をみな収拾したのです。七千名を教育しました。その基盤は国家的基準であるだけに、イエス様を蕩減してあげなければならないし、エリヤを蕩減してあげなければ

なりません。その次には出てくるや否や百二十日以内にその基盤の上にその十倍の七万名の世界基盤を代表することのできる蕩減基盤として連結させよと、先生が指示したということを知らなければなりません。蕩減復帰はできません。それでエリヤが来たのです。洗礼ヨハネが、エリヤが来たのです。世界的です。世界的代表です。

四十年前にレバレンド・ムーンとキリスト教と民主主義が一つにならなければならなかったのを、統一教会が再蕩減していくのです。統一教会がキリスト教の失敗を蕩減復帰して、レバレンド・ムーンと一つになって初めて、世界的頂上であるこの自由世界に来てキリスト教を連結させ、アメリカを連結させて責任を果たせなかったことを蕩減復帰する基準を立ててきました。その次には新しいカナン出発を命令しました。これが獄中、出獄から始まるという事実を知らなければなりません。

アメリカが自由世界を代表し、人類を代表して、歴史を通じキリスト教文化圏を中心として神様の蕩減復帰の基準を備えたなら、そのアメリカがもつべき思想とは何でしょうか。神様を解放しようということです。神様を解放しようという心がなければなりません。来られる真の父母は神様の代身として来られるので、真の父母に侍って世界人類を自分の民族よりもっと愛さなければなりません。自分の民族、自分の国よりももっと愛さなければなりません。ですからこのアメリカの国の中には数多くの国家が入っているし、数多くの民族が入っているし、数多くの氏族が入っているし、数多くの家庭が入っているのです。

統一教会は昔と反対です。ユダヤ教とイスラエルの国とローマが合わさってイエス様を打ったのと反対です。今回は統一教会がアメリカから勝利圏をもたらした基盤のもとで、韓国政府とキリスト教を押すのです。それでイエス様がその当時、イスラエルの国とユダヤ教とローマが合わさって反対することによって死んだのを、今日、統一教会を中心としてすべて蕩減復帰したのです。アメリカで歓迎され、勝利した圏をもって全アメリカと全キリスト教の協力を受けたレバレンド・ムーンが帰ってきて、統一教会と政府が合わさってキリスト教を押し出すのです。このようにしてイエス様が死んだのを蕩減復帰しました。

少数の群れをもってしても、今まで韓国にこのような影響を私が及ぼしてきました……。多くの人は必要ではありません。蕩減復帰を知っているので、私が十字架を一人で背負って蕩減するのであって、従ってくる子女たちに苦労をさせないようにするのです。ですから私は執念をもって行くのです。このような犠牲の代価を知って、万物が私のあとに従って役事するではありませんか。世界のきれいな二世たちが私のあとについてくるし、その次には祝福を受けたきれいな家庭が私のあとについてくるのです。日本で、そしてアメリカでもそのような傾向になるのです。

四) 蕩減復帰歴史は回ってくる運勢

蕩減復帰の原則上、歴史始まって以来単一民族として五千年の歴史を背負いながら、自主的な国家として羽振りをきかせることができず、血をたくさん流してきた民族が韓民族です。多くの忠臣たちは奸臣たちによって犠

牲になりました。それはこの国が、人類歴史路程においてサタンによって、天の国の多くの忠臣たちが犠牲になった表象的な国家であり、縦的な代表国家だからです。このようにこの民族は横的に悲惨だったすべての事実を縦的に蕩減する蕩減の道を、受難の歴史を歩んできたのです。

回り帰ってくるには橋を架けなければなりません。天使長が物を捧げるには、ただそのまま天の物になることができません。エバによって失ったので、必ずエバと一つになることによって捧げなければなりません。天の物をサタンの物にしたので、蕩減復帰の原則によって、天の側の天使長がすべての物質を引っ張ってきてエバと一つにならなければなりません。エバである日本に接ぎ木しなければなりません。日本が近世になってなぜ経済大国になったのでしょうか。摂理時代においては橋を架けなければなりません。アメリカのすべてのものを引き継ぐのです。これが百二十年間、一九八八年までです。明治維新以後、計算してみなさい。一九八八年を中心としてこれが連結されるのです。来年まで百二十年間にアメリカのすべてのものを引き継ぐのです。

ローマ教皇庁を中心としてイギリスを経てアメリカを経て、二千年かかって回り帰ってくるのです。回って入ってくるのに、ただ入ってきません。蕩減復帰の原則を中心として、それと反対の現象を経るようになるのです。日本の国がイギリスのような国に該当し、イギリスに行く前のイタリア半島のような半島が韓国だというのです。同じ与件を中心として、その時代に責任を果たせなかったことを世界半島で失敗したことを蕩減して清算したと言うことのできる基盤を経ずしては、サタンがついて入ってくるのを防ぐことができないので、蕩減という原則を中心としてそのような路程を歩んでいくのです。

第四章　蕩減路程と私たちの生活

一　復帰の道は人が当然行くべき道

一) 蕩減復帰は再創造の道

蕩減復帰というとき、それは復帰のための蕩減です。完成を中心として蕩減復帰して見れば、完成します。蕩減されたのちに復帰をして、完成の道を行きます。ですから蕩減と復帰は一つだと考えればいいです。

完成は自動的にできるのではなく、蕩減により成されるのです。ですから堕落世界に住んでいる人間は、蕩減条件を立てなければ完成することができません。

統一教会で言う復帰の道とは、どんな道でしょうか。一般の宗教は、ただ救われなければならないと救いの道を求めますが、私たちは、復帰しなければならないと復帰の道を求めるのです。それでは復帰とは何でしょうか。復帰をどのようにするのでしょうか。再創造の過程を通じてするのです。

復帰の道は人間が元の姿に帰っていく道なので、蕩減条件を立てなければ行くことができません。蕩減条件は、神様がお立てになるのではなく、人間が立てなければなりません。病気になった人が病気を治すためには、薬が苦くて飲みたくなくても飲まなければなりません。良薬口に苦しです。苦いのが本当の薬になるのです。蕩減条件を立てるのは、苦い

薬を飲むように難しいことです。しかし、蕩減条件を立てなければ復帰できないのです。

救援の道は、蕩減して復帰する道です。蕩減とは、堕落した経路に従ってさかのぼっていくことです。反対に行くことです。

蕩減という言葉を知れば、すべてがとても良くなります。蕩減がなければ福もありません。統一教会において無限な黄金の塊とは何かと言えば、蕩減です。蕩減は死を押し切って、すべてを犠牲にし、すべての困難を克服することができる驚くべき単語です。

復帰歴史とは、説明してあげてするのではないのです。やっておいて、勝利しておいて収拾するようになっているのです。説明してあげて行くようであれば、聖書新・旧約の六十六巻は必要ないのです。十枚ならば、すべて記録されます。六十六巻がなぜ必要ですか。くだらないのです。十枚も必要ないのです。三枚ならば全部記録されるのです。

蕩減の概念は再創造のためのものです。ですから私たちには、再創造のための蕩減が必要だというのです。蕩減は、再創造されて本然の人間になるために必須なのです。本然の人間が出てくれば、本然のみ旨の道を行く人間が現れるのです。本然の人間が現れてこそ。皆さんは本然の人間ですか。堕落した族属です。堕落した族属ですから、蕩減を通して再創造されなければならないのです。

アダムは、どのように堕落しましたか。不信から堕落したのです。不信が第一の原因です。その次は自己主張から堕落したというのです。自我主張、自己を中心としたのです。自己中心の立場で堕落したのです。その次は、自己を中心とした愛の圏を要求したというのです。これが堕落の三大要素です。不信、自我主張、自己を中心としたこと。その次には自己を中心とした愛の圏を夢見たこと。これがサタンの足場なのです。堕落した天使がそのようになったのです。

先生が、なぜ皆さんに苦労させるのでしょうか。蕩減の道を行かなければならないからです。先生自身も一生蕩減の道を行こうとするのです。嫌々行くのではないのです。願って行かなければなりません。願って行かなければならないというのです。それを知らなければなりません。監獄にも願って行くのです。蕩減のためには行かなければなりません。不平を言えば蕩減にならないのです。

私たちには蕩減の道が必要なのです。皆さんは、この世の中を救うためには蕩減の道を行かなければなりません。イエス様がいくら神様の本然の息子として生まれたとしても、世の中を救うためには蕩減の道を行かなければなりません。世の中ができないので、するべき人が全部反対するので、イエス様自身も行かざるを得ないし責任を負わざるを得なかったのです。

復帰の道は、堕落した経路と反対の経路を貫いて行かなければなりません。蕩減の道は、堕落した者には原則として現れるのです。これを克服しなければ元の姿に復帰することができないので、自分を清算しなければなりません。個人的な問題から、家庭、氏族、民族、

国家、世界をどのように復帰するのかという確実な理論をもっていなければなりません。

二) 蕩減の道を行かなければならない理由

再創造は本来、投入した力よりももっと投入しなければなりません。修理しようとするのは、新しくつくることよりも大変だという言葉と同じなのです。ですから創造よりも修理するほうが大変なように、それ以上に投入することを蕩減という条件で払わなければならないというのです。分かりましたか。蕩減という概念が分かるのかというのです。

皆さんは神様のみ旨を深く知れば知るほど、サタンによって汚されたこの肉体、サタンの汚れた血が流れる自分の肉体を焼き殺してしまいたい思いになるのです。サタンに利用された手と足、この体全体を一度に切ってしまいたい思いになるはずです。サタンにより汚された自分の姿をそのまま保存していこうとするのは、とんでもないことです。皆さんは、このような心情を体恤してみましたか。しかし、そのように殺すこともできないので、私たちにはサタンとかかわり合った過去の自分を清算するための条件が必要なのです。

復帰路程は一人で行くことができません。必ず再創造の原理を通し、神様と霊界の協助を受けて行かなければなりません。また、そのようにならなければならないのが救援摂理なので、神様と霊界が動員されて再創造の役事をしているのです。なぜならば神様は人間を創造される前に天使世界を造られて、天使たちの協助を受けて万物を造られ、その万物を材料にして人間を造られたからです。

完成は、蕩減完成を通じて成されます。蕩減の峠を越えない人には、絶対に完成の道はありません。それは内的な意味から見れば個性完成を意味しますが、神様の立場から見れば復帰だということができます。蕩減完成の基準を復帰完成だと言うことができます。復帰は蕩減を通じて成されます。ですから蕩減復帰というのです。それゆえ、蕩減と復帰は切り離すことができないのです。

人類の先祖であるアダムとエバは、自分を中心とした間違った愛で堕落しました。天使長を介入させ堕落したことにより、神様を追放し、本然の真なるアダムの人格を追放し、本然の真なるエバの人格を追放した結果をもたらすようになったのです。

神様は、堕落していないアダムとエバに現れます。ここから神様を発見することができます。私たちはみな堕落以前のアダムとエバ、罪のないアダムとエバの立場に帰っていかなければなりません。そこで真の父母を迎え、真なる氏族をつくり、真なる国家をつくり、真なる世界をつくらなければなりません。このような主張をするのは統一原理以外にはありません。

天国は、神様を絶対的中心として侍り、神様を通じて愛の因縁を結んで生きる所です。この根本を正しく立てるために神様は救援摂理をされるので、自分を立てれば絶対にできないのです。

二　信仰基台と実体基台

一) メシヤのための基台

信仰基台と実体基台を復帰してメシヤのための基台を成すのは、原罪を脱ぐためです。原罪を脱げば、神様の生命圏と愛の圏内に新たに越えていくのです。そのようになろうとすれば接ぎ木されなければなりません。質の悪いオリーブの木を真のオリーブの木にするためには、質の悪いオリーブの木を切ってしまって真のオリーブの木に接ぎ木しなければなりません。

同じように質の悪いオリーブの木のような人間を真のオリーブの木のような人間にするためには、自分自身を否定する過程を経て新しい肯定、あらん限りの肯定を提示する過程を経て越えていかなければなりません。そのようにすることにより、その本質素性が質の悪いオリーブの木ではなく真のオリーブの木と化して、完全に善のみを主としたそのような人間として登場し、一つの家庭、一つの氏族、一つの民族、一つの国家、一つの世界を形成していくのが統一教会です。そしてこれがきょうの日、統一教会の食口たちが願う現在の立場であることを皆さんが知らなければなりません。

信仰の基台を何で復帰しますか。祭物で条件を立てなければならないのです。実体基台は堕落性本性を脱ぐことですが、それはカイン、アベルが一つになることです。体が堕落性本性を脱いで復帰されれば、堕落性本性がなくならなければならないので、血肉の感情が完全になくならないといけないのです。「東へ行け」と言えば「はい」と言わなければならないし、「西に行け」と言っても「はい」と言わなければならないのです。異議があれば復帰されないのです。異議があって復帰ができますか。絶対について行かなければならないのです。

メシヤを迎えるためには信仰基台と実体基台がなければなりません。実体基台が完結されたのちは、メシヤのための基台が必然的に要求されるのです。それでは実体基台が完結されたのち、メシヤのための基台の位置に立つ者は誰でしょうか。堕落した人間の子孫として生まれた私たち人間は、サタンの血統を受け継いだので、いまだにその血統を越えることができません。その血統を越えるためには血統を換えなければならないのですが、人間は自分自身ではそれを成すことができません。それでメシヤが必要なのです。

人間が堕落することによって、第一に父母を失い、第二にサタンの血を受け、第三にサタンの支配を受けるようになったのです。ですからそれを復帰するためには逆に上がっていかなければなりません。皆さんが原理を習うことによって、どこまで行くことができるかといえば、信仰基台を成し実体基台を成して、メシヤを願うことができるようになっています。これが原理です。ですから信仰基台と実体基台まで成そうというのです。外的に。

人間は完成基準に入ったとしても、これはまだ血統的には完全に清算されていないのです。サタンの血統を受け継いだことにより、血統的にはまだ清算されていないのです。血統的に清算するには必ずメシヤが必要です。それで信仰基台、実体基台、メシヤのための基台が、堕落した人間には絶対に必要なのです。最後の問題は、どのようにメシヤのため

の基台をつくり、メシヤを通じて自分が血統転換を成すのかということなのです。

信仰基台、実体基台を完成してメシヤのための基台を受け継ぎ、メシヤと接ぎ木するという驚くべきことをしなくてはいけないのです。接ぎ木されることにより、過去に質の悪いオリーブだったのを真のオリーブの木に変えられるようになるのです。言い換えれば、サタンの血統を脱いで善なる神様の血統に帰ってくるので、その位置を受け継ぐことができるところでのみ新郎新婦の位置を迎えることができるのが原理の道です。

「復帰の道を最後まで行った」と言うことができる人は、この世の中にはいません。ですから滅ぶしかない人間になったのです。これを滅びないようにしようとして、このような内容を備え最後まで行くことができるようにする責任者として来られる方が、メシヤという方です。そのメシヤと接ぎ木されれば、私はついて行くことができるのです。統一教会には、信仰基台を立て実体基台を完成するようになればメシヤのための基台を成すことができる、という言葉があるでしょう。それがこのことなのです。

復帰途上で、僕の僕時代から僕の時代を経て養子の時代、直系の時代に上がっていかなければなりません。それでは完全に僕の僕時代を経て、僕の時代、養子の時代を通過し、直系の時代と因縁を結ぶことができるのでしょうか。直系の時代と因縁を結ぶにはただ結ぶことができません。必ず原理によって信仰基台を経て実体基台を経、メシヤのための基台を経なければなりません。すなわち、メシヤを迎えなければならないということなのです。メシヤは神様の真の息子です。養子と真の息子とでは血統的に関係が違います。ですから血統転換が必要だというのです。

さあ、それでは皆さんはどのようにしなければならないのでしょうか。皆さんは死ぬような苦労をしなさいというのです。縦的な歴史を横的に蕩減するために僕の子となれというのです。天使と同じように、神様が愛する韓国国民は僕の子となれというのです。僕になれというのです。そこにおいて主人になれば養子となるのです。養子になるのは信仰基台と実体基台を復帰することです。実体基台を復帰してこそメシヤのための基台が成されるので、これをしなければならないのです。

皆さんは悪を屈服させて善を残すことによって、悪が自動的に順応できる立場に立ってこそ善なる人になるのです。それを原理的にいえば、実体基台完成です。9.5

イスラエルがどんなに世界を復帰することができる国家になったとしても、その国家だけでは駄目なのです。皆さんは原理を通じて、カイン・アベルの実体復帰時代、すなわち実体基台というものを知っているでしょう。同じように、探し出されたイスラエル国家を中心としてカイン国家、すなわち天使長型国家を屈服させなければなりません。それを武力でするのではありません。アベルが兄であるカインによって殺されたので、死ぬ位置、すなわち打たれる位置に入って死なないで生きて彼らを屈服させることができる因縁をもつことができなければ、復帰の起点が現れない

という事実を私たちは知らなければならないのです。

復帰の道を行くために、まず信仰基台を立てなければなりません。信仰基台は、自分が位置を確保することができる確固とした基盤を築き、主体的な立場に立つために必要なのです。その次は、自分自ら目的に向かって行くことができるようになったとしても、それだけでは駄目なので、戻って来て実体基台を立てなければならないのです。

実体基台とは何でしょうか。アベルの前にカインを屈服させることのできる基台です。カインとは誰でしょうか。怨讐の子です。このカインを通じて歴史的な闘争が行われてきたのです。カインを通じて悪の母体が根を下ろしたのです。カインを通じて今まで、死の波が歴史時代に向かって突っ走っているのです。このような事実を見る時、このすべての悪の要件と悪の側をここで防止するためにはアベル的立場、すなわち天の側に立つ人が、必ずカインの立場にいる人を屈服させなければならないのです。

私たちが行く道は二つです。それはカインと自分のために行く道です。怨讐のための道まで経ていかなければなりません。それは何を意味するのでしょうか。カインを収拾していかなければならないということなのです。実体基台というのは何なのでしょうか。アベルが自分の道を修めたとしても、カインを完全に屈服させなければ神様の前に行くことができないのです。怨讐を導いていかなければなりません。怨讐と闘っていくのではなく、怨讐を導いていかなければならないのです。

信仰基台が立てられたというのは、条件的立場で、神様を不信することによって堕落したことを、信じることができるアダムの立場、すなわち希望的なアダムの立場にもう一度立ったということです。このようになったのちは、サタンと闘って実体基台を立てなければならないのです。アベルの立場でカインを屈服させなければならないのです。

皆さんは原理を通じて、信仰基台と実体基台を知っているでしょう。実体基台を成したとしても、その実体は神様の前に捧げることのできる実体ではなく、メシヤのための基台、すなわちメシヤを迎えることのできる実体となるのです。

二) 結局は血統復帰が問題

アダムが信仰を失って実体を失ったので、信仰基台を取り戻し実体基台を確保したのちでなければ愛を見つけることができないのです。アダムが失ったものとは何でしょうか。最初は信仰を失い、その次は実体を失って、その次に愛を失いました。この三つです。これを取り戻そうというのです。

信仰基台というのは原理原則に立脚し揺れない人、夜も昼も四季が変わっても青春時代や壮年時代、老年時代になってもそのまま変わらない立場で、神様の原理と一致させることのできる信仰の基盤を立てなければならないのです。そうしてこそ、原理を通じた実体基台が成立するのです。信仰の基台の上に原理を通じて実体基台が現れ、その実体基台の上に原理と一つになった立場に立てば、対象

価値の心情世界が賦与されるのです。これが堕落した人間の行く道です。

先生が偉大な貢献をしたというのは、神様と人間との関係を愛を中心として確実にし、責任分担と蕩減路程、カイン・アベル問題、血統問題を確実にしたことです。カイン・アベルが一つになれなくてはメシヤは来ることができません。カイン・アベルが一つになることが実体基台が成され、メシヤが来てここで一つになってこそ血統復帰をすることができるのです。これが原理の要点です。原理の要点。皆さんは、このようなプログラムをすべて知って祈祷しなければなりません。ですから頭の中は、全部その思いでいっぱいでなければなりません。

信仰基台、実体基台、その次はメシヤのための基台です。血統が問題になっているのです。アベルの勝利圏を中心としてアメリカの反対を押さえ、すべての自由世界のどんな国の反対にも勝たなければならないのです。全世界が私を反対しても、先生はその反対に押されなかったのです。原理がすべてあるのに、大ざっぱにできると思いますか。原理原則が鉄瓮城（注：堅固に取り囲んだたとえ）のようなのです。神様が公証した理論がそのようになっているので、仕方がないのです。あなた方が怨讐の国、悪魔までも愛したという条件を立てられなければ天国に入ることができる要件がないのです。イエス様が十字架にかかりながらローマ兵の槍で突かれながらも彼をお許しくださいという祈りをなぜしたのか知っていますか。それは個人ではありません。世界を支配するローマの国なのです。今日、キリスト教は個人救援を追求しているのではありませんか。

三　なぜ蕩減復帰が必要なのか

一) 蕩減復帰しなければならない二種類

私たちが復帰路程を行くのに、なぜ蕩減法を重要視しなければならないのでしょうか。それは摂理的に見るとき、神様が創造したものを人間が滅ぼしたので、私が再創造しなければならないのです。再創造するためには、神様が創造の役事をするとき精誠を尽くしたので、私も精誠を尽くすその条件を復帰するのです。ところで神様がこの宇宙を造るとき、遊びながら踊りながら造ったのではないのです。ありったけの精誠の限りを尽くして、一〇〇パーセント投入して造られたのです。神様が創造された時と同じように、私が再創造するのが復帰の道なのに、ただ遊びながらしますか。

元来アダム・エバが成長の各段階を完成するために、各々の責任分担が与えられていました。一段階の成長期間にはその段階の責任分担を、したがって三段階の成長には三段階の責任分担を完遂しなければなりません。ここには例外がありません。すべての人は同じ条件をもっていて、責任を完遂することによって成長することができます。もし神様が堕落人間に同じ量の責任分担を要求されたならば、堕落前の本来の位置に私たち自身を復帰する希望は少しもありません。責任分担を完遂することができる機会を失った代わりに、私たちは蕩減条件を立てなければならないのです。

責任分担と蕩減は、一つは右側の立場であり一つは左側の立場です。また、一つは右足のようなもので一つは左足のようなものですが、それを失ってしまったのです。責任分担も知らず、蕩減も知らないのです。ですから、どうやって行くのですか。そのようにしては行くことができないのです。責任分担と蕩減復帰を連結しておかなければ前進は不可能だということを知らなければなりません。そのようなことを考えてみましたか。蕩減、嫌いでしょう。神様も摂理もみな嫌いでしょう。きょうからは新しく、御飯を食べることを忘れたとしても、寝ることを忘れたとしても、自分の愛する人を思うことを忘れたとしても、これを忘れてはいけません。そのように深刻なのです。神様もこれを通らなければならないし、レバレンド・ムーンも生きてこれを通らなければならないし、すべての統一教会の教会員もこれを通らなければならないし、全世界もこれを通らなければ行くことができないのです。みな何もなしに通過したいでしょう。博士や教授の位置をただ得ることができますか。そのコースを経てこそ博士になれるのでしょう。それを通過しなければ、それは偽物です。今こそ分かるでしょう。

サタンを縦横に分別するのには、内的な蕩減条件と外的な蕩減条件があります。外的な蕩減条件はカイン・アベルの蕩減条件です。内的な蕩減条件は、アダムの蕩減条件です。この責任分担を中心として完全に屈服してサタンの支配権を取り除くとき、天の側が始まるのです。これが原則です。

アダムはなぜ堕落したのでしょうか。アダムの堕落は責任分担を完成できずに、神様との関係、神様の愛の関係が切れたことです。責任分担を連結できず、その次には神様の愛に連結させられなかったのです。堕落することによって、責任分担を喪失し神様の愛の圏を喪失したというのです。

サタンをどのように分別させるのでしょうか。蕩減条件を立てることができる立場に立ったアダムの代わりの存在にならなければなりません。ですから本然の基準において責任分担を完成した資格者となったアダムの位置で、愛を中心としてサタンと対決し、サタン側に対する人たちよりももっと天の側的に、サタン側で愛するよりも天の側でもっと愛したという条件を立てることによって分別が行われるのです。ここに蕩減条件が成立することを知らなければなりません。サタンは環境を支配しているので、中傷謀略をして、どんな手段を使ってでも切ってしまおうとするのです。しかしその環境を克服して、どんなことがあっても神様に代わってアダムが失った責任分担を取り戻すなら間違いありません。永遠なものです。そして神様を愛するのに絶対に誰が何と言っても、「間違いない」と言うことができる基準を立てなければ蕩減ができないのです。

蕩減条件は何を分別させるものでしょうか。責任分担を完遂して、その次に神様を愛するものです。サタンがどんなに迫害して攻撃しても、それを退け、そこに動揺しないとき、サタンは打って打ちまくってそれでも退かないときは、自分が退かなければならないのです。このようにしてサタンを分別するのです。これが決定できなければカイン・アベルを蕩減する道がありません。

縦的な蕩減条件は何によって立てなければなりませんか。責任分担完成と神様に対する絶対的な愛の復帰完成、この二つの条件です。このような基準があるのでイエス様も「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」（マタイ一〇・三七）と言いました。この原則からこのような言葉が出てきたのです。こうしてこそ聖書がすべて解けるのです。同じように皆さんも先生をそのように愛しますか。

蕩減復帰の道は必ず行かなければなりません。サタン分立をしなければなりません。サタン分立をできないところには責任分担完成がありません。責任分担完成ができなければ天国に入っていくすべがありません。アダムとエバも追い出したのが神様の法度なのに、皆さんがアダムとエバより優れていますか。答えてみなさい。劣っていますか。優れていますか。劣っているのは、いつでも捨てることができるのです。ぼさぼさに頭をかき乱して歩き回りながら誰でも出入りするからといって、統一教会の教会員ではありません。原理をはっきりと知らなければなりません。

生活観念は世界のために生きることです。世界のために生き、神様のために生き、さらには神様の解放と父母様の解放と世界の解放のために生きるのです。これが統一教会員の生活内容ではありませんか。解放するのに蕩減復帰だけ知っていては駄目なのです。責任分担というものがあるので完全に整備されるのです。

カイン・アベルは責任分担を完成する責任がないのです。責任分担完成は誰がしなければならないのですか。アダムとエバ、すなわち父母がしなければなりません。先生にその責任があるので皆さんができないことを、キリスト教ができないことを、全部私が責任をもって四十年間父母の位置から個人で整備し、家庭で整備し、氏族、民族、国家、世界的に整備したのです。このようにして個人責任分担の蕩減復帰、サタンを追放できる壁を造っておいて……責任分担の完成圏を造ったので、ここから新しい世界が始まるのです。世界理想の位置から成されたので、これから天国が可能だというのです。それで天国創建という言葉、祖国創建という言葉が出てくるようになるのです。これがすべて原理的です。

今までこの歴史を誰が動かしてきましたか。サタンが動かしてきました。ですからサタンを分別しなければなりません。サタンを取り除かなければ神様は入ってこれません。神様の領土ではありません。サタンの領土なので堕落した圏内から蕩減条件を立ててサタンを分別しなければ、追放することができる蕩減条件を立てなければ、神様の領域が拡大され神様が活動できる基盤が築かれません。ですから分別して追放してしまわなければなりません。

サタン世界に、「いくらでも迫害してみよ、打ってみよ」と言うのです。私がお前たちを占領する。何によって。愛の力で。神様の創造の能力で。そうすれば神様が共にいるのです。ここには神様が共にされるのです。やってみなさい。共にされるかどうか。先生は監獄にいてもどんな拷問される所へ行ってもこ

れを忘れないで闘ってきた人なのです。そうやってこそ分別されるのではないですか。

今日、統一教会員たちは蕩減の道を好まないのです。それは何かと言えば、復帰を好まないということです。「ああ、私は復帰というのは好きですが、蕩減は嫌いだ」と、こんな言葉はありません。それでは何が先ですか。復帰が先ですか。蕩減が先ですか。皆さんは、復帰が好きですが、蕩減は嫌いだと言うのですか。神側から見れば反対です。皆さんはどちら側ですか。神側ですか。サタン側ですか。これをはっきりと知らなければなりません。皆さんは復帰が好きです。しかし神側では復帰を好むことができないというのです。蕩減をした、蕩減を通じたのちに復帰があるのです。

蕩減復帰、蕩減はなぜ必要ですか。蕩減せずしてはサタンを屈服させるすべがありません。本来神様の愛の焦点が個人に合えば、そこにはサタンがいますか、いませんか。原理的に見るとき、サタンがいますか、いませんか。

蕩減復帰するには反対にしなければなりません。それで絶対信仰が出てきたのです。人類の先祖が不信して堕落したので、これを踏んで上がらなければなりません。私たちの先祖が堕落したその線以上に上がっていかなければなりません。絶対信仰をしなければなりません。私たちの先祖が堕落したその線以上に上がっていかなければなりません。絶対信仰をしなければなりません。絶対信仰は死ぬまで、死んでからも、死にながらも行こうとするのです。皆さんは絶対信仰を知らないでしょう。絶対信仰の限界とはどこですか。生命体をもった私自身と比較して言えば、死にながらも行くのです。私は死ぬとき、横に倒れるのではなく前に倒れるのです。そのような意味で死の道を選ぶのです。

二つ目は自己否定です。一〇〇パーセント否定しなければなりません。自己否定です。私の見たい目、私の食べたい口、先生は三十歳までおなかがすかなかった日がありませんでした。これは私自身を否定することです。三つ目は絶対愛です。絶対愛は、怨讐を消化して敵を討つのが許しではありません。怨讐が自ら進んで自分の国と自分のすべての権限、長子の嗣業までも全部渡してくれなければなりません。渡してもらわなければなりません。

サタン世界で蕩減を嫌う者はサタン側です。そして蕩減を好む側は神側だということが今分かりました。それでは自分自身をじっと反省してみなさい。自分が神側ですか。サタン側ですか。それは皆さんがよく知っているのです。皆さん自身に聞いてみなさい。今まで皆さんはみ旨に従ってきましたが、復帰を好むのはサタン側で、蕩減を好むのは神側であることをはっきり知ったならば、今からどの道を行きますか。

皆さんもファンダレイジングをしたでしょう。「ああ、私はファンダレイジング嫌いなのに何だこれは」と言うでしょうが、これからが始まりです。これから逆に歩きなさいと言うかもしれません。「世の中が悪なのでお前たちは逆に歩きなさい！」と、そう言うかもしれません。世の中が逆になっていますから、悪なる人と一緒に行けば悪くなるので、私たちは反対に行かなければなりません。そ

うすれば善なる人になるというのです。それは理論的です。

四　蕩減条件は自分が立てなければならない

一) 他の人が代わりに立てることができない

蕩減条件は自分が立てなければなりません。他の人が代わりに立てることができるものではありません。堕落は主管権を失ったことを意味します。復帰のためには他の人がどんな干渉をしたとしても、自分自身の確固とした主体性をもって進まなければなりません。他の人がどんな道を行こうと、私の行く道は忙しいのです。前でどんな言葉を言ったとしても、そこに気を遣ういとまもありません。夜寝る時間もありません。落ち着いてゆったり座って御飯を食べる余裕はありません。そのような切迫した心情をもたずしては復帰の道を行くことはできません。

堕落は人間がしでかしたので、蕩減復帰も人間自らがしなければなりません。罪を犯した者が罪を蕩減しなければならないのが原則なのです。父母が偽りの父母となったので、真の父母が来てそのすべてのものを蕩減してくれなければ、神様に帰っていける道はありません。このすべてのものを解決してくださる方が真の父母なのです。真の父母は、皆さんの生命を何千万、何億捧げたとしても換えることができない価値をもっておられる方です。ですから皆さんは真の父母を求めて、「命を懸けて従います」と言うことができなければなりません。

人間が堕落することによってどんな結果が現れたのでしょうか。人間世界から神様が追放され、天使世界が追放され、万物世界を失って、その次には個人基準、家庭基準、氏族、民族、国家、世界基準をすべて失ってしまいました。その責任は誰にあるのでしょうか。その責任は神様にあるのでもありません。天使世界にあるのでもありません。万物にあるのでもありません。人間にあるのです。このような結果が現れたのは人間の責任です。ですから人間は、自分たちが責任をもって復帰路程を歩んでいくべき運命に置かれているのです。

復帰の道は、堕落した経路と反対の経路を突破していかなければなりません。そして蕩減の道は、堕落した者には原則として現れるのです。これを克服しなければ本来の姿に復帰することができないので、自分を清算しなければなりません。個人的な問題から家庭、氏族、国家、世界をどのように復帰するのかという確実な理論体系をもっていなければなりません。

皆さんが統一教会員として伝道をする時、「いやー、大変でできない」と言うならばどうなるか知っていますか。それは神様を中心としたことにならず、自分を中心としたことになるのです。このような原則を考えるとき、皆さんが統一教会に入ってきて活動するにあたって、行けないとか、不平を言いながら活動する人がいれば、不合格なことをしたということをはっきりと知らなければなりません。自分を中心として統一教会で働く人は、困難に遭うとすぐにレバレンド・ムーンと統一教会に対して不平を言いながら、今まで統一教会に入って働いたことが私のものだと主張するのです。

蕩減条件は、自分自身が立てなければなりません。他の人が代わりに立てることはできません。堕落は主管圏を失ったことを意味します。

天国は、神様を絶対的な中心として侍り、それを通して愛の因縁を結んで生きる所です。この根本を正しく立てるために神様は救援摂理をされるので、絶対に自分を立ててはいけないのです。

アダムが責任分担を果たせなかったので、私たちは責任分担を全うするのに誰かの協助を受けては、その使命を完遂することができない立場にあります。最後の決定は、私たち自身がするのです。言い換えれば、善なる人になるのか悪なる人になるのかという決定は神様がされるのではなく、私たち自身がしなければならないのです。

皆さんは、生命以上に懇切なる立場に立たなければなりません。ですからおなかをすかせた立場でも祈祷しなければなりません。断食をしながらも自分をすべて投入しなければなりません。神様の愛とともに生命力を万国に投入しなければならないのです。その過程では神様は絶対に答えられず、知らないふりをされます。干渉してはいけないのです。その投入が終わるまでは干渉されません。人間の責任分担とは何ですか。自分自ら完成することではないですか。同じように、自分が祈祷していくときは神様が干渉されないのです。かえって反対するのです。本当に不思議です。

勝敗の起点をどこに置くべきでしょうか。先生に置いてはいけないというのです。先生がどんなに勝敗の起点をもったとしても、それは皆さんと関係がないのです。皆さん各自には五パーセントの責任分担があるのです。

個人の生活環境が変わり、時代の違いが生じるに従って、その時その時ごとに神様が呼ばれる道の前に、相対となる立場を決定するためには、私自身が努力していかなければならない責任分担五パーセントの路程がいつもあるのです。それは個人を中心としてもそうであり、教会を中心としてもそうであり、国や世界を中心としてもそうだというのです。

神様はどんな方なのでしょうか。玉座に座り、栄光を受ける神様だと思いますか。そうではないのです。堕落した人類に対して神様は今まで何をされたのでしょうか。人類を救援しようと毎日痛哭していらっしゃるのです。そのような立場で人類を引っ張ってこられたのが神様の姿です。神様はこのように悲惨な方です。悲惨な中に落ちた人類を救援するために神様は眠りこけた人類を起こして、「来い、来い」と言われるのです。しかし、そのようにして行くようにはなっていません。皆さんは責任分担を果たさなければならないのに、それを代わってあげることができない立場で、（救援）しようとされるのが、どれほど大変だったでしょうか。

二) 責任分担の心構え

人間は、自分が今生きているところが善側か悪側かということを決定しなければならない、中間位置にいます。また、私が善なる方向に行くのか悪なる方向に行くのかということも、第三者の力を借りて決定するのではな

く、自分自らの判断によって決定しなければならないのです。さらに責任分担を全うすることができずに、堕落した人間の後孫になった私たちは、必ずこれを決定しなければならない、重大な岐路にあるということを知らなければなりません。

五　蕩減法なしにはサタン分立はできない

一) 私は分水嶺に立っている

先生は監獄に何度も出入りしました。以北から以南まで行く先々で……。それを知らなければなりません。なぜ蕩減復帰しなければなりませんか。なぜサタンを分立しなければなりませんか。サタンを分立する目的は責任分担圏自由化のためです。堕落する前のアダムとエバがサタンの干渉を受けましたか。サタンの干渉を受けていては天の国へ行けないのです。皆さんは今どこに立っているのでしょうか。自分がどこにいるのかは、自分の良心が知っているのです。それはだますことはできません。私がどこへ行こうとしているのかを良心は知っているのです。

蕩減復帰は不可避なものです。なぜ蕩減復帰しなければならないのか、なぜサタンを分立しなければならないのかといえば、自然な本然の責任分担、自由環境基盤を必要とするからです。そうすればサタンが讒訴できないし、サタンが因縁をもつことができない位置を私が占有するようになるからです。それで蕩減復帰、責任分担完成という基準は論理的にも不可避です。ですからサタンを分立しなければならないのです。ですから御飯を食べないで座っていても、サタン世界とは関係がないという考えをもっていなければなりません。ここが分水嶺です。これが境界線です。

蕩減復帰の道は、サタンを分立するための道です。サタン分立をなぜしなければならないのでしょうか。責任分担圏を探すためです。本来責任分担圏は、サタンがいない所です。アダムの責任分担がそうです。アダムの責任分担圏は本来、サタンが侵犯できる基準ではありません。その確実な思想を注入しなければなりません。私たちはいずれにせよ行かなければなりません。責任分担を完成して神様の愛の中に接ぎ木されなければなりません。神様の愛の中に接ぎ木しようとすれば、サタンを分立しなければなりません。サタンと因縁をもったすべてのものを、完全に分立しなければなりません。

蕩減復帰は、なぜ生じたのですか。堕落以後、何のために生じたのですか。責任分担がなければ蕩減復帰という言葉も必要ありません。人がどの位置で堕落したのかというと、責任分担を果たしていく過程で堕落したのです。このとき堕落した人間は、責任分担圏をサタンに渡してしまったのです。サタンに奪われてしまったのです。それゆえこの責任分担圏を、もう一度取り戻してこなければならないのです。

もし堕落した人間の前に神様が責任分担を設定しなかったならば、今日の統一教会で主張する蕩減復帰という言葉は出てこなかったはずです。ただそのまま復帰すれば良かったでしょう。蕩減しなければならない！　なぜ蕩減しなければならないのでしょうか。人間には責任分担があるからです。人間が完成し

なければならない責任分担を自ら壊してしまったので、その賦与された責任を果たさなければならないのです。そのようにするためにはサタン世界のすべてのことに勝利し、サタンを主管する位置に立って、堂々とサタン世界の反対環境を取り除いたその位置に立って、神様の愛を受けることができる位置に入らなければなりません。そのようになればサタンは離れるのです。

堕落した子孫である私たちには、責任分担圏が残っているのです。責任分担を中心として見るときに、個人的な原理結果主管圏で個人完成して神様の愛と連結させ神様の直接的な愛の因縁を結ぶことができる基盤をもったのかという時、もてなかったというのです。蕩減復帰はなぜ必要かといえば、サタンを分立させるためです。サタンを分立しなければ責任分担を果たすことができません。

責任分担がどんなに重要かを、みんな知らないで生きてきたのです。これが解放の基準です。蕩減復帰とは何ですか。責任分担を完成できる自由環境をつくるためのものです。サタンが侵犯するので、サタンを防御するにはどのようにしなければならないでしょうか。サタンよりも神様をもっと愛し、人類をもっと愛さなければなりません。サタンよりも神様を憎み、人類を愛する反面、私たちは「私はお前より神様をもっと愛し、人類をお前よりももっと愛する」と言わなければなりません。堕落しなかった人間がもっていくべきその基準を中心として、一方通行化させることができるこのような立場に立たなければ、サタンを分立することができません。

蕩減復帰はなぜ必要なのかいえば、サタンを分立させるためです。サタンを分立しなければ責任分担を全うできません。

サタンは、責任分担が果たせなかったという条件の上に侵犯しました。ですから責任分担が終われば、サタンは追放されるのです。責任分担を完成すれば、サタンはいることができません。

皆さんは、責任分担完成圏に立っていますか。未完成圏に立っていますか。未完成圏に立っているのに先生と何の関連がありますか。それを知らなければなりません。蕩減復帰をなぜしなければならないのですか。責任分担を全うするためです。責任分担を果たすにおいて本来、堕落する前の責任分担圏はサタンが讒訴することができないのです。サタンが侵犯するその場においては責任分担圏が出てきません。ですからサタンが侵犯できないのです。その場が監獄です。

神様を愛する力をもって、サタン世界の監獄を自ら進んでいくのです。サタンが一番嫌う所を、私が一番喜んで歓迎するのです。この世の中の人たちは苦労を嫌うでしょう。統一教会の教会員は苦労が好きです。なぜ好きなのですか。蕩減復帰をしようとするからです。驕慢はサタンがする行動です。サタンは、下がっていく所へは下りていけないのです。

サタンを防御するには、神様を誰よりも愛さなければなりません。この世界の誰よりも愛して、宇宙を誰よりも愛さなければなりません。自分よりも愛さなければなりません。自分は堕落した人間なので、自分より愛さな

ければならないのです。サタンは神様より自分を最も愛し、世界より自分を最も愛しました。それがサタンです。ですから個人主義を中心とした皆さんは、サタンの王者たちです。自分を思う人は、そうです。

責任分担法がなければ整理ができません。責任分担があるのでサタンもきれいに整理されて、国もきれいに二つの国に分かれて境界線をはっきりさせて、神様の愛を中心とした宇宙的な主管圏時代に入っていきますが、これが神様が霊界と肉界を直接主管する天上天国です。地上天国です。はっきり分かりましたか。皆さんが問題です。皆さんはどこにいるのかといえば、いつも境界線にいます。個人を中心とした蕩減復帰の境界線においては、サタンがついてきてはいけないのです。

統一教会の教会員の生活観念とは何でしょうか。世界のために生きるというのです。世界のために生き、神様のために生き、さらには神様の解放と父母様の解放と世界解放のため生きるのです。これが統一教会員の生活内容とならなければなりません。

二) サタン圏（堕落圏）を脱するには

完全に救いを受けるには、自分の罪を清算しなければなりません。皆さんの過去と現在のすべての生活を通じて犯した罪を清算しなければなりません。罪を清算するには、原理原則に食い違いがないようにしなければなりません。

堕落して故障したので、故障を直すには故障する前の原理原則に従って合わせなければなりません。そして創造法度に一致できるようにするためには、再創造歴史の過程を経なければならないのです。堕落は相手のために自分を投入しないで、反対に相手に自分に投入しろというところから始まったので、反対に投入することを経なければなりません。ですから宗教は自分を犠牲にしなさいと言うです。

アダムとエバの堕落以後、人間がかかった病気とは何ですか。サタンを中心とした愛の病気になり、間違ったその愛の病気でサタンの血統を繁殖させてきたのです。言い換えれば、サタンの血統を受けてサタンの直系として生まれたのが病気なのです。ところでその病気はどのように出発したのでしょうか。神様が立てた秩序と天地の道理、環境などすべてのものを否定して、自分を中心として愛したところから堕落の病気が始まったのです。ですからこの病気を治すには、自己を否定し神様を絶対的に中心として生きなければならないのです。天使長やアダムとエバが神様を中心とした愛を願ったならば、堕落しないで理想世界を成したはずです。

サタン圏を抜け出すには、神様を中心とした観をもたなければなりません。そうでなければ抜け出すことはできません。それ以外には抜け出すことができないので、このような道を選ばざるを得ないのです。

私が行かなければならない道は難しいけれども、私の前を行かれる神様がいて、私のそばで歩む友達がいて、私たちの兄弟がいるという事実を考えなければなりません。また、人類が行くべき未来の運命の道が、まだ私たちの前に残っているということを考えなけれ

ばなりません。私の生命が尽きるまで行くと考えなければなりません。そのような考えをもつことによって、サタンが自分を中心として堕落した基準を越えていくのです。私中心ではなく、神様を中心とした考えをすることによって堕落圏を越えていくことができます。ですから統一教会で最も大変な時は、最も大変なサタンの堕落圏をけり飛ばして解放され得る日が近づいたことを意味します。

元来堕落は死の境地に落ちたことなので、救援するために死の境地に飛び込まなければなりません。どうせその過程を通過しなければならない運命ならば、男らしく喜びの心で臨む皆さんにならなければなりません。そのように決意をもってみ旨の道を歩む食口が多くなれば、世界は新しい方向に進むのです。私たちはその母体を成す心情に燃えています。皆さんの心の中には、生死の境界を超越できる信念がありますか。

先生は何十、何百、何千、何万にもなる生死の境界線を見守りながらサタンと対決して来ました。言い表し難い大変な環境が波のように何度も押し寄せても、先生が立てた基準は変わりません。足が折れたとしても、目の玉が落ちたとしても、首が飛んだとしても、出発した時の心情基準から外れません。ですから死ななければ勝利するのです。

どのようにすればサタン圏の愛とサタン圏の血統が脱げますか。自分を愛して自分だけ考えればいつでもサタンは引っ張っていきます。反対に私を否定し、神様を中心として考えて生活するようになれば、サタンは私を管理できず、神様が臨在して管理するようになるのです。それによってサタン世界の天使長圏から解放され得るのです。堕落した天使長の位置から堕落しなかった位置に上がっていくのです。

死ねというのです。死んだふりをなさい。あの足の裏に何度も踏まれよというのです。私が知るところによれば、高いところに上がって心と体を一つにすることのできる道はありません。天下に高い心をもって上がれば、一つになる道がありません。踏まれなければなりません。先生も高くなるのではと、神様が四十年間足で踏んでしまったのです。踏んでしまったので、上がろうとするのがすりつぶされて一つになるのです。三千里半島を歩き回った金サッカ（一八〇七―一八六三。本名は金炳淵。家門が滅んだのを嘆き、生涯放浪生活を送り、多くの風刺の詩をつくった）のように、ののしられ、踏みにじられ、ぞんざいに扱われながら、さまよわなければならないのです。そうしながらもそれを消化することができ、それをみな喜んで消化できる自分自身を発見しなければなりません。

「愛という枠をもって私がサタンよりも愛するという心で、神様を愛し、宇宙を愛する心をもって、神様のみ旨と人類の解放のためにどん底に下りていく」と言うことができなければなりません。下りていくのはどういうことでしょうか。踏まれてみなさいということです。四十億人類にみな踏まれてみよというのです。踏まれても不平を言わないのです。感謝し、愛によって消化するのです。このようなことをしなければなりません。

六　信仰は蕩減法を守っていくこと

一) 信仰と蕩減

統一教会は九八パーセント、九五パーセント生活的な面が全部信仰です。九五パーセント神様が造られたものを失ってしまったので、九五パーセントやってこそ再創造が始まるのです。その上でさらに五パーセントまで私がしなければなりません。ですからどんなに大変なことでしょうか。堕落していなかったら九五パーセントは天がしてくださり、五パーセントだけを私がしていたでしょうが、堕落したことによって神様がもう一度してあげることはできないというのです。再創造を私がしなければならないのですが、九五パーセント、プラス五パーセントです。ですから死ぬ覚悟をしなければなりません。犠牲になる覚悟をしなければなりません。世界蕩減路程を歩みきるまでは、楽な考えをしてはいけないのです。

先生がこの地に来て信仰世界に残した偉大な内容は四つです。神様と人間との関係をはっきりさせました。責任分担と蕩減というものを、この歴史の中で誰も知らなかったことをはっきりさせておきました。その次に、良心的な人は生きていくことが難しく、悪人は良い生活をしていますが、これはどうしてかということです。蕩減法、カイン・アベルの問題を知らなかったことを、これをはっきりさせました。

人間は堕落性を相続して習慣の奴隷になってしまいました。今日においては宗教者までもこのような惰性に浸り安逸な生活をする傾向があります。習慣的な信仰生活は危険です。このような信仰生活はサタンの讒訴条件を提示させてしまう要因になります。人間たちが復帰路程を歩んでいくにつれて一人でも失わないようにしようとするサタンは、あらゆる方法を通じて再侵犯の機会をねらっています。サタンは個々人が立てた蕩減条件によって個人から離れていかなければなりませんが、また再び家庭的次元、民族的次元において、侵犯することもあり得るのです。

私たちが行くべき公式路程がありますが、皆さんはそのような公式をはっきりと知らないでいます。「私たちには蕩減が必要ない。何のために私たちがこの大変な蕩減の道を行かなければならないのか」。このような人はサタン圏内で死ぬしかありません。サタンは彼らの圏を主張します。皆さんはこのようなサタンの領域を征服しなければなりません。サタンを退かせなければなりません。サタン圏を占領しなければなりません。果敢に立ち上がりなさい。過去のことを清算しなさい。これが信仰生活において皆さんがしなければならない責任です。はっきりと知らなければなりません。

蕩減復帰は条件復帰ではありません。事実蕩減だということを知らなければなりません。このようなものは原理にはありません。条件蕩減でありながら事実蕩減というようなことは初めて聞くことでしょう。したがって今までの復帰路程を考えてみると、サタン世界で一番良心的な一人を立てます。ノアが正にそのような人でした。ノア一人の信仰を絶対信仰の基台の上に立て、ノアの家庭を中心として着陸するようになります。絶対信仰の男性、絶対信仰の女性、絶対信仰の四位基台が必要です。

神様は堕落した人間を蕩減復帰させようとして宗教を立てられました。神様は宗教を通じて神様中心の精神を強化させる方法、生と人格に対する肉体の支配を逆転させる方法を教えておられます。宗教が断食、犠牲的奉仕、温柔で謙遜な態度などを要求する理由は正にこのようなところから来ています。これは肉体の勢力を減少させ、肉体をして精神に服従させる方法です。信仰生活を通じて、肉体中心的な生活習慣から脱して新しく精神中心的な生活方式をつくっていくまでに、通常三年ないし五年かかります。

蕩減は、何を中心としてするのでしょうか。蕩減の内容とは何でしょうか。サタンをより愛するのか、神様をより愛するのかという愛の問題です。すべてのことが愛の問題です。蕩減するには神様を絶対に信奉しなければなりません。ところがサタンは神様を絶対に信奉しませんでした。背信したということです。始めてから、中間で神様を背信しました。それゆえに、まず蕩減の道を行くに当たって信仰や行動が絶対的でなければなりません。

蕩減路程というものは責任分担圏を立てなければなりません。この責任分担は何を中心としてしなければならないのでしょうか。より天を愛すること、より絶対的な信仰とより絶対的な愛をもたずしては、サタンを屈服させることはできません。

今までの蕩減復帰時代は過ぎ去りました。蕩減復帰時代は過ぎたために、これからは法的な行動に即座に引っ掛かる時です。蕩減復帰時代は帰っていくことです。第一次ができなければ第二次に移るので、前進的な発展に通じることができる過程でしたが、今の時は蕩減復帰時代が過ぎたので復帰時代です。今は復帰時代であるだけに誤ったことを後日に延ばして解決する時ではありません。即刻的です。このようなことをはっきりと知って、過去のかすかな信仰概念があったならば、それをけり捨てて先頭に立つ覚悟をしなければなりません。

み旨のために行く道で先生自身の生活を中心として見れば、誰も理解できない道を歩んできましたが、その背後で天が理解してくださるその二面的な深さと幅がありました。そのような事実を考えるとき、それは不幸ですか、幸福ですか。幸福なことです。彼らが私に反対するのは、反対したくてそうするのではありません。反対しなければ蕩減復帰は成立しません。天がすべてさせているという事実を知って、皆さんは感謝しなければなりません。感謝していけば、結局は私が考えもしなかった世界に行くことになり、私に反対していた世界は考えもしなかった結果の世界に落ちてしまうということです。それゆえ、天に侍っていく人の生涯は感謝しなければならないということです。

自分が行った忠誠の実績をもって、それを貴く思い、天の前に一歩一歩前進することが貴いことであって、欲を出して祈祷するとしても、騒がしくするとしてもみ旨がすべて成就するというわけではありません。蕩減復帰の道を中心としては自分を第一に立てる人はみな流れていくのです。文先生は自分が一番素晴らしいと言いますか。私が今まで皆さんに教えたことは、私が行わないで教えたので

はありません。私がすべて行ってから教えたのです。

神様の解放は、真の父母と一つになって地上のすべての祭物を捧げることができるサタンの讒訴条件を清算しなければできません。皆さんが、どのようにして神様の心情的な所有権に帰着するのでしょうか。父母と皆さんと万物が平行線上で神様の所有だと決定することができる位置をもつことができなかったということです。これを蕩減復帰しなければなりません。

皆さんが蕩減復帰の道を歩んでいるという事実、責任分担という宿命的な道を歩んでいるという事実をどれだけ感謝して受け止めましたか。もう一度考えてみなければなりません。「ああ、統一教会の原理のみ言は良いが、蕩減復帰は嫌だ」と言うことはできません。大学に入るためには、その関門を通過するために試験を受けなければなりません。私が願う反対の道が横たわっています。これを解決しなければ学校に入ることができません。同じことです。統一教会の行く道は簡単ではありません。

私がどうしてついて行かなければならず、私の心がなぜ促され、良心が生きた心地もなく追求されているのかということを、皆さんは誰よりもよく知っています。私の心はどうしてこうなのだろうということです。正道が目の前にあるがゆえに従って行くべき歴史、人間が行くべきであり、私が行くべき蕩減復帰の深刻な運命の道が残っているからです。落ちてしまってはこの道は行けません。御父母様の背に乗っていくまでは、行く道がないということです。いくらはえが汚くても、走っている千里馬の腹の下にくっついて落ちることなく忍んでいけば、千里の道を行けるのと同じことです。ひっくり返ってもくっついていかなければならないのです。落ちてはなりません。

今日、信仰をする人たちは蕩減復帰の道を歩んでいるということを忘却しています。アダムとエバがどうして堕落したのでしょうか。責任分担路程を忘れてしまったからです。現実を忘却してしまったから堕落しました。責任分担圏を残したまま人類は呻吟せざるを得ない立場に立ち、この責任分担圏さえも自由に迎えることのできない立場になりました。堕落した人間であるがゆえに、責任分担圏を自由に迎えることができるその位置まで出てくるためには、今日の歴史的なすべての堕落圏を解脱していかなければなりません。そうでなければ復帰の道に出てくることはできません。

蕩減復帰を完成した人は手を挙げてみなさい。こいつ、こん棒でたたかれて、罵声を浴びせられ、雷に打たれなければならない邪悪な者たちよ、見なさい。これをしなかったら先生もどうにもなりません。先生ははっきり教えました。そのとおりに霊界が変形されるのです。皆さんがこれをできずに逝けば、あの世に行って必ず引っ掛かってしまうのです。いくら夫婦同士が息子、娘を愛したとしても、全部行ってストップです。霊界に楽園ができたのと同じように、統一教会において天国に入る前の家庭楽園ができてしまうのです。

そこでは愛し合うこともできません。どうやって愛し合いますか。我が子だからといっ

ても、愛したくとも愛することができなくなっているのです。そこに行けば、どうしますか。夫に「あなたは私を愛していたのに、ここに来てどうしてそうなの」と言ったとしても、愛することができなくなっています。愛することができません。自分が立っている位置では愛するようになっていません。

皆さんに聞きたいことがあります。皆さんは蕩減復帰の道を歩いてきましたか。そのように生きてきましたか。長子復帰をしなければならない運命として私の前に長子復帰の道が立ちふさいでいるのに、これを必死に努力して、どのような代価を払ったとしてもこの峠を越えなければならないといって身もだえをしましたか、しなかったのですか。しなかったのですね。ただ先生について来たのでしょう。先生がどうだから？　先生が好きだからですか。どうしてついて来たのですか。ついて来たその動機も、原理よりも先生が好きだからついて来たのです。

統一教会に入り、すべて腰掛けていて天国に行くと考えてはいけません。心情圏を相続しなければなりません。皆さんは、いつ蕩減復帰すると考えましたか。いつ蕩減復帰しますか。蕩減復帰するために行けと言うのに、いつ行きましたか。

人間にとって一番難しいこととは何でしょうか。サタンの三大門がありますが、一つ目は食べることです。この口は、食べて食べて食べたら、もっといい物をくれと言います。しきりにそうします。その次は休むことです。寝さえすれば、しきりに休みたいのです。そうでしょう。仕事をしたくありません。その次は何ですか。情欲です。浮気をしようとします。統一教会で浮気をして男女問題があれば一箇所に連れていって、ガソリンを掛けて燃やしてしまうでしょう。そのような時が来るのです。私が、そのような指示をしないからこうなのです。神様が、エデンの園にいたアダムとエバを追放したでしょう。この子たちを処理する道がありませんでした。ところが今は大変おびただしいほどあります。ですから深刻だというのです。

七　蕩減の道は絶対服従、絶対順従の道

宗教人は、なぜ絶対服従をしなければならないのでしょうか。絶対的な主体の前に絶対的な相対になろうとするので絶対服従しなければならないというのです。そして悪に対しては、死んだとしても絶対相棒になってはいけません。愛せよと言っても、悪と絶対相棒になるなというのです。人間は愛しますが、人間と一つになっている罪を愛してはいけないということです。皆さんは、これを知らなければいけません。

神様が絶対的ならば、私も絶対的な位置を願わなければなりません。神様が不変ならば、私も不変でなければなりません。神様が唯一ならば、私も唯一でなければなりません。神様が永遠ならば、私も永遠でなければなりません。このような観点で人間の永生は不可避です。それは結果的な帰一点でないわけがないという結論を堂々と下すことができると見るのです。いくら神様に愛があるとしても、私に愛がなく、いくら神様に生命があるとしても、私に生命がなく、いくら神様に理想が

あるとしても、私たち人間に理想がないならば、すべてが無駄だというのです。

我欲をもってはいけません。先生を中心にして完全に絶対的に一つにならなければなりません。一つの根です。根を引っ張れば、引っ張られていかなければならないのです。幹や枝は、自分の存在意識をもつことはできません。主張することができません。二つの方向はあり得ません。一つです。これが勝利的基盤を築き、位置を確保すれば東西南北に自由が広がるというのです。そうしなければ自由がありません。どういうことか分かりますか。ですから自由行動をすることができません。

今までの道人たちは、何を中心に生活してきましたか。イエス様もかわいそうな人です。人間的に見れば何の主張もない人です。夜も昼も神様のみ旨だけをもって、自分の旨はないのです。神様のみ旨の前に絶対服従でした。絶対服従！　なぜ絶対服従したのでしょうか。絶対的な主体、円形的な主体がいるにもかかわらず、もう一つの三角形的主体の圏を成したのがサタンなので、そのサタンを取り除くためにそうしたのです。今日、人間はサタン圏の中に隷属しています。サタン圏内に隷属している人間を脱出させるためには、サタンが一番嫌がる道を行かなければならないのです。それで宗教は良心を中心に絶対服従しろと言うのです。良心と心が、本来は神様が絶対的なので絶対的な神様を中心に絶対的に一つになるようにしようとするので、宗教世界ではマイナスになれと言うのです。

絶対的に服従しなさい。絶対的に服従することは滅亡することではないのです。服従したらどうなりますか。一つになります。一つになったらどうなるのでしょうか。悪は反発するのです。完全に一つになっているので、悪は反発するのです。それで悪を取り除くことができるというのです。これが原則です。

神様のみ旨には、神様の理想的なみ旨と、人間が堕落してしまったので蕩減復帰しなければならないみ旨があります。二つあるということを知らなければなりません。それではどのようなみ旨の道を行かなければならないのでしょうか。二番目です。それではその二番目のみ旨の道には、天に従って信仰生活をする人たちが自由にすることができる内容が、少しでもあるのかということです。これっぽっちもないのです。

絶対的な信仰をしなければいけません。「統一教会を信じるか」と言う時、「絶対的に信じて行く」と言わなければなりません。

絶対信仰とは何でしょうか。自分が信じているある宗教の指導者がいたら、その指導者と私は歴史的に数千年という遠い隔たりがありますが、信じる心を中心としては平面的に対等な時代圏内に入ることができます。それで絶対的に信じなさいというのです。絶対的に信じる時、その人と一緒にいるということが分かるようになるのです。またその人と一緒に暮らしているということが分かるようになるのです。このようなことを新しく認識させて刺激させるためのものが、信仰だということを知らなければなりません。

残るものは何でしょうか。絶対信仰も去り、絶対服従も去りますが、最後には絶対愛が残

るのです。信仰と愛と希望、この三つはいつもありますが、その中で一番は何ですか。（愛です）。信仰も去り希望も去りますが、最後には愛が残るというのです。同じことです。絶対信仰も、みな去ります。

死ぬところでも答えなければいけません。死ぬと言って目を閉じて「私は、死んだ」と言っていれば、既に別の世界に行っていたということです。飛躍が起こったということです。統一教会はそのように発展してきたのです。気が詰まり、息が詰まり、四方が堅く絞められて、地に入ることも天に跳ね上がることもできないその場を、死を覚悟して乗り越えていけば、生きておられる神様は間違いなく顕現されるのです。ですから私には神様がいるか、いないかということは問題になりません。そして怨讐を消化しなければいけません。怨讐を愛さなければなりません。その道は、易しくはありません。自己否定を何十回、何百回するだけでなく、怨讐を愛することができるところまで行かなければなりません。そうでなければ神側に立つことができません。

宗教は、肯定概念から始めることができません。先祖がそうしたのです。それを否定する第一条件が何かというと、絶対信仰です。絶対信仰。分かりますか。そう、あなた方は絶対信仰を身につけましたか。ですから苦行の道をなぜ行くのか、その原因を暴かなければなりません。きょう文なにがしが来て、宗教の秘密世界をすべて明らかにすることを願うでしょう。なぜ苦行の道を行かなければならず、犠牲にならなければならないのか、なぜ絶対に信じなければならないか、と牧師たちを呼んで三つのことを聞いただけでも答えられず、「そ、それ信じることによってすべての救いを……」と言うのです。そのような妄想的なサタンの煙幕戦術に引っ掛かってはいけません。

さあ、統一教会がそうです。統一教会員たちが蕩減復帰するためには、反対の行路を通じて行かなければならないだけに、自己認定、自己肯定から始めるのではありません。完全否定です。完全な宗教は自己否定から、堕落した世界の完全否定から始まります。それで世界を否定して、国を否定して、氏族を否定して、家庭を否定して、妻夫、男性女性自体を否定して、私の体と心自体を否定しなければなりません。否定の版図がどのくらい大きいか知らなければなりません。私の心を中心にして体まで否定しなければなりません。

統一教会を信じて福を受けようという考えをしてはいけません。福をあげようという考えをしなければなりません。統一教会自体内の福を国と世界のため、もっと大きいもののためにあげると言わなければなりません。そのように行く時、レバレンド・ムーンが皆さんの進路に責任をもちます。皆さんの足を私が引っ張りはしません。そのような人にならなければなりません。

表では好きですが、心の中で頭を横に振る人がいます。このようなことを見るとき、良い性稟をもって生まれなければならないというのです。信仰の道において自己と闘って勝つということは、世界を克服することよりも難しいのです。このような観点で見るとき、第一次の十字架は自己を克服しなければならないということです。

では、今まで責任分担の蕩減歴史を誰が全部しましたか。それをお金で返すことができますか。皆さんの家を売って、国を売って返すことができますか。それでは、何をしなければなりませんか。することはありません。ただ絶対服従です。皆さんが二十代までは絶対服従です。二十代になる前にエデンの園でアダムとエバがお尻を振って堕落したのです。自己主張していてです。二十代までは絶対服従です。二十代前は服従しなければなりません。ですから子供たちは絶対服従です。絶対服従を教えなくても服従するようになっています。彼らももし父母と一つになれなかったならば滅ぶということを知っているのです。神様と一つにならなければ滅ぶというのです。

四大心情圏と三大王権を失ったので、これを取り戻さなければなりません。これを成すためには絶対服従と絶対従順と絶対犠牲を中心として順応し、何をさせたとしてもすべてをやると言わなければなりません。そのようにしてこそ、父母がサタン世界からここに来るのです。ですからサタン世界の男性は天使長だから切ってしまわなければならないのです。そうすれば、ここから上がっていくのです。

カナン復帰路程では先生について行かなければなりません。雁が大洋を渡るとき、親分雁の前に絶対服従です。異議がないというのです。「飛べ」と言えば飛ぶのです。死ぬほど疲れても、ただついて行かなければなりません。今までそのようなことをしてきたのです。今は目的地に来てひなを産む時です。すべてこのようになっているので、同族同士お互いのために生きて、愛して、一つの族属を成して、族属自体を誇ることができる、そういうことをしなければならないのです。これが今この時、しなければならないことだと言ったのです。今まではカナンの福地に向かっていく時でした。今は定着時代に入ったのです。

本当の孝子は服従する者です。本当の忠臣は奸臣に追われて死んだとしても、王に対して無能な王だと言うのではありません。奸臣に追われて死にながらも、忠臣の志操でかわいそうな心を抱いて涙を流しながら王の安泰を願う人が、本当の忠臣です。絶対服従です。絶対服従で成功をもたらすことのできるただ一つの道は、真の愛の道しかありません。

先生は今まで「ああ、お前たち、先生の言葉に絶対服従しろ」とは言いませんでした。私たちは歴史的な路程に順応して行かなければなりません。歴史的路程とは何かと言えば、神様のための摂理的な歴史路程です。今まで皆さんに復帰摂理路程を教えてあげたのは、そのような意味からです。統一教会の文先生のために教えてあげたのではありません。ですから先生も行くのです。人類の目的を成していくのです。その目的を一点に結末を見ることができなかったので、この結末を締めくくってあげようとするのが今日、この時代の統一教会が主張する統一原理であり、統一思想だということを知らなければなりません。

Book 九: 祝福家庭
Blessed Family

はじめに

神様がアダム、エバを創造されたのは、祝福の夫婦として罪のない善の息子、娘をこの地に繁殖させ、天国を成すというところに目的があります。神様が人類の父母として主礼となられ、天の礼法と天法によって行われる天倫の大事として、アダム、エバが結婚式を挙げていたならば、彼らが正に人類の真の先祖であり、真の父母になるのです。ところがこのような天倫の秘密を悟れなかったアダム、エバは、堕落することによって、サタンを中心とした夫婦に転落してしまいました。

したがって歴史始まって以来、一人も真の婚姻をした人がいません。聖書でも「小羊の婚宴」がなされる前の婚姻は、みな仮の結婚であると言っています。今日、歴史時代のこの世の婚礼は、人間中心の人倫の業です。どんなに豪華で、ぜいたくで、神聖に行われる結婚式でも、神様とは関係がないのです。この世の夫婦は、この世に生きている間、臨時に結ばれる、この世での配偶者であって、永遠の伴侶になることはできないのです。それであの世に行けば、ばらばらに別れるようになっています。

それでは祝福結婚の意味とは何でしょうか。祝福結婚は、六千年の人類歴史において初めて、真の父母を通じて、エデンの園で成し遂げられなかった神様の祝福を今のこの時代に、私たちに成してくださる驚くべき約束の成就なのです。真の父母として地上へ来られた文鮮明先生は早くから、人間の堕落は、サタンとの不倫な愛の関係であるということをはっきりと解き明かされ、救いとは、祝福を通じて神様中心の血統への転換、父子の関係の心情圏を回復するところにあるとといてこられました。

祝福は単なる結婚式ではありません。祝福は神様の子女に生まれ変わる聖なる重生の役事であり、サタンとの関係を断絶することによって原罪を清算し、新しい生命へと出発する核心的な儀式であるがゆえに、この祝福の関門を通過せずには誰も天国に行けないというのが原理です。祝福は堕落した人類が通過すべき公道です。
ぜひこの本が、このとてつもなく驚くべき祝福の意味と価値を真の御父母様のみ言を通じて明確に理解させ、はっきりと痛感し、祝福に同参させる恵みの道標となることを願います。

二〇〇二年十二月

第一章　真の父母と祝福

一　祝福の意義と価値

一) 祝福とは何か

①祝福の意義

祝福は、真の父母と真の子女が出会い、創造目的を成し遂げることを意味します。

神様は二性性相としていらっしゃいます。これをプラスに分立させたのが男性のアダムであり、マイナスに分立させたのが女性のエバです。そしてアダムとエバを再び合わせた

姿のようなものが子女です。このように神様を中心として一代、二代、三代が形成されるのです。

では、この三代の中で問題が起こったのは何代かといえば、二代目のアダム、エバの代です。アダム、エバが神様の愛を中心として一つになれなかったのです。もし、アダムとエバが神様の愛を中心として一つになっていたならば、神様が臨むことのできる因縁が決定され、そのことによって子女にも、神様と関係を結ぶことのできる愛の基準が連結していたことでしょう。それを「祝福」と言うのです。

統一教会で行う祝福結婚式は、ただ単に男女が出会って一家庭をつくる婚礼式ではありません。今までの結婚式は、自分を中心としたものでしたが、私たちの結婚式は、神様に喜びを返すような内容をもって歴史を蕩減する貴い条件として、神聖で盛大に挙行します。私たちの結婚式とは、アダムとエバの堕落によって始まった神様の恨を解き、イエス様が成し遂げられなかった新郎新婦の基準を通過することだ、ということを「原理」は明らかに説明しているのです。

「祝福」という言葉は、統一教会から始まった言葉ではなく、創世時から堕落した以後今まで、歴史過程を通じて神様の内心の中に一つの願いとして、神様がいつもこれを追求し願ってこられたものだということを知らなければなりません。

そのような希望の一日を取り戻すために神様は、今まで受難の道を歩んでこられましたが、いまだにこの日を取り戻せないでいるのです。ゆえに、この一日を取り戻すならば、この日は歴史的な解怨が成就できる日となり、神様の歴史的な願いを成就できる日になるというのです。このようなことを考える時、この祝福の場が、どれほどとてつもないかという事実を知らなければなりません。

人間の先祖のアダムとエバが堕落したその日から、人間は神様が祝福してくださる一日を待ち焦がれてきました。

祝福の場は、過去から今までつづられてきた歴史過程における、あらゆる悲しみを清算することのできる場です。今まで成就できなかった神様の願いが、新たに出発できる場であり、新たな人間の未来が出発するきっかけとなり得る一つの基点なのです。

今の時代は、蘇生、長成の段階を越えて、完成段階へと進んでいく時代なのです。縦につくられた歴史が横的に越えていくべき時代なのです。すなわち、六千年の歴史をすべて一度に越えていく時代なのです。ですからサタンの侵犯圏内を抜け出さなければならないのです。

それでは祝福とは何でしょうか。今までの歴史的なサタン圏を完全に越えさせる関門なのです。

祝福は、真の父母の因縁を継承することです。この日のために、先生は精誠を尽くして闘ってきました。したがって、真の父母がサタン世界と闘ったその看板を掲げて祝福するのです。

先生が生涯で最も貴いと考えたものとは何でしょうか。祝福です。皆さんにとっても、人類歴史始まって以来、最高の贈り物は、祝福です。

今日、皆さんは、まだ真の父母と完全な因縁を結ぶことができないでいます。ですから、その因縁を結んであげるためにしてあげるのが、統一教会の祝福です。

祝福を受けた人は、霊界に行っても先生が永遠に責任を負います。先生が主管して指導します。祝福とは、このように先生と永遠の因縁を結ぶものでもあります。

祝福をしてあげるということは、天の全権を委譲してあげることを意味します。

祝福は、天国の門を開くことであり、天国は、子女をもって家庭が入っていく所です。

祝福とは、永遠の宝物です。子孫万代を今から出発するという一つの契約です。ですから、それを汚す時には一族が関係します。イエス様を十字架につけることによって、一国家が関連することになったように、一族に連結されます。

祝福とは、歴史が追求してきた万民解放の門を開く鍵なのです。

祝福を受けるということは、とてつもない事実です。祝福を受けた人は、神様の代わりに「私が定めれば天宙も定める」という心で、主人として振る舞える人にならなければなりません。このような条件が備わってこそ、天が私たちを中心として生活理念を立てることができるのです。

神様の祝福は、絶対的に公的なものです。その祝福は、ある個人だけのためのものではなく、またある家庭だけの、ある国家だけの、ある世界だけのためのものではありません。神様の祝福は、宇宙全体のためのものです。

「祝福」という言葉は、福を祈るということです。祝願する（祈る、願うという意味）の「祝」という字です。福を祈るのに、どんな福が一番貴いのでしょうか。愛の福が一番貴いのです。統一教会は、そのような意味で「祝福」という言葉を使うのです。一番貴いもの、宇宙の公約を代表した一番核心的な起源が、男性と女性が結合するところから始まるので、その祝福が一番偉大だというのです。

その偉大なものが福を祈れば最高の福になるので、統一教会では結婚式を「祝福」と言います。初めて来た人々は、こういうことを知らなければなりません。統一教会で「祝福を受けた」というのは、今日この世で「福を受けた」というのとは違います。神様の立会いのもとに、真の父母を通じて結婚式をしてもらったということです。

今、あのイギリスの王室にある五三〇・二カラットのダイヤモンドは、昔アフリカでは石ころの扱いを受けていたのです。ダイヤモンドが世界で最も貴い宝石になることを誰が知っていたかというのです。きらきら光るのを見て、単なるガラスの塊だと思っていたのではありませんか。全く同じです。この貴い祝福を受けたことは受けたのですが、これが

ダイヤモンドであるにもかかわらず、単なるガラスだと考えているのです。何も知らずにいたのが、先生から話を聞いてから「ああ！貴いんだな」と言っているのです。

祝福の中で一番重要なものとは何でしょうか。お金ではありません。名誉でもありません。いかなる権力でもありません。息子、娘が栄えていくことです。皆さんがそれを知らなければなりません。祝福の中で一番良い福とは何でしょうか。息子、娘が天の愛を受けることができるように生まれることです。それは立派に生まれることです。

するとどうなるのでしょうか。その息子が私より神様の愛をたくさん受ければ、恩恵を受けるようになります。そうではありませんか。山の谷間の向こうからこのように下りてきた電線のようなもの、この送電線のようなものを見れば、伸びていますが、ここでぎゅっと引っ張ればピンと張るのです。同じように、子供が天の愛をたくさん受けるようになれば、私がそれだけ落ちたとしても、ぐいっと上がることができるのです。恵みを受けるのです。

祝福の場に参加する人がいるならば、彼はただそのまま一人の男性、あるいは一人の女性という立場で参席してはいけません。その場は、今まで六千年間この世に来ては逝った数多くの男性、あるいは数多くの女性を代表した場です。その場に皆さんが招請を受けたという認識をもたなければなりません。皆さんは、そういう事実を内情的な心情で体恤しなければなりません。

祝福が成される今の時は、どのような時でしょうか。今は、神様の願いが成される最高の時であり、六千年間苦労してきた神様の恨が終わる時であり、この地へ来られ、御苦労された神様の息子、すなわちイエス様の願いが成される時です。それだけでなく、人間が創世以後、初めての愛が始まる時であり、万物の歓喜と尊貴と栄光を受けることができる時です。神様にとっても、この日がどれほど良いでしょうか。罪悪がみな消え、光明の太陽が昇った明るい天地を迎える日、すべての自然が和動し、すべての万象が踊る明るい朝、勝利の朝を迎える日です。

先生は今、現実はこうですが、後日、先生が祝福した者の中から最後に残った一人が、世界的な人的資本として残り、栄光を受けることを希望して生きています。

②祝福の価値

皆さんは、摂理的に見るとき祝福がどれほど重要なのかを知らなければなりません。神様を中心として祝福を受ける場は、地上天国と天上天国が出合う場です。横的に、永遠な世界と瞬間的な世界が出合う場です。

祝福は、天地で最も貴いものです。同時に、極めて恐ろしいものです。もし祝福を受けた夫婦が、互いにほかのことを考えるならば、それは相手を蹂躙することです。皆さんからまず善の先祖、地、国が生じるのです。したがって祝福を受けた人は、目覚めれば、天地を考えなければなりません。祝福は、人に福を分けてあげるためのものです。

祝福の場は、恐ろしい場であり、ここでは、いい加減な自分の感情は通じません。一生命の価値は、宇宙よりも貴いものです。ゆえに、一人に責任をもつには、永遠を中心として責任をもたなければなりません。こういう問題が左右する場が祝福の場であることを皆さんは、はっきりと知らなければなりません。ですから自分の一生で、そのような一時をもったならば、彼は幸福な人です。このようなとてつもない祝福の場に皆さんが加担するためには、歴史的な決心をしなければなりません。

祝福は、その価値を知って受けなければなりません。祝福を受けることによって、第三イスラエルの位置に立つようになるということを知らなければなりません。皆さん、祝福の意味と価値を知ってみると、祝福を受けずしては、人間完成の道へと行くことができません。結婚していない人々を大人として扱いますか。人間の世の中でも、処女が死ねば処女の怨霊で、チョンガー（独身の男性）が死ねばチョンガーの怨霊と言います。それは、誰かがそのようにしたのではありません。天道がそのようになっています。

国の国王も国民もサインするのは同じですが、その内容においては天地の差があるように、祝福においても外的に見れば何でもないようでも、その内容と価値において見れば、とてつもない差があるのです。

皆さんが衣食の問題が大変だといって、なすべき使命を忘れて、神様が下さった祝福をお金で売るのですか、そのような考えでしょうか。神様の祝福は、天と地を与えたとしても絶対に引き替えることができません。

祝福には、全世界を与えたとしても引き替えられない価値があります。時には、私が祝福してあげたことを後悔することがあります。祝福は、一人の男性と一人の女性が神様のみ意を中心として、「真の愛を実行する真の父、真の母になれ」と言って、してあげたものです。

祝福の場とは、どんな場でしょうか。祝福の場は、世界で一番良い場です。その祝福の場は、誰と関係を結ばなければならないのでしょうか。皆さんは自分自体で完成するのではありません。父母の愛によって完成するのです。子供が親の懐から生まれれば、立派に生まれたとしてもそうでなくとも、その親の姿に似るのです。それと同じように、統一教会では真の父母の道理を教えます。それが皆さんには、福の中の福です。

八十歳を越えたおばあさんたちも、祝福を受けることができずに死ねば、天国に行けないという事実を知っているために、死んでいく最後の瞬間でも何千里も何万里も向こうに男がいても、その男と絹織り糸を結んで、祝福の条件だけでも受けたいと思うのです。統一教会ではこのようになっています。先生はこのことをやり遂げなければならないので、星回りが悪い人です。

祝福を受けたということは、メシヤが二千年間の苦労によって地上に基盤を築き、選ばれた民族と教団と自分の氏族を中心として、新郎新婦の名前で出発することができる時が来たということです。皆さんが氏族的メシヤになることができるでしょうか。先生と父子の因縁が結ばれたがゆえに、サタンもどうす

ることもできないのです。このように祝福は、本当にとてつもないものです。

イエス様が二千年の間、精魂を尽くして成したかったこととは何でしょうか。婚宴をしようとされたのですが、婚宴とは何でしょうか。正に祝福です。イエス様が二千年間願ってきた、その願いを成就する基準が祝福の婚宴です。婚宴しようとするならば、新郎の前に新婦が現れなければなりませんが、それがキリスト教の終末です。ですからキリスト教を越えずしては、天国に行くことができません。

イエス様が来て、四千年の歴史を終結させて新しく出発しようとしたものとは何でしょうか。家庭がないために滅びました。家庭があったならば、氏族は自動的に時間がかかっても横的な面において歴史を通じて蕩減できるのです。そうなれば、イエス様の一族が生じていたでしょうし、イエス様の民族が生じていたでしょうし、イエス様の一国が生じていたのではないかというのです。そのようにすることができる家庭をもつために、イエス様が三十三年間苦労したのです。三十三年間苦労してももてなかった家庭なのに、皆さんは祝福の価値を知っていますか。祝福は、六千年間探し求めてきた恨の解決門なのです。

「小羊の婚宴」は人類歴史上、初めて人間が祝福を受けて家庭的な救いの基準を立てることを意味します。これが六千年の歴史が探し求めてきたものです。「小羊の婚宴」をする新郎新婦が、真の父母の使命をもって現れることです。ゆえに、再臨主の祝福を受ければ、その家庭の救い主として、その家庭の救いの門を開くことになります。

統一教会に入って皆さんが祝福を受けたということは、神様が四千年間摂理してこられた土台の上に、イエス様を送り、み旨を中心として家庭を復帰したという勝利的基準に立ったということです。それで皆さんの子孫は、復帰摂理において何の功労がなくても、皆さんの勝利の基準を通じて、四千年の復帰摂理で功臣となった先祖たちの恩賜を受け継ぐことができる立場に入っていくのです。

エデンの園で、男性の前に女性を創造しなかったならば、どうなっていたでしょうか。女性がいるという事実は、宇宙的な真理です。奇跡の中の奇跡が、男女が存在するということです。片方だけ存在するとすれば、何も存在しないのと同じです。人類はおしまいです。統一教会の祝福の価値が、こういう角度から十分に分からなければなりません。

一度相対者に会えば、それは永遠と連結します。宇宙を与えても、神様を与えても買えない本然の夫婦の愛に感謝して、強く大胆でありなさい。統一教会の真の愛を味わった者たちは、世界のどこへ行っても、その愛の光が共について回るようにならなければなりません。人類を、全宇宙を、真の愛を中心として愛さずしては、絶対に天国に行くことができないのです。

「神様が変わらない限り、私は変わらない。過去、現在のいかなる人やいかなる物が、サタン世界の生命、サタン的愛、サタン的理想を私から完全に奪っていっても、私は行くのだ。さらには、神様が変わるようなことがあっても、私が神様を元に戻していくのだ。神様が絶対的でなければ私が絶対的にしてみせ

る」と、こういう考えをもたなければなりません。そのようになれば、神様でも絶対服従します。「私は、金の輝きのように、ダイヤモンドのように硬く、変わらない光をもっている」と、そのように考えなさいというのです。そのような立場で、そのような日を見つめて、神様がアダム、エバの祝福の一日を願っていたというのです。

皆さんは、神様を探す必要はありません。それよりは愛が必要だというのです。この愛さえもてば、神様は自然に私のところに来るということです。私に捕らえられるというのです。ですから神様を探す方法は、世界人類を兄弟と思い、神様のように父母のように愛して行動することです。そうすれば、すぐに神様は私のところに来るというのです。それで宗教では愛を語っているのです。しかし、このことが成されなかったために、今日、統一教会はこれを再び復帰するために、このようなことをせざるを得ないということを知らなければなりません。祝福はこの場で受けますが、一つになり、これを中心として拡大さえすれば、この宇宙は皆さんのものになります。

宇宙は、生きるか死ぬかの決定点です。

三・一運動に参加した三十三人の中に李甲成という人がいるでしょう。今、その人一人だけが生きていますが、三・一運動について考えるとき、その人が大統領よりも高いですか、高くありませんか。それは尋ねるまでもなく、より高いというのです。同じように、先生を通じて祝福結婚をした人は、世界的な栄光を受けることでしょう。

たとえ一番最後に結婚した一双が、夫婦とも、目も一つなくて、鼻も曲がって、耳も一つなく、腕も一つない不具の中の不具であったとしても、彼らは世界的な栄光を受けるようになるでしょう。そのような身体上のことが問題ではなく、先生を通じて祝福を受けたということそれ自体が問題になるということです。それは数億万ドル与えても買うことができないのです。私たち統一教会のお嬢さんたち、それを知っていますか。どれほど知っていますか。

③祝福は人類が通過すべき公式路程

統一教会を中心として成される合同結婚式は、統一教会にだけ限られる結婚式ではありません。これは、全人類が必ず通過すべき公式的な路程なのです。これをはっきりと知らなければなりません。それでは祝福結婚式をやらなければならない根本的な原因はどこにあるのでしょうか。それは、私たち人間の始祖が堕落したからです。

もし人間の始祖が堕落しなかったならば、今日、私たちが祝福を受ける、このようなことはなかったはずです。しかし堕落することによって、再び神様の主管圏に越えていかなければならない復帰路程が残るようになったので、私たちはこのような道をさかのぼっていかなければならないのです。今日、人間たちが宗教を信じるのも、このためであり、歴史が指向してきたのも、やはり同じです。

これから人類は、どこへ行くべきでしょうか。「全人類は祝福の門を通らなければ、天国に行くことができません。数多くの人々が

キリスト教を信じていますが、そのキリスト教自体も祝福という門を通らなければ、天国に行けません」。このように言えば、キリスト教では、「統一教会のレバレンド・ムーンは独善的な発言を多くする」と不平を言います。こういう考えをする人、またそのように話す人がいるかもしれませんが、それはその人たちの言葉であって、統一教会でいう祝福結婚は、堕落した人類にとっては必ず行くべき道なのです。どんなに反対しても、霊界と肉界を連結して天国に入っていく上で重大な問題となるのが、この祝福結婚だというのです。

結局、最後の目的はどこにあるのでしょうか。真の家庭を取り戻そうということです。これが堕落した人間が探し求めてきた最高の目的なのです。この真の家庭を成すためには、真の人が出てこなければなりません。真の人の中でも真の男性が先に出てこなければなりません。その真の男性が真の女性を探して立てて、神様を中心として聖婚式をすることによって、初めて真の家庭が出現するのです。

人間が堕落することによって、こういう起源をもつことができなかったので、私たちは今までのすべての家庭を否定し、新しく神様の摂理のみ意に従って、このような家庭的基準を踏んで越えていかなければならないのです。もしその基準を越えていくこができなければ、堕落した人間は本然の世界へ戻ることができない、というのが原理的な見解です。

堕落した人間たちは、誰でもこの公式的な条件をたどっていかなければ、神様の前に立つことができないということを知らなければなりません。

天国理想は、結婚して家庭をもたなければ成されません。統一教会ですべての善男善女たちが祝福を受けなければならないというのも、天国理想を実践していくためです。未婚者はもちろん、既に結婚した人であっても、一定の基準を備えて再び祝福を受けなければなりません。すべての人が祝福を受けなければならない理由は、創造理想世界へ帰るためです。もともと創造理想の世界は、真の男性と真の女性が祝福を受けてつくっていく世界ですが、堕落によってそういう愛の歴史が一度も現れなかったのです。

堕落とは、サタンを中心として結婚式をしたことです。サタンを中心として結婚したので、神様を中心として、神様のみ名によって結婚しなければなりません。その結婚は、世界史的な結婚です。一民族の中での結婚ではなく、民族を越えてサタン世界を超越した立場での結婚です。サタン世界を越える場です。

エデンの園において本来アダム、エバの息子、娘の結婚式は、神様の命令によってアダム、エバがするのです。私たちの結婚式も同じ理致です。それで私たち統一教会では、真の父母のみ名によって祝福してあげるのです。今までこの世で、自分のお母さん、お父さんが結婚の主礼に立って結婚式をするのを見たことがありますか。そのような人はいないのです。それを見るとき、この世には完成した人がいないということを物語っています。

結婚式は、正に愛の伝授式です。神様の愛をもって父母が生きるように、皆さんも父母の愛を神様の愛の代わりに受けて、「このように生きよ！」という愛の伝授式が結婚式だというのです。神様の愛を父母から受けるの

です。ある有名な人から受けるのではありません。それは天使長がしてくれる結婚です。名のある人が片方だけ来て結婚式をするのは、みな天使長にしてもらう結婚式です。

愛で堕落したがゆえに、復帰するにおいても、天を中心とした新しい父母の愛と関係を結んでしなければなりません。それで統一教会で合同結婚式をする時は、先生とお母様、二人でしてあげるのです。それが愛の伝授式です。ここで造成された伝統は、永遠の伝統になるのです。革命は必要ありません。このように革命の必要のない新たな伝統が、この天地間に立てられるとき、ここから新たな家庭と、新たな氏族と、新たな民族と、新たな国家と、新たな世界が形成され、この地球星を主管することができるのです。

誰も手をつけられないことに統一教会は着手して、再創造の道へと導いてきたのです。これができる日には世界が一つになるのであり、悪のサタン世界を天の国へと転換させることができるのです。今日米国が、若者たちが自ら相対を得られるようにしてきたのはおかしなことです。キリスト教文化圏なのに、聖書が認めないことをやっているのです。これは物質文明と共にサタンに侵食され、サタン側的な自由主義によって、そのようになったと見るのです。

ところが皆さんは、なぜそのようにしませんか。サタンがやってきたことを、私たちはすることができません。愛とは何でしょうか。神様から、父母から受け継いだ結婚をするのが原則であるにもかかわらず、神様と関係のない自由結婚を唱えたことが堕落なので、これを根本的に根絶しなければ、天の国に戻ることができません。

ここは、天道を立てる所です。私は死んでも原理原則を立てるために、私の生活を捧げてきたのに、この結婚という問題に対して、皆さんの言うことを聞いて、適当にする男ではありません。

二) 祝福から見た真の結婚観

①真の結婚は神様の形状に似るためのもの

結婚は、なぜするのでしょうか。神様の姿に似るためです。神様は二性性相でいらっしゃる方として各一性が合体化した一体的な存在であられ、その神様の分性的人格自体が男女なので、彼らが合性一体化することによって、種のようになり、神様の本性の場に戻らなければならないのです。

結婚の最高の神聖さを私たちは謳わなければなりません。男性と女性が愛することができる道は、結婚生活なのです。そのように一つになることによって誰に似るのでしょうか。神様に似るのです。男性と女性が一つとなってこそ、御自身の形状どおりお造りになった神様に似るのです。そうしてこそ神様が臨まれるのです。

原理について考えるとき、アダム、エバが堕落せずに完成していたならば、結婚式の場へと進んでいたことでしょう。言い換えれば、アダム、エバが神様の実体対象として神様が主体になられれば、彼らは対象になるのです。そのような立場で、愛の主体なる神様から対象的な立場の愛を連結させることができるそ

の土台として個性を完成し、結婚することによって、祝福は成されるということを知っています。

完成は結局、結婚をいうのであり、結婚は、神様の愛の顕現をいうのです。別の言い方をすれば、結婚がなかったとすれば、現在、人類のこの世における愛というものが始まらなかったと見るのです。その愛の主人とは誰でしょうか。人間ではなく神様だということを私たちは知らなければなりません。

結婚は、創造理想を完成するためのものです。すなわち、創造目的を成し遂げるためにするということです。すると創造目的は、誰の目的でしょうか。アダムの目的である以前に神様の目的です。ですからアダムが喜ぶ前に神様が喜ばなければならないのです。そのようにならなければなりません。このように見るとき、結婚を誰ゆえにするのでしょうか。神様ゆえにするのです。言い換えれば、神様の創造目的というみ旨のためにするのです。み旨は創造理想を完成することです。

結婚をなぜするのでしょうか。アダム、エバが自らの愛を探していくためのものではありません。縦的な神様の愛を核として、その核を中心にその分身として一つの球形を成すためのものです。それが理想です。神様の創造理想もそういう愛を中心として結着するのであり、人間の男性と女性も成熟して、そこで愛の結着点が生じ、生命が連結されるのです。ですから生命によって連結されるのではありません。愛によって連結されるのです。縦的父の愛と横的夫婦の愛を中心として、本然の愛の種が初めて連結されるのです。

成熟したアダム、エバが愛の因縁を結ぶことができるその時になれば、神様は二性性相としていらっしゃるので、男性性相はアダムに臨在し、女性性相はエバに臨在するのです。神様が私たちの体と心の中に臨んで、神様が結婚式をするのです。アダムの心は至聖所のようなもので、アダムの体は聖所のようなもので、その中に神様がいらっしゃるのです。そのようになっていたなら、アダムは神様の体になるのであり、エバも神様の体になるのです。

神様の男性格的性稟に似たのがアダムであり、女性格的性稟に似たのがエバです。この二人が結婚式をすることが、宇宙の王権を立てる式ではありませんか。それは何の王権ですか。愛の王権です。

結婚をなぜするのでしょうか。神様を愛するために。神様を愛して何をするのでしょうか。神様の軸と一致するためです。一致して何をしようとするのでしょうか。一致すればどうなりますか。なぜ一致しようとしますか。絶対的な神様の愛を中心として、永遠の愛を中心として永生がなされるのです。それだけではありません。そのように接触した、そこから宇宙の相続権が伝授されるということを知らなければなりません。愛を中心として造られた被造世界は、神様のものですが、私のものとして相続権が与えられるのです。

結婚した夫婦の愛というものは、神様の縦的な愛に接ぎ木されるのです。神様の縦的な愛と一つになるときは、これを離す者がいません。しっかりくっついていて、離す者がいないのです。ですから人々が生きる生活にお

いて何がどうであれ、愛の道を求めていくのです。

自らの価値をどのように取り戻すのか、これが問題です。男性として生まれたのは、女性のためであり、女性として生まれたのは男性のためです。この男性と女性がなぜ一つにならなければならないのでしょうか。一つにならずしては神様の愛を感しることができないからです。これが問題です。男性と女性が完全な愛によって一つにならなければ、神様の愛を所有できないということです。結婚をなぜするのでしょうか。神様の愛を所有するためです。

絶対的な神様も、愛が絶対的に必要なので、絶対的愛の対象が必要だというのです。

アダム、エバが完全に成熟して新郎新婦として神様の前に対象圏を成して、神様の祝福を受けることによって、神的愛による家庭になったならば、それが本来エデンで堕落しないで成し遂げていた完成圏でした。その完成圏に現れたアダム、エバになっていたなら、その場は、どんな場でしょうか。祝福を受ける場です。

福の中で一番貴い福は、神様の愛です。その次は、神様の創造の権限を引き継ぐことです。神様がアダム、エバを創造したように、創造的権限を与えられるのが子女なのです。皆さんがなぜ子女を愛しますか。神様の創造の偉業を横的に実体圏で受け継いだのと同じなので、アダム、エバを造っておいて、神様が喜んだその喜びを代わりに感じるためです。

その次は、神様が天地万物を主管されたように、万物を主管させるために、私たちに主管権を与えました。したがって結婚するその時には、神様の愛を相続して、再創造の権限と主管権を完成圏に立って受け継ぐようになるということを皆さんが知らなければなりません。それで結婚式というものは、愛の顕現をいうと同時に、創造権と主管権を与えられるものです。

創造理想は、自らを中心として成されるのではありません。すべての心情が主体的な神様と一体となって、神様が動ずれば私が動じ、神様が静ずれば私も静じ、心情的一致点を中心として内外が一つにならなければならないのです。このように神様の前に和することができる基準を立てなければ、創造目的を成し遂げることができません。

②結婚は愛の完成のためにする

結婚自体は何でしょうか。結婚をなぜするのでしょうか。何ゆえにするのでしょうか。男性に会いたくて、女性に会いたくて、するのではありません。愛を完成させるためにするのです。男性が探さなければならない愛は、女性でなければ見つかりません。一人では絶対に見つかりません。女性が探さなければならない愛は、男性でなければ絶対に見つからないのです。

男性が個性完成をしようとするならば、相対完成をしなければならないので、結婚をしなければなりません。結婚をしなければ、愛圏内に行けません。なぜ結婚をしなければならないかといえば、お互いに神様の愛に接す

るためです。神様の愛に接するために、男性と女性は結婚しなければならないというのです。男性と女性が結婚して、神様の愛がそこに臨むことによって、愛を中心として一つになるので、神様が、その時から宇宙と神様御自身を相続させてくださり、神様の愛まで相続させてくださり、神様に属するすべてのものを相続させてくださるようになるのです。

結婚は、なぜするのかといえば、自分の個人的愛を完成させると同時に、相手の愛を完成させるためです。個人の愛を完成させると同時に、神様の愛を完成させるために私が結婚するというとき、気分がどんなにいいですか。地上に神様が愛することができる土台を準備するために、男性と女性は結婚しなければなりません。

二人が愛によって一つになったその基準の上に、初めて神様の愛が訪ねてくるのです。結局は、神様の愛のために、また神様の愛のために生きることは、私が神様の愛をもつためなのです。「ため」に与えるから愛が来るし、愛が来るので神様の愛を自分のものにすることができるのです。

結婚の目的は、男性と女性の心の世界を一致させようということであり、男性と女性の愛の完成のためのものです。それで結婚したということは、「そういう証拠を見せる」と宣布したということです。

結婚生活を通じて、愛の完成と心の完成を成し遂げたとすれば、家庭の理想を実現したと見ることができます。それで死ぬとき、これを成し遂げたとすれば、間違いなく天国に行くというのです。

私が結婚をするのは、私だけのためではなく、相手のためのものでもあります。結婚が自分より相手のために行われるというのはどういうことでしょうか。天地間のすべての理致が、主体と対象でできているように、男女が結婚するのも天地間の道理です。男性が右側ならば女性は左側になりますが、それは宇宙間の横的な関係を成すためであり、男性が主体ならば女性は彼の対象になりますが、それは神様との縦的な上下関係を成すためです。したがって結婚とは、男性だけのためのものではなく、また女性だけのためのものでもない、天理の法度を合わせるためにするものです。それで男性と女性は、互いに異なる姿を備えています。天理の法度を合わせることができるように生まれたのです。

女性が男性を迎えるのは、男性の世界を得るためです。女性が男性の世界を得て何をしようとするのでしょうか。それは愛の一体を成すためです。

男性は女性を探していくために生まれ、女性は男性を探していくために生まれました。女性と男性は、二人が合わさって、より次元の高い神様の愛に接するために生まれました。一人では、その愛に接することはできません。一人で接しても、それは一方的です。立体的で球形的な愛に接することはできません。それで、男女がより高い次元の立体的な愛の圏内にジャンプするために結婚するのです。

本然の世界において男性と女性が一つになればなるほど、その力の作用において偉大な中心が生まれて球形になるのです。横的に連結すればするほど、縦的な力の愛の母体が連

結し入ってくるということです。そこで体と心が一つになるのです。

結婚は私のためではなく、相手のためにするという信条をもたなければなりません。結婚するとき、優秀な人、きれいな人を得ようとするのは誤った考えです。人間は人のために生きるべきだという原則を知ったなら、結婚をする時にも、相手のためにするという観念をもたなければなりません。どんなに醜い人であっても、美人よりもっと愛そうという信念をもつことが、原則的な結婚観です。

神様の最高傑作品として造られた美しい男性と女性が、神様を中心として愛し合うことができるならば、それは最高の愛であり、超越的な愛であって、この世的な愛ではありません。その愛は、最高の美しい愛であり、愛の中の代表的な愛であり、永遠に輝くことができる愛です。

新郎新婦は、お金や権力、名誉を中心として一つになるのではなく、神様の本然の愛を中心として一体にならなければなりません。

人間として生まれて相対を神様のように愛して、人類のように愛して、この世界の誰よりも愛することができるという観念が立たずしては、天の国に復帰されません。一男性として一女性を愛することができなければ、神様と人類を愛することができないのです。

③結婚は天地合徳、宇宙合一の道

結婚とは何をしようとするものですか。発展するためにするのです。何の発展をするためにですか。神様の愛を発展させるためのものです。神様の族属を発展させるためのものです。血統を発展させるためのものです。

結婚をなぜするのでしょうか。天国へ行くために、そして人類のためにです。男性の前にいるその女性は、神様の娘であり、人類の娘であることを男性たちは知らなければなりません。人類が愛する女性として愛することができ、神様が愛する娘として愛することができれば、夫になる資格がありますが、そうでなければ失格です。女性は、その反対です。「あれは私の男だ」と考えるなというのです。私の男だという以前に、神様の息子であり、人類のすべての男性を代表した男性だと考えなさいというのです。

人類が愛する以上に愛することができ、神様が愛する以上に愛することができる女性になればいいのです。それで私が男性としての右足になり、女性としての左足となって、人類のために生き、神様のための愛の足跡を、家庭を通じて残そうという考えをもって結婚しなければなりません。

右足は夫であり、左足は妻であるということは、結婚をしなければ片足が不自由になるということです。また右足、左足が完全でなければなりません。どちらか片方だけで、完全でなければ、片足が不自由になります。ですから完全な男性と完全な女性になってこそ、円満な結婚ができるのです。それで私が夫を好むのは、人類を好むことであり、神様を好むことであり、また夫を愛することは、人類を愛することであり、神様を愛することです。

結婚は、厳粛なものです。結婚は、天地が合わさることであり、東と西が合わさることであり、南と北が合わさることであり、上と

下が合わさることです。それでは愛というものは、どこへ行くのでしょうか。二人が一つになって、愛はどこへ行くのでしょうか。なぜ愛を探していかなければならないのでしょうか。そうすることによって、そのすべての環境の中心の場に行って立つのです。私の家庭がなければ、この社会では不完全です。信じてくれないのです。それは宇宙存続の原則に不合格であるために、その価値を認めないのです。それは理論的です。

男女が合わさることは、天地が合わさることです。

男性は天を象徴し、女性は地を象徴します。二人が合わさって調和を成し、水平線を成さなければなりません。

男性と女性が愛し合って抱擁するそれ自体が、宇宙が一体を成す場となります。神様の理想の中で成される創造本然の姿は、そのようなものです。

私たちの結婚観は、「宇宙で一番すてきな宇宙シルクの布団を敷いておいて、その中で愛し合う！」と、そのように考えるのです。愛を中心として所有権を私一代で決定する瞬間だというのです。私の当代に所有が決まるのですが、その所有とは、女性の所有が決定されるということです。その女性とは、どんな女性でしょうか。宇宙の半分です。これをつかむ日には、私のおしりに宇宙がついてくるのです。考えてみてください。また、女性はなぜ結婚しなければならないのでしょうか。「男性にくっついて半分（一八〇度）と半分が合わさって、二人が宇宙の価値に対等な作用圏をつくるために結婚する！」と、このように考えるとき、統一教会の思想はすてきだというのです。

皆さん、香りのない花は好きですか。香りのない花には無関心です。「私は、花になるならば緑色の花になろう」と言いますか。緑色の花を見たことがありますか。私は植物園に行っても、今まで緑色の花は見たことがありません。木の葉のような花は、咲いても咲かなくても意味がないでしょう。それを見れば、天地の理致は実に奥妙だというのです。それ一つ見ても、「神様がいる」と言わざるを得ません。

葉がみな緑なのに、緑色の花があり得ますか。ただ、緑に近い花が一つあります。それは、唐辛子花というものですが、それも細かく注意深く見れば緑ではありません。内容を見れば、赤などもあります。それは自分を現すためです。現すのは、この世の調和圏に入っていくためです。天地調和の創造法に適用されるためには、自分を現さなければならないということです。私たちの結婚観は、このようにすてきなのです。そういう結婚、私たち統一教会の結婚観がどれほど素晴らしいでしょうか。

この世で盛んに行われている自由結婚は、サタンが人々を堕落させて、神様の前に行くことができないようにするためにつくったわななのです。そのわなに引っ掛かれば、死んでサタンの支配を受けたり、餌食にならざるを得ません。今日の西欧社会、特に米国は自由結婚が盛んに行われることによって、真の家庭が成されず、家庭生活に失敗した人たち

が日増しに多くなり、遠からず家庭をもたない人が多数を占めるようになるでしょう。

そのようになれば米国社会は、愛に渇いた社会になり、不信によって不安と恐怖が支配する地獄のような社会になるだろうと、自信をもって確言できます。このような時点に立っている皆さんには、このような社会風潮を一掃して米国社会に愛があふれ出る、神様が願う社会を建設しなければならない義務と使命が与えられているということを知らなければなりません。

私たち統一教会は、結婚観が違います。結婚というものは根本へ帰るためのものです。

三) 祝福を受けなければならない理由

①堕落によって偽りの父母から生まれた

アダム、エバは堕落のゆえに血統が変わったというのです。誰の愛によって？　神様の怨讐、姦夫であるサタンの愛によって、サタンの生命体になったのです。男性の生命体、女性の生命体が、サタンの愛に入り混じって一つになり、その二人によって結実したのが、息子、娘です。したがってその息子、娘は、サタンの愛、サタンの生命、サタンの血統を継承しているのです。

聖書的内容を観察してみれば、人類始祖が不倫な愛をすることによって、悪魔サタンを中心として父子の関係を結んだという事実を否定できません。神様の血筋を受けて、神様の絶対的な愛の中で神様の直系の息子、娘として生まれなければならない価値的な人間が、悪魔サタンの血統を受けて、サタンの息子、娘として生まれたというのです。ローマ人への手紙第八章に「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる（養子の）身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」（二三節）と記録されています。養子は血筋が違うのです。これが私たち人間の正体なのです。

ローマ人への手紙の第八章を見てください。「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる（養子の）身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」（二三節）とあり、「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷（僕）の霊を受けたのではなく、子たる（養子の）身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのである」（一五節）と書いてあります。養子にしかなれないのです。今、キリスト教徒たちは養子なのです。養子は血筋が違うのです。血筋が。

ヨハネによる福音書の第八章四十四節を見れば「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている」とイエス様が言われました。ここで「父」と言われたので、血筋が、先祖が悪魔ではありませんか。ですから割礼とは何ですか。陽部を切ることです。このようになっています。善悪の実とは何でしょうか。

もともとサタンはどんな存在ですか。悪魔という存在はどんな存在かといえば、神様の僕です。ところがこの僕が主人の娘を強奪したのです。これが堕落です。聖書に出てくるその堕落とは何かといえば、エバが善悪の実

を取って食べたことが堕落だといいますが、善悪の実とは果物ではありません。僕が主人の娘を強奪したことです。

将来、代を継ぐ息子と娘を生み育てて、神様の理想を成就しようとしていたのに、僕としてつくった天使長が主人の娘を強奪したことが、人類の堕落の起源となりました。全くそんなことがあっていいでしょうか。天地がそのようになったというのです。複雑にからまった内容ですが、皆さんが「原理」を聞けば、大体分かるでしょう。

堕落した結果、どうなったのでしょうか。私たちは死亡圏内に落ちました。神様が、「善悪の実を取って食べたら必ず死ぬだろう」と言われたみ言のとおり、死亡圏内に落ちてしまいました。堕落した結果、どうなったのでしょうか。ヨハネによる福音書第八章の四十四節を見れば、悪魔サタンが私たち人類の父になったとイエス様は指摘しました。神様を父として侍らなければならないアダム、エバが堕落することによって、悪魔サタンを父として侍るようになったという、この恨めしい事実が、堕落の報いであるということを知らなければなりません。

アダム、エバが堕落しなかったならば、神様を中心としたアダム直系の長孫の子女たちが出てきたことでしょう。アダムは長孫であり、真の父であり、王です。地上の国と天上世界の王です。また真の父母であり、真の長子です。ですからアダム家庭は、天の国の王室です。

それでは、アダム家庭のおじいさんは誰でしょうか。神様がおじいさんです。その次に、お父さん、お母さんはアダム、エバです。そして過去の立場を身代わりした観点で見れば、おじいさん、おばあさんは神様の代わりであり、また神様は父母の代わりです。縦的に見れば、一代圏、二代圏、三代圏を中心として、神様が家庭に着地するのですが、一代圏が横的に展開したのがおじいさんであり、二代圏が父であり、三代圏が私です。それで息子、娘を中心として万世一系の天的皇室を受け継ぐのです。

真の父母権、真の王権、真の長子権、これがアダム、エバが出発しなければならなかった原点です。そこに神様の王宮があり、神様の愛があります。そして人間と創造主が一つに連結され、真の愛の基盤になるのです。そこが完成した本然のアダムの家庭基盤であり、神様が永遠に臨在することのできる神様の王宮です。

堕落しないで、完成の場まで行ったとするならば、アダム、エバは個人完成だけでなく、宇宙史的な完成をしていたはずです。また、神様の愛を中心とした新たな家庭が出発していたことでしょう。このように家庭から氏族、宗族、民族、国家、世界が成されていたならば、神様に侍る一つの大家族社会になっていたでしょう。

このような大家族社会の中心は、神様とアダムです。それでその世界では、神様を中心としたアダム家庭の生活や一生の路程が歴史的伝統として残されるのです。彼の生き方、風習、慣習、彼の生活的な背景が歴史的伝統になるのです。それは神様の愛を中心とした伝統でないはずがありません。神様の愛は生

命の根源であり、すべての理想の源泉なので、その懐を離れようとしても離れることができず、離れたとしてもまた帰ってこざるを得ません。

アダム、エバの堕落は、アダム、エバだけの堕落ではなく、全般的な人類歴史を総合した立場での堕落です。言い換えれば、アダム、エバが堕落したというのは、善の父母になることができず、悪の父母になったということです。悪の父母によって悪の子女が生まれ、悪の子女が生まれることによって悪の氏族、悪の国家、悪の世界が形成され、この世界圏内に五十億の人類が存続しているのです。

こういう堕落圏内にある今日の人類歴史は、喜びの歴史ではなく、悲しみの歴史であり、人類も喜びの人類ではなく、悲しみの人類であるに違いありません。愛を知るようになるとき、すべてのものが通じます。地上世界の平面的な事実だけでなく、霊眼が開いて、立体的な世界までも分かるので、神様を直接見て、接することができる境地に至るようになります。ところが愛の知覚が発達する前に、堕落してしまいました。天使長との不倫の関係を結んだのです。これが宇宙を破綻させた根本原因になったのです。

こういう話を、お金を払って聞くことができますか。自分の家を売り、財産をはたいて、千年、万年祭祀を捧げても教えてくれる人はいません。統一教会の文先生しかいないのです。これは宇宙の秘密です。聖書にもこういう内容はないでしょう。聖書では、善悪の実を取って食べて堕落したといいます。善悪の実とは何の果実ですか。そのように幼稚園生にも劣る実力でもって、博士学位を検証し、博士の総会長になった文総裁に「異端だ」と言うことができますか。自分が異端でしょう。異端というのは、終わり（端）が異なるのではなく、終わりが見えないということです。

私が解き明かした原罪と堕落の曲折は、人間の最初の家庭で起きた天使長との不倫の事件でした。「統一原理」でいうサタンは、観念的存在や仮想の存在ではなく、霊的実体です。神様の愛の理想を破壊して、神様の血統をサタンを中心とした血統に変えた元凶です。イエス様もヨハネによる福音書第八章で、人類の父が悪魔であることをはっきりと語られました。神様が御自分の外的体であるアダム、エバを通じて実現なさろうとしていた愛の理想を剥奪した愛の姦夫が、まさしく悪魔サタンなのです。皆さんには耳新しいでしょうが、私が霊界を開拓して宇宙の根本の曲折を究明しようと血涙のにじむ闘争をした結果、得た結論がこれです。皆さんも真剣に祈祷すれば、解答が得られるでしょう。

②怨讐の血統を受けた

堕落人間は偽物になったので、接ぎ木しなければなりません。血統的に見れば、皆さんは先祖が違うというのです。なぜ養子にしかなれなかったのかといえば、お父さん、お母さんが違うからです。ですから統一教会で、愛によって堕落したと主張するのを否定することができません。聖書を見れば、善悪の実を取って食べて堕落したと書かれています。善悪の実とは何か知っていますか。善悪の実は果実ですか。風が吹けば、落ちてごろごろ転げ回る果実でしょうか。違います。

アダムとエバの心にサタンが入って、一つになったので、サタンの血統を受け継いだというのです。愛の神様がなぜサタンを許せないのでしょうか。強盗、殺人も許し、みな許すと言ったのに、イエス様を信じるならば許されると言ったのに……。サタンを許してあげることができない理由とは何かといえば、人類の血統を汚したからです。それは何のことですか。神様の立場から見るとき、サタンは姦夫です。愛の姦夫。何のことか分かりますか。

サタンを中心として結婚式をしたので、サタンを中心とした愛、サタンを中心とした生命、サタンを中心とした血統を受けなかったと否定することができません。もし善悪の実を取って食べずに堕落しなかったならば、神様を中心として結婚式をしていたことでしょう。統一教会の父母様が皆さんを祝福してあげたように、アダム、エバが成熟したあとには、神様が呼んで、祝福してあげたはずです。

アダム、エバが善悪の実を取って食べずに完成していたならば、天地を創造した大王の息子、娘になるのです。大王の息子、娘というのは、その直系の長男、長女とは何ですか。正に王子、王女になるのです。天の国を代表した地上の王国を治めることのできる基盤になります。王権は二つではありません。一つだというのです。

神様の手によって直接造られたひとり子、ひとり娘がアダム、エバです。アダム、エバが堕落したので、問題になったのです。それでは、堕落することによってどうなったのでしょうか。「取って食べるな」と言った善悪の実を取って食べて堕落しましたが、「取って食べるな」と言ったその言葉を実践していたなら、どうなっていたでしょう。キリスト教は、そのことを考えることができませんでした。考えてみても分からないのです。それは蒼々たる大海なのです。深いか浅いかについて、深さを測ろうとしても、それを測定する方法がありません。分かろうにも分かるすべがないので、無条件に信じなければならないという冠をかぶせたのです。けれども、無知には完成がありません。

体を打つというようなことをなぜするのでしょうか。サタンの血、神様の怨讐の血を受けたからです。神様の怨讐とは誰かといえば、姦夫です。神様の愛の怨讐です。その姦夫の血を受けたのです。天国の王権を受け継いで皇后になることができたはずのエバが、悪魔の配偶者になり、僕の対（妻）になりました。これは天地の秘密ですが、先生の時代になって初めて暴露されたので、サタン世界は退かなければなりません。

無知には完成があり得ません。サタンとは誰ですか。神様の姦夫です。こういう問題を見抜いたのに、これをみな伏せておいて、天国へ行きますか。伏せておいて救いを受けますか。とんでもないことです。でたらめな者たち！　そのように信じて救われるのなら、私たちのような人は、とうの昔にみな救われて余りあるというのです。このように苦労しません。

悪魔は、なぜ神様を憎むのですか。神様は、なぜ悪魔を憎むのですか。キリスト教の論理でいえば、キリスト教は「怨讐を愛せよ」と

言っているのに、神様は怨讐であるサタンをどうして愛することができないのでしょうか。愛の怨讐を愛せば、天地がなくなるというのです。治める法がなくなります。存在する法がなくなるのです。

サタンが神様の理想的愛を破壊させ、理想的生命、理想的血統を蹂躙したのです。そうして子供を生んだのですが、それが人間たちです。サタンの愛の表示、生命の表示、血統の表示であるその息子、娘を、神様は干渉できません。

サタンがなぜうんざりするほど、今までの人類歴史において、道義の道を行こうとする人のところに例外なくやって来て、首を押さえて、背中に乗り、犠牲にするというようなことをやってきたのでしょうか。そのサタンとは、神様にとっては、神様の家族を奪っていった、強奪していった姦夫だというのです。お母さんが本来、神様に仕えて平和の王国を成し、平和の天地を成さなければならないのに、お父さんと私たちを追い出したというのです。サタンが入って、今日の人間をこのような姿にしてしまいました。何か他の罪を犯したのではありません。

堕落は、血統の否定的動機から始まった事件でした。それで堕落の結果が現在まで原罪として遺伝してきているのです。血統を転換しなければなりません。なぜ血統を転換するのでしょうか。サタンの血統を受けて継承したので、血統を正さなければなりません。皆さんは、これをはっきりと知らなければなりません。

サタン圏に属している人たちは、神様の血統とは全く関係がありません。すなわち、善の父母の子女として生まれなければならない人類が、悪の父母との因縁によって生まれました。それで悪を中心とした家庭、氏族、民族、国家、世界へと拡大されたのです。

堕落とはいったい何でしょうか。生命の因縁が切れたということです。アダム、エバがどうなったかといえば、アダム、エバが関係して神様と一つになるべきところを、僕と一つになってしまいました。結局、神様の血統を受けなければならないこの人間たちが、僕の血統を受け継いだということです。ですから、堕落した人間たちがどんなに神様を父と呼んでも実感がわかないのです。それで自分のお父さん、お母さんがしたのと同じように、サタンの本性を引き継いで、自分を中心としてすべてのものを考えるようになり、天も何も、高いものはみな自分と連結させるのです。

堕落することによって、真の父母を失い、真の夫を失い、真の子女を失ってしまいました。失うようになった動機は、エバと天使長によるものでした。こういう観点で見るとき、この地に生きている女性たちは、天使長の父、天使長の夫、天使長の兄に頼って生きているのです。ですから女性たちは悲惨なのです。裕福な家のお嬢さんが、自分の家の僕と暮らす立場になったのです。すなわち、僕の血統を受け継いで生まれたということです。ですから本来の夫、本来の父、本来の兄の愛を受けられなかった女性たちなのです。

悪魔は、何によって堕落させたのでしょうか。善悪の実だというのですか。善悪の実を

食べてどこを隠しましたか。口を隠しましたか。手を隠しましたか。下部を隠したでしょう。それが悪を蒔いた種になりました。青少年時代、成熟する前に堕落しました。この歴史的な人間の世の中の血統がそこから広がったので、それが人間の終末時代において盛んになるのです。全世界的に青少年たちが、アダム、エバのように日陰で独自に愛の倫理を破壊させて、天を恐れない時になれば、サタンの全権時代が地上に到来すると思え、ということです。その時は、神様の鉄槌が目前に迫るのです。

血統的にこじれたために六千年かかるのであって、そうでなければ一日でみな復帰できるというのです。血統的に固まってしまったので、能力のある神様が一度にみな抜いてしまえば、死んでしまうのです。それで六千年かかってやってきたのです。善悪の実を取って食べて堕落したというのですか。そうであるなら、どんなにいいでしょうか。

罪の基盤、堕落の基盤、悪の基盤、地獄の基盤、こういうものは具体的にどのように生じるのかということが問題です。アダム、エバに戻って考えてみましょう。アダム、エバがなぜ堕落したかという根源を探ってみると、アダム、エバは神様が命令した「善悪の実を取って食べるな」という言葉を不信して堕落しました。

二つ目は、自己中心的だというのです。三つ目は、自己を中心として愛そうとしたことです。これが堕落した中心的骨子の内容であるがゆえに、この内容を共に行おうとする者はサタン側だという結論が出てくるのです。堕落した人たちはみな、不信の愛で、自己中心の愛で愛した人たちです。結局、自己中心の愛を主張するのが、この世界の人たちだと見るのです。

堕落が善悪の実を取って食べたことだというのですか。善悪の実とは、女性のそれです。女性は善の夫に出会えば、善の母になり、悪の夫に出会えば、悪の母になるのです。今日、統一教会の文総裁が言うことは、理論的に否定できません。心と体が争う起源は、夫婦の争いによって始まったからです。これを理論的に否定できません。

③メシヤとして真の父母が必要

私たちにメシヤが必要な理由は、救いを受けるためです。それでは、救いに必要な根本的な基点とは何ですか。それは神様の愛の接触点へ帰ることです。ところが人間は、神様とは関係のないサタンの実体をもった存在になってしまいました。これは神様の愛とは正反対なので、蕩減されなければなりません。蕩減とは原罪を除去することであり、原罪を除去するには、血統的なことが根本的に存在します。血統的なものは、堕落人間としては到底解決できないものです。それでメシヤが必要なのです。

アダム一族において、真の父母が生まれることができずに罪の父母が生まれたので、これを真の父母の役事を通して蕩減復帰し、神様に接ぎ木しようということがメシヤの思想であり、救世主の思想です。そのようになったのは人間の堕落のゆえです。

メシヤとは誰でしょうか。真の父母です。それでは真の父母が、なぜ必要なのでしょうか。真の父母の愛に再び接ぎ木されなければならないからです。ですからメシヤである真の父母が現れなければ、堕落した人間は原罪を脱いで、罪のない解放された立場から完成段階の祝福を受ける場に出ていくことができないのです。

堕落した人間が要求する救い主とは、どんな救い主でしょうか。堕落した父母の立場ではなく、堕落していないアダム、エバのような立場で、神様のみ旨と一体となって神様の愛を受け、神様の祝福を受けることができる真の父母の立場で、人類を生んでくれる救い主でなければなりません。そうでなければ、人間は原罪と関係のない立場に上がることができません。

真の父母が必要なのは何ゆえでしょうか。心情圏を中心として、その根を下ろさなければならないためです。今は根が違います。堕落によって幹と枝がすべて違います。ここで新たに、根が真の父母から始まって、幹と枝が出て接ぎ木をするのです。切って、接ぎ木するのです。接ぎ木して、それが宇宙の大きな主流になるのです。サタン世界のすべてのものを切ってしまわなければなりません。根まで切ってしまわなければなりません。

人間は堕落によって、神様とは関係のないサタンの実体をもった存在になってしまいました。これは神様の愛とは正反対なので、蕩減しなければならないのです。蕩減とは原罪を除去することであり、原罪を除去するには血統的なことが根本的に存在します。血統的なものは堕落人間としては到底解決できないものです。それでメシヤが必要なのです。

エデンの園で結婚を誤ったことが堕落なので、今、真の父母が正しく結婚させてあげることにより、再びひっくり返したのです。偽りの父母が誤ったことを真の父母が清算することにより、地獄を撤廃して数百、数千億の霊界の先祖たちまで祝福結婚をさせてあげるということが起こるのです。真の愛を中心とした地上の子孫たちの家庭基盤を通じて、霊界の先祖と地上の子孫が縦的に一つに合わさるだけでなく、このような家庭基盤を基点として東洋と西洋が互いに連結されます。

皆さんは、新しい血統を受け継がなければなりません。受け継ごうとすれば、メシヤが父として来て、サタン世界に勝ち、サタンが干渉できない超世界的な基盤の上で、エバに侍って蕩減復帰しなければなりません。そうして、夫婦の因縁を中心とした家庭における息子、娘を立てて、横的に接ぎ木するようなことが行われなければなりません。それで統一教会で祝福してあげるのです。

統一教会は違います。統一教会は、血統がどこから始まったのでしょうか。神様から始まったのです。ですから、いくらでもサタン世界で反対してみなさいというのです。反対していれば、損害賠償を払うようになるのです。

真の父母は、血統転換する新しい祝福結婚行事を通じて、全人類を神様の真の愛、真の生命、真の血統に接ぎ木して、真の人として救い、さらに真の家庭を成して地上天国を建設されるのです。

二　真の父母と重生と血統転換

一) 真の父母はどんなお方か

①真の父母は原罪のない始祖

真の父母とは何でしょうか。堕落していなかったら、神様は縦的な愛になり、アダム、エバは神様の体になります。神様の体のようなものだというのです。神様は骨のようなもので、アダム、エバは体のようなものです。神様も心があり、体があります。神様は内的な立場で内的な父母になり、アダム、エバは外的な立場で外的な父母になります。内的・外的父母が一つになったその場で、愛で結ばれ、内的父母に侍るようになり、外的父母をもつようになります。神様と人間との愛の結合によって、真の父母、すなわち、完成した人間が成就するはずだったのです。愛と結合しなければ、完成人間がいないというのです。

真の父母の立場は、どんな立場でしょうか。アダム、エバが神様を中心として完全に一つになり、サタンの讒訴圏を抜け出した立場です。サタンが讒訴することのできる内容を残さずに、完成基準を越えた立場に上がって、初めて真の父母の起源が生じるのです。これが原理的見解から見た真の父母の起源です。しかしその見解にふさわしい立場は、簡単につかむことができるものではありません。

新しい父母とは、どんな父母でしょうか。昔エデンの園で堕落したアダム、エバは堕落した父母ですが、これから人類を再び生み変えてくれるその父母は、堕落していない立場で、神様のみ旨と一致した立場で、神様の公認を受けることができる本来の父母なのです。堕落しないで、み旨を完成し、神様の愛を中心として神様の懐で理想的な家庭を成して、善の子女を繁殖できる、そのような本来の基準に立つことができる父母なのです。その父母は、堕落とは関係がありません。

もともとアダム、エバが堕落しなかったならば、人類の父母になって神様を中心とした世界を成し遂げていたことでしょう。ところが彼らが堕落することによって、サタンが主管する偽りの父母になってしまいました。したがって、本来神様の創造理想によって立てようとした真の父母はいなくなりました。真の人類の先祖がいなくなったということです。

真の父母とはどんな存在でしょうか。真の父母は、全体の希望の象徴です。堕落した人類の前に絶対的な希望の象徴なのです。彼は、歴史的な結実体であり、時代的な中心であり、人類が生きている今日、この世界へ連結することができる未来線上における出発点です。

真の父母というその名前の三文字（韓国語で）を考えるとき、真の父母によって歴史が治められ、真の父母によって新しい世界へ戻ることができる起源が生じ、真の父母によってサタンを屈服させることができる内的な因縁が決まり、真の父母によって外的な世界を占領しているサタンを征服して、初めて神様の解怨を成就することができる中心が決定されるのです。したがって、真の父母と共に生き、真の父母の命令を奉じて行動できるこの驚くべき恩賜に、皆さんがまず感謝しなければなりません。

人間の願いは、真の父母に出会うことです。死の道を行くとしても出会わなければならな

い人が真の父母です。歴史をみな失い、時代をみな失い、自らの子孫をみな失ってしまうようなことがあっても、真の父母に出会うならば、歴史を見つけることであり、時代を見つけることであり、未来を見つけることになるのです。このような方が正に真の父母だということを皆さんは知らなければなりません。

メシヤがこの地上に来られるとき、その方は、個人として来られても個人ではありません。その方の価値は、全世界の人類が信じている信仰の結実体であり、全世界の人類が願っている希望の結実体であり、全世界が願っている愛の結実体です。その結実体には、すべての歴史路程が連結されています。すなわち過去、現在、未来がみな連結されています。そして個人から家庭、氏族、民族、国家、世界がすべて連結されていて、天と地がすべて連結されているのです。

イエス様は、人類の父母の位置に立たなければならない使命をもって来られましたが、そのみ旨を成就できずに亡くなりました。したがって再臨時代には、そのような立場を蕩減復帰して勝利しなければ、その理想の世界へ上がれないのです。その仕事をこれまでやってきたのが統一教会です。

真の父母は、完成したアダムとして、アダムが失敗した第一の父母の基準を復帰しなければなりません。また、第二アダムとして来られたイエス様が失敗した父母の基準を完成させなければなりません。再臨時代において先生が苦労の伝統を立てざるを得なかったのは、イエス様が霊的基台しか立てられず、霊肉ともの世界的な基台を立てることができなかったからです。

私たちが知っている真の父母とは何でしょうか。人間の先祖です。人間先祖。ですから真の父母を自分の父母のように侍らなければなりません。

人類には真の父母が必要なのです。なぜそうなのでしょうか。愛の軸に連結することができる原則的なことが、歴史始まって以来初めて起こったのです。歴史始まって以来、前にもなく、あとにもありません。はっきり知らなければなりません。軸は一つです。絶対に二つではありません。その軸とは、正に真の愛です。

歴史始まって以来、神様の名によって人類の男性を代表して勝利した人がいませんでした。これまで先生は、そういう勝利の基準を立てるために闘ってきました。統一教会と先生は、苦労をしなくてもいいのですが、こういう原則を知っているために、苦労せざるを得ないのです。

人類が願うものとは何でしょうか。真の父母に侍ることです。六千年前にアダム、エバが成婚して全人類が神様の子孫にならなければならなかったにもかかわらず、堕落することによって人間たちはサタンの子孫になってしまいました。したがって私たちは、六千年前に失った天の側の真の父母を再びこの地上に探し立て、真の父母の愛の因縁を通じて重生しなければなりません。そうしてこそ天国の国民になることができるというのです。

真の父母とは何でしょうか。肉身の父母は、真の父母と何が違いますか。真の父母とは何ですか、何をするのが真の父母ですか。愛を中心として話すとき、その肉身の父母と真の父母とでは何が違いますか。何が違うかといえば、愛に対する概念が違います。正に愛の概念が違うということです。肉的父母は肉身を中心とした愛を教えてくれるのであり、霊的父母は霊的な世界を中心とした愛を教えてくれるのです。内容が違うということです。

②真の愛によって人類を生んでくださる

皆さんは、真の父母と関係ない立場で、天の前から追い出された偽りの父母の血統を受けて生まれたので、この血統から抜け出すためには、血統を否定して否定して抜き取らなければなりません。そうして血統を根本的に変えずしては天の国に行けないのです。

真の父母は何をしなければならないのでしょうか。サタン世界の根っこの間違った血統を正さなければならず、間違った生命を元に戻さなければならず、間違った愛の道を正しく開かなければなりません。

血統的転換を成すためには、アダムの骨髄まで、骨肉の中心部まで入っていって、将来の赤ちゃんとなるその種に神様の愛と結束した勝利的条件を充足させなければ、神様の子女として生まれることができません。これは理論的に間違いないというのです。聖書に、そのようにしてきた記録があるでしょうか。あるとするならば、聖書は神様のみ言だということです。

堕落した人間が要求する救い主とは、どんな救い主でしょうか。堕落した父母の立場ではなく、頃落していないアダム、エバのような立場で神様のみ旨と一体となって神様の愛を受け、神様の祝福を受けることができる真の父母の立場で、人類を生んでくれる救い主でなければなりません。そうでなければ、人間は原罪と関係のない立場に上がれないのです。

真の父母が必要なのは何のためでしょうか。心情圏を中心として、その根を下ろさなければならないからです。今は根が違います。堕落によって幹と枝がすべて違います。ここで新しくこの根が真の父母から始まって、何が出てきたのでしょうか。幹と枝が出てきて、接ぎ木するのです。切り取って、接ぎ木します。接ぎ木して、それが宇宙の大きな主流になるのです。

サタン世界のすべてのものを切ってしまわなければなりません。根まで切ってしまわなければなりません。

今日、万民が願うこととは何でしょうか。世界国家を迎える前に、真の父母を迎えようということです。また未来の子孫たちは誰から出発したいのでしょうか。皆さんの息子、娘は皆さんの血統を通じて生まれたいのではありません。真の父母の血統を通じて生まれたいのです。ですから真の父母は、新たな未来の出発点になるということです。

真の父母は何をしなければならないのでしょうか。サタン世界の根となる間違った血統を正さなければならないし、間違った愛の道を正さなければなりません。聖書に「生きんとする者は死に、死なんとする者は生きん」

とありますが、そのような逆説的な論理がなぜ出てこなければならないのでしょうか。正にサタン世界は死ななければならないからです。

真の父母と真の父母の子供というのは、永遠不滅の宿命的な業（関係）です。これは誰も分けられないのです。千年、万年、その道を行かなければなりません。行く道は、二つの道ではなく一つです。他の方法はありません。秘法がないのです。その道を行かなければならないのです。

エデンの園で結婚を誤ったことが堕落なので、今、真の父母が正しく結婚させてあげることにより、再びひっくり返したのです。偽りの父母が誤ったことを真の父母が清算することにより、地獄を撤廃して数百、数千億の霊界の先祖まで祝福結婚させてあげるようなことが起こるのです。真の愛を中心とした地上の子孫たちの家庭基盤を通じて、霊界の先祖と地上の子孫が縦的に一つに合わさるだけでなく、このような家庭基盤を基点として東洋と西洋が互いに連結されます。

養子はどのようにしなければならないのでしょうか。真の息子から接ぎ木を受けなければなりません。野生のオリーブの木を切り捨てて、真のオリーブの木の芽を接ぎ木しなければなりません。渋柿の木が甘柿の木になる運動をしなければならないのです。重生するためには真の父母の血統を受け継がなければなりません。それで人類が願うのは真の父母であり、イエス様と聖霊が願うのは「小羊の婚宴」です。

まずは父母を心から慕わなければなりません。私の生命の動機も父母であり、私の願いの一切も父母であり、私のすべての理想と幸福の根源も父母だという基準を中心として、父母に侍らずしては救いを受けられません。皆さんはそのように侍ってみましたか。皆さんはこれをはっきりと知らなければなりません。ですから「私は真の父母と永遠に一つになることのできる息子、娘だ」という信念を、自分の存在意識を超越できるほどに固くもたなければなりません。そうでなくてはならないのです。

皆さんは買ってきた人たちです。人類を与え、天宙を与えて、買ってきた人たちです。ゆえに神様は、皆さんをおいて天地を審判したいと思われるのです。神様は、サタン世界の奴隷の立場にある皆さんを買って、神様の息子、娘として立てました。ゆえに皆さんは、福を受けた栄光の子女たちです。ですから全世界で皆さんを「くれ」と言うとき、与えることができる皆さんにならなければなりません。サタンにまでも与えることができる皆さんにならなければなりません。

皆さんは、先生の血と汗の代価で買ってきた人たちです。先生の体を与えて、買ってきた人たちです。したがって、皆さんも先生のような仕事をしなければなりません。先生は食口たちを誇りたいのです。このような立場で公約しましょう。

二) 重生摂理の核心

①生まれ変わるということの真の意味

再び生まれなければならないというのは、堕落したアダム、エバの子孫の父母の血縁を通じて、もう一度生まれなければならないということではなく、堕落と関係のない父母の

血縁を通じて再び生まれなければならないということです。そうでなければ、神様に帰ることができないのです。罪の根本の根はアダム、エバから始まったがゆえに、これを踏んで越え、すなわち原罪と縁がない立場で生まれたという資格を備えなければ、神様のそばに絶対に帰ることができないのです。

神様が私たち人類を救おうとする目的はどこにあるのでしょうか。堕落圏以下では、どんなに救おうとしてみたところで、救援ができないのです。それで神様は、堕落していないアダム、エバ以上の真の父母をこの地上に再び送り、その父母を通じて人類が再び生まれる路程をたどらせ、永遠にサタンとの関係をなくさせ、讒訴しようにも讒訴できないようにされ、神様だけが主管し、神様だけが干渉できるようになさるというのです。そのような立場で人類が再び生まれなければ、原罪をもった人間が原罪のない立場に戻ることはできないのです。

真の父母が真のオリーブの木ならば、皆さんはみな接ぎ木されなければならない野生のオリーブの木です。脇の芽であり、脇の枝です。これは新しい枝が出てこそ、正常な生態作用をすると見ることができるということです。人類は、信頼と愛と実体を失ってどうなってしまったのでしょうか。血統的に逆になってしまいました。それでひっくり返さなければなりません。すなわち、ニコデモがイエス様に「天国に入るには、どうしなければなりませんか」と尋ねると、「生まれ変わらなければ、天国に入れない」という最も重要で、事実的な内容を明らかにしたのです。

生まれ変わるというのは、心が改変しなければならないということです。

ニコデモがイエス様に「どうしたら救いを受けることができますか」と尋ねると、「生まれ変わら（重生し）なければならない」と言われたのです。それは、サタンの子として生まれたので、救いを受けるには、神様の聖霊を受けて、再び生まれなければならないということです。今までサタンと結んできたすべての関係を清算して、神様と創造本然の関係を結ばなければならないという言葉です。

神様の摂理で信仰を立てたとしても、神様の子供に復帰されるためには、接ぎ木されなければなりません。

生まれ変わるには、アダム、エバより劣っていてはできないし、またアダム、エバより劣っていては根本復帰もできません。生まれ変わるにも個人が生まれ変わらなければならないし、家庭、民族、国家、世界が生まれ変わらなければなりません。この事実を、今日のキリスト教徒たちは知らすにいます。

今日、キリスト教を信じる人たちの中には「再び来られる主は、雲に乗って来られる」と信じる人々もいます。何も知らない中でも、信じれば救われるという考え方では、真の信仰をすることができません。そんなに簡単に救いを受けることができるならば、統一教会はこの世に必要な宗教ではありません。

野生のオリーブの木に真のオリーブの木を接ぎ木するときは、枝を切ってそこにつけるのではなく、木の下のほうを切って根だけ残

しておいて、その上につけるということです。この話は既成教会が再び来られる主によって、既存の体制や制度、またはすべての儀式を変えて、新しく出発するようになるということを意味します。

彼らが信仰生活を通じて結んだ実は野生のオリーブの木の実なので、真のオリーブの木の実を結ぶためには、大木を切り取って、芽接ぎをしなければならないのです。もし接ぎ木することができなければ、根まで引き抜いて、燃やしてしまわなければなりません。そのまま置いておけば、野生のオリーブの木の実が畑に蒔かれて、数多くの野生のオリーブの木をつくり出すからです。

野生のオリーブの木を切るのは、新しい真のオリーブの木の芽を接ぎ木するためです。問題は真のオリーブの木の芽や野生のオリーブの木の芽が、外から見ると全く同じなので、いさかいが起こるようになっているということです。特に再臨上が来られる時には、多くの偽キリストが現れるので、真実を見つめる価値観と目が混乱を起こしかねないのです。それで「絶えず祈りなさい」と言ったのです。

野生のオリーブの木の下のほうを切って、真のオリーブの木を接ぎ木することによって、野生のオリーブの木はみななくなり、真のオリーブの木の畑になるはずです。このような作業をレバレンド・ムーンがしようとするので、大騒ぎなのです。彼らは自らの体が切られる痛みを恐れて、「いかさま庭師ではないか」と思うからです。摂理歴史の春とともに、野生のオリーブの木に接ぎ木をする作業が始まりました。

②重生しようとすれば

新郎のイエス様の愛と新婦の聖霊の愛が一体となったその愛が、私の骨肉と一つにならなければなりません。すなわち、「私があなた方の中にあり、あなた方が私の中にあって」というイエス様のみ言のように、愛の心情基盤が成される前には、キリスト教でいう永生はあり得ないということです。

皆さんは重生されなければならないといいますが、重生されるには、イエス様を誰よりも愛さなければなりません。堕落圏内で、すなわちサタンの愛圏内でなされるそのいかなる愛よりも、神様を中心としてなされる愛が、より次元が高くない限り、神様と連結することができる道がないということを知るべきです。これが受難の道であり、宗教人たちが行くべき険しい道だというのです。

キリスト教徒たちもイエス様を日ごとに思慕しており、イエス様が再臨されることを首を長くして待っており、無心になって「新郎イエス様、いらしてください」と二千年間叫んできませんでしたか。しかし、体がばらばらになり、胸が裂けて、骨髄が溶ける立場、体の中にあるのか体の外にあるのか分からない境地、ただ神様やイエス様とのみ通じることができる境地に入るとき、初めて聖霊が臨むのです。聖霊が臨むことによって、霊的な赤ん坊として再生することのできる霊的重生の役事が起こるというのです。

皆さん、そのような体験がありますか。そのような体験がない限り、まだサタン世界の息子、娘だということです。まだサタンの讒訴を受けざるを得ない人だということを皆さんは知らなければなりません。そのような人は、天国に行くことはできません。

イエス様はニコデモに対して、「あなたが生まれ変わらなければ、天国に入ることができない」と言われました。今まで生きてきた私は、いずれにせよ歴史的に否定されなければなりません。どんなに良くやったと弁解して自ら立てた何かがあるとしても、私自体は否定されなければなりません。堕落人間であるがゆえに、そのような圏内を抜け出すことができないのです。否定されるべき生涯であり、否定されるべき生活であり、否定されるべきしかばねの人生であったというのです。

血統を転換するのはメシヤがするかもしれませんが、転換できるように行動するのは自分自身でなければなりません。このような基準が成されない限り、私たちは救いの道に至ることができません。それは決して容易に成されるものではなく、生きるか死ぬかの境地を通過しなければなりません。四十日断食祈祷であるとか、血を吐く死の境地に行ってこそ、血統転換が可能です。

世界の万民は真の母が現れる前に生まれたので、意味もなく生まれたことになります。それでイエス様と接ぎ木した立場でイエス様の腹の中に入っていって、イエス様が夫婦になったとき、聖霊を通じて再び生まれなければなりません。偽りの愛によって生まれたので、真の愛を通じて再び生まれなければならないということです。キリスト教で愛を強調する理由もそこにあるというのです。

イエス様と一体になるには、愛以外にはありません。真理でも正義でもありません。生命があるのに先立って、愛が必要です。愛は歴史も跳び越えることができるし、距離や空間の支配を受けないというのです。

三) 真の父母の中心思想は血統転換

血統的転換は誰がするのでしょうか。それは誰でもできることではありません。先生がこのことをするために、涙ぐましい十字架の道を歩んだということを知らなければなりません。こういう基準があるので、皆さんは何の功労もなく祝福という新しい伝統を受け継ぐようになりました。転換の勝利圏を立てるには、数千年に及ぶ神様の労苦と、実体を中心とした先生の苦難の生涯がありました。これを土台として立った所が、正に皆さんが立っている所です。祝福とは、接ぎ木することであり、接ぎ木することによって血統が変わることです。

血統の同一性が必要なので、神様の心情圏に従わざるを得ないのです。なぜそうなのかといえば、根が違います。幹が違います。しかし、根が同じでなければならず、幹が同じでなければならず、芽が同じでなければなりません。そこには絶対的に血統転換という、とてつもない問題が起こるのです。それは、一人ではすることができません。真の父母がいなければなりません。

神側では、サタンの偽りの愛圏にいる人間をより大きな神様の愛によって奪ってきて重生させるのです。人間が偽りの愛の父母、偽りの愛の先祖、偽りの愛の血統を通じて生まれたがゆえに、真の愛の父母、真の愛の先祖、真の愛の血統を通じて再び生まれてこそ、神様の子女、神様の民になるのです。イエス様の聖血が貴いのも、聖餐の儀式もみな、血統転換を通じて神様の子女になる摂理を形状的、象徴的に表すものです。

皆さんは血統転換、これの実感がわかないでしょう。皆さん、いつこのようになりましたか。先生がアベルになるとき、皆さんはカインとして完全に一つになるのです。この関係があるので皆さんが先生と一つになれるのであって、この関係がなければ大きな問題が起こるというのです。

神様の心情は、どこで連結されるのでしょうか。理論では連結されません。血統を通じてのみ連結されるのです。皆さんは、神様の心情の血統を受けました。今までは知らなかったというのです。それで皆さんが祝福を受ける前に、血統転換式があります。その時は、私は何もないという無の境地に入らなければなりません。私の体はないという立場に立って、父母様の血肉を再び受け継ぐ結着点が、私から始まるという信念をもたなければなりません。

皆さん、祝福を受けるとき、血統転換式をしたでしょう。皆さんは何も知らずに先生がさせるまま従ってやっただけですが、それがそんなに簡単なものではありません。イエス様が夫婦関係を成すことができなかったために、歴史がこのように混乱してきたということを考えて、その目的に合う一双を立てるという心情的基準から見るとき、祝福で血統を汚すような何かがある場合には、大変なことになります。これは刑罰が問題ではありません。

エデンの園では未完成期に堕落した者も追い出しましたから、完成の心情的基準で罪を犯したとすれば、言うまでもありません。そのような者は、後ろ姿も見たくない神様であられます。先生もやはりそうです。

祝福を受けるとき、皆さんは血統転換式をしたでしょう。その次からは完全に変わらなければなりません。真の父母が出てこなければ、このことが可能ですか。創世以後、どんなに険しい道を歩んできましたか。真の父母が現れたことだけでも有り難いのに、真の父母から祝福を受けたということは、もっと驚くべきことです。こうした伝統、その伝統とは、血統の伝統です。真の愛と、真の生命と、真の血統を植えた伝統ができているのです。これを、いつも考えなければなりません。

祝福家庭は、どんな意味をもっているのでしょうか。祝福家庭を中心として見るとき、サタンは祝福家庭を支配できないというのです。どんな国においても先生を完全に信じて真の父母に属したという信念をもって立つようになるとき、サタンはそれを侵犯できないのです。なぜそうなのでしょうか。父母様の心情を中心として血統転換した心情圏に連結されているからです。それで、ここからはサタンが手をつけられないのです。

復帰途上で僕の僕の時代から僕の時代を経て、養子の時代、直系の時代に上がらなければなりません。それでは完全に僕の僕の時代を経て、僕の時代、養子の時代を経て、直系の時代と因縁が結ばれるでしょうか。

直系の時代と因縁を結ぶには、そのままでは結ばれません。必ず原理によって、信仰の基台を経、実体基台を経て、メシヤのための基台を経なければなりません。すなわち、メシヤを迎えなければならないということです。メシヤは神様の真の息子です。養子と真の息子では、血統的な関係が違います。それで血統転換が必要だというのです。

堕落人間は、血統を転換しなければなりません。これが根本的な問題です。神様と人間との関係は父子の関係ですが、このようなすべてのものが未知の事実として残っていたがゆえに、歴史が解けず、今までも神様の摂理を知らなかったのです。血統転換も個人圏、家庭圏、民族圏、国家圏、世界圏、みなしなければなりません。

これをするには、メシヤにならなければなりません。父母が出てくることによって、父母から血統が出てくるのです。父母が出てこなければ、血統が転換されないのです。このようなすべての問題に個人が責任をもたなければなりません。個人がみなこういうことをして、越えていかなければなりません。これを知らないので、知っているメシヤが来て、代わりにやってあげるのです。

堕落人間は、出発が間違ったというのです。ですから、また帰らなければなりません。帰ることは帰るのですが、どこに戻るのでしょうか。原点へ戻らなければならないのです。偽りの父母によって始まったので、原点へ帰って真の父母によって再び始めなければなりません。ですから、どれほど深刻ですか。

私が神様の愛と、神様の生命と、神様の血統を再び受け継がなければなりません。それで皆さんが祝福を受けるとき、血統転換式をしたでしょう。それを自分の生命よりも信じなければなりません。統一教会の一つの儀式ですが、ただ一般の宗教儀式だと思ってはならないのです。これは死んだ人を回生させる注射の薬と同じです。解毒注射です。

聖書の歴史を見れば、ヤコブはお母さんと一つになって父を欺いて祝福を受け、タマルの歴史を中心としてもこのような非人間的行為をしたのに、ユダ支派を通じてイエス様が来るとはどういうことですか。血統転換という問題があるからです。血統を清めなければなりません。キリスト教だけが血統を重要視して、血統転換を主要思想とみなしてきました。他の宗教にはこういう歴史がないので、ここに従わなければならないという結論が出てくるのです。

ですから血統転換というものを中心として見るとき、文総裁はキリスト教を外すことができませんでした。選民思想を受け継いだキリスト教を外せなかったというのです。（世界基督教統一ではなく）「万教統一」と言っていれば、どうして私が迫害を受けるでしょうか。何のことか分かりますか。骨髄思想がこのようになっているためです。はっきり知らなければなりません。

四) 血統転換の三段階過程

①聖酒式

統一教会の祝福を受けるとき、血統転換式があります。皆さんは血統転換式をしたでしょう。蕩減棒行事とか三日行事とか、どんなに複雑ですか。そこには、サタンは入ることができません。それは真の父母と神様によって天国の門を開き、解放を宣言して立ったものであるがゆえに、長成期完成級で活動していたサタンは関係をもつことができないのです。祝福を受けた家庭は血統転換式をしたことを知っていますか。それを経なければならないのです。

皆さんが婚約式をしたあとには聖酒式があり、その次に結婚式があります。それでは、

この婚約式と聖酒式、そして結婚式はいったい何でしょうか。これは、ある前例に従って行う式ではありません。堕落したすべての内容をもう一度、象徴的に再現させて、それを蕩減するために行う不可避な行事なのです。

堕落した人間は、サタン世界の偽りの愛によって汚された過去のすべての愛を否定して、新たに神様の愛を中心として真の父母の愛を再現させることができる復活的な実体を備えずしては、祝福の場に行くことができません。したがって聖酒式は、まさしく真の父母の愛の関門を通じて、新しい生命の基準を成すことを約束する儀式です。

聖酒式は何をするものでしょうか。新しい愛を中心として神様の体を自分の体の中に投入させる儀式です。堕落した体は一つしかないので、神様の愛を中心として取り替えるのです。これが正に聖酒式だというのです。イエス様が、「パンは私の体を象徴するものであり、ぶどう酒は私の血を象徴するものなので、あなた方はそれをもらって食べ、飲まなければならない」と語ったのと同じように、愛を中心として、神様の実体を中心として、新しい血統を受け継いで原罪を洗い清めることができる式です。この式を経ずしては、祝福の場に行けないのです。ですからこの式は、血統を転換させる式です。

「血統転換」という絶対語が必要です。皆さんも祝福を受けるとき、血統転換式をしたでしょう。その血統を転換するためには聖酒がなければなりません。そして聖酒という酒が出てくるためには、二十一種類の選別過程を経なければなりません。それが何か知らないでしょう。それは空中で実を結ばせるものと、地で実を結ばせるものと、地の下で実を結ばせるものを中心としています。その次には鉱物世界、植物世界、動物世界で最も貴いもの、このように二十一種類の選別された物を通じて、その過程を経るのですが、そのすべてのものが讒訴条件に引っ掛かってはいけません。七カ月間、使わずにおきますが、そこに不祥事が生じてはいけないのです。

聖酒式は蕩減復帰式です。聖酒式は天使長の立場でするのです。ですから血統とすべてを捧げます。すべて復帰する条件になります。ここでお母さんを通じて先生がするのです。皆さんも全く同じ立場です。そのような立場で橋を架けるのです。聖酒式をこのように挙行することによって、皆さんが父母の場と同じ復帰の場に入っていくというのです。それを知らなければなりません。

聖酒は女性が先にもらいます。女性が先に先生に敬拝して聖酒をもらい、半分だけ飲みます。その次は、夫が敬拝しなければなりません。これは、女性が半分飲む時は、男性は頭を下げているのです。この時は、女性がお母さんの立場にあります。お母さんの立場と同じです。こうして女性が半分飲んで残ったものを男性にあげ、男性が飲むことによって因縁が結ばれます。それで男性も対等な場に行くことができるというのです。

聖酒式は、アダム、エバが堕落したその反対のコースで行うものです。結婚するには、婚約式がなければなりません。その次は聖酒式です。そうしてこそ結婚式に進むのです。皆さんは堕落したので、アダム、エバになれなかったのです。婚約式は、息子を取り戻そ

うという神様の前に、真の父母の前に、「堕落した息子より立派なアダム、エバになりました」と言うものです。

アダム、エバは婚約段階にあったのです。こうして一つの世界がここから誕生するのです。ですから、このようなすべての因縁を連結させる条件を成立させることが聖酒式だ、ということを知らなければなりません。

聖酒を飲むには、天使長からエバ、エバからアダムです。皆さんはどのようにするかといえば、エバが受けます。エバがいなければ、男性は再び生まれることができません。復帰なので、エバに杯を受けさせ、半分だけ飲んで、その次にエバが夫に与えます。杯をもらう時は、お父様から頂く代わりなので、礼をして、実際には三拝ですが、礼を一回だけでもいいです。三拝するという気持ちをもって、それを頂いて半分を飲んで、それを夫に。それを飲んだあとは、返してもらいます。そして反対にします。

そのようにすれば、心情的に一体化します。実際には、その前に先生が女性たちに手をのせて祈祷しなければなりません。先生が女性の手にこのように祈祷します。これが一体化の祈祷です。そういう祈祷をして聖酒を飲めば、堕落の血統をきれいにすることになります。それが条件です。キリスト教の洗礼式のようなものです。血統転換式！　分かりますか。

天使長を通じてエバが堕落したので、復帰歴史においては、エバがアダムを通じて天の前に立って天使長復帰をしなければなりません。そのために行うのが聖酒式です。聖酒式をするとき、先生が女性に先に与えるでしょう。なぜそうなのか知っていますか。それが失ったエバを復帰する式なのです。聖酒式をすることによって霊的に一つとなり、心情的に一つとなり、肉的に一つになるのです。絶対的な内約なのです。

聖酒は、ただ作られるのではありません。ただそのままできるのではないということです。サタンと神様の立ち合いのもとに、霊界にいる数多くの天使たちの立ち合いのもとに作られるのです。そして、そこには皆さんが知らない二十一種類の物が入っています。万物世界と人間の復帰歴史の過程で形成される、すべての物が入っているのです。

聖酒を作る時は、霊界の霊人たちが来て、「頼むから一杯だけ注いで自分に飲ませてくれ」と強要します。聖酒を飲めば、復帰されることを知っているからです。それで、こじきが群れになって来て、しきりに「自分たちにも恵みをくれ」と言います。先生にはそれができるということを知っているのです。しかし、先生は、霊界のための先生ではありません。地上のための先生です。ですから「君たちは待ちなさい」と言って、苦労した皆さんに与えたのです。

聖酒には、父母の愛を象徴するものが入っています。そして血を象徴するものが入っていなければなりません。したがってそれを飲めば、父母の愛と一体になり、また血と一体になります。こういうものが聖酒の内容なのです。

聖酒は、どのように作られるのでしょうか。それは地と海と空を象徴し、全体を象徴するものから作られた酒です。聖酒には三種類の酒が入っています。それ以外に、すべての万

物を象徴するものが入っています。これを飲むということは、霊的に生まれ、肉的に生まれることを意味します。この式がなければ、原罪を脱ぎ、血統を転換することができません。血統が転換されなければ、完成基準を通過して神様の愛と一体となることができないのです。したがって聖酒式は、そのすべてのものを蕩減する式だということを知らなければなりません。

聖酒式は、堕落によって血統的に汚されたサタンの血を抜いてしまうものです。言い換えれば、原罪を取り除く式だということです。

聖酒にはサタンの讒訴のない万物の要素がみな入っています。その聖酒をもらって、真の父母と一つになった自分自身を汚す行為をすれば、サタンよりも恐ろしい立場に立つようになります。サタンは長成期完成級圏を汚して蹂躙しましたが、祝福を受けた者が過ちを犯せば、完成期完成級園で神様の実体を犯した罪が残るので、永遠に許されません。これは実に恐ろしいことです。

聖酒式をしたその場は、父母様が通過してきたすべての受難の道をみな蕩減してあげるためのものです。それは天下、宇宙を与えても替えられない貴い立場です。それを汚してはいけません。そうすれば当然、責任追及を受けなければなりません。

祝福家庭の二世たちと新しく入ってくる若い層、祝福対象者たちとは何が違うのかというのです。皆さんが祝福を受けるときは、聖酒式が必要であり、それ以外に必要なものが多いのです。複雑なのです。しかし祝福家庭の二世は、そのような聖酒式がありません。根が違うというのです。皆さんの根は堕落世界の根ですが、彼らはそうではありません。もちろん、人はみな同じように見えますが、歴史が違い、背景が違うというのです。出発が違うので、過程も違い、今現在置かれている立場も違い、未来において行く目的地も違います。目的地が同じだとしても違うというのです。祝福家庭としての立場なので、同じではありません。

②祝福結婚式

祝福式は、愛の伝授式です。神様の愛をもって父母が良く生きるように、皆さんも父母の愛を神様の愛の代わりに受けて、「このように生きなさい！」という愛の伝授式が祝福式だというのです。神様の愛を父母から受けるのです。ある有名な人から受けるのではありません。それは、天使長がしてくれる結婚です。名のある人が片方だけ来て結婚式をしてくれるのは、みな天使長にしてもらう結婚式です。

結婚式というものは、愛の顕現をいうと同時に、創造権と主管権を与えられることをいいます。

祝福結婚式は、ただ単に男女が出会って一つの家庭を成す婚礼式ではありません。今までの結婚式は、自分を中心としたものでしたが、私たちの結婚式は、神様に喜びを返し得るだけの内容をもって、歴史を蕩減する条件として、神聖で盛大に挙行されなければなりません。私たちの結婚式とは、アダムとエバの堕落で始まった神様の恨を解怨し、イエス

様が成し遂げられなかった新郎新婦の基準を通過することであると、「原理」は明らかに説明します。

主礼の前に歩いていくのは、六千年の摂理路程を歩むことです。蘇生、長成、完成を意味する路程に、二十一人、十二人の介添人を立てます。これは三数を代表するものです。七歩歩いて、蘇生を越える条件として三回、敬拝しなければなりません。この路程は、アダムから今までの歴史路程です。

特にアダム、イエス様、再臨主の三時代の過程ですが、この介添人の中を通過して、真の御父母様と出会うことを意味します。介添人を立てるのは、十二支派、二十四長老の霊的基準を立てるためです。敬拝することによって、蕩減条件を立てるのです。真の御父母様は聖水をまきますが、これは蕩減復帰した立場に立てるためであり、その条件を立てるためです。また霊界の先祖たちの土台を越える条件を立てるものです。

合同結婚式は、神様の新しい家庭を取り戻し、立てるためのものです。合同結婚式は、神様を何よりも愛することができるようにするものです。

統一教会の誇りは合同結婚式です。しかも同じ民族同士で結婚することより、東洋、西洋の人が合わさって結婚式をもつということは、誇り以外の何ものでもありません。そのことは統一教会でなければ、誰もできないことです。大統領もできないことです。それは先生が優秀だからそのようなことができるのでなく、神様の力が作用しているからです。

先生の聖婚式は、今までのどんな結婚式よりも盛大にしなければならないのに、苦難の中で行ったので盛大にできませんでした。ですから今後、盛大にしなければならない条件が残っています。食口たちは自分を中心とした三代の中で、外的に最も結婚を素晴らしく行った立場に立たなければなりません。そうしてこそサタンの前に条件を立てることができます。それで合同結婚式をするのです。内的な面でも神様が喜ぶ結婚をするためには、祭物的な条件を立てなければなりません。

神様が催した宴会は、サタン世界のどの宴会よりも壮大でなければなりません。しかし個体としてはその基準に立つことができないので、歴史始まって以来、かつてなかった合同結婚式を挙げなければなりません。

祝福結婚式の目的とは何でしょうか。それは世界を教うためのものです。この結婚式は、国境と人種と言語と文化、習慣を超越した国際合同結婚式でした。新しい神様の民が編成されるのです。したがってこの結婚式場は、和解の広場でした。

神様を中心として世界民族の編成のために、統一教会で祝福結婚式を行います。

今日のこのような成婚式は、神様の希望であり、理想でした。アダム、エバが成熟すれば、成してあげようとしていた成婚式なのです。創造理想の心情の中にあったもので、これは実に歴史的なことです。このような式典は創造以後、初めて行われたということを痛感しなければなりません。

③三日行事 — 実体復帰式

祝福を受けて四十日が過ぎたのちには、三日間にわたり実体的な復帰式があります。この四十日期間は、歴史的で総合的な蕩減期間なのです。人間が愛を中心として復帰の権限をもつようになるのは、蘇生期でもなく、長成期でもありません。完成期に入らなければならないのです。

アダムの時代と次の時代は、失敗の時代です。その結果、旧約時代の神様の蘇生的な愛圏を継承できずに、キリスト教を中心として神様の長成的な愛を受け継ぐことができませんでした。その蘇生、長成の愛圏を受け継いだのちにこそ、完成的な成約時代圏に立つことができるようになるのです。そのような条件を立てることが、三日行事の実体復帰式である蕩減式です。三日行事の実体復帰式の最初の日は、旧約時代の復帰です。堕落したアダム、旧約圏を復帰するのです。二日目は、新約時代のイエス様の立場を蕩減復帰するのです。三日目は、イエス様の代わりの新郎として新婦を再創造するのです。そこで初めて正式軌道に乗って、出発することができます。このように具体的に蕩減条件を立てるのは複雑なのです。

三日行事をするとき、夫婦はどんな立場に立たなければならないかといえば、夫婦とは夫と妻ですが、妻がお母さんの立場に立たなければなりません。お母さんになって、夫を愛によって生んであげなければなりません。結局は、再臨主までエバが生んであげなければなりません。主が来る時まで、再臨主までは三時代を経ますが、アダム、イエス、再臨主の三代を経て出てくるには、誰が生んであげるかといえば、女性が生んであげなければなりません。

この地上には今、主が、主人がいないというのです。ですからそれを生んであげる責任を果たさなければならない立場に立ったのが、女性たちだというのです。エバがアダムを完成させなければならないのに、堕落させ、イエス様がその使命を完成できるように、イエス様をよく生んで責任を果たさなければならないマリヤが、責任を果たせなかったというのです。それを、すべて復帰してあげなければなりません。結局は、アダムとして生んであげなければなりません。完成したアダムでなければ、結婚することができないということです。再臨時代まで三代かけてきたので、三人、三代にわたるお産の使命を果たさなければならないのです。

エバがアダムをこれくらい産み育てて、そこにまたイエス様をこれくらい育てたのちに、完成段階に入って夫を育てます。そののちに、夫としての権限を中心としてエバを愛して、越えていくそのような過程があるというのです。そこにおいて告解がなければなりません。再臨時代になって初めて夫になります。完成したアダムの立場に立つので、祝福の場、新郎の立場に立つようになるというのです。何のことか分かりますか。

先生を通じて妻は、お母さんの使命を再び与えられるのです。これは、三段階で生んであげる形式で愛さなければならないということです。愛によって生んであげるので、そのような条件を立てるためには、愛するときに、今までとは反対にするのです。女性が上にな

り、男性が下になります。愛するとき、それを間違えないようにしなければなりません。

三日行事の式を進行するとき、まず女性が祈祷します。蘇生的アダムをお産するのに、祝福がなければなりません。その次には、イエス時代に入ります。「イエス様のような第二次アダムをお産する祝福をしてください」と同じ式を行います。それで二度生めば、イエス様の立場であると同時に完成的な立場に育ったという段階へと越えていくのです。そのとき初めて、夫の立場に進みます。主体的立場へと進むのです。

その次からは、男性が上に復帰されます。それで三度目の愛は、男性が上で行います。二人がそのように愛を終えたのちは、神様の永遠の夫婦として、天の相続を受けた永遠の家庭として、父の眷属になると祈祷して、その次に夫婦生活に入るのです。そのようになれば、完全に蕩減復帰された家庭として、天の国に堂々と入るというのです。そのように難しいものです。ですからこういうことを知らなければ、復帰は不可能なのです。これを知らなければ、復帰できません。今日、既成教会で、信じて天国へ行こうというのは、でたらめで、こっけいなことです。天国へ行くのではなく、楽園へ行くのです。楽園は待合室です。

聖酒式は、三人のお母さんから生まれたという条件を立てる式です。聖酒には蕩減の血が入っています。聖酒を飲むことによって、内的に清め、聖巾で体を拭くことによって、外的に清めようとするのです。

これから実体の子女を繁殖しなければなりません。父と心情的な因縁を結ぶことができる子女を生むようにしてくださいと祈祷しなければなりません。心情的な祭司長になることができる子女を生むために祈祷しなければなりません。先生は、天地を身代わりすることができる心情的基準の上で子女を生むことを願います。

先生は、一度祝福すれば責任を負います。私たちは世界の代わりに、もう一度祝福を受けなければなりません。ですから条件的な結婚です。それまでの四十日間は、四千年を蕩減する期間に該当します。事実、結婚生活はきょうからです。今までは蕩減期間でした。

三　祝福家庭の責任

一) 真の父母と一体圏を成さなければ

人間は長成期完成級で堕落したので、そのまま完成段階に上がることはできません。私たち人間が長成期完成級で堕落したので、堕落したその線以上に上がってこそ、初めて原罪を脱ぐことができるようになっているということです。原罪は長成期完成級で脱ぐのではありません。したがって今日、皆さんが祝福を受けて立ち上がったこの場は、完成期完成級ではなく、長成期完成級だという事実を知らなければなりません。

堕落したアダム、エバを中心としてカイン、アベル、セツと彼らの対象（相対者）を含んだアダム家庭の八人がみな落ちていってしまったので、神様の前に蕩減条件を立てて、再び完成級に向かっていかなければなりません。そこでは父母の愛を感じなければなりません。生命の起源は、父母の愛を通じて生まれるの

です。こういう生命の価値を世界の何よりも尊重視できるその場を経てこそ、新しい道を行くことができるというのです。原理がそのようになっています。

今の個性完成は、絶対的な全体個性完成になっていません。条件完成です。復帰過程での条件完成ということを知らなければなりません。それで彼らが父母の立場に立っていますが、神様の心情圏というものを知りません。自分の妻は宇宙を与えても替えることができず、夫は宇宙を与えても替えることができず、二人が愛するそこに天地をつかんでいくことができる偉大な力があるということを体験できませんでした。

ですから祝福してあげた家庭は、この堕落圏を越える時までは、条件完成圏内に立っているということを知らなければなりません。天国完成圏ではありません。条件完成圏です。条件完成圏にあるので、ここで生きたのち、霊界に行けば手続きを別にしなければなりません。手続きの手順を済ませて、完成的完成をすれば、パスポートをもらって天国に入るのです。

「私は祝福を受けたからもういいだろう！じっとしていても天国だ」とそのように座っていれば、めちゃめちゃになるのです。祝福を受けたことが完成段階ではありません。皆さん、七年路程を習ったでしょう。このような複雑な内容を知って、合わせてくれる人がいないので、全能なる神様も仕方なく引っ張られてくるのです。皆さんが祝福を受ける時、「私たちは神様の原理原則に従って祝福を受けた。きょうから一つになった」と言いますが、一つですか。再び夫婦が再創造しなければなりません。

お互いに再創造しなければなりません。怨恨の夫婦の溝を埋めなければならない道が残っていることを、統一教会の祝福を受けた者たちが忘れてしまえば滅びます。私がいくら「滅びない」と言っても、滅びるようになっています。二人の夫婦は、神様が願う理想的復帰完成の夫婦に向かって、再び再創造の過程をたどらなければならないのです。それで統一教会では、個人復帰完成、その次に家庭復帰完成をいうのです。

人類が願うこととは何でしょうか。真の父母に侍ることです。六千年前に、アダム、エバの成婚によって、全人類が神様の子孫にならなければならなかったにもかかわらず、堕落することによって、人間たちはサタンの子孫になってしまいました。ですから、これから私たちは、六千年前に失った天側の真の父母を再びこの地上に探して立てて、その真の父母の愛の因縁を通じて重生しなければなりません。そうしてこそ天国の民になることができるのです。

すべての始まりは、真の父母からです。すべてのものの出発、初めは皆さんではなく、真の父母です。生きるのもそうであり、行動するのもそうであり、愛の家庭を連結するのもそうです。初めは真の父母です。これは先生の話ではなく、私たちの初めの先祖に対する神様の公式的な概念であったというのです。どうすれば私たちの家庭を父母様の家庭のようにつくれるか、それを考えなければなりません。

皆さんはこれから、真の父母と共に生きなければなりません。ですから真の父母は、お

じいさんの立場であり、自分のお母さん、お父さんの立場であり、自分たちは長子の立場だというのです。三代にわたって共に生きるという結論、これが違うのです。神様が私と共にあり、真の父母が私と共にあって、自分の父母が共にあるのを感じて生きなければなりません。神様がいない、死んだというのは、考えられない時代に入りました。

人間は誰でも、心情的に神様と一つになるようになっています。神様である父と、子である人間は、正に心情で結ばれています。

神様を信じることができずに堕落したので、メシヤを信じて、ついていかなければなりません。ついていって何をするのでしょうか。愛の住みかを用意しなければなりません。簡単でしょう。それから新郎であるイエス様と実体的に一体化して、心情一体化しなければなりません。それで復帰しなければなりません。そうして神様と真の父母と真の子女が対面する場、すなわち神様が初めに願われたその揚が、この天地間に繰り広げられれば、そこから新しい天地が開かれるのです。

皆さん各自の血統的内容が違い、背後が違っても、父母に似るためには、接ぎ木する役事をしなければなりません。ひっくり返して接ぎ木しなければなりません。接ぎ木するには、皆さん自体に残っている蕩減路程をみな清算しなければなりません。それは父母から始まったので、父母を通じて清算されなければなりません。それで真の父母から接ぎ木されなければならないのです。アダムが真の父母になることができず、偽りの父母になったので、神様は今まで真の父母を探してこられたのです。再臨時代に新郎新婦とか「小羊の婚宴」とかというものも、みな父母を探すためのものです。

父母の愛を受けるには、何をしなければならないでしょうか。父母様が愛するすべてのものを愛さなければなりません。そうしてこそ、初めて愛されるのです。家庭でいえば、自分の親に愛されることを願うならば、その息子は親がもっているすべてのものを愛してから、愛されなければならないということを知らなければなりません。これをしないで愛されようという人は、どろぼうです。父母が貴く思うものをすべて自分勝手に引き継いでは、愛されないのです。

皆さんは、真の父母の本当の息子、娘ですか。真の子女とは、何を中心としていうのですか。真の血統です。もちろん真の愛を通じて因縁をもちますが、成されるのは真の血統を通じて連結したということです。真の血統を通じて連結されたものは、お母さん、お父さんに似るのです。皆さんは先生に似ていますか。皆さんの目は青く、私は黒く、髪の毛も違うではありませんか。髪の毛がみな白いではありませんか。私は東洋人で、顔が平らです。

似るのは、一番の骨子だけが似ます。骨子だけが似ますが、どういうふうに似るかといえば、サタンに勝つことと神様を絶対に愛することだけ似ます。それだけ似るというのです。そうしてサタンを主管して、コントロールするというのです。

皆さんが先生をどれだけ愛さなければならないでしょうか。根本問題に戻ります。サタ

ン世界の愛の痕跡がある、その愛に染まったところで愛してはいけません。それ以上でなければなりません。皆さんがサタン世界で生まれたお母さん、お父さんと妻子、その誰よりも愛さなければなりません。

それで聖書で「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」（マタイ一〇・三七）と言ったのです。すべてそのような結論を下したのです。そう言いながら、あとでは「自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない」（同一〇・三八）と言いました。十字架を背負わなければならないと言いました。反対に引っ張っていく力を押さえて越えていこうとするので、十字架でしょう。ここで、悲痛な涙を流さなければなりません。

今日、堕落した人間はすべてのものを否定して、全体を否定する中で、愛の芽を育てなければなりません。そのような論理が必要になっています。全体を否定して、ただ主体の愛をもった神様を中心とした、愛を中心とした絶対基準を発見しなさいというのです。

一切を父母と共にかかわり、父母と共に決定し、父母と共に話し合い、父母と共に解決しなければなりません。

二) 性の絶対的な価値観確立

男性、女性の愛の象徴とは何でしょうか。愛の終着地点とはどこでしょうか。男女を一体とならしめる性器官です。それは、愛を中心として心と体が完全に合わさることができる通路になるのです。

男性と女性は何が互いに違いますか。性器官(Sexual Organ)を含むその体がまず違います。それでは男性の性器官は誰に絶対に必要ですか。男性の性器官は女性のためにあるのです。人間の性器官が一つは凹で一つは凸ですが、なぜそのようになっていますか。二つともとがるようにするとか、二つとも平らにすることもできるのに、なぜそのように違うのですか。みな相手のためです。

男性のものは女性が絶対に願い、女性のものは男性が絶対に願います。絶対に女性のものが男性のもので、男性のものが女性のものだという事実を知らなかったのです。それを占領することによって、愛を知るというのです。

生殖器とは、愛の王宮であり、永生の生命が誕生する王宮であり、永遠に変わらない天の伝統を受け継ぐ血族を、血統を受け継ぐ王宮です。真の生命の王宮、真の愛の王宮、真の血統の王宮だというのです。その王宮は最も貴いところです。自分勝手にできません。神様の公認がなければ、開けることができません。神様と宇宙の公認を受けた自分の夫、自分の妻以外にはタッチできないのです。

男性と女性が、凹と凸が一つになるのは、神様が完成し、半分の女性、半分の男性が完成する場です。凹と凸が結婚して初愛の関係を結ぶその場で、神様の愛的理想が完成する定着地が展開するのです。男性と女性の愛を中心とした神様の相対的位置としての完成の位置が決定するのです。これは宇宙の核です。

これが動けば、すべての宇宙が行ったり来たりします。地上天国の本拠地であり、天上天国の本拠地なのです。ここは愛の本然地であるので、「愛の本宮」と言います。多くの王宮の中で、中心の宮を「本宮」と言います。ここが愛の本宮であり、生命の本宮であり、血統の本宮であり、その次には、天上天国と地上天国の出発地であり、人間が願っている自由と幸福と平和がここから始まるのです。

そこは愛、生命、血統、すべてのものの王宮であり、個人、家庭、氏族、民族がそこから連結されます。天上天国と地上天国の本熱地、出発地だということを知らなければなりません。その次は自由と幸福と平和の起源地です。女性に男性がいなければ絶対暗黒であり、男性に女性がいなければ絶対暗黒です。

平和の基地もそうで、地上天国と天上天国、すべてのものが愛から始まります。何の愛ですか。男性の愛ですか、女性の愛ですか、男性、女性が合わさった愛ですか。合わさった愛です。その男女の愛はどこで合わせますか。顔で合わせますか、指先で合わせますか。凹凸で合わせるのです。

男性が崇拝できる最高の場所とはどこでしょうか。女性の顔ですか。女性の胸ですか。女性の体ですか。どこですか。凹と凸を合わせることができる所は一つしかありません。そのために、予備的環境が、社会が連結され、国家が連結され、世界が連結されて、地上・天上天国、宇宙がみな連結されます。これが存在世界の鉄則であり、公式です。

男性完成、女性完成、神様まで完成させることができるその本拠地とはどこでしょうか。どこで神様の愛を完成させることができ、どこで男性、女性を完成させることができるのでしょうか。その中心の定着地とはどこでしょうか。これが問題です。これを知らなければ、地上に愛の理想天国を拡張、拡大することはできません。それは目ですか、鼻ですか、手ですか、足ですか。どこですか。凹凸です。

生殖器というものは何ですか。それは真の愛を中心とした王宮であり、真の生命を中心とした王宮であり、真の血統を中心とした王宮です。一番貴いものです。これがなければ、神様の理想、神様の家庭、神様のみ旨が成されないのです。これは、全体完成を成し遂げることができる一つの起源です。

女性の生殖器は、宇宙的な本源です。愛の関係を結ぶその場が、愛の本宮になっています。本然の宮中です。愛はそこから始まるのです。結婚した初夜の愛が、愛の本宮の出発です。女性の生命、男性の生命が、初めて一つになるのです。ですから理想的な生命の本宮がそこであり、血統がそこから始まるために、血統の本宮がそこなのです。そして天国がそこから始まるために、そこが地上天国の本宮であり、天上天国の本宮であり、人間完成の本宮であり、神様完成の本宮です。

生殖器は、愛の王宮です。今、その愛の王宮がどのようになっていますか。愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮であるもの、そのように貴いのが人間の生殖器です。神聖なものです。それが堕落によって、汚いものになってしまいました。本然の神様の観点から見れば、汚いものではなく、神聖なものです。最も貴いものです。生命、愛、血統

がここに連結されています。このように神聖なものをサタンが汚しました。

生殖器を絶対的に貴く思う世界になれば、その世界は良い世界でしょうか、悪い世界でしょうか。栄える世界でしょうか、滅びる世界でしょうか。神様が人間を創造なさるとき、最も大切に精誠を尽くして創造された箇所とはどこでしょうか。目でしょうか。鼻でしょうか。心臓でしょうか。でなければ頭脳でしょうか。これらはすべて、死んでなくなります。事実がそうではありませんか。

私の生殖器は、愛の本宮です。私の生殖器は、生命の本宮であり、王宮だというのです。私の生殖器は、血統の王宮です。このようになってこそ、神様が臨在できる王宮になることができるのです。神様は王の王であられ、本宮を訪ねてとどまられるお方なので、神様に仕えるために、愛の本宮にならなければならず、生命の本宮にならなければならず、血統の本宮にならなければならず、良心の本宮にならなければなりません。

愛が中心となって、二人が生命の合一体となって合わさる場、男性の血、女性の血が一つのるつぼで一つになる場が生殖器です。その場は、息子、娘より貴く、夫より神様よりも貴いということを知らなければなりません。子供より貴く、夫より貴く、父母より貴い場だというのです。それがなければ、父母も無価値なものであり、夫婦も無価値なものであり、息子、娘も無価値なものです。

そのように貴いので、宝の中の宝として、世の中の誰にも見えないように一生の間、錠をかけておくのです。そしてその鍵は、男性のものは女性がもち、女性のものは男性がもっていますが、各々一つしかありません。一つの鍵だけをもたなければなりません。フリーセックスのように十も、二十ももちたいですか。門を開けて主人がいない家のように、過ぎゆく人がみな出たり入ったりする廃虚の家のようになりたいですか。

男性と女性が愛する本宮、生殖器とは何ですか。愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮です。おじいさん、おばあさんもそれをつかんで生き、今後生まれてくる息子、娘もみなそれをつかんで生きるでしょう。それをつかまないで生きる女性、男性がいるでしょうか。ところが、それが何ゆえ悪いものになりましたか。「下品な言葉」と言うでしょう。何ゆえ下品な言葉ですか。聖なる言葉です。聖なる言葉として受け入れなければなりません。そこで永遠の愛が連結され、永遠の生命、永遠の血統が出てきます。最も貴いものです。

女性、男性の貞操を守り、保護するというのは、宇宙を保護することと同じです。男性、女性の愛の秩序が、宇宙の根本だからです。

頭よりもそれがもっと重要です。頭には真の愛の起源がありません。頭には真の生命の起源がありません。頭には真の血統の起源がありません。その起源はどこにあるでしょうか。生殖器です、それは間違いないでしょう。生殖器にすべてのものがあります。そこに生命があり、愛があり、血統があります。そこが愛の本宮なのです。生命の根もそこにあります。血統も同じです。人間の体だけでなく、

人間世界と人類歴史を通じて、一番貴いところです。それがなければ人類の繁殖は不可能です。

堕落した世界において、愛は最も危険なものになってしまいました。愛をよく管理できなければ、天下が崩れ、ひっくり返るのは、堕落したからです。愛が何ゆえ偽りで醜くなったのかよく分からなかった人間が、その愛を守り、保護しようとしてきたのは、真の愛が現れてくれることを希望する本能のためでした。

堕落することによって、男女の生殖器が、この妖邪な死亡の波、死亡の法、滅亡の地獄を開門させた本宮となり、天道を破綻させた化け物団地になりました。これが今まで歴史に隠された秘密でした。

愛の王宮とはどこですか。こういう話をするからといって、変に考えないでください。それを正すことができなければ、世の中がみな狂うのです。標準が合わなければ、全天下に妖邪なものが横行します。文総裁がこれまで苦心して、人間の根本問題、宇宙の根本を究明してみると、ちょうど到着したところが生殖器でした。生殖器に到着してよくよく考えてみると、天地の調和がここで渦巻いていたのです。驚くべき事実です。

真の自由は、責任性を前提とします。もし責任性がなく、個々人の愛の自由だけを主張して実践するならば、どんなに大きな混乱と破局が訪れるでしょうか。至高な愛の理想を成す人間の完成は、愛に対する責任性をもつとき、可能なのです。

人間は愛の自由を下さった神様に感謝しながら自己修養、自己主管によって、自由の主体となる責任性をもたなければなりません。人において愛の責任性は、法や人目を気にすることによって守られるのではなく、神様との生命的、縦的関係の中で、自己主管、自己決断によって守られるのです。

生殖器を目の見えない盲人のように、方向を失ったまま使用すれば、地獄行きであり、反対にこれを神様の絶対愛の基準に合わせて使えば、天国の高い所に行くのです。明白な結論です。

愛の器官をむやみに扱えば、罰を受けるようになっています。それが愛の王宮であり、愛の先祖の園です。愛は、そこから出発しました。生命がそこから出発しました。歴史がそこから出発しました。地上天国の起源であり、天上天国の起源であり、神様の幸福の出発の起源が、そこで形成されるというのです。

神様の笑いの土台がそこから出発します。愛を見つけて、神様が踊ることができる場が、その場です。その場を探していかなければなりません。それは正しいですか、違いますか。このように貴いものです。

人間が堕落するとき、愛ゆえに堕落したために、この性器が一番恐ろしいのです。宗教では姦淫することを一番恐ろしい罪として扱っています。米国のフリーセックスは悪魔の地獄膨脹主義ですか、天国膨脹主義ですか。地獄です。地上地獄であり、天上地獄です。これはすべて滅亡するのです。

文総裁がすべての真理を探究し、霊界、肉界を探査し、すべての経典を探査しても、これは解決する道がありません。神様がいるでしょうか、いないでしょうか。神様がいるならば、世界をこのようにつくった神様をそのままにしてはおきません。見極めるための談判闘争をしたのです。人間が生まれた根本原則とは何であり、何ゆえ生まれたのでしょうか。男性は女性のためです。それが全体の真理の中の最高の真理です。

女性の前に理想的な男性は最高の真理です。宇宙全体を完成した理想の真理の本体だということを知らなければなりません。男性の前にそのような女性も、宇宙の真理の本体の中の本体です。絶対的な真理体です。

祝福を受けた血統を汚してはなりません。それを皆さんは、よく知らなければなりません。天国を受け継ぐことができる、相続することができる財産です。それは血族の文書、血統の権利証書と同じです。族譜と同じです。純潔をどのように守るかということです。

三) 理想的夫婦生活が重要

男性は、神様の陽性的形状をもった存在であり、女性は、神様の陰性的形状をもった存在です。夫婦は、天下を一つのふろしきに包んだようなものです。ゆえに夫婦は、神様の理想的な愛の心情を感じることができます。

夫婦が神様を愛し、人類を愛する心の土台の上で、爆発するように愛し合うならば、その家庭によって、神様が酔い、宇宙が酔うことができるようになります。その愛は、神様のための愛であり、人類のための愛でないはずがありません。その愛の根はどこにあるのでしょうか。自分にあるのではありません。神様が愛の根源であり、人類の愛が根源なのです。

結婚したならば、既に平面的ではありません。平面的な基盤しかありませんが、高いものが低いものと連結されるときは、垂直的概念が生じます。平面的な役事は宇宙や天宙を収拾できません。垂直と水平が出合って、九〇度の角度を成すとき、それは天を地にしても、地を天にしても、前を後ろに、後ろを前にしても、右弦左弦、上弦下弦、前弦後弦、どの面に付けてもぴったり合うのです。地上の完成基準は、霊界のすべての完成へとつながります。

神様の結婚式とはアダム、エバの結婚式です。ですから地上天国と天上天国が同時に生じるのです。愛の巣から出発するのです。男性、女性の生殖器を中心として、堕落しないで出会うその時間が、地上天国、天上天国出発の起源地です。三大王権を樹立しなければならないその基地がそこです。その場でなければ、愛の巣を成すことができません。

人間は本性的に、自分に対する相対の愛が分散することを願いません。夫婦間の横的な愛の関係は、親子間の縦的な愛の関係とは違って、分散すれば既にその完全性が破壊されます。夫婦間には絶対的な愛の一体を成すようになっている創造原理のためです。人間には、自分の相対に絶対に「ため」に尽くさなければならない愛の責任性があります。

男性と女性が祝福を受けて完全な愛を分かち合い、喜びを享受するとき、神様の目には、

地上に咲いた花のようだというのです。また彼らの愛によって成されるすべての調和万象は、神様には香気のようなものです。神様は、このような美しい香りの中で暮らしたくて訪ねてこられるというのです。神様の愛が訪ねてくることができる根拠地が、まさしく夫婦の愛の場です。その場は、万物と宇宙が和動する場となるでしょう。

神様の愛が人間の三大愛を中心として共に花咲くことができる家庭を成すことが世界の願いであり、人類の願いであり、未来の願いだというのです。これが初めて天地の法度の前に歴史の香りを漂わせることができ、新しい花として登場できる貴く美しいものが、夫婦の愛だということを知らなければなりません。

男性と女性の愛の完成が宇宙の完成です。この愛が壊れる日には、宇宙の秩序が破壊され、縦的な世界がみなつぶれるようになります。

心情的な愛によって結ばれた夫婦は、その愛情が生活圏に満ちあふれ、生涯を通じて満ちあふれ、神様の目的と間違いなく一致したという家庭を成さなければなりません。そうでなくては神様がいらっしゃる天国へ帰ることはできません。

愛は永遠です。そのような愛は、二つではなく、一つです。男性と女性の間が愛によって結ばれれば、地上で百年偕老（注：夫婦が仲睦まじく年を取ること）し、死んでも永遠に共に生きていくようになっています。体は二つでも、一つとなって回ることによって一体になるのです。二つの体が一つになれば、神様と回るようになって、愛の四位基台を成すので、それが正に理想世界なのです。そこには偽りの愛が侵犯できず、ただ真の愛のみが臨在するようになるのです。

人には常に刺激が必要です。幸福は、刺激なしには成されません。刺激がなければなりません。

いつも食べる御飯も、食べるたびに、おなかがすいていてこそ味が新しいように、夫婦間の愛も同じように、常に新しくなければなりません。妻と夫がお互いに見れば見るほど、より一層共にいたいし、一日中、共に過ごしたいと思わなければなりません。そのために自分に対する研究をしなければならず、神様に対する研究をしなければなりません。

理想的夫婦とは、どんな夫婦でしょうか。最高の芸術を実体に展開させることができる夫婦、最高の文学を展開させることができる夫婦なのです。最高の理想、最高の文化世界に接する前に、最高の愛によって夫婦がやり取りする甘い愛が、世界最高の芸術作品にならなければなりません。夫婦生活自体が最高の文学作品であり、それ自体が文学の実体にならなければなりません。

結婚して夫婦が真の愛を行う場は、神様と人間の愛と、生命と、血統の根源の王宮の場であり、理想のための地上天国、天上天国の出発地なのです。このような真の愛によって結実した子女が、真の愛を中心とした夫婦一体を完成して、神様に仕えて生きる家庭になり、平和と理想の出発基地になるのであり、半分の男性、女性たちは一体となって、神様の相対として神様の理想愛を完成させるようになるのです。

赤ちゃんを生む場は、神様の上弦世界を占領するのです。神様の立場に上がることによって、子女を愛することによって、神様が創造以後、人間をどれくらい愛したのかという内縁を体恤させるのです。

皆さん、愛するのを神様が見るでしょうか、見ないでしょうか。天下時空を超越する神様が、この世界の五十億人類が愛する夜になると、目をつぶるでしょうか、つぶらないでしょうか。見ているなら気分はどうでしょうか。

良い妻、良い夫がどれほど多いですか。考えてみてください。ありとあらゆることがみな展開されるでしょう。やむを得ず女性の役割をし、やむを得ず引っ張られていき、やむを得ず機嫌を取って、そのように生きるのではありません。

それが愛ですか。それが人生ですか。世の中がすべて神様が願っていた創造理想どおり、花の香りが漂うエデンの園のように、ちょうど蜂が思いのままに飛び交い、天地に和動しながら生きることのできる環境となって、神様がそこに酔い、眠ることができるなら、どんなにいいでしょうか。それを考えたことがありますか。一度そのように生きてみてください。

夫婦の愛を通じて一つになることによって、神様のような立場で、創造の能力を成したのが子女です。

四) 祝福は理想家庭完成にある

人間に対する神様のみ旨は、創造目的を完成して創造理想を実現することです。創造理想の実現は、男女が結婚して愛によって一つになることで終わるのではありません。そのようになったのちは、息子、娘をもたなければなりません。何ゆえそうなのかといえば、天地の道理は上下、前後の関係が連結されることだからです。きのうがあればきょうがあり、きょうがあればあすがあるのです。連結されなければなりません。ですから夫婦だけでは、きょうはあってもあすはありません。あすがなければ、すべてのものが終わるのです。それで天地の道理は、上下が連なってこそ左右になります。

人間の始祖を通じた神様の理想は、男性と女性が結合して、理想的な家庭を成すことでした。理想的な家庭の中心は、男性でもなく、女性でもありません。家庭とは、父母と子女、夫婦の結合によって成された一つの束なのですが、その結ばれた中心が、正に神様の愛です。神様の愛を中心として、家庭を完成させることが神様のみ旨だという結論が出てきます。家庭は、神様の理想が顕現することのできる基点であり、人類の幸福の顕現の基点となるのです。人間としての仕事がみな終わる場であり、神様もすべての物事の完成を見る場です。家庭がなぜいいのですか。それは父母の愛を中心として自由に活動する基地になるからです。

家庭には必ず父母がいて、妻子がいなければなりません。そうしてこそ、その家庭が幸福の土台になるのです。神様が人類を訪ねてこられる目的も、神様御自身の幸福を模索するためのものであるに違いありません。ゆえに神様御自身が幸福の土台を訪ねてこられるのに、人間を離れた所では、そのような理想はあり得ないというのです。人間と共に関係

を結んでこそ、その一致点をもたらすことができるのです。私たちが家庭で情緒的なすべての内容を備えた立場で幸福を感じるのと同じように、神様もやはりそういう立場で幸福を感じようとされるのです。

神様を中心として一つになるとき、千態万状に回るようになるのです。したがって兄弟間で愛するのも、父母が子供を愛するのを見習って、兄は弟を愛さなければなりません。そのように愛して一元化した家庭は、家庭愛が花咲くことができます。これがまた社会愛になることができます。さらには、民族愛になり、世界愛になるのです。ところが今日、これが漠然としているというのです。

真の家庭は、自分のお母さんのように妻を愛して「ため」に生き、自分のお父さんのように夫のために尽くして愛し、兄妹のように愛し合う所です。その次は、神様のように自分の妻を愛し、神様のように自分の夫を愛して尊敬する世界が、理想家庭が暮らす天国です。このような伝統がこの地球上に立てられなければなりません。

神様を中心とした永遠の父母の愛、永遠の夫婦の愛、永遠の子女の愛、この三種類の愛があるのが理想的家庭です。

人の一生において、最も重要な時はいつかといえば、生まれる時、結婚する時、死ぬ時です。それでは生まれる時は、どのように生まれなければならないでしょうか。正しく生まれなければなりません。私たち統一教会でいえば、心情の因縁を中心として生まれなければなりません。

その次は、結婚する時です。結婚とは、生きるためにするものです。すなわち、四位基台を成すためにするものです。これと同じ宇宙の公法を地球上に立ててこそ、神様のみ旨が成され、人間の願いが成されるというのです。このような宇宙の法度が指向する内容を備え、その形態を備えるためのものが家庭です。

天国生活はどこから始まるのでしょうか。正に家庭です。他の所から始まるのではありません。天国は家庭を立体的に拡大させただけであって、家庭園を離れたものではありません。ですから皆さんが自分の妻や夫を抱くとき、これは世界のすべての男性と女性が一つになるのだという考えをしなければなりません。このように世界人類を愛したという条件を立てることができる場が、正にこの家庭です。

父子の関係の真の愛は縦的であり、夫婦の真の愛の関係は横的であり、兄弟の真の愛は前後の立場として、球形の真の愛の理想を願われたのです。すなわち、縦に上弦下弦、横には左弦右弦、前後には前弦後弦を全体的に連結した一つの中心点で統一は成されるのです。その点が球形体の中心点になるのです。いつ四大心情圏である子女、兄弟、夫婦、父母が一体を完成するのかといえば、神様を中心として人間が結婚して初愛を結ぶ場が、すべての完成の結実点であり中心になるのです。したがって結婚は、天地人の合徳であり、縦横、左右、前後、全体を完成するものです。結婚は真の子女、兄弟、夫婦、父母の理想の真の愛の完成地なのです。

一家庭を中心として、一番良いものとは、皆さん自身で決定されるものではありません。

それでは家庭での最上の価値は、何になるでしょうか。父母です。皆さん一個人においても、権力や知識、または名誉やお金も貴重なものになるでしょうが、そのすべてのものに勝って良いものは父母以外にないというのです。その次は皆さんの妻や夫になるでしょうし、さらには皆さんの子女になるでしょう。

事実、皆さんの家庭で皆さんの父母や妻、そして子女たちよりも大切で価値あるものがありますか。ないというのです。では何ゆえ、父母が良いものになるのでしょうか。そしてまた夫と妻、子女が何ゆえ、良いものになるのでしょうか。愛があるからです。父母の愛、これは夫と妻にとって、絶対的に必要なものになります。そして兄弟間の友愛とか、子女が父母に対して抱く孝行の心も、一家庭で絶対的に必要なものです。

神様は真の愛の本体なので、真の愛と連結されればすべてが同じ体になります。父母は神様の代わりに生きている神様であり、夫と妻はお互いに片方の神様であり、息子、娘はまた一つの小さな神様です。このように三代が真の愛を中心として成された家庭組織が、天国の基盤です。そのような基盤を成さずしては天国が成されません。家庭とは、宇宙の中心です。家庭完成は、宇宙完成の基礎となるために、家庭で愛するとともに宇宙を愛すれば、どこでも無事通過です。こういう場合、神様は宇宙全体の父母として、愛の複合的な中心の場にいらっしゃいます。

統一教会の「原理」でいう四位基台は、三大愛圏をいうのです。三代が一つの家で暮らしながら、愛によってむつまじく幸せなとき、天地創造の理想が実現されるのです。夫婦が愛し合うことはもちろんですが、子女たちに愛によって祈祷してあげ、精誠の心で世話をしてこそ、家庭がむつまじく、幸福になるのです。これが縦的に成され、横的に連結されるとき、完全な愛が成されます。いとこと、またいとこの兄弟たちまで愛によって一つになって初めて愛の原形となり、完全になります。

理想的な愛は、家庭で成されます。しかし神様は、真の息子、娘をもつことができませんでした。真の兄弟をもつことができず、夫婦をもつことができず、また父母になることができませんでした。ゆえにこのようなことを成そうというのが、神様のみ旨です。このようなところでこそ、愛がとどまるのです。このような愛が成されるところには、人々が世の中のすべてのものを捨てて、訪ねてくるのです。

神様は、家庭の中心となるお方として、この世界は神様の国にならなければなりません。祝福家庭は、神様の国を連結させることができる家庭になるように努力する生活をしなければなりません。神様の代わりに、「ため」に生きる生活をするところから、氏族が展開され、民族が展開され、国家が興って形成され、世界が形成されます。それで家庭は、神様を中心とした世界を形成する責任を果たさなければなりません。先生を中心とした統一教会は、一つの氏族のようなものであり、一つの民族のようなものです。五色人種が合わさって単一民族を形成し、世界に誰よりも「ため」に尽くすことのできる国家を形成することが、統一教会の目的です。それが先生がしようとする目的であり、神様が先生を通じて成就しようとする目的です。

統一教会では、天国は氏族圏内から成されると見るのです。おじいさんを中心として、父母と兄弟が一つになり、いとこと、またいとこまで一つに連結されるとき、完全な三代が成されます。このような氏族圏の愛が、地に立てられ、神様と一つになるならば、すべての世界は神様と一致する愛の世界であり、天国になるのです。

女性が嫁に行っても同じです。夫の祖父や舅は、神様の代わりの立場であり、夫の代わりの立場ですから、愛で侍らなければなりません。また義理の弟や小姑とも愛によってむつまじくなければなりません。こういう愛の関係が、社会へ拡大して、民族と国家、世界へ拡大するならば、この世界は罪悪と戦争の代わりに、平和と愛で満ちるでしょう。その世界が正に神様の理想が実現された一つの天国であり、理想世界です。

この宇宙の中心は、どこにあるのでしょうか。家庭にあります。真の愛が定着できる基地はどこでしょうか。皆さんが生きている皆さんの家庭だというのです。したがって本来の家庭は、宇宙愛を掌握して宇宙の保護様相を体得しながら、宇宙愛圏を拡大させ、家庭を越えて国家を愛する愛国の道を行かなければならず、ひいては民族と国家を越えて、世界を愛する道へと行かなければなりません。家庭を愛する人を「孝子」または「烈女」と言い、国を愛する人を「愛国者」と言うならば、世界を愛する人は何と言うのでしょうか。その人を正に「聖人」と言うのです。

神様の愛圏の中で理想的な家庭を成し、氏族を成し、民族と国家を形成して、もっと拡大して、アダムの理想が実現する一つの理想的世界を成し遂げていたでしょう。木の根、幹、葉が一つの生命で連結されているように、愛を中心として上には神様を父として侍り、下には万民を兄弟のように、一つの生命体、愛の生命体に和するようにして、神様を中心とした永遠の理想世界を成さなければならないのが、正に神様のみ旨から見た世界観です。このような世界の人間たちには、救いが必要ではなく、メシヤも必要ありません。なぜかといえば、その世界に住む人間は、神様の善の息子、娘だからです。

この地球上に神様のみ旨が成されていたなら、アダムを中心とした単一文化圏が形成されていたことでしょう。今日のように数多くの民族がそれぞれ文化と文明を形成してきたのではなく、アダムを中心とした単一文化、単一思想、単一文明をもった世界になっていたはずです。このようになっていたならば、文化、歴史、風習、言語、伝統などがみな統一されていたことでしょう。

家庭とは、人類愛を教育する代表的な修練所です。心情の中心を立てる代表的な広場です。そこで互いに信頼し合い、幸福な生活を営めば、全宇宙の中心が立つようになり、幸福を享受するようになるというのです。それが理想圏の始まりです。愛なくしては、何の存在の意味もありません。

統一教会の理想は、他の所にあるのではありません。出発も家庭で、結論も家庭です。まだこのような問題を解決した人がいないので、それを願ってきました。そして、そこに幸福があるので、これを体系化させ、天宙化させて、無限の価値を現したので、「統一主義」が公認されたのです。したがってこの主

義を嫌う人々がなく、みな頭を下げて好きになれば、世界は自動的に統一されるのです。

これから先生は、家庭に対する規範、天国家庭としてもつべき生活に対する規範を教えてあげなければならないと感じています。しかし、復帰の路程を歩むべき人たちは、「原理」を中心として教えてくれる人がいるので、その人たちを通じて教えを受けなければなりません。先生が直接そのような問題に責任を負う時代は過ぎました。家庭一つ一つを中心として、再び収拾しなければなりません。私たち統一教会の組織は、家庭組織です。家庭を中心にするというのです。個人を中心にしてきたものを、家庭を中心にするということです。

第二章　真の父母と祝福の歴史

一　真の父母と第三選民圏

一) 祝福家庭は真の父母の新しい氏族圏

先生の家庭を中心として結合した祝福家庭は、新しい氏族です。これが日に日に発展していくと、新しい民族になります。そこから少し発展すると、国家・世界圏を成すようになります。すなわち、新しい民族、第三イスラエル民族が形成されるのです。日本人であっても、今までの日本の歴史過程に現れた先祖から血統を受け継いだ子女ではなく、新しく神様による血統圏を受けた子女になり得るのが統一教会です。

霊的な第一・第二イスラエルを連結して、第三イスラエル圏を地上に成さなければなりません。そのために再臨主は、第一イスラエルの代わりの第一家庭（アダム家庭）と、第二イスラエルの代わりの第二家庭（ノア家庭）と、第三家庭（ヤコブ家庭）を探し出して立てなければなりません。それで三十六家庭は、人類の先祖とならなければなりません。

これから統一教会を中心として第三イスラエルの民になるためには、祝福を受けなければなりません。その昔、アブラハムの時代には、イスラエルの民になるためには割礼をしなければなりませんでした。またイエス様の時代には、洗礼を受けなければなりませんでした。同じなのです。統一教会では、祝福を受けなければ第三イスラエルの民になることができません。しかし、祝福を受けるための条件は簡単ではありません。先生もその条件ゆえに、今までの四十年の生涯を捧げてきました。それゆえに、一生をみな捧げてきたのです。

祝福家庭の版図が広がるというのはどういうことかといえば、神様を中心とした主流の家庭圏が拡大されたということであり、神様の氏族が形成されたということです。このように真の父母の因縁と天倫の内的な心情を受けた家庭が生まれて横的に拡大されたのは、神様を中心として氏族が形成されたということであり、民族、国家が形成されたということです。さらに一国家の形成で終わるのではなく、神様を中心として世界を形成することなのです。

本来、統一教会の祝福家庭は、一国家の形成を目標として始めたものではありません。神様を中心として善の世界を目標として出発したものです。ですから統一教会の祝福家庭は、全民族的であり、全国家的なのです。

神様のみ旨を中心として出発したので、皆さんの家庭がたとえたった一つの家庭であり、皆さんが金なにがし、朴なにがしという個人だとしても、統一教会の祝福家庭は、個人のみを代表とした家庭ではありません。全世界の人類を代表した家庭です。言い換えれば、国家を超越し、民族を超越し、氏族を超越し、全体を代表した家庭だというのです。

統一教会は、他人同士が集まって新しい家庭を形成し、今までの氏族観を超越した新しい氏族を形成しなければなりません。また様々な氏族を合わせて単一民族を形成しなければならず、様々な民族を合わせて自分の民族を愛する以上に愛することができなければなりません。これが統一教会と統一教会員が行く道です。

祝福の基点の上に現れた責任者、すなわち中心存在は、その時代という制限された環境のみに処している存在ではありません。世界史的な内容をもった中心人物だというのです。ですから祝福は、夫婦の因縁をもつことだけで終わるのではありません。その祝福によって新しい家庭を形成しなければならず、新しい氏族、新しい民族、新しい国家が形成されなければなりません。そのすべてのものがここから出発しなければならないのです。

このような観点から見る時に、一九六〇年代から新しい歴史時代に入ったということを知らなければなりません。新しい歴史時代に入ることによって、新しい氏族がここに顕現するでしょうし、新しい国家、新しい世界の形成がここに現れるようになるのです。今まで、このような基点を中心として統一教会では祝福行事を挙行してきたのです。

二) 祝福家庭を通した第三イスラエル圏の編成

神様の側では祝福家庭を誕生させることによって、新しいイスラエル圏を編成しなければなりません。それで一九六〇年からは神様の側の運勢が高まるのです。そこから家庭・氏族・民族時代を経て、世界時代に向かうのです。ヤコブのような先生が家庭を中心として、エサウのような皆さんと一つになって氏族と民族を編成しなければなりません。

第三イスラエルの先祖にならなければならない終わりの日に処した皆さんは、最後のみ言は神様の愛のみ言だということを知らなければなりません。神様の愛に基づいたみ言……。神様のみ言の見える実体にならなければなりません。神様の内的心情が皆さんの内的心情にならなければなりません。すなわち、本心の実体にならなければなりません。

皆さんは、神様のみ言を繁殖させ得る第二創造主の使命を果たさなければなりません。すなわち、み言の繁殖体にならなければならず、生命の繁殖体にならなければなりません。そして愛を中心として一つになってこそ、神様に永遠に侍ることができるのです。このような基準が第三イスラエルの基準です。このようにしてこそみ言を植えつけることができ、実体を植えつけることができ、生命を植えつけることができるのです。

神様に侍り、み言を読んで感じることのできるみ言の実体、生命の実体、六千年の心情に代わった実体になり、第二イスラエルを再創造する使命を完遂しなければなりません。そうしてこそ神様の内的な心情が完全に通じた息子、娘になることができ、そのような神

様の真の子女になってこそ、神様の愛を中心とした永遠なる栄光の中に生きることができるということを心に刻まなければなりません。

第三イスラエルは、悲しみから復活した民族です。喜びの場から復活したのではなく、悲しみの場から復活したのです。悲しみの世界でサタンを屈服したということが違うのです。前にも龍媒島事件のことを話しましたが、そのようにするのは難しいことなのです。しかし避難の道をたどる時も、この三千万の民族の中で最も困難な避難の道をたどろうと心に決めました。そして「死ぬ時までこの道をたどる！　私の脈拍が止まる時まで行く！　まだ息をしているのだから行かなければならない！」という決心をして行ったのです。

世界が一つの心情によって一つの形態をもち、天の心情とイエス様の悲運な死を通して歴史が流れてきたのですが、今日この実を結ぶことのできる一つの実体が皆さん自身であることを知らなければなりません。皆さんがイエス・キリストの悔しい心情と喜びの心情を所有する相対者になってこそ、第三イスラエルとして残ることができるのです。イエス様がそのような心情を抱いて祭物になられ、第二イスラエルをつくったので、今日私たちがこのような覚悟をしてこそ、第三イスラエルの先祖になることができます。また、いわゆる地上天国、すなわちエデンの園の本然の子女になることができるのです。

統一教会の祝福家庭は、その昔イスラエルを中心としてユダヤ教を通してメシヤを待ち望んだ立場ではなく、メシヤに出会って新しい氏族編成をした一段階前進した立場に立っているのです。

韓国を見る時に、神様を不信した人たちは第一イスラエルであり、既成教会は第二イスラエル、統一教会は第三イスラエルに該当します。そしてサタンがこの摂理の中心を攻撃するのです。

三) 第三イスラエル入籍は祝福によって

アブラハムは祭物としてイスラエルを形成しましたが、統一教会では祝福によってイスラエルを形成しました。それで第三イスラエル入籍は、祝福によってのみ可能なのです。

統一教会は、アダムとイエス様がサタンに侵入されて立てることのできなかった、その絶対基準を立ててきました。聖婚式は一九六〇年、先生の家庭を中心として始まりました。そののちには家庭園編成を超えて氏族圏を編成しなければなりません。氏族圏を成すためには、イエス様を中心として弟子たちが一つになった立場に立たなければなりません。イエス様が弟子たちと相対基準を結んで家庭を築いたなら、その弟子たちも相対基準を結んで家庭を築かなければなりません。そうしてユダヤ教内で新しい氏族圏を編成するのです。

イエス様が聖婚式を挙げるなら、聖婚式を挙げない立場でまずイエス様の家庭と十二弟子が完全に一つにならなければなりません。その次に、イエス様の家庭を中心として祝福を受け、霊肉共にサタンが侵入できない勝利圏をつくらなければなりません。祝福を受けて新しく編成された氏族というのは、堕落に

よって復帰された養子圏とは全く違います。それは、初めて神様の息子から始まった氏族圏が出現することを意味するのです。

キリスト教が霊と肉を中心として完全な立場に立つことができなかったので、すなわち肉的基準を除いた霊的基準だけを中心として第二イスラエル圏を成したので、私たちが肉的基準までも成さなければならないのです。この肉的基準を成す日が再臨の日なのです。この一日を願ってきたキリスト教徒たちは、第二イスラエルの霊的基準の上で再び来られる主に出会い、第三イスラエルの世界的な選民圏を成さなければなりません。

イエス様は霊的には勝利されましたが、地上にイスラエル圏を成すことができなかったので、霊界のイスラエル圏を立てることも、個人から始まるのです。

今日、全世界を見る時、二千年前の国家のように腐敗しつつあります。このような国の中からイスラエルの立場の国家として韓国を、またローマの立場の国家としてアメリカを立てて摂理をされているのです。この二つの国家さえ一つになれば、世界を一つにし得る基盤が成されるのです。霊的なキリスト教の世界的基盤の上に、共産世界を吸収して地上天国を完成するのです。ですから再臨主には、共産世界と民主世界を一つにしなければならない責任があります。

では今、どこまで来たのかといえば、既に世界的基盤を越えたというのです。統一教会は、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界の完成基盤をつくり終えたのです。ですから五色の人種が一つの家族になっているのです。第三イスラエル民族は、世界的な国の基盤の上に霊界と肉界を中心とした天の国をもち得る民族なのです。それで私たちは、新しい第三イスラエル民族になることができるのです。

第三イスラエルは、神様の心情を相続した群れです。再臨主によって心情的実体基台が世界的に拡大されなければならず、その基台を通して蕩減復帰していかなければなりません。そして復帰した家庭の基準をつくらなければなりません。

イエス様は、人類の真の父母になられるはずのお方でした。それで、真の父母として来られたイエス様がサタンに侵害されたことは、真の父母によって生まれ変わらなければならない全人類がサタンに侵害されたことになるのです。父母が侵害されたので、父母から生まれたすべての子孫たちは、その父母の基準を凌駕することはできません。それで神様とみ旨のみを思って出発することができなくなった人間は、イエス様の十字架のもとに集まらざるを得なくなり、それが今、世界的に広がって信仰しているキリスト教徒たちなのです。

二　祝福家庭の歴史

一) 三十六、七十二、百二十四家庭の歴史

神様の歴史は氏族での民族編成運動なので、統一教会の先生を中心として一九六〇年代の聖婚式、すなわち祝福のあとから本格的な氏族編成が展開するのです。それが三十六家庭から七十二家庭です。三十六家庭は、イスラエルの民族歴史、ユダヤ教の歴史の中において、先祖たちをもう一度探し出したものです。

先祖の代表を立てたものなのです。そのような蘇生基盤が展開されたその基盤の上に、七十二家庭があるのです。

それでは七十二家庭とは何でしょうか。三十六家庭の二倍なのですが、祝福家庭があると、いつもカイン家庭とアベル家庭の闘いの問題になるのです。ですから父母の家庭を中心として、息子の家庭である長子の家庭と次子の家庭が一つになれませんでした。常にカインがアベルを打つ立場にあるので、一つになれなかったのです。それで象徴的な面で蕩減条件を立て得る家庭として合わせたのが、七十二家庭だということができます。

横的に見ると七十二家庭は、イエス様の時代の十二使徒の次の立場の七十二門徒を代表とした家庭なのです。これは今日、私たちの時代においての三十六家庭を中心として見るとき、すべての家庭の前にアダム家庭のカイン・アベル家庭に該当します。

今まで、その時代に影響を与えてきたすべての先祖たちが摂理の中で、カイン、アベルを一つにするのに失敗しました。そのカイン、アベルを一つにする基盤を形成し得なかったので、堕落の世界は延長してきました。そして三十六家庭を中心として七十二家庭型をつくり、カイン家庭とアベル家庭を連結させて、一つの先祖の家庭をつくるのです。これが八十四家庭になるのです。

百二十門徒とは何でしょうか。イエス様が昇天したのちにできた百二十門徒。十二使徒が一つの氏族的基準だといえば、七十二門徒は民族的基準であり、百二十門徒は世界的国家に代わった基準です。このようなすべてのものを再び蕩減復帰して、解怨成就をするのです。それを誰がしなければならないのでしょうか。来られる主の解怨成就なしには、世界の生きる道はありません。それで三十六家庭を立てて七十二家庭を立て、これが一つになることによって、民族的中心を確定することができるのです。

三十六家庭は、アダムからアブラハムまで二千年間の先祖たちに代わった家庭です。ですから三十六家庭の前にはカイン、アベルがなければなりません。この立場に立てられた家庭が七十二家庭です。また十二数を中心とした、全体数のために立てられた家庭が百二十家庭です。百二十四家庭のうち四家庭は、この世で既に結婚していた家庭を立てました。これは堕落した人間の立場を復帰することであり、イエス様の歴史の中で探し出そうとした家庭を復帰することを意味するのです。

先生は、先生の家庭を中心として三家庭を祝福し、三家庭を中心とした十二家庭を中心として三十六家庭、七十二家庭、百二十家庭を祝福しました。これは、先生が世界史的な闘争を経て祝福したものです。これは、イエス様を中心とした三弟子と十二弟子、七十門徒、百二十門徒のようなものです。イエス様が神様の息子の立場で父の代わりに勝利的責任者になったのと同じように、皆さんも息子の立場で責任を果たさなければなりません。

これから問題になるのは祝福家庭です。三人の息子は、アダム家庭、ノア家庭、ヤコブ家庭に代わる家庭です。三十六家庭というのは、どのような家庭でしょうか。歴史的に提示されたすべての蕩減条件を果たさなければ

ならない代表的な家庭です。結局、三十六家庭とは、歴史上の各時代においてすべての家庭がみ旨を成すことができなかったので、家庭の形態を果たせずに受け継がれてきたすべての歴史的な蕩減条件を、この時代に地上で予防線として張るための家庭です。言い換えれば、歴史的に受け継がれてきた蕩減条件を防ぐことのできる代表的な家庭が三十六家庭です。

それでは七十二家庭と百二十家庭とは、どのような家庭でしょうか。三十六家庭は歴史的な代表の家庭なので、過去からつづられてきたものの代わりになる家庭です。この家庭を中心として現実的な基盤として立てられたのが、七十二家庭と百二十家庭です。過去から願ってきた家庭的な蕩減条件を防ぐことのできる家庭が三十六家庭ならば、それを現実的な家庭の基盤として防ぐことのできる家庭が七十二家庭と百二十家庭です。七十二家庭は氏族と民族を代表した家庭であり、百二十家庭は世界を代表した家庭です。

皆さんも御存じのように、一九六〇年を中心として、先生の聖婚式を中心として、三十六家庭から七十二家庭、百二十家庭へとずっと発展してきたのです。三十六家庭を選ぶためには三家庭を中心とし、続いて十二家庭を中心とした三時代型、すなわち旧約時代、新約時代、成約時代型を代表に全体を連結させたのです。

十二数というのは横的基盤のみではいけないのです。縦的な立場において霊界と連結させる基盤をつくらなければならないので、三十六家庭を中心として、それを一つの先祖が再臨した基盤として、七十二家庭、百二十家庭に連結されたのです。七十二家庭とは、氏族から民族に編成して天を代表し得る中心者を選んで立てるということなのです。

モーセが七十二長老を中心として民族的な指導基盤をつくったのと同じように、統一教会においても氏族圏から民族圏に発展しなければならないというのです。それは家庭です。どこまでも家庭を中心として天が役事するというのです。ですから統一教会の合同結婚式は、ある個人の結婚問題を解決するためのものではありません。祝福家庭は、今まで歴史時代に数多くの先祖たちと民族、国家が天と相克してきたものを打ち破るために、一時一つの群れとなり、時代的な一つのチームの使命的負担を担わなければならないのです。

百二十家庭であれば百二十家庭が一つのチームになり、四百三十家庭であれば四百三十家庭が一つのチームにならなければならないのです。歴史的なすべての結婚を中心として成された家庭の失敗を蕩減して、一つの中心的な復活家庭として登場するのが合同結婚式をした家庭だということを知らなければなりません。

先祖を中心としてカイン、アベルが一つになったなら復帰されていたでしょう。その復帰の目的は国家のみではありません。世界です。国家のみの復帰ではいけないのです。世界が復帰されなければならないのです。イエス様が昇天され、五旬節の日が来た時に屋根裏部屋に集まった百二十人の門徒とは、世界的国家代表だというのです。民族を中心としては七十二家庭まで基盤ができれば、それが一つの中心になり、世界的な国家形態が成さ

れます。これは十二支派を中心とし、七十二門徒を中心として国家の中心になることはできても、世界の中心にはなれないのです。

民族を中心とした七十二家庭の基盤の上に、世界の代表百二十国家を糾合したならばイエス様がこの地上でみ旨を成すことができたというのが摂理観なので、これを蕩減復帰するのが統一教会の責任です。統一教会の責任であると同時に、統一教会の祝福を受けた家庭の責任です。

では、この家庭はどうしなければならないのでしょうか。三十六家庭を中心とした七十二家庭、百二十家庭が完全に一つにならなければなりません。形で見るとどうなるかといえば、世界を代表したのが蘇生で、その次の七十二家庭が長成、その次に三十六家庭が完成です。これが先祖ですから、そのように見るのです。百二十家庭が終わることによって一九六五年に、先生が全世界に聖地を選定したのです。

神様のみ旨を中心として三十六家庭を探し出し、その次には七十二家庭を探し出して民族的中心にし、世界国家型の百二十家庭のような基盤をつくっておいたので、世界国家を管理しなければならないのです。そうすることのできる時代に入るので、全世界四十カ国に、百二十箇所の聖地を選定したのです。

そうすることによって、神様のみ旨の中で先祖が探し出され、その次には七十二家庭を中心としてカイン・アベル型が探し出され、世界代表者が探し出されたので、世界の国家の地を探し出さなければなりません。神様の摂理時代に人を探し出し、地を探し出したので、世界的な時代へと越え始めたのです。このようなことが一九六五年に、聖地を選定したのちに起こったのです。

三十六家庭も責任を果たすことができず、七十二家庭も責任を果たせませんでした。全部果たせませんでした。それで先生の家庭で惠進と喜進が犠牲になりました。先生は、息子、娘を犠牲にしながら天のため、またカイン家庭のために生きたのです。三十六家庭、七十二家庭の皆さん、考えてみてください。皆さんもそのような心をもって生きてきましたか。先生は、天の家庭はこうでなければならないということを見せるために、どんな代価を払っても讒訴条件を残さないようにしたのです。

ところが、もしこれが残ったときには、どのような代価を払わなければならないでしょうか。もう一度七年路程を歩まなければなりません。しかし一次七年路程を歩むことによって、家庭的な基準を中心として、讒訴条件を解消させることができたのです。

縦的な歴史を横的に蕩減する歴史を経てくるためには、蕩減復帰の基盤を築かなければならないので、三十六家庭と、七十二家庭と、百二十家庭を立てたのです。その中で三十六家庭は、縦的な先祖三十六代の縮小型です。その次に、一代下ったカイン・アベル型が七十二家庭です。そして百二十家庭は、世界の百二十カ国を代表した家庭です。国連加入国とぴったり合わなければならないのです。事実、そのようにぴったりと合っているのです。

三十六家庭は堕落した人類の先祖たちが復活した型であり、七十二家庭はその先祖たちの息子、娘が復活した型であり、その次の百

二十家庭は世界の人たちが復活した型です。ですからこれらが一つになれば結局、家庭と息子、娘が一つになって、世界が一つになります。それで百二十家庭までは、個人が責任をもたなければならないのです。

これからは皆さんも、先生のような考え方をしなければなりません。一つの世界を探し出すためには一つの国を立てなければならず、一つの国を探し出すためには一族、文氏であれば文氏の氏族を動員しなければなりません。氏族を動員してこの大韓民国の民族を救わなければならないのです。このような観点をしっかりともっていなければなりません。

再臨主は、アダム家庭の立場を蕩減復帰しなければなりません。したがってアダム・ノア・アブラハム型の家庭を探し立てて、先祖として立てなければならないのです。そのためにはまずアダム型の十二家庭を立て、次にノア型の十二家庭とアブラハム型の十二家庭を立てて、縦的な先祖を立てなければならないのです。それで先生が三十六家庭を立てたのです。この先祖たちを中心としたカイン・アベル型の家庭として立てたのが七十二家庭です。そして百二十家庭は、世界百二十カ国の指導者を象徴しているのです。

百二十門徒は世界を代表します。イエス様も百二十門徒を中心として世界的な出発をしようとしましたが、それができませんでした。私たちはこれ（百二十数）を所有しなければなりません。世界を標準として行く道を前にして、橋を架けることのできる自分の子孫を段階的に立てなければならないのです。子孫を立てるときには、誰でもいいのではなくて、世界的な代表になることができる人を立てなければならないのです。これが何でしょうか。統一教会の三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭の合同結婚式です。三十六家庭は十二双の三倍であり、三時代を代表しているのです。

三十六家庭は、歴史的な代表の家庭なので、過去からつづられてきたものに代わる家庭です。この家庭を中心として、現実的な基盤として立てられたのが七十二家庭と百二十家庭です。過去から願ってきた家庭的な蕩減条件を防ぐことのできる家庭が三十六家庭ならば、それを現実的な家庭の基盤として防ぐことのできる家庭が七十二家庭と百二十家庭だというのです。七十二家庭は氏族を代表した家庭であり、百二十家庭は世界を代表した家庭です。そうなるのです。

三十六家庭の責任とは何でしょうか。今までの歴史的なすべての蕩減条件を防ぐことです。言い換えれば、サタンを完全に取り除くことのできる、一つの完璧な囲いにならなければならないのです。ですから家庭のすべての伝統と思想を、サタンとは完全に隔離されたものとして立てなければなりません。この伝統を中心として、横的な因縁を七十二家庭と百二十家庭が立てていかなければなりません。このような立場で見るとき、三十六家庭の責任がどんなに重要であるかを皆さんは知らなければなりません。

三十六家庭と七十二家庭は、私たちの教会の中でしたものです。違うというのです。これは教会を中心とした、ユダヤ教を中心とした民族形成の基盤を築くのと同じなので、内的基盤を確保するのです。その次には外的基

盤を見ると、世界史的キリスト教文化圏をつなげ、百二十四家庭を中心として世界基盤を拡大させていくことなのです。百二十四家庭が祝福を受ける時は、国連の加入国も百二十四カ国にならなければならないのですが、これが間違いなくぴったりと合ったのです。

これは、世界各国の代表である韓国において、内的蕩減要因を確立させる世界史的な条件を立てる、このような祝福だったというのです。そのような祝福とは何でしょうか。家庭を確保したのです。先生の家庭を中心とした三家庭、三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭……。これによって世界的蕩減条件を形成したというのです。

今日の統一教会を中心として見るとき、一九六〇年から三年間にわたって祝福を受けた三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭は何をしなければならなかったのでしょうか。これらの家庭は、イエス様が生きていらっしゃった時に勝利できなかった外的な基準を中心とした、囲いの使命を完結しなければなりませんでした。そうして内外において世界を代表し、国家を代表し、または民族、氏族、家庭を代表し得るすべての蕩減内容を連結させて、一つの相対基準を接続させる責任を果たさなければならないのです。

このような囲いの使命を果たさなければならないのが、一九六〇年から三年の間の祝福を受けた家庭たちの責任だということを知らなければなりません。

二) 四百三十家庭は民族を代表したもの

聖地祝福ののちに、私たちは四百三十家庭を祝福しました。それは、ユダヤ民族のエジプトでの四百三十年に該当し、韓国歴史においての四千三百年に該当するのです。それは、新しい歴史の出発を意味しました。また四百三十家庭は、世界の家庭を代表しました。そののちに、先生が第二次世界巡回の時、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本で四十三双を祝福しました。それによって先生は、その四十三家庭を、世界的な次元で四百三十家庭に連結させたのです。

四十三家庭を四百三十家庭と連結させることによって、先生は、韓国で成した勝利の基盤を再び世界に連結することができました。先生は、その基台を西洋の世界に連結することができたのです。これらを成すことによって、統一教会の食口だけではなく世界のすべての家庭は、その時に、天的な運勢が受けられる立場に入ることができたのです。それで門は、この地のすべての家庭に開いているのです。

四百三十家庭は、四千三百年の歴史とぴったり合うというのです。イスラエルが四百三十年ぶりに四代を中心として（エジプトから）出てきたのと同じように、四千三百年ぶりに四十三数の地上基盤を経て出発し得る、新しい全体を代表とした国家、民族を天のみ旨の前に立てる土台を広げるための代表家庭が四百三十家庭です。この四十三数、すなわち四と三を合わせて七数になり、これを掛けて十二数になるのです。このような原則を通して四百三十家庭を韓国で祝福したのです。

このようにして四百三十年ぶりにイスラエルの解放が起こり、移動が起こったのと同じ

ように、統一教会でも移動が起こるのです。ですから全羅道の人は江原道に行き、江原道の人は全羅道に行って、みな混ぜて大移動をするのです。

韓国においての統一教会は、自体において蕩減していたのであり、国家基準の蕩減の因縁はまだ結んでいない状態だったのです。この時に行われたのが四百三十双の祝福です。四百三十という数字もまた、適当につくられた数字ではありません。どのような意味があるのかといえば、その年が正に韓国が檀紀で四千三百年になった年であり、イスラエル民族においてはエジプト路程の四百三十年に該当するものなのです。これが四百三十という数字です。

それで四百三十双を祝福したのです。それで韓民族は、誰でも祝福を受けることができるようになりました。国家的には、そのような基準を成したのです。ところが、その相対的基台を外国につくらなければならないのです。

四百三十家庭は、世界的運勢を代表とした統一教会圏内において全民族を意味するものであり、民族全体の誰でもここに入ることのできるものです。四数、三数は、七数を代表し、イスラエル民族が四百三十年目に、カナン復帰のためにエジプトを出発した者を代表したものです。それで新しい出発をする時だというのです。また、その時が韓国の歴史四千三百年に当たる年だったのです。それは偶然の一致ではありません。神様は数理的役事をされます。

四千三百年になる年に四百三十双をこのように祝福したという事実は何かといえば、氏族的な、一つの系列の宗教の勝利的な基盤だけではいけないので、全氏族の前に共通する門を全部開放させるのです。ですから李氏も、これからは神様のみ旨の中では国家的な恵沢を受けることができ、世界的な恵沢を受けることができます。金氏も、朴氏も、いかなる姓の氏族もみな、全体が福を受け得る基盤を築かなければならないので、その道を開門するのが四百三十家庭です。

四百三十家庭を私がつくってきたので、この大韓民国の国民であれば誰でも、神様の摂理のみ旨の前に、横的にすべてが連結され得る運勢圏の中に入ったのです。ですから、大韓民国は滅びるはずがないのです。滅びてはいけないというのです。このような結論になるというのです。このような歴史的時代に入ったのです。

ですから一九六八年を中心として、その時から世界的な時代です。私たちが一九六八年に「神の日」を設定したでしょう。「神の日」を設定したその年に、四百三十家庭の祝福をしたのです。そうでしょう。世界的時代だというのです。世界的に連結されているのです。それで先生がこの韓国に基点をつくったものを世界的に連結しなければならないので、一九六九年に初めて四百三十双の代わりに四十三家庭を世界に広げて祝福したのです。それはなぜでしょうか。韓国で築いた運勢を世界に連結するためです。

韓国という国は世界の代表国家なので、その国家にあるすべての氏族を超越しなければ

なりません。それは文氏のみを中心としたものではありません。ここにはどんな姓であっても、すべての姓が天の前に自由に接することのできる門を開けておかなければならないのです。ですから統一教会の合同結婚式というものは、ある個人の結婚問題を解決するためのものではありません。祝福家庭は、今まで歴史時代に多くの先祖と民族、国家が天と相克した内容を壊すために、一時一つの群れとなって時代的な一チームの使命的分担を背負わなければならないのです。

三十六家庭が一チームになり、四百三十家庭であれば四百三十家庭が一チームにならなければならないのです。歴史的なすべての結婚を中心として成されてきた家庭の失敗を蕩減して、一つの中心的な復活家庭として登場させられたのが合同結婚式をした家庭だということを知らなければなりません。統一教会の合同結婚式は、そのような意味をもっているのです。

四百三十家庭を中心とした世界的な連結体をつくることによって、統一教会は、平面的に世界民族圏として発展したのです。韓民族だけではないというのです。四百三十双と四十三双を世界舞台に家庭的基台として連結させたということは、超民族的、超国家的基準において、新しい超民族形成の出発がなされたということなのです。そのように見るのです。

世界的基盤を築かなければならなかったので、四百三十家庭を祝福したのちに十カ国の人たちに国際結婚をしました。ところで、ここから韓国が抜けてもいいでしょうか、いけないでしょうか。それでは、外国の女性たちが韓国の男性と出会うことは栄光でしょうか、そうでないでしょうか。外国の男性が韓国の女性と出会うことは栄光でしょうか、そうでないでしょうか。そうなれば、万民に栄光を与える国が良くなるでしょうか、ならないでしょうか。

ですから男性たちは、栄光の妻になろうとする人と結婚するため、国家を超えて相対を迎えなければならず、また女性は、栄光の夫になろうとする人と結婚するために、国家を超えて相対を迎えなければなりません。

先生が四百三十双を祝福したということは、世界的な次元の使命を遂行することのできる門が開かれたということを意味します。皆さんが世界的な次元でその目標を達成したならば、それは皆さんが氏族的な次元でメシヤになる立場にあることを意味します。祝福を受けた人として皆さんは、今、死んだイエス様の立場にいるのではありません。皆さんは祝福を受けたので、氏族を復帰するための再臨のイエスの立場にいます。四百三十双と七百七十七双の祝福は、イエス様の基台を築くことに成功したということを意味します。

イエス様が十字架で亡くなるとき、ユダヤ教とイスラエルの国とローマが合同で反対しましたが、その時と同じような、危険の絶頂期である六〇年代に聖婚式を断行したのです。そして三十六家庭を全部サタンから奪ってきたのです。このようにして三十六家庭から七十二家庭、百二十家庭、四百三十家庭を中心として社会に物議を醸しながら、私たちが追い出されたのではなく、社会を押し出しながら大きくなってきたのです。

三) 七百七十七、千八百、六千、六千五百家庭の歴史

私たちの合同結婚式の歴史がそうです。三家庭、次の三十六家庭、その次は七十二家庭、その次には百二十四家庭、そして四百三十家庭、四十三家庭、七百七十七家庭、その次は何でしょうか。千八百家庭。最後は八数です。そのように進むのです。これは全世界的です。それで今は、世界のどんな民族でもすべて神様の祝福圏内に入ることができるように開門する時代なのです。それでアメリカとドイツと日本を主体国として、みな祝福したのです。それで宣教師も、みなその国から引き抜いたのです。

そのような土台が築かれたので、これからは七百七十七家庭、これは三・七数なので最後ということなのですが、神様の摂理圏内において最後だというのです。それで一九七〇年に七百七十七家庭を祝福することによって、初めてどんな民族でも神様の摂理圏内に……。地上天国に入ろうとすれば相対理念を完成しなければならないのと同じように、どんな世界の民族、または氏族もこの全体圏内に入ることのできる恵沢を賦与するそのような代表的な式が、七百七十七家庭の祝福式だということを知らなければなりません。

それで七百七十七家庭には、世界復帰のためにみなばらばらになって三年の動員がありました。日本の食口の場合には、五年間、聖別したのです。一九七〇年から七一、七二、七三、七四年を経て、七五年の六月十日に初めて同居するようにと先生が特別処置をしたのです。なぜそうしたのでしょうか。世界的基盤を築くためだったのです。

統一教会がなぜ父母や兄弟から反対されなければならないでしょうか。レバレンド・ムーンが行く道を統一教会が行くのに、なぜ反対があるのでしょうか。なぜこうなのかというのです。これが真のものなのでしょうか、そうでないでしょうか。ですから天とサタン世界が分かれるというのです。このようにして韓国に基盤を築き、三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭まで立て、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭まで立てて、世界的に基盤を築いたのです。

その圏内で皆さんが祝福を受けたのです。これを中心として民族基準を経て、世界基準の七百七十七家庭、千八百家庭で連結したのです。七百七十七家庭は七数完成を意味します。全体の家族を中心として世界の国家において蘇生、長成、完成の三掛ける七は二十一、二十一段階の過程を経たすべてのアダムとエバの子孫たちは世界に広がっています。七百七十七家庭は、その圏内のすべてのものを代表することのできる家庭と見ることができます。ですから世界的な二十一段階で連結させたのです。

「神の日」を設定することによって、神様が初めて地上で干渉し、主管することのできる基盤となりました。それで一九六八年から国家的家庭対家庭・氏族対氏族の対決時代へと超えたのです。それで皆さんに、一九七〇年に七百七十七家庭まで、みな三年路程の命令をしたのです。この三年路程とは何でしょうか。全世界の家庭が韓国に来て、韓国の家庭と一つになり、国家と世界的版図を広げる条件を立てる期間です。このような基盤が築かれることによって、先生は一九七〇年から、七一年、七二年まで三年路程蕩減家庭基盤を

中心とし、氏族基盤を中心として活動したのです。

そのために三十六家庭、七十二家庭、百二十家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭まで、それまで祝福を受けた家庭が子女を生み、生活基盤を築くために準備をしたものを、一時にすべて崩してしまったのです。みな別々に南へ、北へと行きました。言い換えれば、家庭を祭物にして、その国の氏族と民族を救うための全国的な三年蕩減路程を通過したのです。

その次は、攻撃戦です。その次からは、韓国を中心として攻撃戦です。そして祝福家庭がみな動員されて三年路程を歩みました。あの時、七百七十七家庭まで動員したでしょう。七百七十七家庭まで動員されてみな息子、娘を捨てて国のために出ていきました。この国の受難のすべての溝を埋めるために、飢えながら、愛する息子、娘を、反対する親の住んでいる塀の向こうに、ねんねこにくるんでほうり、国を生かしてくると泣き泣き旅立ったのが、ついきのうのことのようです。

皆さんもそうではありませんか。一九七〇年から三年間、七百七十七家庭まで動員されたでしょう。これは世界的なことです。動員されて三年の間、苦労しなさいということでした。それは、民族を代表し、世界を代表した、いかなる家庭も統一教会の家庭にはかないません。統一教会の家庭のようにならなければならないというのです。三年の間、みなどんなに悪口を言ったことでしょうか！　親が反対するので、子供をふろしきに包んで、夜に行って塀の向こうに置いてくるようなことをしたのです。

なぜそうしたのかというのです。国を自分の息子、娘よりも愛したという条件を立てなければならなかったからです。そうするためには子供を孤児院に入れなければなりませんでした。妻と離れ離れになりました。祝福して「幸せになれ」と言うのではなく、みすぼらしい家庭用品で大変な生活をしていた者もみな、どたばたと送り出しました。それは何かといえば、数多くの姓氏、統一教会で祝福を受けた姓氏が代表となって、国に行って氏族圏を蕩減復帰したのです。それで挙国的に反対しましたが、結局は「金日成を防ぎ、国を救おうとする統一教会の人たちのようにならなければならない」と言うくらいになったというのです。

「子供と妻を捨てて国を救うために、こうしなければならない」という教材になったのです。三年になるころには、最初に反対していた人たちが歓迎し始めました。そのように歓迎するのが、カイン・アベルの復帰なのです。

七百七十七家庭まで全部動員しました。家も捨て、子供も孤児同様になり、出動命令によって出動したのです。これが世界に行くための国家的総清算をする蕩減の期間でした。三年路程を中心として分別期間を立てずしては解決できなかったので、家庭を中心として金日成を防ぐ立場で大韓民国に対する忠節の道理、忠臣の道理を果たさなければならなかったのです。祝福家庭が愛国者の模範家庭として行動しなければならない時だったのです。

一九七〇年代に大移動が起こりました。そして、全世界から十カ国以上の祝福家庭を韓国に呼び寄せてカナン復帰をするのです。韓国に呼び寄せて、みなここで一つにまとめる

のです。これが七百七十七家庭の祝福だということを皆さんは知らなければなりません。それを一九七〇年に行いました。そのような基盤を築いて、世界圏で、統一氏族が国家を代表して十カ国から参加しました。蘇生、長成、完成の九数を超えた十数は、神様の数です。十数は十二数に該当するものです。ですから十カ国は、いずれにせよ連結しなければならないものです。

先生の聖婚式をしたのちに、十二弟子、それから三十六家庭、そして七十門徒のような七十二家庭です。イエス様に七十門徒がいたでしょう。次には百二十門徒と同じように百二十四家庭、四百三十家庭、そして七百七十七家庭、こうして蕩減復帰をして世界的に発展していくのです。こうして統一の運勢は、既に世界的基盤をもって今後、登場するようになるのです。だんだんと現れるのです。これが原理です。

そうして統一教会の女性は、少なくとも金日成が暮らした以上の立場で暮らさなければなりません。そうできなければ天国に行くことができません。将来、統一教会を信じる人は、みな北韓の金日成が暮らした以上の立場で暮らす時が来るでしょう。皆さん、世界的に、将来は七百七十七家庭といえば、その国で軍楽隊をもって一人しかいない貴賓として取り扱われ、その国の役人を集めて、侍られる時が来るのです。

今まで、どんなに複雑だったでしょうか。霊の子女を三人立てなければなりませんでした。七百七十七家庭まで霊の子女を絶対に主張してきました。ところが七百七十七家庭以降は主張しませんでした。これは、天使世界においてアダム圏の半分を超えたということです。霊の子女は三天使世界を復帰するということです。「父母様の出現の前には先生もイエス様の名で祈祷する」と言って、父母様の名で祈祷しませんでした。ところが祝福してからは、真の父母の名で祈祷するようになったのです。

父母様を中心として三家庭、その次には三十六家庭、その次には七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭です。これが七数です。七数。ここから三段階が残ります。これが三数です。これは、いつでも分別数です。なぜ三数でしょうか。直線上には調和がありません。三数を通して、ここで面積ができ始めるのです。三数を並べると直線で戻ってくる道がありません。これが三点からだと戻ることができるのです。それで三段階では帰っていくのです。上がったら必ず戻るようになっています。

韓国のすべての宗氏が、天国に行くことのできる門をみな開きました。これを邪魔してはいけないのです。神様の愛を中心として普遍的な愛が全体的な愛であるだけに、門を閉めておくことができないのです。みんな開けておかなければなりません。こうやって行くのです。そこから拡大するのです。四百三十家庭、その次は七百七十七家庭です。これは世界の舞台に立つのです。国家の舞台を越えて世界の舞台に行くのです。そうです。六千双は人類の代わりです。その次が六千五百双です。サタン世界を七数を中心として、霊界まで解放圏を立てるためのものなのです。

先生がまず強調するのは、天使長復帰です。信仰の三人の子女をもたなければならないのです。そうでしょう。それを七百七十七家庭まで強調しました。千八百双からは、その次に超えていくのです。世界的な版図、世界の家庭を代表的に祝福することのできる時になったので、千八百双からこれを強調しなくてもよくなりました。千八百双は七番目です。七数を超えるのです。八番目は六千双、六千五百双が九番目です。三万双が水平になるのです。水平になると水が入ってくることができるのです。

祝福をしたというのは、父母を中心として、この地上に天的血族圏が生じたということです。サタン世界がいくら反対しても、その血族圏には数多くの氏族が入っているのです。韓国を中心として様々な氏族が入っているというのです。その門を開けているのが四百三十家庭の祝福から七百七十七家庭の祝福です。そうしてすべて世界的に連結していくのです。

十八数は、サタン世界の完成数です。また四の四倍である十六も、サタン世界の理想数です。それで韓国動乱の時、国連の十六カ国が参加し、オリンピック大会も百六十カ国が参加したのです。韓国・北朝鮮の国連加入も百六十番目、百六十一番目です。それが世界的な版図です。

サタンは堕落する時、家庭を中心として堕落したので、神様の主管圏に家庭をつなげて超国家的な運動を展開してきたのです。七百七十七家庭、その次に千八百家庭、千八百家庭が最後です。サタン数である六数の三倍、蘇生、長成、完成をして十八数です。サタン世界で、千八百家庭を先生がもったということは、氏族圏を超えることになります。その国家基準に連結された勝利基準は、世界に連結される道の始まりです。その千八百家庭は、サタンの主管圏にある六百数の三倍です。それを基準として家庭を立てて、サタン圏の家庭を蕩減する基準になるのが千八百家庭です。

六千家庭は全世界の縦的なキリスト教徒と一般の人、縦的なキリスト教徒と横的なカイン世界のようなものです。六千家庭を先生が連結するようにしたのは、サタン世界が家庭的に攻撃する時代は既に過ぎたということを意味します。そこから先生が世界的に進んでいく路程が始まるのです。霊的な長成基準を国家基準において成すのです。

世界的な基準においては霊的なキリスト教が世界的な基盤になるので、世界的実体基準をキリスト教文化圏に連結するためにアメリカに行って、全国的に復興活動をしたのです。そして行く先々で歓迎を受けました。それを国家基準を代表して韓国に連結しました。そのように勝利して帰ってきました。

祝福家庭は、国際合同結婚式が伝統です。千八百まで国際結婚を重要視したでしょう。十八は六数の三倍数です。三×六＝十八、それで千八百家庭というのです。イエス様は百二十家庭で、再臨主は百八十家庭です。

百八十家庭と百六十家庭は、同じ数です。四数の倍数です。四×四＝十六、そして十八は六数の三倍です。サタン数の完結数です。それで祝福家庭に「氏族の百六十家庭を祝福するように」と言ったのです。本来は百八十家庭なのですが、百六十家庭も同じと認める

のです。一家庭でも少ないほうを皆さんが望むので百六十にしました。これからは百八十家庭です。次には八数、それで三数で増えます。七数、七番目が千八百家庭です。三家庭、三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭まで七数です。七数から、八数、九数、十数である帰一数に入るのです。十数は祝福世界化時代へと超えていくのです。

これから先生は解放です。兄、弟の立場で教えてあげ、神様が愛する息子、娘の立場で教えてあげ、その次に夫の立場で、父の立場でしっかりと教えてあげるのです。先生がそれをすべて分別して教えてきたでしょう。三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭、六千家庭、六千五百家庭まで、三回以上教育しました。三万家庭まで教育して、すべて終わったのです。

四) 蘇生的国際結婚――三万家庭

見てください。今まで多くの祝福をしてきて、一九九二年には三万双の祝福がありました。なぜ三万双でしょうか。これは国際的です。一九五六年に父母を中心として世界的祝福をすることのできる世界時代を失ったのですが、一九九二年、四十年ぶりに世界的祝福の時代に入ったので、三万双の結婚が始まるのです。これは世界的な時代の蘇生です。

一九九二年の三万双の祝福は蘇生です。国際的な基準でした。人種や文化のすべてのものを否定するのです。結婚とは何でしょうか。アダム、エバの愛のためにつくったものが結婚でしょう。アダム、エバはサタンを中心として神様を否定しましたが、神様を中心として、真の父母を中心としてこれを肯定することにより蕩減復帰するのです。

自分勝手に結婚して、今まで反対してきたのが親でした。ですから統一教会で、祝福圏を親にも立ててあげるのです。サタン世界を共に祝福してあげなければなりません。ですから三万双の祝福の時は、一週間の修練を受けた人までみな祝福してあげたのです。このように超えていくのです。今の世界的な時代には三万双、三十六万双、そして若い青年たちが三百六十万双の結婚をすることのできる時が来るかもしれません。

今の青少年たちがぼろぼろの版図を構成したのは、アダム家庭から始まったものです。イエス様も結婚できずに死んだのです。愛の関係のためにです。今までそのような版図が広がっていたのです。完成時代において父母様がしなければならないのは、直系の子女、青少年を中心として結婚をさせることなので、これから既成家庭の祝福は先生が手をつけなくてもいいのです。

家庭を重要視するので、昨年三万双を結婚させたのです。これは世界的な爆弾です。三万双の結婚を考えてみてください。親も息子、娘を自分勝手にできない世の中なのに、統一教会の文先生が、百三十一カ国の若者を連れてきて思いのままに結婚させるのです。これ以上の奇跡があるでしょうか。また、これ以上の世界的な事件があるでしょうか。

一九九二年四月十日を中心として、イスラム教を信じる人たちをはじめとした八カ国を

祝福することによって、イスラム教までも統一する条件を立てました。知らなかったでしょう。その祝福の立場に参加しなかった人はいないのです。イスラム教徒も祝福に参加しました。中国人、韓国人、北朝鮮の若者が、それに惹かれて入ってきました。共産主義から転換して入ってきて、祝福を受けた人もいるのです。全世界的にカバーしたというのです。

百三十一カ国の若い男女を捕まえて写真でマッチングをして、三万双の結婚式をしたのですが、それにすべて従うという気の狂ったような人が、この世のどこにいるのかというのです。そのようなことをしたのは先生しかいないのです。レバレンド・ムーンは、気が狂っているのではありません。能力があまりにも多すぎるので、そのようなことをしているのではありませんか。

これから家庭堂には個人は加わることができません。家庭で加わらなければなりません。そうしてすべて祝福を受けなければなりません。それは簡単でしょうか、難しいでしょうか。ですから氏族的メシヤを配置するのです。皆さんが故郷に帰って氏族的メシヤとして基準さえ立てれば、一族がみな一度に押し寄せてくるのです。三万双の祝福を受けた人がみな故郷に入り、十二双ずつでも伝道すれば、三年以内に三十六万双の祝福が可能になるのです。そうなることのできる環境をつくっておいたのです。

考えてみてください。歴史的に三万双まで結婚させた人が、この世で先生以外に誰がいるでしょうか。これからは、三百六十万双までもしてあげようというのです。そのためには、一日に一万双ずつしても一年はかかるのです。それで私が霊界に行って、「お父様、人種差別とかすべての複雑な文化圏をかき混ぜて、あなたか喜ぶ統一世界にしてきました」と言うとき、神様が「ははは……」とお笑いになるのです。立派な統一教会の若い青年にも、それが可能な時代圏内に入ったのです。

百三十一カ国で三万双が相手の写真を見ただけで結婚をしました。それは歴史的な事件です。これをローマ法王ができるでしょうか。アメリカの大統領ができるでしょうか。先生が望んだのではなくて、皆さんが望んだのです。「どうか先生がしてください！」と言ったのです。では、皆さん！　今回カップルを結んであげたのですが、お似合いですか、似合いませんか。写真を見てやったということを世界がみんな知っているのです。

統一教会員たちは、賢いので先生にお願いするのです。これからは先生がしないようにしようと思います。そうすれば泣く人が多いでしょう。「早く受けるんだった……」と言うでしょう。そのような力がどこから出るでしょうか。人を見れば分かるのです。そのような何かがあるので、統一教会の教祖もするのです。教祖をするのが簡単でしょうか。歴史始まって以来、最も迫害をたくさん受けた人がレバレンド・ムーンではないでしょうか。クイズにも出るでしょう。「歴史上で最も迫害をたくさん受けた宗教指導者は誰でしょうか」と言えば、「レバレンド・ムーン！」と答えるのではありませんか。

将来、人々がなだれ込んできて、皆さんが逃げなければならない時が来るのです。また

誰に説明を聞いたのかという時に、祝福を受けた家庭の中で、最も高い家庭に説明を聞いたというのが誇りになる時が来るのです。「三万双の祝福を受けた人に聞きました」と言うのと「六千双の祝福を受けた人に聞きました」と言うのでは、どちらのほうが価値があるでしょうか。ですから統一教会で長くなった人たちは、祝福について解説して回るだけでも歓迎を受けるのです。

世界の若者たちによる三万双が、一つ所に集まって結婚したという事実は宇宙史的な慶事です。それは宮殿で、ある王を中心として「王子、王女が結婚をする」と言って一国が祝うよりももっと素晴らしいことなのです。世界的な次元だというのです。これが世界的な事件として続いて、一次、二次、三次まで発展すれば、その次からは大きなことが起こるのです。

今回、三万双をすべて公開してしまうのです。四十日の教育だけで祝福を受けて結婚したのちに二人とも、三年路程に行かなければなりません。何の条件もない人にも恵沢を与えるのです。ですから皆さんが、「祝福を受けた家庭はこうなんだなあ！」と近所の人が慕い、うらやましがるような伝統を立てるのです。そうして、新しい祝福を受けた人が皆さんの家庭に入ってきて、十二支派のように一つにならなければなりません。そして先生を中心とした環境のように、「あの家に行って御飯を一度食べてみたいなあ！」という環境にならなければなりません。

愛の道理に従って神様が投入して忘れたような実践路程の主体者になる時は、その環境は、荒地になろうとしてもなることができないのです。民族の結合した喚声と南北統一を願う声が天地に響くのです。遠からず南北解放の日に、歓喜の声とともに、統一教会の人たちが万歳三唱を叫ぶ日が来るでしょう。

五) 長成的国際結婚――三十六万家庭

このごろ統一教会が、二、三年の間に世界での水準が上がったのを知っていますか。では何をしてさっと上がったのでしょうか。お金を稼いでさっと上がったのでしょうか。伝道をたくさんして上がったのでしょうか。祝福です。三十六万双の祝福はいつですか。一九九五年です。三万双は、一九九二年です。一九九二年から一九九五年、三年目に三十六万双です。その次は三百六十万双です。「三万双から三十六万双をする」と言った時、誰が信じましたか。三十六万双の時、そうでした。三十六万双をして三百六十万双をするまで、三年かかりませんでした。二年半でやり遂げました。二年半もかかりませんでした。

これをしようとした時、三百六十万双になると信じた人は一人もいませんでした。神様はどうだったか分かりませんが、先生も信じられるか信じられないかでした。考えてみてください。この一本の指と十本の指は違うでしょうか、同じでしょうか。峠はいくつでしょうか。十の峠があるのです。私が三年間ジャルジンに行って仕事をしながら二世の時代を宣布しました。宣布した内容とは、絶対信仰です。絶対信仰、これからは信じまいとしても信じざるを得なくなるのです。

三万双から三十六万双になるという時、それを信じなかった人は損をしたのです。不合格者の烙印を押されたのです。また、三十六

万双が三百六十万双になるという時、それも信じることができなかったのです。そしてまた今、「三百六十万双から五月の末までに三千六百万双をするように」と言い、また一億二千万双までやろうとしているのです。そのようなことを言う人たちは、正常な人たちでしょうか、気の狂った人たちでしょうか。

三百六十万双の結婚、これは蘇生、長成、完成の完成です。三万双から三十六万双を経て、完成の段階を成すのです。これを水位で例えると、水が六時間かけて満ちてきてたまり、十二時間で一回ずつ引いていくとすると、六時間前にたまった水も、六時間後にたまった水も同じ水位に立つのです。先にたまったものを押しのけて、新しくたまった水が先になることもあるのです。ですから平準化時代に入ったのです。

お母様が現れたその年を中心として三万双の祝福をしました。これは国際的な祝福です。初めて父母が出てきて、対等な価値でこれを全世界国家に植えるための蘇生的国際結婚式が行われました。次の長成的な国際結婚式が三十六万双です。次の三百六十万双は完成です。三万双の時から、すべての宗教とすべての根本民族は、誰でも祝福を受けることのできる道が開かれました。三十六万双で本格的な長成時代を経て、この三百六十万双は、信者でなくてもみな対等な立場で相続することができるようになりました。

これからは、国が一度に丸ごと入ってくる所がたくさん出てくるでしょう。今までは伝道するのが大変だったでしょう。今の氏族時代を超えると、これから国が入ってきます。大統領とその国さえ認めれば、三百六十万双も行うことができるのです。先生が金日成の肩を軽くたたきながら北朝鮮の青年男女を中心として「三十六万双の結婚式をしましょう！」と言って、そのようにすれば、南北統一が成されるでしょうか、成されないでしょうか。そうして北朝鮮の三十六万の男性と韓国の三十六万の女性を混ぜれば統一されるでしょうか、されないでしょうか。

日本人も韓国人と交差結婚をしたのですから、韓国と北朝鮮が交差結婚ができるというのは論理的でしょう。金日成が本当に男性なら、男性と女性を組み合わせることに反対できないようになっているのです。簡単なことです。

初めは、結婚して七年間、聖別をしました。七年間を通過しなければなりません。蕩減の塔を見るとこのように高く長いのですが、だんだんと近づいてくるでしょう。ここが頂上になっているのです。三十六万双とか三億六千万双は、三十六数です。蕩減条件を中心として歴史が、このように何百年も早められて今に至っているのです。三十六家庭のような三百六十万、三千六百万、三億六千万、このように前進してきました。かえって昔の人はみな年老いて、心情的に世界的な活動をする手本になっていないのです。

祝福を受けた日本の人は、本当に祝福の価値を知った時には、あまりぼーっとした人はいないので、そのまま一〇〇パーセント飛躍的発展をすることができるのです。そのような意味で平等なのです。なぜ三万双から三十六万双、三百六十万双、三千六百万双、三億六千万双をするのでしょうか。三万双の時が分別式です。三数を中心として、世界レベル

でサタンと神様との世界的祝福圏に対する分別式をしたのです。

真の父母といえば、既にレバレンド・ムーンだということを知っているのです。真の父母といえばレバレンド・ムーンなのですが、それ以上の名称はないのです。それ以上教えることがありません。考えてみてください。今から四十年前には、再臨論を教えるためには聖書の六十六巻を広げて話をしましたが、今は再臨論の講義をする必要もありません。「レバレンド・ムーンを知っていますか」と言えば、「その方は三十六万双の結婚式をした人で、これから三百六十万双を結婚させる人だ」と答えるのです。「その人は人ですか、メシヤですか」と言うと、「メシヤ」という言葉がぴったりであって、「人」という言葉は合わないようになるのです。

統一教会の文先生が真の父母の立場で結婚式をして、全世界に氏族的メシヤとしての数十万双を配置することができる時になりました。三十六万双を配置する時代が来たので、その一族は滅びるはずがないのです。それで家庭を中心に、ザカリヤ家庭とヨセフ家庭が一つになることができなかったことによって、成すことのできなかったイエス様の理想を、すべて成すことができるようになったのです。

これからは新郎の家、そして新婦の家を一つにすれば終わるのです。それがカイン、アベルです。新郎にも一族がいるでしょう。夫にも夫の家の一族がいるでしょうし、妻にも妻の一族がいるでしょう。ここに婿や嫁になってすべてを一つに結んで百六十家庭さえ一つになる日には、一族圏内でサタンが活動する舞台はなくなるのです。

根本の根が間違ってしまったので、根をひっくり返さなければなりません。それで根を探す運動という言葉も今、出てきているのです。偽りの父母によって結婚式を間違え、根本をひっくり返したので、真の父母が来て世界的な結婚式をしなければならないというのが理論的な論理です。それで三十六万双の祝福結婚式、そして三百六十万双の結婚式をするのです。三百六十万双の結婚式ができるでしょうか、できないでしょうか。できるかどうか見てみましょう。もう既に決まっているのです。できるようになっているのです。

三万双の結婚式をしてすぐ「三年後に三十六万双を結婚させる」と言ったときに、誰が信じたでしょうか。神様とレバレンド・ムーンしか知りませんでした。五カ月でそれをやり遂げました。これからは三百六十万双は、問題にもなりまサん。インドという国のヒンズー教徒だけでも一億を超えるし、パキスタンはイスラム教徒が七千万を超えます。彼らがみな自分の国だけで三百六十万双をするというのです。アメリカは、お使いでもしていなさいというのです。

混乱した邪悪な性問題の解放を主張する世界をほっておいてはいけないのです。神様が制裁を加えるのです。エイズという病気は罰です。罪を犯したので、罰を受けなければなりません。この罰で死んではならないのです。これを防御しなければならないので、先生が仕方なく世界的な大家庭編成をするのです。三百六十万双を結婚させる時には、結婚する人たちが統一教会の結婚観を知ってから結婚するでしょうか、そうでないでしょうか。これから問題になります。

三十六万双をやっても今、問題です。小学校の先生に、「先生、私たちは十一歳、十二歳になったのですが、いずれは結婚するので、聞きたいのです。統一教会で結婚することを既成教会では『異端だ、悪い、悪魔だ』と言うのですが、統一教会の三十六万双は、国境を越えて地の果てから来た人もみな面会もせずに、写真で結婚しても幸せそうです。うちの近所には、結婚をして暮らしても、一週間もたたずに壊れた家庭があります。統一教会の結婚式は正しいと思いますか」と質問されたら、どう答えますか。そういう時が目前に来ています。

私たちが三十六万双の祝福を果たしたので、三百六十万双を三年後にして、また三年後に三千六百万双が祝福を受けるとすれば、世界に統一教会のカップルのいない所がなくなるでしょう。どこでも祝福家庭がいるのです。そうなれば強力な力をもつようになるのです。その国では、どの村でも境界線がなくなるのです。すべての所が連結されているので、何の問題もないのです。座ったまま電話で、世界の三百六十カ国の友達をつくりながら暮らすのです。

三万双、三十六万双、そして三百六十万双を超える時代、そのような世界的な基準の方向圏を今日に至って造成しながら万歳を叫び始めたのです。今日まで先生の生活は、悲惨でした！　天下が喜ぶことのできるその日を迎えるために、歯を食いしばって死の道を歩んできました。四千年の歴史を四百年で復帰しなければなりませんが、四百年生きることができないので、一生涯の四十年以内に生涯をかけて成さなければならないということが、先生としてどんなに深刻だったか考えてみてください。

世界の真の父母圏の基盤を備えるために、世界的なこの運動をしました。そして今、祝福も三万双から三十六万双、そして三百六十万双をしています。蘇生・長成段階を超えるのです。長成段階を超えたというのは、国家的基準を超えたということです。イエス様が失敗したイスラエル圏、国家を失ったのを復帰することのできる時が来たので、このような観点で見ると、先生を中心とした家庭と氏族と民族と国家を探し出して、入っていかなければならない時が来たことが分かります。ですから王権時代へと超えていくのです。

六) 完成的国際結婚――三百六十万家庭

世界的な拡大は、祝福家庭を中心として行うのです。三万双から三十六万双、三百六十万双を中心として家庭的世界版図が形成されることによって、神様個人よりも、神様の家庭や真の御父母様の家庭が行くのに、縦横を経なくても神様がこの地上に臨むことのできる時代圏を迎えました。それで「天地父母天宙安息圏」を宣布しました。それで蘇生、長成、完成を経て、世界の統一家庭が動くときに障害物がなく、歓迎を受けることのできる時代になったのです。神様がどこででも休むことのできる時代になったのです。

それでこの宣布式をしたのです。したがって今回、天の安息圏を宣布したので、世界的な三万双、三十六万双、三百六十万双を中心として三千六百万双、三億六千万双を祝福するのです。これら（三千六百万双、三億六千万双）は、下りていくので簡単です。三億六

千万双が分水嶺になったので、この峠を越えることによって、世界の全人類は一つの家庭になるのです。アダム家庭で始めたものを失ったので、それを取り戻すために、国家でこれを成そうとし、世界で成そうとしたので、先生を中心として家庭で勝利、国で勝利、世界の版図で勝利したすべてのものを中心として、初めて全人類が解放圏に入ることができるのです。

三億六千万双の祝福が終われば、どうなるでしょうか。三百六十万双の祝福は、祝福において最高の山場です。山でいえば、エベレスト山のようなものです。今これを越えるのです。これが最も難しい峠です。それを越えて三万双が蘇生であり、三十六万双の長成、三百六十万双の完成を成して三千六百万双へと進みます。全部三十六数なのですが、三万双が出てきました。なぜ三数でしょうか。三数というのは過程的な数です。いつでも転換の時期には三面を広げていくのです。ですから三万六千双ではなくて三万双なのです。

三数がいつも分別期間になっているので、三万双を中心として、三十六万双、三百六十万双と、頂上に上るのです。それが最も難しいのです。これを全世界が注目しています。すべての宗教圏で「統一教会が三十六万双を結婚させ、三百六十万双を結婚させるそうだ。三十六万双は簡単だったけれど三百六十万双はできるだろうか」と言うのです。一年八カ月だったか、何カ月でしょうか。それを誰も信じませんでした。しかし三百六十万双を七月十五日を期して超えました。きょうまでで、二千五百万双を超えたのです。きのうまででしょうか、おとといまででしょうか。二千四百五十七万人、四捨五入すると、二千五百万を超えたのです。

すべての堕落した子孫の最高の願いは、「どうしたら先生の血統圏につながるか」ということです。それで親戚関係を結ぶのが最高の希望です。先生の子女は何人でしょうか。孫たちはどれくらいいるでしょうか。息子、娘が、孫をどれくらい欲しいかと聞きます。一人ずつ生みましょうか。みんな少なくても一ダースを超えなければなりません。大勢の人たちが待っているのです。黒人、白人、黄色人種みんなが待っています。そのような希望をもっている世界的な大氏族になるのです。多くの血統圏につながることができます。三百六十万双ではつながらないところがありません。至る所に必ず一双ずついるのです。

今日、統一教会は真の父母の家庭を中心として伝わってきた氏族で蕩減して上がってきました。そして水平線に上がって世界化の祝福時代、一九五二年から一九九二年までの四十年を過ぎて、一九九二年から国際的な祝福時代へと超えたのです。祝福が国際時代へと超えたのです。氏族基準に入って、そこから水平的な国際時代に入るのです。そして一九九五年に三十六万双を祝福し、その次には一九九八年六月十三日に四千万双の祝福をしたのです。これが世界時代において三万双、三十六万双、三百六十万双です。この三百六十万双が峠です。ここから全世界水平時代に入るのです。

条件に引っ掛からないように、完全な作戦のためのすべての責任を完遂しなければ、完成することはできません。延長し、また延長

した先生の最後の方便であり対策が、正に三百六十万双、三千六百万双、三億六千万双です。この最後の段階で責任を完遂したという条件を立てて、万民解放を成すのが先生の責任であり、先生の思想です。先生が行く道です。

十二の峠を越えていくのです。十二の峠を迎えて世界に越えていき、天下は、その世界の懐に抱かれるようになっているのです。祝福家庭の懐に抱かれる時が来るのです。ですから八月以前に三百六十万双を終えたときには、三千六百万双は一年以内で終えるのです。三千六百万双の祝福が終わったなら、また一年以内の三億六千万双は問題ありません。その次には三十六億をするのですが、三十六億双になる七十二億の人が地球上にはいないのです。人類は六十億しかいないのです。それを何度かすれば終わってしまいます。このようにすれば二〇〇〇年内に世界は行き場もないように家庭版図に打ち込まれなければ、生きていく場所がなくなるのです。

家庭を中心として世界の基準を超えなければなりません。それで統一教会は、その日を実現させるために合同結婚式をしたのです。三十六家庭から十数を中心として三万双、その次には三十六万双、三百六十万双まで頂上の峠を越えるのです。分水嶺を越えるのです。ここまでが大変なのであって、これからは世界祝福の門をすべて開けるのです。三百六十万双、絶頂の横的基準が立つことによって、この縦的な基準も比例的に高まるのです。それによって地上で全世界の氏族、民族、国家を超えて祝福を受けたのと同様に、天上世界、天使長圏世界までみな祝福を受けるのです。

三百六十万双の祝福が終わっても、おしまいではありません。町ごとに（祝福家庭が）いるので旗を立てて全部祝福しなさいというのです。そうしなければなりません。旗を立てて祝福するのです。サタン世界の地獄の民が、天国の民に加入することのできる真の父母の血族をすべて相続するのです。そうして全部祝福するようになっています。旗を立てて祝福を受けた人が、町内で一人残らず祝福を授けるのです。

一九九七年八月九日までに三百六十万双の祝福が終わって、先生が七十七歳の七月七日七時七分七秒のその日に三千六百万双の祝福を宣布しました。誰でも祝福を受けるのです。解放です。「三千六百万双を祝福する」と言えば、霊界が下りてきて強制的に打って、祝福を受けるように引っ張っていく時が来るのです。

今まで宗教は個人の救いを語ってきましたが、これはどんなに簡単でしょうか。家庭の救いと、国家の救いと、世界の救いと、天宙の救いです。国家救援から、今は世界救援に超えていく時なので、霊界の先祖たちを祝福することができるのです。霊界や肉界や地上で、家庭生活を真の父母と暮らした人が入るところが、天上・地上天国であり、天上・地上天国の民になるのです。ですから霊界に行っている先祖たちを解放させるために、不可避的に宗親連合をつくらなければならなかった事実を知らなければなりません。

このために必死に努力しなければなりません。それが遅れれば遅れるほど先祖がドンドンドンと足踏みしながら、「こいつ、なぜこのように遅いのか」と言うのです。「早く、

早く」と言って、解放されたがるので、天使長圏の解放が起こるのです。地上で天使長圏を祝福すれば、天上世界が祝福を受けられるのです。それで興進君と大母様が「三百六十万双祝福！」と言えば、直ちに先生が霊界に祝福することのできるものを与えるのです。

レバレンド・ムーンの公式的な名前、神様が制定した名前が「真の父母」です。このようなものを八段階に上がっていくのを平面的にしたのです。蕩減法のとおり、心のままに、世界的な家庭を編成したのです。ここで三百六十万双が祝福を受けるのです。

二次四十年路程がこれまで短縮されてきました。このようになると、これからは自由結婚時代へと超えていくのです。父母が決定すれば、自由にするのです。これからは、先生が結婚を決めないのです。三百六十万双の結婚のあとは、何人かだけ先生が祝福してあげるのです。そのようなすべての関係が完全にできているので、十代、聖婚式当時のお母様の年齢以上の人はみな解放してあげるのです。それで十九歳、十八歳まで結婚させるのです。

三百六十万双の祝福をしたので、また、三千六百万双が祝福を受ければ、世界の町々には、統一教会のカップルのいない町はなくなるでしょう。どこにでも祝福家庭がいるのです。そうすれば強力な力をもつようになります。その国では、どこにも境界線がなくなるのです。すべての場所がつながるので、何の問題もないのです。座ったまま電話で、世界の三百六十の国の友達をつくりながら暮らすことができるのです。

祝福家庭を超国家的、超世界的、超民族的、超宗教的な水平線に置いてするのです。三百六十万双を祝福すれば終わるのです。そうすれば世界は、家庭を訪ねていくために統一教会の教理を知らなければならなくなるのです。何の力で、一人の人が三百六十万双を国境を越えて統一することができるでしょうか。そのような力をもったという事実は、永遠に歴史の誇りとなる事件です。それで、鳩のように小さな一双が結婚することが問題でしょうか。そうして一族が心配し、母親が鴇が鳴くときのようにのどを詰まらせながら、結婚をどうするかと悩み、心配しながら眠れない、そのような環境から抜け出すことができるのです。

そして、小学校の先生がこれを知らなければなりません。「先生、三百六十万双が結婚したのは事実ですか、うそですか」と聞いたとき、先生はどう答えるでしょうか。「うそだ」と言うでしょうか。そのような先生は、偽者になるのです。「その内容は何ですか」と聞かれた時に、説明できなければ落第です。

蕩減条件を先生が立てました。一週間以内に百六十家庭、千六百家庭も祝福することのできる時代になりました。三十六万家庭で実ったでしょう。大韓民国の人に「三十六万家庭を祝福し、七十二万人を結婚させた文総裁は立派ですか、悪い人ですか」と聞けば、何と答えるでしょうか。もし「悪い人だ」と答えれば、「その悪い人のもとに、世界の大統領がいるし、学者、博士が並び、優秀で立派な人たちが従っていますが、みなあなたより劣っているので祝福を受けたのですか」と問い詰めるのです。三尋の竿でかき混ぜても引

っ掛かるところがありません。そのような時代になりました。

三十六万双が三百六十万双になり、三千六百万双になり、三億六千万双、三十六億双へと広がっていく時、人類社会から初めてエイズが撲滅され、神人が一体化した純潔な真の愛の世界が実現されるのです。これは夢ではありません。神様の地上天国建設の大歴史の中でその実現は、必至の事実です。人間の業ではなく、それは神様のなさる業だからです。

第三章　祝福家庭の摂理的意義

一　三十六家庭

一) 三家庭をまず祝福

一九六〇年に先生の聖婚式を挙げる前に、三十六家庭の中の三家庭を婚約させて先生が聖婚式を行ってから、この三家庭を祝福しました。それは、イエス様を中心としたペテロ、ヨハネ、ヤコブのように、先生を中心として三子女が神様の理想圏に立ったという条件を立てたのです。完全に分かれることができないという勝利基盤を立てたのです。

最初にしたことが三家庭の祝福です。一九六〇年に先生が聖婚式をする前に、この三家庭の基盤がなければ聖婚式はできないようになっていたのです。お母様を迎える時に、この人たちの相手をすべて決めておいて、先生が結婚式をまず行い、次に彼らも祝福してあげたのです。そのように原理の道を合わせてきたのです。

アダムの前に三大天使長、アダムの八人家族を編成しなければなりません。三大子女、信仰の息子、娘を立てて結婚すれば、八人家族の編成と三大天使長を連れて天の前に行かなければならないというのです。それで統一教会の文先生も、三人の息子、娘、三十六家庭を立て、三十六家庭の婚約式を行ってから結婚式をしたのです。すべてが原理的です。水も漏らさぬ組織編成をしてきたのです。アダムが家庭を失ったので、再び家庭を探し出さなければなりません。

先生を中心として見れば、縦的立場の子女たちがいて、子女を中心として見れば、横的な立場の兄弟がいますが、横的基盤で私たちの子供の中の代表としてアベルの位置に立ったのが誰かというと、興進だったのです。二番目、二番目だというのです。私たちの統一教会で見れば、三十六家庭を立てるためにはイエス様の三弟子、天使長の家庭を代表した三数を解決しなければならないのです。その三数が決定されたので、アダム家庭、ノア家庭、ヤコブ家庭の三十六家庭の型が出てきたのです。

三十六家庭で代表されるこの三家庭の中で、最初の家庭が金元弼家庭です。歴史は、誰でもその場に立てるようにはなっていません。これこれこのようなプログラムによる、様々な背後の内容が霊的な世界にできていなければ、長子の位置に立てることができないのです。そのような人が金元弼なのです。その次に二番目は誰かといえば、劉孝元です。そして三番目は、金榮輝です。

三家庭を中心として十二人を立てなければなりません。この十二人は、歴史的な使命を果たさなければなりませんが、十二人だけでは駄目だというのです。過去の十二人、現在

の十二人、未来の十二人、三十六数を決定しなければならないのです。それで三十六家庭となるのです。アダム家庭からノア家庭まで十代、ノア家庭からヤコブ家庭までの十代、ヤコブ家庭の十二人の子供、二千年歴史の先祖を連結できなかったのを、すべて圧縮したのが三十六家庭です。

二) 三十六家庭を立てた意味

三十六家庭は、第一家庭、第二家庭、第三家庭で構成されています。第一家庭は、旧約時代を象徴していますが、それは神様の許可なしに結婚した立場です。第二家庭は、新約時代を象徴していますが、新約時代は、地上で初めて神様が選んでくれる結婚を願った時代です。しかし、イエス様が十字架で亡くなることによって失敗し、新婦は新郎がやって来ることだけを待った時代です。

第三家庭は、成約時代を象徴しますが、成約時代は、完成の時代で、神様の家庭の出発を願う時代です。現在の摂理は、ヤコブが勝利した象徴的復帰摂理を経ています。したがって先生は、僕の時代と養子圏時代を蕩減復帰して、神様の真の子女時代を成し遂げなければなりません。この三時代の路程を象徴的に復帰するのが三十六家庭です。

三十六家庭の中で、第一家庭は、既成家庭で旧約時代に該当し、イエス様の時代は、結婚を願ったけれども成せなかった時代で第二家庭がそれを象徴します。第三家庭は、すべての苦難に勝って、勝利したヤコブのように、成約時代を象徴します。特に三十六家庭は、先生を中心として一代に旧約時代、新約時代、成約時代を蕩減する勝利的基台となるのです。さらに、家庭勝利の完成で三時代を横的に一代に蕩減した歴史的意義をもつのが三十六家庭の祝福だというのです。

摂理史的に見れば三十六家庭の第一家庭は、アダム家庭を復帰した立場です。アダム家庭のカイン、アベルを含み、ノアまで十二数でつながっているので、これを蕩減するために十二家庭を立てたのです。第二家庭は、ノアからアブラハムを復帰したことを意味します。アブラハム家庭にサタンが侵犯することにより、イサクとヤコブに延長された十二代を象徴します。ヤコブは、十二人の子女を通じて歴史上初めて縦的な摂理を横的に蕩減復帰したので、三十六家庭において第三家庭がそれを象徴するのです。ヤコブが成した個人的勝利の基台の上に出発した家庭は、旧約時代、新約時代、成約時代を象徴したものでもあります。

三十六家庭は、三十六代と同じです。三十六家庭は先祖なのです。神様の復帰摂理の中で先祖が失敗したことを、すべて取り戻した型です。イエス様の時代の十二弟子を代表した歴史的な過去、現在、すなわち旧約時代と新約時代を、すべて蕩減して取り戻した型が三十六家庭だというのです。言い換えれば、成約時代は旧約と新約を完成しなければ出発することができないのが原則なので、これをすべて清算するために三十六家庭を取り戻さなければならなかったのです。

先生が個人的な勝利の基盤の上に、横的な家庭的蕩減の基準を準備しなければならないので、三十六家庭を祝福するようになったのです。ノア家庭から勝利の基準を築いたでし

ょう。伝統的家庭の基準を中心として立てたのがノア家庭です。その次にヤコブ家庭、第三家庭とは何でしょうか。これは清い青年男女たちです。ここから地上の基盤は、すべて蕩減復帰して完全なものを立てなければなりません。それでヤコブ家庭型の十二家庭を中心として横的な四方向性が起こるのです。

これが三十六家庭を中心として全体を代表した立場で基盤を築くようになります。それが十二支派を中心として、三時代の十二型です。ヤコブを中心として見れば、蘇生、長成、完成の三時代です。これがすべて一つとならなければなりません。

三十六家庭は、歴史時代において復帰摂理の使命を担った時代の数多くの善なる先祖を代表した家庭です。その先祖が縦的に失敗したことを横的に実体復帰するために、先祖の復活体としての責任をもった、選ばれた家庭です。この三十六家庭は、三十六億の世界人類を代表しているということを皆さんは知らなければなりません。

世の中を見れば、家庭をもった既成家庭と家庭をもっていない人がいます。また、家庭をもっていない人の中にも二つの種類があります。一つは、自分勝手に男女関係を結んで失敗した者です。このように世界の人々を分ければ、三種類になるのです。自分勝手に結婚した人、その次に自分勝手に男女関係を結びながら家庭をもっていない人、今そのような人が多いでしょう。その次には純潔な青年男女、このような内容でもつれ合っているのが世界人類です。世界人類を縦的に見れば三種類なのです。

言い換えれば、自分勝手に結婚した人、その次には、自分勝手に相対的関係を結んだけれども結婚できなかった人、すなわちイエス様と聖霊が今まで婚約段階にありながら新しい家庭を収拾する、そのような型の人がいます。その次は、純潔な青年男女がいるのです。このような型をすべて蕩減復帰するためには、縦的な歴史時代を代表して家庭的に収拾しておかなければならないので、それで三十六家庭が出てきたのです。

イエス様が十二弟子を取り戻し、アダム家庭からノア家庭、ヤコブ家庭までの三時代の代わりにしてみ旨を成そうとしたことを、蕩減復帰するために三十六家庭を立てたのです。このように連結してきたのです。このように先生は、どれ一つ取っても適当にやったことはありません。

再臨主は、アダム家庭の立場を蕩減復帰しなければなりません。したがってアダム、ノア、アブラハム型の家庭を取り戻して先祖に立てなければなりません。そのためには、まずアダム型の十二家庭を取り戻し、ノア型の十二家庭とアブラハム型の十二家庭を取り戻して、縦的な先祖を立てなければなりません。

三十六家庭は、私たち人類歴史の先祖が復活したものです。その先祖が復活してどのようなことをするのでしょうか。地上世界の人間が六千年間縦的に繁殖したものが、横的に展開しているのですが、これをすべてつなぐようなものです。これが全体の縦的蕩減においては十二代、代数では十二です。地上でも、この十二ですべて連結されました。地上でも、蘇生圏が既成家庭、長成圏は、愛の関係はも

ったが結婚式を挙げていない者、その次に完成圏は、清い青年男女です。

三十六家庭は、すべて十二数です。アダムからノアまでは十代ですが、十二数です。カイン、アベルで十二数になりました。その次は、ノアからアブラハムまでが十代ですが、イサク、ヤコブを入れて十二数です。こうしてヤコブの時になって初めて十二数の基準を中心として、横的に展開することにより世の中に着陸したのと同じように、統一教会も、やはり三十六家庭が出てくるのです。

アダム家庭型、ノア家庭型、ヤコブ家庭型、これが第一家庭、第二家庭、第三家庭です。これを中心として歴史時代のすべてのもの、旧約時代と新約時代を経てきたすべてのものを成約時代に一つにつないできたのです。霊的世界を代表して、これらを連結させ、地上に先祖たちを一つにつないできたのです。それで三十六家庭は、みな先祖たちです。

三十六家庭とは、いったいどんな家庭でしょうか。三十六家庭の中で第一家庭は、自分勝手に結婚した者をすべて連れてきて神様の前に連結させたのです。その次に第二家庭は、愛を成し遂げられなかった、このような内容をもった人たちをすべて組み合わせたのです。そのまま単にペアを組んで祝福したのではないのです。それはなぜでしょうか。世界の人々を救うためです。その次に第三家庭は、清い青年男女たちです。既成家庭は、第二家庭の前に絶対服従しなければなりません。霊界に行けば分かるのです。その次に、第二家庭は、第三家庭に絶対服従しなければなりません。

今後、み旨が成し遂げられた時には、三十六家庭の中で誰が中心になるかといえば、第三家庭が中心になるのです。こういう話は、先生から初めて聞いたでしょう。では、再臨主が来られる所とはどこでしょうか。この既成家庭を訪ねてくるのではありません。自分勝手に愛の関係を結んだ人を訪ねてくるのではなく、清い青年男女を訪ねてくるのです。

先生が三十六家庭を組んであげなかったとすれば、皆さんは、天上世界に入っていって立つ場所がないのです。このようなことを知っていますか。ここでそれを拡大すれば、全世界がその範囲の中に入るのです。既成家庭を蘇生とするならば、長成は第二家庭です。それでこれをアダム家庭、ノア家庭、ヤコブ家庭、このようにいうことができます。ヤコブ時代となって初めて平面時代、横的に越えてきたのです。十二支派を中心として横的に越えていくのです。

天上世界に行けば十二の真珠門があり、十二支派があるように、また地上世界に十二カ月があるように、先生を中心とした十二支派、これがすべて合わなければいけないのです。イエス様を中心として十二弟子がいたように、先生を中心として三十六家庭がありますが、その中で十二家庭の代表が清い青年男女たちです。これを中心として、その次は自分勝手に生きてきた人たち、その次は家庭をもった人たちです。この人たちが一つになったという条件を立てなければ、入っていく道がないというのです。

清い青年男女として先生から祝福を受けた家庭は、先生と連結することができる基準が立てられています。それで今後、家庭的基台

においての中心は、清い青年男女として祝福を受けた家庭です。このようなことを知り、皆さんが今後、家庭の秩序を立てていかなければなりません。三十六家庭を見るとき、第一家庭、第二家庭、第三家庭の中で、第三家庭が中心になるのです。

三十六家庭は、アダムからノアまで、ノアからアブラハムまで、アブラハムからヤコブまでを経て、十二の子女を中心として、全体的な摂理の基盤を築かなければなりません。これは、過去の歴史を成し遂げようとするのではありません。先祖が失敗したことを現実において、横的に一度に蕩減復帰するためなのです。これを成すための闘いが三十六家庭を中心として起こるのです。

先生がこの世の事情を知らずに、そのようなことを言っているのではありません。人間の事情よりも神様の事情がもっと哀れで、人間の意志よりは神様の意志がより大きいので、責任をもってこれを成そうとしたのです。神様が子女を失った歴史的な恨を蕩減復帰しなければならないので、縦的な歴史を現実において横的に蕩減復帰して、先祖の願いと、先祖が立てようとした基準を再び取り戻さなければならない立場にあったので、三十六家庭を祝福したのです。

三十六家庭の責任とは何でしょうか。今までの歴史的なすべての蕩減条件を食い止めることです。言い換えれば、サタンを完全に消し去ることのできる一つの完璧な囲いにならなければなりません。それでこの家庭のすべての伝統と思想は、サタンとは完全に隔離された伝統を立てなければなりません。この伝統を中心として横的な伝統の因縁を七十二家庭と百二十家庭が立てていくのです。このような立場で見るとき、三十六家庭の責任がどれほど貴重なのかを皆さんは知らなければなりません。

霊界に行けば、正式に清い青年男女として祝福を受けた者と、既成家庭が受けた祝福は違うというのです。霊界に行けば、天は三層になっています。現実の社会にも上中下があるように、霊界もそうだというのです。それでは三十六家庭はどうでしょう。各々十二家庭ずつアダム家庭、ノア家庭、アブラハム家庭の代わりとなる三十六家庭を見るとき、どの家庭が一番貴いかといえば、一番最後の家庭が一番貴いというのです。今後は、そのような家庭を貴ばなければなりません。今は、そのような時になっていないからそうなのであって、みな差があるというのです。違うのです。

私がお金を投入して金の指輪、服などを買ってあげたのです。そのようなことを、なぜするのでしょうか。三十六家庭は、結婚費用も出さなかったでしょう。人の子を連れてきて、自分の子以上の結婚式をしてあげました。一次、二次、三次と、世の中がどんなに反対しても堂々と行いました。全く、そのようなことをすれば土地が生じますか、お金ができるでしょうか。何ができるというのでしょうか。先生に度胸がなかったならそのようなことが成せたかと、考えてみてください。大韓民国が騒いでも、既成教会が騒いでも、微動だにしなかったのです。米国が騒ぎ、全世界が騒いでも、微動だにしませんでした。それで、今ここまで来たのです。

三) 三次にわたって祝福――数多くのエピソード

一九六一年の三十六家庭の祝福式の時に、乱闘劇が起こりました。門に警備兵を立てて結婚式を行うほどでした。しかし先生は、誰がどんなに騒いでも、すべきことは、すべて行います。三十六家庭の親たちが集まって来て、あらゆる罵声を浴びせながら大声を張り上げました。またひどいのは、先生を「監獄にほうり込んでやる」と裁判所に何十枚もの投書をして、先生が裁判所に呼ばれていくこともありました。

特に、過激になって練炭の灰をばらまきながら「統一教会をなくさなければならない」と言う人が十二人いました。統一教会は、そのようなところで大きくなりました。反対されるその立場で、勝利の基盤を築かなければならなかったのです。反対されて冒険をする立場で、勝利の基盤を築かなければならないのです。

私が三十六家庭の合同結婚式をする時、新郎新婦のお父さん、お母さんに私の名前で招待状を送りました。「お父さん、お母さん、何日にあなたの息子、娘が青坡洞教会で結婚式をします。それで来たる時には、このような礼服を着て来れば参加できますが、そうでなければ参加できません」と招待状を送りました。

そのようにしたところ「全く、そのような話がどこにあるか。誰が人の子の結婚式の招待状を送るのか」と大騒ぎして、どんなに大変だったか分かりません。騒いでみろというのです。私が既に決めて行うのです。警察が動員されても私が言ったとおりに、そのままするようになっているのであって、自分勝手にするようにはなっていないのです。

韓国で三十六家庭の結婚式の時は、自分の親も天使長の扱いをしたのです。親にも全く知らせなかったのです。仕方なくあとで、一週間前に、「礼服も着て来なければならない」という条件を立てて、通告したのです。それでののしりわめき、「他人の息子、娘を連れていって誰が結婚式をするのか」と物議を醸しましたが、仕方ありませんでした。親がどんなに気分を悪くしたか考えてみてください。それでそのまま鉄の門を閉じて、誰も入ってこられないようにしました。そのようなことをして、すべて分別したのです。

三十六家庭の幹部の中のある人の親は、相当な名士で、文先生のような人は夕日のように過ぎ去る金サッカ（韓国の詩人）ほどにも思わないで、ああだこうだと言ったのです。その人の娘を結婚させる時、私が通知を送りました。その人は、自分の娘が結婚するといって結婚式場に堂々と入ってこようとしたのです。しかし、統一教会の結婚式に参加するには礼服を着てこなければならなかったのです。（礼服ではなく）自分の洋服で入ってこようとしましたが、入れてくれないので大騒ぎになったのです。娘の結婚式なので入らなければならないのに、入れないので仕方なく、統一教会の教会員のところに行って、「頼むから礼服を貸してくれ」と言って、礼服を着て入ってきたのです。

三十六家庭の合同結婚式をする時にも、お父さん、お母さんに知らせることができるでしょうか。駄目だというお父さん、お母さんに会って、説得しようとする子を歓迎するでしょうか。そうではないですか。それは明らかなのです。お父さん、お母さんが来れば喜ばしい日となり、目が細くなりますが、先生という人は、それをすべて知っていながら、そのお父さん、お母さんに尋ねてから紹介するようになっているでしょうか。

しかし、通知はしなければならないので、結婚式をする前日の何時間か前にちょうど到着するようにするのです。「あなたの息子、娘が貴い結婚式を行います。御来賓なされますようお願いします」、そのようにすべて通知したのです。

先生の時代にどんな革命をしたかといえば、伝統を完全に覆しました。キリスト教の伝統を完全に覆して、大韓民国の伝統を完全に覆しました。お父さん、お母さんを否定しました。皆さん、祝福を受ける時、皆さんのお父さん、お母さんに先生が相談して祝福しましたか。一言もしていません。先生が主体です。三十六家庭の時にはお父さん、お母さんが来られないようにしました。無条件、礼服を着て来いといいました。それで大騒ぎとなったのです。革命の中の革命なのです。完全に覆したのです。

三十六家庭の結婚式をする時、一次の結婚式は何時にしたでしょうか。夜明けにしたでしょう。闘いながら「やあ、私の父を出せ！」、「私の娘を出せ！」と言いながら騒いだのです。「私の父を出せ」と言うので、他人の父を盗んだ人となり、「私の娘を出せ」と言うので、他人の娘を盗んだ人になってしまったのです。

このようにして、けんかをしながら「やあ、文なにがし！　出てこい！　やつが出てきて、うちの家をめちゃめちゃにして、うちの娘を気違いにした！」と言うのです。結婚する場合、親から承諾を受けなければならないのに、結婚式の日に親に、「来たければ、こういう礼服を着て来てください」と通知を送る、全くそのような話がどこにあるかというのです。

そのようなことはあり得ないのを、私はよく知っています。それを知らなければ楽ですが、知っているので息が詰まるのです。そうでしょう。知らずにすれば悪口を言われても「なぜですか」と言えますが、非難されることを明らかに知っていながらするのです。このようなことを知っていながらも、しなければ蕩減にならないのです。目をつぶって、いい加減にしてはならないのです。

三十六家庭が結婚式をする時、一つは夜に行い、一つは昼に行い、一つは夜明けに行ったのです。なぜでしょうか。自分の息子、娘を出せと、みんなが反対をしたからです。神様のみ旨から見た時、偽りの父母から出発したので、真の父母の立場で、すべてのものをコーチしなければならないというのです。親たちも反対しましたが、国も反対しました。私が裁判所に行って、調書を作ってきて結婚式をしたのです。そのようにやってきたことを、誰も知らないでしょう。先生が立つ位置がなかったのです。そこから冒険をしてきたのです。

先生がおもしろい話を一つしましょうか。私たちの韓国で三十六家庭の合同結婚式をする時、その娘婿も今この席にいるのですが、ある人が訪ねてきました。自分の二人の娘が二人とも統一教会に引っ掛かったというのです。自分はある学校の校長先生なので、良いお婿さん候補にある先生たちを選んでおいたと、絶対合同結婚式をさせることはできないというのです。しかし先生は、「反対をするならしなさい。あなたの娘は私が嫁に送る」と言いました。

三十六家庭を選ぶ時、その親たちに先生が相談したでしょうか。他人の子を連れていって相談もしないで、招待状も出さないで、すべて先生の勝手に結婚をさせたので、悪口だけでなく、棒でたたかれるようになっているのです。昔のイスラエル民族だったならば、服を破られ、刃物で刺されて死んでいたことでしょう。しかしそれを、みんなが何をしているのか分からないように、あっという間に片づけてしまったのです。

サタンの子をみな連れてきて、神様の子にして結婚させました。天の宇宙的な運勢で復帰路程を完結させるのに、誰に相談しなければならないでしょうか。祝福してあげるのに、誰に相談しますか。三十六家庭は何かといえば先祖です。先祖となる愛を成すのに、肉親のお父さん、お母さんに相談できますか。神様に相談しなければならないのです。

三十六家庭の祝福も、真っ暗な夜中にしなければならなかったので、門を閉めて成婚式をしたのです。その時、「私の息子を出せ、私の夫を出せ、他人の息子、娘を連れてきて何をするのか」などの罵声を浴びました。自分の息子に妻をめとらせるのは、親の一存で決めることなのに、統一教会の先生が独断で結婚させるというので、わめいたのです。すなわち、サタン世界の親だからです。神様の息子、娘をサタンが奪っていったので、先生が再び奪い返して蕩減復帰するのです。歴史的に失った息子、娘を再び取り戻して蕩減復帰するためでした。それで式を早く終えたのです。蕩減復帰歴史なので仕方がありませんでした。

二　七十二家庭

一) 七十二家庭の祝福の意義

今まで先祖が責任を果たせなかったことだけが間違ったのでしょうか。そうではありません。先祖も過ちを犯しましたが、兄弟が間違ってそのようになったのです。それで、三十六家庭の前に兄弟のような立場としてカイン、アベルの二人を立てたのが七十二家庭です。七十二家庭を立てることによって、ヤコブの代まで、地上に横的基盤を築く時まで、家庭を中心としてカイン・アベルの二つの型を復帰した基準に立てたのが七十二家庭です。

それによって今までの直系先祖の家庭が、すべて復活した型として地上に現れたのです。これによって重要な中心が決定されたのです。十二家庭を中心としてイスラエル支派型の出発が行われたのです。今日、私たちが七十二家庭を立てたので、先祖を中心とした基盤がこの地上に立てられたのです。

先祖の前に二人の息子の家庭型を編成しなければならない摂理的意味があったので、これを立てるために三十六数の二倍の七十二家庭を立てたのです。縦的な歴史路程において、

アダム家庭で成し遂げられなかったことをカイン・アベル家庭が完結させなければなりませんでしたが、完結させることができなかったのです。すなわち、蕩減条件を立てることができなかったのです。

ところがカイン・アベル家庭型の七十二家庭を祝福することによって、延長した縦的な摂理が平面的な一つの基準点で勝利の基準を立てることができたのです。三十六家庭と七十二家庭を立てることによって、縦的なカイン・アベル型の理念的基盤がすべて地上に造成されたのです。その次に平面的に縦的家庭型を復帰しなければならないのです。その家庭は、すべてアダム家庭を復帰するための型です。

三十六代が失敗したことを復帰したという基準を立てたのが三十六家庭ですが、そのようにして先祖となった三十六家庭だけでは駄目なのです。争いは、どこから始まりましたか。アダムとエバの息子のカインとアベルから争いが始まりました。それで、この世界がこのように壊れました。それは何のことかといえば、その子孫がみなけんかをする世界をつくったということです。これを蕩減復帰しなければなりません。

そのためには、三十六代の息子、娘が神様の前で争わないで一つになったという条件を立てなければなりません。それでカイン、アベルに分立した数、すなわち三十六を二倍した数の七十二家庭を立てたのです。この七十二家庭が立てられることによって、カインとアベルが争わないで四位基台を成すことができる歴史的な先祖の基礎をつくったのです。それでサタンを防ぐことができる絶対的な基準が立てられたのです。皆さんは、七十二家庭がどのくらい深刻な位置に立っているかを知っていますか。

七十二家庭は、三十六家庭の祝福基盤の上に立てられました。七十二家庭は、アダム家庭を中心として復帰されたカイン・アベル家庭を象徴します。アダム、エバが神様の前に立つためには、カイン、アベルが完全に一つになった基台の上に上がらなければなりません。アダム、エバが人類の先祖として完全な父母の立場に立つためには、カイン、アベルが完全に一つにならなければなりません。

三十六家庭は、先祖格のアダム家庭を象徴しています。したがって三十六家庭は、カイン、アベルが一つになった家庭の基盤の上に立ってこそ、父母の資格を備えるようになっているのです。七十二家庭が三十六家庭の二倍になっているのも、カイン、アベルの立場だからです。

七十二家庭とは何でしょうか。聖書で見るように、七十門徒といい、七十二門徒ともいいました。もともとは、この七十二数が合うのです。七十二数。十二支派を中心として六数、六人の族長たちが合わされば二掛ける六は十二、十二掛ける六は七十二なのです。七十人ならば数が合いません。それで七十二家庭が、もともと合っているのです。

この七十二家庭は何かといえば、中心家庭の三十六家庭、すなわち先祖家庭の前にある息子、娘と同じです。子孫なのです。神様のみ旨の中で先祖がみ旨を成し遂げられなかっ

たことは、その先祖の家庭においてカイン、アベルが一つになれずにみ旨が延長されたと、このように見るのです。

カイン、アベル、息子、娘、兄弟が一つになった、その家庭の基盤をもてなかったのです。七十二家庭とは何でしょうか。全体を合わせてみれば、三十六家庭の倍数です。それでカイン・アベル家庭の三十六家庭の息子を中心としたアベル的三十六家庭とカイン的三十六家庭、合わせれば七十二家庭と同じです。それは何かといえばカイン、アベルが一つになれずに、歴史的先祖が失敗したことを蕩減復帰するための代表的家庭です。このように見るのです。

三十六家庭から七十二家庭、百二十家庭は一チームです。分けることはできません。三十六家庭は歴代の先祖のことをいいます。次に七十二家庭は、息子、娘のことをいいます。百二十家庭は、世界国家の祭司長のことをいうのです。十二支派のことをいいます。十二支派の世界的分派型をいうのです。問題は、先祖とカイン、アベルと十二支派が一つになればいいのです。それが復帰歴史です。

今日の「私」という存在は、過去の結実であり、現時代の中心であり、未来の出発です。すなわち、三時代を代表した結合体だというのです。この三時代の形を結合したのが三十六数です。十二数に三時代を掛ければ三十六双になるのです。この三十六双を中心としてカイン・アベル型の息子、娘を復帰しなければならないので、七十二家庭が出てくるのです。

家庭でいつも問題になるのは、父母と子女が一つになることです。アダム家庭において、アダムとカイン、アベルが一つにならなければならないのです。神様の前に一致させることができる家庭になるためには、父母と二人の息子が一つになったという条件を立てなければなりません。そうでなければ神様の前に立てないのです。それが三十六家庭の二倍に当たる七十二家庭なのです。

この七十二家庭は、イエス様の七十門徒に該当する数です。私たちが家庭を取り戻すことによって、この家庭はイエス様の十二弟子と七十門徒を中心として氏族を編成しようとしたのを成した型です。イエス様が十二弟子と七十門徒を家庭型として復帰した氏族型が、七十二家庭です。

言い換えれば、この三十六家庭と七十二家庭は、イエス様のイスラエル民族を中心とした十二支派と七十門徒のようなもので、イスラエル民族を指導し得る代表的型を復帰した型なのです。これは、神様がイスラエルを中心として取り戻そうとした基本数が取り戻された型です。

七十二家庭は、どんな家庭でしょうか。家庭を完全復帰しようとすれば、カイン・アベル家庭が一つにならなければいけません。アダム、エバが完全に神様の前に立とうとすれば、カイン、アベルが完全に一つになった基台の上に上がらなければならないのです。先祖というのは、父母の立場です。この父母の立場が完全に神様の前に立とうとすれば、カイン、アベルの基台を復帰しなければなりません。

三十六家庭は、先祖です。先祖が立とうとすればカイン、アベルが一つになった家庭の基盤がなければならないので、三十六家庭の二倍の七十二家庭になります。七十二家庭はイエス様を中心とした七十門徒に該当します。それが一つになった地上の蕩減圏を成し遂げたので、神様の摂理はますますその基台が拡大されるのです。こうなると先祖の家庭を中心としてカイン・アベル家庭が一つになるので、摂理歴史においてそれは、家庭を中心に必要としたすべてのものが備わったことになります。家庭復帰を完成したことになります。それが七十二家庭までの祝福です。

七十二家庭の祝福が成就することによって初めて、地上に神様を中心として平面的にも立体的にも一つの段階を成すようになったのです。したがってこれが決定されることによって、中心的基準が立つのです。

すなわち、神様の摂理により決定されなければならない中心点が縦的な足掛かりとして、完全な歴史の勝利者として立つことは、三十六家庭、七十二家庭が一つになることによって成されるようになります。その中心点が決定されれば、神様が要求してこられた中心的先祖の勝利圏を成すことになります。それは完全な基台なので、それを横的に展開しなければなりません。

イエス様が天国を成すことができなかったのはなぜでしょうか。氏族が協助することができず、次に十二弟子が協助できなかったからです。三弟子と十二弟子が協助できなかったのです。その次に氏族を中心として、十二弟子を中心として、七十門徒を中心として国と国を連結することができる橋を架けようとしたのに、その橋が崩れてしまいました。そうして家庭的基盤をもつことができなかったイエス様、氏族的基盤をもつことができなかったイエス様、教会基盤をもつことができなかったイエス様となったのです。

次に、七十門徒が一つになることができなかったのです。この七十門徒は十二支派の代わりであり、七十長老を代表したものです。これが七十門徒ではなく、七十二門徒にならなければならないのです。十二支派に六人ずつとすれば、七十二人です。それで統一教会では、七十二家庭を祝福したのです。聖書を見れば、新約には七十二人ですが、旧約は七十人となっています。七十二人が合っているのです。七十人では合わないのです。

復帰歴史とは、カイン、アベルの歴史です。カイン、アベルの歴史なので、このような先祖の前に二人ずつ、カイン、アベルだけを組んでやれば、今まで歴史時代において先祖が失敗したすべてのものを蕩減する条件となるのです。先祖がなぜ失敗したかといえば、カイン、アベルが一つになれなかったからです。カイン、アベルを中心として信仰基台と実体基台がすべて成されるのです。ところが、その先祖を中心としてカイン、アベルの基準を完結できなかったので、それを完結するための条件をこの地上の横的基盤に合わせるためのものが七十二家庭です。

地上天国を成し遂げるためには、家庭を成さなければなりません。イエス様の三弟子、十二弟子、これは三時代の蘇生時代、長成時代、完成時代です。それを代表した三十六家

庭。その次は七十二家庭です。カイン、アベルが家庭を中心として争ったので、その代表的な立場として七十二家庭を立てたのです。これは七十二民族、民族的な代表なのです。

人類の中にはアダムのように自分勝手に結婚した型があり、次に相手を見つめながら生きてきたイエス型の人物もいるし、再臨主型もあります。再臨主は、これらの人物型の立場をすべて蕩減しなければなりません。まずノア型家庭を復帰しなければなりません。それはノアがアベル型であり、またイエス型だからです。神側の二番目の息子型なので、これをまず復帰しなければなりません。これがカイン、アベルに分かれて復帰された型が七十二家庭です。

三十六家庭を立てた目的は、三十六の先祖を探し立てるところにあるのです。それで三十六家庭を中心に霊界と肉界が一つになるのです。これをカイン・アベル型に広げたのが七十二家庭です。ヤコブが七十二家族を率いてエジプトに出発したように、統一教会も七十二家庭の時、そうでした。

祝福は、新しいイスラエルを認めることです。三十六家庭の一家庭に、カイン型とアベル型を立てれば、七十二家庭になるのです。

三年の期間にアブラハム、イサク、ヤコブの三代の基準を越えなければなりません。今年、七十二双を無理に結婚させたのです。何組かしか気に入る人がいません。

三　百二十四家庭

一) 百二十四家庭を立てた意味

イエス様の百二十門徒の代わりとなる百二十家庭は、世界的な型です。百二十家庭は、世界の代表型として世界的な蕩減条件を立てることができる基盤となるので、百二十家庭を立てることによって、神様が世界的に訪ねてくることができる基準を立てたのです。それで国連の加盟国が百二十カ国を超えれば、その時が「終末だ」と言うことができるのです。

百二十家庭は、世界のすべての国家を代表した基準で立てられた家庭です。

再臨主は、アダム家庭の立場を蕩減復帰しなければなりません。したがって、アダム・ノア・アブラハム型の家庭を取り戻して先祖に立てなければなりません。そのためには、まずアダム型の十二家庭を取り戻し、次にノア型の十二家庭とアブラハム型の十二家庭を取り戻して、縦的な先祖を立てなければなりません。それで先生が三十六家庭を立てました。この先祖を中心としたカイン・アベル型の家庭として探し立てたのが七十二家庭です。そして百二十家庭は、世界百二十カ国の指導者を象徴するのです。

横的な基準を立てて、平面的な四方数の世界型を立てたのが百二十家庭です。これは百二十国家を代表したものです。

百二十四家庭までは七年路程です。現在百二十家庭があるので、新しいイスラエル圏を中心として世界の百二十カ国を取り戻すことができる基盤が連結されるのです。それでイエス様が家庭を通じて取り戻そうとした世界的なすべての数が、先生が百二十家庭を祝福

することによって、復帰された基準が決定したのです。

皆さんに必要なのは何かといえば、八十四人と百二十人をすべて氏族圏内に立てることです。それは縦的です。三十六家庭、七十二家庭、百二十家庭、違いますか。百二十というのは世界の代表です。それでイエス様が復活したのち、五旬節に屋根裏部屋に百二十人が集まったのです。それは世界的な代表です。先生が百二十四双を祝福する時、国連の加盟国が百二十四カ国でした。それがすべて合っているのです。

十二数に該当するのが百二十門徒です。これは、イエス様の時代において百二十門徒の代わりの蕩減復帰数に該当するので、世界国家の代表者型です。これを立てて、その族長代表が国家代表でしょう。国家代表基準として編成するために、世界的な基準として編成するために祝福してあげたのが百二十四家庭なのです。

四家庭は、これはこぶです。その四家庭は、既婚家庭です。なぜ既婚家庭を入れたのでしょうか。既婚家庭を入れないと今後、既婚家庭を救う道がないのです。この四数は東西南北の四方の門を象徴するので、このようなタイプの型を中心として既成家庭が復活できる道を開けてあげなければならないのです。それで百二十四数を祝福したのです。

百二十家庭は、イエス様を中心とした百二十門徒の代わりなのです。四家庭は、結婚した既婚家庭です。四方の門を開けてあげなければなりません。

イエス様が十字架で血を流すようになったのは、七十二門徒と十二弟子を足した八十四人が一つになれなかったからです。ですから皆さんは、八十四人を実体で蕩減復帰しなければなりません。その蕩減復帰基盤の上で、皆さんは結婚生活ができます。先生もそうです。そのために十二、十二、十二の三十六家庭です。それは蘇生、長成、完成です。これは三つですが、縮小すれば一つなのです。

その次の七十二家庭も同じです。その基盤上に百二十家庭、百二十家庭の基盤上に世界が連結されるのです。イエス様が復活し昇天したのちに、五旬節に百二十門徒が一つになって聖霊が地上に降臨したでしょう。それは世界の代表を象徴します。

イエス様がユダヤ数的基準を成し遂げられなかったことが恨なので、それに代わる百二十家庭がイエス様の恨を解いてあげる祝福家庭だというのです。それで百二十家庭は先頭に立って犠牲にならなければなりません。この前、出動教育を受けた地域長は、全部百二十家庭なのです。百二十家庭は犠牲にならなければならないのです。百二十家庭は、イエス時代の百二十門徒の立場で世界的な支派編成をするところにおける、世界百二十国家を代表した国家的な基台です。

イエス様が昇天する時に百二十門徒を立てたでしょう。百二十門徒は、百二十家庭を意味します。その次に、地上でも天上世界に行った百二十国家の代表がいるのです。その国家代表の列に皆さんの血族が一つずつ入っていくことによって、皆さんの活動舞台が百二

十国家の天国の版図を相続して、そこに活動できる基地を連結するのです。

イエス様に十二弟子と七十門徒だけがいたのではありません。五旬節の時に百二十門徒に聖霊が降りてきて、世界的な宣教運動を始めたのです。それを代表したのが百二十カ国です。私たちが百二十家庭を祝福する時にも、国連に加盟した国が百二十四カ国でした。私たちにおいても百二十四双ですが、四双は何かといえば、東西南北を中心として犯罪者だった人でした。前科一犯、二犯、三犯、四犯まで百二十四組にすべて入っています。なぜでしょうか。地獄に行っている人々を救ってあげなければならないからです。刑務所にいる人々を救ってあげなければならないのです。

天国の民を少なくともイエス様が願った百二十人、百二十家庭は連れて入らなければならないというのです。百二十家庭とは何でしょうか。百二十家庭は、地上の国家の代表です。それで一生の間、百二十家庭を連れて入っていかなければなりません。それを目的としなければなりません。それは何かといえば、イエス様が死なないで再臨できる代わりの者となって氏族に送るということです。カインの氏族にアベルの氏族を送ることです。それがメシヤの資格です。それが氏族的メシヤの使命なのです。

自分の息子、娘と自分の血族と復帰された民と共に、永遠なる創造理想的伝統を、愛の伝統をどのようにつくっておくのかというのです。あの世に行って、これが一つの群れとなって自らの永遠なる生命の権威、生命の位階を求めていくのです。一族を復帰して百二十家庭以上を連れていかなければなりません。これだけ話したから分かったでしょう。恥を免れるように準備しなさいというのです。恥どころか裸にされて追い出されます。

イエス様の十二弟子の十二数を十倍した百二十数は、平面的な世界を代表する数です。それで、この百二十門徒と同じ数を合わせるために百二十双の祝福をしたのです。本来は百二十ですが、四方数の四双を足して百二十四双を祝福しました。

百二十カ国の代表に四を加えて百二十四双を祝福して、氏族的中心が決定された基盤の上に世界的な百二十四家庭を祝福しました。これは、イエス様が百二十カ国の象徴基盤として出発したキリスト教全体を代表する家庭が成立したということです。ですからそれは、先生を中心として個人で四位基台を成して、次に先祖をつなげ、次に民族をつなげて、次に世界をつなげる蕩減的家庭なのです。ですから今は、世界に広がっている数多くの国家圏を代表することができる国家が、すべて一箇所へ行くことができる道が開けるというのです。

百二十門徒は、世界を代表します。イエス様も百二十門徒を中心として世界的な出発をしようとしましたが、それができませんでした。私たちは、これを準備しなければなりません。世界を標準として行く道の前に、架け橋となることができる自らの子孫を段階的に立てなければなりません。子孫を立てる時はいい加減に立てるのではなく、世界的な代表になることができる位置に立てなければなりません。これは何でしょうか。統一教会の三

十六双、七十二双、百二十四双の合同結婚式です。

二) 献貢式と百二十カ国聖地選定

百二十四双の成婚式ののち、献貢式を行いました。神様がイエス様を通じて成すことができなかった個人的、家庭的、氏族的、民族的な基盤を成すために復活実体として来られ、み旨を成さなければならない方が再臨主です。それを三年間しました。この三年は、子女を取り戻す期間（縦的期間）に該当します。この期間は、イエス様がユダヤ教とユダヤ民族を収拾しなければならなかったように、復活実体の一人のお方を立てて、それを収拾する期間です。

百二十家庭は、世界型です。一九六五年に四十カ国を中心として、百二十箇所の聖地を立てた理由もここにあります。

人を取り戻したのちには土地を取り戻さなければなりません。先生が四十カ国を巡回した理由は、聖地を選ぶためでした。韓国で堕落前の基準を立てたので、聖地を選ぶことができたのです。世界四十カ国で百五箇所の聖地を選びました。百二十家庭は、百二十国家を象徴します。今後、私たちは、百二十箇所の聖地を選ばなければなりません。

百二十家庭とは何でしょうか。百二十国家を代表する型だというのです。それでは天の組織で見たとき、先祖と家庭の形態と、ここに世界の代表者の型を備えたのに、土地がないというのです。土地がないので、天の前に人的組織の型は備えたものの、この地を汚したことを天が取り戻せる基盤がなかったので、これを中心として数を合わせるために四十カ国に百二十の聖地を選んだのです。それで地の基盤となったのです。そのようになったので、皆さんが聖地に行って祈祷するときは、そのような観点で祈祷しなさいというのです。

皆さんは百二十家庭を代表して、七十家庭を代表して、三十六家庭を代表して、天の王座の中心である真の父母を代表して、すべて地上に降りてきて、平面に広がった立場で祈祷しなさいというのです。それで今後、統一教会を発展させるためには神様も動員しなければならず、今までの先知先烈（注：先駆け歩んだ義人たち）も動員しなければならず、すべて動員しなければならないのです。彼らはカイン型です。ここはアベル型なので、すべて地を中心として協助するのです。神様もしなければならないし、天使も協助しなければならないし、先祖も協助しなければならないのです。

四　四百三十家庭

一) 四百三十家庭の数理的意味

四百三十家庭とは何でしょうか。四百三十家庭は、全体の平面的な基準です。ですから一つにならなければなりません。今は、国家を中心として影響を及ぼすことができる状況になったので、世界へ出ていくのです。それで四十三数を立てて、先生の四十年生涯を復帰しなければならないのです。世界的に条件を立てなければならないのです。それで歴史は今、統一教会時代圏に移ってきているのです。ではここで、何が問題かといえば、氏族が一致団結して民族復帰のために進むことで

す。民族が復帰される日には、国家は自然屈服するようになっているのです。

今年、四百三十双を祝福しなければならないのは、韓国において一九六七年が檀紀四千三百年になるので、これを摂理的な条件に合わせなければならないためです。また、イスラエル民族がエジプトの地からカナンに帰ってくるまで四百三十年かかりました。すなわち、四十三数です。それは新しい時代に移っていく歴史の転換点となる数です。それで私たちも、四十三数を中心として七年路程を最後に終わろうというのです。これがすべて合って、新しい歴史時代に移っていくのです。これから統一教会が行く道は、日進月歩することでしょう。

四数、三数というのは、七数を代表して、イスラエル民族が四百三十年目にカナン復帰のためにエジプトを出発したことを代表します。ゆえに新しい出発をする時だというのです。また、その時が韓国歴史四千三百年になった年なのです。偶然の一致ではありません。神様は、数理的役事をされます。四千三百年になる年に四百三十双をこのように祝福したという事実は、氏族的で一つの系列的な宗教の勝利的基盤だけでは駄目なので、すべての氏族の前に共通の門を開放させておくのです。

四百三十家庭の時は、大韓民国の歴史が檀紀四千三百年の年だったのです。四千三百年になる年に、大韓民国の家庭はどんな家庭でも、天の国へ行くことができる門を開いたのです。反対した集団までも入っていくことができるのです。いかなる氏族、いかなる民族、大韓民国の民は、反対した人でも、下賤の身の子孫だとしても、人ならば誰でも行くことができるのです。それで四百三十家庭は、氏族全体が加担する時なのです。全体の特定時代が、今は普遍的時代に移ってきているのです。

それで金氏ならば金氏家門が神様の前に選ばれたならば、金氏全体が入っていくことができるのです。そして一九六九年度に、世界の数多くの国家を代表して四十三家庭を祝福してあげたのです。ドイツで祝福してあげ、米国で祝福してあげ、日本で祝福してあげたでしょう。それが四十三家庭です。相対なのです。

四百三十家庭の国家的家庭の前に、四十三数の相対的家庭です。これは何を意味するのかといえば、全世界民族国家も韓国のあらゆる氏族が天国圏内に加担する特恵を得たので、世界民族が加担できる内的基盤によってこの相対的基準を連結させれば、外的世界の氏族も内的世界の蕩減基準にある韓国民族と連結することができるというのです。

四百三十家庭は、イスラエル民族がカナン福地へと出発したように、私たちは、世界のカナン福地に出発したのです。四百三十年に出発したことを、この時は、四千三百年を代表した四十三数を合わせたのです。そこからみんな出ていくのです。出ていくための単位は、個人単位でなく、家庭単位です。家庭を引き連れて進まなければなりません。それを知らなければなりません。単位は個人ではありません。家庭なのです。それで自分の家庭を捨てていってはいけないというのです。

モーセは、イスラエル国民を捨ててはいけないのです。みな率いて進まなければならな

いのです。監獄にイスラエル人がいても、その人を奪い取ってでも連れていかなければならないのです。そのような数を代表して四百三十双を祝福したのです。四百三十家庭には、すべての民族が入っていくのです。善なる人、宗教人、すべての人が入ります。十二数から四十数も出てくるし、三十数も出てくるし、百二十数も出てくるし、すべてここから出てくるのです。一カ月の三十日もここから出てくるのです。宇宙の中心数がここに、すべて入っているのです。

それで四百三十家庭を中心として、四千三百年を私たちが出発するのです。一段階高いのです。正にその年なのです。韓国民族はもちろん、世界民族までここにみな入りました。韓国は、世界の代表で、すべて入っているというのです。それをはっきり知らなければなりません。広めていくのです。

四百三十家庭を祝福することによって、どんなことが起こったかといえば、大韓民国はこれから統一教会と連結することができる立場に立ったというのです。それは何を意味するのかといえば、韓国の民は、宗教を信じなくとも、四百三十家庭を中心として第三イスラエル圏の恩恵を受けることができる圏内で蕩減条件を成立させることができるということです。それで大韓民国が選民だということを発表することができました。選民圏が形成されたというのです。

では、このような基盤を中心として、次は何をするのかといえば、先生が世界的に拡大するのです。四百三十家庭をつくっておいて、次に世界的に大韓民国の土地と民をすべて拡大しなければなりません。土地に植えるというようなこと、聖地を選んでおいて、次に四百三十家庭に接ぎ木をするということをしなければなりません。それで四十カ国を中心として聖地を選んだのです。次に、世界巡回をしながら何をしたでしょうか。四十三家庭の祝福をしたのです。四百三十家庭の相対的数になる四十三家庭を、日本と米国とドイツを中心として連結させるのです。これは世界史的です。それによって、世界にいる数多くの信仰のない人々も、イスラエル圏の恩恵を受けることができるのです。

四千年あるいは六千年間のユダヤ教やキリスト教の歴史を経てきましたが、そのように伝統を受け継いで信じてきたその恩恵を、信じないでも平面的時代へのその恩恵圏内に加担できる特権を与えるというのです。このような基盤が形成されたというのです。

祝福とは何でしょうか。家庭を確保することです。先生の家庭を中心とした三家庭、三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭……。これによって世界的蕩減条件を形成するというのです。それでは、次に何が問題でしょうか。四百三十家庭なのです。世界的祝福基準の代表的型として百二十四家庭を立てましたが、大韓民国を中心として見た時、宗教を信じないで宗教生活をしない数多くの人が大韓民国にいるのです。そうではありませんか。

蕩減条件は、教派を中心として必要なのです。神様の摂理は、教派を中心として必要なのですが、その他の宗教を信じない人は、どのようになるのでしょうか。それをすべて切って捨てることはできないのです。結局、教

派を中心とした主流の思想圏内に平面的に数多くの国家、民族、数多くの氏族をすべて接ぎ木しておかなければならないというのです。世界へ通じることができる道を開き、その宗教人を連結させることができる門はできていますが、一般人は外れてしまったのです。一般人は加入できなかったのです。

それで、韓国を中心として一般の数多くの氏族圏を接ぎ木しなければならなかったので、四百三十家庭を立てたのです。韓国歴史四千三百年を代表した四百三十家庭なのです。

四百三十家庭とは何でしょうか。数多くの姓、朴氏、金氏などなど、韓国にも数百の姓があるでしょう。これと同じように、世界の数多くの姓をもった人々が連結し得る道を四百三十家庭を通じて開いておいたのです。四百三十家庭を中心として見れば、国内四百三十家庭と国外四十三家庭、日本とアメリカとヨーロッパ中をすべて合わせたことで相対圏を成します。これで全世界五色人種の前に四百三十数の相対的数を決定して、四十三家庭でつなげたのです。

四百三十家庭は、韓国における四千三百年に合わせたものです。ここには、すべての人々が入っているのです。罪人も、あらゆる人たちが入っているのです。ここは殺人犯も、強盗もいて、あらゆる人がいなければなりません。それでこそ、世界の人々が入ることができる門ができ、道ができるのです。

四百三十家庭が統一教会で主力部隊にならなければなりません。今四十代ならば、先生が世界的に闘う時です。四十五歳までにすべての基盤をつくって、大韓民国の蕩減基準を立てて、国と国を連結させた四十カ国を中心として百二十箇所の聖地を選んだ時だったのです。闘いの準備を始めた時です。

四百三十家庭には、どれほど重要な意義があるか知っていますか。本来、昨年の一九六七年を中心にして越えなければなりませんでした。今年の二月二十二日は、先生が興南の監獄に入って満二十年を越えようとする時です。それで内外のすべてが先生の復帰路程二十年を越えていく、その中に内外の重要な意味があるので、皆さんがその日を中心として記憶されるというのです。

皆さんがそのような同参する権威を所有できるという事実が、どんなに光栄であるかを知らなければなりません。その日は、悲しい日だけではありません。ジョージ・ワシントンの誕生日がその日なのです。そのように理解して、皆さんが素晴らしい家庭を築いていかなければなりません。

四百三十家庭とは、大韓民国、この民族の代表なのです。そこには様々な姓が、すべて入っています。それとともに、これがアダムの立場、アダム国家のような世界的版図基盤を経て、韓国国民が連結されたところに、エバ国家型と同じ基準の人を連結させるのです。そうでなければ連結できないのです。それで四百三十家庭の時初めて、日本の久保木家庭を連結させたのです。そこから連結させていくのです。

一九六八年を中心として「神の日」を定めるとともに、大韓民国の背後に神様の家庭が

連結され得る版図をすべてつくったのです。世界へ出ていくことができる版図を連結させておいて、世界的に進出するというのです。ゆえに四百三十家庭の中に、初めて日本を介在させたのです。久保木会長が代表なのです。世界的時代に連結させていくのです。このような蕩減的条件を立てて、世界の版図を組んでいく、このような勝利の発展をさせていくのです。

原理的に見た時、國進は四番目の息子で七番目に生まれ、結婚は八番目にしました。そのすべてが原理に合うのです。それとともに今回、四百三十家庭を國進の相対としたのは、四百三十家庭を中心とした全体の姓を連結したものです。世界の姓がそれほど分かれたということです。四千三百年を人によって、年数を人で蕩減するのと同じなのです。また、家庭を中心として蕩減するのも同じなのです。

過去には四百三十家庭をすべて祝福することで、個人が行くことができましたが、今は四百三十数を家庭で選ぶことで、先生の家庭を中心にすべての東西南北にある世界の姓をもった人が家庭的に入ることができる時が来たというのです。それで國進の結婚式が、どれくらい影響が大きいかを知らなければなりません。したがって地上において東西南北が、すべて満たされるのです。先生は、その真ん中の位置を占めるのです。

四百三十双というのは、四数、三数は、韓国歴史の四千三百年数に該当するのです。また、四数、三数を掛ければ十二数が出てくるし、四数、三数を合わせれば七数が出てくるのです。原理数においてすべての重要数、合わせて倍にする数が七数、三数、四数から出てくるというのです。このように四百三十双に決定しておいて、その次は韓国が中心なので世界の前に相対的数を探し立てるために、世界で四十三家庭を立てて祝福をしたのです。日本と欧州と米国において四十三家庭を立てて、世界的な相対圏を成したのです。これによって、全世界の万民には、天と接することができる平面的な基盤が完結したのです。

天についていく人ならば、地の果てであってもその人が真心を込めれば、必ずこの門を通じて一箇所に集まることができる道を開けてあげなければならないのです。統一教会の合同結婚式はそのような意味があるので、四百三十家庭を中心とした世界的な連結体をつくることによって、統一教会は平面的に世界民族圏に発展したのです。韓民族だけではないというのです。四百三十双と四十三双を世界舞台の家庭的基台に連結させたのは、超民族的、超国家的基準における新しい超民族形成の出発が成されたということです。そのように見るのです。

一九六八年の一月一日を中心として、「神の日」をこの地上で定めたのは統一教会として勝利した日です。その時まで何をしたのかといえば、四百三十双まで祝福をしてあげました。このような勝利の日を横的に、世界的に連結させなければならないので、先生が一九六九年に世界を歴訪しながら四十三組を祝福してあげ、十ヵ国を横的な舞台に連結させたのです。

韓国でしたことを世界化させなければならないというのです。韓国で勝利したことを世

界的に錨をつけておかなければならないというのです。これが十カ国を中心とした四十三双の祝福ですが、四百三十双の祝福のようなものです。四百三十双というのは、韓国の歴史が四千三百年なので、韓国の全国民を中心とした祝福の基礎となったのです。

三十六家庭の時も、命懸けだったのです。それで三十六家庭の時代を経て、七十二家庭、百二十家庭の時代に入って、これがすべて地上に定着して、四百三十家庭の時代に入ってからは、東西南北の四方三六〇度に対する方向を備えて、世界的な発展をしていくのが統一教会の歴史だというのです。それとともに二十一年間に、数多くの人々と数多くの氏族圏を、すべて連結させる家庭の門を四方に開いたというのです。五色人種がすべて入らなければならないのです。

それで私たち統一教会は、四百三十家庭を中心としたその時から、世界史的な舞台を中心としたのです。韓国において四百三十家庭とは何でしょうか。四百三十数は、四千三百年になる年に四百三十双を中心として新しい出発をするというのです。また四百三十数は、イスラエル民族がエジプトでカナン福地へ行くまでの年数だというのです。四百三十年ぶりにカナン福地に向かっていくのです。それで、世界史的なカナン復帰の出発をするので、家庭を中心としたカナン復帰の世界的出発が行われるのです。このことを、はっきり知らなければなりません。

四百三十家庭は、民族すべてを合わせたという意味です。統一教会だけではありません。四百三十という数字は、四千三百年の韓国歴史を中心とした世界的なカナン福地に出発することと、イスラエル民族がカナン福地に向かって出発することと同じになるのです。信じている人はもちろん、信じていない人でも、その道を行くことができるように開いたというのです。すなわち、イスラエル民族が四百三十年に民族的出発をした代わりに、四千三百年に四百三十家庭が世界的出発をするのです。世界的なカナン福地に出発をするのです。四百三十家庭を中心として国家全体を連結させて、世界へ連結させなければならないのです。

それで、先生が世界的な四十三双の祝福をしてあげたというのです。それが、四百三十双の相対です。それは条件なのです。それで、韓国にどんな氏族でも連結することができるのと同じように、世界代表を連結することによって、どんな国でも連結することができるのです。

本来は、一九六七年に祝福してあげようとして日本へ行ったのに、できませんでした。それで一九六八年に四百三十家庭の祝福をしてあげる時、日本の代表として久保木を連れてきて、最初に祝福の条件を立てたのです。まず日本を祝福してあげて、米国を祝福してあげました。そしてサタン的なアダム国家だったドイツを中心として、四大国家に神様の錨を下ろすことができる立場に立ちました。したがって全世界の国家を代表した全体が、蕩減条件を立てることができる勝利の基盤になったということを皆さんは知らなければなりません。

皆さんが七年間先生の路程に同参したので、四百三十双まで責任をもって祝福してあげま

した。これは、すべて先生に属します。彼らは、先生の世界復帰路程に貢献したので偉大なのです。

二) 四百三十家庭は氏族的メシヤの家庭

先生は、四百三十家庭を祝福する時、「氏族的メシヤになれ」と話しました。それは「自分たち同士で楽しく生きよ」ということではありません。言い換えれば、イエス様と聖霊のような使命、すなわち復活したイエス様と聖霊の実体として、その氏族を救う役事をする氏族的メシヤになれというのです。霊的ではなく、実体としての氏族的メシヤの使命を果たせというのです。

四百三十家庭に「氏族的なメシヤになれ」と言ったのに、彼らは私がなぜそのような話をしたのかが分からないのです。皆さんは、この地で生きている間、自分の両親と親戚を伝道しなければなりません。したがって一つの家庭が、少なくとも百二十人は伝道しなければなりません。これが皆さんの生涯における使命です。このような目標を中心として、今後進むのが統一教会が行く道です。

第二次七年路程とは何でしょうか。皆さんの家庭がアベル家庭にならなければならない期間です。これを決定するための路程なので、皆さんの家庭がアベル家庭として責任を果たすためには、カイン家庭を復帰しなければなりません。このようにアベル家庭がカイン家庭を復帰すれば何になるでしょうか。氏族になります。皆さんは、氏族的メシヤにならなければならないのです。四百三十家庭がこの氏族的メシヤに該当するのです。これは世界性を帯びているのです。このように、条件にすべて合わなければなりません。

一九六八年度の四百三十家庭を祝福する時に先生が指示したとおり、氏族的メシヤになれというのです。その使命を果たさなければなりません。先生を中心として教会に三十六家庭が組織されているように、金氏ならば金氏家門で、先に祝福を受けた家庭を中心として金氏家門の三十六家庭型がなければなりません。三十六家庭ができないなら、皆さんは十二家庭型の先祖にでもならなければなりません。皆さんは父母なので、皆さんの息子、娘を中心として、三位基台を成してその基準を立てなければならないのです。

四百三十家庭とはどんな家庭かといえば、皆さんの四百三十家庭時代になって、氏族的メシヤ時代に入ったのです。四百三十家庭とは、どんな家庭でもすべて氏族を中心として再臨復活できる家庭的基盤、言い換えれば、イエス様が再臨した家庭的基盤を全民族的に与えたことを表すので、四百三十家庭は自らの全氏族を中心としたメシヤ家庭なのです。四百三十家庭は、氏族を中心とした再臨のメシヤ家庭と同じなのです。

それで、三十六家庭から七十二家庭、百二十家庭は先生に属します。それは縦的な基準に該当するのです。四百三十家庭は四方に立てたのです。それで氏族的メシヤ圏内に入っていくのです。それで皆さんに対して、「氏族的メシヤになりなさい」と言ったのです。中心になった三十六家庭、七十二家庭を先生がすべて蕩減して、百二十家庭を先生が一遍に蕩減したので、皆さんは百二十人だけ連結

すればいいというのです。それによって縦的に、横的にすべて蕩減できるようになります。

それで百二十人は、皆さんが氏族に入っていって、必ずまとめなければならない責任があります。四百三十家庭、私たち統一教会家庭の責任だということを知らなければなりません。そのようにしましたか。できませんでしたか。そのように考えていましたか、考えていませんでしたか。今まで知らなかったでしょう。先生の話を聞いたので、今は理解できるでしょう。

個人を取り戻したのちは、家庭を取り戻すのです。個人が勝利した次は、家庭のアベルとして入っていくのです。夫ならば夫、妻ならば妻、皆さんは家庭において神様から送ってもらったアベルなので、ここから氏族的なメシヤになるのです。これは家庭をもった人たちがしなければならないので、先生が四百三十家庭を中心としてそれを編成したのです。皆さんは、何が何だか分からないでしょう。四百三十家庭は氏族的メシヤだ、とはどういうことでしょうか。これは道理を通じて不可避的に出てきた言葉です。み言は公式的なのです。

五　七百七十七家庭

一) 七百七十七家庭は世界を代表した家庭

一九七〇年度に、十カ国の青年男女たち七百七十七双が祝福を受けました。国境と人種を超えて神様のみ旨の前で愛を中心とした新しい家族、新しい氏族を編成して世界のための神様のみ旨の道を開拓する家庭を形成するために、七百七十七家庭の祝福をしたのです。そうして、来られた主の前に新しい世界的な国家体制を備えて、その方が計画したみ旨の前に、いかなる国といかなる国民の前にも奉仕できる、基本となる要員を形成しようというのです。

七百七十七家庭は、世界を代表した家庭です。世界的な家庭だというのです。したがって、世界的な家庭を中心として補強するためのものです。しかし、まだ統一教会の家庭制度が継ぎはぎのようで、みな使命を果たしていないので、世界的基準の七百七十七家庭まで延長してきたのです。本来は四百三十家庭からそれをしなければならないのですが、七百七十七家庭を立てて、今まで発展してきました。

皆さん、七百七十七家庭は全世界を代表しているのです。七、七、七、すなわち蘇生、長成、完成、一九七〇年度に七百七十七家庭を中心として世界的な家庭形態を備えて、超民族的な時代に入っていくのです。それで日本人とか、ここに参加した家庭を中心として三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭までも間違えれば、すべて押し込まなければならないのです。このようにして、復帰摂理の道を築いていくのです。

私たちは、国家、民族を超えて世界的に一つになろうとするのです。私たちには、人種が問題ではなく、皮膚の色が問題ではありません。自分の国家と民族を超えて、一つの家庭制度を形成する運動をしなければならないので、七百七十七双の大々的な合同結婚式をするのです。

先生が一九七〇年に七百七十七双を祝福してあげたのは、三掛ける七は二十一、三数と七数は全体の完成数です。すなわち、二十一数は三段階も表し、全体完成も表すのです。分けようとするのではなく、一度に一つにしようとするのです。そのような位置に合わせたのです。そこに十カ国が参加したのは、世界を代表して十数をすべて蕩減するためです。それによって、家庭を中心として世界的に新しい支派を編成することができるのです。これを連結したので、世界的な支派を編成できます。このようにして超民族的な基準で、新しい支派編成ができる基準を立てたのです。

七百七十七家庭を祝福したのは、蘇生七年、長成七年、完成七年ですべてが終わるということです。それで数十カ国の多くの人々を一緒に祝福したのです。それによって、全世界人類は誰でも天の国の家庭的出発ができる道を開いたのです。すべてが家庭的に出発することができます。

今日、一九七一年度を迎えた年頭に、私たちが必ず決意しなければならないこととは何でしょうか。私たち統一教会は、世界の核心であり、世界の中心なので、主の思想を一日も早く世界に伝播しなければならないのです。今回十カ国を中心とした基盤の上で、私たちは民族を超え、国境を越え、人種を超えて、神様の愛の世界圏を連結する責任を果たして、神様のみ旨の前に一致させることができる内容を決めなければなりません。それを標榜するためのものが、今回の七百七十七双の結婚式だというのです。これは歴史的な事件です。

七百七十七家庭とはいったい何でしょうか。これは、結婚式としては最後の結婚式だというのです。一九七〇年度に統一教会が七百七十七双の結婚式をすることによって、世界の数多くの民族が連結されるのです。このような基盤の上で七百七十七家庭を祝福することによって、どんなことが起こったのでしょうか。今日の世界の数多くの家庭を、数多くの氏族をつなげることによって、すなわち天国と連結することができる家庭をつなげることによって、すべての家庭、氏族、民族を問わず、天と関係を結ぶことができる世界的な門が開かれました。

七百七十七の門を通じて入り、すべてその道に沿って行けば、どこへ行くかといえば、天国へ行くのです。門ができたのです。これを統一教会においては一九七〇年度に行ったので、世界へ出発することができる新しい次元の最後の祝福だというのです。

世界は、統一教会の運勢に入って、だんだん動くようになります。それで、一九七〇年に初めて国際合同結婚式を行いました。それが七百七十七双です。これは地上において、世界的にすべてのものが到来しつつあることを意味します。四百三十双までは、先生が行って祝福してあげなければなりませんでした。（今回は）韓国に連れてきて、祝福をしてあげなければなりません。

初めて韓国で、全世界的に七百七十七双の国際合同結婚式を行いました。そこに十カ国の人が参加しました。このように家庭的理想を中心として、世界のいかなる国でも神様に帰っていくことができる道が完成しました。

この時を中心に、世界の運勢は統一運勢に回ってくるようになりました。

七百七十七家庭は誇ることができます。ですから一九八〇年代を越えるに当たって先頭に立ち、すべての家庭の伝統を相続して誇らなければなりません。このような位置に、どんな家庭が立つのでしょうか。それによって世界に通じるのです。七百七十七家庭は、世界の氏族的家庭を代表した家庭です。ヤコブの一族が七年路程でできなかったので、三・七路程を通じて一族ができたのと同じです。統一教会において四方に通じることができる氏族的編成が七百七十七家庭だということを知らなければなりません。数多くの国の人々が祝福を受けたという事実は、世界に通じることができる伝統を残したことになるのです。

ですから厳粛な家庭にならなければならず、夫と妻は真の夫と真の妻にならなければならず、また真の父母と真の子女になって、天のみ旨を相続することができる基準を立てるべき責任があります。それが今、三十代の基準にある皆さん、七百七十七家庭が統一教会において家庭を代表しているのではないでしょうか。

四十代では駄目で、二十代では不十分です。三十代である皆さんがそのような立場に立っているので、それにこたえられるようになった時、統一教会の歴史を世界に伝達できる一つの伝統的基盤が立てられるのです。そうすることによって皆さんは、歴史に輝く英雄になるのではありませんか。歴史に輝く世界の家庭的な先祖になるのではありませんか。

このように驚くべき歴史的背景をもったことを理解して、皆さんがそのように努力しても滅びたなら先生に抗議しなさい。絶対に滅びることはありません。

一九七〇年度に十カ国以上を中心として、七百七十七双を祝福したのです。三・七です。三掛ける七は二十一、七百七十七双は全世界を代表して、蘇生、長成、完成のことをいいます。それは、どんな家庭でも天の国に入っていくことができる自由な権限を与えるというのです。そのような数理的なことをするのです。

そのように七百七十七双を祝福したので、その次に先生も、家庭を連れて世界のどこでも回ることができるというのです。ドイツにも行くことができるし、遠くアフリカにも、どんな国にも行くことができるのです。これは、どこに行っても、み旨は成し遂げることができるということです。同じなのです。

どんな人でも先生のところに来ることができる道があるので、先生もどんな国にでも行くことができます。同じです。一九七〇年度まで七百七十七双を結婚させることによって、先生の家庭が全世界どこへでも行くことができるのです。今、先生は韓国が反対すれば、どんな国にでも先生の家族を連れていって、み旨を成し遂げることができる基盤を築いたので、世界的時代に向かうことができるのです。

七百七十七家庭は、スリーセブンなのです。「スリーセブンは世界が好むもので、蘇生・長成・完成の三段階として二十一年に該当するので、七数に三段階を加えた完璧な最高の完成数だ」と、このように考えているでしょ

う。けんかするだけけんかして、欲はそのまま心に抱き、み旨を中心としては等閑視しながら名前だけで生きようとしているのではありませんか。

七百七十七家庭は、一九七〇年十月二十一日に祝福しました。これが七百七十七家庭です。世界国家を中心として十カ国です。七百七十七家庭は、世界と連結しなければなりません。スリーセブン(three seven)です。そこには民族の区別がありません。日本人であるから、米国人であるからというものがありません。みな一つにならなければなりません。それによって世界のすべての国家が、韓国に従って天国に入っていくことができるのです。

七百七十七家庭の祝福は、一九七〇年度を中心として十月二十一日、それは三掛ける七は二十一なのです。そのようにして七数を合わせたのです。結婚式としては、世界を代表した最後の結婚式だというのです。これを中心に七〇年代を限界点として、七百七十七家庭を祝福することによって、どんな民族でも一つの結婚を通じて血統的に結ぶことができるのです。それで七百七十七家庭からは超民族的結婚時代に入っていくのです。

それで統一教会は、一つの大韓民国の民族を中心とした教会ではありません。既に七百七十七家庭を祝福することによって、統一教会には世界人類を通じて成すことができる新しい民族形成の基盤かつくられたというのです。それで七百七十七家庭は何を意味するのかといえば、世界民族形成ができる新しい超民族的時代、超氏族的時代に入っていくということです。その時から統一教会は、世界的出発をしなければならないというのです。

先生が行った道を、皆さんも行かなければなりません。先生の道は遠くて長くかかりますが、皆さんは短い蕩減条件を立てててでも同じように行かなければなりません。それは、避けることができません。皆さんが受けた七百七十七双は、何番目の祝福かといえば、先生、三家庭、三十三家庭、七十二家庭、百二十家庭、四百三十家庭、その次に世界巡回中に行った四十三家庭と七百七十七家庭です。

ですから国内的に見れば、七次祝福式で、世界的に見れば八次祝福式です。祝福式も最後です。それで七百七十七家庭です。そして日も十月二十一日です。それも三・七、二十一（三×七＝二十一です。今回が最後の峠です。これからは、私が祝福をしてあげなくてもいいのです。それで十カ国を参加させたのです。

統一教会の思想は、世界のために生きる思想です。これは、他の宗教と違います。統一教会の人たちを見れば違います。先生は、今でも世の中から非難されています。この世の人は、先生がするのを見て「統一教会の文先生という人を見れば、大層なことをする」と言います。今回、先生が世界十カ国の人々を集めて合同結婚式をしました。

もともとは七百七十七双をすると約束しましたが、実際には七百九十一双を祝福してあげました。約束はそのようにしましたが、それより多くしなければならないのです。なぜかといえば、彼らが婚約して祝福行事を行う

時、軍隊に行くとか、体の調子が悪くて参席できない人がいて数が少なくなる心配があったので、七百九十一双を祝福してあげたのです。

統一教会の原理がそのようになっているのです。七百七十七双の合同結婚式の時にも、米国人たちは、ほとんど大学院出身の修士たちでした。そのような人々が荷物をまとめて、自分の国を離れて何万里も遠い韓国に来て祝福を受けたのです。一人が来るのに費用がいくらかかるかといえば、二千ドルです。一双に四千ドルかかります。韓国のお金にすれば百三十万ウォンかかります。

そのような莫大な経費を投資しながら、彼らがなぜ韓国まで来て結婚しようとしますか。それは、米国で結婚するより韓国で結婚するほうが、より価値があるからです。もっといいというのです。お金を使ってでも何十倍も良いので、「来るな」と言っても来るのです。損をするなら、そのようにはしません。これはただ「統一思想」による原則のもとで絶対的なのです。彼らには、他のものをもってしては駄目だというのです。

先生は、統一教会の食口を中心として合同結婚式をしてあげました。そのようにする時、世界の人々が我が国に押し寄せてきました。この世でそのようなことをした人は、文先生しかいません。もし結婚させてあげた実績に従って賞をもらうなら、世界十カ国を集めて七百七十七双合同結婚式をしたということで一等賞をもらうはずです。こういう事実を知れば、度肝を抜くというのです。

今、この席には祝福を受けた七百七十七家庭がいます。彼らは、世界を代表した人たちです。それで彼らを混ぜておきました。七百七十七家庭は、まだ本当の統一教会の食口になっていない人も祝福をしてあげたので、彼らを見れば、まだらだというのです。では、彼らをなぜ混ぜておいたのか分かりますか。それは彼らを世界を代表する立場に立てるためでした。このようにすることによって、神様の無限の許しの圏をこの地球星に与えるための神様の愛なのだということを皆さんは知らなければなりません。

この七百七十七家庭には、み旨がよく分かっていない人も入っています。めちゃくちゃな状態です。けれども、ここに集まった夫人たちだけは正しい人にしなければなりません。エデンの園で女性の過ちで滅びたので、女性たちが精誠を尽くして走るようになれば、外部のほうが私たちの時と共に歩調を合わせるようになります。そのようになれば、男性はついて行かざるを得ないというのです。ついて行かないと、行く所がなくなるというのです。

統一教会で結婚すれば、四十日間は何でしょうか。それは夢も見られません。私たちの日本の祝福家庭や七百七十七家庭は五年間、一つの家に住みながらも、みんな独身生活をしたのです。それは驚くべきことです。それで青年男女の倫落問題のようなものは、統一教会でなければ手をつけることができません。この秩序を正すことができなければ、世の中はサタンの犠牲となってしまうのです。このような難問題をすべて一つにして、神様の民を立てようというのですから、それは容易なことではありません。

七百七十七双を中心として、国際結婚時代に入っていくのです。すべて混ぜるのです。そこから蘇生段階、その次は長成段階、完成段階、今回は本格的に混ぜるかもしれません。今の時代は、どんな時代ですか。結婚国際連合時代に入ったのです。

輝く朝を前にして、一九七〇年十月二十一日を期して七百七十七双が全世界、万民の前に解放の旗を持って立ち上がるということは、天宙史的な勝利基盤が蘇生するという意味があります。このように、とてつもなく驚くべきこの日が貴いということを、皆さんがどれくらい感じているかというのです。父母様の国、父母様の一族、父母様の家庭、父母様の息子、娘を中心として十カ国から集まりました。韓国と日本をはじめとする数多くの国においては、文化の違いがあります。文化の平均基準がないというのです。

七百七十七家庭は、三掛ける七は二十一、全世界を一度に合わせたのです。それが一九七〇年十月二十一日です。世界のどんな民族でも、天国に行くことができる橋を架けたのです。三掛ける七は二十一、三・七数の恨の峠を蕩減復帰する目的とは何でしょうか。二十一年路程において霊肉を中心として、あるいは男性、女性を中心としてサタンの讒訴圏を抜け出すためのものです。

今日、統一教会を中心として、家庭が抜け出すことができる完全な基盤を、十カ国を中心として築いたのが七百七十七家庭です。一九六〇年度にも成婚式、その次に信仰の三子女、その次に三十六家庭、その次に七十二家庭、その次に百二十家庭、その次に四百三十家庭、その次に七百七十七家庭、このように七回の祝福がありました。七次ですべての祝福は終わったのです。

それが終わったので、韓国のものは世界のものです。世界のものは韓国のものになります。今回先生が韓国に築いた個人復帰、家庭復帰、氏族復帰、民族復帰の基準は、国を復帰する時までは縦的に上がるのです。個人、家庭、氏族、民族、国家、このように上がっていくのです。これは逆に上がっていくのです。

七百七十七双の祝福式を挙行する時、ある親が先生を訪ねてきて「統一教会の文教組様、私の娘の名前は何々ですが、良い婿候補を選んでくださるよう心からお願いします」と言ったのです。統一教会の文先生がいつの間に、このように高い位置へ上がったのでしょうか。世の中も変わったようです。冬だと思っていたのに、いつの間にか春だというのです。生き甲斐を感じるというのです。そのようなおもしろみもなければ、どのようにして先生は生きていきますか。

七百七十七双を祝福してあげる時、祝福の資格がない人もたくさん祝福を受けました。神様の前に祝福を受ける資格を完全に備えた立場で祝福を受けた人は、何人もいなかったのです。けれども資格を備えていない人々も、今回のこの作戦に同参させることによって、その人も生き、彼らに関係する親戚もここに関係を結ぶことができる挙国的な基盤を築くことができるのです。それで、資格を備えていない人々も七百七十七双の祝福に同参させたのです。

今回七百七十七双の祝福を受けた新郎は、新婦が当然自分の家に来るだろうと思っていたでしょう。慣習によって間違いなく自分の家に来て、舅と姑に従い、兄弟と共に暮らすだろうと思ったのに、なぜか消息もなく、みな一線に派遣されたというのです。もちろん、これに副作用があることも知っています。けれども、仕方がないというのです。

私たちは、七〇年代には七千年歴史の蕩減の起源をつくらなければならず、韓国自体においては男としての威信を備えなければなりません。それで先生も家を買わなければなりません。皆さんが先生の家を買ってくれなければ、責任を果たせないことになります。それで、仕方なく七百七十七双を立てて祝福してあげたのです。

その七百七十七双を中心として先生の最高に良い家を買うという条件を立て、車も最高に良い車を買うという条件を立てました。家を買わなければならないのですが、それがどれくらい大変か、その家一つをめぐって今でも闘っています。その人たちが私たちに売ると約束したのに、国家法に引っ掛かってお金を払うこともできずに、今も待っているのです。これも蕩減復帰しなければならないようですね。

ごちそうを食べるようになれば、それがこの国の怨讐です。立派な生活ができる環境になれば、それが怨讐だというのです。今、釜山港に米国から送ってきたリンカーン車が到着しました。これはもちろん七百七十七家庭の合同結婚式の時の贈り物ですが、この車に乗るべきでしょうか。これを売ればいいでしょうが、これは歴史上に聖なる涙とともに天の名誉を懸けて送ってきたものなので、これを売った日には威信も立たないので、それを取りに行かなければならないというのです。

その車に乗れば、「統一教会の文先生が韓国で一番いい車に乗っている」という話がうわさになるでしょう。「統一教会の文先生は、お金がどこからそんなに出てきたのか」と言えば、「どこからかというと、七百七十七双が祝福を受ける時に贈り物としてくれたのだ」と言うのです。大韓民国で私がその車に乗ったとしても、それは私のお金で買ったのではなく、贈り物としてもらったものです。それが新聞に出たのです。そうでしょう。それで良い車に乗っても少しも良心の呵責を受けないで、誇りとするのです。

六　千八百家庭

一) 千八百組を祝福するようになった背景

一九七五年二月八日に、千八百双の合同結婚式を挙行しました。私たちの統一教会が個人的に現れ、家庭的に現れるに当たって、御父母様の家庭だけでなく、全世界の統一教会の教会員が、この世界の前に現れなければなりません。このような神様のみ意があるので、家庭的に勝利して一つの杭を打ち込まなければならないのです。

ですから第一次七年路程、第二次七年路程の受難の功績を基盤にして初めて、第三次七年路程の上に父母を中心として、皆さんの家庭を平面図上に横的に展開させ得る一つの攻撃戦を繰り広げたのが、二月八日の行事だったということを皆さんは知らなければなりません。

千八百家庭、これは三掛ける六は十八、三は六数の代わりの三時代をいいますが、これは六数のサタン数の三数完成数と同じなので、全人類を代表する家庭です。信じる人だけではなく、信じない人、サタン世界圏にいる未来の家庭的基盤を天と連結させることができる基礎をつくってきたのです。このような役事を今までやってきたのです。

千八百家庭、十六は四数の四倍です。また、十八は六数の三倍です。これは同じことです。四数は地の数です。その四倍は立体数です。十八はサタン数である六数の三倍です。旧約時代、新約時代、成約時代の三数を合わせて百八十数です。それで統一教会の蕩減過程では百八十家庭で、千八百家庭は世界的です。

サタンは堕落する時、家庭を中心として堕落したので、神様の主管圏に家庭をつないで、超国家的な運動を展開していくのです。七百七十七家庭、その次に千八百家庭……。千八百家庭が最後です。サタン数である六数の三倍、蘇生、長成、完成の十八数です。サタン世界において千八百家庭を先生がもったということは、氏族圏を越えたことになります。その国家基準に連結した勝利基準は、世界に連結する道の始まりです。その千八百家庭はサタン主管圏の六百数の三倍です。それを基準に家庭を立てて、サタン圏の家庭を蕩減する基準になるのが千八百家庭なのです。

神様は数理的な神様です。偶然に、どんぶり勘定式では駄目なのです。それで全世界の家庭が合わせることができる立場になって、自分たちも知らず知らずに巻き込まれていくのです。千八百家庭は三掛ける六は十八です。すべてその数なのです。六数をいつも掛けていくのです。今回韓国で六千双が結婚したのも、二千百双もすべて原理的なのです。

祝福家庭は、国際合同結婚式が伝統です。千八百まで重要視したでしょう。六数の三倍数です。三掛ける六は十八、それで千八百家庭だというのです。イエス様は百二十家庭で、再臨主は百八十家庭です。百八十家庭と百六十家庭は同じ数です。四数の倍数です。四掛ける四は十六、そしてこれは六数の三倍です。サタン数の完結数です。それで祝福家庭に氏族の百六十家庭を祝福しなさいといったでしょう。もともとは百八十家庭ですが、百六十家庭も認めたのです。

一家庭でも少ないほうを願ったので、百六十としましたが、今後は百八十家庭です。その次は八数、それで三数で増えていきます。七数、七番目が千八百家庭です。三家庭、三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭まで七数です。七数から八数、九数、十数の帰一数に帰っていくのです。十数は、祝福世界化時代へと越えていくのです。

百六十家庭は四数の四倍です。四位基台の基盤、アダム的四位基台、アダム子女の四位基台を成せなかったのが地上天国の門を開くことができなかった原因ですが、蕩減時代に「四・四節」を中心として、この四数の四倍、四倍というのはサタン理想数です。それはなぜかといえば、六数がサタン世界の占領する基盤ならば、三倍、蘇生、長成、完成、三掛ける六は十八、それで千八百家庭を祝福したのです。千八百家庭は千六百家庭に該当する

数です。サタンを全滅させることができる数なのです。

イエス時代は百二十家庭ですが、再臨時代、世界化時代は百八十家庭です。それで千八百家庭を祝福して六千双へと越えたのです。それはサタン数の六数を三倍したものです。サタンのすべてのものを踏み越えて立つ数を意味するので十八数です。

今年、千八百双を祝福したのです。本来は昨年、一九七四年にしなければならなかったのです。けれども今年の四月までは大丈夫です。一九六〇年の四月から始まったので、今年に入っても四月までは十四年圏内だというのです。ですから二月にして、十四年目にそれをしたのです。

それで統一教会の第二次七年路程の終了とともに全世界圏を中心として千八百双の祝福をしたので、完全に世界的基準に向かって基盤を築いて越えていくのです。この千八百双とは何でしょうか。六数プラス六数プラス六数で、十八数です。これに該当するのです。これは、サタン世界を制圧するという意味です。完全に制圧するというのです。私たちが世界的基盤を築いたので、今は国家を中心として思いどおりに動いて、世界を動かすことができる時代に入っていくという結論が出てくるのです。

一九七五年二月八日にあった千八百家庭の祝福、これは全世界的な事件です。全世界の新聞という新聞にはすべて載らなければなりません。全世界が知らなければなりません。それで一九七五年が歴史的な一年であることを皆さんは知らなければなりません。世界的な宣布時代に入ったのです。千八百双がここに上がってこそ、これが横的な時代に入っていくので、そのようになるのです。

千八百家庭といえば、三掛ける六は十八、三十六数（六・六・六数）は、サタン数の完結なので、どんなことがあっても世界的な時代へ越えていく新しい起源を準備しなければなりません。それで先生は、今年の初めにどんなことがあっても千八百家庭を一家庭でも越えなければならないと考えました。そのような信念をもって、「千八百家庭を立てなければならない」と言って、今回そのようなことをしてきたのです。

今、国連の加盟国家が百八十三カ国です。私たちが千八百双の結婚をしたでしょう。それと同じで、今この時、転換期において百八十の国家を転換するのです。百八十、千八百はサタン数の完成です。六数の三倍で、四数の四倍です。サタン数です。それで、本来は私たちが氏族的メシヤとして百八十家庭を復帰しなければならないのです。しかし、百六十家庭にすることができるのです。価値は同じなのです。四数の四数が理想数です。それで国連加入も十六数です。ソウル・オリンピック大会を中心として、百六十の国家が参加したのです。それで百六十番目にサタン世界の宗主国が入り（北朝鮮）、韓国は百六十一番目で出発です。蕩減すれば韓国が一番前に立っているというのです。

千八百双から信仰（霊）の息子、娘を強調しませんでした。祝福の世界時代に入ったので、家庭で解決しなければなりません。横的なものを縦的に、縦的なものを横的に展開し

なければなりません。信仰の息子、娘が自分の一代のおじいさん、お父さん、お兄さんを中心として見れば、おじいさんは孫になるのです。それではお父さんは何になるのでしょうか。お父さんは何になりますか。おじいさんが孫になれば、お父さんは息子になり、お兄さんは何になりますか。弟になるのです。

二月八日、先生が今まで一番忘れられないのがその日です。一時間半前まで相対をマッチングしていました。全く、そのような結婚式がどこにあるでしょうか。その時、十時に結婚式が始まるのに、八時半までそれをしていました。夜も眠らずにやりました。しかし、結婚することは一生を決める重要なことなので、それはでたらめにできないのです。一度失敗すればまたしてあげ、またしてあげて、そうしたのです。

七　六千家庭

一) 六千家庭は縦横の宗教圏を開いたもの

六千家庭は全世界の縦的なキリスト教徒と一般の人が、縦的なキリスト教徒と横的なカイン世界が共に連結されるものです。六千家庭を先生が連結させたのは、サタン世界が家庭的に攻撃する時代は既に過ぎ去ったことを意味します。霊的な長成基準を国家基準で成し遂げました。世界的な基準においては霊的なキリスト教が世界的な基盤になるので、世界的実体基準をキリスト教文化圏に連結するために米国に行って、全国的に復興活動をしたので行く先々で歓迎を受けました。このようにして国家基準を代表して韓国に連結しました。このように勝利して帰ってきました。

皆さんは枝です。根につながった一つの枝と同じです。あくまでも根を中心として幹に沿ってすべての枝が大きくなるのであって、自分自身で大きくなることができますか。考えてみてください。特定の概念があってはいけません。それで御父母様の家庭を中心とした伝統、その基盤の上で拡大していくのです。ですから三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、その次は七百七十七家庭、千八百家庭、六千家庭、これらは世界の拡大的条件の代表として祝福してあげたものです。

六千双、六千家庭は完全に歴史的なこの家庭の門を全世界、共産圏まで、サタン世界まで、すべての門を開いたものです。それとともに、米国を中心として神様の国と祖国創建というこの基準まで引っ張ってきて、米国と生死を懸けて決着をつけるのです。

六千家庭の祝福を終えることによって、今こそこの地上で神様の恨を解くのです。キリスト教が責任を果たせなかったことを、米国が責任を果たせなかったことを、私が背負っていったのです。統一教会を中心として、すべて成したのです。

六千家庭を中心として、監獄にいる家庭も、地獄にいる家庭もみな集まるというのです。カイン世界だけではなく、地獄天上世界、地上世界に対して門を開けてあげるのが六千数です。六千家庭が門を開けてあげるのです。すべて開けてあげたので、世界的に現れました。すべて現れたのです。天国に入っていく門がどんな人にも、地獄にいる人にも、すべて開かれたので公開するのです。

六千家庭はサタンの六数を世界化したものです。それを知っていますか。三家庭からその次に三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭、その次は六千家庭、一番迫害が多い時が六千家庭、九数を越える時です。それで六千家庭が一番苦労したのです。

先生が世界的な基準を越えなかったならば、日本全体が大変なことになっていたはずです。それで祝福家庭を中心として、今まで蕩減路程を通過してきたのです。三家庭から三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭、六千家庭、これは世界的な蕩減の道を越えるためのものでした。アダムとエバが結婚したでしょう。それで結婚の道を通じて蕩減するのです。

統一教会は、愛の世界を成すために、合同結婚式をするのです。統一教会は、人種を認めません。真の愛に白人、黒人の区別はありますか。統一教会が偉大で、統一教会の教会員が違うのです。前回、六千双の合同結婚式をする時も、私が日本の女性たちと黒人を七十双ほど結婚させました。強制的にしたのではなく、自分たちが願ってしたことなのです。そのようなことがあり得ますか。

現在、全世界的に見れば国連加盟国が百八十二カ国です。百八十三カ国圏内に入りました。これが百八十数に該当するので越えていくのです。けれども百八十家庭よりも百八十箇所の宣教本部よりも百六十のほうが数が少なく、それをみんなが願ったので百六十数にしたのです。それで統一教会では千八百家庭を中心として、六千家庭をすべて連結させたのです。それは、サタン数の完結です。六千数というのは、家庭ではサタンと関係ない数です。家庭がサタン世界の数を越えることによって、解放圏に進むというのです。

問題を起こせば、文なにがしが負けるようにはなっていないというのです。ここで六千双の合同結婚式をする時も日本から二千八百双、五千六百人が来る時、反対して大変でした。反対してみなさい！　誰が抜け出すのかというのです。すべてが反対しても、一人も抜け出さないのです。

そのようなことをなぜするのでしょうか。青年世界にこれを早く通過させなければならないというのです。今は、文先生が行く所に合同結婚式は世界的に知られているので、これから反対してみたところで意味がありません。日本も反対している途中で滑り落ちたことをみんな知っているので、もう反対できないという、そのような看板がつけられたのです。

先生は、世界史的な第一線でサタンの総攻撃を受けてきたのです。韓国の総攻勢とアジアの総攻勢をすべて受けながらこのような道を築いてきましたが、皆さんの時代はそのような時代ではありません。歓迎を受けながらするのです。

それで皆さんのホーム・チャーチでは、東西南北に散在しているその門をこれからすべて開いて、また閉まっている門を開いて、通ってもいいという環境をつくらなければならないのです。それでこそ天国になります。それが一つから二つに、二つから三つに連結して、韓国での六千家庭を中心として連結しなければなりません。

私たちが今、世界的な大会をどんなにたくさんしていますか。このごろはあまりにもたくさんするので、私に対して報告もしません。ここの六千双の合同結婚式だけ見てもそうです。小さい町内で結婚式をするにしてもけんかして大変なのに、六千双の結婚をしながら大声一つなく、整然と行ったのです。今でも本当に天の前に感謝するのです。飛行機に乗って行ったり来たりするので事故が起きることもあり得るし、車が故障して死ぬ可能性がいくらでもあるのに、すべて天が保護してくださいました。有り難いことです。

八　六千五百家庭

一) 六千五百家庭は交差祝福のケース

サタン数の三倍、旧約時代、新約時代、成約時代を代表した六千年に該当する数を蕩減して、人類歴史全体の家庭が、神様の祝福圏内にすべて蕩減して越えていく数なのです。これは七百七十七家庭、千八百家庭は七、七番目です。七数は越えていく数です。その次に六千家庭は八、六千五百双は六千七百家庭です。六千七百家庭は、人間が六数を中心として七数を合わせて清算するのです。

六数で七数をまだ越えていないので、それを蕩減するために六千五百双の祝福をしたのです。六千五百双は米国の二百双を足して六千七百双です。それを祝福することによって、これが九次、九数を越えていくのです。

皆さん、一昨年の十月三十日の六千五百双では、日本と韓国の人たちを交差祝福させました。日本人たちは韓国の男性と女性に出会い、韓国人は日本の男性と女性に出会ったのです。

アダム国家を代表した韓国人と、エバ国家を代表した日本人と交差祝福をさせた意味が大きいというのです。どのようにして一つになるのかというのです。これが国家基準で交差祝福することによって、統一的家庭を連結させることにおいて、国家的次元で越えるのです。その国家的次元を越えたので、世界的時代へ越えていくのです。それで昨年の交差祝福が重要なのです。

天が統一的運勢を迎えさせるために韓国を中心として摂理を始めたのですが、天のみ旨を受け入れることができずに、金日成主席が、サタン世界が侵入して南北が分立されたので、世界がここで問題となったのです。これが分かれたので、合わせることができる運勢を収拾しなければ本然の地に戻れないのです。

ところが昨年、先生が帰ってきて、それを連結させて開天節を中心として、アダム国家とエバ国家が交差祝福をすることによって、条件的に家庭的国家基準を越えるようになったというのです。家庭を考えなければなりません。家庭基準です。これを知らなければならないのです。

なぜ今回、日本人と韓国人を一〇〇パーセント交差祝福させたのかということを知っていますか。アダム国家とエバ国家、アダム国家は韓国で、エバ国家は日本であり、アダムとエバが個人で自分勝手に結婚して世界を失ったので、今はそのようにばらまいたことが結実として国家的基準で収めてくるのを、ひっくり返したのです。蕩減して覆し、世界的原則においてアダムが上に、エバが下になり、ここでは二世を中心として連結したこの愛の

基盤を蹂躙する者がサタン世界にはいないということを知らなければなりません。

先生は知っています。日本は、宝石で飾った美人が全裸で横になっているようなものです。何も身につけていない女性です。それを四人の男性がねらっています。三天使長と完成した一人のアダムです。その完成したアダムが権限を行使するためには「こいつら、手をつけるな！」と言って、交差祝福をさせなければならないのです。そうしなければ息子、娘をみな占領されてしまうのです。堕落は息子、娘、カインによって決まるのです。

女性一人の力では三天使長を防ぐことができません。しかし、交差祝福することによって、神様の息子が連れていくことができるようになっています。復帰されるのです。それで交差祝福こそ、日本が主人として最高の条件を得ることができる方法です。そのような喜びの条件なのです。

韓日交差祝福をした人は、日本人ではありません。アジアを越えたのです。自分たちの国を指導し得る思想をもっているという観点から見た時、韓国に来ている日本家庭は、中国もすべて開拓できなければなりません。故郷の地に派遣して世界を包容できる基盤を築こうとアダム・エバの一体圏を先生がつくっているのです。歴史はそのようになっていくのです。偉大な歴史がここから始まるのです。

この前、日本の青年男女二千五百名と、韓国の青年男女三千五百名を交差祝福しました。「きょうから君たち日本人は韓国人と結婚して、韓国人は日本人と結婚するのだ！」と言いました。その二千五百名の中に東大出身が何人いるか知っていますか。東大出身は十何人もいます。それから大学卒業者は多数で、医者だけでも約三十人になります。「みんな辞めて韓国に来るのだ」と言いました。

日本人同士で結婚した人たちと交差祝福を受けた人たちのうち、どちらが高いでしょうか。交差祝福を受けた人たちに侍らなければなりません。日本の将来の重要な責任は誰の肩にありますか。交差祝福を受けた人たちを日本の責任者に徐々に任命することが伝統的な天の観点なのです。今はそのようにしていませんが、そのように準備していなさい。米国もそうです。こういうことを公式的に初めて話しました。時が来たので話すのです。

この前、私たちが交差祝福する時、日本の久保木や何人かの幹部が信じなかったのです。しかし、一週間急がせてできたのです。何万人ですか。六千五百双なら一万人を超えます。一万人以上が日本から来なければならなかったのです。八千人、九千人が一週間の間にすべて押し寄せてきましたが、飛行機がどこにありますか。オールストップしたのです。私がみな分からないようにやりました。

日本の韓国大使館では三日間、昼夜を徹して自分の一族を動員しながら印鑑を押し続けたのです。それで日本政府と韓国政府が後押ししたという条件になったのです。六千五百双の祝福を韓国政府が後押ししたのです。

キリスト教は、怨讐とは個人だと思っていますが、違います。個人の怨讐ではありません。国の怨讐です。国の怨讐を愛さなければなりません。ですから日本を愛しなさいというのです。そうです、日本人と韓国人が出会

えば、火花が散るでしょう。今回、交差したことを知っていますか。個人で交差結婚した時には滅亡の落とし穴に落ちていきますが、むしろそのように植えられた根によって、国家的には分かれたのではなく、一つになって天国に入っていくのです。日本人と韓国人が交差祝福することによって、この国の運勢が地に根を下ろし始めるのです。

九　三万家庭

一) 三万家庭は三時代三数を代表した家庭

昨年、三万双が祝福を受けましたが、国家を超えて、地域を超えて、宗教を超えて、政治圏を超えて国際結婚をしました。考えてみてください。三万双ならば、六万人になります。どれほど多い数でしょうか。そのように多くの人たちが十日間でもなく、一日ですべて行ったのです。一つの国の人だけではありません。約百三十カ国の白人、黒人、黄色人種はいうまでもなく、すべての人種の人々が参加したのです。皮膚の色が違っても、生活方式は同じなのです。一つです。

「ため」に生きる生活文化は、全く同じだというのです。たとえ貧しく暮らしたとしても、人のために生きるのです。そのような家庭が全世界に広がっていくというのです。私たちのような人たちが世界の大部分を占めて、二十年後に一つの世界、一つの国家をつくったと考えてみなさい。そのような時が来るというのです。

一九九二年八月二十五日は、何の日ですか。三万双の結婚式です。統一教会の祝福を受けることが難しかったのです。二十年間聖別しても、祝福を受けることができずに去っていった人がいたのです。では、今の時はどうでしょうか。一週間を七年とするのです。一週間に自分が間違いなくサタンの体だと認めて、真の父母が来て血統転換させてくれると信じれば祝福してあげました。サタンが所有していた人たちです。国の主人になれない者たちです。それで所有権を転換しなければならないのです。

三万双の結婚は、最後の峠を越えていくものです。三時代、蘇生時代・長成時代・完成時代、旧約時代・新約時代・成約時代の三数を代表したのが三万双なのです。それで相対的に六数を越えるのです。三数の主導権で六数を越えるのです。第二次大戦を中心として英国、米国、フランスと、日本、ドイツ、イタリア、この全体を蕩減しなければなりません。

三万双の祝福を歴史的な一つの記念碑的事件として受け入れるべきだということを知らなければなりません。その歴史的な背景がどの程度歴史的でしょうか。これは世界史的です。三万双を終えてからは先生が祝福をしてあげなくてもかまいません。

今回の三万双の祝福は、体育オリンピック（世界文化体育大典）と共に開催され、人間社会の精神的な面と肉体的な面の均衡を保って発展させなければならないという方向性を示す意義をもっています。特に、世界百三十カ国から国籍と人種を超えて三万双の善男善女が集まった中で挙行される歴史上最大規模の合同結婚式は、二十一世紀とともに新しい歴史時代を迎える世界人類が、神様を中心としてお互いに和合することにより世界平和を

実現するという、平和の大道を見せてくれる壮挙となることでしょう。

特に、八月二十五日には世界全域から集まった約三万双が神聖な祝福を受けて、神様を中心とした新しい家庭の伝統の確立を固く誓うでしょう。家庭は国家、社会の最も基本的な単位です。社会問題の解決は、家庭問題の解決から始まります。

三万家庭というのは、蘇生、長成、完成の三数を中心としています。三数は全体を代表したものです。聖別数です。天の国と地の国を完全に開放してしまうのです。

御父母様の前にある日本、米国、ドイツはアベル圏ですが、長子権を行使することができます。この日本、米国、ドイツを中心として、これから世界的な祝福をします。九二年に三万双の世界的な祝福をしました。三数というのは完成数で、天の数を代表します。蘇生、長成、完成です。三万家庭を祝福したのは世界的です。三万双の祝福以後は統一教会の合同結婚式に対する反対がさっとなくなってしまうのです。三万双が結婚することによって、国際的に連携するようになりました。

そこには国家もなく、国境もなく、民族もなく、文化もないのです。今までの結婚は、その境界線を越えることができず、自分の国を中心として、自分の国でも自分の氏族を中心として、それも自分と関係のある氏族だけを求めて結婚しましたが、これを完全に捨てたのです。国境や民族や人種や宗教や文化をすべて捨てて、兄弟として、初めて歴史的結婚運動に参加する、このような役事が国際合同結婚式だというのです,

三家庭、三十六家庭、七十二家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百、六千家庭、六千五百家庭、その次は三万家庭です。この三万家庭は、帰一数なので世界的です。蘇生・長成・完成時代を渡っていかなければなりません。三万双とは、旧約時代、新約時代、成約時代を出発する立場です。今から世界祝福時代へと越えていくのです。

一九九二年に祝福したのが八月二十五日でしょう。三万双を一週間の間に祝福をしてあげたのです。このように見る時、この三代の先祖に、横的には五十億人類がすべて入るのです。平面的にしてあげるのです。それで一週間にみ言だけでも聞けば、その後の全体を祝福してあげることができます。祝福してあげれば、アダム家庭が愛を中心として夫婦関係を過ったことを蕩減復帰して、一度に天国へ行くことができるというのです。

先生が一九九二年八月二十五日を中心として三万双を祝福する時、皆さんの親に家庭を中心に氏族的メシヤの特権的な恵沢を与えました。それで息子、娘も同じ中心として認めるのです。ですから何も知らない人も一週間真の父母を信じて、血統的に過ったということを知り、真の父母の血統となって血統転換、所有権転換、心情圏転換を間違いなくすると誓う人には同じ立場で祝福をしてあげたのです。

今は他のものが必要ありません。旧約聖書、新約聖書をすべて捨てても真の父母と真の愛を中心にすればいいのです。真の愛を通じた、

真の愛を中心とした真の生命、真の血縁的因縁をどのように成すのかという問題が残っています。皆さんも文総裁の前に、御父母様の前に、祝福を受けなければならないのです。これは妄想ではありません。昨年、三万双を祝福するといった時、既成教会の牧師たちが「ははは！　あの空想家、気違い」と、そう言いました。

三万双を祝福してあげる時、何も知らない既成家庭を一週間の修練会に参加させて祝福してあげたのです。それでみなメシヤの位置、アダムの位置、再臨主の位置に引き上げたのです。

一九九二年八月二十五日、その日は三万双の祝福式をした日です。このようにして堕落した父母を解放して、同じ基準に引き上げたので、堕落した子孫も同じく平等な立場に立つのです。蘇生、長成、完成です。三万双の時は、一週間の修練会を受けて誓えば、みんな祝福してあげました。それは、自分の親を解放してあげたので、親と共に子孫全体を解放して横的な平等の価値の基準に立つようになったということです。この基準がこのように論理的に成り立つので、真の父母はこのように世界家庭の主体圏に立つようになるのです。

一九九二年八月二十五日を中心として三万双の祝福結婚式を誰でも同じようにしてあげました。一週間だけ「原理」を聞いて、ただ真の父母を信じるなら祝福したのです。自分が堕落した血統をもっており、真の子女ではないので、絶対的にすべてのものを真の父母にゆだねました。堕落してサタンが神様の所有権を奪っていったので、全体を神様に返しながら血統転換、所有権転換、心情圏転換をして、必ず真の御父母様の子女になると誓えばいいのです。そのようなことをしたのが三万双です。

だからといって、祝福を受けてそのまま終わるのではありません。家庭の規則を中心として兄さん、姉さんたちがしたことを相続した基盤の上に、祝福したことを忘れてはいけません。相続すれば、それを相続した先祖が管理、保管しながら愛したのと同じような心をもたなければなりません。それで過去のすべての先祖がもった同じ心情圏を受け継がなければなりません。しかし前と違って、サタン世界が解放されているのです。兄弟がみんな一つになっていけば、その境地を越えていくことは問題ありません。

三万双の祝福式をしましたが、これからは三百六十万、三億六千万も問題ではありません。三十六億も人工衛星を通じて何千箇所、何万箇所で一度に行うことができます。そのようにして全人類を祝福すればいいのです。三代の先祖がみんな解放されて祝福を受けた立場なので、その先祖の子孫と父子関係を結ぶのです。それで、上にあるものをどこへでももっていけるのです。ここにあるものをどこにでももっていって、ここにあるものもどこにでももっていくことができる平面時代になっているのです。サタンの妨害がありません。

今は一度に祝福する時代です。それで一週間過ぎれば、七数である一週間がたてば祝福してあげることができるのです。それを宣布したのが三万双の祝福の時なのです。だからといって、一週間ですべてのことを完成した

のではありません。これは今まで六数期間をかけてここまで来たものを連結したものです。ですから個人において再び六数期間をかけて、ここに来なければならないのです。それで統一教会の伝統、思想を訓練されて接ぎ木されるので、生き残ればそれでいいのです。これはすべて論理的です。でたらめではありません。

アダム・エバが結婚を間違ったので、祝福を通じて万国に統一圏を成していかなければなりません。初めて神様の名前で結婚式をするのです。三万双まで先生を中心として結婚式をしたのです。これは平面的なのです。同じ恩恵圏内にあるというのです。それでこれが水平線なので、三万双を中心として初めて一週間だけ修練を受けて絶対信仰さえもてば、みんな祝福してあげたのです。

天がサタン側を追放して世界を収拾して初めて天宙から世界、国家、民族、氏族、家庭まで基盤が築かれるのです。このように基盤を築いておくことによって天が訪ねてくるのです。訪ねてきて地上に来られる主と共に一つになって、サタンを追放した家庭の起源をつくるのです。そのような家庭を代表できる世界的時代、その時が三万双の祝福を中心として三年路程をたどる時です。

一昨年の八月二十五日を中心として三万双を祝福したのです。これは六時間かけてずーっとこのように上がってきたとしても、こちらは六時間かかるのではありません。ここでは何分かでこのようになるのです。それで一週間の修練を受けて真の父母を認めて、血統転換、所有権転換、心情圏転換をすると誓えばそれでいいのです。祝福を受けたのちに血統転換、所有権転換、心情圏転換をすれば、それは一族なのです。

それが個人を中心として、個人、家庭、氏族の三段階が一つの単位です。一つのチームです。おじいさんとお父さんと自分の三代、六人の家庭が一つのチームなのです。それを外しては駄目です。顔から口を取れば、どのようになりますか。すべて三段階になっているのです。

三万双の祝福の時には、功労がない人まで祝福してあげたのです。なぜかといえば、氏族的メシヤを送って、一族を解放させるためです。メシヤになった者たちの親が今まで統一教会に反対して、その氏族全体が統一教会に反対したのです。過激に反対したのは、むしろ統一教会に入った子供をもった親たちだったのです。その反対した親を解放してあげたのです。

交差祝福こそ、日本が主人として最高の条件を得ることができる方法です。そのような喜びの条件なのです。今回の交差祝福は何回目ですか。二回目です。今回、天下分け目の闘いをしたのです。三万双の時、日本が必死に反対したのです。サタンは日本全体で最大の攻撃をしましたが、先生はびくともしなかったのです。その内容を本当に知っている人たちならば、秋の紅葉のように染まって既に伝道されているのです。「いやー！　合同結婚、素晴らしい！」と考えるはずです。今回の三万双結婚式の八〇パーセントはＮＨＫで放送しました。

昨年の八月二十五日、三万双合同結婚式をするのに日本人たち一万七千双が来て結婚したので、日本を文総裁が食べてしまうのではないかと反対して、一年間大騒ぎしたのです。言論を総動員してつぶそうとしたのです。「今年の八月、統一教会はなくなる。解体して、流れる水のようにかけらも残らないくらいになるだろう！」と言ったのです。よく知らないのです。文総裁がそのような男ならば、このようなことは始めもしなかったでしょう。

歴史的な伝統をひっくり返さなければならないのです。「自分の肉親のおじいさん、おばあさんとお父さん、お母さんがいるのに、真の父母とは何だ」と言うのです。これが逆説的な論理なのにもかかわらず、世界の良心ある若い青年たちは餅のようにくっつくのです。それで三万双の結婚式が可能だったのです。

私が一日に三千七百何双をマッチングしたのです。これからは一日に三万双もマッチングすることができるのです。先生は、そのような頭をもっているのです。それは、普通の人にはできないのです。人生の重要な愛の問題を中心として、これを行う時です。それこそ普通の人ではありません。そのような何かがあるのです。それで統一教会の教祖をやっているのです。

今回、三万双の祝福に参加した人たちが九十人ほど集まったと聞きましたが、手を挙げなさい。みんな若いでしょう。皆さんのおかげで、日本が大騒ぎになったでしょう。三万双が祝福を受ければ、日本民族が韓国民族に隷属するようになると考える右翼を中心とした日本の一部、そして年を取った人たちがみんな集まって反対しました。言論界と一つになって四カ月間、ずっと反対してきました。

キリスト教の優秀だったという人たちが一発殴られるのです。二十四日にそのように殴られて頭が「ガン！」となったのに、二十五日に三万双の結婚式を見て、みんな「メシヤでなければ、こういうことはできない！」と言い、完全に再整備されて復帰されていくのです。

先生がお母さんの話を聞いて、息子、娘の話を聞いて、皆さんの話を聞いたならば、このようにできなかったのです。これを引っ張って越えていかなければなりません。行かなければならない道を知らないのです。今は、皆さんがどこへ行くのか分かったでしょう。誰でもみんな分かったはずです。これは簡単なことです。これから、皆さんには生きるか死ぬかということがなくなるはずですし、迫害を受けなくなるでしょう。

今回の三万双の祝福によって、整備作業がすべて終わりました。息子、娘が三万です。この三万人がみな気が違って道理が分からない人たちではないというのです。そこには学者もいて、あらゆる人たちがいるのです。それで無視できないのです。

三万双の祝福をすることによって、世の中がすべて静かになりました。この文総裁が普通の人ではないというわさが流れたでしょう。ですから、メシヤ宣布をするだけのことはあったのです。メシヤなので、救世主であるがゆえにやったのです。

海水が一年に一度、満ち潮で水面が最も高くなる日があります。ただ一日しかありません。何日もあるのではないのです。一日だけです。そのように水面が最も高くなる日があるように、今回の三万双の祝福をしたのです。エデンの園において、心情圏完成基準というのも、その海水のように一度しかないのです。その時に同参しなければなりません。それでどれほど堕落した人でも、七日修練会、三日修練会さえ受ければ、みんな祝福してあげたのです。

三万双祝福式の時は、平面上に立つことができるすべての世界人類を御父母様が責任をもって、解放の位置に立ててあげたのです。誰でも一週間の修練会を受けて血統転換と所有権転換と心情圏転換が必要な、堕落という事実を知り、祝福を通じて真の父母が歴史全体を蕩減してくれたので自分が解放される、ということを信じればいいのです。

今回、三万双祝福の時は、「三日間の教育を受けただけでも祝福に同参させなさい」と言ったのです。それは原則ではありません。しかし、この小さな条件で三万双の祝福を受けて、自分が氏族メシヤとして家庭に戻り、堕落で自分勝手に結婚した自分のお父さん・お母さんを三日間教育させるのです。それで、そのお父さん・お母さんが息子、娘の話を聞くならば祝福の位置、アダム・エバの位置に引き上げるのです。

息子、娘はカイン・アベルで、アダム・エバ、父母の立場に同参する恩恵を受けるのです。何の功労がなくても、み言を聞いたというだけでも、父母の立場に同参することができるのです。統一教会の内部だけにあげて、サタン世界、外的な世界には与えないということはできないのです。

レバレンド・ムーンが七月三日から八月二十四日まで「私が真の父母で、救世主だ！」と宣布しても、反対する人がいなかったのです。レバレンド・ムーンのみ言どおり救世主が再臨したとしても、レバレンド・ムーンのように、世界のためにこういうことができる人が一人もいないからです。

今回三万双、六万人が結婚式をしましたが、「すべて真っ赤なうそだ」と既成教会で言いふらしながら、あらゆる反対をしました。そうこうしながら、実際にやったので「おっ！」と驚いたのです。それを見て、うそをまき散らして反対してきた既成教会が落ち込んだのです。

先生は去る八月二十五日の合同結婚式には、三日間の修練会だけ受けた人たちもすべて同参させました。私たち統一教会の原理に、そのようなことがありましたか。潮が満潮になる時、これが入ってきます。エデンの園でアダム家庭を中心として、満潮になろうとしたのにすべて壊れてしまったのです。それで復帰時代に一度、満潮にならなければならないのです。今回の三万双祝福式は、歴史的な宣言です。それを中心として、すべての家庭と国家をあずかる指導者たちは、みんな文総裁に対し頭を下げなければなりません。

私は、世界のカップルを執り持つことができます。個人的に執り持つことが問題ではありません。パッと見れば分かります。皆さんは息子、娘の結婚相手を十年たっても選ぶこ

とができないのに、私は一秒で十五双まで結んであげました。そのような頭をもち、世の中を隅々まで知っているので、そのようなこともできるのです。そのように思うでしょう。三万双を祝福させてあげたからです。

結婚は本来、真の父母がさせてあげるようになっていたのです。ところが、真の父母を失ったので世界的な父母の立場でこれを収拾して、すべて接ぎ木しなければなりませんが、それをする方法は私しか知らないので、私がせざるを得ないのです。

三万双の祝福の時、写真で婚約をしました。これは驚くべきことです。サタン世界にはないのです。結婚するに当たって、絶対的なゼロの位置に立ちなさいというのです。結婚するのに絶対信仰をもった立場に立つのです。

エバは堕落することによって、絶対愛をもつことができませんでしたが、彼らは国境を越えてサタン世界にはない愛の道を探し出したのです。先生を絶対的に愛したというのです。神様をエバが絶対的に愛することができませんでしたが、絶対的に愛する立場に立ったのです。自分全体を否定する位置に立ったという事実を認めなければなりません。

三万双を祝福する時も、郭錠煥は「三万双！　六千五百双の五倍にもなります。どうしましょうか」と言ったのです。六千五百双も目を大きくして死にそうだと大騒ぎしたのに、それも十年後にするのではないのです。三年以内に片づけなければならないのです。「超宗数的に、イスラム教でも仏教でも儒教でも訪ねていって何双でもすべきだ！」と言う時、「できない」と言ったのです。目がセメントのような目になりました。セメントのような目を知っていますか。凍りついた目をセメントの目と言います。「できない」と言いましたが、達成したのです。

金日成主席が「三万双合同結婚式を本当にするのか」と好奇心をもっていました。三万双をどのように結婚させるのかというのです。「三万双は何でもない」と言ってあげました。三万双祝福式をしたなら「その写真を一度見たい」と思っているのを私は知っているのです。今回その写真を持っていって、金正日党書記と金日成主席に見せてあげました。三万双の祝福写真が大統領官邸にはありませんが、金日成主席、金正日党書記の部屋には掛けてあるのです。それはよくやったことでしょうか、間違えたことでしょうか。それで中国の門を開けて、ソ連の門を開けました。あとは北朝鮮の門だけ開ければいいのです。

本来は金日成主席と私とが北朝鮮から来た難民、それを何と言いますか。離散家族、その離散家族をみんな会わせようと約束しました。交流を約束しました。また、「三万双を北朝鮮でみんな歓迎するから連れてこい！」と言ったのです。その時は夏なのです。皆さん、松島を知っていますか。松島海水浴場、はまなすが咲く松林、無限の松林がある白い砂浜にテントをいくらでも張ることができるので、総裁が願うならば三万双をそのまま北朝鮮で歓迎！　それを政府が反対しました。

三万双合同結婚式を材料として私が「日成お兄さん、三万双を連れて北朝鮮に入っていきたいが、三十八度線を開ける自信があるか」

と言うと、「もちろんだとも、もちろん、ああ、そいつは素晴らしい！」と言ったのです。

金日成主席が「三万双を連れて北朝鮮に入ってこい」と言ったのです。それで「ホテルがないじゃないか」と言うと、「松島海水浴場が世界的に有名な所だから、その松林に数十万人くらい入ることができる、だから十人当たりテント一つ持ってくれば万事解決だ」と言ったのです。それはそのとおりなのです。そこに食べ物を運ぶのです。元山港を解放するから、船にすべて積んで運べというのです。

三万双が北朝鮮に入っていって、松島海水浴場で十人にテントを一つずつ与えようとしたのです。服を脱いで過ごすことができる季節だったのです。北朝鮮でも「文総裁が望むとおりにいたしましょう」と言ったのです。それを現政府にも通報しました。それを誰が抑えましたか。現政府が阻止したのです。それでも私は滅びませんでした。天道を行く道には光明の朝が来ますが、天道を離れれば暗黒の闇がやって来るのです。永遠の闇が訪れるのです。

今回、三万双を金日成主席がみんな招待しました。「文総裁、あなたが願うならば、今が三十八度線を開くための一番いいチャンスだ。北朝鮮で三万双をみんな受け入れます！」と言ったのです。それを大韓民国の国民は知りません。北朝鮮からそのように言ってきたのです。北朝鮮で「三万双を受け入れます！」と言ったのに、どうするつもりですか。車に五十人ずつ乗れば何台ですか。三万双だから千二百台です。五十人ずつ乗った千二百台がつながれば何キロメートルになりますか。もしそれが行われたと考えてみなさい。

このようになれば、南北統一の騒乱事件になったかならないかを考えてみなさい。これはもう過ぎ去ってしまいました。私は、誰がこれを反対したのかみな知っています。米国の情報を通じてみな知っているのです。私は過ぎ去る人ではありません。誰が何をしたのかをすべて記録してデータを出そうとするのです。

今は、統一教会を知らなければならないようになっています。統一教会を知らなければ常識のない人になります。本当なのです。統一教会を知らなければ何の価値もない人になります。これから世界に出ていきなさい。どこから来たのかと尋ねられた時、「韓国」と言えば、「三万双の祝福はどうなったのか」と言われて、そこに行けなかったなら「テレビで見ました」と言わなければなりません。そして「どうだったか」と言われた時、「壮観でした」と言い、「壮観でしたか。どんな人たちが集まりましたか」と言われれば、すべて説明しなければならないでしょう。先生もそうです。

一昨日の二十四日にもリトル・エンジェルス芸術会館でバンケット（注：晩餐会）を終えて帰ってくると、あす、祝福式なのに四百人が相手がいなくて、どこどこに集まっているというのです。それでそこに行って、一晩中、四時過ぎまで相手を決めてあげて出てくると、雨がどしゃ降りなのです。「こんな日に雨が降って地に雷が落ちるような所で、三万双を不動の姿勢で立たせて、祝福してあげ

れば、それこそ歴史的な事件になる！」と考えるので、気分がいいのです。

十　三十六万家庭

一) 三十六万家庭は世界的な背骨（脊椎）となる家庭

なぜ三十六万双に決めたのでしょうか。私たち祝福家庭の中で、一番中心となる家庭が三十六家庭です。アダム家庭、ノア家庭、ヤコブ家庭をいいますが、これは縦的基準です。この三家庭が一つにならなければなりません。それが一つになって十二数を満たすのです。これに三段階を合わせれば三十六数になります。これは歴史的なすべての先祖、人類全体を代表した先祖になるのです。人に例えると、背骨と同じです。背骨と同じで縦的な基準をいうのです。骨を中心として、肉が一つとなって、細胞が生きているのです。

堕落して神様の前から追い出されたのは、結婚を間違って追い出されたのです。ですから真の父母の名を中心として、全体、全般、全権、全能の権限をもって、解放圏を宣布したのが三十六万双の祝福だというのです。この三十六万双は、アダム圏、ノア圏、ヤコブ圏を完成したものです。アダム圏を完成して、イエス圏完成、再臨主完成を平面的に代表する数なので、三十六万双が結婚しなければならないということを皆さんは知らなければなりません。

三十六万双が問題ではありません。三百六十万双、三千六百万双ができる時代に入ったというのです。次が三億六千万双でしょう。それをすべて成せば、地上天国が目の前に訪れるのです。

イスラエル民族は、四十年の荒野路程が過ぎて、七年路程で国を建てる伝統を立てられずに敗亡の国となりましたが、私たちは、建国理念、その国を建てる伝統を立てなければなりません。今、四十年路程が過ぎ去る時なのです。過ぎ去ったので、この七年路程中にすべての建国思想と統一的世界、平和の理念に満ちた国民に結束させなければなりません。それで先輩となる一世と二世がカイン・アベルとして一つになるべきなのに、一世が失敗したので、荒野で倒れる危険性があるというのです。

これをどのようにするのでしょうか。祝福を早く行って救ってあげようというのが三十六万双の祝福です。そこには多くの既成家庭が入るのです。多くの既成家庭が因縁を結びました。統一教会に反対した人たちは、怨讐です。既成家庭を祝福してあげたのが三十六万双です。一世に該当する人は、腐ってなくなる人たちです。すべて鷲の餌になるはずなのに、死ぬはずなのに生かしてあげようというのです。皆さんの息子、娘、二世がアベルとなり、一世を救ってあげるのです。それで自分の息子を父母のように絶対服従、絶対信仰、絶対愛で接しなければならないのです。このような基準があるので復帰していくのです。

三万双の祝福以後には、統一教会合同結婚式の反対がさっとなくなるというのです。それ以後、三年で三十六万双の祝福をするのです。三十六数というのは、アダム家庭、ノア家庭、ヤコブ家庭までの三十六家庭をいうの

です。それで、これは先祖の数です。ですから三十六万双の祝福は、世界的な全体の背筋のような、先祖のような祝福になるのです。これは、世界的に長成級に該当するのです。

この結婚式をすれば、どうなるでしょうか。今、全世界で家庭が破壊されています。これを清算するのが問題です。混乱したこの家庭を、どのように収拾するかという問題で世界が病んでいるのに、統一教会が三十六万双の青年男女を中心として新しい家庭を編成し、その家庭が理想的に、幸せに暮らすようになる時には、世界中の破壊された家庭がここに関心をもつようになるのです。これは世界的な事件になるのです。

このような三十六万双の祝福をする時、「この結婚は素晴らしい」とのうわさが世界的に流れて、一つの国で三万六千双ずつすればどのくらいになりますか。ある国は、五万双までするということです。考えてみなさい。

一九九五年八月二十五日には、全世界七十二万人、三十六万双の善男善女が創造本然の理想家庭として、神様と真の御父母様から祝福を受けました。これで、神様の真の愛によって、夫婦が初めて理想家庭に向けた真の家庭のモデルを確立することができます。

今や三十六万双を行ってサタン世界が倒れたので、皆さんの努力いかんによっては何千万双もできる時代に入りました。それで私が心配して祈祷しなくても、ほうっておいてもその数は越えるのです。間違いありません。私は、予想数字が何千なのかを既に考えています。ですから自分の責任を完成しなさいというのです。自分の責任！

三十六万双というのは歴史になかったことです。三万双から公開的祝福を世界的にしたのです。そこには、国家の第二人者まで参加しました。大臣クラス以上が入っているのです。今回も、大統領たちもみんな出席したのです。世界の峠を越えなければなりません。そして三万双から三十六万双を三年で行ったので、三数を越えていくのです。

現在の統一教会員、皆さんすべてが出ていって、ありとあらゆる理由を挙げながらそれを可能だと信じていましたか。それを知って信じたのは、神様と先生しかいませんでした。けれども私が責任をもって祝福をしてあげました。霊魂のために祝福をしてあげたのです。蘇生家庭圏の世界版図上の三万双を基盤として、長成圏の三十六万双を中心として、三十六万双は三十六家庭を世界版図上で越えていくのです。先祖が間違った峠を越えていくのです。

今回、私が三十六万双を祝福したのは、南米からアラスカに通いながら、荒れ地の開拓の王子のように、失ったものをすべて収拾しなければならない責任があるからです。収拾して帰ってこなければなりません。これを収拾すれば三十六万双が峠を越えるのです。神様の愛があるので、神様は内的中心として、私は外的中心としてこれを整えるのです。このような理由で三十六万双をするようになりました。

先生は、かかしではありません。これは初めて話すことです。私が数多くの人を組んであげました。あらかじめ決めておいてすると言われたり、狂人だとうわさされました。三十六万双を率いて祝福してあげた記録を残したので、「その人が何の調和だ」と言われても信じることができるので、事実を話すのです。今までは、話しませんでした。今回、初めて話すのです。先生の手が動くのです。手が動くのです。誰も知りません。写真に、てきぱきと手が動くのです。

三十六万双の祝福のために血の汗を流して、八月二十五日が来ることがどれくらい恐ろしかったか分かりません。私はワシントン大会、それ以上の気持ちでした。天の前に宣言した威信と体面がここですべて壊れるか、跳躍するかなのです。深刻でした。神様が加護してくださり、先生を愛してくださり、保護してくださったのです。その孤独で悲惨な文なにがしを同情してくださる神様がいらっしゃったので、誰も考えもしなかったのに、それを超えて達成したのです。

三万双から三十六万双は、十二倍の数です。それで三十六万双は十倍で、すべて根を下ろしました。鐘を打つ音が地の果てまで鳴り響きました。また今の世の中はエイズとかフリーセックスによって、毒蛇の口に手を入れるような危険な時代です。美男子を求める女性はエイズにかかり、美人を求める男性はすべてエイズにかかるようになっています。これは生きて地獄に直行するようなものです。これを守る道がありません。純潔を守らなければならないのです。

一九九二年が過ぎて、三年後の九五年に三十六万双の祝福をしたのです。三万双から、国際的水準の三万双から祝福を同じ位置でしてあげるのです。カイン・アベルに同じ位置の恩恵を与えるのです。一週間だけみ言を聞いて、絶対信仰をもって真の父母に仕え、絶対愛で真の父母を愛して、サタン世界の知恵ではなく、無知でもなく、真の父母の知恵でみ旨の道を行くと決心すればいいのです。一週間のみ言を聞いて決心して誓えば祝福をしてあげたのです。同じ位置に立ててあげるというのです。

今まで多くの祝福をしてきて、一九九二年には三万双の祝福が行われたのです。なぜ三万双でしょうか。これは国際的です。一九五六年に、父母を中心として世界的な祝福ができる世界時代を失ったのですが、一九九二年、四十年ぶりに世界的祝福時代に入ったので三万双の祝福が行われたのです。これは世界的な時代の蘇生です。その三年後の昨年には三十六万双でした。

三万双も祝福して、「三年後に三十六万双を祝福する」と言うと、「できる」と言う人は一人もいませんでした。一人も信じませんでした。でも、それが終わりました、終わりませんでしたか。世の中にそのようなことをする人はいないのです。誰もこういうことをする人はいません。こういうことをする国もありません。これが記録的です。サタン世界の家庭全体を踏んで上がっていったのです。長成的基準の三十六万双を勝利したので、サタン世界の国を踏んで上がっていくのです。これで残ったのは三百六十万双です。これは

全権時代です。祝福全権時代に入っていくのです。

今回祝福を受けた三十六万双の中には、イスラム教信者、仏教信者、儒教信者、超宗教的信者が祝福を受けようと参加したのです。キリスト教は、祝福をすべて奪われたのです。天の国の皇族圏になることができるキリスト教文化圏の体裁がなくなったのです。これも私が救ってあげなければ、すべて地獄にけり入れられるでしょう。

長子権時代、父母権まで来たので命令どおりに動かなければ引っ掛かるのです。自分の先祖が来て、処理してくれるのです。天使世界も降りてきて処理するのです。下手をすると先祖が来てあらゆることをします。統一教会に行けと命令をします。今回、全世界の宗教団長がそのような命令に、天の特命だと命令するので逆らえません。宗教団長に対して「祝福しろ、息子よ！」、こんな夢のようなことが可能です。三十六万双だから三百六十万双は問題ありますか。問題ありません。可能な時代に入ったということは驚くべき事実です。そのようなことをする統一教会は、どれくらい有名ですか。どれくらい素晴らしいですか！　どれくらい誇らしいですか！　どれくらい気分が良いですか！

三十六万双の祝福を六カ月間ですべて解決しました。第三世界にいるこの人たちは、信仰生活に命を懸けてきました。おなかをいっぱいにして、おなかをさすってげっぷをしながら来たのではなく、飢えて死にそうになりながら息子、娘と生き別れになる、そのような死の場に送りながら神様を信じてきた、徹した信仰基盤が残っているということを私は知っていました。

今回、三十六万双祝福式をしましたが、三十六万双は何人ですか。七十二万人を数えれば何日かかりますか。一生かかるでしょう。それが人間の力でできますか、できないですか。先生は、六カ月間でやりました。三年ではありません。先生は、どれくらい深刻だったか分かりません。それで霊界を動員したのです。動員してアフリカへ……。ここ北半球は反対です。ここが明るければあちらは暗く、あちらが暗ければここは明るいのです。今はあちらが明るいのです。神様は公平だというのです。

今回の三十六万双合同結婚式をする時、日本ではこれが失敗するといって韓国のキリスト教と組んで、発表するや否や「やっつけよう！」と万全の準備をしていたのです。このように日本の政府から何からすべてでもって片づけようとしたのです。ところが夢のような話が起こったというのです。ＮＨＫが実況放送をしたのです。三十六万双がどのようになったと実況放送したので、反対しようとして来た約百六十人の言論人の首が縮み上がりました。ＮＨＫが発表してしまったのです。

自分たちが勝手に撮って発表し、混乱を起こそうとしたのにＮＨＫが発表したのです。日本の言論界を代表した、それも先進国家の名があるので発表しなければ大変になるのです。世界的見識から脱落するということを知っているので正式発表して、残っていた反対しようとした者が完全にさっとなくなってしまいました。そうするや否やブッシュ元大統領が来て、掃き捨ててしまったのです。

真なる家庭と理想家庭を実現しようというのです。神様のみ旨が願う理想家庭を実現しようというのに、息子、娘の理想家庭を願わないお父さん、お母さんがどこにいますか。願っても不可能だったというのです。夢のような話です。政治力をもってしても駄目で、経済力をもってしても駄目で、外交能力あるいは軍事力をもってしても駄目なのです。こういう時代を越えることができるのは三十六万双の祝福です。

真の父母がこの地上に来て、根本を明かさなければ霊界に行って問題になります。これを全世界の町々、村々に伝えることで霊界と地上が完全に一つになるのです。それで今回、三十六万双というのは意味が大きいのです。四十年たってお母さんを中心として女性解放ですが、それが母の出現です。女性解放とともに三万双を祝福したのです。祝福の基準で三万双をしたのは、世界的な母とカイン・アベルを中心として新しい祝福基盤を世界で成立させるためです。

それが蘇生ならば、これは長成というのです。二番目なので三十六万双を中心として天が摂理的ペースで合わせたのが、家庭問題です。今、完全に地獄化されてしまったのです。いくら先進国家が自慢しても、家庭問題を中心としては頭を下げなければならないというのです。完全に破綻させられました。手をつけることができないのです。経済力、軍事力、政治力をもってしても手をつけることができないのです。

お母さんがエバの責任を果たせなかったことを解放してあげることで、初めて女性解放運動が行われるのです。三年圏内にあって、女性解放を通じて国を探し出さなければならないのです。国を探す時代に入ったので、結婚式をするようになりました。サタン圏内で三十六万双家庭を探し出したことでサタン世界は崩れるのです。これから世の中の家庭は完全に飛んでいくようになっています。こういうことが行われるようになって、これが大きな主流の流れになり、文総裁の家庭理想は人類を解放して平和の世界へ行く近道だということを、みんなが知るようになったので反対がありません。

これから反対すれば「よく聞け、こいつ！文総裁がしていることとは何か。世界的に青年男女を組んで三十六万双祝福式をしたのを知らないのか。お前は何と思ってそんなに反対するのか。ほうり出せ！」と、王でも誰でも釘を打たなければならないのです。町内隅々まで行って、お父さん、お母さんを降参させる時が来たのです。父母権復帰です。分かりましたか。

神様が文先生をつかんで離さないのです。こういうすべてのものを内外で実践するのです。教えようとするだけではありません。すべて実践して教えるのです。三十六万双もそうです。三十六万双もできるとした上で始めたのです。今度の三百六十万双もできるという、その上で命令するのです。そのまま先生のみ旨を受け入れれば、できるようになっています。

三十六万双をしたので、今は原理結果主管圏を越えたのです。皆さんは知らなければなりません。統一教会は、原理結果主管圏内の

長子権復帰のための戦いを毎日のようにしている所です。それで世界平和統一なのです。「世界平和統一家庭連合」は、原理結果主管圏を越えて、直接主管圏と一つになるのです。先生と一つとなっているのです。それで先生のおしりをつかんで絶対に一つになれば、結果主管圏は分立ではなく統一されて、勝利の覇権者として先生についていくようになります。これが宗教を中心として見た時、「世界平和統一家庭連合」だということを知らなければなりません。

三十六万双の祝福というのは、外的と内的に王権国家基準でサタン世界を踏み越えたということです。エバならばエバとして、妻ならば妻としての勝利の覇権をもって、堂々と国家を越えて天国に行くことができる責任分担を完遂したのです。直接主管圏の神様の血統を直接伝授することができる世界へ越えていくのです。

三万双の時も、郭錠煥には見込みがなかったでしょう。できるだろかできないだろか、と思ったでしょう。三十六万双、これは夢の国で占うのです。夢の中で占って当てることができますか。これは想像もできないことです。しかし私は、「三十六万双は既にできた」と言ったのです。ですから神様が「OK」なさったのです。答えを得て始まったのです。ですから毎日一瞬にも、三年間、夜になっても、どこに行ってもそれに焦点を合わせながら、そこに中心を置いて精誠を込めたのです。

私の精誠は、五十億人類の精誠に負けないというのです。それを誰も知りません。お母様も知りません。神様と私だけが知っていることです。完全な主体は、完全な対象を成すのです。完全な対象の信念は、完全な実体の信念として神様が成功させなければならない責任があるのです。どうですか。素晴らしいでしょう。その信念どおりにできました。三百六十万双はどうですか。三万双から三十六万双をすることよりも簡単です。世の中で文総裁を夜も昼も呼ぶ人が多くなっています。お母様のお父さん・お母さんと、先生のお父さん・お母さんを、歴史の数千万代の先祖のすべてを許して、復活できる因縁を地上で組んであげました。

今までは、そのままほっておきました。私が直接管理できる、長成期完成級の峠を越えることができなかったので、完成した父母として処理できません。干渉しないのです。今は時を越えました。四十年の峠を越えて、三十六万双を突破したというのです。三万双から始まって蘇生、長成期を越えたということは、サタン世界の誰も統一教会を抑える人がいないということです。その峠を越えたのです。反対しても越えていくことができるのです。

潮水は六時間ごとに入ってきますが、水平になる時があるのです。今そのような時になったので、今回の祝福も一週間の教育を受けて血統復帰、所有権復帰、心情圏復帰をすると決意した人、真の父母に接ぎ木して新しい人になるという人は祝福してあげたのです。しかし、いつもそうではありません。水平になる時は、少しの間なのです。そのような時が来たので、三十六万双も、なんの功労のない人を先生の特権で祝福してあげたのです。

世界的蘇生が三万双です。世界的長成が三十六万双です。これが第二次です。第二次の時に堕落したので、第二次の時に霊界と肉界を、家庭を中心として結ぶのです。先生の父母と先生のお兄さんをこのように結んでおくことで、家庭的にお母さん、お兄さん、息子、娘として、これが三位基台になるのです。それだけでなく、アダム家庭から出発してお母さんの家庭を祝福してあげて、その息子、娘を結ぶのです。これを三時代を経て初めて、真の父母を中心として先生の息子、娘と皆さんの家庭がカイン・アベルで縛られるのです。

それで今回の三十六万双を祝福する前に、その前日の明け方三時にその祝福式をしてあげたのです。真の御父母様の両親です。このように難しいのです。だからといって、本然的アダム・エバの理想的祝福の位置ではありません。王権が残っています。国がありません。国です！　今は、すべて終わりました。

忠母様の祝福も同じです。大母様の祝福も霊界に行っている人を祝福してあげたのです。大兄様も同じなのです。その準備です。それが三十六万双をする前、明け方三時にそのようなことをすべて準備したのです。皆さんは知らないでしょうが、そのように複雑なのです。それをすべて収拾して、旗を前面に立てたそこに、サタンと神様と霊界と肉界が相反することがない道を切り開くのです。それが蕩減復帰の道です。

十一　三百六十万（三千六百万）家庭

一) 三百六十万家庭祝福で解放時代を迎えて

真の父母が出てこなかったので、今までこの地を離れた人たちも、真の御父母様が来て、祝福を受けて共に平面上で生きることができる位置に上がってくるのです。そのような歴史的な解放圏を代表したのが三百六十万双の祝福だというのです。三百六十万双を中心として、今年すべて集まるのです。

三百六十万双の祝福、これは蘇生、長成、完成の完成です。三万双から三十六万双を経て、完成段階を成すのです。これを水位で例えると、水が六時間かけて満ちてきてたまり、十二時間で一回ずつ引いていくとすると、六時間前にたまった水も、六時間後にたまった水も同じ水位に立つのです。まず入ってきたものを押し出して入れば、かえって新しく入ってきたものが先になるというのです。だから平準化時代に入ったのです。

それでカイン・アベルを中心として、「君が正しくて私が間違っている」と言うことができる条件を立てられない時代に入ったというのです。平準化時代になったので、一律にすべて祝福できるのです。こういう時代に入ったのです。それで三百六十万双だけ越えればいいのです。完全に越えていくのです。

今は、世界がすべて変わって、私たちの時が来たので世界的に「真の父母を誇り、愛することは三百六十万双祝福完成」だというのです。世界化祝福時代が来たというのです。三百六十万双を祝福するようになれば、小学生たちが尋ねるのです。「先生！　統一教会の文先生がする三百六十万双祝福とうちのお父さん、お母さんがしたように一双一双する結婚とどちらが本当ですか。世界のすべての

国民と、すべての国家の風習、伝統を越えて統一的な立場で家庭をつくることができる、こういうことをしています。その結婚式と、私たちの結婚式と、どちらが本当ですか。統一教会に行って結婚しなければなりませんか。今までの方法で結婚しなければなりませんか」と尋ねるならば、先生は何と答えるのかというのです。

三百六十万双が祝福家庭の世界解放圏を成立させるという内容があるということを知っているでしょう。そこに殺人者や強盗がいないですか。がらくたのような人がいないでしょうか。盗賊、詐欺師が大勢いるのです。それを悔い改めるなら、どれくらいかかりますか。何千万年の罪を負っているので、その罪を何千万年の何倍悔い改めても許されないのです。その罪を許すのが真の愛のパワーです。真の愛の力をもっていると、偽りの愛の力がどんなに強くても、自動的にすべて流れてしまうのです。

三百六十万双をすれば統一天下がなされるのに、統一天下は何を中心として回るのでしょうか。これが錨なのです。錨だというのです。地上世界の悪魔の主管下において習慣化されて、汚されているものを清算できる錨だというのです。ここにロープを結んで、皆さんを押し出すのに錨のロープが切れてはならないのです。それが皆さんの家庭とならなければならず、皆さんの一族にならなければいけないのです。切れるかもしれないと思って一族を縛り、国家的なメシヤをみんな縛ってあげるのです。

百六十家庭は、誰のためにしましたか。自分の一族のためです。ここの黄氏ならば、黄氏の先祖から今までの家庭の責任を負うのです。真の父母がそうではありませんか。アダムから今までのすべての家庭の責任を負いました。それが世界版図になったので家庭を越えて、国家を越えて、世界まで越えて、それを解放して、すべて収拾したような価値を中心として三百六十万双を祝福するのです。そこには国境もなく、宗教とか風習とか文化とか、そのようなものがないのです。同じです。平面的に全世界の村ごとに同じ家庭を配置したので、神様が求め、堕落していないアダムの本然的家庭基準を設けておいたのです。

統一教会で、真の父母の誇りと愛は三百六十万双完成をすることですが、それは韓国のためだけではありません。南北統一基準で東西に分立された西洋の文明が今戦い、南と北が貧富の差で戦う、そのすべてのものがかかわっているというのです。それだけに三百六十万双で、韓国で記録を破って、北朝鮮の前に水が流れるように、天運を動かさなければならないことを知らなければなりません。

家庭とは、そのように恐ろしくて怖いのです。ですから「家庭盟誓」の内容は、天宙的な大宣言だということを忘れてはいけません。昨年から御父母様が講演する講演文の内容は、家庭をもつべきだというものです。これは鉄則だというのです。霊界解放の祝福式をしなければならない時が迫っているのです。三百六十万双が終われば、霊界祝福式をするのです。相手が霊界に行けば、呼び出して組んであげることができる時代に入っていくのです。ですから地獄世界まで解放されるのです。

アダム家庭の体制、イエス家庭の体制、再臨主家庭の体制が、すべて違うというのです。イエス様は、ローマを越えて、世界的段階を越えて、天を救うことができませんでした。統一教会は、今やそのような位置を越えたというのです。それで王権時代を叫んでいるのです。今回の三百六十万双の祝福さえ終われば、霊界の祝福が行われます。

これから三百六十万双が終わった日には、興進君と大母様を使って先生の祝福を代わりにさせようというのです。祝福してあげるのです。それでは自分が愛する人、統一教会を中心として独身祝福を受けた人があの世に行って、昔の自分の夫と息子、娘を探して再編成できる時代が来たというのです。その時がいつ来るか分からないので独身祝福をしてきました。

十一月二十九日の三百六十万双は、天と地が接する時です。縦的世界と横的世界が接する時です。それでアダム家庭で堕落せず、全人類が堕落しないで、横的世界がみな祝福の日を待っている時なのです。エデンの園でアダム・エバが家庭完成を成功させたのです。引っ張ってきて、強制的に結婚させてもサタンは反対しません。たとえ強制的に祝福を受けさせても、祝福が終われば永遠に、深く父母様に感謝するはずです。宇宙の価値を相続する代表的家庭が立ったのです。

再臨主は、何をもってくるのでしょうか。神様の愛を中心とした血統の主人として来るのです。その血統によって新しい子孫を残すようになるのです。それでアダム家庭で完成したように完成された家庭となれば、その家庭は、氏族完成と国家完成の根本になるのです。それがそのまま世界的に展開しながら三万双、三十六万双、三百六十万双の祝福につながったのです。このように地上から蘇生・長成・完成が成されたのです。これは平面的です。

今からは、何の問題もありません。とても簡単になるのです。三百六十万双をすることよりも簡単です。神様の全体、全般、全権、全能の時代に入っていくのです。真の愛を中心として家庭を祝福するのに、妨げになるものは何もありません。なぜそうなのでしょうか。世界で最も難しい問題とは、青年男女の倫落問題と家庭崩壊の問題です。神様は、エデンの園で干渉できなかった基準があるので、今でも手をつけることができません。サタンも家庭を引っ張っていって、終わりの日になれば、枝まですべて枯らせてしまうのです。

三百六十万双を超えて、すべて完成させるのです。それで三千六百万双です。三万双から三十六万双、三百六十万双、三千六百万双、三億六千万双、その次はいくつですか。三十六億です。六回すればすべて終わります。六回もしなくていいのです。三百六十万双をするようになれば、結婚する人は「なぜあのように世界を騒がして結婚したのか」と知られるようになるのです。

そう、先生は、祝福がどれくらい価値があるのかということを知っている人です。自分たちは知りません。無限の価値圏を与えたのです。今は、文総裁がどんな話をしても、すべて信じるようになったのです。「三十六万双をする」と言った時、「あれは狂った人だ。統一教会は滅びる」と言ったのです。「統一

教会は滅びる」と言っているところに、「三百六十万双をする」と言うので、「ああ、ついに滅びたな！」と言うのです。「統一教会が三年ももたずに滅びるようにしてください。二年間ももたないようにしてください」と既成教会は祈ったのです。

今年も、もう八月になって三分の二が過ぎました。今年の標語は、三百六十万双祝福完遂です。それで人の妻を盗んで、息子、娘を盗んだと反対しました。祝福したのは、三家庭から三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭、四百三十家庭、七百七十七家庭、千八百家庭、六千家庭、六千五百家庭です。九番目が六千五百家庭です。次は十回目で、三万双をしました。十一番目は、三十六万双です。十二番目は、三百六十万双です。三百六十万双をして蘇生、長成、完成と上がってきたのです。すべて上がってきたのです。

上がったので世界中が知るのです。世界に知れわたると同時に、家庭問題が世界で一番大きい問題となります。それを収拾する道がありません。政治の力、経済の力、宗教の力、どんな力でもこれを収拾できません。

神様と真の父母に仕えて聖餐を食べることを私たちは、聖日だけしていたというのです。「七・一節」、全体、全権時代、三百六十万双の家庭によって世界理想に入っていくので、嘆息していた万物が嘆息圏を抜け出して、月曜日から一週間、私たちが生活しながら食べて寝ることすべて、神様と真の父母に仕えて生活する侍義時代に入っていくのです。その準備です。

外形的には、統一教会がキリスト教についていったかのように見えるかもしれませんが、内的には、どれだけ闘争歴史を繰り広げたか分からないのです。サタンを分立させて、分別するための闘争をしてきたというのです。そうして、人類を再度神様の懐に抱くことができるようにするための救援の道を、個人から家庭……。八段階を経て、全世界の民族が祝福家庭を中心として、真の父母の祝福家庭を中心として、世界水準を越えることができるのが三百六十万双の祝福です。それで、今は三千六百万双です。これは簡単です。一番難しいのは三百六十万双です。四十年の峠を経て失った旧約圏と新約圏を探して出てくるのです。長子権と父母権、王権を失ったので、すべてその過程も経なくてはなりません。それで先生が長子の責任を果たさなければならないのです。

三百六十万双の祝福は、祝福において最高の山です。山とすれば、エベレスト山と同じです。今それを越えていくのです。これが一番難しい峠です。それを越えて三万双蘇生から、三十六万双長成、三百六十万双完成を成して三千六百万双……。すべて三十六数なのに三万双が出てきました。なぜ三数でなければならないのでしょうか。三数というのは過程的な数字です。どんな時でも転換期には三面を広げていくのです。それで三万六千双でなく三万双をしたのです。三数がいつも分別期間になっているので、三万双を中心として三十六万双、三百六十万双と、頂上に上がるのです。それが一番難しいのです。これを全世界が注目しているというのです。

すべての宗教圏で、「統一教会が三十六万双をして、三百六十万双をするという。三十

六万双は簡単かもしれないが、三百六十万双は可能だろうか」と言うのです。一年半か、一年八カ月か、何カ月かかるか、それを誰も信じなかったのです。けれども三百六十万双を、七月十五日を期して、すべて越えました。今日まで見れば、二千五百万双を越えようとするのです。きのうか、おといまでで二千五百万双になりました。二千四百五十七万、四捨五入すれば繰り上がるので二千五百万を越えたのです。

では三百六十万双祝福で終わるのでしょうか。三百六十万双と三千六百万双を一度に勝利して、峠を一度に越えることができるというのです。これをみ旨から見れば、蘇生・長成がサタン圏に入っており、完成基準が残っているので、蘇生・長成圏のサタンを中心として分立の歴史をなしてきたのです。もし三百六十万双と三千六百万双をすれば、世界は驚嘆するのです。

三百六十万双さえ越えれば、すべての解放圏の世界へ越えていくのです。それで「真の御父母様の誇りと愛は三百六十万双祝福完遂」なのです。今、先生を中心として神様を愛して誇った、そのすべてのものを成したように、先生を誇り、愛する基準を立てて三百六十万双を越えれば、すべての解放圏の世界へ越えていくというのです。祝福ということを説明しなくても、「どこに行け」と言わなくても、文総裁の祝福理念は、世界を解放できることを万民は知っているし、聞かなければならなくなっているのです。三百六十万双が、耳にたこができるように毎日ラッパを吹くのです。

三百六十万双は、皆さんに必要ですか。その必要はないのです。二天使長の家庭を消化して、アダム家庭に出してこそサタン世界の家庭的痕跡とか、息子、娘がいなくなり、サタンが永遠に服従してサタン分立が行われるというのです。それでサタンは、どうやっても反対するのです。それを縛ったのが一九九二年の三万双の祝福です。初めて世界が縦的に上がるのです。長成は三十六万双で、三百六十万双は完成で最後です。

それで地上に三六〇度をすべて開放して、誰でも祝福を受けることができるようにしたように、これが連結されれば、天上世界にいる人たちを祝福できる門が開くというのです。それでこの三百六十万双を祝福するには興進君が先生の代わりに、イエス様が祝福できない霊界のすべての悲しい理由……。今まで誰も天国に入っていないのです。ところが興進君が先生の代わりに祝福をしてあげるので、霊界にいる天使長の子孫がアダム家庭の弟の位置に立って、一列で真の父母のあとに従って天国に行くというのです。蕩減復帰です。

今回三百六十万双をすれば、どのようなことが起こるかといえば、統一教会で結婚式をする必要はありません。宗教がなくなるのです。文総裁が言うならば、今私が演説する内容、説教する内容は、宗教は体を主管するために生じたということです。堕落したので生じたのです。それで、すべて宗教がなくなります。何をしなければならないでしょうか。神様に仕えて生活する家庭、国だけをつくればいいのです。それが創造理想です。

世の中の終わりの日には神様も手をつけることができず、サタンもすべて寂寞たる山川、絶壁にぶつかっているのです。サタンが見た時、右側、左側を振り返ると、レバレンド・ムーンがしりを打ちながら家庭をすべて奪ってきているのです。今は三百六十万双ですが、三億六千万双を祝福して、家庭をすべてひっくり返すのです。これからは行く所がありません。

先生の心と同じならば、それも二倍を足すのです。問題ではないと見るのです。これで世の中が驚嘆するでしょう。三百六十万双も未完成だと、指さしてあざ笑った怨讐たちが待っているという事実を知らなければいけません。火を消しては駄目です。腰のベルトを緩め、服を脱ぎ捨てて寝ては駄目です。その日を先生は願ってきました。先生のような心をもってみなさい。行動の終着に向かって、あらゆるけんかをせざるを得ません。自覚的な自分自身をもたなければなりません。神様の代わりに審判主の行為を拡大させようとしているということを、理解して決意しなければなりません。

七月十五日の前、三百六十万双完了を宣布する前までは、本当に心が逼迫していました。アルゼンチンでは何人しましたか。何百だけしかできなかったでしょう。五百人もできなかったのです。ですから大変です。ところが天が役事をしたのです。八月に入って、私たちが天地父母天宙安息圏を宣布したその日は、何日ですか。八月九日です。そのような時がまた来るというのです。霊界の門が開き、この地上に全く想像できない事件が起こることを知っているのです。ですから七月十五日に「三百六十万双完了」を宣布したのです。

二) 三百六十万双が三千六百万双に

今回は短い準備期間にもかかわらず、全世界百八十五カ国で三百六十万双を目標にした当初の計画を三千六百万双も超えた三千九百六十万双が人種と宗教を超えて、真の家庭のために祝福結婚儀式に同参しました。これは、その趣旨や規模で見ても「人間が動機となった行事だ」と言うことができません。神様のみ旨が主な動機となって成し遂げた、摂理的な成就であるというのです。

三千六百万双が終わりましたか、終わりませんでしたか。「三百六十万双もできない」と言ったのに三千六百万双を成したので、十倍を超えました。四千万双を超えました。どれくらい統一教会が素晴らしいですか！　誰がこのようにしましたか。三億六千万双は、六カ月間あればできるはずだと先生は信じています。六カ月あればできるのに、皆さんが信じないのでできないというのです。三億六千万双は、これから新たに六カ月間あればできます。皆さんが先生のようになれば、十分にできるのです。皆さんがどれくらいしなければならないかが心配です。

きょう、この席に世界言論人を代表して参加した言論人の皆さんに、レバレンド・ムーンが伝えたい最も重要なメッセージです。今、ワシントン市内一円で開催されている第三回「世界文化体育大典」のすべての行事と、二十九日のＲＦＫスタジアムと、全世界で挙行される国際合同祝福結婚式行事は、当初三百

六十万双が参加する予定でした。ところが驚くべきことに、当初の目標の十倍を超え、三千六百万双以外にも数百万双が参加するようになりました。このような汎人類的祝祭こそ、未来世界のための家庭価値を守って高揚させ、人類が決断を促す荘厳な出発基台となるはずです。

私は土曜日、ＲＦＫスタジアムで行われる特別な行事に、皆さんを直接招待したいのです。世界宗教の代表的指導者たちの祝福の中で、私と私の妻は百八十五カ国から参加した三千九百六十万双に対する祝福結婚式を挙行します。当初の目標の三百六十万双を超え、また三千六百万双を超えて達成しました。皆さんの国からも多くの夫婦が同参しているはずです。百八十五カ国の代表を含んだ三万双の夫婦がスタジアムに参加し、同時に人工衛星とビデオを通じて、世界的に連結されて祝福結婚儀式が進行するはずです。

本来は、三百六十万双をすれば完全に水平になるのです。海に入っていこうとするなら、その水は、すべて水平にならなければなりません。一番流れが遅くなるのは、大きい川が海に入っていく時です。そう見えますか。できるだけゆっくり入っていくのです。それがなぜそうなるのかといえば、主体となる海水の前に完全に吸収されるからです。天地の道理を中心として運動をして、すべてが存続するのです。

なぜ早く、なぜ三千六百万双が終わったらすぐ始めるのがいいかといえば、既に山の谷間をすべて流れ下ってきたからです。峠を越えたので、蘇生、長成なので、サタン圏でいえば長成期完成級を越えることができる段階に達したのです。それで三億六千万双が入るのでしょう。これは完成圏です。

先生は、皆さんに対して話すこともできません。私が話してあげれば、自分たちが恨に満ちた位置に降りていかなければならないのです。一人でアリラン、一人で、単身でここまで来ました。三百六十万双ができると誰が信じましたか。郭錠煥も信じませんでした。みんな信じませんでした。私一人が信じました。再創造は、神様が創造の命令をするので、砂底からも数千名を、エゼキエル書にある、谷間の枯れた骨を生かして軍隊をつくりました。能力がある神様がいらっしゃるということを知らなければなりません。

三百六十万双の祝福と共に成すことができるのは腹中の子女、その祝福家庭の子女にも聖酒を飲ませます。私の生涯を懸けて、私はこのように生きてきましたが、腹中にいる堕落した血統と関係がない絶対純潔な血統を受け継いだ子女にする条件として聖酒を授けることを忘れてはなりません。その国と一つになって、天に誓って宣布して聖酒を飲まなければなりません。そのようにすれば重生し、腹中の子女は、サタンの子女ではないというのです。

この世に一本勝負があるでしょう。一本勝負をして、既にすべて勝利しました。既にすべて勝利したので、皆さんの家庭がすべて勝利するのです。韓国も今、そうです。北朝鮮もこの前、私たちが三百六十万双を祝福結婚させるというので、それが謎だというのです。「それはうそでしょう。うそではないですか」と言ったのです。すべて成し遂げたので

すが、うそだと信じないのです。今回七千二百万人が結婚し完成した時には、のびてしまうでしょうか、倒れるでしょうか。のびたならどうなりますか。私が助けてあげれば、私の話を聞かなければなりません。そのようなことができる時が来たのです。

愛の理想をすべて探し出したのちに、相続しなければなりません。これをすべて相続するためのものが三万双の祝福です。これが祝福において十二峠です。皆さんは知っているでしょうが、三万双の祝福は蘇生、三十六万双は長成、三百六十万双は完成基準です。それで今年、三百六十万双、三千六百万双をするのに、あの頂上でどれくらい忙しいのか、空から滝のように落ちてきたのです。三億六千万双を勝利した日には、この地上に心情圏統一世界が、地上・天上世界に統一世界が来るのです。心情圏に生活している家庭を中心としたアダム家庭完成のように、地上天国で生きて天上天国に入っていくので、天国の門が開くというのです。

先生も今まで十二峠を中心としました。十二の峠です。三百六十万双が十二峠です。十二峠を越えなければなりません。「アリラン、アリラン」、これが「愛のアの字」、「村の里（リ）の字」、「峠の嶺（リョン）の字」なのです。愛する村を訪ねることだと、私はそのように思うのです。捨てて行ったら一里も行くことができず、足が痛くなるという言葉を知っているでしょう。韓国民謡の中で、そのアリラン十二峠という言葉……。今私がこの十二峠を越えようと苦労しています。十二峠を越えるので、あっという間にすべて平準化されます。ですから、どこでも行くことができるのです。

三百六十万家庭は、祝福でいうと十二番目です。最後です。世界が三六〇度帰ってくるのに十二カ月かかります。十二数を中心として三百六十万双を連結させるので、すべての日とすべてのことが天の祝福についていくようになっているのです。これは止める道がありません。世界的な解放、祝福の時代だというのです。公式的です。

復帰摂理は十二峠を越えました。それで世界的な峠を越えるためには、三百六十万双までの十二峠を越えなければならないのです。この十二峠を越えるようになれば、故郷の地に達するのです。黄金があふれる素晴らしい世界に行くことができるというのです。神様の愛の春のエデンを取り戻すことができるのです。

十二　三億六千万家庭

一) 三億六千万家庭祝福から第四次アダム圏時代出発

アダム家庭は、神様と真の父母が一つになって宇宙を抱くその家庭の代表であり、アダムが堕落しなかったならば、アダムの受ける祝福は宇宙史的な祝福だというのです。ところが、堕落することによって分かれてきたために、家庭が宇宙史的な祝福の恵沢圏内に入っていくことができないので、アダム家庭において失敗して失ってしまったものを、世界の家庭圏において、対等な立場の価値に共に一致させるためのものが、この世界三億六千万双の祝福だというのです。

三百六十万双からは、下りていくのです。下りていくのは簡単だというのです。三千六百万双はここです。これは長成なのです。それから、三億六千万双です。そのようにすれば、地上に来るのです。ここに来るのです。地上に来るのです。ここに下りてきたので、昔のアダム家庭に帰っていくのです。ですから、アダム家庭においては、父母が息子、娘を祝福する時に入っていくのです。ここから皆さんが予備祝福をすることができるのです。洗礼ヨハネ的家庭として策定することができるのです。それで、予備祝福を真の父母の名前をもってするのです。

「三億六千万双、三千六百万双を祝福したとは……」。神様が保護されたということを否定することはできません。そして、その内容を説明すれば、新約と旧約のすべての秘密、人類歴史のあらゆる思想的体系の秘密がすべて出てくるのです。それを聞けば耳が開き、それを見つめることができる眼識が生ずるようになれば、それを遮る者がいないのです。それは見たいと思うのです。見たいと思うでしょうか、見たいと思わないでしょうか。耳で聞いても見たいと思うのであり、また見れば、もう一度会ってみ言を耳でも聞きたいと思うのであり、ラジオを通して聞きたいと思うのです。ですから、毎日先生のみ言を聞かなければならないというのです。

三千六百万双を経て三億六千万双をするようになれば、どのようになるのでしょうか。これは夫婦なので七億二千万人です。そこに四人ずつだとしても、四×七は二十八、二十八億人になるのです。四人以上いるはずです。東洋では四人だけで暮らしていますか。五人、十人で暮らしているのです。それで、三十億人を超えるので、天の側から見るときに人類の半分以上が超えていったということになるのです。ですから、力の対比から見たとき、この天秤でいえば、一方に傾く時が来たというのです。

それで、蘇生、長成、完成、三億六千万双までに十二の峠です。そこで四千万双をすべて終えたので、下りてこないで、そこで水平になるのです。そのようにして、祝福家庭が四億双になったのです。三億六千万双の祝福は、地上においての平準化祝福です。世界万民の平準化祝福だというのです。それが半分を越えたのです。

既に「天地父母天宙安息圏」を宣布したので、神様がこの地上に訪ねてくることができるようになったのです。それゆえに、このような家庭的基盤、氏族的基盤を連結させる世界大祝福の時だというのです。それで、三百六十万双、三千六百万双、三億六千万双を祝福してあげることによって、全人類のサタンの血統を断切してしまわなければなりません。サタンの血統をもった人が一人でも残ってはいけないというのです。完全に掃除しなければなりません。

この三億六千万双を完成することによって、天が直接管理することができる圏内に入ってくるので、長子権復帰、父母権復帰を経て、国家王権復帰時代に越えていくのです。

三億六千万双が終われば、その時から蕩減が必要でない第四次アダム圏時代に入っていきます。そのようになることによって、エデ

ンにおいて神様の代わりに自分の父母が祝福することができる時代に入っていくので、万民が自分の祝福した一族を中心として天国に直行する道が生じるというのです。

今回の三億六千万双の祝福が終われば、レバレンド・ムーンは祝福してあげません。その次からは、自分の父と母に祝福してもらいなさい。これを第四次アダム圏解放時代といいます。蕩減がありません。一次、二次において、旧約時代はアダムが失敗、新約時代もアダムが失敗、成約時代も迫害を受けながらきましたが、今からは解放圏に入っていき、堕落していない本然の世界となり、第四次アダム圏時代に――アダム圏です。この全体を、宇宙のことをいいます――入っていくので、堕落していない父母が息子、娘を祝福してあげるその家庭理想、神様が創造された内的・外的全体理想を相続してあげる家庭ができるのです。ですから、父母が祝福してあげるのです。その父母が、真の父母の代わりの立場に立つのです。それゆえに、世界は一つにならざるを得ません。

三億六千万双をすれば、すべての塀を崩してしまうのです。サタン世界の個人的な塀、家庭的な塀、氏族的な塀、民族的な塀、国家的な塀、世界的な塀、天宙的な塀、神様の心情圏の塀をすべて崩すのです。

この三億六千万双の祝福をするのは、私がこの世界の自由の地上天国の環境をふさいでいる塀を崩してしまうためなのです。個人から家庭、氏族、民族、国家、世界全体においてふさがっているものを開いてしまうのです。私がするというのです。それで、私が行くべき道を行くのだと思わなければならないというのです。

地上世界で三億六千万双の祝福がすべて終わるようになったので、霊界では祝福が始まるのです。それで、サタンの血統を断切するのです。サタンが讒訴することができる時代は過ぎ去るというのです。真の父母の全権時代、全体、全般、全権、全能の時代が来るというのです。真の父母が権限を行使できる時代が来るというのです。神様がアダムとエバを造って「良し！」と言って喜びながら、「すべてのものがあなたが言ったとおりの名前になる！」とおっしゃった、そのような特権時代が来るというのです。

私たちが三億六千万双をするのです。家庭で失敗したので、家庭で収拾しなければなりません。この三億六千万双は、全人類的であり、超歴史的であり、超摂理史的な内容をもって行っています。これは最後の仕事です。そのようにして、サタンの血統を除去しようというのです。清算しようというのです。

王権復帰、文総裁一人で自由民主世界を統一し、天下一の王になってやろうと宣伝したのです。王ではありません。王は王ですが、世界国家をすべて放棄しました。神様が国をもつことができなかったのに、世界国家をもつことはできません。神様が願うものは家庭王です。家庭王を探しています。家庭王！家庭王が生まれなければなりません。家庭王になるために、世界三億六千万双の祝福を通して、サタンの血統を否定するのです。文総裁は、祝福してあげた、新たに結婚させてあげた代表者です。何の代表者でしょうか。王

の代表者なので、家庭王だというのです。今は、「文総裁が家庭王だ」と世界に宣布しても、反対する人は一人もいません。

今年の標語は何ですか。「真の神様を絶対に誇り愛することは三億六千万双の祝福完成とサタン世界の血統断切」です。今、三億六千万双の祝福が終われば、その次に何をするのでしょうか。エデンの園において、誰が先に神様の前に祝福を受けなければならないのでしょうか。おじいさんとおばあさんではありません。壮年ではありません。青年ではありません。青少年です。今まで、数多くの祝福家庭ができて、老年や壮年、青年まで来たのですが、少年時代の基準に合わせなければならないのです。

全世界に「三億六千万双の祝福完成とサタン血統断切」です。最後です。それ以上はありません。そのようにしようとするので、地獄の門、天国の門をすべて壊して開くのです。昔、怨讐視していた者たちが、真の御父母様を迎えて侍り、歓迎の祝宴をするのです。真の御父母様を家庭にお迎えできないだけでなく、氏族にお迎えできず、民族にお迎えできず、国にお迎えできず、世界がお迎えすることができませんでした。天下において初めて催す祝宴の中に、怨讐となった兄弟、怨讐となった男女が、再び神様の法度に従って天道の大道を明らかにして入っていくのです。そこから、地上天国に向かうのです。

三十六家庭から三億六千万家庭まで、今、すべて集まりました。集まって教育を受け、四十日が過ぎればどのようになるのでしょうか。古い先輩家庭を見て模範とするのです。それで、証をするのです。妻も証をし、夫も証をするのです。結婚してどのように生きてきたのか、自分が生きてきた生活をすべて証するのです。心と体に引っ掛かっているものをすべてありのままに話さなければなりません。それが家庭教育です。根本的な家庭教育だというのです。誤った内容は、根を引き抜いてしまわなければならないのです。隠していては、絶対に霊界に入っていくことができないのです。

そして、祝福の天宙化です。天宙化なので、霊界から先にしてあげなければなりませんか、地上から先にしてあげなければなりませんか。先に天使長と愛を行ったのでしょう？　霊界解放を急がなければなりません。三億六千万双を越えれば、世界的基準を越え、霊界との因縁を越えるので、霊界の人々が結婚することができる境界線に結びつけてあげたのです。そして、今回祝福を受けた人の中にマフィアがいるでしょうか、いないでしょうか。殺人鬼がいるでしょうか、いないでしょうか。やくざやギャングがいるでしょうか、いないでしょうか。ありとあらゆる者が、すべて入りました。

三億六千万双は、原理結果主管圏から抜け出たのです。世界的時代です。蘇生する春が来ました。先生がそこに連れていって祝福してあげるのです。その代わりに、皆さんは何をしなければなりませんか。皆さんが悪魔を統治し得る、その大将になりなさいというのです。

旧約時代は万物、物質時代、新約時代は子女時代、成約時代は父母時代、その次には解放時代です。恨みの解放時代は、神様時代に

越えていかなければならないのです。それゆえに、神様時代に越えていく時は、所有意識が神様のものにならなければならないというのです。

それで、共産党は、反対に、党が強制的に絶対命令したのです。銃剣を使ってです。私たちは、武力ではありません。自ら進んで銃剣の威力よりも何十倍感謝する心の中で、絶対に神様の愛主義の主権に向かって、永遠に、永遠に継続しなければならないのが、統一家の伝統です。今、三十六家庭から三億六千万家庭まで祝福家庭全体が一つになってその伝統を受け継ぎ、愛の理想天国を永遠に後代の前に連結しなければならないのです。それが、私たち統一教会が成就しなければならない最後の責任だというのです。

〈祝祷〉

愛する天のお父様。きょう一九九九年二月七日、この日は、天地が注視する三億六千万双の祝福を記念する式が開催されています。全人類と全天上世界の祝福を受ける家庭が共にこの場に参席し、天地の新しい解放の日、長子権復帰と父母権復帰と王権復帰を越えて、創造本然の神様を中心とした天地父母を中心として、真なる愛を中心とする愛の主権による統一世界に向かって、お父様が願っていらっしゃったみ旨を完成させることができる世界史的転換時点に置かれているこの場でございます。

全霊界と全人類が一心一体となり、エデンにおいて悪なる先祖によって、悪の愛と悪の生命と悪の血統を受け継いだ全人類の歴史の中で、すべてがサタンの主導下にあった天地を再び取り戻すためには、神様は、旧約時代を経て新約時代、成約時代として、旧約時代は、約束を成し遂げることができなかったアダム家庭において、神様と父子関係を結ぶことができる血統的因縁を受け継ぐことができず、堕落によってこれを失ってしまいました。

お父様の愛と父母の生命と父母の血統を受け継ぐ場において父子関係が成立するのですが、この場で人類始祖が過ちを犯すことによって、偽りの父母の立場でサタンと血統的因縁を結び、サタンの父、サタンの子女、サタンの家庭をもち、サタンの愛とサタンの生命とサタンの血統を受け継いだ恨の歴史が、アダム家庭から始まったのでございます。このことによって、私たち人間の心と体の闘いが始まり、夫婦の闘いの環境が始まり、父母と子女間の闘いが出発し、アダム家庭、第一代の家庭においてカインとアベルの殺戮戦が展開したのでございます。

このような事実を考えるとき、全人類は、家庭から氏族、民族、国家、世界版図までも民主世界と共産世界が対峙し、上下に分かれた世界、混沌とした末世となっているのです。このような渦中において、今日、統一教会を立てて、旧約時代にみ旨を成し遂げることができなかったこと、新約時代にあなたの理想の王権を立てることができなかったこと、それらを成約時代を迎えることによって真の父母がこの地に来て、地上の未完成と天上の未完成を完結したのでございます。そして、野生のオリーブの木の畑からそれを刈り取って真のオリーブの木を接ぎ木するように、堕落した世界に解放的神様の名と真の父母の真なる愛と生命と血統的因縁を接ぎ木し、天の血

族と天の眷属を取り戻すことを願われた神様のみ旨に従うために、統一教会においては、真の父母の名によって誤った結婚を再生させ、世界万民を一兄弟、一眷属とするための世界合同結婚式を始めたのでございます。

このようにすることによって、今まで歴史過程において迫害の路程を歩んできましたが、神様が保護してくださって個人的反対、家庭的反対、氏族的反対、民族、国家、世界、天地、サタンの地獄圏まで、反対するすべての存在を退け、神様の真なる愛を中心とした血統的因縁をもつことによって、父が息子を直接保護するように、今日の統一教会は、そのような堕落による迫害の路程における数多くの恨を、個人で踏み越え、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙史的峠を踏み越えて、人類全体を代表する三億六千万双を真の父母の名によって超宗教、超人種、超文化、超国境解放の祝賀をし、天と地が共に祝福の因縁をもつことができるこの恩賜を心から、心から、心から感謝申し上げます。

霊界の二百億を中心とした、百五十億、五百億の天のすべての父母、兄弟、子女たちと、地上の四億を超える祝福家庭を、夫婦を中心として見れば八億人を超え、その八億人の家庭に四人ずつとして計算すれば三十億を超える、このような数の人々が、混乱した世界を救い、混乱した歴史を再創造するためには、青少年問題と家庭問題を再び確立しなければなりません。

このようにすることによって、世界の全人類が祝福に同参することができる環境的条件を克服し、すべての人々が天の眷属として祝福を受けることができるこのような驚くべき役事を成就するのでございます。これは統一教会の誰が成したのでもなく、天と霊界全体が成してくださったすべての勝利の覇権を永遠に、永遠に、永遠に大切に保管してくださり、万世、栄光の愛の主権を描き、祝福を受けて解放されることによって、地上・天上天国を成し遂げてくださることを懇切にお願い申し上げます。この三億六千万双に連なるすべての世界人類は、一致団結し、心の統一、夫婦の統一、氏族の統一、民族の統一、国家の統一、世界の統一、天宙の統一、地上の真の父母と神様の愛の一族圏全体を代表することができる愛の基台の核心として立ててくださり、あなたが万世にわたって願われた創造理想的愛の主権による地上天国を完成するために祝福を受ける群れとなったのでございます。

彼らの前に、あなたが願われたこの場から、今あなたから全体のみ旨を受け継ぐことができる真なる個体として、心と体が一つになり、夫婦が一つになり、父母と子女が一つになり、祝福を受けた世界の兄弟たちと一つになって地上・天上天国を完成する、神様の選ばれた息子、娘となることを祝福していますので、永遠に、永遠に保護してくださり、勝利の場であり栄光の場に前進、前進し、さらに祝福を加えてくださることを真の御父母様のみ名によって三億六千万双の前に祝福いたします。アーメン。アーメン。アーメン！！

第四章　祝福家庭と入籍

一　祝福家庭入籍と私たちの祖国

一) 入籍とは何か

皆さん、入籍とは何でしょうか。嫁入りする女性は、新郎の戸籍に籍を移します。女性は、自分の本然の籍を取り消して、他の籍に移らなければならないのです。嫁入りすれば、

人の家に引っ越しすることになるので、戸籍が変わることになるのです。入籍とは何でしょうか。真の愛の根源を中心として結ばれた証票です。

嫁入りした女性は、何をしなければならないでしょうか。婚姻届けをするだけではありません。女性が結婚すれば、夫の戸籍に入籍しますね。西洋や日本の場合、姓はどうなりますか。根本が何もないので、姓が変わります。井上ならば井上、山岡ならば山岡、木下ならば木下というように、みな夫の姓に従って一つになるのです。それは愛の関係を結ぶことを条件として、一つになるのです。愛の力は生命の根源よりも強いので、それを悲しいことと考えるのではなく、当然のこととして、希望をもって喜んで行くのです。

花嫁が輿に乗って新郎の家に行ったとします。新郎の家に行って、自分がその家に入籍するその瞬間、自分を中心とした考えをもっていたのでは通じません。それまで自分を中心として、自分の家で育ち、暮らしてきた、そのような行動一切が受け入れられるでしょうか。それが問題です。「受け入れてくれ」と言うことができるでしょうか。「受け入れてくれ」とは言えないのです。自分の行動の一つ、視線、聞くこと、話すことなど、行動の一切が新しい分野において出発するときには、細心の注意をしなければなりません。

どのように注意しなければならないのでしょうか。いかにして新郎の家門や、新しく出発するその環境とぶつかることなく、そこにプラスになり得る立場に立つかということですが、それはとても難しいことなのです。

これから神様と真の御父母様から歴史がつづられ、入籍時代が来るのです。ですから皆さんが入籍するのです。自信がありますか。神様の息子、娘として、すべての人が神様のように、真の父母のようになりましたか。言葉で言うのは簡単です。食べるときも寝ているときも、どこに行くとしても、それを考えなければなりません。そのためには祖国で暮らさなければなりません。ですから韓国語を勉強すべきでしょうか、すべきではないでしょうか。本来、人間には二つ以上の言語はありませんでした。たった一つなのです。

今後、入籍する時が来ます。先生の一族、天の皇族を中心として連結されるところに、皆さんが加入するための入籍時代が来るのです。しかし、入籍時代が来たとしても、氏族復帰ができていない人は、そこに入籍することができません。それを知らなければなりません。十二支派と同じことです。氏族復帰をするまでは、入籍できないのです。人々が氏族復帰のこの内容を知るならば、統一教会に我先に入ろうと、それこそ群れをなして押しかけてくるのです。

今まで天国への入籍はありませんでした。天国には国がありませんでした。家庭もなく、国もありませんでした。霊界に行けば、父母も何も、十人家族ならば十人がみなばらばらになりました。しかし、これからはそうではありません。本来、堕落しなかったならば、父母と一族が共に行くようになっているのが天国だということを知らなければなりません。

真の愛を中心として祖父母、父母、自分たち夫婦、息子、娘が一つになって、「ため」に生きる神様の真の愛をもてば、そこでは神

様も絶対服従するのです。そのような愛の伝統に服従しながら、「ため」に生きる愛のみをもって動くその世界、「ため」に生きようとするその世界には、平和の基地が願わなくてもできるのです。

入籍時代になって名簿を作るとき、いい加減に作成することはできません。ホーム・チャーチを通過しなければ、名簿に記入されないのです。天国の族譜編成がなされないのです。祝福を受けた家庭であっても、外されるのです。落ちるのです。そのようなことを知って、天が提示するすべてのことを、急いでしなければなりません。人がするから自分もするのではありません。しなければならないのです。それをせずに霊界に行けば、霊界に行ったあとで、永遠にしなければならないのです。地上で解決することができずに行けば、大変なことになるのです。

この地上でみ旨を成し遂げられなかったイエス様は、時代的な新婦の名を立てて真の父母の因縁を決定し、真の子女を立てて、この地上で、相続権、入籍権、天国の権限をもって入籍させるための基準をつくっていかなければならなかったのに、それができないまま逝ったのです。入籍させるとき、僕として入籍させるでしょうか。直系の息子、そうでなければ、せめて養子という名前で入籍させて、初めて神様の前で相続することができるのです。相続圏内に同参することができるのです。

私たちは何をしようというのでしょうか。神様の愛を受け、真の父母の愛を永遠に受けることのできる息子、娘の立場に入籍するのです。これから入籍しようというのです。天国の生命録に入籍するのです。新しい「真の父母主義」、「神主義」を中心として、新しい入籍がなされると同時に、支派編成が行われなければならないのです。イエス様の十二弟子、十二支派などと同じように、支派編成をしようというのです。

皆さんはこれから故郷に帰って、自分を中心とした血族はもちろん、環境的条件をいかに早く拡大させるかという闘いを繰り広げるのです。競争が起こるのです。ですから、どの支派に属したとしても、故郷に帰ったその根と共に支派編成をするのです。東西南北の枝、その枝がどこに属するかが決められて、本籍への登録が始まる時が来るのです。人種の違いによる差別や、文明国や発展途上国というものはありません。

どれだけ霊界の善なる先祖を中心に一つとなって、その先祖が地上に来て協助できる基盤をもつかという問題が、今後、皆さんの郷土開発運動の展開を左右するのです。その枝がどれだけ大きいかということが問題です。幹が死んだとしても、枝が大きければ、それが幹になることもできるのです。人は、芽が出て、それから枝になりますが、それが問題ではありません。皆さんが新しい枝を育て、その一族がこの世界に入籍して本郷に帰るか、天国に帰るかということが問題なのです。帰郷の道に立っているということを知らなければなりません。

これから入籍をするのです。南北が統一されれば、世界の統一教会の家族は、祝福を受けた家庭の中で正常な行動をしてきた人は、氏族を越えてすべて入籍をすることになります。先生の力によって南北が統一されれば、

法をつくって世界の統一教会の忠臣を代表民族として、血統を受け継いだ民族として立てるのです。そのようにしたからといって反対する人がいるでしょうか。歴史的にいえば、韓国の独立のために生き、韓国の還故郷のためにこれほど苦労をしたのに、誰が反対するでしょうか。

これからは氏族加入時代が来ます。個人加入時代ではありません。金氏ならば金氏、朴氏ならば朴氏、その時代が過ぎれば、国家入籍時代が来ます。早く来るのです。これからは早いのです。あっという間に変化していくのです。今、世界情勢は目まぐるしく変わっています。なぜそうなのでしょうか。文総裁ゆえなのです。原因がほかにあるのではありません。

二) 入籍は国家祝福時代になされる

統一教会の祝福は、教会祝福であって国家祝福ではありません。世界祝福までの三段階を通過しなければなりません。教会祝福時代を経て、南北を統一して一つの国をもつ天国を中心とした祝福時代が国家祝福時代であり、その次は地上・天上世界が一つになる祝福時代です。三大祝福圏時代を通過しなければなりません。アダム一代でなされるべきことを、再臨時代になって先生の一代ですべて終えなければなりません。二〇〇〇年までに世界的な祝福を一度にやらなければならないのです。そうして本格的な入籍となるのです。

統一教会の祝福家庭は婚礼を挙げましたが、その結婚式は教会内の結婚式であって、国家の中での結婚式でも、世界の中での結婚式でもありません。ですから、祝福の日も、教会の祝福、国の祝福がなければなりません。世界の祝福、天国に行って永遠の祝福の式を経てこそ、本然の世界に行く道が開かれるという事実を知らなければなりません。皆さんが統一教会の祝福を、先生の知らないところで簡単に、便利に受けたといっても通じません。国家祝福を経なければなりません。そして天上に行って、大入会式とともに入籍式を経て、十二支派の編成を終え、基盤ができて、神様を中心として真の父母が天国へ行き、定着して初めて、万民も順々に定着するようになるのです。

統一教会の結婚も、三段階を越えていくのです。教会祝福、国家祝福、世界祝福です。ですから、祝福家庭は今までの段階を越えていかなければならないのです。本来ならば、蕩減条件のない解放された人が結婚すべきなのですが、引っ掛かっている蕩減条件があるのです。教会の前には迫害する国があり、国の前には世界があるのですが、それを超えなければならないのです。

ですから、家庭を引き連れて、迫害のない解放された立場に達してこそ、一つの統一された世界のアダム家庭で天が祝福した相続圏ができるのです。解放がなされるのです。ですから、教会圏、国家圏、世界圏があるのです。世界的な王権復帰の圏を越えて、サタン世界の讒訴圏を抜け出すことによって、地上・天上世界の解放がなされるなら、その立場にまで行って祝福を受けなければならないのです。そのような立場を三度乗り越えるのです。

祝福家庭が氏族的メシヤになるのは何のためでしょうか。入籍するためです。入籍して国を復帰し、国家的祝福を受けるためです。ですから氏族的メシヤは、氏族的メシヤ同士が一つになって自分の国を求めなければなりません。その国を世界に入籍させることによって、世界祝福を受けるのです。

入籍時代が来れば、大韓民国の民という名では通じません。愛を中心としてすべての民族を克服しなければならないのです。家庭を否定し、氏族を否定し、国家を否定し、世界を否定し、天上世界の地獄、霊界の地獄まで否定して、サタンを否定しなければならないのです。それを肯定したのが堕落です。そのようにして落ちたので、反対に上がっていかなければならないのです。

今は国がないので、教会の中で祝福しましたが、これからは国に入籍しなければなりません。氏族的メシヤの責任を果たしてこそ、国への入籍がなされます。国に入籍し、世界に入籍することによって、真の父母と一つとなり、真の父母が主体だとすれば、全世界の家庭が客体として一つとなり、神様に侍ることのできる家庭を献納してこそ、天宙的祝福家庭の理想が形成されるのです。それが正に地上天国、天上天国なのです。

三) 入籍するためには主権国家が必要

国がなければ国籍もありません。国がなければ入籍するための基盤がないのです。私たちは、民族を編成して新たな入籍をしなければなりません。この地上に天国を編成して、その国籍をもって愛国、愛族する、真で善なる父母の血統を受け継いだ勝利的息子、娘として、自分の氏族、家族を引き連れて生きたのちに、天上世界の天国に入ることができるのです。それが原理です。

皆さんは天国に登録されていません。国がないので出生届けができないのです。結婚式ができないのです。死亡届けもできないのです。ですから、押されれば倒れ、死んでも訴えることのできない恨の道を、宗教人は歩んできたのです。文総裁がその代表的な道を歩んできたということを知らなければなりません。いくら痛哭しても尽きることはありません。無念で悔しくても、耐えなければなりません。

自分が息子、娘として生まれたとしても、入籍する天国がないので保留せざるを得ないのです。天国の夫となることを願い、天国に入籍した民として妻を得て、その家庭で子を生みたいと思わなければなりません。それを知るべきです。そして寝ても覚めても、一日の一時間、一秒を忙しく闘って勝利しなければならないという前提があるということを知らなければなりません。常にそのように生きなければなりません。

皆さんは出生届けをしますね。入籍というのはそのようなものです。日本のどこどこに生まれた日本人として登録します。今までは神様の国がありませんでした。本当の真の父母を中心としてできた家庭がなかったので、氏族もなく、国もあるはずがないのです。ですからサタン世界、サタンの国からすべて蕩減して、家庭、氏族、民族、国家、世界を取り戻さなければならないのです。

宗教圏を中心として、宗教圏以外の世界を一つにして、サタンがもっていたものをすべて神側に還元しなければならないのです。そうしなければ、霊界に行って平安な生活をすることができません。霊界に行ってから地上と関係をもつことは、何十倍、何百倍、何千倍も大変なのです。

神様の愛と生命圏と血統圏を伝授するのが、統一教会の祝福です。堕落した万民は、祝福を受けなければ、入籍がなされません。ここにいる人はみな、一人残らず誰もがそうしなければなりません。では、どうすれば入籍がなされるのでしょうか。本来は、出生した時から入籍しなければなりません。

皆さんは今日、大韓民国に生まれ、大韓民国に入籍しましたね。いつ、どこで、父誰々、母誰々の息子、娘として生まれ、誰々の長女ならば長女、次女ならば次女、長男ならば長男というように、名前をもって入籍します。そうして永遠に大韓民国の民となるのです。皆さんは天国の民になっていますか、なっていませんか。はるかに及ばないというのです。

神様の国がありません。サタン世界に入籍しているものを、すべてそこから外して、天国に入籍することのできる時代が来るのです。人々はそれを知らずに死ぬので、大変なことになるのです。天国の民として入籍して、天国の家庭として入籍し、天国氏族、天国国家、天国世界に入籍して、地上天国と統一されれば、神様の右腕として二つの世界を愛で統治することができるようになるのです。その世界へ行くには、入籍という手続きをしなければなりません。

今後、皆さんには入籍する時期が来るのです。祝福を受けることは、入籍することではありません。それは象徴的な入籍でしかありません。ですから、私たちは入籍するための国を求めていくのです。その国は、どんな国でしょうか。主権は父母に代わり、民は息子に代わり、国土は物質に代わって、三位一体をなす国です。国家を形成するためには主権がなければならないし、国民がいなければならないし、国土がなければなりません。宗教も同じことです。

私たちには国がありません。祝福家庭の息子、娘は多くいますが、神様の願う理想国家を立てられずにいます。ですから、皆さんの息子、娘の名前を入籍する所がありません。結婚しても、昇華しても、登録する所がないのです。国がなければ定着はあり得ません。とどまって暮らす所がないのです。皆さんがパスポートをもっていなければ、どこの国でも認められません。一国家の国民として認められないのです。それと同じことです。

私たちにも国がないので、パスポートがないのです。統一教会のメンバーは、どこに所属していますか。米国ですか、他の国ですか。神様の国です。堕落した世の中では「どこから来たのか」と聞きます。聞かれれば、米国、ドイツ、日本といった国の名前を言います。その中で最高の国は、天国です。最も貴い国が天上天国、神様の国です。「どこに属するのか」と聞かれたならば、「私は神様の国に属する」と答えなければなりません。そこから天国なのです。

近い将来、統一教会のメンバーは入籍式をする時が来ます。私たちの国が南北統一されて、天も喜ぶことのできる国になれば、皆さんの入籍時代が来るのです。そのような入籍時代が来れば、たとえ目の見えない人でも、鼻に障害のある人でも、腕に障害のある人でも、先に嫁いできた人が上になるのです。長男の嫁になるのです。

遅れて嫁いできた人は、たとえ大卒で年上だとしても、鼻に障害のある人、腕に障害のある人に仕えなければならないのです。そのような時が来ます。ですから今後、そのような時にこのような特殊な条件が、すべてパスするための重要な要件になるのです。

南北が統一されて、その祝福された者たちの国ができれば、入籍時代になるのです。真の御父母様を中心とした血族となれば、入籍時代になるのです。平面的に六十億人類が一度に祝福を受けて入籍することによって、数千万代の先祖が決定されるのです。平面的に同じ日に祝福を受けたとしても、その中で数千代の先祖の差がつくのです。恐ろしい時代が来るのです。

もしも、皆さんが国家を復帰することができずに死んだとすれば、この地上に再臨して個人を後援し、家庭を後援できるだけであって、堂々と権勢をもって後援することはできません。サタン世界を征服するために闘い得る資格をもった者にはなれないのです。ですから、国ができて初めて、皆さんは入籍することができるのです。皆さんは入籍しましたか。皆さんは、統一教会には入籍しましたが、統一された神様の国には入籍できないでいるのです。国がないのに国民になることができるでしょうか。できないのです。

四) 私たちが求めるべき祖国

私たちが求めるべき祖国は、今日この地にあるような歴史と伝統をもった国ではありません。そのような国とは本質的に次元が異なるのです。私たちが次元の異なるそのような国を受け継ぐには、それを可能にする思想的な主体性をもった国民にならなければなりません。

ところで、その主体的な思想は、絶対的な創造主の思想と一致する思想でなければなりません。絶対者の願う国が存在するためには、その国の主権を中心として、その国の国民と一致する国になることを願わなければなりません。そのような国民性をもって、国家形態を備えなければならないのです。

神様の祖国とはどこでしょうか。真の父母と真の家庭がある所です。では、真の父母の本郷はどこでしょうか。神様とその息子、娘が入る所です。その真の父母の祖国とはどこでしょうか。神様と子女のいる所、愛する主体と対象のいる所が祖国です。主体と対象が愛し合うことのできる所が祖国です。

そうだとすれば、子女の祖国はどこでしょうか。神様を主体として父母を愛し、子女は対象として愛されることのできる所です。そこが統一教会でいう、四位基台の本郷地です。それが理想的な祖国です。どうして理想的な祖国なのでしょうか。真の神様の愛と、真の父母の愛と、子女の愛があるからです。それが根本となって拡大された世界が理想世界で

す。四位基台には、そのような原則があるのです。

祖国とは何でしょうか。祖国は父母の国であり、私たちの先祖の国です。お父さん、お母さん、私たちの先祖の国です。始祖の国です。その始祖の時から愛してきた国です。その愛は不変なので、その国は変わってはならないのです。歴史時代に国を中心として祖国だと主張した人々の伝統的な背後を見るとき、このような父母の愛する祖国を失わなかった民族はありませんでした。常に失ってきたのです。

神様のみ旨から見た祖国は、真の愛を中心とした人類の祖国であり、本郷です。韓国はそのような人類の祖国、本郷にならなければなりません。

一つの国をとって見れば、国が形成されるためには、その国の主権がなければなりません。そのような観点から地上に天国を実現するという問題を考えるとき、天国の主人とは誰でしょうか。主権者とは誰でしょうか。間違いなく神様が主権者です。では国民は誰でしょうか。国民は万民です。では、国土はどこでしょうか。地球星です。

本郷の地と本郷の祖国とはどこでしょうか。どのようにして祖国となるのでしょうか。もちろん祖国というのはある特定の一つの国家的な基準ですが、神様が求めてきた人類の祖国とはどこかというと、地球星です。この地球星なのです。この地球こそが人類の願う祖国なのです。神様の願う人類の祖国なのです。過去、数知れない歴代の私たちの先祖が、犠牲の道を歩んできましたが、その先祖たちが天の前に訴えてきた望みとは何でしょうか。祖国でした。

天の一つの国家を建てることによって、今まで天の前に怨讐であった大サタンを審判して悪を除去し、善のみによる平和の天国をこの地上につくらなければならないのです。それが神様の願いであり、イエス様の願いであり、今まで摂理路程において至大なる貢献をしてきた先祖の願いだったということを、皆さんははっきりと知らなければなりません。

神様が創造した世界には、国境というものはあり得ません。黒人、白人といった人種も問題になりません。善悪の闘争も、そこでは必要ありません。そのような観点から見るとき、私たちの住んでいる世界には、すべての国に国境があります。黒人、白人の人種問題のみならず、家庭においては夫と妻、父母と子女の間のすべてに分裂が起きています。善なる人と悪なる人が闘っているのです。

そのような現在の情勢を考えるとき、来たるべき主は、国境のない国をつくって人種問題を超越し、世界を一つにしなければなりません。分裂した家庭をすべて統一し、善悪が闘う世界に平和の王国をつくらなければなりません。

私たちの目標は、統一世界、神様を中心とした一つの国をつくるところにあります。その国は、一つの主権、一つの国民、一つの国土、一つの文化です。真の父母を中心として一つの血統でつながっています。その国では、すべての人が心情圏を完成して理想的な後継者になろうとするのです。聖書にある「怨讐

を愛せよ」というみ言を完成することができるのです。

神様を中心とした国には、民主主義や共産主義といったものはあり得ないのです。一度形成されれば永遠の国家体制として残るのです。そのようなことを考えるならば、自分自身がそのような国の民になっていないのは、とても悔しいことではないでしょうか。自分自身がそのような国で暮らせないことを嘆かなければなりません。そのような一つの不変なる主権がもてなかったことを、私たちは嘆かなければなりません。

私たちの信仰の目標は、神様の国の民になることです。その国の民にならなければ、その子女として自由自在に万民や万物世界に誇り、愛される道は現れません。国のない者は、いつも攻撃を受けることになります。かわいそうな立場に立つのです。あえなくやられてしまう場合がいくらでもあります。ですから、神様の願う国がどこにあるか、神様の足場となる国がどこにあるか、それが問題なのです。

主権のない国の国民は、かわいそうです。ですから、イエス様は懸念を抱いて、「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ六・三一～三三）とおっしゃいました。まず息子を求めよとおっしゃいましたか、国を求めよとおっしゃいましたか。神様が求めている国を求めよとおっしゃったのです。

私たちがこの国、この民族のために血と汗を流すのは、結局は永遠の天国をつくるため、千秋万代の子孫が永遠にたたえることのできる福地をつくるためなのです。

これからは祖国を建てることができます。その祖国には主権があり、その祖国には国土があり、その祖国には国民がいます。また、そこは単一民族の血統の因縁があり、他の民族にはもち得ない歴史があります。このような祖国のために、私たちは密使の使命を遂行しなければなりません。そのような使命を自ら早い時期に完遂すればするほど、祖国光復の基盤が徐々に近づいてくるのです。

今日、苦労の代価を払うのは、祖国光復の一日を早く迎えるための基盤となるのです。そのような事実を考えながら、皆さんは生きて密使の使命を果たそうという決意をもって進まなければなりません。そうしなければ、この時代に神様が私たちにもたらしてくださる世界的な祝福と天運を、私たちのものとして迎えることができないのです。

二　入籍のための条件

一) 所有権、血統圏、心情圏転換

①所有権転換

皆さんは今後、新しい国に入籍しなければなりません。ところで、神様が万物を造ったのちに人を造られたように、万物を先に入籍させてから人間が入籍して、神様とつながれなければならないのです。そのための歴史が六千年歴史に該当します。

旧約時代は万物を通して、成約時代は父母を中心として、天とつながっていくのと同じように、このすべての過程を経ていかなければならないのです。ところが、これが今日私たち統一教会の限界圏の中だけで行われてはならないのです。国家を超えて世界まで拡大して、そのような歴史を完全に終結させなければ、完全な復帰の一日を迎えることができないということを知らなければなりません。

アダムの所有として決定したあと、神様の前に戻して神様のものとして認められてから、再度アダムを通してもらってこそ、初めて自分の所有権時代が来るのです。天国に行って入籍を終えることによって、そのようなことが起こるのです。そうして初めて皆さんは地上で、エデンの園で堕落せずに万物を所有していた主人の立場を復帰するのです。そうしてこそ地上天国に入っていくのです。

自分の持っている物は、すべて自分の物ではありません。天の前に返して接ぎ木されなければなりません。ですから、自分の物ではないのです。自分のものという所有権はありません。真の愛を中心とした主人はアダムではありません。天が中心なので、天を主人として、自分はその相対的な存在、対象的な立場に立つということを考えなければなりません。ですから、所有権はまず誰にあるべきかというと、神様に帰らなければならないのです。

被造世界はサタンの所有であって、神様の所有ではありません。今後は所有権回復ということがあるので、天下は戦争せずに一つになるのです。今後、一族が財産とすべてのものを合わせて天に入籍するために、世界の歴史上にかつてなかった行列が続くことでしょう。誰が先にそこに入籍するかによって、兄となり、弟となるのです。

真の父母の名を中心として、神様のみ旨の平和世界ができ、統一圏ができたここにおいて、家庭的に入籍するという事実は、国家が一瞬のうちに戻ることができるということです。入籍した氏族的メシヤが十二家庭いると考えてみてください。その国はどうなるでしょうか。一瞬のうちに戻るのです。日本も、すべての国も問題ありません。完全に一度に復帰されるのです。それはどういうことかというと、神様を中心として、アダム家庭以後に堕落した全体を、愛で許して抱こうという意味なのです。

そのような時代が来たので、先生は号令をかけるのです。「早く氏族復帰をしなさい！所有権を神様に返しなさい！　早く入籍しなさい！」と、それが人間としての最大の希望です。先祖以来、数千代の希望がここにあるのです。骨の髄に刻んで、忘れてはなりません。そうすることによって、未来の日本において、黎明の朝が過ぎ、輝く太陽を迎える喜びを体恤することでしょう。

「総生畜献納祭」とは何でしょうか。堕落した偽りの父母が、天の世界を奪ったどろぼうになりましたが、真の父母を中心として世界をすべて一つに結んで捧げなければなりません。捧げるまでは、先生が主人として振る舞うことができません。地上の王権、天上の王権を立てて引き継いでから、基盤を築いてこの地上で生きてから行かなければなりません。そうしてこそ地上・天上天国が完全に合

徳となるのです。合徳というのは、一体となることです。天地合徳、人間合徳という言葉があります。

今ここにいる皆さんは「総生畜献納祭」を捧げなければなりません。解怨統一式をしなければならないのです。今までは神様に祭物を捧げるときは、神側の所有物とサタン側の所有物に裂いて捧げましたが、どんなに悔しかったことでしょうか。二つに裂いた右側のものが神様のものであり、左側のものはサタンだというのです。これが人です。アベルであり、アダムです。神様の愛を中心として完全に捧げて、初めてサタンが離れるのです。

②血統転換

統一教会の「原理」を中心として見れば、今日、堕落した人間は、生まれるや否や地獄行きです。そうではないでしょうか。生まれるや否や地獄に入籍するのです。間違いありません。堕落後、偽りの血統でつながったすべての子孫は、サタンに入籍することになるのです。サタンの国、サタンの世界を奪い返すために宗教が現れたのです。宗教とは、体と一つとなり、分かれたものと一つとなるためにあるのです。

再臨主は、イエス様が果たせなかった神様の復帰摂理の根本を完成するために来られます。すなわち、創造理想を完成する真の本然の種として来て、神様の真の愛、真の生命、真の血統の根源となる真の父母の理想を完成するために来られます。再臨主は、イエス様の時までの勝利の基盤の上に立って、イエス様が探すことのできなかった新婦を探し出して真の父母となり、万民を救ってくださるのです。真の父母は血統を転換する新しい結婚行事を通して、全人類を神様の真の愛、真の生命、真の血統に接ぎ木し、真の人となって救われ、さらには真の家庭を築いて地上天国を建設されるのです。

堕落によって偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統を受け継いで、偽りの結婚式をした家庭から始まった汚れたものを、完全に清算して復帰し、真の神様と真の父母の愛を中心として、私たち夫婦が外的には「頭翼思想」を立て、左翼、右翼を屈服し、内的には「神主義」、すなわち真の愛を通して良心世界と霊的世界を屈服して真の父母となることによって、神人愛一体となった真の愛の種、真の生命の種、真の血統の種を接ぎ木して、大いなる祝福を伝授してあげるという復活の儀式が、正に国際合同結婚式なのです。

再臨主は、肉身をもって来られ、新たな血統関係を編成しなければなりません。アダム家庭で失ったものを、世界大家庭圏で蕩減することによって、アダム家庭で完成すべき真の長子権、真の父母権、真の王権を得て、神様が主管される地上天国に転換し、天上天国への入籍をして、神様を中心とした地上・天上王権時代へと進入し、勝利と自由と幸福と統一の世界を求めて、神様の創造理想である地上天国、天上天国を迎えるのです。これが救援摂理史の原理観です。

蕩減復帰は、血統転換、所有権転換、心情圏転換が三大目標です。そのような内容について聞いたことがありますね。血統が変わったので、血統を転換しなければ、神様の国に連結され、入籍することはできないのです。

血統の主人は、神様です。堕落の血統を受け継いで、盗みを働いて神様の所有権をめちゃめちゃにしたので、神様の愛で血統を連結することによって、これが整理されるのです。堕落の愛の関係によって血が変わったのです。血統が反対になったので、血統を転換しなければ神様のもとに戻る道はないのです。

今後、所有が誰のもとに戻らなければならないのでしょか。今までは神様の所有にはなれませんでした。悪魔の所有だったものを、神様の所有として入籍させなければなりません。血統転換ができなかったので、祝福を受けると同時に所有権を天に返還し、心情圏を返還しなければなりません。心情圏とは一族のことです。四代から八代までつなぐことができます。一つの心情圏です。おじいさんを中心として親戚になれば、四代、五代とつながり、それが八代となるのです。

皆さんは、お父様、お母様に会うためにどのようにしなければならないでしょうか。皆さんは、御父母様の前に直接出ることはできません。皆さんは血統が違うので、入籍するまでは相続権をもらうことはできません。

まだ、皆さんは入籍していません。先生の族譜に入籍しましたか。していないのです。では、いつ入籍するのでしょうか。祝福を受けたからといって、みな入籍するわけではありません。祝福を受けた位置は、長成期完成級です。七段階完成級の七年路程が残っているのです。それが原理です。その原理を中心として復帰していくのです。

③心情圏転換

天国へ行く条件があります。自分の家庭をもたなければ行くことができません。神様の息子、娘である以上、息子、娘としての使命があります。様々な使命を果たした上で、永遠の世界で真の父母と会うようになっているのです。そのような公式の内容を完成しなければ会うことができません。祝福を受けただけでは、天国へ行く門は開かれても、歩いて入ることはできません。先生の言うとおりに実践して、氏族のメシヤを完成した立場で入籍しなければならないのです。

心と体の統一世界をもつには、神様の本質的愛を回復しなければなりません。そのような命題が残っているということを知らなければなりません。どんな苦労があったとしても、これを克服して、その境地を取り戻してから霊界に行かなければ、大変なことになります。

このような真の愛の論理を中心として考えるとき、私たち人間がそこに一体化して共同一体圏内に入るので、神様の生命が私の生命となり、神様の愛が私の愛となり、神様の血統が私の血統になるのです。「神様の所有である被造世界は、私の被造世界だ」と言って、天下を抱く父母の名をもち、そのように生きなければ、天国に入籍することはできません。

皆さん、祈祷してみてください。祈祷すればするほど、涙で前が見えなくなります。父の前に近づけば近づくほど、悲しみと痛哭が起こるのです。このような段階を越えて、父を思っただけで踊りたくなるようでなければならないのに、いまだにそうなっていません。ですから皆さんは、いまだに神様が私たちを本然の人間として慕うことができなかった歴

史的な条件に引っ掛かり、時代的な条件に引っ掛かっているのです。

ですから、希望となれなかった皆さんには、天と自分の間にある「慕わしさ」という条件を清算すべき時が、今後来るということを知らなければなりません。それから何をしなければならないのでしょうか。天の家族として入籍できる日を待ち望まなければなりません。皆さん一人だけが待ち望むのではなく、全世界の人類が待ち望まなければなりません。

皆さんが真の父母権を相続しなければなりません。そして、真の子女権、真の父母権、真の王権を中心として、真の父母権と一体化した天地とならなければならないのです。そこでは、まず地上天国、第二に天上天国、第三に王権と皇族圏です。皇族圏とは何でしょうか。カイン世界が残っています。カイン世界の長子権を復帰して、次子として絶対服従させて天国に連れていってこそ、皇族圏ができるのです。

堕落しなければカインも皇族になるはずだったのですから、地獄に行くのを、天国に行けるようにしてあげなければならないのです。天上、地上、そして王権と皇族圏を中心とした勝利の基盤の上で何をしなければならないかというと、真の父母に侍り、神様に侍る家庭を完成しなければならないのです。天と縦的な関係を結んで、すべて入籍しなければならないのです。すなわち、先祖の立場に立たなければならないということです。

真の父母の恵みは、言葉では表せないほどの恩恵であるということを考えなければなりません。天下のそのいかなるものとも替えることはできないのです。自分の一族が問題ではありません。自分の財産が問題ではないのです。この肥だめのような汚れたものを、神様が受け取りたいはずはありません。「ペッ」とつばを吐くのです。

先生の息子、娘を通して、お母様を通して、先生までの三代を経るのです。天使長を通して、天使長の息子を通して、お母様を通して神様のもとに帰るのです。帰って本然の者となるのです。神様の血族になって、再び分配してもらわなければならないのです。それは、先生が勝手に言っているのではありません。摂理的な観なのです。

二) 氏族的メシヤの使命を果たさなければ

①氏族的メシヤの使命

これから皆さんの根を整備しなければなりません。根はどうなっているのでしょうか。堕落によって父母が駄目になってしまいました。ですから、真の父母と真の息子、娘を中心とした本然の父母権と長子権を、反対に越えていかなければなりません。ただそのままではできません。一八〇度反対にして、初めてもう一度出発することができるのです。どういうことかというと、皆さんが故郷に帰って、先祖を取り替える運命が残っているということを知るべきです。

氏族的メシヤがすべきこととは何でしょうか。アダムが失敗したことをすべて復帰しなければなりません。真の父母が来て、イエス様が失敗したことを復帰し、アダムが失敗したことを復帰したのです。

アダムは家庭的基準ですが、家庭的根をアダム、エバから連結できなかったので、これを逆に、氏族的メシヤの立場で自分の父母と氏族を復帰しなければなりません。それが祖父母、父母、自分、息子・娘の四代です。この四代を連結させて、今まで根がなかったのを、父母を中心として代わりに根とするのです。

氏族的メシヤとは、父母の位置に立つことです。父母の位置において息子、娘を結び合わせるのです。宿命的です。避けることができません。それができなければ、あの世に行っても入籍できません。立つ瀬がないのです。自分の位置を定めてもらうことを有り難く思わなければなりません。

先生が与えることのできる最高の贈り物であり、先生が一族の前でできなかった歴史的な恨を解くことを、代わりに皆さんにさせるのです。そうすることによって先生の父母が解放されるとともに、皆さんの父母まで恵沢を受けるのです。皆さんのお父さん、お母さんが、堕落していない父母として登場するのです。

自分の氏族を復帰するためには、氏族的メシヤの責任を果たさなければなりません。このような命令は歴史上にありませんでした。氏族的メシヤの立場は、第二の真の父母の立場であり、イエス様の立場よりも上なのです。そのような立場を賦与されたという、とてつもない価値があるのです。これはいかなるものとも替えることができません。

なぜ氏族的メシヤとして責任分担を果たさなければならないのでしょうか。最初の理由は、皆さんの父母を救わなければならないからです。父母は第一のアダムの立場であり、皆さんは第二のアダムの立場にあります。

父母を復帰して再創造し、アダムの使命を完遂しなければなりません。第二の理由は、皆さんには故郷が必要だからです。氏族的メシヤの使命を果たすことによって、自分の故郷をもつことができるようになるのです。

結局、氏族的メシヤの責任分担を果たさなければならない理由は、アダム家庭の完成のためです。具体的には、氏族を教育するということです。

ここに来た皆さんは、金氏ならば金氏家門のメシヤのような使命を果たさなければなりません。金氏家門ならば金氏家門、朴氏家門なら朴氏家門において、天国を創建するに当たって、その氏族を代表して「私がメシヤだ」と考えなければならないのです。救世主だと考えるべきだというのです。金氏家門を救う救世主だと考えるのです。そのためには、金氏家門全体を代表して、祭司長的な責任を果たさなければなりません。

入籍というものがなければ、天国の国民になることはできません。宙に浮くことになるのです。そうなればサタンが思いのままに前後、左右、上下から攻撃するのです。今皆さんは、真の御父母様に代わって、氏族的メシヤの使命をもって自分の父母を解放することのできる立場に立っています。

なぜ氏族的メシヤが必要なのでしょうか。氏族的メシヤがいなければ、家庭基準を中心として連結されません。連結されなければ皆さんが故郷にいることはできません。先生に

は故郷がありますが、皆さんの故郷はないのです。家庭をすべて復帰したならば、今後入籍時代が来ます。入籍時代になれば、支派編成が行われ、入籍する順序が決まるのです。先に入籍する人々が兄となり、彼らを先祖のように侍る新しい体制ができます。全世界がそのようになって初めて地上天国が完成されるのです。

絶対的に氏族的メシヤが必要です。それができない人は、第一・第二アダム圏を連結することができません。先生とつながることができません。入籍することができません。ですから、絶対的に氏族的メシヤが必要です。そのような天の恩寵について何の価値も分からない人は、宝物をもらっても、その価値あるものをないがしろにします。そのようにいい加減に考える基準に応じて、審判を受けるのです。氏族さえ復帰すれば終わるのです。

祝福を受けることによって、天国への入籍が可能になります。そして、ようやく人間が天国を得るのです。天の家庭を得て、天の氏族、天の民族、天の国家、天の世界を経て、天宙を経て国を得ることになり、その国に入籍することによって天国の国民になるのです。真の父母の血族が入籍するはずでしたが、堕落することによって長い歴史を経て世界の中から奪ってこなければならなくなりました。

ですから、ここにおいて氏族的メシヤの責任を果たすことで、イエス様が失敗したことを蕩減復帰しなければならないのですが、そのためには世界各国に責任をもって、その国を天国に捧げなければならないのです。

氏族的メシヤがたくさん現れて、彼らが一つになり、氏族的メシヤを中心として自分の国を復帰する運動が起こるのです。東で西で、三六〇度で祝福家庭が生まれ、誰が頂上に上るか競争するのです。天の国に入籍するまでは、先祖の立場を得ることはできません。先祖の立場が得られなければ、いつ押し出されるか分からないのです。

統一教会に通いながら二十年間に何人を伝道したかということで等級をつけるとすれば、その間一人も伝道できなかった人は、寄生虫のようなものです。今後入籍するときは、その数を重要視するのです。入籍時代に入るのです。自分の家庭を中心として一族にならなければなりません。アダム家庭は、アダムの一族です。アダム家庭を中心として考えると、アダム家庭の息子、娘がいて、一族がいるならば、国が形成されるのです。そうなれば、じっとしていても国は形成されるのです。

自分の家庭に息子、娘がいて父母がいるので、三代がいることになるでしょう。自分の縦的な基盤を中心として、横的には平行に家庭の理想をすべて受け継ぐことのできる、数百、数千の家庭があるのです。それを連結すれば国になるのです。そのままにしておいても国になるのです。世界は、複雑で困難なものではありません。

統一教会の教団は、氏族です。氏族なのです。私の血が共に動くのです。私が涙を流すならば涙を流さなければならないし、私が喜べば喜ばなければならないのです。血族なのです。五色人種を超えて、文化背景の異なるすべての国家基準を超えて、壁を打ち破って

一つとなった新しい天国を創建するための民族です。この民族が聖なるものとされるとき、天国の創国（注：国を建てること）が顕現するのであり、そのような聖なる創国の民族として生きていくとき、創世界がなされ、その世界の上に天宙的な地上天国と天上天国が連結されるのです。

今、先生は、皆さんにメシヤという名を与えました。氏族的メシヤ！　ですから皆さんは、どうすべきでしょうか。メシヤとして何をしなければならないでしょうか。国家的メシヤ、世界的メシヤ、天宙的メシヤになり得るあらゆる準備をしておきました。山のような大きな宝物を皆さんのために準備しました。皆さんがメシヤになりさえすれば、宝の山のようなものをすべて相続するのです。水道管のようなものがつながっていて、水が流れていくように、皆さんに相続させるのです。

氏族的メシヤが安物だとでも思っていますか。賢い先生がメシヤの使命を果たすために一生を捧げても到達していないので、恥ずかしく思っているのです。皆さんにとって「氏族的メシヤ」という言葉は驚くべきものです。イエス様よりも貴い価値ある立場に立つことができるのです。そればかりでなく、統一教会に反対し、誹謗中傷してきた人をも、堕落していないアダムの立場に引き上げてあげるのです。この世の中に、そのような話がいったいあるのでしょうか。語っているこの文なにがしという人は、真の御父母様の位置にあるので、今まで話してきたすべてのことを成し遂げてきました。成し遂げられなかったことはありません。

②百六十家庭完遂は必須

皆さんの一族をすべて祝福家庭にしなければなりません。百六十家庭から百八十家庭です。そうして初めて入籍するのです。これを中心として国を救うことができるのです。このような時が来たのですが、氏族的メシヤにならなければならないでしょうか、なるべきではないでしょうか。個人の救いの時代ではありません。家庭と、氏族と、国家と、世界が一度に帰ることのできる時になったのに、家庭的基準で座り込んでしまえばどうなるでしょうか。

祝福を受けた家庭は、氏族的メシヤの使命を果たさなければなりません。イエス様が失敗したことを、家庭的メシヤを中心として百六十軒、百二十軒を一つにできずに死んだがゆえに、今の時は世界的舞台で百六十軒を一つにすることによって、イエス様が失敗した基準を中心に、地上に着陸することのできる家庭的メシヤを形成して、堕落していない真の父母の歴史をつくることができるのです。

そうなって初めて入籍がなされます。国に入籍することができるのです。自分の国になるのです。そうなれば、国に入籍し、戸籍に載るのです。先生は、迫害されながらなしてきましたが、皆さんは、歓迎されながら百六十軒をなすことができるのです。ですから、先生が反対されながら百六十カ国やったものを、百六十軒で歓迎されることによって蕩減復帰するのです。

王権時代になったので、多くの国、百六十の国家を中心として、先生が神様の代わりにメシヤを送るのです。神様は、一人のメシヤ

を送って今まで救いの歴史を展開してきましたが、先生は、神様の救いの歴史において地上に着陸し、サタンのいない世の中になったので、平面図上で全世界の祝福家庭に氏族的メシヤの使命を完遂させるため、世界に配置したのです。この氏族的メシヤが家庭的メシヤを引き連れて国に入籍するようになれば、世界に通じる基盤はできるのです。

百六十の国家さえ一つになれば、世界と天宙は自然に一つとなって結ばれるのです。先生は、百六十の国家を完成したということを知らなければなりません。皆さんがいかにして百六十軒をするかということが問題です。いかにして、氏族的メシヤとして百六十軒を救うかということです。そのようにして真の父母が百六十の国家を完成したのを連結するのです。ですから登録するのです。そのようにして皆さんの家庭が回れば、百六十家庭を中心として、国が回り、百六十の国家がすべて一度に回るのです。ですから氏族的メシヤが必要なのです。

アダム、エバが堕落することによって、アダム家庭を失ったばかりでなく、アダムの一族を失いました。七代です。七代を経たならば、アダムの一族を中心として、地上天国の基盤を完成するはずでした。七代が神様の血統を中心として結ばれなかったのです。七代だと何千家庭になるでしょうか。個人・蘇生、家庭・長成、氏族・完成です。これが一つのカテゴリーです。これを切り離すことはできません。三段階過程です。

ですから、み旨の道では、皆さんは一人で生きることはできません。家庭のために生きるべきであり、氏族のために生きなければなりません。その氏族を越えることができなければ、世界の国家圏に加わることができません。氏族編成ができなければ、世界国家、世界版図の上に入籍できないということは、皆さん、知っていますね。百六十家庭以上祝福をして、初めて天国に入籍するのです。これは話だけではありません。このとおりにしようということです。

氏族的メシヤがいなければ、復活し得る重生の橋を失うということを知らなければなりません。氏族的メシヤが百六十家庭を立てることができなければ、入籍できません。入籍において数千代の差が開くのです。五十億人類が歴史的代数においての差が開くということを知らなければなりません。ですから、必死に氏族的メシヤの使命を果たさなければなりません。

これからは、真の父母を中心として入籍する人が先祖になるのです。霊界で先祖となって、その主流氏族とその傍系となる人を中心として、これを編成するようになっているのです。ですから入籍しなければなりません。しかし、ただで入籍できるようにはなっていません。百六十家庭、あるいは百八十家庭を完了しなければならないのです。これができていない人は、脱落することになります。三十六家庭とか何とか、それを主張する時代は過ぎたのです。平等化時代が来たので、ここでは誰が先にその数に入るかが問題なのです。

自己完成というのは、絶対真の愛、絶対真の生命、絶対真の血統、絶対真の良心を完成することです。そうして堕落後に失った家庭を復帰して、安着するのです。真の父母が安

着したので、私たちも真の父母に従って氏族的メシヤになり、百六十家庭を連結し、百六十カ国を占有するのです。そうすることによって、天国と地上を自由自在に行き来することができるのです。必ずやこれを相続しなければならないので、運命的というよりも宿命的にしなければならないのです。そうして入籍するのです。入籍して初めて皆さんが地上天国、天上天国を所有することができるのです。入籍して初めて「私の国」、「私の王国」と言えるのです。

入籍する順序で先祖が決まるのです。つまり、誰が早く氏族的メシヤになって、先に入籍をするかによって先祖が決まるのです。イエス様が百二十門徒を登録しようとしたのですが、それができなかったので、再臨時代に百六十家庭を中心として登録しなければならないのです。百八十でもいいのです。みな「百六十家庭がいい」と言って、百八十家庭は願わないので、百六十家庭に定めたのです。六数はサタン数なので、サタン世界で完成しなければならないのです。四数は理想数です。四数の四倍は全体を象徴するのです。

皆さんがいかにして百六十家庭をするかが問題です。それが氏族的メシヤの使命です。百六十家庭を皆さんの家庭を中心として連結するのです。それが失われたアダム家庭を完成することです。百六十家庭が絶対に必要です。どうして必要なのでしょうか。神様と真の御父母様が勝利したすべてを相続するためです。相続というのは、すべてが解放されて、神様のようになることです。

皆さんは、氏族的メシヤがそれほどまでに重要だということが分かりましたか。これがなければ、先生についてくることはできないのです。つまり、天国に行けないということです。それはまた、サタン世界を解放できないということでもあります。ですから、いかに困難でも氏族的メシヤの使命を果たさなければなりません。そうしてこそ天国に入籍することができるのです。登録するのです。そうしなければ入籍することができないのです。

なぜ百六十家庭かというと、これを世界に連結させるためです。ヤコブは十二家庭、モーセは七十二長老、イエス様は百二十門徒、再臨主は百六十使頭です。使徒の頭ということです。イエス様は使徒といいました。「使頭」というのは私が初めて使う言葉です。誰も知らない言葉です。日本はエバ国家なので、先生が知っている秘密をすべて教えてあげました。韓国人、責任者も知らないことまですべて教えてあげたのです。それで責任が果たせなければ首が飛ぶのです。

百六十家庭を解放できなければ、第一次アダム、第二次アダム、第三次アダムの勝利圏を相続できないのです。一次アダムの分しかしていなければ、二次アダム、三次アダムと関係を結ぶことができないのです。来たるべき再臨の主が、一次アダム、二次アダム、三次アダムをすべて完成して、一次アダム圏、蘇生の基盤さえつくるならば、接ぎ木してあげようというのです。

先生は四十年間迫害を受けながら、百六十カ国に宣教部をつくりました。これからは、祝福を受けた家庭、統一教会のメンバーが氏族的メシヤとなって、百六十家庭を連合しなければなりません。それは一つの水晶体、結晶体のようなものです。先生は迫害されなが

らつくりましたが、今や統一教会の食口は、迫害されるのではなく、歓迎されながら自分の一族を救うことのできる時が来たのです。それができないという人は、資格がありません。百六十人に祝福を受けさせて初めて、国に入籍するための資格ができるのです。カナンの福地に上陸して、国を迎えることのできる立場に立つのです。

世界が先生の言うことさえ聞いていたならば、一九五二年から地上に平和の世界が、天国ができていたはずです。今日、皆さんに語っている「氏族的メシヤ」を派遣していたことでしょう。そうしていたならば、全世界のキリスト教徒は八億ですが、世界の八億の人が先生の側にいるのですから、一つの町内に一軒、一家三代がみな氏族的メシヤということになるのです。そうすればサタン世界は、完全に退くのです。そうして憲法を中心として、すなわち今後の世界をいかにして治めるかという憲法を制定して、治めるようになっているのです。

ですから今後、家庭を中心にどう進むべきかということは、まだ教えていないのです。一つ知っておくべきことは、大移動の時代が来るということです。先生の言う氏族的メシヤとなって、百六十家庭を祝福した家庭は入籍が可能です。先生を一代として、二代、三代、四代というように、先祖を定めるのです。先祖を立てれば王権ができるのです。王権の血族をつくらなければなりません。

実績のない人は、神様には必要ありません。愛を中心とした実績がなければなりません。ですから、皆さんも三十六家庭、七十二家庭、百二十家庭、一族を率いてこそ天国に行くことができるのです。それができなければ入籍はできません。原理がそうなっています。そうですか、そうではありませんか。三十六家庭という威信を掲げていますが、ただ掲げているのではありません。恐ろしい立場なのです。サタンも誰かをつかまえて、その前で攻撃するかもしれません。

三) 天国の支派と族譜編成

今後、皆さんが天国に登録するという新しい出来事が起こることでしょう。戸籍に載せなければなりません。戸籍に載せるためには、国がなければなりません。国がなければ入籍することができません。

国がどんなに重要かを知らなければなりません。国があってこそ、その国を通して神様が思いどおりになさることができ、そうして初めて私たちにも迫害圏であるサタン世界を踏み越えることのできる基盤がつくられるのです。ですから、食べるときも、何をしていても、いつも国のことを考えなければなりません。

戸籍が変わらなければなりません。戸籍を新しくつくらなければなりません。サタン世界の戸籍は、すべて滅びるのです。それは、地獄圏に属するものです。ですから、天国の戸籍に入籍し直さなければならないのです。今日、それをはっきりと知って、今後私たちの取るべき姿勢を整えて、私たちの周辺にこの事実を伝えなければなりません。そのために、中心存在はいつも投入して忘れなければなりません。

天国に新しい族譜が編成されるとき、入籍が行われるのです。百六十カ国を中心として百六十家庭が一つになることによって入籍時代となるのです。今、皆さんが生まれたとすれば出生届けをしなければならないし、結婚すれば婚姻届けをしなければならないし、死ねば死亡届けをしなければならないのと同様です。国ができれば、憲法を中心に、戸籍であるとか、それに関する体系によって管理する基本法ができなければなりません。その国に入籍するためには、百六十家庭が完全に一つになって入籍しなければならないのです。

入籍するとき、母国語を知らなければ入籍できません。言葉と文化と生活環境が完全に真の父母のものでなければなりません。真の御父母様の文化圏を相続して心情文化世界を代表した、そのような家庭とならなければ、天国に入籍できる資格が剥奪されるのです。

天国の法を守って、天国の王宮法を尊重視することができなければなりません。今後、南北が統一された世界、そのすべてに対して備えなければなりません。その訓練が残っています。その時に、誰でも入れるのではありません。入籍時代が来るのです。その時は、大学を卒業して、博士になって、大学の先生になることよりも難しいのです。自分の一代に一族の歴史をすべて編成して、それにパスしなければなりません。霊界、肉界から鑑定を受けて選出されるのです。

そのように考えると、皆さんは、先生が今まで四十五年間指示してきたすべてのことにおいて合格ですか、不合格ですか。何分の一合格したかが審判の条件になるのです。これは脅迫ではありません。見ていてください。私の命令は、私がすべて勝利した条件を立てた上で命令していることなので、天国の訓示第一条の条件として、法的条件として残っているのです。それについての問答がなされるのです。

憲法を作って法律を発表したのに、その法に引っ掛かるならば監獄行きなのです。「知りませんでした」という弁明は通じません。そのように考えている女性は今、悔い改めなければなりません。絶対に隠れて生きてはなりません。警告します。男性よりも女性に責任があります。男性は女性の言うことを聞くものです。どういうことか分かりますね。

日帝時代にサタンが先に創氏改名する運動をして、私たち民族を教育しました。ですから今、姓を変えることが難しいでしょうか。日帝時代にも変えたのですから。そうではありませんか。私は、姓を変えるために来た人物です。族譜を掘り起こすために来たのです。気分が悪いですか、良いですか。僕の族譜を掘り起こして、王宮の宮女、王子の族譜に入籍させてあげようとしているのに、嫌だという人がいますか。嫌ならばやめてください。そのような人は滅びるべきです。ですから、喜ばざるを得ないのです。

アダム一代から族譜ができていません。初めて族譜編成がなされるのです。家庭を中心とする入籍時代が来ます。そのような恐ろしく、驚くべき時代が来るということを知らなければなりません。

四) 民族大移動時代が来る

氏族的メシヤとして入籍したときには、韓国語を知らなければ御父母様の近くに行って立つことができません。遠からず、そのような時が来るのです。入籍は、超国家的、超民族的にしなければなりません。民族大移動の時が来るのです。ですから民族的メシヤの活動を急いでしなければなりません。この世は、何でも先生の言ったとおりになります。そうなるようになっているのです。

今後、入籍する順序を中心として、民族大移動が起こるのです。統一教会に反対する人は今後、荷物をまとめなければなりません。スターリンはサタン側の再臨主の象徴なので、韓国の民族を死ねとばかりに中央ロシアの砂漠地帯に連れていって捨てましたが、死にませんでした。韓国民族は、とても忍耐力のある民族です。団結して生き残りました。その時のように大移動するのです。その時は、強制的に移動させられましたが、今は、志願して移動せざるを得ないのです。

原理原則がそうですから、天国に行くといって自分たちが良い暮らしのできる所に行くことができるでしょうか。そうではありません。地上天国が顕現するときには、大移動が起こります。先に入籍した順番のとおりに、先生の側近となり、ずらりと並ぶのです。大韓民国で反対する人は、追い出すのです。荷物をまとめるのです。

イエス様は結婚できなかったので、祝福を受けた人は、イエス様よりも上の立場に立つのです。ですから氏族が反対することなく、先生を歓迎する時代が来たのです。氏族的メシヤとして百六十家庭を糾合するのは、たやすいことでしょう。問題ないのです。早くそれをしなければなりません。それをしなければ、皆さんは一人残らず追い出されます。

世界の人が行列をつくって来て、みな入籍するようになって、入籍する数が四千万を超えるとき、皆さんがそこから外れたならば、荷物をまとめて南米に、アフリカに行かなければならないのです。嫌でもそのような時が来るのです。大移動時代が来るのです。

ここに来た人たちは、「そんなはずはない」と言うかもしれません。そのような人は、見ていてください。今に、荷物をまとめて遠い南洋に追い出されるのです。世界の七千万人以上の統一教会のメンバーが、入籍して入ってくるのです。すべて韓国に入籍してくるのです。それを知らない人はみな、荷物をまとめて退くようになります。大移動が起こるのです。民族大移動が起こるのです。起こらざるを得ないのです。

そのような困難な世界を知っているので、皆さんを集めて深刻にみ言を伝授してあげているのですから、よく聞いてください。ここに来ていた人が死んでから「どうしてあの時はっきりと言ってくれなかったのか」と言ったときに、私が引っ掛かることのないように、はっきりと語ってあげるのです。

国があって初めて入籍がなされます。出生届け、婚姻届け、死亡届けをするのです。私たち統一教会の多くの家庭が祝福を受けましたが、今は誰も手続きすることができません。手続ができないのです。国がないがゆえに、みな新しく登録しなければならないのです。ですから大移動が起こるのです。北極の人が南極に、南極から北極に行くのです。今後、

手続きをする順によって支派が異なってくるのです。大移動が起こるのです。

三　四位基台入籍続一祝福

一) 三時代大転換一体圏統一祝福式

地上では真の父母によって祝福を受け、天上では興進君によって祝福を受けたのですが、父と息子が霊界と肉界に別れて祝福したものを一つにしなければなりません。地上の御父母様を中心に、息子が霊界でしたことを地上に下ろして、御父母様から皆さんが祝福を受けた基盤と霊界で祝福を受けた基盤を連結させて一つにし、御父母様が地上で息子、娘を祝福する代わりに、霊界が天使長の立場で完成できる祝福基準の前に順応しなければならないのです。それゆえ興進君が地上に降りてきて、父と息子が一つとなった立場で一つの条件を立てて、御父母様がなしたことをすべて興進君も共になしたといえる価値を認めるのです。

八十の老人が世界を回って祝福する時代は過ぎ去りました。皆さんが御父母様の代わりに、興進君も霊界で御父母様の代わりに祝福する時代を設定するのです。そのためには私が地上にいる父の立場で、息子である霊界の興進君に祝福する権限を伝授し、霊界で祝福してきたすべての基盤も、先生が行って祝福した基準と同等の価値を設定したのです。

平面において、お父様の前に息子を立たせて祝福した、すなわちお父様が天上世界、霊界の息子の所に行って祝福したのと同じ価値あるものとして、統一された祝福家庭として意味をもたせるために、お父様が息子に祝福の権限を相続してあげるのだということを知らなければなりません。

父親が霊界に行けば、兄になります。また、息子は、弟になるのです。ですから天の父、父親の呼ぶ天の父も、息子の呼ぶ天の父も同じなのです。神様の前では、みな息子になるのです。ですから、同じ息子といっても、父親が先なので、横的な面においては兄の立場を代表するのです。

ですから、御父母様が御父母様の立場を完成したということは、息子の立場の完成を、霊界でも地上でも同じ価値的内容を伝授し、一体化させるというようなことをするのです。御父母様が、霊界の長子である興進君を呼んで、このように祝福された家庭を立て、一緒に統一的宣言をすることによって、先生が祝福をしてあげるのではなく、今後は興進君が祝福をするのですが、興進君がいなければ、顕進君がお父様の代わりに祝福することのできる時代になるのです。

三代の息子、娘、祝福を受けた家庭は、絶対に堕落してはいけません。堕落したならばどういうことになるかというと、今までのように真の父母が来て救うことのできる道理の時代は過ぎ去るのです。血統が異なったのを完全に転換し、三時代の先祖を代表した王権を受け継いで、祝福することのできる大将となった夫婦の血統は、千年、万年たっても汚されてはならないのです。血統の汚れたものを受けてはならないのです。純潔を守らなければなりません。分かりましたか。それをよくよく知らなければなりません。

深刻です。「真の父母の名によって許してください」と、許しを請うことはできないの

です。自分の先祖と自分の愛する兄弟を犠牲にしなければ、救う道がありません。それでもその血統はきれいな血統ではないので、剥ぎ取ってしまわなければならないのです。純潔な血統を残さなければなりません。深刻なのです。

三代圏内にある祝福家庭は、どんなことがあっても、堕落の悲しさを味わうような血族になってはならないことを警告します。

入籍特別修練会を通じて、女性が入籍することによって、息子、娘に責任をもち、母と息子、娘が一つとなって父を完全に悔い改めさせて、堕落していない父母の立場に立てることによって、来たるべき真の父母のあとに従って、神様を玉座にお迎えし、天宙のすべてを喜びの心をもって旧約時代、新約時代、成約時代、万物と息子、娘と自分たち夫婦をすべて捧げる立場に立たなければならないのです。

愛の実権を再び相続したその立場が故郷の地への出発の場であり、祖国光復の出発の場なので、今後、全体的歴史時代で願ってきた、祝福家庭がなせなかったすべてを蕩減してこそ、南北統一のこの混乱時代に責任をもって、私たちの手で祖国光復することによって祖国を建てるのであり、本郷の地を求める厳粛な課題に出征した兵士の母であり、息子、娘であるので、天地全体が協力して、一方通行で、勝利に向かって一歩一歩前進するための出征命令であることを知らなければなりません。

兵士となって、天の威信と伝統に汚点を残すような家庭、一世、二世、三世となるのではなく、霊界の先祖の前に恥じることのない、誇らしい家庭となることを天地父母は願いながら、祝福された長男興進君、顕進君、一族全体を合わせて願いますので、その目的達成のために、一寸の狂いもなく一体理想を完成させ、天地の勝利的王子、王女となることを願います。アーメン！

地上世界の真の父母の勝利圏、天上世界の長子圏を代表した興進君を中心とした勝利の伝統によって、一体的理想で伝授したことを宣布いたしますので、天地の存在は感謝の心で永遠不変の愛の国と、愛の地上天国、天上天国を抱いて、ありったけの精誠、忠誠をもって、孝子、孝女、烈女、聖人の道理、聖者の道理を果たします。お誓いします。アーメン！　お誓いします。アーメン！　お誓いします。アーメン！

二) 四位基台入籍

家庭的基盤でなければ入籍することはできません。真の父母というのは、家庭を中心として祝福の基盤を代表した世界的家庭なので、それと相対圏をなして入籍しなければなりません。家庭的出生を届け出なければならないのです。真の父母のみ名を中心に、神様のみ旨の平和郷ができ、統一圏ができるそこにおいて、家庭的に入籍するならば、国家が一瞬のうちに帰ることができるということです。

アダムとエバが家庭的に堕落することによって、サタンにすべてを入籍したのと同じように、今度は皆さんの家庭を中心として皆さんの国と全体が入って、天に入籍して戻ってこなければならないのです。これは原理です。堕落するときに、家庭を中心として堕落しました。ですから、それを蕩減しなければなり

ません。この原理があるので、この世界の大統領がいれば、その世界を引き連れて天に登録しなければなりません。登録したならば全体が、その国全体が救われるのです。

皆さんは、家庭を中心に入籍しなければなりません。ところが皆さん、まだ入籍していませんね。今後、恐ろしい時が来るのです。それに関しては具体的に説明しません。もしも引っ掛かるようなことがあれば、切ってしまわなければなりません。それが正に原理の法度なのです。

皆さんは、天を愛するように父母を愛さなければならないのであり、天と父母を愛するように兄弟を愛さなければなりません。自分の家庭と兄弟を愛するように万民を愛する人は、天国の民としての資格をもつ者として登場することができるのです。入籍できるということです。

潮が満ちてくるときは、初めはとても早く満ちてきます。どんなに早いことでしょうか。ところが、満潮となって交代するときは、一分以内に代わるのです。恵みの圏内で一分間だけ水平となって同じ立場に立てるということです。ですから、統一教会の熱心な青年たちが、サタン世界の人と同じ祝福の位置に立って、五十億人類が一朝一夕に、すべて統一されるのです。それで数万代が横的に連結されるのです。それから国家編成をするのです。国家というものを編成するときに、再び先祖として登場するのです。

これからは、祝福を受けたならば、一族に責任をもたなければなりません。押されてでも、強制的にでも祝福を受けたならば、天国に入籍するチケットをもらうのです。

三) 入籍家庭に対する真の御父母様の訓示

①純潔な血統を死守せよ
②一心定着
③子女に対する真の愛の実践教育
④国境撤廃と交差結婚
⑤祖国光復と天国創建
⑥訓読経、原理暗記
⑦家庭盟誓の実現化
⑧正午定着

四) 祝福家庭婦人動員と祖国光復

今後、皆さんの一族がすべて天に入籍しなければなりません。今回動かなければ、入籍できないのです。ですから祝福を受けた家庭を動員しなければなりません。しなくてもよいでしょうか。既成家庭はどうでしょうか。既成家庭の皆さんが、「既成家庭は動員しよう」と言うならするし、しないというならしないで、自由です。また、皆さん以外の人も、しようというならして、しないというならしないで……。我先に動員しようとするというのです。今、そのような時が来たのです。

母を通して母の伝統を受け継ぎ、父母の伝統を受け継いで代表してきたのが長子であり、長子権と長子の伝統まで受け継いだのが次子なのです。ですから、父の命令に母が絶対服従して、母の命令に長男が絶対服従して、長男の命令に弟が絶対服従しなければならないのです。そのような家庭にならなければ、神

様に仕える家庭になることができないというのが、原理的総観です。

先生は、天の心情をあまりにもよく知っているので、誰かが一言でも語るならば、痛哭するのです。天下を統治し万国を治めるべき神様が、主権者の中の主権者となって、万世の大王のあらゆる権威をもって、万民を父子の関係の世界として統治しようという理想が蹂躙されたという事実、それが恨なのです。この時点から私たちが立ち上がって、悪なる権勢をすべて破り、天の願ってきた主権を立てることのできる栄光の一日が、私たちの目前に迫っているのです。

私たちが神様を中心とした自主的な国で生きることのできる希望の一日は、何ものにも換えることのできない価値ある時間なのです。霊界に行った人の中に、神様を中心とした国家圏内で生きた人はいません。先生は、それを知っています。私は、統一教会のメンバーを苦労させましたが、国を建てて摂理的国家圏で国をもった主権者の前に国民として堂々と生きてきたという、本然の人間像をもてるという事実が、どんなに権威あることかというのです。先生は一生の間、それを標準として生きてきました。

今まで先生は、多くの人に苦労させましたが、その国の国民のために主権者としての神様に仕え、その心情を注いで、一生涯をそっくりそのまま捧げることのできる栄光の日のために闘ってきたのです。

私たちが復帰すべき祖国というのは、今日この地上にあるような歴史と伝統をもった国ではありません。そのような国とは本質的に次元が異なるのです。私たちが次元の異なるその国を受け継ぐには、そのための思想的な主体性をもった国民にならなければなりません。

ところで、その主体的な思想というのは、絶対者である創造主がいるとするならば、その創造主の思想と一致する思想でなければなりません。絶対者の願う国が存在するためには、その国の主権を中心として、その国の国民に一致することのできる国になることを願わなければならないのです。そのような国民性をもって国家形態を備えなければならないのです。その形態を保存することのできる資格をもつ人になれなかったので、その国は形成されなかったのです。

今私たちが生きている世の中に、祖国がどれほど多くあることでしょうか。大韓民国の人は、大韓民国を「祖国だ」と言いますね。北朝鮮の人は金日成を中心として北朝鮮を「祖国だ」と言います。日本人は日本が「祖国だ」と言い、中国人は中国が「祖国だ」と言います。多くの民族が、根源的な国家や先祖を中心として民族を形成したならば、それを中心として「祖国」と言うのです。しかし本来、人間世界の祖国は、何百、何千もありません。本来の祖国は、一つです。一つでなければなりません。

私たちの祖国は、一つの国です。一つの国の中にある故郷を求めていくのです。「神様が共にいらっしゃる故郷、神様が共にいらっしゃる祖国、神様の名をもった祖国だ」と言うことのできる国がないのです。それはモスクワでもワシントンD・Cでもありません。ないのです。そのような祖国と、私たちの故

郷の地を創建することのできる宝物を探そうというのです。

先生は、横になりながらも、いつもそのようなことを考えました。ここは父の国の家ではないので、愛着がないのです。ここに愛着をもって、良い暮らしをしたり子を生んだりするのは、仕方なくしていることなのです。神様と霊界の霊人が祖国の統一を、どれほど待ち望んできたことでしょうか。どんなに待ちわびてきたことでしょうか。「たとえ自分は地獄で生きたとしても、天上の低い所にいたとしても、私たちの祖国が早くできてほしい」と願うのではないでしょうか。その祖国が顕現するとき、自分たちが解放されるのです。ですから特使を遣わさなければならないのです。私は、監獄でもそのようなことをしてきました。門を開け放ったのです。肉界、霊界すべてにハイウェイをつくったのです。

ですから、霊界がすべて御父母様に対して、そのような方向に、一つの国へと進軍するのです。そのように願っているのです。霊界が地上のために、真の御父母様がうまくいくように祈っているのです。それを知らなければなりません。地上の真の御父母様、どうかよく闘って霊界の恨を解いてください。神様の願っていらっしゃるのがそのようなことではないでしょうか。皆さんは、これまで神様の国で生まれて暮らすことができず、この地のサタン世界で生きてきた期間が長いということを、恥ずかしく思わなければなりません。

四　入籍時代と私たちの責任

一) 入籍と真の御父母様の恵み

今日の人類は、サタンの血統を受けています。ですから悔い改めなければなりません。天地の大主人の前に顔を上げることのできないほど、恥ずべき内容があるのです。しりまで隠して岩の後ろに隠れて、神様と呼ぶことのできない恥ずかしい子であることを知らなければなりません。愛の怨讐の血を受けたのです。ですから、涙と鼻水を流してはいつくばり、命を失ったとしても「罰を受けて当たり前だ」と言うことができなければなりません。死んで埋葬された自分であるということを知らずに生きる、かわいそうな人たちなのです。

誰も知らないこの道を探すために、私がどれほど大変だったか分かりません。人生問題の根本を解明しなければ、解決することができないということを知ったとき、暗中模索していた若い時の苦痛は、皆さんには分からないでしょう。しかし、それを可能にする組織をつくって、言葉だけでなく実戦の途上において、それが証明された世界の版図をすべて備えました。今や誰でも走ってきて旗を受け取って後ろを向きさえすれば、天国に入ることができる時代が来たのです。

自分自身がどれほど汚れた姿で悪臭を放ち、統一教会を汚し、サタンの舞台をつくってきたかを考えてみてください。それを考えれば、神様の前で体を伸ばして座っていることはできないのです。答えてみてください。それができますか。解放されて長子権を相続し、王権を相続することのできる自然な神様の愛圏と血統圏が中心となっている人ならば、それが可能かもしれませんが、皆さんは、そのような人になっていますか。腐って、いつ落ち

るか分からないこの者たちが、自慢しているのです。

皆さんには何の資格がありますか。祝福を受ける資格があるでしょうか。祝福を受けようとここに来て座っているのですが、皆さんが統一教会に入ってから何年かの間にしたことは何でしょうか。祝福というのは、そのようにただ来て座っていれば受けられるというものではありません。千年の功を尽くし、万年の功を尽くしてから、その子孫が来て厳粛に千万回の謝礼を捧げながら、そして天上世界と地上世界の万民が仰ぎ見て、その日の栄光を称賛する中で、祝福を受けるべきなのです。果たして皆さんに、それができるでしょうか。

死んでみれば分かります。文総裁の言っていることがうそかどうか。私の言っていることがうそかどうか、今すぐにでもこの場で一度死んでみてはどうですか。霊界の度数に合った道理を教えてあげたということを知って、その教えどおりに行かなければなりません。いずれにせよ一度は行かなければならない道です。

文総裁の教えを受けなければ、その峠を越えることはできません。案内者がいないのです。ですから、天は今日この滅びゆく世の中で私たちのような者を立てて、キリスト教が生きる道、自由世界、民主世界が生きる道を教えてくれるのです。今日ここで名実共に真の父母の論理が出てくるのです。

「先生に似なさい」というのは良い言葉でしょうか、悪い言葉でしょうか。築かれてきた福をそのまま引き継がせてあげようというのです。先生が大きな峠を越えたとすれば、それを中心に同じ形をつくりなさいということです。そうすれば、その垂直線は同じなのです。

これからは、皆さん全員が絶対愛、絶対服従する立場に立たなければなりません。エデンにある家庭には自己所有権はありません。神様と神様の絶対愛と血統が一つとなった立場に立った真の息子、娘になりさえすれば、宇宙のすべてが私のものになるのです。愛によって一つになれば、自分のものになるのです。

二) 家庭の伝統を立てよう

天国の皇族圏を編成していく時代です。このどうしようもない野良犬のような者たち、今後ブルドーザーで押し倒してしまう日が来るのです。私の教えるすべての原理のみ言、教えるすべてのことを中心として、世界へ出ていくとき、この世界の伝統をせき止めることのできる韓国人がいるはずはなく、この世界の伝統をせき止める統一教会があるはずはありません。根を抜かなければなりません。目をつぶって断行しなければなりません。天国の伝統を立てるために刀を当てるときは、刀を当てる腹がなければなりません。

私の目を見てください。とても早く話しますね。主張の強い人なのです。間違えたならば、許しというものはないのです。世界に向かっていく時代を前にして、そのような日がやって来るということを考えるとき、これからは厳粛に過去をもう一度悔い改めながら、自分の一身を整え、一家庭を整えなければなりません。

これからは、世界がすべて入籍しなければなりません。十二支派を中心に、入籍するときは、皆さんの一生、統一教会に来てから今までのすべてを一つ一つ記録しなければなりません。教会からふろしき一枚でも持っていったとするならば、それをすべて記録しなければなりません。それが霊界で記録されたコンピューターの記録と合っていなければ、皆さんは入ることができません。正直にすべて自述書を書いていかなければなりません。そのように、一度清算して越えていくべき時が来るのです。

ですから、皆さんの祝福も、教会祝福、南北を統一したあとの祝福、世界を統一したあとの祝福があるのです。そのようなものなのです。短期間内に南北統一の時代が来ることを願わなければなりません。世界を越えて皆さんが祝福を受けて行ってこそ、天国に入るのであって、そうでなければ霊界に行ってとどまるのです。

人間の価値的結論は、二つではありません。一つです。その価値的結論の中心とは何でしょうか。真の愛です。真の愛とは何でしょうか。真の愛の定義さえ下せずにいます。統一教会の思想は、愛を中心とした唯一の世界観です。個人はこう行くべきであり、家庭はこう行くべきであり、氏族はこう行くべきだということがはっきりと示されています。その法度は、レバレンド・ムーンの構想ではありません。天国の法度の反映体なのです。そうしなければ、霊界に行って入籍できないのです。

理論的に考えるならば、み旨に関して説明することはなくなりました。すべて終わったのです。これからは、紙切れを持って越えていく時です。ですから、神様と真の父母から歴史が始まり、今後、入籍時代が来るのです。ですから皆さんが入籍するのです。神様の息子、娘としてみな神様のように、真の父母のようになったでしょうか。言葉で言うのは簡単です。寝ても覚めてもこれを考えなければなりません。食べている時も寝る時も、どこへ行ってもこれを考えなければなりません。そのためには、祖国で暮らしてから行かなければなりません。

人間の堕落によって、あってはならない内容が、天の道に反対する内容が、今日の人間世界に満ちているのです。これを払いのけなければなりません。これを裂いてしまわなければなりません。それは言葉だけではできません。サタンの愛を中心に、サタンの生命、サタンの血統につながって、すべての民族が歩んできた歴史的文化背景が、異なる習慣性、あるいは風習が各種各様に満ちているので、そのままでは除去できないのです。

ですから聖書に、「自分の命を失おうとする者は生きる」とあるのです。それで逆説的な論理が成立するのです。命を失おうとしてこそ生きるのです。自分の命を投入しなければならないのです。ですから、すべてのものを漂白して洗濯し、言い換えれば、蕩減して復帰しなければならないのです。そのような過程が絶対に必要なのです。それをせずに、堕落世界で所有していた習慣性や罪悪性が残っている限り、天との関係を結ぶことはできないのです。

救いの道というのは、皆さんが今まで生きてきた、そのままの習慣的生活を通して得ることのできるものではありません。完全に蕩

減の道を行かなければならないのです。救いの摂理は復帰摂理であり、復帰摂理は再創造摂理です。ですから、再創造されるためには、堕落する前のものと同じように、本然の位置、ゼロの位置に戻らなければならないのです。そこには意識もなく、習慣もなく、今の自分の金や李という姓もないのです。そのようなゼロの位置に戻らなければなりません。天の創造本然の基準を考えるならば、造られたすべての万物は、ゼロから出発したのです。

統一教会のメンバーは、絶対に自分勝手に生きることはできません。自分の心をだますことができますか。自分の心を偽ることができない限り、天国の戸籍を偽ることはできません。すべてのことが籍に入るのです。私がこの手を挙げたとすれば、それがビデオ・テープにすべて記録されていますね。人間の世界でもそのように記録されるのですから、天国に記録されないはずはありません。祝福を受けたある夫婦について、ボタンを押しさえすれば、幼い時から、その先祖の時からすべて現れるのです。あっという間に出るのです。時間はかかりません。ここでは時間という概念がありますが、天国はあっという間なのです。

女性が家柄の高い名家に嫁入りしたならば、いくら美人だとしても、その家の法度に従わなければなりません。法度に従えなければ追放されるのです。ですから、どんなに大変でしょうか。生活が合わず、習慣も合わず、風習が通じなければつらいのです。規則だらけの行路に従って愛し、それに拍子を合わせることは、容易ではありません。難しいのです。拍子を合わせられなければ、追い出されるのです。

アダムとエバが絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準を失って偽りの結婚して、神の血統を失い、所有権を覆し、一族を滅ぼしたので、ここで絶対血統復帰をしなければならないのです。真の父母の純潔な血統を永遠に自分の子孫に残すことができるように守らなければなりません。アダムとエバは、それができずに結婚したのです。私たちは、それを守って結婚し、絶対血統、絶対所有権、絶対心情圏を復帰しなければならないのです。それを標語とするのです。三大標語です。

Book 十: 成約人への道
The Way in the Completed Testament Age

はじめに

成約時代は、天地父母様が地上にお座りになることによって、子女たちが完成し、神人愛一体の愛の理想が成就する時です。

真の御父母様は早くからみ言を通じ、神様と人間は親子の関係だということを明らかにされ、その関係を連結する根本の力が真の愛の心情であると教えてこられました。

「全宇宙の根本は、真の愛が土台となり、神様を中心とした親子の関係も心情によって完成し、生活の中で侍って生きる心情の社会」であると語られました。

真の愛による心情の完成的体恤は、神様の真の愛の中で心と体が統一を成すとき、成就し、家庭の完成も夫と妻の関係が真の愛によって一つになるとき、成就するとおっしゃいました。

本然の世界は、お一人の神様を中心とした一つの大家族社会です。神様を父母として侍って生きる巨大な一つの家族です。したがって、この大家族社会は万民が心情によって調和して生きる心情文化社会なのです。

心情が血縁のような絆となって生きる世界、血肉の情を越えた心血社会は、自由と平和と統一と幸福の世界が成就した心情文化の共生共栄共義の世界なのです。

真の御父母様は、多くのみ言を通じて、生きていらっしゃる父なる神様が分かるようにしてくださり、人間の根本道理を悟らしめ、本然の世界へ向かうことのできる個人完成と家庭完成、そして家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子の道理を完成した成約人の営みと、霊界をはっきりと教えてくださって、生命と永生の道へと導いてくださいました。

成約人は人類の父母であられる天地父母様に侍り、地球星は私の故郷であり人類の故郷、天宙は私の祖国であり人類の祖国であることを知り、成約人は父母が同じであり、故郷が同じであり、祖国が同じ創造理想世界である神様の国を創建しなければなりません。

どうかこの本をたくさん訓読されることによって、神様の創造理想を相続し、新たな心情文化を地上に花咲かせる成約人としての人生を培っていかれる皆さんとなられることをお祈りいたします。

一九九九年十二月二十五日

日本語版発刊によせて

文鮮明先生は「人間が、①神様について明確に分かっていれば、②真の御父母様がどのような方なのか明確に分かっていれば、③霊界について明確に分かっていれば、④罪を犯したら蕩減復帰の道を歩まなければならないことに対して確かに分かっていれば、その人はどこでどんな環境の中で暮らしても罪を犯さずに生きることができるでしょう。いや、この中の一つでも確かに分かっていれば、その人は善なる人になるでしょう」と語られています。

このみ言を基に七つのテーマを設定し編集したのが本シリーズです。

本書は、シリーズの最後に位置づけられる本です。成約時代、完成時代を迎え、蕩減復帰されて本然の立場まで戻ったのち、私たちはどう生きるべきでしょうか。これは最も重要な課題であると言えます。

侍る生活、統一する生活、真の御父母様の生活的伝統、創造理想を中心とする根本原理など、成約時代における天国人としての信仰生活についてのみ言が集められています。

この本を活用され、皆様が高い理想と志を掲げ、希望ある人生を歩まれることを願ってやみません。

一九九九年十月

人生とは何か

一) 今まで人生問題は迷路

私がなぜ生まれ、なぜ生きなければならず、どこに行かなければならないのでしょうか。生まれたことを、皆さんが自分で生まれたと考えてはいけません。生まれはしたけれど、どのような動機で生まれ、何のために生まれたか、私をして生ましめた動機と目的が分からない私たちです。生まれるには生まれたけれど、私が生まれようとして生まれたのではなく、生きるには生きるけれど、私が生きようとして生きるのではなく、死ぬには死ぬけれど、私が死のうとして死ぬのではないというのです。

ところで、私をもってして何を誇るのでしょうか。自分自身が生まれたくて生まれることもできず、自分自身のその何かをもって生きることもできず、死ぬ道を避けることもできない自分をもって何を誇ってみても、哀れで物悲しいだけです。生まれたので生きなければならない運命であり、またそのように生きていかざるを得ない運命です。

今日まで哲学は、歴史時代を通じて人生問題を解決するために苦心してきました。真の人間の価値、人間がどのように完成することができ、人間自体から勝利して万宇宙に誇ることのできる勝利の完成した姿を、いかに成し遂げるかという問題を中心として、数多くの哲人たちが出てきて、苦心しながらありとあらゆる主張をしました。それが今となっては、人間を通じて思想体系を立てたすべての主義主張がもはや実験をすべて終え、既に落第してしまったというのです。みな脱落してしまいました。

なぜ人間が、このように特別することもなく生きながらも死ぬことを嫌い、「なぜ生きるべきか。根源がどのようになっているのか」と、皆さん疑問が多いでしょう。そのすべての疑問は、人間の哲学書籍を通しては解決できません。哲学というものは、今まで神様を探していく道を開発したものです。宗教とは何でしょうか。神様を知って、共に生きる生活から始めるのが宗教生活です。

人生をこのように生きて行く目的とは何でしょうか。この問題を、もう一度考えてみなければなりません。動機が私によるものではなく、目的も私だけのものではないことに間違いありません。生きる上において幸福な場を嫌う者がどこにおり、豪華絢爛な場で生きたくない者がどこにいるでしょうか。しかし思いどおりにできないのが私です。それでも自分を誇りたいし、思いどおりに生きたいし、思いどおりに残りたい私です。このような心情の交差点をもった私だというのです。

さあ皆さん、見てください。皆さんが八十年ほど生きたとします。その中で夜寝る時間を除けば四十年になります。半分に減るということです。寝ることも生きることでしょうか。寝ることは死んでいるようなものです。寝ることは死んだ命です。ですから、二十四時間の間で生きようともがく時間は半分にもなるでしょうか。また、そこから御飯を食べる時間を一時間ずつ切り捨てたらどうですか。御飯を食べる時間を一時間は見ないといけません。
さあ、またその中で友達の宴会の日、近所の町内のお年寄りの還暦を祝う日、誰かが亡くなった日、葬式を行う日、病気になって寝ている日、すべての日を全部差し引くと一生の中で生きているという日が半分にもなるでしょうか。この間計算してみたところ、生きているという日が七年と出ました。その七年の中で「本当に生きた」と言える日が何日出てくるかというのです。

一生というものは早いのです。一生は本当に早いのです。物心ついてこの世の物情を知り、あれこれしていて四十を越えたら五十であり、もう十年はあっという間なのです。そして十年たてば六十があっという間であり、六十になれば七十があっという間であり、私も静かに考えてみると、一場春夢（注：人生のはかないたとえ）という言葉を実感するのです。

自分が運を百ほどもって生まれたのに、百二十ほど生きて死ぬ人は、その後孫が滅びるのです。人の運は、ゴムひもと同じでピンと張るというのです。しかし八十ほど生きて死ねば二十ほどの福を残して、その運勢を後孫の前に相続してあげ、逝くことができるというのです。

運命は変更することができますが、宿命は変更することができないのです。大韓民国の人として生まれたことは、変わり得ますか。自分のお父さんの息子、娘として生まれたことは、変わり得ますか。その国の主権がどんなに強く、その国の慣習がどんなに強くても、お父さんの息子、娘だということは変更できないというのです。そのように復帰の道は、宿命的な道です。どうせ、いつの日かは清算しなければなりません。

出発を誤ればとんでもない所に行くというのです。ですから船が大海を航海するにしても、出発した港から羅針盤を中心として行くべき目的地に向かって、方向性を描いてこそ行くことができるというのです。
それでは、人間が出発した港とはどこなのでしょうか。分からないでいます。羅針盤をもって彼岸の世界に到達することのできる、目的地を描いて行くことのできる方向性がどこにあるのでしょうか。ないというのです。これがくねくねと、自分勝手に行ったり来たりしました。このように見るとき、人間はどんなにやったとしても人間で終わるのです。

二) 私たちはどこに行くべきか

一生を経たのちに、私はどのような所に行くのでしょうか。これが、人間たちが解決しなければならない重要な問題です。宗教もこの問題を解決するために、哲学も歴史もこの問題を解決するために動員されています。それで皆さん自身も、このような運勢に捕らわ

れて導かれていっていることを否認することができないのです。

それならば、どうせ行かなければならない私自身であるとすれば、この体はどこに行こうとするのでしょうか。この心はどこに行こうとするのでしょうか。またこの生命はどこに向かって傾いていて、私の心情はどこに行こうとするのでしょうか。私の所願あるいは所望と理念はどこに行こうとしているのでしょうか。

この問題を解決することができないとしても、私たちはどうせ行かなければならない運命に置かれているのです。私たちが生きて、そして死ぬ日、この体は土に埋められることによって終わるのです。それならば体が埋められるその日、この心も、この生命も、この心情も、この理念も、あるいは所願までも一緒に埋められてしまうのでしょうか。消えてしまうのでしょうか。ここに確実な内容と、確実な解決点と、確実な目的観を立てておかない限り、これは不幸な人間でしかあり得ないのです。

せみの卵がせみになるためには、赤ちゃん時代、幼虫時代があります。幼虫時代には水たまりに棲み、あるいは地面のくぼみにある穴の中に棲むとしても、それらが行かなければならない道はそこではありません。大空を飛ぶことのできる道を行かなければならないのです。飛ぶためにはどんなに地面の穴を掘り入ったり、水の中で泳ぎ回ったとしても、その過程で何かを準備しなければなりませんが、それが絶対条件だというのです。なくてはならない条件だというのです。

幼虫時代から成虫時代に越えていくためには、幼虫時代において飛ぶことができる万端の体制が準備されなければならないのです。そこに反対の要素である皮を脱いで整備することができる一時を必ず通過しなければなりません。殻を脱がなければなりません。水の中で棲む時は平たくなければならず、水の上に浮かんで回るのに必要な姿が適格でしょうが、空中で飛ぶようになる時にはそうであってはいけないというのです。そこに合うように、すべてのものが整えられなければなりません。

私たちは何を中心として生まれ、何を中心として行くべきであり、何を目的として行かなければならないのでしょうか。このことは、神様抜きには絶対駄目なのです。神様を抜きにしては動機のない因縁になるのです。動機をもつことができない人は、どんなことを成就しようとしても、その結果は収められず、価値が認定され得ないのです。ある建物を建てるときは、設計者が設計した設計図に従って建築するようになります。設計の原本もなく建てられた建築物は、設計者が目的とした建物になることはできないのです。

秋の季節が来たという事実は、冬が近づいているということを意味します。冬は、生命があるものだけが通過することができる路程です。生命をもてないものはすべて、ここで後退するしかありません。それで、冬が来る前に新しい生命を注入しなさいというのです。

新しい生命は新しい愛を中心とした新しい主義と思想、そして新しい人生観、新しい世界観、新しい宇宙観をもたなければなりません。そうでなくては、冬の季節を通過することはできません。冬の季節を通過することができる生命力をもつようになれば、それを通

過する過程には苦労が多いのですが、行けば行くほど春の日が近づくのです。春の日が訪ねてくるのです。統一教会はその道を行くのです。

二　人間は原因たる存在ではない

一) 本来神様の愛によって生まれた人間

本来私たち人間は、自分の意志によって生まれたのではありません。また、父母なら父母自身がこれこれこのような息子、娘を生もうという計画のもとで生まれたのでもありません。このように私たちは、父母の要求によって生まれたのではないというのです。神の摂理を中心として私たちが存在するようになった根源を掘り下げてみるなら、私たち人間は摂理の起源と一致し、その起源を中心として動いていく歴史と関係を結ぶ重大な責任をもつための一つの生命体として、この地に送られたとしか考えようがないのです。

それゆえ歴史過程にある私自身、その中で生きている私たち個体がどんなに小さいとしても、一つの個体として終わるのではありません。

人間自体が、自分で生まれたのでしょうか。自分を主張することができる起源はどこにあるのでしょうか。この大宇宙の原則の前に人間を主張することができる起源を、どこから探さなければならないのでしょうか。私たち人間は生まれた結果的存在なのに、結果的存在が原因を知ることはできないのに、自分を主張しようとする人、そのような人たちは精神の抜けた者たちです。全部が狂った人です。

生まれたことについて、なぜ生まれたかという問題、神様が人間をなぜ造り、天地万物をなぜ造ったかという問題、その結論は簡単です。神様も愛の対象が必要なので、愛の対象として人間を創造されたのです。皆さんは今、「何でもない姿の私のような存在は、いてもいなくても同じだ」と考えるでしょう。それではいけません。神様の愛の対象になるのに、父母の前に子供が優れているからといって愛するのではありません。子供であれば、優れていようがいまいが愛するというのです。

障害のある子供をもつ父母の胸がもっと痛いのと同じように……。天地の中心であられる神様の愛の心は、皆さんが優れているとかいないとかいうことを超えているのです。本性の愛の、そのパターンをもっているかいないかということが重要です。ですから、私がなぜ造られ、宇宙がなぜ創造されたかということを知らなければなりません。愛の理想を完成させるために造られたという事実を知らなければなりません。

神様がなぜ天地万物を造り、神様が私をなぜ造ったのでしょうか。愛のためです。私がなぜ生まれたのでしょうか。神様の愛ゆえに生まれたのです。神様の愛の中で生まれ、神様の愛の中で生きるために生まれたのです。「神様と共に私の家庭で愛することができる人だ、神様と共に私の社会で愛することができる人だ、神様と共に私の国で愛することができる人だ、神様と共に私の世界で愛することができる人だ」と言うことができる人になるために、神様の愛の中で生きなければならないのです。

私というものは父母から何を受けて生まれたのでしょうか。生命の連結体として生まれた、このように見るのです。お母さん、お父さんが一つになる所から、お母さん、お父さんの生命力の価値をもって生まれたというのです。

その生命力は何によって？　愛によって。その生命力と愛は何ゆえに？　宇宙の目的を完成するために。このようになるのです。目的を完成するために生まれたというのです。男なら男、女なら女としてのある目的、大宇宙目的の協助体としての自らを完成するために、このような生命力を中心とした結合によって生まれたというのです。

私たちが生まれたのは、なぜ生まれたというのですか。何のために生まれましたか。神様の愛、神様の愛ゆえに生まれたというのです。ここで「ドカン！」といえば、神様の頭に「ガン！」と通じることのできる、その愛だというのです。皆さんが何かを持って池に「ポン！」と投げれば、波紋が池の辺に広がるのと同じように、この宇宙の中で愛を「パーン！」と投げれば、全宇宙に波紋が生じるはずだというのです。そのようなことをしているのです。皆さんが何によって大きな波紋を起こすかということが問題だというのです。

神様とはどういうお方でしょうか。創造主です。創造主とはどういうお方でしょうか。宗教世界での概念では、「神様は私たちのお父さんだ」「私たちは神様の子女だ」と言うのです。では、そのお父さんは、どんなお父さんですか。どのようになったお父さんですか。これは漠然としているというのです。

借りてきたお父さんですか、隣近所のお父さんですか、あるいは養父ですか、どんな父母ですか。そうでなければ妻の父母ですか、嫁ぎ先の父母ですか。お父さんという言葉はたくさんあります。根本を解決できずしては、どんなに環境が拡大されたその世界で解決しようとしたところで、それは解決が出てこないのです。千万年行っても解決ができないというのです。

それならば、人間と神様が問題です。「神様が私たちのお父さんだ」と言うとき、皆さんは神様がお父さんだと感じられますか。私よりも、私がいる前にもっと確実なのがお母さん、お父さんです。お母さん、お父さんが私より先にいるので、私がいるということを前提とする時は、私がいるということを主張する前に、私たちのお母さん、お父さんがいると主張しなければならないのです。それが正しい定義です。お母さん、お父さんをのけ者にして私がいるという主張は、愚かな主張なのです。

人間は第一の原因的存在ではありません。第二の結果的存在だというのです。ですから私がいるということを語る前に、お母さん、お父さんがいることを語るべきなのです。このように見れば、根本に帰って宇宙の根本となる神様という問題を、根本的に、一番最初に解決しておかなければならないのではないかというのです。

お母さん以上、お父さん以上、先祖、先祖と言って上がっていけば神様になるでしょう。このような論理を追求すれば、私を主張する前に神様を決定しなければなりません。神様はどんな方だ、彼は私のお父さんだ、そのお父さんはどんなお父さんだということを。そ

れで私たち統一教会はこれを教えてあげるのです。

本然の出発点を正しくつかめ、正しく求めよというのです。人間は結果的存在なので原因の起点にもっていって合わせろというのです。原因の起点に合わせますが、その起点が盲目的起点になってはいけません。神が人格をもっているので、人格をもった人間においても知情意のすべての良心的作用の内容を持ち合わせているのです。ですからその動機も原因的内容以上の動機でなければならないというのです。それでいて絶対的でなければいけません。一度出発したものが誤ったなら、永遠に是正することはできません。

二) 人間が生まれた本然の目的

神様は宇宙の第一原因であられ、森羅万象の創造主です。そして私たちの愛するお父さんであられます。神様は特別なみ旨を成し遂げられるために万物を創造されたのであり、その目的は正に愛の具現にあります。神様は真の愛の根源であられますが、どんなに全能な神様であられるとしても、一人では決して愛の喜びを感じることができません。

神様は愛の対象が必要であり、その対象から自発的な愛が帰ってくることを願っていらっしゃいます。その対象としての最高の被造物が、正に私たち人間です。そのような理由で人間の生命には目的があるのです。人生の目的は成熟し、神様と永遠の真の愛の関係を実現するところにあるのです。正にこれが、神様と人間の間に平和をつくり上げる根本原理なのです。

豊かに生きることも重要で、何かをすることも重要ですが、まずは縦的な天の父母の前に孝の道理を立てなければなりません。縦的天の父母の前に忠の道理を立てなければなりません。縦的な天の父母の前に聖人以上の道理を尽くさなければならないというのです。それが、人間が生まれた本来の目的です。また、そのような人に出会うために神様が人を造ったのです。そのような目的があるというのです。

人生が真実に行く道とはどこでしょうか。人間はどこから生まれたのでしょうか。愛から生まれました。人生はどんな道を行くべきなのでしょうか。愛の道を行かなければなりません。どのように死ぬべきなのでしょうか。

愛のために死ななければならないという結論が出てきます。その愛とはどんな愛でしょうか。大宇宙が歓迎することができる愛です。小宇宙ではないというのです。神様が公認し、天使世界が公認し、万物が公認し、すべての人が公認し、私たちの父母が公認することができる大宇宙の中で生まれ、その中で生きて、その中で愛し、その中で死んでいくことが、人生の目的だと見るのです。

愛は自分が良いときは父母、兄弟、親戚を訪ねて、一緒に楽しもうとします。良いことは幸福なことなのです。幸福は永遠なものであり、永遠なものは心情です。宇宙の中心は何でしょうか。それは父母と子供だというのです。すなわち父母と私です。神様と私だというのです。神様はお父さん、私は息子……。人生の究極的な目的は、父を訪ね、切ることのできない関係を結んで喜びを感じることです。

先生はいつか、道を行く途中で年を取ったおじいさんと話をしたことがありました。そのときおじいさんに「どこに行かれますか」と尋ねると、「行くって、どこに行きますか。うちの息子の家に決まってるでしょう」とおっしゃいました。「そうですか。行って何をされるんですか」ともう一度聞いてみると、「くれる御飯を食べて、たまに鶏でも出してくれるなら鶏もおいしく食べるんだよ」と言うのでした。また「それなら食べたあと、何をされますか」と聞いてみると、「食べたあとは特にないよ」と、このような答えでした。私たちの人生を、このように送ってもいいのでしょうか。

家計の帳簿を整理するときにも、収入がいくらで支出がいくらかを正確に決算します。このように帳簿を整理するときにも、収支計算を徹底してやるのに、皆さんの人生はどうですか。一生の間生きたことを収支決算してみましたか。赤字ですか、黒字ですか。赤字ならば地をたたいて痛哭しなければなりません。

人は死ぬ場において、楽しく歌を歌って死ぬことができなければなりません。ところで、死を前にして生きようともがくことは、赤字の人生だという証拠です。私たちは絶対性を中心として、心情の世界において黒字の人生を生きなければなりません。

人間は誰のために生きるのでしょうか。「私のために生きます」と言えば落第です。自分のために生きる人の前に家庭が存在することができますか。希望の家庭がないのです。国が存在することができますか。国は出てきません。そこに世界が存在することができますか。世界が存在することができません。世界が出てくることができる場がないのです。天地の公約は「この個人主義の悪党よ、立ち去れ」と制止するのです。個人を第一とするのに、そこに家庭が入ることができますか。そこにある理想的な国が入ることができますか。錐の先のような狭い所に入ることができるかというのです。どんなに入ろうとしても、入っていくことができないというのです。

皆さんは愛を知らなければなりません。すべてのものが移動する目的、存在する目的は、愛だというのです。愛を求めて動き、愛を求めて存在しているというこの鉄則を、皆さんはいつももっていなければなりません。鳥たちがお互い好きになり、チュッチュとさえずりながら飛び回ることも愛ゆえであり、磁石のプラスとマイナスがお互い合わさることも愛で一つになるためだというのです。人がみな誰かに会おうとするのも一つになるためなのです。

三) 愛のために生きる

人生はどのように生きるべきでしょうか。人間はどこから、なぜ生まれ、どのように生きていくべきでしょうか。簡単だというのです。愛（神様を中心とした）ゆえに、愛によって生まれたので、愛の道を求めて、愛の目的地に行くのです。そうすれば循環法度上で、永遠に回ることができるのです。愛は永遠の概念なので愛を求めてこの中心に来るのです。それは愛でのみ成立するのです。

私が一生の間生きるのは、私のために生きるのではありません。神様の愛のために生き

るのです。その目的のために移動し生きるというのです。それがどれだけ素晴らしいことでしょうか。そのように生きる人は絶対滅びないのです。そこに大変なことがあり、涙もあり、時には悲惨なことがあったとしてもそれは神様の愛ゆえなので、悲惨ではなく、悲痛でもなく、悲しみでもないというのです。その原則を知らなければなりません。

私たちは何のために生きるのでしょうか。絶対的な真の愛、真の愛のために生きましょう！　ここにすべてが入っているのです。ですから私のポケットにあるハンカチも愛のためにあり、私が仕事をするのも、汗を流すのも愛のため、真の愛のためにするというのです。私が話すことも真の愛のため、食べることも真の愛のため、遊ぶことも真の愛のため、すべてがそうだというのです。

人間は何を目的としなければならないのでしょうか。個人を目的とすることより、家庭を目的とすることより、団体を目的とすることより、国家を目的とすることより、世界を目的とすることより、天地を目的とすることより、神様を中心として神様と人間が合わさった目的に向かって進んでいかなければならないのです。

そうすれば、どの目的が最後に残るでしょうか。個人を主としたものは流れていくし、家庭を主としたものも流れていくし、団体を主としたものも流れていくし、国を主としたものも流れていくし、世界を主としたものも流れていくのです。しかし一番最後まで残る一つの目的があるとすれば、それは神と人間が共同で追求する目的です。そのような目的だけが、人間の歴史の最後にまで残ることができるものなのです。

皆さんの心が最後に安着することのできる終着点とはどこでしょうか。神様を求めて自分のものにしたとしても、そこに皆さんの心は安息しようとしません。心の最後の終着点は、神様を占領し、神様の愛を占領する所です。ですから皆さんが神様の愛を占領することができなければ、万事がむなしいのです。

人生の最後の目的は、神様を中心として天の中心たるその方と出会うことではありません。その方と一緒に住むことが問題となります。その方と会うのにどのような場所で会うか、生きるのにどのような場所で生きるのかということが問題です。その方とは中心の場所で会って、中心の場所で生きようというのですが、その中心の位置は神様の愛の位置なのです。ですから人類の良心が指向する最高の目標は、天運に従って神様と一致して、神様の愛を私のものにしようというのです。結論はそれです。

人間が最後に到達したいのは、最高であられる方の愛の対象者になることです。その最高の方とは誰かというと、私たちの父であられると同時に、神様だというのです。

本来人間の特権は、誰彼問わず、天上王国世界において皇太子として生まれることのできる権威をもっているのです。お姫様として生まれることのできる権威をもっているのです。それが人間の価値です。それが本来の人間の権威だったのです。

心情が通じるようになれば、みんなが神様の子女になります。文化の背景や歴史的環境、あるいは時代の位置いかんによって人間の価値が左右されるのではありません。そのいかなるものをもってしても人間の価値を決定することはできません。人間が天を知り、地を知り、天の目的と地の目的と人間の目的を知るところにおいてのみ、人間の価値が決定されるのです。

私たちは新しい価値観を模索して、それを中心としなければなりません。世界に対する新しい価値、人間に対する新しい価値、理念に対する新しい価値、あるいは愛に対する新しい価値を模索しなければなりません。その価値観が神様のみ意と一致することのできる内容をもって出発するとき、その価値観は人間を中心とした価値観とは母体が異なるのです。人間の意志を中心として立てられた価値観とは異なるのです。

今日、この世界において確実な価値観をもたなければなりません。世界観を越えることのできる価値観をもたなければなりません。私たち統一教会は、その価値観の中心を神様においているのです。私たちの主張する世界に帰ろう、理想世界に帰ろう、ではないのです。神様に帰ろうというのです。

神様に帰らなければ理想世界もないのであり、幸福な世界もないのであり、永遠な世界もないのであり、愛の世界もないのです。そのすべての幸福の要因、私たちが願うすべての要件は神様によって始まらなければならないからです。それゆえ、神様に帰らなければならないのです。これを懐かしがり、これを求めてきたのが、人類歴史上に現れた宗教という機関だということを知らなければなりません。

私たち統一教会は絶対的な価値観を提示するとともに、真の御父母様を提示しています。私たちが願う絶対的価値の基準は、どこが終着点なのでしょうか。真の父母の息子、娘になるところです。永遠の生命をもつことができ、永遠の愛をもつことができる神様の息子、娘になることです。そのほかには道がありません。

アダムとエバが堕落するとき、神様が許諾したところで相対理想を結んだのではありません。自分たちが勝手にやったのです。神様が許諾して関係をもって出発することができるのは父子の因縁しかありません。ところが、それが壊れたので、没落したので、それを標準にし、もう一度継ぎ当てしなければなりません。

三　人間の価値は偉大である

一) 人間の価値は神様的価値

人の価値は、どのくらい大きいでしょうか。神様が杖をついて千年、万年懐かしがることができる存在が人間です。統一教会の文先生が見ると、これが宇宙の根本だというのです。これが内外関係になったので、縦横の愛の世界観が成立するのです。上下関係と左右関係になれば、縦横の愛の世界観が広がるのです。その中心には神様が臨在されるのです。心の深い谷間の位置で一つに固く結んであげることができるその場は、縦横の中心地です。これを結んでおかずしては縦横の基準が愛の理想型として出てこないのです。ですから人を、

このように造らずにはいられなかったということを皆さんは知らなければなりません。

神様は絶対的な創造の観を所有した絶対者であられるので、絶対的な対象としての価値のある存在を追求するのです。これは、この地上の被造万物の中の何をあげても換えることのできないものです。

価値的に見るならば、相対的存在とは神様をあげても換えることができない存在です。「相対的価値」という言葉は少し難しい言葉ですが。相対的価値というものは、相対という言葉を中心として、その対象の価値というものは神様をあげても換えることができないのです。神様をあげたところで神様一人になるというのです。神様として残ってしまうのです。

ですから神様自身を投入して、神様自身の力を、エネルギーを消耗するのです。消耗戦をされるのです。ですから、神様をあげても換えることのできない価値的存在として造ったものが人間なのです。これと同じように、絶対的価値の存在が人間だということを皆さんは知らなければなりません。神様がそのような観をもって、価値的存在として人間を造られたのです。

神様は、人間を愛のために造られました。人間はなぜ造られたのでしょうか。愛のために造られたのです。人間が万物と違うのは、神様の息子、娘として造られたからです。神様の直系の愛を受けることができる対象者として造られたというのです。これが人間の特権です。

人は誰に似ましたか。神様に似たというのです。ですから神様が愛を願うことも、結局人と同じだ、とこのように見るのです。愛を中心とした理想の創造世界というものは、実体を中心とした愛の表示が形状として現れ、形状の表示が象徴として現れるのです。統一教会の原理は、そのように言っているのです。何を中心としてですか。愛を中心としてです。その実体が喜べば、その形状となるものも自動的に喜び、形状となる存在が喜べば、象徴的なものも自動的に喜ぶことができるのです。そのような作用を何がしますか。愛のみがするのです。

神様が、愛を求めていく対象を造ろうとするとき、誰に似るように造るでしょうか。神様に似るように造るのです。その神様に似るように造るなら、神様の中にあるもののように男性の性稟がなければならず、女性の性稟がなければなりません。自分に似たので自分の本性相からすべて抜き出して、見えない性相、見えない考えの形態を実体として展開させたものが人間だというのです。ですから聖書の創世記に出てくる、神様が自分の形状のとおりに人間を創造したという言葉は正しいのです。

見えない神様の形状を、私たちの体中に象徴的にすべて投入したというのです。目は、誰に似たのですか。神様です。ですから顔の真ん中を見てみると、目は深い所にあるのです。そうでありながら、すべてのものを観察するというのです。その次に、鼻はアダムとエバを象徴するのです。これが中心でありセンターです。その次に、口は万物です。横的です。ですから、四八、三十二（四×八＝三

十二）、三十二個の歯をもっているのです。この世の万物を中心として四数を中心として。その次に、耳は四方を象徴するというのです。この首の上は天の国です。天の国の情報センターがあるというのです。

顔は、天地創造の主人が自分の形状をすべて取り入れて造りました。ですから、人の中には神様の性稟がすべて入っているのです。この目は何を象徴するかというと、神様を象徴します。ですから生物が生まれるとき、目が最初にできるのです。天地の中心は神様であられるので、目は神様を象徴するのです。ですからどんな人でも、その人の目は神様を象徴するというのです。ですからどんな人でも、その人の目を見ればその人が良心的な人なのか、非良心的な人なのか直ちに分かるのです。

いくら真理だと言っても、その真理の核心とは何でしょうか。お金でもなく、権力でもなく、知識でもありません。愛です。本質的な愛は縦的なところにあるのであり、真理的愛は横的に連結されているのです。ですから万物を見て神様が分かるし、アダムとエバは神様の形状なので、アダムとエバを見て神様が分かるのです。なぜですか。アダムとエバは縦的な真の愛の対象的主体なので、これを二つすべて完全にピタッと、男女の愛を東西南北を通して世界の軸をもっていって合わせるときには、神様と霊界が通じ、全世界がすべて通じるのです。

皆さんは主体と一つにならなければならず、対象と一つにならなければならないということを知るべきです。主体と対象が一つになれば、繁殖が起こります。与え受ければ、必ず繁殖が繰り広げられるのです。その繁殖することができる場は、うれしい場なのです。神様自身も性相と形状の二性性相になっているでしょう。各自が一人の時は主体ではありません。男性と女性が合わさってこそ家庭の主体が成立するのです。二人が合わされば、主体になるまいとしても主体になるのです。

人間たち自らが、神様の本然の愛を再現させることができる運動、神様を愛することができる運動、神様に接近することができる運動をしなければならないというのです。「汝の体と心を尽くして、主なる汝の神様を愛せよ」と言われた、それが第一の戒めだというのです。愛することが第一です。体と心を尽くして愛さなければならないのです。中間であってはいけません。終わりまで行かなければなりません。

そうです、神様の形状が現れることができる真実な心、神様と一つになろうとするその心の本性が絶対的であり、それによってすべてのものの始まりと終わりだとすることができる境地に入っていかなければなりません。そのように愛せよ、ということが第一の戒めなのです。

神様と人間が拍子が合い、和動することができる喜びの拍子の前に、すべてのものが自分の形のとおりに音律を合わせることができ、自分の形のとおりにすべて象徴的に、形状的にみなこうすることができる、そのような喜びの表示がそうだというのです。そのようになれば万物も、「ああ、私も生まれがいがあるなあ」と言うのではありませんか。例を挙げて話をするなら、神様と人間が愛の宴をす

るその日に同参することができる因縁をもって、その喜びを分かち合うことができる存在になったという事実が、被造世界のこの上なく小さい万物が願うことのできる所願ではないかということです。

このすべての万物は、神様の息子、娘たちを造ることができる土台なのです。関係を結び、連結することができる土台なのです。動物もそうですし、鉱物もそうです。鉱物世界にもプラス・マイナスがあるのです。植物世界にも全部雄しべ・雌しべがあり、動物世界も雄・雌があります。すべて橋を架けて、すべてのものが結集され創造された最高の傑作品が、人間の内的形状と外的形状です。それを実体化させて男性、女性の性相を……。そのすべての形状を賦与して、象徴的、形状的、実体的にすべてさらけ出して橋を架けるようにして、すべて連結するように、関係を結ぶようにしたのです。

それでは神様は、なぜ夜と昼をつくられたのでしょうか。毎日のように一日中お日様があれば、朝何の刺激がありますか。光明な朝だ、光輝く朝だというとき、光明がどのように光明で、光がどう輝くというのですか。おもしろ味がないのです。しかし、すべてのものは刺激のために、愛という課題を置いて、刺激的な象徴と形状でつづられながら調和することができる拍子をもっているのです。

皆さんの生命の根は、どこにありますか。堕落していない父母にあります。では堕落していない善なる父母の位置は、どのような位置ですか。神様が二性性相の主体であられるように、神様が自分の二性性相を展開し、神様の形状どおり万宇宙を造り、人間を造ったのです。アダムは神様の男性的性稟を展開させたものであり、エバは神様の女性的性稟を展開させたものなのです。
このように見るとき、私たち一般人たちが普通「天のお父様！」と言うのは、お一人ですからそのように言うのでしょうが、そのお一人という概念の中に「天のお父様、お母様」という概念が入っているというのです。

二) 人間は神様が臨在される聖殿

もし人間の先祖アダムとエバが堕落しなかったならば、どのようになっていたでしょうか。アダムとエバは神様と一つの体になって、神様と同じ立場に立ち、神様の創造の威厳を継承し、神様が創造後お喜びになられたのと同じ位置に立つことになっていたはずです。神様と人間の間で、そのような関係を結ぶようになるのです。堕落していない本然の人は、神様の聖殿になるのです。

アダムとエバは、神様の息子、娘であると同時に神様の聖殿です。彼らが共に成長し聖殿が完熟するように造られたなら、神様がアダムとエバの中に入ってこられるというのです。そして完成したアダムとエバが神様を中心として聖なる式を挙げれば、それは何ですか。神様と一つの体になるということです。神様は内的な神様になり、私たち人間は実体をもった神様の体になるというのです。
皆さん、コリント人への第一の手紙第三章十六節を見ると「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」というみ言があります。信じて救いを受ける人も神様の聖殿になるので

すが、本然の人類の真なる先祖の位置に進むその方たちにおいては言うまでもないというのです。

神様が父になり人間は神様の息子になったとしても、父は上にいて息子は下にいる上下関係のような、そのような気分がするのです。そのとき私たち人間は、どのような考えをするのでしょうか。「お父さん、お父さんが座っていらっしゃったその席を、私に一度下さい。私もお父さんの席に座りたいです」という欲望が私たち人間にはあるのです。

ここで神様が「おいこいつ、駄目だ」と言えば、すべて壊れるのです。しかし神様は、そのように言われないのです。むしろ神様は、私たち人間がそのような欲望をもっていることを知っているので「早く、そうしなさい。早く、そうしなさい」と言われながら、その位置までも私たち人間に下さるのです。その位置まで人間に下さって神様は私たちの心に臨在され、私たちの心を聖殿として、いようとされるのです。

聖書には「私たちの体は聖殿である」とありますが、それはどういう意味か、解釈できずにいるのです。それは偉大な言葉です。いくら大きな神様だとしても、その神様と私が愛をささやくことができる愛の対象圏になり、その愛の対象圏と一つになれば宇宙を相続することができる権限が生じるからです。愛という原則基盤を通じて神様が造った世界、霊界、無形世界、実体世界、このすべて、すなわち宇宙の相続権を獲得することができるのです。この驚くべき事実を知らないのです。

アダムは実体をもった神様の体です。コリント人への第一の手紙第三章十六節にあるでしょう。あなた方の体が聖殿であることを知らないのかと。聖殿は神様がいらっしゃる所でしょう。私たちの心に本然の愛が芽生えるその場所を至聖所としているのです。ですからアダムの心に神様が宇宙的な愛の聖殿を造って愛の力を伸ばして、愛の花を咲かせようとするのです。これが、神様がアダムとエバを造り、家庭と世界に繁殖しなさいと祝福してくださった目的だということを知らなければなりません。

一番神聖な所はどこですか。至聖所とはどこかというとき、エルサレムの聖殿が至聖所ではありません。人間が造ったそこが至聖所ではありません。神様が造られた愛がとどまることのできる所が最高の至聖所です。この至聖所を失ってしまったのです。ですから人間の罪がどれほど大きいでしょうか。

神様が人間を造ったのは、実体の神様の体として造ったということです。コリント人への第一の手紙第三章十六節を見ても「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」と言っています。聖殿とは何ですか。神様の家だというのです。アダムとは誰かといえば神様の体であり、エバとは誰かといえば神様の夫人だったというのです。このようになっていたならば、その子供は神様の血統をもって生まれるのです。彼らが神様の血族になるのが原則です。

完成段階に至った人間が霊界に行くと、どのようになりますか。アダムは神様の体にな

ります。アダムは神様の体になるというのです。ヨハネによる福音書とコリント人への手紙に「あなた方は神様の聖殿である」と出ているのと同じように、神様が臨在することができる聖殿です。家です。神様とどのように似ますか。責任分担完成段階に至り、神様が臨在し一つになれば、愛によってすべての生命の結合、一体化が成し遂げられるのです。生命が和合するのです。男性、女性が家庭、夫婦を成すということは、愛を中心として一体となり、和合するということです。それと同じように、その愛の力は神様と和合するようになるのです。神様と和合するようになるということなのです。

人間が完成して成年になれば、そのとき、見えない神様が入ってきて愛を造るのです。神様が好むと同時に、アダムが好む激動的愛を神様がすることができるというのです。それゆえ愛は最高の神聖な聖殿です。神聖の聖という字です。ですから真の愛の中には、どこでも神様が入っていらっしゃるというのです。なぜ人は真の愛を好むのでしょうか。真の愛にさえ会えば、神様がここにいらっしゃるというのです。主人がいるようになっているのです。ですからアダムとエバが成年になって愛するとき、アダムとエバの体は、この宇宙を創造した神様がその中に入ってきて最高の神聖な聖殿を築く神聖なところになるのです。

エバとは誰かというと、アダムの妻です。アダムは、神様の実体です。「あなたの体は神様の聖殿だ」と言ったのです。神様は、アダムの心に臨在している見えないアダムです。この二つの父が一つになるのです。合一されるのです。そして霊的世界、無形の世界と有形の世界の合一の起点がアダムの本性的基準です。その本性的基準は何ですか。お金のふろしき、欲心のふろしきではないのです。

純粋な思春期を通じてすべての細胞機能が総動員され、一つの触覚として、アンテナとして現れたその基準を中心として、神様がそこに臨まれるので席を設けて……。陰陽が調和し、合わされば互いに降りていくのと同じように降りてきて、警備兵のいるところ、基地を……。アダムの心の中に来て神様は内的父、アダムは外的な父として霊的世界と実体世界の和合、一体の基準で、一人の男性を中心として一人の女性を中心とした横的世界で一致を成し遂げ、愛を中心として球形の核が広がるのです。球形の核。

コリント人への第一の手紙第三章十六節を見れば「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」というみ言があるでしょう。これが何かというと、神様の聖殿です。皆さんが神秘的な境地に入って祈祷しながら「神様、どこにいらっしゃいますか」と尋ねると、答えがとても素晴らしいのです。「ここにいる！なぜそのように大騒ぎするのか」とおっしゃるのです。

「朝御飯を食べられなかったのか。夜遅く、なぜ大騒ぎするのか」と言うのです。「どこにいますか」と尋ねると、「どこにいるも何も、その深い心の奥に立っているだろう！お前の心の中にいるだろう！」と言われるのです。天国がどこにあると言いましたか。心の中にあると言いました。

四　人間本性の真なる生活

一) 心に和合した生活をしなければならない

自分の一番近い先生とは誰かと言えば、自分の心です。一番親しい友達よりも貴いものが自分の心であり、お母さん、お父さんよりももっと貴いものが自分の心です。心に尋ねてみるのです。その心には神様が入っていらっしゃるのです。その心の声を聞くことができなければなりません。その境地まで入らなければなりません。仏教には、自性を清めなければならないという言葉があります。「天上天下唯我独尊」とお釈迦様が言いましたが、それは何かと言えば、私が私に尋ねれば私に神様が入っていることが分かる、ということです。そのようになれば、できないことがないというのです。

愛する心は、いつも犠牲になろうとするのです。譲歩しようとするのです。与えても、また与えようとするのです。例えば、私にお金が百億あって、道端に出ていって全部分けてあげたとします。それでも心が安らかでないというのです。世界の人類をみな助けてあげられなかったので、お金がもっとあれば、もっと分けてあげたいのです。神様の心は、推し量ることができないというのです。神様の心がそうなのです。ですから自慢することができないというのです。いくら大きいことをやったとしても、心に尋ねると「もっとやらなければ」と、このように答えるというのです。

自分の心を清めなければなりません。心を清めなければならないというのです。心が先生よりもいいのです。心は永遠の私の主人です。ですからよこしまな心をもつなというのです。公理に属した公的立場に立った心をもたなければなりません。

ある人をさっと見れば、その人がどんな人かということを、心は一遍で分かるのです。すぐにもそれが分かるというのです。ですから一番近い先生が自分の心です。ですからその心を苦しめるなというのです。心を悲しませるなというのです。それは先生を悲しませることであり、天宙の主人を悲しませることです。心が私の生涯の主人です。ですから心を悲しませるのは、私の生涯の主人を悲しませることなのです。心が喜ぶことのできる道を行かなければなりません。

心と楽しむ時間をもたなければなりません。世の中で見れば、寂しい立場のようですが、心と友達になる時間です。心と座って、瞑想でもしてみよというのです。深い祈りの境地に入るでしょう。人知れぬ深い世界に入るのです。そのようなものが必要です。

二) 三位一体を成してこそ完成人間

統一教会では三位一体を主張しています。それを何によって一体化させるのかといえば、正に真の愛を中心として一つにするというのです。観念と実在に対する問題も深く入ってみると、いろいろな背景があります。それを解明していけば、正にこの道が正当な道だということが分かるのです。それは、体恤してみれば証明されるのです。

良心が正しい、行動が正しい、心身一体圏を成しているというとき、それは何を中心と

して言う言葉でしょうか。言葉だけではいけないのです。行動だけでもいけないのです。心身一体圏の決着点はどこでしょうか。「まず九〇度になりなさい。九〇度になるには、すべての世の中で水平として中心になることのできる基準を立てなさい。西洋に行っても東洋に行っても連結できる標準的な人間になりなさい。それで歴史的に現在と未来を通じて見ても、それは間違いないと言える基準にならなければならない」。これが結論です。

人間の貴重な価値を満点にするのは、真の愛と一体になるときに可能なのです。心身一体とは、良心と肉身が共鳴圏に立っていることを言います。音叉の周波数が同じとき、一方をぽんと打てばその反対の音叉が響きます。それと同じように、真の愛によって良心を打てば肉身が響くのです。真の愛によって肉身をぽんと打てば、良心が共鳴圏をつくるようになるのです。そこには、教育は必要ありません。その真ん中に入れば、教えるべきすべてのことが分かるようになっているのです。

統一教会の勇士は、どんなことがあっても心身一体圏を成さなければなりません。この生涯の間に心身一体圏をどのように成すのでしょうか。それを成すことができない者が愛を考え、理想を考えるということは恥ずかしいことです。天運に反するのです。そのようなものを完成した自分自身を指向する、そこに新たな希望の道が連結されるのであって、ただそのままの基準においては新たな希望の天国に連結される道が現れません。

心身一体をどのように成すのでしょうか。歴史を通じて心身が紛争しています。神様がそのように創造されたとすれば、そんな神様は人間の敵です。自分がそんな立場にいることをはっきりと知って、神様に「神様自体の心と体が人間のように争いますか」と尋ねたら、神様はどう答えるでしょうか。そんなことを考えてみた人がいますか。

神様も人間のように良心と肉身が、心身一体できずに闘っているのかと聞いてみれば、神様は間違いなくそうではないと答えられます。皆さんは、そんな境地に到達したことがないので知らないかもしれませんが、統一教会の教主としては、そんな境地をいつでも連結できる道があるので、間違いありません。神様は心身一体となっていらっしゃるのです。

宗教生活は体を主管するものです。三年ないし五年以内に習慣性をつくるのです。そうならないままでも、不便な自分を発見できないときには、心身一体をいくら願っても道がないのです。先生の第一目標は「宇宙主管を願う前に自己主管を完成せよ！」ということです。自分自身の統一圏を成せない人がいくら世界を飛び回ったとしても、自分と関係をもつ道は絶対にないのです。

人間の体はサタンの血統をもっています。皆さんの良心は、アダムとエバが長成期完成級に成長するときまであった神様の良心の基準まで成長しなければなりません。それは信念です。それと反対の愛の力によって、この良心以上の力によってサタンにだまされてしまいました。良心も肉身の方向に従わざるを得なかったのです。

良心のほうにもっと力を与えなければなりません。ずっと多くの力を与えれば、肉身がいくら強くてもついてこざるを得ないのです。

そうでなく良心が肉身より弱ければ、現在の状態よりももっと下に落ちることになるのです。この二つの道しかありません。それで断食とか水行をして犠牲と奉仕をするのです。それ以外の道はありません。

皆さんそうですか。この道を歩んでいますか。死んでも犠牲と奉仕をしようと誓いますか。それで死ぬ覚悟をして反対の道を行かなければならないのです。宗教の行く道、それは克服の道です。心身が闘うそれ以上の克服の道なのです。その道を行かずしては心身一体を成すことができないのです。

統一教会に入って長くなったからといって、罪を埋めていてはいけません。それを清算しなければなりません。手続きを踏んで清算しなければならないのです。私の生涯のすべてのものを白紙化させて、そこから新たに復活してエデンの園で罪を犯さず、神様が造られた心と体が完全に真の愛と一つになることのできる本然的な私だ、と自覚できる男性と女性にならなければなりません。分かりましたか。

そうでなければ故郷へ行くことはできません。皆さんは故郷の家を訪ねていかなければなりません。そこには神様がいらっしゃるのです。神様がいらっしゃり、本然的父母がいらっしゃり、本然の私たちの家があり、皇族圏生活を中心として万国を治めることのできる長子権国家の後孫たちが住むべき所なので、そこが新しい私の故郷の家です。自分が生まれたその故郷ではなく、新しい私の故郷の家、本然の家を訪ねていくにはどうしなければならないでしょうか。その故郷に入ることのできる資格を備えなければなりません。そうするには私自身が心身一体となり、統一圏を備えなければならないということを知らなければなりません。

いくら良くできなかったとしても「神様、私はこのように良くできませんでした」と、このように率直でありなさいというのです。そのように祈祷しなさいというのです。「本然の心がこうで、父の心がこうで、師の心がこうで、国の民の心がこのようになるべきではありませんか。このような心を神様の愛と連結させようと、忠孝を尽くす私の心は変わらないでしょう。このような心を哀れに思い、きょうのこの心の前に、すべてのことを許してくださることはできませんか」と言えば、神様が「うんうん」と言われるのです。祈祷する方法も知らなければなりません。分かりましたか。

神様は、いったいどこにいらっしゃるのでしょうか。神様が住まれるところは、いったいどこでしょうか。神様は最も価値のある愛に定着します。それならこれが男と女の二人だとすれば、神様はどこにいるでしょうか。神様は一体化し、変わらない、統一された愛の最も底に、垂直に住んでいらっしゃるのです。これが何かと言えば、男性と女性が一つになったところ、それが中心点になるのです。皆さんが神秘な祈祷の境地、霊的体験圏に入って「神様！」と言えば、おなかの中から「どうして呼ぶのか。ここにいる、ここ！」と答えます。「ここ」というのは自分の心の中です。心身一体となった愛の中心点、垂直の場にいるのです。神様の点を垂直と見れば、これをゼロ点というのです。

心身一体となれば、宇宙の力が保護してくれるのです。宇宙の力が保護してくれる心と体になれば、父母も宇宙の因縁をもった父母、兄弟もそのような因縁をもった兄弟……。みな因縁を結んでいます。民族、国が因縁を結ばなければならないのです。素晴らしい結論です。それで国を越えて他の国に行っても、そのような一体圏を成せばそこでも通じるのです。どこでも通じるのです。サッカーをするとき、ボールが転がっていって止まったらどうなりますか。その表面全体が合わさることができるところは垂直線を通るのです。それで球形体を理想的な存在だというのです。表面のどんなところでも、その垂直線が安着できるのです。それで転がっていくのです。どこでもみないいので……。それで心身一体圏、九〇度の角度になればどこでもみな合うのです。西洋人と東洋人、過去の人と現在の人、未来の人もどこでもみな合うのです。

三) 心が正に師であり近い神様

心とは誰でしょうか。私の主人です。私の先生です。心は誰かと言うとき、心に似た体を生んだので、私の体の根源です。ですから平面的にお母さん、お父さんの代わりです。心は父母の代身であり、師の代身であり、その次は主人の代身です。

皆さんの心は、師が必要ありません。心は第二の神様です。師についていかないで、統一教会の先生に侍らないで、皆さんの心に侍りなさい。心はどうですか。朝早く起きて一人、ねずみの子の音も聞こえず、はえの音も聞こえない静かなときに、「ああ、私はこんなことをしなければ。いいことをしなければならない」と言えば、心が「うれしい！　うれしい！　早くしろ！」と言いますが、悪いことを考えれば、心が「こいつ！」と言うのです。心が分かるでしょうか、分からないでしょうか。分かるのです。そうだというのです。心はよく知っているのです。

心の価値、私にとって心がどれほど高いものかを考えてみたかというのです。心は体が間違ったところへ行こうとすれば、いつでも忠告し、こうしてはいけないとみな制裁するのです。しかし体はいつも心を攻撃し、無視し、踏みつけて、自分勝手だというのです。迫害を受けながらでも死ぬときまで私にとっての戦友のように、師のように、主体的使命を全うすべく犠牲を払っていくのが、私たちの体についている心だ、ということを考えてみたかというのです。

人間の主人は、正に自分の良心です。この良心がどれほど皆さんのために忠告し、昼夜を分かたず悪い考えをすれば「おい、こいつ！」と言って、疲れずに引っ張って峠を越え、川を渡ろうと、どんなに気をもんだことでしょうか。このように心は真の主人の姿をもって私を保護しようとするのに、裏切った体、一つしかない宇宙から貴い師として賜り受けた先生であるにもかかわらず、この先生を手荒にあしらった体、また私の本然の愛の心を引き継いでいけるようにした父母の代わりに送ってくれた良心を余地なく蹂躙したこの体、このように心の怨讐となったこの体を皆さんは愛しますか。いいえ！

もう、私たちが誰かの言葉を聞く時は過ぎ去りました。どんな真理よりも、千万倍素晴

らしい師の言葉よりも、私の心の声を聞き、聞いてもまた聞きたくて、その心を求めていくべきです。そうすれば、私も分からない無限大の何かが出てきます。それが創造の内容です。

良心が体のために、どれほど犠牲になったことでしょうか。一生の間蹂躙される良心の事情を皆さんは知っていますか。昼も夜も私を管理するのにくたびれているのが良心です。それでも疲れずに体が悪い行動をしようとすれば、やめさせようとするのです。「そんなにやったのならもうやめなければならないのではないか。私の言うことを聞かなければならないのではないか」と、そう言うでしょう。自分の前に一番近い、父母の代わり、神様の代わり、師の代わりの存在が良心です。心自体には教育が必要ありません。しかし体には教育が絶対必要です。

私が一つ聞いてみましょう。皆さんの心と体を中心として見るとき、心がどれほどかわいそうですか。心は神様の代身です。心は烈祖（功績のある先祖）、先祖たちを代表するのです。心は師を代表し、心は王を代表するのです。ところがこれまでこの心をどれほど蔑み、手荒にあしらいましたか。宇宙の中心として真なる父母の立場にあり、真なる師の立場にあり、真なる主人の立場にいる、真の愛をもった主体としていらっしゃる方の代わりにあるその心が、この地上において私一人を収拾するためにどれほど犠牲になったことでしょう。そのように犠牲になりながらも不平を言いますか。

ただぞんざいに扱われ引っ張られて回りながら、死んだと思っていたのに、悪い考えをもって夜中にどろぼうでもすれば、「おい、こいつめ！」と再びよみがえって忠告するのです。皆さんは、そのような心をどれほどもてあそびましたか。心は父母の代身であり、心は師の代身であり、心は主人の代身です。心の世界には公判が必要ありません。皆さんが、皆さん自身を誰よりももっとよく知っています。第三者、証人が必要ないのです。

私自身に偉大な師がいることを知りませんでした。心は偉大なお母さん、お父さんの代身なのです。お母さん、お父さんが心に逆らって訓示するはずがありません。心がお母さん、お父さんのように訓戒するとき、服従することを知るべきです。このようなすべての秩序的環境において、起源になり得る道義的な結論が出ていません。そのような公式が出ていないというのです。心を虐待してはいけません。皆さんは二重人格が好きですか。心は先生の代身、父母の代身、神様の代身です。心を教えることのできる師はいません。

すべての人間は、それぞれ自分の中に最も貴い師を一生の間ずっともっているのです。にもかかわらず、その師を間違って待遇し、踏みにじり、濫用します。その師が、正に人間の良心です。私たちの良心は、常に私たち自身にもためになるように言葉を語り、私たちを真の愛と連結させてあげようとします。父母のように私たちの良心は、私たちをして善なる非利己的な人になれと促し、神様のみ意に従って行動するように導いてくれます。しかし各自の心の中にはまた、良心の声にいつも逆らう反乱者がいます。その反乱者が、まさしく肉体なのです。

「宇宙主管を願う前に自己主管を完成せよ！」というのは、道義の道を開拓したときの標語でした。「宇宙主管を願う前に、この世の万事と何らかの関係をもつ前に、自己主管を完成せよ」と言いました。貴重な三大お客さんです。主人になることができ、師になることができ、父母になることができるこの方を、私の体が千年、万年仕えても不足だという自分自身を発見するときに、初めてここに天運が臨むのです。心は体のために生きたがるのですが、体は心のために生きません。これが問題です。問題は私自身にあるのです。社会にあるのではありません。

このように心は、真なる主人の姿をもって私を保護しようとするのに、裏切ったこの体、宇宙から賜り受けた一つしかない貴い師であるにもかかわらず、この先生を余地なく手荒にあしらったこの体、また私本然の愛の心を引き継げるように父母の代わりに送られた良心を余地なく蹂躙したこの体……、このように心の怨讐となったこの体を皆さんは愛しますか。いいえ。心と体の闘いをやめさせる前には天国はないのです。どの聖人もこのようなことを考えませんでした。

陰と陽、性相と形状というプラス・マイナスは、相対的であって、相反することができません。しかし今日、堕落した人間には心の声もあり、体の声もあります。心と体が一つになっていません。神様に似て生まれるべき男性や女性の心と体が、どうやって分かれたのかというのです。これが問題です。神様は絶対的な方なので、私たち人間においての標準相である心と体が絶対的に一つになって、神様の全体世界に和合し、一つの中心的な役割をすべきなのにもかかわらず、私たちの心と体がどのように分かれたかというのです。心と体が分かれたのが、心のままになされたことなら、神様はいないのであり、理想や統一や平和や幸福といったものの基地を見いだすことができません。

神様は遠くにいるのではありません。私の中にいます。心が皆さんの主人でしょう。夜にただ悪いことをしようとしても、現れて「行くな」と言い、いつでも現れて主人の役をして、どこででもお母さんのように、先生のように教えてくれるのです。ですから、この体のやつが怨讐です。体が怨讐だというのです。

神様は誰に似ましたか。私たちに似ました。男と女。皆さん、心は見えないでしょう。心を見たいですか、見たくありませんか。神様も同じです。神様が霊的な立場から見れば……。神様も体がありません。今まで体がありませんでした。アダム完成が成されなかったので、体が今までなかったというのです。心のような宇宙に、心のような主人、心のような師、あるいは管理者、心のような父母としているのです。

皆さん、心と体が一つにならなければ駄目なのです。そこに焦点を合わせなければなりません。祈祷するとき、心と体が呵責を覚えるものがあれば、悔い改めなければなりません。悔い改めるときは一人ではいけません。東西南北を備えなければなりません。自分の一番近い人、父母の前に通告しなければなりません。師の前に通告しなければなりません。その次に、自分の息子、娘に、自分の弟子に

通告しなければなりません。「私にこんなこんなことがあるのだが、許してもらえるか」と、こうして心を合わせて後援することのできる、このような道を行かなければなりません。何のことか分かりますか。

心と体がいつ統一できるのか、それを考えなかったでしょう。これが深刻な問題です。一生の間心と体が闘うのですが、この闘いをやめさせる者は誰でしょうか。これが問題です。私たちのお母さん、お父さんもやめさせられません。王もやめさせられません。師もやめさせられません。聖人もやめさせられません。この心と体の闘いをやめさせられる主人は、どこにいるのでしょうか。深刻に求めてみましたか。それが真の愛だというのです。真の愛。

心は、皆さんの番人となって昼も夜も皆さんを守ってくれ、皆さんに休みなく「善なることをしろ。善なることをしろ」と言うのです。ですからどんなに疲れるでしょうか。生まれたその日から、意識的に考えることができ、社会環境においてすべての制度を分析できる知能的起源が生じるその日から、生涯をついて回るのです。

自分の師もついていくことはできず、お母さん、お父さんもついていってくれませんが、生まれたその日から死ぬ時まで、永遠に良心は私に対して命令するというのです。神様に似なさい、聖人に似なさい、愛国者に似なさい、孝子に似なさい……。それと同じように似ることを願うのですが、「体よ、お前は私に似なさい」と言うのです。

皆さんの心と体の統一も、真の愛でなければできません。ですから心は、体のために犠牲になりながらも忘れ、また忘れ、また忘れるのです。心は、神様の代身としての立場なので、皆さんの師の中の師です。その心は神様が御自身の代わりに送ってくれた私の中心です。縦的な私です。

五　真の人間が行く道

一) 人間が求めて行くべき道

本性の心が行く道を行けば、宇宙が一つに広がります。そのような何かがなければなりません。そのような境地に入れば、自分の心と話をするようになるのです。そのような境地では、心と話をするのです。何かをしようと思えば、既に答えが出てくるのです。そのような境地まで進むのです。そのような境地にいる人が、自分の行く道が分からないでしょうか。もう行く道が確実で宇宙のすべての作用の力が助けるのです。手を引っ張って試験場へ入れば、既にすべてのものが協助するのです。そうしてこそ大きいことができるのです。

偉大な力の背景をもって生きることのできる人間が、真の人間です。真の人間にはそのように無限の力のバックグランド（背景）があって、自分が指向する方向に無限に後押ししてくれるのです。方向が間違えば、すぐに分かるというのです。統一教会は、皆さんがいい加減に知っているような統一教会ではありません。深い背景、偉大な力のバックグランドをもっているのです。ですから皆さんが努力をしてこのような境地を連結して上がれば、すべてのものがみな解決されるのです。

ですからそのような面で、皆さんが行く方向感覚を決定しなさいというのです。それは自分がしなければなりません。自分が一番よく知っているのです。

自分が行く道を求めていかなければなりません。お金さえもてばすべてでしょうか。そうではありません。お金が必要なときがあり、また人として自分が行くべき、他の道を行くべきときもあるのです。ですから、自分が行く道は自分が決めなければなりません。自分自ら、自分の深い心の底から本来自分がもって生まれた本質と共に和合して、未来の目的を指向することのできる、天があれば天がその方向を提示するようにして、自ら解決するようにしなければなりません。

磁石は地球の引力を凌駕した作用として現れるようになっていますが、そのような作用は何によって可能なのでしょうか。地球の重力以下の作用として、その作用を越えるというのです。ですから私たちの良心も同じです。生まれたなら、既に自分が生まれた背景がさっと分かるのです。これは自分が判定しなければなりません。そのようなものを感覚、判定できなければ、皆さんは将来大きいことができないというのです。（一二〇・三〇二）

私たちが自然を見て「ああ、私は四季が必要ない。私は春だけ必要であって、夏や秋や冬は嫌だ」と言うかもしれませんが、神様に尋ねてみると「私は四季がみな好きだ」と答えるというのです。ですから嫌いでも夏を好むことを習わなければならないし、秋と冬を好むことを習わなければならないというのです。雪が降る冬になれば、神様は白い雪が世界的に積もるのを見るとき、喜ばれるのです。「ああ、私もいい」と言うのです。そうでなければなりません。

神様のような心で自然を見ることができなければなりません。そのような心をもたなければなりません。洪水が起こり雷が鳴ったりするときは、「ああ、あれは私は嫌だ」と言うなというのです。神様は「ほほ、あれはキスして結婚するのだな」と、このように考えるというのです。そして「嫌いだ」と言う人たちに、「ははははは、おいこいつ！　ならず者たちよ！」と言うのです。

人間を愛さなければなりません。人間の中でも五色人種をみな愛さなければなりません。「あ、私は白人だけ好きだ」と、神様がそう言うでしょうか。それならみんな白い服だけを着なければなりません。白人たちはみんな白い服だけを着なければなりません。色のある服は全部捨てなければなりません。

黒い服をなぜ着ますか。色のある服をなぜ着ますか。それは矛盾です。部屋に入れば、色とりどりのものがみなあるのに、ピアノなどもみな真っ黒ですが、どうして置いてあるのですか。黒板のようなものもどうしてもってきたのですか。その人たちには夜もあってはなりません。夜もあってはならないというのです。真っ黒な夜もあってはなりません。どうしてそうですか。白人中心ですか。白人中心が何ですか。それは、滅びる道です。滅びる道。それが何年も続くと思いますか。どれほど続くと思いますか。冬がいくら長くても三カ月しか続きません。永遠のもののために皆さんは、四季をみな愛さなければなりま

せん。ですから白人だけ好んではいけないのです。

神様の愛は、神様のすべてを愛し、人類を愛するだけでなく、過ぎ去った過去、現在、未来の人類を愛してあげる愛です。ですから地獄へ行った霊人たちまでも解放してあげる運動をする神様だということを知らなければなりません。人は真理の道を行かなければならず、生命の道を行かなければならず、愛の道を行かなければなりません。いくら偉大だとしても「ため」に生きる基盤がなければ、すべてのものがついてこないのです。このように生きる人は自然に主体になります。真の生命の人になるのです。

皆さん自身が、自分がどんな道を行くべきかを知って、行かなければなりません。方向をすっぱり決めたならそれを中心として、ありったけの精力をみな投入するのです。疲れて目を開けることができないほど、耳が聞けないほどに、すべてを投入しなければなりません。

統一教会で正常的な信仰生活をすれば、自分が何をすべきかすぐに分かるようになっているのです。しかし自分を中心として生き、自己の考えを中心として行動する人は分からないのです。船にいるねずみの子でも、波打てば船が破損することを知り、すぐに縄をつたって船が出る前にみな港の荷下ろし場へ出ていくのです。それなのに、人間にそれが分からないはずがないというのです。

自分が行く道を知らなければならないというのです。ありも、梅雨になることがみな分かるではないですか。ありが引っ越しするのを見たでしょう。行列をつくって。意味のない空想でもしているので分からないのでしょう。自分が自分の分野を知らないという事実は深刻なことです。深刻に重要な一生の問題を天と共に話し合うべきです。そして自分自ら環境的与件に適応しなければなりません。それを誰がしなければなりませんか。それはいずれにせよ自分がしなければならないのです。

人は冷静になれば、心の深いところに心が落ち着く場があるのです。心が眠ることのできる場があるのです。そこまで私の心が入らなければなりません。そこで寝て、目覚めるときには鋭敏だというのです。そのときに雑多な考えをせずに精神を集中すれば、すべてに通じます。ですから修養が、祈祷が必要なのです。

先生も祈祷するのです。精誠を尽くすのです。いつも精誠を尽くさなければなりません。精誠は一度だけ尽くして使ってしまうものではありません。刀は常に研がなければなりません。刀を一度使って研がなければどうなりますか。いつも研がなければなりません。一度激して怒ったならば、いつも磨いておかなければなりません。それが問題です。静かに心の位置をつかまえておかなければならないのです。

心情の世界の中央に行けば、下がったり上がったり運動するのです。自動的に運動するのです。これが息をするということです。地球も息をしていることを知っていますか。地球も一メートル近く息をするのです。こうしながら調整しているのです。円形によって曲

がったところを調整するのです。ですから心情の世界も、中央はすべて軸を中心として上がったり下がったりするのです。運動するのです。

すべての存在物は楕円形で形成されたものです。ですから心の、心情の中心、真ん中に入ってみよというのです。そこで無限の力が伝わるのです。それで九〇度の角度さえつくれば、無限な力を九〇度で保つことができます。それで道を磨いていかなければなりません。精誠を尽くしてこの世のすべての面で、深い心霊世界を体験しなさいというのです。なぜでしょうか。一生の間生きていくのに推進力を無限に普及されることのできる一つの源泉が必要なので、そのようなことをするのです。

先生も、先生自身が今もっている力よりももっと大きい世界的な仕事をするときは、深刻だというのです。もっと大きい力が必要なときは、それをどこからもってくるのかということが問題になります。もってこれないときは、それをどこから補うのかが問題になります。もってこれないときは後退しなければならないのですが、そうすることはできません。ですから祈祷が必要であり、神様が必要なのです。

心情の世界が、それで必要なのです。愛の世界は、いくら引っ張り出しても終わりがないのです。物質の世界も終わり、知識の世界も終わり、権力の世界もすべてが崩壊し得るのですが、心情の世界は無限なのです。ですから心情の世界を中心として動かさなければなりません。

神様は独裁者ではありません。神様も人間のために投入しました。そう、神様が人間の前にいるのは、「ため」に存在するのです。ですから千年、万年神様についていこうとするのです。「ため」に生きる天理の宇宙の存在世界の前に自分自らの存在位置を維持するためには、「ため」に存在しなければなりません。「ため」に生きることが東洋、西洋に通じることができ、古今に通じることができるのです。

神様は昔も今も東洋にも西洋にもみな同じ愛をもっているので、東洋、西洋を克服することができ、過去、現在、未来を克服することができるのです。それは何かと言えば、過去も現在も未来も克服できるので、いつも発展できるし、東洋、西洋を克服するので、東洋、西洋を統一できるというのです。これは愛でのみ可能なのです。

自己主張するときは自己破壊、相対破壊、神様破壊、完全に分離されるのです。そこでは統一的理論を発掘できないことを知らなければなりません。簡単な言葉ですが、重要な言葉です。私たちが理想を求めていく最後には、究極には神様の愛と縦的な統一を要求しますが、その縦的基準が早く来いと繰り上げることのできるようにするためには、互いに「ため」に生きなければなりません。「ため」に生きるところから完全に統一圏が広がるのです。

どのように統一されるのでしょうか。先生がどのように統一するのでしょうか。何によって？　こぶしによって、力によって、お金によって、権力によって、知識によって？
愛を中心とした「ため」に生きる立場で万事

が解決するのです。結論は簡単でしょう。真の愛を中心として「ため」に生きていくところに、悪魔の世界が天の国へ再創造されていくという結論です。それは理論的です。

二) 真の人間の行く道

自分を中心として作用しようというのは悪をもたらしますが、全体のために作用しようというのは発展をもたらすのです。これを知るべきです。全体のために行くところは、すべてのものが門を開くのです。個人も門を開けるし、家庭も門を開けるし、氏族も門を開けるし、民族も門を開けるし、世界も門を開くし、天の国も門を開くし、愛の道や、すべての道が門を開いて歓迎するというのです。

そのような道とは何でしょうか。これを私たちは考えなければなりません。それで統一教会はこのような観点で「ため」に行く道を取れ、「ため」に生きよ、と「ため」に生まれたという天理を教えるのです。

真の人生が行く道とは何でしょうか。一つの公理として立てるべきことは「ため」に生きよということです。これはどこでも通じることのできる原則ですから、万古不変です。過去、現在、未来がないので「ため」に生きよというのです。ここに孔子やイエス様やお釈迦様やマホメットのようなすべての聖者という人の前に神様が現れて、「あなた方はどう思うか」と言えば、「そのとおりです」と言うでしょうか。「それは違います」と言うでしょうか。「正しい」と言います。それが宇宙の法則です。それが、人間が人生において真の姿で生きることのできる一つの法だということを知るべきです。このような真の道があるのです。

世界的な人物になるためにはどうしなければならないでしょうか。人倫道徳だけを中心としてはいけません。人だけを中心としてはいけないのです。人だけを中心としては国を越えることができません。国を越えることのできるそのような内容は天にあるのです。天宙思想をもたずしては国を超越できないのです。ですから聖人たちが何を紹介したのかといえば、人間だけを紹介したのではなく、神を紹介しました。聖人の等級に同参した人々を見れば、神を崇拝しましたか、しませんでしたか。神を抜きにして聖人になった人がいますか。また聖人たちは人倫の道理だけ教えてくれたのではなく、天倫の道理を兼ねて教えてくれたのです。

家庭で父母に尽くし愛する人は孝子です。国のために生き、愛する人は愛国者です。世界を愛する人は聖人です。それでは、先生が教えるものとは何ですか。神様と世界と宇宙を愛する聖子になれというのです。皆さんはどんなものになりますか。聖子になりますか。孝子、孝女になりますか。そうなるには神様のような愛を心にもたなければなりません。

神様は、短い生涯を生きて死んでいく人間の前に、一番良い標語、一番良い課題を賦与せざるを得ないので、その課題として「誰よりも神様をもっと愛しなさい」という標語として掲げたというのです。それによって誰もなることのできない神様の息子になれるのです。神様の息子になる日には、聖人完成はもちろん、忠臣完成ももちろん、孝子完成もも

ちろんなのです。すべてのものが完成だというのです。このようになれば、家庭でも勝利した立場に立つのであり、国家的基盤においても勝利者となるのであり、世界的基盤においても勝利した者となるのです。

統一教会は何をしようというのでしょうか。偉人をつくろうというのではありません。聖人をつくろうというのです。偉人の前には怨讐がいますが、聖人の前には怨讐がいません。偉人は自分の民族だけを愛した人ですが、聖人は人類を愛した人です。それゆえ偉人が神様の前に出ていくとき、「お前はお前の民族は愛したが、私が愛する、私が求める世界人類を愛することができなかったではないか」と言われれば、出ていくことができませんが、聖人の道理に従っていった人は神様の前に直行できるのです。統一教会は何をしようというのですか。偉人をつくろうというのですか、聖人をつくろうというのですか。

宇宙を造った神様とは、宇宙の法度を立てた神様とはどんな方でしょうか。全宇宙を通じて、誰よりも「ため」に生きる代表的な立場に立った方です。その方が神様だというのです。ですからその方に出会うには「ため」に生きなければならないのです。その方は知識の大王でありながら、「知識をもって神様の前に来い」とは言いません。能力の大王ですが、「能力をもってこい」とは言いません。権力に対する、お金に対する、物質に対する主人であり、大王ですが、「それをもってこい」とは言わないのです。「ため」に生きてくれば、すべてがついてくるというのです。

三) 「ため」に生きる法度を立てた理由

私たちが思うに、愛とか理想とか幸福とか平和とかという言葉は、一人では成立しません。これは相対的な関係で成立する言葉なので、いくら絶対者神様がいらっしゃるとしても、その神様が願う理想と幸福と平和は一人で成すことはできないのです。神様の理想を成就させることができ、神様の愛を成就することができ、神様の幸福と平和を完結させられる対象が人間だ、という事実を私たちは考えることができなかったのです。神様一人で愛すれば何をし、神様一人で理想をもって何をしますか。相対的な人間を通じずにはこのような要件を成就させることはできないということは、当然の結論です。

知恵の王であられ、全体の中心であられる神様の真なる愛や、真なる理想や、真なる幸福や、真なる平和の起源を主体と対象、この両者間のどこにおくのでしょうか。これが問題にならざるを得ません。主体がいらっしゃる反面、対象がありますが、主体のために生きる道と対象のために生きる道、この二つの道の中で、理想の要件をどこにおくのかということが、創造主であられる神様として問題とならざるを得ません。

それで真なる理想、真なる愛、真なる平和において主体を中心として対象が主体のために生きるのに理想的起源をおくのか、対象を中心として主体が対象のために生きるのに理想的起源をおくのかという問題を考えられた神様は、その理想的起源を主体の前に対象が「ため」に生きよという立場に立てるならば、神様がそうなると同時にすべての人も自分がある対象をもつことができる立場に立つならば、そのようになるでしょう。そうなれば、

一つになることのできる道がふさがってしまいます。これを知るべきです。

一つになることができ、平和の起源になることのできるその道は、どこにあるのでしょうか。神様御自身だけでなく、真の人間は「ため」に生きる存在だという原則を立てざるを得なかったのです。ですから真の愛は「ため」に尽くすところから、真の理想も「ため」に尽くすところから、真の平和、真の幸福も「ため」に尽くす立場で成り立つのであって、「ため」に生きる立場を離れては見いだすことができません。これが天地創造の根本だということを、私たち人間は知りませんでした。

男と女が生まれたのは、男は男のために生まれたのではなく、女のために生まれたし、女は女のために生まれたのではなく、男のために生まれたのです。生まれるのに自分のために生まれたのではありません。自分のために生まれなかったのに、自分を主張するのです。「私、私」というこの思想を壊してしまわなければなりません。これさえ壊してしまえば、統一の世界が展開するというのです。

自分の価値を自分から追求するよりも、相対から、すなわち相対的基準からその価値を追求することのできる道を探求する人は、不幸な人ではありません。いつも、どこでも心情の土台は相対圏をもっているので、どこに行き来しても彼は寂しくなく、幸福であり得るのです。

神様は、なぜ「ため」に存在する原則を立てざるを得なかったのでしょうか。まず皆さんに尋ねますが、もし皆さんのために誰かが心から生命を尽くし犠牲になりながら一〇〇パーセント恩賜を施した人がいるとすれば、皆さんの本心がその恩に報いるのに五〇パーセントはポケットに入れて五〇パーセントだけ報いたいですか。それともありったけの恩返しをしたいですか。私たちの本心がどのように作用しますか。

誰でもより多く報いたいのが本心です。与えるままに心から愛する中でくれたことを知れば、一〇〇パーセント以上を返そうとするのです。一〇〇パーセントが一一〇パーセントになって帰ってくるし、その一一〇パーセント帰ってきたのは、また向こうが心からくれたので一二〇パーセントを返すようになり……。このようにすることによって、ここで永遠という概念が設定されるというのです。永遠が始まるのです。ですからこのような原則を立てざるを得ないし、それだけでなく、ここから発展と繁栄が生じるのです。

理想と愛は人間にとって生命よりも貴いものなのにもかかわらず、今日人間たちはこのようなものが自分のものとして自分に現れると思っていること、これが大きな誤解だというのです。愛と理想はどこから来るのでしょうか。対象から来ます。対象から来るので、「ため」に生きる法度を立てざるを得ないのです。知恵の王であられる神様はこのようなすべての結果を御存じなので、そのような法度を立てざるを得ないということを知るべきです。

永遠という概念、これは自分の「ため」に生きるところでは不可能なものです。皆さんが運動するのを見ても、押してくれ、引っ張

ってくれる相対的方向が、大きければ大きいほど早く回るのです。知恵の王である神様が「ため」に存在する法度を立てたのは、永遠であり得るために立てられたということを知るべきです。

私たちの中で、人に主管されるのは死んでもできないと考える人たちが多いと思います。さらに識者層にいる高名な方の中に、このようなことを多く見ます。しかし一つ知るべきことは、今までの人間たちが「ため」に存在するその方に主管されて生きることが、どれほど幸せかという事実を夢にも考えられませんでした。霊界の組織を見れば、天地の大主宰であられる神様、その神様は宇宙万有の存在の中で、「ため」に存在する中心存在なので、その方に支配されるのがどんなに幸せなことか……。千年、万年支配されても感謝することのできる理想的統一圏がここに成立することを知っているので、神様は「ため」に存在せよという原則を立てざるを得ませんでした。

愛は私から始まったのではありません。生命よりも貴い愛と理想を見つけるには、対象がいなければできません。私たちはこれを考えつきませんでした。この高貴な愛と理想を受けることができ、それを見いだすことができる存在が対象です。ですから私たちが謙遜にその高貴な愛と理想を受け入れようとすると、最も「ため」に生きる立場でなければならないので、神様は「ため」に存在せよという原則を立てざるを得なかった、ということを私たちは覚えておくべきです。

愛は一人では成されません。愛はどこから出てきますか。私から出てくるのではなく、対象から来るのです。対象から出てくるので、私が頭を下げて対象のために生きなければならないのです。「ために生きよ」という天理がここから生まれるのです。極めて高貴なものが私を訪ねてくるのですが、それを受けようとするので、高め、「ため」に生きるべきだというのです。「ために生きる哲学」を成してこそ愛されるのです。

真の愛は、与えても忘れ、また与えようとする愛です。偽りの愛は、与えても付け加えて商売する愛であり、与えたのでお前はそれ以上返しなさいという愛です。これはサタンの愛です。

私たちの本郷は、神様の「ため」に存在する者たちだけが入るところであり、「ため」に生まれ、「ため」に生きて、「ため」に死んでいった人たちが入る所です。これが私たちの本郷の理想的構造なので、神様は本郷を訪ねてこさせるために、歴史過程で数多くの宗教を立てて、訓練させてきたのです。

これまでの宗教が温柔謙遜でなければならず、犠牲にならなければならないと教える理由は、霊界の法度がそうなので、霊界に帰るべき人間たちを地上生活の過程でその霊界に合うように訓練させざるを得なかったからです。ですから高次元的な宗教であるほど、より次元の高い犠牲を強調し奉仕を強調するようになったのは、普段の生活を通じて、その世界に一致させようとするところにその原因があるのです。

しばしばこの世で、「ああ！　人生とは何なのか」と言いますが、人生観、国家観、世界観の確立、その次には宇宙観に対する確立、ひいては神観の確立が問題となるのです。これをどのように確立するのでしょうか。系統的段階と秩序をどこにおき、その次元的系列をどのように連結させるかという問題は、最も深刻なものです。しかし「ため」に存在するというこの原則に立脚して見るとき、最も価値ある人生観は、私が全人類のためにあり、全世界のためにあり、国家のためにあり、社会のためにあり、家庭のためにあり、妻のためにあり、子女のためにあるという立場から幸福な自我を発見することができるならば、これ以上の人生観はないと見るのです。

第二章　家庭観

一　理想的な家庭とはどのような家庭か

一) なぜ家庭が良いのか

家庭とは、神様の理想が顕現し得る起点であり、人類の幸福が顕現する起点なのです。人間におけるすべてのことが果たされる場であり、神様においても、すべてが完成する場なのです。なぜ家庭が良いのでしょうか。それは、父母の愛を中心とした自由な活動の基地となるためです。

神様を中心とした永遠な父母の愛、永遠な夫婦の愛、永遠な子女の愛、この三つの愛があるのが理想的家庭です。

人は必ず家庭をもたなければなりません。家庭を中心に見れば、家庭には父母がいて、子供がいて、物質があります。旧約時代、新約時代、成約時代における縦的な歴史のすべてを、代わりに横的に展開することのできる実体とは何でしょうか。万物と子女と父母です。すなわち、父母と子女と、その所有物です。これらが、家庭という一つの囲いの中で必要とされるものです。

統一教会の理想は、どこか別のところにあるのではありません。出発も家庭であり、結論も家庭です。いまだこの問題を解決した者がいないので、それを願ってきました。そして、そこに幸福があるがゆえに、これを体系化し、天宙化して無限の価値を現したので、統一主義が公認されたのです。したがって、この主義を嫌う者がなく、皆が頭を下げて好むようになれば、世界は自動的に統一されるのです。

聖書六十六巻はすべて、理想的な家庭を願ったみ言です。また、万民が願うこととは何でしょうか。理想的な妻を迎えることです。「そうではない」と言う男性がいるとすれば、それは人ではありません。また、女性として生まれた者の一番の願いは、理想的な夫に出会うことです。女性は、たとえ博士になって世界に向かって大きなことを言ったとしても、その願いは、理想的な男性に出会うことです。愛することのできる理想的な男性に出会って、福の多い息子、娘を生むことです。これが幸福の根本です。このように統一教会の教理を家庭に打ち込んであるので、これを取り除く者はいないのです。

天国はどこで成されるのでしょうか。私たちの家庭からできるのです。では、私たちの主義は何主義でしょうか。家庭主義です。私たちの標榜する天宙主義とは、「天」という

字に、家を意味する「宙」という字、すなわち天の家主義ということです。こうしてみれば、天宙主義という意味がはっきりするのです。

家庭とは、小さな社会に立脚した小さな国家です。小さな国家であり、小さな世界であり、小さな天宙だと言うことができます。ですから、家庭を離れては何もできません。このような家庭というものを教えてくれるので、統一教会は偉大だというのです。

家庭は、万古不変の起源であり、礎です。それは父親にも直すことはできず、兄弟にも直すことはできず、どの国のいかなる制度によっても直すことはできません。また、世界的にも直すことはできず、天と地も、神様にも直すことはできません。ですから、家庭というものには、革命という名詞が永遠に必要ないのです。

人の一生の中で、最も重要な時とはいつかというと、生まれる時、結婚する時、死ぬ時です。
それでは、生まれる時はどのように生まれるべきでしょうか。良く生まれなければなりません。私たち統一教会で言うところの、「心情の因縁」を中心として生まれなければなりません。
次は結婚する時です。結婚というのは生きるためにするものです。すなわち四位基台をつくるためにするのです。このような宇宙の公法を地球上に立てて初めて、神様のみ旨が果たされ、人間の志が果たされるのです。そのように、宇宙の法度が志向する内容を備え、その形態を整えるところが家庭です。

世界は家庭に倣ってできました。どんな世界もみなそうです。今後、理想世界は三位基台、家庭の三位基台を中心として成されなければなりません。
それでは創造目的とは何でしょうか。四位基台を完成することです。人間がまず四位基台を完成しなければならないので、誰もがみな、家庭を築くのです。人間は神様に似ており、人間を中心とした社会は、神様を中心として人間に似ているのです。統一教会の先生は、今世界に統一教会を立てて、そうなるようにしています。世界はすべてそうなるべきだと知っていながらも、それが表に現れてはいません。しかしながら、そのような原則を通して、世界がそうなっていくのです。理想世界というものは、全世界が一人の人の形を形成する世界です。そこにおいては、国家と民族を超越するのです。

家庭というのは世界を縮小した横的な基盤です。ここから国家と世界が始まるのです。家庭とは何でしょうか。家庭とは世界の横的な縮小体であり、絶対的な中心の前に相対的な基準です。では、私というのは何でしょうか。絶対的な中心がとどまることのできる足場です。

この世界を審判することのできる絶対的権限をもつものは、個体ではありません。真なる家庭です。サタンも何を打ってくるのでしょうか。家庭を打ちます。それゆえ、家庭をもって一つとなれなければ破綻するのです。親子の間に、夫婦の間に、破綻をもたらすのです。そして、家庭をもったのに、その家庭が破綻したならば、その人の傷は永遠にいや

されないのです。その人をいくら慰めたとしても、どうにもならないのです。

私たちは、神様の願う家庭を中心とした父母、夫婦、兄弟とならなければなりません。

なぜ家庭が良いのでしょうか。家庭には、お互いに自由に愛を授け受けることのできる基台があるからです。それゆえ、人は故郷を慕わしく思い、父母、兄弟のいるところを慕わしく思うのです。

父親が喜べば、家庭全体が喜ぶのであり、妻が喜べば、家庭全体が喜ぶのであり、子供が喜んでも家庭全体が喜ぶのです。一時に宇宙全体が喜ぶことのできる場が、家庭というところなのです。

心と体を収拾して完全な個人となり、夫婦が一つとなって完全な家庭を築かなければなりません。

お母さんとお父さんが一つとなれば、その家庭は発展し、子供と親が一つとなれば、より次元の高い家庭へと発展することを知らなければなりません。それでは、家庭と親戚の間で一つとなればどうなるでしょうか。そこには新しい民族正気がわき起こることでしょう。それがより高い次元に向かっていこうとするならば、すべて環境的に結束し、国家基準にまで忠臣の血統として残り得ることを忘れてはなりません。

天国の家庭は、無理強いしてできるのではなく、喜びの中で自動的にできるのです。愛するときも、受けようとばかりするのではなく、互いに授け受ける作用をしてこそ理想的な愛が成立するのです。

幸福な家庭とは、夫が帰ってくれば、外であったことを妻と話し合い、新しく開拓し得る要因を発見する家庭です。互いに力を合わせて研究する家庭が、幸福な家庭だというのです。父母がそうなれば、子供たちもそこに加担して、「自分たちもそのような家庭を築こう」と同調するようになるのです。

真の家庭とは、妻を母親のように思って愛し、「ため」に生き、夫を父親のように思って愛し、「ため」に生き、妹と兄のようにお互いに愛し合うところです。さらには、自分の妻を神様のように愛し、自分の夫を神様のごとくに愛し尊敬する世界が、理想家庭の暮らす天国です。そのような伝統が、この地球上に立てられなければなりません。

母親と父親は、愛なしには一つになることさえできないのです。皆さんは、なぜ愛が好きなのでしょうか。好まずとも好まざるを得ないようになっているからです。両親が互いに愛し合う力が、自分のことを思う力よりも強ければ強いほど、理想的なのです。お母さんとお父さんを完全に一つに結びつけるものは、愛の綱です。鉄でできた綱は、時間がたてばさびついて切れてしまいますが、愛の綱は永遠です。また、親と子の間は、食べ物によっても、お金によっても結びつけることはできません。唯一、親子の関係の愛でのみ結びつけることができます。

革命の要素を加えることのできない、そのような礎の上にできた家庭は、いかなる主義

や思想にも吸収されることはありません。むしろ主義や思想を支配し、凌駕します。そのような基準が立てられた家庭は、十年、百年、千年たっても永遠に変わることはなく、民族と国家の形態が維持されるのです。

愛のふろしきとは、どんなふろしきでしょうか。本郷の国へ行って、そのふろしきを開いてみると、理想的な夫が飛び出してくるし、理想的な妻が飛び出してきます。また、理想的な家庭が飛び出してくる福袋です。ここから出てくるものは、一等復帰です。ですから、個人も一等、家庭も一等、氏族も一等、民族も一等、国家も一等、世界も一等なのです。すべてが一等ならば、高い低いということはありません。ですから、兄弟も、家庭も復帰されるのです。このように統一的基盤を造成していくために、宝の壺である愛のふろしきが必要なのです。

二) 家庭において社会愛、民族愛、人類愛が芽生える

神様を中心として一つとなるとき、千態万状の様相で回るようになるのです。それゆえ、兄弟の間で愛するときも、親が子を愛するのに倣って、兄が弟を愛さなければなりません。そのように愛して一元化した家庭には、家庭愛の花が咲きます。そして、これが社会愛にもなります。そしてさらには、これが民族を愛する民族愛となります。このように愛すれば、世界になるのです。ところが、今日それが漠然としているのです。

子女の間の愛とは、どのようなものであるべきでしょうか。何を基準として愛さなければならないのでしょうか。お父さんとお母さんが愛するように、兄弟も愛さなければなりません。愛は誰から学ぶかというと、両親から学ぶものなのです。

理想的な愛は、家庭から生まれます。しかし、神様は真の息子、娘をもつことができませんでした。真の兄弟をもつことができず、夫婦をもつことができず、また、父母となることができませんでした。それゆえ、それを成そうというのが神様のみ旨なのです。そのようなところであってこそ愛がとどまるのです。そのような愛のある所には、人々がこの世のすべてを捨てて、やって来るのです。

真の愛とは何でしょうか。父母の愛、夫婦の愛、子女の愛です。愛は、互いに犠牲となる伝統が備わっていなければ、長く続くことなく壊れてしまうものです。父母は子供のために犠牲となるので、父母が子を愛する因縁は壊れることがないのです。そうして、真正なる父母の愛を受けて育った息子、娘であるならば、絶対に自分の父母に親不孝をすることはできないのです。また、夫は妻に、妻は夫に対して「あなたは私のために生きた」という立場で、よりお互いのことを思い、より犠牲となる立場が広がれば、その家庭は恵みを受けるのです。そのような家庭が、神様の訪ねてこられる福地なのです。

一つの家庭を中心として、最も良いものとは何かというと、皆さんの子女に結晶するものではありません。それでは、家庭における最高の価値とは何でしょうか。父母です。一人の個人を考えてみても、皆さんにとって権力や知識、あるいは名誉やお金も貴いものか

もしれませんが、そのどれにも勝って良いものは「父母」以外にはないのです。その次には皆さんの妻や夫が良く、皆さんの子女が良いことでしょう。

実際、皆さんの家庭において皆さんの父母や妻、そして子女よりも大切で価値あるものがあるでしょうか。ないのです。それでは、なぜ父母が良いのでしょうか。そしてまた、夫と妻、子女がどうして良いのでしょうか。「愛」があるからです。父母の愛、これは子供にとって絶対的に必要です。夫婦の愛、これは夫と妻にとって絶対的に必要なものです。そして、兄弟の間の友愛であるとか、子女が父母に対してもつ孝誠の心も、一つの家庭に絶対的に必要なものです。

皆さん、誰が家で一番良いですか。お父さん、お母さんですね。なぜ父母が一番良いのでしょうか。愛を中心として一生の間関係を結ぶことのできる、最も近い立場にあるからです。

その次は愛する夫と妻でしょう。その夫と妻の、ある条件的な愛ではなく、無条件の愛です。その愛が、絶対的に天によって与えられた永遠な愛と密接に関係した愛ではなかったとしても、夫婦間の相対的な関係において結ばれる愛であるとすれば、その家庭に幸福と和睦をもたらす最も良いものではないかと考えられます。

その次は、父母に対する子女の愛、父母を思いやる子女の愛です。絶望ではなく、あすの希望として芽を出すことのできる理想的な環境を慕いつつ、明るく肯定的な姿勢で子が親のために犠牲となり、愛することができるとすれば、その子女の愛は、その子の幸福のための、純粋で真実な価値をもつ愛となることでしょう。

このように父母の真の愛と夫婦の真の愛、そして子女の真の愛を完璧に具備した家庭があるとすれば、その家庭は私たち人間世界で、最も理想的な家庭だと言わざるを得ないでしょう。

一つの家を考えたときに、その家の中心になる人とは誰でしょうか。年を取った方、すなわち、曾おじいさんがいるとするならは、その曾おじいさんが中心です。亡くなる時が近づいたからといって、家族がそのおじいさんを無視したとすれば、それは縦的な世界を無視するのと同じです。たとえぼけているとしても、その家庭の中心は曾おじいさんです。何か食べ物があれば、まずおじいさんに差し上げなければなりません。たとえお父さんがその国の大統領だとしても、先におじいさんに差し上げなければならないのです。なぜならば、息子は横的だからです。

不幸はどこから出発するのでしょうか。愛の安息所がなくなるところから始まるのです。幸福な家庭とは、その家の囲いとなる父母に仕えて生きる家庭です。そのような家庭は、上には天を代表する父母に侍り、横的には家庭を代表した他人同士がその因縁の愛を夫婦として結び、この夫婦が天倫の法度に従って、その代を継いで生きる家庭です。

家庭には必ず、父母がいなければならず、妻子がいなければなりません。そうであってこそ、その家庭が幸福の基台となるのです。神様が人類を探し求めてきた目的も、神様御自身の幸福を模索するためであったに違いあ

りません。それゆえ、神様御自身が幸福の基台を求めようとしても、人間を離れたところにはそのような理想はあり得ないのです。人間と関係を結んでこそ、一致点をもたらすことができるのです。私たちが家庭において、情緒的な内容をすべて備えた立場で幸福を感じるのと同じように、神様もやはりそのような立場で幸福を感じようとなさるのです。

「これほどならば天上天下にうらやむものはない」と幸福を謳歌する人がいたとしても、「そのような外的なことで幸福だ」と言うことはできません。幸福を求めるための条件にはなっても、幸福それ自体にはなり得ないのです。それでは、何が決定されれば幸福を感じることができるのでしょうか。愛する父母がいて、夫婦がいて、子女がいなければなりません。このことは、誰にも否定することができません。その中の一つしかないとするならば、その人はそれに該当する比例的な悲しみを感じ、比例的な不満がその胸の中に残るしかないのです。

人間祖先を通じた神様の理想は、男性と女性が結合し、理想的な家庭を築くことでした。そうなれば、理想的な家庭の中心は男性でもなく、女性でもありません。家庭というのは、父母と子女、夫婦の結合による一つの結びつきなのですが、その結ばれたものの中心は、正に神様の愛です。神様の愛を中心として家庭を完成することが、神様のみ旨であるという結論になります。

父母と子女、夫婦、そして兄弟姉妹が真の愛を中心として一つになることを願うのが、私たちの理想家庭です。ここから永遠な世界的平準化が始まることによって、地上天国が出発するのであり、天上天国も自動的にできるのです。神様は真の愛の本体なので、真の愛に連結されればみな同じ体になります。父母は神様に代わる、生きた神様であり、夫と妻は互いにもう一方の神様であり、息子、娘もまた、一つの小さな神様です。このように三代が、真の愛を中心とする家庭の組織が、天国の基盤です。そのような基盤を築かずしては、天国はできません。

家庭というのは宇宙の中心です。家庭の完成は、宇宙の完成の基礎となるがゆえに、家庭において愛するがごとくに宇宙を愛すれば、どこでも無事通過です。その場合、神様は宇宙全体の父母として、愛の複合的な中心の位置にいらっしゃるのです。

神様を中心とした創造本然の家庭的基台には、男性の愛、女性の愛、息子の愛、娘の愛、父母の愛、神様の愛が、すべて含まれています。このような消化された立場で、父母を愛し、夫を愛し、息子、娘を愛すれば、誰でも天国生活をすることになるのです。

「家和万事成」という言葉があります。家庭が平和であれば、万事がうまくいくという意味です。完成した家庭は平和の家庭であり、それは天国の基礎です。家庭の原動力は、真の愛です。自分よりも神様を、そして相手を、生命のように愛するという純粋で美しい愛、それが真の愛です。神様はこの宇宙に、真の愛の力よりも強い力は創造されませんでした。真の愛は、神の愛です。

人間は、父子の関係がなければならず、夫婦関係、兄弟関係がなければなりません。す

なわちこの三つの関係が一点になければなりません。その中心点は神様です。上下、左右、前後の中心が異なるようではいけないのです。その中心点が違えば、上下、左右、前後関係の均衡がすべて崩れるのです。それで結局、上、下、左、右、前、後、そして一つの中心点までの七数になるのです。そのような七数を成すということは、すなわち、神様を中心として完全な真の愛で一つとなって、そのすべてが完全に球形となり、調和し、統一された家庭になるということなのです。

二　家庭は天国完成の基本単位

一) 家庭は地上・天上天国の礎石

家庭から天国を成さなければならないのですが、イエス様も家庭を築くことができなかったので天国に行くことができず、楽園にいらっしゃるのです。楽園は、天国へ行くための待合室のような所です。地獄は、人間が堕落したがゆえに生じたものです。神様が始めから造られたものではありません。

四位基台は、地上天国と天上天国の礎石です。天国は、一人ではつくることができません。それゆえ、イエス様も一人でいてはいけないので、聖霊が降臨しなければならないのです。

天国の起点は、個人でもなく、国家でもありません。家庭なのです。それゆえ、イエス様は新郎新婦の因縁を求めてこの地に来られるのです。個人が天国の起点でしょうか。家庭が天国の起点なのです。

家庭は天国完成の基本単位です。天国は、一度行けば帰りたくなくなり、十回、百回会ってもまた会いたい、そのようなお方のいらっしゃるところです。万民が共通にそこに行きたいと思い、そのお方に会いたいと思い、そのお方と共に生きたいと思うならば、世界は統一されることでしょう。そこを目指して進んでいるのが統一教会です。しかし、それは一度に成されるのではありません。まず、個人の基台ができ、次に家庭の基台ができ、民族、国家、世界へと順次、広がっていかなければならないのです。

家庭天国は、男性と女性が完全に一つとなってこそ完成するのであり、個人天国は、体と心が完全に一つとなってこそ完成するのです。家庭天国は、神様のみ旨を中心として夫婦が一つとなり、子女と一つとならなければなりません。そのみ旨の目的は、万民のためのものです。そして、そのみ旨の中心は神様です。それゆえ、神様を中心として万民のために生きるところから、家庭天国が連結されるのです。神様のためだけに生きるのではなく、神様を中心として万民のために生きなければなりません。神様は、そのような家庭を探し求めていらっしゃるのです。世界が復帰されるときまで、そのような家庭を探し立てなければ、万民を救うことができず、万国を救うことができず、万家庭を救うことができないがゆえに、そのような家庭をつくるために祝福家庭を立てたということを、皆さんは知らなければなりません。

統一教会の原理でいう四位基台とは、三代愛圏を意味するものです。三代が一つの家で暮らしながら愛によって和睦し「幸福だ」と

言うときに、天地創造の理想が実現されるのです。夫婦が愛すべきことはもちろんですが、子女たちを愛で指導し、真心を尽くして育ててこそ家庭が和睦でき、幸福になるのです。これが縦的に成され、横的に連結されるとき完全な愛が完成するのです。いとこや、六親等のいとこまで、愛で一つとなって初めて愛の円形となり、完全なものとなります。

私たちの家庭と、天国は、その形態が同じです。私たちの家には父母がいて、夫婦がいて、子女がいて、兄弟がいます。私たちの家は愛で一つになることができます。ここでは統一がなされ、生命が連結することができ、理想を実現することができます。ですから、皆さんが夫婦の愛を尊重することができ、父母の愛を尊重することができてこそ、天国へ行くことのできる資格者となるのです。祖父母は父母の前に愛を相続し、父母は夫婦の前に愛を相続し、夫婦は子の前に愛を相続しています。ここで、どの愛一つを否定しても天国は成り立ちません。夫婦同士で愛する以上に両親を愛し、自分の両親を愛する以上におばあさん、おじいさんを愛すべきだという結論になります。それが天国の核心となり、理想的モットーとなるのです。

神様の創造理想世界とは、どのような世界でしょうか。真の父母圏を通じて地上天国と天上天国が成される世界です。天国は愛の基盤を通じてのみ成されます。堕落した世界には、真の父母の愛を受けたことのある人は誰一人としていなく、現れた痕跡すらありません。霊界も同じです。真の父母の愛を受けていった者がいないからです。

天国はどこにあるのでしょうか。空中にぽつんと離れているのではなく、父親と母親、そして子供の間で授け受けるという生活的な舞台を育て、また、その中にあるすべての被造物を私たちの生活に利用し、私たちの理想の条件として利用する楽しさ、その楽しさを一〇〇パーセント享受し得るところが天国です。

今後先生は、家庭に関する規範、天国家庭としてもつべき、生活に関する規範を教えてあげなければならないと感じています。ところで、復帰の路程を歩んでいくべき人は、原理を中心として教えてくれる人がいるので、その人を通して教わらなければなりません。先生がそのような問題に直接責任をとる時代は過ぎました。家庭一つ一つを中心として、再度収拾しなければなりませんでした。私たち統一教会の組織は、家庭組織です。家庭を主としているのです。個人を主としてきたものを、家庭を主とするのです。

み言の時代を経て、実体の時代を経て初めて、相逢（相まみえる）の日を迎えるのです。そして相逢の日を迎えてこそ、天国生活をすることができるのです。相逢の日には、相手の心が私の心であり、相手の心情が私の心情であり、相手の姿が私の姿であり、相手の困難は私の困難であり、相手の傷は私の傷として感じられる境地にまで入らなければなりません。そのような境地に入って相手の心も私の心であり、相手の心情も私の心情となってこそ、天国家庭ができるのです。それがこの地で完結されてこそ、天国家庭ができるのです。

天国生活は、どこから始まるのでしょうか。家庭です。他のところから始まるのではありません。天国とは、家庭を立体的に拡大したものにすぎず、家庭圏を離れたものではないのです。それゆえ、皆さんは自分の妻や夫を抱くとき、それが世界の男性と女性が一つになることだと考えなければなりません。そのように、世界人類を愛したという条件を立てることのできる場が、すなわち家庭なのです。

天国は、家庭を中心として成されます。家庭の家族として守るべき矜持（誇り）を忘れてはなりません。

これからは私たち統一教会で礼拝を捧げるときも、説教の形式ではなく、報告の形式で行わなければなりません。報告の内容は、その家庭が誇ることのできるものでなければなりません。それゆえ、家庭全体で来て礼拝を捧げなければならないのです。そうして、良くやっている家庭を見ては見習い、そうでない家庭には、うまくいくように導いてあげなければならないのです。そうして家庭天国を建設しようというのです。まず家庭天国ができなければ地上天国はできないということを、はっきりと知らなければなりません。

今、私が教会を建てないのは、それなりの考えがあってのことです。教会に多くの人が必要ではないからです。天国は教会からできるものではなく、家庭から始まるものです。家庭、すなわち新郎新婦から始まるのです。女性は男性に出会うために生まれ、男性は女性に出会うために生まれました。赤ん坊が眠りから覚めて、まず呼ぶのが「お母さん」です。赤ん坊が母親を呼ぶ以上に、夫は妻を呼ばなければなりません。そのように呼んだことのない人は、かわいそうな人です。また、妻も夫以上に、そのように呼ばなければなりません。お互いに、そのような夫婦として接しなければならないのです。琴瑟之和（注：夫婦の仲がごく睦まじいこと）の夫婦として、お互いにそのように呼び合って暮らさなければならないのです。そのように千年、万年暮らしたならば、老いても青春をうらやむということはないのです。今後、祝福家庭の夫婦が八十歳の老人になったならば、先生が世界一周をさせてあげようと思います。

昔、先生が統一教会を始めた時のように、友達が家に来れば「自分の家よりもここのほうがいい。麦飯を食べたとしても、粥を食べたとしても、うちの御飯よりもおいしい。もう一晩だけ泊めてくれないか」と言う、そのような家庭を築きなさいというのです。訪ねてきた人、訪ねてきた友達がみな、自分の家を捨ててその家に来たいと思うような家庭になってこそ、その家庭は天国の家庭となるのです。

神の愛を中心として二人が一つとなってこそ、夫婦の天国ができます。一つとなったものは誰にも離すことはできず、分かれたり離れたりする心配はありません。皆さんは、どのような愛を見いだしましたか。神の愛を見つけたとするならば、皆さんの心と体が完全に一つとなり、神の愛がそこに臨在できなければなりません。そして夫婦の天国が生じ、家庭天国を成さなければなりません。お母さんとお父さんが完全に一つとなって愛し、その息子、娘も両親のように相手を得てこそ、家庭天国が実現するのです。父母がプラスと

なり、息子、娘がマイナスになれば、家庭天国となるのです。

夫婦のうちで、男性はどうあるべきなのでしょうか。男性は、教会と関係をもたなければなりません。また女性は、物質と関係をもたなければなりません。環境的にはそのようになっていますが、家庭的にはどうでしょうか。父親と母親と息子、娘、この三者が一つとならなければなりません。そこから家庭天国が始まるのです。それゆえ、愛を中心とした天国を成すためには、四位基台を成さなければなりません。

二) 家庭は真の愛の訓練道場

天宙主義というのは、体と心を合わせたのち、神様の愛の本体となる家庭を成し、その理念を霊界と肉界に連結させる主義です。天宙の「宙」の字は「家」という意味です。家の宙、ですから天宙主義という言葉を使うのです。天宙は、無形世界と実体世界を合わせたものです。それが私たちと、どのような関係があるのでしょうか。私たちには家庭が必要です。皆さんが家庭で一つになれないとすれば、天宙主義とは関係がないのです。家庭が、天宙主義を完結するための最終基準なのです。そこで平和の歌を歌うことができず、幸福を賛美することのできない人は、地上でも、霊界へ行っても不幸な人となるのです。

愛は永遠に続くものです。愛は最高の願望なので、万民がもろ手を挙げて相続しようとします。その愛を残すことによって、霊界でも神様の前に堂々と進むことができます。そのような愛を完遂し得るところが家庭です。家庭を通して天国に行くということは、すなわち愛の一体圏ができるということです。

天があれば地があり、天と地があれば、これを象徴する男性と女性がいて当然です。それが立体的な面で一つとなり得る心情的な基準が、家庭です。その家庭は、目的世界のための絶対的な基準をもって突き進むことができます。そこから新しい歴史、新しい世界、新しい天宙の基盤が築かれるのです。

家庭を中心として天宙主義を成さなければなりません。天宙とは、天と地を総合したものです。天と地は、人間における心と体のようなものです。心と体が一つにならなければなりません。一つの主体があれば一つの対象が必要であるように、一人の男性には一人の女性が必要なのです。男性と女性が一つとなるのが家庭です。

一つの家庭は、社会の倫理的基盤であり、人間世界において最も手本となり、根源的で、一次的な組織です。そのような家庭において、「愛」が最善の価値基準になるのです。

人間の価値をどこに置くべきかというと、理想世界に置くのではなく、理想の人に置かなければならないのです。ですから世界を愛そうとするならば、人を愛さなければならないのです。どのように愛するかというと、男性が女性を愛するように、女性が男性を愛するように愛さなければならないのです。

神様の息子になろうとすれば、神様の心情に似なければなりません。神の心情は、世界に植えられています。ですから、世界の人を

愛さなければなりません。距離が離れている関係で愛せないというならば、その国を愛し、氏族を愛し、家庭を愛し、父母を愛さなければなりません。なぜなら、父母は神様、夫婦はアダムとエバ、子女は世界の人類を代表した立場にあるからです。

理想世界とはどのようなものでしょうか。理想的となるには、単色よりも色とりどりなのが理想的です。そのような意味から考えると、五色の人種が一つとなって暮らすのが理想的でしょうか、五色の人種がそれぞれに暮らすのが理想的でしょうか。みな一緒に一箇所で交わって暮らすのが理想的です。ですから、そうなっていないとすれば、直さなければなりません。レバレンド・ムーンが現れてそれを直すのを、神様は嫌がるでしょうか、喜ぶでしょうか。神様はそのような人を後援しようとするのです。ですから皆さんは、神様のような心をもって、その父母の伝統を継承して人類を愛する天の家庭的なこの心情の絆を、いかにして拡大するかということに力を注がなければなりません。

この中で、年を取ったおばあさん、おじいさんが好きだという人は手を挙げてみてください。それでは、好きではないという人、手を挙げてみてください。手を挙げない人が多いです。皆さんに五百歳になるおばあさん、おじいさんを任せたとすればどうしますか。それでもよいですか。年が多ければ多いほど好きだという人は、神様のことが好きな人、ということになるのです。なぜかというと、この世界で最も年を取ったおじいさんとは誰かというと、神様だからです。

ですから神様を愛する人であるならば、その中にいる年を取っていないおじいさん、おじさん、息子を問わず、みな愛さなければなりません。すなわち、神様の家庭を愛さなければなりません。神様の家庭には、日本人でも韓国人でもアメリカ人でも、どの国の人でもみな入っているのです。人種差別をする人は、神様の家庭を愛していない人だということになるのです。その差別がなくなってこそ、理想世界なのではないでしょうか。

もし父母の愛を受けている子女が、外でお父さん、お母さんのような人に出会ったならば、その人にとても親近感を感じ、話をして、助けになりたいと思うことでしょう。また、兄弟姉妹の間で美しい絆をもった人が社会に出れば、周りの人とより親密な関係を保ち、うまく交わることでしょう。自分の兄弟姉妹と仲の良い人が外に出て異性と交際するときも、ごく自然に交際することでしょう。肉欲的、あるいは不健全な感情をもつことなく、兄弟姉妹のような感情をもつようになります。地上天国とは、神様を中心として、そのような関係を経験することのできる家庭をいうのです。

健全な家庭生活とは、祖父母、父母、子女が共に生活することです。もし、一つの世代が欠けているとすれば、その家庭はかたわのようなものです。そこで理想家庭を成すならば、その家庭は地上天国を成すれんがとして奉仕しなければなりません。私たちは、その理想家庭を地上に築くべき使命をもっています。

祖父母の深い愛を享有する子女が社会に出れば、例えばその人がニューヨークの街に行

けば、お年寄りにとても親近感をもつことでしょうし、お年寄りはその人に対し、自分の孫のごとくに接することでしょう。とにかく、お互いに話をしたいと思うし、親近感を感じることでしょう。家庭で祖父母に仕えたことのある若者は、助けが必要なお年寄りを見ると、走っていってでも助けてあげることでしょう。

父母、夫婦、子女で形成された家庭は、世界の縮小体です。家庭的愛を拡大してすべての人を愛するのが、人類の生きていくべき道であることを知らなければなりません。年を取った人は自分のおじいさん、おばあさんのように、中年の人は自分のお父さん、お母さんのように、自分より少し年上のような人はお兄さん、お姉さんのように、年下に見える人は弟妹のように思って愛さなければなりません。

ですから真の人というのは、自分の父母と年の似通った人は親のように思い、お兄さんと年の近い人はお兄さんのように思い、お姉さんと年の近い人はお姉さんのように思うというように、すべて自分の家族のように思って、すべての世界的な障壁と境界線を超越して人類を愛することのできる心情をもった人のことです。そうしてこそ、本当の意味で父親、母親を愛することのできる資格をもつことになるのです。

皆さんはどこへ行っても、すべての人を他人ではないと思わなければなりません。皆さんの家族だと考えなければなりません。お年寄りを見れば自分の親のように思い、その人に悲しいことがあれば、その人を抱いて痛哭し得る心を常にもたなければなりません。

自分の妹やお兄さんを捨てることはできません。自分の母親も捨てることはできません。誰も捨てることはできません。ですから離婚ということはあり得ません。夫は父親に代わり、兄に代わるものなので、父親を捨てることはできず、兄を捨てることはできないので、妻も夫を捨てることはできません。そのような愛を抱いて、世界を愛さなければなりません。父親と同じような年の人を見れば、父親のごとくに愛し、母親と同じような年の人は、母親のごとくに愛さなければなりません。

皆さん、家庭がなぜ良いのでしょうか。それは、父母の愛を中心として自由な活動の基地となるからです。同じように、神様が自由に活動できなければなりません。いくら見た目にはみすぼらしくても、輝く愛の核をもつ、そのような内的な人間から成る社会となったならば、神様は自由なのです。皆さん、そうではありませんか。人の家に客として行けば、何か不自然です。なぜでしょうか。それは愛の因縁がないからです。愛の因縁に四方性が備わっていないので、ぎこちないのです。ですから私たちの行くべき道は、人格の道です。

統一教会では、天国は氏族圏の中からできると見るのです。おじいさんを中心として父母と兄弟が一つとなり、いとことその子供まで一つに結ばれれば、完全な三代ができます。このような氏族圏の愛が地に立てられて神様と一つとなったならば、世界はすべて神様と一致する愛の世界となり、天国となるのです。

女性が嫁に行っても同じです。婚家のおばあさんとおじいさんは、神様に代わる位置にあり、夫に代わる位置にあるので、愛をもって仕えなければなりません。また、夫の兄弟

姉妹とも愛によって睦まじく暮らさなければなりません。そのような愛の関係が社会に拡大し、民族と国家、世界に拡大するならば、この世界は、罪悪と戦争に代わって、平和と愛に満ちるようになります。そうなれば、その世界こそが神様の理想が実現した一つの天国であり、理想世界なのです。

この宇宙の中心はどこにあるのでしょうか。家庭にあります。真の愛が定着し得る基地とはどこでしょうか。皆さんの生きている、皆さんの家庭だというのです。それゆえ、本来の家庭は宇宙愛を掌握し、宇宙の保護様相を体得しながら宇宙愛圏を拡大して、家庭を越えて国家を愛する愛国の道を行くべきであり、さらに民族と国家を越えて世界を愛する道を行かなければなりません。家庭を愛する人を「孝子」あるいは「烈女」と言い、国を愛する人を「愛国者」と言うならば、世界を愛する人を何と言うのでしょうか。そのような人のことを「聖人」と言うのです。

神様は家庭の中心となるお方として、この世界は神様の国とならなければなりません。祝福家庭は、神の国を連結し得る家庭となるように努力する生活をしなければなりません。神様に代わって「ため」に生きる生活をするところから氏族が生まれ、民族が生まれ、国家が形成され、世界が形成されます。ですから家庭は、神様を中心とした世界を形成する責任を果たさなければなりません。先生を中心とした統一教会は、一つの氏族のようなものであり、一つの民族のようなものです。五色の人種が合わさって単一民族を形成し、誰よりも世界のために生きる国家を形成するのが、統一教会の目的です。それが先生の目的であり、神様が先生を通して果たそうとされる目的です。

家庭というのは、人類愛を教育する代表的な修練所です。心情の中心を立てる、代表的な広場です。そこで互いに信頼し、幸福を享受するようになるのです。それが理想圏の始まりです。愛なしには、何ら存在する意味さえありません。

家庭は、天国を成すための教材としてつくられたものです。おじいさんのような年格好の人を自分のおじいさんのように愛するならば、その人は天国へ行くようになっています。自分の親と同年輩の人を、自分の親のように愛するならば、万国共同で、霊界でも境界線が生じません。息子、娘と同じような年のアメリカの若者を、自分の息子、娘だと思うことのできる心さえもっていれば、天国のどこへでも行くことができます。天国には十二の門があり、方向があるのですが、どこへでも通じるのです。家庭というのは、天国全体に因縁を結ばせる教材です。すなわちテキストブックだということです。

家庭において父母は、縦的な軸を完全に継承し、そこに合わせなければなりません。次に夫婦は、軸に対して横的に九〇度の角度に合わせなければなりません。その基準は、国家においても同じです。愛の軸の位置は一つしかありません。それゆえ、その軸を中心として、家庭は小さいのですが、氏族、民族、国家、世界へとだんだん大きくなります。愛の軸を中心として拡大するようになっています。拡大縮小の因縁関係をすべて四方に拡大するところから理想圏が生じるのです。です

から今世界を一つにするために私のしていることは、軸を正すことです。ですから方向を設定するためには、思想的王子の立場を占領しなければなりません。占領するにおいて、強制ではなく、愛で消化しなければなりません。

皆さんの家庭は、天国の主権を代表した立場にあることを知らなければなりません。父母は主権を代表し、子女は国民を代表し、物質はその国の地を代表したものであるので、父母に孝行することが、国に忠誠を尽くすことであり、父母に孝行することが、聖人の道理を果たす道に通じるのです。今、家庭がありとあらゆる醜態の起源となっていますが、神様は家庭が聖なる基台となることを願っていらっしゃいます。それゆえ、堕落圏内にある腐敗した家庭を収拾すべき使命が、私たちにあるのです。この地の家庭は破綻していますが、その家庭を否定することのできない立場にあるということを知らなければなりません。

三　真の家庭の理想と価値

一) 真の父母、真の夫婦、真の人

神様は人間にとって、真の愛をもった縦的な父母です。その縦的な垂直関係というものは一つしかありません。絶対的です。二つとあり得ません。その縦的父母だけをそのまま置いたのでは倒れてしまいます。大変なことになります。ですから横的父母を探し立てて連結しなければなりません。それを詳しく説明するならば、創造主は真の愛の縦的父母であり、創造されたアダムとエバは、子の立場でありながら神様の体である横的な父母の立場に立ちます。それらが内外一つとなることによって、内外の共鳴体となって授受作用をすれば、中心が生じると同時に、その内外の共鳴圏の中心が植えつけられるのです。それが、皆さんの生まれた生命の根源です。

縦的な父として一つとなった中に、横的な父が必要です。なぜでしょうか。球形を成さなければならないからです。そうではないでしょうか。球形を成そうとするときに、そのままで球形になることはありません。必ず垂直を中心として、横的なもの、前後左右が連結されて初めて球形ができるのです。球形になってこそ、思いのままに動き回ることができるではありませんか。

宇宙はそのようにはなりません。この宇宙の対軸の前に相対として編成された立場で、軸を中心として回るのです。それゆえ、同位圏に立っているのです。そして、この宇宙の神の創造的真の愛というのは一つです。軸は一つです。二つではありません。

既成神学では、創造主は聖なるものであり、被造物は俗なるものとされています。被造物を罪人扱いしたのです。しかし、「それは誤った」ということを知っているというのです。神様がなぜ創造をしたかというと、愛のゆえです。縦的な愛の主人であるとすれば、縦的な神様の愛をもったそのお方が子女を生んだとすれば、長く一筋にしかならないのです。それをいかにして横的に展開するのでしょうか。それゆえ、子を生むのは神様がするのではないのです。真の父母を通して生むのです。

横的な真の愛の父母の位置に立ったお方が誰かというと、真の父母です。神様の縦的な愛を中心とした真の父母の前に、九〇度の角

度にある横的な愛をもったお方が真の父母なのです。それゆえ、二つの父母の愛が必要なのです。一つは創造主としての父母であり、一つは被造物としての、神様がその対象として理想を描きながらお造りになった体的な父母です。それゆえ、神様は心的な父母の立場にあり、真の父母は体的な父母の立場にあります。この世に、縦的な愛と横的な愛を中心として生まれるべきだったのが人間です。

なぜ子女を生まなければならないのでしょうか。神がアダムとエバを喜びをもって創造した、その内容を体恤させるためなのです。それゆえ、息子、娘を生んだことのない人は、父母というのが分からず、夫のことが分からず、妻のことが分からないということになるのです。過去と現在において愛したけれども、未来を開くことができないのです。おじいさん、おばあさんは過去の時代を代表し、お母さん、お父さんは現在の時代を代表し、息子、娘は未来の時代を代表するのですが、この三つが一つとなることのできる所が家庭だということです。

エバは神様の外的新婦です。それでは、神はなぜアダムとエバを創造したのでしょうか。それは繁殖のために創造したのです。子孫を殖やすために創造したのです。子孫を繁殖してどうするというのでしょうか。それは、莫大な天国の国民を増やすためなのです。霊界に行っても繁殖が可能でしょうか。絶対に不可能です。なぜならば、神の愛は垂直的なので、たった一点しかありません。神の愛は一点に立つ垂直的な道を降りてくるのですが、垂直には繁殖の道がありません。それで、繁殖のために横的な基準であり愛の基台であるアダムとエバを創造したのです。それは水平なので、東西に回るようになるからです。一八〇度の平面圏は無限に存在するのです。ですから繁殖は、すべての方面で可能なのです。膨大な平面圏において繁殖させた者たちを霊界に連れていって、天国の国民にするのです。永遠な国民をつくるために繁殖が必要なのです。しかし、その生産地は地上です。男性、女性の体を借りてできるのであり、霊界では子女を生むことはできません。

天国の民は霊界で生まれるのではありません。神様は何ゆえに実体を創造したのでしょうか。天国の民を繁殖させるためなのです。実体でなければ繁殖できません。縦的な愛には一点しかありません。横的な基準を中心として回ることによって三六〇度の球形体が生じるのです。その球形体には定着し得る空間がいくらでもあります。ですからその息子、娘が地上に生まれることができるようになっているのです。その息子、娘がたくさん生まれるということは、不幸なことではありません。地上で多くの息子、娘を生むということは、天上世界における天国の民をたくさん繁殖するということになります。神様が願うのは、限りない世界です。広大な世界に空いた所があってはなりません。それをすべて埋めることのできる民が必要なのです。

原点は何でしょうか。真の父母権、真の王権、真の長子権です。それがアダムとエバが出発すべき原点だったのです。それが神様の本宮です。そこに神様の王宮があるのです。神様の王宮がそこにあり、神様の愛がそこにあります。人間と創造主、被造物と創造主が一つに結ばれて、真の愛の基盤となるのです。

その出発点が神様のセンターです。それが、完成した本然のアダムの家庭基盤であり、神様が永遠に臨在することのできる王宮です。

私たち人間が寝て、朝目覚めたときに願うこととは何でしょうか。朝起きて朝食を取るのが問題ではなく、出掛けていって働くのが問題ではなく、世界のことを心配するのが問題ではありません。夜も昼も、春夏秋冬変わることなく、一生変わることなく愛の心をもつことを願うのです。そのような男性、そのような女性が完全に水平線を成して、縦的な神様に完全に九〇度の角度で連結され、人情と天情が合わさり得る、そのような立場における愛、そこに結合し得る愛の理想の境地、そのために神様は天地を創造されたのです。

私が生まれるときに、何を動員して生まれたのでしょうか。本来、創造理想である神様の愛を中心として愛を通してつくられた実体である母親と父親の生命が激動して、完全に一〇〇パーセント沸き立って一つになって生まれました。これを煮え立たせたのは何でしょうか。愛を通して男性と女性が完全に和合するのです。細胞が完全に沸き立って、その父母の愛を根拠とした生命と血統、血を受け継いで私が生まれたのです。それゆえ、私という存在は何かというと、父母の愛の結実です。それを知らなければなりません。私は両親の愛の結実だということです。

神の創造原則において、女性が生まれたのは男性のためであり、男性は女性のために生まれたという根本を知らなければなりません。互いのために生まれたのですから、その中心は何かというと相手です。自分ではありません。男性にとっては女性が中心であり、女性には男性が中心なのです。自分によって生まれたのではありません。自分から出発したのではありません。

なぜ神様が創造したかというときに、愛のゆえに創造したと聞いたならば、宇宙がどれほど平和になり、どれほど近く感じられることでしょうか。つまり、神様の絶対的愛をもっているのですから、その相対は永生するのです。それが最も貴いことなのです。

神様が天地を創造したように万物が結婚するならば、どれほど美しいことでしょうか。万物も自分のように愛を通して生きているということを見るときに、神様が創造のあらゆる根源的な感覚を再現し、すべての万物と共に、その相対と共に統一的感情を感じることのできるもの、それが愛なのです。神様が創造するときの根源的なものを感じるのです。天地の万物を造るときに神様が感じた理想型、それがすべての被造物なのです。

真の愛をもって引きつければ、天地がすべて引かれてくるのです。いくら遠いものでも真の愛が引けば引かれてくるし、いくら近い所にあったものでも遠くに見えるようにしようとすれば、真の愛によって遠くに行かせることができるのです。

絶対的な神様の一つの文化世界において生まれる息子、娘は、王子であり、王女です。神様の王宮における王子と王女は、人間です。そこは、創造主、神様を中心とした王宮です。王の中の王である創造主を中心とした皇族が、私たちなのです。

男女の生殖器官は、創造主から受け継ぎ、先祖から受け継いだ、変わらずにそっくりそのまま連結された礼物です。神様も侵犯することのない貴い礼物です。先代も破ることのできない貴い礼物です。これを侵犯する者は、天理の大道の中心である愛の本宮を破綻させる悪魔の血肉です。純粋な本質としての永遠な真の愛を中心としたその基台の上に生まれたのが、生命の本宮です。また、新しい血統の本源の地です。きちんとしなければなりません。私は教主なのですから、まっすぐにさせなければなりません。生殖器は何ゆえに生じたのですか。天地の大道のために、天地の大摂理的経綸のために、私に与えられたものです。

神様が創造するときに、生殖器を表象して男性と女性を造り始めました。それゆえ生殖器を動かすところには、人間全体の構成要素がすべてついているのです。ですから男性と女性が愛して、その二人が一つとなって子を生むのです。一つとなって生むということはどういうことですか。何に似るのでしょうか。神経系統がすべてついているので、従ってくるのです。根がないのに枝が出てくるでしょうか。それを否定することはできません。それゆえ愛が激動するときには、体と心が一つとなるのが原則です。これは理論的です。

では、愛を代々に連結させることのできるところ、その生命を代々に連結させることのできるところ、自分の血統を自分の子に代々連結させることのできる、その器官とは何でしょうか。それは男性、女性の生殖器官です。

それでは愛が先なのか、生命が先なのか、それが問題となります。このごろ、心が先だとか、体が先だとか、唯物理論の哲学思潮が入って世界で問題になっているように、愛が先か、生命が先か、これが問題です。どちらが先でしょうか。先か後かを明らかにしなければなりません。愛が先です。神様が創造理想を立てるとき、神様を中心として立てたのではありません。愛を中心として立てたがゆえに、相対世界の創造を始めたのです。これは理論に適っています。

男性と女性はどこから来たのでしょうか。創造主がいるとするならば、創造主から始まったことでしょう。そうだとすれば、その創造主が男と女を造った目的は何でしょうか。何ゆえに造ったのでしょうか。なぜ造ったのでしょうか。愛のゆえに造ったのです。どんな愛でしょうか。真なる愛です。真なる愛とはいったい何でしょうか。真の愛とは、永遠で、変わらない愛のことをいいます。たとえ時代が変遷し、いくら環境が変わっても、その愛は変わらないのです。その本質において唯一で永遠、不変性をもった真の愛の理想を果たすために男と女を造ったのです。誰を中心としてでしょうか。それは人間を中心として創造したのではありません。根となる神様を中心として創造が始まったのです。それゆえ、この被造世界はすべて愛ゆえに生じたと考えられるのです。

真の愛によって成熟した真の家庭は、神様の愛の巣です。

神様の恨とは何かというと、子女を教育できなかったことであり、兄弟を教育できなかったことであり、夫婦を教育できなかったことであり、父母となるための教育ができなかったことです。そのような内容の心情圏を中

心とした、そのようなオーソリティーを全体化しなければならないのです。

二) 真の家庭の理想と価値

四大心情圏と三大王権を復帰して、皇族の愛をもっていくべき祖国が天国です。死んでみれば分かります。いくら偉い人でもみなそこに引っ掛かります。その時になって「文総裁の言うことを聞けばよかった！」と後悔するのではなく、早く決めて祝福を受ければいいのです。それが最も早い解決方法です。そのようにして学ぶのです。

四大心情圏と三大王権をサタンが蹂躙したのです。天の国を破壊し、未来世界を破壊して、三世界の王権を破壊しました。それゆえ、私たちが天国に行くには、四大心情圏の完成実体となり三大王権をもった愛の王子、王女の基準で、皇族の愛を受ける人とならなければなりません。そのような人が天国に行くことは元亨利貞（注：事物の根本となる道理）です。

堕落によってこれを一遍に失ったので、その本体に会えば、娘の心情を感じ、妹の心情を感じるのです。そのように新婦の心情を感じ、母の心情を感じ、新しい息子、娘の心情までも感じるようになるのです。ですから先生の場合、自分の息子、娘にできたらいいとも思うのです。そのような心情圏を回復することによって、善悪のよしあしを判断して、天の側に帰ることによって、すべてが解怨成就するのです。心がそのように作用するのです。それはどうすることもできません。

皆さんは愛の家庭をもたなければなりません。神様の愛の圏で完全に統一された王族、天国の王子、王女の王族圏を中心として愛の体験をした皇族の行く所が天国であるということを知るべきです。アーメン。皆さんが生きている間、この原則を中心として合わせなければなりません。あの世へ行ってもこれに合わせるために身もだえしなければならないのです。ですから私は一生の間、他のことを考えたことがありません。

皆さんは家に帰って、おじいさん、おばあさんを神様のように思って侍らなければなりません。お母さん、お父さんを家庭の中心である王のように、王妃のように侍らなければなりません。そのお父さん、お母さんの息子、娘として、私は王子、王女の道理を受け継いで育ち、未来の王権を伝授されて世界を導いていくべき王子、王女なのです。今後、統一教会員は、そのような考えを中心として、そのような愛の秩序に拍子を合わせていかなければならないのです。そのような家庭の父母となり、そのような家庭のおばあさんとなり、そのような家庭のおじいさん、そのような家庭の息子となるときには、そのまま天国へ行くのです。そのような天国の皇族の愛を体験した人の行く所が、天国なのです。

私たち統一教会の信徒同士は、自分の兄弟よりも近いのです。そのように今後世界は、前後の世界が一つとなり、その次には夫婦が一つとなり、左右の世界が一つとならなければなりません。上下、前後、左右……。上下は子としての道理、前後は兄弟としての道理、左右は夫婦としての道理、そのようにして完成すれば、霊界の神様の位置に上がって神様

化すること……。神様へと帰っていくのは、真の愛だけにできることだということを知らなければなりません。真の家庭とは、このような公式的基準で訓練された完成したアダム家庭を拡大したものなので、この世界を拡大すれば、東西が一つとなり、男性と女性が一つとなるのと同じことです。男性を中心として、主体を中心として相対が一つとなり、前後が一つとなり、上下が一つとならなければならないのです。そうなることによって、一つの世界が間違いなく原理的な内容を中心として真の愛によって完成し、完結するでしょう！　アーメン！

今日の人生の行路は、旅人の航路なのですが、そこで備えるべきものとは何でしょうか。愛を体恤していかなければならないのです。父母の愛をよく受けられなかったことが堕落なので、真の父母の愛、真の兄弟の愛、真の夫婦の愛、真の息子、娘の愛を中心として、縦的な家庭を築き、横的な環境を、東西南北にたくさんの家庭を広めなければなりません。そして、それらが縦横を連結することのできる真の家庭の形態を成して、氏族圏、民族圏、国家圏、世界圏へと連結するとき、愛で結ばれたその世界のことを、すなわち天国というのです。

子女の愛、兄弟の愛、父母の愛を拡大しなければならないのです。拡大してそれが公式化され、広がることによって、縦的な国と、横的な国を受け継いだ天地の完成的家庭となるのです。神様の内的な心情と、アダムとエバの外的な実体のすべてを体験し得る家庭的な生活をした人が、天国の皇族圏に属するのです。簡単なことです。先生の言うことに間違いはありません。

真の父母の愛、真の師の愛、真の主人の愛です。この三大主体思想の中心の場は一つです。真の家庭の父母を中心とします。先生も、夜になれば家に帰ります。大統領でも、夜になれば家に帰らなければなりません。それゆえ、父母の愛を中心として父母の代わりに教育するところが学校であり、父母の代わりに父母の愛で国を治める者が大統領なのです。

真の愛とは、どのようなものでしょうか。自分の理想を投入して忘れるのが、真の愛です。ここにいらっしゃる方々、よく考えてみてください。愛国とは何でしょうか。自分の命を投入して忘れることです。真の夫とは、自分の妻のために自分の命を投入し、また投入しても、永遠に投入しようという人です。そのような立場に立つのが真の夫の行く道であり、真の妻の行く道であり、真の息子の行く道であり、真の兄弟の行く道であり、真の父母の行く道であり、真の家庭の行く道なのです。おじいさんがそうであり、おばあさんがそうであり、お母さん、お父さんがそうであり、自分の夫、妻がそうであり、息子、娘がそうであるという家庭は、神様に「来るな」と言っても、自動的に来ていらっしゃるのです。なぜでしょうか。神様に似ているからです。

お金がたくさん必要なのではありません。お金というものは流れていってしまうものです。子供というものも流れていってしまいます。すべては流れていってしまいます。しかし、真の愛を中心とした真の家庭の伝統だけ

は、霊界にまで永遠に残るのです。それが最も貴いものなのです。

アダムとエバが、息子から兄弟、夫婦、父母にまでなったとすれば、アダムの息子、娘たちもそうなったことでしょう。しかし、アダムの息子、娘は、神様の愛の圏内にまで至ることができませんでした。堕落していないアダムの息子、娘となったならば、すべてが横的に結ばれる地上天国ができたでしょうが、縦横が連結されなかったので、天国はできなかったのです。ですから二つの国を受け継がなければならないのです。息子、娘は、二つの国を受け継がなければなりません。天の国と地上の国、縦的な国と横的な国、縦的な父母と横的な父母の血統を受け継いだので、縦的な父母の内的なものすべてと、横的な父母の内外のすべてを伝授されるのが息子、娘なのです。皇族というのは、二つの国を受け継いだ生活を実際にするのです。皇族になれば、二つの国でいつでも受け入れることのできる、そのような完成的な基盤の上に立つのです。

父母の愛は、全世界の男性圏、女性圏を代表した花であると同時に、香りとなり、実の基準となるものです。代表なのです。母親と父親は、人類の女性と男性を代表した存在なのです。では、自分の息子、娘は何でしょうか。後代に数千万の人類が生じ得る、そのような子孫の代表者なのです。ですからこの三者が一度に神様の愛と化して、下の者が上の者のために、上の者が下の者のために生きる愛になるのです。自分のためというのではありません。神様の創造本性とは、「ため」に生きるということです。

おじいさん、おばあさんは神様の代わりとなり、母親、父親は世界の大統領の代わりとなり、その息子、娘は、天国の王の息子、娘のように王子、王女として生きるのが家庭の理想であり、創造主であられる神様の愛の本来的な家庭です。家庭は天国の王宮であり、その構成員は天国の王族を代表するものです。おじいさんは神様から見れば、王子、王女の代表です。皆さんの両親は、すべての国家、世界の王子、王女の代表です。そうではないでしょうか。誰もがそのような欲心をもっていますね。同じなのです。子供は未来の全宇宙の王子、王女の代表です。これほど価値ある場の中心が私たちの家庭です。本当に誇るべきことです。そのような素晴らしい理論の基盤の上に私たちが立っているというのは、本当に貴いことなのです。

「私は神様を誇ります」と、皆さんがそう言えば、もちろん神様も同じです。「私は中心家庭として、理想的夫婦の代表的な家庭であることを自負しています」と言うことができれば、すべてが、未来のすべての万物までもが歓迎するのです。そのような価値ある家庭、歴史的家庭の背後を知っていますか。それは神様の創造された理想家庭の組織です。皆さんがその立場に出なければならないのです。神様はおじいさんの立場です。その立場に立てば、誰もがその前で敬拝するのです。

おじいさんを愛し、おじいさんを尊敬するということは、過去をすべて受け継いで、過去の世を学ぶことです。父親からは現在を学ぶのであり、子女を愛するということ、子女を大切に思うことは、未来を学んでいくことです。おばあさん、おじいさんを通して、お母さん、お父さんを通して何を受け継ぐのか、

どんな血統を受け継ぐのかというと、真の愛です。真の愛を受け継ぐのです。おじいさん、おばあさんが年を取っていても、二人が真の愛で一つとなっていて、お母さん、お父さんが一つとなっているので、私たちもそのようになって、未来を受け継ごうというのです。未来を受け継ぐためには、絶対に真の家庭とならなければなりません。そうならなければ未来を受け継ぐことができないということを知らなければなりません。家庭の中にこの三者がいるならば、それは宇宙があるようなものです。宇宙の愛は、神様からの歴史全体、現在と未来を代表した真の家庭にあるのです。

真の家庭でおばあさんを愛し、お母さんを愛し、お姉さんを愛するのです。動物の世界を見ても、雌を愛し、雄を愛するというように、すべてがそうなっているのです。それはなぜかというと、宇宙の愛を学ぶ教科書だからです。おばあさんがいなければ不安定なのです。おじいさんがいなくても不安定で、誰かほかの方がいなくても同じです。そのようになってこそ、そのまま天国に移っていくのです。祖父母、母、父、子女がそのまま天国へ行くのです。真の祖父母を愛し、真の父母を愛し、真の子女、真の家庭、真の国家、真の宇宙を愛した人が天国へ行くのです。その模型の教科書が家庭です。そう考え、神様を考えると、永遠な未来になるのです。神様を愛しながら「私の愛は未来のために行く」というとき、永遠な未来となるのです。

四　天国は家庭単位で行く所

家庭は国の中にあり、国は世界、世界は宇宙の中にあるので、家庭や世界を捨てたとしても、神様のために愛したとすれば、すべてを愛したという位置に立つのです。ですから統一教会の皆さんは、世界のために生き、神様のために生きるべきなのです。皆さんが先生のことを好きだというくらい、世界を愛し、人類を愛したとすれば、天国へ行くことができるのです。

父なる神様というように、神様は親です。本来堕落しなかったならば、アダムとエバが父母であると同時に、国の王となるのです。天国の王になるのです。宇宙の王になるのです。ですから愛する孝子は天国へ行くことができるというのです。愛する忠臣と孝子は、天国へ行くことができるということです。夫を神様のように、主のように、王のように思って仕え、真の愛をもって生きる人は、天国へ行くことができるのです。父母を愛し、その国と世界を愛することなくしては天国へ行くことができないという論理が、そこで成り立つのです。

人間の堕落とは何でしょうか。堕落した子女とは何でしょうか。彼らは、神様が自分の父であると切に感じることができません。彼らは心の中に神様という概念をもっていないのです。皆さんは次のようなことを体験し、悟らなければなりません。

まずは「私は新生して新しい生命を得て、真の父母によって新たな生活を営んでいる神様の息子、娘である」という事実を実感しなければなりません。

第二には「私は神様の国に住む資格をもった市民である」ということを実感しなければなりません。

第三には、皆さんが国と世界を見るときに、神様の愛を感じなければならず、「神様がこ

の世界を遺産として下さったので、神様の子女としてこの世を所有する権利がある」と思わなければなりません。

私一人では天国に行くことはできません。そのような意味で、一人の男性は一人の女性と一つにならなければなりません。そのような過程を経るためには、一人は必ずカインと一つにならなければなりません。相対的環境を必要としているのです。父母を迎える前に、もしくは夫婦を迎える前に、兄弟の間で一つの相対的基準をもっていなければ（天国へ）行くことができないというのが、統一思想なのです。

皆さんが知らなければならないことは、地上で天国の愛を体験できなかったならば、天上に行くことができないということです。カイン的な人を本当に愛したことがありますか。天国へ行くにはサタン世界における父母の愛、夫婦の愛以上の愛で愛さなければなりません。もし、堕落世界で父母が子女のために命まで捧げたとすれば、私たちはそれを超越した愛で愛さなければならないのです。

皆さんの心の中に、皆さんの生活の中に神様の愛があふれて、ぽたぽたと滴るようでなければなりません。愛がぽたぽたと滴れば、希望がありますが、愛が乾いているとするならば、皆さんとその家庭は滅びるしかないということを知らなければなりません。愛の乾いた人は、愛の国の国籍から除名されるという事実を知らなければなりません。愛の伝統の世界から除外されるしかない運命になる、ということをはっきりと知らなければなりません。

皆さんは、夫婦の愛と父母の愛を尊重できてこそ、天国へ行くことのできる資格者となるのです。自分たち夫婦が愛し合う以上に、両親を愛し、自分の両親を愛する以上に、おばあさん、おじいさんを愛さなければなりません。それが天国の核心であり、理想的モットーとなるのです。

天国に行く人とは、どのような人でしょうか。神様よりも自分の息子をより愛する人は、天国に行くことはできないのであり、神様よりも妻や自分自身を愛するようでは天国に行くことができないのです。

「私は劉孝元です。地上では先生の一番弟子として長い間協会長を務め、み言を受けて『原理講論』を執筆し、世界的経典とならしめたので、霊界では最も高い地位を占めることと思っていました。ところが、先生が霊界の三位基台を編成なさったのですが、李起錫、劉孝元、朴鍾九の順でした。私は失望して不平を言いました。先生は、『ここは愛の世界であり、知性を競うのではなく、愛を競うところである。李起錫のほうが愛をより多く所有していたのだ。だから李起錫が三位基台の一番上の兄になったのだ』と説明してくださったので理解できました。私はいまだ天国へ行くことができずにいます。今行く途中です。これまでは知性的な面に傾いてやってきましたが、地上にいる妻と共に、懸命に心情的に働こうと思います。現在天国には興進様がいらっしゃいます。興進様も祝福を受ける前は天国にお入りになることができなかったのですが、四位基台を立てて天国へ行かれました。霊界は愛の世界です」

天国には、独り者は決して行くことができません。独身者にとって天国は絶望の山河です。寂寞の山河には希望がありますが、絶望の山河というのは希望すらない状態ではないですか。（注：韓国語では「絶望」と「寂寞」の発音が似ている）

皆さんは、天国とはどのような所だと思いますか。天国は一言でいうと、完成した人が行って暮らす所だということができます。天国は真なる愛をもった完成した人の行く所だとすれば、その真の愛をもった人というのは、どのような人なのでしょうか。人間には男性と女性がいます。神様の理想的愛が地上でどのようにして完成するかということを考えると、男性と女性を離れては完成されないという結論に至ります。完成した愛の主体性をもった男性と女性でなければ、神様の愛は完成されないのです。

天国復帰は誰がするのでしょうか。み旨のためならば十字架の道も感謝することができ、絶対夫婦、絶対信仰、絶対実践、絶対心情を主張することのできる夫婦から初めて天国の門が開かれるのです。

天命を受けて、この怨讐の世界において手本となるような家庭になってほしいというのがお父様の願いであることを思えば、天国に行くためには、家庭を通さずしては行けないということを知らなければなりません。

天国へは一人では行くことができません。祝福は、天国の門をさっと越えるということなのです。天国は、家庭的に行くところです。三代の因縁をもって行くところです。ヤコブの七十人の家族も、三代が合わさったものです。そのようにしてエジプトに行ったのです。

本来、創造原則による天国とは、家庭を中心として行くところです。父母が行って、子供が行って、自分の家門全体が行ってこそ幸福なのであり、父母は地獄へ行き、子供だけが天国へ行ったとするならば、どうして天国だということができるでしょうか。ですから、統一教会が今後天国へ行くことのできる道を築くにおいて、家庭的な基準を立てなければなりません。そうしなければ天国へ行くことはできません。家庭を中心としてサタンの讒訴し得る基準を脱しなければなりません。歴史的な讒訴基準、時代的な讒訴基準から脱しなければなりません。

一人では天国に行けません。一人では絶対に天国へ行くことはできません。アダムとエバが二人で堕落して地獄の門を開いたので、一人では天国へ行くことはできないのです。ですからイエス様も天国に行くことができず、楽園にいるのです。イエス様も新婦を迎えて初めて天国へ行くようになっているのです。今日のキリスト教信徒は、このようなことを知りもせずに、みな「イエス様についていく」と言います。そうなれば、彼らは行って、再び戻ってこなければなりません。家庭を築き、家庭的な復帰の基準を立てなければ、天国へ行くことはできないのです。ですから、統一教会で祝福をしてあげるのです。

女性が先に罪を犯したので、女性神である聖霊が来て母の実体として現れ、罪を洗い、世の中を清めたならば、イエス様は、新郎として新しい種をもって再臨しなければなりま

せん。再び充電して、新たな天地の真の父母の血族として、神様を中心とした新しい世界をつくろうというのが神様の目的です。そのような世界ができてこそ、神様の計画がみ意のままに成されたということができるのです。目的もなしに六千年の間摂理してこられた神様だとすれば、そのような神様は信じる必要すらないのです。

天国とはどのような所でしょうか。男女が共に家庭を築いていくところです。ところが、イエス様はこの地に来られて新婦を探し求められず、息子、娘をもてずに亡くなられたので、今まで楽園で二千年間祈祷しながら、聖霊に役事させていらっしゃるのです。

本来神様は、夫は天国に、妻は地獄に行くというように創造されたのではありません。創造当時の理想の主人公たち、すなわち父と母と息子、娘が氏族を成し、民族を成し、国を成そうとしたのでした。そうなるべきではないでしょうか。ところが、人間が堕落したので地獄が生じたのです。

統一教会でいう天国とは、一人で行く天国ではなく、家族が共に行く天国です。神様の創造理想から考えると、男性と女性が分かれていくところが天国でしょうか。そうではありません。二人で行く所が天国です。父親が行けば母親も行き、両親が行けば子供も一緒に行く所が天国なのです。天国へはお父さん、お母さんが一緒に行かなければなりません。お父さんは天国に行くのに、お母さんは地獄に行くというのでは、天国だと言えるでしょうか。このような立場から、私たち統一教会は歴史的な宗教です。

天国というのは、人間が堕落せずに、この地上で神様の愛の懐で成婚し、神様の喜ぶ息子、娘、神様の喜ぶ孫を得て神様の愛を受け、その家庭がみな一緒に行く所です。子供が行けなくても、自分さえ行ければ良いというのは天国でしょうか。

ところで、楽園というのは、いくら仲の良い夫婦や親子でも、別れて行くのです。家庭とは何ら関係がありません。そのような所が天国でしょうか。両親と共に家族全員が行って、神様を中心として授け受けすることのできる、そのような世界が天国です。息子は地獄で死にそうだとあがいているのに、親が天国でいい暮らしをすることができるでしょうか。そのような所を天国だと言えるでしょうか。

天国へは、個人的には絶対に行くことができません。先生が知っているところでは、天国は、これまでキリスト教徒が信じているような妄想的な所ではありません。本来天国は、家庭単位で行くようになっています。家庭が行くようになっているのです。家庭が行くのです。お父さん、お母さん、息子、娘が一緒に行って神様を中心として、共に生きることのできる所が理想的な世界なのです。ところが、父親は地獄へ行き、母親は天国へ行き、姉は地獄へ行き、弟は天国へ行くというのでは、自分が天国へ行ったとしてもうれしいでしょうか。天国へは、家庭単位で行くのです。家庭が行くのです。

天国へ行く秘訣とは何でしょうか。天国へは個人で行くのではありません。家庭的に行かなければなりません。家庭的に行かなければならないというだけではなく、一族を率い

ていかなければなりません。この地で神様の前に多くの一族がいるということは恵まれたことです。家庭にたくさんの息子、娘がいて富裕であれば、恵まれた家庭だといいます。そのように恵まれて天国へ行こうとするならば、個人が一人で行くのではなく、家庭的に行かなければなりません。

五　家庭盟誓

一) 家庭盟誓をすることができる者

家庭盟誓をすることができる家庭は、心と体が一つになった立場にある家庭です。心と体が一つにならなければ、家庭盟誓をすることができません。これを毎日のように唱えながら祈祷するとき、ここに不合格のすべてのものを除去して、そこに合致し得るものを加えて、解放の心身統一圏を備えなければなりません。その立場でするのです。

家庭盟誓のとおりにならなければなりません。この家庭盟誓を唱えるにおいて、「私たちの家庭は真の愛を中心として」これが標題です。それは堕落圏を越えたということです。偽りの父母の愛と、偽りの生命と、偽りの血統を中心として分かれたものが、統一されることを言います。「真の愛を中心として」と言うときは、心と体が一つになった立場で唱えなければなりません。

その次には男と女、夫婦が一体となった立場で、その次は息子、娘が一つになった立場で唱えなければなりません。息子、娘を中心としてカインがアベルの血を流すようになった歴史的暗礁を、すべて消化しなければなりません。このようにすべて統一されて、心身統一、夫婦統一、子女統一の基盤の上で唱えるべきなのが、この盟誓だということを知らなければなりません。

家庭盟誓は、どんな人がすることができるのでしょうか。サタン世界の偽りの父母による偽りの愛と、偽りの生命の因縁をもった人はできないようになっています。これは本然の世界に帰って、神様と堕落していない真の父母と一つになって、真の愛によって心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになることのできる基準に立った人だけが、この家庭盟誓をするようになっているのです。

天国にはどんな人が入るのでしょうか。天国は誰でも入るところではありません。心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになって、三代が暮らす家庭の四位基台基盤を成してから入るところです。ですから天国に入るには、出発することのできる基地である家庭を中心として、完全に統一しなければなりません。そうすることのできる人々が唱える盟誓文が、家庭盟誓だということを知らなければなりません。

ですから毎日、朝食、昼食、夕食を食べる時ごとにチェックしなければなりません。そして、朝起きる時と夜になれば、必ずチェックしなければなりません。自分の心身が一つになれず、サタン的因縁を再び誘致させる立場に立たなかったかを常にチェックしなければなりません。夫婦げんかがあり得ないのです。夫婦がけんかするのは問題になるのです。

今まで自分勝手に生きてきましたが、これは将来、天法によって治められるべき時が来るというのです。厳格です。そこには許しがありません。女性は特別に、もっと注意しなければなりません。堕落した女たちは、口を

よく主管しなければなりません。口を慎めというのです。女性が重要な責任を負わなければなりません。女性がすべての責任を取らなければならないのです。

家庭盟誓は一般の人がするのではありません。家庭盟誓は誰でもたやすくできるようにはなっていません。家庭盟誓の八つの項の初めには「私たちの家庭は真の愛を中心として」というのが前提になっています。それは、サタン世界と関係のない基盤で言う言葉です。

二) 家庭盟誓の内容

①私たちの家庭は真の愛を中心として、本郷の地を求め、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建することをお誓い致します。

第一番は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、本郷の地を求め、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建する」です。私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建するという言葉は、地上天国と天上天国を私がつくるということです。家庭を失ったので、家庭をつくらなければならないという言葉です。

私たちの家庭は真の愛によって、本郷の地を中心として、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建するというのです。本郷の地です。家庭を中心とした本郷の地です。国ではありません。それで故郷に帰らなければならないというのです。皆さんにそのような家庭があれば、故郷の地に帰って、地上天国と天上天国を成就しなければなりません。もう故郷さえ取り戻せば自然に国、世界、すべてが一つになるのです。心配する必要がありません。地上天国、天上天国が自然に築かれるのです。それは家庭で始まるのです。

それで盟誓文の第一は何ですか。「真の愛を中心として本郷の地を求め」その地を求めていかなければなりません。「神様の創造理想である地上天国と天上天国」を完成することを誓うのではありません。創建しなければなりません。私の手でつくらなければならないというのです。悪魔の世界から完全に取り戻してこなければなりません。サタンの世界圏を完全に回復させなければなりません。分かりますか。ですから完成ではなく、創建です。

第一番は何かと言えば、本郷の地を求めて、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建しなければなりません。失ったので、復帰しなければなりません。つくるのは、神様がつくってくださるのではなく、私たちが取り戻さなければなりません。

②私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子の道理を完成することをお誓い致します。

二番目は、「私たちの家庭は真の愛を中心として」、真の愛を離れてはいけないのです。「神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり、中心的家庭となって、家庭では孝子」、父も孝子になり、息子、娘も孝子に

なり、すべて孝子にならなければなりません。孝子の伝統を受け継がなければならないのです。「国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子の道理を完成する」というのです。「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子の道理を完成する」です。父母になって、息子、娘をよく育てなければならないというのです。

「聖子」と言うとき、息子の「子」の字ですか。息子を言うのです。聖子とは何かと言えば、天の国の宮法と、天の国の法と、地上の宮法と、地上の法とをみな守ることです。二つの世界を言うのです。天の国に王権があり、民がいれば、どちらもこの法を守らなければならないのです。霊界も王権があり、プラス・マイナス、二つの世界のプラス・マイナスになるのです。

神様と真の御父母様に侍って、代表的な家庭となり、中心家庭となって、家庭では孝子、孝女、国では忠臣、烈女、世界では聖人、天地では聖子の道理を天が願ったすべてのことを私たちの家庭で完成しようというのです。父母として子女教育と、国家では国民教育と、世界では、天地では、その天の国の一族、家庭、食口としての合格者になれるようにつくろうということです。

二番目は何ですか。代表的家庭です。「神様と真の御父母様に侍り、代表的家庭となり、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子の道理を完成すること」を誓わなければなりません。今まで歴史時代に神様に不忠、親不孝だった、すべての逆賊となったこれを踏み、片づけなければならないというのです。

家庭にもそのようなやからが多かったし、国家にもそのようなやからが多かったし、世界にもそのようなやからが多かったし、天地にもそのようなやからが多かったというのです。多かったのですが、そのすべてのものを代表してみな真の父母と一つになって、このような家庭を完成しなければならないというのです。

その次は、孝子の道理、忠臣の道理、聖人の道理、聖子の道理をすべて愛を通して連結させなければなりません。アダム・エバの代表的家庭です。一番頂上の家庭です。頂上で結婚すれば地上に着陸するのです。天上で愛を中心として着陸すれば、中心家庭になるのです。それは聖子の家庭であり、聖人の家庭であり、忠臣の家庭であり、孝子の家庭だというのです。永遠にそれが種になります。実は同じです。千代、万代この原則に立脚した人になることによって、間違いなく天の国の民になるのです。

③私たちの家庭は真の愛を中心として、四大心情圏と三大王権と皇族圏を完成することをお誓い致します。

三番目は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、四大心情圏と三大王権と皇族圏を完成することをお誓い致します」です。皆さんは四大心情圏と三大王権をみな知っています。それは堕落する前のアダム・エバが、四大心情圏と三大王権を成して、皇族になることでした。それでこれは、復帰された皇族をつく

って入ることを言うのです。私たち祝福家庭がこれを成さなければなりません。

女性が男性の愛を受け、男性が女性の愛を受けるためには、この立場に立たずしては愛することができないようになっているのです。夫婦関係で愛するのは、四大心情圏と三大王権の立場でするようになっているのです。愛がなければ、四大心情圏と三大王権があり得ないのです。ですから男性が女性に絶対に必要だし、女性が男性に絶対に必要なのです。祝福家庭はこれを標準として、毎日のように努力しなければなりません。実際問題です。みな目の前にいるのです。

三番目は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、四大心情圏と三大王権と皇族圏を完成する」です。これはアダム・エバが初愛を中心として成すべきことをみな成せなかったので、これから本然においてこれを成すのです。聖子とかなどはみな復帰的内容があるので、それを育ててこのように越えていかなければなりません。「四大心情圏と三大王権と皇族圏を完成する」、これです。

皇族圏というものは、これから来られる再臨主の直系の子女たちは、蕩減条件がないのです。蕩減条件に引っ掛かりません。これは何かと言えば、直系ではなく、地上でカイン圏の女性とカイン圏の息子に残してあげるのです。お母様を中心として見てもそのようになっているのです。聖進のお母様と聖進を中心としてそのようなことが起こるのです。それは何かと言えば、カイン圏をみな皇族圏として認定することです。弟として、復帰された弟の立場に立てて、皇族扱いすることによって、サタンが讒訴する道がなくなるのです。

サタンがなぜ認めるかと言えば、自分の息子だと言うことのできる条件ができないからです。皇族圏というものを認めなければ、堕落したサタン圏内に皇族を離れた群れがいるということになるので、サタンが残るというのです。しかし皇族圏を認定するので、サタンがなくならなければならないのです。これは重要な言葉です。

四大心情圏と三大王権を完成しなければなりません。おじいさんは神様の代身です。お父さんは二世の中心になっているので、この世界家庭の王になるのです。お母さん、お父さんを王と后のように侍らなければなりません。おじいさんは神様のように侍らなければなりません。それで二つの愛を迎えることによって、神様の代わりにお母さんとお父さんの二つの愛を受けることができることによって、孫の時代に入って、地上天国と天上天国の拡大世界に越えていくのです。

それをすることによって初めて、神様の本然的理想型、堕落していないアダムの本然的理想型である四大心情圏と三大王権を完成するようになるのです。「真の愛を中心として、四大心情圏と三大王権と皇族圏を完成することをお誓い致します」。そのようになった家庭がそうすることのできる立場に出ていくのです。神様と真の御父母様に侍って、天下の代表、イエス様のような世界完成した立場に立って神様に対するようになるとき、サタンと永遠に関係がなくなるのです。今まで世界の人が怨讐になり、長子の立場で天の側であるアベルを殺してきましたが、殺してしまうことができないというのです。

知ってみるとお兄さんだったというのです。お兄さんの立場から弟の立場から入れ替わっただけであって、兄弟です。ですからこのような群れを、世界の人々を、皇族として扱うのです。統一教会がアベル的皇族なら、サタン世界はカイン的皇族です。この統一教会の教会員たちはカイン的皇族を一つにしなければ、天国に入れないということです。父母様と一つになって、これをしなければなりません。ここには反対がなく、順理的にみな従っていくようになっています。

④私たちの家庭は真の愛を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形成し、自由と平和と統一と幸福の世界を完成することをお誓い致します。

四番目は、「私たちの家庭は真の家庭を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形成し、自由と平和と（統一と：はあとから加えられたので、この時のみ言にはない）幸福の世界を完成する」です。「私たちの家庭は真の愛を中心として」これは同じです。「神様の創造理想である天宙大家族を」どんなに大きな家族でも一つの家庭です。霊界に行けば、一家庭だというのです。「形成し、自由と平和と（統一と）幸福の世界を完成する」です。そこに形成することによって、天宙的な自由、天宙的な平和、（天宙的な統一、）天宙的な幸福が宿る世界を完成するという意味です。

「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形成し」、神様の理想は世界がみな一つの家庭です。一家です。四大心情圏と三大王権を完成した人々が呼ぶ場なので、神様を中心とした一つの家庭であって、二つの家庭になることができないというのです。創造理想である天宙大家族を形成し、私たちは世界が一つの家族です。

「天宙大家族を形成し、自由と平和と（統一と）幸福の世界を完成することをお誓い致します」、自由というのは、個人の自由ではなく、全世界の大家庭にいる人々の自由であり、大家庭の平和であり、大家庭の幸福です。全人類がみな幸福だということです。

その次に四番目は何ですか。神様の真の愛を中心として何ですか。「創造理想である天宙大家族理想を形成し、自由と平和と（統一と）幸福……」このような基盤があって、神様が願う創造理想は大家族です。カイン・アベルの世界が大家族です。本然の理想を、初めて四大心情圏と三大王権をすべて成したその場に大家族理想を完成するのです。そのような立場に立つことによって、自由と平和と（統一と）幸福の世界を完成することをお誓い致します。これがこのように順理的になっています。

⑤私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します。

五番目は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化する」です。前進的発展は、毎日のように発展することです。ストップしないのです。スト

ップすればすべて地獄と連結されるのです。前進的発展をしなければなりません。前進的発展を促進化するというのです。

私たちの信仰生活は毎日、天と霊界に関心があります。今まで統一教会の教会員たちが霊界を中心として毎日の生活をしなければならないのに、そのようにできないのが問題です。考えてみてください。この世に関して先に考え、霊界に対する考えは後回しです。その反対にならなければなりません。私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かって、一つにならなければなりません。ストップするのではなく、前進的発展をしなければなりません。

生きているものは発展するし、死んでいるものはストップするのです。また促進化するというのです。止まるものは地獄と連結され、成長は繁栄と連結されるのです。天国に連結されるというのです。私たちに止まるということは必要ありません。皆さん、統一教会に入るときは喜んだのに、今まで十年、二十年たってみるとどうですか。ストップは下がっていくのです。ストップは地獄に連結され、成長は天国に連結されます。ストップはサタンが一番願うことです。

ですから毎日、一つずつプラスしなければなりません。重要な言葉です。これまでこの世ではみなお金を集めようと必死ですが、私たちは一人の生命を救うために必死にならなければならないのです。

私たちの家庭は毎日、主体的天上世界、主体的な大きな天上世界があるということを知らなければなりません。どこがプラスかと言えば、霊界がプラスです。心がプラスであるのと同じです。体は世界を代表し、心は霊界を代表するのです。心はプラスのようなもので、体はマイナスのようなものです。ですから主体的心の世界が分からない生活をしたならば地獄に行くようになるのです。

体が心を打つのと同じように、心を否定してきましたが、これを反対にしなければなりません。それで「毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一」、主体世界と対象世界が統一されなければならないのです。「統一に向かって前進的発展」、前進していく発展です。「前進的発展を促進化することをお誓い致します」、促進化、早く、早く、早くするようにするのです。

停止してはいけません。停止すれば、もう落ちるのです。地獄と通じ、死亡と通じるのです。停止は下がっていって地獄と通じ、死亡と通じるのです。停止は下がっていって地獄と通じ、促進は発展と通じるのです。促進、急ぐのです。寝てばかりいて、怠けて食べ、楽しみ、そんなものは歴史にないというのです。忙しいというのです。人生は短いのです。宇宙が大きいですが、焦点は一点と同じように、焦点が一周回れば、これも一周回らなければならないというのです。同じように回らなければなりません。ですから焦点を合わせなければならないというのです。

それで「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かって前進的発展を促進化することをお誓い致します」です。休まずに走れというのです。先生のようにです。寝もせずに走れ走れ、というのです。そうして私が考えたその世界と関係を結ぶのであって、考えもしない世界に関係をどうやって結びますか。そうしてこそ統一されるというのです。一緒

に考えてあげなければなりません。相対的に考えてあげなければならないのです。

家庭盟誓の五番は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」。これは世界がみな同じ家庭だということです。天地にすべて主体的天の国の相対的立場で一つにならなければなりません。一つになるだけでなく、地上に地上地獄分野、サタン圏が残っているので、早く促進化させなければなりません。一日が忙しいのです。

⑥私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を

動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します。

六番目は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成する」です。自分だけいい暮らしをしようとしてはいけないというのです。「私たちの家庭は真の愛を中心として神様と真の御父母様の代身家庭として」、ですから天運が神様と真の御父母様と共にあるのです。天道を動かす、天運を動かす家庭となって、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成するというのです。その言葉は、どこに行っても私たち祝福家庭たちは全体に福を分けてあげることのできる中心家庭になるということです。

六番目は、「私たちは真の愛を中心として……」真の愛を知っているでしょう。いつも考えなければなりません。「神様と真の御父母様の代身家庭として……」神様の家庭と真の父母の代身家庭です、皆さんが天運を動かす家庭となって、神様と真の父母の代身家庭は天運を動かす家庭です。
「天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」。天のみが祝福を受けて、いい暮らしをしようというのではありません。結局は王族となって、全体の人々を国民につくらなければならないということです。真の愛を中心として、神様と真の父母の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、神様と真の父母の代身家庭は天運を動かすというのです。

「天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」。天のすべての祝福を万民の前に平等に分けてあげる家庭的福の基になろうというのです。神様と真の父母の家庭は、一つの家庭です。一つの家庭ですが、祝福家庭たちが多いので、全世界に広がって、神様の家庭と真の父母の家庭の代身として福を受ける基となって、分けてあげる家庭にならなければならないということです。

天運を動かすのが六番でしょう。「真の愛を中心として真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭」になるのです。真の御父母様が受難を受けたすべてのことが、自分がいい暮らしをするためのものではありません。全人類を自分が解放し、天運を分かち、天運を移してあげるためのものです。真の父母についてくる天運を、ただそのまま渡してあげなければなりません。福の基になれということです。分かりますか。

どんなに促進化され、一つになっていても、その人が地上に来て、自分なりの福だけを受けて行ってはならないのです。地上に功績を立てて、すべての人が満足して、大きな天運の恵沢を受けられるものを渡してあげてから、行かなければなりません。

先生が今まで幸福と自由の環境で、天下を動かすことができ、福を受けることのできるこのような環境で、父母のみ旨を立てるために、反対の道をすべて経て、万民にまで天運をつないであげるためにやってきたので、真の父母の家庭の代表者として、皆さんも天運を分配してあげる家庭になってこそ、真の父母のあとに従って、天の国で呼吸を共にし、面と向かって暮らすことのできる面目が立ち得るということを言うのです。

その次は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」。福の基になれというのです。そうしてこそ天と地の一つとなったすべてのものを備えて、その場を中心として、神様が下さった福の基になるのです。分かりますか。福のセンタ・になれというのです。

⑦私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結された為に生きる生活を通して、心情文化世界を完成することをお誓い致します。

七番目は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結された為に生きる生活を通して、心情文化世界を完成する」です。「私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結された」本然の血統です。血統が重要です。血統が変わってはならないし、汚してはいけないのです。心情文化世界の形成を完成するというのです。心情文化というものは、すべての生活において、真の愛によって為に生きる思想が入っていなければならないのです。心情文化世界と言うときは、全体を代表した一つの囲いを言うのです。心情圏の氏族（宗族）を言うのです。

心情文化世界が何か分かりますか。神様の心の世界も、天上世界も、地上世界も、真の父母の心の世界も、一つだというのです。それで「心情文化世界の形成を完成することをお誓い致します」、これが私たちの理想です。文化が二つではありません。堕落した世界は文化が複雑多端なのです。それを通してこそ個人天国、家庭天国、氏族天国、国家天国、天上天国、永遠の世界の天国へと連結されるのです。その心情でなくては、個人、家庭、氏族を連結することができません。心情文化世界でなければ、個人から天宙まで連結することができないのです。

私たちの世界は心情文化世界です。神様のただ一つの愛を中心とした統一家族、一家族です。高いもの低いものがなく、五色人種が一つの家族生活をしなければなりません。将来、そのような時が来ます。全世界が動員して平均的な生活を定めよう。世界の公義がそのようになったらどのように定めるのか。どの国を中心として定めるのか。このように言うときは、北韓があのように貧しければ、貧しい北韓を中心として基準にするのです。アフリカではありません。アダム国家ならアダム国家、日本の国ではありません。アダム国

家を中心として一番貧しい人を基準にするのです。

心情文化世界は本然的神様の文化世界であり、堕落していない完成したアダム文化世界です。文化が二つではありません。一つしかありません。言語も一つであり、風習も一つであり、伝統も一つしかない、このような統一の世界になることでしょう。そこにおいてのみ神様が個人にも共に住み、家庭にも共に住むということを知らなければなりません。

その次には、「私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結された心情文化世界を完成することをお誓い致します」。心情世界です。真の愛が表面化された世界です。どの町に行っても、道の要所で夫婦がお客さんを迎えるために待ちわびる世界にならなければなりません。

ごちそうを作ったなら、それを世界の兄弟の前に分けてあげるために、道に出て待ち、迎えて入るのです。自分の兄弟のように自分の家に世界の家庭を迎えて、多くのものを食べさせ、たくさん奉仕する時代に入っていくのです。こうして心情を表面化させて、世界化させる時代になることによって、統一の心情文化世界、単一文化世界、統一文化世界が来るのです。戦争がなく、紛争のない一つの世界、地上天国と天上天国世界になるのです。心情文化世界になれば、終了だというのです。

⑧私たちの家庭は真の愛を中心として、成約時代を迎え、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神人愛一体理想を成し、地上天国と天上天国の解放圏を完成することをお誓い致します。

八節は何ですか。「私たちの家庭は真の愛を中心として、成約時代を迎え、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神人愛一体理想を成し、地上天国と天上天国の解放圏を完成することをお誓い致します」。それが何かと言えば、エデンの園の神様が創造するその当時の内容です。

成約時代を中心として絶対信仰、絶対愛、絶対何ですか。絶対服従によって地上天国と天上天国が神人愛一体圏となって、神様のような息子、娘のすべての権限も自由奔放の世界どこでも通じることのできる、活動することのできる能力者になってこそ、初めて神様を解放させることができるのです。地上天国と天上天国の解放圏です。

神様が創造するとき、神様自体が絶対信仰、絶対愛、絶対服従する位置にいたので、その相対的家庭を成すことができずに、みなすべて地獄に落ちたのです。真の父母の勝利圏によって一つになったすべての基盤において、絶対信仰、絶対愛、絶対服従することによってアダム家庭で失ったものを世界的に越えていくこの時であるがゆえに、統一教会は真の父母を中心として、絶対信仰、絶対愛、絶対服従をしなければなりません。真の父母は神様の前に絶対信仰、絶対愛、絶対服従の伝統を受け継いできたので、それを伝授されなければなりません。分かるでしょう。天の祝福が共にあることでしょう。

宿命的課題と運命的課題であるすべての父子の関係の因縁が一つにならなければなりませんが、何を中心として一つになるのでしょ

うか。骨髄から、赤ちゃんの種から、真の愛を中心として一つにならなければなりません。それで生まれて今、心と体が大きくなって、世の中をすべて抱いて、父も抱いて母と一つになるのです。
父母様が言うそこには、絶対信仰、絶対愛、絶対服従、おじいさんが言う時は、孫も絶対信仰、絶対愛、絶対服従。お父さんも絶対信仰、絶対愛、絶対服従、同じです。永遠に伝統的に相続されていくというのです。宿命的提案解怨！　こうしてこそ第八盟誓においての成約時代を迎えて、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神人愛一体、神様と人間が一体、愛によって一体になるのです。一体を成して、その次には、そこから地上天上天国の解放圏です。

第三章　国家、世界観

一　人類が追求してきた一つの国家、世界

一) アダム主義、アダム国家、アダムの世界

本来、人間始祖アダムとエバが堕落しなかったならば、どのようになっていたでしょうか。アダム家庭でのアダムは、族長になるのです。族長になると同時に民族長になるのです。また国家の代表者となり、アダム王となるのです。それゆえ、この世界はアダム主義で一つに統一されるのです。つまらなくみっともない主義たちは、ほうり出さなければならないのです。くだらない主義が現れて世界を攪乱させているので、私たちはこのような主義を根こそぎ全部引っこ抜いてしまわなければならないのです。

主義もアダム主義、言語もアダム言語、文化もアダム文化、伝統もアダムの伝統、生活方式もアダムの生活方式、制度もアダムの制度、すべてのものがアダム国家の理念制度にならなければならなかったのです。このような主義は「神主義」です。神様の心によって神様と一つにならなければならないので「神主義」と言うのです。

家庭を中心として見るとき、堕落していないアダムとエバの家庭が、アダムとエバ二人だけの家庭でしょうか、宇宙を代表した家庭でしょうか。その次に、神様においてその国は、誰の国でしょうか。神様の国ですか。アダム、エバの国ですか。神様との共同目的をもった、神様を中心としたアダムとエバの国です。そして、その国が拡大されたのが世界ですが、その世界もやはり神様を中心とした世界です。それを知らなければなりません。

私たちはどこに行くのでしょうか。天国ですが、家庭的天国から、氏族的天国、世界的天国、宇宙的天国に行くというのです。そこまで行かなければならないのです。地上での世界を自分の国と思い、万民を自分の兄弟と思い、世界を中心としてこのように伝統を受け継いだ人は、間違いなく天国に一番近いところに行くのです。これは理論的です。

皆さんが天国に行くとき、「うちのお父さん、お母さん、息子、娘を連れていく」と、こんな考えをしないでください。「国を連れていく」と言わなければなりません。国を捨てて自分の家庭を中心として、「ああ！　私の息子、娘よ……」ではないのです。国を連れて入らなければなりません。国の中に民族がすべて入っていて、自分の息子、娘もすべて入っているのです。先生で言えば、先生の考えでは「世界を連れて天国に行かなければ

ならない」と、このように今まで御飯を食べ、行動し、生きてきたのです。このように生きてきたので、この天上世界の中心位置に行くのです。正にこれが神様の考えです。真の父母の考えであり、真の子女の考えではないでしょうか。

神様が創造した世界には国境があり得ません。黒人、白人の人種問題が問題になりません。善悪の闘争もそこには必要ないはずです。このような観点から見たとき、私たちが住んでいる世界には各国ごとに国境があります。黒人、白人の人種問題だけではなく、家庭においても夫と妻、父母と子女間にすべて分裂が起こっています。善なる人と悪なる人が闘っているのです。このような現情勢を見たとき、再臨主は国境がない国をつくり、人種問題を超越して世界を一つにつくらなければなりません。分裂した家庭を全部統一しなければならず、善悪が闘っているこの世界に平和の王国をつくらなければなりません。

神様が確実にいることさえ分かれば、神様のみ旨についていかざるを得ません。神様のみ旨とは何でしょうか。この世界人類を御自身が愛される民につくり、この地球星を御自身が愛される国土につくり、この国土と民を合わせて一つの主権国家をつくろうというのが理想世界です。

皆さんにはそのような国がありますか。ないので、その国を求めて成さなければならないのではありませんか。その国はどんな国でしょうか。理想の国、統一の国なのです。万民が行くことのできる国なのです。この国を成すのには例外があり得ません。ここには家庭も協助し、氏族も民族も世界もみな協助することでしょう。そうして個人を統一することができ、家庭、氏族、民族、国家、世界を統一することができるのです。

人は誰でも自分の国で生きるべきです。それは人間に賦与された絶対的な条件です。一人も漏れなくその国とその義のために希望に満ちた義の生活をしなければなりません。思いによって理想郷を描き、生活によって義の法度を立てながら、その国とその義のために生きよというのです。

普通、世界主義と言えば、民族と国家を無視して全世界を一つの国家、全人類を同胞と見るという意味で終わりますが、統一教会で叫ぶ世界主義は、家庭からその壁を超越するのです。父母であられるお一人の神様と、血肉の本当の兄弟と変わりない同じ兄弟たちである全人類が、一つの世界を成すという世界主義です。これは、どれほど素晴らしい世界主義でしょうか。

天国とはどのようなものでしょうか。地上天国とはどのようなものでしょうか。私たち統一教会の食口のような人が、全世界に住むのです。それが地上天国です。この地上のすべての人たちが統一教会の食口のように住めば、それが地上天国です。その世界とは、神様と共にある世界です。誰かが「神様はいない」と言うこともなく、神様に対して疑いません。神様を私たちの父として、すべてが一つになった世界です。その次にサタンの誘惑……。サタンがいないのです。神様が主管する世界、それが地上天国です。神様が私たちと暮らすのです。

これからこの世界問題を解決して、人類の道徳問題をすべて解消させるためには、堕落論がなくてはならないのです。堕落論なくしては人間の問題が是正されないのです。これは、サタンが天を裏切って歴史を引っ張ってきた最後の絶望的終末現象だというのです。これは人類を破綻、滅亡させるための戦略です。これを解消しなければ歴史が解かれないのです。歴史が解かれなければ歴史を清算することができないのです。これに対する代案を中心として、神様の創造と理想の代案を中心として、私たちは神主義に帰ろう、真の愛主義に帰ろうというのです。それは自分自身のためではなく、為他的なのです。愛の相対を創造しなければならないというのです。そのような内容でなければ収拾する道がありません。

結婚をなぜするのでしょうか。神様の愛を中心として、神様に侍り、男性、女性を統一するためです。天下の起源、平和の起源はここから始まるのです。真の愛の本質は父と母のために生き、母が父のために生き、兄が弟のために生き、このように「ため」に生きることです。「ため」に生きる愛によって、もつれてしまったそこに永遠な神様の愛が臨在することにより、その家庭は永遠無窮の永生的家庭になるのです。これを統一思想と言います。

二) その国は私たちすべての願い

私たちは、神様の国を慕い仰ぎます。そこは、愛があるところだからです。一時的な愛ではなく、時間を超越した永遠なる愛が存続することができるところです。また、自分自らを高めることができるところであり、自分の価値を一〇〇パーセント認定してくれるところだというのです。すなわち、永遠に幸福なところです。ですから人間は、天国を慕いあこがれるのです。

もし地上の国家を復帰することを自分の生涯に果たせなかった場合、皆さんは霊界に行っても天国に属した人としての価値をもつことができません。地上で神様の主管圏内で統治された実績をもって、霊界に行かなければなりません。それは本来の創造基準なのです。

私は今、世の中にうらやましいものがありません。この世的に見てもうらやましいものがありません。この世的なものには考えがいきません。何、お金の端切れ、土地の端切れ、家の端切れ、そんなものには関心がないのです。「部屋一部屋でも何でも、死ぬとしても私の国で死ななければならない。神様が保護することができるその国で死ななければならないのではないか。私がそのように生きていくことができなければ、その生涯は悲惨な生涯ではないのか。だから死ぬ前に一日でもその国を求めていかなければならない」と、これが先生の一生の願いです。その日のためには、数千日の犠牲を投入しようという心で前進しているのです。皆さんは休んでも、私は前進しているのです。皆さんができなければ、外国人を動かしてでもやらなければならないし、大韓民国ができなければ、外国を通して包囲作戦をしても行かなければなりません。

私たちの信仰の目標は、神様の国の民になることです。その国の民になれなければ、その子女として自由自在に万民、あるいは万物

世界に誇り、愛される道は現れません。国がない者は常に攻撃されるのです。かわいそうな立場に立つようになります。あきれるほどやられる場合がいくらでもあるのです。ですから神様が願う国がどこにあるのか、神様が足場とする国がどこにあるのか、これが問題です。

私たちがこの国、この民族のために血と汗を流すのは結局、永遠なる天の国を成すため、千秋万代の後孫たちがとこしえに褒めたたえることができる福地を成すためです。

その国は、神様を中心として直系の子女が天命を奉じ、神様に代わる命令をもってその王権によって治め、そのような国であることは間違いありません。そこには、民主主義や共産主義があり得ないというのです。一度形成されれば、永遠な国家体制として残るというのです。そのようなことを考えるとき、私自身がそのような国の民になれなかったという事実が怨痛なことではないかというのです。私自身がそのような国で暮らせないことを嘆かなければなりません。そのような一つの私を備えることができないことを嘆かなければなりません。そのような一つの不変の主権をもつことができなかったことを、私たちは嘆かなければなりません。

主権と国と国土を建てるために、人類は主権国家を建ててきました。その中で数多くの人が死に、数多くの民が犠牲になり、数多くの国が滅び、数多くの主権が交代してきた事実を知らなければなりません。そのように犠牲になった数多くの人、天の側にいる人たち、あるいはそのようなみ旨のために犠牲になったすべての哀魂は、ある一時にそのような国、そのような世界を成してくれることを願うのではないでしょうか。

神様が愛する息子、娘を地上に送り、絶対的な天の国家を建てるためのことを進めてきましたが、現時点で一つの国家を復帰し得る基盤をつくることができませんでした。何度も失敗したのでこの地上に天の人を送り、それを経営させて推進させ、成就させるために努力してきたのが、今までの天の役事だったのです。

主権のない国の国民はかわいそうなのです。それでイエスが案じて「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ六・三一～三三）と言われました。先に息子を求めよと言われましたか、国を求めよと言われましたか。神様が望んでいる国を求めよと言われたのです。

イエス様も楽園に行って待っているのです。天の玉座の前に行けなかったということを知らなければなりません。イエス様は神様の前に国の主権を建てて国を治め、地上から天国まで直通し得る権限をもった国をつくれなかったので、神様の前に立つことができないのです。ですから楽園は、天国へ行く待合室です。また、天国へは一人では行けないのです。天国へは本来堕落していないアダムとエバ、

家庭単位で行かなければならないのです。息子、娘と共に行かなければなりません。そうでなければ行けないのです。

今まで宗教人たちは、生き残ることのできないようなことをしたのでしょうか。宗教に協助してくれる家庭もなく、社会もなく、国もなかったからです。国がない民なのです。国があったならば、氏族が反対する立場に立ったとしてもその国圏内に生き残る道があったのですが、今まで宗教を信じた人たちはどこに行っても迫害され、どこに行っても血を流す祭物の道を歩んできたのは何のためでしょうか。国がなかったからです。主権者がいて国があったならば、「やあ、お前たち、これが正しいのだ」と言えば、「はい」と言うのに、国がないので……。国がない民なのです。

今日、この地上に霊的救いを完成した世界圏、キリスト教文化圏の世界が民主主義世界です。ところが神様が選定したイスラエル民族が選民思想を受け継いできたのと同じように、その選民を定め、間違いなくお前の国にメシヤを送ってあげようとイスラエル民族に対してきたのに、その約束と共にあるべきキリスト教国家が世界にはないのです。皆さん、これを知らなければなりません。ですから地を失い、国もなく空中に名前だけもったその国を追求して、東から追われれば西に逃れ、北から追われれば南に逃れ、彷徨しながら、死の道を避けながら世界的な発展をしてきたのがキリスト教文化圏の世界です。

統一教会員たちも国がないのです。今の民主主義の世界も、神様が六千年間苦労してつくってこられたのです。もし皆さんが昔のイエス時代のイスラエルに生まれていたならば、皆さんの首は既に落ちて久しいはずです。先生のような人は既に、この世の中には痕跡もなくなっていたことでしょう。国家的に不義のサタンの代役者がいるかと思えば、現在の世界的な不義の代弁者である共産主義が宗教を抹殺するための最後の背水の陣を敷いているというこの厳然たる事実を、私たちははっきり知らなければなりません。私たち統一教会員たち、国がありますか。ですから賤しい者ではないですか。行く所がない賤民扱いを受けたのではないですか。その誰よりも悔しいことを忘れてはならないのです。

国がなければ、いくら良い幸福な家庭であっても、馬賊が出てきて首を切られることがあり得るのです。ですから国を求めなければなりません。これを宗教人たちは知らないでいるのです。宗教人たちは全く知りません。善なる国を求めなければなりません。これが宗教の目的です。

その国を探すことができる代表的な一人の個人はどこにいるのでしょうか。この地上にはいません。それで宗教を通してそのような代表的な一人の方に仕えようとする思想が、再臨思想です。この再臨思想を中心として新しい個人が現れるのです。新しい家庭、新しい氏族、新しい民族、新しい国家、新しい世界の形成が起こるのです。それで再臨思想は、他の思想とは根本的に次元が違うのです。

それでその代表的な人は、死亡の世界から腐った死体を取り除き、そこに根を下ろし、それを肥やしにして大きくならなければなりません。ここで良いというものを肥やしにす

ることのできる力をもった、新しい主体的な人格を備えてこられる人です。サタン世界で良いというものを自分の生命体として復活の権限を誓うことのできる息子ならば息子、民ならば民が備えなければならない人格を見るとき、この死亡の世界、腐った死体のようになったものを肥やしにして大きくなることのできる主体力をもった人格者でなければなりません。言い換えれば、死亡の世界に支配される人ではありません。

人類を救うために来られる方が再臨主です。天は基準さえ立てられれば打ちます。攻勢を取ります。だからと言ってスターリンのように首を切って殺すのではなく、一度に降伏させるのです。一番目は理念、二番目は民、三番目は主権、四番目は領土でサタンを降伏させなければならないのです。人は誰でも、お金と権勢と友達と理想が共にあることを願いますが、その四つは正にこれを代表したものなのです。

二　理想社会、国家、世界の構造

一) 人類大家族社会

私たちが住みたいところは天の国、天国で暮らしたいというのが合っています。天の国に境界線がありますか。ありません。天の国で使う言葉は二つですか。違います。人種の差がありますか。ありません。それでは天の国とは何なのでしょうか。人はみな神様の懐から生まれたので、人類はみな兄弟です。神様を中心として見れば神様の息子、娘なので、すべてが兄弟であり、地上天国を中心として見れば民となります。地上天国の国民だというのです。民だというのです。

完成した人はどのようでなければならないのかというと、天と共に世界的な一つの国民にならなければなりません。皆さんはどの国の人でしょうか。皆さんにはアメリカ人、ドイツ人、韓国人といろいろいますが、私の国はどこにあるのでしょうか。この地球です。この地球が私の国です。私の故郷とはどこでしょうか。この地球が私の故郷です。私は国境のようなものは知りません。黒人、白人のようなものも知りません。すべて神様の子供です。

原理は、永遠の歴史を通じても変わらない真理です。これは、どんな偉人の権勢や国家権力でも変えることができず、世界も神様も変えることができないものです。過去、現在、未来にわたって変わらない真理だとすれば、これは人間が本来願う理想的な価値をもっているものに違いありません。この原理によって復活した人たちが国家を超越し、世界を超越して一つになれば、すべてが兄弟なのです。そこには白人もなく黒人もなく黄色人もありません。考えてみてください。黒人だと言っても、皮膚の色が違うだけで、すべてが同じです。骨も同じ、肉も同じ、血も同じ、心も同じです。皮膚の色だけが少し違うのです。これは気候と環境によって異なったことなので、仕方がないことです。

松の木を見てください。極寒地帯から温帯圏に行くにつれ、種類が少しずつ異なります。松の木が立っている地域環境によってだんだん異なり、またそれが出発した基準と歴史を通して種類が異なるのです。また、熊を見てください。北極の熊は白熊です。白色でなけ

れば駄目なのです。それは環境のためなのです。保護色が白色だからです。白色人種は何かと言えば、北極の白熊と同じようなものであり、黒色人種は、暑い温帯地方の黒熊と同じようなものなのです。ただその違いだけです。ところで黒熊と白熊がお互いに「お前は白熊だから」、「お前は黒熊だから」と言いながら共にいることができないと言うことができるでしょうか。

すべてが一つにならなければなりません。統一教会は結婚式を国際的に行います。西洋人と東洋人が結婚をします。白人と黒人が結婚をすることもあります。人種を超越し愛し合う姿、それは歴史にもない美しさです。そのようにならないところに問題があるのであって、それは一番美しいのです。このような主張を訴える世界的な思想がなければ、人類は滅亡してしまいます。神様を中心として見れば人間はみな兄弟です。神様の前ではすべてが一つになれないわけがありません。アメリカの建国精神は「神様のもとの一つの国家（one nation under God）」です。これは素晴らしい精神です。また、現在そのようになりつつあるのです。

万民はその生きていく環境が違うだけで、人間という点で白人も黒人も同じです。もしある人が黒人の女性と結婚して暮らしながら黒人の子供を生んで、そうして再び白人女性と結婚して白人の子供を生んだとすれば、その人は白人の父にもなり、黒人の父ともなるのです。すなわち、彼らの父は一人の父だというのです。どんなことがあっても世界人類が一人の父によって生まれた兄弟だという心情がわき出すようにしなければ、世界人の統一は不可能であり、万代の糾合は不可能です。

全世界の人種が一つになる一番の近道は、国際結婚しかありません。二つの全く異なる文化圏と環境から選ばれた男女が、神様の愛によって仲良く一つにならなければなりません。これが完全な調和と統一なのです。このように理想を実現するのが私たちです。偉大なことを成就させるために私たちは、巨大な愛の力を求めなければなりません。ただ、最高の愛の力によってのみ、そのような力を発揮するのです。社会の動きと環境によって翻弄されるような愛ではありません。最高の愛だけが国境を越え、人種の境界を越え、文化の境界を越え、知識の境界を越えるのです。

これからどのように世界を一つに統一するのか、また、心情交流の土台をどのように築くのか、これが問題です。それで先生は、これから独身の男女を国際結婚させようと思います。これは神様が願われることです。韓国の枠の中だけで身をかがめて座っている、そのような人を神様は願われません。神様は、御自身の理念圏内ですべてのことが成されることを願われます。共産主義の女性たちは、労働者と結婚することが最高の希望です。しかし統一教会の娘たちは、それ以上にならなければなりません。

さてこれからは、自分の家庭が異国の民族と一つになることができる血統をどのくらいもっているかということが、霊界に行って誇れる内容になります。ですからこれから皆さんの息子、娘が結婚するときには、国際結婚をたくさんしなければならないのです。これ

から統一教会の独身男女はみな、国際結婚をしなければなりません。男性も女性も生まれたならば、一度はやってみる価値があるのです。

神様は公平です。アメリカは神様の祝福によって物質文明を花咲かせた代表的な国となりました。ですから外的な基準から内的な基準に急に変わることは難しいのです。反面、東洋では物質的面よりは精神的面を重要視します。西洋は外的には祝福されましたが、内的基準においては不足です。反面、東洋は内的には祝福されましたが外的基準においては不足です。神様は、これほど公平な方です。

宗教を中心に精神面を重要視すれば、物質的な条件を退けてしまいます。東洋は精神文化を重要視して、すべての外的基準を拒絶してしまいました。それを西洋人たちが拾い集めました。アメリカをはじめとして西洋の多くの国が外的に素晴らしくなったのは、東洋のすべての物質的条件の援助を受けて西洋文明を発展させたからです。しかし、それが限界に来ています。そして東洋の精神文明も限界に直面しています。東洋はだんだん西洋文明、物質文明を要求するようになりました。西洋はまた、東洋文明、精神文明を要求するようになり、これらが交差する時点に立っています。まさしく授受作用をしているのです。

人間にとって一番難しく大変な道とは、どのような道でしょうか。天国へ行く道です。この道が一番難しいのです。この宇宙の中で人間に一番難しい道とは、どのような道でしょうか。天国へ行く道が一番難しいというのです。イエス様が天国へ行きましたか。楽園に行っています。天国へ行く待合室にいらっしゃるというのです。ですから、これがどれほど難しいのかというのです。それでは、神様は天国で住んでいらっしゃいますか。違うのです。それでは歴史始まって以来、天国で住む人が誰かいますか。神様が住めず、その息子が住めないのに、誰が天国に行って住めるのかというのです。天国へ行って住んだ人はいるのでしょうか。いないのです。ですから一番難しい道なのです。一番難しい道。

二) 共生・共栄・共義の社会

神様が一番好きなものは愛の文化です。神様がお金や権力、知識などを必要としますか。いい家を設計して建てるためには、れんがも必要だし、ドアも必要だし、多くの材料が必要ですが、その中で一番重要なものは、その家を完成させる総合的な完成美を備えることです。人間に対して神様が願われる一番の願いは、お金が多いこと、学者になることではありません。聖書のみ言どおり「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）と言われたので、それが第一の戒めです。第二は「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（同二二・三九）と言われました。驚くべきみ言です。

コリント人への第一の手紙第十三章の愛の章にも、「信仰と希望と愛」この三つが常にあるが、その中で一番は愛だと言いませんでしたか。人間はそれを知らなかったのです。愛……。あなたの心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くせというのはどういうことですか。生命を懸けて愛せよということです。皆さん、

誰かをそのように完全に愛してみましたか。妻たる者が夫を完全に愛し、弟子なる者が師を完全に愛し、民たる者が国を完全に愛してみたのかというのです。誰も完全に愛せなかったので、モデルをつくらなければなりません。工場で鋳型を作って物を大量生産するように、その鋳型と同じような真の人間のモデルをつくらなければなりません。そうすることによって、そのモデルに倣って真の人間が世界に広く広がっていくのです。

時が来れば、一人で主張する時代はすべて過ぎ去ってしまいます。「私が一番だ」と言えない時代です。その時からは共同時代です。すなわち共生共栄共義主義世界だというのです。だから統一教会で共生だ、共栄だ、共義だということを主張するのです。その世界は、一人で成すのではありません。

共生共栄共義主義の世界は、人類が願ってきた理想天国の世界です。その世界は、絶対に一人では成すことができない世界です。ですからその世界は、一人だけでいる世界ではありません。「私」と言えば必ず相対がいるのであり、また家庭があるのです。これは観念だけで終わるのではなく、実際の生活において作用しなければなりません。それが生活舞台において実際に表現することができる世界が、すなわち天国の世界です。

その世界はどのような世界でしょうか。互いに嫉視反目しながら、人がうまくいけばおなかが痛み、人が喜べば死にそうだという、そのような世界ではありません。一人の人が良くなるのは、全体を代表して良くなるのであり、一人の人がうれしいのは全体を代表してうれしいことなので、一人がうれしがれば全体がうれしがるのであり、一人が喜べば全体が一緒に喜ぶところがその世界なのです。

皆さん、左目と右目の歩調が合っていますか、合っていませんか。これは共栄です。すべてが一つの目的のために生きていくのです。全部このようになっているのです。鼻の穴も二つですが、一方の鼻の穴が詰まればいいですか、良くないですか。同じように耳も一方が詰まればいいですか、良くないですか。体が不自由でいいですか、よくないですか。足を切ってしまったり、腕を切ってみてください。気分が悪いはずです。ですから相対的関係を備えたすべての存在物は、自ら天地を証明するのです。すなわち人間が自ら証明しているというのです。このように心は知っています。人心が天心という言葉も、ここに関係しているというのです。

三) 言語も一つ

アメリカの豚も韓国の豚もみな同じように「ブー、ブー」と言い、すずめも「チュン、チュン」と鳴きますが、万物の霊長である人はなぜこのような状態なのですか。豚の子の言葉でもなく、牛の子の言葉でもなく……。数十カ国を回ってみても、行く先々で言葉が違います。御飯をもらって食べるのも大変です。おしでも最上のおしになるのです。このような結果を誰がつくりましたか。それは一言で言うと、堕落したからです。言葉も一つに統一できず、一つの種類の言葉も使えない人間が、どうして万物の霊長でしょうか。どれだけ悔しいことでしょうか。本当にあきれて物が言えないのです。

神様の絶対的な愛を中心に、絶対的な男女が合わさって絶対的な文化を創建しなければなりません。絶対的な文化創建のために、何よりも統一された一つの言語と文字をもたなければならないので、韓国の言葉と文字を学ばなければならないと何度も強調してきたのです。文化創造と発展は、言葉と文字によって伝達されるからです。

これからは言葉が問題です。先生が今、韓国語で話していますから相当……。これから通訳がいなければどうするつもりですか。皆さんが私に習わなければなりませんか、私が皆さんから習わなければなりませんか。先生が話す韓国語を習えば、先生を通してもっと深い内容を学ぶことができ、もっと価値あるものをもつことができるからです。これが何よりも貴いので、そのようにしなければならないという結論が出るのです。

真の父母の息子、娘は、その父母が使う言葉ができなければおしです。おしだというのです。今後そのような方向に世界は流れていくのです。この西欧社会にレバレンド・ムーンが来て今、かなりの波紋を起こしています。これは近世にない新しい宗教界の脅威であり、新しい問題だということを皆さんは知らなければなりません。今、事実そうなのです。これから原語の勉強には韓国語が入るであろうということを知っておくべきです。皆さんがどんなに英語になったものを読みながら「ははあ」と言っていても、韓国語の原本がこうだと言えば、すべて何度も書き換えるのです。ですから、変わらないものが価値があるのです。同じです。これからは原語を勉強しなければなりません。

韓国の言葉と文字は、韓国で作られ、韓国で使われています。真の父母という言葉も、韓国語で初めて名前が付けられたのです。真の父母の愛を中心として、神様の真の父母の愛と、歴史始まって以来最初に接ぎ木されたのです。神様が愛を中心として言葉を話し始めた最初の出発が、真の父母を中心とした愛の基盤の上で、韓国語を通じる以外なかったというのです。それで真の父母という言葉の起源が絶対的なので、韓国語を学ばなければならない理由となるのです。またハングルは、韓国語を表記することができる文字なので学ばなければなりません。神様が愛の言葉を言うことができる最初の場所が韓国だということも知らなければなりません。

先生が真の父母という言葉を韓国語で初めて使い始めたので、真の父母という言葉の起源は韓国語となるのです。真の父母という言葉は、英語や中国語ではなく韓国語です。それで韓国が、統一教会員にとって愛の祖国となるのです。韓国が愛の祖国なので愛の祖国を求めなければならない私たちは、韓国語と文字を学ばなければならないのです。皆さんが韓国人の男性、女性と祝福を受けたがるのも、神様の話した初愛の言葉の起源が韓国語なので、その本郷の近くに行きたいという心の発露から始まったと言えるでしょう。

韓国語には哲学が入っています。天地の理致と調和を備えた背景をもっています。発音法において、アメリカで言語学博士号を取った有名な人もいます。

韓国語は、極めて高次元的な宗教言語です。表現が深く繊細です。それは、どの国もつい

ていけません。ですから韓国人は頭がいいというのです。それは、正確で分析的な言語を通して全部キャッチして理解するので、その頭の構造が相当に次元が高い位置にあるということを知らなければなりません。韓国人が技能オリンピック大会でいつも一等になるではありませんか。多分、七年間そうだったはずです。

統一世界に向かう私たちにおいては、統一語で先生の説教集の朗読を完遂しなければなりません。皆さんがこれを原語で読めなければどうしますか。原語でです。オリジナル言語、英語ではなく、ドイツ語でもないのです。ですからこれから皆さんは、説教に対しては心配する必要がありません。これは先生が一生の間に説教したものです。

皆さんが霊界に行って問答するとき、「私は見ることもできず、読むこともできなかった」と言うのですか。初めから英語に翻訳をさせないでしょう。ここに漢字を入れれば本当にいいのです。これを読まないで逝けば大変なのです。指導者がこれを読まなければ大変なことになるのです。後代に各自の家に先生が入っているでしょうか、み言が入っているでしょうか。考えてみてください、どうですか。先生のみ言が入っているのです。

三　人類の中心思想は真の愛主義

一) アダム主義は父母主義

本来、アダムは私たち人類の始祖であると同時に、家長にもなり、族長にもなり、民族長にもなり、その国の王にもなるというのです。この世界は本来、堕落していなかったならば何主義の世界ですか。アダム主義世界です。アダム主義とは何ですか。神主義です。このようになるはずだったのです。これが堕落することによって、ばらばらに引き裂かれたというのです。こうしてアダムが破壊させたものを再び……。穴がぽこぽこと開いているので、それを直さなければならないのです。堕落したので穴がぽかんと開いているのです。

アダムとエバが堕落しなかったならば、神様が何をしてあげようとしたことでしょうか。神様が祝福によって結婚式を挙げてくださり、神様が喜ばれる息子、娘を生むようになり、神様が喜ばれる家庭を編成して、これを繁殖させ、氏族と民族を編成するようにしようとしていました。これがさらに広がれば、その世界は何主義の世界ですか。神主義の世界であると同時に、アダム主義の世界です。その世界に理念があるとすればこれはアダム主義理念であり、そこに宇宙観があるとすればアダム主義宇宙観であり、天宙観があるとすればアダム主義天宙観であり、生活観があるとすればアダム主義生活観だというのです。そして五色人種が入り混ざって、そのようなものは問題ないというのです。それは環境によって異なったものなので、数多くの民族の皮膚の色が違うのは問題ないというのです。それでは、どうして数多くの民族の言語が異なるようになったのでしょうか。人類始祖が堕落することによって、天は分立させたというのです。

主義もアダム主義、言語もアダム言語、文化もアダム文化、伝統もアダムの伝統、生活方式もアダムの生活方式、制度もアダム制度、すべてのものがアダム国家の理念制度にならなければならなかったのです。このような主

義が、神主義です。神様によって神様と一体とならなければならないので、神主義だと言うのです。

主権より人権の平等を論議しなければなりません。私たちが追求する主義は天宙主義であり、神主義です。私と神様が合わさった主義です。今日、民主主義は神様を離れた主義であり、共産主義は物質と人間だけを中心とした主義です。しかし天宙主義は、人間と神様を合わせた主義です。私たちはこの世界を、神様を中心とした主権の世界につくろうとするのです。

私たちは、心の福地を成すことができる一つの中心を立て、心情の福地を成すことができる一つの中心を立てて、心情と心と体が通じることができる一つの基準を求めなければなりません。そうして体と心が一つになったのちには、世界を抱かなければなりません。ですから今日のこの時代には、世界主義よりも大きい天宙主義の理念が現れなければなりません。そうして人間がこの地で生活する上で、その神主義を中心として体と心が天の心情と通じることができる確固とした基準を立てなければ、私たちは幸せに暮らすことはできないのです。

人間は堕落することによって、その心と体がサタンの偽りの愛を受け継ぎ、自己第一主義による不協和を起こす個人になりました。このような人たちが集まった家庭、社会、国家、世界は立体的に増幅された・藤と紛争を自体矛盾としてもち、相互不信と分裂、闘争をするようになるのです。サタンの願いである自己中心主義によって民主世界は個人第一主義化され、サタンと人類は滅亡に向かっているのです。これを救うために、神様の真の愛を中心とした統一思想と神主義が必要なのです。

神主義は、自分のために尽くせという主義ではありません。「ため」に生きようとする投入主義です。「ため」に生きようとする主義です。悪魔は自分のために尽くせという主義ですが、神様は「ため」に生きようとする主義です。ですから投入して投入して投入するほど、あの永遠の世界の所有権が増えるのです。共産世界では、投入するほど損をするので仕事をしません。しかし私たちの世界では誰が福を多く受けるのかといえば、自分の部落のために寝ることを惜しんで血と汗を流す人です。神様のように投入する人が、福を受けるようになるのです。

神主義とは何主義でしょうか。真の愛主義です。真の愛主義とはどのように生きることでしょうか。投入してまた投入し、忘れるのです。このような国民になるならば、大韓民国がどのようになるでしょうか。考えてみてください。分かりましたか。

父母主義とは何でしょうか。地上でアダムとエバが完成した真の父母主義です。その次に、神主義とは何でしょうか。真の父母は横的な父母なので、縦的な父母が必要だというのです。ですから縦的な父母主義が神主義です。ゆえに頭翼思想という言葉は真の父母主義であり、ゴッディズム（Godism：神主義）とは縦的な神主義です。このようになるのです。横的な真の父母と縦的な神主義の、縦横が一つになって、天の生命、地の生命、

天の愛、地の愛、天の血統、地の血統が連結されて人間が生まれたので、人間は二重存在になっているというのです。内的な人と、外的な人になっています。内的な人は縦的な私であり、体的な人は横的な私だというのです。実となるのです。

二) 父母主義は真の愛主義

神様が一番好まれるのは愛の文化です。神様にお金や権力、知識などが必要ですか。いい家を設計し、建てるためには、れんがも必要だし、ドアも必要だし、多くの材料が必要ですが、その中でも一番重要なものは、その家を完成させる総合的な完成美を備えることです。人間に対して神様が願われる最も大きな願いは、お金が多いこと、学者になることではありません。聖書のみ言のとおり、思いを尽くし、心を尽くし、精神を尽くして主なるあなたの神を愛せよと言われましたが、それが第一の戒めです。第二は、あなたの体を愛するように隣り人を愛せよと言われました。驚くべきみ言です。

私たちが行くべき道は、本当に行きたい道であり、私たちが求めて成すべき国は、永遠に住みたい国です。私たちがもつべき財物は、天宙のものであると同時に、私のものであり、この時代のものであると同時に、過去のものであり、同時に未来のものだと保証することのできるものでなければなりません。私たちが泣くとき、天地が共に泣くことができ、私たちが喜ぶとき、天地が共に喜ぶことのできる権威と知識をもたなければなりません。これが今日、堕落した人間たちが現世で求めるべき最高の欲望であり、希望なのです。

神様の理想国家の実現、すなわち祖国光復は、どこから実現されるでしょうか。怨讐を愛する思想をもった個人から出発するのです。ですから神様がいらっしゃる限り、愛によって国境を壊し、すべての環境と文化的な壁を越えて怨讐までも抱こうという運動を提示したキリスト教が世界的な宗教にならざるを得ないのです。豆を植えれば豆が出るし、小豆を植えれば小豆が出るし、赤い花の種からは赤い花が咲きます。同じように、仕返しをするサタン悪魔の種を蒔けば、仕返しをする悪の木が育ちますが、怨讐を愛する善の種を蒔けば、怨讐を愛する善の木が育つのです。これは自然の理致なのです。

その国は神様を中心として直系の子女たちが天命を奉じ、神様を身代わりした命令をもってその王権を治める、そのような国であるに違いありません。そこには民主主義や共産主義があり得ないというのです。一度形成されれば永遠の国家体制として残るのです。そのようなことを考えるとき、私自身がそのような国の民になれなかったという事実が怨痛なことではないかというのです。私自身がそのような国で住むことができないことを嘆息しなければなりません。そのような一つの不変の主権をもっていないことを私たちは嘆かなければなりません。

レバレンド・ムーンを中心として統一思想によって共産主義と民主主義を消化させることができる神主義とは、どんな主義ですか。力を出す主義ですか。真の愛主義です。その真の愛によってこの世の中を、これからどのように料理するのかというのです。

大韓民国の民主主義は、何のための民主主義ですか。政党のための民主主義ではありません。大韓民国のための民主主義です。それでは大韓民国はどんな主義にならなければならないのでしょうか。大韓民国は世界のために生きる主義に帰らなければなりません。世界は神主義に帰らなければなりません。人間主義は信じられません。百年以内にすべて消えてしまいます。神主義であってこそ永遠無窮なのです。その伝統を受け継いで、真の愛という論理の上にこれが連結されるので、個人も真の愛が必要であり、男性、女性も必要であり、夫婦も必要であり、息子、娘も必要であり、氏族も必要であり、民族も必要であり、国家も必要であり、世界も必要なのです。

神主義とは、いったいどんな主義でしょうか。愛の主義です。愛主義ですが、いったいどんな愛主義なのでしょうか。「ため」に尽くせという主義ではなく、「ため」に生きようとする主義なのです。これを知らなければなりません。

神主義とは何でしょうか。個人主義でもなく、家庭主義でもなく、氏族主義でもなく、民族主義でもなく、国家主義でもありません。天宙主義です、天宙主義。天宙主義の基盤をもったそのような霊界に、個人主義の囲いに入った人が行こうとしてみても、行くことができないのです。家庭を中心として「ああ、世の中がどうであろうが、うちの息子、娘、うちのお母さん、お父さんしかいない」と言うそのようなやからの圏内に入るならば、抜け出す道がないのです。永遠に抜け出すことができないでしょう。その壁を誰が壊さなければならないのでしょうか。その中で自分たちだけで自分の主張を立てて、家庭を中心として争い合うのです。争っているのです。

健康な人は、普通の人が消化できないものを消化します。ですから、誰でも健康な人が好きなのです。人が健康な精神をもった、精神が健康だというとき、何でも消化してしまいます。民主主義も消化し、共産主義も消化し、何でも消化するのです。

それでは統一教会は、どんな主義ですか。ユニフィケーショニズム（Unificationism：統一主義）です。ユニフィケーショニズムは簡単ですか。皆さん、見てください。私たちの四肢を見ても、この体には目があり、耳があり、鼻があり、手足があり、すべてあるのです。ここに一つの生命が連結され、統一されなければならないのです。そして、これが一つになるためには「ああ、私は目が嫌いだ。どこどこが嫌いだ」と言えばできるでしょうか。みんな「いい、いい」と言わなければならないのです。すべて消化しなければならないのです。

神様をあがめ尊ぶ人は血を流さなければなりません。神様を愛そうとする人は涙を流さなければなりません。目から涙が乾いてはならないのです。そして、神様を求めていこうとする人は汗を流さなければならないのです。それで父母の心情をもって僕の体で人類のために、アベルの立場で犠牲と奉仕をし、もてる限りの精誠を尽くして与えよというのです。与えながら誇るのではなく、もっと良いものを与えたい気持ちをもって、恥ずかしさを感じながら与えよというのです。これが神主義です。

公的なものをどのように管理するのでしょうか。個人をどのように管理するのでしょうか。社会をどのように管理するのでしょうか。国家をどのように管理するのでしょうか。さらには世界をどのように管理するのでしょうか。このような公的な管理法を中心として、新しい愛、新しい世界主義を定立させていかなければなりません。その主義は、人間主義ではありません。統一教会の文先生主義でもありません。そんな主義ならば滅んでしまうのです。神主義と一体になれるかなれないかという問題が、生死を決定する原因となるのです。

今まで世界の数多くの民族、あるいは五色人種がつくった文化圏を全部打破して、一つの文化圏にしなければなりません。言い換えれば、神主義的な家庭制度、神主義的な社会制度、神主義的な国家制度、神主義的な内容を備えた理想社会が展開されなければなりません。そのような主義が、堕落していない完成したアダム主義です。共産主義でも民主主義でもないアダム主義です。それは神主義を求めていく過程です。主義というのは、ある目的を求めていく杖のようなものです。主義自体が要求されるのではなく、目的を成就する上で必要な過程なので、この主義というのは変遷するのです。

今日、アメリカを民主主義の宗主国として先進国家と言いますが、将来お金によって腐敗し、民主主義が嫌いになる時が来るのです。大韓民国にも今、このような実状が起こっています。民主主義が良いことは良いのですが、今の私たちの国ではお金のためにもろもろの中傷謀略が起き、政権を奪い取ろうとする闘いが起こっています。それが民主主義ですか。それは特権主義的な状態で起こる現象です。

今日の若者は、「ため」に生きる生活をすれば中心存在となり、責任者となり、保護する主人になるという事実を知りません。自分の生命までも投入して失っても喜ぶ真の愛のみが、男性と女性を、父母と子女を統一させることができるのです。そして、ここに永遠なる神様の愛が臨在することによって、その家庭は永遠無窮な永生的家庭になるのです。これが頭翼思想の核心なのです。永生はここにあるのです。

利己主義を打破する新しい世界主義が出てこなければなりません。私より他人のために生きる利他主義は、ただ神様の理想からのみ出てくることができます。それは神様が愛の本体であられ、愛の本質は自分を犠牲にして他人を生かす利他主義だからです。したがって、神主義の本質は愛です。その思想は、人の四肢を動かすことのできる頭とも言える中心思想です。それで頭翼思想なのです。

必勝目標、必勝する上で、どのように勝つのかが問題です。勝つには、神主義の頭翼思想で勝たなければなりません。これは純然とレバレンド・ムーンだけが……。左右を解決するための頭翼思想、神様と真の父母を中心として、十字架で右側の強盗と左側の強盗が闘ったのが、世界的な実を結ぶ時代に、神様と父母が出てきて父母様の思想と神様の思想を中心としてこの二つの手足が……。闘ってはならないのです。これが、何をもって合わさるのでしょうか。知識でもなく、お金でもなく、権力でもなく、愛によって合わさなけ

ればなりません。愛を中心として動き始めなければなりません。愛によって命令してこそ、すべてが喜んで動くのです。

唯一残るのは、絶対的な愛の理想をもった、万国の兄弟の心情圏を備えた神主義です。これのみが、この世界を統治するでしょう！
アーメン。

四　民主世界と共産世界の未来

一) 民主世界と共産世界を一つに

神主義とは何ですか。先祖主義です。第一先祖主義、その次には頭翼思想です。共産主義と民主主義が闘うのをやめさせる、父母主義のようなものです。父母主義です。頭翼思想とは何かと言えば、それは真の父母主義です。愛を中心とした父母を知るようになるときは、この手も闘っていたのがすべて解かれ、一つになるのです。座る位置、立つ位置、方位を備えて、誰も指導しなくても天理の大道を守って生きることができる人をつくれば、すべて終わるのではありませんか。人が問題です。お金はいくらでもあり、国はいくらでもあります。何が問題ですか。人なのです。

原理がなかったならば共産主義の克服はもちろん、代案提示も不可能だったというのです。それは、何をもってするのですか。神主義をもってするのです。神主義とは何ですか。真の愛主義です。生命を投入しても、また投入しようとし、何度も投入しようとするのです。そうしてみると、宇宙を包括しても余りある、神様の愛があふれる宇宙になるのです。

現在、世界で起こっている最後の難しい問題とは何ですか。東西文化の分立の問題です。東洋と西洋をどのように一つにするかという問題です。それは人間の力ではできないのです。左翼と右翼が一つになるには左翼でもできないし、右翼でもできないのです。ここに頭翼が出てこなければなりません。それで頭翼思想の顕現を語っているのです。

人間が優れているというあの人本主義思想、唯物主義をもってもできません。物本主義思想と人本主義思想では駄目なのです。天意による本然の心情を中心とした、神本主義思想に帰らなければなりません。このような問題を提示して、東西に分立されたこのすべての文化背景を、どのように連結させるのかというのです。アメリカの国民が私に反対しましたが、私に従わざるを得ない段階に入りました。西洋社会も同じです。

人類の真の平和は右翼でもできないし、左翼でもできません。その理由は右翼も左翼もその根本的動機が利己主義を抜け出ていないからです。自分を中心として自国の利益を中心とするとき、そこには永遠になくならない利害の相衝があり、統一もあり得ず、平和もありません。

共産主義や民主主義は左右思想です。左右思想とは何かと言えば、カイン、アベルの兄弟思想ですが、東洋から出てくる新しい思想は、父母の思想だというのです。父母を中心とし、アジアを中心として左右が統一されなければならないというのです。これを頭翼思想と言うのです。それで両者に「これ、間違っているぞ」と言えば「そうです」と言い、「私の言うことを聞け」と言えば「はい」と

言うのです。それですべて終わるのです。簡単なのです。「お前たちが主張することよりも、父母様が主張することがもっといいので、従わなければならない」と言うときは、「はい」と言うのです。

私たちが共産主義の本質が無神論にあることを看破するとき、これを克服するイデオロギーが神様を認め、神様を中心とする理念でなければならないことは言うまでもありません。私たちはこのイデオロギーを「神主義」または「頭翼思想」と呼びます。絶対的な神様中心の世界観こそ、共産主義から人間を解放することのできる最も効果的な武器なのです。それは「神様がいらっしゃる」という真の真理のみが、「神様がいない」という偽りを一掃できるからです。

復帰の道はそんなに簡単ではないのです。今は左右の終末時代です。左右と共に死んでいったイエス様は、父母の恨を残して逝きました。それで父母の思想をもって頭翼思想と神様を中心として、左翼の讒訴圏を離れた立場で統一圏を論議し、反対に回れ右をして無限に進んでいける環境をつくらなければ天国ができません。そのような時です。そのような意味で、先生が神主義と頭翼思想を掲げて兄弟主義をなだめるようなことをするのです。

現在統一教会で言う統一思想とは何ですか。神主義はあとです。統一思想とは何ですか。左翼と右翼が闘うのは、頭がないので闘うのではないですか。ですから頭があれば、頭翼思想、左翼思想、右翼思想、三つの思想が合わさって連合思想が出てくるのではありませんか。その連合思想の主体とは誰ですか。どんなに考えてみても頭の上がすべての神経系統の中枢神経の根なので、そこを通過しなければ出ることができないのです。それでは、その根の中の根とは何ですか。それを知らないでいるのです。根の中の根は、神様です。神様から出てくる頭翼思想です。

左翼、右翼がいつも双子のように一つの懐に抱かれてお互いに足でけったりしないで、乳を分かち合って飲みながら、取り替えてもいいと言える双子にならなければなりません。アダムとエバがそのように神様の懐で愛することができる立場に立たなければ、天国は出てこないのです。ですから私がアメリカに行って怨讐を合わせ、怨讐の国で天の国の伝統基盤を立てて、天国の出帆を宣言したのです。聖書で言う怨讐は、個人ではありません。国です、国。

皆さんには、神様と真の父母以外にはいないというのです。そうでなければ、サタン世界に伝統的基盤を立てることはできないのです。これを立てずしては。サタンはこれ以下のものなので、それ以上上がれないのです。このような時が来るので、金日成も、ソ連も、アメリカも長くないというのです。ただ文総裁の思想だけが世界に頭翼思想として残るのです。頭翼です。右側の右翼を中心として、左側の左翼を中心として、頭が治めることのできる水平線上に置いておいて一回りだけすればいいのです。左側が右になり、右側が左になる日にはすべてが終わるのです。

韓国はもちろん、全世界は今、価値観の没落によって大混乱に置かれるようになりました。本人は、このような世界に向かって今ま

で世界的な碩学たちを対象に、愛を中心とした絶対価値を主張し、頭翼思想を宣布して、左翼・右翼の間違いを正し、新しい世界へと進んでいくことができるように指導してきました。そうして我が祖国、韓国の地から世界的な指導者たちを排出して、統一の世界、平和の世界である地上の楽園を成就しなければなりません。我が祖国の統一はもちろん、東西の文化的な違いと南北の貧富の格差を神主義と頭翼思想によって解消し、愛を中心とした人類大家族社会である平和の世界を建設していかなければいけません。

南北が引き裂かれて南北の貧富の格差が開いたのを一つにしなければなりません。東西の文化を一つにしなければなりません。人種差別、文化の差別をなくして一つにしなければなりません。何によって一つになり得るのでしょうか。これが絶対的な一つの愛から出発できなかったので、この絶対的な愛によって宇宙版図の上にしっかりとしておけば、統一教会に反対する喚声がなくなるのです。そのようになるとき、世界はこの愛のふろしきに老若男女を問わず一つに包まれるだけでなく、霊界にいるすべての霊人もこのふろしきに包まれることを願うことでしょう。ですから頭翼思想を中心とした天宙統一という言葉が、妥当な言葉なのです。アーメン！

社会主義、共産主義は絶対的な一つの国を指向しているのです。これから神様の理想を中心とした所有権復帰の時代が来るので、サタンは先に知って、共産主義を通じて世界的な神様の所有権をなくしてしまおうと計画したのです。それでサタンとしてはできることをみなやりました。先生は神様の側にすべてを復帰しました。それで理論的にも思想的にもみな手を挙げたのです。今は文先生の前に、神様の前には反対するものが何もありません。

今も所有権が問題になっているでしょう。共産主義、社会主義は国家が所有主になっています。民主主義は個人が所有主になっています。それを移行して誰の所有でしょうか。全世界の所有は神様のものであり、全世界はその子女たちのものであり、その子女は家庭のものなので、その移行する過程において、一箇所に集めなければなりません。そのような主人には、ただ神様がならなければなりません。神様が主人になり、神様の所有権をもつ主人となって、真の父母に伝受され、真の父母によって子女に伝受されてこそ、その所有決定権は神様の世界のものになるのです。

自分の物、自分の息子、自分の夫婦自体が自分のものではありません。天使長の立場にいるので、絶対否定の立場、所有権を否定する時代を超えなければなりません。そのような時代に行くので、社会主義や共産主義というものは個人の所有がありません。国家の所有、社会の所有を言っているのです。大韓民国もそのようになるでしょう。お金をもうけてもみな取られるではありませんか。そうでしょう。そのような時代に入るのです。

二) 宗教と哲学を収拾する頭翼思想

哲学において観が違い、物質が先だとすることによって共産主義が生じ、心が先だとした観から民主世界ができたのです。唯心史観と唯物史観が起こったのです。このようにして歴史が変わり、目的が変わったのですが、

それが正しくないので全部壊してしまわなければなりません。心と体というのが主体と対象の関係になっていることを知らなかったのです。これを別々に切り離して考えたので、行く道がないのです。そのような意味で今、文総裁が主張する神主義や頭翼思想というこのようなものが問題になるのです。主体自体が生じるとき、主体自体のためにできたのではなかったのです。

頭翼思想とは何かと言えば、完成したアダム主義です。アダムが堕落することによって完成したアダムになれなかったので、アダムを育てあげるためにサタン側の息子、神側の息子を育てていったのです。それで、左右が互いに主人になろうとして闘ったのです。そのような歴史です。頭翼思想は何を中心とした思想でしょうか。原理で見れば、間接主管圏と直接主管圏が統一されていません。アダムが責任分担を果たすことによって間接主管圏、直接主管圏が一つになる思想です。どこで一つになるのでしょうか。十段階を越えてです。

統一をどのようにするのですか。強制的に殴ってできますか。そのようにしては絶対いけません。たたいては一人も統一できません。どのようにしますか。「ため」に生きるのです。一番貴い愛と生命と血を投入するのです。それをするやからが統一教会です。統一教会とは何ですか。どのように統一するのですか。それでは、それはどんな主義ですか。それは神主義であり、真の父母主義です。真の父母主義とは何かと言えば、頭翼思想です。

今までの数多くの「主義」は、不変の方向を取ることができませんでした。アメリカはアメリカだけを中心として、ソ連はソ連だけを中心として、民主主義は民主主義だけを中心として、共産主義は共産主義だけを中心としてきたのです。宗教もそれと同じでした。それは、神様が願われる方向ではありません。一時も同じ方向を取ることができず、すべて東西南北にそれぞれ分かれました。今まではどんな組織、どんな責任者、どんな国家も神様が願われる方向をつかむことができませんでした。ですからこれからは、個人、家庭、社会、国家、世界、宇宙、天宙などすべてのものは、永遠不変の方向性をつかまなければならないのです。そのようなものを代表したのが頭翼思想、神主義だというのです。

今、東西問題を中心として見たとき、民主主義が勝ったと思わないでください。民主主義は何もありません。民主主義というのは政治形態の一つの解説方法です。思想的基礎は何もありません。今、思想の空白期に入ったのです。これから私たちの思想を教育しなければなりません。神主義、頭翼思想を掲げていかなければなりません。それをもって、制度化して引っ張っていく機関が必要なのです。統一教会をもってしては駄目なのです。

皆さんはここに何のために来たのでしょうか。世界のために来たのです。世界のために闘っているのです。すべてが世界のために投入し、また投入する人たちです。このような原則から見れば、理論的に神様の創造原則と一致するので、統一教会は後退しないのです。発展、発展、発展するのです。今は頭翼思想を中心としています。これは右翼と左翼のす

べてを包容するのです。また、これは神主義を中心として霊界までも収拾することができるのです。霊界と地上界を収拾して、真の愛による世界を出現させることが、神様の創造理想であり、原理にかなったことなのです。

見てみなさい。民主世界は右翼を代表し、共産世界は左翼を代表します。これらは今崩れつつあります。アメリカも同じです。両世界ともセンターがありません。これから必要なものは統一思想と神主義だと、レバレンド・ムーンが宣布しました。いかなるヒューマニズムも神様の前に出ることはできません。神主義しかあり得ません。神様だけが絶対的であり、永遠のセンターです。頭翼思想だけが全人類のセンターになることができます。真の意味の霊界と肉界のセンターになるのが真の父母主義です。

聖書でも「終わりの日には自分の家の家族が怨讐だ」と言っています。終わりの日には家族が怨讐になるというのです。このような逆説的な論理がどうして設定されたのでしょうか。これは一度反対にならなければなりません。左右が一八〇度回ればどうなるかということです。大変なことになります。方向が変わるというのです。それで主体思想、頭翼思想が必要だというのです。それでは頭翼思想とは何でしょうか。神主義を求めていくことです。神主義を求めて何をするのでしょうか。平和主義として再度出発するのです。神主義は神様と出会って愛を中心として一つとなり、平和主義として再度出発することによって、この世界で本然的な地上天国の出発基地ができるというのです。そこで一生涯生きた人は間違いなく永遠の世界にそのまま入っていきます。手続きもせずにそのまま入っていきます。鑑定がありません。簡単でしょう。

聖人たちも道端に立ち止まっています。自分が行くべき道を行くことができません。根本を知らないからです。しかし統一教会の文総裁は直行するのです。み前に直行して、み前で報告するのです。その道が真の父母が提示した基準であることを知り、頭翼思想、神主義の思想に従って花咲けというのです。これが心身一体理想です。アーメン。

イエス様が死ぬことによって左翼と右翼が生じ、バラバ圏が生じました。願わない死でした。生きて統一すべきでしたが、死ぬことよって今まで個人、家庭、氏族、イスラエルが戦ってきたというのです。ですから、このようなすべてのことが統一されなければならないのです。頭翼思想を中心として、神主義を中心として、完全に統一されなければならないのです。バラバ圏の前にサタンが立っています。それでイエス様が行こうとするとき、イスラエルの国の前に怨讐であるイスラム教圏が生じたのです。

五　神様を中心とした主権が復帰されれば

一) 神様のみ旨が成就した世界

人間の力、人間の知恵、人間の文化、このどれをもってしても真の意味の平和の世界や、一つに統一された世界を願うことができない視点にあるということを私たちは知っています。このような立場で世界文化を解決する上で一番中心となる問題は何でしょうか。神がいるのか、いないのかという問題を、確実に解明することが何よりも重要な問題だと見る

のです。もし神様がいるということを全人類が知った日には、神様のみ旨がどのようなものを指向するのかを確実に知るようになるでしょうし、その指向するみ旨を知るときには、その世界はそれこそ一つの世界であり、平和の世界であり、理想の世界でないはずがありません。

大きいものを得るために小さいものを犠牲にすることは、正常なことです。より価値のあるものとすり替える人が、知恵のある人です。これが世界に行くための正当な道です。人間はより大きなものを憧憬するのであって、小さいものを憧憬しません。より大きいものを願うのであって、小さいものを願いません。

私たち統一教会が違うのは、これです。統一教会は父母を愛するように兄弟を愛し、兄弟を愛するように氏族を愛し、民族を愛し、国家を愛そうというのです。父母を捨てても国家を愛そうというのです。世界を愛するためには自分の国も捨てなければならないのです。また、天を愛するためには世界まで捨てようというのです。もっと遠く大きいもののために、私に近く小さいものを犠牲にする愛の道を求めていこうというのが、統一教会の主流思想です。

今日、民主世界が第三解放を要求するならば、共産世界では第二解放を要求するのではないでしょうか。このような問題を考えてみるとき、第二解放、第三解放の旗手になり、その源泉とし得る新しい主義と思想は、どこから来るのでしょうか。これは、人間世界からは出てくることができません。人間は今まで数千年の間、この解放を迎えるために身もだえして努力してきましたが、そのような環境も、内容ももつことができませんでした。それゆえ、人間だけを中心としては解放することができません。

皆さんは民族主義者になりますか、世界主義者になりますか。宗教は世界主義だけではありません。人間だけを良くしようという主義ではなく、神様まで良くしようという主義です。しかし共産主義や民主主義は、人間だけを良くしようという主義です。それで神様まで良くしようという主義と、人間だけ良くしようという主義と、どちらの主義がいいですか。神様もいいし人間もいい主義がいいですか、主人を除いて僕たちだけで喜んでいる主義がいいですか。宗教は、それでいいものなのです。

最後に残る思想は何でしょうか。世界のために、自分の国や国民よりも世界をもっと愛することのできる運動、神様をもっと愛することのできる運動だけが、最後に残り得る主義になるでしょうし、思想になるでしょう。ですから、この国を越えることができる超民族的運動を世界的に提示し、超民族的に天が愛することのできる立場に、あるいは世界の人々が愛することができる立場に、自由に行けるようにするためにはどのようにすべきかを模索する主義だけが問題となるのです。

今後この世界を受け継ぐ主義、思想は、自分の国家を犠牲にしても世界を救おうとする主義、思想です。このような思想をもつ国、このような新しい運動を中心とした国家と国民が登場するようになるとき、この世の中には新しい希望の世界が顕現するでしょう。そ

こから新しい統一の世界、理想世界が顕現することでしょう。国を越えることができない国家観、歴史観は、神様の理想世界を引き継ぐことはできません。

一つの目的に帰一させることのできる思想は、自分を中心とする世界観ではありません。この思想は世界を中心とする世界観であり、万国を中心とする世界観です。これが、一つの目的に帰結させることができる思想です。これは、世界と分離された立場から自分の氏族を誇る思想ではなく、人間自体のために生きる思想です。人間ならば誰でも、このような思想によって成された世界を願っているというのです。

黄色人種は長男であり、黒人は次男であり、白人は三男ですが、彼らが争うのを韓国が統一思想を通じて統一することができるというのです。このようになることによって、神様を中心とした理想的祖国創建ができるというのです。そこから初めて、平和の世界、一つの世界、統一の世界、勝利の世界へと、世界は収拾されていくというのです。そのようにして地上に天国を形成すると同時に、神様と一致しなければなりません。天上天国の主体であられる神様を地上にお迎えして、統一された一つの天国を形成しなければならないのです。これが統一信徒たちがやらなければならない使命であることをはっきり知らなければなりません。このような基盤のもとで初めて父母と一つとなることによって、平和の天国生活が始まるのです。

統一教会とはいったい何ですか。右翼を抱き左翼を抱いて、これらをつかんでどこに行くのでしょうか。ここから追い込まれて争う、闘争の世界を越えて、天が導く幸福の世界に、ユートピアの世界に導くのです。これらを抱いて平面的に行ってはいけません。これが何のことかと言えば、統一教会が、思想的に体制によって没落して失敗したことを全部収拾することのできる論理体系をもっていると同時に、これを抱いて横的に運行することができるのです。また同時に、宗教を中心として縦的な基準で運行し得る霊的な体験の基盤を中心として、超越的実体を追求しなければならない内容をもつべきなのです。

統一思想は、人間的面での人本主義や物本主義、今までの過去のすべての神本主義も体系的に理論化させてこれを統合することのできる内容をもつと同時に、縦的面で宗派を超越して連結していくことのできる超自然的体験の宗教思想にならなければならないという事実を知らなければなりません。

すべての物質主義者、共産主義者たちが見るとき、「統一教会の信者であるあの人は、私たち共産党よりも徹底していて、人格的に良心的に内外すべての面において徹底している。共産党自体があのような人を必要とする」と言うことができ、また世俗的な人本主義者たちが見るときにも、「ああ、私たちの世界にあのような人がいたらいい」と言うことができ、今までの既存宗団たちが見る時にも、「ああ！　統一教会の信者は私たちの宗団を越えた立派な人だ。あのような人が私たちの宗団の人だったらいいのに」と言うことができ、神様が御覧になれば「ああ！　この人は私に絶対必要だ」と言うことができる、この四大面において必要とされる資格を備えた人がいたならば、問題は解決されます。

二) その国を求めていかなければならない

皆さんが願うその国とはどのような国ですか。その国は今日、皆さんが生活しているこのような国ではありません。このような国は、どうせ別れを告げなければならない国です。皆さんがこのような国と因縁があるとすれば、罪悪の因縁があるというのです。皆さんは、その国のみ旨と神様のみ旨が結びつくことができる善の因縁を本来から結ぶことができなかった、堕落した人間の後孫として生まれたということを、自らがよく知っています。

国がなければ国籍がありません。国がなければ入籍し得る土台がないのです。私たちは民族編成をして、新しい入籍をしなければなりません。この地上に天の国を編成し、その国籍をもち、愛国愛族する、真であり善なる父母の血統を受け継いだ勝利的息子、娘として、自分の血族あるいは家族を率いて生きたのちに逝ってこそ、天上世界の天国に入ることができるのです。これが原理です。

国があって初めて、千秋万代の私たちの後孫の前に、大切に残してあげることのできる伝統も残るのであり、私たちの血と汗を流したすべての努力も残るのであり、天の苦労を祝うことができる記念の塔がこの地上に生じるのであり、すべての栄光の痕跡がこの地上に残ることができるのであって、国がなくなるときには、すべて無駄になるというのです。今日の世界キリスト教において残された十字架だとかすべての文物も、天が求めようとする国がなくなるときには、全部を川に流さなければならず、燃やしてしまわなければなりません。サタンの籠絡（注：まるめこむこと）に倒されていくということを知らなければなりません。それゆえに、国が問題だということを皆さんは知らなければなりません。

真の父母の愛を受け、神様の愛を受けなければなりません。ところが神様の愛は、国がなくては受けられないのです。本来のアダムは、一人でも国の始まりです。サタン世界のサタンの国より優れた国があってこそ、神様の愛を受けるのです。私たちは神様の愛を受けますが、代わりに受けるのであって、直接受ける立場になっていないのです。真の父母の愛は受けることができますが、神様の愛を受けようとするなら国までもたなければなりません。国です。なぜでしょうか。サタンが残っていて、サタンの国が残っているからです。それよりも上がっていかなければならないでしょう。そのような道を、皆さんが行かなければならないということをはっきり知らなければならないのです。

先生は復帰摂理を歩んでいます。この世の政治と経済、文化世界を基盤として神様の摂理を解いたということは歴史上にないことです。今、世界の学者たちの中で韓国語を勉強する人が増えています。レバレンド・ムーンのみ言選集を原語で読むためです。それは通訳、翻訳すれば権威がないのです。皆さんは、これを読むことができなければいけません。皆さんが、この原語で書かれた先生のみ言集を一度読んでみなければならないのではありませんか。

私たちが求めなければならない祖国というものは、今日この地上にある、そのような歴史と伝統をもつ国ではありません。そのよう

な国とは本質的に次元が違うのです。私たちは次元の違うその国を受け継ごうとするならば、そうすることのできる思想的な主体性をもった国民にならなければなりません。しかし、その主体的な思想は、絶対的な創造主の思想と一致された思想でなければならないのです。絶対者が願う国が存在するには、その国の主権を中心としてその国の国民が一致することのできる国になることを願わなければならないのです。そのような国民性をもち、国家形態をもたなければならないのです。

本然の地とはどんなところでしょうか。悪が宿るところではありません。悪と絶縁して、あふれ流れる本然の愛を中心として永遠無窮に幸福を謳歌しつつ生きる永遠の統一世界です。ところで、そのようなところで生活した人がいたでしょうか。一人もいませんでした。歴史上、数多くの人々がそのような世界を追求しましたが、そのような世界はこの地上に建てられませんでした。その世界がどんな世界だと言葉を語った人はたくさんいましたが、自ら実践してそのような世界を成した人はいなかったというのです。

一つの国が形成されるためには、主権がなければならず、国民がいなければならず、国土がなければなりません。天の国も、やはり同じです。主権を代表するのが父母であり、国民を代表するのが息子、娘であり、国土を代表するのが国だというのです。この中で、どの一つも除くことはできないのです。これは鉄則です。

国が形成されるためには、国土がなければならず、国民がいなければならず、主権がなければなりません。主権とは何でしょうか。根源的な神様と因縁を結ぶことです。国を治める人々は、国民が深く寝入ったあとに神様と因縁を結んで政治をしなければなりません。そうして、主権者は国民と一つとならなければなりません。国民と一つとなって、自分にあるすべてのものは自分のためのものではなく、国のためものであると考えなければなりません。そのようになれば、その国は繁栄するのです。

一つの国を見れば、国が形成されるためには、その国の主権がなければならないのです。国民がいなければならないのです。国土がなければならないのです。そのような観点から地上に天国を実現するという問題を考えてみるとき、天国の主人とは誰でしょうか。主権者とは誰でしょうか。間違いなく神様が主権者です。そして国民とは誰でしょうか。国民は万民です。それでは国土とはどこでしょうか。地球星です。

どんなに大きい社会、どんなに大きい国家だとしても、人に似なければなりません。これは、神様が御自身の形状に似ているものを好まれるからです。それでは、人が一番好きなものとは何でしょうか。自分の形状に似たものです。それゆえ、理想的な国家は人に似なければならないのです。似ていますか、似ていませんか。天地人に似ているというのです。

私が行き来するのもその国を取り戻すための、祖国光復のための、建国の功臣になるためです。そのような使命を担って、あるいは天の密使として指令を受け、今日、悪い世の

中に来てこのようなことをしているという事実を考えながら、生きていかなければなりません。そうでなければ皆さんは今後、やがて到来する国の国民として、その威信と体面を立てることができないということを知らなければなりません。

さあ、六千年の間、神様に打撃を与えてきたサタンがただ素直に「ああ、私は下降した」と視線を落として帰るでしょうか。皆さんはぞうきんのような物も捨てようとすれば、もったいないと思うでしょう。ぞうきんの切れ端でもひっくり返してにおいをかいでみて捨てるでしょう。サタンがただで引き下がるはずはありません。それで執拗に闘いを挑んでくるというのです。ですから中心に合わせなければなりません。統一教会の文先生も中心からずれてしまうときは、折れていくのです。方向が合っていなければ発展しません。

統一教会員たちは裸足で立ち上がって、祖国を創建しなければなりません。食べ残しをもってこの国を生かすことができるのでしょうか。いつ食べて、着て、乗り回ることに気を遣っていられるでしょうか。裸足で、素手で開拓していこう、このようにするところが統一教会です。

第四章　成約人への道

一　真の御父母様の勝利圏確定

一) 八定式・・長子権、父母権、王権復帰

（一九八九年八月三十一日〈陰暦八月一日〉アラスカ、コディアック）

縦的な蕩減、横的な蕩減、八段階の蕩減がすべて終わったので、一九八九年八月三十一日を中心として八定式というものを、西洋社会で最も高いアラスカに行ってしたのです。最も高い所です。そして九月一日に天父主義を発表しました。天父主義です。愛援主義であると同時に父母主義です。父母主義とは、愛そうということです。愛することにおいて、サタンは反対することができません。統一教会が行く道の前にサタンが反対しなければ、あっという間に世界的なものとして展開されるのです。

個人蕩減、家庭蕩減、氏族蕩減、民族蕩減、国家蕩減、世界蕩減、天宙蕩減、神様の心情的蕩減まで八段階があります。それは個人復帰、家庭復帰、氏族族的復帰、民族復帰、国家復帰、世界復帰、天宙復帰、神様までの八段階です。これは、縦的な蕩減路程、横的な蕩減路程を、愛を中心として上下にすべて無事通過することができるのです。このように連結されれば、その球自体は愛圏の所有物となるのです。そうなれば、この地球星ではサタンが所有権をもつことができないので、サタンは自動的に追放されるのです。おしまいです。

一九八九年は新しい時代の一月、二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月の末です。八月末ですね。八カ月の間に世界的な蕩減路程を終えました。それで昨年の結婚式、交差結婚式、世界統一国開天日の宣布など、様々なことをしました。総合蕩減条件を樹立したのです。すべてをそのようにして、八月に終えました。海上、水上にまで連結したのです。先生はここまでやってきました。

八定式とは、縦的な蕩減歴史的路程、横的な個人、家庭、民族、国家、世界蕩減路程、八段階の縦横の路程を経て定着するので、長子権復帰が成され、地上世界の人間の前には蕩減の路程が解消されるのです。八定式をすることによってそうなるのです。長子権が復帰され、父母様の懐に抱かれることによって、父母の愛圏内で長子権を復帰するための歴史時代における戦争史、闘争史は消え去り、愛によって和合することができ、蕩減の必要がない時代となったのです。そのためには八定式をしなければならないのです。八定式をすることによって、その息子、娘、長子と次子を前にした父母の立場で、そのような子女を許してやったので、その次には父母の許しの圏時代が来るのです。

今の民主主義時代は、兄弟主義です。原理で言えば、カイン・アベルを中心としたのと同じことです。原理がぴったりと当てはまっているのです。カインは、あとで神様にすべてを奪われます。既に頭も奪われ、体もすべて奪われました。もう行く道がないので、労働者と農民を中心として、民主世界を侵食しようとするのです。それがいけないのです。秋になって実がなっても、そのまま腐ってしまいます。下がるのでなくなります。兄弟圏復帰です。その兄弟主義とは、真のアダムを探し求めることです。それをするのにこれほど長くかかりました。

戦争史でつづられてきたこの民主主義の末路は、いかにすれば終わるのでしょうか。父母が来なければなりません。父母主義が現れなければなりません。ですから統一教会は、この世の救援摂理時代は過ぎ、愛援摂理時代となっていくという、多くの宗教は知らずにいることを宣布したのです。既成教会の牧師たちは、愛援摂理時代とは何で、天父主義時代とは何なのか、全く知らないのです。八定式とは何なのかも知らず……。

天父主義を中心として、民主世界と共産世界を消化することによって、王権樹立時代となっていくのです。これをはっきりと知らなければなりません。

二) 天父主義によって父母権、王権へと越えていく

天父主義というのは何をもってそう言うのかというと、家庭です。それゆえ、神様がこのみ旨を成すときを中心として、サタン世界や民主世界の最も大きな問題は家庭の破綻の問題です。共産世界は家庭というものを認めません。家庭は搾取の基盤になっていると言うのです。神様との関係が結ばれていないのです。

民主世界も同じです。ですから実際のところ、家庭形成におけるすべてが傾いているのです。社会基盤であり、国家基盤であり、世界の基盤であるにもかかわらず、これが今まで乱れていたのです。ですから今後、私たちの家庭基盤を中心として、右翼世界と左翼世界は自然と吸収されるのです。

これからは家庭絶対主義時代です。家庭を抜きにしては、天父主義というのは成り立ちません。主義というのは一つの過程的なものです。橋を渡るようなものです。統一国というのは、家庭を中心としてできるものです。それゆえ、家庭を絶対視しなければなりませ

ん。家庭において絶対的な神様のような父母に侍ることによって、絶対的神様の二性性相、性相と形状が絶対的に分立しないように、永遠に共にあったのと同じことです。次には子女が、アダムとエバが堕落することなく完全に一つになったのと同じことです。

天父主義とは、家庭を中心とした王権を回復して連結することによって、王権が復帰されることです。天宙的王権が復帰されるのです。ですから、家庭がなければならないのです。家庭が中心なのです。統一的家庭基盤を通し、アダム的統一家庭、氏族的アダムの統一家庭、それなのです。アダムの氏族があったはずです。民族的アダムの家庭を中心として統一して、それがずっと連結されなければならないのです。そうしてこそ、統一的家庭基盤を通して王権が復帰されるのです。

天父主義を宣布することによって、これからは統一王権主義時代とならなければならないのです。神様が王にならなければなりません。私たちは神様を中心とした一つの主権を誇るのです。イエス様が願い、神様が願われた統一王国をつくって、天上世界と地上世界の地獄を撤廃し、神様が直接統治することのできる愛万能圏時代になるのです。

愛の伝統に従って、垂直的愛とは何であり、縦的な愛を中心としてどのように連合するのかということをはっきりと知って生活舞台に適応することによって、万国万象世界、天上世界のどこにおいても、それが拒否され得る圏を越えることによって、自然に解放の時代となるのです。統一の時代となるのです。

本来アダムが完成すれば、天国の父が完成し、エバが完成すれば、天国の母が完成します。ですから、家庭の主人となれば、家庭的天国の王権ができるのです。それゆえ、アダムとエバは個人的王であり、家庭的王であり、氏族的王であり、民族的王であり、国家的王であり、世界的王となるのです。今やそのような国家基準を越えることのできる時になったので、サタン世界の王権を踏んで、天の世界の王権を定めることができるのです。その日が、一九九〇年三月二十七日というわけです。それゆえ、世界は今や、レバレンド・ムーンがブームを起こすとおりに動くようになっているのです。

お父様、一九八〇年代を中心として、救援摂理の路程を愛援摂理の路程へと転換し、兄弟圏怨恨の蕩減路程を立てて兄弟解怨時代を迎えるようになり、その上に父母解怨時代を迎えることのできる歴史的起源を整えました。八定式を中心とした天父時代を発表し、理想的摂理時代を越えて、天と地を中心としたすべての復帰摂理の恨の峠を清算し、今後、一九九〇年代には統一家を中心としてすべてが、お父様、摂理圏内の統一世界へと入っていくべき、歴史的で、厳粛な課題を控えております。

興進君が天上世界へ行くことによって、イエス様と一つとなり、キリスト教のすべての聖賢、賢哲を今後糾合し、今や南北統一を中心とした、その限界線を越えることのできる時となりました。天父主義時代を発表いたしました。愛援摂理時代を発表いたしました。今や、死亡世界のすべての峠を越える分水嶺を過ぎましたので、天の圏に接することのできるこの時代を迎え、統一家のすべての氏族

が結ばれる基盤を通して、霊界が平面図上で交流することができ、交差することのできる摂理史を迎えるとき、全権的に霊界を中心とした新時代がやってくるということを知っております。

ですから、興進君はより一層、この時代において天の法度を立て、地上の法度を立てることにおいて、先君先女（歴代の王、王女）たちと、百二十の国家の王権を代表することのできる、そのような君王と忠臣を集めて、天の前に忠孝の道理を誓うことのできる教育をし、精誠を尽くすことができますよう、天よ、共にあってください。アーメン。

二　摂理的総決算と真の御父母様の大宣布

一) 真の父母（メシヤ）宣布

（一九九〇年四月三十日〈陰暦四月六日〉、韓国）

真の父母をなぜ宣布できるのでしょうか。民主世界と共産世界はカイン、アベルの兄弟です。民主世界と共産世界が二人の息子と同じなのに争っているのです。ところが、私が二人の息子が争っていたのを和解させて歓迎され得る立場に立ったので、初めて父母の特権をもって韓国の地へ来て、真の父母宣布を挙国的にやったのです。

すべてのことを信じることのできない世の中であり、見通しのない世の中であり、絶望的な世の中ですが、一つの希望が芽を出しました。それが何かというと、真の父母です。それを韓国の地に宣布したのです。一九九〇年四月九日、世界言論人大会をモスクワで開くことによって、民主主義と共産主義の両体制を勝利圏へと導き、その基台の上で韓国に帰ってきて韓国を起点として全世界に宣布したのです。

聖書の目的はただ一つ、真の父母を探し出すことです。それが最も希望に満ちた福音です。サタンも被造物なので、真の父母が現れればなくなるのです。そのような時が近づいたので、共産党が崩れ、北韓も今崩れようとしているのです。四方を見ても道はありません。先生はよく知っています。

そこに天国が実を結び、天上地獄と地上地獄が解放されるのです。私たちの目的は、神様と人類、そしてサタン圏の中にあるすべてのものを解放し、救うことです。それが私たちの目的です。私たちはそのような父母の心情を宣布するのです。前進するのです。そこにサタンが存在することはできません。それが原理観です。

共産主義は、僕と主人の主人主義です。自由がないのです。民主主義は兄弟主義です。兄弟主義なので自由なのです。自分たちの間では自由があります。ですから争いの連続になります。互いに自分の方が優れているといって闘うのです。そこで、ヘッドウィングとは何かと言えば、父母主義です。上院議員と下院議員が争い、共和党と民主党が争いますね。父母がいないからなのです。父母さえいて、「こら、どうしてけんかするのか。お前たちは僕ではない。私の息子なのだ」と言えば、すべて終わるのです。黒人と白人の間における人種主義も同じことです。

共産世界はどうでしょうか。先生はゴルバチョフに、レーニンの銅像と、マルクスの銅像をも撤去するように言いました。共産党の歴史上、そのようなことを言った人物は、レバレンド・ムーンしかいません。ソ連の共産党幹部たちはみな「我々の前で神主義を語るとは、なんと傲慢なことだろう」と騒ぎました。

彼らがいくら先生が憎いといっても、共産世界は今、そのようになったのです。彼らが世界で最も恐れていた存在が、彼らにとって唯一の希望の存在となりました。ほかに希望はありません。ですから「私の言うことに従いなさい。さもなければ道はない」と先生ははっきりと教えてあげました。

今後、地上はどうなるのでしょうか。第一、第二、第三イスラエル圏を通して動いてきたことすべては、真の父母の名を発表してしまえば、その領域はすべてエデンの園のようになって、宗教圏の歴史はすべてなくなるので、天使世界にいる霊は、いつでもここに来ることができるのです。それゆえ、いつでも再臨することができるのです。それはどういうことかというと、原理結果主管圏です。天と地は、僕がついているのですべて霊界と同じです。真の父母を宣布することによって、このような基準が再び連結され、サタンはいなくなるのです。

それゆえ、自由にここに来ることができるのです。これが縦で、これが横で、この角度は九〇度です。九〇度の角度というのは、サタン世界の領域ではないのです。角度が異なるものとなったがゆえに、堕落世界が生じたのです。九〇度であってこそ神様が主管できるのです。そこにサタンはいません。解放です。霊界が解放され、地上が解放され、被造物もすべて解放されます。そこには蕩減路程もありません。

真の御父母様の宣言を発表することによって、サタンの権限がなくなり、宗教を中心として闘争してきた蕩減法もすべてなくなり、善なる霊が天使世界に匹敵するので、堕落のない世の中となり、思いのままに地上に協助することができるのです。その天使たちが皆さんの先祖です。ですから、今から統一教会に反対しようものなら、ありとあらゆることが起こるのです。

今日、メシヤに関する事実を宣布するのです。皆さんの両親と、皆さんすべてが解放され得る道を開いて王権を発表し、真の父母を宣布するのです。真の父母とは何かというと、個人的王権が真の父母であり、家庭的王権が真の父母です。すべてがそのようになるのです。王権であると同時に真の父母です。ですから、全世界に真の父母を宣布するのです。真の父母は真の愛を中心とするのです。

皆さんは大胆にならなければなりません。それはどういうことかというと、主体的所有権を持たなければならないということです。いくら困難な環境に置かれたとしても、問題になりません。「このようなものは神様も願われない。私の前から消え去れ！」と言えばなくなるのです。すぐに下りていくのです。

霊界も同じです。「私はこんなものはいらない」と言えばすぐになくなります。周囲のすべてにそのような力があります。愛の中心が現れれば、すべてはそちらの方に向かって帰っていくのです。東から朝日が昇れば、植

物の中心はすべて、その太陽の方を向きますね。それが生命のエッセンス、愛のエッセンスです。

これからは闘わなくても自動的に連結されます。すべての道が開かれます。皆さんが所有権をもって師となり、真の父母となることができます。それは皆さんの使命です。どれだけ懸命に活動するかにかかっています。理論的であり、明白な結論です。これからは皆さんがはっきりと知って、「私は真の御父母様が宣布するすべてのことを完全に相続して、世の中のすべてを解放しよう！」と言わなければなりません。皆さんもそうなりたいですか。だとすれば神様の前に誓いましょう。両手を挙げて、このようにきれいに振ってみてください。さざ波のようですね。

二) 神様祝福永遠宣布式

（七・一節）（一九九一年七月一日、ソウル、漢南洞公館）

愛するお父様！　きょうは一九九一年七月一日、摂理史的転換時期において、最後の峠の位置を占める年であることを知っております。一月から六月まで複雑多端なる環境を越えて、新たに七月を迎えました。一九九一年の半分を送り、新たに迎える後半期は、お父様の摂理史において、頂上を越え、新しい希望の一峠を越えて、天国の自由と平和の世界へと進入することのできる分水嶺の期間であることを知っております。

今や韓国という祖国の地を中心として、南北が分かれているという怨恨、東西の紛糾によって歴史的な恨を残した戦いの苦痛もすべて、真の父母を中心としてみな解消されました。偽りの父母によって植えられたすべてのことが、真の父母によって勝利的収穫を収め、共産世界と自由世界、北韓と南韓が一つとなることのできる時代が訪れました。

お父様！　きょうを期して、神様祝福永遠宣布式をすることにより、摂理史を代表してきたすべてのこと、天が立ててきたすべての条件を清算し、勝利と解放と栄光の日を自ら祝うに至ったことを感謝申し上げます。氏族的メシヤの使命を果たさなければ、その家庭とその国を連結させることができないという摂理史の全体的み旨を思うとき、既に氏族的メシヤを宣布することのできる日となりました。この時間、真の父母の一族を宣布することのできるこの日を迎えさせてくださったことに感謝いたします。

今日まですべての路程を天が保護してくださり、今一九九一年七月一日を起点として、恨多き歴史的蕩減路程を清算しました。新たに創造主なる神様と、本然の父母となり得る横的な真の父母に侍り、左右が一つとなり、南北韓と、あらゆる宗教圏と政治圏が一つとなって父母権の王権を受け継いで本性の世界の解放圏を求めるためのあらゆる宣言が必要だということを私たちは知っております。

のみならず、本性の真の愛を中心として、個人的な中心であり、家庭、氏族、民族、国家全体の中心である真の愛の道理に従わなければなりません。そして、絶対的な一つの方向による絶対的な目的の帰結である本然の天国は、地上を代表して地上で生活した家庭の基台とならなければならないということを知っております。したがって、統班撃破という厳粛な使命的課題を前にして、前進命令を天から受けました。

決定的この峠に向かって七月一日から自分の家庭と自分の一族を収拾するために総進軍すべき世界史的時代が訪れるということを知らなければなりません。そして七月一日を中心として全世界的に氏族的メシヤ宣言を申請することのできる日として定めました。それを申請した私たちはすべて、前後左右を見渡すことなく、天の眷属の因縁に従って、アダムとエバが失った長子権復帰、父母権復帰、王権復帰の基準を、家庭において鉄の軸を打ち込んですべてのサタン、誰にも動かすことのできない勝利の覇権を確立すべき祝福家庭の使命を忘れることのないようにしてくださいますことを、切にお願い申し上げます。

天の前には自由世界、共産世界、南北というものはあり得ませんし、サタンという存在もあり得ません。

すべての悪の業を清算し、歴史とともにこれを埋葬して、勝利と解放の天国が地上に到来することを、真の父母のみ名により地上世界と天上世界に宣布いたしますので、万世にわたって永く盾として、主導してくださいますことを、きょう七月一日、この時間、真の父母のみ名により宣布いたします。アーメン。真の父母のみ名によって宣布いたします。アーメン。真の父母のみ名によって宣布いたします。アーメン。アーメン。アーメン。

きょう七・一式を終えることによって、父母様が思いどおりにすることのできる時が来たのです。今までは自分の思いどおりにすることはできなかったのです。思いどおりにできたとするならば、どうして先生が苦労したでしょうか。どうしてこの世を相手にあのようなことをしてきたのでしょうか。

物事にはすべて時というものがあります。時に対する責任を果たせなければ、顔を上げて歩くことはできません。真の父はサタン圏に打ち勝たなければなりません。これからは、真の父母の名をもって個人的、家庭的、氏族的、民族、国家、世界的な迫害に打ち勝つことができなければなりません。自由世界が統一教会とレバレンド・ムーンに反対し、共産世界が反対しましたが、既に自由世界のワシントンでソ連の指導者層を教育することによって、彼らに対して完璧な勝利を収めたのです。

上に上ることができるのは、真の父母と天の権勢しかありません。ですから越権を行使する力がなくなったということです。無理やりに力を出したところで崩れるのです。国がそのようになれば、南北もすべてそうなるのです。南北韓の特定の権力者が自分の思いどおりにすることはできないのです。今までは偽りの父母が処理してきたので、真の父母がこのように結んで宣布しておかなければならないのです。それを宣布するのがきょう、この日なのです。

三) 蕩減解消宣布式

（一九九六年十一月一日、ウルグアイ）

世界平和家庭連合を中心として家庭を収拾するのです。家庭的版図で失敗し、国家的版図で失敗したことを、来られる再臨主は世界的版図で収拾するのです。アダム家庭で失ったものを世界的版図において結んでいって世界的祝福として連結、アダム家庭の立場に立てて世界的国家を形成し、王権統一時代、地

上天上時代へと、いかにして越えていくのでしょうか。

今、大転換時代になったということを知らなければなりません。ですから先生、御父母様を中心としてカイン・アベル世界的民主世界と、キリスト教文化圏を中心として統一教会の家庭運勢に反対するのを完全に越えたがゆえに、勝利的覇権をもって家庭を中心として世界平和家庭連合の定着と同時に、蕩減解消、そのような環境を御父母様の名によって宣布するのです。

堕落はフリーセックスによるものなので、それは絶対セックス、絶対父母を中心とした絶セックスを中心として越えるのです。血統転換は絶対セックスによってなされるのであり、フリーセックスや中間セックスによって血統転換されることはありません。血統転換をしなければならないのです。

先生が世界平和家庭連合で発表したことは、それが越えることのできる権利を立てることです。ですからこれからは、御父母様が世界的版図で勝利したすべてのことを、お母様に代わって、祝福家庭がお母様を中心としてカインとアベルが完全に一つとならなければなりません。お母様と一つにならなければならないのです。

世界のフリーセックス、ホモといった青少年倫理の堕落によって、家庭を収拾することのできない世界を、真の父母の思想を中心として初めて、それを反対にして家庭形成、国家形成、すべて地上天上天国形成するようになるのです。それは、平面上で復帰されていくのではありません。家庭版図を中心として個人、家庭が絶対にお母様お父様を中心としてカイン、アベルが一つとなり、母が一つにならなければなりません。

母が一つとなることによって、母を中心として民主世界と共産世界、キリスト教ではカトリック（旧教）とプロテスタントが一つとなり、天地が一つとなって、その基盤の上で母を中心としてすべてを蕩減してきました。それゆえ、世界平和家庭連合定着と蕩減解消を宣布することができるのです。

神様が創造するとき、神様御自身が絶対信仰、絶対愛、絶対服従する立場にあるのですが、その相対的家庭を築くことができなかったので、すべてが地獄に落ちたのです。真の父母の勝利権で一つとなったすべての基盤において、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、アダム家庭で失ったものを世界的に越えていくことにより、統一教会は真の父母を中心として絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなければならないのです。真の父母は神様の前に絶対信仰、絶対愛、絶対服従の伝統を受け継いできたので、それを伝授してもらわなければなりません。分かりましたか。天の祝福が共にあることでしょう。

四) 天地父母天宙安息圏宣布

（七・八節）（一九九七年八月九日〈陰暦七月七日〉、ソウル）

一九九七年七月七日七時七分七秒を中心として、三百六十万双家庭祝福を中心としたこの日「三百六十万双祝福完成は真の御父母様を誇り愛すること」という標語の今年、すべてのことを成就しました。お父様、いかばか

りの恨を抱いてこられたことでありましょうか。

お父様……、東洋、西洋の文化全体を失い、南北の統一世界を中心として万国の中心国家であるべき祖国の地を失い、祝福を完成してお父様の一族が天の一族となるべきすべてのもの、血族、子女、二分されなければならない立場に立ったがゆえに、再び共産と民主を中心として二分された闘いを経て、四十年期間を再び復帰の道を歩むしかなかった歴史的な事実を、統一の群れは知っております。

この四十年期間は、摂理史の四千年に代わる期間であるがゆえに、キリスト教とキリスト教信仰国、また、宗教と宗教信仰を中心とした人々に加えられてきたサタン世界の主権国家の行使、今日の世界舞台を抱いたお父様のみ旨の前に反対の立場にある全世界が相まって、真の父母を攻撃するという四十年歴史に当面してきたお父様の悲しみを知る者は誰もおりませんでした。

ただ一人、ただ一人、ただ一人この道を開拓してこられたお父様の指導の前に、お父様の個人的な安息所を備えんがための闘い、夫婦的な安息所を備えんがための闘い、家庭的な安息所を備えんがための闘い、氏族的な安息所を備えんがための闘い、国家的、世界的、天宙的な安息所を備えんがために、お父様が自由自在においでになることのできる、そのような創造理想的自由環境を開発するための受難の四十年歴史において、今やその峠を越えました。お父様、それによってきょう真の父母を中心として、天宙安息圏を宣布することのできる、驚くべき時代を迎えました。

きょうこの日は、お父様の息子であるこの文という者の年が七十七歳であり、一九九七年七月七日七時七分七秒を中心として七数を八回連結することのできる焦点に合わせて七、八数を越えることのできる安息年と、再出発の数を連結することのできる時代となったがゆえに、統一家のすべての群れは、天の権威と天の愛の伝統を受け継いだ家庭を中心として天に侍り、国家を中心として天を安息させ、世界を中心として天を安息させ、天宙を中心として天を安息させることによって、神様と真の御父母様が自由においでになることのできる安息的基盤が家庭から天宙までつながれ、そして、神様と一体となることのできる一つの地上天国の王権と天上天国の王権が一時に樹立され得る限界線を越える時を迎えさせることによって、これを成就しました。

このために、エバ国家としての国を代表する母がこの地上に現れて、天上天国がアメリカを中心とした国連舞台を中心として南北に分かれているものを、アメリカを中心として統一的な運勢を備え、韓国にそれを植えて解放基準において民族的解放を代表する韓国となるべきことを案じていたものを、お父様がお守りくださり、三次にわたって、お母様を中心としてこの地に送り、み言を伝えることによって、お母様が今回十六箇所という、十六数を越えてこの地上の高位層を、新たに門を開いて解放することのできる祝福をしてくださいました。そして、今や国を挙げて祝福家庭が聖なるものであるということを知るに至りました。

そこに南北の女性を中心として、世界の南北に代わる女性を代表した大会において歓迎されることによって、きょう、十六数と十八大会を中心としてこのような日を宣布するに至り、あす十日を中心としては、この国の中枢的な群れ、世界のすべての主権と国家を代表する核心を中心として、天の勝利圏を宣布

することのできる家庭的王権時代へと入っていくその祝福がこの地上で成就し、統一教会が家庭祝福において先頭を切って行くことのできる主権をお立てになったのも、お父様の御苦労のゆえです。

そうしなければ韓国の立つ瀬がなかったものを、お母様と天のお父様が協力することによってこのような基盤を備えるようになったことに心から感謝申し上げます。そのような基盤の上に、きょうこのような真の父母を中心とした天地父母天宙解放圏宣布をさせてくださいましたことにも、お父様の前に千回、千回、千回感謝申し上げます。

お父様、あなたの願いである家庭的王権時代、国家的王権時代、世界的王権時代と天宙的王権時代の安息の基盤がこの地に造られることにより、囹圄の身である神様の解怨成就をして、解放的な立場で愛の天宙を抱くことのできる時代を迎えたことをお喜びください。

この息子の歩んできたこの道を、涙で保護し、助けてくださることのできない父の悲しみはいかばかりであったかを知っておりますから、これからはお父様の願われた全体、全般、全権、全部の権限を成し、万国をお父様が主管され解放天国へと前進することができるように祝福してくださいますことを、お父様、切にお願い申し上げます。

今や真の父母の家族から、悲しみの涙を流したその涙の跡が消える時代となりました。お父様の解放の権限をもって御父母様の家庭から万国においでになるときに、滞ることなく行き来することのできる、愛する子女と、愛する国と、愛する世界と、愛する天宙を創造理想の特権的な最高の頂上において位置を占めることのできる行幸を、真の父母のみ名と共にお父様の解怨成就と全般的な解放を宣布いたしますので、お受けくださいますことを切にお願い申し上げます。

そして天地父母天宙解放圏を宣布する時間を喜んでお受け取りください。天からこれを宣布して天上世界と地上世界における統一圏の勝利の旗を高くお掲げください。真の父母のみ名によってこの日を宣布いたします。アーメン。アーメン。アーメン。

今まですべての歴史時代において、神様の安息日がなかったということを知らなければなりません。驚くべきことです。これまではすべてがサタンの所有権でした。息子、娘も神様のものではなく、万物も神様のものではなく、国も神様のものは一つもありませんでした。神様の理想的相対として血族を代表することのできる先祖として現れることのできる人間が、アダムとエバが堕落することによって失われたのです。

私たちの理想家庭は神様の安息の家、安息の家というものがいったいどのようなものなのかを知るべきです。神様が安息の家を失ったのです。ですから堕落した人類の理想家庭というのは、神様の安息の家を取り戻すことです。その安息の家は、何が中心となって形成されるのでしょうか。真の愛と真の父母と真の子女、真の家庭を中心として形成されるのです。

家庭が中心です。家庭を中心として一族とならなければなりません。ですから家庭を中心とした一族、氏族的メシヤにならなければなりません。家庭とは何かというと、家庭的メシヤ、氏族的メシヤ、国家として形成された国家的メシヤ、世界的メシヤ。世界的メシヤは誰かというと、万王の王です。そこに地

上天国が形成されるのです。安息が個人から全世界どこでも、天国のどこまでも、神様が行って休むとき、そこが家庭であれば、そこに個人と夫婦と息子、娘、全体が神様に侍って喜ぶのです。

真の父母がとどまって住む所はどこでしょうか。真の父母が住むことのできる所はどこでしょうか。宇宙の中心です。宇宙の中心であると同時に、神様のみ座となる王権の王子の位置です。天上世界の王子の立場、地上世界の王子の立場、二つの父母の資格を中心としてこれを連結させる王子の立場なのですが、その王子の立場というものは何によって連結するのかというと、お金ではありません。もし私が、お金が好きだったとすれば、韓国で金持ちになっていたことでしょう。知識が好きだったならば、私は既にソウル大学の総長になっていたことでしょう。総長に教え、部下にしている人物なのですから。そうではありませんか。

世の中で名の知れた人を弟子として足でけり、王だった人に使いをさせる人物なのです。ですから知識を必要とはせず、お金を必要とはせず、権力を必要としない力をもった人物です。何の力でしょうか。愛の力、神様の愛、真の愛の力です。

韓国には、世界のどの国の家庭にもないものがあります。民謡をとってみても、民謡が宇宙的であり、歴史を越えた宇宙史的な内容をもっています。「月よ、月よ、明るい月よ、李太白（李白）が遊んでいた月よ、あのかなたの月に、月桂樹が生えているので、金の斧で切り、玉の斧で仕上げて、くさぶきの三間の家を建て、父母に侍って、千年、万年暮らしたいものだ」。

何と素晴らしいことでしょうか。「千年、万年暮らしたいものだ」の父母とは誰のことでしょうか。そのような夢の夢の中で願った父母を尊重した内容を民謡で賛美した国は、世界にありません。

千年、万年暮らしたいものだ。家はどんなにみすぼらしい三間ほどの小さなくさぶきの家でも、千年、万年真の御父母様と暮らしたい。韓民族の童謡の理想にぴったりと合っています。そうして何をするのでしょうか。半月のような月、完成していなくてもいい！家庭的出発は完成してはいないけれども、この世界の半月のような空中の雲の国、人工衛星の船に乗り、帆もなく、竿もないけれど、すいすいと進んでいく、東の国、西の国。太陽の光は東から西を照らします。男性は東を象徴し、女性は西なのですが、女性は東の太陽の光を受けて、男性と対等な価値をもつのです。東西の平準一致世界が築かれるのです。アーメン。何と素晴らしい民族でしょうか。

きょうは何の日ですか。（天地父母天宙安息圏宣布の日です）。天地父母です、天地。天地父母の理想安息圏ができるとき、そのような世界となるのです。考えただけでもいいし、夢の中でもいいし、働いてばかりでもいいし、汗を流してもうれしくて、悪くないのが、つまりよくないということのあり得ない立場なので、私は永遠に「アー」、口を千年開けていても有り難く「メン」永遠に死んで生きようというのが「アーメン」ということです。そして神様の印を押してもらい、天国の宮殿圏内に入って千年、万年生きることのできる天の皇族圏、天の民圏となることによって、人間の願いは万事成就されるのです。

五) 地獄解放と天国開門のための宣布

（一九九八年五月十五日、ブラジル、パンタナール、アメリカーナホテル）

興進様が真の御父母様の直系の子女であるという事実と比べて、キリスト教は血統の異なる養子の立場にあります。この二つが一つとなってこそ、御父母様が完全に立つことができるのです。したがって、既に祝福を受けた興進様と、キリスト教が祝福を受けて一つとなって初めて真の御父母様のみ旨が成就するのです。ですから統一教会はキリスト教に対して、本格的に教団的な祝福を施さなければなりません。真の御父母様を中心として父と母、そして長子圏が一つにならなければならず、さらには父と養子圏（キリスト教）とその他の宗教、そして非宗教圏が一つにならなければなりません。

六月十三日に一億二千万双が祝福を受ければ、三億六千万双の三分の一が祝福を受けることになるので、旧約時代を脱するのです。早くキリスト教を中心として重生式と復活式、そして永生式である祝福式を挙行しなければなりません。既に四人の聖人をみな祝福し、清平でもキリスト教解放のために精誠を尽くしています。第四次アダム圏解放の鍵はすべて真の御父母様が持っています。事実、地上よりも霊界を早く処理してあげなければなりません。したがって、先祖を整理することに努力をするのです。

霊界を正してから、肉界を正さなければならないというのが摂理の順序です。霊界は肉界に対して垂直であり、肉界は水平関係の世界だからです。このように垂直と水平の世界が出会うことによって、地球星に真の平和がもたらされるのです。真の御父母様が現れなかったとするならば、霊界というものはないに等しいのです。すなわち、真の御父母様が来られてこそ、霊界と肉界を処理することができるからです。

六) 総霊界霊人解放式・・全体解放統一式の祈祷

（一九九八年十月十五日、ブラジル、サンパウロ）

愛するお父様、きょう一九九八年十月十五日、この日は韓国では秋夕であり、先祖をお迎えする記念の日です。韓国の清平と、この西欧社会のサンパウロの聴衆、天地のすべての被造万物と、霊界にいるすべての霊人、先祖と幾千万の聖徒、神様から始まった愛で造られた被造万物と、この地上に生きている全人類が、一致圏を完成した愛の結晶をもてずにいるという神様の恨を解くために、歴史時代において旧教、新教、成約の解放完成圏を目指してこられたお父様、悲しかった歴史をすべてお取り除きください。

天の縦的な真の父母が、天地を創造した理想をもってこの地上で真の父母となる神様の体としての横的な父母が、私たちの第一代の先祖であったことを知っております。その方たちが家庭を中心として一体圏を成し、一つの体を成して、縦的な心と横的な体が一体となり、その一体となった愛の種をこの地上に着地させることによって、永遠なる神様の血統と真の御父母様の血統が連結し、体と心が一つとなった子女を万民がこの地上に繁殖す

るという喜びの出発の一日を迎えることができず、悲しく憤懣やるかたない歴史的な恨の痕跡を消すための摂理を今まで続けてきたということを知っております。

今まで考えもしなかったこのような恨を抱かれたお父様の前に、この地上で孝行する息子、娘が一人もいなかったお父様、孤独でかわいそうなお父様であられました。

億万代の一人息子を生かさなければならないお父様のその胸を開いてみると、この地上に先祖のいない悲惨な人類、先祖を失ったその悲惨な人類を見つめる神様が、どれほど悲痛であったかという事実を、この息子は誰よりもよく知っております。神様を知った日から、わきまえのない子たちのために神様が行かれる道は、順調な道を整えるための、キリスト教数千年の歴史における苦労の基台を中心とした真の父母の祝福の一日を得ることによって、エデンで失ったアダム家庭の一つの勝利的血統を受け継ぐことのできる天の真の愛と共に、それを結合できなかったものを取り戻すための受難の歴史であったということをよく知っております。

責任を果たせなかった息子の恥ずかしさを覚える時に、どうすればそれを避けていけるかということを求め、求め、求めたところ、その場で神様の道を、私の行く道を開拓し、橋を架け、また、山を越えて縦的な八段階、横的な八段階を経て、八定式の宣布とともに、真の父母であることを宣言しました。

そしてこの地上に七・八節を宣布すると同時に、ジャルジンを中心として、お父様の創造理想である本然的基準が、お父様が出発されたその本然の基準の絶対信仰、絶対愛、絶対服従と、神様の属性の基準でもあり、愛がとどまることのできる基台である絶対、唯一、不変、永遠なる家庭的基盤を願われたお父様の願いを成就するために、真の父母となり得る絶対父母、唯一父母、不変父母、永遠父母、絶対子女、唯一子女、不変子女、永遠子女、絶対夫婦、唯一夫婦、不変夫婦、永遠夫婦、絶対家庭、唯一家庭、不変家庭、永遠家庭を完成する日が、世は知らずとも天は待ちわびる日であり、この歴史で最高の転換点となることを知っているこの息子は、千年を一日のように願ってきたその日の来たりしことを、世の中に称賛したく、称賛すべき宣布の日であるにもかかわらず、このジャルジンの基盤でこれを宣布することになりました。

第三宣言では、天を第一代創造主、第二代創造主、第三代創造主、氏族基盤を連結して横的な基台の上で地上天国と天上天国の王権の基準を中心とした三代の創造主の権限を地上に宣布することによって、恨めしい宿命的な課題として残っていた、神様もどうすることもできず、サタンもどうすることもできないこのような過程をたどり、永遠、不変、宿命的な父子の関係、夫婦関係、父母関係、子女関係をすべて解怨成就することができるようになりました。

今、四数、四・四節を宣布することによって南北がつながり、父母の心情を海から連結して、万物の授受の原則を中心として、海でノアの大審判もありましたが、審判を受けない海の基盤を中心として、すべての被造物を解放的立場に呼び集めるという意味で、国家メシヤと祝福家庭をすべてジャルジンに集め、世界的メシヤ、国家的メシヤ、氏族、家庭的メシヤの型をもって父母に従って戻らなければならないということを明らかにしました。

左側で勝利したことを、すべて右側に返して、すべてが何にも引っ掛かることなく容易

に行くことのできる道を行き、父母様が来ることのできる道を開くことによって祝福家庭たちは絶対信仰、絶対愛、絶対服従の四大属性を中心とした、絶対、唯一、不変、永遠なる、父母、息子、夫婦、兄弟、家庭を基盤とした本郷の道を行くことのできる自由な環境を下さったお父様の前に感謝申し上げ、霊界と肉界に分かれているのを統一し、東西文化の壁を越え、南北の貧富の差を越えて、今後統一された国の父母に侍る子女の心情をもって、平和の天地と平和の人類をもつべき統一家の祝福された群れとして行くことができるようにしてくださったことを、心から感謝申し上げます。

もてる財産と、もてる土地をすべて売ってでも、失ったこの平和の天国を率先して取り戻さなければならないのが、祝福を受けた息子、娘であり、祝福された立場に出るすべての人々であるということを知っております。そうすることによって、それを祭物として国を目指し、国を祭物として世界を目指し、世界を祭物として天地を目指し、天地を祭物として神様を目指すべき責任があります。

万年解放圏の愛の実体主権を誇ることのできる永遠解放、地上天国をこのように語ることのできる歴史的な出発を、既に六月十三日を通して、聖人たちと殺人魔を兄弟のごとく、父母様が号泣の心、悲しい心を押し殺しつつ、彼らを同じ立場で祝福することによって、天上世界は解放の叫び声が今でも響き渡っているということを、この息子は知っております。

地の人間は知らなかったとしても、天上にいる私たちの先祖すべてと、天使世界と、千万のあらゆる聖徒がこれを知り、地上で御父母様の環境を開拓するために苦労していることを知っております。堕落した天使長圏の家庭を残し、この地上にあらゆる主権の形態を生んだ堕落した天使、神様の愛の家庭を破綻させた怨讐を、霊界と肉界が一つとなって兄弟の因縁を中心とした父母の愛を抱き、神様の愛を抱くことによって、この地上で御父母様が、解放圏の宣布とともに、進軍命令を受けて長子権を取り戻しました。

お父様の願いである六月十三日に祝福した五大聖人を中心とする基盤に関係する宗派に因縁のある、霊界のすべての弟子たちとともに、祝福を受けたこの群れが、今後最後の転換の一時を迎えるべき地上に、再び兄弟と共に御父母様に侍り、神様と共に天上と地上とともに、忠孝の道理と伝統の足跡についていくこの地上の天使長家庭を、この地で完成したアダム家庭にいる地上祝福家庭の解放圏の前に同参させてください。神様の前に、家庭では孝子の道理、国では中心の道理、世界では聖人の道理、天地では聖子の道理の愛的因縁を共に受け継ぐことができるように、天の神様と真の御父母様が一つとなって、それが永遠に可能となり、彼らを中心として彼に従う弟子と、そのような先祖をもったアダムとエバに連結された後代、先祖も解放してください。

そして、真の御父母様を地上にお迎えした本然の完成した天と一体となった愛圏の血族を中心として侍ることのできなかったすべてが、地上天上の先祖が兄弟の因縁、親子の因縁の本然的創造理想、縦横を決定する愛の一家庭を中心とした定着点に、地球星全体、全霊界が一つの真の父母を中心とした宇宙史的な家庭的礎を永遠に定着することのできる宣布の日に、霊界解放、地上解放、すべての家庭が縦横無尽に自由に往来でき、共に活動する時代を、真の父母のみ名により、今そのす

べてを結んで地上着地活動することを、そして、すべての被造万物と共に、真の愛を中心として、神様と真の父母の真の血統的心情圏を中心とした神様の愛の地上天上天国、永遠なる神様の主権的勝利のために出動することを、真の御父母様のみ名により宣言いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！

七) 真の祝福天宙化とサタン血統根絶完成解放宣布式

（一九九九年一月八日、ウルグアイ、プンタ・デル・エステ）

今年の標語は「真の祝福天宙化とサタン血統根絶」です。それはどういう意味かというと、サタン世界とは関係がないということです。真ということを中心としては、偽りが相対の立場に立つことはできません。昨年は、真の神様を愛し誇ることは三億六千万双祝福とサタン世界血統断切です。それは既に、昨年の九月三十日を中心として乗り越える時代に入りましたから、今や天と地において相対的関係で闘争するという時代は過ぎ去るのです。峠を越えたということです。

本然のアダムの立場において、この世界人類を大祝福して乗り越えて、多くの本然のアダム家庭が祝福を受けた立場に立ったので、天と地の塀がふさがってはならないのです。今年は「サタン血統根絶」です。根を抜いてしまわなければなりません。そのためには祝福の恩恵圏をこの天宙、すなわち霊界と肉界に築かなければならないのです。

アダム家庭を中心に考えると、天使世界を中心にアダム家庭を完成しなければなりませんでした。ところが、堕落したがゆえに、アダム家庭においてそれを清算して、アダム家庭の再創造の役事をしなければならないのです。先祖を再創造して、天使長の位置にある家庭にしておかなければならないのです。それゆえ、大量祝福、霊界の解放祝福時代になったのです。解放祝福時代です。それによって霊界にいるすべての霊人の家庭を中心とした天使長自由環境圏へと追いやるのです。家庭を中心とした解放圏では、サタンの役事というのはないのです。

霊界の人々にも祝福をすれば、自分たちが相対を連れて降りてきて、子孫の先祖という立場で、自分の子孫が祝福の道へ行くように駆り立てるのです。人間は本来、真の父母を中心としてこの地で生きてこそ天国へ行けるようになっているのですが、霊界にも住むことのできない霊が、この地上に来ることのできる道を開いてあげるという式にもなるのです。

自分が好きな人を連れてきてエデンで夫婦になれなかったのをこれからは、祝福を受けることのできる地上で、その子孫に従って、絶対信仰、絶対愛、絶対服従するように後援することによって、地上で真の御父母様と共に生き、天国へ行くことのできる大道の道に参列するために、全体の根本となっているサタンの血統の根を抜くということを、先生が打ち立てておかなければならないのです。どういうことか分かりますか。

全体解放、サタン追放、サタン根絶と同時に、人間の罪の根が反対に進んでいたのを正して、すべてがまっすぐに進んでいくことができるの

です。地獄には悪魔と罪人が行くので、完成できずにすべて逆さまになっていたのが、善なるものとなり、まっすぐに立って、自分の階層から天上世界へと行くことができるという、正に祝福天宙化となっていくのです。

今日「真の祝福天宙化とサタン血統根絶」を宣布したのですが、祝福を受けた一族は、先生の誕生日の二月二十日を中心として献納祭物をすることによって、地上における直系の十二人ではなく、七十二代から百二十代までイエス様が祝福したかったすべてを乗り越えることができるのです。そうなれば、自動的に真の父母の直接主管圏内に入って、サタンと関係のない時代へと移行していくのです。

霊界にいるすべての先祖も解放するのです。サタンも解放してやらなければなりません。それゆえ、今後、氏族的メシヤとして百六十家庭を祝福した人は、一つの一族を中心として、それを自分の一族と連結させて総蕩減献納式をして、その基盤の上で百二十代の先祖を祝福してやることができるのです。こうすることによって、百六十家庭は先生の時代であるために、百二十家庭さえすれば統一天下圏に入るのです。十二代、七十二代、そして百二十代、そのようになるのです。それゆえ、百二十代をすればすべて入っていくのです。百二十代の王たちとその長孫、王権を祝福すると同時に、その王権にいたすべての国民を解放させるのです。真の父母と神様が許すのです。

今後デモをしなければなりません。何のデモをするのかというと「真の父母を誇り、真の家庭を誇り、真の血統、真の純潔を誇る」デモです。そのように御父母様がこの地上に来て目的を世界化させるのと同じように、個人でも家庭、氏族、国家はすべて真の父母を中心としなければならないのです。個人から始まって、家庭的な真の父母、家庭的な基準で真の家庭、家庭基準で純潔、民族基準においてもそうであり、国家基準における真の父母、真の家庭、真の純潔、このように世界化されるのです。

国家基準さえあれば世界化され得るので、真の父母の基準が私たち個人から国家、世界、天宙まで連結し、真の純潔の血統が連結されることによって堕落がなかった解放の時代に入っていくのです。ですからそれを全体清算するためのデモをしなければならないのです。伝道よりも、それをしなければなりません。祝福することよりも、祝福を受けさせることよりも、これをしなければなりません。

そうすれば真の父母に向かって讒訴する者はないのです。サタンも讒訴できず、神様も讒訴はできません。今後、完全に解怨成就、所願成就したという立場で地上天上天国が着地するのです。今後、教会はなくならなければなりません。しかし家庭連合時代が過ぎ去ることはありません。最後まで残ります。そのようなすべてを、千里遠征の蕩減路程を経て、先生の一代で、八十歳まで、六十年代から御父母様は四十年間歩んできたのです。韓国の年齢でいうと、私は今八十歳です。誕生日の前にこれをすべて宣布してしまうのです。

八) 成約時代と天上地上天国完成宣布

（一九九九年四月十一日、イースト・ガーデン）

韓国でも八箇所で巡回講演をして、お母様がエバ国家の日本から、息子の国家アメリカの責任を負って巡回講演をしてきたのです。ですから日本では十六カ都市、アメリカで二十四カ都市、合わせて四十の都市で大会をすべて終えたのです。つまり父母の責任と子女の責任においてすべて失敗したものを、先生が責任を取ってなしてきたのです、それは神様にもできず、キリスト教にもできなかったものを、初めて先生が責任を取ってそれを着地させるための決定をしたのです。

それゆえ、韓国での勝利、日本での勝利、アメリカでの勝利を収めて、長子圏を中心としてカイン圏文明世界の三十四カ国を中心として、キリスト教文化圏が一九四五年に責任を果たせなかったことによって、その四十年荒野家庭カナン復帰路程においても失敗したことをすべてに対して先生が責任を負い、全権をもって再び地上に定着させるという決定をしたのが今回の巡回路程だ、ということを皆さんは知らなければなりません。

今日、先生は「成約時代と天上天国、地上天国完成」ということを宣布しました。家庭完成と、霊界におけるすべての解放を中心として考えると、祝福家庭の中には、既成祝福家庭、法的に契約する契約家庭、そして純粋処女と純粋童貞の家庭があります。三十六家庭の三家庭を代表して、霊界において既成家庭祝福、法的結婚未完成段階で地上と天上に分かれていたものを結んで、霊人祝福をしてやると同時に、霊界でも、霊人で祝福を受けた人は、三日式を通して復帰も許すようにしておきました。

今まで地上で幼くして死んだ霊の中で、十六歳以上になった霊が数百億いるのです。彼らを完全に祝福してあげているので、霊界の先祖が法的結婚をしたように、今まで未成年は天に入れなかったのですが、すべてを祝福してあげることによって、これが十六億双を祝福するということです。

祝福とは、神様の真なる生命の血統を連結することのできる基盤を相続することです。祝福を通して神様の血統を相続した人が霊界にも肉界にもいるがゆえに、神様は思いのままに主管することができるのです。ですから神様の思いどおりに再創造、復帰歴史を今も蕩減条件なしに全権をもって推し進めるのです。ですから皆さんが、そのような信念をもった相対的立場に立てるか立てないかということが問題です。そのような決意した絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準と一つとなれば、一瀉千里にすべてが水平世界に線を引くことができるのです。

皆さんすべてが今後、絶対愛、絶対服従する立場に立たなければなりません。エデンにおける家庭には、自分の所有物はありません。神様と、神様の絶対愛と一つの血統の立場に立った真の息子、娘にさえなれば、宇宙のすべては息子、娘に相続されるようになっているので、すべてが私のものとなるのです。愛によって一つになれば私のものとなるのです。

皆さん、所有権というものが、すべて自分の財産だと考えてはなりません。所有のうちで最高のものは神様の愛であり、神様の愛を受けることのできる息子、娘の家庭であるということを知らなければなりません。それが一番です。それを失ったがゆえに、すべてを失ったのです。それは探せば取り戻すことが

できます。皆さんがその愛を中心として、そのような家庭を築くためには、所有権のない完全な無から創造されて、理想と一つとなる絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基盤を連結させ、本然的なものをもってこのサタン世界でも完全に拒否するような立場になければなりません。

アダムとエバが失ったものを、これからは家庭を中心として真の父母との血統的関係を、真の愛を中心として見いだすことによって、完全に復帰することができるのです。それゆえ皆さんは今、財産だとか、所有といったものをもっていてはならないのです。神様を中心として、血統を中心として、神様の愛を中心として一つになれば、神様のものがすべて私のものとなるのです。

先生は世界的メシヤ、世界的父母として、国家的父母と氏族的父母と家庭的父母を配置したので、これらすべての国家的メシヤ、氏族的メシヤ、家庭的メシヤは、先生と一つになって大移動をしなければなりません。そして本然の地を求めて入り、本国を創建し、そこで氏族的に拡張して世界を求めていかなければならないのです。そのような道を経ていかなければならないので、大移動をしなければならないのです。

今回の二月七日の祝福は、韓国の責任、日本の責任、アメリカの責任、カインとアベルすべてが失敗したものを、先生が軌道を修正して、先生が全権、勝利圏をもってくぎを打ち込むという行事です。この「真の家庭世界化前進大会」がその復興会です。

さあ、先生がどれほどすごいのか見てください。今回の祝福式で、「地獄の門を開けて殺人魔までをも祝福してやる」と神様が言うことはできないのです。「早く地獄の門を開いて天国へ来なさい」と言うのです。死んだ人の中には、統一教会に何年間も反対した人もいるのですが、そのような人までも霊肉を中心として霊肉結婚して、三日行事まで、地上で三日行事までせよというのです。それを、韓国からアメリカに来るときに、一九九九年三月十三日に承諾してきたのです。

聖人になれる人、地獄にいる悪の側の人、聖人と殺人魔まで解放するのです。その原則において、統一教会を信じる人ならば、統一教会にこの上なく反対していた夫でも、あるいはまた、自願する人を連れてきて、地獄にいる人までも解放し、祝福してやることができるというものです。そのようなことが起こるのです。

聖人と悪人を一つにするという原則があるので、結婚もできずに死んだ哀魂が大きくなって十六歳以上になった人を、これから解放してやるのです。そのような人までも祝福してあげるのです。先生が地獄の門を開いて、すべての人の前で祝福してあげることによって神様の血族的権限を認めることにより、サタンは完全に後退せざるを得ないということを知らなければなりません。革命の中でも、このような革命はありません。

今日、み言と共に世の中が変わり、霊界が祝福家庭によって処理され、三日行事までも思うがままにして解放圏ができたので、サタン世界の血族根絶を行って、霊界肉界の解放

圏、神様の全権によって入ってきたということを知らなければなりません。

九) 真の御父母様の東西洋（地球星）勝利祝賀宣布

（一九九九年五月三十日、ベルベディア）

あなたの怨恨の根源となったサタンの血統を根絶することのできるこの時代を迎えさせてくださったことを知り、このことを知って今まで身もだえして闘ってきた三億六千万双の祝福とともに、今や残されたすべての男女たちの祝福を霊界と肉界で完成することによって地球星全体を新しく天国化しなければならない責任的な素行を背負ったこの統一家の祝福を受けた群れを、天が守ってくださったことを感謝いたします。

この者たちを代表して先頭に立って息絶え絶えの受難の中で一人、真の父母としての面目を立てるために今まで個人的な闘争、氏族、民族、国家、世界、天宙、天上世界の心情的怨讐であったサタンを追放するときまで闘いながらやってくるのに、失敗することを心配しながら保護して、一線に立って共に協助してくださったお父様の前に心より、心より、心より感謝いたします、お父様。

このように苦労した家庭を中心として三億六千万双を祝福することによって、四億双以上の祝福家庭を中心として、神様を中心として、これが堅固な城のような先陣となり、サタン基盤、霊界と肉界の地獄解放圏を宣布されて、あなたが自主的な権限を回復することのできる宣言の日々を通して天が協助し、勝利の基盤を真の御父母様と共に、祝福家庭と共に成せるようにしてくださった恩賜を心より感謝いたします。

その基盤の上に、今年においての昨日、一昨日まで（一九九九年一月十七日～五月二十八日）に終わった、父母様を中心とした八十カ国巡回の大いなる天の役事を勝利の権限をもって一方通行で目的地にまで一息に走って循環勝利することのできるその日々を記念して、パンタナールにおいての天宙史的な解放とともにこの祝福の基盤を中心として、御父母様が精誠の八数を中心とした八回の韓国、十六回の日本、二十四回のアメリカ、三十二回の世界、八十カ国を中心として、八数を合わせる四位基台の倍数、アダム家庭の八数、ノア家庭の八数を失ったことを世界的家庭の上でこれを再び回復するための最後の清算のために、このような大覚醒運動を宣言しながら巡回講演を成功的に終わることができました。

このような昨日、一昨日までの勝利の権限をもって帰ってきて、歴史的なこの中心の立場であるベルベディアで「真の父母東西洋（地球星）勝利の宣布」のできるすべてのことが言葉だけでなく、このような城壁が根源となって善悪を分別して高低を推し量ることのできる一つの盾としたので、これを中心として今後の統一家のすべての祝福を受けた者は堂々と天の圏の中に天の代身となった国家の国民として責任遂行にはばかることなく、前進に前進を誓うことのできる群れとなることができるようになったがゆえに、万福の祝福のために地上拡大の勝利の権限として真の御父母様の勝利の権限の上に連結させてくださるように懇切にお願い申し上げます。

そうして天上世界と地上世界に天地父母の勝利の解放圏を立てることによって、あなた

の愛の主権の理想を万宇宙に宣布して旧約時代の万物の祭物の恨を踏み台として、新約時代の子女の祭物の恨を踏み台として、成約時代の父母様をかけてこの恨を踏んで、ただお父様のみが、創造主のみが主人になられ、サタンの讒訴条件を完全に全廃した勝利の覇権をもち、愛の王になってくださるようにお願いいたします。

地上に平和をもたらすことのできる勝利のこの日とともに、天上世界の解放をもつことのできるこの日を真の父母の名によって願いますので、受けて実践されることを万世に祝福し、勝利により、前進されることを懇切に願いながら、天上世界と地上世界に神様と真の父母のみ名を中心として万民と共に万物を合わせた勝利の覇権国家へと、前進を誓うことを宣布いたします。

万世の恨と嘆息を、解放圏をもつことによって真の父母の名によって天上地上の真の父母圏全体を身代わりしてこの勝利の日を宣布いたしますので、万世の勝利の主人公になってくださいませ。アーメン！　アーメン！　アーメン！（一九九九年五月三十日、ベルベディア聖地）

十) 真の御父母様天宙勝利祝賀宣布

（一九九九年六月一四日　ソウル）

神様！　きょう一九九九年六月十四日午後一時十五分を期して、ここに立っている真の父の名と真の父母の名を代身して勝利された天宙解放を宣布し、五月三十日には「真の御父母様東西洋（地球星）勝利祝賀宣布」をしたその基盤の上に、きょうは天地を代表した真の父母の勝利圏を中心として勝利歓迎宣布をすることのできる、とてつもない歴史的な時点を迎えました。

その間、天の前に人類の先祖から犯罪を犯した悲しい歴史を残したすべてのことを神様の胸に埋めたまま、誰も願いを、願いをかなえることのできない恨の心情を抱えてこられた父を私は知っております。その前で讒訴し呪いながら嘲弄したサタンを見つめる神様の心が、どんなに曲折が多かったことかを私は知っております。神様が、本然の堕落していない完成したアダム家庭を中心として神様の血筋が連結された愛の氏族圏を編成され、家庭と民族、国家と世界、国を経て世界の地上に地上天上天国の出発をされようとした理想は、完全に水泡と消えてしまいました。

サタンが屈服することによって、サタンの立場のすべてのものを自由自在に神様が創造権限をもって重ねて収拾することできる主体的な能動行使を施行することのできる時代が来たことを宣布し、地球星解放圏を宣布し、きょうを迎えては真の父母様の天宙勝利祝賀宣布の日を基盤として縦的、横的な基盤の上に、縦的な基盤として天宙真の父母勝利祝賀宣布の時間を迎えさせてくださった恩賜をお父様！　心より感謝いたします。

お父様、これからあなたの指導の前にサタンが強制的に首を絞め、死刑場に引きずり出して脅迫し、脅しによって地獄に行ったこのような時代とは反対に、霊界で祝福を受けたこの家庭たちが自分の後孫のところに行って強制的にでも全部に薬を与え、病気にしてでも地獄に連れていくのではなくて、天国に連れていくことのできる自由解放圏時代を迎えることができたがゆえに、全世界でさまよっているすべての一族、氏族たちを連結させて

国家を収拾し、あなたの愛の血縁を中心として永遠の愛の主権の前にあなたの血族であり得る眷属圏を超国家的に形成し、万民の解放とともに天上世界の解放とともに真の父母の解放、人類の解放、神様のサタンまでも哀れまれた基台の上に、僕の立場をもう一度つくることによって本然の創造理想をなした以上のすべてのものを解放することのできる時代を真の父母が父の権限の前にこれを奉献し捧げますので、その実権的な変わった覇権を通して、正義の判断を中心として地上再臨、天上昇天し、自主的な主管の善の愛の王権を立て、万王の愛の永遠の愛の王権を立て、万王の愛の永遠な永世をつくってくださり、相続させることのできる愛の永遠の王となってくださいませ。

真の父母の地上にその統治を受け、天の前に孝子の道理、忠臣の道理、聖人聖子の道理を行く道を教示して、万民があなたの血族と眷属の立場となり、万代の祝福を受けた天国を主管し地上天国、天上を相続した後継者としてはぐくみますので、この特権的な富貴栄華を受けてくださいまして、宣布の日として定めてくださり、万事がうまくいき、自主的な善の王権を行使することを真の御父母様の前に勧告、また勧告、また勧告宣布、宣言いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！

先生の生涯というものは、み旨の解放のために生きてきたものです。メシヤの使命は、み旨の解放のために生まれ、み旨を中心として生涯を通してみ旨の完成をすることです。その解放圏というものは天国の解放であると同時に、神様を解放することです。その次には、堕落した父母によって、サタンの血統によって牢獄に捕らわれの身となったのを、このサタンの牢獄世界から解放することです。その次に、嘆き悲しんでいる万物まで全部解放することです。

パンタナールを中心として、最高のところに神様のみ旨を連結させることができるように一九九八年五月十三日から十五日まで特別な精誠を捧げたことがあり、その基盤の上に今年においての五月十四日、天宙解放宣布がありました。その次に御父母様がアメリカに帰られた日を中心として五月三十日、ベルベディアにおいて「真の父母様東西洋（地球星）勝利祝賀宣布の日」を設定することによって横的な立場がみな築かれたのです。ですから縦的なこの宣布（真の父母天宙勝利祝賀宣布）というものは、神様が今や創造した世界の前に心配から抜け出し、エデンの園の家庭からその自然世界のどこに行っても歓迎されることのできる蕩減を、みな成し遂げたということを意味するのです。

摂理の総結論はアダム完成です。アダム完成とは何でしょうか。アダムが責任分担完成を成せなかったというのです。責任分担は世界の伝統的、礎石的基準が、家庭的礎石であり、氏族的礎石であり、民族的礎石であり、国家的礎石であり、地上天国の礎石であり、天上天国の礎石になることのできるすべてのものの礎石が汚されたのです。それを清算しなければなりません。ですから霊界の掃除、地上の掃除、すべてのものをみなしなければなりません。

天使長がエバを主管性転倒させたのも、偽りの愛ゆえであり、エバがアダムを主管性転

倒させたのも血筋を汚したからです。この血筋を汚した人類を子女としている神様は父母の立場なので、宿命的な立場であるけれども不可避的な反対の立場です。神様が逆に立っているというのです。逆に立っている神様は、行くところがありません。捕らわれの身になったということを考えてみてください。神様が人間の世に入ることのできない事実を、誰が知っているのかというのです。神様がこのようになってしまっていいのかというのです。

神様の息子、娘であるアダムとエバは、億万代の一人息子、一人娘です。億万代の一人息子、一人娘を失ったので、神様がどんなに悲しいでしょうか。それだけでなく、愛の伝統として立てることのできる愛の道を失ったのです。愛することができないのです。愛することのできる息子、娘に会っても愛することのできない、愛の道が切れてしまった、そのような神様の悲しみを誰が解怨してあげるのかというのです。アダムがそれを解怨してあげなければならないのです。

皆さんにおいて、これからは、これ以上苦労はありません。蕩減がありません。ただ一つ、絶対信仰をもたなければなりません。神様が天宙を創造するときの出発が絶対信仰です。絶対信仰をもって造った基盤の上に、未来の絶対愛の型をつくって愛の完成体を成すことができるので、絶対信仰をもちながら絶対愛を投入するのです。その価値の愛は、自分よりも億千万倍立派であることを願うこのような立場なので、投入しては忘れ、投入しては忘れる歴史の蕩減復帰を繰り返しながら数千万年、アダム完成の家庭を探してこられた神様の愛です。その神様の苦労を知って、その苦労された神様を解放させなければならない、誇り高い家庭にならなければなりません。

真の御父母様の天宙勝利祝賀宣布をすることができた事実を見ても、勝利の祝賀を宣布できるこの事実は、神様が真の父母の前に、天地すべての前に感謝することのできるこのような条件を立て、その感謝の心が創造し、願った希望の神様の心を全部越えに越えて、内外共に完成したアダム以上の立場を固めるその世界を根こそぎ受け継いだその立場で、新しい四次アダムと出帆を願うのが、本当の勝利の立場に立った神様の心と真の父母の心であることを記憶しなければなりません。

アダムの責任が神様を解放し神様の愛以上のすべての心情と精誠の心でアダムの何十倍、何百倍の完成の道を超えたその立場で家庭を中心として孝子、国を中心として忠臣、世界と聖人、聖子の立場に立って、神様の前に全体の相続を受けなければならない御父母様の生涯路程です。そのためには、すべてのものを捧げなければなりません。これを捧げて神様がそのような立場で勝利、万世の勝利、永遠の勝利、永遠に存在する神様がそれ以上の勝利を願うことのできない立場に立って、相続してあげるとき、堕落の恨を大きく越えることのできる新しい世界の勝利の神様の権限を行使することができると見るのが総結論です。そして汚されたサタンの血族は跡形もなくきれいに整理しなければなりません。

一) 天地父母天宙統一解放宣布（九・九節）

（一九九九年九月九日、ソウル）

愛するお父様、きょうは一九九九年九月九日、御父母様の七十九歳に合わせて九月九日九時九分九秒を中心として天地に恨として引っ掛かっていたサタンの完成数である九数圏を天上世界から地上世界に連結されたすべての地上天上天国に連結された地獄と天国の堕落の因縁によって拘束されているすべての全体は、サタンを中心として連結されていることを説破いたしました。

その内容が腹中時代からふさがり、幼児時代、兄弟時代、婚約時代、結婚時代、父母の時代を経て、おばあさんの時代と女王の時代まで、男性世界、女性世界共に血筋を中心として連結されなければならない一体的理想圏がサタンによって心と体の中で境界線、幼児時代、兄弟時代、婚約、結婚、夫婦、父母、祖父母、王権まで全部がふさがっていたこのすべての事実が善と悪の闘争歴史によって、多くの天側に立ったアベル的な兄弟圏が血を流してきましたし、このアベルを中心としてカインを逆に屈服させてアベルが天の国の長子権を探し求めてサタン世界の子女たちを次子権として自然屈服させなければ神様の善の血筋が汚された血統の因縁を正すことのできない恨の歴史であることを、統一教会の教会員たちははっきりと知っております。

偽りの父母によるこのすべて全体は、九数に該当するものであり、一から九数までは神様が嫌うことによって、神様は旧約時代に十分の一の条件を中心として、サタン数九数を清算するための摂理歴史を成してきたことを私たちは知っております。このすべての九数、サタン数の最高の頂上数を個人的に屈服して、氏族、民族、国家、世界的に屈服するだけでなく、地上世界と天上世界、真の父母を中心として地上世界の整備とともに天上世界の氏族的な真の父母、神様を中心とした一体となられて、縦横のサタンが汚した地上地獄と天上地獄、地上のすべてのふさがっていた壁を崩すことによって、地上に愛を中心として主流の天上世界の天国まで直行することのできる道を連結させることのできる真の父母の涙は、立体的なものを経て、個人的時代を過ごし、家庭、氏族、民族、国家、世界、家庭的限界線を逆さにして神様的最高の家庭理想を地上に開くことによって、天が解放され、神様が自主的にすべての世界を主管することのできる時代が目の前に近づくことによって、天上世界では七・八節を中心として真の父母天宙安息圏を宣布して以来、満四年が過ぎたので、これから四年を迎えて二千年代を中心としてサタン世界のふさがっていたすべての九数を完全に清算しなければ、二千年代を越えることはできません。

あす十数を足すことによって一九九九年が二千年を迎えることのできる数になることによって、神様が引っ掛かることなく堕落のない本然の創造理想的アダム家庭以上の愛を中心として、縦に個人から家庭、氏族、民族、国家、世界、終わりまで戻っていって、地上世界と天上世界に連結することによって球形的統一世界を探そうとするその本然のみ旨が解放と共に万歳を叫びながら天地解放圏をもつことのできる六月十四日を中心として、天地父母天宙勝利祝賀宣布式をもった基盤の上に、きょうのこのすべての天地父母天宙統一解放圏を宣布することができたということは、これから南北統一の運勢が来るようになったのです。

東西文化の格差、東洋では精神的文化の基準であり、物質文明の西洋文明は互いに闘争的概念があったものが、一つにならなければ

ならない東西文化の統一であり、南北の貧富の格差を統一することができ、兄弟の愛の父母を中心とした家庭理想統一的縦横のすべての愛の理想、天国まで解放圏をもって地上世界の地獄全体、天上世界の地獄全体、地上世界天国全体に顕現、天上世界全体に顕現することのできる自由解放圏を迎えた最後の決定的な勝利の権限を天宙に宣布することのできる日をもつようになりました。

きょう以降から主なる神の名に従って神様が宣布するこの宣言の前に、絶対服従、屈服することによって、今まで天の一八〇度の方向を一八〇度善の方向に絶対信仰、絶対愛、絶対服従の因縁をもつことによって、エデンにおいて悪の先祖、天使長が絶対信仰をもってアダムを愛し、絶対愛、絶対服従を天倫の大主体父母、相対父母、天地父母に反対したことをこれから蕩減復帰して、絶対的な立場に立って全人類と万物を絶対信奉すると同時に、絶対愛と絶対解放圏に従って、絶対服従することによって堕落した天使長まで、地獄まで解放することのできることを真の父母の名によって、この九・九節を宣布しながらこの内容を明らかにし、天宙に宣布いたしますので、悪の世界、善の世界は神様と真の父母と一体化して善のみを残し、善のみが動くことのできる、神様の理想地上天上天国天運時代、解放時代を迎えることのできるように許諾することを今、真の父母の名によって宣布いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！

文総裁は世界的版図をもっています。アメリカは天使長国家で、韓国はアダム国家です。父と息子が一つにならなければならないでしょう。今までの復帰歴史は母子が協助してきましたが、今は母子協助時代が過ぎたのです。今までの蕩減歴史で母子が、母と息子、娘が犠牲になって復帰しましたが、このすべてのことが九・九節を宣布して、南北が統一できる運勢に入り、統一される日には父子協助時代に入るのです。母親はいなくてもいいのです。母親はいくらでも立てることができます。アダムが堕落しなかったら、エバはいくらでも代えることができたのです。

人知れぬ思いを一人しながら、韓国の未来の統一の理想世界と天上天国にどのように連結させるかという問題を誰が知るでしょうか。牧師が知っているでしょうか、長老が知っているでしょうか、誰が知っているでしょうか。宗教圏では分かりません。それを真の父母のみが知っているのです。無知で堕落しました。堕落した父母は無知の愛で堕落しました。これが偽りの愛であり、偽りの生命、偽りの血統を残しました。これを真の父母は完全に知っています。

神様が誰であり、歴史はどのように流れてきて、民族的帰結はどのようになり、良心的分裂をどのように統一するのか。個人統一、家庭統一、氏族、民族、国家、世界、天国、神様まで、私の手で解放させようというのです。偽りの父母が神様を捕らわれの身としてしまったので、真の父母は解放的主人として神様を解放するのです。サタンの王権をなくして、長子権、家庭権、王権を取り払い、神様を天上世界にお連れして先生が整えた基盤に入ってきて家庭統治、氏族統治、民族統治、国家統治、世界統治まで完結させなければならない責任があるので、そのことを今でもしているのです。

歴史上で数多くの民族、氏族、血族がみな三六〇度位置が違うのをどのようにして天国に入れるようにするのでしょうか。全部門を開けておいたのです。海になるためには滴を落として、支流を経て、大流を経て、大きな川を通して海まで行きます。ところが、今は大きな川は逆に流れるのです。逆に流れますが、すべて海の水は無限な水があって逆に流れるのです。あの山深い谷間まで、愛の波、真の波、正義の波、理想天国のユートピアの波が流れて三度だけ入ったり出たりするだけで自然に浄化されます。三年路程さえ経ていけば、地上天国は目の前に現れるのです。このような国家観、大運勢転換時期に処しているということを知らなければなりません。

太陽は一つですが、太陽の光は宇宙に満ちあふれているのです。

真の父母は誰に必要かというと、個人に絶対必要です。体、心の闘いをやめさせることのできる教えは真の父母にしかないので、真の父母は数多くの人間、個々人に絶対に必要です。

それでは、真の父母は絶対的に誰のものでしょうか。真の父母は誰のものでしょうか。私のものです、私のもの、一度言ってみましょう。真の父母は誰のものでしょうか。私のものになった男性、女性は、真の父母の血族を受け継いだ息子、娘です。そこにはサタンの血筋はつゆほどもないのです。つゆほどもありません。真の御父母様は絶対的に誰のものですか。真の御父母様を絶対私のものだという人は、個人絶対完成者だということです。分かりましたか。

真の父母は私のものです。真の父母を私のものにするためには、この地球星を売っても買わなければなりません。地球星でも足りません。地球星と霊界と肉界を売っても買えないのです。今日、特別に決意しなければならないことは、真の御父母様は絶対的に私のものだ、唯一的に私のものだ、普遍的に私のものだ、永遠的に私のものだ、という決意です。

皆さんはこれから九・九節を中心として「総蕩減献金」をしなければなりません。「総蕩減献金」とは何をするのかというのです。怨恨と解放式です。解放式をしなければなりません。神様の恨を解いて解放をしてさしあげなければなりません。それだけでなく、天宙を解放して、皆さんを解放させることのできるのが「総蕩減献金」だということを知らなければなりません。

一九九九年九月九日、九・九節宣布以降、十四日午前七時十五分を期して、今までの真の父母の名によって祈祷したものを自分の名前で祈祷する時代に入りました。天宙統一解放圏を迎えて第四次アダム圏の自主自由の解放の時代に入るからです。

祝福家庭の場合（一世二世を含む）

〔例一〕夫（妻）が祈祷する時：真の御父母様の勝利圏を祝福によって受け継いだ祝福家庭誰々（祈祷者の名前）の名によって祈祷いたします。アーメン。

〔例二〕子女が祈祷する時：真の御父母様の勝利圏を祝福によって受け継いだ祝福家庭（父親の名前）家庭の息子、娘（息子、娘の名前）の名によって祈祷いたします。アーメン。

〔例三〕大衆の前での祈祷の時：真の御父母様の勝利圏を祝福によって受け継いだ祝福家庭（祈祷者の職責）、誰々（祈祷者の名前）の名によって祈祷いたします。アーメン。（教区長の場合：〇〇教区長〇〇〇の名によって祈祷いたします。）

祝福家庭でない場合は前と同じように祈祷します。

〔例〕真の御父母様のみ名によってお祈りいたします。アーメン。

二) 第四アダム時代（二十節）宣布

（一九九九年十月十日、ウルグアイ）

一九九九年十月十日の十月の十数は天を中心とした再出発数を意味し、十日の十数は地を中心とした再出発を意味します。それで十月十日を「二十節」として宣布するのです。

三　ジャルジン七大宣言と新エデン創建

一) 第一宣言：新希望農場（New Hope Farm）宣言

「神様が人間と万物を創造されるとき、絶対信仰、絶対愛、絶対服従をもって造られました。神様の対象体である私たちも神様に絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなければなりません」（九五年四月三日、ジャルジン、新希望農場）

エデンの園で失った絶対信仰、絶対愛、絶対服従を取り戻すために、サタン世界を完全に否定してきたのが、神様の復帰の使命であることを知らなければなりません。旧約は割礼を通して、新約はもちろん洗礼をしてあげることによって、不信によって汚されたすべてのものを洗い流すのです。成約は何でしょうか。愛です。犠牲になることによって、自分を投入して忘れるのです。神様と共に投入して、堕落した世界を再創造しなければならないのです。神様の息子、娘になろうとするならば、この世に自分を投入して早く復活しなければなりません。ですから血統転換の祝福を受けなければならないのです。また祝福を受けたら、その一族を犠牲にしても早く国を収拾しなければなりません。絶対的な信仰、絶対的な心情、絶対的な服従ですので、それは絶対的な行動です。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従することのできる人になりさえすれば、統一教会の原理を知らなくてもいいのです。そうしてその上に絶対的な血統復帰、所有権復帰、心情復帰を地上で成して越えるようになると、その人は天の国の民になります。

レバレンド・ムーンが世界的に百六十カ国家を中心として自由民主世界および共産世界を収拾して既に勝利の覇権を握り、南半球に来て、地上天国、理想王権の世界を建設できる時運が始まりました。これから皆さんは先生の代身であり、神様の代身です。先生がどこに行ってもついてきて、天がどこに行ってもついていかなければなりません。きょう一九九五年四月三日を中心として「新希望農場（New Hope Farm）」を宣言します。

二) 第二宣言：絶対、唯一、不変、永遠の理想家庭

「神様は絶対、唯一、永遠、不変であられます。私たちは神様の子女であるので、神様の属性に似て、絶対子女、唯一子女、永遠子女、不変の子女にならなければならないし、絶対夫婦、唯一夫婦、永遠夫婦、不変の夫婦として生きなければならないし、絶対父母、唯一父母、永遠父母、不変の父母にならなければならないし、絶対家庭、唯一家庭、永遠家庭、不変の家庭として完成しなければなりません」（九八年八月七日、ジャルジン、新希望農場）

神様を中心として真のすべての被造世界の本質的愛の、理想の愛をもっているので、絶対夫婦、絶対子女、絶対兄弟、絶対父母を中心とした家庭にならなければなりません。これが第二ジャルジン宣言です。絶対信仰、絶対愛、絶対服従、神様の属性とは何かというと絶対属性、唯一属性、不変属性、永遠属性です。そのような属性をもっているので、その属性は四つの必要とするすべての全体相対を願われるに違いないのです。自分よりも良いものを願われるがゆえに、より絶対、より唯一、より永遠、より不変、このようなものを願われるのです。

皆さんは神様を、絶対父母、唯一父母、永遠父母、不変父母として仕えてみたことがありますか。そのような父母、起源者がいて、その起源者が見えないその父母と、見える夫婦としてのアダムとエバになったのですが、アダムとエバも見える絶対、唯一、不変、永遠の神様の代身者にならなければなりません。

創造主と言い、万宇宙の根本だと言い、すべての存在世界の主体となる一つの中心があるのですが、その中心が願う理想世界は、この地上の存在世界ではないのです。神様が願われる世界は、天上にあるある理念の世界でもなく、だからといって外的な世界でもないのです。その世界は心情の因縁を中心として動くことのできる情的な流れの前に、全体を巡って「息子であり、娘である」と呼ぶことのできる世界です。ですから神様がいくら立派な方で、創造主で、絶対者であるとしても、やはりそのような内容をもった人を願われるということを私たちは否定できないのです。

歴史は真の人、真の国家、真の世界を指向しています。私たち自身も真の存在になろうとする意識をもって目指しています。それでは真の因縁の中で、標準になる因縁とは何でしょうか。神様と人間の間に結ばれた、父子の因縁です。この因縁から始められた心情は、どんな存在の権限によっても曲げることのできない永遠で不変で唯一なものです。また、この心情の権限は絶対的なものです。

ですからこの権限をもって現れるようになるとき、すべての存在物はその存在の前に頭を垂れるしかないのであり、この心情の権限をもって動くようになるとき、万天下はそれに従って動かなければならないのです。これが宇宙の鉄則です。もしそうでないとすると、私たちが願う本当の目的を成すことができず、一つの絶対的な因縁を結ぶことはできないという結論が下されるのです。

人類と天倫の前に終わりの日があるとするならば、その終わりの日は、どのような日になるのでしょうか。その日は神様が人間に対

して「お前は永遠に否定しようとしても否定することのできない私の真の息子、娘だ。私の息子、私の娘、今こそ恨をすべて解いた」と言うことのできる、安心して安堵することのでる、安心して楽しむことのできる日でなければなりません。そのような息子、娘がこの地上に現れる、その日その時が来てこそ、神様の新しい理念世界は始まるのです。

三) 第三宣言：第一、第二、第三の創造主宣言

「神様は第一創造主としてアダムとエバを創造され、アダムとエバは第二創造主として私たちを創造しました。それゆえ、私たちは第三の創造主になるのです。神様は息子、娘（アダムとエバ）を失った悲しみも大きいですが、孫をもつことのできなかった恨もあります。三代が第一創造主（神様）のような心情をもって、一つ家のもとで共に生きなければなりません」（九八年八月二十一日、ジャルジン、新希望農場）

天は「ため」に生きる人に「滅びろ」と言うでしょうか、「栄えろ」と言うでしょうか。保護するのです。統一教会の教員たちはよく知らなければなりません。誰よりも「ため」に生きる人は中心存在になるのです。これは天理です。

朝御飯を食べるときには、夕べの怨讐の名前を忘れろと言うのです。昼食を食べるとき、朝の怨讐の名前をみな忘れるのです。彼らのために救ってあげようとする神様の心の道に従えば天運がその後ろから保護し、背こうとするときには何度も何度も振り返って、怨讐を怨讐と思ってはいけないのです。先生は怨讐の名前を全部忘れてしましました。

先生は、怨讐の子女たちに学費がなければ、学費を送ってあげました。食べることができなければ、食べるものを送ってあげました。誰だか私も分かりません。そのような心情があるので今日、世の中を正し、神様を中心として天下を収拾することのできる中心、永遠の中心が決定されることのできる事実が、このような論理で結論づけることができるということを知らなければなりません。

「ため」に生きて滅びた人はいません。「五千年の歴史の中で、生きている聖人が文総裁だ！」と、そんなことは聞きたくもないのに、そう言う人が多いというのです。直接会ってみると、生きている聖人として侍らせてくださいと、そう言う人に多く出会いました。誰がそのように教えたのでしょうか。自分の心に、高いその何かが関係して、先祖とか、通りがかりの天国に近い忠臣の家系の中で名前を残した人たちが訪ねてきて、夢の中で、思いの中で、投入して、そうすることのできる行動の結果を招来したという驚くべき事実を忘れてはいけないのです。

四) 第四宣言：宿命的提案解怨宣言

「神様と私たちは父子の関係です。父子の関係は宿命です。父母のすべての恨と問題を子女のみが解いてあげることができるのです。それが子女の道理なのです。入籍した家庭は二度と不信したり背信することはできません。神様と私たちは父子の間で共鳴統一されなければなりません」（九八年八月二十八日〈陰暦七・八節〉、ジャルジン、新希望農場）

父母の愛は公平でなければなりません。ですから父母は長男、長女がいれば、自分の代わりに愛することのできるように、お兄さんたち、お姉さんたちが、その弟妹たちに尊敬されるように、つなげてあげなければならないし、そのように結んであげなければなりません。それができなければ、家庭に不和が起こり、兄弟の紛争が起こります。それで教育をしなければなりません。

ですから宿命的提案解怨！　それがアダムとエバ、個体復帰の完成をしなければならない神様の素性を中心として、四大原則は絶対男性、唯一男性、不変男性、永遠男性、また絶対女性、唯一女性、不変女性、永遠女性だというのです。そのような男女になって祝福を受けなければなりません。真の夫婦にならなければなりません。

親不孝の中の親不孝です。その方が求めて成そうとした家庭において孝子を願っていたのが、失った長子ですが、それを成すことができませんでした。このような長子の伝統を受け継いで国を建てるはずだったのが、国ももつことができませんでした。これを世界のために、世界ももつことができませんでした。地上の天国を成して天上天国をつなげることのできる、これをもつことができませんでした。

すべてのことが宿命的課題を成就することのできなかった、という事実が分かりますか。これをすべて解決することのできる方法が、このジャルジン宣言です。これは絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。

神様は私たちの父母です。この世の堕落した人間も同じように、父母は、愛する主体は自分の愛する相対が自分よりも優れることを願います。この天理原則が、根本が神様と父子の関係なので、神様を中心として夫婦関係、父子の関係、アダムとエバは神様の体となり、神様的夫婦になるのです。

父の精子は骨です。骨を中心として母は肉です。精子が母親の卵子と合わさって構成されて生きることによって、母親の卵子が構成されるのです。骨！　骨に対するものがどのように生まれるのでしょうか。父親の赤ちゃんの種の根本がプロジェクトです。根本の計画というものです。それが母親に入って、母親の肉を受けて大きくなって、みな形を整えて本来の父親の赤ちゃんの種としてあった構成的、その実体がプラスになって、母親の腹中で、母親の体をマイナスとして大きくなっていくのです。このようにして初めて、計画されたプログラムの形態に一致して生まれたのが私です。

夫婦の生活に愛の自由があります。そこは制裁のない解放された天地、どこに行ってもそれが拘束されない自由的愛の立場から出発しなければなりません。自由の愛を中心として自由の生命の結合夫婦となって、自由生命の結合を通して自然な腹中生成の過程を経て生まれるのです。そうすると自分に自由があるというときには、これは父母の自由を、愛の自由を尊敬しなければならず、父母の生命的自由、血統的自由の因縁を否定する自由はあり得ません。ですから父母を尊重視しなさいと言うのです。

父母が守ってきた愛を尊重視し、伝統を受け継がなければなりません。それを受け継いだのちに、その上に自由があるのです。木の枝が生きるためには根から、茎から、すべて

の栄養が連結された立場において育つことのできる自由権があるのであって、これを否定する自由はありません。切ってしまえばみな死んでしまうのです。

真の愛の道は順理です。絶対信仰、絶対愛、絶対服従のために生きれば愛が育つというのです。信仰の上に愛の種を植えて、芽が出たので、これを誰が育てるのでしょうか。これはすべて神様自体が、自体を投入できるのです。

コディアックに行くと鮭がたくさんいます。鮭が寒い冬に、十一月に卵を産みます。そのように寒いので、昆虫もいません。小さな魚もいません。すべての魚が暖流を探していくので食べるものがありません。ですから母親、父親が餌になるのです。父母、先祖は、子供のために犠牲になるのが当然の原則です。動物世界は今まで伝統に従って数億年が過ぎても続いているので、人間はさらにそうしなければならないのに、それさえもできずにいるので、人間は動物よりも劣っているという話になるというのです。また、愛することも同じです。勝手に愛することをしません。鳥も真の愛の種に従います。勝手に愛し合わないというのです。カップルになったら、それが絶対的です。

これから家庭法をつくってあげなければなりません。全部規範をつくるようにと私が指示しています。これから私が霊界に行っても、霊界に行って国を立てるようになると、その国を立てる法に従って、先生がいなくてもその法を先生の代身として守って一つになっていけば、天国と連結できるのです。

自分中心、個人主義、自分の存在意識を主張できないのが「私」だということを知らなければなりません。私自身を主張する前に父親、母親がいたし、父親、母親の生命から父親、母親を通した血統があったし、その上に愛がありました。血統を尊重し、歴史を尊重し、先祖を尊重し、先祖たちを整えることのできる因縁が何かと言うと、父母なのです。父母を尊重し、その次に神様を尊重し、神様の上に何でしょうか。愛です。

絶対愛、絶対父、絶対父母、絶対父母を通じた絶対愛から絶対生命、絶対血統が、その母親、父親に集まっています。ここから出てくるということを知らなければなりません。それで私は血統の代表者であり、母親、父親の生命体の代表者、母親の愛の代表者だというのです。その代表者として受けたので、それを拡大することのできるのが生まれた本位の目的であって、これも成さずに自由行動して、自分の欲望を立てて勝手にしては亡国の種になるのです。

宿命的な課題と運命的な課題である、すべての父子の関係の因縁が一つにならなければならないのですが、何を中心になるのでしょうか。真の愛を中心として、骨の髄から、赤ちゃんの種から。それで生まれて今、体と心をもって大きくなってこの世をすべて抱いて、父親も抱いて母親と一つになるのです。父母様が言うそこには絶対信仰、絶対愛、絶対服従、おじいさんが言うときには、孫も絶対信仰、絶対愛、絶対服従。父親も絶対信仰、絶対愛、絶対服従。同じです。ですから永遠に伝統的に相続されていくのです。宿命的提案解怨！　このようにしてこそ第八番目の誓い

においての、成約時代を迎えて絶対信仰、絶対愛、絶対服従による神人愛一体、神様と人間の一体、愛による一体となるのです。一体を成して、その次にはそこから地上天上天国の解放圏です。

五) 第五宣言：家庭的四・四節宣布

「地上世界の完全完璧な摂理完了時代を迎えるようになった。

一、霊界でも四位基台が成されて地上でも四位基台が成された。

二、父母と子女が四位基台を取り戻し、理想家庭の種を蒔いた。

三、一世代と二世代が一つになった。

四、南（パンタナール）と北（アラスカ）が一つになった。（天と地が一つになった。）

五、サタン血統が断切され神様の側として血統が転換された。」

（一九九八年九月八日〈四・四節〉、アラスカ、コディアック）

きょうが一九九八年であり九月八日ですが、このすべての数字を足すと四十四数になります。アダムの四位基台、子女の四位基台、相対の四位基台を越えることのできる九数はサタン数であり、八数は出発数です。「十九」も二十の前です。全部サタン数だというのです。ところで全体、全般、全権、全能の時代、神様の思いのままにすることのできる時が来ます。サタン世界のすべてのものが一つの世界になるのです。それでは四十四数はいつ現れるのでしょうか。歴史的な宣言をしようとするのです。一九九八年九月八日の合計四十四日、それできょう四・四節を宣言するのです。

いずれにせよ帰らなければなりません。それで北の方のコディアックに行って二世を中心として四・四節をつくるのです。ここ南の方では国家的メシヤ、北の方では母の国のカイン的メシヤ、このように分かれるのです。これを連結して心情的なものを中心として、その前には二世が立つのです。ここにプラス・マイナスがあり、プラスがあればマイナスをくっつけなければなりません。北の方に入って将来二世たちがプラス・マイナスに連結されて初めて、そのとき四・四節を宣布することによって、アダム家庭の四位基台着地、息子、娘の四位基台着地をして二人ともみな初めて四位基台が着地することができることによって、天上世界の門を開けることができるのです。ですから、このことを準備するために六月十三日、聖人と殺人鬼たちを祝福してあげたのです。みんな兄弟です。神様のことをサタンが打ってしまったので、神様が思いのままにするのです。それで解放的地上天上天国になるということを知らなければなりません。

六) 第六宣言：総霊界霊人解放式 ・・ 全体解放統一式

「すべての霊人たちは何の功績もなく祝福を受けたので、地上の後孫を助けて地上天国建設を助けなければなりません」（一九九八年十月五日〈陰暦八月十五日〉、ブラジル、サンパウロ）

愛するお父様！　きょう一九九八年十月五日、この日は韓国では秋夕であり、先祖に侍る記念の日です。今から韓国の清平とこの西洋社会のサンパウロの聴衆と天地を巡ってすべての被造万物とすべての霊界にいる霊人たち、先祖たちと千万聖徒たち、神様をはじめとした地上の愛によって造られた被造万物たちとこの地上に生きている全人類が一致圏をなした愛の決定をもつことのできない神様の恨を解くために、歴史時代の旧約、新約、成約解放完成圏に向かってこられたお父様、悲しかった歴史をみな取り除いてください。

お父様の願いであられた六月十三日に祝福した五大聖人を中心としたその基盤と共に関係している宗団の因縁の霊界に行っているすべての弟子たちと共に祝福を受けたこの群れたちが、これから最後の、転換の一時を迎えなければならない地上に、再び兄弟と共に父母様に侍って神様と共に天上と共に、共に忠孝の道理と伝統にその足跡を踏んでいく、この地上の天使長家庭をこの地に完成したアダム家庭にある地上祝福家庭解放圏の前に同参させてくださり、神様の前に家庭では孝子の道理、国では忠臣の道理、世界では聖人の道理、天地では聖子の道理の愛的因縁を共に相続することのできるように、天の神様と真の御父母様が一つになって、このことが永遠に可能になり、彼らを中心としたその従ってくる弟子と、そのような先祖をもったアダム・エバと共に連結された後代の先祖たちも解放してください。

そうして真の御父母様に地上で侍った本然の完成的天と一体の愛圏血族を中心として、侍ることのできなかったすべてが、地上天上の先祖たちが兄弟の因縁、父子の因縁の本然的創造理想、縦横の決定の愛の一家庭を中心とした宇宙史的な家庭的枠を永遠に定着することのできる宣布の日に、霊界解放、地上解放、すべての家庭が縦横無尽であることのできる自由の往来ができるようになり、共に活動する時代を真の父母の名によってこれからこのすべてのことを一つに束ねて地上着地活動をすることを、全被造万物と共に真なる愛を中心とした神様と真の父母の真なる血統的心情圏を中心とした神様の愛の地上天上天国、永遠な神様の主権勝利のために出動することを真の父母様の名によって宣言いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！（「総霊界霊人解放式」を参照）

七) 第七宣言：天宙的四・四節宣言・・真の祝福天宙化とサタン血統根絶完成解放宣布式

（一九九九年十一月八日、ウルグアイ、プンタ・デル・エステ）

心と体の統一、夫婦統一、子女統一を成さなければならないのです。それで絶対家庭が成されなければなりません。これがジャルジン宣言において第二です。第三、第四まで連結されてその次には四・四節まで連結されるのです。アダム家庭は四位基台完成を通して定着することができませんでした。その次には息子、娘が定着することができませんでした。ところが四・四節を越えて、これからジャルジンに来て家庭訓練をして天国に帰っていくのです。

旧約時代は祭物時代を統一祭物として捧げなければならず、新約時代は息子の祭物を完全に統一祭物として捧げなければならず、こ

れから成約時代は父母の祭物を完全に一つにして捧げてこそ恨の世界に解放と統一を宣布することができるのです。それで今回、神様がどっさり祝福をしてくれると思っているのですが、水道管が太ければ水が多く排水されるのと同じように、皆さんが精誠を捧げて努力したいかんによって、勝利的すべてのパイプが各々天上世界と連結されるのです。このような事実を知って、あらん限りの精誠、精誠、精誠を尽くして敗者になるのではなく、勝世者になることを祝願いたします。

サタン世界の権能がどんなに強くても、神様の権能の時代が来るのです。神様が思いのままにできる時代が来るのです。そのようにできる時代が来て、初めて地上天国になるのです。

神様を解放しなければなりません。それも四数です。旧約時代、新約時代、成約時代、その次には解怨時代です。解怨時代には全体を捧げなければなりません。こうすることによって、それをもらって神様がもっているのではありません。神様が全体を受けて初めてアダムに渡すのです。アダムは受けたものをもう一度神様にお返しして、神様が真の父母の前に渡すことによって、そこから所有権分配が始まるというのです。

四　世界平和統一家庭連合

統一するためのキリスト教時代は既に過ぎました。長子権復帰、父母権復帰を完成したので、キリスト教統一だけでなく、世界統一時代へと越えていくのです。それできょうから名称が統一教会の名を替えて、世界平和統一家庭連合を一九九六年四月十日付で使用しなければなりません。

世界キリスト教統一神霊協会の使命が終わることによって、宗教の使命は終わり、救いを必要としない、人類史上初めて宗教を必要としない新時代に入るのです。家庭連合は家庭を理想家庭にすることによって、神様の創造理想を復帰完成して天的理想世界を立てるものです。

家庭が定着しなければなりません。今まで宗教は個人圏を目標にしたのであって、家庭圏を目標にする宗教はありません。全部出家です。家庭を捨てていきました。時代が違います。どんな宗教でも個人の救いをしたのであって、家庭救援、氏族救援、国家救援という言葉はありません。私たち統一教会は、家庭を中心とした国家救援、世界救援を唱えているのです。

家庭が定着して世界が通じることのできる家庭になってこそ、エデンで願った神様の創造理想の結実が現れるのです。息子、娘を中心として横的に拡大され、それが神様が願った氏族になり、自動的に民族に連結されなければなりません。それで家庭が重要です。すべてのことが世界平和統一家庭連合でみな終わるのです。さあ、世界平和統一家庭連合。一度言ってみてください。世界平和統一家庭連合。その中心は何かというと家庭です。

家庭が世界を代表することのできる平和の道を、統一の道を行かなければなりません。すべてのことが家庭と連合された基準に連結された、ということを知らなければならない

のです。ですから立派な家庭がこれから出世するのです。

これからは家庭中心です。ですから一人で行くことはできません。これから人事処置も夫婦一身です。夫が長であれば妻は副責任者です。その息子、娘がすべて実力基準で優秀であるとき、彼らを重要な部署に家庭的に配置して、一族として配置することができるのです。

これから重要視しなければならないのは世界平和統一家庭連合なのですが、世界を忘れてはいけません。世界を忘れたら、平和になってどうしますか。平和を忘れたら、統一してどうしますか。統一がなければ、家庭を成してどうしますか。家庭は一つの家庭ではありません。連合主管がなければ家庭を成してどうしますか。全部関係しています。連合を考えるとき、統一を考え、家庭を考え、平和を考え、世界を考えなければならず、世界を考えるとき、平和を考え、統一家庭連合を考えなければなりません。一体だというのです。世界の代表主人になり、平和の主人になり、統一の主人になり、家庭の主人になる連合世界の統一天下の主人になるその場に、神様が臨在することができるのです。

五．堕落の峠を越えるためには

一) 父母の道と子女の道は違う

カナン復帰路程では先生についていかなければなりません。かもが大洋を渡る時には親分がもの前に絶対服従です。異議がありません。「飛べ！」と言ったら飛ぶのです。大変でも死んでもただついていかなければなりません。今までそういうことをしてきました。これからは目的地に来てひなを生んでみなこのようになったので、自分同士で互いのために生き愛して一族を成して、その一族自体を愛することができるようにしなければなりません。それが今、この時にしなければならないことだというのです。今まではカナン福地に向かって行く時であり、これからは定着時代に入っていくのです。

カイン・アベルは責任分担を完成する責任がありません。責任分担完成は誰がしなければならないのでしょうか。アダム・エバ、すなわち父母がしなければならないのです。先生にその責任があるので、皆さんができないことを、キリスト教が間違えたことを全部私が責任をもって四十年の間父母の立場で、個人として整備して、家庭として整備して、氏族、民族、国家、世界的に整備したのです。このようにして個人責任分担蕩減復帰、サタンを追放できる塀をつくっておいて、責任分担完成圏をつくったので、そこから新しい世界が始まるのです。世界以上の場で成したので、これから天国が可能だというのです。それで天国創建という言葉、祖国創建という言葉が出てきたのです。これがみな原理的です。

皆さんは天国に行く道を知りません。蕩減の道を知りません。蕩減の道が分かりますか。責任分担を完成できなかったので、責任分担条件に引っ掛かっているのです。責任分担を果たせなかったことにより、サタンが侵入したのです。個人、家庭、社会、国家、世界、または霊界まで全部サタンが侵入しているのです。

欲張ってはいけません。先生を中心として完全に絶対的に一つにならなければなりません。一つの根です。根を引っ張ったら、引かれていくべきなのです。茎や枝は自分の存在意識をもつことができません。主張することができません。二方向はあり得ないのです。一つです。これが勝利的基盤を磨く立場を取ってこそ、東西南北に自由が起こるのです。そうでなくては自由がありません。ですから自由行動をすることができません。

先生が教えてあげたすべての内容が、天国に入ることのできる鍵です。ここに合わなければ全部開けることができません。私があげるキーをもって開けてこそ天国が開くのであって、どんなことをしても駄目なのです。先生のキーは、本質的キーです。金で作り銀で作ったとしても、どんなもので作っても、いくらやっても開きませんが、これはさびた鉄で作って何でもないもののようだけれども開くというのです。誰もそのようなキーを作ることはできません。貴いキーだというのです。

絶対的な信仰をしなければなりません。「真の御父母様を絶対的に信じていく」と言わなければなりません。

二) 子女の道は絶対服従の道である

絶対的に服従しなさい、絶対的に服従するということは滅びることではありません。服従したらどうなるのでしょうか。一つになります。一つになったらどうなるのでしょうか。悪は反発します。完全に一つになっているので悪は反発するのです。それで悪が除去され得るのです。これが原則です。

皆さん全員が、これからは絶対愛、絶対服従する立場に立たなければなりません。エデンにおいてのその家庭は、自分の所有物がありません。神様と神様の絶対愛と血筋が一つになった立場に立っている真なる息子、娘になりさえすれば、この宇宙のすべてが息子、娘に相続されるようになっているので、全部自分のものになるのです。愛によって一つになると自分のものになるのです。

祝福は、神様の真なる生命の血筋が連結されることのできる基盤を相続するのです。祝福を通して神様の血筋を相続した人が霊界や肉界にいるので、神様が思いのままに主管することができるのです。それで神様の思いのままに再創造、復帰歴史を今も蕩減条件なく全権をもって押し出しているのです。ですから、皆さんがそのような信念をもった相対的立場に立つか立てないかということが問題です。決心したそのような絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準と一つになるようになるときには、一瀉千里にすべてのことが水平世界に線を引くことができるのです。

神様が創造するとき、神様自体が絶対信仰、絶対愛、絶対服従する位置にいたので、その相対的家庭を成すことできずに、すべて地獄に落ちたのです。真の御父母様の勝利圏と一つとなったすべての基盤によって、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によりアダム家庭で失ったものを世界的に越えたこの時なので、統一教は真の父母を中心として絶対信仰、絶対愛、絶対服従をしなければなりません。真の父母は神様の前に絶対信仰、絶対愛、絶対服従の伝統を受け継いできたので、それを伝授され

なければなりません。分かりますか。天の祝福が共にあるのです。

今までの道人（修道者）たちは何を中心として生活してきたでしょうか。イエスもかわいそうな人です。夜も昼も神様のみ旨のみを抱いて、自分の意志はありません。神様のみ旨の前に絶対服従でした。絶対服従！　なぜ絶対服従したのでしょうか。絶対的な主体、原形的な主体がいるのにもかかわらず、もう一つの三角形的主体の圏を成したのがサタンなので、そのサタンを除去させるためにそうしたのです。

今日、人間はサタン圏内に隷属されています。サタン圏内に隷属されている人間を脱出させるためには、サタンが最も嫌な道を行かなければなりません。それで宗教は良心を中心として絶対服従だというのです。良心と心が本来は、神様が絶対的なので、絶対的な神様を中心として絶対的に一つにしようとするので、宗教世界ではマイナスになれというのです。

絶対信仰には愛がついていきます。父子の関係においては絶対に信じ、絶対に愛し、絶対に服従するのです。互いに完成するためには、父母は子女のために生まれたので、自分の血と肉と精誠、このすべてのものを投入し自分よりも良くなることを願います。無限に良くなることを願うのです。投入し、投入し、投入して忘れて無限に投入、永遠に投入して忘れるのです。それは何かというと個人の家庭を越え、氏族、世界を越え、神様がいるならば神様の上にまで上がらなければばならないというのです。

堕落の恨をもって、徹頭徹尾、地上において天が見ている観点で順理的な内容で、全部この地で解いていかなければなりません。逆理的内容をもっていってはすぐに引っ掛かります。許しがありません。先生が生きて、誰よりも先頭に立って苦労するのです。本来は誰よりも栄光の立場であることを知っていますが、栄光の出発と栄光の生涯と永遠の栄光の世界を連結する橋を架けなければならないのに、その反対のサタン世界で苦労を始めたので、苦労で終わろうとするのです。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に、絶対唯一家庭、永遠不変の家庭、神様に侍ることのできる永遠の家庭となって、それが永遠な氏族、永遠な民族、永遠な国家、永遠な社会を成して地上天国を成し、それが天上天国に直結する一つの体制を成さなければなりません。神様に対して孫も父と言い、息子も父と言い、父も父と呼びながら、神様に同価値的に父として侍るアダムのような立場を万民がもつことができなければなりません。皆さんは、これから先祖になるのです。

霊界をはっきりと知らなければなりません。適当に生きることはできません。地上で完全に合格した家庭として天国に直行できる、条件に引っ掛からずに解放直行できるように家庭を皆さんがつくらなければなりません。それは先生の責任ではありません。みな行けるように祝福してあげたでしょう。ハイウェイを造っておいたでしょう。自動車になっていて油さえ入れればいいようにです。どこにでも行けるのです。

解放をみな宣布したのです。駄目な時は「こいつ」と言って制裁を加えるのです。天国に入る時に、この地上から合格者を送らなければなりません。今まで合格した者たちだけ送ったのではなくて、ただ送ったのであの世の牢獄や中間霊界に行っています。地上の中間霊界とか楽園家庭とか、または地獄家庭がないようにきれいに整備して、天国に直行できるこのような基盤を築かなければならないのです。

神様が絶対的ならば、自分も絶対的な立場を願わなければなりません。神様が不変ならば、自分も不変でなければなりません。神様が唯一ならば、自分も唯一でなければなりません。神様が永遠ならば、自分も永遠でなければなりません。このような観点で、人間の永生は不可避的であり、それは結果的な帰一点でないはずがないという結論を堂々と下すことができるというのです。いくら神様に愛があるといっても自分に愛がなく、いくら神様に生命があったとしても自分に生命がなく、いくら神様に理想があったとしても自分たち人間に理想がなければ、すべてのことがむなしいことなのです。

四大心情圏と三代王権を失ったので、これを取り戻さなければなりません。それを成すためには絶対服従と絶対犠牲を中心として順応し、何をさせてもみなやると言わなければなりません。そのようにしたのちにこそ、父母がサタン世界からここに来るのです。ですからサタン世界の男性は天使長なので、切ってしまわなければなりません。そうすると、ここから上がっていくのです。

先生は今まで「ああ、お前たち、先生の言葉に絶対服従しろ」と、そう言わなかったのです。

私たちは歴史的な路程に順応していかなければなりません。歴史的な路程とは何かというと、神様のための摂理的な歴史路程です。今まで皆さんに復帰摂理路程を教えたのではないのです。ですから先生も行くのです。神様の目的を果たしていくのです。その目的を一点で結末をつけることができなかったので、これに結末をつけようとするのが、今日この時代に統一教会が主張する統一原理であり、統一思想だということを知らなければなりません。

本当の孝子は服従する者です。本当の忠臣は、奸臣のように追われて死んだとしても、王に対して無能な王だと言うのではありません。奸臣として追われて死んだとしても、忠臣の不変の心でかわいそうな心を抱いて、涙を流しながら王の御安泰を願う人が本当の忠臣です。絶対服従だというのです。絶対服従で成功をもたらすことのできるたった一つの道は、真の愛の道しかありません。

三) 義務と守るべき規則（心得）

ジャルジンが重要です。そこは、韓国とは正反対の地です。そこから家庭を中心として、先生と国家メシヤと氏族的メシヤが再び天国に行くことができるように公認してやるのです。ですから先生の一族圏内に加入することのできる、先生の血族圏内に入ることのできる圏を中心として、地上から天国行きのハイウェイに入るのです。

ジャルジンで四十日修練を受けた祝福家庭は、避難民のように荷物をまとめ、何でも売り払って、大移動の準備をしなさいというのです。どこへ行かなければならないのでしょうか。みな韓国へ来なければなりません。韓国は今ＩＭＦ（国際通貨基金）の体制下において、すべてを売り払うという状況にあります。このような時に皆さんが来て、土地を買うなどして基盤をつかまなければならないのです。

今後、南北が統一されることによって、私たちが一つとなって天が認めるホーム・タウンができるのです。地上天上天国のホーム・タウンが始まるのです。真の父母の家庭からすべての氏族、一族から祝福家庭が一つとなって定着すべき時がついに来たのです。今後、南北が統一されれば、世界はあらゆる思想的な面でも、私たちに従わざるを得ないのです。一つの世界となるのです。

「真の祝福天宙化とサタン血統根絶」という言葉は、引っこ抜いてひっくり返して打ちつけろというのです。それでお父様が八十になる二〇〇〇年に入ると、すべての地上の一族たちは全部天国行きだというのです。サタンの地獄から出エジプト、地上世界へと脱出する出発が起こるのです。モーセが八十歳で出エジプトしたのと同じように、これから真の父母の家庭王としての世界地球星が出発するのです。イスラエル民族がモーセのあとについていったように、これから地上地獄を出発する天国への大移動が起こらなければならないのです。ですから荒野のような過程を経ていかなければなりません。

そこでは今のエジプトにあるすべてのものを売って、自分の故郷を建設することのできる資金を持って帰っていくことになるのです。すべて売り払って、ふろしき包みを抱えろというのです。避難民のように大移動するのです。このようにして韓国の地を十倍ずつ高く買ったとしても全部買わなければなりません。買って完全に私たちの土地にして入っていかなければなりません。

エジプトに住んでいたころのことを懐かしがってはいけません。エジプトで食べた肉、生活していた豊かなそのすべてのものが、荒野に入って砂原の風の吹く中で乞食のような生活をする時、どんなに恋しいことでしょうか。しかし、その時恋しがった人たちはみな滅びてしまったということをよく知らなければなりません。

これから国家的メシヤの家庭は三代、七代を中心として一族がみな一つとなって自分のすべての財産を売り払って祖国光復をしなければなりません。そうしたら全世界が一度にくるっと回るというのです。すべての所有は神様と真の父母の所有を中心として世界のすべてのものを集めてくることによって、もう一度再分配して地上天上天国、神様の祝福を受けた家庭の所有権時代に越えていくのです。そうすると霊界が、全天使世界が一度に入り、アダム家庭の復活圏を成すのと同じことが起こるのです。

個人から家庭を成し、氏族、民族、国家、世界を成して一度に御父母様が成してくださった基盤を中心として祖国を取り戻し、入ることによって、自分の家庭、氏族、民族、国

家、世界が全部解放されるのです。それが嫌な人は地獄に行くのです。

韓国の地がもし買えないならば、南米の土地を全部買って、全部分割しようとしているのです。南米の土地を買ったら、韓国の延長の土地として認定するのです。キリスト教、アメリカが一度に韓国に移動するというようになったら、南米までの世界キリスト教圏を全部一つとして、一度にみな復帰できるのです。一度に入籍できるというのです。それで家庭連合、氏族連合、国家連合をつくっておいたのです。

自信満々に、どこに行こうと自分が爆発的な中心になって、天の中心から下りてくる力を受けて横的に押し出せというのです。引っ掛かることのない、このようなことを自信満々にやっていけというのです。祝福天宙化です。このような家庭は天地がみな注目する家庭なので、ここから解放圏が広がっていくのです。それこそ天宙が回るのです。それで、これから皆さんの祝福を受けた一族が一つになって、ジャルジンで教育を受けなければならないというのです。

神様が創造当時に宇宙を愛した心以上の心をもって、このすべてのものを引っ張って集結させ、ここに一方的な投入をしなければなりません。このような家庭の最後の終着点に芸術的な家庭の理想を備えて、神様に侍って真の御父母様が自分の家庭に来たら永遠に離れたくないと言えるこのような家庭、万民のすべて責任者たち、さらには天の国の直系の真の父母の息子、娘を含んだ皇族圏があるとすれば、どのような皇族であってもその家に行って住みたいと思えるようなモデル的家庭を成さなければならないのが、私たちの責任だというのです。

皆さんの家庭が問題です。一族の核になることのできる家庭、統一的基準を成すことのできる家庭、これが問題です。どれほど今まで自分勝手に生きてきたでしょうか。自分たちが知っているでしょう。本当に心と体が一つになったでしょうか。あのクリスタルのように、四方がみな輝くものとして一度輝いてみなさいというのです。自分たちがよく知っています。夫妻同士で闘ってはいけないというのです。

皆さんは、これから先生の誕生日を中心として献納祭をしなければなりません。「総生蓄献納祭」ですが、「総生蓄献納祭」は何をするのかというと、怨恨と解放式です。解放式をしなければなりません。神様の恨を解いてあげ、解放をしてあげなければなりません。神様を解放してあげなければならないのです。

自分の財産でも何でも、みな捧げなければなりません。その捧げる行列が、この世の歴史始まって以来最も長くなくてはなりません。それを捧げることによって最初の先祖が一代になり、二代、三代、と代数が生じるのです。ここに座っているこれは何代でしょうか。五百人であれば五百代になるというのです。五百代の差が生じるのです。

一緒に一つ所に座っているここで、誰がこれを完成して先にこれを献納するかによって、入籍する問題において五百代の差が生じるのです。これが天上世界に行って会おうに会うことのできない段階へ分かれてしまうのです。

ですから競争が起こるのです。この世で最も恐ろしいことが起こるのです。先祖たちは足を引きずって、ドンドンと踏みつけ「こいつ、お前の財産を全部早く献納しろ」と、やらなければ、その財産を踏みつけてなくしてしまうというのです。

旧約時代の祭物、新約時代の祭物、成約時代の父母の祭物を捧げなければなりません。神様の心情的な姿を引き出すためには、私たち全体が合わさって真の御父母様を中心として祭物を捧げなければなりません。そうして統一的祭物を献納することによって、神様に全体の主人として侍り、この地上に私たちの家庭から氏族、民族、国家に君臨することによって上下関係、左右関係、前後関係を思いのままに回ることができることによって、神様が主管する世界になり、全体が一時に同じになるのです。

神様が憤り悔しく恨めしいことを解怨成就するその日を迎えなければならないにもかかわらず、自分のこの腐るもの、地獄に行く家庭をつかまえて防御して保護し、とんでもないというのです。ですからここの教育が終わったら一族教育を指示するのです。その時になったら家庭教育時代が過ぎるというのです。行かなかったら棒で追いやり、ぶん殴ってでもジャルジンの教育に行かせなければなりません。

祝福家庭は家庭を中心として家庭的メシヤ、氏族的メシヤ、国家的メシヤ、世界的メシヤがあることによって、新しくジャルジン教育を受けるその基地に来て、天国に行くことのできるチケットをあげるのです。皆さんを写真にみな撮ってあげるのです。この人たちは間違いなく先生の歴史的先祖隊列に参加させるのです。その写真がなくてはいけません。問題になるのです。（「サタン血統根絶完成解放宣布」を参照）

いつ先生が大移動を命令するか分かりません。もう皆さんが動かなければならない時です。動かなければならないというのです。全世界の祝福を受けた食口たちは早く南米に行って教育を受けてこそ、これから天国に入ることのできるチケットをもらうことができ、先生は一族に写真を撮ってあげているのです。これは先生の命令です。ここアメリカの責任者、州の責任者が問題ではありません。言うことを聞かずに、先頭に立って教育を受けなさいというのです。お父さんが行けなければ、お母さんと息子でお父さんの代わりに来て条件を立てながらこのような避難の荷物を整理して行きなさいというのです。それを経なければならないのです。それは入籍の手続きを受けることなのです。

「お父様に似なさい」という言葉はいい言葉でしょうか、悪い言葉でしょうか。築いたすべての福をただそのまま受け継がせるというのです。先生が大きな峠を越えたなら、これを中心として同じ型をつくれというのです。そうしたらこの垂直線は同じだというのです。そのように蕩減していくのです。

六　第四次アダム圏、自由自主の時代

一) 第四次アダム圏時代は自然復帰時代

第四次アダム圏時代は自然復帰時代へ進入するのです。蕩減復帰時代が終わったことに

より、第四次アダム圏時代は皆さんの努力によって、個人アダム圏を勝利して、家庭アダム圏を超え、氏族アダム圏、世界まで超えることのできる自由解放圏が起こるのです。

これからは皆さんの家庭が理想的家庭となって、御父母様と神様に直接に侍り、御父母様の代わりにならなければなりません。皆さんは旧約時代、新約時代に来たメシヤ、新約時代を越えて成約時代に来たメシヤ、一次アダム、二次アダム、三次アダムの代身家庭となることによって、神様に侍るようになり、万民が天国に直行できるようになるのです。そのようになることによって、第四次アダム圏解放の祝福時代に入るのです。

第四アダムの時代が確定されれば、祝福二世たちは親が直接祝福してあげる時代が開かれるのです。

今、解放時代を迎えたということを考えるときに、この地球を中心とした宇宙がどんなに讃美しているか分かりません。どんなに今日を喜んでいるか分からないというのです。それで今年に入って今日まで祝賀した雰囲気一色になったというのです。これから私たちがしようとするすべてのことは、天運がついて回りながら助けてくれるのです。天運を捕まえようと苦労しますが、天運が私たちのあとについて回りながら助けるというのです。

これは何のことかと言うと、神様と霊界が数多くの先祖たちと数多くの善なる人たちが動員されてこの地を助けることのできる時が来たというのです。解放圏を成すことができ、形を変えることのできる時代が来たというのです。

万国に聖酒をまかなければなりません。聖酒を飲ませて生かすのです。堕落圏解放が加重されるのです。万物にまで飲ませなければならないのです。そうすれば全部神様の側に帰るのです。それでこれから万世界、地球星に聖酒を飛行機でぱーっとまいてあげながら、全部できなければ主要都市にだけでもまきながら祈祷するのです。御父母様が祈祷することがどんなに恐ろしいことか知らなければなりません。その国が滅べといえば滅びるのです。どうしようもありません。

真の家庭、真の父母、真の夫婦、真の息子、娘にならなければなりません。純潔を守り伝統的血筋を受け継いだ王子、王女にはサタンが相対する世界がないのです。

神様は第一創造主、アダムは第二創造主、孫は第三創造主です。ここから蘇生、長成、完成、三を越えることによって定着します。それで四次アダムを立てることにより、みなアダム、息子、娘から繁殖していくのです。

真の愛、神様に侍っていくのです。真の御父母様と共に行くのです。それが本来の創造原則です。真の父母は中心の根、中心の茎、中心の芽となっていますが、皆さんは枝なので、枝は中心の根が必要であり、中心の茎が必要であり、中心の芽が必要です。これは連結させなければ、根の力を受けて大きくなることができません。また茎の影響を受けずしては、その木が大きくなることができません。その次には芽がなければ花が咲くことができません。絶対的に一つにならなければなりません。

神様は第一創造主、アダムは第二創造主、アダムとエバも第三創造主を経てこの世に地上天国、天地が生まれるので、私たち統一教会においての第四次アダム圏時代に越えて定着して本然の祝福と万代の後孫が自分の父母の伝統を尊敬して、後孫が自分の父母の伝統を尊敬して息子、娘が一つになって、天国に入ることのできる転換された世界が目の前に来たのです。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に、絶対唯一家庭、永遠不変の家庭、神様に侍ることのできる永遠の家庭になって、それが永遠の氏族、永遠の民族、永遠の国家、永遠の世界を成して地上天国を成し、それが天上天国として直結される一つの体制を成さなければなりません。神様に対して孫も父と言い、息子も父と言い、父も父と呼びながら神様に同価値的に父として侍るアダムのような立場を万民がもつようにならなければなりません。皆さんはこれから先祖になるのです。

二) 自分の名前で祈祷する時代

一九九九年九月九日、九・九節宣布以後、十四日午前七時十五分を期して、今までの真の御父母様の名前で祈祷してきたのを、自分の名前で祈祷する時代に入ります。天宙統一解放圏を迎えて第四次アダム圏の自主自由の解放の時代に行くからです。

三) 第二創造主格・・自分を創造する時代

真の父母と一つになって伝統を相続して、皆さんの家庭が主体的伝統で万国を治めることのできる基盤となり、主体性をもつことのできる家庭となるとき、天国で皇族圏内に入籍するのです。こうして入るところが天国です。天国は誰でも入れるところではありません。その道を行こうと三代が決心しなければなりません。おじいさん、おばあさんから父親、母親、夫婦、息子、娘まで、段階は四段階で、系列は夫婦をもったものは三代です。

個人完成するためには何をしなければならないでしょうか。創造性完成です。第二創造主格の立場に立てるためのものです。そうでなければ永遠の神様の主体の前に、永遠に対象格として立つことができません。被造物自体だけならば分かるでしょうか。それで創造主格立場に同参させるためには、これが絶対不可欠の要因です。これがなければ人間が天の絶対者の前に対等の立場を取ることができないので、このような法を立てざるを得なかったのです。

神様に似るには、内的な面では絶対愛を中心として、その愛が絶対愛であると同時に唯一不変の永遠な愛なので、その愛を通して神様と永遠に同苦同楽することができ、同参することができ、相続することができるのです。神様の愛の対象なので、絶対的神様の愛が私の愛であれば絶対的神様の対象でしょう。そのような内的な基準を、神様の属性を中心として創造世界を拡張するためには、創造性属性がなければなりません。

環境創造をしなければなりません。そこに主体性をもって相対を再創造しなければなりません。再創造するようになると、愛のパートナーをつくるための神様は、自分以上のすべてのものを投入してまた投入しようとする

ので、自分の生命を捨てるようになったとしてもまた投入しようとする心をもつようになると、自動的に相対は生まれるようになっているのです。完全なプラスは完全なマイナスを創造する原理があるでしょう。空中で完全なプラスができるとマイナスは自動的について生じるのです。

本性的な神様の属性に一体となる得る本然的愛の定義に一体となった存在は、神様の代身、神様自体がそのような立場なので、創造するようになるときは、その相対を造るのにこのような本性自体と共に投入して、そこに何を加えるのかというと、創造性、絶対創造性、唯一創造性、不変創造性、永遠創造性です。愛を中心としたこのような絶対的な創造性を投入しました。創造するためには何かを残さなければならないのですが、主体性がなければなりません。私に似なさいというのです。

私と皆さんとどちらが優れているでしょうか。優れているのは何でしょうか。心は同じでしょう、何が優れているでしょうか。その心がしようというとおりに活動するのがちょっと違いがあるのであって、違いはないというのです。心はみな同じです。人のパターンは同じなのですが、思いのままにしようとするとき、どのくらい関係性を拡大させるのか、舞台を、環境をどれだけ開拓するのか、その差であって、心のパターンは同じなのです。

七　愛の皇族となれ

一) 天国は皇族の名誉をもって行くところ

天国は神様の愛を中心として王子、王女となって王と王女の愛を受けた皇族たちが入るところです。今日キリスト教では、イエスを信じて天国に行くと言うでしょう。どのようになるか行ってみろというのです。文総裁の言葉が合っているか、合っていないか、見てみろというのです。それは理論に合わないのです。今まですべての宗教は理論に合わなかったのです。

天国に入る人は、神様の愛を中心として王子、王女として完成して家庭で息子、娘を生み、皇族圏の中で愛を味わい、その全体をそのまま移していく人です。そのような人が天国の国民であるということを知らなければなりません。

ところが、イエス様を信じて天国に行くのですか。イエス様一人では行けません。イエス様に相対がいますか。環境には相対理想がなければなりません。ところが、イエスは主体として対象がありません。ですから楽園に行って待っているのです。時が来ればもう一度行かなければなりません。このように事実も知らずに騒いでいる既成教会を見ると、ばかの中にもそのようなばかはいないというのです。

天国に入ることのできる人は、神様の愛の直系子女として、天国の王孫として、神様の前に王子、王女の門を経なければならないのです。天国はどこでしょうか。王孫として、皇族として行くところです。この地上に模範的な兄弟の友愛の直系子女と傍系的子女となって、模範的な一つの一族と国家を形成した立場で、皇族の名誉をもって生きたのちにただそのまま移動していくところが天国です。

おじいさんは、天の国から送ってきた王権を代身した主人です。ですから神様のように侍らなければなりません。母親、父親は、全世界の家庭を代表した王と王女です。皆さんも父親、母親が王になり、王女になったらうれしいでしょう。その伝統を失ったというのです。王子、王女の伝統を、天上世界の皇族的道理を立てて、もう一度原点に帰らなければなりません。

堕落して破壊されたフリーセックスのようになったすべてのものが、絶対的な愛を中心として原点に戻って初めて、本然の立場に戻って順理の道理を受け継ぎ、個人から家庭、氏族、民族、国家、世界を再編成してこそ統一の世界になるのです。

天と地の国が愛によって一体化しなければならないのです。このように皇族圏さえ成すようになれば、霊界に行っても地上に行ってもすべての中心になるのです。ですからどこでも一体を成すことができるのです。それを訴えているのです。天上天国、地上天国、愛の一体化です。愛によって初めて皇族を中心としてすべてが一つになるのです。世界のすべての民族が一つになり、天のすべての一族が一つになるのです。

堕落した以降に地獄が生まれたでしょう。ですから天上世界と地上世界のすべてが真の父母の愛の門を経て入っていく、その世界が天国です。アダム・エバが堕落せずに真の父母の愛を通して天国に入ったら、万民家庭のモデルになっていたはずです。一つの本然的なモデルの家庭形態が入るのです。

そうすることによってその伝統的な歴史を受け継いだ皇族圏の愛を連結したすべての家庭は、一つの中心茎の前に東西南北の枝のようなものです。ですから同じ圏統合の原則によって天国に入るのです。そうしてこそ統一世界になるのではないですか。これをはっきりと知らなければなりません。

その王族、皇族を中心として入籍する時代が来ました。それをするためには、まず血統転換をしなければなりません。アダムとエバによって、原理型の悪魔の愛によってすべての所有権がサタン側に渡ってしまったのを、返還しなければならないのです。

その王の愛の相対者であり、皇族圏を相続する皇太子なのです。王子、王女だというのです。堕落していないアダム、エバがそうだというのです。全宇宙の大王であられる神様を中心として生まれた長男、長女がアダムとエバだった、ということをはっきりと知らなければなりません。

家庭を中心として、このような天国家庭をつくらなければならないというのです。女性たちがこれをはっきりと知って、この伝統を教えなければなりません。息子、娘たちに乳を飲ませながら「天の国の皇族にならなければならない。神様の代わりに私があなたを愛します」と言って、お父さん、お母さんが夫婦として愛するのを中心として「あなたは将来、私たち夫婦よりも素晴らしい夫婦にならなければなりません。これがお父さん、お母さんの願いです」という伝統を植えてあげなければいけません。

偽りの父母が種を蒔き、めちゃくちゃになった愛におぼれて、この地は悪魔の巣窟にな

ってしまいました。悪魔の肥だめでどろどろになったそれをお風呂に入れさせ、本然的天の国の皇族圏の烙印を押すために教えてあげなければならないその仕事が簡単なことですか。神様が今まで六千年の間、六千年が何だというのですか。億万年の間、苦労してこられましたが、アダム・エバを完成させることができなかったのです。

これからみんな故郷に帰らなければなりません。故郷とはどんな家ですか。「天の国の王宮を代表する家だ」と、このように考えるとき、気分はいいですか、悪いですか。わらぶきの小さな家であるほど、天の国の皇族が王宮を離れ、この山川が慕わしく訪ねきて、水が良く山水がいいので、ここに来て住んでいるんだなあと考えるのです。

水一杯をついであげるとき、それは薬水よりも貴重なのです。水一杯にも愛が入っているのです。ここには何よりも無限な価値の真の愛の津液が投入されていることを知らなければなりません。このようになるとき、その御飯を千年食べても病気にかからないのです。そのような御飯を夫を迎て一度食べてみたくありませんか。（夫の）お父さん、お母さんがそれを好むでしょうか、好まないでしょうか。私たちの家に帰るたびに、田舎が懐かしくて訪ねきた、天の国の皇族を代表することができる家だなあと思うのです。

おじいさん、おばあさん、お母さん、お父さんはその王権を王孫として継承しなければならないのです。皆さんが長男長女のような位置にいれば、これを譲り受ける時なので、生活する上で王孫のように生きてこなければならなかったのです。ところが、そのように生きてくることができなかったのです。

ですから今からでも、み言を聞いたので、このような方法で家族のため、おじいさんおばあさん、お母さんお父さんと愛で一つになるときには、間違いなく天国の神様もここに入って来て住むのです。

そのようになれば、永遠の神様の一つの愛を中心として永遠に生きるために、自動的に、その主体となった家庭は、永生することができるようになるというのです。ですから永生する家庭は、天国の本宮として天の国を再拡張編成するのです。それが現世界の韓国でも、百六十カ国を中心として天の国を連結させる運動が広がっていることを知らなければならないというのです。そこにあって代表的な心情的旗を持っている人がレバレンド・ムーンだということを知らなければならないというのです。

神様の愛を中心として、神様の生命に体と心が完全に結合することができる位置に行かなければなりません。天下の誰が誘惑しても、私が行く道を行くのです。どこかに避けて生きるのではありません。私は堂々と天の国の本然的王宮を通して皇族権をもち、天国の民になるという自負心をもって堂々と勝ち、越えていかなければならないというのです。それができなくなるときは、サタンの中に入っていくのです。

今から皆さんは、真の愛を中心とした皇族にならなければなりません。皇族、アダムがそのようになったら、アダムが直系の子女ならば、傍系の子女であるその兄弟、お姉さんたちは、すべて民になるのです。ですから天

国に入るのは、天の国の王子、王女の愛を備えて、その権威と威信を堂々と身につけて、生涯の路程に父母も堂々と威信をもって、入っていかなければならないところが、本郷の国、天国だということを知るべきです！

天の国の国民、天の国の氏族と国の民というのは、皇族から始まるものです。ですから本来私たちがもつべきその位置に入っていこうとするなら、天の国の真の愛を中心として、皇族的心情圏を体得せずしては天の国に入っていくことができないというのです。そのようにできなかったことが神様の恨です。そして王孫を中心として孫たちをもてなかったのです。

アダム・エバが成長しながら王子、王女として、王の代を引き継ぐことができる立場で愛することができなかったのです。みな中間で、原理結果主管圏内で堕落してしまったのです。ですから神様の愛を中心として、神様と直接話し合うことができる、天地創造の大偉業を中心として、お父さんと息子が互いに話し合って歴史を編成することができる、話し合いの相対になれなかったというのです。

皆さんが今まで暮らしてくる中で大変なことがあったでしょうが、氏族（宗族）復帰、皇族復帰、これをなぜしないのかというのです。私がやるなら六カ月あればすべて終えることができるというのです。

熱烈な心をもって「お母さん」というその言葉には、千年の歴史が連結されているのです。「お兄さん」という言葉には千年の愛があるのです。「お姉さん」という言葉には千年歴史、神様の心情を感じるというのです。創世以降、心情がどこにありましたか。そのような心情の主体性を中心として、神様の前に立ち上がり、話をするようになるときは、再創造の役事が起きるのです。

家庭で失われたことによって、天国家庭が現れなかったので、天国民族が生じることができるでしょうか。天国が生じ得るでしょうか、できないでしょうか。その天国を成し遂げなければならない神様が、人間の堕落によってすべて失ってしまったのです。天国は空いています。天国は真の愛を中心として皇族権の権威をもち、天地の愛の中心として恥ずかしくない神様の代身者として、相対者として備えるべき内容を備えてこそ、入っていくことができるところです。文総裁の言葉が間違っていなければ、既成教会の教会員たちは大変なことです。

愛の価値というものは永遠にあります。自分の夫を迎るのに自分は王女として王を迎る心をもち、世界全体が尊敬するその瞬間において、愛の中に入っていくと考えたことがありますか。そのような価値観をもって、自分の子女たちを生まなければならないというのです。生むのに先立って、妊娠したその日から王子、王女を妊娠しているという心をもたなければなりません。そして生まれるようになるときは、朝日が昇る希望の皇族、天下全体を相続する皇孫が生まれると考えなければならないというのです。そんなふうに考えたことはなかったでしょう。

堕落しなかったならば、天地の王権と天地の父母権と天地の長子権を中心とした直系の息子、娘になり、この地上の王宮となり、天の国の王宮となったことでしょう。またそこ

に傍系的なすべての兄弟たちは直系の王宮の伝統を横的に受けることができるのであり、これと一つになって生きたそのような人たちが天国に行くようになっているのです。

それでは天国が何かというと、愛を中心として皇族の伝統を通過したその家庭と一族が入っていくところだということを否定することはできません。ですから皇族生活環境、前にいる人も支流にいる人も同じ生活をした人が天国に行くというとき、すべての万民の家庭たちは、愛を中心とした皇族伝統の生活をしなければならないという結論が出てくるのです。

今、アメリカではどのようになっていますか。もともとは祖父母と別れることができず、父母と別れることができず、息子、娘と別れることができません。この三代が別れることができないのです。これが一つになって四位基台を成就しなければならないのです。そうでなければ、理想的な基盤を築くことができないというのです。そのようなことを、皆さんはよく知っているでしょう。

ですから神様が、愛を中心として、人間を中心として拡張した基盤を築くのです。この地上に真の父母が現れなかったならば、霊界に永遠に神様の息子、娘がいなくなるのです。初めて私によって神様の本然の息子、娘たちが生まれるようになるのです。私によって神様の皇族が生じるというのです。皆さんは、そのような自負心をもたなければなりません。私たちが、すべての国を本然のエデンに連結しなければなりません。

世界の主流とは何ですか。神様の愛、宗教を中心として天地全体を身代わりしたこのような人間たち全体を代表して、理想的な血肉を連結させる父子関係の愛理想の愛圏を家庭を通して環境を越え、世界の果てまで影響を及ぼすことができる人生を生きる人は、天の国の王子になることができ、天の国の皇族に間違いなくなるのです。息子、娘になるのです。

私が求める人は、天の国の皇族です。天の国の愛の皇族です。皆さんは種にならなければなりません。そうなることができる種となったものは、刈り取られ倉庫に入り、翌年の北風寒雪、激しい風が吹きつける冬の季節を越えて、あの南から吹いてくる春風と春の陽光を受け、新しい芽が太陽の光と共に方向を備えて、ここで自体内から創造の力を発揮して生命力をつくり出すことができる種になってこそ、生命の芽になるのです。

私の生涯において何をするのですか。愛の墓を残していこうというのです。これが結論だというのです。愛の墓を残していきましょう！　愛の墓の中で今生きるとしても恨がないというのです。墓のような所でどんなにうんざりと生きるとしても、愛の中で生きれば恨がないというのです。愛の墓を生きながら残して行きましょう！　そうすれば、生涯の暮らしは永遠に成功することでしょう。

そのように皆さんが生きて死ぬときは、神様が祝福してくれるでしょうし、神様が息子、娘を連れて歓迎しに出てくることでしょう。そのときには、指輪がはめられなかった手であるならば、天の国のダイヤモンドをはめてくれるでしょうし、服が着られなかったなら、天の国の皇族たちが着る最高の服を着せてくれることでしょう。

二) 愛の人になれ

愛で和合して喜ぶことができるものは、昔創世前の時代の神様の喜びと、創世以降の相対的実体たちが出会って同化して感じる刺激的な愛の衝撃とは、天地の間の差があるのです。踊りを千年、万年踊っても終わることがないというのです。神様一人で踊りを踊ることができますか。神様一人で歌を歌うことができますか。一人でうれしいと言って笑うことができますか。香りをかぐことができますか。愛のために生まれて、愛のために生き、愛のために宇宙世界を統一して占領することができる主人の相対になるのです。その次に、愛を中心として私も主人の位置に立つことができるのです。

神様が愛する相対が神様よりもっと素晴らしくなると、創造した所望的基準から見るとき、神様より高い位置に立っているのです。ですから私が「神様！」と言えば訪ねてくるし、私が「ようこそ」と言うと神様は後ろからついてきながらも不平を言いません。千里、万里ついていっても、いつも神様は喜びながらついてくるようになっているのです。子供についていく親の喜びというものは、口で言い表すことができないものです。天地が和動して自分以上に歓迎をするのを見るとき、父母の満足した細胞全体が、笑いのふろしきとなり、どっとはちきれて出てくるのです。

愛を中心として真の愛に通じるなら、すべてが友達です。石も話すというのです。そのような境地があります。創造されるときの自分の存在圏、すべての生態、すべてのことを話すのです。神様が知らないはずがありません。大きな磐石の山、姿がどんなに壮厳な山だとしても、神様を見るときは愛を受けたいのです。

神様が山を見て「こいつ、どうして大きくなったのか」と言えば「神様を喜ばせるためにこんなに大きくなりました」と答えるのです。だから、しかることができません。存在するものはすべて、愛に同化しないものはないというのです。すべて愛する主人になっているのです。何の話か、分かりますか。

自然の美しさを、私たちはここで悟ることができるのです。「お前の姿はこうだけど、お前は私を中心として宇宙の前に、愛をテーマとして創造された世界の前でどの面が足りないかを補うため、音が調和するための刺激的なある音を出すために、宇宙には高低の音があるのと同じように、お前もそれと同じ面を補うために、共同的な理想体圏に存続するんだな」と言うとき、神様の目のような目で見るようになるのです。

愛は、いつも、どこでも、新しいものを追求するのです。永遠の前に出発したことと、今、永遠後に継続するものも同じであるために、神様が創造したその本然の心情を感じることができる力が愛にあるために、神様のように感じることができるのです。それで話もするし、すべてそうだというのです。

ゴムひもは「ぶんぶん」音を出して、伸びたのが元の長さに戻っていくのです。神様は、真の愛がゴムひものようなものだということを理解していらっしゃるのです。それを永遠に切りません。それでついに完成された位置に立つようになられ「私はゴムひものような真の愛によってお前に永遠についていく。お前は、お前の中に強力な力があってもそれを

切ることができない。最小限それをもっと保護してあげなければならない。その価値のあるものを保護してあげなければならない」と言うのです。神様自身が、その真の愛のゴムひもなのです。

「従順になれ。完全に従順になれ」と、絶対的に尊敬しながら、神様に何が必要か聞いてみなさいというのです。そうすれば「私はお金は必要ない。私の中はお金でいっぱいに満ちた山と野原の天地だ」と答えられるというのです。神様はすべての被造物を創造されたので、お金が必要ならそのような創造の力を利用して、この世のすべての場所にダイヤモンド鉱山と金鉱をお造りになることもできるのです。どんなものでも問題ありません。

子供のために千年苦労し、千年十字架を背負っても、また背負おうとする父母の前に、孝子でない人がいないということを知らなければなりません。孝子でない人がいないのです。どうですか。そのようなお母さんの愛、お父さんの愛の世界に、神様までも来て「うわー、私よりも素晴らしい！」と言うことができる立場を願いませんか。

すべて与えても十年、百年、千年の間、また与えても、それを考えながら今の生活に感謝する心をもって生きるのを見るとき、それは神様も褒めたたえるのです。子供が父母に対してそのような子供に、夫が妻に対してそのような夫に、婦人が夫に対してそのような婦人になり、家庭が国に対してそのようになり、国が世界に対してそのようになるとき、その世界はどれほど素晴らしいでしょうか。神様が天上世界にいなさいと言ってもそこにいないで、人間世界の真ん中に来て生活しながら、みんながよく暮らせるようにしてあげようと、再び創造が起こるであろうというのです。

Book 十一: 宇宙の根本
The Root of the Universe

はじめに

神様は真の愛を中心として、神様の性相と形状に似せて被造万物を創造されました。そして万物世界を通して人間に愛の交流と秩序を学ばせました。

人間始祖アダムとエバは、神様の本然の愛を体恤しながら、真の夫婦となり、家庭を完成すべきでした。ところが、彼らは天使長ルーシェルの誘惑に陥って、愛の秩序を破壊し、真の愛から離脱して、偽りの愛を中心として偽りの家庭、国家、世界と歴史を作り上げたのです。文鮮明先生は早くからこのことを看破され、創造本然の愛とその秩序について一貫して教育してこられました。

文鮮明先生は、現在蔓延しているフリーセックス、同性愛、近親相姦の原因が、愛の本宮であった人間の生殖器の堕落によると説かれています。その人間の生殖器の堕落が宇宙を破壊させ、愛の秩序を崩壊させる道具となって、終末の時を迎えるようになったというのです。

文鮮明先生は、夫婦がそれぞれもっている生殖器の主人は、自分ではなく相手であると説かれます。つまり夫の生殖器の主人は妻であり、妻の生殖器の主人は夫である、という説明です。この劇的なメッセージは、一九九六年八月一日、アメリカのワシントンD・Cで開かれた「世界平和家庭連合」創設大会の席上、各界各層の指導者の前に宣布されたものです。

本書はこのメッセージを前章に置き、それに関するみ言を「文鮮明先生み言選集」から精選し、抜粋したものです。本書では神様の愛を中心とした人間の絶対的な価値、絶対セックス、人間の堕落と復帰、そして、私たちの最後の目標である真の家庭理想の実現についてのみ言が網羅されています。

本書を通して、人類が神様を中心とした真の愛の秩序を取り戻し、一日も早く真の家庭が天宙的に実現されることを心から祈るものです。

二〇〇二年七月

前章

宇宙の根本を探して
(1996 年 8 月 1 日、ワシントンD・C、「世界平和家庭連合」創設大会で語られたみ言)

尊敬する御来賓の皆様、そして紳士淑女の皆様！

冷戦の終息とともに平和と社会正義に対する新しい希望が急速度に全地球星に拡大しています。新しい世界的現実を無視したり、直視できない指導者たちは津波のように押し寄せる変化に流されてしまいます。今、私たちは新しい世紀の分岐点に立って、私たちの伝統的な思考方式を再検討してみて、新しい機会と価値観を迎えるために、果敢に進んでい

くべき時だと信じます。そのような意味で、私はきょう、生涯を懸けて主唱してきた「世界平和の実現と真の家庭の価値」についてお話しし得るようになったことを大変な栄光と存じます。

神様は宇宙と愛の根元

この世の中には男性と女性の二性が暮らしています。ところで、彼らは互いに立場を変えることはできません。皆様も自らが願ってそのように生まれたのでしょうか。そうでなければ、私たちは願わないのに、そのように生まれたのでしょうか。私が考えもせず、願いもしなかったのに、そして原因はもちろん、結果や過程も知らないのに、そのように生まれたのです。

人がいくら偉大だとしても、原因的な存在ではなく、結果的な存在であることを否定することはできません。したがって、第一原因である存在がなければなりません。そうすると、そのお方は誰でしょうか。男性でしょうか、女性でしょうか。その第一原因的な存在を神様と呼ぼうと、あるいはどのような名で呼んでもいいのですが、その原因的な存在がなければならないのです。きょう、ここには、「世界的に我こそは」と思われる著名な方々がお集まりになっています。皆様は「神様がどこにいるのか。見せてくれれば私が信じよう！」とおっしゃるかもしれませんが、少なくとも、その原因的な存在がなければならないということを否定してはならないと、まず私は指摘するものです。

きょう、私は「宇宙の根本を探して」というテーマでお話しいたします。

私たちが宇宙の根本を探していけば神様に帰着しますが、そのお方は男性格と女性格の二つの性品を所有していらっしゃるということを知らなければなりません。宇宙の出発の原因はどのようになっているでしょうか。神様に対してはまだ分からないとしても、私たち人間は男性と女性、そして主体と対象から成っています。

鉱物界の分子を見れば、陽イオンと陰イオンから構成されており、植物界は雄しべと雌しべから、動物界は雄と雌から、そして人間は男性と女性から成っていることを見ることができます。

存在界を調べれば、鉱物界、植物界、動物界、どの世界を問わず、次元がより高い陽性と陰性が、より低い陽性と陰性を吸収して、存在、発展していることを知ることができます。なぜこのような現象が生じるのでしょうか。このすべての存在世界は、万物の霊長である人間を完成させるべき責任があるからです。鉱物界を見ても陽性と陰性、すなわち主体と対象が愛という概念のもとに、互いに一体となって存在しており、植物界も同様に、すべて雄しべと雌しべとがあり、主体と対象が愛を中心として、一つに結合して存続するのです。最近、医学界では病原菌までも陽性と陰性があると言っています。

主体と対象、すなわち陽性と陰性が一つになるのに何を中心として一つになるのでしょうか。キスすることによってでしょうか。愛

は、概念であると同時に実在なのです。その愛が定着することのできる実在とは何でしょうか。ここに各界の指導者の方々、フォード元大統領、ブッシュ前大統領、皆様が集っていらっしゃいますが、自信があれば答えてみてください。皆様方にも知らないことがあるということです。男性が男性になり、女性が女性になるようにするものが何であるかを知らなかったというのです。それがまさしく生殖器です。それを卑しく思う人がいますか。貴く思うとすれば、どのくらい貴く思うでしょうか。今まではそれが善くないものと考えたとしても、今からは貴く思わなければなりません。

変わらない宇宙の鉄則

未来の世界はどのような世界でしょうか。生殖器を絶対的に貴く思う世界になるなら、その世界は善い世界でしょうか、悪い世界でしょうか。栄える世界でしょうか、滅びる世界でしょうか。冗談で言っているのではありません。神様が人間を創造なさる時、最も重要視して、精魂を込めておつくりになった箇所とはどこでしょうか。目ですか、鼻ですか。心臓でしょうか。でなければ頭脳でしょうか。これらは全部、死んでなくなってしまうのです。実際、そうではないでしょうか。

世界平和のための家庭連合の目的は何でしょうか。道徳と宗教など、すべての分野を完全に超越し、夫婦が完全に一つとなって、神様までも拍手で歓迎することのできる人が暮らす世界があるなら、どのような世の中になるでしょうか。男性と女性が生まれる時、彼らの生殖器の主人は誰でしょうか。夫の生殖器の主人は妻であり、妻のものの主人は夫です。今日まで、人類は生殖器の主人が互いに取り替えられていることを知りませんでした。明快な真理です。これを否定できないというのです。千年、万年、歴史がいくら流れても、この真理は変わりません。

あらゆる男性たちはそれが自分のものだと考え、またあらゆる女性たちもそれが自分たちの所有だと考えたために、世の中がこのように滅びつつあるのです。互いが主人を間違えているという話です。すべての人たちは、愛は絶対的であり、永遠なるものだといいながら、夢のようなものとだけ考えていますが、その永遠の愛の主人がひっくり返っているということをはっきり知るなら、世の中がこれほどまでにはならなかったはずです。

博士や学者は数多くいますが、これ一つ考え抜いた人がいないというのです。皆様はこの真理を否定できますか。皆様の父母、祖父母、曾祖父母、そして人類の先祖たるお方と、さらには宇宙の根本であられる神様に尋ねても、全部、同意するようになっているのです。これが鉄則なのです。この真理こそ、宇宙が億万年過ぎても原理原則として残るので鉄則です。そして、この鉄則によって、神様の前に出ていけば、正しい人と間違った人の判定を受けるようになるのは当然なのです。旧約聖書に出てくるアダムとエバの堕落も知ってみれば、正にこの鉄則に背いたところに由来しているのです。

アダムやエバは、自分たちの生殖器が自分たちの所有だと錯覚したのです。考えてみてください。神様が善悪を知る木の実を取って

食べたからといって、アダムとエバを追い出しますか。神様は、それほどいい加減な神様ではありません。アダムとエバは、根本的な問題を誤って、宇宙のどこからも公認を受けられなくなったので、追放されてしまったのです。鉱物界や、植物界や動物界の雄と雌もすべて、愛の相対のために自分の生殖器を保管しているということを、アダムとエバが知らなかったというのです。では、生殖器は何のために存在するのでしょうか。それは愛のためです。愛を探すために男性と女性として生まれたというのです。

神様の属性は何でしょうか。神様は、絶対的、唯一、永遠不変であられるお方です。そうだとすれば、愛の主人は誰でしょうか。男性でもなく、女性でもありません。そのお方が正に神様であられます。愛を中心として愛を通してのみ、神様と人間が一つになるのです。なぜなら、神様にも人間にも愛が絶対に必要だからです。

神様と人間は父子の関係

神様が必要とされる愛は、果たしてどのような愛でしょうか。絶対的愛を願われます。皆様はどうでしょうか。私たちも同じです。神様が絶対的愛、唯一の愛、不変の愛、永遠の愛を必要とされるように、私たち人間も絶対、唯一、不変、永遠なる愛を必要とするのです。皆、神様に似なければならないのです。

神様自身が男性格と女性格をもっていらっしゃるお方なので、そこから分立された実体対象として創造された人間も、男性と女性として創造されたのであり、彼らが結婚すれば、実体として神様に代わる陽性と陰性になるのです。このように結婚を通して縦的な神様の愛が、横的に完全統一されるように追求したものが神様のみ旨だったのです。

人間の体は、この地を代表した横的なものです。すなわち、それが肉身です。それと反対に、良心はいつも縦的なものを愛し、縦的に高いものを求めるのです。したがって、人間は神様の縦的な基準と一つになり得る点を探していくのです。その点は、中心点でなければならず、正にこの点で男性と女性が出会わなければなりません。そうして、この中心点から出生した人間は、愛と共に幼児の成長過程を経て、兄弟姉妹の愛、そして夫婦の愛を経験しながら成長するのです。

この時、肉身は地を代表して成長するようになり、心は神様を中心として成熟して、ついに体と心が縦的、横的に一つになって、幸福の基地を築くようになるのです。そのようなところであってこそ、絶対的な愛を中心として絶対的存在であられる神様も喜ばれ、その愛の対象体である夫婦も幸福になるのです。

このように上下の関係である父子の関係、東西の関係である夫婦関係、前後関係である兄弟姉妹関係が一点を中心として完全に一つになる時、理想的な球形をつくるようになります。このような由縁で、父子の関係を東洋では一つの体だといいます。さらには夫婦関係も一つの体であり、兄弟姉妹も一つの体として考えています。何を中心として、このように言うことができるのでしょうか。真の愛を中心としてこのすべての関係が四方に球形をつくるとき、このすべてのことが可能にな

るのです。一点で出会って、球形をつくらなければならないのです。その点は一つです！一つなので、統一が可能なのです。神様と人間も父子の関係なので、一つにならなければならないのです。それは真の愛を中心としてです。

人間と完全体であられる神様

人間の欲望はどれほど高いでしょうか。皆様の心の欲望は、神様よりも高くなることを願ったりもします。いくら劣った人でも、神様よりも勝った世界の代表者になろう、という欲望はもつことができるのです。

もし、皆様が神様の愛する息子なら、「お父様、いらしてください！」と言う時、神様はそれを拒まれるでしょうか。皆様の妻がいくら劣っているとしても、本当に愛するなら、妻が呼ぶ時、夫は従うのです。このように真の愛で一つになれば、妻が夫を呼んでもついていき、兄さんが呼べば弟がついていき、弟が呼べば兄さんがついていき、皆が絶対に離れたがらなくなるのです。神様も独りでいらっしゃれば寂しいでしょうか、寂しくないでしょうか。どうして分かりますか。

紳士淑女の皆様、愛をもっていますか。生命をもっていますか。皆様の血統をつなぐことのできる精子と卵子をみな、もっているでしょう。良心ももっていますか。それなら、愛を見たことがあるでしょうか。生命、血統、良心を見ましたか。触ってみたことがありますか。その存在の現象は知っていますが、触ることも見ることもできないということを知らなければなりません。ただ心で感じてのみ知ることができるのです。同じ論理として、神様がいるか、いないかというとき、または神様を見たか、見なかったかと尋ねてみると、見なかったとはいえないのです。

見えるものと見えないもの、どちらが重要でしょうか。見えないものがもっと貴いということを知らなければなりません。お金、地位、名誉は見ること、または触ることができますが、愛、生命、血統、良心は見ることも触ることもできないのです。みなもっているのに、なぜ見ることができないのでしょうか。それは一つになっているからです。体と心が絶対的にバランスを維持していれば感じないのです。

皆様は自分の目が瞬きするのを感じながら暮らしているでしょうか。三時間だけ数え続けてごらんなさい。また、息をするのを数えながら暮らしているでしょうか。では、右手を挙げて、左側の胸の上にあててみてください。どういう音がしますか。鼓動の音、心臓の鼓動の音を感じます。その鼓動の音を皆様、一日に何度くらい聞いているでしょうか。聴診器で聞いてみれば、爆弾が爆発するような音が聞こえるのに、私たちは一週間、一カ月……。忙しい時は何カ月間もそれを感じないで暮らしているのです。考えてみてください！　小さい蝿が一匹だけ頭の上にとまっても、すぐに感じる私たちが、何百倍大きな鼓動の音を聞いても、なぜ感じられないかというのです。それは一つになっているからです。

上品な壇上からこのような話をすれば「失礼だ」と思われるでしょうが、実感の出る話なので、一つ例を挙げてみましょう。皆様、

毎日、朝起きてトイレに行くでしょう。大便をするとき、マスクを使って大便をするでしょうか。笑い事ではなく、真面目な話です！もし、ほかの人がそばで大便をして、そのようなにおいを漂わせれば、すぐに鼻をふさいで何万里でも逃げ出すはずなのに、なぜ自分の大便のにおいはそのままかいで、座って、平気なのでしょうか。自分の体と一つになっているから、自分の大便を汚く感じないのです。

皆様、幼い時、鼻くそをほじくってなめてみたことがありますか。その味は甘かったでしょうか、塩辛かったでしょうか。辛いですって。その味を知っているのをみると、皆様、経験者ですね！　なぜ、その鼻くそが汚く感じられなかったのでしょうか。それが正に私たちの体の一部分だったからです。この世の誰も知らなかったことをレバレンド・ムーンが初めて発見したのです。皆様、咳をして、痰が出れば、ごくっとのみ込んだりもするでしょう。ここに列席なさった大統領の皆様はいかがでしょうか。そのような経験はありませんか。気取らないで率直に答えてみてください。なぜ、汚く感じないのでしょうか。みな一つになっているからです。

私たちはみな、朝、昼、晩、三食ずつ食べていますが、口から一尺だけ下りれば、肥料工場があります。毎日、三食ずつ食べて、その肥料工場に原料を供給しているのです。ワァー！　それを知っても、箸とスプーンが口に入りますか。おなかの中に肥料工場があることを知りながらも、感じないで私たちは生活しています。なぜ、感じられませんか。一つになっているからです。

神様の創造目的

愛、生命、血統、良心があっても一つになっていて、完全にバランスをとれば、感じられないのです。私たち人間がそうであるように、神様も愛、生命、血統、良心、みなもっていらっしゃいますが、独りではそれを感じられないのです。完全にバランスをとっているので、感じることができないのです。ですから、神様も相対が必要なのです。

相対の必要性をここから見つけることができるのです。男性でも女性でも、独りの時は愛を感じられませんが、男性の前に女性が現れ、女性の前に男性が現れる時は、相対的に刺激的な愛と血統が雷と稲妻のように衝撃を受けて問題を起こすことを知らなければなりません。だから、しっかりしなければなりません。このような真理を知らずに生きてきたのです。神様も絶対的に愛の相対が必要だという論理を、人間が悟ることができなかったというのです。

それなら、神様の愛の相対は誰でしょうか。猿でしょうか。人間が結果的存在であるならば、猿がその原因的存在、すなわち私たちの先祖になれるでしょうか。それではお話にならないというのです。アメーバから始まった生命体が人間に至るまでは、数千の段階の愛の門を通過しなければならないのです。

ただ無条件に上がっていきますか。とんでもありません。あらゆる動物もみな、同じです。種の区別は厳格です。誰も占領できません。唯物論を信奉する共産主義者たちが猿を先祖として信じ、猿と人間を交配させたとして、新しい生命体（人間）が出てくると思い

ますか。百年、千年しても無駄骨です。なぜ、できないのでしょうか。考えてみるべき問題です。

そうだとすれば、神様も何を必要とされるでしょうか。何か器官をもっと必要とされるでしょうか。目でしょうか、手でしょうか。必要とされるのは、私たちが考える五官ではありません。神様は男性格と女性格の二つの性品をすべて所有していらっしゃいますが、父としていらっしゃるために男性格主体として存在なさるお方です。

このような基準で見るとき、神様も愛のパートナーが必要ではないでしょうか。被造世界の誰が果たして神様の愛のパートナーになるでしょうか。男性独りででしょうか。女性独りだけでパートナーになれますか。神様はどんなパートナーを願われるでしょうか。お金のパートナーですか。知識のパートナーですか。権力のパートナーですか。違います！神様は愛のパートナーを願われるので、夫と妻が生殖器を通して一つになるその場を中心として顕現なさり、人間と出会うのです。

なぜその場が、神様を中心として一つになる場なのでしょうか。愛は絶対的であり、男性と女性が絶対的に一つになることを願う所が正にその場だからです。横的に見れば、陽性である男性がその中心に向かって近づき、陰性である女性がまた近づき、神様も男性の性格である陽性と女性の性格である陰性が合わさって、大きく陽性的立場で、大きな陰性と合わさって一つになるのです。いつそのようになるかということが問題です。

結婚とは何ですか。なぜ結婚が重要なのですか。結婚は愛を探していく道だからです。愛する道、生命を創造する道です。男性と女性の生命が一体になる道です。男性と女性の血統が混ざる所です。結婚を通して歴史が生じ、ここから国が生じ、理想世界が始まるのです。これがなければ個人もなく、国もなく、理想世界もありません。これが公式になっています。

男性と女性は絶対的に一つにならなければならず、父母と子供たちは絶対的に神様と一つになり、神様を愛し、神様と共に生きてから、死んでそのまま霊界に行けば、そこが天国なのです。しかし、そのような人、そのような家庭、国家、世界、そのような理想的な人がいないので、神様が理想とする天国は空いているのです。今まで死んでいった人類はすべて、地獄に落ちています。天国に入れなかったという話です。

このような観点から見るとき、イエス様も人類を救うための救世主として来られましたが、昇天したのち、天国には行けず、楽園に行っていらっしゃることを知らなければなりません。天国に行くためには、家庭を築いて入らなければならないので、イエス様も再臨なさることを願われるのです。イエス様も結婚して家庭を築き、その家庭と共に神様に侍って暮らしてから、共に天国に入るのであって、独りでは天国に入れないので、聖書でも「あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」（マタイ一八・一八）と書かれているのです。地上で解決しなければなりません。地上で病気になっ

たので、その病気になった場所で治さなければなりません。

堕落世界を収拾できる思想

今日、人類は堕落した後孫となって、堕落圏の下に落ちているので、この圏を突破して上がらない限りは、天国に入れないのです。堕落圏内にいる人間は、いかなる困難があっても、その圏を突破しなければならないのです。それゆえ、イエス様も「生きんとする者は死に、死なんとする者は生きん」（マタイ一〇・三九）と言われたのです。この道を行くためには全生命を懸けて、突破して上がらなければならないのです。

皆様の家庭は、堕落圏内の家庭です。氏族、国家も同様です。闘って勝たなければなりません。アダム家庭で覆されたのです。アダムとエバが赤ん坊を生んだのちに追い出されましたか、追い出されたのちに赤ん坊を生みましたか。彼らは追い出されたのち、神様と無関係な立場で子供を生んだのです。このようなことも知らずに天国に行くことができるのでしょうか。とんでもないことです！　無知からは理想も生まれず、完成もありません。しっかりしなければなりません！　これが皆様方に対する私の警告です。

レバレンド・ムーンの話が正しいか、正しくないか祈祷してみてください。私がこの道を見いだすためにどれほどの受難の道を歩んできたか、誰も知りません。罪なしに監獄に六回も入るほどの苦難に遭い、探し出してきた道です。ところが、他人の大切な息子、娘たちを連れていって、このような真理を教え、短時間に方向転換させるので、皆が洗脳したというのです。無神論者には、神の存在を詳しく科学的に理論的な基盤をもって証明してあげるので、無神論は崩れていくのです。

それとは反対に、キリスト教徒たちは自分たちが信じている教理と違うといって、「異端だ」と責め立てながら、私たちを取り除こうと大騒ぎしているのです。しかし、彼らが唱える異端が正統なのです！　反対になることを知らなければなりません。サタンが嫌うものは神側であり、神様が嫌うものはサタン側だということを知らなければなりません。

思想的空白期に置かれている旧ソ連の若い青年たちも、レバレンド・ムーンの思想を中心として出版された中学校、高等学校、大学校の教材を通して、そして甚だしきに至っては、刑務所の罪人までもその教材を通して、思想武装をしています。ロシアの三千六百の学校でレバレンド・ムーンの思想の教材を使っているのです。彼らは叫んでいます。「私たちはアメリカに勝らなければならない！　レバレンド・ムーンに反対するアメリカに勝らなければならない！」と、西洋の腐敗した退廃風潮であるホモセクシュアル、フリー・セックスなどを収拾する道は、レバレンド・ムーンの思想だけだと彼らは信じ、急いでいるのです。アメリカより先にレバレンド・ムーンに従っていこうと、叫んでいます。

罪悪の根は「不倫なる性関係」

皆様！　神様がお好きですか。レバレンド・ムーンがこのようなことを展開しているのを御覧になる神様は喜ばれるでしょうか。

教皇庁の教えと今度の大会に列席したロバート・シューラー牧師の教えが同じであり得ますか。もちろん、大きく違います。そうだとすれば、誰の教えが正しいか神様に尋ねてみてください。

イエス様と聖母マリヤに対する皆様の理解が間違ったものだと、いくら教えてあげても、それ自体が統一教会に利益になることがあるでしょうか。しかし、皆様が間違いなく知らなければならない一つのことは、「地上で解かなければ、天でも解くことができない」ということです。それを早くから知ったレバレンド・ムーンは、生涯を懸けてこの道を歩んできたのです。

皆様、イエス様が結婚をしなければならないでしょうか。結婚をしなければなりませんでした。イエス様は女性ですか、男性ですか。聖女がいるなら、イエス様も彼女と結婚をしたくないでしょうか。神様はエデンの園にアダムとエバを創造なさりながら、彼らに生殖器をもつことを共に許されましたが、何のためにそうされたのでしょうか。彼らが成長すれば、神様が彼らを結婚させてくださるでしょうか、させてくださらないでしょうか。問題は彼らの堕落にあります。堕落ゆえに血統が変わったのです。それゆえ、神様は彼らをエデンの園から追い出されたのです。

本来、神様の体となるべきアダムと、神様の夫人格に立つべきエバが堕落することによって、神様自身の体と理想を病気にかからせ、怨讐になったので、それを御覧になった神様の心情はどれほど大変だったでしょうか。堕落は、自らを埋葬する墓です。人のものを奪い取っていく行動です。言い換えれば、堕落はフリー・セックスの根になり、個人主義の先祖になりました。

今日のアメリカは、どのような国ですか。極度の個人主義、過分なる私生活の追求、フリー・セックス‥‥このようなものを神様が好まれるでしょうか。行き過ぎた個人主義が追求するものは何でしょうか。彼らの話のとおりであるなら、天と地、世界、国家、社会、家庭、甚だしきに至ってはおじいさん、おばあさんまでも全部ほうり投げてしまい、父母と兄弟も失ったまま、ジプシーやヒッピーになってさまよい、雨が降り、雪が降れば、行く所がないので、自殺して、一生を終えようという話ではないでしょうか。

しかし、人間の本心は極度の個人主義や、過分なる私生活の保障を願ってはいません。宇宙と国家、町や村、そして父母の愛を受けて暮らしたいのが、私たちの本心が願うところです。しかし、そうすることができないで、反対の道を行くうちに、良心が燃え尽き、本心との相反を感じるようになって、むしろ薬でも飲んで自殺するのが良いと判断し、自ら命を絶つ現象がだんだん増えていくのです。

「蒔いたとおりに刈り取る」（ガラテヤ六・七）という真理が的中するのを目撃するわけです。アダムとエバがエデンの園にどんな種を蒔いたでしょうか。フリー・セックスの種を蒔きました。それを否定できますか。

そうしたために、彼らが下半身を覆ったのです。幼子たちも父母が隠しておいた大切なお菓子を盗み食いして、見つかれば隠すのが

本性の作用ではないでしょうか。もし、善悪の実を取って食べたなら、その取って食べた手や口を覆うべきはずであるのに、なぜ下半身を覆ったのかというのです。堕落は淫乱によって引き起こされたということを否定することができません。

アダムとエバが堕落して落ちたものを救ってあげるためには、堕落した方向と一八〇度違う逆の経路を通してこそ、救ってあげられるということは、この上なく理論的です。堕落によって地獄行きの血統を受け継いだので、メシヤが来なければならないのです。

再臨メシヤの使命と真の父母、真の家庭

メシヤは堕落前、神様が創造したエデンの園の場で、家庭を築くことのできる主人として来られるお方です。それをはっきり知らなければなりません！　理論的に合わなければなりません。メシヤはまず、神様に侍る家庭を築き、その家庭を通して国家を立てなければならないのです。このように、家庭が問題です。メシヤの家庭を中心として、接ぎ木する摂理をしなければならなかったのです。この死亡の世界で、誰が自分を救ってくれるかが問題です。それゆえに反対を受けたのです。

旧約時代は、「目には目、歯には歯」（出エジプト記二一・二四）という原則のもとに蕩減してきました。イサクの妻であったリベカを御覧なさい。長子であるエサウと夫までもだまし、次子であるヤコブに祝福を奪い与えた女性ではありませんか。そのような女性を神様はなぜ愛したのでしょうか。そのような神様をどうして信じることができるのでしょうか。今まで、このような疑問を誰も解決できませんでした。レバレンド・ムーンが初めて解いてあげているのです。レバレンド・ムーンだけが神様の秘密をみな、知っているからです。

では、どこで天国と地獄が分かれるか調べてみましょう。空中ですか。どこでしょうか。正に皆様の生殖器です！　深刻なことです。これが天地をひっくり返しました。この事実を誰が否定できますか。レバレンド・ムーンが発表した「原理」の本の堕落論に説明がなされています。疑問に思えば神様に尋ねてごらんなさい。皆様としては夢にも想像できない内容と理論をもって、体系立てておいたレバレンド・ムーンの「原理」の本に誰しも反対することはできないのです。

レバレンド・ムーンが天国に行くか、行かないか、気掛かりなら、死んで霊界に行ってみれば、分かることです。きょうの夕べ、私の話を聞いて気分が悪くなったのなら、割腹して死んでいただいても結構です。そうすれば、分かるでしょう！　レバレンド・ムーンがこの道を探すために、死の道を何度も超えてきたことを、皆様は知らなければなりません。神様を数百回も泣かせた人がレバレンド・ムーンです。歴史始まって以来、誰もレバレンド・ムーンほど神様を愛した人はいません。それゆえ、いくら世の中がレバレンド・ムーンを滅ぼそうとしても、私は絶対に滅びません。神様が保護してくださるからです。皆様もレバレンド・ムーンが教える真理圏内に入ってくれば、神様が共に保護してくださいます。

生殖器を、目がつぶれた盲人のように、方向を失ったまま使用すれば地獄行きであり、反対にこれを神様の絶対愛に基準を合わせて使えば天国の高い所に行くのです。これは明白な結論です。今、青少年の問題が深刻な問題です。エデンの園でアダムとエバが、青少年期に日陰で淫乱によって堕落して、フリー・セックスを蒔いたので、取り入れの時期である終わりの日には、必ず世界的に青少年たちのフリー・セックスの風潮が蔓延するようになる現象が現れるのです。

終わりの日には再臨主が神様の真の愛を中心として、堕落圏内に陥った人類を絶対愛圏内に引っ張り上げ、救われる戦略を、サタンは知っています。ですから、サタンはどこにも愛の基準を置くことができないので、アダムとエバを堕落させる時に天使長がそうしたように、全人類をフリー・セックスに押しやって、裸になって死んでいく方向に全世界を引っ張っていくのです。人類がすべて天使長の後裔たる末路に直面するようになるのです。

エデンの園からサタンの支配圏内に陥ったアダムとエバの後孫が、今日の人類なので、サタンは堂々と神様の前でも、この世界のすべての男性と女性を引っ張っていき、自分のやりたいとおりにすることのできる権限を主張するというのです。神様はサタンが何を願うかを御存じなのです。サタンはフリー・セックスを通して、ただの一人も神様の前に帰れないように、言い換えれば、全人類を完全に駄目にしてしまい、地上地獄をつくろうとするのです。

今日、私たちが生きているこの世界が、地上地獄となっていく世界でなくて何でしょうか。したがって、このように地上地獄になったこの世界と一八〇度異なる、正反対の道を求めていけば、天国に行く道があるのです。再臨主が来て、この世の中を救ってくれるのも、正にこのような一八〇度反対の道を教えてくれて、天国に導くことなのです。

それでは、フリー・セックスの道と一八〇度異なった正反対の道とは、どのような道でしょうか。偽りの父母が現れて、つくっておいた道がフリー・セックスの道なので、真の父母が現れて、この間違った道を正してあげなければならないのです。神様は干渉なさることができません。その地の主権や軍事力、経済力、政治力でも手をつけることのできない問題です。偽りの父母によって引き起こされたことなので、真の父母がメスをもって手術しなければ、決して人類は救われる道がないのです。

罪を犯した者がその罪を蕩減しなければならないのです。家庭で結婚を誤って、血統が一八〇度ねじれてしまったので、真の父母が来て、結婚させ、一八〇度原状に戻すことによって、天国に行く道を開いてあげるようになるのです。

純潔と真の家庭運動を通じた平和世界の実現

神様がアダムとエバに期待したものとは何だったでしょうか。絶対愛を期待したのです。この場にお集まりの世界の指導者の皆様が、このような内容を知って、お帰りになって、皆様方の国で絶対愛を探す運動をお始めにな

れば、皆様の家庭と国は、そのまま天国に直行できるということを、御理解くださるようお願いいたします。絶対愛が存在する所には絶対相対が誕生するようになり、自動的にフリー・セックス、ホモ、レズビアンという言葉は消えるようになるのです。このような運動を世界的に広げるためにレバレンド・ムーンは一生を捧げて、受難の道を克服してきました。今は勝利のファンファーレを響かせ、世界に号令をかけ得る時が来たので、天の前に感謝をするものです。

世界平和に向かっていくことのできる礎石を置くのも家庭であり、世界平和への道を破壊し得るのも家庭です。人類の希望と幸福の土台が破壊された所がアダム家庭でした。したがって、きょう、このように「世界平和家庭連合」を創設し、皆様の家庭も、今からはサタン世界と一八〇度異なる方向に行くことのできる道を開くようになったことを、天の前に感謝せざるを得ません。この道でなくては、自由も幸福も理想もありません！

皆様は今、絶対、唯一、不変、永遠の生殖器を中心として、これを基盤にして神様をお求めになるようお願いします。この基盤が真の愛の基盤、真の生命の基盤、真の血統の基盤、良心の基盤にならなければならず、ここから正に地上天国と天上天国が生じることをお分かりにならなければなりません。

すべての男女が自分たちに所属した生殖器が、実は、自分のものではなく、主人が自分の相対だということを認定するようになれば、私たちすべては頭を下げ、謙虚な姿勢で愛を受け入れるようになることでしょう。愛は相対なしには来ないのです。相対から来るということを知らなければなりません。「ため」に生きないところには、愛はあり得ないのです。絶対、「ため」に生きるところで絶対愛を見いだすことができるということを肝に銘じられ、皆様も今からお帰りになれば、サタン世界との一戦を覚悟なさるようにお願いいたします。

どこに行かれても、テレビやその他、言論機関を通してレバレンド・ムーンの話を伝えてみてください。絶対に滅びません。地獄になったこの世界を、果たしてどんな力で変えることができるでしょうか。神様の愛、すなわち絶対、唯一、不変、永遠であられる神様の真の愛を中心として、私たちの生殖器も絶対、唯一、不変、永遠の基準に立て、生きていかなくては不可能なのです。私たちの生殖器の本来の主人は神様であられます。

今、私たちすべてが共にこの目的のために前進しましょう。神様の真の愛を実践する前衛隊になりましょう。今から家にお帰りになられたら、夫と妻でもって、自分たちの生殖器が絶対、唯一、不変、永遠な器官であることを互いに確認し、それが正に自分のものではなく、あなたのものであり、あなたが今までよく保管してきたものが自分のものだと宣言し、互いのために生き、永遠に奉仕し、感謝しながら生きようと、お誓いください。

そのような家庭であってこそ、永遠に神様がとどまるようになり、そのような家庭を中心として世界的な家庭編成がなされるのです。

そうして、皆様共に次回三百六十万双の祝福結婚式に列席なさり、地上天国に入籍する真の家庭になるようお願いいたします。ありがとうございました。

第一章　宇宙の根本秩序

一、神様の二性性相の大展開

一) 神様は二性性相の中和体

宇宙を観察してみれば、すべての存在において、陽性と陰性の二性性相が相対的関係を結ぶことによって存在していることを知ることができます。これは、鉱物という次元から始まって、すべての場合に適用されています。分子は、陽イオンと陰イオンの結合を通して形成され、植物の場合、生存と繁殖は雌雄を代表する雌しべと雄しべの結合を通じて成されます。このような二性性相は、動物の場合より一層明らかです。魚類、鳥類、ほ乳動物等、すべての動物は雄と雌によって存在します。最後に、神様の最高の創造物である私たち人間も、男性と女性で区分されています。最初の男性アダムと最初の女性エバは、人類の始祖です。このような二性性相の存在目的は、何ですか。神様は、なぜこのような方式によって創造されたのでしょうか。

神様が男性と女性を造られて何をしようとされたのでしょうか。見ようとされたのです。神様は、女性ですか、男性ですか。女性にもなり、男性にもなられます。男性性稟だけをもっているとするなら、女性だけを見つめられるようになるのです。アダムは、陰で生きなければなりません。そのように、女性も見つめて男性も見つめることができる二種類の性稟を、共に備えていらっしゃいます。ですから、結局縦的な立場に立ち、男性も好まれ女性も好まれる、二性性相をもった中和的主体だというのです。それが神様でいらっしゃいます。男性も必要であり、女性も必要であり、どこへでも行って迎え入れ、いつでも主体の位置にいらっしゃるので主体格です。それゆえに、格位では男性格位です。そして、横的というものは女性格位をいうのです。

神様はお一人でしょうか、お二人でしょうか。お一人です。お一人なのに、どのようにして二人の人に入っていくのでしょうか。この人に入ってからあの人に入っていき、あの人に入ってからこの人に入っていってと、そのようにするのですか。また世界には数多くの人々がいますが、数多くの人々にどのように入ったり出たり、出たり入ったりされるのでしょうか。これが問題になるというのです。それで、私たち統一教会の「原理」で、神様は二性性相の中和体であるという話が出てきたのです。ここには規則があります。神様は二性性相でいらっしゃる中和的本体です。これは真に素晴らしい結論です。

神様は、二性性相の男性的主体だというのです。それでは、その神様は、誰に似ているのでしょうか。私たちに似ていて、私に似ていて、皆さんに似ているというのです。同じなのです。それゆえに、「主体格」という言葉は、必ず相対格位を介在させて成立するのです。そのような概念が含まれています。相対格というものを必要とするために、「主体格」という言葉が出てくるというのです。

原理講義をする時、創造原理で「神様は二性性相の中和的主体としていまし給い、中和

的存在になっている」と簡単に言います。中和的主体になっているというのですが、それはどういうことですか。座ってそのまま神様が男性と女性の中和的存在になって、何がおもしろいでしょうか。何を中心として中和するのですか。愛を中心として中和的存在だということを知らなければなりません。

神様は何を願うのでしょうか。創造をされて、創造理想を完成して何をしようというのですか。神様御自身も愛をなそうというのです。神様御自身が願うことは何でしょうか。神様は、「原理」でいえば二性性相の中和的存在です。主体的存在です。このように、ぱっと一言で定立します。男性格を備えた主体的存在だというのです。

何が統一的起源をもたらすのでしょうか。一人でいらっしゃる神様を、統一的位置で何が喜ばせてさしあげるのでしょうか。「原理」でいえば、神様は二性性相の中和的存在であり、格位においては男性格です。その男性格位というものが、どのようにして男性格位になるのかを知らなければなりません。男性格位ならば主体でありプラスですが、相対なくしてはプラスはありません。その概念の中で、なぜプラス格位にいらっしゃるのですか。愛ゆえにいらっしゃるのです。絶対的神様も絶対的に服従してみたいというのです。愛には絶対的に従順になりたい、絶対的に一つになりたいというそのような基台がなくなる時には、統一も融合も和合というものもありません。それは、根源がないために分散してしまいます。

神様から造られた人間だという時、人間はどのようにしなければなりませんか。神様が愛の相対を造られた目的は、喜ぶためなのです。何を中心として喜ぶのでしょうか。愛を中心としてです。絶対者であられる神様も愛が必要だというのです。そうではないですか。

神様が二性性相の主体としていらっしゃるといいましたが、二性性相の神様だとしても必ず愛の対象が必要なので、天地万物を創造されたのです。

愛は、男性と女性だけではできません。男性と女性は、ただ二つの存在です。男性と女性だけを連結させては愛が成り立たないというのです。男性と女性を総合して、中心に立って動かすものが愛です。それでは、男性と女性が和合して愛を中心として動くことがどこから始まったのかといえば、神様の二性性相からなのです。男性性稟と女性性稟が和合したものを相対的に展開させたのです。それで神様は、自分の愛の相対が自分より優れていることを願われるのです。

統一教会の文先生は知恵深い方なので、「神様は二性性相の中和的主体だ」と結論づけたのです。右側から見れば男性に見え、左側から見れば女性に見えるというのです。二性性相がそうではないですか。内外になっているので、上から見れば男性に見え、下から見れば女性に見えるというのです。それでこそ女性も「よし！」と言い、男性も「よし！」と言うのです。

原因と過程と結果が明確な内容をもってくる、科学的論理のような論理をもってくる、

そのような宗教人が出てこなければ、宗教世界を救うことができないのです。統一教会の「原理」がそうです。これこれこうだからこうだ、神様は二性性相で存在される、宇宙の存在が主体と対象である、ゆえにこの世界は、神様が愛の主体であり、人は愛のパートナーとして造られたという結論がぴたっと合うのです。それが歴史を超越して、愛によって、永遠の世界と結ぶことができる力の作用によって継続されるのです。その千年、万年続く愛の作用が始まったのですが、それが普通の力ならば弱くなるはずですが、弱くなりません。

神様も愛を中心として一つになるのと同じように、統一教会もそのような観念をもっているために、世界を統一させることができるのです。キリスト教はそうではありません。「神様は絶対的な万能の神様だ。何でもすべてなさることができる」と考えています。しかし、それは誤りです。神様は何でもできますが、本来の原理原則においては、愛は二人で成すことができるようになっています。それゆえに、二性性相を成すようになっていて、愛もその条件の上で可能なのです。

神様が二性性相の中和的存在としていらっしゃるならば、二性の中和的存在の中心は何ですか。愛です。神様も愛を中心として生きてきました。

「原理」で論じている二性性相の主体としていらっしゃる神様は、いかなるお方ですか。二性性相の神様であると同時に、二性性相の中和的主体としていらっしゃるお方です。その主体の本質が愛です。絶対的愛だというのです。

「原理」の総論は、神様に対してどのように表現しましたか。神様は、二性性相の中和的主体であると同時に愛的主体です。

「愛」というこの言葉も入れなければなりません。それを必ず入れなければなりません。

神様がアダムとエバを造って二性性相を分立して中和的存在になろうとするなら、何を中心として中和的存在でなければなりませんか。愛を中心として中和的存在でなければなりません。それとともに、格位においては男性的主体格でなければなりません。

なぜ神様が人間を創造されたのですか。このような根本問題、私がなぜ生まれたのかという根本問題をはっきり知らなければなりません。神様は愛の主体です。「原理」を見れば、神様が二性性相の中和的存在だというでしょう。中和的立場で愛を中心とした統一的存在だという話はまだしていなかったのです。そこに、愛を中心として統一的存在だということを添付しなければなりません。

男性の愛と生命の起源はどこですか。神様でしょう。二性性相の中和的主体であると同時に愛の根本であるお方が神様です。『原理講論』に「真の愛の起源」という言葉を入れなければなりません。「真の愛の起源が神様だ」という言葉を入れなければならないというのです。『原理講論』を修正することができる主人公は私しかいません。それを知っていますか。

問題の出発点は、神様がいるかいないかということなのです。神様がいらっしゃるならば、人間とどのような関係にあるのですか。神様が人間と関係を結ぶためには、人格的神でなければなりません。人格的な神だということをはっきり悟ったのです。人格的神になろうとすれば人間のようでなければなりません。人間には心があって体があるように、このような素性があるので、人間を造られた神様も、人間と共に共同目的をもつことができるその本体ならば、人間に似ていなければなりません。二性性相という概念は、ここから出てくるのです。

神様が人格的な神であるように、神様は誰に似ているのでしょうか。神様は、アダムとエバを一つにしたそのようなお方なのです。二性性相の主体は神様です。男性と女性を雑然と一つにしたようなものではありません。一つに合わせたものですが、主体格を備えたそのようなお方です。この主体格の無形の神様の前に、主体格を身代わりして男性と女性が一つになり、その無形の神様の前に相対格位を備えて結ばれることが神様の創造理想を完成することであり、私たち人間、アダムとエバの理想を完成することになるのです。それ以外にはありません。

東洋哲学では人格的神を知らなかったのです。人格的神がいるということを知りませんでした。陰陽といいますが、漠然とした陰陽では人格的起源となることができないのです。それではいけないというのです。根のすべてのものを備えなければなりません。人がこのようになっているならば、男性と女性のすべての神性を備えることができるそのような根にならなければなりません。そのような意味で、統一教会で教える二性性相、この論理は偉大な論理です。

二) 被造世界は神様の二性性相に似て出てきた

宇宙の根本である神様がいらっしゃるなら、その神様は、主体と対象的な観念をもった存在だというイメージが出てきます。それゆえに、私たち統一教会の「原理」でいう二性性相は偉大な言葉だという結論に到達するのです。主体と対象が作用し始めるところから存続が展開するのです。生まれ始めるというのです。このような根本のもとでなされているので、すべての宇宙は二重的です。二重的になって、授け受ける相互作用をするのです。

被造世界は神様の性相に似ています。すべての被造物は、二性性相の分立体として展開されているということを知っています。主体と対象の関係、それから上下関係、前後関係、左右関係の相対的関係によって連結しているということを私たちは知っています。そのような環境的制度の条件をもった目的とは何でしょうか。愛を目的として動くのです。

主体と対象はどこから出てくるのですか。これが出てくることのできる基台がなければなりません。統一教会では、これを二性性相といいます。この主体と対象は、人間自体からつくられた主体と対象ではありません。ここにその基台が必要なのです。その基台が二性性相であり、二性性相の中には本性相と本形状がなければなりません。

主体と対象があって、お互いに作用しなければ力が生じないのです。力は、一人で出てくるものではありません。力は、必ず主体と対象があって初めて生じるのです。私が対象である時、私が心に悪いと感じても主体がなければならず、良いと感じても良いと言うことのできる主体がなければなりません。それで、統一教会の「原理」に、「二性性相」という言葉があるのです。

「原理」で見ると、神様は二性性相の中和的主体です。主体というものは、何を中心として成立するのですか。愛を中心として成立します。ですから、横的な基盤が必要なのです。刺激的な基盤を多方面にもちたいと思って拡大展開させたのが被造世界です。

どのような種でも、二つのかけらで一つになっています。豆のようなものも二つのかけらです。神様が宇宙の根本なので、神様の形状に似なければ根本の種になり得ないのです。

生命の種は必ず二つになっています。これは天地の道理です。神様は、二性性相としてお一人の人格になっています。種の根本を象徴するのです。種には胚芽があるのですが、胚芽には、根になる部分、芽になる部分があります。自らが存続することができる内容をすべてもっているのです。そのまま置いておいても、完成した実体を構成できるようになっているのです。

神様が二性性相になっているので、私たち人間も二性性相になっているというのです。万物もプラス・マイナスの二性性相になっています。神様と人間と万物を合わせて連結させれば七数になります。これは、段階で見れば三段階であり、広げれば四位基台です。この三数と四数が調和をなして統一されれば七数になります。七数は、創造目的完成数です。

宇宙は、すべてプラス・マイナスになっています。分子を見ても、プラスイオンとマイナスイオンになっています。すべて相対圏になっているというのです。原子を見ても、陽子と電子になっています。宇宙構成の根本がそのようになっているのです。植物は雄しべと雌しべ、動物は雄と雌、人は男性と女性になっています。すべてが相対的になっています。そのように相対的になり、一つの体制圏に収拾されなければなりません。神様が主体なので、神様を中心として収拾されなければなりません。その創造の意志に一体化した相対圏がつくられなければ、神様の創造の喜びはあり得ないのです。

統一教会で神様を二性性相の主体としていらっしゃるお方だというのは、すべて科学的な分析結果によって、間違いなくそのようにいらっしゃるという事実を知っていうのです。ですから、主体と対象が完全に一つになれば、神様の力がそこに永遠に存在するのです。主体がなく対象がないところには力は存在しません。それでは、神様はどのように存在するのでしょうか。神様自体内にある主体と対象の力が授け受けすることによって永存します。

「原理」は二性性相を言っています。二性性相は、なぜ必要ですか。二性性相がなければ創造の調和をつくり出すことができないのです。二性性相があるのでお互いに授け受けできるのであり、その一つは骨と同じで、一

つは肉と同じなので、授け受けすることによって新しい形態が展開できるのです。神様が二性性相それ自体なので、神様を中心としてその相対世界が生まれざるを得ないというのです。このように二性性相は、創造的妙味を成し遂げるために必要なのです。

「原理」でいえば、全体を連結するものが万有原力です。すべてのものに神様の二性性相が入っていって、それがすべて万有原力になっているのです。核心は同じです。

男性には女性の性相があります。女性も男性の二性性相の要素をもっているために、男性が暮らすことのできる場所があるのです。神様は二性性相なので、女性とも男性とも暮らすことができます。それと同じように、一つの相をもった夫も、女性が二性性相の要素をもっているために夫人の胸の中にとどまることができます。女性も男性の心の中にとどまることができます。一つです。離れることができないのです。

アダムとエバ、男性の先祖、女性の先祖です。男性の種、女性の種です。半分の種なのです。すべてのものが一つの殻の中で二つになっています。それで、神様と宇宙を象徴するのです。神様が統一された中には二性性相があるのですが、その二性性相には胚芽があります。種があって核があるのです。

神様も無形の主体でいらっしゃるために、実体相対圏、絶対的な有形の実体を必要とせざるを得ないということが理論的な結論です。それゆえに、神様も二性性相をもっているのです。それは、無形の性相を有形の実体として展開する創造のためのものです。それを中心として宇宙の被造世界を考えてみれば、鉱物世界もすべて主体と対象の関係をもって運動をしています。分子で見るときはプラスイオンとマイナスイオンが主体と対象の観念であり、原子で見るときは陽子と電子が主体と対象の観念です。

神様は、女性性稟もあって男性の性稟ももっている二性性相によって成されています。神様は、神様の中にある男性の性稟を集めて男性を造られ、女性の性稟を集めて女性を造られたのです。このようになれば自然に主体と対象に分かれ、この主体と対象がお互いに授受作用をすれば、これが再び一つになって作用するようになります。これが正に統一教会の「原理」でいう正分合作用だというのです。この偉大な統一教会の「原理」が、今後哲学において、宗教において問題になるはずです。

愛のみ旨を成していくためのものですが、愛を成すことができる存在は誰ですか。神様の中にあるものをそのまま表したような、一つ残らず自分に似た同じ姿の息子と娘を造られたのです。それゆえに、統一教会でいう「二性性相」という言葉は、この地球上で初めて聞く驚くべき内容だというのです。二性性相の中和的主体、これはどういうことでしょうか。天地の道理がすべて入っている言葉です。

愛といっても、一人でいる所には通じません。二つが和合する基準を中心として、より高い次元に引き上げるために作動するのです。これが愛の力です。愛が作動する時は、相対

という橋がなくてはならないので、万有のものは愛の理想に和合することができるようになっているのです。神様がさらに愛の理想を実践するためには、相対になるようにせざるを得なかったという事実を知らなければなりません。それで、「二性性相」という名前をつけたのではないですか。

全体を糾合して一つの原則的な基本を明らかにしてみれば、主体と対象の関係、ここから存在と作用を起こすのです。主体と対象によって存在し作用すると見るのです。私たち統一教会は、これを中心として二性性相という概念をキャッチしました。それでは、二性性相がただそのままいるのでしょうか。ストップしているのでしょうか、動いているのでしょうか。ではどうして動くのでしょうか。なぜ動くのかというのです。損をするために動くのでしょうか、利益を得るために動くのでしょうか。作用して運動するのに、損をするために運動するという法則があるならば、私たちの理想の作用や希望に向かって前進する作用はあり得ないのです。損をするならば、これがますます小さくなっていくというのです。小さくなってストップしてしまうというのです。しかし、この小さいものが利益のために動くならば、ますます大きくなっていきます。

神様御自身は一つの体です。二性性相の主体としていらっしゃるために自体内で愛するといいますが、思考では「男性的主体の位置だ、女性的対象だ」といって愛を感じることができるのかもしれませんが、男性と女性が分立された立場では刺激的な衝撃を感じることができないというのです。

したがって、アダムとエバが神様御自身をさて置いて、自分たちの間でもっと衝撃的に愛するのを見る時、愛の主体であられる神様は悪く思われないというのです。なぜですか。その二人が一つになったその場を相対として喜びを感じることができる主体者でいらっしゃるために、その相対がより価値的な愛を感じるようになる時、神様も幸福を感じられるようになるというのです。それが神様の人間創造を中心とした愛の第一法度ではないかというのです。したがって、そのような愛の教育を受けることなくしては、その場に行くことができないのです。

本来力とは、作用すれば減少するのですが、愛の力だけは作用すれば強くなります。無限に拡散したものは、その中に無限に集約された力があるために引き寄せるのです。

ですから、循環作用の内的力を自分自体がもっているということを知らなければなりません。そのような論理を適用しようとするので、私たち統一教会では二性性相の論理がどこにでも適用されるのです。文先生に知恵があるので、それをすべてキャッチしておきました。

真の愛がどれほど良いかというのです。神様も愛ゆえに生まれました。愛ゆえに生まれました。気分が良いでしょう？　「ああ、文総裁が言うには、神様は愛ゆえに生まれたそうだ！」。神様を捕まえて分析してみてください。神様の二性性相まで先生が分析しました。その二性性相にも、また二性性相があるでしょう？　皆さんもすべて男性ホルモンと女性ホルモンが出てきますね。分からなければ病院に行って診察してもらってください。

それゆえに、すべて通じるようになっています。

創造原理の二性性相がなぜなければならないか、どのようなものが主体でどのようなものが対象かという問題を根本的に解いて、解いて、これ以上解くことができない時、戻ってくるというのです。いくら掘り下げても戻ってくるというのです。これが千年、万年そのようになるので、仕方なく「ああ、この道しかないな。これ以上探す必要はない」という時、「原理」という言葉が成立するのです。それで、原理というものは変わらないのです。

三) 神様の宇宙創造の動機は愛

天と地自体も、自ら存在したくて存在するようになったのではなく、ある力の源泉に立脚して生まれたということを考える時、ここよりも一段階上がって、中心的な主体を備えて天地を動かすか、あるいはここに創造をするという力の作用体、根本の作用体が必ずなければなりません。このような立場にいるそのお方を私たちは「神様」と言いますが、民族が違い、言語が違うことによって異なった表現をします。しかし、その名詞が問題ではありません。この宇宙の中心がなければならないというのです。その中心は、この存在世界全体の前において、存在が作用して移動してもその移動するところについていって移動せず、動く相対的な世界の中心において億千万年動かない中心的な本体がないといけないというのです。

宇宙の根本を掘り返してみた時、神様はなぜ生まれたのかという問題は根本に入ります。神様はなぜ生まれたのか、何のために生まれたのか、神様は何をするのか、このようなことが問題なのです。今日、キリスト教の盲目的な信仰時代は過ぎました。むやみに神様を信じる時代は過ぎました。このような推理的な結論に続いて、適切な神様に対する内在的性稟、外向的なみ旨に対する世界との関係、神様における内外との関係、この関係というものが問題です。

人間が第一の存在になることはできないのです。いくら優秀だとしても原因的存在になることはできないというのです。私たちは、あくまでも第二の存在です。結果的存在です。それでは、この宇宙の原因的存在とは何ですか。神様がいるならば、神様自体が原因的存在であり絶対者です。そのような絶対者がいるとするなら、絶対者自身が何を必要とするでしょうか。何を中心として人間や被造物と関係を結ぼうとされるでしょうか。これが根本問題です。神学で取り扱わなければならず、哲学で取り扱わなければならない重要な問題です。神様と人間、原因と結果を連結できる内容は何なのかというのです。

神様は何のために、どのように生まれたのでしょうか。愛によって生まれました。宇宙の根本はどのようになされたのでしょうか。愛の種があり、それが相対を中心として吸収してみたところ、神様自体が性相と形状によって構成されるようになりました。何を中心としてそのようになっているのでしょうか。愛を中心として形成されています。皆さんと同じです。父母の愛によって受けた皆さんの生命の種、一つの細胞が大きくなって今の皆さんが生まれてきたのと同じように、神様も

そのように大きくなったというのです。神様も、目が生じ、鼻が生じてこのように生まれました。全く同じだというのです。

真の愛というものは、最も深いところから出発します。では、真の愛の起源は何ですか。神様、ゴッド（God）です。「ゴッド」という発音を韓国語で言えば、昔の人々が使った帽子のことを表します。帽子は、てっぺんに使うものを言います。同じ意味だというのです。ここにおいて、性相と形状がなぜ分かれるのでしょうか。問題になります。宇宙の根本とはどこでしょうか。宇宙の根本はどのように生まれたのでしょうか。これが問題です。神様がどのように生まれたのかというのです。神様を見ましたか。それはどのように生まれましたか。皆さんはどのようにして生まれたのですか。宇宙のすべての要素の津液を取って、総合して生まれたのが正に「私」です。

愛の中心は神様なのです。宇宙生成以前からいらっしゃる、唯一的であり、永遠的であり、不変的な存在なのです。ところで、愛は心情の流れです。内的な心情が外的に流れるものが愛です。ゆえに神様の本質は心情です。このような神様が、正に存在論的に扱った宇宙生成の根本原因である統一的存在だったのです。この根本原因からの宇宙の生成が、正に神様の宇宙創造だったということは言うまでもありません。

それでは、神様は、どうして宇宙と人間を創造することができたのでしょうか。それは、神様が心情をもっていらっしゃるからです。心情があるところにおいてのみ生命が現れることができ、生命があるところに発展運動（創造）が展開するためです。ところが、その創造には必ず目的があるのですが、その理由は、本来心情というものは目的を指向するものだからです。ですから、創造目的は、心情を充足させる喜びであるといわざるを得ません。そして、この喜びは、被造物、特に人間が神様に似た時に訪れるのです。

ゆえに神様の愛と創造性に似た人間と国家が、神様が創造しようとされた目標だったのです。これは、人間の理想がそれを追及することを見ても知ることができます。理想とは、当然享有するようになっている世界を追及する熱望なのです。

宇宙の根本とは何でしょうか。この宇宙が生まれる前には何があったのでしょうか。神様ですか。神様だけいましたか。愛が見えますか。愛は実体がありませんが、愛はどこにありますか。愛はコンセプト（概念）です。神様においても、愛はコンセプトなのです。神様にとっても、愛はコンセプトだということを知らなければなりません。

神様は、なぜ創造をされたのでしょうか。愛のためにされました。愛は、一人ではできないのです。相対がいなければなりません。一人でいる愛は縦的な愛なので、環境的条件がありません。

神様は絶対者ですが、何が慕わしくて人を創造されたのでしょうか。黄金も何の知識も必要ない全知全能の神様が、もっていないものは一つもない神様が、何が必要で人を造られたのですか。

すなわち、創造の根本動機は何ですか。それは権力でもなく、知識でもなく、所有でもないのです。神様には愛の基盤がなかったの

です。神様も一人では愛を成し遂げることができないのです。それゆえに、天地創造の動機が愛だというのです。

神様は、なぜ天地を創造されたのでしょうか。その全知全能の絶対者が、何がなくて人を創造されたのでしょうか。愛のために創造されました。愛は相対がなくては現れません。相対がいないのに作用するようになれば損をします。すべて自分を保護するようになっています。損をするところでは絶対に動きません。愛は、相対が現れれば、ないようですが、飛び出してきます。

神様にも愛がありますが、男性的な神様が静かに一人でいる時には、その愛が現れません。これを現してみせることのできる相対が、正に人です。

全知全能の神様、遍在する神様が、何が不足で人を造られたのでしょうか。神様にお金が必要で、金の塊が必要で、ダイヤモンドが必要ですか。そのようなものはいくらでもあります。それでは、知識が必要ですか。神様は知識の王なので、知識はいくらでもあります。それならば権力が必要ですか。権力とは、神様にとってあってもよく、なくてもよいものです。神様に不足だったのは愛です。愛というものは相対的関係においてのみ成立するものだからです。神様も、愛を必要とする神様にならずしては、この創造世界と人間世界が関係を結ぶことができないのです。ですから、愛をもって訪ねてこなければ存在世界とは関係ないという結論が出てくるので、神様は愛を標準として定めてこられたのです。

神様がなぜ天地を創造されたのでしょうか。いくら絶対者だといっても一人では喜びを感じることができず、仮にうれしいと思っても喜びの刺激を感じることができないので創造されたのです。絶対者がいくら、「私は絶対者だ。私は愛の主人公だ。生命の主人公だ」と言ったとしても、絶対者一人では愛の刺激を感じることができませんし、天地が私の体の中にあるという生命の刺激を感じることができないのです。

神様が自分自身だけを考えたとするなら天地創造をされたでしょうか。創造とは、力の投入をいうのです。芸術家は、最高の傑作品をつくることが願いです。芸術家は、傑作品をつくるためにあらゆる精誠を投入します。すべてを投入するところにおいてのみ完全な傑作品が出てきます。これ以上できないという時に、初めて傑作品が生まれます。

創造は、投入するところから始まります。力を投入してこそ創造が可能です。力を投入しなくてはいかなるものも生まれません。完全な投入をするところから完全な対象が成立するという原則をおいて見る時、神様は主体として対象を造るために完全に投入されました。神様御自身が、自分自身のためにではなく、対象のために生きるといって運動を始めたのが創造です。

創造するということは、力の投入をいうのです。投入をしたのですが、どれほど投入したのでしょうか。神様がみ言によって造られる時、「このようになれ、あのようになれ」といたずらに創造したかのように理解しています。違います。そうではありません。ここには真の生命を完全に投入して、真の愛を完

全に投入して、真の理想を完全に投入しました。私たちも精誠を尽くさず、血と肉を投入しないものは愛しません。

それゆえに、創造する前と創造したあとが違います。創造する前には自分のことを考えましたが、創造を始めてからは対象のために生きました。私がいるのは自分のためではなく相対のためだ、息子、娘のためだ、このようになっています。

神様が人間を創造される時、自分よりももっと立派な愛の相対を造ろうとされたので、神様のすべての要素、見えない無形の要素を一〇〇パーセント実体化させるために投入しても、もっと投入しようとされたのです。そのことが意味するのは、投入して忘れてしまうことができるその場においてのみ、真の愛の起源を発見することができるというのです。簡単な内容です。正にこれが、宇宙の根本原理です。

愛を占領しようとするなら、投入して忘れ、投入して忘れてしまわなければなりません。なぜそのような愛をもたなければならないのですか。愛は、動けば動くほど小さくなるのではなく、大きくなっていくものだからです。力学世界での自然現象は、動けば動くほど、作用すれば作用するほど小さくなるでしょう？　自然世界は、動けば動くほど小さくなるのですが、真の愛の世界は、動けば動くほど大きくなっていきます。神様がそれを御存じだったので、真の愛を中心として創造を始めることができたのです。

宇宙はどのように出発したのですか。神様をおいて見る時、すべてが「ため」に生きるところから、投入するところから出発したのです。自分を消耗するところから始まります。それでは、自分を消耗して相対をつくって何をしようというのでしょうか。二つとも消耗するのですが、消耗して得るものが愛です。愛さえもてば、いくら消耗しても良いというのです。そのような概念が愛なので、愛を中心として神様が創造を始められたのです。

神様が損することをされたのではありません。投入することは損害ですが、なぜ神様がそのようにされたのでしょうか。愛はすべてのものを満たしても余りある力があるので、消耗させて投入しましたが、その代わりに愛を取り戻してくるのです。真の愛は、投入するほどますます小さくなるのではなく、動けば動くほど大きくなっていきます。そうでなくて、真の愛が小さくなるという原理ならば、神様自体が投入して消耗してしまうのです。反対になります。真の愛は、投入すれば投入するほど大きくなっていくのです。

愛には創造能力があるので疲れません。愛の心をもてば、いくら投入しても、消耗したエネルギー以上にいつも補充し得る愛の力があるので疲れないのです。それで、難しくて苦痛でも嫌ではないのです。それが嫌ならば行くことができません。愛ゆえに生きる道には、「嫌だ」という心を永遠にもつことはできません。真の愛ゆえに生きる道には、永遠に「嫌だ」という心はあり得ないというのです。神様の本質には怨讐の概念がありません。悪の概念がないのです。それは、真の愛の中にいらっしゃるからです。

神様の創造理想を中心として、投入、投入、投入しなければなりません。投入をすれば巡

り巡るのです。空気を例に挙げて、絶対低気圧と高気圧があるならば、その中間の気圧が生じます。誰が呼ばなくても天が降りてくるのです。それゆえに、一〇〇パーセント以上投入したいと思う人は、常に天が満たしてくれるのです。宇宙の原則がそうです。完全に投入して忘れてしまうところには永遠の運動が連結するので、その基準において永生の論理が出てくるようになるのです。永生、永遠の生命、そうでなければ、統一原則をどこから引き出すことができますか。「ため」に生きるようになればぐるぐる回るでしょう？
ぐるぐる回ってどこに行きますか。どんどん小さくなって上がっていきます。上がっていくのです。くるくる回って広がれば下がっていきますが、徐々にすーっと上がっていくために、神様は、自動的にアダムとエバの肩の上に両足を載せざるを得ないのです。

なぜ神様がいらっしゃるのでしょうか。何のためにいようとされるのですか。愛のためにいようとされるのです。それで、愛の相対が必要なのです。そのようにして全知全能の神様は、愛の相対を創造しなければならなかったのです。
創造の本質的理想が愛を中心として創造を始めたということを、これまで私たちが全く知らなかったというのです。愛を中心として、すべての被造世界が創造されたというのです。

神様の願いは、真に与えることができる世界的な踏み台をもつことです。神様は、与えることにおいても誰も讒訴することができず、受けることにおいても誰も条件を提示することができない、自由で平和で幸福な場を願われます。そのような場を世界的に広めて、万民がそこで暮らせるようにすることが神様の収めようとする所期の目的です。

愛が先ですか、生命が先ですか。愛が先です。地球が神様の生命から出てきたからといって、生命が一番だとはいえません。愛が一番だというのです。神様は、天地創造を生命からしたとしても、その生命の発源地、動機は愛です。生命が生まれたのは愛のためです。

世界の一番になるものは何ですか。神様が一番です。その位置に上がっていくのです。上がっていって何をしようというのですか。神様の愛を中心として、宇宙を自分のものにしようというのです。そうです、皆さんも全員欲心があるでしょう？　その欲心、欲望のすべてを完成するには、お金をもって、自分の知識、自分の権力をもってはできません。唯一、愛です。これが統一教会の「原理」の真髄であり、人生哲学の根本です。今までこれを知りませんでした。簡単な内容です。

二、宇宙は主体と対象でできている

一) ペア・システムが宇宙存在の原則

万物は、鉱物世界でも植物世界でも、愛を基台として、愛の主体と対象関係の因縁を通じて理想的分母をもって生まれました。万物は結果の存在なのです。そして、結果の存在は、原因的内容なくしては生まれることができません。それで、私たちは、その原因的存在を神様といいます。それで、神様を中心とした愛の圏内で、東西南北、上下、前後左右を問わず、いつも和合して和動するためにすべての鉱物世界もペア・システム、主体と対象の関係にあるのです。このようにペア・シ

ステムで構成されているというのです。鉱物世界も動物世界も植物世界も人間世界も、同じです。

創造をするにおいては、人間を中心に、人間をモデルとして東西四方に広げて橋を架けてつくったのです。それで、すべての万物、鉱物、植物、動物界、すべてが相対になっています。すべて相対につくったというのです。そのように縦的な道と横的な道をペアでつづりながら行くのです。ジグザグに行くもの、このように運動するもの、様々な形態の作用を経ながら、ペア・システムを中心とした万物は、理想的愛を訪ねていくことができる人間の教材です。

すべての被造物は、主体と対象のペア・システムになっています。なぜそのようになっているのでしょうか。すべての被造物、存在世界は、それ自体の愛を絶対視する立場に立っているために、それを中心として授け受けして一つになるために、主体と対象関係、ペア・システムになっているのです。そのようになっていないものがありません。すべて愛ゆえに生まれたのです。

宇宙には主体と対象の関係が必ず必要であり、存在するすべてのものは主体と対象の因縁に従って存在するようになっているので、この宇宙はペア・システムのコンセプトを中心として造られました。そのように生まれたのは、愛を中心として、愛を必要とするためにそのように生まれたという結論を下すことができるというのです。鉱物も同じです。プラスイオンとマイナスイオンが授け受けします。植物世界も必ず雌しべと雄しべを中心として、動物も雌と雄を中心としてすべて存在するのです。

鉱物世界も陽イオンと陰イオン、すべて相対になっています。百七個にもなる元素も、どこにでも行ってくっつくわけではありません。実験室でいくら強制して付けても駄目です。しかし、自らの相対になると、一つになれないように無理にいろいろしても、神様が止めてもぴたっとくっつきます。それは知っているでしょう？　すべてペア・システムになっています。鉱物もそうであり、動物も植物もそうです。すべてペア・システムになっています。すべて陰陽の道理に通じています。

この世の中のすべての存在は、ペア・システムになっているというのです。ペア・システムになっているために、鉱物世界、植物世界、動物世界を問わず、彼らが連合するためには、必ず主体と対象が愛という概念を中心として連結するようになっているというのです。

愛をもってする時は、通じないところがないのです。それゆえに、この宇宙はペア・システムになっています。鉱物世界もペア・システムです。植物もペアでしょう。動物もペアです。何を中心としてですか。級は違いますが、垂直の愛を中心として、次元は違いますが、この大宇宙に愛を中心として、どのような空間でもすべてそうだというのです。水平線上の位置に自分の存在を決定し、宇宙空間に浮いているのです。これらはすべて、愛ゆえにそのように生まれたのです。

すべての被造世界は、ペアの組織体制で連結しています。鉱物世界もそうです。すべてのものがプラス・マイナス作用をするのです。重力をもった地球星上でも、強い引力関係をもっている磁石は、その引力が地球の重力よりも強いために作用が表向きに現れるだけであって、磁石以外のすべての要素もプラス・マイナス作用をするのです。意識化運動も電流を通したプラス・マイナス作用を通して展開するのです。ペア・システムの中心にあるものとは何ですか。その中央には、自分なりに二つを連結させて保護することのできる中心軸があるのですが、その軸が正に愛の軸です。ですから、鉱物世界の元素も相対基準になるもの同士では自ら一つになりますが、相反した元素同士では、いくら神様が命令して、またどのような実験室の主人が命令して、いくら千年精魂を込めても一つになることができないのです。

宇宙は、愛を離れては生きることができないようになっています。ペア・システムになっているのです。昆虫たちも、見れば雄と雌がいるでしょう？　ある時は、庭のような所に行って土を一度掘ってみます。多くの虫がいます。見えない多くの虫がいるのですが、それにも雄と雌がいます。それらも子供を産んで、おっぱいを飲ませます。それらも話をするというのです。話を感じとったり、雄と雌がこのように喜んだりしていますが、どのような力でそのような調和を起こすのですか。昆虫世界にも愛があるでしょう？　雄が雌に従っていき、雌は絶対に雄についていきます。

鉱物世界もペアになっています。陽イオンと陰イオンを中心として作用するのです。それゆえに、真の愛を中心としてこのつまみさえぱっと抜けば、神様も引っ張られ、真の父母からすべての世界人類が、すべて神経の筋に引っ掛かって引っ張られてくるのです。すべてがペア・システムになっています。級は低いのですが、愛の天理に従って生きるのです。

神様から造られたすべてのものはペア・システムです。鉱物世界もペア・システムであり、級は低いのですが陽イオンと陰イオンも愛を表示しながら絡み合っているのです。これは、レバレンド・ムーンがこの世に現れて、歴史始まって以来初めて発表するのです。神様御自身も真の愛を絶対視して、それに絶対服従して生きるというその起源を発表したのは、歴史上レバレンド・ムーンが初めてです。それは観念ではなく事実です。ですから、神様は、真の愛を探し出すために創造されたのです。

小さな虫もそれなりの愛を中心として、この宇宙のペア・システムという創造理想圏内で同じ位置、同じ要素をもっていることを誇るのです。あなたは大きくて私は小さいけれど、二つが一つになって分けてあげることさえできれば、億千万世たっても分けてあげることができると誇っているというのです。人と違うのです。元素世界が一つになる時は、プラス・マイナスが自分の相対についていって一つになるのです。ところが、人の取るに足らない姿は何ですか。ですから、本質に一致できていないので、これは事故です。

世上万事を見ると、すべてペア・システムになっているというのです。それを抱えて生

きています。神様が御覧になる時、「やあ！あなたも私に似ているなあ。あなたも一人では寂しいだろう」、そのようにおっしゃるのです。それで、この宇宙は、級は低いのですが、すべて理想的ペア・システムによって展開した、充満した自然博物館だというのです。自然博物館であると同時に、愛の博物館です。どうですか。過ぎゆく道端の松やそのポプラの木をいつも見ているように無心に見たでしょう？　これを見つめる時、「あなたも私のように主体と対象が授け受けできる愛の相対的な因縁をもって生きているのだなあ！　あなたと私を比較する時、今日私は一人で生きていて、このように堕落した生活をしているのであなたに恥ずかしい」と言うことができなければなりません。そのような世界に至るようになれば、落伍した人間でも価値がいくらでもあるというのです。それを見て尊敬することができる人間になれば、どれほど美化された世界になるでしょうか。見る世界がどれほど美しいでしょうか。神様が愛の心をもっていらっしゃるので、そのように造らざるを得ないのです。それゆえに、存在世界はペア・システムになっているというのです

この宇宙は、すべてペア・システムでできています。鉱物世界においてもプラスイオン、マイナスイオンになっています。元素が違うものは、いくら科学者が研究して何をしても一つになりません。しかし、自分と相対性をなすようになれば、いくら離しておこうとしても一つになるのです。ペア・システムになっているのですが、そのペア・システムの中心は何でしょうか。愛です。植物も、すべて男性と女性のような性稟を中心として和合し、種を結ぶようになります。このようにして本然へ帰るのです。二つが一つになってこそ本然へ帰るのです。分かれたものだからです。それで正分合です。

皆さんが環境圏をつくらなければなりません。神様も環境圏として太陽、地球、空気、水を造られたのです。環境圏には、いつも主体と対象があります。公式です。すべての被造万物はペア・システムになっているのです。鉱物世界もそうであり、動物世界もそうであり、人間世界もそうです。なぜ主体と対象になっているのですか。真の愛の完成のためです。主体なくしては愛を中心として完成できません。公式です。そのように完成した先祖が、今まではこの地球上にいなかったのです。

雄と雌が一つになってこそ、すべての天地の調和をつくり出すことができるのです。雄と雌が一つにならなくては天地の調和が成せず、ペア・システムになっている宇宙世界に和動することができないのです。そこでは除去されてしまうのです。

一人では存在できません。一人で存在する道理はないのです。それゆえに、すべての存在世界はペアで存在するというのです。なぜペア・システムになっているのでしょうか。愛のためです。どのような愛のためですか。本然の神様が喜ぶことができる本然の愛、真の愛のために存続するのです。

万物は、一人でいるものがありません。万物は、必ず主体と対象になっています。すべてペア・システムになっているというのです。これを今日の人間たちは知りません。相対で宇宙を創造したところには絶対信仰観が出て

くるのです。ペア・システムが生まれたのは愛のゆえだというのです。

この世の中をよく見てみると、ペア・システムになっているでしょう。環境圏内には必ずペアがいます。そのペアの、主体と対象はバランスをとっているのです。バランスをとらなければ滑り落ちてしまいます。四方に滑ってしまうのです。東西南北に滑ってしまうというのです。バランスがぴたっと合うようになれば、愛を追求することができるバランス基準さえできれば、世界のすべてのものが平衡となり、ぴたっと平面になるのです。宇宙に水平の表面が生じるのと同じです。ぴたっと一つになる時には、水平の表面が角張らないで丸い形態になるのです。

その端は、ぐるぐる回るのに妨害となる作用の形態を自然に備えなくなるというのです。循環するにおいて、それが遠心力作用を一〇〇パーセント加重することができる円形に似て一つになるようになっているのです。どれほど素晴らしいでしょうか。

ペア・システムは主体と対象の概念ですが、この主体と対象はいったい何をするのですか。これがあるのは愛のゆえです。愛の概念があって主体と対象があり、主体と対象があって作用し、作用があって力が出てくるのです。今日の科学者は、これしか見ることができませんでした。それゆえに、このような理論をすべて整理しておかなければなりません。「ああ！　このようになって作用があり、作用がある前に主体と対象が、主体と対象がある前に愛がなければならない」、これを反対に話すと、力が存在するためには作用が必要であり、作用するためには主体と対象がなければならず、主体と対象は愛がなければならないというのです。

環境には、必ず主体と対象があるようになっています。したがって、神様が造られたすべての世界はペア・システムになっています。簡単な内容です。鉱物世界も相対になっていて、植物世界も相対になっていて、動物世界も相対になっていて、人間世界も相対になっていますが、その相対とは何ですか。男性と女性です。

力よりも作用が先です。作用は一人ではできないのです。必ず主体と対象がなければなりません。この宇宙は、ペア・システムの原則、公式に立っています。ペア・システムになっているというのです。結論がそうです。世界がどれほど簡単か見てください。鉱物世界も相対でできています。すべてそのようになっています。植物もペア・システム、動物もペア・システム、人間もペア・システムになっています。神様も二性性相です。それは、永遠の真理であり、公式です。

すべての創造物は、ペア・システムになっています。それで、それを管理して、見て、聞いて、話すことができる五官も、すべて相対になっています。彼らを感知することができるようになっているのです。相対をもてないものは、この宇宙創造世界から追放されてなくなるのです。

すべてのものは主体と対象、ペア・システムになっています。完全なものが相対なので、そこに従っていかなければなりません。心と体のうちで、どちらがより良心的で、より善

に近いでしょうか。体よりも心が善の面に立っているので、心に絶対に従っていけば天国であり、体に従っていけば破壊、なくなる存在、地獄、破滅だというのです。

二) 主体と対象は愛の関係

この宇宙がなぜ生まれたかということが問題です。これは、宗教世界やすべての学問世界、あるいは哲学世界の根本問題なのです。宇宙の中心は人間ですが、人間がなぜ生まれたのかという問題さえもみな分からずにいます。また人間を中心として横的に鉱物世界、植物世界、動物世界の三段階に連結されたすべてのものがペア・システムになっています。なぜペア・システムになっているのか、今までは漠然としていましたが、そのすべてのものは愛ゆえに始まったのです。

宇宙の根本は何かといえば、すべて愛ゆえに生まれたので、愛を求めるためには、愛をなすためには雄と雌がいなければならない、このようになるのです。動物では雄と雌ですが、植物では何ですか。雄しべと雌しべです。鉱物世界では、分子をおいてみればプラスイオンとマイナスイオンです。それが雄と雌です。すべてが雄と雌なのです。

作用しようとするなら、どのようにしなければなりませんか。作用は、一人のままではできないのです。プラスとプラスが会ってはできないのです。必ずプラスとマイナスの相対的関係においてのみ作用が成立するのです。宇宙の現象の根本は、力によるものというよりも、ある作用が始まって調和の世界へ拡大していくものですが、作用の形成はプラスだけではできないのです。プラスとマイナスが授け受けすることから作用が始まるので、作用するところには必ず主体と対象がある、このように見るのです。それで、すべてのものは相対をもっているのです。

このように小さいものにも雄と雌があるというのです。雄と雌、プラスとマイナスになっているというのです。分子もプラスイオンとマイナスイオン、すべて相対的に主体・対象関係になっています。神様は何を好まれるお方ですか。神様はどのようなお方ですか。プラス・マイナス、雄・雌をつくられたことを見ると、そのように行動することを好まれる神様です。宇宙の根本とは何ですか。「主体・対象であり、雄・雌である！」というのです。

宇宙の根本に入っていけば、主体・対象関係においてすべての調和がなされるのです。もう少し入っていって見ると、主体と対象関係がなぜ必要なのでしょうか。作用するためです。作用は運動するためです。このようになります。この世に存在するものの中で運動をしないものはありません。皆さんも運動しているでしょう？　先生と皆さんも、必ずこの主体と対象を中心として何かが流れているのです。

主体と対象が一つになることによって、電気でいえばプラスとマイナスが一つになることによって光が発するのと同じように、宇宙の光が発することができるというのです。電気と同じだというのです。この小さな電球の中にあるプラス・マイナスが連結されてです。ここだけで一つになっても駄目です。これが、

もっと大きい変電所を通して発電所まで、結果的な立場ですが、根本的発電所と連絡することができるところにおいてのみ永遠の光を発することができるというのは常識的な結論です。

宇宙の根本は、力よりは主体と対象の観念です。宇宙的根本は、主体と対象の観念で始まり、主体と対象には格位がなければなりません。主体的格位と相対的格位がなければなりません。その主体的格位が神様であり、相対的格位が人間です。神様は、なぜ人間を創造されたのでしょうか。神様は主体であられるので、相対がなければならないからです。相対がいることによって刺激を感じることができるためです。何によって。美と愛と真理によって刺激を感じるので人間を造られたというのです。

宇宙の根本である力というものも、物質世界において授け受けする愛的因縁と同じ形態の作用によって生成されるのです。それゆえに、どのような存在でも、主体と対象の関係をもたなければこの宇宙に存在できないのです。

宇宙の根本概念とは何でしょうか。哲学者たちも、宇宙の根本概念がどこから出てきたのかということを知りません。真の愛！　神様もなぜ存在するのかといえば、愛ゆえに存在するのです。愛ゆえに神様が必要であり、愛ゆえに神様がいらっしゃるのです。神様も愛のために生まれたのです。それゆえに、宇宙が存在する前に愛の概念があったというのです。この愛の概念の完成は何かというと、雄と雌、陽性と陰性がなければならないということです。存在するすべてのものは二種類の類型があります。

人類のすべて、宇宙の根本が主体と対象、ここにすべて入っています。それゆえに、すべてが相対のために生まれたというのです。主体と対象をもたないものがありません。鉱物世界もそうではないですか。分子なら分子において、プラスイオンとマイナスイオンが主体と対象になっていて、植物の世界はすべて雄しべと雌しべ、動物世界は雄と雌、人間世界は男性と女性になっています。すべて相対的です。

宇宙の根本は何ですか。宇宙は何から始まったのですか。愛です。科学者たちは、「宇宙は力でできている」と言います。作用するのを見て、力があることが分かるのです。力があれば作用をします。では、作用が先ですか、力が先ですか。男性が男性として成長する時は、愛の力は作用しないのです。

男性として作用しながら大きくなるのです。心と体が作用しながら、だんだんと成年になっていくのです。そして、女性に会う時に横的な力が生じるのです。力が現れるには、必ず作用を経ていかなければなりません。力がある前に作用があるというのです。それでは、作用はどこから出てくるのでしょうか。主体と対象の関係です。人も心と体、すべてのものがペア・システムになっています。この目も二つの焦点を合わせなければなりませんし、鼻もまず焦点を合わせるのです。ペア・システムになっています。

再創造の公式は何ですか。宇宙は、プラス・マイナスになっています。分子を見ても

プラスイオンとマイナスイオンになっています。すべて相対圏になっているでしょう。原子を見ても陽子と電子になっています。すべてそのようになっています。宇宙構成の根本がそのようになっているのです。植物は雄しべと雌しべ、動物は雄と雌、人は男性と女性でしょう？　すべて相対的になっています。そのように相対的になって、結局一つの体制圏に収拾されなければならないというのです。神様が主体なので、神様を中心として収拾されなければなりません。その創造の意志と一体化した相対圏がつくられなかったとすれば、神様の創造の喜びはあり得ないのです。

真の愛には、垂直的な愛と水平的な愛の二種類があり、宇宙はこの原則によって動きます。宇宙の構成もそのようになっていて、植物世界、動物世界、鉱物の世界、このすべてが主体と対象の関係になっていて、垂直と客体の関係を中心として円形に似ているという事実は、級は低いのですが、すべてのものは愛をモデルにして宇宙の根本に従って伝送が始まったという事実を知らなければなりません。

この世界、宇宙を見てください。鉱物世界もプラスイオンとマイナスイオン、植物世界も雄しべと雌しべ、動物世界も雄と雌になっています。近ごろは細菌まで雄と雌があるといっています。すべてのものは、愛を中心として、自分の級を中心として一つになるようになっています。このようなペア・システムの宇宙を見れば、これらは、人間の理想的愛が天地を代表して一つになる時、共に連結されて信奉するためにそのようになっているというのです。

家を建てようとすれば、初めに基礎をつくるのと同じように、人のためにこのようなペア・システムですべてつくったのです。動物もそうではないですか。雄と雌とが歩いていて、雌が被害を受けるようになれば、雄が命を懸けて守るのを見たでしょう。子を見れば、子のために命を差し出すのです。愛の道理はそうなのです。それは本来、根本がそうであるがゆえにそうなのです。

作用がある前に宇宙の主体と対象がなければならないので、神様御自身を中心として、宇宙の根本であるそのお方も、主体である心と対象である体が愛の概念を中心として永遠に共存しなければなりません。愛においてのみ永生があるのです。

宇宙の構成体自体が盲目的になっているのではないのです。この膨大な宇宙が、相対的、主体と対象関係において対応しながら、授け受けする運動をしながら、永続的なその法度の軌道に従って永続するのです。法度の軌道に沿っていってこそ永続するというのです。法度の軌道に沿っていかなければ、永続するのではなく破壊が展開するのです。私たちも、御飯を食べて消化が正常にされ、栄養要素が正常に血管を通じて普及されてこそ永続が展開するように、正常に普及されなければなりません。良く授け良く受けてこそ永続が展開するのです。

神様が天地をなぜ創造されたのですか。根本である愛ゆえに創造されました。それゆえに、すべての存在世界はペア・システムで造られています。ペアのないものがありません。ペア・システムでぎっしり満ちています。こ

のように、人間を取り囲み、愛が宇宙の中心なので、この中心となる人間を中心とした愛の柱を打ち込み、そこに大木の根元のようにくっついて生きるようになっているのが、神様の愛を中心とした創造理想だったというのです。「神様の創造理想とは何か。神様のみ旨とは何か」という時、そのみ旨が権力に行けば滅びなければなりません。知識に行っても滅びなければなりません。神様の愛に行かなければなりません。愛が終着点にならなければならないというのです。

与えるものがなぜ栄え、与えることによってなぜ大きくなるのかということが問題です。それは、神様が本来、この宇宙を創造された当時の根本と通じるためです。神様が創造しようというのは引き寄せることですか。与えることです。ギブ（give：与える）すれば、絶えず大きくなるのです。絶えず大きくなるのです。すべてのものがギビング（giving）です。すべてのものが与える概念に変われば、アメリカはますます大きくなります。絶えず受けていれば、すべてのものは小さくなるのです。なぜそうなのかというと、神様の創造原則に同伴することができるので宇宙が私を協助するのです。宇宙が私を協助するからです。

宇宙の根本、九〇度の角度は真の愛です。これがすべてのものの測定基準になっています。動物世界もすべて雄と雌になっているでしょう？　左側にあるか右側にあるか、陽質か陰質か、そして、すべて自分の系列に従い、縦横を中心として愛するのです。それも、すべて愛するではないですか。ここに縦的垂直線と横的水平線があるとするならば、ここが自分の存在位置です。

それゆえに、愛を中心として存在する博物館です。鳥も愛を中心としては命を懸けます。獣もそうです。すべてそうだというのです。植物もそうです。鉱物世界もそうです。元素にもプラスイオンとマイナスイオンがあります。元素もすべて自らの相対を中心として作用するというのです。

宇宙の根本は、運動の起源はどこから始まったのですか。すべての天体世界も、太陽を中心として衛星が運動をします。それが一つの核になり、もう一つの相対的な相応世界と連結し、またこれを中心として大きくなればもう一つの大きな世界と連結するのです。このようにして、全宇宙はいったいどのように生じたのか、広大無辺なこの世界のすべての存在はどのように生じたのかというと、これが運動するのです。すべて運動しながら一つの球形のために動いていきます。そのようにしながら星が動くその世界が、ある時は大きくなり、ある時は小さくなったりするのです。息をするというのです。地も大きくなったり小さくなったりします。そのことを知っていますか。大きくなったり小さくなったりします。

回るときには何を中心として回ってみたいですか。真の愛を中心として回りたいのです。これが宇宙の根本です。男性も「受ける」と言い、女性も「受ける」と言えば、どのようになりますか。お互いがそのように「受ける」と言えば、額を合わせてこのようにしていなければなりません。それは互いに主管しようとするためです。宇宙の存在は、授け受

けするのです。授け受けすることが原則なので、先に与える側が主体です。先に与える人が主体だというのです。

皆さん、体が重要ですか、心が重要ですか。心です。心の中心に真の心があり、その真の心が最も重要視するのが真の愛です。同じです。したがって、この宇宙の根本が真の愛なので、真の愛の心をもたない人はここから追放されます。宇宙から追放されないようにしようと、神様がそれをすべて教えてあげようと、男性も女性も愛することができる、真の愛を行うことができる訓練をするためのものが結婚だというのです。このようにして男性と女性が一つになり、神様の真の愛、すなわちプラスの前に相対にならなければなりません。これを完全に授け受けしようとするなら、人間が完全でなければなりません。

私たちが宇宙の根本を求めていけば神様に帰着するのですが、そのお方は、男性格位と女性格位の二つの性稟を所有していらっしゃるお方であることを知らなければなりません。宇宙出発の原因はどのようになっていますか。神様に対してはまだ分からないとしても、人間は男性と女性、主体と対象になっています。鉱物界の分子を見れば陽イオンと陰イオンによって構成されていて、植物界は雄しべと雌しべに、動物界は雄と雌に、そして、人間は男性と女性になっていることを見ることができます。

今まで数多くの博士、数多くの学者がいましたが、これ一つ考え出した人がいないのです。皆さんは否定することができますか。皆さんの父母、祖父母、またその祖父母、そして、人類の先祖である方とさらには宇宙の根本であられる神様に尋ねてみても、すべて同意するのです。これは鉄則です。この真理こそ宇宙が億万年過ぎても原理原則として残るための鉄則です。そして、神様の前に進んでいくようになれば、この鉄則によって正しい人と間違った人の判定を受けるようになるのは当然のことです。

自分のものを主張するものは追放されます。宇宙万物を見る時、鉱物世界も主体・対象関係、植物世界もすべて雄しべと雌しべ、動物世界も雄と雌、人間世界もこのようになっていて、この根本の愛の主人が自分ではなく相対なのですが、この相対を否定したので、相対として認めるその世界には、存在することができないのです。ですから、追放してしまうのです。使用価値がないというのです。

三、宇宙の根本は愛である

一) 宇宙の中心は愛である

この宇宙全体、天国全体の中心軸は何ですか。愛です。愛は、生命の根本であり、血統の根本です。それは、愛を中心として成されているので、愛の軸に従って運動します。運動とは、ただするのではないのです。運動は、必ず主体と対象を中心とするので、それ自体の位置において、愛を中心として関係を結んで行動するのです。

永遠の愛の実績として存続したいというのが、すべての運動するものの目的になっているというのです。作用とは、ただするのではないというのです。

宇宙の根本は、愛から始まりました。神様はどのようにして生まれたのでしょうか。愛

が中心です。ですから結論は、絶対的な神様も絶対的に服従したい理想郷をもたなければならないということです。完全に服従するところに完全な幸福があり、完全な解放があるところに完全な幸福があるのです。

宇宙の根本の動機は、何を中心として動くのでしょうか。男性を中心として動くのではありません。女性を中心として動くのではありません。神様御自身を中心として動くのでもありません。神様が動くことができる動機は何かというと、愛です。

それゆえに、愛は、始まりであり終わりだというのです。コリント人への第一の手紙第十三章を見れば、信仰と希望と愛はいつまでもあるが、このうちで一番は愛だ、といいました。それは、なぜそのようにいったのでしょうか。それを解くことができなかったのです。

なぜ真の愛で愛さなければならないのでしょうか。宇宙の根本が真の愛の原則から生じたからです。したがって、それに通じれば、宇宙のすべてと関係を結ぶことができるのです。理論的なのです。それで、一つが上ならば一つは下であり、一つが右側ならば一つは左側になるのです。鉱物世界、植物世界、動物世界がすべてそうです。お互いに与えようとするそのような世界が起源となって出発したので、お互いに与えようとしながら暮らすのが宇宙です。

このような論理で、より次元の高い大きな存在にすべて吸収されようとするのです。このように思う時に、宇宙存続の源泉はどこでしょうか。より高い愛を中心として与えようとする運動圏内で作用するものが宇宙的な存在です。

宇宙の存続する原則とは、理想的な根本の愛と接続することができる環境的条件であり、縦的、横的、すべての球形的な全体方向性の運動圏内に所属した属性だったというのです。それでは、その父母の前に皆さんはどうでなければなりませんか。そこに報いなければなりません。相対にならなければならないでしょう？　一つになろうとするなら、父母のように相対にならなければならないという結論です。真の愛の相対になる時に統一が展開されるのです。真の愛がなくては完全に統一することができないのです。結論を出しました。

神様を中心とした人間は、神様の体と同じであり、体と同様の実体を、象徴型として影のように送ってくださったものがこの宇宙万象です。この宇宙万象は、何を標榜して造られたのかといえば、神様御自身を標榜して造られたというのです。それが形象的、象徴的な位置にいるだけであって、その根本主体は神様を中心として造られたというのです。

宇宙の根本は、どこから始まったのですか。進化論でもなく、創造論でもありません。進化より先に、創造の概念がある前に、雄と雌がいたということを知らなければなりません。では、雄と雌はなぜ生まれたのでしょうか。愛のゆえにです。愛、これが公式です。

神様は、神様よりもっと立派な愛のパートナーを願われます。皆さんも、愛の相対が皆さんよりも優秀なことを願うでしょう？　同じです。神様御自身が主体と対象として完全

に一つになっているのですが、それが創造の根本です。愛を中心として二つが完成するのです。そこで神様が解放されるのです。愛の位置で歌って踊ってごろごろ転がって、すべての被造世界が一つになるのです。そのような世界は、どれほど楽しい世界でしょうか。

家を建てる時は、水平が合わなければならず、垂直が合わなければなりません。合わなければすべて倒れるでしょう？　宇宙がどのように存在するか、という根本問題に入っていくというのです。

それで、神様御自身も愛が必要です。神様御自身が天の玉座において、「ああ！　私は愛が好きだ」と歌いますか。文総裁が一人で踊ってこのように汗を流すようになれば、狂った人ではないでしょうか。ハンカチ一枚見ながら踊ってこのようになれば、狂ったのではありません。これの十分の一、百分の一くらいのものを見て踊って笑ったとしても、それは気違いではありません。

創造は、相対価値の絶対基準に該当する価値的内容をもっている、という事実を認めなければなりません。

アダムとエバが完成すれば、神様が結婚させてあげることによって、アダムとエバの体の中に、性相と形状、男性と女性の形状をもった神様が入っていき、私たちの心の位置に創造主、お父様の体の位置に創造物、お父様が愛によって一つになるのです。他のものではないのです。知識でもなく、権力でもなく、お金でもありません。真の愛によってここで一つになることによって、真の愛を中心として形状が成され、家庭が成されるようになるというのです。真の愛が重要なのです。これがはっきり分からなければ宇宙の根本を知らないというのです。

世の中の人たちが考えるのは、お金をもって世界で一番の代表者になる、権力をもって一番の代表者になる、知識をもって一番の代表者になる等の様々な考えをしています。

しかし、宇宙の根本である神様から関係しているすべてのものは、真の愛を中心とした代表者になることを願うのです。それが、人間が願い、神様が願われる道だということを知らなければなりません。

皆さんは、愛が良いと言うでしょう？　愛を求めていくでしょう？　どのように求めていくことが、宇宙の根本であるその公式に合う愛の直線の道、近道なのかというのです。これが問題です。

この宇宙の根本は何ですか。神様は絶対者です。力があります。力が根本ではありません。知識が根本ではありません。それでは、お金ですか。これは、あの世から見れば退廃的な何というのでしょうか。廃物を拾って歩き回るのです。廃品を回収して歩き回る人々は、お金を集めようという人です。私たちのような人は金があるといいますが、私はそのようなお金を使わないのです。

神様が天地を創造される時、どのようにされたのでしょうか。神様の相対になることができるのは人しかいないのです。それで、自分を一〇〇パーセント投入されました。それでは、知恵の王なのに、なぜ投入されたのでしょうか。完全に投入して神様はゼロの位置、無になり、あそこは百二十になるので、気圧

でいえば、ここは低気圧中の低気圧である真空状態になり、あちらは高気圧になるので、ひゅーと循環作用が起きて自動的な発展原則、自動的な運動原則を追求します。

それで、絶えず押し込めばこちらは巻き込むでしょう。自分を包囲するそのようなことが展開するのです。それは何をもってですか。愛をもってするのです。宇宙の根本が愛なので、このような原則によってこのように展開されるのです。

根本は個人です。個人で連結するのです。家庭も、氏族もすべてです。根本は、いくら小さくても同じです。角度は同じだというのです。九〇度です。それで、これを茎にして真の愛、真の愛、真の愛、真の愛、真の愛、このようになって地球星全体が真の愛で一つになり、宇宙でもどこでも真の愛でぎっしりいっぱいになるのです。そのようになれば、いつでも「良い！　あなたは私と似ている！」と言うようになり、どこに行っても、縦的でも横的でも全く同じになるのです。

人間は、歴史を通じて宇宙を越えていっても愛を必要とし、昼でも夜でもどこに行こうとも、若くても年老いても死んでも、いつでも愛の観念を離れることができない存在です。なぜそうなのでしょうか。根本がそのようになっているので仕方がないというのです。愛だけが今でも創造の能力を行使することができるのであって、愛がなくては行使することができないのです。発電所のような愛の原動力を中心として、すべて行くのです。

愛も、もちろん神様がつくることができると思いますが、その愛を所有するということは一人ではできません。二人が所有しなければなりません。神様も愛を一人で探すことはできません。ですから、その基準の測定原器は何でしょうか。宇宙万象、存在世界、永遠世界で測定することができる絶対的に一つしかない原器、それは何でしょうか。根本問題です。それが愛だというのです。ですからこれは、春夏秋冬、季節の変化に影響を受けません。受けてはならないのです。

なぜ愛のひもに結ばれて生きるようになっているのですか。神様の本物の愛に、神様も喜ばれ、宇宙も喜び、この世界も和合することができる愛のひもに人間が結ばれて生きるようになっているのですが、そのような愛のひもに結ばれずに幸福になり得る心の基台がないのに、生活が幸福になり得ますか。なり得ません。根本が違っているのに、結果が幸福であり得ますか。歴史はこのような関係になっています。

心と体が一つになったその場に入っていくようになれば、その場は、釈迦が経験した位置です。「天上天下唯我独尊」というその境地に入っていきます。その中に入っていくようになれば、愛の球形内のすべての力は、この中心を通じることなしには作用することができないのです。これを通じない作用は存在できません。宇宙のすべての作用は、これを基本として定めて拡大しました。

ところが、愛を中心とした軸が生まれなかったのです。それはすなわち、核心が生まれなかったのと同じです。人間だけではありません。今日、人間同士で連結された愛、家庭を中心とした愛、家庭を中心として拡大された氏族、民族、国家の愛、あるいは聖人が教

えてくれた愛をもっては、その根本を悟ることができなかったというのです。

宇宙根本において、生命が先ですか、愛が先ですか。このように思う時、それを突き詰めて入っていくようになると、生命が先にはなり得ないのです。神様は生命の源泉ですが、生命の源泉であられる神様が存続するには、どのような基盤の上で暮らすことを願われるのでしょうか。何の基盤の上で暮らすことを願われるのでしょうか。神様は、平和の基盤の上で暮らすことを願われるはずです。平和の基盤設定は何がするのですか。生命がするのか、他の何かがするのですか。それがまた問題です。それは、生命がするのではありません。主体と対象が高低を超越して、共通的価値を認めることができる秩序的段階を超越したその何かです。それは何ですか。真の愛です。

皆さん、細胞繁殖というものを知っているでしょう。これ一つを取ってみても、その位置に再び目が出て鼻が出てくるのです。髪の毛も出てきて、足も出てきて、すべて出てきます。すべてのものが全く同じなのです。真の愛と連結した細胞は宇宙と同等な価値をもつことができるのです。なぜ真の愛がそうでなければならないのですか。真の愛は原因であると同時に結果であり、根本であると同時に目的だからです。

愛は、宇宙をはじめ、どのような存在でも因縁をもたない存在がありません。小さな草一本でも、必ず愛を中心として生きているというのです。鉱物もプラスイオンとマイナスイオンを中心として生まれ、すべて愛ゆえに動いています。

真の愛で成された心情圏は、いくら小さくても宇宙と連結され、その中で起きる出来事の波長は万象と霊界まで波及するのです。霊界を含む天宙は、すべて同じ神様の真の愛の原理のもとに存在するからです。神様と人間との間の縦横、前後的真の愛の関係は、人間相互間の理想的真の愛の関係の根本であり、その完成は四大心情圏を成した理想家庭においてのみなされます。

愛の本質は何ですか。どのような愛ですか。愛とはどのような愛ですか。今日のアメリカに蔓延しているフリーセックス、一夜の愛が愛ですか。それは、根本の愛とは関係がありません。それでは、根本の愛、真の愛はどのようなものですか。愛とは、始めであり終わりです。この宇宙が生まれたのは何のために生まれたのかといえば、愛のために生まれたというのです。愛を訪ねていくというのです。神様に対して聖書には「私が最初であり最後である。始めであり終わりである」とありますが、それはどういうことですか。これは、愛をおいていう言葉です。

なぜ「ため」に生きなければならないのですか。なぜそのようにしなければならないのですか。それを願わないのに、なぜそうでなければならないかというのです。愛のひもが結ばれているというのです。愛のひもが万物に連結しているといのです。愛のひもが私の体を結んでいるというのです。このような時、すべてが手を差し出して早く早く巻いてくれというというのです。早く早く大きくなろう

というのです。愛の宇宙を占領しようというのです。愛の宇宙も宇宙であり、それはパートナーの世界ですが、愛の根本が神様まで占領しようとするのです。

神様は、いつでもうれしいでしょうか。皆さんは、いつでもうれしいですか。うれしくありません。しかし、真の愛をもった時には、悲しみもその愛によってすべて消化されるのです。これを見る時、愛の絶対権限が、この宇宙のある個別的権力や知識や何かをもって第一主義を主張する、それ以上のものとして残したいのが人間の本性の欲求だったというのです。それがどこから来たのでしょうか。根本から来ました。その根本のどこからですか。神様の愛からです。神様もそのような愛を願うために、そこから来たのです。

最初から私たち人間は、近ごろの共産主義のように闘争概念から始まったのでしょうか、融合概念から始まったのでしょうか。どちらなのですか。電気でいえば、プラスとマイナスが闘争するというのですか。それでは、どのようになっていたのでしょうか。調和と融合から始まったのです。それで、お母さんとお父さんの愛を通してお互いに調和して、融合して私が生まれたのです。それは否定できません。このように思う時に、宇宙の根本は、本性とは、調和にもなり融合される内容から出発した、ということを私たちは知ることができます。

すべての宇宙の中で、借金だらけの人間にならずに借金を負わせて暮らすことができる方法とは何でしょうか。それでは、私の根本がないのでしょうか。違います。心にいくらでももっています。「ごめんなさい」、「ありがとう」と言うことのできる心、水を見て、山野を見つめて、野原を見つめて、三千里の山川、さらには大地球星を見つめて「ありがとう！」と言うことができる心、神様の前に有り難いと考え、環境に有り難いと考え、不平を言わないで侍って暮らすことができる、このような主人の心をもちなさいというのです。真の主人には、そのような人々がなるのです。

二) 人間は万宇宙の愛の中心

(1) 神様の愛の対象として造られた

人の価値は、どれほど大きいでしょうか。神様が杖をついて千年、万年慕うことのできる存在が人です。統一教会の文先生が見るとき、これが宇宙の根本だというのです。これが、内外関係になったので縦横の愛の世界観が成立するのです。上下関係と左右関係になるので、縦横の愛の世界観が展開されるのです。その中心には神様が臨在されるのです。

心の深い谷間の位置に、一つにしっかりと結ぶことができるその場は、縦横の中心位置です。これを結んでおかなければ、縦横の基準が愛の理想型から出てこないのです。縦的なものがどんなにあるとしても、横的なものは出てこないのです。それで、人をこのように造らざるを得なかった、ということを皆さんは知らなければなりません。

神様は、絶対的な創造の観を所有した絶対者なので、絶対的な対象価値の存在を追求するのです。これは、この地上の被造万物の中で、何をもってしても取り替えることができないものです。価値として見れば、相対的存

在とは、神様を与えても取り替えることができない存在です。「相対的価値」という言葉は少し難しい言葉ですが、相対的価値というものは、相対という言葉を中心として、その対象の価値というものは、神様を与えても取り替えることができないのです。神様を与えてみれば、神様一人になるのです。神様が残るのです。それゆえに、神様御自身を投入して、神様御自身の力を、エネルギーを消耗するのです。消耗戦をするのです。

それで、神様を与えても、取り替えることができない対象の価値的存在として造られたものが人間です。このように、絶対的な価値の存在が人間であることを皆さんは知らなければなりません。神様がそのような観をもって、価値的な存在として人間を造ってくださったのです。

神様は、人間を愛ゆえに造られました。人間はなぜ造られたのですか。愛ゆえに造られたのです。人間が万物と異なるのは、神様の息子、娘として造られたからです。神様の直系の愛を受けることができる対象者として造られたというのです。これが人間の特権です。

人は、誰に似たのでしょうか。神様に似ました。ですから、神様が愛を願うのも、結局は人と同じだ、このように思うのです。愛を中心とした理想の創造世界というものは、実体を中心とした愛の表示が形状によって現れ、形状の表示が象徴として現れるというのです。

統一教会の「原理」ではそのようにいっているのです。何を中心としてですか。愛を中心としてです。その実体が喜べば、その形状である存在が喜べば、象徴的なものも自動的に喜ぶことができるというのです。そのような作用を何がするのですか。愛だけがするというのです。

「万物之衆　唯人最貴（万物の中で人が最も貴い）」と言いました。万物の中で人間が中心だというのです。何を中心として中心ですか。愛を中心としてです。知識とか、お金とか、権力というものは問題ではありません。

神様は創造主なので、そのようなものはいつでも造ることができ、もつことができます。しかし、愛というものは、一人では探し出すことができません。愛は一人ではもつことができません。愛は、必ず相対を通して現れて成されるようになっているのであって、一人では神様でも成し遂げることができないというのです。

神様が天地を創造される時、誰のために造られたのですか。神様のために造られたのではありません。愛の対象のためにです。それでは、神様の愛の対象とは誰ですか。「万物之衆　唯人最貴」と言いました。人だけが神様の愛の対象として造られたというのです。愛の本質的内容を分析してみる時、属性には相続権があり、同位権、同参権があるために、愛に接すれば、いくら気高い神様、いくら偉大な神様、いくら宇宙的な神様といっても愛に乗せられるというのです。

今日の統一教会の教えは、神様も愛が必要だというものです。いくら全知全能で遍在する全権の神様でも、愛は相対的に訪ねてくるのが原則なので、愛の相対圏を備えなければなりません。その相対がアダムとエバです。

神様がいくら立派で、絶対者で、全知全能の方であっても、一人では良いことがあり得ないのです。「幸福」という名詞は、あるいは「良い」という形容詞は、一人で設定される言葉ではありません。必ず相対的関係を備えた位置にいてこそ、「良い」、「幸福だ」という言葉があり得るのです。一人でいながら「幸福だ」と言う人はいないのです。

したがって、いくら全知全能の神様でも、一人では幸福になることはできません。例を挙げれば、歌を上手に歌う音楽家がいて、一人で歌を歌ったとしましょう。幸福でしょうか。相対がいなければなりません。授け受けしてこそ良いのです。同じように神様も、「良い」と言うためには、必ず神様一人でいてはいけないのです。

(2) 人間成長の道は神様御自身の展開過程

人間創造とは、神様御自身が成長してきたことを実際に再度展開させてきたものです。ここで神様が興味を感じられ、刺激を感じられるのです。人も同じです。画家が傑作品をつくるために絵を描くのは、自分の内的な素性をすべて実際に形状に展開させることです。自分の骨髄の奥深くまで絞り出して投入するのです。

人間の完成はどこにあるのでしょうか。男性なら男性自体で完成する道はなく、女性なら女性自体で完成する道はありません。それは、すべて半製品だからです。したがって、男性と女性が完全に一つになった愛を中心としてのみ完成するというのです。アダムが完成するには誰が絶対に必要でしょうか。神様が絶対に必要なのですが、神様は縦的に絶対必要です。アダムが完成しようとするなら、縦横の因縁をもたなければなりません。縦横の愛の因縁をもたなければ回転運動、球形運動が不可能です。それゆえに、横的にアダムに絶対必要とするのはエバです。同じように、エバにも絶対必要なのがアダムです。

アダムとエバをおいて神様が愛したのは何ですか。アダムとエバが息子、娘として育ってきたということは、神様もそのように育ってきたということを意味します。神様も赤ん坊のような時があり、兄弟のような時があり、夫婦のような時があり、父母のような時があったので、そのように創造されたのです。

神様は、無形の神様です。無形の神様がそのように大きくなってこられたというのです。それで、兄弟のように、夫婦のように、また息子、娘のように創造してこられたというのです。

アダムとエバを神様が造られたとすれば、どのような段階から造られたのでしょうか。アダムとエバを成人した人として造ったと考えることはできません。赤ん坊から造られたというのです。神様は、赤ん坊を身ごもった母が抱いて育てるのと同様の過程を経て造られたという論理を立てなくては、この三段階の秩序に通じた存在の形成ということを説明する道理がないのです。幼児期があったというのです。それから長成期があり、完成期がありました。これは天理の道理です。

アダムとエバに幼児期があったのですが、その幼児期はどのような幼児期だったのでしょうか。無形の神様が無形の世界から有形への過程を経てくることができ、赤ん坊の存在

を抱いて育てたという論理から始めなければなりません。

それでは、赤ん坊から生まれ育ち、成熟して結婚することができる位置まで、父母になることができる位置までどのようにして行くのでしょうか。神様が青年期、壮年期、老年期のような過程を経てきたという事実を、神様が育った無形の過程を実体として見るための存在が子女だというのです。このような論理が形成されてこそ、父子一身という論理が出てくるのです。一つは縦的で一つは横的なので、縦横一身の理論を立てることができます。

愛する夫婦、アダムとエバが子女を生むということは、神様の無形実体の性相と形状が、愛をもって一つになって創造され、父母の立場に立ったのと同じです。第一の見えない神様が見える第二の創造主としてアダムとエバを造られ、実体の第二の神様の立場に立ったアダムとエバが、再び息子、娘を生むことによって父母の立場に上がっていくのです。そして、その幼い子女を通して、実体のアダムとエバの乳児時代、兄弟時代、夫婦時代、父母時代等、神様が経た過去を再び実体として展示するのです。それで、それを触ってみたいと思われ、愛してみたいと思われるのです。子女は第二の自分自身です。

結婚した夫婦の立場は、途方もない立場です。歴史時代に人類が望んだ子女としての希望峰が花咲く立場であり、兄弟として花咲く立場であり、夫婦として花咲く立場です。このようにして夫婦として愛した神様が創造を始められたように、息子、娘を生んだそこからアダムとエバが創造するのです。実体的創造主の立場となり、自分を中心として平面的創造主の立場で息子、娘を生むのです。第三の創造主を造るのです。それが子女です。

それゆえに、父母は、子女を神様の代身の実体父母の立場で神様の子女を養育するのです。そのようにしてこそ、見えない無形の神様が子女を養育したということを自分の実体で感じるのです。神様もそのように大きくなられたというのです。神様も子女時代、兄弟時代、夫婦時代、父母時代として発展してこられました。見えない神様の過去史を中心として、自分の息子、娘を生んで育てながら、神様の見えない赤ん坊時代の第一の創造主、無形の創造主の姿を見るのです。

第二の創造主、見ることができる創造主の立場で赤ん坊を育て、兄弟として育て、夫婦を成すようにすることは、神様がアダムとエバを息子、娘として、兄弟として育てられたように、無形の内的要求の実相をすべて実体的にアダムとエバを通して平面途上から見るためなのです。これが息子、娘だというのです。

神様が創造主として歴史的、内情的原則を中心として、存在の起源から今まで成長した過程を実体的に展開してくる過程がアダムとエバの創造過程です。それでは、どこから始まるのですか。完全に小さな細胞が一つとなって大きな細胞になるのと同じように、赤ん坊が十カ月間で育つ過程を経ていきながら、男性と女性の形態に分かれて出てくるのです。なぜそのようになるのでしょうか。そうでなければ、生命遺伝をどのようにするかという論理に対して解釈する方法がありません。遺伝的内容をどのように展開させるのかという論理を立てることができないというのです。

それゆえに、一つの本質的な無形の形態と有形的な形態の本質が、一体的内容の因縁を中心として横的に展開することを必要とするのです。

別の言い方をすれば、主体の前に相対圏が必要だというのです。内的性相は外的形状とすべての根源的な面において、一致することもでき、通じることもできる内縁があります。それゆえに、人が生まれて育つその過程は、見えない無形の神様が実体を見るためのものだったのです。ですから、神様の内的なすべての存在が表現されて現れるので愛さざるを得ないというのです。それが私であり、私が現れた実体だというのです。無形の実体が有形の実体として展開される以上、そこにすべてを投入しなければなりません。

神様が愛を見いだす対象を造ろうとされる時、誰に似るように造られるでしょうか。神様に似るように造られます。その神様に似るように造られるなら、神様の中にあるように男性性稟がなければならず、女性性稟がなければなりません。自分に似ているのですが、自分の本性相からすべて抜いて、見えない性相、見えない思考の形態を実体として展開させたものが人間だというのです。それゆえに、聖書の創世記に出てくる、神様が自分の形に人間を創造されたというのは正しいというのです。

神様と人間の拍子が合って和動することができる喜びの拍子の前に、すべてのものが自分の姿どおりに音律を合わせることができ、自分の姿どおりにすべてが象徴的、形状的に踊り、すべてがこのようにすることができる、そのような喜びの世界が本然の園です。そのようになれば、万物も「ああ、私が生まれたかいがあるなあ」と言うでしょう。例えば、神様と人間が愛の祝宴をするその日に同参することができる因縁をもって、その喜びをお互いに分かち合うことができる存在になったという事実が、被造世界の限りなく小さな万物が願う所願ではないだろうかというのです。

いくら真理だとしても、真理の核心とは何でしょうか。お金でもなく、権力でもなく、知識でもありません。愛です。本質的愛は縦的なところにあるのであり、真理的愛は横的に連結しているのです。それゆえに、万物を見て神様を知り、アダムとエバが神様の形状なので、アダムとエバを見て神様を知るというのです。なぜですか。アダムとエバは、縦的な真の愛の対象的主体なので、これを二人とも完全にぴたっと男性と女性の愛を、東西南北を通して世界の軸に合わせるようになる時は、神様と霊界が通じて万世界がすべて通じるというのです。

(3) 人間は被造万物の中心

神様は誰に似ているというのですか。私たち男性と女性に似ています。皆さんの心は見えないでしょう？　心を見たいですか、見たくないですか。神様も同じです。神様が霊的な立場で見れば同じなのです。神様には体がありません。今まで体がありませんでした。アダム完成が成されていないので、今まで体がなかったというのです。体がありません。心のような宇宙に心のような主人、心のような先生、あるいは管理者、心のような父母でいらっしゃいます。

すべての万物は、神様の息子、娘を造ることができる土台だというのです。関係して連結することができる土台です。動物もそうであり、鉱物もそうです。鉱物世界にもプラス・マイナスがあります。植物世界もすべて雄しべと雌しべがあり、動物世界も雄と雌がいます。すべてに橋を架け、すべてのものが結集して創造された最高の傑作品が人間の内的形状と外的形状です。それを実体化させ、男性と女性の性相、そのすべてに形状を付与し、象徴的に、形象的に、実体的にすべて表して橋渡しするようにし、すべて連結するように、関係を結ぶようにしたのです。

神様が被造物の中心である人間を必要とされるのは、お金のために必要とするのではなく、知識のために必要とするのでもなく、権力のために必要とするのでもありません。ただ愛ゆえに必要とされます。そうではなく、神様一人で愛を受けるという立場に立つようになれば、愛してくれる何の存在もありません。結論がそうなので、神様は、必ずこの世界に自分が愛することができるそのような対象者を造らないといけません。このように思う時、被造世界においてその愛の対象になることができる、そのような度胸の大きな存在とは誰ですか。全宇宙を創造された神様の前に相対的な条件を備えることができる存在は、人間しかいないのです。したがって、皆さんは、「私は宇宙の主人です。宇宙で第一である」と言うことができる度胸をもたなければなりません。

神様は、喜びを加えて、喜びの刺激を連続させるために万物をつくられました。瞬間的な喜びを感じるためにつくられたのではなく、被造物に対するたびごとに胸深く入り込んでくる喜びの刺激と幸福を感じるために、最高の心情を注いでつくられたのです。神様は五日間万物をつくられたのち、六日目の日に喜びの心情で人間を造られました。自身の形状を型として造った私たち人類の先祖は、限りなく美しい存在であり、限りなく貴い存在であり、限りなく誇らしい存在であり、限りなくうれしい存在であり、限りなく光栄の存在であり、限りなく愛したい存在でした。

神様は、全知全能の方であられるがゆえに、知識も必要なく、能力も権力も必要なく、金銭も必要ないのです。それでは、神様において必要なものとは何でしょうか。それは、神様が愛することができる一つの対象です。その対象は、被造万物の中で最も貴く、最も霊長である人間以外にはいません。「神様が最も好まれるものが人間だ」と言ったのですが、神様はなぜ人間を好まれるのでしょうか。神様も愛が必要なためです。愛というものは、一人では、あるのかないのか知ることができないのです。

見えない神様の形状を、私たちの体に象徴的にすべて投入したというのです。目は誰に似たというのですか。神様です。それゆえに、顔の中で見れば、目は深い所にあるというのです。それで、すべてのものを観察するというのです。それから鼻は、アダムとエバを象徴します。これが中心でありセンターです。その次に、口は万物です。横的です。それゆえに、四掛ける八で三十二（四×八＝三十二）、三十二の歯をもっているというのです。世の中の万物を中心として、四数を中心としてです。それから、耳は四方を象徴します。

この首から上は天国です。天国の情報の場があります。

皆さんの生命の根はどこにあるのですか。堕落していない父母にあります。それでは、堕落していない善の父母の位置は、どのような位置ですか。神様が二性性相の主体であられるので、神様が自らの二性性相を展開して、神様の形状どおりに万宇宙を造って人間を造られたのです。

アダムは、神様の男性的性稟を展開させたものであり、エバは、神様の女性的性稟を展開させたものです。このように思う時、私たち一般の人々が普通「天のお父様！」というのは、一人のお方なのでそのように言うのですが、その一人のお方という概念の中には「天のお父様、お母様」という概念が含まれているのです。

もし人間先祖アダムとエバが堕落しなかったならば、どのようになっていたでしょうか。アダムとエバは神様と一体となり、神様と同じ位置に立って、神様の創造の偉業を受け継ぎ、神様が創造後に喜ばれたのと同様の位置に立つようになっていたのです。神様と人間との間にそのような関係を結ぶようになるのです。堕落していない本然の人は、神様の聖殿になるのです。

神様がお父様になり、人間は神様の息子になったとしても、お父様は上にいて息子は下にいる、上下関係のような気分がするというのです。その時に、私たち人間はどのように考えるのでしょうか。「お父様、お父様が座っていらっしゃるその席を私に一度下さい。私もお父様の位置に座ってみたいのです」という欲望が私たち人間にはあるというのです。

ここで神様が「なんだこいつ、駄目だ」と言えば、すべて壊れるのです。しかし、神様は、そのようにはできないのです。むしろ神様は、私たち人間がそのような欲望をもっているということを知っているので、「早くそう言いなさい、早くそう言いなさい」と言われながら、その席までも私たち人間に下さるのです。その席まで人間に与えて、神様は、私たちの心に臨在なされ、私たちの心を聖殿として定めていらっしゃるというのです。

心身一体になれば、宇宙の力が保護してくれます。宇宙の力が保護してくれる心と体になれば、父母も宇宙の因縁をもった父母、兄弟もそのような因縁をもった兄弟、このようにすべてが因縁を結んでいます。民族、国が因縁を結ばなければならないのです。素晴らしい結論です。ですから、国を越えて他の国に行っても、そのような一体圏を成すようになれば、そこでも通じるのです。どこにでも通じるのです。

サッカーをする時、ボールが転がっていって途中で止まれば、どのようになりますか。その表面全体が一つになることができる所は、垂直線に通じるのです。それで、球形体を理想的な存在だといいます。表面のどのような所でもその垂直線が安着することができます。それで、転がり回るのです。どこでもすべて良いために、そうなるというのです。それで、心身一体圏、九〇度になれば、どこでもすべて合います。西洋人と東洋人、過去の人と現在の人、未来の人を問わず、どこでもすべて合うのです。

本性の心が行くべき道を行けば、宇宙が一つになるのです。そのような何かがなければなりません。そのような位置に入っていけば、自分の心と話すようになるのです。そのような境地では心と話をします。何かをしようと考えれば、すぐに答えが出てきます。そのような境地まで行くのです。そのような境地にいる人が、自分の行くべき道を知らないでしょうか。既に行くべき道が明確で、宇宙のすべての作用の力が助けるようになります。手を引っ張っていって試験場に入っていくようになれば、すぐにすべてのものが協助します。それでこそ大きなことができるのです。

私たちが自然を見て、「ああ、私には四季は必要ない。私は春だけが必要だ、夏や秋や冬は嫌いだ」と言うことができますが、神様に尋ねてみれば、「私は四季のすべてが好きだ」と答えるというのです。それゆえに、嫌いでも夏を好むことを学ばなければなりませんし、秋と冬を好むことを学ばなければなりません。雪が降る冬になれば、神様は、白い雪が世界的に積ったのを見る時に喜ばれるのです。「ああ、私も良い」と言うのです。そのように言わなければなりません。

神様のような心で自然を見ることができなければなりません。そのような心をもたなければなりません。洪水が起き、雷が鳴る時は、「ああ、私はあれが嫌いだ」と言うなというのです。

神様は、「ハハー、あれはキスして結婚しているのだなあ」とこのように考えるというのです。そして、嫌いだという人々に「ハハハハ、こいつめ！　悪いやつめ！」と言われるのです。

知恵の王であられ、全体の中心であられる神様が、真の愛や、真の理想や、真の幸福や、真の平和の起源を、主体と対象、この両者の間のどちらに置かれるでしょうか。これが問題にならざるを得ないのです。主体がいる反面、対象がいるのですが、主体のために生きる道と対象のために生きる道、この二つの道の中で、理想の要件をどこに置くのかということが、創造主であられる神様として問題にならざるを得ないのです。

それで、真の理想、真の愛、真の平和において、主体を中心にして対象が主体のために生きるところに理想的起源を置くべきか、対象を中心にして主体が対象のために生きるところに理想的起源を置くべきかという問題を考えられた神様が、主体の前に対象が「ため」に生きなさいと言う立場にその理想的起源を立てるならば、神様がそのようにすると同時に、すべての人も、自分がある対象をもつことができる立場に立つならば、同じようにするというのです。それでは、一つになる道がふさがってしまいます。これを知らなければなりません。

一つになることができ、平和の起源になることができるその道はどこにあるのでしょうか。神様御自身だけでなく、真の人間は、「ため」に生きる存在だという原則を立てざるを得なかったのです。それゆえに、真の愛は「ため」に生きるところから、真の理想も「ため」に生きるところから、真の平和、真の幸福も「ため」に生きる位置で成立するのであって、「ため」に生きる位置を離れては探すことができないのです。これが、天地創造の根本だということを私たち人間は知りませんでした。

男性と女性が生まれたのは、男性は男性のために生まれたのではなく、女性のために生まれたのであり、女性は女性のために生まれたのではなく、男性のために生まれたのです。生まれたのは、自分のために生まれたのではないのです。自分のために生まれたのではないのに、自分を主張します。「私」というこの思想を壊してしまわなければなりません。これさえ壊してしまえば、統一の世界は展開するのです。

自らの価値を自分から追及するよりも、相対から、すなわち相対的基準でその価値を追及できる道を探求する人は、不孝な人ではありません。いつでもどこでも、心情の基台は相対圏をもつので、孤独ではなく、幸福になることができるのです。

調和というものは、一人で展開する道理がありません。楽しいということも、一人で展開する道理がありません。幸福もまた、一人で展開する道理がありません。絶対者だとしても、一人ではできないのです。必ず、自分に対応することができる相対的な条件がなければなりません。絶対者の前には絶対的な相対者がいなければならず、絶対的な主体の前には絶対的な対象がいてこそ、幸福や、調和や、喜びや、踊りや、歌というものがあるのです。

今日の既成教徒たちは、「全知全能の神様は元から栄光の中の栄光の主体であり、幸福の中の幸福の主体であり、すべての愛と生命の主体なので、それによらないものがない」と大声を張り上げています。しかし、いくら絶対者だとしても、絶対的な対象をもたなければ、仕方なく不幸になるのです。神様も絶対的な立場に立つことができる一つの対象を探せなければ、滅びるしかないのです。いくら絶対者だとしても、絶対的な対象をもたなければ、やむを得ず不幸だというのです。したがって、神様が滅びないためには、仕方なく相対的な存在を造らなければなりません。

三) 被造世界は人間のための愛の博物館

(1) 被造世界を造られた意味

被造世界のすべてのものは、神様が愛する息子、娘が愛の理想を探し求めていくことができるように教材として造っておいたものです。それで、相対的構造なのです。鉱物も主体と対象の関係で作用し、原子も陽子と電子が主体と対象の関係で作用するのです。作用しなければ存続できないというのです。運動しなければ永続と存続はできません。それゆえに、宇宙は、人間を中心としてその中心点に到達することができるように創造された世界だというのです。

神様は万物をつくられ、その万物の主人公として人間始祖をエデンの園に造っておかれました。人間を造られる時は、神様が何かふざけて造られたのではありません。趣味で造られたのでもありません。人間を造られ、万物を代表する中心として立てるようになる時までの神様の苦労と精誠は、到底言い表すことができなかったという事実を私たちは知らなければなりません。

神様が人間を造られる時、あらゆる精誠をすべて尽くされ、また心血と御自身の生命の核心をすべて注いで造られ、ありったけの愛と愛情を降り注いで造られました。どのよう

な力を用いて離そうとしても離すことができず、分けようとしても分けることのできない因縁の中で造られたのです。このように造られた人間なので、その人間を御覧になる神様には、平和が宿ることができ、すべての情と幸福は、その人間を通してこそ宿ることができるのです。

神様は人間のお父様であり、人間は神様の息子、娘です。神様が骨の中の骨、肉の中の肉、骨髄の中の骨髄をありったけ施して造られた人間なので、このような人間が神様を引けば、引かれざるを得ないのであり、また神様が人間を引き寄せてくだされば、引き寄せられざるを得ないのです。

神様は、このような因縁の中で、内容と目的が一致する人間に造られたのです。もしそのように造っておかれた人間を御覧になって、神様が称賛することができるあるみ言や詩があるならば、それは世の中のどのような詩人も、文人も表現できない最高の作品になるはずです。その対象は、神様でもなく、万物でもない、唯一、万物を代表した人間なのです。

宇宙は何ですか。神様の体と同じです。見える体と同じです。神様の分身です。それゆえに、私が本当に愛することができるという観念が成立します。宇宙を愛するということが実感できるというのです。自身の頭もこのようになでてあげたりします。服も何かがつけばはたきます。それは、なぜそのようにするのですか。私のものだからです。私と共にあるので、そのような観念があるというのです。皆さんが今後どのようにしなければならないかといえば、心の中に神様をお迎えして、心が一つになり、体が一つになり、万物が一つになって、このような統一の世界を成し遂げなければなりません。

宇宙がどれほど大きいかというと何億光年です。光が一秒間に三十万キロメートル進むのですが、三十万キロメートルとは、地球を七周半回ることができる距離です。その距離を一秒間で走る光が一年かかって行く距離を天文学では一光年といいます。そのような光年を単位として出発した光が、何億光年になってもまだ到達できないほど大きいのです。グリニッジ天文台では、今まで百億光年向こうの世界の星まですべて発見したのですが、今ではもう百五十億光年向こうの世界の星も見ることができる時代が来て、それ以上の時代に入っていっているというのです。

この宇宙がどれほど大きいかといえば百億、大体二百十億光年です。これは、原理的な数です。そのように大きいというのです。それがどういうことかというと、光がここから出発し、それが一日かかるのを一光日、一カ月ならが一光月、このように出発して一秒間で三億メートル、光の速度で三億メートル行きます。距離で言えば、地球を七周半回る距離です。七周半にもなる距離です。ぱっといったら、既に七周半を回るというのです。そのように早い光が一日でも腰が曲がって、考えが鈍って「私は分からない」というはずなのに、百年でもない百の何万倍にもなる一億光年です。出発してから一億光年たってもまだ進んでいるのですが、人が百歳生きるとすれば、合わせて百万人が死んでいきます。一億光年のうちにです。一億光年なので、人が生まれて百年生きて死んでいくのを続けて、百万人目が死ぬその時になっても、まだ進んでいるのです。

では、二百十億光年といえばどのくらいですか。その人々が続いて生きて死んで、また生きて、百歳まで生きて、このように二億一千万人が生きて、それほどたっても、まだ進み続けるというのです。その遠い距離は、直線で行くのではありません。これがぐるぐると回っているのです。このような宇宙だというのです。

(2) 万物世界は人間のための愛の教材

真の愛の基準から見れば、アダムとエバは、ペア・システムで造られた愛の自然園を見ながら、学び成長するようになっていました。育ってどのようにしなければならないかということは、つくっておいた万物を見れば、すべて分かるようになっていました。万物が正に神様の博物館です。アダムとエバを教育する愛の博物館です。鳥も雄と雌、蝶々も雄と雌、すべてがペアで生まれて、愛し合いながら繁殖して生きていくのを見て育つようになっています。

このように成熟して神様の愛を代表したプラス的王子が男性であり、マイナスを代表した愛の王女が女性であるということを悟るようになっていました。女性が考えるに、「あの男性が正に私に必要な男性なのだなあ！」と信じるようになり、男性もやはり女性に対して「本当に私に必要な女性だなあ！」と思うのです。

真の愛の基準から見れば、アダムとエバは、ペア・システムで造っておいた愛の自然の園を見ながら学び、成長するようになっていました。鳥も雄と雌、蝶々も雄と雌、すべてがペアで生まれて、愛し合いながら繁殖して生きていくのを見て、人間は成長するようになっています。

少年時代から育って、青少年時代に行くのです。思春期になってここから学び始めるのです。皆さんもそうです。赤ん坊の時は何も分からないので、「お母さん、これは何ですか」「お父さん、これが何ですか」、このようにして知っていかなければなりません。そして、男性は男性に対してすべて知ってみると、世上万事がペア・システムになっています。「やあ、動物世界もペアがあって、昆虫世界もペアがあって、ああすべてがそうなのだな！　花の世界もそうで、鉱物世界もそうだ」。それをすべて学ぶのです。「そうだ、主体と対象になり、このようになって、このようになるのだなあ！　気がついてみると、私が行くべき道はこのように求めていかなければならないのだなあ！　ああ、これではないな！」と知るようになるというのです。

アダムとエバは、成長しながら世の中を学んでいきます。二人の息子、娘が大きくなりながらじっと見てみると、世の中はペア・システムで造られた博物館です。愛の博物館です。これを見ながら学ぶのです。「やあ！　彼らがあのように愛し合っている。はえも雄と雌、蝶々も雄と雌、すべてペアが戯れている。それから、愛し合って繁殖している！」、それを学んだでしょうか、学ばなかったでしょうか。

天地をペア・システムで造ったのは何のためですか。これは、愛の博物館です。それ以上に、あなたは鳥よりももっと幸福に、昆虫

よりももっと幸福に、あなたはこの世の何よりももっと幸福に生きなさいというのです。

この世の中のすべての被造物は、ペア・システムになっています。ペア・システムになっているこの環境は、人間のための理想的愛の博物館です。それゆえに、鉱物世界が作用するのもペアを求めてするのです。また、草木もペアを求めて運動するのです！　繁殖するのです！　鳥もそうで、昆虫の中でうまおいむしもそうです。うまおいむしも歌いますね。

神様が万物世界を造られる時にペア・システムで造られたので、男性と女性を中心として、そこにすべての要素を抱いてもっています。自然は何ですか。男性と女性が愛することができるように、愛を教示するために造った博物館です。

それゆえに、男性が愛する妻を慕わしく思いながら歌うようになる時、何の歌を歌うにしても罪ではありません。堕落すれば罪になるのです。愛の問題によって家庭が破綻して天理原則がすべて壊れていったがゆえに罪なのであって、天理原則の基盤の上でお互いに愛して、「私はあなたを真に愛する。永遠に愛する。あなたは私の永遠の相対である」と言うのは罪ではありません。これをはっきりと知らなければなりません。

ペア・システムで造られたこの宇宙は、愛の神様が創造された博物館です。生きた博物館です。国立博物館にある骨董品のように死んでいる、主人のいない記念物ではありません。生きた記念物です。

真の神様がいらっしゃるのですが、その方を通して造られたすべてのものは、理想的愛の条件を備えることができるように主体と対象関係になっているのです。それゆえに、この宇宙のすべての被造物は、ペア・システムになっています。鉱石も夫婦同士になっています。夫がいて妻がいます。

それゆえに、二つがお互いに引き合うではないですか。そのような話を初めて聞いたでしょう？　実験室の先生が完全に暴君となり、自分に合わない元素をいくら激しくくっつけようとしてもくっつきません。神様が「しなさい」と言われてもしません。しかし、相対が合えば、「くっつかず一つになるな」と言ってもくっついてしまうというのです。ですから、すべてがペア・システムになっているというのは、神様の愛のためだというのです。

小さな昆虫も、愛を中心としてペア・システムになっているということを知らなければなりません。鉱物世界も同じです。何のためにですか。愛ゆえにです。級が低ければ低いなりに愛を中心として繁殖し、この人間とこの宇宙が人を通して神様の理想を完成することができるように、すべての体制にギアが連動して回るようになっているのです。

エデンの園に展開しているすべてがペア・システムになっているので、アダムも自然にそれを見て、「やあ！　私も雄のような男性だが、私も雄のようにできているが、雌のようなものがどこにいるのか」と探すと「エバだ！」、このようにして二人が結婚式をするのです。「雄、雌があのようにすれば子を産むのだなあ」というのです。女性は、嫁に行

くことは嫌でも、赤ん坊は好きな女性が多いのです。

エデンの園のすべてのものがペア・システムになっていたので、動物が繁殖して「雄と雌が楽しい環境をつくっているな」、このようにして愛というものを学んだというのです。ですから、アダムとエバも「二人が会わなければならないな」と考えるのです。昔、アダムとエバが育つ時、どれほど複雑ですか。男性はワイルドで山に登って飛び回るのに、女性は毎日座って見物して、おもちゃで遊んでいたのです。このように性格が違うのですが、このような環境から学んで自然的に相対を訪ねていくようになっています。

気がついてみると、世の中がペア・システムになっているのですが、アダムとエバも一人ではいけないというのです。動物世界のしかも牛もすべて雄と雌がいて、お互いに好んで子を産むのを見るようになります。それで、アダムとエバも動物世界の昆虫から鳥と蜂と花までもそのことをしているので、教えてあげなくても知っているというのです。

皆さん夫婦は、双子で生まれた兄と妹です。エデンの園のアダムとエバと同じです。そこでは妹一人しかいないのです。世の中に友人もいなくて一人娘です。エデンの園に女性一人しかいなくて、男性一人しかいないので、間違いなくアダムがエバの友達になってあげなければなりません。兄と妹だというのです。

それで、大きくなって万物のすべてのペア・システムがどのように繁殖して育つのかということを知り、世上万事をすべて知るようになったので、自分たちも歴史の伝統を残すためにこのように愛を行わないといけないとして夫婦になるのです。歴史のために、人類のために夫婦になるのです。

アダムとエバが生まれた時は、相対に、子女になっていましたが、兄弟の因縁の中には相対がいませんでした。相対がいないでしょう？　女性は女性一人で教育を受けて女性完成しなければならず、男性は男性一人で教育を受けて男性完成をしなければなりません。その教育を受ける材料は、天地間にいくらでもあります。すべてのものがペア・システムになっているので、男性はそれを見て、「あのように大きくならなければならないのだなあ！」ということを知り、女性もそれを見て、「あのように大きくならなければならないなあ！」と自ら知るようになるのです。愛に対するすべての教材を、すべての自然が博物館のようにそのまま見せてくれています。自然はすべてペアになっているというのです。

縦的な基準には相対性が移されてこなければなりません。この縦的な基準には相対がいるのです。そして、この息子、娘が大きくならなければなりません。成熟しなければなりません。万物世界を見れば、すべてペア・システムになっています。鉱物世界も同じであり、植物世界も同じであり、動物世界も同じです。人間世界もすべて男性と女性のペア・システムになっています。自然世界というものは、級は低いのですが、ペア・システムになった愛の博物館です。それでは、愛の博物館をなぜ造りましたか。誰のために造ったのかというのです。人のために造り、神様のために造ったのです。それゆえに、神様は、万物のすべての愛の感触、鉱物世界や植物世界

や動物世界の愛の感触というものをすべて感じることができるのです。

男性と女性がこの道を行くにおいて、この時までは相対がいないのです。それで、男性として女性をもらわなければなりません。すべてペア・システムで子を産んで暮らすことを見るのです。春になれば、牛もそのようにし、豚もそのようにし、犬もそのようにし、猫もそのようにし、ねずみもそのようにし、いなごもそのようにするのをすべて見るのです。「ああ、そのようになるのだなあ！　一人はいけないのだなあ！」、このように目覚めることを目が開くといいます。その方向が、今までこのように四五度で、「ああ、私が必要なのはアダムだな！」と思い、「私が必要なのはエバだな！」と思うのです。そうですか、そうではありませんか。

環境には、必ず主体と対象があり、ペア・システムになっています。この宇宙は、愛を核にした博物館です。ペアの博物館になるのです。それゆえに、二羽の鳥がお互いに喜びながら一生懸命に巣を作り、子を産んで、食べさせるのを見ながら学ばなければなりません。「自分の子のためにそれ以上、何百倍しないと」、このように思わなければなりません。虫たちも雄雌二匹が愛して子を産むのです。彼らも自分の命を懸けて子を育てようとします。教育です。

アダムとエバが成熟するにしたがい、ここで横的に回ってアダムが自分の相対だと思い、エバが自分の相対と思うようになるのです。そうではないですか。女性として言うならばどうですか。アダムは、外交的に歩き回ろうとします。ハンティングもして、どこに行っても握ってつかまなければなりません。エバはどうですか。エバは、根本の性格が違います。このようにしながら大きくなり、女性として知るべきこと、男性として知るべきことを知るようになるのです。すべて世上万事全体がそのようになっています。鉱物世界も植物世界も動物世界も、すべてペア・システムになっているでしょう？　それを学ぶのです。大きくなりながらじっと見てみると、何を見てもすべて相対的です。ですから、我知らず学ぶのです。

誰が愛を教えてくれるのでしょうか。自然が教えてくれるのです。園に走る動物を見ても雄と雌、蝶々を見ても雄と雌、すべてペア・システムになっているというのです。花が咲けば、美しい園には鳥がピーチクパーチクしきりに鳴いています。鳥がなぜしきりに鳴きますか。雄の鳥と雌の鳥がしきりに鳴くのは何のためですか。何を呼ぶためなのですか。鳥がしきりに鳴くのには三つの理由があります。一つは空腹で鳴くのであり、一つは愛ゆえに鳴くのであり、一つは子を呼んでいるのです。その三つの理由です。それは愛ゆえにそうなのです。

標準的なアダムとエバの相対圏に立つために、自分たちもその形態として準備されなければならないので、この宇宙の創造物はペア・システムになっているというのです。ペア・システムで存在しているというのです。アダムは大きなプラスであり、万物は東西南北に広がった小さなプラスです。それゆえに、すべて相対的になっているのは人間も万物も同じです。人間と万物が、共通した絶対的主

体圏を中心とした基準において平面を成すようになれば、神様が垂直に臨在されるようになるのです。

すずめがちゅんちゅん鳴いて目を覚まさせてくれることが、自分で起きるよりどれほど素晴らしいですか。どれほど詩的ですか。皆さんは、自分が歌うのが良いですか、歌を聞くのが良いですか。それは、またどれほど詩的ですか。自分がちゅんちゅん、ちゅんちゅん鳴くよりも、第三者がちゅんちゅん、自分で起きるより愛する人が目を覚まさせてくれるということです。そのように、調和の音律によって声を変えながら目を覚まさせてくれるのが理想的ではないかというのです。ですから、すずめも私の友人です。友人であるそれは、何がそのようにさせるのですか。ペア・システムから見る時、それが私の友人になるのです。男性と女性ともペアです。友人だと考える時、どれほど詩的ですか。

世の中のすべてのものがペア・システムとして繁殖するようになっているのを見る時、アダムとエバも成熟すればそのようにしなければならないことを知るのです。成熟する前は、アダムとエバはそれを知りませんでした。アダムとエバが二人で暮らしているのですが、この二人の性格を見れば、アダムは男性的で外交的です。朝起きれば飛び出していき、山に行ってうさぎを捕まえたくて、きじを捕まえたくて、しかを捕まえたくて、蛇を捕まえて割いてみたいというのです。今後、主人となり管理しようとするなら、すべて管理できる責任者になるためにはすべて知らなければならないというのです。山に何がいるのか知りたくて、動物は何がいるのか知りたくて、水にはどのような魚がいるのかすべて調べてみようとするのです。男性なので、主人になろうとすれば、何でも調べなければならないというのです。

今日、歴史を開拓した人々は男性たちです。くまなく探して、ときめくためです。男性は神様の代身なので、すべての自然万物の博物館の館長です。男性は、愛を中心として展開したペア・システムの世界、博物館の館長です。館長なので、すべてくまなく探さなければなりません。ですから、女性が嫌うのです。「ああ、兄さん！　私を捨ててどうして。私を連れていってちょうだい。私は脚が痛くていけない！」と言って、ついていきながら、エバがどれほどアダムの心をめいらせたでしょうか。そのように、エバに黙って歩き回るので事故が生じたのです。

主人が子犬にひもを付けて連れて歩き回るように、エバをそうしなければならないのに、あまりにも泣くので投げ飛ばしたのです。その時、孤独だったので、天使が来て慰労したのです。「あのアダムは暴れん坊だ。何が楽しくて一緒に暮らしているのか。私と遊ぼう！」、このようにして問題が生じたのです。

神様が喜びを感じながら創造されました。それは、どれほど楽しかったでしょうか。ペア・システムをつくったので、細胞までもペアになって喜んでいるのを見る時、どれほど楽しかったでしょうか。写真に撮ったものだけでも、よく写っていればのぞき込んで「良い」と言うのに、写真がしゃべって踊っているのですから、どれほど良いだろうかというのです。

男性と女性を神様が造られ、抱いて育てていくにおいて、僕である天使長をつくって彼らを保護して育てるようにしました。それで、彼らがすべて育って成熟すれば、神様が結婚させてあげようとしたのです。その時までは成熟しなければなりません。

そのために、生まれてから分かれて、男性は男性として育ち、女性は女性として大きくなっていくのです。大きくなって成熟した男性と女性になり、世の中をじっと見てみると、鉱物世界も動物世界も植物世界も、すべて相対理想、ペア・システムになっているというのです。「あ！　動物たちも二つが一つになってあのように子を産んで幸福に生きている。やあ、お母さんは子を育てるために自分の命を捧げてでも保護する。私たちもあのようにしなければならない」、このようにすべて見て学ぶのです。それで、アダムとエバの理想的発達のための展示的博物館だというのです。

真の愛圏の深い境地に入っていくようになれば万物と通じるのです。岩にも通じるのです。真の愛の世界は、通じないものがないのです。なぜですか。ペア・システムになっているのは、神様に属することができる愛と因縁をもって、一つになるための作用をするためです。

真の愛は共鳴するようになっています。そのような真の愛圏内に入っていくようになれば、神様の内的な世界と外的な世界を感じることができるのです。それゆえに、誰が教えてくれなくても霊界を知ることができ、神様が分かって、この地で父母にどのように侍らなければならなくて、また国にいかに仕えなければならないかということなど、すべてのことを自然に知るようになるのです。愛が行く道は、いい加減に行くようにはなっていません。公式になっています。愛が行く道は一つの道しかありません。真の愛が行く道には、二つの道はないのです。人間として行く真の愛の道や天の世界、神様として訪ねてくる真の愛の道は、いつも一つの道です。天が降りてくる時は、人間が上がっていってこのようになります。

それでは、これがどこで会わなければならないのですか。ここでしか会うことができないのです。最高に成人した位置がこの位置です。この位置は同じ位置です。この二人が一つになろうとするなら、どこで会わなければならないのですか。この位置で会わなければなりません。この位置しかないのです。この点で会わなければなりません。

愛の理論を話してみると、それが解けない理論がありません。知識の中の王の知識です。愛を探してみると、このすべての被造世界がペア・システムになっていることを知りました。鉱物世界もプラスイオンとマイナスイオンによって成っているでしょう。ペアです。それは何のための相対ですか。その級に該当する愛を中心として、愛ゆえにそのように生まれるのです。それでこそ繁殖が展開するのです。

動物世界もすべて雄と雌、人も男性と女性です。それはなぜ生まれたのですか。女性のために愛が生まれたのでもなく、男性のために生まれたのでもありません。「男性と女性が愛ゆえに生まれた！」このようにならなければなりません。その命題を否定する邪悪な者たちは、地獄の一族であり、破壊の一族です。

四　進化論か創造論か

一) 進化論の根本的な誤り

(1)　種の区分は厳格、第三者の介入を絶対排斥

歴史はいつからですか。進化を始めてからですか、その前からですか。進化とは何ですか。すずめとほおじろはいとこです。全く同じです。骨なども全く同じだというのです。色が少し違うだけであって、生殖器と目も全く同じです。だからといって、すずめの子とほおじろの子と、雌と雄を取り替えて、愛して子供を産みなさいといって子供を産むことができますか。千年、万年すれば子を産むでしょうか、産まないでしょうか。猿とチンパンジーとで子供を産むことができるか、千年、万年試してみなさいというのです。

すずめとほおじろとは兄弟です。どうですか。猿と人間に比較すれば一〇〇パーセント理にかなった話です。

それでは、すずめとほおじろをペアにすれば新しいものが生まれますか。全く、学者という人々が考えるには、雄と雌が愛して子を産んで発展したという論理を否定して、外形的形態の構成が同じだから進化したというのですか。皆さん、生殖器官がどれほど複雑ですか。魚は雌と雄がくっつきません。陸地に出てきて変わるのです。

この太陽系の地球が何億年になったでしょうか。何億年も回っているのに寸分の違いがありますか。毎日そのようにぴたっ、ぴたっと合います。同じです。また、アメリカのすずめと韓国のすずめと巣を作るのが同じですか、違いますか。答えてみてください。同じですか、違いますか。同じです。これは進化論的に見るならば、すずめが巣を作るのも発展しなければならないのではないですか。学んでいないのに、どのように何千年、何万年そのようにするのかというのです。それはどのようにして知るのですか。つばめはつばめで違い、すずめはすずめなりに、うぐいすはぴたっと枝にぶら下げます。それもみな知らないでしょう？　鳥の世界を知っていますか。皆さん。

オランウータンの雄と愚かな女性を捕まえて結婚させて、万年祈祷をして精誠を尽したからといって人の子が生まれるでしょうか。赤ん坊が繁殖すると思いますか。答えてみてください。猿の子孫、共産党の者たち！　オランウータンを人間の女性と結婚させて、共産党世界が祈祷して、あらゆる力を加えたからといって子が生まれると思いますか、生まれないと思いますか。分からないなら共産主義を主張するなというのです。進化論を主張するなというのです。明確にして暮らさなければなりません。

アメーバから猿まで行こうとするなら、数千種の愛の門を通じて上がっていかなければなりません。進化論は、数多くの種の愛の門を通過して上がっていかなければならないことを省きました。そのように行くことができますか。種を通じなくても思いのままに上がっていくことができますか。鳥が昆虫と通じることができますか。鳥が動物世界に通じないで上がっていくことができますか。愛の門、愛の関係を通して大きくならなければならないという事実はすべて抜いてしまって、骨が同じだからといってそのようなことをいうと

は話にもなりません。産むほど、より良いものが出てくることができますか。より悪いものが出てこなければなりません。ここで問題になるのが何かというと、彼らが愛の関係を知らなかったということです。

種の区分は厳格だというのです。アメーバから猿まで数千種がいるのです。進化論は、数千種の段階をすべて無視して、そのままこれを通ろうとするなら、すべてその種の雄、雌の門を通じて何千回も産んで子が出てくるのに、一度にすっと出てきたと考えるので、「これは間違っている」と言うのです。愛の門を通過しなければならない、ということを否定したのです。数千種の愛の門を、アメーバがどのようにすべて通過して人になることができるのかというのです。骨が同じだから同じなのですか。同じような骨はいくらでもあります。狂った話はやめなさいというのです。

今日、この進化論を考えてみる時、種の起源を話せば、一つの種が生まれるにはそのまま生まれるのではありません。必ず雄と雌がいなければなりません。これは、鉱物世界も同じです。プラスイオンとマイナスイオンが一つになって、一つの物質を造成するようになっているのです。必ず雄と雌の陽陰になっているのです。

再創造は、環境の創造、主体と対象の創造、その次には対応的な発展、このようになるのです。進化論もこのように発展しなければなりません。ただ発展するのではないのです。主体と対象が一つになり、より大きなものに吸収され、必ず愛の門を通らなければならないというのです。このような原則によれば、愛のないアメーバからこの人間世界までは数千段階を経て行かなければならないのに、そのような愛の門をただ越えていくことはできない、このように思うのです。

今日、進化論がいうには、アメーバが発展して、進化して人になったといいます。ここで考えなければならないこととは何ですか。雄雌が人間にまで到達するためには、数千段階の愛の道を通らなければならないということです。それを知らずにいます。種別の限界は厳格です。ところが、それがそのまま進んでいって進化するのですか。

皆さんの中で、愛する妻の前に他の男性が来て介入することを喜ぶ人がいますか。動物もそうであり、植物も同じです。いないというのが普通ですか、絶対的ですか。絶対的だというそこには、他のものが入ってくる場所がありません。種においては、そのレベルが完全に違うというのです。ところが、アメーバは雌と雄の愛の門を通じて出てきたのですが、どのように違う種類を連結させて出てくることができたのですか。そのまま上がっていったのですか。必ず愛の門を通らなければなりません。それを無視して進化ですか。西洋の人たちは猿のような姿なので、進化論を主張したのです。そうなのです！　頭の色もそうで、毛もすべて狼のように褐色ではないですか。

愛は絶対的です。二人だけです。第三者の介入を願いません。このように思う時に、アメーバから人にまでなるとすれば、何千段階の愛の過程を通して連結するのです。存続す

るのです。愛がなければすべて壊れるでしょう。一年しか生きることができません。そのようなものですが、愛というその部分を通して、これが、連続的な系列的存在が残されるのです。その愛の門に第三者が介入して、まだらなアメーバを願いますか。猿と人と結婚式をして、千年くらい生きれば子供が生まれるでしょうか。生まれないでしょうか。千年ではなく万年たってもできません。話にもならないたわ言はやめなさいというのです。

昆虫の世界もそうです。このようなことが原則ならば、進化論は成立しません。相対圏、対象の路程を通したアメーバから猿まで、何千、何万回の愛の門を通じた雄雌の関係を無視すれば、連結されないというのです。すずめもそうです。冬のような時は、相対のようなのが分からないので、いたずらをしてそれぞれ他のプラスになっていますが、春になって巣を作り、相対圏をつくった時には絶対的です。第三者であるすずめに対しては、雄と雌が共に絶対的に排斥するのです。雌が来れば雄が排斥し、雄が来れば雌が排斥します。なぜですか。自分の相対圏を壊し、宇宙法圏の侵略者になるために、それを排斥するようになっているのです。

植物の花を見れば、自分の種があるのに違ったものを中心として他の種子には変わりません。変わらないのです。それを見れば種の区別が厳格だというのです。それゆえに、アメーバから猿に進化したという進化論の論理は、形成することができないというのです。種の区別が厳格なのに、どのようにして数千種類の種の協助を受ける体制において連結させて発展したかというのです。進化論では愛の力を認めません。その愛の力を通して繁殖が可能なのです。愛の力がなければ、どのようなものも繁殖は不可能だというのです。どのように、アメーバから猿まで愛の力が正常に通じることができますか。そのようなことは、いかなる場合でもあり得ないのです。

アメーバから猿まで進化したとするなら、アメーバから猿までそのまま行くことができますか。数多くの異なる種を越えていくためには、どのようにしなければならないのでしょうか。愛の峠を通らなければ越えていく道がありません。新しい大きな種が出てくることはできないのです。数千、数万の雄と雌の愛の過程を通してこそ越えていくことができるのです。種の世界において、原則的なプラス・マイナスの概念が愛を中心として第三者の侵犯を容認しないなら、アメーバの世界からより高い一段階に越えていくことはできないのです。

進化は別種が出てくることだといいますが、愛の関係を中心としないでは他のものが出てくる道理がないのです。種の区別は厳格です。

進化論は、一度に壊してしまわなければなりません。自分勝手に理論をくっつけて進化論を議論したのです。人が猿の子供ですか。この者たち！　人間は、千年、万年天に侍るようになっています。猿なら何の猿ですか。猿と人は四十七の種類が進うのです。質的変化は起こり得ないのです。種の変化はあり得ません。だからといって、今日でも猿と人が暮らして人が生まれますか。猿が生まれますか。生まれません。種の起源というものは絶対的です。

宇宙は、なぜペア・システムになっているのでしょうか。自然にできた、あるいは進化論でもいいです。進化論の前に散在している事実は何ですか。男性と女性の生殖器、繁殖器官があります。そこに進化があるのですか。進化があるなら、男性と女性の愛する方法が変わらなければなりません。昔の人と今日の人とでは、それが発展していなければならないというのです。昆虫世界においても、虫が愛する方法が昔と今日とでは変わらなければなりません。鳥もすべて変わらなければならないというのです。そのような内容を中心として論ずることができるのです。生命の起源である愛の器官を中心として、その本拠地が進化的内容によって発展するようになっているのですか。狂っているというのです。

愛の世界の種別区分の厳格さは、天宙のいかなるものも犯すことができないのです。春になってすずめの雄と雌がカップルとなり、これから卵を産もうと巣を作り始める時には、第三者としてどのような鳥の種類も、どのような獣の種類も絶対に介入を許諾しないのです。皆さんの中で、結婚初夜に自分が最も愛する友人をそこに参加させたいと考える男性と女性がいますか。進化論は真理ではないというのです。嫁に行く女性が、母親以上にこの世で近い人がいないので、「死んでもお母さん、生きてもお母さん！　どんなことがあってもお母さんと一緒に暮らしたい」と考えますが、それでもそのようにはならないというのです。そのような女性でも、夫を迎える初夜には、「お母さん、今夜お願いだから一緒にいてください」とは言わないのです。そのような女性がいますか。第三者の介入は絶対に必要ありません。それが本来、人間が迎えなければならない愛の伝統的で公式的な基準だったのです。

皆さん！　生殖器官がどれほど複雑ですか。そのような構造的発達形態……。それを言えば、すずめとほおじろとせきれいは、その形がぴたっと同じです。では、すずめとせきれいとくっつければ何が生まれますか。それは可能ですか。この者たち、すべて訳が分からないのに言っているのでしょう。私が問い詰めれば、いくらも語らないうちに返事もできなくて、うんうんうめくのです。この者たち！　雌、雄！　アメーバからこのように生まれたとするならば、どのようにしてこのような雌と雄、凸凹が生じたのですか。なぜそれを通って授け受けして初めて子供が繁殖するようになっているのですか。それは誰が設定しましたか。進化論者がそのようなことを設定しましたか。

内的な力、生命の起源とは、偉大な宇宙観でも包括できない生命の連合基盤を通して生成が展開するという内容を知らずにいます。猿と人とは四十七箇所が違うそうですね。この二つが結婚すれば子供を産めますか、産めませんか。昔、学生の時に共産党の者たちに尋ねてみると、全員答えることができなかったのです！　このようなことは、きょうも数百種類の話をすることができますが、時間がありません。そのようなでたらめではいけないというのです。

進化が構造的形態の同位性によってできるのですか。違います。なぜですか。アメーバのような場合においても、より高い次元のものになるためには、雄と雌の愛の道を通じることなくしては不可能だということを知らな

ければなりません。ほおじろとすずめは、姿が同じです。しかし、それらが進化することができますか。足も同じで、くちばしも同じです。姿が同じです。見ても区分することができません。だからといって、ほおじろの雌とすずめの雄をペアにすれば発展しますか。白人男性とオランウータンの雌を結婚させれば何が出てきますか。子供が出てきますか、出てきませんか。進化論者、答えてみなさいというのです！　生殖器を通らないでは発展するものがないということを知らなければなりません。今晩、帰ってから研究してみてください。生殖器がどれほど複雑か知っていますか。すべての構成に必要な神経要素が、すべて集中しています。

今日の世の中の人たちは、人間が進化、発展したと信じていますが、アメーバに対する例だけ挙げても、それらも雄一つだけで発展し始めたのではなく、雄と雌が共に作用して初めて、より発展したものが出てくるのです。この進化論が大きな問題です。低級なものからより高い級に発展するためには、雄と雌の愛の過程を通らなければならないというのです。多くの愛の過程を通って出てこなければならないというのです。そうでなくては発展があり得ません。皆さん、すずめとほおじろとは似ています。毛色が若干違うだけであって、彼らの骨をおいて見れば完全に同じです。だからといって、すずめとほおじろとペアをつくっておけば子供が出てきますか。進化論者、答えてみてください。一度してみなさいというのです。出てきません。また西洋の人々を見れば、比較的毛がたくさんはえているのですが、だからといってゴリラの雌と西洋の男性とを結婚させておけば人が生まれますか。とんでもない話です！

種の区別は厳格なのです。したがって、進化論者たちの話のように、猿が人間の先祖ではありません。アメーバから人まで出てくるには、そのまま出てくるのではありません。数万種類の愛の過程を通します。愛の法度は動物世界でも同じです。第三者が介入することを絶対容認しないのです。ところが、どのように段階的に進化することができるのかというのです。力の作用においては、入力より出力が小さいのです。作用すればマイナスになるのに、どのように大きいものが出てくることができますか。そうではありませんか。だからといって、大きくなることができる第三の力に自分が加入することができる能力をもった存在でもないのです。

アメーバのそばに他の者が来て、見つめるのを喜ぶでしょうか。それゆえに、連結性をもつことができないという論理を否定できません。進化という意味を話す前に、雄と雌の生殖器を除去する時には、進化論が根本的に壊れていくのです。進化する前に雄と雌がいたので、進化することができる相対的要因の運動が展開したのです。

雄と雌の愛の器官が進化して、そのように合うようになっているのですか。この進化論が問題です。それが連結してアメーバのペアと、それから中間のペアと接触できる道ができていますか。横的にだけでなく、すべてに、どこでも接することができるかというのです。とんでもない話です。雌雄の世界は、既に愛

という概念を中心として生じたので、進化とは関係ない次元なのです。

愛の世界では、自分の相対以外には第三存在を絶対容認しないのが天理原則です。すずめも虫も、すべてそうです。それでは、進化論を中心として見る時、アメーバから人まで行こうとするなら、その愛の系列が何千段階ですか。昆虫だけでも数千種ではないですか。植物から動物までも数千種です。

ところが、その数千種がアメーバからそのままさっと人になったと考えているというのです。とんでもないことです！　数千段階を経なければなりません。種の区別は厳格です。アメーバから進化して人になったというのですか。でたらめな者たち！

すべての存在物は、すべてペア・システムになっています。進化論者に、「雄がなぜ生まれましたか」と尋ねれば、何というのですか。「自然に生まれたのでしょう」と言うのですが、それは狂った者たちです。自然に生まれたのですか。すべての雄、雌は、自分の系列を存続させるために生まれたのです。他の系列ではありません。猿が人になって、蛇がかえるになるのではありません。それは正しいですか、正しくありませんか。雄と雌が愛の門を通るという事実を知らずにいる、全く無知な人々がその人たちです。では、あなた方は雄と雌を知っているでしょう。それがそのまま生まれたのですか。

環境には必ず主体と対象がありますが、一つになって対応的な主体・対象関係をもたなければなりません。環境の主体・対象から対応的な主体・対象関係に発展していくのです。ですから、一人では生きることができません。それゆえに、心と体は主体・対象関係です。主体が対象を見分けられなければ因縁がないのです。元素世界において、これが相対的に合わなければ、いくら実験室でくっつけようとしてもできません。ペアであれば、きちっとくっつきます。置いておくだけでもくっつきます。

種の区別は厳格です。かえるに似た鳥がかえるの世界に行って、「あなた、私とペアになろう」と言う時、「そうしよう」と言うのですか。逃げますか、闘いますか。あり得ないのです。進化論は、アメーバから猿まで行くときに何を否定したのかといえば、愛の門を経ることなくしては新しいものが生まれることができないという事実を否定しています。数千代の愛の門をすべてアメーバが経てきたというのです。そのようなことができますか。気が抜けるにしてもほどがあります。それゆえに、文総裁の前に共産主義が壊れていくのです。事由が先か、存在が先か、このような問題も気になることは気になるというのです。精神が先ですか、物質が先ですか。皆さんは学校で進化論を学んだでしょう？　それは間違いでした。進化論は間違っているというのです。今から私が革命をするのです。

再創造の環境では、プラス・マイナスの対応世界で発展する過程があって、雄と雌の概念が進化論よりも先だということを知ることができたでしょう？　愛の種の区別は厳格で、第三者が介入できないのです。進化論によれば、アメーバから猿まで行こうとすれば数千段階を一度に跳躍しなければならないのですが、そのようにすることができる道理はあり

ません。千万種類の愛の門を通過してこそ、発展的なその種を連結させることができるのに、一度に跳躍して猿が出てくることができるというのですか。絶対不可能です。これだけ知っておいてください。

もし進化論を認めるならば、アメーバから人まで何千段階を越えていかなければなりません。段階が同じだといって、そのまま通過できません。ここは、何千種類の愛の門を通じて連結しているというのです。愛には、第三者の侵入を許す法がありますか。ありません。嫁に行った初夜に「お母さん、頼むからここで一緒に寝ましょう！」と言う新婦を見ましたか。夫もそうです。「お父さんがいなければ嫌だ！」と言っていた男性でも、初夜に「お父さん、ここで一緒に寝ましょう！」と言う男性はいないというのです。愛は第三者の介入を願いません。動物界でも同じであり、昆虫世界も同じです。このように思う時、猿は猿を産むのであって、猿のような種類から人間のようなものが出てくる道理はありません。

化学実験室で元素を研究する教授が、「やあ！　こいつ、この元素とあの元素と一つになりなさい」といくら命令してもできません。自分の相対圏が成されなければ絶対に一つにならないというのです。作用しません。自分が相対の主体になってこそ一つになるというのです。このようなことが原則なのに、無責任に進化論をこの宇宙形成に当てはめたのですが、それはでたらめです。ここで私たちは、「すべての存在に内的作用の力を起こすことができる本然の宇宙力がある」ということを認めていくべきだというのです。

猿と人は種子が違います。猿が文化的な生活をしますか。人は、生命が始まった時から宗教が付いて回りました。しかし、猿が「文化をもって世界を統一しよう」と言いますか。他の国を占領して自分の国にしたり、国境線をつくって「お前の国だ、私の国だ」と言いますか。そうですか、そうではありませんか。人とは種類が違うというのです。猿が神様を賛美しますか。猿は、ただ食べることを喜び、食べて繁殖すればそれで終わりです。人と狼では全く違います。進化論を主張する学博士という人々は、猿が人として進化したと意地を張って詐欺を働いているのです。統一教会では、彼らの主張が誤っていたことを明らかにして正さなければなりません。

(2)　力の作用法則と進化論の虚構

今日、進化論を適用しているのですが、アメーバならアメーバが繁殖していくにおいて、アメーバよりも大きなものが生まれるためには、現在のものよりも大きくなるためには、他の力が加えられなければならないというのです。力がプラスされなければならないというのです。アメーバ自体が、自分で力をプラスさせながら発展することができますか。自分自体がそのような力を加入させることができるのかというのです。そのような能力があるのかというのです。

もう少し上がっていって、より大きなものになることができるならば、ここにもっと大きな力をプラスしなければなりません。それでは、自分自体で力を創造してプラスさせることができる能力はないのに、どこからどのように来るのですか。そのような論理が成立しますか。ミスター金ならばミスター金、ミ

スター朴ならばミスター朴がいる時、「私は、モハメド・アリのようなものは問題なく握って片づける」、そのようなことができますか。そのようにしようとすれば、ここにより大きな力が加えられるか何かすべきで、そうでなければいくらやっても限界線を越えることはあり得ないのです。ミスター朴が「突然変異によって私の力が大きくなればアリをたたきのめすことができる」と言ってそのようになることができるでしょうか。そのようなことができますか。

力の公式的な原則を見れば、人間において入ってくる力と出ていく力とを同じにすることができますか。力が入ってきてこのように作用したのに、作用しようとして入ってくる力と作用したあとの力とが同じになることができますか。ここには消耗が生じます。そうではないですか。運動をすれば消耗が生じるでしょう？　ですから、入ってくる力と同じにはなり得ないのです。作用したあとには、常に力が小さくなるものです。進化論者たちは、作用したあとに力がもっと大きくなるというのです。そのような公式はありません。そのようになれば、この世はひっくり返ります。それゆえに、第二の力が必要です。

進化論者たちは、アメーバが順次進化して高等動物である猿になり、その猿が進化して人になったといいます。ところが、皆さん考えてみてください。人が人以上の力を発揮しようとするなら、その力をどこからか補充されなければなりません。力の原則がそうです。力が作用するようになれば必ず消耗します。ここに力を補充してあげてこそ、再び作用するようになるのです。

主体と対象が作用して現在よりも劣るようになれば作用しないのであり、より良くなり得るお互いの目的を発見すれば作用するのが原則になっているというのです。この問題を中心として進化論を見れば、進化するところにおいても、より良くなり得る目的的なその何かをもつことができないときには発展できないということを考えることができます。発展するためには、横的により強い力が加重されなければなりません。そうでなくては発展できません。その力は、作用することができる目的と対象がなくては絶対にできないのです。

進化論の矛盾は何ですか。アメーバが進化、発展するためには力が必要です。どんどんと大きくなっていくためには第三の力が必要です。「私は上の段階、高い段階の物に生まれる！」とするなら、ある何かをそこにプラスしなければなりません。力が加えられなければ大きくなることはできないのです。第三の力が必要だというのです。アメーバがより大きくなっていくことができる力を創造していきながら育つことができるのか、生きていくことができるのかというのです。そのようなことはあり得ません。

進化論では、どのように発展するというのですか。進化論は、入力と出力の法則と反対です。世の中にこのような原則がどこにありますか。進化論は絶対に大きくなることでしょう？　進化とは小さくなるということですか。進化論では、アメーバが自然発生してどんどん大きくなって上がっていき、猿に進化発展して人に進化発展したといいます。進化論によれば、それが大きくなるのですか、小

さくなるのですか。しかし、力の原則においては、入力と出力が同じ時、絶対に大きくなることはできません。小さくなるのです。力の消耗が起きるというのです。

力学の世界では、入力・出力圏を中心として作動すれば、必ずロス（損失）が生じることになっています。落ちていくようになっています。ところが、進んでいくことができるという論理がどこから出てくるのかというのです。「進化」ということ自体が、進んでいきながら変わるということ自体がプラスするという言葉ですが、それがどこでプラスされたのかというのです。投入した入力よりも出力が大きくならなければならないという論理をどこから探し出すのですか。作用すればロスが生じるので、入力は出力より大きいのです。このような立揚では、進化という論理は形成されないのです。

三点加入をそれ自体が投入できず、それから運動する世界では、入力よりも大きい出力を自分自体で発生することはできないのです。このようになれば、無限の動力が出てくるのです。その次の問題とは何でしょうか。今日、進化論を考える人々が、性関係を、プラスとマイナス、男性と女性、雄しべと雌しべ、プラスイオンとマイナスイオンが一つになり、その運動を通して出てきたということを忘れてしまいました。アメーバから人まで来ようとするならば、何千段階の愛の門を通らなければなりません。ところが、これがただ自然になったと考えています。突然変異が起きてそのようになったと考えますか。でたらめな者たち！　すべての種の原則は厳格なのです。第三者の介入を許す存在はありません。

進化論を主張しようとするなら、進化できるようにする力をどこからか補充することができなければなりません。そうでなければ、核の変革形態を自分自体に成し遂げて連合できる自制力がないというのです。それゆえに、進化は不可能だという結論です。

主体と対象があれば、必す目的があって方向性があります。ところが、進化にどうして方向性と目的があり得るのかというのです。進化論では、このような理論を適用できないのです。それゆえに、この目的観、方向性によって共産主義を壊してしまわなければなりません。このでたらめな理論をもって世界を蹂躙してしまおうとしたのです。アメーバが作用すれば、入ってくる力よりも作用が小さいはずですが、どのようにして大きくなるのかというのです。どのようにして大きいものが出てくるのですか。アメーバにおいて、入力より出力が小さいので、大きいものが出てくることができるようにするためには、第三の力が投入されなければなりません。そうでなくては進化論の根拠が壊れていくのです。アメーバ自身が第三の力を投入できる能力がありますか。このでたらめな者たち！

進化論を語る時、進化するアメーバ自体が進化の出発である三点をつくり出せるでしょうか。作用しようとするなら、運動しようとするなら、三点で回っていきながら、回転することができる四点基準を経ていかなければなりません。三点から四点を経なければなりません。円形で授け受けして運動しようとするなら、三点から四点を経なければなりません。ところが、アメーバ自体が再び自己の位置に戻ってくることができ、三六〇度に循環

させることができる力をもつことができるのですか。もてません。

それでは、三点の力は誰が加えたのでしょうか。それは、理論的に、他の違う力が含まれなければならない、という事実を知らなければなりません。ですから、進化する時、進化の方向がどのようになるのですか。その方向性を誰が決定するのかというのです。進化するアメーバ自体は、方向性を備えることはできません。それを思うとき、突然変異というものは気違いのたわ言です。それを誰が受け入れますか。最近では、進化論というものは、既にごみ箱に入ってすべて腐ってしまったというのです。何というのでしょうか、肥料の山のように考えているのです。

今日では、物理学が発達し、すべての原子にも意識があるという二元論を主張しています。この論理は、統一教会の二性性相原理のみ言と同じです。次元は違っても、すべての万物が聞き分けるというのです。そうではないですか。それでこそ細菌のようなものも生きるのです。そうではないですか。細菌のように見えもしない、何千万分の一にしかならない大きさで生きている細菌に耳がありますか、ありませんか。目がありますか、ありませんか。鼻がありますか、ありませんか。口がありますか、ありませんか。そこに生殖器がありますか、ありませんか。すべて備えているというのです。

神様もこの世界を創造される時、三点から始めました。このように思う時、進化論というもの、「進化」という言葉を私たちが認めることはできません。アメーバが作用するならば、作用するところにおいて三点基準を自分自ら選ぶことはできないのです。その三点基準は、もう一つ別の力によって形成されるのです。このようにして運動すればするほど、そこには必ず円形を経て運動したその点数を加えて球形運動を経ていくのです。

進化論を信じる絶滅分子たち、ここに進化論を信じる者たちがいますか。教授という安物がそのようなものをよく信じるでしょう？ それがなぜそうなのでしょうか。ペアにならないものを、いくら力を通してやっても、神様だとしても、和合作用もしないのはもちろん、一つにもなりません！　なぜですか。これが宇宙の法です！　なぜですか。愛の理想を中心としてつくられ、相対性を分け与えたために、宇宙はペア・システムになっています。アメーバから人になりますか。

直線上では調和がありません。このようなことを理論的に話そうとすれば、時間がたくさんかかります。直線世界でどのようにして三点をつくり出すのですか。三点、四点、四角形をどのようにつくるのかという問題、ここから調和が成されます。円形はどこから出てくるのですか。直線からは出てきません！ アメーバが三点自体を策定して、それを形成することのできる自力がありますか。ありません！　運動すれば直線でするのです。

アメーバを中心として、数千階段が愛の法ですべて積まれているのに、それがどのように愛の門、男性と女性の愛の門をすべて越えていくことができますか。できません。進化論の問題とは何かといえば、第三はどこから来たのかということです。愛の峠を越えてのみ種の繁殖が可能なのに、その門を通っていったのか、そのまま越えていって猿になった

のかというのです。その次には、進化論というものが、雌と雄、このすべての鉱物において、元素世界においてもプラス・マイナスがあるのですが、プラス・マイナスの相対的概念より先にあったのかという時、それはあとだったというのが事実です。それでは、この宇宙の主体・対象関係を認めざるを得ないというのです。これは、自分の正道以上に越えていくことができないということです。

直線上には調和が成されません。直線は何かというと、二点を連結したものです。創造されるためには、三点四点、スペースが必要です。この三点を誰がつくっておいたのですか。直線自体が知ることができるのかというのです。答えてみてください。上の三点に下の三点を誰がもってきて置いたのかというのです。それとともに、宇宙のすべての発展をするのです。その話は、運動というものは主体と対象がなければならないということです。それゆえに、主体・対象がなくてはなりません。また、それからもう一つは何ですか。力学の世界では入力が出力より大きいのです。それでは、アメーバが運動するところにおいて出力が大きいという論理がどこにありますか。上がっていくのではなく、落ちていかなければなりません。そのような意味で、進化論はすべて整理しなければなりません。

直線上には調和がありません。三点からすべての球形世界の調和基準が展開するのです。進化論には、三点を提示することのできる能力がありません。それゆえに、創造を無視することはできない伝統的な内容があることを知らなければなりません。直線上の点にはそのようなものはないのです。

宇宙の創造から見るとき、直線世界でどのようにして三点の基準を立てるようになったのかと考えてみるならば、進化論の観点で宇宙が始まったという結論を下すことはできないということを知ることができます。三点を中心として始まったというのです。三つの点があるというのは、必ず相対を中心として見るとき、それを連結させてあげる核があるということを意味するのです。

進化論は、既に過ぎた廃論です。方向性がありません。このようなことを中心として見るとき、方向性が設定されたということは、プラスとマイナスの二つに、相対圏にすべて共同的な利益をもたらすことのできる道が決定したのです。中道であると同時に正道の道を行くのです。二つとも喜ぶことができる道を行くのです。進化論者たちは、入力と出力の関係に対する論拠に解答できませんでした。しかも、方向性を提示できませんでした。第三の力を加えて、より大きいものを引き込むことができる内容的力を、アメーバ自体が介在させる自主力をもったのかというとき、もっていないのです。話もするなというのです。その方向性は愛の方向性です。

進化論を結論づけて越えていこうとするなら、進化することができるためには、アメーバが大きくなれる第三の力を自分で創造しますか、補給されますか。アメーバが進化して大きくなるためには、現在の状態から大きくなろうとすれば第三の力が加えられなければなりませんが、自分が創造しながら大きくなりますか、他人の力を受けて大きくなりますか。創造することができなければ、力を受けたという論理を否定することはできません。

また、そして、無条件に骨が同じだからといって進化するのですか。そのような狂った者たちは、いてはいけないというのです。精神病者です。

アメーバから猿まで行くときには、数千種の階級があるということを知らなければなりません。種の区別があるということです。それは何かというと、すべての種は、男性と女性、雄と雌の愛の門を通じてのみ出てくるようになっているというのです。ところが、数千種の愛の門を通過するということを忘れてしまって、骨が同じだ、似ているといって進化したということができますか。その数千の門の、階級の愛の峠をすべて越えていって発展したのかという話です。

生まれる時に、目を閉じて生まれますか、目を開いて生まれますか。では、私がいつ目を開けると思って開けましたか、自然に開けましたか。また、お母さんのおっぱいを飲むという教育を受けましたか、受けませんでしたか。ところが、どのようにしてそのようになりましたか。そこには見えない磁石のひもがあります。作用するすべてのものに、原則的な道があるというのです。このように思うとき、すべての作用というものは、偶然に展開するのではないということを私たちはここで知らなければなりません。今日、進化論者たちは、「宇宙が発展した、自然発生だ」とこのように言うのです。ところが、どのように自然発生するのかというのです。どのようにしてそのまま自然発生することができるのかというのです。原因もなく、動機もなく、過程もなく、結果もなく発生することができるのかというのです。

動機が最初であり、原因が最初であり、その次が方向です。それでは、なぜ方向が出てきたのかというのです。存在それ自体が、「私はこのように行くべきだ」ということを意識していきますか。目はなぜ開かれるのですか。目を開ければ、開けるや否や中を見つめますか、外を見通しますか。なぜそのように見なければならないのかというのです。そのような方向性がどこから出てくるのですか。どのようにしてそのようになるのかというのです。存在するものは、方向に従っていくために存在するということを私たちは知ることができます。

私たちは、目一つにしても答えることができないのです。今日の弁証法や進化論をもってこのことを話すことはできないというのです。皆さんは、今後共産主義者と闘わなければなりません。今から進化論と弁証法を壊さなければなりません。進化論さえ壊してしまえば弁証法は壊れるというのです。今の闘いは何ですか。意識が先か、物質が先かという問題です。共産世界は「物質が第一である、物質が最初である」と言い、民主世界では「意識が先だ」と言います。目がどのように生まれたのかという時、目がただ生まれたいと思って生まれた、と考える者は狂った者です。鼻はじっとしているのに、なぜ目は動くのですか。「なぜ目が動くのですか」と言う時に、「動きたいから動く」と言うのが進化論式であり、弁証法式です。

目の目的は見ることです。見ることに目的があるので動くのです。目的を達成するために動くのです。鼻はほこりがくっついてもじっとしているのに、目はなぜこのように絶えずぱちぱち瞬きするのかというのです。なぜ

ですか。なぜそうなのかというと、水分が蒸発して乾くので、水蒸気をまいてあげるためにそのようにするのです。まゆ毛はなぜ生えているのですか。ほこりを防ぐために生えています。「なぜそのようになっているのか」と言う時、「そのようになってみたいと思うからそのようになるのだ」と言うのが進化論式であり、弁証法式なのです。それは、そのように簡単ではありません。それが「ただそのようになった」と言う者がいれば、「この者たち、狂った者め！　たわ言を言うな！」と、このように言うのです。

(3)　愛の論理から見るとき、進化論は間違っている

進化論を解決しなければなりません。進化論が問題です。進化論のコンセプトと実在は、共産主義が問題とするのです。見えないものが貴いのです。神様が見えますか。良心が見えますか。愛が見えますか。人間に最も貴いのはこの三つです。見えない三つの貴重なものが神様、良心、愛です。良心があることはみな知っているでしょう？　「良心はない」と言う人がいますか。「愛はない」と言う人がいますか。しかし、目には見えません。見えないのでどのようにするのですか。どこにでも入っていくことができて、どこにも一つになることができるのです。見えたら入っていくことができますか。見えないので細胞の中にも入っていくことができるのです。通じない所がないということです。それは論理の根源を探すことができます。愛だけは誰も制止できないのです。真の愛は、宇宙が制止できず、妨げることができないのです。

進化論が先ですか、雄雌の概念が先ですか。どちらが先ですか。実在が先ですか、愛に対するコンセプトが先ですか。これは深刻な問題です。共産党を押し倒すためには、進化論を克服することができる論理をはっきりと知らなければなりません。アメーバが現象世界以前にいたでしょうか、その以後にいたでしょうか。アメーバから人間までの発展の連結体制を成すにおいては、どのようになっているのですか。愛によって実体が発展するという概念は無視して、そのまま進化によってアメーバから人になったという、そのようなばかな論理が世の中のどこにありますか。

中世時代から今まで、歴史を経てきたキリスト教文化圏が最も混乱したものとは何かというと、人本主義思想です。人本主義思想を中心として出てきたチャールズ・ダーウィンの進化論が、キリスト教を滅ぼすことにおいて、首を締めてつるし上げるのに主導的な役割をしたのです。「神様はいない」と言ったのです。環境圏内において、主体と対象になるのが雄と雌の相対概念です。雄と雌、人でいえば男性と女性のコンセプトですが、このコンセプトが先でしょうか、進化論が先でしょうか。環境には主体と対象があるのですが、そこには進化がありません。環境の中には必ず主体と対象があります。鉱物世界でも電子が陽子を中心として回っているのです。分子なら、プラスイオンとマイナスイオンが一つになって運動しているのですが、それらが進化論よりも先にあったでしょうか、あとにあったでしょうか。先です。先にあったというのです。

進化論が先ですか、宇宙の雄、雌の概念が先ですか。主体と対象が先ですか。鉱物世界にもプラスイオンとマイナスイオンがあり、主体と対象によってすべてペア・システムになっているでしょう？　植物世界もそうでしょう？　雌しべと雄しべがあり、主体と対象の相対的関係です。動物世界はどうですか。雄と雌になっています。宇宙の天理です。不変の天理です。これを人間の力、ある自為的な力をもって種別に対する雄、雌を変更させることができるものは、この地上に永遠に誰もいません。いれば大変なことになるのです。

進化論を片づけてしまいなさいというのです。進化論がある前に、そのような雄、雌の思想があったということを知らなければなりません。宇宙の神秘な秘密の中に隠された秘密、そのような秘密であり、今まで人間が知らずにいたのが雄、雌の概念であり、この概念が宇宙を形成したという、主体・対象関係で宇宙を形成したということを知らなければなりません。進化論が先ですか、雄、雌の概念が先ですか。雄、雌の概念です。イエス様がこの地に来て雄、雌の概念を革命しようと言いましたか、言いませんでしたか。

進化論を中心として見るとき、どのように進化したのですか。自分だけがいて、アメーバだけで進化したというのはでたらめです。あなたがなければ発展がないというのですか。自分だけがいれば発展するのですか。あなたと私とで喜ぶことができるその内容を中心として発展するのです。発展は、あなたと私の間の相関関係において、理想的な授受をすることによってより次元の高い発展が展開されるのです。

進化論では、アメーバから人まで発展したと見ます。発展がどれほど複雑ですか。一段階より高い生物がそのまま環境に適応して発展してくるのではありません。一段階高い存在の位置に上がっていくためには、必ず雄と雌、プラスとマイナスの愛の過程を通してこそ成されるのです。ところが、進化論では、このような問題を無視しているというのです。雄から雄に行って再び雌に行き、また雌に行って、このように生きることができるのかというのです。その方向性を見れば、必ず愛の門を通じて次元の高い存在になるのです。ところが、進化論者たちはそれを知らずにいるというのです。進化するためには愛の門を通過しなければなりません。

進化して男性と女性になったという言葉が問題です。愛という観念が進化する前にあったのでしょうか、進化したあとに生じたのでしょうか。どうですか。前ですか、あとですか。前です。今では、細菌までも夫婦があるというでしょう？　アメーバではなく細菌です。何十万倍、何百万倍に拡大して見ることができる細菌の世界にも夫婦というものがあるというのです。その細菌は、アメーバがいる前にいたのでしょうか。どうですか。おもしろいでしょう？　万物がペア・システム、相対になっているということ自体は、愛を中心として成されたものです。このことを考えてみれば、愛の感性とは進化する前からあったという話になります。それならば、アメーバから人間まで進化するのに、何億段階の雄雌交流の等級をどのようにして越えることができるのですか。これは、既に理論に合わないのです。そのような理論は、今ではもう古くなりました。進化論は大変なことをしでか

しているのです。これは、歴史上「神様はいない！」といって神様を否定する共産主義が発展した基台になったのです。

宇宙は、どの方向に向かっていますか。その方向性をつかむことができなければ目的観が出てこないのです。共産主義者たちは、進化論を語るので目的観がありません。しかし、すべての存在物は、既に主体と対象になっていれば、必ず愛というものを中心として作用します。ですから、それを連結させていく道が愛の道です。愛の道を訪ねていくのです。

今日、進化論もこのような原則で発展するものとして説明しなければなりません。二つの心が合って、お互いにより大きな目的によって刺激を受けなければなりません。刺激を起こし、その目的を中心として二つが追求してこそ、より高い所に行くことができるというのです。ですから、必ず主体と対象がなければなりません。その二つの間に起きる刺激とは何かといえば、愛だというのです。

進化論に愛の論理がありますか。なぜ凹凸が生まれたのかという理論的な根拠を語っているのかというのです。それでは、進化論が先ですか、雄、雌の概念が先ですか。どちらですか。雄、雌が先です。雄、雌が先ですか、愛の概念が先ですか。どちらですか。愛ゆえに雄、雌が生まれたのです。

宇宙の根本がどこから始まったのですか。進化論ではありません。それを知らなければなりません。進化よりも先に、創造の概念がある前に雄と雌がいたということを知らなければなりません。雄、雌はなぜ生じましたか。愛ゆえにです。愛、これが公式です。

すべての存在物は、すべてペア・システムになっているというのです。進化論者に「雄がなぜ生まれましたか」と尋ねれば、何と言うのですか。「自然に生まれたのでしょう」と、また「雌がなぜ生まれましたか」と言えば、「自然に生まれたのでしょう」と言うのですが、それは狂った人です。自然に生まれたのですか。すべての雄、雌は、自分の系列を存続させるために生まれたのです。他の系列ではありません。猿が人になって、蛇がかえるになるのではありません。それは正しいですか、正しくありませんか。雄、雌が愛の門を通るという事実を知らずにいる、全く無知な人々がその人々です。そうです、あなた方は雄、雌を知っているでしょう？　それがただ生まれたのですか。

主体と対象の相対圏は宇宙が保護します。このような理知で進化論を見れば、どのようになりますか。アメーバからそのまま行くことはできません。必ずプラスとマイナスが一つにならなければなりません。この一つになったものは、また一つの大きなプラスになるかマイナスになるのです。このようになり、ある存在は上に上がっていって、ある存在は下に下りていくのです。このようにしてその全体的な一つの主体的性格の基準の前に、自分に合う相対的主体性に該当するプラス的対象存在ならばプラスに行ってくっつき、その大きい主体に対してマイナス的対象存在ならばマイナスに行ってくっついて、もう一つの大きなプラスになるかマイナスになるかして、

より大きな世界に向かって発展していくというのです。

進化論をどのように撃破しますか。学者を中心としてその進化論が問題です。進化する前、猿の雄、雌も進化してそのようになりましたか。どうですか。雄、雌は進化してできましたか。すべてのものが、鉱物世界はプラスイオンとマイナスイオンであり、植物世界は雄しべと雌しべであり、あの昆虫世界の小さな虫もすべて雄、雌ですが、この雄、雌は、進化して生まれたのですか。

進化論者に雄、雌が生まれた起源とは何かと尋ねてみてください。それを何だと答えますか。繁殖するためであり、愛するためだということを否定できません。

進化は、どこから始まったのですか。これが問題です。今日の若い知性人たちは、この問題に引っ掛かり、このわなから抜け出すことができずに、すべて地獄に行っているのです。進化はどこから始まったのかといえば、アメーバから始まったというのです。進化なのか、神様が創造した調和なのか、この二大論理が文総裁によってきれいに整理されます。進化論は、神様を否定する共産党の無神論が作り出したものです。進化論は、科学世界に途方もない被害をもたらした怪物です。それは処断しなければなりません。進化がアメーバから始まったとするなら、それより何十万倍、何百万倍も小さなそのような世界を顕微鏡で見ることができますが、そこにいる菌の雄、雌は、アメーバがいる前にいたのでしょうか、あとにいたのでしょうか。

一つ知らなければならないことは何ですか。進化論よりも愛というものを中心として雄、雌が先にあったのでしょう？　この進化論が問題です。進化して雄、雌が生じましたか、進化する前に雄、雌が生じましたか。愛という内容を中心として実体が生まれたのです。愛ゆえに生まれました。男性と女性、雄と雌が一つになるのは愛のためです。進化というものはあり得ないというのです。進化する前に愛のコンセプトがあって実体が生まれたので、進化という言葉は、男性と女性、雄と雌にはふさわしくないというのです。愛ゆえに生まれました。

進化論を主張する前に雄、雌、愛の概念が最初にありました。それは、進化論以前にありました。男性と女性は、愛ゆえに結婚して一つにならなければなりません。一つになるのは何のためですか。それは愛の目的を得るためなのです。ここには進化論の内容も何もないのです。

創造の公式的な一致観を認めることはできますが、進化して雄自身がどのようにして雌になるのかという観念、また雌自体が、女性である私が男性になるという観念をどのようにもつのかというのです。そのようにはならないというのです。自分自体ではなりませんが、そのようになった結果論から見れば、その動機は愛という観念であるということを否定できません。雄、雌を考える時、進化論は絶対に成立しません。結局、雄、雌は何のために生まれたのでしょうか。愛ゆえに生まれたというのです。

宇宙には進化という観念がなかったというのです。増加するという観念は、本来愛を中

心にして始まったのです。愛の観念から進展の編成を展開させるのが神様の創造理想です。進化論に先立つ愛の観念を考えてみても、そこに連結する雄、雌の内容をどのように進化論によって理解させることができますか。愛の感情は進化する前からありました。それは自分とは関係ないのです。男性と女性が生まれる前から、存在前からあったのです。したがって、観念が先だというのです。愛の本宮とは何ですか。本宮が何か分かりますか。

進化論という言葉が出てきたので、一言話して次に行きましょう。鉱物世界にプラス・マイナスの概念があります。動物世界にも雄と雌がいて、植物世界は雄しべと雌しべがあります。すべて雌雄関係です。それから人間世界は男性と女性です。

ところが、男性と女性がいたずらに生まれたのですか。それは、何のために生まれたのでしょうか。これは、すべて主体・対象関係です。授け受けするために、運動するためだというのです。それ自体の愛を中心としてこのようになったのです。

進化論がキリスト教を破壊させるのに、どれほど貢献したか分かりません。しかし、今、進化論を私の手で握りつぶすことのできる時代が来たというのです。進化論を信じますか、信じませんか。文総裁の話を信じますか、進化論を信じますか。今、整理して越えていかなければなりません。これはうそだというのです。愛の力は何千万代を経るのに、アメーバがそのまま何千段階の愛の門を通って人になることができますか。アメーバ自体がそのような能力、飛翔天することができるそのような資質をもつことができますか。

二) 進化論は既に時代後れの思想

今、世界の主流思想から見るとき、概念と実在が哲学世界の二大主流になり、有神論と唯物論、左翼と右翼の闘争によって世界に及ぼしたその被害は莫大なものです。左翼思想というものは、進化論によって世界的に覇権をもつようになりました。男性と女性という概念が先ですか、愛が先ですか。男性と女性がいる前に、愛という概念が先にありました。愛が先にあったので、男性と女性もそこに準備してその愛の概念に一致するようになっているというのです。それゆえに、概念と実在は分かれるものではありません。このように、概念と実在が愛によって一つになることができる、ということを共産主義は分かりませんでした。

今まで世の中の学者において進化論が先か、神様の創造が先かということが問題でした。愛の概念がある前に、先に進化の概念がありましたか。どちらが先ですか。進化論が先ではなく、この愛の概念が先にあったあとにそれがあったというのです。ペア・システムの宇宙が先に生じて、その中で形体的な構造が合うものが進化論形態として合うだけであって、それで根本がそのようになったのではないということを知らなければなりません。

すべての鳥の種類は、形態がすべて同じです。しかし、種の区別は違います。すずめとほおしろが夫婦になって子を産むことができますか。それはできないというのです。アメーバから人までは何千段階の種の区別があるのですが、これを無視して一度にさっと人が出てくることができますか。とんでもありません。種の区分は絶対的です。

共産主義も「神様がいる」と言って帰ることができる、そのような思想的概念をどこで取り戻すのかというのです。絶対的に唯物論を、絶対的に進化論を否定することができるように確定しなければならず、心と体が一つになることができるように確定しなければならず、理想的出発を自分から始めなければならないという、このような基準をどのようにしてつくるのか、統一するのかという問題が世界史的問題です。

共産ブロックが進化論を主張して、創造論は宗教圏が主張して、この二つが闘いました。それで、世界的ブロックが主張したことが、すべて失敗しました。ですから、どこからこれが出発しなければならないのかといえば、世界的基準ではないのです。個人に入っていかなければなりません。個人で誤ってこのような結果になったのですから、個人から唯心、唯物を中心として判定しなければなりません。

進化論を取り除いてしまい、絶対的神様を中心とした創造論を中心として、絶対的神様を中心とした絶対価値の核を立てなくては、世の中が行ったり来たりするというのです。

今日、進化論や唯物弁証法、認識論、唯心論、唯物論等によって、世界の思想界は矛盾と混乱に陥ってしまったので、絶対真理を樹立してこそ絶対的価値世界の形成が可能なのです。絶対価値的存在は、永遠、不変、唯一の存在です。それでは、宇宙の中で永遠、不変、絶対の原理が何かというと、原因と結果、主体と対象の関係だという結論になります。

今日、進化論が事実か、調和の創造が事実か、ということが大きな問題になっているのです。その進化論の方向性は誰が決定するのですか。自分が決定するのですか。発展するその物質が決定することができますか。また問題は、それ自体が理想圏と関係を結ぶことができる力をどのように育てることができるか、もっと抱くことができるか、プラスさせることができるかということが問題です。

それは神様によって可能なのです。そのような問題は、科学も解明することができません。それゆえに、物質にもやはり人の欲望のようなものがあるのですが、その欲望的方向は神様と一つになることです。それが目的です。同じです。ここにおいて宇宙のすべての元素の総合的代表、この物質世界の代表が人間だというのです。

思考の根拠地はどこですか。ある人は頭にあるといい、ある人は胸にあるといいます。それでは、自分が胸にいるのですか、頭にいるのですか。それだけではないのです。このように見ると、自分が存在するのは結果的なことなので、どのようにして生まれたのでしょうか。すなわち、起源がどのようになっているのでしょうか。これが問題です。自分はどこから始まったのですか。

一般的に人々は、人間が動物界から進化したと考えます。それは、仕方なく作った方便的な理論です。論理的に連結させるために仕方なく方便的にくっつけたものであって、本当に進化したかということは知ることができないというのです。私たちの精神的底辺がアメーバから始まったのですか。精神的先祖がアメーバなのかというのです。進化論では、アメーバから出発してすべて発展したというのです。

今日の哲学思想、その哲学思想とは何かというのです。これは、すべて一番下から探求していくのです。ところが、これが、「どのようになっているか」と理論的な追求をしてきましたが、「人間とは何か。真の人間とは何か」ということに対してまだ結論が出ていません。すべての学者、すべての有名な哲学者が人間の問題を中心として考えましたが、この結論がまだ出ていないのです。「人間とは何か。人間の起源とは何か」ということに対して、進化論や創造説による様々な学説を通しても、まだ解決されていないというのです。「こうだ」と言える決定が出ていないというのです。

すべての経典を見れば、孔子もあいまいです。人格的神を知らなかったのです。お父様を知らなかったのです。生まれた私たち人間の根本であるお父様がいるはずですが、お父様を知らなかったのです。また仏教も万象帰一の法を論じますが、人格的神を知らないのです。

もしも誤れば、唯物論に陥りやすいのです。進化論に陥りやすいのです。進化論的見地の発展的信仰基準に立つために、これは唯物論に接近しやすいのです。

フランス革命以後、人本主義思想を中心として啓蒙思想を経て、今の共産主義まで出てくるその過程において、このチャールズ・ダーウィンの進化論を中心として共産主義が一つにつづられ、今までキリスト教を完全に破壊のくぼみに陥れたのです。

今日の科学者たちは、「この宇宙は力でできている」と言います。しかし、力がある前に作用が先だという事実を知らずにいます。作用があるがゆえに主体と対象があるという事実を知らないので、混乱が生じるのです。主体・対象の概念によって事物を判断するときには、進化論が根本的に壊れていくのです。

最近、進化論のようなものは、アメリカの大きな大学では講義しない所が多くなったといいます。それは当然のことです。「自然にできた！」と言いますが、皆さんが自然にできたと考えれば、それはどれほどむなしいでしょうか！　「自然にできるのですか。自然も主体的な自然がありますか」と言えば、「それは私には分かりません」と言います。

このような話がどこにありますか。どのようにして主体的な自然があるのですか。「それはそのようになっている。生理作用がそのように、発展現象はそうなるようになっている」と言うというのです。「そのようにですか？　なぜそのようになるのですか」と言えば、「それは誰も分かりません。それはそのようになったのでそうなのです」と言うのです。そのような論法は、あり得ないのです。原因がない結果は、あり得ません。因果法則を否定する科学論理というものは、あり得ないのです。

今、進化論は、流れていった一つの歴史的遺物になっていますが、進化して発展するというでしょう？　進化すれば、なぜ逆にはならなかったのですか。逆さまになることもあり得るのではないかというのです。東にも行くことができて、西にも行くことができて。進化することができる方向を誰が定めてあげたのですか。自分で育ちながら方向を定めるのですか。アメーバから発展して人になる時

まで、数多くの高次元の段階を経ていくのに、その方向を、高次元に向かって発展することができる方向を誰が定めてあげたのかというのです。なぜそのように高次元に向かうのかというのです。

各宗教の経典の欠点とは何かといえば、創造説がないというのです。神様が創造されたプログラムがないというのです。それで、あらゆる論理を中心として論告を書くのです。創造説がないので、創造の方向と創造目的を知らないのです。これだから世の中が自分勝手になり、進化論だ、何論だというものを掲げてきて自分の思いどおりにやってしまい、自分の思いどおりに行動してきたというのです。

ですから、創造説がどうだということをはっきり知らなければなりません。その次には、方向性と目的性があって、これがこうなのですが、なぜこのような悪なる世界になっているのかという、その理由を糾明しなければなりません。

その原因を糾明し、聖書とか歴史的な過程において、人類歴史の中で滅びた国がなぜ滅びたのかという、そのすべての起源を解決していかなければなりません。一般常識的な立場で、誰でも妥当性があると公認することができる論理的体制を整えた歴史観がなければならないというのです。

絶対的な愛の前には、第三の相対者を絶対に付与しません。このような論理が本物ならば進化論はあり得ないのです。アメーバも、それだけでは発展できません。陽性、陰性の内容を通して、愛の門を通じて新しい次元を経ていかなければなりません。すべての宗教の教理は、愛の門を通るという論理、またここには第三者の介入が不可能だという天理を考える時、進化論はあり得ないという結論が出てくるのです。

第二章　人間創造と愛の理想の完成

一、愛の絶対価値

一) 人間の男性と女性

宇宙の根本を考える時、何を考えて造ったのかといえば、男性と女性の概念を通じて、それに合うように相対的理想として造ったというのです。今まで、これが分かりませんでした。

宇宙の根本とは何かというのです。人間だとすれば、男性と女性がいます。その人間はなぜ生まれたのかというのです。人間はなぜ生まれましたか。これが問題です。宇宙の最も根本になる中心とは何かという問題、宇宙の最も貴いものは何かという問題を、私たちは扱わなければならないというのです。

宇宙の根本を探し求めていくと、主体と対象の概念が生まれてきます。ここにいる小柄な女性たちも、力をもっているでしょう？
では、この小さい女性の力が願うものは、小さい男性の弱い力ですか、大きい男性の強い力ですか。男性も同じです。男性も小さい男性ならば、大きい女性の力を願うのです。それは、なぜそうなっているのでしょうか。バランスをとるためです。バランスが問題です。水平、または垂直にならなければならないのです。それゆえに、相対的理想というものがそこから出てきます。そこから、相対的理想が出てくるというのです。

人間の中には何がいますか。男性と女性がいます。それでは、男性と女性とは何ですか。種の中の種、焦点は、男性と女性を中心として、誰が焦点となるのかということが問題です。この男性と女性も、プラス・マイナスでできているというのです。

必ず、プラス・マイナスがあるというのです。何かの種を見ても、二つのかけらがぴたっと一つにかぶせられています。一つの殻の中に、二つが入っています。これは宇宙の根本を表しているのです。宇宙の根本が、すべてこのようになっているというのです。

宇宙の根本は、どのようになっていますか。原因なくして生まれたものはありません。必ず原因があって、初めて結果が現れます。このように見るとき、男性と女性が生まれた原因とは何かというのです。女性が生まれたのは男性を捕まえて食べるためですか。男性が生まれたのは女性を捕まえて食べるためですか。愛のためです。愛のために生まれたとすれば、女性も愛のために生まれ、男性も愛のために生まれたというのです。愛が原因なのです。

女性はなぜ生まれたのでしょうか。愛のために生まれたのですが、男性のために生まれたというのです。男性のために生まれました。男性はなぜ生まれたのですか。女性のためです。宇宙の根本は簡単です。それが天理であり、真理です。これを変えることができる他のものはありません。この簡単な真理が今まで分からなかったのです。

女性は、生まれてどこへ行きますか。いったい女性がなぜ生まれたのでしょうか。これが問題です。女性は、女性に生まれたことを嘆いたことがあるでしょう？　なぜ女性に生まれたのかというのです。簡単です。

哲学の最も根本となるこのことを知らなかったので、そのように思うのですが、簡単なのです。男性のために生まれたのです。簡単です。宇宙の真理です。

根本問題において、この宇宙は、ペア・システムでできていますが、それは共鳴するためです。何を中心として共鳴が起きるのかといえば、愛というものを中心として起きるのです。それゆえに、神様が創造される時、男性と女性を先に考えて愛を立てられたでしょうか、それとも、愛を中心として男性と女性を立てられたでしょうか。どちらが先でしょうか。

「男性と女性がこうなっているから愛がこうなるべきだ」と思われたでしょうか、「愛がこうなっているから男性と女性がこうなるべきだ」と思われたでしょうか。ですから、見えないものが貴いのです。

人はなぜ生まれたのでしょうか。生まれるときに、自分のために生まれた人はいないというのです。人がこのように生まれたとすれば、生きるのも自分のために生きる人は、生まれてきた本来の根本原則に背くのです。そのような人は、脱線者であり、落伍者であり、堕落者であり、破壊者だというのです。学校でこのようなことを習いましたか。「自分のために生まれた」と言う人は、この宇宙が要求しないのです。

女性のものは、女性のためのものではありません。男性のためです。そうではないと否

定できる人がいますか。それゆえに、何ももっているものがありません。「な（名）」しかない「おんな（御名＝女）」だからといって、それが恥ずかしいことではないというのです。どこでも調和が可能です。おばあさんとも、お母さんとも、おじいさんとも、親戚のおばさん、おじさんとも調和することができます。女性という中心性を大きくしないので、その相対圏の幅がどんどん広くなるのです。これは、宇宙の創造原則に根本をおいた公式的な基盤に連結されるものなので、それは確定されていくのです。

種が一度一つになれば、その二つが一つとなった種は、その二つ自体に他の種がありません。それを壊すことは、宇宙を根本的に破綻させる立場、再創造過程をすべて破綻させる立場に立つのです。それはサタンです。それゆえに、自分の妻は自分の妹です。そして、神様の子女として見れば双子です。生まれたのは、男性のために生まれて、女性のために生まれたのです。女性は、女性のために生まれたのではありません。女性は男性のために、男性は女性のために生まれたのです。ですから、人が生まれたのは、自分自ら生まれたのではありません。それゆえに、男性のような人を好むのは男性ではないのです。女性です。女性のような人を好むのは、女性ではなく男性だというのです。そうでしょう？

真の愛を中心として私が完成するには、相対がいなくてはならないのです。相対がどれほど貴いかということを知らなければなりません。皆さん、真の愛がある前に相対が先です。相対が先であることを知らなければなりません。それを打つということは、宇宙の根本を打つことと同じです。神様を打つことであり、神様の体を否定することです。それを知らなければなりません。

それゆえに、すべての真の愛が安着し得るところは、男性だけではなく、女性だけではなく、二人が、男性と女性が一つになるところにあるということを知らなければなりません。このような観点から、夫婦を中心として自分の家庭を中心に、「宇宙は、私に似ている」というのです。

男性と女性が、全く同じでもよいでしょうか。男性と女性は違うのです。根本的に違います。男性が東側ならば女性は西側であり、男性が南側ならば女性は北側です。女性が「なぜ男性は、私と同じではないのか」と言ってはいけません。女性が弱ければ男性が強くなければならず、女性がおとなしければ男性は大胆でなければなりません。また、男性は肩を振って進み、女性はおしりを振って進まなければなりません。このように違います。肩を振ることは、すべてを揺さぶることです。それが宇宙のトーン（tone）です。宇宙に拍子を合わせるのです。

男性は女性のために生まれて、女性は男性のために生まれました。では、男性と女性はなぜ生まれたのですか。これは根本問題です。なぜ男性と女性が生まれたのですか。神様の愛のためです。これが問題だというのです。男性と女性、二人がなぜ一つにならなければならず、お互いに出会って何をしようとするのかということです。水平となって球形の中央に到着するためです。宇宙は、すべて球形に似ています。地球も丸くて、ぷかぷか浮い

ているでしょう？　宇宙も、太陽もすべて浮いているのです。

なぜ男性が生まれたのですか。男性が生まれた目的は簡単です。女性のために生まれました。女性はなぜ生まれたのですか。男性のために生まれました。女性は男性がいなければならず、男性は女性がいなければなりません。アダムとエバは何のために生まれたのですか。愛のためです。人間は何のために生まれたのですか。愛のために生まれたのです。それはなぜですか。神様が愛を必要とされるからです。愛のスープを飲んでこそ神様が喜ばれます。朝食、昼食、夕食を食べながらも、「ああ、気分がいいなあ！」と言われます。神様がお金のふろしき包みをもらったとすれば、喜ばれますか。知識のふろしき包み、権力のふろしき包みを必要とされますか。しかし、人間が最も貴いと思う愛のふろしき包みには、神様も一目でとりこになってしまうのです。「家和万事成（いえわしてばんじなる）」とはよく言ったものです。「家和万事成」という言葉は、宇宙の根本をいっているのです。それがなぜそうなのかということは、統一教会に来てみれば明らかでしょう？

女性はなぜ生まれましたか。男性はなぜ生まれましたか。自分が生きるために生まれたのではないのです。この宇宙と共に、神様の本性の根本と結果のすべてを保護して、そのような価値的存在として生きるために生まれたのです。それゆえに、万物のすべての特性を、捕まえて食べようとするなら自分と似たものを捕まえて食べ、愛することができなければなりません。昆虫たちも雄と雌で喜んでいるでしょう。それを知っていますか。虫たちもそうです。蝶々たちも、雄花と雌花が開いて香りを振りまく所を好むでしょう？　雄と雌が愛する運動圏内に行って、動き、暮らし、食べようとするのです。

堕落せずに本来どおりになっていれば、教えられなくても分かります。では、男性と女性はなぜ生まれたのですか。それが問題です。愛のためです。その愛は、なぜ必要なのですか。愛で何をするのですか。愛のために死ぬとか生きるとか言うでしょう？　そうではないですか。なぜ命を懸けて死ぬとか生きるとか大騒ぎするのですか。それが命の根源だからです。根本が絶対的愛、一つの愛を訪ねていこうとするのであって、二つの愛を訪ねていこうとはしません。宇宙の大道、天理です。億千万世がたっても、この法はなくなりません。天上世界に行っても、この法が審判の基準になっています。

母親の生命、父親の生命を何によって血筋に連結させることができますか。愛を中心として血筋が連結されるのです。宇宙の根本に踏み込んで入っていくと、このようになります。私たちのような人は、深刻な人です。深刻な人です。宇宙の根本とは何かという問題、これは深刻な問題です。

宇宙の根本は、愛、生命、そして血統です。それが「私」として結実しているというのです。それで、私は、愛の中心をもっているのです。生命の保護体です。それで、血統により歴史性、伝統性を連結するのです。皆さん、この三つが必要です。皆さんもこの三つをもっているでしょう？　愛をもっているでしょう？　生命ももっているでしょう？　血統も

もっているでしょう？　この三つを一つに合わせて、新しい人が誕生します。

神様の愛と人間の愛がいつ一つになるのかということが問題です。これが歴史的な問題であり、宇宙創造以降の重大な問題です。これが解決されない限り、宇宙の根本が解決されない限り、絶対に結果が解けないのです。真の愛を中心としては、神様は核の位置に立たなければなりません。それでは、アダムとエバは何でしょうか。アダムとエバは、核を包み込む二つのかけらと同じです。皆さん、くりのようなものを見れば、二つのかけらになって胚芽を包んでいるでしょう？　それと同じように、神様を核として、男性と女性が愛を中心として完全に一つになるのです。

男性と女性の二人が出会うのはなぜかといえば、愛のために会うのです。男性がなぜ生まれたのかといえば、愛のために生まれ、女性がなぜ生まれたのかといえば、愛のために生まれたのです。その愛を行って何をするのかといえば、神様を占領するためなのです。神様を占領して、宇宙の根本を占領するためなのです。原因と結果が一体となって和合するのです。結実というものは、原因と結果が一つになった位置で、すべてのものを一致化、合致化させたものです。実がなったので、ここから芽が出てくるのです。子が出てきて広がっていくのです。それゆえに、二人の父母の血肉を受けて生まれるのです。

「私」が生まれたのは、愛のために生まれたというのです。愛です！　このことが分かりますか。宇宙の根本がこれです。愛、真の愛です！　男性も女性も同じです。

二人が一つになるには、何を中心として一つになるのですか。神様を中心として一つになるのではありません、男性を中心として一つになるのではなく、女性を中心として一つになるのではありません。神様とアダムとエバが真の愛を、絶対的愛を中心として統一が展開するのです。これが宇宙の根本です。簡単です。神様も、愛がなければ孤独な神様です。

かぼちゃの葉は、何のために呼吸しますか。生命を維持するためですか。生命は、何のために生きているのですか。愛のためです。女性は、何のために生きているのですか。男性は、何のために生きているのですか。お金のために生きているのでしょうか。愛のために生きているというのです。

愛する妻を百億、千億のお金と取り替えますか。深刻な問題です。本物の愛が貴いということを知れば‥‥。この愛は、宇宙の根本と通じるのです。これがなければ、すべての根源が損傷するということをはっきり知っている立場にいるとすれば、これを何と取り替えますか。国と取り替えますか。

共産党を支持しますか、民主世界を支持しますか。民主世界は有神論です。「精神が先だ」と言います。私たち統一教会は、「精神と物質は一つだ」と言うのです。これが統一論です。主体と対象を論じています。宇宙の根本は、原則として一人で存続できないというのです、二つの存在ですが、それが愛を中心として、絶対に一つに帰結されるのです。男性と女性、プラスとマイナスなら二つですが、一つになることができなければ唯一論に

なりません。すべて二元論になるので、二つの世界が生じて闘争の世界が展開するという論理が形成されるのです。ですから、男性と女性は二人ですが、一つにならなければならないのです。真の愛を中心として一つになるようになっているのが原則だというのです。

二) 男性と女性を完成させるものは生殖器

宇宙の根本は何かというと、男性と女性です。プラスとマイナス、男性と女性の愛を中心として成り立っているのです。それが生殖器原論です。すべてそのようになっているでしょう？　カンガルーなど、何の動物であれ、見てみれば、産まれるとすぐに、まずおっぱいを探していきます。生殖器を見てみても、羽の付け根の中にあるものもいて、ありとあらゆるものがいるのですが、それをどうやって探していきますか。それは、超音波のようなものがあるのです。それを連結させる宇宙の根源が万有原力です。万有原力は、神様の本質的力をいうのです。

男性と女性は、何ゆえに違うのですか。目が違うから違うのではありません。五官が違うから違うのではないのです。何が違うために男性と女性は違うというのですか。生殖器が違うために違うのです。それ一つのために違うようになったのです。

男性と女性は、なぜ生まれたのですか。男性という言葉は、女性のために生じたのです。男性という言葉は、先有条件として女性を認めるのです。男性は体が大きいのですが、体の小さな女性のために生まれたのです。女性は何のために生まれましたか。その男性と女性において、違うものとは何ですか。何が違いますか。手が違い、目が違い、鼻が違い、口が違うのですか。何が違いますか。一つだけ違うものは何ですか。一つは凹で、一つは凸です。それが生殖器です。

男性に絶対必要なものは、女性の真理です。女性に絶対必要なものは、男性の真理です。男性の真理とは何ですか。女性の真理とは何ですか。それは生殖器ではないですか。そうです、生殖器を合わせるために男性と女性が生まれました。その生殖器をなぜ合わせるのですか。何のためにですか。愛のためです。生命を結合して、血筋を結合するためです。

三元素をすべて混ぜるためです。

男性と女性を完成させるものは生殖器です。考えてみてください。皆さんもそうではないですか。目は一つですか、二つですか。なぜ二つですか。鼻の穴は二つですか、一つですか。なぜ二つですか。唇は二つですか、一つですか。なぜ二つですか。耳は一つですか、二つですか。なぜ二つですか。手は一つですか、二つですか。なぜ二つですか。足は一つですか、二つですか。なぜ二つですか。女性の生殖器と男性の生殖器も二つですか。それも同じですか。違います。それは別個になっています。

この違うものをどのようにすれば良いのかということが問題です。すべてが相対的になっているのに、男性のそれと女性のそれは別個でしょう？　生殖器というのは、いったい何をするものですか。それが何をするのですか。その目的は何ですか。生殖器というのは、いったい何をするものですか。それで何をするのですか。その目的は何ですか。おなかが

すいた時に御飯を食べるためにそれがあるのですか。その使用目的は、いったいどこにあるのかというのです。自分一人では使用目的を絶対に果たすことができません。男性と女性が一つにならなければ、永遠に無用の長物になるというのです。考えてみてください。それが何のためにあるのですか。誰が女性を呼びますか。目が呼びますか、頭が呼びますか、体が呼びますか、心情が呼びますか。誰が呼びますか。また、女性は何のために男性を呼びますか。誰が、どちらが呼びますか。口が呼びますか。使用目的を成し遂げるために、生殖器は相対が必要なのです。それで、女性は、絶対的に男性を呼ばないといけないというのです。また、男性は、絶対的に女性を呼ばないといけません。これが絶対的ですか、相対的ですか。絶対的です。歴史を超越し、環境を超越します。それゆえに、いかなることがあっても、いかなる出来事があっても、これは成し遂げなければなりません。

男性と女性は、お互いに何が違いますか。性器官を含んだその体がまず違います。それでは、男性の性器官は誰に絶対必要なのですか。男性の性器官は、女性のためにあるのです。人間の性器官は、一つは凹で一つは凸ですが、なぜそのようになっていますか。二つともとがっているものにするか、二つとも平たくすることもできるのに、なぜそのようにできていますか。すべて相対のためです。男性のものは女性が絶対に願い、女性のものは男性が絶対に願います。女性のものが絶対に男性のものであり、男性のものが女性のものだという事実を知らなかったのです。それを占領することによって愛を知るというのです。

平和の基地もそうであり、地上天国・天上天国、すべてのものが愛から生じてくるのです。どのような愛ですか。男性の愛です。女性の愛です。男性と女性が一つとなった愛です。その男女の愛がどこで一つになりますか。顔で一つになりますか、指先で一つになりますか。凹凸で一つになるのです。

心と体は、何を中心として統一するのですか。お金でもなく、知識でもなく、権力でもなく、真の愛だけが心と体を統一するのです。それは何を見て知ることができますか。存在世界をすべて知ってみると、男性と女性に生まれたのですが、哲学に入門する人々にとって、なぜ人が生まれたのかということが疑問でしょう？　それは簡単なのです。この世に人がなぜ生まれたのですか。人といえば男性と女性です。この男性と女性がなぜ生まれたのかという問題を見るときに、女性という動物と男性という動物がいるのに、生殖器がそのようにできているのは一つになるためのものです。

何を中心としてですか。愛を中心としてそのように生まれました。本来の神様が愛であるという概念を考えた時、愛のために男性と女性が生まれたということは否定できません。これが、何を中心として一つになるのですか。愛のために一つになるので、愛を中心として造ったということを否定できないのです。それゆえに、宇宙の最大の神秘、最大の興味、最大の趣味、最大の関心、最大の魅惑、すべて最大が入ります。それから何がありますか。最大の滅びる運命。反対もあります。いくらでもそのようなことを思いのままにこうすることもでき、ああすることもできる内容をも

った化け物のようなもの、それが何かというと愛です。愛の化け物だというのです。

生殖器は神聖なものです。それは正しいですか、正しくありませんか。なぜおかしな目で見るのですか。「統一教会の教主が生殖器の話をする」という目で見ていますか。牧師がそのような生殖器の話をすることができますか。皆、つばを吐きます。生殖器に対してつばを吐く男性、女性がいますか。男性が女性の生殖器につばを吐き、女性が男性の生殖器につばを吐きますか。

生殖器は神聖なものです。それは神聖で、神聖で、神聖な生殖器です。神聖なものです。堕落していない、完成したアダムの位置です。神聖な場所であり、神聖な宮殿です。最高の宮殿です。生命の本神殿が生殖器であり、愛の本神殿が生殖器です。

男性と女性の生殖器は、何をするためのものですか。愛するためのものでしょう？　それゆえに、その愛が現れるためには、男性と女性が必要なのです。男性と女性は真の愛のために生まれたのです。それは否定できないことです。

いくら凸があっても、凹がなければ大変なことになるのです。それでは、神様が人を造られる時、凹凸、男性と女性の概念が先だったでしょうか、人という概念が先だったでしょうか。それを考えて、はっきり答えてみてください。男性と女性、人の概念が先ですか、男性の性、女性の性の概念が先ですか。根本はそれです。いかなるものよりも重要だというのです。女性としてもっているその生殖器官が、宇宙創造の先祖だったという事実を知らなければならず、男性の生殖器が創造の先祖だったという事実を知らなければなりません。これを知らなかったのです。

生殖器が人間創造の先祖だったのです。第一の先祖が生殖器だというのです。この生殖器から男性と女性が現れたのです。事実です。生殖器から男性と女性に分かれました。分かれるという概念は、本来の概念の次だというのです。本来の概念から分かれて、男性、女性と呼ぶようになったのです。はっきり分かりますか。

雌と雄が生まれる時に、体が先に生まれたでしょうか、生殖器というものが先に考えられて生まれ始めたでしょうか。途中で雌、雄が決定しますか、雌、雄が決定されてから育ち始めますか。どうですか、尹博士？　決定されてから育ち始めるのでしょう？　そうだというのです。その雌、雄を誰が決定しましたか。アメーバが、「私が雄になる」と思って雄になれますか。雌のアメーバは絶対的に雌のアメーバであり、雄のアメーバは絶対的に雄のアメーバです。行ったり来たりできないのです。

文総裁がお母様のように「女性になる」と思ってなることができますか。既に、生まれる時に決定されるのです。精子と卵子が一つになる時、既に決定されているのです。男性、女性が現れる前に、生殖器が決定されるのです。男性になるところだったのに女性になったのではありません。男性は男性として絶対的であり、女性は女性として絶対的です。

結論として、神様が人間を造られる時、最も苦労してつくられたところはどこでしょう

か。目ですか、口ですか、鼻ですか、手ですか。人間たちは、そのことを考えてもいないというのです。それが愛の本拠地です、愛の本拠地。愛の本拠地とはどこですか。男性と女性のそれをいうのです。それが愛の本宮だったというのです。そこから、男性の愛を知り、女性の愛を知るようになるのです。それがなければ愛が分かりません。愛の主人が現れることができません。男性の愛の主人は女性であり、女性の愛の主人は男性です。愛の主人になることができる資格をつくるのが愛の器官です。

純金という二十四金は、韓国の地から出てきたものも、景色の良い所から出てきたものも、水中から出てきたものも、どこかの山の谷間、人とかかわりのない地から出てきたものも、価値は同じです。自分が愛そうとする相対に対して、生殖器の愛というものが、「ああ、あなたは顔が悪いから私は嫌だ」と言いますか。愛の関係を結べば、そのあばたがかわいくなるのです。白人と黒人の夫婦が愛するようになれば、その白人女性は、黒人男性を黒人と考えることはできません。そのようなことが展開するのです。

自分勝手にまゆ毛が生えてきたり、勝手に涙が出てきたりしますか。狂ったことを言うなというのです。この宇宙の根本となる主人が存在し、その考えがなければなりません。私たちのこの体がどれほど神秘的ですか。この体は、ただ生まれたのですか。生殖器がどれほど神秘的でしょうか。それは想像できないくらい神秘的なのに、それがただそのようになっているのですか。生命が連結されているものは、簡単ではないというのです。

男性は、男性の生殖器を千年、万年きちんと守る主人にならなければならず、女性は、その生殖器を千年、万年きちんと守る女性になりなさいと教えるのが文総裁です。そのようにこれを間違いなく守るようにして、そのようにさせる責任を負った人が、「真の父母」の名前をもった父母だというのです。真の父母は簡単です。浮気者の女性と男性を連れてきて、浮気をせず絶対的に節操を守る男性と女性にすることができる力をもった人が真の父母です。希望がありますか、ありませんか。

三) 生殖器は根本問題解決の出発点と終着点

皆さん、勝手におしりを汚してはいけません！　女性のものは誰が主人なのですか。笑うなというのです、宇宙の根本を明らかにしているのです。そうか、そうでないか、考えてみなさい。私がこれを知るために、骨髄が溶け出すくらい、それほど苦労したのを知っていますか。言葉は簡単だというのです。しかし、内容がどれほど途方もないか知っているのですか。天下が分かれて、世界が二つに分かれて、悪なる人、善なる人がここで分かれるのです。

愛の王宮はどこですか。このような話をするからといって、おかしく思わないでください。それを正すことができなければ、世の中がすべてずれていくのです。前後関係が合わなければ、全天下によこしまなものが生じてくるのです。文総裁が今まで苦心して宇宙の根本を追求した結果、ぴたっと到着したところが生殖器でした。生殖器に至ってじっと考

えてみると、天地の調和がここで渦を巻いていたというのです。驚くべき事実です。

先生がすべての複雑な世界の真理を探求したでしょう？　すべて知り尽くそうとすると、神様がすべて許してくださいました。そのように苦労して、苦労してきてみると、座っているその場で自分がもっていて、知っているものだったというのです。ですから、もちろん驚き、感謝しましたが、むなしいことこの上なかったのです。

今まで人間が悩んだ根本問題がこれほど簡単で、これほど易しいとは、私は本当に分かりませんでした。ひどく苦労しました。全く、このようになっていることを知らずに、私が泣いたりわめいたり、霊界に入っていって、ろくでなしまでひっくり返してみて、ありとあらゆることをすべてしました。ところが、気づいてみると、私がすべてもっていたのです。「ああ、これを知らなかったのだなあ！」と思いました。私にすべてあります。宇宙がすべて私の中にあります。宇宙がすべて私に入ってきています。気分が良いでしょう？

先生は、宇宙の根本が何かという問題をおいて九年間も苦闘して解決しました。明らかになってみると簡単な道理でした。「やあ、こんなに簡単なことを知らなかったのだなあ。すべてもっていたのに、分からなかったのだなあ！」と思いました。そうではないですか。

山人参を掘るおじいさんが、太白山のような深い山中に入っていき、山人参を掘ろうと歩き回っていたのですが、「あ、ここは朝出てきて、小便をして一休みした場所、しりに敷いた場所が人参畑だった」というのです。分からなかったのです。帰ってくる途中で、出発した時、小便をしてタバコの吸殻を捨てた所に行って、またそれを拾って吸おうとして見ると、なんと人参畑だったというのです。そのようなことがあるのです。そのような時は、タバコの吸殻を探して吸うことも「幸福だ」と言うことができるというのです。

文総裁は、与太者式ではありません。宇宙の根本を追求してみると、それです。これをすべて知って見てみると、全くこんなにも苦労をして、一生の間どれほど苦労をしましたか。あぜんとします。すべてもっていました。すべてもっていたというのです。それゆえに、霊界の神霊な場所に入っていくようになり、「神様、どこにいますか」と尋ねる時には、神様が私の中で、「どうした、ここにいる」と言われるのです。それで、「人すなわち天」という言葉が出てきたのです。

宇宙の根本が何であり、どのようになっているのかという問題を解くために、千辛万苦、苦労したその背後を皆さんは知りません。

それは、通りすがりに何かの笛の音を聞くようにして、歌の調べによって探し出したのではありません。血涙ですべての五感神経の感覚を一つの焦点に集めて、身もだえしながら奪ってきたのです。それを奪ってきても保管できる能力がなければ、天が許諾しないのです。

今までこのように生き残ったのは、誰が保護したから生き残ったのだと思いますか。文総裁が保護したからですか。滅びたい人がどこにいて、栄えたくない人がどこにいますか。

しかし、天運の保護を受けようとするなら、栄えない道を行かなければなりません。その道は、どのような道ですか。この地上に、自分のために生きなさいという歴史の教訓を広げておいたのが悪魔ですが、これを越えて本然郷においての、神様の思想的基盤においての、根本思想においての「ため」に生きる創造の遺業を通して、「ため」に生きつつ理想を求めていこうとしていた創造主の本意に一致することができる行動をする人は、この宇宙が保護します。「宇宙が保護する」ということを実感できるように一言話しましょう。

私が、誰も知らないこの道を探すために、どれほど大変だったでしょうか。人生問題の根本を解決するためには歴史を解決しなければならず、宇宙を解決しなければならず、神様の苦衷まで解決しなければ解決できないということを知った時の、暗中模索していたその若い時期の苦痛を皆さんは知らないでしょう。しかし、そのようなことができる組織をすべてつくって、言葉だけでなく実践途上において、それが証された世界の版図をすべて得ました。これからは、誰でも走ってきて旗を受け取って後ろにつけば、すべて天国に入ることのできる時代が来たというのです。

最も根本の問題は、心と体が闘うことから始まって、宇宙的な宝石を埋蔵した基地を失ってしまったということを知らなかったのです。内的な面において自分を統一する道は、自分を完成させる愛を発見する道であることを誰も知りませんでした。それを発見するためには、宇宙すべてを解読してから、それを知ることができなければならないのです。それが分からない以上、答えは出てきません。先生の話を聞いて、どう思いますか。不幸だと思いますか、幸せだと思いますか。どの程度幸せだと思いますか。

この宇宙の存続、歴史の存続、国家の存続や理想の継承等、すべては何を中心としているのですか。様々な関係世界を支えることのできる、その根源的な根本要素は何か、全体を代表することができるその中心要素は何かというのです。これが、重要な問題です。私たち統一教会の食口関係において、統一教会に入ってくる時と、今まで十年、数十年たった時と比べると、だんだん習慣化されていって、昔、教会に入ってくる時に情熱を尽くして全体を考えていた、そのようなすべての関係はだんだん消えて、あとからは自分の利益だけを取ろうとして悪魔の網に包まれ始めるのです。それは滅び始めるということです。

なぜ原理ですか。根本の理論だというのです。原理というのは、根源の道理、理論を言うのです。人生の根本問題、宇宙の根本問題、そういったものが、原理を解きほぐすことによってすべて明らかにされるので、地上に行っても天上に行っても、その原理の行く道を妨げるものは何もないのです。それで、平和、安定、安息の生涯路程が見いだされるのです。一つになれば感じないというのは重大なのです。

宇宙の根本とは何かというこの問題に対して、祈祷して、神様にすがって大騒ぎをしても、教えてあげることができないのです。誰にも教えてあげることができない内容であることを知らなければなりません。それはおかしいでしょう？　神様が教えてあげれば、天

下に一日統一が起きるはずですが、人間が誤ったので、人間自体が罪を犯したので、罪を清算しなければなりません。未知の立場に落ちたので、この未知の立場を克服して、この線を越えた人でなければなりません。病気が治った人でなければ病院から退院できないのと同じです。

根本に入っていけば、神様と人間との関係は何かという問題が台頭しますが、答えは簡単です。「宇宙の根本は何ですか」という問題を中心として、誰よりも苦心した人がここにいる、この人です。そのような問題を解決したので、「統一教会」という言葉を掲げてきたのです。それは、人間世界ではできません。霊界に行って、すべて、公判廷に入っていって競売の入札をするようにしなければなりません。このような話は、初めて聞いたでしょう？

万一、宇宙の根本であられる神様がいらっしゃらないとするなら、この世に絶対価値の基準はあり得ないのです。そうなれば、人間の道徳と倫理の基準が成立せず、その社会は、人間が万物の霊長になることができる、いかなる哲学的根拠ももてないのです。

私は科学を勉強した人です。このような理論的な基準で、宇宙のすべての根本を洗い出して、間違いないという自信があるがゆえに出発したのであって、一生の間、監獄を出入りし、むち打たれ、悪口を言われて、あらゆることをすべてしながら、一言も反対できず、このように黙って世界を征服してきたのです。真の愛の中心である神様、すべての力の根本である神様が倒れますか。

神様の愛のパートナーが倒れますか。打てば、それが壊れるようになっていますか。神様はどうですか。「神様、あなたは、あなたの愛の対象が御自身より劣っていることを願いますか、優れていることを願いますか」と尋ねれば、「お前たちと同じだ！」という答えです。

この驚くべき事実、この宇宙の根本がこのようになっているという驚くべき事実です！その次には「あなたも息子、娘がいれば、息子、娘が御自身より立派であることを願うでしょう？」と尋ねれば、「同じだ」と言われるのです。人間がもつべき権威的価値、これを失ってしまいました。

文総裁がすべての真理を探究して、霊界、肉界を探査し、すべての経典を探査しても、これを解決する道がないのです。神様がいるか、いないか。神様がいらっしゃるならば、世界をこのように造られた神様を私が抱えて放しません。勝負を決定するための闘いをしたのです。

人間が生まれた根本原則は何であり、なぜ生まれたのですか。男性は女性のためです。それが全体真理の中の最高の真理です。女性の前に理想的な男性は、最高の真理です。宇宙全体が完成した理想の真理の本体だということを知らなければなりません。男性の前にそのような女性も、宇宙の真理の本体の中の本体です。絶対的な真理体です。

二、生殖器は三大本宮、天の至聖所

一) 愛と生命と血統の本宮

男性と女性はなぜ生まれたのですか。男性と女性の違うものは何ですか。男性と女性がどのように一つになるのですか。男性と女性

が何を中心として一つになるのですか。生殖器を中心として一つになるのです。これは調和の箱です。この場で、愛の完成が展開するのです。真の愛が初めて完成するのです。それから、男性と女性の生命が一つになる所も、その場です。男性と女性の血筋が交流して植えつけられる所も、その場です。その場が理想的な愛の本宮であり、血統の本宮なのです。絶対的な本然の所を本宮といいますが、誰もその価値を変えることはできません。

アダムとエバの生殖器、その場所が偉大だというのです。それゆえに、その生殖器は愛の本宮といいます。驚くべき言葉です。天地創造のすべてを、神様まで完成させて安息させることができる王宮であり、本宮です。天国も一番目ではなく、地上国も一番目ではありません。家庭から始まるのです。これが本宮です。驚くべき言葉です。またその場は、真の愛を中心とした本宮ですが、真の生命を中心とした本宮でもあります。その次には、血統を中心とした本宮であり、地上天国の出発地であり、天上天国の出発地なのです。

人間の生殖器が真の愛の場所です。そこで愛の行為が連結されるでしょう？　ほかの所でそのようになるのではありません。そこが男性と女性の生命が連結され、一つになる宮殿です。そして、男性と女性が一つになれば、その血統から息子、娘が出てくるのです。ですから、血統の宮殿です。それほど重要なのです。

男性と女性の生殖器は、愛の宮です。愛の王宮です。子宮が貴いですか、男性と女性のそれが貴いですか。言ってみなさい。子宮のために生殖器ができましたか、生殖器のために子宮ができましたか。深刻な話です。笑う話ではありません。男性がいるために子宮ができたのです。女性のそれは、男性のためにできたのです。なぜおかしな表情をするのですか。男性と女性の生殖器は、愛の王宮です。それがなくては愛がありません。愛を探せません。それを通らなくては、生命が連結されません。男性と女性がいても、何になりますか。生命が連結されないのです。それを通らなくては、歴史を連結させる血統が連結されないのです。

生殖器とは何ですか。それは、真の愛を中心とした王宮であり、真の生命を中心とした王宮であり、真の血統を中心とした王宮です。最も貴いものです。これがなくなれば天地がなくなり、これがなければ神様の理想、神様の家庭、神様のみ旨を成し遂げることができないのです。これは、全体の完成を成すことができる一つの起源です。

女性の生殖器が宇宙的な本源です。愛の関係をするその位置が愛の本宮になっています。本然の宮中だというのです。愛はそこから始まります。結婚初夜の愛が愛の本宮の出発です。女性の生命、男性の生命が初めて一つになるのです。それゆえに、理想的な生命の本宮がその場所であり、血統がそこから始まるので、血統の本宮がその場所だというのです。そして、天国がそこから始まるので、そこが地上天国の本宮であり、天上天国の本宮であり、人間完成の本宮であり、神様完成の本宮です。

男性完成、女性完成、神様まで完成させることができる、その本拠地はどこですか。どこで神様の愛を完成させることができ、どこで男性と女性を完成させることができるのですか。その中心定着地はどこですか。これが問題です。これが分からなければ、地上に愛の理想天国を拡張、拡大できません。それは、目ですか、鼻ですか、手ですか、足ですか、どこですか。凹凸です。

生命が出発する本拠地とはどこですか。愛の本郷の地とはどこですか。血統の本郷の地とはどこですか。男女の生殖器です。男性と女性が何によって一つになるのですか。愛を中心として一つになります。それを中心として始まるのです。生命がそこから出発します。血統もそこから連結されます。その貴重な三大基地を失ってしまってはいけません。天下をもらっても取り替えることはできません。

愛の本宮が生殖器であり、生命の本宮が生殖器であり、血統の本宮が生殖器です。神様が最高に探し求めていた真の愛の起源地であり定着地は、男性と女性の生殖器です。そこから男女の生命が結合するのです。そこから血筋が受け継がれ、歴史性をもった人類というものは、すべての血族が関係をもっているのです。それゆえに、最も貴いのです。

頭よりも、それがもっと重要です。頭には真の愛の起源がありません。頭には真の生命の起源がありません。頭には真の血統の起源がありません。その起源は生殖器にあります。それは間違いないでしょう？　生殖器にすべてのものがあります。そこに生命があり、愛があり、血統があります。そこが愛の本宮なのです。生命の根もそこにあります。血統も同じです。人間の体だけでなく、人間世界と人類歴史を通じて最も貴いところです。それがなければ人類の繁殖が不可能です。

私の生殖器は愛の本宮です。「私の生殖器は生命の本宮だ、王宮だ」というのです。私の生殖器は血統の王宮です。このようになってこそ、神様が臨在なさることができる王宮になることができるのです。神様は、王の王でいらっしゃるので、本宮を訪ねていってお住みになる方なのです。それゆえに、神様に侍るために愛の本宮になり、生命の本宮になり、血統の本宮になり、良心の本宮にならなければなりません。

生殖器は、愛の王宮です。今、その愛の王宮は、どのようになっていますか。愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮であるもの、そのように貴いものが人間の生殖器です。神聖なのです。最も貴いのです。生命、愛、血統がここに連結されています。このように神聖なものをサタンが汚しました。

男性と女性が愛する本宮、生殖器とは何ですか。愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮です。おじいさん、おばあさんもそれを中心として生き、父と母もそれを中心として生き、自分たち夫婦もそれを中心として生き、将来生まれる息子、娘もみなそれを中心として生きるのでしょう？　それを中心としないで生きる女性がいて、男性がいますか。種がありません。ところが、それがなぜ悪いものになりましたか。下品な言葉だというでしょう？　なぜ下品な言葉なのですか。神聖な言葉です。神聖な言葉として受け止め

なければなりません。ここで永遠の愛が連結され、永遠の生命、永遠の血統が出てきます。最も貴いのです。

女性、男性の生殖器は、生命の王宮です。生命の最初の出発地です。永遠に変わらない本然地です。生命の王宮であり、変わらない愛の王宮です。良心が理想を中心として定着することができる基地です。血統の基地です。そこから生命が芽生えるのです。そこから愛が一つになります。そこから男性と女性が一体になるのです。そのような生殖器が堕落して天地を破綻させた怪物になってしまったので、今日これを悪いものとして扱っているのです。

神様が精誠を尽くしてつくられたものがそれです。すべての被造万物の核心的な骨髄を絞り出して連結させたのです。ここに愛の本質が一〇〇パーセント連結され、生命の本質が一〇〇パーセント、歴史の本質がここから芽生えるのです。そこから初めて希望があり、そこから初めて幸福があり、そこから初めて愛を中心とした自由圏が始まるのです。

生命の根源地、愛の根源地、血統の根源地はどこですか。それはどこですか。生殖器です。それをひっくり返して打ち込んだので、世の中で最も下品な言葉になったのです。それが誤らなければ、下品な言葉ではなく王の言葉です。神聖な言葉です。「下品な言葉」の反対語は「神聖な言葉」でしょう？　「真の言葉」よりもう少し高いものは何ですか。「真の言葉」というのは相対的関係で成されますが、「神聖な言葉」は縦的、球形的圏をいうのです。

人間が堕落していなければ、男性の生殖器が愛の王宮です。愛の王宮なのです！　それをいい加減には使用できません。そして、生命の王宮です。そこから生命が生まれるでしょう？　生命がどこから出てきますか。生命の王宮です。血統の王宮です。そこから、自分の命が血統を受け継いで生まれるのです。私の生命の根源地であり、私の血統の根源地であり、私の愛の根源地です。それゆえに、先祖がそれを通じ、貴く思い、「ため」に生きなければならなかったのです。

神様が、どれほど喜んでつくられたでしょうか。最も喜んでつくられ、最も精誠を尽くしてつくられたものが、男性と女性の体の中のどこだろうか、何だろうかを考えてみてください。それが生殖器だというのです。生食する米を入れる器（生食器）ではありません。生殖器といえば、「生きるものを植えることができる器だ（生植器）」だというのです。生命の生殖です。生命を植えることができる器だというのです。その場がなければ、千年、万年たっても生命が生まれないので、国もなく、世の中は暗黒天地、砂漠天地になるのです。それを知らなければなりません。

真の愛がどこから生まれるのかといえば、息子、娘、神様の息子、娘を生むその局面から生まれるのです。それが生殖器です。これが最も冷遇されました。天地がひっくり返ったために最も卑しいものとして扱われましたが、復帰された天下では、これが愛の本宮であり、生命の本宮であり、血統の本宮であり、良心の本宮だというのです。これがなければ国も生まれず、理想世界の発展も、起源もな

くなるという事実を知らなかったというのです。

生殖器がなぜできたのかというのです。愛のために、生命のために、血統のために、良心のためにできました。そこを通らなければ、愛もなく、生命もなく、血統もなく、良心もありません。神様が人を造られる時、目や鼻等、五官をつくるのが大変だったでしょうか、生殖器をつくるのが大変だったでしょうか。五官が愛をアピールするところですか。それが、愛と生命と血統と良心が集まっているところですか。違います。絶対に違います！
ただ一つ、そのような箇所があるならば、生殖器です。そこで愛、生命、血統、良心の第二の実が結実するのですが、それを私たちは、息子、娘というのです。
それがなければ何も存在できません。すべての被造世界がストップするのです。今まで人類はこのように貴い生殖器を知らなかったのです。「私が世界で一番だ！」と誇らしく思ったかもしれませんが、生殖器がなければなんでもないのです。その生殖器は、真の生殖器をいうのです。

生命の王宮とは、どこだといいましたか。愛の王宮とは、どこだといいましたか。血統の王宮とは、どこだといいましたか。家庭でしょう？　夫婦でしょう？　夫婦の愛の基地ではないですか。男性の生殖器、女性の生殖器がそれをしなければなりません。皆さん、王孫を生まなければなりません。神様の愛を中心として、天国の真の王子、王女を生まなければなりません。それが真の生命でしょう。真の血統を残さなければなりません。後世を残さなければなりません。

生殖器は生命の王宮です。王宮とは、第一に全体を代表した根源的な家です。王とは何でしょうか。蘇生、長成、完成の中心です。三段階の中心が王です。それを見れば、漢字も啓示を受けて作ったと考えるのです。愛の王宮をもっていますか。男性と女性、愛の王宮をもっていますか。それなのに、愛の王宮をもっている人たちがなぜ心配するのですか。不幸という言葉がどこにありますか。簡単なのです。

なぜ皆さんは、歴史的伝統と関係を結ばなければならないのですか。愛と生命と血統、この三つが最高の伝統であり核心だからです。そうです。生殖器官は、その三つを同時に連結させてくれるものです。接ぎ木をするところです。愛を接ぎ木し、生命を接ぎ木し、血統を接ぎ木するところです。

愛する夫婦二人が関係を結ぶ生殖器は、愛の王宮だというのです。そこから愛が始まるのです。真の愛の王宮です。最初の出発をする場所なのです。そうか、そうでないか考えてみてください。生殖器は、愛の王宮です。堕落する前の観念で見るならば、生殖器は、愛の王宮だというのです。生命の王宮、血統の王宮です。愛を中心として男性と女性が一つになる、そこに生命が連結して血統が受け継がれるのです。

皆さん、男性と女性が、堕落していない復帰された神様の息子、娘を生むことができる生殖器に向かって、全存在世界は、自らの生命全体を投入して自分より高い次元に吸収されるのです。鉱物は植物に、植物は動物に、動物はより大きい動物に、大きい動物を経て、

人間は、すべてのものを吸収して消化することができる主人の資格を備えなければならないというのです。

それゆえに、愛して食べなければならないのです。愛しましたか。そこがどのようなところですか。生殖器だというのです。生殖器は、生きた食器です。生命を食べる食器だというのです。それが愛の王宮です。それがないのに男性と女性が愛を感じることができますか。できないというのです。

全万物世界の最終理想的吸収の終着点がどこかといえば、男性と女性の生殖器だというのです。それは事実です。なぜですか。どうしてですか。神様の愛と人間の愛と宇宙の愛が結合するのです。愛と生命が一つになる位置がその場です。

そして、血統を通じて縦的に後孫が連結する位置がその場です。そのように縦的に引き継がれて、横的に数え切れないほど多くの民族が連結されるのです。それによって地上天国が形成されるというのです。そのような価値をもつのが生殖器です。どれほど重要ですか。

自分がもっている生殖器は、生命の本宮です。愛の本宮です。皆さんが父母だとして、皆さんを中心とした一代の一族を中心として、愛の本宮が偽りとならず、皆さんの息子、娘が純潔な本宮から周辺三六〇度になる王宮の場所を築き、神様が夜も昼もいつもここに来られ、自分の家を中心として周辺に関係している一族の前に自由自在に来臨され、いつも苦楽を共にすることができる環境的宮殿にならなければならない、ということを知らなければなりません。

何がそのようにならなければならないのですか。「私の生殖器は愛の本宮である！」。一度、言ってみてください。「私の生殖器は生命の本宮である」と言ってみてください。私の生殖器は、血統の王宮であるというのです。このようになってこそ、神様が臨在なさることができる王の基地に、王宮になることができるのです。

本然の人間の先祖がどこから始まったのでしょうか。目ではなく、鼻ではなく、口ではなく、手でもありません。どこからですか。その神聖なところとはどこですか。皆さんの生殖器です。そうではありませんか。そこに血統が連結されているのです。それゆえに、救援するということは容易ではないのです。

るつぼという言葉があるでしょう？　溶鉱炉とは何ですか。男性と女性の血がるつぼで溶けて混ざる場所はどこですか。生殖器です。生命を載せる器を生殖器というのです。それは愛の本宮です。神様の愛が芽生えることができる出発の園であることを知らなければなりません。

皆さんの生殖器もそうです。「やあ、この生殖器を通して子供が創造される」、このことを考えてみましたか。重大な内容です。

生殖器は、生じるの「生」の字に、食事の「食」の字でも、植えるの「植」の字でも良いのです。生命を植える器だというのです。その次には、繁殖するの「殖」の字でもかまいません。生殖器が生植器だというのです。そのように解釈します。分かりますか。生命

を植える器です。それを知らなければなりません。

創造主と被造物が何を中心として一つになるのですか。愛です。これを知らなければなりません。ですから、先ほど話した、神様が愛をもって創造されたという答えがどうして出てくるのでしょうか。生殖器を中心として創造されたという事実は、愛という表題を中心として創造されたという事実を証するのです。

歴史上のすべての人がそれに従っていったのです。とてつもない力をもっています。文化や経済を超越します。堕落した世界でもそうならば、堕落以前の世界ではどうだったでしょうか。考えてみれば、それが最も貴いものです。それが宮殿です。宮殿の中でも本宮です。また生命の宮殿にもなり、血統の宮殿にもなるのです。この三宮殿の基礎が生殖器です。一番重要なところです。神様もそれを訪ねてこられるのです。神様がこの三大王宮を占領したならば、この世は神様の一族になっていたでしょう。

人間世界において最も貴いものが愛の本宮です。愛の根源地、生命の根源地、血統の根源地です。それがどこですか。堕落していなければ、これが神聖な至聖所です。男性の生殖器と女性の生殖器は、愛の王宮の根源的本宮です。このことを知らなければなりません。堕落したために汚れたものになったのであって、本来は生命の根源地であり、血統の根源地です。ところが、私たち全体の最も貴い根源地を破綻させてしまいました。これが、最も悪いものになりました。ですから、これをひっくり返して打ち込まなければなりません。

男性と女性にある生殖器官とは、愛の器官であり、生命の器官であり、歴史的血統の器官です。これが分からなかったというのです。それは、最も貴いものです。神様と共に、私たちの模範的で理想的な先祖と共に、理想の国と共に、理想の文化と共に共存することができるものであるにもかかわらず、これをすべて世俗的な人本主義によって破綻させてしまったというのです。悪魔は、神様がこのような国を取り戻しに来られることを知って、これを完全に破綻させるための計略の形態として成しておいたもの、それが現在のアメリカの世俗的人本主義だというのです。

それは動物的な世界です。生殖器とは何かというと、愛の王宮であり、永生の生命が誕生する王宮であり、永遠に変わらない天の伝統を受け継ぎ、血統を受け継ぐ王宮だというのです。真の生命の王宮であり、真の愛の王宮であり、真の血統の王宮なのです。最も貴いところです。好き勝手にはできません。神様の公認がなければ、開くことができないのです。神様と宇宙に公認された自分の夫、自分の妻以外にはタッチできないのです。ところが、アメリカの愛はそうですか。

神様が理想とした本然の、アダム以降、堕落していないその生殖器が、真の愛を中心として神様と共に一つになり、血統と生命を連結させるべき本拠地となって本宮にならなければなりません。これは、本然の愛の王宮です。愛の本宮です。分かりますか。

統一教会の教主が性教主になった、という話が出てくるかもしれません。性というものが堕落していなければ、それが愛の本宮です。いつも王が定住することのできる、生活することのできる本宮だというのです。愛の本宮であることを知らなければなりません。生殖器が本部であり愛の宮殿だというのです。

二) 神様の創造目的を完成させる器官

皆さんの生殖器は、愛のための器官です。いかなる独裁者が現れてその愛の器官を革命したいと思っても、不可能だというのです。歴史上に数多くの変化がありましたが、生殖器だけは永遠に変わらないのです。全宇宙を与えても取り替えることができません。人間がそのようなコンセプトをもっていないということが問題になるのです。人間のすべての諸問題は、男性と女性から発生します。男性と女性が完全に一つになれば、すぐに平和の世界が目の前に展開するのです。

人間において、生理学的に神経と血管が最も集中しているのが生殖器です。それゆえに、自分と同じ者を再創造することができる器官になるのです。最も苦労してつくったものです。そうですか、そうではありませんか。それが肥おけになってしまっているのです。

神様が創造される時、男性と女性の生殖器を中心として造られたのですが、そこには霊的な要素、肉身的な要素、血の要素、すべての要素が連結できる、連合器官になっているのです。皆さんの目の要素もそこにすべてかかっているでしょう？　歯の要素もすべて父母に似るでしょう？　似ないところがどこありますか。心もすべて似ます。ですから、その器官にすべて集約して、すべての神経器官、血統器官全体がそこにかかっているというのです。根です。それが根っこです。人間の根は頭ではありません。根がそこにあるというのです。

宇宙は、愛から始まりました。それはどのような愛ですか。縦的な愛と横的な愛です。それは球形の愛をいうのです。上下、左右、前後を連結する中心は家庭です。神様に、「神様、どこにいらっしゃいますか」と尋ねれば、「愛の中心にいる」と言われるのです。「愛の中心とはどこですか」と尋ねれば、「愛の定着地だ」と言われるのです。「愛の定着地とはどこですか」と尋ねれば、「生殖器だ！」と言われるのです。

男性にとって最も刺激的で、神経的で、敏感なところとはどこですか。舌ですか。味を見るのにいくら敏感だとしても、生殖器以上に敏感なものはありません。それでは、舌を満足させるために、一度食べればその翌日また食べたいと思いますが、生殖器を満足させられる相対がいれば、考えただけでもその満足を感じることができる世界になるというのです。味を見るのは食べなければ感じることができませんが、愛の相対は考えるだけで感じることができるのです。千里、万里、無限空間世界を超えて喜びを感じることができるのは、死んでもまた生き返って愛したいのは、愛する妻、夫の愛しかない、そうですか、そうではありませんか。

人間世界において、愛の起源地はどこですか。生命の起源地はどこですか。血統の起源

地はどこですか。口ですか、頭ですか。どこですか。生殖器です。生殖器を汚した、天地を破壊した堕落によって、これが凶悪な宮殿になりました。本源地になりました。ここに偽りの愛を植え、ここに偽りの生命を植え、ここに偽りの血統を植えました。そのように天地を掘り返した一番の悪党なので、それが下品なのです。その話をするのは下品な話になるのです。

生殖器という器官は、何か魔法を使う器官かというのです。愛というものを連結させる器官であり、男性の生命と女性の生命を連結させる器官であり、男性の血と女性の血を混ぜ合わせて連結させる器官が自分の体の中にあり、それが生殖器です。そのとおりですか。この根本を追求してみれば、神様がなぜ創造されたのかという問題に入っていきます。

なぜ創造されたのですか。何を中心として創造されましたか。今日、そのようなことを考える人はいません。これは、世界の図書館に行ってみても、文先生が最初に提唱したことです。それが貴いものです。知ってみると、それがすべての結末です。なぜ創造されたのでしょうか。愛によってされたのだということを何で証明するのかといえば、生殖器を中心として男性と女性が一つになることです。それは、神様の理想的な愛の根源になっています。

男性と女性が九〇度で一つになるところはどこだといいましたか。生殖器です。笑うことではありません。神聖なことです。そこが愛の本宮です。目でもなく、頭でもありません。男性と女性が愛する時は、どこが動きますか。目が動きますか。頭が動きますか。何が動きますか。生殖器なのです。悪いものだと考えるなというのです。堕落したために悪いものとして扱われているのです。

サタンがこの世を滅亡させる本宮にしています。それが愛の本宮であり、生命の本宮でしょう？　生命がどこから出てきますか。そこから出てくるでしょう？　その次に、血統がどこで連結されますか。頭で連結されますか、手の甲で連結されますか。

すべての物質の元素が願う本宮とは何ですか。人間において最高に精密な、理想的感覚を備えた男女の生殖器官が最高の希望峰だというのです。このような話、初めて聞いたでしょう？　それゆえに、それを訪ねていくためにはお互いが投入しようとするのです。生命を捨てながらも行くことができる道は、愛の道しかありません。虫の世界から鉱物の世界、植物の世界、動物の世界、宇宙のすべてのものがそうだというのです。

主流に従っていくべきなのに、主流に従うことができずに中間でとどまって退化するものもあるかもしれませんが、最高の目的とは何ですか。すべての万物の願いは何ですか。神様を愛することができる、その場を訪ねていくことです。神様の立場で、創造物の中で最も精誠を尽くしてつくったものとは何ですか。男性と女性の生殖器官だというのです。全精力をすべて尽くして創造されたのが人間の生殖器です。人間のすべての要素を合わせて、再度つくることができる起源としてつくったのです。そこは細胞の王宮です。細胞は元素で構成されているのです。

男性と女性の生殖器が一つになるところにおいて、愛の本宮が生まれます。歴史的な愛の宮殿が生まれます。安息の場になります。これは、誰も移すことができないのです。永遠です。絶対的なのです。その愛のすみかで、男性の生命と女性の生命が同化するのです。同化して沸きたって爆発するのです。その中から新しい生命が発生します。発生する爆発力によって、新しい生命が続いて出てくるのです。ですから、愛し合う時は、はともクウクウ鳴いて爆発するのです！　男性と女性が愛し合う時、姑、舅がいたとしても、大声をあげて叫ぶのは恥ずかしいことではないというのです。

左右の中心になるものとは何ですか。女性の生殖器と男性の生殖器です。これが一つに出会って天宙が回り、宇宙が回るのです。そのように貴重なものです。男性と女性自体が貴重なのではありません。

愛という観念があり、その愛と一つになることができるように分立されて生まれたのが、女性であり男性だというのです。その男性と女性が、何を中心として一つになりますか。愛を中心として一つになるというのです。男性と女性の生殖器は、愛を中心に一体化させる武器なのです。

それゆえに、凹凸になっているというのです。形がそのようになっているのは、一つになるためなのです。それは恥ずかしいことではありません。それを中心として合体し、一つになるのです。愛を中心に一つの体になるのです。心身一体になるのです。男性と女性の心身一体は、何によって成されるのですか。キスではありません。手を結ぶことでもありません。そこを完全に合わせることによって完全に一体化するのです。

神様も愛を中心として天地万物を創造されました。それを何によって証すのですか。その宿題が重要です。愛のために創造されたということを何によって証すのですか。男性と女性ではありません。それでは何でしょうか。露骨な話をするようですが、男性の生殖器、女性の生殖器を見れば分かるというのです。

神様が何を標準として人を造られたのか、男性は何を標準として造られたのかという時、「男性の顔を中心として造り始めた」と言われれば、理にかなった話ですか。女性を造るのに、「女性はこうあるべきなので、女性の顔を見て造った。ひげが生えず、このようにすべすべしていて、身長が小さく、そのように造った」と言われるとき、そうなのでしょうか。違います。生殖器を中心として造られたということを知らなければなりません。男性がそのようになっているのは、生殖器に似てそのようになったのです。女性がそのようになったのは、生殖器に似てそのようになったのです。このような言葉は文総裁から始まるのです。誰もそのような話をしませんでした。図書館にはありません。人類歴史にない新しい言葉です。

神様が創造される時に、生殖器をかたどって男性と女性を造り始めました。それゆえに、生殖器を動かすところには、人間全体のすべての構成要素が入っているというのです。それで、男性と女性が愛し合って、その二人が一つになり、赤ん坊を生むようになるのです。一つになって生めば何ですか。女性に似て生まれ、男性に似て生まれるのですが、何に似

るのですか。神経系統がすべてつながっているので、つながってきます。根がないのに、枝が出てくることができますか。それは否定できません。それゆえに、愛が激動する時は、心と体が一つになるのが原則です。それは理論的です。

それでは、愛を連続的に連結させることができるところ、その生命を連続的に連結させることができるところ、自らの血代を自分の子供に連続的に連結させることができる器官とは何ですか。頭ですか。それは男性と女性の生殖器官です。

それでは、愛が先か、生命が先か、これが問題になります。最近、心が先か体が先か、唯物理論の哲学思潮が入っていき、世界で問題になっているのと同じように、愛が貴いか、生命が貴いか、これが問題です。どちらが先でしょうか。これは先後を分けなければなりません。愛が先です。神様が創造理想を立てられる時、神様を中心として立てたのではありません。愛を中心として立てたので、相対世界を創造し始めたというのです。これは理論的に正しい話です。

生殖器、それは何をしようというのですか。愛を探し出そうというのです。女性を探し出すことによって愛が生じ、男性を探し出すことによって愛が生じるのです。それが結婚です。これは、宇宙の何をもらっても取り替えることができないのです。男性がこのように生まれたのは、自分の生殖器に似てこのように生まれたというのです。女性は、女性の生殖器に似てそのように生まれました。女性が女性になり、男性が男性になったのは、生殖器によってそのようになったということを知らずに生きていたというのです。それは本当でしょうか、うそでしょうか。

愛を成し遂げることができる器官とはどこかという問題が、今まで重要な問題だったのですが、これが分からずに、これを最も悪いものとして扱ったというのです。それが何ですか。今まで生殖器を悪者扱いしました。愛をなす器官はどこですか。生殖器とは何ですか。凹凸、それではないですか。凹は何をするところですか。凸は何をするところですか。それを合わせることによって、愛が連結されるのです。それを合わせなければ愛が分かりません。完全な愛が現れて、絶対的に一つになるところが生殖器です。他の道はありません。

男性、女性の相対として必要な器官とは何ですか。キスするところですか。体を触ることですか。何の器官ですか。生殖器です。これは韓国語で言えば、「生命を植えておいた器」という意味です。

それが正に生殖器です。女性の生殖器は、男性を占領することができる武器です。それは、愛を求めるために使用することができる武器ですが、その武器の主人は自分ではありません。その武器を通して自分が愛の主人の資格をもつのです。女性も男性も同じです。

存在するものは、すべて愛のために生まれたので、愛のための存在は、自分のために生殖器をもっていてはいけないのです。相対のためにもっているのです。相対と連結しなくては真の愛を完成することができません。これが天法です。絶対、唯一、不変、永遠の主人になるのです。男性一人で愛の主人になる

ことはできないのです。生殖器を中心として相対と連結される時に完成が展開するのです。真の愛に連結してこそ女性が完成するのですが、男性の生殖器を完全に占領するその場で、完成が展開するというのです。男性も同じです。それで、そこを中心として暮らすのです。

女性は、耳と口が王にならなければなりません。それは、聖人の「聖」なのです。誰かが「聖女になりたいか、悪女になりたいか」と尋ねれば、「聖女になりたい」と言うのがすべての女性の返事です。それが「聖」の字です。男女間の性欲の性ではありません。それも性の字ですが、この聖の字は耳と口が王だというのです。それを女性の生殖器だと考えればよいのです。事実です。これが王ではないですか。それを守れば聖人になるのです。いいことを学ぶでしょう？　そのようなことは辞典にも、どこにもありません。日本の教科書でも見たことがないでしょう？

神様の愛の世界、神様の愛の根源地を訪ねていくのです。万物は、男性と女性の生殖器をもつために行くのです。人間は、神様の愛の相対になるために行くのです。それは間違いない原理観でしょう？　先生が勝手に立てた理論ではありません。天地の大道の原則なのです。

三) 生殖器は天が臨在する至聖所

男性、女性の愛の器官の細胞が最も精密です。心と体が一つになり、すべての愛の道が通じるその細胞の感情、その世界に元素としてどのように入っていくのかということが、万物、被造世界の目的だというのです。では、男性と女性が統一されるところとはどこですか。生殖器です。そこでは、直接男性と女性が一つになり、神様と一つになることができるところです。堕落したために、それが最も悪いものになりましたが、本来は限りなく神聖なものです。男性と女性がその門を開けた時、世界が開き、門が閉まれば世界が閉められて、それが幸福な時、世界が幸福であり全宇宙が幸福なのです。

神様の息子になろうとすれば、その器官を通じて一つになった、その場から生まれなければなりません。その場でなければ、神様の息子、娘がどこから生まれますか。それゆえに、男性と女性が愛する時はもちろん、すべての細胞の願いが生殖器の細胞になることなのですが、愛の場所に入っていくようになれば全身が同感するのです。体全体が一つになるのです。

愛のすべてのものがバランスよく完成して成熟したのちに、そこから成されなければなりません。世の中で最も高いアンテナとは何でしょうか。何が最も高いアンテナですか。それは、愛のアンテナです。人間において愛のアンテナとは何でしょうか。男性と女性の生殖器官です。電波はただアンテナを通して流れるようになっています。それで円形を成すのです。アンテナを通して円形を成します。人間が神様のアンテナです。神様を中心としたアンテナです。人間世界のアンテナに神様の垂直愛がつながる日には、世界を包括し、全宇宙を包括して余りある圏に入っていくようになるのです。それは、人間世界と霊界に雷鳴がして稲妻が走るようにする装置のようなものです。

神様は、その中心に住みたいと思われるのです。理想的な家庭、国家、世界は、その根に連結されたいと思うのです。ところが、堕落によってすべてのものを失ってしまいました。悲惨な立場です。男性の生殖器とは何ですか。永遠の愛の王国です。皆さん一代においてだけそうなのですか。違います！　永遠です。永遠の王宮の位置、永遠の生命の王宮です。そこから、愛を中心として、男性の生命と女性の生命を初めて一つに結ぶのです。生殖器とは何でしょうか。第一に愛の王宮、第二に生命の王宮です。第三に血統の王国です。これが最も貴いものです。皆さん、それをもって、「幸福だ」と言うでしょう？

夫婦の愛と父母の愛が永遠に定着する時は、結婚して愛する時です。愛する時、どこで愛しますか。口、目、耳でもって愛しますか。私は分かりませんが、皆さんはよく知っているでしょう。どのようなものですか。今まで人間は、生殖器を悪いものだと思ってきたのですが、今レバレンド・ムーンがそれを神聖な本宮だと教えています。どれほど驚くべき男性と女性の生殖器でしょうか。生殖器がなければ、真の愛、真の生命、真の血統、真の良心を連結できないのです。それなくして天国が出発できますか。できません！　そこを通ってこそ、自由、幸福、平和の統一世界が可能なのです。そうではありませんか。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従、それは何ですか。それは、生殖器をおいていう言葉です。神様と人間の生殖器が一つになることができなかったのです。合徳ができなかったのです。それを絶対信じなければなりません。私の家庭歴史の柱であり、私の一族歴史の柱であり、私の血筋歴史の柱だというのです。

神様と人間がどこで出会うのですか。男性と女性が一つになって愛する時間、生殖器を中心として一つになる時間に会うのです。これが堕落したために、世の中を滅ぼし、天地を滅ぼしたのです。それゆえに悪いものになりました。男性と女性が愛する時、神様を迎えにいくのだと考えなければならないというのです。下半身を見る時、「どうやってこの器官を、愛を中心として連結させようか。どのように奉仕して歓迎しようか。どうすれば真の愛を中心とした夫婦生活をすることができるだろうか」と毎日考えなさいというのです。私の体がそのような位置にいるのです。

神様のように永遠不変でなければなりません。神様のように、絶対的にユニークで永遠不変の内容をもって愛が定着するところは、生殖器です。今まで誰もそれを知りませんでした。それほど貴い生殖器だというのです。祖父母、父母、夫婦、将来の皆さんの息子、娘もみな、生殖器が一つになるところで幸福な家庭が成されるのです。それが壊れれば、家庭全体が壊れるのです。おばあさんもおじいさんの生殖器をつかんで永遠に放そうとせず、おじいさんもおばあさんの生殖器を占領して永遠に失うまいとするのです。生殖器から愛、幸福、自由等、すべてのものが出発します。それは否定できません。

アダムとエバの位置は、本宮です。そのアダムとエバの子孫はそのまま宮になるはずですが、本宮の基台を失ってしまいました。男性と女性の生殖器は、そのように驚くべきも

のです。三大愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮であると同時に、その場から地上天国、天上天国が出発する基地になっているという事実を知らなければなりません。驚くべき事実です。

地球世界の被造物は、男性と女性の生殖器の細胞になるために総動員されるようになっているのです。なぜですか。このような価値があるので犠牲になる価値があるのです。それは何かというと、アダムとエバが愛の相対になれば、神様が臨在され、縦的愛と横的愛がここで竜巻のようになるので、地を削ることもでき、山を造ることもできるのです。愛だけが世の中の悪なるものを占領することができ、愛だけが気高い神様を占領することができるのです。

皆さんは、男性と女性の生殖器を最も汚らわしいものだと思っています。しかし、そうではありません。最も神聖なものです。神様が真の愛を中心として、そこから理想天国を拡大させようとされたのです。限りなく神聖な聖所です。それゆえに、愛の対象は絶対的です。一度結婚するようになっているのであって、二度結婚するようにはなっていません。

女性の愛の生殖器、男性の愛の生殖器が正にそれです。女性のものは愛の女性の宮殿であり、男性のものは愛の男性の宮殿だというのです。それらが出会うことが、最高のクイーン、キングになる理想です。それを愛といいます。そのように愛を行った人は、神様のように、神様の息子、娘となって、一つの同等な理想的生活圏に同参することができます。そのような価値ある人間として造られました。

自分にとって最も貴いものとは何ですか。自分の国よりも、自分の理想的家庭よりもこれが貴いのです。これがなければ、自らの家庭も成立せず、民族も成立せず、国も成立しないのです。これが一つにならなくては、絶対に永遠の生命にならないのです。地上世界の版図を越えていける、天上世界、無限な世界へ越えていける生命圏は、生まれることができないのです。地上にも天国がなく、天上にも天国がないというのです。

「教主の先生があのようなことを教えるなんて、統一教会は下品なやつらだ」と悪口を言っているでしょう？　下品なやつだと言ってもいいのです。偽物のメダルをもらうより、本物の金メダルをもらうほうが良いではないですか。それで、男性と女性の愛というものを中心として、男女の生殖器官は、創造主から受け継ぎ、先祖から受け継いだ、変わらない、ただそのまま連結された礼物です。神様も侵犯しない、貴い礼物です。先代たちもこれに背けない、貴い礼物です。これを侵犯する時は、天理の大道の中心となる愛の本宮を破綻させる悪魔の血肉となるのです。純粋な本質として、永遠の真の愛を中心とした、その基台から生まれたのが生命の本宮です。そして、新しい血統の本源地です。

この者たち、しっかりしなければなりません。私が教主の先生ですが、しっかりしなければならないというのです。どこがですか。生殖器です！　その生殖器は、何のために生まれたのですか。金なにがしのために生まれたのではありません。天地の大道のために、天地の大摂理的経綸のために私に下さったのです。

将来、人間世界に、理想世界がどのようにして訪れるのでしょうか。生殖器官を正しく使うことができる道理を明らかにしてあげない限り、世の中は滅びます。平和の世界を取り戻すことはできません。ローマを見てみなさい。アメリカを見てみなさい。アメリカは、お金がなくて滅びるのではありません。

今までサタンのために生殖器官の主人が誰かを知らず、どのような由来で創造されたのかということを知らなかったのですが、それを明らかにするために、天地の邪悪でよこしまなサタンの乱闘場をすべて掃除するために、私が旗を掲げて立ち上がったのです。

三、神人一体と愛の理想完成

一) 神様と人間が出会う愛の決着点

宇宙の愛の根本はどこでしょうか。神様です。神様の愛がどこに行って結合するかというときには、ここで論理的整理をどのようにするのかが問題です。神様がアダムとエバを造られて、二性性相を分立し、中和的存在になろうとするなら、何を中心として中和的存在になるのでしょうか。愛を中心として中和的存在になるのです。格位においては、男性的主体格をもったというのです。何を中心としてですか。愛を中心としてです。それを知らなければなりません。

それでは、神様はどのようになっていますか。アダムとエバは、二性性相の主体なので、体は蘇生であり、心は長成です。そして、この心の中に神様が臨在しようとされます。それでは、アダムとエバの体と体が一つになり、心と心が一つになり、そうなれば心の一番底にあるものが一つになるでしょうか、ならないでしょうか。それは何ですか。神様が一つになるでしょうか、ならないでしょうか。神様は、どこで一つになるのですか。愛のために造られたのなら、神様がどこで人間と共に結合されるのですか。その場はどこですか。愛の場所だというのです。

統一教会の「原理」では、神様は無形の絶対的主体として、二性性相の中和的主体としていらっしゃる方だといいます。二性性相でいらっしゃる神様御自身の分性的実体としてアダムとエバを造っておかれ、彼らが成人して愛を中心として横的に連結するようになる時、縦的な立場で中心になろうとされたのです。それは何の話かといえば、アダムとエバが成熟すれば、神様の男性性稟はアダムの心の中に、神様の女性性稟はエバの心の中に入っていくというのです。かといって、神様が分かれるのではありません。そのような二性性相の主体としていらっしゃる神様なので、アダムとエバの心の中に臨在することができるというのです。

成熟したアダムとエバが、お互いに愛の因縁を結ぶことができるその時になれば、神様は二性性相になっているために、男性性相はアダムに臨在し、女性性相はエバに臨在するのです。神様が私たちの心と体の中に臨まれ、神様が結婚式をするのです。

中央線は、その距離がすべて同じであり、角度がすべて同じです。長さがすべて同じです。そのようになれる中央の水平線は一つしかないのです。二つではありません。垂直も一つであり、垂直の中心点も一つであり、水平線が交差する中心点も一つです。その一つ

の位置に初めて神様の愛、軸の愛が連結するのです。

そこで一つになってぶつかる日には、三六〇度、四方に行くすべての力の作用がこの点を経るのです。このような愛の力が爆発すれば、男性と女性は完全に一つとなり、その中に神様が入っていかれるのです。神様は二性性相になっているでしょう？　「原理」で論じている二性性相の主体としていらっしゃる神様は、どのような方ですか。二性性相の神様であると同時に、二性性相の中和的主体としていらっしゃいます。その主体の本質は何ですか。愛だというのです。絶対的愛だというのです。

二性性相の実体圏は、真の愛により、神様の相対として立って神様に帰るのです。正、分、合です。一つだった性相と形状が分かれたのち、実体として再び会う、それがアダムとエバの祝福です。ここに神様も来て一つとなり、男性と女性も一つとなって、ここですべて統一されるのです。これが先生の偉大なみ言です。

神様がこのように近いというのです。自分の心の底にいた神様を知るようになった、それ以上のことはありません。何の話か分かりますか。神様のその命令に従って、生涯、間違いない勝利の道を行かなければなりません。

神様は、二性性相なので、神様の男性性相がアダムの心に入ってくるのです。それで、神様が内的な父になられるのです。神様が内的な父の位置に入ってこられるのです。コリント人への手紙を見れば、「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」（コリントⅠ三・一六）とあります。私たちの体は「神の宮」と言っています。私たちの体は神様が臨在することのできる「神の宮」だと言ったのです。その「神の宮」という言葉は正しいというのです。神様が二性性相の主体としていらっしゃるために、アダムは神様の男性性格、見えない性格を見える性格として現した存在です。ですから、アダムは実体として現れた神様の体です。無形の実体が有形に実体化して、人類の父として立っているアダムの背後で、内的な父の立場に立つべき方が神様でした。何の話か分かりますか。

本来、堕落していなければ、神様はアダムとエバの中に臨在することができたのです。二性性相の形状と性相の本体であられる神様は、その性相と形状の相対がアダムとエバなので、その心の中に入っていくようになっていたのです。入っていって、神様とアダムとエバが心身一体圏を成すのです。神様が、堕落せずに完成した人間の心のような立場になり、人間は神様の完成した体のような立場になって心身一体圏に立ち、アダムとエバと共に結婚式をするのです。その結婚式は、実体的、平面的で、横的にはアダムとエバの結婚式ですが、それが縦的には神様の結婚式になるのです。

アダムとエバは、いったい誰ですか。その位置が私たち人類の横的な理想の愛を中心として和合する位置であり、九〇度を合わせる位置であり、焦点を設定する位置です。その位置もまた、この前後、左右、上下、どこに合わせても合います。そのことは何を意味するのでしょうか。神様は、二性性相の主体であられるので、その愛の焦点を合わせたアダ

ムとエバの心の中に神様が入ってこられ、堕落していない人間の先祖の結婚式が神様の結婚式になるのです。

アダムとエバは、見えない神様の二性性相として来たのです。見えないお二人が、一人の方のような位置に立っているのです。真の愛を中心として一つになっているというのです。そのようになっているものが男性格位と同じようになっているので、その男性格位に対して相対的立場に立った息子、娘を再現させて、彼らが成長し、愛を中心として夫婦になる時、上にいらっしゃった神様がその位置に共に降りてこられるのです。それは、一つは見えない父母の位置に立ち、一つは見える父母の位置に立って、愛して一つになるためなのです。

神様は何をもっているかといえば、男性的性稟と女性的性稟をもっていらっしゃるというのです。二性性相の主体という言葉が出てくるのです。それで、統一教会は、「二性性相の主体が神様である」という素晴らしい結論を下すのです。見えないものがプラスであり、見えるものがマイナス的父母です。見えない父母が原因的であり、見える父母は結果的です。ゆえに、愛を中心として一つになるのが父母の位置ですが、神様は見えない父母であり、これは見える父母です。これは何かというと横的父母であり、これは縦的父母です。

一つになった男性と女性は、神様の愛と和して一つになった統一的な立場であり、一つは東方、一つは西方です。この宇宙を代表した一人の男性と女性は、二性性相の総性です。それは避けられないのです。彼らが統合するという事実は、この宇宙に神様の愛が結合できる中心軸が生まれるということです。

神様を発見できるところとはどこでしょうか。今日、祈祷をして修行に励み、いくら宗教を信じてみたところで、神様を発見することはできません。真の神様の愛を発見できないというのです。神様なら神様も、男性なら男性も二性性相になっています。内的・外的、二性性相だというのです。プラス・マイナスになっているのです。そのような意味で、ここには完成した男性と神様が関係しているのであって、それ以外には、息子もなく、何もないというのです。

エバは、霊的な面において神様の妻です。アダムの中に入っていき、エバの中に入っていって神様が愛そうとされるというのです。二性性相に分立し、愛を中心として一つにして、四方をすべて愛だけが連結させることができるのです。神様と人間関係は、そのようになっています。神様は、内的な私です。ところが、二性性相の分立的な立場にいるために別々の存在だというのです。それは、なぜ分立したのでしょうか。愛をより刺激的に感じるためなのです。刺激的でありながら、位置を移動するためであり、また環境を変更させるためなのです。位置を変化させるので、繁殖が展開するのです。縦的な神様だけでは繁殖することができません。縦的な位置は一箇所であって、二箇所あり得るでしょうか。

女性をよく見れば、そこに新郎が一緒に存在します。一体となるというのです。神様がそうでしょう？　すべてのものは、二性性相

をもっているのと同様に、二性性相が成されるのと同じように、結局は神様に帰るのです。真の愛を中心に一体になれば、神様の友達になります。神様が彼らの中へ入っていくのです。女性の中心は男性です。女性は男性の相対圏に立っているために、男性を中心に回るのです。女性が男性を中心に回るというのです。女性を中心に回るのではありません。男性が中心に立つようになれば、女性は自然に男性を中心とするようになるのです。

神様が父になるためには、血筋が関係しなければならず、生命が関係しなければならず、愛が関係しなければなりません。二性性相の神様が、愛を中心として一人で心で喜んでいたことを別々に分け、東西南北、自然全体がペアで和動する世界において中心的主人の形態を備えるために展開したものがこの世界です。それで統一教会では、「正反合」ではなく「正分合」だというのです。

神様は二性性相になっているでしょう？
結婚式をすればどのようになるのかといえば、神様の女性性相はエバに入ってき、男性性相はアダムに入っていって一つになるのです。別の言い方をすれば、アダムとエバは実体をもった神様の体であるということを知らなければなりません。そのようになれば、神様は、アダムとエバの内的な二性性相に入っていかれて愛で一つになるのです。そのようになれば、そこから神様の血統を受けるようになります。

神様は、どこに入っていかれるのですか。神様は、アダムの心の中に入っていき、エバの心の中に入っていかれるのです。二性性相でしょう？　この二つが一つの根を中心として入っていって打ち込まれるのです。そして、息子、娘で連結されるのです。愛で連結して、心と体を中心として、霊を中心として根を合わせて、ここから生まれた愛の息子、娘が地獄に行くでしょうか。誰かが勝手にできません。絶対的な体、絶対的な心、絶対的な霊、絶対的な男性、絶対的な女性が、絶対的な神様の愛を中心として、生命の起源であり、愛の起源であり、血筋の起源である生殖器を中心として統一が展開するのです。

神様とアダムとエバは、いったい何でしょうか。アダムは何であり、エバは何でしょうか。堕落せずにアダムが完成すれば、神様がアダムの中に入られ、エバが完成すれば、神様がエバの中に入られ、神様の二性性相が分立された分立実体相に入っていかれて、分かれたものを再び一つにするのです。何を中心として一つになりますか。力をもって一つになるのではありません。愛をもって一つになるのです。そこから刺激が起き、そこから繁殖が展開されるのです。理想世界の繁殖が展開されるのです。

はっきりと知らなければなりません。このようなことは図書館にもない話です。これは、初めて文総裁によって天国の図書館に記録されて保管されるというのです。うそではありません。妄想的な話ではありません。神様は誰かといえば、縦的な父です。堕落していないアダムとエバは横的な父母です。神様は、二性性相で存在するすべてのものの縦的な父母です。そして、アダムとエバは横的な父母になるのです。それでは、彼らはどこで出会

うべきでしょうか。真の愛は直短距離を通るのです。

二) 神人愛理想の根本原理

(1) 神人一体をどのように解明するのか

先生が最も苦心したこととは何でしょうか。神人一体をどのように形成するのかという問題です。理論的にどのように説明するのかというのです。これが解明されなければ、理論的体制が定着できません。人間の愛の根本的位置が設定されなければ、すべてのものがずれていくのです。

神様の愛と人間の愛が問題になります。神様の愛と人間の愛は、色が同じか違うかという問題です。大きな問題です。神様の愛と人間の愛がどこで結びつくのでしょうか。これが結びつかなければ、神人愛一体の拠点を見いださなければ、神様も人間も共に定着できないのです。神様が喜ばれるので人間も愛を通じて喜ぶ、そのような場が異なる場合には大変なことになるというのです。

先生が根本問題を追及する時、神人一体圏はいったいどこなのかを、ずーっと考えました。これは重大な問題です。これを解決せずには、出発点と終結点が合わないのです。そのような中で、雷のようにぴかっと悟りがありました。真の愛は直短距離を通るというのです。その一声がすべてを解決しました。天地が真の愛で連結するならば、直短距離を通るというのです。言い換えれば、垂直は一つです。水平に対して九〇度以外にはありません。これは最高の直短距離です。

結婚は、なぜするのですか。愛を完成するためにするのです。横的に左右、東側と西側を男性と女性だとすれば、その男性と女性の真の理想というものは直短距離を通るので、直面に対して横的な愛の直短距離というものは中央に一点しかありません。これは、九〇度以外にはありません。これがこのように横になれば、楕円形になるのでいけません。すべて同じではありません。平等な位置にすべてが同じ基準として立つのは、九〇度以外にはありません。神人一体にする愛の結集場所というものは、九〇度以外にはないのです。

「神様は縦的な父」という言葉が出てきます。真の愛を中心として神様は縦的な父であり、アダムとエバは真の愛を中心として横的な父母です。縦横が九〇度で定着するのです。これが宇宙の根本です。結局は、神様が結婚式をするために人間を造られたというのです。神様の愛のために創造されたというのです。このように解明することによって、すべての根本的な難問題が解決されるのです。

文総裁が宇宙の根本を追求していくときに最も苦心したのは、愛がどのように動き、どのように定着するのか、という問題でした。愛は直短距離を通るという、この一点を解明することによって、すべてのことが解決されるのです。愛が上から来るとすれば、天が高くて地が低いので、真の愛が天から地に訪ねてくる時にどのような道を通ってくるでしょうか。最大の直短距離なので垂直です。これは垂直一つしかありません。直短距離です。愛が一番早く、直短距離を通るという時に、天上世界と地上世界の接着地は、完全水平の

中の一点しかないというのです。二つではありません。絶対的に一つです。

アダムとエバは、見えない神様の二性性相として来たのです。見えない二人が一人の方のような位置に立っているのです。真の愛を中心として一つになっているというのです。そのようになっているものが男性格位と同じようになっているので、その男性格位に対して相対的立場に立った息子、娘を再現させて、彼らが成長し、愛を中心として夫婦になる時、上にいらっしゃった神様がその位置に共に降りてこられるのです。それは、一つは見えない父母の位置に立ち、一つは見える父母の位置に立って、愛して一つになるためなのです。

人間が完成すれば神性をなして、天のお父様が完全なように完全で、神様的価値をもつのです。神様は絶対者ですが、真の愛の理想は一人で成し遂げることはできません。愛の理想は必ず相対を要求するためです。

私たちはここで、神様の真の愛と人間の真の愛の出発と完成が、お互いにどのような関連をもっているのかを知らなければなりません。万一、神様が真の愛の絶対的な対象体として人間を立てず、ほかの方法を通じて御自分の真の愛の出発と完成をなそうとされたなら、どうなるでしょうか。神様と人間の真の愛の理想は、各々動機が異なるようになり、二つの愛の方向と目的は異ならざるを得なくなります。

アダムとエバは、いったい誰ですか。その位置は、人類の横的な理想の愛を中心として和合する位置であり、九〇度を合わせる位置であり、焦点を設定する位置です。その位置もまた、この前後、左右、上下、どこに合わせても合います。それは何を意味するのでしょうか。神様は、二性性相の主体であられるので、その愛の焦点を合わせたアダムとエバの心の中に神様が入ってこられ、堕落していない人間の先祖の結婚式は、神様の結婚式になるのです。

人間完成の出発点はどこですか。これは、神様にも最も貴く、人間にも最も貴く、この宇宙のすべての存続の根源になることができるのです。創造当時のあらゆる要因の根本になることができるのです。それは愛です。愛のために生まれたというのです。その愛はどのような愛ですか。真の愛です。その真の愛には、目や口や五官が離れることはできないのです。それを中心として回るようになっていて、それに従って往来し、上がっていくにもそれに従って上がっていき、降りてくるにもそれに続いて降りてくるようになっているというのです。

それゆえに、私たちの五官を一つの焦点に結びつけることができるのです。その力とは何ですか。お金でもなく、知識でもなく、権力でもないのです。それはただ愛しかありません。そうではないですか。

縦横がどこで一つにならなければなりませんか。天地合徳がどこで展開するのでしょうか。縦的な基準の前で展開するのです。愛が行く道は直短距離を通ります。これがどこで定着するのかという問題が、非常に苦心した問題でした。宇宙の根本を解明するときに、縦的な愛と横的な愛があるということを知りました。

なぜ知ったのでしょうか。垂直にさっと上がっていくことができません。そのようになれば、私が全く身動きせずにぴたっとここに立たなければなりません。そこを離れて縦的に愛すれば、私がぴたっとこのようにならなければなりません。これがどこに行って回るのかというのです。回ることができないのです。このような問題、どのように連結させるのかという問題、天地の愛があれば、その愛はどのように合徳するのかという問題が、大きな問題でした。しかし、一つ知ったこととは何かというと、愛は直短距離を通るということでした。

神様が願われることも、真の愛による神人一体です。神人一体、神様と人との一体圏です。神様が喜ばれる理想の基準と人間が願う基準がずれれば、大変なことになるのです。真正面で一体にならなければなりません。水平に一体になり、垂直に一体にならなければなりません。これを前後左右九〇度に合わせれば、上弦と下弦と右弦と左弦、十二箇所をすべて九〇度の角度で、どこに合わせてもぴったり合うのです。

神様の愛と人間の愛がどこで一つになるのかという論理を、今まで誰も分かりませんでした。これが分からなくては、天のお父様という言葉は荒唐無稽です。関係ない言葉です。アダムとエバは神様の何ですか。体です。それゆえに、アダムとエバが名づけるとおりになるというのは、どのような意味ですか。その体に神様が入っていってつけられるのです。完成すれば、男性の心の中には神様の性相が入り、女性の心の中には神様の形状が入っていくのです。アダムとエバの実体結婚式は、神様の結婚式なのです。霊界に行ってみれば、それをはっきりと知ることができます。知ることができないこのような理論が、すべてあてはまるのです。それゆえに、皆さんが神様の愛を占領してこそ、その欲心がいっぱいに満たされ、「もう、いっぱいだ」と言うのです。

神様は、愛の根であり、生命の根であり、血統の根であり、地上天国と天上天国の根です。アダムとエバが結婚する時には、神様がアダムとエバの心に入っていって一体的愛をなすのです。神様は縦的な真の父母であり、アダムとエバは横的な真の父母です。そのような二つの父母の血肉を受けて生まれたので、心は縦的な私になり、体は横的な私になるのです。

このようにして神人愛一体圏を形成するので、心身一体愛を完成した者は、神様の息子、娘になるのです。神様の王子、王女になれば、神様と父子の関係になって、神様のすべてを相続することができるのです。このような子女が真の愛を中心とした夫婦一体を完成すれば、神様に侍って暮らす家庭になることができ、その家庭は、平和と理想の基地になるのです。半分である男性と女性は、一体となり、神様の相対として神様の理想の愛を完成させるようになるのです。すなわち神様は、真の愛を中心として、人間を無限の価値者として完成させることによって、神様も真の愛の完成をなし、永遠の理想の愛が宿る創造理想世界を完成されるのです。

真の愛の主体者であられる神様は、その真の愛の相対者として人間を立てました。神様の愛の理想は、人間を通じてのみ完成するの

です。神様の創造目的は、神人愛一体の絶対的愛の理想世界です。

人間は、神様の最高、最善の愛の対象として造られました。それゆえに、人間は、創造物の中で唯一神様の実体をもった対象です。無形の神様の前に見える体として生まれました。人間は、完成すれば神様の聖殿になります。神様が自由に、また安らかに、いつでも入ってきてお住みになることができる有形の実体です。神様の絶対的な真の愛の全体的理想は、人間を通じた父母と子女の縦的関係によって実現し、完成します。

神様はどこに入っていかれるのですか。神様は、アダムの心の中に入っていき、エバの心の中に入っていかれるのです。二性性相でしょう？　この二つが一つの根を中心として入っていって打ち込まれるのです。そして、息子、娘で連結されるのです。愛で連結して、心と体を中心として、霊を中心として根を合わせて、ここから生まれた愛の息子、娘が地獄に行くでしょうか。誰かが勝手にできません。絶対的な体、絶対的な心、絶対的な霊、絶対的な男性、絶対的な女性が、絶対的な神様の愛を中心として、生命の起源であり、愛の起源であり、血筋の起源である生殖器を中心として統一が展開するのです。

(2) 神人一体の拠点

神様の愛と人間の愛がどこで会うのですか。その結着点は、愛の結着点、生命の結着点、血統の結着点になるのです。そこでなければ、愛と生命と血統を連結できる道がないのです。その場所はいったいどこですか。どのような生殖器で、どこに使う生殖器ですか。男性と女性の生命が連結されるところです。男性と女性の血統、血が交差するところです。神様の生命、神様の愛、神様の血統、そして男性と女性の生命、男性と女性の愛、男性と女性の血統が、この一点を中心として連結されるのです。これを中心として子孫が生まれるのです。

神様の絶対愛と人間の絶対愛が出会う点とはどこでしょうか。一点です。それはどこですか。結婚して初夜、生殖器が一つになる場です。そうです、神様に会うと考えてみましたか。どこで一つになるのかというのです。絶対的な神様が定着できる一つの起点と、人間のアダムとエバが理想として願う愛の起点が、一つになることのできる点が、一点ではなく二つの点になる時には、愛の方向と目的が二つになり、永遠に神様の絶対愛とは関係を結べない人間になるので、愛のために造られたというのは偽りだということになります。

そこから私が生まれるのではないですか。男性と女性がそこから生まれるのであって、キスするところから生まれるのですか。そこから男性と女性の生殖器が絶対的に一つになることを願うでしょう？　夫婦間で絶対的に一つになってみたいですか、適当に一つになってみたいですか。その場は何かというと、女性が愛を受けるためには、夫だけではなく、霊的に神様に侍る位置に立たなければならないのです。見えるアダムの生殖器は、内的には見えない神様の生殖器だというのです。女性の生殖器も、見えない神様の生殖器であり、見える生殖器はエバの生殖器です。見えないものは縦的であり、見えるものは横的に一つになるのです。それで、縦的な父母、横的な父母が一つになるのです。

アダムとエバの結婚式の日が、その場を中心として神様の結婚式の日になるのです。一つの縦的な結婚式であり、一つの横的な結婚式になるというのです。すべて生殖器を中心として、男性と女性が絶対愛に着地すると同時に着地の中心に来るので、神様の愛を中心として一つになるのです。そのようになったならば、神様のように心を中心として統一がなされたはずです。

絶対的に変わらない、そのような愛の位置に神様が臨在されるのです。神様が生殖器に臨在されるのです。神様が愛の根源であり、生命の起源です。男性の生命、女性の生命、血統の起源ですが、神様と人間は、どこで愛と生命と血統が結集しますか。この場所しかないのです。

アダムとエバの結婚式は、内的には神様の結婚式です。二重の結婚式の場だというのです。それを結束させるものが、男性と女性の生殖器です。それがなければ、自分の生命も生まれないというのです。それによって一族も、人類の歴史も続いてきたというのです。神様の理想世界も、その門を通過した子供たちが、愛された子供たちが連結させていくのです。そのようにして神様の国もつくられていくのです。

アダムとエバの結婚式とは何ですか。誰の結婚式なのですか。神様の結婚式です。もし、そのようにしていればどのようになりますか。そうなれば、どのような結果になったでしょうか。そのセクシュアル・オーガン（生殖器）が第一に何になるのかということです。

神様の愛の王宮になるのです。愛の本宮になるのです。そうです、家庭は王宮だというのです。これが愛の本宮です。一般家庭は王宮であり、これは縦的な愛の本宮です。どれほど貴いところなのかというのです。

アダムとは何でしょうか。堕落しないで完成していたならば、神様の体になるのです。エバも、やはり神様の体になるのです。神様の体になるのですが、男性はプラス側の体になり、女性はマイナス側の体になるのです。そして、二人が何を中心として結ばれますか。愛を中心として、生殖器を中心として結ばれるのです。内的な心の中に神様が入ってきているアダムとエバは神様の実体ですが、彼らが生殖器を中心として愛するようになれば、どのようになりますか。神様は誰を通じて愛するのですか。心は何を通じて愛しますか。体を通じて愛するでしょう？　同じように、神様が堕落していない完成したアダムに入られ、神様の家のようになったところで、神様が主人となった中で、二人が愛するのです。分かりますか。

神様とは、いったい誰ですか。神様は創造主でありながら、縦的な真の愛の父母です。真の愛を中心とした、縦的な父母だというのです。完成したアダムとエバは、真の愛を中心として横的な父母です。その二つの父母が一体となるのです。愛するその場所で、縦横が一体になるのです。そこは愛の本宮であり、生命の本宮であり、血統の本宮です。それが男女の生殖器です。

それによって、神様御自身が神様の息子、娘を生むのです。神様の子女です。皆さんは、二つの父母から生まれたのです。その縦的な

父母の相対的な立場に立ったのが良心です。そのような面から見るとき、良心は縦的な自分自身です。肉身は横的な自分自身です。縦横が何によって一つになりますか。真の父母の愛、創造主の真の愛によって一つになれば、心と体は絶対に闘わずに一つになるのです。

神様を「お父様」と言う、それはいったい何のことかというのです。創造理想の根源を知らなければなりません。神様は誰ですか。お父様です。皆さんは誰ですか。子女です。皆さんは子女ですが、それでは、皆さんは神様に似ましたか、誰に似ましたか。神様に似ました。神様には目がありますか、ありませんか。鼻がありますか、ありませんか。口がありますか、ありませんか。耳がありますか、ありませんか。あります。その次には体がありますか、ありませんか。神様に生殖器がありますか、ありませんか。そのようなことがすべて問題になるのです。このようなことを、すべて理論的に解決しておかなければなりません。

夫婦が愛する器官とは、どのようなものですか。神様の愛と人間の愛がどこで一つになるのですか。この一つになる出発点が二つになれば、方向も二つであり、目的も二つなので、神様と人間は喜ぶことができないという結論に到達します。神様が人間を愛の対象として造られたならば、神様の愛と人間の愛が接触できる出発点が同じでなければなりません。その同じ点とは、どこですか。心情ではありません。女性や男性に一番重要な器官とは何ですか。生殖器です。神様が創造される時、最も精誠を尽くしてつくられた器官です。

アダムとエバの結婚式は、神様の結婚式だというのです。そうあるべきではないですか。愛の対象を自分より高く造ろうとされた神様が、どこに行ってお会いになるのでしょうか。どこに行って一つになられるのでしょうか。鼻で一つになるのでしょうか。どこでしょうか。問題が大きいというのです。ですから、女性がもっていて、男性たちがもっている生殖器というものは、神様が臨在できる本然の園です。神様の愛が初めてそこで完成するというのです。凹凸が一つになるその場で人間完成、すなわち女性完成、男性完成と神様完成が、愛を中心として展開するというのです。

心と体が一つになって、その生殖器を中心として一つにならなければなりません。出発地は一点であるべきであって、二点になれば方向も二つになります。人間の愛と神様の愛が接触して定着することができる寄着地（経由地）はどこかといえば、内的夫と外的夫が愛によって結ばれる生殖器だというのです。あの凹凸で結ばれるのです。

人間が成熟して結婚するということは、神様の愛と人間の愛が関係を結ぶことを意味するのです。何を中心としてですか。愛の器官を中心としてです。霊的に見るとき、アダムの生殖器は神様の内的な生殖器であり、エバの生殖器も神様の内的な生殖器です。そして、相対的に女性の生殖器と一つになるのです。

神様の結婚式が、アダムとエバの結婚式です。それゆえに、地上天国と天上天国が同時に生まれるのです。愛のすみかから出発するのです。男性と女性の生殖器を中心として、堕落しないで出会うその時間が、地上天国と

天上天国出発の起源地です。三大王権を樹立すべき基地がそこです。その場でなければ、愛のすみかを成すことができません。

アダムの結婚式は、神様の結婚式です。これが天の最大の秘密です。気がついてみると、統一教会の文教主が生殖器解剖学の代表者になりました。生殖器ですべて一つになるのです。それなくしては愛が分からないのです。それ以外には、男性の生命と女性の生命が結ばれる場所がありません。そこで女性の血と男性の血が出会います。そこから歴史が連結します。そこから良心が出発します。そのようになっているのです。

神様が御覧になるときに、女性は本来誰でしょうか。女性は、神様とどのような関係ですか。神様は、愛のために人を造られたのです。愛のために造られたのに、その神様の愛と人間の愛が相反しなければならないでしょうか、一つにならなければならないでしょうか。それでは、一つになるとすれば、どこで一つにならなければなりませんか。どこですか、考えてみましたか。それを考えなければなりません。セクシュアル・パート（sexual part）だというのです。

「絶対セックス」です！　絶対的に心と体が一つになっていない人が、絶対セックスになれますか。生殖器も二重です。絶対セックスなので、私の生殖器は神様の生殖器であり、完成したアダムの生殖器です。神様に生殖器があるでしょうか、ないでしょうか。なぜ笑うのですか！　分からなければ「分からない」と言い、あれば「ある」と言ってみなさい。あるでしょうか、ないでしょうか。動機がないのに結果が現れることはできません。人間は結果的存在なので、結果がそのようになるためには、動機的内容がなくてはならないのです。理論的です。

神様も生殖器があります。その生殖器がどこかに行って、二重的人格である神様も二重的なものが必要なので、内的人格の神様の位置、外的人格の体の位置が必要です。体の立場は誰ですか。完成したアダムです。心の立場は誰ですか。神様です。結婚式をして二人が一つの家で爆発するのです。

初愛のアダムとエバが生殖器を合わせる初夜に、精子と卵子が泳いでキスし始めるときは、神様とアダムとエバは別々でしょうか、同一でしょうか。

神様と真の父母を中心とした愛の伝統が、すべての出発点であることを知らなければなりません。神様の愛と人間の愛のトゥルー・ラブが、どこで一つになって出発するのでしょうか。生殖器です。どのような種類の生殖器ですか。真の生殖器です。神様が願われる生殖器です。そのような結論が出てきます。

神様と人間の愛が連結されるところを本郷の地にして帰ろうとするのです。そこがどこかといえば、男性と女性の生殖器です。神様の愛と人間の愛がどこで始まるのでしょうか。アダムとエバの生命と愛と良心と血統の根である神様は、間違いなく縦的な立場から横的な位置のアダムとエバ、彼らの性相と形状が一つになったその中にすっと入っていかれるのです。ですから、アダムとエバの結婚式は、神様の結婚式なのです。男性と女性がもっている生殖器は、神様を解放して神様を完成させる器官です。ですから、神様がお父様にな

るのです。縦的なお父様、横的なお父様は完成したアダムです。

皆さんがその長い棒をいい加減に扱ってはいけません。それに侍って生きなければなりません。それが最も貴いのです。神様が見下ろしているのです。神様がそこに臨むのです。そして、皆さんの妻のものは神様の夫人、女王のものであり、皆さんの夫のものは神様のスティック（棒）と言いましょうか。神様と一緒にぶらさがっていると考えなければならないのです。それは二重ではありません。心と体のように、神様が心ならば、皆さんは体になるのです。神様は見えませんが、その生殖器と一緒にいらっしゃるのです。私たちの体にそれがぶらさがっていますが、それは二つが一つになってぶらさがっているのだと考えなければなりません。

夫の生殖器が神様の生殖器だと考えてみましたか。どれほど近づきますか。神様をどこか天のてっぺんに置いて信じるのではありません。自分の心の中に入ってきているのです。一つになっているから分からないのです。

堕落することによって、男女の生殖器がこのよこしまな死亡の波、死亡の法、滅亡の地獄を開門させた本宮になったために、天道を破綻させた魔物になったために悪いものになりました。これが今まで歴史に隠された秘密でした。堕落していなければ、男性と女性の生殖器は、愛の根本であり、愛の本宮であり、生命の本宮であり、血統の本宮になるのです。そこで縦的な神様の愛、横的な真の父母の愛が一つにならなければなりません。

真の愛は直短距離を通るために、横的な人間、アダムとエバの愛も直短距離を通る道は、九〇度の道しかないのです。そして、ここで一つにならなければなりません。ここで爆発して、アダムとエバが神様と生命一体、愛一体、血統一体、このように和合した喜びとともに爆発して、蘇生するところから生まれるべきなのが私たち人類です。これがアダムとエバの子女になることであり、神様の孫になることです。そうなっていれば、なぜ地獄に行くのですか。宗教に何の必要性がありますか。そのままそのように生きれば、すべて天国に行くのです。

神様は縦的な位置、中央なので縦的であり、アダムとエバは横的なので、二人がどこで一つになるのかといえば、生殖器という基準を中心として一つになるのです。それゆえに、愛の源泉である神様がその場に臨むことができ、生命の源泉である神様がその場に臨むことができ、血統的根源が神様なので、その場からすべてのものが始まるのです。

それゆえに、生命の根源地であり、愛の根源地であり、血筋の根源地である、これをつかんで引っ張れば、すなわち血筋をつかんで引っ張れば、先祖の血筋がすべて出てくるのです。ここで生命をつかんで引っ張れば、先祖の生命がつられて出てきますか、出てきませんか。また、愛のひもをつかんで引っ張れば、つられて出てきますか、出てきませんか。そのように造化を集約させて、それを連結させることができる本部とはどこかといえば、最も貴いところだというのです。男性になれる性格、女性になれる性格、何がそれを分けるのかといえば、生殖器です。

それでは、男性の生殖器と女性の生殖器を、誰が先にこれと因縁を結ぶためにつくったのでしょうか。アダムでもなく、エバでもありません。神様です。聖書に、悪魔は淫乱の神だとあります。なぜ神様がそこまで嫌ったのですか。自らの理想的本基台を完全に破壊させてしまったからです。ですから、これは全宇宙からの追放を予告しているのです。

男性と女性の生殖器は、どれほど貴いでしょうか。これで堕落したために、この人類の全体の理想を破綻させてしまいました。その主人は二人ではありません。絶対的に一人です。女性が結婚して一人の夫に三角地帯を許すようになれば永遠です。それゆえに、男性の生殖器、女性の生殖器は貴いのです。神様の愛と人間の愛は、どこで会うのですか。

神様が創造理想の愛のために天地を造られたのですが、その愛の対象が人間です。皆さんは、愛の対象が自分より優れていることを願うでしょう？　そう願うでしょう？　何千倍ですか。「千倍を願うか、万倍を願うか」と尋ねれば、「万倍を願います」と言うのです。「万倍、十万倍か」と尋ねれば、「十万倍です。億万倍です」と答えるのです。

神様も、被造世界の誰が愛のパートナーになると思いますか。そのパートナーとは何ですか。男性一人だけでパートナーになりますか。女性一人だけでパートナーになりますか。神様は何のパートナーを願われるのでしょうか。お金のパートナーではなく、知識のパートナーではなく、権力のパートナーではありません。愛のパートナーを願われるので、男性と女性の生殖器が一つになったその場を中心として神様に会うことができるのです。

(3) 真の血統の根は神様

人間が堕落していなければ、神様は内的な父と母になり、アダムとエバは外的な父と母になります。内的な父母の息子、娘として愛の種を受けて生まれた人間になるはずだったのですが、悪魔の愛を中心として堕落することによって、悪魔の血筋を受け継ぎ、悪魔の愛、悪魔の生命、悪魔の血筋を受けた人間になりました。

神様は、見えない内的なアダムの位置にいらっしゃり、また見えない内的なエバの位置にいらっしゃいます。アダムは、人類の前において、内的なお父様に侍る実体の父として立とうというのであり、またエバは、内的な母の神様に侍る実体の母として立とうというのです。このようにして縦的な基準から横的基盤へ拡大させようというのです。

エバは、未来における神様の愛の夫人です。神様自体は縦的ですが、横的な相対がいません。縦横を結んで、もたなくては生産できないのです。神様は縦的にいらっしゃいます。縦は垂直で、垂直は一つしかありません。垂直の世界は生産できません。生産できる環境は横的な基盤です。ここには四方、三六〇度があるので、面積があって生産圏が展開されるのです。神様は、一人でいてはいけないので、天国を成す民族を生産するためにアダムとエバという体を造られたのです。

本来、堕落していなければ、エバは神様の夫人になり、アダムは神様の体になるのです。神様の体になったアダムと神様の体になったエバが愛することによって、神様と人の天地

合徳が展開し、男性と女性、陰陽の合徳が展開して初めて縦横に結びつき、愛によって新しい生命、新しい血筋が絡み合わなければなりませんでした。

アダムとは誰ですか。神様が根ならば、アダムは新しく出てくる枝と同じであり、芽と同じです。神様とアダムは一つの体です。生命の根も神様であり、愛の根も神様であり、血統の根も神様であり、良心の根も神様なので、神様が先に愛を感じなければなりません。根が先に感じて、幹が愛を感じなければならないのが原理です。

アダムとエバは相対的愛の位置にいて、主体は神様です。神様の愛は、アダムとエバが結婚して初日に愛するその時間、出発地から一つになっています。ところが、一つになると感じられないのです。一つになっているために感じられないだけであって、既に神様は、愛と生命と血統の因縁を中心として、創造理想の喜びを感じるというのです。その喜びに反応して男性と女性が愛しながら喜ぶのです。これは、アダムとエバが結婚して夫婦が合徳することをいうのです。

神様は、愛の源泉であり、生命の源泉であり、血筋の源泉です。このように思うとき、男性の愛と女性の愛が合徳し、男性の生命と女性の生命が合徳し、男性の血と女性の血が合徳するところとはどこでしょうか。男性と女性の秘密の場所、生殖器です。それで、人間世界における大礼の中の大礼が結婚です。

神様と私たち人類の始祖であるアダムとエバの関係について考えれば、私たちの生命の起源は神様です。私たちの愛の主体も神様で、私たち一切の生活的な標準も神様です。

アダムとエバの結婚は、神様と人間が結婚することです。同じように、皆さんも人間として神様と結婚するようになっています。それでは、神様はどこにいらっしゃるのでしょうか。私の中にいらっしゃいます。

アダムとエバの結婚式は、神様の結婚式です。アダムは誰ですか。神様の長男です。平面の中の平面で横的です。神様は縦的です。その一家で横的に発展することができるのは、長男から始まります。神様とアダムは、愛を中心として父子一身です。それでは、愛はどこで一つになるのでしょうか。縦的なアダムとエバの結婚式で一つになります。成熟してお互いに思い慕うのは、縦的なものを取り戻すためなのです。

愛を中心として、アダムとエバに神様が入ってこられて内的な父になり、アダムとエバは神様の体になって内外の神様になるのです。神様は、宇宙を創造された内的な神様であり、人間は外的な神様になるのです。彼らが夫婦になって天国の王宮を創設することが創造の遺業です。宇宙の王権を中心とした王宮を設定して、アダムとエバを中心とした皇族編成がなされれば、地獄はあり得ないのです。

神様とアダムが内外に一つになれば、神様は内的な神様であり、アダムは外的な神様になります。内にいる神様は内的な神様であり、外にいるアダムは外的な神様になるのです。

神様は創造主でありながら、縦的な真の愛の父母です。真の愛を中心とした縦的な父母だというのです。そして完成したアダムとエバは、真の愛を中心とした横的な父母です。この二つの父母が一体になるのです。愛するその場所で縦横が一体になるのです。そこは愛の本宮であり、生命の本宮であり、血統の本宮です。そこが男性と女性の生殖器です。そのようにすることによって、神様自体が神様の息子、娘を生むのです。

皆さんは二つの父母から生まれました。その縦的な父母の相対的な立場に立ったものが良心です。そのような面から見るとき、良心は縦的な自分自身であり、肉身は横的な自分自身です。それでは、縦横が何によって一つになるのでしょうか。真の父母の愛、創造主の真の愛によってです。真の父母の愛、創造主の真の愛によって一つになれば、心と体は絶対に闘いません。

神様が創造当時、理想として願われた真の愛、偉大な真の愛を中心として、人間との真の愛の関係を結んで一つになることのできる、このような神人愛一体の家庭を築いたならば、今日私たちは、天国だ、地獄だと心配することもなく、そのまま天国にみな入っていくようになるのです。ここで問題になることは、神様の真の愛と真の人間の真の愛が、主体的真の愛と相対的真の愛で一つになって一点から出発しなくては、神様の真の愛と人間の真の愛が異なった二つの愛の出発になってしまうので、二つの愛の方向と目的地になるということです。このようになる時は、神様と人間が願う絶対的理想世界は探し出すことができないのです。

既成教会と統一教会が違うのは、統一教会は、愛を中心として神人一体を定着させるということです。既成神学では、神様は神聖なもので人間は俗なるもの、罪なるものとして定義しています。そうであるなら、神様の愛と人間の愛がどのようにして一つになることができるでしょうか。それは話にならないというのです。絶対的な神様は何でもできると考えているのが問題です。したがってキリスト教の行く所には、たくさんの血が流れてきました。神様の命令を名目に侵略し、奪取したのです。独裁者を出したのです。世界はそのようにはなりません。神様の本性から見るとき、そのようにはならないのです。

三) なぜ結婚が重要なのか

(1) 結婚の目的は神様に似ること

宇宙の根本がそうです。神様の完成も、やはり同じです。アダムとエバが二性性相になって縦的に一つになるのです。それで、神様を完成させて解放させるのが人間だというのです。また、人間を完成させて解放させるのが神様だというのです。離れることができません。その場で生きなければなりません。

アダムとエバは、神様の二性性相がそのまま出てきたので、一つのふろしきから出てきたのと同じです。双子で生まれた兄と妹のようなものです。その兄妹の双子がおっぱいを片方ずつ分けて飲み、お互いに触って、母親のおっぱいを飲む愛を中心として考えるのです。すべて母の懐に抱かれて愛するのです。

神様が二性性相に分立されるので、その本性がそのように分立されるのではないですか。

男性は何ですか。男性は性相的な神様であり、女性は形象的な神様です。この二人が一つになり、分立されたもの一つになることによって、愛を中心として愛の軸が生じるのです。愛の軸は誰もタッチできません。神様も愛の軸の前に絶対服従するという論理がここから展開するのです。すべて理論的です。

統一的基準の内容があるところとはどこでしょうか。垂直線です。人間が堕落していなければ、神様と人間はどこで会いますか。なぜ結婚するのですか。神様に会おうとするのです。神様の愛の前に接ぎ木をするためなのです。愛のために生まれたので、その愛は宇宙と同参して、神様のような愛の理想相対を探さなければならないのです。それは一人ではできません。神様が二性性相に分立したのです。

なぜ結婚するのですか。神様の姿に似るためです。神様は二性性相でいらっしゃる方として、各々の一性が合体化した一律的な存在であられ、その神様の分性的人格自体が男性と女性なので、彼らが合性一体化して種のようになり、神様の本性の位置に帰らなければならないのです。その種を連結させるためには、愛の道理の道を通らなければならないので、生まれるときも愛を受け、育つときも愛を目標として育ち、生きるにも愛を中心として生きて、逝くときも愛に帰るために逝かなければならないのです。その道は、「ため」に生きる目標を中心として訪ねていかなければ、方向がずれるという事実を皆さんは知らなければなりません。「ため」に生きて愛するという心を先頭に立てれば、いくらこっちに行くといっても、南極と北極の方向を探し当てるように正しく行くというのです。

私が結婚をするのは、私だけのためではなく、相対のためでもあります。結婚が自分自身より相対のために行われるということはどういうことでしょうか。天地間のすべての道理が主体と対象で成り立っているように、男性と女性が結婚するのも天地間の道理です。

男性が右側ならば女性は左側になりますが、それは、宇宙間の横的な関係をなすためであり、男性が主体ならば女性はその対象になりますが、それは、神様との縦的な上下関係をなすためなのです。したがって、結婚とは男性だけのためではなく、また女性だけのためでもない、天理の法度を合わせるためにするのです。それゆえに、男性と女性がお互いに異なる形を備えています。天理法度に合わせられるようにできているのです。

なぜ結婚するのですか。神様を愛するためです。神様を愛して何をするのですか。神様の軸と一致するためです。一致して何をしようとするのですか。一致すればどのようになるのですか。なぜ一致しようとしますか。絶対的な神様の愛を中心として、永遠であられる愛を中心として、永生が展開するのです。それだけではありません。そのように接触したところから宇宙の相続権が伝授される、ということを知らなければなりません。愛を中心として造られた被造世界は神様のものですが、私のものとして相続権を与えられるのです。

なぜ結婚するのですか。アダムとエバが自らの愛を求めていくためではありません。縦

的な神様の愛を核として、その核を中心として、客体として一つのバランスをなすためなのです。それが理想です、

神様の創造理想もそのような愛を中心として結びつくことであり、人間の男性と女性も成熟してそこで愛の結着点が展開して、生命が連結されるのです。ですから、生命によって連結されるのではありません。愛によって連結されるのです。縦的な父の愛と横的な夫婦の愛を中心として、本然の愛の種が初めて連結されるというのです。

結婚とは何かといえば、創造理想完成の場です。神様の子女完成の場であり、兄弟完成の場であり、男性と女性の理想的完成の場です。男性と女性が理想の場で一つになることは、創造前にアダムとエバが二性性相の性相と形状でいたものが実体として一つになることです。

神様の無形の二性性相がアダムとエバの実体として分かれたのですが、これが再び縦的に会うのが結婚式です。結婚して一つになる瞬間は、未完成の半分が完成する瞬間であり、完成品として合格する瞬間であり、相対の世界を抱く瞬間です。愛の力以外にはそのようにできるものがありません。それだけではなく、神様を占領するのです。結婚は、相対を占領して神様を占領するのです。それが正に結婚です。でたらめにするのではありません

結婚とは何ですか。男性は女性の世界を占領しようというのです。女性の世界を知りません。また、女性は男性の世界を占領しようというのです。結婚する前は、女性は男性が神秘的です。男性には女性が神秘的なのです。同じです。結婚して神秘的な男性・女性世界をお互いに占領して二つとも備えることによって、神様の二性性相の主体の前に一つになる、その姿を備えるのです。このようにして神様と一つになるのです。

男性は女性のために生まれて、女性は男性のために生まれたのです。結婚は何かというと、片側の身分が完成することです。男性半分、女性半分が一つになることであり、その次には神様を占領するためです。二性性相の男性と女性が二性性相になったので、愛で一つになることによって、正から分かれたものが合わさっていくのです。

アダムとエバの結婚は誰の結婚かといえば、神様の結婚式です。愛の根、生命の根、血統の根、良心の根であるその根が、先に愛を体恤しなければならないのです。結婚するその場には、神様をお迎えしておいて夫を迎えなければなりません。神様の二性性相がアダムの心とエバの心に入っていかなければなりません。正から分立して入っていくのです。これで正分合になるのです。したがって、プラスとマイナスがすべて一つになるのです。

結婚はなぜするのですか。神様の姿に似るためです。神様は、二性性相でいらっしゃる方として各一性が合体化した一体的な存在であられ、その神様の分性的な人格自体が男性と女性なので、彼らが合性一体化して種のようになり、神様の本性の位置に帰らなければならないのです。結婚は、神様と一つになることができる位置に行くということです。

結婚とは何ですか。男性を通じて愛を結ぶことによって、半品存在である女性が完品存

在になることです。男性も同じです。結婚を通じて完成するのです。何によってですか。愛で一つになることによってです。ですから、男性と女性の生殖器は絶対に必要なのです。ですから、男性の生殖器は女性のためにできたのであり、女性の生殖器は男性のためにできたのです。自分のものではありません。

結婚初夜の愛というのは偉大なものです。初愛です。皆さんが女性として生まれて一生保護してきた自分の体、その一身を男性に捧げるのです。

男性もそうです。自分一身を備えて純潔な体を女性に一〇〇パーセント捧げるのです。そのためのものが男性としての結婚前の生活です。

男性と女性が出会って愛が芽生えれば、絶対的に一つにならなければならないといいますか、絶対的に分立されなければならないといいますか。絶対的に一つにするとは、どうなることですか。男性と女性がキスすることですか。どこが一つになりますか。何のために結婚するのかと言えば、生殖器理想の完成のためです。結婚とは何かといえば、生殖器官の理想を満たすためのものが結婚だというのです。それは間違っていますか、合っていますか。俗的な結論のようですが、俗的な結論ではないというのです。俗的な人間の世の中で話すので俗的なのであって、神様の創造本然の世界では神聖なのです。神様が願われる至聖所はどこかというのです。愛が永遠に宿ることができるところが至聖所だというのです。そのとおりでしょう？

女性が男性を訪ねていく時は、「神様よりもっと貴いものを訪ねていきます。一生を大切に装って貴く思い、何よりも貴いものをもってあなたを訪ねていきます。あなたを愛します」こうでなければなりません。そのように女性が男性を慕えば、生殖器が息をします。

結婚して男女が初めて愛する瞬間、関係する時間は、子女の愛の完成なのです。兄弟の心情の完成場、夫婦の心情の完成場、未来の父母の心情の完成の出発点です。それで、女性の生殖器というのは愛の本宮です。愛の根源です。そこから愛が始まるのです。空中から始まるのではありません。何ですか。愛の本宮です。

男性と女性が完成するのは何ですか。それが結婚生活です。男性と女性の凹凸、これを一つにするのです。何を中心として一つにするのかというのです。男性と女性の凹凸が何のためにそのようになったのかといえば、愛のためにそのようになりました。愛で一つにすることを知らなければなりません。人間のすべてを構造的に見るとき、この生殖器のように全体の核的な内容をもって生まれたものはありません。神様が創造されたなら、ここにすべての精力を込めてつくられたという話になることを知らなければなりません。

結婚とは何かといえば、半分の男性と女性が生殖器を一つにすることによってお互いに完成するのです。男性は、女性の愛を中心として完成するのです。男性は女性を完成させ、女性は男性を完成させるのです。それは、真の愛を中心として完成させるのであり、真の生命の結合が展開するのです。真の愛で一つ

になるのです。愛が中心になって生命が活性化され、二つが一つになる位置がその場です。男性の血、女性の血が一つのるつぼで一つになることのできる位置がその場だというのです。その場から息子、娘が生まれます。その場は、息子、娘より貴いということを知らなければなりません。夫よりも、神様よりも貴いということを知らなければなりません。

男性と女性がお互いに愛して抱擁する、それ自体が、宇宙が一体をなす場になります。神様の理想の中でなされる創造本然の姿は、そうです。

福の中で最も貴い福は、神様の愛です。その次には、神様の創造の権限を引き継ぐことです。神様がアダムとエバを創造されたように、創造的権限を与えられるのが子女なのです。皆さんは、なぜ子女を愛するのでしょうか。神様の創造の業績を横的に実体圏で受け継いだのと同じなので、アダムとエバを造って神様が喜ばれた、その喜びを代わりに感じるためです。

その次には、神様が天地万物を主管されたように、万物を主管するために私たちに主管権を賦与されました。したがって、結婚するその時間には、神様の愛を相続して、再創造の権限と主管権を完成圏に立って受け継ぐようになる、ということを皆さんは知らなければなりません。それゆえに、結婚式というものは、愛の顕現を意味すると同時に、創造権と主管権を賦与されることです。

世間で盛んに行っている自由結婚は、サタンが人々を堕落させて神様の前に出ていけないようにするためにつくっておいたわななのです。そのわなに引っ掛かれば死に、サタンの支配を受けてえじきになるしかないのです。今日、西欧社会、特にアメリカは、自由結婚が盛んに行われることによって、真なる家庭を築くことができなくなっており、家庭生活に失敗した人々が日増しに多くなって、いくらもたたないうちに家庭をもたない人が多数を占めるようになるでしょう。

そのようになれば、アメリカ社会は愛が干からびた社会になり、不信によって不安と恐怖が支配する地獄のような社会になるだろうと、自信をもって確言することができるのです。このような時点に立っている皆さんには、このような社会風潮を一掃して、アメリカ社会に愛が満ちあふれ、神様の願われる社会を建設しなければならない義務と使命が賦与されていることを知らなければなりません。

私たち統一教会は、結婚観が違います。結婚というのは根本に帰るためのものです。

(2) 夫婦の愛と絶対性

夫婦が、神様を愛して人類を愛する心の基台の上で爆発するようにお互いに愛するならば、その家庭によって神様が酔い、宇宙が酔うことができるようになるのです。その愛は、神様のための愛であり、人類のための愛です。その愛の根は、自分にあるのではありません。神様が愛の根源であり、人類の愛が根源なのです。

結婚したなら、既に平面的ではありません。平面的な基盤しかありませんが、高いものが低いものと連結される時には、垂直的概念が生じます。平面的な歴史は宇宙を収拾し、天

宙を収拾することができません。垂直と水平が出会って九〇度をなす時、それは天を地にしても、地を天にしても、前を後ろにしても、後ろを前にしても、右弦左弦、上弦下弦、前弦後弦、どの面をくっつけてもぴったり合うのです。地上完成基準は、霊界のすべての完成へ続くのです。

結婚して夫婦が真の愛をなす位置は、神様と人間の愛と生命と血統の根源である王宮の位置であり、理想のための地上天国・天上天国の出発地なのです。このような真の愛によって結実した子女が真の愛を中心とした夫婦一体を完成し、神様に侍って暮らす家庭となり、平和と理想の出発基地になるのであり、半分である男性と女性は、一体となって、神様の相対として神の理想愛を完成させるようになるのです。

男性と女性が祝福を受けて、完全な愛を授け受けして喜びを享受する時、神様が地上に咲いた花のように御覧になるというのです。また、彼らの愛によってなされるすべての調和万象は、神様にとって良い香りと同じです。このような美しい香りの中で神様は暮らしてみたいと思って訪ねてこられるというのです。神様の愛が訪ねてくることのできる基台が、すなわち夫婦の愛の場です。その場は、万物と宇宙が和動する場になるはずです。

男性と女性の生殖器の主人とは誰ですか。縦的な神様です。どこで神様の理想的愛と人間の理想的愛が一つになりますか。生殖器です。神様に出会うために結婚するのです。驚くべき話です。神様がほかにいるのではありません。その場に入っていくようになれば、神様が生きていらっしゃいます。三大主体思想がどこで結合して根を打ち込むのですか。愛です。神様の愛と人間の愛が生殖器を中心として‥‥。結婚は、神様の縦的な愛に接ぎ木をするためのものです。

曇った日に陰電気と陽電気が合わさって雷が鳴ったり稲光がするのは、宇宙結婚の象徴です。大声で叫ぶでしょう？　はとも愛する時、大声で叫ぶでしょう？　皆さんも愛する時、大声で叫びますか。声が出てきそうなのに両親に聞こえるかもしれないと思って、ただもう死ぬほど心配でしょう。率直であるべきです。なにもそのようなことを隠す必要はありません。これからは、窓ガラスが一度にガッシャーンと音がするくらい叫んでも罪ではありません。雷鳴がとどろき、稲光がするかのように、火が出なければなりません。聖女に侍って生き、聖男に侍って生き、神様に侍って生きる境地に入っていかなければならないのです。そのような愛の世界があります。ですから僧侶たちには、いくら修行に励んでもその世界を知るすべがないのです。

皆さんが夫婦関係をするのを神様が見ないと思いますか。公開的なのです。これは宇宙的に公開するのです。それを知らないということは大きな間違いです。皆さんの先祖がすべて見ているというのです。霊界でも、すぐ目の前に見えます。手のひらに立ってするかのように、すべて見えるのです。ですから、それを恥ずかしいと考えれば大きな間違いです。

愛は永遠です。そのような愛は二つではなくて一つです。男性と女性の間が愛によって結ばれれば、地上で偕老（共に年を取るこ

と）しなければならず、死んでも永遠に共に生きていくようになっています。体は二つですが、一つになって回ることによって一体になるのです。二つの体が一つになれば、神様と回るようになって愛の四位基台を成し遂げるようになりますが、それが正に理想世界なのです。そこには偽りの愛が侵犯できず、ただ真の愛だけが臨在するようになるのです。

理想的夫婦とは、どのような夫婦ですか。最高の芸術を実体として展開させることができる夫婦、最高の文学を展開させることができる夫婦なのです。最高の理想、最高の文化世界に接する前に、最高の愛によって夫婦が授け受けする、その甘い愛が世界最高の芸術作品にならなければならないのです。夫婦生活自体が最高の文学作品であり、それ自体が文学の実体にならなければならないのです。

家庭を芸術化させなければなりません。おもしろい夫、芸術的な夫にならなければなりません。何かの雑誌などに良いものがあれば、さっととっておいて、寝ようとする夫人の前で素晴らしい声で読んであげるのです。感動して寝る妻の姿を夢に描けば、それが再現されるのです。霊界と連結するのです。それはどれほど素晴らしいことでしょうか。そのように暮らしたいですか。でなければ、そのまま野暮な夫婦同士で暮らしたいですか。素晴らしく生きたければ、素晴らしくなれる姿勢から、素晴らしくなれる方向をとらなければなりません。それが第一条件です。

赤ん坊を生む位置は、神様の上弦世界を占領するのです。神様の位置に上がっていくことによって、子女を愛することで、神様が創造以降に人間をどれほど愛されたのか、その内縁を体恤させるのです。

このように、夫婦が息子、娘を生んで父母の立場に上がっていくことで、神様の立場で神様が人間を創造される時、どれほど喜ばれたかを体恤するようになるのです。天地の大主体であられる神様のすべての権限を相続できる立場に入っていくことができる体恤的環境において、体恤的内容として伝授させてあげるのが息子、娘の生産です。息子、娘を生産して大切に育てて結婚させるまでが父母の責任です。神様がアダムとエバを育てて結婚させるはずでしたが、できなかったのです。アダムとエバも、息子、娘を生んで結婚させることができませんでした。この恨を解かなければなりません。これが教育の原論になるのです。結論は簡単です。

夫婦が一つになって息子、娘を生むことによって永続することができます。それで、創造した創造主の位置に上がっていき、息子、娘を生んでみることによって、神様が創造された喜びを平面世界で感じることができるのです。それゆえに、自分の妻は、息子、娘と同じでなければなりません。息子、娘と兄弟の位置を合わせたものです。ですから、別れることができないというのです。愛はいい加減になっていません。息子、娘を生もうとするなら、このようなすべての伝統を踏まえて経ていったのちに息子、娘を生んでこそ、神様が本来創造理想として願われた本然的基準に到達するのです。それゆえに、家庭が天国基盤です。

神様を中心として一つになる時、千態万状に回るようになるのです。したがって、兄弟間で愛するのも、父母が子女を愛するのを見習って兄は弟を愛さなければならないのです。そのように愛しながら一元化した家庭は、家庭愛が花開くことができます。これはまた、社会愛になることができます。これがさらには、民族を愛する民族愛になります。このように愛すれば世界になるのです。ところが、今日これが漠然としているというのです。

神様は、真の愛の本体なので、真の愛と連結すればすべてが同じ体になります。父母は、神様を身代わりした生きている神様であり、夫と妻は、お互いがもう片方の神様であり、息子、娘はもう一人の小さな神様です。

このように、三代が真の愛を中心として成された家庭組織が天国の基盤です。そのような基盤を築かなければ、天国を成すことはできないのです。家庭とは宇宙の中心です。家庭完成は宇宙完成の基礎になるために、家庭で愛して宇宙を愛すれば、どこでも無事通過です。このような場合、神様は、全体宇宙の父母として愛の複合的な中心の位置にいらっしゃいます。

平和の立て札、碑石を立てるのが、女性の節操と男性の志操です。そのようになれば、男性でも女性でも絶対に信じます。これが水平にならなければなりません。永遠に水平になるのです。そうなれば幸福でしょう？　なぜですか。自分たちの宝物の中の宝物が何かといえば、半分のかけらだった女性が夫を占領することです。夫も占領しましたが、天地が半分のかけらだったものが一つになるのです。上弦の神様側に下弦の息子、娘が生まれるのです。上下関係が生じるのです。

その次には夫婦関係です。これを中心として四方に広がっていきます。そのようにして、前後を中心として初めて家庭が定着するのです。前後関係は兄弟です。兄弟をもたないといけません。上下関係、左右関係、前後関係です。その器官を完全に定着させなければなりません。

それゆえに、唯一私にあるものは何ですか。男性には妻一人しかいません。財産でも何でも、全部捨てるとしても、これは取り替えることができないのです。ただ一つの宝物は妻だというのです。

四、生殖器は最高の神秘、最大の関心事

一) 生殖器は最も精誠を尽くしてつくったところ

宇宙は、なぜペア・システムになっているのでしょうか。独りでになっているのでしょうか。今日、進化論もいいのですが、進化論に先立って広がっている事実は何でしょうか。男性と女性の生殖器、繁殖器官があります。そこに進化がありますか。進化があるなら、男性と女性の愛する方法が変わらなければなりません。昔の人と今日の人と、それが発展していなければならないないというのです。昆虫世界においても、虫が愛するそれが、昔と今日と変わらなければなりません。鳥もみな、変わらなければならないというのです。そのような内容を中心として論じることができるのです。生命の起源である愛の器官を中心として、その本拠地が進化的内容で発展するようになっていますか。それが、ただそのままゆ毛が生えたり、勝手に涙が出てきたりしますか。狂ったことを言うなというのです。

この宇宙の根本になる主人がいて、考えがなければなりません。私たちのこの体は、どれほど神秘的ですか。この体が理由もなくできましたか。生殖器がどれほど神秘的ですか。それは、想像できないほど神秘的なのに、それがただそうなっているのですか。生命が連結しているものは簡単ではないのです。

男性と女性の生殖器の細胞が、物質世界が最高に願う希望の終着地だというのです。そこに行くことによって、神様の愛に接することができる高貴なものになるというのです。それゆえに、男性と女性の生殖器は、宇宙のすべての精髄の核が、細胞が作動し、集まっているというのです。その力は、宇宙を動かすことのできる力が通過する愛だというのです。したがって、愛する人のためには自分が犠牲になろうとするのです。

生理的感覚の集結地が生殖器です。神様が創造される時、最も精誠を尽くされたところです。それゆえに、歴史を連結して、生命を再び創造する器官になっています。皆さんは何も知らずに夫婦関係をして、息子、娘を生みますが、そのようになっていません。そのようにすることができるように造られた神様は、全体の要素がそこに連結されるようにされたのです。それゆえに、それが活動するようになれば、生命の根本要素がすべてそこに連結して、発電所のように爆発するのです。それを愛というのです。

結婚しましたか。新郎がいますか。恋しい時は、動物が発情する時に見ないでにおいをかいで自分の相対を訪ねていくのと同じように、皆さんにも、生理的な大革命が起こらなければなりません。堕落したために、その基準に至らないというのです。動物が愛する時、どのようにしますか。きょう、さっき映画を見たでしょう？　江原道の東江にいるオルムチという魚を見れば、魚たちは生殖器がありません。魚がこのような形をしているとすれば、ここにひもがあります。これが生殖器です。雌が発情すれば、そこに行ってこするのです。電気が通じて精液を放射するのです。本当に真の神秘です。水中でどのように卵をかえすのかというのです。そのように、みな愛するのです。

進化論から考えれば、男性と女性の性を誰が区別しましたか。アメーバがしたのですか。このダーウィン、こいつめ、私が胸ぐらをつかまえて、首根っこを押さえつけておかなくてはいけません。「男性と女性の生殖器の構造が、私たちの骨格の構造よりも何次元もさらに神秘的で複雑だということを知っているのか」と尋ねるとしたら、尹博士はどのように答えるつもりですか。さあ、どのように答えますか。骨格の構造よりももっと複雑なものが生殖器の構造であるという時、これは正しいですか。生殖器の構造がより複雑ですか。私はよく分かりません。もっと複雑なのが生殖器の構造です。

二) 生殖器の主人がお互いに入れ替わった

男性の宝物は、男性自身はもっていません。男性の宝物は女性がもっていて、女性の宝物は男性がもっているというのです。取り替えてもっているのです。女性のセクシュアル・オーガン（生殖器）は女性のものではありません。男性のものだということを知らなければなりません。自分のものではありません。

男性も同じです。したがって、自分の思いどおりにできないのです。米国の女性たちは、自分がもっている生理的五官が自分のものだと思って自由に行動して、ありとあらゆることをします。男性たちもありとあらゆる行動をします。皆さんは管理人です。管理人が主人のように振る舞っているというのです。

女性に尋ねますが、皆さんがいつ、その主人に出会いましたか。主人は夫です。また、男性は、男性のものが自分のものですか。それでは、結婚とは何でしょうか。お互いに主人を訪ね求めていくためのものが結婚だというのです。陰電気と陽電気とが飛び交って、雷を落とすのが愛です。それと同じだというのです。女性が結婚するのは、男性の顔よりも、それのためです。男性が結婚するのは女性の手ではなく、それのために結婚するのです。男性や女性同士で結婚する男性同性愛者や女性同性愛者など、そのようなものがどこにありますか。それはなくなるのです。百年も続かず、一代ですべて終わるのです。このように見る時、結婚をすべきですか、すべきではありませんか。結婚はなぜするのですか。このようになっているので、結婚をしなければならないのです。絶対に結婚しなければなりません。

女性の生殖器は、自分のものではありません。男性のものです。夫のものです。今まで自分のものだと思っていました、自分のものではありません。女性には必要ありません。これを必要とするのは男性です。男性のものをもっている、ということを知らなければなりません。男性のものです。夫のものだというのです。夫のものなのに、自分のものだと思っているので、世の中の万事をよこしまにすべて破壊してしまうのです。男性がいなければ、それを何に使いますか。何に使うのかというのです。重要な問題です。今まで、それが分からなかったのです。

男性の愛の主人は女性です。女性がもっています。女性の愛の主人は男性です。男性がもっています。男性たちはみな知っている話です。男性たちがぶらさげているのは誰のものですか。今までは、このことを知りませんでした。自分のものだと考えたのが罪です。女性がもっている生殖器を自分のものだと思ったことが、大きな罪です。

男性は何をもっていて、女性は何をもっていますか。早く答えてみなさい。生殖器です！　その男性の生殖器は男性に絶対必要ですか、女性に絶対必要ですか。どのように思いますか。この時間に私たちは明確に定めなければなりません。生殖器は女性のためにあるのです。人間の生殖器の一つは凹で、一つは凸ですが、何をしようとそのようになっているのですか。二つともとがらせたり、二つとも平らにしないで、それはなぜそのようなかたちをしているのですか。それを知らなかったのです。

真の男性は変わってはなりません。真の女性は変わりません。真の愛を中心として、絶対的に変わらない男性と絶対的に変わらない女性をどこで探し出すのですか。そのような人々が出てきたとすれば、宇宙全体がその前にすべてひざまずくようになります。そのようになるのです。神様は知恵の王であられるために、男性の宝物は女性がすべて大事に保管するようにし、女性の宝物は男性がすべて

大事に保管するようにしました。生殖器官がそうです。

人間が生まれた目的とは何ですか。愛の道を訪ねていくためです。それで、男性と女性がもっている生殖器官は自分のものではありません。男性についているものは男性のものではありません。ところが、これを自分のものだと思っていました。女性についている生殖器官の主人は女性ではありません。その主人は男性です。そして、男性についている生殖器の主人は誰かといえば、女性だというのです。このように、愛の主人を取り換えて配置したという驚くべき事実を知らなければなりません。

女性と男性で違うものが一つあります。それは何ですか。生殖器でしょう？　女性の生殖器が自分のものですか。結婚したのちには自分のものですか。夫のものです。また、夫にぶらさがっているものは何ですか。それは誰のものですか。女性の万年所有です。真の愛を中心として、絶対的な愛の所有権が決定されます。サタン世界で夫が浮気をし、刃物を持って自分でこれを切るといって大騒ぎをしても、妻が駄目だといって手で阻むことで、「切ることができなかった」となってこそ許しを受けます。そうでなければなりません。

男性と女性を統一するには、キスすることによって統一されますか。お互いに抱擁することで統一されますか。完全統一は、男性と女性が主人をお互いに取り換えて、主人を取り戻してあげる結婚生活から統一が展開するのです。ですから、男性の陰部は誰のものですか。女性のものですか。あそこの男、一度答えてみてください。男性のものの主人は誰ですか。女性のものです。あの人もたくさん浮気しましたね。どろぼうです！　主人の許しをもらう前に、他人のものをつかって自分のもののように振る舞う人はどろぼうです。どろぼうは、万国において存続できないのです。

男性がいるのは、男性の相対である女性のためにいるのです。それゆえに、神様は知恵の王なので、けんかして離れることがないようにするために、最も貴いものの主人をお互いに入れ替えて装着したのが男性の生殖器と女性の生殖器です。これが貴いのです。これが愛の至聖所です。モーセの契約の箱のために建てたのが至聖所だと言ったでしょう？
これに触れば、雷に打たれるようになっています。一代、万代に滅亡が訪れてくるのです。その主人である祭司長は、唯一夫です。

神様が創造される時、男性と女性をでたらめに造ったのではありません。生殖器を中心として造られました。なぜでしょうか。神様は愛の先祖であり、生命の起源であり、血統の起源であるからです。ここで男性が理想的愛を伝達するのです。女性の生殖器は男性のもので、男性の生殖器は女性のものです。自分が主人ではないのです。それを開くことができるのは自分ではありません。女性が自分のものを開くことはできません。男性のものを男性が開くことはできません。女性だけが男性のものを開くことができ、女性のものは男性が開くことができるのです。愛の焦点がそこに結実するのです。そうですか、そうではありませんか。言ってみてください。そうですか、そうではありませんか。

男性は女性のために生まれ、女性は男性のために生まれました。それゆえに、男性の生殖器と女性の生殖器は自分のものではありません。神様は知恵深い方です。主人がお互いに入れ替わっているのです。この男性たちは浮気するでしょう？　この雷に打たれる者たち！　統一教会では絶対に許せません。

女性のへこんでいる生殖器は誰のものですか。それが女性に必要ですか、男性に必要ですか。女性に絶対必要ですか、男性に絶対必要ですか。男性に絶対必要なのです。また男性のものは女性に絶対必要なのです。その鍵を誰がもっているのかといえば、女性のものは男性が、男性のものは女性がもっています。それゆえに、それを開くことができる人は、ただ一人です。真の愛は一つなので、一つの真の愛を主管することができる人は、真の男性であり、真の女性だというのです。

女性の生殖器は、誰が主人ですか。男性です。男性のものは女性に必要であり、女性のものは男性に必要になっています。そのように相対的になっています。主体が交差するのです。

愛は絶対的であることを願うというのです。絶対というのは一つです。二つではありません。絶対的だというのは永遠に一つだという意味です。愛のパートナーは、一人の男性と一人の女性だけを許容するというのです。それゆえに、神様がアダムとエバを一人ずつ造られたのです。それをどのようにして否定することができますか。誰もそれを変えることはできません。

女性のおっぱいは誰のためにあるのですか。自分自身のためのものですか。息子、娘のためのものです。自分自身のためのものではありません。ヒップが大きいのも誰のためですか。それも息子、娘のためです。そのおっぱいの主人は息子、娘です。生殖器はどうですか。相対のためのものです。なぜですか。相対のためにすべてのものが地上に現れるのです。女性の生殖器は誰のものですか。夫のものです。誰が主人ですか。夫が主人であって、女性が主人ではありません。男性のそれは誰が主人ですか。女性が主人です。神様は素晴らしい方です。主人をお互いに入れ替えて、どこにも逃げられないようにしておいたのです。

女性のその顔は、自分のものではありません。夫が好む顔です。女性のものはありません。自分の正面の下にある生殖器は自分のものではありません。夫のものです。女性は、自分のために造られたものが一つもありません。夫と息子、娘のためのものしかありません。その道を行くのです。二つの世界を一人で抱くことができるのです。手を取り合わせなければなりません。縦横の地上世界を抱くことができる、そのような愛の器になることができるのが女性です。

女性の体を見れば、胸とおしりは赤ん坊のために、顔とその隠すものは夫のために生まれたというのです。上下左右がすべてそうです。自分のものは一つもありません。その主人は誰ですか。何の主人ですか。女性の生殖器の主人をいうのです。それは自分のものではありません。男性のものです。男性のものを自分勝手にできないというのです。これだ

け知っていても、世の中はこのようにみだらになりません。フリーセックスがどこにありますか。ホモがどこにいますか。他人のものを自分の思いどおりに使うのはどろぼうではないですか。どろぼうたちは地獄に行けば、逆さまに差し込まれます。

きょう、ここに十カ国以上の大統領が来ていますが、その国の放送を通じて、これを通告してみてください。男性が男性のために生殖器をもったのか、女性のためにもったのかと尋ねてみてください。それが自分のものだという人は、どろぼうです。自分のものだと考える盗賊だというのです。笑うことではありません。歴史的な宣言です。このように生きれば、平和の世界が目の前に来ます。神様のみ旨の中の重要なみ旨が愛のみ旨です。この愛のみ旨を人間の前に伝授してあげるために、最も貴重な器官をつくられた、それが生殖器ですが、男性の生殖器は女性のものであり、女性の生殖器は男性のものなのです！
アーメン！　「そうではない」と言いますか。それが間違っていると思いますか。

男性と女性の生殖器官は、神様の愛を所有することができる極です。プラス極とマイナス極です。電池の充電点です。これがなければ、神様の愛が充電できません。人間のその器官を通じて愛を満たそうとすれば、人間は毎日のように愛を満たすことができます。しかし、動物はそれができません。一年に一度だけです。

アメリカの家族制度は、いくらおじいさん、おばあさんがいても、孫の家に思いのままに訪問することができません。訪問したければ、先に電話をしなければなりません。そのような手順を踏んでから行くことができるというのです。考えてみてください。愛する間柄でも「今夜、愛しましょう」と許しを受けますか。妻であれ、夫であれ、「私たち愛しましょう」と言えば、いつでもＯＫしなければなりません。これが夫婦の道理なのです。そうです。「私は疲れています。嫌です」と答えることはできないというのです。自分の器官は自分のものではありません。女性の生殖器の主人は男性であり、男性の生殖器は女性が主人です。誰がそれを否定することができますか。

女性たち、そのように胸が大きいのは、自分のために大きいのですか。ヒップが大きいのは、自分のためですか。自分のものは一つもありません。女性がもっているすべてのものは、自分のものではありません。「ため」にあるのです。子供のために、夫のためにあるのです。すべての生理生殖器官は自分のものではありません。男性のものの主人は誰ですか。主人は女性です。誰が鍵をもっているかといえば、夫人がもっているというのです。これを間違って使うことによって天罰を受けるのです。ソドムとゴモラがなぜ滅亡しましたか。アメリカがなぜ滅びるのですか。麻薬と淫乱を通して滅びるのです。

男性が男性になり、女性が女性になるようにするものが何か分からなかったというのです。それが正に生殖器です。それを嫌う人がいますか。好きだというなら、どれほど好きですか。今まではそれが良くないものだと思っていたとしても、これからは貴く思わなければなりません。未来の世界はどのような世

界でしょうか。生殖器を絶対的に貴く思う世界になるならば、その世界は良い世界でしょうか、悪い世界でしょうか。栄える世界でしょうか、滅びる世界でしょうか。冗談ではありません。神様が人間を創造される時、最も大切に精誠を尽くして造られたところがどこでしょうか。目ですか。鼻ですか。心臓でしょうか。でなければ頭脳でしょうか。これらはすべて死んでなくなります。事実がそうではないですか。「世界平和家庭連合」の目的は何でしょうか。道徳と宗教等、あらゆる分野を完全に超越して、生殖器が一つになって神様までも拍手で歓迎できる人が生きる世界があれば、どのような世の中になるでしょうか。

男性と女性が生まれる時、彼らの生殖器の主人は誰ですか。夫の生殖器の主人は妻であり、妻のものの主人は夫です。生殖器の主人がお互いに入れ替わっていることを知りませんでした。簡単な真理です。これを否定できないというのです。千年、万年、歴史がいくら流れても、この真理は変わりません。

地上世界で神様の愛が宿るところはどこでしょうか。男性と女性の生殖器だということを知らなければなりません。堕落していない本然の愛、これが、至聖所だったということを知らなければなりません。堕落したために、最も貴い天国の皇子の系統を受け継ぐべきこのような王宮が、神様の怨讐であるサタンの一族の血統を受け継いだ、という驚くべき事実を知らなかったのです。

男性と女性が愛することができる生殖器なのです。ところが、神様は、知恵があるので、この愛の器官を入れ替えておきました。離れようとしても離れることがないようにするためです。離れたとしても、再び戻ってきてそれを探さない限り、どこにも行く所がないというのです。どこかに行って安息する所がないというのです。それをもっていってこそ、天下のどこに行ってもみな和合して、歓迎するようになっています。

三) 真の愛は汚いものも消化

皆さん、神様が最も重要視して、最も精誠を尽くしてつくられたところがどこか知っていますか。生殖器です。生殖器は生殖する機械ではありません。それが最も貴いものなのに、最も汚いものとくっついています。それを知っていますか。小便の穴は、同じですか、違いますか。場所は同じです。男性も女性も同じです。なぜ、そのようにつくりましたか。いくら良い種でも、肥やしをかぶせて植えてこそよく育ちます。貴いものであるほど、良い肥やしをたくさん継続的に与えてあげなくてはならないというのです。

人は継続的に育っています。神様を占領するように育ち続けているのに、肥やしも一生の間、共に降り注いでいます。それが汚いですか、有り難いですか。それを考えれば、すごいことでしょう？　それがなぜ、そこにくっついているのかというのです。毎朝、生殖器はそのにおいを必ずかがなければならず、小便をしてそこに毎日のように水をまかなければならないというのですから、これはどういうことでしょうか。天地の道理がそうです。

じっと考えてみれば、宝物は天国にあるものだと思っていました。ところが、気がついてみると、自分の体にもって歩いているもの

だったというのです。本宮がそこだということを知ったからです。神様に侍ることができる本宮は、愛ではないですか。愛の真の壺がどこにありますか。指にありますか。どこですか。男性の何ですか。女性の何ですか。男性の生殖器、女性の生殖器ですが、そこと同じところに最も悪いものがあります。小便がどこから出てきますか。生殖器から出てきます。女性も同じであり、男性も同じです。そのように出てくる汚い小便が愛と和するようになる時、汚いものになるでしょうか、きれいなものになるでしょうか。それでは、小便を真の愛にひたして冷茶を飲むように飲むならば、どれほど素晴らしいでしょうか。

愛は調和も多いのです。においも、悪いものでも香水だと思わせます。ですから、愛には汚いものがありません。それゆえに、神様は真の知恵の王です。私たちの生殖器のようなものも、最も汚いところの近くにあります。これが和合する調和だと宣布して、配置したのが男性と女性の生殖器です。最も良くない、汚い部分に装置したのです。

皆さん、男性と女性の生殖器がどこにありますか。そこは最も安全地域、最も安全地であると同時に、最も汚いところです。それを見れば、神様は真の知恵の王です。人間世界に、「愛はそのような汚いものも支配するのだ」ということを教えてくれているのです。肛門に近い位置にあります。小便が出てくる道と、もう一つの道と全く同じです。

関係する時、男性の生殖器が入ってくることを願うでしょう？　それは、考えればどれほど汚いですか。神聖な穴と汚い穴が一緒にあるというのです。そうではありませんか。汚くてにおいがする同じ場所で、永遠の生命が芽生えるのです。これは明確な概念です。いつでもトイレに行けば、それを考えなければなりません。お父様のみ言を考えて、「真の愛と連結された神聖なところだ。すべてのものが神聖だ」と思わなければならないのです。いつも忘れずに覚えていなければなりません。

最も貴い生殖器が汚いところに連結されています。おしっこがどこから出てきますか。誰もこのように重要なことを一度も考えてみたことがありません。そのようなことを知らなければ完成は不可能です。春に種を蒔く時、その種を水で洗いますか、肥やしで覆いますか。肥やしで覆います。汚くてにおいがする肥料で覆います。地に埋めて踏むというのです。

生殖器と小便や大便をするところとは、最も遠いですか、最も近いですか。偉大な人は、汚いところに行って尊敬されなければなりません。生命の場には肥やしが必要です。きれいなところはありません。砂浜にはないというのです。男性は、においがぷうーんと、何と言うのでしょうか。みそ汁の味がしなければなりません。女性は清潔でもかまいませんが、男性は少し不潔でなければなりません。出掛けて帰ってくれば、足のにおいがぷうーんとしなければなりません。あまりにも清潔だったら、はえも来ません。はえさえも訪問しません。そこにありの子がくっつきますか、何か鳥の子がくっつきますか。

結婚とは何ですか。生殖器を合わせるための運動ではないですか。そうですか、そうではありませんか。これは下品な話ではありません、神聖な話です。人間の最も高貴なものが生殖器です。そこから生命が引き継がれ、理想が引き継がれるのです。限りなく貴いものなのに、便所に近いところにあります。男性と女性の生殖器は、毎日のように便座に座る時、どうなりますか。肛門だけが座るのですか。すべてが座るのでしょう？　私は男性ですから、女性のことは分かりませんね。女性もすべてが座りますか。答えてみなさい。

人間にとって最も貴いものとは何だと言いましたか。生殖器です。生殖器は最も神聖なものでありながらも、生殖器に最も近いものが最も汚いものでもあります。男性の生殖器からは小便も出てきます。それは、なぜそうなのでしょうか。それが宇宙の神秘です。また女性の生殖器から最も近いものが何ですか。肛門があります。それは毎朝使用するでしょう？　小便もそうです。でも、おかしなところにあると考えてはいけません。それを讒訴する言葉を聞いたことがありますか。何も言わず、何でもないというのです。霊界に行けば高い位置に行きたいと思うのと同じように、最も卑しい所へも行って住みたいと思わなければなりません。

女性の生殖器から何が出てきますか。生命が出てきて、その次に、何が出てきますか。小便が出てきます。糞のいとこです。私もそれが不思議なのです。全く、それがなぜ好きなのですか。おじいさんとおばあさんも、神様もそれをつかまえることができなかったと嘆息しています。気がついてみると、そうだというのです。あぜんとします。それが何だというのですか。

愛は人間にとって貴いものです。人間の愛が貴いものなのに、その貴い愛の器官の前に、最も嫌っているのに近くにあるものとは何ですか。それは何ですか。小便をどこでしますか。女性も男性も、それが生殖器と連結していますか、していませんか。気分が悪くありませんか。

最も良いものは何ですか，指が良いですか、頭が良いですか。何が良いのですか。男性にとって何が良いのですか。男性と女性において最も責いものとは、どこですか。生殖器ではないですか。どれほど貴くて、サムサルバン（三つの災いが重なった不吉な方向）の侵犯を受けず、保護するようにきちんとつくっておいたのでしょうか。通るたびにこれに触れるようになれば大変なことになるので、さっと保護してあげるのです。男性と女性、みなそうです。私が神様でも、ほかには取り付けるところがありません。それをつくって組み立てる時、これをどこにもっていって取り付けたでしょうか。ここにつけますか。ここにしておいたら、男性と女性が二人で歩く時、どうなりますか。

四) 生殖器を中心に縦横のバランスをとらせなければならない

建築する人たちは、三角定規一つで、すべて設計するでしょう？　さっさっさっとすべて設計するでしょう？　それと同じです。人を見てみれば、重要なものがどこにあるでしょうか。真ん中の垂直線形態に沿ってあるも

のが一番重要です。それが何ですか。生理的体の形態、この体においてそれは何ですか。鼻です。鼻をふさいでみてください。この鼻を通じて、生命の要素が通るのです。それからどこに下りていきますか。へそに下りていって、どこに行きますか。生殖器です。女性の生殖器は逆さまになっていますか。横的になっていますか。私には分かりません。女性がよく知っているでしょう。男性の生殖器は縦的になっていますか。それを知らなければなりません。縦的な基準を備えたすべてのものは神聖だというのです。生命の問題と直結されているのです。

皆さんの顔で、この水平（口の線）とこの垂直（鼻の線）がまっすぐな人々は、良心が正しいのです。これが九〇度になる人々は、良心が正しいのです。一番重要なところです。へそが左によってもいけなくて、ぴたっとセンターラインになって、あごまでこのようになり、唇がここにありますが、この鼻がこのようになって、血管があるところまでこのようになっている人は、出世する人です。これが、おしりともぴたっと合わなければなりません。このようにして腰も九〇度、おしりも九〇度が合わなければなりません。このように考えるのです。

目は横的になっていて、鼻は縦的になっているでしょう？　この縦的な鼻を通じて口と食道を通じ、胃腸まで縦的に通じるのです。縦と横が調和をなさなければなりません。縦的な口や横的な目がゆがんでいたりすれば、既に人の性格が変わるのです。男性と女性の生殖器も、縦的な面に拍子を合わせているのです。男性たちの生殖器は縦的なものと横的なもの、二つがついているのです。それが宇宙を代表するのです。それゆえに、生命の種は男性から、生命の根源は男性から出てくるのです。米国の女性がいくら誇っても、赤ん坊の種はもてないでしょう？　いくら有名な米国の女性だとしても、赤ん坊の種をもつことはできません。

皆さん、このように垂直にまっすぐにして、これがどこに通じるのですか。生殖器と通じるのです。それが垂直の通過点です。それゆえに、神様の希望の場所です。体は、ここに九〇度で一つにならなければなりません。今まで人間は、心と体が正しくありませんでした。心は垂直的私です。体は水平的私です。どこからですか。垂直的父母、水平的父母、垂直的父母と水平的父母が一緒に私をつくったのです。彼らから真の愛、真の生命、さらには真の血統を受け継ぐようになったのです。自分がそのようになっているのです。真の愛で一つになって生まれたのが私です。私は宇宙の中心であり、愛を代表した存在だというのです。水平的愛と垂直的愛が合わさって一つとなった真の愛の中心存在です。それが正に私なのです。

人は、縦的なことを考えるので立っています。頭がここにあり、生殖器が中心です。皆さんが脱いで鏡を見れば、男性たちは下の生殖器まで毛が生えているのですぐに分かります。これがゆがんではいけません。女性もおっぱいがありますが、これがすーっと合わなければなりません。おしりが大きくてもいけなくて、すべてが合わなければなりません。ああ、笑うことはありません。このようなことに感動することができなければなりません。

なぜ私たちの体は相対的になっているのですか。焦点を合わせるためにそのようになっているのです。耳も目も、すべて焦点を合わせるのです。また、口も神経を中心に焦点を合わせているのです。そして、これが真ん中から下には、へそと生殖器が直線になっているというのです。それを恥ずかしく思うのは間違いです。

目の焦点も中心を中心として一直線上にあります。これとこれが合っているでしょう？へそから生殖器まで、ぴったり合わなければなりません。それで、二つをくっつけました。それゆえに、共鳴するのです。なぜ、そこにくっつけたかといえば、共鳴しなければならないからです。共鳴してこそ意識をするのです。

唇も焦点が合わなければならず、手と手も合わなければなりません。これがずれれば事故が起きます。口がいくら大きくても、すっと突き出て鼻筋と合い、へその緒と合い、あの下の重要な生殖器と合わなければなりません。鏡を見て、自分自体が合っているかを見て、私はどのように生きるべきかということもすべて知らなければなりません。子供の時から、こうなっているからこのようなことに注意すべきだ、と教育しなければなりません。それを教育できる教材がありません。そのような話をすれば、きりがありません。

目を見る時、目がただあるのではありません。垂直に沿ってあるのです。人の目がゆがめば良くありません。垂直にならなければなりません。鼻は、アダムとエバを象徴します。目は神様の象徴です。歯は万物を象徴します。三十二本の歯は、四掛ける八で三十二（４×８＝３２）、すべて万物世界の表示的象徴です。このような視覚的なすべてのものが、どこに行って実を結ぶのかというと、頭ではありません。生殖器です。様々な神経の王宮が生殖器です。それは生理学を研究すれば分かります。

男性は、なぜそれがとがっているのですか。女性も突き出るようになります。それは、山脈が途絶えるような形になっています。明堂地（ミョンダンチ：風水で墓地として使うのに非常に良いとされる所）はそうでなければなりません。左の青龍、右の白虎という言葉もすべてそのように展開されるのです。それゆえに、愛のひもを通じて父母の愛から連結され、愛の生殖器と共に垂直にならなければならないのです。

すべてのものは球形に似ています。すべてのものは運動をしなければなりません。体の中で、人間の中で最も球形に似ているのが顔です。顔の中で最も球形に似ているのは目です。それから、男性においては生殖器の周囲にあるものです。私がそのことまで話をしなかったので、話さなくてもよいのです。それから、体の中に入っていって何がありますか。腎臓、それから膀胱、それはすべて重要な器官です。そのようなことを考えてみましたか。

すべて種が流れ、これが結実できる、それが生殖器です。そこにすべて集まるようになっています。悪いもの、良いものがそこにすべて集まるようになっています。ですから、これを正しく使えば良い人になり、使えなければ最も悪い人になります。

鼻先とこれが合わない人は、良心的な人になれません。これは常識的に知っておかなければならない問題です。これがへそを通って生殖器まで、ずーっと直線にならなければなりません。男性たちを見れば、毛があります。女性は毛がないでしょう？　女性たちの胸に毛がありますか。男性の毛はこのように二つの側がつながっているのです。それも主体と対象です。二つが一つにならなければなりません。

鼻先と中央がすべて合わなければならず、へそと生殖器とすべて中心が合わなければなりません。それがゆがんでいれば、その人は星回りが悪いのです。人生は平坦ではありません。人をぱっと見れば、これを合わせてみて、目が平等になっているかをすべて見るのです。肩からすべてのものがどのようになっているかを見るのです。歩く時、このように歩く人はみな良くありません。ここに数百人が集まっていますが、この人たちの歩き方は、同じではありません。すべて違います。自分の性格を表すのです。ある人は、このように歩く人もいます。そのような人々は、すべて変えなければなりません。いつも定着することができないのです。

頭が立っているのを見れば、まっすぐではないですか。ずーっとまっすぐです。人の重要な部分は頭と生殖器です。ここから直接下りてくるのです。ここで分かれました。頭で考えるすべてのことは、夫は妻を考え、妻は夫を考えます。愛を中心として考えますが、それが生殖器、そこで一つになるのです。

おっぱいが一つになっていますか、垂直になっていますか。へそは中央にあるのですが、円形のへそになっていますか。その次に、これが生殖器までずーっと連結されているのです。水が流れればどこに行きますか。低い所を通ってどこに行くのですか。座って仕事をする時、一番たくさんぬれるのが下部の中央です。汗が途方もなくたくさん出ます。それで、毛がたくさんはえているのです。ここはみなそうでしょう？　水がそこにすべて集まるというのです。

鼻が良い形であれば、金持ちになります。それが分かりますか。さっと見る時、あてはまらなければなりません。ここがすべて生殖器まで、へそまで線が合わなければなりません。これがずれれば相対が揺れます。結婚する時は、丸裸になってへそを合わせてみて、胸を合わせてみて、すべていったんぴったり合えば、夫婦間が理想的になるのです。生殖器もゆがんだ人がいるというのです。女性もどちらか片方に偏って、垂直にならなければ遊び人になるのです。未亡人になって死ぬようになるのです。創造の原則がすべてそうです。

人体で最も貴いものが目です。目が最も貴いのです。それから心臓です。心臓も丸いのです。また、女性は子宮が丸いのです。男性は何ですか。男性の生殖器も丸くなっているでしょう？　丸いものは貴いものです。女性たちは骨ばっていません。肉体が丸いので、美術家たちは女性の裸体を描くのが好きなのです。

顔を中心として、へそから生殖器まで、ぴったり合わなければなりません。一度、自分の体を病院に行って調べてみてください。そして、歩く時は、ぴたっと中央に伝達される重さが同じなので、くつ底が一定に擦り減らなければなりません。そうです、くつを見てゆがんでいる人は間違っています。正しい人は道人になるのです。そのようなことを考えてもみなかったでしょう？

人の人相を見ようと思うなら、ここからどのように下りてくるかを見るのです。これがずーっと生殖器とぴたりと垂直になってこそ、良心的な人です。それがずれれば困るというのです。胸が片方に寄っていても駄目で、へそが寄っていても良くないというのです。きょう、そのような話を聞いて帰って、夕方鏡を見て、「私はこのようになっているからこうしなければならない」と言って引っ張るかもしれませんね。そのような運動はしなくてもかまいません。

座るのも、まっすぐに座らなければなりません。歩くのも、まっすぐに歩かなければなりません。歩くのを見れば、ありとあらゆる人がたくさんいます。何千人がいたとしても、みな歩く姿が違います。それで、歩く時は、いつでもこのてっぺんとここ、生殖器をぴたっと垂直に合わせて歩かなければならないのです。縦的なものを中心として、すべての器官が動かなければなりません。そうすれば、神様がそれを見て、「やあ！　男性と女性が私の願ったとおりに歩いているなあ」と関心をもち、霊界が関心をもつのです。

人を見る時、頭からすーっと下りてくれば、鼻があるでしょう？　その鼻を過ぎて、唇を過ぎて、へそと生殖器に通じるのです。この縦的な線を中心として、目ですべてどのようになっているか、横的によく合わさっているかということを見るのです。耳も見て、肩も見て、歩くのも正しいか、すべて見るのです。それゆえに、歩くのもいい加減に歩いてはいけません。歩く姿は、その人の一生を象徴するのです。

人間について考えてみるとき、人間の体の中で最も貴いものは何ですか。円形によく似たものが貴いのです。そのように見るとき、人の目と心臓、その次には、男性の生殖器です。男性の生殖器には、目のようなものが二つあります。男性にはありますが、女性にはそのようなものがありません。貴いものです。目が本当に貴いでしょう？　目は神様を象徴するのです。心臓は生命を象徴するものであり、生殖器は愛を象徴するものです。頭は神様を中心とした監視器官です。

座って、ぴたっと広げて、このように力を入れるのです。空気を吸い込んで、目の玉が飛び出るように力を入れるのです。こうすれば、疲れがすべて吹き飛びます。ふさがっていた鼻の穴がすべて開くのです。これを一日に四回するのです。四回以上はしません。簡単でしょう？　トイレに行ってするのです。トイレに行ってあとを見なければならないでしょう？　あとを見る時、力を入れるのが呼吸です。それに合わせて、血管と共にすべてのものを授受作用させるのです。そうすれば、女性は生殖器が飛び出してきそうな気分になります。肛門が出てきそうな気分になるので

す。鼻をぴたっとつまんで「フン！」とすれば、ぽんと飛び出てくるのです。一日に四回ずつ、してみてください。

五) 愛は学んで知るものではない

愛の表示を教えてくれないものはないというのです。動物を見ても、よく見えない昆虫のようなもの、手でつかまえればぴたっとくっついて消えそうなほど小さいものも、そこに目があり五官があります。ありますか。見たのですか。何を見たというのですか。このようなことを考える時、なければならないというのです。それにも生殖器がありますか、ありませんか。雄と雌がいるというのです。その雄と雌が何をもって一つになりますか。焦点が何ですか。愛でしょう？　それは否定できないのです。

教育は必要ありません。フリーセックスだの、性教育だのと言っていますが、この狂った者たち、やめなさいというのです。動物世界で性教育をしますか。そばにさえ行けば、自動的に合わせます。あるものは生殖器が羽の付け根の中にあるのですが、かかとでそれに合わせます。自然に合うようになっています。磁石が南北に通じるのは、「合わせろ」と言うから合うのですか、自動的に合うのですか。自動的に合うのです。神様の愛があり、真の愛に一致することができる心と体になれば、ほっておいても、自分で東西南北の方向を正しく探し当て、自動的に行って合わせるというのです。

動物たちが愛する時、どのように生殖器を合わせますか。体よりも大きいのが生殖器ですか、小さいのが生殖器ですか。小さくても、体を引っ張っていって合わせるというのです。愛のために引かれていくのです。それは、強制的に引かれていくのですか、好きで引かれていくのですか。好きで引かれていくのです。自動的に天国に入っていくようになっているのです。

すべての動物たちの雄、雌の生殖器は、羽の付け根にあったり、ありとあらゆるところにあるのですが、それをどのようにして合わせますか。教育が必要ですか。合わせるための教育が必要ですか。教育を受けなくても、擦り合わせているうちに、すべて合うようになっています。それを教育するといって性教育するのですが、それはサタンがつくったものです。教育は必要ありません。

最近では、病原菌までもが夫婦で相対になっているといいます。顕微鏡で三百万倍に拡大して見るのですが、その雄の中にも目があるでしょうか、ないでしょうか。鼻は？　耳は？　口は？　生殖器は？　そのような小さなものも、生殖器を合わせることができますか。いったい誰が教えてあげたのですか。皆さんが嫁に行く時、「おいおい、生殖器はこのように合わせなさい！」と心配しながら嫁がせる父母がいますか。自然に動かせば合わさるようになっています。自然合徳です。強制合徳ではありません。人は和合して和動が展開されるのです。一つになるのです。

神様は、男性と女性の生殖器をなぜそのようにつくられたのでしょうか。天地がすべてその教材です。動物たちは、どのように愛するのかを見せてくれる愛の教材です。動物の中には人間が尊敬すべき動物が多いのです。

学校に行ってみれば、最近は先生と学生とが闘うでしょう？　それは「ため」に生きる愛を知らないからです。天理の根本を教えてあげることができませんでした。より「ため」に生きる人が偉大な愛を占領することができるのです。愛には相続権があり、同参権、同居権があるのです。愛はそうでしょう？
愛する妻の前に金の塊を置いておいて、「それは私のものだ」と言い、体だけゆだねてあげながら、「あなたが好むのは愛なので、私の生殖器だけを受けなさい」と言うのですか。それが愛ですか。そうではありません。万物を捧げ、息子、娘をすべて捧げて、自分の体、自分自身まですべて捧げようとするのが愛です。

五、生殖器を通して天国と地獄が分かれる

生殖器が貴い生殖器になる時、天国に連結されることができるのです。間違いありません。小学校からそのような重要性を教えなければなりません。男性と女性が追求する目的は、愛の生殖器だというのです。凹と凸にできているのは愛のためだというのです。それは事実ですか。なぜ、この生殖器が異なっているのですか。愛のためです。どのような愛のためですか。真の愛のためだというのです。永遠の愛、不変の神様の愛のためにあるのです。

生殖器が地獄と天国に分けてしまった、ということを知らなければなりません。これを間違って使えば地獄と連結し、正しく使えば自然に天国に至るのです。出発地は一つであって、二つではありません。愛の行為がどれほど重要かというのです。もう、皆さんも分かりましたね？　はっきり分かりましたか。すべての女性と男性たちが家へ帰って、「今、真理が分かった。今から実践してみよう！
これが、私たち家庭の希望の本拠地だ」と言うことができるようになれば、すべての解放が展開されるのです。結論は、宇宙的宣布と共に私たちは宇宙的宣布の内容を知って、生殖器を保護しなければならないということです。母が、エバが堕落しました。その次にカインが滅ぼしました。破壊しました。アベルがそれを助けて滅びました。それで、統一教会では、母の世界団体をつくったのです。

地獄と天国がどこから出発したのか、それを考えてみてください。どこから出発しましたか。空中ですか。どこですか。生殖器です。深刻でなければなりません。ここが天地をひっくり返して打ち込みました。それを否定することができますか。レバレンド・ムーンの「原理」の本にある堕落論理を否定する道はありません。神様に尋ねてみてください。みな調べてみてください。そのような答えをもらえずに、自分たちは夢でも、聞くことも、知ることもできなかったことを、レバレンド・ムーンが理論的体系をつくっておいたので、反対する道、反対する道理がないのです。

最も恐ろしい地獄に行くこととは何ですか。天理で決めた生殖器の反対の道を行けば地獄へ直行であり、これと反対に、正当な神様の絶対愛の道を行けば天国の高い所に行くというのです。すっきりとした結論です。

堕落することによって、男女の生殖器がこのよこしまな死亡の波、死亡の法、滅亡の地獄を開門させた本宮になり、天道を破綻させ

た魔物になったがゆえに悪いものになりました。これが、今まで歴史に隠された秘密でした。

生殖器が解放されなければならないというのです。それで、今フリーセックスの反対になるものが絶対セックスです。絶対セックス、唯一セックス、不変セックス、永遠セックスです。その四つのコンセプトがどれほど誇らしく、貴いでしょうか！　その二人がただそのままでいれば、どのような変化もあり得ません。これが真の愛の根です。ここから真の愛が出発するのです。

今、サタン世界では完全に生殖器がすべて壊れてしまいました。フリーセックス、レズビアン、麻薬がはびこっています。麻薬は精神を失わせるのです。人ではなく、動物と同じにさせるのです。動物のような考えしかできないのです。しかし、天国はこれと一八〇度正反対です。フリーセックスではなく、絶対愛のコンセプトなのです。永遠の愛のコンセプトなのです。不変、唯一の愛のコンセプトです。これは、一気に天国に連結されます。地上でそのような基盤を築けば、地上天国になるのです。否定できない理論的な結論です。皆さんの愛の基盤に気をつけなければなりません。

生殖器を誤って使いました。それを革命しなければなりません。ですから父母です。母を立てて女性を動員するのです。「女性連合」を動員して、母の位置の定着です。そこに再臨主が来るのではないですか。メシヤは何をもってきますか。絶対セックスをもってくるのです。絶対、唯一、不変、永遠のセックス完成のために来るのです。

女性は男性の体を見る時、目を見ますか、どこを見ますか。手を見ますか、どこを見ますか。男性を見る時、どこを見るかというのです。目ですか。その次はどこですか。顔、その次はどこですか。下りていってすべての五官がとどまる場所とはどこですか。どの器官が最も悪いものですか。歴史を通じて、生殖器が最も悪いものになりました。それを考えてみてください。地獄が出発したポイントと一八〇度異なる方向だというのです。真の生殖器は天国に入っていくものであり、偽りの生殖器は地獄に入っていく出発点だということを今まで知らなかったというのです。その基盤が生殖器だというのです。生殖器を誤って使用することは地獄に連結されることであり、愛を正しく行うことは天国に行くことです。簡単です。

絶対愛はどこから探すことができますか。キスからですか。絶対愛をどこから探すことができるかということです。絶対生殖器から絶対愛がつくられるのです。それがなければ、絶対愛を探すことができません。どこで絶対愛を探すことができますか。キスすること、見ること、聞くこと、触ることですか。性的な関係からしか探すことができません。これを知らずにいるのです。永遠の愛、永遠のセックス、セックスが定着するところがどこなのか知りませんでした。どこから出発するのかを知りませんでした。生殖器をもっていない人、手を挙げてみてください。皆もっています。それは、何をするためにそのようになっているのですか。それを尋ねると、生殖器

が答えて、「私は二つの生殖器が共にしっかりと結ばれて、絶対愛を成し遂げるのが最後の願いだ！」と言うのです。「ワンダフル！」と言いながら永遠に「ハハハ！」と笑うというのです。

どのように思いますか。その言葉が好きですか、嫌いですか。私は分かりません。米国の女性たちが、私よりもっとよく知っているはずです。嫌いですか、好きですか。それでは、絶対生殖器を願いますか。唯一の生殖器を願いますか。不変の生殖器を願いますか。永遠の生殖器を願いますか。そのようなものをもっているかということが問題です。

その生殖器は誰のものですか。自分のものですか。夫のものです。これを知りませんでした、簡単な真理です。この宇宙のすべての陰陽の道理は、雄、雌です。鉱物世界も主体・対象関係、最近ではバクテリアまでも雄、雌になっているといいます。宇宙がペア・システムになっているというのです。

愛という概念をもって、主体は対象のために、対象は主体のために、「ため」に生まれたというのです。「ため」に生まれたのですが、何のためにですか。愛のためです。愛を完成させるためだというのです。神様がアダムとエバ、二人の男性と女性を造って成熟し結婚させようとされる時、その結婚式を中心として関係が結ばれる生殖器が絶対的な器官になっていて、その器官が絶対的な生命、絶対的な愛、絶対的な血統を植えるための本部だったということを知らなければなりません。

堕落とは何ですか。根本問題、根本は何ですか。アダムとエバが生殖器を自分のものだと思って自由行動をしたということです。成熟すれば、神様を中心としてアダムのものはエバのものであり、エバのものはアダムのものとなって、永遠なる神様と絶対的な愛の基台をつくるためのものだったのですが、それを不信して自分のものにしたということです。それで、これが破壊されてしまったのです。自分のために生きる人は地獄に行くのであり、相対のために生きる人は天国に行くのです。ここから分かれるのです。この生殖器が地獄と天国の境界線です。それを知らなければなりません。

神様の創造理想は絶対夫婦を立てることです。絶対生殖器を中心として、自分のために生きるのではなく、相対のために生きるところから立てられるのです。生まれたのは「ため」に生まれたのです。「ため」に生まれたのであって、「ため」に生きなさいとして生まれたのではありません。生殖器を与えたのは、男性は女性のためです。女性の生殖器は男性のためです。男性のために生まれました。その生殖器をサタンが願うとおりに使うようになり、勝手に原則的な道を行かなければ、地獄に行くのです。絶対愛を中心として「ため」に生きれば、神様の系列に入っていくのです。天国の皇族になることができるというのです。

どこで天国と地獄が分かれるのか、調べてみましょう。空中ですか。どこでしょうか。正に皆さんの生殖器です！　深刻なことです。これが、天地をひっくり返してしまいました。いったい誰が否定することができますか。文先生が発表した『原理講論』の堕落論に説明されています。疑わしければ、神様に尋ねてもいいのです。皆さんとしては夢にも想像で

きない内容と理論をもって、体系を立てておいた文先生の『原理講論』に反対することはできないはずです。目の不自由な人のように、方向を失ったまま生殖器を使用すれば地獄行きであり、反対にこれを神様の絶対愛の基準に合わせて使うようになれば、天国の高い所に行くのです。すっきりとした結論です。

悪なる先祖がいて、善の先祖がいますが、堕落することによって善の先祖が血族をもてませんでした。しかし、この天地の大主宰者であられる神様をサタンも無視することができません。自分の業を実行するためには、必ず善の神様の決裁を受けたのちに行動をするのです。その悪なることで神様の理想世界を破綻させるのです。愛の世界を破綻させる仕業をするのです。終わりの日には、神様の愛の理想のその本拠地である生殖器を完全に破壊させる仕業をするのです。

サタンの血統は、どの部分から連結されたのでしょうか。キスを通じてですか。愛を通じてです。それがどこですか。その起点がどこですか。生殖器です。神様の視点から見るとき、この生殖器が恐ろしい器官だというのです。それを知らなければなりません。

神様は、男性と女性の生殖器をなぜ凹凸につくられましたか。凸凸同士で結んで結婚しますか。凹凹同士で合わせて結婚しますか。全く、狂った者たちです。そんな者たちは一代も行かずにすべて滅亡するのです。独身生活を強調する人は、あの世に行けば、天国と反対の方向に立っています。

ヤコブが母方のおじ、ラバンの家で二十一年間生活して帰ってくる時、ラバン家庭で最も愛する偶像を盗み出してきました。それが見つかれば雷が落ちます。それを砕いて飲み干しました。そのようなことを知っていますか。そうです、宗教圏は独身生活をしなさいといったでしょう？　男性と女性の生殖器を料理してしまったのと同様になれということです。同じことです。はっきり分かりましたか。ですから、堕落をすることができますか。その一瞬間の行動が、億千万世の天地大王陛下をフック（かぎ）に引っ掛けて、解放の日を迎えられないようにしました。それを逆にひっくり返して打ち込むための統一教会の食口（シック）が、祝福を受けて堕落をしますか。あり得ますか、あり得ませんか。

南米に行って、十万教徒を率いた教団の道主に、生殖器に対する話を二時間しました。そして、目がこのように回ったと思ったら、結論として「生殖器の専門家ですね」と言いました。皆さん、おじいさんが生殖器の専門家になれなかったために痛哭が起きるのです。おばあさんが生殖器の専門家になれなかったために家庭が破綻するのです。父母が専門家になれなかったために家庭がめちゃくちゃになって、夫婦がその専門家になれなかったためにめちゃくちゃになるのです。専門家になれば、天地をそのポケットにすべて入れることができるというのです。

皆さんの目は、絶対的なものを願うでしょう？　唯一的なものを願うでしょう？　鼻も唯一的なものをすべて願うでしょう？　他人の鼻と違うというのです。体も絶対、唯一、不変、永遠の体だというのです。生殖器も同

じです。絶対的生殖器、唯一的生殖器、不変の生殖器、永遠の生殖器です。皆さんは、そのような生殖器をもっていますか。なぜ笑うのですか。深刻な瞬間に「ひひ」と笑うので、それを誰が信じるでしょうか。絶対家庭が必要です。絶対家庭、唯一家庭、不変家庭、永遠家庭であってこそ、天国に行くのです。

愛の器官をいい加減に扱えば、罰を受けるようになっています。それが愛の王宮であり、愛の先祖の園です。愛は、そこから出発しました。地上天国の起源であり、天上天国の起源であり、神様の幸福の出発の起源がそこから形成されるというのです。神様の笑いの基台がそこから出発するのです。愛を探し当てて、神様が踊ることのできる場がその場です。その場を尋ね求めていかなければなりません。それは正しいですか、正しくありませんか。このように貴いのです。

愛が中心となって、二人が生命の合一体となって合わさる場、男性の血と女性の血が一つのるつぼで一つになる、その場が生殖器です。その場は、息子、娘より貴く、夫より、神様よりも貴いということを知らなければなりません。子女より貴く、夫より貴く、父母より貴い位置だというのです。それがなければ父母も無価値であり、夫婦も無価値であり、息子、娘も無価値なのです。

そのように貴いために、宝の中の宝として、世の中の誰にも見えないように一生の間、錠前を掛けてもっているのです。そして、その鍵は男性のものは女性がもち、女性のものは男性がもっていますが、それぞれ一つしかありません。一つのキーだけもたなければなりません。フリーセックスのように十個、二十個、もちたいですか。門を開け、主人がいない家のように、過ぎゆく人が全員出たり入ったりする、廃墟の家のようになりたいですか。

生殖器を神様に侍るよりもっとよく侍って、神様よりもっと愛さなければなりません。それでこそ神様が喜ばれます。全く、そのような話がどこにありますか。宗教界で聞けば、びっくりして飛び上がってひっくり返るかもしれませんが、これは明らかな事実です。神様の理想の愛に侍ってこそ、神様が定着することのできる足場が生まれるのです。生命より大切であり、世の中を与え、天地を与え、神様まで与えても取り替えることができないものです。創造物全体を合わせた以上に妻の生殖器を崇拝して、それ以上に愛してその価値を認めてこそ、神様が自分の家に訪ねてこられるというのです。

第三章　人間堕落と復帰

一、人間堕落の内的意味

一) 人間堕落は愛の事故だった

私が糾明した原罪と堕落の曲折は、人間の最初の家庭で起こった天使長との不倫の事件でした。「統一原理」におけるサタンは、観念的存在や仮想の存在ではなく、霊的実体です。神様の愛の理想を破壊し、神様の血統をサタンを中心とした血統に変えた元凶です。イエス様も、ヨハネによる福音書第八章で、人類の父が悪魔であると明確に語られました。神様が、御自分の外的体であるアダムとエバを通して実現しようとされた愛の理想を剥奪した愛の姦夫が、すなわち悪魔サタンです。皆さんには聞き慣れない話かもしれませんが、私が霊界を開拓し、宇宙の根本の曲折を究明

しようと血の涙の闘争をした結果として得た結論が、まさしくこれです。皆さんも真剣に祈祷してみれば、解答を得られるはずです。

宇宙の根本には脱線があり得ません。しかし、この悪魔‥‥。完全に成長する前の未成年の時、十五、十六歳の時に‥‥。女性たちを見れば、十代の時に堕落するでしょう？ちょうどその時です。その時に、天使長ルーシェルをよくよく見れば、その語ることは、天地の道理をすべて知っているかのようだったのです。神様の使いもし、天地創造に対しても話すことができたのです。アダムは無口でむすっとしていて‥‥。

アダムのほうは鳥のひなを捕まえようと歩き回っていた時期です。子供の時には、みなそうでしょう？　鳥のひなでも捕まえに歩いたり、棒を持って蛇でも捕まえに歩いたり、かえるを捕まえに歩いたりして、このようにしながら自然から学んだすべてのものをもって、これから主管し、管理し、それらと親しくなろうとし、完全にそれらと同化した者になろうとしていたので、エバに対して関心などありますか。

堕落とは何でしょうか。天理大道の基準、愛の元軸、天地の軸となるべき中心ポイントが、堕落によって破壊されました。女性が目覚め、天使長が自分に目覚めて因縁を結ぶことによって宇宙の根本を撃破し、恨みの地獄が生じたというこの悔しい事実を、人類は知らなかったのです。サタンが人類の血統的先祖になったということに対するこの恨を、誰が解いてあげなければならないのでしょうか。それは何かというと、王妃となり得る人を、その僕が支配したということです。ですから、宇宙の大道の原則となり得る根本基準が壊れてしまったのです。結局、その悪魔とは何ですか。愛の天国の王宮を根本的に破綻させた親玉です。

なぜ、蕩減や父母権復帰や王権復帰というものが必要なのでしょうか。サタンの愛とサタンの生命とサタンの血統が問題なのです。本来は神様から出発しなければならないのに、悪魔から出発したというのです。ところで、悪魔は、愛という途方もないものを中心として出発しました。愛ゆえに宇宙が生まれました。創造は、愛ゆえに始まったのでしょう？すべての存在の起源となる愛を中心として、創造はなされてきたのです。その根本をサタンがひっくり返してしまったのです。ですから、そのひっくり返った根本を、再びひっくり返してしまわなければなりません。

人類は闘争の歴史を経てきたのですが、なぜ闘争の歴史ですか。善悪の闘争歴史だというのです。悪なる悪魔が神様の理想世界の全権を奪い取っていきました。奪い取ったものはほかでもありません。この全宇宙の中心となる女性と息子、娘を強奪したのです。ですから、神様には女性がいません。女性を通して生んだ息子、娘がいません。本来、そのようなことはあり得ません。本来の女性は、神様の女性であり、女性を通して生んだ息子、娘は、神様の息子、娘にならなければならないのですが、悪魔がこれを奪っていったのです。未成年の時に堕落することによって、このようになったのです。このような論理がなければ、人間の根本を悟らせることはできません。

愛ゆえに生まれたのですが、その価値をどのようにして失ってしまったのでしょうか。愛の反対行動以外には、それを失うことはありません。堕落の結果は何でしょうか。女性が男性のために生まれ、男性が女性のために生まれてお互いの愛を完成してあげるのではなく、その反対になったのです。私のために決着させたすべてのものが、堕落の結果をもたらしたというのです。一八〇度反対の方向に行ったのです。

聖書には、善悪の実を取って食べて堕落したとあるのですが、根本的に愛ゆえに生まれた立場において、善悪の実を取って食べたというその事実だけでは、「ため」に生きる愛の基盤を破壊させることはできません。愛ゆえに生まれた根源を否定することはできないのです。男性と女性が引っ掛かるべき「ため」に生きる愛ではなく、「自分のために生きろ」という愛に二人とも引っ掛かったことが堕落です。神様が創造されたすべてのものはペア・システムになっていて、お互いが「ため」に生まれました。

人間もこのような価値の世界へ入っていくようになっていたのですが、自分を中心として一八〇度反対になったことが堕落です。それは、何を中心としてなったのでしょうか。女性が一番重要に思い、男性が一番重要に思う、その愛の器官を中心として破壊の行動が起きたのです。

神様とは誰であり、悪魔とは誰ですか。悪魔は神様の怨讐です。愛の姦夫です。「女」という字が三つ集まれば「姦」です。これが文総裁によって明らかになりました。人類始祖の堕落の根源となった善悪の実は、男性と女性の生殖器です。それを正しく使えば国が発展し、間違って使えば国が滅びるのです。それが善悪の実です。国王であっても、正しく使う時には国が発展するのですが、間違って使えば国が滅びるのです。それによって家庭が崩壊し、社会が崩壊し、すべてのものが地獄と天国に分かれます。善の実を結ばなければならない場所に、悪の実を結んだのです。

善悪の実とは何ですか。それが善悪の実ではないのですか。みな善悪の実をもっていますか、いませんか。男性の生殖器と女性の生殖器が善悪の実なのです。毒蛇の頭です。イエス様は、なぜサタンを「毒蛇」と言いましたか。なぜサタンを「蛇」と言ったのですか。それが蛇の頭です。毒蛇の頭です。女性も男性もすべてそれをねらっているでしょう？
女性も男性も、みなそうではないですか。

人間にとって最も貴い場所とはどこですか。男性や女性にとって、最も貴いものとは何ですか。女性が女性になったのは、一つのものを中心として女性となりました。一つのもののゆえに、女性が女性になったのです。その一つの場所とは、どの場所ですか。愛の器官である生殖器です。それは何かというと、生命を植える器官です。それは何と良い名前でしょうか！　生殖器ではないですか。「愛の器官」と言うよりも実感がわくのです。説明がなされました。生命を植える道具、それが生殖器です。生殖器を恥ずかしく思ってはいけません。生殖器を韓国語で何と言いますか。韓国語で何と言うのですか。性器を韓国語で何と言うのですか。それを言うのが恥ずかしければ、自分が恥ずかしさをもって生きているということです。韓国語自体が恥ずかしけ

れば、韓国人としての資格はありません。誇らなければなりません！

創造主である神様が、御自身の対象が御自身より何千万倍も立派になることを願ったのであれば、なぜ堕落するように人間を造られたのでしょうか。これが問題になるのです。神様が堕落するように造られたのではありません。堕落してはいけないと警告をしました。「善悪の実を取って食べるな」と警告したのです。その善悪の実とは何ですか。善悪の実とは女性の生殖器のことです。女性は弱いのです。私たちの先祖がエデンの園で暮らす時は、裸になって暮らしたのです。

神様は「善悪の実を取って食べるな！」と命令されました。その善悪の実が何であるか知っていますか。それは女性の生殖器のことです。「全く、そのような話がどこにあるか」と言うかもしれませんが、エバはいつも「お兄さん、どこへ行ったの？　私は寂しい！」と言っていたのですが、このようなエバを天使長が犯したのです。天使長には、彼らが結婚する時まで保護し、育成すべき責任があるのです。

それで、天使も裸になって暮らすのです。服というものは、堕落したのちに生まれたのです。動物が服を着て暮らしますか。生殖器に何をかぶせるのですか。夫婦間で、お互いに恥ずかしく思うのですか。一緒に暮らしている夫婦が裸になることが恥ずかしいことですか、恥ずかしくないことですか。

堕落とは何ですか。生殖器を誤って使用したことです。誤って使用することによってどのようになったのかというと、新郎が変わり、愛する相対が変わりました。ですから、根本的な堕落です。これを犯すことによって、宇宙のどこにおいても、動物世界や植物世界や鉱物世界や人間世界のどこにおいても、ねずみの世界や何かの虫の世界においても、これを前面に立てることができないほど誤ったので、この宇宙から追い出してしまわなければならないのです。それで、エデンから追放したのです。

アダムとエバの堕落も、知ってみれば、この鉄則に背いたことに由来しているのです。アダムとエバは、自分の生殖器が、自分のものだと錯覚したのです。考えてみてください。善悪の実を取って食べたからといって、アダムとエバを追い出したりしますか。神様は、それほどでたらめな神様ではありません。根本的な問題において誤り、宇宙のどこにおいても公認することができなくなったので追放してしまったのです。鉱物界、植物界、動物界の雄や雌においても、すべて愛の相対のために自らの性器を保管しているということを、アダムとエバは分からなかったのです。

戒めに背いたのです。絶対生殖器をもって、絶対的に「ため」に生き、絶対服従しなければなりません。「ため」に生きる愛の基台を神様は願われたのですが、自分を中心として自分勝手に行動してしまったのです。それゆえに、宇宙が「ぺっ！」とつばを吐いてしまったのです。これを再び回復しなければなりません。それを回復しようとすれば、偽りの父母によって失ってしまったことなので、真の父母が来て回復しなければなりません。

男性にとって最も恐ろしい恩讐は、女性です。開いた蛇の口のようになって「男性の生殖器が入ってくればかみついてやろう」と、このようにしているのです。このようなものが至る所に散在していて、これが次の世代に引き継がれているのです。ですから、最も恐ろしいものが生殖器です。

エデンにおいて愛を失ってしまいました。悔い改めなければなりません。エデンにおいて、涙を流しながら神様とアダムとエバが惜別したその何十倍、何百倍の痛哭をしなければなりません。涙と鼻水とよだれの三つが流れ、これがへその線を通じ、あの生殖器を経て落ちなければなりません。これが罪を犯したのです。

アダムにエバを造ってあげたのは、何を造ってあげたということですか。寂しいということで女性を造ってあげて良しとされたのですが、何を中心として良しとされたのでしょうか。女性の何ですか。生殖器です！　凸の前における凹です。凹をつくってあげたのです。アダムはアダムなのですが、エバを何のために造ってあげたのですか。目、鼻、顔ですか。何をつくりましたか。アダムのために、エバの何をつくったのかというのです。凸のために凹をつくったのです。アダムとエバのその場所には愛の源泉があるので、それをつくったのです。凸のために凹をつくりました。最も価値があるもの、愛の根本だということを知らなければなりません。

今は、根本が出てこなければなりません。神様はどうで、天地創造はどうで、人間の始祖はどうだということや、人間が家庭から始めて社会、国家、世界がこのようになるということ、それがすべて堕落によって否定されたので、これを再現し、理論的にぶつかって「そうだ」と認定させることができる個人解放、家庭解放、氏族解放、民族解放、国家解放、天宙解放をなし、神様までも解放しなければならないのです。この途方もない問題がアダム家庭における愛の問題であり、男性と女性の二人が生殖器を誤って合わせたことがこの天宙を爆破させたのです。

生殖器というものは何かというと、愛の本宮であり、王宮です。それがなければ愛は起こりません。それがなければ生命は生まれません。それがなければ血統の歴史性は生まれません。それを否定すれば、あらゆるものは一代ですべてなくなります。なくなるのを神様は認めることができないので、これを存在する立場に立てておき、私が創造に責任をもち、サタンまでも屈服させるのです。たたいて屈服させるのではありません。自然屈服させるのです。自然屈服です。

先生のアダム完成の責任は、堕落のない解放された天宙的な愛の王の位置を復帰しなければならないということです。サタンの血統のすべてに責任をもつのです。恥ずかしさや自分の威信や体面が問題ではありません。自分が最も愛する生殖器を犬の糞の上にも突っ込まなければならないのです。千年、万年、そのような想像もできないことをしなくては、女性を生かすことはできません。それを見たくないので、「新しい天地を造ろう」と言うことができます。神様を迎えて新しい宇宙を造ることができるのです。そのような神様は、サタンである天使長の前に、愛の秩序を破壊させたことに対して着手することができないので、それはどれほど悲惨なことでしょうか。

女性の生殖器を見れば、「これが、何千万年、神様までも監獄にほうり込んできた穴なのだなあ」と思わなければなりません。男性を見るときも、そうでなければなりません。男性の生殖器が、エバが「そうしよう」と言ったからといって、そのように天国をひっくり返してしまったという事実、そのことを思っただけでも、背筋が寒くならなければなりません。

男性五人の中に女性が一人でいる場合、神様は安心されたでしょうか、不安だったでしょうか。皆さんが神様ならばどうですか。それならば、誰に警戒させるでしょうか。

女性一人が最も近いのです。将来の神様の相対となり、御自身の体です。最も近い愛の相対です。戒めを与えるときは、近い人に与えるのです。家を出るとき、自分と最も近い人と最も遠い人がいれば、自分とは遠い人に命令しますか、近い人に命令しますか。近い人に命令をするので、エバに「善悪の実を取って食べてはならない！」と言われたのです。善悪の実とは何ですか。それは、女性の生殖器のことをいうのです。女性が善の男性と出会えば善の息子、娘を生むのであり、マフィアと出会えばマフィアの息子、娘を生むのです。結実がそこにあるのです。

神様が愛を中心として投入して、投入してみると、この宇宙を包括しても余りあるほどになったのです。愛の動機である神様を中心として、この核を中心として、この宇宙の存在世界の末端まで愛の雰囲気で包括してしまうというのです。ですから、霊界に行っても愛の雰囲気であり、地上でもペア・システムを中心として、愛を歌いながら暮らすことができていたはずの私たちの人生行路が、堕落によってこのように悲惨になってしまったのです。このような事実を知らなければなりません。堕落を知らなければなりません。

二) 善悪の実はエバの生殖器

エバは女性ですが、女性の根本とは何ですか。「目には美しい」その存在の核心とは何かというのです。目ですか。顔ですか。手ですか。体ですか。違います。生殖器です。女性は凹であり、男性は凸です。神様は、凸であるアダムを造られ、アダムの前に凹のものを造ってくださったのですが、それが女性です。なぜアダムの前にエバを造られて「良し！」と言われたのでしょうか。神様の愛を中心として見るとき、その愛を完成させることができる道が生まれたのです。それゆえに、神様も良く、アダムも良く、エバも良いというのです。愛を中心として、そのように言われたのです。それは何を中心とした言葉ですか。生殖器を中心として言われた言葉です。おかしな話だと思ってはなりません。

エデンの園において、神様は、アダムとエバに戒めを与えられました。「善悪の実を取って食べてはならない！」と言われたのです。その善悪の実とは、女性の生殖器のことです。女性が王と出会えば王子を生むのであり、マフィアと出会えばマフィアの息子、娘を生むのです。善悪の実を結ぶことができるのが女性です。女性は、夫が立つ位置に一緒に立つことができるのです。小学校すら出ていなくても大統領の夫人になって、愛の関係さえ結べば同じ位置に立つことができるのです。

「取って食べてはならない」と言われたのですが、何を「取って食べてはならない」と言われたのですか。エデンの園の命の木と善悪を知る木は、アダムとエバのことをいうのです。命の木とはアダムのことではないですか。アダムの生殖器が命の木です。それは正しいですか、正しくないですか。善悪を知る木とは何ですか。エバの愛のことをいうのです。マフィアと愛をなせば、マフィアの息子、娘が実を結ぶのと同じです。王と愛をなせば、王の息子、娘が実を結ぶのです。ですから、血統的に悪魔の血統を受け継いだというのです。

聖書を見ると、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」とあります。兄弟の関係なので、手を握ったり、キスしたりしても構わず、すべての木の実を取って食べても構わないのですが、善悪の実と命の木、男性の生殖器と女性の生殖器は、触れることができないようにしたのです。そのように警告したのです。

神様は、何ゆえに創造されたのでしょうか。「ペア・システムだ」と言ったでしょう？何ゆえにですか。愛ゆえにです。神様の愛は、何の愛ですか。真の愛に対して知らなければなりません。真の愛とは何ですか。神様が天地を創造されるようになった動機は何ですか。善悪の実ゆえに堕落したのです。そのような狂ったたわごとはやめなさいというのです。善悪の実とは何ですか。善悪の実が何なのかを知りません。根源を知らず、罪の根が何なのか知らないのです。分からないで、どのようにして病気を治しますか。病人が天国に入っていくことができますか。できません！そのような論理は通じないというのです。

エデンの園にいる者たちを見れば、女性は一人しかいないのです。女性は一人ですが、天使長は三人いて、アダムがいて、神様も男性的です。神様以外に四人の男性が一人の女性を取り囲んでいるので、警戒すべき問題は正にそれです。善悪の実は、女性の生殖器のことをいうのです。

人間の堕落はどこから始まりましたか。生殖器です。この生殖器とは何かというと、愛の王宮です。生命の王宮です。そうではないですか。王の血統を相続するものが生殖器です。最も貴重なものです。それが、堕落してしまうことによって最も不潔な所になったのです。どの国でも同じです。そのような状況です。それが、神様を中心として神聖なものでしょうか、罪悪である卑しいものでしょうか。モーセが造った契約の箱ではありません。神様がつくられた至聖所です。

神様が最高の至聖所としてつくられた場所が生殖器です。堕落する前は、その位置がその場所でした。人々は、堕落論に対してすべてを知ることはできません。それが原理ではないですか。

エデンの園のアダムとエバに、「善悪の実を取って食べてはならない」という戒めを与えられたのです。善悪の実とは何ですか。それは誰の生殖器ですか。善悪を知る木です。女性の生殖器を意味するのです。女性がマフィアと一つになればマフィアの息子を生み、王と一つになれば王の王子を生みます。善の実も結ぶことができ、悪の実も結ぶことがで

きるというのです。善悪の実です。それは、女性の生殖器について言っている言葉です。「善悪の実を取って食べてはならない」というのは、何のことか分かりますか。将来神様は、エバを愛の相対にしようとされたのですが、男性がたくさんいたのです。男性は何人いますか。御自身以外に四人います。

ですから、どのような警告をしましたか。「愛してはならない！」とおっしゃったのです。「善悪の実を取って食べなさい」と言われたでしょうか、「取って食べてはならない」と言われたでしょうか。それは何ですか。女性の生殖器です。警告するようなものがどこにありますか。戒め、訓示するようなものがどこにありますか。善悪の実という果実があったのですか。園の中で関心をもつのは、善悪の実という果実でしょうか、それとも女性でしょうか。私には分かりません。皆さんは、私よりももっとよく知っているはずです。そうではありませんか。

堕落したのですが、何ゆえに堕落しましたか。愛ゆえに堕落したのです。誤った愛が堕落です。ですから、誤った愛がどこから出発したのかというと、誤った生殖器の行動を通してなされたのです。これは公式です。アダムとエバに生殖器がなかったとすれば、人類が生まれることができますか。生殖器がなければ、地上天国が出発することができますか。完全な、真なる、善の生殖器を通して、真なる善の地上・天上天国が生まれるのです。このようになっているのです。真実でない生殖器を通しては、どのようになりますか。地獄が生まれるのです。

堕落した愛を中心として一つになったので、「亡国の嘆き」になりました。最も下品な言葉になったのです。神様が最も精誠を尽くしてつくられた場所が生殖器です。最も精誠を尽くされた場所です。生命の根源がすべて集まった場所であり、理想的、感性的なすべてのものの総合地です。そして、愛の本宮です。愛の出発がそこから展開するはずだったのです。堕落していなければ、生命の起源地です。真の愛の本宮であり、真の生命の本宮であり、真の血統の本宮だというのです。王宮です。「子宮」という言葉があるでしょう？　どこを通して子宮が生じたのですか。その場所を通してではありませんか。愛を通して、男性と女性の血肉が混ざり合うのです。男性の生命と女性の生命が、愛を通して一つになるのです。

堕落したのちに、すべて壊れたのです。最も悪いものに変わりました。神様の懐の中ではありません。それを否定する人がいますか。最高の貴い王宮が、汚い愛の宮、汚い生命の宮、汚い血統の宮になってしまいました。私たちの生殖器の話です。

人間堕落の根本が愛によって成立したので、人類は真の愛を失ってしまいました。神様は、アダムとエバが赤ん坊を生む前に追い出されたので、それは神様と関係がありません。私たち人類の堕落の始祖が生じたのです。その過ちを私たちは知らなければなりません。

女性がどのような男性に抱かれるかによって、善にもなり、悪にもなります。どろぼうに抱かれればどろぼうの子女を生むのです。ですから、善悪を知る木だというのです。善

にもなり、悪にもなるということを知るようになっている木だというのです。聖書は、人間を木に例えているのです。女性はみな、そのような性質をもっているでしょう？　注意しなければなりません。エデンの園で警告しましたが、今も同じです。

善悪の実は、エバの生殖器のことをいうのです。女性は、対する夫によって種が変わるのです。そのような意味です。善の男性に対すれば善の実を結び、悪の男性に対すれば悪の実を結ぶのです。そのようにすることのできる本宮が女性の生殖器です。女性は畑でしょう？　盗賊が来て種を蒔けば、盗賊の子供が出てくるのであり、王子が来て蒔けば、王孫が出てくるのです。

人間が罪を犯した場所は、男性と女性の生殖器です。男性と女性の生殖器というものは、本来、愛が出発する場所です。

善悪の実とは何ですか。女性が良い夫と出会えば、良い赤ん坊を生みます。悪い夫と出会えば、悪い赤ん坊を生みます。私が知ってみると、善悪の実とは、女性のそれについていう言葉でした。女性のそれとは何ですか。若い娘の時期は、「それ」と言えば胸です。胸がどんどん大きくなっていくのを見て……。それは女性の生殖器についていう言葉です。しかし、男性においては、悪の女性が相対になっても悪になりません。善の女性が相対になれば、より一層善になるでしょう？

男性よりも女性のほうが先に成長して堕落する素質が多いので、神様が「善悪の実を取って食べてはいけない！」と警告されたのです。女性の生殖器は、善の人を迎えれば善の実が出てくるのであり、悪の男性を迎えれば悪の実が出てくるのです。善悪の実とは、女性の生殖器について語っている言葉です。男性にそのようなことがありますか。男性にはそのようなことはありません。

善悪の実とは何ですか。善悪の実は、善の男性と関係すれば善の実となり、王と結婚すれば王子を生み、マフィアのボスと結婚すればマフィアのボスを生むのです。善悪の実です。善と悪の実を結ぶことができるものとは何かというと、女性の生殖器です。女性の生殖器を犯してはならないというのです。韓国でも、若い女性を犯す場合、「取って食べる」と言うでしょう？　啓示的です。取って食べてはならないというのです。

堕落がどこでなされたのでしょうか。目ですか、鼻ですか、口ですか。それとも、手ですか、耳ですか。違います。生殖器で堕落したのです。偽りの愛によって、偽りの愛と連結して偽りの父母となり、偽りの父母によって偽りの生命、偽りの愛、偽りの血統、偽りの良心が生まれました。すべてがサタンと一つとなっています。神様と一つになりませんでした。絶対的な神様と一つになりませんでした。神様の反対側と一つになったのです。

善悪の実とは何ですか。愛を誤れば、永遠の悪の実を継承するのであり、愛を正しく行えば、永遠の善の実を継承するのです。その善悪の実は、何かの果物ですか。狂った者たち！　善悪の実というのは、男性と女性の生殖器のことをいうのです。

堕落の根本は愛によって成立したので、失ってしまった真の愛をどのようにして復帰しなければならないかという問題は、淫乱によって堕落して真の愛を失い、生殖器を中心として誤ったがゆえに、その反対にまっすぐに行かなければならないのです。

アダムとエバの堕落とは何かというと、それが自分のことだということが分かりました！　自分のことだということが分かったのです。今回、来て学んだはずです。愛を中心として誤ったというのです。なぜアダムとエバを追い出したのでしょうか。善悪の実を取って食べたからといって追い出したりするでしょうか。そのような無価値な神様ではありません。根本的な問題において誤り、宇宙のどこにおいても公認を受けることができないので、追放してしまわなければならないのです。

宇宙の根本はどこにありますか。堕落していない宇宙の根本は、そこにあります。これが天地を破綻させた邪悪な根拠地になったということを知りました。ですから、自らの生活をいい加減にすることはできません。恐ろしくも、一日の失敗が千万年の歴史をひっくり返し、神様と真の父母と理想世界を完全に下敷きにしてしまったのです。そのように恐ろしい器官です。おしっこをするたびに、それを考えなければなりません。「こいつ、おしっこも正しく出さなければならない！」ということです。

高貴な価値をもたなければならない人間の本然の姿が、堕落することによって逆さまになりました。このようなすべての基準を連結させることができる「宮」とはどこですか。生殖器官です。

三) 悪魔サタンは淫乱によって堕落した

サタンとは、いったいいかなる存在ですか。特にイエス様を信じる人々は、神様の前にサタンの正体をはっきりと明らかにしなければなりません。サタンとは何ですか。姦夫です。愛の姦夫です。そのサタンが父をたたき殺し、母を強奪して生んだ子女がまさしく皆さんです。気分が悪いでしょう？　本当だと信じることができなければ、先生のみ言が本当かうそか、命を懸けて神様の前に一度談判祈祷をしてみてください。

サタンとは誰ですか。神様の夫人となるエバを強奪した姦夫です。エバは、アダムの夫人であると同時に、神様の夫人です。神様の夫人となるエバを強奪した姦夫です。サタンは愛の怨讐です。それゆえに、神様は怨讐を愛するのですが、愛するにおいては、姦夫であるサタンまで「愛しなさい」とはおっしゃいませんでした。サタンは許すことができません。サタンに属した人は愛するのですが、サタンは許すことができません。それは原理なので、皆さんはそれを知らなければなりません。

私たちの先祖がサタンに讒訴され、蹂躙され、虐殺の祭物となってきた恨を解かなければならないのがキリスト教信徒であり、修養の道を行く人であるからには、このサタンの正体を解明しなければならず、歴史的な神様の心情と時代的な神様の心情、そして未来を心配される神様の心情を知らなければなりま

せん。そのようにして、神様が涙を流しながら「おお！　私の息子、娘」とおっしゃることができてこそ、この世の中は戻っていくのです。

本来の主人を追い出し、その妻を奪い、その息子、娘まですべて死の位置に引きずり込んでいく悪党の親玉の立場が悪魔サタンだというのです。このように見るとき、神様の怨讐であり、人類の怨讐である悪魔サタンを許す道がありますか。結局、悪魔サタンは、愛を中心として神様と姦夫の関係になってしまったのです。

ですから、許すことができますか。そのようなサタンを許せば、世の中をすべて破綻させてしまうのです。ですから、皆さんがただそのまま神様の息子、娘となることができると考えることができますか。それゆえに、これを変える日まで、神様と人類は、呻吟と苦痛の道を避けることができない立場で歴史をつづっていくということを知らなければなりません。

皆さんの愛の関係は、どこから始まりましたか。どこから出発しましたか。悪から始まりました。この悪の親玉が悪魔サタンです。どのような因縁をもった悪魔かというと、愛の姦夫だというのです。その姦夫の血肉を受け継いで人間が生まれたのです。そうであるならば、私たちが受けようとする愛は、姦夫の愛ですか。姦夫の血統を通して受け継がれてきた不正な血統の愛を受けようとしましたか。違います。ですから、これが問題なのです。

神様は、希望にあふれた大業を夢見ながら、あらゆる最善を尽くして宇宙を創造されたのですが、その大業と生命と理念のすべての条件が一時に破綻して駄目になった時、天地が真っ暗になったというのです。ここに怨讐として登場したものが天使長ルーシェルでした。このルーシェルを打倒しなければなりませんか、打倒してはなりませんか。神様が最も愛された骨の中の骨であり、肉の中の肉である息子、娘を、ルーシェルが自分の息子、娘にしたのです。このような怨讐の首を切らなければなりませんか、そのままにしておかなければなりませんか。このような問題について、歴史始まって以来、初めて苦心されたお方が神様です。

神様が願われた王子、王女の資格を破綻させ、王子、王女の家庭的愛を破綻させ、王子、王女以後の王孫を破綻させ、神様が理想とされる家庭と天国を破綻させた元凶が、悪魔サタンだということを知らなければなりません。この元凶は、神様の怨讐であるだけでなく、私たち人類の怨讐です。その怨讐の敵将にその国の王宮にいる王族、王族の王子、王女が捕らわれていき、僕の生活をしながら、その僕の世界の子供を繁殖させたというのと同じです。王子、王女を中心として、王権のもとで繁殖していかなければならなかったにもかかわらず、悪なる悪魔の王権のもとで繁殖した群れのようなもの、それが堕落した人類だというのです。

聖書の内容を観察してみれば、人類始祖が不倫な愛をなすことによって、悪魔サタンを中心として父子の関係を結んだという事実を否定することができません。神様の血筋を受

け、神様の絶対的な愛の中で神様の直系の息子、娘として生まれなければならない価値的な人間が、悪魔サタンの血統を受け、サタンの息子、娘として生まれたのです。

ローマ人への手紙第八章に、「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分（実子でなく養子として）を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」（二三節）と記録されています。養子は血統が異なるのです。これが、私たち人間の実情です。

ローマ人への手紙第八章を見ると「御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分（養子）を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」（二三節）とあり、「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分（養子）を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのである」（一五節）とあります。養子にしかなることができないのです。

今、キリスト教徒たちは養子です。養子は血統が異なります。ヨハネによる福音書第八章四十四節を見ると「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている」とイエス様が語られました。ここで「父」と言っているので、血統、先祖は悪魔なのではないですか。それゆえに、割礼とは何ですか。陽部を裂くことです。このようになっています。善悪の実とは、何かの実のことですか。

堕落によって、人間は偽りの父であるサタンに屈服せざるを得なくなりました。人間は、自分たちの父を取り替えてしまったのです。私たちは、真の父である神様を捨て、偽りの父である悪魔サタンと一つになったのです。このようにして、最初の男性と女性はサタンの息子、娘となってしまいました。

本来、サタンとはどのような存在ですか。悪魔という存在がどのような存在かというと、神様の僕です。しかし、この僕が主人の娘を強奪したのです。これが堕落です。聖書に出てくるその堕落とは何かというと、エバが善悪の実を取って食べたことが堕落だというのですが、善悪の実は果物ではありません。僕が主人の娘を強奪したことです。将来、代を継ぐ息子と娘を生んで育て、神様の理想を成し遂げようとしたのですが、僕としてつくられた天使長という輩が、主人の娘を強奪したのです。それが人類の堕落の起源になりました。天地がそのようになったのです。このように複雑に絡んだ内容は、皆さんが「原理」を聞けば大概分かるはずです。

聖書を見ると、善悪の実を取って食べて堕落したとあるのですが、下部を覆ったということはどういうことですか。既成教会において聖書をもう少し知性的に解析しようとする思いさえあれば、すぐに堕落の起源が分かるのです。なぜ下部が恥ずかしいのですか。口を覆い、手を覆わなければならないはずなのに、なぜ下部を覆ったのですか。下部だからといって科（とが）になるのではありません。しかし、下部で堕落することによって、そこが天の愛を蹂躙した恥ずかしい宮殿となったのです。真の愛の泉がわいてこなければなら

なかったのに、悪魔の愛を中心とした偽りの愛の泉が噴き出てきたというのです。ですから、これが愛の基台の中で、最も悪い愛の基台になったのです。

アダムを追い出す時、息子、娘を生んだのちに追い出したのでしょうか、生む前に追い出したのでしょうか。見ることはできませんでしたが、息子、娘を連れていれば追い出すことができますか。涙をもっとたくさん見なければならないのです。「おばあさん、おじいさん、なぜこのように追い出すのですか」と、しがみついて痛哭するはずです。四人が両手両足にしがみついて大騒ぎすれば、それをすべて包丁で切って追い出してしまわなければならないのではありませんか。罪を犯したアダムとエバは分かりませんが、罪を犯していないアダムとエバの息子、娘はそれを見抜くのです。それを知っている神様は、息子、娘を生む前に追い出したのです。

彼らは、追い出されたのちに任意で結婚して子供を生んだのでしょうか、神様が追い出される時、「あなた方は出ていって結婚し、息子、娘を生みなさい」と訓示して送り出したのでしょうか、それとも、そのような話はせずに追い出してしまったのでしょうか。答えてみてください。いずれにせよ、彼らは追い出されたのちに息子、娘を生んだのではないですか。

終わりの日になれば、再びそれを編成して神様の恨を解き、天倫の恨を解くと同時に、人類の恨を解かなければなりません。このようになるのですが、これを知らないで「善悪の実を取って食べてどうで」と……。ここで言っている人の言葉が間違っていると思うならば、首をくくって四十日間祈祷してみなさい。そうすれば、統一教会の文先生がうそを言ったかどうかが分かるはずです。皆さんは、正常な血統を受けて生まれたのではありません。ですから、独身生活を強調してきたのです。子女を繁殖しては困るのです。

神様は淫乱を憎悪します。なぜでしょうか。人間が不法な愛によって天地をひっくり返してしまったからです。この悪の血はどうすることもできません。ですから、修養の世界では独身生活を主張するのです。もし男性が神霊的祈祷の境地に入っていけば、必ず女性が現れて試験をします。必ずこのようなことが起こります。修養の道を妨げるのです。なぜそのようになっているのでしょうか。不法な愛によって歴史が結ばれたからです。善悪の実を取って食べて堕落したという教理をもって、二〇〇〇年まで残ったということはすごいことです。

アダムとエバが堕落していなければ、神様を中心としたアダムの直系の初孫が生まれていたはずです。アダムは初孫であり、真の父であり、王です。地上の国と天上世界の王です。また、真の父母であり、真の長子です。それゆえに、アダム家庭は天国の王室です。

それでは、アダム家庭のおじいさんは誰ですか。神様がおじいさんです。それから、お父さんとお母さんはアダムとエバです。そして、過去の立場を身代わりした観点から見ると、おじいさんとおばあさんは神様の代身であり、また神様は父母の代身です。縦的に見ると、神様が一代圏、二代圏、三代圏を中心として家庭に着陸がなされるのですが、一代圏が横的に展開したのがおじいさんであり、

二代圏がお父さんであり、三代圏が私です。それで、息子、娘を中心として、万世一系の皇室の代を継ぐのです。

なぜ神様がアダムとエバを造られたのか分かりますか。神様も、父母の立場で息子、娘を愛する愛を一度もちたいと思われたのです。それから、アダムとエバと共に、新郎と新婦が愛し合っている愛を一度体験してみたいと思われたのです。おじいさんの愛、それから国を愛することを一度してみたいと思われたのであり、すべてもちたいと思われたのです。すべてもちたいと思われたものを私たち人間世界に伝授され、それを受け継いだのが皆さんの一族であり、皆さんの民族であり、皆さんの国であり、この世界であり、この地であり、あの世の霊界であるということを知らなければなりません。

堕落せずに完成の位置まで行っていれば、アダムとエバは個人完成だけではなく、宇宙史的な完成をしていたはずです。また、神様の愛を中心とした新しい家庭が出発していたはずです。このようにして、家庭から氏族、民族、国家、世界ができていれば、神様に侍る一つの大家族社会となっていたはずです。このような大家族社会の中心は、神様とアダムです。そして、その世界においては、神様を中心としたアダム家庭の生活や一生の路程が歴史的伝統として残されます。その生活様式、風習、慣習、そして生活的な背景が歴史的伝統になるのです。それは、神様の愛によって絡み合った伝統とならざるを得ません。

神様の愛は生命の根源であり、すべての理想の源泉なので、その懐を離れようとしても離れることができず、離れたとしても再び戻ってくるしかありません。アダムとエバの堕落はアダムとエバだけの堕落ではなく、全般的な人類歴史を総合した立場における堕落です。言い換えれば、アダムとエバが堕落したということは、善の父母になることができずに悪の父母になったということを意味します。悪の父母によって悪の子女が生まれたのであり、悪の子女が生まれることによって悪の氏族、悪の国家、悪の世界が形成され、この世界圏内で五十億人類が存続しているのです。このような堕落圏内にいる今日の人類歴史は、喜びの歴史ではなく悲しみの歴史であり、人類も、喜びの人類ではなく悲しみの人類であるということに間違いありません。

このような話を、お金を払って聞くことができますか。自分の家を売り、財産を売って、千年、万年、祭祀を捧げても教えてくれる人はいません。統一教会の文先生以外にはいません。これは宇宙の秘密です。聖書にもこのような内容はないでしょう？　聖書では、「善悪の実を取って食べて堕落した」と言っています。善悪の実とは何かの果実ですか。そのような幼稚園児にも及ばない実力をもって博士学位を検証し、博士学位の総会長になった文総裁を「異端である」と言うことができますか。「異端」という言葉は、端が異なっているということではなく、端が見えないという意味です。私の言っていることは正しいですか、正しくないですか。正しいのです。

この世においても、自分の罪の実相を知っている人がいない場合は、罪を犯した者でも、どこに行っても罪を犯していない人として堂々と振る舞うことができるのです。しかし、とても幼い少年がその人の「罪を犯した現場を見た」と指摘するようになれば、その犯罪

者はそこで屈服するのです。したがって、悪魔サタンを屈服させようとすれば、サタンの正体を暴き、罪状を暴露し、天上と地上において追放運動をすれば良いのです。

神様は永遠の公法の主人公であられるので、神様の前にサタンを引っ張ってきて讒訴しなければなりません。サタンを告訴しなければならないのです。サタンが弁護するのを見て、検事の立場で論告し、どうすることもできないように厳しく締め上げてしまわなければなりません。そのようにして、堕落した天使長ではなく、堕落していない天使長たちが「正しい！　やはり正しい！　正しい！」と言わなければなりません。

四) 堕落によってサタンの血統を受けた

アダムとエバは、堕落ゆえに血統が変わったのです。誰の愛によってですか。神様の怨讐であり、姦夫であるサタンの愛によって、サタンの生命体になったのです。男性の生命体と女性の生命体が、サタンの愛と混ざり合って一つになり、その二つによって結実したものが息子、娘です。したがって、その息子、娘は、サタンの愛、サタンの生命、サタンの血統を継承しているのです。

堕落人間は偽物になったので、接ぎ木しなければなりません。血統的に見れば、皆さんは先祖が違うというのです。なぜ養子にしかなることができなかったのかというと、父と母が違うからです。それゆえに、堕落が血統的になされたという論理が生まれたのです。堕落とは何ですか。血統を誤って受け継いだことです。誤った愛によって堕落したという論理を立てても理にかなっています。
それゆえに、統一教会で愛によって堕落したと主張している話を否定する道理がありません。聖書を見ると、善悪の実を取って食べて堕落したとなっているでしょう？　善悪の実が何なのか分かりますか。善悪の実が木の果実ですか。風が吹けば、落ちて、ころころ転がる木の果実ですか。違います。

アダムとエバの心にサタンが入っていき、一つになったので、サタンの血統を受け継いだのです。愛の多い神様が、なぜサタンを許すことができないのですか。殺人者や強盗も許し「すべて許す」と言われ、イエス様を信じれば「許しを受ける」と言われたのに、なぜサタンを許してあげることができないのでしょうか。それは、人類の血統を汚したからです。それはどういうことですか。神様の立場から見るとき、サタンは姦夫です。愛の姦夫です。何の話か分かりますか。

アダムとエバはサタンを中心として結婚式をしたので、サタンを中心とした愛、サタンを中心とした生命、サタンを中心とした血統を受けなかったと否定することはできません。もし善悪の実を取って食べずに堕落していなければ、神様を中心として結婚式をしていたのです。統一教会の真の御父母様が皆さんを祝福してあげたように、アダムとエバが成熟したのちには、神様が彼らを呼んで、神様を中心として祝福してあげたはずなのです。
なぜ体を打つのですか。サタンの血、神様の怨讐の血を受けたからです。神様の怨讐が誰かというと姦夫です。神様の愛の怨讐です。姦夫です。姦夫の血を受けたというのです。

天国の王権を受け継いで王妃になることができたエバが、悪魔の配偶者となって僕の相対になったのです。これは天地の秘密ですが、先生の時代になって初めて暴露されたので、サタン世界は退かなければなりません。

なぜ神様は悪魔を憎むのですか。キリスト教の論理で言えば、キリスト教は「怨讐を愛しなさい」と言ったのですが、神様は怨讐であるサタンをなぜ愛することができないのですか。愛の怨讐を愛すれば、天地がなくなるというのです。統治法がなくなります。存在法がなくなるというのです。

サタンが神様の理想的愛を破壊し、理想的生命、理想的血統を蹂躙したのです。そのようにして子供を生んだのですが、それが人間たちです。サタンの愛の表示、生命の表示、血統の表示であるその息子、娘を、神様は干渉することができません。

なぜサタンが、今までの人類歴史で修養の道を行こうとする人々に間違いなく来て、うんざりするほどその首を押さえ、背中に乗って、犠牲にさせようとしたのでしょうか。そのサタンが何なのかというと、神様にとっては、神様の家族を強奪していった姦夫だというのです。本来、私たちの母が神様に侍り、平和の王国を成し、平和の天地を成し遂げなければならなかったのですが、父
と私たちを追い出してしまったのです。サタンが入ってきて、今日、人間をこのような姿にしてしまったのです。何かほかの罪を犯したのではありません。

悪魔が堕落させたものとは何ですか。善悪の実を食べてどこを覆いましたか。口を覆いましたか、手を覆いましたか。下部を覆ったのでしょう？　これが悪をまいた種になりました。ティーン・エイジャー時代、成熟していない時期に堕落したのです。この歴史的な人間世界の血統がそこから広がっていったので、それが人間の終末時代において盛んになるのです。

全世界的に、青少年たちがアダムとエバのように、陰で独自的に愛の倫理を破壊させ、天地を恐ろしいとも思わない時になれば、サタンの全権時代が地上に到来するということを知らなければなりません。その時は、神様の撤退が目前に迫ってくるのです。

血統を転換しなければなりません。その理由は、サタンの血統を受けて継承したからです。皆さんは、これをはっきりと知らなければなりません。

堕落とは、神様を中心としてアダムとエバが一つになるべきだったのに、神様の僕である天使長と一つになったことをいうのです。神様の血統を受け継がなければならない人間が、僕の血統を受け継いだというのです。ですから、堕落した人間がいくら神様を「父」と呼んでも、実感がわきません。

これは、神様であろうと何であろうと構うことなく、すべてのことを自己中心的に転結させて考える堕落的本性が遺伝されているからです。それで、すべてが相克的な存在となって氏族と民族を形成しているので、少したてば、すべて分かれるようになるのです。このようにして立てられたものがサタン文化圏です。二つに分かれ、三つに分かれ、すべて

分かれるものは、サタン圏に属しているのです。

血統的に曲折が結ばれたので六千年かかるのであって、そうでなければすべて一日で復帰しています。能力多き神様が、血統的にこれが持病となっているので、こいつを一遍にすべて取り除くと死んでしまうのです。それゆえに、六千年かけてこられたのです。善悪の木の実を取って食べて堕落したのではありません。もしそうであったのならば、どれほど良いでしょうか。

罪の基盤、堕落の基盤、悪の基盤、地獄の基盤、このようなものが、具体的にどのようにして生じるようになったのかということが問題です。アダムとエバに立ち戻って考えてみなければなりません。アダムとエバがなぜ堕落したのかという根源を掘り起こしてみれば、アダムとエバは、神様が命令した「善悪の実を取って食べてはならない」という言葉を不信して堕落しました。二番目は、自己中心的ということです。

三番目は、自分を中心として愛そうとしたことです。これが、堕落した中心骨子の内容なので、この内容と同じようにすることはサタン側だという結論が出てきます。

堕落した人々は、みな不信の愛と自己中心的愛を行った人々です。結局、自己中心的愛を主張しているのが、この世界の人だと思うのです。

無知には完成はあり得ません。サタンとは誰ですか。神様の姦夫です。このような問題を整理してあげたのに、これにすべてふたをして天国に行くのですか。ふたをして救われるのですか。とんでもないことです。でたらめな者たち。そのように信じて救われるのであれば、私たちのような人は、既にみな救われて余りあるというのです。このような苦労はしません。

先生の時代になって「堕落は愛によってもたらされた結果だ」という事実を明らかにしたということは、驚くべきことです。これは、歴史的背景を通して理論的に体系化されたものであり、否定することができない内容です。

五) 蛇が誘惑したということの意味

男性と女性のそれは何ですか。それは毒蛇です。毒蛇のわなです。「蛇が欺いた」と言うでしょう？　蛇が誘惑したということはどういうことですか。それは正に生殖器のことを言ったのです。女性の生殖器です。毒蛇よりも恐ろしい生殖器がどれほど多いですか。同様に男性の生殖器です。その毒蛇のような生殖器で誘惑して強奪しようとします。それを誤ってかみつけば、大変なことになるのです。国が滅び、世界が滅びます。天国、永生の道がふさがるのです。何の話か分かりますか。

地球上に生存する男性と女性は、すべてサタンの生きた毒蛇です。女性の生殖器は、男性のそれに毒を吹き出す毒蛇です。失う日には一族が滅びるのです。それゆえに、蛇で比喩したのです。分かりますか。皆さんは生殖器をもっていますか、もっていませんか。怒った毒蛇が口を開いているのですが、そこに手を押し込みますか。その愛の生殖器を入れますか。

血統を誤って使えば、大変なことになります。血統を使うというのはどういうことですか。愛するということです。ですから、男性と女性は、それを誤って使えば大変なことになるのです。正しい種を植えなければなりません。皆さん、エデンの園の毒蛇とは、何だと思いますか。男性の生殖器です。それを意味しているのです。女性のそれは、毒蛇の口です。口を広げた毒蛇です。毒をもっているというのです。一度連結されれば、すべてのものが終わるのです。天国が一度に破壊されます。生殖器は蛇の口であり、毒を含んだ開かれた口です。

それゆえに、化粧品でよく整えた女性は、美しい蛇だというのです。蛇は、周りで静かに見ていて、近くに来れば、突然攻撃するのです。女性は、あまりにも恐ろしい存在です。蛇の口と、蛇の棒をもっているのです。それが生殖器です。本来は、そのような毒をもつ悪い血統ではなく、毒をもつそのような器官ではありません。しかし、それを誤って使えば国も滅び、家庭も滅び、権威も何もすべて滅びるのです。それはどれほど悪い毒でしょうか。毒を含んだ蛇の開いた口だというのです。

蛇とは何ですか。男性の生殖器です。男性の生殖器が最も好むものとは何ですか。女性のそれです。そうですか、そうではありませんか。ですから、危険千万なのです。火薬の導火線に火を付け、ガソリンまでまいて、少したてば爆発するので警告したのです。男性の生殖器は蛇と同じです。妻たちは、行って夫のものを静かにのぞいて見てください。なぜ笑いますか。露骨な話のほうが理解しやすいので、このように話すのです。

蛇は何だと言いましたか。天使長の生殖器です。実感がわくでしょう？　終わりの日が来たので、今回そのような面のことをすべて教えてあげるのです。女性のそれは何ですか。口を開くというのです。男性が興奮し、お互いが興奮すれば、それが開くでしょう？　それがじっとしていますか。妻をめとるということは、それを合わせるということではありませんか。それを誤って合わせれば、国が滅びるのです。千年、万年、毒が抜けないのです。

男性と女性は、みなとても素晴らしい人たちを願っています。人それぞれ多様に願っているのですが、それをこのような観念から一度考えてみれば、それは毒をもった蛇です。エイズよりもっと悪いのです。一度ここに連結されれば、すべてのものが滅亡するのです。生殖器を誤って使えば、すべてのものがきれいに滅亡するのです。繁栄するのではありません。そこが最も悪い場所になってしまいました。そして、最も恐ろしいものがそれです。とらよりも、ライオンよりも、もっと恐ろしいのです。一度でも誤って使えば滅亡です。地獄に落ちるのです。これは深刻な話です。

蛇とは何かというと、男性の生殖器のことを言っているのです。男性の生殖器は、毒蛇の頭と似ているでしょう？　常に穴を求めて歩き回っているのです。女性の生殖器は、ちょうど口を広げた毒蛇の洞窟とも似ています。一度かんだり、かまれたりすれば、その毒が全身の血管に広がって永遠に死ぬのです。淫乱とは、個人はもちろん、家庭、氏族、国家が破綻する道です。蛇が善悪の実を取って食べたからです。そのことを意味しています。

男性たちは、それをもって女性を誘い込もうとします。

人類がこのように滅びるとは、誰も知りませんでした。最も恐ろしいものです。火薬の筒とすれば、それほどの火薬の筒はありません。それゆえに、三時間に一度トイレに行くとすれば、二十四時間なら、一日に八回はトイレに行くということができます。そのたびに「おい、蛇の頭、出てこい！」とそのように言いなさいというのです。それが、自分の本当の生殖器ならば、神聖な生殖器です。

美人が来てありとあらゆる誘惑をしたとしても、そこに動じることなく越えていくことができるように、崇拝をしなさいというのです。敬拝ではありません。崇拝というのは、敬拝より以上のものです。服従より以上のものです。先生はそのような訓練を受けました。誰が誘惑してきても動じません。人に会って一時間見て、三時間ずっと見つめて、目をぱちぱちさせて……。そうでなくては神様の息子、娘になることは難しいのです。ですから、「宇宙主管を願う前に自己主管せよ」という言葉は、すなわち生殖器を主管しなさいということです。

男性の生殖器は、堕落前の天使長と同じです。二つの舌をもって欺き、誘惑して、完全に地獄にほうり込んだように、そのような蛇の頭のようなものを中心として、再び堕落させる行為をしているのです。蛇がかむというのです。蛇に取って食べさせたというのです。男性にとって、女性を取って食べるということは、そのこと以外に何かありますか。食べるということは、それしかないでしょう。それは恐ろしい器官です。それが天使長、蛇の頭のような男性の生殖器なのです。

根本はどこかというと、女性と男性の生殖器です。生殖器自体が毒蛇の歯と同じです。一度かまれれば、一つの家庭が崩壊していくのです。どれほど名門の家系であっても、それを誤って使えば、あっという間に崩壊してしまうのです。たとえ王族であったとしても、めちゃくちゃになってしまうのです。今日のエイズというものは、終わりの日における神様の審判です。

二、堕落の結果

一) 堕落人間と堕落した世界の姿

(1) 青少年問題とフリーセックス

アダムとエバが青少年、ティーン・エイジャーの時代に、木陰でそのように堕落したのと同じように、世界史的に実を結ぶ審判の終わりの日が来ることによって、今日、全世界の青少年がフリーセックスに陥ってしまったのです。フリーセックスとは何ですか。悪魔のソドムとゴモラのわなです。末梢神経を刺激し、そこでおしまいになるのです。すべて崖の下に落ちるのです。ディスコでどのような踊りを踊りますか。ツイストは蛇の踊りです。蛇は体をねじるでしょう？　ツイストとは、ねじるという意味です。悪魔がまいたとおりに、世界でこれを流行させて、人類を誘惑するのです。

淫行によって堕落したので、終わりの日にはそのとおりになります。青少年がすべて堕落してしまうのです。先祖がそのように種を蒔いたので、収穫期には、そのように青少年

が世界をカバーし、世界を滅亡させるのです。それが今日です。それを否定できません。フリーセックス、フリーセックスというものがどこにありますか。誰がフリーセックスを主張しましたか。アダムとエバです。そうですか。そうではないですか。堕落したので、フリーセックスの先祖はアダムとエバです。

エデンにおいて、フリーセックスによって堕落したのでしょう？　アダムとエバがフリーセックスしたのではないですか。終わりの日にもフリーセックスです。これを救わなければ、すべて滅びなければなりません。それを救うためのものが、先生の生涯です。それを収拾し、渡っていくことができる橋を造っておかなければなりません。それをしなければ、すべて落ちます。男性と女性がすべてそこに落ちて死にました。ですから、太平洋を渡っていくこの橋を架けなければなりません。先生でなければ、橋を架けることはできません。そして、川を渡っていったのちには、その橋は必要ありません。蕩減というそのようなものは必要ないのです。絶対セックス、絶対愛の時代に移っていくのです。

ディスコダンス、酒、タバコ、それらはすべて関係ありません。フリーセックスも関係ありません。ホモセクシュアル、レズビアン、独身主義者たちも必要ありません。いかなる風が吹こうと、泰然と自分自身の位置を守っていくのです。風が吹き、台風が吹き、地球星がどれほど移動したとしても、東西南北が変わらないのと同じように、統一教会の行く方向が変わることはないのです。ですから、ここで一度統一をしておけば、これが最後です。

東西四方から押し寄せてくるこのフリーセックス、淫乱の波を、誰が防ぐのですか。享楽主義、末梢神経の享楽を求めていくこの波を、誰が防ぐのでしょうか。麻薬でも満足させることができません。愛も不足し、麻薬、幻覚剤を求めていく「人種の末」になりました。それが体です。

今、アメリカにおいて皮肉なことは、青少年の間でフリーセックスが蔓延していても、自分の家を離れるということです。これは、一方では天側です。家を出るので、血族から抜け出すことができ、国から抜け出すことができるのです。アメリカの青少年には、世界がなく、国がなく、家庭がなく、父母がいません。フリーセックスを中心として「ホモセクシュアルだ」「レズビアンだ」と言って、男性と女性を否定しているのです。このようになれば、人類は一世紀以内ですべてなくなるのです。悪魔の魔法に引っ掛かってうめいているこの人類の惨状を御覧になる神様の心は、どれほど痛むだろうかというのです。

ヒッピー、イッピーの運動や現実における淪落問題、麻薬問題等は、すべて共産主義者たちの世界戦略のある一面として現れた事実であるということを、私たちは知らなければなりません。フリーセックスやホモセクシュアル、レズビアン・ムーブメントなどのすべてのものは、人間の権利と人間の権威を破綻させる一つの行動にすぎません。このように見るとき、家庭基準を中心とした破綻、社会基盤と教会基盤を中心とした現在の破綻形態は、既に極に達し、誰も、いかなる神学者も、また国家のいかなる力をもっても防御することができない段階に達したと思うのです。

私は、アメリカをよく知っています。このアメリカは「フリーセックスだ」「何だ」と言って、一晩楽しんでグッバイする愛を行っています。すべて個人主義であり、自己弁解主義であり、自分が中心でなければ嫌だというのです。あいさつするのも外交的あいさつであり、目を合わせながらも心は別の所に行っている外交的あいさつです。すべて適当主義による感情、生活風習です。

サタンは、どのような武器を利用しましたか。空気の武器を利用しました。それがタバコです。次に液体の武器は酒です。それから個体の武器は何ですか。麻薬です。このようにして、精神まですべて腐らせるのです。体を腐らせ、精神を腐らせ、鼻の穴から肺をすべて腐らせるのです。ですから、私たちは酒を飲まないのです。タバコを吸わないのです。人類を滅亡させるためのサタンの武器です。神様と通じることができる精神を妨害する要素であるこの三つは、怨讐の最高の武器です。その次には何ですか。愛です。フリーセックスです。愛の秩序を破綻させるのです。そのようなものを私の手ですべて整備するのです。

フリーセックス、ホモセクシュアル、レズビアン、このようなものはあり得ないのです。終末となり、人類の歴史上になかったものが、あからさまに太陽世界に現れるようになったのです。この宇宙においてあり得ないものがあからさまに現れるようになったのです。愛の秩序もすべて完全に破滅です。ですから、アメリカは地獄のどん底になっているということを知らなければなりません。愛の秩序を完全に破壊し、麻薬を中心として、男性と女性の生理的秩序を完全に破壊したのです。それは何かというと、生きた若い青年たちを破壊させることです。道義や秩序というものを破壊させることです。

今日、「性解放だ」、「フリーセックスだ」と言って醜悪になったこの世界を、文総裁の手ですべて直して定着させようというのです。文総裁は、そのようにすることができる医者としての特許をもっている人です。それは、私しか直す人がいません。真の愛を教えてあげることによって直すことができるのです。今後、統一教会を信じざるを得なくなる時が来るはずです。皆さんが信じることができなくても、皆さんの息子、娘は間違いなくそのような道を行くことができるように、むちで追い立てででも案内してあげるべき責任があるということを通告します。既成教会にそのような能力がありますか。注射する薬がありますか。

神様に対して恥ずかしい愛を行ってはならず、人類に対して恥ずかしい愛を行ってはならず、この土の塊に対して恥ずかしい愛を行ってはなりません。今まで、ヒッピーやイッピーだというフリーセックスの輩には、すべてそのような過去の経験があり、ありとあらゆることを行っているのですが、それは自分のためのことですか。それが愛というものですか。人類を破綻させ、神様の顔に泥を塗り、地球星に愛の血を吐くことだということを知らなければなりません。それは、地の塊に血を吐くことと、人間本然の血をまくことと同じです。そこで踊りを踊って何かをして大騒ぎするのです。分かりましたか。

終わりの日に神様が地上天国を形成し、収拾して天上天国に入っていこうとすることをサタンは知っているので、神様とは反対になるものを主張するのです。代表的には、フリーセックスを中心として一つしかない初愛をめちゃめちゃにしてしまいました。初愛は永遠なものです。それを全く価値のない愛にしてしまったのです。このような価値のない愛の天地になってしまったのです。

サタンはそれを知っているので、男性は男性同士で結婚し、女性は女性同士で結婚するフリーセックスの世の中をつくってしまったのです。麻薬によってめちゃくちゃになり、歓楽だけを追求するのです。肉体的満足に酔っていれば、地獄直結の判決を受けるようになります。これを誰が清算するのですか。ほかならない文総裁です。真の父母が清算しなければならないのです。

すべての被造物は、愛を中心としてペアとなって連結しています。その愛を除いてしまえば、砂粒のように散り散りばらばらになるのです。皆さんはどのような愛を願いますか。愛の世界には、個人主義の概念はありません。ペアの概念です。昆虫の世界においてもプラスとマイナス、主体と対象がなければなりません。これがすべての被造物の存在様相です。はっきりと分かりましたか。

(2) 性道徳の紊乱

アメリカでは、どのようなことが起きているのかというと、高位層の人々が性解放というこのような命題のもとで、弁護士ならば弁護士協会に集まった人々が、会議したのちにどこかのホテルに入っていって、お互いに女性を交換しているのです。毎晩自分の友人の妻と寝て、一週間あれば、すべての友人の妻と寝ているのです。

夫のいない女性が化粧しても良いのですか、良くないのですか。それは、街角の売春婦です。街角の売春婦たちはそうでしょう？　結婚していない若い娘がルージュを塗って歩いていますが、ルージュがどれほど汚いか知っていますか。若い人々の本然の自然色が美しいのです。千年見ても醜くなく、美しいのです。その色がどれほど美しいことでしょうか！　それ以上の色を出すことはできません。ルージュではその色を出すことはできないのです。

家庭が滅べば、根本的に滅ぶのです。青少年問題、家庭破綻です。完全な家庭が一つもないというのです。終わりの日においては、女性たちは二人の男性に対するのです。ですから、性解放という言葉も出てくるのです。それをすべて繕い、ぼろきれを繕って、絹の服以上にして神様に着せてさしあげなければならないのが真の父母の責任です。どれほど息が詰まることでしょうか。

シカゴもロサンゼルスも、ニューヨークと同じです。アメリカの大都市は、すべて同じです。サタンは性紊乱、性解放を中心として、キリスト教の中心となる家庭を完全に破綻させてしまえば、今まで世界的に基盤を築いておいたものがすべて崩れると考えるのです。それで、すべてにフリーセックスという注射をするのです。そのようになれば、完全にサタンになるのです。

現在のアメリカにおける青少年の淪落問題を、アメリカ政府が解決することはできますか。それは、軍事力でも、経済の力でも、科学技術でもできません。最近では「性解放だ」と言って、ありとあらゆる邪悪なことが起こっているでしょう？　愛とはそのようなものですか。永遠の生命をもつことができる真の愛がこのようになってしまっているので、ここに何の希望がありますか。絶望です。男性と出会っても絶望であり、息子と出会っても絶望であり、父母と会っても絶望であり、どこに行こうと、会えば絶望です。

世の中が修羅場となったので、エイズという病気が生じました。「性解放だ」と言って、混乱が広がっています。真の愛を見つけることができません。人間の本心はそれを探して訴えているのですが、それを探すすべがありません。世の中は、行けば行くほど傷だらけになるのです。外的世界の愛というものは、すべてたたきつぶすのです。

アダム一人から始まったことが、現在になると「性解放だ」「何だ」と言って、男性の混乱状態が起こるようになったのです。親族の相姦関係まで起きているのです。これは、動物世界でも見ることができない悲惨な現象です。このような家庭破壊と愛の現象は、天の前では許せないことであり、見ることもできない世の中になったというのです。

夫婦が完全に一つになる時は、天運が保護するのです。滅ぼうとしても、滅ぶことができません。家庭の運、社会の運、国家の運、世界の運、天地の運、神様の愛の運勢が幾重にも重なり合って保護するのです。ところで、これ自体を壊すことを世の中がそっとしておきますか。その種子が絶滅するのです。天運の保護を受けたその位置を破綻させる離婚をすることができますか。浮気をすることができますか。今日、性解放を主張しているこの世界を、私の手ですべて整理しなければなりません。きれいに整理しなければなりません。今までそのようなことを整理してきたのであり、アメリカ社会も「文総裁以外にはそれを治めることができる博士はいない」と言っているのです。ドクター、医者がいないというのです。

子女が父母を殺したというううわさや、父母が子女を殺したというううわさが聞こえてきます。甚だしきに至っては、どのようなうわさまで聞こえてくるでしょうか。子供が母と暮らすというううわさまで聞こえてくるのです。最後だというのです。そのようなうわさを聞いたことはないでしょう？　聞いたことがありますか、ありませんか。たくさんあるのですが、ここまでうわさは立ちませんでした。今、そのような時が来たというのです。これを性解放というのです。共産党の世界では、人間を動物と等しく扱っているので、このようなことは問題にもなりません。最後の時だというのです。いとこ、叔父、母を区別しますか。犬は、子と母が交尾してまた子を産みますか、産みませんか。人間世界にそのような時が来れば、終わりになるのです。

最近では、独身生活を強調し、またホモセクシュアル（男性同性愛）やレズビアン（女性同性愛者）のようなものが問題になっていますが、ホモとか何とかいうものは、どうしてそのようになるのでしょうか。そのように

ならざるを得ない内容とは何かというのです。近親相姦関係によってそのようになったのです。おじいさんが孫娘を蹂躙するのです。自ら進んで蹂躙するのです。父親が自分の娘を蹂躙するのです。なぜそのように近親相姦関係になるのかというと、結局性解放という時代、フリーセックスの時代が来たので、思いのままに接触しているのです。接触するのですが、それが遠くの町の知らない人ではありません。最も近い親戚関係において起きているのです。

皆さんが知らなければならないことがあります。今、ニューヨークはどのようになっているのかというと、最高の裕福な人と最下級の人々だけが残っているのであって、背骨のような中流階級の人々は完全に荷物をまとめて逃げていきました。昨年一年だけでも六十万人が逃げていったのです。下流階級はすべてサタンの基盤になっているので、売春婦であり、性解放といって乱れています。ですから、「混乱したニューヨークで子女を教育させることはできない」と考えている人は、すべて逃げざるを得ないのです。今まで、ホテルというホテルは、すべて娼婦たちが売春をする市場になっていたというのです。

(3) 同性愛

私たち統一教会の人たちは、サタンが喜ぶ世界の悪事をすべて消化しようと思っています。アメリカにおいて、ゲイ・ムーブメント（同性愛運動）といって「ホモセクシュアルだ」「何だ」という問題が起きていることを、私が消化します。フリーセックスというものを私が消化します。淪落問題、あらゆるならず者の巣窟、悪党、テロ、マフィアなどを私が消化します。世界で最も難しい問題に私が責任をもちます。それから、共産党を私が消化します。それはすてきなことですか、息が詰まることですか、絶望ですか。すてきなことですか。きまりの悪いことですか、すてきなことですか。誤れば、きまりの悪いものになります。それを知るには知りました。はっきりと知りましたか。

アメリカでは、ゲイ・ムーブメントが多いでしょう？　ホモセクシュアルが多いでしょう？　そのような者たちは、みな創造原理を知らないからです。しかし、創造原理を知っている統一教会の食口たちは、「結婚しなければならない」と絶対的に教育を受けたので、ゲイ・ムーブメントは完全に壊れました。皆さんのお母さん、お父さんは、出ていって踊ってフリーセックスをして、すべて分解され、粉々に壊れて、家庭がすべて崩壊したのですが、皆さんは、いくら踊ったりしても堕落論を知っているので、フリーセックスになり得ますか。

ホモセクシュアルをすることができる法を定めるというのですか。法を定めるのですか。それは、太陽を見ることも恥ずかしく、木を見ることも恥ずかしく、草木を見ることも恥ずかしく、犬を見ることも恥ずかしい話です。そのようなことをして、どうして人間と同じように服を着て暮らすことができますか。御飯を食べて暮らすことができますか。「ホモセクシュアリティーをする者たちはすべて異端者だ」と反対するようになっているのです。

それで、今、アメリカでは何ですか。ホモセクシュアリティーやレズビアン、すべてこのようなものです。相対を否定する文化世界がアメリカで膨張しています。天使に相対がいますか。男性は、昔、神様を裏切ったエバに従っていきましたが、今からは、神様を支持するエバに従っていかなければなりません。それで、日本の女性とたくさん結婚させるのです。アメリカ人は女性の話をよく聞くようになっているのです。アメリカ人にとっては、女性は女王なのです。

一人で暮らす女性が幸福でしょうか。ここにレズビアンの女性とホモセクシュアルの男性が集まったとすれば、先生のみ言を聞いてそれを継続しなければならないと考えますか、直さなければならないと考えますか。「それは間違っている」と、レバレンド・ムーンに反対できるのかというのです。全世界の若者たちは、そのようなものがあるということを知りませんでした。神様に会おうとすれば、永遠の属性をもった、唯一、不変の属性をもった愛をもたなければなりません。それをもたなければ、真の愛の主体に会うことはできず、真の愛の道に同参することはできないという事実をはっきりと知らなければなりません。

ホモセクシュアル、レズビアンを誰の手によって？　レバレンド・ムーン、私の手によってです。生きる屍となっていき、麻薬で病んで死んでいくこの若者たちを誰の手によって解放するのですか。私の手で解放するというのです。それから、フリーセックスを主張し、賭博場を好んでいる人々を、誰が解放してあげますか。アメリカのキリスト教に、誰かそれをする人がいますか。アメリカの教会の牧師の中に誰かいますか。それから、共産党を誰が防ぐのですか。レバレンド・ムーンが防ぐのです。

アメリカのホモセクシュアルやレズビアンのような人々はどうですか。これは自分勝手な愛です。すればするほど破壊されていくのです。破壊をもたらすのです。人間破綻、家庭破綻、子女破綻、国家破綻、世界破綻、宇宙破綻をもたらすというのです。破壊されれば自然になくなります。人間がそうなる時は、この人類が滅亡するのです。

今、アメリカで、レズビアンやホモセクシュアルやゲイのようなものが起きています。それは罪です。罰を受けなければなりません。彼らがもっている病気は、普通の男性と女性、正常な男性と女性が暮らす所にはないものです。彼らには、普通の夫婦にはない病気が蔓延しているのです。愛の原則を破壊させるそのような性病は、罰です。それで、センター・ラブが必要なのです。皆さんは、センター・ラブから生まれたのです。センター・ラブとは何ですか。父母の愛です。これは永遠に否定することができません。絶対に否定することができません。（板書されながら）これ自体を否定して補強することはできても、これは否定することができません。

最近は、「ホモセクシュアルだ」「レズビアンだ」と言って大騒ぎだというのです。そのようなことをすれば滅びるのです。一世紀ももちません。いくらももちません。そのように生きていれば、すべて滅びるのです。アメリカの文化が何を根拠にしているのかとい

うと、破壊的で、滅亡するサタンの愛の文化圏に立っているのです。サタンの愛の文化圏にあるので、それをほうり出さなければなりません。アメリカの文化は、サタンの愛の文化圏に立っています。統一文化は何ですか。これは神様の愛の文化圏に立っています。簡単です。ここでは、フリーセックス絶対反対です。ホモセクシュアル絶対反対です。麻薬も絶対反対です。すべて反対です。

アメリカの女性たちは、「私たちには老いた父母は必要ありません」と言います。老いた父母とは誰ですか。父母、祖父母のことでしょう？　終わりの日において、サタンがそのようにしたのです。なぜですか。サタンは、神様の目的を知っているからです。神様がこの公式をつくりたいと思っていらっしゃるので、サタンはその基盤を壊そうとするのです。誰が攻撃しますか。サタンです。それを知らなければなりません。また、その次には「私たちは、夫は必要ない！　妻も必要ない！」と、このように言うのです。それは本当におかしな制度でしょう？　誰がこのようにしたのですか。サタンです。それがサタンの目標です。ホモセクシュアリティー、レズビアン、これらはすべてサタンによるものです。その次に、「私たちには、赤ん坊は必要ない！」と言うのです。

麻薬を吸い、ホモセクシュアルやレズビアンといったそのようなことを体験した人々が、そこから抜け出すことは、どれほど大変なことでしょうか。人間の地獄です。そのような網に引っ掛かり、サタンのえじきとなっていくアメリカの若者たちを失ってしまうことはできないというのです。ムーニー以外に、誰が救ってあげますか。これをしなければ、アメリカはありません。

男性と女性は横的です。水平です。縦的な愛という基盤を中心として、永遠の愛を中心として、一生の愛を中心として接ぎ木をするためのものが、男性と女性の結合です。東方の人、西方の人が中央線を失ってしまったので、訪ねて入っていってこれを接ぎ木しようとするので、結婚は絶対的にしなければなりません。結婚に反対する人がアメリカには多いでしょう？　ホモセクシュアルやレズビアンのような者たちが多いというのです。息子、娘を生むことを嫌がっているのです。息子、娘をもつことができなかった人は、霊界に行けば不合格者です。それは宇宙の公式です。

今に見ていなさい。邪悪なフリーセックスは一日でなくなります。ホモセクシュアルも一日でなくなります。レズビアン、女性が女性と結婚しているのです。全くそのようなことがどこにありますか！　動物世界の昆虫もそのようなことはしません。これが人間がですか。また、「神様はいない」と言う邪悪な者たちも、すべて消えてしまわなければなりません。唯物史観がすべて消えていくのです。

男性は女性に疲れ、女性は男性に疲れて、毎日のように愛に飢えて回っているので、いつも孤独で、みなホモセクシュアルやレズビアンになって、ごみ箱に入っていくようになってしまうというのです。アヘンを吸って、すべて自滅の窮地に陥っていくのです。それに誰が責任をもつのでしょうか。アメリカの国務省や国防総省が責任をもちますか。大統

領が責任をもちますか。皆さんが責任をもたなければなりません。

アメリカは、終末に天使長の立場となり、天使長国家なので、女性が女性としての資格をもつことができないのです。それで、ホモセクシュアルやレズビアンが出てきて「女性同士で結婚しよう、男性同士で結婚しよう！」と言うのです。天使長はパートナーシップ（相対関係）を認めません。所有権を認めません。女性を認めません。それゆえに、すべてそのようになっているのです。一方では反対しながらも、一方では自らの道を率直に神様の前に提示しなければならないのが、今のアメリカの現実です。レズビアンやホモセクシュアル、家庭破壊というものをきれいに清算しなければなりません。

アメリカ統計局の資料によると、急増する離婚率は、一九七〇年から一九九〇年までで三倍も跳ね上がり、六家庭に一家庭は離婚するという結論が出てきています。そして、全国的に三〇パーセントの子女が片親のもとで育っているという実情です。さらにその上、同性愛夫婦という世紀末的な奇現象まで広がっているのです。

不道徳と淫乱、そして退廃風潮は、享楽主義とともに家庭を組織的に破綻させています。一部の現代人の間では、「伝統的な家庭以外に、同性愛の人々もまた別の類型の家庭を築くことができ、彼らは養子や人工受精を通じて子女をもつことができる」と考えるまでに至っているのです。

今日、世界の問題は深刻です。アメリカのような所に行けば、男性が男性同士で結婚し、女性が女性同士で結婚する同性愛者がたくさんいるのです。全くそのような道理がどこにありますか。生理的に、そのようにならないようになっています。それは一代で全滅してしまいます。すべてなくなるというのです。天運が追放してしまいます。そうだからといって、彼らの心に幸福があるわけでもありません。苦痛は苦痛として受け、より複雑な問題が起きるというのです。それゆえに、環境には、必ず何があるのですか。主体と対象があるのです。皆さんは、これを知って社会生活をしなければなりません。

フリーセックスこそ、この地球星から完全に根絶させなければならない邪悪な風潮です。このフリーセックスと関連した要素は、麻薬、暴力、同性愛、エイズなどのような人類を破滅に追い込む因子ばかりなのです。

今日、ホモセクシュアルやゲイのような者たちが出てきて父母を否定し、夫たちもありとあらゆることを行い、妻たちもありとあらゆることを行っているのですが、これは宇宙の天法に背くことなので、宇宙の刑法による裁きをあの世に行って受けるのです。

(4) 近親相姦

近親相姦関係を中心としたフリーセックス、ホモセクシュアル、レズビアンを中心として「亡国の種」となって滅亡の世界に至るので、これに対して、神様が最後の鉄槌を下したものがエイズです。エイズは、一年から八年の間、潜伏するのです。毎日のように病院に行

っても分かりません。ですから、あなた方には、二世である息子、娘の嫁や婿を正しくもらう自信がありますか。しっかりしていなければなりません。一家一族がすべて滅びるのです。このようなものが韓国にまで押し寄せてきているのですが、無知蒙昧な韓国の青年たちが「それは良いな！」と言うようになれば、滅亡の底無し地獄へ真っ逆さまに落ちるようになるということを知らなければなりません。なぜ近親相姦関係をさせて家庭を破綻させ、国を滅ぼし、世界を滅ぼすようにしたのでしょうか。来られる再臨主は永遠不変の血族をつくるために、数千万代をすべて神様が創造される時に理想とされたその血族をつくるために来られるのですが、サタンがそれを完全に台無しにしてしまったのです。台無しにしてしまったのですが、レバレンド・ムーンがこれに着手したのです。それは、統一教会の文先生でなければ分からないことです。

統一教会は、天のための主流です。主流の位置にいるので、汚された罪悪世界のすべてのものを追い出さなければなりません。ですから、フリーセックスやホモセクシュアルをしてめちゃくちゃになったものをすべて追い出さなければなりません。アメリカは四十年の間で、どうして近親相姦、フリーセックスの世の中になったのでしょうか。フリーセックスを防御することができる専門家は誰ですか。これを防御することができる人は、来られる再臨主です。再臨主を中心として、この終わりにすべてが転換されなければならないのですが、来られる主人公を追放してしまいました。再び戻ってくることをサタンは知っているので、サタンが四十年間でアメリカをめちゃくちゃにしたのです。

それが近親相姦でしょう？　近親相姦と関係するのです。ですから、離婚するのも、本妻が伝統を継承できなかったので、妾が継承することができる時になったということです。その妾たちが被害を受けないようにするために、神様が離婚制度を許可されたのです。第二次大戦以後、女権運動とともに分裂が起きたのです。離婚もすることができる自由環境になったので、天国に帰っていくのに支障がないようになったのです。まさしくそのような時代相が現れたのです。

近親相姦関係が来るということは、絶対的に近親相姦関係を否定する神様のみ旨の世界が来るということを意味します。なぜでしょうか。サタン世界は、神様のみ旨の時が来るのを台無しにするための世界なので、み旨に近い時が来れば来るほど、世の中にはそれと反対になる現象が現れるのです。

終わりの日に離婚時代が到来し、アメリカは新婦国家であるにもかかわらず、このような混乱した立場に置かれるのです。近親相姦関係がここにあるのです。これは、イエス様の家庭で成されて解決するはずでしたが、イエス様の家庭、再臨主を追放してしまうことによって、アメリカ、エバ国家、自由世界が中心存在を追放したので、フリーセックス圏内に巻き込まれ、地獄に完全に落ちて滅びてしまうのです。再臨主が来てこの道を変えておきさえすれば解決するはずでしたが、再臨主を追放したので、そのまま地獄に落ちて近親相姦関係、フリーセックス、ホモセクシュアル、レズビアン、麻薬時代となり、地獄膨張世界になってしまったということを知らな

ければなりません。歴史はそのように蕩減を負っていくのです。

終わりの日にはどのような時代が来ますか。近親相姦関係が起きるのです。なぜそのようになるのでしょうか。イエス様の父親は誰ですか。ザカリヤです。キリスト教では「聖霊によって身ごもった」と言いますが、うそです。無精卵を知っていますか。種がない卵です。卵は同じなのですが、種が入っていないのです。今日、堕落した人間は無精卵です。神様とは関係ないというのです。ですから、永生がありません。

マリヤは自分のお姉さんの夫を盗んだのであり、その息子のイエス様は腹違いの妹と結婚するのです。これは近親相姦です。これが明らかになる日には、道人たちが刺激を受ける内容です。朝起きると、死ぬほど驚くようになっていたというのです。自分の妹を強奪するというのですから、死ぬほど驚くようになっています。

ザカリヤ家庭は、うんうん苦しみながらもそのことを話すことができないというのです。終わりの日に現れるこのような現象は何ですか。近親相姦です。それが、新婦となったキリスト教の運命です。来られる主の前に、世界的家庭を中心として、新婦となったキリスト教を中心として、このような環境が展開するのです。分かりますか。入れ替えなければなりません。それゆえに、キリスト教では、妾が正妻になり、正妻が妾になる運動が起きるのです。

このようなすべての問題を解決することができる秘密を知る人は、来られる再臨主以外にはいません。正妻から盗んでくるということが、蕩減現象として近親相姦関係というかたちで現れる環境になるのですが、それが今、本妻の位置に立ったということが事実ならば、そのままではくっついたまま落ちてしまうので、命令してあげなければなりません。ここで誰かが来られる再臨主を中心として、そこから逃避しなければなりません。しかし、真の御父母様を中心として元に戻っていけるように入れ替えることができなかったので、そのまま地獄のどん底に落ちたのです。

ですから、母親も自分の姉の夫を奪ったのであり、また息子は自分の妹と結婚をするのです。その家庭に破綻が起きるのです。雷に打たれるのです。これは何ですか。このようなことから近親相姦関係が起きるのです。乱交事件やフリーセックスという観念がここにあるのです。

マリヤがエバの使命を果たすことができなかったのです。復帰解放です！　そのようなことも分からないキリスト教は、終わりの日には秋風に散る木の葉です。審判の時には、秋風に散る木の葉のように落ちます。世の中に不信の愛をすべて審判するための風が吹くので、すべて落ちるのです。そして、全世界ではフリーセックスや近親相姦が展開するのです。近親相姦とは何ですか。父が娘と暮らし、息子が母と暮らすことです。おじいさんが孫娘を連れて暮らし、母が息子と暮らすのです。ですから、動物よりも劣るのです。完全に勝手気ままです。

父子関係、夫婦関係という最も近い愛の関係から混乱が起こるのです。サタン世界、悪のその世界の愛の痕跡で、残すことができる

ものは一つもありません。ですから、神様がすべて整理してしまうのです。近親相姦が起きるのです。おじいさんが孫娘と暮らすのです。父親が、妻がいるにもかかわらず、娘と愛を交わすのです。全くそのようなことがあり得ますか。お兄さんと妹と、兄弟同士で暮らしているというのです。そこまで下りていきます。

サタンは、神様が最も貴く思っているものを破綻させようとするのです。神様が最も貴く思っているものは、近親相姦関係の相手ではありません。絶対理想的相対関係を近親相姦関係にしてしまったのです。サタンはそれを知っているので、神様が立つことができる足場を完全に破壊するために行動したのです。

近親相姦は、神様と関係ありません。完全にサタンとペアになったのです。どのアメリカ人もそれを否認できないはずです。これは摂理観です。分かりますか。すべて人生観を一八〇度転換しなければなりません。そのようにしなければ希望がありません。そこには世界、国家、民族、氏族、家庭、個人、すべてありません。すべて堕落し、サタンとペアになってしまったのです。サタンが動けば、人類がすべて堕落と滅亡の地獄に落ちるのです。これがサタンの観点です。

洗礼ヨハネも、イエス様がマリヤを通じて、その非法的な妾を通じて生まれたということをすべて知っていました。それで、ヨルダン川で「神様の息子だ」と証したのですが、よくよく考えてみると「全く、神様が伝統的メシヤを送るのに、妾の子供を送るとは！」と思ったのです。ここで見ると、イエス様は「自分の妹と結婚する」と言い、マリヤは自分のお姉さんの夫を奪ったのです。これは何かというと近親相姦関係です。これが明らかになれば、完全にザカリヤ家庭は滅亡するのです。

なぜ四十年間で、このようにめちゃくちゃになったのですか。再臨主でなければ分かりません。近親相姦関係の解除方法、解決方法を教えてあげなければならないのであり、それは再臨主でなければ分からないのですが、そのお方を追い出してしまいました。それにより、近親相姦関係がこの地上における普通のことだと思うようになり、皆がそれに染まり、サタンと共に地獄拡張世界をつくってしまったのです。キリスト教文化も、本来は導いて回っていかなければならないのですが、キリスト教文化さえも排斥し、何もない貧しい統一教会を中心として回らなければならないのです。

なぜこのような時代になったのでしょうか。離婚問題や近親相姦関係の問題は、このような蕩減復帰原則によって起こらざるを得なかったものだというのです。このような内容をはっきりと教えることによって、堂々と神様の所に戻っていくことができるようにするのです。はっきりと分かりましたか。そのような原則を中心として、早く日本の地に帰ってこの内容を教え、復帰を早めることがエバの使命です。エバが門を開かなければなりません。

イエス様の当時、洗礼ヨハネの妹はイエス様の妹です。マリヤとエリサベツは姉妹、いとこの間柄です。お姉さんの夫であるザカリヤがマリヤを奪ったのです。このようなこと

が近親関係です。このような内容を知っている再臨主です。

マリヤ自身が、自分のお姉さんの夫と関係を結びました。そして、イエス様は妹と関係しようとしたのです。このような近親相姦関係の基準を中心として結末、蕩減原則の結末を見なければならないという原則があるのですが、それを知っている人は誰もいません。唯一再臨主、真の父母しか知らないのです。しかし、そのお方を追い出してしまったので、それがそのまま伝統としてつながれることによって、アメリカは四十年間で、その近親相姦関係をサタン的に拡張して地獄世界をつくってしまったのです。分かりますか。それは神様が承諾なさったからなのです。

エリサベツとマリヤが完全に一つになっていれば、イエス様と洗礼ヨハネが一つにならなくても、ザカリヤは反対できずにどうすることもできなかったのです。ザカリヤが反対していれば、あのような事件は起こり得ません。マリヤが自分の姉の夫とくっついて赤ん坊を生むということがあり得ますか。それに同調することができますか。近親相姦関係というものがここから出てきたのです。この世の終わりの日には、必ずこのようなことが起こります。近親相姦関係が出てきたのですが、ここにおいて、これを知って復帰していくことができる人はほかにはいません。来られる主しか分かりません。アメリカが先生に侍っていれば、あのようにはなっていません。

ヨセフは、マリヤに対してどれほど疑ったことでしょうか。おなかの中にいる赤ん坊が誰々の赤ん坊だということをその時に話していれば、一族が滅亡するのです。全く、このような家があるかというのです。ですから、マリヤは口を開くことができませんでした。「聖霊によって妊娠しました」としか言えなかったのです。その当時、未婚の女性が赤ん坊をみごもれば、石で打ち殺したのでしょう？　これは近親相姦関係です。一族が一気に処分されるのです。そのような立場をマリヤも、エリサベツも、ザカリヤも、洗礼ヨハネも、みな知っていたのです。

そのような関係をもって生まれたイエス様だということを、洗礼ヨハネが知らなかったでしょうか。問題になるのです。「近親相姦関係によって余計なものとして生まれたイエス様がメシヤなのですか」と言ったのです。それは、あり得ないというのです。ヨルダン川の川岸で、天の門を開きながら、そのようにはっきりと教えてあげたとしても、それをすべて疑うことのできる内容が豊富にあるのです。

蕩減復帰原則からそのようなことを知っていれば、イエス様は洗礼ヨハネの妹を嫁にすると考えなければならないでしょうか、考えてはならないでしょうか。このように見るとき、洗礼ヨハネの妹はイエス様にとっては誰ですか。自分の妹です。腹違いの妹です。ですから、復帰していかなければならない家庭において、最後に残された近親相姦関係をそのまま経なくては復帰することができないのです。

今日、新婦国家であるアメリカと自由世界が、キリスト教を中心として新婦の基台を備え、来られる再臨主を迎えていれば、ここで復帰するすべが分かるのです。来られる新郎を追い出してしまったので、悪魔はこれに乗

じて近親相姦関係を拡大したのです。それがフリーセックスになってしまいました。近親相姦関係になってしまったのでしょう？　近親相姦関係の位置に行って、すべて転換しなければならないのです。再臨主に侍り、新郎と一つになっていれば、天国へ戻っていく道が分かったのですが、来られる主を追い出し、神様を追い出したので、悪魔は自分の側を中心として、神様が理想とする家庭と国家と世界を滅亡のるつぼへ掃き捨ててしまいました。最近、全人類がエイズによって滅亡を予告された位置に来ているということを知らなければなりません。先生がその責任をもたなければなりません。

エリサベツが、自分の夫にいとこのマリヤを紹介してあげたというこのような問題があるので、近親相姦関係が生まれるのです。先進国であるアメリカは、このような過程を最後まで行き、そこで転換しなければなりません。神様が承諾したのでこれが生じたのであって、ただ生じたのではありません。近親相姦関係がなぜ出てくるのでしょうか。自分のお姉さんの夫を、妹が強奪するのです。それを近親相姦関係というのです。ヤコブ家庭でレアを入れたのはなぜかというと、蕩減法において、堕落したエバがいなくては復帰時代がなくなるからです。女性世界においてもカインがいなくてはならないのです。同じ道理です。

エリサベツが、聖霊や天の指示によって、自分の夫と自分の妹を関係させたのです。それは、普通のイスラエルの法ではすることができないことです。これが近親相姦です。このようなことがあるので、キリスト教の新婦の立場にいるアメリカが再臨主を迎えていれば、天に帰っていく道が分かったはずなのですが、再臨主を追い出したので、サタンが主人となって全く反対の方向に行くようになるので、近親相姦やフリーセックスでめちゃくちゃになってしまったのです。

マリヤは、イエス様の父親が誰かということを知っていました。ザカリヤとエリサベツも知っていました。洗礼ヨハネも、イエス様が自分と同じ父親から生まれた兄弟だということを知っていたのです。これが問題です。イスラエルの法では、そのような関係は許すことができないようになっています。それは、近親相姦によって不倫したことです。マリヤは、ザカリヤの家庭でお姉さんの夫と性関係を結んだというのです。

今日、終わりの日において、近親相姦を中心としてアメリカの家庭が破綻するということを知っていますか。このような中心存在を中心として、歴史がこれを軸として、すべてが別の世界へ戻っていかなければならないのですが、本妻を追放してなくしてしまいました。ただそのまま流れていくので、すべて敗亡する「亡国の種」になってしまいました。近親相姦、フリーセックス、ホモセクシュアル、アヘン王国時代となり、すべて腐ってしまいました。近親相姦関係によって、イエス様の根源的血族基準をこのように入れ替えなければならない運命があったということを、誰も知りませんでした。

もしこれができていれば、ここで直系のイエス様を中心として、これが長子権のプラスとなり、これはマイナスとなって、これらが一つになって天国に入っていくのです。神様

の懐へ戻っていくのです。それができなかったというのです。このようなことが国家的基準においてできなかったので、世界的終末時代にはそのような世界が展開するのです。

二) 誤った性解放文化をどのように収拾すべきか

(1) 愛の秩序が乱れる終わりの日

真の愛は貴いものなので、真の愛を蹂躙するということは宇宙的な犯罪になるのです。不倫、青少年たちの淪落、家庭破綻、近親相姦、同性愛、形容し難い性犯罪など、今日の現実は神様を悲しませています。創造理想は崇高で、永遠の愛を中心とした家庭理想の成就にあるのですが、なぜこのような結果を招来したのでしょうか。それは終末を迎え、人間始祖の堕落した結果がそのまま結実することによって、すなわち蒔いたとおりに収める世紀末的様相を呈するからだ、と言うことができます。

アメリカの人々はこれを知りません。アメリカには真の愛の基盤がないというのです。最終的には愛によって滅亡するのです。カップルが破壊され、兄弟関係が破壊され、父子関係が破壊されるのです。近親相姦が繰り広げられ、地獄に落ちていくのです。すべて破壊されたというのです。完全にゼロポイント（零点）となり、新しくつくり直さなければなりません。「ワン・ワールド・アンダー・ゴッド！」です。そこには、いかなるカラーもなく、いかなる障壁もなく、いかなる習慣も、伝統もあってはなりません。家庭の父母主義だけが残るのです。それは、父母が子女を愛するように、投入して忘れてしまうことです。それが天国のコンセプトです。

これが根源なので、サタンがこれを完全に破綻させたのです。フリーセックスからホモセクシュアル、近親相姦関係によって、すべて滅ぼしてしまったのです。私たちは、これを完全に克服しなければなりません。地上地獄になっているので、一八〇度反対の道へ行かなければなりません。私たちはこのような理想をもっているので、問題なく、一八〇度を中心として理想的家庭の土台の上に理想的国家ができ、理想的世界を成し遂げることができるのです。

フリーセックスは悪魔です。神様の理想がこの地上から跡形もなくなるようにさせ、足を踏み入れることができなくなるようにする破壊的な作戦です。そして、麻薬を通して精神異常者をつくっておきました。このような所では、正常な立場の天理大道の原則、愛の花、愛の夫婦の理念を探し出すことはできません。このような状態で、神様の復帰の理想を成し遂げることができますか。四十年で、なぜアメリカがこのようになったのかというのです。先日、なぜフリーセックスになったのかということを話しましたね？　話しましたか、話しませんでしたか。どうして近親相姦関係が起きたのか、そのような話をすべてしたでしょう？

フリーセックスと近親相姦関係が勝手気ままに勢力を振るう世の中になりました。これは、どうしてこのようになったのでしょうか。イエス様の時に、このようなことを解決しなければならなかったのです。再び再臨主が来

て、必ず近親相姦関係を解決しなければなりません。しかし、来られる主を追い出してしまったので、自由世界がそれを知らず、今、地獄に落ちていっているのです。みな列をつくって、がけから落ちていくのです。ここで転換するすべが分からないのです。私がいれば、あのようになりませんでした。自由世界が先生を追い出し、四十年間でめちゃくちゃになったのです。これを私が、四十年の間で地獄から再び上がってくる時まで‥‥。そのようなことをすべて詳しく話そうとすれば、きりがありません。

女性一人で完成することができますか。できません。アメリカの女性は、「私は嫌だ。私は結婚しない、結婚したくない、でも子供はもちたい！」とそのように言うでしょう？どうしてそのようになったのですか。「祖父母も必要なく、父母も必要なく、夫婦も必要なく、兄弟も必要なく、すべて必要ない」と言うのです。そして、一人では生きられないので男性同士くっつき、女性同士くっついて、それで慰労するのですか。それが慰労の方法ですか。どこから近親相姦が出発しましたか。その背後はフリーセックスです。

この地上で暮らしている男性や女性は、動物的人間に転落してしまうのです。言い換えれば、性問題においては動物と同じだというのです。これがどのようになってしまったのかというと、おじいさんが孫娘を連れて暮らし、叔父が姪を連れて暮らすのです。このように、理想的愛の圏内では想像もできない破滅的環境を中心として、世の中は崩れていくというのです。母親と一つの家で暮らしながら、娘が父親と愛を行うのです。そのように暮らしながら、テレビに出てきてインタビューまでしています。アメリカには、このような近親相姦関係が二〇パーセント以上あるというのです。

神様は、堕落した人類を干渉することができません。自分の愛していた恋人を奪って子供を生んだのです。そのような所に訪ねていき、その悪魔の隣で愛することができますか。これは空言ではありません。それゆえにローマも淫乱によって滅びたのであり、アメリカも今、淫乱によって滅びるのです。ポンペイのような所に行けば、今も淫乱の痕跡が残っています。三代で近親相姦が起きた痕跡です。アメリカのような所は二〇パーセントがそうです。これは滅びるようになっているのです。

アメリカが、なぜ滅びつつあるのか分かりますか。私が以前警告しました。近親相姦関係がどれほど多いか知っていますか。二〇パーセントです。この国がです！　おじいさんが孫娘を連れて暮らし、父親は、その妻がいるのに娘を連れて暮らしているのです。終末的滅びの徴兆がすべて現れ、天から原子爆弾が投下され、直撃爆弾を受けかねない時代に入っているという、この恐ろしさを知らない先進国家です。そこに私と統一教会が必要なのです。統一教会がなければ、収拾することができません。絶対にできません。

男性は天使長の立場です。それゆえに、アメリカでは、自分の娘と自分の母親までも犯す事件が起きています。親族による近親相姦問題が二〇パーセントを越えています。サタンがおばあさんから、自分の母、自分の弟、自らの娘まで攪乱しているのです。それゆえ

に先生は、そのようなサタン圏を全滅させるために、地獄全体を包囲する作戦を立てているのです。

イエス様が十字架で亡くなることによって、左側であるサタン世界が勝ちました。ローマ教皇庁が責任を果たすことができなかったことによって、フランス革命、人本主義を経て、無神論的物本主義に落ちていったのです。神様を追放し、人間を追放し、物まで追放して哀れな存在になりました。食べるものがなくて苦しんでいるのです。誰がそのようにさせたのでしょうか。

神様がそのようにさせたのです。この民主世界において黄金万能を誇り、キリスト教文化圏の恩賜を知らず、それを天の前に返すすべを知らず、人間的責任を果たすことができずに、動物的人間になってしまったのです。キリスト教文化の背景を中心とした家庭において、どうして近親相姦というものがあるのですか。悪魔の祭物となって腐ってしまったのです。

アダムは、十代で堕落しました。父母の承諾なく木陰で堕落してしまったのです。そのように蒔いたので、そのように出てくるのです。なぜこの時代において、十代が世の中の問題になり、誰も手をつけることができない全権時代になったのですか。これは避けることができません。これを料理することができる唯一の道は、来られる真の父母の道理を知ることです。真の父母の道理を知らなければなりません。分かりましたか。

韓国の歴史において世界的に誇れるものとは何かというと氏族圏です。先祖を崇拝して一つの伝統と純粋な血族を保ち続けるために、神様が摂理の中で残された民族だというのです。ですから、そのような不倫の輩が出てこないように、早く整備をしなければなりません。今、アメリカのような所では近親相姦が問題になっています。おじいさんが孫娘を連れて暮らし、父親が娘と暮らし、兄が妹と暮らし、ありとあらゆる事件が起きています。今、そのような風潮が生じており、八親等同士で結婚するようなことが起きているのです。これをなくして処断してしまうのです。それを整備しなければならない私たちの使命は大きいのです。清い氏族を継承する伝統を守り、民族の道徳観念を継承、養育させなければならない責任があるというのです。

(2) 絶対純潔、血代を汚してはならない

千代、万代純潔を守る血代に神様はついてこられるというのです。千代、万代、直系の血統をいかにして残すかということが、私たち人間の願いであり、人類始祖アダムとエバの願いだったという事実を知らなければなりません。その伝統的な思想は、今でもなくなっていません。なぜですか。神様が計画されたことは絶対的だからです。そのみ旨は、いつか必ず成し遂げられなければなりません。成し遂げることができなければ、神様になることはできません。これは変わることがありません。数多くの宗派の争い、数多くの宗教の争い、数多くの国家の争いは、神様のみ旨ではありません。神様のみ旨はそのようにはなっていません。それは、すべて壊れていくのです。

真の父母は、アダムとエバが失敗したすべてのものに責任を負い、それを解決してあげなければなりません。解決しなければ、真の父母の位置に戻っていく道がありません。父母が蒔いたので、父母となる者が収穫し、悪いものは火で燃やし、良いものは倉庫に入れ、万民が要求する種を分配してあげなければなりません。それが原理のみ言です。真の愛のみ言です。純潔の血統のみ言です。理想夫婦の愛のみ言です。それ以外に人間として訪ね求めていく道はありません。それ以外はすべて消えていくのですが、これは、人間の生命と共に、永遠の生涯と共に行くのです。それほど貴重なものです。

本然の血統を失ってしまった所では、心情文化は生まれません。文化というものは、歴史性を通じて連結されるものです。家庭を中心とし、社会を中心とし、国家と世界を中心として、これが連結されなければなりません。「本然の血統と連結された心情文化世界を完成することをお誓い致します」、純潔な血統を残すことが問題です。それができなければ、自分たちと心情文化世界が断ち切れてしまうのです。あの膨大な天国は、私が暮らすことのできる心情的基盤となっているのですが、心情文化世界ができなければ、その世界が断絶されるのです。それゆえに、心情文化圏を中心とした生活をしなければなりません。

堕落は何によってなされたかというと、淫乱によって堕落したという結論を私たちは話すことができます。堕落論を語る前に、このような話をすべてしなければなりません。サタンは淫乱の神でした。淫乱の神です。神様は何ですか。純潔の神です。これは何のことでしょうか。血統です。血筋のことを言っているのです。サタン世界はすべて淫乱の世界、悪魔の世界です。

清い血統、純潔な血統を維持しなければなりません。神様が堕落したアダムとエバを追放したのと同じように、血統が汚されれば完全に自分を除去してしまい、堕落した人と同じように、再び人類の後ろに回って入ってこなければなりません。今後、責任者には、このような純潔を守っていく人だけがなることができます。この人たちが主流の伝統思想を受け継いで相続していくはずです。祝福を受けた家庭が再堕落することは、許すことができません。この西洋社会は、めちゃくちゃです。

麻薬中毒になれば、どのようになるか知っていますか。愛の中毒は、麻薬中毒よりももっと強いということを知りませんか。偽りの愛の中毒に引っ掛かって、人間がこのように滅びるようになったのです。気分が良いですか、悪いですか。顔は厚かましく、よく整っていますね。女性もそうです。女性が二つの心をもったのです。夫と愛する時、「神様が訪ねてこられる」と思わなければなりません。自分の夫に「神様が降臨された」と思わなければなりません。「寝る場所を今晩きれいに整えなければならない」と言って、あらゆる精誠を赤ん坊の種の時から動員しなければなりません。赤ん坊の時に動員し、兄弟の時に動員し、夫婦の時に動員し、母の時に動員して、四大心情圏を動員したそのような純潔な夫と妻が愛するというのです。そのように考えてみましたか。

女性というものが、どれほど恐ろしい存在でしょうか。女性一人を誤って扱えば、国も滅び、一族も台無しになるのです。また、女性も同じです。夫一人誤れば、国も滅び、自分の一族も滅び、先祖から残してきた純潔の一代がすべて傷つくのです。深刻です。それゆえに、女性の前における最高の真理の真の本体は何かというと夫です。夫に対して初愛を与えたというのです。初愛は交換することができません。神様を与えても交換することができず、アダムを与えても交換することができません。完成した神様とアダムの二人をあげて、初めて交換するようになっています。このように途方もないものだというのです。

神様も干渉することができず、サタンも、つくっておいたのちに「おい、おい！　間違っていた。もう自分もついていくことができない」、このようになりました。ですから、喜ぶ人がいません。それで、自殺する人がますます増えていきます。自分の体にとって最も貴いものとして守らなければならず、このような価値的な愛の本拠地として守ってきた純潔を四方から蹂躙するのです。お父さんとお母さんが保護することができる環境にならなければならないのに、おじいさんから、お父さん、お兄さんへと、このように蹂躙してきたのです。ですから、夢でも男性は見たくないのです。死んでも嫌だというのです。

体を占領しなければなりません！　体と連結した五官を占領しなければなりません！
肉的な愛についていくのですか、精神的な愛についていくのですか。千万回死ぬようなことがあったとしても、貞節を守らなければなりません。結婚する女性と息子、娘たちは、純潔を守らなければなりません。結婚前は純潔を守り、真の人と結婚したのちには貞節を守らなければなりません。分かりますか、この女性たち。

エデンの園で青少年問題をまき、誤って結婚したので、ひっくり返して再び天の側において結婚式をしなければならず、血統を転換しなければならないという論理を理論的に肯定しなければなりません。それで、青少年の絶対性、純潔を主張するのです。絶対性です。絶対的です。何ゆえにですか。絶対的愛ゆえにです。唯一不変の永遠の愛ゆえにです。永遠の愛ゆえだというのです。愛ゆえにこのようになったのであり、偽りの愛ゆえにこのようになったので、真の愛にひっくり返さなければなりません。

生殖器を保全しなさいというのです。オリジナル生殖器を保存する運動をしなければなりません。神様は、純潔な愛の器官を創造されたのです。皆さんは、それを守らなければなりません。絶対的器官です。絶対一つの方向です。絶対一つの方向に連結した愛の道に永遠に従わなければなりません。神様が本来願われた生殖器だというのです。人々は、それが愛の宮殿であるということを知りません。愛の宮殿、生命の宮殿、血統の宮殿、良心の宮殿だというのです。四つの宮殿が一箇所に集まったのです。最高に神聖な場所です。永遠に清く守っていかなければなりません。

絶対純潔の伝統をいかに残すかということが問題です。これを汚せば、イスラエル民族は石で打ち殺しましたが、今は違います。それよりももっと恐ろしいのです。アダムとエ

バという独り息子、独り娘を追放した神様のその心情の前に再び堕落するということは、夢にも考えることができないというのです。それで、限界線を宣布しなければなりません。限界線を宣布するその日となる時に残された者たちは、すべてサタン側に残された長子の中の悪の長子たちです。

カナン復帰路程において、モーセに従い、今こそカナンの地に入城しなければなりません。今こそ王権を取り戻さなければなりません。エジプトでの四百三十年の受難の道において、神様の四千年歴史の悲惨な、それ以上に悲惨であっても耐え、すべてのことを越え、天の前に慰労して、謝罪することによって天国に行くのではありません。悔い改めたからといって天国に行くのではありません。峠を越えて悔い改めたのちに天を慰労し、真の父母を慰労し、その息子の新しい血筋をもって、永遠に純潔的血統を残そうと誓って約束した基台の上において、相続権が展開するのです。はっきりと知らなければなりません。

神様の前に誓約をしなければなりません。今まで、自分が純潔を中心として生きることができなかったことを、すべて振り返って否定し、新しい真の純潔と貞操を誓うのです。統一教会は、嫁に行くまでは純潔を守り、嫁に行ってからは貞操を守らなければなりません。それは、誰のためでしょうか。自分のためではありません。夫と家庭と国と世界のためです。そうでなければ、永遠の世界である天国に入っていくにおいて、個人的な天国、家庭的な天国、民族、国家、天宙的な天国、神様の愛に定着することができる位置まで行くことができないのです。どうすることもできません。

未来の世界は、家庭の純潔を保全し、家庭の価値を守護するという道徳律が定着するかしないかによって、天国と地獄の分かれ目に置かれるようになるはずです。世界各国が一様に悩んでいる青少年の退廃と絶え間ない麻薬による犯罪、増加する家庭破壊と離婚、エイズの蔓延、性犯罪などを、政治権力によって解決することができますか。現在の学校教育や宗教的教えでも解決することができずにいます。

今後、先生が祝福する時は、浮気をして貞節を蹂躙した人はしてあげません。純潔な男性、女性でなくては結婚させてあげません。エデンの園のアダムとエバが定着して天下の公的な位置に立つようになるとき、堕落した息子、娘を集めて祝福してあげるでしょうか。そのようなことはあり得ません。それゆえに、浮気をして男女関係がある人は、どのような男性や女性であっても、今後、統一教会の祝福を受けることができないということを知らなければなりません。純潔な未婚の男女でなければならないのです。そうだとすれば、「祝福を受けて生まれた息子、娘しかいないだろう」ということが先生のみ旨です。それで、祝福家庭の子女だけを結婚させてあげるのです。

ここから、女性はすべて貞節を守るのです。純潔な宗教は、性問題を絶対に拒否する宗教とならなければなりません。それで、キリスト教が「すべての罪は骨の外の罪だが、淫乱は骨の中の罪だ」と言ったのです。サタン圏

内の世界とはこのようなものです。このようにして、すべて妨げているのです。数多くの人々は、サタン世界の愛に反対してきました。すべてサタン世界になってしまうところを、神様は、イスラエルの宗教とキリスト教を中心として、世界を革新し、新婦の貞節の道理を立ててきたのです。ここから新郎新婦が一つになれば、この二つの世界は道が開けるのです。

それで、歴史的な伝統世界の純潔な新婦、純潔な新郎が来て愛し、一回りするようになれば、これがすべて崩れます。それゆえに、歴史始まって以来、キリスト教文化圏を開門するために、大勢の女性が犠牲になってきたのです。捕まえられていって強姦され、主権者たちからあらゆる辱めを受けたのです。

もしイエス様が結婚して、自分が愛する以上に愛してくれる女性と愛を成していれば、そこから生まれた息子、娘を、悪魔は引っ張っていくことができるでしょうか。神様が連れていくのです。キリスト教徒たちは、「何だかんだ」と言って大騒ぎするでしょう？純潔なイエス様が、善の男性として善の女性を迎え、神様が保護することができる家庭をもっていれば、どのようになっていたと思いますか。そこで善の息子、娘が生まれていれば、二千年が過ぎたのちには、既に世界は統一されていたはずです。一族なのです。七百年もかからないというのです。そのようになっていれば、イスラム教やイスラム教徒は現れていません。

純潔な高次元的な良心、高く、広く、深い良心世界の活動舞台を追求し、そのような愛の基台を願う人であればあるほど、霊界における活動舞台は、広く、高く、大きくなるのです。自分のことだけを考えれば、どんどん狭くなっていくのです。

祝福を受ける夫婦は、自分の家庭と夫婦の結合を神様の前に誓約し、配偶者に対して永遠の信頼と純潔を誓い、そして子女に対しては、高い道徳と純潔を教えながら養育することを約束するはずです。この夫婦たちは、言語と人種と国家と宗教の背景が様々です。しかし、彼らは神様の愛、そして世界平和の出発は神様を中心とした完全な家庭から来るという信仰ゆえに、この祝福式に同参しました。私は、皆さんがこの歴史的な式典において、見物するだけでなく、皆さん、または関係のある周囲の人々と共に神様の前に出て、自らの結婚誓約を更新するように招待します。

三、真の父母と根本復帰

一) 根本問題解決のためには、堕落論を知らなければならない

世界の問題を解決し、人類の道徳問題をすべて解消するためには、堕落原理がなければなりません。堕落原理がなくては、人間の問題は是正することができません。これは、サタンが天を裏切り、歴史を引っ張ってきた最後の絶望的終末現象だというのです。これは、人類を破綻、滅亡させるためのサタンの戦略です。これを解消しなければ歴史が解かれません。歴史が解かれなければ、歴史を清算することはできません。そこに代案を中心として、神様の創造と理想の代案を中心として、私たちは「神主義」に帰ろう、真の愛主義に帰ろうというのです。それは自分自身のためではなく、利他的なことです。愛の相対を創

造しなければなりません。そのような内容でなければ、収拾する道がありません。

人類歴史の堕落の起源は、結婚を誤ったということです。偽りの父母を中心として結婚式を誤りました。どの時期ですか。青少年の時です。ですから、青少年の淪落はエデンの園で始まったのです。青少年の淪落を植えたというのです。それによって、アダム家庭を中心とした全体の神様の理想は完全に壊れてしまいました。

そのように植えたものが、ただそのまま植えたものが、次第に大きくなり、終わりの日になれば、このように結実する時が来ます。世界的に青少年の淪落を防ぐ者がいません。アメリカが防ぐことができますか。できません。これがフリーセックスの様相を呈し、ホモ、レズビアンの様相を呈しています。めちゃくちゃになったというのです。アメリカの教育やアメリカの宗教が防ぐことができますか。アメリカの政治や経済の力で防ぐことができますか。できません。軍事力で防ぐことができますか。できません。完全にお手上げだというのです。

それでは、誰が解決することができるのでしょうか。神様だけが解決することができます。偽りの父母が植えたのです。その罪を犯した動機は人間だというのです。偽りの父母、アダムが誤ってこのようにしたのであり、アダムが無知の中で堕落したので、アダムがこの地で完全に知らなければならないのです。神様の秘密と神様の完成基準の目的がどのようになっていて、悪魔がどのような失敗をしたのかということを詳細に知ることによって、サタンを屈服させることができるのです。

世界の難しい問題の原因は何かというと、男性と女性の二人の人間にあります。男性と女性がもつれたことが国家、世界の問題になりました。天地における問題となりました。この男性と女性における問題とは何ですか。愛です。愛の問題において誤ったというのです。それゆえに、エデンにおいて偽りの父母によって青少年が淪落し、アダム家庭を粉々に破綻させたことを、真の御父母様が来られて収拾しなければなりません。真の御父母様が来られてしなければならないのです。

神様の愛の血統を伝授し、愛を中心とした生命体、偽りのオリーブの木ではなく真のオリーブの木になるのです。血筋が変わるのです。文総裁は、神様の血筋を連結させることができるすべての理論的な体系をもっている人です。その道を行けばそうです。それは証拠的事実です。

それで、今、文総裁がしていることとは何ですか。青少年問題を中心として、アメリカ、ロシア、中国はもちろん、先進国家の世界の代表的国家は、すべて手を挙げました。宗教世界まで手を挙げました。それを解決することができる特権を受けた者は誰かというと、文総裁だというのです。文総裁しかいません。

「蒔いたとおりに収める」と言ったので、エデンの園でアダムとエバが青少年の時に淪落することによって、世界的に家庭というものが一つもなくなるように完全に破綻させてきました。その時が終わりの日です。その時が、正に今の現実です。

アメリカの人々に世界観がありますか。ありません。国家観がありますか。ありません。社会観はもちろん、氏族観、民族観、家庭観もありません。自らの父母をすべて否定して

います。個人主義です！　個人主義は何かというと、悪魔である天使長のその位置に戻ることです。男性が女性を否定し、女性が男性を否定するのです。終わりの日になったので、最後にはサタンはその正体を現さなくてはなりません。

そのようにして完全に家庭を破綻させました。青少年問題、家庭破綻を収拾するすべがありません。サタンも収拾するすべがなく、神様も収拾するすべがありません。神様が収拾することができるならば、エデンの園のアダム家庭の時に収拾していたはずです。エデンの園で手をつけることができなかった神様が、今、滅んでいくこの世に手をつけることができますか。

これは、誰が責任を負わなければなりませんか。未知で堕落させられることによって、偽りの父母がこのように滅ぼしたので、真の父母が完全に神様の秘密、サタンの秘密を知って、サタンの秘密を神様の前に告訴してしまわなければなりません。「お前、よくよく知ってみると殺人魔だな、こいつ！」と言うのです。いくら隠れて生きてきた殺人犯であっても、その証拠を出されれば、自分の罪状をありのままに告げて判定を受け、永遠の人間世界から流れていってしまうではないですか。同じことです。今の現実が、これとちょうど同じだというのです。

文総裁は、悪魔サタンを讒訴することができるのです。讒訴しようとすれば、その基盤、家庭基盤が半分以上を超えなければなりません。それゆえに、もしキリスト教が歓迎していれば、三年半で世界の人類を祝福し、天の眷属にし、神様を解放していたはずです。四十年前に、これをなしても余りあったというのです。それなのに、それに反対することによって、この文総裁を荒野に追い出してしまったのです。

人類始祖の堕落によって恨に満ちた神様を慰労しなければなりません。堕落したアダムとエバによって、大きな悲しみのくぎが刺さっている神様を慰労することができる立場で出発しなければなりません。そのようにしようとすれば、悲しみの神様を慰労することができる孝子とならなければなりません。家庭を代表した孝子、国家を代表した忠臣、世界を代表した聖人、天地を代表した聖子の道理をすべてなすことによって、慰労してさしあげなければなりません。それだけではありません。私が間違いなく新しい青少年を動員し、新しい祝福をなして、アダムが破綻させたすべての要素を根絶しなければなりません。

人類の願いは何かというと、堕落の仮面を脱ぐことです。堕落の仮面とは何でしょうか。血統が変わったというのです。血統の堕落とは何でしょうか。男性と女性が性関係を誤ったということです。誰を中心としてですか。サタンを中心としてです。

アダムとエバが息子、娘を生んだ時が堕落する前かあとかというとき、「堕落する前だ」と言う人はいません。その息子、娘を生むことができるように、誰が結婚式に責任をもったのでしょうか。神様は、追い出した人々に対して責任をもつことができません。間違いなく悪魔サタンを中心として結婚式をしたのです。

ですから、神様がアダムの心に入っていき、夫婦を完成しなければならなかったその位置をサタンが占領し、サタンの血統を植えつけ

たというのです。堕落することによって下部を覆ったでしょう？　取って口で食べたとすれば、口と手を覆わなければならないのに、口と手を覆ったのではないのです。その場所が血統的恨みの根拠地となりました。

そのようなことを考えるとき、文総裁が「契約の箱の中の二つの石板は、アダムとエバのことをいいます」と言ったのですが、それを象徴しているのです。至聖所とは、その場所です。誰も触ることができません。触ってすべて滅びたのではないですか。至聖所は、その場所です。それから、芽を出したアロンの杖です！　この杖は何でしょうか。永遠に死なないということです。死んだ杖から芽が出てくるので、永遠に死なないということです。何を中心としてでしょうか。本然の愛です！　愛がなければ死にます。それで、芽を出したアロンの杖が出てくるのです。そのような意義があるので、聖殿に置いて侍ったのです。ですから、神様の体を象徴したものが幕屋です。体は聖所であり、至聖所はその場所です。

二) なぜ真の父母が必要なのか

私たちに必要なものとは何かというと、真の父母です。偽りの父母から出発したことを、真の父母から出発させなければなりません。偽りの父母とは何かというと、偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統を受けたものです。これをひっくり返さなければなりません。ですから、真の父母の愛を中心として、いかにして真の生命と真の血統を受け継ぐのでしょうか。言い換えれば、生命の種を誤って受けたので、これをいかにして再び本然の種として受けるようにするのかというのです。

この問題を考えるとき、真の父母がいなければ受けることができないので、この地上にメシヤが来られ、そのメシヤの種、真の父母の新しい生命の種を再度注入し、接ぎ木しなければなりません。これを通して、本然の真のオリーブの木の位置に戻っていくのです。簡単なことです。ですから、神様は、私たちの本当の父母です。ですから、どれほど近いでしょうか。縦的な父母が神様であり、真の父母は横的な父母として、理想の愛を成すのです。

なぜ真の父母が必要でしょうか。サタンの愛、生命、血統基盤を清算するために必要です。なぜ男性と女性がそのような位置に落ちましたか。生殖器ゆえにです。本来、生殖器は愛の王宮です。

今、その愛の王宮がどのようになっていますか。愛の王宮であり、生命の王宮であり、血統の王宮であるという、そのように貴いものが人間の生殖器です。これは汚いものですか。神聖なものです。それが堕落によって汚いものになってしまいました。

本然の神様の観点から見れば、それは汚いものではなく、神聖なものです。最も貴いものです。生命、愛、そして血統がここに連結されています。そのように神聖なものをサタンが汚しました。

本来、アダムは皆さんの先祖となる父母だったのですが、神様の愛を連結させることができませんでした。それを連結させることができなかったのです。それゆえに、皆さんの父母は、皆さんを神様の愛に連結させること

ができないのです。真の父母が違うのは、神様の愛を連結させることができる特権をもってきたという点です。皆さんが父母の言葉を聞かずに統一教会の文先生の話を聞くので、これは社会の正義ですか、悪ですか。正義です。天宙の原則がそのようになっているからです。

どのようにすれば真の父母になるのでしょうか。人類始祖の堕落によってふさがった垣根を壊すことができる責任的な条件を立てることができてこそ、真の父母になるのです。私たち統一教会を見れば、ここにはプロテスタント、カトリック、仏教、儒教、イスラム教徒がすべて入っています。仏教もここに入っているのです。そのことを知っていましたか。知らなければ恥をかくのです。ここに入ってくれば、宗教が一つになることができます。それから人種問題ですが、五色人種が一つになることができるのです。

メシヤは、本然の愛、真の父母の愛を完成した男性として来られるお方です。本然の理想的な代身者として来られるのです。「私」という話をするたびに、これを考えなければなりません。ですから、解放されるのでしょう？　そのようになっています。サタンから解放、生活圏において解放、血統圏から解放されればすべて終わるのです。

それでは、解放されて何をするのですか。悪魔ではなく神様に侍り、文化圏を形成しなければなりません。真の父母の生活圏を形成しなければならないのです。完成したアダムの位置に立つので、生まれた目的を完成するのです。

したがって、私に真の父母の愛が宿り、神様の愛が宿るのです。その愛は、私を完成させることができる調和の根本です。言い換えれば、それは、私に愛があり、生命があり、血統があるということです。三位一体です。

真の父母を中心としたところから理想的な歴史の出発、新しい文化の出発、新しい愛の出発がなされ、新しい人生の出発、新しい家庭の出発、新しい国家の出発、新しい世界の出発がなされ、天国と神様の愛の出発がなされるのです。

この真の父母という言葉は、今まで知っていたそのような内容の言葉ではないということを、皆さんは知らなければなりません。このような後世と関係を結ぶために国も滅び、個人も滅び、家庭も……。したがってこの位置は、数多くの、数千億万の犠牲となった祭物の血が訴えている位置だということを、皆さんは知らなければなりません。

聖書には、アベルがカインに殺害されて血を流すことによって、天に讒訴したと書かれています。そのような歴史をすべて解怨成就することができる位置は、この位置しかありません。

そのような使命を受け継ぎ、そのような驚くべき蕩減の道をまっすぐにするために集まった群れが正に皆さんです。それが本当に分かれば、自分の命がどうで、私がどうだという不平は、夢にも、千回死んでも言うことができません。

本来、神様の創造理想は何かというと、真の父母の名を通じて天国の王国と地上の王国を完成することです。これを知らなければなりません。真の父母の名をもたずには、地上

天国と天上天国は生じません。今日、キリスト教徒たちに「イエス様は神様の愛する長子であり、息子であるにもかかわらず、どうして天国に行くことができず、楽園に行っているのですか」と聞いてみれば、答えることができません。

天上天国と地上天国は、真の父母の完成と愛の基盤を通してのみ成し遂げることができるものです。霊界に行って王国を統一するということは真の父母の使命であって、ほかの人の使命ではありません。イエス様は真の父母になることができなかったので、楽園に行っているのです。

堕落した世界においては、今まで真の父母の愛を受けたことがある物もなく、受けた人もなく、そのような痕跡もありません。ですから、霊界にそのような基盤ができても必要がないのです。縦的で横的な原理基準、完全に公式となっているのです。公式になっているということを知らなければなりません。自分勝手にしてはいけないのです。

すべての出発は、真の父母からです。あらゆるものの出発、最初は、皆さんではなく真の父母です。生きるのも、行動するのも、愛の家庭を連結するのも同様です。最初は真の父母です。これは先生の話ではなく、私たちの最初の先祖に対する神様の公式的な概念です。いかにして私たちの家庭を真の御父母様の御家庭のようにすることができるか、それを考えなければなりません。

先生は、世界のためにどれほどたくさん投入したでしょうか。どれほど血の涙を流し、どれほど汗を流し、どれほどため息をついたでしょうか。私は、御飯や出世のためにそのようにしたのではありません。地上世界、天上世界、神様を解放するためです。このような人は、歴史時代において文総裁以外にはいません。真の父母以外にはいないのです。

そのような背後の歴史をもっています。それは観念だけではありません。実践舞台において実際圏を形成するために、その理想基盤を築いてきたので、世界万国が粛然と頭を下げることができる段階にまで来たというのです。

三) 血統復帰は祝福を通して成される

すべての天の秘密は、文総裁が明らかにした内容でなければ解決する道がありません。ここにいる二人の人が私を紹介する時、「真の父母になった」と言いましたが、真の父母とはいったい何ですか。真の父母はどこにいるのですか。天にいます。神様が真の父母です。今日の人類、堕落した世界のすべての宗教は、神様のことを「父」と言います。天地を創造されたその主人が正に父です。誰の父ですか。私の父です。私の父なのですが、父の内容の中で、何を中心として父子関係になりましたか。神様の愛です。そして、神様を中心として、堕落していないアダムとエバの生命が愛に連結されるのです。

神様の本然の愛を中心として、私たちの本然の先祖である堕落していないアダムとエバが、神様の愛に燃えて一体となるのですが、男性と女性を一つにすることができるのは、男性でもなく、女性でもありません。男性と女性を必ず一つにすることができるのは、絶対的に必要な愛だけです。これが一つになってこそ一つになるのです。神様は、絶対、唯

一、永遠、不変であられるお方です。絶対的な神様の愛は、二つではありません。

男性がもった愛と女性がもった愛は、二つではありません。一つです。それを知らなければなりません。しかし、それを知らずに生きてきたというのです。

堕落とは何ですか。神様が創造理想によって願われた血筋が神様の血統と直結した血筋を残し、家庭の出発から氏族、民族、国家の形成と世界の平和、地上天国をつくり、天上天国をつくるのです。地上天国と天上天国とは何ですか。神様が私の体の中で生き、家庭で生き、国で生き、世界で生き、不可能なことがない無限な霊界という環境において暮らすことができる愛の家がなければなりません。私個人というものは、個人の真の愛を中心として、神様が入ってきて暮らすことができる家です。家庭というものは、夫婦同士において、二人の男性と女性は異なります。極です！　エデンにおいて、神様が愛で一つになったその家に入ってきて暮らすためのものが家庭です。その父母は、万代の神様の血統によって連結した種として結実を結ぶための神様の孫だというのです。

堕落とは何ですか。神様が一代ならば、アダムは二代です。三代となる血筋の孫をもつことができなかったことが堕落です。孫をもつことができなかったことが堕落です。堕落したのちに息子、娘を生んだのですか、堕落する前に息子、娘を生んだのですか。堕落したのちに息子、娘を生んだのです。それは、誰が結婚式をしてあげましたか。神様と関係なく、追い出され、結婚して生んでサタンの子になったというのです。今日、六十億の人類は、神様の前に追放され、隠れて誤った結婚を通して生んだ血統が連結された息子、娘なので、地獄に行くのです。神様と関係がありません。

根本を知らなければなりません。それでは、滅びることがない道とは何でしょうか。万代を越えて、今日の六十億人類と未来の世界まで真の愛の血統を連結させなければなりません。変わらない血統となり、大きな木の中心の根、幹から芽まで、四方八方に伸びたすべての枝が、すべて一つの体のように感じることができる血族的連結体とならなければなりません。このように連結したものが国ならば、国の天国であり、世界ならば世界の天国であり、天地ならば天地の天国になるのです。

真の父母になることができず、このようなことをすべて失ってしまったので、真の父母になることができなかった堕落した父母は偽りの父母であり、偽りの愛であり、偽りの家庭、偽りの氏族、偽りの国、偽りの世界です。ですから、滅びる運命です。世界は、どのようにすべきか分からないのです。ですから、神様の救援摂理は何かというと、本然へ帰ろうということです。ですから復帰です。病気になったので、病気にならなかった本然の世界に帰らなければなりません。神様の血統的因縁をどのようにして回復するのでしょうか。ですから、滅びなければならないこのような人々を捨てておくことはできません。偽りのオリーブの木と真のオリーブの木の比喩があります。

真の父母とは何ですか。神様の愛を中心として、生命圏を中心として、血統圏を中心として、良心圏を中心として、すべて一体となることができるのです。真の父母が定着する

ことができるそのような位置です。これが芽となり、ここから育って世界へ枝が伸びれば、国家、世界、天地にすべて連結されるのです。それは移動するものではありません。

神様は、絶対、唯一、不変、永遠なので、定着する基準も、絶対、唯一、不変、永遠でなければなりません。何をもってですか。政治力ではありません。手段をもってはできません。力をもってもできません。真の愛をもって「ため」に生きて投入すれば、より価値があるものになるのです。

真の愛を中心として「ため」に投入すれば、それは絶対になくなることがありません。発展するのです。入力よりも出力が大きいのです。なぜですか。宇宙がそのようになっているのです。現れれば、絶えず宇宙が来てくっつきます。真の愛も、核が現れれば、来てくっつくようになっています。磁石も、鉄分があれば、鉄分の配合の度合いによって引き寄せる力が違うでしょう？　同じです。真の愛が宇宙を引き寄せるのです。

血統の同一性が必要なので、神様の心情圏に従わざるを得ません。なぜそうなのかというと、根が違うのです。幹が違います。しかし、根が同じでなければならず、幹が同じでなければならず、芽が同じでなければなりません。そこには、絶対的に血統転換という途方もない問題が展開するのです。それは一人ではなすことができません。真の父母がいなければなりません。

皆さん各自の血統的内容が違い、背後が違っているとしても、父母と似るためには接ぎ木する役事を行わなければなりません。身もだえして接ぎ木しなければなりません。接ぎ木しようとすれば、皆さん自身が残された蕩減路程をすべて清算しなければなりません。それは父母から始めたので、父母を通して清算されなければなりません。ですから、真の父母に接ぎ木しなければならないのです。アダムは、真の父母になることができず、偽りの父母となったので、今まで神様は、真の父母を探し求めてこられたのです。再臨時代における「新郎新婦」や「小羊の婚宴」というものも、すべて父母を取り戻すためです。

皆さんが血統転換式をしたのちには完全に変わらなければなりません。もし真の父母が現れていなければ、このことが可能だったでしょうか。創世以後、いかに困難な道を歩んできたでしょうか。真の父母が現れただけでも有り難いのですが、真の父母から祝福されたということは、もっと驚くべきことなのです。このようにして伝統、その伝統とは何かというと血統の伝統です。真の愛と真の生命と真の血統を植えた伝統になっているのです。これを常に考えなければなりません。

血統的転換は誰がすることでしょうか。それは、誰でもできることではありません。先生がこのことをするために、涙ぐましい十字架の道を歩んだということを知らなければなりません。このような基準があるので、皆さんは、何の功労もなく、祝福という新しい伝統を継ぐようになったのです。転換の勝利圏を立てるにおいては、数千年に及ぶ神様の御苦労と実体を中心とした先生の苦難の生涯がありました。これを基盤として立ったところが、正に皆さんが立っている位置です。祝福されるということは、悪の血統を切ってしま

い、新しく接ぎ木をすることです。接ぎ木をすることによって血統が変わるのです。

祝福家庭は、どのような意味をもつのでしょうか。祝福家庭を中心として見るとき、サタンは祝福家庭を支配することができません。先生を完全に信じ、真の御父母様に属したという信念をもって、いかなる国であっても立つようになるとき、サタンはそれを侵犯することができません。なぜでしょうか。父母様の心情圏を中心として、血統転換した心情圏に連結しているからです。それゆえに、ここからは、サタンが帰らなければなりません。

帰るには帰るのですが、どこに帰るのでしょうか。原点へ帰らなければなりません。偽りの父母から始まったので、原点へ帰り、真の父母から再び始めなくてはなりません。ですから、どれほど深刻でしょうか。私が、神様の愛と神様の生命と神様の血統を再び継がなくてはなりません。それで、皆さんが祝福を受ける時、血統転換式をしたでしょう？
それを自分の命よりもっと信じなければなりません。統一教会の一つの儀式だといって、それを一般宗教の儀式と同じように思ってはいけません。これは死んだ人をよみがえらせる注射と同じです。解毒注射です。解毒注射なのです！

四) 最後の目標は真の家庭理想実現

人間において、最も神聖で貴いものが真の愛です。真の愛は自分一人だけでは生じません。自分中心的なところでは生じません。真の愛は相対のために生きて、与えてまた与えて、与えたことをすべて忘れて、また与えて与えながら、一つになろうというのです。それゆえに、真の愛は、すべてのものを抱くようになります。真の愛は、私個人の所有ばかりにしてはいられません。真の愛は相続されて、私なら私のものと同時に、万民のものであり、宇宙の公認のものになるのです。

神様の希望は、真の愛を人間と共に成し遂げることです。神様は、御自身の息子であり、最高の被造物である人間と、心情世界で真の愛の喜悦と幸福を永遠に共にしたいと思われます。人間世界で真の愛を完成するならば、政治的にも、経済的にも、文化的にも、環境的にも、何の問題がありますか。真の愛の世界では、解決できない問題がありません。真の愛の世界は、すなわち歓喜と理想が充満した、自由と、平和と、幸福が無限に、そして永遠に広がる世界になります。今日、世界人類が抱いている難問題は、真の愛によってのみ根本的な解決が可能なのです。

真の愛の真の家庭は、人類の願いと同時に、神様の創造目的の根本になります。このような真の家庭で輩出する、真の愛の真の人格によってのみ、真の社会、国家、世界の完成があり、すべての環境圏の創造理想が具現できるのです。私が、常に地上における真なる家庭天国を強調する理由もここにあります。真なる家庭天国がなされて、地上天国がなされるのです。真なる家庭天国で完成した真の愛の人格は、社会、国家、世界へ拡大され、不義と妥協せず、いつも「ため」に生きる真の家庭によって調和一体を成し遂げる真の人になるのです。

人間の先祖を通した神様の理想は、男性と女性が結合して、理想的な家庭を築くことでした。ですから、理想的な家庭の中心は、男

性でもなく、女性でもありません。家庭というものは、父母と子女、夫婦の結合によって成された一つの束ですが、その結ばれた中心が正に神様の愛です。神様の愛を中心として、家庭を完成させることが神様のみ旨であるという結論が出てきます。家庭は、神様の理想が顕現することができる起点であり、人類幸福の顕現の起点になるのです。人間としての仕事がすべて終わる位置であり、神様もすべてのことを完成される位置です。家庭がなぜ良いのですか。それは父母様の愛を中心として、自由活動の基地になるためです。

家庭には必ず父母がいて、妻子がいなければなりません。それでこそ、その家庭が幸福の基台になるのです。神様が人類を尋ね求めてくる目的も、神様御自身の幸福を模索するためだということは間違いありません。ゆえに、神様御自身が幸福の基台を尋ね求めていくためには、人間を離れた位置ではそのような理想があり得ないというのです。人間と共に関係を結んでこそ、その一致点をもたらすことができるのです。私たちが、家庭において、情緒的なすべての内容を備えた位置で幸福を感じるのと同じように、神様もやはりそのような位置で幸福を感じられるというのです。

父子関係の真の愛は縦的であり、夫婦の真の愛の関係は横的であり、兄弟の真の愛は前後の立場として、球形の真の愛理想を願われたのです。すなわち縦には上弦下弦、横には左弦右弦、前後には前弦後弦、それをすべて連結した一つの中心点で統一がなされるのです。その点が球形体の中心点になるのです。いつ四大心情圏である子女、兄弟、夫婦、父母が一体を完成するのかというと、神様を中心として、人間が結婚して初愛を結ぶ位置が、すべての完成の結実点であり、中心になるのです。したがって、結婚は天地人の合徳であり、縦横、左右、前後、全体を完成するのです。結婚は、真の子女、兄弟、夫婦、父母の理想の、そして真の愛の完成地なのです。

この宇宙の中心はどこにありますか。家庭にあります。真の愛が定着することができる基地はどこですか。皆さんが生きている皆さんの家庭だというのです。したがって、本来の家庭は、宇宙愛を掌握して、宇宙の保護様相を体得しながら宇宙愛圏を拡大させ、家庭を越えて国家を愛する、愛国の道を行かなければならず、ひいては民族と国家を越えて世界を愛する道に行かなければなりません。家庭を愛する人を孝子または烈女といい、国を愛する人を愛国者というならば、世界を愛する人を何といいますか。その人を正に聖人というのです。

神様の愛圏の中で、理想的な家庭を築いて氏族をなし、民族と国家を形成してさらに拡大し、アダムの理想が実現される一つの理想的世界を成し遂げたのです。木の根、幹、葉が一つの生命に連結されているように、愛を中心として、上には神様を父として侍り、下には万民を兄弟と共に一つの生命体、愛の生命体と化して、神様を中心とした永遠の理想世界を成し遂げなければならないということが、正に神様のみ旨から見た世界観です。このような世界の人間たちには、救援が必要なく、メシヤも必要ありません。なぜなら、その世界で暮らす人間は、神様の善の息子、娘だからです。

Book 十二: 環太平洋摂理
The Pacific Rim Providence

はじめに

真の御父母様は、早くから二十一世紀は海洋の時代、海の世紀になるということを見通されていました。また、二十一世紀は、海洋で人類の生活を開拓する時代になり、今日の人類の難題である飢餓問題や資源の枯渇問題も、海を開拓することによって解決することができるとおっしゃいました。海は、食糧資源と鉱物質エネルギーなど、無限な資源の根源地であり、人類の未来に残された最後の宝庫です。

真の御父母様は、地球の七三パーセントを海が占めているので、今後の世界は必ず海洋を中心とした新しい文明の時代になるということを予見されながら「先生が海で精誠を尽くすのは、大洋の時代に対して準備しているからです」とおっしゃいました。

また、人類の未来は、海上と海底に海洋都市が建設される水中生活時代となり、未曽有の水中時代文化が開花し、海から水素エネルギーが無限に開発されれば、北極や南極に氷中都市が建設され、シベリアのツンドラ地域や砂漠にまでも大文化都市が建設されて地球の至る所が楽園化されるというのが真の御父母様の摂理的見解です。

このために、誰よりも精誠を積まれながら「私が霊界に行く前にみ言をたくさん話しておかなければなりません。話しておいてから霊界に行けば、後世にそのすべてが成就されるはずです」と語られています。真の御父母様は、このように復帰摂理のことを考えられ、未来世界を先導する牽引役をしていらっしゃいます。アラスカで水産基地をつくられ、アラバマに造船所を建設され、また南米においては、エデン大建設の役事と神様の創造のみ手が残されているパンタナールを中心として、人類愛と万物愛の思想を展開されながら海洋摂理を開拓していらっしゃいます。

今や、本格的な海洋時代、太平洋時代を迎えました。神様の摂理の成就として太平洋文化が花開くためには、私たちが大覚醒をして希望のみ旨を支え従っていかなければなりません。それがこの時代における私たちの役割だと思います。

この本は、真の御父母様がなしてこられた摂理の中で、海洋摂理に関する部分のみ言を抜粋して一冊の本にまとめたものです。真の御父母様の摂理の全般を理解するためには、この本が必ず必要なものになると思います。

真の神様の摂理の方向を理解するにおいて、この本が大きな助けとなることを切に望みます。

二〇〇一年三月

第一章　二十一世紀は海洋の時代

一　海は未来の人類の宝庫

一) 海は人類の食糧難の解決策

今後、私たちは世界的な基盤を築いていかなければなりません。私は、地球の七三パーセントが海だということについて考えています。三分の二は海です。将来、地上から食べ物がすべてなくなってしまえばどうしますか。海から何かを獲って食べなければなりません。海を中心として生きる道を模索しなければなりません。ゆえに、今からは海域を多くもった国ほど水産事業に有利で、それが少ない国ほど不利になるという結論が出てきます。

今後、世界の大洋の資源を産業的に開発する必要があります。私は、大型漁船の製造から漁場の建設に至るまで、漁業のあらゆる方面で様々な事業体をつくってきました。未来の海は、世界の数多くの民族に食糧を供給することでしょう。ゆえに、海の開拓こそ世界人類の飢餓を終息させる望ましい方法となるはずです。

未来の資源は、すべて海底に埋まっています。地上の資源は、既にほとんど掘り尽くされていて長くはもちません。何年ももちません。ですから、海底に埋もれている資源を発掘することが重要です。

今後はツンドラ平原に関心をもって、それを研究していかなければなりません。今私が関心をもっているのは、そのような未来の世界です。今後五十年ももちません。何十年後には、そのような現実が目の前に迫ってきます。ゆえに、それに対して準備しなければなりません。ですから、アラスカを重要視しているのです。

アメリカ人は、海の食べ物がどれほど多いかを知りません。新鮮なもの、ぴちぴちと跳ねるものがどれほど多いかを知らないのです。人々は牛の肉を好んで食べますが、「死にたくない」と言っている牛を殺せば、血が結集して凝固した肉を食べることになるのです。ですから、その肉の中には悪性の要素がたくさんしみ込んでいるのです。

陸地の原資材には限界がありますが、海の原資材は無限です。一匹の魚が何百万個の卵を産みます。ゆえに、海の原資材は無限です。これを人工的に孵化すれば、百パーセント孵化することができます。餌や飼料などをしっかり調節さえすれば、無限の原資材を補給することができます。そのような所は海しかないので、統一教会の文先生は海洋問題について考えているのです。

一年に二千万の人が飢えて死んでいます。一日で六万名です。このことにアメリカの大統領が責任をもちますか。ソ連のゴルバチョフが責任をもちますか。誰が責任をもちますか。世界の誰が責任をもつのでしょうか。真の父母と、真の父母の兄弟が責任をもたなければなりません。ゆえに、海に関するものは二十年間計画して、すべて準備したのです。

海には原資材が無限にあります。魚一匹が何百万個の卵を産むのです。これらの魚を世界中から獲って食べているのですが、これを人工的に保護すれば、原資材は常に無制限です。今は、山頂までパイプで海水を連結させ、

また都市でも高層ビルにタンクを造って、いくらでも養殖をすることができる時代です。人類が食糧問題を解決し得る道はこれしかないと思っているので、先生は二十年間、お金を投入してこのようなことをしてきているのです。

今、水産事業をするのもそのためです。海には資源が無限にあります。小魚が海にいれば、すべて大きな魚に捕まって食べられますが、養殖をすれば九〇パーセントは育てることができます。それは無限の資源になります。今後、食糧問題を解決する方法は養殖しかありません。

鮭は海で暮らしていますが、淡水に上がってきて子を産むでしょう？　養殖場をつくって淡水魚を海水で育て、海水魚を淡水で育てることが必要です。なぜでしょうか。寄生虫のようなものをいちいち取ることはできないからです。寄生虫を殺そうと思えば、海水に暮らしていたものを淡水に移して一カ月間そのままにしておけば、すべて死んでしまうのです。それは簡単なことです。二週間で取り替えれば、いくらでもできます。その調整は可能です。淡水魚と海水魚を取り替える方式で行うのです。ですから、陸地を中心とした牧場から得る収入とは比較になりません。ゆえに、これからの私たちの版図は無尽蔵です。

今後、養殖は海岸においてのみするのではなく、海から海水をパイプで引いてきてするのです。アラスカから本土まで油を引いてきているでしょう？　何千里でもパイプで引いてきて海水の池を造れば、いくらでも魚を養殖することができます。卵は無尽蔵です。魚をたくさん育てれば、食糧が増えるのです。一つの町に大きな池を一つ造れば、その町の人がすべてそれを食べて生活することができるのです。

太平洋の水を何百マイルでも引いてきて養殖することができる時代が来ました。そのようにして、生きた魚を移していくのです。人はそれほど必要ありません。全自動システムの魚のビルを造り、ボタン一つ押せば、自動的に餌も与え、また魚が大きくなれば自動的に選別してトラックに積んで輸送できるようにするのです。そのようにして食べれば、良い時代が来るのです。

養殖をすれば、数十万坪の牧場で牛を育てて売ったり、あるいは牛乳を搾って売ったりするよりも、何十倍の利益を残すことができます。今は良い時代になったので、海水をどこへでも引いていくことができます。何百里、何千里でも引いていくことができる時代が来ました。ＰＶＣ（ポリ塩化ビニール）パイプさえ敷けば、水はどこにでも引いていくことができるのです。お金も多くはかかりません。太平洋の水を引いていけば、大陸の奥地に養殖ビルを造って、どんな魚でも養殖することができるのです。

数十階のビルを造って養殖をしたとしても、人はそこを上がっていく必要はありません。座ったままですべてを見えるようにするのです。そして、ボタン一つ押せば自動的に餌も与え、大きくなったものは自動的に選別されて降りてくるようにするのです。何でもすることができるようになりました。

ツナ（tuna：まぐろ）、ストライプト・バス（striped bass：しまのあるすずき）、サーモン（salmon：鮭）、クロウカー（croaker：にべ）、フラウンダー（flounder：かれい）などの高価な魚の品目を季節別に知っておけば、海の魚が西から南に、また南から北へと行ったり来たりする、その季節に合わせてそれらの魚を一年十二カ月獲って、生計を立てていくことができます。今回、ひらめとにべを五十四匹釣りましたが、先生がその半分を釣り、残りの半分は十数人の人で釣りました。ですから、どのように釣るのか、その秘訣を教えてあげるのです。

今後、栄えるか滅びるかという運命を左右する世界の経済基盤は水産事業にある、と思っているのです。ゆえに、趣味や遊びでこのことをするのではありません。私がそれを教えてあげると、みなおもしろがってするのです。「先生のおっしゃったとおりだ」と言っているのです。そのように言わざるを得ません。

陸地で暮らす生き物と、海で暮らす生き物を比較した場合、その数はどちらが多いでしょうか。地球には約四十億の人類が暮らしていますが、海には数百億の生き物が暮らしているのです。また、海はどのようなものでしょうか。東洋の太平洋の水が大西洋へ行き、大西洋の水がまた北海へ行くのです。五大洋が互いに連結しています。そのように見れば、私たちが暮らしているこの陸地も連結しています。陸地は平面的に連結していますが、海は円形的に連結しているのです。太平洋の水が大西洋にも行き、地中海にも行き、どこにでも行きます。このように躍動しながら、一つの動きによって全体が連結しているという結論が出てくるのです。

私はアメリカで世界的な水産事業をしていますが、漁船を造る工場としては、私たちの工場がアメリカで最も有名です。

今後、陸地の資源が必要な時代は過ぎ去っていきます。今からは、水中資源を誰が世界的に管理するか、そのような技術を誰がもつか、この海洋世界を主管する者が世界を主管していく新しい時代が来ます。海は無限の原料の根源地です。今後、海の魚を獲って食べる時代は過ぎ去ります。海の農業、海の牧場、海の養殖をしなければなりません。

文総裁は七十歳を越えましたが、アラスカに行ってキング・サーモン（king salmon）について研究しています。キング・サーモンは鮭科ですが、五つの種類があります。魚の中の最高の魚です。ところで、これは卵を産めばそのまま死にます。もちろん子孫のために神様がそのようにしたのでしょうが、今は人工的に餌を与えて、その稚魚が死なないようにすることができる時代になりました。これが死なずに、毎年海に行って戻ってきてから卵を産むようになれば、鮭が人類を生かすことができる食糧の中の食糧になるはずです。このように便利な食糧はありません。ツナ（tuna：まぐろ）の刺身など問題になりません。それほどキング・サーモンはおいしいのです。

先生はツナに着眼し、今後人類の食糧問題に対処しようとしています。ツナを大量に育てて海に送り返すのです。二カ月だけ育てて放せば、ツナは速いので絶対に捕まえられて

食べられることはありません。普通、ツナの平均速度は三十五マイルです。速く泳ぐ場合は百二十マイルで泳ぎます。海で最も速い魚です。これがいかに格好がいいかというと、泳いでいく時には背びれをぐっとたたみます。腹びれをさっとやれば、ほかの魚がぱっと引っ掛かります。魚雷のようになっています。爆弾のようになっています。

ツナは、五大洋を舞台にして生きている魚です。これを無尽蔵に産卵させて海に送り返せば、人類の食糧問題が解決し、公害問題が解決すると考えています。それで、私はこれを開発しているのです。

地球の三分の一は陸地で、三分の二は海だということを知っているでしょう？　人間は、海に生息するすべてのものを食べることができます。草も、海の草（海草）は大概のものが食べられます。しかし陸地の草や木は、すべてを食べることはできません。海には陸地にいるものがすべています。海の牛もいるし、海の馬もいます。また、海のライオンや、海の虎や、海の蛇など、あらゆるものがいます。また、魚の種類はどれほど多いでしょうか。白人は陸地の肉を食べ、海の魚は「臭いがする」と言って食べようとはしません。

最近になってアメリカ人は「いやあ、フィッシュ（fish：魚）が良いそうだ。魚はすべての蛋白質をもっているので肉より良いそうだ」と言っているのです。「自然食品が良い。長生きしよう」と言っているのです。また、海はいかに豊かでしょうか。いかに富にあふれた所でしょうか。女性がツナを一匹釣れば、一年食べて暮らしても余ることでしょう。

魚を養殖すれば、一つの家庭の暮らしは簡単です。二百坪あれば、一つの家庭が食べて暮らすことができます。魚をたくさん育てれば食糧になります。また、魚にはどれくらい多くの栄養があるでしょうか。蛋白質が優れているのです。ですから、すべての食糧問題を解決することができるのです。海でぴちぴち跳ねていた魚が私たちの工場に入れば、十分以内でパウダーになります。十分を越えると温度差によって腐ってしまいます。バクテリアによって腐っていくのです。ですから、短時間のうちに処理できるようにするのが技術です。

これ（フィッシュ・パウダー）は上質の蛋白質です。八六パーセントから九四パーセントが蛋白質です。完全な上質蛋白質です。また、そのパーセントを加減すれば、飼料のようなものをいくらでもつくることができます。魚を飼料として無尽蔵に育て上げることができるのです。

海は、原料市場の中で三分の二を占める世界の宝庫です。間違いないでしょう？　海の中にはダイヤモンドの鉱山があるでしょうか、ないでしょうか。陸地の二倍以上はあります。神様のみ旨の中で、私が神様の復帰摂理をしているので、二倍以上はあると思っています。

それから、海には海草があり、魚がいます。これらがすべて食糧になります。海草が生えている面積は、この陸地面積の二倍ほどになります。そこにまた無数の魚がいます。このようなことを考えている人が、そこに関心をもたないでしょうか。陸地よりももっと多くの関心をもつはずです。魚を獲って売るでしょうし、原料をすべて運搬しなければなりま

せん。ですから、陸・海・空の運搬路を掌握するつもりです。

二) 海底開発、無限な資源がそこにある

海は本当に神秘的で、無限の宝庫の内容をもっているということを知らなければなりません。

海を好きにならなければなりません。開拓しなければなりません。陸地の三倍もある海を無視することはできません。今後、誰が海底に眠っている水産資源を開発するのでしょうか。地上には金銀、石油があるといいますが、海は陸地の三倍なので、その三倍が埋まっているのです。今からその開発に着手しなければなりません。ゆえに、統一教会員は家を売ろうと何をしようと、どのようなことをしてでも水域を確保しなさいというのです。海岸の土地は安いのです。島のような、そのまま主人として振る舞うことができる所がいくらでもあるのです。そこに水産事業の基地をつくれば、その基地に数百隻の船が来るのです。国の検問所をつくれば、魚にも税金をかけることができるし、いくらでも生きていく方法を見つけることができます。そのような希望があるのです。

地球の金銀財宝の多くは海底にあります。海の中にたくさんあるのです。先生はそこに関心があります。ほかの人が手をつけたものは欲しくありません。海底のすべての金銀財宝をいくらでも掘り出すことができるのです。最近は科学が発達したので、島から海の底に何十里もの穴を開けて、どのようなことでもすることができます。ゆえに、海を誰がつかむのか、これが問題です。

「海洋鉱山を掘らなくてはならない」。私はそのようなことを考えています。皆さんができなければ、私が先頭に立ってしようと思っています。私が連れていって掘るのです。

海に行ってみると、海は単調です。しかし、その内容はどれほど複雑か分かりません。また、資源的に見ても、陸地よりも多くの資源をもっています。そこには無尽蔵の宝があります。そこには人間の好きなあらゆる宝物が沈んでいます。このような海を所有しようとすれば何が必要でしょうか。アメリカの開拓時代に、西部の鉱山を見つけるために危険を顧みずに冒険したことを考えてみてください。その時、冒険的で勇猛だった人にそれを所有することができる特権があったように、冒険の山を何度も越えていかなくては宝物を手に入れることはできません。今までは、船が行ったり来たりするための航路を手に入れる争いをしてきました。海の中のものを所有するための闘争はしなかったのです。

今後、海の主人になる人は誰でしょうか。地球に大変動が発生すれば、海の中に陸地が発生し、陸地が海になるかもしれません。太平洋の真ん中にアメリカよりも大きな陸地が生まれれば、その土地は誰の土地になるのでしょうか。そのようにならないとは言い切れません。いつそのようになるかは誰も知りません。海の底だからといって火山脈がないわけではありません。それで「世界の二百海里以内はどこも私のものだ」と主張する人がいればいいのですが、そのような人はいません。

しかし、間違いなくその時が来るはずです。海を中心として闘う時代が来るのです。その時に海を所有することができる人は、勇猛であり開拓精神がなければなりません。そうでなくては海の主人になることはできません。

既に陸地は人でいっぱいなので、船を造って海に出ていくのです。将来、遠からず海で暮らす時代がやって来ます。では、私たちは海で何をしなければならないのでしょうか。世界の海洋基地で統一教会の男性ムーニーたちが暮らすのです。これさえつかめば、現在の世界のすべての文化を思いどおりにすることができます。男性ムーニーたちが海岸に集まって、世界の海岸をすべて買うのです。私たちが所有するのです。

これからの世界を指導することができる人は、海を守ることができる人です。人類が海底の宝物に対して、自分たちのあらゆる権力と文化的背景、そして伝統と国力を投入して開発をしていく時代が来ます。それを開発するためには、誰が先に海洋地域を占領するのかという問題が鍵となります。このような問題に直面する中で、統一教会の教主として、あるいは真の父母の名をもった歴史的な責任者として、今後統一教会がとどまることができる基地として、どのような場所を残してあげるのでしょうか。それは都心地ではなくて海岸です。海岸において、あえて誰も考えもしないようなことをするのです。

アメリカは、すべての水産事業から手を引きました。しかし私は、今後世界がどのように展開していくのかということを知っているので、困難であってもそのことを続けていくのです。歴史が進んでいく方向の始めから終わりまで、広く大きな高速道路を築くことはできなくても、小道だけでも築いておかなければならないと思っているので、一人、海でその訓練をしているのです。

一つ学び、二つ学び、三つ学び、四つ学び、五つ学び、六つ学んだとしても、もっと学ぼうとしなければなりません。それが公式です。一つのことは一つの公式を中心として編成されているので、多くの公式を知っている人は、闘いにおいて勝利するのです。海に行って釣りをしても、ほかの人よりもたくさん釣りますが、それは魚がどこにいるのかを知っているからです。多くの経験があるからです。ゆえに、経験を積んだ人には負けます。経験のある人には負けるのです。

今、先生は一人でどこへ行ったとしても心配がありません。釣りの道具がなければ、釣りの道具も作ることができます。そのような自信をもとうとすれば経験が必要です。今後、海に関心をもつようになる舞台において、海に対する関心をもっている人と、もっていない人を見れば、もっていない人は必ず後退します。完全に負けるのです。

三) 未来は水中時代、海の空間を開拓する

先生は未来世界を準備しています。私は海が好きでそのようにするのではありません。海にいるのは大変です。最初は一週間も行ってくれば、ひざの後ろがいつもずきずき痛んで大変でした。それでも、胸の内では「すべきことがたくさんあるので、年のことを嘆かずに行かなければならない。ヒマラヤを越えていく子馬のようにならなければならない」と思いました。そうであるのに、どうして休

むことができますか。私がなぜ海に関心をもっているのかが分かりますか。将来、私たち人類が行くべき平和の道を開くための鍵がそこにあるのです。幸せに暮らそうというのです。

何をして幸せに暮らすのでしょうか。どのようにすることが幸せに暮らすことでしょうか。一日に三食、御飯をおいしく食べれば、それが幸せに暮らすことでしょうか。何が幸せに暮らすことですか。健康な食事をして、健康な生活をして、健康な一生を送ることが幸せに暮らすことです。そして、世界を舞台にして自分の望むとおりに暮らすことです。そのような基盤をすべて先生が築いたのではありませんか。

今後、誰が海洋世界を所有するのかが問題です。これからは宇宙時代です。空中の世界も海の世界も同じです。そのような海を所有し、冒険することができる人は、宇宙時代に入って大移動を起こすのです。もうそのような時代に入ってきました。さっと服だけ着て、酸素だけで一カ月間生活することができる時代に入っていきます。そのようになれば、そこで食事を作って食べますか。生活が便利になるので、おいしい魚を用意して荷物一つを持っていけば、半年は暮らすことができます。そこに何の水を持っていきますか、唐辛子みそを持っていきますか、キムチの瓶を持っていきますか。将来、そのような時代が来ます。

すべてのことを機械がします。人がするのではありません。ボタン一つ押せば自動的にどこへでも進んでいくので、何の問題もありません。飛行機と全く同じです。コンピューターだけ作動しておけば、以前航海したコースに従ってそのまま進んでいくのです。ですから、昼寝をしてもいいし、夜に寝てもいいし、妻を抱いて、何か騒いでもかまいません。船は、人がするよりも正確に目的地に向かっていきます。ですから、操縦する人は必要ありません。電子装置がすべて手落ちなくしてくれるのです。美しい海の底を見ながら「いやあ、魚がいる！　これはさめだ。さめが通り過ぎる」と言いながら、写真で見る以上に大小すべてのものを、はっきり観察しながら航海するのです。

皆さんはどのように思っていますか。海の底にも行きたいし、高い山にも行きたいし、宇宙にも自由に往来したいと思っているでしょう？　境界線がありません。皆さん、統一教会員の中には「霊界はない」と信じている人はいないでしょう？　信じているのでしょうか、知っているのでしょうか。知って体験までしているのです。ですから、否定することはできません。

今後、海に入っていって生活することもできます。それで、五人乗りの潜水艦について研究をさせています。便利でしょう？　風が吹かない穏やかな時の波は、何と表現すればいいでしょうか。そこでは億万長者の主人になることができます。どれほど神秘的で気分がいいか分かりません。

風が吹かない時、ガラス玉のような海で、大洋に夢をのせた夫婦が座り、昔の夢、あるいは未来の夢を語り合いながら愛の巣をつくっていくことを想像してみてください。それも問題ありません。もし台風が吹いても、三十メートル以上、下に入っていけばいいのです。水中で思いのままに暮らせる時代が来ま

す。ですから、大韓民国の国土が狭いといって心配をしなくてもいいのです。

人間は、どこでも自由です。国境もなく自由に、どこへでも行くことができます。海に行こうとすれば海に行き、山に行こうとすれば山に行き、また水中で暮らすこともできるのです。潜水艇を造って深度を調節すれば、いくらでも海中で暮らすことができる時代になります。そのようにしなければ人類の生きる場所がありません。タンクに水を入れて、沈む重さになれば沈むのです。ボタンで操作して水を抜いたり満たしたりすれば、浮かんだり沈んだりするので、水中で暮らすことができるのです。

海面から十メートル下の世界ほど良い場所は、ほかにありません。三十メートル下りていけば、風が何でしょうか。とても静かな世界が現れるのです。海底王国です。海の上に上がっていけば風も多く、変化が多いので騒ぎが起きるのです。気流が変わり、空気が変わり、雨が降って大変です。ですから、海に行って暮らすのが理想的な生活だと考えるのです。

みな良い所で暮らしたいと思うので、今先生は、潜水艦を研究しているのです。どこが最もすてきな場所でしょうか。アパートが良いのではないでしょう？　海の真ん中の奥深く、そこでどのように暮らすのでしょうか。その時に必要なものが潜水艦です。ボタン一つ押せば涼しい所に下りていくのです。エアコンは必要ありません。そこには、ありとあらゆる魚が多彩な踊りをしていて、数限りない色の美しい光景があります。そこは遮るものがありません。昼だろうと夜だろうと、どこへでも行くことができます。

そのようにしながら暮らすことがどれほど気楽でしょうか。霊界に行く前に、そのような所で一度暮らしてみたいですか。すてきでしょう？　皆さんのためにするのであって、私一人のためにするのではありません。全体のためにしているのです。それで、様々な研究をしているのです。海においても、私は誰の世話にもならないようにしています。

海で遊べば、陸地で遊ぶよりももっと楽しいことがいくらでも起きます。ですから、私は潜水艦を造ろうとしたのです。今後、そのような時代が来ます。誰もがみなヨットをもって、海の中を往来するのです。水中を見学しながら回るのです。それはどれほど楽しいことでしょうか。海の中を行き来しながら魚の群れ、さめの群れ、鯨の群れと共に生活する時代へ発展していくのです。その準備をすれば、世界的な経済圏を掌握することができると思っています。

人々はどこへ行くのでしょうか。山岳地帯へ自然を訪ねて行きます。しかし、山岳地帯にだけいれば生活に飽きてしまいます。ゆえに、海に行くのです。今後は海を中心として、水中に入っていって生活をしなければなりません。今、私は学者たちを通してそのような潜水艦を研究させています。既に、ほとんどできあがってきています。

これを研究して水中三十メートルの中に入っていくのです。そのようにすれば台風が吹いても静かです。風が吹こうと、どれほど波風が立とうと、三十メートル以下に入っていけば波風はありません。三十メートル以下に

は波風がないのです。ですから、三十メートル以下、百メートル以下というボタンだけ押せば、自動的に入っていって反射器で海の風景を見ながら暮らせるようにするのです。

将来、どのような時代になるのでしょうか。何をしに飛行機に乗って何時間も行くのですか。太平洋の真ん中に鉄の柱を打ち込んでホテルも造るのです。ヘリコプターがどれほど多様な機能をもっていますか。ピッとボタン一つ押せば、思いのままに飛び回ることができるのです。三時間くらい飛べば退屈してしまいます。大体二時間ぐらいずつ飛んでいけば、海上ホテルに行って、そこで寝たりするのです。そのようになれば、どれほどいいでしょうか！　太平洋上にホテルを建てるのです。そのようになれば、二時間か三時間くらい行けば、そこで昼食を食べ、家族と船に乗って釣りもするのです。どれほどすてきなことでしょうか！

海に膨大な資源があると見ているので、今後、海洋事業場を全世界的に準備するのです。フランスにもつくり、ドイツにもつくり、命令一下で数十カ国につくることができる準備をしなければなりません。そのようにしてこそ、世界的な時代に必要とされる船や潜水遊覧船などを造ることができ、その分野の経済圏を主管することができると思っているのです。数十カ国に準備すれば、私たちがその分野において全世界的に力をもつようになるのです。その想像がつきますか。可能性があると思いますか。ですから、統一教会の教会員はみな学んでおきなさいというのです。

私は、船も設計して、世界で一番のものを造りました。潜水艦においても、どこの海に行っても暮らせるような五人乗りのものを造ろうと思っています。今後は海の中に入っていって生活をしなければなりません。ですから、それを開発しています。一度、統一教会の者たちに、良い暮らしができるようにしてあげなければなりません。

きれいな水は、どこにありますか。海水は、すべて公害で汚染されています。北極には八百メートルの雪が積もっています。それはきれいな水です。千年前に積もった清らかな水です。公害がありません。その水は、一万年後にも美しい水です。南極も同じです。そして、その氷の下に氷の文化都市、ニューヨークのような都市を人工的につくったとすれば、多くの人々は観光に行くでしょうか、行かないでしょうか。それを建てることは問題ありません。考えただけでも気分がいいでしょう？　トンネルを一度造っておけば、万年トンネルとなって崩れることはありません。一年に一度、冷水をまいておけば、こちこちに凍るのでますます頑丈になります。ますます強くなるのです。

氷の下で農業をすることができる時代が来ました。何の話か分かりますか。花が咲くのです。アラスカのような所に行くと、高い山中には万年雪があり、その中間には草が生えていて、その下には花が咲き、その下では釣りをしているのです。それは、どれほど美しい仙境か分かりません。水は澄んで美しく、空気はきれいで、すべての生態的条件をくまなく備えた環境です。一度、趣味だと思って行って味を占めてしまうと、そこで暮らした

くなるのです。そのようになれば、そこから出てきたくなくなります。今、私がこのようなすべてのものを投入して努力するのも、そのようなものがあるからです。

今後、水素を開発すれば、電力のようなものは問題ありません。あの寒いシベリアのような所にも地下都市をつくり、いくらでも良い都市で暮らすことができる時代が来るのです。

今後、シベリアのツンドラ地域やアメリカの平原地帯を開発するためには、アラスカを開発しなければなりません。北極の氷で覆われた世界を先に所有する者が世界を主管することができます。海を所有する者が世界を主管するのです。ゆえに、水産事業を始め、北極に関心をもつのです。

太平洋にはヒマラヤ山脈が連結しています。大小様々な山脈が果てしなく連結しています。太平洋には怖いシャーク（shark）、それを日本語では「さめ」と言いますが、そのようなものがいくらでもいます。そのような所を泳いで渡らなければなりません。危険が幾重にもあるのです。人類歴史において、誰も行くことができなかった道です。そのような路程をたどって越えていかなければなりません。そのように越えて向こうの世界にまで行くのです。そのようなものが人生路程です。

深い所が中心であり、高い所が中心です。深い所は見えません。海の底が見えますか。最も深い所が海の底ではありませんか。エベレストは、万物が見たくなくても、朝になるたびに見て、夕方にも見るようになっています。雨が降るか降らないか、天気が良いか悪いかといって見るのです。雲がかかったり、暗くなったりすればそこを見るし、今年が豊作になるかならないかを知ろうとしても高い所を眺めて測定をするのです。深い所は見えません。深い所を見てはいけません。ですから、海水で覆ってあるのです。しかし、深いからといって悪いのではありません。そこには神秘があります。女性にも神秘的な何かがあるので、男性が関心をもつのです。男性が神秘を感じて訪ね求めていくのです。

四) エネルギー補給源は海にしかない

海の資源がどれほど膨大かといえば、この陸地は問題になりません。今後の燃料問題を考えるとき、油類燃料や石炭燃料、電気燃料を中心とした時代は過ぎ去ります。電気も限界があります。今やエネルギーの補給源は海にしかありません。水素を開発する道しかないのです。

今後、食糧は科学的に無尽蔵につくることができます。今はなぜそれをつくることができないかというと、原価が多くかかるからです。燃料費が多くかかります。

今後、水素エネルギーを解決すれば、エネルギーは無尽蔵です。エネルギーがあまりにも多くて処理しきれないほどになります。ですから、食べ物も、いくらでも、食べきれないほどつくることができるようになるのです。そのようになれば、独りで食べるのはつまらないので、通りがかりの人に「ちょっと食べていきなさい。そして、ちょっと話をしましょう」と言う時が来るかもしれません。ですから、今から準備しようというのです。その

時まで私たちは、そうなるようにつくりあげなければなりません。私たちの後孫が豊かに暮らせるようにするのです。

海の管理を誤れば戦争が起きます。戦争をすれば、しまいには水素爆弾が炸裂するようになります。この水素爆弾は地球を破壊しかねないのです。ですから、統一教会は水域の二十キロを中心として、二十数を中心として世界中のすべての場所を占領しようというのです。そのようにすれば、世界はその懐に抱かれるのです。

ある人が「今後、水素原料が解決すれば、世界はすぐに暮らしやすい文化世界になるはずだ。しかし、独裁者がこのような膨大な原料をもてば世界をすべて滅ぼしてしまうだろう。世界をそのようにさせない人は文先生しかいないので、文先生にそのことを任せなければならない」と言ったのです。

五) 海洋強国が世界を支配する

未来において、私たちは海を主管しなければなりません。海にあるすべての金銀財宝を私の手で開発するつもりです。そのようなことを考えていると、トンネルをたくさん掘らなければならないという結論になったので、ハイウェイ・プロジェクトも出てきたのです。海の底に道を通し、そこに門を造っておけば、その門を開けて出ていって魚を獲ることもできるので、それはどれほど楽しいことでしょうか。海にある油も、船にパイプで直接供給すれば、それはどれほど素晴らしいことでしょうか。

海底にはどれほど多くの石油があるでしょうか。ボタン一つ押せば、パイプがさっと出ていって油が出てくるならばどれほど素晴らしいでしょうか。皆さんが指導者であるならば、未来においてそのように暮らすことができる計画を立てなければならないのではありませんか。

それでは、海の中でどのようにして酸素を供給するのでしょうか。水中にはどれほど多くの酸素があるでしょうか。ですから、水中で酸素をつくって自動的に供給するのです。海水中の酸素の比率はどれくらいでしょうか。それをどのように活用するのですか。それは問題ありません。したがって、近い将来、海の世界を主管することができる時代がやって来るのです。

今まで、先生の生涯における一次の四十年の生活は、北半球にある先進国家を中心とした、すなわち陸地を中心とした受難時代でした。それで、二十年前から南米における海洋文明圏を準備してきたのです。熱帯地方圏内にあるすべての国を救うために海洋時代を築いてきたのです。そこで受難の道を経てきたのが先生の二十年路程です。

今後は海、水を主管しなければなりません。そのような思想をもてば世界を主管するようになるのです。水が一番重要です。ですから、私が霊界に行く前に、大きな地域を中心として水を主管する事業に着手しておかなければなりません。それで、せっせと多くのみ言も語っているのです。私が話しておけば、後孫たちが成し遂げるだろうと思っているのです。

海の世界は誰のものですか。今後、海洋の世界はとても高価になることでしょう。明洞よりも高くなるのです。早いうちに海洋地域をすべてつかまなければなりません。ここから三キロ以内の水のある所を握る人が、世界をリードするだろうと思っています。そのような時代が来ると思っています。

海を占領しなければなりません。海は誰のものですか。神様のものです。その次には真の御父母様のものです。その次には私のものです。すべてが私のものです。「自分のものだ」と言ってこそ、よりうれしいのではありませんか。海と川の水がこの世界の生命圏を左右しています。海は、雲を生成して陸地に雨を降らせるので、生命を左右しているのです。

若い人たちは海に関心をもたなければなりません。ここにいる皆さんの中から、海で事業をすることができる責任者も出てこなければなりません。先生が大西洋に行って二十四時間そのことをするのも、海を愛したという伝統を立てるためです。船乗りは海に出ていくと、六カ月から一年は帰ってこないので、女性たちはみなマドロス（船乗り）を嫌います。そのために、マドロスが次第に少なくなっていくのが世界的な傾向です。ですから、これを私たちが引き継がなければなりません。

統一教会の女性は、夫が海に行って半年間帰ってこなくても不平は言わないでしょう？ゆえに、今後の世界の海上権を私たちが掌握しなければなりません。今後、陸地よりも海に力を注ぐ時代が来るということを皆さんは知らなければなりません。それゆえに、先生は海に関心をもっているのです。そのような目的で先生が海に関心をもつのだということを知り、皆さんも海に関心をもたなければなりません。

先生は海の中を進む潜水艦を研究しています。また、宇宙への関心も高いのです。現代の宗教指導者であり、現代の世界的な思想家として、そして、あらゆる世界に驚くべき基盤をもっている国のない代表者として、国家以上の力をもっているレバレンド・ムーンが、どうして海洋に関心をもつのでしょうか。今後、人類の食糧問題や飢餓問題のようなものを解決できる所は海しかないと思っているからです。

多くの人は、海水魚は淡水で生きることができず、淡水魚は海水で生きることができないと思っていますが、そうではありません。鮭のような魚は、海で暮らしてから淡水に上がってきて卵を産むのです。ですから、三週間で完全に変わるのは問題ありません。三週間、十日間で変わります。これは空想的な話ですか、それとも実質性のある話ですか。コンピューターがポケットに入れられるくらいに小さくなるでしょうか、ならないでしょうか。その世界へ行くのです。ですから、海の主人になるのですか、陸地の主人になるのですか。どちらに、よりなりたいですか。

北極に行って鉱山を掘り、南極の海の深い所でダイヤモンド鉱を掘り、黄金鉱を掘るのです。水中のダイヤモンド・ラインに行って掘るのです。男性だけが掘るのではなく、女性も掘るのです。その中に入っていって真の愛をなすことができるならば、素晴らしい愛になるのではありませんか。千尋の海底に入

っていって愛する時は、行く道が険しいがゆえに、その愛も素晴らしい愛になるのではありませんか。

衝撃を受け、苦痛も受けるのですが、それ以上の愛を求めてそこまで来るからです。そこで愛する場合は、すてきな愛になるでしょうか、不完全な愛になるでしょうか。海の底に入っていって愛し合いたくはありませんか。老いれば誰もがみな死にますが、海の底で二人で愛し合いながら暮らしたのちに死ねば、それは幸福です。

先生は海への関心を生涯もち続けてきました。大洋的運勢が来るからです。ですから、皆さんも海に関心をもたなければなりません。その次に大陸に関心をもたなければなりません。

海洋事業は有望性があります。私には明確な概念が定立しています。ゆえに、私は「人類のために海へ行きなさい」と宣言するのです。

二　真の御父母様がなされた海洋摂理

一) 北米を中心とした海洋摂理

(1)アメリカの水産業

アメリカが豊かに暮らそうとすれば、若者は海へ行くべきだという風潮をつくらなければなりません。そのようになれば、国家の新しい未来像が開拓されます。その時は、皆さんが責任者になって、陸地にあるすべての工場を逆に引き継ぐのです。陸地にある生産工場は、門に錠が掛かるようになっています。個人の利益を追求してきた工場は滅びるのです。私たちは、国家の利益を追求する工場を営むので、国と協力して世界のために進んでいくのです。国家の支援のもとで、いくらでも発展することができるのです。

今、海洋都市がすべて廃虚になっています。若者が海に出ていって何カ月も戻ってこなければ、彼らの妻はあちらこちらを踊り回って、そのうち浮気をして荷物をまとめて逃げていってしまうのです。ですから、若者は船で出ていかなくなるのです。このようにして完全に廃虚になりました。私にお金が少しあれば、東部から南部を経て、西部までの埠頭を完全に買ってしまわなければなりません。それは良いですか。

現在、アメリカにおける産業分野はすべて軌道に乗っています。すべて定着しています。唯一アメリカに残っているものは、陸地のすべての資源よりももっと膨大な基盤である海洋分野、すなわち水産業の分野です。それがアメリカでは完全に没落状態に入っています。それがどれほど膨大な資源か考えてみてください。海洋事業をする人は、大洋の中に隠されたすべての資源を掌握することができる後継者です。三分の一は陸地で、三分の二は海洋なので、三分の二の資源が海洋に埋もれているのです。ですから、このようなことを計画し、将来これを管理して主管することができる運動とは、どのような運動でしょうか。それは、海洋事業を行って世界的組織をもった基盤と、思想的に世界的組織をもった基盤、この二つしかないと思うのです。

海洋都市が疲弊すれば、その国の経済も疲弊するようになっています。アメリカは、資源をもってその海洋都市を世界と連結させる

ことができる基盤をもっているにもかかわらず、それをなすことができなかったので、アメリカ政府は緊急措置を取らなければならない段階に入ってきているのです。海洋都市の責任者も若い人を探しているのですが、若い人がいないので、私たちがこれに責任をもつのです。また、妻が逃げていくことはないという、そのような思想をもった若い夫婦が必要です。それはムーニーしかいません。

このようにして、その都市にしっかり定着すれば、海洋都市は復興し始めるのです。三年から五年以内であれば、政府から支援を受けて五十人が船を造ることができます。五十人ずつ三十箇所ならば千五百隻です。そうでしょう？　千五百隻ほどの船を造ることができます。アメリカの港をすべて合計すると三千数箇所あると認識しています。ですから、三千数箇所の港に五十名ずつ行けば十五万人でしょう？　そのようになれば、アメリカの海域を完全に消化することができるはずです。

海に関心のある優秀な人々を中心として、フィッシング・ボートをもつように組織します。ですから、一つのセンターでは、五十名の青年男女を集めて海洋へ行く基地運動、教育運動をするのです。そのようにして募集をするのです。現在、アメリカの海岸都市がどのような傾向になっているのかというと、海洋都市が疲弊しているので、みな引っ越したりして解体してきているのです。ゆえに、有力者やあらゆる所の責任者は、これを防いで海洋都市が復興することを願っています。

それで、私は行くや否や、すぐにこのような計画を立てて、地方の有力者を中心とした後援会を組織しました。そのようにしたので問題はありません。そのようにして、私たちの責任者が一日に四百ドル分の魚を獲る方法を教えてあげれば、永遠に持続するのです。

「ニュー・ホープ」という私たちの船の名前は、アメリカの東部ではツナ釣りで有名であり、南米にまでうわさが立ちました。私がそのようなことをするのも、水産事業を開発する要員を養成するためでした。私が二十四時間船に乗って回りながら、私たちの若者に「船に乗りなさい」と言うと、逃げていって話も聞きませんでした。ところが、私が時間さえあれば話をして四年、五年が過ぎ、七年もすると、女性までもが「私がキャプテンになる」と言うようになったのです。そのように言うことができる雰囲気をつくりあげました。

そのようにしながら造船所を造り、その次には加工工場を造って販売することができる訓練をさせました。商店を造り、移動バン（van：大型トラック）を中心とした販売訓練をさせたのです。一年の間で船を造り、網を編んで魚を獲り、その次には魚を販売する仕事までしました。シー・フード・レストランまで造り、そのようなことを中心として七年間基盤を築き、今では水産業界に問題を起こすことができる段階にまで入ってきました。これが軌道に乗れば、相当な資本が動くようになります。

皆さんの中で、船に乗るのが好きな人は手を挙げてみてください。皆さんがいなければ、これからのアメリカ世界は海で成功することはできません。海での成功はありません。アメリカで海上、海底における成功はないのです。そのようになれば、アメリカはいくら大きなことを言っても後退しなければなりませ

ん。そのようにならざるを得ません。どれほど大変でも、皆さんは海に出ていかなければなりません。海を突き抜けていくのです。そのようにしてこそ、海に希望が連結するという事実を知らなければなりません。

海に出ていけば、二カ月から六カ月の間は船に乗っているので、最近の妻は、「ディスコだ、ツイストだ」と言って踊りでも踊って浮気をして回り、彼らが帰ってくるころには荷物をまとめて逃げていってしまっているのです。子供は孤児院に入れてしまい、一家四散するケースが八〇パーセントにもなるので、誰があえて海に出ていこうとするでしょうか。また、海に行って魚を獲ったとしても、その販路がありません。アメリカ人は魚を食べません。ですから、この水産事業に手をつければ、莫大な力の消耗が伴うのです。けれども、仕方がありません。水産事業に手をつけて成功できる基盤をつくらなければ、今後世界に対する作戦を経済的に支援することはできないと思っているのです。

アメリカで有望な事業は、水産運輸事業と漁業です。水産運輸事業と漁業しかないという結論を出したのです。それで、私は「三年後にはこの事業を始めなければならない」と思い、三年前に船を購入し、今年からその事業を始めているのです。「ここニューヨークの海はどのようになっていて、魚はどこにいるか」などといった東部海岸地域に関する大抵のことは、この三年間ですべて調査を済ませておきました。今後、私は国家と交渉して養魚場をつくることを考えています。

海水魚の養魚場、淡水魚の養魚場など、どのような養魚場でもつくることができます。何でもすることができるというのです。ニューヨークのすぐ前にある干潟地でも、かにからどんな魚も、すべて養殖することができます。それを研究しなければなりません。その事業がどれほど膨大なものでしょうか、どれほど膨大な事業になるかを考えてみてください。

女性は船乗りを好まないでしょう？　私がどうしてこの水産業をしようとするのかというと、今アメリカではこの水産業が完全に全滅状態にあるからです。なぜそうなのでしょうか。男性が船に乗って出ていき、一カ月も二カ月も帰ってこなければ、女性たちはみな浮気をして離婚して逃げてしまうのです。また、近ごろのアメリカの若者は、何回か大きな波に出遭って苦労すれば、それでもう海に出ていくのが嫌になるのです。そして、金持ちも、全くここに投資をしようとはしません。

ですから、アメリカを生かすためには仕方なく、統一教会の青年がこの事業を引き継ぐしかないのです。統一教会の青年や統一教会の女性は、離婚をすることができますか。絶対に離婚できません。離婚して逃げようとは考えないで、一緒に船に乗って出ていく訓練をしなければなりません。先生が命令さえすれば、船乗りたちはどこからでも集まってきます。そのようにして訓練されて出ていくのです。

私が手をつけなければ、アメリカの水産業は復興させることができません。絶対に復興させることはできません。そのような意味で「アメリカに私は多大な貢献をなすだろう」と思っています。それで現在、約四千トンの

船を買うために交渉しています。そのような種類の船は世界に一つしかありません。

一昨日ベリータウンに行って、こいを数千匹獲りました。また、池をすくうと亀が六匹出てきました。それで、これくらいの大きな亀をハドソン川に放してあげ、また、最初に獲ったこいを放してあげました。そして、「お前は愛を通して生まれ、愛のために死ぬのが道理なので、愛する人々のために生きることはうれしいか、死ぬことはうれしいか」という、このような問題を中心として考えてみました。

「このように見れば、お前は犠牲になるのだが、将来のアメリカの水産業を発展させ、今後統一教会の人たちがお前たちを通して神様の前にもっと忠誠を尽くし、人類をもっと愛することができるようになるだろう。そのような愛の力になり、エネルギーになり、肉になると思っている。お前たちは魚に生まれたが、私の息子、娘のごとくに思ってあげよう。そして、アメリカのどの国民よりも愛し、アメリカ国民以上に思ってあげよう。そのような肉となり、心となり得る一部分として愛してあげるが、それでも嫌か」とこいに向かって言いました。「こいよ、お前たちは愛する息子の血となり肉となり、息子、娘の身代わりとなって、愛するアメリカ国民の肉となるのだ」と言いました。

「宗教指導者であるレバレンド・ムーンが、どうしてあのような漁夫になって水産業をするのか。それは卑しい者のすることだろう」と、人は言うことでしょう。私はそれを知っています。しかし、私たちは小さな目的をもってしているのではありません。皆さんがそのような訓練をして、アフリカなどの重要な港を一つずつ受け持っていけば、そこでは世界的な基盤が一遍に築かれるのです。五十カ国に基盤が築かれるのです。

今まで、漁夫たちは一日に八時間仕事をしましたが、これからは「八時間以上は仕事をしない」という話は出てこなくなります。完全にひっくり返るのです。アメリカ水産業界の生きる道ができるでしょうか、できないでしょうか。これは、黄金の門が開くのと同じです。黄金の鍵をもって黄金の倉庫の門を開けるのと一緒だということを知らなければなりません。ですから、統一神学校を出た女性はみな、この次に嫁に行く時は、船長のところに嫁に行くのだと思ったらいいでしょう。

アメリカの水産業界は、私たちでなければできない段階に入ってきました。膨大で無限な資源が私たちを呼んでいます。ゆえに今後、世界を主管するための経済基盤として、これを活用しようと思っています。

アフリカ人が食堂のような所に行って食べる場合、自分が食べていた魚、自分が食べ慣れている魚を探します。しかし、その魚が食堂になければ、そのお客さんは帰ってしまうのです。ですから、五大洋で獲った魚を食堂に補給する運動をしようというのです。アメリカ人は、一日に八時間以上仕事をしないので、五時になれば店を閉めてしまいますが、私たちは二十四時間店を開けておくのです。また、私たちと関係している食堂が品切れになれば、私たちと関係しているほかの食堂から補給してあげるのです。ですから、誰もダメージを受けることはありません。それで、

今水産業界においては、「レバレンド・ムーン」と言えば知らない人がいません。このようになっていることを知らなければなりません。

食口はこのオーシャン・チャーチ（ocean church：海洋教会）が好きではありません。「水産業をしなさい」と言うと逃げていってしまうのです。それで、今先生は、早く全米に一千軒の日本食堂をつくることを計画しています。それが今の計画です。そして、五百三十五箇所の海洋教会をつくるのが次の計画です。今、二つの準備をしなければなりません。

今後、各州に私たちの水産業基地ができれば、そこにコンドミニアムを一つずつ造ろうと思います。これを造って日本人、韓国人、アメリカ人、そしてドイツ人を中心としたヨーロッパ人、これらの四カ国の人を一緒に住まわせるのです。出勤は別々にしても、帰ってくれば一緒に食事をして、そのほかのことも共にするのです。このようにして、一つの家族生活の形態を整えて訓練をしなければなりません。ここをパスできない人は、今後地上天国の理想圏に入っていくことはできません。天国に入る資格をもてないのです。それで、今私は、その生活基盤を築く仕事をするためにこの事業をしているのです。

なぜ水産業をするのでしょうか。今後、人類の食糧問題を解決する方策は、養殖以外にはありません。皆さん、将来は海岸に数十階、数百階のビルを造り、ボタン一つですべての養殖ができるようになるのです。百坪もあれば、一つの世帯が子供たちを大学で勉強させながら暮らすことができるのです。今の時代は科学が非常に発達しているので、何十里、何百里、何千里も離れた所から海水を引いてくることができます。山の中に養殖ビルをいくらでも建てることができるのです。そのようにしなくては人類の食糧問題を解決することはできません。ですから、私は深刻なのです。

統一教会の若い勇士は、いつかは遠洋漁船に乗ってみる経験をしなければなりません。先生は、水産業の経験が素晴らしい訓練になると思っています。先生がさせることなので、皆さんはしなければなりません。いくら東大出身だからといっても、それを逃れることはできません。

レバレンド・ムーンには、食糧問題のゆえに死んでいく人々を生かすために、今まで二十年間活動した実績があります。水産業の世界には、原料が無尽蔵にあります。今では、アメリカでもレバレンド・ムーンのことを信じるようになっています。今まで私は、網を編んだり船を造ったり、様々なことをしながら世界における基盤を築いてきました。そのようにして築かれた基盤は、誰も無視することができない段階に入ってきています。それは水産事業界において、すべての人が知っていることです。

テキサスの農場に行ったことがある人は、手を挙げてみてください。アメリカ人は全員行ってみたことがあると思います。皆さんも一度招待しましょうか。ここで、今、うずらやきじ、また鹿のようなものをハンティングしようと思っています。そこには、自然の生

きた七面鳥がたくさんいます。それから生きた猪やおおかみ、そして虎のような姿をした獣までいるのです。あらゆる獣がいます。今からここに関心をもち、自分たちで農場をつくり、ハンティングや釣りなど、すべてのことが管理できるように開拓しなければなりません。

今後、第三次産業が発展することができる基地ができてきます。それで私たちは、三十箇所に船を十隻ずつ浮かべて訓練をしているのです。それを三百箇所まで拡大しようと思っています。どこの町に行っても、釣りができるようにしようと思っているのです。今後、世界にルートをつくろうと思っています。フランスからヨーロッパ、ここをすべて観光コースにするのです。そのようなことができる、釣りに関する専門家を育成しなければなりません。船の運転をしながら観光案内役までするのです。これは大きなビジネスです。このようにすれば、その貴重なお客さんを中心として、今後私たちは世界的な大事業をすることができるのです。世界的な国際会社をつくり、膨大な資源を採取することができる基盤が自然に築かれるのです。

(2)セイロ流通組織

先生がアメリカで計画したことは二大事業です。水産事業とセイロ販売組織です。先日「ムーニーが水産事業分野を完全に占領する」と言って、水産業界でとても問題になりました。その事実を皆さんは知らないでいます。このことは知らないといけません。

経済活動の組織面において、いかにして全国の販売市場を掌握するかという闘いが最後に残された障壁です。セイロという世界的な機械販売組織を通じてアメリカで力をもち、また水産事業でも力をもち、これらが一つになって動くようになれば、アメリカや自由世界に対する影響圏は自動的にできてきます。ここで経済基盤を築くと同時に、もう一つ準備することは、言論界における世界基盤を確保するための「ワシントン・タイムズ」と、「インサイト」という週刊誌です。現在、これらを通じて世界に影響を及ぼすことができる版図をつくっています。

有り難いのは、水産事業において、アメリカは膨大な資源をもっているにもかかわらず、そこには主人がいないということです。既に、「レバレンド・ムーンと統一教会が主体にならざるを得ない」という評価を受けるまでに上がってきたということは驚くべき事実です。科学技術を中心とした製品の販売市場において、レバレンド・ムーンがアメリカで力をもったといえる基盤を築くために「セイロ組織を五十州に編成しなさい」と指示しました。セイロ・システム自体が国境を超越したのです。今まで、国境を超越した展示場、販売市場はありませんでした。

今、皆さんがなすべきことは、アメリカにおいて経済基盤を築くことです。それが先生の選択した、セイロ組織の全国化運動と、水産事業の販路の世界的基盤を築く運動です。これをどのように成し遂げるのかということが現実的な問題として登場しました。それが結論です。現在、機械工業が西欧文明の中心だとすれば、その一方で水産事業には主人がいません。ですから私は、損害を被りながら

も水産事業に投資しているのです。そして、セイロの発展のために投資しているのです。そのような結論が出てきます。

ここに投資をして基盤をつくる努力をしなければなりません。このように見ればセイロは、世界の販売組織とアメリカ水産事業に力をもつための基盤です。ですから、「ここに拍車をかけなければならない」というのは妥当な結論です。

アメリカにおいて、セイロ組織によって機械工業と水産事業に力をもてば、アメリカ経済を動かすことができる強大な勢力になります。それで今、南米連合機構をつくっています。そのようになれば、アメリカは困ることでしょう。四十年間、先生がこのような頭と能力をもって苦労し、開拓のためにそのようなことをしてきたのは、それが歴史に残る先覚者の行くべき道だったからです。そのようにして伝統を立てることが貴いことなので耐えてきたのです。

先生が縦的な伝統を立てたならば、皆さんには横的な伝統を立てなければならない責任があるということを知らなければなりません。横的基準まで先生が立てなければならないのですか。それは皆さんの責任です。今後、セイロ組織を通じて、いかにして急進的発展をするかを考えなければなりません。

「水産事業がセイロと何の関係があるのか」。このように思ってはいけません。今後、セイロの人を水産事業分野に入れ、水産事業の人をセイロに入れるかもしれません。いつでも自由に交替させることができるのです。それを知らなければなりません。ですから事務室も、一つの事務室を使わなければならないという結論が出てきます。お金もないのに、どうしてそれぞれが一つずつもっているのかというのです。この機会にすべて一つにするのです。多くの責任者は必要ありません。一人の責任者を中心として命令すれば、天下が動くような組織にしなければなりません。

(3)アラスカ水産業

アメリカは、その国土を中心として三つの海域に世界四大漁場うちの三大漁場をもっています。そこにノルウェーの漁場を合わせれば四大漁場になります。メキシコからアラスカ、そして、カナダにあるノバスコシア地域が世界四大漁場のうちの三大漁場として連結していますが、それは世界の魚のほとんどすべてがそこにいるということです。しかし、その魚を獲る人がいません。二百海里を策定しておいて、完全に主人のいない荒れ地のようになっているのです。

アラスカは、海を中心としてすべてのものが連結しています。海のすべての資源、すなわち魚類と原資材が集中している場所がアラスカです。世界の水産資源のうちの八〇パーセントがアメリカにありますが、そのアメリカの水産資源の七一パーセントに相当する魚がアラスカにいるのです。水産資源において、アラスカは中心です。残された資源の獲得地は、このツンドラ平原しかありません。

先日、アラスカに行った時、長さが六十マイルにもなる真っ黒なカープ（carp：こい）の大群が押し寄せてきました。幅が十マイルで、深さはどれくらいになるか分かりません。それを考えてみてください。その群れを見れ

ば主人がいません。主人がいないのです。レバレンド・ムーンは大洋上にそのような富が浮いていることを知りました。ですから皆さんは、未来の所有者にならなければなりません。

水産事業にどれくらいの発展をもたらしたでしょうか。今では船におけるすべての機械は、私たちが研究し、私たちの手で作ったものが最高の位置に立つことができるようになりました。この驚くべき事実を知らなければなりません。私たちがアラスカで魚を釣っていれば、どこで魚が多く獲れるかということが分かるようになります。ゆえに、それをコンピューターに入力しておくのです。コンピューターに入力しておけば、ボタン一つでいつでもそこに行くことができるのです。コンピューターにテープを入れてボタンを一つ押せば、十年後にもその場所に行くことができるのです。

そのようになれば、いつでもたくさんの魚を釣ることができます。漁夫が誰にも秘密にしておいて死ぬ時になって、初めてその息子に遺言として教えてあげるような材料を、世界五大洋において無数にもつことができるのです。ボタン一つ押せばいいのです。五大洋にそのような根拠地を記録しておけば、季節に従っていつでも漁業を続けることができるのです。それは、水産事業において莫大な利益をもたらすことができるものです。

アラスカに工場を造りました。その次には、東部のグロスターの埠頭も買おうと思っています。また、南方のアラバマにも、私たちの船の工場があるでしょう？　基地がすべてあります。皆さんは、船や海について関心さえももっていなかったでしょう？　私は十年間で、すべてを準備したのです。

アラスカの西部地方、南部地方、東部地方に加工工場を造り、様々なことをしなければなりません。魚がたくさんあっても、その処理ができないので製粉工場、すなわちフィッシュ・パウダー（fish powder）工場を造ろうと思います。なぜ粉を作らなければならないのでしょうか。貯蔵問題が解決されるからです。いくら良い魚でも、八カ月以上はもちません。冷凍魚であっても八カ月以上たてば、再度水を供給しなければなりません。氷が凍っていても温度差によって、その氷の間に風が入っていくのです。風が入れば、魚から水蒸気が氷の間を通って出ていくのです。ですから、全体に水をかけて再度冷凍し直さなければならないのですが、それができません。何度か取り出して冷凍していると、一定の温度を維持できません。したがって、その品物は廃物となるのです。

えびをどのように処理するかについて先生は考えました。パウダー、すなわち粉を作るのです。えびは一年で死にます。それは、神様が魚の餌としてつくられたものです。しかし、すべてを獲って食べることはできないので、みな死んでいきます。毎年、そのような量の魚が海に流れていくのです。また、それは公害と直結します。この問題をどのように解決するのかということを先生が長年の間研究し、パウダーを生産するようになったのです。

飢え死にする人は、世界的に見て一年に約二千万人ほどです。この人々を中心とした食

糧問題の解決のために、二十数年前から海洋産業に関心をもったのです。魚の粉、フィッシュ・パウダーが問題です。それは上質の蛋白質であり、どの動物にもない栄養分です。これを粉にすることによって保管と運搬が楽になります。私たちがこのフィッシュ・パウダーを一トン生産すれば、それを三十倍、五十倍に増やすことができます。それは九八パーセントが蛋白質です。先進国家がそのようなことを解決しなければならなかったのに、それを解決することができなかったのです。

ものすごく大きな魚がいるとともに、また、魚の種類がどれほど多いか知れません。様々な魚がいるのです。私はそれを見て「いやー、アラスカから海に出ていって魚を獲るよりも、投網の上手な人が三、四人もいれば、一日で船一杯の魚を獲ることは問題ないなあ」と思いました。それで、「賃金を与えて魚を獲り、フィッシュ・パウダーを作って売らなければならない」と思い、すべて調査をしました。

今後は、魚を粉にして調合すれば、パンも作ることができます。何でも作ることができます。すてきなパンを作ることができるのです。海の魚を食べることは肉食よりも優れているのです。体に良いということもすべての人が知っています。しかし、これが未開拓です。アメリカが手をつけていないのはこれしかありません。ですから、私たちがこれをしなければなりません。これがとても有望だということは、先生がはっきり知っています。お金は先生が用意しますが、そのような意欲をもった人をいかに育てるかということが問題です。

カナダやソ連もそうだし、アメリカや日本、ドイツも、私たちが現在行っている事業に関心をもっています。本来この海で獲れる魚の二〇パーセント以上を、人は食べることができません。残りはすべて捨てるのです。ですから、捨てるものを集めて粉にして人が食べることができる栄養剤を作り、それを低開発国に送ろうと思っています。そのようなうわさが立ったので、全世界の低開発国家の人々が統一教会に対して多くの関心を寄せているのです。

日本政府は「自分たちには海洋資源が必要だ」と思っています。海洋資源とは魚のことをいうのです。ですから、日本人は魚を欲しがっているのです。しかし、その魚がいません。一方でアメリカはアラスカの魚を加工して売ることを願っています。ですから、アメリカの魚を獲って日本にあげようというのです。それで、アメリカ政府は日本人と、また、日本人はアメリカ政府と交渉するのです。日本はアメリカの魚が必要であり、アメリカは日本の技術が必要なので、互いに合作投資しようというのです。

アメリカという国で最も有名な海洋基地、水産業基地がアラスカです。このアラスカとノバスコシア地域、そしてメキシコ湾、それからノルウェー、これが世界の四大漁場です。そして、その中の三大漁場をもっているのがアメリカです。その中で最も代表的な場所がアラスカです。

今後、ソ連が政治的に主張してくるかもしれず、日本とドイツが連合して主張してくるかもしれません。このように、未来の世界的

な政治問題が引き起こされる可能性がある基地です。ところが、アメリカ人は二百海里を策定しておきながら、ここを中心とした水産物に対して主人になる能力をもった人が全くいません。

アメリカ人は魚を食べません。皆さんの中で外国によく行かれる方は御存じでしょうが、食べてもロブスター（lobster：大きいえび）と、それから、きょう釣ろうとするハリバット（halibut：北方海洋産の大きなひらめ）、それからサーモン（salmon：鮭）、その次にはトラウト（trout：ます）、このようにいくつかのものしか食べません。そのような魚は大概どこで獲れるかというと、寒帯地方の寒流で獲れます。ですから、脂がのっていておいしいのです。アメリカ人が食べるその何種類にしかならない魚がどこで育つのかというと、このアラスカで育つのです。

イエス様はペテロたちに「あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」とおっしゃいましたが、それはどういうことかというと、魚で人を象徴したのです。魚を獲って海洋圏を握れば、陸地圏まで握ることができるようになるというのが摂理観です。また、アラスカを占領すれば、すべての海洋圏が占領されるのです。なぜなら、世界の水産輸入の八五パーセントがアラスカから出てくるからです。それ以外の五パーセントは大西洋から出てきて、それから一〇パーセントは太平洋から出てくるのです。それで一〇〇パーセントになるのです。

アラスカに行けば鮭がいます。鮭を知っているでしょう？　鮭には五つの種類があります。ピンク色をしたものもいれば、赤い色をしたものもいて、様々な種類があります。淡水で卵を孵化して何カ月してから送り出せば、それは海に出ていくのですが、四千マイル、五千マイルの五大洋を経て戻ってくるのです。そのように泳ぎ回るのです。そのように泳ぎ回って四年がたつと、卵を産むくらいになります。成熟した雄と雌の鮭になるのです。そのようにして卵を産む時になれば、どこに行って真の愛の対象と出会うのでしょうか。自分の生まれた所を訪ねていき、そこで出会おうという条約ができているのです。そのような法度になっています。誰がそれを立てたのでしょうか。その鮭が立てたのでしょうか。これは神秘的な問題です。

アラスカの鮭を見れば、七月に小さい稚魚を孵化して海に送り出せば、四千マイルから五千マイルを四年間泳ぎ回ったのちに、昔自分が離れた故郷の匂いをかいで、再び戻ってくるのです。今日、その神秘は、科学でも解析することができません。人間がいくら研究しても分かりません。それが何かのアンテナやレーダーをもっているので帰ってくるのですか。四年たてば、自らその故郷を訪ねていって卵を産み、卵を産んだのちはすべて死んで、自分の体をその稚魚に与えるのです。そのようにしながら、その稚魚が大きくなるようにしているのです。魚でもこのようにしているのです。それなのに、万物の中で最も貴いという人間のこの姿は何ですか。人間は自分の故郷に戻ることを知りません。どのように行くべきかを知らないでいます。

私はサーモンを見て「サーモンは統一教会の人たちとそっくりだ」と思いました。故郷を訪ねていく群れが統一教会の群れだからで

す。そして、ペア・システムを求めるのは「神主義」であり、それがぴったり一致しているのです。雄と雌がペアになって四年から六年の間、海で一緒に泳ぎ回るのではありません。時になれば、先に雄が上がってきて、その次に雌が上がってきて、そこで初めて出会うのです。そして、水がたまっている所に雄と雌が集まって、統一教会で行う婚約式のようにしてペアを形成するのです。ところで、本当に不思議なのは、海にいる時には、雄と雌は大きさが少し違うだけで見た目は全く同じであるのに、これが相手と結ばれると、雄は二週間で別の姿になるのです。それは「そこまで変われるものか」というほどです。

淡水に上がってきてペアを組めば、雄の姿は雄ライオンのようになるのです。口がこのようになって、歯もこのように出てきて、見れば怖いのです。頭が出てきて背中が出てくるのです。雄ライオンの姿のようにです。サーモンのようなものも、優秀な種を残すためにそのようになっているのです。四千マイル、五千マイルの海を泳ぎ回りながら、どのようにして故郷を訪ねていくのでしょうか。それは神秘のなぞであり、今まで解析ができずにいます。いかにしてその小さい魚、すなわち故郷の地で約六カ月たったわずか十五センチの稚魚たちが海に出ていって、そのように大きくなって上がってくるのかというのです。物心がついた時には、既に自分の子供をもつ時を知るのです。

サーモンは、海に出ていって自由気ままに泳ぎ回ってから、雄と雌が来てマッチングをします。そして、マッチングをしたのちには、お互いが「ため」に生きるのです。これは、統一教会の夫婦が愛する時の、正にその手本となるのです。父母が愛するのと同じです。統一教会は、サーモン以上のカップルにならなければなりません。そのような映画のようなことを見ながら、人々が学ぶことはたくさんあります。死んで子供たちの餌になって子孫を残そうとするのがサーモンです。動物の本能世界の伝統を代表する存在として生きているのがサーモンです。

世界四大漁場のうちの三大漁場はアメリカがもっています。カナダのノバスコシア地方とアラスカ州とメキシコ湾地方です。皆さんは、知らないのでそのようにしているのですが、水源資材の豊富さを知れば熱狂するはずです。黄金脈は何十年も掘れば終わりですが、これは永遠です。ところで、その主人がいません。それで、私は水産業に関して二十年の計画を立て、今十五年目に来ているのです。アメリカの水産業界では「文総裁は異端者だ」と言ってデモをしています。「文総裁、出ていけ！」と言っているのです。このように大騒ぎをしています。しかし、いくらやってみたところで、問題は実力です。

海に行けば魚釣りもします。私はあらゆる魚を釣ってみました。太平洋、大西洋、地中海の魚をすべて釣ってみました。釣ってみたことのない魚がありません。アラスカでも釣りました。何も持たず、パンツだけはいて主人として振る舞ったのです。漁夫の世界に入っていって三十分も話してあげれば、「あー、私の家に行きましょう！」と言うようになるのです。そのようにして、金持ちの家に招待され、良い部屋を与えられて食べていれば「家に帰らないで一緒に暮らしましょう！一年間一緒に暮らしましょう！」と言ってく

るようになるのです。船に乗って三日も一緒に回れば友人になるので、いくらでもそのようにすることができるのです。

世界の漁獲量の七五パーセントをアメリカがもっていますが、その漁獲量の八五パーセントはアラスカから出てきます。ゆえに、アラスカは水産の宝庫です。誰がそこの主人になるのでしょうか。そこの主人になるということは、今後海洋産業の王権を掌握することができるということを意味しています。そこはそのようなことができる基地ですが、環境的条件が良くありません。条件が良ければ、ブルジョアがすべてやってしまいます。そこでは、船が難破して人が死ぬこともあり得ます。そのようなことを覚悟しなければなりません。

今回、アラスカで風が吹いて十メートル以上の波が立ったのですが、そのまま走っていくのです。ですから、アラスカ海洋警察本部でＵＤＴ（水中破壊部隊）の訓練をしている人々が感嘆したのです。その時「海に出ていってはいけない」という警報が下りました。少しでも出ていけば、警察が追い回しながら「戻りなさい」と放送して大騒ぎするのです。「私たちの船は沈まない」といくら説明しても信じませんでした。そうして、私たちの船は小さくても勇敢に荒波に乗って出ていくので、彼らが驚くのです。しかし、これを信じさせたので、台風が吹く日に出ていっても、「彼らはそのような人々だ」となるのです。「ＵＤＴ訓練、特戦訓練と一緒なので、雨の降る日だろうと風の吹く日だろうと、生死をいとわずに出ていくのが原則だ」。このようになっているのです。

全世界の漁獲量の七五パーセントをもっているアメリカの中で、その八五パーセントの漁獲量をもっている場所がアラスカです。ところで、アラスカは韓国式発音では「知っていましたか（アラッスムニカ）」と言っているように聞こえます。「知っていましたか」というのは、「風がたくさん吹いて死が交差する危険な所であることを知っていましたか」ということです。

魚は、なぜ寒いアラスカ地方を訪ねていくのでしょうか。暑い所にいた魚が寒帯地方を訪ねていくのです。それは陰陽の調和です。主体と対象が和合する所に行って繁殖しようとするので、すべて流動していくのです。また淡水にいたものは塩辛い海水を飲んで繁殖するのです。しなもくずがにのようなものがそうです。理想的な繁殖をするためには、プラスとマイナスが和合しなければなりません。レバレンド・ムーンは、そのようなことをしているのです。

今まで、先生はアラスカでもどこでも、昼夜の別なく先頭に立って今日の統一の伝統を立ててきました。今後、人類と国と世界は、真の御父母様の前に負債を返す道がありません。永遠に侍り、永遠に従っていかなければならない立場にいるのです。

ここは暖流と寒流が交差する所なので、各種の魚がすべて集まってきます。また、ここで産卵しようと、魚が集まってくるのです。そのようなことで、ここは有名な場所ですが、ここに来て釣りをするという事実は、何と表現すればいいのでしょうか。幻想的です。さらに、韓国の教授たちがここに来て、アラス

カの海で釣りをするということは歴史的事件です。

アラスカは、観光客を誘致すれば世界的な名所になります。今年、韓国は暑かったでしょう？　そのような時に、お金があればアラスカへ行くのです。ここからアラスカまで、約六時間かかります。行く時に逆風が吹くと七時間かかりますが、普通五時間から六時間かかるのです。夕方出発し、飛行機で寝てから朝降りてくれば、これは一日活動圏内に入っていくのです。金曜日の晩に出発し、土曜日と日曜日に釣りをして、夕方飛行機に乗って帰るのです。そのようにすれば、その翌朝には出勤することができます。

ここは、どこに行っても遠くの山を見れば、その山頂は雪で覆われています。周辺の近い山もすべて雪で覆われています。雪で覆われた園の下に青い地帯があり、その青い地帯には花園があります。花が咲いているその下には美しい湖のような青い海があって、そこで釣りをするのです。それは、どれほどの仙境であるか想像してみてください。四方を見れば、高い山によって屏風のように囲まれています。また、アラスカの木は、ピアノの鍵盤を作る、とてもまっすぐな木で、そのような山林が茂っています。その下の森の中には、見たこともないような花がたくさんあります。それが湖の近くにあります。

そこにはまた、鹿もいます。獣たちがたくさんいます。水辺を中心にたくさん住んでいます。食べ物が多くないので、水を飲まなければなりません。冬になれば、海草がすべて死にます。雪が積もるので食べ物がありません。海草をかじって食べて生きているので、海ととても親密な関係をもった鹿や熊のような獣がたくさんいるのです。

アラスカに行くと、四月でも寒いので毛糸の下着を着なければなりません。前方の山に雪があります。ところで、海に行けば無尽蔵に魚がいます。どこでも無制限に魚が泳いでいるのです。釣り糸を投げれば「ワー」とエキサイトするのです。このような経験をした人は、必ずまた来るようになっています。「来るな」と言っても来るのです。一度魚を釣る刺激的な経験をすれば、忘れることができません。

暮らすにも良い所です。すべてのものが備わっています。景観も素晴らしいのです。三分の二が雪で覆われた山で、暮らす場所は青い地域の中心です。海は青く、空には鷲が飛び回っています。

アラスカから飛行機で行くと、モスクワには八時間かかり、ロンドンには六時間かかり、ニューヨークには十時間かかります。ですから、ここは交通の要地でもあります。今後、人間の力をもって、アラスカの平原で農作物を耕作することは問題ありません。今も温床栽培をしています。そこでバナナもできるのです。熱帯地方から来るのではありません。

食べて暮らすすべての産物がアラスカから出てくるようになれば、どのようになるかを考えてみてください。アラスカは韓国の何倍にもなります。カリフォルニアの四倍だといいます。カリフォルニアがアメリカで最も大きな州なので、それだけ膨大な地域だということです。そこには無尽蔵の原資材が埋まっ

ています。そこの主人はソ連でもなく、アメリカでもありません。

そこに、誰も関心がありません。自分たちの経済問題、政治問題、体制問題でめちゃめちゃになっていて、原資材の消耗だということは考えもしないのです。今後は、誰が原資材を支配するのかということが問題です。先生は、それを準備しています。それで、誰が北極を主管するかということが重要です。北極を主管すれば、世界を主管できるのです。極がそうなのではありませんか。北極を主管して主体的立場に立てば、南極の主管は自動的になされるのです。

アラスカ精神という言葉を聞きましたか。アラスカ精神とは何でしょうか。朝五時に起きて御飯を食べて海に出ていけば、夜の十二時にならなければ帰らず、一時や二時に帰ってくるときもあるのです。

責任量を果たすことができなければ帰ってくることはできません。事情をくんであげるのではありません。修練過程では、責任を果たすことができなければならないのです。

ですから、魚を釣るのを見物するのではありません。魚釣りの訓練をするのは、今後世界中どこへでも行ける指導者を育て上げるためです。誰もが魚を釣ることができるのではありません。専門的にならなければなりません。多くの経験を通して学んでこそ魚を釣ることができるのです。

(4)養殖業

その地方に水産大学の教授がいるとして、それらの教授が、その地方の水域にはどのような魚が住んでいて、どこの水域には何という魚が住んでいるということを研究したものがあれば、皆さんは、彼らの研究したものが正しく合っているかをテストして、しっかり記録をして、それを本にしなければなりません。五十州の海を調べて、その情報をすべて一箇所に集め、どこへでも出ていって魚を獲る計画を立てるのです。海に沿った州の全体の海域、漁業をする地域全体の深さと温度をすべて測り、その海域に何という魚が棲んでいるかをすべて調べ、それを本にしなければなりません。そのようにすれば、ボートを買ってあげるのです。三十数州、すなわち海に沿っているすべての州は、漁場を中心として本を作り、もし、海がなければ湖を中心としてそのようにさせるつもりです。そして、今後私は、養魚をコーチしようと思っています。

先日、私はフロリダに行きましたが、そこにはわにが暮らす湿地がありました。私は、国家と交渉して養魚場をつくることを考えています。海水魚の養魚場、淡水魚の養魚場など、どのような養魚場でもつくることができます。何でもすることができるというのです。ニューヨークのすぐ前にある干潟地でも、かにからどんな魚も、すべて養殖することができます。それを研究しなければなりません。その事業がどれほど膨大なものでしょうか、どれほど膨大な事業になるかを考えてみてください。海水魚の骨で動物の飼料をつくることもできます。飼料のようなものは、雑魚を捕まえて、それでつくることもできるし、それから調合をしてもつくることができます。相当な事業になるだろうと思っています。その世界的な組織網をもって、それぞれの国で事業をすることを考えてみてください。そし

て、缶詰め工場をすれば相当な事業になります。

南米のような所には山がないので、水を完全にコントロールすることができます。井戸はそこでだけ掘るのであって、ほかの所はいくら掘っても水は出てきません。ですから、水の商売だけをしても暮らすことができます。海水を水蒸気にして、水をいくらでもつくることができます。今の科学的な力をもってトンネルを掘り、十里、百里、千里の遠くにまでフィッシング・ファーム（fishing farm：養魚場）・ビルを造ることができます。ニューヨークの貿易センターよりも高いビルが造られることでしょう。

パンタナールで魚の種類に従ってビルで養殖をし、コンピューターにその資料を入れておくのです。そのようにして、ボタン一つ押せば、昼食時にはそこを通っていく人がその中から魚を選んで買って食べることができるようにするのです。ぴちぴちはねている魚を刺身にして食べることができる場所をつくるのです。

現在、世界には水の多い湖がたくさんありますが、アラスカだけでも二万坪以上の湖が三百万箇所あります。二万坪を中心として魚を養殖すれば、二百世帯、三百世帯が暮らすことができます。では、三百万箇所ならばどれくらいですか。二万坪ずつとすれば、六億という人が暮らすことができるのです。二×三は六ですから、六億です。ですから、アフリカの湖畔に養殖場をつくってあげれば、六億五千万のアフリカ人を食べさせてあげることができるのです。ですから、人類の食糧は問題になりません。牛肉などの陸地の肉よりも魚は健康に良いのです。消化吸収が良いのです。ですから、今後「牛肉などの肉類を食べなさい」と言っても食べない時代が来るのです。

南米にあるアルゼンチン、ブラジル、ウルグアイに湖がどれほど多いでしょうか。何千万になるはずです。アラスカにあるのが三百万箇所とすれば、何千万箇所になるはずです。そこに多くの水は必要ありません。何百坪だけつくって、そこに水を入れて何種類かの魚だけを育てれば、それを食べて暮らすことができます。人工的につくって、それをモデル形態として教育し、運営させれば、食べて暮らすことができます。食糧問題が解決します。水と土地がある場所では、食べて生きる問題は解決されるのです。ゆえに、海に対する関心をもって釣りの訓練をしなければなりません。

先生がなぜツナに関心をもつのでしょうか。ツナ一匹がどれくらい卵を産むかというと、二百万個産みます。それがどれくらい孵化するかというと、〇・八パーセントしか孵化しません。なぜでしょうか。卵を産めば、小さな魚がすべてそれをのみ込んでしまうからです。ですから、先生はツナの養殖場をつくろうと思っています。卵を一〇〇パーセント孵化することができる技術さえもてば、人類の食糧問題は一瞬のうちに解決されると思うのです。

皆さんの好きな魚がナンバーワンとするならば「ナンバーワン」と呼ぶように、魚の番号が世界的に統一されるようになります。百何番ならば百何番、あるいは五十何番ならば

五十何番というように、その種類の中に好きな魚がいれば、電話一本で注文するのです。「何時何分に養殖場に行きますから、何番と何番の魚を準備しておいてください」と注文するのです。その時は、刺身にする包丁が一本あればいいのです。その包丁で刺身にして、おいしく食べればいいのです。そのような時代が来ます。

今後は世界的に大きな湖をつくって、そこに魚を養殖して釣りをさせる事業が最も魅力的な事業になるだろうと思っています。ですから、今からそれを準備しなければなりません。養殖場をつくって魚を捕まえて、どんどん釣り堀に入れるのです。そのようにすれば、一年十二カ月釣りをすることができるのです。

牧場のようなものを大きく営んで生活するよりも、養殖をすれば、五十坪くらいでも、一つの家庭が暮らすのに問題はありません。高い山でも、海水をいくらでも引いてきて養殖をすることができるのです。海水が全くなければ、塩水を入れて塩度を調節すればいいのです。いくらでもできます。そして、山にも養殖場をつくり、そこを一人で管理しても、数十万、数百万の人が食べて暮らすことができるようになるのです。そのような養殖をすることができます。それで、今回私がアメリカに行った時も、海に出ていってそのことをしたのです。良い種類の魚を捕まえて養殖をするのです。

釣り場に魚がいなければ、養殖場をつくって魚を養殖し、その養殖した魚で釣りをするのです。魚を養殖して、それをどこへでも運搬して釣りをすることができる時代になりました。気候が合い、温度が合う場所で養殖場をつくって養殖をすれば、どこでも、どのような魚でも釣り場に入れることができます。船で運搬して放してあげ、それを釣ることができるのです。また、獣でも、虎のハンティングまでできることができる時代が来ます。おおかみを育てて猟場に放ってハンティングをすることもできます。熊のハンティングもすることができ、どのような動物でも飼育してハンティングすることができるのです。

私は養殖場を運営しようと思っています。今、日本で活魚の料理が可能なのも私がコーチしたからです。私のアイディアです。ろ過装置を使って水槽の水を長時間使うことができるようにしたのも、私たちが研究したことです。養殖場がなぜ必要なのでしょうか。人々が活魚を欲しがるからです。海で獲るものだけでは、需要を満たすだけの供給をすることができません。釣ったものを生きたままで供給することもできますが、養殖をして活魚を補給しなければなりません。「各州でも養殖場をつくる計画を立てて釣りができるように訓練しなさい」と言ってワン・ホープ号をそれぞれに分けてあげたのですが、それをしているのかどうか分かりません。それをすれば、今後船だけ三十隻から五十隻売っても暮らすことができるのです。それは世界的です。

ワン・ホープ号にしても、十年前から「買いたい」と言ってくる人はたくさんいたのです。しかし、海兵隊から七十二隻の注文が入ってきた時も売りませんでした。なぜ売らなかったのでしょうか。この船がどれほど素晴らしいか分かりません。今ではうわさが立ったので、みな「あの船は釣りをするには最も

良い船だ」ということを知っています。ですから、みな「買いたい」と言ってくるのです。ですから、今は公開して売ろうと思っています。釣りをする人たちは、この船がどれほど良い船かを知っているのです。ですから、買いたがるのです。本当に素晴らしい船です。

今、大学を卒業しても、十五万人くらいの人は就職できずにいるでしょう？　それで、私は水産事業をして養殖場をつくっているのです。スペインでもしています。ツナを閉じ込めて育てているのです。金もうけも上手にするのです。私は化け物みたいに何でもしているのです。

今後、荒廃した土地を沃土にして、飢えて死んでいく人々を救わなければなりません。それは、土地と水があればできるのです。水のある所では養魚をするのです。養殖場をつくるのです。土地がある所では五色の穀物を植えるのです。西洋人はアフリカ人に農業を教えてあげませんでした。ですから、滅びるのです。これを蕩減してあげなければなりません。

全世界で飢え死にしていく何千万の人々のために、先生は養殖場をつくったのです。公害によるオゾン層の破壊問題を人類の代表として解決できる人は、先生しかいません。そのように、各方面に関心をもって進んでいかなければなりません。先生が行くことができなければ、皆さんが涙を流し、汗を流しながらでも行かなければなりません。「先生の足跡の上に自分も足跡を残そう」という心をもたなければなりません。原理の道は、そのまま踏襲していく道です。越えていく道ではありません。おじいさんも行かなければならず、お父さんもお母さんも行かなければならず、子々孫々、何千代の子孫も、それと全く同じように行かなければならないのが原理の道です。ですから、蕩減の道です。

(5)オーシャン・チャーチと海洋訓練

レバレンド・ムーンを中心とした統一教会は世界的です。西洋人は、レバレンド・ムーンは韓国人でも、韓国のためだけに仕事をしているとは思っていません。世界のために仕事をしているという観念が強いのです。それで、陸地でも海でも、迫害を受けながらも雄々しく勇敢に世界的な協会をつくっているのです。そのような意味で、一般の思想を中心としてしているのではなく、宗教という背景を中心としてこのような体制を整え、「海洋教会」というタイトルを掲げたということは恐ろしい宣言です。これはレバレンド・ムーンの恐ろしい課題設定です。

今後、オーシャン・チャーチをして何をするのでしょうか。海に出ていって訓練するという、その程度のものではありません。海を主管し、海を愛するのです。海を主管するからといって何をどのようにするというのではありません。創造主の本意に合うように海を管理し、海を愛する意味から、海を中心として世界を結束することができる舞台をつくろうというのです。

船に乗って荒波を切っていくのは男たちのする仕事です。女性にはできないことです。それはどれほど魅力的でしょうか。それで、私は船に乗るのです。皆さんにそれを教えてあげようとして船に乗るのです。今後、その

ような海を開拓しなければならない責任を担っているのです。ですから、先生に従い、先生が好きになれば、船が好きにならざるを得なくなるのです。大きなツナは何ポンドになりますか。千ポンドを超えます。千ポンドのものが山ほどいます。普通の人の体重が百二十ポンドとすれば、ほとんどその八倍です。そのような魚を釣る時の気分はどのようなものか想像してみてください。商売の中でそのような商売がありません。それを一匹釣れば、一年食べることができます。皆さんが一日に三ポンド食べるとすれば、一年で一匹を食べるということです。

アメリカ海域には無限の水産資源があるので、アメリカ水産庁ではそれを開発するために全力投球をしています。しかし、人がいません。それで、国家で計画を立てたのです。誰でも二年半船に乗れば、その人が「船を買いたい」と言う時には、一〇パーセントのお金だけ出せば、二百万ドルに相当する船を造ってあげるというのです。二百万ドルならば、百二十トンの船に相当します。百二十トンならば大変なものです。それで、三百箇所の港を中心としてこの事業をしています。また、特別に考案して船を造りました。

小さな釣り船から訓練をするのに良い船まで、特別に考案して造りました。それは、レバレンド・ムーンが考案したのです。人にたとえれば、とにかくハンサムな船です。そのようにしてフィッシングの訓練をさせるために、一隻の大きな船が中心となって十隻の船をまとめて出ていくのです。ですから、一人が十隻の船をまとめて行くことになるのです。そして、「五名だけ編成すれば、三万ドルに相当する船をあげる」と言って宣伝するのです。そのようになれば、小さな船も三万ドルで売ることになります。現在、水産都市の開発のための計画もしています。

一箇所に六十名の要員を集めて教育するための対策を立てています。今回、私は三十箇所に配置してきました。三十箇所の基準が完成すれば、三百箇所に拡大し、統一神学校を出た人たちを責任者として立たせて海洋教会をつくろうと思っています。これは歴史上になかった教会です。「海洋教会」という名前をもって船に乗り、そこで聖日礼拝も行うのです。今、この運動を展開するために準備しています。このようになれば、どのようになるのでしょうか。私たちの要員は二年だけ船に乗ればいいのです。大きな漁船をもっているので、それに交代で乗るのです。

そうすることによって、その都市の市長や海洋警察署長がサインだけしてくれれば、いくらでも国家で船を造ってくれるのです。このようにすれば、数千隻の船ができます。それを実際に消化することができる基盤を拡大するために世界的な組織を計画しています。すなわち販売組織を計画し、ヨーロッパ、日本でもそれを準備しています。このような膨大なことを準備しているのです。

皆さんはホーム・チャーチをしていますが、三百隻のボートは何かというとホーム・チャーチです。オーシャン・チャーチ（ocean church：海洋教会）です。皆さんがどこかへ行って困ったときは、そこが港町であれば「ワン・ホープという船がある所はどこですか」と尋ねなさい。港の人であれば、誰でも知っているはずです。アメリカの海岸にいる人は、みな知っているはずです。そこに私た

ちが集まって歌を歌い、祈祷しているのです。お昼を食べる時にも祈祷するのです。

南米には、えび獲り船が三十隻あり、ツナ獲り船が五隻あります。ですから、今後の私たちの中心メンバーは、誰もがみな一年六カ月は海洋訓練をしなければならないというのが先生の考えです。そして、統一教会の責任者は、一年に二週間は、誰もがみな動員されて海洋教会の活動をしなければなりません。そして、その海洋教会の活動をする時は、どこどこの教会の責任者などという、そのようなものは関係ありません。すべて同じように仕事をさせるのです。それで、先生が「お前、どこどこに行って釣りをしてきなさい！」と指令を出すのです。それはいつ行くか分かりません。

今年に入って、四月から今まで、私は五時に起きて夜十一時まで船に乗って海に出てきました。ある人が「若い者たちも逃げ回って隠れて寝ようとするのに、七十を越えたおじいさんが船に乗って釣りをするのか」と言って舌を巻きました。それを見ながら「私は大きな罪を犯したものだ。なぜ若者を捕まえてあのように苦労させるのだろう」と思ったのです。しかし、そのようなことに勝つことができなければ脱落するのです。世界の頂上に上がっていくことができないので、そのようにするのです。

皆さんを訓練させるのです。ここで先生を追い越すことができる者は何人いますか。それは過激な重労働と同じです。重労働の中でも、そのような重労働はありません。一日中立って釣りをするのです。十日間座ってはいけません。やってみれば、夜の十二時になっているのです。アラスカでは十二時になっても明るいのです。夜中の一時でも明るいです。朝五時に起きて夜十二時までやれば何時間ですか。十九時間、釣りをするのです。

海と陸地の境界線は海岸線です。今後、海は陸地を連結しなければならず、陸地は海を連結しなければなりません。このような二つの目的が重複している境界線は海岸線しかありません。今後「陸地も必要だし、海も必要だ」となる時には、海岸線が最も重要になります。このように見れば、今後、海岸線が陸地のどこの土地よりも高価になる時代が来るだろうと思っています。

水産業をなぜするのでしょうか。なぜアラバマで船を造るのでしょうか。神学生たちが「オーシャン・チャーチ（oceanchurch：海洋教会）に行かない」と言えば、女性を船長にして、彼らを連れて行かせるつもりです。そして、その女性船長が男性のほっぺたをひっぱたいて「こいつ！　私もこのような仕事をしているのに男性が何をしているのだ」と言わせようと思います。男性たちを連れていって海洋教会を指導するのですが、男性が「船に乗らない」と言えば、ほっぺたをひっぱたきなさいというのです。男性が「行かない」と言えば、女性を船長にしてそのようにするつもりです。

二) 南米を中心とした海洋摂理

(1)ジャルジンの新エデン建設

ジャルジンはどれほど不便な所でしょうか。二度と行きたくないジャルジンを、どこのい

かなる場所よりももっと慕い、行きたくて泣き、月を見ながらも慕わなければならず、太陽を見ながらも慕わなければなりません。そのようにして、その太陽の支配下にある生命体とあらゆる万物を見て、自らの心情を吐露し、恨の神様の祭物的な条件となることをすべて心で洗ってしまわなければなりません。

ジャルジンは源焦地です。創造物自体が一つの博物館のように総合的に集まっている源焦地です。それゆえに焦点地域です。万物創造の焦点です。その源焦物が生息している所に行き、三年以上血の汗を流さなければなりません。三年間労働をしなければなりません。なぜでしょうか。祖国光復のためにです。水の中でそれをするのです。水は世の中を象徴しているので、水の中に天国を建設しなければなりません。真の御父母様が立てたように皆さんがそれをしなければなりません。

人間の堕落によって破壊されたものを早く復帰して管理し、昔絶滅した種をここから再び世界に拡大させなければなりません。ゆえに、新しい博物館を造らなければなりません。鳥も千五百種類の鳥がいます。その博物館を造り、また昆虫博物館を造らなければなりません。それを造っておけば、そこは摂理のみ旨の中で登場した所なので、世界中の人々が息子、娘の教育場所として訪問するようになるのです。神様が造られたものを見て喜ぶことができる環境をつくるために、ジャルジンを開発するのです。ジャルジンはエデンです。その場所を通じて多くの人々が「再臨主が来られる」と言ったのです。

「ジャルジン」という言葉は何でしょうか。堕落の「位置に入った（ジャリエ、ドゥロッタ）」、そのような意味にもなります。サタンが人類先祖の位置に入ったので「ジャルジン」です。エデンの園で堕落の位置に入った人類先祖をサタンが「パンタナール」、すなわち「お前を売る（ノルゥル、パンタ）」ということです。お前を売って「サロブラ」です。これは「生かしてみろ（サルリョバラ）」ということです。「サロブラ」は「復活しよう」という意味です。韓国語にすれば、そのような意味が入っています。

ブラジルで最も良い水は黄土水です。黄土水の流れる川を、黄金の川といいます。一方、澄んだ水の流れる川を水晶、銀の川といいます。そのような二種類の川が合流する三角地帯に、私たちは土地を買ってジャルジン基地をつくりました。

ここで養魚場をしても、とても良いのです。パラグアイでも、電気が余って困っているくらいなのです。湖のような所の温度を調節すれば、南方の魚でも、北方でいくらでも養殖をすることができます。

ジャルジンを中心として、このミランダに生息している魚を北方地帯にもっていき、そこでそのまま温度を調節して棲ませれば、南方の人も来て見物し、北方の人も来て見物するようになっているのです。「私はアラスカだけが良い」と言うのは南方では落第です。「アラスカも良いが南方も良い」と言ってこそ合格です。「朝はアラスカで生活し、夕方は南米で生活しなさい」と言う時、一生の間そのように暮らすことができ、また「それ以上でもします」と言う人は、アラスカや南方世界をすべて統治する主人になることができ

ます。神様はそのような人に会いたいと思っていらっしゃるのです。

イグアスの滝は一つですが、観光地としてそれ以上に良い所はありません。水泳もできます。そこにはドラドもいるし、魚もたくさんいます。そうでなくても、釣りをすれば魚がよく食いついてくるのです。ですから、餌をあげれば飛ぶように集まってきて捕まえることができます。子供たちが一度来れば「ここで暮らそう」と言って大騒ぎになるでしょう。周囲の人々が「レバレンド・ムーンはなぜジャルジンに関心があるのか」と言いながらも、来て見てみれば「いやあ！　ここは天国のようだ。州はそれも知らず……。ああ、レバレンド・ムーンに奪われた！」とそのように言っているのです。ですから、その州では私を援助せざるを得ないのです。

ジャルジンの農場では、たくさんの種類のおうむを飼っています。おうむも自然の人々と一緒に暮らすことができるし、だちょうも餌をあげれば、どんどん寄ってくるのです。人に慣れて、人が行って餌をあげても逃げていきません。神様が創造されてそれを見て喜んだように、アダムのように遊んだ世界をつくってみようというのです。今、その仕事をしているのです。

先生は水を愛しています。水はすべての生命の根源です。水はすべてのものを抱いて消化します。ジャルジンにはミランダ川とラプラタ川がありますが、その二つは陰陽です。ラプラタ川は澄んだ水ですが、ミランダ川は泥水です。きのうも見ると、泥水があれば、人の世であれば逃げていってしまうところですが、その泥水の渦の中に澄んだ水がためらうこともなく巻かれていくのです。自らの姿勢を備え、泥水と和合してその色も変わっていくのですが、流れ流れて日がたてばたつほど、再び自らの光りを取り戻して、澄んでいくことができる力をもっているのです。

水はいくら汚れていても水平を取ることができます。人も水平を取ることができなければなりません。私がここジャルジンに来たからといって、ブラジルとは関係ありません。ここには五色人種が生活していますが、言葉が通じなくても私は別の種とは思いません。自分の親戚であり、自分の弟であり、みな六千年間離れて暮らしたのちに再び出会った人々です。ですから、言葉が通じない事情を乗り越え、習慣と風習が通じなくても自然の中で懐かしがり、受け入れているのです。

今後、この場所は貴い場所になることでしょう。パンタナールは先生が訪ねてきて、このようなことをしている所です。それくらいここは貴い場所なので、この地をすべて私たちが買わなければならないと思っています。サロブラも、ジャルジンの地もすべて買おうと思っています。ここを中心として連結することができるものがパンタナールです。パンタナールを連結するのです。今後、ここは世界的な観光の名所になります。霊界と肉界が連合できる内容をここで決定するのです。水陸、すなわち水と陸地が連結する場所です。おもしろいのは水の上に草があるのです。このような水と陸地が連結しているこの場所において、すべてのことを決定し、摂理を成し遂げていくのです。

統一教会にはジャルジン宣言があります。第二次四十年路程を発表したのです。エデン復帰です。エデンに帰ってきたのです。エデンに帰っていって神様の絶対信仰、絶対愛、絶対服従の平衡基準に立たなければなりません。それで、ジャルジンで「絶対信仰、絶対愛、絶対服従」の宣布をしたのです。それを宣布することによって堕落のなかった万物全体、すなわち絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に造られたこの世界をすべて管理し、同一圏において接触することができるようになるのです。

それで、先生はジャルジンで教育をしているのです。祝福を受けた家庭は縦的には上がってきましたが、横的には基準に立っていません。ですから、今からは横的基準において神様と共に暮らすことができる家庭をつくらなければなりません。そのために、世界平和に向けた理想家庭教育センターをつくって、今まで祝福を受けた家庭をジャルジンで新たに教育してきているのです。神様の絶対栄光の家庭に同参できる内容を、再び訓練し直さなければなりません。それがジャルジン家庭訓練です。

ジャルジンで小学校から中学、高校まで造ろうとすれば八つの教室が必要ですが、十二教室になる小学校、中学、高校を建てるプログラムを組みました。ジャルジンに、二千名以上の人々がいつでも生活することができる基盤を築くのです。講堂を中心として血と汗をもって教育基盤を準備するのです。そこに小学校から中学、高校、そして大学まで建てる準備をしています。小学校から本格的に出発するのです。ジャルジンを中心として周辺には三十三の都市がありますが、その三十三カ都市の大部分には中学、高校の施設を造るつもりです。

今、このジャルジン本部では、小学校から中学、高校、大学までのシステムをもって、その地方の優秀な人々を教育して、今後全国に広げることができるすべての準備を整えるのです。それゆえに、ここには二千五百名以上が収容できるようになり、講堂は一万名まで入ることができるように造っています。今後、ここはこの州の三十三カ都市のすべての和動の主体になるはずです。政府にはそのようなことはできません。

ジャルジンの教育計画は、水産事業と山林、そして農業方法、それから工業方法に関するものです。その全般的なことが分かるので、各市を中心として、ここが本部のような仕事をするのです。ジャルジンに建てたものと同じものを拡大し、そのようなシステムをもって単科大学を中心として総合大学を造る計画をもっています。

また、本当におもしろいのです。ウルグアイも三十三名の独立軍があり、韓国にも三・一独立運動の有功者が三十三名いました。また、南米の国は、三十三カ国です。本当に不思議なのは、このジャルジンがある州には三十三の市があるのです。それは摂理的です。

三十三名を中心として摂理していくすべての内容が、そのように完全に自動的に一致したということは摂理的です。ですから、ジャルジンには「東洋人が来てジャルジンで拠点を構え、その名前が知れわたるようになれば、その方が来られるメシヤだ」という預言があります。インディアンたちが既に知っていたのです。「ジャルジンに韓国人が来て、思想的にすべてのことを革新する運動を行えば、

その方がメシヤだ！」。それを知っているのです。インディアン全体が巻き込まれてくる傾向を見せているのです。

本当に、神様が生きていらっしゃるということを実感します。韓国の独立万歳運動の指導者は三十三名でした。韓国の裏側がウルグアイですが、そのウルグアイの独立軍も三十三名です。南米の国も三十三カ国だし、今私はジャルジンに来て仕事をしていますが、そこも都市が三十三です。本当に不思議です。その周辺にある主要都市が三十三カ都市です。これは本当に不思議です。

私は、ジャルジンから四百キロ内外の場所を中心として、そこにどのような魚が棲んでいるのかを調査しました。蚊に刺されながら調査したのです。お金が必要だから、そのようなことをするのでしょうか。名誉が必要だからでしょうか。政治的背景が必要だからでしょうか。死んでいく人を助けてあげるためです。彼らは兄弟です。私がこのような考えをもたなければ、誰が万民を救ってあげるのですか。どこの政治家や、どこの国の主権がそのようなことを考えますか。このような基盤をもって、私はその地ですべての原資材を掘って輸出するのです。彼らがしようと思っているとおりにしてあげるのです。工場が必要ならば、工場を造ってあげるでしょうし、「何かが必要だ」と言えば、それを援助してあげるのです。私はそのような実力をもった人です。

ジャルジンで四百キロメートルの土地を取得すれば、フィッシュ・パウダー（fish powder：魚粉）工場を建てるのです。フランス、イタリア、ドイツ、アメリカ、日本など、先進国家が研究して失敗したものを私たちが開発して成功しました。全世界がパウダーを作り、食糧を補給する道を解決しようというのです。輸送が問題ですが、国連と赤十字社が「我々と共に世界の難民を救いましょう！」と言っているのです。それで、ジャルジンの四百キロ以内の農村に豆を植え、とうもろこしを植え、マンジョーカを植え、いかなる穀物でも植えるのです。そして、収穫されたものをすべて粉にして二十倍に拡大した食糧を作り、それで難民を救ってあげるのです。

それでは、魚はどこで獲るのでしょうか。魚の粉はどこで作るのですか。ここには川がたくさんあります。湖をつくり、釣り場をつくって魚を釣るのです。これを私たちがすべて買ってあげるのです。ぴちぴち跳ねている魚が十分以内で粉になって出てきます。ですから、これはジャルジンで歓迎できる内容ですか、歓迎できない内容ですか。

第三世界の難民は、レバレンド・ムーンが自分たちを生かすために苦労しているということを知っています。うわさが立ったので知っているのです。魚でフィッシュ・パウダーを作り、それをするためにジャルジンに農場をつくって、粉工場を造るための準備をしているということをすべての人が知っているのです。

今後、全世界の人々が統一教会の信者になることを考えたとき、その人々がジャルジンを訪ねてくるでしょうか、来ないでしょうか。先生の行った場所、名のある場所はすべて訪ねていこうとするのです。そこが聖地になるのです。魚を養殖して人類を生かすために苦

労したその公的な基盤を中心として、万民が口をそろえて称賛し、足を速めて「天国を建設しよう！」という喚声が世界に響きわたるのです。

ブラジルやウルグアイには、牧場をつくって自給自足することができる豊富な内容があります。アフリカで果物の農業をする人にも、ここで模範的農場をつくり、木を植えてありとあらゆることをして教育しようと思っています。それで、彼らが帰っていく時には、三百頭の牛を与え、その国で牧場を寄付してもらうようにしてから送り出そうと思っています。それは百六十カ国で競争するようになっています。ここで育てた子牛をもって行くのです。お金は使えばなくなりますが、牛は使えば使うほどどんどん増えていきます。皆さんも今はみなかわいそうに暮らしている人々ですが、世界的な牧場の主人になり、農場の主人になり、また、水産業もでき、釣りもして、どこでも楽しむことができる世界版図が完全にできるのです。

私たちがここに来た時、千ヘクタールの土地が七十万ドルでした。その七十万ドルで、七百頭の牛までくれたのです。そのような所がパラグアイです。そこでは鶏も飼っています。そこにはトラクターなどの農作業に必要な器具がすべてあります。理想的な故郷や国をつくることができるように私がコーチをしようと思っています。皆さんがもっている土地を売り、その費用で私がここを買うのですが、皆さんにここの土地をそのままあげるのです。すべて開発し、飢え死にすることはありません。その農場の中に幼稚園を造り、中学、高校を造り、大学まで造ることができます。そして、五色人種が共に暮らすのです。郷土を開発すれば、プラスが相対を再創造する役事が起きるのです。関心がありますか。そのようにすれば、本当に良いでしょう。そこで釣りもして、ハンティングもして、世界的なことを準備しているのです。

広大な草原地帯に無数の果物があり、無数の鳥がいて、無数の動物がいます。ありとあらゆる動物がいます。釣り糸を垂れれば、水のある所には魚がいくらでもいます。女性が夕食を作る時、おかずがなければ、川の流れている裏口の外で釣りをして、その釣った魚をてんぷらにすることもできます。ブラジルは、そのような国です。世界にそのような所はありません。そこしかありません。投網を一度投げれば、ひとかますもの魚がかかってくるのです。

今後、牧場と合わせて養魚場もつくり、猟場もつくるのです。春になれば数多くの魚が川を上がってきます。ここにミランダ川がありますが、この川を中心として運河を掘るのです。そのようにすれば、この川は十個以上の川と同じ面積になりますが、これをせき止めて、春になってここに入ってくる魚を帰ることができないようにすれば、春夏秋冬、季節を超越した釣り場にすることができるのです。ここでは季節を超越して養殖をすることができます。そのようになれば、魚を養殖して釣り場に供給できる世界的な場所になるのです。私が関心をもっていることは、パンタナールに棲む三千六百種類の魚を捕まえて養殖場で養殖し、三千六百箇所の釣り場をつくることです。その魚を養殖する方法を開発し

て、世界の各地にこれと同じ場所をつくって広げていくのです。

アメリカが上にあり南米が下にあるとすれば、上にあるアメリカが嫌っている南米、その南米の中でもアメリカが最も嫌っているブラジル、そしてブラジルの中でも最も嫌っている山奥に私が行ったのです。私はジャルジンという所に行って蚊に食われながら鳥を友とし、蛇とも友達になり、魚を友として暮らしているのです。教主がはだしになって歩き回っているのです。皆さんが見れば「あれは私たち統一教会の先生ではない」と言うような生活をしています。「彼は本当に農夫か漁夫だ」と言われるような生活をしているのです。アメリカで二十四年の間に築き上げた基盤を、一年六カ月間で一度にさーっと築き上げたのです。

ブリッジポート大学と鮮文大を造り、今は南米に大学を造っています。ジャルジンに大学を造っています。幼稚園から中学、高校、大学まで造っています。大学に行くことができるようにすべて準備しています。今後、そこを通過しなければなりません。

この世の大学は必要ありません。そこに行って何をするのですか。それは、すべてがらくたです。ホモ、レズビアンのような道徳的根本を破壊する砦になっているのです。神様の怨讐の基地です。軍隊基地と同じようにサタンの基地となっているのです。そこからすべての影響を及ぼしています。それはサタンの場所です。それを壊さなければなりません。彼らは「神様が死んだ」と言ったのです。

(2)パンタナール聖地

日本の二倍もある湖がパンタナールです。パンタナールには三千六百種類の魚がいます。三千六百種類の魚がそこに棲んでいるのです。それならば、そこの水温や、立地条件や、環境など、それらのすべてが同じ条件の湖は、世界的にどれほどたくさんあるでしょうか。そのような水がどれほどたくさんあるでしょうか。これを分科別に研究して、養殖ができる所をつくるのです。そのようにすれば、世界的にできるのです。

パンタナールには、神様が創造された原初的な自然がそのままたくさん残されています。ほかの場所は、種の基準が残らずに絶滅している所が多いのですが、唯一残っている所がパンタナールを中心としたこの地域と、アマゾンの流域です。自然の存在がそのまま残されていて、神様が創造した原初的なすべての万物が集約している場所です。どうして私がここに来たのでしょうか。私だけが来たのではありません。神様が共に来られて歴史的に犠牲になったすべての万物を愛するのです。ノアの時代に、魚は審判を受けませんでした。審判を受けなかった魚と因縁を結ぶことによって、万物が蕩減して戻ることができる道を築こうとパンタナールに来たのです。神様が造った万物を愛さなければなりません。先生にはこれを保護する責任があります。種をもっと繁殖させなければなりません。神様が創造した時よりも、種を絶滅させてはいけないのです。

パンタナールには草や魚の種類がたくさんあります。魚の種類も三千六百種です。アマゾン川には三千種がいますが、パンタナールには三千六百種がいます。その種類を考えて

みてください。ですから、草や穀物や木など、万物には数多くの種類があるのですが、神様は洪吉童（注：李朝時代に、魔法を使って金持ちから財を奪い貧民に分け与えたという小説の主人公）のように「このようになれ」と言ってそれらを造ったのではありません。すべて考えがあって造ったのです。構造的なすべての内容が自然世界の法度と気候の条件に合うように、それに合わせて造ったのです。

パンタナールは、動物や植物など、本来神様が創造された原初的な宝庫となる場所です。私は、それを守って保護するための世界的な運動を起こしています。協助しますか、しませんか。エバゆえに堕落しました。ゆえに、日本の国家メシヤをパンタナールの先頭に立たせ、すべてのことを進行するように命令をしました。それは有り難いことですか、それとも悪いことですか。子供は、母の肉を売ったとしても育てなければなりません。植物や動物を育てることができるように後援をしなければなりません。日本がこのように世界の地に血統を連結させれば、そこは自然に日本の所有になるのです。

アマゾン流域、パンタナールの奥地には三千六百種がいます。三千六百種ですが、そこには神様の創造された本然的なすべての創造物が残されています。アマゾン流域がそうであり、パラグアイ川の流域がそうです。三千六百種を中心として、そこに養殖場をつくるのです。魚に関心のある人は「来るな」と言っても来るようになっています。私たちの新聞社があるので、そこで「三千六百種を育てている養殖場だ」と書いて評判を立てるのです。「三十六種になった。もうすぐ三百六十種に増える。三百六十種は何年で終わる。三千六百種は何年で終わる」と宣伝してみてください。魚に関心のある人はここに来るでしょうか、来ないでしょうか。

パンタナールのような所には魚がどれほど多いか分かりません。何かを投げると、いつの間にかきれいになくなっているのです。稲妻のように素早くきれいに片づけてしまうのです。汚いものでも、いつきれいにしたのか分からないうちに、きれいになっているのです。様々な種類、ありとあらゆるものがいますが、種類によって食べるものが異なります。そのようなものが混ざり合って、休むことなく海の清掃作業をしているのです。食べるという行為自体が清掃作業だということを知らなければなりません。

彼らは自分の目的のために生きているのではなく、環境を整理しながら、周辺をすべてきれいにしながら、互いに助け合いながら生きているのです。それが自然協助体制です。また、パンタナールにはブレオクチャムという草があります。その草の葉っぱの裏を見ると、それをかじって食べる虫がたくさんついています。その虫は、すべて魚の餌です。その虫がいれば葉っぱをすべてかじって食べてしまうのですが、それを捕って食べる魚がいるので、その草が生存できるのです。

スルビ。スルビとは何かというと、海にいるなまずのような魚です。一番底に棲んでいる魚です。そして、ボガは水が流れている所を好みます。ドラドも水の流れが速い場所に棲んでいる魚です。このボガは釣りの餌を入れれば、餌だけ食べていなくなってしまいます。ドラドは餌に食いつけば離れることがで

きません。しかしボガは、ぱっとやるとそのまま食べてしまいます。ですから、このボガは釣りやすい魚ですか、釣りにくい魚ですか。（釣りにくい魚です）。皆さんに釣りにくいものから教えてあげなければなりませんか、それとも釣りやすいものから教えてあげなければなりませんか。スルビを釣ろうとすれば、夜釣らなければなりません。

草食性の魚がいます。このドラドは、ドラドドラド（回っても回っても）どこに行っても勇猛です。こいつが餌を食べるとひゅっと出てきます。五人が船から釣り糸を遠くに投げた場合、こいつが動けば、どの釣り竿か区別できません。誰の釣り糸にかかったのか分からないのです。「誰のだ、誰のだ」と言って、すっと自分の竿を振り返ると「あっ、自分のだ！」。このように驚くのです。三度、四度、五度、六度、徹底してするのです。その味が、またとても良いのです。夕日の光、その黄金に光る魚、そのまばゆい光景というものは、ドラドを釣る所以外では決して味わうことができない光景です。人として生まれれば、一度は味わってみるだけの価値をもつ、趣のある光景です。そのような光景を自ら迎えてみたいと思うのが人情です。

パンタナールは、海と陸地、水と植物が共に暮らしている所です。本当に不思議です。パンタナールを中心としてアマゾン川の流域には、創造本然の生物がすべて残っています。創造以後、被害を受けることなく自然に生息しながら種別の鎖がそのままつながってきているのです。ですから、パンタナールは世界の聖地になるのです。

パンタナールに行けば、そのようなものをたくさん見るはずです。パクがわにの子を捕って食べることもあります。そして、捕って食べる時「やいっ、お前は腹の中に糞をもっているだろう？」と言いながら食べたりはしません。虫を捕って食べる時、その虫の羽には糞がついています。人糞や犬の糞など、汚いものがすべてくっついているのです。しかし、それをすべて洗い落としてから食べるのですか、それとも丸ごとのみ込むのですか。丸ごとのみ込むことができない人は、天下を統一することはできません。丸ごと食べることができなければなりません。良いものも食べるし、悪いものも食べることができなければならないのです。堕落した人間は、悪いものは投げ捨てて良いものだけを食べようとするでしょう？　愛はそうではありません。愛は地獄まで中に入れて消化するのです。

パンタナールの魚は、大きい魚が小さい魚をのみ込みます。大便があり、小便があり、内臓があり、汚物があるのですが、それをそのまま丸ごとのみ込んでしまうのです。頭も、臭いのするしっぽの箇所も、すべて丸ごとのみ込んでしまうのです。「そのように丸ごとのみ込む者が解放圏の世界における王子ではないか」。そのように思うのです。

パンタナールに行って「丸ごとのみ込もう。丸ごとのみ込もう！」。魚の世界に行って丸ごとのみ込もうというのです。それで、この地において、丸ごとのみ込むことができる教育をしているのです。自分の一族、家庭、先祖、親族を丸ごとのみ込むことができない弱者になってはいけません。強者にならなければなりません。

パンタナールに行ってみてください。そこでは、少しだけ大きければ、小さいものをすべてのみ込んでしまいます。さめの子も、たらより小さければ、それにぺろっとのみ込まれてしまいます。躊躇しません。自分より小さければ、どんなものでもすべてのみ込んでしまいます。それは素晴らしいことでしょう？　大きい種類が小さい種類だけのみ込んでしまえば、小さいものが「神様、なぜ私たちは食べられてばかりいるのでしょうか」と言って神様に抗議することでしょう。しかし、水からすべての天地を創造される時、大きいものも小さいものも、どのような種類でも、少しだけ大きければすべてのみ込んでしまうことができるようにしたのです。ゆえに、自分も大きくなれば小さいものを捕って食べることができるので、不平を言わないのです。

丸ごとのみ込む関係世界がパンタナールです。「パンタナール」とは何かというと「ナルゥル、パンタ（私を売る）」、すなわち「売ってしまう」ということです。目的のためには関係ないということです。ゆえに、パンタナール精神とは、良いものも悪いものもそのままのみ込んで消化し、自分が生きることができるように影響を及ぼしながら、互いに大きくなっていくことです。神様のみ旨とは、サタン世界も善の世界もそのままのみ込んでしまうことではありませんか。

神様が人間を堕落のなかった世界に回復させるということは必然的なことです。神様は、堕落のなかった完成したアダム世界のために、すべての怨讐を収拾しなければなりません。そこには怨讐がありません。すべてが兄弟であり、一つの家庭であるという概念しかありません。のみ込むのです。パンタナールの魚世界では、大きいものが小さいものをのみ込んでしまいます。そこに何かの汚いものがあろうとなかろうと関係なく、すべてのみ込むのです。内臓の糞だろうと何だろうと丸ごとのみ込んでしまうのです。

パンタナール精神とは何かというと、のみ込んでしまうことです。食べる時、糞がついていようと菌がついていようと気にしません。菌がついているからといって、それを取ってきれいに洗って食べたりしますか。そのようなことをすれば食べる物がありません。逃げていってしまわなければなりません。糞どころか毒薬を食べたとしても、それが自分の腹に入っていけば「体と一つになって体は死んだとしても、私は消化することができる」という精神をもたなければなりません。それが偉大なことです。

昆虫を殺すことができる毒薬を食べたとしても、また毒薬を食べた魚を食べたとしても「私は毒薬を消化することができる」という精神をもたなければなりません。パンタナールを中心として、そのようなことをするのです。宇宙的メシヤである神様、そして世界的メシヤである再臨主、国家的メシヤであるその国のアベルの王、氏族的メシヤであるアベル氏族の王、家庭的メシヤであるアベル家庭の王、これがアダムの理想圏です。

それで、このすべて、すなわち神様、再臨主、国家メシヤ、氏族的メシヤ、家庭的メシヤがいるのですが、ここで氏族的メシヤが病気になれば家庭的に代わって立つことができ、国家的メシヤが病気になれば代わって立つことができ、世界的メシヤが病気になれば代わって立つことができるのです。神様が病気に

なるはずはありませんが、病気になれば代わって立つことができるすべてのものを備えておいてこそ、主体と対象が循環運動をすることができる相対圏をもつのです。

先生がパンタナールを好きなのは、パンタナールにはあらゆる魚が棲んでいるからです。そこで学んだこととは何でしょうか。パンタナールで一つ学んだことは、すべてのもの、すなわちこれものみ込み、あれものみ込むということです。例えば、わにがいるとすれば、大きいわには人をのみ込んでしまいます。そして、パラグアイには、そのわにを捕って食べる二十五メートルにもなる蛇がいます。箸で豆をつまんで食べるように、人一人をのみ込んでしまう蛇がいるのです。その蛇にも、小さなものから大きいものまですべているはずです。そのようなものが至る所に棲んでいます。

見てみると、それらはすべて丸ごとのみ込むのです。小さい魚も、自分よりも小さければ、それがたとえ鯨の子であったとしてものみ込むのです。口に入っていくものはすべてのみ込んでしまいます。素晴らしいことではありませんか。文総裁も口の中に入ってきさえすれば何だろうとのみ込む専門家にならなければなりません。それを一つ学びました。ここで生きようとすれば、のみ込めなければ生きていくことができません。ほこりを払い、汚れたものを払ったりする女性たちは生きていくことはできません。

パンタナールでは、日本人のお金の十分の一、百分の一、一万分の一だけで暮らすことができます。日本のために、すなわち島国の人々が万物をもつことができるようにとパンタナールを保存しているのです。日本人は、そのことを知らないでしょう？　先生は、万物の嘆息圏を解放するために万物を愛しているのです。ローマ人への手紙の第八章を見れば「被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」と書かれています。万物のその嘆息圏は、人類の嘆息圏です。人類の嘆息圏とは何でしょうか。神様を中心として祝福を受けられなかったこと以上の嘆息はありません。

ニューヨークやワシントンD・Cのような文明をすべて壊してしまわなければなりません。そして、原始時代に帰っていかなければなりません。自然に帰るのです。それで、先生は自然に帰り、パンタナールで自然を愛しながら暮らしているのです。

大洋はきれいな場所です。そこは、どれほど水が澄んでいるでしょうか。きれいな水、きれいな空気があります。きれいな自然があります。どれほど良いでしょうか。

み旨を知ったその日から霊界を愛し、人類を愛しました。人類を愛するにおいては、自分の家庭や自分の国以上に愛さなければなりません。人類を愛し、その次には万物を愛さなければなりません。この陸地にあるすべての物を愛し、その次には水中の世界を愛さなければなりません。再創造過程です。神様の愛から人類を連結し、人類の愛から地球星を連結し、地球星を連結して水の世界まで連結しなければなりません。パンタナールを中心として、先生があらゆる精誠を尽くすのはそのためです。

私はこのパンタナールを忘れることができません。ここは、霊界の相軒氏を通じて、朴マリヤ家庭に対する神様の願いを受けて深刻になった場所です。どうして神様がそのようになったのかというのです。悔しくて恨めしいのです。そのようなことを考えれば、はらわたが煮えくり返って骨がしみ出てこなければなりません。

私がパンタナールに来て、今までにしたこととは何でしょうか。「統一教会の食口、南北にいる人々は来なさい」と言ったのです。祝福家庭はすべて行かなければなりません。ありとあらゆる口実を並べ立てますが、お金がなくて飛行機に乗ることができなければ、歩いて来なさい。父親が病気になれば、その妻と息子が背負ってでも来るのです。そのようにして非常な苦労をしながら行ったからといって「ああ、滅びる！」と言いますか。「ああ、もう駄目だ。みんな死のう！」と言いますか。そのようにして帰ろうとするのです。そのように、行く道が大変だったならば、帰る道はもっと大変になるのです。ですから、行くことを嫌がる人は、帰っていく時には百発百中落伍者になるのです。それは理論的です。

結論的に、パンタナールの影響は、今後世界の歴史においても大きな問題になるはずです。これをどのように定着させるかということが問題です。戦場になる可能性があります。人類が誤れば、滅亡の淵に入っていく可能性をもっている危険な場所なのです。どのようなことをしてでも、ここの整地作業をしなければなりません。

ゆえに、今回パンタナールで国家メシヤを教育したのも、その背後の国々に対してあらかじめ宣伝しようということでした。今回の大会や、今までになされたすべてのものを中心として環境保護要員となり、早くその百八十箇所に警戒所をつくらなければなりません。その次にはそこに関心のある学者を中心として、世界各国の大学総長たちを中心として動かすのです。このようにして彼らが動くようになれば、その国の幹部要員や、どこの行政部署においても、その中心人脈を動かすことができるのです。

パンタナールがもっている水の世界と関係しているものがフィッシュ・パウダー（fish powder：魚粉）です。今までは、魚を釣っても食糧にできませんでした。しかし、先生を中心としてコディアックで研究したことは、魚を食糧資源化することです。イギリスや日本をはじめとして、ソ連やドイツなどの先進国がいかにしてフィッシュ・パウダーを食糧にするかという問題を中心として競って研究しましたが、すべて失敗しました。すべて手を引いてしまったのです。

韓国から見れば、パンタナールは極と極です。日本から見るときもそうです。パンタナールは地球の果てです。そこには源焦聖地があり、根源聖地があり、勝利聖地があります。これはとても大きなことです。根源聖地は、パンタナールにあるホテルに設置されているのですが、そこは、水があろうと何があろうと何の問題もありません。水上宮殿が造られているのです。

パンタナールに聖地ができれば、統一教会の教会員は訪ねていかなければなりません。家庭を率いて訪ねていかなければならず、また天国に向かうことができる出発の起源地となっているので、自分の一族全体が訪ねていかなければなりません。自分の一族を連れていき、先祖が統一教会で祝福を受けた日を記念するのです。そして、自分たちによって未来の後孫と天上の先祖と自分の国の民にまで天の祝福の因縁が続くように精誠を尽くさなければなりません。それが、祝福を受けた家庭が地上天国を完了する時まで続けなければならない義務です。そのような観点から、自分の生活を再度批判しなければなりません。批判しなければ行くことはできません。そして、すべてのものは真の御父母様が責任を負わなければなりません。

パンタナールは焦点、根本です。根源地になります。ゆえに、統一教会の家庭は、四年に一度ずつ訪ねてこなければなりません。大移動できる準備をしておかなければなりません。今でも観光客が三倍、五倍と増えてきています。パンタナール大会をしたので世界的に有名になりました。もう二回、三回もすれば、大変なものになることでしょう。ゆえに、来年までに先生が計画したとおりに土地を買わなければ、その土地の値は十倍以上に跳ね上がるのです。

人間は、たとえどれほど苦労をしたとしても、世界から永遠に称賛を受けることができる聖地を準備しておかなければなりません。そうすれば、その努力の結果が現れるのです。ゆえに、その努力を誰が最初に始めるかということが問題です。父から始めるべきですか、母から始めるべきですか。父が立ち上がれば、母の周りを父が回るのですか、それとも父の周りを母が回るのですか。父の周りを母が回るのです。聖地を守り、聖地の名をより高めることは、日本が国家的にしなければなりません。それで、すべてのパンタナールの管理は、日本の国家メシヤが責任を負っているのです。

先生は、パンタナールでどれほど多くの蚊と闘ったことか、体には蚊に食われた跡でいっぱいです。蚊の世界では「誰が真の父母の血を味わうかを競争しよう！」と言っているのです。それで、蚊が最も多く私に飛んでくるのだと思っているのです。釣り糸を垂らしても、大きな魚は私の釣り糸に先に食いついてくるのです。多くの魚が食いつくようになっています。不思議です。神様も「ミステリーだ」と言うのです。

(3)動物博物館

人間には、神様が創造された種の絶滅を防止すべき責任があります。今まで、人間はいかに多くの種を絶滅させたことでしょうか。パンタナールには魚だけでも三千六百種類がいます。ゆえに、それらが常に繁殖することができるように、世界で土質の同じ場所に養殖場をつくって永遠に絶滅しないようにするのです。そのようなことを中心として仕事をするのです。今、そのような膨大なことを始めようとしています。

三千六百種類の魚の養殖場をつくれば、皆さんの息子、娘がその中の一つを中心として研究したとしても、三千六百種類の博士が生まれるのです。ゆえに皆さんは、そのように

後孫が出世することができる準備をしていることを有り難く思わなければなりません。博士論文を書けば、三千六百名の博士が出てくるのです。その仕事は、休まずに続けなければなりませんか、それとも続けてはいけませんか。それはどうしてでしょうか。神様が万物をどれだけ愛して造られたのかということを知りたいからです。

先生は博物館を造ってあらゆる種類のものを展示しようと思っています。標本をつくって展示するのです。ここで見る自然に接触するのと同じ養殖場をつくるのです。動物を愛することができる表示として、村で博物館を造る運動を展開するのです。それで、その種のものを最も多く集めた村が世界的な観光村になっていくのです。また、草と木の種も、そのように集めて展示するのです。

船の下で数千種類の魚が遊んでいるのに、そこに関心が行きませんか。パンタナールだけでも三千六百種類の魚がいます。その三千六百種類の養殖場のビルを造れば、世界中の人々がその養殖博物館を訪ねてくるでしょうか、訪ねてこないでしょうか。小学生まで来て、人の波ができるようになっているのです。アマゾン流域、パンタナールの奥地に三千六百種類の魚がいます。神様が創造された三千六百種の本然的な創造物が残っているのです。アマゾン流域がそうで、パラグアイ川の流域がそうです。ですから、その三千六百種を中心として、そこに養殖場をつくるのです。そのようにすれば、魚に関心のある人は「来るな」と言っても来るようになっているのです。

土地の高度によって気温が異なります。同様に、海に棲んでいる魚も、水の温度によってそこに棲む種類が異なります。川の魚も、自分たちの棲んでいる温度に相当する地域を訪ねていってそこで生息し、卵を産むのです。ゆえに、地域が異なっていても、そこに温度差がなければ同じ種類のものがいるのです。数多くの種類の魚がいます。パラグアイから南米を縦に流れる川がありますが、その川の深い所は七十メートルから百メートルを越えます。ゆえに、大きな輸送船などがそこを上っていくことができるのです。

その周辺の魚の多い所に、小さな川が連結しています。私たちは、そのコーナーに冷凍工場を造って、捕まえた魚をすべてそこに貯蔵するのです。そこで必要なものは電気ですが、電気は無尽蔵にあります。現在、どこにも売ることができないでいる状態です。

魚をどんどん獲れば、なくなってしまいます。ですから、養殖をしなければなりません。育てなければなりません。そして、南米のパンタナールやアマゾン川流域に棲んでいる動物で動物園を造ろうと思っています。昆虫を育てる都市が出てこなければなりません。昆虫を育て、それを食べる鳥たちが飛んできて食べることができるようにするのです。鳥の餌となる昆虫を育てる都市が出てこなければなりません。昆虫がいなくて死ぬようになっているのです。昆虫を育てる町、鳥を育てる町、動物を育てる町が出てこなければなりません。

パンタナールには三千六百種類の魚がいます。韓国には何種類の魚がいますか。三十六種にもなるでしょうか。そのようなものは相

手にもなりません。では、今後この三千六百種類の魚の養殖のために、都市ビルよりももっと大きな養殖場ができてこなければなりません。魚の種類別にコンピューターで温度を調節し、海洋の魚や淡水魚、寒帯地方の魚や熱帯地方の魚を養殖するのです。このように一つのビルの中で全世界の三千六百種の魚が養殖されることを想像してみてください。都市ビルなど問題ではありません。

アルゼンチンもブラジルも、山がたくさんあって水がきれいなので、動植物を育てるのに適しています。一千三百メートルの高地まで連結した山があるので、そこではどのような動物でも育てることができます。魚も育てるのです。先生は、そこに関心をもっています。三千六百種類の魚を捕まえて展示場を造り、入場券を高くして売るのです。博物館を造って観光地にするのです。そのようにすれば、魚に関心をもっている人は、一度はここに来てみないわけにはいかなくなります。魚が三千六百種類です。そのような博物館を造ることを考えています。

訪ねてくる人を教育するのです。そのようにしながら自然とともに暮らすことは、どれほど素晴らしいことでしょうか。現代文明の都市生活と連結することができる村をつくるために、このような膨大な地域に三千万種類の昆虫博物館を造ろうと思っています。昆虫学者はみなここに来なければなりません。また、三千六百種類の魚を養殖できる養殖場をつくろうと思っています。それから、鳥類園も造り、植物園も造ろうと思っています。

三) 韓国を中心とした海洋摂理

(1)天勝号

先生が海に対する関心をもったのは、一九六〇年代からです。二十二年間、海洋産業をしてきました。一九六三年に天勝号を造り、五大洋に出ていくことができるように劉孝敏氏と劉孝永氏に海で仕事をするようにさせたのです。しかし、彼らは海を嫌いました。

天勝号を造ったのが一九六三年です。劉孝永氏も船を嫌いました。水を嫌うのです。波を嫌うのです。海で台風が吹けば、家のように大きな波を越えることを楽しいと思わなければなりません。そのために死んだとしてもいいというやり甲斐を、そこに感じることができる男にならなければなりません。それなのに「水が怖い」と言って海を嫌いました。もし、その時からアラスカに出ていったとすれば、世界的にどれほど大きく発展していたことでしょうか。

先生は「ために生きる心」をもって神様のために生き、人類のために生き、世界のために生き、万物のために生きているのです。万物まで解放したのでしょう？　それで、海のために生きているのです。一九六〇年代には、韓国にあるすべての山に登りました。そして、一九六三年からは船を造りました。それが天勝号です。この世に、船に「天勝号」とつける人がどこにいますか。それはすべて意味があるのです。

天が勝利したという基準を立てるために、今まで船を造ってきたのです。アメリカに来てから船造りを始めたのではありません。一九六三年から船造りを始め、今まで船に乗っ

てきたのです。一九七三年、一九八三年、一九九三年、二十四年間船に乗ってきました。朝から夜の十二時まで、ある時はアラスカで明け方の三時まで、昼でも夜でも船に乗りました。一片丹心で船に乗ったのです。

韓国で船を造りましたが、その船の名前は「天勝号」です。それは何が勝利するということでしょうか。天勝号とは、天が勝利するということですが、それは神様のみ旨を成し遂げるという意味です。既にその時から始めたのです。天勝号を造り、その時に「世界の海を主管しよう」という話をしたのです。

劉孝永氏が「船、船」と言っていたのですが、実際にこの船を造ってあげると、年を取ったせいか船に乗ることを嫌がりました。「先生、このように波が荒い時には、私は海に出ていくことはできません」と言うのです。漁夫がそのように言うことができますか。死ぬまでには出ていかなければならないのです。

(2)一興水産

きのう、私は済州島から帰ってきました。そこに一興水産という会社がありますが、私はその社長に「あなたは、今から一興水産教会をつくりなさい。そして、済州島にいる海女を自分の母親以上、自分の妻以上に侍ることができる準備をしなさい」と言って指示をしてきました。

済州島に造船所を造ったのですが、それを見て「これではいけない」と思いました。それで、造船所を木浦に移してみたのですが、そこでも「ああ、これではいけない」と思いました。一興水産の本社も済州島からソウルに移さなければなりません。世の中のすべてのことがそうなのです。祝福をしてあげようとする時、受け入れ態勢ができていなければ天も離れていくのです。

今まで、私は一興水産をつくって「どんどん基盤を築きなさい」と言って投入しました。

韓国に一興水産があります。今回、先生は十一万数千名の日本女性と韓国の女性を教育して姉妹結縁をします。今は、末端部署にも、すべて私たちの組織の人間、すなわち私たちの要員がいるのです。それで全国に、慶尚南・北道の代表、全羅南・北道の代表、忠清南・北道の代表、京畿道の代表、そしてソウル地域の代表、このように五人の副社長を立てました。その人たちはすべて女性です。二人を任命したのですが、あと三名を任命しなければなりません。

(3)造船所

木浦の人は哀れです。先生は全羅道の人を気の毒に思っています。ここにいる全羅道の人は気分が良いと思います。全羅道だということで国も同情せずにほっておくのです。しかし、私は全羅道の人が哀れで木浦に造船所を造ることにしたのです。ところが、日数が多くかかるので造船所を一つ買いました。その造船所が木浦で一番大きいということで、どれくらい大きいかを見るために行ってみました。私はアメリカの造船所をすべて見て回ったことがあります。

木浦に造船所を造ったでしょう？　それはお金をもうけるために造ったのではありませ

ん。教えてあげるために造ったのです。良い船を造らなければなりません。今は最初なので反対しているでしょう？　反対をしていますが、良い船を造って東海（日本海）や釜山の船を独占しなければなりません。そのようになれば、どんどん注文が殺到してくるのです。その次には、私が一つずつ注文を分けてあげるのです。今はこのような状態ですが、それが生きる道です。そのようなことをしようというのです。そのようにすれば絶対に滅びません。「滅びろ」と言っていくら祭祀をしても滅びることはありません。天運が保護するのです。

福を受けることを誰しも望みますが、福を受けようとすれば受ける準備が必要です。準備ができていない人は流れていくのです。道でも自分たちの計画どおりにしてくれることを願ったのです。城山浦においても、それを早くやっていれば、私が冷凍会社を造り、船も、八千トンから一万トン規模のものをすぐに造ってあげることができたのです。道でも、私たちが土地を買うことに支援もしなかったのです。自分たちの間では「売ってはならない」と言ってありとあらゆることをしたり、「高く売りなさい」と言って操作をしたのです。

魚を獲り始めれば、魚を運ぶ船が必要になってくるので、運輸事業と自然に連結するのです。そして、中東の石油を運搬する何十万トンにもなる遠距離タンカーまで造らなければなりません。世界的な造船所に発展していこうとすれば、一番下のものまですべてのものを備えておかなければなりません。今は、図面さえあれば何でもつくることができる技術を確保しました。そして、魚を獲ろうとすれば、網をつくらなければなりません。網づくりから、何から何までできる訓練がすべてできています。

実績が良い人には、木浦にある私たちの造船所の技術を教えてあげようと思っています。木浦にある私たちの造船所は、本格的な造船所です。タンカーから化学船まで造ることができます。何でも造ることができる技術を教えてあげようと思っています。その技術をもって、六大州を中心として、アフリカならばアフリカの代表的な国においてそのような工場を造らなければなりません。

先生は恐ろしい人です。造船事業をすれば、自分たちの隠しているものを一発で摘発します。このポール・ワーナーが私たちの造船所であるマリン・マスター造船所の責任者になったとき、あちらこちら自慢して回りましたが、隠しておいたものをすべて暴いて攻撃しました。

最も恐るべき先生です。船のデザインも、先生が指示するのです。新聞の記事のレイアウトも、先生が指示をしてアメリカの新聞オリンピック大会で一等を取りました。そのように早いのです。以前のように考えてはなりません。そのような何かがあるので、サタン世界のいかなる政府ももち得ない基盤を築いたのです。

私が造船所に行けば、船がどのように造られたのかをすぐに探り出し、間違っているところがあれば、すぐに命令するのです。「ここをどうしてこのようにしたのか」と言うのです。アラバマの造船所でも、私が訪問する

ことを最も恐れています。隠しておいたものをすべて摘発するので「先生は化け物のようだ」と言っているのです。私はそのような人です。

今後、事業する責任者が主体になれば、その対象をつくらなければなりません。発展させて、造船所ならば造船所の社長を中心として、社長と職員が主体と対象となって一つにならなければなりません。職員と一つになる目的は、国を復興させるためです。そして南米を復興させ、世界を復興させるためです。

二十五年の間、毎日先生は船に乗ってきました。私の手で海洋産業を育てていかなければなりません。それで、きょうも玉浦造船所に行ってきました。「この造船所を私が買うか、それとも北朝鮮に行き、ソ連と満州の三角地帯にこれ以上のものを造らなければならない」。そのようなことを考えながら視察したのです。そのようなことを私一人で考えているのです。そのようにすれば北朝鮮の人々が生きるのです。

私たちは船を早く造らなければなりません。木浦造船所で造って、ここでもはえなわのようなことをするのです。あかあまだいのような魚を釣る場合は、船はかなり速くなければなりません。現在よりも二倍は速くなければなりません。三時間かかる所に、一時間半で行かなければなりません。私たちが新しく造ったワン・ホープ号は沈まない船なので、六人で乗ってどこへでも行くことができます。台風が吹いても錨綱さえ切れなければ生き残ることができるのです。台風が吹いても問題ではありません。大きい船は沈みますが、私たちの船は沈みません。私がそれを開発したので、ツナ釣りにおいて世界的な基盤を築いたのです。どこへでも行くことができるように、それを活用しなければなりません。

本来、私はここで日本と中国を相手にしようとしました。ここに中国の船が来たでしょう？　中国船のために造船所に修理工場も造りました。修理してあげなさいということです。船が故障すれば、原価で直してあげるのです。日本人にも、地歸島につくった釣り場を案内してあげるのです。そのようにすれば、高官たちが飛んできます。それで、慕瑟浦に飛行場も築いたのです。中国の飛行機と日本の飛行機が自由に往来しなさいということです。ほかの国には使わせないで、中国の飛行機と、ソ連の飛行機と、日本の飛行機の専用飛行場にするのです。

(4)済州島を国際釣り場として開発

先生は、十年前から済州島に対して関心をもってきました。済州島は軍事要塞地域として、今後アジアで重要な地域となります。このようなことをずっと考えてきたので、済州島に多くの関心をもってきたのです。開発問題、もちろん観光開発も開発ですが、今後国の運命において、海と接しているこの済州島が重要です。

済州島は、昔蒋介石が「軍港として貸してくれれば、自分がアジアを占領する」と言った、そのような重要な所です。韓国において軍事基地として重要な場所です。あれこれ勘案してみれば、今後済州島は、香港のように、国際自由都市としての機能を発揮することが

できる場所になるでしょう。金利が自由体制になれば、スパイ活動ができる基地として最も適した所です。そのような面からも軍事的に重要な要塞です。そのようなことをよくよく考えると、済州島で事業をすることは簡単なことではありません。それで、仕方なく事業基盤を築いて何から始めたのでしょうか。釣り場です。

済州島は、我が国において海洋関門として重要なアジアの要所となっています。東シナ海や日本海を経て太平洋まで連結することができる位置にあるので、軍事要塞として最も重要な場所です。そして、慕瑟浦の横にある港は、世界的に有名な軍事港となり得る水深をもっています。

先生は世界中を回ってみましたが、韓国ほど良い所はありません。気候から見ても、山水の美しさを見ても、韓国は本当に世界にない国です。私はいつだったか、韓国のような風景をフランスのある田舎に行って感じたことがあります。しかし、それ以外は全く異なります。ここは山々を見ても、老年期の山なので、すべて花のつぼみのようになっていて美しいのです。ほかの所に行ってみれば、例えば日本の山を見ても青年期の山なので、でこぼこしていて見栄えが良くありません。山の姿から見ても、韓国は美しい国です。また、三面が海に囲まれた半島なので、自然の恩恵を受けており、景色においてはより一層の恩恵を受けている国です。

晴れた日に漢拏山に登ると、すべてを見下ろすことができます。そこから見ると「ああ、一度一回りしてみたい」という気持ちになります。しかし、一周できる観光案内所がありません。山に登っていく施設もなく、海に出て一周することができる施設もありません。せいぜい車で一周するくらいのものです。車で一周するのは全然おもしろくありません。ですから、ここで必要なのがケーブルカーです。ケーブルカーを造らなければなりません。

漢拏山を誇らなければなりません。済州島は何をもって誇るのでしょうか。漢拏山をいかにして誇るのでしょうか。それで、私が海軍基地をつくろうと思ったのです。漢拏山の中腹に飛行場もつくるのです。B｜29のようなものも、ここから北済州に飛べば、四方に目を通すことができるようになります。そして、空母も、海から済州島を貫いていくようにするのです。それは、漢拏山の東西南北に穴を開ければできることではありませんか。人間は何でもすることができるのです。そのようにすれば格納庫になり、戦闘機のようなものもエレベーター式に数万台を貯蔵することができるのです。油タンクのようなものも山の中につくることができるのです。

済州島の「済」という字は「渡る」という意味です。「渡っていって主人として振る舞う所」という意味です。また「済州島」と言えば祭司長（注：祭祀を捧げる主が祭司長だから）の国です。地歸島という島はおもしろいのです。ここは、海を中心として何百メートルもの柱を打ち込んで釣り場をつくることができます。そして、大陸とガラスパイプのようなもので連結すれば、自動車で行ったり来たりすることができるのです。そのようなものを造って流されないように埋めておき、

車で行き来できるようにするのです。そのような時代がやって来ました。

ここ済州島ですべきことはほかでもありません。釣りです。そしてゴルフとハンティング、それからカジノです。その次には販売市場を形成しなければなりません。良い物を売る販売市場がなければなりません。その次にはおもしろいものがなければなりません。山にヘリコプターに乗って上がっていくよりも、エレベーターやケーブルカーで上がっていき、また海では、快速艇で済州島を巡回することができればおもしろいのです。日本にも一時間で行ったり来たりするのです。

山にも登り、海も一周すれば、その次に考えることは何でしょうか。釣りをすることを考えるのです。釣りは、済州島で紹介すれば、必ずするようになっています。「済州島で有名なものは何ですか」と聞けば、もちろん「石も多く、女性も多い（注：済州島は風と石と女性が多い三多島と言われている）」と言いますが、一番多いものは魚です。済州島の全域に釣り場の許可を出さなければなりません。地歸島も開発すれば、それを中心として七つの島があります。七つの島をすべて開発しなければなりません。今後、済州島をどのようにするのかというと、三時間以内の場所では魚を獲ることができないようにしなければなりません。観光の釣りはできても、網で獲ることはできないようにするのです。それは、法的にも可能です。

「済州島の魚は小さい」と言って悪口を言ってはいけません。アラスカの魚だけが良いのではありません。済州島の魚を刺身にしたのですが、刺身というのは片方を下ろして作るではありませんか。ところで、これを丸ごとざくざくと切ってみると、その骨がとても固いのです。もっとも砂利の海に棲んでいる魚なので、固くなければ生きていくことができません。そうでなければ骨が折れてしまうではないですか。そして、それを食べてみると、その魚の肉が本当に香ばしいのです。

地歸島も、一周ぐるっと回ってみれば気分はどうですか。韓国で、冬でも釣りをすることができる場所はここ済州島しかありません。また、ここは火山脈なので、海中にある石も火山石であり、そこには小さな魚や虫がたくさん生息しているのです。魚も、網よりも釣りで獲るほうが良いのです。それで、釣りで有名なのです。日本でもそのように知られています。

済州島を見れば、そこで釣りに関係している人が三千三百人だということです。商店だけ見ても、とてもたくさんあります。全国的には何万人にもなるのです。それらの人々はすべて中流以上の人です。趣味産業に力を入れることができる人は、中流以上の人だということです。趣味産業関連のスポーツ店、そこには銃器も含まれています。釣りに使われるプライ（ply：釣り糸）のようなものは消耗品です。どれくらい工場が必要か分かりません。これをすれば、大した産業になるのです。

プライのようなものは一年しか使うことはできません。ですから、その工場を造って人件費の安い多くのアフリカ人を採用し、その人たちが御飯を食べることができるようにするのです。先生は、済州島に来てそのような面も考えたので、九日と十日に釣り大会とハ

ンティング大会をしようとしているのです。それは世界平和のためにするのです。

アラスカは、サーモン（鮭）以外には適当な魚がいませんが、済州島には様々な種類の魚がいます。魚の種類が多様なので、釣りの趣向も多様になるのです。近ごろは狩猟でも有名です。また、「みずだこ」という済州島特産のたこがいます。頭の大きな、とても変わった済州島特産のみずだこがいます。済州島は、コディアックに代わって船釣りで趣味を満喫することができる場所であり、日本人が釣りをするのに良い場所です。観光客を誘致することができる良い場所です。

済州島に行けば、すずめだいという魚を釣って食べるでしょう？　すずめだいを知っていますか。最近、私が済州島に行った時のことです。この魚を釣り上げて、そのままそのしっぽをつかんで酢を入れたコチュヂャンにつけて、丸ごとむしゃむしゃ食べたところ、「やー、あの人たちは糞も分けずに食べている！」と言われました。そのようにして食べても病気にはなりません。魚が食べるものは自分が消化できるものです。

ですから、自分の体に合った魚を食べれば病気にはなりません。おいしく食べさえすれば、体に入っていったその糞のいとこのゆえに、どうして病気になるのかというのです。おいしく食べれば、理想的な材料が入っていきキムチのように熟しておいしくなるので、病気にはなりません。それで、生きているのです。

済州島は、陸地から取れた陸地のひとかけらではありませんか。かもめが糞をする所です。飛び回りやすく、糞をしてひなを孵化する所です。かもめも島で卵を産むのでしょう？　島は、すべての海の動物が子を産む所です。四つ足動物のような姿をしたものは、陸地に行って子を産まなければなりません。

亀もそうでしょう？　海中に棲んでいるものも、魚以外はすべてそのようになっています。魚には生殖器がありません。海の魚には必ずこのような点があります。すべて線があります。雄と雌がそれをこすり合わせて関係を結ぶのです。子を産む時は、すべて陸地に来て子を産みます。済州島はそのような面で必要な所です。

白頭山は男性であり、漢拏山は女性と同じです。二つは相対的になっているのです。白頭山は夫の山であり、漢拏山は妻の山です。海の中にあるので女性の山です。そうでしょう？　済州島の人が飢え死にしたという話を聞いたことがありますか。海に行けば、どこでも食べられる海草があるのです。済州島（チェヂュド）、すなわち祭祀（チェサ）を捧げる主人（ヂュイン）が住んでいる所なので、夜明けに海辺に行けば、御飯やリンゴのようなものがはいて捨てるほどあるのです。女性が息子、娘を連れて白い御飯やリンゴのようなもので祭祀を捧げるので、夜明けに行けばそのようなものがたくさんあるのです。祭祀は人が見る前にするので、朝行くとそのようなものがたくさんあります。

海を平地にしようとどのようにしようと、国を生かすことができれば良いのであって、漢拏山が問題ではありません。たとえ漢拏山を売ったとしても、国を生かさなければなりません。そうでしょう？　だからといって漢

拏山がなくなりますか。海に入っていって生きているのです。この山が千年万年立ち尽くしているので「漢拏山が一度平地に来ることが万民の願いだ」という記念塔を立て、万民がここに来て各国の王が出入することができる基地をつくってみてください。大統領、世界の官吏たちが来てそのようなことをするのです。漢拏山が問題ではありません。南米に行ってみれば、漢拏山は何でもなかったというのです。

今回、私は済州島に行って「虎を二組ほど寄付すれば良い」と言いました。虎が漢拏山の頂上に登っていって「うぉーん」と鳴いて海の波の音と調和しなければなりません。

では、そのようなことが良いですか。「ああ、波の音は騒がしくて嫌だが、山の音は静かだ」。これが良いですか。それでは調和しません。「ざぶーん、ざぶーん」と波の音がすれば、山でも「うぉーん」と鳴いてそれに調子を合わせなければなりません。そのように思います。ゆえに、そのような話をしたことは悪いことではありません。天地が和動することです。

今後、済州島が観光地になれば、どのようになるのでしょうか。今は、どのような人々が済州島に多く行くかというと、新郎新婦がたくさん行きます。ところで、私たちが宣伝さえ良くしておけば「ああ、どうしてホテルに入って寝ていられるだろうか」。このようになるのです。これは夢中になってしまう遊びです。海で釣りをしながら新婚夫婦同士が楽しく過ごすことができるようにするのです。すべてのものを供給してあげるのです。釣りの道具もそろえてあげ、餌もそろえてあげるのです。それから朝食も、外で食べることができるようにして、あらゆることができるようにしてあげるのです。

済州島に猟場と釣り場をつくって訓練しようと思っています。ここに来る時、一つの国から百名ならば百名を連れてくるのです。そのようにして、世界平和観光釣り協会の会員がますます多くなれば、その目標のために毎月、月極め金を出して援助してあげることはいくらでも可能です。中流以上の人々がそれをするのです。

今後、皆さんはそのような任務を負い、アフリカに行って援助してあげられるようにその国に影響を及ぼし、毎年このような仕事をするのです。各国に猟場と釣り場がなければなりません。それで、養魚場と猟場をつくり、そこでハンティングした獣や釣った魚は、殺さないで再び投入するのです。季節ごとに、ほかの場所でできるようにするのです。

済州島は気候が良いのです。アラスカは冬に釣りをすることはできませんが、済州島に行けば、今は釣りをするのにちょうど良い時期です。皆さんは、一年春夏秋冬の四季を中心として、釣りができる二百名を確保しなければなりません。あまりに多すぎても困ります。五十名、すなわちバス一台ずつの人を連れてくることができるように、帰ったらすぐに二百名を確保しなければなりません。

私たちの組織がそのようになれば、夜は、私たちの世界的な活動やその地方の釣りに関する紹介をするのです。このようにしながら最終的にみ言を語ってあげるのです。世界の頂上に対する問題や世界の政治問題、外交問題、経済問題等、全般的な問題に対する教育

をするのです。教育することができる材料はいくらでもあるので、高次元的な教育をして統一教会に関心をもつようにさせて食口化する運動をするのです。そのようにすれば、三年以内で食口になります。

先生は、世界的に多くの団体をつくりました。数十年前からつくってきましたが、そこにはすべて「平和」という文字が入っています。「世界平和教授アカデミー」、「世界平和サミットクラブ」、「世界平和新聞協会」、「世界平和宗教連合」、「世界平和女性連合」など、すべて「平和」という文字が入っています。先日、済州島で釣り協会とハンティング協会をつくりましたが、それも「世界平和釣り協会」と「世界平和ハンティング協会」です。すべて「平和」です。

三　海には学ぶものが多い

一) 海のように天下を抱いて生きなければならない

海を回ってみれば、本当に学ぶものがたくさんあります。海は一日の間にも何度も変化します。世の中では「人心は朝夕に変わる（注：人の心は頼りにならないということわざ）」と言いますが、海は朝夕ではなく時間ごとです。時間ごとに変わるのです。よくよく見ると、いくら天候が良い時でも、ある場所に行けば波が穏やかなのですが、ある場所に行くと風が吹くのです。強い風ではありませんが、そのようにすべて異なっています。人の顔が異なっているように、水があり山があれば、山の高低に従って気候も変わるのです。海は千態万状の妙味をもっています。

先生は自然が好きです。海が好きです。海がどれほど神秘的か分かりません。水滴はすべてダイヤモンドの玉です。これがきらきらしながら「私は文総裁のものです。ダイヤモンドよりもっと高価な価値をもっているのが、私たち水です」と言って誇るのです。どうして水が誇るのでしょうか。「私がなければ、この世に生命は形成されません。また、私がいるので、深かったり低かったりするものも、すべて水平にすることができるのです」と言っているのです。

海がどれくらいでこぼこしているのか知っていますか。しかし、水がそれを水平にしているので、どれほど気分が良いでしょうか。気分が良く、見ても千年万年飽きることがないように青い光を放っているのです。青い光は慰労の光です。なぜ神様は青い光をつくったのでしょうか。この光はいくら見ても疲れません。それは、慰労の色です。万物はすべてそうです。空も青く、海も青いのです。それはどれほど理想的でしょうか。神様の愛に浸るようになれば、すべてが友になります。

人間も友達になるかもしれませんが、自然界がすべて友達です。一度その性格を知っておけば絶対に変わることはありません。しかし、人間の性格は千態万状です。きょうはこのようであっても、あすになれば変わっています。それで「人心は朝夕に変わり、山色は古今変わらず」という言葉があるのではないですか。人の心は朝夕に変わります。そのような人間に使い道がありますか。ですから、動物にも劣るのです。

海は天下を抱いて生きています。一箇所に集まって雲になり、山を覆ってその友となり、高い所から雨を降らせて四方に広がっていく

のです。驚嘆に値するものは水です。水は休みません。千年万年動いていれば、どれほど疲れるでしょうか。文総裁は海を愛しています。自然にはいんちきなものがありません。高ければ高く、低ければ低いのです。そして、高い所にいれば、異議なく供給してあげるのです。文総裁はそれを学び、異議なく供給してあげるのです。異国の地に行っても、私よりも貧しく暮らしていれば、私の倉庫を開いてすべてを分けてあげるのです。たとえ私の米がなくなったとしても、すべてを分けてあげるのです。水平になるようにするのです。それはすべて水から学んだことです。それで、水が好きなのです。

空も青く、海も青く、草も青く、すべて青ければどのようになりますか。本来ならば窒息するはずです。それが自分の好きなイエロー（yellow：黄色）であったならばどうだろうか、一度想像してみてください。すぐに嫌気がさすはずです。また、別の色をもってきたとしても、いくらもせずに嫌気がさすはずです。けれども、グリーン（green）は慰労の色です。これは常に青いのです。

それでは、人はなぜグリーンを好むのでしょうか。存在世界はグリーンとともに調和しています。それゆえに、土にはグリーン・カラーが多くあると考えるのです。土は主にグリーン・カラーと近いのです。ですから、土でつくられた私自身がグリーン・カラーを好むというのは理論的な話です。そのように考えることができます。神様もそれを知っていたので、空も青くし、海も青くしたのです。すべて人を中心として、このグリーン・カラーと調和するようにしたのです。それは、どれほど素晴らしいことでしょうか。

海が穏やかな時は神秘的です。魅惑的な神秘の女王のような美女になってすべての人々を引き込む力があります。海は銀色にも見えますが、翡翠色にも見えます。そうかと思えば、また千態万状です。そこにそよ風が吹けば、その波の美しさというものは何と言ったら良いのでしょうか。舞姫がどれほど上手に踊りを踊ったとしても、そこについていくことはできません。皆さん、ダンサーを見ようとすれば小さいステージ（Stage：舞台）で踊っているのを見物しますが、それはあまりにも狭いのです。

反対に海のステージは無限です。海の舞台がどれほど広いでしょうか。美女や舞姫のような性質があるかと思うと、一度怒れば荒野で飛びかかってくる虎やライオンよりも恐ろしいのが海です。それを考えてみてください。何十メートルもの波が押し寄せてきて引いていく時は、かもめが鳴いても相手になりません。「お前がいくら歌を上手に歌おうと、お前がいくら素晴らしい喜劇俳優であっても、雄壮な私の気勢の前にはかなわない！」と言うのです。威勢が堂々としています。波が穏やかな時は、快速ボートが気分良くさーっと進みますが、ここでは動きをとることはできません。しっぽを振り、頭を振って、このようにしているのです。波に乗り、波のなすがままにするようになっているのであって、そこには自らの勢いというものはありません。

自然の力は偉大です。ゆえに、海を愛する人は驕慢になることができません。海にはそのような偉大さがあります。海の門を開いてのぞいてみれば、そこには無尽蔵の魚がいます。黄金色から金色、青色と、ない色がないほど多くの魚族が暮らしています。陸地と海

の中を比較してみれば、どちらがより美しいでしょうか。陸地も美しいでしょう？　しかし、陸地には花と蝶と、それ以外に何がありますか。それから美しい鳥もいるでしょう。しかし、それらのものは単調です。花は動きません。海にいる豪華絢爛な色をもった美しいすべての生き物は、踊りながら活動しているのです。ですから、どちらがより美しいですか。陸地が美しいですか、海が美しいですか。海が美しいのです。

神様は、どうして水をつくったのでしょうか。「神様が鑑賞するための特別装置が水だ」。このようにも言うことができます。ぱっと隠しておいて公開しなかったということです。このようなことを見れば、神様は、陸地よりも海により多くの関心をもっているはずです。また、未来を考える人は、陸地よりも海に関心をもつのです。神様は、まだ見ぬ未来の理想家庭に関心をもっています。それゆえに、地球の歴史始まって以来、今まで地上に現れたものに関心をもつよりも、まだ見ぬ未来観をもっている海の世界に関心をもつということは必然的なことです。これは理論的です。そのような立場から、海を考える人、すなわち未来像を憧憬する人が増えてくるようになるという話が出てくるのです。

釣り糸を垂らして座っている時の退屈さは、到底言葉で言い表すことができません。そこで散歩することができますか。このくらいのところで動いて、そこで料理をしなければなりません。そこから映画を見に行くことができますか。また、友人の所に遊びに行くことができますか。静かにしていなければならないので音楽を聞くこともできないのです。ですから、海を見つめながら海と空と対話をするのです。海と空が一つになっているそこに私一人がいれば、本当に気分が良いのです。

先生は、なぜしきりに海に出ていくのでしょうか。霊的に、すべての面において利益が多いのです。私が一日中家にいれば気が散漫になって、世界宣教師や教会問題など、考えなければならないことの何分の一しか考えることができません。しかし、海に出ていけば全体的な考えが浮かぶのです。そのような面において、海はとても良いのです。それで「『釣り道』という言葉が出てきたのだなあ」と感じるのです。

静かな海で一双のカップルが愛し合っている姿を想像してみてください。海が「こいつ、私は耐えられない」と言うでしょうか。そのようになれば、魚の群れが来て尾を振って見物しながら喜ぶのです。万物はそのような愛を願っているのです。自然のすべての存在が「頼むから来てください！　してください！」と言って、そこに来て愛し合ってくれることを望むのです。皆さんも、それを推し量り、感じることができる心をもたなければなりません。主人が白い雪の積もった山の頂上に行って愛し合えば、「私たちの主人がこのように美しく愛し合っている！」と言って喜ぶのです。それを願っているのです。

二) 海の生活は素晴らしく、神秘的だ

太平洋を中心として、「黒潮」は四千マイルを回っています。一年に四千マイル回ります。その回る力によって五大洋が回るのです。もし黒潮がなければ海は回りません。この黒潮によって大西洋と太平洋は五大洋と通じて

いるのです。このような環境条件を通じて五大洋がすべて死なずに生きているのです。

いくら川が大きくてもそれは海に入っていき、海がいくら広く流れているといってもそれは黒潮に従っていくのです。黒潮というものを知っていますか。黒潮というのは、太平洋地域を中心として四千マイルの円を描きながら回っている海流のことです。力強く回る水の流れによって、五大洋のすべての水の流れが生きて作動するのです。それに乗って回ることができてこそ海水の資格をもつのです。人間が生きていくのも同じです。

川がいくら大きくても、大小すべての川はいずれ大海に入っていくのです。大海に入っていけば、すべて混ざり合うようになっています。五大洋を中心として見れば、太平洋には黒潮というものがあって四千マイルを回っています。もちろん月の引力によるということもありますが、このように回る黒潮があるので、五大洋全体を動かすことができるのです。それは海の柱の役割をしているのです。汚いものでも、何であっても、入っていけばそれをすべて混ぜ合わせて一つの姿勢になろうとするのが海の目的です。いくら大きな川が何万年も継続的に淡水を投入したとしても、それをすべて吸収して余りある余裕をもっているのです。ですから、海に権威があるのです。海は、いくら入っていこうと変わらない姿勢を備えているので偉大なのです。

日本の雲が太平洋を渡ってアメリカの雲と一つになる時、「私はアメリカの雲は嫌だ！」と言いますか。日本の水が黒潮を通じて太平洋に行き、そこにアメリカの水が来れば「おっとっとっと！」と言いますか。太平洋には四千マイルの黒潮が流れています。そこに先進国や後進国がありますか。国家間の境界線がありますか。それなのに、人間世界のこの姿は何ですか。自然運動に反するものはすべて壊れていくのです。

愛の世界は、どこに行こうとすべて通じるのです。太平洋の水が「私は太平洋の水だ。アジアの水はすべて汚染されているので嫌だ！」と考えるでしょうか。水がどこから流れ出ようと、すべて連れていくのです。そこに悪いものがあれば、それを混ぜて早く解消させて同じ道を行こうと努力するのです。ゆえに、太平洋の水はいくら公害が激しかろうと、たとえ人類がいなくなることがあろうと、変わらず青いままでいることは間違いありません。いくら試練を受けて紆余曲折の過程を経たとしても、海水の青い色が占領されないのと同じように、愛の権威と、愛の内容と、愛の力は常に青いのです。

統一教会は世界の主流の海流となり、太平洋の黒潮のようにならなければなりません。太平洋で四千五百マイルの黒潮が回り、五大洋の水が回るようになっているのです。世界の生命力をすべて宇宙で勃発させるためには、深い所を回っていって動かすことができる源泉をつくらなければなりません。そして、汚い世の中をきれいにしなければなりません。

台風が吹けば、どれほど波が憎く、風が恐ろしいか分かりますか。しかし、その風も自分の使命を果たしているのです。もし風が吹かず、海に波がなければ、魚が生きていくことはできません。風が吹くのは海に酸素を供

給するためです。波というものは酸素を供給するためのものです。ゆえに、波が激怒しようと、どれほど風が吹いてこようと、それを味わいながら「お前は味を失っていないな！」と思わなければなりません。海は塩辛い味をもっています。先生も「レバレンド・ムーンの味は失っていない」と、このように思っています。そのように思えば、押し寄せる波も憎くはなりません。

海には哲学がどれほど多いか分かりません。陸地だけで生活した人間は、あの世に行って理想的活動をしようとすれば、とても多くの支障があるはずです。霊界に行けば鯨にも乗り、魚と一緒に泳ぐことができるのです。しかし、海が好きでなければそのようなことをすることはできません。

海に出ていけば、台風というものは恐ろしいのです。その波は本当に恐ろしいのです。しかし、いくら恐ろしくても愛の力を帆にかけていく場合は、それも越えていくことができるのです。

海は、そのままじっとしていてはいけません。水が動けば死にません。器に汲んでおいた水も、動かしてさえおけば永遠に死ぬことはありません。運動すれば死なないのです。遠洋漁業をする船は、一度出港すれば一年六カ月から二年分の水を一度に積んでいきますが、海水に揺られるので、その水は何百年置いたとしても腐ることはありません。動かせば腐らず、停止すれば腐るのです。ですから、水は本当に特殊でしょう？　水はそのようになっています。

遠洋漁労作業をしようとすれば、飲み水を船にたくさん積み込んでいきます。一年半の間その水を飲まなければなりません。塩水を飲むことができないからです。水は動かせば、何十年たとうと腐ることはありません。水は動かさなければなりません。ゆえに、み言も動かさなければなりません。

水は、なぜ流れるのでしょうか。水平になっていないので流れるのです。水は、流れてどこを訪ねていくのでしょうか。水平線を訪ねていくのです。水は、海に行かなければなりません。水平を訪ねていかなければなりません。

水は、常に水平にならなければなりません。それが特徴です。海は、いくら大きな波が立とうと水平線を描いています。水平線を見れば、寝ころんでみたくなるのです。「いやー、一度寝ころんでみよう」となるのです。そのようなことができないので船に乗って寝ころぶのです。そのようなことを考えてみましたか。水平線では何をしても、ひっくり返ったとしても頭や足が先にぶつかりません。水平にぴたっとぶつかるのです。そのようなことができるのが水平線です。人間には水平線が必要です。

空気や水は、愛と同じです。空気は、真空が生じさえすれば世界の空気を動員してさっとそこを満たしてしまいます。海の水もくぼみが生じれば、さっと押し寄せて水平になろうとするのです。空気も水も愛も、常に水平になろうとするのがその生き方です。

私たちが海に行けば、水を見ます。水は循環しています。水のある所では、朝、霧がかかります。水蒸気になり、これは低気圧なので上がっていくことができません。水が水蒸気になって集まったものが霧です。この水が霧になるのです。そして、蒸発して雲になって世界を回るのです。海に水がなければどのようになりますか。大変なことになります。生物が存続できません。水がどれほど偉大なものであるかを考えてみてください。

皆さんが知っているように、先生は時間さえあれば海に出ます。海に行ってもまれるのです。もまれるのですが、それは精神を整えて大きな闘いをするための試練であり、準備だと考えるのです。睡眠も取らず本当に疲れますが、精神をまっすぐ正し、自らそのような標準を定めて、水平線から他の方に傾かないようにしているのです。

空気も動き、水も千年万年動いているでしょう？　千年万年動いているのですが、全く同じ公式です。海を見てください。水はどれほど疲れるでしょうか！　しかし、一度も疲れると思ったりはしません。それが存続することができる公式です。

海の世界を知らない人は、それだけ幸福の領域が制限されるという結論になります。創造主がいらっしゃるとすれば、陸地を知り、海をよく知って、海の神秘性を思い、陸地の美しさに思いを馳せながら称賛するのを喜ぶのであって、一面だけをもって喜ぶことはないはずだと考えるのが至極理論的な話です。

海や陸地も、すべて人間一人を教育するために造られたものだということを考えれば、創造主の有り難さを実感することができます。海を見ても、それをただ海として見るのでありません。「天の父が私に下さった贈り物だ」と、このように考えるのです。再創造する過程ですべてのものを再度調べてみるという事実、ここで偉大な革命が起きるのです。偉大な勝利の旗印がここから芽生えてくるのです。

三) 海は偉大な自然の力をもっている

先生は刺激的なことが好きです。変動の多いところから切り開いていくのです。そのようにしようとすれば、陸地よりも海のほうが優れているのです。海は風も吹き、穏やかでもあり、波風が何度も起こったりしながら変化するのです。ですから、陸地の旅行よりも、海の旅行が楽しいのです。陸地は、旅行して回っても朝の考えはそのままで、変動はありません。陸地は、いくら回っても修正することなく穏やかに行くことができますが、海はそうではありません。自分がこのように行こうと思っても、あっちに行ったりこっちに行ったりするのです。そのように変わります。変化する時には、本当に刺激的な変化が起きるのです。

穏やかな時は陸地が顔負けするほどです。本当に不思議なほどの穏やかさです。ある時は、海面がガラスに思える時があります。あまりにも美しくて触ったり食べたりしたくなる時があります。ですから、海は限りなく変化しますが「私は行く」という一念で前進していくのです。そのような刺激がなくては、大きな仕事をすることはできません。

海の底を見れば、鯨のようなものもいますが、ハリバット（halibut：ひらめ）のような魚もいるし、キャットフィッシュ（catfish：なまず）のような姿をした魚がくっついて生きています。このキャットフィッシュのような魚は、体よりも頭が大きく、口も大きいのです。これで何をするのでしょうか。それは、大きいもの、腐るものが流れ込んでくれば、かじって食べるのです。いっぱいのみ込んで、かじって食べるのです。それでも足りなければ、虫を吸い込んで食べるのです。このように休まず浄化作業をしています。清掃作業をしているのです。

パンタナールに生息している魚は三千六百種です。三千六百種の魚がいます。それらが食べる餌はすべて異なります。そのようなものが混ざり合って、休むことなく海の清掃作業をしているのです。食べるという行為自体が清掃作業だということを知らなければなりません。彼らは自分の目的のために生きているのではなく、環境を整理しながら、周辺をきれいにしながら、互いに助け合いながら生きているのです。それが自然協助体制です。

彼らは海の水をきれいにする運動をしているのです。海は塩辛いだけでもいけません。魚がいて、汚いものも食べたりしなければなりません。魚の糞はどのようにするのですか。それをまた食べる魚がいるのです。

海をきれいにするのは魚だけではありません。水鳥もそうです。かりやかもめのような水鳥たちは、休むことなく探索しているのです。もしこの海の表面ではなく、中間を流れていくものがあれば、水の中に入っていき、探し出してそれを食べて生きているのです。また、風が「おい、雲よ、今向こうに乾いて死ぬほど暑い所があるから行こう」。このようにして冷たい海の空気がそこに行くのです。その風が雲を乗せて通り過ぎながら水をまいてあげるのです。

この宇宙が、いかに共同協助体制になっているかを考えてみてください。風がなければどうなりますか。大変なことになるでしょう？　皆さんが食べる御飯やパンなどというものもそうです。水蒸気が海から空に上がって風に乗り、真夏の暑い太陽の光に乗って訪れ、そこで雨を降らせれば、その水分を吸い込んでそれらが作られるのです。土の中の水分や空気の水分が合わさって、御飯ならば御飯になり、パンならばパンになるのです。それを考えてみれば、どれほど苦労したかというのです。それはどれほど貴いものでしょうか。そこに宇宙が動きます。宇宙が動いて協助してパンになるのです。そのパンのひとかけらは、簡単にできたものではありません。

海で一番塩辛い所は、深い所だと思いますか、浅い所だと思いますか。深い所です。なぜでしょうか。塩水は重いからです。ですから、深い所ほどより塩辛いのです。それでは、天国の最高の宮中はどこにあるのでしょうか。塩水で比喩するならば、一番底にあります。そこに王宮があります。一番下に行くのです。私がこのように話している概念を知らなければなりません。レバレンド・ムーンが言おうとすることは、天国の一番最高の位置が最も深い海、最も塩辛い水のある底にあるのですが、反対に最も清い人は一番上にいるということです。最も良心的で、より世界のために生き、より全体のために生き、より高い心をもつ所に神様はいらっしゃるのです。

主流から流れるきれいな水が公害で汚れた水を見て、「私はお前と混ざり合うのは嫌だ！」と言って避けることはできません。自然の場合はそのようになっています。自然の調和と総合関係というものは不思議です。水の性質は、汚いものがあって自らの本質がそれによって汚れたとしても、それを包容し、自らの周辺のものまで吸収してこれを同一化させるのです。そのようにして、流れ流れていく間に、汚いものは沈んで、きれいなものは浮かんでくるのです。そのようにしながら流れていく中で、きれいな水になって海に流れ込んでいくのです。歴史の流れもそのようになっています。

海の波がいくら流れていても、魚は寝るのです。水が流れていても、魚のひれは流れる水に逆らって一箇所にとどまるように運動します。しかし、体は寝ているのです。おもしろいでしょう？　皆さんのすべての血管が運動していても、皆さんの体が寝ているのと同じです。魚の生命がその拍子を合わせるのは、血が巡るのと同じように寝るのです。このように考える時、誰が主人となり、誰がより高いものになるのでしょうか。より投入する人、より「ため」に生きる人が主人になるのです。

いくら海の波が荒々しく波打ったとしても、その流れは必ず主流に従っていきます。主流に方向を合わせてくることによって、全世界が反対し、迫害しても生き残ることができたのです。また、神様は、主流を中心として、完全な主体としての主流的な立場に立てば、主体と対象の関係を中心として保護するので被害を受けることはありません。

皆さんは、水泳をしながら「ねえ、のどが渇いた。コーラかメッコールを持ってきて！」と言いますか。水に入っていれば、一日中水を飲まなくてもよいのです。水に入っていれば細胞が水を飲みます。先日、先生は十六時間半も話をしました。「そのように長い時間、おしっこをどうやって我慢するのですか」と言うかもしれません。しかし、おしっことして出ていくものがすべて汗になって出ていきます。暑くて水蒸気になって出てきて、汗としてすべて出ていくのです。

ですから、海に一日中入っていれば、水のようなものを持っていく必要はありません。そこで一時間でも、何時間でも鯨のように水泳をしてみてください。その時でも、のどが乾きますか。砂浜にうつ伏せになっているので、暑くて水を飲むのです。人にとって水は貴重です。それから空気です！　水の行く所には空気も行きます。海の中にも空気がありますか、ありませんか。

世界の海は常に動いています。風が動いたりするのも、すべて繁栄し生きるためです。このようなことを考える時、台風が吹いて波が数十メートルも立ったりしますが、そのようにならなければ海に空気がなくなります。それでは、魚はどのように生きるのでしょうか。このようなことを考える時、「いやー、台風が吹いているので海底の魚が喜ぶだろうなあ。私は大変だが、魚が喜んでいるのでうれしい！」と、このように考えることができます。

生命の祖先のようなものが水です。ですから、神様の代わりに水を愛しますか。そのような考えをもちながら海を愛さなければなり

ません。景色の良いところには水がなければならず、樹林がなければなりません。それが水の調和です。このような問題を中心として見るとき、水を愛そうというのです。水を愛することは、万物を愛することになります。これは原則的な考えです。水を愛するのですが、湖の水を愛するのですか、海の水を愛するのですか。毎日のように海に行かなければなりませんか、それとも行ってはなりませんか。風が吹いて波が立つのですが、船に乗れば血が揺れるので血が腐ることはありません。すべて浄化されます。本当です。いつも船に乗っている人は健康です。

私は月給をもらいません。私は、私の力でかせいで暮らすのです。今でもどこへ行こうと、たとえヘリコプターでアフリカの奥地に降ろされたとしても、そこに動物しかいなかったとしても、私は生き残ることができます。山に行けば山で食べて生きることを学び、海に行けば海で食べて生きることを学びました。ゆえに、私は乞食街に入っていっても、これを天国につくりあげます。皆さんが従ってこなくても、乞食の群れを通してでもみ旨を成すことができるように訓練をした人です。ゆえに、今私が皆さんに「乞食街に行きなさい」と言えば行きますか、行きませんか。そのようにしようとすれば訓練が必要です。

自分たちは「ふろしき包みを抱いて、座って食べて楽に暮らそう」と言いますが、今まで私は開拓者でした。開拓して私が先頭に立ってきました。今回も、私たちの会社で船を造りましたが、船長がいなければ私が連れて海に出ていくのです。「風よ吹け。波よ打て。男の行く道をふさぐことができるものか。天を思い、人類を思い、後孫に生命を引き継ぐことができる食糧問題をここで解決するのだ」と、このような考えをもっています。すてきでしょう？　私はそのような男が好きです。

今後、残される生きた映画がそこから出てくることでしょうし、歴史の渦がそこから解かれることでしょう。それ以上に不思議ななぞはありません。悲喜劇が交差する道であり、素晴らしい男たちが憧憬しながら行くべき道です。ジャンピングすることができ、そこから世界に越えていくことができる基地があるのです。このようにすることによって海に出ていく数多くの若者に希望を与えることができるのです。あすの海の世界に対する夢を描くことができる源泉、泉がそこから爆発するのです。それはどれほど素晴らしいことでしょうか。

私は、そのように熱心に海に出掛けていくのですが、その心を忘れてしまったら問題が生じます。その心が続かなければなりません。精誠というものは、千年万年続かなければなりません。海に出ていって精誠を尽くすのを楽に座ってするならば、蕩減できる条件が立ちません。きのうよりもきょうが良く、きょうよりもあしたが良くなければなりません。すべての川の水は大西洋に集まり、大西洋の水は太平洋へ行くのです。今後私が、飢え死にする人々を救ってあげる時までその精誠を込めるならば、私が死んだとしても、そのみ旨はこの地上に成し遂げられるだろうと思っています。

真っ黒な顔をしたハドソン川の漁夫のような男、千年を待てば何もかも消えてなくなっ

てしまうような男ですが、まさかそのような方がこのようなことをするとは思いもしないでしょう？　なぜそのようなことをするのでしょうか。二千万の飢え死にする人類を解放するためです。汗を流したハドソン川を忘れてはならないということです。五大洋六大州を通して息をし、考えるその見えない波紋、電波のようなものが、そこで生きている魚世界を通じて未来の人類解放の道に連結するのです。地と海があれば飢え死にすることはありません。先生が教えてあげれば、飢え死にする人々を救うことができるのです。

神様が絶対愛のために創造した物を見れば楽しいのです。未来の福地天国を中心とした家庭で十分に生活必須要件を備えることができるように、すべてつくっておいたのです。ですから、どれほど喜びを感じるだろうかというのです。流れる水も天地が機能するためのものです。海から水蒸気になって循環しながら万物を蘇生させるのです。すべてが協同圏内で協力し、人間の理想を完成することができるようになっているのです。神様の生活的な舞台として、神様の息子、娘をこの地上で育てて天国に移譲しようというのです。

夜が過ぎれば朝になるように、反対の世界になりました。統一教会には春が来てサタン世界には夜に向かっていく時が来ました。サタン世界には希望がありません。サタン世界は真っ暗な希望のない絶望の世界であり、統一教会は絶望だと思っていたら、黎明時代を過ぎて新しい朝が来ることによって鮮明時代がやって来るのです。

「文鮮明」とは、真理の王国になるということです。名前が良いのです。これは何かというと、この「鮮」という字は「魚」という字と「羊」という字なので、陸地と海を統一するということです。「明」は空の「日」と「月」、すなわち空を表しています。「文」という字は早く書くと、このように「父」という字になります。「父」という字のいとこになっているのです。真理を通じて説明することができる真の父という言葉が「文」という字の最も近いところにあったのです。私は、そのことも知りませんでした。このように話してみたので学べたのです。

第二章　海洋レジャー産業と趣味産業

一　海洋レジャー産業の開発

一) レジャー産業には釣りとハンティングが適格

将来は、レジャー産業が発展するはずです。なぜなら、人々が都市生活をするためにストレスが多くたまるので、それを解消するには刺激的な運動が必要だからです。何によってストレスを解くのですか。私は三種類あると思います。一つはハンティング、一つは乗馬、そして釣りです。ハンティングや乗馬をするには多くの制約があります。乗馬は、特定の階層の人だけができます。たくさんのお金がかかるからです。それゆえに、誰でもできるわけではありません。またハンティングも、四十歳前後の人ができるのであって、五十歳を越えては難しくてできません。ですから、これも特定の階層の人だけです。しかし釣りは、少年時代から老いて死ぬ時まですることができます。それゆえに、今後釣り事業は世界的なものになるはずです。

趣味産業とは何ですか。カジノとスポーツ、ハンティング、フィッシングではないですか。それを準備しているのです。今後、趣味産業を主管する者が世界を主管します。これは強大な力になるのです。私が数十年間準備してきたのは、すべて人類のためです。釣りをしても、魚を釣って売り飛ばそうというのではありません。趣味です。御飯は食べることができます。ですから、それは趣味ですので、釣ってみて、小さな魚は放してあげ、大きい魚は食べるのです。食べるとしても、一人で食べるのではありません。分けて食べるのです。そのような時代が来ます。

今カナダでは、「政府でお金を八〇パーセント以上出すので、早く鹿の農場を拡張しよう」と言っています。見てみると、国家の収入がとても多いというのです。現代文化人の病気治療はストレスを解決することですが、それを解決できる最も良い方法は、レジャー産業を中心としたハンティングと釣りしかありません。ハンティングをする人々は、みな度胸のある人々です。女性のような男性にはできません。概して、ちょっとしたけんかはする将軍のような人たちです。ですから、活動半径が広く、お金をもうけるのもものすごく、使うときもものすごいのです。

釣りは主に夏にするのですが、冬は制限されます。これをすべての季節で行えるようにするにはどうすればいいかということが問題です。それで、コディアックにいる人々を連れてきて試してみようと思います。釣りは夏に行い、ハンティングは冬に行うのです。夏と冬なので、互いに交替してできるというのです。それゆえに、私たちの観光事業を拡大する期間を広めるためには、趣味産業である釣りとハンティングが絶対に必要だというのです。ハンティングは寒い時にするものであり、釣りは暑い時にするものなので、趣味の基盤を拡大できるのです。冬でも夏でも、春夏秋冬いつでも趣味としてこれを活用できるのです。そのようにすれば、世界のお金持ちの人々は、一年中趣味を楽しむことができるのです。

釣りとハンティングは趣味です。高位層、豊かに暮らす人々の趣味分野です。ですから、趣味産業をするのです。観光組織をつくって先生が直接リードするつもりです。

趣味の中にはハンティングがあり、釣りがあり、その次には冒険すること、飛行機に乗ること、自動車競技のようなハイスピードのものがあります。その次にはスポーツです。南米を中心として、数千の飛行機がアクロバット飛行をする、そのようなエア・ショーを行えば、全世界の人々が南米に集まるというのです。一万メートルの高い所から地上へと、何秒間か垂直に降りてきて、そして、地上十メートルで再び上がっていくのです。それゆえに、自動的にストレスが解けるのです。目を開けてみると、別天地が展開されるのです。

皆さんは、釣りが初めてなので分かりませんが、これを一度、二度続ければ、どんどん魅力を感じるようになります。ハンティングも、初めは小さい鳥を捕まえ、それがおもしろければもう少し大きいものを捕まえて、またより大きいものを捕まえようと猟銃を買い、それからまたもっと大きいものを買って捕まえようとするのです。限界がありません。止

められないというのです。ひっきりなしに高まっていくのです。人間生活にすべて関連するというのです。ですから、これは全世界的に発展できる可能性があります。

大使たちが一年に何度も訪ねてくることを願います。このようにすれば、大使を通じてその国にいるすべての人々に、皆さんがいくらでも講義して教えてあげることができるのです。集まって釣りとハンティングをしながら、祝宴もできるのです。その国に来ている自分の国の人々とクラブもつくり、事業もして、すべてのことができるのです。

馬に乗ることも制限があり、ハンティングも年を取った人々はできません。しかし、釣りは年齢を超越します。これは無制限です。船に乗って餌を海にまき散らして、小さい魚一匹を釣り上げても釣ったことになります。そのような意味で考えてみるとき、今後釣り観光は、無限に発展させることができるのです。そのようなことができる最適な所がアラスカです。

皆さんに国をすべて任せてあげたので、今から先生は、世界のトップクラスの人たちを連れて、釣りをしたり、ハンティングをして回りながら、酒は飲みませんが、歌って踊って暮らすことのできる時代に入っていくというのです。彼らを通して世界の趣味事業を発展させようと、百六十カ国に船を分け与えて、その準備をしているのです。

コンドミニアムを造って、家がなくても暮らすことができる体制をつくり、年を取った人々を世界の公園に連れていきながら教育しようと思います。船があり、狩猟場があり、その次には飛行場があり、ホテルがあり、そのようにつくるのです。このようにして、趣味産業をしながら世界をリードしようと考えるのです。その準備をするために、今飛行機会社をつくっているのです。中型、小型飛行機に乗れば、どこにでも飛んで行けます。今、大型飛行機で行くことができる名のある休養地は、すべて行ってみたというのです。

今からは、田舎の村まで行くことができる飛行場を築き、世界的な観光基地をつくろうと考えているのです。小型飛行機を世界化させるというのです。百六十カ国に飛行場をつくろうと、現在飛行機会社をつくっているのです。大きい飛行機が行く所はすべて休養地域なので、そこにはすべて行ってみたというのです。それで、湖をつくり、ハンティング場をつくろうと思うのです。

観光事業で中流以上の人を連結するのです。観光をする人は中流以上です。そして、ビジネスのためのハンティング場、その次には釣りのための養殖場を世界にたくさんつくるのです。それが事業です。大西洋まで運河をつくって休養施設をつくり、狩猟場と釣り場をつくれば本当に良いのです。水と土地がある所では、どのような国であろうと飢え死にしないように私が教育するというのです。

二) 沈まない船、ワン・ホープ

ワン・ホープとは何かというと、「海の一番の希望」という意味です。最初、他の船は、「三十フィートだ、五十フィートだ」と言いながら豪華船だと誇っていましたが、私たちの船は小さくても速いのです。シュッ、シュッ、シュッと走っていくと、皆「小さい船が来る」とあざ笑いながら、「危険なのに、あ

れは死ぬために来た」と言うのです。どうして死にますか。沈まない船だということを知らなかったというのです。

海と関係を結ぶために最も重要なものとは、海に浮かべる船です。世界的に見るとき、いかなる会社が造ったものよりも、私たちの会社が造った船は永遠に称賛できます。歴史が過ぎれば過ぎるほど称賛できる伝統をもった船を造らなければならないというのです。

小さい船で何をするのですか。釣りをするのです。大部分の人が釣りには関心がありますが、網をもって魚を獲る漁業には関心がないのです。未来は、大きい船で網を使って魚を獲ることには関心がなくなるというのです。それで造ったのがこのニュー・ホープです。これは、川にも行くことができて、海にも行くことができる船を考案しなければならない、といって造ったのです。

今、私たちのニュー・ホープが有名です。釣りをして案内するたびに有名になっているのです。海だけ走るボートではありません。車でどこにでも移動が可能です。ここからフロリダに行こうとすれば、車で引っ張っていくのです。ここから海路でフロリダまで行こうとすれば何日もかかります。ところが、車で行けば一日で行くのです。西部から東部まで車で行けば三日です。海路を行こうとすれば一カ月かけなければなりません。そして、海に出れば波に乗って行けるように、波をかき分けて行くことができるように建造しました。それで、二十八フィート以上に造ったのです。それ以下ではいけないので、そのようにしたのです。その二十八フィートを中心として三十八フィートも造り、それから五十二フィートも造り、九十八フィートも造り、百八フィートまで造ったのです。百八フィートのボートは、アラスカの荒れた海の中で、底引き網を引いて魚を獲るのです。

海で船に乗って行こうとすれば、位置を探知して方向をつかんで行かなければなりません。それを知らなければ、霧と闘っても絶対に動くことはできません。ですから、どれほど不便ですか。その計器は十何種類にもなります。これをどのようにすれば一つの計器に入れたシステムをつくることができるのか、ということを研究しなさいと指示しました。それで、いろいろな計器をコンピューター装置に入れて、方向から今の位置、海の深さと魚の動きまで、すべて一つのシステムで知ることができる機械を研究開発して、今製作できる段階に入ってきています。そのうわさを聞いて、世界各国で競争が起き、「自分の国で工場を造ってあげるので、私たちの所で製作しなさい」と大騒ぎです。

私たちは、「それは統一産業がしなければならない」と言っています。海の深さ、魚の動き、これらがすべて問題になっています。海が神秘なのは、網で魚をたくさん獲った所に再び訪ねていくのが難しいということです。網を引いて魚を獲る時、どのようなコースを行けばたくさん獲ることができるのですか。わずか十メートルの差で、三倍も獲ることができる所もあります。それはどういうことかというと、魚の脈があるというのです。そのような所を再び訪ねていって魚を獲るということが難しいので、一度魚がよく獲れた所をコンピューターに入れれば、百回でもその場に行って自動的に網を下ろすことができ、そのコースへ行けるように案内できるシステム

を開発したのです。それは、本当に素晴らしいのです。

私は、この手でこのような基盤をすべて築きました。船が必要ならば、どのような船でも造ることができます。最近では潜水艦まで、小型潜水艦まで造ることができるように研究させています。ノルウェーから日本まで、そのような研究をしています。今後は、海の各階層で生活できる家庭的小型潜水艦を造り、そこを住宅として、海の中に入っていって暮らすのです。

私たちにはバン家庭、潜水艦家庭、宇宙船家庭があります。一週間はここで暮らし、一週間は海で暮らしてまた行く、このようにするのです。そのような最高の技術を先生はもっています。バンを造ることができ、潜水艦を造ることができ、今宇宙船も造ることができるのです。

三) 脚光を浴びる未来レジャー産業・・釣り

(1)海釣りの醍醐味と味

海の中には、スウォッド・フィッシュ（めかじき）とか黄色いひれのツナもいます。大きいものは三百ポンドにもなります。百五十キログラムにもなるほど大きいのです。先生の一・五倍です。そのようなものが群れをつくって泳いでいるので、一度網に引っ掛かれば、数百匹が引っ掛かります。それがさめの攻撃対象になります。さめが入り込めば血が広がるようになります。そのようになれば、周囲にいたさめが寄ってきて、三分の二はさめの餌になります。それは衝撃的です。船の上で希望をもっていた人々も、さめにやられて瞬く間に絶望の境地に陥ってしまいます。

大きい魚が食らいつけば、海の底から振動がそのまま波及してきます。これに対し船で「ドーン、ドーン、ドーン、ドーン」と音を鳴らせば、頭をハンマーでたたくのと同じです。海で数十年間あらゆる風霜の中で生き残ってきたものなので、どれほど荒波をたくさん経たでしょうか。そこで生き残ってきたので、どのようなことが起きたのか、すぐに分かります。状況を見て、人が何メートルの所にいるということまで測定している局面なので、てっぺんで「かん、かん」と音を鳴らしてはいけないのです。

ツナ獲りのようなものは釣りではありません。海のハンティングです。海のハンティングという言葉は初めて聞いたでしょう。それを捕まえるのは、大きい牛を一頭捕まえるよりも難しいのです。一匹、千ポンド以上です。五百キロ、六百キロ、七百キロのものもいます。それは雄牛よりも大きいのです。

そのようなものを捕まえれば楽しくなります。捕まえて長くおけば魚が腐るので、すべて血を抜くのですが、床が瞬く間に血の海になります。その時は私も「私は本当に無慈悲な心をもったな！」という気がします。私は、そのような時、いつも「神様も、私たちを人類解放のための祭物と考えるので、やむを得ずそのようにされるのではないか」と考えるのです。また「自然世界から捕まえたものは精誠を尽くしたものではないので、私が育てて祭物を差し上げます」と心に誓うと、気分が晴れました。それで養殖事業をし、水産業をするのです。

魚がどれほど大きいかといえば、このように大きい私たちが二人立っても、隠れて見えません。そのようなものが小さい一ミリメートルの釣り糸に引っ掛かってくるのですから、どれほど興味がわくか分かりません。簡単には何と言えばいいのでしょうか。雄牛のようなものが引っ掛かってくるのです。釣り糸は細いのに、これがすごいのです。女性で生まれて、釣りをすることはできなくても、見物だけでも一度したくはないですか。

きのうもブラックタング・フィッシュを一匹釣ったのですが、これがどれほど強いか分かりません。貝をかみ砕くのです。釣りの中で、最も神経を使う釣りがブラックタング・フィッシュ釣りです。皆さん、かにがいるでしょう、これを二つに切って釣り針につけて入れれば、さっとちぎって食べます。いつの間にか来て、ちぎって食べてしまいます。本当に不思議です。この釣り針にかにの足をつけておけば、いつ来て奪い取っていくか分かりません。

ペテロは漁夫だったでしょう。皆さんは漁夫の子孫ではないですか。ですから海を知らなくてはなりません。何を捕まえようとしてアラスカまで来たのですか。海の底にうつ伏せになって王のように振る舞うのがハリバットです。それは、うつ伏せになって生きるのです。目がアンテナのように飛び出していて、海の底で暮らす姿は、ちょうどこけが生えた岩の塊のようです。うつ伏せになってそこから匂いを出すので、小さい魚が集まるのです。小さい魚が集まってくると、体をひねって捕まえ、のみ込むのです。うつ伏せになりながら生きるのです。サタンと全く同じです。サタンの王です。

「天下の私を誰が触るか！」といいます。これが釣られて引き上げられながらも「私を誰が触るのか！」と、このようにしながら少しも動かないのですが、あとで釣られたことが分かって「ああ、大変なことになった」と、このようになるのです。文総裁によってアラスカのハリバットが初めて雷に打たれるのです。コディアックで八十ポンド以上のものを捕まえた人がいないのです。文先生が現れて初めて二百ポンド、三百ポンドのハリバットを捕まえるようになったのです。

釣りがなぜ刺激的かといえば、血を見るからです。どれほどストレスが解消されるか分かりません。ハンティングも同じです。そうでなければ、現代人のストレスをどのように解くのですか。血を見るということは衝撃的です。昔ローマの人々がなぜ残忍だったのか知っていますか。引き裂かれて死ぬ人々の血を見てストレスを解くことができたので、それを喜んだのです。血を流すのを見れば「ワッ！」と細胞が一度にひっくり返ります。それで、ストレスがいる所がなくなって逃げるのです。男性として生まれた者が釣りをすることができず、ハンティングをすることができなければ女性と同じです。そのような男性とは、絶対に一緒に暮らすなというのです。

人間が文化生活をすればストレスがたまります。これをどのように解くのですか。説明するだけではできません。刺激です！　刺激は、血を見る以上のものでなければなりません。血がはねて小さな肉片がくねくねするのを見る瞬間、ストレスのようなものはたまっ

ていることができないのです。逃げ始めるのです。

ハンティングもそうです。ツナのようなものは、大きさが雄牛の三倍にもなります。そのようなものがのこぎりでひかれれば、血が飛び散るのです。その時、海を見れば真っ赤に変わります。そのような時には、詩人のようになるのです。女性が見れば、「ああ、神様！　ああ、ああ……」と言いながら気絶するかもしれないのです。それくらいぞっとします。そのような所ではストレスがたまる余裕がありません。完全に除去されるのです。それだけ刺激的です。

今後、日本人を動員する観光事業では、アメリカは希望的です。アメリカでは、一年中釣りができます。その中でも最もおもしろいものとは、はえなわですが、釣り糸をどれくらい長くするのかといえば、六十マイルにもなります。六十マイルといえば、ソウルから天安まで行く距離です。それがどれほど深い海なのかといえば、千メートル、八百メートル、五百メートル以上です。その色を見れば正にインク色です。その中で六十マイルの長さがあるので、魚が食いつけば相当な量です。さめの中には、人をそのままのみ込んでものどに引っ掛からないほど大きいものもいます。スウォッド・フィッシュ（めかじき）というものも、三メートル、四メートル近くになります。そのようなものを、そのまま頭だけ除いて、すべてのみ込んでしまうのです。それは戦争です。そのようなものに出会えば、あいさつもなくのみ込んで、ゆうゆうと王子のように泳いでいくのです。

今から、北極に行って氷の上で捕まえるのです。あしかを氷上で捕まえてくることが残っています。そして、オーストラリアに行けば、ブラック・マーリン（白かじき）というものがいます。その重さが三千ポンドです。私は二百ポンドなので、私の体重の十五倍です。十五倍もある大きい魚がいます。三千ポンドです。鯨でも、釣り針を垂らせば引っ掛かるはずです。そのようなものが食いつけば釣り糸が切れるので、捕まえて、また元に戻してあげたこともあります。

それを捕まえていれば、博物館にもっていったでしょう。その力がどれほど強いか、それを捕まえようとすれば五時間以上苦労しなければならなかっただろうというのです。それで、「ええい！　使うこともできないものを捕まえてどうするのか」という気がして放してあげたのです。ですから、捕まえてみたいものは、すべて捕まえてみました。

先ほどのアルバムでハリバットの写真を見れば分かりますが、これがその魚釣りです。グロスター、ボストン海域には、ジャイアント・ツナ、ブルーフィン・ツナ（黒まぐろ）がいるのですが、私がもっている記録は千二百七十二ポンドです。長さが十八フィート以上です。ですから、五メートルを越えます。きょう私が捕まえたのは十四・九フィートになるのですが、それは雄牛より大きいのです。虎で大きいものは七百ポンドくらいで、雄牛は千ポンドです。ですから、雄牛より大きいのです。

きょう私たちは約二百ポンドのものを捕まえましたが、私の記録はその六倍です。そこまであれば、それはすごいことでしょう。第二次大戦の時に、何かの将軍になって勝利す

ることよりもっと素晴らしいのです。それこそ、男として生まれて釣りをするのは王子のような立場です。一度その味を味わえば、「妻を売ったとしても参加する」と言うはずです。してみなければ分かりません。

ストライプト・バス（striped bass：すずき）というすてきな魚もいます。それはツナよりもっとおいしいのです。刺身にすれば、肉に弾力があって、とてもおいしいのです。日本人は、とろ（注：ツナの腹肉の脂肪が多い部分）が一番と言いますが、この味を知れば飛びつくはずです。それは、最初蛇の肉をかむような感じです。かんでも、このようにはじいたりするというのです。お母様は、すしのようなものは好みませんが、この魚の味を知ると、「刺身、刺身！　ストライプト・バスの刺身」と言うようになったのです。先生が釣りに行くとき、お母様に「準備しなさい」と言えば、ストライプト・バスを釣りに行くものと思って「ああ、そうですか」と言いながら、すぐについてきます。ですから、おもしろいのです。それで、魚釣りは刺激的だというのです。

魚を刺身にして食べれば、食べられない魚はありません。血があるので気分は悪いのですが、皮をはがしてすっすっすっとすれば、唐辛子みそなどをつけて食べる必要がないのです。単純ながらも栄養が十分で、食べるにもどれほど良いか分かりません。生きた細胞を食べるのであって、死んだ細胞ではありません。ごくごくのみ込んで、一日船で休むようにすれば、どうしておなかをこわすのですか。食べることができないから下痢をするのです。そのように素晴らしく暮らすことのできる道が明白なのに、それを知りません。

(2)海釣りをする時の要領

海の魚を見れば本当におもしろいのです。一番浅い所に小さい魚がいます。深い所に入っていくと、だんだんと大きい魚がいます。小さい魚は少し大きい魚に捕まり、また、少し大きい魚はそれよりももっと大きい魚に捕まるのです。おもしろいのは、鯨の子やツナの子を見れば、子供はみな同じです。すけそうだらの子やツナの子など、子供はみな同じだというのです。

先生はよく海に行きます。海には無限の宝物が埋まっています。そこには、ずーっと系列的に餌が置かれています。それを見ればおもしろいのです。すべて「ため」に生きているでしょう。連帯関係をもって「ため」に生きて存在しています。もし大きいものが小さなものを食べてあげなければ、大変なことになるのです。海が魚でぎっしり埋まってしまうのです。食べてくれることによってバランスがとれるのです。

海の魚を見れば、小さい魚から段階的に食べられて生きていくのですが、これがどうして神様の愛ですか。彼らは人間を標榜し、神様の愛を受けることのできる人間の細胞に吸収されることが最高の理想です。そのようにしようとするので、鉱物は植物に吸収されるのです。神様の愛を受けることができる細胞圏に占領されるのです。植物は動物に、高級動物は人間に占領されるのです。おいしくて立派なものは、すべて人間に吸収されること

を希望するのです。最高の細胞が躍動し、神様の息子、娘の愛の実体として連結したい、愛の本宮に向かって帰ろうという願いをもってその主人に吸収されるのです。

海に行けば、水が深ければ深いほど階層が多いのです。温度の差が大きいのです。温度一度、二度の差によって魚の種類がすべて変わります。本当に不思議です。人間には分かりませんが、魚の世界では、一度の差による階層と、その面に沿って五大洋を訪ね回るのです。本当に神秘的です。きのうまで魚が無尽蔵にいて、魚が半分、水が半分だったのですが、きょう行ってみると一匹もいません。それはなぜかというと、温度差のためです。〇・五度、一度変われば完全にいなくなるのです。人は、一度、二度の差は問題ありませんが、魚たちはそうだというのです。

人は、寒帯地方に行っても暮らすことができ、熱帯地方に行っても暮らすことができ、温帯地方に行っても暮らすことができますが、動物たちはそうではありません。ライオンが韓国で暮らせますか。韓国にライオンがいますか。ライオンはアフリカにいます。韓国には、ライオンではなく虎がいます。

魚の食いつき方も、魚の性格によってすべて違います。千種類の魚がいれば、食いつき方も千種類です。新しい所に行って釣りをする時は、一匹、二匹、三匹と捕まえながらどのように食いつくのか、きちんと公式化させるのです。それが常識です。魚がこのように食いつくのに、このように引けば引っ掛からないのです。引くほうに釣り糸が行くので、いくらでも魚が逃げるのです。このように食いつけば、反対に引っ張るのです。前に行く時はこのように引っ張り、左に行く時は反対に引っ張るのです。初心者は、いつもこのように引っ張るのですが、違うというのです。反対に引っ張ってこそ早く引っ掛かるのです。いくらも時間がかかりません。

海釣りに行くとしても、ただ水平線だけがある海に行くのではないのです。必ず石がある所に行かなければなりません。石があって隠れることができ、そこに食べられる虫がくっついている所に魚がいます。水が流れるのを見れば、魚たちがいる所は必ず波打つのです。三メートル、五メートルの波が立つというのです。そのような所に行けば魚がいます。そのような所の近くに行って魚を釣らなければなりません。

釣り糸を垂らせば魚が釣れると思っているのですが、とんでもないことです！　魚が戯れる水温が違います。大小によって水温が変わります。夏は表面に近いほど水温が高いのです。それゆえに、小さな魚は水面で暮らすのです。海水の温度によって自然に移動するのです。魚は、縦に動くことを最も嫌います。いつも横に移動しようとします。釣りをしようとすれば、そのようなことを知らなければなりません。魚がとどまる所、サーモンでも、どこで釣りをしなければならないのかということを知らなければなりません。ですから、専門家にならなければなりません。勉強が必要です。専門家にならなければ釣ることはできません。

先生は、温度に合わせて釣りをします。温度がどの程度ではどのような魚がいるのか、すぐに分かります。釣り糸を何度か垂らせば、すぐに魚が餌をつつきます。釣り糸を早く巻けば上に上がっていき、ゆっくり巻けば沈む

のです。ゆっくり巻きながら、今水面から何分の一の所を流れているのかを知らなければなりません。今のこの気温では、キング・サーモンはどのレベルに来るのかということを知っているのです。サーモンは、普通底にいます。なぜですか。底に餌が多いからです。虫やかにのようなものたちがいるので、底に寄ってくるというのです。

いくらアラスカで魚をたくさん釣ったとしても、他の所に行けば、また学ばなければなりません。どれほどこれがおもしろいか分かりません。また往来することもできます。ニュージーランドの人々も、コディアックに来れば学ばなければなりません。ニュージーランドではうまく釣ることができるとしても、コディアックでは通じません。コディアックに来てまた学ばなければならないので、お互いに一つになることができるのです。多様な釣り方法、多様な顔、多様な環境があるというのです。どこに行っても、釣りをする所によって違います。

おもしろいことがあります。海を見れば、台風が吹いて船も出てこないので、すべて魚の世界です。普通の時は、人々がやって来て、音楽をかけながらざわついて「ガンガン」と音がするので、棒で何かをたたくような大きい振動を感じるのですが、台風の時は静かだというのです。ですから、鯨たちが集まってジャンピングしたり、ショーをしたり、その日は本当に歴史的でした。どこかにその時の写真があるはずです。

大きい魚も、小さい魚もいたのですが、鯨は大きいのでしっぽのつけ根までしか跳ねることができませんでした。しっぽだけはいつも水の中に残るのです。そのようにして倒れれば、水の上にひっくり返って、さっとこのようにしながら浮上するのです。どれほどショーを楽しんでいるか分かりません。それで私は、「風が吹けば鯨があのように喜ぶのだろうか」と、このように考えました。また一度か二度見れば、「そうだ！」という結論を下すことができると思います。

釣りをしようと海に行くのではありません。アラスカ精神とは何かというと、鮭の精神です。鮭は子を産むために四千マイル、五千マイルの大海を渡って、離れた自分の故郷を訪ねてきます。人間の復帰路程を見ても同じです。何億千万里離れたとしても、再び訪ねていくことができなければなりません。釣りをするにおいても、それ以上興奮する釣りはありません。それがどれほど強いか分かりません。他の魚が食いついたときは、何度か巻けば出てくるのですが、これは数十回巻かなければなりません。私たちが天の伝統をもった人を捕まえるのが難しいことと同じです。

それは死ぬまで、終わりまでジャンピングします。このようにジャンピングを三度すれば釣り針が外れます。それがアラスカの伝統です。海は死亡の世界、サタン世界を象徴し、魚は人を象徴するのです。魚の中で最も勇猛な魚は、サーモンです。

ある日、海に行ったのですが、台風が吹いているのに船が多かったのです。ツナ（tuna：まぐろ）の季節になって海へ行けば、五百隻ほど集まった船がすべて怨讐のように感じられます。「一度私一人で釣りができればいい」と考えたのですが、そのような日がありません。ある時、台風警報が出たのです

が、私は行こうとしました。しかし、みな出ていくなというのです。それでも船長に「この者たち、私の言うことを聞きなさい！　死にはしない」と言って、無理やり行くようになりました。

近い道のりではありません。二時間以上かかるので、夜一時に出発します。四時に到着しようとすれば、一時に出発しなければなりません。風が吹いているので、倍もかかります。それで、十二時に出港しました。生涯路程においてそのようなことがたくさんありますが、その材料は億千万のお金を与えても買うことはできません。

そして、そのような天気なので船は一隻もありません。そのような所に行って釣り糸を下ろすので、下ろすや否や、「がばっ」と食いつくのです。そうではないですか。数多くの船の中で数十匹が食いついていたのが、今は一隻しかいないので、十里も見通す目をもつ飢えた魚の群れが押し寄せて、食いつくようになっています。そして、釣り糸を下ろすと「がばっ」と食いつくというのです。台風が吹いても吹かなくても、それは私が気にすることではありません。ただ汗を流しながら釣りをしました。捕まえようと四時間走りました。それで、そこから二十マイルをエンジンで引っ張っていくのです。

私たちのような人は、釣りに行けばすぐに魚のいる所が分かります。朝と夕方には、すべて餌を求めて訪ね回るのです。それから、昼食の時間は、食べたので遊び回るのです。そのようにするとき、海の底が深いだけではいけません。海の底は、ある所は深く、ある所は平らでなければなりません。魚は隠れるために深い所に逃げます。出てきて遊ぶときは、間違いなく平らな所に出てきて遊びます。午前はそうです。午後にはまた食べるために出てくるので、その海の底を見て「ああ、ここは魚がいる！」とすぐに分かるのです。

自分の釣り針が、今水面からどのくらいの所にあるのかということを知らなければなりません。魚は海底から一フィート、餌を捕まえやすい所にいます。餌を食べて生きなければならないので、二フィート以上離れられないというのです。季節になれば、それが海底を覆うのです。釣りをしてそれを引っ掛けようとすれば、何度でも引っ掛けることができます。ささささっと、このようにしながら、少しでも引きがあれば激しく引っ張らなければなりません。それが技術です。まぐろは、海の天下で自分が一番であるかのように自由に生きているので、小さな餌には引っ掛かりません。ですから、引っ掛かるようにしなければなりません。それを研究しなければならないのです。

大きい魚を釣ろうとすれば、底に行かなければなりません。魚の中で泳ぎ回るものは小さな魚です。大きいものは泳ぎ回りません。「泳ぎ回って何をするのか」と、このようにしているのです。釣り糸を垂らせば、そのようなものが引っ掛かるのです。底に一指尺程度浮かして匂いを漂わせておけば、ゆっくりと寄ってきて……。魚が泳ごうとすれば、ひれを動かさなければなりません。それゆえに、魚が水平へ行くので、引っ掛からないように一指尺以上浮かしておかなければなりません。それを計算して釣り糸を投げれば、間違いなく大きいものが引っ掛かるのです。

今回、私が最後に捕まえた魚がどれほど大きいかといえば、十五ポンド三十でした。今まで、私たちが捕まえた鮭の中で最も大きいものです。最後にそれを引っ掛けました。これがどれほど力が強いか、網でこれをすくいあげなければならないのですが、夕日に照らされて魚が見えないのです。網の中に体の三分の二が入っていて、頭だけが出ていても飛び出してくるのです。ですから、勇ましいのです。その時、まかり間違えば網が切れてしまうのです。

釣り糸には、千里にもなるもの、十里にもなるもの、一寸のもの等、多種のものがあります。数多くの釣り糸がかかわっています。ところが、この一寸ほどのものが水に入っていくや否や引っ掛かる魚もいます。だからといって、これを引き始めたら大変なことになるのです。糸が長くて遠ければ遠いほど、深い大洋なのです。しかし、本当の釣り師ならば、小さい魚が食いついても、それに対して神経を使ってはいけないのです。「お前が食いついたのか。お前たちの群れがどんどん集まりなさい」このようにしてこそ、そのあとに最も大きい魚が何百、何千里の遠くから来るのです。何千里も遠くにいる、その一匹を捕まえなければならないというのです。

先生も釣りを好んでします。四十日以上、一日中してみました。私が釣ろうとする魚は、最初に食いついてくるものではないのです。「食いつけ。めだかの群れよ、集まりなさい」と言いながら、最後に貫禄のあるものが食いついてくることができるように待っていなければなりません。めだかの群れは、ただ来て行ってしまうものが多いのです。「ああおいしい。釣りをする主人は狂ったようだ」と思いながら、食べて帰るのです。

ハンティングは、動物が通る道で待ち伏せして撃つので野蛮です。飛んでいくものを撃つのは、道義的ではないのです。釣りはそうではありません。自分で来て食いついてくれるのです。ですから、それは捕まえてもかまいません。そして釣りは、五歳から死ぬ日まで、百歳になったおばあさんやおじいさんでも、寝床から釣り糸を垂らして釣りができるのです。いくら釣りのチャンピオンで有名でも、他の地方に行けば、そこでは釣る方法が違います。それゆえに、その地方のやり方でやらずに自分一人のやり方でやれば、食いつきません。そのやり方に従わなければならないので、どこに行っても学ぶようになり、またどこへ行っても教えてくれるのです。

誰でも先生になり、学生になることができます。これが平等です。同じ種類でも場所によって食べるものが変わり、釣りをする人がどのような餌を与えるのかによって変わるというのです。それゆえに、その地方に行ってすべて学ばなければなりません。万国すべて違います。そのように多様なので、趣味は多様だというのです。

(3)釣りを学べば飢え死にしない

皆さんは、農作業をすることができますか。先生は、農作業のやり方をすべて知っています。それを教えてあげなければなりません。統一教会員たちは、農作業をすることができ、ハンティングもすることができ、釣りもすることができなければなりません。この三種類をすることができなければならないのです。

それで、単身アフリカの部落に入っていき、一週間で彼らを食べさせてあげて、それが自分の生きる基盤になるのです。一年食べさせてあげれば、一年後には彼らが稼いで食べさせてくれるのです。

熱帯地方には獣がたくさんいます。釣りとハンティングは、統一教会員ならできなければいけないというのです。なぜですか。飢え死にする人々を生かしてあげるためには、魚釣りを教えてあげなければならず、ハンティングして生き残る道を教えてあげなければなりません。ですから、レバレンド・ムーンは、血を見ても堂々としているのです。昔、祭司長たちが祭物を捕まえました。私が動物を捕まえるのは、統一教会員を祭司長にするためなのです。これは神聖なことです。釣りとハンティングを学んだならば、今から班をつくり、アフリカに行って協助するのです。アフリカにハンティング宣教師を送り、釣り宣教師を送って手助けする仕事をして、それから全世界にまき散らさなければなりません。どこに行っても、釣りをして、ハンティングをして生かすことができる道もあります。

一つの湖で、何千何万の家族が食べていくことができる時が来ます。釣りをすることができれば、その魚は私たちの魚です。釣りは、誰がしなければなりませんか。女性がしなければなりません。なぜですか。女性は、おしりが座布団のように大きいので、楽です。長い時間座っていることができます。男性は、三時間だけ座っていても痛いのです。それゆえに、一人の女性が魚を三匹だけ捕まえれば、三人の赤ん坊を食べさせて生かすことができ、四匹捕まえれば父親まで食べさせて生かすことができるのです。

釣り場に行けば、一時間以内に十匹も捕まえることができ、数十匹でも捕まえることができるのです。一つの町に百軒の家があれば、百人の女性を中心としてクラブを編成し、「きょうは百匹捕まえてこよう」と言えば百匹捕まえ、「二百匹捕まえる」と言えば二百匹捕まえることは問題ではありません。何人かを動員すればいいのであって、全体動員する必要もないのです。一カ月に一回ずつ動員して用いても、食べさせて生かすことができるというのです。

釣りは簡単です。アフリカの奥地でも、女性はみな針をもっています。ろうそくのあかりをつけて、針を熱して釣り針を作ることができるというのです。昔は、私がすべて作りました。釣り糸も買う必要がないのです。ナイロンひもはいくらでもあります。この釣り糸は、昔の絹糸が問題ではありません。そして、おもりは鉛の塊を切ってつるし、浮きはとうきびの管を切ってぶら下げればいいのです。このようにして餌をはさんで手を釣り竿にして投げれば、いくらでも釣ることができるのです。無尽蔵なのが魚です。魚はどこにでもいるので問題ないのです。

夫人たちが釣りをすることができないのが問題なのです。そのような指導者はいませんでした。ですから、先生が釣りをせざるを得ず、ハンティングをせざるを得ません。村と村を連合させて、人々を何人かずつ結んで分配し、獣を捕まえて食べさせて生かすことができるのです。そのようなことを教えてあげる人がいなかったというのです。

飢えて死ぬアフリカの人々や第三世界の人々は、釣りをすることができないから死ぬのです。母親が釣りさえできれば、絶対に飢え死にしません。どこにでも水があり、湖があります。魚は無尽蔵です。ですから、釣りを教えてあげ、養殖のやり方を教えてあげるのです。このようなことを既に先生がしています。釣りは、糸さえあればできるのです。針はどこにでもあります。ろうそくのあかりをつけておいて、針を熱して曲げればいくらでも魚を釣ることができるのです。そして、餌はどこにでもあります。一人で一日に十人の赤ん坊を食べさせることは問題ではありません。身長ほどの魚たちが食いつくのです。そのような環境的条件なのにもかかわらず、指導者がいないのでそのようになってしまうのです。

ビジネス・センスがなければなりません。一年に二千万名が死んでいくのですが、その生命を助けてあげることができなければなりません。土地がある所には農作業の方法、水がある所には養魚のやり方を教えてあげて、飢え死にしないようにしなければならないというのです。夫人たちと子供が釣りをすることができるのに、なぜ飢え死にするでしょうか。水があって魚がいくらでもいるのに、なぜ死ぬのかというのです。ですから、釣りをするのです。皆さんが釣りを教えてあげなければなりません。

また、ハンティングも教えてあげるのです。そこにわにであれ何であれ、獣がどれほどたくさんいますか。世界平和観光狩猟協会も、すべて世界平和のためなのです。なぜこのようなことをするのでしょうか。今まで私は二十年間赤字を出しながら、この基盤を築いてきたのです。飢え死にする世界の人々を、真の父母が責任をもたなければなりません。全世界の人類は兄弟なので、あきらめることができないのです。

毎年二千万が統一教会の食口になると考えてみてください。このようなことを統一教会が主導して世界的にすれば、どれほど多くの人を救えますか。農作業の方法、釣りの方法を一刻も早く学びなさいというのです。なぜこれをしなければなりませんか。飢え死にする人々を生かすためなのです。それで、ここでその方法を伝授されて帰りなさいというのです。

母親たちが釣りさえすることができれば、息子、娘を飢えて死なせたりはしません。水がどれほど多く、魚たちがどれほど多く、獣がどれほど多いですか。どこにでも川があります。魚一匹だけでも捕まえれば、大きいものなら一週間も食べることができます。わにを捕まえれば、一カ月も食べることができるのです。河馬は乾燥させて、一年も食べることができます。それから、ハンティングをしても食べていくことができます。世界平和観光ハンティング連合会と釣り連合会をつくりました。釣り大会を開いて米国の女性たちを連れていき、釣りを教えてあげるのです。母親に釣りを教えてあげれば、どこに行ったとしても絶対に飢え死にしません。

水と土地があればいいのです。土地では農作業をすればいいのです。白人たちがそれを教えてあげなかったというのです。農作業のやり方を教えてあげずに、搾取ばかりしたというのです。ですから、刃物で刺されて追い出されたのです。私たちの宣教師はそうではありません。すべて歓迎するというのです。

なぜそうなのでしょうか。「ため」に生きるからです。それゆえに、テキサス農場をつくり、釣り場をつくって、農作業の方法もすべて訓練させるのです。猪のようなものも、わなだけつくっておけば、一日に十頭、百頭も捕まえることができます。

第三世界で暮らしている女性が釣りのやり方さえ知っていれば、はえなわのやり方さえ知っていれば、絶対に飢え死にしません。湖があり、川がある所には魚がたくさんいるのです。それを教えてあげる人がいなかったので飢え死にしているのです。また部落に一丁の銃さえあれば、ハンティングをして飢え死にする人々を生かすことができる道がいくらでもあります。このような教育を、今全世界的に始めています。水があれば魚を育て、土地があれば農作業をする方法を教えてあげるための訓練場所として、現在テキサスに農場を準備しているのです。そこに多くの人を配置しておかなければなりません。この白人たちは、アフリカの人々に農作業も教えてあげませんでした。

山に行けば食べ物がたくさんあります。うさぎも食べて生きていけるのに、人が食べて生きていくことができないでしょうか。皆さんが田舎に行けば、海もあり、川もあります。その川や海には魚がたくさんいるのに、捕まえる方法を知りません。それをすべて教えてあげるのです。ハンティングの季節になれば、ハンティングをしてもかまいません。銃を撃つことができますか。ハンティングをしても、生きていくことができるのです。熊一頭だけ捕まえれば、一年は食べていけます。そのようなことをなぜ研究しないのですか。

(4)海釣りは精神的なもの

先生は釣りに行けば、どこでも考え事をたくさんします。釣りを長くした人は、釣り糸を十回垂らせば十回考え、百回垂らせば百回考えるのです。ですから、十回垂らしながら百回考えるならば、先を越すことができるのです。先生はさっと行けば、釣り場に砂がある所なのかどうか、すぐに分かるのです。専門家には分かります。このように鉛のおもりをつるして引いてみれば、砂場ならぶつぶつぶつといい、泥ならすーっと引けるのです。

見てみれば、大概釣り竿を一つだけおいて、釣りはしないのです。釣りをする人は、二つの竿を併せて使います。なぜ二つなのかといえば、男性完成、女性完成、すなわち主体と対象の完成を意味するのです。

ハンティングは、肉体運動として肉体の健康のためのもので、釣りは精神の健康のためのものです。座って釣りをする時は、自分の一生を回想して、本当にたくさんのことを考えるのです。そのような時間をもつことができるというのは驚くべきことです。自らの過去を分析して、未来の生活に対して設計できます。自分たちにとって最も重要な時間になるのです。威厳を備えて自分自身を静かに省みることができます。それが絶対に必要です。これを東洋では釣り道といいます。

母親の魚が捕まえられて上がってくる時、子魚たちが続いて上がってきます。このようなことを見ながら、自分の生活を中心として「あ、釣ってはいけないな！」と考えます。自分の息子、娘を中心として考え、自分の民族のことを考えるようになります。釣りを何

年かしただけでも、釣ったものは放してあげたいのであって、釣った魚を食べたいという考えは一つもなくなります。それが本当の道です。食べたいという考えがなくなるというのです。

人々が船に乗って釣りに行こうとすれば、気候が良くて、気分が良い時に行こうとします。それは、普通の人が考えることです。特別な人になるためには、夕立が来て雷が落ちる環境で釣りをしなければなりません。そして、雨が降る時、環境的変化、周辺のすべての水がどのように違い、その水が動くことによって魚にどのような影響を与えるのかということは、どしゃ降りの雨が降る所で釣りをしてみなければ分かりません。

歴史は新しい世界をつくっています。ですから、先生を指さして「間違っている」と口に出して言うことはできません。私は、恥ずかしくないというのです。魚の顔を見て言うのです。一日中座って釣りをしながら、「あなた方は私のような男性に初めて会っただろう。あなた方を捕まえることが目的ではない。あなた方を連結させ、漁場を中心として人類を飢饉から解放するためだ。それが、あなた方が創造された本然の目的ではないか。そのようになれば、あなた方の肉を食べる者は悪いことをしなくなるだろう」と言うのです。

先生が釣りをする時「私は主人だ。みな来なさい！」と言えば、魚たちがみな集まります。そして、餌を与えるのです。それゆえに、釣りをすればいつも周囲の人々よりもたくさん釣ります。不思議だというのです。どうしてそうなのか理解できないのです。縦的な神様を中心とすればそのようになるというのです。特別な光がぴかぴか光るのです。皆さんから普通の光が出るならば、先生からは特別な光が出てくるというのです。その光を魚たちが見るのです。それで、いくら「来るな」と言っても押し寄せてくるのです。

先生が釣りに行って、最初に釣った魚は放してあげます。神様が造って解き放ってあげたのと同じ心をもって、放してあげるのです。そして今まで、先生が釣った魚は食べませんでした。二千万の神様の息子、娘が飢え死にしているのに、魚が自然死することは許諾できないというのです。「お前を釣って二千万の神様の息子、娘を助けてあげなければならない」と言うのです。動物、あるいは生物たちが生まれた原則がそのようになっているので、それに対しては有り難く考えなければなりません。そのような意味で、釣り大会に行けば、先生はよく釣れ、一般の人はよく釣れません。精誠です。「やー、神様がつくった水の博物館に潜水して入っていくことはできないので、一度水の中から飛び出してきて、私を通して神様が解き放ってくださる喜びを鑑賞するようにしなさい」と言えば、自分から釣られてくるのです。

船に乗って青い海で魚を釣るというのは、神様の復帰摂理、救援摂理と同じです。堕落した人間が魚だとすれば、それと同じです。良い餌を入れなければならず、そして丈夫な糸を結ばなければならず、釣り竿も良いものでなければならず、すべてのものをそろえて釣らなければならないのであって、糸も弱く、餌も悪く、釣り竿も悪く、釣る技術も悪ければ、釣ることはできないというのです。同じ

ことです。世の中で暮らすことも、魚を釣ることとぴったり同じです。自分がこの世で成功しようとすれば、自分自身が釣り竿のような立場で釣りをし、良い糸を結び、良い餌で釣らなければなりません。ただそのままでは釣ることができません。相対的な条件が合って、そこに収獲が生まれるのであって、相対的条件を合わせなければ収獲をもたらすことはできないのです。

皆さんが先生と海に行けば、先生の釣り竿に魚がよく食いつくと思うでしょう？　釣りをする時は、すべて相対のように思います。完全な主体は完全な相対を成すのです。釣りをする時は「ここには必ず魚が食らいつかなければならない」と思うのです。原理がそうです。私が一度このように出せば、すぐにさっと相対的価値が生じるというのです。普通の人が魚に対するのとは違うというのです。

一日中、一箇所に座っているのです。小便もそこで解決します。あき缶を置いておいて「小便をする。見てはならない！」と言って、おしりを反対にしてするのです。一人そこで小便をし、食べ、終日そのようにするのです。二十五年間そのようにしました。缶を使用すればとても便利です。海で真っ裸になって水泳もし、あらゆることをするのですが、そのようにしたからといって誰が悪口を言いますか。動物たちは見て笑うかもしれませんが、人は何人もいないというのです。しかし、鳥も動物も、すべての万物も全く同じ状態なのですから、誰が悪口を言いますか。それは自然なのです。ですから、恥ずかしく思う必要がありません。女性も、その時は座って小便せずに、男性のように立ってしてもいいというのです。

アラスカで魚を釣る時、私たちが明け方に出ていくのを見て海岸警備隊が訪ねてきて、「魚釣りを何かの訓練のようにしている」と言いながら「人がどうしてそのように暮らしているのか！」と敬服しながら称賛していきました。ですから、海に行っても、釣りは私が一番上手でしょう？　めだかの群れとか、釣ってみなかった魚はありません。今、「鯨を捕まえなさい」と言えば、一日に何頭かは捕まえるのです。ツナから始めて、釣ることができなかった魚はどこにいますか。東海岸、西海岸、太平洋、大西洋、地中海、あらゆる所を巡りながら、釣ってみなかった魚はありません。ですから、世情に精通しています。

大きい松を見れば「患難を受けた過去の歴史時代の私を知り、出ていったのを見たお前は、今日どのように考えているのか」と、問うことができなければなりません。また、過ぎた日、庭を見つめながら友人を呪ったその庭を、今では愛の友人として抱き、流れていく水も忘れまいとしたが、今からは、主人の位置ですべて忘れてその水辺で泳ぎもし、そこに暮らす魚も釣ってあげようと考えなければなりません。それでこそ主人です。エデンの園のアダムが川に入っていき、王権の代表者として魚を釣って食べることができなかったことを初めて蕩減復帰する、という心をもって釣りをします。魚を釣って食べてもよく、山にいるうさぎやきじも、そのような心をもって捕まえ、「父母を奉養し、神様の前に祭物とし、生活のための食べ物として、生活の

材料として消耗する」と言うことのできる歴史を残さなければなりません。

今まで先生は、最も悲惨な世界からすべてのものを乗り越えてきました。ですから先生は、知らないことがありません。できないこともありません。何であっても、すべてすることができます。農村に行けば農夫の王になるのです。このような地には何を植えなければならないのか明確に知っています。また、海に行けば釣りの王です。ツナ（tuna：まぐろ）を捕まえることにおいても「レバレンド・ムーン・システム」と言って、既に有名になりました。また、万民が万歳をする時は、写真を撮ってあげるカメラマンにもなり、御飯を炊く炊事場に入っていけば、料理をするコック長にもなります。主人はそうでしょう。すべての後始末をするのです。そのような背後をつづってきた人が真の父母だという事実を忘れてしまってはいけません。

真の愛をもてば、何であっても統一が可能だというのです。動物世界、植物世界、毒蛇までもすべて保護してくれるというのです。私が釣りをする時は「魚たちよ！　私がお前を釣るのは私のために釣るのではない。世界で飢えて死ぬあのかわいそうな人、神様が涙を流しながら食べさせたいと思う、その心情を身代わりして釣るのだ。私のためではなく、子孫と万民のために釣るのだから、お前たちは許さなければならない」と言うのです。それで、最初に釣ったものは食べずに放してあげるのです。祭物として放してあげるのです。愛を受ければ、その前に生命を捧げようとします。ですから、周囲で魚たちが調べてみて「先生の釣り餌にだけ、どんどん食いつけ！」といいます。それで、船に十二人が乗れば、三分の一は私が釣ります。

世界の人々が先生のことを神秘的な男だと思っているでしょう？　ですから、神秘的な言葉もよく話すのです。また、神秘的な行動もよくします。私は統一教会の教主ですが、船に乗って海に行けば漁夫の中の漁夫です。「あの人は統一教会の教主なのに、何が分かるか」と言いますが、現場に行って監督すれば、十年、二十年していた人々も感嘆します。農場に行けば、農場の仕事も上手にします。学者は、自分たちが自ら神秘的な人々だと考えているのですが、先生に会えばもっと神秘的な人がレバレンド・ムーンだと思うのです。何が神秘的にさせるのですか。真の愛がそうさせるのです。

先生は、徹底した三食主義者です。デザートのようなものは食べません。テーブルの上にあっても食べません。なぜなら、彼らのことを考えなければならないからです。服もこのようなものです。ネクタイのようなものは結びません。人々がネクタイを結ぶお金をすべて集めて、世界を救うことに使いたいと思うのです。先生は、トイレに行ってもちり紙を二枚以上使いません。可能ならば一枚です。原理的に見るとき、浪費は罪です。私たちは、生まれる時から一定量の消耗品を使うようになっています。それ以上使えば罪です。私たちは、残していかなければなりません。そうでなければ、私たちの子孫がそれを負債として相続します。誰が話して教育してあげるのですか！　教育以前に、原理が先生です。自然が先生であり、海が先生です。

山に行けば、山菜のようなものもはっきりと分かります。これは何であり、どのようにして食べるか、どれが悪いか、毒きのこのようなものもすべて知っています。それゆえに、山に行って暮らす法度をすべて知っていて、海に行けば、釣りはどのようにするのかということをすべて知っています。水に魚さえいれば、間違いなく一人ででもそこに家を建てて暮らせます。魚は、釣って塩だけで、生きたままで食べるのがおいしいのです。本当です。一人でどこでも暮らすことができる準備をすべてしました。

皆さんが誰も知らない間に、先生が一人アメリカで苦労して、ここまで来ました。その背後の苦労を皆さんは知りません。毎日海に行くというのは、その一部分にすぎません。先生は、してみなかったことがありません。学者世界から文化世界、芸術世界、教育世界など、手を出さなかったところがありません。思想世界までも手をつけました。その基準で皆さんもここで教育を受けて活動しています。なぜ先生がここに行ったり来たりするのですか。四十年近く先生に従ってきた人でも、先生がどのような人なのか分かりません。いつも新しいのです。自分勝手に考えればできません。自分が立っている位置がどのような位置なのかをはっきり知っている場合でも、世界を復帰するまでは無駄口を言ってはならないのです。

私も一人は嫌いです。一人でいることは嫌いだというのです。海辺で仕事をすれば、釣りをする人、一等の漁夫と一緒にいたいと思い、山に行けば山登りをする人と一緒にいたいと思い、土俵に行けば相撲をとる人と一緒にいたいと思い、酒宴に行けば匂いだけでもかぎます。匂いをかぐ人もいなければなりません。一人ではいけません。友人が必要です。同僚が必要です。一人では嫌だというのです。「仲間同士」という言葉があるでしょう？
いくら文先生が立派だとしても、一人では退屈で生きていけません。

結婚することは主人を訪ね求めることです。二人がぴたっと一つになれば、愛はどこから来るのかといえば、あの垂直の天から来るというのです。これが一つになれば、垂直にすーっと降りてきます。頭に行った血が下に行きますか、行きませんか。足のつま先に行きます。「農民の匂いがするつま先、指先を経てきた血は捨てなければならない！」と、そのようにしたらどうなりますか。死にます。それが天地の道理です。

高かったものは低い所に行かなければならず、低い所にあったものは高い所に行かなければなりません。それゆえに、文先生も成功して、み旨をすべて成し遂げたあとは、あの低い所に、朝野に埋もれて暮らしながら、釣りをし、農民の友人になり、漁夫の友人になるはずです。私は今そのような訓練をしています。

神様も愛の釣りで引っ張り回されても幸せだというのです。そこから愛の芸術が生まれるはずです。愛の喜劇、悲劇が、愛のすべての文化が創造されるはずです。そのような世界を創造する独立軍になってみたいとは思いませんか。

最高の餌、釣りの餌に相当するものは何ですか。愛です。万民を釣ることができる一つ

の餌は何ですか。それは愛です。歴史を釣り、神様を釣ることができる餌は何ですか。神様を釣ることができる餌があるなら一度準備してみたいでしょう？　それは愛の餌です。歴史を釣ることができ、天地を釣ることができる餌があるとすれば、それは何でしょうか。それが愛だというのです。

二　人間と趣味生活

一) 未来世界は趣味生活の時代

これからの世界は、新しい国際経済機構および秩序の誕生によって飛躍的な経済発展が可能になり、人類は充足した経済生活に伴う時間的余裕をレジャーに利用できるのです。これを通じて人類は、大自然を理解し、学び、その中で神様に感謝し、人種と国籍を超越してお互いに愛し、「ため」に生きて、正しい生活を楽しむ理想世界が、必ず来るということを本人は確信しています。

今後事業は、レジャー産業になります。技術事業時代は、自動技術によって人間が仕事をしない時代です。そのような時が来ます。今でもそのようになりつつあります。人がボタンさえ押せば機械が仕事をします。何千名が作業していた工場が、三、四人だけで昼夜生産品をつくることができる時代が来るというのです。それでは、今からどのような産業が展開するのでしょうか。それは、興行産業、流行産業、このようなレジャー産業です。

今後、皆さんが経済的基盤を築くことのできる良い時が来ます。レジャー産業時代、三次産業時代が来ます。レジャー産業、観光産業が発展するのです。金剛山を訪ねていく人々は、金剛山よりも韓国を先に見ていくはずであり、韓国の釜山や済州島に行き、外回りして金剛山に行くはずです。金剛山を見てからほかの所に行くことはできないのです。行ってみたところでおもしろくないのです。行くことは行ってみるでしょうが、行けばみな気落ちするというのです。お客さんを誘致するとき、釜山から済州島に行き、ぐるぐる回りながら白頭山を経てくると考えてみてください。

今はどのような時かといえば、社長が会社に出勤して仕事をする時は過ぎました。コンピューター時代が来たので、人工衛星によって日本の事務室ですることと同じことを、外国でいくらでもできるのです。そのような時が来ました。船で釣りをして刺身を食べながら「理事は何をして、常務理事は何をして、課長は何をして……」このように指示できる時が来ました。一年十二カ月、責任者は会社に出勤しなくても、趣味生活をしながらストレスを解消する、そのような解放された位置で経営できる時代に入っていくのです。

趣味生活をしようとすれば、夫婦で、あるいは一族が車に乗って、全世界を旅行しながら暮らすのです。自分の家族と息子、娘を連れて趣味生活をしながら暮らすのです。今、女性が恨めしいと思うのは、それではないですか。夫が出歩くときに、ついていくことができないのです。

自然の近くで暮らす農民たち、都市から遠い人々は、自然や農業を開発して指導し、都市の人々は、科学的最高技術を通して両面に支援できる体制を準備するために、今大きな

研究所と大きな実験場が必要です。農作業実験場、漁業実験場、ハンティング実験場、釣り実験場が必要なので、これを総合して神様の創造の喜びを感じる趣味産業を開発していくのです。趣味産業、趣味生活をするのです。

趣味生活、神様はそれを喜びます。皆さんの趣味が創造と連結するのです。すべての趣味が私を待っています。疲れません。趣味生活を重ねていくことによって自動的に神様の世界と近づくのです。これが、人間が願う最高の生活です。

二) 趣味産業は平和世界へ導いていく近道

趣味生活をしなければなりません。神様が創造される時、無理やりに造ったのではありません。喜びを感じるように造ったというのです。創造される時の神様の立場を、私たちは再び感じなければなりません。誰かが「しなさい」と言うからするのではなく、せざるを得ないのです。眠る時間にも眠らずにそれをしなければいけないというのです。そこにどうしてお金が介在し、環境が介在しますか。それゆえに、趣味生活、趣味産業、趣味研究などが、神様と共に喜ぶ中で一つになってなされたものであってこそ、神様に所有されるものとなり、神様が愛する息子、娘たちが愛用できるものになるのです。そうでなければ、サタンのものだというのです。お金を目的にこれをするのではありません。私は、お金を与えながらこのことをしているのです。

六十を越えれば、故郷の農村に帰って土地を耕しながら、霊界に行く準備をしなければならないのです。霊界に行く準備が忙しいのです。ですから、精誠を尽くして先生のように農村に行って埋ずもれて、農村を指導する責任を果たさなければなりません。ですから、趣味産業、趣味生活を終えて霊界に行ってこそ高い霊界に行くことができ、情緒的な人になって霊界の舞台を活用できる皆さんになるのです。

今後は趣味産業を開発しなければなりません。レジャー産業ではありません。趣味産業です。レジャー産業といえば、利権が介在した概念です。魚を釣ることも、ハンティングをすることも、すべて利権を考えるというのです。それは、趣味とは違うというのです。

これを趣味産業として展開すれば、部落にまで広げることができます。部落でもシーズンを決めてするのです。各自していることが違います。工場に行く人、会社に行く人など、あらゆる職場がありますが、職場別に百から三百六十のクラブをつくるのです。そして毎日、どれかのクラブがこのことをするのです。できます。このように編成して春夏秋冬、一年中このようにすれば、お金を失いません。五〇パーセントは返還されてきます。ですから趣味産業、これ以上良いものはないと思うのです。

趣味産業は、レジャー産業とは違います。レジャーは利益を目標とするのですが、これは趣味を目標とします。「お金のある人がすべきであって、お金のない人はどうするのか」と言うかもしれませんが、そうではありません。今、全員休暇があるではないですか。一年に一度でも二度でもそれができるのです。

趣味産業とはどういうものか分かりますか。これに対する世界的な組織をつくって先取権

を握ることが、今後世界の金融界などの人的資源をはじめとして、あらゆる分野を平和に導いていく一つの近道だと考えるのです。それで、今まで二十年間、海に対して準備してきたのです。来年の四月で二十年になります。そして、このような趣味産業とともに、今後農作業も趣味農作業にしなければならないと考えるのです。今後、遊ぶ時間が多くなれば遊ぶことも心配です。ですから、庭園のようなところに千二百坪程度の空間をつくり、自ら趣味農業をして食べて生きることができるようにリードするのです。

今、成約時代において、私たちがしなければならないことは、このような大人員を動員することです。大人員が必要です。国境を超越し、文化背景を越えて世界の人々を連結させることができる産業とは何ですか。もちろん、教会活動も必要ですが、対内と対外の活動を兼ねて連結させることができる事業は、趣味産業しかないというのです。

三) 趣味産業時代のために準備しなければならない

先生は、趣味産業、ホビー・ビジネス（hobby business：趣味事業）という言葉を今、新しく使っているのです。それは利権のためにするのではありません。それゆえに、都市集中時代は間もなく終わって、すべて分散します。分散させる方法は、これしかないのです。趣味産業を開発しなければなりません。先生が今、「趣味産業」と叫んでいるのです。人は趣味を中心として生きるようになっています。

趣味産業にはカジノも入っていて、スポーツも入っていて、ハンティング、釣りも入っています。それで世界文化体育大典でも、それらをしたのです。世界的な観光事業を繰り広げるのです。今、先生が世界的な観光事業を準備しています。このアメリカでバス会社「ゴー・ツアー（Go Tour）」をつくったのも、そのための一環であり準備でした。今後は、観光レジャー産業が世界的に発展するのです。私は、これを趣味産業と名づけます。

今後、全世界の観光地で、私たちのボートに乗らざるを得ない環境になるだろうと思うのです。どのようにしてそのようにするのですか。私たちは、世界的組織をもっているので、どのような国でも観光客を誘致でき、お金持ちの人々や、どのような人でも案内できるというのです。その人々は観光をしなければなりません。休暇シーズンには観光に行かなければなりません。それを趣味産業と名づけたのです。ホビー・インダストリー、趣味です。見物しながら物を運んでいこうというのです。

観光地をつくるのです。土地があれば、環境をよく整えて釣り場もつくるのです。そこにタバコの吸い殻、あき缶、ごみは一切捨てることができないようにして、清潔にして、無公害で保護することのできる地域をつくり、趣味は趣味で、観光は観光で楽しめるようにつくるのです。一度見て回れば、誰もがみな行ってみざるを得なくするというのです。五十億人類がすべて競争するので、そうにしておけば行ってみざるを得ないのです。

今まで統一教会に休暇がありましたか、ありませんでしたか。今からは、先生が築いた釣り場、狩猟場、水泳場が、どこに行ってもきちんとできています。寒ければ暑い地方へ行って、暑ければ寒い地方を歩きながら、それこそ休暇を楽しむことができる基盤を築いておいたのです。それを「趣味産業」と言います。今そのような時が来ました。先生は、迫害を受けながら上がってきましたが、皆さんは迫害を受けません。今は、先生が南米に基盤を築いたのですから、責任をもって氏族を連れていって訓練すれば、その氏族基盤を中心として、霊界にいる先祖と国にいるすべての一族が一つになることができる基地になります。

アラスカに基盤を築き、テキサスに基盤を築き、百六十カ国に釣り場や狩猟場をつくっておくのです。釣りとハンティングは趣味です。高位層、豊かに暮らしている人々の趣味分野です。それゆえに、趣味産業をするのです。観光組織をつくって先生が直接リードします。

観光事業の基盤を世界的に連結させて、お互いに和合できる世界をつくるのです。その人々を動かしてこそ世界を動かせるのです。それで、今から皆さんは、お互いに額を合わせて暮らす生活をするよりも、そのような名のある人々を中心として外交世界のチャンピオンにならなければなりません。

人には趣味がなければなりません。これからは、御飯を食べることや生きることは問題ないのです。そのあとは、けんかして暮らしますか。喜びがなければなりません。川に行けば船に乗り、水上世界でダイビングして、魚や友達と遊ぶのです。そのように趣味的生活が残っているのです。それで今、私は「趣味産業」という言葉を作り出したのです。

統一教会では「カジノをしなさい」とは言いません。クラブを編成するのです。趣味産業を一カ月間訪問する時は、カジノの時間は二日しかないのです。そこを経ていくのです。カジノをすれば、若者たちがすべて狂うのです。それも趣味産業です。それで、もし一万ドルを失ったならば、その失った人に対しては三〇パーセントを返してあげなさいというのです。ラスベガスとかアトランタで、先生はその背後の暗黒街をすべて調べました。それで、十万ドルを失ったならば、十万ドルの三〇パーセントに該当する宝くじを分けてあげるのです。その代わり、そこに参加して三時間以上になる人は、必ず一時間の思想教育を受けなさいというのです。

カジノが歴史的にどれほど汚いでしょうか。人々は賭博で指を切っても、またするのです。しないと決心しても、また賭博をするのです。それを真の御父母様が趣味産業として、私たち人間が理想的な夢を描くことができる機構として特別に作り変えるというのです。趣味産業にならなければなりません。

教育は精神を代表して、スポーツは体を代表するので、このような世界的大学連盟を通して今後円熟した方向に、真の御父母様を中心として天国の愛の理想に合うようにするのです。そのために趣味産業というものをするのです。今後は楽しく生きなければならないので、理想家庭の世界は趣味産業世界へ越えていくというのです。

すべてのものが趣味です。目新しい所に行けば、山が違い、岩が違い、木が違います。それがすべて関心事です。それは誰のためにつくったのですか。神様、主人が抱くためにつくったのです。息子、娘が、地上のどこに行っても暮らすことができる適切な環境をつくっておいたというのです。

先生は、今まで「趣味産業」のことを言いました。それは、世の中が科学世界であり最高の技術を通し動いているので、生産することを重視しているのでそのように言うのであって、本来それは、「趣味産業」ではなく「趣味生活」と言わなければなりません。それが分かりますか。目の趣味、鼻の趣味、口の趣味、耳の趣味、感触の趣味、体の趣味、心の趣味、愛の趣味、様々な種類の趣味があります。

安息圏とは海ではありません。陸地の安息圏を連結させなければなりません。今では山なら山、景色の良い所を訪ねていくはずです。そこに行って何をするのですか。そのまま行くことはできません。狩猟場をつくるのです。これは自然の動物を殺すのではなく、育てるというのです。これを趣味産業にすべて連結させるのです。

神様の息子の血となり、体となり、骨となるはずなのに、盗賊が盗んで盗賊の血肉になっています。これをなくすために、歴史の大転換期として三百六十万双を迎え、その頂上の転換点を中心として今まで本然的愛と一つになることのできる趣味産業を準備してきたのです。

喜びというものは、主体と対象がいる所において、芸術という美しさや貴さ、価値が存続するのです。それで、趣味産業は外的です。家庭は、趣味家庭ではありません。喜びの家庭にならなければなりません。喜びといっても、アメリカに来て暮らす人ではないのです（韓国語で「楽しみ、喜び」と「在米」は同じ発音）。アメリカは喜びますが、そうではありません。アメリカの天地よりもっと喜ぶことができる家庭で、私たちの父母が暮らすというのです。鼻唄を歌うというでしょう？そこで鼻唄だけ歌いますか。

暮らすことがすべて喜びです。趣味というものは環境的条件を言い、喜びは主体と対象の愛の理想に根を下ろすことができるのです。一人で楽しいですか。それでは狂ったことになります。愛の相対がいなければなりません。神様は、未来の理想的宇宙よりももっと大きい愛の相対のために燃料として供給するための立場に万物を立てたので、愛の圏内に因縁をもっていないものがないというのです。ですから、万物を愛さなければなりません。

公害で汚染された農作物を食べる必要はないのです。自分のあらゆる精誠をすべて尽くして食べて生きることができるようにするのです。五人の食口なら、五人の食口が農作業をしたものを食べるのです。他の所から買ってくるなというのです。野菜も自分が栽培して食べ、米も自分が栽培して食べなさいというのです。これを私たち統一教会に任せれば、ウルグアイ・ラウンドを心配する必要もないのです。そのようにならなくては、世界は公害ゆえに滅びます。

今から世界は、観光産業の覇権を誰が握るのかということが最も問題になるはずです。そのような時代が来ます。経済流通構造は、他の産業基盤を通して定着します。しかし、観光産業の流通構造は、いつも早く回るのです。回るのでその活用能力が膨大だというのです。どこにも通じないところがありません。その基盤を築こうと水安堡や、釜谷ハワイにコンドミニアムも建てて準備するのです。すべて遠い将来に対備するためにそのようにするのですが、内部にいる人々の中には、そのような考え方をもった人がいないのです。

第三章　環太平洋時代と「島嶼国家連合」創設

一　今は環太平洋時代

一) なぜ太平洋時代が来るのか

今、「時は太平洋時代だ」と言っています。アメリカがいくら何と言おうとも、ヨーロッパ第一主義を叫んできたものが、今では太平洋を中心とした貿易圏がヨーロッパを凌駕して発展してきています。あらゆる面において、アメリカが太平洋地域を捨てることができない段階に来ているというのです。商売は誰がうまいかといえば、アジアの人がうまいのです。アメリカ人は、お金があればやたらに使うでしょう。しかし、アジアの人は使いません。中国人の死体を扱うと、お金のない死体がないというのです。

世界文明の方向は、世界を一周しながら発達していきます。すなわちエジプトの大陸文明、ローマとギリシャの半島文明、イギリスの島嶼文明、アメリカの大陸文明のほうに、再び文明は西に進み、太平洋を渡り日本の島嶼文明に、ついには韓半島文明に集結するため、アジアに連結しているのです。ここで結束された文化は、高次元的文化として新世界を創造することでしょう。

日本は島国として、アジアでは初めて西洋文明を定着させました。次は半島文明時代です。韓半島は東洋と西洋の文明が一致する場所です。歴史学者シュペングラーが指摘したように、文明は、一年に春夏秋冬があるように興亡を繰り返してきました。今、時は大西洋文明時代が過ぎて、太平洋文明の時代です。

キリスト教は霊的に世界の救いに責任をもちましたが、肉的基盤を吸収しなければ立つ所がありません。今、世界の人々は「太平洋文明圏時代が来る」と言っていますが、それはなぜでしょうか。歴史の起源がここにあるからです。イエス様の体を失ってしまったがゆえに、アメリカが、霊的キリスト教が太平洋を渡ってアジアに行かなければならない歴史的な使命があります。それゆえに、このような時代が来ざるを得ない、というのが結論です。原因がここにあることを知らなければなりません。

アメリカは、どこに行かなければならないのでしょうか。アジアに帰らなければなりません。イエス様の体を失ったアジア大陸を訪ねていかなければならないというのです。今後は太平洋文明圏の時代が来ますが、どうしてアジア太平洋文化圏の時代が来るのでしょうか。学者もそれを知りませんでした。それはレバレンド・ムーンの「原理」で解かなければ、解けないのです。アジアを訪ねていかざるを得ません。今、アメリカは霊的基準だ

けをもっているので、体をかぶるためにアジアに帰らなければならないのです。

イエス様が体を失ってしまったので、その本舞台の基台がなくなり、アジアの基盤を失ってしまいました。ですから、反対方向に行くのです。ローマに反対に引っ張られてしまったのです。アジアから西洋に向かわなければならないのに、西洋から反対に回っていくので、蕩減の道と一致して、血を流し犠牲になりながら行ったのです。そのようにして一周し、ローマを中心としてイギリス、アメリカを経て再び太平洋文明圏に帰ってくるのです。なぜ太平洋文明圏に帰ってくるのかといえば、イエス様の体を世界的に失ってしまった所がアジアだからです。ここで霊と肉が分かれてしまいました。ですから、西洋文明と物質文明とが反対にさっと向きを直して、このようにアジアに帰ってくるのです。

旧約時代から延長してきたものを、新約時代のイギリス、アメリカ、フランスを中心として、新婦圏すべてを蕩減復帰した時代になったので、第二次大戦直後に統一的世界に出発することができるのです。それで、母とカイン、アベルが一つになってアジアに入り、太平洋文明圏時代が到来するのです。なぜなら、イエス様の体をアジアで失ってしまったので、体である世界的政治版図まで、アジアを中心として統一しなければならないのです。それゆえに、今からアジア文明圏時代が到来するのです。

西欧文明、東洋文明、アジア文明、太平洋文明圏へと世界でつながれてきましたが、太平洋文明圏はアメリカとは遠い距離にあります。それで、文総裁が行って、余りある万全の準備を備えました。今からはアジアに帰ってきて、東西を結合させ、インドまで収拾しなければならず、シベリアも収拾しなければなりません。二箇所を収拾しなければなりません。

主は、どこに来なければなりませんか。アジアに来なければなりません。イエス様が肉身をアジアで失ってしまったので、アジアで取り戻さなければならないのです。太平洋文明圏が来るのは、なぜでしょうか。イエス様の失ってしまった肉身が、アジア文化圏統一時代に向けて帰りつつあるのです。すべてのものをこのように解いてこそ、歴史がきれいに解かれます。

日本は、サタン側のエバ国家です。サタン側のエバ国家は、天の側のエバ国家のすべての恵みを対等に分かち合うことができます。キリスト教がアジアで成功できずに死ぬことで、反対にヨーロッパに向かい、ローマを経て、イギリスを経てきたのです。このように反対に来るのです。ローマのような半島が韓半島に匹敵し、地中海のような海と島が日本に匹敵し、ヨーロッパ大陸に匹敵するのがアジア大陸です。相対的に反対に一周してくるのです。これが、互いに出会う時となったので、学者や政治家たちは「太平洋文明圏時代が来る」と言っているのです。

なぜ第二次大戦が起こらなければならないのでしょうか。イエス様の体を失ってしまったのを、世界的に取り戻さなければならないからです。来られる再臨主を追い出したがゆえに、統一圏を失ってしまうことで、今、ア

メリカが再び太平洋文化圏を通して、イエス様の体を失ったアジア地域と統一世界を求めてくるのです。反対に求めてくる時代が来るのです。太平洋文明圏の時代は、それで来るということを知らなければなりません。

イエス様の体をアジアで失ってしまったがゆえに、アジアで復帰し、再臨主の理想を中心としてこの世界を統一しなければならないという内容と一致します。このような過程を経ることによって、太平洋文明圏時代が来ざるを得ないのです。それは体を復帰して一つにするためですが、再臨主には霊肉を中心として既にこれを受け入れることのできる基盤があるので、文化圏も内外で統一された基準でもって、主体の前に対象的な基準で連結されることにより、真の父母を中心として統一世界が成され得るのです。

なぜ太平洋文明時代が来るのかといえば、西洋文明と東洋文明は、失った父の体を取り戻さなければならないからです。イエス様が父として来たのに、父の体を殺してしまいました。これを取り戻して霊的救いとキリスト教圏内で一つにしなければならないので、東洋を訪ねてくるのです。来られる主を中心として、韓半島がイタリアと同じです。イタリアは今まで滅びたことがありません。千年を越えるほどに強大国としてあり続けています。それはなぜかというと、今後、主が来られる相対国だからです。

そのような基準を中心として帰ってくるのが、この半島を中心とした太平洋時代です。地中海より太平洋時代です。膨大な環境を中心としてアジアに帰ってきて連結されますが、それが韓半島です。韓半島が男性の生殖器ならば、日本は女性の生殖器です。これらは一つにならざるを得ないというのです。これらが一つになってこそ統一天下の時代が来るのです。それで、韓国を「アダム国家」と言い、日本を「エバ国家」と言うのです。

今後、世界文明は間違いなくアジアを訪ねてきます。太平洋文明圏の時代が到来するというのです。今日、社会科学を研究する著名な学者はもちろん、何も知らない科学界の学者までも「太平洋文明圏の時代が来なければならない。歴史的帰趨はそのようになる」と主張します。それはなぜそうでなければならないのでしょうか。その根本を知っている人が私ではないでしょうか。既に四十年前から「太平洋文明圏時代が来る」と教えたでしょう。それがどの国に行くかということは、誰も知りません。それは私だけが知っているのです。それを知っている文総裁という男は、大韓民国がそれを主導しなければならないと見るのです。

西洋文明と東洋文明がいつ一つにならなければならないでしょうか。一つになるには、どこで一つになるべきでしょうか。島国で一つになるのではありません。半島で一つになるのです。このように見るとき、アジアで半島国家として最も微妙な立場にあるのが韓国です。韓国周辺を見れば、ソ連、中共、日本、アメリカまであります。太平洋沿岸を中心として見るとき、アメリカまで連結されていると見ます。「歴史は今、太平洋文化圏時代に移る」と、あらゆる学者が言っています。政治、経済、歴史学者が「そのような時代が来る」と言います。アメリカではそれを結論的な基準で見ています。

では、どの国が主役になるのでしょうか。日本がなるのでしょうか、中国がなるのでしょうか。日本と中国は怨讐です。四十年前に怨讐でした。韓国と日本も怨讐です。すべてが怨讐です。アジアで日本は中国とも争い、ソ連とも争い、韓国を占領しました。みな日本を怨讐の国だと考えます。イギリスに対峙し得る、サタン側のエバ国家だったというのです。

西欧文明とアジア文明圏をそのまま連結することはできないのです。行く方向を失ってしまった西欧文明に、夕暮れ時に傾く太陽のように、地ぐもが巣くう西欧文明に、新しい朝の光明、太陽の光のような東洋文明を連結してあげたこのレバレンド・ムーンに対して、感謝しなくては滅びるということを知らなければなりません。滅びていく、大西洋に流れていく文化の背景をもった西洋社会は、レバレンド・ムーンによって新しいアジア文明を通して神様の摂理圏に連結させることができるという、驚くべき事実を知らなければなりません。

西欧の人たちは、今までレバレンド・ムーンに反対だけしたのであって、それを知りませんでした。レバレンド・ムーンによって神様の摂理と通じることができ、再度神様の摂理を受け入れることができる世界に越えていったというのです。再度、神様の摂理が伸びていくのです。

統一教会は三番目の息子です。統一教会は実際、秘蔵っ子の中の秘蔵っ子として生まれたのです。今や、キリスト教文明を統一的な内容によって消化させ、ヨーロッパを一つに和合し、南・北米を和合できるのは、キリスト教文明圏以外にはありません。

ところが、西洋のキリスト教文明圏がアジアに越えてきつつあります。そうなれば、キリスト教思想を通して神様が統一的な方案を収拾してくるものを、アジアはどこで合わせるべきでしょうか。日本は異教をあがめていて、中国とソ連は共産化されていて、ただ一つ残っている韓国は、教派争いはしていても、キリスト教という垣根の圏内にあります。種を取る木としては植えられなくても、火をたく木としては必要です。言い換えれば、太平洋文明圏が目の前に迫る環境を直視しながら、アジア帝国において、キリスト教文化の背景を民族を挙げて備え、受け入れ態勢を備えることができる国があるとするなら、それは日本でもなく、中国でもなく、ソ連でもなく、ただ韓国だけです。

「ＩＣＵＳ」（科学の統一に関する国際会議）や「ＰＷＰＡ」（世界平和教授アカデミー）を命懸けでつくりました。これを前面に出せば、通じない所がありません。その時、アメリカを動かさなければ、中国首脳部の今後二十年以内の政策方向を知ることができません。共産主義が変遷するのは明らかなのに、その変遷方向を知ることができないというのです。私が話しても信じないというのです。ですから軍の戦略家たちをすべて集めて、代表的に自由世界の二十人、中国の二十人を中心として「太平洋沿岸における中国を中心とした今後のソ連外交政策に対する糾明」というタイトルでセミナーをしたのです。そこに、アメリカの今後の作戦資料を投入してあげた人が私です。

今は太平洋文明圏時代です。それとともに宇宙時代と連結されているのです。太平洋の中には、あらゆる水が入っていきます。河川の水も、大西洋の水も、地中海の水もみな入ります。ここに黒潮というものがあり、それが四千ないし五千マイル程度の長さですが、これが回ることによって全世界の五大洋が動くのです。それゆえに太平洋文明圏時代が来る時には、すべてが一つにならなければならないのです。そして宇宙に飛んでいくのであって、これが一つにならなければ、今後「太陽の主人は誰だ」、「私だ！」と、このように争うというのです。「星の世界の主人は誰だ」、「私だ！」と言うのです。それは闘うようになっています。

この太陽だけでも地球の百三十万倍になるのに、この巨大なものを、一粒にもならない小さい人間が、「私のものだ」と言うことができますか。そうすれば、宇宙が笑うのです。宇宙が「ハハハ」と笑うというのです。いずれ太平洋文明圏時代には統一世界が来なければならないので、みな整備されなければならないのです。アメリカ民主主義でも駄目で、共産主義でも駄目なのです。ですからこの時代に、「頭翼思想」、「神主義」が出てこなければならないのです。

天の側の母、天の側のカイン、アベルを中心とした天の側の統一天下にしなければならないのです。統一天下とは何でしょうか。サタンのいない世界です。エデンの園で見るならば、堕落がなかった基準です。堕落した父母の立場であるアダムとエバが、新しくお父様に侍らなければなりません。世界を一周して太平洋文明圏時代に帰ってきて、ここでお父様に侍らなければならないのです。そして、新しい血を受け継がなければなりません。新しい愛を通して生命と新しい血統を受け継いで一つになる時、初めて統一天下が成されるのです。

今や太平洋文明圏時代が来ます。そこに主役の基盤を用意すべきなのが、アダム国家とエバ国家と三天使長の国家ですが、それが一つになるのです。本然的エデンの真の父母の名声とともに天国に直行できる、天使長の愛と神様の愛と父母の愛を中心として天国に入ることのできる本然の基準を、解放圏をすべて成し遂げたがゆえに、国家的基準で天国に入ることのできる時代が来るというのです。ですから、地上天国、天上天国が顕現するというのです。

南北統一によって東西の貧富の差も解消し、西洋文明と東洋文明が一つになるのです。本来、精神文明の中心は東洋です。それゆえに、あらゆる宗教は東洋から出てきました。宗教圏が栄えれば、物質を捨てなければなりません。家を捨て、国を捨て、みな捨てなければなりません。それを捨ててしまっては駄目なので、端のほうの西洋から物質を拾い上げてくるのです。ですから物質文明を発展させたのは西洋の人々です。

西欧は知識を通して、知れば知るほど「私の土地だ」と言って、みな占領してしまいました。みな知識によって版図を拡張しました。しかし、東洋ではお金をみな無にしました。しかし精神的基準と物質的基準が一体化する時には、統一が生まれるのです。物質文明がアジアを求めるのです。太平洋圏で西欧文明とアジア文明が連合して、新しい世界に越え

ていく文明時代がやって来ます。それが太平洋文明圏時代です。

太平洋文明圏とは、本然的縦的な世界と出会うための歴史的方向だと、すべての世界的学者は結論を下しました。では、何を訪ねていくのですか。真の愛を訪ねていくのです。その愛の原則をつくってやれば、世界は滅びないのです。東洋を代表したレバレンド・ムーンがアメリカに来て教育し、太平洋でおぼれないで無難に渡っていくことのできる者たちをつくろうとするのが、西洋社会の統一教会であることを知らなければなりません。統一教会だけが、太平洋文明圏を縦的愛と横的愛で編成し完成させた、永遠なる理想の本郷の地に行くことができるのです。

アジア大陸から世界統一圏に進む過程で、西洋文明と東洋文明を中心として太平洋文明圏が出てくるのです。そして、今ヨーロッパが一つになっていきます。このように見るとき、何がその文化的背後基盤になるのでしょうか。それはイギリスの歴史でもなく、ドイツの歴史でもなく、フランスの歴史でもありません。それはすべて、キリスト教文化圏だというのです。

膨大なアメリカと西洋圏がイエス様の体を復帰し、一つになって太平洋に帰ってくるのです。精神文明圏であるアジアで、イエス様を中心として一つの世界的指導国家基準をなさなければなりません。それを先生が今まで準備してきたのです。東洋文明をバックグランドとして、未来に復興統一し得るキリスト教文明の内容をもち、キリスト教文化圏を収拾して世界的な背後関係を結んだのが、「世界平和宗教連合」の結成です。

ローマ文化の失敗を蕩減復帰するために、世界的な半島文明を収拾して神様の前に帰る歴史的なローマの教皇国を、今、つくろうと思うのです。それが太平洋文明圏として来るのです。西洋と東洋の宗教圏を今、今年の今月まで集めています。

そのようなことは歴史になかったでしょう。「科学の統一に関する国際会議」だとか、「ＰＷＰＡ」（世界平和教授アカデミー）だとか、「世界言論人会議」だとか、そして、「世界平和宗教連合」だとか、「世界平和連合」だとかいうものは、今まで心と体として分裂して紛争していたものを、各国のために一箇所に集めて、一体理想圏を中心として収拾しようという団体です。これは恐ろしいことです。神様がいるから可能なのです。

あらゆる識者たちは、「今後、太平洋文化圏時代が来る」と言います。では、その主役がどこかといえば、アジアだというのです。アジアが主役を果たすためには、どのようにしなければならないでしょうか。周辺国家を収拾しなければなりません。韓国を中心として見れば、日本と中国があり、ソ連とアメリカがあります。一つの小さな国を中心として四大強国が角逐戦をしながら、この地を手放せなくなったのは、地政学的な要地になっているからだけではありません。

これを実践するために私が多方面の国家を連結させ、超国家的な核心部を連結させて同化させ結成することに今まで努力したがゆえに、あの太平洋を渡って自由世界を指導するアメリカも、今になっては無視できない段階

になりました。日本だけでも、レバレンド・ムーンという人を無視できない段階になりました。ソ連もそうであり、中国も同じです。

太平洋文明圏が目の前に迫る環境を直視しながら、アジア帝国でキリスト教文化圏の背景を民族全体として備え、受け入れ態勢を備えた国があるとすれば、それは日本でもなく、中共でもなく、ソ連でもなく、ただ韓国だけなのです。

人類でいえば、五十億人類の中で三十二億の人々が、五分の三以上がアジア人です。アジアで暮らしています。そして、歴史を経ながら、韓国は宗教が結実した王国として過ごしてきました。仏教がそうであり、儒教、キリスト教がそうです。アジアで、韓国を中心としてキリスト教と数多くの宗教を背景として結んで、太平洋文化圏を生み出そうというのです。民主世界や共産世界も、来るならば来いというのです。

このために準備したのが「世界平和女性連合」の創設、「世界平和宗教連合」の創設です。闘う心と体を連合させ、一つに詰め込んだということは、自分の個体で心が闘争する歴史的過程をすべて統一させ得る内的因縁が連結したということです。それを忘れてはなりません。

皆さん、考えてみてください。有色人種の文化歴史は長く、白色人種の文化史的な背景は短いのです。白人たちは、北極から来た熊のいとこたちです。血を見ながら肉を食べる人々です。白人たちの行く所は、いつも血が伴いました。血を流しました。しかし、農耕文化世界に暮らす人々は、そうではありません。それゆえに、もう白人社会の終末は遠くありません。それを知らなければなりません。

今からは、どこへ行くのでしょうか。アジアへ行かなければならないでしょう。最近、アメリカのあらゆる知性人たちは、「太平洋文明時代が来る」と言うでしょう。太平洋文明時代は、黄色人種を中心として来るのです。日本と韓国がそのように急成長をしたのは、どうしてでしょうか。神様が共にあるからです。そこでレバレンド・ムーンも伸びていくのです。それで太平洋文化圏に、なくてはならない必須の概念を植えました。全世界に、みな植えました。そのように植えたものは、誰も抜くことはできません。

今後、「黄色人種時代、イエロー・パワー時代が来る」と言います。太平洋文化圏世界とは、アジアをいうのです。今後、人類はいずれそのようになるのです。私たちが合同結婚式をしても三分の二は黄色人種になり、三分の一が雑種になるのです。ですから今後、世界は黄色人種の時代に進むのです。私が黄色人なので、このような話をするのではありません。原則がそうなので、このような話をするのです。

二) 太平洋時代の中心国は韓国と日本

今から太平洋文明圏が来ます。アメリカ、日本、韓国、中国、ロシアを中心として争いの場が生まれるしかない状況において、このような文明と文化の背景で準備しない国は退却するのです。そのような先端に立って準備をした男が、私です。それゆえに日本を結び、アメリカを結び、中国を結び、ソ連を結びました。そのようなレバレンド・ムーンとアメ

リカの人々が、手をつないで一つになって大きな仕事をすることは、今後、アメリカと世界、太平洋文明圏で共同運命圏を勝ち取っていく一つの条件になるということを考える時、希望的です。気分悪く考えるなというのです。これが連結されるならば、西欧世界やアメリカにとっては本当にいいのです。

ここにソ連の人々も来たので、私が一つ忠告しようと思います。ソ連が今後、ドイツやヨーロッパを中心として経済体制を強化させていっては、大きな問題が生じるというのです。いつも念頭に置くべきことは、アメリカを第一にして、ヨーロッパは第二として結んでいかなければならないということです。もしヨーロッパを第一にして結んでいったなら、大きな戦争、世界史的な難しい問題が、遠からずヨーロッパ地域と太平洋沿岸のアジア地域にまで起こるというのです。これを予防するためにも、ソ連の指導層は経済的方向をあくまでもアメリカにおき、ヨーロッパを結んでいかなければなりません。これをほっておけば、問題が大きいというのです。

今後、太平洋文明圏時代が来ます。西洋社会でもそう言っています。日本自体、島国ではできません。日本でしょうか、中国でしょうか。中国は第三世界、未開地に該当します。これを私が知っているので、摂理をこのようにするのです。韓国と日本を、アダムとエバとしてしっかりと定めたので、大陸と連結されます。中国は、それを信じても信じなくてもいいのです。しかし、中国は天使長圏です。中国には男性たちが多いでしょう。天使長。昔、女性がいないので、（逃げないように小さな靴で）足を締め付けたことがあるでしょう。青い竜ではありませんか。竜は天使長です。

イギリス、アメリカ、フランスの連合軍はキリスト教文化圏なので、韓国のような国をたくさん保護しました。太平洋戦争が三日だけ延長されていたなら、キリスト教徒二十万人が虐殺されていたことでしょう。神様が韓国を愛して、そのようにはなりませんでした。第二次大戦の時、韓国には爆弾は一つも落ちなかったでしょう。日本は廃虚になりましたが、韓国には爆弾は一つだに落ちませんでした。なぜでしょうか。天地が保護するからです。アメリカがキリスト教文化圏なので、そのように保護したのです。

太平洋文明圏は、このようにしてアジア統一と世界統一に向かっていくのです。それで、失ってしまったすべてのものを蕩減復帰するのです。今、ちょうどそのように回っているでしょう。アメリカは天の側の天使長なので、サタン側の天使長三名はアメリカから支配されなければなりません。

ですから、エバ国家の使命が大きいというのです。エバ国家にはどのような使命が残っているのでしょうか。貞操を守り、夫のそばにぴたっとくっついて、自分の存在の色合いを出してはいけません。女性には、自分のために存在しているものは何もありません。日本の富は、アジアのために使用しなければなりません。中東を越えて、ヨーロッパまで開拓するのに使用しなければなりません。

大西洋文化圏時代から太平洋文化圏時代に移動してくるにおいて、ここに主役になろうと浮気をしているのがソ連とアメリカです。

彼らが主役をしているのですが、今後、世界を指導するためには、アジア人を消化しなければなりません。そうでなければ、指導できません。アジアの人口は、世界五十億の中で三十億に近いのです。五分の三を超す数をもっています。それゆえにアジア人を消化できない主義は、世界をリードできません。

アジアでは三十億が暮らしています。今、時は太平洋文化圏時代です。そのような時代が訪れました。歴史は河川文化、地中海文化圏を経て大西洋文化圏を回って、今、太平洋文化圏を中心として宇宙空間文化圏に跳躍する時代が来つつあります。これをいかにつないでいくかということが、世界の政略家たちが模索する問題ですが、彼らからは解決策が出てきません。私は世界で立派だという政略家たちをみな集めて、数多くの国際的な会議をしました。彼らの結論は、レバレンド・ムーンの思想だけがこの時代の希望だというのです。アメリカでもなく、フランスでもなく、ドイツでもなく、イギリスでもありません。ソ連でもありません。

迫りくるアジア太平洋時代は、一つの隣人として近づいた地球村の人類が、皮膚の色と文化背景を超えて、調和して生きるしかない世の中です。個々人の自己の存立のためにも、怨讐を想定できない和合の時代に行くように天運が追い立てています。私たち韓民族は、神様を中心とした強硬な思想的基盤と正しい価値観のもとで生活することによって、新時代の導き手にならなければなりません。私たちすべては、小さな利害関係を超えて、国際関係に対する冷徹な認識のもと、全民族的に団結した力を発揮して、アジア太平洋時代の主役にならなければなりません。

有り難いことに、アジアの民族は三十二億暮らしているというのです。ソ連は白人国家です。風土的に見ると、不利な立場に置かれています。しかし、軍事的分野や政治的分野やあらゆる面において、中共を凌駕しているのが現在のソ連の立場です。ですからソ連は、どんなことをしてでも日本さえ手に入れれば、今後の太平洋の舞台を中心としたアメリカとの対決で、先手を取れると考えるのです。

地政学的に見るとき、日本は島国です。島国は、どのようにしても孤立しては生きられないのです。それゆえ、ある大陸と関係を結ぶべきですが、今は太平洋を渡ってアメリカ大陸と関係を結んでいます。彼らは四十年前には、第二次大戦を中心として怨讐でした。怨讐になって闘争した国民性をもっています。

ところで、日本はどこに行くべきでしょうか。太平洋を渡っていってアメリカに背負われるべきでしょうか。大陸に接するべきでしょうか。接するにはどこで接しなければならないか、これが問題です。最も近い道は、韓半島を通じて行くのです。シベリアを通じて接しても駄目なのであり、中共と接しても駄目なのです。中共に入っていって、混乱した中共を消化することはできません。十二億の中共の国民を消化することはできません。また、膨大な共産世界の主導国家であるソ連を、日本は消化できません。このように見るとき、日本自体は仕方なくアメリカを中心として、韓国と連結しなければなりません。

太平洋文明圏は、来たるべき父主義の版図を形成するための準備文化です。ここから統一的文化圏が展開し、結束された文化を終結しなければならないので、父母文化を中心として言語統一、文化統一、国家統一が展開されていくのです。そのような時になってくるのです。それが韓半島を中心として連結されてくるのです。

今、アメリカの経済界や哲学界や思想界を問わず、みな「太平洋文明圏の主役だったアメリカはすべて終わった。東洋に行かなければならないが、どのようにして行くのか」と言っていますが、レバレンド・ムーンのしりをつかまなければならないということを、分からずにいます。それだけ教えてあげれば、すべて終わります。

統一国家圏を成す決着点は韓国です。韓国はアダム国家です。愛と生命と血統を連結し、新しい理想的な創造理想圏に立てる主人の本性を相続できる血統が、アダム国家から始まります。母の国と長子の国、そして次子の国々が一つになって、どこを訪れるのでしょうか。太平洋を越えてアダム国家である韓国を訪れるのですが、その時、韓国は日本から解放されるのです。

太平洋文明圏が目の前に迫る環境を直視しながら、アジア帝国において、キリスト教文化の背景を民族を挙げて備え、受け入れ態勢を備えた国があるとするなら、それは日本でもなく、中国でもなく、ソ連でもなく、ただ韓国だけです。

皆さん希望をもってください。人類の五分の三以上が宗教の発生地であるアジアで暮らしていますが、韓国はその宗教の結実において王国になってきました。

太平洋文明圏時代は、韓半島を中心として展開します。日本は女性の子宮とちょうど同じです。これらが、一つにならなければなりません。それゆえに、日本はキリスト教が誤ったこと、イギリスが誤ったことをすべて蕩減復帰しなければなりません。また、ローマ教皇庁が誤ったことを、韓半島を中心として収拾しなければなりません。ローマ教皇庁の理想、キリスト教の理想である再臨理想王宮圏をつくり、イエス様の体をアジアで失ってしまったので、再びアジアでキリスト教文化圏を霊的、肉的に合同させ、統一文化圏が展開されなければならないのです。

アダム国家は韓国であり、エバ国家は日本です。そして、天使長国家は周辺のアメリカ、中国、そして、ソ連です。これは神様が選択するのです。日本も韓国を支配したでしょう。中国も韓国を占有しようとします。韓国を支配する国は、太平洋を支配します。今に太平洋文化圏時代が到来します。歴史的に知識人たちがみな発表しているでしょう。それで、ソ連も韓国、中国も韓国、アメリカも韓国を独り占めしようとするのです。

韓国が既に四カ国を主管できる段階に入ったことを、世界の人々は知らずにいます。神様とレバレンド・ムーンとムーニーしか知らずにいます。これはどれほど有り難く、驚くべきことですか。今後、歴史の方向に対して世界の学者たち、経済学者、社会科学者たちは「太平洋文明圏時代が来る」と話していま

すが、太平洋文明圏の基地をレバレンド・ムーンがつくり、思想的な基地として立てて前進しているという事実を、世界が知るべし！アーメンです。このように世界に夜明けが訪れ、太陽が昇るようになっているというのです。

南北統一は、金日成によってではなく、先生によって成るというのです。エバ国家、アダム国家、天使長国家を収拾することによって、太平洋文明圏が成り立つのです。太平洋文明圏がなぜそのように成り立たざるを得なかったかといえば、イエス様がアジアで体を失ってしまったがゆえに、アジアで天下統一の世界を再び復帰しなければならない基準があるのです。それで、世界的に太平洋文明圏が論じられるのです。アダムとエバ、三人の天使長が一つになることによって、世界は統一世界になるのです。歴史がそのようになっています。

アジアを中心として韓半島は男性の生殖器のように、日本は女性の陰部のようになっていて、太平洋文明圏を中心として見るとき、これはより大きな大陸、アメリカ大陸、中国大陸、ソビエト大陸、世界六大州すべてが連結されている基準において、中心点を形成しています。これが、太平洋文明圏を成すのです。

太平洋文明とは、何を中心として成されるものでしょうか。今は中国と日本が中心だと考えていますが、そうではありません。大韓民国が、韓半島が中心にならざるを得ないのです。それは韓半島を地勢学的に見る場合、ヘレニズムとヘブライズムの交差点として、民主主義と共産主義、唯物主義と有神主義が世界的に対決している所であり、ここに結実体として悪の真の父母である金日成と善の真の父母である先生が対立しながら、互いに消化しようとします。それは歴史の最後の終着点になりもするのです。これを一体化させる中心体が、大陸の男性の生殖器のように生じた半島であり、これは太平洋すべてを包容することができるのです。

アジアの半島である韓国は、大陸の生殖器、男性の生殖器を象徴します。日本列島は、北海道が頭です。そしてその下にある列島は、四肢を広げている女性のようです。ですから、日本がエバ国家です。その中で貿易の基地は、下関と四国です。下関の通交で、そこから西洋文化が広がったのです。太平洋をバックとし女性が脚を広げて関係を始めた、文化輸入の道です。しかし文先生は地球をバックにして、太平洋文化、アメリカ文化を、天の文化を中心として韓半島文化でもって統一することでしょう。

二　「島嶼国家連合」の創設

一) 「島嶼国家連合」創設の背景

私たちが行く道は、国を復帰するものです。国を取り戻すのに、日本という一つの国は必要ありません。国を取り戻すには、超国家的基準で取り戻さなければなりません。そうするためには、国連を背景として一つの国を取り戻さなければならないのです。ところが、国連が話を聞かないので「島嶼国家連合」をつくったのです。これはアベル的国連です。その次には「半島国家連合」をつくったのです。そうして六大州の国家連合を、みなつくっておいたのです。

私は韓国を離れて、世界版図の上で位置を復帰しなければなりません。国家的メシヤが駄目ならば、世界的メシヤの立場で越えるのです。十二の国さえ立てれば、すべて成されるのです。ですから、「島嶼国家連合」、「半島国家連合」、「大陸国家連合」をつくったのです。「これで国連と折衝しなさい」と言ったのです。四大連合である「女性連合」と、「青年連合」、「学生連合」、「宗教連合」を国連に加入させようとするのです。それが駄目なら、新しい国連をつくるのです。国連にはもはや主人がいません。そこに「真の父母の日」もつくり、国連の万年事務総長にも父母様を……。そうすることのできる内外のあらゆる内容ができているのです。みなそのように思っているのです。

今は王権復帰時代なので、「島嶼国家連合」、「半島国家連合」、「大陸国家連合」をつくったのです。北米大陸はあきらめてもいいのです。アジアと南米を中心として、カイン・アベルで結べばいいのです。そのような時代になるのです。国家定着の摂理観を超越するために世界へ回るのです。中心を求めれば三六〇度回るのです。摂理国家を思いのままに選ぶ権限があるのです。

国連が責任を果たせないので、「島嶼国家連合」と「半島国家連合」をつくるのです。宗教人を中心としてアベル国連をつくらなければなりません。今の国連は体を身代わりするのです。体はサタン側を象徴します。心的国連がありません。これらが一つにならなければなりません。ですから、つくらざるを得ません。

エバ国家圏はいくらでもあります。これを防止するために「島嶼国家連合」をつくり、「半島国家連合」をつくり、「大陸国家連合」をつくりました。日本を救うために東西南北に引っ掛けて、船を沈没させないようにしました。それで、私が提示したことに効果があれば、新しい国連を、アベル国連をつくるのです。ですから、「島嶼国家連合」や「半島国家連合」、「大陸国家連合」をみなつくっておいたのです。

今、「島嶼国家連合」を創設し、あるいは「半島国家連合」、「大陸国家連合」を創設するのです。低開発国家がどれほど多いですか。先進国家は、わずかＧ７（西方先進七カ国）だとかＧ８（先進八カ国）しかありません。世界を動かす経済圏を中心として見れば、何カ国にもなりません。ですから、これは問題にもなりません。それを糾合すべき時が来たのです。

大移動の時が来ます。国連を中心としてすべきですが、国連が先生を受け入れないならば、アベル国連をつくるのです。それで「島嶼国家連合」をつくりました。「半島国家連合」、「大陸国家連合」をつくりました。各国の大統領たちは「先生が早く理想的な世界家庭を完成しなければ理想世界が生まれないというのが、先生の教えであり、神のみ旨の道ではありませんか」と言いながら、立ち上がる者たちがたくさん現れるようになりました。

国連の事務総長を中心として消化運動を推進しているのです。それで、「国連の会議場にも十六名くらいは来なさい」と言えば、み

な先生のところにすぐ来ます。大会をして事務総長を参加させ、新しい平和の道に行く架け橋になるのが、文先生の「家庭連合」です。

東洋医学と西洋医学の統一、これが問題です。それもするつもりです。また「国連大学」を今つくっています。その万全の準備をみなやりました。そして、先生が「世界平和島嶼国家連合」をつくったでしょう。日本が陥没したので日本に対峙できる「島嶼国家連合」、その次には「半島国家連合」、それから「大陸国家連合」もみなつくりました。

島国であるフィリピンは、アメリカのエバ国家です。エバ国家も日本が責任者です。ここに台湾とフィリピンが三位基台を成します。台湾とフィリピンまで世界的エバ国家として、島嶼国家を中心として人類を動かすことができます。そのようなことのできる準備をしました。「島嶼国家連合」だとか「半島国家連合」だとか「大陸国家連合」だとか、みな結んでおいたので、九月にそれを国連に建議しようと思います。

母がいなくても、身代わりを立てることができます。「日本が責任を果たせなかったものを、世界の人々に母として買って食べさせ、もうけて食べさせられなかったものを、あなた方、娘がやりなさい」と言えば、しなければならないのです。誰が早く復帰されなければならないのでしょうか。日本より台湾、フィリピン、カナダが早く復帰されなければなりません。日本が駄目なら、この三つの国が入って、日本をもち上げなければなりません。それで、私たちは「島嶼国家連合」をつくり、「半島国家連合」、「大陸国家連合」をつくり、新しい国連を構成することのできる基盤を築いたのです。

先生を迎えるために、アラスカのコディアックでさえ準備しています。フィリピンの闘争、激戦で勝利しました。日本が闘争しなければならないのに、日本の代わりに闘争したのです。日本は島国の王国です。島が七千近くもあります。それを一日に一つずつ回っても、二十年はかかります。「島嶼国家連合」と同じくらいの数です。そのような日本を切り捨てて、フィリピンを立てることができます。台湾もそうです。台湾は中国のエバ国家です。フィリピンはアメリカのエバ国家です。第二次大戦前はアメリカの占領地でした。日本とアメリカが占領して分割されたのです。

もう最後になりました。もし国連が反対すれば、国連をけ飛ばして私はアベル国連をつくるつもりです。島嶼国家なら「島嶼国家連合」をつくり、また、「半島国家連合」をつくり、「大陸国家連合」までみなつくりました。人々は「国連を信じないで、私たちがアベル国連をつくりましょう！」と言うのです。そうなれば、世界はどこに従うと思いますか。その目的とは何かというと、青少年と家庭を教育しようというのです。

二) 創設大会概要

一九九六年六月十六日から十八日まで、日本の東京にある京王プラザ・インターコンチネンタル・ホテルで「世界平和島嶼国家連合」創設大会が開かれました。この席には、アジアとオセアニア地域のオーストラリアおよび日本をはじめとする二十七カ国、アフリ

カ地域の五カ国、ヨーロッパと地中海地域のイギリスをはじめとする五カ国、西半球とカリブ海地域のカナダを含む十五カ国など、合わせて五十二カ国から、カナダのマルリーニ首相をはじめとして前・現職国家元首を含む百名余りと、日本側の関係者九百名余りが参加しました。（注：この一文は「世界平和島嶼国家連合」創設の概要であり、文鮮明先生のみ言ではありません）

三) 創設大会基調演説

人類歴史において文明発展の流れを眺望してみる時、大きな川の周辺から勃興した古代文明は、ギリシャ、ローマ、そしてイベリア半島を含む地中海沿岸を経て伝播されてきました。そしてこの文明は、ドイツ、フランスを含むヨーロッパ大陸を通し発展し、島嶼国家であるイギリスを中心とした大西洋文明の形態でもって、ユダヤ・キリスト教文化が結実しました。

そののちに、文明はアメリカ大陸を通して西の方向に流れ、現在は島嶼国家である日本を中心とした太平洋時代の文明に発展しました。これはユダヤ・キリスト教的文明が、アジア地域に広がったことを示します。

私たちが神様の摂理観から文明の流れを概観するとき、今日、島嶼文明として天の運勢をもっている国は日本だということが分かります。二十世紀を結実する境目にあって、日本は神様の摂理において人類歴史に注目される立場にあります。そして、日本の現在のような復興は、神様を通したユダヤ・キリスト教摂理に関連して説明されるしかないのです。もし、日本が神様の摂理的計画において一つの役割を担っているなら、私たちは、日本が神様の摂理においてもっている摂理的責任について耳を傾けなければなりません。その理由は、神様の摂理の目的が世界平和の実現であり、世界平和はすべての人類の希望であるからです。

すべての島嶼国家が平和世界創造のための「島嶼国家連合」として、一緒に集まって、互いに寄与するならば、人類歴史においてこの上ない希望を提供することでしょう。このような希望と基台をもって、私は「世界平和島嶼連合」を創設しようと思います。私は全世界の島嶼国家が日本に与えられた天運を相続し、世界平和追求のための彼らの集団的な努力の傾注によって、世界平和は実現できると確信しています。

島嶼国家の特徴は何ですか。地球の表面は、陸地と海で構成されています。今日、科学は「最も単純な最初の生命の形態が海から出現した」と説明します。これは、海が生命を妊娠して養育する母の役割をするということを意味します。このような意味から、海が女性の特性を象徴するものとみなされるならば、陸地は男性の特性を象徴するものと理解することができます。そして海に位置した島嶼国家は女性を象徴し、大陸と半島国家は男性を象徴するものと考えられます。

霊的な側面において、私たちは、「島嶼国家は対象性、依存性、滋養性、忍耐、そして感受性などの女性的特質をもっている」と言うことができます。他方で、「大陸国家は、主体性、創造性、そして供給性などの男性的特質を所有している」と見ることができます。

島嶼国家は、女性の人類歴史において占有してきた役割を、遂行すべき位置にあると見ます。

女性は、結婚して伝統的に彼らの夫を全身全霊で愛し、奉仕しなければならない者とみなされてきました。彼らの配偶者から愛を受け子女を出産することによって、このような躍動的な関係を通じて、女性は彼女自身を輝かせて花咲かせます。母として女性は、子女を養育する重要な責任をもっています。

このように島嶼国家は、それと似た役割をしなければならないと考えることができます。

一九四五年、第二次世界大戦が終わった時、世界のキリスト教は神様の救援摂理史において非常に重要な時点にありました。イギリス、アメリカ、フランスのようなキリスト教の国々は、その当時、神様の摂理の中心国家でした。第一次、第二次世界大戦で、この三大主要国家であるイギリスとアメリカとフランスは、連合軍の中心として、民主主義のために闘いました。

神様の希望は、これら三大主要国が自国を中心とした国家主義に陥らず、世界平和の実現のために奉仕と犠牲によって、人類のための奉仕をすることをもって、神様の愛を実践するために彼らの力を結集することでした。

一九四五年、第二次大戦の終戦は、国際連合の創設を通し、永遠な平和を実現する機会を提供しました。しかし歴史的な現実は、世界平和の実現ではなく、共産主義の膨脹と、キリスト教の国々の霊的堕落と道徳的崩壊を通した数多くの▪藤として現れました。人類は、四十年以上アメリカとソ連の間の冷戦を経験しながら現在まで続いている、霊的な荒野時代を通過してきたのです。

私は、神様の創造計画を基盤とした世界平和のビジョンを実現し、神様の理想と摂理を説くために、全世界をあまねく回っています。このような目的から、私は数多くの国際機構を創設しました。しかし、このような路程は長く、私たちすべてが今後しなければならない数多くのことが横たわっています。

神様の理想とは何でしょうか。神様の創造理想は、平和世界の実現です。そのような世界では、分裂と▪藤は、これ以上存在しません。そのような世界は、調和と統一の喜びに満ちた世界です。このような目的を実現するために最も早い手段は、真の愛を通すことです。真の愛は、統一の要素であり、喜びと幸福の根源です。ですから平和の先決条件は、真の愛です。

人類がまだ真の平和を成し遂げられない理由は、人類が真の愛について分からないからです。なぜでしょうか。解答は聖書に記録されているように、人類が神様から遠ざかったからです。人類の最初の先祖が堕落した以後、アダムとエバは神様の祝福なく家庭を出発しました。それ以後、平和はこの世界に存在しなくなりました。代わりに分裂と▪藤、闘争がこの世を支配しました。個人の次元で心と体の闘争、家庭で夫と妻の▪藤、そして社会の中での▪藤すべては、日常的な面において限りなく正常なものとみなされました。

私は、あらゆる人類の問題が真の愛の根本的な喪失から始まると考えます。人類の堕落は、真の愛の喪失を意味します。結果的にイエス様は、アダムとエバが失ってしまった真の愛を復帰するために、真の愛の王としてこの地に来られました。このような脈絡から、

再臨主も真の愛を復帰するために来るのです。これが、救援摂理史的観点から見つめた明確な結論です。

私の全生涯と世界平和のための努力とは、いかにして人類が真の愛を回復するかに焦点が集められています。私たちが今日、世界の道徳的堕落を目の当たりにするとき、神様の悲しみがどれほど大きいか、想像することもできません。このような世界の堕落を見つめることは、私の心情を引き裂き、悲しみの涙を流させます。

ソドムとゴモラのような不倫と姦淫の害悪は、いわゆるフリーセックスという名目で、若者たちの霊魂に傷を与えています。神様の最高の悲しみは、このように無責任な堕落のどん底に陥りつつある人類を見つめることです。

人類歴史は、アダムとエバの堕落で知られる悲劇の歴史から始まりました。私たちすべてにこの問題に耐え、解決すべき責任があるということは、否定できない事実です。しかし、私たちが聖書の中で、エバが、堕落して罪の歴史を始めた最初の張本人だという事実を見るとき、私たちは、人類歴史において女性がエバの堕落を蕩減すべき一時代が必ず来るであろうと、摂理的な立場から知ることができます。

二十世紀において真の解放を追求する女性運動のような理念的な傾向は、今、女性が世界平和のために立ち上がり始めたということを意味します。私は、そのようなことが神様の摂理だということを知ったので、一九九二年四月、私の妻と共に「世界平和女性連合」を創設しました。

女性の時代は、一九九〇年代になって世界的な趨勢になりつつあり、これは二十一世紀に進展していくことでしょう。私たちは、愛と協助、決断と調和の精神が、世界平和に向かう歴史的な寄与を完遂するものと考えます。全世界的な女性の時代は、島嶼国家時代が、女性の特質を抱くようになるということを意味します。このように女性の時代と島嶼国家時代は、密接に互いに連結されています。女性が世界平和のために立ち上がる時代は、正に島嶼国家が全世界的な協助のために出ていくべき時代なのです。今や、島嶼海洋国家に、世界平和実現のための、彼らに栄えある歴史的な使命を完遂すべき機会が来ました。これよりも大きい使命がどこにあるでしょうか。

「島嶼国家連合」がこのような献身と奉仕を拡散させるとき、希望の光は人類の未来に明るく照らされることでしょう。島嶼国家は究極的に、大陸に向かうしかありません。これは女性が男性と愛の関係を求めるのと同じ原理です。これは多分、島嶼国家の生存条件だともいうことができます。こうして島嶼国家で遂行された世界平和のための多様な活動が、究極的に大陸国家に良い影響を与えなければなりません。このようにして世界平和実現のための島嶼国家の努力の肯定的な影響が、大陸の領域に広がるとき、世界平和実現に大きな進展が成されることでしょう。

二十一世紀は、人類がそれほど渇望してきた天国の明るい黎明が、この地上に輝く新しい千年になることを、強く希望しています。「世界平和連合」、「世界平和宗教連合」、「世界平和女性連合」、「世界平和青年連合」、そして「世界平和学生連合」などの機

構が、「世界平和島嶼連合」と共に調和と平和に向かう重要な役割を完遂することを確信します。究極的にこのすべての機構は、「世界平和家庭連合」として結実することでしょう。その理由は、家庭は平和のための最後の砦であり、家庭制度の再構築を通すことなしに、全地球的な統一を成し遂げ得る道がないからです。

民族と人種、そして宗教を超越した理想に基づいて、若い世代を徹底的に教育することによって「世界平和家庭連合」は理想家庭を完成し、地球星の中にいるあらゆる人々が、真実で永遠の平和を享受できる一つの地球家族理想の歴史的偉業を達成できることでしょう。皆さんの「島嶼国家連合」は、「世界平和家庭連合」の至高な目的に最善の寄与をすることでしょう。（九六・六・一六、日本で語られた「二十一世紀における島嶼国家の役割」というタイトルのみ言）

三　ハワイを中心とした海洋摂理

一) 日本とハワイ

日本がハワイのパール・ハーバー（Pearl Harbor：真珠湾）をなぜたたいたのかといえば、その背後のアメリカを押さえることなくして、中国や韓国を保護することは不可能だという結論が出たからです。それを知らなければなりません。韓国や中国を保護するために真珠湾を打ったということを知らなければなりません。アメリカの歴史家たちもそれを知らないことでしょう。先生はそのように見ています。

小さな日本が大東亜戦争を起こして、戦いを挑んだでしょう。なぜハワイをそのように攻撃したと思いますか。勉強していた留学生たちを人間扱いしないので、「今に見ていろ。十年、二十年後を見ていろ。お前をやっつける」と、このように反対に釘を刺したのです。留学生たちがそのように考えるので、神様がそのように助けるのです。十年勉強している人は、十年間「お前に勝たなければならない」と言い、二十年勉強している人は、二十年間「お前を踏みつける」と言いながら勉強していたのです。

日本人は、アメリカをやっつけなければならないという決心をしなかったでしょうか。それで、真珠湾を不法に攻撃したのです。これについては、アメリカの歴史にもそのようには書かれておらず、日本の歴史にもそのように書かれていません。摂理的に見るとき、そのようになったということを知らなければなりません。これは間違いない事実です。日本がアメリカの真珠湾を不法に、ただ攻撃したのではありません。原因は十分だというのです。では、宣教師たちは何をしたのでしょうか。それを見れば、政治的な要素をコーチしたという話です。

アメリカという国は、インディアンの国だったでしょう。ハワイに行ってみると、「やあ！　こんな国もあるんだなあ！」と思いました。そこには日本人が三〇パーセントいて、白人たちが二九パーセントにしかならないので、白人たちが迫害されるそうです。そのような話を聞いたとき、私の気分は悪くありませんでした！　「やあ、日本人たち！　私がアメリカで反対された、その反対に蕩減しな

さい！」と言えば、どれほど格好よく蕩減するでしょうか！　そうなれば、その人たちがみな、白人を追放するだろうという気持ちがして、「そうであってはいけない！」とも考えました。「三〇パーセントの家庭と二九パーセントの家庭をみな結婚させておけば、完全に統一できる」と思いました。それで、「アメリカ大陸にみな移せば、どれほど復帰摂理が簡単だろうか！」とも考えました。それで、私がハワイで暮らそうと、基地をつくり、船も買って準備をするのです。ハワイに行こうと思います。太平洋文明圏が訪れるではないですか。

二) ハワイが海洋摂理の中心になる理由

ハワイに行きたいでしょう。そこに今、天国村をつくろうと土地をみな買いました。家も建て、船もみなもってきました。それはすてきでしょう？　そこは一年間、四季を通して雨が降らないので、釣り場としては世界にない所であり、そこでは春夏秋冬の季節が一つの谷間でみな調和するのです。

あちら側は毎日のように雨が降り、雷が落ちますが、こちらは一年の全季節、雨が降らない所です。世界の中でそのような所が、私が来る時まで待っていたということを知ったがゆえに、今回、その全体のために教育化運動をしているのです。

アメリカ人の食口に、ハワイ島を主管するための運動をさせています。今回、「平和女性連合」を中心とした家を造り、夫人たちに私が電話だけすれば、お金も使うでしょうし、あらゆることをすることでしょう。これと拍子を合わせて、国民教導の枠組みを編成して、ハワイ群島を神様が泳ぐことのできる足場にしようという、先生の驚くべき構想を称賛によって歓迎しましょう！　アーメン！

イエス様がメシヤとして来た所もアジアです。アジア統一圏のために体を失ってしまったのを取り戻し、霊的勝利圏とともにキリスト教文明を通して、新しい体としての版図であるアジアを統一すべき立場にあります。この西欧文明がアジアに入るのに、中間である混合、和合文明を中心としてしなければならないので、太平洋文明圏時代が来るのです。西欧文明が太平洋文明を中心として融合します。ここにおいてどこが問題になるかといえば、ハワイです。

御存じのように、アメリカの歴史は、東から西に向かって国家を形成し、文明の起源を発生させました。そうしてハワイを中心として、太平洋圏を動かすことのできる主導的基盤を強固にしました。

アメリカは五十二の州です。ハワイも一つの州でしょう？　ハワイでは本土の人が少数民族です。そして多数民族が有色人種です。それゆえにハワイに行った人々は、長く滞在せずに本土に帰ってくる場合が多いのです。互いに争ったりして、あまり長続きしないので、そこにレバレンド・ムーンが入っていって、和解させるためにハワイ島に基地をつくりました。レバレンド・ムーンには権力があります。知識もあり、財力もあります。

「ハワイ」という言葉は、韓国語では「してきなさい（ヘワラ）」という意味です。エバ（注：韓国語でヘワ）と通じるのです。エ

バは「仕事をしてきなさい」という意味ですが、ゆっくりと言えば、「ハワイ」になるのです。西欧文明とアジア文明を中心として交流する版図になったのですが、これがアメリカの領土だと思っていたら、日本の領土になりつつあるというのです。そこに文総裁がこれを一つにするために、現在、教育をしているのです。これを誰が教育するのでしょうか。渦巻きが起こらなければなりません。ハワイの領土を中心として今、世界的な版図を編成する仕事をしているのです。

太平洋文明圏がやって来るではないですか。それで、「パシフィック・リム・ディベロップメント・カンパニー」（Pacific Rim Development Company）というものをつくりました。そこにはアメリカも入り、オーストラリアも入り、南太平洋、太平洋がみな入るようになります。

このようにして「アメリカの人々に恥をかかせよう！」と、今仕事をしています。そのように命令をしてきました。その時に、ここにいる日本の女性たちが、ハワイで結婚した女性より駄目ではいけません。「大陸で伝統をつくり、お姉さんとしてこのような伝統をつくったから、ついてきなさい！」と言えば、「イエス！」と、こうならなければならないのであって、反対するようにはなっていません。

先生が船に乗ってハワイに行くというとき、ハワイについて来なければなりません。国がないときは仕方ありません。先生も寝ても覚めても神の国を探し求めるのです。神の国はこの地球星です。皆さんがここで民になってこそ、天国に入るのです。その時、民になれなければ、死んであの世に行って待たなければなりません。

第四章　神様の摂理から見た海洋文明

一　人類文明史と発展の推移

一) 文明圏を中心とした世界歴史の流れ

私たちが歴史発展過程を注意深く見てみれば、人類最初の文明であるエジプト文明は、ナイル川を中心とした河川文明です。すなわちエジプト文明は、ナイル川を母胎として発祥した文明だというのです。また、このエジプト文明は、どのようにして発展したのでしょうか。エジプト人は「川の向こう側には何があるのか」と気になっていました。いつも川の向こう側に行ってみたいと望んでいたのですが、それがエジプト文明を発展させる精神的な背景となったのです。このような河川文明時代が過ぎたのちに、地中海文明が建設されました。向こう岸を見つめる切実な心、希望の心情が動機となって人類社会が発展してきたのです。そして、向こう岸に向かう切実な心情が文明の革命を起こした、ということを皆さんは知らなければなりません。

文明の発展路程を考えてみるとき、古代文明は熱帯圏文明、今の文明は温帯圏文明、このように逆に上がってきています。古代文明は熱帯文明に属し、今の文明は温帯圏であるにもかかわらず、この温帯圏文明は春に向かうのではなく、秋に向かいました。ですから、ここには共産主義を中心とした寒帯圏文明が侵犯していくのです。

文明の発展段階を見れば、文明が一つの形態として現れるためには、ある過程が必要だ

ということを知ることができます。必ず文明が芽生える季節を通るのです。夏の季節と秋の季節を通り、それから冬の季節を通って、一つの宇宙的な春の季節の文明圏として発展していく、ということを私たちは推理できるのです。

神様がいらっしゃるなら、神様はどのようなことを喜ばれるのでしょうか。もちろん、季節も春夏秋冬すべて喜ばれ、人も少年時代、青年時代、壮年時代、老年時代と、すべてお好きです。人間を見れば、白人、黒人、黄色人、紅人種など、五色人種がいます。それでは、神様はどのような人を好まれるのでしょうか。神様は、白人も好まれ、黒人も好まれ、黄色人も好まれ、赤人も好まれます。世界が全体的な因縁によって動いているという思想で見るとき、歴史の発展も同じです。文明の発展史も同じです。

神様のみ旨とは、すべての文明の発展を糾合して一つのみ旨の世界、一つの統一された世界、一つの理想世界を実現することなのです。それゆえに、西欧文明が初めてアジア文明圏と接することができる動機、世界史的な動機を成し遂げるために、民主世界を主導するアメリカがアジアで全面的に責任を負ってきたのです。このような摂理史的な意義があるにもかかわらず、アジアのベトナム戦争を中心として、アメリカが強力に責任を遂行することができず、後退したがゆえに、摂理史に莫大な被害をもたらしたというのです。

今後、どのような文明時代が来るのでしょうか。春の季節文明時代が来るというのです。人類が堕落しなければ春の季節から始まったのですが、堕落することによって夏の季節から始まりました。春の季節の文明は永遠に続くことができるのです。夏の季節の文明は、なぜ永遠に続くことができないのでしょうか。結実を結ぶための調和というものは、すべて春の季節に展開するようになっているのであって、夏に展開するようにはなっていないということを知らなければなりません。種が結実するには、春の季節を経なければならないのです。ですから、今までこの堕落した世界の文明圏は、種のない文明として流れてきたので、絶対に生命に接近することができないというのです。したがって冬の季節の文明を迎えても、春の季節の文明を迎えることができないのです。

人類歴史の文明発展の流れを見れば、河川流域から発生した古代大陸文明がギリシャ、ローマ、イベリアなどの半島文明に移動していきました。この半島文明は、イギリスを中心とした島嶼文明に移り、この島嶼文明は再びアメリカを中心とした大陸文明を経て、日本の島嶼文明に戻ってきました。今この文明の巡礼は、韓国において半島文明として結実しなければならないと見るのが摂理観です。

世界文明の方向は、世界を一周しながら発達していきます。すなわち、エジプトの大陸文明、ローマとギリシャの半島文明、イギリスの島嶼文明、アメリカの大陸文明から再び西に進み太平洋を渡って日本の島嶼文明を経て、ついに韓半島文明として集結し、アジアに連結していくのです。ここで結束する文化は、高次元的文化として新世界を創造して生み出すはずです。

二) イスラエル、ローマ、イギリスが失敗した理由

半島的な地形をもっている所が世界的な文明の発祥地になりました。その中で最も代表的な所がローマです。地中海は、男女が夫婦関係をするのと全く同じ形状です。それゆえローマは、千年以上の歴史を経た今でも、世界の強国の中心国家として定着しているのです。特にローマの法律は世界的です。それゆえに「文明はローマから」という言葉が出てくるのです。世界統一もローマから始まらなければならなかったのですが、ローマがその使命を果たすことができなかったのです。

陸地と島を見れば、半島は生殖器と同じです。文明の発展は、いつも半島を通じてなされます。イベリア半島やギリシャ半島、イタリア半島など、すべて半島です。イタリア文明圏が千年を越えてもなぜ滅びないのですか。地中海は、ちょうど女性の子宮と同じです。それを占領しています。それゆえに、今までイタリアは、患難と滅びざるを得ないすべての環境を越えて、歴史に綿々と残っているのです。これが滅びるならば、人類歴史の復帰や救援による解放はないというのです。

教皇庁を中心としたイタリアが男性宮です。ドイツやフランス、イギリスが中心ではないのです。千年以上の文化背景をもっている所はイタリアです。法が変わらないのです。なぜそうなのでしょうか。イタリアは男性の身代わり、地中海圏は女性の身代わりだからです。本然的基準のことを話しているのです。男性と女性が愛することのできる環境と、ぴたっと同じだというのです。イタリアは男性の生殖器と同じであり、地中海は女性の生殖器と同じです。これが一つになるのです。この西洋において教皇庁が天下統一することのできる基準をもつことができなかったので、東洋に帰ってくるのです。

真の父母が現れて、なしていることとは何ですか。神様の愛のない死んだ世界からサタンの愛を除去して、神様の愛を通して全人類を再び生命の世界に接ぎ木するのです。そのように、復活させるための闘いをするということを知らなければなりません。イエス様が生まれたユダヤの国は、地中海を中心としています。

本来、神様の摂理は、アジア大陸を中心として出発してきました。東洋にヒンズー教を立て、仏教を立てたのです。中国には儒教を立て、シリアとかイラクのような所には、ユーフラテス川を中心としてゾロアスター教を立てるなど、宗教圏をつくりました。この三角圏内において、ユダヤ教を中心として世界を統合しようとしました。ところが、イスラエル民族の十二支派が一つになることができなかったので、サタン世界であるローマが占領しました。今、中東のすべての民族は、モーセ時代に編成された十二支派です。これが一つになれなかったのです。

歴史の発展の中心は、何が最も重要だと言いましたか。それは生殖器です。大陸に連結した半島は、男性の生殖器のようです。それで、このような男性の生殖器をまねた所は、世界文化の発祥地です。結実地になるのです。このように思うとき、イタリア半島は男性の生殖器になり、地中海は女性の子宮になるのです。完全に女性の陰部と同じでしょう。地

中海というのは、この地上における歴史上、初めて文化摂理の基準で文化の起源を統合させた所です。ローマ文明の偉大さを否定できません。法律などのローマの文化は、今でも歴史に相当な影響を与えています。

それで、イタリア半島は男性の生殖器のようであり、地中海は完全に女性のものと同じであり、それは一つになっています。それで、アジア大陸、アフリカ大陸、そしてヨーロッパ大陸を連結させる、その中心部になっているのです。

地中海は女性の子宮と同じです。イタリア半島周辺で、女性でいえば生殖器がぶら下がる位置にあるのがユダヤの国です。本当に不思議です。女性の子宮の最も深い位置にあるのがイスラエルの国です。ここで主が生まれたのです。ここで生命の根源が現れて問題になるのです。それが戻ってきて世界的版図を成し遂げて、半島を中心として地中海を経て、大西洋と太平洋を経て、その半島文化圏を中心として世界統合が展開しなければならないのです。これは、本来イタリアを中心として統一されなければなりません。

ローマとイスラエルは東西関係、ギリシャとエジプトは南北関係です。ユダヤの国がそのようになっていませんか。ユダヤの国を中心として見れば、すべて地中海を中心として受ける所です。そして、ローマを中心として完全に地中海一帯が統一されたとするならば、アジアが中心になるのです。アジアを中心として完全に一つの世界になるのです。そのようになれば、そこで東西の統一が展開したのです。東西文化の統一が展開するはずだったのですが、統一されなかったので、西の方に回って、再び東西の統一圏に向かって訪ねていかなければならないのがキリスト教の歴史です。

地理的に見るとき、ローマとユダヤの国の間には地中海があります。地中海を経ていくようになっています。イエス様が何かの手段でも使って死を免れようとすれば、免れることができる立場だというのです。またその時、イスラエル民族は、四百年間数多くの国に圧迫されてきたので、全員が民族精神によって団結できる時でした。それゆえに、時をつかんでローマに対して反旗を翻していくことができる、そのような時でした。その時は、ローマの政治体制がユダヤの国を思いのままに指揮できる最高の基準を越えて、退廃の道に向かっている時でした。歴史的な背景がそのようになっていたので、イエス様を中心にして団結さえしていたならば、その時にユダヤの国を中心として必ず問題が起きたのです。

ローマは、地中海一帯の文化圏を形成していたので、世界を支配できる背景をもっていました。イスラエルがこのようなローマと連結して世界的な基盤がつくられていたならば、世界はイエス様を中心とした一つのキリスト教文化を形成し、統一的基盤を完全に形成することができたはずでしたが、これを失ってしまったのです。イスラエルの国がローマの属国になったのは、より大きいローマにかみついているイスラエルの国だけを引っ張れば、ローマをはじめとしてすべての世界を釣ることができたからです。今日、そのような立場にいる国が大韓民国です。

ユダヤ教とイスラエル民族が一体になったとすれば、ローマの王などは問題ではなかったのです。彼らが一体となって国家を立ててローマを併合し、地中海全般にわたるローマ文明圏をイエス様の指揮のもとに入るようにすれば、世界統一は問題ありません。神様は、それを基盤として全世界を復帰し、イエス様を中心として地上天国の理想を成し遂げようとしましたが、そのみ旨が成されなかったのです。そして、数千年間死の犠牲を払い、今ついに世界的な第二イスラエル圏を成し遂げました。しかし、昔のように第二イスラエル圏のキリスト教には、地上に国がありません。それは、イスラエルがイエス様を殺した罪を贖罪する期間として、二千年間放浪しながら世界万民から虐待を受けたからです。このように蕩減の鉄則には許しがありません。

その当時、地中海文化圏を中心として、ローマ帝国が世界的な版図に号令できる基盤を築くようになったのは、サタン世界のカイン型代表国家としてローマ帝国を立てておいたからです。ここにイスラエルをアベル型国家として立て、カインであるローマ帝国を屈服させることによって国家と世界を蕩減復帰し、願った天国を成すことが神様のみ旨でした。それが二千年後に繰り返され、今日のアメリカがそのような立場にいるというのです。それでは、イエス様は死ぬべきだったのですか。

本来、神様のみ旨は、アジアを中心として世界を統一することでした。それが、ユダヤ教を中心としてイエス様を殺すことによって、その福を誰がもっていったのですか。ローマがもっていったのです。それを取り戻そうとするので、ローマを中心として再び世界を一周してアジアに行かなければならないというのです。なぜですか。ローマが福をすべてもっていったからです。ユダヤ教が受ける福をすべてローマがもっていったのです。それがローマ、イタリア半島を中心として、イギリスを中心として太平洋を渡り、アジアに行く道です。そのようにして、第二次大戦でアジアの全域を掌握しました。全体を掌握できたというのです。

本来イエス様が死ななければ、アジア大陸を中心として出発しなければなりませんでした。大陸で連結され、大陸で勝利しなければならないのですが、大陸を失ってしまったので、地中海を中心とするイタリア半島に教皇権を中心として定着しました。それゆえに、彼らが行くべき所はどこですか。大陸から半島を経て帰る所は島国です。島国へ行かなければならないのです。それで、イタリア半島を中心とした大西洋文明を経て行かなければなりません。大西洋文明とは地中海文明です。地中海文明圏を中心として、ローマ教皇が責任を果たせずに新教と旧教に分かれることによって、今まで地中海文化圏の大移動が展開されてきたのです。それで、イギリスを中心としてアメリカに連結させることによって、大西洋文化圏が形成されました。

地中海文明圏の中心だったギリシャ文明やイタリア文明は「ヘレニズム」と呼ばれ、人間を中心とした宗教形態を備えて現れてきたものです。そこに、イスラエル民族を中心として、唯一神を中心とした「ヘブライズム」が合流して、ローマで一大闘争を繰り広げて勝利したのです。それが中世紀のローマ教皇を中心としたキリスト教世界です。そのよう

な基準を中心として、キリスト教は、島嶼文明圏であり、新教を中心としたイギリスを基地として世界的に発展しました。世界的な宣教本部を設置して、急進的な発展をしたというのです。このような摂理の基盤を中心として、文明はだんだんと世界を一周し、地中海文明圏から大西洋文明圏を中心としたイギリス、それからアメリカ文明圏から太平洋文明圏を中心として再び一周して、イギリスに相当する立場の日本に渡ってきました。

イエス様がアジア圏の陸地に着陸して世界統一をしようとしましたが、追い出されることによってローマに行きました。陸地から半島に追い出され、半島から島国に追い出されながら再び世界の版図を取り戻してくるのです。それで、アメリカ大陸の新教文明圏を中心として帰還するのです。旧教文明圏として大きくなり、神様の前に反対の立場に立った旧教文明圏から新しく新教文化圏を中心として宣教事業をしたのです。宣教事業はイギリスがしました。イギリスとアメリカが宣教事業をしました。イギリス宣教会がアメリカ新教独立国家を成し遂げて帰ってくるのです。帰ってくるには、太平洋文明圏内でこれを蕩減復帰しなければなりません。こちらは失敗したのです。

イタリア半島からローマ教皇権を中心として統一天下を成し遂げなければならないのですが、大陸の版図を中心として吸収できる基盤をすべて築いたのに、なぜここで神様のみ旨を成すことができなかったのですか。ローマ教皇庁が分からなかったというのです。キリスト教を中心とした教皇庁がしなければならないこととは何かというと、ローマと教皇庁、キリスト教を犠牲にしてでも世界のために生きることです。彼らは、世界のためにいるという事実を知らなかったというのです。観が違ったのです。

ユダヤには、国があり、イスラエル民族という選民がいたにもかかわらず、イエス様の体を殺したことによって、キリスト教は霊的救援だけをした、ということを知らなければなりません。国がないので殺されたのです。アジアで天国が成されるはずでしたが、反対に太陽神としてヒューマニズム、人本主義思想のローマから逆に来て、太平洋に帰ってくるのです。太平洋文化圏時代が来るのです。歴史がただそのまま来たのではありません。これをすべて解いておいてこそ、このようなすべての人、霊界の先祖を解放させることができるのです。真の父母が来るので、それをすべて教えてあげて解放するのです。

堕落はどのようになったのですか。エバが先に堕落して、次にアダムを堕落させました。天使長を中心としてエバが一つになって、それからアダムを堕落させたのです。復帰過程において、イギリスは女性国家です。それゆえに、エリザベス女王時代に世界を制覇したのです。また女王時代がみ旨を信奉することができずに、女王によって始まったことが女王によって連結され、女王によって滅びます。イギリスは、海の中にある島国です。大陸は男性を身代わりし、島国は女性を身代わりします。いつも島国の人は大陸を思慕するでしょう。女性が男性を思慕することと同じです。

それゆえに、イギリスは女性国です。その女性国を通してアダム国家が出てくるのです。女性を通してアダムを滅ぼしたのですが、女性の立場のイギリスを通してアダムが復活す

るのです。それがアメリカです。それゆえに、イギリスは息子の支配を受けなければなりません。母は、息子の支配を受けなければならないでしょう。そのような立場で、キリスト教の文明をすべて祝福して結実したのがアメリカです。

三) アメリカは二十世紀のローマ国家

ヨーロッパ大陸ではアメリカを「新天地」と呼び、最初にこの新天地に希望を抱いて移民した人々は、信仰の自由を求めて神様に侍るために来た人々でした。旧時代の虐政のもとで完全に希望を失い、たとえ大西洋の海の上で生命を失うことがあるとしても、ひとえに私の心を尽くして神様に仕えることができる所へ行こうと、悲壮な思いで出発したのです。メイフラワー（May Flower）号という小さな帆船に乗り、五十七日間の難しい航海の末にアメリカのニュー・イングランド（New England）地方に上陸しました。その人々がすなわちアメリカの先祖、ピルグリム・ファーザーズ（The Pilgrim Fathers：清教徒団）でした。

歴史的に見れば、二千年のキリスト教史において、西欧の新教徒が新教という体制を整えて、新しい信仰の自由と信仰を中心とした理想の国を求めて大西洋を渡って成し遂げた国家であり、集合民族を代表した新教独立国家がアメリカです。昔、旧教を中心としたローマ教皇庁があったように、アメリカは新教を中心とした新しい次元のローマ教皇庁型です。アメリカがそのような立場にいるので、神様が六千年間このアメリカを立てようとしてきたのです。これをどのように有終の美として飾るかということは、神様にも、キリスト教を代表したイエス様にも、歴史的な宿願とならざるを得ません。これを終結させなければならないのが先生の使命です。

アメリカは、宗教の自由のために、迫害の矢を避けて大西洋を渡って集まった人々がつくった国であり、ピューリタン思想が建国理念として立っているということを知っています。そして神様は、世界の人々をここに集めてきたのです。また、この国に物質的な祝福をしてくださったのです。今後、サタンが下部構造を中心として、経済というものをもって打つ時が来るので、それに対備してアメリカに莫大な経済的物質の祝福をしてあげ、この国とこの民族をいかなる民族よりも豊かに暮らすようにしたのです。キリスト教文化圏を中心として、世界のいかなる国もついてくることができない最大の権限を与えられた国は、アメリカ以外にありません。

ローマが滅びたのは、何によってですか。神様は、世の中を救おうとされたのに、彼らはローマを主張してきたというのです。ローマを犠牲にして、来られる主の前に祭物として捧げて世界統一を夢見なければならないのにもかかわらず、ローマは一方通行を願ったのです。しかし、神様は、両方通行を願われます。ですから、ローマでキリスト教の革命が起きるのです。新教を起こし、新しい枠組みを中心としてこれを切ってしまい、曲がってしまったとしても新しい芽を中央に立てようとするのです。反対して、すべて捕まえて殺すので、ここから新教が出てくるのです。

このようにして、キリスト教のピューリタン（Puritan：清教徒）たちが渡っていって移

植したのではないですか。ヨーロッパの新教の熱血分子たちが、すべて大西洋を渡ったのです。ピューリタンは、自分が生きるために行ったのではありません。信仰ゆえに、命を失う覚悟で大西洋を渡ったのです。死を覚悟するところにおいて、神様の摂理の焦点が展開されるのです。新教のためにピューリタンが来て、二百年の歴史を経て初めて新教独立国家を編成したのです。これが、アメリカの歴史です。ケネディ大統領までは、大統領の中で旧教の人が一人もいませんでした。一九六〇年代までは、国連機構を中心として左右が一つになる時であり、前後、上下が一つになる時であるがゆえにそれを賦与したのです。

新教徒たちは、ローマ教皇庁から離れて新しい神様の世界を渇望しました。特にイギリスの清教徒、新教活動家たちは、イギリスは新しい神様の世界建設に適合しないと主張し、激しい迫害の中で新世界に向かって出港したのです。彼らが発見した新世界がアメリカ大陸です。その当時、多くの新教徒たちがローマ教皇庁から離れていき、清教徒であるピルグリム・ファーザーズがメイフラワー号に乗って、多くの逆境にもめげず、神様に従うことを願いながら大西洋を横断してたどり着いた所がアメリカです。

その後、イギリス人、フランス人、あとで敵国になったドイツ人など、ヨーロッパ全域で様々な国の人々がアメリカに集まり始めました。ヨーロッパの多くの人々が大西洋を横断してアメリカに移民してきたのち、インディアンと闘って西部で領土を拡張していったのです。

旧教時代に、カトリックの迫害を受けた新教徒たちが大西洋を渡ってきました。皆さんの祖国、皆さんの国の建国理念を見れば、皆さんの先祖は、死を覚悟して大西洋を渡ってきたというのです。それで、この地に上陸して建国する時は、神様が望んだ理想天国、み旨の世界を成し遂げようとしました。そのような建国思想が、今はどのようになったのでしょうか。自由主義になって、創造論を論じないで進化論が正しいとしています。キリスト教文化圏の世界において、教会に対して免許を取り消すという、このような切迫した最後の断末魔的な現実に置かれていることを皆さんは知らなければなりません。

皆さんの先祖が大西洋を渡ってくる時の冒険、独立のための戦争で死を覚悟した冒険の道、インディアンと闘った姿のように、様々な冒険の道を断行していくという決意をしなければならない時だと思います。死を覚悟して大西洋を渡り、独立戦争の時は命を捧げて闘いました。神様のために命を捧げる決意をして進んでいったという事実を知らなければなりません。皆さんの先祖が大西洋を渡る時、ある指導者がいたのではないのです。ただ神様に従ってきたのです。また、独立戦争の時、弱い兵士を率いて闘う時も神様に従って闘いました。神様をキャプテンとして侍り、天と共に祈祷し、涙を流して従ってきたという事実を知らなければなりません。

南・北米はキリスト教文化圏です。旧教と新教は兄弟です。今、このままアメリカがアジアに来れば、兄弟を無視して太平洋を渡り、より遠い距離にある我が国にどろぼうしに来たと考えるのであって、手助けしに来たと考えることはできません。アメリカ人がアジア

に来る時、アジアの人々はそのように考えるのです。「兄弟たちが一つになれずに闘って、すべて捨ててきた者たちが、私たちの所に訪ねてきて手助けするとはどういうことか」と、このように考えます。どろぼうをしに来たと思うのです。

神様が御覧になる時も「アメリカ人、この精神が腐った者たち」と言われるのです。太平洋を渡ってアジアに行っても、怨讐の芽が生えているというのです。日本は経済的な大国であり、中国は人口の大国です。ソ連は思想の大国なのですが、それを満たすためにそれ以上のものを求めているのに、アメリカがそこに行って何を手助けするつもりですか。ですから、どろぼうをしに来ると思うのです。

アメリカの最も近い兄弟関係は南米であり、一つは旧教で一つは新教です。これを差しおいて、アジアで何をしても、日本とは怨讐であり、中国が怨讐であり、ソ連が怨讐です。太平洋圏内にあるアメリカを隣近所の人とは見ず、異邦だと思っているのです。アメリカがいくら親交を結ぼうとしたところで、日本で問題が起きればすべて倒れるというのです。愚かだというのです。将来を考えれば、南・北米に乗っていって日本を抱かなければなりません。アジアを抱かなければならないのです。

新教と旧教が闘うと、新教の教徒たちは大西洋を渡ってアメリカへ行き、新教の独立国家を建てました。これは神様が建てたのです。それでアメリカは、二百年間でヨーロッパのすべての精髄を抜き出してきました。人脈から信仰の骨髄をすべて抜き出し、この太平洋を相対として、女性文化圏を中心として、キリスト教文化圏を中心として、二百年間で二千年の歴史をもう一度新しく結実させたのです。

サタンは、アメリカと日本が一つになることに反対し、アジアの連結にも反対します。サタンは、経済問題に執着する外的存在です。今、アメリカが経済問題を念頭に置いて、アメリカの法を中心として、日本が入ってくることができないように牽制政策をとっています。それで、太平洋にあるすべての国、日本と韓国、マレーシア、インド、台湾に対してアメリカがブレーキをかけようとします。この危機一髪の終末時代に、アメリカが大きな汚点を残す時点に立ち入っているという事実を知らなければなりません。

二　島嶼文明がもつ意味

一) 最大の海洋島嶼国家であるイギリス

古代人類の文明は、大陸で発生しました。エジプトのナイル川の川辺で胎動した人類文明は半島文明に変遷して、ギリシャ、そしてイタリア半島で地中海文明圏を成し遂げました。その半島文明は、再び島嶼文明に移され、島国のイギリスを中心として大西洋文明圏を形成しました。そして、ついにイギリスの島嶼文明が大西洋を渡ってアメリカ大陸で現代文明の奇跡を起こし、太平洋文明圏を形成しました。歴史の流れはここで終わらないのです。

この文明圏は、太平洋を渡ってイギリスに相当する島国の日本で新しい島嶼文明の花を咲かせて、イタリア半島に該当するこの韓半島で、昔のローマ文明に相当する人類総和文明を成し遂げて、アジア大陸に連なる一つの

世界を成し遂げ、新しい統一文明圏を形成しようとするのが神様のみ旨だということを私はよく知っています。

神様が世界文明圏を、西欧大陸、ナイル川を中心として地中海を経て、ローマを経て、イギリスを経て、アメリカ大陸文明圏を形成し、それを太平洋文明圏として移すようになるのです。そのようにしようとすれば、島嶼文明を糾合して半島国、すなわち地中海文化圏を動かしたローマに該当する半島地域がなければならないというのです。それが正に韓国だということを皆さんは知らなければなりません。初めて、この三千里半島を中心として、西欧文明の最後の結実とアジア文明の最後の結実を成して、神様の前に捧げなければならないというのです。

大陸を中心とした神様のみ旨は、ユダヤ民族が失敗することによって、イタリア半島を中心として世界を制覇しようとして失敗し、イギリスを中心とした島嶼文明を中心として成そうとして失敗し、それをアメリカ大陸が受け継いだのですが、これが反対に帰ろうとすれば蕩減を経なければならないのです。島国を中心として蕩減しなければならず、半島の国を中心として蕩減しなければならないのです。そのようにしなければ、大陸に行くことができません。

摂理の版図は、ローマ、イタリア、スペイン半島を越えて、島嶼文明圏から大陸文明圏に移動するのです。イエス様を中心として、アジア大陸から出発したものが半島を越えて、島を越えて、再び大陸に来たのです。ローマの半島も失敗して、島国のイギリスも失敗して、アメリカも失敗したのです。すべて失敗しました。これをどのようにするのですか。

西洋世界を見るとき、アメリカはイギリスを通して生まれたので息子と同じです。ところが、息子と同じこのアメリカがイギリスを支配するというのです。そのような時になれば、西洋世界の終わりの日が来る、このように思います。それで、最大の海洋都市圏であるイギリスと天使長国家であるフランス、この三つの国が一つになるのです。ここで海洋都市が州になり、アメリカが州になり、その次には天使長国を引いて陸地まで占領する運動が展開するのです。それが第二次世界大戦だということを知らなければなりません。エバ国家がするのではなく、アダム国家がエバ国家をコントロールして、天使長国家をコントロールしなければならないのです。そのようになってこそ、陸地に上がっていくというのです。

アメリカを中心としてイギリスとフランスが一つになり、一つになればその次には陸地に上がっていくのです。それで、陸地を占領するための第二次大戦が起きたのです。アメリカが、イギリスとフランスを中心とした勝利圏をもち、第二次大戦によって全世界をコントロールできる基盤をもったという事実を知らなければなりません。

復帰の完成は、分かれた三人と国が一つになることを意味します。それが原理的観点です。そのような理論がいかなる所でも適用されるというのです。ヨーロッパを中心として見るとき、アダム国家はどこですか。自由体制全体を中心として見るときはアメリカです。なぜですか。イギリスが生んだというのです。

イギリスは女王時代に繁栄しました。十六世紀のビクトリア女王時代に、海洋都市を開拓して世界の海洋圏を掌握し、アメリカを植民地として占領したのです。

イギリスは、どのように世界の海洋圏を握ったのですか。海洋国家であるイギリスは、エバ国家です。それは女性国家であり、島国なので世界の海洋圏を開拓してコントロールしたのです。そして、アメリカを植民地としました。イギリスの息子に当たるのがアメリカです。理想的夫を誰が生まなければならないのかといえば、エバが生まなければならないのです。そうでなければ、理想的夫が出てこないと考えるのです。

二) イギリス文明と日本文明の差

現代二十世紀の民主主義制度は、すべてイギリスから始まったのです。皆さんが知っているように、イギリスのエリザベス一世が海洋政策を強化し、アジアはもちろん、アフリカをはじめとして全世界の至る所を占領しました。それは神様がさせたのです。

イギリスは島国なので、バイキング等の侵略によって訓練をたくさん受けました。いつも攻撃を受ける立場だったので、訓練を多く積み、いかなる民族よりも海洋文化を強化した民族です。その時、スペインやポルトガルの海洋圏がとても強い立場にいたのですが、それ以上の基準を中心として、エリザベス一世が一五九三年から一六〇三年の期間に強化運動を行い、海洋力を強化させたのです。

イギリスは、島嶼国家としてノルウェーやスウェーデンのバイキングたちにいつも攻撃を受けたので、海に対する関心をもって海洋防備のために訓練してきました。海洋圏を握らなければイギリスは存続できない立場だったので、エリザベス女王を中心として海洋圏制覇の政策を強化したのです。それは、神様の摂理にすべて一致したものです。

スペインのような国が南米を支配して、北米をイギリスが支配する時、スペインに対して外的には友好的に振る舞いながら、内的には欺く政策をしてきました。そのことは、みな歴史を学んで知っているのではないかというのです。スペインが南米を制覇しました。それでイギリスは、スペインが北米まで制覇するのを防ぐために様々な海洋政策を強化したのです。

イギリスは小さな国です。それが「五大洋六大州に日の沈まぬ国」と大見得を切っていたときは、海洋を中心として盗みを働くパイレーツ（pirate：海賊）精神をローマから受け継ぎ、すべてを占領したのです。神様の摂理と連結させてみるとき、世界を早く救う作戦が神様の摂理観なので、イギリス人を使うのです。ところが、そのような観に一致できるイギリス国民になることができずに、自分を中心とした方向に分かれました。それで、今イギリスが孤立しています。

イギリスが世界の版図を築くのは、ローマの文明を受け継いだからです。ローマがイギリスを占領する前までは、人々が一年に一度も入浴をきちんとしなかったのです。それは野蛮人でしょう。寒くてぞくぞくするので入浴できなかったのです。そのようなイギリス人たちは、海賊団の後裔たちなのですから、いつ入浴する暇がありますか。そのイギリスがローマの文明を受け継ぎ、海洋文明圏を中

心として世界版図を拡大したのです。世界を支配しなさいというのです。「お前、島国が世界を支配しなさい！」、それが神様のみ旨です。

神様は海の主人でもあり、陸地の主人でもあります。それが象徴的にすべて合わなければできません。それで、そのような姉妹関係をもつようになりました。日本は、今後すべてのものをもって大陸に移動します。今、日本が願っているのは、移民政策を通して五千万人以上を外国に送り出すということですが、それをすることができなければ、五十年後、百年後には大変なことになると話しています。今は、イエス様がメシヤとしてイスラエル民族に降臨した時とは異なる状況に置かれています。ローマ帝国の時や大英帝国の時とは異なる状況だというのです。

大英帝国は、ヘンリー八世の離婚に対するローマ教皇庁の処罰措置を無視して、ヘンリー八世の主管のもとで、イギリス旧教（聖公会）を創始するところから始まります。この時、神様の中心は、神様のみ旨から外れて腐敗したローマ教皇庁があったイタリア半島から、聖公会が復興する島国イギリスに移動します。エリザベス女王が統治した大英帝国の全盛期の時は、神様のみ旨によって海を通した領土拡張政策を繰り広げ、五大洋六大州を治めて神様の祝福をたくさん受けました。その当時、アメリカも大英帝国の手元にありました。大英帝国の繁盛は、聖公会の復興であり、これはヨーロッパ全域において、ローマ教皇庁に対抗する新教運動を拡散させる原動力になったのです。

イギリスがどれほど悪い国ですか。イギリスは海賊の根拠地です。そうでしょう。一時世界を制覇したときも、帆船に乗って海に出ていき、銃刀で襲撃して乗っ取ったのではないですか。海賊団です。そのようなことも、神様を動機としながら宗教版図をつくっていったがゆえに滅びなかったのでしょう。そうでなければすべて滅びたのです。

エリザベス女王は、新教支持者です。ウェストミンスター信仰告白三十三カ条により、エリザベス女王がカルヴィン主義思想を吸収できる基盤を築き、海洋圏制覇という政策を立ててスペインが海洋圏に介入できないように基盤を築いたのは、すべて神様のみ旨です。

イギリスのエリザベス一世は、一五五八年から一六〇三年までの約五十年間の在位中に何をしたのですか。海洋を開発しました。海洋圏を握る民族にならなければ世界を支配できないということを既に悟っていたというのです。神様は、どの国よりもイギリスを訓練させたのです。

当時、海洋を舞台として、全世界に広げることができる基盤をもった相対国であるイギリスに宣教本部を設置するようにして、キリスト教思想を伝播させてきました。イギリス自体は神様のみ旨に対する価値は知りませんでしたが、植民地を拡大する立場にいたので、イギリスの主権が支配する所では、背後でキリスト教が思想的に支えるようにしてきました。

母の国がイギリスです。なぜ母の位置ですか。大陸が夫ならば、海の島、島国は女性を

象徴します。島はいつも大陸を慕うのです。「いつ行くのか。いつ来るのか」と慕うのです。このように思う時、それが地の果てと果てである極東において、イギリスの反対であるアジアにそのような国が出てこなければなりません。西洋に出てくれば、反対のアジアに出てこなければなりません。それが日本です。

日本は、サタン側のエバ国家です。ですから、サタン側のエバ国家は、天の側のエバ国家からすべての福を対等に分けてもつことができます。キリスト教がアジアで成功できず、逆にヨーロッパを回り、ローマを経て、イギリスを経て来るのです。このように反対に来るのです。ローマに相当する半島が韓半島であり、地中海に相当する海と島が日本であり、ヨーロッパ大陸に相当するのがアジア大陸です。相対的に一周して入ってくるのです。これが、お互いに出会う時になったので、学者や政治家たちは、「太平洋文明圏時代が来る」と言うのです。

日本は、イギリスと同じです。イギリスの文明をそのまま受け継いだのが日本です。イギリスの文明をアメリカが受け継いだように、アジアでは日本がイギリスの文明をそのまま受け継ぎました。

イギリスの対になるのが日本です。日本の文明は、イギリスの文明を受け継いだのです。キリスト教文明のすべてのものを抜き出して、核心だけを選び出して日本の文明をつくったのです。これがサタン国家です。キリスト教が西洋に行くことによって、西洋文化圏を誰が支配したのですか。サタンが支配したがゆえに、西洋文明が入ってきた日本を中心として見る時、これは、イギリスに該当します。日本では車は左側通行でしょう。日本の全盛期は、百二十年間です。一八六八年に明治維新が出発し、それから百二十年を中心として一九八八年の昨年までに決着させなければならなかったのです。

私が日本を選んであげ、ドイツを選んであげました。日本をイギリスの代わりとして立てたのです。日本の文明は、イギリスの文明を取り入れたのです。イギリスのすべての行政分野を持ち込み、ドイツの軍隊のものを取り入れたのです。昔、そのようにしたのです。それゆえに、車はイギリスも左側通行であり、日本も左側通行です。百二十年前、明治維新の時、日本がイギリスの文化をすべて取り入れたのです。それゆえに、先生が日本を摂理の中に立ててあげたのです。イギリス、アメリカ、フランスが責任を果たせないからです。摂理史で失敗した者を再び立てて使う法はありません。

エバであるイギリスは島国です。島国は陸地を慕うのです。ちょうど女性の立場です。アメリカは、エバが生んだ男性です。そうでしょう。フランスは闘ったから怨讐です。この三つが神様の前に、キリスト教文化圏を中心として一つにならなければなりません。サタン側は何ですか。日本です。日本の文明は、サタンが神様のものをすべて奪ってきたのと同じように、天の側のイギリスの文化をそのまま奪ってきた立場です。盗んできたのです。それで、日本も自動車が左側通行です。

日本は、イギリスのまねをしました。西洋文明のまねをしたのです。法律はローマのものを、軍隊はドイツのものを、文化はイギリスのまねをしたのです。そして、日本は自動車が左側通行ですか。それはイギリスと全く同じです。サタンは、何でも神側のものを同じようにまねするのです。ですから日本の文明は模倣文明です。神様が祝福したその国を中心として模倣して、それを奪ってきたのです。先進世界のものを奪ってきたのです。

それは神様のためではありません。本来は、先生が認めたエバ国家として帰ってきて、それを神側で使用するためであって、日本国のためではありません。そのように見れば、歴史は蕩減原則の原理圏ですべてなされるのです。

三　エバ国家としての日本の使命

一) 日本はエバ国家である

摂理の完成とは何ですか。アダムとエバが完成して、その周辺の三人の天使長が一つになるはずだったのです。今、どのようになっているのかといえば、アメリカ、中共、ソ連が三人の天使長です。

アダムは韓国、エバは日本、これが残っています。本然の世界は、アダムとエバ、そして三人の天使長が一つになる世界です。ところが、天使世界とエバが一つになってアダムを追放しました。本来のエデンにおいて、三人の天使長とエバが一つになってアダムを追放したのです。

これを蕩減しようとするなら、第二次大戦で日本とアメリカとドイツを中心として一つになるべきでしたが、それができなかったのです。それで今、再蕩減しなければならないのです。必ずそのようにしなければなりません。アジアを中心として、日本と韓国は怨讐です。この怨讐を一つにしなければならないのです。

アダム国家とエバ国家を中心として、先生がこれを再び奪還する立場にいます。復帰時代に来て、エバを中心として復帰されなければならないので、エバ国である日本がすべての経済圏をもつのです。したがって、アメリカも日本が必要であり、中共も日本が必要であり、韓国も日本が必要だというのです。競争世界で、誰が先に引き寄せるかという闘いをしているのです。先生はそのことを知っています。それゆえに、今回交差結婚をさせて、完全に韓国と日本を結んでおいたのです。このように一つになったことに対してアメリカは反対せず、中共も反対せず、ソ連も反対しなかったのです。

今、先生が日本をアメリカと一つにして、中共とも一つにして、ソ連とも一つにしました。それから、アメリカと日本と韓国を完全に一つにし、彼らを教育しなければならないのです。日本はエバとして、カイン、アベルを抱いてお乳を飲ませなければならないのですが、双子にお乳を飲ませるのと同じ役割をしなければならないのです。自分のお乳と血と肉をすべて供給しなければなりません。そして、生命を与えるのです。真の生命、真の愛、真の血統を連結するのです。日本がそれをするのです。

今、皆さん自身を中心とした成功や目的を考えてはいけません。日本の成功を要求するのは、全世界の成功を求めるためだからです。

皆さんだけでも団結して、日本に対する天的復帰の使命を遂行するならば、今後二十年も必要ありません。その使命を果たすためには、休む暇もなく祭物を必要とするのです。祭物は、主観をもってはできません。全体に対するにおいては、神様を中心とした主観をもって存在の位置を決定しなければならないのです。これが、祭物の使命です。祭物になるためには、絶対に自らの主観を前面に立ててはいけないのです。

皆さんは、東京で最も難しい所に責任を負うことができる主人公にならなければなりません。また日本統一教会の最も難しい位置に立つことができ、難しいことに責任を負うことができる人にならなければなりません。そうでなければ、日本が最も難しい国家的な位置に置かれるようになります。十年、百年、私たちの目的を達成するためには、限りなく前進しなければならないのです。自分一代で成し遂げることができなければ、二代、三代の子孫を通してでも必ずその目的を達成しなければなりません。世界的な波が押し寄せるとき、その中に飛び込む人の数によって民族的な勝利が決定するのです。

統一教会の食口たちは、日本の統一教会と韓国の統一教会が、どのようにすれば両国間に残っている歴史的な国家的感情を超越して兄弟のような心情圏をつくることができるか、ということを考えなければなりません。これが最も重要なのです。ここで日本や韓国という国を介在させて考える立場に立った場合には、神様が志される新しい神様の国をつくりあげることができないのです。そのような立場で見たとき、韓国と日本の食口たちは、新しい国家復帰という目標を定めて、神様が尋ね求めてこられたその国を全体的に復帰する時まで、一体となって推し進めていかなければなりません。これが、統一食口の世界的使命です。

韓国と日本、韓国の統一教会と日本の統一教会が一つになって国を復帰した場合、二つの国民が結びついたその伝統は、今後の歴史過程において様々な国の模範となり、伝統的基盤になるはずです。したがって、この伝統をどのようにしてでも、清い真の伝統として神側に立てることが、今から成すべき日本と韓国の統一食口の使命です。

先生は、日本の誰よりも日本人を愛しています。「日本の将来はこのようになるはずだ」と心配し、中国に対しても心配してきました。アメリカはこのようになると心配し、ドイツはこのようになると心配してきました。したがって、韓国に生まれたからといって韓国人だけを愛する先生ではないのです。日本人も先生の力が必要です。それで、日本人までも先生を神様のように愛することができる基準にまで押し上げなければならない、というのが先生の考えです。

神様は、日本の父母が愛を受ける以上の立場に立たずしては、その国の家族になることができないのです。それ以上にならなければなりません。極は極と通じるのです。私たちは、そのような活動をしなければならないのです。メシヤは絶対に必要です。特に日本を中心として、世界万民がメシヤを迎えることができる基盤を、他のいかなる国より先に日本民族が団結してつくった場合には、天国で称賛を受ける日が来るはずです。したがって、

どのようにしてでも悪の主権を脱皮して天の善なる血統を私たちは残さなければなりません。

先生を中心として、アメリカと世界各国で力を尽くすようにして、日本と共同作戦のようなものもさせています。それは、日本の助けになることです。三年間、真心を尽くして万物と実体と心情を一つにしなければなりません。アダム国家の先生が成した勝利の基台を復帰する基台をつくらなければ、日本が「エバ国家としてこのような使命を果たした」と言うことのできる条件が成立しません。イエス様の三年路程において、エバを迎えることができなかったことを再び国家的基準で蕩減することも、日本の統一教会がしなければならないのです。

日本のエバ国家という名称を中心として見るとき、エバはお乳を搾って息子に飲ませなければならないのです。アベルとカインを食べさせなければならないのです。食べさせて育てなければなりません。したがって、エバは父を愛する心をもち、その父は神様を愛する心をもって、限りなく愛さなければならないのです。限りなく愛するということは、息子、娘よりももっと愛することができる位置に立たなければならないということです。

そのような血統的因縁によって、ここで再び父の精子を受け継いで、赤ん坊の種を受けて再び生む運動をしなければなりません。しかし、大きくなってから再び生むことはできないので、接ぎ木しなければならないのです。

二) 日本をエバ国家に選んだ理由

韓国の文先生が、日本をエバ国家に定めたことがなぞです。日本には、文先生を尊敬する学者がたくさんいるのです。東京大のある有名な学者が「先生、なぜ日本がエバ国家なのですか。気分が悪いです」と言うので、「何年かのちに、そのようになっているかいないか見ていなさい」と言ったのです。

日本がエバ国家に選択されるという原理はありません。サタンが最も貴重なものを握ったがゆえに、やむを得ず神様は、サタンのしっぽをつかんででも闘い、奪ってきて本来の状態に返さなければならないのです。それが蕩減の道です。蕩減は反対に回るのです。ですから、神様、アベル、カイン、エバ、アダム、サタンです。人間が堕落しなかったならば、本来上から下りてきたのです。しかし、サタンがこれを占領してすべて失ってしまったので、神様はやむを得ず反対側からアベルを中心として上がっていったのです。

第二次大戦以後、キリスト教文化圏が責任を果たさず、このような状況になってしまったのですが、誰がその責任を負わなければならないのですか。私のために準備した神様の苦労は、私が責任を負わなければならないのです。それで、廃虚になった日本をエバ国家に選んだのです。日本が四十七年間で世界の経済大国になったのは、日本が優秀でそのようになったのではないのです。エバ国家に選んだがゆえにそのようになったのです。エバが失ってしまった万物を取り戻すことができる総合基地となったので、日本が世界的な経済圏をつかんだのです。ドイツがそうであり、アメリカがそうです。

神様が最も愛するイギリスとアメリカとフランスをサタンが握り、サタン世界の国々は一番下の僕の僕の位置に立つようになるのです。それで、文総裁は、捨てることができないので、仕方なくこの怨讐国家を訪ねていくのです。悪魔の魁首のように振る舞い、天の国や天の世界に反対したそのしっぽを訪ねていくのです。サタンが頭を握ったので、どん底を訪ねていかなければならないのです。それゆえに荒野に行って、サタンが最も好む日本をエバ国家に選んだのです。仕方がないというのです。

先生は天国を代表し、神様を代表して立ったアダム国の代表者です。そのような位置に立てば、エバ国の代表者を探し出さなければならないのです。絶対的に従うことのできる国を復帰しなければなりません。それは何ですか。イギリスを身代わりした日本です。サタンが神様の愛するものを奪っていったので、反対に私は、サタンが最も愛するものを奪ってくるのです。それが日本とドイツです。

イギリスは、サタンがすべてもっていったので、仕方なくサタンが最も愛するエバ国家を奪ってきたのです。蕩減復帰しなければなりません。サタンが最も喜ぶ偶像商の長男アブラハムを奪ってきたと同じように、日本をイギリスの身代わり、アメリカをアベルの身代わりとして奪ってきたのです。彼らを誰が立てるのですか。神様が立てるのではありません。私が立てます。私が立てたので、私が取り戻してこなければならないのです。

私が日本を立てたので、日本をイギリスができなかったエバ国家にしなければならないのです。そして、最も怨讐国であるドイツとフランス、この四大国が一つになるようにしなければなりません。母と父が一つになり、息子と母が一つになり、兄と弟が一つになるのです。

今後、世界の経済圏は、アメリカでもなく、ドイツでもなく、日本が握るというのです。なぜですか。日本がエバ国家だからです。それで、天使長国家であるアメリカも日本に従っていかなければなりません。サタン側の天使長、カインが誰かというとドイツなのですが、ドイツも日本の影響を受けなければならないのです。それで、今後、世界のすべての富が集まる所が日本です。

先生がエバ国家に定めてあげなかったならば、日本は既にぺちゃんこになっていたのです。雑多な神様を信じる民族、いわしの頭も信じる日本ではないですか。唯一神をあがめるキリスト教の伝統から見るとき、多くの神様をあがめることはサタンにも劣ります。そのようなものをエバ国家に選択したのです。神様の復帰の愛の基準があるので、そのようになったのです。そうでなければ、かわいそうな民族になっていたのです。

ドイツと日本はそうです。それは不思議でしょう。人類に被害を与えた民族が、どうして再びこのような短い期間に祝福を受けて万民がうらやむほどになったのですか。それは、文先生の内容を知らなければ解く道がありません。日本の人々も、そのようなことを知りません。

第二次世界大戦を中心として見るとき、日本はアジアにおけるエバ国家です。サタン側のエバ国家です。「八百万の神」というのは、

唯一神とは関係がありません。それはいわしの頭まで崇拝する民族だからです。「八百万の神」と言うのですか。これは、サタン側の民族であり、サタン側のエバです。天照大神とは何ですか。女性です。ですから、エバ国家です。サタン側のエバ国家を代表しています。このエバ国家は、西洋文物が摂理圏に帰ってきて、アジアで最初に経ていく所であることを（サタンは）知っています。イギリスからずーっと島に帰ってくるということを知っているのです。

日本は、イギリスからすべてのものを伝授されました。西洋文明から、アメリカから伝授されました。伝授した所は二箇所でしょう。今の経済問題は、完全にアメリカから継承しました。これは第二次世界大戦以後からです。それ以前、戦争の時は怨讐でした。それで、サタンは、サタン側はよく知っています。

韓国という国を生かそうとするなら、アダム国家の前にエバ国家がなければならないのですが、どこがエバ国家になるのですか。キリスト教が反対したので、イギリスをエバ国家に立てることができないのです。ですから、サタンが最も愛した怨讐の国を立てるしかありません。サタンがアメリカをすべて抱いているので、一番あとが日本です。サタンがキリスト教文化圏をすべて自分の側にしたので、天の側がそれを取ろうとするとすべて反対するのです。それで仕方なく日本をエバ国家に選ぶのです。イギリスとちょうど同じだというのです。

先生は国をもっていませんが、先生個人がアダム国家韓国の代表であり、来られる主の国の代表としてエバ国家を率いていかなければなりません。日本はエバ国家であり、島国イギリスとぴったり同じです。アメリカをアベル国家とし、ドイツをカイン国家として、この四大国を再び編成して天の前に立て、失ってしまったものを取り戻したという条件を立てなくては、先生がアメリカから韓国に帰ってくることができないのです。

日本が世界的なお金を集めたのは、エバが失ってしまったものを取り戻すためなのです。そのお金は、日本だけのものではありません。アジアを通じて世界のために投入しなければ、日本はぺちゃんこになります。今年が境界線です。境界線にある日本を滅亡させたくないので、このようなことをするのです。先生にお金が必要だからではありません。日本のためです。

日本には今、二千四百兆のお金が残っていて使い道がないのです。お金の使い方を知りません。日本は、もうけ方しか知りません。使い方は知りません。女性なので、ポケットをつくってそこにお金を集めておいて、嫁いでいった夫の家ですべて取り出して分けてあげなければならないでしょう。文字どおりエバ国家なので、そのようになっています。

日本が特別にエバ国家として立てられる前に、日本の女性が世界で最も苦労してきたのではないですか。日本の女性は、男性に蹂躙されたり、殴られたり、姿勢も自由にできないほどの絶対服従の歴史過程を経てきました。特に武家の女性は悲惨なのです。言い表すことができないほど悲惨です。まず、エバ国家の象徴である日本の天照大神も、エバのことをいうのです。天照大神は女性ですか、男性ですか。したがってその国は、霊肉共に女性なのです。日本人は一方しか見ません。女性

は一方だけ見ます。夫をもらった時は、夫以外には考えません。目も鼻も耳も口も触覚も、すべて夫に向かいます。

エバ国家である日本についていかなければならないアメリカは、日本を手放すことができないのです。ぴたっとそのようになっています。貿易不均衡になって、すべてエバ国家の所有権を失ってしまったでしょう。アメリカがこの世界のすべての物質を所有してきました。これが、どこへ行くのかといえば、アベルを通して、カインを通して、エバを通して、母を通して、父を通して神様に帰るのです。

西欧は天使長です。天使長が天の側のエバを奪っていったので、アジア文化圏を代表した日本が西欧文物をすべて奪ってきたというのです。

先生が日本をエバ国家に立てなければ、あのような国になることができなかったのです。悲惨な国になっていたのです。キリスト教文化が先生を受け入れる場合には、イギリスがエバ国家です。アダム国家は韓国です。イギリスがエバ国家であり、フランスが天使長国家であり、ドイツが（サタン側の）アダム国家として自動的に一つにならなければならなかったのですが、彼らが神様を拒んで反対しました。それゆえに、怨讐が最も愛するエバ国家を奪い、ドイツ男性国家を奪ってみ旨の中に立てたのが統一教会を中心としたアダム国家、エバ国家、天使長国家だということを忘れてはなりません。したがって、日本を祝福したのは、日本のためではありません。世界のためであり、統一教会と韓国のためです。韓国統一のためにその祝福を用いなければ日本は滅びます。

世界最高の知性人を、日本を中心として結ぶのです。日本において、左翼と右翼がみな滅びるようになっています。アメリカは、精神を中心とした宗教圏内の代表ですが、完全に精神が欠如し、ソ連は物質の理想的国家を追求したのですが、完全に物質が欠如しました。反対になりました。神様がそのようにさせました。エバ国家には、物質が滅び、精神が滅びたこれらを中心として、外的な体と内的な生命のためにお乳を飲ませなければならない責任があります。これを母が連結しなければならないのです。アメリカも生かしてあげなければならず、ソ連も生かしてあげなければなりません。

今、韓国情勢を見れば、主人がいないのです。サタン世界には主人がいないのです。アメリカも主人がいなくて、ソ連も主人がいなくて、共産世界も主人がいなくて、中共も主人がいなくて、日本も主人がいないのです。主人は誰ですか。主人は何人もいるのではありません。一人です。ですから、アダムを中心としてエバが一つになったのちには、その二人が神様と縦的に一体になり、天使長はアダムを中心として横的に一体になるのです。

このように見るとき、今先生はアダムであり、それから三人の天使長国、世界的代表国がアメリカと中共、そしてソ連です。また復帰過程において、お金を一番多くもっている国が日本です。これがエバ国家です。このエバ国家である日本がもっているお金は、日本のお金ではないのです。それなのに、日本が

豊かに暮らすように使ってみなさい。うまくいきません。

終わりの日には、所有権復帰時代が訪れるようになります。それゆえに、統一教会を中心として、この世界は統一されざるを得ないのです。それで統一教会では、アダム国家、エバ国家、天使長国家ということを言うのです。ドイツは、民主世界圏内にあるのでサタン圏内のアベル型です。それから、天の圏内のアベル型が今のアメリカです。それから、日本がエバ国家なのでアダム国家のものです。今世界はどこへ行くのかといえば、ドイツ、アメリカ、日本、この三つの国に経済圏がすべて入りました。それがどこへ行くのかといえば、アメリカを経て、日本を経て入ってくるのです。

アダムとエバが堕落する時、一人のアダムを中心とした女性一人をおいて三人の天使長がいました。男性四人が取り囲んでいるのと同じです。日本がエバ国家なので、ぴたっとそのようになるのです。韓国はアダム国家であり、ソ連と中共とアメリカは三人の天使長です。日本は、エバ国家として真っ裸になり、今まで四十年間お金ばかりもうけてきました。芸者のようなことをしたのと同じです。闘いを繰り広げて、お金ばかりもうけたというのです。

日本は、エバ国家です。サタン側の女性神をあがめる国です。天照大神は女性神ではないですか。この女性神が四千年歴史を代表し、主が来る時まで四十年間アジアを支配したのです。様々な困難を防ぐための防御線を引かなければならないので、アジア制覇百二十年というこのような歴史が来るのです。

アダムとエバが一つにならなければなりません。アダム国家は兄で、エバ国家は妹でしょう。縦的に見ればそうですが、横的に見れば夫婦関係です。横的には夫婦関係ですが、縦的な面で見れば兄妹関係です。そのような内容になるのです。

日本は、侵略国家として、韓国や中国の多くの人の血を流すようにしました。その血を流すようにした民族が解放されて、戦後四十年間でどうしてこのように立派な国家になったのでしょうか。それは、文先生が日本をエバ国家に決定したからです。日本は、世界的なエバ国家の立場です。イギリスの身代わりです。

カインとアベルを懐に抱いてお乳を飲ませ、この二人の子女が闘わずに一つになることができるようにし、神様の息子、娘として父母様の前に、神様の前にお捧げしなければならないのです。そうでなくては、エバとして責任を果たしたことにならないので、このことに加担させるのです。エバによって失ってしまった経済的なすべてのものを、エバによって復帰しなければならないのです。

したがって、キリスト教文化圏を中心として、島国であるイギリスがエバ国家として世界を統治できた時代と同じように、今日アジアと世界文化圏が交流するこの時に、日本は、先生が選んだ恩恵によって、エバ国家としてイギリスの伝統文化をそっくり受け継いだのです。ですからキリスト教をしてアベルを歓迎し、父母の正常な伝統を相続する道を行く

ための教示をしているのです。これが今、日本食口と韓国食口が行くべき道だということを知らなければなりません。

なぜ日本がエバ国家ですか。第二次大戦以後に、イギリスがエバ国家としての使命を果たせないことによってサタンが占領したので、最も弱い反対側のエバを再び取り戻し、最も悪辣なドイツを再び探し立てたのです。それは、荒廃して灰になった国です。何もないのです。来られる再臨主は、これを再び収拾して立て、第二次大戦に勝利したイギリス、アメリカ、フランスが天下統一した基準を蕩減復帰しなければ、新しい歴史は出発することができないのです。先生が四十年間でそれをするのです。

三) 母の国としての日本の使命

日本をエバ国家に選んだので、エバは、カイン、アベルを再び生まなければならないのです。それゆえに、日本には二つの韓国僑胞がいます。韓国僑胞と北朝鮮僑胞、カイン、アベルがいます。この韓国僑胞と北朝鮮僑胞、カイン、アベルが闘っています。これを一つにしなければなりません。これは、先生がエバ国家に選んだので不回避なことなのです。これができなければエバ国家になれません。腹中でこれを一つにしなければならず、エバは右翼世界と左翼世界を一つにして抱かなければならないのです。

日本の立場で見れば、日本がエバ国家の使命をもったのでイギリスと同じです。イギリスでは、旧教と新教、アイルランドとスコットランドが今でも闘っています。それを消化しなければならないのです。日本がそれと全く同じ立場にならなければエバ国家にはなれません。

それで、日本の中には、異質な二人の息子、娘がいるのです。それが北朝鮮の朝総連と韓国の民団です。エバ国家日本の腹中に異質的な双子が入っているのです。日本政府や日本人すべてがこれを悪いものと考えてきました。エバ国家の使命を果たすためには、これを生んで一つにしなければならないのです。そのような時代になったので、日本では朝総連と民団を一つにすることを中心として活動しなさいと指示しているのです。

日本が女性として民団と朝総連を愛さなければなりません。日本の中でこの内容を知っているのは、統一教会のメンバーしかいないのです。どのような困難があっても、朝総連と民団を一つにするためのテープを切らなければならず、エバ国家としてその子供たちが復帰されて一つになったカインとアベル、すなわち兄弟になるようにしなければエバの使命を果たすことができないのです。エバは、これを一つにすることによってアダム国家に帰ることができるのです。

息子、娘と一つになった母が父と一つになる場合には、全世界的なカイン･アベル圏、民主主義世界と共産主義世界が消化されていくのです。それは、韓国と日本にかかっています。リベカやタマルと同じです。腹中で双子が闘ったでしょう。それを産んで一つにしなければ、エバ国家の使命を果たすことができないのです。いくら難しくても、日本女性はイスラエル民族と同じ六十万の韓国人を消化しなければ、国に帰ってくる道がないのです。

それで、日本人を伝道しようと努力するなというのです。まず妊娠した双子を生んで立派に一つにするように、在日韓国民団と朝総連を一つにして先生と一つになる場合には、日本がエバ国家として収拾されるのです。

朝総連と民団を一つにしなければ、エバ国家として立つことができないのです。彼ら全員が先生を大歓迎することによって先生と一つになるのです。そして、アダムとエバが一つにならなければなりません。民団と朝総連が一つになることによって、南北の実体である韓国と北朝鮮が自動的に一つになれば、北朝鮮の偽りの父母と韓国の真の父母が条件的に転換されるので、エバがこれを抱いていってその伝統を韓半島に連結させれば、韓日統一圏が自動的に展開されるのです。

母が左翼と右翼の息子、娘を抱かなければなりません。日本がエバ国家です。日本が島国イギリスの代わりに、男性と女性を抱いて、どこへ行かなければならないのですか。本然の国に入って、万民の父と母を通じて再び産んだという条件を立てなければならないのです。母を通じて、母の愛の懐に抱いて生んであげなければなりません。

アダムとエバを中心として三人の天使長がいるのですが、そこでサタン側の天使長がソ連であり、アジア的天使長が中国であり、キリスト教圏の天の側の天使長がアメリカです。闘った三人の天使長たちが初めて一つになって統合されることにより、アダムとエバを中心として三人の天使長と神様、このように、六つが縦的に一つになるのです。

韓半島が南と北に分かれたのですが、これは世界が分かれたことを象徴します。今統一の運勢を追い込んで、それがそこに巡ってこなければなりません。これを誰が南北に分けたのですか。日本が分けてしまったというのです。それゆえに、南北統一の支援は日本がするのです。そのようにしようとすれば、日本の国民を教育して総動員しなければなりませんが、そのようなことができる人は文総裁しかいないのです。ですから、それをするのです。南北統一の支援はどこがしなければなりませんか。日本がしなければならないのです。

女性が嫁いでいって愛を受けるのはいいのですが、その反面、息子、娘を生まなければなりません。一家のすべての経済問題、教育問題を解決して心情圏を立てなければならないのです。先祖代々譲り受けた内容が誤っている時は、本然の心情圏に転換して教育しなければならない使命が、日本のエバ国家を代表した女性にはあるということを忘れてはいけません。それで、日本女性を中心としてすさまじい活動をしてきたのです。

時には涙を流し、ある時は男性にけ飛ばされ、ある時は父母に殴られる、そのような悲惨で歴史的な状況がその道において展開しなければならないのです。ですから、内面世界の安楽地、安着地がありません。今でもそうです。日本には女性が多いでしょう。それで、今回も祝福が問題になります。それゆえに、自分より年が多い男性たちを一人以上、三人ずつ伝道して連れてこなければならないのです。

韓半島を南北に分けてしまったのが日本です。それゆえに、根本に入っていって影響を与えることができるのです。それで、先生は、左翼と右翼を統一して新郎の位置に帰ってくるのです。帰ってきて金日成まで向きを変えさせなければなりません。左翼と右翼は息子です。長子権を復帰したあとは、父母権を復帰するために金日成までも先生が連結したのです。ですから、この韓半島において統一圏さえ展開すれば、民主主義の西洋文明とアジア文明、左右が一つになるのです。共産主義はすべてなくなるがゆえに一つになるのです。

皆さんが日本のすべてのことを思いながら、悔い改める心をもって自らのすべてのものを投入し、エバ国家の使命を早く完遂できる環境をつくらなければならないのです。北朝鮮と韓国を先頭に立てて帰らなければならないのが日本の立場です。そのようにしなければ、お父様がいる所に帰ることができないのです。先生と共同戦線を繰り広げなければなりません。そのような使命を日本政府は知りません。日本がお金を集めるようになったのは、そのお金をアジアのために使わなければならないからです。

日本は、過去にアジアの様々な国家と怨讐でした。満州など、様々な国を侵略したので、日本としては、今アジアに着陸できる条件が何もないのです。日本は、四十年前に侵略国家として圧政をしました。その実状をすべて生きた目で見て、頭の中に記憶しているので、アジアの国々は、日本人の上陸を嫌うのです。しかし、先生と統一教会を先頭に立てていけば、アジアでも、どこでも通じるのです。それが今後、日本が生きることのできる道であって、それ以外にはどこにも道がありません。日本だけでは何もできません。

エバ国家になるためには、エバの使命を果たさなければなりません。左翼と右翼を誰が包容するのですか。イエス様の夫人である新婦が包容しなければならないのです。本来、イスラエル国家とユダヤ教がイエス様に侍らなければならなかったのですが、それができませんでした。それゆえに、今では新婦教会、新婦の国がそれを包容しなければならないのです。

イスラエルとユダヤ教は、主が来れば世界をすべて踏み越えて、最高の位置に立って一番になると考えました。それは誤った思想です。神様の摂理から見るとき、女性宗教として夫を迎えれば、夫婦が共にローマ世界を包容し、養育して天的な使命を果たさなければなりません。ところが、そのように考えずに、再臨主であるメシヤが来ればローマをあっという間に踏みつぶし、自らの国に隷属化させて支配すると考えたのです。それは誤った考えです。日本もそうです。今日本は、エバ国家なので左翼と右翼を包容しなければなりません。外的にもそうですが、内的にも、日本がそのようにしなければなりません。それがエバ国家の特徴です。

血統転換と所有権転換をしなければなりません。サタンの所有権を譲り受けた日本です。サタンが主人になる前にアダムが主人にならなければならず、アダムが主人になる前に神様が所有主にならなければなりません。ところが、神様が所有主になっていません。アダムが所有主になっていません。エバが失ってしまった所有権を返還するために、世界に出

てすべて収拾しなければならないのです。そして、神側に返還しなければなりません。所有権を返還するにおいて、直接先生にもってくることはできません。先生の息子、娘を通して、母を通じてもっていくのです。反対です。復帰していくことと同じです。

女性がお嫁に行くとき、裸では行きません。女性も所有するものをつくってから行かなければなりません。父母、一家すべてが、自分の家庭からお嫁に行く人の所有権を拡大してあげたいというのが、お嫁に送り出す一家の心です。その点は天国に嫁がせる統一家庭も同じです。永遠な氏族的主人としての所有権を管轄して、その圏内において恥ずかしくない堂々とした基盤をもてるようにしてあげることが一族の心です。それは、自分自身でも全く同じように願う目標です。それは間違いないのです。

日本がエバ国家としての使命を果たすためには、新しいエバ国家の伝統を韓国の女性世界に連結しなければならないのです。そうでなければ、日本のエバ圏と韓国のエバとを連結する道がありません。それができたのが、今回の四月十日、お母様の女性解放宣布大会でした。

お母様を中心として韓国の女性と日本の女性は、カインとアベルです。長子権を復帰した立場でいえば、韓国の女性がお姉さんの立場です。しかし、復帰過程ではアベル圏と同じです。それゆえに、日本の女性は苦労しながら韓国の女性に従わなければなりません。それがサタン世界の解放圏です。ですから、日本の女性は、統一教会の模範にならなければならず、帰ってくる女性の模範になることができるように伝統を立てなければ、終末においてエバ国家の使命を果たすことができないのです。

日本の使命は、エバ国家の使命です。エバは母を象徴するので、日本は、外的には民主主義だとしても、共産主義を包容して消化しなければならないのです。それゆえに神様は、日本に世界的な経済圏を賦与しているのです。堕落によって、エバを中心として万物とともに子女の心情圏がサタン世界に落ちてしまいました。それゆえに、エバの使命は、神様の心情をもって息子、娘と万物を抱いて帰ってこなければならないのです。しかし、エバには、神様の心情圏がありません。それは、来られる主である完成したアダムにあるのです。それゆえに、一つにならなければなりません。それがアダム国家とエバ国家です。

エバの使命が何か分かりましたか。皆さんには、南北を統一しなければならないという使命があります。今まで、経済的に自分を犠牲にして南北を統一しなければならないという日本の使命を知っていた人が一人もいなかったのです。

これが先生の結論です。怨讐圏を消化して血統転換、所有権転換、心情圏転換を完全にし、エバ国家として恥ずかしくないように、その使命を果たさなければならないのです。そのためには、家族を中心として、神様の前に世界を担うことができる家庭堂の基準を凌駕しなければならないのです。このような厳粛、かつ宿命的な使命が皆さんにあるということを忘れずに、覚悟しなければなりません。

復帰されたアダム側に立って日本が堕落したアダムを整理しなければならないのですが、むしろ日本政界では、北朝鮮と交流して得ることができる経済的な面を考えています。それは根拠のない考えです。日本の経済を投入して南北を統一しなければ、日本は滅びるのです。エバ国家の使命を果たすことができなければ、跡形もなく消えるというのです。それゆえに、統一教会の勇士である皆さんは、どのような犠牲を払っても責任を全うしなければならないのです。一家を捨てても、一族が滅びても南北統一のために奮発しなければなりません。それが統一教会の勇士の使命です。それは、先生の使命ではありません。

第二次世界大戦後に新婦であるキリスト教文化圏が先生と一つになっていたならば、このような蕩減路程はなかったので、南北が分かれることもなかったのです。先生が男性として完全に勝利したことを、お母様に伝授して勝利しました。それゆえに、キリスト教文化圏の失敗、エバ国家が使命を果たすことができずに新郎を迎えることができなかった四十七年前のことを再び蕩減しなければならないのです。それで、エバであるお母様に韓国の女性がすべて引き込まれ、日本の女性もすべて引き込まれるのです。

日本にはエバ国としての使命があります。日本の富は日本人のためにあるのではありません。日本は、アダム国家を中心として、アジアでイエス様の実体圏を復帰するためのエバ国家の名前をもっています。エバ国家は、イエス様の体を復帰しなければならないのです。

堕落の転換期には、女性が二人の男性を思慕します。天使長を慕ったものがアダムを思慕するようになるのです。天使長を夫とした、天使長を先祖とした歴史において、エバ国家の立場に立った日本の女性は、先生に誰よりも従い、思慕し、先生によって一つにならなければならないのです。妹になるのです。妹が堕落したので、妹を救って婚約者として、そして、将来の夫人として訓練させるのです。そして、母として、おばあさんとして、女王として教育していくことが先生の使命です。

日本と韓国は、摂理的に見れば一つの国です。日本の人々は、韓国語を学ばなければなりません。摂理的にすべてそうです。韓国は、地政学的に見てもイタリアと同じです。イタリアで王権を中心として天下統一しようとしましたが、それができなかったので、韓半島をイタリアの身代わりとして立て、イエス様の死によって失ってしまった体をここで統一しなければなりません。そして、世界史的キリスト教文化圏の完成を中心として、統一教会とともに心身一体、統一をなさなければならないのです。そのように統一されたアジア大陸から世界文明圏に進出することによって、太平洋文明圏時代を迎えるのです。

どうして日本がこのように大きな国になることができたのですか。サタンは、神様のみ旨をなす路程がどのようになっていくのかを知っていました。結局は神様の摂理が韓半島を中心として帰ってくることを知っていたので、四十年間この民族を苦しめたのです。それで、朝鮮の国の母である閔妃までも残忍に殺害したのです。そのようにして、すべて占領してしまったのです。そして、「日韓一

体」ということをいったのです。日本と韓国は一つの国であるというのです。今後、神様の摂理が韓半島を中心として展開するということを知っていたので、そのように接近して国をのみ込もうとしたのです。そのような作戦をして、四十年間韓半島を支配しました。

どうして経済的な面において日本が祝福を受けたのですか。世界各国の援助を受けたのです。エバによって世界的に失ってしまったものが何かというと、地と人と愛です。それゆえに、それを復帰するための国がエバ国家なので、経済的に世界の一流のものを占領することができる立場に立っていかなければならないのです。そのようになるのです。ですから、エバは、自分に任せられた使命を果たさなければならない立場なので、先生は日本の人々を先頭に立てるのです。それと同時に、彼らは、心情的に誰よりも高い位置にいなければなりません。心情を中心として見れば、日本の人々はそのようになっているというのです。

第五章　すべての文明の結実は半島で

一　半島文明と韓国

一) 世界文明の潮流

人類の古代文明は大陸で発生しました。エジプトのナイル河畔で胎動した人類文明は、半島文明へと変遷し、ギリシャ、そしてイタリア半島で地中海文明圏として結実しました。その半島文明は、再び島嶼文明に移行し、島国イギリスを中心として大西洋文明圏を形成しました。そして、そのイギリスの島嶼文明は大西洋を渡り、アメリカ大陸において現代文明の奇跡を起こして太平洋文明圏を形成したのです。

天使長文化圏は、エジプトを中心として形成されたナイル川文明がその起源となり、これが地中海を中心とした半島文明であるギリシャ文明を経てローマ文明において結実しました。それでは、どうして文明の変遷は、西欧圏を回っていかなければならなかったのでしょうか。堕落したので、そのようにならざるを得なかったのです。

島国としての日本は、アジアで初めて西洋文明を定着させました。次は半島文明時代です。韓半島は、東洋と西洋の文明が一致する場所です。歴史学者シュペングラーが指摘したように、文明は、一年に春夏秋冬があるのと同じように興亡を繰り返しています。今は大西洋文明の時代が過ぎ去り、太平洋文明の時代が来る時です。

韓国はいかなる民族でしょうか。イタリアの半島文明圏を再び起こしてそれを蕩減することができ、文化圏の世界史的伝授を受けなければならない民族です。韓国は、そのような地域となっているのです。南北の統一は、民主世界と共産世界の統一を意味しています。そして、韓国が独立することは、イスラエル民族が失敗したことを復帰することになるのです。ですから、イスラエルも韓国も、共に一九四八年に国を取り戻したのです。

近代アジアで最も短い歴史をもって世界の東・西洋の文化を吸収し、宗教を吸収したのは韓国しかありません。儒教から仏教、そしてキリスト教を受け入れたのです。この四十

年という短い期間で、西洋の文物を吸収して、その実を結ばせたのです。実は種と同じ立場なので、半島文明は世界を生かすことができる一つの起源となるのです。そして、そこから理想的に安着する愛の世界に越えていって、初めて幸福の基地となるのです。そうでなければ、世界に破綻が起きるのです。

いつだったか半島文明について話してあげたでしょう？　「半島文明は二重文化をもって発展してきた。そして、日本で火山が爆発する時は、韓半島を考えなければならない」と言いました。それで「船を造っておきなさい」と前から話しておきました。船を造りましたか。それは、そのようになるかもしれません。ですから、日本人は傲慢に振る舞ってはいけません。アメリカ人も傲慢に振る舞ってはいけません。太平洋の両側の沿岸で傲慢に振る舞えば、神様は、二つともそのままほってはおきません。アメリカも打たれ、日本も打たれます。先生は、そうなるように祈祷はしませんが、日本が誤ればそのようにならざるを得ないというのは妥当な結論です。歴史的な善悪の審判から見れば、妥当な話だというのです。

ローマ教皇庁のある半島文明を中心として統一天下を成し遂げなければならなかったのに、そのローマ教皇庁が責任を果たせなかったので、イギリスに移っていったのです。これが回ってくる時には、必ず島国である日本を通じて入ってくるのです。日本は、イギリスの文化圏を受け継いだのです。ですから、これ（日本の繁栄期）は、一八六八年から一九八八年までの百二十年間です。サウル王、ダビデ王、ソロモン王の百二十年期間と同じように、明治、大正、昭和までがちょうど百二十年です。

昭和天皇が一九八九年一月に亡くなりました。そうでしょう？　ちょうど百二十年です。この期間で、イギリスの文化圏をすべて受け継いだのです。西洋文学において「演劇ならばイギリスだ」と言います。そうではありませんか。現代の機械文明も、研究はイギリスがしましたが、その結実はドイツがもっていきました。それは、そのようにならざるを得ません。サタン側だからです。

アダムとエバが堕落することによって、数億年という長い歴史過程を経ながら蕩減してきました。血を流しながら蕩減してきたのです。今日、文総裁が歴史の理論的背後をくまなく暴き、破れたものは縫い合わせ、穴が開いたものは埋めているのです。そのようにして、堕落していない本然的姿を備えて越えていかなければなりません。ゆえに、神様を中心として、アダムとエバと三人の天使長を復帰しなければなりません。それが韓国に来て実を結ぶのです。

韓国と日本がしなければなりません。半島と島がするのです。イタリア半島が誤れば、イギリスがその誤りを蕩減復帰しなければなりません。ローマ教皇庁を中心として、半島文明が世界を支配しました。これを蕩減するために、新たにアメリカを中心として摂理してきたのです。イエス様をアジアで殺したので、殺したイエス様の体を取り戻して、万国解放と地上天国理念のラッパの音をこのアジア地域で鳴り響かせなければなりません。

その次には半島です。韓半島を経なければなりません。それで、半島を蕩減しなければ

なりません。ローマ教皇庁と同じように、世界的全権を代表した統一教会を中心とした半島文明圏時代に入っていくのです。ここに世界文化史および宗教全体を蕩減すべきローマ教皇庁のようなものが生まれようとするので、共産主義理念に対峙して民主主義が生まれるのです。共産主義はサタン側であり、民主主義は神側です。このような対決が展開するのです。

韓半島が男性の生殖器ならば、日本は女性の生殖器です。これは一つにならざるを得ません。これが一つになってこそ統一天下の時代が来るのです。それで、「韓国をアダム国家、日本をエバ国家」と言うのです。

二) 原理的に見た半島文明の役割

歴史というものは本当におもしろいのです。文化の発祥地を見ても、陸地と海が接する港や半島などの場所が文明の発祥地となりました。同じ道理です。ギリシャ文明やイタリア文明などの古代文明の発祥地を見れば、大きな海や半島や川に沿っているのです。文明がそのような所で発達したということは歴史的な事実です。なぜでしょうか。お互いに合流するからです。私たちは、合流の調和を通じてすべてのものが形成される、ということをおおよそ知ることができます。

文明の発祥地を地理学的に見るとき、気候を中心として発展したとすれば、理想的地域とはいかなる地域でしょうか。春夏秋冬があると同時に、海と陸地を連結することができる地域が理想的地域だという結論が出てきます。気候的に春夏秋冬が加味された地域です。春夏秋冬の四季がはっきりしている地域であると同時に、半島地域でなければなりません。その半島地域というものは何でしょうか。陸地は天を象徴し、水のある所は海を象徴しているので、それを連結するのが半島だということです。世の中はそのようになっています。すべての天地の道理がそのようになっているのです。

そのように見るとき、半島地域であり、この世界の文化に貢献した所とは、イタリア半島です。これが過去の文明の帰結地であり、今まで歴史時代の権威をもってきたのが、このローマを中心とした半島文明、総合文明地域だということを知らなければなりません。これはまた、エジプト文明とギリシャ文明を経て、総合地となったのです。

私たちは、海に囲まれた半島国家が歴史的に貴重な文明を花開かせたということを知ることができます。偉大な宗教理念と思想の多くは半島国家で発生し、それが人類の精神世界を指導してきました。バルカン半島で発生したギリシャ哲学、イタリア半島で花開いたキリスト教文化、インドのヒンズー教文化と哲学、アラブ半島のイスラム文化、東南アジアの半島で結実した仏教文化、イベリア半島での航海術、スカンジナビア半島でのゲルマン文化などがそうです。このように、半島国家が世界文化史に最も大きな影響を及ぼしているのです。

地球は陸地と海洋で形成されています。海は、最も単純な生命の誕生をはじめとして、母の役割を果たしてきました。海は養育し、抱いてくれるので女性を象徴し、陸地は男性を象徴しているということができます。した

がって、海洋に位置する島嶼国家は女性を表し、大陸国家および大陸に連結している半島国家は男性を表しているということができます。特に半島国家の国民には、大陸と海の両面からの敵に備える生活から生まれた強靭さと勇猛さがあります。また、彼らは開拓し、探険する進取の気性に富んでいると同時に、きらびやかな文化を花咲かせ、またそれを世界に伝播しました。

私たちが住んでいる地球は、陸地と海洋に分かれています。その中でも半島は、地理学的に見ても、大陸と海洋を連結する中間的位置にあります。古くから半島は、文明の形成において、常に注目するに値する場所となってきました。古代文明が繁栄したギリシャやローマも半島にあります。スペインとポルトガルの文明も、イベリア半島という半島で発達しました。しかし、今日このような文明は世界へ拡大され、そこに新しい東西文明が出現しなければなりません。この文明の出現地がアジアの韓半島です。

イギリスがエバ国家でアメリカがアベル国家、そしてフランスが天使長国家ですが、母が息子を抱いて取り戻してくるのです。失ってしまったものをそのように取り戻せば、次には父を取り戻すのです。アダムの国を取り戻してくるのです。アダムの国は、来られる再臨主の国ですが、それが韓半島です。なぜ韓半島なのでしょうか。それはイタリア半島と同じです。旧約時代において教皇庁を中心として失ってしまったものを、蕩減復帰しなければなりません。イタリア半島を中心として西洋で失ってしまったものを東洋で取り戻さなければならないので、半島である韓半島が世界的な問題となるのです。

韓半島は、死亡と生命の境界線です。南北が共産主義と民主主義に分かれ、北側には金日成がいて、南側には文総裁がいるのです。すべてこのようになっています。北朝鮮では金日成のことを「お父様」と言うでしょう？韓国でも文総裁のことを「お父様」と言うでしょう？　「真の父母」と言うではありませんか。誰がこれを解放するのでしょうか。大統領にはできません。これは、私の手にかかっているのです。

地中海にあるローマ教皇庁が千年歴史に強大国という名前をもちながら、どうして今まで滅びることなく残されてきたのでしょうか。地中海とローマは、女性と男性が一つになっている状態と同じです。凹凸が一つになっているのです。そして、世界的な基準においては、太平洋文明圏を中心として韓半島がそのような立場から日本に囲まれているのです。これは、それと全く同じ状態です。そのような所は、インドネシアでもなくシンガポールでもありません。アジアにおいて韓国しかありません。それゆえに、東北アジアにおける三カ国が問題です。この三カ国を掌握すれば、アジアを掌握するのです。

韓半島は、どのような立場に立っているのでしょうか。ローマと同じ立場に立っています。ローマ教皇庁と同じ立場にあるのです。それでは、韓国とはいかなる国でしょうか。韓国は、歴史時代のあらゆる宗教と人類を神様のみ旨に適うように収拾し、統一的な世界と統一的な天国を建設する責任を果たす国とならなければなりません。なぜでしょうか。

半島を中心として、すなわちローマ教皇庁を中心として世界を動かした教皇権を代表することができる文化終着点時代に入っていくからです。

文化的背景を中心として南北が統一され、そのような位置をつかめば、世界の宗教を動かし、世界の万民を動かすことができる位置に立つのです。そして、そのようになってこそイスラエルを選ばれた神様のみ旨に一致することができる宗教圏が顕現するのであり、神様のみ旨に一致することができる民族圏、国家圏が形成されるのです。

ローマ教皇庁が一つの独立国家として伝統を引き継いできたように、アジアにおけるローマのような立場にあるのが韓半島です。これが強大国に挟まれてきたのですが、今まで滅びずに残っています。歴史的に、この国が南北に分けられたことはありませんでした。もちろん三国時代はありましたが、本格的に世界的な思潮と世界の国を引き込んで南北に分かれたのは初めてのことです。南北が闘うということは何を意味するのでしょうか。イエス様を中心として見るとき、心と体が半島で分かれたので、その心と体が分かれたことを蕩減復帰するためには半島で一つにしなければなりません。ゆえに、地政学的見地から見ても、韓国に主が来なければならないのです。

今、日本はどこに帰っていかなければならないのでしょうか。イタリア半島のような所へ帰っていかなければなりません。そして、大陸に連結しなければなりません。そのようなことができる焦点が韓半島です。それはインドシナ半島でもなく、マレー半島でもなく、シンガポールでもありません。ただ一つ極東でなければなりません。そのような地域は韓半島しかありません。

太平洋文明圏時代は、韓半島を中心として展開するのです。日本は女性の子宮とちょうど同じです。これが一つにならなければなりません。ゆえに、日本は、キリスト教が過ったこととイギリスが過ったことをすべて蕩減復帰しなければなりません。また、韓半島を中心として、ローマ教皇庁が過ったことを収拾しなければなりません。ローマ教皇庁やキリスト教以上の再臨理想王宮圏をつくり、イエス様の体をアジアで失ってしまったので、アジアにおいて、再びキリスト教文化圏を霊的、肉的に合同させて統一文化圏をつくっていかなければなりません。

韓半島がアダム国家ならば、日本はエバ国家です。それでは、どうして韓国がアダム国家なのでしょうか。地理的に見るとき、韓半島は男性の生殖器と同じです。ローマがちょうどそのようになっています。地中海は女性の陰部と同じであり、イタリアは男性の生殖器と同じです。ですから、この二つが一つにならなければなりません。このような所は、常に文化が離れることができない地域です。一つの文化が帰着すれば、そこを離れることができないのです。なぜなら、愛の基盤の上に立ったのと同じ立場だからです。地政学的に見ても、ローマと地中海は二人の男女が合わさったのと全く同じだというのです。

世界の文明の方向は、世界を一周しながら発展していきます。すなわちエジプトの大陸文明、ローマとギリシャの半島文明、イギリ

スの島嶼文明、そしてアメリカの大陸文明に至り、その大陸文明は再び西に進んで太平洋を渡って日本の島嶼文明を経由し、最終的には韓半島文明に集結してアジアに連結されるのです。ここで結実する文化は高次元的文化であり、それは新世界を創造することでしょう。

歴史の流れは、そこ（アメリカ大陸）で終わりません。この文明圏は、太平洋を渡ってイギリスに相当する島国日本で新しい島嶼文明の花を咲かせ、イタリア半島に相当するここ韓半島において、その昔のローマ文明に匹敵する人類総和文明を築き上げ、アジア大陸を連結して一つの世界を成すことでしょう。そのようにして新しい統一文明圏を形成しようとされる神様のみ旨を、私はよく知っているのです。

太平洋を見ても、韓半島が侵略されると大変なことになるので、日本列島によってこのように防いでいるのです。それは何かというと、女性は肉と同じであり、男性は骨と同じだということです。骨と肉は一体です。それが二つになっていれば、それは別個のものです。愛を中心として二人が必要なのです。ですから、いくら多くのアダムがいても、そこにはエバがいなければなりません。そのような方法で世界的に協助して、天宙的な愛の実を結ばなければなりません。

日本がなぜ福を受けるのかというと、日本はエバ国家なので、エバが堕落することによって失ってしまったすべてのものを物質から復帰するためです。世界の物質の祝福を受けた日本を中心として、どこへ行かなければならないのでしょうか。韓半島を経て中国大陸へ行かなければなりません。中原天地（注：中国のこと）へ行かなければなりません。本来、イエス様が来られた当時は、中国とインドが文化国であり、宗教国でした。ゆえに、イエス様が来られた時に、ヒンズー教と仏教を中心とした文化圏と三位一体となってローマ帝国を吸収する責任を果たさなければならなかったのです。

その時にユダヤの国と中東のアラブ圏が一つになっていれば、自然にインドと連結されていたはずです。インド人は、その人種自体がヨーロッパ系です。そのインドがアジアと連結され、すなわちインドがミャンマーを通じて中国と連結され、その中国の宗教文明圏と連合した世界的版図を中心としてローマを消化していれば、その時に一つの天国を形成していたはずです。

日本は海にぽっかり浮かんだ島ですが、ここ（韓国）は大陸と連結しています。より大きな大陸こそ、神様の願われる第一故郷となるのです。「島は、第二故郷だ」と言うことができます。島は常に陸地を慕うのです。そのようなことを理解し、ここ韓国においてだけでなく、中国やソ連など、この大陸全体を中心として、より大きい故郷の因縁を広げることができなければなりません。そのようにして、神様がこの地上の私たちの故郷において「世界のすべての人々と共に暮らすことができる所こそ理想的な場所だ」とおっしゃることができるようにしなければなりません。そのような生活を送ろうとする人々は、霊界に行っても解放圏をもって暮らすことができるのです。国境がなくなるのです。

これまでの文明は、ローマを中心として千二百年の歴史を代表し、ローマがその権威を立ててきました。それと同じように、今からはアジアの韓半島を中心として新しい千年世界を経て永遠の文化圏が形成されるだろうと思っているのです。それを実際に蕩減しなければなりません。それが韓半島です。

二　韓半島と摂理的使命

一) 韓半島は世界の縮小体

大韓民国は、韓半島において共産主義と闘って勝利しなければならない宿命的な立場におかれています。大韓民国が共産主義と闘って勝利すれば、世界に雄飛するでしょうし、反対に共産主義に敗れた場合は、形跡もなく消え失せてしまうことでしょう。敗亡の悲惨な運命は、その例をベトナムがよく見せてくれています。北朝鮮は悪を代表し、大韓民国は善を代表しています。北朝鮮は悪魔が支配し、大韓民国は神様が共にいらっしゃるのです。

このように、韓半島は世界において善と悪が最も激しく対抗している世界史的地域となっており、この地域で善が悪を打ち破って勝利すれば、世界のすべての悪は滅びていくのです。神様は、全摂理史において、韓国国民と全世界の自由人が一つになってこのような全体的勝利を収めることを待ち焦がれていらっしゃるのです。

韓民族は、五千年の悠久な歴史をもった文化民族であり、早くから敬天思想に染まり、豊かな精神的生活をなしてきました。私たちの先祖は、仏教と儒教を受け入れ、その文化をまばゆいばかりに花咲かせ、またそのキリスト教伝来の歴史は、短いながらも今日名実共に世界を代表する熱心なキリスト教国家となっています。それだけでなく、様々な高等宗教が民族の精神文化の中に溶け合って調和的に善の影響を及ぼしており、現実においても、この地には様々な宗教が共存しているという特異な様相を見せてくれています。

本来、敬天思想が強い韓民族の本性を考えれば、無神論の共産主義が韓半島に根を下ろすようにはなっていなかったと思っています。神様が生きていらっしゃるならば、韓民族を立てて共産主義を打破する試験を世界に見せてくださるはずだ、ということを私は確信しています。

この民族（韓民族）の試練は、この民族自体だけのものではなく、摂理的なものであり、神様はこの民族がそれを克服することを待ち焦がれていらっしゃいます。東と西、南と北の出会い、そして精神と物質、唯心と唯物の対決と混沌は世界史の総合的遺産だということができますが、それらが集約されてこの韓半島において渦巻いているということも、ちょうど新時代をはらんだ妊婦の苦しみと同じです。

韓民族の民族的、国家的困難は、神様のみ旨と摂理を離れては解決できないものであり、韓国単独ではなく世界との関係の中においてのみ、その解決は可能であると思っています。今こそ韓民族は神様のみ旨を悟り、神様が世界の精神界を指導する目的で送られた方に従って、その苦難を乗り越えていかなければなりません。

歴史時代において統一教会がその基準を中心として韓半島を中心として……。それで、

韓半島を中心として周辺の強大国が関心をもって集まるようになったのです。ソ連もそうで、アメリカもそうで、中共もそうで、日本もそうです。このように集まったのは、ある一時に活用しようとしたからです。ここから世界的に神様のみ旨を連結させることができるキリスト教文明圏の旗手が現れて、キリスト教の統一連合運動をしなければならなかったのです。七年以内で世界のキリスト教を平定するのが先生のみ旨でした。

二) 韓半島を中心とした統一文化圏

ローマを中心としてすべてのヨーロッパ文明圏が一つになったように、そのローマがある半島と同じ役割を再現する場所が韓半島です。ゆえに、韓国と日本とアメリカを連結させなくては、世界問題を収拾することはできません。これが現在の立場です。

皆さんは、韓国を愛さなければなりません。韓国を立てられた神様のみ旨が成され、韓国は祖国にならなければなりません。将来、韓半島全体は聖地にならなければなりません。韓国の地である満州の遼東半島を取り戻さなければならないのでしょう？　イスラエル民族はイエス様を売ってイスラエルの国を取り戻しましたが、再臨主という名前をもちながら、昔先祖が住んでいた地を私が取り戻すことができないでしょうか。ソ連が妨害しても、すべてを押しのけるのです。昔、宋の時代にロシアに奪われたものを取り戻し、私たちの先祖の住んでいた地を回復するために交渉しなければならないと思っています。

ちょうどここから三十マイル北に行けば、そこには北朝鮮があります。民主主義と自由理念は、この世界で最も閉鎖された北朝鮮の金日成共産集団と対峙しています。分離された世界のうち、一方は神様を認める世界であり、もう一方は、それとは正反対に神様を否定する世界です。極と極を成している二つの世界の差異点を、この韓半島以上に顕著で明確に表している場所はありません。韓半島は、自由と独裁、善と悪、民主主義と共産主義が闘争する全世界の縮小版です。

現在の世界情勢から韓国を中心とした周辺国家を見るとき、韓半島で紛争が起きれば、強大国は互いに都合が良くありません。特に中共は、今後科学技術の発展を促進して先進国の仲間入りを果たそうとしています。そのためには復興しなければなりません。しかし、ここで北朝鮮が南侵をすれば、相当な支障が生じるのです。

中共は、今後韓国と交流したいと考えているのです。私は、そのことをよく知っています。日本ではどうしていけないのでしょうか。日本は侵略した国です。ですから、経済的にも侵略をしてくると考えているのです。中共が韓国と結びつこうとしている立場から見れば、中共自体は北朝鮮の南侵を願っていません。では、日本はどうでしょうか。日本自体もそれを願いません。韓国と交流しようとしているのです。

中国の人口は十二億です。アメリカは二億四千万であり、ソ連は二億七千万です。世界を指導する先進国、「我こそは」と言う国はたくさんありますが、韓国は、今までどれほどしがない存在だったでしょうか。これはし

がない存在にもなれず、愚かで哀れな国だったのです。五千年の長い歴史の中で、中原天地（注：中国のこと）はすべて私たちの領土でした。我が民族は戦争を好みません。平和を愛好する民族です。それゆえに、勃海族に対しては歴史にも残っているでしょう？　それが今まで学界で問題になってきているでしょう？　東夷族といって、彼らが韓半島に流れてきたといっています。中原天地にいた彼らは、数多くの民族が対決する荒れた原野で暮らすのが嫌で、豆満江、鴨緑江を渡ってこの韓半島に逃げてきた者たちです。

皆さんは、過去の善人を身代わりし、皆さんが願った理想的家庭の基盤を中心として、氏族、民族、国家を編成するために南北統一の解放を主張する過程にあるので、その解放の花が咲く日には、万国にエベレスト山頂よりももっと高く統一の旗が翻り、歴史的に誇り得る時代が韓半島に訪れてくるのです。そのような驚くべき事実を知らなければなりません。それを知らなければ、先生が成し遂げた実績が皆さんを呪って審判することでしょう。血と涙の交差する死の峠を押しのけてきた恨と、ここに結晶した歴史的実績が皆さんを審判することでしょう。

日本という国は島国です。結局は、島国が孤立して生きることはできません。それゆえに、ある大陸と関係を結ばなければなりませんが、今は太平洋を渡ってアメリカ大陸と関係を結んでいます。彼らは、四十年前に第二次大戦を中心として怨讐でした。怨讐となって争った歴史をもっているのです。それでは、日本はどこに行くべきでしょうか。太平洋を渡ってアメリカに背負ってもらうのでしょうか。大陸に接するべきでしょうか。これが問題です。

最も近い道は、韓半島を通じて行くことです。シベリアを通じて接しても行くことはできません。中共とそのまま接しても駄目です。中共に入っていっても、混乱した中共を消化することはできません。十二億の中国の国民を消化することはできないのです。また、膨大な共産世界の主導国家であるソ連を日本が消化することはできません。このように見れば、日本自体は、アメリカを中心として韓国と連結する以外にはないという実情にあるのです。

皆さんも知っているように、日露戦争は韓半島ゆえに起きました。日清戦争も同じです。大東亜戦争の起源を見れば、蘆溝橋で日本兵たちが独立運動をしていた韓国の宣教師と事件を起こして大東亜戦争が起きたのです。結局、近代アジアの動乱の起源は、すべて韓国からです。韓国が基地です。中国も韓国が必要です。

韓国は、実に不思議な所です。ソ連が必要とし、日本も必要としています。日本は、大陸と連結しなくては政治的版図を世界へ伸ばしていくことができません。

このように見るとき、もし北朝鮮がソ連を背景として「南北総選挙をしよう」と言い、韓国でも「三十八度線を撤廃しよう」と言えば、ソ連がどれほど喜ぶでしょうか。ソ連は何が必要なのでしょうか。ソ連は、韓半島要塞基地が必要なのです。この韓半島を占領すれば、日本の襟首をつかむことになるのです。そして、中国の胸元に銃を突きつけることにもなるのです。

今は、文総裁が国を取り戻すことができる段階に入っていく時です。ゆえに、与党が主人でもなく、野党が主人でもありません。四つの強大国に包囲されている韓半島は、その四大主人の前に小さくなっているのです。それでは、その国家的中心は何かというと、それが統一教会です。「南北を統一しよう」という話も、私が最初に言ったのではありませんか。南北を統一しようというのです。南北統一政権をつくろうというのです。そのように見るとき、南北を統一しようとすれば、東西南北の四つの大国を消化することができる能力をもたなければなりません。今まで、アメリカから日本、中共、そしてソ連においてまでもこの活動をしてきました。そして、今やレバレンド・ムーンが打ち込んでおいたおもりを上げ、これが一つになる時代に入っていくのです。

韓半島を中心とした脈というとき、その脈とは何かというと、それは韓国の運命や運勢と通じるのです。天運とも通じます。国運とも通じるはずです。国運とは何でしょうか。国の運、国が転がっていく方向です。このように思います。韓国が転がっていくとき、すなわち韓国が生きていくにおいて、韓国の脈拍がよく打ち、よく連結すれば、大韓民国は発展することができるのです。そのような大韓民国が世界の天運と脈拍を共にし、天運を協助して一つの世界をつくっていかなければなりません。

共産主義は崩壊しなければなりません。民主世界も崩壊しなければなりません。民主世界は人本主義であり、共産世界は唯物主義です。彼らは神様を追放してしまいました。ローマ教皇庁は、神本主義を中心として世界統一を成し遂げ、理想的王権を立てようとしましたが、それが失敗したので、再び戻って蕩減して越えていくのです。大陸を中心としてイギリスを蕩減し、イタリア半島でローマ教皇庁が過ったことをアジアにおいて復帰しなければなりません。そのために、アジアにおいてローマと同じ半島を復帰しなければなりません。それが韓半島です。

イタリア半島の教皇庁で統一することができなかったので、再び半島を通じて統一しなければなりません。その場所が韓半島であるということをサタンは知っているので、四千年を蕩減するために日本が四十年間支配する時代に入っていくのです。その四十年間の支配を受ける国こそ、再臨主、アダムが来られる理想の国だということを皆さんは知らなければなりません。歴史発展の帰趨から見るとき、また蕩減復帰の原則から見るとき、韓半島に再臨主が来なければならないという理論的な根拠がここから出てくるのです。

ここでイギリスとアメリカとフランスが一つになって、どのような国を訪ね求めていくのでしょうか。アダムの国を訪ね求めていくのです。父の国を訪ね求めていくのです。父を取り戻さなければなりません。父の国を訪ね求め、アダムの国を訪ね求めていかなければなりません。これはレバレンド・ムーンの考えではありません。原理観です。韓半島の統一は自動的に訪れます。韓国がエバを抱いて一つになれば、天使長たちが完全にアダムとエバに献身するようになるのです。それが原理観です。

太平洋文明圏とは何かというと、訪れる父主義の版図を形成するための準備文化です。ここで統一的文化圏を展開し結束した一つの文化を終結しなければならないので、父母文化を中心として言語統一、文化統一、国家統一が起きてくるのです。そのような時になっていくのです。そして、それは韓半島を中心として連結してくるのです。

韓国は、地政学的に非常に微妙な位置にあり、昔から強大国の勢力拡大のための要地となり、歴史的な犠牲を払ってきました。東西両極時代に代表的な苦難を経た我が祖国は、多元化と和解の時代を迎えたとしても、その国益が保障され、民族的な問題が解決されているわけではありません。韓国を中心とした四つの強大国、すなわちアメリカ、日本、ソ連、中国は韓半島に各々重要な関心と利害関係をもって互いに絡み合っています。私は、神様の摂理的観点からこのような韓国の状況を世界と歴史の縮小体として見つめています。それゆえに、すべての歴史的因縁と世界的問題が直接、間接に韓半島に連結しており、韓国は世界問題の縮小体となっているのです。したがって、世界問題の解決は、韓国問題の解決と不可分の関係にあります。

母が西側の果てならば、父は西側から現れるようにはなっていません。女性が西側の果てならば、男性は東側の果てでなければなりません。「極東」という言葉も、このような面で意味があるのです。また韓半島という所は、男性と女性が連結する場所です。陸地が男性を象徴すれば、海は女性を象徴しています。ゆえに、常に島の人々は陸地を慕うのです。彼らが陸地を訪ね求めてきて上陸する時は、常に半島に上陸します。それゆえに、西欧文明においては、今までイタリア半島が伝統的因縁を中心として、世界のキリスト教文化圏の中心としての権限を行使してきましたが、その反対に位置する極東においても半島が問題となるのです。

今、日本はどこに帰っていかなければならないのでしょうか。イタリア半島のような所へ帰っていかなければなりません。そして、大陸と連結しなければなりません。そのようにすることができる焦点が韓半島です。インドシナ半島でもなく、マレー半島でもなく、シンガポールでもありません。唯一極東でなければなりません。そのような地域は韓半島しかありません。その韓半島の歴史は、イスラエル民族の歴史と似通っていなければなりません。なぜなら、ユダヤ教の延長がキリスト教だからです。そして、単一民族として長い歴史をもつ中で受難を受けなければなりません。

多くの血を流さなければなりません。正義の人々でなければなりません。歴史時代において、奸臣たちによってどれほど多くの血を流したでしょうか。さらに、朝鮮王朝の五百年期間、六百年に相当する期間をそのように生きてきたのです。この六数を蕩減しなければなりません。そのような時代だったので、多くの善なる血を流したのです。

私は、統一教会の悲惨な運命の道を四十年間歩んできましたが、滅びませんでした。なぜでしょうか。このことを知っていたからです。私が願う家庭的基準がこうであり、私が願う国がこうであり、私が願う世界がこうであり、私が願う神様はこうだというのです。

そのような私の願いが神様の願いであったということを知ったのです。それゆえに、投入して、投入してまた投入すれば、それは循環してある軸を中心として定着する、世界史的な一つの定着地が必ず生じてくるのです。できれば、それが韓半島の三十八度線を中心として成し遂げられることを希望しているのです。さらには、先生の故郷を中心としてこれを着地させようという思いをもっています。それで、今故郷の地に向かって前進しているのです。

南北が交差する中で展開した闘争の場において、韓国の自主独立の一日を願いながら身もだえしたのです。この韓半島が新しい寵児として生まれるためには、産みの苦しみを経なければなりません。そのような立場から南北が交差するようになっているのです。民主世界と共産世界を代表した一つの先進基地となり、両分される悲惨な国家的運命を迎えるようになっているのです。

誰がこれに責任を負わなければならないのですか。韓国民族がその責任を負わなければなりません。韓国民族が責任を負うのですが、将来の韓国の行くべき道を知らない人がその責任を負うことはできません。もし、それを知っていれば、韓国の伝統的歴史を通じて、韓国のこのような悲惨な姿を彼ら自身が収拾していたはずです。「収拾しなければならない」と考えた人、あるいはそのような愛国者もたくさんいたはずです。しかし、それができなかったということは、人間だけで解決することができる韓半島ではなかったということです。それを知っていたので、天意による摂理史的な韓半島とはどのようなものなのかということを知っている先生としては、開拓の一路を準備せざるを得なかったのです。

韓国と日本が合同で北朝鮮を動かし、南北統一を主導しなければなりません。そうでなくては韓半島と日本は一体化できません。

三) 韓半島統一は世界統一の模型

韓国を中心として統一を果たさなければなりません。そのようにすれば、次には韓半島を中心としてエバ国家である日本を一つにし、中共を一つにし、ソ連とアメリカを一つにしなければなりません。既にそのようにすることができる基盤を、すべて築きました。先生がすべて築きました。この国に入ってきて、外的なカイン世界に基盤を築くための活動をしました。今まで、政治世界、経済世界の基盤を築くために、彼らのために活動したのです。統一教会の文総裁に反対する人は、次第にいなくなるのです。既成教会に何人かの反対する人たちはいますが、今では南北統一する人は私しかいないということをすべての人が知っているのです。

韓半島が南と北に分かれましたが、これは世界が分かれたことを意味しています。今や統一の運勢を集めて回ってこなければなりません。誰がこれを南北に分けたのですか。日本が分けたのです。ゆえに、南北統一の基金は日本が出さなければなりません。そのようにしようとすれば、日本の国民を教育して総動員しなければなりません。それができる人は文総裁しかいません。それをするのです。南北統一の基金はどこで出さなければなりませんか。日本が出さなければなりません。

蕩減復帰において、日本は、失敗したイギリスに代わって、経済王権を中心としてアジアと全世界に影響を及ぼすことができる立場に立つようになったのです。ここで失敗すれば終わりです。ここで真の父を迎えなかったので、大陸を失い、半島を失い、島を失ったのです。ゆえに、それを蕩減するために大陸に戻り、これを反対から蕩減しなければなりません。ここでその大陸がアメリカであり、島が日本であり、半島が韓半島です。それで、大陸に戻ってくるのです。

アダムの怨讐がエバであり、エバの怨讐がアダムであり、アベルの怨讐が父母であり、カインの怨讐が父母です。そして、アベルとカインの兄弟は、お互いが怨讐です。このように、すべて怨讐です。怨讐たちが闘って掌握しようとしている所がどこかというと、韓半島です。韓半島は、最後の歴史を終結させる場所です。これを文化史で見れば、共産主義と民主主義の決着点です。南韓と北韓がそのようになっているのです。

共産世界を代表して再臨復活した父親の格位に当たるのが北韓の金日成です。それから、民主世界を代表し、キリスト教を中心として再臨復活した父親の各位に当たるのが文総裁、真の父母です。父母が二人出てきたのです。今までこの韓半島は、アジアにおいてアメリカや中国やソ連が手放すことができない立場にあります。日本は結婚していないエバであり、きらびやかに着飾った完璧な美人になっているのです。ですから、ソ連も中国も、そしてアメリカも、これを取って食べたいと思っているのです。天使が堕落する時と全く同じです。

神様は韓半島を愛していらっしゃいます。韓国だけを愛しているのではありません。今まで北朝鮮は愛することができる立場になれなかったのですが、今からは北朝鮮を助けてあげなければなりません。ヤコブがエサウを助けてあげたのと同じように、すなわちヤコブがエサウの長子権を受け継ぐために、受難を経ながら二十一年間準備した財物をすべて捧げたのと同じように、文総裁にも、北朝鮮の人々を先頭に立てて食べさせて生かす道を開拓しなければならない責任があります。そのためには、カインの立場の政府とアベルの立場の文総裁が一つにならなければなりません。

死ぬべき金日成を救ってあげたのが文総裁です。双子の兄弟と同じです。韓半島の双子でしょう？　ゆえに、互いに殺そうとするのではなく、助けてあげなければなりません。エサウとヤコブは兄弟でしょう？　ヤコブが二十一年ぶりに帰ってくることによって兄の前にすべてのものを捧げたのです。エサウにとって祝福を受けた長子権を譲り渡すことは惜しいことでしたが、同じ兄弟の位置に立って福を譲り渡すことによってイスラエルの王権が成立したのです。第三イスラエル圏にあるレバレンド・ムーンは、韓半島の南北を統一し、アジアの諸国圏を一つにしなければなりません。北と南はカインとアベルです。そのようにすることによって、イエス様がアジアで失ってしまった体を接ぎ木してあげなければなりません。

民主と共産に分断された韓半島は、世界の中心地であり、南北統一こそ世界の平和統一の鍵になるということを知り、今日まで私は、

世界の各地でこの任務のために全身全霊を捧げてきました。昨年、一九九一年十一月に、私が北朝鮮を訪問して金日成に談判したのもこのためでした。今や世界のすべての宗教が統一される日も遠くはありません。韓半島の南北が統一される日も遠くはありません。

韓半島は、四十年間南北に分かれてきました。今、世界において第三次世界大戦勃発の最も大きな危険性をもっている場所は、中東のイスラエル地域と韓半島です。この二つの地域です。これらは、すべて宗教的背後をもってぶつかっています。金日成の主体思想は、サタンを中心とした宗教と同じです。北朝鮮は、完全にサタン的宗教圏です。その独裁については、到底言葉では表現できません。この世界を統一できる宗教は、レバレンド・ムーンの統一教会しかありません。

今、世界には、宗教を中心とした中近東のイスラエル地域の問題と、民主主義思想と共産主義思想を中心とした韓半島の南・北韓の問題があります。この宗教と思想を背景とした両陣営の衝突によって第三次世界大戦が発生すれば、地上の人類は全滅します。そのような危険のまっただ中に立っているのです。誰がこれを平和の世界へと収拾するのでしょうか。

アダムとエバが一体化すれば、カインとアベルが統一の出発をするのです。そのようになれば、韓国と日本を中心として、アジアにおいて新しい理想的出発がなされるのです。アジアと西洋、すなわち東洋と西洋の一体化、そして、南北の一体化が成されるのです。それは韓半島の南北のことではありません。南北における貧富の差のことをいっているのです。そして、東洋と西洋の文化の違いのことをいっているのです。ゆえに、世界的一体化は問題ではありません。

この国が四十年前に先生を立てていれば、世界を主導することができる長子権の王宮になっていたはずです。長子権の国になっていたはずです。第三イスラエル圏の定着国になっていたはずです。しかし、それができなかったので二つに分かれたのです。イスラエルが北朝イスラエルと南朝ユダに分かれて闘ったように韓半島が分かれたのです。これが再び回ってきて文総裁を中心として統一的運勢を備えなければならなかったのですが、そのようにすることができなかったので統一が成されませんでした。

韓半島が南北に分断されたのは、我が民族がそれを願ったのではなく、アメリカとソ連の二大国家、そして中国や日本など、周辺の強大国の影響によるものです。したがって南北統一も、私たちが韓半島の中に座ってただ統一を願ったとしても、それがそのまま訪れるのではありません。アメリカ、ソ連、中国、日本などが我が国を分断させたままで、国際秩序を主導している既存の状況を変えなければ、統一を成すことはできません。すなわち、韓半島を統一させる事業に、周辺の強大国が妨害するのではなく協力するように、我が民族と韓国の主体的な影響力を養わなければなりません。

四) アダム国復帰のための摂理的展開

(1)日本、アメリカ、ドイツを中心とした摂理

死亡の種を受けたエバが生命の種を受けるためには、アダムを中心としてカインとアベルの二人の息子を抱いてこなければなりません。蒔いたとおりに刈り取らなければならないのです。第二次大戦時、島国であるイギリスは、エバ国家としてアメリカというアベル的な息子を生み、天使長であるフランスを抱かなければなりませんでした。

カインとアベルを抱かなければなりません。そこに相対しているのが島国である日本ですが、日本は、エバ国家としてドイツとイタリアを抱いたのです。全く同じです。ドイツのヒトラーはキリスト教破壊主義者です。ゲルマン民族第一主義思想をもって、精神的に、思想的にすべてのものを破壊しようとしたのがヒトラーの思想です。そして、行ったり来たりするイタリアは天使長です。サタン側の母の前に二人の息子と同じ立場に立ったのです。これを世界的に清算する闘いが第二次世界大戦です。そのように蒔いたので、秋になれば「毒麦」は切って捨てなければなりません。それを切って捨て、一人の主人圏内のキリスト教文化圏に統一したのが第二次世界大戦です。

アダムとエバが堕落する前は、アダムとエバを中心として神様と三人の天使長がいました。アダムを中心として見るとき、エバはアダムに従い、三人の天使長もアダムに従っていかなければなりませんでした。アダムを中心として、エバと三人の天使長が神様と一つになって天国に入っていくのが理想です。ゆえに、今アダム格の代表である先生が、エバ国家である日本を動かし、アメリカを動かし、中国を動かし、ソ連も動かしているのです。それで、三人の天使長とエバ圏を迎える位置に戻ってきたのです。

韓国はアダム国家であり、日本はエバ国家です。なぜ日本がエバ国家なのでしょうか。日本は島国です。島は、常に陸地を慕うのです。海は女性を象徴しているではありませんか。ですから、島国は女性を象徴するのです。これが韓半島と日本を中心として成立したのです。ここに三人の天使長と同じ国があるのです。そのアジア的天使長が中共であり、西欧キリスト教的な天側の天使長がアメリカであり、悪魔的な天使長がソ連です。これが、三人の天使長です。

イギリスはエバ国家です。失われたアダム家庭においてエバが誤ったのです。その次はカインとアベルです。カインとアベルが一つになれずに堕落しました。それを世界的国家形態で復帰し、結実したのがイギリスです。イギリスは島国です。島国はいつも陸地を慕います。これはエバを象徴するのです。母の象徴です。そしてアメリカは、アングロサクソン民族を中心としてエバ国が生んだ国です。ゆえに、アベルです。それからフランスは天使長です。イギリスとも闘い、アメリカとも闘って怨讐ですが、これが終末になって連合軍を中心として、イギリスとアメリカとフランスの統一が起きたのです。

今まで、先生がアメリカでしたこととは、アダム国家とエバ国家、それからカイン国家とアベル国家の復帰です。アダムが堕落して種を蒔いたので、これを世界的国家基準にお

いて蕩減復帰しなければなりません。韓国がアダム国家、日本がエバ国家、それからアメリカがアベルの立場です。長子権復帰を成し、主権復帰を成すために出てきたのがアベル国家です。それからドイツは、サタン側のカイン国家でしたが、日本がエバの位置に立ったので、ドイツが天の側のカイン国家になるのです。

この四つの国が世界的な舞台の上で一つの国の伝統を立てなければなりません。その舞台がアメリカです。自由世界のキリスト教文化圏であり、世界を指導するアメリカにおいて、先生を中心として日本人、ドイツ人、韓国人、アメリカ人が一つにならなければなりません。アメリカが滅びるようになっているのです。アベル国家型が崩壊してきているのです。このようなことを収拾しておかなくては、アダム国家とエバ国家の立つ位置がありません。いくらアダム国家の位置にいたとしても、これが完全に崩壊してしまってはいけません。ゆえに、先生はこれを収拾するためにアメリカに行くのです。また、それをするのは、韓国人と日本人を連れていってアメリカ人を教育し、ドイツ人と一つにさせるためです。これらは怨讐の国です。すべて怨讐関係にある国です。

先生は、韓国をアダム国家、日本をエバ国家に立てましたが、アメリカに行ってすべてが出会うのです。カインとアベル、旧教と新教が結束した基盤の上で、今までアダムとエバを中心とした結束運動を十二年間してきたのです。

エバ国家がすべてなし、アダム国家がすべてなせば、その次には天使長国家です。三大天使長です。中国はアジアの天使長、アメリカはキリスト教文化圏である西洋の天使長、ソ連はサタン側の天使長です。この三人の天使長がアダム国家とエバ国家と神様と一つとなり、本然の相続権が引き継がれれば、それによって初めて、堕落しなかった個人的エデンの園の神様とアダムとエバと三人の天使長の位置を世界的に蕩減復帰するのです。そこに真の父母が設定されることにより、真の父母の名前がある所には悪魔の勢力がいなくなっていくのです。

今はその時が来たので、真の父母を世界的に宣布するのです。歴史はそのように流れていくのです。この話は、私の話ではありません。

アメリカは摂理的に見れば倉庫番です。知識倉庫、軍隊倉庫、物質倉庫、科学技術など、あらゆるものをもっています。しかし、主人ではありません。主人ではなく、その管理人です。ゆえに、これらをすべて世界に分け与えてあげなければなりません。ところが、アメリカは、何が何でもそれを独占しようしています。倉庫は、天がコントロールするのです。その倉庫をアジアに移してくるのです。今は、それを日本がすべて引き継ぐのです。そうでしょう？

日本はエバ国家なので、天使長と一つになって失ってしまったものを再び取り戻すのです。エバがこのようにするのは、アダムのためです。ですから、どこに行くのでしょうか。アダムの所に帰っていくのです。今、アメリカは、韓国を捨てれば滅びます。カーターは、そのようにしたので首が飛びました。それは、意味もなくなされたことではありません。こ

のようなことは、すべて摂理的見地からなされているのです。

皆さんは「なぜアメリカは天使長国家なのだろうか」と言って寂しく思うかもしれません。しかし、キリスト教がそのようになっているのです。相対的です。再臨する時は、エバ国家を中心としてすべて民となるのではないですか。キリスト教文化圏は、新婦圏をつくるためにあるのです。すべての国は天使長国家となるのです。

(2)二次大戦前後の蕩減復帰摂理

イギリスはエバ国家です。そのエバが息子として産んだのがアメリカです。フランスは怨讐です。この三カ国が連合国です。それから、枢軸国はどこかというと、島国であるエバ国家日本です。サタン側も神側と全く同じです。島国日本を中心として、ドイツもサタン側の息子のように極悪です。

第一次大戦以降、日本は大東亜戦争を中心として、フランスの領土であるベトナムをあっという間に占領し、またシンガポールもあっという間に占領してしまいました。ドイツは、日本が自らの怨讐国をこのようにあっという間にやっつけるのを見て「日本を中心として一つになれば世界をのみ込むことができる」と考えたのです。それで、日本とイタリアと三国同盟を結んだのです。イタリアは天使長圏なので、行ったり来たりするのです。

キリスト教を抹殺しようとしている国を中心として、本来のエバ国家であるイギリス、また本来のアベル国家であるアメリカ、そして本来のカイン国家であるフランスの代わりとして立てなければなりません。キリスト教文化圏を身代わりしたものをすべてサタンがもっていったので、アダムの位置にアメリカを置いてエバを選択するのです。

神様の好きなイギリスという頭をサタンが占領したので、神様は仕方なくそのしりとなる日本をつかんでくるのです。その次にはアメリカのしりをつかむのです。その次にはドイツのしりをつかんだのです。そのようにして、エバ国家、アベル国家、カイン国家の形態を再びつくりあげ、四千年の歴史を四十年間で蕩減しながら峠を越えていくのです。そのようにしなければ世界が滅びるのです。

キリスト教を中心としてエバ国家を代表したのがイギリスです。カインはフランスです。それから、アベルはアメリカです。アメリカは、イギリスが生んだ息子と同じです。世界的にそのような種を蒔いたので、そのような国が世界的に実を結ぶのです。そのように実を結んでこそ、お互いに闘ってきた国同士が反対に天の側に復帰される立場となるので、イギリスを中心としてアメリカがアベル国家であり、フランスがカイン国家となるのです。

この三カ国が一つになって連合国となるのです。サタン側はその反対です。日本はサタン側のエバ国家です。天照大神は女性神でしょう？　これを中心として、サタン側のアベル国家がドイツです。ドイツは、歴史時代に六百万人ものユダヤ人を虐殺しました。キリスト教全体を虐殺し、この世界を一掃しようとしたのです。

日本はサタン側のエバ国家です。ドイツのヒトラーは、日本をはじめとしてイタリアと三国同盟を結びました。なぜでしょうか。ドイツにとっては、フランスとイギリスを打ち

破ることが最高の目的となっているのですが、日本がフランス領であるベトナムとイギリス領であるシンガポールを侵攻し、それをあっという間に席巻するのを見て「日本と同盟を結べば、アジア的勝利圏を連結することができる」と考えたのです。そして「このように一つになって勝利したとすれば、その時はドイツが主体となる」と考えたのです。「日本は大陸ではなく海洋国なので、日本が勝利しても大陸の主体である自分たちのあとに従ってくるしかないはずだ」と考えたのです。

神側の連合国と同じように、サタン側でも編成するのです。日本、ドイツ、イタリア、この三カ国が枢軸国です。同盟国を中心として見るとき、日本がエバ国家です。誰が闘いを始めたのかというと、東洋では女性が先に始めました。東洋全体をまとめようとしたのです。また、西洋ではどうだったのでしょうか。ドイツは体を象徴しています。そのようなドイツが西洋全体を占領してまとめようとしたのです。全体的に見るとき、先に闘いを始めたのは日本であり、ドイツです。イタリアという国は、それについて回るこぶです。

第二次大戦の時、連合国であるイギリス、アメリカ、フランスと、枢軸国である日本、ドイツ、イタリアが闘いました。これは何でしょうか。エデンの園で蒔いた種を、その蒔いたとおりに刈り取るのです。母親とカイン、アベルです。これが神様のみ旨の中で、内的なものと外的なものという二またに分かれたのです。それゆえに、内的なエバ国家と外的なエバ国家、内的なカイン国家と外的なカイン国家、内的なアベル国家と外的なアベル国家として大きくなってくるのです。それが右翼と左翼です。

神様のみ旨においては、二度選んで使うことはありません。しかし、アメリカを除いてしまえば、統一教会とキリスト教、そして統一教会とユダヤ教の文化圏が分裂していくのです。それで、仕方なく泣き泣き芥子を食べて（注：嫌なこともやむを得ずするという諺）アメリカを選んだのです。なぜ私がアメリカに行って闘わなければならないのでしょうか。それは、私がアメリカを選んだからです。ゆえに、エバ国家の日本人を連れていってアメリカが失敗したものをすべて整えてあげるのです。

アダムが蒔いた罪が世界的に実を結んだので、それをすべてめちゃくちゃに打たなければなりません。根本を見れば、神様、アダムとエバ、そして三人の天使長です。これを見れば、韓国がアダム国家であり、日本がエバ国家です。ですから、交差結婚をするのです。アダムとエバは、個人的に結婚することによって死亡世界をつくりました。しかし第二世は、韓国民族の二世と日本民族の二世が交差結婚をするのです。

もしアメリカまで放棄していれば、自由世界とキリスト教文化圏は完全になくなるのです。誰がアメリカをアベルの位置に再び立たせたのかというと、私です。それは、神様が選んだのではありません。一度失敗すれば、それで終わるのです。しかし、父母によって誤ったものをアベルを通して救った歴史があるので、私がアメリカをアベルの位置に選び、イギリスの代わりのエバ国家として日本を選び、フランスの代わりにサタン側にいた、極

悪なサタンの最も愛する怨讐国家ドイツを奪ってきたのです。

サタン側と天側の二種類の人を立てました。サタン側のエバ国家、サタン側のアダム国家、サタン側の天使長国家を立ててぶつかったのが第二次大戦です。ここでサタン側が屈服することにより、キリスト教文化圏がアメリカに入っていきました。新教文化圏がアメリカに入っていったのです。アメリカが韓国の統一教会と一つになり、文総裁と一つになっていれば、今日のようにはなっていません。共産主義は出てこなかったのです。

ゆえに、アメリカが韓国を手放せば滅びます。それで先生は、日本をエバ国家として育て、統一教会に反対したアメリカを天使長国家として育てたのです。それは、アメリカや日本が自らそのようになったのではありません。文総裁がそのようにしたのです。

私は、解放後の七年間で世界のキリスト教を統合する責任を果たそうとしました。歴史を代表して誇ることができる偉大な人物が四十年蕩減路程を経て、今日七十歳となって戻ってきました。ですから、アダム国家とエバ国家が統一されることによって、反対していた天側の天使長アメリカ、アジアの天使長中共、共産党の天使長ソ連、この三人の天使長が自然屈服して、韓国を中心として従ってくるようになる時は、世界におけるサタン世界の血統を根絶し、天国の血統と交替することができる平和の王国時代が到来するのです。

先生を中心として中共とアメリカとソ連が一つになるということは、エデンの園でアダムとエバを中心として三人の天使長が一つになったことと同じなので、このようになればすべてが終わるのです。そのような環境で蒔かれたものが世界的次元に発展し、そこでそれを蕩減復帰して清算しなければなりません。ゆえに、韓国がアダム国家であり、日本がエバ国家であり、その周辺の国々が三大天使長国家です。ちょうどそのようになっています。神様とアダムとエバを中心として三大天使長圏ですが、その三大天使長圏がどこの国かというと、中国とアメリカとソ連です。これが今では神側に反対しません。先生を中心としてすべて連結されたのです。

神様とアダムとエバの周辺に三人の天使長がいたように、神様を中心としてアダム国家を形成しなければなりません。個人的に蒔いたすべてのものが国家的、世界的に実を結んでこそ終わるのです。ですから、神様、アダム国家、エバ国家、そしてその横に三人の天使長です。これは何かというと、韓国と日本がアダム国家とエバ国家です。そして、三人の天使長とは、アジアの天使長、天側のキリスト教天使長、それから世界的な悪魔側の天使長のことをいうのです。この三人の天使長が集まってエバを奪い取ろうとするのです。もしアダムとエバを再びもてあそぶようなことがあれば、世界的にすべて終わるのです。そのようになれば終わりです。

来られる主が世界の全権をもって天地を統治する基盤をすべて連結させ、統一王権を中心として世界を一つにしなければなりませんでした。それが神様のみ旨だったのですが、キリスト教文化圏であるアメリカを中心として統一教会の文先生に反対することにより、サタン圏内に完全に倒れていったのです。そ

のような状態で、文総裁が何ももたずに決起したのです。サタン側のエバ国家である敗亡した日本を支え、アメリカを支えたのです。

(3)アダム・エバ・天使長国家の摂理

摂理観から見るアダム国家とエバ国家と天使長国家を、いかにして一つの国のようにするかということが問題です。この話は何かというと、今後は韓国人、日本人、アメリカ人、ドイツ人が一つの家で暮らさなければならないということです。天国に行こうとすれば、それをここで準備しなければなりません。天国に、ドイツ人やアメリカ人や韓国人や日本人というものがありますか。天国では、すべて一つの国の人です。しかし、霊界はすべて分断されています。これを一つにしようとすれば、地上で一つにしなければなりません。地上で一つにして上がっていかなければなりません。それが問題です。

もしイエス様が死ななければ、中国とインドを二人の息子のように抱かなければなりませんでした。それらの国がそれをしなければなりませんでした。母の格位であるイスラエルの国が、その新郎として来られるイエス様をアダムとして侍る立場で、インドと中国というカイン、アベルを中心として一つにならなければならなかったのです。そのようにしてメシヤがアダム国家の主権を立てなければなりませんでした。しかし、イスラエル民族がメシヤに侍ることができなかったので逆の方向に行くのです。ローマという半島から、島国へ回っていくのです。

宗教が果たすべき責任とは何かというと、母親に侍る歴史的基盤を築くことです。それは世界的でなければなりません。そのような意味から、宗教圏を中心として世界が一つになることができる摂理的帰結点を神様が考えざるを得ないと思うのです。その時がいつなのかというと、第二次大戦の時でした。それで、エバ国家、カイン・アベル国家、アダム国家を立てなければなりません。彼らがアダムとして来られるお父様に侍り、世界の頂上で接ぎ木をする工作をして統一国をつくろうとされたのが神様のみ旨でした。歴史をこのように見なければなりません。

統一教会は異色な四大文明圏、すなわちアダム国家とエバ国家と天使長国家、そしてカイン・アベル国家、このように怨讐と同じ四大文化に基盤をおいたのです。すべて背景が異なり、相いれない立場にあるものを伝統基盤とし、出発基地としようというのは恐ろしいことだということを知らなければなりません。これがどれほど偉大な事実かということを知らなければなりません。それを出発点とするのは難しいことだと考えるかもしれませんが、それが統一教会において何よりも誇り得る伝統基地であるということを知らなければなりません。

本来蒔かれたもの、すなわちアダムとエバと天使長が失敗したものを、国家的次元で収穫期の結実として、アダム国家、エバ国家、天使長国家を中心として蕩減してくるのです。もし先生を中心としてイギリスとアメリカとフランスさえ一つになっていれば、韓国はアダム国家となるのです。天の国、縦的な国の主権を中心としたアダム国家となり、イギリ

スをエバ国家として率い、アメリカを長子として率いていたのです。

アメリカはアベル圏として世界の主導権を握り、世界の版図を率いるのです。世界の国家的な主導権をアベル的立場に立ったアメリカが初めてもったのです。それ以外の国々はカイン的立場です。そして、カイン的立場の国々はアメリカに従っていくのです。ゆえに、長子権復帰の世界化時代に合わせて統一されたキリスト教文化圏時代の上に主が来られ、母子協助基盤と連結させれば、すべての問題が解決するのです。

文総裁がアメリカに行って成したこととは、世界的な西欧文明のすべての潮流をアジアの潮流へ引き込むことでした。今まではアジアから盗んでいったのですが、今からは引き込むのです。引き込むにおいて、その最初が日本です。日本はエバ国家として祝福を受けたので、アダム国家を訪ねていかなければなりません。

エバが堕落することによって、万物とあらゆる権威をサタン世界が奪っていったので、回復時代においては、世界の潮流が逆に流れる時代に入ってくるのです。イギリスを「日の沈まぬ国」と言ったように、今日、日本を中心として経済圏とあらゆる権限がアジアに集中するのです。そのようにして日本に従って、韓国を経て大陸に行き、そこで定着するのです。

５．私たちが取り戻さなければならない祖国

(1)祖国光復は人類すべての願い

本来、人間始祖のアダムとエバが堕落していなければ、どのようになっていたのでしょうか。アダム家庭でのアダムは、族長となるのです。族長となると同時に民族長となるのです。また、国家の代表者となってアダム王となるのです。したがって、この世界はアダム主義一つに統一されていくのです。つまらない主義が出てきて世界を撹乱しているので、私たちはこのような主義を根元から抜き取ってしまわなければなりません。

主義もアダム主義、言語もアダム言語、文化もアダム文化、伝統もアダム伝統、生活様式もアダム生活様式、制度もアダム制度、すべてのものがアダム国家の理念制度にならなければなりません。このような主義が「神主義」です。神様の心によって神様と一体とならなければならないので、「神主義」というのです。

アダムとエバが堕落していなければ、神様は何をしてあげようとされたでしょうか。神様の祝福による結婚式をしてあげ、神様が喜ばれる息子、娘を生ませ、神様が喜ばれる家庭を編成し、これを繁殖させて氏族と民族を編成しようとされたのです。これがさらに広がれば、その世界は「神主義」の世界であると同時に、アダム主義世界となるのです。

その世界に理念があるとすれば、それはアダム主義理念であり、宇宙観があるとすればアダム主義宇宙観であり、天宙観があるとすればアダム主義天宙観であり、生活観があるとすればアダム主義生活観です。そして、そこに五色人種がいることは問題ありません。それは環境によって変化したものなので、皮膚の色が異なったりしているのは問題ないのです。それでは、どうして数多くの民族の言

語が変わったのでしょうか。それは人類始祖が堕落することによって、天が分立させたのです。

神様が創造された世界に国境はあり得ません。そこでは、白黒の人種は問題となりません。善悪の闘争もそこでは必要ないはずです。このような観点から見るとき、私たちの住んでいる世界には、各国ごとに国境があります。そして、白黒の人種問題だけでなく、家庭における夫と妻、また父母と子女の間に分裂が起きています。善人と悪人が闘っています。このような状態を見るとき、来られる主は、国境のない国をつくり、人種問題を超越して世界を一つにしなければなりません。分裂した家庭をすべて統一し、善と悪が争っているこの世界に平和の王国をつくらなければなりません。

理想天国とはどのようなものでしょうか。統一教会の食口のような人々が全世界で暮らすことです。それが地上天国です。この地上のすべての人々が統一教会の食口のように生きれば、それが地上天国です。それはどのような世界かというと、神様と共に暮らす世界です。その世界では誰も「神様はいない」と言わず、また神様に対して疑うことがありません。神様を「私たちの父」と言いながら、すべてが一つになる世界です。それから、サタンの誘惑がありません。サタンがいないのです。神様が主管する世界、それが地上天国です。神様が私たちと共に暮らすのです。

その国は、神様を中心として直系の子女たちが天命に従って神様を身代わりした命令をもち、その王権によって統治する国であることに間違いはありません。そこには民主主義や共産主義というものはあり得ません。一度形成されれば、その国家体制は永遠に続くのです。そのようなことを考えれば、私自身がそのような国の民となることができなかったという事実が悔しいことではないかというのです。私自身がそのような国で暮らすことができないことを嘆かなければなりません。そのような国をもっていないことを嘆かなければなりません。そのような不変の主権をもっていないことを私たちは嘆かなければならないのです。

神様の理想国家の実現、すなわち祖国光復はどこから実現されるのでしょうか。怨讐を愛する思想をもった個人から出発するのです。それゆえに、神様が存在される限り、「愛によって国境を壊し、すべての環境と文化的な垣根を越えて怨讐までも抱こう」という運動を提示したキリスト教は、世界的な宗教にならざるを得ないのです。大豆を植えれば大豆が出るし、小豆を植えれば小豆が出るし、真っ赤な花の種からは真っ赤な花が咲くのです。同じように、恨みを晴らすサタンの種を蒔けば、恨みを晴らす悪の木が育つのですが、怨讐を愛する善の種を蒔けば、怨讐を愛する善の木が育つのです。これは自然の道理です。

本然の地とはどのような所でしょうか。そこは悪が宿る所ではなく、悪と絶縁し、あふれ出る本然の愛を中心として、幸福を永遠に謳歌しながら暮らす永遠の統一世界です。今までそのような所で生活をした人はいたでしょうか。一人もいなかったのです。歴史上、数多くの人々がそのような世界を追求してきましたが、この地上にそのような世界が立て

られたことはありませんでした。その世界がいかなる世界かを言葉で表現した人はたくさんいましたが、自ら実践してそのような世界をつくりあげた人はいませんでした。

今まで、世界の数多くの民族、あるいは五色人種がつくってきた文化圏の世界をすべて打破し、一つの文化圏をつくらなければなりません。言い換えれば、神主義的な家庭制度、神主義的な社会制度、神主義的な国家制度、神主義的な内容を備えた理想世界ができてこなければなりません。そのような主義が、堕落することのない完成したアダム主義です。共産主義でも民主主義でもないアダム主義です。

それは「神主義」を訪ね求めていく過程です。主義というものは、ある目的を訪ね求めていく杖のようなものです。主義というものは、それ自体が要求されているのではなく、あくまでも目的を果たすために必要な過程です。したがって、この主義というものは変遷するのです。

今日、アメリカは民主主義の宗主国として先進国家だといっていますが、今後金銭問題で腐敗することによって民主主義を嫌う時代が来るはずです。今、大韓民国にもそのような現象が起きています。民主主義は、良いことは良いのですが、我が国では金銭問題ゆえに、ありとあらゆる謀略中傷が起きて「政権を奪取しよう」という争いが展開しています。それが民主主義ですか。それは特権主義的な状態で展開する現象です。

南北が分離し、その貧富の格差が広がっていることを一つにしなければなりません。また、東西の文化を一つにしなければなりません。それから、人種差別、文化の差別をなくして一つにしなければなりません。何によって一つになるのでしょうか。これが絶対的な一つの愛から出発することができなかったので、この絶対的な愛によって宇宙版図の上に立てば、統一教会に反対する叫び声はなくなるはずです。世界は、老若男女を問わずこの愛のふろしきで一つに包まれるのです。それだけでなく、霊界にいるすべての霊人もこのふろしきに包まれることを願っているのです。ゆえに、天宙統一というのは可能な話なのです。

神様がいらっしゃるということをはっきり知るようになれば、神様のみ旨に従っていかざるを得ません。神様のみ旨とは何でしょうか。この世界人類を御自分の愛される民族とし、この地球星を御自分の愛される国土とし、この国土と民族を合わせて一つの主権国家をつくろうとされるのが神様のみ旨です。

人は誰でも自分の国で生きなければなりません。それは、人間に賦与された絶対的な条件です。一人も漏れることなく、その国とその義のために、希望にあふれた義の生活をしなければなりません。理想郷を思い描き、生活で義の法度を立てながら、その国とその義のために生きなさいというのです。

皆さんにそのような国がありますか。なければ、その国を探し出し、それをつくりあげなければならないのではありませんか。その国はどのような国でしょうか。理想の国、統一の国です。万民が行くことのできる国です。国をつくるにおいて例外はありません。ここには家庭も協助し、民族も、世界もすべて協助するはずです。そして、個人を統一し、家庭、氏族、民族、国家、世界を統一することができるのです。

普通、世界主義というと、民族と国家を無視して全世界を一つの国家、すべての人類を同胞として見るという意味にとどまりますが、統一教会において唱える世界主義は、家庭からその壁を超越するのです。父母であられる一人の神様と、血のつながった実の兄弟と変わらないすべての人類が一つの世界を成し遂げるという世界主義です。これは、いかに素晴らしい世界主義でしょうか。

(2)新しい祖国の定礎石をおこう

人間の力、人間の知恵、人間の文化、そのいずれをもってしても真の意味での平和世界や一つの統一された世界を願うことはできません。このような立場において、世界文化を解決するために、最も中心的な問題は何でしょうか。何よりも重要な問題は、神様がいるのか、いないのかという問題をはっきり解明することだと思います。神様がいらっしゃるということをすべての人類が知り、神様のみ旨がいかなる世界を目指しているかということを知るようになれば、その世界は正に一つの世界、平和の世界、理想の世界になるに違いありません。

私たち統一教会が違う点はこれです。統一教会は父母を愛するように兄弟を愛し、民族を愛し、国家を愛そうというのです。父母を捨ててでも国を愛そうというのです。世界を愛するためには自分の国も捨てなければなりません。また、天を愛するためには世界まで捨てようというのです。より遠く大きいもののために、自分に近く小さいものを犠牲にする愛の道を訪ね求めていくのが統一教会の主流思想です。

皆さんは民族主義者になりますか、それとも世界主義者になりますか。宗教は、世界主義というだけではありません。人間だけ喜ぼうという主義ではなく、神様まで喜ぶようにしようという主義です。しかし、共産主義や民主主義は人間だけが喜ぼうという主義です。そのような人間だけが喜ぼうという主義と神様まで喜ぶようにしようという主義とでは、どちらが良いですか。神様も喜び、人間も喜ぶ主義が良いですか、それとも主人を除き、僕たちだけが喜ぶ主義が良いですか。宗教は、神様までも喜ぶようにしようという主義なので良いのです。

最後に残る思想とは何でしょうか。世界のために自分の国や民族よりも世界を愛し、神様を愛する運動だけが最後まで残る主義となり、思想となるはずです。したがって、その国を越えることができる超民族的な運動を世界的に提示し、超民族的に神様が愛する場所、あるいは世界人が愛する場所に自由に行くことができる道をいかに模索するかという主義だけが問題になるのです。

今後、この世界を引き継ぐ主義思想は、自分の国を犠牲にしてでも世界を救おうという主義思想です。そのような思想をもった国、そのような新しい運動を中心とした国家や国民が登場すれば、この世には新しい希望の世界が顕現するはずです。国を越えることができない国家観や歴史観は、神様の理想世界を引き継ぐことはできません。

黄色人種は長男であり、黒人は二番目の息子であり、白人は三番目の息子です。韓国は、争っているこれらの人種を、「統一思想」を通じて統一することができるのです。このよ

うになれば、神様を中心とした理想的祖国が創建されるのです。そこから初めて平和の世界、統一の世界、勝利の世界に収拾されていくのです。

そして、地上に天国を形成すると同時に、神様と一致しなければなりません。天上天国の主体であられる神様に地上で侍り、統一された一つの天国を形成しなければなりません。これが、統一信徒たちの果たすべき使命だということを、はっきりと知らなければなりません。そのような基盤のもとで父母と一つになることによって、初めて平和な天国生活が始まることでしょう。

統一教会とはいったい何でしょうか。右翼を抱き、左翼を抱いて、これを互いにつかんでどこに行くのでしょうか。ここから闘争の世界を越えて神様が導かれる幸福の世界、ユートピアの世界へ行くのです。これを抱いて平面的に行ってはなりません。それは何の話かというと、体制によって没落し失敗したことを、統一教会が思想的にすべて収拾できる論理体制を備えると同時に、これを抱いて横的に動かすことができる霊的体験の基盤を中心とした超越的実体を追求しなければならないということです。

人間的な面での人本主義や物本主義、そして過去のあらゆる神本主義も体系的に理論化させ、それを統合できる内容をもつと同時に、縦的な面において宗派を超越して連結していくことができる超自然的な体験の宗教思想にならなければならないという事実を知らなければなりません。

皆さんの願う国とは、どのような国ですか。その国は、今日皆さんが暮らしている、このような国ではありません。このような国は、いずれ決別を告げなければならない国です。皆さんがこのような国と因縁があるとすれば、それは罪悪の因縁があるのです。皆さんは、その国の願いと神様の願いが結びつく善の因縁を最初から結ぶことができない、堕落した人間の子孫として生まれたということを自らよく知っているのです。

国がなければ国籍がないということです。国がなければ入籍できる基盤がないということです。私たちは、民族を編成して新たに入籍しなければなりません。この地上に天国を編成し、その国籍をもって愛国し、愛族する真の善の父母の血統を受け継いだ勝利的息子、娘となり、自らの一族、あるいは家族を率いて生きていってこそ、天上世界の天国に入っていくことができるのです。それが原理です。

国があって初めて、私たちの子孫に、千秋万代にわたってそのまま残してあげることができる伝統も残るのであり、血と汗を流した私たちのすべての努力も残るのです。また、神様の勝利を祝うことができる記念塔がこの地上に造られ、すべての栄光の足跡がこの地上に残されるのです。しかし、国がなければすべては無駄になるのです。今日、世界のキリスト教に残された十字架やすべての文物も、神様が探し求めようとされる国がなくなるような場合は、すべて川に流し、火で燃やしてしまわなければなりません。サタンの籠絡によって、すべて滅びていくということを知らなければなりません。ですから、国が問題です。そのことを皆さんは知らなければなりません。

真の父母の愛を受け、神様の愛を受けなければなりません。しかし、神様の愛は、国なくしては受けることができません。本来アダムは、一人でも彼が国の始まりでした。サタン世界のサタンの国よりも良い国があってこそ、神様の愛を受けるのです。私たちは、神様の愛を受けはしますが、直接受ける立場にはありません。真の御父母様の愛は受けることができますが、神様の愛を受けようとすれば国まで備えなければなりません。なぜそうなのかというと、サタンがいて、サタンの国が残っているからです。それよりも上がっていかなければなりません。そのような道を皆さんが行かなければならないということを、はっきりと知らなければなりません。

私たちが取り戻さなければならない祖国は、今日この地上にあるような、ある歴史と伝統をもった国ではありません。そのような国とは本質的に次元が異なります。次元の異なるその国を私たちが受け継ごうとすれば、そのようにすることができる思想的な主体性をもった国民とならなければなりません。その主体的な思想は、絶対的な創造主の思想と一致する思想でなければなりません。絶対者の願う国ができるためには、その国の主権を中心として、その国の国民が一致することを願わなければなりません。そのような国民性と国家形態を備えなければなりません。

一つの国が形成されるためには、主権と民族と国土がなければなりません。天国もやはり同じです。主権を代表したものが父母であり、民族を代表したものが息子、娘であり、国土を代表したものが国です。このうちのどれ一つとして除くことができるものはありません。これは鉄則です。

国が形成されるためには、国土があり、民族と主権がなければなりません。主権とは何でしょうか。根源的な神様と因縁を結ぶことです。国を治める人たちは、その民が深く寝静まったのちに神様と因縁を結び、政治をしなければなりません。そして、主権者はその民と一つにならなければなりません。民と一つとなり、自らにあるすべてのものは自分のためにあるのではなく、国のためにあるものだと考えなければなりません。そのようになれば、その国は繁栄するのです。

いくら大きい社会、いくら大きい国家であっても、それは人間に似ていなければなりません。それは、神様が御自身の形状に似たものを喜ばれるからです。それでは、人間が最も喜ぶものは何でしょうか。自らの形状に似たものです。したがって、理想的な国家とは人間に似ていなければなりません。それは、天地人に似ているということです。

私が行ったり来たりするのも、その国を取り戻すためです。祖国光復のための建国の功臣となるためにそのような使命を担い、あるいは天の密使として指令を受け、今日の悪の世の中に来て、このことをしているという事実を思いながら生きていかなければなりません。そうでなくては、皆さんは、今後訪れてくる国の国民として、その威信と体面を立てることができないということを知らなければなりません。

Book 十三: 真の神様の祖国光復 Restoration of the True God's Homeland

はじめに

真の御父母様の八十歳の御聖誕日を中心として、統一問題が再び争点となっています。真の御父母様が主管された国際会議の全般の主題が「二十一世紀・韓国のビジョンと統一祖国」であったし、御聖誕日の行事以後、引き続き全国二十一箇所の市、道において、南北統一前進大会を開催して、統一に対する民族の熱望を確認したところです。

それでは、民族の宿願である統一は、どのように現実化すべきでしょうか。韓国は人本主義と神本主義、共産と民主、唯心と唯物の世界、すべての宗教と思想の最後の終着地となっています。言い換えれば、南北分断は、単純な政治的、軍事的分界線ではなく、神様とサタンが対決する現場なので、韓国だけの問題ではなく、世界の問題となっており、それで韓国の統一問題は、世界統一のビジョンと一致しています。

真の御父母様は、私たちの南北統一が、世界統一の典型であり、神様がこの上もなく願われる神様の国の創建だという次元の高い価値と目的をもっていると語られました。

真の神様の祖国光復は、全人類的願いであるがゆえに、歴史の趨勢も統一祖国に向かっています。それでこの聖なる歴史の前に、召命された人類とすべての宗教は、真の神様の祖国光復に、超民族、超国家、超宗教的に、協力せざるを得ないのです。

神様は、世界の最も重い荷物を背負っている韓国を通して、世界を救うことのできる真の御父母様を立てられ、そのお方を通して世界史の難しい問題、すなわち、共産主義の問題、人種差別、貧富の格差、倫理道徳の堕落、宗教問題などを解決することのできる統一思想を下さったのであり、真の御父母様は、このような神様のみ旨を深く理解され、平和と統一世界を成就するために、大変な計画と事業を先頭に立って、実践してこられました。

真の御父母様は、四十年前からこのような統一の根本原則を見抜かれ、徹底して神主義を母体とした真の愛を中心に、共生・共栄・共義の心情文化を創建することに目的をおいて、調和と統一の新たなビジョンを提示されたのです。

新千年の始まりである二十一世紀は、偉大な神様の世紀になることでしょう。神様の神性と人間の理性が調和する私たちの真の神様の祖国創建のために、高邁な役割を果たす指導者となられることをお祈りいたします。

二〇〇〇年五月一日

日本語版発刊によせて

真の御父母様は、傘寿祝賀の一連の行事が行われたころから再び韓半島の南北統一を強調され、そのための具体的な活動を強化されるようになりました。神の摂理という観点からみるとき、韓半島の南北分断は単なる一民族の政治的分断を意味するのではなく、人間

の堕落以来カインとアベルの二つの型に分かれて争ってきた善悪闘争歴史が、最終的な結末をつけるべき摂理の終着点であるという極めて重大な意味をもっています。それは単なる政治的な統一ではなく、神様の祖国の回復として成し遂げられなければなりません。そのため、本書のタイトルである「真の神様の祖国光復」は、正に六千年の復帰摂理歴史と、真の御父母様の八十年の生涯を通じた悲願であると言っていいでしょう。

しかしながら、復帰摂理の原則は、人間が一足飛びに国家レベルの勝利を手中に収めることを許しません。そのレベルに至るためには、個人、家庭、氏族、民族の各レベルにおける勝利基準を着実に積み上げていかなければならないのです。そのため、真の御父母様はこれまで「家庭教会」「統班撃破」「氏族メシヤ」などに代表されるように、各段階ごとに私たちが勝利しなければならない内容を実に事細かに語り、指導してくださいました。

これらのみ言は、荒野時代を越えて定着時代を迎えるに際し、私たちが具体的に何をしなければならないかを教えてくださったものです。過去の復帰歴史においては、エジプトから出てきたイスラエル民族が荒野路程を終えてカナンに定着しようとする時、モーセを通じて神様から与えられた十戒のみ言と、荒野で訓練された信仰の伝統を守ることができずに、カナン七族の風習に染まって堕落してしまいました。

今日、私たちはいよいよ本格的な定着時代を迎えようとしていますが、私たちは決して堕落世界の風習に染まって過去のイスラエル民族の失敗を繰り返してはなりません。今日の私たちは、成約のみ言の集大成とも言うべき『聖本』と、本書の中に収録されている「世界と南北統一教本」とされている五つのみ言を頂き、さらにそのための細かい活動指針までも示されるという、まことに恵まれた立場にあります。

本書を通して多くの方々が、定着時代における信仰実践の具体的な方案を学んでくださるように願ってやみません。

二〇〇〇年五月

第一章　真の神様の祖国光復

一　真の神様が願う祖国

イエス様も真の神様の祖国を創建するために来られたし、先知先烈（注：先駆けて道を悟った先人、義のために命を捧げた烈士）たちも祖国建設の役軍（注：担い手）たちでした。天国を創建するために完成した男性が来なければなりません。天地が公認する男性が家庭を成して、子女を繁殖し、氏族、民族、国家を成さなければなりません。カインとアベルを基準として蕩減し、接ぎ木して、この世界を神様が主管する祖国として創建しなければなりません。先知先烈たちがこれを願ってきましたが、願う個人、家庭、氏族、民族、国家、世界へとつながる地上天国を建設できなかったので、私たちは歩んでいた道を捨てて、行かなければなりません。

本来、人間始祖のアダム・エバが堕落していなかったならば、どうなっていたでしょうか。アダム家庭でのアダムは族長になるので

す。族長になると同時に民族長になるのです。また国家の代表者になり、アダム王となるのです。ですからこの世界は、アダム主義一つに統一されるのです。くだらない主義はみな片づけなければなりません。くだらない主義がたくさん出てきて、世界を惑わしたので、私たちはこのような主義を根こそぎ引き抜いてしまわなければなりません。主義もアダム主義、言語もアダム言語、文化もアダム文化、伝統もアダム伝統、生活様式もアダムの生活様式、制度もアダム制度、すべてのものがアダム国家の理念制度にならなければならなかったのです。このような主義が神主義です。神様の心情によって神様と一体とならなければならないので、神主義なのです。

私たちが住みたい所は天の国、天国で暮らしたいというのが正しいのです。天の国に境界線がありますか。ありません。天の国で使う言語は二つですか。違います。人種の違いがありますか。ありません。では天の国とは何ですか。人はみな神様の懐から生まれたので、人類はみな兄弟です。神様を中心として見れば、神様の息子、娘ですから、みな兄弟であり、地上天国を中心として見れば、国民です。地上天国の国民なのです。国民だというのです。

私たちの目標は統一世界、神様を中心とした一つの国を築くところにあります。その国は、一つの主権、一つの国民、一つの国土、一つの文化です。真の父母を中心に一つの血統で連結されています。その国では、すべてが心情圏を成して、理想的な後継者になろうとするのです。聖書で「怨讐を愛せ」と言うすべてのものを成就することができます。

神様が創造した世界は、国境があり得ません。白黒の人種問題は問題になりません。善悪の闘争もそこには必要ないはずです。このような観点から見るとき、私たちが住む世界には各国ごとに国境があります。白黒の人種問題だけでなく、家庭において夫と妻、父母と子女の間にみな分裂が起こっています。善なる人と悪なる人が闘っています。このような現情勢を見るとき、来られる主は国境のない国をつくり、人種問題を超越して、世界を一つにしなければなりません。分裂した家庭をみな統一しなければならず、善悪が闘うこの世界に、平和の王国をつくらなければなりません。

それでは本郷の地と本郷の祖国はどこか、祖国は何を意味するのか。祖国はもちろんある特定の一つの国家的基準になるでしょうが、神様が求めて来られた人類の祖国はどこかと言えば、地球星です。この地球星です。この地球が人類が願う祖国だというのです。神様が願う人類の祖国なのです。過去に数多くの歴代の私たちの先祖たちが犠牲の道を歩みましたが、彼らが希望をもって天の前に訴えながら歩んだこととは何だったのか。「希望の祖国の一時が早く来るように」というものでした。天の一つの国家を立てることによって、今まで天の前に怨讐である大サタンを審判してしまい、悪を取り除き、善のみを中心とした平和の天国をこの地上に築かなければならないというものです。それが神様の願いであり、イエス様の願いであり、今まで摂理路程において、至大な貢献をした私たちの先祖たちの願いであったということを皆さんは、はっきりと知らなければなりません。

祖国は、アメリカでも韓国でもありません。いかなる所であっても、家庭の編成、氏族の編成、民族の編成が成された祖国の地がなければなりません。神様は六千年の間、数多くの国家を経ながら、この地に築かれる天国を願いつつ、求めてこられたのです。天の忠臣、烈女がどこにいるかと求めてこられたので、今こそ私たちは天を中心とした国家と民族、家庭を再編成しなければなりません。祖国光復の解放の日のために、召されたということを忘れてはなりません。祖国創建が宗教人の使命であるのに、自分一人が救われようという間違った欲をもっています。

統一教会のメンバーは、個人から民族、国家基準まで築いてきました。これからは全世界の人類とすべての国家を動員しなければなりません。私たちは祖国光復、自由、平等、幸福の日を求めて行かなければなりません。その道が難しくとも行かなければなりません。それは先生が見つめる観点であり、神様が御覧になる基準です。イエス様はこの基準を目指して歩み、亡くなられました。私たちは祖国光復の過程において、苦労し、前進しなければなりません。この地の人類は、統一教会のメンバーを前に立てて行かなければなりません。統一教会のメンバーでなければ駄目だという時が来ても、三年は苦労しなければなりません。彼らが私たちのものを相続する時まで、伝統を立てて、血と汗と涙を流さなければなりません。まだ私たちには蕩減条件が残っているということを知らなければなりません。

神様は悲惨な神様、神様は孤独な神様、神様は言い表すことのできないほど悲しい神様ですが、この神様を解放するための旗手になり、第一線の将兵となり、「血を流しても正統に打たれ、血を流して倒れるとしても一度に倒れよう」と言うことのできる信念をもって、祖国光復のために、その世界を一つに収拾するために歩む勇士の隊列がだんだん大きくなれば、ここから神様の喜びが始まることでしょう。

今は摂理の時が、どのような環境になったかということが、分かりますか。天の国の祖国光復がなされ、神様の地上天国が解放されること、それが第一の目標です。そのためには自分の家庭だとか自分の一族を犠牲にしてでも、やらなければならないのです。難民になったとしても、それをやらなければなりません。

一つの神様の主権のもとに一つの国を建てなければなりません。皆さんがこれから神様を中心として、真の父母を代行する実権者であるだけに、地上に祖国光復、世界統一的な国家に税金を払う時が来ました。先生の財布から出たお金をもって、皆さん個人を助けてはなりません。天のみ意に従わなければなりません。ですから韓国は韓国なりに責任を果たさなければならないし、日本は日本なりに責任を果たさなければならないし、アメリカはアメリカなりに責任を果たさなければなりませんが、この三カ国が一つの国です。父母の国と兄の国です。

今後、言語の統一をしなければなりません。父母様が成就したすべてのことに対する記録を読むのに、翻訳されたものを読むということは恥です。天上世界の前に恥となるでしょ

う。天上世界にに行けば、神様の命令によって千年、万年を蕩減しなければならないかもしれません。そのように大変な問題が起こるのです。その峠を越えられない人は、祖国光復をしたと言っても、故郷に帰る道がありません。祖国に住むことのできる居住証がありません。国民として入籍できていないというのです。深刻な問題です。

二　我々の祖国を求めていかなければ

私たちは、神様の国を仰ぎ慕います。そこは、愛があるところだからです。一時的な愛ではなく、時間を超越し、永遠な愛の存続するところです。また、自分自身が高められるところであり、自分の価値が一〇〇パーセント認められるところなのです。すなわち、永遠に幸福なところです。それゆえ、人は天国を慕い、憧憬するのです。

もしも、地上で国家を復帰するということを自分の生涯で果たせない場合、皆さんは霊界に行っても天国に属する人としての価値をもつことはできません。地上で神様の主管圏内で統治されたという実績をもって、霊界に行かなければなりません。それが本来の創造基準なのです。

私たちの信仰の目標は、神様の国の民になることです。その国の民にならなければ、その子女として万民あるいは万物世界に、自由自在に誇り愛される道は現れません。国のない者は、いつも攻撃を受けることになります。かわいそうな立場に立つことになります。物も言えず攻撃される場合がいくらでもあります。それゆえ、神様の願う国がどこにあり、神様が足場とする国がどこにありますか。それが問題です。

私たちがこの国、この民族のために血の汗を流すのは、結局のところ永遠な天国をつくるため、千秋万代の子孫が永遠にたたえることのできる福地を築くためです。

その国とは、神様を中心として直系の子女が天命を受け、神様を身代わりした命令をもってその王権によって治める、そのような国であることに違いありません。そこに民主主義や、共産主義はあり得ないのです。一度形成されれば、永遠な国家体制として残るのです。そのようなことを考えるとき、私自身がそのような国の民となれなかったという事実が恨めしいことではないかというのです。自分自身がそのような国で暮らせないということを嘆かなければなりません。そのような一つの国をもてなかったということを嘆かなければなりません。そのような一つの不変の主権をもてなかったということを、私たちは嘆かなければなりません。

主権と国と国土を復帰するために、人類は主権国家を立ててきました。その中で多くの人が死に、多くの民が犠牲となり、多くの国が滅び、多くの主権が入れ替わってきたという事実を知らなければなりません。そのように犠牲になった多くの人、天側にいる人、あるいはそのようなみ旨のために犠牲になったすべての哀魂は、いつの日かそのような国、そのような世界を築いてくれることを願っているのではないでしょうか。

神様は愛する息子、娘を地上に送り、絶対的な一つの国家を建てるためのみ旨を進行させてきましたが、現時点では一つの国家を復帰し得る土台は築かれていません。いつも失敗してきたので、この地上に天の人を遣わし、それを治めさせ、推進させ、成就させるために苦労してきたのが、今までの天の歴史なのです。

主権のない国の国民はかわいそうなものです。ですからイエス様が心配して「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ六・三一～三三）とおっしゃいました。まず息子を求めなさいとおっしゃいましたか、国を求めなさいとおっしゃいましたか。神様の求めている国を求めよとおっしゃったのです。

イエス様も楽園に行って待っているのです。天の宝座の前には行けなかったということを知らなければなりません。イエス様は神様の前に国の主権を立て、国を治めて、地上から天国まで直通することのできる権限のある国をつくることができなかったので、神様の前に立つことができないのです。ですから楽園は天国へ行くための待合室です。また、天国は一人では行くことができません。本来堕落しなかったならば、天国はアダムとエバ、家庭単位で行くべきなのです。息子、娘と一緒に行かなければならないのです。そうでなければ行けないのです。

今まで宗教人たちは、なぜ生き残れないようなことをしてきたのでしょうか。宗教を協助することのできる家庭もなく、社会もなく、国もなかったからです。国のない民なのです。国があったならば、氏族が反対する立場に立ったとしても、その国の圏内に残る道があったはずなのに、今まで宗教を信じる人たちが、どこへ行っても迫害を受け、どこへ行っても血を流す祭物の道を歩んできたのはなぜでしょうか。国がなかったからです。主権者がいて、国さえあったならば、「おい、これは正しいのだ」と言えば、「ちぇっ」ということになったであろうに、国がなかったので……。国のない民なのです。

国がなかったとすれば、いくら幸福で良い家庭だとしても黄馬賊団（注：馬に乗った盗賊）が出てきて首をはねられるかもしれないのです。それゆえ国を求めなければなりません。宗教人は、これが分からずにいます。宗教人は確実に知りません。善なる国を求めなければなりません。これが宗教の目的です。

国がなければ国籍がないということになります。国がなければ入籍するための土台がないということです。私たちは民族を編成して、新しく入籍しなければなりません。この地上に天国を編成し、その国籍をもって、愛国、愛族の真実で善なる父母の血統を受け継いだ勝利的息子、娘として、自分の一族、あるいは家族を率いて生きたのちに、天上世界の天国に入ることができるのです。それが原理です。

国があって初めて私たちの千秋万代の子孫の前に、大切に残してあげることのできる伝統も残るのです。私たちが血の汗を流したすべての努力も残るのです。天の労苦をたたえる記念塔がこの地上に生じるのであり、すべての栄光の形跡がこの地上に残るのであって、国がなければすべて無駄なものになるのです。今日、世界のキリスト教にとって残された十字架やすべての涙も、天の求める国がないとするならば、すべて川に流さなければならないのであり、燃やしてしまわなければなりません。サタンの籠絡に倒れていくということを知らなければなりません。それゆえ国が問題だということを皆さんは知らなければなりません。

私たちが求めるべき祖国というのは、今日この地上にあるような歴史と伝統をもった国ではありません。そのような国とは本質的に次元が違うのです。私たちが次元の異なるその国を受け継ぐには、そのための思想的な主体性をもった国民にならなければなりません。しかしその主体的な思想は、絶対的な創造主の思想と一致する思想でなければならないのです。絶対者の願う国が存在するには、その国の主権を中心として、その国の国民が一致し得る国となることを願わなければならないのです。そのような国民性をもち、国家形態をもたなければならないのです。

国が形成されるためには、国土がなければならないし、国民がいなければならないし、主権がなければなりません。主権とは何でしょうか。根源的な神様と因縁を結ぶことです。国を治める人は、国民が深い眠りについたあとで、神様と因縁を結んで政治をしなければなりません。そうして主権者は国民と一つにならなければなりません。国民と一つになって自分にあるすべてのものは自分のためのものではなく、天のためのものであると考えなければなりません。そうなれば、その国は繁栄するのです。

一つの国が形成されるためには、主権がなければならないし、国民がいなければならないし、国土がなければなりません。天国もやはり同じです。主権に代わるものが父母であり、国民に代わるものが息子、娘であり、国土に代わるものが国なのです。この中の、どれ一つとして欠かすことはできないのです。これは鉄則です。

一つの国を見ると、国が形成されるためには、その国の主権がなければならないのです。そのような観点から地上に天国を実現するという問題を考えてみると、天国の主人は誰でしょうか。主権者は誰でしょうか。間違いなく神様が主権者です。では国民は誰でしょうか。国民は万民です。それでは国土はどこでしょうか。地球星です。

自分が行き来するのも、その国を求めるための、祖国光復のための建国の功臣になるために、そのような使命を負って、あるいは天の密使としての指令を受けて、今日の悪なる世に来てこのようなことをしているのだという事実を考えながら生きていくべきです。そうでなければ、皆さんは今後来たるべき国の国民として、その威信と体面を立てることができないということを知らなければなりません。

さあ、六千年間神様に打撃を与え、苦しめてきたサタンが、そのままおとなしく「ああ、我は降りる」と言って目を伏せて引き下がるでしょうか。皆さんはぼろの雑巾でも、捨てようとすればもったいないと思いますね。ぼろでも裏返して臭いをかいでみてから捨てるでしょう。サタンがそのまま引き下がるわけがありません。それでしぶとく闘いを挑んでくるのです。ですから中心に合わせなければなりません。統一教会の文先生も、中心から外れれば折れて出ていくのです。方向が合わなければ発展しないのです。

統一教会のメンバーは、はだしで立ち上がり、祖国を創建しなければなりません。食べて残ったものでこの国を生かすことができるでしょうか。食べて、着て、乗り歩くことに気を遣っている暇があるでしょうか。はだしで、素手で開拓していこう、このようにしていくのが統一教会です。

三　祖国光復の旗手

皆さんが責任を遂行するために誓い、三千里半島で新たな旗手になろうと誓って立ち上がるとき、大韓民国は私たちの懐に帰ってくることでしょう。それゆえ、輝く瞳をもっているならば、その瞳は栄光の祖国を直視する瞳と化さなければなりません。才能と力があるならば、それを祖国光復のために用いることのできる勇士となって、皆さん自身が堂々とした姿で、祖国光復のための聖別された責任者に代わる者となろうという信念を感じながら前進することができなければなりません。

祖国を立て、祖国を輝かせ、祖国と共に生き、祖国の中で死ぬことのできる自分とならなければなりません。今まで天の前に、誰も果たすことができなかった責任、この一時に一度しかできないこの厳粛な責任をおろそかにしてはなりません。一度聞けば十のことを考え、一度聞いたことを十以上のものと比較していかなければなりません。天の運勢をここに顕すためには、自分が千回恥辱を受けてもそれをものともせず、また、百の死の道があったとしてもそれをものともせずに行こうという信念をもって進むとき、神様は皆さんの行く道を守ってくださることでしょう。なぜならば先生が今まで歩んできた生活の中で、そのようなことがあるたびに神様はお捨てにならなかったことを体験したからです。皆さんも神様が保護してくださることは間違いないのです。

祖国光復のための一つの主体的な使命者として、自分が任された一つの道ならば道、一つの部落ならば部落で、この責任を遂行する者は自分しかいないという信念をもって、絶対引き下がってはなりません。ここで背信者となってはなりません。天命に一致する責任を果たせなくてはなりません。責任の裏道（責任を避けるところ）にいたのでは、この道を越えることはできないのです。

寝ることができなくてもやらなければならず、食べられなくてもやらなければならず、追われながらもやらなければならず、死ぬとしても決定を下してから死ななければなりません。決定的な使命を遂行しようと新たに決心して立ち上がるとき、皆さんの行く道は開かれるに違いありません。しかしそうできな

ければ、先生が皆さんを立てて信じ、願ってきた希望の世界、光明の世界は、逆に闇の世界となることでしょう。先生はこのような問題を心配しているのです。

因縁を結んできた歴史とともに、因縁を結んできた事情とともに、感じ難い涙ににじんだ心情を感じるたびに、神様の心情をかき抱いて身もだえしなければなりません。そして祖国光復と世界解放の土台を私たちの手で、私たちの精誠によって築くために、闘いの場に向かって力強く闘っていかなければなりません。そのような皆さんになってほしいと思います。私たちが求めるべき希望の祖国を見いだす皆さんとならなければなりません。

皆さんが死地に赴かなければ、自分が救われないのはもちろん、大韓民国が滅びることになるのです。大韓民国の国民がすべて滅びたとしたならどうしますか。そこに入ろうとしなければならないのです。もしそこで犠牲になったとすれば、民族を団結させ得る新たな世界史的な爆発的力の源泉がそこからわき出るのです。「行こう！」と決意することのできる男らしい足並みとならなければなりません。
そのような道でなければ成し遂げる方法がないとするならば、その道を通ってでもみ旨を成していこうと、そこに志操の碑を立てていこうという天の息子がいるとするならば、それは神様の胸と骨と肉を一度に溶かすことのできる息子ではないでしょうか。祖国光復の伝統的思想は、そこから芽生えるのではないかということです。

そこへ共に行き、その涙の谷間を共に行き来するならば、皆さんは滅びることはないでしょう。神様はそのような人を捨てはしないでしょう。来たる希望の祖国は、そのような人を迎えるようになっているのです。皆さんが世界史上になかった祖国を迎える最初の旗手となり、祖国光復の建国の勇士として登場するときには、千年、万年たたえられる群れになるのではないでしょうか。これは深刻な問題です。

今日、統一教会の群れは、金日成を中心とした北韓共産党の骨髄分子が一つとなったもの以上に、それを凌駕できなければ、神様のみ旨を成し遂げることはできないのです。そうでなければ神様の願う新しい祖国光復はあり得ないのです。

女性が先頭に立たなければなりません。ですから今、韓国でも祝福を受けた家庭の女性をすべて一線に追い出しました。先に動員したのです。韓国が本部国家なので、祝福を受けた皆さんの先輩家庭はみな一線に出ました。それを知らなければなりません。ですから世界に散らばっているムーニーの女性すべては、それに従って一線に向かって出ていくのです。アーメン。

四　私たちは祖国光復のための独立軍

皆さんが決心すべきこととは何でしょうか。祖国光復の一日を迎えることです。今日、私たち韓国の民は、八月十五日を光復節として記念しています。解放の日として記念しているのです。第二次世界大戦以降、多くの弱小民族が、自分の一つの国を中心として光復と

解放と独立を記念しています。ところで神様を中心として、天地の光復の日と独立をたたえることのできる日はいつ来るのでしょうか。考えたことはありますか。その日が来なければならないのです。

日帝時代末期に祖国光復のために、祖国の独立のために地下運動をして日本と闘争しました。今もはっきりと覚えています。私が血を吐くような場で、息が詰まり倒れるその場で、「私は神様の名によって日本帝国を屈服させなければならない」といって闘争しました。そのような場において、神様は共にあるのです。北韓に行っても同じです。監獄に入れられ、追い込まれた場でも、神様の名によって監獄へ行けば、神様がついてくるのです。

私たちの生きている現世を、どんなことがあっても否定しなければならない運命にあるのが、今日の人類であり、人類を導いている様々な国家だと結論づけることができます。それゆえ、この地上に生き、地上に存在する人類と国は、どの道一つの峠を越えなければならないのです。歴史的伝統をそのままもっていては、真なる理想の祖国、神様の描く祖国の光復はあり得ないということを知らなければなりません。

神様の祖国光復が私たちの目前に来るという時点があるとすれば、そして、今日の韓国の地が神様の祖国光復の基地となるという驚くべき事実を知れば、韓国民族は寝ていられるでしょうか。食べて遊ぶでしょうか。勝手なことをするでしょうか。「するな」と言っても昼夜を問わず生命を投入することでしょう。財産が問題ではありません。子と妻はもちろん、自分のすべてと南韓（韓国）全体を投入してでも、これを成就させなければならないという義務感をもった大韓民国になるに違いないのです。そうなれば南北が統一されるでしょうか、統一されないでしょうか。それを知らなければなりません。

その基地はどこでしょうか。班です。その班が、個人の前で「お前は祖国光復をしたのか」というときに、「したとも。私は神様が愛した本然の祖国、私たちの先祖が愛した祖国の上に立ったのだ。歴代の先祖が愛し、見たいと思っていたその位置に立ったのだ。それゆえ、愛を中心とした神様の祖国のための復活体、祖国光復を願う父母と歴代の先祖の希望の復活体、祖国光復を願う世界万民を縮小した復活体として、私は立ったのだ」という自負心をもたなければなりません。

今まで統一教会は、家一つ建てませんでした。私はビルを建てることができるのに、どうしてそれをしないのでしょうか。私たちの教会本部をヨイドに建てようとしたとき、政府が許可してくれませんでした。本堂を建てられない統一教会が、地方教会を建てるというのですか。祖国光復のため、万民復帰を主張するための一つの神様を迎える殿堂を立ててから出発しなければならないのに、私たち統一家がひとつところに落ち着いて良い暮らしをしてはならないのです。

ですから「父母の日」から、祖国の光復を公布しなければならないし、万国天下の伝統的出発と一致しなければなりません。このような闘いをしなければなりません。これを失

ったのです。ですからこれは、サタンの餌です。では、これを起こして成し遂げた人は誰でしょうか。サタンでも誰でもみな、「文総裁は最高だ」と言うのです。

父の国、再臨主の国、愛の救世主の国、天国の生命を中心とした愛の中心存在、天国の生命をもった中心存在として、神様の血統を受け継いで、ここに真のオリーブとして登場し、ついにこの統一教会の群れを支えることのできる統一教会ができたので、これらを中心として、すべての既成教会思想を切ってしまって、接ぎ木をするということをなしてきたのです。接ぎ木されまいと騒ぎ、切るといっては大騒ぎしていますね。切ってしまわなければ、それは滅びるのです。

日本人が復讐をするときは、自分の母一人、兄弟一人殺したといって、一生の間命懸けで復讐します。これを知れば、私たちの祖国光復のための復帰摂理路程において、このような惨事に遭ったことを知る王の悲痛、民の悲痛はどれほど大きかったであろうかということです。ところが、民であるこの人類がそれを知らずにいるのを見る神様は、なおのこと悲痛なのです。

神様のものなのに、偽りの愛によってすべて奪われてしまったのです。ですから、神様に帰らなければなりません。帰るには、そのままでは帰ることができません。蕩減しなければなりません。ではそのようなことを誰がしなければならないのでしょうか。数千年間宗教を通してなしてきたのですが、アメリカのキリスト教が韓国をアダム国家として保護し、イギリスとフランスと日本とドイツ、イタリアまで合わせて、祖国を光復させなければなりません。父の国を創建しなければなりません。そのためには絶対服従して、すべて真のオリーブに接ぎ木されなければなりません。

お母様の行く道は、先生の道のように困難であってはなりません。お父様の行く道は男性が反対しても困難はないのですが、お母様の行く道には反対する女性がいてはなりません。それを私が解怨成就するためにも、お母様の行く道は女性という従者がすべて後援し、「私を踏んで早く祖国光復と天地を解放して、神様を解放することのできる道を行ってください」と言うことのできる女性の橋が必要なのです。

ここにいる食口たちはみな国を捨ててきました。自分の祖国を捨ててきました。なぜでしょうか。神様が願う本然の祖国の地のため、祖国の光復のためにです。いかにアメリカが素晴らしいとしても、私の言うことを聞かなければ滅びるようになっています。このような独断的な決断を下してそんなことを言う人は、通りがかりの客ではありません。それをすべて果たしたので言っているのです。ほら吹き者ではありません。すべて終わらせてきたのです。

過去の人、現在の人、未来の人、霊界に行った人も、祖国光復のために協助することのできる時が来ました。ですから多くの人々の先祖が入ってきて、統一教会に行かなければ薬を与えて病気にするようなことが起こるのです。文総裁の力でそうなるのではありません。神様と先祖、天使世界と先祖が一つとなって、地上をすべてコーナーに追い込むので

す。家庭問題を中心としてコーナーで手をつけることはできません。唯一文総裁だけが全権をもって行使することができるという驚くべき事実を、この民族が喜望峰として、その国の、祖国の基盤として歓迎するときには、天下無敵の国となるのです。

五　祖国光復は真の愛によって

天の国、天国を建設する祖国光復において独立軍として戦いに出た女性は、歴史上どれだけ立派なことでしょうか。歴史上どれだけたたえられることでしょうか。堕落したエバ一人によって、歴史的に女性がどれほど呪われてきたことでしょうか。しかし、今復帰時代において、女性が先頭に立って祖国光復のために勝利的基盤を築いたならば、それはどんなにたたえるべきことか、考えてみてください。

では、どのようにして勝たなければならないのでしょうか。銃剣で勝ちますか、何によって勝ちますか。女性が現れれば、サタンの男性兵士が女性の真の愛を願うでしょうか。願いません。そのような者たちにどうやって勝つというのでしょうか。皆さんは自分が女王であるかのように考えなければなりません。

金日成は悪なる王であり、皆さんは善なる女王なので、自国のあらゆる権限をすべて悪なる王に何も言わずに与えるのです。そうして整備しなければなりません。何によってでしょうか。真の愛によってです。

神様が最も喜ばれるのは、愛の文化です。神様はお金や権力、知識などが必要でしょうか。良い家を設計して建てるためには、レンガも必要だし、ドアも必要だし、多くの材料が必要ですが、その中でも最も重要なものは、その家を完成させる総合的な完成美を備えることです。神様が人間に願われる最も大きな願いは、多くのお金をもっていること、学者になることではありません。

聖書のみ言のとおり「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）これが第一の戒めです。第二に「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（同二二・三九）とおっしゃいました。驚くべきみ言です。

今後この世界の問題を解決し、人類の道徳問題をすべて解消するためには、堕落論がなければならないのです。堕落論なしには、人間の問題は是正されないのです。これはサタンが天に背反し、歴史を率いてきた最後の絶望的終末現象なのです。これは人類を破綻、滅亡させるためのサタンの戦略です。これを解消しなければ歴史が解かれることはありません。歴史が解かれなければ歴史を清算することはできないのです。

それに対する代案を中心として、神様の創造理想の代案を中心として、私たちの神主義に帰ろう、真の愛主義に帰ろうというのです。それは自分自身のためではなく、利他的なものです。愛の相対を創造しなければならないのです。そのような内容でなければ、収拾する道はありません。

アメリカの女性は、善なる女王のようです。現代のどんなアメリカの家庭においても、女性は女王のような状態にあります。それは事実です。いつも夫に「ああしろ、こうしろ」と命令するのです。神様がアメリカの女性を

訓練しているのです。お金もたくさんもっているし、宝石もたくさんあるし、力も強いのです。お金をたくさんもっています。お金、すなわち「マニー」というのは、韓国語では「多い」という意味です。

皆さんが宝石や家や、アメリカの土地の半分を金日成の肩にかけてやれば、投げ出してしまうことでしょう。アメリカの半分を載せさえすれば、あきらめてしまうのではないでしょうか。そうでしょう。今、彼らは飢えて死につつあります。悲惨です。経済的に後援すれば変わります。ですからアメリカの女性が一線に立って「闘うのはやめよう。おなかがすいているでしょう。食べ物を送ってあげる。車も送ってあげる。欲しいものはすべて送ってあげる」と送り続けてごらんなさい。自然に解放されるのです。

アメリカの女性がもっているお金をすべて金日成にあげれば、金日成は闘おうとするでしょうか。その次には、中共を通して食べ物も送り、着る物も送ってごらんなさい。アメリカ人のように良い暮らしができるようにして、豊富に食べさせてあげれば、闘うことはしないはずです。ですから、ムーニーたちはどうすべきなのでしょうか。苦労して飢えながらも北韓の人に対して犠牲的に接したとしましょう。そうすれば、北側の人はそれが分かったときに、銃剣でムーニーを殺すでしょうか。

人類はすべて家族です。私たちは家族だというのです。すべて真の愛によって関係した一つの家族なのです。きょうお話ししたことと同じです。人類は一つの木だということです。皆さんの家庭には何人もの家族が一緒に住むのです。そこには赤ん坊もいるし、少年もいるし、青年もいるし、壮年もいるし、老年もいるというように、みんないるのです。このような家庭の道場は、世界大宇宙の家庭を連結させるための師範教育の場なのです。

自分の家庭を中心として関係をもっているおじいさんから母親、父親、自分の兄、自分、このような一つの家庭で訓練された四種類の人が散らばっているのです。ですから自分の家庭を中心として訓練することが、世界の家庭に接ぎ木するための道なのです。世界の家庭に連結させるためには、自分の家庭を投入しなければなりません。それが復帰原理なのです。より大きな目的を完成するためには、投入しなければならないのです。それが復帰原理です。再創造原理です。

主体と対象が、より大きな対象を求めて対応的な相対関係を中心とした主体と対象となって、一つとならなければならないのです。このみ旨と同じです。人類大家族化時代なのです。これは家庭を中心として訓練されたのを、自分の家庭よりもより大きく愛するということです。投入して忘れるならば、より愛するならば、どこにおいても主人となるのです。家庭よりも氏族が大きいので、氏族を愛し、氏族よりも民族が大きいので氏族を愛していた以上に民族を愛し、民族よりも国家が大きいので、民族を愛する以上に国家を愛するということです。

このように段階的により投入し、忘れなさいということなのです。大きい分野に該当する道理に従って、より投入するという概念がなければなりません。この国からあの国に移るときも同じです。国をもって世界へと上がる

ときには、国に対して尽くしてきた精誠以上の精誠を尽くせばいいのです。投入するところには、より投入すべきなのです。

韓国で暮らしてきた人が、ここウルグアイに来たということは、地の果てから地の果てまで来たことになるので、自分の国よりも愛さなければならないのです。そのように自分の家庭よりも、自分の国よりも愛そうという心をもっていれば、夢でも統一されます。国境がなくなります。国境がなくなるのです。今や地球星は真の愛を中心として、統一祖国化時代となったので、このような思想さえもっていれば、どこでも通じることができるのです。一番目は言語統一化時代であり、二番目は人類大家族化時代です。これらはすべて、真の愛を中心としてするのです。

世界も祖国光復とともに自然についてくるので、一つの方向を中心として、民族が団結した世界と国家の形態をつくることができるのです。これがアダム文化ですね。それは何かというと、真の愛の文化です。

生まれるのも愛ゆえに生まれたということです。男性が生まれたのは自分のために生まれたというのでは、真の愛をすべて全面的に抱くことはできません。向こうの果てまで完全に抱くためには、無限に与え、与えて忘れなければなりません。そうすれば、宇宙が飛びついてくるのです。

今後、天国の世界では、給料をもらうという時代は過ぎていくのです。夫婦を中心として総蕩減をしなければならないのです。歴史時代においては、絶対信仰、絶対愛、絶対服従が宇宙創造の原則です。愛ゆえに信仰も必要なのであり、服従も必要なのです。愛ゆえです。無限なる愛には、宇宙的神様までも服従するのです。神様が投入してお忘れになるのですから、私も投入して忘れなければならないのです。服従するのです。

愛を中心として絶対信仰です。愛を完成するためには絶対服従しなければならないのです。死んで、百回死んでも愛を必要とするがゆえに、その道をよく求めていかなければならないのです。それゆえ、霊界に行くということは死ぬことではなく、神様の愛を求めていく道だということです。神様が愛のために死ぬという道をつくったのです。それ以上の心をもっていなければ、愛を復帰することはできません。

六　祖国光復のためにもつべき信念と姿勢

これから新しい時代を迎えて、どんな姿勢をもつべきなのでしょうか。祖国光復のための信念が、何よりももっと高く胸の中で燃えていなければなりません。言い換えれば、六千年間神様が待ちわびてきた祖国を建設する旗手となり、先鋒に立った精鋭部隊の一員として開拓者になるという、このとてつもない使命に責任をもっているという自負心を感じなければなりません。来ては去っていった多くの人が手に入れたいと願ってはきたものの、手に入れようにも手に入れることのできなかった、たった一つしかない、この時にしかない特権的な使命を背負っているという厳粛な責任感をもつべきです。

食べて寝て、行き来するという生活全体が、祖国創建のためのものでなければなりません。

神様から特別に遣わされた密使として、凛々しくこの使命を遂行しようと勇み立つことを、神様はどれほど待ちわびてきたことでしょうか。今まではひどく追い込まれ、ひどく追われてきました。一度たりとも国家の足場を備え、全体の内容を提示して繰り広げることのできなかった天のそのみ旨、祖国を立てるための、そのみ旨を立てなければなりません。今まで一度もそのみ旨を立てることができなかったのです。

これからは、そのような祖国を立てることができます。その祖国には主権があり、その祖国には国土があり、その祖国には国民がいます。またそこには、単一民族の血統がつながっており、他の民族にはもつことのできない歴史があります。このような祖国のために、私たちは密使の使命を遂行しなければなりません。

そのような使命を自分自ら早い時期に完遂できれば、それだけ祖国光復の土台が自分によって徐々に近づくのです。今日苦労の代価を払うということが、祖国光復の一日を近くに迎える土台となるのです。

このような事実を考えながら、皆さんは生きて密使の使命を完遂しようという決意をもって進まなければなりません。そうしなければ、この時代に神様が私たちにもたらしてくださる世界史的な祝福と天運を、私たちのものとして迎えることはできません。

「神様は私たちの神様、私たちは神様の息子、娘、私たちは祖国光復のために生きてきた。世界の至る所で追われても滅びることなく、復権する日を見るまでは死ぬものか。たとえ私たちは果たせずに死んだとしても、お前たちはその日を見てから死になさい」と子孫に遺言を残すのです。この思想が、すなわちイスラエルの思想です。

今後私たちは、大韓民国を神様のみ旨の前に立てなければならないのであり、神様の願う祖国光復をしなければなりません。このような意味から、私たちの責任遂行を前にして冷徹に批判してみるときに、今まで私たちがつづってきた生活態度が、どのような意味での生活だったかを反省せざるを得ません。

神様はどのようなお方でしょうか。神様は密使の大王であられます。祖国光復のためにサタン世界に現れる密使の大王であり、総司令官であられます。では、そのような神様がこの地に向かって、「私が神様である。私が教えてやることのできる真理はこれだ」と六千年の間に主張したことが一度でもあったでしょうか。ありませんでした。

しかしながら神様は、私たちの澄んだ良心を通して指示し、絆を結ぶために苦労してこられました。私たちの心の器を広げ、一致し得る自由な世界へと率いてきたのが六千年の復帰摂理歴史なのです。

第二章　家庭教会は摂理的な内的基盤

一　家庭教会とは何か

皆さんは「ホーム・チャーチ」という言葉を聞いたことがありますか。家庭教会というのでしょう。ところで家庭教会というのは、昔はいくら家庭教会という名詞を知っていたとしても、事実それを迎えることはできなかったのです。なぜでしょうか。時が来ていなかったからです。そのような蕩減条件が、歴

史の前に神様とサタンと歴史を代表した責任者との決定がなされていなかったので、いくらホーム・チャーチに入って、「これを世界の祭壇に完結させて捧げます」と言っても受けることができないというのです。サタンも認定しないというのです。

今、全世界の統一教会で、家庭教会活動が展開されています。堕落した人間たちは、個人復帰から世界復帰まで、先生のように一生を、犠牲の道を通じて天国に行かなければなりませんでした。

しかし、今は先生が築いた道に従っていけばいいのです。もう先生は、皆さんが走ることのできる道をつくってあげました。皆さんは先生が築いておいた道を蕩減復帰する条件を立てて、出発することができます。それが三百六十軒を中心とした家庭教会活動です。

皆さんが今年から家庭教会活動ができるという事実は、驚くべきことです。これは人間が堕落の運命を抜け出すための運命的な道であり、生きてできなければ、死んででも行くべき道です。もう個人から氏族、民族を天の国民として編成させる時になったので、統一教会はこの全歴史のすべての結実を総合して、一つの勝利的祭壇を築かなければなりません。そのようなことを担当するために出てきたのが、家庭教会活動なのです。

自分の息子、娘よりも三百六十軒のカイン世界を愛さずしては、入り得る道はありません。神様は、数千年の間、言い表すことのできない難しいこの道を築いてきましたが、私たちは七年間、三百六十軒を中心として活動し、勝利の条件を経ることができるのです。このような家庭教会の基盤が、皆さんの目前にあるので、皆さんは行かざるを得ません。これは歴史的なすべてのことを網羅して、この世界を代表した神様の理想的完成であり、今日人類がやるべきこととして、登場し得る家庭教会となるとき、間違いなく地上天国が実現されるでしょう。

家庭教会とは、三百六十軒を中心とした祭壇を設定して、その家庭教会の祭壇に属した家々を神様のみ旨の中に、立ててあげる活動です。このように三百六十軒を中心とした家庭教会を実践し、完成する人は、個人的には神様の真の子女になると同時に、宗族的メシヤになり、全体的には神様の創造理想を実現することになるのです。

先生が百余国家のすべての蕩減条件をみな立てて、天地にふさがれた壁を心情的基準で連結させたので、皆さん自身もそのような世界を縮小した型を中心として蕩減条件を立てて、現時点において、天と地に壁がふさがらない、自分自ら動くことのできる基盤を築いておかなければなりません。それが何かといえば、ホーム・チャーチ（家庭教会）だというのです。

先生は今まで父母の名前をもって全世界の人類の前に、万民が個人、家庭、氏族、国家、世界、神様にまで、行くことのできる蕩減条件を代表的に立てておいたのです。代表的に立てて、勝利したので、この勝利の名前でそれを一〇〇パーセント相続して、皆さんが七年路程を経て、行かなければならないのです。先生が一生の間、世界の舞台に成し遂げたことを皆さんはできますか。ですから世界舞台を縮小した足場、祭壇が必要だというのです。

それがホーム・チャーチだということを知らなければなりません。家庭教会……。分かりましたか。

統一教会が歴史上初めて、家庭教会という主題を立てることができたという事実は、神様の前にも人間全体の前にも、極めて重要なことだという事実を知らなければなりません。

先生は、世界的に勝利しました。皆さんはわずか三百六十軒を中心とした家庭教会で勝利することができないのですか。

皆さんが家庭教会活動をするのは、神様の代わりに、真理の教育と愛の教育をしに行くのです。家庭教会を通じて父なる神様の愛と真理を教えなければなりません。

皆さんは神様にどこで出会えるのでしょうか。レバレンド・ムーンは、世界の蕩減基盤を中心として各国で、汗と涙を流す闘争の中で、勝利の土台を立てるところで神様に出会うことができましたが、皆さんは父母様の名を通じて勝利のそのすべてのものを相続し、皆さんが世界の舞台には行かなかったとしても、「世界に行った」と言うことのできる、そのような条件を成就したということが必要なのです。それが何ですか。家庭教会です。

そこが、万国の解放された家庭の出発地点です。堕落していない本然的なアダム・エバの理想的な真の愛と真の生命の出発が宣布されたところだというのです。これを編成するために、先生が宗族的メシヤを宣布したのです。イエス様が家庭を求めてきたでしょう。ホーム・チャーチを知っているでしょう。カインの一族、アベルの一族が一つにならなければなりません。イエス様でいえば、ヨセフの支派と洗礼ヨハネの支派が一つになって、家庭を成さなければなりません。そのように家庭が策定されなければならないというのです。そうすればサタンが侵犯できません。そのようにして、宗族的メシヤの前に、イエス様の前に、すべての一族が抱かれることによって初めて、イスラエルの国で失敗した家庭本然の基準が、堕落していない基準へと復帰されるのです。

家庭教会の完成とは何ですか。新たな文化創建を主導する、アダム文化を再編成することのできる主人になれということです。そうしてこそ、アダムの後孫になるでしょう。それでは何が中心なのでしょうか。心情的基準が中心です。それではその心情とはどんな心情なのでしょうか。神様が皆さんを見つめるとき、心の中に「お前は堕落した。復帰された息子ではない」という、そのような堕落したという観念を感じないで、「我が愛する息子よ」と言うことのできる立場に上がらなければなりません。「あの野郎、あの統一教会に入って、ろくでもなくあんな姿で歩き回り、あっちに行ったりこっちに行ったり、どじょうの子、うなぎの子のような姿で」などと言われてはなりません。

世界がまだ私たちの教会化した天国基盤になっていないので、家庭教会の組織を通じて、先生が四十年の間、蕩減条件、神様の愛を中心とした所有決定的権限を完全に編成し、勝利したという印を押さなければならないのです。サタンが公に認めた立場で「勝利しました」と言い得る決定をしてこそ、愛する父母

は、愛の勝利の所有決定権を皆さんの前にすべて相続してくれるのです。それは真の父母という名前をもったがゆえに、皆さんが相続することができるのであって、そうでなければ相続することができないのです。

皆さんはホーム・チャーチをしながら、ありとあらゆる人にののしられなさいというのです。冷遇されなさいというのです。冷遇されるたびに、自分が冷遇されるときは、ただされるのではないのです。私が冷遇され、ののしられるのは、なぜかと言えば、妻を生かすために、息子、娘を生かすために、そうするのです。息子、娘を抱き締めて、妻子を抱き締めて、夜を明かしながら、止めどない涙を流さなければなりません。「これはどうしたことか。この道を行くのにこのように反対できるのか」と言って涙を流すのは、悲惨なことではありません。この世で涙を流すすべての悲痛な人々よりも、切なる天の価値のために涙を流す立場に立ってこそ、これが谷となり、この世から流れて入ってくるのです。そうしてこそ同情して、一つに絡み合って出てくるのです。

私が統一教会をつくって、統一教会に残してあげた宝があるとすれば、これです。家庭教会は、私が一生の間、犠牲の道を歩んで残してあげた宝です。統一教会の教会員たちに残してあげられる宝とは何でしょうか。統一教会の権限を天と地から、あるいはサタンと神様から堂々と相続することができるという、これが宝です。それでは家庭教会が完成するときは、統一教会という名詞があるでしょうか、ないでしょうか。神様の摂理はあるでしょうか、ないでしょうか。私以外の家庭教会未完成圏では、あるかもしれませんが、私自体に成された家庭教会圏内では、神様の摂理も宗教もありません。そこは天国人が住むところです。

皆さんは今、父母の代わりに働くことのできる時代に入ってきたということを知らなければなりません。皆さんが代わりにしなければならないこととは何かといえば、先生がやったことを繰り返すことです。ところで、先生が世界の舞台でしたことを、皆さんは全世界的に歩き回りながらはできないというのです。ですから、制限された一つの祭壇のようなところでしなければなりません。世界を歩き回りながら祭祀をして、連結させたすべてのことを縮小した一つの祭壇、世界全体の人類を代表して拡大されたそれを縮小した祭壇でしなければなりません。皆さんのそのような活動的蕩減内容が必要なので、そのような形につくっておいたのが家庭教会です。

蕩減したすべてのことを皆さんが先生から受け継がなければならないのに、ただでは足場がないというのです。祭壇がありません。このような世界的祭壇をつくって、勝利したこのすべての祭壇から祭物を移すとすれば、自分なりに祭壇を築いてこそ、祭物を移すことができるのです。その祭物を移しておいたのが、何かと言えば、家庭教会だというのです。分かりましたか。
家庭教会は、皆さん自身が完成できていないことを完成させてあげるものなので、世界を越えて帰ってこなければなりません。世界に行って蕩減条件を経て、このことをするのですが、それを縮小したものです。これを縮小して先生の福を引き継ぐことのできる祭壇で

す。祭物は祭壇を築いて、大きな祭壇から小さな祭壇に移さなければならないのです。祭壇は血を流すのです。ホーム・チャーチとは何ですか。チャーチというのは、まだ祭壇を築いて血を流さなければならないのです。先生が築いた祭壇を受け継ぐための小さな祭壇として、世界史的な苦労をしたのです。

神様はどれほど苦労したでしょうか。先生はどれほど苦労し、イエス様はどれほど苦労したでしょうか。このすべての苦労と労苦によって勝利の祭壇をもってきたものを皆さんが引き継ぐためには、皆さんも祭壇を築かなければならないのです。そうしてこそ引き継ぐことができるのです。それがホーム・チャーチです。

家庭教会はどこからですか。ゲッセマネの十字架の絶頂からしなければならない、こう考えます。ゲッセマネ……。それは何のことか分かりますか。さらにはゴルゴタの山頂から始まるというのです。考えてみてください。イエス様がそのゴルゴタ、ゲッセマネの園で死ぬとき、同情した人は一人もいませんでしたが、私が死のうとするとき、数多くの人々が同情することのできる基盤、環境をもってから死ねるということが、どんなに幸せなことかというのです。皆さんが死ぬとき、逃げ出すペテロではなく、皆さんの代わりに「私が死にます」と言うことができる群れを地上でもつことができる自由な環境をもったという、このような事実を考えて、このような歴史的伝統を蕩減すると考えるのです。

ここに来ては、みな先生にだけついていこうとするのです。「自分の言うことだけ聞け」と言って、自分は「何、ホーム・チャーチは嫌だ。先生の行くところにだけ行こう」と言うのです。それはいけません。
いくら父が大統領でも、父のそれをただそのまま自分が引き継ぐことができるでしょうか。大統領になるためには、大統領になる基盤を築かなければなりません。いくら皇太子として生まれたとしても、王になるためには、王になることのできるすべての法度と規範を習わなければなりません。備えなければなりません。それで皆さんは、口だけではなく、これから人類歴史最後の路程に父母様の言うことを一つ聞けば、神様が「お前は孝子だった」という印を押して、天の国の孝子として天国に送ろうというのです。これはどれほど驚くべき愛でしょうか。その基盤とは何ですか。家庭教会という基盤です。

それでは皆さんは、天の国の孝子として行きたいですか。ならず者として行きたいですか。孝子、孝女として行きたいでしょう。ホーム・チャーチを通じずには、孝子、孝女の印をもらう道がありません。天国は、孝子が入るのです。

息子は息子でも、ならず者は入ることができません。孝子の名前をもって行かなければならないので、孝子の名前の印を押してもらうためのもの、それが家庭教会です。

統一教会の指導体制が、もう今は私が引っ張っていく時が過ぎたというのです。平面的拡大時代になったので、家庭理想をもった自体の氏族を中心として拡大すれば、世界は自然に復帰されるのです。その氏族拡大の方法とは何かというと、統一教会でいういわゆるホーム・チャーチだというのです。このような総決算的公判の場ができたというのです。

二　家庭教会活動の始まり

一九七八年十一月十二日を期して、皆さんすべてをメシヤの資格者として、ホーム・チャーチの区域に出ていけと命令したのです。どうしますか。出ていこうという人、手を挙げてください。それでは、これからそこに出ていくのです。家庭教会をつくるまでは、帰ってくることができないということを知らなければなりません。死ぬまで帰ってくることができません。霊的に帰ってくることができないのです。

イエス様は死んで昇天するとき、ペテロに天国の鍵を与えましたが、レバレンド・ムーンは生きて、天国の鍵を与えるのです。個人のために与えるのではなく、氏族を救うための鍵を与えるのです。個人の救いをさせる人ではありません。皆さんはメシヤになるのです。家庭教会のメシヤ。これは空論ではありません。地でなされることはそっくりそのまま霊界でもなされるようになっているというのです。ですから、この宇宙のダイヤモンド鉱山のようなところで、誰がこの鉱山口でたくさん掘り起こすのかということが、皆さんの努力いかんにかかっています。この宇宙のダイヤモンド鉱を統一教会の教会員たちが探し当てるのです。ホーム・チャーチで探し当てるのです。誰がたくさん見つけるでしょうか。分かりましたか。大変なことです。

これまで宗教は、自分一人が救われようとしたのです。私一人がどうやったら救われるかという個人の救いを標準にしてきたというのです。私たちは個人の救いではありません。氏族の救いを一度にやろうというのです。皆さんゆえに氏族が救われ、その三百六十軒が救われるのです。

このようなことは、宗教の歴史上にもなかったし、人類歴史上にもありませんでした。このような一つの事件が始まったのです。宗教がいつ結婚しろと教え、宗教がいつ親と一緒に暮らせと教えましたか。そのように教える法がどこにありますか。初めて出てきたのです。初めて、皆さんが一緒に家庭教会を中心として……。家庭教会というものは、同じ運命にあるということです。共に栄えることのできる全体の救いの基盤を与えられ得る大変な、時代になったというのです。このように大きな世界的な三段階が、家庭教会によって短縮されます。短縮されるのです。

皆さんの前に、先生が家庭教会の基盤である三百六十軒を分けてあげることができたというのは、歴史的な希望の日であり、宗教が希望してきた終着点であり、神様の摂理の終着点となるのです。サタン世界で今まで確保しておいたサタンの基地が完全に撃破され得る出発の日となるのです。もし先生が家庭教会を発表できなかったならば、歴史は悲惨な運命の歴史として終わっていたことでしょう。家庭教会というタイトルは、皆さんにとって無限の福です。歴史過程に数多くの王がいたし、数多くの大富豪がいたし、数多くの学者がいたし、有名な人がいましたが、それがすべて問題ではないというのです。皆さん自身が「たとえ私は卑しい身であっても、たとえ無価値な身であっても、私が生きているうちに先生からホーム・チャーチという名前を中心として、私に伝授してもらえる」という事実は、驚くべき事実であることを知らなければなりません。

父母を探すと同時に、天使世界も探さなければならないし、サタン世界も探さなければならないというのです。神様も探さなければなりません。ここで、これがみな決まります。それで今度日本へ行ってもイギリスに行っても、みなこれから行くべき道はホーム・チャーチ、すなわち家庭教会です。それが何かと言えば、家庭天国だというのです。それで三百六十軒全部が皆さんをメシヤのように侍ることができ、皆さんを真の父母のように侍ることのできる基盤を備えて、一つにし、神様の前に奉献したという事実は、全世界を通じてサタンが基盤を築き、反対したすべてを勝利の立場で受け継いだということです。

私たち統一教会は、家庭教会をしなければなりません。この家庭教会を通してカインの氏族を一つにしなければなりません。そのカインの氏族をみな一つにして、アベルの氏族圏をつくらずしては、その氏族の基盤の上に父母様を迎えることのできる基盤ができないのです。氏族的天国が現れないのです。その基盤ができたのちには、民族が連結されるのです。氏族圏を中心として民族ができれば、その次からは、民族を中心として国家は縦的に行くのです。相対的です。

一族を収拾するためには、サタン世界に既に広がった五十億の人類を愛さなければなりません。それから救ってあげなければなりません。ですからホーム・チャーチ（家庭教会）の組織はなくなってはいけません。

神様も宇宙的なアベルの立場に立っているので、サタン世界に対して神様に近いすべてのものを犠牲にして、カインを愛さなければなりません。したがって、このカインが神様の息子、娘を愛したのちに、アベルが長子の資格を備えて出てくるとき、神様が愛するようになるというのです。それで祝福して愛するようになるのです。この原理をはっきり知らなければなりません。これは公式です。家庭教会を完成させるには、これを知らずしてはできないというのです。

「統一神霊協会」と言うとき、神霊的なものが何かといえば、堕落していない本郷の世界です。統一された本然の世界を成すことができる協会です。これからは、キリスト教がうまくいきません。これが今日から三十三年はいいですが、将来新しい世界へと越えていくときには、世界キリスト教ではなく、宗教もなくなります。何と言いますか。家庭教会。家庭教会だけが残ります。真の父母を中心とした家庭。この葉も葉同士が家庭でしょう。この葉と葉同士、三つの葉は三つの家族、五つの葉は五つの家族で、これも枝の一家族です。何を中心としてですか。根と芽を中心として。根を神様とすれば、人は芽です。芽と根を中心として、家庭調和の活動をすれば、この木は、無限に大きくなる木になるのです。

これから統一教会に従っていく人々は、私のように悲惨であってはならないというのです。神様の願いがそれです。レバレンド・ムーンのように悲惨であってはいけないというのです。レバレンド・ムーンを苦労させて、苦労を短縮させて、このような悲惨な運命を一度に一箇所で世界を代表して越えることのできるところがあれば、どんなにいいでしょうか。これが神様の願いであり、先生の願いであり、皆さんも願うものです。そのような

願いの基準を生涯の目標とし、摂理の目的地にしているのです。そうして現れたのが家庭教会です。ホーム・チャーチです。

アダムの願い、イエス様の願い、先生の願いを解いてあげることのできる蕩減条件を必要とするのが、ホーム・チャーチ（家庭教会）です。

生きている間はとても短いのです。一生がとても短いというのです。私が死ぬまでにこれをすべて突破できるかという問題を前にして、「私の生命をこれくらい延長してくれるなら、私のあらん限りの力を尽くして行こう」と、このように思って行くべき道であるにもかかわらず、皆さんは今、見物人のような姿で歩んでいるのです。ですからホーム・チャーチ（家庭教会）をしなさいというのです、ホーム・チャーチ、ホーム・チャーチという言葉は、一生涯のうちでも、いい言葉でしょう。

世界を連結させる上での条件基盤とは何ですか。それがホーム・チャーチ（家庭教会）です。世界を代表して、三六〇度を中心として方位数全体を代表することのできる地で、三百六十家庭が東西南北どこでも門を開いておいて、私を歓迎できるようにしなければ、あの世に行って引っ掛かるというのです。

今後、ここに妨害となるすべての組織体は、解散させ、全部停止させるでしょう。家庭教会運動が第一です。その次に他のことをするのは、付帯的なことです。ですから、この伝統的思想を全世界の統一教会と、統一教会に従うすべての人の前に、伝授することを宣言するものです。

三　家庭教会の活動展開

一) 宗族的メシヤの資格を賦与する条件

今まで宗教というのは、個人の救いを目標にしてきましたが、統一教会の救いの目標は、氏族の救いだというのです。一度に氏族が救われようというのです。「私は死んで天国に行くのではなく、生きて氏族が天国に入ることのできる公義のチケットをもらおう！」この運動がホーム・チャーチ運動であることを知らなければなりません。

宗族的メシヤというのは何かといえば、イエス様以上の人だというのです。イエス様は宗族的メシヤになれませんでした。そうならなければ、完成時代に父母様の子女になることのできる資格がないのです。そうすることによって父母が誤ったすべてのことを蕩減し、新・旧約の蘇生、長成のすべてのことを、歴史的な全体を総合して、一度に燃やして捧げるためのものが、家庭教会の祭壇だというのです。分かりますか。これを完成させて、勝利すれば、世界も天上世界もどこでも行ったり来たりすることのできるパスポートをもらうことができるのです。

あなた方の家庭がアベル家庭としての役割を果たしましたか。アベルの責任について知っているでしょう。アベルはカインを救うべき責任があります。なぜでしょうか。カインを救わなければ父母様に会えません。それで、統一教会において家庭教会とは何ですか。カインの氏族復帰をしたのちに、自分の氏族復

帰をする役事ではありませんか。あなた方は、カインの氏族復帰のために努力しましたか。カインの氏族とアベルの氏族が一つになれなければ、民族圏内に上がることができません。上がる道がないのです。これが原理ではありませんか。原理。

今日、統一教会においては、世界的蕩減、すべての蕩減の版図を縮小して、現実化したのが、ホーム・チャーチです。分かりますか。ホーム・チャーチですから家庭教会でしょう。これを氏族教会に発展させなければなりません。氏族教会を発展させて……。韓国にはそれぞれ姓が多いでしょう。姓を連結すれば、民族教会になるのです。民族教会になり、国家教会時代を経て……。そうなれば、私たち統一教会を中心としてホーム・チャーチを始めたので、氏族圏チャーチが始まり、国家圏チャーチが展開されていくのです。

皆さんの一家、親戚を中心として、皆さんが祝福家庭として立つには、カイン・アベル氏族圏を越えなければなりません。イエス様がザカリヤ家庭、ヨセフ家庭を中心に一つにできず、ユダヤの国とユダヤ教がカイン・アベル国家基準を越えられなかったのと同じように、これを蕩減復帰する運命が、キリスト教の歴史に残っているのです。これを蕩減する基準に立ってこそ、家庭が祝福を受けるようになっているのが、原理の基準なので、「家庭教会を中心としてこれを統合させよ」と言ったのですが、家庭教会を一生懸命にやりましたか。

家庭教会とは何かといえば、氏族です。宗族的メシヤの基盤ですが、その宗族的メシヤの基盤とは何かといえば、イエス様を中心として見るとき、ヨセフ家庭とザカリヤ家庭の基盤です。イエス様が死んだのは、ザカリヤ家庭のゆえです。ヨセフ家庭を中心として、一つになれませんでしたが、ザカリヤ家庭を中心としても一つになれませんでした。ザカリヤ家庭を知っているでしょう。洗礼ヨハネの家庭のことです。洗礼ヨハネとは誰かといえば、イエス様と兄弟です。腹違いですが、兄弟なのです。

絶望の呻吟も笑いによって消化することのできるものとは、何ですか。家庭教会だというのです。家庭をホームと言い、チャーチは教会でしょう。ですから皆さんが帰るときには、皆さんの故郷に帰らなければなりません。皆さんのお母さん、お父さんの前に帰らなければなりません。お母さん、お父さんの前に帰って、ホーム・チャーチ運動をしなければなりません。

皆さんはもう二十年もかかりません。あっという間にできる時です。それで四十カ国の代わりに東西南北四カ国に通じなさいというのです。四カ国に行って、血と汗を流し、精誠を尽くさなければなりません。四カ国を通過せよというのです。そうしなければ、アメリカ人はアメリカ人の観念を離れることができません。ですから、東洋でもどこでも、遠いところ、できるだけ遠いところに、端から端へと、東西南北の端を経なさいというのです。何のことか分かりますか。白人の霊たちが今までどんなに地上に来ることを待ち焦がれたでしょうか。今まで来ては逝った善なる人生を送った良心的な霊たちが、地上に降りてくるのをどれほど待ち望んでいるかという

のです。そうするには、自分の一族が縁を結ばなければなりません。それでホーム・チャーチ・システム（家庭教会組織）が展開されるのです。これによって世界のいかなる霊も自分と関係のあること、専門分野、経済なら経済分野の学者を中心に世界の各国、百二十カ国以上の霊たちが自由に活動できる基地になるというのです。それでホーム・チャーチが絶対に必要だというのです。さらにアメリカのような所では、三百六十軒の中で百二十カ国以上の種族がいるかもしれません。また各国の中にあるすべてのホーム・チャーチを中心として見るとき、人によってみな違います。黒人のような人、イギリス人のように傲慢な人、ドイツ人のようにこだわりの激しい人、みないるというのです。そのように考えなさい。アメリカ人のように個人主義的な人もいるのです。

統一教会が一九七八年から主張してきたこととは、伝統を受け継がなければならないということです。伝統とは何の伝統ですか。神様の復帰摂理の心情の伝統を受け継がなければなりません。その次には先生がこの伝統を立てるために歩んできた、六十年の生涯のすべての心情を、皆さんが受け継がなければなりません。これを受け継ぐことのできる一つの足場（土台）がホーム・チャーチであり、その運動が家庭教会運動だというのです。

家庭教会をもたなければ、将来天の国に行くとき、先生についていくことができません。将来、家庭教会が全世界的に二十四万くらいになれば、全世界の人類に対して配置するのです。完全に教会はなくなるのです。韓国人は将来、家庭教会に配置される恵沢圏内にいるのです。まだ世界の至る所に家庭教会の配置がされていないので、大移動、民族大移動をしなければなりません。家庭教会に配置されるために、ここからアフリカに行かなければならないし、これから全世界へ大移動する時代に入るのです。

原理を見れば、同時性時代に関することが出てくるでしょう。そこを見れば四十数に関することがみな分かるでしょう。四千年の代わりの四百年、四百年の代わりの四十年、四十年の代わりの四十日、そこで一週間という七数は復帰摂理の中心数です。このような問題をかけて、私たちが自分の生命の道を開拓するには、蕩減条件が絶対的に問題です。

四十日ずつ三年やれば、百二十日になります。三年やれば三・四、十二（三×四＝十二）、百二十日ではありませんか。百二十日を埋めていくのです。日本は、明治維新以後百二十年です。サウルとダビデとソロモン王で百二十年です。これは重要な一つの峠を越える過程です。

ですから三年を中心として特別にこのことをしなければなりません。断食しながら四十日間の活動を展開しなければなりません。昔は出ていって活動しましたが、今は自分の故郷に帰って、このことをしなければなりません。ホーム・チャーチ内でしなさいというのです。

私が今回指示したこととは何ですか。「二世をもって故郷復帰しなさい」と言いました。まとめて故郷に帰るのです。これが統一教会でいう家庭教会の理念を代表することのできる二世を連れて、皆さんの故郷に帰るのです。一人が十名、二十名の若者を連れていって、「死ね」と言えば死に、「生きろ」と言えば

生き、二十四時間その部落を掌握してどんなことをやっても、その町（村）の人々は反対できないでしょう。

お母さん、お父さんもそうです。これからは文総裁に反対できない環境へと、世界がだんだん押されていくのです。「いい」と言うようになっています。あっという間に回っていくのです。

二) 訪問、奉仕、教育など多様な活動を展開

今まで長年の間活動してきたホーム・チャーチ（家庭教会）がなくなったのではありません。ホーム・チャーチ基盤はカインの基盤であり、自分の一族はアベルの基盤です。ホーム・チャーチの基盤で涙と血と汗を流した功績をもてば、自分の一族は自動的に回っていきます。ホーム・チャーチを通して百名さえ伝道して自分の一族のところに行けば、「英雄の息子が帰ってきた」と言って、その村が一朝一夕にして一度に復帰されるのです。闘った経歴を報告するのです。他のことをするなというのです。三百六十軒をみな配当しなければなりません。

「党の責任者だ」と言いながら勝手にやっていた人が、今まで冷遇した人に、反対にあいさつをしなければならないというのです。そのようになったとき、その親戚たちがいいでしょうか、悪いでしょうか。同じです。家庭教会三百六十軒、妻の側まで七百二十名を率いて自分の村を訪ねていくのです。その町で住んでいた七百二十名の中には、ちょっとした者がいないでしょうか。一族を率いて宴会を開き、トラックにプレゼントを積んでいって分けてあげれば、一朝一夕にしてすべてきれいに整理できるのです。この話をどうして話すのですか。皆さん一人を中心として百人をつくりますか、千人をつくりますか、一万人をつくりますか。みんな「一万人をつくる」と言えば、人が足りないのです。それも事故です。雰囲気を見ながら他の人が食べるのも（やるのも）ちょっと残しておいてやらないと……。早くしないで、みな平均的にしなさいというのです。一つ一つしっかり食べなさい（やりなさい）というのです。分かりましたか。

七月三日から九日までに先生は七万三千の里、統の支部長たちにみな先生の写真を与え、統一教会の旗を与えたでしょう。それがみな生きていますか。死んでいますか。考えてみなさい。先生が家庭教会を発表して十四年になります。天の三百六十軒を探せ！　探せというのです。家庭教会を成すことができなかったら、自分の故郷を訪ねていかなければなりません。三百六十軒ならそこに大統領もあり得るし、内務長官もあり得るし、外務長官もあり得るし、外交官もあり得るし、学者もあり得るし、先生もあり得るし、僕の子供もいるでしょう。

その町を訪ねていけば、その町以上のものが、すべてそこにあるというのです。その人々が訪ねてきて、「あなたの家のなにがしという方が、私たちを救ってくれた救世主です」と言うとき、お母さん、お父さんや町内の人々が目をぱちくりさせながら、見物するでしょう。そして頭を下げるでしょう。

統一教会の食口全体が原理の本三十冊を買って、毎日一日に一冊貸してあげなさいというのです。それを一週間ずつ貸してあげれば、

三・四、十二（三×四＝十二）、百二十軒に分けてあげることができるのです。この百二十軒を中心としてその本を読むと考えてみなさい。切なる紹介内容をつけて分けてあげるのです。それを読ませ、その次にビデオ・テープを貸してあげるのです。自分が住んでいるところで、これから統班撃破運動をそのようにしなさいというのです。ホーム・チャーチ運動を続けながらです。

そうなれば創造原理を講義するときは、誰でも本をもってきて創造原理を聞くのです。本を中心として簡単に序論式にその内容を講義するのです。そうなれば、本を中心として自分たちが講義する内容に合わせながら、全部やっていけるのです。

皆さん、最近ホーム・チャーチをやりながら反対されませんか。「私にはあなたは要らない。要らない」と言っても、また行くのです。「来るな」と言ってもほうきを持っていって、庭でも掃いて、雪が降れば雪を片づけたり、いろいろやるのです。溝に水があれば、溝も片づけるのです。それなのにその主人が「あの、私が嫌だというのにどうしてこうするんですか」と言ってけんかする日には、町内の人々が「こいつ、何だって言うんだ」と言って代わりに闘ってくれるのです。このようなことがいくらでも起こるというのです。それがどれほど素晴らしい闘い方でしょうか。そんなことが起こるのです。どうしてそうなのでしょう。

もう一つ話すことは、これから会社に戻っても五時になりさえすれば、みな工場から出てくるのです。ですから工場を中心としてホーム・チャーチ組織、家庭教会組織をすべてもたなければなりません。それで個別的な活動基盤を中心として、霊の息子、娘から氏族編成をしなければなりません。それが発展する原則です。人を育ててこそ自分が成長するのです。人を育ててみなければなりません。

では、これから皆さんが三百六十軒のホーム・チャーチをつくるのに、誰が歴史時代に初めてやって、先生、お母さん、お父さんを迎えることができるでしょうか。そのようなホーム・チャーチが韓国の地から出てくるか、アメリカの地から出てくるか、日本の地から出てくるか、イギリスの地から出てくるか。「家庭教会ナンバーワンはコリア！」、こうならなければならないというのです。考えてみなさい。皆さんは足が長くてこうやって歩きますが、韓国人たちはダダダダ……。歩くのに背が高くてこのように、目が丸くて四方を見て「ウー」と言いますが、韓国人たちは背も低く、目も小さくて、一箇所だけに集中して行くのです。それなのに、彼らに勝てると思いますか。自信がありますか。

これから皆さんは、家庭的に愛をもってサタン世界を攻撃するのです。家庭をもって腐敗したサタン世界の人々を攻撃するのです。それでこの自由世界の腐敗した動物的な家庭をみなけ飛ばしてしまうのです。みな壊してしまわなければなりません。全部そうだと彼らが滅びながら、「ああ、私は滅びる」と言うのではなく、滅びながらも泣くのではなく、喜ぶというのです。「わあうれしい。わあうれしい」と言うのです。何のことか分かりますか。そのような時が来たのです。

それで皆さんが一度に家庭を動かすことができ、氏族を動かすことができ、民族を動か

すことのできるホーム・チャーチ運動をせよということを私が言ったのです。ホーム・チャーチ、分かりますか。これさえ終えれば、これさえ築かれれば、世界が引っ張られていくことができる、これさえ成せば、「天国を私が成すことができる」と言うことのできる時が来たというのです。

父母様と心情一体にならなければなりません。世界を救うためのその痛烈な心をもって、一生を経て克服したこのすべてのことを皆さんは、七年間でできるのです。七年もかからないでしょう。これからはむごく反対されるとしても七年もあれば終わるのです。先生がやってきたように精誠を尽くせば、七年以内に皆さんは家庭教会をきれいに終えるというのです。それは何を意味するのでしょうか。世界問題が七年後にみな終わるということです。全世界に統一教会のメンバーたちが、これから広がって三百六十軒さえやれば、簡単だというのです。ですから精誠を尽くして、これを築くのです。

韓国全域を四千万と見て、家庭教会を組織すれば、家がいくつですか。約六百万ですか。五・七、三十五（五×七＝三十五）……。八百万！　八百万ですから、一人が三百六十軒ずつすれば、二万二千、そうでしょう。食口が二万二千ならば、このホーム・チャーチ（家庭教会）組織はすべて終わるのです。難しいことではありません。それでホーム・チャーチの責任者から一代、二代、三代と続けて伝道していけば、千名、二千名、数千名がホーム・チャーチ運動をやるようなことが起こるのです。

勝共連合の全国組織がさっとできて、自分の家庭に入って教育するようになるのです。文総裁が家庭に入って教育していますか。割り当ててあげて、やるのです。ホーム・チャーチ（家庭教会）組織に連結させるための作戦です。ホーム・チャーチ基盤さえきちんとできれば、班に十軒、二十軒ありますが、三百六十軒ですから、一人が十五軒ずつ責任をもって活動するのです。二重三重にやるのです。

私たち統一教会の目的とは何かといえば、家庭教会を成すことです。それが目的なので、その家庭教会三百六十数に該当する班を昼も夜もみな……。原理の本があり、勝共理論があり、統一思想があります。私たちの教会のすべての材料がみな待っているので、早く訪ねていってホーム・チャーチ、家庭教会活動と共に勝共連合の統、班編成を中心としたこのような、何の教育ですか。それを何と言いますか。班常会（注：班で毎月もたれる例会）教育、それで家庭家庭を中心として父母様の家庭の四位基台、自分の家庭の四位基台が完全に一つになって、天下が反対し、世の中が反対するとしても、分かれることができないという愛によって結ばれるようになるときには、そこから超国家的な天国が出発するということを知ったので、このことをしなければならないのです。

先生が今まで四十年間闘ってきたすべてを総合して、決算することのできる決算場がホーム・チャーチです。ですから皆さんがホーム・チャーチを一生懸命にするために、教会長がいれば教会長に、「きょうは、私はホーム・チャーチのために教会に行けません」と

言うときは、「教会に来なかった」と言えないというのです。ホーム・チャーチ第一主義時代です。

ですからホーム・チャーチがこれからどんなチャーチになるべきかといえば、皆さん自身のホーム・チャーチが氏族チャーチにならなければなりません。家庭教会ではなく、これから氏族教会に発展していくのです。皆さんが氏族教会さえ連合すれば、金氏、朴氏という民族は自然に生じるのです。そうじゃありませんか。金氏、朴氏、文氏、おびただしく氏族復帰の基盤さえできれば、国家は自然にできるのではありませんか。そのようになるのです。氏族教会、民族教会、国家教会、世界教会、天宙教会、そのように連結されるのです。

宗族的メシヤは、カイン、アベル二つの族属を抱かなければなりません。イエス様を中心として見るとき、ヨセフ家庭とザカリヤ家庭と同じです。これらの家庭が一つになれなかったことによって、イエス様が死んだのと同じように、今は家庭教会と氏族教会が必要だというのです。いつも同じです。ヨセフ家庭とザカリヤ家庭が一つとなったその上に、イエス様が立つのです。その宗族的メシヤを迎え、国家的メシヤを迎えれば、復帰です。ですからホーム・チャーチ（家庭教会）はカイン的教会として、宗族的メシヤの基盤であり、アベル的教会は自分の一族です。この二つを合わせなければなりません。そうしてこそ宗族的メシヤの使命が終わるというのです。これから氏族と完全に一つになるのは問題ありません。そして外部的にも問題がない時が来たというのです。

今は世界的な時です。その時は国家的な時でしたが、今は世界的な時です。イエス様を中心とした国家的な時を蕩減復帰して、解放されたので、迫害のないところにおいて、世界的な基準を中心として宗族的メシヤになるのです。宗族的メシヤとは何ですか。家庭教会ではありませんか。家庭教会をつくって、全部やったなら、宗族的メシヤがどんなにいいでしょうか！

これからは自分の霊の息子、娘たちをみな連れて、教育しなければなりません。親族です。霊的な信仰の息子、娘たちを中心として一つになって、宗族的メシヤ圏を復帰することによって、霊界の他の族属たちも後援するのです。そうなれば、連合的前線が展開されるのです。

四　三百六十軒家庭教会完成

一) 三百六十軒の数理的な意味

ホーム・チャーチとは何ですか。家庭教会とは何ですか。すべての歴史時代の摂理を中心として国境とか社会制度をすべて捨てて、家庭教会の中で一つになれば、すべてのことを復帰するのです。

三百六十家庭は三百六十族属です。それをなぜやるのでしょうか。三十六とは、十二数の三倍です。そうでしょう。十二数というのは、天理の度数です。これは霊界の十二真珠門をいうのです。三十六家庭数と同じだというのです。旧約時代、新約時代、成約時代の三段階の運勢を連結させることができるのです。それは天道を解くためにすべて出てきたのです。

家庭教会の祭壇は三百六十軒です。この三百六十軒の数理的意味は、すべての数理的価値を象徴した内容です。三百六十軒は原理的な数として、ここに数理的意味がみな入っているのです。三百六十数は、三十六数の拡大数として、三十六と同一の意味です。三十六数は十二数が三つ合わさった数であり、十二数は三数と四数を掛け合わせた数です。

ですから三数、四数、十二数、三十六数、百二十数、三百六十数を含めた数理的意味があるのです。旧約時代十二数、新約時代十二数、成約時代十二数を代表するので、三十六数は全歴史を意味します。そして三百六十数は立体的な内容を含んでいます。ですから東西南北の四方を意味し、三六〇度を中心とした立体的な内容も備えていて、そこには春夏秋冬の四季があり、十二カ月を含んだ数であり、百二十カ国まですべて入っています。

ですから三百六十数の復帰は、世界復帰だけでなく、歴史的な蕩減路程の完成を意味するものであり、神様が失った全被造世界と全歴史、全人類を探し立てる重要な意味がすべて含まれているのです。

家庭教会三百六十軒は、まず区域が選定されなければなりません。三百六十軒家庭教会の祭壇が確定されなければ、原理的な意味がなくなり、霊界が地上再臨できる条件的な祭壇になることができません。ですからまず三百六十軒の祭壇を確定することが重要です。三百六十軒の祭壇が優先的に確定されなければ、家庭教会の意味が立てられません。

三百六十軒家庭教会の祭壇で勝利するには、血と汗と涙を流さなければなりません。三百六十軒を完全に復帰し、勝利すれば、先生の勝利の栄光を伝承してもらえるのです。言い換えれば、神様の復帰の心情を蕩減復帰する立場に立たれた先生の立場に立ててくださる条件なのです。

私たちがやるべき三百六十軒家庭教会は、カイン型天使世界に該当します。このカイン型天使世界である三百六十軒家庭教会を成功させれば、アベル型天使世界である自分の氏族は自動的に復帰されます。
三百六十軒家庭教会を伝道すれば、カイン型天使世界の宗族的メシヤになり、その次に自分の氏族から歓迎され、アベル的宗族的メシヤになるのです。

私たちの地球星を中心としてどこに行ってもホーム・チャーチが成されなければなりません。
どこでも三百六十軒のホーム・チャーチ運動をしなければなりません。それは氏族です。特定氏族です。氏族を解放しなければ、特定氏族が生じ得ません。これは元来、三次七年路程が終わってやることです。そのことを三次七年内にやっているということを知らなければなりません。皆さんには夢のような話ですが、事実なのです。

二) 家庭教会は摂理の終着地

このようなことを宣布することができるということは、摂理史において、偉大な飛躍だというのです。では、家庭教会で勝利すれば、皆さんは何になるのでしょうか。その時にはメシヤになるのです。メシヤ。宗族的メシヤになって、民族に対してもその民族を救うことのできる責任者になるのです。

皆さんがどのように完成するのでしょうか。皆さんには父母がいて、息子がいて、万物が

ありますが、家庭教会はこのようなものを拡大したものです。アダムが堕落することによって、この三つを失ってしまいました。ですから、この三つを一度に取り戻して、神様の前に捧げなければなりません。失ったものを取り戻して真の父母を通じて神様の前に捧げようというのです。

それで神様を経てこなければならないのです。失ったものを取り戻して、神様のものになってから父母から再び相続しなければなりません。そうしてこそ皆さんの家が生じ、皆さんの世界が生じるということを知らなければなりません。その土台がホーム・チャーチです。これは何かといえば、祭物です。これは一つの祭壇です。ここで三大祭物を捧げるのです。

家庭教会は私たちの定着地である！　いったい家庭教会とは何でしょうか。ホーム・チャーチは統一教会が迫害の歴史においてレバレンド・ムーンを中心として、すべての歴史的蕩減基準、すなわち個人蕩減世界的基準、家庭、民族蕩減世界的基準、国家蕩減世界的基準、天宙蕩減世界的基準の蕩減路程において、チャンピオンの継承権をなして、全体勝利した承認を受け、決定してきたものです。ホーム・チャーチにおいてのみ初めて、すべての蕩減条件を脱いで定着することができるのです。

アメリカを失い、地球星を失ったとしても、真の愛をつかんでいれば、神様が私のものになるので、天の国が私のものになり、自動的に地球星も私のものになっても余りあるというのです。その結論が間違っていますか。合っていますか。それでは、皆さんに何の心配がありますか。「ああ、私は家庭教会が嫌だ」と言って大変なのです。真の愛は、難しいほどその価値がもっと大きいというのです。

地上で生きている間に、家庭教会運動を一生懸命にやるのが、福を受ける道です。人生は短いのです。

統一教会で絶対に必要なものがありますが、それは何かと言えば、ホーム・チャーチです。ホーム・チャーチが出てくるまでは、先生でしたが、父母様でしたが、ホーム・チャーチが出てきたあとは、ホーム・チャーチ完成が絶対的だというのです。これを成してこそ父母様も私の父母様になるのであり、父母様の世界になるのです。父母様の天国が私の天国になるのです。父母様の愛が私の愛として伝授されるのです。

ホーム・チャーチがなければ、天国が成されません。ホーム・チャーチがなければ、すべてのことができないのです。ホーム・チャーチは天国の基地です。天国はどんなところですか。天国というところは安息するところであり、幸福が宿るところであり、愛が宿るところであり、平和なところです。

キリスト教が、救いがあって何がどうですって。統一教会を離れては、生命的救い、永遠の愛を中心とした因縁的救いはありません。それで先生が還故郷の道を築いて、自分たちをみな立てて還故郷をして宗族的メシヤ宣布をさせたのです。それを私がいつから教えてあげましたか。そのためにはカイン・アベルの関係を収拾しなければなりません。

ホーム・チャーチ、家庭教会をいつ話しましたか。七年の歳月です。やりましたか、やりませんでしたか。「やる」と言ったのが成功しましたか。台風が吹いてきて、自分の足が切られ、首が落ちたとしても、やらなければならないのです。

家庭教会の任務を任された人は、歴史的な最終の、マラソン大会で言えば最後のマラソン選手と同じなのに、「国家代表のマラソン選手として立って、ただ汗をかくから汗を拭き、汗を流さずに走り、汗をかけばうちわであおぎ、コーラも飲んで、適当に楽に行けばいい」と言うのと、走るのに、ひたすら汗を流し、死んで倒れたとしても最後まで行くのと、どう違うでしょうか。

神様はチャンピオンの後ろにいて見えませんが、サタン世界では「この野郎！　倒れろ！　あの野郎、倒れろ！　こいつめ、飯食って行け！　こいつめ、休め！」と言って、すべて反対するのです。

霊界が見えますか。神様が見えますか。世界が行ったり来たりする中で、天と地が応援し、「もっと走れ」と言っても、それを聞くことができないのです。その反面、サタン世界でそれに反対して、「ああ、神様がなんだ。こいつめ！　お前、飯食って走れ！　休んで行け！　車に乗って行け。歩いてどうするのか。ああ、あれは何だ」と言うのです。決勝点に行って、勝つまではサタンも関与できないのです。

私が帰ってくれば、国家が歓迎しなければならないのです。今は歓迎することができる時なのです。けれどもそれができないので、私が男たちに責任を追及するのです。私が十四年前から「家庭教会をしなさい」と言ったでしょう。けれども誰か一人でもそのようにした人がいましたか。

それをやるのに十四年かかりました。一九七八年から家庭教会を語ってきたし、統班撃破を始めてもう七年がたったのに全部失敗しました。教会が存在するのは、国と世界のためです。それなのに皆さんは、自分の家庭と自分だけにしがみついて、教会はみな後回しにしてしまったでしょう。

頂上クラブをつくって、世界最高の頂上たちに会うのです。アメリカのブッシュ、ソ連のゴルバチョフ、中国の江沢民を教えた･小平等々……。みな今まで隣の家の暮らしでもするかのように乞食のようにやってきたというのです。何ですか、これは。てっぺんに火をつけて飛び出して来れるようにしてこなければなりませんでした。そうすれば私がこのことをしなくてもいいのです。

ホーム・チャーチ、家庭教会をすべてやっていたら、このことをやらなくてもいいのです。個人が行ってでもみな教育しなさい。分かりましたか。荒野路程のその受難生活はもういけません。そこで勝たなければなりません。このような輩たちを屈服させなければなりません。

第三章　統班撃破運動をなぜしなければならないのか

一　統班撃破運動を再び行う理由

統班撃破運動をなぜしていないのですか。あなた方が生きる道がそれです。その運動の基盤のもとで、今回故郷に帰って、今まで活動したことのある自分の郡、面、自分の町内、

すべてに自分が責任をもって、統、班を動かしていかなければなりません。数がないので、故郷に入って、それをしなければならないというのです。昔のように食べて寝て、そのようにする時ではありません。

これから地方の郡民、農民たちを動員してデモしていくのです。今工場で「デモをする」と言って大変ですが、工場のデモは会社で勝手に首を切れば、ばらばらに自分の田舎に帰るので、なくなるのです。しかし農民たちが結合してデモすれば、永遠に停止です。何のことか分かりますか。

どんなことをしてでも、私たちの氏族を中心として統班撃破運動を実現するための中間的な集合、訓練をするための復興会をしなければなりません。今回は急がなければなりません。それを近いうちにやって、実績を出さなければなりません。

そのように一つの面で、三つの部落になりさえすれば面全体を消化することができると同時に、郡全体、面一つを消化すれば郡全体まで影響を与えることができるのです。一つの郡全体になりさえすれば、このケースで道まで連結させることのできる道が開かれるのではないかと見るのです。このようにやらずしては、この全体の統班撃破組織編成が不可能だというのです。これが急がれているのです。

皆さん、先生が統班撃破を命令してから四年の歳月が流れました。この者たち！　先生がお金を出してあげなければなりませんか。愛国するのに先生がお金を出してあげなければなりませんか。血を売って、土地を売って、家を売ってやってきました。妻子とすべての兄弟と私の一族を犠牲にしながら愛国してきました。伝統を踏んで行くべき統一の群れたちが自分の姿勢と立場を忘れて、行く道を知らなければ、亡国の種になるのです。亡国の種。私の目の前に倒れる者が現れると見るのです。

ここの政党の党首をやってみようという人たち、自分の党だと思っているでしょう。大韓民国が自分のものだと思っているでしょう。先生が韓国統一に協助しなかったらと考えてください。ガラガラとなります。

それで統班撃破です。分かりましたか。皆さん、統班撃破です。この郷里のためにやれば、すべて氏族の名前で統班撃破ができるでしょうか、できないでしょうか。きれいにできるでしょう。このサタン世界など問題ありません。統班撃破という言葉が、これがそのことです。

先生の一代に解放をもたらし、自由天地を見つめ、この三年路程において、将来の南北統一の運勢を駆り立てて、鉄槌を打ち込まなければなりません。そうするには四千万民族をすべて抱かなければならないので、私たちはあの頂上の政党の責任者になろうとはしません。彼らの母になり、父になって、兄になり、姉となり、弟になろうという戦略戦術法が今日の統班撃破運動であることを知るべきです。そのために神様のような心をもたなければなりません。

この三年の間に天は捨て、地だけを見つめなさいというのです。地獄の底まで行こうとし、先生がしなさいと言うとおりに統班撃破をやって、各家庭を神様の愛に感動させなけ

ればなりません。各家庭にふさがっているのは何ですか。責任分担でふさがっています。この壁を崩さなければなりません。蕩減復帰の壁でふさがっているので、これを崩さなければなりません。血統転換をしなければなりません。すべてこれを切って、接ぎ木しなければなりません。このように挙国的に動かなければなりません。

私の手にかかっているのです。できない者たちはみな首を切ってしまおうと思います。ですから統班撃破が必要です。それが主人になる道です。そうでなければ僕にもなれません。金日成をつかまえることがそれで、国を生かすことがそれです。最近、共産党の輩たちがみな地方で活動していますが、地方は私の手で主管しなければなりません。大学教授が有名でも大学教授をもってしてはできません。

ですから、あなた方がしっかりしなければなりません。大韓民国のどの愛国者よりも先頭に立たなければならないし、北韓のどの愛国者よりも先頭に立たなければなりません。これから統班撃破の組織をやるようになれば、金日成は行ってしまうのです。そうじゃありませんか。労働者と農民の組織が統、班ではありませんか。貧しい人々です。それで今まで先生が、「中央にお金を使うな！　統、班に使え！」と言ったのです。このようにやれば、大統領をやったとしても反対されません。分かりましたか。

復帰とは何ですか。どこに帰らなければならないのでしょうか。文総裁が天下にいくら高い地位に上がったとしても、循環する一番下は家庭です。統班撃破です。統班撃破とは何でしょうか。サタン世界のすべての家庭に対して根源的に、血統的に、文化的に、生活的に浸透する、これをみなひっくり返さなければなりません。それで撃破という言葉が出てきたのです。

統班撃破とともに復興会をしなければなりません。そうすれば縦的基盤がつくられるのです。これは横的です。それでこれが家庭において、ちょうど九〇度になり、「私の母と父は、真の母、真の父であり、私の息子、娘は真の息子、娘だ」と言うことのできる家庭の喚声が、この地上にわき上がるとき、地上世界のサタン圏は終わりを迎えるのです。家庭で出発したので、家庭でひっくり返さなければなりません。統班撃破はサタン世界の家庭を転覆するためのものです。サタン世界の血統を転覆させて、意識的なすべての内容をみな消化させるためのものです。これが最後です。

私たちがやろうと言うのが、統班撃破です。家庭で堕落して、世界的に繁殖したのを文総裁が逆に上がってきて、家庭を取り戻すことのできる基盤をみな築いたので、韓国のすべての家庭を訪問して今まで根を下ろしているサタン側的すべての愛の因縁をひっくり返そうというのです。「撃破」です。ここには闘争の概念があります。「撃破」という言葉は何かと言えば、悪魔を跡形もなく焼き尽くしてしまおうというのです。これをひっくり返さなければなりません。そうして新しい家庭として神様を迎えるようになるとき、ここから統一は自動的に始まるのです。

今日、ソウルを中心として、文総裁が提示する統班撃破は、家庭基準において真の父母の息子、娘をつくるためのものです。家庭で真の父母の愛に代わることのできる夫婦をつくり、神様が見たかった、神様の愛の中で成されるべきおじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、妻と夫、子女の基準を中心として一族、一国、一世界を失ったのを再現させなければなりません。そうして世界万民を私の息子、娘として抱き、愛することのできる世界になったと宣布してこそ、地上に解放圏が始まるのです。そうすることによって悪なる世界、暗黒の世界は退き、新しい光明の世界が来るのです。この門を開けようとするので、天は文総裁に世界の迫害の過程、国家の迫害の過程を通過させたのです。ここの大統領たちがみな私の世話になりませんでしたか。反対していた彼らが自然屈服するのです。

私たちは統班撃破をしなければなりません。神様の歴史的願いを成就しなければなりません。家庭で誤ったことを家庭からひっくり返さなければなりません。天の国は国を通して出てきます。出てくるのは真の男性と真の女性を通して出てきます。サタン世界の反対の家庭から出てくるのです。ですから、統一教会はすべて世の中と反対です。真の父母という言葉も反対です。

それでは今までの父母は何ですか。真の父母と反対ではありませんか。自分を生んだ父母は偽りの父母だということではありませんか。その言葉が神様の側では合っています。またサタンの側でも合っているのです。ですから真の父母を強調すれば、サタンは退くのです。なぜですか。神様が重要視するので、サタンは退いていくというのです。ひっくり返すのです。

生命の種を蒔けというのです。精誠の限り、精誠を込めて、掘りならして、精誠を尽くして蒔けというのです。十年、二十年たてば、必ずそれが私の枝となり、知らないうちに大きい巣を作って大きくなったもの自体が、天の国に行くことができるように実を結んで、あの世の高い、神様と近いところに行くことができるでしょう！　アーメン。ですから統班撃破をしなければなりません。

なぜ統班撃破をしなければならないのでしょうか。復帰歴史は今まで堕落した世界からどこへ帰るのかといえば、真の父母の門を通して帰るのです。堕落の門へ出てきて繁殖したのが、すべて真の父母の門を通して、エデンから出発したのを中心として再び回って上がっていかなければなりません。回って上がっていくその主流とは誰かといえば、統一教会のメンバーです。回って上がる時には、ぼろのふろしき包みのようなものはいりません。サタンが汚したすべてのものをきれいに清算して水晶のように澄んでいなければなりません。蒸留水のようにきれいな真の愛の心と体をもって、この地上に顕現した天の国の王子、王女となる真の愛の後継者であると自信をもつことのできる人にならなければなりません。

「統班撃破」と言うとき、「撃破」という言葉は、戦闘で使う言葉です。それが何かと言えば、サタン世界のこのすべての習慣を抜いてしまおうというものです。取ってしまって、皆さんに従い、天の側的習慣をここで確立することによって、天上天国が愛を中心と

して完成するでしょう！　アーメン。そのような精兵として、長男、長女として歴史時代に新しい黎明期を迎え、宣布するのに、出戦した精兵たちが統班撃破の勇士たちです。

二　勝敗の最後の砦は統、班

これから統班撃破をなぜしなければなりませんか。堕落は家庭でしました。班ではありません。分かりますか。統、班です。班の中で家庭です。家庭撃破。お母さん、お父さんが神様を絶対に信じなければならないし、神様がお母さん、お父さんを愛するように、息子、娘を愛さなければなりません。息子、娘、お母さん、お父さん、妻と夫が愛し、神様を愛する三大愛を中心として、連結された場に町内の親戚と国を愛さなければならないのです。ここから統一圏の方向が設定されるのです。分かりましたか。

今、標準は統班撃破です。これはイエス様を中心として見れば、一家、氏族的版図を中心として成就できなかったことを今日、私たち統一教会の教会員の家庭を中心として氏族的版図を完成することによって、世界的氏族圏の解放が四方から起こるのです。それが万国に統班解放圏を起こさせることのできる条件になると見るので、先生が今回、ここで命令し、誓いを受けたことを知らなければなりません。

一番重要なことは、私たちがどこで根を下ろさなければならないかということです。この根が下りるところは、道の組織体ではありません。道の下に郡があり、郡の下に面と里がありますが、それらはみなポンと浮いているので、ここはサタンが入ってきて、寓居することのできる土台が築かれているというのです。ですから統、班で根を下ろさなければなりません。これを原理的に知らなければなりません。これが統一教会が統、班を撃破する目標を単一目標にしなければならない原因となるのです。復帰の目標はただ一つなのです。人間が過去の時代や現在の時代や未来の時代を問わず、完成を目指す目標も一つです。個人完成から始まるのです。それと同じように、統一のために、統、班を中心として鉄壁のような基盤を築かなければなりません。

今、大韓民国が失敗する理由がどこにあるかと言えば、統、班組織を中心として国民教育をできないところにあります。すべて操縦して郡まで行けなかったのです。道で行ったり来たりして、行政部で組織をつくって、国庫だけ消耗して、すべて飛んでいってしまったというのです。それではいけません。統、班長を中心としてすべてのものを投入して、ここで成功しなければなりません。それで家庭を保護しなければなりません。家庭を保護しなければなりません。国を救うためには、細胞を保護し、細胞繁殖をしなければなりません。細胞自体が思想武装をして、私たちが大きくなって、隣近所に「一つにならなければならない」と言って、互いに一つになろうとする、これが大きいのです。そうして結束しなければなりません。

私たちが統班撃破運動を展開しているのは、政治的目的ではなく、南北統一時代を迎え、思想と組織を強固にしようというのです。共産党は組織で動く集団なので、それに匹敵する私たちの立場を準備しようというのです。

今が重要な最後の峠です。先生が一生の間祈祷してきたのは、面、洞を中心として統、班を占領することです。そうしてこそサタン世界を完全に占領するというのです。いかなる大きい機関でもなく、中央庁でもなく、いかなる都市でもなく、占領するのは、洞を中心として統と班、面を中心として、統、班を占領しようというのです。そうすればそこには、みな入るのです。どんな素晴らしい人も出来の悪い人も、その国の最高の人物たちから最低の人、階級を超越してみな入っているというのです。ですから教区長とか支部長たちも、これからの活動基準がどこにあるかといえば、道ではありません。統、班長にあります。洞を中心として、統、班長が活動舞台だというのです。

大韓民国は、今まで各政権が、統、班長を中心とした自分たちの政治的方向だとか、ある教育をすることができなかったというのです。民族的教育ができなかったのです。思想教育ができなかったのです。各道知事を集めたり、郡守たちを集めたり、班で一人ずつ集めたりはしたでしょう。しかし、思想教育の主人が統、班長にならなかったのです。ですから根がありません。根を下ろすことができなかったのです。根を張ることができなかったのです。浮き草と同じです。

初めは統・班長撃破問題、その次は面撃破問題、里まで、そうしておけば、完全に組織化できるでしょう。

統を中心として班の消化にどのように火をつけるかと言えば、問題はもう生死を決定することなのです。すべて家が問題です。選挙の時に動かすのは何ですか。どこかの都市、市長を中心としては駄目なのです。郡守を中心としては動かないのです。問題は何かと言えば、統、班長を中心として班を動かす組織です。

統・班長を中心として消化するのが難しいですか、易しいですか。この組織編成をすれば易しいでしょうか、難しいでしょうか。ですから自信をもってください。それは誰でも幼子でも問題ないと考えるのです。事実、問題ではないでしょう。統・班長さえさっと配置しておけば、それは長くかからないのです。

皆さんが一線で闘う先生のような立場には及ばないとしても、統、班を中心として涙の峠を越えて定着しなければなりません。
堕落した運命、ゆがんだこの悲哀の運命を打開しなければなりません。そうしなければ天が協助しません。天がここに働きません。天が離れます。天が離れるのです。

皆さんがこの運動をするのに、靴が何足すり切れてもやりなさいというのです。統・班長を訪ねるには自動車ではいけないのです。歩いて行かなければなりません。靴を何足も捨ててでも歩いて回りなさいというのです。汗を流しながら一日に三回、四回ノックしてみなさい。皆さんのほとんどが一度しかノックできなかったのではありませんか。一日にも統、班に講義をしに何回か行けば、汗に濡れますが、そうすればお風呂に入らなければならないでしょう。そうやってみなさいというのです。天が役事してくださるか、役事してくださらないか。火がついて出ていくか、

消えて出ていくかやってみろというのです。先生の言葉がうそか本当がやってみなさい。

先生を中心として、皆さんは出ていって統、班を撃破する砦となって、同じ輝きを発しなければなりません。大きくはできなくとも、同じ光を発しなさいというのです。青い光を発しなければならないところで、赤い光を発してもいいでしょうか。そこで黄色い光を発してもいけません。同じ光を発しなければなりません。

先生が提示したすべての焦点は確実です。統・班長、南韓にいる統・班長を撃破するのです。
皆さん、統一教会の教会員たちは、みな班長になるか統長になる立場に立ってこそ天の前に記憶される群れとなるでしょう。

私たちの目標は簡単でしょう。私たちは、どんなことがあっても、泣いたりわめいたりしてでも、統・班長を一つにしなければなりません。統、班にみな配置されるのです。それは大学の学生もするのです。

私たちが家庭をしっかりつかんでおけばいいのです。すべてが家庭の中にしばられた人たちではありませんか。家庭さえつかめば、国会議員も捕まえられ、長、次官もみな捕まえられ、青瓦台の大統領も捕まえられるというのです。みんな統・班長をやれというのです。そうではないですか。国会議員と国家の重要な為政者たち、閣僚たちと軍隊の幕僚たちまでも完全に統・班長運動に動くようになれば、すべて終わるのです。闘いなく私たちはつくることができます。何のことか分かりますか。

私たちは政治が問題ではありません。私たちがやろうというのは、国を取り戻そうというのです。統、班をつかもうというのです。統、班をつかめば、国は自動的に解決されるのです。

これから私たちがやるべきことは何ですか。北韓の組織というのは、統班撃破ができません。北韓がいくら地下工作しても統、班まで追い出して、撃破運動を消化できません。点の組織、線の組織は行政によって組織しますが、統班撃破はできません。統班撃破さえやればみな掛かってきます。すべて倒れます。点の組織も引っ掛かり、線の組織も引っ掛かり、体制がみな引っ掛かります。
この北韓でできないことを私たちがやるのです。共産党が下りてきたときは、これをさっとやって、頭を下げればいいのです。南韓の四千万がふろしきを持ってみな入り、ヤコブがエサウを屈服させたのと同じです。二十一年の間蓄えたすべての財産をもっていって、「これはお兄さんのものです」と言って、まるごとあげてしまえば、北韓は完全に屈服するのです。

これから国民連合を中心としてやるべきこととは何でしょうか。統班撃破運動だけが残っています。この統班撃破のために体制をつくるのです。中央の体制、道の体制、郡の体制、面の体制を定立させるのです。面を中心としてすべて動かすのです。統、班を中心として見れば、国の体制は大きい枠です。道の体制はその次の枠で、郡の体制はその間の枠

で、面の体制はその次の枠です。班を中心として見れば、統はその次の枠なのです。復帰は個人復帰から家庭復帰、氏族復帰、民族復帰、国家復帰、世界復帰、このように進みます。そのように私たちが、体制的に見るときに、国家も国民連合のようにすべて国家組織があります。道の組織があり、その次には郡の組織があり、面、里（統）班の組織があるのです。これが現在の韓国の国家組織体制です。それでは班は何を代表しますか。もちろん統を代表しますが、二重目的があります。直接の目的は班のためのもので、全体目的は国のためのものです。統と班がみな一つになるのは、国を一つにすることです。私たち人体の構造と同じ組織体制をもっています。

初めに組織、二番目に団結、三番目に行動が必要です。これが私たちの韓国を中心に世界を動かすための三大要素です。徹底した組織圏内に立つことによって、四方八方への連絡を一〇〇パーセントしなさい。そして中心使命を果たすために、先頭に立って、このような基準をつくらなければなりません。自分の位置、組織圏内の自分の位置を決定しなければなりません。位置がなければ、座るところがありません。位置を決定してこそ仕事ができるのです。努力次第で、その位置がどのように大きくなるのかということが分かります。位置決定は組織力を強化していく上で、重要なものです。

三　南北統一方案も統班撃破運動

韓国において何をしなければならないのかと言えば、長子権を復帰しなければなりません。大韓民国の人々は、「文総裁を中心として南北統一へと前進しなければならない」とこのようなイメージができあがっているのです。大統領も南北統一をするのには協助するようになっているのであって、反対するようにはなっていません。そのような意味でカインとアベルを中心として見るとき、これからは私の言うことを聞かなければなりません。さらに三派閥が生じるので、私たちが統班撃破をして、操縦さえきっちりやる日には、昼寝ばかりしていても、かかとをつかんで「おお、主よ！　助け給え」と言うようになるのです。先生は知恵の王ではありませんか。どうすればこのようにぴったり合うようにして、悪口を言われても滅びないで、素晴らしく生き残るのかというのです。

統班撃破をやるのです。地下に隠れていたスパイを私の手でみな探し出して、爆破してしまうのです。赤を追放するのです。毎日のように夜、北韓と連絡するのを探し出すのです。これからだんだん深く入るでしょう。金日成のいかなる特攻隊よりも熱烈な忠臣の精気を込めて統班撃破の組織を完成するのです。そのようになれば、金日成が死ぬとか問題が起こるのです。統一教会の組織編成完了のときまで、金日成が死んではいけません。何のことか分かりますか。

南北統一のためにお昼を一食抜いてみたことがありますか。きょう、ここに何をしに来ましたか。統班撃破です。「南北総選挙をしよう」と言うとき、我が国は何もできないままやられてしまいます。どういう時が来るか分かりますか。それを知らなければなりません。

では、そのように歩む先生が韓国に来て、「遊んで食べろ」と言わなければなりませんか。どのようにしなければなりませんか。韓国人が仕事ができなければ、追い出さなければなりません。今度の七月には、統一教会のメンバーはみな四十日間伝道しなければなりません。一九五六年から伝統的に、永遠に開拓精神を受け継ぐための修練期間として、設定しておいた期間です。最近、毎年これをやっていますか。今回は三十八度線の国境地帯にみな配置して、毎日のように聖歌のラッパを吹かせて、スピーカーを通して北韓の平壌まで聞こえるようにしなければなりません。こうして共産主義は滅びたということをすべて訴えなければなりません。そのような材料がたくさんあるではないですか。みな根こそぎにやらなければなりません。統班撃破の責任者になっていないので、これを鑑定するその鑑定部隊に派遣するでしょう！　「アーメン」と、大きい声で言わなければいけません。派遣するでしょう！　「アーメン！」。

統一教会は統班撃破をするでしょう。復帰歴史を出発して、サタンが先に浸透してきた個人基盤、家庭基盤、氏族、民族、国家、世界まで行って、アメリカを越え、共産党を越えて、回って帰ってくるのです。韓国に回って帰ってくるのです。韓国に回って帰ってくるのに、韓国という国が私に反対したでしょう。今、国はお粥を炊いているのです。みな互いに自分が大統領になろうとしているのです。

そうやって争っていなさいというのです。私は天理の道を、天運を受けて一周回ってきて、抱いていこうというのです。こうして回って帰ってくるのです。そうして国民を失いつつあるので、統一教会の文先生が国民をみな収拾するのです。

イスラエル民族が、カナン福地に復帰するために、エジプトを出ていくとき、自分の一族に何度も行って、「私たちが行くべき道を行かなければならない」と言いました。「サタン世界を解放しなければならない」と言いました。今は、その時代に入ったので、人を解放しなければなりません。私たちがその伝統を立てなければなりません。

一軒でも逃してはなりません。今はそのような時です。先生が「統班撃破」という言葉を、それで言ったのです。疲れを知らず、その日が満ちるまで、昼も夜も一軒でも自分の歩みが通過しなければなりません。東西に行き、南北を経て、円形に通過しなければなりません。ですから三回は、行かなければならないというのです。みな三回以上訪ねて行きなさいというのです。今、帰って何をしなければならないですか。統班撃破を北韓よりももっと熱心にやらなければなりません。そうしてこそ根を引き抜くのです。

全大協キリスト教農民会、カトリック農民会が、デモをしようとどれほど一生懸命ですか。皆さんは統班撃破をそれ以上にやりますか。それ以上やらなければなりません。

この大韓民国の一番悲惨な家庭の底を通してふろしきに包んで、これを引き上げて南北統一をしなければならないというのです。統一はどこからですか。頂上会談、大統領と金日成が頂上会談をやってできるのではありません。それで統班撃破です。統班撃破という言葉は、統、班を破壊せよという言葉です。

その統、班というのは、自分たちのための統、班です。お母さんもお父さんも自分のために生き、夫も子供もみな自分のために生きる世界です。サタンが身を潜めているので、それを撃破しなければなりません。

私の国を統一しなければならないのではありませんか。それで私たちは今、南北統一のための選挙の準備をしているのです。それで統班撃破をしなければなりません。国を取り戻して世界を復帰しなければなりません。どこからしなければならないかと言えば、韓国を中心としてしなければなりません。先生が一番初めに、昔は景武台（青瓦台の旧称）を通して、梨花女子大学、延世大学のような頂上から始めました。ところが頂上でできなかったので、下りてくるのです。頂上をつかめなければ、一番下をつかまなければなりません。サタンはそれを知っています。一番上で定着できなかったので、着地のために一番下に下りてくるということを知っているので、サタンが下りてこれないように打つのです。それで党の話が出てきたのです。

統班撃破を中心として着地時代が回ってきたので、これからは私が故郷を訪ねていくのです。私の兄は八・一五に解放されることをみな知っていました。その兄が私の言うことに絶対に従うのです。その兄と母と父に原理のみ言を一言も伝えることができませんでした。皆さんを私の母と父よりも愛しました。何のことか分かりますか。一生をすべて統一教会のために尽くし、血と涙の事情を経て、埋めていくのです。個人を埋め、家庭を埋め、氏族を埋め、民族を埋め、国家を埋め、世界を埋めていくのです。埋めなければサタンが離れないのです。それで私がアメリカへ行って、千辛万苦の受難の道を歩んだのです。そしてソ連を救うために準備しているのです。今はすべて成したので、故郷に帰ってきて統班撃破をするのです。

統班撃破をするのに、これから皆さんが十二族を吸収せよというのです。洞に行って十二の統を消化し、統に行っては十二の班を収拾せよというのです。十二段階です。今はもう、市、郡、区、ほとんどが私たちと和していませんか。機関長でも誰でも、文総裁を尊敬しない人がいないでしょう。皆さんもみな尊敬されているでしょう。有志になったでしょう。有志ですが、びりの有志ですか、中心の有志ですか。共産党に対して闘える人々が私たちしかいないではありませんか。中心有志になっています。

統班撃破をすることによって、南韓に浸透したスパイは自動的に摘発されるのです。そうでしょう。一周転がせば、スカートの下に隠れていたのが、みな現れるのです。

反対され、疲れ切ったこの乞食の群れのような統一教会のメンバーたちを集めて、挙国的な面で共産党に対峙することのできる価値観をもって、理論的設定の基盤に立って、共産党が攻撃するのを方々から防ぐことのできる準備を私一人でやってきたのです。それで統班撃破を五年の間主張してきました。しかし皆さんの中に実際にその価値を知り、その時を知り、それを実際に責任化して、私の体と心で盾となって防ごうと努力した人が誰がいますか。文総裁一人しかいません。

これから統一教会がアベルの立場で南北統一に備えることのできる準備をしなければなりませんが、今までは統一教会が自体整備の着地ができませんでした。統班撃破とは何でしょうか。南韓の地の家庭を中心としてひっくり返さなければならないのです。なぜですか。出発が家庭なので、家庭的基準で思想を転換しておかなければならないのです。ところが、そのような環境的与件を訪ねていこうとする神様の前にサタン側の外的世界は躍起になって反対したのです。今までの政治風土は自由党の時から共和党、民政党と、ずっと統一教会が組織して地方へ下りていくのを反対しました。定着するのを反対したのです。

今まで五年の間、統班撃破を何のためにしようとしましたか。一つの時を迎えるためにです。時は今しかありません。金日成がこれから行くところがどこにありますか。ですから米軍を撤収しなくても選挙しようと出てきます。そうすればすべて終わります。南韓のどこに代案がありますか。それを防御するための基盤を築いていますか。二者が争ってばかりで、大便をしてまごつき、下痢をし、はらわたに穴があいているのに、薬がないではありませんか。こんなものは雪かきのようなもので押して片づけなければなりません。そのようにできるように教育しなければなりません。そうでなければ、私たちについてきますか。それしか道がありません。これからカインとアベルが一つにならずしては行く道がありません。今、はっきり分かったでしょう。

文総裁はいろいろ悪口を言われてきましたが、滅びないで希望的立場で統班撃破、家庭をつかまえて、世界のすべての家庭をこのようなモデルにつくろうとしています。その場に行くときは、悪魔は接近もできず、跡形もありません。金日成がどこにいますか。地下運動をする共産主義者がどこにいますか。きれいになります。

これから十年の間は統班撃破をしなければなりません。統班撃破とは何かと言えば、南北を中心として、家庭を占領することです。神様が今まで歴史を通じて天の下に恩賜を施しておいたのです。そうしては、実が実ることを願っていたのですが、そのようにできませんでした。もちろん宗教圏を中心としてこれを撒くことによって、その恵沢を全世界に広げておきましたが、今はこれらを刈り入れる時が来ました。

私たちがやる統班撃破とは何でしょうか。南北を統一して、神様の名前で、真の父母の名前で万国の勝利の版図を中心として大韓民国を全人類の祖国光復として神様の前に捧げなければならないのです。ここには民族と共産が一つになっています。真の父母と偽りの父母を中心として見るとき、神様の前に互いに怨讐ではありません。金日成が死んではいけません。今、金日成と私たちの側が会っています。安企部でもそれを知りません。反共法に私が抵触するでしょうが。私がそのようなことをたくさんやってきました。日本にもそうだし、アメリカにもそうだし、ソ連にもそうだし、すべて投入してきたのです。

南韓においての共産党の基地をすべて……。統班撃破、分かりますか。潮水は初めにどこへ行かなければなりませんか。洞役場に行ってはいけません。家庭に入らなければなりま

せん。家庭を埋め、その次に統を埋め、次に洞を埋め、郡を埋め、ソウルがいっぱいになり、大韓民国がいっぱいになってこそ青瓦台を埋めるのです。そして最後に、死ぬとしても大統領があとで死ななければなりません。大統領が先に死んで、自分は生きようという輩は乞食たちです。半分泥棒です。大統領になったら、尊敬し、仕えなければなりません。

北韓一千万の五道民を収拾して、教会と連結し、南韓四千万を中心として先生の言うことを聞けば、南北間のキリスト教統一と国民統一が可能です。

ですから統班撃破を急ぐ意味は、南北のための統一のために進む近道の方案であることを知らなければなりません。この道でなければできないのです。

さあ、統班撃破さえきっちりやっておけば、金日成が何かできるでしょうか。先生が神様の前に「共産党は私の手で処理します！」と言ったのですが、すべて処理しました。最後に残ったのは金日成ですが、もう南侵戦争を通じてもできないようになっています。金日成が生きることのできる道は、選挙することしかないのです。選挙して、落選したからといってみんなを捕まえて殺すでしょうか。生き残るにはその道しかないというのです。そのようなことを積極的に推進しなければなりません。

もう最後です。一九九二年まで一度期待してみるのです。これから統班撃破をやりなさいというのです。先生を中心としてみな三位基台を結んだでしょう。洞、統、面を中心として配置した人が三位基台です。先生を中心としては四位基台です。長がいないのです。統、班です。洞、面基準が私たちの活動舞台なのです。国がどこにありますか。国を中心として考えていたら、国が滅びます。何のことか分かりますか。道が滅びれば滅びます。郡が滅びれば滅びます。一番安全地帯に出ていけるのが、洞、面です。もし北韓が占領するとしたら、どこを占領するでしょうか。面を占領しますか、洞を占領しますか。洞を占領してどうするか、統、班を占領してどうしますか。中央庁を占領しなければ、道を占領して郡を占領するのであって、面は行きもしません。そうじゃありませんか。昔、金日成の輩が面に来て闘いましたか。面は経もせずにみな占領しませんでしたか。安全地帯です。

四　統班撃破は家庭を中心にしなければ

協会長を通じて十二の地区にビデオ・テープを作って、真の父母宣布大会をみな部落までしなければなりません。なぜそうかと言えば、蕩減復帰は家庭が基盤です。洞ではありません。洞が家庭ではありません。家庭で出発して氏族、民族、このようになっているので、氏族的復帰の土台というのは、家庭を連合したものです。ですから統班撃破というのが、世界的すべての運勢を国家の運勢に、国家の運勢を氏族の運勢に、氏族の運勢を家庭の運勢に、家庭の運勢を個人の運勢につないでいくのです。

統班撃破というのがどこですか。家庭基盤です。それをやらなければいけません。家庭基盤が大韓民国で一番貴い新芽が出てくるところではありませんか。息子、娘。そうではありませんか。国の芽がそこから出てくるの

です。天の国の芽が芽生えなければならないというのです。そこから息子、娘が出てくるでしょう。息子、娘は天の国の民ではありませんか。天国の国民の出生地、生産地は、地球星しかありません。ほかの星の国に人がいるのではありません。

この間、選挙のとき、私たち統一教会の人の中にも「選挙に出馬したら」と言うのを、「この者たち、何だ！」と怒鳴りました。選挙に出馬していたらどうなるところでしたか。共和党でも数名推薦してほしいと通報が来ました。政治をもって収拾するのではありません。家の中からするのです。救いの摂理は上から出発するのではありません。家庭から出発しなければなりません。三千万の精誠と熱意がすべての家庭に着陸しなければなりません。それで統班撃破をしなければならないというのです。洞、面が統、里へと下りていかなければならないし、統、里が班へと下りていかなければなりません。ですから、私たち統一教会のすべての活動基地は、それぞれの家なのです。そこに種を植えて、お母さんとお父さんの愛以上の愛を芽生えさせ、そこで未来の自分以上の父母たちの心情をもった後孫たちを中心として新芽を芽生えさせ、神様の心情とともに家庭圏の上に植えなければなりません。

これから私たちがやるべきことが統班撃破であるだけに、家に帰らなければなりません。アダム、エバが男、女から出発して、息子、娘から汚したのでそれを収拾するためには家庭に帰らなければなりません。自分の一族と親戚の家を訪ねて血と汗と涙で掃除しなければなりません。水で掃除するのではありません。血と汗と涙をもって洗わなければならないようになっているので、その家庭に入って血と汗と涙を流さずしては復帰ができないのです。その道を先生が行かなければならないのです。

統班撃破です。統班とは何ですか。神様が会いたかった父に出会うところです。家庭に帰ろうというのです。神様が会いたかったお母さん、お父さんをつくろうというのです。神様が会いたかった息子、娘をつくろうというのです。神様が会いたかったおじさん、おばさんをつくろうというのです。これが文総裁の願いであり、神様の願いです。誰の願いですか。天地を創造した大主宰の願いです。誰が本当にその方の願いの成就の、このことを引き受けて手をつけるでしょうか。皆さんの家の中において、皆さんは神様が会いたがる父母になっていますか。これが問題です。統班撃破というのは過ぎ去る言葉ではありません。アダム、エバが家庭で神様が会いたがる真の母、真の父になれなかったのが神様の恨です。真の息子、娘になれなかったのが恨であり、真の夫婦になれなかったのが恨であり、真の孫になれなかったのが恨です。どこでですか。家庭で。ですから私の家庭でこの恨を解いてあげなければなりません。その恨を解いてあげてこそ天地に解放が始まるのです。

今、何をすべきかといえば、統班撃破です。統班撃破。神様が家庭を失ってしまったので、この天地間にすべての本郷的天の国の基地になることができるところが韓国だと言うとき、文総裁が生まれた本郷の国が韓国だと言うとき、韓国の故郷に帰って、家庭において神様

が訪ねたいおじいさん、おばあさん、お母さん、お父さん、夫婦、子女を抱いて天地の大脈を開けることのできる一つの起源地となる、一つの葉となり、枝になることのできる家庭を成すことが、全天地の願いであり、創造主の願いであることを知ったので、家庭で失ってしまったものを家庭で取り戻し、新たに植えてあげなければならないので、統班撃破ということを五年前から主唱してきたのです。これがすべて終われば、将来誰が大統領をやっても心配ありません。私たちが思いどおりにできる時が来るのです。

南北韓を解放する近道が統班撃破です。北韓に自分のお母さん、お父さん、自分のいとこ、あるいは親戚がいれば、その人に会うとき、抱き締めて泣くように、これから各家庭を訪ねていって、心情的に涙を流すことができなければなりません。このような心情的因縁が神様と共に同伴することのできる環境が成されるときは、私によってその家庭が、神様の訪ねたい愛らしい家庭として誕生するのです。そのような喜びの歓声とともに解放のその日が私の目前にやって来ることを知っているので、このようなことをやっているということを知り、今日ここに集まった皆さんは真の兄弟の因縁を経て、神様が探している愛の家庭形成を願う使者となって、神様の心情的通告者としての使命をしなければなりません。

そうすることのできる兄になり、姉になって、あるいはおじさん、おばさんとなって、お母さん、お父さん、おばあさん、おじいさんの代身者となって、その家庭を収拾し、神様をお迎えできる家庭の基盤をソウルから始めようというのが、今日、洞、統、班に責任をもって全力を尽くすことのできる、神様の代身者となる皆さんに下さったみ言です。万歳しましょう！

家庭とはどんなに貴いものでしょうか。家庭は国を代表したものであり、家庭は世界を代表したものです。
ですから三千里半島の多くのおじいさん、おばあさんたちを自分の家庭のおじいさん、おばあさんのように、神様が愛したいおばあさん、おじいさんのように愛し、私のお母さん、お父さんのような多くの人々を神様が愛したがるお母さん、お父さんのように愛し、私の妻のような多くの女性たちを神様が夫婦のように愛したがるように、神様の愛の代身者として愛し、私の息子、娘、私の兄弟のような多くの人々を神様が愛したがるように、愛さなければなりません。このような愛の理想を中心として、神様が訪ねたかったその心の基準をもって世界のために投入し、投入しなければなりません。

そのようにするとき、神様を代行することのできる息子の継承者となり、娘の継承者となり、その国と世界を建国する独立軍になるというのです。今、このような事実をはっきり知ったので、これから皆さんの家庭に帰り、家庭を覆さなければなりません。それが統班撃破です。家庭を取り戻さなければなりません。これが私たちの義務です。

統班撃破とは何でしょうか。家を訪ねていくものです。文総裁がいくら世界的勝利圏をみな備えたとしてもその贈り物をどこにもっていきますか。国ではありません。国にあげる前に、家庭から失ったので、家庭にもっていって植えてあげなければなりません。家庭

に種を蒔かなければなりません。民族に蒔いてはいけません。ですから文総裁は統班撃破、家庭着地！　共産党の搾取という言葉ではありません（注：韓国語の着地と搾取の発音が似ている）。そのようにすることによって、そこから今まで亡国の種に行きつつあった、地獄に行こうとしていたのが、天上に帰ることのできる時代が来るのです。ここからサタン世界は文総裁によってみな遮断されてしまいました。そこで後ろを振り向く日には、自動的に南北統一ができるのです。完全にプラスの前に一つになるのです。霊界が動員され、掃いてしまうのです。

私が南韓にいてから北韓に入り、三年後に帰ってきたとき、以北で感じた習慣性を解消するために五年以上かかったことを覚えています。これを考えるとき、私たちがサタンの伝統的な歴史を通じて受け継いだ習慣性を解消するためには、どれほど痛烈に悔い改め、身もだえしなければならないかを知らなければなりません。その身もだえすることを自分自らするのではなく、公的な命令の戦争の場に入って、統班撃破路程でやれば、このことがどんなに短縮されるかということを知り、その道を自任して取っていく賢い息子、娘たちにならなければなりません。

統班撃破が問題です。ですから家庭から勝利しなければなりません。経済問題、政治問題、文化問題、宗教問題、思想問題、全体が家庭で解決されなければなりません。

先生が話した幸福の心という意味の会社をつくりました。七年間ずっと開発投資してつくったのですが、それが何かといえば、ホーム・チャーチ組織です。これは今に、統班撃破運動と連結して家庭を占領するでしょう。これを占領してしまえば、何でも可能なのです。大衆動員には、これ以上の基盤がないのです。

統一教会では今、一大激戦が起こっているのです。統班撃破！　アダム・エバが家庭から失ったものを取り戻そうとするので、家庭に帰らなければなりません。家庭に帰って、一八〇度ひっくり返さなければなりません。一八〇度何ですか。覆すのです。

アダム・エバが家庭に根をおいたのが、悪なる家庭が生じることによって、悪なる氏族、悪なる民族、悪なる国家、悪なる世界まで広がったのです。それで根を再び植えなければならないのです。今日、この韓国においての統班撃破の論理がそれです。

今、何かといえば、統班撃破家庭着地です。それは先生が指示したことです。この者たち……。隣近所の選挙運動をしてどうしますか。この者たち。生死の境がかかった重要なことであり、天下を得るか失うかという闘いなのです。

国から、道から、郡から、面を経て、統班撃破をしていくのです。アダム・エバが偽ったので、偽ったのを元に戻さなければなりません。

皆さんに統班撃破を指示し、十四年前から家庭教会を指示したのです。五年前から統班撃破を話したのです。これは何かといえば、今日皆さんがする統班撃破を叫んだのです。

根がどこまで下りなければなりませんか。家庭まで下ろさなければなりません。今日、この世の国は家庭まで行けませんでした。行ってみても、面までも行けませんでした。しかし私たち統一教会はどこまで行かなければなりませんか。班まで行かなければなりません。班まで。

これからは家庭を寄着地（注：経由地）として救国、国を救わなければなりません。その運動が統班撃破です。それで統、班に入れというのです。班常会をリードせよというのです。班常会を通じて家庭、家庭に私たちの根を下ろさなければなりません。

家庭の平和の基地をつくるための運動を私が強調しました。これらもそのように教育しなければなりません。統班撃破の班常会を通して、おじいさん、おばあさんを神様のごとく侍るように教育し、お母さん、お父さんを王のごとく侍るように教育し、若い人たちは王子、王女の立場だと教育しなければなりません。そのような思想さえ入れれば、サタン世界のどこに行くところがあるでしょうか。そうすれば天国と直通するのです。

復帰摂理は家庭に帰らなければなりません。家庭まで帰らなければなりません。氏族をもってしても駄目です。家庭まで帰らなければなりません。アダム・エバが家庭で堕落しました。

アダム・エバを中心として息子、娘が出てくるところが家庭なので、家庭に下りていかなければいけないのです。そうでなければ、帰ってくることができないのです。

五　統班撃破活動の組織拡大

一) 社会の人物を中心に組織拡大

私たちは今度完全に統班撃破をするのです。反対する人たちを訪ねていって、どうしても悔い改めさせ、私たちの側に引いて来なければなりません。これを選挙運動をする以上の運動だと知ってやりなさい。分かりましたか。決戦時代に入るのです。

今度アメリカ研修に行って来た人たちの知り合いとか、ここに同意する人、あるいは団体の誰々がいれば、大会に参席させて、私たちが面に三人ずつ派遣するのに、私たち食口以外にそこで推薦してくれる人二人を配置してもかまいません。このように三人ずつ配置しても人が余れば、四人ずつ配置するのです。そのときは、私たち食口一人に推薦された人三人がそこに加担するのです。

それは三人だけの単位ではありません。多ければ多いほどその基準を中心としてもっと早く統班撃破が可能だし、面洞撃破が可能だというのです。それで早く組織が編成されれば、そこで他の統を協助してあげるのです。そうすれば面だとか洞を中心として自分の基盤を完成して、周辺の洞、面を協助することのできる責任者になるのです。そのような責任に実績をもった人は、いくつかの面、いくつかの洞の中で、中心人物になるのです。

大韓民国で今まで出したものが何かありますか。政治家たちが、文総裁を家庭の基盤まで下りていけないようにしたのです。それがもう何年ですか。統班撃破を始めてから五年になるではありませんか。六年目です。家庭をひっくり返さなければなりません。そうし

てこそ国が蘇生するのです。面ではなく、郡でもありません。皆さんのように実力のある人たちが、みな家庭に組み込まれていなければなりません。

将来、能力がなくなれば、教会もやめて、支局長でもやるとか、メッコール販売でもしなさいというのです。これからは私がそのように手をつけようと思います。一九九二年さえ過ぎれば、さっと整理するでしょう。分かりましたか。そのときは、教会の責任者たちが一年に約八百名ぐらい出るでしょう。成和大学を卒業する人たちが、五百名以上は出るのです。その人たちをどうしますか。皆さんの郡の東西南北に配置するのです。これをサタンたちができないように妨害したので、できなかったのであって、そうしなかったなら既にできていたはずです。十八年の歳月が流れてしまいました。統班撃破を完了しても余りあったでしょう。そのようになっていたなら、大韓民国は心配しなくてもいいのです。このだらしのない者たち、みな首を切ってしまったことでしょう。

私たちが活用しなければならない人たちは、アメリカやソ連に行って来た人たちです。その人たちが多いのです。この人たちをどうやって核心的な要所要所に配置するかということが問題です。この人たちをみな糾合して、統班撃破のための統長をやらせ、班長をやらせなければなりません。家はみなあるじゃないですか。みんな統長、里長、班長をやらせなければなりません。

次に選挙するときには、私の手を経なければならないでしょう。これからどうなりますか。私は党はつくりません。党にいるがらくたは私が首を切ってしまわなければならないというのです。統班撃破をして、国を蝕み、不信の風潮を起こす、このような邪悪な群れは、私の手で南北統一を中心として切ってしまうでしょう。

それと同じように「国が求める人はこのような人だ」と言うとき、そこにふさわしい私が後援するでしょうし、ここについて争い、頭で口先だけのことをいう人たちは、きれいさっぱり掃いてしまわなければなりません。しなければなりませんか、してはなりませんか。国らしい国を見て、生きなければならず、国を守ることのできる国会議員らしい国会議員を見て、死ななければなりません。

ですから金日成が自分勝手にできません。それで近いうちに統班撃破着地運動を中心としてつないでいかなければなりません。さっき、何人ずつやろうと言いましたか。帰ったらすぐに、十二人をつかめというのです。つかんだその十二人がまた十二人をつかんで、これさえやれば、七千三万の里がみな私たちの懐に敷かれるのです。

団体を大きくつくれば、被害が大きいです。「統一教会は何でもない」と言うので、無事でした。何のことか分かりますか。アメリカに連れていって教育した人たちは上中下が連結されていないので、これを今回の大会を中心としてつなごうとするのです。そうなれば、統班撃破は問題ではありません。それを知らなければなりません。

皆さんが父母として侍るならば、愛の起源が同じだし、生命の起源が同じだし、血統の起源が同じだということです。父母に似たと

いう話でしょう。そう、北韓を思えば、歯ぎしりするほどいまいましく、みぞれが降る日が嫌なように、とても嫌でしょう。そのようなことを一緒に感じなければなりません。そのようなことを知って、統班撃破に総力を傾けなければなりません。今年の夏に私が帰ってきて、郡守（郡の長）でも何でも私が会おうと思います。将来、地方自治になれば、私の手を経ずしては、郡の議員、道の議員になれないというのです。

さあ、統班撃破運動をやりますか、やりませんか。何のためにですか。文総裁ではありません。皆さんが愛する息子、娘とお母さん、お父さんのために、南北が統一されるのが、皆さん自身の願いだけではありません。私の息子、娘の願いであり、私の妻の願いであり、私のお母さん、お父さんの願いです。このように共通の願いとなり、責任を各自がもっているので、この各自の責任を果たさないという人は、民族の反逆者になるのです。

そう、統班撃破をやるときには、文総裁が出してくれることを願いますか。皆さんがお金を出してやることを願いますか。お金をもらって、給料をもらってそのことをやるのが愛国者ですか。食事を抜き、寒くて、誰も分かってくれない道を歩みながら、愛そうとする人が愛国者ですか。答えてください。二番目でしょう。今はこれくらい分かったので、統班撃破を一生懸命やりなさいというのです。

私は日本の国会議員たちともたくさんかかわりをもっています。ここでもそうです。私と関係のある人がおよそ百八十人はいます。私がもし悪党だったら、既にみな焼いて食い、煮て食っていたことでしょう。私はそのすきにつけ込むのは嫌いです。

ある人は、「文総裁が統班撃破まで論じるのを見ると、座ったまま大韓民国を網でしっかり囲み、投網さえ引っ張れば、その中にいる魚を一度に丸ごと捕まえるのと同じように、取って食べようとしている。それで大統領でもなろうとしている」と言うのです。そうですか。（笑い）

毎日のように何ですか。路傍伝道！　その次は何ですか。統班撃破運動！　近いうちに、六月までに終えなければなりません。みな洞、統、班に長たちを配置して、三泊四日の教育を早いうちに終えて、その次は第二次へと急がなければなりません。よくできる人たちは、将来いいでしょう。よくできない人たち、実績のない人たちは落ちるし、協会長、それを知らなければなりません。目標は百二十人です。氏族復帰、ですから近いうちに洞を中心として教会をつくるのです。三千六百個を早くつくらなければなりません。

統班撃破のための組織の体系化が急がれる問題です。

これからまず初めにしなければならないことは、教学統連を中心として大学基地撃破運動です。大学がどうやって国民連合を中心として一体となり、方向を保っていくのかということが問題です。そのように大学を中心として連結することを通して、その次には、対社会運動です。社会の有志たち、その地方なら地方の行政機関、あるいは政党の官吏たちを集めなければなりません。それで教授たちが地方の有志たちをつないで、その次に、学

生たちは地方の青年たちをつないで、大会をするのです。主要都市で大会をしていきながら、統、班を撃破するのです。統班撃破だというのです。私たちの最後の闘いの激戦地は統、班です。統・班長強化完成、これが目標です。

統班撃破という言葉は、政党にしっかりしろと、国の政治をする人々にしっかりしろという言葉です。

言うことを聞かなければ、けんかもやったりしてみなさいというのです。「国を生かそうというのに、どうしてやりませんか」と言ってです。こうして将来、ここに逸する人は、首を切ってしまわなければなりません。何をもってですか。統班撃破の基盤をもって、これからはみな選挙運動です。何のことか分かりますか。

先生が多年間、統班撃破をしなければならないと言ってきたのは、この一時に使うためでした。そんな時が来ると見ていたのです。先生でもこのような準備をしていなかったらどうなっていたことでしょうか。どうなると思いますか。大変なことになると思うでしょう。大変なことになるところでした。そこに皆さんが選抜されて準備された代表だという意識をもって、「台風が吹いても、地震が起こっても火山が爆発しても、私は抜くことができない。鉄壁のような鉄槌だ」と言いながら出ていかなければなりません。そうすれば、霊界も協助し、国民の心も自然にそこに収拾されるだろうというのです。

二) 地域奉仕活動で組織拡大

まだ残りの闘いが残っています。今回先生が指示したことを知っていますか。統班撃破というものを知っていますか。一九八四年から始めて、満六年になります。統班撃破、これが最後のキーポイントです。これさえすべて果たす日には、政治をする人たちもお尻についてくるようになります。

これからは、私がやろうというとおりにやらなければなりません。民主主義はみな滅びました。民主主義をもってしては、世界を指導できません。今、私が新しい主義を主張するのです。天宙主義方式！　私が国家指導者の選出方法を提示しなければならない時が来るのです。

目的が何ですって。統班撃破です。完全に主導できるようにしなければなりません。
ですから、洞の責任者は洞長と肩を並べなければならないし、統長、班長と肩を並べることができるようにしなければなりません。これから以北の人を中心として、みなこのような組織もつくろうと思います。ソウルは特別にそうです。

ホーム・チャーチ組織をつくることによって、統班撃破が可能だし、将来消費者組合が可能だというのです。経済圏がここから……。私たち統一教会のメンバーは絶対に御飯に飢えることがありません。座って立ち上がったと思ったら、新聞も約二百部は一時間以内に配達でしょう……。

明け方寝ていたらもどかしく、空気も濁るし、これをやればどんなにいいでしょうか。お前たちはみな寝ていろ。こう言いながら夜

の王者になって、さっさっと、密命を受けた勅使となって、視察に回ると思えば、どんなに気分がいいですか。

大韓民国は、今から選挙の準備のために統班撃破を推進していかなければなりません。統班撃破。復帰歴史は、家庭を通じて失ってしまったので、文総裁は、三千里半島に広がっている家庭を通じて上がっていくのです。国を通じて上がっていくのではありません。ある人々は「文総裁が大統領になろうとしてああしている」と言いますが、違います。

一つ私たちが約束しましょう。これは南北統一のための指導者会議でしょう。統一教会の文先生が今まで何をしたかといえば、縦的にだけ育ててきました。なぜですか。迫害がとても激しいので、今まで何と何があるのか分かりませんでした。今はみなそれは過ぎ去りました。これからは横的につないで、統班撃破、面と洞を中心として結束運動をしなければなりません。

先生が五年前から何を強調してきましたか。統班撃破とは何ですか。私もみな忘れてしまいました。統班、分かるでしょう。洞の場まで今回の古稀を通じて完全に全国三千六百の洞で大会をしました。
これからやるべきことは、ここに十倍、十五倍、三万六千ないし五万の統、三万五千から五万の統をすべて教育しなければなりません。統を教育するのです。その次は三十一万です。三十一万の班を教育しなければなりません。

三) 教育強化で組織拡大

統班撃破をしなければなりません。家庭から始めます。初めはただ歯をむき出して大声でほえていた犬たちが、しっぽを振りながらうれしく迎えることができるように、出入りしなければなりません。故郷で閉まった門を開けるためには、犬が案内役をしなければなりません。夜に行っても昼に行っても、私が行くべき道を行かなければなりません。千の道、万の道、足に豆ができるほど走れ、走れと言って、統班撃破をしなさいというのです。

大都市の復興会と具体的組織拡充、組織をつくらなければなりません。統班撃破をやって組織をつくらなければなりません。

統班撃破、分かりましたか。自分の村に、一つの宗氏が一班と見れば、百軒なら何班になりますか。班まで下りていってこそ、李氏なら李氏、朴氏なら朴氏、といってその村全体を動かすではありませんか。家庭で蒔き間違えて、すべて滅んだので、家庭で刈り入れ、栄えることのできる天の国の家庭をつくっておかなければなりません。そのためには、運命をかけて、最後の是非の決定をつけなければなりません。

教育は長くする必要はありません。一週間ずつ教育すれば、みな終わるのです。統、班を中心として一週間ずつ教育しさえすれば、すべて終わるのです。それが可能になるためには、どうするのでしょうか。洞、統、班の要員さえ四十日修練を受けさせればいいのです。そうしたのち、その人たちを通じて、住民たちを客間に集めておいて、一週間ずつ続けて講義する時間をもつのです。夕食を食べて集まり、昼夜集まるのです。集まって、時

間計画表を組んで、集まる数を中心として、教育し、修練を受けたという条件を立てるのです。こうしてそれがみな終われば、統班撃破を完了するのです。そのように標準を決めるのです。

統班撃破というのは、一つの洞に、平均二十五の統があり、その二十五の統には、二百五十の班があるので、大体三百人と見て、三百名を今まで七日修練したその時間の比重を中心として、二十日ずつ二回、四十日、原理の本を見ながら教えてあげ、勉強させ、七日修練に該当することをすべて教育しておいて、試験をして、五十点以上取った家を統班撃破の班長にするというのです。こういうことは初めて聞くでしょう。私がこれをみな話しました。そのようにやっておけば、終わるのです。南韓でそれをみなやっておけばです。今まで浸透していたスパイたちが摘発され、みな追い出されるのです。そうなれば、金日成は南韓に降伏するしかありません。

韓国にも今回、統班撃破を中心とした組織をつくっています。ですから安企部から「昔は、何かの大会をするとき、一日に二千四百、二千七百箇所でやった記録がありますが、今はどうしてこんなに静かですか」と言ってきて大変なのです。今は、自分の息子、娘を育てなければならない時です。壁を越えて声が出たらいけないのです。布団の中でささやきながら、教育するときに入ってきたのです。これが統班撃破です。班常会以上の班常会をしなければなりません。それでここで三十人ずつ、五箇所に百五十人集まれば、「あなたたち百五十人が感動を受けたなら、南北統一を願うなら、お父さん、お母さん、親戚の中で誰か一人を立てよう」と言うのです。それで三百人を越えなければなりません。その三百人を中心として洞大会、面大会を指示しました。

行政機関を中心として、その婦人たちを通して統班撃破のための体制を洞会長から統長、班長まで、二重に配置するのです。教育して配置するのです。このようにして、横的に政府を中心として班長同士一つになり、統長同士一つになれば、四千万がみな私たちの側になって入ってくるのです。一度に入ってくるのです。
政府がこれを知ってから、「これは文総裁に取られた」と言って、じたばたしても駄目なのです。彼らには思想がないのです。ですから私たちを信じざるを得ないということを知らなければなりません。ここで国が完全に私たちに引っ張られていくのです。ですから確実な自信をもとうというのです。

統班撃破は主にどこからやるべきかと言えば、協会がしなければなりません。きょう話した内容とは何ですか。長子権、父母権、王権復帰は、家庭基盤を中心として祝福家庭たちがしなければならないのです。それをするには、原理講義もしなければならないし、勝共講義もしなければなりません。そしてこれから洞の責任を任された祝福家庭がいれば、勝共連合を活用しなければなりません。もともとは組織において、勝共連合の人々をどうやって信仰化するかということが、一番重要な問題です。この組織が大きいのです。そこに関係した人々を食口化すれば、現在私たち統一教会の教区長の数が問題ではありません。

教会の教会員の数が問題ではないというのです。

急がなければ南北総選挙に備えることができません。それで今から六カ月の間、南北総選挙の準備の全国大会をするのです。これから火をつけるのです。全部火をつけて講義するのです。統班撃破です。これから本当に統、班を掌握して、講義するのです。本当にこれをやらなければなりません。これをやってこそ生きるのです。

統班撃破というのは、家庭基盤を中心として、しなければなりません。そこにみ言を中心として、真の父母の宣布内容のみ言を中心として、感興を受けさせ、これを連結させていかなければなりません。今回、隊員たちを配置して、テープをみなコピーして、それを上映するようにするのです。それを全部見ていった人に、中間中間に見た内容を記録させるのです。一度だけやってみたらいいです。みな感銘を受けた話をしてあげて、これから南北統一に……。南北が分かれていますが、南韓が内的であり、北韓が外的です。南韓は精神的基準において、心的立場であり、北韓は体と同じです。体が反対してきたのです。体が、サタン圏なので。ちょうどそのようになったのです。

私の命令のとおりに統班撃破を一度やってみなさい。長くはありません。七カ月さえ死ぬつもりで足の裏に豆ができるほど一度走ってみろというのです。お金もかかりません。これからは私が、「ここまで来い」と言わないでしょう。私があなた方の故郷に行くでしょう。みな行けばいいでしょうが、今ソウルの洞だけでも三千三百あり、統だけでも一万二千あり、班だけでも十二万もありますから、みな行くことができますか。みんな行けないので、推薦してもらって、行って、会うでしょう。

皆さんがみんな素晴らしい統班撃破をして、神様が誇ることのできる家門を代表した家庭が成されれば、自動的に福を受けるでしょう。そこで幸福の礎が形成され、自由の旗がなびくことでしょう。

ソウルは、最近みなびりだというのです。もともとはみな故郷に行くのです。故郷に行くのに、これから六カ月の間、期限を決めて、みな統班撃破することのできる組織をつくり、そこに有力な人、既成教会に通っていた将軍たち、長老級たちがいれば、将来、そこにみな配置しようと思います。ソウルはそのように全部配置しようと思います。四十日さえ修練を受ければ、いくらでも導くことができるのです。長クラスは、連隊長やいろいろなことをやったので、組織とか大衆を指導する上では、皆さんはかないません。

愛の世界には、神様を私の相対にすることのできる特権があるというのです。大きいか小さいかを問わず、そうだというのです。
自分が統班撃破の分野で血と汗を流して、基盤を築いて、一から百までいっぱいに愛があふれ出ることができるように、るつぼをつくっておいて、主人の立場で「神様、一度いらっしゃいますか」と言うとき、神様が来て、「どけ」と言うでしょうか。「私が案内する」と言うのです。「どこに座るか」と聞くようになっているのであって、自分が勝手に

座ることができますか。この世の道理がそうです。

秩序を立てた神様は、被造世界の段階を知っているので、自分が座り、立つ位置を知っているのです。物心のつかない人に対して、「あいつは座る位置、立つ位置をわきまえて生活することを知っているか」というようなことを言うでしょう。同じです。

四) 教学統連と二世中心の摂理

道別に全名門校出身の全国大会をして、道を中心として地方組織の責任者たちを選定するのです。
道の責任者、郡の責任者、面の責任者、統の責任者、班の責任者まで選定すれば、これが統班撃破の活用基盤になるのです。このようにしておけば、その名門中学、高校の出身者たちが大体、ソウル大、高麗大のような名門大学出身に連結されるので、名門大学出身全国連合会が自動的に編成されるのです。

本来、私がアメリカへ行って話すとき、統班撃破時代に教授たちを中心として、中学、高校の先生、小学校の先生まで、いちいち対談して、させたのも、みな父兄たちと連結するための作戦なのです。それで勝共連合の組織をつくって、国民連合の組織をつくり、みなつくったのに……。これをしていなければなりませんでした。これがよくできなかったので、共産党は共産党のままのさばって、みな死の地にしてしまったのです。これに一人で闘ってきたのではありませんか。

統班撃破運動を教授たち、中学、高校の先生、小学校の先生たちを中心として連結させるのです。彼らを連結させれば、すべて終わるのです。既成教会が歴史の何がああだこうだと言って、反対しますが、みなきれいに越えていくのです。共産党までみな座って、消化できるのです。

こうしてそこに関係のあるすべての教授たちの前に……。ある教授は故郷がどこでというようなことが、すぐに出てくるではありませんか。百個すべて郷土学校の基盤を中心として、さっとつくり、「ホーム・チャーチの責任者、来い」と言って、夕食は教授たちがごちそうしてもいいです。そうして組織して、共産党を防ぐための地方においての統班撃破、里洞撃破をしなければ、共産党の前に、食べられるのは、実際的問題です。

統班撃破、それはカープ（ＣＡＲＰ）が主導の役割をしなければなりません！　中学、高校の学生たちは、将来、大学生になって、二世たちを包摂しなければなりません！

今の時は、学舎（注：韓国の原理研究会の寮）を動かすことを重要視しなければなりません。あなた方はみな統班撃破に責任をもち、今教育をしているのではありませんか。二重作戦です。行動部隊として今学舎が立ち上がったので、全面的に後援しなければなりません。無法な振る舞いが起こるこのような風土で、学生たちを中心として、全大協、西大協の者たちが、いろいろなことをやるのを首をきつく締めて、決死的に反対することによって、市民がみなここに……。それで新聞社を早くつくらなければなりません。新聞社、早く急がなければなりません。

今回、どんなことがあったのかといえば、南北統一運動国民連合をつくって、全国的に統班撃破運動をしてきました。そこに面長の半端者たち、支署長の半端者たち、警察署長の半端者たち、郡守の半端者たち、「どこどこの大学を出た」と言って、腹を突き出してかき回して歩く者たちが加担しました。またそこの面の委員長が誰かといえば、大学教授たちです。みな大学教授たちが配置されて、国を生かそうとするのに、ここの新聞記者の先生たち、自分の故郷を生かすのに加担しますか、加担しませんか。答えてください。やりますか。国を生かすためにもっとやらないと。世界を生かすのにはどうですか。国を売ってでも世界を生かそうとするならば、その民族は世界の祖先の民族になるのです。

国が必要だし、世界が必要です。これを探していく道がありません。このように見るとき、皆さん教授自身も垂直的愛に九〇角度平衡線愛圏を中心とした愛の球形の理想を成すべき宇宙史的本然の追求を抜け出す道がありません。それは何のことかと言えば、文総裁の言うことを聞けということです。そうでなければ、これに合わせることができません。これをやっておけば、さっと合わせれば、どこに行きますか。家庭に行きます。それで統班撃破とは何かと言えば、家庭に帰って、これに合わせるのです。

皆さんは文総裁の息子、娘なので、私が世界的に築いたすべての心情圏、同参、同位の相続権とその価値まで、無条件に丸ごとあげたので、故郷に帰って家に行き、根を下ろせというのです。皆さんが根さえ下ろして、しっかり立てば、文総裁によって、世界的情的版図をそのまま相続して、同参することのできる勝利的栄光の立場に上がるというのです。理論的です。真の父母は絶対的です。ですから、宗教でメシヤが絶対に来なければならないという結論がここから出てくるのです。

「国民連合でも勝共連合でも統一教会でも、あなた方が働くべき場所は、現在の事務室ではありません。統班撃破、これをやっておいて、闘うにしても闘え」と言うのです。誰が班に行って、多くの影響を与えるのか、誰が洞に行って、北韓解放の勇士になろうという人を多く加入させるか、地区長、あるいは議長団のもとに自分に属した族属たちをたくさんつくるのかということを競争しなさい。それを発表しなかったら、みな崩壊していました。教授たちは考えもしなかったでしょう。責任をもった文総裁はどんなに頭を使ったか分かりますか。それで結論が何かと言えば、中央までもすべての郡でも面までも、教授たちが統・班長をしろというのです。
教授たちはみなふろしきを包んで、家庭に行けというのです。愛国の根は家庭に植えなければなりません。面の事務所、郡の事務所、ではありません。家庭に根を……。親孝行、下へ、子供へ……。さあ、文総裁が統班撃破しろという宣言をよくやったと思いますか、間違ったと思いますか。教授たち、よくやりましたか、間違いましたか。それでは統班撃破をしようと夜を明かしてどれほど歩き回りましたか。それが問題です。

自分のお父さんが亡くなった時の悲しい心情以上の心情をもたなければ、国を生かすことができません。自分のお母さん、自分の一族が死んだ以上の悲しみを感じなければ、南北統一はできません。私はそのように見る人です。教授たちが家に入って手を取り、涙な

がらに「南北統一しよう」というむせぶような一言には、通り行くいかなる先生の千の言葉もかなわないと見るのです。

それで教学統連をつくっておいて、班町内を生かそうというそのような教授がいるとすれば、学生たちと連結させて、その息子、娘たちをみな糾合せよと指示しました。

五) 宗族的メシヤ活動と統班撃破

本然の故郷の地に帰らなければなりません！　これが原理観です。これをどうやって否定しますか。理論的な結論です。そうじゃないと言う人、手を挙げてください。否定できますか。服従する道以外にありません。それで今、韓国でそのようにしているのです。還故郷しろと言って、自分の村の統班撃破を完遂した基盤の上に国家基盤完遂……。各家庭の出発点を立てて、蘇生、長成、完成を通るのです。家庭は蘇生で、統、班は氏族長成で、国家が完成になるのです。家庭にこの三つが連結されなければなりません。そうでなければ、氏族を連結できないし、国家を連結できないし、世界を連結できません。

統班撃破をなぜするのですか。今まで政府が私に反対してきたのは、文総裁が家庭まで入れば大変だと思ったからです。文総裁が定着すべきところは、政府ではありません。政府には平和の基地がありません。大韓民国ではありません。それではどこでしょうか。家庭です。アダム・エバの家庭です。家庭を中心として堕落したので、家庭を正さなければなりません。偽りの父母によって、家庭が破綻したので、真の父母が出てきて、家庭を正さなければなりません。

これからは統班撃破のために、全国の三千六百個の面と統を中心として、組織を編成し、完全に配置するでしょう。ここ本部にいる人もよく知っておいてください。これからはここが自分の故郷ではない人がここに参席したならば、みなぶんなぐるでしょう。なぜでしょうか。宗教世界において、還故郷というプレゼントをくれたのに、なぜ行かないのかというのです。

今、宗族的メシヤの使命を果たせば、自動的に大韓民国は解放されるのです。これが何かと言えば、統班撃破に連結されるのです。一族を中心として、統班撃破、これが決定される時には、共産党は存在できません。ですから韓国で個人的にサタンの讒訴圏を抜け出ました。

先生が国家基準まで、実体を中心としてアメリカを中心として築いてきて、アメリカを中心とした国家の勝利的基盤をもたらしたので、ここで大韓民国が国家を経て、世界に行くことができる道を先生が、ここに接ぎ木して、宗族的メシヤ圏を中心として、四千万民族をさっと連結させることによって、これが一つになったというときには、皆さんの家庭には、サタンが讒訴するところがありません。個人で讒訴できる基盤を越えたし、家庭で、氏族で……。三つの宗族を連結させれば、民族が編成されるのです。

氏族的基盤さえ解決すれば、民族は自動的に編成されるのです。そしてこれからのこれが何かと言えば、統班撃破問題です。統班撃破は氏族圏から始まるのです。部落と言えば部落、統、班はみな氏族圏内にあります。それで先生が今まで、統班撃破という言葉を使

ってきたということを知らなければなりません。これから宗族的メシヤになれば、統班撃破が完了できますか、できませんか。完了できるのです。

それでは、皆さんは、どのように動かなければならないのでしょうか。先生が一生をかけて、苦労したすべての受難の道を推し量りながら、涙とともに自分の故郷、父母兄弟が自分の親族のために、泣かなければならない時が来たというのです。涙でもってエデンの園で別れざるを得なかった親族が、みな四方八方に散らばって、数多くの怨讐国家と闘って、滅び得るサタンの地域になっていたのが、これから再び帰って、涙をもって一つになり、万国を収拾するのです。一つの愛を中心として、万国を代表した家庭を通して、涙で出会うことによって、そこに解放の旗が立てられるとき、万国はそれを中心として、永遠に戻ってくることができるというのです。

統班撃破という言葉は「破壊させよ」というのではありません。その言葉をもって問い詰める人は「統班撃破が何だ。統班消化と言うとか、解放とか言ったらいいのに」と言うでしょうが、ひっくり返さなければなりません。なぜですか。そこには偽りの愛が残っているし、偽りの血筋が残っているし、自分のために生きよという偽りの生命があるからです。これをひっくり返さなければなりません。

それで「生きんとする者は死に、死なんとする者は生きん」、と言いました。あなたの家の中の食口が怨讐だというのです。必ずそうです。その道を行こうとすれば、お母さん、お父さんが、狂った子だと言います。

統班撃破の意義を知らなければなりません。家庭基準を中心として、思想的な面で一八〇度真の父母の心情圏に帰らなければならないというのです。

私が語る言葉は私のものではありません。万民のものです。天地のものです。愛で私に伝授された父の伝統を引き継いで、私も真の父母の因縁をもって、無条件で皆さんに与えるのです。私が与えるには、血と肉と精誠を付け加えて与えようというのです。そのような誠意ある気立てを見習って、皆さんの奥さんの心、息子、娘の心、隣人である皆さんの村、さらには、統、班に与えれば、統班撃破がみな終わるのです。

アダムとエバは家庭から出発できなかったがゆえに、結局のところ宗族的メシヤが家庭定着の問題を解決しなければなりません。それゆえ韓国で統班撃破運動を展開するのです。家庭が定着できるようにするために、今、韓国にいる家庭に先生の写真を掲げる運動、旗を掲げる運動をさせているのです。それは何かというと、完全にサタン世界と天側の世界を分けることです。初めて家庭に真の御父母様のお写真を迎えることになるのです。

今、統班撃破において、里、統の組織を先生がすべてつくりました。八万世帯に該当するすべての家庭に、御父母様のお写真と旗を分けてやり、七月三日から九日まで、真の父母宣布、救世主宣布、メシヤ宣布、再臨主宣布まですべてしたのです。再臨主宣布とは何でしょうか。真の父母です。メシヤとは何でしょうか。再臨主のことです。

本然の心情が爆発する一つの起源とならなければ山頂を越えていくことはできません。ヒマラヤのような山頂を越えることはできないのです。何をもってでしょうか。愛の力をもって、死ぬ、生きるということが問題ではないのです。その反面、外部の世界は国が合わさり一つとなって反対するのです。その反対する渦中に責任をもち、行って撃破しなければならないのです。先生一人で闘うのです。私はアメリカに行っても闘ったのです。個人的に撃破！　統班撃破ですね。

南北統一時代になすべき第一のことは、統班撃破です。今叫んでいるのが統班撃破ですね。統班撃破を通して先生のお写真を掲げ、それから先生の思想を教えてあげるのです。真の御父母様とは誰であるかということを教えてあげるのです。

還故郷しなさいと言いましたね。私も大韓民国へやって来て頂上をすべて吸収しました。文総裁と言えば「ああ、あの方は愛国者だ！」というようになっているのです。優れた人物だと言われる人々にも「こういうわけで南北統一総選挙に備える全国大会をするのだが、反対しますか、支持しますか」と言えば、「どうして反対などしましょうか。支持します」という通牒を受けてするのです。今まではそのような通牒をすることもありませんでした。もしも反対するならば、私が力比べをしてさっさと押し出してしまいます。私が手を出したら凄まじいのです。いくら大きなことを言ってもしおれてしまうのです。そういうことを知った上で統班撃破をしなければなりません。

統班撃破というのは、行って銃剣で脅迫し、恐喝せよというものではありません。愛のみ言と、愛の実践を通して夜も昼も活動するならば、おじいさん、おばあさんがタバコを吸い、酒を飲みながらも、あるいは悪いことをしながらも「うちの息子、娘たちも、あの人たちを見習うようにしなければ」と統一教会を褒めるのです。すると酒好きの悪魔もそこから逃げていくのです。けんかしていた者たちも、統一教会に入教してからはけんかをしないのを見て、「うちの息子、娘たちも統一教会の信徒のようになったらいいのに！」と思うならば、サタンはみな逃げていくのです。何のことか分かりますか。

家庭に基盤を築けば、一八〇度変わるのです。それゆえきのうもお話ししましたが、御父母様の写真を掲げなさいというのです。そうすれば、御父母様の命令と一致し得る立場となるので、あたかもモーセが竿に蛇を掲げたのを見た人は生き残ったように、生きるのです。全くそのとおりです。

私たち統一教会の旗を見て呪うようなことがあれば、今後目がおかしくなったり、様々なことが起こったりするのです。皆さんが精誠を尽くして掲げないからそのようなことが起こらないのです。写真を掲げるのも、精誠を尽くして掲げれば、指を指して悪口でも言おうものならば、指が曲がるなど、いろいろなことが起こるのです。精誠を尽くしていないから駄目なのです。

統班撃破のために家庭を訪ねていくのです。アダムとエバの家庭からすべて失い、それが国と世界を失う起源となったので、これからは先生が世界から蕩減して、大韓民国の家庭

をすべて包み込んで方向転換するということをしているのです。そうするためには主体思想がなければならないので、真の父母と、真の師と、真の主人の思想を宣布したのです。これを宣布なさった真の父母はどんなお方でしょうか。神様のような立場です。神様は真の父母なので、この地上の真の父母の立場で、真の師の位置、真の主人となるための世界的版図圏を相続してあげるために、今大会をするように教えてあげるのです。これが最後です。分かりましたか。

統班撃破の組織さえ完了したならば、どの家にも旗を掲げた竿を立て、統一教会の人が、一日に三人も出入りしても喜ぶことのできる、そんな家庭にさえなれば、みな救われるのです。ですからお世話をするのです。反対するなといってお世話するのです。皆さんは私の世話になりましたね。アメリカに連れていって教育して……。明らかに世話になっているのに、真の父母だと言ったからといって、反対することができるでしょうか。先生を中心としてなされたすべての事実、先生のみ言によって精神的分野と物質的分野でみな恵沢を受けたのです。重鎮（注：その社会で不動の位置を占めている人）の誰が反対するでしょうか。ラッパを吹いて太鼓をたたけと言えば、みなラッパを吹いて太鼓をたたくようになっています。そのような段階まで来ているということです。
ですから御父母様を宣布し、歓迎することによって世界の頂上を越えるのです。サタンが今まで舞台としてきたこの地球星の上に立ち、韓国に帰って天国と連結させて、王権、何と言いますか。定着宣布式をすることのできる時となったのです。分かりましたか。ですから押さえつけるのです。精神を統一させてしまえば何も言えないのです。こぶしでなぐるのではありません。考えだけで制圧することのできる時が来るのです。

今は韓国に帰ってきて統班撃破をするのですが、これは家庭に帰る運動です。すべてのことを、国家を中心に、統から、班から、すべて帰り始めれば、組織として統と班さえ統一すればそれで終わるのです。それは蘇生、長成、完成の三段階を意味しています。自分自身を中心として垂直には家庭と統、班、横的には自分と父、そしておじいさん、このように自分を中心として蘇生、長成、完成の三段階基準をもって家庭転換期に入っていくのです。そのときに何を中心としてそのようになるのでしょうか。真の父母の愛とともに、頭翼思想、神主義が中心となっていくことによって、サタンは歴史を通して何の讒訴条件も押し出すことができないのです。

六　統一運動と女性の役割

先生は実に巧みでしょう。良い暮らしをしている女性に統班撃破とか何とかやらせて……。それが皆さんとどんな関係があるのでしょうか。それをしたからといって誰かが認めてくれるでしょうか。しかし、これによって女性解放の伝統的歴史を、韓国の女性が築き上げることになるのです。それが教材となるのです。
先生の教えたみ言のすべてと、皆さんが行動してきたその内容は、今後世界の女性を動かす伝統的教材となるということが分かるのです！　アーメン。

誰がその教材となることができるのでしょうか。楽な立場で八時間寝て、三度の食事をして、暑ければ涼しい所へ行って日陰で休む、そうではありません。日の照りつける中で血の汗を流し、脂汗を流しながら行動することが歴史に残るのです。悲惨であるほどに歴史時代の材料となるのです。皆さんも先生が獄中生活をした話を聞けば、骨の髄まで泣くのです。ですから先生はそのような話ができないのです。獄中生活をした話、それを包み隠さずに話せば、痛哭が巻き起こるのです。そこにはどれほど多くの事情があることでしょう。話さないのです。

私は一銭のお金も出してあげませんでした。お金を出してあげたのではいけません。お金を出してあげれば、今後国の行く道は遮られてしまいます。国が民にお金を出してあげなければならないという論理が成り立つのです。そのような国はないのです。それゆえ大変でも、統一教会の信徒が血の汗を売って、血の汗を流し、骨身を削って売ってでも、この国のなすべきことをしなければなりません。お金を出さずにこれまでやってきて、今や統班撃破が終わる段階に来ています。うまくできましたか。できませんでしたか。あのように生活が困難な統一教会の信徒がいかにしてやったか、この間全体の報告を聞いて、整理するために私はソウルへ来ました。全国は行くことができず、ソウルが中心ですから代表として来たのです。お母様にそのような話をしたところ、お母様が考えて、今巡回しているのです。

きょう、よく話を聞いて清算し、新しい皆さんとならなければなりません。先生の願うことは何かというと、男性を通して失敗した統班撃破体制を再び築くために、今現在、里、統基準を中心としてすべての人事をしました。統班撃破が目の前にあるのですから、統一教会の女性たちは寝ず、食べず、遊ばずに、これをなすべき天的な義務があるということを知っているのです！　アーメン。そうしようという人、手を挙げてください。

今まで先生が夜寝ずに一生の間犠牲になってきました。皆さんも同じなのです。統班撃破は自分の一族を中心として百二十家庭をしなければなりません。昔、イエス様の時は百二十門徒がいましたね。それと同じく百二十家庭を自分の指揮下に立てたならば、お金などが問題ではありません。食べて生きるのが心配でしょうか。問題ありません。男性たち、分かりましたか。男性たちは天使長です。天使長は使い物にはなりません。母親を通して生んだという条件を立てなければなりません。ですから再び祝福を受けてこそ天国に入るというのです。

韓国は女性を立てて救わなければなりません。このような意味から、不可避的に世界平和女性連合の指導者を、地方の女性指導者として立てたのです。世界平和女性連合の指導者たちが地方における郡支部長となり、面支部長となり、洞支部長となり、統支部長となるのです。それは容易なことでしょうか。文総裁はこれを十四年前から準備してきました。ホーム・チャーチという言葉を中心として「地方へ行って一族を収拾せよ」と、これを十四年前から準備してきたのです。それゆえ、七年前から統班撃破を主張してきました。

来たる四月に、十五万人の女性を中心として、オリンピック・スタジアムを完全に埋めるための計画を立てています。ですから全国の夫人は統班撃破をしなければなりません。男性ができなかったので、女性がしなければなりません。今まで七年の間、統班撃破運動をしてきたのですが、まだできていません。私は三度も、多くのお金を使って完遂せよと言ったのにできなかったのですから、今後は男性を信じることはできません。男性を除いて女性を動員して解決しなければならないのです。男性が統班撃破をするとしても、妻の署名、息子、娘の署名をもらわなければ勝手にはできません。しかし女性は一軒一軒入っていって、夫を追い出して集まることができるのです。分かりますか。なんと便利なことでしょう。女性たちは、群れをなして裏門、正門、門の垣を乗り越えてその家の夫を追い出して、思いのままに会議をすることができるのです。分かりますか。

皆さんは神様を中心として、平和の世界が早く訪れるように国民を結束して、平和の門を開くために南北統一平和の基準を促進化しなければなりません。これを促進化するための運動が統班撃破運動だということです。分かりましたか。これによって……。南侵したスパイが隠れているところは、女性の懐です。女性のチマの中に抱かれているのです。チマの下に隠れているということです。スパイは南へ下りてきて南韓で嫁をもらって金を稼ぎ、婚家の又従兄弟のところまで入っていって、後援をしたり、町内や一族の者に気前よく施したりするのです。これが南韓スパイの工作費で宴会を開いてもてなすような、名のある立て札を得た人だということを知らなければなりません。これを撃破しなければなりません。

今までは仕方なく男性にさせてきましたが、これからは違います。家庭教会は、主に男性がしてきましたし、今も男性が主にやっていますね。男性を中心に統班撃破をするのにどれだけお金を投入したことでしょうか。これからは血肉を売ってでも、きちんとした基盤をつくらなければなりません。土地を売るなり、一族の畑を売るなり、一族のお金を集めてでもこれを成就しなければなりません。分かりましたか。今後指令が下されます。七十家庭をして、一家庭で一億ずつ準備しなさいと言えば、七十億ができます。南北統一時代なのですから、それができる準備をしなければなりません。涙と血の汗を流してまとまったお金を作って、夫に知られないように通帳を作らなければなりません。先生は今何と言いましたか。夫に知られないように何を作れと言ったでしょうか。通帳、銀行通帳を作るのです。

一九七八年より始めたので、すでに十四年目です。十四年前からこのことを始めたのです。皆さんが決死の覚悟でしていたら、どれほど良かったでしょうか！　そのようにしていれば、ホーム・チャーチを中心として、統班撃破に連結されるのです。ホーム・チャーチの基盤を中心として統班撃破をするために、男性たちを中心に里まですべて組織したのです。それで洞大会、統大会、班大会まですべてしたのです。

十二万人いるすべての班長たちに、私の名前で『世界の希望』という本と原理の本を配布してあげたのです。ここにももらった人が

いるはずです。そうしたにもかかわらず、男性たちがみな責任を果たすことができませんでした。このことを、この世の遊び事でもするかのように、気楽に考えたのです。ですから、男性たちが責任を果たせなかったので、女性がしなければならないのです。何があろうとやらなければなりません。

女性たちは、自分の家の家事だけをしていてはいけないようになっています。女性連合を中心として動員したのを見てください。これが動員されたのは人の力によってですか。一番最初、私がアジア平和女性連合発起大会をやると言った時、みな目がこんなふうになって、「女性がいったい何をするのですか。アジア平和女性連合がいったい何をするのですか」と反対したのが、私たち統一教会の教会員たちでした。お母様が前面に立ったので、仕方なかったのでしょう。雰囲気を見れば、反対できないのです。そのようにしながら、女性時代の到来を宣布したのです。それができる時になったので、宣布したのです。これから女性時代が到来するかどうか見ていなさい。

統班撃破を一九七八年から始めたので、もう十四年になります。十四年間統班撃破をしてきたのは、この時を目標にしてのものです。家庭教会の理念が統班撃破の理念です。それが薄れてきたので、色彩を異にして統班撃破を中心として引っ張ってきたのです。それが七年、七年の十四年かかりました。それ以前から準備して行うのが先生の計画だったのですが、韓国の責任者たちが、それが分からずに責任を果たせなかったのです。男性が二度できなかったので、これからは女性がしなければなりません。

南北総選挙を実施するようになれば、この南韓はどうなるでしょうか。このような様々な問題……。文総裁は愚か者ではありません。今やすべての準備を整えて統班撃破をするのです。それを何度も訓練しておきました。ですから女性が必要なのです。

北韓の軍人を女性たちが担当しなければなりません。女性が地上のサタンを担当しなければならないのです。そうして初めて男性が天上世界のサタンを打つのです。両面作戦をしなければなりません。北韓のスパイが住んでいるのですが、それは女性が保護しているのです。女性の懐で……。男性はみな願っていないのに、女性が隠しているのです。これを撃破するために統班撃破運動が現れたのです。今やあれこれすべて分かりました。先生は、いつ皆さんを呼んで命令を下し、使命を果たせと言うか分かりません。できないと言うならば牢獄に閉じ込めておくのです。遊び事ではありません。生死の決断をして勇み立つ道なのです。給料をもらって楽な暮らしをするための場ではありません。野良犬を連れてきて食べさせてやる所ではありません。それを知らなければなりません。天国の精兵をつくるところです。

統班撃破というのを知っていますか。十四年前からホーム・チャーチのことを語ってきました。多くのお金を使って教育してきました。五年前から「統班撃破」と言ってきました。男性を立てて失敗したので、仕方なく最後に女性を立てるのです。

第四章　宗族的メシヤ活動をせよ

一　今は東西南北統一の時代

先生は、南北統一運動をすることのできる基盤をつくるために、一生の間苦労してきました。
これから皆さんは、既に造成された雰囲気の中でその運動ができるので、ずっと容易なのですから、勇気をもって一生懸命活動してほしいと思います。もし南北統一運動に反対する人がいるとすれば、その前に行ってデモをしてでも反対しないようにしなければなりません。

皆さんが韓国で楽に暮らしながら南北統一の目標が達成できるでしょうか。ここは一線です。世界の一線なのです。ここは世界の焦点だということです。ですから、決意した分、私たちのみ旨を中心として様々な役事が起こると考えられるのです。完全に団結して南韓さえ動かすことができれば、霊界で役事するのではないでしょうか。何が起こるか分からないのです。

お金がなくてもしなければなりません。自分の家も売るのです。そうすればこそ、天が行く道を守り、責任をもってくれるのです。問題はそこにあるのです。お金に従ってはならないし、体制に従ってはなりません。天の喜ばないお金は毒薬です。滅びるのです。精誠が必要です。これからは教会で泣いた以上に、泣きながら歩くべきです。それは簡単なことです。教会で精誠を尽くした以上に、南北統一運動のために泣きながら歩きなさいということです。

いかにして統一された体制をつくるかという問題を考えるときに、思想的な面において、民主体制と共産体制を越え、それらを消化することのできるもう一つの統一的な思想がなければならないのです。そのような理論的基盤の上で、統一体制を形成しなければならないという結論が出てくるのです。統一体制を形成するには、この韓国が一つのモデルとなります。韓国を中心とした国民連合の形態をもっているのが、世界の東西南北統一連合です。すなわち韓国が世界のモデルだということです。世界がそれに従ってくるならば、すべてが統一的世界体制になっていくのです。

今後の問題は世界を動かすことです。そのためにはまず、理念の徹底化、二つ目は組織の強化、三つ目は協同活動によって一致すること。それゆえ私たちは共産主義に対して、共産主義以上に強い組織力と活動力をもって対決しなければなりません。少し発展すれば組織化しなければなりません。

南北統一運動国民連合は、南北統一運動のための、統一のための運動機関です。そこでは国民が連合して南北統一運動をするのです。そこでは六千万を動員しなければなりません。六千万民族が一つにならなければなりません。六十万を代表として団結させ、新しいエデンに向かって六百万、六千万の団結した旗手が生じるならば、世界は完全に地上天国の基地へと直行することでしょう。

統一教会には教会もあり、勝共連合もあり、教学統連（注：全国大学教授学生南北統一運動連合）もあるし、南北統一運動国民連合もあります。これらは何をしようというもので

しょうか。南北統一だけではありません。南北解放だけではありません。人類解放と共に、神様を解放しようというものです。何を中心としてするのでしょうか。真の愛を中心としてするのです。それを知らなければなりません。
南北統一運動は神様の伝統的思想を中心として南北を統一しようというものです。そうしてすべての国民が新しい建国思想をもって、天国を建設しようというものなのです。

問題はこれです。歴史の勝敗圏を分ける最後の激戦場の勇士として闘うにあたって、今後迫ってくる激戦、戦争の前に、どれだけ強く雄々しくあるか、どれだけ克服していくか、生死の交差路においても、第二の決意をすることのできる希望ある勇士となれるかということが問題なのです。死の道においても、再び生きて闘うことのできる希望があり、それがかなわなければ再び生きかえって闘おうという思想があるならば、共産主義を吸収することができるのです。

いまだに統一教会を知らない人がいますね。それは責任を果たせなかったということです。楽に休み、遊んでいる人はいても、この民族に責任をもつ責任者がいなかったのです。骨が砕けても、この山河、あの町の谷間、すべてが私の血の汗のにじんだ精誠の手を待っているのですから、行かなければなりません。自分にそれができないならば、鐘に綱を結びつけて引っ張り、四方にガランガランと鐘の音を鳴らしてでも、ひとつところに動いていくことのできる統一戦線をつくらなければなりません。そうしなければ、いくら南北韓が会談したとしても、統一法案を模索する道はありません。私たちが主体的な立場でそのような道を切り開かなければなりません。

今はどんな時でしょうか。イスラエル民族がエジプトからカナンの福地に向かって出発する時です。そのような時なので、夜を明かしてでも、ありったけの力を出して、エジプトの地に住んでいるイスラエル民族に、何日、何時にその家を出なければならないと通報をしてあげなければなりません。知っていながらも知らせてあげない人は、永遠の罰を受けることになります。そのようにカナンの福地に向かって出発する時代になったので、私たちは三千万民族全体の前に、彼らが行くにしても、行かないにしても、知らせてあげる責任があるのです。ですから今まで全国的な活動を展開してきたのですが、いまだに統一教会を知らない人がいるというのではいけないのです。

呻吟の声の高まる、息の詰まるような世界的最後の交差点に向かっていく混乱した渦中で、自分の主体性をいかにしてもっていくかという問題が、今後の韓国において宗教人が解決すべき問題であり、多くの僑胞が解決すべき問題であり、大韓民国全体が解決すべき問題ではないでしょうか。これもいいし、あれもいい、というのではなりません。主体と対象を確実に分けて、天を主体とし、人間を対象として完全に分けて、立つべき位置に立ち、いるべき所にいなければならないということです。それゆえ、息の詰まるような時代の交差点に向かって私たちは今前進しているのであり、今がその瞬間なのです。

南北が一つとなるためには、北韓を自分の兄弟以上に愛するという愛をもって、養ってあげることのできる南韓の政権にならなければなりません。

今、全羅道と慶尚道が互いに「自分がやってやろう」と闘っているのですが、そんなことで南北統一をしようというのでしょうか。とんでもありません。そういうことではすべてが滅びます。滅びるのです。このような話は耳に痛いかもしれません。耳に痛い話だとしても、私は正しいことを言っているのです。

天運に従っていかなければなりません。個人的運勢、国家的運勢も、アジアの運勢を捨てたならば、大韓民国はここで失脚するのです。天運に従って、アジアの運勢に足並みをそろえることのできる大韓民国にならなければなりません。

大韓民国は、天運に従ってこそ天運の保護を受けるのであって、そうでなければ滅びるのです。その道をいくら知っているといっても、文先生に学ばなければならないという結論まで出したのです。今日も同じです。

南北が統一されれば、統一された大韓民国は、堂々と世界の前で先頭に立って、世界のために犠牲になることのできる、伝統的思想を残す国家とならなければなりません。そうなれば、この大韓民国がなくなり、主権がなくなったとしても、この民族の思想は今後二十世紀を越えて、三十世紀以降いつまでも残り、必ずや世界を指導することのできる民族として残ることでしょう。皆さんはそれを知らなければなりません。

貿易することによって南北統一がなされると思いますか。とんでもありません。共産主義思想とはいっても、神様の愛の中では力なく吸収され、消滅してしまいます。私たちが今までそれが分からなかったからであって、愛する心をもつならば、南北統一は絶対に問題ではありません。のみならず東西問題や南北問題も、この神様の愛で完全に解決することができます。このような神様の理想を中心として、世界の理想を消化し、そこで国家の理想を消化し、国家理想から民族、家庭、個人まで連結し得る理想世界の平和的無限景（この上もなく素晴らしい景色）ができることによって、この地上にはユートピアが建設されるに違いありません。

この時代においての願いは南北統一です。北韓と南韓を統一して、神様が安息することのできる基台を、皆さんの家庭と、私たち民族と世界に築くことを天は願っているということです。それでは何をもって神様にお仕えするのでしょうか。他の何でもありません。自分の母親、父親を愛する以上の、夫、妻を愛する以上の、子を愛する以上の愛を中心として、祭物的な祭壇を築こうというところから、初めて理想的南北統一というものが出てくるのです。理想的東西文化の統合がなされるのです。地獄と天国の解放圏ができるのです。愛をもってしなければ解くことはできません。愛のキーが必要なのです。

韓国で南北統一がなされれば、世界の統一は自動的になされるようになっています。軍事力、武力を使って統一できるでしょうか。とんでもない話です。軍事力だけならば、私は何でもつくることのできる力のある人物で

す。しかし軍事力だけでは絶対にできないので、このようにみ言を伝播しているのです。

我が国の政治を執り行う指導者たちは、国を愛しているでしょうか。国がどうなっていっているのかも知らずに、このごろも民政党やら、新民党は自分が大統領になるといって闘っていますが、やってみなさいというのです。本当に国民と共に生きようという心が彼らにないならば、すべては流れていくのです。いくら立派だといっても、水の泡のように流れていってしまうのです。国民を愛することのできない指導者ならば、国民から、そしてのちには歴史からの審判を免れることはできないはずです。

分かれた南と北は、そのままでは一つとなることはできません。愛国の同志たちが闘争するその過程では、夜寝ずに、時間を超越し、困難な環境を屈服することのできる心の決意と実践が必要なのです。真に共に生きたい。死ぬにも共に死に、生きるにも共に生きたい。私たちの先祖、霊界の霊人たちとも共に生きたい。そのような皆さんとなることによって、今後南北統一をここから始めるのです。

北韓があのように困難に処しているのは、北韓が閉鎖社会となっているからなのですが、その事情を知れば知るほど、その治下にある人々がどれほど悲惨か知れません。共産主義が怨讐なのであって、人々が怨讐なのではありません。北韓を眺めながら、かわいそうな暮らしをしている同胞のために、喉を詰まらせて涙を流し、「あなた方の困難と共に私は生きている。解放の一日を準備して皆さんの前に現れよう」と誓い、統一のための実践運動がここから繰り広げられたならば、北韓に行く日は遠くないのです。

統一をどこからするかが問題です。南北統一は、どこから、何をすべきなのでしょうか。こぶしや力によってでしょうか。力によって屈服させたとすれば、のちに向こうの力のほうが大きくなったときに、再び闘いが起こります。そのような方式では統一することはできません。たとえ以南（南韓）の地で生きているとしても、以北（北韓）に住む人々と本当に共に生きたいという心、一つとならなければという心があってこそ、統一の道が開かれるのです。

「共に生きたい」というその内幕の共通分母は何でしょうか。それは権力ではありません。権力は歴史を超越することができません。それは一時のものです。知識でしょうか。知識の世界は発展するものです。皆さん、知識の世界で学問とともに、永遠に共に生きたいという気持ちはありますか。私たちが共に生きることのできるものは、知識でもなく、金銭でもないということは確かです。このように考えるならば、上や下や前後左右を問わず、過去、現在、未来の時間性を超越した場で、共通的に認め得る一つの分母とは何でしょうか。それはすなわち愛なのです。

人間がいかに生きるか、あるいは、私たちの人生航路をいかに行くべきかを念頭において考えるとき、その骨子を要約すれば、孝子の行く道、忠臣の行く道、聖人の行く道、聖者の行く道の根本があるのです。すなわち、永遠に共にいたいと思い、共に生きたいと思う心です。上下を問わず、共にいたいと思い、

前後左右、昼夜を超越して、生涯を越えて共に生きたいという切なる思いをもった生涯ではないか、という結論が出てくるのです。

三十八線を中心として南北に分かれているこの国において、私たちはどうしたらよいのでしょうか。問題の解決をいかにすべきかということが問題です。それは北韓の人々よりも苦労し、南韓の人々よりも苦労することです。苦労の中で立てられた超民族的な愛国心をいかにしてもっていくか、それが韓国を生かす近道であり、解決方案です。悪なる世界と善なる世界を統一するのもやはり同じです。悪なる世界の忠臣以上の忠臣が現れなければなりません。今まで善を志向してきながらも、私たちの先祖が立てた忠臣の道理以上の忠節を主張し得る人が現れてこそ、決裂した歴史を収拾することができるのではないでしょうか。そのように考えるのです。

今、南北の間で行き違いがあります。方向を異にする立場で、一方は南に、一方は北に行こうとするという二つの別れ道があるので、その目的は異なるのです。いかにすれば統一されるかという問題を考えると、深刻なのです。その主体的な使命を誰が果たすべきなのでしょうか。南韓がすると言えば、北韓が反対するでしょうし、北韓がすると言えば、南韓が反対することでしょう。自分自体にこだわる立場では、再び決裂することでしょう。これをいかにするかが問題です。問題は、南韓の誰よりも北韓をより愛する韓国人が現れなければならないということです。北韓の人が北韓を愛する以上に、北韓を愛する韓国人が現れればよいのです。それ以外には模索方案、解決方案はありません。南韓の誰よりも国を愛する人、北韓の誰よりも国を愛する人、そのようにして一つの道を行く人がいるとするならば、そこから統一方案が出てき得るのです。そのほかに道はあるでしょうか。それ以外に道はないのではないでしょうか。

今、南北統一を願っているのですが、南北統一するための方案は何でしょうか。次元の高い統一の内容を提示せずしては、統一されることはありません。以北（北韓）から以南（南韓）に来て、また、以南から以北に行って互いに「私の言うようにしよう」というのではなりません。互いに損害を受ける立場では統一はされないのです。互いにプラスとなるところにおいて可能なのです。そうではないでしょうか。男女が結婚して互いにマイナスとなる立場では、一つとなる法はありません。それゆえ互いに利益となることを求めなければならないのです。

南韓が北韓を武力で打って屈服させるのではありません。私たちは彼らよりも強い思想の基盤をもたなければなりません。彼らが国を愛する以上に、私たちも我が国を愛さなければならないのであり、彼らが共産主義を愛する以上に、私たちも天を愛することのできる思想的な強い力をもち、人格的な面において彼らを自然屈服させることのできる実力者とならなければなりません。そうでなければ北韓を吸収することはできないのです。生活的に潜伏させて、人生観や生涯を通して感服させることのできる、人格的な基準を中心に現れた人格の価値を中心として考えるときに、共産主義の思想で武装した彼らを凌駕する私たちとならなければなりません。私たちが彼らに影響を与え得る環境をもたなければ、カ

イン国家を復帰することはできません。カイン国家を復帰できなければ、天国を中心とした世界的な国となり得る復帰の国家は、成立しないのです。

神様が、サタンを敵であり怨讐だと考えて、復讐しようという思想をもっているとするならば、絶対に勝利の頂上を占めることはできません。そのような観点から、神様は「怨讐を愛せよ、怨讐を愛せよ」と、愛の作戦をとってこられました。イエス様のみ言の結論も「怨讐を愛せよ」というものです。

世界的に迫害を受けたとしても、世界的な怨讐圏に立ったとしても、彼らを愛したという条件を立てなければなりません。この一筋に神様もかかっており、神様の子女になろうというあらゆる宗教界のすべての人がかかっているのです。「怨讐を愛せよ」というみ言は偉大な真理です。内容は簡単ですが、これが神様とサタンの闘いの勝敗を分かつ境界線となってきたということを誰も知りませんでした。

私たちの願い、私たちの願いは何でしょうか。統一です。統一教会を中心とした統一ではありません。統一教会が祭物となって南北韓を統一する、その統一のことを言っているのです。

統一教会の行く道は、何をしようというものなのでしょうか。統一です。統一が核心です。

二　宗族的メシヤ宣布の意義

先生が宗族的メシヤの宣布をしました。宗族的メシヤ。なぜそれをしなければならないか分かりますか。韓国が先生に反対したからです。それを蕩減復帰しなければならないでしょう。アメリカもみな反対したのを私が蕩減復帰してあげましたから、私が蕩減復帰してあげるのです。そうしなければならないではありませんか。

どうして宗族的メシヤを韓国と共に世界に宣布したのか分かりますか。これを韓国でさえやれば、世界の国家すべてが真の父母を中心として一つになるのです。霊界でどれほど総動員されたか考えてみなさい。この時だと、みな目に火をつけて解怨成就することのできる、数千、数万年の歴史を蕩減することのできる良い時が来たと、すべてが下りていくことを願っているのに、みな橋を切ってしまったらどうしますか。今はもう国家的次元、世界的次元です。ですからこれがすべて崩れたので、自分が立つ場がありません。立つ位置をつくるには、宗族的メシヤとして祝福家庭を配置して、イエス様の完成、自分の完成、アダムの完成、三大先祖の基準を立てることによって、この地上にいるすべての人間たちを抱くことのできる自由な環境に入るのです。ですから宗族的メシヤの宣布をするようになったのです。南北統一がいい加減にできるのではありません。これをつないでいってこそ可能です。それが家庭的基準と氏族的基準に連結されたので、国家的基準に連結されるでしょう。ですから統一教会と政府が内的に一つにならなければならないのです。

イエス様が失敗したのち、皆さんに宗族的メシヤを委任して、堕落したアダムと同じよ

うに、自分勝手に結婚した自分の親を今になって、「祝福」という神様の天恵によって、堕落していない親の立場に立てるという、それはとてつもないことです。夢のような話です。そのようなことを完成するために、宗族的メシヤを宣布したのです。イエス様は一人で宗族的メシヤを宣布したのです。イエス様は一人で宗族的メシヤ、国家的メシヤになるために送られたのですが、先生は全世界的に祝福を受けた二万五千名以上の祝福家庭たちを宗族的メシヤとして発表しました。この威力というものがどんなものか考えてみてください。

韓国の統一教会と日本の統一教会は、カイン・アベルとして一つになりましたが、一つになった統一教会の女性たちがプラスとなって、統一教会の団体である国際勝共連合、南北統一運動国民連合など、すべての団体をはじめとして、統一教会に連結された団体のすべての女性たちをこれから捧げなければなりません。どこにもっていって捧げなければならないかと言うと、家庭に訪ねていくのです。どこからしなければなりませんか。家庭です。これを促進化するために、氏族メシヤを宣布したのです。先生の代わりに男たちが行ったので、女性たちがみな収拾して、女性を四人しっかり収拾しておけば、男たちはその国の氏族的王になるのです。そうすれば女性のお出ましを中心として、すべての男性までも収拾することができるのです。教育さえすればすべて終わるのです。

地で成されることが天でも成され、地における成就が天の勝利として刈り取ることのできる時が来たし、真の父母のみ名と共に今日挙行したすべての式典が、霊界のイエス様を中心として、統一的な霊界と地上の真の父母を中心として、統一的な一つの世界になりました。二つの世界が一つの真の愛を中心とした家庭的な血縁関係を通して、つないでいくことのできる新たな世界拡張時代として、宗族的メシヤを宣布しました。これを受け入れることのできる新婦と家庭、エバとカイン・アベル圏を中心とする真の家庭の基盤において、新郎の心情を接ぎ木することのできる世界的なすべての終末的な清算期間をもたせてくださったのです。

宗族的メシヤが家庭的メシヤの橋を見失えば、重生することのできる道がふさがってしまうのです。先生がこのようなことを知ったので、人類を解放するために、宗族的メシヤを宣布したのです。これは世界的な革命的事件です。特権的事件、特赦的な事件です。

三　宗族的メシヤの責任を与えた理由

宗族的メシヤとは何でしょうか。真の愛の主人です。真の愛の主人、これはイエス様が願い、アダムとエバが願い、神様も願った所願でした。ですから、すべて真の愛の主人になって前進しなければなりません。そうすればすべてが終わるのです。宗族的メシヤになりなさいというのは、氏族的先祖になりなさいということです。

宗族的メシヤとは何でしょうか。一言でいえば、父親、母親を王権の位置に上げて立てるための役事をすることであり、その次には、今まで愛を中心として父母が始めて、私の生

まれた本来の故郷である天国の故郷に行くことができるのです。

そうでなければ故郷はありません。これをしてあげなければ生まれた故郷がないのです。故郷のないところには父母がいるわけにはいかないのです。故郷が定められることによって、韓国で暮らしていたすべての人の故郷は、今後天国の故郷の地に入り収められるのです。それによって、地も、人間の生まれたあらゆる所が天国に属し、堕落していない立場で生まれた父母の位置を代わりに受け継ぐようになるのです。

宗族的なメシヤは、一代において氏族を中心として、故郷を案内する先鋒者であるということを知らなければならないのです。モーセのように出エジプトの先鋒者であることを知らなければなりません。盲目的であってはなりません。モーセは何も分かっていませんでしたが、私たちは具体的にすべて知っています。理論的にすべて知っているのです。故郷を訪ねていかなければなりません。

しかし、カインを探し出さなければ故郷に入ることができないということは原理的な事実です。サタン世界に兄の氏族が残っているので、彼らが自分の氏族に来るように、兄を救ってあげなければなりません。そうしなければサタンになるので、仕方がないのです。兄を救ってあげて行ってこそ、兄が囲いとなり、自分の故郷に帰って、自分の一族を救うことができるのです。そうしなければ、皆さんの母親、父親を伝道しておいても、サタンが再び連れていくのです。引いていかれるのです。そのようになる危険性があるので神様はこのような摂理をせざるを得ないのです。自分の父親、母親、自分の一族、故郷をすべて伝道しても、再び引っ張っていくのです。

氏族的なメシヤは、まず父親、母親を、堕落していないアダム・エバにします。その次に故郷、故郷を探し出すことによって、どんなことが起こるかというと、王権回復がなされるのです。そうなれば、すべて終わるのではないでしょうか。それをさっと入れるのです。まずは、父母同位圏に立つのであり、次に故郷復帰をするのです。王圏復帰するのです。それゆえ生まれたすべての人々、ソ連でもアメリカでも、生まれた人々が天の国の故郷をもつようになるということです。天国の故郷をもつには、天国の父母をもたなければなりません。天国の父母をつくるのが、宗族的メシヤの使命なのです。

神様の息子になるためには、垂直の位置に行かなければなりません。東西南北の感覚と前後、左右、上下の感覚すべてを体得することによって、神様が見るときに、見るまでもなく経験したと言うことのできる位置に入ったとき、息子の位置に入るのです。本然の位置に行かせまいと、サタンが百方をふさいでいるのです。サタンが最も恐れることは、神様の愛に接することです。お金も恐れはしませんし、権力も恐れません。神様の前では権力は必要ありません。神様は全知全能なお方なので、知識は必要ありません。全知なるお方に、何の知識が必要でしょうか。知識の王様なのですから。

垂直の位置で、天にいる神様に代わって地上に降りて、地上から横的な面で宗族的メシヤを送るというのが、今回することなのです。

宗族的メシヤは、自分は死んだとしても、必ず世界的に築かれた版図、この鉄柱、垂直的世界に接ぎ木されるようになるのです。それゆえ、今先生は宗族的メシヤを送って、アベル的門中の先祖となるようにしているのです。その先祖は生命の種をもっているということです。メシヤは父母なので、種をもって現れるのです。皆さんの一族と、両親は、サタン世界の種を受けたのです。皆さんが生命の種をもってぶつかれば、どこへ行っても通じます。

宗族的メシヤは、ユダヤ教、キリスト教、統一教会を中心として、伝統的すべての失敗を圧縮し、勝利的権限をもって仏教、儒教などのすべての宗教が受けることを望むすべての恵みを総合した位置で、決定的核として伝授したものです。それが宗族的メシヤです。皆さんが国家のことを心配する必要はありません。皆さんが世界のことを心配する必要はありません。皆さんの一家のことを心配すればいいのです。

自らの氏族を復帰するためには、宗族的メシヤの責任を果たさなければならないのです。このような命令は、歴史上なかったものです。宗族的メシヤの立場は、第二の真の父母の立場であり、イエス様の立場よりも上なのです。そのような立場を与えられたという、とてつもない価値があるのです。これは何ものとも換えることはできません。

なぜ宗族的メシヤとして責任分担を果たさなければならないのでしょうか。最初の理由は、皆さんの父母を救わなければならないからです。父母というのは第一のアダムの立場です。皆さんは第二のアダムの立場にいます。父母を復帰し、再創造してアダムの使命を完遂しなければなりません。

二番目の理由は、皆さんには故郷が必要だからです。宗族的メシヤの使命を果たすことによって、自分の故郷をもつことができるようになるのです。結局のところ、宗族的メシヤの責任分担を果たす理由は、アダム家庭の完成のためなのです。具体的には、氏族を教育しなければならないということです。

これからは皆さんの根を整備しなければなりません。根はどのようになったのでしょうか。堕落することによって父母が駄目になりました。長子が駄目になりました。それゆえ、真の父母を中心とし、真の息子、娘を中心とした本然の父母圏と長子圏を中心として逆に回して越えなければなりません。そのままでは接線をもつことができないのです。一八〇度反対にしてつけなければ、出発できないのです。ですから皆さんは故郷に帰って先祖を変えるべき運命が残っているということを知らなければなりません。

皆さんを宗族的メシヤとして送ったのはどういうことでしょうか。昔はイエス様が、霊界からこの地上に縦的な過程を通して送りましたが、今日文総裁は、天を代表した神様の立場で、氏族を代表するメシヤ型の数万家庭を世界に送ったのです。これからは滅ぶことはありません。一九八九年二月三日、午後二時三十分に宗族的メシヤを宣布したのです。

統一教会教団は、宗族です。宗族なのです。私の血が共に動くのです。私が涙すれば、涙しなければならないし、私が喜べば、喜ばなければならないのです。血族なのです。五色

人種を越えて、文化背景の異なるすべての国家基準を越えて、壁を取り払って一つとなった、新たな天国創建のための民族です。この民族が聖なるものとなるとき、天国の創国が顕現するのであり、そのような聖なる創国の民族として生きていくとき、創世界がなされるのであり、その世界の上に、天宙的な地上の天国と、天上天国が連結するのです。

私が皆さんを祝福してあげました。祝福というのは、イエス様に優る立場を意味します。祝福を受けた皆さんを、サタンが讒訴することはできません。男性も女性も、みな讒訴することはできません。なぜでしょうか。真の父母を中心として血統がつながっているからです。それを見ればサタンも、個人、家庭、民族、国家、世界のいかなる次元においても讒訴できません。それが神様の最終的な観点です。絶対に讒訴することができないのです。それが解放の境地です。ですから今回宗族的メシヤを宣布したのです。

今、宗族的メシヤになれと宣布したのは、どういうことでしょうか。皆さんが私の代わりに責任を負ってするならば、天が後援するということです。私が過去に、統一教会が困難の中にあったときに開拓したその時代、後援して開拓したその役事を、霊界では今でも間違いなくしているということです。そのとき反対される中においても、統一教会を氏族的復帰時代に発展させた天なのです。今は反対されないのですから、どれほど発展することでしょうか。

堕落したアダムとエバが失敗したものを、皆さんが再び復活させて、復帰された家庭の資格を天国の天権をもって是認、公布するのです。それが宗族的メシヤ宣布の目的です。

故郷、私も今、故郷に帰りたい思いです。ここソウルにいたくはありません。このように従う外国の統一教会員が故郷へ行ってすべて還故郷活動するようになり、その余波が北韓を凌駕するようになれば、先生の故郷は自然と浮上してくるのです。闘うことなくそのまま通じるのです。水が、潮が先生の故郷に満ちるかもしれないし、通じるのです。それゆえ、金日成の徒党以上の精誠を尽くして、心情的な故郷、カナンの地を編成するのが統一家の使命だということです。ですから今日、氏族的なメシヤになりなさいというのです。

今先生が皆さんにメシヤという名をあげました。宗族的メシヤ！　では皆さんはどうしなければならないでしょうか。メシヤとして何をすべきでしょうか。国家的メシヤ、世界的メシヤ、天宙的メシヤとなるための、すべてのことを準備しておきました。山のような大きな宝物を、皆さんのために準備しました。皆さんがメシヤになりさえすれば、宝石の山のようなこれらすべての相続を受けるのです。水道管のようなものがつながっていて水が流れていくように、皆さんに相続されるのです。

宗族的メシヤが安物だとでも思いますか。賢明な先生が、メシヤの使命を果たすために一生をかけても至らずに恥ずかしく思うのです。皆さんの前に宗族的メシヤという言葉は、驚くべきことです。イエス様よりも貴い価値ある位置に立つことができるのです。それだけでなく、統一教会に反対して、ありとあらゆる悪態をついていた人までをも、堕落して

いないアダムの位置に引き上げてあげるのです。そんな話がいったいどこにあるでしょうか。話をしている文という人は、真の父母の位置にいるので、今まで話したことはすべて成し遂げてきました。成されなかったことはありません。

皆さんは宗族的メシヤ、氏族の救世主という名前をもったのです。ヤコブ家庭においてメシヤが来ることをどんなに待ったでしょうか。何千年も待ちました。何千年も待って迎えなければならないものを、皆さんの氏族の前にメシヤとして任命して送ったのですから、そのメシヤの種子としてどんなに貴いものでしょうか。

ここに来た皆さんは、金氏ならば金氏家門のメシヤの使命を果たさなければなりません。金氏家門であれば金氏家門、朴氏家門であれば朴氏家門において、天国を創建するにあたって、その氏族を代表して「私がメシヤだ」と考えなさいというのです。救い主だと考えるべきです。金氏家門を救ってやる救世主だと考えなければなりません。そのためには金氏家門の全体を代表して祭司長的な責任を果たさなければなりません。

今後、最後に残った終着地は何でしょうか。解決方法は何かということです。すべての壁を取り除き、処方するのですが、そのような恵沢を受けるにはどうすべきなのでしょうか。宗族的メシヤにならなければなりません。宗族的メシヤ。これさえ終われば、個人的讒訴条件、家庭的讒訴条件、氏族的讒訴条件、民族的讒訴条件、国家的、世界的讒訴条件を提示するその何ものもなくなるということです。

皆さんが外地に出て修練し、み旨を中心として懸命に活動した新しい習慣性をもって、その町全体を変革させなければなりません。従っていくのではいけません。神様が何もない中から自己の全体を投入して愛の対象圏をつくったように、皆さん自体を投入しなければなりません。必ず一つにしなければなりません。皆さんの故郷の人々の中で、誰よりも最高の位置につけば、霊界が協助するのです。実際にそうか、そうでないか、見ていてください。そしてビデオ・テープをたくさん作って伝道しなければなりません。

今日、皆さんは故郷へ帰って、種となり得る存在にならなければなりません。そしてその種が植えられて、大韓民国はもちろんのこと、天地が訪ねていくことのできる、神様がいつでも訪ねていきたいと思う環境を残すことができなければなりません。そうした上で、あの世へ行くときは、天国の息子、娘として愛を受けて生きるに違いありません。このような生涯路程をこれから定立していかなければなりません。

先生が「故郷へ行きなさい」と言えば故郷へ行くのは、新たな種を植えるということです。アダムとエバの種となったので、皆さんを通して新しい種を植えて、新しい根を下ろそうとしているのです。新しい種を植えるときには、肥やしをかけてやらなければなりません。

ですから悪口を言われに行かなければなりません。善意の悪口を言われて、多くの苦労をしなければなりません。三年だけしてみなさい。三年も必要ありません。六カ月あれば、すべて終わると見るのです。

昔、皆さんが一次伝道に出るときも、故郷の代わりとして行って百二十軒つくって、教会をつくれと言って追い出したことがありましたね。それは失敗に終わりましたね。その次に「ホーム・チャーチ」をしなさいと言いましたが、それも失敗しましたね。もう最後です。

宗族的メシヤとして行きなさいということは、自分の氏族のところに生えているものはすべて偽物、野生のオリーブなので、そこに行って、真のオリーブが生えるように、切って接ぎ木をして真のオリーブ畑にしようということです。その一族にとっては、それ以上の福音はありません。国を求めることよりも、世界を求めることよりも、天地を求めることよりも、もっと貴いことなのです。

韓国統一というのは、統一教会の文先生を中心として統一教会の信徒が完全にプラス・マイナスとなって、私が縦的なところにいれば、統一教会員は横的な基準で走ればよいのです。私が国のためにこの基盤を築いたのですから、皆さんはこの基盤を築くために、南北統一のための基盤を築くにあたっては、氏族が連合せよということです。

宗族的メシヤが来て、助けてくれとはどういうことですか。協会長！　言ってみなさい。先生は助けてくれという祈祷は一言もしませんでした。また助けてみましょうか。それを助ければさなぎになるのです。さなぎとはどんなものか知っていますか。死ぬほどの力を出し切っても駄目ならば、祈祷してみなさい。祈祷しなくてもお金はついてくるようになっています。そういうものです。

故郷に帰るにあたって、今後の自分の生活問題、息子、娘の教育問題、このようではすべて滅びます。イスラエル民族が出エジプトするにあたって、出ていかなかった人々はすべて滅びたではないですか。呪われる民族になるかもしれないのです。そのような天的なみ旨があるので、先生があらかじめすべて宣布するのです。宗族的メシヤに関してのことです。

四　真なる心情を本郷の地に植えよう

個人が安息するには、家庭がなければならないので、今まで統一教会は家庭を探し求めるために闘ってきたのです。また、家庭が安息するためには氏族圏がなければなりません。氏族が囲いとなって吹き付ける風と、それ以外のすべてを防いでくれる責任を代わりに果たすような、そんな舞台をつくらなければ、自分が安らかな家庭で生存することはできないのです。そのためには、親戚を中心として族長になれというのです。

族長になれば、戦いが起こっても町中の親戚が出て戦うので、族長は作戦を指揮しながら休むことができるのです。ですから先生は皆さんに対して宗族的メシヤの使命をなすように言うのです。

今までは事実上、他郷での暮らしでした。これからは故郷を訪ねていくのです。故郷へ行って、涙を流して精誠を尽くさなければなりません。イスラエル民族がエジプトに行って四百年間暮らしたのと同じく、私たちは四十三年間そのように暮らしたので、故郷に帰って愛の根を下ろさなければなりません。神

様を愛し、父母を愛し、兄弟を愛さなければなりません。

ですから世界的サタンが讒訴し得る起源を切ってしまわなければなりません。イスラエル民族はそれができなかったので、カナン福地の理想天国を形成することができませんでした。ですからサタン世界に何かを求めてはならないのです。ふろしき包みを背負って歩いたとしても、私たちが一番です。
悪口を言われて歩き、夜には近所の犬にほえられても、私たちが一番です。そのような自負心をもって、父母も堂々と村の天地を、愛の歓声と共に消化することに参与して前進しなければならないということをよく覚えておいて、闘ってほしいと思います。

皆さんは真の御父母様の前に真の子女の名分をもっているがゆえに、相続権、同位権を付与することができるのです。このような天の特権的事実を信じて、すべてを愛圏の中に投入しなければなりません。神様が投入したのと同じように、皆さんが完全に投入することによって一族が復活するのであり、一族が復活するに従って一国が復活することでしょう。

自分の郷里を中心として、新しい種として植えてもらうことのできる父母の赤い血筋が自分に埋められ、すべての山野、山河がすべての犠牲の代価をたたえるように、頭を下げるようにしなければなりません。そこに植えられて花が咲けば、初めの花は天の花として、二番目の花は御父母様の花として、三番目の花は自分の長男の花として、四番目、五番目は自分のものとしなければなりません。適当にしてもいいでしょうか。とんでもありません。

今回故郷に帰ったならば、皆さんもカナン福地に入ったイスラエル民族と同じなのですから、皆さんは故郷に帰ってお金持ちの人をうらやんではなりません。権力者をうらやんではなりません。気を奪われることなく、正しい教育をしなければなりません。

神様を愛し、自分の後代を愛し、イスラエル圏である私たち民族を愛することのできる伝統が第一です。
皆さんの子を抱いて教会に出入りするとき、彼らに吸収されてはなりません。何千年ぶりに、何万年ぶりに故郷に帰ってきた還故郷の喜びをもって細胞と骨の髄が響くように泣き、血の涙でその地を濡らし、血の涙に浸った聖なる血であるという名が天から降りなければなりません。そこから天国が始まるのです。

皆さんは故郷に帰って、故郷を復活させなければなりません。イスラエル民族はそれができませんでした。四十年間乞食の群れとなって渡り歩き、帰ってきてからは豊かに暮らしているカナン七族がうらやましく思われ、子羊がうらやましく、家がうらやましかったのです。天幕を張って暮らす身の上だったからなのですが、そうしているうちに国を売り渡し、神様を売り渡すことになったのです。

それでは、故郷に帰ってどうしなければならないのでしょうか。皆さんと一つになるようにしなければなりません。その方法は簡単です。息子を生んで、天の伝統を伝授する教師となり、「こうすれば天国ができる」という手本を見せてやり、母親、父親は、その町

内の母親、父親に「こうすれば天国の部落になる」というのを見せなければなりません。

そうすれば良いのです。簡単です。夫は妻を、妻は夫を愛し、父母は子を、子は父母を愛する愛の家庭を築いて、それをすべて伝授すればよいのです。

先生は世界的先祖の位置に立つために、このようなことをしてきましたが、皆さんは、それぞれ皆さんなりに、氏族的先祖になるための伝統を、それぞれの分野に該当する伝統を受け継ぐために、皆さん自身もそのような道を行かなければならないという事実を知るべきです。皆さんの氏族のために、一族のために伝統を立てなければならないということです。これから十二支派が編成されていくことでしょう。ですから伝統が必要だということです。自分のことを考える人は、ここから落ちるのです。

真なる心情を本郷の地に植えなければなりません。これが植えられなかったのが堕落でした。そして皆さんは皆さんの一族の中で宗長にならなければなりません。

「神様は宇宙のアベルであり、この世界の人類は神様の前にカインの立場にあるのですが、神様は、僕の僕の体をまとい、養子、子女の体をもまとって、今まで復帰歴史をしてきたので、私たちはその伝統を受けて、自分の氏族のところへ行き、そのような伝統を再び提示し、屈服させる役事をしましょう！
というのです。それは長くかかりません。三年、長くても三年です。ですから十年と見るのです。

五　この時代に我々がやるべきこと

一) 真の父母を証しよう

万民の願いは何でしょうか。世界の国家を迎える前に、真の父母を迎えようということです。誰から出発したがるのでしょうか。皆さんの新しい息子、娘は、皆さんの血筋を通して生まれるのを願うのではありません。真の父母の血筋を通して生まれたがるのです。それゆえ真の父母は、新しい未来の出発点になるのです。

すべてはどこに帰結するのでしょうか。真の父母に会うことに帰結するのです。人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり、国家の願いであり、摂理の願いです。ですからそのような真の父母が現れるときは、歴史上で一度しかない定点をなす時であり、空前絶後の時なのです。永遠な世界というものを考えれば、人間の一生というのは、一度呼吸する期間のようなものです。

真の父母というのはどのような存在でしょうか。真の父母は全体の希望の象徴です。堕落した人類の前に、絶対的な希望の象徴なのです。それは歴史的な結実体であり、時代的な中心であり、六十億人類が生きている今日のこの世界の国家圏の中心です。真の父母は今後の理想世界につながる未来線上における出発点です。

真の父母というその名（韓国語で三文字）を考えるとき、真の父母によって歴史が治められ、真の父母によって新たな世界になり得る起源が生じ、真の父母によってサタンを屈服させ得る内的な因縁が結晶し、真の父母に

よって外的な世界を占領しているサタンを征服し、初めて神様を解怨成就してさしあげることのできる中心が結晶するのです。それゆえ、真の父母と共に生き、真の父母の命令を受けて行動することのできる、この驚くべき恵みに、皆さんはまず感謝しなければなりません。

人間の願いは真の父母に会うことです。死の道を行ったとしても会わなければならないのが真の父母なのです。歴史のすべてを失い、時代のすべてを失い、自分の子孫すべてを失うことがあったとしても、真の父母に出会ったならば、歴史を得ることであり、時代を得ることであり、未来を得ることなのです。そのようなお方がすなわち真の父母だということを皆さんは知らなければなりません。

皆さんが真の父母と完全に一つとなるときに、国家があり、氏族もあり、民族もあり、家庭もあるのです。天地の栄光の価値すべてを総合した実体基準が真の父母です。真の父母をこの世のお金と取り替えますか。自分の生命を渡して取り替えることができるでしょうか。それゆえ昔とは違うのです。皆さんはどこに行っても真の父母にお仕えするために大韓民国を訪ねてこなければなりません。皆さんの息子、娘も、千世万世の子孫たちもそうしなければなりません。それゆえ統一教会は違うのです。

統一教会で言う真の父母とは何でしょうか。堕落しなかったとすれば、神様が縦的な愛になり、アダムとエバは神様の体になるのです。神様の体のようなものです。神様は骨のようなものであり、アダムとエバは体のようなものだということです。神様にも心があり、体があります。神様は内的な立場で内的な父母であり、アダムとエバは外的な立場で外的な父母となるのです。内的、外的な父母が一つとなったその場において、愛によって結ばれて内的父母に仕えるようになり、外的父母をもつことになります。神様と人間との愛の結託によって、真の父母、つまり完成した人間が成就するということです。愛と結託しなければ、完成人間はないのです。

二) すべての家庭に御父母様のお写真を掲げよう

御父母様の写真を貼り、統一教会の旗さえ掲げればそれは天国の眷属となるのです。天国の眷属にしようというのです。それゆえ、今回旗を掲げるのをためらっていて打たれた人がたくさんいましたね。本当に不思議です。先生に対して後ろ指をさしたことで、手が悪くなり、幾晩も祈祷して悔い改めて初めて良くなったり。そのようなことが起こるではないですか。なぜでしょうか。

天運が来ているのに、個人の運勢によって防ぐことはできません。宿命的な道なのです。モーセが杖を持っているときは、それを見ていた人はみな生きました。統一教会の旗を見て行く所ごとに敬拝し、泣いては敬拝し、写真を見て敬拝し、泣いては敬拝すれば生きるのです。

統一旗を掲げるのは、通りがかりの信徒が空腹であれば、ここに入って休みなさいという表示であり、昼時であれば、昼御飯でも食べていきなさいという表示です。それゆえ、いつでも客をもてなすことのできる準備をし

ていなければなりません。父母に代わってそのような準備をしなければならないのです。ですから部屋もなければなりません。御父母様が来ないので、御父母様の代わりとしての客に侍ろうというのです。この思想は、天の最高の基準の前に平準化思想を連結させるためのものです。そのような意味で、神様に侍るように、御父母様に侍るように客をもてなしなさいというのです。そのような人は恵みを受けます。

文総裁は有名です。国のための愛国者だということは、みな認めています。また、私が成した功績には、天下がみな頭を垂れます。そして「あの方の写真をかけている以上、夫婦がむやみにけんかをするわけにはいかない」と言い、息子、娘の前でも「あの文先生の前ではそれじゃあいけない」と言うようになれば、悪いことはありません。自分の両親の写真以上に尊ぶことによって、先祖たちが来て、先祖として侍るのです。また、先祖たちが来て、その家に侍るための祭壇となるのです。それゆえ、天上世界の恵みを受けることのできる道があるので、午前三時になれば、自分たちは寝ていても、（先祖たちが）みな一家周辺の邪悪な悪魔をすべて追い出すのです。

今日以降、皆さんは先生の写真をもって歩くのが良いのです。そうすればどんな苦難に遭ったとしても、無事に耐え抜くことができるよう保護してくれることでしょう。モーセがエジプトのパロ王からイスラエルの民を脱出させてカナンに導くために、奇跡を見せたとき、長子は患難に遭い、病気になって死にましたが、羊の血を門の柱に塗った家はその患難は避けて通ったのです。霊界は、私たち人間のすべての行動を見ることができるだけではなく、保護もしてくれるのです。

イスラエル民族がエジプトから出てくるときに、門の柱に血を塗って災いを免れたのと同じように、写真をもっていれば、そのようなことがあるかもしれないのです。先生の写真をポケットに入れておいても分かるのです。このように小さな条件が、門の柱に血を塗るのと同じことになるのです。

これからレバレンド・ムーンの名声は国境を越えます。あちこちの政治家の中には、書斎にレバレンド・ムーンの写真を掲げて仰ぐ人が多いということを私は知っています。尹博士も私の写真を掲げましたか。毎日あいさつしますか。毎日キスをしますか。熱情的でなければなりません。キスしなければなりません。だからといって失礼になることはありません。神様の愛に代わってキスすることによって、私がキスすることによって、霊界に行った人々に同参圏、同位圏をもたせようとしているのだと言えば、神様は「ノー」とは言わないのです。「そうだ、そのとおりだ」と言うのです。尹世元博士、そうしてみたらどうですか。

先生のほほえみは、モナリザのほほえみほどに神秘的なところがあるという経験をしたことがあるはずです。ある時はこうで、またある時はああで、数十万種類の姿に見える先生のこの神秘的な姿は、霊界をして皆さんに協助させるという経験を大部分がもっていると思います。霊界の霊人たちはみな、先生のことをよく知っているのですから、この写真

を見れば霊界が喜ぶでしょうか、気を悪くするでしょうか。皆さんの先祖がこれを媒介体としてつながることができるのです。そのような良い材料であると理解してほしいと思います。

三) 氏族復興会をしよう

これからは家庭復興会をしなければなりません。家庭復興会は皆さんの一族を中心としてするのですが、その復興会は全体の氏族を代表した復興会です。それは韓国だけでなく、世界の多くの祝福家庭が、氏族をつなげた、その氏族を代表した復興会だと思わなければなりません。そのような復興会に世界の人がみな同参するのです。今日韓国にある統一教会は、韓国が基地となることによって、氏族基盤を中心として、世界を代表して復興会をすることができるのです。これがどれほどの恵みか知れません。

ですからこの復興会の宴会で牛をつぶしてもいいのです。それは皆さんの思いどおりにしてください。鶏をつぶすならつぶして、鶏をつぶしただけの恵みを受ければいいのです。牛をつぶせは牛をつぶしただけの、牛百頭をつぶしたとすれば牛百頭をつぶしただけの恵みを受けるのです。相手のためにというその心情、自分の努力いかんによってすべて左右されるのです。それに比例して皆さんの先祖の解放圏が広がっていくのです。

今や韓国統一が可能な時になったのです。すべてがそうです。これからは故郷を訪ねていって氏族復興会をすれば、それは歴史的な復興会になるのです。これは国を取り戻そうと三・一運動で万歳を叫んだ以上の驚くべき事件です。歓迎される立場で天理が動き得る、そのような環境をもったということです。このような舞台で自分の氏族を動かせないとすれば、それはもう死ななければなりません。

歴史というのは、真の真理を求めていく路程です。その真理は、真の個人が生きる道、真の家庭が生きる道、真の社会が築かれ得る道、真の国が築かれ得る道、真の世界が築かれ得る道を提示しなければなりません。そうして個人から世界までの焦点がすべて一致してこそ、世界完成、国家完成、氏族完成、家庭完成、個人完成が可能なのです。このようにぴったりと合わせ得る核となるみ言、すなわち真理をもってこられるお方が真の父母なので、その真理はすなわち神様の真の愛です。

全世界の人類は、気を確かにもたなければなりません。統一教会の文総裁の教えは、救世の真理なのです。人類が永遠に必要とする真の愛と生命のみ言です。再臨主が世の中を救おうとして来られるとするならば、人類を鉄格子の窓で審判するというのではなりません。たたくことによっては一人として完全に屈服させることはできないのです。手がヒキガエルの背のようにでこぼこになり、曲がって開かなくなるほどに苦労した母親の犠牲的な愛には、不孝者を悔い改めさせ、戻ってこさせる力があるものです。

棍棒をもってしてはできません。審判の大王であり、天地を思いのままに主導なさる神様でも、真の愛なしには天宙統一は不可能なのです。真の愛は困難が問題にはなりません。自分の生命を投げ出してでも、行くことのできる力が真の愛にはあるのです。

統一教会のみ言はいいのだが、人は良くないというようになれば滅びます。滅ぶのです。統一教会の文先生は皆さんの前にみ言を語っただけでしょうか。み言を語っただけではありません。先生が今皆さんに教えている内容は、先生がすべて行ってから教えているものなのです。それゆえこれは間違いありません。先生は知識の面においても、実際的な面においても、矛盾や相いれないということのない理念体系をつくって教えてあげているのです。そこに関しては誰も何も言えません。サタンも公認するし、神様も公認することでしょう。

神様はみ言をもって私たちを呼んでおられるので、私たちはそのみ言どおりに行かなければなりません。真の父母と真の子女が相まみえるための道は何でしょうか。真なるみ言を通じることです。そのみ言は父のみ言です。父のみ言を知らずしては、子となることはできません。父のみ言が絶対的であり、真のみ言であるとするならば、同じみ言を千年、万年聞いても飽きません。終わりがないのです。

私たちはそのようなみ言を求めていかなければなりません。そのみ言がある論理的な条件にぴったりと合うといっても、それで終わるものではありません。大原則でありながらも、聞いて、聞いて、また聞いて、永遠に聞いても生命となり得るみ言です。そのようなみ言を求めなければなりません。

父母のみ言は永遠なものです。時間と空間を超越しているということです。それゆえ、神のみ言は歴史を超越しています。主義を超越しています。思想を超越しています。ですからどこの誰の言葉よりも貴いものです。そのみ言は夜聞いても、昼聞いても、夜見ても、昼見ても、皆さんの心に無限に流れてくるのです。そのようなみ言を求めなければなりません。

私の恨は何でしょうか。両親の生きているうちに、統一教会に入会するように涙を流し、絶叫しながら勧めることができなかった不孝を残したことです。この恨を、皆さんを通して解こうと思います。

私の一族を伝道することはできませんでした。八人の兄弟姉妹がいましたが、私は彼らの前で原理のみ言を一言も語ることはできませんでした。兄は私が語れば何でも絶対服従するのです。カイン復帰を完全にしました。家を売れと言えば家を売り、牛を売れと言えば牛を売ってくれるのです。母親、父親が及ぶところではありません。そのような兄に対して、一度も原理のみ言を語ることができませんでした。

これからは故郷に帰って灯台を立てるべきです。灯台とは何でしょうか。夜、暗いところに灯をともすのです。それはどんな灯台でしょうか。南北統一、東西統一の灯台の灯をともしなさいということです。これからは聖地のその灯を消さないように、灯をともさなければなりません。

今後皆さんは口を閉じていてはなりません。人が集まってくれば、先生が一九五〇年代に七年間二時間以上寝ることなく、皆さんに昼夜を問わず教えたように、夜も昼もなく七年ぐらいやってごらんなさい。七年間しなくてもよいのです。四年もかかりません。四カ月以内にすべて終わるのです。

私が故郷に行くならば、もう、あっという間に統一してしまうのです。ですから両親によく教えてあげなければなりません。兄弟たちに本当の意味でよくよく教えてあげなければなりません。自分の手で、人の口を借りることなく、皆さんの血の汗を通して教えてあげなければなりません。精誠のこもったその教える態度を、その姿勢を父母が見習い、兄、姉、弟、妹が見習い、甥、姪が見習えば「家の宝である私たちのおじさん、私たちの弟、お姉さん、私たちの息子、娘」というようになるのです。

皆さん、これからみ言を宣布しなければなりません。これから原理宣布だと言って、皆さんの町内で八時間でも何時間でも夜を明かして、私が七年間したように、皆さんもそのようにしなければなりません。七年もかかりません。七カ月もすればすべて変わっていくことでしょう。そうなれば私がトラックにいろいろと積んで行くかもしれません。一族が私を招待して。

先生は七年間一日に二時間しか寝ませんでした。皆さんもそうしなければなりません。私は劉協会長に三年間、十六時間ずつ講義させました。劉協会長が大変がるときに、私が「こら、横になって人を殺そうというのか。先生に横になると言いもせずに横になっているのか」と怒鳴ったことが、今となっては心が痛みます。劉協会長は魚のことが好きだったですから。

アキアミ（注：甲殻類に属する海老の一種）というのがありますね。アキアミの塩漬けは臭いがして、その横に行くこともできないのに、それがおいしいといって食べたことを今でもはっきり覚えています。今では味付けした牛のカルビー（あばら肉）の片方全部を食べさせてやることのできる時代になったのに、あんなにかわいそうな生活をしていたことを思うと、胸が痛むことがあります。どうしてそうしたのかというと、伝統を立てるためです。

四) 訓読会を組織化せよ

先生のみ言は、先生が語ったものではありません。先生が言ったことではないのです。天が先生を通して語られたみ言です。そのみ言は皆さんがいつ、どこで聞いても心が動き始めます。心が感動を受ければ、体に一大革命的変化が起こるのです。そのような力があります。

集まりがあるときは勉強です。夜も昼も時間さえあれば勉強です。何百回、何千回と読んで、自分のものになるまで、自分がその相対的実体圏をもつまで、これからはそのようなことをするのです。統一教会員は座っていると病気になります。病気にならないためには一生懸命に読んで、試験をして、努力するのです。

真の父母はみ言の先祖であり、人格の先祖であり、心情の先祖です。

訓読会は私が千辛万苦して人生において積んだすべての宝の箱を、民族の前で開けて与えることなのです。誰にでもすべて。翻訳もするなと言いました。翻訳できません。私の民族の前に通告するときまでです。それを知らなければなりません。

時間さえあれば訓読会をしなければなりません。一人でも、化粧室でも訓読会、一日に何時間でも、どこを読んだか記録して、ポケットにみ言の本を入れておいて常に訓読会をしなければなりません。

『御旨の道』を読み、原理を読むのはもちろんですが『祝福と理想家庭』であるとか、今まで先生の語ったみ言の中で重要なみ言は、サタン世界と対峙して闘ってきた勝利の記録なので、すべて読まなければなりません。ここには御父母様の歴史的記念である過去、現在、闘ってきた内容がすべて含まれているので、私たち統一家が御父母様と一つとなるためには、その内容と一つとなりながら、そこにあるそのみ言と相対的な基準をつくっていかなければなりません。自分を中心として、家庭を中心として、自分の一族、七代まで、そして横的には百六十家庭、百八十家庭を中心として完全に一つとなってみ言を定着させなければならないのです。

訓読会は祝福家庭の夫婦二人きりでもしなければなりません。毎日朝一時間ずつ。もし朝にできなければ、夜寝る前に十二時でも一時にでもすべきです。私はしています。今回南米を巡回したときにも、十二時を過ぎて疲れていても、それを実践したのです。一日も欠かすことはできません。分かりましたか。読んでみるべきです。『祝福家庭と理想天国』！　この本は祝福家庭の内容をすべて教えてあげたものです。先生がそれをめぐって闘ってきた勝利の基盤を、ハイウェイを切り開いておいたので、ここに高速道路をつくって皆さんはすべて自動車となり、ガソリンとなって、自動車でここを最高のスピードで走らなければなりません。

私たち統一教会の原理の内容を、嫌気がさすほど語ってみなさい。一度嫌になるほどやってみようということになれば、どんなにおもしろく、どんなに良いか知れません。み言が創造の能力をもっているという事実を、確実に知らなければなりません。私がどこへ行こうとも、天が共にあるということを知っているので、その心情が直接大衆に影響を及ぼすのです。どういうことが分かりますか。

今までの先生の説教をまとめた説教集をすべて読んだ人は手を挙げてみなさい。こら！どんな教育をしたのですか、協会長。先生はその説教集の中でも深い内容は語れませんでした。今でも語ることはできません。み言の貴さを知り、み言の下には生命の源泉が、湧き水の源泉、水の源泉ではありません。降水ではありません。その生命の源泉が流れているということを知らなければなりません。自分個人の家にその湧き水のパイプをひいて、永遠の生命水が湧き出すような道を模索しなければならないというのが、統一家の群れの責任であるのに、何をしてきたのですか。あれはみな古物屋に売る本なのですか。

第五章　再出発のための私たちの決意

一　再出発の決意

さあ、滅びるわけにもいかないし、死ぬわけにもいきません。生き残らなければなりません。生き残るためには、そのままでいてはならないのです。敵を越えていかなければなりません。敵を越えなければならないのです。

敵を越えれば天国です。ですから還故郷したところから敵を越える日には、天国の版図が広がるのです。統一民族圏ができるのです。

それゆえ、皆さんが今回同行することによって、一千万の心の中に還故郷の火をともすことのできる良い機会です。こうして底辺から侍り、抱き、兄弟の愛をもって南韓の同胞と北韓の同胞が兄弟のように自らのすべてを分かち合いつつ、そこから再出発するのです。そこには国家観はありません。カイン・アベル時代に国家はあったでしょうか。国家がありましたか、ありませんでしたか。国家の後援を受けてはならないのです。国家の後援があれば、両者とも滅びるのです。

以前、分水嶺を越えると言いましたね。古稀のとき霊界に通じる外部の人が、踊りを踊りながら「今や文総裁が三十八度線を越えた」と言いました。それは敷居を越えたという意味です。幸福の世界が来るということです。すべてそういうことです。

そのようにして一九九〇年代を越えなければなりません。これを越えれば統一教会は一瀉千里に発展していくことができます。今回の古稀からは……。七十歳ですから七千年、七数を蕩減して八数時代になるのです。八数は解放の数、再出発の数ですね。

ですからアメリカが共産党滅亡宣布をしたのです。すべてが終わったのです。本当に不思議です。それも私たちが大会を終えたのちの七日と八日でした。

このような難局の時期が来ることを天は知っていたので、神のみ旨を中心として新たに再出発する準備をさせなければなりません。その位置にあるべき宗派、教会、あるいは宗団とはいかなる宗団でしょうか。統一宗団です。

その名のとおり「統一」という言葉は指導を受ける位置での統一ではありません。
「統」には率いるという意味があるのです。率いなければなりません。主体的中心をもって相手を教育し、主体理論の理想的な同伴者として、相対圏を形成することのできる内容を備えなければなりません。それが統一宗団、統一教会です。
しかし、それはこのレバレンド・ムーン一人の構想から始まったものではないのです。歴史性を超越した内容を中心として始まったという事実を今日の世界は知りませんでした。

孝子の道を行くためには、有史以来の迫害が迫り、困難な峠が多かったとしても、それを克服することのできる余裕満々とした男とならなければなりません。患難と試練の中でもまれ、後退の余念をもって悲しみの恨の道へと戻っていくのではなく、億千万世の苦衷と受難の道を克服し、克服し、決意して誓い、あすの希望に満ちた再出発の道を促していきながら、死の道も見分けていくことのできる道を残して行かなければなりません。そのような歴史的要求と、神様の要求があるということを知らなければなりません。

世界平和連合構想をそのときから始めたのです。それを今年八月末までに終わらせなければなりません。世界平和宗教連合も同じです。これが九月を越えてはならないのです。八月は世界的な再出発をする月なので、それを形成しなければなりません。そのために七月一日の神様祝福永遠宣布式をしたのです。蕩減路程をすべて越えなければならないので

す。そして宗教圏まで一つに結んで宣布しなければならないのです。それが八月二十八日です。そのときまでに宣布式をして、その次に九月一日に新たな出発をするのです。すべてが越えるのです。そしてこれからは、世界は進んでいた道に背を向けて、すべて先生に従ってくる群れとなっていくのです。

皆さん、皆さんがそのように「ため」に生きようという生き方をすれば、歴代の先祖の基準を越えて、歴史上初めて必勝の勝勢者として神様の息子、娘だということのできる天道の道を行く巨人の人生に出世するのです。そのような時代になったのです。皆さんが自分自身の生涯を再出発させることのできる、驚くべき時代になったのです。

二　真の御父母様の伝統相続の姿勢

皆さんは堕落した息子、娘です。本来は、一人ではその位置に到達することはできません。皆さんは堕落した位置にいるのです。それゆえ、まず真の父母に学ばなければなりません。その場で互いに一つとなることができ、そこで真の愛が生じるのです。それが最初のエデンの家庭の伝統になるのです。真の御父母様なしに、どうして真の愛と伝統を学ぶことができるでしょうか。御父母様なしにはそのような相続がなされるはずはないのです。分かりますか。

父と母は、真の愛で愛する息子、娘に自分のすべてを相続しようとするのです。宇宙の相続は愛の伝統の上で、同等な愛の価値的位置を見いだすときに、そのすべてのものを心置きなく一〇〇パーセント相続するようになっているのです。ですから父母は孝子を望むのです。孝子とは何でしょうか。父母の永遠なる愛の同参者として愛を相続しつなぐものです。

皆さんは、皆さんの家庭の主人がどんな人だったらいいでしょうか。どんな人を主人の位置に置きたいでしょうか。父親でも、おばあさんでも、家族はみな、どんな人を相続者にしたいでしょうか。より愛する人です。おじいさんが最もその家全体を愛しているとすれば、家族はおじいさんにすべてを報告するのです。お父さんをさておいても、それはどうしようもないのです。それゆえ、一つの主人となることのできる者は、愛の心をもって「ため」に生きる者です。愛の心をもってより「ため」に生きる者が、その愛の家庭の伝統を受け継ぐのです。より大きな愛をもって「ため」に生きる者が永遠なる相続系列に同参するということを知るべきです。

皆さんは家庭で「孝子になれ」と言いますが、それはどういうことでしょうか。真の愛の中に入りなさいということです。それでは「相続者となるようにしなさい。愛国者となりなさい」というのはどういうことでしょうか。国を相続しようということです。「聖人になれ」と言いますが、それはどういうことでしょうか。世界を愛せよということです。「聖者となれ。神様の息子となれ！」と言いますが、それはどういうことでしょうか。神様の愛に同参して宇宙全体の相続権を受け継ぎなさいということです。そのすべてを相続することのできる伝統的な道があるがゆえに、今日まで堕落した人間世界において、このような論理的な段階に発展することのできる基

盤を連結させてきたのです。それゆえ宗教の目的や、求道の道が可能であるということを決定づけることができるのです。何ゆえにできるのでしょうか。愛のゆえです。

今までこの道を切り開いてきた神様の道がそうだからです。神様の築いてきた伝統を相続してやるには、皆さんがこの道を行かなければならないのです。皆さんが苦労するのを見て喜ぶのではありません。苦労して切り開いてきた、その心血を注いだすべての福の恵みを、皆さんに無条件に祝福してくださる天があるということを知らなければなりません。その位置で相続を受けてこそ栄光となるのです。神様はそこで暮らすのです。十字架で蒔いたのですから、十字架で取り入れなければなりません。それを知らなければならないのです。涙で蒔いたので、涙で取り入れなければなりません。

私たちが神様の摂理全体を相続するためには、その伝統に忠実でなければなりません。伝統に忠実な者となったのちには、どうすべきでしょうか。そこからは責任をもたなければなりません。責任をもたなければならないのです。責任をもったならば革命を起こさなければなりません。この伝統が父の前に正しくないとするならば、その伝統を全体の前で相続させるためには、社会環境の矛盾したすべてを打開するために闘争しなければなりません。そうしなければ発展がないのです。それゆえ、皆さんがそのような歴史的な因縁を相続し、時代的な開拓者の責任を果たすためには、神様の復帰摂理に関する歴史的な純粋な伝統を受け継がなければなりません。そして、現在の生活的環境においてそのような責任を負い、未来の新たな理念の礎を築くために闘争していかなければならないということを、よくよく心に刻まなければなりません。

同じ父母をもち、兄弟の因縁を共にしなければなりません。そうして一つの父母の生活と、習慣と、伝統をそのまま相続しなければなりません。そして、天が喜ぶことのできる家庭形態を備えなければなりません。そうしてこそ家族ができるのです。

立派な国をもちたがっている人が、「ただ遊んで食べて、人と同じようにしながら立派な国をもとう！　それはどんなに素晴らしいことか！」と言っているとするならば、その人は悪魔の後継者に違いありません。立派な氏族と民族と国をもとうとするならば、一家ではなく、一族を、自分の氏族を……。そのような世界を願うならば、まず一国を投入するということをしなければなりません。そうしてこそ、立派な世界を相続することのできる摂理史的伝統の位置に立つのです。そのとおりです。

皆さんのお母さん、お父さん自体が生命をもって生きているのですが、そこに愛というものがなければ、関係を結ぶことはできません。また、愛がなければ、前後左右のいかなる因縁も相続することはできないのです。それゆえ夫婦となった男女は、必ず父母の愛を伝授してもらわなければなりません。父母の愛を伝授してもらうと同時に、子女にその愛を伝授する伝統の上に生命の軸を立てなければなりません。

天国とは「ため」に生きる人の行くところです。自分を世界に投入しつつ、世界と連絡し、世界を抱いて、世界以上の位置を、神様に侍るための愛を求めてさまよう人が、天国の主人となるのです。そのようなことを誇らなければなりません。自分から自分の母親を誇り、自分の妻や夫を誇り、息子、娘を誇り、兄弟を誇り、皆さんのお兄さんを誇るには、そのような伝統を中心としてこれを国へと拡大して適用し、その公式を世界に適用し、天宙に適用しなければならないのです。そのような人はどこへ行っても同参、同位、相続権をもつことができます。

それゆえ、神様が私のものとなるのです。神様の愛が私のものになるというのです。神様の行くところはどこでも同位、同参することのできる権限があるということを知らなければなりません。この驚くべき事実を知ってから他のものを求めていこうというのなら、行きなさいというのです。雷が落ちることでしょう。そのようなことを求めていくのが統一教会の道であるということが分かりました。

息子、娘が、自分のことばかり考えるようであってはなりません。私のように、天地のために、人類のために生きるには、より強く、より次元の高い伝統を受け継ぐことのできる息子、娘にならなければなりません。そのように考えるのです。だからといって、誰も不平を言うわけにもいきません。それゆえ、統一教会の教主の後継者には誰もがなれるというわけではありません。血統を受け継いで、「ため」に生きる伝統的な愛と一致することのできる息子、娘にならなければなりません。より次元の高いお母さん、お父さん以上の息子、娘とならなければならないのです。そのより高い息子、娘は、侍る生活をしてみなければなりません。出たり入ったりする人はなりません。それゆえ、相続も、高い次元の息子、娘がもっと「ため」に生きようという基準で相続しなければならないので、長孫（孫の中で一番上の男の子）が必要なのです。

皆さんは南韓の地においてどうしなければならないのでしょうか。北韓を取り戻す前に、南韓はアベル圏の中にいるがゆえに、皆さんがアベル圏の中に入ってこの世界版図まで上がるように、先生が引っ張ってあげなければなりません。ずーっと上がってきたこの基準を皆さんが相続して、皆さんの誰もが先生を代表し、世界を代表し、国家を代表し、氏族を代表し、民族を代表して、皆さんの故郷に帰って、皆さんの家に根を下ろすのです。真の夫婦の愛を中心として、本然の伝統基準をここにしっかりと根づかせることによって、先生の世界基準の根が完全に根づくのです。

教会をあとにして、みな家に帰って自分だけがよく食べ、いい暮らしをするというのではなりません。帰ってから第一にすべきことは何かというと、教会を整備することです。次に、自分の息子、娘から後ろ指をさされるようではいけません。物乞いになって人の世話になるようであってはなりません。血の汗を流し、正義の真なる血肉の価値を通したその基盤において、息子、娘を養い育て、息子、娘に新たな伝統を教育しなければなりません。のみならず、自分の一身を投入してその一族を生かしたのちに、一族が自分を定着させてくれて初めて私が生きるのです。さもなければ潔く祭物として消えていこうという犠牲的精神をもつ、そんな相続者がいなければ、こ

の南韓の地が天国の基地として残り得る国家の基盤はできないということを、はっきりと知らなければなりません。

相続は天の名によって、天の命令によってなされるものです。相続は民主主義式ではできません。もしそうであれば滅びます。国会の相続、授権政党というものを、自分たちが偉いからといって自分たちの手段方法をもってしてはいけません。国の伝統を立てなければなりません。命令によってなされるものであるがゆえ、命令を受けることができなければなりません。そのような社会にならなければならないのです。それを分かってほしいと思います。

今回皆さんを配置したのですが、それは皆さんが愛の主人、サタンが愛してきたそれ以上の愛をもって、主人意識を回復した立場に立ち、神様に代わって、イエス様に代わって、先生に代わって、子孫として堂々と伝統を受け継ぐ天の相続者としての権威をもち、主人の役割を堂々と果たしてくれることを願って故郷に送ったというわけです。これまで故郷では私たちに反対してきましたが、これからは順応できるようになりました。文総裁のもとに従ってこれるようになっているということです。

愛には相続権があるのです。驚くべき事実です。この世でも、親が相続権を与えるときには、父母を愛し、国を愛し、兄弟を愛する人に与えようとします。それはなぜでしょうか。その伝統の歴史的起源、出発の起源に合っていて初めて正しい種となるからです。それが分からずにいたのです。

歴史上どんな父母にもそれはできません。私が最高の伝統を立てました。そのような伝統を皆さんに相続してあげようというのです。皆さんは何をしているのですか。これから季節が変わります。春が来るのです。お父様は春だけではありません。四季……。そのような態度でやっていくのです。

生命よりも貴いものは何でしょうか。私が貴いでしょうか。私の生命よりも、もっと貴いものは何ですか。それは愛であるがゆえに、高い愛をもった人の前に忠誠を尽くさなければならないのです。

それゆえ、家庭に入れば父母の前に服従するのです。愛の最も高い位置にあるのが父母の愛であるがゆえに、その愛を慕う息子、娘は、千年、万年順応しながら、その愛を相続するために、山奥をさまようような立場にあっても良いというのです。あの臭い肥やしを頭からかぶっていても、父母を愛する伝統を受け継いでいかなければならないという立場で、「孝行しなさい」という父母の言葉を永遠に誇ることのできる愛を相続するのです。そうならなければなりません。

先生がこの世を去るときの贈り物として、何を残していくかということを考えるとき、それが最高の贈り物なのです。それは天地を渡しても売り買いすることのできないものです。その贈り物は、先生が真の父母だという場合、真の子女がいたとすれば、血統的に一つに結び付けてくれるものです。血統的に一つとなったというのは、生活はもちろんのこと、環境のすべてまでも収拾されます。父母に代わる者、父母に代わって愛する者であるがゆえに、父母のみ言を相続し、父母の文化

を相続し、父母の生活方式を相続しなければならないのです。それが伝統的な道です。

三　真の愛を植えよう

愛によらずしては、一つにすることができません。二つを一つにするには、言葉をもっては不可能です。二つが一つになるためには何がなければならないのでしょうか。物質によって一つになっている場合、物質がその場を離れたならば、逃げていってしまいます。第三者の紹介によって、ある事情を通して一つとなったとする場合、その人がいなくなれば去っていってしまうのです。二つが一つとなるためには、永遠に一つとなるためには愛がなければなりません。愛以外のものではなりません。

神様を中心として考えるとき、根本は愛です。愛があれば統一は自動的になされるのです。サタンよりも水準の高い愛で愛すれば、サタンも引かれてきます。神様は最高の善と愛を与えるために天地を創造なさったのです。

愛が偉大なのはそれです。上下、高低の距離を超越し、空間と時間を超越して、共同所有の理念を即時に共有し得る圏内に参ずることができ、参加することのできる能力が愛の道にある！　これは驚くべき事実です。

愛があればどうなりますか。どうなるでしょうか。すべてが遠ざかりますか、それとも近くなりますか。愛はどうして良いのでしょうか。それを知らなければなりません。遠いものも極めて近くに、一つにすることができるのです。東洋人と西洋人を政治力、軍事力、文化の力で一つにできる人はいるでしょうか。文化の力、経済力、どんな力をもってしてもできません。何がありさえすれば一つになるのでしょうか。愛というものがなぜ良いのか分かりますね。

人間が愛を最も好むのは、愛は全体を統一して私のものにすることのできる主体だからです。人は愛がどんなに良いものか完全に知るよしはありません。ですから先生が愛をもって出てきたのです。

愛の心は、愛の力は、殺そうとしていた怨讐までをも一つにするのです。極と極、反対のものを一つにすることができるのです。女性と男性は、極ですか、それとも極ではないでしょうか。女性は女性同士で好むでしょうか。女性が二人きりで「私はあなたの手にほれたの。ああ、なんて良いのでしょう」と言ったとすれば、どんなに気持ち悪いことでしょうか。

統一の方案はどこにあるのでしょうか。「ため」に生きるところにあります。それでは南北を統一するのに金日成の言うとおりにするというのでしょうか。金日成の言うとおりにするのではありません。愛が宿るものは何であっても「受けたい」と思うような良いものであるがゆえに、その良いという立場において永遠に与えることのできる位置に立てば、北韓も統一されるのです。現在北韓の民が暮らしている以上の立場で、永遠に与えることのできる基盤さえつかめば、共産党の宣伝などは通用しないのです。大韓民国が、経済分野、生活分野、知識水準などすべての分野で優越な立場にあり、永遠に与えることの

できる立場に立てば、一つになるなと言っても完全に一つになるのです。

善は何かにぶつかるたびに発展するのです。行く先々で百勝するのです。困難なように見えてもこの原則に立脚すれば、この原則が間違っていない限り、必ず勝利をもたらすのです。この原則によって生き、この原則に立脚して犠牲になる人は、必ず勝利するのです。自分が得た利益を自分の利益と考えるのではなく、より大きい国家の利益とみなし、勝利したならば、その勝利した価値を自分のものとしてではなく、国のものとして、世界のものとして返す、そのような思想を繰り広げていく団体があるとすれば、世界が滅びることはあっても、その団体は滅びないはずです。そのような内容をもった統一思想は滅びないということを、皆さんは知らなければなりません。

借りをつくっては統一ができません。借りをつくるところに統一はありません。借りがあっては天国を築くことはできません。借りをつくっておいて復興するという法はありません。借りたものの何倍もの利子をつけて完全に返すことのできる余裕ができたときに、富国が設定されるのです。天国というのは富国の中の富国なので、借りのある立場では不可能だということを知らなければなりません。

結局のところ、どこに行かなければならないのでしょうか。愛を求めて行かなければならないのです。お金も貯めて、世界も支配し、学者にもなり、人が良いというものはすべてしてみたところで、すべては使い道のないものなのです。ですからどこへ帰らなければならないのでしょうか。真の愛と一つになった自分自身、体と心、すなわち、神様の縦的人と横的人が一致する自分、このように一致した男女が神様の縦的愛を中心として、永遠に核が骨のようなものとなり、その体が回る、一つとなるそれ以外にはないのです。

これから皆さんは天国の愛の僕として暮らすと考えるべきです。天国を築く愛の僕であり、愛の秘密結社隊員であり、スパイ工作情報要員だと考えるべきだということです。だとすれば何でもできないことがあるでしょうか。生きるためには男性が女性の仕事をすることもあるのです。乞食のようなことをすることもあるのです。国を生かすため、自分の一族を生かし、自分の国を生かすためには、自分はそれ以上のことでもできるという心の姿勢をもって実際にそのように行動するならば、村は黙って屈服するのです。

真の愛を中心とした幹の根と、真の愛を中心とした真の幹の芽が必要です。皆さんのような芽ではなりません。ですから涙を流し、血の汗を流して、皆さんが、この地上に生きては去っていった多くの人以上の愛で、地のため、村の人のため、民のために愛したという基準を定めることによって、皆さんは正常な根を下ろし始めるのです。

皆さんは真の御父母様の前に真の子女の名分をもっているがゆえに、相続権、同位権を付与することができるのです。このような天の特権的な事実を信じて、すべてを愛の圏内に投入しなければなりません。神様が投入したように、皆さんが完全に投入することによ

って、一族が復活するのであり、一族が復活するに従って一国が復活するのです。

先生は世界的先祖の位置に立つために、このようなことをしてきましたが、皆さんは、自分なりに氏族的先祖となるための伝統を、それぞれの分野に該当する伝統を受け継ぐために、皆さん自身もそのような道を行くべきだという事実を知らなければならないのです。皆さんの氏族のために、一族のために伝統を立てなければならないということです。これから十二支派が編成されていくのです。ですから伝統が必要なのです。自分を考える人はここで落ちてしまうのです。

皆さんが故郷へ行くときには、真の愛をもって行かなければなりません。真の愛をもって故郷に行って、真の愛を植えて愛するならば、皆さんが先祖となるのです。皆さんが一代目の先祖となるのです。皆さんが朴氏だとすれば、朴氏として天国に接ぎ木され得る一代目となるのです。このように考えるならば、皆さんの父親は、逆に皆さんの息子格になるのです。

四　愛の根を故郷に下ろせ

今までは勝手に生きてきたとしても、これからは深刻なのです。私が敗者であるか、勝者であるかを決定すべき責任があるのです。その責任は先生にあるのではありません。皆さんにあるのです。敗者の覇権をもって帰るのでしょうか、勝者の覇権をもって帰るのでしょうか。どちらですか。真の御父母様が勝利し、神様が勝利したその内容をもって帰らなければなりません。その内容は他の何物でもありません。故郷に前進することです。世界を縮小して私の家庭にすべて反映したものなので、それを求めてきた御父母様と神様の蕩減歴史を考えるとき、人が訪ねてきたならば、涙で迎えてあげなければならないのです。ある人が自分を訪ねてきたならば、夜を明かして話をしてあげても疲れることのない心情が伴わなければなりません。

イスラエル民族がエジプトへ行って四百年間暮らしてきたように、私たちが四十三年間そのようなことをしてきたのですから、故郷に帰って愛の根を下ろさなければなりません。神様を愛し、父母を愛し、兄弟を愛さなければなりません。そうして世界的サタンが讒訴する起源を切ってしまわなければなりません。イスラエル民族はそれができなかったがゆえに、カナン福地の理想天国を形成できませんでした。ですからサタン世界に何かを望んではならないのです。ふろしき包みをもって歩いたとしても、私たちが一番です。行く先々でののしられ、夜に近所の犬にほえられても私たちが一番です。そのような自負心をもって、堂々とした足取りで、村の天地を愛の歓声と共に消化することに同参し、前進しなければならないということを肝に銘じて闘ってほしいと思います。

皆さんが故郷に帰ったならば、故郷の山河をもう一度眺めて「ああ、これは神様が私に下さった贈り物だ」と考えなければなりません。私よりも年を取った木のおじいさん、私よりも年を取った川の石、そして平野を眺めては「元気だったか」と言うべきです。それが愛です。自然を愛することができてこそ、人を愛することができるのです。再びそうし

なければなりません。復帰なのです。復帰。アダムが万物を愛せなかったので、万物を愛さなければなりません。郷土に帰って自然を愛さなければなりません。近所の草からあらゆる山川草木に至るまで、すべてを愛さなければならないのです。すべてを愛してから人を愛するのです。山川草木、動物まですべて愛することのできる立場に立ったならば、その基盤の上で人を愛するのです。万物を復帰してから人を愛するようになっているのです。

人を愛するときには、まず最もかわいそうな人から、かわいそうな子供たちから愛して、それから中年へと上がっていくのです。世の中の貧しい人には、良心的な人が多いのです。私たち統一教会の家庭は世の中で最も貧しい人を愛するのです。貧しい人は悪魔の世界にいるとしても、今後はそのような人の中から天運を受け継ぐことのできる人が現れると考えるのです。

今日皆さんは故郷に帰って、種となり得る存在にならなければなりません。そしてその種が蒔かれて、大韓民国はもちろん、天地が訪ねていくことができ、神様がいつでも訪ねていきたいような環境を残すことができなければなりません。そうしてからあの世に行くならば、天国の息子、娘として愛されて生きるに違いありません。そのような生涯路程を今から立てていかなければなりません。

五　霊界の協助と確信

今は霊界が極めて近くに来ているので、善なる霊人たちが地上に定住する時代が来ることでしょう。来て住むということです。それがどういうことか分かりますか。今まではサタン、悪魔が地上をすべて分割して主管してきたのです。しかしこれからは善なる霊人たちがその地域を奪い返して主管するのです。そのために統一教会員は涙を流し、血の汗を流してホーム・チャーチ（家庭教会）運動をしなければならないのです。精誠を尽くさなければならないのです。キリスト教が精誠を尽くした以上に、イスラム教、仏教、どの宗教よりも切なる心情をもって祈祷しなければならないのです。「あなた方を中心として地上に実体基盤が復帰されましたので、霊的基盤を中心とした霊界圏を通して統一教会は前進します」と祈祷するのです。

霊界に行った人々も私たちを通して初めて救われるということを知っていますか。ですから霊界に行った人のために生きるならば、霊界の福が皆さんのところにやって来るのです。そのように、霊界のために蕩減してあげて、悔い改める人であれば、その霊界が皆さんに従ってくるのです。霊界が皆さんを中心としてすべて動くということです。蕩減と悔い改めがそれほど重要だということを知らなければなりません。ですから、これらすべてのことを、家庭教会を中心にしてやっていけばいいのです。

地上で家庭教会祭壇を中心として活動し、精誠を尽くせば、各界各層の霊人が再臨して、地上の聖徒に協助することができるのです。三百六十軒の家庭教会祭壇の中には、仏教徒、キリスト教徒、儒教、その他の良心的な人たちが千差万別に生活しています。霊界にいる霊人たちは、教派と宗教を超越して再臨し、摂理の中心人物の前に導くという霊的な現象

が起こるようになるのです。家庭教会は、霊人たちが再臨復活するための条件的な祭壇だということです。

皆さんが一つ鉄則として知っておくべきことは、その地方から生まれた忠臣、愛国者、孝子、教会の牧師が尽くした精誠以上の精誠を尽くさなければならないということです。それ以上の精誠を尽くしさえすれば、彼らがみな協助するのです。それが条件なのです。そうすればサタンの讒訴圏以上の位置に立つことになるので、サタンが反対することはなく、霊界の協助によって皆さんの先祖が子孫に現れて、統一教会に行けと霊的に協助して、伝道するのです。

霊界にいる皆さんの先祖も、この世を眺めながら誇らしい子孫に協助しようと、地上に降りてきたがるのです。ですから多くの先祖が皆さんの周囲に降りてきます。これが氏族を中心とした宗派を超越した宗教世界です。理解できますか。皆さんの先祖が皆さんを信じて、皆さんを愛しながら皆さんに従いたいと思うのです。皆さんに従ってくるのです。そして皆さんに協助することに献身したがるのです。

強い信念さえもって進めば、皆さんの先祖は、お母さんであれ、親戚であれ、押さえつけて身動きできないように、口が開けられないように圧力を加えるのです。「私の言うことを聞け！」というようにです。なぜでしょうか。堕落した悪なる霊は退き、善なる圏内の本然の氏族的基盤を中心として、父母と連結され得る国家的基準までつながった御父母様と共に、世界的基準までサタンを押してきた基盤の上に立っているので、サタンは退き、天使長型霊界にいる皆さんの先祖が協助するようになっているのです。

それでは、誰に拍子を合わせるべきでしょうか。私が皆さんの動きに拍子を合わせなければならないのでしょうか、皆さんが先生に拍子を合わせなければならないのでしょうか。異議はないのです。そうしなければ霊界が動かないのです。先生の言うとおりにしなければ通じません。いくら才能があったとしても、いくら能力があったとしても、先生の願わないものを付け、指示していないことをするとすれば、通じないのです。それゆえ、その条件に天は退くのです。霊界の協助がなされないのです。天使長は協助することなく、破壊してしまうのです。

私は天国の法をすべて知っている人物であり、行くべきことすべてを知っている人物です。サタンの動きの秘法をすべて知っており、神様の作戦計画を知っている人物です。それゆえ、今世界ではレバレンド・ムーンが問題になっているのです。これからは霊界が私に協助する時が来るのです。もう少しすれば不祥事がたくさん生じます。

今日地上では、統一教会に来て祈祷すれば、一週間以内に先祖が現れて、すべて教えてくれるのです。そのような所にまで来たということです。それは何を意味しているかというと、今まで宗教が世界的版図をつくって、心情的絆によって縦的な行路を築いてきたのですが、そこから横的版図を世界的に広め、この世界の果てまでつないだので、霊界に行った先祖が氏族を中心として、初めて地上に再

臨して協助することのできる時代になったのです。ホーム・チャーチはそのような世界的な版図を縮小した基盤です。ですから善なる霊はどうなるでしょうか。昔は、来て協助しては帰っていったのですが、これからは地上に定住するのです。そのような時代が来るのです。定住、いいですか。定住といっても、先生の故郷の定州ではありません。（注：韓国語の定住と定州は発音が同じ）霊界に行った善なる霊が初めて定着して住むことのできる時代になるということです。ですから皆さんが統一教会に来て活動するときに、善なる先祖が皆さんと共に暮らして協助します。それゆえ氏族復帰が可能なのです。

天運に乗ってきたのです。一九八七年四月は新たな光が蘇生し、世界の希望がひとつところに集まって芽を出すのです。霊界の霊人たちはどれほど韓国に来たかったことでしょうか。霊人が韓国に来て、協助することのできるその日をどれほど待ち望んできたことでしょうか。みな集まるのです。ですから国のために血を流した人々、祭物になった霊たちが連合して、初めて御父母様に侍るための連合運動をするのです。その霊たちが今後世界的な霊人をすべて迎えるための仲介に立たなければならないのです。ですからその霊たちと連結してこの国を変えていくのです。

一度しなければなりません。今は霊界が「韓国を助けよう」ということのできる時代になったのです。今まで善なる霊たちが世界に散らばって、外部で働いてすべての基盤をつくり、その運勢に乗って来るのですが、誰が来るかというと、先生が先発隊となり、韓国のために生きた忠臣、烈女、愛国者がすべて先生の後ろについて来るのです。従ってきて、霊界にいるすべての宗団長を中心としてキリスト教、イスラム教を問わず、韓国の統一運動に協助しようとするのです。そのような旋風が押し寄せてくるのです。

皆さんも同じです。同じ神様が同じ信念をもっているのに、なぜ皆さんには霊界が協助するその結果が現れないのでしょうか。同じことです。みな自分というものが残っているからです。自分というものが残っているので…。先生はそのような警告をしたのです。困難だとしても……。足が棒のようになれば「足よ！　私は行かねばならないのだ」と言います。先生はそうしてでも歩くのに、若い者が……。そのような者は天罰を受けるべきです。若い者が昼寝をして歳月を無為に過ごすとは。それではならないのです。

皆さんが霊界に行ったとき、隔たりのない自由天地の主人の息子、娘になる資格をつくってあげようというのですから、どんなに有り難いことでしょうか。先生の言うことを聞いて、そのように生きたならば、霊界の領域は果てしなく、境界線がないので、どこへ行ってもみな「私がお前たちに協助した。そこの責任者がお前だった時、お前の時代に行って協助した」と言うのです。友達になるのです。一つの時代圏の中にいる同僚になるのです。

先生が言っているように、霊界が動員されなければなりません。霊界が動員されなければ、どうやって天国を形成するのでしょうか。形成できません。天国は真の父母から始まるのであって、今までの堕落した子孫から始まるようにはなっていないのです。アダムを創

造するときに天使世界の協助を受けたように、再創造も霊界から降りてきて、みな地上に協助しなければなりません。そうせざるを得ないようになっているのです。原理がそうなっているではないですか。復活原理がそうですね。復活原理がそのまま結果として現れてこそ真だと言えるのです。ですから霊界は先生のことがどんなに好きなことでしょうか。

世界的な時代に入った皆さんは、個人的な立場にあったとしても世界最高の聖人につながっています。それゆえ、その聖人のような心性をもって、そのような心的な生活をした人には、必要なときは、どこでも縦横無尽に協助できる基盤が霊的にできているのです。ですから今統一教会の動きに関して、全世界の各国の愛国者はすべて、この地上で統一教会の基盤を中心として背後の囲いとなって再臨し、定住しています。これを部隊にたとえれば、その国の民族の何十倍、何百倍もの人が死んでいったのですが、その人たちが来て陣を敷いて拡大工作を待っているのです。それゆえ、すべての宣教師は国家的な運動をなして総動員し、霊界と全体を代表し、犠牲を覚悟して総進軍命令を下せば、その霊たちが協助するようになっています。

統一教会は霊的な個人を動員することができ、連結的体制を通して先祖を動員することのできる能力をもっています。それを知らなければなりません。これまでの宗教は、霊界と肉界をつなぐことができなかったので、霊的な精誠を尽くすことによって、縦的な面に拍子と波動を合わせて、初めて接線をもつことができたのですが、今はもう、その放送局の中に入ったのです。振動板のような位置に立ったということです。波動なのではなく、波動を起こす送信機自体だということです。ここで周波数を何千にするなり、何十にするなり、短波にするなり、つなぎさえすれば、どんな波長、電波でも送ることができます。

私が放送局をもっているので「霊界にいる先祖は来て、私に協助してください。善なる先祖よ、来て協助してください。そのようなバイブレーション（振動）が必要です」と言えば、すぐに来て……。個人を呼んでも動くし、家庭を呼んでも動くし、氏族圏、民族圏、世界圏を中心としてつなぐことのできる足場が地上にできたので、それが動いて降りてくるのです。このようになれば、今まで私の体はあちらに行こうとしていたのに、我知らず反対を向いて引かれていくのです。二つの霊人体が来て一つをつかんで引いていけば、自分はつかまれているのが分からないので否応なしに引かれていくのです。ひとりでに走って入っていくのです。皆さん、それが信じられますか。これは空論ではありません。理論的なのです。

統一教会が動けば、マホメットが協助し、儒教、仏教の代表者たちがみな協助し、神様も協助するというのは理論的なことです。ですから、自分は人類を代表し、霊界を代表し、神様を代表しているので、全体が協助する位置で動く、という自負心をもたなければなりません。

過去においては、祈祷し、精誠を尽くしても宗教の教主とはその時にしか会えませんでした。会おうものならすべて分かれてしまうのです。ですからまた上がらなければなりませんでした。ところが今では、すべて宗教圏

を中心として地上に再臨することのできる時になりました。そのような時代が来たので、皆さんが過去時代、現在時代、未来時代を動かすことのできる実績がなければ天国へ行くことができません。それを知らなければなりません。

過去時代とは、今霊界にいる善なる霊、天使をはじめとした善なる霊の時代であり、現在時代とは、父母の時代です。そして未来時代とは、神様の時代です。それゆえ霊界を動員し、御父母様を動員し、神様を動員することのできる、そのような実績をもっていない人は天国へ行くことができないということです。アダムとエバに天使が動いて協助し、神様が動いたのと同じです。その次に宇宙はアダムとエバが動かさなければならないということです。

皆さんがこのホーム・チャーチ運動さえすれば、霊界がすべて協助するようになっています。ですから今後一九八八年以後は、本格的なホーム・チャーチに入るのです。そうなれば先生はここにいてもいなくても同じです。これ以上教えることはありません。これ以上とは。天国に入る証明書をどうやって準備するのか、すべて教えてあげたのです。その内容は地球ほどのダイヤモンドをいくつ渡しても得ることはできません。ですから霊界が皆さんをどれだけ……。「なぜこのような黄金時代を逃しているのか！」と言うのです。もう分かりましたか。

今まで霊界が御父母様を支持できず、協助できなかった理由は、完成した父母の位置を、堕落した霊界が協助するということは不可能だったからです。本来そうではないですか。原理がそうなっています。完成した御父母様の位置というのは、神様と、堕落していない天使長が後援するようになっているのであって、いくらサタン圏内の霊が多かったとしても、御父母様に協助することはできない位置にいるのです。

今霊界にいる霊人たちは、真の父母を通して生まれたのではなく、偽りの父母を通して生まれたがゆえに、真の父母に協助することはできないのです。しかし天使長の失敗したすべてのことを蕩減し、子女の立場で、アダムとエバが成長しているという立場においては、いくらでも後援することができるようになっています。それゆえ霊界が協助することによって、世の中が遠からず徐々に崩れていくのです。

六　我々の本郷と天国入籍の道

一) 故郷は創造本然の世界

人間の力、人間の知恵、人間の文化、その何をもっても真なる意味の平和の世界や、一つの統一された世界を望むことのできない時点にあるということを私たちは知っています。このような立場において、世界文化を解決するにあたって、最も中心的な問題となるのは何でしょうか。神はいるか、いないかという問題をはっきりと解明することが、何よりも重要な問題だと考えるのです。

もしも神様がいるということを全人類が知ったならば、神様のみ旨が何を志向しているかということがはっきりと分かるでしょうし、その志向するみ旨を知るとするならば、その世界はそれこそ、ほかならぬ一つの世界であり、平和の世界であり、理想の世界なのです。

皆さんは民族主義者になりますか。世界主義者になりますか。宗教は世界主義にとどまりません。人間にだけ良い主義なのではなく、神様にとっても良い主義であるべきだということです。しかし共産主義や民主主義は、人間さえ良ければいいという主義です。ですから神様まで良くなければならないという主義と、人間さえ良ければいいという主義と、どちらが良いでしょうか。神様も人間も良いという主義がいいですか、それとも主人を抜きにして僕だけが良いという主義がいいですか。宗教はそれだから良いのです。

私たち統一教会は他の何でもありません。統一教会は、母親、父親を愛するように兄弟を愛し、兄弟を愛するように氏族を愛し、民族を愛し、国家を愛そうというのです。母親、父親を捨ててでも国家を愛そうということです。世界を愛するためには自分の国も捨てなければなりません。また、天を愛するためには世界までも捨てようということです。より遠く、大きいもののために、自分に近い小さいものを犠牲にするという愛の道を行くのが統一教会の主流思想です。

統一教会とはいったい何でしょうか。右翼を抱き、左翼を抱き、この二つをつかんでどこへ行くのでしょうか。寄り集まって闘う闘争の世界を越えて、天の導く幸福の世界へ、ユートピアの世界へと導くのです。それを抱いて平面的に行くのではなりません。どういうことかというと、体制によって思想的に没落し、失敗したものを、統一教会がすべて収拾し得る論理体系を備えなければなりません。これを抱いて横的に動かすと同時に、宗教を中心として縦的な基準で動かすことのできる、霊的体験の基盤を中心とした超越的実体を追求する内容をもたなければならないのです。

統一思想は、人間的な面での人本主義や物質主義、そして過去のあらゆる神本主義をも体系的に理論化して、それを統合し得る内容をもつと同時に、縦的な面において宗派を超越してつないでいくことのできる、超自然的体験の宗教思想となるべきであるという事実を知らなければなりません。

統一教会の願う国とはどのような国でしょうか。今統一教会は大韓民国を経て世界へと進んでいます。統一教会は、現在のように、共産主義の唯物史観と、民主主義の唯心史観が争うような世界を望んでいるのではありません。この世界を超越し、神様の心情と愛の支配する国を望んで進むのです。

私たちの住みたいのは天国、天国で住みたいのです。天国に境界線はあるでしょうか。ありません。天国で使う言語は二つでしょうか。違います。人種の差はあるでしょうか。ありません。
では天国とは何でしょうか。人はすべて神様の懐から生まれたので、人類はすべて兄弟です。神様を中心として見れば神様の息子、娘であるので、みな兄弟であり、地上天国を中心として見れば民です。地上天国の国民だということです。民だというのです。

国がなければ国籍というものはありません。国がなければ入籍する基盤がないということです。私たちは民族を編成して、新たに入籍しなければなりません。この地上で天国を編成して、その国籍をもって、愛国愛族の真なる善の父母の血統を受け継いだ勝利的息子、

娘として、自分の族属（一門）あるいは家族を率いて生きてこそ、天上世界の天国に入ることができるのです。それが原理です。

家庭の天国とはどのようなものでしょうか。妻は夫のために一〇〇パーセント存在し、夫は妻のために生き、妻のために死ぬという立場に立つとき、その家庭こそがほかならぬ天国なのです。「家和万事成」という格言があります。国が栄えるのも同じです。国を治める主権者自身の存在価値は、自分が主権を行使することではなく、民のために治めることにあります。またその民は、民自体のためというよりも、国のために……。このようになればその国は天国になるのです。

このような原則を拡大していくことによって、国家、民族を超越して互いに「ため」に生きる世界を築くならば、その世界こそ、私たち人間の願うユートピア的愛の世界であり、理想の世界であり、平和の世界であり、幸福の世界であるに違いありません。「ため」に存在するというこの原則をもって進むならば、どこでも通じないところはないのです。

私たちが探し求めていく祖国というのは、今日この地上にあるような歴史や伝統をもった国ではありません。それらとは次元を異にするその国を私たちが受け継ぐには、それにふさわしい思想的な主体性をもった国民とならなければなりません。ただし、その主体的な思想とは、絶対的な創造主の思想と一致するものでなければなりません。絶対者の願う国が存在するためには、その国の主権を中心として、その国の国民が一つとなり得る国であることを望まなければならないのです。そのような国民性をもち、国家形態を備えなければなりません。

自分が行き来するのも、その国を復帰するため、祖国光復のための建国の功臣となるために使命を帯びてのことであり、天の密使としての指令を受け、今日の悪なる世に来てこのようなことをしているという事実を考えながら生きていくべきです。

二) 天国に入籍するには

皆さんは、そのままでは御父母様の前に直接行くことはできません。皆さんは血統が違いますね。入籍する前に相続権を受けることはできません。皆さんはまだ入籍していません。先生の族譜に入籍しましたか。祝福を受けたからといって、入籍したことにはなりません。祝福を受ける位置は長成期完成級、その位置です。七段階の完成級七年路程が残っているのです。それが原理です。その原理を中心として復帰していくのです。

入籍時代に入って名簿を作るとき、適当に作ることはできません。ホーム・チャーチを経なければ名簿に記入されないのです。天国の族譜編成ができないのです。祝福家庭でも外すのです。落ちるのです。それをわきまえて、天の提示するすべてのことを早くしなければなりません。人がするから自分もする、というものではありません。しなければならないのです。それをせずに霊界に行けば、霊界に行ってから永遠にしなければならないのです。地上で解決できないまま行ったならば、大変なことになるのです。

悔い改めなければ、皆さんは公議の審判を受けなければなりません。愛のその掟の前に立つ者はいないのです。そのときには先生が弁護士となって、先生の家族一族が弁護士となって、皆さんを指導する統一教会のすべての人が弁護士となって、神様も、先生も、先生の家庭から指導者までが弁護して、弁護の範囲が讒訴圏よりも大きくなって、初めて善なる天国の民として入籍できるのであって、その讒訴圏よりも小さければ入籍できないのです。

統一教会員は絶対自分勝手に生きてはなりません。自分の心を偽ることはできません。自分の心を偽れない限り、天国の戸籍を偽ることはできません。すべてのことが入籍に関係するのです。私がこの手を上げれば、それが今ビデオ・テープに記録されますね。人の世でもこのように記録されるのに、天の国に記録されないと思いますか。ボタンを押しさえすれば、ある祝福家庭の夫婦の幼いときから、その先祖のころからがすべて出てくるのです。一瞬のうちに出てくるのです。長時間ではありません。ここでは時間の観念がありますが、天国ではあっという間に終わるのです。

入籍というのはどういうことか分かりますか。女性が嫁に行けば籍を移さなければなりません。自分が生まれたもとの籍を取り消して、違うところに移さなければならないということを私たちは知っています。

大韓民国は今後私たち統一教会を中心として祖国をつくることによって、大韓民国を中心として入籍する時が来るので、今まで動員された人はみな、今後大韓民国の土地を買うことのできる時が来るのです。先生を中心として大韓民国を動かすことができるならば、西洋にある自分のすべてのものを売って、大韓民国で小さな小屋暮らしをするとしても替えなければならない時が来るのです。

もう死んで、村の裏山に行くように（注：普通、裏山に墓がある）気力もなく、（部屋の中から）敷居の向こうを眺めながら「年老いたから……」と言っています。年老いても伝道しなければなりません。自分の母親、父親をみな天の前に入籍させてから霊界に行かなければ大変なことになるのです。

母親、父親に、歴史上の自分の先祖の前に、自分の兄弟の前に、自分の親戚、姻戚を中心として歴史的に偉大なことをすることのできるこの時代、この時を迎えているのが統一教会の祝福家庭なのです。

今まであなた方に伝道しなさいと言ってきたのは、威信を立てさせてあげるためなのです。今後、族長を立てて、七十二族長を立てて、すべてそのようにして、新しい入籍時代が来るので、その軸に入れてあげようとしているのに……。実績があってこそ入れてあげることができるのです。

これからは入籍するのです。南北が統一されるときには、世界の統一教会の家族は祝福家庭の中で正常な行動をした人はみな、氏族を越えて入籍するのです。先生の力によって南北が統一されたならば、法をつくって世界の統一教会の忠臣を代表民族として、種を受け継ぐ民族として立てようというのです。そうしても反対する者はありません。歴史的に

見て、韓国の独立のために、韓国の還故郷のためにこんなに尽力したのですから、誰が反対するでしょうか。

皆さん、これからは氏族加入時代が来ます。個人加入時代ではありません。氏族加入時代が来るのです。金氏であれば金氏、朴氏であれば朴氏。それが過ぎれば国家入籍時代が来るのです。すぐです。これからは早いのです。目の回るほど早く変わっていくのです。なぜそうなるのでしょうか。文総裁がいるのでそのようになっていくのです。原因はほかにあるのではありません。

所有権を神様にお返しするためには、真の父母の名を通さなければなりません。真の父母の名を通さずしては、帰っていく道がありません。それゆえ世界統一は統一教会が中心とならざるを得ないのです。手を下さなくても、誰もが少しでも早く入籍しようと列をつくって待つようになるのです。一番、二番、三番を争いながら必死になる時が来るのです。

これから入籍する時が来ます。先生の一族、皇族を中心としてつながるところに、皆さんが加入するための入籍時代が来るのです。しかし入籍時代になっても氏族復帰ができていない人は、そこに入籍することができません。それを知らなければなりません。十二支派と同じです。氏族復帰をするまでは入籍できないのです。

人々がこの氏族復帰の内容を知ったならば、我先に統一教会に入ろうと、群れをなして押しかけてくるのです。入籍すればどうなるのでしょうか。今までは愛をはじめとして、人から万物まで神様の所有ではありませんでした。サタンの愛によってサタンのものとなっていたものを、今は神様のみ旨を成し遂げた先生を中心として、先生の息子、娘、先生を中心とした万物を復帰していかなければならないのです。そして、いまだ先生には国がないので、国を求めて立てなければなりません。

これはサタンの所有地であり、神様の所有ではありません。所有権の回復というのがあるので、天下は戦争なしに一つとなるのです。どういうことか分かりますか。今後、一族が財産とすべてのものを合わせて天に入籍するために、世界の歴史上で類を見ない行列が続くことでしょう。そこに誰が先に入籍するかによって、兄となり、弟となるのです。

今まで天国への入籍はありませんでした。天国に国がなかったのです。家庭もなく、国もありませんでした。霊界に行けば、親も何も、十人家族だとすれば、十人がみなばらばらになったのです。しかしこれからはそうではありません。本来堕落しなかったならば、お母さん、お父さん、自分たち夫婦、息子、娘が一つになって、相手のためという真の愛をもつならば、それには神様も絶対服従するのです。そのような愛の伝統に服従しながら相手のための愛をもって動くその世界、「ため」に生きるその世界では、平和の基地が生じるなと言っても生じるのです。

これからみな越えていかなければなりません。越えなければならないのです。越えるには整備しなければなりません。一つとなって夫婦の日記をつけなければなりません。そして息子、娘の公認を受けて、みな入籍しなけ

ればなりません。入籍時代が来るのです。清算して越えなければなりません。そのときにはサタンがついてくることはありません。そのように深刻な時が来ます。祝福家庭はみなこれから日記をつけなければなりません。たやすく通り過ぎてはならないのです。

これからは世界がみな入籍しなければなりません。十二支派を中心として。入籍するときには皆さんの人生、統一教会に入ってから今までのすべてのことを、一つ残らず記録しなければなりません。この教会から何か一つ、ふろしき一枚でも持っていったならば、それをすべて記録しておかなければなりません。これが霊界に記録されたコンピューターの記録と合っていなければ、皆さんは入れないのです。

王族の心情圏を中心としたところでは歓待のみであって、崖や壁といったものは一つもありません。平地なのです。全体が歓迎し、万年の愛の世界がつながっているのです。そこの主人として生きるのです。自分の一族がそうなるのです。一族がみな集ったその栄誉の価値をもって入籍して天国に入るのです。入籍するのです。新たに入籍して天国に入ることができるように、清い解放の氏族長として、メシヤとして、父母として、自分が率いてあげましょう。

今後天国が地上に建設されればこのようになるのです。憲法がそうなるのです。全体を天国に帰化しなければなりません。それゆえ統一がなされないわけがないのです。強制的にするのではありません。志願しなければなりません。そうすれば移籍する日が来るのです。その氏族が入籍する順番となるので、先に入籍すれば先祖になるのです。残りはその前で頭を下げなければならないのです。

自由な環境舞台が訪れるこの時代において、イスラエルの王権を造成すべき独立軍であることを肝に銘じなければなりません。小隊長になりますか、中隊長になりますか、連隊長になりますか、師団長になりますか、軍団長になりますか。皆さんの活動いかんによって左右されるのです。
これからは兄、姉、弟、妹がみな一方では競争になるのです。勝利した人が、先に登録する人が兄、姉になるのです。先祖になるのです。天地開闢の時代が来るのです。祖父が孫になり、父親が息子になり、弟が兄になり、姉が妹になる時代になるのです。誰が先に入籍するかが問題です。

天国の法を守り、天国の王宮法を尊重できなければなりません。それがどのようなものか知りませんね。今後、南北が統一された世界のすべてに備えなければなりません。その訓練をすべき内容が残っています。そのときには、誰もが入れるわけではありません。入籍時代が来るのです。それは、大学を卒業して博士として大学の先生になることよりも難しいのです。自分一代の一族の歴史をすべて編成して、そこにパスしなければなりません。霊界、肉界から鑑定を受けて選出するのです。

天運は相対圏をもった人を保護するようになっています。ですから献金をしなさいというのです。それは当然のことです。すべてを、一族を神様のところに連れて行かなければなりません。そこでは誰が先祖になるかという

と、先頭に立って率いる人が先祖になるのです。久保木が統一教会の会長であっても、率いていくことができずに、今み言を聞いている人がすべてを率いて入籍するならば、久保木会長が何代も後の孫になるのです。入籍を先にした人が先祖になるのです。

そのような時代になったので、先生は命令をするのです。「早く氏族復帰をしなさい！所有権を神様に返しなさい！　早く入籍しなさい！」。これは人間としての最大の希望です。先祖以来、千万代を経た希望がここにあるのです。肝に銘じ、忘れてはなりません。そうすることによって、未来において日本の黎明の朝が過ぎ、輝く太陽を迎える喜びを体恤するようになるのです。

天国での財産とは何でしょうか。今は天国の国民がいないので、復活させて天国の国民を連れていく以外に方法はありません。天国の国民がいなければ、霊界での財産というのもありません。それゆえ、皆さんが生んだと言っても、皆さんの息子、娘ではないのです。日本の一億二千万すべてが神様の国民になる道を探さなければなりません。

いかにして多くの日本人を皆さんの息子、娘と共に天国の国民として入籍させるかというその数字が、皆さんが霊界に定着するにあたっての礎石となるのです。それがなければ、たとえ統一教会の会長を何十年したといっても、すべては無駄なのです。今までは統一教会が反対されていたので不可能でしたが、これからは全世界的に先生を尊敬するようになるので、可能なのです。

真の父母と一つになって伝統を相続し、皆さんの家庭が主体的伝統をもって万国を治めることのできる基盤となり、主体性をもった家庭となったならば天国の皇族圏内に入籍するのです。このようにして入るのが天国です。天国は誰もが入ることのできるところではありません。その道を行こうと三代が決心しなければなりません。おじいさん、おばあさんから父親、母親、夫婦、息子、娘まで、段階は四段階であり、系列でいえば、夫婦になったのが三代です。

これから皆さんの行くべき道には反対がありません。先生がすべてつくってあげました。すべてふさいであげました。すべて取り壊してあげました。ですから皆さんは先生をどれほど崇拝しなければならないでしょうか。皆さんが迫害時代に先生を崇拝していたその何百倍も、皆さんの子孫が崇拝することのできる伝統を残さなければ、天国という本貫（注：先祖発祥の地）に入籍することは難しいという事実を通告しているのです。皆さんの息子、娘が、皆さんが先生に侍っていた何百倍以上も侍ることのできる基盤をつくっておかなければ、離れてしまうのです。押し出されてしまうのです。

入籍しなければなりません。入籍するためにどこへ行こうというのですか。本郷の地に帰らなければならないという運命を、避けることはできません。生きているうちにできなければ、霊界に行ってから後戻りして、億千万世、回りに回りながら涙と嘆息で越えなければならないという、堕落圏の支配から逃れることはできないのです。ですから、直行することを願って、皆さんの前で詳しくお話し

しましたので、それを忘れずに肝に銘じ、勝利の天国の門に入る王権を受け継ぐことのできる、そのような相続を受け継ぐことのできる皆さんとなることを願う次第です。そうするという人は諸手を挙げて宣誓してください。

第六章　真の父母が伝授する世界と南北統一教本

一　「世界と南北の統一は真の愛で」

世界と南北の統一を熱望する内外の貴賓、そして紳士、淑女の皆様！

今正に始まった新千年紀は、分裂と・藤の前世紀の遺物が清算され、和解と統一の地球村、一つの家族の理想が実現される時です。皆さんの各家庭に、新千年紀の祝福が共にあらんことを祈願いたします。初めに、私の八十回の誕生日を祝賀してくださるために、世界と全国の各地から訪ねてこられた皆様に心から感謝申し上げます。何よりも、この日まで見守ってくださり、共にいてくださった神様に、このすべての栄光を捧げます。

私の生涯を振り返ってみるとき、一時も平坦な時期はありませんでした。私は韓半島を取り巻く列強の狭間で、あらゆる苦難の道を歩んできた民族の受難史と共に歩んできました。

私は、十六歳（数え）の少年時代に祈祷をしている最中、突然、神様のみ旨に接したのち、生涯を通して神様のみ旨を成就するために、全身全霊を尽くしてきました。そうして知ってみると、人間の不幸の根本原因は、人類始祖が堕落することにより、霊的無知に陥り神様との関係が断絶されたことにあったのです。これによって、神様と人生と宇宙などの根本問題について無知に陥ったのです。これまで私は、世界各地の公式席上で、一万回余りのみ言を通して、神主義に立脚した真なる人生観、世界観、歴史観を提示してきました。これは、十二種類の世界各国の言語に翻訳され、既に三百巻余りの書籍として出版されています。これは、文献による総合的な研究や、学問的な探求の結果として解明したものではなく、有形、無形両世界を自由に行き来しながら、原理的であり、根本的な答えを説き明かしてきたものです。

きょう私は、意義深い場を感謝しながら、我が民族の宿願であり、世界の冷戦問題の最後の決算と言える韓半島の統一問題を念頭に置いて、その方案に対する根本的な解答として「世界と南北の統一は真の愛で」という題目で、お話ししようと思います。

我が国の統一は、単純に国土の統一だけでなく、これは、堕落によって引き裂かれた人間の心と体の統一問題から始まり、東西の二大世界に引き裂かれた全世界の統一のためのモデル的路程です。したがって、この問題は、神様の救援摂理的側面から理解しなければならない事案であるがゆえに、摂理的次元から解いていかなければならないのです。

人類歴史は、人間始祖が堕落により失ってしまった本然の世界を再び取り戻すための蕩減復帰歴史です。

ゆえに歴史は、神様の創造理想を実現させるための目標を置いて、サタン側と天側の善

悪闘争の歴史なのです。歴史の背後ではいつも、善なる側には善霊が協助し、悪なる側には悪霊が作用してきました。人間の堕落により始まった分裂の歴史は家庭、氏族、民族、国家、世界へと範囲を拡大しながら、結果的に人本主義と神本主義の根幹となった無神論と有神論の対決として現れたのです。

二千年前、ユダヤ民族がイエス様を受け入れていたならば、イエス様はユダヤ教を基盤としてユダヤの氏族と民族を統一し、十二支派の後孫たちが住んでいたアラブ圏を統一していたことでしょう。さらに、イエス様の思想が中東地域とインド地域を経て極東にまで伝播され、一方では、ローマ帝国と全ヨーロッパを掌握し、イエス様の時代に統一された一つの世界が成し遂げられていたことでしょう。最終的には、イエス様を中心として一つの新しい宗教文化圏を形成し、イエス様は世界の王の王にならなければならなかったのです。

しかし、イエス様が十字架にかけられることによって、それ以降、外的な肉的文化圏である人本主義のヘレニズムが先に発達して、ローマ文化を形成しました。一方、内的な心の文化圏である神本主義のヘブライズムを代表するキリスト教は、四百年の間、ローマからあらゆる迫害を受けたのです。人間始祖の堕落によって引き裂かれた善と悪の闘争歴史の背後で、サタンは今、何をねらっているのでしょうか。神様をはっきりとねらっています。永遠、不変、絶対、唯一であられる神様が、天地創造時に理想とされた基準も永遠、不変、絶対、唯一でなければなりません。サタンはそのような神様の絶対的なみ旨を破壊しようとするのです。

神様にお尋ねしてみれば、神様は、その事実を認められることでしょう。サタンが神様に、「神様！　最初に私を天使長として立てられたとき、一時的な愛で立てられましたか。そうでなければ、永遠なる愛のために立てられましたか」と質問するならば、神様は、どのように答えられるでしょうか。それを考えてみなければなりません。神様は、永遠に愛するために立てられたと語られることでしょう。一時的な愛で立てたとするならば、一時的な神様となります。永遠に愛するという基準をもたなければ、いつかは、サタンの前に神様の権限を行使することができなくなるのです。

ゆえに神様は、サタンがどんなに反対しても、彼を愛したという条件を立てざるを得ないのです。それで、神様は悪に対しては「無抵抗主義者」なのです。それはどうしてでしょうか。神様は、この地球上に天国理想の世界を成就する時まで、どのような環境の中でも、堕落してサタンとなった天使長を愛さなければなりません。神様は、サタンがいくら暴れ回るとしても、罰したり、打ってしまうことができないのです。どのような状況でも愛したという条件と基準を立て、サタン自身が「ああ、本当に神様は神様であられる。幸福でした」と告白しない限りは、神様は、完全なる勝利を成し遂げることができません。それが問題なのです。

神様がそのようにサタンを愛することによって屈服させることが、復帰原理的な道であ

るならば、神様の子女である私たちも、やはりその道を行かなければなりません。世界的に迫害を受けても、世界的な怨讐圏に立つとしても、彼らを愛したという条件を立てなければなりません。このような側面から、悪を自然屈服させようとする神様の戦法は「怨讐を愛せよ」ということでした。

話は簡単ですが、これが神様とサタンの間で勝敗を分ける境界線となってきたということを誰も知りませんでした。神様がサタンを敵であり怨讐であると見なし、彼に対して復讐しようという思想をもったとするならば、絶対に勝利の頂を占領することはできません。反対に、神様は「怨讐を愛せよ」と言って、愛の作戦を繰り広げてきました。神様のひとり子であるイエス様は、サタンが役事して自分を殺そうとする怨讐に対して、彼らを許し給えと祈祷したということは、偉大なことです。もし、イエス様が十字架で死ぬときに、怨讐に対して敵愾心を抱いたならば、摂理は逆転したことでしょう。福を祈る愛の心をもって死を克服したために、サタンが自然屈服したのです。永遠に神様の子女として残ることができる資格が、そこで生まれたのです。サタンもこれを認め、「あなたは、本当に神様の息子である」とサインするのです。

皆さんも神様の前で、「サタンよ、私が神様の息子であることに間違いないだろう」と問えば、「はい、間違いありません」、また「神様の息子としての相対圏を拡大していくであろう。個人から、家庭、氏族、民族、国家、世界圏に拡大するのに異議はないだろう」と言えば、「はい、それは原理原則なので仕方ありません」と答えるように行動しなければならないのです。

神様は、このような条件に従って、キリスト教文化圏を中心として摂理を推進してきました。犠牲の道、殉教の場、血まみれの境地においても神様を愛し、怨讐までも愛する運動をキリスト教は展開してきたのです。私たちは家庭、社会、国家、世界においても、この運動を展開しなければなりません。キリスト教の愛の精神によって、激しく迫害を加えてきたローマ帝国がついに屈服しました。キリスト教は、そのようにして世界的な宗教になりました。これまで、クリスチャンは個人的な怨讐だけを考えてきたのですが、そうではありません。怨讐国家や、さらには怨讐世界も愛さなければなりません。怨讐国家の中心に天国の出発点があるので、そこに真の愛の伝統基盤をつくって出発しなければ、地上天国は成し遂げられません。このようにして伝統が立てられれば、これ以上の思想、これ以上に消化できる主義は生じません。韓国が日帝のもとにあったとき、韓国、日本、ドイツ、米国など主要な摂理的四大国家は、互いが怨讐の関係でした。その当時の状況では、日本と韓国が怨讐の関係であり、日本と米国が怨讐の関係であり、米国とドイツが怨讐の関係です。

ところが、私はこのような怨讐関係にある日本人とドイツ人を米国に連れていき、米国が神様を無視し、神様を失ってしまったら滅んで死んでしまうので、米国を生かさなければならないと言って、真の愛の道を実践しました。日本やドイツの人々に「敵対関係であった米国を、自分の祖国以上に愛することが

できる伝統を立てることなくしては、神様が望まれる新しい世界理念を立てることができない」と強調し、真の愛の伝統を教えたのです。怨讐関係にある国家を自分の祖国以上に愛する基盤と伝統を成さない限り、地上に天国は顕現できません。このような歴史的な伝統の樹立は、神様の真の愛の中でのみ可能なのです。

私は、米国連邦政府より屈辱を受けて罪なく法廷に立ったとき、米国の未来を心配し、保守正論紙、「ワシントン・タイムズ」を発行し、放送局を設立させるなど、むしろ米国のためにあらゆる努力をしたのです。近来では、共産主義の没落以降、ロシアと中国の未来を心配し、数十種類にも及ぶ各種の教材を出版し、青少年を中心とした倫理教育に多くの支援をしています。

皆さん！　日帝のもとで反日地下運動をしていた私にとって、日本民族は怨讐でした。民族的にはもちろんのこと、個人的にも怨讐でした。しかし、日本が敗戦したのち、私は日本人を愛しました。地下独立運動をしたからといって引っ張っていき、むごい拷問をした日本の警察官たちは、私が一言言えばみな処刑される運命だったのですが、反対に、追われている彼らを安全に送ってあげたのです。

今日、日本の多くの若者たちがなぜ、私に永遠なる命を懸けて忠誠を尽くしているのか分かりますか。因果の法則に従って、報いなければならない原則があるためです。それは、私が国家を超越し、神様の心情的なみ旨に従って、世界に向かって真の愛を植えたからです。国家的な怨讐を愛して生きる道に導く心情的な基盤を植えたので、自分たちも知らずに天命に従っているのです。

私は、日帝のもとで当時の日本にも恨みがあったのです。しかし、日本は既に敗者でした。天は、滅びる者をさらに打つことはしません。自分の罪を自白して、謝罪する者に対しては、哀れみをもって対するのです。そのような天であるので、敗者にさらに刃物をもって打てば、打った者の後孫が滅びるのです。米国もやはり、私を敵対視していた国家です。しかし私は、道徳的に塗炭の苦しみに陥った米国を救うため、父母兄弟をあとにして、祖国を振り返ることなく、カイン世界を救うために、私に属しているすべてのものを捨てました。

また、既成教会が統一教会をどれほど憎んだことでしょうか。しかし、怨讐のように闘ってはなりません。お互いに、愛で和合しなければならないのです。二つが和合して、大韓民国を天のみ旨の前に立て、北朝鮮を消化しなければなりません。

解放直後に、既成教会と統一教会が一つとなっていたならば、すべてのことが解決されていたでしょう。しかし、そのようにならなかったので、私たちが行く道の前において、個人的、家庭的、氏族的、民族的、国家的な怨讐と対峙するようになり、それでも闘わないという条件を立てるために、無限なる犠牲を払いながら受難の道を克服してきたのです。

内外の貴賓の皆様！

既に北朝鮮の人たちは、全国民が金日成の主体思想で武装しています。私たちは、彼らを消化することができる神様の真の愛の思想で武装しなければなりません。北韓は、ソビエト文明から来た冷たい風が吹きつける、北方文明です。私たちは、温帯文明によって彼ら自身が自ら溶けていくことができるような作戦をとらなければ、お互いが滅びるのです。ゆえに、私たちは徹頭徹尾、真の愛の思想武装をしなければなりません。私たちの思想は、個人の欲望のためのものではなく、世界人類を救うためのものです。自分を中心としたものではありません。より大きなもののために生きようという思想です。

しかし、共産主義者たちは、共産党員の何人かの幹部を中心として成そうとするのです。それで彼らは、自分の敵が現れれば除去してしまうのです。私たちはそうではありません。「相対的環境と和合し、一つとなって、より高い次元の相対的基準を成そう。すなわち、カインとアベルが一つとなって、より高い父母を迎えよう」という思想です。言い換えれば、生活的に感服させ、人生観や、人格的な基準を中心として、共産主義の思想で武装した彼らを凌駕することのできる私たちとならなければなりません。私たちが彼らに影響を与えることのできる環境をもたなくては、カイン国家を復帰することができません。カイン国家を復帰できなければ、天の国を中心とした世界的な国になり得る復帰の国家が成立しないのです。

したがって、南北韓は分断されましたが、北韓と闘わずして解放しようというのです。ゆえに、お互いに利益となる愛し合う道を探し求めなければならないのです。

皆さん、現在、南と北の目的が食い違っています。方向が異なった立場で、一方は南に、もう一方は北に行こうとする分かれ道にいるので、その目的が異なっているのです。どのように統一されるかという問題をおいて見るとき、深刻です。その主体的使命を誰がしなければなりませんか。それを南韓がすると言うとき、北韓が反対するでしょうし、北韓が主導すると言うとき、南韓が反対することでしょう。互いが、「我々がしようというとおりにしよう」と言うときには成されないのです。自分自身の立場に固執すれば、必ずまた決裂することでしょう。これをどのように克服するのかが問題です。問題は、南韓の人が南韓を愛する以上に北韓をもっと愛するという人が出てこなければならないということです。

同様に、北韓の人が北韓を愛する以上に南韓を愛する人が出てこなければならないのです。それ以外に、模索方案、解決方案がありません。南韓の誰よりももっと国を愛する人、北韓の誰よりももっと国を愛する人、そのように一つの道を行く人がいるというとき、そこから超国家的な統一方案が出てくるのです。それ以外に道があるでしょうか。どんなに考えても、それ以外に道はありません。

それでは、これをどのように実践するのかが問題です。それは、北韓の人よりももっと苦労し、南韓の人よりももっと苦労することです。このような苦労の中で立てられた超民族的な愛国心が南北を生かす近道であり、解

決方案なのです。悪なる世界と善なる世界を統一するのも、やはり同じです。これまで、私たちの先祖が立てた忠臣の道理以上の忠節を主張することができる人が現れてこそ、決裂した歴史を収拾することができるのです。

そのような観点から見るとき、イエス様は偉大でした。ユダヤ民族が不信し、十字架の道を行かざるを得ない立場になられると、神様のために生き、イスラエル民族のために生きる道は、神様のために死に、イスラエル民族のために死ぬことしかないと考えたのです。それが十字架の道理なのです。人類を愛することにおいて、歴史始まって以来誰よりも人類を愛し、神様を愛することにおいて、歴史始まって以来誰よりも愛したので、滅びつつあった歴史が、そこから新しい方向に向かってより次元の高い善の目的の世界に進出したのが、キリスト教文化圏です。それは歴史的事実です。

ゆえに、南北を統一することができる方案は、南と北のために死ぬことができる群れとなる道しかありません。それ以外に、統一することができる道はありません。本当に、共に生きたいという心がなくてはなりません。人間がどのように生きるのか、あるいは、私たちの人生航路をどのように行くべきかということを念頭において見るとき、その骨子を要約するならば、孝子が行く道、忠臣が行く道、聖人が行く道、聖子が行く道の根本があるはずです。まさしく、永遠に共にいたいと思い、共に生きたいと思う心です。上下を問わず共にいたいと思い、前後左右、昼夜を超越し、生涯を越えて、共に生きたい思いに満ちた人生のことではないでしょうか。このような結論が出てくるのです。「共に、一緒に生きたいなあ」という、その内なる共通分母とは何でしょうか。それは権力ではありません。権力は歴史を超越できません。

それは一時のものです。知識もやはり同じです。知識世界は発展するものです。知識の世界で、この学問と永遠に共に生きたいという思いがあるでしょうか。間違いなく私たちが共に生きることができるのは、知識でもなく、お金でもありません。

このように見るとき、上や、下や前後左右の区別なく、過去、現在、未来の時間性を超越した立場から、共通的に認定することができる一つの分母とは何でしょうか。これがすなわち、神様を中心とした真の愛だというのです。ですから、孝子は、家庭で父母を限りなく愛して生きる人です。また、愛国者は国をこの上なく愛して生きる人であり、聖人は世界万民をこの上なく愛する人であり、聖子は人類と神様をこの上なく愛しながら生きていく人なのです。

したがって、愛国者の心のように、民族と共に生きたいと思い、民族が困難なときには、その困難がすなわち自分のことであり、自分の痛みであり、喜びがあるとすれば、それが過ぎ去る喜びでなく、私たちすべての喜びとして永遠に残ることができるものでなければならない、と誓うことができる真なる心情の基盤が問題なのです。真なる愛と心情の因縁をもった人は、統一圏に同参できる特権があります。

皆さん、全く字を知らない女性でも、博士と結婚して愛の因縁を結ぶならば、一日にして博士夫人になるでしょう。このように、共に生きようという情の因縁をたくさんもった人は、今日、統一圏に堂々と参席することができる特権があるのです。神様御自身がそのようなお方であるために、一つとなることができる生活内容をもてば、同参することができる資格が自動的に賦与されるのです。

それでは南北統一は、どこから、何をもってするのでしょうか。力で屈服させるならば、相手側の力がもっと大きくなるとき、また闘いが起こるようになります。その方式では統一を成し遂げることができません。たとえ以南の地で暮らしていても、北朝鮮で暮らす彼らと真心から共に暮らしたいという心、一つにならなければならないという心があってこそ、統一の道が開かれます。北朝鮮を思いながら胸が詰まり、哀れに暮らす私たちの同胞のために涙を流し、あなた方の困難と共に私は生きている、解放の一日を準備してあなた方の前に現れることであろうと誓いつつ、統一のための真の愛の実践運動がここに起こるならば、統一の日は遠くありません。

皆さん、その最初の段階として、郷土とどのように生きるのかを考えてみなければなりません。自分の父母と共に生きたがらず、郷土と共に生きたくない人が国を愛するというのは偽りです。国と共に生きてこそ、世界と共に生きるようになっています。そして、世界と共に生きてこそ、神様と生きるようになっています。ゆえに郷土を愛し、その地域社会を愛してこそ、愛国も可能なのです。政治をする指導者たちが国をどれほど愛していますか。彼らに、国民と共に真心から共に生きようという心がないときには、そのような政治家は流れ去ってしまうのです。どんなに優れていても、水の泡のように流れ去ってしまうのです。

引き裂かれた南と北がそのまま一つとなることはできません。愛国の同志たちが闘争するその過程では、夜寝ることもせず、時間を超越して、困難な環境を克服することができる心の決意と実践が必要なのです。「本当に共に生きたい。死んでも共に死に、生きても共に生きたい」という、そのような心を互いがもつようになるときに、南北統一運動が始まるのです。南北統一を成し遂げれば、民主世界と共産世界の統一も、ここから起こるのです。ですから、韓国問題を心配する場合は世界を代表した立場に立って、六十億人類を代表し、三十億のアジア人を代表し、民族の将来、世界の将来を見通さなくてはなりません。

そして、「私は、あなた方と共に、本当に共に生きる運動を展開するだろう」という誓いをしなければなりません。それが聖人の道理に通じれば聖人に似るのであり、聖子の忠節をもって神様に対して実践すれば、「神様の相続者」「み旨の後継者」となるということを、私は生涯を通して確認したので、きょう皆さんにこのようなみ言を伝えているのです。

内外の貴賓の皆様！

神様の真の愛を中心として互いに因縁を結べば必ず主管権と所有権、それから、相続権

をもつことができる特権が賦与されます。力学では入力よりは出力が小さいですが、真の愛の世界では、入力よりも出力がもっと大きいのです。

真の愛とは何でしょうか。「他のため」に生きる愛であり、与えてはそのまま忘れてしまうものです。与えたことを、ことさら記憶もしないのです。また、どんなに降り注いでも、疲れるということを知りません。九十歳を超えた父母が、七十歳になった息子に、「息子よ！　車に気をつけるんだぞ」と言っても不自然でなく、何十年間、その言葉を数限りなく繰り返したとしても嫌気がさしたり、疲れるということがありません。堕落した世界の父母がこのようであるのに、いわんや、本質世界で父母なる神様の愛を授け受けするとき、疲れるはずがあるでしょうか。人生で真なる神様の対象圏を確定し、真の愛の栄光が不変であるということを初めて知るようになるとき、永生の論理を妥当化させることができるのです。

私が、去る一九八四年に何の罪もなく米国の監獄に入り、獄中のベッドに一人で横たわっているとき神様が訪ねてこられて、信じる人は私しかいないのでニカラグアの事態を解決しなさい、と命令されました。神様が訪ねてこられる人間が、どうして私しかいないのでしょうか。先進国を代表するという米国には、二億四千万という国民と、数限りなく多くの教役者（注：宗教活動に携わる人）がいるのですが、彼らを訪ねていくことができず私を訪ねてこられた神様が、どれほど哀れであられるか推し量ることができるはずです。

しかしながら、神様は強い引力の愛を訪ねていくことができるので、昼夜、世界のために心配する私を訪ねてこられたのです。その時、私が「ワシントン・タイムズ」を前面に立てて助ける仕事を展開しなかったならば、南米は思想的に既に廃墟になっていたことでしょう。

紳士、淑女の皆様！

我が民族の念願である南北統一は、この時代の神様の願いでもあります。北韓と南韓を統一させ、神様が安息することができる基盤を、皆さんの家庭と、私たちの教会と国に築くことを天は願っているというのです。それでは、神様に何をもって侍るのでしょうか。何をもって、これをすべてきれいに洗い流さなければならないでしょうか。何をもって洗い流してこそ、神様がきれいだとおっしゃるのかというのです。ほかでもなく、自分の父母を愛する以上の、夫や妻を愛する以上の、子供を愛する以上の真の愛を中心としてその環境をつくり、祭物的な祭壇を積もうというその立場から、初めて理想的な南北統一ができてくるのです。理想的東西文化の統合が起こるのです。分離した地上世界と天上世界の理想的統一が起こるのです。地獄と天国の解放圏が開かれるのです。それで、真の愛の鍵が必要なのです。

私の心と体の愛による統一は、家庭的な愛の統一と常に互いに通じることができるのです。家庭が和合した愛の夫婦は、家族だけでなく、その氏族と国家と世界にも通じることができます。愛し合う夫婦が一つになれば、誰がそしり、踏みにじることができるでしょ

うか。和合した家庭、和合した民族、和合した政府、和合した世界、和合した天と地、和合した真なる人間愛と神様が一体となった、そのような世界が真の愛のユートピアではないでしょうか。すべての植物が太陽の光を生命の要素として吸収するのと同じように、人間には、愛が生命の要素となるのです。私たちの願いは、永遠に真の愛と共に、慕いながら生きることのできる地上天国と天上天国が建設されることです。

しかしこの世の中には、すべてのものの主人格として登場することができる驚くべき人生の価値と、その特権的な権限をもった真の愛の主体者あるいは対象者が、果たしてどれくらい存在するでしょうか。きょう、この場に参席された皆さんはどうかこれを忘れないで、心と体が一つとなるように努力することによって、自らの夫婦同士でより高くために生きることができる愛で愛し合うことから、家庭と、民族と、国家と、世界を愛することができる真なる人と家庭となることを願います。

もしそのようになれば、南北統一は既に成就したも同然です。どんなに強い主体思想であっても、神様の愛の中では力なく収拾され、消滅してしまうことでしょう。真の愛で愛する心をもつようになれば、南北統一は絶対問題ではありません。それだけでなく、東西問題や世界的南北の貧富の格差問題も、この神様の真の愛をもって完全に解決することができます。このような神様の理想を中心として世界の理想を消化し、そこから国家理想を消化し、国家理想から民族、家庭、個人にまで連結することができる理想世界の平和的無限境が成し遂げられることによって、この地上には真の愛の平和世界が建設されることは間違いありません。

内外の貴賓の皆様！

私は四十年余り前から、ここでお話ししたように統一の根本原則を宣言し、国内外で神主義を中心とした理念運動を土台として、周辺四大強国に統一の国際的な基盤を造成してきました。韓国や、日本、米国などに、各々数百万を超える会員たちが、国際勝共連合、カウサ（ＣＡＵＳＡ）活動などを通して民間基盤を構築してきたのです。これまで私が主唱してきた神主義は、唯物論、無神論の相反する価値観の統一はもちろんのこと、世俗的人本主義を解放することができる唯一の思想として、世界各国の指導者たちと思想界で検証されました。

南北統一を熱望する愛国同胞の皆様！

私たちはみな共に、真の愛の神主義で私たちの価値観を定立し、国民思想武装に総決起しましょう。私たち自身と、韓民族と世界平和のため、南北統一を信仰化しましょう。そしてこの時代、歴史と天の召命を受けて立ち上がり、南北統一運動に私たちすべてが先頭に立つ義人と指導者になりましょう。真心より共に生きたいと思う真の愛、怨讐までも愛する心で、真の愛の温風を北方の地の同胞たちに送りましょう。

特に、人類歴史の始まりにエバの失敗によって歴史が誤ったので、終わりの日には女性たちが先頭に立って、真の愛の母性愛で、青

少年の和解と統一の新しい歴史を創造していきましょう。女性の使命は、子女のような立場である青年男女および学生たちを、真なる教育を通して真なる子女たちに復帰することです。さらには、母と子女が一つとなって手本を示し、教育を通して夫までも真なる天の息子として復帰し、真の父母に従って神様を中心として侍り、地上天国理想を復帰しなければなりません。今一度、きょうの私の話が、南北韓が共に真の愛で出合うその日を早める全国民運動となるように願いながら、お話を終えようと思います。

神様の祝福が皆様の家庭に共にあることを祈願いたします。ありがとうございました。

二　「天宙は私の故郷であり祖国」

尊敬する内外の貴賓の皆様！

きょう、私の八十回目の誕生日を祝賀してくださるために公私共にお忙しい中、全世界の至る所からここ韓国を訪ねてこられた各界各層の指導者の皆様に、心から感謝申し上げます。私は、今日まで共にいてくださり、見守ってくださった神様に、このすべての栄光をお返ししようと思います。私は生涯を通して、ただひたすら神様の創造理想実現のために諸般の難問題を解決しようと心を砕いてきました。

私は十六歳（数え）の少年の時に天命を受け、楽園のイエス様をはじめとする歴代の聖賢たちと自由に交流しながら、神様のみ旨の究明とともに、人類救援のための復帰摂理歴史を完結するために、孤軍奮闘してきました。知ってみると、神様は栄光と尊貴の玉座にいらっしゃるお方ではなく、堕落して地獄に落ちた子女たちを救うために苦労してこられた、悲しみと嘆息と苦痛の神様であられました。この意義深い日、私たちが心に刻まなければならないことは、私たちがみな神様の心情と完全に一つになることであり、さらには神様のみ旨を成し遂げることです。人間は堕落によって霊的無知に陥ることにより、神様の実存および人間と宇宙に対して根本的な無知に陥りました。

したがって、肉身をもってこの世をどのように生きるべきか、死後の霊界の実在とそのための準備として、地上生活がどのようでなければならないかということを知らないまま生きてきました。神様のみ旨と心情を知って生きてきた私の生涯は、一言で言えば、昼夜を忘れ、季節も環境も超越して、ただみ旨を成就するために全身全霊を尽くす道でした。私の八十年の生涯を振り返ってみるとき、これまでの多くの苦難と迫害にもかかわらず、この場できょう、皆様と共に過ごすことができたのは、ただただ神様が助けてくださったからです。私はこれまで、世界の至る所の公席で一万回余りお話をしてきました。これは既に三百巻余りの本として発刊されています。

きょう、世界最高の指導者の皆様と出会ったこの意味深い場で、これまで私が考え、教えてきた内容の一端を「天宙は私の故郷であり祖国」という題目でお話ししようと思います。本来、天宙は、人間が主人となって暮らすように造られた巨大な家です。そしてこの天宙の中心となった人間は、上下、左右、前後の関係性、すなわち父子関係、夫婦関係、

兄弟関係の中で球形として存在します。神様は私たちの日常生活を指導されながらも、見えない中心の位置にいらっしゃるのです。堕落したサタン圏内での拘束と苦心の中から、神様の助けにより自由と解放を受け、真なる息子、娘として成長したのちに相対に出会い、真なる夫婦となり、さらに子女を生み、真なる父母となることが人間の正しい人生路程です。

ゆえに、私たちは真なる子女を否定することができず、真なる夫婦を否定することができず、真なる父母を否定することができません。これを否定すれば宇宙の原則に逆行し、自らの存在を破壊することになります。それゆえ、人間は真なる父母と共に、真なる夫婦と真なる息子、娘によってなされた、真なる家庭を成し遂げなければならないのです。これがすなわち、理想的な存在のモデルとなるのです。人間は、家庭において真なる父母の愛を完全に受けなければならず、真なる夫婦の愛を完全に受けなければならず、それから真なる息子、娘の愛を完全に受けなければなりません。このようなすべての人間関係を完成させるのは、お金でもなく、知識でもなく、権力でもなく、物質的な力でもない、均衡をなす神様の真の愛しかありません。真の愛は投入する力です。与える力であって、受けることのみをする力ではありません。すべてを与え、零点（ゼロポイント）の位置に入っていくのです。完全に空いた場になるので、零点の位置には何が入ってきてもＯＫです。

それで、与える力が永続するので、戻ってくる力が加重され永続することによって、永遠なる均衡がなされるのです。それゆえ、真の愛を中心に「ため」に生きる世界は、授受作用を通して完成されるのです。天地のすべてのものが相対的関係で存在しているのも、このように授けて受ける作用を通して真の愛の世界を成すためなのです。相対関係において、すべての授ける力に対して戻ってくる力が運動することによって、その中心点は永遠に定着することができるのです。すなわち、天運の数である「７」のような真の愛の中心位置に神様がいらっしゃり、全宇宙が均衡をなして運行しているのです。天運というのは、このように受けて返す巨大な天宙的な流れです。その中で愛も流れ、空気も流れ、水も流れ、光も流れます。しかし、その流れは回り回って、再び円形に戻っていくのです。

内外の貴賓の皆様！

善なる人とはどのような人ですか。様々に定義することができるでしょうが、一つは受けたものを踏み倒す人は悪なる人であり、受けたものに対して、プラスして恩返しする人は善なる人であるというのです。それゆえ、子供が自分よりも低くなることを望む父母はいないのです。高くなることを望みます。また夫は妻を、そして、妻は夫が自分よりも素晴らしくなることを願います。また、兄は弟が、弟は兄がもっと立派になることを願うのです。

ゆえに、受けたものよりももっと大きなものを返そうとするのが父母の願いであり、夫の願いであり、子女の願いであり、万物の願いであり、結局、宇宙の願いでもあるのです。一歩進んで、大きな心で「天宙が私の故郷であり、私の祖国である」という考えをもった

人だけが自由と解放を受け、天宙的に歓迎されるのです。すなわち、個人的に歓迎され、家庭、国家、世界、天宙的に歓迎されてこそ、結局、神様の真の息子、娘になることができるという結論が出てくるのです。

それでは、皆さんはどこで暮らしたいですか。自分が生まれた本然の故郷で暮らしたいはずです。しかし、本然の故郷は、広い意味で考えるとき天宙の中でも地球星であり、祖国は私たちの先祖である神様がいらっしゃる所です。この地球星で堕落していない本然の父母、兄弟、息子、娘が共に暮らすならば、そこがすなわち私の故郷です。そこには黒人、黄色人種、そして、白人が共に調和して暮らしているのです。このすべての人種は誰の息子、娘ですか。父母は一人の方であられます。ゆえに、宇宙で東西南北のどこに行ったとしても、共にいらっしゃる神様が人類の父であらざるを得ないのです。例えば、米国の主人が白人であったり、黒人であったり、黄色人種であるという考えは誤りです。米国の主人は神様であられます。

韓国も同様です。ただ皮膚の色が違うのは、住んでいる地域に従って、保護色を合わせるための気候と環境の影響のせいなのです。それで、雪の多い地域には白人が多いのです。反対に太陽の光が強いアフリカのような所には、黒人がたくさんいるのです。しかし、人はみな根本的に同じなのです。例えば、血の色や、皮膚や骨の形はみな同じです。そして、互いに愛し合うことも同じです。ゆえに、人種の差別はあり得ません。

それで統一教会では、国際合同結婚式を通して人類を平等化してきました。自然の道理と原則を尊重してみると、五色人種が互いに結婚するようになったのです。黒人と白人が結婚することは、北極と南極が一つになることと同じです。また、黄色人種と黒人が結婚すればお互いの長所を受け継ぐようになり、より優れた後孫を生むと考えるのです。愛があるところには▪藤がありません。たとえ皆さんの生まれた故郷と祖国は異なるとしても、一つ間違いのないことは信仰の本郷地であり、平和と統一の本郷地というのは、真の愛を中心とした祖国と故郷であるということです。

人間世界で、最も重要なことは真の愛、真の生命、そして真の血統です。真の愛には真の生命があり、真の血統が連結されます。真の血統が連結されなくては、真の愛が成されないのです。また、真の生命が連結しない愛は偽りの愛です。真の生命は、真の愛と、真なる血統の因縁の中で懐妊されるのです。

このように、真の愛と、真の生命と、真の血統を通して永生の道が開かれるのです。真なる人となり、真なる愛と、真なる生命と、真なる血統を後代に残すことが神様の創造理想なのです。永遠なる真の愛、永遠なる真の生命、永遠なる真の血統の主人であられる理想的な神様に似た人が、天の国の完全なる真の息子、娘になるのです。どうして結婚をするのでしょうか。まさしく、このような真なる血統的伝統を、過去、現在、未来に連結するためです。

堕落する前、アダムとエバは神様に直接、自由に接することができたのですが、堕落したのちには、以前のように神様に接することができなくなってしまったのです。さらには、

堕落したアダムの子女たちであるカインとアベルは、神様の血筋を受けることができず、サタンの血筋を受け継ぎました。ゆえにイエス様は、ヨハネによる福音書第三章三節で「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言われたのです。

人間は、血統的に誤った愛によって、誤った生命をもっている自分自身であることを自覚しなければならないのです。人間は、自分たちが愛の怨讐であり、生命の怨讐であり、血統の怨讐の位置にあるという事実をこの上なく恥ずかしく思わなければなりません。神様は、今日の世界でフリーセックスやホモセクシュアルが氾濫しているのを御覧になって、言葉にできない悲しみと苦痛を感じていらっしゃいます。

しかし、そのような怨讐の息子、娘を自分の息子、娘よりも、もっと愛さなくてはならないというのが神様の立場です。投入し忘れ、また投入し忘れながら、失ってしまった息子、娘を再び取り戻そうとするのが、神様の救援摂理です。堕落した生命を生かすためには、それよりももっと強い生命力を投入しなければなりません。堕落し、偽りの種で腹中に宿された子供を見ながら、悲惨に感じている神様がどんなに哀れでしょうか。そのような子女が繁殖し、今日の六十億の堕落人類となったのです。

人間は本来、三時代を通過するようになっています。母の腹中時代は水中時代であり、地上世界は土と水と空気の時代であり、死後の世界は愛の時代です。胎児が母の腹の中で栄養をもらって育つのと同じように、人間の肉身は、地球星で万物を食べながら成長するのです。それで人間は、地を母のように愛さなければならないというのです。霊界は、太陽のような光が夜も昼も射す所です。太陽の当たる所は常に昼です。霊界もこれと同じです。霊界での愛の光は変わることがありません。朝でも夜でも、北極でも南極でも、愛は変わることがありません。そのような真の愛が充満した世界が霊界です。霊界は、春夏秋冬という季節を通して実を結んだものを収穫し、倉庫に貯蔵する所と同じなので、地上世界の人生が結実した所です。

復帰歴史路程で、これまで神様の直接的な真なる血統が連結され、真の生命をもって出生した人はイエス様しかいません。ゆえに、これまで堕落した人類の中で、地上や霊界で神様の直接主管圏に入っていった人は一人もいませんでした。それで神様は、これまでお一人で孤独な悲しみの歳月を過ごしてこられたのです。

ゆえに、人間も悲しく、万物も悲しい世界となってしまったのです。それで神様は信じることができる一人の人、すなわち血筋を浄化させ、真の生命に重生させ、神様の真の愛を受け継ぎ、解放の主人になることができる一人の男性、メシヤを探してこられたのです。

皆さんも御存じのように、アダム以降、旧約時代の歴史はメシヤを迎えるための選民の歴史です。準備された選民イスラエルを通して、イエス様がメシヤとして来られ、万民をイエス様の家庭と接ぎ木し、真の血統を世界化しようとされたのが神様のみ旨であったのです。しかしユダヤ民族の不信により、イエ

ス様が十字架にかけられることによって、そのみ旨は再臨理想として残されました。したがって、再び来られる再臨主は人類の真の父母の立場で、再び真の愛の家庭を取り戻し、天地父母の位置を経て、人類救援摂理を完成しなければなりません。

メシヤが出発しなければならない起点は、アダムとエバが堕落しないで完成した家庭よりももっと神様に栄えある立場で、もっと素晴らしく侍ることができる孝子、孝女の家庭とならなければなりません。メシヤは、真の愛を中心とした父の立場で、真の生命と真の血統を連結し、新たに出発しなければならない人類の理想的な核となる家庭の主人です。ここから祝福結婚した家庭を連結し、地上天国、天上天国の完成を見るのです。ゆえに、メシヤは人類の前に真なる父母として来られなければなりません。来られるメシヤは、サタンの愛とサタンの血統を否定し、神様の真の愛で連結した、完成した個人、家庭、氏族、民族、国家、世界と天宙を成さなければなりません。

すなわち真の父母の愛によって、全人類が新たな祝福結婚をすることによって、神様の新しい血統的家庭の相続を受けなければならないのです。そしてこれは、真の愛でなくては道がないという事実を知らなければなりません。こうして、サタン世界の地獄圏を解放しなければなりません。ゆえに、すべての人類は八段階の復帰過程を経て、神様の子女の立場を取り戻さなければならないのです。すなわち腹中時代を経て、幼児時代、兄弟時代、婚約時代、夫婦時代、父母時代、祖父母時代を経て、王と王妃の時代までの八段階を復帰しなければなりません。結局、人間は神様の子女として、王子、王女として、天地の大主人になるという目的で生まれたことを知らなければなりません。

皆さん！　このように、私たち人間は本来、成長して、男性は女性に出会って王となり、女性は男性に出会って王妃となり、天の国の王子、王女として、天の国のすべてのものを相続される相続者の位置にまで行かなければなりません。このためには、地獄の底から八段階の蕩減条件過程を通過して天国まで一体化させなければならないのですが、これは、メシヤとして来られる真の父母の祝福を通してのみ可能なのです。このような祝福家庭（blessed couple）は、世の中の前に助けとなる、主体的なプラス・カップル（plus couple）にならなければなりません。このように、完全に生まれ変わった新しい人になるためには、神様を中心として、絶対信仰、絶対愛、絶対服従を実践しなければなりません。私もやはり生涯を通じて、これを実践してきました。

神様は宇宙を創造されるとき、絶対信仰をもって造られました。さらに、神様は私たち人間を愛の絶対的パートナーとして造られました。絶対従順とは、自分自身までもすべてなくして完全投入することを言います。このように投入しては忘れ、投入しては忘れ、最後には自分という概念まですべてなくなるゼロ・ポイントになるのです。愛を否定されてももっと愛し、投入してももっと投入してこそ、怨讐を真の愛で自然屈服させる位置まで進むようになるのです。神様がそのような道

を歩んでこられ、天地父母がそのような道を歩んできたのです。

投入して忘れてしまい、投入して忘れてしまうことを続ける人が中心者となり、全体の相続者となり、孝子の中の孝子となります。家庭の中でもおじいさんおばあさんなど、十人の家族が暮らすとしても、最も「他のため」に生きる者が家庭の中心となるのです。国において、愛国者も同様です。投入して忘れてしまうほど、忠臣、聖人、さらに進んで聖子として決定されるのです。

神様は、人類歴史始まって以来いかなる存在よりも、真の愛を中心としてより一層「他のため」に投入して忘れてきたのであり、また、永遠に継続して忘れて投入することができるお方であるので、「他のため」に生きる者の王となり、先祖となることができるのです。私が導いてきた統一教会が、短い期間に世界的な宗教団体として成長したのも、まさしくこのような原理原則で努力してきたからです。自分の生涯を振り返ってみるとき、私が人類救援の道を行きながら今日に至るまで、有形・無形世界の億万のサタン勢力が反対し、多くの宗教指導者たちが反対し、各国の政権が反対しましたが、私は堂々と彼らのために生きてきたので、いつの間にか彼らの中心位置に立つようになったのです。真実を理解できず反対する彼らのために生き、反対する彼らの子女たちのために投入し、反対する政権のために生きてきてみると、いつの間にか、人々がレバレンド・ムーンを尊敬するようになっていたのです。

私たちはここで、天の戦法とサタンの戦法がどのようなものであるかを学ぶことになります。すなわち、天の戦略は打たれて取り戻すことであり、サタンの戦略は打って失ってしまう戦略です。このような原則のもとで、レバレンド・ムーンは人類救援のための方便として、五大洋六大州に広がっている五色人種を「一人の方、神様のもとの一つの世界」を成すために国際合同結婚式を挙行し、数千数万双の若者たちを祝福結婚させてきました。東洋と西洋が結婚を通して一つとなるとき、世界で最も大きな文化的▪藤はなくなるはずです。米国人とドイツ人が結婚し、夫婦が真の愛で一つとなれば、怨讐であった二つの国が神様の真の愛によって一つになるのです。

さらに、レバレンド・ムーンは霊界にいる霊人たちまで、真の愛により祝福してきました。地上と天上に天国が成されるためには、霊界にいる霊人たちまでも祝福を通して解放しなければならないのですが、それは、地上にいる真の父母を通してのみ可能であるのです。人類の先祖が偽りの父母として罪悪の種を蒔いておいたので、メシヤは人類の真の父母として来て、地上と霊界のすべての人類を解放してあげなければならないのです。血統で誤った問題に対する解決は、全知全能であられる神様でさえも、一人ではなすことができないのです。

もし神様がなすことができるのであれば、既にずっと以前にされたであろうし、また堕落もさせなかったはずです。人間に賦与された自己の責任分担は、原理法度の神様においては一切干渉することができないのです。ゆえに、再び来られるメシヤは、人類の真の父母として来られ、血統を汚した原罪をもった人間を真の愛によって重生してあげなければ

なりません。このような点から、私が主導してきた国際合同結婚式の意味は、単純に、男女が配偶者として出会うところにのみあるのではありません。

本然の神様の生命の種を賦与され、真なる神様の子女として生まれ変わるための、神聖な重生の儀式なのです。このように、蕩減原則を通して個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙的蕩減時代を経て、最終的には、霊界解放と地上解放時代を迎えたのです。世界が数千数万の民族に分かれ、父母、夫婦、子女まで分裂し、宗教圏もキリスト教、イスラム教、儒教、仏教など四大文化圏に分かれてきましたが、今私たちは、大統一家庭化時代を迎えたのです。新約時代を経て、完成時代である成約時代を迎えて、堕落がなかった本然の第四次アダム圏時代に入り、天国の時代に入っていくようになったのです。言い換えれば、今は国家主義時代が過ぎ、世界主義時代を越えて、天宙が一つの神様のもとで、一つとなる時代に突入したのです。さらに地球星が全祝福家庭の故郷となり、神様がいらっしゃる天上世界は祖国になり、一つとなることによって、永遠なる神様の祖国が主権復帰された地上天上天国が始まるのです。

内外の貴賓の皆様！

私は、新千年紀が始まる午前零時に、全世界に送るメッセージを通して「真の愛の天宙化は、新千年天国完成」というみ言を宣布しました。「真の愛の天宙化」という言葉は、天と地を真の愛の家にしようという意味であり、新しい千年紀を迎え、全体世界を通して天国を完成するということになります。天宙は神様から出発したので、その対象的立場にある愛の家の完成のために、家庭や氏族、民族、国家、世界が同じ公式原理の家を求めて一つにならなければなりません。

国は家庭が入ることができる愛の家であり、世界は国が入ることができる愛の家であり、さらに天宙は世界が入ることができる愛の家です。その中でも、真の愛の家庭というものは巨大な天の国の家、天宙の出発点であり、核になるのです。家庭で夫は妻の真の愛の家であり、妻は夫の真の愛の家であり、父母は子女の真の愛の家であり、子女は父母の真の愛の家です。神様の国は真なる自由と信仰の理想が花咲き、実を結ぶ所であり、真の愛と真の生命と真の血統が結びついた真なる家庭がとどまる所です。さらには、永遠なる真の愛と幸福が充満した千年王国時代が始まる所です。私がこれまで主唱してきた天地安息圏の中心が、神様が共にされる真なる男女が結合した家庭であるために、真なる家庭の価値を説き明かしてきたのです。ゆえに、私たちは、聖書でいうエデンの園をこの地球上に具現させなければなりません。

今、新たに迎えた千年紀は、六千年間の救援摂理が完結され、創造理想を中心とした本然の天の国が建設される時です。旧約と新約の約束が成される、成約の時代をいうのです。二度と涙がなく、死亡がなく、哀しみ痛む声が聞こえない、新しき天と新しき地をいいます。水晶のような澄んだ生命水を代価なく分け与えられる、条件のない真の愛の時代をいうのです。霊界と地上が一つに通じ、天上と地上に神様の国が成される時代です。生きていらっしゃる神様の直接主管が復帰された長

子権、父母権、王権を通して、全体、全般、全権、全能の新時代を開く時です。以上お話ししたように、地球星は人類の故郷であり、霊界は人類が完成、到達しなければならない永遠なる祖国を意味するのです。

そしてついに「一なる神様のもとの一つの国（One nation under God）」を越え「一なる神様のもとの一つの天宙（One cosmos under God）」として、天の父母を中心とした地球星大家族主義の世界が成される時です。ゆえに、神様と人間の根本関係である父子の因縁を心に刻み、「天宙」すなわち霊界と地上を「私たちの故郷であり祖国」として創建するために、積極的に先頭に立ってくださるようお願いいたします。重ねて、この場を訪ねてくださった全世界の指導者の皆様に感謝し、四海同胞がお互いに真なる兄弟姉妹となり、平和と自由と正義があふれる新しい千年王国が始まることを祈願しながら、み言を終えようと思います。

皆様の国と、各家庭に神様の祝福が共にあらんことを祈ります。ありがとうございました。

三　「真の愛は誰もが願う」

尊敬する内外の貴賓の皆様！

公私共にお忙しい中を、第四回「世界文化体育大典」に参席してくださった皆様に、心から感謝申し上げます。

理想家庭を通じた真の平和世界の具現のために、私が生涯をかけて追求してきた平和運動は、神様のみ旨を地上に成就してさしあげるための一環として推進してきました。分裂と▪藤の一世紀が終わり、和解と統一を模索して出発した新千年紀の希望は、漠然と成就するのではありません。神様の創造理想を中心として全世界が、一つの神様のもとに一つの世界を指向するという具体的な青写真をもって、各界各分野で具体的な実践運動が世界化されなければならないのです。

私は、十六歳（数え）の少年時代に天のみ旨に接して以来、楽園のイエス様をはじめとする歴代の聖賢たちと自由に霊通しながら、生涯を通じてあらゆる試練に打ち勝ち、ただひたすら神様のみ旨成就に全身全霊を尽くしてきました。知ってみると、神様のみ旨は、地上と天上に自由と平和と解放の天国を建設することでした。神様と人間の本然の関係は、永遠の父母と子女の関係です。堕落はその断絶を意味し、復帰は、父母と子女の因縁を回復することを言います。

私がこれまで設立した各種の平和団体と国際組織は、「一なる神様のもとの一つの世界」を構想してこられた神様のみ旨成就のための一環です。特に、皆さんが参観された国際祝福行事は、堕落によって受け継いだ人種、宗派、国家間の▪藤を根本的に解決するための神様の戦略です。五色人種が一つに調和して、真の兄弟、真の夫婦として出会うことは、「一なる神様のもとの一つの世界」を追求する聖なる理想の現実化なのです。

きょう、私の八十歳の誕生日の祝賀行事と第四回「世界文化体育大典」を記念する歴史的大会を終えながら、皆さんと共に考えてみようとするみ言の題目は「真の愛は誰もが願

う」です。皆さん、人間に一番重要で必要なものとは何でしょうか。それはお金や権力や知識ではありません。生命よりも貴く、空気よりももっと必要なものとは真の愛です。真の愛が私たちにこれほどに貴く、重要なのは、何のためでしょうか。人間が生きていく上で、神様に会うことを願うように、神様も真の人間に会いたいと願われるのです。

ところで、人間の中でも男性と女性のどちらか一方に先に会いたいと言われれば、おそらく互いに不平を言うことでしょう。ですから神様は、愛を前に立てざるを得ないのです。愛さえ一番に立てれば、男性と女性が一緒に会うことができ、一緒に触ることができ、一緒に分かち合うことができるからです。世の中で一番貴いものがあるとすれば、男性と女性が互いに先に所有しようと争うでしょうが、それが愛だということが分かれば、二人が互いに一つになって所有しようとするのです。このように愛は誰もが好むだけでなく、愛のみが、人間の欲望をみな均等に充足させることができるという原則があるので、神様の救援摂理も可能なのです。

愛とは本来、神様のものです。しかし、いくら神様のものだといっても、神様お一人では所有することができません。愛は必ず相対を要求するようになっているのです。男性一人、あるいは女性一人だけをもってしては、愛は成立しないのです。ですから男性の愛のために女性が、女性の愛のために男性がいるということになります。醜い男性も醜い女性も、愛の対象が現れることを願うのです。それも、最も高い愛の対象であることを願います。

ゆえに、宇宙のすべての存在を見れば、みな主体と対象、プラス（＋）とマイナス（－）の対になっています。鉱物界、植物界、動物界、そして人間の世界もみなペア・システムになっているのです。なぜならば、すべてがこのような相対関係を通じて真の愛を願うからです。この宇宙の中で絶対に一人では所有することができないのが愛ですが、反面、相対が現れることによって、愛で連結されたすべてのものを所有するようになるのです。同じように、子女がいなければ子女を愛することのできる父母の愛が現れないし、子女に対する父母の愛の主人にもなれません。ですから神様も、真の愛を成されるために、その相対として宇宙と人間を創造されたのです。このように子女の愛や兄弟の愛、夫婦の愛、そして父母の愛すべてが、主体と対象が一つになることによって現れるのです。主体と対象として一つになれば、これら二つは分けることができません。もし分けるならば、真の愛が破壊されるのです。ですから離婚という概念はあり得ないのです。

男性が愛を感じるからといって、それが自分によるものではありません。女性から始まったものです。また女性が愛を感じるからといって、それもやはり自分によるものではなく、相対である男性から来たものです。すなわち、愛の主人は相対です。ですから愛を貴く思う以上にその相対を貴く思い、相対の前に感謝して、「相対のため」に生きてあげなければなりません。これが、祝福を受けた夫婦が永遠に共に暮らすことのできる根本の道理です。このように夫婦が互いのために生き、尊重し合い、真の愛によって完全に一つにな

るとき、これを通じて堕落したサタンの血統は完全に根絶されるのです。

真の愛とは、横的な水平関係だけでなく、縦的な垂直関係においても成されるのです。真の愛の横的関係が縦的にだんだんその次元を高めれば、結局その頂点に到達するのですが、この場が「真の愛の王」である神様の位置なのです。この場ではすべてのものが結合し、抱かれ、愛化され、そして花咲くことができるからです。

ですから宇宙の中にあるすべての存在は、愛によって和することを願い、愛の中で生きることを願うという結論になります。愛のために生まれ、愛のために生きて、愛のために死ぬということになります。真の愛は人間のみならず、すべての万物も願います。ですから万物の霊長である人間は、神様が造られた傑作品を抱いて愛するだけでなく、すべての万物に愛することを教えてあげなければならない責任があることを知らなければなりません。万物たちはこのような主人を探しています。このような基準に私たち自身を照らしてみながら、自分を恥ずかしく思わなければなりません。宇宙いっぱいに満ちたすべての存在は、自分のレベルで相対と共に存在しますが、結局より高い愛の次元に吸収されて上昇するという原則に従うのです。

すなわち、鉱物は植物に、植物は動物に、結局は人間にすべて吸収されることを願うのです。ですからすべての存在は、捕まって食べられたり、吸収されたりして、より高い愛の次元に上がり、最後は愛の根源であられる神様の最も近い愛を受ける立場まで進んでいくようになるのです。このようにすべての存在が究極の目的地とするのは、正に真の愛の本質だというのです。ダーウィンの「弱肉強食」という言葉は、このような愛の論理によって再び解釈されなければなりません。それゆえ、蟻や微生物までも真の愛を願うのみならず、自分を愛する主人のところに行って死のうとするのです。

このような原則から神様の愛の最も高い対象として造られた人間は、すべての万物をみな食べたり、持ったりすることのできる立場にいるのです。このすべてのものをみな食べて、持ちますが、これらを造られた神様の真の愛の心をもって食べ、持たなければなりません。万物の中で長い形のもの、例えば、うなぎや魚が好きなみみずのようなものは、大体薬剤として使われるのです。どのレベルにおいてもみな、捕って食べられるようになっています。もしそうでなければ、宇宙は存立することができないのです。

神様の理想は、アダムとエバを種として家庭をつくり、氏族をつくり、国をつくって、膨大な天の国の民をつくろうというものでした。天の国の民は、このような神様の真の愛の伝統に従って繁殖されるのです。私の理論とチャールズ・ダーウィンの理論は正反対ですが、平和の世界は、私の理論に従って成されるのです。なぜならば、これが創造理想を成す根本原理だからです。進化論と創造論の論争が続いてきましたが、「創造」という言葉には既に創造主であられる神様がいらっしゃることを認定する意味が前提となっているのです。

神様の創造には真の愛の目的がある反面、共産主義には闘争と破綻があるだけでなく、結局、すべて消えてなくならざるを得ないのです。神様が主体と対象を通じてつくられた創造には、方向性と目的観が内在していますが、唯物論をパターンとした共産主義理論には、何の方向性も目的観もあり得ないのです。すべての万物の中でも一番貴い存在が人間、すなわち、男性と女性なのです。その中でも一番重要な部分は、鼻でも、目でも、手でも、そして頭脳でもなく、愛の中心器官である生殖器です。この愛の器官によって、宇宙のすべてのものが再創造されるのです。植物も動物もこの生殖器によって繁殖し、拡散していくのです。一番価値があり、一つとなった素晴らしい家庭もそれが一つとなった夫婦から現れるのです。一つとなった夫婦によって理想家庭が始まるのです。この愛の器官こそ、愛と生命の本宮であり、血統と歴史が連結するとてつもない価値の場なのです。

神様が宇宙を造られた根本原理は、雄と雌の概念を通すのです。ところで、この雄と雌が絶対的な愛を願うならば、その相対が二つであってはいけません。ただ一つ、絶対に一つでなければなりません。永遠に絶対男性と絶対女性でなければなりません。それで神様は、アダムを二人造ったのではなく、エバも二人造ったのではありませんでした。ただ一人ずつ造ったのです。

ところが、今日の世の中を見ると、義理の父が十人もいるケースを見ることができます。いかに偽りのごみ箱のような世の中でしょうか！　女性と男性が貞操を守り、保護するというのは、宇宙を保護することと同じです。男性と女性の愛の秩序が宇宙の根本だからです。ですからこれを動物のように濫用してはいけません。愛の主人は一人です。その中でも真の愛の「真」は、二つを許すのではなく、ただ一つであり、絶対に一人なのです。

「真の愛」とは、誰でも言うことができる言葉ではありません。唯一神様のみが、本当の真の愛をなすことができ、真の愛の絶対主人となられるのです。ゆえに、神様の真の生命も、神様の真の血統も、神様の真の良心も、真の愛を必要としています。このように、神様の最も根本となる本質は、真の愛です。

またこの真の愛と因縁を結ぶには、神様と関係を結ばなければなりません。うちのお母さんとお父さんがけんかしないで豊かに暮らすからといって、真の愛で愛しているとは言えないのです。恋愛している若い未婚男女が、互いに命を懸けて愛し合うからといって、それが真の愛ではありません。神様が介在していないので、真の愛ではありません。真の愛は必ず神様を中心にしなければなりません。神様の息子、娘になるには、神様の血統と生命と愛に関係しなければならないのです。権力や知識やお金、軍事力だけをもってしては、真の愛の世界で歓迎されません。真の愛は、誰もが願うものですが、愛とは「他のため」に生きることによって可能だという原則を知らなければなりません。相手のために奉仕し、犠牲になってあげなければならないのです。「私のために生きよ」という心で人に接すれば、みな逃げていくのです。

このような利己的な個人主義はサタンの戦略であり、目的であり、道具です。ですからその結果は地獄以外の何ものでもありません。

全体のために生きなければなりません。人のために全体のために犠牲になり奉仕すれば、みんなが来て、私を愛してくれるのです。子女として造られた人間が兄弟になり、夫婦となり、父母の立場に進む過程ごとに、神様はそのすべての真の愛の主人になるのです。すなわち、人間が育つのを見ながら、神様はそのすべての段階の愛の主人として定着されるのです。それゆえ、神様をしてすべての愛の主人となるようにした人間こそ、神様よりも貴い存在だとも見ることができるのです。ちょうど自分が愛する人を、自分よりも何千万倍も価値があり、貴く思うようにです。ですからもっと貴いもののために神様は投入され、忘れられ、また投入され、忘れられるのです。一〇〇パーセント投入されたのち、一〇〇パーセント忘れられるので、続けてさらに投入することができるのです。

自分の夫が素晴らしくなるのを願う妻は、夫のために投入しては忘れ、また投入しては忘れることによって、夫を成功させるのと同じです。投入して忘れることを続ければ、その愛の段階を高め、究極的には神様の位置に連結されるのです。そうして神様と共に父子の関係を成して、永生するのです。みんなが天国に行きたがるのですが、「私のために生きろ」という思いだけをもっては天国に行けないのです。

真の愛は神様が造られたすべての傑作品を抱いて、「他のため」に生きるところから始まり、全世界の人類と究極的には神様にまで「他のため」に生きることによって、天国に至るようにするのです。一生に三回以上生命を捧げて、「他のため」に生きようとしなければなりません。アダム家庭の堕落、イエス様の十字架、そして再臨主の家庭を追い出した迫害のすべての歳月を蕩減しなければなりません。

神様に出会うには、三回死に、再び復活したのちにも、神様に私のことを分かってほしいと願うよりも、神様のためにもっと尽くそうとしなければなりません。そのような人々が生きる世の中がこの地上にあるならば、そこが正に天国です。この道を私が教えており、そのような世の中をつくっていっているのです。子供はお母さん、お父さんの愛の実ですが、愛の実というのは、愛と生命と血統が合わさって成されるものであることを知らなければなりません。子供たちが「自分のもの」を主張しますが、私のものの出発点は父母です。父母は根であり、幹です。父母がいなければ、すべて孤児です。父母に連結された愛のはしごを切ってしまえば、生きることができないのです。真の愛の起源であられる神様を父母として、私たち人間は、息子、娘の立場に立てられました。父母は本来、子女のための愛の最高の主人です。父子の関係が縦的な垂直関係なのに比べて、夫婦関係は横的な水平関係です。ですから父子関係と夫婦関係は互いに直角（九〇度）を成して、ここに前後関係である兄弟関係が合わさることによって、すべての愛の関係が球形を成します。

それで、愛によって成されたすべての存在は球形です。宇宙全体が球形になっているのです。このように成された球形の中心位置ですべての愛が統一され、定着しますが、この場に神様がいらっしゃるのです。すなわち、神様とその息子、娘である人間の垂直関係を

中心として男性の愛と生命と血統が右側に位置するならば、左側は女性の愛と生命と血統が定着するのです。ここに兄弟の愛が前後の方向に定着すれば、このすべての愛を中心として宇宙全体がバランスを取るようになりますが、これらが一番の核として出会うところに神様がいらっしゃるのです。これを平面的に横にしてみれば、愛の一番の根っこに、生命の一番の根っこに、血統の一番の根っこに、そして良心の一番の根っこに神様がいらっしゃるのです。このように神様を中心とした家庭では縦と横、そして前後の愛が一つになりますが、このような家庭から氏族になり、民族、国家、世界、そして天宙に至るまで拡大していきますが、その根本中心は常にお一人、神様であられるのです。

アダムとエバが堕落しなかったならば、真の夫婦の愛のモデルが出てきていたはずです。彼らから愛の教育、すなわち、愛することを学んでいたはずです。彼らが子供をもてば、誰がその子供を結婚させてあげるでしょうか。それは父母です。それでは果たして今日、この社会で父母がどれほど子供たちの結婚に関与しているかを考えてみなければなりません。統一教会では真の父母がいるので、世界の人々を父母の立場で結婚させてあげています。ここには、人種の違いを超えるだけでなく、聖人も悪人も一緒に結婚させているのです。真の父母は、悪なる愛、悪なる生命、悪なる血統を接ぎ木して勝利し、否定させることによって、アベルを殺したカインを除去してしまわないで、みな同じ立場で祝福してあげるのです。

潮水を見るとき、出ていく水と入ってくる水が出合い、水平を成した時のように、歴史的に救援摂理（蕩減復帰）が終結する善悪の転換期において、善人と悪人を一緒にみな祝福してあげることによって、サタンは完全に追放されるのです。エデンの園で結婚を誤ったことが堕落なので、今、真の父母が正しく結婚させることによって、これを再びひっくり返すのです。偽りの父母が犯したことを真の父母が清算することによって地獄を撤廃し、数百数千億の霊界の先祖たちまでも祝福結婚させ、真の愛を中心とした本然の真の愛と真の生命と真の血統を取り戻し、真の父子関係を復帰するのです。こうして神様の創造理想である八段階の真の愛のモデルの主人を完成するようになるのです。

すなわち、腹中時代、幼児時代、兄弟時代、思春期時代（婚約時代）、夫婦時代、父母時代、真の祖父母時代、真の王と王妃の時代を経て、永遠に変わらない真の愛の伝統を立て、父子関係である真の愛のモデルが完成するようになるのです。真の神様の愛と生命と血統は、絶対、唯一、不変、永遠なので、子孫万代の不変の真の愛を中心としたモデルとして相続するのです。真の愛を中心としては、父子一体、夫婦一体、兄弟一体になるのです。父を愛の主人にしてくれるのは息子であり、夫を愛の主人にしてくれるのは妻であり、兄を愛の主人にしてくれるのは弟なのです。反対に、子女に父母がいなければ、妻に夫がいなければ、兄に弟がいなければ、それぞれ愛の主人の立場を見いだすことができないのです。

真の愛の主人になるためには、相対を自分よりも高め、「他のため」に生きなければなりません。ですから、個人においては心身一体、家庭では夫婦一体、兄弟一体、国家一体圏を形成し、八段階の理想のモデルである愛圏を完成するのです。そうして父母と子女、夫婦、そして兄弟（姉妹）、国家がみなこのような真の愛を中心に八段階のモデルである主人になることを願うところが、私たちの理想家庭と国家です。ここで永遠の世界的標準化が始まるので、地上天国が出発するのであり、また天上天国も自動的に築かれるのです。今、新たに始まった二〇〇〇年代には、世界の至る所で定着した祝福家庭たちが、天地父母様と一つになり、真の愛を中心とした新たな家庭革命、世界的道徳革命を主導することによって、地上と天上すべてに永遠の平和と統一の理想天国を創建することを願うのが、神様の願いなのです。私たちみんながこの聖なる聖業に同参し、神様の真の愛圏を相続する主人になることを願います。

皆様の家庭に神様の祝福があることを祈ります。ありがとうございました

四　「終末における人類とアメリカが行く道」

尊敬する内外の貴賓の皆様！

きょう、私の八十回目の誕生日を祝賀してくださるために、全世界から参席してくださった各界各層の指導者の皆様に、心から感謝いたします。特に、今日まで常に共にいてくださり、守ってくださった神様にこのすべての栄光をお返しし、深く感謝申し上げます。

私は生涯を通じて、ただひたすら神様の創造理想実現のための諸般の難問題を解決するために、心を砕いてきました。知ってみると、神様は栄光と尊貴の玉座にいらっしゃる方ではなく、堕落して地獄に落ちた子女たちを捜し、救援するために苦労してこられた、悲しみと嘆息と苦痛の神様であられました。

このような神様のみ旨と心情を知った私の生涯は、一言で言えば、夜も昼も季節も環境も超越し、ひたすらみ旨を成し遂げるために全身全霊を尽くしてきた日々でした。過ぎし八十年の星霜を振り返るとき、ありとあらゆる迫害と苦難を受けたにもかかわらず、きょうこの場を皆さんと共にすることができたのは、神様が共にいてくださったからです。この意義深い日に、皆さんと共に神様の摂理的な観点から歴史と世界を理解するために、「終末における人類とアメリカが行く道」という題目でみ言を分かちたいと思います。

神様の救援摂理的歴史観の立場から見るとき、歴史の終末はサタン主管圏の悪なる歴史の終末であり、同時に神様の主管の善なる歴史の出発の起点となります。したがって終末は、天の摂理の全般を完成させなければならない時です。すなわち、個人完成を完結させるべき終わりの日であり、家庭、民族、国家、世界、ひいては天宙完成を完結させなければならない終末だというのです。神様は摂理路程で、終末期を迎えるごとに神様中心の理念圏へと人類を導いてこられましたが、実に人類は自ら責任分担を果たすことができず、悪なる歴史を整理して善の立場に立つことができませんでした。

しかし神様は絶対、唯一、永遠、不変の方であられるので、神様のみ旨に対する予定も絶対的です。ゆえに神様は、堕落によって人類が失ってしまった真の個人、家庭、社会、国家、世界、そして真の主権の復帰を通じて天上と地上に神様が運行できるその世界を取り戻し、成し遂げられることでしょう。神様が求めていらっしゃる本然の世界とは、どんな世界でしょうか。その世界は真なる父母を中心とした真なる世界です。ところが人類は、堕落によって歴史過程においてではなく、歴史の初めに、人類の真なる父母と真なる世界を失ってしまいました。

その結果、堕落によって私たちが住んでいるこの地も、人類が所有している理念も、どれ一つとして真の父母と直接因縁を連結させてあげることのできるものがありません。ですから人類はまず、「真」を求めなければなりません。そうして真なる父母、夫婦、子女、民、万物、主権、宇宙が真なる神様の心情を通じて動じ、静ずることのできるその日が、人間世界において悪なる世界の終わりの日となるのです。このような理想が成就する時が終末であり、再臨の時期です。したがって再臨期は、火の審判や地が崩れたり、信じる人が空中に引き上げられるなど、天変地異現象が起こるのではありません。もつれた曲折の悲運の歴史を蕩減し、個人から家庭、社会、国家を経て、世界を正しく立てる時なのです。縦的に失った個人、家庭、社会、民族、国家、世界を再び取り戻し、横的に連結させ、歴史的な個人、家庭、社会、国家、世界を成す時です。その日を願って生きてきたのが人類の所望であり、人類歴史が行くべき終着地だというのです。

ところが、個人も家庭も国家も行く道を失ってしまいました。世界には各種の公害問題、食糧問題、さらに宗教間の・藤、人種間の対立などが至る所で起こっており、各種の紛争の主要な原因となっています。誰がこの世界に責任をもちますか。深刻な問題です。過去の共産主義国家群も、自分の民族主義を超えることができませんでした。今日、強大国であるアメリカも、汎アメリカ主義の理想を超えることができずにいます。自国の利益のみを優先するときは、世界を指導することができません。自らを犠牲にするとしても世界人類を抱き、より次元の高い理想的国家へ前進しようという理念で団結した、民族や宗教が必要な時です。このような側面から私は、神様の命を受け、ここアメリカに来て青年たちを教育しながら、没落していくアメリカの道徳的危機に強力な警告をするとともに、地に落ちたキリスト教の再復興のために全力を尽くしてきました。

皆さんは、レバレンド・ムーンの教えの核心とは何なのか、気になることでしょう。その答えは簡単です。

第一は、「より大きなもののために犠牲になって生きよ」ということです。個人は家庭のために、家庭は氏族のために、氏族は民族のために、民族は国家のために、国家は世界のために、世界は神様のために生きよというのです。そうすればその神様は結局、「私」を訪ねてこられるのです。家庭でも、父母は子女のために生き、子女は父母のために生き、夫は妻のために生き、妻は夫のために生きなければなりません。より多く「他のため」に生きる者が、善の中心者になるのです。

第二は、「怨讐を愛せよ」ということです。神様は堕落して悪魔サタンの子になってしまった人類を救うために、ひとり子イエスを送り、犠牲の道を行かせました。怨讐を本当の子供よりももっと愛するところには、サタンも自然屈服するのです。いつも、サタンの戦略は打って奪われるのであり、天の戦略は打たれて奪ってくるのです。それが公式です。私が全生涯を通じて、多くの迫害と苦難を受けてきたにもかかわらず、今日全世界百八十五カ国に宣教基盤を築いたのは、このような天理に従って生きてきたからです。

キリスト教の宣教歴史を見ても、イエス様を信じるキリスト教徒たちが行く道は追われる道であり、迫害の道であり、殉教の道でした。そのように二千年の歴史を経て、殉教の血の跡が土壌となり、民主世界という巨大な体制を発展させてきましたが、今日では、その原動力となったキリスト教が危機に瀕しています。キリスト教理念を中心とした国家群が神様を否定し、イエス様を否定し、さらには神様の摂理を否定しています。甚だしくは「神はいない」「神は死んだ」と主唱している神学までもあるのを見るとき、真なる子女を捜してあらゆる犠牲の道を歩んでこられた神様の心情は、いかばかりでしょうか。

内外の貴賓の皆様！

神様が今まで投入して犠牲になったすべてのものは、誰のためのものでしょうか。それは、アメリカのためのものでもなく、キリスト教自体のためのものでもありません。結局は、堕落によって失ってしまった「私」一人を救うためであったということを知らなければなりません。堕落が一人の個人から始まったので、救いも一人の個人から始めなければなりません。

したがって代表的な一人が出てきて、「この時代の責任を果たそう。人間が神様に負ったすべての負債を清算して、堂々と善なるものをお返しできる私になろう」と自覚せずしては、復帰する道がないのです。漠然とした立場では、絶対に蕩減復帰をすることができません。観念的であってはいけません。神様を身代わりして、悲惨なことがあれば、悲惨な目に遭う当事者以上の心情をもたなければ、神様の心情に到達することができません。

皆さんは、皆さん自身が死んでいくというそのような深刻な心情で、六十億の世界人類のために祈祷したことがありますか。皆さん個人を犠牲にして、家庭を救い、氏族、民族、国家、世界を救うために、どれほど精誠を尽くされましたか。そのような点では、誰も簡単に自信をもつことができないはずです。そのような絶対的な基準の代表者として来られる方が、再臨主です。人間始祖が堕落したのち、救いの摂理を展開してこられた神様は、アダムから二千年後にアブラハムを探し立てられ、その後孫を選民とされ、新しい家庭、氏族、民族を編成されましたが、それが正にイスラエル民族です。メシヤを迎えるための勝利的な基台の上に召命された選民がユダヤ民族だったので、将来メシヤを実体として迎えるための主流民族になったのです。その主流の要を求めていくと、人間始祖アダム・エバができなかった使命を再現するための基準と理念が必要ですが、それが正にメシヤ思想であり、クリスチャンの立場から見れば、新

婦思想です。主を新郎として迎えるための新婦としての資格を準備することが、最も重要なキリスト教の使命なのです。

このような莫大な使命をもっていたのに、ユダヤ民族がイエス様を十字架で処刑することによって、第一イスラエルとして召命されたユダヤ民族は流れ去ってしまい、第二イスラエルであるキリスト教がその使命を継承してきたのです。この一つの目的を中心として神様は六千年の摂理をしてこられましたが、その摂理の終盤が、今のこの時代なのです。

それではメシヤ思想の核心とは何でしょうか。それは世界を救い、統一させるための思想であり、本然の理想家庭を建設することのできる教えであり、人間始祖が堕落によって失ってしまった位置である真の父母の立場を取り戻すことです。新・旧約聖書の教えを見ても、メシヤは父の権勢をもって来られ、聖霊の実体である女性神に出会い、真の父母の立場を回復されるのです。ヨハネの黙示録に預言されている小羊の婚宴後の新郎新婦は、真の夫婦の段階を経て真の父母になるのです。このような使命で来られた方がイエス様でした。イエス様はイスラエルの不信によって民族と国を失ってしまいましたが、神様が願われた世界と天国のために生命を捧げました。十字架にかかられたイエス様の苦難の行路は、神様と共に歩まれた苦難の道でした。イエス様は死の場でも「彼らの罪を赦し給え」と切に祈られたのです。死にゆく場でも未来の勝利を期して、ローマと、反対する群れを祝福したのです。したがってイエス様の生涯は、一代三十三年で終わったのではなく、神様の協助によって歴史と共に残り、その精神を継承したキリスト教は世界的な宗教にならざるを得なかったのです。

内外の貴賓の皆様！

アメリカが今は世界で一番の強大国だと言いますが、神様の摂理線上にまっすぐ立たない限り、いつまでも栄え続けることはできません。人類文化史を見れば、古代文明の発祥は主に熱帯圏から始まりました。マヤ文明、インカ文明、エジプト文明、インド文明、中国の黄河文明など、古代文明の発祥地は亜熱帯圏ないしは熱帯圏でした。人間が堕落しなかったならば、春の季節の温帯文明から始まるべきでしたが、熱帯文明から始まって、その次は秋の季節の涼帯文明圏に属するようになりました。これが自由世界を中心とした温帯文明圏に属するようになり、西洋文明がその中心です。大体赤道を中心として見るとき、北緯二十三度圏で連結されていますが、アメリカ、イギリス、ドイツなど、西側の先進諸国がこれに該当します。秋の季節の涼帯文明が終わりつつ、冬の季節の寒帯文明がしばらく押し寄せるようになります。これが共産主義の出現です。

多くの知性人たちは、ソビエト連邦が解体したのち、以前の冷戦体制は終わったと思っていますが、いまだに唯物論と無神論は、無力化された民主と共産の二大思想の代替理念として世界の至る所に蔓延しているのです。本来、神様の創造理想は春の季節の温帯文明から始まるべきだったのに、堕落によって熱帯文明から、原始的な状態から出発したのです。今こそ涼帯文明の危機と寒帯文明の脅威を貫いて、古代から人類が追求してきた本当

の春の文明である温帯文明が現れることでしょう。誰が、寒帯文明の冬の季節を溶かすことができますか。権力や経済、科学や知識をもってしては不可能なのです。河川と海岸を中心とした文明の循環を見てみても、文明は巡礼します。ナイル川、チグリス川、ユーフラテス川を中心として発達した文明は、ギリシャ、ローマ、スペイン、ポルトガルを中心とした地中海文明に移り、この地中海文明は再びイギリス、アメリカを中心とした大西洋文明を経て、最後にはアメリカ、日本、韓国をつなぐ太平洋文明で結実するようになるのです。

このような文化史的観点から、韓半島の位置はとても重要です。韓国は、北の方にはロシアと中国を結ぶ寒帯文明圏の極地点であり、南の方はアメリカと日本を結ぶ涼帯文明の極地点です。したがってここで、涼帯文明を消化することのできる世界史的な春の季節、温帯文明圏が誕生するというのは摂理観的です。このような側面から、涼帯文明の結実地として人類的課題として残された南北問題と東西問題を解決するために、生涯を捧げてきたレバレンド・ムーンが韓国から出てきたということは、神様の摂理的な帰結だと言わざるを得ないのです。

実際に私が、生涯を通じて人種と理念と国境を越えて「神様のもとの一つの世界」運動を展開してきたのは、このような神様の摂理による道であったということを申し上げたいと思います。これは摂理史的な原則であって、私が作り上げた特別な理論ではありません。天のみ旨を悟った私は、理論だけでなく、このような神様の構想を現実化するために、外的には五大洋六大州に影響を及ぼさない所がありません。アラスカ、南極、南米三十三カ国、旧ソビエト連邦各国とアジア、アフリカ大陸の各国など、全方位的な宣教と事業基盤を通じて、到来した新千年時代に人類が当面した公害、食糧問題などを解決することのできる準備をしてきたのです。近年ではブラジルのパンタナールとアマゾンを中心に、地球環境保存について実際に基盤を築いてきました。

一方、これまで内的には、国際合同結婚式および真の家庭の価値誓約運動を通じ、約四億三千万組が参与することによって、神様が長い間待ち望んでこられた理想家庭を土台にした地上天国建設に拍車をかけてきたのです。

内外貴賓の皆様！

その間、世界は政治、軍事、経済において優越した力をもった国々が支配してきました。しかし、神様の摂理と一直線上に立たないとき、永遠の国はありません。燦爛たるギリシャ・ローマ文明の滅亡はその良い例なのです。今日、超強大国としてそびえ立ったアメリカは、過去のローマのような立場です。ローマの滅亡は、外からの侵犯よりは内部から崩れ始めた道徳的堕落に起因し、天の運勢が離れたからです。一時期は、労働者、農民を主体視した唯物論と唯物史観に立脚した政治勢力が、旧ソ連と中国を中心に、世界人口の三分の一、地球面積の三分の二を占領したこともありました。しかし、それは永遠ではあり得ませんでした。これからは、神様のみ旨を代弁する宗教人たちが勢力を得る時が来ることでしょう。宗教指導者は、神様のみ旨を地上

に宣布し、人類に進むべき方向を提示してあげなければならない預言者です。しかし今のように四分五裂し、続いてきた教派間の▪藤と宗教間の争いは神様の摂理に障害物となるだけです。それで私は、ずっと以前から教会全体の予算の半分以上を超教派、超宗派運動に投入し、宗教間の▪藤を解決しようと努力してきました。さらに「世界平和宗教連合」を創設し、宗教間の和解と一致によって、人類平和増進の先頭に立ってきたのです。近年には「世界平和超宗教超国家連合」を創設し、これまでにここワシントンD・Cで七回にわたって「国際訓読セミナー」を行ってきました。

すべての人類は人種と宗派を超越して、創造理想世界の実現のための神様の摂理を理解し、究極的には神様の心情と一致点をもたなければなりません。堕落によって失ってしまった神様との心情的関係を回復し、本然の父母と子女の位置を取り戻さなければならないのです。したがって、神様が約束された終末は、真の父母が顕現される時です。言い換えれば、堕落によって父母を失ってしまった人類が、本然の父母を再び迎えることのできる希望の時です。したがって真の父母は、人類歴史の希望の結実体であり、願いの結実体であり、勝利の結実体です。統一教会は、このような伝統を国際合同結婚式を通じて世界化してきました。民族と人種、皮膚の色を超えて、黒人と白人、黄色人が一つの兄弟姉妹としてまみえ、夫婦となるのは、地球村を一つにしようとされる神様のみ旨成就において、最も重要なことの一つです。今日、このように人類は、失ってしまった本然の兄弟姉妹、夫婦、父子の因縁を回復し、究極的に、子供を失い、嘆いてこられた神様を解放してあげてこそ、真の幸福の道が開かれるのです。これまで民主主義は、「人間の自由」と「人間の解放」を主張してきました。これに比べて私たちは、「神様の自由」と「神様の解放」を主張しなければなりません。この問題を解決するならば、人間解放はもちろん、人間の自由回復は自然に成し遂げられるのです。

内外貴賓の皆様！

特別に、きょうアメリカの首都ワシントンD・Cで、神様の摂理を語っているのは深い意味があります。

アメリカは、いろいろな面で神様の祝福によって準備された国です。アメリカを建国した先祖たちは、信仰の自由のために命を懸けて自由の国を求めてきたピルグリム・ファーザーズです。彼らは真の信仰の自由を求めて、愛する父母、兄弟、故郷と離別し、さらには国まで捨てるという覚悟で、命を懸けて大西洋を渡ってきました。メイフラワー号がニューイングランドに到着したのは一六二〇年十一月の晩秋でした。その年、初めての冬を越えながら共に到着した百二名の中で、寒さと飢えによって半分以上の人々が死亡しました。彼らが素晴らしかった点は、後孫たちのために翌年に蒔く種を残しておいて、自分たちは飢えて死んでいったという事実です。

清教徒たちは、何をするにしても神様のみ旨のために生きているという信仰が徹底していました。彼らは、初めの年の収穫をもって神様に感謝を捧げ、教会と学校を先に造ってから、彼らが住む家を造りました。清教徒た

ちが開拓する路程で、農業をする時も、戦争をする時も、常にまず祈祷をしました。独立戦争当時、あの有名な最後の激戦地フォージ渓谷で、ジョージ・ワシントン将軍は戦闘で激戦に臨む瞬間、命を懸けた祈祷をしたはずです。神様のみ旨を先立てた戦闘で、神様はアメリカに手を挙げてくださいました。当時、世界的な強大国であったイギリスは、国王と国民が一つになって戦いましたが、アメリカは、神様と神様が愛する息子、娘たちが共に戦ったのです。それで、アメリカという自由信仰の国家が成立するようになったのではありませんか。

今もアメリカは、国会が開院される時は、祈祷から始めます。大統領が就任宣誓をする時、聖書の上に手を置いて神様の前に誓い、聖職者の祝祷を受ける国です。さらには、貨幣にも「我々は神を信ずる（In God We Trust）」という言葉を書いている唯一の国です。このようにしてアメリカは、地球上に唯一、プロテスタントを信奉する世界的な形態を備えた国家となったのです。

ところが、今のアメリカはどうでしょうか。公立学校では、公式的に祈祷を禁じています。創造論よりは進化論を教育しています。さらには五〇パーセントに至る離婚率は、家庭の神聖さをことごとく破壊してしまっているのです。このような現実を心配されている神様の声を聞いた私は、既に一九七一年に祖国と家族をあとにしたままアメリカにやって来ました。何度も全国を巡回しながら私は、「火事になった家に消防士として来た。病気になっているアメリカを治療するために医者として来た」と叫びました。その時私は、既にアメリカを離れていらっしゃる神様を発見しました。アメリカのいかなる所にも神様がいらっしゃらなければならないのに、反対に至る所で神様が離れ始められたのです。人々の心から、家庭から、学校から神様が離れておられました。振り返ってみると、ニューヨークのマンハッタンの五番街を歩きながら、アメリカを離れていかれる神様にしがみついて限りなく涙を流したのが、きのうのことのようです。不幸にもアメリカは私が予言したとおり、道徳的に衰亡の一途をたどっています。

皆さん！　レバレンド・ムーンがなぜアメリカで反対されながらも苦労してこのように叫んでいるのでしょうか。私は、神様が今日アメリカを訪ねてこられるまでに流された血と汗と涙の苦労を誰よりもよく知っているので、去る三十年間、アメリカにいながら一日たりとも楽な気持ちで過ごしたことがないのです。アメリカの主人は誰ですか。ホワイト・アメリカンやブラック・アメリカンではありません。神様がアメリカを愛されるようにアメリカを愛する人が、本当のアメリカの主人です。アメリカは地上に神の国を立てるために選ばれた長男のような長子権代表国家なので、今もイエス様は霊的に主にアメリカの地にいらっしゃりながら、そのみ旨を果たしてくれることを切に祈っていらっしゃいます。

一方、私は神様のみ旨に従って一九八二年にワシントン・タイムズ社を設立し、アメリカが行くべき方向を提示する保守正論紙として、アメリカの世論を主導してきました。そして真の家庭の価値運動と青少年たちのための純潔運動を通じて、強力な救国救世運動を

展開してきました。このすべてのものに、アメリカが神様の摂理の前に正しく立つことを願う心から投資してきたのです。私が一九六五年にワシントンD・Cを訪問し、決定したホワイトハウスの近くの聖地には、今も夜を明かしてアメリカのために祈祷する群れがたくさんいます。皆さんすべては、心の門を開き、あのピルグリム・ファーザーズから歴代の愛国の烈士たちの切なる願いを聞くことができなければなりません。

内外の貴賓の皆様！

今始まった新千年紀は、六千年の間追い求めてこられた神様の救援摂理歴史がみな終わり、エデンの園で失ってしまった創造理想が天宙的に実現される時です。人間の堕落によって主人を失った万物の嘆きも解放される時であり、長い間別かれていた父母と子女が再び出会い、これ以上涙のない新らしき天と、新しき地が成し遂げられる時であり、霊界と地上が一つに通じ、地上と天上に神様の国が成就する時代です。生きていらっしゃる神様の直接主管が、全般、全能の権勢として現れる時代です。さらに東西両洋全体が、天地父母を中心に「一人の神様のもとに一つの宇宙」として地球星大家族主義の世界が実現される時です。これは、聖書に預言された旧約の約束と新約の約束が成就される、成約時代の完成を意味します。

今、時が来ました！

アメリカが再び目覚めるべき時が来ました。第二の建国運動を挙国的に展開し、神様を中心とした真の父母、真の家庭、真の国家、真の世界を取り戻すべき時です。そうして離れようとされる神様を再びお迎えしなければなりません。六千年間も準備して訪ねてこられた神様がアメリカを離れられたら、どこに行きますか。神様さえ正しくお迎えすれば、家庭問題、倫理問題、青少年問題、人種問題は自動的に解決されます。五色人種が一つに相まみえて生きていくアメリカは、地上天国のモデルなのです。この時、私たちみんなが一致団結して、人類が進むべき道を開かなければなりません。「長子の国（注：兄弟の最年長のこと。最も期待が大きい国の意味）」であるアメリカが先頭に立って、天の父母様に侍り、世界各国を神様の前に導く先導者的な使命を完成すべき時です。

この歴史的な課業を完遂するために、共に同参してくださるようお願いいたします。もう一度この場を訪ねてくださった皆様に、深甚なる感謝を捧げ、天と地に平和と自由と正義があふれる新たな千年王国が始まることを願いつつ、お話を終えようと思います。

皆様の家庭と国に神様の祝福が共にあらんことを願います。ありがとうございました。

五　「神様の王子、王女が行くべき生涯路程」

南北統一を熱望する指導者、そして紳士、淑女の皆様。

たった今始まった新千年紀は、二十世紀の遺物である分裂と▪藤が清算され、和解と統一の地球村一家族という理想が実現されると

きです。皆様の各家庭に新千年の祝福が共にあることを祈願いたします。

まず、私の八十回目の誕生日を祝賀してくださるために、世界（全国）各地から訪ねてきてくださった皆様に心から感謝いたします。そして何よりも、この日まで見守ってくださり、共にいてくださった神様にすべての栄光をお捧げいたします。私の生涯を振り返ってみるとき、ただの一時も平坦な時期がありませんでした。韓半島を取り囲む列強の狭間で、あらゆる苦難の道を歩んできた民族の受難史とともに歩んできました。

私は、十六歳（数え）の少年時代に、祈祷している中で突然、天のみ旨と出合い、その後、生涯を通じて神のみ旨を成就するために全身全霊を傾けてきました。そして気がつけば、人間の不幸の根本原因は、人類始祖の堕落によって霊的無知に陥り、神様との関係が断絶されたことにあったのです。このことによって、人間は神様と人生と宇宙の根本問題等に対して無知に陥ったのです。今まで私は、世界各地の公式席上において一万回以上語ったみ言を通して、神主義に立脚した真の人生観、世界観、歴史観を提示してきました。それらの内容は、世界各国の十二の言語に翻訳され、既に三百巻以上の本として出版されました。これは、文献による総合的な研究や学問的な探求の結果として解明したものではなく、有形・無形世界を自由に行き来しながら、原則的で根本的な解答を解き明かしてきたものなのです。

今日、私は、この意義深い場に感謝しながら、私たち民族の宿願であり、世界の冷戦問題の最後の決算であるというべき韓半島の統一問題を念頭に置き、その方案に対する根本的な解答として「神様の王子、王女が行くべき生涯路程」という題目でお話ししたいと思います。

内外の貴賓の皆様。

皆様は、どこの国の国民ですか。大多数の人が韓国の国民であると思います。そうすると、韓国が皆さんの祖国です。そうではないですか。それでは、神様の祖国はどこになりますか。今、神様の祖国はありません。この世界のすべての国家の起源はどこですか。神様が起源になっていますか、そうでなければ、他のところが起源になっていますか。このような、すべての国家の歴史的な起源が問題になっているのです。

この世の国々は、すべて闘いによって分かれて生まれました。それゆえに、ある二つの国があるとき、その二国の境界線は、深い恨みが積もった境界線になっている場合が多いのです。第三国、第四国との境界線よりも、隣接した境界線を中心としてより熾烈な闘いを繰り広げ、より多くの血を流した歴史的な事実があるということを私たちはよく知っています。このように、二国家間、二つの民族間の障壁が最も高いのです。

闘いは常に、何万里も離れた所に飛んでいってするのではありません。昔から、隣接する二国家の境界線を中心として闘いが起きてきました。ですから皆さんも、最も近い隣人との間から闘うようになっています。なぜなら、人間が堕落したからです。隣人との間か

ら闘いが起きるのは、堕落による結果なのです。

堕落とは何ですか。神様と人間との間に・藤が生じるようになったことであり、神様とサタンとの闘争が起きるようになったことであり、人間とサタンとの闘争が起きるようになったことです。人類歴史において、この地球上に数多くの国があったということは、数多くの闘争があったということを証明することだという結論を下すことができます。そのようにして生まれた国はどこに行くのでしょうか。すべての国が平和の世界を追求しますが、本当に平和の世界に行くことができるかという問題が、今人類共通の課題として残っているのです。

平和の世界というものは結果の世界ですが、過った出発、すなわち過った原因から平和の世界に到達するということは、論理的な矛盾と言わざるを得ません。それゆえに、このような戦争の起源を克服して乗り越えていくことのできる運動を展開するところにおいてのみ、理想世界に向かう出発点を捜し出すことができるのです。原因が完全であるために結果が完全であり、平和で始まるがゆえに平和の過程をたどることができ、平和の目的に到達できるということは理論的に妥当なのです。

このように見るとき、自分の国と隣接している国が歴史的な怨讐国家であるといって、ずっと憎み続けようとするならば、永遠に平和の世界には到達できないということを知ることができます。それでは、いくら理想郷を慕い、理想郷に向かって前進したとしても、その目的達成は不可能です。このような闘いが始まった、その動機を否定し、過った歴史を消し去るためには、その反対方向の内容を主張する運動が必要であるというのです。

内外の貴賓の皆様。

皆様は、国のない民と同様です。それでは、過去には国があったのでしょうか。歴史上に、「私の国である」ということのできる形態の国があったでしょうか。そのような国の形態も、もつことができなかったのです。それでは、その国を取り戻すために苦労した人がいなくてそうだったのでしょうか。そうではありません。その国は、過去の歴史時代の人が考えていた位置では、捜し出すことができないために迎えることができなかったのです。その時代圏内において、内外を備えた基準を中心としてその国を捜し出すことができなかったので、その国を迎えることができなかったのです。私たちが取り戻さなければならない祖国というのは、今日、この地上に存在する、いかなる歴史と伝統をもった国でもありません。そのような国とは本質的に次元が違うのです。

私たちは、次元が違うその国を受け継ごうとするならば、そのようにできる思想的な主体性をもった国民にならなければなりません。しかし、その主体的な思想は、絶対的な創造主がおられるならば、その創造主の思想と一致する思想でなければなりません。絶対者が願う国を成そうとするならば、その国の主権を中心として国民が一致することのできる国となることを願わなければなりません。そのような国民性をもって国家形態を備えなければならないのです。

一つの国が形成されるためには主権がなければならず、国民がいなければならず、国土がなければなりません。天の国もやはり同じです。主権に代わるものが父母であり、国民に代わるものが息子、娘であり、国土に代わるものが国なのです。この中のどれ一つとして除くことはできません。これは鉄則です。最も重要なことは何ですか。世界と国のために生きることです。そのようにしさえすれば滅びません。滅びない所が限界点です。

国のために生きる基準で実際に行動をしていて死んでいった人々は、死んでもその国の民になります。その国がなくなる時まで残るようになるのです。国が形成されるためには、国土がなければならず、国民がいなければならず、主権がなければなりません。

主権とは何ですか。根源である神様と因縁を結ぶことです。国を統治する人たちは、国民が深く寝入ったあとに、神様と因縁を結んで政治を行わなければなりません。そして、主権者は国民と一つにならなければなりません。国民と一つになり、自分の持つすべてのものは自分のためのものではなく、国のためのものであると考えなければならないのです。

そのようになれば、その国は繁栄します。そのような観点から地上に天国を実現するという問題を考えてみるとき、天国の主人は誰でしょうか。主権者は誰でしょうか。間違いなく神様が主権者です。そして国民は誰ですか。国民は万民です。それでは国土はどこですか。地球星です。地上天国は誰に似ているのでしょうか。「私」に似ているのです。一つの国を見れば何がありますか。主権、国民、国土があります。これは人間と同じです。

地上天国は誰に似ているというのですか。「私」に似ているのです。「私」という個人が集まって国になるのです。したがって、「私」に心があるように、国にも主権がなければならず、人格体なので国民がいなければなりません。人間には万物が必要であるように、国土がなければなりません。このような原則から、国土は人に支配され、国民は主権に支配されるのです。この国土、国民、主権が国家形成の三大要素です。そのようになっています。

人について見てみるとき、心は体を支配し、体は万物を支配するのが原則です。この原則があるために、全世界を見れば、天地人であるという決定的な結論が出てきます。天とは何ですか。人間の心と同じなので主権と同じです。人は国民であり、地は万物です。結局、国は誰に似たのかというと、「私」に似ているのです。

いくら大きい社会、いくら大きい国家であっても、人に似なければなりません。それは、神様が御自身の形状に似たものを好まれるからです。それでは、人が最も好むものは何ですか。自らの形状に似たものです。ですから、理想的な国家とは、何に似なければならないのですか。人に似なければなりません。天・地・人に似るのです。

統一教会の用語で「祖国」というものは、大韓民国という一つの国ではなく、世界的な国のことをいうのです。「世界的」という言

葉は、堕落した世界圏でも使われる言葉なので気分が良くありません。それで、このような「祖国」を捜し求めていく主義を統一教会では「天宙主義」というのです。

その祖国は大韓民国ではありません。神様が願われる祖国は大韓民国ではなく、米国でもありません。共産国家でもないのです。その祖国は神様が願う祖国です。ゆえに、私たちは、新しいその祖国の文化を創り上げなければならず、その祖国の歴史を創り上げなければなりません。

私たちは、新しい理想的な祖国を建てるために、新しい基準を定めなければなりません。私たちの生活を変えなければならないのです。その世界は、今のこの世界と全く違います。言葉も違うのです。「原理主管圏」や「相対基準」、「相対基台」、「復帰基台摂理」という重要な言葉を、世の中の人々は知っていますか。ですから、違うというのです。

統一教会が願う国が建設されれば、統一教会の看板を外さなければなりません。そして、統一教会が願う世界が形成されれば、統一教会が立てた国はなくさなければなりません。大韓民国の韓民族を中心とした文化と人格だけのための宗教は捨てなければならないのです。世界のために生きる宗教であってこそ、これからも残る宗教になるのです。

満場の内外の貴賓、紳士、淑女の皆様。

神様のみ旨を受け継ごうとする人がいるならば、彼はどのような主張をしなければならないと思いますか。

この世の人々が好むような方向に行くようにという主張は絶対にできません。むしろその反対の道に行くようにと主張しなければなりません。それに該当する代表的な標語が「愛の心をもって怨讐を愛しなさい」というものです。「怨讐を愛しなさい」このみ言は、誤った歴史を元に戻すことができるものであり、台風に揺さぶられる船の錨や錨綱のようなものです。

しかし、復帰摂理歴史を通じて「怨讐を愛しなさい」というみ言を実践してきた人はいませんでした。もし、怨讐を愛することができる人々がいるならば、そのような人々によって一つの組織的な形態を備えた世界的な版図を確保しなければなりません。このような結論が出てくるので、そのような運動を神様が提示なさらなければならないのですが、神様によって提示されたその運動の反映体が、歴史に現れた宗教運動であるということを皆さんは知らなければなりません。

今までで、神様が最も愛することのできる人は誰でしょうか。イエス様なのです。イエス様は、闘っているこの世界に新しい方向を提示してくださいました。ローマやイスラエルのような圧迫国家と非圧迫国家の間には、お互いを怨讐視する高い障壁があるのですが、イエス様の哲学は、それを壊してしまうべきであるというものでした。イエス様は「ローマよ、あなたは力で私を征服しようとするが、私はその反対に愛であなたを征服する」と考えられたのです。それで、十字架にかかりながらも怨讐のために福を祈ってあげたのです。

そのような思想は、ローマの兵士たちに対して「彼らは、自ら犯した罪が分からないので、彼らを赦したまえ」という驚くべき宣言として現れたということを知らなければなりません。イエス様がそのようになさることによって、世界のすべての国がお互いを怨讐視することを乗り越えることができ、二つの国家間の国境を乗り越えることができる一つの原型、または模範となりました。

イエス様は、個人的な怨讐がすべてではないということを知っていたのです。家庭的な怨讐があり、氏族的な怨讐があり、民族的な怨讐があり、国家的な怨讐があり、世界的な怨讐によって四方から縛りつけられているということを知っていました。これは、自分に従い、自分が行く道を行こうとする人には、数多くの怨讐が待っているということなのです。そして、「家庭的に行けば家庭的な怨讐が待っており、氏族的に行けば氏族の怨讐が待っていて、熾烈な闘いが予想されるけれども、その時ごとに怨讐を愛しなさい」というみ言です。このような精神をもっていれば、いつかは勝利できるというのです。

それでは、神様の理想国家の実現、すなわち神様の祖国の主権復帰はどこから実現されるのでしょうか。怨讐を愛するという思想をもった個人から出発するのです。それゆえに「神様がいらっしゃる限り、愛で国境を崩し、すべての環境と文化的な垣根を越えて怨讐までも抱こう」という運動を提示したキリスト教は、世界的な宗教にならざるを得ないのです。大豆を植えれば大豆ができ、小豆を植えれば小豆ができ、真っ赤な花の種からは真っ赤な花が咲きます。同じように、あだを討つサタンの種を蒔けば、あだを討つ悪の木が育つのですが、怨讐を愛する善の種を蒔けば、怨讐を愛する善の木が育つということです。これは自然の道理なのです。

神様の祖国は、どこからどのような道を訪ねてくると言いましたか。それは、怨讐を愛する道、個人の怨讐を愛して、家庭の怨讐を愛して、氏族の怨讐を愛して、国家、世界の怨讐を愛する伝統を残す道から訪ねてくるのです。そのような道でなければ、神様の祖国は現れることができないということを皆さんは知らなければなりません。

見ていてください。米国が反対したがゆえに、国務省が反対したがゆえに、国会が反対したがゆえに、私は国会で勝利したという賞状を受け、国務省から勝利したという賞状を受け、米国で勝利したという賞状を受けることができる時が来るはずです。それで、反対する国務省の中にも友人ができ、国会の中にも友人がたくさんできています。勝利は、私に返ってくるようになっています。

私は、そのような友人が一人もいなかったとしても、あらゆる反対を克服して勝利に導くことができるという確信があります。反対すれば反対するほど、こちらの怨讐を愛する内容が相対的により大きくなるので、反対が激しいからといって落胆する必要はありません。

自然の道理は、一方が低気圧ならば、もう片方は高気圧になっています。一方が高気圧になれば、もう片方は低気圧になるのです。米国の国務省が高い所から反対するとき、私が低気圧圏を成していれば、高気圧が低気圧

に吸収されるように、米国の国務省は私に屈服してしまうはずです。

私が非難されながらも闘わずに彼らを愛すると、彼らは私の友人になり、友人の家庭ができ、友人の氏族ができ、友人の国ができたのです。怨讐を愛する精神をもった人々によって構成された国が現れれば、その国は、神様が願う理想境となることができ、人類が入っていくことのできる理想郷になることができるということを知らなければなりません。

私は、とても見すぼらしい男です。事実、そうではないですか。皆さんは「違う」と言いますが、世の中の人たちは、私が愚かな人であると思っています。しかし、神様は、私が一番お好きです。世の中が私を愚か者扱いしたとしても、神様が認めるので、世の中に対して堂々とした立場で攻撃できるのです。

怨讐を愛する心をもてば、言えないことがありません。なぜですか。神様が送った男性であり、美男子というならば、そのような人が美男子です。立派な人というならば、そのような人が立派な人です。堂々として勇ましい人というならば、そのような人が堂々として勇ましい男であると考えるので、私はそれを栄光に思い、世の中に対して自信をもって攻撃するのです。

私一人がこのように陶酔して活動すれば、何が起こるか御存じですか。このようにすることによって、神様を喜ばせる若い青年男女が生まれ、神様を喜ばせる五色人種の家庭が生まれ、神様を喜ばせる民族が編成され、神様の祖国の主権復帰が可能になるのです。

「怨讐を愛しなさい」と言ったので、最も憎むべき人をも愛さなければなりません。一番の美男子に一番の醜女を夫婦として結んであげたとしても、怨讐を愛する以上に愛さなければなりません。そのような人は、この世の怨讐を愛するにおいて最高の王子の旗を掲げて前進する人の候補者です。事実そのような人がいるならば、どれほど素晴らしいか考えてみてください。そのような人は、民族の国境をさっと越えることができるというのです。愛する心だけをもって暮らす日には、すべての障壁が崩れていき、復帰摂理歴史が短縮されて天国が近づいてくるということを知らなければなりません。

私の哲学は簡単です。私は、やってみなかったことがありません。農夫にもなってみて、労働者にもなってみました。やれることはすべてやってみました。漁夫になってまぐろも釣りました。そのようにして生涯を生きてみると、一人だと思っていたのに、振り返ってみると英国人がついて来て、米国人もついて来て、世界の数多くの人々がついて来ています。ついて来るなと足でけ飛ばしてもまたついて来て、後ろに飛ばされてもまたついて来ます。ですから統一教会を、いくら研究してみてもその内容のすべてを知ることはできないのです。

内外の貴賓、そして紳士、淑女の皆様。

今から行くべきなのは、どのような道ですか。いくら氏族を編成したとしても、サタンの国の主権が残っている限り、皆さんは国のない人々です。ここが皆さんの国ですか。皆さんには国がないのです。いくら氏族がある

としても、その主権が天を中心とした主権でないときは、この氏族の首を切ることもあり得るのです。そうでしょう。それゆえに、天が歓迎することのできる国を訪ねていかなければなりません。今日、この地上における第一イスラエル圏というものは、天全体が歓迎でき、個人も歓迎し、家庭も歓迎し、氏族も歓迎し、民族も、教会も歓迎することのできる、そのような地になるべきです。

ところが、今日の統一教会を中心として見ても、既成教会を中心として見ても、大韓民国を中心として見ても、全体が歓迎できる立場に立ったでしょうか。そのようになることができませんでした。方向が違います。方向が違うのです。大韓民国が進んでいるのは外的です。そうでしょう。神様を中心としたものではなく、世の中を中心として外的に進んでいます。この国の主流的な思想がないというのです。

したがって、この国の主流的な思想を中心として天と連結させ、新しい立体的、あるいは平面的内容を備えた新しい国家観を形成し、その形成された国家観を、今日の国家を中心としたもの以上の内容として備えていかなければ、神様の祖国の主権復帰の時を迎えることはできません。

今日の「解放」というものは第一の解放です。今、統一教会においては、第二の解放が必要なのです。大韓民国も第二の解放が必要です。ここで大韓民国が第二の解放を迎えれば、国家と民族はそのことによって願いを成就できるかもしれませんが、統一教会は第三の解放を必要とするのです。そのようになるのです。大韓民国は第一の解放により、初めて内外において今の国家形態を備えましたが、第二の解放が必要な時が来ました。南北が統一されなければならないというのです。

その国はどのような国ですか。その国は、歴史過程において、民族が悲惨な路程をたどらねばならず、蕩減復帰の原則に一致することのできる国民性をもたねばならず、歴史的な伝統を引き継いできた国でなければなりません。その国はどのようにならなければならないのでしょうか。完全に統一された国にならなければなりません。今日の大韓民国がそのような国になろうとするならば、どのようにならなければならないでしょうか。

その国の基準に上がっていくためには、南北を統一しなければなりません。北朝イスラエルと南朝ユダのように分かれた南北韓を、一つに統一しなければなりません。カイン・アベル国家に分かれたのと同じように南北に分かれたのですが、これを統一しなければ一つの勝利的イスラエル国家は現れないのです。

それでは、この国において、大韓民国を中心として北朝鮮と韓国は、どのように統一されなければならないでしょうか。それは、新しい世界主義的な思想をもたなくては統一することができません。この時に備えて、新しい思想を掲げていこうというものが、今日の統一教会が主張する統一思想です。分かりますか。

今、私たちは二つのことをしなければなりません。世界において、いかなる国家もついて来ることができない団結した民族を形成し

なければならず、そして、いかなる宗教もついて来ることができない鉄のような信仰で団結した国家を成し遂げなければならないのです。このような思想を中心として、南北が統一された国家が成し遂げられなければなりません。そうしなければ、神様の国、世界に誇ることのできる天国の主権は誕生しないのです。これが、今日の私たちの行くべき地上の第一目的地であるということを知らなければなりません。

祖国を取り戻すことができなければ、サタン世界の国家を凌駕することのできる天を中心とした一つの国をもつことができません。その国をもつことができなくては、世界のサタン国家を打つことはできません。押し出せないのです。宗教、統一教会をもってしてもできません。真の父母の思想を中心として、国が方向を定めて進んでいかなければなりません。このような問題が残されているということを知らなければならないのです。

このような観点で見るとき、イスラエル国家の精神的な支柱がユダヤ教であったように、今日の韓国において統一教会がユダヤ教と同じ立場であるならば、真の父母の思想が韓国の主流的な思想になるのです。ある人たちは、そのように言うのです。国会議員たちもそのように言います。真の父母の思想を国家の中心理念すれば、共産党は問題ありません。

紳士、淑女の皆様。

今日、天のために行く人々は、サタン世界に派遣された密使です。個々人において、大小、広狭、高低の差はあるかもしれませんが、各自が置かれている生活自体においては、密使の生活から離れてはなりません。そこには、いつも生死の危険が伴っています。まかり間違えば、永遠の生命の問題が左右される立場に立つようになるのです。

それゆえに、永遠の生命を支えることができ、永遠の生命を保護してくれる私たちの祖国を取り戻すという観念が、その環境より何百倍も強くなければ密使の生活はできません。「祖国の栄光を願う心をもって祖国の恨を解いたとき、すべての万民が喜ぶ」ということを考えながら、新しい歴史を創建し、神様の祖国主権復帰の一日を迎えるその時に、自らの功労が現れることを思いながら、現在の立場を無視してしまうことができなければなりません。そのような心が先立たなければ、密使の使命を遂行することはできないのです。言い換えれば、神様の祖国主権復帰のための希望が現実の希望より千倍、万倍強くなってこそ、今の生命を捧ることがあったとしても、それを克服して密使の使命を遂行することができるのです。

もしそのように責任を果たそうとして、不意の事故で犠牲になったとしても、そこには新しい責任者を再び派遣できるのです。既に彼が死んでしまったとしても、彼の友人になることができ、彼の側に立つ人々が出てくるはずです。彼が模範となる立場で生きてきたゆえに、たとえ彼が犠牲になったとしても、そこには彼の側に立つ人々が残るのです。このような人々が残っている限り、神様がその基台の上に代わりの者を送ることができるのです。しかし、そうでない立場で死んでしま

うときには、そこで彼がいくら苦労したとしても、それで終わってしまうのです。

このような立場で皆さんは今、新しい時代を迎えてどのような姿勢を持たなければならないのでしょうか。神様の祖国主権復帰のための信念が、何よりも高く胸の中で燃えていなければなりません。言い換えれば、六千年間、神様が待ち焦がれた祖国を建設する旗手となり、先鋒に立った精鋭部隊の一員として開拓者になる、この途方もない使命に責任をもっているという自負心を感じなければならないのです。過去に生きた数多くの人々がもつことを願いましたが、もとうとしてももつことができなかった、一つしかなく、この一時にしかない特権的な使命を担ったという厳粛な責任感をもたなければなりません。

したがって、食べること、寝ること、行くこと、来ること、すべての生活が祖国創建のためのものでなければなりません。「神様から特別に派遣された密使として、凛々しく見事にこの使命を遂行しよう」と立ち上がってくれることを神様がどれほど期待していらっしゃるでしょうか。今までは、ひどく追い込まれ、激しく追い回されました。国家の基台を備え、全体の内容を提示して一度も広げてみることができなかった天のみ旨、祖国を立てることができる、そのようなみ旨を立てなければなりません。今までそのみ旨を、一度も立てることができなかったのです。

しかし、今からはそのような祖国を建てることができます。その祖国には主権があり、その祖国には国土があり、その祖国には国民がいます。また、そこには単一民族の血統が因縁となっており、他の民族が持つことができない歴史があります。そのような祖国のために私たちは密使の使命を遂行しなければなりません。そのような使命を自分自ら早く完遂して、やり遂げればやり遂げるほど、神様の祖国主権復帰の基台が自分によって徐々に近づくのです。きょうの苦労を代価として払うことが神様の祖国主権復帰の一日を早く迎えることのできる基台になるのです。このような事実を思いながら、皆さんは生きて密使の使命を完遂するという決意をもっていかなければなりません。そうでなければ、これから神様が私たちに与えてくださる世界史的な祝福と天運を、私たちのものとして迎えることができないのです。私たちは、天国を地上に建設しなければなりません。地上でその国を復帰し、その国の中心と一つになって、天の国において、天が願ったその希望の基準を備えてお父様のみ前に帰ってこそ、面目を立てることができるのではないかというのです。

ところが、皆さんに国がありますか。もっていないということを考えるとき、死ぬに死ねないのです。死ねば、どこへ行くのかというのです。お父様のみ前に行って面目のないことと恥ずかしさをどのように免れるのですか。自分の生命の長さというのは制限されているのに、その期間内にしようとするのですから、どれほど忙しいでしょうか。そこで悪なるサタンの環境は私たちに反対し、怨讐たちは私たちの道を妨げるのです。これを切り開いていこうとするので、いつも密使のような行脚の路程を避けることはできないのです。

私が行き来するのも、その国を取り戻すための、神様の祖国主権復帰のための建国の功

臣になるためであり、そのような使命を担い、あるいは天の密使として指令を受けて今日の悪なる世界に来てこのことを行っている、という事実を思いながら生きていかなければなりません。そのようにしなければ皆さんは、今後、訪れる国の国民として、その威信と体面を立てることができないということを知らなければなりません。

皆さんは個人的に影響を与えたいですか。家庭的に影響を与えたいですか。国家的ですか。世界的ですか。どのように影響を与えたいですか。世界的に影響を与えたいでしょう。しかし、世界的な舞台に上がっていこうとするならば、一人ではできません。国がなければなりません。しかし、皆さんの国があるでしょうか。

ですから私たちは、夜も昼もその国のために食べて、寝て、暮らそうとするのです。そのために生まれたということを、皆さんが天地を中心として誓う生活をしなければならないということを知らなければなりません。寝ているときにも、世界の数多くの人々のベッドを集めて、その頂上で寝ていると考えなければなりません。食膳を見てもそのように考え、どこにいても自分一人で座るのではなく、世界の人種をすべて集めた頂上の玉座に座っているという心をもたなければならないのです。天の息子はそのようでなければなりません。

サタン世界の権限を凌駕する位置に立つことができ、その栄光の位置に立って生きなければならないのが天の息子、娘の生活であるということを、皆さんは知らなければなりません。神様が息子、娘を愛そうとするならば、そのような息子、娘を愛すべきなのであって、サタンにさえも劣る息子、娘を愛すれば、父の威信が立たないのです。皆さんは、そのような信念をもって今後、全世界と手を結んで日々の生活をしていかなければならないということを、新しく決心しなければなりません。そこにおいて、統一戦線の基盤は確固たるものになると思うのです。

「私は、たとえサタン世界圏内にいたとしても、天の密使だ、天の一大使だ」と考えなければなりません。密使には、その国の国王と直接連絡することのできる道があるのです。ほかの人には分かりませんが、そのような密使の使命と威信のために生きているという信念をもっていかなければならないのです。このことを皆さんは、はっきりと知らなければなりません。国の国王も密使の報告をもっているのです。それと同じように、私たちがこの地上で、そのような使命をもっているならば、神様も私たちの報告と私たちの要求を待たれるようになるというのです。

したがって、自分が密使の立場で「至急に願うものを送ってください」と言えば、あらゆる冒険を克服しながらでも送ってあげようとするのではないでしょうか。これと同じように、皆さんがそのような信念をもって神様の特権的な栄光の息子、娘であることを認識しながら「私はこれを願うので成し遂げてください」と言えば、成し遂げてくれるのです。そのようにすれば、生きていらっしゃる神様を発見でき、生きていらっしゃる神様が働かれるのを見ることができるのです。

そのようになってこそ、指導者になることができ、病気の者がいれば病気を治すことができ、困難なときには、神様が直接助けてくださるようになるのです。そのような生活を通じて多くのことを学ばなければなりません。そうしてこそ自信が生まれ、そうしてこそ信念をもってすべてのものを打開していくことができるのです。

紳士、淑女の皆様。

私たちが行くべき所はどこですか。個人を尋ねていくことが、私たちが行くべき目的ではないのです。また、家庭を尋ねていくことが現在の私たちの目的ではありません。私たちが行くべき道は、国を尋ねていくことです。分かりますか。父、母、息子などという区別なく、これを尋ね求めなければならないということです。ところが、今日の統一教会の教会員たち、祝福を受けた家庭、氏族圏内にいる人々は、「ああ、国だとか何だとか、教会だとか何だとか、そんなことは知らない」と言います。そのようになれば、すべて落第です。原理的にそうなのです。

死ぬときまで国を求めていき、もてる精誠のすべてを尽くして、正に天国の主権復帰のために祝典を行い、祝賀することができ、勝利の凱歌を上げることができる、その時を迎えなければなりません。

イエス様の言葉ならば何であっても、その一つだけしか知らないというようでなければなりません。方向を提示するにおいては、二つではなく一つです。行こうと言えば行かなければなりません。そのようになっています。そのようになっていますか、いませんか。それでは、夫を捨てて、息子を捨てて、家庭を捨てて行こうと言えば、行かなければなりませんか、行ってはならないでしょうか。統一教会のためにそのようなことはしないのです。国のためにそのようなことができなければならないというのです。

今、以北（注：朝鮮半島で休戦ライン以北を言う語。北朝鮮）では、家庭の戸籍をすべて作り直しています。これはどういうことだと思いますか。サタン世界が先に行うということなのです。国のためには、自分の夫や、妻、父母、息子など、すべて捨てて立ち上がることができなければなりません。そうしなくては、希望の国を取り戻すことができません。その国を復帰するとき、その国とともに父母を取り戻すようになるのです。国を見いだすことができなければ、血を流す父母を見なければならず、血を流す妻を見なければならず、血を流す子女を見なければなりません。それ以上に悲痛なことがどこにありますか。それゆえに、国を取り戻す前には妻を愛することはできないのであり、父母を愛することはできないのであり、息子を愛することはできないのです。これがキリスト教が行くべき道であり、統一教会が行く道なのです。

皆さんは、自分自身を否定して、その国とその義のために生きる人にならなければなりません。いかなる困難な環境にぶつかったとしても、皆さんは、自分自身に対するお父様の願いがあることを思いながら、その環境と闘って勝つ人にならなければなりません。そのような皆さんになって初めて、神様の真の息子、娘であると言うことができるのです。

それでは、神様の国を建設できる人はどのような人でしょうか。それは、自らの一身を否定し、切ない心で天のために生きる人です。自分を否定して、社会と民族、国家、世界のために生きる人が、正に神様の国を建設することができる人であるというのです。さらには、国家と世界を否定してでも天のために生きる人が天国を建設することのできる人であるというのです。また、いかなるつらい環境にぶつかったとしても、自分一身のゆえに悲しむのではなく、社会と国家、世界、さらには天のために悲しむ人であってこそ神様の国を建設することができます。

それだけでなく、皆さんは、神様の国と神様の義を捜し立てる過程において、サタンとの闘いに敗北せずに勝利して、皆さんが個人から家庭、社会、民族、国家、世界を一つに連結させることができなければなりません。すなわち、皆さんがどのような立場に立ったとしても、そこでサタンと闘って勝利する人にならなければならないのです。社会に出れば、その社会のどのような環境の中にあってもサタンと闘って勝利すべきであり、国家に出れば、その国家の一番難しい問題に責任をもち、サタンと闘って勝利しなければならないのです。

六千年間神様を縛りつけてきたサタンが、そのまま素直に「ああ、私は降参します」と言って、目を伏せて帰ると思いますか。皆さんは雑巾でも、捨てようとすればもったいないと思うでしょう。雑巾でも、引っ繰り返してにおいをかいでみてから捨てるのです。サタンは、そのまま退いてはいきません。ですから、がむしゃらな闘いをしてくるのです。それゆえに、中心に合わせなければなりません。統一教会の文総裁も、中心から外れるようになるときには負けてしまうのです。方向が合わなければ、発展しないということです。

その国を取り戻すのは世界を取り戻すためであり、世界を取り戻すのは霊界のためなのです。そうして何をするのでしょうか。神様を地上にお迎えして、そして定着し、万国が神様を中心にお迎えして、その神様の前に勝利の栄光をお返しするために行くのです。そのような闘いをしなければならないのが私たち統一教会の使命であるということを知らなければなりません。

私たちは、はだしで出ていき、神様の祖国を創建しなければなりません。食べ残したもので、この国を生かすことができますか。食べること、着ること、行き来することに、いつ神経を使うことができるでしょうか。はだしで、素手で開拓していかなければなりません。このようなことを行うところが統一教会なのです。

皆さんは祖国を捜し出さなければならない勇士ですか、それとも滅ぼす亡国の士ですか。勇士とは国を代表し、ほかの人ができない仕事をできる人のことを言うのです。誰でもできる仕事をする人を勇士とは言いません。そのような人は兵士です。同僚たちができずに後退するとき、その仕事をやり遂げることができる人であるならば、その人は勇士です。「勇」という字は、「すばしこい」という意味です。誰よりも早く走り、鉄砲玉もよけるほどにならなければなりません。誰でもできる仕事をする人を勇士とは言えないのです。

国を建国するにおいて、開拓の勇士となるべき先鋒に立つ将軍は誰ですか。そして、国を成すことのできる基台はどこですか。一つの国を成そうとすれば、主権がなければならず、国土がなければならず、国民がいなければなりません。それでは、天の国を中心として見るとき、国土となり得る基盤は何ですか。それは、教会の人と物しかないというのです。そうでしょう。

この韓国に建てられる国はどのような国でしょうか。互いが流通し交流するようになるときは、共産国が建てられるでしょうか、それとも今日の大韓民国としてそのままにしておくのでしょうかそうでなければ、どちらでもない新しい国を追求するのでしょうか。このような問題について見るとき、私たちの時もますます近づいてきているということを感じるようになります。皆さんが、このことを成して責任を負うべき統一の群れであるならば、それに対する責任感をどのくらいもち、また、どの程度の犠牲の代価を払うことができる決意ができているのかというのです。自信がありますか。三十八度線の以北に越えて、以北にある五つの道の市、郡を中心として、私たちの基地を準備しなければなりません。

人員が不足なこの時に、誰が北韓の地の、定州ならば定州の責任者になるのかを考えてみなければなりません。定州の郡ならば定州の郡を中心として、「私が責任者にならなければならない」と十年、二十年準備して、それでもなれなければ、後孫に「お前は一所懸命に勉強して、一所懸命に準備をし、その日を迎えたら定州の地の天との因縁を代表した責任者になりなさい」と、遺言を残してから死ぬことのできる、そのような精誠を尽くす皆さんになってみましたか。私は今まで、そのように思って準備してきました。

そのようなことを考えるときに、若い者たちは地方に帰って自分の子女と妻を連れて、笑いながら暮らすようになっていますか。そのように暮らすようになっていますか、いませんか。死んでも国を残していかなければなりません。死んでも、子女たちに国を残してあげなければなりません。新しい決心をしなければならないのです。

「私は、ソ連と満州に隣接する地方に行って共産党と額を突き合わせ、朝夕に銃声を聞きながら国境地帯の見張り役をする責任者にならなければならない。国が理解してくれず、誰も理解してくれなかったとしても、生命と取り替えても、国を愛する忠節の心は変わらない」という決心をしなければなりません。それで満点です。世の中が分かってくれなくてもかまいません。霊界に行けば、すべて明らかになるようになっているからです。

このようなことを考えるとき、人が足りないということを皆さんは知らなければなりません。分かりますか。人が不足しているということを知らなければなりません。かかしのような男性であってもラッパをかつがせ、あるいはロボットを造って北韓の地を歩き回らせてラッパを吹かせたいというのが私の心情であり、神様の心情です。口があり、感情をもった男として生まれ、それも二十歳、三十歳の若い心と体をもっていながら、原理のみ言を語ることができないというのでは話になりません。

目玉が腐って飛び出すくらい、夜、寝ずにでも勉強をしなければなりません。おなかがすいて骨と皮だけになったとしても、準備をしなければなりません。そのようにして骨と皮だけになったやせこけた体が、天の愛をすべて受けることができる体となるのです。神様は、そのか細い一人の男性ならば男性に、すべての期待をもつことができるのではないかというのです。

イエス様も、国を建てられるために来られました。祖国がなければ、かわいそうなのです。祖国がないので、宗教人たちは悲惨でした。審判しようとすれば個人と家庭、氏族、民族、国家、世界が不変の基準に立ってこそ、その基準を基台として審判するのです。祖国は最後の希望です。祖国の中には、民族も、氏族も、家庭も、個人もすべて含まれているのです。

この三千里（注：朝鮮半島全体）が祖国になりましたか。そのようになっていないので、清算しなければなりません。神様が望まれ、イエス様と聖霊が望まれる祖国を創建するために、私たち全員が一片丹心で頑張らなければなりません。

善というものは何でしょうか。家庭のために個人が犠牲になり、氏族のために家庭が犠牲になり、神様の祖国主権復帰のために氏族が犠牲になることが善です。神様の祖国主権復帰のためにすべてが犠牲になって、神様の祖国主権復帰が成し遂げられれば、すべての人が愛国の忠臣となるのです。国家的基準の前に忠誠を尽くして国家基準を立てれば、家庭、氏族の基盤を築いたという公認を受けるようになります。道義の基準とは、神様のために絶対忠誠することです。そのようにすれば、その過程のすべてのものは認められるようになるのです。

私たちはどのようにすべきでしょうか。イエス様は「わが父よ・…わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさってください」（マタイ二六・三九）と言われました。ここにおいて、「わたしの思い」とは世の中の思いであり、「父のみこころ」とは神様のみ旨です。統一教会員である皆さんは何をしましたか。忠臣の道理を立て、またその実績をもってきましたか。孝子の道理を果たして、その実績をもって、個人、家庭、氏族、国家、世界的な闘争をする覚悟ができていなければなりません。イエス様は祭物の使命をもって来られました。皆さんは世界的な闘争をなしていきながら、民族的な基盤を築いていかなければならないのです。メシヤとの相対的な価値を備えなければならないのです。指導者が世界を開拓するところにおいて、指導を受ける皆さんは、民族的な道を築いていかなければなりません。数多くの人々が神様の主権復帰の道を願いながら死んでいきました。いつになるとしても「必ず成る」という信念をもって死んでいったのです。

統一教会員は、個人から民族、国家基準まで築いてきました。今からは、全世界の人類とすべての国家を動員しなければなりません。私たちは、神様の祖国主権復帰、自由、平等、幸福の日を捜し出していかなければなりません。その道が困難であっても行かなければなりません。それが、私が望む観点であり、神様が望まれる基準です。イエス様はこの基準

を望みつつ、歩まれている途中で亡くなりました。私たちは神様の祖国主権復帰の過程において、苦労しながら行かなければならないのです。

韓国は、私たちが責任をもたなければなりません。きょうもあすも変わることのない祖国創建という覚悟と信念をもって、イエス様の祖国、聖霊の祖国、先知先烈（注：預言者と、義のために戦って死んだ烈士）の祖国、神様の祖国、その祖国を成せなかった恨を解かなければなりません。そうでなければ、面目が立たないのです。

私たちは、祖国を取り戻さなければなりません。祖国を取り戻そうとすれば、祖国のために生きなければなりません。祖国のために生きることができない人は祖国を見いだすことができません。それでは、どのように生きることが祖国のために生きることになるでしょうか。世界を自分の祖国と思って世界のために生きなければならないのです。そのような人は、祖国を創建することができます。食べること、寝ること、歩いていくこと、すべての生活と行動が祖国創建のためのものとならなければなりません。

それゆえに私たちは、共産党から白昼、刃物で刺される覚悟をもって闘っているのです。この民族ができないときは、私たちがしなければなりません。この民族が行くことができなければ、私たちが行かなければならないのです。そのためには、誰よりも祖国を愛さなければなりません。御飯を食べるのも祖国のために食べ、結婚するにしても祖国のために結婚しなさいというのです。私たちの祖国のためにです。

今は、私が言えば何でも聞くことができる群れが生じ、私が方向を提示すれば動くことができる群れが生じましたが、これで幸福を感じる男ではありません。統一教会を犠牲にしてでも、神様の祖国主権復帰を約束できる、そのような基台を広めていくのです。六千年摂理の中心的み旨として立てた家庭を信奉することのできる、教団と民族と国家がなければなりません。神様を信奉することができる、そのような基台を準備し、それが一時に連結することを願って送られたのですが、それが粉々に壊れたゆえに、再び収拾しなければならない運命が残るようになったのです。これを収拾するために先頭に立って走らなければなりません。

夜になって寝床に入る時間にも、その願いの国と共に寝なければなりません。今は神様の国がありませんが、その国の国民の一員として、その国のために眠るのであり、目覚める時もその国を建国するための一員として眠りから覚めなさいというのです。見て、聞いて、感じるすべての感覚も、祖国という命題を思うことなくしては感じてはならないというのです。その日が来るまでは、死んではなりません。その日が来るまでは忙しいのです。そのことを成すためには、激しい受難と逆境を克服しなければなりません。

成すべき仕事があれば、寝るのが遅くなったとしても解決しなければならないのです。神様の祖国の主権復帰というものが時間を中心とした犠牲の量を加重させてこそ訪れてく

るということを思うとき、自分の涙と精誠の量を、きょうこの時間を通じて少しでも補充すべき責任があるのにもかかわらず、安らかに寝て伸びをしながら起きられるのかというのです。起きては腰を曲げて「お父様。あなたが訪ねていかれる明日の安息の住みかであり、あなたが行使されたかった世界を支配することのできる勝利的国家の基台に向かっていく寂しく孤独な男の行く道が、このように悲惨であることを感じます。私自身がそうであるのに、天が訪ね求めてこられる道はもっと悲惨なのではありませんか」と、祈祷しなければなりません。

疲れたといって思いのままに横になることができないのです。死んでも国のために死ななければなりません。それゆえに、年を取って疲労を感じるそのような立場で、自分がもし死の場に行くとすれば、その場で残すことができる一つの願いが何かというとき、それは「天のためにできることはすべて果たした。その国のためにできることはすべて果たした」という言葉を残すことです。

イエス様は「（あなたがたは）何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。・・まず神の国と神の義とを求めなさい」（マタイ六・三一～三三）と言われました。このように聖書の主流思想は国です。国、その国を求める思想なのです。自分の幸福を求める思想ではありません。国の民として生まれ、夫をもったとしたならば、その夫は国を代表した夫です。ゆえに、国を愛した後に夫を愛さなければなりません。妻も国を代表した妻であるので、国を愛したのちに妻を愛さなければならないのです。死ぬにしても「私が成し得る力をすべて果たし、私はこれ以上できないというその位置で死なせてください」と言えなければなりません。「これをやっておけばよかったのに」という言葉を残して死んではなりません。それゆえに、やってもやっても忙しいのです。行っても、また行かなければならないのです。ほかの人が休む時間に、私たちは一歩でもさらに進まなければなりません。「サタン世界よ、休んでいろ。サタン世界よ、お前は何もしないで遊び暮らしていろ。我々はその国のために歩むのだ」と思わなければならないのです。

南北統一を熱望する愛国同胞の皆さん。

特に女性の使命として、子女格である青年男女および学生たちを、真の教育を通じて真の子女として復帰しなければなりません。さらに、母と子女が一つになって模範を示し、教育を通じて夫までも真の天の息子として復帰し、真の父母に従い、神様を中心に侍り、地上天国理想を復帰しなければなりません。

改めて、きょうのみ言が、南北韓が共に真の愛で出合う、その日を早める汎国民運動になることを願いつつ、私の話を終わりたいと思います。

神様の祝福が皆さんと、皆さんの御家庭に共にあることを祈願いたします。ありがとうございました。

Book 十四: 真の孝の生活
A Life of True Filial Piety

はじめに

文鮮明先生は、かつて数えの十六歳の時にイエス様からメシヤとしての使命を託されてのち、神様の解放と人類の救いのために血と汗と涙の人生を生きてこられました。服を涙でぬらす祈祷を通して神様と霊界に通じ、神様がどのようなお方なのか、神様と人間とはどのような関係なのか、深い瞑想と祈祷をなさいました。

文鮮明先生が発見された神様は、今までの人類が考えてきた栄光の神様ではなく、堕落した人類のために深い苦痛を受けられ、身もだえするかのように胸を痛めてこられた悲しみの神様でした。また、神様と人間との関係は、父子の関係だということを明らかにされました。

父母はいかなるものよりも、子女のために完全に犠牲になり、投入し、子女の幸福のために命も惜しまない存在なのです。そのようなお方が神様であられるということを悟った文鮮明先生の一生は、ただ悲しみと苦痛の神様を解放してさしあげるための超人的な生きざまだったのです。ほかの何ものでもなく、ただ神様を喜ばせてさしあげ、人類を数うために、孤独な立場で多くの迫害と苦難を越えられながら、真なる孝子として生きてこられたのです。

本書は、真の孝子としての完全な手本として生きてこられた文鮮明先生が語られた「文鮮明先生み言選集」三百余巻の中から「真なる忠孝とは何か」をはじめとして、「聖子としての道理」、「聖子、忠臣としての姿勢」など、真なる忠孝に関するみ言を精選して、訓読用の書籍として編纂したものです。

どうか、真の御父母様が生涯にわたって体で示してくださった真の孝の生活を手本とし、そのみ言を訓読することによって、私たち自身も真なる孝子、孝女となり、聖人、聖子となって、歴史的に悲しみを受けられた神様を慰労してさしあげ、解放してさしあげる子女となるよう祈るものです。

二〇〇二年十月

第一章　忠孝の意義

一、忠孝思想は韓国人の中心思想

孝行する人は、自らの生活の中で良いことがあれば、先に父母を思います。良いものを見た時に、先に自分の夫や妻を思うのは堕落した世の中ですることです。先に自らの父母に貴い物を買ってさしあげなくては、自分の妻に買ってあげることはできません。

男性たちも、自分の服を買おうと思えば、先に父母に買ってさしあげてから買わなければなりません。そして、妻や子供たちにも買ってあげなければなりません。

御飯を食べる時も、父母に侍って食べなければなりません。サタン世界の父母が亡くな

っても、三年間喪に服するのが韓国の風習です。ですから、この地上で三年以上精誠を尽くして父母に侍らなければ、天上世界に行って、「大韓民国の子孫だ」と言うことはできません。

昔、孝子が父母の三年の喪に服する時、墓地に穴蔵を建て、そこで起居しながら孝の道理を履行したのが韓国の礼法ではありませんか。

私たちは、それ以上にしなければなりません。私たち祝福家庭は、お互いの良い面を備え、父母に侍る生活をしなければなりません。（一九六九．一一．一〇）

韓国人は、古くから忠孝の志操が高い民族です。国軍の日(韓国軍創設記念日、十月一日)に五・一六広場に招待され、壮年の国軍の威容を見て満足感をもったことがあります。そして、その国軍の勇士たちが査閲台の前を通り過ぎながら叫ぶ「忠孝」というスローガンは、本当に印象的でした。

神様から召命を受けた民族として叫ぶスローガンとしては、あまりにも啓示的でした。世界のどこの国にも、このようなスローガンを叫ぶ軍人はいないでしょう。

韓国は、最後に神様に忠誠を尽くして孝行する民族なので、今日、その忠孝精神が国家の中心思想になったのです。沈清の父母のために尽くす哀切な孝行心、春香の夫に対する志操、鄭夢周の君主に対する忠誠、柳寛順の殉国精神、このような忠孝の志操は、古今東西、どこにもその類例を見ることができない韓民族の魂です。

このような忠孝の精神と、松と竹のように固い志操は、今後成し遂げられる地上天国の中枢的思想と精神になるのです。天国は神様の国なので、その国のために永遠に忠誠を尽くさなければならず、神様は人類の父であられるので、その父に永遠に孝行しなければなりません。世界の様々な民族をいくら試験してみても、韓国のように忠孝の情熱と志操が高い国はないので、神様は、韓国を選んで訪ねてこられるのです。（一九七八．一〇．一九）

孝子は、百年たとうと千年たとうと、父母を離れてはいけません。「一緒にいたらいい！」と思わなければなりません。父母に「できるならば、私と千年、万年一緒にいたらいい！」と思わせる、そのような父母の心を引きつける者でなければ、孝子ではありません。

父母の愛には、子供がいくら悪くても、「その子供と共にいたい」という思いがあるのです。

それゆえに、真だというのです。しかし、親不孝者とはどのような者でしょうか。父母と共にいることを嫌うのです。聖書にもそのような比喩が出てくるでしょう？　兄弟たちと共にいることを嫌うのです。自分一人で自由にしてみたいというのです。それは何の種ですか。不孝の種です。（一九八六．一〇．一）

孝子とは、自らの立場を忘れて先に父母の事情を思い、涙を流す心情で父母のために生きる人です。忠臣とは、国家が乱世に置かれ

ている時、自らの一身のことをすべて忘れて国王の困難を先に心配し、忠誠の道理を果たしながら生きる人です。

自分を忘れ、自分の利益とすべてのものを犠牲にするところから、忠孝の極致が連結されるのです。（一九七〇．一二．二二）

家庭において、男性でも女性でも兄弟でも、すべての人が願うことは、孝子、孝女にならなければならないということです。それは、愛を中心として一つの体にならなければならないということです。

家庭を一つにするためには、孝子が必要です。国も同じです。国の父と母である国王と王妃、そしてその国王の息子、娘を中心として、相対的世界の夫婦と兄弟同士が上下、左右、前後で合わなければなりません。前後がなければ、父母と子供は関係を結ぶことができません。ですから、上下、左右、前後です。

兄弟が絶対的に必要です。結婚は、兄弟から連結されていくのです。（一九九七．八．一三）

皆さんは、忠孝の道理について話しますが、その定義を知りません。父母を家庭の中心として神様と同じ立場に立ててさしあげ、心と体を一つにし、子供を愛するその父母の心が変わらない限り、その愛する心の前で、常に心と体で一〇〇パーセント受け入れ、一〇〇パーセント順応することができる立場に立った息子、娘を何と言うのですか。「孝子」と言うのです。

今日、忠孝の道理について話しますが、本当の忠孝の道理を知らないのです。（一九七八．一〇．二八）

父母の願いとは何でしょうか。父と母として、血統的に一つになった根がありません。息子、娘を生んでこそ、その家庭の血統が続いていくのです。息子、娘が父母を愛することによって、関係のなかった父と母の血統が、その息子、娘によって統一されるのです。子供によって父母の完成がもたらされます。その息子、娘が孝行することによって、父母の完成がなされるのです。

私に、孝行することのできる父母がいるというのは、幸福なことです。私は、父母の生命と、父母の愛と、父母の血統を得たのです。父母の愛を通して、父母の愛が私において再び二重になるのです。核になります。皆さんの愛と生命と血統は、副体となるのです。それゆえに、父母を完成させれば、私の完成をもたらすことができるのです。私が成長すれば、父と母と同じように一つにならなければなりません。それゆえに、お互いが完成するのです。（一九九一．一一．一〇）

家庭が願う世界とは、どのような世界でしょうか。国です。家庭が直行していかなければならない国です。その国が行かなければならない所とは、どこでしょうか。世界です。その世界が行かなければならない所とは、どこでしょうか。世界が行かなければならない所、地上天国が行かなければならない所は、天上天国です。

ですから、国の忠臣とは、国の孝子のことです。世界の忠臣とは、どのような人でしょうか。世界の聖人とは何かというと、世界の孝子のことです。天地の聖子とは、どのような人でしょうか。天地の孝子のことです。孝子という存在、息子という存在には、自分というものがありません。このようになるのです。（一九九六．一一．一一）

二、聖人、聖子は忠孝の完成者

大韓民国は、忠孝思想が本当に素晴らしいのです。それでは、大韓民国の民は、大韓民国に対してだけ忠誠を尽くせば良いのでしょうか。これが問題です。日本人は、日本の天皇に対してだけ忠誠を尽くせば良いのでしょうか。ドイツ人は、ドイツの主権者に忠誠を尽くせば良いのでしょうか。あるいは、アメリカの国民は、アメリカの大統領に忠臣の道理を果たせば、すべて通じるのでしょうか。違います。通じません。

大韓民国の国民に「あなた方は聖人になりますか、忠臣になりますか」と尋ねるとき、「今、大韓民国は忠孝の道理が中心なので、聖人のことは分かりません。忠臣になろうと思います」、これではいけません。

忠の道も重要ですが、誰においても聖人の道理を行かなければならない道が残されているので、聖人の道を行こうという新しい国民がいるとすれば、その国民は、世界の福を人類の前にもたらすことができる人々となります。

忠臣とは何かというと、忠臣は、その国家の福をすべての国民の前にもたらしてくれるのです。孝子とは何かというと、その福を家庭にもたらしてくれる人です。それを知らなければなりません。（一九七八．一〇．二八）

愛国者である忠臣と聖人では、どこが違うのでしょうか。忠臣とは、自分の国のために生命を捨てる覚悟をし、公的にすべてのものを投入していく人のことをいいます。

聖人とは、自らの民族を越えて世界人類のために生き、さらにはより公的な神様のために生き、世界人類に対して、その前で忠孝の道理を果たすために、いかなる孝の道、いかなる忠の道よりも、それ以上に尽くさなければならないと決意して立ち上がった人です。それをなすために、忠臣の位置を捨て、自分の国の国王を捨てていこうという人です。

国王がその手をつかんで「あなたが行けば、我が国は滅びる」といくら頼んだとしても、国王の立場を考えずにそれを捨て、世界に向かって聖人の道理を全うするようになれば、その国王に対して世界にない忠臣の道理を果たすこと以上の価値を、天から認められるようになるのです。（一九七八．一〇．二九）

愛国者の中には数多くの孝子が入っています。孝子になったとしても愛国者になることができなければ、それは、愛国者の隊列に上がっていくことはできません。しかし、孝子になることができなかったとしても、愛国者になる時には、自動的に孝子の班列に上がっていくのです。

そのような意味で、聖子の位置に立てば、聖人を統治することができます。孝子となることができず、愛国者となることができず、

聖人となることができなくても、聖子の位置に立てば、すべてのものはその下に抱かれるのです。しかし、聖子となる道は、それほど易しい道ではありません。愛国者の中の最高の愛国者となることができる困難の峠を克服した歴史をもった人とならなければならず…。

孝子ならば孝子として、愛国者ならば愛国者として、聖人になる時まで、あらゆる困難を経て、それ以上の立場で克服することができる自主力をもったその基盤において聖子の道理が連結されるのです。そのような過程を経ていない人は、短時日のうちに世界的迫害を受けなければなりません。（一九八九．一二．三一）

人に絶対的に必要なものは、孝子の道理、忠臣の道理、聖人の道理、聖子の道理です。堕落したので、聖人が必要です。聖子の道理を完成するのです。

それゆえに、神様のすべての相対圏は、私から、天、世界、そして私たちの家庭まで連結することができるのです。それは、生きている間に成し遂げなければならない道です。完成する道です。国についていえば、国王は、父と母の骨です。そこに接ぎ木して大きくなろうというのです。私が家庭をもたなければ、国の前に立つことはできません。また家庭も、国がなければ、サタンの国の前に破綻するのです。（一九九七．四．二一）

愛の生命力がそのまま通じる家庭を愛することが孝子の道であり、国の生命力を中心として愛することが忠臣の道であり、世界の生命力と愛を連結していく道が聖人の道です。このように見るとき、このような方向を通して人倫道徳を教育してきたという概念は、確かだというのです。それが正しかったことを知らなければなりません。世界を愛することが聖人の道理だ、ということを知らなければなりません。

これが、人倫の道徳教育の標準となってきたのです。それが間違いでなく正しかったということを、ここから見いだすことができるのです。（一九八一．二．一五）

人間世界で生きる時、愛を中心とした孝子が最初の円であり、忠臣はその外側の円です。これが大きくなっていきます。小さい時は、これは小さいのですが、大きくなっていくのです。この円が、聖人はもっと大きく、聖子はもっと大きいのです。ですから、これをきちんと並べれば、その一点は孝子です。孝子が最初です。その次に忠臣、聖人、聖子、この四段階です。

その中心は垂直です。垂直を中心としています。すべて中心は一つです。二つではありません。愛は中心が一つです。それゆえに、父母の前における孝子は地獄に行きません。国の前における忠臣は地獄に行きません。救世主を信じなかったとしても、それは、自然に収拾するようになっています。ですから、聖人は地獄に行きません。

すなわち、この話は、孝子になれなかった人は、忠臣にはなれないという話です。それでは、孝子になりたいと思っても、父母がいなくなればどのようになるのでしょうか。孝子が良いというのですが、自分に父母がいなければどのようになるのでしょうか。大変な

ことです。「神様、私に父母を下さい！」と言っても、天地の道理はそのようにはなっていません。父と母が死ぬこともあり得るのです。

そのようになれば、孝子になりたいと思っても、なることができるでしょうか、できないでしょうか。なることができない時には、どのようにするのでしょうか。忠臣、聖人になりなさいというのです。聖人の位置は、孝子や忠臣の位置よりも勝っているのです。（一九九〇．一．七）

父母を愛し、息子、娘も愛するのが孝子です。それは、最初のページも愛であり、過程も愛であり、最後の結論のページも愛です。家庭は、核となることはできません。家庭の核の上には国がなければなりません。国の核は何かというと、忠臣の道理です。それはどういうことでしょうか。国を愛しなさいということです。

忠臣、聖人、聖子、これらはすべて核は核ですが、何を根拠として核になっているのでしょうか。それが愛だということを人間は知りませんでした。しかし、漠然とそのように立ててきたということは、今後、終わりの日の時代に定着し得る安定点は、愛以外にはないということを意味しています。

それゆえに、男性と女性の夫婦同士で愛する人こそ、孝子になるのです。孝子になり、忠臣になるのです。忠臣になり、聖人になるのです。聖人になり、聖子になるのです。

聖子になって、すべての相続権をもつのです。このようにして神様の息子になれば、神様も私のものになり、それから神様がもっているものも私のものになり、今後、神様が創造することのできる希望的な未来のものも私のものになるのです。

聖子の位置に立ってこそ、過去と現在と未来のすべてのものを伝授してもらうことができます。そこにおいては、被造万物は頭を上げて抗議することはできません。そこにおいて初めて、統一天下をうんぬんすることができるという結論が出てくるのです。（一九九〇．一〇．七）

私たちが人生行路をどのように歩んでいくべきかという問題について整理してみるとき、孝子が行く道、忠臣が行く道、聖人が行く道、聖子が行く道の、その骨子とは何でしょうか。

永遠に共に暮らしたいと思うことです。そのような人々は、上下で共にいたいと思い、前後や左右で、昼夜を問わず、生涯を超えて共に暮らしたいという思いが心の奥深くまでしみ込んだ人々ではないでしょうか。このような推理的な結論が出てくるのです。（一九八六．一〇．一一）

それでは、皆さんは、神様の前に何にならなければならないのでしょうか。第一に、孝子にならなければなりません。第二に、忠臣と愛国者にならなければなりません。忠臣と愛国者の上は何でしょうか。聖人です。

孝子とは、家庭において、父母の前に絶対的な忠誠を尽くす人です。愛国者とは、国に対して絶対的な忠誠を尽くす人です。それで

は、聖人とはどのような人々でしょうか。イエス様や釈迦や孔子のような人々です。彼らは、自分自身を主張した人々ではありません。

神様を主張した人々です。神様を中心として生きた人々です。

また彼らは、人間たちに被害を与えた人々ではなく、利益を与えようとした人々です。また彼らは、国家主義者ではなく、世界主義者です。（一九七二．三．二四）

第二章　真の忠孝

一、真の忠孝は困難の中でも自ら実行すること

易しい立場で易しいことをしながら孝の道理を果たそうという人よりは、限りなく難しい立場で孝の道理を全うしようという責任者、そのような立場に立った人、そのような立場に立った息子、娘こそが、孝子の行く道に入ってきた人です。それは間違いありません。

このように見るとき、神様は世界的な問題を心配していらっしゃるので、世界的な問題に責任をもとうという人がいれば、その人は、世界のいかなる民族やいかなる人よりも、神様の前で認められる近い立場に立っているということは言うまでもありません。

それゆえに、孝子の立場とは、「父母が受けた悲惨なことに対して代表的に責任をもとうとする立場だ」と結論づけることができます。

良いことがあっても、良いことは除き、常に悪いことに責任をもたなければならない道が孝子の行くべき道です。（一九七二．九．一〇）

周囲に散在する数多くの人々が父母に侍って孝行している生活環境において、父母の前に孝行するということは難しくありません。しかし、多くの人が、みな父母を排斥し、自らの行かなければならない道を避けようとする時に、たった一つしかない自分の生命を捧げる恨があったとしても、行かなければならないその道において父母のために生きようとする立場に立つならば、それこそ、環境を超越した立場で孝行の道理を果たした、ということになるのです。それゆえに、そのような人は孝子として立てざるを得ないという事実を、私たちはよく知っています。（一九七一．三．四）

孝子とは、豊かに暮らしながら孝行するのが本当の孝子ですか、貧しく暮らしながらも孝行をするのが本当の孝子でしょうか。（貧しく暮らしながらも孝行するほうです）。

一日に一食しか食事をとることができない家庭で育ち、自らの血肉まで売ってでも父母に三度の食事をとらせてあげるのが孝子ですか、三度の食事をとり、残って処理できなかった御飯をたくさん盛ってあげて侍るのが孝子ですか。どちらが本当の孝子でしょうか。（血肉を売ってでも孝行するほうです）。

本当の孝子は、豊かに暮らしている家からは出てきません。それを知らなければなりません。

父母が飢えていて、弟が飢えているのを見る時、母が自分の御飯を弟に与えている姿を、その息子、娘は、夜を明かしながら見つめ、骨身にしみるほど知っています。弟をあのように愛しているので、自分も母に倣って、その弟に一銭でも多く助けてあげようと思い、自分の御飯を先に母に分け与えるようになる時、孝子圏、孝子の環境が生まれるのです。自分だけのために生きる人は、すべて追放されるのです。このような観点から見るとき、孝子が行く道は「ため」に生きる道です。

本当の孝子になる道は、「ため」に生きることです。環境が良い所で「ため」に生きることではありません。（一九九七．八．一三）

私たちが誇ることのできるものは、何もありません。天の主権と民と国土を滅ぼした、ということしかありません。今、私たちは、忠誠と孝行によって、天の主権と国土と民を売り飛ばして蹂躙した自分自身を反省しなければなりません。裏切った自分自身を反省しなければなりません。悲しみの中でも、天の主権と民と国土を取り戻してさしあげようという信念が明確でなければなりません。食べることも、生きることも、死ぬことも、ただこれだけのためになければなりません。

それでは、何のためにしなければならないのでしょうか。地と民と人類と主権のために忠誠を尽くし、孝行しなければなりません。自覚さえすれば、不忠をし、不孝をし、裏切ったすべてのことを父が忘れてくださることのできる時なので、民族に代わって悔い改め、国土に代わって悔い改め、主権に代わって悔い改めてください。父のために悔い改める時は、過ぎ去ります。

また、地のために悔い改めなければなりません。今も、数限りない聖徒が待ち望んでいます。私たちは、天の主権と領土を回復するために悔い改めなければなりません。天の民を回復し、天の国土を回復し、天の主権を回復するために、皆さんを選んだのです。

ですから、皆さんは、もし間違えればアダムとエバのあとに従っていくようになります。自分で正しく判断して行えば、勝利の日を迎えるようになるでしょう。（一九六一．五．一三）

歴史的なすべての先祖のように、霊界に行き「私はどうしたら良いのか」と言って恨を残す群れになることなく、自分一代においてこれを終結させ、「私はどうしたら良いのか」と言う位置に立つ子孫を残さないために、私たちは、団結し、一つになってこれを完結させ、国家的な忠臣、国家的な孝子、孝女の基盤を築かなければなりません。私たちにはそのような責任があります。

これが、現在、私たち統一教会の行かなければならない道だということを知らなければなりません。

干渉しない立場で、孝子となり、忠臣、烈女となることができ、天が指示し命令しなくても、怨讐サタンに対して復讐し蕩減するために、自ら責任をもって行くということが、どれほど福なことかというのです。

そのようなことを知って、この時代とこの世代に対する責任を担って闘っていくことができる自らの立場を感謝に思いながら、今からあすに向かって、「私はどうしたら良いのか」という問題にぶつかった時に、「私は忠臣となり、孝子、孝女となった」と言うことができる時まで、倒れることなく必ず進んでいってくれることをお願いします。（一九六三．一〇．二四）

二、真の忠孝は家庭を築き、父母と国を完成させること

父母を知ったならば、その父母の前に何をしなければならないでしょうか。孝行しなければなりません。孝子にならなければなりません。また、その父母を中心として、その国の忠臣にならなければなりません。その父母が、国を率い、世界を率いてきたからです。

忠臣になる前に孝子にならなければならず、孝子になる前に真の兄弟を誇ることができる家族にならなければなりません。家族とは、兄弟間で褒めたたえることができる圏を中心とした名前です。

それでは、孝子とは、どのようにするのが孝子でしょうか。昔、結婚して夫婦となり、家庭を率いて父母の前に孝行した男性と女性以上の孝行をしなければなりません。結婚しなくては、真の孝子、孝女となることはできません。

真の孝子、孝女とは、結婚したのちに初めてなることができるのです。結婚して夫婦を成し、その父母の前で、夫の孝心に妻の孝心をプラスして、二人で父母に侍る孝心の基盤を備えてこそ、真の孝道圏を成立させることができるのです。

忠臣も一人でなるのではありません。統一教会でいう忠臣は、一人でなることができるものではありません。家庭を築いた夫婦であってこそ、忠臣になることができます。ですから、皆さんが忠臣という立て札を立てるためには、孝子を生まなければなりません。

皆さんは、神様の前に孝子とならなければなりません。孝子は、一人でなることができるものではありません。三位基台を中心として、三人の兄弟が一つになって初めて孝子となることができるのです。皆さんには三位基台があるでしょう？　その三位基台が一つにならなければなりません。

三位基台の三つの家庭が兄弟として一つになり、各家庭の四人の子供が再び糾合されなければなりません。そのようになれば、三×四は十二で、十二子女になるのです。それがイスラエルの第一の基盤です。部族、一族、別の言い方をすれば、氏族創立の起源となるのです。（一九七〇．三．二三）

天の皇族になろうとすれば、孝子、忠臣、聖人、聖子にならなければなりません。その訓練場所が家庭です。完成した家庭が拡大されれば、理想的な王国になるのです。常に家庭がセンターです。男性と女性の二人の問題だというのです。理想的男性と理想的女性が夫婦となって家庭を築けば、すべてのものが完成します。理想家庭が拡大されて国家になり、世界になるのです。

私が家庭で奉仕して父母を敬うことによって孝子になるのと同じように、国の王に侍って「ため」に生きれば愛国者になるのであり、全人類のために生きれば聖人になるのです。ですから、私たちと聖子では、次元がどれほど異なっているだろうかというのです。私たちが変わろうとすれば、革命的に変わらなければならず、数多くの段階を経て上がっていかなければなりません。（一九九八．五．二六）

神様は、孝子を願われません。孝子の家庭を願われます。忠臣の家庭を願われたということを知らなければなりません。聖人の家庭を願われました。聖子の家庭を願われました。それが恨です。霊界に行けば、今まで、みな独身生活をしてきているでしょう？

モーセも、今まで何千年という歴史を経たにもかかわらず、常にそばで世話をしてくれる女性がいると言ったでしょう？　その女性に「なぜ結婚しないのか」と尋ねてみると、「神様が少し待ちなさいとおっしゃった」と言うのです。自分の思いどおりにできないのです。（一九九八．一一．二〇）

国を愛するにおいて、息子が父母に忠告し、教育してあげることによって、その父母を国の忠臣にし、天に記憶される父母にした場合、その息子は、不幸者でしょうか、孝行者でしょうか。（孝行者です）。

それでは、息子が、「お父さん、お母さん、外に出ないで楽に休んでいてください！」と言いながら、国を愛することができなくさせるよりも、「お父さん、お母さん、何をしているのですか。私と一緒に一人でも国を愛することができる人、南北統一することができる人、北朝鮮を生かしてあげることができる人を探さなければなりません」と言って、血と汗と涙を流し、周辺のすべての国民がその功労を褒めたたえるようになればどうでしょうか。

その時は、自分の息子に対して、「こいつ、父と母をひたすら酷使して悪いやつだと思ったが、それに成功した人となって、褒めたたえられるようになった。ああ、私たちの息子は孝子だ」と、そのように言うでしょうか、それとも「不幸者だ」と言うでしょうか。どちらだと思いますか。（一九九〇．一一．三〇）

皆さんの父母がみ旨のために忠誠を尽くすことができなければ、皆さんが勧告しなければなりません。「お父さんとお母さんは、何をしているのですか。み旨の道はこうであり、天のみ旨はこうだと思うのに、お父さんとお母さんは、なぜそのようにしているのですか。

このように歩んでいかなければならないのに、なんですか。毎日のようにけんかをして、なんですか」と言いながら責め立てるのです。それは良いのです。父と母が誤れば、大変なことになるのです。（一九七八．一〇．九）

父母が生き返ることのできる道をつくらなければなりません。それが子供としての道理であり、孝子の位置に立つことです。これが私たちの責任です。それゆえに、生死を意に

介すことなくこの道を開拓しなければなりません。世の中の良いものや、世の中の迫害や、死の道も意に介すことなく、この道を開拓するために忠孝の因縁をもたなければなりません。（一九六八．五．一一）

歴史的な女性になるためにも、歴史的に失敗して追われた内容を清算しなければなりません。

また、時代的なエバになるためには、時代的なすべての女性を代表して、天の前に忠孝の道理を全うした一つの基準を立てなければなりません。

そして一人の女性として、一人の男性に対して、また神様に対して、烈女の心情をもって立ち上がらなければなりません。（一九七〇．三．二二）

三、真の忠孝は従順により、より「ため」に生きる愛を施すこと

孝子は、父母が生きている時に孝行しなければなりません。忠誠も、国王が生きている時に尽くさなければなりません。死んだあとでは、千万倍の孝行も無益であり、千万倍の忠誠も無益です。そのようにする者は、ずる賢い者たちです。

死んでから大きな祭祀の膳を捧げるよりも、生きている時に一言でも慰労するほうが勝っているのであり、自分が悲しみの相対となってその心を慰労することのほうが、千万種類の食物で整えられたその祭壇よりも美しいということを知らなければなりません。死の道を追慕しながら行く人よりも、その死の道に行く前に、目的のために行く人のほうが貴いのです。（一九七一．一一．二八）

孝子になろうとすれば、父母の心の方向と常に一致していなければなりません。孝子の道を行く人は、父母と掛け離れた行動をする人ではありません。

父母が東に行けば東に行かなければならず、父母が西に行けば西に行かなければなりません。行く目的を提示したのちに、行く途中で回れ右をすれば、一緒に回れ右しなければなりません。そこに異議があってはなりません。十度行き、十度回れ右をしたとしても、また回れ右して従っていかなければなりません。

反抗すれば、孝子の道理を最後まで守ることはできません。父母が狂ったことをすれば、子供も狂ったことをしなければなりません。父母の命令ならば、狂ったことでもしなければなりません。狂ったことをすること自体はいけないことであり、父母が分からずにしているのならば知りませんが、分かってしているというのです。

それでは、なぜ父母は狂ったことをするのでしょうか。孝子の中から最高の孝子を選び出すためには、その道しかないからです。百人の孝子がいるとすれば、その百人の中から一番になることができる孝子をつくるために、その父母は狂ったことをするのです。

しかし、その気まぐれを真実だと思い、生命を捧げてその父母の命令の前に絶対従順をすれば、その人は、孝子の王にもなることができるのです。（一九七二．九．一〇）

孝子とは、父母を愛し、兄弟を愛した人です。より「ため」に生き、より愛する人が、その家庭の相続者になります。それゆえに、すべてそのような道に方向を取らなければなりません。今日のあらゆる理想的作用の主流は、真の愛が行く道です。真の愛が主流です。それ以外のものは、すべて傍系的流れです。

したがって、「孝子、孝女になりなさい」という言葉は良い言葉です。今日、母親の時代と若い時代では差があると言いますが、とんでもないことです。母親の時代と若い時代では、愛に差がありますか。女性として生まれ、一人で生きることができますか。また、男性として生まれ、一人で生きることができますか。口にも出してはいけません。

一年を一緒に過ごしたのちに行く時に、「もう一日だけいてくれたらいいのになあ」と言うこと、それが貴いのです。百年生きたのちに逝く時も、「ああ、もう一時間だけ生きてから逝ってくれたらいいのに…」と言う妻になっていますか。そのような夫になっていますか。そのような兄弟になっていますか。

いくらかのお金のために、「お兄さんはお兄さんであって、私は私でしょう。お兄さん、私が百万ウォン貸してあげたのに、なぜ返してくれないのですか。愛であれ何であれ、私は嫌いです。お金が一番です」と、このように言ったとすれば、その人は、もって生まれた福をすべて売ってしまうことになります。

千万長者や億万長者になることができる福をもって生まれ、愛があればすべての宇宙の福が来て巣をつくってくれていたはずなのに、「ああ、あのけち」と言って無慈悲に逃げてしまうのです。ですから、人は孝子を好むのです。（一九八六．三．二）

父母の愛の道に従っていこうとするので孝子が必要であり、国の愛の道に従っていこうとするので愛国者が必要であり、世界の愛の道に従っていこうとするので聖人のような人が必要なのです。

皆さんの息子、娘はたくさんいますが、その息子、娘の中で、息子の中の息子とは、どのような人でしょうか。父母のために厚い愛の因縁をもった息子を、孝子というのです。

孝子だというのです。孝子の中の孝子を中心として、父母の行く方向を連結させるのです。（一九八五．一二．二九）

父母が大便を漏らそうと何をしようと、すべて自分の赤ん坊のように愛し、抱いてあげることができる息子、娘ならば孝子です。天国に行くことができる息子、娘だ、このように思うのです。（一九八一．一二．二〇）

息子、娘の中には、孝子もいて、ただの普通の息子もいて、不孝者もいるでしょう。三種類です。最高の孝子になろうとすれば、神様と競って負けてはならないという結論が出てきます。

そのようになろうとすれば、どのようにしなければならないでしょうか。歴史過程においてこの地上を経ていったいかなる聖賢、賢哲以上に、神様のみ旨の前にみじんも疑わない者にならなければなりません。

神様に、「あなたが息子を引き離すような疑わしいことばかりを私におっしゃったとしても、私は信じます。『信じることはできないだろう』とおっしゃったとしても信じます。愛する父母が最も悪なる父母となって、むちで打ったとしても、私は、愛する孝子以上の心をもってあなたに従います」と言わなければなりません。神様は、そのように思っていらっしゃいます。（一九七四．七．二九）

父母が寝たとしても、孝子は眠ることができません。眠って起きたのちは、罪人のように悔い改める生活をしたのです。食べたのちも、申し訳なくて顔色をうかがう人です。

結局は何かというと、孝子の道です。孝子の道をどのように行くのでしょうか。これを見れば、先生は狂った人です。父母を顧みたでしょうか、妻子を顧みたでしょうか、兄弟を顧みたでしょうか、親戚を顧みたでしょうか、国を顧みたでしょうか…。

私は、国を思ってあげなかったのではありません。より次元の高い立場で、国のために行こうとしたので…。日帝時代に、私が国のために涙を流したこととは…。愛国者に負けない涙を流しました。（一九七二．九．一〇）

父母が、この道は死んでも行かざるを得ないということを本当に知ったならば、子供を神様のところに連れていかなければなりません。父母の使命を果たすことができなかったのは、知ることができなかったからであり、知ったならば、祭物としてでも連れていかなければなりません。むちで打ったとしても、それは善です。ですから、先生は、「父母が正しく立っていさえすれば、子供が救われないことはない」と言います。もし父母に対して不孝者がいるとすれば、追い出してしまいなさい。

そして、父母に孝行する者を自分の家に連れてきて、養子として立てなさい。（一九六五．一〇．九）

第三章　忠孝の道理

一、生命まで惜しまない真の忠孝

新郎のために自分の命を捧げれば、烈女だといいます。孝子も、父母のために命を捧げる人のことをいい、忠臣も、国のために命を捧げる人のことをいいます。

しかし、天の基準は、永遠の命を懸けて忠誠を尽くし、孝行することです。この肉体は死にます。永遠の生命を懸け、それをすべて父のものとして、新郎のものとして、父母のものとして捧げることができる立場においてのみ、天的な烈女の基準が成立します。自らの命が動いて感じるすべてのものを傾けなければなりません。

それゆえに、聖書にも、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくしなさい」と書かれています。それでは、尽くす基準とは何でしょうか。世界のいかなる忠臣よりも、いかなる孝子、孝女よりも、いかなる烈女よりも勝らなければなりません。

そうでなければ、神様の威信が立ちません。今まで、サタン世界にも多くの忠臣、烈女がいましたが、そのサタン世界の忠臣、烈女の

基準と同じ基準を立てた人を天が忠臣、烈女として立てれば、神様の威信が立たないというのです。（一九六〇．四．二四）

孝子は、過去から現在まで、時代ごとにすべていました。その中から一番の孝子を選ぶとすれば、どのような人を一番の孝子、孝子の標本として選ぶのでしょうか。老いて孝子の役割をして死ぬよりも、若くして老いた人以上の孝子の役割をしたとすれば、より貴いのです。孝子も千態万状です。貧しい人、裕福な人、雑役をする人、物ごいをして暮らす人、あらゆる階級がありますが、孝子はどこにもすべています。

生きている人が真の孝子になることはできません。生命をまだ残している人が、孝子の部類に入っていくことはできません。孝行するために数多くの人々が死んだのですが、死んでいない人が孝子の表彰を受けたとすれば、孝行するために死んだ人々から讒訴されるのです。

死んだ人の中にも、孝行するために道を行く途中で死んだ人もいるのです。父と母が病気になったので、薬を買いに行く途中で死んだ孝子もいるでしょう。

薬を買いに行くのに、自分のお金をもって買いに行った人もいるはずであり、借金して買いに行った人もいるはずです。困難であればあるほど、その価値が大きくなるのです。忠臣も、死ぬ前には忠臣になることはできません。同じ道理です。（一九七一．一〇．一七）

孝子になろうとすれば、どのような立場に立たなければならないでしょうか。死の道、一番の受難の道に責任をもつことができる立場に立たなければなりません。孝子として行くべき道とは、何でしょうか。

「父母である私を愛する以上に兄弟を愛し、お前が私のためにいるように、兄弟のためにいてほしい」。これが、孝子の行くべき道です。父母は、このように自らの願いを言うでしょう。（一九七二．九．一〇）

孝子の中の本当の孝子とは、どのような人でしょうか。父母のために一生をすべて犠牲にし、七十歳、八十歳の高齢になるまで孝行を尽くした人と、若い青春時代に父母のために生命を捧げた孝子がいるとすれば、どちらをより孝子と言うことができるでしょうか。

いくら七十、八十になるまで孝子の役割を果たしたとしても、青春時代に父母のために生命を捧げた孝子にはかないません。それゆえに、忠臣は、死んだのち、生命を捧げたのちに決定するのです。真の孝子も、生命を捧げる立場で決定するということを、私たちは歴史時代においてたくさん見て知っています。（一九七一．九．五）

忠臣の名をもって立ち上がる人も、天のために生きてこそ忠臣という称号を天から受けるのです。孝子の行く道も、やはり同様です。ですから、どれほど貴重であり、大切なものかというのです。

私が食べるのもそのために食べ、私が見るのもそのために見て、私が話すのもそのため

に話し、私が行動するのもその目的のために行動しなければなりません。

たとえそれが悲しみと涙の道であったとしても、天上の主人であられる神様が行かなければならないその道を代わりに受け持って行かなければならないので、孝子の道理と忠臣の道理を果たさなければならない責任があるということを、私たちは知らなければなりません。

神様の涙の道をふさぎ、私が地に倒れることがあったとしても、再びその道を行かなければなりません。そこで忠孝の道理を果たさなければなりません。（一九七一．二．一四）

孝子や忠臣は、死を共にしなければ、本当の忠臣ではありません。本当の忠臣は、死ぬ前にはいません。いくら苦労したとしても、きょう、一言後悔の言葉を言えば、忠臣になることはできません。いくら忠臣であったとしても、この時間に不忠をすれば、逆賊になるのです。死の峠を越えていく時まで忠孝の道理を果たしてこそ、「忠孝を全うした」と言うことができる人になるのです。

それゆえに、公的な道においては、忠と孝はその過程が同じです。国のために生命を捧げた人を「愛国者」と言い、父母のために生命を捧げた息子を「孝子」と言うのです。

父母が死ぬ前まで親不孝したとしても、父母が死ぬ最後の場に置かれた時に、今まで孝行してきた子供が親不孝になり、親不孝してきた子供が転換すれば、孝行してきたその位置を受け継いで一瞬の孝行をすることによって、父母から「孝子だ」と言う声を聞くようになるのです。

そのようになれば、その一日の行動の基準とともに孝子の称号をもって登場するようになります。

生命が尽きる時までその目的に向かっていく人の前に、栄光の相続がなされるのです。（一九七二．一〇．二四）

長く苦労するよりは、本当に忠誠の心をもって、重大な問題と世界的な問題に身を捧げて死んでしまいましょう！　爆発してしまいましょう！　このような覚悟をもつことが、堕落した人間としては素晴らしいことだと先生は思っています。もし神様の前でそのような最期を遂げたとすれば、既にその人は素晴らしい所に行くように決定されているのです。（一九六七．六．一二）

父母は、孝子、忠臣、聖人、聖子のような前進的なことを教えてあげなければなりません。孝子、忠臣、聖人、聖子の道理を果たし、そののちに神様まで行かなければならないことを自分の息子に教えてあげなければなりません。

そのように教える人がいるとすれば、神様が御覧になる時、「やー、あの人は父母の役割を果たしている。あの人は先生の役割を果たしている。あの人は主人の役割を果たしている」と思われるでしょうか、思われないでしょうか。

「あなたには、父母の資格があり、先生の資格がある」とおっしゃる時は、主人の資格

があり、さらには王になることができる父となることができるのです。西欧の人々に孝子という概念がありますか。忠臣の概念がありません。聖人の概念がありません。聖子という概念がありません。ですから滅びるのです。

神様は、聖子になることを願っていらっしゃいます。それならば、聖人は誰が願うのでしょうか。世界が願います。国は何を願うかというと、忠臣を願います。家庭は孝子を願うのです。これがまさしく真の真理の道です。（一九九七．五．一九）

真の父母がいるとすれば、「あなたは孝子になったので、忠臣になってはいけない。忠臣の道を行ってはいけない」と言いません。真の父母は、その孝子に「あなたは、家庭を犠牲にし、忠臣の道を求めて国に仕えなければならず、聖人の道理を果たさなければならず、聖人の道理を犠牲にして天が願う道を行かなければならず、天地を犠牲にして神様を訪ねていかなければならない」と教えてあげなければなりません。

そのようになろうとすれば、個人は家庭のために犠牲にならなければなりません。家庭のために犠牲になってこそ、孝子になるのです。また、国の愛国者になろうとすれば、その家庭全体を犠牲にしてでも国を救わなければなりません。そのようにしてこそ、愛国者になるのです。聖人は、自分の国を犠牲にしてでも世界を救わなければなりません。

聖子は、世界を犠牲にしてでも、天上天国と地上天国を築かなければなりません。このような概念があるということを知りませんでした。投入して犠牲にならなければなりません。

そのようにしなければ、一つの世界、一つの国は永遠に現れません。（一九九七．五．一九）

キリスト教徒の数が問題ではありません。神様の体となり、神様の命令によって、いつでも、どこにでも行こうと決意する人、神様が「命令を待ちなさい」と喜んで命令したいと思われる人が要求されるのです。

今日、何億という信者を誇るキリスト教徒の中から、果たしてそのような人を探すことができるでしょうか。わき腹に剣を突きつけて、「あなたを天の祭壇の犠牲物として捧げようと思うが、生命を捧げることができるか」と尋ねた時に、その峠を越えることができなければ何にもなりません。命を懸けて神様を愛する孝心に燃える人、天に対して身もだえすることのできる群れがこの時代に必要です。私は、そのような群れが終わりの日の天の革命軍だと思っています。

全世界の人類の前にそのような責任を全うしようという徹頭徹尾の思想をもった個人、家庭、民族、国家がどこにあるのかと、神様は探されるでしょう。

神様は、早くからそのような個人を探してこられました。そのような個人は、神様の心情を慰労してさしあげ、神様の前に忠誠の道理を果たし、孝道を尽くさなければなりません。天地のあらゆる事情を解き明かさなければなりません。

そのようにして、神様が、「この時代の前に責任を負うことができる者があなただ。あなたを見ると、あすに望みをもつことができ、あなたを見ると、きょうの闘いを勝利に導いていくことができる」とおっしゃってくださる一個人にならなければなりません。このような個人が絶対的に必要です。

そのような個人を神様がつかまれ、「あなたは骨の中の骨であり、肉の中の肉であり、心情の中の心情だ」とおっしゃることができなければなりません。いくら歴史上の多くの先祖がいて、時代的に多くの人類がいたとしても、心情を中心として、「あなたは、歴史において、あとにも先にもない最高の先祖の立場にいる」とおっしゃることのできるお方がこの地上に現れない限り、人類始祖の堕落による悲しみの歴史は清算されないのであり、その中で生まれた私たちは、また再び、ある父母に侍らなければならないのです。（一九六五．一〇．一〇）

世界のための神様のみ旨が残らなければならず、世界を愛する神様の愛が残らなければなりません。したがって、皆さんは、死んでもそれらを残してあげなければなりません。それを残すために自らの生涯を犠牲にする人は、孝子になり、忠臣になるということを、皆さんは知らなければなりません。

一日孝子や一日忠臣は必要ありません。一日孝子には、どれほど悪い強盗でもなることができるのであり、一日忠臣も、やはり誰もがなることができます。その場で悔い改めればなることができるのです。神様は、生まれる時から孝子、忠臣として生まれ、孝子、忠臣として生きたのち、孝子、忠臣として死ぬことができる人を願っていらっしゃるのです。

先生と皆さんを比較すれば、先生は、神様の前に皆さんよりも孝子です。なぜならば、今まで、生涯を捧げてこのような仕事をしてきたからです。

しかし、私が孝子の道理を果たしたとは夢にも思っていません。歩めば歩むほど足りなさを感じます。孝子の道理、忠臣の道理を果たしたと思う人は、そこで孝子や忠臣としては終わりです。

「私は孝子なのに、私は忠臣なのに、なぜ分かってくれないのか」と言って抵抗する人は、その峠から後退する人です。歩めば歩むほど孝の道理が残っていて、歩めば歩むほど忠の道理が残っているということを発見し、その孝を果たすことを自らの生活哲学として生きる人であってこそ、天の孝子になり、忠臣になることができるということを、皆さんは知らなければなりません。（一九七〇．一一．一）

今、私たちが学ばなければならないことは、幸福の中にいらっしゃる神様を学ぶことではありません。それは、そのようにしても良く、そのようにしなくても良いのです。先に知らなければならないことは、孝子になり、忠臣、烈女になることです。孝を立てる人は、困難な中から生まれます。忠を立てるのは、その国が完全に平安な立場において成されるのではありません。

国が泰平で、国民が安らかな立場において成されるのではありません。国の状態が最期の峠にぶつかり、「お前が死ぬか私が死ぬか。全体が死ぬか生きるか」という最後の逆境において、自らの命を懸け、あらゆる精誠を尽くして、国運を転換させ、国難を解決してあげる責任を果たした者であってこそ、その国の「忠臣」と言うことができるのです。困難な時に「忠」の名詞、困難な時に「孝」の名詞、困難な時に「烈女」という名詞が、歴史路程の中に記録されるのです。（一九六二．一二．一五）

皆さんは、妻に関心をもつよりも、南北に分断された皆さんの国を思わなければなりません。分断されている民主世界と共産世界を思わなければなりません。

南北を一つにしたのちは、自由世界と共産世界に分立されたこの世界を一つにしなければなりません。それを一つにしたのちには、分かれている霊界と地上を一つにしなければなりません。

これを一つにして神様を解放することが、息子の名前をもった孝子の行かなければならない道だということを知らなければなりません。（一九八一．一一．八）

したがって、真の孝子の道を行くためには、歴史始まって以来の迫害がどれほど激しく、困難な峠道が多かったとしても、それを克服することができる余裕に満ちた男性にならなければなりません。

艱難と試練の中で苦しめられ、後退して悲しい恨の道に行くのではなく、億千万代の苦衷と受難の道を克服して、また克服しながら、決意して誓い、あすの希望にあふれた再出発の道を促していきながら、死の道も選んでいくことができる道を残していかなければなりません。そのような歴史的要求と神様の要求があるということを知らなければなりません。（一九八八．二．三）

二、相手のころを読んで真の愛を施す真の忠孝

人類歴史は、堕落の歴史ですが、人倫道徳を中心として流れてきました。その道徳の中心は愛です。父母の前の孝子は、父母をより一層愛する人であり、国の前の忠臣は、国をより一層愛そうという人であり、国を越えて世界に愛を教えようとするのが聖人の道です。

自分の家庭よりも、自分の国よりも、世界を愛そうとするのが聖人の道理です。聖子の道理とは何かというと、天と地のすべての法よりも王宮法を中心として、「最高の愛を行いなさい」というのが聖子の道理だということを知らなければなりません。愛を中心として、すべてのものはこのようになるのです。

孝子は、家庭を愛するにおいて正しく行かなければなりません。忠臣は、国を愛するにおいて正しく行かなければなりません。聖人の道理は、世界の人々を愛するにおいて正しく行かなければなりません。

天子は、天国の王宮法を守り、天国の国法を守ることはできますが、天国の王宮法の道理までは知りません。その王宮の法まで備えて神様に侍ることができてこそ、聖子になる

のです。人間が行かなければならない段階はそのようになっています。

孝子になれば国が歓迎するのであり、忠臣になれば聖人が歓迎するのであり、聖人は聖子が歓迎するのです。聖子は神様が歓迎するのです。その核は真の愛です。不変の真の愛、絶対的な真の愛です。

しかし、絶対的な真の愛をもって絶対的な孝子、絶対的な忠臣、絶対的な聖人、絶対的な聖子、絶対的な父の息子、娘の因縁を連結させることができるこの道を知らなかったので、さまよっているのです。どのようなことをしてでも天理と共に行かなければならない道が残っているということを知れば、さまようことはできません。（一九九〇．一〇．三）

孝子は、自分のためにいるのではなく、父母だけのためにいるのです。忠臣は、自分のためにいるのではなく、国王のためにいるのです。聖人は、神様だけのためにいるのです。それゆえに聖人は、神様の道理を教えてあげました。

それでは、神様の願いとは何でしょうか。世界を救うことです。神様の事情とは何でしょうか。息子、娘を愛したいと思っていらっしゃるということです。神様の愛の願いとは何でしょうか。その愛に酔って暮らしたいと思っていらっしゃるのが、神様の愛の願いです。

それゆえに、神様の願いと事情と心情に通じなければなりません。それに通じなければ、孝子になることはできません。それが統一教会の骨子となる思想です。神様の事情を知ろうという人が、神様がいるのかいないのか分からなくていいのですか。神様の願いが何なのか分からなくて、孝子になることができますか。

神様の心情が悲しいのかうれしいのか分からなくて、孝子になることができますか。到底不可能な話です。孝子になる道は簡単です。父母のより多くの苦しみに自分が責任をもとうという立場が孝子となる道です。（一九七二．九．一〇）

食膳を立派に整えてもてなす孝子と、食膳も何もなく手ぶらで来て、何をもって来たかというと、愛をもってきた孝子がいるとすれば、どちらの孝子が良いでしょうか。愛をもってきた孝子だとしても、おなかをすかした母の前に何も食べる物を持ってこなければ、そのような親不孝者がどこにいますか。しかし、「親不孝者が参りました」と言いながら涙を流せば、食膳を整えること以上になるのです。

それならば、御飯の釜を持って歩くのが孝子でしょうか、愛の釜を持って歩くのが孝子でしょうか。愛は、二十四時間、時間と空間を超越していますが、御飯は、時間性を超越することができません。それを知らなければなりません。（一九八八．四．一四）

国家に忠誠を尽くす前に、神様が臨在されるその臨在点で忠誠を尽くそうと誓わなければなりません。社会に奉仕する前に、神様が臨在される所に入っていって奉仕し、認定を

受けなければなりません。そのようにしなければ、神様の内的な因縁は、結果である外的世界で実を結ぶことができません。

これが信仰生活の本質です。皆さんは、「世界のために奉仕し、国のために忠誠を尽くす」と言うでしょう？　それでは、忠誠を尽くすにおいて、その起点はどこにあるのでしょうか。

必ず家庭におけるその父母の心と体の中から出発しなければなりません。（一九六九．一．一九）

その時のために、忠誠を尽くして歩調を合わせれば福を受けるのであり、歩調を合わせることができなければ嘆息が生じるのです。

その命令を遂行するにおいて、「私は、私のすべての精誠を尽くしてこのような仕事をした」と言うことのできる人が統一教会の中にいるとすれば、その人々が精誠を尽くして一致化した基準がどの程度か、またその数と量がどの程度か、そして天運をどれくらい多く吸収したかに従って、地上と関係を結ぶことができる広い基盤になるか、ならないかが左右されることを、皆さんは知らなければなりません。

広い基盤にならなかったとしても、先生は、個人を中心として、そのような足跡でも残していかなければなりません。これが蕩現復帰の道です。（一九七一．一．三）

愛国者は、国の愛を受けようという人のことです。孝子は、父と母と家族の愛を受けようという人のことです。家族の愛を受ける孝子になることも、簡単なことではありません。人が食べている時に食べずに、人が食べることができるように助けてあげ、人が寝ることができるように助けてあげ、人よりも良い服を着てはならないのです。

遊ぶ時に遊ばずに、その国のために生き、家庭のために生きる人が孝子になるのです。自分の家だけではありません。三代を中心として、おじいさん、息子、娘、おばあさん、それから伯母さんたちがいて、母の兄弟がいて、それから何でしょうか。孫娘まで、すべての人が好きにならなければなりません。一人でも好きにならなければ、孝子になることはできません。

そして、親戚がいれば、親戚全員が「あのような息子にならなければならない。あのような姉にならなければならない」と言うことができてこそ、その一族の中における孝子の称号をもって定着することができるのです。自分の位置が生じるのです。（一九九九．一．一六）

考えてばかりいてそのことを行わなければ、考えていない人よりも悪いのです。そのような人は、本当にどろぼうです。それがもし思ったとおりにならなければ、盗みしかできないのです。

それでは、神様が喜ぶことのできる孝子、孝女とは、どのような人たちでしょうか。どのような人たちですか。自分のおなかを満たす人ですか。自分が食べる物までも人に食べさせてあげなければなりません。「食べな

い」と言えば、口を開けて食べさせてあげなければなりません。

それでは、父に代わって、皆さんを統一教会の忠臣、烈女、孝子、孝女にするためには、どのようにしなければならないでしょうか。割かなければなりません。一年でできると思いますか。忠臣というものは、もちろんそのように生まれついたという言葉もありますが、生まれつきそのような天性をもっているのならば、死ぬ時までその志操が変わってはいけません。
忠臣になるためには、どのようにしなければならないでしょうか。苦労の道で苦労するしかありません。それが最も近い位置であり、最高の近道です。忠臣、烈女になり、孝子、孝女になることができる最高の近道とは何ですか。
公的な立場で涙を流す生活だけです。涙を流して苦労の道を行かせる方法しかありません。（一九六五．一〇．三一）

国をもっていなくても、もった以上にその国の忠臣となり、民をもっていなくても、その民以上に世界の人々を愛そうとしながら、天の忠臣と孝子の道を一生歩めば、自分に何もなく死んだとしても、滅びる人ではなく、逆にもっと価値があり、その国とその世界の忠臣になることができるということを知らなければなりません。（一九七六．七．一）

真の愛を国に与えれば愛国者になり、それが父母に向かえば孝子の中の孝子になります。世界万民の前に立てば聖人の道理を果たすのであり、神様の王国まで行けば聖子の道理をすべて果たすので、神様までも見守ってくださる息子となることができるのです。（一九八八．五．三）

真の愛でなければ、真の孝子はいないという結論です。今、誤った愛の伝統を受け継いだ人間たちによる世俗的な愛、フリーセックスなどというものが、この愛の基盤、孝子の基盤、忠臣の基盤をすべて破壊しています。

絶対愛を中心として真の孝子の道理、真の忠臣の道理、真の聖人の道理、真の聖子の道理を経て、神様の前に立つことによって、天国において初めてその時に相続を受けるのです。個人的家庭であるアダム家庭で堕落した内容を相続する時は、未来の国と未来の世界と未来の天国のすべてのものを合わせて自動的に大きくなったものを相続するのです。
（一九九七．八．一三）

三、無条件に服従し、代価を要求しない真の孝子

おじいさんがつばを吐こうと、おばあさんがつばを吐こうと、また母が気に掛けず、兄弟が知らないふりをしたとしても、おじいさんのことを思い、おばあさんのことを思い、家庭全体のことを思って忘れてしまう人になってこそ、歴代に残り得る孝子の班列に入っていくのです。

「私は孝子だ。孝子になるためにこのようにしている」。それは偽りの孝子です。「ため」に生きて忘れてしまうことのできる人が、孝子の班列に入っていくのです。

どのような人が忠臣でしょうか。すべての閣僚の中で、自分が王を愛するにおいて、餅も作り、何でもしてさしあげ、王に侍る臣下や、王妃に侍る侍女がみな責任を果たすことができない場合は、それを見てじっとしているのではなく、それに対して説教しながら、自分がそれ以上にして、その環境がそのようになるように教育し、それを忘れてしまうのです。そのようにして「もういい」と言うのではなく、「もっと良くしなければならない」と言わなければなりません。

なぜでしょうか。大韓民国よりも大きい国の王がいるのであり、天下には天子がいるのであり、天国の王子がいるので、大韓民国という一分野の代表にしかならない忠臣では、自らの欲求を満たすことはできないのです。（一九九〇．七．一）

父母の前に孝行する人は、孝行するその天の心が、動脈に行ったのちに静脈に回ってくる血の流れのように動くのです。家庭の一番末端に立ったとすれば、天理の愛の力が動脈側に行ったのちに静脈に回ってくるのです。見えませんが、自然に動くのです。

静脈の血は、自分で入っていきますか、押されて入っていきますか。押されて入っていくのです。それは、福を受けようとしなくても福を受けるということです。動かないようにしても、大きな心臓によって次第に回っていくのと同じです。福を受けようとしなくても福が訪ねてくるようになっているのです。

ですから、一生懸命に孝行しなければなりません。それが統一教会の教育です。孝行しなければなりません。孝行する父母がいなければ、国ために尽くしなさい。国が危険な時に、孝行しなければならない父母を残し、父母の反対を受けてでもこっそりと荷物をまとめて一線の将兵として出ていって死んだとすれば、その人は、孝の道理の完成体になることができるのであり、忠の因縁の立場に入っていくことができるのです。（一九八六．一〇．一）

私たち人間を見れば、困難に直面した時、大概自分の悲しみでいっぱいになります。そのようなことがよくあります。しかし、忠臣はそのようにすることができません。孝子もそのようにしてはいけません。自分の子供が死に、自分の妻が死んだからといって、その子供をつかんで泣いたり、妻をつかんで泣いたりしてはいけません。

本当の指導者は、そのようにすることができないのであり、真の忠臣ならば、自らの事情を見せたりはしません。自らの心の奥深くにしみ込ませるだけであって、表に出して泣くことはできないのです。

国王のためにそのような一時をもつことはできませんでしたが、父母以上の心をもって、善の立場に立って、国王よりも悲しい立場に立てば、天がなすべきことを教えてくれるのです。

そして、孝子、孝女の立場で考えるとき、私たちは、自分が悲しくても、自分の悲しみだけを中心として悲しんではいけません。また、悔しいことがあっても、その恨みを晴ら

そうとしてはいけません。（一九六七．六．一一）

良いことよりも、嫌なことにもっとＯＫすることができてこそ孝子です。自分の一生の貴重な愛を犠牲にしながら父母に孝行しようとする人は、天上世界のどこに行こうと、四方に十二真珠門があるとすれば、そこでふさがっている門はありません。完全に開くのです。

興進が霊界に行く時、イエス様はオールド・キリスト（年を取ったキリスト）であり、興進はニュー・キリスト（新しいキリスト）だと決定して天上世界に送ったところ、そのとおりになったのです。（一九八七．五．一）

イエス様を愛することができなかった神様の恨を解くためには、一つの国の代表者として、おじいさんとおばあさんを愛しなさいというのです。私たち統一教会は、そのようにしなければなりません。

おじいさんとおばあさんを愛するにおいては、国のおじいさんとおばあさんが愛することができず、教会のおじいさんとおばあさんが愛することができず、家庭のおじいさんとおばあさんが愛することができなかったものを愛さなければなりません。

このような三段階の内容を代表した、忠孝の道理を備えた真の兄弟の因縁をもって愛さなければなりません。（一九七一．一．六）

孝行する父母がいるとすれば、その父母は、自分よりも孝行する息子を願うでしょう。そのようになってこそ、おじいさんが死ぬ時に目を閉じて死ぬことができるのであり、父が死ぬ時にも目を閉じて死ぬことができるのではないかというのです。息子を自分よりも苦労させることができる心情は、息子を愛しているということです。

それは当然の考えです。そのようにして、自分と共に苦労してこられた神様を慰労してさしあげなければなりません。このような息子、娘が必要であり、そのような後継者が必要なので、死んでも忘れることができない孝行をするように教育するのであり、私よりももっと苦労させるのです。

先生は、自分に対してはけちです。自分のためには、お金を使うことを知らない人です。おなかがすいたからといって、食堂に入っていって一人で御飯を食べる、そのような人ではありません。お母様に対しても、食べたり着たりする物まで干渉する人です。（一九七一．四．一八）

孝子をもった父母は、その孝子に対することができる父母であり、愛する孝子のための父母であって、そこには第三者が関与することはできません。

それゆえに、天は、真の孝子をつくるために、サタンと人間がどのようなことをしたとしても、タッチし得ない最後の道を中心として深い因縁を結ぶために、愛する子供を死の場に立てながらも知らないふりをされるのです。

それが、不孝者になった人間に再び孝行の道理を立てさせるための天の心であり、孝子を立てるための天の指導方法ではないかというのです。それは、言うまでもないことです。（一九七二．九．一〇）

孝子をもった父母よりも、その父母の前における孝子のほうが、より心配が多いということを知らなければなりません。孝子、孝女のほうが、父母よりもより多くの心配をもたなければなりません。

孝子、孝女になるためには、父母よりも多くの心配をもたなければならず、孝子、孝女になるためには、その父母よりも各方面に多くの心配をしなければなりません。（一九六五．一〇．三一）

イエス様は、神様の前で僕の僕となり、十字架を背負いながら死んでいきました。義人とは、国のために僕の僕のような悲惨な立場で死ぬ人のことをいいます。

自分が死ぬにしても、国のために死ぬという人が愛国者です。僕の僕の立場でも、感謝して父母のために生きようという時、その人には孝子という名称がつきます。これが、人間世界の道徳の骨子であり、核心だということを知らなければなりません。

神様のためにより公的に僕になることが、より義人になることのできる道であり、国のために、僕よりももっと深刻な僕になることが忠臣になることのできる道であり、父母のために、より僕となった立場で犠牲になっていくことが孝子の道だということも、ここから発見することができます。（一九七六．一〇．三）

この地上の復帰摂理に対してこられた神様の前で、「神様の真の孝子」と命名できるようにするためには、また息子や忠臣として認めることができるようにするためには、どのような人でなければならないでしょうか。アメリカで一番裕福な人でしょうか。飛行機に乗ってビラをまいて回りながら、「さあ、イエス様を信じなさい！」と言う、このような人々でしょうか。飛行機に乗ってビラをさーっとまいて、「信じるならば信じ、信じないならば信じないようにしなさい」と言う、そのような人々でしょうか。

そのような人々と、一枚を与える時も、その人をつかんでぶるぶる震えて涙を流すほどの精誠を尽くして与える人とでは、どちらの人が神様の前に近いと思いますか。（一九六五．一〇．三一）

結論的に、孝子とは特別な者ではありません。父母を絶対信仰し、絶対愛と絶対服従するのが孝子です。

国王を中心として、国の民を中心として、絶対的に国王を信じ、絶対的に民を信じ、絶対的に愛し、絶対的に自分を投入するところからのみ忠臣が出てくるのです。（一九九五．五．二九）

第四章　神様に対する忠孝

一、神様の願い

神様はどのような方ですか。神様は人類の父母でもある方であり、神様は人類の王の中

の王でもある方であり、すべてのものの中心でもある方です。その神様の息子になるために、個人的には一対一の立場で、一つの家庭を中心として見るならば孝子にならなければなりません。それも、世界的な孝子にならなければならないのです。

そして、孝の中でも最高の孝であり、忠の中でも最高の忠であり、聖の中でも最高の聖を代表することができる、そのような位置を占有した者だけが神様に侍ることができるならば、それらを別々にしてはいけないのです。神様の願いは、この三つを一度に成し遂げた人です。孝子にもなり、忠臣にもなり、聖人の中の聖人にもなる、そのような人を願うはずです。

このような観点から見る時、神様は、そのような方であることに間違いありません。私たちは、その神様を父母として侍り、子女の名分を備えるために努力しています。そのように、最上になることができる孝子の行くべき道を訪ねて、それを守ろうと努力する群れになろうという者たちが、あるいは宗派が、あるいは民族がいるならば、彼らの行くべき道は楽な道ではありません。楽な道を求めていくところには、そのような孝子は生まれてくることができないのです。

それは、正常な形態として現れることはできません。見ればすべての人が「間違っている」と言うでしょう。他の人々は東に行こうとするのですが、この人は、西だけではなく、南にも行き、東にも行き、北にも行き…。

誰かがついてこようとしてもついてくることができない、そのようなことをさせるはずです。そのようなことをする宗教が出てこなければならないというのです。それは、私たちが常識的に判断しても、そのような結論に到達します。（一九七二．九．一〇）

今まで、歴史的に国王のための忠臣、孝子、烈女は多かったのですが、それに比べて神様のみ旨のための忠臣、孝子、烈女はいませんでした。

しかし、今日の私たちは違うというのです。彼らは、すべて地の基準に立脚した自由解放のために捧げてきたのです。ですから彼らは、神様の前に心配の対象にはなったとしても、慰安や喜びの対象にはなることができませんでした。「忠臣、孝子、烈女だ」と神様が誇った人は今までいなかったというのです。

神様の前に忠臣、孝子、烈女になることが人間の正道ですが、そのような人はいなかったのです。国王と父母にはそうであっても、神様の前にそのような人はいなかったというのです。

神様は、世の中の忠臣、孝子、烈女を見つめながら、彼らが神様のための忠臣、孝子、烈女になることをどれほど慕い願われたでしょうか。（一九六一．一．二九）

神様は、すべての人々が孝子、孝女、忠臣になることを希望していらっしゃいます。また、神様は、その中でも最上の基準にある人を願っていらっしゃいます。忠孝を尽くす道

しかないという人を神様は願っていらっしゃいます。

父母の生命と財産に責任をもって家庭に平和と発展をもたらすことができない者は、孝子になり得ないというのです。父母の財産が崩れる時は、自らのすべてのものを投じることができなければなりません。

神様の創造理想が破綻したので、生命、財産、平和、理想を蹂躙する位置では、忠臣、孝子にはなり得ないのです。私がいつ神様のために自分のことのように悔しく思い、私がいつお父様の生命に対して偉大さを感じ、私がいつお父様の家庭の平和と統一のために苦闘してみたでしょうか。

そのようにしようとはしましたが、それが神様の前に忠孝になることができず、不忠、不孝になったのです。（一九六七．一〇．一）

神様は、忠臣、孝子を立て、彼らを通して御自身の恨をサタンに譲り渡そうというのです。しかし、この恨を無条件に渡すことはできなかったので、忠臣、孝子を立てて、個人的に歴史的な苦痛の道を歩むようにすることによって、その恨をサタンに譲り渡そうとされるのです。（一九六三．一二．二〇）

神様も解放して、愛自体も解放する、そのような孝子が存在し得るだろうかという問題が重要なのです。神様もその場に入ってきて、「私も一度孝子になってみることができれば良い」と言われ、真の父母も、「一度孝子になってみることができれば良い」と言い、神様と真の父母が一つになって、愛の前に孝子になることができるそのような道があるならばどれほど良いですか。

神様御自身が、お父様として愛を完成した立場に立たれ、息子自体が、神様の愛と宇宙の根本的愛を中心として孝子の道理を果たし、父と息子が一つになって、その愛の前に、より次元を高めることができる孝子の道をどのように植えつけることができるかというのです。植えつけることができたとすれば、堕落も永遠に生じないのです。

解放の解放圏です。それは、原理圏を凌駕したというのです。根本世界です。このようなことを考える時、今後皆さんが家庭理想と地上天国が成され、天上天国が成されればそれで終わりだと考えてはいけません。

そこにはまだ解決しなければならない、サタンの血統によって汚された痕跡がまだ内的根に残っているというのです。数千万年の歴史を経てきたのですが、その何倍、何十倍、何百倍以上の消耗を経ても、堕落したその世界の過去の出来事を忘れることができるかというのです。それを忘れてしまい、あなたと私が一つになり、息子、娘が一つになり、愛自体の苦労を慰労することができる孝子になれればということが、神様の最高の願いだということを皆さんが予想しなければなりません。（一九九九．二．二一）

神様が手を挙げてアダムとエバを祝福なさる時に、神様は彼らの父として心で何を願われたのでしょうか。「おお！　あなた方は私が造った大天宙を抱いて、私を王として侍り、

忠臣になってくれ」と思われたのです。神様は、そのような心だったというのです。

したがって、アダムとエバは、この天地間に忠臣の志操を立て、それを伝統として億千万年残さなければならなかったのです。アダムとエバが神様を真のお父様として侍り、真の孝子、孝女になっていたならば、彼らが神様の前に立てた忠孝の志操は伝統になっていたのであり、この地の役事は、連結した神様とアダムとエバの心情を中心として受け継がれてきたのです。そのようになれば、悪が主管できないのです。

神様の心情の世界を悪が主管することができるならば、復帰歴史、救援歴史は絶対に不可能です。（一九六〇．四．二四）

神様が息子、娘であるアダムとエバに願われたことは、彼らが育って孝子、忠臣、聖人、聖子になることです。皆さんは、神様が願われるように、家庭で孝子になるという考え、国で忠臣になるという考え、世界で聖人になるという考え、そして、天地の前に聖子になるという考えをもってみましたか。

歴史的に見る時、すべての聖人たちは、孝子になり、忠臣、聖人、そして聖子になりなさいと教えてきました。これを教えることができない宗教は、宗教として千年、万年の歴史を越えることができません。いずれ行くべき私たち人間の宿命的な路程です。宿命は、父子の関係のようなものをいうのです。宿命は分けることができません。運命は代置し得るものがありますが、宿命はそのようなことはできないのです。

このような内容を知らなくては、家庭において真の父母の役割を果たすことはできないというのです。真の父母ならば、孝子、忠臣、聖人、聖子のような前進的なことを教えてあげなければなりません。

自分の息子たちをして、孝子、忠臣、聖人、聖子の道理を果たすようにして、さらには神様にまで行かなければならないということを教えてあげなければなりません。（一九九七．八．一〇）

神様が理想とされた一双の夫婦は、神様に栄光をお返ししてさしあげなければならないのに、堕落によって栄光の代わりに悲しみを返してしまったというのです。ここには、アダムとエバの責任だけでなく、天使長の不忠もあるのです。天使が先に神様に忠孝の道理を立てなければならなかったのですが、その道理を果たせずに堕落したのです。したがって、復帰摂理は忠孝烈を立てることです。

神様が忠孝烈の心的中心を立ててこられたので、すべての宗教と道もこれを立ててくるようになっているというのです。すべての道人たちは、これを探し立てるために出てきたのであって、イエス様も忠孝烈を立てるために家庭を尋ね求めてこられたのです。

神様がイスラエル民族を立てられたのは、このような家庭を復帰するためでした。イエス様が先に忠孝烈の道を立てていなければならず、忠孝烈を立てるための祭司長になってこそ、サタンを屈服させることができたのです。

私たち祝福家庭は、忠孝烈を立てることにおいて誰にも負けてはいけないのです。忠も、孝も、烈も家庭から始まらなければなりません。

祝福は、お父様の希望を相続することです。今まで、神様に対する忠孝はありましたが、烈の家庭はなかったのです。「神の日」が訪れるまでは烈を立てることができず、サタンの讒訴が残っている限り烈は立てられないというのです。（一九六四．一一．四）

それゆえに、本来は、皆さんが天の前に完全に立つためには、韓国ならば韓国という一つの国に忠誠を尽くすことだけではいけません。それでは、天の前に完全な神様の息子、娘になることはできないのです。使徒パウロのような人は、そのような事実を知っていたというのです。自分の民族は、誰でも愛することができます。自分の民族は、誰もがすべて愛することができるというのです。

しかし、異邦の人々までも愛さなければなりません。なぜなら、神様は、自分たちの国の人々だけ愛するのではありません。全体を同じ立場で愛する神様だということを知らなければなりません。

その神様の心情を知るためには、逆境にぶつかり、難しい環境に置かれている一つの国を訪ねていき、私たちが因縁を結んでいかなければなりません。そのようにしなければなりません。原理的に見る時も、三カ国を経ることができる忠誠の道理を立てなければなりません。

皆さんが今、韓国でお父様に侍り、天の前に忠孝の道理を果たそうと考えるようになる時、ここで忠誠を尽くすその忠誠は、自分自らのために忠誠を尽くすのだと思ってはいけません。「先に民族のために、先に世界のために、先に天地のためにこれを捧げ、これを残しますので、天のものとして受けてください。天のものとして、地のものとして残してください！」、このように祈祷しなければなりません。

そのようにすれば、それは、私が死んでも必ず天のものとして残るのであり、地のものとして人類が残すようになるはずです。そうだというのです。（一九六五．一〇．三一）

神様の前に孝子になることができる時は、いつもあるのではないのです。孝行することができる時は、死んだのちに霊界でつくられるのではありません、永遠を中心として見る時、限りなく短い期間、チックタックという瞬間のようなこの一生の間に、神様を愛したという条件を立てなければならず、神様の前に孝行したという条件も立てなければなりません。

また、私たちが生きている時に、神様の前に絶対必要な息子だという決定もしなければならないのです。私たちは、生きている時にそのようなことをしなければなりません。（一九六九．一〇．一九）

神様が、一時に六千年の恨の因縁を解くという目的をおいて今までつづってきた歴史の結果として私たちが因縁を結んだのです。

それゆえに、私たちは、お互いの姓が違っても、同じ血筋をもった兄弟以上の情をもっ

て生きなければなりません。私たちは、父母でない父母に侍っていますが、神様を中心として、自分の血肉の父母以上にその父母に侍ろうとする群れです。また私たちは、国をもっていますが、その国以上の忠孝烈をもって天国のために生きようとする群れです。（一九七一．八．一九）

今は最後の時が来たというのです。父母から私の国まで復帰するのです。祝福を受けた家庭が父母の代わりに横的に囲んだので、私の国を取り戻すにおいて、忠孝の道理を果たすことによって、孝子の代わりに忠臣、忠臣の代わりに聖人、聖人の代わりに聖子の立て札を持ち、天宮法を守り、天国の道、天国の法を立てなければなりません。私たちによって天国の憲法が始まるという事実を知らなければなりません。このような意味で「私の国」というのです。（一九九〇．一．七）

神様の心さえ知る日には、この民族は、天地を支配するはずです。どうしてでしょうか。数多くの子女がいて、数多くの民族がいたとしても、最高の孝子、孝女、忠臣は一人です。堕落した人間の父母も、同じ子女であっても、無念に打たれている子女をより考えるというのが誰もがもっている人情ならば、ましてや神様がそうでないということがあるでしょうか。

神様は、ある民族を探し求められるのではなく、最も愛する孝子、孝女を探し求められます。孝子、孝女を探し立てて、その民族に誇りたいと思われます。

世界を収拾して一つの民族を取り戻し、イスラエルを立ててここで一つの血族を取り戻し、一つの血族を収拾して一つの家庭を取り戻し、一つの家庭を収拾して一人を取り戻すのです。その一人を取り戻すことが世界を取り戻すことなので、その一人は、神様のすべての歴史的な恨を解いてさしあげることができる心を所有した孝子でなければなりません。

そのような孝子が出てきてこそ、彼によって悪なる人々が贖罪を受けることができるのです。（一九六〇．一〇．一六）

終わりの日の私たちは、何よりも神様の心を知っている人にならなければなりません。人間には、知、情、意の三要素があり、知と意を踏み台にして情的な天情をなすべき部分が残っています。

神様の情的な流れがあり、私たち韓民族に対して天的な摂理があるために、韓民族は、誰よりも天に対する切実さと忠孝の心が強く働いているというのです。（一九五八．六．二二）

天の忠臣になろうとすれば、天の恨みを晴らさなければなりません。孝子になろうとするなら、父母の怨讐をそのままにしてはなることができないので、怨讐をなくさなければなりません。烈女も同じです。この恨みを晴らす日まで、永遠の命を懸けて覚悟して行かなければ、闘わなければ、皆さんは、堕落の恨に満ちた峠を越えることはあり得ないのです。

この峠を越えてこそ、初めて神様がすべての悲しい心情を解かれ、皆さんに、「六千年

間待ち焦がれた忠臣よ、孝子よ、烈女よ」とおっしゃって、両手を挙げて祝福してくださるはずであり、三位神は安息することができるのです。

このように、心情基準が解決する前には安息できないというのです。（一九六〇．四．二四）

神様は、父母の中で一代の父母であり、王の中で一代の王であり。この天地を一人で主管することができる方であり。理想を形成することができる一代の先祖である方です。

その方を中心として孝誠を尽くして、その方を中心として忠誠を尽くし、その方を中心として聖人の目的を達成することができる息子、娘になり、そして神様の天地創造の大偉業を相続されるにおいて恥ずかしくない位置に行こうということが、私たち統一教会の目的だというのです。（一九七六．二．二九）

二、神様を感動させる絶対忠孝

ノアじいさんは、迫害が激しく、乱れた環境の中でも、渾身の力を出したので、その環境に勝つことができました。神様の法度の前に、子女として忠孝の道理を果たすだけだ、という謙遜な心をもっていたのです。

神様の前に行けば行くほど、環境の非情さを感じて悲しみましたが、そのような時であるほどノアじいさんは、神様に申し訳ない心で悔い改めの涙を流していったので、彼が行く道を妨げる者はいなかったのです。

そのようにして百二十年間を過ごしてきたノアを一度考えてみてください。ノア一人に対して、サタン世界は、打つことができるすべての方法を動員して反対しましたが、神様が中心として立てられたその基準から、ノアは少しも外れることがなかったのです。その基準は、天宙の絶対的な中心として立てたものであり、宇宙の正義の人間として立てたものであり、真の勝利者として立てたものです。

それで、神様は、この基準に反対になるすべての怨讐の要素を清算しようとされたのです。（一九六六．六．四）

生きるためには、皆さんが一生の間、忠誠の道理に変わることがあってはならないというのです。環境が自らの立場と自分を評価すれば評価した分だけ、私たちの舞台は世界へ拡大されるというのです。今日、国内事情を中心として身もだえしていますが、環境が平安ならば平安なほど世界を中心として身もだえしなければなりません。世界のために行かなければならないというのです。

それで、世界のために忠誠を尽くす神様の息子、娘をお迎えして、神様が祝福してくださり、神様が誇ることができるその日を迎えなければなりません。そのようにしてこそ、初めて韓国に安息が展開するというのです。皆さんが、三千万民族が世界のために忠誠の道理を果たして、世界万民が「韓国によって自分たちも神様の息子、娘になった」と言って忠誠を尽くすことができる環境の基台を迎えるようになる時、初めて韓国に安息の基台が展開するというのです。（一九六五．一〇．三一）

今まで大韓民国のために、神様が苦労してこの歴史的な環境をつくっておかれ、あるいは今日、時代的な時を私たちが迎えるようにしてくださり、そして今その時が来たとすれば、ここで忠誠を尽くす牛のような人々が出てこなければならないというのです。

牛のような人です。アブラハムの祭壇の中に三大祭物がありますが、一つは鳩であり、一つは羊であり、一つは牛です。今の時は、象徴的な型から見れば牛の時代です。牛の時代だというのです。神様は牛を好まれるのです。

牛の時代！　捕まえて食べるために好まれるのでしょうか。牛を好まれるのは、肉を食べるために好まれるのではありません。農夫が牛を好むのも、未来に食べる肉の塊が集まっているから好むのではなく、働くからです。働かせて、肉を食べて、また食べて食べて、さらに食べるというのです。そのようになっています。

それでは、神様の息子になるためには、何にならなければなりませんか。豚にならなければならないでしょう？　（いいえ）。象徴的に言えば、その方が大王の牛のような忠誠と至誠を人間のために尽くされ、子女のために尽くされたので、今日の私たちも、牛のような方の前に子女になるためには、牛の子のよにならなければならないというのです。

だからといって、牛の子になりなさいという話ではありません。例えて言えば、そうだというのです。（一九六五．一一．二）

この全天地間に、私よりも天の前に忠誠を尽くす人がいるならば、その人は誰か、東方か、あるいは西方か、どこにいるのか、これが気にならなければなりません。

忠誠を尽くす人がいれば、その人はどのような人なのか、気にならなければならないというのです。どのように忠誠を尽くす人なのか、その人はどのようなことをする人なのか、そのようなことが気になるべきだというのです。（一九六五．一〇．三一）

神様のために忠誠を尽くすことにおいては、一歩も譲歩できないという信念をもたなければならないというのです。どのような人、どのような忠臣、誰よりも私がより一歩、わずかでも先んじなければなりません。地上で生きていった霊人たち、地上で一生懸命に仕事をしていった霊人たち以上に、その人々が国のために忠誠を尽くして、すべての公的な仕事に一生懸命に働いたそれ以上に実践しなければならないというのです。わずかでも多くしなければなりません。鉄則がそうなのです。（一九七八．一一．二六）

僕の時代において絶対的な忠誠を尽くし、養子時代において生活面で絶対的な忠誠を尽くさなければなりません。このように二代の環境を経ることなくしては、養子として神様の直系子女と一体となることができる基準を決定できないのです。

一つになることができる基準を決定できないというのです。地の世界を中心として天の世界との関係を結ぶことを、世界を代表して最初にした民族が第三イスラエル民族になるのです。（一九七一．六．三）

皆さんが待つ心をもって耐え、その環境において、すべての恨的な要件を皆さんの一身で蕩減、解怨しようと思って苦闘しなければなりません。そのような人は、倒れず、滅びないということを皆さんが銘記しなければなりません。倒れて、今ではもう主の前に行く道がないと考えても、天は生きているというのです。

天は今まで耐えてきたので、そのような立場で精誠を尽くし、忠誠を尽くしている途中で倒れたそのような群れは、再び起こして天の前に祈祷だけでもし得る道を開いてくださるのであり、また今から生きて進んでいく方向を提示してくださるのであり、また彼らを起こして協助することができる人を送ってくださるようになるというのです。（一九六四．一．七）

神様が御覧になる時に、民族の内的心情を泣かせることができ、天宙の内情を貫徹することができる人にならなければなりません。神様と通じることができる愛情をもったその孝子、孝女は、深い悲運が漂う立場でも、その悲運の主人公になった王ならば王、父母なら父母の心を解いてさしあげ、その背後のすべてを一人で防いで解決しなければなりません。このような忠孝の因縁をもった人が天国に行くのです。

イエス様を信じて一人で天国に行くという人は、天国どころかエデンの園にも行くことができません。このような人々に今まで悪口を言われて迫害されてきたことは無念で悔しいことですが、だからといって銃刀で復讐してはいけません。（一九六八．三．一〇）

皆さんが文字を書く時に、点を一つ書くにしても、その時の心の姿勢いかんによって喜ぶことができます。また、その一点が希望の象徴になり得るというのです。

それゆえに、天地を創造された神様が、いくら小さな物をつくられたとしても、それは神様の孤独な立場を埋めて喜びを得るための対象なので、それは、神様の前においては最高の喜びの対象になるのであり、忠孝の要件にならざるを得ないのです。ここで私たちは、神様が、つくったものを鑑賞されながら、これは抜いてこれを加えればどうかという希望の中で、いつも喜びの心をもってお過ごしになったという事実を知ることができます。（一九七一．一．一五）

誰が神様を解放してさしあげるのでしょうか。忠孝の道理を誓って孝誠の道理を尽くす、限りなく最善を尽くす孝子が現れて、その方のすべての十字架の恨に責任をもたなければなりません。そのような息子、娘が現れなければなりません。

そうでなければ、神様は解放されないということを皆さんは知らなければなりません。（一九七八．一一．一）

私を見て勇気を出され、悪なる世界を押し倒そうと思いながら立ち上がることができる神様になるとすれば、その瞬間には神様の活動舞台が自分によって生じます。それは、自分にとってどのような貴い位置、玉座、栄光の位置において、一生ではなく、いくつもの生涯にわたってそれ以上のものをプラスして

も達し得ない、王からの喜びの贈り物なのです。

歴史を越えてまで迫害に対して自分が対抗する、それが永遠の歴史を代表した孝子、孝女が行くべき道ではないかと思うのです。

それが永遠の国に対しての忠誠の道ではないかというのです。（一九九四．三．一〇）

結論的に神様は、絶対家庭、絶対忠孝を願われるのです。今までそのような絶対的な忠孝が出てきませんでした。絶対聖子、神様の息子のような世界的な基盤がなければ、神様が地上に降臨できないのです。神様お一人では、地上で何の役事もできません。ですから、私たちは、「悲しい神様、かわいそうな神様だ」と言うのです。

今から、レバレンド・ムーンを中心として、ヨーロッパのメンバーが初めてそのような家庭を築くということは、驚くべき事実です。誰でもみな忠孝を願います。今まで神様は、この堕落した世界に対して、かわいそうな立場にいる以外になかったのです。

その神様をどのように解放することができるのですか。それは、どのようにそのような家庭、氏族、民族、国家、世界を建設するかということにかかっています。（一九九八．一一．二〇）

三、イエス様の忠孝

イエス様は、「どのような難しい環境にぶつかっても、その環境を克服するためには忍耐心をもたなければならない」と主張しました。「罪人が悪に対して忠誠を尽くす以上に神様のみ旨のために忠誠を尽くさなければならない」と言ったのです。これがキリスト教でいう、聖霊の九つの結実の根本です。愛の生活をするようになれば、喜楽と和平が現れ、忍耐を通して慈悲と良善が現れ、忠誠の生活をすれば柔和と謙遜が現れます。

イエス様は、堕落圏内にいる人間たちのすべての悪の要素を除去してあげるために、天的な愛と天的な忍耐、天的な忠誠を強調したのです。これらが天国の理念を達成させ得る実践的な理念ですが、今日、皆さんの心にこのようなキリストの愛がありますか。

また、忍耐と忠誠心がありますか。イエス様は、神様の心情に代わって顕現なされた愛の化身体であり、寂しいゴルゴタの道においても万民の苦痛を心配なさった忍耐の主人公であり、歴史上の誰よりも天に対して忠誠を尽くした忠誠の代表者でした。

それでは、このようなイエス様の愛、忍耐心、忠誠心はどこから来たものなのでしょうか。これらは、イエス様自身が起源となったものではありません。イエス様は、神様の愛を人間に連結させる仲保の役割をするのです。無知な人間を救うために来られたイエス様は、神様の愛の化身であり、神的な価値の実体でした。（一九五七．八．四）

神様は、このように真のみ旨を成すために、御自身のような人、全体の価値の代わりをすることができる人を取り戻すために、人間が神様に対して忠誠を尽くす前に神様が人間に

対して先に忠誠を尽くされたのであり、無限に忍耐してこられたのです。

したがって、皆さんは、天倫を中心として運行なさる神様と、み旨を成就するために人間に対して無限に忠誠を尽くされたその事情を体恤しなければならず、この志を立てるために無限に犠牲になってこられた神様の心情、また未来の理念を立てるために無限に御自身を超越なさった神様の心情、無限に与えようとされる神様の愛の心情を体恤しなければなりません。（一九五七．八．四）

イエス様は、人類の父として来られ、聖霊は、人類の母としてこの地に来ました。しかし、彼らは、霊肉を中心とした父母になることができずに霊的な父母としてのみ役事してきました。

イエス様の十字架における死は、霊肉が一つになった立場でサタンに勝利したのではなく、サタンに追い込まれて死んだのです。それゆえに、体はサタンに差し出し、霊だけが復活したのです。四十日後に復活して弟子たちを集め、霊的な基準を中心として第二イスラエルを出発しました。これが今までのキリスト教二千年歴史なのです。

それでは、第一イスラエルはどこにいるのでしょうか。第一イスラエルは滅びました。第一イスラエルであるユダヤの国は、イエス様を殺した罪によって滅び、第二イスラエルが登場しました。神様は、メシヤを待ち焦がれたイスラエル民族を四千年間率いて保護し、育成し、四千年間苦労したその功績の基盤の上にメシヤを送られました。

それにもかかわらず、この民族は、メシヤを信奉することができずに十字架の死の道に追い込んだのです。それで、この民族は、神様の前に怨讐になったのです。

イスラエル民族は、この時から国のない民族になりました。そして、イエス様が再び来る時までは独立できないのです。イエス様を殺した罪を蕩減するために、二千年間多くの苦労をしなければなりませんでした。イスラエル民族は、万人類のために万民の先祖として来られたイエス様を、刑場に立てて血を流すようにしたので、国のない民族として苦労したのです。

その時のイスラエルは、霊的にも肉的にも、どこに出ても堂々とした権威をもった国でした。イエス様は、このような国家圏の上に来られて、国家を収拾し、世界を復帰しなければならない責任があったのですが、イスラエル民族が信奉せずに死の位置に追い出したので、イエス様はやむを得ず霊界に行くしかなかったのです。

しかし、イエス様は、神様のみ旨を立てることができる忠孝の道理をすべて果たしました。死の道を行きながらも、万民に代わって天倫の使命と責任を全うしようと思い、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」（マタイ二六・三九）と言いながら、忠孝の道理を立てたのです。

ゆえにイエス様は死んだとしても、その精誠の基準はサタンが占領できません。そして、イエス様が霊的に復活することによって、霊的なイスラエルの基準がつくられたのです。（一九六八．一．七）

イエス様は、「わが神、わが神。なぜわたしをお見捨てになったのですか」という立場に出ていき、自分の体が引き裂かれて、自らの魂がずたずたに引き裂かれる犠牲の道、死亡の峠を越えていきながらも、お父様を離さずに最後まで忠孝の道理と忠臣の道理を誓うにおいて、サタン世界の誰にも負けない立場で静かに死の道を迎えていったのです。

イエス様が、その場において、サタン世界で死んでいったどのような人よりも上に立つことができたその条件とは何でしょうか。怨讐に対して福を祈ったという事実、その条件を中心としてサタンがそれ以上は侵犯できない防波堤として決定されたというのです。

神様はイエス様を愛して、イエス様は天を愛したので、愛を中心として復活の権限を発揮して復活したのです。（一九七一．一一．七）

イエス様は、幼いころから神様が喜ぶことができる立場でイスラエル民族の慕心を受けなければならず、神様の前に召命されたイスラエル民族は、忠孝の道理を果たす立場でした。しかし、イスラエル民族がそのような使命を果たせないので、腹中教を中心としてイスラエルの勝利的立場を再現し、そのことを再び推進させたのです。（一九六九．八．一〇）

本来、ヨセフとマリヤが、イエス様は神様が送られた真の息子であり、神様の王子であり、また万民のメシヤだということを知ったなら、彼が生まれたその日から、神様の王子として侍っていかなかればならないのです。

毎日のようにイエス様に敬拝しなければなりません。王の王であり、永久に全天宙を支配することができる天の主権者として来られた方であるがゆえに、イエス様が生まれたその日から、ヨセフとマリヤは、彼に最善を尽くし、忠孝の道理を果たして侍らなければならなかったというのです。

人間的に見れば、自分の息子に忠孝の道理を果たさなければならないという法がどこにありますか。しかし、天法ではそのようにしなければならないのです。（一九六五．一二．二六）

イエス様は、どうして父母、すなわち神様に侍ることができる天の法度を親しく教えてあげることができなかったのでしょうか。本来、堕落していなければ、神様がアダムの父母になっていたはずですが、堕落によって父子の因縁が途絶えたのです。それで、父子の因縁として、忠孝の道理を果たすことができなかったことを私たちが蕩減復帰するために、忠の道理と孝の道理の代わりをするのです。

それまでは、神様が父母の位置で教えてあげることはできないというのです。（一九六五．一〇．一〇）

第五章　孝行と忠誠と宗教は不可分の関係

神様を占領する方法は忠誠を尽くす道理しかなく、父母を占領する方法は孝行する道理しかありません。ですから、皆さんは、神様の前に忠孝の道理を果たさなければなりません。（一九六四．六．一二）

家庭で本当の孝行をする人は、国の忠臣の道に直通します。国に本当の忠誠を尽くす人は、聖人の道に直通します。それを知らなければなりません。結論は何かというと、家庭において父母を絶対的に愛していこうという道が孝子の道であり、国のすべての国民と主権者を絶対的に愛していこうという道が忠臣の道であり、世界を絶対的に愛していこうという道が聖人の道です。

国の国王も、聖人の道に従っていかなければなりません。絶対的に信じなければなりません。愛国者と忠臣は王に従っていかなければならず、孝子は愛国者に従っていかなければなりません。一つの道です。それでは、聖人は誰に従っていかなければならないでしょうか。神様に従っていかなければなりません。

神様も永遠、不変、唯一の愛、この聖人も永遠、不変の愛、国王も永遠、不変の愛、忠臣も永遠、不変の愛、孝子も永遠、不変の愛であり、これは一つのコースにあります。いくら回り道して行ったとしても、この道に従っていかなければなりません。

個人が行き、家庭が行き、氏族が行き、国が行き、すべてのものが行くので、父母にも孝行しなければならず、国にも忠誠を尽くさなければなりませんが、一度に二つともできない場合は、どちらを先にしなければならないでしょうか。孝子の道と忠臣の道の二つがある時は、孝子の道を捨て、忠臣の道を取るのが法度に準ずることだということを知らなければなりません。なぜならば、国の中には数多くの家庭が入っているからです。数多くの父母が入っているからです。（一九七八．七．二三）

友人たちがすべての秘密のふろしき包みを持ってきて、それを千年、万年保管しておいても、安心できる友人にならなければなりません。そのようにすることができる友人が一番の友人です。自分の妻や父母や兄弟をほうっておいても訪ねてくるような友人になれば、友人の中の代表的な友人になります。

友人として、過去と現在と未来の代表者にならなければなりません。それから、家庭における代表者になりなさいというのです。それゆえに、父と母は、息子を自分の家庭の代表者として立てるために「孝行しなさい」と教えます。別の言い方をすれば、孝子になりなさいということです。

それでは、情緒的に最初に一つになることができる道とは何でしょうか。孝子になる道です。天地が知ることのできる孝子の因縁をもった人は、その国を中心として相続することができる特権をもつのです。

三綱五倫の教えとは何でしょうか。その家庭において、国が知り世界が知ることのできる孝行を尽くしなさいということです。そのような孝子は神様も御存じなので、神様は、その血統を通して国を納める人を送られるのです。

孝子は家庭を中心として決定され、忠臣は国を中心として決定されます。忠臣とは、心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして、主なる神様を愛した人ではなく、心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして、自分の国を愛した人です。そのような人だけが忠臣になることができます。（一九七〇．七．一九）

どのような人が主人になるのかというと、一番の主人になる人は、至誠を尽くし、忠誠を尽くす人です。そのような人だけが主人となる資格をもちます。学士や博士が主人になるのではありません。

もし学士や博士が来て働いて協助したとしても、彼らは労働者にすぎません。主人になることはできません。最後の帰結点は、知識が問題ではなく、学識が問題ではなく、その人に力量があることが問題ではありません。至誠と忠誠を尽くすことが問題です。

昔を見てください。日本が三千万民族を掌握して思いどおりにしていた時に、柳寛順のような少女が日本人に反対したのですが、その当時で見れば、それは正常な人ではありません。しかし、彼女は、民族が忠誠を尽くすことができない時に、民族を代表して忠誠を尽くし、民族が精誠を尽くすことができない時に、民族を中心として精誠を尽くしたのです。それゆえに、私たち韓民族にとって、常に忘れることのできない思想的な指導的権限を彼女が占めるようになったのです。

時でない時、環境ができていない時、その時と環境ができていない時だったので、その目的は、達成することができずに失敗したのですが、時と環境ができている時に精誠を尽くし、忠誠を尽くす人がいるとすれば、どのようになるでしょうか。誰かが捕まえて殺すでしょうか。どのようになるでしょうか。

環境ができていない時に死を覚悟して忠誠を尽くした、そのような忠誠をもって、時になり、環境ができた時に立ち上がる天の子女がいるとすれば、その子女はどのようになるでしょうか。その人は、動けば動くほど、上がっていきます。その代わり、歩んでいる途中で中断してはなりません。私が生まれたのはこのために生まれたのであり、私が働くとすればこれしかないという、このような観念をもって至誠と精誠を尽くす立場で、一年を過ごし、二年、三年と過ごしていけば、その過ごす年数に比例して、その人はどんどん上がっていくのです。（一九六五．一一．二）

皆さんは、李舜臣や柳寛順のような人が愛国者だということを知っています。彼らがこの国の愛国者ならば、彼ら以上に忠誠を尽くそうという心はもっているのですが、今まで、そのようにすることのできる実質的基準をもつことができなかったので、今から皆さんは、忠誠の道を歩まなければなりません。

国を取り戻すための解放の先駆者にならなければなりません。それゆえに、この道を行く所で党派的に追われ追われて、あるいは投獄されたとしても、闘争しなければなりません。この闘争において、敵対する相手が誰かということを決定していかなければなりません。これが、統一教会の行かなければならない道です。

「自分は父の前に孝行した」と誇ってはいけません。孝は、忠の道理を果たすための一つの土台です。父に代わって忠の道理を果たし、一つの家庭の父母を中心として愛の祝福を受けることができる私にならなければなりません。

そして、国を中心として永遠の愛を祝福してくださろうとする父の願いに、いかにして私がその基準を突破し、成就するかということが問題です。

これを一生の事業だと考え、国民としての道理をもって、その責任と使命を果たさなければなりません。（一九七〇．二．二五）

おそれ多くも、天は、父子の因縁に対するみ言を私たちに提示してくださったのですが、私が、どの程度まで父に侍ったのか、どの程度の孝子になったのかというのです。

個人的には孝子として、国家的、民族的には忠臣の気概をもって天に対さなければなりません。東洋の三綱五倫のようなものには、すべて一理があります。それを教えてあげるためのものです。天に対する忠孝も同じです。同じことです。父母に孝行することのできない者が、天の前に孝子となることはできません。

国に対する忠臣の志操をもつことのできない者が、天の前に忠臣となることはできません。天の前でもこの世界でも同じです。心情の世界も、内容が異なっているだけであって同じです。（一九五九．七．一二）

愛国心は天の理想に連結されるので、本心は忠孝の道を賛美するようになっています。しかし、日本の中心と韓国の中心では、方向が異なります。

韓国の李舜臣将軍といえば、日本では怨讐です。また、日本の伊藤博文は、韓国の怨讐です。そのようなものです。ここにおいて、韓国と日本がお互いに中心に立とうとします。ですから、偉人は各国ごとにすべているのですが、聖人はいません。

偉人は、国を中心として愛した人であって、世界を中心として愛した人ではありません。伊藤博文が、アジアと世界をより一層愛していれば、そのような悪いことはしませんでした。（一九九二．四．一二）

家庭において父母に孝行するために、毎日毎日父母の考えと一致する生活をする人と、今すぐに孝行することはできないものの国を取り戻すことができる道を求めて民族の願う最善を追及し、世界のために最善を尽くそうとしながら、ある瞬間を待ち望んでいる人を比較してみるとき、今すぐには父母に孝行できなくても、未来に孝行しようという人が、この世の中においてはより必要です。このような観点から見るとき、「宗教とは、未来を追及する立場で、未来の国のために忠誠を尽くすものであり、未来の孝行の基盤を強固にするために出てきた」と言うことができます。（一九六九．一二．二八）

国を愛することは、国を中心としたものではありません。父母を解放しようという愛の心をもった孝子になろうというのが統一教会

の思想です。国を愛する前に、父母を愛さなければなりません。孝子にならなければなりません。

それを通って国を愛することができるのであり、国を愛することができる道を通って世界を愛し、世界を愛することができる道を通って天を…。そのようになるのです。まず、父母の前に孝子にならなければなりません。（一九八六．一．三一）

宗教が追求しているある瞬間、忠孝を行うことができる未来のある瞬間とは、どのような瞬間でしょうか。

人類が共に幸福を謳歌することができ、人類が初めて希望の起点を賞賛することができ、歴史を支配される神様が喜んで誇ることのできる時です。

その瞬間を迎えて勝利を誓い、その一瞬に自らを全天地の中心として現すために宗教が出てきた、ということだけは間違いありません。（一九六九．一二．二八）

第六章　忠孝と真の愛の有無が天国行きと地獄行きの尺度

いくら邪悪な社会環境に直面したとしても、愛する父母がいて、その父母の懐に行って涙を流しながら寄り掛かることができるならば、それはどれほど幸福なことでしょうか。

私が悲惨な立場にいる時に、誰も私を抱いて慰労してくれなくても、父と母の懐にもたれて涙をすっと流せば、その重荷を背負いながら苦しんでいる体を無言でなでてくれるその父と母の手は、億千万金を出しても買うことができません。そこには、天下の名将として敵対軍を退けた勝利の気分を凌駕するほどの感謝の気持ちが訪れてくるのです。

それで、孝子、孝女になりなさいというのです。夜に傷つこうと、昼に傷つこうと、父と母に報告すれば、その父母は常に準備しています。なでてあげ、包んであげる心が常に準備されているのです。

たとえ包帯や薬は準備できなかったとしても、愛の包帯と愛の薬で私をなでてくれるという驚くべき事実、その場所は平和の香りで満ちあふれるようになります。これを支配し得る力は、ほかにないということを知らなければなりません。

一生の間、子供のために愛の関係を結んで生きる父母が血の汗を流し、腰が曲がり、その容貌がどれほど悲惨になったとしても、その心の世界に燃え上がる希望は、誰もくじくことができません。直面する困難がどれほど強かろうと、そこには、それを一歩一歩踏み越えていくことのできる偉大な力があるのです。

愛国者の道も同じです。我が国の先祖たちが、愛国者の道を行き、父母を愛する立場に立ったので、それと同じように愛そうとするのは、先祖の愛を受けることができる子孫としてもち得るプライドです。

ですから、一つの国の国民になったならば、国を愛さなければなりません。国に依存して生きてはいけません。成長して分別がつく時

までは、依存して生きるでしょう。ただ勉強するだけの時はそうです。

しかし、分別がついてからは、依存して生きてはいけません。赤ん坊も、何ヶ月か乳を飲めば、乳離れするでしょう？　ちょこちょこ歩き回る時は、父母が隠しておいた物をどれだけ盗み食いしても、それは罪悪ではありません。お父さんやお母さんが隠しておいた物を子供がちょこちょこ行って取り出して食べたからといって、「やい！　この息子、どろぼうをしたな。罰を受けろ」と言うでしょうか。「こいつ、とんでもないな。どうやってそれが分かったのか。私よりも勝っている！」と言いながら、おしりをたたいてくれるのではありませんか。それが父母の心です。（一九八八．四．一七）

エデンの園においてアダムとエバが堕落することによって蒔かれた罪の種は、彼らの息子であるカインとアベルによって刈り入れられました。それゆえに、罪の種を蒔いた父母が復帰されなければならないのです。

そして、天宙史的な父母復帰の基台を中心として、忠孝の道理を全うすることができる子女の基準を復帰しなければなりません。この基準が決定したのちに、初めて「万物の日」が出てきたのです。（一九六六．六．一九）

愛は、自らの家庭から父母の助けを願うことではありませんか。自分が父と母の愛を受けたならば、父と母を愛さなければなりません。天理はそのようになっています。すべての心情的な誘発点は、父子の関係から連結されるのです。それは、すべて郷里から植えられてくるのです。

しかし、堕落することによって、これがすべて食い違ってしまいました。それをこの地で解かなければなりません。郷里に帰っていって、サタン側に立って愛する数多くの孝子、孝女以上に孝子、孝女の立て札を立ててこそ、天使長ではなく、善の霊人たちが地上に来るのです。

そのようにして横的に活動する霊人たちが、故郷で愛する心をもってソウルの家に来て協助するのです。そのようにして横的基盤を広めていくことができるのです。それが復帰です。（一九八八．四．六）

最高の立場で自己陶酔して満足しているその群れから迫害されて追われ、涙を流す立場で血だらけになって倒れていく体を立て直しながら、たった一つ私が残さなければならない遺業とは何であり、私が残すことのできる遺産とは何であり、私が相続させることができる最後の遺言とは何でしょうか。天に対して燃え上がる心情と、忠誠を尽くしたいと思う孝子の心、忠臣の心、烈女の心をもつ群れがいるとすれば、その群れは絶対に滅びることがありません。（一九六一．一．九）

正義の道をはっきりと知って分別していくのが忠孝の道理です。ですから、皆さんは、何の価値もない一日一日を送ってはいけません。それは負債を負うことと同じです。自分に近い人々をここに引っ張ってこなければなりません。力が足りなければ、脅迫してでも

連れてきなさいというのです。それは罪ではありません。

なぜそのようにでもしなければならないのでしょうか。教育して良い所に連れていくためです。そのような条件があるので、何でもすることができるのです。ですから、これからはそのままほうっておいてはいけません。（一九九三．一．一）

皆さんが忠誠を尽くせば、皆さんの子孫の前に道が残されるのであり、皆さんが霊界に行けば、その苦労の功績の道が褒めたたえられるのです。今はもう、蕩減の時代は過ぎ去りました。

今は、皆さんが動くほど輝く伝統を立てることができるのです。それが皆さんの財産になります。

このような時点に置かれているということを知って、すべての精誠を捧げなければなりません。（一九七一．一．三）

絶対的に忠孝を尽くせば、神様の本性の天国に行くのですが、ここに反対すれば、天国と一八〇度反対の地獄に、直行で落ちていくのです。

フリーセックスは、サタンが人類を滅亡させ、地上地獄を膨張化するための悪魔の計略的愛の版図だということを、皆さんは知らなければなりません。絶対的な愛の神様を中心として見るとき、おじいさんとおばあさんは、絶対的に一つになっています。分かれることができません。

神様を中心として、おばあさんとおじいさんが愛を中心として絶対的に…。愛とは何でしょうか。その凹凸を合わせるにおいて絶対的であり、父と母も絶対的であり、夫婦も絶対的であり、自分の息子、娘たちも絶対的であることを願うのです。（一九九六．一一．二四）

父母は、孝行する子を見て涙を浮かべ、永遠をかけて祝福するのです。心情圏には、そのような背後があります。恐ろしいのです。

この世には、お互いを比較しながら祈祷しているうちに、後ろ指を指されて消えていく人もたくさんいますが、本当に忠孝を行う孝子が中心になる時は、父母と自らは、涙を流してその家庭を守り、未来の国の祝福がその家庭と共にあることを願う孝子になり、父母になるのです。（一九九三．四．二一）

神様のために生きる孝子の道は、客死の身になったとしても、その環境を守り、その環境が喜ぶことのできる立場を継承していかなければなりません。そのようにしてこそ、天国に行くことができるのです。そのようにしなければ行くことができません。（一九九六．一〇．一三）

一つの世界、一つの目的の世界を成し遂げるための神様がいらっしゃるのであり、その神様は、遠くに対する時は万軍の主であられ、中心の中の中心であられるので、そのお方に対して私たちが信仰するのは、忠臣になるためです。

それが、私の生まれた義務であり、責任です。近くに対する時は父であられるので、孝

子、孝女になることが私たちの責任だということを知らなければなりません。それが先にしなければならないことです。そのようにしておいてこそ、「地獄に送ろうと、天国に送ろうと、自由にしてください」と言うことができるのです。そのように生きたのちに地獄に行った人はいません。（一九六四．一〇．五）

アメリカは、世界の代表国家として責任を果たし、皆さんは、世界の国家代表としての責任を全うするという立場で結束しなければなりません。

ですから、先生の前において完全なカインにならなければなりません。国家を代表した者、世界を代表した者として、完全なカインにならなければなりません。そこにおいては、個人の観念はあり得ないということを知らなければなりません。

この時だけは、皆さんが世界史を代表したカインの中のカインになり、天使長に恥ずかしく思わせる天使長になり、天使長の蕩減条件を越え、天のために忠誠を尽くす天使長になるという心をもって立たなければならないことを知らなければなりません。（一九七六．八．一〇）

第七章　神様と真の御父母様

一、真の御父母様は忠孝の標本

私たちは、イエス・キリストを「王の王」と言っています。「主の主」、あるいは「絶対者の主体者」と言っています。しかし、そのお方の前で、「忠臣だ」と言って祝福された人はいません。このことを知らなければなりません。天の忠臣が現れず、天の孝子が現れず、天の烈女が現れなかったのです。

ある絶対的な信仰をもった人がいて、天が、天地を統治することのできる位置にその人を立てて祝福してあげたいと思われるとすれば、その人は、最高の位置に行くようになるでしょう。そのようにしようとすれば、その人は、その国の「最高の忠臣」という名前をもたなければならず、その国の「最高の孝子」という名前をもたなければならず、信仰者たちを「新婦」と言われたので、その国の「最高の烈女」という称号ももたなければなりません。しかし、神様は、六千年間復帰摂理をしてこられましたが、「あなたは、天地が生じたその日から今日までの歴史において、かけがえのない私の忠臣だ」と言って祝福してくださった人はいません。「創世以後今日までの歴史において、あなたは私の前における真の孝子だ」と言って祝福してくださった人はいないのであり、烈女として祝福してくださった人はいないというのです。

それは、この地の各国家が、天が誇ることのできる主権をもった国になり得なかったからであり、この地の家庭が、天が永遠に愛して守ってくださることのできる真の父母をもった家庭になり得なかったからであり、この地の人々が、天が永遠に信じてくださることのできる真の新郎新婦となり得なかったからです。

ですから創世以後今日まで、創造主が、この地上で暮らす人間たちの中で、「あなたは私の愛する息子、娘だ」、「あなたは天上天

下を代表した孝子だ」と言って誇った人はいません。「あなたは私の前における忠臣だ」と言って誇った人はいないのであり、「烈女だ」と言って誇った人はいないのです。

堕落した私たちは慕っています。天が認める忠臣になり得る、その国を慕っているのです。真の父母に侍って孝子となり得る、その世界を慕っているのです。

真の新郎新婦となって、天の懐に抱かれ得る、本然のその世界を慕っているのです。これが、人間の願う最大の目標です。（一九六〇．四．二四）

この世界は、父母が慕わしいので、その父母が来られる日のために準備するのです。その一人の主人公、一つの父母、一つの世界が、神様が今日までの六千年間苦労してこられた結実であり、願ってこられた目標です。ここに、その父母に代わって立つことのできる心情的な後継者が出てこなければなりません。

心情的な後継者です。言葉だけの後継者ではなく、姿だけ同じ後継者ではなく、喜ぶだけの後継者ではなく、父母の悲しみと苦痛を自らのものとして、父に代わって苦痛を受け、父に代わって悲しみながら、心情的に天の前に忠孝の道理を立てようともがく後継者のことです。そのような群れだけが、天の前に立つことができるのです。（一九六〇．四．三）

今日までの歴史路程は、善と悪の闘争によってつづられてきた路程です。このような歴史が私の前に迫ってきたので、私を中心として、悪は悪として、善は善として分立しなければなりません。「私」という存在は、この勝敗を左右する鍵を握った人です。

したがって、私は、個人を超越した公的な存在だということを肝に銘じなければなりません。過去に忠誠と孝行で公的な使命を完遂するために苦労した先祖たちのその歴史的な偉業を継承する者は、彼らよりも公的使命の前により忠誠を尽くし得る人でなければなりません。

したがって、私たちが公的な使命を担うためには、歴史を超越した宇宙的な忠孝烈の心情と覚悟を備えなければなりません。（一九六一．一二．一七）

忠臣とは何でしょうか。国王に対して精誠を尽くす人が忠臣でしょうか。違います。民を国王と同じように愛することのできる人が忠臣だということを知らなければなりません。

孝子とは何でしょうか。父母のために精誠を尽くす人ではありません。父母を愛するのと同じように、兄弟のために精誠を尽くす人が孝子だということを知らなければなりません。

真の聖子、神様の息子、娘とはどのような人でしょうか。神様を愛するのと同じように、神様に属するすべてのもののために歩もうとする人が聖子です。

それゆえに、私は聖子の道を歩もうというのです。先生は、神様も愛していますが、人類も愛しています。怨讐であるアメリカまで

も愛しているのです。そうであってこそ、神様が御覧になるとき、「私の息子よ」とおっしゃることのできる人は、神様を愛するのと同じように、人類のために生きる人です。そのような人が神様の息子です。

御自身のことを忘れて人類のために生きる神様なので、自分を忘れてこの人類のために生きるのです。そのように生きるので孝子だというのです。その定義をはっきりと知らなければなりません。

私たちは、孝子の道と忠臣の道から聖子の道を尋ねて行くのです。聖人の道を尋ねて行くのではありません。そのような内容を中心とした孝子の道理と忠臣の道理を通じて、聖子の道理を成し遂げてこそ、その国が何の国となるのですか。地上天国です。そこで生きれば、そのまま天国に行きます。そのようにすることが神様の創造理想だったのです。（一九八四．七．一九）

二、真の御父母様に対する忠誠は神様に対する忠誠

父母に親不孝した息子の立場に置かれているのが人類です。不幸を招いた張本人が、私たち人間です。天の前に言い表すことのできない不孝をしたので、親不孝した者が天の前に堂々と立つためには、孝子となることのできる立場に立たなければなりません。

統一教会の食口たちは、天の孝子となることを誓って立ち上がったということを自負しています。しかし、私たちは、再度冷静に批判、分析しなければなりません。私の手が、天の前にどれほど孝子の手として、天が慕う手となっており、私の顔がどれほど天の前に孝子の姿として、天が慕うことのできる人になっているでしょうか。

自らの一身が、どれほど孝子の触媒となり、いかなる逆境にあっても、昼夜その逆境を克服しながら、孝子の行く道を開拓してあげるために努力される父の姿を現すことができるようにしてさしあげたのかという問題を考えてみるとき、そこでは、私たちは自分というものをもつことができません。（一九七二．八．一）

孝子になろうとすれば、父母のすべての苦労を、あるいは父母の前に最も困難な道を選んで責任をもつために立ち上がる者にならなければなりません。

また、そのような孝子になることができない子供を孝子にさせたいと思う父母がいるとすれば、その父母はどのようなことをさせるでしょうか。死ぬほどのことをさせるのです。「おい、これをしなさい」と言って、兄弟の中で最も大変なことばかりを選んでさせるのです。

ただ一つしかない孝子の名をもってこられるお方がメシヤです。ただ一つしかない孝女の名をもってこられるお方が、メシヤの新婦です。

イエス様は男性なので、男性の前に女性だからといって、すべての人が新婦でしょうか。新婦がたくさんいるのですか。新婦は一人しかいません。しかし、新婦になろうとするところでは、誰もが競争することはできるのです。（一九七二．九．一〇）

故郷に孝子がいるとすれば、歴史時代において、その地にいた孝子の中のいかなる孝子よりも立派な大王の孝子にならなければなりません。忠臣がいたとすれば、それよりも立派な大王の忠臣にならなければなりません。

いくら孝子と忠臣になったとしても、真の父母と横的な因縁をもたなければ何の意味もありません。真の父母を中心として、横的な父が水平になる時、縦的な父が現れるのです。

完全なマイナスが生じるようになれば、完全なプラスが訪ねてくるのです。（一九八八．五．二二）

真の父母とは何かというと、家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天地では聖子の伝統的道理をすべて果たした人です。そのようなコンセプトをもたなければ、神様を中心とした家庭において、神様の願われる孝子として立つことができず、そのような中心を中心として築かれた国において、神様の国を中心とした忠臣として立つことができず、そのような世界において神様が願われる聖人として立つことができず、そのような天地において孝子となり得る聖子として侍ることはできません。

それゆえに、私たち自身が、このようなサタン世界の蕩減復帰のために、このような四大条件を完成し、天の前に奉献しなければなりません。聖子とは何かというと、天国の宮殿法と天国の法と地上の宮殿法と地上の国の法を守らなければなりません。天国にも王宮があり、国があるのです。

地上のすべての宮殿法と国の法と、天上世界の宮殿法と国の法を完成し、それをすべて守ることができなければなりません。それを守ることができてこそ、聖子になるのです。

その故郷の地を訪ねていって何をするかというと、「家庭盟誓」の第二番の孝子、忠臣、烈女にならなければなりません。二番を成すのです。今まで神様は、そのようなものをもつことができなかったので、サタンのものだったというのです。（一九九四．一二．二二）

三千里半島の至る所で、三千万民族の代わりとなり、父のために忠孝を果たそうと誓う群れが現れることを先生は待ち望んでいます。

皆さんが胎中にもいない時に、先生はこのような誓いをなしたのであり、皆さんがこのような道を行くことを夢にも思わなかった時に、既に先生はこのような道を歩んでいたのです。涙が多いとすれば、三千万民族の誰にも劣らないほど涙が多いのです。誰かが現れて私に一言でも言えば、抑えることができずに痛哭してしまうでしょう。

この世から見れば、先生は本当にかわいそうな人です。どれほどかわいそうでしょうか。心の安らぐ場所がありません。天地がどれほど広くても、心の安らぐ場所がないというのです。

イエス様が、「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」（マタイ八・二〇）とおっし

ゃいましたが、その心が理解できます。（一九六三．一〇．一六）

皆さんは、先生に対して、天の父母のように孝行したことがありますか。サタン世界に生まれて死んでいった数多くの孝子たちも、その国が追慕することのできる孝子の碑を残したのではありませんか。

また、いつ忠臣の道理を果たしたのかというのです。死ぬ最後の時まで、生命を捧げるまでは、孝子になることはできないのであり、忠臣になることはできないのではないですか。私は、そのような人を願いました。私が教育をしたのは、そのような人を願って教育したのです。それにもかかわらず、標準がすべてずれてしまいました。

いつ皆さんが、本当の意味で国を愛し、本当の意味で兄弟を愛し、本当の意味で先生を愛し、本当の意味で先生の家庭を愛したことがありますか。蕩減復帰の原則において、いかなる孝子よりも、いかなる忠臣よりも勝っていなければならないのではありませんか。それが、「原理」が教えてくれている教示ではありませんか。

そのような基準に立ったことがありますか。このようなことを皆さんは知らなければなりません。（一九七三．八．一五）

先生が命令することのために、なぜ手が曲がるほどに忠誠を尽くすことができないのかというのです。それを見つめる時、その話を聞く時、なぜ胸がふさがって痛哭が出てくる歴史の条件を残すことができないのかというのです。簡単で易しい方法だというのにです。

家庭を代表して父母の前に孝行し、国に対して忠誠を尽くし、天に対してすべてのことをなし、歴史的な勝勢の権限をもっていくことができるチャンス、天のすべての偉業を無条件に相続し得る絶対的なチャンスを得たにもかかわらず、なぜそれをすることができないのかというのです。そのようにしてこそ、地から国を経て天国に入っていく時に、遮る者がいないというのです。

サタンはどのようにするのかというと、家庭の前で遮ったのです。私個人がいくら完成したとしても、父母の前に孝行しなければなりません。そのようになっています。また、いくら父母の前に孝行したとしても、国の前に忠誠を尽くすことができなければなりません。

いくら国の前に忠誠を尽くしたとしても、人類の前に忠誠を尽くさなければ、天国に行くことはできません。（一九六七．一二．二六）

私が愛さなければならない万物という父母の前に孝子となることができなかったのであり、私を生んでくれた父母の前に孝子となることができなかったのであり、この霊界と神様の前に孝子となることができなかったのですが、先生を中心として真の父母に侍ることによって、代わりに孝子の資格を与えてもらうことができるのです。それゆえに皆さんは、粘り強く従っていかなければなりません。（一九七九．九．三〇）

世の中の若い男性や女性たちも、「初愛は忘れることができない」と言うでしょう。皆さんは、みな結婚したことがなくて分からないかもしれませんが、初愛は忘れることができないものです。

神様と私たち人間との間で父と息子の因縁をもち、父の前に孝行した孝子として記憶された息子、娘は、神様の心の中から取り除いてしまおうとしても、絶対に取り除くことができません。それは、アダムとエバよりも勝っている立場に立っているからです。

アダムとエバは孝子になったでしょうか。孝子になることができませんでした。孝子になる道とは、どのような道でしょうか。孝子の道を行こうとすれば、父のみ旨のとおりに生きなければなりません。父のみ旨のとおりに生きた人でなければ、孝子になることはできません。（一九七二．五．三一）

自分のために苦労してくださる父母の前に孝の道理を全うするためには、まず涙をもって父母を慰労し、引き受けた十字架を堂々と背負っていかなければなりません。

あなたが歩んでこられた十字架の道は、子女を愛するがゆえに悲惨だったという事実を告げる心をもって、「父よ！　これ以上苦労しないでください。父よ！　私のためにこれ以上心配しないでください！」と言うことのできる立場に立たなければなりません。

これが、今まで悲しみを受けながら歩んでこられた父母である神様の前に、立つことのできる孝子の姿ではないでしょうか。このようなことを思うとき、今日、私たちは神様の前にあまりにも厚かましく、あまりにも傲慢だったという事実を発見するようになります。（一九七〇．四．一二）

天地を代表して真の父母に侍るにおいて、歴史上のいかなる先祖よりも、いかなる時代の人よりも忠孝を尽くすという自覚をもって行動しなければなりません。そのように行動すれば、天とその環境において、すべての人が影響を受け、自分を中心として一つになるのです。（一九九五．一二．八）

皆さんは、社会に忠誠を尽くさなければならず、教会に忠誠を尽くさなければならず、家庭に忠誠を尽くさなければなりません。それでは、教会とは何をする所でしょうか。人格を形成し、人格を育てる所です。堕落したので、教会が必要です。家庭と社会で終わるのではありません。

人格を復帰するにおいては、そのままでは復帰できません。大学を卒業して何かの博士の学位を受けたからといって、それで人格が復帰されるのではありません。ですから、教会が必要だというのです。

それでは、どこに忠誠を尽くさなければならないのでしょうか。家庭に忠誠を尽くす前に、教会に忠誠を尽くさなければなりません。社会に忠誠を尽くす前に、教会に忠誠を尽くさなければなりません。教会が主体であり、家庭と社会は対象です。

知恵深い人はどこに立つのでしょうか。対象の立場に立つのではなく、主体の立場に立つのです。主体の立場は一つしかありません。

対象は、東西南北の四方において三六〇度回転しなければなりませんが、主体は、中心のただ一箇所しかありません。それは、ある圏内の絶対的な立場です。二つではありません。中心が二つになることができますか。これが行ったり来たりすれば、滅びる可能性が大きいのです。（一九六九．九．三〇）

大統領になるには、大統領になり得る基盤を築かなければなりません。いくら皇太子として生まれたとしても、王になるには、王になり得るすべての法度と規則を学ばなければなりません。

ですから、皆さんは、言葉ばかり言うのではなく、人類歴史最後の路程で、父母の言葉を一つ聞いて実践するのです。そのようにすれば、神様が「あなたは孝子だった」という印を押して、天国の孝子として天国に送ってくださるのです。これは、どれほど驚くべき愛でしょうか。その基盤は何ですか。家庭教会という基盤です。天国は孝子が入っていくのです。

息子は息子でも、ならず者は入っていくことができません。孝子の名をもっていかなければならないので、孝子という名の印を押してもらうためのものが家庭教会です。（一九八二．一一．一）

家庭で安楽に暮らす人々は愚か者です。家庭天国の垣根の中にしかとどまることができません。ですから、代表的家庭になり、中心的家庭にならなければなりません。それで、孝子、忠臣、聖人、聖子の道理は、私が行く道だというのです。天性的に私が必然的に行くべき道だというのです。

それゆえに、家庭では孝子にならなければなりません。それから、国では忠臣にならなければなりません。忠臣は、生まれながらその道理を外れることがありません。夜も昼も、焦点を合わせていかなければなりません。先生は、一生の間、寝ても覚めてもみ旨という焦点を忘れたことがありません。床から起き上がれば、それを続けます。千年、万年続けるのです。

先生が勝利した内容があるので、「氏族的メシヤの責任を果たすことができなかったとしても、国家的メシヤの責任を果たして、自分たちの誤ったことを清算しなさい」と言って前に立てたのです。そこで孝子にならなければならず、忠臣にならなければなりません。世界と国家を愛する心で、兄弟たちのために祈祷しなければなりません。そのようにしてこそ、真の御父母様に従って聖子の地位をもち、神様のみ前に現れることができるのです。（一九九七．四．八）

先生が国を担いました。その道において、皆さんが功臣です。それゆえに、孝子の道、烈女の道、忠臣の道を築くために行く道だということを知らなければなりません。それが氏族的メシヤの使命です。

孝子は家庭における息子の立場であり、烈女は夫婦の立場であり、国を代表する父母の立場は忠臣です。忠臣になることによって国

と連結され、父母の立場を代表するのです。
（一九九一．一〇．一六）

先生のために、神様は多くの涙を流しています。そのようなことを知らないでしょう？皆さんの中に、先生に涙をたくさん流させる孝子、孝女がいますか。それを願っているのです。

そのような人は、まだ探し出すことができずにいます。深刻な男です。（一九九四．三．一二）

Book 十五: 天一国主人の生活
The Life of an Owner of Cheon Il Guk

はじめに

真の御父母様は、神様と人類の解放、そして幸福な永遠の理想世界を実現するために、八十年の生涯を血と汗と涙で濡れた蕩減の路程を歩んでこられました。そのような苦難の路程の中で、一九九三年に成約時代の到来を宣布され、天宙平和統一国（天一国）の基盤を固められて、二〇〇一年に天一国を宣布されました。さらに、二〇〇二年の「真の子女の日」には、天一国主人として祝福家庭を祝福してくださいました。

真の御父母様は、天国に対して多くのみ言を語ってくださいましたが、天宙平和統一国（天一国）宣布以来、天国の具体的名称は「天一国」だということを明確にしてくださいました。

天一国三年二月六日、天一国開門が宣布されて以降、天一国主人としてふさわしい生活のために精誠を尽くしている祝福家庭の皆さんのために、真の御父母様のみ言集の中から天一国に関するみ言を精選して『天一国主人の生活』という本を発刊するようになったことを、神様と真の御父母様に感謝申し上げます。

堕落した人類は、個人主義的利己主義と物質万能主義、瞬間的な快楽のみを追う即席的愛による道徳性の喪失と家庭の破壊によって、極度に乱れた生活を送っています。

人類の父母であられる神様は、このような乱れた生活を送っている堕落人間が一日も早く創造本然の立場に戻り、天一国主人になる生活を送ることを願っていらっしゃいます。まず、神様から召命を受けた私たち祝福家庭が、天一国主人としての生活を率先して実践することにより、自らの氏族を祝福して天の懐へと導かなければなりません。

「天一国主人の生活」は、一心、一体、一念、一和の精神を土台として、純潔、純血、純愛、純孝、純忠、純聖、純婚、純家庭の純潔八段階を常に実践することにより、天一国の主人になることができるというみ言が収録されています。

天一国の開門が成された今、時代は大きく変わりました。古い時代は行き、新しい時代が到来しました。人間始祖の堕落によって出発したサタン主権の時代は行き、勝利された天地父母様が天宙を治められる神様主権の創造本然の時代が到来しました。

すべての祝福家庭は、天一国主人にならなければなりません。このみ言を訓読し、実践することにより、天一国主人になられることを祈願します。

二〇〇三年三月

第一章　創造の原動力は神様の真の愛

一　真の愛は神様のみ旨がとどまる中心

神様は、真理の大王、善の大王、真の大王、愛の大王です。では、神様は、もともといらっしゃったのでしょうか、お生まれになったのでしょうか。神様も大きくなってこられました。それを知らなければなりません。それをどのように知ることができるのですか。神様の本性に似たすべてのものが、小さな細胞から育ってくるのと同じです。それでは、神様は何によって大きくなってこられたのでしょうか。愛ゆえに大きくなってこられたというのです。絶対的な愛を中心として大きくなってこられました。愛の主体が神様であり、人間はその愛の対象です。

神様は、真の愛のために天地を創造されました。神様が天地を創造されたのは、人を見るためではありません。愛ゆえに創造されたのです。愛は、神様お一人でもつことはできません。お一人で愛を感じることはできません。もちろん、御自身の中に愛はあるのですが、円満に和合する喜びが充満した愛は感じることができません。いくら美しい花が咲いても、香りが出なければならず、いくら香りをもっていたとしても、風が吹いて初めて香りが飛んでいくのです。ですから、風のように相対的な刺激の対象が必要なのです。

真の愛は、神様が創造される時の根源的力です。原動力だというのです。それゆえに、神様も好むのは、真の愛だというのです。神様も、私たちのように御飯も召し上がり、目もあり、鼻もあり、すべてあります。そのようなお方ですが、そのお方が喜ばれることとは何かというと、私たち人間たちが喜ぶ黄金の塊ではありません。それは、いつでもつくることができます。それから、知識も同じです。神様は、全知全能のお方です。知識の大王であり、能力の大王です。

真の愛の深さは、神様がお生まれになる時の、その底まで包括するという話です。どれほど深いか分かりません。神様が存在し始めた根源から始まったので、どれほど深いか分からないのです。一生の間生きても、すべてそこまで行けないので、あの世界に行っても、それに向かって永遠に発展するのです。ですから、夫婦でけんかをして別れるというのは考えることもできません。

神様御自身も育ってこられたというのです。神様がその深さまで、出発とともに根源と一緒にいらっしゃったのです。根源は、神様が先ではなく愛が先です。「神様は二性性相になっている」というのですが、なぜ二性性相ですか。愛ゆえに二性性相を大切に保管するのです。

真の愛は、神様が思いのままにお出ましになることができる橋になるのです。すべての四肢五体が、いつ愛を中心として表面で一つになってもＯＫであり、内面で一つになってもＯＫです。北でも、南でも、東でも、西でも、天国でも、地上世界でも、どこでも同じです。愛を中心として和合することができ、愛を中心として自律的に和動することができるのです。それは、愛だけがもっているものです。

体制においても同じです。党を神様の絶対的な代わりとして立て、完全に一つになろうとするのは、神様を中心として一つになるということです。

神様も、真の愛に対しては絶対的に服従します。真の愛を中心としては、神様も生命を捧げようとされます。男性や女性も、真の愛があれば、なぜ命を捧げようとするのですか。愛が生命よりも先だからです。神様がなぜ存在し始めたのでしょうか。愛ゆえに存在し始め、愛するために存在されるというのです。愛という概念がなかったならば、神様も生まれる必要がなかったというのです。

それゆえに、神様からつくられたすべてのものは、ペア・システムになっています。鉱物世界もペア・システムであり、レベルは低くても、陽イオンと陰イオンも愛を表示しながら絡み合っているのです。これは、レバレンド・ムーンがこの世に現れて、歴史上初めて発表したのです。神様御自身も真の愛を絶対視され、それに絶対服従しながら生きようと思われるその起源を発表したのは、レバレンド・ムーンが歴史上初めてです。それは、観念ではなく事実です。このように神様は、真の愛を求めるために創造されたのです。

真の愛というものは、神様を介在させることなくしては成立しません。神様が介在されなければ、真という言葉、真という男性、真という女性、真という家庭、真という真理、真という愛がないというのです。神様が介在してこそ、それらが可能なのです。

神様は、真理の大王であり、善の大王です。真の大王です。愛の大王様です。それゆえに、神様を介在させない所には、善なるものがあり得ないのです。仕事もそうです。神様を抜かして行うのは詐欺です。信じることができません。すべてのものがそうだというのです。神様を介在させることによって、真の基準、永遠の基準が設定されるのです。

それでは、真の愛と偽りの愛を、何によって分別することができるのですか。自分を中心として「ため」に生きようとする愛は、悪魔と通じる愛であり、相対を中心として「ため」に生きようとする愛は、天地の道理と通じ、神様と通じる愛です。ここに境界線があるのです。

神様の愛は、与えて、与えて、与えても忘れてしまうのです。それが真の愛です。年を取ったおばあさん、九十歳になったおばあさんが七十歳を越えた息子に、「おい、なにがしよ。きょう外に出たら車に気をつけなさい」と言って、相変わらず昔の幼い時の息子と同じように接してあげるというのです。毎日のように繰り返すその話を、九十歳を越えるまでしても疲れません。千万年たっても疲れないのです。そのような愛が真の愛です。

自分の生命までも投入して、また投入するという位置、与えて、また与えても忘れてしまうことができる位置においてのみ、真の愛が始まるのです。真の愛は、天地を貫きます。死の世界も貫いて上がっていくのです。

生命の世界も、硬い心でも、どこでも貫いていくことができるというのです。愛が通る

ことのできない所はありません。愛は、秘密の部屋も通ることができるのです。

最も速い速度をもったものが愛です。真の愛は、神様の創造能力と一致した力です。ですから、その愛をもっていれば、地の果てから神様に、「来てください」と言っても来られるというのです。醜い孫娘でも、指を少し動かせば、おじいさんが彼女に従っていきます。愛は、そのように偉大だというのです。これが真の愛です。

愛というものは、ただそのまま出てくるのではありません。神様の愛を通じなければ、栄光が出てこないのです。その人が栄光を享受するというのは、自分一人でいる愛をいうのではなく、億万長者になって金の畑に座っていることをいうのではありません。

愛の因縁を完全に備え、変わらない幸福な位置にいることを、栄光を享受するというのです。栄光は、神様の愛を除いてはあり得ないというのです。責任を完遂したのちに、完成段階の基準を経たのちに神様の愛を受けるようになれば、栄光は自動的に訪れるのです。

真の愛は、神様よりも貴くなり得るのです。それは何の話かといえば、神様でも愛の相対は、何千万倍も立派であることを願うというのです。それは逆にいえば、真の愛の対象は、神様より貴いというのです。皆さんも、相対が皆さんより立派であることを願うのが愛です。

真の愛は、神様の愛です。霊界に行けば、真の愛の色と味を感じることができます。そのような世界が霊界です。その真の愛と和合すれば、通じない所や聞こえない所がなく、すべて通じるのです。真の愛の主人である神様の産毛があるならば、その産毛も真の愛に属しているので、少しだけ動いても天下がすぐに知るようになります。鋭敏だというのです。感情が宇宙的感情にまで、すべて通じるというのです。

愛を中心として、人間たちが神様、創造主以上の位置にまで上がっていける特権を許諾したその道を歩んでいくことができ、従っていくことができる方向を教えてあげるので「神主義」というのです。

「神主義」は真の愛主義ですが、真の愛主義は、堕落した生命を犠牲にして投入することができる道を訪ねていかない限り、その道に到達できないのです。それで聖書は、「生きようとする者は死に、死のうとする者は生きる」と、逆説的な論理を教えてくれたことを知らなければなりません。

愛の道を尋ね求めていく人は、どのようなものを備えなければならないのでしょうか。神様の愛、神様と父母、そして私が一つにならなければなりません。それで初めて真の愛だというのです。これが、神様のみ旨がとどまることのできる中心です。私がそのみ旨と一つになることのできる中心です。

二　神様と真の父母と一体を成し遂げるための真の愛

本来、心と体は、離そうにも離すことができず一つでした。人間の心は神様の心であり、

人間の体はその心を包む器でした。ところが、人間の堕落が人間の体を悪魔に差し出したのです。それから、人間の体は悪魔の僕になりました。

人間の良心は、神様を代表する心です。良心は、自分のために存在するのではありません。天の義のために存在します。良心は、常に善に向かって走ろうとします。ここに体は反抗します。体は、自分だけ楽をしようとし、利己的であり、本能的要求によって肉欲を表そうとします。良心は、この体を叱責して心に順応させようとします。ここに、常に血を流す葛藤と闘争が一つの体の中で起きるようになります。

しかし、神様を自分の中に迎え入れなければ、誰も自分の体を征服することはできません。ただ、神様の真の愛と真理の力を中心として、主体である心は、対象である体を率いて神様と一体理想をなすようになっています。これが宗教のいう完成した人間です。

神様を中心として、神様はお父様であり、私たち人類の先祖は息子、娘でした。その真の愛が出てくるためには、神様と一つにならなければなりません。一つになるのが原則です。一つになるための原則とは何かといえば、従順にすることしかないという結論が出てきます。神様が人と一つになる日には、神様のものが私のものであり、神様であり私であり、私であり神様だというのです。神様と一つになり得るのは真の愛だけです。

真の愛と和合すれば、彼は神様の体になり、細胞になります。神聖な神様の肢体になり、一体のようになって永遠に愛を呼吸し、愛を食べて生きることができるのです。そのような世界を天国といいます。真の愛を中心として一つになったことを、聖書は話さなかったのです。「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ一四・六）、そこには愛が抜けています。

真の人とは、真の愛で暮らす人です。真の愛は、与える愛であり、永遠にセンターのために生きるという愛です。これが神様の核心です。真の愛は、神様の愛です。神様を永遠に愛そうとすれば、私は真の愛の所有者になるのです。

真の愛は、神様とだけ関係を結んだ愛です。自分とか大韓民国とか、また世の中の習慣性、風習、国民の伝統性、このようなものがありますが、そのようなものと関係を結んだ愛ではありません。神様とだけ関係を結んだ愛です。人間が堕落したために、神様とだけ関係を結んだ愛になることができなかったのです。サタンと関係を結んだというのです。それが家庭だけではなく、家庭を越えて氏族、民族、国家、世界まで、地上世界、天上世界までそれが拡大されているというのです。今日、私たちが堕落した人として生まれ、生きている環境に染まったすべての習慣や伝統は、神様と関係ないのです。これを否定して、これを解決することが、どれほど難しいか分かりません。

真の愛は、神様までもコントロールすることができます。真の愛を中心として一つになれば、所有権が生じます。愛する相対のものは、私のものだというのです。愛のパートナ

一は、いつ、どこにおいても取り替えることはできないのです。絶対的な愛の主人です。

真の愛には、神様の心と体を絶対的に統一させ、一つにすることのできる力があります。神様も人と似ているとすれば、心と体があるのではないですか。心と体は、何を中心として一つになっているのでしょうか。知識でもなく、権力でもなく、お金でもないのです。ただ、真の愛だけが神様の心と体を完全に統一させるのです。

私たち人間は、欲心が多いのです。しかし、神様の真の愛圏に、さっと入っていけば、欲心がすべてなくなります。真の愛圏内には相続権があります。ですから、愛の主体である神様までも私のものです。神様に属したものはあとにして、神様の心と体も私のものになります。一体になります。神様と私が一体だというのです。

真の愛は、神様の一体圏に属するもの、神様に支配されるものであって、サタンに支配されるようにはなっていません。皆さんの堕落圏は、そのようになっていません。したがって、垂直である神様の心情圏の円形は残っていますが、血統を誤って継承したので横的円形が九〇度になっていません。七五度、または一五度、このようになっているのです。その差によって、良心の呵責を受けながら、苦悶を避けることができず、圧迫を受けています。

真の愛は、ダイヤモンドより貴重です。そのアンテナから強い電波が送出され、自分の方向に従って触れ、出会い、キスをするというのです。それが真の父母のアンテナです。決して変わらないで、最後まで消滅しない貴重なものです。それで、全霊界の善の霊たちが真の父母を通して、新しい自らの明るい道を行こうとするのです。

世の中で最も悲しいことは、真の父母を失ってしまったことです。真の父母を失ってしまったことが、どれほど悲しいことかを知らなければなりません。そうしてこそ、真の父母に会うことが、どれほど喜ばしいことかを知ることができます。

それで、私が皆さんに一つ一つ指導するのです。神様の真の愛は、真の父母を通して出てくるので、真の父母には天使世界も支配されるようになっていて、すべての万物世界も支配されるようになっています。世界がその愛圏内にあることを、いつも考えなければなりません。

真の父母は、世界の人が冷遇する立場で生まれなければならず、世界が反対する難しい立場で生まれなければならず、万物世界のどのようなものよりも貴い立場で生まれなければなりません。天使世界の天使が反対しても、それを克服してこなければならず、神様が反対しても、それを克服してこそ、それを越えて新しい理想的なものが出てくるようになるのです。

真の愛は、女性から始まるのではなく、神様を通して、男性を通して来るのです。それゆえに、女性に生命の種を植えようと、男性たちが女性を尋ね求めて歩くのです。女性は器です。完全に空の器です。空の器とは、そ

の器に入っていくものと対等な価値をもつのです。

人間に真の愛と偽りの愛というものが生じたのですが、偽りの愛とは何であり、真の愛とは何でしょうか。偽りの愛は、サタンと関係を結んだものであり、真の愛は、神様と関係を結んだものです。では、男性も女性も真の愛を願いますか。

本来は、真の愛を願うのが人間ではありません。堕落したために真の愛が必要なのです。堕落したのです。これが問題です。

女性が女王になり、男性が王になるには、真の愛を中心としてなるようになっています。真の愛を中心として女王、または男性の王が生まれるようになっているのであって、真の愛がなければ生まれることができないようになっているのです。真の愛は、最高の位置で会うのです。最高の位置で二人がぴたっと一つになり、ここに神様が連結するのです。結婚するのは、最高の男性世界と女性世界を成し、神様を占領するためなのです。二つの世界を占領するためだというのです。男性や女性は半分にしかならないので、完成するために結婚するのです。真の愛は、神様と一つにするのです。

神様と人がどこで一つになるのでしょうか。結婚式の時に一つになるのです。本然の真の愛の中心である神様を中心として、ぴたっと一つになるのです。それは何かというと、神様がアダムの心に入っていき、エバの心に入っていくという意味です。アダムとエバの結婚式は、神様の体の結婚式です。神様の結婚式です。

外的な位置が体であり、内的な位置が心です。それで、直接的に神様が私たちのお父様です。神様の愛が私の愛であり、神様の生命が私の生命です。神様の血筋が私の血筋です。

夫婦は、すべて違う所から来て結ばれるでしょう？　しかし、夫と妻が父母になって私を生み、父子の因縁を残すようにしたのですが、その横的な要素の中で、一つは他の所から来ました。それゆえに、夫婦は別れても、父子の関係では別れることができません。縦的なものは一つしかないのです。これを知らなければなりません。天地間に、本然の真の愛を中心として、人類歴史を引き継いであげ得る血統的伝授の道は、垂直の位置一つしかないのです。垂直の位置が、なぜ必要なのですか。垂直に入っていけば影がなくなります。正午になれば影がなくなるでしょう？　神様と人間の理想的な愛の理想を中心とした垂直関係ができませんでした。

それゆえに、この宇宙の中で、人間と神様が真の愛を中心として垂直的な直短距離で連結できる道とは何でしょうか。このように連結できる関係は、父子の関係です。直短距離は、垂直以外にはありません。少しだけ違っても垂直ではありません。直短距離なので垂直です。その垂直を中心として、父母は東西に直短距離で連結しています。

それから、兄弟も前後に直短距離です。これが九〇度です。これを面で見れば二十四面です。全知全能の神様がそのような理想的構

想力をもたれたので、垂直と水平が九〇度を成し遂げ、前後、左右、すべて九〇度を成し遂げた球形の中央に、宇宙の真ん中にいらっしゃるのです。神様は、何を中心としていらっしゃるのですか。真の愛を中心としていらっしゃいます。神様に尋ねてみれば、それしかないとおっしゃるのです。

真の愛は、通じれば絶対的になることができ、唯一的になることができ、永遠不変になることができるというのです。真の愛に一致した人は、神様に対して相対の位置に立つことができます。唯一的な神様、絶対的な神様、不変的な神様、永遠の神様にいつでも相対できる環境圏内に入っていくというのです。

私たち統一教会員の関係は、自分の兄弟より近いのです。このように、今後世界は、前後の世界が一つになり、その次には夫婦が一つになり、左右の世界が一つにならなければなりません。上下、前後、左右が一つにならなければなりません。

上下、前後、左右、これは何ですか。上下は子女の道理、前後は兄弟の道理、それから左右は夫婦の道理をいうのです。このようにして完成すれば、霊界の神様の位置に上がっていき、神様に帰らなければなりません。それは、真の愛だけができることを知らなければなりません。

真の家庭は、このような公式的基準に訓練され、完成したアダム家庭を拡大させたものなので、この世界に拡大させれば東西が一つになるのであり、それは、男性と女性が一つになったのと同じです。男性を中心として、主体を中心として相対が一つにならなければならず、前後が一つにならなければならず、上下が一つにならなければならないというのです。そのようになれば、原理的な内容を中心として、真の愛によって一つの世界が間違いなく完結するのです。

神様を中心とした真の愛の道が、天国に行く道です。偽りの愛の終着地が、いわゆる地獄です。今まですべての宗教は、それをはっきりと分かりませんでした。地獄と天国のバウンダリー（境界線）を知らなかったのです。今明らかになりました。堕落した愛を復帰して再出発することが、天国の出発だというのです。

三　神様の愛の絶対対象は人類の先祖アダムとエバ

新しい万物をつくっておいたそのエデン、新しい万物と共に永遠の福楽を享有しなければならない主人公のアダムとエバ、そのアダムとエバを立たせておいて、新しい心情的な理念を抱いて見つめていらっしゃった神様、その神様には、一瞬でも貴重でない時がなかったのです。アダムとエバが挙動するその一瞬一瞬は、表現できないほど深刻な瞬間であり、表現できないほど貴い因縁の時間だったというのです。

成長するアダムとエバは、日が進むに従って理知と知能が明るくなり、神様の本性に代わるにおいて不足なものがありませんでした。彼らは、神様から造られる新しい世界に対して、神様の心情に代わって見ることができ、

聞くことができ、触れることができる資格者に間違いなかったのです。

神様は、アダムとエバを見つめられながら、彼らの動きが神様御自身の動きであり、彼らが話す言葉は神様御自身の言葉となり、また彼らが聞いて、見て、感じるすべてのものが、神様御自身が聞いて、見て、感じるものになることを願われました。そのような関係と因縁圏内にいるアダムとエバは、神様が心中で描かれた、神様の全体に代わる存在だったことに間違いないというのです。

アダムとエバのためにつくられた万物を抱いていらっしゃる神様は、アダムとエバを立てておいて、どのような一日を待ち焦がれ、慕われたのでしょうか。六日目までにすべて万物をつくり終えられたのですが、アダムとエバを完成した姿で創造されなかったということは、アダムとエバと神様の間に、必ず何か残っていたということです。神様が願われたのは、造っておいた状態のアダムとエバでもなく、彼らが成長する姿を見つめるその期間でもなく、アダムとエバを通じて成し遂げようとする一日であったことを知らなければなりません。

この一日を迎えるその瞬間、神様も喜ばれるはずであり、アダムとエバも喜ぶはずであり、万物も喜ぶはずなので、万物もその日を待ち焦がれ、人間もその日を待ち焦がれ、神様もその日を待ち焦がれられるのは間違いないのです。

私たちの先祖アダムとエバは、神様の愛の懐で育ち、神様の至聖、至大な愛の心情のもとで育てられました。しかし、いくら育つ姿がかわいくて、暮らす環境が自由だったとしても、彼らがもっていないものがあったのですが、それは何だったのでしょうか。許諾してくださった万物がなかったわけでもありません。使いがいなかったのでもありません。それは、アダムとエバが神様の息子、娘になり得る心情の因縁を結べなかったということです。それが恨です。

神様が無限の創造の理念とともに享受することができる希望の世界を立てられ、アダムとエバによって天下万象が自由自在に主管される姿を見て喜ぼうとされたのは、彼らを愛されるためだったのです。外的なある条件が貴いからではなく、御自身の心血が彼らに浸透していて、御自身の骨肉が潜在していて、忘れようとしても忘れられない心情の流れがアダムとエバに向かっていたがゆえに、アダムとエバに天地のすべての万物を許諾されたということを、私たちは知らなければなりません。

しかし、アダムとエバは、堕落することによって神様に背きました。万物に背いたのでもなく、施してくださった祝福に背いたのでもなく、背いてはいけない一つの原則に背いたのですが、それは何でしょうか。それは、神様と心情の因縁を結ぶことができる基盤です。心情の基盤に背いたのです。それが堕落です。

神様は、アダムとエバを見つめるたびごとに希望の心情が燃え上がり、彼らを見るたび

ごとに、彼らが自己完成して幸福な生活をすることを思われて幸福の感情が燃え上がり、神様がつくってくださった天地万物を彼ら自身がつくったもののように主管して、楽しみ、なでてあげることを願われました。しかし、そのような希望の心情は、アダムとエバの堕落によって、すべて途絶えるようになったというのです。これが、私たちの先祖が過ちを犯した罪状の中でも、容認されない、とても大きな罪状だということを知らなければなりません。

しかし、神様は、堕落した人間をそのままほっておくことができないのです。なぜですか。本来、人間を永遠の基準である原理的な法度によって造られたがゆえに、その基準を無視することはできないからです。堕落したアダムとエバを無にしてしまいたい心は切実でしたが、彼らを無にすれば、六日間でつくられた全被造世界の原則を無にすると同時に、永遠の基準まで無にしなければならない立場になり、永遠の主体であられる神様の実存まで侵害されざるを得ない立場になるので、これを知っていらっしゃる神様は、アダムとエバをもう一度救援する摂理を始められたのです。

サタンは、エバと愛の関係を結び、ひいてはアダムまで堕落させました。すなわち、エバがアダムを主管したのです。それゆえに、今までこれを蕩減させるために、歴史的に数多くの女性が男性たちに蹂躙されてきたのです。女性は寂しく思うかもしれませんが、それは事実です。

それでは、神様は何のためにアダムとエバを造られたのですか。聖書を見れば「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」（コリントⅠ三：一六）と記録されています。体が堕落して救援歴史を経なければならない人々も、体を何だと言うのですか。「神の宮だ」と言います。神の宮とは、神様が臨在される場所をいうのです。

堕落して救援歴史を経なければならない人が、神様が臨在できる聖殿になるとしても、堕落していないアダムと比較すれば、堕落していないアダムが良いというのです。それでは、アダムの心に神様が入っていってそこにいらっしゃるのでしょうか。言うまでもなく、百年でも千年でもいらっしゃるというのです。

それでは、アダムは、そもそも何でしょうか。アダムとエバが何も分からない間抜けならば、神様が創造された天地万物を主管することができないのです。すなわち、天地を創造した技術者のような実力がなくては、主管できないというのです。それでは、誰が主管の能力を下さるのでしょうか。正に神様であられます。すなわち、神様がアダムの心と体に入っていき、アダムをコントロールして初めて正しく動くというのです。

このように考える時、神様の体になるように造られたアダムが人間の先祖になるのです。言い換えれば、アダムは実体の神様です。無形の神様が実体の世界を主管するためには、実体、すなわち体があってこそ見聞きできるので、神様の実体になるように創造された存在がアダムだというのです。それでは、エバは誰ですか。エバはアダムの妻です。実体の妻です。したがって、アダムが実体をもった

神様ならば、エバは実体をもった神様の妻です。神聖な神様が妻をもらうなどとんでもないと思うかもしれませんが、アダムは実体をもった神様の体であり、エバは実体をもった神様の妻として造られたのです。

そのようなアダムとエバは、どのようにしなければならないのでしょうか。見えない神様の内在的な性稟にそのまま似て一体を成し、愛の実を結ばなければなりません。そのようにすれば、その息子、娘は、アダムとエバの息子、娘であり、神様の息子、娘だというのです。真の愛を通してアダムの息子であり、神様の息子をつくらなければなりません。ところが、正常な軌道で愛の因縁を立てられなかったことが億千万代の恨の歴史であり、今日この悲惨な堕落の歴史だということを皆さんは知らなければなりません。

神様が王ならば、アダムとエバは、神様の初代王子、王女です。神様の相対として、天宙のすべてのものを相続し得る神様の初代王子と初代王女が、私たちの最初の先祖であるアダムとエバだったことを、はっきりと知らなければなりません。このように、王族心情圏に一致する生涯を終えて入っていく所が天国です。これを今まで歴史始まって以来、どの宗教家も分からず、誰も分かりませんでした。

ところが、既成教会では、「イエス様を信じれば、すぐに救われる」と言います。そのようなばかな話はありません。心情圏、長子権において、アダムとエバは、初代の長子と長女でした。初代の真の父母であり、地上王国の初代の中心人物でした。その王を中心とした王族が地上に残っているならば、今この世界はどのようになっていたでしょうか。神様の理想を中心として、すべてのものが準備されていたはずですが、堕落することにより、サタン圏を中心として数百、数千の民族が分裂し、闘いの渦中で王族圏を制圧してきたのです。それが堕落の結論です。

無形の二性性相の主体としていらっしゃる神様の男性格性稟を実体として展開し、神様の内的性稟を見えるように実体として展開して相対的に造ったものがアダムであり、神様の内的な女性格性稟を実体として展開したものがエバです。別の言い方をすれば、神様の内性的なすべてのものを投入して実体化させたものが人間の体だというのです。

エバゆえに、本来の理想的なアダムとエバが二人とも壊れたのです。それゆえに、理想的「後のアダム」として来られたイエス様の前に、堕落したエバ、すなわちマリヤがイエス様の妻になるエバを復帰してあげなければなりません。復帰するには、マリヤ一人ではできません。創造主がアダムを中心としてエバを造る時も天使長が協助したので、復帰歴史完成のために、「後のアダム」を型としてエバを造る時も天使長が協助しなければなりません。そのようにすることによって、エバが復帰されるのです。

そして、イエス様と復帰されたエバが一つにならなければなりません。天使と天使長の立場である僕たちが、アダムの立場であるイエス様を中心として、エバの立場である娘を創造したとすれば、その娘は堕落していない神様の娘ではないですか。マリヤとヨセフが、

その神様の娘とイエス様を祝福してあげなければなりません。ここで、神様の娘と神様の息子が一つになるのです。

主管性転倒問題は、エバが行ったことなので、女性が責任をもたなければなりません。それゆえに、マリヤが天使長も復帰してあげるべきであり、アダムも復帰してあげるべきであり、エバも堕落前のエバに復帰しなければなりません。マリヤが、このすべてを復帰しなければなりません。ですから女性は、主管性を転倒しなければなりません。マリヤは、天使長とアダムとエバ、この三つを復帰するだけでなく、神様の心情まですべて探し立てなければなりません。

それをすることによって、神様のみ旨と人類の目的が成し遂げられるのです。神様が四千年間願ってこられたみ旨と、人類が今後天国を成すことのできる起源が、ここでできるのです。ですから、これが人類の目的点となってきたのであり、神様の目的点となってきました。

アダムとエバが愛を結び、愛を完成すれば、そこから完全なものへの出発がなされるのです。それゆえに、主管性転倒を必ずしなければなりません。

もしアダムが堕落しなかったならば、アダムとエバが成し遂げた家庭は、神様が喜ばれる家庭であると同時に、人類始祖において最高の幸福を感じることができる基台になったのです。苦痛とか失望とか、あるいは嘆息などを見たり感じたりせず、喜びと幸福だけを感じて永遠を希望とし、神様の直接主管圏内で神様の主管を受けたのです。ところが、アダムとエバの堕落により、このようなすべてのことが誤ってしまいました。

したがって、それを復帰しなければならないのですが、それをそのままでは絶対に復帰できないのです。必ず、創造原則によって復帰していかなければなりません。これが原則なので、今までの復帰歴史を見れば、再創造歴史を通してそれをなしてきたことが分かります。エデンの園には、天使長がいて、エバがいて、アダムがいて、神様がいらっしゃいました。別の言い方をすれば、神様を中心として四位の形態を備えた位置だったというのです。そのような位置で堕落したので、復帰するにおいては再創造原則を通さなければなりません。それで、今まで復帰歴史は男性が担当してきたのです。

ユダヤ民族がイエス様を受け入れなかったために、イエス様は、一人で国家と世界のために自らを犠牲にすることに決めました。イエス様は、家族を離れなければならず、孤独に生きなければならなかったのです。しかし、神様の愛を受けました。結局彼は、堕落したアダムとエバの救援のために堕落していない兄弟が犠牲にならなければならなかったように、人のために自らを犠牲にしました。

すべての人が堕落したアダムとエバの位置にいました。彼は、彼らのために自らを犠牲にしました。祭物になりました。自分を殺そうとする人々を呪わなかったのです。むしろ、神様に彼らを祝福してくださるように願われ、祈られました。それゆえに、イエス様は、神

様と堕落したアダムとエバの間に仲保者として立ったのです。

イエス様は、堕落していないアダムとして亡くなりました。そして、全世界、人類の救援のための公式的な道を行きました。それで、彼に従う者は誰でも救われる、代表的なアダムになったのです。

もしアダムとエバが成熟し、完成していたならば、彼らは、夫婦の愛によって一つになることができたのです。彼らは、肉体的だけではなく、霊的にもお互いに愛するようになっていました。その場において、アダムは、お父様であられる神様と縦的に一つになることができ、エバは、お父様と娘の立場で神様と一つになることができました。その時、アダムとエバが望んだ位置は、一つになる位置でした。そして、神様とエバも一つになってアダムを望んだのです。

横的には神様とアダム、そして、神様とエバ、三人がいます。この三人は、完全に一つになることを望みます。それでは、どこで彼らが会うのですか。あの上ですか、でなければこの下ですか。違います。彼らは、横的に出会って一つになったのです。もしアダムとエバが横的に一つになっていたなら、彼らはどのようになったでしょうか。完全に一体になったのです。何も彼らを離すことはできなかったはずです。

これを成したのちに、初めて愛の位置に対する欲望が生まれます。男性と女性には、これが唯一の道であり、唯一の目標です。それは、神様とアダム、そして、神様とエバが一緒にいたいと思う唯一の位置なので、最高の位置です。神様とアダム、そして、神様とエバが一つになることができなければ、彼らはその場を占有することができないのです。その時から、神様を中心としたアダムとエバの間の授受関係が疎遠になります。

このような観点から見るとき、私たちは、神様が縦的にだけではなく、横的にも創造していらっしゃることが分かります。これがアダムとエバを中心とした創造理想、神様の理想です。

アダムが神様と一体になり、エバが神様と一体になれば、彼らの間ではどちらも、「私のほうがあなたより貴い」と言うことができないのです。より貴いものも、より貴くないものも存在せず、ただ完全な一つのものだけが存在するのです。しかし、様々な理由で、神様とエバのすきま、そして、神様とアダムのすきまが生じるようになりました。

アダムとエバが成熟して成婚式をすれば、彼らは神様を中心として直接的な愛圏内で一つになるのです。ここで中心は、誰ですか。神様です。そのようになったとすれば、私たち人間は、実体をもった神様の体になるのです。そのようにしてアダムとエバが一つになっていたならば、彼らは神様の体であり、人類の父母であり、神様の中心になるのです。いくら全知全能の神様でも、相対なくして喜べば、「狂った神様だ」と言うことができるのです。

絶対的な神様の前に、私たち人間は、相対的存在です。絶対的な愛を中心として一体に

ならなければなりません。そのように、神様とアダムとエバが一体になっていれば、そのアダムとエバを中心として生まれた息子、娘は、アダムとエバの息子、娘であり、神様の息子、娘です。そのようになったならば、神様の血族としてこの地上に家庭を築き、氏族を成し、民族を成し、国家を成し、世界を成していたはずであり、永遠であられる神様の愛を中心として結ばれたその因縁は、断ち切る者がいないので、その国自体が神様の愛を基盤とした地上天国になることを皆さんは知らなければなりません。

アダムとエバが堕落していなかったならば、アダムがエバを愛するのは神様の代わりに愛することであり、エバもアダムを愛するのは神様の代わりに愛するという観念がここで形成されるのです。それゆえに、アダムとエバの生活は、神様の生活を表示するものになります。

アダムとエバが喜べば神様も内的に喜ばれ、アダムとエバが悲しめば神様も内的に悲しみを一緒に感じられるようになっています。愛は、神様のものであり、アダムのものであり、エバのものだからです。一つの愛なので、そのようにならざるを得ないというのです。

本来、堕落していなければ、左翼と右翼はありません。統一です。「頭翼思想」や「神主義」は必要なく、そのまま天国に行くのです。救世主も必要ないのです。アダムとエバから「頭翼思想」によって神様の前に行くのであって、再び戻る必要は何もありません。すべて天国に直行するのです。アダムとエバが堕落していなかったならば、天国の王子、王女として天国に行くのです。アダムとエバは、神様の王孫でしたが、堕落したためにそのようになれなかったのです。

アダムとエバとは誰かといえば、神様の体です。エバは、神様の実体の夫人です。神様は、霊的に縦的なお父様になります。垂直的なお父様、縦的なお父様です。皆さんの心には、その二つの父母の血統を受け継ぐことのできる本然的基準があるので、堕落したとしても永遠に変わりません。

創造主は縦的な父母として、横的な父母を縦的な愛の相対として造られたのです。それゆえに、アダムとエバは、神様の永遠の愛のパートナーです。神様の相対です。アルファとオメガだといいました。神様から愛を始めたので、戻れば神様の友人になるのです。あとで神様に戻らなければなりません。

アダムとエバは、誰を中心として結婚生活をしたのでしょうか。神様がそれを干渉されたでしょうか—アダムとエバが息子、娘を生みましたか、生みませんでしたか。生みました。カインとアベルを生みました。カインとアベルを生んだのですが、神様が「おい、アダムとエバよ！　お前たちは一緒に暮らして息子、娘を生みなさい！」とおっしゃって生んだのがカインとアベルですか、自分勝手に生きながら生んだのがカインとアベルですか。自分勝手にして生んだのです。自分勝手に生んだのですが、誰が喜ぶでしょうか。サタンが喜ぶのです。アダムとエバは、サタンを中心として結婚したのです。これを否定できません。

韓半島がアダム国家ならば、日本はエバ国家です。韓国がなぜアダム国家ですか。地理的に見るとき、韓半島は男性の生殖器と全く同じです。ちょうどローマがそうです。地中海が女性の陰部と同じで、イタリアが男性の生殖器と同じです。ですから、二つが一つにならなければなりません。このような地域は、いつも文化が離れられません。一つの文化が帰着して離れることができないのです。

なぜなら、愛の基盤の上に立ったのと同じ立場だからです。地政学的なすべてのものを見ても、ローマと地中海は、男性と女性が一つになったものと全く同じだというのです。

今から父と母に代わって総合的な文化時代が訪れてきます。これは、アダムとエバが堕落した時に失ってしまったものを再び取り戻す場なので、その周辺国は、一緒に堕落した三天使長の立場です。アダムとエバ、三天使長と同じです。韓国を中心として三天使長は、中国とソ連とアメリカです。アメリカは、天の側的な天使長であり、サタン側的な天使長が、中国とソ連です。台湾とインドもそうです。これがちょうどそのような立場にいるというのです。

アダムとエバが家庭を失ってしまったその時に、アダムとエバを失ってしまい、三天使長がすべて堕落しました。それを復帰しなければなりません。それゆえに、韓半島において、ローマ教皇庁ができないことを収拾しなければなりません。ローマ教皇庁は、来られる主のために備えるというみ旨をもっていましたが、失敗しました。

日本は、サタン側の国です。天照大神の国を、天国のエバとして完全にひっくり返さなければなりません。次子権を日本人以外の第二世に、奪って返さなければなりません。韓国と日本は、アダム国家とエバ国家なので一つだというのです。一つにしなければなりません。日本が日韓併合する時には、銃刀で一つにしようとしましたが、文総裁は、自由の環境で、愛で一つにするというのです。

エデンの園において、女性は一人であり男性は五人ですが、アダムは目がぼーっとしていて女性を奪うことができないのです。そのようにしようとすれば、息子、娘をすべて抱かなければなりません。息子、娘をもってこそエバを取り戻せるのです。息子、娘をすべて結婚させたので、エバは行く所がないのです。

日本自体が国家的にこのようなことをしなければなりません。そのようにすることによって、世界を代表したエバ国家が出生し、それがアダム国家と一つになる日には、天使長国家であるアメリカまで加担して、三つの国が一つになるのです。

「成約時代」と言うとき、「成約」とは、アダムとエバを創造して、アダムとエバの家庭を完成することをいうのです。すなわち約束を成すことです。

そして、アダムとエバの本然的な基準に帰らなければならないのですが、堕落の血族、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界の五十億人類と、歴史時代に霊界に行った数多くの先祖までぶら下がっています。いくら歴史時

代に忠誠を尽くし、精誠を尽くして神様を愛したとしても、それはすべて過ぎていってしまい、み旨を成せる成約時代に達し得ない忠誠であり精誠だったというのです。

神様は、アダムを造られ、アダムからエバを造られたので、神様が責任をもつべきことは、アダムを再び造ることです。神様はアダムを造らなければならず、地はエバを造っておかなければなりません。そして、エバを中心としてカインとアベルの二人の息子を失ってしまったので、これを取り戻すのです。そのように種を蒔いたので、それを収めなければなりません。

母を中心としてアベルは右側であり、カインは左側だというのです。三角形の線と同じになるというのです。地でそれを準備しなければなりません。それをどのようにすれば解放することができるのですか。個人的にカインとアベルを蒔いたのであり、アダムとエバを中心として母と息子、娘が植えたので、これを世界的に蕩減しなければなりません。

真の愛の礎石を、誰がおいたのですか。人間がおいたのか神様がおいたのかという問題の答えは、神様です。人間が生まれる前に鉱物をつくられ、植物をつくられ、昆虫をつくられ、すべてつくっておかれたのです。聖書を見れば、一番あとで人間を造られたのであり、最後に造られたのがエバです。

それゆえに、結局神様は、誰と連結するのですか。女性と連結しなければなりません。神様が礎石をおいた目的は、地上でアダムとエバが一つにならなければならないからです。アダムとエバが一つにならなければなりません。それでは、アダムとエバは、横的な面において、プラスとマイナスを中心としてどこに行って一つになるのでしょうか。男性と女性が一つになるのです。男性と女性は、凹、凸で一つになるのです。

神様は心的存在と同じなので、アダムの心に性相が入っていき、エバの心に形状が入っていき、彼らが結婚式をするようになるのです。結局は、私たちの心と体が一つになることと同じです。神様と私たちの心が一つになることが、霊肉一体と同じ立場に立つのです。霊肉一体の男性と霊肉一体の女性が神様と一つになって結婚式をするのです。結婚式は、一日、一時に一双で結婚するのです。その結婚式は、アダムとエバの結婚式であると同時に、神様の結婚式だというのです。

それで正分合です。正で分かれたものが合わさるときは、それらだけで合わさるのではありません。アダムとエバだけではなく、神様から一つになるのです。

縦横を中心として運動することにより面積が生じるのですが、この面積の中で、神様の真の愛を中心として、アダムとエバが内外に同じ姿を備えるようになります。そして、私たち人類の先祖の位置で初愛を結ぶことにより、永生的で内的な神様の存在と、この肉的で一生的な存在が一つになるのです。それで、神様の心の血筋と体の血筋を受け継ぐことにより、その子女は、神様とアダム完成のすべての基準を受けるようになり神様が永生されるので、私たち人間も永生するというのです。永生論理がここから展開するのです。

それゆえに、愛でなければ人間が神様の形状を受け継ぐことはあり得ません。神様御自身が人間の形状、体の形状を受け継ぐことはできないというのです。そのように愛が重要なのです。それで、神様の愛の理想を完成させるのに絶対的に必要なのが、絶対主体の前の絶対対象だというのです。その対象的な存在がアダムとエバです。

ここは、内的な形状であったものが実体として分かれ、再び完全なアダムとエバを中心として愛によって一体となることにより、結局は、心的実体である神様がここに内的に入ってこられ、体的な実体であるアダムとエバが愛で一つになるのです。ここにおいて神様もアダムの形状に似て、アダムも神様の内的な形状に似て地上に定着するのです。これが家庭の基盤です。これを知らなければなりません。これが宇宙の根本です。

四　真の愛の初舞台は真の家庭

神様は、真の愛でアダムとエバを造られました。そのアダムとエバは、神様の本来の性相と形状が展開した実体です。神様の見えない性相と形状が実体として現れたのが、創造されたアダムとエバです。それゆえに、大きくなって上がっていかなければなりません。大きくなって神様と一つにならなければなりません。完成したアダムとエバになっていたならば、彼らの心と体が自動的に一つになるのです。

しかし、堕落のために彼らの心と体が闘ったのです。今まで、これが分かりませんでした。神様の創造理想どおりに人間が完成したとすれば、心と体は闘いません。闘う人になったということ自体が、「神様はいない」と否定し得る条件になるのです。

真の愛は、一人では成すことができないのです。相対がいなければなりません。皆さんも、自分の相対が自分よりも立派であることを願いますか。誰でも、自分の息子、娘が自分よりも立派であることを願うというのです。そのような心は、神様から来たのです。

それゆえに、神様も、愛の相対が神様より立派であることを願っていらっしゃる事実を知らなければなりません。愛の相対が横的にも縦的にも自分より立派であることを願う本然的起源は、神様にあったというのです。

女性の心と男性の心が一つになり、女性の体と男性の体が一つになれば、神様の形状になるのです。そのようになれば、その中心に神様が臨在し、永遠に定着することができるというのです。正分合作用が三段階を経て、心的基準と体の基準が一体理想を成すのです。

愛の一体、縦横に理想世界の一体圏が成されるというのです。心身一体という概念に、すべてのものが統合されるのです。

愛が一体となることにより、実体の神様として地上に定着し、繁殖した家庭が神様の家庭になり、神様の一族になり、神様の民族になり、神様の世界になるのです。そのようになれば、堕落による心と体の闘いがすぐになくなります。神様の性相と一つになっているので、自然に神様の愛が臨在して男性と女性の相克がなくなるのです。衝突なく、自動的

にお互いが愛することができるようになるのです。そこに神様が臨在され、家庭で心的な存在となり、夫婦は体的な存在として一体を成し遂げるのです。

真の夫婦というものは、真の生命体を中心として、男性と女性が真の愛によって結束した夫婦です。そのような夫婦が真の夫婦です。社会は、そのような因縁を連結しなければなりません。兄弟圏の心情を横的に拡大した相対圏が真の社会、真の国家、真の世界です。人間は誰しも、自分自身が宇宙の代表になりたいのです。

真の愛を背景とする因縁を中心として見れば、すべてが平等なので、それに背く者は、立つ位置がなくなるのです。唇は、真の愛によって連結します。それゆえに、生命、愛と血統、これが自分自身です。

真の愛の第一故郷は、真の家庭です。真の家庭とは何ですか。そこには真の父、真の母、真の夫、真の妻、真の子女がいるのです。それが真の愛の家庭基盤です。

父母が子女のために無限に投入して犠牲になれば、真の愛が背後にある限り、子女はその真の愛に無限に感謝するようになり、父母は大きな喜びでその犠牲を埋めるのです。このように犠牲的な真の愛の力は、授け受けする作用を発展させ、真の家庭で、そして、真の世界で永遠の喜びと平和の関係を結ばせます。このようなところで、永生の理想世界が顕現するのです。

しかし、このような真の愛が欠如した家庭と国と世界は、抜け殻にすぎず、むしろあらゆる不信と反目と不倫の納骨堂になってしまうのです。人間の純粋な真の愛が成長して完成する場は、真なる家庭です。真の父母の愛、真の夫婦の愛、真の子女の愛、そして、真の兄弟の愛が共に完熟して実践される真の愛の初舞台は、真の家庭です。

真の父母の真の愛を通して神様の真の愛を学びながら、真の兄弟の真の愛を通して真の国と真の世界人類に対する普遍的真の愛を訓練させる、平和世界の基本核の場が真の家庭です。それだけでなく、父母と子女間に受け継がれる真の愛を通して、過去と現在と未来の世代が一貫した真の愛の価値観によって連結していくようになる、歴史的連結の輪の基本単位も真の家庭です。

おじいさんとおばあさんは、父と母のために死を覚悟して、命を懸けて愛する、これがどれほど幸福ですか。また父母は、息子、娘のために命を懸けて愛するというのです。どれほど幸福ですか。

皆さんは「愛のために死ぬ」と言うのですが、孫がおじいさんのために死ぬことが真の愛です。おじいさんは孫のために、父母は子女のために、子女は父母のために、姉は弟のために、弟は姉のために、夫は妻のために、妻は夫のために、おばあさんはおじいさんのために、おじいさんはおばあさんのために、愛を中心として生命を捧げようとする家庭が真なる家庭だという結論が出てきます。

神様が最も好まれるものとは何ですか。神様が最も好まれるものとは真の愛ですが、真の愛が最も喜ぶ相対的基準は何かといえば、アダムとエバの家庭です。この家庭は、理想的な神様の立場に立てられたものです。

レバレンド・ムーンが教えてあげる真の愛の道、真の愛の男性と女性が行き、真の家庭が行き、真の国が行き、真の世界が行く道は、絶対的です。一つしかないのです。二つではありません。それを教本として、すべての人が向かい合える所が家庭だというのです。

祝福を受けた夫婦がけんかをすれば、どのようにするのですか。夫婦がけんかをすれば、自分の息子、娘を呼んでおいて、その次には信仰の息子、娘を呼んでおいて、許しを請わなければなりません。カインとアベルが、行くべき伝統に背いたのです。ですから、自分の息子、娘と信仰の息子、娘がアベルとカインの立場であり、彼らが一つになれずに反対のことをしたので、カインとアベルの子女に悔い改めなければなりません。そのような時が来るというのです。共同運命です。息子、娘が間違えば、父母に許しを請わなければなりません。もし夫、父が間違えば、その息子、娘と夫人に許しを請わなければなりません。それが真の愛を中心とした真の家庭です。

宗教は、神様を尋ね求めていくのです。神様の教えを尋ね求めていくのです。それを成し遂げるのは、神様ではなく人間です。相対的な愛を尋ね求めていくのですが、どこでそれを定着させるのかといえば、教会でもなく世界でもありません。正に家庭だというのです。家庭に真の愛の種を植えなければなりません。真の家庭によって拡大するためなのです。そこには宗教観念がありません。

第二章　天国と真の家庭

一　神様の創造理想は四位基台と真の家庭

本来、神様は、天地万物を創造され、すべてのものが人間を通じて完成するようになさることにより、神様の威信と人間の威信を立てようとされました。そのようになれば、人間の完成はもちろん、神様の創造理想の完成も自動的に完結するという結論に到達するのです。

そのようになっていれば、神様は万宇宙の中心の権威を備えられ、人間はその息子、娘として一体となり、神様の理想的愛の世界がこの地上に実現していました。そして、神様の悲しみが始まるのではなく、神様の喜びが始まっていたのです。そのようになっていれば、神様は、喜びの中で、人間の権威を一〇〇パーセント褒めたたえていらっしゃったのです。

神様が人間をそのように高く褒めたたえられることを見習い、人間も、同じように神様に対して高く褒めたたえていたのです。そのようになれば、共同運命に置かれるようになっていたというのです。

神様は、人間始祖アダムとエバを中心として、万物を主管するだけではなく、愛の家庭を築こうとされました。私たち統一教会では、この基準を「四位基台の完成」と定義しています。結局、神様のみ旨とは創造理想を完成することですが、その創造理想を完成すると

いうことを具体的に言えば、それは四位基台の完成だというのです。

それでは、四位基台とは何でしょうか。完成したアダムと完成したエバが、神様の愛の中で祝福を受け、そのお方の息子、娘になると同時に神様が願われる夫婦となり、その次に、神様が願われる家庭を築くためには子女がいなければならないので、子女を完成させることです。

神様のみ旨は、創造理想を完成することによって成されます。それでは、神様の創造理想とは何でしょうか。もちろん万物をつくることが神様の創造理想でもありますが、アダムとエバを中心として創造理想を成そうとされたというのです。神様の創造理想の完成、み旨の完成とは何でしょうか。神様を中心として、神様の愛を中心として四位基台を完成することにより、創造理想も完成し、み旨も完成するのです。言い換えれば、「神様のみ旨の完成」という言葉は、常に神様の愛を中心として四位基台的愛の基盤を内包しているという事実を、皆さんははっきりと知らなければなりません。

四位基台は、愛を中心として東西南北が備えられていくことです。愛を除けば何もありません。その愛は、アダムだけの愛ではありません。エバだけの愛ではありません。アダムとエバが統一された位置で、神様の愛を連結させなければならないのです。神様の愛を連結させたその位置には、アダムとエバの愛があると同時に、息子、娘の愛が介在します。

私たちがしばしば言う「三対象理想」という言葉も、アダムを中心として見れば、天がいて、妻がいて、子女がいるという意味です。これは三掛ける四は十二、十二数の対象圏のことをいっているのです。またこれは、愛を中心とした人々の三つの位置についていっている言葉です。

ところが、今まで信仰生活をしてきた人々は、神様の愛を中心として創造理想を完成するという、そのようなみ旨が分かりませんでした。それは、神様のみ旨の完成、創造理想の完成をいうのです。それが四位基台の完成です。四位基台を完成すればどのようになるのでしょうか。天と地が定着するようになります。天と地が初めて定着するようになるのです。

天は上の軸と同じであり、地は下の軸と同じであって、これを中心として一つになるのです。ここで子女は、中央の軸に向かって一つになれる平面的な形態を備えなければなりません。そして、これが育つことにより、中央に上がっていって一つの円形を描き、さらには愛の理想である球形を成すのです。

すべてのものは、中央線を通らなければなりません。なぜ人の鼻は、上から下に垂直に下りているのでしょうか。中央を失ってしまってはならないからです。顔を見れば、目は神様を象徴し、口は万物を象徴しています。それで、歯が三十二本です。四掛ける八は三十二、歯は三十二本です。これは全体数を表しています。四数は東西南北であり、八数は全体数を代理したものです。乗数なので、四掛ける八は三十二、全体を象徴しているので

す。それは、万物を食べなさいという意味です。これは、外的なものを取り入れることです。一方で、話すということは、内的なものをはき出すことです。すべて四位基台になっています。授け受けする道理です。

縦横に備えられた愛の圏が、四位基台の愛の圏です。そのようになった時に、初めて父母が父母として登場するのです。父母として登場するので、横的な面において初めて実体的な神様の代身者として登場するのです。神様がアダムとエバを造って感じられた喜びを感じさせるために、横的な子女を養育できる力を人間に許諾されたのです。これが神様の創造理想です。

神様を中心としてアダムとエバが愛を感じたとすれば、その愛は神様の愛であり、その四位基台は神様を中心とした四位基台です。それから子女ですが、この子女関係は、神様を中心として相対的です。ところで、相対となっている子女を生み、ただそのままではどこにも使うことができません。教育をしなければなりません。大きくなっていかなければなりません。大きくなっていく中で、男性は右側、女性は左側に行かなければなりません。

新しい時代の四位基台は、アダムとエバの息子、娘から始まります。ですから、アダムとエバが結婚して繁殖すれば、結局は四位基台圏を成すようになっているのです。

本然の息子、娘に帰っていくには、どのように帰っていくのでしょうか。神様の本来の心情と、神様が願われた理想家庭を中心として、相対圏が新たに生じるのです。四位基台は三段階でしょう？　神様、アダムとエバ、息子、娘です。この場合が縦的です。これが横的に展開していかなければなりません。横的に着陸することにより、縦的な要素がこれを基盤として、無数に平行に広がっていくのです。これが一つのモデルとなります。

アダムが理想とした四位基台が全世界的に発展していくためには、このような伝統的な家庭の内容を完成させなければなりません。これを完成させなければ、横的な連結を成すことができません。別々に分けて考えてはいけないというのです。アダムとエバが結婚して暮らせば、既に神様は右側に来ていらっしゃり、自分の息子、娘は左側に立つのです。これが一つです。この三つが一つになっていることを知らなければなりません。

横的に見れば、アダムは長男です。次男はイエス様であり、完成したアダムは三男です。縦的原理から見れば、三男は三代目でしょう？　ですから、おじいさんの立場が第一代であり、父の立場が第二代であり、第三代は息子であり、それは孫の立場です。このようになっていたものが反対を向けば、孫がおじいさんの立場になります。反対に、祖父、父、孫となるのです。それゆえに、先生に絶対服従していくことによって、神の国の四位基台、三代圏を完成し、神の国に入っていくことができるのです。ですから、蕩減復帰です。

統一教会の主体思想は、神様を中心とした思想です。この主体思想の中で、秩序的段階について言えば、三段階がなければなりません。ですから、父母と夫婦と子女がいるのです。この中心が神様と因縁を結び、四位基台

理想を拡大させ得る愛の理想圏なのです。これが、私たちの主体思想の内容です。

愛は、拡大する力をもっています。それが集約されれば一つになります。それゆえに、拡大し得る理想と連結し、全人類を抱いて生きていこうとするので、拡大させなければなりません。これを拡大させたのが、私たち人間の繁殖です。アダムとエバの二人を、横的に拡大させたのです。

それゆえに、主体思想の内容を要約すれば、神様が、愛を中心としては絶対的な主体です。その次には真の父母です。その次には自分たち夫婦です。自分たち夫婦が真の父母の代わりとなり、子女をもつのです。これが四位基台です。

四位基台は、父母を中心とした真の愛の起源を表しています。その次には、父母と子女の完全な愛の一体を表しています。それは、一時的なものではなく、永遠です。永遠であると同時に、絶対的だというのです。その愛の起点とは、唯一であり、不変であり、絶対的です。そのような愛は、神様だけにあるのでもなく、父だけにあるのでもなく、母だけにあるのでもありません。家庭的基盤の上、真の家庭の基盤の上に成立するのです。

愛が絶対的なので、その愛を中心とした家庭の信義は、絶対的です。愛は、すべての関係においても絶対的です。そこでは、一つが侵犯されるということは全体の破壊を意味するので、そのようなことは容認することができません。したがって、四位基台自体は、愛が侵犯され得る問題において、自らの生命を凌駕したとしても、これを擁護し、保護しなければなりません。ここで最も恐ろしいことは何かというと、この愛の基盤が破壊されることです。それが一つの核となって拡大したものが世界です。

そのようにして、一つのアダム家庭からその息子の家庭が生まれ、父母の家庭と息子の家庭が一つにならなければなりません。それで、四位基台が生じれば、この四位基台は将来、霊界の四位基台へと移っていくのです。

神様の創造理想の最後とは何でしょうか。原理でいえば、責任分担を完成し、愛を中心として四位基台の家庭理想を完成することです。なぜ四位基台が必要かというと、父子関係の家庭理想を成さなければならないからです。父母の愛を中心として一つになったその縦的伝統を受け継いだアダムとエバが、横的伝統を展開させていかなければならないのです。

アダムを起点として十二部族が生まれ、その十二という数字を中心として三百六十日という日が拡張されたように、すべての民族の拡張のための摂理の基準を立てることが創造理想の完成だというのです。

そのような面から見るとき、「み旨の道」におけるみ旨とは何でしょうか。創造理想の完成です。創造理想の完成とは、四位基台の完成をいうのです。父を中心とし、母を中心とし、息子を中心とし、娘を中心としたものではありません。真の愛を中心とした四位基台の完成です。

真の愛を中心として、これが責任分担の完成です。責任分担の完成というのは、すべての愛の理想を基準として男性と女性が完全に一つになり、神様が創造なさったすべての基準に一致すれば、その地上において縦的な基準として受け継いだアダムとエバの伝統を、肉身を通して初めて横的に展開させていくことをいうのです。息子、娘を一人か二人だけ生むようにはなっていません。アダムとエバの時代が来れば、東西南北に息子、娘をたくさん生むようになっているのです。

一人の男性は、必ず一人の女性と共に家庭を形成しなければなりません。そのようにしなくては、統一世界に行くことができません。過去の信仰者たちは、家庭を捨てていきましたが、捨てた家庭を高い次元において再び取り戻し、勝利の家庭として新しい基台の上に立てなければ、天国に行くことができません。一つの家庭が形成されたからといって、その家庭だけで天国に入っていけるのではありません。四位基台を形成して初めて行くことができるのです。

どこで四位基台を成さなければならないのでしょうか。この地上で成さなければなりません。いつ成さなければならないのでしょうか。自分が死ぬ前に成さなければなりません。

それを成さなくては、国家を迎え得る国民になることはできず、世界を迎え得る人類になることはできず、神様のみ旨が成されなければ天国世界を迎え得る天民になることはできないのです。

皆さんは、妻をもって幸福だと思うかもしれませんが、私は、そのように思いません。女性も幸福なのではありません。幸福なのではなく、十字架を背負ったのです。主体である人は、相対を幸福にしてあげなければなりません。子女がいれば、その子女も幸福にしてあげなければなりません。三大十字架を背負わなければならないのです。

ですから、四位基台の復帰が最も難しいのです。それは、世界を征服することに比喩することができます。

皆さんの息子、娘は、神様が数千年の歴史を経ながら数多くの預言者、烈士を犠牲にさせて探し出された一つの家庭を通じて、願いのともし火のごとくに生まれた貴い息子、娘です。各家庭の息子、娘が四位基台の完成という神聖な目標の帰一点をもたらすことを考えるとき、その息子、娘に対しても、日がたてばたつほど、本当に感謝しなければなりません。父母がそのような心をもつようになれば、その息子、娘たちは絶対に飢え死にしません。

今、皆さんは堕落圏内にいます。長成期完成級で祝福を受けた家庭は、上がっていく道があります。それは、先生に従っていくことができる道をいうのです。しかし、皆さんの父親や母親と、皆さんの四位基台が一つにならなくてはなりません。

ノアじいさんが箱舟を造る時、その夫人がよく協助したと思いますか。息子、娘がどれほど批判したと思いますか。「神様が審判される」と言って、一日でもなく百二十年間、

弁当を持って山に上がっていき船を造ったのですが、ノアの妻がよく協助したかを考えてみてください。ノアの妻が協助しないのですから、その息子、娘に至っては、協助しないのは当然でしょう。皆さんは、母と完全に一つにならなければなりません。

立体的な四位基台を成さなければなりません。上下の位置、前後の位置で一体を成さなければなりません。そのようになれば、いくら転がしても、止まった時は垂直になるのです。

サッカー・ボールを置いた時、中心は垂直です。一点しかありません。それゆえに、家庭において四位基台の立体理想が成されなければなりません。

父母の前に孝子になるだけではいけません。夫婦がいなければなりません。ですから、四位基台を成さなければなりません。これは絶対原理です。このようなことを考えてみるとき、今日、個人的四位基台、家庭的四位基台、国家的四位基台はどのようになっていますか。家庭的四位基台形態を拡大したものが国家であり、国家的四位基台形態を拡大したものが世界であり、世界的四位基台形態を拡大したものが天宙なのですが、その根本は家庭です。

そのように行く中で、サタンが一匹もついてくることができないように整備する、家庭四位基台の教育がジャルジン教育です。そこを通らなければ落ちるのです。国籍を失った家庭になるのです。登録をするためベツレヘムに行って、赤ん坊のイエス様を馬小屋で出産するという、それ以上に悲惨なことも起きるのです。その道を訪ねていかなければなりません。

神様を愛すれば愛するほど、永遠の父母の愛を受けるようになるのです。孝子になればなるほど、その父母の愛を余すところなく受けるのです。忠臣になればなるほど、聖君の愛を余すところなく受けるのです。真の夫になればなるほど、妻の愛を余すところなく受けるのです。

素晴らしい善の夫、善の妻とは、どのような人でしょうか。妻として、神様の代わりに、真の御父母様の代わりに絶対視する夫をもった者、夫としてそのような妻をもった者が真の夫婦です。神様を絶対視し、父母を絶対視し、夫婦を絶対視し、そのもとに生まれた子女を絶対視しなければなりません。これが統一教会でいう四位基台理想です。

二　真の家庭は天国の民の生産工場

女性は、宇宙を与えられても、神様を与えられても換えることができない貴い宝物をもっていることを知らなければなりません。愛を実現できる根源の王宮が私にあることを知らなければなりません。ですから、神様は、どれほど安全な場所にそれを入れておかれたでしょうか。おしりの肉がなければ、どのようになっていましたか。凍りついていたでしょう。

男性たちは、どのようになりますか。保護するのにどれほど良くできていますか。すべての精力、すべてがそこに集まっているので

す。それゆえに、それは、自分と同じような人を再びつくりだすことができる器官です。父母となることができるその場所というものは、どれほど神秘の王宮でしょうか。

天国に行けば生産地がありません。神様が人を造られたのは何ゆえでしょうか。垂直には繁殖がないからです。垂直の位置は一点しかありません。神様は、一点、垂直の位置で愛をなすので、そこでは繁殖をすることができません。霊界では繁殖することができません。それゆえに、横的な三六〇度が必要です。横的世界には、東西南北に繁殖していくことができる位置がいくらでもあります。

ですから、それが、天国の民を生産するための生産地だというのです。その国の民として来る人は、すなわち天国の息子、娘です。神様御自身の愛する息子、娘になるのです。その人は、神様御自身を中心とした細胞と同じです。私たちの生命は、その国に行けば神様の細胞と同じです。神様御自身になるのです。根本から来たので、根本へ帰っていくのです。

それゆえに、男性と女性は、霊界に行けば一つの体となって神様に似るのです。最後は神化するようになるのです。神様に似なければなりません。神様は二性性相だと言ったでしょう？　二性性相は何から出発したのかというと、愛から出発しました。愛の結実として本然の神様に似て、帰ってくるのです。ですから神様も、お一人では孤独なのです。

神様は、花の咲く愛の園をつくり、色とりどりの花が満開となり、愛の香りであふれたその園の中で、昼寝をしたり、動き回ったりしてみたいと思われたのです。そのような神様だったのです。

生殖器は、真の愛を中心とした王宮であり、真の生命を中心とした王宮であり、真の血統を中心とした王宮です。最も貴いものです。これがなくなれば天地がなくなり、これがなければ神様の理想、神様の家庭、神様のみ旨を成し遂げることができないのです。これは、全体を完成し得る一つの起源です。

子供は一人だけ生めばよいのに、なぜ神様はたくさん生むようにされたのでしょうか。これが問題です。一人だけ生めば、アダムとエバの二人しかいません。そのようになれば、どのようになっていたでしょうか。二人だけで生きなければなりません。一家庭だけで暮らすのです。そのようになれば、世界がなくなります。天国をつくろうとすれば、横的に広げていって数多くの家庭を生産しなければなりません。そのようにしてこそ、天国の民が生まれるようになっているのです。霊界では繁殖がありません。地上の夫婦は、天国の民を生産する生産工場です。

すべてを満たそうとすれば、一度にはできません。ですから、数多くの世代を継いで生まなければならないのです。そのようにして天国の民が増えていくのを御覧になるとき、神様は喜ばれるのです。その国では、食べることも、着ることも、寝ることも、何も問題になりません。自動車も必要なく、工場も必要ありません。すべてのものが準備されている所です。

自分が願えば、ひゅーっと飛んでいくのです。信じることができないほどに早い所です。一歩動けば、数千マイルを移動するのです。

先生は見え、神様は見えないだけです。結婚初夜に夫婦同士で盛んに愛し合う時、既に神様が入ってきてアダムとエバと一つになるのです。人間を創造した目的は何ですか。霊界では繁殖することができません。

霊界の民を創造する所が地上の家庭です。天の民をたくさん生んで育てたのちに逝く人が栄光の位置に立つのです。栄光の位置に立ちたいと思えば、今から息子、娘をたくさん生まなければなりません。

地上は、天国の民を生産する生産基地です。霊界では繁殖がありません。堕落することによって、悪魔の息子、娘になってしまったのです。

それゆえに、これを接ぎ木する役事をして、天国の民に戻してしまわなければなりません。それゆえに、皆さんがあの世に行く時は、嫁に行く娘が婚礼家具をもっていくのと同じように、天国の民をどれだけ復帰して連れて帰っていくかが問題です。

神様は、孫を御覧になることができませんでした。アダムとエバを通して孫を御覧になろうとしたのですが、御覧になれなかったことが恨です。それゆえに、この地で息子、娘を生んで育て、その人々をすべて抱いてくることを願っていらっしゃるのです。

その広大無辺な天国には、数千億の民が必要だというのです。先生は、それを知っているので、監獄に行きながらも、一つの生命を救うために、御飯も食べずに、夜も寝ないで生涯活動してきたのです。夜を朝だと思い、朝を夜だと思ったことが何度もあるのです。そのようにしながら、一つでも多くの生命を救おうとしているのです。そこにおいては、あらゆる国境を超越しているのです。

人間は、誰もが愛を中心として結婚生活をする中で連結するようになっています。完全な愛を成したその基準の上で完全な息子、娘が生まれるのと同じように、神様の子女圏と神様の兄弟圏と神様の家庭の理想的夫婦圏を生んで育てなければならないのが、地上で生きる私たち人間の責任です。

霊界では繁殖が不可能です。霊界は中心です。中心は、面積がないので、息子、娘を生むことのできる空間がありません。ですから神様は、膨大な天国に行って暮らすようにするために、平面的、立体的空間をつくられ、神様の国の国民を生産するようになさったのです。

それゆえに、夫婦というものは、天国の国民をつくる分工場です。そうだとすれば、この地上で息子、娘をたくさん生んで連れていくことが、その世界を相続し、所有権を受けることのできる相対圏となるのです。息子、娘がいない人は、そのような相対圏がありません。一つになった素晴らしい相対圏をたくさん、十二カ月の十二数以上もたなければなりません。

神様を誇り、男性となり女性となったことを誇らなければなりません。そのような男性、女性となって、天国の民を繁殖しなければなりません。これは鉄則です。アダムとエバは、繁殖をしなければなりません。心と体が一つとなり、神様の愛によって霊的五官と肉的五官が一体となり、真の愛で永遠に一つにならなければなりません。そのようになることができる男性、女性として永遠に会うことのできる男性は、永遠の人類を代表した王権をもった王であり、女性は、王権に対する王妃です。父と母は、心の中において万世の父であり、万世の母です。真の愛には、そのような背後が連結されていることを知らなければなりません。

そのような姿勢を備えた愛を中心として一つになり、結婚を通してその愛を訪ねていくのです。愛ゆえに行くのです。結婚は、二人だけではなく、縦的な神様を占領するためのものです。東西に分かれ、どこに来て爆発するのか分かりますか。垂直線です。垂直線で爆発してぶつかるので、戻ってこなければなりません。戻って、上がっていかなければ下りていくのです。ここで神様は下りてきて、私は上がっていくことにより、神様が中心に入っていくのです。

このようにして下りてきてみると、神様が愛の中心核になっているのです。ここにおいて、このように垂直になっているのを水平にしようとするので、息子、娘が必要なのです。それゆえに、このような垂直をつくっても息子、娘を生むことができなかった男性と女性は、天上の位置に行って神様に侍ることができません。息子、娘を生んで愛してみた人であってこそ、神様の二性性相、理想的主体である神様に侍ることができるのです。皆さんも、真の父母に侍るためには息子、娘を生まなければなりません。息子、娘を生むことができなかった人が養子をとったならば、自分の息子、娘を生んだ以上にその息子、娘を愛する訓練をしなければなりません。ですから大変です。それゆえに、統一教会では、「愛する息子、娘をたくさん生みなさい」と言うのです。

統一教会の子供たちは、天運に乗ってきます。食べることは心配いりません。その中からは、判事も出てくるはずであり、検事も出てくるはずであり、大統領も出てくるはずであり、あらゆる人が出てくることでしょう。五色燦然と輝く光が出てくることでしょう。

それゆえに、真の愛を中心として、母として恥ずかしくなく、父として恥ずかしくなく、天国の民をたくさん連れていかなければなりません。

今日、夫婦というものは、天国の民を生産する工場です。ですから、息子、娘をたくさん生んで入っていけば不幸ではありません。あの世に行けば、高い位置に行くのです。東西南北を中心として見れば、四季が三カ月ずつで十二カ月です。ですから、イエス様も十二弟子を選んだのです。イエス様を中心として、三弟子は、東西南北の代表型と同じです。神様を中心として、これが中央を中心として四方を備えたのです。

地上の家庭は、天国をつくるための横的な世界です。縦的な世界は繁殖することができ

ません。横的な世界で息子、娘が増えれば、彼らが神様の民となるのです。

皇族が繁殖すれば、長孫だけを残し、すべてが民となります。親戚になるというのです。親戚にも長孫がいるでしょう？　氏族たちも、氏族たちを合わせた長孫がいなければならないのではありませんか。それがアダムとエバです。アダムとエバは、伝統的な永遠の王と王妃です。しかし、民主世界では、これがすべてなくなるのです。

天国の民を生産するための生成基盤は、天の家庭基盤ではなく、地上の家庭基盤です。息子、娘を生むということは、天国の民を生産するということです。

三　天国の民の教育は真の家庭で

地上にある家庭は、天国に連れていく民を再創造する工場です。私たちは、その工場の主人の役割をなしたのちに霊界に行くのです。ですから、正しい道さえしっかりとつかんでおけば、息子、娘を教育する必要はありません。自然になされるのです。自分の神様をすべてもっているのです。教育は必要ありません。堕落したので、このようになったのです。堕落することによって、根本が分からなくなったのです。

神様が願われるものは、失ってしまったエデンの真の家庭です。その真の家庭に立てられる真の父母、真の父母の前に立てられる真の夫婦、真の夫婦が愛することのできる真の子女のいる家庭が、神様が一緒にいたいと思われる天の家庭だということを、皆さんは知らなければなりません。このような家庭が現れれば、その時には、イエス様も兄弟と共に喜ぶことができるのです。そのような家庭が現れなければなりません。

真の家庭は、真の男性と真の女性が一つになって夫婦として出発するのです。息子、娘を生んだのちに真の家庭が出てくるのです。心と体が完全に一つになった男性と女性が永遠の愛を中心として一つになったところから、分かれることのない子供が出てくるようになるのです。父と母が分かれたところから、感情的に分かれた子供が出てくるのです。

心と体が一つになり、真の愛を中心として一つになった夫婦から、心と体が一つになった子供が出発するというのは自動的な結論です。そうでなければ、家庭に真の愛がとどまることができません。神様は、真の愛がない所に臨在なさることはできないのです。これは論理的な結論です。

天国の倉庫に入っていこうとすれば、神様の愛と神様の生命と神様の血統的因縁を中心として、きれいにならなければなりません。そのようになろうとすれば、生まれた時から神様の息子、娘であり、育っていく時も神様の息子、娘であり、暮らすのも神様の家庭でなければなりません。そのように暮らしてから行く所が地上天国であり、天上天国です。それゆえに、天上世界にも、そのような家庭、そのような一族が入っていくのです。個人救援ではありません。

神様の愛を受けることができる息子、娘として、神様の愛を受けることができる兄弟と

して、神様の愛を行使することができる夫婦として、また神様がアダムとエバを愛したのと同じように、第二創造主の立場から、神様の代わりに自らの息子、娘を愛していくのが人生行路です。始まりも愛であり、過程も愛であり、終わりも愛です。愛の教科書に一致することのできる完成品として入っていく所が天国です。そこに入っていく時には、個人で入っていくのではありません。家庭全体が入っていかなければなりません。

妻が夫に対する時は、どのようにしなければならないのでしょうか。「私とあなたは、共に生まれ育った双子の兄妹なので、私たちは、別れようとしても永遠に別れることができないことを、今やっと分かりました」と言いながら、手をしっかりと握り締めなければなりません。アダムとエバがエデンの園から追い出される時、分かれていくことによって悲しみの涙を流しましたが、今、復帰時代においては反対の涙を流さなければなりません。天国の息子、娘になることができなかったことを、私の一生を通して復帰しなければならないのです。

国を建てようとすれば、王がいなければならず、女王がいなければなりません。息子、娘がいなければなりません。また、王国を守ることができる中心家庭がなければなりません。ですから、今、イエス様は、楽園に行って待っているのです。天国は、一人で入っていくようにはなっていないのです。

愛の所有を中心とすれば、相対の故郷が私の故郷になり、相対の家庭が私の家庭になることができるのです。そこにおいて、子女の完成、兄弟の完成、夫婦の完成、父母の完成が成されるのです。

神様の教本に提示されたすべての内容を成すことができなかったことを、今日、真の父母を通して再現し、知るようになり、それを再度実行することにより、堕落していない本然的立場において、神様が完全に恨の峠を越えて教育に対する定義を下すことができるのです。そのようになることにより、天国の民として、合格者、合格家庭になるのです。

キリスト教における聖霊は、女性神ですが、霊的に、また実体的に二つの世界を生んで育てなければならない責任があったように、統一教会で祝福を受けた女性は、二つの世界に対する責任を負わなければなりません。天国の民もつくらなければならず、サタン世界の民をすべて拒否することができるようにならなければならず、その人々を統治できるようにならなければなりません。

皆さんの息子、娘は、神様の国の民です。ある一国家の市民ではありません。天国の民だというのです。皆さんは、このような目的をもって育てなければならないのであり、そうでなければ、今後、皆さんの家庭には希望がありません。地獄に行くようになるのです。

真の御父母様は、いつも私のために生きた父母様だということを知って、今からでもその父母様のみ旨を私がすべて相続し、今後誕生する子孫を大切に育て、私のような人にはしないと決心して立ち上がらなければなりません。それだけが先生の望む、たった一つの願いです。

その貴い息子、娘を再び皆さんのような息子、娘にしてしまえば、どうするのかというのです。「私はこうだったが、将来の私の子孫はそのような息子、娘にしない」と決意して精誠を尽くし、神様がエデンの園でアダムとエバを造って喜ばれたように、息子、娘を真の息子、娘にするために保護しながら抱いて育て、堕落した子孫の前轍を踏ませないようにしなければなりません。

再びそのような道を行かないように最善を尽くして育て、神様の前で祝福を受けるように、私が準備し、すべての内容を備えさせてあげなければならないという責任感をもって将来の家庭を築いていけば、天国の息子、娘になるのです。

皆さんは、自分の息子、娘を教育する時に、父母だけを愛する息子、娘になりなさいと教えてはいけません。「私は、この国を愛する忠臣だ、愛国者だ。母としての愛国者ではなく、愛国者としての母、忠臣としての父だ」と教育しなければなりません。

父母が素晴らしければ、その家の息子、娘も素晴らしく、息子、娘が素晴らしければ、その家で育つ犬や鶏も素晴らしいのです。犬がほえることができず、鶏が鳴くことができなければ、それが素晴らしいことですか。「父母は和やかだが、その家の犬はよくほえるし、鶏もよく鳴く！」。そのようになってこそ素晴らしいのです。「あの家の人はそうではないのだが、鶏はあまりにもよく鳴くし、犬はよくかんだりもする」、そのような家庭は、滅びるのではありません。栄えるのです。

息子、娘は、その父母を、神様の代わりとして、真のお父様と真のお母様よりも素晴らしい父母として侍らなければなりません。そのようにして、真の父母に敬拝する前に、先に自分の父と母に敬拝できる家庭にならなければなりません。家庭生活の中で神様に代わるのが自らの父母です。ですから、四大心情圏と三大王権は一つの家庭で成さなければなりません。

神様の愛の主権は、絶対、唯一、永遠、不変です。その国の主権もそうであり、その国の民もそうであり、その国の万物もそうであるがゆえに、今、再整備して、絶対、唯一、不変、永遠の国民性で再登録しなければなりません。万物もそのように再整備する時なので、全体を反対に回さなければなりません。このように回っていたものが反対に回らなければならないという事実を知らなければなりません。

神様の国では、絶対主権が必要であり、民が必要であり、万物が必要です。私たちの家庭を見れば、主権の代わりに父母がいて、民の代わりに息子、娘がいて、万物の代わりに物があります。それが小さな天国の基盤です。それを神様のために、すべて捧げてしまわなければなりません。そのようにしてこそ、大きな国、大きな世界が成し遂げられるのです。

四　天国の基盤は真の家庭から

神様は、絶対者であられ、唯一、不変、永遠であられるお方です。そのお方のみ旨も同じです。絶対者であり、不変なお方なので、そのお方のみ旨もそうだというのです。

創造主と人間の真の愛を中心として完成する真の家庭を願っていらっしゃった神様は、人間と一体となる条件が必要でした。ですから神様は、人間始祖に与える戒めが必要だったのです。その戒めとは何でしょうか。愛の家庭、愛の全体、最も貴いものを相続してあげようという約束の条件が戒めだというのです。人間には成長過程を経て成長して上がっていく未完成段階があるということを御存じである神様が、最も貴い真の愛と家庭を人間に相続してくださろうとした条件が戒めでした。

真の愛と真の家庭を相続してあげようというのが、神様の約束された戒めです。

神様のみ旨は、一つにすることです。堕落していなければ、私たちの心と体は一つになっているのです。男性の心と体が一つになり、女性の心と体が一つになっていたのです。そのようにして、二人が心と体の一つになった家庭を成していれば、そこからは統一の世界が展開していたのです。

今日、この世界は一つになっていません。この世界というものは、男性と女性を拡大したものです。

神様は、最も深い所に隠密にいらっしゃいます。より深い所に下りていけばいくほど愛は大きくなっていき、最後には神様の真の愛を探し出すようになるのです。

皆さんが子女をより一層深く愛すれば、神様の愛と出会うようになるのです。このような真の愛の家庭は、地上天国の基盤となります。それゆえに、天国が別の所にあるのではありません。

天国は、真の家庭によって構成されます。神様のように暮らすのです。内的な父母である神様と永遠に共に暮らせる夫婦の生活環境だというのです。天国とは、そのような人々が入っていける所です。神様の体、神様の家庭に属する家庭が入っていく所です。完成したアダム家庭が、そこに入っていくのです。

ですから、天国は、家庭的に入っていくようになっているのであって、一人で入っていくようにはなっていません。今まで「個人救援を受けよう」と言っていたのは、天使長世界です。ですから、真の家庭の所有は、天国です。真の家庭が所有物であり、主人となるのが天国だというのです。真の家庭と真の主人が真の所有権をもつのが天国だというのです。家庭的主人が所有するのが天国だというのです。

皆さんが、神様の息子、娘となり、神様の家庭を築いてこそ、天国が成されます。一つの家庭においても、すべて同じです。サタンがわなを仕掛けて引っ張り、神様も引っ張っているのですが、その食口が神様の前に完全に帰ろうとすれば、限りない精誠を尽くさなければなりません。そのようにしてこそ、個人個人に対して、五人家族ならば五人家族に対してサタンが引っ張り、神様が引っ張っていても、サタンの綱を切ってしまい、天の側に帰っていくのです。

夫婦は、神様をお迎えして愛の部屋に入っていくことを、お互いが考えなければなりません。そのようにして、心と体が完全に一つになれば、その夫人は、天下の女性の中で王の中の王であり、美人の中の美人であり、一つしかない絶対、唯一、不変の永遠の私の体だと思わなければなりません。愛する私の体だと思いなさいというのです。愛の体だというのです。

主体と対象が愛で一つになることにより、夫人は私の愛の所有になります。愛で一つになる時は、相対を中心として、その愛も私のものなので、主人も私のものになり、その主人の所有も私のものになるのです。同じ価値をもったので、宇宙がすべて私のものになるというのです。

このことは、神様を感じなければならないという話です。ですから、誰もが、神様に侍って生き、愛したという体験をしなければなりません。そのようにしてこそ、天国家庭として神様の貴族となり、血族となることができるということを知らなければなりません。神様が天国においてこのような祝福家庭を御覧になれば、星のように輝いているというのです。ですから、神様が常に喜ばれるというのです。

栄光の真の家庭とは、地上でも幸福であり、霊界でも幸福になれる、真なる家庭のことをいうのです。あの世の中心存在であられる神様と直接共に暮らすことができる家庭が、栄光の真の家庭になるのです。うれしくて、またうれしくて、永遠に喜べる真の家庭にならなければなりません。お互いにうれしくなければ、協助して愛の理想的世界を築かなければなりません。愛の理想的な主体と対象として、自らを愛の対象として迎えてくれたので、お互いに感謝し、「ため」に生き、尊敬することができる世界を築かなければならないというのです。

真の家庭の核心は、夫婦です。それでは、夫婦とは何でしょうか。神様の実体対象である神様の体です。真の愛をもった神様のことを、皆さんは父と呼びます。神様が父ならば、私とは父子の関係だというのです。父と息子であり、母と娘ですが、一つの体です。縦横を一つにしたものなので、そうだというのです。

若い青年男女の願いは、理想家庭の完成、すなわち真の家庭を築くことです。ここで真の家庭とは、神様が喜ばれる家庭のことをいいます。それゆえに、最も重要なことは、神様をいかに知るかということです。

真の家庭は、神様の目に入れても痛くないというのです。胸に抱いて踊られるのです。どれほど踊り騒いでも、神様は全能でいらっしゃるので、抱いて空中を舞いながら踊りたいと思われるのです。真の家庭は、神様を解放して慰労することができる対象です。

真の家庭とは、神様がつくられ、神様のみ旨どおりに理想が成し遂げられた家庭です。

完成したアダム家庭が真の家庭だというのです。しかし、アダム家庭がそのようになることができなかったので、そのようになるためには復活が必要です。復活した家庭によっ

て、復活した氏族、民族、国家、世界を立てようというのです。そのようになれば、この地上において、サタンや、罪悪や、神様とサタンが闘う人類歴史の戦争などというものはなかっただろうというのです。そのようになれば、サタンもいなくて、この世界は、今日のように様々な国に分かれ、民族が異なり、文化が異なり、言葉が異なり、すべてが異なる、このような世界にはならないというのです。

それでは、真の父母とは、どこから来られたお方でしょうか。神様からです。神様から連結されているのです。ここで、第一に神様の愛、第二に神様の生命、第三に神様の血統にならなければなりません。これは何かというと、ここにあるすべての世界も、神様の愛、神様の生命、神様の血統のために生じたということです。

そのようになれば、ここには、サタンを中心とした愛や、生命や、血統などというものはあり得ないのです。そのようにしようとするので、今までの愛と生命と血統、このすべてのものは、神様に帰らなければならないというのです。

しかし、直接帰っていくことができないので、ここで息子、娘を通じて帰っていくのです。この時、カインとアベルが問題になります。ですから、アダムとエバを中心として神様に帰っていくのだというのです。

男性も、真の愛でなければ心と体が一つにならず、女性も、真の愛でなければ心と体が一つになりません。心と体が一つになってこそ、真の愛のカップルになることができます。真の愛のカップルになってこそ、真の愛をもった神様の子女となります。そのようにして神様の家庭になるのです。

神様が最も好まれるものとは何でしょうか。ただ真の愛だけです。愛は、一人でなすものではありません。神様が人間を造られたのは、御自身のパートナーを造られたということです。真の愛のパートナーとして人間を造られたのです。それを手本として、全宇宙がペア・システムをもって造られたのです。

ですから、神様の愛も永遠であり、男性の愛も永遠であり、女性の愛も永遠であり、子女の愛も永遠なのです。これが神様の家庭です。

神様を中心として家庭生活を始めるということは、神様の家庭が出発するということです。そのようにして、神様と人間が愛を中心として一つになって家庭が出発するのですが、私たちの家庭だけが出発するのではありません。天国の家庭の出発とともに、これが並行していかなければなりません。

神様の解怨を成就した家庭が、神様の家庭です。兄弟以上に愛することができる長男の資格、夫の資格をもった人々によって構成された家庭が、安息の場所なのです。父母として、こじきまでも自らの子女として迎えて暮らしたいと思う安息圏をつくらなければなりません。それが統一教会の祝福家庭の使命です。それが祝福家庭の宿命的使命だということを忘れてはなりません。

真の父母の真の愛を通じて神様の真の愛を学びながら、真の兄弟の真の愛を通じて真の国と真の世界人類に対する普遍的真の愛を訓練させる、平和世界の基本、その核の立場が真の家庭です。

霊界に行けば、理想的夫婦、理想的な真の家庭は、神様といつでも共に暮らすことができます。ですから男性は、神様の性相、心の立場にならなければならず、女性は、形状となって一つにならなければなりません。これが一段階もっと大きくなって一つになるのです。この二人の心的な面が性相になり、体的な面が形状となって、ここで初めて実を結ぶようになります。それで、神様を中心として、心と体の一体圏が成されるのです。

そのようになれば、アダムの息子、娘には、神様の心、神様の愛を中心とした骨が生まれ、アダムとエバのような体が生まれるようになるのです。それゆえに、神様御自身は、アダムとエバのような形状をもって、見える人類を支配することができるのです。そのようになれば、完全に地上天国となり、神様を見ることができるのです。

今は、天国に行っても神様が見えません。真の父母がそのようなすべてのことを成し遂げてあの世に行った時、神様は真の父母の心の中に入っていかなければなりません。そのようになれば、神様が体をもたれ、すべての宇宙を動かし、支配することができる時代に入っていきます。神様が神聖な形状をもたれるというのです。

それらをすべて完成すれば、すなわち天上世界が完成し、地上天国が完成すれば、神様が形状をもたれるのです。それは、愛を中心として可能なのです。アダム家庭において肉体的に愛が一つになっていれば、神様も、性相と形状を兼ね備えることができるので、体をもつことができるというのです。それは、愛でなければできません。「一体」という言葉は、そこから出てくるのです。

霊界は、真の愛、絶対的な愛によって統治する世界です。すべてのものが真の愛と連結しているのです。真の愛は、種です。堕落していない種が連結して、地上と天上に満ちるのです。

ですから、今の世の中は、堕落した結果の世界なので、なくならなければなりません。堕落した世界の血統はなくしてしまい、本然の神様の血統を連結しなければなりません。どのようにしてそのような世界をつくるのでしょうか。その方法が結婚です。結婚とは何かというと、家庭を接ぎ木することです。

霊界にいる人々も、真の家庭が必要です。その真の家庭がなければ、神様の位置に連結されず、天国に入っていくことができません。地上天国で暮らした夫婦も、あとから天国に入っていくようになります。それが神様の創造理想です。そこには宗教もなく、文化も一つしかなく、家庭がすべてのものを完成するのです。家庭があらゆるもののセンターです。ですから、私たちの家庭は、センターに立ちたいと思うのです。

そこには、宗教が必要ありません。キリスト教も解放であり、仏教も解放であり、すべて解放です。イエス様も家庭が必要であり、釈迦牟尼も家庭が必要であり、マホメットも必要であり、すべての聖人も家庭が必要なのですが、その家庭は、誰によるものでしょうか。真の父母の家庭です。

今までは、すべての家庭は、偽りの血統で連結されていました。本然の家庭ではなかったのです。祝福家庭が現れることによって、神様の血統が連結された真の家庭が生まれるようになったのです。

レバレンド・ムーンは、四方八方のあらゆる場所に勝利的な基盤を築きました。霊界と肉界も同じです。そのようにして、真の家庭から真の世界に発展していくのです。真の家庭から、真の氏族、真の民族、真の国家、真の世界、真の宇宙、真の天国が築かれるのです。

今は、私というものをはっきりと知りました。私は、どこから因縁を結び、どのような生活過程を経て、どこに向かって行くのかということを知りました。このように行く私は、何をもって行くのでしょうか。神様の憂いを抱いて行くのです。私の個性が復帰されていれば、私がこの家庭だけに安息するのではなく、私には、家庭を中心とした氏族があり、氏族を中心とした民族があり、民族を中心とした国家と世界人類が残っているという事実を知って、死んで土に埋められる前に、この世界の果てまで行って数多くの民族を父の前に導き、その後ろから万民を祝福していくことができる一日が私に来ることを待ち望みながら、毎日のように闘っていくことができなければなりません。そのような人が、神様に代わることのできる人です。

今まで、私たちが信仰してきた観念というものは、「私は、神様を信じて天国に行こう」というものでしたが、天国に行く前に何をしなければならないのか分かりますか。私自身が、心と体を中心として一つに統一されなければなりません。そのような闘いをしなければなりません。自分を統一できない人が天国に行くことはできません。私の家庭を中心として一つになることができなければ、天国に行くことができないというのです。私が、親族を中心として善の場所に導いていくためには、精誠を尽くさなければなりません。そのようにしなくてはならないのです。

アダムとエバは、堕落することによって死亡世界に占領され、死亡世界を主管するサタンは、神様の創造理想時代において、反対に神様に背く家庭をつくり、現在まで神様と対峙する世の中をつくりあげてきたことを考えるとき、神様が心で思い描かれるのは、もちろん理想的な家庭ですが、その内心は、怨讐が願う基準よりも、怨讐が知っているその基準よりも、堕落前の理想時代の家庭基準よりも、もっと素晴らしく、愛情の深い家庭を成したいと思われたのではないのでしょうか。そのようなことを私たちは考えなければなりません。

イエス様がこの地上に来て教えられた真理は、簡単です。「天地を創造した神様は、私の父だ。私は、その息子だ。あなた方は、私を信じればその息子になることができる。私

の父であると同時に、あなた方の父だ」と言いました。その次には、私たちに子女の道理を教えてくれると同時に、自分の父を教えてくれました。それから、「私は新郎であり、あなた方は新婦だ」と言いました。これは何でしょうか。神様を中心として家庭を築くのに必要な要件を、イエス様が来られて初めて叫ばれたのです。聖書がそうです。ほかのものは必要ありません。

聖書を見れば、神様を父だと教えてくれています。イエス様は、「自分はひとり子だ」とおっしゃいました。またイエス様は、信者を見て「新婦」と言い、それから「兄弟だ」とおっしゃいました。これが、神様の家庭を中心としたその愛の型において、すべてのものを備えた内容を明らかにする教理となっているので、神様の家庭をつくっていく教理であり、その息子が神様の家庭に安息することができる家庭の道理を教えてあげたものです。

聖書が教えてくれたものは、家庭です。イエス様は新郎であり、私たちは新婦だというのです。新郎新婦が出会って神様を中心とした「小羊の婚宴」をなし、家庭に帰っていくのです。これが新約・旧約六十六巻を総合した結論です。それゆえに、聖書は偉大だというのです。

聖書が指向する最高の目的は何であり、聖書が要求する希望とは何でしょうか。イエス様個人ではありません。イエス様が新婦と一つになった神様の家庭を、待ち焦がれていらっしゃったというのです。神様の家庭をつくれば、何をするのでしょうか。

家庭、すなわち新郎新婦が出てくれば息子、娘が出てくるのであり、息子、娘が出てきて繁殖すれば、氏族になり、民族になり、国家になり、世界になるのです。その世界とは、どのような世界でしょうか。神様の愛と連結した「神主義」の世界です。「神主義」の世界であると同時に、アダムとエバ主義の世界です。アダムとエバ主義の世界とは何でしょうか。父母主義の世界です。

天国の終着点は、真の家庭の完成です。真の家庭の中には、真の国があり、真の世界がなければなりません。真の世界と真の国に影響を及ぼすことができる真の愛の伝統として、「絶対セックス」という言葉が出てきます。絶対セックスとは、絶対、唯一、不変、永遠のセックスをいいます。神様の属性である愛を中心として連結された対象的なパートナーと、そのような観点において愛で一体化するのは、すべて性関係によって結ばれるのです。

互いに異なる人種と文化背景をもった夫婦であっても、神様の真の愛で一つになった家庭を築いたならば、そこから生まれる子女の間には、人種や文化的な葛藤が存在できません。

その子女たちは、父母を愛するそれ以上の心をもって、両方の文化と伝統を愛し、大切にするはずです。世界の至る所で深刻な社会問題となっている人種間の葛藤を、政治や経済によってのみ解決しようとすれば、その結果は失敗しかありません。人種差別は赤ん坊の揺りかごから始まるものなので、真の愛を中心とした真の家庭の理想をもたなくては、この問題の根本的な解決は不可能です。

したがって、その中心理想は、やはり一人のお方、すなわち神様の真の愛を中心とした真の家庭を築くことです。

人類が歴史の最初から神様と一つになっていたならば、既に人類は、真の愛を中心とした真の家庭を築き、「ため」に生き、より「ため」に生きる真の愛を実践することによって、真の国家、真の平和の世界を成し遂げていたでしょう。

この歴史的な闘いを終息させるためには、神様に帰らなければなりません。まず、神様を中心として個人の心と体が一つにならなければなりません。そのような真の男性と真の女性が、神様を中心として真の家庭を築くことにより、その中に再び神様を迎えるようになるのです。真の愛を中心とした真の家庭こそ、神様がお住みになる地上基地になるのであり、さらに真の国家、真の平和世界の出発地になるのです。これによって、真の自由と幸福の世界が開かれるのです。

今からは、デモをしなければなりません。デモをして、真の父母を誇り、真の家庭を誇り、真の血族を誇り、真の純潔を誇らなければなりません。それは、真の御父母様がこの地上に来られた目的を世界化させるのと同じように、皆さん個人や、家庭、氏族、民族、国家も、すべて真の父母になるためです。個人において家庭的な真の父母、家庭的な基準において真の父母、真の家庭、真の純潔、民族基準において真の父母、真の家庭、真の純潔、国家基準において真の父母、真の家庭、真の純潔、これが世界化されるのです。

国家基準において世界化し得る立場になるので、真の父母の基準が私たち個人から世界と天宙まで連結し、真の家庭基準が連結し、真の純潔の血筋が連結することによって、堕落がなかった解放の時代に越えていくのです。ですから、この全体を清算するためのデモをしなければなりません。伝道よりも、このことをしなければなりません。

第三章　神様と真の父母

一　真の父母は神様と人類の希望

神様は、私たち堕落した人間にとって、先生の中の最も大きな先生です。先生の中の大王の先生だというのです。それは、神様に知らないことがないからです。また、父母で言うなら、父母の中でも最初の父母です。すなわち、真の父母です。王としては、王の王です。

今日、堕落した人間の願いは、神様の息子に会うことです。神様の息子としては、個人的な息子、家庭的な息子、氏族的な息子、民族的な息子、国家的な息子がいます。彼らをすべて取り戻さなければならないのですが、このように取り戻そうとすれば、人類がどれほど苦労するでしょうか。ですから、国家的基準にある息子圏を代表したメシヤを送るのです。このメシヤを迎える日――個人的神様の息子、家庭、氏族、民族、国家的息子まで、すべての息子を取り戻したという喜ばしい知らせを、人間世界に与えるためのものがメシヤの降臨だという事実を、皆さんは知らなければなりません。

堕落した私たちは、神様の息子、サタンの讒訴圏から外れた神様の息子に会わなければなりません。会ってからのちには、神様が愛することのできる父母を取り戻さなければなりません。

またその次には、父母の家庭を取り戻すのです。父母の家庭を取り戻し、神様の愛を取り戻すのです。そして、神様に会うというのです。

神様の愛を中心として愛の関係を結ぶことができるものは、ただ完成したアダムだけです。アダムは、真のお父様です。それゆえに、先生が真のお父様の位置にいるというのです。それでは、パートナーは誰ですか。女性です。絶対女性です。世界的な女性を代表したものがキリスト教の新婦教会です。新婦宗教を代表したものがキリスト教です。キリスト教の主流思想は、再臨主、メシヤを中心とした新婦思想です。

真の父母は、二つではありません。唯一です。それは、男性も絶対的に一人であり、女性も絶対に一人です。二人ではあり得ません。そのように、二つの唯一な存在が出会って真の父母になるのです。真の父母は、神様の創造理想を中心とした真の理想的夫婦だというのです。

真の父母は、個人的、絶対的一つの標的になり、家庭的標的、氏族的標的、民族的標的、国家的標的、世界的標的となり、地上・天上天国の一つの中心形態を代表するのです。真の父母を立てるということには、神様の愛を中心として創造理想を完成した地上・天上世界を、統一させるという目的があります。

それゆえに、個人から世界、天地まで、その統一的中心になったので、個人も接ぎ木することができ、家庭、氏族、民族、国家、世界が接ぎ木することができるところにまで来たというのです。先生は今まで、一生涯このことを準備してきました。神様の真の愛を中心として、個人の中心にならなければならず、家庭の中心、氏族の中心、民族の中心、国家の中心をどのように形成するか、これが目的でした。そのような目的に向かっていくという概念をもって、これから始めなければなりません。

神様が終わりの日に約束された一日は、「父母の日」です。真の父母に侍ることができる日です。別の言い方をすれば、堕落によって父母を失ってしまったこの地上の数多くの人々が、神様の祝福を成すことのできる本然の父母を、再び迎える日です。

人類がある復帰の一つの目標を定め、神様に向かって進んでいく中において、必然的な条件とは何かといえば、父母の門を通らなければならないということです。父母の門を通るまでは、心情を連結させることができません。この時代は、心情的にはこの民族とあの民族が通じることができず、この宗教とあの宗教が通じることができず、この家庭とあの家庭が通じることができない時代です。私たちがこれを通じさせるためには、必ず神様の心情を知らなければならず、神様の心情と因縁を結ばなければならないのですが、これを連結してくれる仲保者が真の父母です。です

から、失ってしまった本然の真の父母を探し出してこそ、神様の心情と連結することができるというのです。

エデンからアダムと神様を追い出しました。それで、霊的な父と肉的な父に分かれました。これを家庭で失ってしまったので、世界的に取り戻すときには、世界型の大家庭が生まれなければなりません。それでキリスト教文化圏は、母の文化圏なのです。新婦の文化圏です。東洋と西洋を中心としてカインとアベルが一つになった息子、娘をキリスト教が抱いて、誰のところに行かなければならないのかといえば、来られる再臨主のところに行かなければなりません。そのようにしていれば、七年以内に世界を統一するのです。

その来られる再臨主が真の父母です。真の父母が現れ、真の子女が現れ、真の家庭が出てこなければなりません。真の家庭を編成するのが統一教会でいう祝福です。家庭を編成するのです。

エデンの園で真の父母になることができなかったことが堕落です。真の父母が来られることによって、試練と迫害の路程がなくなるときには、世の中は真の父母の道理を求めてくるのです。真の父母の息子、娘を見ると、彼らの生活とすべての人生は、世の中の人とは違うというのです。貧しく見えても、そこには平和があり、哀れに見えても、そこには希望があり、苦しんでいるように見えても、そこには喜びをもった人生があるというのです。

アダムとエバは、神様が本当に願う真の人類の先祖、人類の真の父母にならなければならなかったのです。その真の父母の血族によって、私たち人類は生まれなければなりませんでした。歴史の出発から始まらなければならなかった人類の真の父母、その真の父母は、神様の栄光の実体として、人類の前には勝利的な永遠の実体として現れなければならなかったのです。それにもかかわらず、アダムとエバは、勝利的な実体として現れることができませんでした。

これが、今までの悲しい歴史を成してきた怨恨の基台になったということを、私たちはよく知っています。それによって天の法度を離れ、自らの実体を失ってしまい、神様の心情を蹂躙した私たち人間は、み言によって実体を取り戻し、心情の世界を取り戻す復帰の路程をたどってきているということを、私たちはよく知っています。

このように堕落した人間は、万物よりも悪なる位置に立つようになり、神様に自由に対することができない悲しい立場に落ちるようになったのです。このような人間は、自ら回復することができないので、神様は、彼らを目覚めさせて再創造の役事をしてこられました。僕の位置を経て、養子の位置を経て、息子の位置を経たのち、勝利的な主管圏を備えて真の父母の位置まで復帰してこられたという事実を知らなければなりません。

皆さんは、堕落の氏族です。皆さんは、神様がどのような方でいらっしゃるのかを知らなかったのです。真の家庭、真の社会、真の国家、真の主権がどのようなものだというこ

とを分かりませんでした。それでは、皆さんは、これからどのようにしなければなりませんか。人間の堕落以後六千年間、数えきれないほどの涙を流されながらサタンと闘う神様ではなく、栄光の神様を知らなければなりません。二千年間闘ってきたイエス様と聖霊ではなく、栄光のイエス様と聖霊を知らなければなりません。闘う天上世界の億千万の聖徒ではなく、栄光の中で生き、栄光を享受する億千万の聖徒を知らなければなりません。地上で迫害されて苦痛を受ける聖徒ではなく、栄光の中にいる聖徒を知らなければなりません。そのような聖徒を見ましたか。見ることができませんでした。アブラハムも、ヤコブも、モーセも、イエス様も栄光の神様を紹介するために来て、死んでいきました。栄光の真の父母を紹介して、栄光の真の息子、娘を紹介して、栄光の真の民族と真の天民をつくるために努力しました。

神様が御覧になる時、この世は堕落した世の中なので、愛国者が一人もいませんでした。孝子もいなくて、聖人、聖子もいなかったのです。メシヤが地上に来られて、神様の家庭を築かなければなりません。そこから孝子が出てきて、国の基盤の上に愛国者が出てきて、世界的基盤の上に聖人、天宙的基盤の上に聖子が出てくることができるのです。第一・第二アダムが失ってしまったものを取り戻すことが、私に対する召命です。すべてのものを売り払ってでも、その国を取り戻さなければなりません。統一教会員ならば、霊的、肉的、すべてのものを投入して犠牲になっても、「私が天国を成し遂げる。愛国者になる。聖人、聖子になる」と考えなければなりません。

それでこそ、神様の祝福を受けるようになります。「あなたこそ本物の孝子であり、本物の愛国者であり、本物の聖人、聖子だ」と言われるその時、初めて「私があなたを祝福する」と言われるのです。そこからすべてのものを相続されるようになります。その場が、すべての統一教会員の本郷です。

本来、「父子」という言葉は、本然の父と息子、娘をいうのです。そのような父子がなければ国もできません。万民は、平和の世界を願っています。その世界は、今日の世界の先進国家が追求している、そのような文化を通して成されるのではありません。

真の父母を通して成されるのです。真の父母が一枚のむしろを使い、ぼろきれのふろしき包みを担ぎ、いくら色あせたよれよれの服を着ていたとしても、また千丈、万丈の奈落から気力の果てた姿で出てきたとしても、堕落した人間は、その真の父母を中心として神様の心情を学ばなければなりません。

それでは、どの程度に心情を接ぎ木しなければならないのかといえば、お父様の腹中から接ぎ木をし、お父様と共に生きたという条件を立てたのちに、お母様の腹中を通して生まれ、成長しながら父母に侍って暮らさなければなりません。しかし、それによって終わるのではなく、父と母と共に暮らすことのできる親戚と愛の因縁を結び、親戚を中心とした氏族と心情の因縁を結び、その氏族は民族と心情の因縁を結び、その民族は国家と心情の因縁を結び、その国家は世界と心情的な因縁を結び、その世界は天地と心情の因縁を結び、その天と地を通して神様まで心情の因縁

を結んだという基準を立てなければなりません。それでこそ神様が「あなたは私の息子である」とおっしゃるのであって、自分自身だけを中心として心情の因縁を結んだ人を、神様が私の息子だとはおっしゃいません。

再び生まれなければならないというのは、堕落したアダムとエバの子孫である父母の血肉を通して生まれなければならないということではなく、堕落とは関係のない父母の血肉を通して生まれなければなりません。そうでなくては神様に帰ることができないのです。

罪の根本は、アダムとエバから始まったので、これを踏み越えて、すなわち原罪と因縁がない位置で生まれたという資格を備えることなくしては、神様のもとへ帰ることができないのです。

神様が私たち人類を救援しようとされるとき、堕落圏以下ではいくら救援しようとしてみたところで救援できないのです。それで、神様は、堕落していないアダムとエバ以上の真の父母をこの地上に再び送り、その父母を通して人類が再び生まれる路程を経るようにして、サタンと永遠に関係がなくなり、サタンが讒訴しようにも讒訴できないようにされ、神様だけが主管され、神様だけが干渉なさることができるようにされるというのです。そのような位置で人類が再び生まれることなくしては、原罪をもった人間が、原罪のない位置には帰れません。

堕落した父母の因縁によって、神様から離脱した伝統を受けて、この世界がこのようになりました。ですから、真の父母が来て新しい主義を立てなければなりません。それが真の家庭主義です。真の家庭主義が出てこなければ、世界主義が出てくることができません。この真の家庭主義の代表者は、神様の真の息子にならなければなりません。彼は、神様の心情的なすべてのものを相続する内情的な相続者であり、外形的な相続者、そして、万物所有権の相続者にならなければなりません。

別の言い方をすれば、神様の心を相続することができる方であり、体を相続することができる方であり、万物を相続することができる方でなければなりません。そのような息子でいてこそ神様の代身者になることができます。その息子が来て、初めて天国が成されるようになるのです。

真の家庭主義は、神の愛主義です。愛がなければ、いくら世界の第一主義だと威張って歩き回っても、その人は不幸な人です。真の家庭主義は、父母が行けば、その息子、娘が父母のあとを永遠に従っていく主義であり、また兄が行けば、弟が永遠に従っていく主義であり、弟が行けば、兄が永遠に従っていく主義です。ですから、弟の国があれば兄の国が従っていき、兄の国があれば弟の国も従っていかなければなりません。

それでは、神の愛主義とは、どのような主義ですか。国境を超越して、このすべての平面的な世界を超越して、お互いが授受することにおいて、争って先に与えようとし、受けることを遅らせようとする主義です。そのような主義の世界が今後、訪れる理想世界です。理想世界は、何か大きな権勢をもって号令する世界ではありません。理想世界というもの

は、自動的に心が動いて神様の愛に和合することができる万民兄弟主義世界です。今後、そのような世界になるはずです。

四大心情圏と三大王権を私の家庭で花咲かせ、嫁に行って、妻をめとって、そのまま本郷の地に移しておくことが神様の創造理想でした。ここに、すべてのことがかかっています。ここに真の父と母、真のおじいさん、おばあさん、真の夫婦、真の子女がいるのです。天国にあるのではありません。ここで一つになって、もっていくようになっています。人類平和の家庭、王の家庭を築くことができる教材、テキストブックが統一教会にだけあるというのです。その教材をもってこられた方が真の父母なのです。真の父母の家庭には、真の父母のおじいさん、おばあさんもいらっしゃり、真の父母の息子、娘もすべているのです。その真の御父母様は、どのようなことをされるのでしょうか。世の中の国は、すべて滅びていきます。アメリカも滅び、イギリスも滅び、韓国も滅びる兆しでいっぱいでしょう？

真の父母は、家庭を収拾して国を収拾するのです。この二つの責任が真の父母にあります。真の愛と真の愛の生命の種で接ぎ木することにより、収拾することができるのです。人類が堕落したので、今日の偽りの愛、偽りの生命の種を受けました。これが野生のオリーブの木になったので、真のオリーブの木に接ぎ木して真の愛に接ぎ木し、真の愛を中心とした生命を再び受け継がなければなりません。そうでなければ、真の父母の血族になることができないのです。

今日の既成教会では、「イエス様を信じて天国に行く」と言うでしょう？　私たちは、「天国を成していく」と言います。天国は今、空いています。本然の理想的な家庭形態をもつことができず、これを成し遂げようとしましたが成し遂げることができなかったので、再臨時代にメシヤが来て成し遂げなければなりません。再臨主は真の父母です。そして、真の国の王、天地の王として来るのです。

先生は、天地の全体を代表して開拓した真の父母になりますが、それは一つの種と同じです。種を植えれば、それを中心として根から幹を経て芽が出てくるのです。千年、万年、いつまでも大きくなるのではありません。大きくなれる時まで大きくなって、次第に縮むのです。それと同じです。種は、実を結ぶようにしてくれるのです。

帰ることができなかった故郷を、真の父母を中心として真の国を成し遂げた立場で取り戻すことができるように、勝利的権限を下さったことが、天下を与えられても取り替えることができない有り難いことだということを知って、涙を浮かべながらその故郷の道を帰らなければなりません。

不平を言えば呪われます。先祖がしりをたたくので、今後、息子、娘が平安でなくなります。皆さんに対して薬を与え、病を与える時が来るというのです。

私たちは、サタンから生まれた堕落した人間なので、サタンの愛から出発しました。それで、神様の愛と真の父母を中心とした愛の因縁をもつことができなかったので、真の父

母の息子、娘になることができなかったというのです。

結局、メシヤとは何ですか。真の父母です。それでは、なぜ真の父母の愛を必要とするのですか。私が真の父母の愛を通して再び生まれなければ、生命が出発することができないからです。生命は、愛によって出発するのです。ところが、私たちは、堕落した生命から出発したので、これを否定して真の父母の愛と因縁を結ぼうとするので、真の父母の愛を求めるのです。それで、メシヤが必要なのです。

救世主、その方さえこの地に来られれば、その方の中では、神様が求めてこられた個人も生き返ることができ、神様が求めてこられた家庭も生き返ることができ、民族、国家、世界が生き返ることができるので、今日、道義世界を望んでいる数多くの民族は、「救世主よ、来たりませ！」と言いながら、救世主を待ち焦がれているというのです。

なぜなら、その方が完成した世界的な真の父母の立場にいらっしゃるので、私たちは、その方にさえ侍れば、真の父母の息子、娘になります。また息子、娘になって育ててもらえば、私たちも結婚して真の父母になることができるというのです。

統一教会の食口だけは、世界を兄弟のように考え、一つの国のように考え、神様を中心として一つの血筋を受け継いだ兄弟のように考えることができるのです。この運動が統一運動です。

先生が今まで四十年の闘争過程で滅びなかったのも、神様が願われるそのような考え、そのような思想をもったからです。神様と同じ立場にいるので、それを保護されるために滅びないのです。それと同じように、皆さんも自分を中心として考えるなというのです。このすべての国境を越えて、神様の息子、娘の代わり、真の父母の息子、娘の代わりとして生きるようになれば、今後、成されるすべての版図は、皆さんのものになるのです。

神様の理想が分からず、統一の概念が分からない者たちは、地獄に落ちるのです。彼らは、恥ずかしい姿になってしまうのです。皆さんは、子女です。今この時の皆さんは、子女になるのです。

旧約時代には兄弟でした。兄弟として長子権を復帰する、そのような時代は過ぎました。メシヤの心情は、父母の心情です。祝福を受けて、周囲の堕落した人々を一度見回してください。サタンは滅びていくのです。

歴史上のどのような聖人、賢哲、どのような孝子、忠臣を問わず、私が神様を愛することにおいては、彼らとはその根本が違います。私は、世の中を中心としてはいませんでした。完全に新しい次元において、神様の本然的愛を中心として、本然の愛による生命と一つになり、その生命と一つになった血統の因縁を自分が伝授されて、神様が「私の息子、娘を抱いた家庭だ」と誇ることのできる家庭が、今日の堕落した世界には一つもないというのです。家庭を夢見て、それを成すために送った方がメシヤであり、これがメシヤの使命なのです。

真の父母は、家庭を収拾するために必要です。サタンが家庭を破綻させておいたので、その混乱した家庭を収拾するために救世主が必要なのです。サタンが国を滅ぼしておいたというのです。家庭を破綻させて国を滅ぼし、神様の家庭と神様の国を永遠に編成できないようにすることがサタンの最高目的です。ですから、家庭をサタンから奪ってくるために真の父母が必要なのであり、サタンが滅ぼしておいたものを奪って、神様が願う国をつくるために救世主が必要なのです。

皆さんが知っているように、レバレンド・ムーンの夫婦は、真の父母という言葉で全世界に知られています。今日、私たち夫婦が本当に真の父母として真の愛、真の生命、真の血統によって神様と連結したということが事実ならば、この地上には、平和を成し遂げた「真の家庭と私」から解放と自由と統一と幸福の天国が芽生えてくることを記憶してくださるようお願いします。

神様が愛の理想を中心として、解放された位置に堂々とお立ちになり、「私は解放された天地創造の主人である！」と言って万歳をお叫びになることができるためには、地上で真の父母を中心として愛の因縁を、血縁的関係を結ばなければなりません。また、そこで血縁的関係を結んで生まれた息子、娘がいなければなりません。その息子、娘を中心とした家庭によって一つの国家、世界まで形成することが、創造主と全人類の歴史を通じた希望の基準だということを知らなければなりません。

父母の中の真の父母が神様です。神様は、私たちの真の父母だというのです。真の家庭の王、真の国の王、真の世界の王が私たちの御父母様だというのです。その方に侍ることができる千年太平時代を迎えなければなりません。韓国の「月よ、月よ、明るい月よ、李太白が遊んだ月よ……」という歌のように、この地上で御父母様に侍り、千年、万年生きたいという、そのような希望を成すことができる統一教会員各自の使命と、召命的目的があるということを知らなければなりません。

天地に運動する数多くの存在物の価値基準を決定し得る核心であり、中心が真の父母です。すべての存在の希望の価値を決定し得る要因が真の父母だというのです。したがって、神様が常に共にいらっしゃるのです。神様がそのようなお方としていらっしゃるからです。歴史的な結実を追求する原理の原因になるのであり、時代の中心であり、未来の主人が神様です。したがって、真の父母は、神様が臨在なさることができる中心本部なのです。

真の父母は、神様の体です。私たちに良心と肉身があるのと同じように、宇宙の原点、最初の出発点は神様と真の父母です。人を例に挙げれば、神様はアダムとエバの心です。それが平面的な心ではなく、立体的な心です。その立体的心と平面的心が自分の位置を決定することは、それ自体では不可能です。愛の力によって永遠の位置を決定するのです。真の愛の出発は、そこからなされます。そのようになる場合には、すべて一体です。良心に苦痛があるときには、肉身も苦痛を感じます。避けることができません。一体です。

真の父母という人は、神様の心の中における息子の中で、最高の息子だというのです。相対完成した永遠の息子として、その息子の歴史は、このようになってこそ永遠の息子が生まれるという神様の教本となるものであり、そのような歴史を残した息子だというのです。

神様が見ていらっしゃるレバレンド・ムーン、真の父母の価値と、皆さんが知っている価値とは、天地の差です。原理的な観点で、あまりにも差があります。神様の立場で見れば、レバレンド・ムーン、真の父母というものは、歴史始まって以来、創造の時代から願ってきたことです。真の父母というものは、堕落した人間たちが願う前に、創造された神様が願われたものです。創造する前から願われたものなのです。創世以前に神様が願われた目的だったというのです。

それでは、この被造世界は何億万年などと言いますが、何千万年の歴史を経ながら、創世以前の理想をこの地上に実現するために、あらゆる努力をしてきたのが今までの宗教歴史です。それが主流宗教の歴史だというのです。ユダヤ教は第一次選民、キリスト教は第二次選民、統一教会は第三次選民圏を通して出てくるのです。長い歴史時代を通して多くの犠牲者を出したのは、その一つの目的を再び取り戻すためなのです。

真の父母には神様の愛が宿っています。今まで私たちが考えることもできず、夢にも考えることができなかった、そのような神様の愛が宿っています。神様の愛を中心として父子の因縁が連結するのです。それゆえに、皆さんが祈祷するときには、神様を直接呼ぶのではなく、真の父母を通さなければなりません。皆さんが祈祷するとき、最後に真の父母の名によって祈祷するということは、簡単なことではありません。習慣的に感じる、そのような簡単な内容ではありません。

そのような内容が成される一つの起点は、天上ではなく地上だというのです。それで、地上で新しい天地が展開することを皆さんは知らなければなりません。真の父母との因縁は、霊界のような漠然とした世界ではなく、地上で連結します。真の父母は、実体を備えて地上へいらっしゃるというのです。ですから、真の父母は、私が呼べば返事をすることができ、私が難しい立場にいれば同情してくださるのです。このように平面的な途上において、真の父母に出会うことができるということが、人間にとってどれほど幸福で楽しいことか分かりません。

地上に生きなければならない人々は、本来神様の真の愛から生まれ、真の父母を通して真の子女を中心とした血縁関係を経て、この血縁的基盤を縦的として、世界に拡大しておかなければならなかったのです。そのような主体的家庭を中心として、相対的家庭によって連結した世界像、すなわち地上世界と天上世界が成し遂げられなければならなかったのです。これが神様の愛を中心とした創造理想世界です。

皆さんの中心は、イエス様を中心とした真の父母です。歴史的な万民は、真の父母を中心として一つにならなければなりません。ここから未来の伝統的起源が立つようになります。統一することができる伝統の起源は、こ

こからだというのです。三数の中心がここからです。それでは、私たち統一教会員は、どのような群れですか。真の父母の教理を教わり、真の父母の息子、娘になる群れです。真の父母の息子、娘にならなければならないという教理を教える所は、統一教会しかありません。

それゆえに、統一教会は、歴史が探し求めてきた中心である真の父母に侍ることができる所です。時代が要求する中心である真の父母に侍ることができる所です。未来の起源となることができる真の父母の因縁を、私が相続することができるというのです。したがって、私は、歴史的な結実です。私は、時代的な中心です。未来の起源となるのであり、先祖になるのです。真の父母の心情と一致することができる因縁を結んでこそ、そのようになる事実を知らなければなりません。このような心をもって、このような祈祷をすれば恥にはなりません。

これを何によって統合するのですか。真の父母の愛によって統合させなければなりません。誰に統合させるのですか。息子、娘に統合させなければなりません。その息子、娘とは誰ですか。真の父母の愛を中心とした息子、娘です。別の言い方をすれば、堕落していないアダムとエバが生む息子、娘と同じです。ここから天国の息子、娘になることができるのです。したがって、今日、三時代の愛の因縁をもって生まれた位置が、真の父母の息子、娘になる位置です。たとえ人間が堕落したとしても、歴史過程をさかのぼっていき、その位置を取り戻さなければなりません。

真の父母と生活すれば、どのようになりますか。個人的な生活、家庭的な生活、氏族的な生活、国家的な生活、世界的な生活、天地においての生活、神様に侍る生活、すべてが通じるのです。皆さんが真の父母の家庭を中心とすれば、氏族も皆さんの家庭であり、民族も皆さんの家庭です。私の家庭です。民族も私の民族であり、国家も私の国家であり、世界も私の世界であり、天地も私の天地であり、神様も私の神様だというのです。このような観念を知らなければなりません。すべて真の父母と一つになっているのです。

真の父母は、神様と一つになっているのですが、神様は世界人類と共に生きようとされるのであって、一つの宗派と共に生きようとはされないのです。宇宙と共に、理想世界全体と共に、その愛を中心として生きたいというのが神様の創造理想であり、神様の家庭を中心として始まる生活方法です。

霊界に行けば、アダムとエバが神様の形状に似て神様と一つになるのと同じように、皆さんが真の父母を通さなければ、神様の形状を完全に受け継ぐことはできません。

また、神様がアダムとエバを中心として愛の世界を成し遂げることができなかったので、真の父母を通して愛を再現させるのが復帰です。

今すべての父母が「レバレンド・ムーンが真の父母ならば、私たちは何だ」と言いながら大騒ぎです。聖書を見れば、来られる主は真の新郎だといいます。それでは、自分の新郎は何になるのですか。それは偽りの新郎で

す。そのようになるのです。聖書には二人の人の話だけが出ています。一人は新郎、一人は新婦です。本然のエデンの園における理想的な新郎はアダムであり、新婦はエバでした。彼らは、神様が造られた理想的なカップルだったのです。

かわいそうなアメリカの家庭に、真の父母を教えてあげたという事実は驚くべきことなのです。真の父母を知るようになったという事実は、驚くべきことです。また真の兄弟、真の家族を取り戻したという事実は、驚くべきことです。真の家庭、それ自体をアメリカが本当に願うのであり、真の世界が願うのであり、真の宇宙が願うのです。ところが、アメリカの人々は、父母の愛を知ることができません。それが恨です。

王は、自分の国の家庭のために自分の息子、娘を犠牲にさせ、王自身が犠牲にならなければなりません。そのように犠牲になっても、自分の民族を食べさせて生かす責任を果たす人が善君です。それで、母と息子が一つになり、王と一つになるのです。このように、この王が父母の愛をもってよく食べさせるようにし、すべて投入して、投入して、投入しなければなりません。それが善なる王です。

真の父母になれば真の子女が出てきて、真の家庭が出てきて、真の氏族が出てきて、真の国、真の世界がここから自動的に生じるのです。その中で「真の父母」という用語が最も重要です。

二　神様は縦的父母、真の父母は横的父母

真の父母は、神様が創造される前、神様の心の世界から始まったというのです。神様が創造されたすべての理想は、真の父母を中心とした愛の理想を表題として始まったので、「真の父母」は、創造前から神様が願われた希望の言葉だということを知らなければなりません。

真の父母を探し出すために、神様の摂理路程において数多くの人々が犠牲になったという事実を知らなければなりません。神様は、数多くの宗教を立てて摂理してこられました。宗教の中では、天使世界の宗教、カイン的な宗教、アベル的な宗教、庶子的な宗教、養子的な宗教、庶母的宗教、養父母的宗教、それから真の母の宗教、真の父の宗教があります。

新教と旧教が、神様の摂理の全体的なみ旨に合わせて世界を指導する責任を負ってきたすべての宗教圏を統合し、一つの国、一つの世界、一つの平和世界を成し遂げなければなりません。一つの平和世界を追求する神様のみ旨を完成させようという数多くの宗教が現れたのですが、その主流宗教がキリスト教だったというのです。

キリスト教は、何を教えるのですか。真の父母と愛を教えるのです。イエス様に関しては新郎だという話を教えてあげ、兄弟だという話を教えてあげ、神様に関しては父母だという話を教えてあげました。家庭的理想を中心とした内容を全面的に備えたものがキリスト教なので、そのキリスト教は、神様が理想とされる家庭を全面的に完成させられる内容を教えてあげたというのです。それゆえに、

数多くの宗教を越えて、キリスト教だけが世界を統一したのです。

それでは、再臨主とは誰ですか。エデンで真のお父様と真のお母様を失ってしまったので、真のお父様としてこの地に来られ、真のお母様を立て、神様との心情的一体を中心として、血統的一体、血肉の一体を中心とした神様の家庭にならなければなりません。神様をお迎えして暮らすことができる第一次の家庭がメシヤの家庭だというのです。

メシヤとは、完成したアダムの位置をいうのです。完成したアダムとエバが夫婦を成し、神様をお迎えして暮らし、神様を中心とした息子、娘を生んで、神様の一族を生み、この地上で生きて、神様と共に天上世界へ移っていくのが天国だというのです。

見えない針の先端が神様ならば、見える先端は私たち人類の先祖です。それで、神様は垂直的な父母です。そのような神様が霊界で息子、娘を生めばどれほど良いでしょうか。しかし、霊界では生産ができないのです。

神様はなぜ、横的な父母アダムとエバを造られたのですか。アダムとエバは、天国の民を生産するための生産工場として造られたのです。なぜなら、垂直には一つの焦点しかないので生産できないのです。中心で生産すれば、どのようになりますか。今までのすべてのものを押し出さなければならないという結論になるのです。そのように、垂直には一点しかないので生産が不可能なのです。

赤ん坊は、神様が産むのではありません。真の父母を通して生むのです。横的な真の愛の父母の位置に立った方が誰かといえば、今日の統一教会でいう真の父母です。神様の前に、縦的な愛を中心とした真の父母の前に、九〇度を備えた横的な愛をもった方が真の父母です。それゆえに、二つの父母の愛が必要なのです。一人のお方は、創造主である父母であり、一人のお方は、被造物の、神様の対象として理想を描きながら造られた肉的な父母です。それゆえに、神様は心的な父母の位置にいらっしゃり、真の父母は肉的な父母の位置にいます。このように、縦的な愛と横的な愛を中心として生まれなければならなかったのが人間でした。

皆さんもこれに似なければならないので、自由に縦的な愛に似るようにするために「縦的な私」がいるのです。それが心です。今まで心が分かりませんでした。仏教でも心を知りません。しかし、統一教会では心を知っています。神様の創造理想を通して縦的な愛の前に、横的な愛を中心として、それから前後の愛、球形的な理想を描いてこそ、東西南北に通じる力の消耗がなく、いつ作動しても良いことばかりであって悪いことはないというのです。相克がないというのです。

皆さんの心は縦的な私であり、体は横的な私です。真の愛を中心として、この点で一つになるのです。そうでなければなりません。皆さんの心と体は闘うでしょう？　なぜですか。堕落したからです。これがどのように一つになるのですか。真の愛がなくては一つになりません。

ここで、神様のように真の愛を通して一つになれば、そのまま天国に行きます。救世主が必要ないのです。そのまま入っていくのです。

天の王は縦的な中心となって心の位置に来て、地上の王は体になるのです。それゆえに、完成したアダムとエバの理想的結婚式は、神様が中心になり、アダムとエバが体となってする結婚式です。それが神様の結婚式であり、アダムとエバの結婚式だというのです。

カインとアベルが一つになって神様の前に帰る時、初めて横的基盤が築かれるのです。神様の前に帰ろうと思えば、どのようにしなければなりませんか。真の父母を通して行かなければなりません。このように完全に一つになったその場を中心として、主である真の父母が来る時まで引っ張ってきた歴史がキリスト教歴史です。それが霊的なキリスト教歴史だというのです。

皆さんも先生が行く天国に行こうとするなら、資格がなければなりません。それをもとうとすれば、先生のみ言どおりに一つでもしなければなりません。それによって皆さんがどのようになりますか。皆さんが真の神様、真の父母、真の国、真の世界、真の天国を中心として、愛で連結される価値をもつようになります。神様を、私個人のお父様であり、家庭のお父様であり、その次には国のお父様であり、世界のお父様であり、すべての天地のお父様として侍り得る権限を得るというのです。言い換えれば、神様を私の個人的なお父様として侍ることができ、家庭的なお父様として侍ることができ、氏族的なお父様として侍ることができ、民族的、国家的、世界的なお父様として侍ることのできる権威を相続されるというのです。

それは、父母になるための神様であり、父母の立場にいらっしゃる神様だからなのです。それで、個人の神様であると同時に、個人のお父様であり、家庭のお父様であり、氏族のお父様であり、民族のお父様であり、国家のお父様であり、世界、天の国のお父様だというのです。それは世界でも同じであり、霊界でも同じです。

先生のものは私のものではありません。これは人類のものであり、神様の愛を中心として一体となった、堕落の侵犯とサタンの讒訴圏から外れた、本然の所有決定の条件基地だと考えるのです。アベル、天の側の愛を中心として相続された所有物だというのです。初めて地上に、真の父母を中心として神様の所有が生まれるのです。それゆえに、統一教会では、物を買ったなら売ってはいけません。必ず真の御父母様が手放すという方式を経なくてはいけません。それゆえに、先生が一度買ったものはこじきになっても売ろうとしないのに、それを売り飛ばした者たちは、あとですべて法に引っ掛かるのです。

真の父母は、神様の愛と一つになった所有を決定されましたが、この横的な祝福を受けた家庭に、父母の位置に進んでいける道がなければなりません。しかし、そのような愛を中心とする所有の決定を父母から受けることができませんでした。ところが、「父母の日」を共に記念することによって、皆さん自身にも、今まで万物から子女、このように逆

に上がっていったものが、この直接主管圏時代に来て平面で連結するのです。ここで個人、家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、この七段階の形態がすべて成され、中央線に連結されなければなりません。それは、男性の七段階、女性の七段階を中心として、すべて連結するためなのです。

救世主がこの地上に来られる時は、自らの新婦を取り戻されるというのです。真の女性を取り戻さなければなりません。真の女性を取り戻すことによって、神様を中心として歴史上初めて、堕落しないで完成できる縦横が連結するのです。内的天のお父様と外的真の父母を通して初めてこの地に着陸して、天国と直通する道が連結するのです。

先生は、歴史始まって以来世界人類の中で、最も多くの迫害を受けた人です。多くの反対を受けた人です。一つの時代において、個人的にも世界的迫害を受けなければならず、家庭的にも世界の迫害を受けなければならず、それから氏族も同じです。統一教会の氏族は、世界の祝福家庭を通して全世界百六十カ国のすべての民族に接ぎ木しなければなりません。それを復帰していくのです。氏族的に、それから民族的に、その次には国家的にしていくのです。

皆さんは、先生が世界的条件を中心として勝利した基盤の上にいるので、先生の心情を受け継がなければなりません。その心情を受け継いで、「私は真の父母の息子、娘であることに間違いなく、アベル的立場に生まれたが、この世界のカインを屈服させることは間違いない」と言うことができなければなりません。

なぜなら、それは霊的な面において完全に勝利の基盤を築いたので、実体圏にある力は消えるようになっていて、押せば、引くようになっています。

皆さんは、ただの一個人ではありません。「自分は世界全体を代表した中心だ」という観念をもてば、それがそのようになるのです。誰でもそのような考えをもって世界を代表しています。息子、娘は父母を代表していて、父母はその一家を代表しています。同じです。感謝しなければなりません。

「摂理は自分のためのものだ」というその内容は、簡単なものではありません。自分が負債を負っていくことなので、四方を見ることができないくらい恥ずかしさを感じることができなければなりません。一時でも、そのような過程を通過しなければなりません。父母によって自分が生まれたことを幸運だと考えて孝行をするならば、すべての歴史が自分のためにそのようになったと考えれば、その孝行以上に国と世界を愛さなければなりません。そのような関係をもって行かなければできません。そのような主体性をもった息子、娘が、真の父母の息子、娘になり得るということを記憶してくださるようにお願いします。

今日、私たちが生きているこの世界に真の父母を迎えましたが、この地には、真の父母の息子、娘だけが生きているのではなく、堕落した父母の息子、娘も生きています。本来は、真の父母の血肉を通して、神様の愛する

息子、娘になるはずだったのですが、堕落により、堕落した息子、娘になったので、私たち人類始祖が誤ったことを、すべて解怨成就してあげるために再び来られる父母が再臨主であり、救世主だというのです。ですから、その方が来られて、先に生まれた長子を復帰しなければなりません。その長子が庶子のようになりました。血筋が変わりました。庶子と同じです。本然的愛では、神様の血統を受けたのですが、堕落することによって、他の血筋を受け継ぎました。だからといって神様が捨てることはできません。

皆さんが労働をするのは創造です。一生働いても疲れを感じないで、神様の愛の世界に接触することができ、神様を慰労し得る道を訪ねていくことが愛の一生だというのです。神様が創造されたものを、私が趣味と思い、楽しく天の記念品にしていくと考えて生きなければなりません。

それで、真の御父母様がそのように自然を求め、海という海、五大洋六大州、川という川、山という山、景色の良い所をすべて実地調査しながら生きるのです。皆さんも、そのように神様の愛をもって自然の嘆息圏を解放させるという真の父母の生活に従っていきますか、都市にいて自分個人を中心として環境を破壊し、公害を起こし、子女の情緒的側面を発展させることができる道を妨げる父母になって生きるつもりですか。このようなことを比較してみる時、先生がこのように自然を愛していった道を統一教会の食口たちは自然に従っていくので、都市分散、自然化した都市世界、自然と和合し得る理想的天国が可能だというのです。

神様が生きていらっしゃるということが本当に実感できます。韓国の独立万歳運動の指導者が三十三人です。韓国の反対側がウルグアイですが、ウルグアイの独立軍指導者も三十三人です。南米の国も三十三カ国で、今私がジャルジンに行って仕事をしていますが、そこも都市が三十三だというのです。本当に不思議です。その周囲にある主要都市が三十三だというのです。それは本当に不思議です。

摂理のみ旨を見れば、神様が生きていらっしゃるからそうなのです。ですから、三十三人にしなければいけません。自分まで入れれば三十四人です。重要です。国家的メシヤと、何が何でも一つにならなければなりません。不平を言ってはいけません。絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなさいというのです。

三　神様を解放する真の父母

悲惨にも、神様が理想とされた真の家庭は実現されませんでした。エデンの園で蛇はエバを誘惑し、エバはアダムを誘惑して、利己的な偽りの愛をこの世に植えました。人類の罪と不幸は、人間の先祖アダムとエバがサタンを動機として結ばれた不倫なる愛の結果から始まりました。

個人を復帰して、真の家庭を復帰して、真の愛と善を世界的基準に拡大しなければなりません。ただ、この真理だけが争っている教派を一つに統一することができ、また地上天国を成すことができるという事実を知っている私は、五十年前にこの啓示をキリスト教徒に明らかにしました。私は、もう一つの分離

された教派をつくる意向は絶対にありませんでした。

しかし、神様のメッセージは、既成教団から拒否されて迫害を受けました。私は、やむを得ず他の基盤を築かなければならなかったのであり、過去四十三年の苦労がそれでした。

一九五四年、韓国で「世界基督教統一神霊協会」として始め、日本、アメリカ、ヨーロッパ、そして、全世界に宣教師を派遣しました。この基盤の上に私たち夫婦は、多くの団体を立て、真の家庭の原理が学術、言論、宗教、芸術、産業分野等で扱われ、この世界を蕩減復帰することができる標本と典型をつくろうと努力しました。

エデンの園で失ってしまったすべてのものをどのように復帰するのか、これが先生の還故郷という考えです。故郷へ帰らなければなりません。それで、氏族的メシヤと国家メシヤを派遣しました。神様は、イエス様という一人のメシヤしか送ることができませんでした。そのメシヤは、氏族を解放するメシヤでした。今この時に、先生は、神様の立場で百八十五カ国に国家メシヤを派遣しました。その国家メシヤは、イエス様の時の氏族的メシヤより次元が高いのです。

そのようなコンセプトがイエス様の時にはありませんでした。十字架ですべてのものを失ってしまいました。家庭がなかったのです。それで、天国に入っていくことができず、楽園にとどまるようになったのです。本然の天国では、家庭から氏族、民族、国家へと続いていくのです。

イエス様は、家庭を成し遂げることができませんでした。エデンの園でも、家庭が失敗したのでアダムが追い出されました。それを復帰するために真の父母が現れ、失ってしまった家庭以上のレベルである国家基盤の上でメシヤを派遣したのです。

人間が堕落することにより、神様を失ってしまい、真の男性、真の女性、真の夫婦、真の子女の位置を失ってしまいました。粉々にすべて壊れました。堕落した人間たちは、神様と一つになることができません。神様に侍ることができる真の男性と女性が一つになり、離れようとしても離れることができず、別れようとしても別れることができない真の夫婦を成して、真の息子、娘を生まなければなりません。すなわち、神様を中心とした真の父母、真の夫婦、真の息子、娘となって四位基台を成し遂げなければなりません。

したがって真の父母は、神様をお迎えしてきて、すべての家族の中心にならなければなりません。ここでの生活制度は、万民が生活することができる生活制度であり、ここで望む国家観、ここで論議される世界観、ここで教える理念は、全世界の万民が共通してもたなければならない国家観であり、世界観であり、理念だということを知らなければなりません。

ところが、これがそのようにできないので、現在、修羅場が展開されるのです。しかし、人類は、今まで一つの門に向かって終末の時を願ってきたのです。真の父母の願いは、人類が神様を中心として真なる家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙を成し遂げることです。

そのようになれば、神様の愛までも復帰することができるのです。

神様の怨恨とは何でしょうか。民族を抱えて泣かれ、地に対して泣かれましたが、神様が願われる勝利した息子を抱いて喜びの涙を流せないことが天の怨恨だというのです。すなわち、天から「あなたは勝利した息子だ」と認められる人がいないことが、天の怨恨であり悲しみです。

それだけではなく、失った息子、娘を復帰するために、そのようにさまよわれた神様を抱いて泣いた人が一人もいなかったというのです。

「神の日」において、人間として成してさしあげなければならない神様の願いとは何かといえば、神様の真の愛を中心として神様を完成させてさしあげることです。神様を完成させようとするならば、人間が完全な主体の前に完全な対象の位置に立たなければなりません。それが真の父母です。また、神様を真の愛を中心として解放しなければなりません。それを誰を通してするのですか。真の父母を通してするのです。このような内容を知っているので、神様を解放してあげることができるのです。

主体的神様を中心として、先生がマイナスになって一つになったのと同様に、皆さんが真の父母を中心として、実体的にプラスとマイナスになることによって、神様と一つになった位置に思いのままに行くことができるのです。再創造原理がそのようになっています。

先生が祝福してあげることによって、神様を中心とした一族、一国が、一世界、天上天下に垣根がつくられるので、神様が解放されるのです。

神様の胸に打ち込まれた釘を、地上で真の父母の胸に打ち込まれた釘を抜かなければならない責任者とは誰ですか。真の父母だというのです。また、そのことを最後にしなければならない人が、お母様です。お母様を前面に立てて世界を巡回するのです。女性たちは全員、お母様の代わりにならなければなりません。

今日の歴史は、父母を取り戻さなければならない歴史的な方向に流れています。神様がいらっしゃるならば、その神様を中心として創造の目的を完結させることができ、すなわち救援の目的を完結させることができる真の父母がいて、その真の父母が神様に孝心を尽くさなければなりません。同時に天使たちは、その真の父母の息子、娘を中心として忠誠の道理を果たすのです。それが本然の創造原則ですが、それが壊れてしまったのです。ですから、私たちは、それを再現させて蕩減しなければなりません。失ってしまったのならば、失ってしまったその姿どおりに取り戻さなければなりません。

皆さんは、父母が所有する父母の息子、娘ではなく、先に神様の息子、娘にならなければなりません。堕落していなかったならば神様の息子、娘ですが、逆になっています。今は、神様の息子、娘になることができなくなっています。ですから、真の父母の息子、娘になったという条件的基準で、根が違うので

その根を切り捨て、大木の根元を切り捨ててここに接ぎ木をし、先生を中心として新しい芽を連結するのです。接ぎ木をするのです。それが神様を解放してさしあげることです。

キリスト教だけでも数百の教派に分かれ、教派間で闘っています。そのように闘うところが神様の肢体と神様の踏み台になることができますか。できないというのです。そのような観点で見てみるとき、神様が思いどおりにできる教派がないというのです。

それでは、神様にこの地上で天国を成し遂げようという理念があるならば、神様はどこに行かれるはずですか。仕方なく一つの家庭でも訪ねていかれるしかないという結論が出てきます。

それでは、父母が神様と直接一つになり、その父母を中心とした子女が父母と完全に一つになり、神様がその家庭の唯一の主人になり、その家族が主人である神様の家族になり、その家庭の所有が神様の所有になる、そのような家があるかというのです。

アダムとエバがエデンの園で夫婦になることができなかったことを、歴史時代を通して克服してきたすべての結果を締めくくるものとして、真の父母を再現するその祝宴が「小羊の婚宴」です。「小羊の婚宴」を通して真の父母が結婚式をもつならば、その息子、娘もその伝統に従って結婚することにより、すべてのものを真の父母の理想に、神様の願われる愛の世界に包括することができるのです。

その中心から全体の環境的要件まで、自分と接触させることができる愛の解放的王子、王女として登場する家庭が、私が暮らすことのできる私の家庭だったのです。神様の家庭であり、私たち人類の家庭であり、私の家庭だったのです。それが大きければ大きいほど、神様と、人類と、愛することのできる国を代表するのであり、それが平等と統一がある愛の天国だったというのです。

アダムが堕落することにより、偽りの父母が生まれたでしょう？　ですから、真の父母が現れなければなりません。偽りの父母は、サタンを根拠として生まれたので、神様を中心として真の父母にならなければならない本然の創造理想が残っているというのです。それゆえに、堕落したアダムを救い、本然の真の父母の理想を地上に実現しなければなりません。

それでは、どのような力でできますか。偽りの父母を通して生まれたこの世界人類が、もし堕落していなかったならば、神様の息子、娘になり、本来真の父母の息子、娘になっていたのです。それが創造原理なので、偽りの愛によってこのようになったことを放棄できないというのです。

皆さんがいくら忠臣の家庭になったとしても、国がなくなる時にはなんにもなりません。国でいくら忠臣でも、国がない時は歴史に定着できる基盤がないというのです。ですから、家庭を通して国を取り戻さなければならず、国を通して世界を取り戻さなければならず、世界を通して天宙を取り戻さなければなりません。そのようになれば天宙の主人です。

ですから、個人は家庭のために投入しなければなりません。投入して忘れてしまわなければなりません。「ため」に生きて犠牲になりなさいというのです。個人は家庭のために、家庭は氏族のために犠牲になるのです。氏族は民族のために犠牲になり、すべて犠牲にならなければなりません。民族は国家、国家は世界、世界は天宙、天宙は神様のために犠牲にならなければなりません。神様まで行くようになれば、神様も犠牲になり、私に戻ってくるというのです。そのまま流れていくのではありません。最後に神様に投入して忘れてしまえば、神様がすべて所有され、それに愛を加えて天地の世界を私に与えてくださるのです。

人類の解放とともに神様が解放されることを知らなければなりません。皆さんの家庭が解放されることは、家庭を失ってしまった神様の悲しみを私が慰労してさしあげることです。一族を解放させ、一族を失ってしまった神様の悲しみを慰労して、一国を私が建国し、神様が国を失ってしまったことから解放してさしあげなければならないのです。先生の一生は、失ってしまった天宙を取り返して、神様の悲しみを慰労するということです。私の願いはありません。私の考えはありません。絶対信仰、絶対愛、絶対服従するのです。「死になさい」と言えば直行します。死んでも戻ろうと思いません。

それで、神様を完成させて、神様自体を永遠にサタンから解放しなければなりません。自然監獄に閉じ込められたのと同じように、捕らわれの身になったことを解放することができる息子にならなければなりません。それでこそ、家庭で解放されなかった恨を抱かれたかわいそうな神様が、終わりの日に世界と天宙で解放され、初めて自分の姿勢を備え、神様を中心とした家庭愛、氏族愛、民族愛、国家愛、天宙愛の法度を中心とした主権を立てることができるのです。

四　真の父母は天国への通路

アダムとエバの位置が、神様に代わる位置であり父母の位置ならば、先生も霊的に見れば父母の位置、神様に代わって地上を代表した位置にいるのです。この地を通して霊界に行ったすべての霊人たちは、アダムとエバを追いかけていったのです。ですから、先に行った霊人たちは天使世界に属しています。したがって、皆さんを思いのままに後援することができるというのです。

今、霊界に行っている霊人たちは、真の父母を通して生まれずに、偽物の父母を通して生まれたので、真の父母を協助することができません。しかし、天使長が失敗したすべてのものを蕩減して、子女の位置でアダムとエバが成長しているそのような立場に対しては、いくらでも後援することができるようになっています。それゆえに、霊界が協助することにより、世の中がますます短期間のうちに崩れていくというのです。

父母がお互いに愛し、息子、娘を愛しながら、国を代表してそれを見せてあげ、その次には天地に代わってそれを見せてあげ、自分の親戚に代わってそれを見せてあげ、父母を通じて見せてあげ、兄弟を通じて見せてあげるように教育しなければなりません。これが

世界から順番に下りてこなければなりません。天地を愛する標本、世界を愛する標本、国を愛する標本にならなければなりません。将来において、見せてあげることができる教科書にならなければなりません。

それだけではありません。主人にしようとするので、父母の心情と、先生の心情と、神様の心情を知って所有権を相続しなければなりません。教会に入ってきて再び生まれ、教育を受けて完成するのです。成長すれば、すべてのものを知るようになるのです。私も主人の位置に立ちたいと思うようになります。すべてを相続するのです。それが主人です。どこでも同じです。それが主流思想です。こちらについていっても真の先生に会い、あちらについていっても真の父母に会うのです。すべて同じです。それゆえに、天国はどこに行っても同じだということができます。

皆さんが残さなければならないことは、天から真の愛、真の父母から真の愛を受け継ぐと同時に、真の血統を受け継がなければなりません。これが誇りです。これが変われば、天国に行くことができないのです。行けません。結婚というものは、それ自体が父母様の愛を受け継ぐことです。皆さんは、堕落したために真の血統をもつことができなかったのです。真の血統は、祝福によってのみ可能です。堕落した世界の根は、堕落した父母です。それで、真の父母を中心として新しく接ぎ木をし、新しい真の血統を受け継がなければなりません。そのような位置が統一教会の祝福の位置だということを知らなければなりません。

「重生」という言葉があるでしょう、生まれ変わるという言葉です。ニコデモが夜にイエス様を訪ねてきて、生まれ変わるということに対して尋ねた時、イエス様が「あなたはイスラエルの教師でありながら、これぐらいのことが分からないのか」と答えられたのですが、重生は再び生まれるということです。生まれ変わるというのです。生まれ変わるということはどういうことですか。偽りの父母から生まれた人が、真の父母を通して再び生まれることを意味するのです。再び生まれる時、神様の愛、神様の生命、神様の血統を受け継ぐためには、「サタン世界の愛と、サタン世界の生命と、サタン世界の血縁とは全く関係がない、それは意識にもない」と言うことができるようにならなければなりません。

堕落する時と反対に、真の父母を通して、イエス様を中心として二人が一つになって蘇生、長成、完成の位置に復帰してあげなければなりません。アダムの息子、娘を霊界と肉界が一つにして、イエス様の息子、娘を一つにして、再臨時代にも一つにして、すべてここに入ってこなければなりません。このようにすることによって、アダムの息子、娘になるというのです。

皆さんには、父母がいて、息子がいて、万物がありますが、家庭教会はこのような姿を拡大させたものです。アダムが堕落により、この三つを失ってしまいました。ですから、この三つを一度に取り戻し、神様に捧げなければなりません。失ってしまったものを取り戻し、真の父母を通して神様に捧げようというのです。

ですから、神様を経てこなければなりません。失ってしまったものを探してあげ、神様が所有され、父母から再び相続しなければなりません。それでこそ皆さんの家が生じ、皆さんの世界が生じるということを知らなければなりません。

その基台が、正に家庭教会です。これは何かというと、祭物です。これは、一つの祭壇です。ここで三大祭物を捧げるのです。

自らのものをすべて自分の所有圏にはできないのです。自らの所有圏をもてばサタンです。私のものという心をもてばサタンです。本来の神様のものに帰らなければなりません。帰るには、そのままでは帰ることができません。天使長を通して、エバを通して、アダムを通して神様に帰るのです。それは何かというと、真の父母を通して帰らなければならないという意味です。皆さんが着た服も、皆さんのものではありません。

家庭を築くためには、皆さんに所有圏や所有観念があればできません。私は誰々の父だ、という所有圏を越えなければなりません。私は何をもっている、という所有観念を越えなければなりません。これがすべて神様の所有になり、そして、神様が本来人間をすべての万物の主人として造られたので、真の父母を中心として真の父母の所有の系統を通したのちに、三段階ごとに神様に公証され、真の父母から皆さんが所有権を伝授されて、初めて皆さんの所有権時代が来ることを知らなければなりません。

皆さんが天国の所有を受けるためには、皆さんの財産、息子、娘、皆さんの一身、すべてを捧げなければなりません。旧約時代型、新約時代型、自分自身をすべて神様の前にもっていって所有権を決定し、「あなたの家庭は私の家庭であり、あなた方はすべて私のものであり、あなたの息子、娘は私の息子、娘である」と言うことができ、神様の物、神様の息子、娘、神様の分身という公認を受け、神様が「今はもう必要ない」とおっしゃり、真の父母を通して、父母を通して、母を通して、息子を通して相続する時、初めて皆さんにおいて天上世界と地上世界の所有権が決定するのです。愛の所有権ではなく、万物の所有権が決定するのです。堕落の愛によって、すべてのものが堕落の所有として決定したのと同じように、本然の愛によって、すべてのものに対する所有権が決定するというのです。

所有権を神様に返してさしあげるためには、真の父母の名前を通さなければなりません。真の父母の名前を通さずには帰る道がありません。それゆえに、世界統一は統一教会を中心として成就せざるを得ません。手をつけなくても、争ってより早く入籍しようと列を成して待つようになるのです。最初になるか、二番目になるか、三番目になるかを争いながら、必死になって闘う時が来るでしょう。

個人が行く道も真の父母を通して、家庭が行く道も真の父母を通して、氏族の道も真の父母を通して、民族の道も真の父母を通して、国家の道も真の父母を通して、世界の道も真の父母を通して、天国に行く道も真の父母を通して行かなければなりません。そのような道を真の父母が築くために、一生を懸けて受

難の道を歩いているという事実を知らなければなりません。

真のアダムは、真の父母です。真の父母の言語は、真の子女が真の父母を通して引き継ぐ言語です。それが原理です。真の父母は、レバレンド・ムーンとして来たのではありません。天から来たというのです。神様から来たというのです。それゆえに、神様が分からない人は真の父母が分からないとみなすのです。

皆さんが生んだ息子、娘は、神様が四千年間準備して生んだメシヤ、イエス様より立派になることができる息子、娘です。イエス様の父母がいるならば、その父母が祝福を受けてイエス様を生みましたか。皆さんは、真の父母を通して祝福を受けて生んだというのです。

祝福は、先生の主張ではありません。すべて神様が教えてくださるとおりに処理し、このような論理体系を間接的につくりました。私がもともと分かっているならば、私の口で話をします。ですから、どのようにも否定する道理がありません。

復帰するためには、母の腹中で絶対的に一つになり、父母が率いた世界の人と絶対的に一つにならなければなりません。それは、女性が一つになるようにしなければなりません。女性が堕落することにより、真の父母を失ってしまい、神様まで失ってしまいました。今、女性が復帰されることにより、神様と真の父母を知ったので、その真の父母と完全に一つにならなければなりません。真の父母を通して生まれなければならない全人類が、偽りの父母を通して生まれ、偽りの父母になったので、女性が彼らを真の父母のように愛することができる運動を起こしてこそ、世界は復活して解放が展開するのです。その運動が「世界平和女性連合」の運動です。

それで、世界的な基準で家庭と相対するのです。家庭では、母と息子、娘が一つにならなければなりません。そして、父と一つにならなければなりません。ところがこの父は、偽りの父だというのです。ですから、真のお父様が来られれば、この真の父母を中心として一つになり、母と息子、娘が偽りの父を教育しなければなりません。そして、一つになって本然の家庭を復帰するのです。母と息子、娘が父を救ってあげなければなりません。

地上に生まれたすべての人間の中で、真の父母を通して生まれた人は一人もいません。真の母、真の父、真の父母の血統を受けずに生まれた者は、天国に入っていく道がないというのです。神様の創造理想から見れば、真の父母の血統を受け継ぎ、真の父母を天上天国、地上天国の王権の主人として仕え、親族圏内で愛を中心として真の御父母様と共に暮らし、自分も結婚して子孫を残し、そのまま移るところが天国です。ですから、皇族圏の愛を中心として、体恤した経験をもたない人は天国に入っていくことができないのです。

勝利した真の父母と、国家的に祝福を受けた家庭が一つにさえなれば、その国が帰ってくるようになります。国連で真の父母と国連の各国が決定さえすれば、一日で復帰できるのです。そうすれば、祝福さえしてあげれば

よいのです。堕落は、結婚式を間違ったのです。神様と真の父母を通して、正しい結婚さえしておけば、完全に復帰するのです。来たる再臨主がすべてのことを勝利したので、思いどおりにしても、サタンはこの横的な線を侵犯することはできません。

サタンが最も無念で悔しいこととは何かというと、皆さんが真の父母に出会ったという事実、その次には、真の父母が皆さんに、「皆さんが真の父母の息子、娘だ」ということを教えてあげたことです。このように教育することを最も嫌い、最も恐れます。ですから、その伝統を見習うことが問題です。

皆さんの希望がほかのところにあるのではありません。真の父母の息子、娘になるのです。真の父母の息子、娘となり、真の孝子、孝女になるのです。その真の父母が、今後天下を中心として地上の王の王になるのです。それゆえに、人類の希望や歴史の希望、時代の希望、すべての希望の中心が結実することができるところがここです。

原理で見れば、真の父母の愛が成したその基盤の上で、万物が支配されるようになっているので、このような愛の内容を皆さんが決定的に備えたのかという問題が、何よりも重要な問題なのです。

養子が直系の位置に行こうとするなら、アダムとエバの時代に天使長がもった心情的なすべてのものを蕩減しなければなりません。猜忌というものを蕩減するためには、信仰の息子、娘が信仰の父母の腹中にいる息子、娘を、自分の生命より貴重に思い、愛さなければなりません。その次にサタン世界を取り戻さなければなりません。このような内容は、すべて本質的な内容です。

それは、皆さんが先生の息子、娘を愛さなくては入っていくことができないという意味です。腹中から愛したか尋ねてみなさいというのです。先生を愛して、神様のみ旨をもっと愛して、腹中から私の息子、娘を自分の体よりも愛したのですか。問題は、自分より愛したのかということです。イエス様は、「自分の息子、娘より、自分の家族よりも、私を愛したのか」と言いました。これをしなければ行くことができません。それが引っ掛かっていれば、今からでも三年間で蕩減しなければなりません。

イエス様が氏族的なメシヤとして立つためには、ヨセフ家庭とザカリヤ家庭が一つになった基台をつくらなければなりません。そして、国家を蕩減しなければならなかったのですが、それができませんでした。しかし、統一教会は、この国家に対して蕩減することができる民族的基盤を築いていっています。今は、氏族時代が過ぎた基台の上にいます。

一つは真の御父母様に侍ったということであり、また一つは真の父母の息子、娘という名前をもったということです。子女になることができるというのです。それは、本当の子女ではなく庶子です。養子は血筋が通じていないのですが、庶子は血筋が通じるのです。そのような位置に立つことなくしては、この世の中を救う道がありません。言い換えれば、氏族圏を越えて民族圏に向かってきたという

のです。その圏内において、皆さんが祝福を受けました。

神様が万物をつくられましたが、主人になれずにいるというのです。本来、万物は、愛を通して、愛と一つになるその場で神様の所有として決定します。神様の所有として決定した真の御父母様を中心として、その真の父母の愛と因縁をもった基盤のもとで、真の父母の子女も愛の中から出てくるので、真の父母の息子、娘の所有圏が展開し、その息子、娘の所有圏を通して一つになることのできる万物の基盤が愛と連結するとき、その息子、娘の所有物が出てくるようになるのです。

イエス様とアダムの解怨を成就しなければなりません。イエス様が間違い、アダムが間違って父母になることができなかったので、それを解怨成就しなければなりません。それで、三代のために生きなければなりません。おじいさんから三代です。アダムが蘇生であり、イエス様が長成であり、真の父母の息子、娘まで、三代圏を連結しなければなりません。これは不可避なことです。

「真の父母の日」が展開することによって、「真の子女の日」が生じ、「真の家庭の日」、「真の国家の日」、「真の世界の日」、「真の天宙の日」、真の神様の解放まで連結することができるというのです。それゆえに、どの時代であっても、「真の父母」の名がなくては連結することができないという事実を知らなければなりません。

皆さんの目は、先に真の父母に会いたかったというのです。どれほどこの目が涙を流したか分かりません。鼻が真の父母の胸で、真の父母のにおいをかいでみたかったというのです。偽りの父母に会ったことを、どれほど嘆いたか分からないというのです。口が真の父母の話をして、真の父母の乳を飲みたかったのですが、偽りの父母のうそを学び、偽りの伝統を立てたのです。この耳が真の父母の話を聞いてみたかったというのです。この手が真の父母の胸を触って、真の母と真の父を引き寄せることができる手になりたかったのですが、偽りの父母と怨讐にもてあそばれ、恨を抱いた手になったのです。広げようにも広げることができず、握ろうにも握ることができない恨の手になったことを知らなければなりません。

永遠に真の父母に侍り、出発と同時に永遠に分けることのできない真の父母の伝統を受け継ぎ、そこに満足感を感じて生きなければならない体であり心だったのですが、歴史の恨をもって悲惨さと怨恨を抱き、嘆息圏内から抜け出すことができない心と体になったという事実を知らなければならないというのです。

この地球星のすべての地も、真の父母が踏んであげることを希望するというのです。真の父母の息子、娘が踏んであげることを希望するのです。

神様が家庭から所願成就できる道を計画されたので、真の父母を願われたのです。真の父母の考えから真の父母を創造され、真の父母の愛とともに一致することを願ったというのです。そうです、蘇生、長成過程を経て成熟し、アダムとエバの結婚式が神様御自身の

結婚式として、人間と神様の愛が定着することができる一つの焦点を合わせなければなりません。

ほかの父親には真の愛がありませんが、レバレンド・ムーンは真の愛をもっています。それで、白人も喜び、黒人も喜び、万物も喜び、天地もすべて喜ぶというのです。私たち統一教会の家庭には、真の父母、真の子女、真の家庭、真の社会、真の国家、真の世界、真の神様がいるということを知らなければなりません。そして、永遠に変わらない真の血統をもっています。人は、真の血統の橋を通じて、すべて愛で連結されています。愛を中心として、ここから始まり、神様まで、すべて真の血統です。

真の家庭は、一つの言語と文化をもつのです。文化は、言語を意味するのです。文化は、言葉によって、言語によって形成されます。

新・旧約聖書をすべて捨てても、真の父母を取り戻さなければならないという事実を知らなければなりません。真の父母をもたなければならないということなのです。それで、真の兄弟が出てきて、真の国が出てきて、すべて出てくるのです。それで、世界的な因縁を通じて基盤を築き、その父母が出てきたのちに、父母を通して子女が出てくることができるのです。そのような天地の調印式をしなければなりません。

それを神様が公認して、サタンが公認して、その次には真の父母が公認しなければなりません。その時から「真の子女の日」が世界的に設定されるのです。

歴史的な転換時代に置かれている私たちの責任は、神様の身代わりの立場に立つことであり、真の父母の身代わりの位置に立つことであり、真の家庭と、真の国家、真の世界の代表者の位置に立つことなので、歴史時代に孝子の中の孝子になるのです。歴史時代の孝子が私を本物の孝子だと称賛することができる天国の孝子にならなければならず、天国の忠臣にならなければならず、天国の聖人にならなければならず、さらには天国の聖子にならなければなりません。

偽りの父母は、サタンの愛を中心として落ちたのですが、真の父母は、神様の愛を中心として上がっていくので、愛の世界へ前進していくのです。

愛とは偉大で永遠に平等なのです。愛という名前だけ聞けば、いくら高い位置にも一度に同参できる資格をもつようになります。女性が無学文盲で、男性が世界の大学者でも……。

それは、私たち人間がいくら不足でも、神様と愛の関係を結ぶようになれば、神様の位置に上がっていくことができるということです。そのような価値の内容があるために、すべての人間の心はどうなのかというと、最高のものを願うのです。

世界をすべてもったとしても、それ以上に良いものがあれば、またもちたいと思うのです。

偽りの愛の立場にいるものを真の愛で取り戻してこようと思えば、すべてのものを否定

しなければなりません。真の父母を通して、真の愛を知ったあとからは、過去、現在、未来に対する垣根がない、すべてのものを完全に清算した息子、娘として生まれたという解放的な位置に立つので、皆さんが結婚をして夫婦で暮らすことができるのです。そうでなければ、到底望めないというのです。イエス様も、今まで夫婦生活ができませんでした。

世の中の家庭、氏族、民族は、すべて滅びるようになっています。中心がないというのです。サタンがそのようにしておいたのです。神様は、その中で個人的中心、家庭的中心、国家的中心、世界の中心的存在を求めて、統一教会を通して祝福をしてくださったというのです。サタン世界の五十億の人類を滅ぼしたその代わり、それ以上の資格で立てたものが祝福家庭だということを知らなければなりません。

キリスト教を中心として、アメリカがアベルならば、ここ（ブラジル）はカイン、カトリック圏です。ラテン文化圏、カトリックはカイン圏です。お兄さんと同じだというのです。プロテスタント、弟を通さなければなりません。弟がこのカトリックを助けてあげなければなりません。

アメリカを中心に、新教で弟であるアベル国家圏の北米を一つにし、その上に父母様が来て、アメリカに築かれたすべての勢力基盤を通して、この南米帝国、カトリック文化圏を消化しなければなりません。先生がカトリック文化圏についていくために来たのではありません。

また、統一教会がカトリック文化圏に従っていくのではありません。統一教会が生まれれば、カトリック文化圏が統一教会を通して行かなければならず、ブラジル人が父母様を通して行かなければなりません。そうでなくては行く道がありません。

氏族的メシヤの氏族的基盤である百八十家庭は、すべてを天の前に奉献しなければなりません。祝福される前のすべての所有、家も、土地も、万物も、所有物というものは、本来神様の所有だったのですが、祝福とともにアダムの前に伝授してあげなければなりません。これが原則ですが、堕落することにより、神様が主人の立場に立つことができなかったのであり、真の父母が主人の立場で来ることもできなかったのです。

今に至っては、主人の立場に立つことができなかったことを、サタン世界で天使長の使命を行うことができる人を通して、息子を通して、母を通して、父を通して、族長を中心とした全体が献納しなければなりません。血統復帰、所有権復帰、心情圏復帰を、七代を中心として献納して戻っていかなければなりません。

地獄が二つあります。地上地獄、天上地獄がありますが、天国の門は一つです。地獄の門が開くからといって、地上から天国に直接入っていくのではありません。真の父母を通して入っていくのです。真の父母を通して入っていく門が、一つの天国の門です。

所有権、心情圏、実体圏を神様に返してさしあげなければなりません。家族と共に、国家と共に、世界と共に神様に帰らなければなりません。それを祭物として、真の父母を通して神様に返してさしあげ、すべてのものを清算しなければなりません。

そのような基盤の上で、真の父母を通して皆さんの家庭の父母と、子女と、万物の所有権平面的基台が連結するのです。そこが地上天国です。堕落していない立場で所有権を地上に連結しなければならなかったのですが、堕落したので、蕩減の道を経て再度連結しなければなりません。

そうすれば、天国の所有権、絶対的な愛の主権時代を迎えることができるのです。そのような解放圏を迎えるために、家庭盟誓の八番に地上天国の解放圏を完成し、その目的を達成することを宣言したのです。

いくら理想家庭を願い、いくら理想的な父母を願い、いくら理想的な夫婦を願い、いくら理想的な息子、娘を願ったとしても、ないというのです。それが、真の父母を通し、初めて総合的な完成が成されるのです。

皆さんがそのような伝統の位置で、神様に代わり、真の父母に代わる後継者として天下になかった兄弟の位置で、同じ種の価値、アダムとエバが神様と一つになったものと同じ種の価値を成し遂げなければなりません。世界で収穫された家庭を拡大したその基盤で、すべての人間の新しい子孫の種を、神様と真の父母が一つになって蒔いた種と同じ価値の種をつくっておけば、チャンピオンの記録を引き継ぐことができる後継者になるのです。

力のある者が世界を指導するといいました。お互いが力で対決して闘うのではありません。力のある者が力をもつことができるように環境条件をつくり、弱い者をすべて巻き込んでしまって、チャンピオンシップ、新記録達成者のような行いをしているので、これは、神様が願われる善意の競争を通して勝利の結果をもつことができなかったというのです。それゆえに、これは、いずれ地球上で清算されてなくならなければなりません。

世界のすべての家庭が、真の父母を中心として、「真の父母の息子、娘だ」と言うことのできる再覚醒が展開するようになる時、そこから世界的天国が顕現するのです。

世界の家庭全体を中心として、このようになる時、新しい地上天国の世界へ入っていくのです。

成約時代というものは、全世界が等しく真の父母の恩恵を受けることができる場に入ってきたというのです。その代わり、血統転換、所有権転換、心情圏転換をしなければなりません。これが氏族的メシヤの責任です。正に女性時代になったのでこのようなことが可能なのです。

堕落したこの世界に、悪魔の愛と生命と血統を受け継いだこの世界に、神様の所有権を完全に奪われました。今、私たちは、これを元に戻さなければなりません。神様の真の愛を受け得る息子と娘が一つになり、この世界

を収拾しなければなりません。神様の愛を受けることができる息子、娘を中心として、アダムとエバ、カイン・アベルを中心として失ってしまった家庭の血族的因縁を収拾しなければなりません。そして、万国が解放され、歓迎するその基盤の上で、このすべての悪魔の、サタン世界の所有権を真の愛の主人、愛を受け得るナンバーワンの男性と女性、ナンバーワンの息子、娘を中心として神様にお返ししてさしあげなければなりません。

全世界の人間たちは、真の父母の愛を通って行かなければなりません。その門を通らなくては、天上世界の本然的故郷の地へ帰る道がありません。地獄しか行く道がないのです。これをさかのぼっていかなければなりません。反対する国と闘い、勝ち進んでいかなければなりません。そして、今日の統一教会は、世界的メシヤ圏の勝利を受け継ぎ、国家的メシヤ圏を越え、氏族的メシヤ圏を尋ね求めてきたのです。サタン世界の氏族圏を中心として、サタン家庭に入っていって世界と交替しなければなりません。

第四章　天一国の民になる道

一　人類に対する神様の希望

神様と人間が一つのみ旨を中心として一つの愛に和合して生き、全天地が神様の愛を喜びながら、その愛を実際の生命の中心として立てた中で、すべてが一つになって生きることが神様の創造本然のみ旨でした。しかし、アダムとエバが堕落することにより、神様の愛は、神様の愛としてのみ残るようになりました。すなわち、人間と関係を結ばなければならない神様の愛は、人間と関係を結ぶことができずに人間から離れるようになり、すべての被造世界から離れるようになったのです。

それゆえに、今まで神様は、御自身が立てようとされたその愛を中心として、すべての万物を糾合し、神様と万物が共に喜ぶことのできる一日を願われながら、六千年の歴史を経過してこられたのです。しかし、いまだ全被造万物が神様の愛を中心として一つに統一されないまま、その神様の理念は、理念のまま残っていて、取り戻さなければならない希望の愛もそのまま残っているのです。ですから、今まで神様は、そのみ旨を必ず成し遂げるために摂理してこられたのです。

このように、人間の堕落以後今日まで、時代を問わず、神様は、神様の希望を成し、人間に対して信じ得る心と、愛することができる一つの心を取り戻すために、長い間摂理してこられたのですが、いまだにそれらを成し遂げることができず、取り戻すことができずにいらっしゃるのです。

創世以後今日まで、宇宙的な勝利の一日を迎えることができなかった神様は、地上の人間を通して、願われた勝利の日を迎えようとしていらっしゃるのです。それゆえに、地上の人間たちがその日を探し立ててさしあげることができなければ、この地で人間を蹂躙しているサタンを処分することができないばかりでなく、天上で神様に人間を讒訴しているサタンの勢力も退けることができないのです。それゆえに、神様は、いかなる苦労も意に介されることなく、いかなる犠牲も意に介されることなく、いかなる闘いも意に介されることなく、きょうこの時間まで、皆さん個人個

人を立てるために盾となっていらっしゃるのです。

これを見れば、私たちは、神様の希望とは何かということを知ることができます。神様は、皆さん個人個人を立てられ、人間を堕落させた怨讐サタンを分別して、サタンが主管する悪の歴史を終結させようとしていらっしゃるのです。

私たちは、そのような神様の希望を成してさしあげ、天の前や万物の前に堂々と立つことができ、神様に勝利の栄光をお返しできる人間にならなければなりません。そのようになってこそ、苦労してこられた神様の摂理の目的が成し遂げられるようになるのです。

神様は、アダムとエバを造られ、彼らが希望の人格者になることを懇切に願われたのですが、そのアダムとエバが堕落してしまいました。堕落前から抱いてこられた慕わしい心情、堕落前から抱いてこられた希望の心情に対して、人類の先祖アダムとエバが裏切ることによって、神様の心には悲しみがしみわたるようになったのです。神様は、アダム家庭に対する悲しみの心情、憤りの心情を抑え、慕わしい心を再び取り戻すためにカインとアベルを立てられたのですが、彼らは、その希望を成してさしあげることができず、逆に悲しみだけを神様に与えたという事実を、皆さんは考えなければなりません。その後、千六百年という歳月を経て、再びノアを立てられました。しかし、結果は同じことになりました。そこからまた四百年を経て、アブラハムを立てられたのですが、やはり同様でした。慕わしく思った一人に出会って心情を分かち合おうとされたのですが、アブラハムも、やはり神様が抱かれた慕わしい心情を完全に解いてさしあげることができなかったのです。そのようにして、数千年間抱いてこられた慕わしい心情を悟らせるために、三代を経ながらヤコブ家庭を立てられたのです。しかし、その家庭においても、完全にみ旨を成し遂げることはできませんでした。

イスラエル民族を立てられても、このような慕わしい心情を躊躇なく話すことができず、教えることもできず、支配することもできない立場で、彼らのあとから従っていかざるを得なかった神様の事情を、私たちは知らなければなりません。

慕わしく思ってこられた一つの民族形態を地上に立てられ、その民族が塗炭の苦しみに陥るたびに、神様は、その慕わしく思われる心に比例して苦衷を感じられ、悲しまれ、困難に遭われたという事実を、私たちは知らなければなりません。

長い歴史路程を経てこられる間、神様は、慕わしい心情を私たちの心に植えつけ、歴史に植えつけ、世界に植えつけるために闘ってこられました。それゆえに、私たちが接する物一つにも神様の慕わしさがしみ込んでいるという事実を知らなければなりません。私たちが対する食口にも、歴史的な神様の慕わしさがしみ込んでいるということを知らなければなりません。私たちが生きているこの国、この世界にも、神様の慕わしさがしみ込んでいるというのです。

したがって、私たちが目を上げて、神様がつくってくださった万象を見つめる時、その万象が神様の切実な慕わしさの対象だということを感じなければなりません。万物でもそうであるならば、万物の霊長である人間はどうでしょうか。

たとえ悪の姿をしていても、神様は間違いなく一つの基準をもって慕ってこられたという事実を皆さんが感じるようになる時、天の前に本当に感謝しなければなりません。

神様が、今まで数多くの悲しみの歴史過程を経てこられながらも、人類を捨てることができずに胸に抱いてこられた内容とは何でしょうか。それは、神様が人間に対して「お前は、私の実の息子、娘だ」と言い得るようになることを願われたのです。このような理想を成し遂げるために、今まで神様は闘ってこられたのです。

神様の善の園において、神様の栄光の中で、神様の愛を中心として万物が和動する中で、万物の主人の資格を備え、神様に「私の父よ！　栄光をお受けください」と言えたはずのアダムは、堕落により、そのような価値を喪失してしまいました。ですから神様は、創世以後本然の息子、娘が現れて、「お父様」と叫ぶその一言をお聞きになりたかったのだということを、皆さんは知らなければなりません。

今日私たちが叫んでいるそのお父様は、罪悪の立場から叫ばれる、そのようなお父様ではありません。したがって、私たちは、罪悪の世の中から抜け出して、善の理想の園に入っていかなければなりません。その理想の園とは、人間が神様の栄光を現し得る世界であると同時に、喜びに陶酔して生き得る世界です。別の言い方をすれば、人間が動ずれば万物が動じ、人間が静ずれば万物が静ずるようになり、人間と万物が動じ静ずると同時に、創造主である神様も動じ静じ得る世界です。そればかりでなく、神様と人間の相対的な関係を超越して一体となり得る理想の園なのです。

神様はこのように、人間が神様御自身と一つになることを願われたのであり、一つになった中で驚くべき愛を中心として喜びに酔う、その一場面を思い描きながら、そのような世界を創造してこられたのです。ところが、人間が堕落することにより、これが自分たちの恨みとなると同時に天倫の恨みとなり、堕落以後今日まで、その恨みに恨みを加重させる悲しい歴史を引き起こしてきたのです。

それでは今日、神様がこの地に対して摂理なさる最大の希望とは何でしょうか。それは、堕落の父母をもっている人類を再び神側に立て、「私は、あなた方の永遠の父であり、あなた方は、私の永遠の息子、娘だ」と叫ぶことです。そのようにすることができる日を迎えることが、堕落した人間たちの歴史的な希望であり、天倫に対する天的な希望だということを、皆さんは悟らなければなりません。

今日、この地上には、数多くの人々が生きています。彼らは、各自のビジョンと意見をもって生きており、また何かの主義主張をもって生きています。しかし、心から神様に敬拝し、神様を主張しながら、神様から召命を

受けたと、天と地の前で自信をもって立ち上がる人はいません。

今、私たち人間が最後に取り戻さなければならないこととは何でしょうか。自らの主義主張と、自らのあらゆる主観的な行動をすべて放棄し、自分の心と体は神様に代わり、自分は神様に代わって行動すると主張して立ち上がる人がこの地上に現れることを、今日まで歴史上に現れて死んでいった数多くの人々が望んでいたのです。また、神様は、このような代身者が現れることを願われ、無限な苦労と忍耐をされながら、長い間摂理していらっしゃるのです。

したがって、地上の悲しみとは何かというと、何かの主義がなくて悲しいのではなく、また行動する人がいなくて悲しいのではなく、神様の心情に代わり、神様のみ旨に代わって主張することのできる主義がなく、また神様に代わって行動する人がいないということが悲しみであり、切なさだというのです。

今日、この地と人間世界に散在している嘆息と苦痛と、しみわたっているあらゆる恨みを除去することに対しても、神様に代わることができる主義主張と、神様に代わる一人の人が現れなければなりません。したがって、摂理の目的もこの一人であり、歴史の目的もこの一人だということを知らなければならない時になったということを、皆さんは再び感じなければなりません。

皆さんは、神様に代わって心から本当に信じることができる一人の友人をもたなければなりません。さらには、神様に代わって信じることができる一つの兄弟、父母、夫婦をもたなければなりません。そのようにして、家庭を超えて、社会、国家、世界の舞台にまで伸びていかなければなりません。これが神様の願われた希望だったのです。

しかし、神様は、人間を個人の立場で追い出され、信じることができない立場に立てられ、人間世界のいかなる希望もすべて絶たれた中で、人間をして神様を信じさせるようにされました。そのようにして、その信じる人が一つになって、すなわち兄弟同士、友人同士で、神様に代わってお互いに信じ得る関係を結ぶことを神様は願われたのです。これがまさしく神様の願われた最高の希望なのです。

レバレンド・ムーンがサタンに、「サタンよ、お前が要求するものはすべて満たしてあげたか、あげなかったか」と尋ねれば、「満たしてくれた」と答えるというのです。神様の本然の愛を中心としたすべてのものを中心として、堕落したサタンまでも愛して余りあるほどに、天国に入っていき得る堂々とした基盤を築いたので、サタンは、「あなたが行く世界は解放であり、あなたの願いで成し遂げられないものはない」と言って祝福しなければなりません。「どこに行こうと、あなたが願うもので、成し遂げられないものはなく、あなたが願うもので、あなたのものではないものはありません」と言うというのです。

「神様のみ名によって、真の御父母様のみ名によって、真の家庭の名によって世界は解放されなければならない！」と言う時は、「アーメン」と答えるようになっているのです。春が来ました。雪がどれほど冷たく、氷

がどれほど硬いとしても、溶けるようになっているのです。ですから、春の季節には種を蒔きなさいというのです。サタンが悪の種を蒔いた以上に世界の果てまで、アメリカの果てまで種を蒔くのです！

良い種は、家庭です。サタンは一つ植えたのです。それが堕落したアダムとエバです。今、私たちは、新しい家庭をつくるために、どこにおいてもそれを築き上げなければなりません。そこにおいてすべてのものを栽培することができます。それをこのアメリカの地でしなければなりません。それが神様の願われた目的です。

神様が男性と女性を造られ、大きくなることを願われたのは何ゆえでしょうか。愛するためです。愛するためだとすれば、その愛は神様よりも高くなるほうが良いでしょうか、低くなるほうが良いでしょうか。神様が、「おい、お前たち！　私がお前たちを愛するよりも、お前たちが私を愛するほうが大きくなってはいけない」とおっしゃるでしょうか。そのようにはおっしゃらないというのです。

それでは、今皆さんが永遠の神様とつかみ合って闘えば、神様のほうがより情熱的でしょうか、それとも弱いでしょうか。情熱的です。神様には、すべてあります。ないものがありません。神様がより情熱的な時は、どのような時でしょうか。新しい男性と女性が現れて、昔の私たちの先祖よりも情熱的に愛するようになれば、神様も息切れされるようになるのです。

そのような情熱的な夫婦に出会ったならば、神様は、人間と離れて生きられるでしょうか、それともくっついて生きられるでしょうか。くっついて生きられるのです。したがって、愛を中心としてのみ、愛においてのみ永遠性があるということを知らなければなりません。真の愛には永遠という概念がある、という話が成立するのです。

二　天一国は本然の故郷

人間は、誰かの子女にならなければなりません。その誰かの子女とは、神様の子女のことです。誰かの兄弟にならなければなりません。その誰かの兄弟とは、神様の家庭の兄弟です。誰かの夫や妻にならなければなりません。それは、神様の家庭の夫や妻のことです。

内的な神様のすべてのものを実体的なものとして御覧になり、刺激をお受けになるために、神様はアダムとエバを創造されました。アダムとエバは、第二の実体の神様です。愛の相対を必要としてお造りになったからです。神様の愛の相対は、猿ではありません。人間以外にはいないのです。

今まで神様は、所有権をもつことができませんでした。サタンがすべて所有したのです。サタンの国、サタンの民、サタンの物、すべてがサタンの所有です。サタンが神様の所有権を盗んでいったのです。真の父母も所有権をもったことがありません。いまだに真の子女、真の国、真の世界としての所有権をもったことがありません。真の人、真の男性と真の女性が生まれなかったのであり、所有し得

る人が生まれなかったので、そのような所有権をもつことができなかったのです。

今まで神様は、所有権者になることができませんでした。悪魔が主人になったのであり、神様の息子、娘が主人になることはできませんでした。主人に代わって悪魔と悪魔の息子、娘が、神様の創造された被造物に対して権勢を振るい、害を被らせてきたのです。これをすべて回収しなければなりません。万物は、すべて本然の父母のもとに帰らなければなりません。真の父母と真の子女、真の国、真の氏族のもとに帰らなければなりません。

今、私たちは、誰々の息子、娘、誰々の兄弟という考えから抜け出さなければなりません。私は、神様の息子、娘であり、真の父母の息子、娘であり、世界と天宙を解脱させる相続権を受け継ぐことができる私自身だというのです。そのような私に、サタンの立場で一族が矢を投げつけましたが、私が何千年の歴史を経るのではなく、生きている間に私の備えるものをすべて備えてメシヤとなり、過去に反対した一族と父母を訪ねていって救ってあげられる平面的再臨の形態を備え得る、このような時代を迎えることにより、初めて地球星の天国化が可能なのです。

このように見るとき、今日、祝福家庭が今まで暮らしてきた生活と行動は、すべて零点です。悪魔の巣窟の中にいたということを知って、自らの解放圏を迎えるために努力しなければなりません。そのようにせずに、昔と同じ習慣性をもって息子、娘を抱いてそのまま幸福になることを願えば、すべて滅びるのです。

イエス様がエルサレムを回られる時、道端にあるいちじくの木を見て、実がないといって呪われました。すると、そのいちじくの木は、たちまち枯れてしまいました。実がなければ、そのような結果が訪れるのです。

未来国家を建設するにおいて、あなた方が神様のために準備したものは何ですか。それは、実を意味し、中心核を意味し、事実を意味します。それは何でしょうか。神様の国の民です。神様の国の民は、りんごや桃の実ではないというのです。

今まで神様は、天国の民をおもちになることができませんでした。ですから、今、その本然の民を救っているところなのです。完成した民をもつことができなかったのです。

真の国を地上天国と呼びます。その国ができてこそ、神様が本然のアダムとエバに「完成した時に、あなた方は、万物を主管しなさい」と祝福されたそのみ旨を成し、人間は初めて、この地の真の主人として現れることができるのです。また、その時に初めて人類は、お互いに真の兄弟になることができるのです。その時に初めて私たちは、神様の真の息子、娘になるのです。天のお父様に対しては真の孝子、孝女になり、主人に対しては忠臣になり、この宇宙万物に対しては真の主人になるのです。そのようになれば、神様は、私たちに全権をゆだねられるのですが、外的な全権だけではなく、内的な全体の心情の中心まで移してくださるようになるのです。神様がすべてのものをゆだねられても安心することができる息子、娘になるのです。

人類歴史は、暗い夜を過ぎ、夜明けを経て新しい光明の太陽を迎えるために進んでいます。それでは、太陽とは何を表しているのでしょうか。人類の太陽は「人類の父母」を表しています。この父母が現れるまでは、人類の故郷である本郷の地が現れることはできません。

愛の故郷をもつことができるという事実は、氏族的メシヤの福音であり、朗報です。その次には、祝福を中心として血統が転換されるのです。今からは、故郷が私の故郷になるのです。私の血筋は、そこから流れ出てきました。その血筋を広め、万国の愛の流れがきれいな水になり、天国という大海に入っていくのですが、そこが霊界です。

霊界は、この地上の愛の大海が連結された世界であり、そこが天上天国です。それゆえに、あの世では、愛の体恤心情をもたなければ生き残ることができないのです。

愛の心情は、子女の心情、その次には兄弟の心情です。兄弟は拡張であり、夫婦は統合です。このように一つになって中央を占領するのです。

結婚とは、本然的神様が愛という概念を中心として一つになることができるようにされたことです。彼らは、成熟して愛を中心に一つになることによって、この実体の位置で神様と一つになるのです。そこにおいて何が垂直かというと、愛が垂直です。それゆえに、縦的な神様を中心として、初めてここにおいて横的なアダムとエバが、縦的に運動する愛の実体の前にさっと入ってくるのです。そのようにして、初めて家庭的な定着地が生まれるのです。

個人と家庭、氏族、民族、国家、世界がこの一点を中心として定着するのです。これが軸です。

神様は男性格主体だと言ったでしょう？ですから、男性が中心です。なぜ男性が中心かというと、赤ん坊の種、生命の種をもっているからです。女性には赤ん坊の種がありません。それが核です。愛の種も、生命の核と接するためのものです。神様と一つになるためのものです。生命の種が神様でしょう？それゆえに、理論的で、核心的な定着点は、神様の愛と一致する所です。

現在、堕落圏内にいる私たち人間が行かなければならない目的地は、天国です。別の言い方をすれば、還故郷しなければならない、故郷へ帰らなければならない、このように思うのです。故郷へ帰るにおいては、私一人では行くことができません。創造目的というものがあるので、創造目的を完成した立場で故郷へ帰っていかなければなりません。

堕落していないアダムとエバの立場から見れば、たった二人で帰ったとしても、彼は天地を代表し、世界を代表し、国を代表し、家庭を代表した立場で帰っていくことができるのです。これが、本来神様によって息子、娘として造られたアダムとエバに賦与された責任でした。

自分が生まれた故郷を中心として、いかにしてこれを天国の故郷に代置して拡大させる

かということが問題です。それゆえに、氏族的メシヤを設定したのです。氏族的メシヤを設定することによって、母親はアダム家庭に代わり、それから自分はイエス様に代わり、先生は再臨主に代わるのです。三代、二代、一代が、歴史の根源地である自分の先祖と真の父母圏を横的に連結するのです。

それゆえに、自分を生んだ母親がアダムとエバに代わり、皆さんはイエス様に代わり、先生は再臨主に代わるのです。これによって、皆さんの母親と皆さんの生まれた場所が天国の故郷になるのです。天の領土圏内にある故郷の位置を再び復帰してきたのです。

皆さんの故郷は、故郷ではありません。国が故郷となり得る時が来たのです。それゆえに、皆さんがあの世に行くようになれば、今まであった境界線はなくなります。今は故郷に境界がありますが、このようなことをしておけば、霊界に行って国境なく連結することができるのです。どの故郷の地にも連結することができる地上天国の基盤ができるのです。

ですから、これを連結すれば、すべての国家の戸籍に入籍したものが、そのまま天国に編入されるのです。ですから、堕落せずに繁殖した人間の故郷が天国の故郷に代わるようになったので、天国に生まれた立場に立ち、すべて接ぎ木されて天国に入っていくようになるのです。そのようにして、故郷復帰が成されるのです。

そのような故郷、そのような国家が復帰されれば、天宙が復帰されるのです。そのような基盤の上で真の父母復帰が完成するのです。真の父母復帰、真の父母が立つことができる位置で、このようにすべての天国の条件、天宙復帰の基盤を完成してこそ、真の父母が使命を完成するのです。

皆さんの故郷はどこかというと、真の父母が生まれた所であり天国です。ソウルが真の父母の生まれた所であり天国ですか。そのコンセプトをどのように克服するのですか。そのコンセプトをどのように越えていくのですか。「私は全羅道の人だ。私は京畿道の人だ。私は韓国人だ。私はアメリカ人だ！」というコンセプトを神様は願われません。エデンの園のアダムとエバに、そのようなコンセプトはなかったというのです。

神様の遺業を相続するために最後に越えなければならない条件とは、神様をもち、真の父母をもち、真の兄弟をもち、真の民、真の国、真の世界をもたなければならないということです。「全人類が私の兄弟であり、あなたと私は永遠、不変だ」と言うことができ、分けることのできない兄弟の心情を通じて、天的家庭の家族として生きることができる人にならなければなりません。

「この地は私たちのもの、天は私たちのもの、父は私たちの父だ」と言うことができる真の家庭を中心として、この地上に真の国を成し遂げ、神様の遺業を相続することができる皆さんにならなければなりません。

今日、私たちの信仰生活と神様を信じるというキリスト教を注意深く見てみるとき、天国に残ることができる民は、どれくらいいるでしょうか。さらには、「神様の所有だ」と

永遠に主張することができる民族はどこにいて、「神様の国だ」と主張することができる地はどこにあり、そのような物、そのような人はどこにいるのかというのです。これを皆さんは知らなければなりません。

どれほど立派な夫をもらい、どれほど良い暮らしをしたとしても、神様が分からなければ、地獄に行くのです。神様の民として入籍しなければなりません。いくら有名なハーバード大学の総長だったとしても、神様の国の民として登録されなければ、地獄に行くのです。家庭、社会、国家、世界、人類の歓迎を受けたのちに天国に入っていくのです。

天一国には、主権と国と国民が必要です。ですから、昨年（二〇〇一年）の神様王権即位式は主権復帰でした。それから、神様祖国定着大会は領土復帰であり、その次には天一国国民として入籍するのです。分かりますか。ですから、カードをもって初めて国民になるのです。国が形成されるためには、主権と領土と国民が完備されなければなりません。それが完備された上で、このような天一国の万世安着を宣布したという事実を信じ、神様のように自信をもち、文総裁、真の父母のように自信をもって一気に押せば、押すことのできないものはないというのです。

神様の王権を樹立したのは神様ではありません。真の父母です。分かりますか。天一国をつくったのは神様ではありません。真の父母です。

天一国という言葉は、天宙平和統一国です。「天」という字、これは二人です。二つの世界です。これは水平です。天国と地上の人です。天の人と地上の人の二重構造になっているのです。皆さんは心と体の二重構造になっているでしょう。心と体は、一つになっていますか、なっていませんか。闘っていますか、統一されていますか。闘っている人は、天一国の国民になることができません。

神様王権即位式ののちには何をしたのでしょうか。韓国において先生が何をしましたか。神様祖国定着大会をしたのでしょう？　それは、真の愛の血統を受け継ぎなさいということです。それを世界的に行いました。その次には何をしたのでしょうか。天一国を宣布しました。天宙平和統一国です。それが天一国です。それでは、天一国とは何でしょうか。二人が一つになる国です。分かりますか。天は二人でなければなりません。父母は二人でなければなりません。すべてペア・システムになっているのです。天一国とは何でしょうか。昆虫世界、動物世界から、すべてペア・システムになっています。それが一つにならなければなりません。二つの物、二人の人、二人の父母、二つの性格、主体と対象が一つになった所には本然の基台が生じ、神様がお立ちになることができるのです。

聖書にも、「もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら」（マタイ一八・一九）となっているでしょう？　神様まで合わせれば三人でしょう？　同じことです。二、三人の人が国の基盤になるのです。家庭の基盤になり、国の基盤になり、世界の基盤になるのです。そこから家庭が生まれ、氏族の出発がなされるのです。二人以上でそのようになるのです。

きょうは、天一国二年十一月五日、第四十三回を迎える「真の子女の日」でございます。「神の日」と「子女の日」と「万物の日」を総合して、エデンの園において家庭で成し遂げることができなかったことを、天上世界にまで拡大した人類を中心として、エデンの家庭完成を総決算することができる天一国を中心とした平和統一平定時代を発表いたしました。神様が、天上地上平和統一解放聖火式の終わった各祝福家庭を訪問するにおいて、支障なく思いどおりに訪問され、苦楽を共にすることができる時代として、同じ生活圏において迎えることができるように、天上世界の願いは地上にあり、地上世界の願いは天上にあるので、天の願いどおり、地の願いどおりにお互いが一つになって平定された基準に立ち、解放された忠孝の道理を残し、天国中心の先祖たちとして地上に残ることができるように祝福してくださることを懇切にお願い申し上げます。

きょう、天一国平和統一平定時代の到来を発表し、今や、霊界の恨を解き、地上に再臨して子孫たちを協助し、また教団の教主たちは宗教を中心として世界に協助し、不義によって苦衷の中に束縛された天のすべてのものを解怨成就し解放することができる時代、自発的に、自由に活動することができる時代、蘇生の天国を創建することができる時代を迎えましたので、許諾してください。

きょう掲げた標語は何ですか。真の愛で？私たちの家庭は天一国の孝子、忠臣、聖人、聖子の真の家庭を完成させます。ここには神様の創造理想のすべてが入っています。この真の家庭を中心とした孝子の伝統を受け継ぐのが忠臣であり、忠臣の伝統を受け継ぐのが聖人であり、聖人の伝統を受け継ぐのが聖子であり、聖子の伝統を受け継いで王権が樹立されるのです。

ですから、相続とは、王権を手にしたその基盤において成されるのであり、自分のもっている所有意識であれ、国に属しているものはすべて否定されなければならないのです。それは、あってはならず、いずれにしろ決別しなければならない堕落した結果だというのです。神様が願われない怨讐の血筋で連結された汚れた世界です。神様は、そこに影を掛けることも願われないのです。

それゆえに、神様は、今日この世の中のすべての悪の世界、戦争によって数多くの人々が死んで滅び、栄枯盛衰を経てきた今までのすべて世界に対しては管掌なさることができなかったのです。

一度神様の前に一〇〇パーセント本物の孝子の家庭になってみたいと思いますか。そのようになってみたいと思うならば、何が惜しいでしょうか。それしかありません。そのようになろうと思えば、自分の七代先祖から燃やして祭物にしたとしてもしなければなりません。祖業田や国まで売ったとしてもしなければなりません。このようになっているにもかかわらず、「総生畜献納を教会に納付しなさい」と言っても躊躇し、食べて残ったものを……。アナニヤがペテロの前でそのようなことをして、夫婦ともその場で死んでしまい、地上から消えてしまったという聖書の話を知っていますか。それよりももっと恐ろしい時代が来たということを知らなければなりません。

三　天一国の民の態度と資格

神様は、ただ外的に民族の形態だけを備えた民族を待ち望んでいらっしゃるのではなく、外的な形態だけを備えた国家を待ち望んでいらっしゃるのでもありません。民族がいれば、その民族を動かすことができ、国家と主権があれば、その国家の主権を動かすことができる、心情で連結された一つの主権と、一つの民族と、一つの民を待ち望んでいらっしゃるのです。

選民ならば、彼らは、神様がいかなるお方かを知り、いかなる目的のために自分たちを立てられたのかを、はっきりと知らなければなりませんでした。そのようにして、いかなる苦難に直面しても、いかなる艱難が迫ってきたとしても、それを貫かなければならなかったのです。このようなことが、当時のイスラエル民族の取るべき態度であり、神様に対する心的基準でした。

しかし、選民であることを誇ったイスラエル民族は、歴史路程において神様に多くの罪を犯しました。もちろん、その時代に対する犯罪よりも、その時代を動かしている神様の心情に対する犯罪のほうが大きかったということを、まず私たちは知らなければなりません。

それでは、神様が人間を復帰するには、何から復帰しなければならないのでしょうか。願いも願いですが、事情、さらには心情を復帰しなければなりません。切っても切ることができず、分けても分けることができない心情の世界を復帰しなければなりません。ですから、今まで神様は、心情の基台を広めるために、その一日を見つめながら、歴史の峠ごとに背後で苦労してこられたのです。今日私たちは、このような事実を知らなければならないのであり、これを知らなかった先祖に対しては、公憤の心情を抱いて抗議しなければなりません。

私たちが様々な事情に絡んだ生活環境で暮らしているとしても、それは結局、すべて過ぎ去ってしまうものです。いくら「地上で幸福な生涯を生きた」と言って自らの栄華を謳歌する者がいたとしても、それはすべて過ぎ去ってしまうのです。

しかし、何かの使命をもって生涯を生きた人ならば、その人には残るものがあります。それは何でしょうか。事情ではなく、事情を支配し得る心情です。この心情が歴史を支配し、民族精神を鼓吹させ、思想を連結させていくのだという事実を、私たちは否定することができません。

今まで神様が働いてこられたとすれば、それは、人間を救援し、御自身のみ旨を成すためです。神様のみ旨とは、神様の国を成し遂げることです。それゆえに、その国の民となることができ、その国の息子、娘となることができ、御自身の側にいることができる人を育ててこられるということは、間違いないというのです。

神様は、どこに国を建てようとしていらっしゃるのでしょうか。霊界に建てようとしていらっしゃるのではありません。正にこの地に地上天国を建てようとしていらっしゃるの

です。それでは、この地に立てられ、神様の国の民となることができる資格者とは誰でしょうか。それがまさしく皆さんです。皆さんは、天国を建国することができる中心です。

皆さんは、「過去の人間は、こうだったのだなあ。今日の私は、どうであり、今後はどのようになろう。神様の事情はこうであり、神様のみ旨はこうであり、神様の心情はこうであり、お父様は悲しいお父様だったので、私はそのお父様の前にどのように進んでいかなければならないのか。お父様が血と汗と涙をもって祭物となってこられたので、その祭物を受けるためには、血と汗と涙を流さなければならない」。このようにして悲しい涙をもって、「お父様は、与えるために悲しんでこられ、与えるために血の汗を流してこられたが、私たち人間は、受けるために死に、受けるために涙を流し、受けるために苦痛を受けてきたので、授け受けすることができるその一日は、どれほどの喜びとなるだろうか。涙で出発し、喜びの涙が目の前を遮り、しみわたった恨が込み上げて爆発し、私の口で喜びと栄光と勝利の凱歌を歌うことができるその日をもたなければならない」。こうでなければなりません。

そこにおいて初めて神様が、「お前は私の息子だ、お前は私の娘だ」とおっしゃることができ、天下万物のすべての福を前に置いて、心情と事情が通じ合う立体的な理念圏内において、神様が「お前は私の息子であり、私はお前の父だ」とおっしゃることのできる父子の因縁を復帰して印を受け、初めて天の家庭を築き、天の民族を築き、一つの世界、一つの主権、一つの天地をつくることが、人間である私が取り戻さなければならない因縁の中心だということを、皆さんははっきりと知らなければなりません。

天国の民の段階に入っていかなければならない運命が、皆さんの前に置かれています。このような皆さんは、新たな歴史的な意識をもたなければなりません。私という一存在は、自分のために生きようとするのではなく、天国の民である同胞のために生きようという観念をもたなければなりません。それだけではなく、天国の兄弟のために、天国の夫婦のために、天国の父母のために努力しようという観念をもたなければなりません。それは、部分的な観念ではなく、宇宙的な観念です。

ただイエス様を信仰する人として、むやみにイエス様を信奉するのではなく、内的にも外的にも天地の運勢と和合してイエス様を信仰する人にならなければなりません。神様は、宇宙的な摂理を中心として、天国復帰の理念を立てていらっしゃいます。私たちは、そこに立つことができる息子、娘、そして民にならなければなりません。そして、天国の同胞を愛することができなければなりません。

皆さんの周囲に信じる民がいれば、皆さんは、彼らを兄弟と、また同胞と思うことができる人にならなければなりません。また、すべての人がそのようになるようにしなければなりません。このようなことを考えてみるとき、皆さんの責任は、この上なく大きいのです。

六千年歴史を縦的に見れば、旧約時代には天の民を集め、新約時代には天の子女を集め

ました。このように歴史は逆に流れてきたのです。

この地の誰もが異口同音に、今日を「終わりの日だ」と言っているこの時、すなわち歴史的な終結、科学的な終結、倫理と宗教的な終結を予告している世界的な終末時代に置かれている皆さんは、どのようにしなければならないのでしょうか。

イエス様が叫ばれたみ言、すなわち「まず神の国と神の義とを求めなさい」のように、自らのことは考えずに、ただこの地上に神様の国と神様の義を立てるために不変の忠誠を尽くす人にならなければなりません。そのようにして、皆さんは、自らを万宇宙に誇ることができなければならず、神様の代身者の使命を完遂する人にならなければなりません。

すなわち、その国の本質的な理念の内容を皆さん自体の生活に適用し、それが皆さんの生涯の実体的な価値を形成し、永遠の未来を約束する希望の一日を実現するようにしなければなりません。もしそのような皆さんになることができなければ、皆さんは、神様がアダムとエバの堕落以後四千年間苦労されたのちにイエス様を送られて役事させたみ旨と、イエス様以後今日まで、イエス様と聖霊を合わせた三位神が役事してきたそのみ旨とは、何の関係もなくなるというのです。

このような観点から、今、皆さんは何を探し出さなければならないのでしょうか。皆さんは、その国とその義を立てることができないようにしている、すなわち天宙的な理念を立てることができないようにしている不義の条件を探し出さなければなりません。そのようにして皆さんは、一身の生活において闘争して勝利し、神様の息子であるイエス様に代わる存在にならなければなりません。すなわち、皆さん自身が、その国に処することができる人、その国の義の民になろうとすれば、食べること、着ることで争う愚かな人になってはいけません。食べる問題、飲む問題、着る問題を超えて生きる人にならなければならず、むしろそのような物が自分に少しでも付与されれば、ぼろを着て飢えている人にそれを分け与えることができなければなりません。一切れのパンがあれば、そのパンを一人で食べるのではなく、多くの人に分け与えたいと思っていらっしゃるのが神様の心情です。イエス様は、このような心情を身代わりしたのですが、イエス・キリストの前に現れた人間たちは、そうではありませんでした。

それでは、今日、家庭において不和が生じる原因、争いが起きる原因はどこにあるのでしょうか。それは、家庭は自分だけのために存在すると考えているからです。食べ物があれば、それは自分だけが食べるためにあると考えるので、争いが起き、不和が生じるのです。正にこれが罪の矢であり、サタンだということを、皆さんは肝に銘じなければなりません。

それゆえに、今日皆さんは、食べる問題を解決しなければならず、着る問題を解決しなければなりません。自分だけのために生きようとする心、すなわち家庭不和の条件を打破しなければならず、正にそのような歴史的な矛盾を踏み越えなければならないのです。このように、皆さんは、衣食住のすべての問題

を超え、真の勝利者の姿をもって神様の前に現れなければならない立場に立っていることを忘れてはいけません。

皆さんは、国と義のために生きる人にならなければなりません。いかなる難しい環境に直面したとしても、自分自身に対する父の願いがあることを思いながら、その環境と闘って勝利する人にならなければなりません。そのような皆さんになって初めて「神様の真の息子、娘だ」と言うことができるのです。

それでは、神様の国を建設することができる人とはどのような人でしょうか。自分自身を否定し、切ない心で神様のために生きる人です。自らを否定し、社会と民族、国家、世界のために生きる人が、まさしく神様の国を建設することができる人だというのです。さらには、国家と世界を否定しても神様のために生きる人が、天国を建設することができる人だというのです。また何かの悲しい環境に直面しても、自分自身のために悲しむのではなく、社会と国家、世界、ひいては神様のために悲しむ人であってこそ、神様の国を建設することができるのです。

今日、皆さんは、皆さん個人の何かの欲望を満たすために努力するのではなく、より大きな目的のために犠牲となり、奉仕する信仰生活をしなければなりません。そのようにして、ただ神様のみ旨と人類だけのために苦労されたイエス様の心情的基準まで行かなければならず、今まで苦労してこられた神様の切ない心情を慰労してさしあげる神様の真の子女の立場まで行かなければなりません。

皆さんは、不義を見れば憤慨する心をもち、また与えたいと思われる神様の愛をもち、この世の果てにまで行って、神様の国と神様の義を探し立てるために苦労しなければならず、さらには、今まで人類を救援するために悲しみの中で苦労してこられた神様の心情を慰労することができなければなりません。

それだけではなく、皆さんは、神様の国と神様の義を探し立てるその過程において、サタンとの闘いで敗北せずに勝利し、個人から家庭、社会、民族、国家、世界を一つに連結させることができなければなりません。すなわち皆さんは、いかなる立場に置かれたとしても、そこにおいてサタンと闘い、勝利する人にならなければなりません。

社会に出ていけば、その社会のどのような環境の中でもサタンと闘い、勝利しなければならず、国家に出ていけば、その国家の最も難しい問題に責任をもって立ち上がり、サタンと闘い、勝利する人にならなければなりません。

もしこのような人が現れれば、私たちがその人を見ると、今は滅びるように見えるのですが、あとから繁栄するようになるということを、皆さんは知らなければなりません。また、正にそのような人が、家庭や職場、団体、国家の主人です。家庭において父母のために自らの生命を捧げて孝の道理を尽くし、夫と妻が各々烈男烈女の道理を尽くし、国王のために忠臣の道理を尽くす人が、正にその家庭の主人であり、その国家の主人です。

このような心が皆さんの心の中からわき出てきて、体と一つになり、サタンまでも皆さんを尊敬して従うようになる時、初めて皆さんは、その国とその義を探し立てる民として立つことができるのです。

今日、数多くの人々は、「私はいかなる人間だ」、「私は国の民だ」と言って誇っています。今日、アメリカ人たちは、「大国の民だ」と言って誇っています。しかし、それは永遠ではありません。アメリカは、自分の国だけのために生きているのであって、他の国のために生きなければならないということを知らずにいます。昔、ギリシャ文明がローマのためにあったという事実を知らなかったのと同じです。ローマも、自分の国の文明がイギリスを経て現代文明のためにあったということを知りませんでした。それゆえに、今日、アメリカの国民は、自分の国のために働くのはもちろんですが、他の国のためにも働かなければならないことを知らなければなりません。しかし、大部分のアメリカ人は、これを知らずにいます。そのような中でも、自分たちだけのために生きるのではなく、天倫のために働かなければならないという理念が一部の人々に立っているということは、不幸中の幸いです。

今日、統一教会に集まった皆さん、皆さんは小さな教会に座っていますが、これを広げれば世界に代わることができ、さらには天城に代わることができるという心情を感じたとすれば、問題は解決するでしょう。いかなることも解決することができるのです。皆さんは、神様のみ旨を身代わりした子女なので、神様をこの世界の主人として侍る天国の民にならなければなりません。そして、皆さんは、いつどこにおいても、父のみ旨から外れることができないということを肝に銘じなければなりません。

歴史的な終末時代において、私たちは、華やかに着て、おなかいっぱいに食べて生きる民族ではなく、歴史に代わって耐え、奉仕する民族にならなければなりません。逆さまにならなければなりません。そうであってこそ公平です。主権をもって他の生命を奪ってきたいかなる理念にも、反対の立場に立たなければなりません。そのような時が来なければなりません。必然的に、このような過程を経なければならない歴史路程です。そうでなければ、道がふさがります。

そうだとすれば、神様が行く道、神様の息子、娘が行く道、神様の民が行く道とは、どのような道でしょうか。耐えて、奉仕し、犠牲になりながら行く道です。皆さんは、耐えるにおいて盲目的であってはいけません。救い主のために、神様のために耐えなければなりません。神様のみ旨のために耐えなければなりません。一時があるので、その時のために耐えましょう。それゆえに、再臨思想がない高等宗教はありません。

一時が来ると言いますが、その時とは、どのような時でしょうか。心の主体であられる神様が、心の目的を達成される時です。人間は、心の主体であられる神様のみ旨に従って闘い、その時のために探し求めていかなければならない歴史的な運命に置かれています。人間が神様に従い、神様の目標に向かっていくところでは闘いの路程がないはずがないの

で、このような曲折を記録しているのが歴史です。

その闘いとは、どのような闘いでしょうか。耐える者が先に打たれる闘いであり、犠牲になる者が支配される闘いであり、新しい理念と新しい希望をもって立ち上がる人々が殺される闘いです。そのような闘いの歴史路程でした。それゆえに、この地上で善を叫んできた人は、誰もが苦痛の路程を耐えなければならなかったのであり、民族に代わって犠牲にならなければならなかったのであり、自分の信念を曲げないために死の場に出ていかなければならなかったのです。

貧しく暮らしている人に対しては、助けてあげなければなりません。日本を中心としてアメリカを助け、アメリカを通して飢えて死んでいるアジアの人、かわいそうなインドのような所を助けなければなりません。この世界の人々は、一つの国の人々です。アメリカ人がアメリカの国民を愛するよりも、天の国の人が天の国を中心として愛するほうが、より強いというのです。

今、韓国は悲惨な立場にありますが、ここで支援しているすべてのものをもって韓国を助けてあげれば、韓国民族が私を褒めたたえながら喜ぶことを知っています。しかし、私は、韓国を助けずに、アメリカに来て、このようなことをしているのです。なぜならば、アメリカには世界へ向かい得る、より高い次元の何かがあるからです。

自分の生活文化の背景に歴史時代の痕跡が残っていては、本然の純粋な天国の民になることができません。サタン世界の文化背景を中心として習慣化した、そのような痕跡は、天国の本然の世界にはあり得ないというのです。生活的、習慣的な要素が残っていては天国に入っていくことができないのです。

民さえ転換すれば、地は自然に転換するようになります。主権さえ立てられれば、民も転換し、国も転換するのです。ですから、レバレンド・ムーンは、世界的な主権を手にすることができる最も近い基地であるアメリカとソ連に対して関心をもつのです。今まで、ソ連はアメリカと両極化していましたが、彼らさえも世界の頂上で一つに統一されています。神様は、そのような頂上を導きたいと思っていらっしゃるのです。強いて比較するならば、そのようになった時、導いていく機関車のようなものがレバレンド・ムーンだというのです。

このような一つの主権における一つの民、一つの地、一つの文化圏がエデンの園ですが、エデンの園には言語問題がないというのです。なぜならば、天国には天国の母国語（真の御父母様の言語）を使う人が入っていくようになっているからです。

一つの国家を見ても、そこには代表者がいて、氏族には氏族の代表者がいて、家庭には家庭の代表者がいます。人間は、このようなすべての世界と関係をもっているので、宇宙的な父母、教団的な父母、家庭的な父母に侍っていってこそ天の民となることができるということを、皆さんは知らなければなりません。

今日、全世界の人類が探し求めているものとは何でしょうか。宇宙的な父母です。特にキリスト教信者たちは、教団的な父母が現れることを願っています。その宇宙的な父母が現れる日が、正に再臨の日です。しかし、まだ教団的な父母と対面させることができる摂理が成されていません。

神様は、六千年間摂理のみ旨を立ててこられましたが、教団を中心として大祭司長の責任を担ってこなければならないという再臨主の使命が残っているのを見るとき、新郎新婦という約束圏内の摂理は成されたのですが、新郎新婦が教団を中心として生活することができる真の父母の位置には、まだ行くことができていないことを知ることができます。

真の父母の位置が決定するまでは、真の子女たちによって築かれる真の家庭は成立しません。一段階さらに進んで、宇宙的な父母の位置が決定するまでは、教団的な父母の位置が決定されないのです。

二十四時間、常に明るい光を発し、常に熱い情熱を発する人が神様の国の人です。虫たちが、真っ暗な夜に光りのある所に寄り集まってくるのと同じです。

それゆえに、神様の生命力と愛の力、明るく熱いものを永遠にもち続けることができる人ならば、その人は天国の人に間違いありません。

真の父の国、真の母の国、真の長子の国があります。そこに連結されて天国の民が生まれるのです。ですから、私が天国の民であり、天国の息子、娘であり、天国の主人だ、そのような結論が出てくるというのです。家庭から出発して、天国の主人になるのであり、皇族圏に入っていくのです。家庭の主人は孝子、国の主人は愛国者ですが、これが一つにずっと連結されなければなりません。一つの道を行かなければなりません。孝子から愛国者、愛国者から聖人、聖人から聖子になるのが一つの方向です。あとに戻ることはありません。

神様は、一つの道を行くことを願われます。最初は孝子にならなければなりません。「あなたが絶対的に必要だ。苦難の場であろうと幸福な場であろうと一緒にいたい」とおっしゃることができる私にならなければなりません。生涯、「永遠に一緒にいたい」とおっしゃることができる私にならなければなりません。誰かがいくら否定し、迫害したとしても、皆さんはその道を行かなければなりません。天国の民になれば、そこには蕩減がありません。一度成し遂げた結果は、永遠に存続するのです。

皆さんは、この国が認めなければならない真の家庭になるのです。この国の民が認めなければなりません。この国の氏族が認め、この国の家庭が認め、この国の個人が認め、皆さんの家庭が個人、家庭、氏族、民族、国家の認定圏を超えてこそ、世界へ入っていくことができるのです。

ここで認められなければ、皆さんの行く道はふさがるのです。認められることによって、歴史始まって以来、初めて皆さんは天国の民として入っていくことができることを知らなければなりません。

皆さんの婚約者が気に入らなくても、耐えて犠牲となり、耐えて奉仕しながら行かなければなりません。「あの人と出会わなければ、私は学ぶことができなかったはずであり、私を天国に行かせるためにあの人を私に与えられ、もっと苦労し、奉仕し、犠牲になることができる精神を私にもたせてくれるのだなあ！」。そのように考えれば、偉大な人となり、天国に行くことができる人になるのです。

神様は、罪人までもその息子、娘にすることを願われていらっしゃるのに、婚約者の顔が少し悪く、日本人で、背が小さいからといって、「ああ、私の好みに合わない！」と、そのように考えることができますか。男性として生まれ、最も醜い女性を連れて、より犠牲となり、より奉仕すれば、一等天国に行くのだということを考えなさいというのです。

最も偉大な夫となり、聖人の夫になるのだということを知らなければなりません。統一教会の食口ならば、それくらいのことは考えられなければなりません。

女性にとって最も幸福であり、最も貴いことは、夫をもったということです。それから、夫婦にとって最もうれしいことは、子女をもったということです。その子女は、父親のものでもなく、母親のものでもありません。この世界のものです。天国のものです。族譜は天国にあるのです。

自分の息子、娘ですが、みな国籍に入っているでしょう？　国籍があるということは、その国の民だということです。それと同じように、その息子、娘は、天国の息子、娘だというのです。それから、その夫婦は、天国を代表した夫であり、天国を代表した妻だというのです。そのように思うことができる心であってこそ、入籍する時、天国の基準に拍子が合うのです。そして、その基準に共鳴することができるのです。この地上において共鳴的体験をしなくては、いくら祝福を受けたとしても、天上世界では困るというのです。

男性も同じです。女性をもったということが最高の幸福です。二人が一つになって、愛を中心として息子、娘をもったということが第二の幸福です。そのような愛の家庭を世界に伝授しなければなりません。そのようになれば、天国の民としての資格を完全に備えるのです。

三位基台は、三大祭物です。アブラハムの三大祭物があり、ノアにも三層の箱舟があったでしょう？　すべて三大祭物です。このように祭壇を築いて三人が祭物を捧げ、その地域の民のために忠誠と誠心を尽くし、自分の息子、娘に対して福を祈る心情をもって、その地域を抱くことができる人にならなければなりません。そのような地域を受け持って三年間だけ活動すれば、天の民の資格を備えるのです。

真の人とは、全体のために犠牲となって苦労した人です。真の人の中には、真の息子がいて、真の娘がいて、真の師、真の友人、真の父母、真の兄弟、真の家庭、真の国、真の天国があります。それでは、真の天国とはどのような所でしょうか。全体のためにより犠牲となり、苦労した人々が行く所です。

アダムとエバは、個人で間違った結婚をすることによって滅びたので、今は逆に、国家間において二世が交差結婚をするのです。今は、愛さざるを得ません。愛によってその怨讐を溶かさなければなりません。このような基準を立てるためには、アメリカという国を中心として、六カ国の怨讐の国々、日本、韓国、ドイツ、フランス、イギリス等の怨讐が集まり、その怨讐の国に行き、その国の忠臣以上になり、新しい国を蘇生させるための伝統として、怨讐を愛したという挙国的な愛の基台を通してのみ、一つになったその基台の上で天国が出帆するのです。

天国に行こうとすれば、怨讐を愛さなければなりません。エデンの園には、神様を中心としたアダムとエバ、それからアダムとエバを中心とした天使長がいました。アダムとエバが完成して天国に入っていく時、天使長も一緒に入っていくようになっていました。愛して入っていく所が天国です。天使長が、神様の愛とアダムとエバの愛を受けたのちに、一緒に入っていくのです。それが創造原理です。

生きるのは、自分のために生きるのではありません。全体を代表して生きなさいというのです。自分が女性ならば、すべての女性に代わってこの時代に生まれ、自分を見ている女性の手本にならなければなりません。一つの標本として生きるのです。そのようになれば、子孫たちは間違いなくその標本に従っていくのです。そのように標本に従って連結する所が天上世界であり、永遠の世界です。ここに合格すれば、すべてのことが無事通過ですが、合格できなければ、大変なことになるのです。そこは、真の父母が教えてあげるのではなく、真の父母を通して完成した人々が行く所です。あの世には、そのような教育制度がありません。この地上で教育を受けてから行かなければなりません。地上でつなぐことは、天でもみなつながれ、地上で解くことは、天でもみな解かれるのです。

天国の民は、万民の前に奉仕の旗を掲げて立ち上がった人々です。それゆえに、今日私たちがある民族を救うためには、自分が所有しているすべてのものを、その民族のために分け与えなければなりません。それでも救うことができなければ、自らの生命まで捧げることができる人にならなければなりません。このような人が、すなわち天国の民です。このような民を糾合して天国理念を成就しなければならない神様の事情があることを、皆さんは考えなければなりません。

怨讐の子女を自分の息子、娘よりも愛さなければ、天国に行く道がありません。今日の既成教会員たちは、神様に「いつも幸福にしてくださり、私たちの罪と悪なることを、すべて許してください」と祈ります。それは、すべて偽物です。それを知っている文総裁は、神様に祈祷することができません。祈祷する前に実績を収め、それを捧げながらも恥ずかしさを感じなければなりません。面目ない私たちの先祖の罪を、何をもって神様に許していただくのですか。

いまだに真の父母が結婚式を挙げることができていません。真の父母が定着できていないのです。しかし、今は、真の父母が「真の父母と成約時代安着」という時代を迎えたの

で、真の父母が初めて還故郷することができるようになったのです。還故郷する時には、散在していたすべての子女を連れていくのです。故郷に行き、真の父母が定着して結婚式を挙げたので、息子、娘を結婚させるようになるのです。

それゆえに、統一教会は、今まで他の宗教と反対の道を歩んできましたが、誤った宗教ではなく、正統の道を教える宗教だというのです。なぜならば、「真の父母」という言葉をもっているからです。偽りの父母が教えた世界とは反対の世界に立っているのです。

偽りの父母の立場から、修養して真の父母の道を求めていくためにこのようなことを教えてあげたので、真の父母は、当然還故郷をしなければならず、家庭をもたなければならないというのです。ですから、真の父母の息子、娘も還故郷し、家庭をもたなければならないということは理論的です。

皆さんの心が「今、私は新しい時代に越えてきている」と思えば、後ろも振り返らずに「世の中よ、さようなら！　私は行く」と言わなければなりません。何の話か分かりますか。天上地上平和統一解放聖火式をしたので、その峠を越えたのです。

ソドムとゴモラを離れる時、後ろを顧みてはならないと警告したにもかかわらず、ロトの妻が、「ああ、行く道が漠漠としている」と言って……。行く目的地も知らず、どこに行くのかも知らず、避難することよりも、今の苦痛が目の前をふさいでいて真っ暗な天地だと思って行くので、女性たちは、昔の暮らしを慕わしく思い、間違いなく後ろを顧みるのです。ですから、終わりの日にはそのような時があるので、「身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である」（マタイ二四・一九）と言ったのです。

皆さんの国がありますか。この国のすべての結論を出さなければなりません。ですから、今から盟誓文も天一国主人です。主人になるのです。天一国主人私たちの家庭は、真の愛を中心として。これが主体です。このようにするのです。分かるでしょう？　盟誓文が変わるのです。盟誓文に主人が生まれました。誰もがみな売り飛ばすことができます。しかし、天一国という言葉は、永遠に、永遠に真の父母によって生まれた言葉です。神様の王権を樹立し、天地父母安着生活圏を経て、地上天上和合統一大会を経て、天宙、天上地上平和統一解放聖火式が終わったので、新しい国が必要です！　分かりますか。

統一教会に入ってきてどれほど信仰したとしても、心と体が一つにならなければ天国に行くことはできません。闘うところには影があるからです。

皆さんがここで入籍修練を受け、祝福を受ける時、正午定着ということを言いました。影があってはなりません。

皆さんの心と体が一つになっていなければ、日の光がさすとき、心が高い位置にあれば、左側に影が生じます。体が良心よりも高くなれば、左側から影が生じます。正午定着にならなければなりません。上中下が完全に垂直に立たなければなりません。神様が一代だと

すれば、アダムが二代であり、三代圏が垂直にならなかったというのです。神様には三代がありませんでした。孫と孫娘をもつことができなかったかわいそうな神様だということを知りませんでした。私たち人類の先祖であり、私たちの師の中の師であり、主人の中の主人であり、王の中の王であり、天下の大主宰であられるそのお方が、このように悲惨な立場に立っていらっしゃったという事実を、堕落した人類は知りませんでした。知ることができませんでした。

四　天国の所有権を得ようとすれば天の民を大勢連れていかなければならない

皆さんは、「私たちは、希望の民を求めてきた群れだ。希望の国を蘇生させるための群れだ。私たちが手を付ける日には、国を蘇生させ得る、一つの要素となる国民が蘇生する。私たちは、国の伝統的思想を受け継いだ者として、私たちの願う国を再建するために立ち上がったので、正しい伝統的思想によって彼らと一つになり、正しい国を求めていかなければならない。私たちは、そのような群れを募集するための募兵責任者だ」、このように考えなければなりません。

ここで、国を愛する心にあふれていなければならず、民を愛する心にあふれていなければなりません。今までのような、国の民として国を愛した立場とは違わなければなりません。今までの自分の親戚、あるいは父母、兄弟、妻子を愛したものとは違わなければなりません。それらとは異なる意味で民を愛し、国を愛することができなければ、神様が求めていらっしゃる希望の理想世界を再現することはできないのです。

私が神様を正しく見せてあげてこそ、彼らが私に従ってきて天の民になるのです。また、その集まる民を正しく連結させてこそ、天の祖国光復が蘇生するのです。

「一つの民」という言葉の中には、黒人、白人、黄色人がすべて入っています。一つの民は、すべての文化を消化させることができる能力をもたなければなりません。また、歴史的なすべての習慣と環境を消化し得る能力をもたなければなりません。

この一つの民となり、父母を中心として兄弟になろうというのです。しかし、まだこの世界は、そのようになっていません。それを完全に一つの民になることができるようにしなければなりません。

そのままほっておけば、そこにはいつも悪なる人が残ります。私たちが家庭教会活動をすることにより、一つの民をつくることができるのです。

一つの民をつくる方法は、家庭教会活動を通じなければならないという事実を知らなければなりません。それ以外には道がないというのです。数多くの氏族がいても、一つにする運動をしなければなりません。

統一教会は、祝福を受けることにより、統一教会の正常な食口として扱われ、天国の民として扱われます。そのようにすれば、サタ

ンは、理論的基準で自動的に分別されざるを得ないという結論が出てきます。

サタンの愛よりも神様の愛が気高く、原則的な愛の基盤で祝福を受けた男性と女性として立ったので、サタンが讒訴できる基準ではなく、その上にいるがゆえに、讒訴することができません。なぜならば、真の御父母様の血筋を通してすべて本然の血統基準を立てたので、その血統圏にいることができるならば、サタンは生まれることもできないというのです。ですから、完全にサタン分別圏に越えていくのです。

統一教会は、家庭天国理想のために前進する代表的教会です。この家庭の中には、国が宿り、世界が宿り、天地が宿り、神様が宿るということを知らなければなりません。

真の父母の血族の因縁をもったので、今後野生のオリーブの木になってはいけません。真のオリーブの木の種をもって、万国のどこに行って根を下ろしても、真のオリーブの木の実が結実しなければなりません。万国万邦を越えて同じ実を収め、天国の神聖な民族として倉庫に納めなければなりません。それが神様の創造理想だったことを知らなければなりません。天国の民を拡張させなければならない責任、蕩減の役事がない自由解放圏内の天国の民を拡張させなければならない責任が、私たち統一教会の家庭にはあるのです。それが皆さんの使命だということを忘却してはいけません。

今から氏族圏が発足するのです。今からは、神様が主管されるのではなく、皆さんの一族を天国の氏族化させる時代に入っていくようになります。それゆえに、先祖が役事して、我知らず統一教会に行くようになるのです。春が訪れてくれば、葉が強制的に出てくるのではありません。自然に出てこなければなりません。ですから、徐々に朝日が浮かび上がるその世界が目前に迫ってきたので、解放された姿で、神様の子女の名分を中心として、威風堂々と天地の大主人として出ていくことが、私たちの義務であり使命だということを忘却してはいけません。

先生の願いは、天国の民を生かすことです。しかし、サタン世界に属した民をどのように変化させるのでしょうか。これが問題です。それを否定して、一八〇度方向を転換させるのです。今、サタンは上に位置し、神様は低い所に位置していらっしゃいます。それをどのように変えるのですか。零点にならなければなりません。天国の民をどれだけ連れていったのかということが、最も貴いことです。

皆さんは、先生のおかげで全員天国の民になったでしょう？　同じです。皆さんの息子、娘が天国の民になることができるようにするためには、自分が死んでも、天国に連れていって暮らすことができる息子、娘として教育しておかなければなりません。それが皆さんの財産です。それをシステムにして、皆さんの息子、娘を教育しなければなりません。それでこそ、彼らが一つの所に行くのです。すべての人々が一度に天国の民になるならば、神様がどれほど喜ばれるでしょうか。そのようにしなければなりません。それが、あの世の財産です。

嫁いでいく新婦が嫁ぎ先に行くときに、所帯道具をもっていくのと同じように、それがあの世に行く時の贈り物です。自分の国の人はもちろん、数多くの国の人を連れてきたというときには、天国で祝宴が催されるのです。

原理のみ言を通じて、事業ならば事業分野において、天国の民を連れて入っていくことが最大の贈り物です。天国に入っていく時に、何をもっていくのですか。自分の家族だけ連れていくのではありません。自分の家族だけ連れていけば、サタン世界のカインの息子、娘を、誰が救ってあげますか。

ですから、今まで、真の愛を中心として天国に入っていった民がいなかったというのです。そうです、天国は空いているのです。ですから、天国の民をたくさん復帰していくことが、神様から賞を頂き、天国の近くに行くことができる贈り物だということを知らなければなりません。知識や何かの活動や実績ではいけないというのです。

永生基盤がなくては、長久な闘争はできないのです。実績がなければ流れていきます。先生は、永生をかけて闘ったので、今まで残ってきたのです。同じです。深刻な問題です。その力を知らずにいます。いずれ、一度は死ぬのです。どのコーナーで死ぬのか分かりません。いつかは霊界に行くのです。行く時に、天の前に何をもっていくのですか。体をもっていくことはできません。すべての人が天の民を率いていかなければなりません。それゆえに、先生の後ろには、多くの民が従うようになっているでしょう？　それは、しなければならないのです。

霊界においての所有圏は、天国の民をどのくらい連れて入ってきたかということで決まります。それが自分の財産です。これからは、それを正さなければならない時が来ました。今からは、一日に何百万が伝道される時が来ます。統一教会には、そのような素晴らしい内容があるのです。世の中を見なさいというのです。今死ぬとか生きるとか、人生が何だとか、地に足をつけることができずに空中をさまよいながら、狂ったように歩き回り、最後に自殺する人がどれほど多いですか。

これからは交流時代に入っていくのです。統一教会の食口交流時代、近隣の三、四カ国を中心とした交流時代、その次には大陸間の交流時代、さらには東洋と西洋の交流時代が来るのです。このように交流すれば版図が変わるのです。

なぜそれが必要でしょうか。その国家と国家を見れば、境界線に接している国家同士は、大概が怨讐視しています。自らの実利を追求しているのでぶつかることが多く、怨讐になったというのです。それゆえに、霊界では、暗黒の時代で生きた人は、すべて障壁でふさがれているのです。これをどのように開くのですか。地上で子孫が崩してあげなければなりません。

その子孫が崩してあげることにより、その障壁が崩れるというのです。その障壁を崩そうとするので、日本の人を、憎んだ以上に愛することができる人にならなければならないというのです。それがアベルの使命です。先に知った人が、先に十字架を負わなければなりません。

あの世に行くにおいて、個人所有になるものは、この地上にいる時に天国の民をどれだけ多く接ぎ木させていったかということです。宗教では、この意識を植えつけてあげなければなりません。私たち統一教会の食口が二世にこの意識を植えつけることができなかったので、ほかの所に行こうとするのです。「就職だ」、「何だ」と言って、世の中に流れていこうとするのです。

ですから、この地で霊界、天国の民を生産するようになっているというのです。霊界では生産ができません。地上で生産するのです。ですから、本来は、アダムとエバを中心として、原則的に生産したとすれば、すべてが天国の所属なのですが、堕落したためにひっくり返ったのです。

御飯を食べることよりも重要なことが、天国の民を治めることです。それが、この地上に生きる私たちの本業です。生涯にしなければならないことの中で、それ以上に貴いことはありません。世の中で就職して出世したり、お金を集めたりすることは、すべて流れていくのです。あの世では、お金を集めても何の意味もありません。あの世では、物質が必要ないのです。知識が必要ないのです。学ばなくても心が先に知っています。一週間以内に何でも、すべて通じるのです。

今後、皆さんはあの世に行き、復帰歴史をされる神様の前に、一人のアダムを取り戻すために今まで苦労された神様の前に行って、何と言うのですか。神様は、創世以後、今まで一人でアダム完成者を尋ね求めてこられたのではありませんか。しかし、皆さんは、原理を知りました。これは、数千、数万の民を救うことのできる武器です。今まで神様が人間に教えることができず、それを分からない中で摂理なさる神様の切なさ、それに代わって地上で神様以上のことを私たちがするのです。私たちには、原理で数百、数千のアダムを教化して連れていくことのできる道があるのです。

皆さんは、天国に連れていくことができる息子、娘を何人つくりましたか。皆さんがしなければならないことは、それしかないのです。いくら億千万のお金をもって幸せに暮らしても、すべて流れていくのです。それは、自らのすべての物質と知識と自分の命まで、堕落した自分の命まで投入してでもしなければなりません。それを別々に投入するのではなく、一度に投入して天国の民をつくろうと思わなければなりません。投入して全体が加重されるに従い、その価値は比例していくのです。

皆さんがどれだけ永遠に天の前に称賛を受けられるかは、どれほど天の民を収穫して収めるかという問題にかかっています。それを収めることのできる鍬が、今まではなかったのです。分からないのでできなかったのです。しかし、皆さんには、背負子があります。熱心にみ言を伝えれば、爆発的に収穫することができるのです。

自分によって多くの天国の民、天国の家庭を拡大しなければなりません。あの世に行って新しく策定される位置が、地で決定するというのです。地で結べば天でも結ばれ、地で

解けば天でも解かれると言ったでしょう？
このことを前提として語られた言葉です。

磁石のＮ極とＳ極がお互いに「引っ張れ」と言って引かれていくのではありません。そのように自然な作用が展開するのです。台風が吹くのです。これが定着しなければなりません。エバ圏を中心として、母を中心として、台風のように吹いてくる世界の運勢と共に、カイン・アベル圏を家庭にしっかりと植えておかなければなりません。出産するのです。皆さんがする出産は、母の出産であり、息子、娘の出産です。この道を行くにおいて、女性たちは解放者です。男性たちは、無関心な自由天地圏にいるので、自分の息子、娘が行くことに干渉できないのです。女性は、二十四時間いつでも占領することができる時代圏に入ってきたという驚きを、天地の前に、父母様の前に感謝しなければなりません。それゆえに、どれだけたくさん収穫して天国に行くのかということが問題です。

最近韓国では、婚礼家具問題で騒々しいでしょう？　ちょうどそのような時になりました。天国に、どれだけ多くの民と家庭を連れて入っていくのかということが問題です。天国には家庭も民もありません。民とともに家庭をつくってさしあげれば、神様がどれほど有り難いと思われるだろうかというのです。真っ暗な夜中に天を見れば、星が輝くのが見えるでしょう？　皆さんはその中で、どのような星になりたいですか。大きな星になりたいと思うはずです。へそのような大きな星になるかならないかは、民をどれだけ、家庭をどれだけ率いていくかにかかっているのです。

山に行って山菜を摘む女性が、良い山菜を取ろうと一日中あちこち飛び回れば、夕方に帰ってくる時にはかごが空だというのです。おなかが空き、その山菜をつまみ食いして空のかごで帰ってくるのです。しかし、着実に落ち着いて取る人は、元気に飛び回っていた女性を家に使いとして連れてくることができるというのです。

今、天国には民がいません。天国は空いています。それゆえに、統一教会の門を通じて、空いている膨大な天国を民で満たさなければなりません。そのような時代が来たにもかかわらず、世界のことは考えないで自分のことばかり考えていてはいけません。うずらのように頭の羽が抜け、せきれいのように頭の羽が白くなってはいけません。仕方なく尾を振りながら、哀れに飛んでいくせきれいになってはいけないというのです。貴婦人にならなければなりません。

なぜ神様がアダムを造られたのかというと、横的な面積が必要なので造られたのです。多くの男女が結婚して家庭を築くのは、家庭の息子、娘をすべて移動させ、天国を満たすためなのです。それゆえに家庭は、天国の民を創造、製造する分工場です。

家庭が分工場なので、多くの息子、娘を刷り出しなさいというのです。天国では、誰が民をたくさん連れて入ってきたかによって天国の位階が、栄光の位置が決定するのです。息子、娘をたくさん育ててみれば、十二タイプの人間、二十四タイプまで育ててみれば、人間をすべて愛したという位置に立つというのです。

今回、私がハワイに出発する時に、今まで神様王権即位式と、それから神様の故郷と祖国定着、それから天一国宣布とともに国民……。国を成すためには主権がなければなりません。それが王権樹立です。国がなければなりません。祖国定着です。その次には国民がいなければなりません。ですから、天国入籍カードをもつようになっているのです。

このようなことをなすことによって、天の全権を中心とした主権と国と国民を備えることができる天一国の基盤がすべて準備されました。ここにおいて自らの確定的な価値決定は、今から皆さんが天の前にどれくらい一族を収拾するかにかかっています。逆に行かなければなりません。ここから上がっていかなければなりません。

今からは、先祖を動員する時代です。先祖たちを動員して協力させなければなりません。そのようにしようと思えば、この内容をはっきりと知り、天上の構造がどのようになっていて、どのように再臨役事が成されるのかということをはっきりと知って動員しなければなりません。そのようにして、皆さんが旗手となり、誠心誠意を尽くす彼らの方向を先につかんであげ、模範とならなければなりません。地上がお兄さんです。地上が模範とならなければなりません。分かりますか。ですから、一人でするのだと思わないでください。先祖を動員すれば、すべて協助してくれるのです。

堕落とは何かというと、神様にも創造なさった責任があり、アダムには堕落させた責任があります。その堕落は家庭破綻であり、それは、国家、世界、全宇宙を滅ぼしてしまうことができる破綻です。偽りの父母がこのようにしてしまったので、偽りの父母の王であるサタンが生まれ、偽りの父母と一つになって神様を追放し、神様が願われる世界を滅ぼしたのです。そのようにして、今まで、政治世界が宗教圏を犠牲にしてきたのです。しかし、今からは、これがひっくり返ります。

ですから先生は、超宗教、超国家、超ＮＧＯ運動をして、秩序がひっくり返っているものを順次的な方向に立て、天と地が統一された解放の結果として合わせるのです。合わせるにおいては、霊界で合わせるのではなく、地上で合わせてすべてのものを解放して越えていかなければなりません。

越えていく時は、サタンが汚した血痕の残っている一切、汚した痕跡が残っている一切を燃やしてしまうのです。今まで、自分個人や家庭やおしりにぶらさがっていたものをすべて燃やしてしまい、この天上地上平和統一解放聖火式を通して越えるのです。

越えるのですが、その越えた位置は何かというと、祝福中心家庭です！　越えるにおいては、家庭から失敗したので、家庭をもたなければ越えることができません。個人では越えることができません。それゆえに、今、霊界でも祝福完結のために大騒ぎです。地上に対して要求するのです。

それゆえに、地上で生きたのちに死んでいった皆さんの先祖や、また宗教の責任者である宗主たちには、地上に再臨し、その氏族や宗教を中心とした主人の立場で責任行為を完

結して越えていかなければならない責任があるので……。

「今、統一教会は外部の人を伝道してはならない」と言いました。自分の一族、自分の家庭に属している僕を救ってあげ、それから養子を救ってあげ、庶子を救ってあげ、直系の子女を救ってあげ、一つになって父母に侍り、本然の家庭の夫であるメシヤを中心として教育を受けるのです。そのようにすることによって、新たに解放された地上の個人から天上解放圏まで完結することができるのです。

五　天一国主人の生活

一) 一心、一体、一念、一和

あなたと私は、心と体が一つになった同じ位置、それはすなわち夫婦一心、父子一心という位置です。一心は、一つは上にあり、もう一つは下にあるという状況では成立できません。父親が上にいて、息子、娘が下にいれば、一心になることはできないのです。お互いが同等な立場で平面的に位置していてこそ一心になるのです。内的外的関係が平面線上の位置に立ってこそ一心になるというのです。夫婦も同様です。

横的関係において内外関係、前後関係の位置に立ってこそ一心になるのであって、上下関係では絶対に一心になることはできないというのです。

一心統一です。目が一心にならなければならず、鼻も一心であり、すべて一心です。心と体も一心であり、男性と女性も一心です。国の氏族も一心であり、国も一心にならなければなりません。王が願うとおりに一心にならなければならず、世界の大統領と一心となり、神様と一心となり、天地の大統領と一心統一になれば、世界は一つの国になるのです。その統一された国は、人の国ではなく、正に私の国なのです。

アダムとエバが神様の前に責任を果たしていたならば、神様が祝福式をしてくださったのです。祝福を受ければ、そこから善が出発し、真理の一体化、実体の一体化、心情の一体化が成されるのです。真理の一体化とは、神様が「このようにしなさい！」とおっしゃれば、「はい」と言って、神様のみ言どおりに従ってすべて成されるのです。神様のみ旨から見たアダムとエバは、本来二人ではありません。アダムがエバに引かれて天法に背いたので二人になったのであって、本来は一人なのです。真理の一体化、実体の一体化が成されたのちには、心情の一体化が成されなければなりません。そのようになれば、神様と一体化するのです。神様は、そのようになる日を待ち望んでこられました。

天国は、神様の愛を中心として完全に一体となった夫婦が入っていく所であり、その一体となった夫婦によって生まれた子女たち、すなわち神様を中心として一体となった家庭、氏族、民族をすべて率いて入っていく所なのです。

統一教会の第一条件は、心身一体です。それで、神様が天地創造される時、絶対信仰、絶対愛、絶対服従を命じたのです。自分が言えば、信じたとおりに実体が現れます。現れなければ、投入して現れるようにして成し遂

げるのです。いくら大きなものでも、自分が命令したとおりに成し遂げられるというのです。願った以上に投入するので、完成するのです。

エバの堕落は、絶対信仰、絶対愛を追求できなかったということです。それで、蕩減復帰原則において、良心を中心として絶対信仰、絶対愛を取り戻すために、天のために生きる一念、一片丹心しかないというのです。世の中のすべてのものは、天とは背反するものなので、これを断ち切って絶対否定しなければなりません。

一和という言葉は、「一」という字に、和するの「和」という字です。化けるの「化」という字ではありません。和するの「和」という字は、皆さんの個性がそれぞれ違いますが、個性の違う人たちが一つになるのと同じように、個性の違う民族、個性の違う国家が一つにならなければならないという意味が内包されています。

一和という言葉の「和」という字は、本質が変わっていきながら和合するのではありません。男性なら男性が、女性なら女性が、変わらずに和合するのです。どちらが貴いかというと、本質が変わって和合するよりも、そのまま和合するのが貴いのです。

一心、一体、一念。一心は何かというと愛天です。天を愛しなさいということです。一体は何かというと、人類を愛しなさいということです。そうではありませんか。一念は愛国です。愛国は国家を愛しなさいということです。国家は家庭を拡大したものです。家庭を愛しなさいということです。男性と女性におけるすべての願いの骨子または主流は、一心、一体、一念の思想です！　分かりますか。

ですから、きょうの表題を言うと、一心、一体、一念安着は、一念と言ってもかまいません。一心、一体、一念は神様と天宙人の主流思想です。天宙と言えばみな分かるでしょう？　神様の家なので、万物世界、天地がすべて入るのです。天宙人の主流思想です！
分かりますか。一度言ってみてください。
（一心、一体、一念は、神様と天宙人の主流思想です）。天宙人とは、天地の家の人です。すべて入ります。被造万物がすべて入るのです。天宙人の主流思想です。分かりましたか。一度言ってみてください。（一心、一体、一念は、神様と天宙人の主流思想です！）。それ以外にはありません。

万福の根源であられるお父様！

地上に真の父母を送られて数多くの恨の峠を蕩減させられ、今は、天上地上和合統一大会とともに天上地上平和統一解放聖火式を終え、天と地が共に水平上に立つことのできる天一国平和統一平定時代を迎え、天と地が共に一体理想を中心として、個人から天宙まで、水平的基準で一つの目的に向かって前進するようになりました。個人完成を中心として、心と体が一つになり、一心、一体、一念を中心として和することのできる一和の実体を中心として、天が願われた相対的理想を完成するための愛の理想のために絶対的に必要なものは、対象的基準として創造されたアダムとエバです。無形の天国の父母と有形の実体の父母が、一心、一体、一念、一和の統一的基

準を中心として、愛の理想相対をもたなければ、絶対愛、唯一愛、永遠不変の愛、神様における属性の主流的理想の目的を完成することはできません。

二) 純潔の八段階

救援摂理は再創造摂理です。再創造摂理は、神様の創造原則にかなう純潔な万物、純潔な人、純潔な血統、純潔な愛を立てるためのものであり、これが創造の過程なのです。純潔な地上に純潔な万物、純潔な人、純潔な愛を立てるためのものが創造の理想であり創造目的なので、これを成し遂げるためには、私たちの一身において自由にならなければなりません。

純潔な体を取り戻すためには、サタンの基盤になっている体を打って、サタンを追放してしまわなければなりません。そして、純潔な心と体、物質と精神が一つになり、それからサタン圏を抜け出し、約婚段階において三年を経たのちに完成圏の祝福家庭を成すのです。これを原理から見るときには、人間の責任を完成することができる立場に上がっていくということです。このような復帰路程と蕩減路程を知らなければなりません。このようにしなければ上がっていく道がありません。

純潔の八段階とは、純潔、純血、純愛、純孝、純忠、純聖、純婚、純家庭の道理を果たし、真の父母によって個人から家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神様まで、地上において八段階の秩序を完成した形態として立てることによって、はじめて対象的な横的個人、家庭、氏族、民族が相対的基準で一体化するのです。

それで、無形の神様と実体の天地父母の愛を中心として、家庭的出発形態を拡大した世界理想の基準として抱き、一つの家庭形態として結論づけることができるようになるとき、地上天国と天上天国が解放され、天の国に直行することができる道が開かれるようになるのです。このような内容を成し遂げることが、神様と真の父母の使命です。

心と体が一つになり、一心、一体、一念、一和の姿で神様の前に真の孝子となり、国の前に忠臣、世界の前に聖人、聖子の道理を果たし、純潔な孝誠の心で、「私は、永遠に真の父母に侍って暮らします」と言うことのできる群れにならなければ、天一国の民になることはできません。

自分一人だけが幸せに暮らそうと考えることはできないということを発見しながら、世の中にいかなる困難や幸福な環境があったとしても、それを越えて不幸な立場にまでも自分が行き、開拓の王子の立場で神様の代身者になろうと思うことができてこそ、天一国を相続することができる相続者になるのです。

一緒に暮らしたいと思って真の御父母様が苦労されるので、私は、千倍万倍苦労しても良く、持っているものをすべてかき集めて、その生活圏内に相対基準を造成し、誰よりも真の御父母様を解放された喜びの立場に立てようと思わなければなりません。

自分は極の極の立場で苦難も消化しながら感謝することができ、賛美を捧げ、天の前に栄光を捧げ、子孫の前に永遠に誇りを残してあげようと思うことができる人になってこそ、天一国の主人になることができるのです。

習慣性を正し、サタンにずるずる引っ張られる糸口を残さないためには、神様の摂理としてこれは良いチャンスだと考えなければなりません。

純潔の血統を残すためには、真の御父母様の血統を受けて継承した清潔な基盤の上に、純潔な愛によって純潔な種を蒔いて、純潔な子孫を迎えるその日の喜びを思って耐えて越えていかなければなりません。そのような道が、山の峠が重なりあっています。それを重大だと思って希望に満ちて越えていくことを先生はお願いします。分かりますか。

真の父母は、アダムとエバが失敗したすべてのことに責任をもち、解決してあげなければなりません。そのようにしなければ、真の父母の立場に帰る道がありません。父母が植えたので父母が収穫し、悪いものは火で燃やし、良いものは倉庫に入れ、万民が要求する種を分配してあげなければならないというのです。それが原理のみ言です。真の愛のみ言です。純潔な血統のみ言です。理想の夫婦に関する愛のみ言です。それ以外に、人間として尋ね求めていく道はありません。それ以外はすべて消えていきますが、これは、人間の生命と共に、永遠の生涯と共に行くのです。そのように貴重なのです。

血統を維持しなければなりません。清い血統、純潔な血統を維持しなければならないというのです。神様が堕落したアダムとエバを追放したのと同じように、血統が汚されれば、自分を完全に除去してしまい、堕落した人と同じように、再び人類の後ろに戻っていかなければならないのです。

今後、天国の責任者は、このような純潔を守って生きてきた人だけがなることができるのです。この人たちは、主流の伝統思想を受け継いで相続していかなければなりません。祝福を受けた家庭が再堕落することは、絶対に赦すことができません。

家に帰ってくれば、誰よりもまず父母にあいさつし、孝道を尽くす伝統がありますが、それは、特に女性に強く強調されたことです。なぜ沈清でしょうか。それは、女性が不孝をしたからです。世界的な歴史を蕩減し、孝子の伝統を立てるために、一人の女性をナンバーワンの位置に立てなければならないのです。復帰天国を成していく時に、これが蕩減の第一条となるので、女性が孝子の伝統を立て、志操を守り、純潔を誇ることができる娘になったというのです。

天国の主人になるということは、孝子になったのちに言う言葉です。孝子の次には、忠臣、聖人、聖子の家庭です。

聖子の家庭が真の家庭です。真の家庭になってこそ、天国の主人になるのです。

心と体が一つにならなければ、今後、天国に行くと考えてはいけません。

もし原理のみ言を知って一つになろうと思ったならば、一つになる時まで、あの世に行って待たなければなりません。

皆さんは、孝子にならなければならず、孝婦にならなければならず、それから孝聖にならなければなりません。その次には、純潔、純血、純愛を中心として、家庭基盤の上で神様に対して家庭的孝子にならなければなりません。一人だけではありません。家庭全体が孝子にならなければなりません。そして、孝子忠臣家庭、それから孝子聖人家庭、孝子聖子家庭です。

そのような立場で、個人から天宙まで、あの世の天国の王権を受け継ぐことができる王子、王女として、遜色のない主人の代身者とならなければなりません。私たちは、常にそのような訓練をしなければなりません。天一国主人という言葉は、そのような意味です。

真の父母がすべてを収拾し、主人の位置に奉献してさしあげなければなりません。なぜかというと、アダムとエバは、結婚したのちに相続されるのです。結婚前に所有しているということは、盗品を購入したということです。

盗んだ品物を買って使っているか、借りて使っているか、自分で盗んで使っているか、主人ではない者が主人の役割をしているということです。すべて果たし、純潔、純血、純愛の家庭を中心として、家庭的孝子忠臣、家庭的孝子聖人、家庭的孝子聖子を真の父母の前にすべて捧げ、神様の前に収拾してさしあげなければなりません。その国も、すべてこのような婚姻申告をしなければならず、出生申告をしなければなりません。

祝福された家庭は、純潔血統、純愛家庭を中心として、家庭的孝子、国家的孝子、世界的孝子、天宙的孝子になって「神様は私の父だ」と言わなければなりません。内外にあるすべてのものが似て、心も似て、体も似て、細胞も似て、一心、一体、一念、一和にならなければなりません。しかし、相対がいません。一和の立場で愛を投入しなければなりません。投入し、万物時代から絶えず上がっていかなければなりません。最終的には神様にまで上がっていかなければなりません。神様が喜ばれれば、天下が喜び、天地が和動できる本然の創造理想、完成完結した解放的起源がそこから出発するのです。そこまで行かなければなりません。それを早くしなければなりません。雷のごとくしなければなりません。

三) 神様と真の父母のための侍る生活

今日、堕落した人間たちに父母はいますが、その父母は真の父母ではありません。その父母は、神様に認められた父母ではないというのです。それでは、終わりの日に私たちがしなければならないこととは何でしょうか。私たちが生きているこの時に、宇宙的な父母をお迎えしなければならず、教団的な父母をお迎えしなければならず、その次には家庭的な父母までをお迎えしなければなりません。すなわち三代の父母に侍らなければなりません。家庭は、民族を代表することができる型であ

り、教団は、子女の代わりをすることができる型であり、宇宙的な父母は、真の父母の代わりをすることができる型です。

今日、地上に人間たちが生きていますが、神様が許諾された真なる父母の愛の圏から外れています。父母と血と肉が相通じる因縁が、私から永遠の世界まで連結していないことが寂しいことなのです。それゆえに、家庭的な父母から教団的な父母と、宇宙的な父母と、神様の愛が絡み合って、初めて六千年全体の愛の圏に入っていき、神様に顔を上げて立つことができるということを皆さんは知らなければなりません。これが、私たち人間が必ず行くべき路程です。

もし人間が堕落せずに生まれていれば、神様の愛と生命がすべて連結された種から生まれていたのです。それでは、その生命はどこに行くのかというと、ほかに行く所はないというのです。その生命は、自動的に神様に帰ります。磁石があれば、Ｎ極は、Ｓ極に向かって自動的に行くのと同じです。そのようになっていれば、神様がいるのかいないのかを尋ねる必要はないというのです。空気があるのかないのかは分かりませんが、なければ息が苦しいのです。同じように、神様もいるのかいないのか分かりませんが、その愛とその生命力によって生きなければ、すべてのものが窒息してしまうのです。

真の父母を通して生まれ変わってこそ、天国の民になることができます。それでは、どのようにして再び生むのですか。生むことができる条件を掲げるのです。完全に一つにならなければなりません。それゆえに、女性は、真の母の命令に絶対服従しなければなりません。エデンの園で戒めを守ることができなかった恨を解かなければなりません。絶対服従しなければならないのです！　また、その母の言葉に息子、娘が絶対服従しなければなりません。それを誰が教えてあげるのでしょうか。父、完成したアダムが教えてあげるのです。

蒔いたとおりに刈り取るということは真理です。エデンの園のアダムとエバは、何の種を蒔きましたか。フリー・セックスの種です。それで下部を隠すのです。幼い子供も、父母が買っておいた菓子か、おいしいものがあるとき、それを隠れて食べていて、父母が来れば隠します。犯罪の部分を隠すのが本性の作用です。神様の前に現れることができないのです。

堕落した人間が地獄に落ちたので、天国に行こうとすれば、一八〇度反対の道を行かなければなりません。ここで間違った血筋をもって生まれ、地獄に落ちるようになりました。血統が変わったのです。それゆえに、メシヤが来なければなりません。神様が創造されたエデンの園で、堕落しないで堕落前の位置に行き、家庭を築くことができる主人として送るのがメシヤです。これが理論的に合わなければなりません。神様に侍る家庭を通してそれを連結し、国家を中心として家庭的に切って接ぎ木した位置で、一度にひっくり返そうというのです。

フリー・パスをもつためには、真の父母の名前を通じなければなりません。そのようにしなければ、それをもつことができないので

す。父がもっているものは子女に相続してあげるのが道理です。それゆえに、皆さんの家庭教会活動は、真の父母の身代わりであり、神様の前に真の父母の息子、娘として行うのです。

神様を中心として真の父母のみ旨に一致することができないときには、他人の息子、娘です。彼らが真の父母の息子、娘として心情一体になるとき、自分の息子として伝授されるのです。

堕落した人間は、他人の息子を生んで育て、その息子を通して自分が高い位置に行かなければなりません。このような観点がきちんと設定されることにより、ここには否定があり得ないのです。

神様の息子、娘になろうとすれば、神様のようにしなければなりません。皆さんが真の父母のようにしなければ、真の父母の息子、娘になることができないのです。同じ原理です。先生も「蕩減」という言葉は嫌いです。しかし、なぜいつも蕩減を中心として話さなければいけないのでしょうか。これが公式だからです。公式を解くことができなければ、落第するのです。十年ではなく、千年たっても落第するのです。

神様を宇宙の父母として侍れば、神様の愛がこの地上に君臨するというのです。そのようになる日には、神様の愛を受けて兄弟を愛するようになり、「闘いなさい」と言っても闘わなくなります。エデンの園で堕落したことは、どれほどひどいことでしょうか。エデンの園で争い、今まで血を流してきた路程がどれほどひどいことでしょうか。個人が天国に行こうとすれば、一人では行くことができません。二つが一つになり、兄と一つになって父母に侍っていかなければなりません。

エデンの園でアダムとエバは、自分勝手に堕落して、その堕落圏内で生きたので、直接的な侍義の生活をしてみることができませんでした。このような侍義の生活ができない人間たちは、天上の天国に入っていく資格がありません。しかし、皆さんは、堕落の血統を受けて生活したとしても、一つの復帰路程を蕩減し、アダムとエバが地上で実体をもって侍ることができなかった真の父母に侍り、神様に侍って暮らしたという条件により、天国に入っていくことができる資格を得るというのです。そのようにしてこそ、天国の市民権を得るようになります。

「天一国平和統一平定」を宣布するのです。「天一国平和統一平定」です。どこも同じだということです。分かりますか。同じでないところはないということです。「平定世界時代」を発表するのです。天一国平和統一平定時代到来発表宣言！　ですから、この言葉は何かというと、天国も地上も同じだということです。平定です。

皆さんがある宗教を信仰したとすれば、その宗教の責任者を呼んだときに答えなければなりません。また、先祖を呼べば、子孫たちは真正に天一国平和統一の祝福を受けた家庭なので、答えてあげなければなりません。ですから、霊界が自由自在に地上に再臨することができ、地上の人の願いが先祖と神様の前に自由自在に伝えられ得る時代を意味するの

です。天一国平和統一平定時代到来発表を宣言します。「アーメン」と言ってください。

きょうを記憶しなさい。きょうの早朝、このような内容を祈祷する中で、このような時が来たのだなあということを感じ、このような内容を発表するのです。ですからそのような時代が来たので、きょうは、どのように生きなければならないのかということを、しばらくの間話そうと思います。

私たちの願いは何かというと、神様と同じ位置に立ちたいということです。同位権です。同居権は共に生きるのです。それから同参権です。同参権も同行権も同じです。共に参席し、共に行動するのです。そのようにして、その次には同愛権です。共に愛の目的のために生きるのです。

イエス様も、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と言いました。しかし、「わたしは道であり、真理であり、命である」と言いましたが、愛の言葉を抜きました。のちの統一教会は、天一国は愛を中心として進むのです。

ですから、皆さんの願いは何かというと、真の御父母様と同じ位置にとどまりたいということです。それが願いでしょう？　真の御父母様と共に生きたい。真の御父母様と共にすべてのことに同参し、行いたい。そのようにして何をしようというのでしょうか。愛を中心として、幸福に、自由に、解放された位置で永遠に共に生きるのです。アーメン。そのような意味において、天一国平和統一、何ですか。平定時代が来たのです。

それゆえに、皆さんが活動する時は、一人で活動するのではなく、皆さんの国が従って回ります。霊界全体が、天の国全体が回り、地上世界と万民が擁護する中で主人の資格をもって生きているのです。ですから、神様の愛の伝統を私の一族を通して、一国の伝統のその骨のような思想に自分が仕えるべき主人にならなければなりません。アーメン。

六　天宙天地真の御父母様の勝利圏相続

一) 名前

先生の説教集を調べてみてください。四十年前に語った話や、今語っている話がそのとおりになってきているのです。すべて読んでみましたか。説教集を読んでいますか。（はい）。私は、イエス様をこの上なくよく知っている人です。「真の父母」という名前は、六〇年から生じたのです。歴史時代に「真の父母」という名前が登場したということは、驚くべき事実です。

統一教会が世界主義になることによってどのようなことが起きるのかというと、霊界の霊人たちがすべて霊界にとどまっていません。地上で完成して入っていくのが目的なので、すべて再臨するようになります。すべて再臨するようになるのです。すべて活動するのです。世界に散在している統一教会の教会員たちが尖端に立ち、「動け！　動け！　動け！　動け！」と言うのを願っているのが、数千億になる霊界の霊人です。それが霊界の霊人たちの願いです。ですから、ここで合わせ、霊

界にもっていって一つにすれば、神様が主管なさる世界になるのです、真の父母の前に一つに統一された世界が永遠に継続するのです。

今、全世界の統一教会の人々は、「先生が韓国に行った」と言えば、既に韓国を中心として全員が一つになっているのです。あやしげでしょう？　そのような意味において、ここの全（斗煥）大統領がアフリカに行くからといって、人々がみなそこに行ったりしますか。しないでしょう。ところが、統一教会は奇妙でしょう？　白人、黒人、誰彼を問わず、私のあとをついて回るのです。なぜでしょうか。どうしてですか。愛ゆえにです。

名前は何ですか。先生の名前は何ですか。名前が二重にあるではないですか。愛を代表して何と言うのですか。（真の父母です）。この名前があるのです。ただの名前は文鮮明であり、愛を代表しては何と言うのですか。（真の父母です）。（笑い）真の父母です。愛を代表する真の父母です。ただの真の父母ではありません。それを知らなければなりません。愛を代表して、神様の統一的な愛を中心として、宇宙的な統一理念を広げるのに愛を中心として、それが一つの鍵、キーになっているので、真の父母です。

私たち統一教会の教会員は、西洋の人々も、東洋の人々も、あるいは黒人たちもすべて同じです。統一教会の教会員はそこが違います。統一教会の人々は、西洋の人ともよく結婚するでしょう。皆さんを西洋人と結婚させれば、しますか、しませんか。（します）。しますか、しませんか。（します）。なぜですか。どうしてですか。世界を一つにしようとするからであり、アダムとエバの夫婦同士が間違って愛することによって滅ぼしたからであり、今日、神様の名と真の父母の名により、男性と女性が、世界を越えて神様の愛で完全に一つになって生きることにより、世界は一つになり得ることを知ったからです。それゆえに、私たちはそのようなことをするのです。韓国人同士で結婚するよりも、できるならば、韓国に対して怨讐の国の人と結婚するのです。

皆さんは、神様がそのように待ち焦がれ、願いのみ旨をもってこの地上に送ってくださった人に対して、どれくらい歓迎しましたか。男性だけではありません。真の父という名前をもってこの地に根を下ろし、そこに真の母を中心として、真の父母という名前をもったという事実、この地上の白衣民族がそのような栄誉ある立場に選出されたということは、驚くべき事実です。それを八八年のオリンピックに比べることができますか。

今日、文総裁が真の父母という名前を誇ることができるのは何ゆえでしょうか。愛を中心として、塀で遮られていたものを崩し、歴史時代における縦横のすべての段階的分野を解決し、門を開放させることのできる内的心情圏を備えたからです。そのような勝利的基盤は、私の喜びだけではなく、天地が喜び、歴史が喜び、時代が喜ぶことのできるものでなければなりません。そのような段階において喜ばなければならないのであって、歴史を否定し、過去を否定して喜んではいけません。過去と現在と未来において共に喜ぶことができる内容として残らなければならないのです。

これをお立てになって第四次アダム圏を準備するために、イエス様の名によって祈祷し、

真の父母の名によって祈祷していたすべてのことを越え、祝福された家庭の名前をもって祈祷することのできる時代を迎えました。それゆえに、今や祝福された家庭が、アダムから堕落せずに夫婦の名前をもって自らの息子、娘たちを祝福してあげることのできる、このような時代を迎えることによって、本然の第四次アダム、地上・天上天国の解放圏をもたせることのできる、このような頂上を越えるこの日を「二・十節」として定め、ここに訪ねてきてお父様の前に申し上げます。

この日を分別し、この日を立てるために、「二・十節」を期してここに訪ねてきて、この日を第四次アダム圏の頂上を越える日として定めることを願い、この日を立てて宣布いたしますので、天がこれと共に天上地上が共に一つになった場、祝福家庭が一つになった場において、天地父母の名前に従ってこのような日を制定することを、すべての万象と万宇宙、サタン圏全体が喜んで従うことを願い、真の父母の名によって「二・十節」第四次アダム解放圏を宣布いたします。アーメン！

神様とサタンが闘ってくるときに、誰がその闘いをやめさせるのですか。神様も止めることができません。サタンも止めることができません。なぜでしょうか。偽りの父母がこの闘いを起こしたので、偽りの父母以上の資格をもった人が現れて神様の前に立つようになった時に、（神様が、）「あなたは私の願う者なので、私はやめる」とおっしゃり、サタンも、「あなたが勝利したので、私は退きます」、このようになってこそ止まるのです。神様も、どうすることもできないので、長い歴史時代を経てこられたことを知らなければなりません。分かりますか。

それゆえに、モーセがイスラエル民族と共に故郷に訪ねていく荒野路程を経てきたように、真の御父母様の八十歳を中心として、このすべての事実を蕩減し、四十年を中心として、家庭的荒野路程において天国入城を果たさなければなりません。そのことをなしているのです。家庭的カナン福地に入っていくので、イスラエル民族は割礼をしてあげましたが、統一教会は接ぎ木するために祝福をしてあげるのです。祝福を中心として、今まで反対され、ありとあらゆる迫害を受けてきましたが、すべての民族が歓迎する、その峠を越えなければなりません。

父母は、子供が銃弾を受けて死ぬ場、刑場に出ていくようになれば、その子供の代わりに銃弾を受けて死のうとしますか、それとも避けていきますか。（代わりに受けます）。父母の中の父母であられる神様はどのような心情をもって歩んでこられたのかを考えてみてください。それを本当に知るようになれば、不孝という言葉は、自らの生涯の中から永遠にその痕跡も見ることができないようになります。そのような神様を解放するために、真の父母が来て苦労しましたか、それとも、よく食べてよい暮らしをしましたか。（苦労しました）。今もこのようにしているのです。

先生のふくらはぎを見てください。教主のふくらはぎをです。これは何ですか。完全に黒人になっているのです。黒人の父にもならなければなりません。漁夫の父にもならなければなりません。農夫の父にもならなければ

なりません。牧夫の父にもならなければなりません。心情的面においてそれ以上の立場に立てば、彼らを天国に連れていくのです。私が皆さんを愛する情に従って「来なさい」と言えば、天下の地上世界が真の父母のあとに従っていくことができるのです。それゆえに、真の父母という名前を定着させるのです。ですから、真の父母は、個人的にも絶対的に必要なのです。必要です。父子関係、夫婦関係、家庭的に絶対的に必要なのです。氏族的にも絶対的に必要です。そうでなくては、国を救うことはできません。

二) み言

原理には三大裁きがあります。真理、人格、心情において裁きます。堕落は三大要件を犯したからです。先生は成して、あなた方に教えているのです。復帰の道は成して教えるべきであって、成さないで教えるのであれば、聖書において六千年前にもう既にやってきています。なぜでしょうか。原則があるからです。父母の信仰が立たないから、父母が先に知らなかったから、知るのも父母が先に知らなければなりません。父母が先に実行できなかったから、実行するのも父母が先に実行してこそ、知るようになるのが原則です。ですから、原理は先生から、もう成した基準に立っていないと教えられないのです。

あなた方は、原理をパスしなければなりません。原理をパスして、原理基準に引っ掛からないような自らとならなければなりません。そうして原理の実体者にならなければなりません。蕩減原則から外れた人には実体復帰は成されません。そのような条件が残っている場合には、サタンがいつも私のものだといって、引っ張っていきます。ですから、実体基準を立てようとすれば、サタンと正面で対抗し、勝利しなければなりません。

聖書には、善悪の実を「取って食べてはならない」という内容が出てきます。そこには、人間と神様との関係を破綻させ得る内容が込めてあったからです。それで問題になるのです。原理ではこの事実を明確に解明しています。原理は、堕落に対する事実がはっきり分からない人には、偉大な福音です。苦痛を受けながら生きているすべての人々を救援することのできる、偉大な福音です。

善悪の実は、文字どおり木と見ることはできません。木の実ではありません。億千万代（にわたって）人類がこのように破綻の立場と闘争の路程で呻吟する状況をつくるような果実を、神様がなぜつくられるでしょうか。先生が語る、愛の内容を中心として現れた結果だというのが、何よりも理論的だと考えられます。

復帰の法度が原理です。この原理は、大学で教える科学の原理のようなものではありません。人間が堕落し、父母を失ったので、その父母を捜し出すための公式を教えるのが原理です。それなのに原理を知らないでいいのかというのです。また、知ったならば、どうしなければならないでしょうか。ただ知るだけで、見物だけしていればいいのでしょうか。実践しなければなりません。自ら学んで、実践しなければなりません。「原理」のみ言どおりに実践しようとすれば、原理に対する確信がなければならないのです。

では、「原理」のみ言を聞いて何をしますか。父母が自ら、原理を中心にして実践したから法度になったのです。ですから、子女たちも「原理」のみ言を中心にして実践しなければなりません。

統一教会には「原理」という言葉があります。原理というのは、宗教を信じる人も、宗教を信じない人も、千年前も万年前もこの道を経なければならない、その原則的な道をいうのです。

ですから、統一教会で今、教えている真理というのは、神様と人間世界における曲折のすべての事情、恨が残ったものを解くことのできる原則的な内容を教えているのです。教理ではありません。教理は、天使長圏復帰解放時代までです。それでは家庭を築くことができないのです。家庭を取り戻すことができません。

私という純粋な者をどこで探るか、という問題を結論づけなければなりません。まずもって、この統一教会の真理が、唯一の真理であるというその自信をもたなければなりません。それから、変わらない、天然、霊界も、他界も、あるいは歴史を通しても、永遠に変わらない真理です。誰も、国も変えることができなければ、世界も変えることができません。神様も変えることができないのです。先生自体もそうです。過去、現在、未来において変わらないという真理であるとするならば、この真理は、人間本来が願う、理想的な価値をもっているに違いありません。

原理を学んだと言いながら、原理を全部奥にしまい込んで、自分がしたいままに、自分は自分なりに、原理は原理なりに一つになっていないのです。それで伝道してうまくいかないのです。神様が共にいらっしゃらないので、そのようなものは偽物です。原理どおりにしなければなりません。皆さん、原理の本を見れば、そこには神様の六千年の心情があるのです。先牛の一生の血を流した闘争の歴史が、そこにあります。皆さんの知らない内容がいくらでもあるのです。そのような原理の本を一ページ一ページ見るたびに、夜を徹して祈祷しながら、ここに神様の心情を探すことのできる鍵があるのではないかと思いながら覚えましたか。線を引きながら、この一言の背後にどのような歴史があるのか考えてみましたか。それで何、「神様が協助してくださらない」と言うのですか。ですから新しい制度をつくらないわけにはいかないのです。今からみな体質を改善しなければなりません。神様の仕事をする聖職者の業が、どれほど神聖なものであるかを知らないでいるのではないかというのです。

原理は、生命のみ言が入っている倉庫です。原理を聞けば、大きな倉庫にゴムホースをつけて生命の水を供給されるのと同じです。この生命の水の味を一度知ると、夢中になって、口を離そうとしても離せられなくなるのです。口を離そうとすれば口だけが取れてしまって、行くなら行くでしょうが、離せなくなるというのです。これはちょうど蜂が蜜を吸うとき、ピンセットのようなものでおしりをつかんで引っ張れば、おしりがとれてしまいますが、蜜から口を離そうとしないのと同じです。こ

のように、原理には蜜よりももっと甘い何かがあります。

私たち「統一教会の原理の内容」といえば、身震いするほど話してみなさいというのです。身震いするほど、一度やってみようというと、それはどんなにおもしろく、どんなに興味深いか分かりません。み言は創造の能力をもっているという事実を、確実に分からなければなりません。私がどこに行こうとも、天が共にいらっしゃることを知っているので、その心情が直接大衆に影響を与えることができるのです。

み言と伝道、皆さん、統一教会の人たちがみな原理を知らないでいるのです。み言で武装するのと同時に伝道しなければならないのです。心情の体恤というものは、自分一人では駄目です。伝道しなければなりません。伝道です。どうやって？　何で伝道をするのですか。『原理講論』の本をみな覚えるほどに朗読しなければならないのです。どのページには何があると、全部分からなければならないのです。

三) 実績

過去にはこのような蕩減路程が……。過去には、祈祷し精誠を尽くしても、この時以外は宗教の教主と会うことができませんでした。会ったのちには分かれるのです。ですから、また上がっていかなければなりませんでした。しかし、今は、宗教圏を中心としてすべて地上に再臨することができる時代が来ました。そのような時代が来たので、皆さんは、過去の時代、現在の時代、未来の時代を動かすことのできる実績をもたなければ、天国に行くことができません。それを知らなければなりません。過去の時代は、今霊界に行っている善霊人たちや天使たちの時代だったのであり、現在の時代は、父母の時代です。

そして、未来の時代は、神様の時代です。それゆえに、霊界を動員し、真の御父母様を動員し、神様を動員することのできる、そのような実績をもたなかった人は、天国に入っていくことができないというのです。アダムとエバに対して天使が協助し、神様が動いたのと同じです。そのようにしたのちに、宇宙はアダムとエバが動かさなければならないのです。

実績のない人は、神様には必要ありません。愛を中心とした実績がなければなりません。それゆえに皆さんも、三十六家庭、七十二家庭、百二十家庭の一族を従えてこそ、天国に入っていくことができるのです。それをなすことができなければ、入籍することができません。原理がそのようになっているのでしょう？。　そうですか、そうではありませんか。「三十六家庭だ」と言って威信を誇りますが、先生が三十六家庭を立てたのは、ただ立てたのだと思いますか。恐ろしい位置なのです。サタンも、誰かをもってこの前で攻撃させるかもしれません。

今、完成した真の父母が多くの宣布式を行っています。それは、あの訓読会の内容の中にあります。何々の式、天地父母天宙安息圏などです。世界平和統一家庭連合定着と蕩減解消宣布式など、多くの式をしてきました。それは、解放していく道をつくり、峠を崩し

て平坦にしていきながら、本来の世界の基準にしようとすれば仕方のないことです。そのような過去の実績をもった人でなければ、真の父母になることはできません。メシヤになることはできません。再臨主になることはできません。それをはっきりと理解しなければなりません。

原理の道がそのようになっているので、真の父母は、このような蕩減条件を払い、障壁を崩していきながら、成し遂げた勝利的権限を譲ってあげたいと思っているのです。しかし、このような実績を宣布するいかなる基盤もないのです。

先祖が過ちを犯したならば、それを解かなければなりません。それゆえに、このような証の時間は貴い時間だということを知って、これを流してしまってはいけません。必ず皆さんの心に参考にして、そこに対比していきながら自らを育てていかなければなりません。

劉正玉氏も、多くの経験をしました。霊界も多くの指導をし、霊界の教えに従ってきたあらゆる実績があるので、霊界ではそのような人を捨てないのです。また、先生自身も、そのような人を知っています。説明しなくても、心を知っています。そのような人を従えて仕事をしなければならないのであって、この世的な外的面を見て仕事をすれば、必ず害を被ります。ですから、内的な人格を浄化してきなさいという、このような経験を通じた証を通して得られるものは多いので、多くの参考にしてくれるようにお願いします。

（お父様は、「いつかは自分の名前で祈祷する時が来る」と教えてくださいました。そのようなみ言を語ってくださいました）。それは、自分の名前で祈祷するというよりも、自分のことを報告しなければならないということです。「何々をします」と言って、実践してから報告しなければなりません。報告するものがなければ、ひざまずいて悔い改めなければなりません。悔い改めです！　不浄なものまでを悔い改めなければなりません。「どれくらい成しました」と言って報告し、約束しなければなりません。

皆さんは、あのサタン世界のハーレム街、サタン世界の中心街に行ったとしても、それをすべてのみ込むことができますか。ですから、統一教会員は、すべて世界の最も悪い所に送るのです。

先生は、韓国で生まれ、日本を経て、アメリカを経て、ソ連を経て、世界を復帰するための道を歩んでいるので、皆さんにも、この道を歩まなければならない責任が残されているのです。ですから、皆さんは、少なくとも四カ国を経ながら奉仕した歴史的実績を残さなければなりません。

ですから、皆さんは、真の御父母様が歩んだように、反対する四つの国を訪ねていき越えることのできる訓練がなされていなければなりません。行って父と母の責任を果たそうとすれば、その国の言葉を学ばなければならず、そのようにして、彼らを子女として養育した実績を残さなければ、天国に行くことはできません。先生は、百二十カ国に宣教師を送り、先生の代わりにすべての国の言葉を学

ばせ、心情による父母の種を植える運動をさせました。そのようなことをすべてなしました。ですから、皆さんは、先生を代表した条件でも立てなければなりません。それゆえに、条件を立てることのできる四カ国を経ていかなければなりません。

先生は素晴らしいですか。（はい、素晴らしいです）。素晴らしいと言いますが、何が素晴らしいのですか。言葉をよく理解させるから素晴らしいのですか。仕事をしなければなりません。実績が必要なのです。実力だけでは、天下は動きません。実績をもたなければなりません。人間として生まれて世界に対してすべきことをすべてなした、いかに偉大な人であっても、そのなしたことは、先生のなしたことの十分の一にもなりません。今は、アメリカ自体も、すべての西欧の人物たちが集まって「レバレンド・ムーンは、名実共に再臨主だと言わざるを得ない」と言う、このような肯定的版図圏内に入ってきています。

共産党を解放し、呻吟する人類とこの世界を解放する方が主人だというのです。それが世界のメシヤであって、ほかにあるのかというのです。それゆえに、今は、「レバレンド・ムーンはメシヤだ」と言っても、それを肯定する段階に来ているのです。

ワシントンD・Cの政治街でもそうではありませんか。集まると、「昔、レバレンド・ムーンは何々と言った」と、ワシントンD・Cの政治街の最高の話題です。その段階にすべて入ってきました。ですから、実績をもたなければなりません。

七　天地父母様天一国開門祝福聖婚式と天宙天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式

一) 天地父母様天一国開門祝福聖婚式の祈祷

天宙を抱いて真の御父母様の天一国開門祝福聖婚式が始まり、夫婦の因縁を備え、天上世界と地上世界に恥ずかしくない、真の御父母様の伝統、本然の創造理想の願いであった心情的要求の希望を完成することができる天地解放のうえに、天一国、祝福家庭が入っていく国の基礎を出発することができる、真の御父母様の聖婚式を中心として、真の愛、真の生命、真の血統の因縁によって伝授された、すべての祝福家庭、地上にいるアベル的祝福家庭と天上にいるカイン的祝福家庭、私たちの先祖たちが地上にいる祝福完成した家庭を協助するために、天上世界の神様と聖人、聖子、すべてが地上の祝福を受けた家庭を協助し、弟の立場で兄に侍る、一体的な地上完全勝利の覇権の前に一体となり、万世の解放と善意の覇権を、愛の主権をもって、ごく小さなものから大宇宙全体を抱いて愛することのできる、御父母様の血肉的因縁を全体の被造万物が相続し、本然の生命の喜びと本然の幸福の充足をもって、小さなものは大きなもの、大きなものはより大きなもの、最後には、神様から生命が出発した真の父母の体にまで、吸収、統一、完成し、真の父母の愛を中心とした家庭、祝福家庭と万宇宙の存在を一体化させ、再びお父様の前に祝福の解放圏の天一国に入っていくことができる被造万物として、奉献することができる、出発の時を迎えるようにしてくださったことを感謝いたします。

この日の祝福は、天上世界の喜びであり、地上世界の喜びであり、天地父母の解放的喜びであると同時に、天地父母の勝利的、解放的喜び、二人の父母が喜ぶことのできる天一国の地上・天上の祝福家庭が一体となり、一心、一体、一念、一和のみ旨を抱いて、故郷を出発し、あなたの願われる、相対的で理想的な祖国に向かって、神様の創造理想の本性的基準で祝福を受けた、天宙を相続するのに不足のない、完成解放、勝利、完結することのできる、天一国の民となることを、この時間に、特権をもって、天地父母と天宙父母の名によって宣布いたしますので、祝福の日の、この記念を、共に伝授、相続してくださることを、真の父母の名によって、懇切にお願い申し上げながら、報告いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！

二) 天地父母様天一国開門祝福聖婚式の祝祷

愛するお父様！　きょうは、天一国三年二月六日、この時間を期して、天上世界の祝福を受けた家庭と地上世界の祝福を受けた家庭が、天一国に入国するためには、入国することのできる天理の道理に従い、天上・地上世界の家庭が兄弟の因縁を立て、カイン的兄であるすべての先祖も祝福を受け、弟の立場にいる地上の家庭も祝福を受け、兄弟の因縁を御父母様の血筋を通して代置してくださる功労によって、兄の立場の先祖が弟になり、弟の立場が兄になって、天地開闢の役事を起こすことのできる、希望の出発である、「天一国開天日」をもつようにしてくださったことを感謝申し上げます。

今、御父母様がこの地上でなした実績、天上において天宙父母様がなした実績、天上・地上の御父母様が標本となり、復帰路程で苦労したすべての子女たちを再創造し、天一国の国民として入籍することができる祝福の家庭が、本然の基準において失ってしまったものを蕩減復帰し、本然の位置で天地父母をお迎えして、子女の名分を備え、本然の地上・天上の宮殿を中心とした先祖の故郷に向かって直行し、入っていくことができ、祝福された天上・地上の兄弟の友愛を哀れんでくださり、真の父母がこの地上で功を立てて、蕩減、解放し、血統的な立場で伝授して、与えられたすべてのものを、今、ここにいる直系の子女から、御父母様の名と、そのみ言と、み言の実績と、み言の実績を中心とした天宙解放の全体解放の標準を、そっくりそのまま相続し、地上にいる弟の立場が兄の立場に代わり、天上にいる兄が弟の立場で教導し、ひっくり返ったものを元に戻して、本然の天上世界、天に直行することができる大道に向かって前進するようになります。

それゆえ、きょう、この時間から、一心、一体、一念、一和の心をもって、創造理想の対象である子女創造、相対創造、父母創造したすべてが一体となり、定着し、地上家庭が天倫に完全に定着することができる時代を迎え、天をお迎えして直接地上で暮らすことができる、そのような生活をすることができる栄光を誇りと思う真の御父母様が伝授してくださった祝福を、すべての万福の根源を、その家庭に、永遠に、永遠に、絶対、唯一、不変の愛の理想を中心として、その伝統を受け継ぎ、後世の万民の前に、ここに立っている子女たちと共に、ここに共に立っている祝福

家庭と、兄弟の友愛を中心として、カインとアベルの兄弟の友愛を結び、縦横に一体となり、未来において私たちの先祖と子孫たちがすべて横的な基準で、これを完成し、天の前に四位基台完成、家庭理想の安着解放圏に前進することを許諾いたしますので、天一国の門を開け放ち、三六〇度に門をすべて開き、どこでも御父母様の伝統に従い、その名と、そのみ言と、その実績と、その成就した勝利のすべてのものを相続するために、忠誠、忠孝の道理を果たし、忠臣の道理を果たし、聖人、聖子の道理を果たし、自由地上圏内でそれを相続することを、天宙父母様と天地父母様の願われるとおりに成就してくださることを、懇切にお願い申し上げます。

このすべてのことが、あなたの創造理想の一念を解放させる、地上・天上天国の統一国入国、全体解放によって、未来において、本然の王権、祝福圏を相続することができる、後継者たちと子孫たちとなるよう、祝福してくださることを、懇切にお願い申し上げながら、真の父母の名によって心から御報告申し上げます。アーメン！　アーメン！　アーメン！

三) 天宙天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式の祈祷

お父様、「天宙・天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式」を奉献いたしますので、天上の天一国の民と地上の天一国の民が、一心、一体、一念で、相対的世界の統一の家庭を根源とした全体祝福の恩賜の式典として受け入れてくださり、天宙解放圏の勝利の覇権をもって、本然の堕落のなかったアダム家庭完成のみ旨を、堕落以降のサタンの愛と生命と血統による数千億の人が、すべて同じ位置で、解放の同等な祝福の恩賜によって、あなたの懐に抱かれることができる、祝福中心王即位式を挙行いたしますので、一体理想として、愛の主権王となり、全体を統治することができる日として、受け入れてくださることを願いながら、真の御父母様の名によって申し上げながら、御報告いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！

四) 天宙天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式の祝祷

愛するお父様！　きょうは、天一国三年二月六日、この日は、真の御父母様の、八十三回と六十回を迎える聖誕の日であると同時に、「天宙・天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式」を挙行する、歴史的な転換の日でもございます。

「天一国」という名は、神様が、堕落していない本然の創造理想を中心として完成したアダムとエバを中心として、祝福することによって、霊的父母と実体父母が一体となり、新しい真の愛を中心として真の生命と真の血統を連結させ、家庭定着を願った希望の一日でありました。

人類始祖が実体圏を中心として、アダムは男性的代表格、エバは女性的代表格として、高い無形の神様の位置から、上弦に代わる相対の位置である下弦の低い子女の立場に立ち、東西南北に広がっていくことができる四方を備え、男性と女性が東側と西側から、無形の天地父母様と中央で一つになって完成基準と

なり、子女時代を成熟させ、その次には、約婚時代と結婚時代を備えることによって、地上の一つの下弦的完成基準と上弦的完成基準が、東と西、男性と女性の完成基準が、合徳することができる、中心位置における祝福結婚によって、無形の天宙父母と有形の天地父母が愛の理想を中心として、創造理想の最高の頂上の位置で合徳することによって、神様的中心の愛を中心として、上弦を中心としてはアダムとエバと神様、下弦を中心としてはアダムとエバと子女、右弦を中心としては神様とアダムと息子、左弦を中心としては神様の女性性相とエバと娘を中心として、四位基台をなすのでございます。

その四方、前後、左右、上下が、一体理想の定着をすることができる、四位基台の中心である神様の真の愛を中心として、上弦、下弦、右弦、左弦、前弦、後弦が一体理想を備え、神様が一代ならばアダムとエバは二代であり、三代となるアダムとエバの息子、娘を中心とした、相対的一体理想である四位基台の安着が、祖父、祖母、父、母、夫婦を中心とする、六数一体とともに、子女を中心として八数圏を、種として決着し、全天地において完成的愛の理想家庭の出発をなそうとしたすべてのことが、堕落によって、このようになってしまいました。

そのようにして、上弦、下弦、右弦、左弦、前弦、後弦が一体的理想をなすことができず、父子である神様と子女が、男性と女性が、兄と弟が、闘う怨讐関係の立場となり、神様を頂点として、真の愛で連結した真の生命と真の血統を中心として、安着の家庭理想を願われたのが神様の希望でありましたが、神様が臨在なさることができる中間の位置に、逆に、天使長が入り込んできて、アダムとエバと一体になることによって、天地父母の位置を悪なる父母が占領するようになり、その結果、心と体が怨讐となり、男性と女性が怨讐となり、天とこの地が怨讐となり、兄と弟が怨讐となり、その闘争の結果、神様は、孤独な立場、囹圄に閉じ込められた立場となり、サタン全権時代になるという、悲しく、恨めしい歴史が展開したという事実を、統一教会の教会員はみな知っております。

お父様！　その怨恨にとらわれた天の父母、理想的位置で、一心、一体、合徳し、勝利の覇権的家庭の出発をなし、万世に愛を中心として、太平聖代圏に、たった一つの国、たった一つの血族、たった一つの民族、たった一つの文化世界を、永遠に創建するということが、すべての面で反対となる闘争の歴史によって、この地、今日の人間の歴史、先祖たちの歴史が、血に染まってきたという、無念で悔しい事実を、統一教会の教会員たちはよく知っております。

そのような環境を見つめながら耐えてこられた天の父母の前に、誤った罪状を悔い改めることができない子女の立場を、神様が哀れみで包まれ、赦され、代わりに蕩減してくださることによって、天が先に、個人的な蕩減の峠を越えるうえでも苦労され、家庭的峠、氏族的峠、民族的峠、国家的峠、世界的峠、天宙的峠を越えるうえで、この地上の人間たちが無知であるがゆえに、行く所が分からず、代わりに犠牲となりながら、これを開拓するための代表的な機関として宗教を立ててこられました。

その宗教の中に選民イスラエルを立て、ユダヤ教とイスラエルの国を中心として、内的・外的、カイン・アベルを基準とする統一圏を中心として、そのうえに来られるメシヤを中心とした、父母の位置を策定し、家庭的勝利の覇権のうえに勝利的基盤を築き、国家的勝利の覇権を願い、国家的勝利の覇権のうえに勝利的基盤を築き、それによって世界と天宙史的な勝利圏を願った希望の一念を、すべて失ってしまわれたという、天の悲痛な事実を知っております。

不忠で不孝な私たち子女の罪によって、そのような立場に天宙父母を立たせるようにしてしまい、宗教を中心として、超宗教、超政治、超国家、超ＮＧＯ、超世界、一つの国を成し遂げようとされたみ旨、メシヤを送るとイスラエル民族に約束され、そのメシヤが男性完成者として来て、失ってしまったエバを取り戻すために、国家的基準においてアダム家庭が失敗して失ってしまったエバの基準を立てることによって、家庭基盤を築き、そのうえに民族を超え、国家的基盤のうえに勝利の覇権を立て、エデンで理想としていた神様の愛の主権を復帰しようとされたすべてのみ旨が、このように悲しみに包まれて、黒く汚れ、転がり落ちてしまいました。

それを暗中模索しながら、真っ暗闇の中で、お一人、僕の僕の立場から僕の立場、養子、庶子の立場、そのようにして直系の子女まで、そして、母を捜し立て、父母の立場にまで立ち、カイン・アベルの共産圏と民主世界を収拾し、これを抱いて、本然の父である真の父母に奉献してさしあげなければならない、地上の母、エバの使命を中心として、すべての民主世界、自由環境を破綻させるサタン圏の主権と闘いながら、個人克服、家庭、氏族、民族、国家、世界、今日の国と世界の限界線を越えて克服することによって、お母様が再び出産の苦労をされ、真の父母のあとに続いて従うことによって、初めて、この天地間に、勝利した母、霊肉完成した実体をもつようになりました。

今から、天の国の王権を受け継ぐことのできる天一国を開門することによって、地上世界の天国の基盤と天上世界の天国を準備し、一心、一体、一念が動ずる、愛の理想的、真の愛、真の生命、真の血統、真の家庭定着という、解放された名を取り戻して復帰することによって、怨恨の多かった惰性の世界を除去してしまい、希望に満ちた未来の勝利的愛の主権を再び建国し、天の前に奉献することができる、この式典をもつようになったことを、感謝、感謝、感謝申し上げます。

天にいるすべての霊人たち、祝福を受けた長子圏、天使長圏の祝福家庭たち、そして、地上のアベル圏、堕落していない本然の家庭のアダム的アベルの立場で祝福を受けた兄弟たち、天使世界にいる先祖である兄たちが地上に来て、アベル的弟の立場を兄として侍ることができ、一体となることによって、天上・地上一体圏のうえに、縦横に天地父母をお迎えし、地上における個人時代祝福、氏族、民族、国家、世界、天宙の祝福の平面途上における解放的基準、立体途上の個人祝福、氏族、民族、国家、天宙的祝福家庭が、縦的な位置にいるのですが、この兄と弟の祝福の位置が交差することによって、天上にいる兄の祝福家庭が地上に来て、弟の立場にいるすべ

ての祝福家庭を縦的な位置に代置することによって、天地開闢的大転換、反対に復帰、転換することができる時代を迎えたのでございます。

そのようになることによって、天宙父母、天地父母、真の愛を中心とする平和統一家庭王即位式を拡大した平面的世界水準と縦的な世界水準が、本来のアダム家庭で一体となり、一つのところから出発することができなかったことを、元返して、それを成し遂げ、地上・天上天国天一国理想圏の出発をなすことができるように、宣布し、祝福の王即位式をもつようにしてくださることによって、天宙父母、天地父母が真の愛を中心として、一心、一体、一念、和合し、真の愛を中心とする、真の父母から真の子女の真の血統を中心として、完成した真の家庭定着をアダムとエバが失敗することによって、偽りの父母が汚した血筋をすべて征服し、きれいに復帰された立場において、一つのアダム家庭を解放させた祝福の位置を、天地父母を通して……。

真の父母は、汚れたサタンの血筋を清める時まで、数千億の霊界と地上の人たちを、一心、一体、一念で祝福することによって、天宙父母と天地父母の腹中に一つになって宿った息子、娘の姿となり、出発的基準において、天上、天の国を中心として地獄と楽園を解放し、三六〇度、どの方向にも天の玉座に向かって直行することができる、自由解放圏をもつようにしてくださった「天宙・天地真の父母様平和統一祝福家庭王即位式」をもつようになることによって、本然の形態の姿勢を整えた場において、新たに神様と真の父母が一心同体となり、全体、全般、全権、全能の行事を万宇宙に出発し得る、家庭的天国理想世界に出発することができることを、宣言、命令するようになったことを感謝申し上げます。

きょうを期して、悪の権勢は後ろに退かなければならず、善の権勢は、前に立って全体を指揮、指導し、新しい天国文化世界の創建に向かって前進し、天の国の栄華と栄光を全天宙に充満させ、万世の祝福された家庭が相続し、天上・地上における解放の主権的愛の主権を受け継いで相続するうえで、天上世界と地上世界の前に不足のない、天国に入籍した祝福家庭の国となるように許諾してくださることを、懇切にお願い申し上げます。

この日、天宙父母と天地父母が、一心、一体となった場において、天国開放を中心とする天一国の統一の世界に、一体理想の主権の世界に前進することを、真の父母の名によって、命令、宣布しながら、懇切にお願い申し上げますので、願うとおりに成就するようにしてください。真の御父母様のみ名によって御報告いたします。アーメン！　アーメン！　アーメン！

Book 十六: 真の家庭と家庭明誓
True Families and the Family Pledge

第一章　家庭盟誓宣布と前提条件

一　家庭盟誓が出てくるようになった背景

一) 今は個人ではなく家庭時代

今まで統一教会では、個人的に「私の誓い」を暗唱してきました。一九五二年を中心として、新婦文化圏であるキリスト教文化圏が新郎と神様を迎え、世界的舞台において天上天国と地上天国を完結すべきだったのですが、それに失敗したので、再びこれを四十年間で蕩減してくる歴史を経てきたのです。

一九四五年から一九五二年までの七年です。一九四五年から一九五二年までの七年だったのですが、これを一九五二年から一九九二年までの四十年に延長したのです。教会を中心としては、四十年かかったのです。そのようにして、一九九四年五月を中心として、「家庭盟誓」を宣布したのです。歴史的です。数理的に蕩減してくるのです。

この世の中で「家庭盟誓」という言葉を聞いたことがありますか。歴史始まって以来、初めて出てきた言葉です。男性と女性が家庭を失ってしまったので、「家庭盟誓」を設定することによって、堕落していない本然の基準で、神様と人類が歓迎を受けることのできる家庭の母体をこの地上に再び立てなければなりません。そのようにしなければ、神様が喜ばれ、神様が来られて暮らすことができる地上天国と天上天国を築くことができません。そのために、不可避的にこのような盟誓文を立てるのです。

今、四十年を経て、初めて「家庭盟誓」が出てきたのです。この「家庭盟誓」は、歴史にはなかったものです。「家庭盟誓」が出てくることによって、今後、地上世界のサタン家庭には行き場がなくなります。「家庭盟誓」が出てきたということは、先生が四十年を通して四千年歴史を蕩減することによって、失われた第二次大戦後の勝利の基盤を復帰した基準に立ち、地上に天国が設定されるということを意味しています。最初は何ですか。「私たちの家庭は真の愛を中心として」です。すべてに「私たちの家庭は真の愛を中心として」という表題が出てくるのです。真の愛とは何ですか。「真の愛」という言葉は、神様の愛と真の父母の愛が堕落せずに一つになり、その真の愛を中心として真の生命、真の血統が連結されることを意味しているのです。

今、統一教会は四十年の峠を越えて「世界平和統一家庭連合」になったのです。これは、完全に復帰された家庭です。復帰された家庭は、個人の心身が統一され、夫婦が統一され、子女が統一された家庭とならなければなりません。このような家庭が暗唱しなければならないものが「家庭盟誓」です。

「家庭盟誓」は、心身が闘争している中では暗唱することはできません。また、夫婦間でけんかをしていては暗唱することはできません。そして、子女を生まなければいけません。心身統一、夫婦統一、子女統一が成された真の家庭が入っていく所が天国です。神様の愛を中心として一つになって「家和万事成」を成すことができる家庭が入っていく所

が天国です。それで、真の愛の一体圏を成した者たちが暗唱しなければいけないものが「家庭盟誓」だというのです。「家庭盟誓」は、歴史始まって以来、初めて出てきたものです。

統一教会は、四十年の峠を越えると同時に「世界平和統一家庭連合」をつくりましたが、それを成し遂げるためには絶対的規約が必要です。その絶対的規約、憲法のようなものが、「家庭盟誓」なのです。「家庭盟誓」という言葉は、歴史にありません。天国に向かう、天国を完成する「家庭盟誓」です。

「家庭盟誓」をよく見れば、それは、蕩減復帰の内容を中心として、完全に解放を受けることができる内容になっています。それゆえに、これを暗唱する人は、堕落した世界の家庭圏内ではなく、完成した家庭圏内に入ってきた人です。真の愛を中心とした家庭圏が形成されることによって、偽りの愛によって分立された心身の統一が起きるのです。それゆえに、心と体が一つにならなくては、「家庭盟誓」を暗唱することはできません。

統一教会員は、真の御父母様が立てた家庭的伝統を世界に誇示しなければなりません。なぜ世の中に「家庭盟誓」が出てくるのかというのです。このような時が来るので、それに備えるためのものとして「家庭盟誓」が出てくるのです。これが、家庭のモットーになるのです。

神様の創造理想圏に戻ってきた家庭は、どのようにしなければならないかという内容が、「家庭盟誓」にすべて出てくるのです。今後、全世界がこの誓いを中心として従ってくればよいのです。真の御父母様の勝利的盾をもって防御することができる、摂理史全体を代表した七項目（のちに一項目が追加されて八項目になる）の誓いを中心として、すべて入っているのです。それゆえに、新約、旧約の完成と原理を知らなくても、これを中心とし、神様のみ旨を中心として、ただそのまま家庭だけが絶対信仰、絶対愛、絶対服従することができる基準に越えていけば、天国に行くのです。

今まで、一般の既成教会ではアダムとエバだけが堕落したと思っていたのであって、そこには兄弟を入れていません。カインがアベルを殺すことによって堕落した、ということを知らないのです。家庭が堕落した、ということを知らないのです。すべて堕落したのです。これから統一教会では、どのように誓うのですか。家庭を中心として誓うのです。ほかのことは必要ありません。すべての幸福と自由、平和、そして天地も、すべて家庭から出発するのです。今、家庭を中心とした誓いが必要です。家庭を失ってはなりません。家庭さえ一つにすれば、世界が統一され、天国ができるのです。

氏族的メシヤを派遣しなければ、大変なことになります。その氏族の生まれる道がふさがってしまいます。氏族的メシヤになることによって、平面的にアダムが堕落せずに完成し、イエス様が死なずに完成し、国家的基準で国家と国家がすべて連結されるのです。そのようになれば、個人から家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、神様の八段階まで、すべてその完成の基盤は、この地上の平面、水平線です。

これを蕩減したので、個人の家に行こうと、氏族の家に行こうと、国家に行こうと、どこに行こうと、サタンが反対できない自由の活動舞台となり、神様を中心として生活する出発がなされることによって、地上に天国ができるのです。そのような時代が来たので、「家庭盟誓」が出てきたのです。「家庭盟誓」のとおりにならなければなりません。

家庭というものは、驚くべきものであり、恐ろしいものです。ですから、「家庭盟誓」の内容は、天宙的な大宣言だということを忘れてはいけません。昨年（一九九七年）から真の御父母様が講演してきた講演文の内容は、原理的な家庭をもたなければならないということでした。これは鉄則です。霊界解放の祝福式をしなければならない時が迫っているのです。三百六十万双が終われば、霊界祝福式をするのです。相対が霊界に行けば、呼び出して結んであげることができる時代に入っていくのです。ですから、地獄世界まで解放されるのです。

今まで、私たちは定着することができませんでした。押し流されてきました。浮き雲のような生活をしてきたのです。キリスト教文化圏も、霊肉を合わせた基盤がなかったので、定着することができなかったのです。しかし、今や真の父母と成約時代が定着したので、相続権が生じるのです。定着するにおいて、何を相続してあげるのでしょうか。個人ではありません。家庭です。それを知らなければなりません。ですから、「家庭盟誓」が出てくるのです。「家庭盟誓」を徹頭徹尾、教育しなければなりません。

今までは「私の誓い」を唱えてきましたが、「家庭盟誓」というものは初めてです。歴史時代において、「家庭盟誓」というものはありませんでした。これは驚くべき事実です。四十年間の世界的蕩減路程を終え、全世界が先生を中心として動く時代に入ってきたので、それが可能なのです。第二次大戦直後に、成し遂げられた統一的世界キリスト教文化圏を破綻させてしまったことを、条件的ではありますが、先生を中心として世界的に、この覇権的基盤の上に載せたのです。

真の御父母様の安着時代を中心として、主体の前に恥ずかしくない家庭完成時代を迎えなければなりません。ゆえに、ここにおいて私たちは、「家庭盟誓」が「必要だった」、「必要だ」、「必要だろう」、どれになるのですか。「必要だ」となるのです。これは千年、万年の表題になります。驚くべきことです。

堕落した宗教の仮面を脱ぎ、解放の位置において、私がこのような盟誓文を暗唱することができるということを感謝しなければなりません。涙なくしては暗唱することができない、数多くの恨があったのです。血を流し、この血の祭壇を統一教会まで引っ張ってきたのです。その血の祭壇から、これを踏み越えることなくしては、この世界から天国に行くことはできません。ゆえに、この祭壇がなければならないのです。

二) 成約時代安着と家庭時代の出発

「真の父母と成約時代の安着」、これは恐ろしい言葉です。「真の父母と成約時代の安着」とは、サタン世界において闘って勝利し

たということです。家庭、氏族、民族、国家、世界、天地が動員された、そのすべてのものと戦って、勝利して成就したのが成約時代です。約束を成して安着したのです。これは驚くべきことです。

堕落とは何ですか。アダムが天使長を主管しなければならなかったのに、それが逆になってしまったのです。皆さんは天地のサタンを屈服させ、その上に上がっていかなければなりません。そのようにしなければ安着することはできません。それは、言葉で言うのは簡単ですが、どれほど難しいことか分かりません。「先生と完全に一つになろう」という信念をもっていれば、どこに行こうと、先生がすることを成すことができるのです。

一九九二年を中心として、世界に「メシヤ」を宣布し、「真の父母」を宣布してきました。このようにして、すべてを集め、一九九三年に入って、五月十三日からアメリカを中心として「真の父母と成約時代」を発表したのです。そのようにすることができる環境を、すべてつくったのです。皆さんが知っているように、アメリカは全世界を代表した国です。キリスト教文化圏において最終定着地になる国です。

今からは、真の御父母様を中心として、新しい時代に転換するのです。成約時代に入っていくのです。今回の宣布は、地上においては初めての出来事でした。今まで神様は、この時をどれほど待ち焦がれていたことでしょうか。歴史時代において、神様はどれほど悲惨な立場にいましたか。今や、希望の時代が近づいてきたのです。「真の父母」を宣布することができる時代に入ってきたのです。これは歴史的であり、宇宙史的な事件です。今までの歴史において、このような事件はありませんでした。

創世以後、神様の復帰摂理は、何千万年の歴史を経てきましたが、その基準を立てることはできませんでした。先生が来て明らかにすることによって、統一教会時代において初めてこれが可能になったのです。それゆえに、「成約時代」を発表し、「真の父母」を発表したのです。これは世界的な事件です。事件というよりは、新しい世界を創建できる一つの起源となるのです。「真の父母」という思想と、「成約時代」というその言葉自体が、そうであるというのです。

成約時代は、何の約束を成すのですか。神様が人間と共に創造した、その約束を成すのです。復帰摂理時代が成されるのでもなく、救援摂理時代が成されるのでもありません。創造理想世界が成されるのです。それゆえに「真の父母」という名前は、人間よりも神様が先に考えたのです。

真の父母の顕現は、創造理想です。ですから、神様の創造の太初から、旧約時代、新約時代を経て成約時代へと、どのように回っていくのでしょうか。成約時代とは、神様と人間との一体圏をいうのです。真の愛によって一体圏を成し、平等な価値の内容を連結する立場になるのです。神様だからといって縦的だけでなく、人間だからといって横的だけではありません。縦と横が一つになるのです。

一九七二年から一九九二年までの二十年間は、韓国を中心として、キリスト教の使命を果たす期間でした。この期間、私は、国家的な次元において旧約時代に相当することを成したのです。真の御父母様が六〇年に結婚式

を行い、世界的舞台であるアメリカで成してきたことは、旧約時代と新約時代の関係と完全に一致するのです。内容が同じです。そのようにして、この期間に真の父母の世界的な定着が完了したのです。それで、成約時代を発表したのです。今からは、神様と共に生活するのです。私たち統一教会員は、神様と共に暮らすのです。

成約時代とは何でしょうか。中心である真の父母の家庭が、堕落圏世界において完全に勝利して越えた時を意味するのです。そのようになれば、その環境には「文総裁の家庭をやっつけよう」と言う怨讐はいなくなります。そのような人たちは、闘って負けたのでいなくなるのです。いくら射撃のチャンピオンであっても、オリンピックに出て負ければ、「自分が一番だ」と言うことができますか。自分がもっているチャンピオン杯を譲り渡してあげなければならないのです。

成約時代は、誰について言っているのですか。父母が父母として安着し、家庭が家庭として定着して、その家庭が天下の平和の世界、統一の世界になったとすれば、その家庭に反対するものはありません。障害物がないのです。今、文先生が戦って勝利したということは、家庭環境だけではなく、全世界と天地がすべて動員する中で根を下ろしたということです。それは素晴らしいことですか、素晴らしくないことですか。

成約時代は、家庭に戻っていく時代です。統一は、個人からです。この峠を越えなければ永遠に天国に入っていくことはできません。長子権を復帰することはできません。自然屈服させなければなりません。強制屈服ではありません。説得屈服です。皆さんは、自然屈服されたのですか、それとも強制屈服されたのですか。説得されたので、自然屈服したのでしょう？

このようにして、地上天国と天上天国の家庭的なエデンで成し遂げられたものを、世界のすべての国家が同一の立場で……。何千年もかかったそのような勝利の覇権が、真の父母の家庭をモデルに、家庭を中心として一時に……。金型を押し出すことができる、そのような青写真があるのです。それをすべて配布しなければなりません。どこであろうと、それで押し出しさえすれば、カチャンカチャンと製品が出てくるのと同じように、全世界五十億人類の家庭が家庭的に接ぎ木されることによって、失われた解放の国と天国に帰っていくのです。この時が成約時代、すなわち約束を成す時代です。

今日、歴史的路程において最も重要なこととは何かというと、選民圏が生じたということです。この時代になり、世界的途上において、蘇生、長成、完成の三段階の基盤を連結させようというのです。イスラエル民族は蘇生級、キリスト教は長成級、そして統一教会は完成級です。イスラエル圏を中心としたものが旧約時代ならば、キリスト教は新約時代であり、統一教会は成約時代です。

成約時代とは何かというと、成し遂げるということです。何を成し遂げるのでしょうか。個人的に成し遂げ、家庭的に成し遂げ、氏族、民族、国家、世界的に成し遂げるのです。何を中心としてですか。神様の愛と、神様の生命と、神様の血統を中心として連結するのです。単一血統、単一愛、単一生命の伝統です。

このようになれば、サタンは離れていかなければなりません。接ぎ木することによって、サタンの血統的因縁がなくなるのです。

問題は何でしょうか。家庭が完全でなければなりません。家庭的カナン復帰完成時代である成約時代を迎えたので、皆さんの家庭はみ言に従って完成し、定着しなければなりません。そのような時代が来たことを知らなければなりません。ゆえに、そのみ言を聞く時には、それを流れていくみ言として聞いてはいけません。それらのみ言は、先生が生死の境で、死ぬか生きるかという境地で、「このみ言を残していかなければならない」としながら明確に教えてあげたものです。それを知らなければなりません。

第二次大戦直後に、キリスト教文化圏とアメリカを中心とした一つの世界を成し遂げていれば、どれほど早かったでしょうか。アメリカとキリスト教文化圏が世界を支配するその時代に、もし内的に一つになっていれば、どれほど早かっただろうかというのです。そのように見れば、第二次大戦直後は、神様においては歴史上最大の希望の一時であり、サタンにおいては最大の危機の時でした。その時に、キリスト教文化圏と、アメリカを中心とした自由世界が統一教会を受け入れていたならば、その時から、霊界の統一圏を地上の統一圏に一致化させていたはずです。これが摂理観です。

今からサタン世界は、どんどん崩壊していきます。見ていなさい。サタン世界は、個人、家庭、氏族、民族、国家が行く方向や中心を、すべて失ってしまいました。しかし、私たち統一教会はすべてを備えていくので、これが交差するのです。昔は、統一教会がサタン世界の支配下にありましたが、これが交差し、反対になるのです。これが安着です。

成約時代とは何でしょうか。サタンの主管圏を越えて成し遂げられる世界だ、ということを知らなければなりません。成約時代は、何をもって完成していくのでしょうか。祝福家庭を通して成し遂げていくのです。それで、アダム家庭や、ノア家庭や、ヤコブ家庭などの家庭が出てきたのです。それから、先生の時代になって、イエス様家庭を編成したのです。

イエス様家庭を編成するのと同じ立場で編成したものが、三十六家庭、七十二家庭、百二十四家庭です。四百三十家庭は韓国を代表していますが、この韓国の四千三百年の歴史を中心とした四百三十家庭を中心として、世界の四十三家庭を連結させたのです。七百七十七家庭は、すべての国家を代表し、それから千八百家庭を経て、現在は七千以上の家庭に越えてきているのです。ですから、世界的な足場の基台ができてくるのです。成約時代は、家庭を通して成し遂げていくのです。

今年（一九九五年）の標語は、「真の御父母様の勝利圏を相続しよう」です。「圏」とは個人的世界版図、家庭的世界版図、氏族的世界版図、民族的世界版図、国家的世界版図、世界的世界版図、天宙的世界版図、地獄と天国の版図です。そこまで先生が統一し、解放してあげたのです。今からサタンは後退します。日がたてばたつほど、すべて衰退していくのです。

エデンにおいて、善悪の出発が兄弟の間で起こったので、世界の人々は、今日「地球村になった」と言っているのです。先生の教えでは、「地球家庭になった」と言っています。地球家庭と地球村は相対的関係です。一方は、サタン世界を代表したカイン的位置であり、お兄さんの位置です。地球家庭は、統一教会のアベルの位置です。これが一つにならなければなりません。

カイン世界は、統一教会に従っていかざるを得ません。家庭を完成しようとすれば、個人を完成しなければなりません。個人を完成することによって家庭理念というものが……。真の男性、真の女性は、統一教会以外にはいません。統一教会は、エイズと関係なく、フリーセックスと関係なく、ホモと関係なく、レズビアンと関係なく、麻薬と関係ないのです。ですから、真の愛を中心として、個人的中心を完成するのであり、家庭的中心を完成するのであり、氏族、世界、天宙の解放圏を完成するのです。そして、神様と真の御父母様まで解放し、孝子の道理、忠臣の道理、聖人の道理、聖子の道理を完成すれば、天上世界と地上世界を自由往来し得る解放がなされるのです。

それが、先生の教えの目的である、人格者になるという道です。結論は簡単です。世界的な解放圏を完成させるために数多くの事情をつづりながら、先生が五十年の生涯｜｜一生です｜｜にわたって迫害の道、あざけりの道、あらゆる追放の道を経てきて、今は、神様が願われた世界的勝利圏を全人類の前に相続してあげることができる時代が来たのです。父母が自らの備えたすべてのものをその子女に代価なく、愛をもって相続する時が来たのです。

地上天国と天上天国が一つになり、そこで神様の真の愛を中心として一致した家庭生活をした人が、地上で暮らしたのちに天国の家庭へ移動していくのです。ですから、個人の救援時代ではありません。

キリスト教を見れば「個人の救援だ」と言いますが、それは違います。家庭救援が神様のみ旨です。堕落は家庭で起きたので、復帰も家庭で成さなければなりません。そのような時代が来ました。今や真の父母を中心として……。今まで、地上の歴史時代にはなかったことです。初めて、新しく定着時代に入ってきたのです。

今年（一九九四年）の標語は、「真の父母と成約時代の安着」です。真の御父母様の家庭が初めて定着するのです。真の父母の家庭を中心として、今まで祝福を受けた家庭を中心として、氏族、民族、国家が編成されるのです。これは世界的な版図になっているので、今から定着時代に入っていくのです。放浪の身ではありません。ですから、体制をつくらなければなりません。

家庭を連合して氏族、氏族を連合して民族、そして民族を連合して国家を編成する時代に入っていくのです。私たちの力で、家庭を中心とした地上天国の基盤をつくらなければなりません。

成約時代には、霊界を知らなければなりません。先生は霊界を知っていたので、このような迫害を受けても勝利してきたのであり、その世界に拍子を合わせるために、今まで受難の道を歩んできたのです。これを知らなけ

れば行くことができないということを、はっきりと知らなければなりません。

今からは、霊界を知らなければ、成約時代を思いどおりに歩むことはできません。アダムとエバが堕落しなければ、彼らは先に霊界を知っていたのです。神様の世界がどのようになっているのかをすべて知り、そこに拍子を合わせるようになっていたのです。

三) 「世界平和家庭連合」の創立、世界家庭化時代へ

家庭を失ってしまったので、家庭を捜し求めていかなければなりません。その家庭は、世界中のいかなる人でも歓迎することができる家庭とならなければなりません。過去、現在、未来の人、すなわち天上世界にいる人や、未来に来る人など、すべての人が追慕することができる家庭基盤を中心として、「世界平和家庭連合」を定着させるのです。そのようにすることによって、人類の解放圏が成され、平和、幸福、理想、希望にあふれた地上天国と天上天国の世界が到来するのです。

世界基督教統一神霊協会の使命が終わることによって、宗教の使命が終わり、人類史上初めて宗教を必要とせず、救援を必要としない新しい時代へ入っていくのです。「家庭連合」は、家庭を理想家庭につくりあげて、神様の創造理想を復帰完成し、天的理想世界を立てるのです。

家庭が定着しなければなりません。今までの宗教は、個人圏を目標としたのであって、家庭圏を目標とした宗教はありませんでした。すべて家庭を捨てて、出家していったのです。今は、時代が違います。いかなる宗教も個人救援を唱えていたのであって、そこには家庭救援や氏族救援、また国家救援という言葉はありませんでした。私たち統一教会は、家庭を中心として国家救援、世界救援を主張しているのです。

家庭が定着し、世界と通じることができる家庭となってこそ、エデンで願われた神様の創造理想の結実が現れるのです。息子、娘を中心として横的に拡大し、それが神様の願われた氏族となり、それがまた自動的に民族に連結しなければなりません。ゆえに、家庭が重要です。すべてのものは、「世界平和統一家庭連合」で終わるのです。さあ、「世界平和統一家庭連合」と、一度言ってみてください。（「世界平和統一家庭連合」）。その中心は何かというと、家庭です。

「世界平和家庭連合」を成し遂げることができなければ、平和世界は絶対に訪れてきません。これは重要です。家庭がそれくらい重要なのです。平和世界も家庭から始まるのです。

家庭に家族が十人いれば、その家族十人がすべて一つにならなければなりません。一つとなり、お互いが縦横、前後、左右において立体的に和合するようになれば、理想的平和の世界が訪れてくるのです。「世界家庭連合」を完成し、平和の世界を創建しましょう！　創建とは、再度収拾して建てようということです。

今からは「世界平和統一家庭連合」です。家庭が根源地です。家庭を中心として、その

家庭に神様をお迎えし、その氏族に神様をお迎えし、その国に神様をお迎えするのです。神様と一体となり得る家庭の理想を完成することなくしては、地上天国はできません。

本然的アダム家庭の世界型版図に加入しなければならない時代に入ってきたので、全世界の人々は、家庭を中心として完成しなければなりません。ここで完成しなければならないこととは何でしょうか。堕落した家庭を、蕩減復帰した家庭にしなければなりません。このことは、「家庭連合」を通して、世界的に、各自が努力して備えなければならないのです。

完成は、アダムとエバがしなければなりません。神様がしてあげるのではありません。また、真の父母がしてあげるのでもありません。これによって「家庭連合」が形成されるのです。これは世界的な組織です。堕落した世界の、アダムの血統を越えるのです。山を越え、坂道を越えるのと同じように、復帰過程を上がっていく途中で失敗すれば、いつでもこれを繰り返すのです。何百万年、何千万年を繰り返すのです。

人間は、夫婦の愛の伝統を立てることができませんでした。父母の伝統を残すことができなかった世の中に、これをすべて実践した「真の父母」の名をもった二人のお方がこの地に現れたということは、民族の誇りであり、歴史の光明です。たとえ天地を与えても換えられない貴い宝物であるということを知って、今日、厳粛にこの内的な因縁を相続し、皆さんの家庭で伝授することを願います。ゆえに、「世界平和家庭連合」が定着しなければなりません。家庭に帰っていかなければなりません。

家庭は、世界を代表することができる平和の道、統一の道を行かなければなりません。すべてのものは、家庭と連合した基準に連結されたものだということを知らなければなりません。今後、素晴らしい家庭は、出世するのです。

これからは家庭中心です。ですから、独りで行くことはできません。今後は、人事も夫婦一体です。夫が長ならば、妻は副責任者です。また、その息子、娘があらゆる実力基準において優秀な場合には、彼らを重要な部署に、家庭的に配置するのです。そのようにして、一族で配置することができるのです。

今後、重要視しなければならないことは、「世界平和統一家庭連合」ですが、そこから世界を忘れてしまってはいけません。世界を忘れてしまえば、平和になってどうするのですか。また、平和を忘れてしまえば、統一をしてどうするのですか。統一がなければ、家庭をもって何をするのですか。家庭は、一つの家庭ではありません。連合の主管がなければ、家庭をもってどうするのですか。すべて関係しているのです。

連合を考えれば、統一を考え、家庭を考え、平和を考え、世界を考えなければならないのであり、世界を考えれば、平和を考え、「統一家庭連合」を考えなければならないのです。一体だというのです。家庭がそのようになってこそ、神様が臨在することができる世界の代表の主人となり、平和の主人となり、統一の主人となり、家庭の主人となり、連合世界

の統一天下の主人となるのです。そこに神様が臨在し得るのです。

統一教会といえば、「世界平和統一家庭連合」です。そうすれば、皆さんの家庭でも、「世界平和家庭連合」という家庭連合が立てられるのです。サタン的家庭や、中間的な天側の天使長家庭、そしてアダム家庭などをすべて収拾しなければならないのですが、これらは結婚を誤ってばらばらになっているので、結婚を正しく行って完成級に入っていき、統一的な世界へ越えていかなければなりません。このように上がってきた坂道、険しいヒマラヤ山脈が、ここからは平地になっていくのです。そのような時代に越えていくのです。

それで、四十年の峠を越えると同時に「世界平和統一家庭連合」をつくりましたが、それを成し遂げるためには絶対的規約が必要です。その絶対的規約、憲法のようなものが、「家庭盟誓」なのです。「家庭盟誓」という言葉は、歴史にありません。天国に向かう、天国を完成する「家庭盟誓」です。

今までは、中身がありませんでした。それでは、その中身とは何でしょうか。今後出てくる「世界平和家庭連合」を中心として、家庭的理想が実を結ぶことです。家庭の理想は、四位基台の完成です。神様の創造理想とは何ですか。神様のみ旨の完成です。それでは、神様のみ旨とは何ですか。神様の創造理想の完成です。それでは、神様の創造理想の完成とは何ですか。四位基台の完成です。それでは、四位基台の完成とは何ですか。父、母、息子、娘すべてが一つとなり、神様が踊れば共に踊ることです。神様の調子に合わせて踊り、歌うことができることが神様のみ旨の完成です。

第二次大戦以後、キリスト教文化圏は、世界統一を成したその基準を整理し、七年路程の上で世界の方向をつかまなければなりませんでした。

その七年路程に今年（一九九四年）も含まれます。このような時が来たので、四十年目にして「家庭連合」をつくり、すべて平面的に立つことができるのです。ですから、世界統一を成そうとしたのと同じように、この時に家庭さえ一遍に統一されれば、すべてのものを蕩減することができるのです。ゆえに、この盟誓文を唱えようとすれば、心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになってこそ初めて唱えることができるということを知らなければなりません。

これが一つにならなければ、サタン世界に属するのです。この盟誓文はその上で暗唱するのです。それゆえに、「家庭盟誓」が出てきたのです。それで、全世界を、「家庭連合」がこの盟誓文を中心として強力に統治していくのです。毎月一日と十五日は、家庭において礼拝を行うのです。二つの組織になるのです。カインとアベルになるのです。

最近は「地球村」という言葉を言うでしょう？　地球家庭時代に向かって入っていくのです。地球村でもありません。地球家庭です！　「地球村」という、その言葉は、今日「家庭連合」が出てきたのと相対的な世界を成しているのです。神様のみ旨を中心として「家庭連合」が出てきたので、世界の環境が相対的に成されなければなりません。これが対等な時代に入ってきたので、一度始めさえ

すれば一時に世界化される時代が来たのです。先生が話していることは、夢のような話ではありません。

今日、世界は経済圏を中心として一つになろうとしているでしょう？　政治圏と文化交流、また経済や知識や権力をもって、力の平準を通してこれを一つにしようとしているのでしょう？　しかし、それは違います。世界を一つにする歴史的、統合的な中心方案は、真の愛です。

歴史が行くべき方向はあるのですが、それは経済圏をもって一つにすることはできません。愛です。真の愛を中心として偽りの愛を収拾し、上下を連結しなければなりません。歴史的な真なる方向は一つです。その真の方向に従って個人の人生観、家庭観、民族観、国家観、世界観があり、これがだんだんと広がっていくのです。個人時代、家庭時代、氏族時代、このようにずーっと進んでいく中において、その中央線を貫いているものは真の愛の方向性です。

なぜ再臨主が必要であり、真の父母が必要なのでしょうか。歴史時代において、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界へ発展してきたすべての家庭は、真の父母と共に生活したことがないのです。再臨主が来た時に、英、米、仏を中心とした統一世界になっていたとしても、真の父母を中心として、家庭の統一から始めなければならないのです。真の父母を中心として、家庭が連合しなければならないのです。

家庭が一つになれば、氏族は問題ではありません。民族も問題ではなく、国家も問題ではありません。なぜでしょうか。真の父母は、世界的版図の上に来られるのです。世界的版図の勝利的基盤の上に来られるのが、真の御父母様です。このお方は、何をするために来られるのでしょうか。このお方は真の父母ですが、家庭時代の代表の真の父母として来られるのです。過去の氏族的な時代の真の父母として、民族的な時代の真の父母として、国家的な時代の真の父母として連結させなければなりません。

地球村時代を越え、地球家庭時代です。地球家庭時代へと越えていくためには、早急に平準化された基準をつくらなければなりません。世界にそのような機構をつくらなければならないので、今回の首脳会談でも、宗教の国連と女性の機構をつくることを宣布したのです。今、その作業をニューヨークで行っています。有名な学者やトップ層を中心として行っているのです。学者たちを通して、国務省や、政策的方向において誤っていることをコーチしているのです。

四) 家庭盟誓を立てた理由

それで、今年（一九九四年）において五月に入ると同時に「世界平和統一家庭連合」を創設し、それと同時にサタン世界･天使長世界と、アダム世界とをはっきりと区分し、境界線をつくるためのものとして「家庭盟誓」が出てきたのです。この「家庭盟誓」によって、初めてサタン世界と完全に隔離されるのです。

「家庭盟誓」を暗唱することができる時代が来たということは、歴史的に驚くべき事実です。今までは個人主義的な生活をしてきた

のですが、これからは家庭主義的生活に移行していくのです。自分独りではありません。夫が行けば、最初から妻はそれに従っていくのです。夫婦が自動的に従っていく生活をしなければなりません。ばらばらになってはいけません。常に統一された、同じ生活圏内で暮らす生活をしなければなりません。

近ごろは電話があるので、手紙も必要ないでしょう？　そのような時代が来ました。常に同じ立場で暮らす生活環境を成していかなければなりません。そのようにしなくては「家庭盟誓」のとおりに完成することはできません。盟誓文の誓いは、必ず成し遂げなければなりません。

「家庭盟誓」を暗唱することができるということは、堕落する前の完成したアダムの立場にいるということですが、これはどういうことでしょうか。父母から偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統を受け継いだのが堕落した家庭ですが、皆さんは、堕落せずに完成したアダムとエバの位置にいる真の父母を中心とした真の愛によって生まれた子女なので、堕落していない家庭となるのです。

それでは、「家庭盟誓」とは何でしょうか。それによって、本然的な家庭の権限一切を賦与するのです。堕落したのですが、堕落していない本然の位置に帰り、永遠の原則的基盤の上で氏族が連結され、民族、国家、世界が連結されなければなりません。このようになってこそ、地上天国ができるのです。それゆえに、「家庭盟誓」は、心と体が一つになっていない人には暗唱することはできません。夫婦が一つになっていない人には暗唱することはできません。息子、娘と一つになっていない人には暗唱することはできません。これを知らなければ、盟誓文全体が、すべてばらばらになってしまいます。

「家庭盟誓」は、すべてのものを清算するものです。ゆえに、「家庭盟誓」の第三節を見れば、四大心情圏、三大王権、皇族圏を完成しなければならないといっています。その以下の節は、復帰する順序を組んでつくったのです。ゆえに、「家庭盟誓」は、どのような人が暗唱できるのですか。サタン世界の偽りの父母による、偽りの愛と偽りの生命の因縁をもっている人は、唱えることができません。

本然の世界に帰っていき、神様と堕落していない真の御父母様と一つになり、真の愛で心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになることができる基準に立った人だけがこの「家庭盟誓」を暗唱することができるようになっているのです。

「家庭盟誓」を暗唱することができる人は、完成した家庭の位置に立たなければならないので、心と体が一つにならなければならないということを知らなければなりません。心と体が一つになっていない人には、「家庭盟誓」を暗唱することはできないということを知らなければなりません。心と体が一つになっていますか。堕落したので、心と体が分裂したということを知ったでしょう？　偽りの父母、偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統なので、これをすべて清算しなければなりません。真の愛、真の生命、真の血統を復帰しなければならないのです。

「家庭盟誓」と一つになり、家庭に定着すれば、既に自分たちは地上地獄で暮らしてい

るのではなく、新しい世界的な天上天国の世界で暮らしているのです。ですから、「家庭盟誓」を暗唱する人は、昔の地獄世界ではなく、別の世界で暮らしているという気持ちをもたなければなりません。その家庭では、争いがあってはいけません。泣きわめいたりしてはならないのです。真の愛を実践しなければなりません。「家庭盟誓」を暗唱する時は、必ず心と体が一つになり、夫婦が一つになり、息子、娘が一つになった上で唱えるのです。

偽りの愛が始まることによって、心と体が分裂し、夫婦が分裂し、兄弟が分裂したので、蕩減復帰の原則に従って一つになり得る家庭を取り戻すためには、心と体が一つになり、夫婦が一つになり、兄弟が一つになることのできる位置を再び築かなければなりません。そのようにすることによって、天上天国と地上天国とが連結されるのです。

「家庭盟誓」の徹底化が必要です。「家庭盟誓」を徹底化した人が、祝福を受けて祝福家庭に加入するのです。祝福家庭に加入すれば、間違いなく「家庭盟誓」のとおりに完成した家庭として、天の前に奉献しても恥ずかしくない家庭を、お互いがつくらなければなりません。そのようにすれば、その家庭を中心として、神様の版図が自然に広がっていくのです。天国理想が広がっていくのです。

ほかの国に「家庭盟誓」がありますか。サタン世界のどの国に「家庭盟誓」がありますか。ありません。どこかの国で「家庭盟誓」を立てて、このように家庭全体を代表して誓っていますか。誓いは、実践しなければならないのです。誓いは、成し遂げなければなりません。言葉だけでなく、それを成し遂げなければならないのです。

「家庭盟誓」は、神様を中心として暗唱しなければなりません。ですから、相対にならなければなりません。すべて相対です。心と体が相対になっていますか、なっていませんか。目は二つですが、片方はサタン側として死んだのと同じです。皆さんが見るものは、すべて二種類です。道を進んでいっても、二つの道を行くのです。ですから、常に批判しなければなりません。食べるのも二種類です。天が私を保護することができる、正当なものを食べているのかというのです。世話を受けながら食べるのは、いけないのです。ですから、今から私たちは「家庭盟誓」を暗唱しなければなりません。

きょうは、五月一日（一九九四年）です。今までの宣誓文の前に敬礼を三拝し、「父母様がすべて成し遂げたことを代わりに相続し、新しい盟誓文に移ります」と祈祷しなさい。そして、それを相続し、「このような新しい『家庭盟誓』の時代に移されます」と言って、申し訳ありませんという気持ちをもって祈らなければなりません。盟誓文に悔い改めなければなりません。これからは「私の誓い」と「家庭宣誓」はやめ、「家庭盟誓」を暗唱するのです。祝福家庭でない人も、「家庭盟誓」を一緒に暗唱するのです。一般の人も、すべてここに入っていかなければなりません。

二　家庭盟誓の意味と特徴

一) 家庭盟誓の重要性

「家庭盟誓」は、すべての原理の内容を中心として、家庭編成に適した核心的内容を抜粋して記録したものです。そのようなものであることを知って、皆さんは、祈祷する前には、必ず盟誓文をすらすらと暗唱し、現在の自分自身と自らの家庭の状態が盟誓文のとおりになっているか、いないかをたださなければなりません。そして、盟誓文のとおりになっていなければ、すぐにそれを是正していかなければなりません。盟誓文のとおりに完成しなければなりません。過去においては「私の誓い」と言ったでしょう？　今は何ですか。「家庭盟誓」を暗唱すれば、その中にすべてが入っているのですが、今後は「国家盟誓」、「世界盟誓」まで出てこなければなりません。

この盟誓文は、復帰摂理の骨子を抜き出してつくったものですが、どこへ行こうと、毎日これを中心として生きなければなりません。すべての盟誓文において、最初の文句は真の愛です。真の愛とは何ですか。自らの心と体を祭物として神様の前に捧げれば、神様まで一つになって私たちに返してくれるのです。自らの心と体を捧げなくては、神様と一つになり、返してもらうことができないのです。絶対信仰、絶対愛、絶対服従する立場で神様の前に捧げるようになれば、神様と一つになり、神様が私たちの前に立たれるのです。そのようにして、万事が天の指示どおりに動くならば、地上と天上天国のすべてのものが成されるのです。

盟誓文を朝、昼、晩の食事の時と、起きた時と寝る時、このように五回ずつ暗唱しながら自分自身を批判し、心と体が闘う基準に連結したものをすべて清算しなければなりません。そして、一つになっていなければ、朝食を食べることができず、また昼食や夕食を食べることができないのです。御飯を食べてはいけないのであり、寝てはいけないのです。盟誓文は、個人的誓いとは異なります。「家庭盟誓」です。

摂理の時、私たちは誓いをするのですが、今は個人ではなく家庭です。家庭がすべての公式であり、根本です。ですから、家庭を代表して暗唱するのです。父親が全体の家庭を代表して暗唱するのであり、母親も全体の家庭を代表して暗唱するのであり、また息子、娘も全体の家庭を代表して暗唱するのです。

第一に、心と体が一つにならなければなりません。第二に、夫婦が一つになるのです。第三に、子女が一つになるのです。どうしてでしょうか。エデンにおいて神様を失ってしまいました。アダムとエバを中心として個人を失い、家庭を失い、子女を失ってしまいました。これを復帰しなければなりません。ですから、「家庭盟誓」は心と体が一つにならなければなりません。夫婦が一つにならなければなりません。そして、子女が一つにならなければなりません。

「家庭盟誓」の最初は何ですか。「私たちの家庭は真の愛を中心として」です。すべて「私たちの家庭は真の愛を中心として」と言うのです。「家庭盟誓」の八大項目の中で、表題は何かというと、「私たちの家庭は真の愛を中心として」という言葉です。真の愛と

は何ですか。真の愛というのは、神様の愛と真の父母の愛が堕落しないで一つとなり、真の愛を中心として真の生命、真の血統が連結されたことを意味するのです。

家庭が、すべての団体の根本です。ですから、問題は簡単です。世界の統一は、良心と体が一つになり、夫婦が一つになり、息子、娘が一つになるところから始まるのです。世界の統一はそこから始まるのです。ですから、一番の怨讐は、心の前における体です。体はサタン側です。心と体が一つになりさえすれば、天下がすべて変わるのです。歴史始まって以来今まで、いかなる聖人もそのことを教えてくれませんでした。真の父母が出てきて、初めて教えてくれるのです。

それでは、堕落したのですが、なぜ体が心を引きずり回すのでしょうか。偽りの愛で堕落したのですが、その偽りの愛の力が良心の力より強いので、問題が広がったのです。ゆえに、私たちは、心に神様の愛を注入しなければなりません。「神様を愛する」と言って注入しなければなりません。心と体が一つになれば、神様の愛が注入されるのです。

家庭が必要です。そこで自分のために生きますか、子女のために生きますか、それとも妻のために生きますか。子女のために生きなければなりません。なぜでしょうか。創造原則がそのようになっているからです。世の中の存在原則がそのようになっているからです。歴史がそのようになっているのです。

神様が創造したのは相対のためです。ですから、相対が自分よりも優れていることを願うのです。優れていることを願うのですが、何パーセント優れていることを願うのでしょうか。一〇パーセントですか。一〇〇パーセントですか。一〇〇〇パーセントですか。永遠パーセントですか。永遠パーセントというのは、無限のパーセントということです。ですから、投入して忘れてしまわなければなりません。一〇〇パーセントだけ投入するのならば、一〇〇パーセントしか出てきません。ですから、投入して忘れ、投入して忘れ、投入して忘れてしまわなければならないのです。

失ってしまったものを再度編成して、天国に一致させてこそ、天上世界で空いている天国が回復されるのです。今、先生は南米と北米を統一しています。南米と北米が統一されれば、韓国と北韓の統一は、あっという間です。それから、天の国を取り戻して立つ時は、その時からは天国の憲法が制定されるのです。皆さんの家庭が唱えている「家庭盟誓」の中から、憲法が制定されるのです。四大心情圏と三大王権、そして皇族圏の内容から憲法が制定されれば、それは公式になるので、誰もがみな知るようになります。そのようになれば、欺くことはできません。

このような原則によって憲法が制定されれば、そのとおりに生活すればいいのです。そのようになれば、教会は必要ありません。そのとおりに生きればいいのであり、国のために忠誠を尽くせばいいのです。国のために忠誠を尽くし、忠臣になり、孝子になり、聖人、聖子にならなければならなかったのですが、そのようになることができなかったので、それを教育するのです。

皆さんには、まだそのような観念ができていないのであり、皆さんの時代においては、昔の観念は変わっていかなければなりません。

皆さんの息子、娘、何代かを経て、これを是正しなければなりません。

「家庭盟誓」は、すべて初めに「真の愛を中心として」から始まるのです。復帰の道は、神様と一つになった真の愛の道から出発するのです。故郷に行っても神様を身代わりし、真の御父母様を身代わりしなければなりません。

二) 家庭盟誓は復帰の総論を集約させたもの

「家庭盟誓」は、先生の歴史について述べた言葉です。先生が家庭を編成してきた歴史について述べた言葉だということを知らなければなりません。ですから、最初は何ですか。環境でしょう？　再創造歴史です。地上を復帰しなければなりません。一族を救い、その国を復帰しなければなりません。二番目は何ですか。「真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり、中心的家庭となって……」、天宙の代表的家庭です。それは、誰の家庭のことですか。先生の家庭です。中心家庭です。その伝統を受け継ぎなさいというのです。

ですから、家庭では孝子となり、国家では忠臣、世界では聖人にならなければなりません。今までの歴史上の聖人は問題ではありません。「神様の家庭を成して世界と連結させよう」という祝福家庭を取り戻さなければなりません

天国には、二つの法があります。王宮の法と国の法です。地上天国にも、王宮の法と地上の法があります。この四つの法を、すべて知って守ることができる家庭にならなければなりません。その王宮に入っていっても侍られ、国に行っても侍られ、地上の王宮に行っても侍られ、地上の国に行っても侍られなければなりません。先生は、その道を行かなければなりません。その道において自然屈服させ、尊重される勝利の覇権を復帰しなければならないのが先生の行くべき道です。

皆さんは家庭で孝行し、国で忠誠を尽くし、世界で聖人の道を行き、天宙で聖子の道を行かなければなりません。それが先生の歴史です。皆さんも、四段階の道を行かなければなりません。すべては成すことができなくても、一段階目である孝子になったとしても、その国の救いを受けるのです。一つでもしなければなりません。

数多くの家庭の中で家庭の王座を守らなければならず、数多くの忠臣の中で忠臣の王にならなければならず、数多くの聖人の中で王にならなければならず、数多くの聖子の中でも王にならなければなりません。多くの聖子の中で王になってこそ相続を受けるのです。そのようになって、そこから相続を受けるということが始まるのです。祝福を受けたからといって、その家庭が相続を受けるのではありません。

聖子は、地上のすべての宗教を統治し、神様の代身の位置に行くことによって、家庭を中心とした世界を祝福するようになっているのです。家庭が別々、民族が別々、このようにはならないということを知らなければなりません。そのような位置に立ったので、四大心情圏と三大王権を成すことができるのです。

すべてが祝福の位置を越えることができる位置に立ち、王権に対して東西南北、すなわ

ち十二真珠門の三六〇度方向の、どこにおいても自由に行動することができるのです。ここから四大心情圏をもってくるのです。四大心情圏の中で、聖子の心情圏、聖人の心情圏、忠臣の心情圏、孝子の心情圏を越えることなくしては「四大心情圏を越えた」と言うことはできません。これが「家庭盟誓」の三番です。

四番は何ですか。「真の愛を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形成し……」、天宙大家族です。世界が兄弟です。一つの血統です。神様のように保護しなければなりません。神様の王宮の座に就いたとしても、この四番を成さなければなりません。天宙の大家族を形成し、自由と平和と統一と幸福の世界を完成しなければなりません。先生は、そのような心情です。天宙大家族主義者です。自由と、幸福と、統一と、平和を植えつけてあげなければなりません。その言葉は、何を表しているのですか。先生の歴史を表しているのです。先生の歴史が表題です。

頭の中にだけ入れたからといって良いのではありません。平和の世界、幸福の世界だけで暮らすのではありません。天上世界に直行できなければなりません。「真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」です。前進的な自分たちになりなさいというのです。

世の中がこのように邪悪なのにもかかわらず、ただ座って眺め、寝て休むことができますか。一秒が重要です。一日を、いかに、より復帰していくのかというのです。雨が降ったり、夜になったりすることが問題ではありません。天上世界がすべて壊れて、機能していないのです。ですから、それをするのです。先生がそれをするのです。地上世界を中心として、天上世界を手術して是正するのです。

六番は何ですか。「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」です。自分たちだけが幸せに暮らすのではないのです。自分だけ幸せに暮らしてはいけないのです。神様は、そうではありません。父母は、そうではありません。息子、娘がもっと幸せになるようにしなければならないのです。四方にすべて連結させる家庭を完成しなければなりません。

七番は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結された為に生きる生活を通して、心情文化世界を完成することをお誓い致します」です。本然の血統です。本然の血統と連結された心情文化世界です。どこにも、引っ掛かるものはありません。地獄に行こうと、天国に行こうと解放です。これは復帰の総論を越えて……。総論だけではありません。序論から主な内容、そして結論までのすべてを集約させたものが「家庭盟誓」です。先生のこのような話を聞けば、考え方が変わるはずです。今後、国をつくりあげれば、皆さんもその歴史をすべて話してあげなければなりません。そのような内容です。

最近、「家庭盟誓」の文の八番ができたでしょう。「成約時代を迎え、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神人愛一体理想を成し、地上天国と天上天国の解放圏を完成する

ことをお誓い致します」です。簡単なことです。解放ではなく、解放圏です。皆さんの家だけに行ってはいけません。地上において、皆さんの国と皆さんの世界に、完全に責任を負わなければならないのです。

三) 家庭盟誓の中心思想は「真の愛」

統一教会では、「家庭盟誓」というものを宣布しました。「家庭盟誓」は、一般の人が暗唱するのではありません。「家庭盟誓」は、誰もが暗唱できるものではありません。「家庭盟誓」の八大条項の書き出しは「私たちの家庭は真の愛を中心として」となっています。それが前提となっています。それは何を意味しているのでしょうか。その言葉は、サタン世界と関係がない基盤から話しているのです。なぜ「家庭盟誓」に真の愛を前提条件としたのかというと、堕落がなかったエデンの園の本然の世界に入っていることを主張するためです。

「家庭盟誓」をすべて説明してあげましたか。「家庭盟誓」は、一から八まで「私たちの家庭は真の愛を中心として」という言葉が表題になっています。真の愛とは何ですか。今後、皆さんが真の愛を中心として一つにならないまま霊界に行けば、神様に侍って生活することはできません。

真なる私と真なる家庭を復帰しなければなりません。「家庭」といえば、三代のことをいうのです。祖父母と父母と子女です。これを拡大したものが世界です。それゆえに、どのような人であろうと、父母、夫婦、兄弟、子女が必要です。これは公式です。それを愛することができなかった人は、天国に行くことができません。「家庭盟誓」に出てくる四大心情と三大王権、皇族圏を体恤することができなければ、天国に行くことができなくなっているのです。

「家庭盟誓」の最初の部分は何ですか。最初は、どのようになっていますか。「私たちの家庭は真の愛を中心として」です。真の愛です。真の愛を中心として成すのです。堕落したので、真の愛をもつことができなかった人は、家庭というものをもつことはできません。それを知らなければなりません。真の愛をもつことができなかった人は、本来、神様の前に家庭をもつことができなくなっているのです。堕落とは何かというと、真の愛が腐っているのです。そうではありませんか。

すべてが相対的関係です。独断的にしてはいけません。そのようにすれば副作用が生じます。原理原則を中心として愛の理想世界を展開し、発展させようとすれば、投入することができる内的因縁がなければなりません。それがなくては、発展することはできません。愛が広がっていくことはできないのです。

神様を除いてしまえば、真の愛はありません。皆さんは、それを知らなければなりません。自分の父親と母親がけんかをしないで幸福に暮らしているので「真の父、真の母、真の愛だ」。そうではありません。神様が介在しなければなりません。未婚の男女が恋愛をして、お互いが死ぬほど愛し合い、たとえそれが生命を投げ出すような愛であったとしても、それは真の愛ではありません。神様が介

在しない場合は、真の愛ではありません。真の愛には、神様が介在しなければなりません。

神様と関係を結び、神様の息子、娘になろうとするならば、神様の血統と、神様の生命と、神様の愛に関係しなくては不可能です。神様の愛と、神様の血統と、神様の良心を受け継がなければなりません。すべて必要です。神様の真の愛も真の愛が必要であり、神様の真の生命も真の愛が必要であり、神様の真の血統も真の愛が必要であり、神様の真の良心も真の愛が必要なのです。それが真の愛というものです。

真の愛とは、天理を立てるためのものです。ゆえに、愛も原理原則に基づくのです。愛は、原理上にあるのでしょう？　自由も原理主管圏、すなわち原理上にあるのであって、原理を否定するものではありません。

「家庭盟誓」には、敵という概念がありません。個人の徹底した精神だけを要求するのです。「家庭盟誓」は、そのようになっているのです。探してみてください。怨讐という概念はありません。愛以外の内容はありません。地上天国の内容に適合した、基礎的な柱と同じです。地上天国建設のための基礎公式なのです。

「私たちの家庭は真の愛を中心として」、これによってすべて越えていくのです。真の愛を中心として、すべて越えていくのです。父母の誓い、夫婦の誓い、子女の誓い、血族の誓い、一族の誓い、国家の誓いは、すべて真の愛を中心として越えていくのです。真の愛は、引っ掛かるところがありません。真の愛という言葉は、投入して忘れるということです。

四) 家庭盟誓を基準として生きなければならない

「家庭盟誓」を完成しなければ、天国に入っていくことはできません。キリスト教徒たちは「イエス様を信じれば天国に行く」と言っていますが、天国に行くことはそれほど簡単なことではありません。今、全世界はキリスト教文化圏ですが、天国になっていますか。

地獄の中の地獄になっているのです。地獄に近いのですか、天国に近いのですか。境界線で見れば、境界線を越えていきましたか、越えていきませんでしたか。自らがどの位置にいるのかすべて分かるのです。どの位置なのか、すべて分かるようになっているのです。それで、「家庭盟誓」が出てくるのです。そのような基盤ができて「家庭盟誓」が出てきたということを知らなければなりません。それで、「私たちの家庭は真の愛を中心として」というように、すべてに真の愛が入ってくるのです。真の愛を中心として個人、家庭、息子、娘を一つにして、父母として来られたということを知らなければなりません。

盟誓文には、すべて真の愛が入ってきます。真の愛は、この上で展開されるのです。心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女と一つになったのちにおいてこそ成されるのであって、それ以外には成されません。それができなければ、盟誓文を暗唱できないようにしなければなりません。今まで、個人的に盟誓文を暗唱してきましたが、実際は家庭です。祈祷会をする時は、毎回この盟誓文を暗唱し

てから祈祷しなければなりません。心と体が一つにならなくては、祈祷することはできません。神様を「お父様」と呼ぶことはできません。私たちは、堕落がどのようにしてなされたのかを知っているので、直すことができるのです。

真の愛とは何でしょうか。心と体が一つにならなければなりません。どのようにすれば、一つになることができるのでしょうか。サタンの血統を断ち切らなければなりません。根を抜き取ってしまわなければなりません。それが宗教生活です。修養です。それで、心を中心として体を一つにするのです。体を打って心を強くし、心に体が従ってくるようにするのです。既に良心は、天国に行くことを知っているのです。体を打ってサタンを分立すれば、自然に切り離されるようになっているのです。真の愛といえば、そのようになっているのです。

神様は、心と体が闘いますか、一つになっていますか。一つになることは簡単ですか、難しいですか。世界をひっくり返すことよりも難しいのです。自らの完成は、世界に勝利することよりも、もっと難しいのです。いかにして心と体を一つにするのかというのですが、それは簡単なことではありません。

難しいことですが、それはしなければならないことですか、してはならないことですか。しなければならないことです。そのような難しいところに、先生はハイウェイをつくりました。橋を架け、山にトンネルを通してハイウェイをつくったのです。先生は、先生のためにこのような苦労をする必要はないのです。世の中の人、皆さん、そして世界を救ってあげるために苦労したのであって、私を救うために苦労したのではありません。

霊界と地上において、すべて夢のような話が実現されるという事実ほど、恐ろしく、貴いものはありません。ゆえに、不平を言わずに素直に原理の道、み旨の道を行かなければなりません。それが神様と真の父母の伝統的な考えです。それは、相続しなければなりませんか、相続してはなりませんか。相続しなければなりません。今、先生が「相続してはいけない」と言えば、どのようにするつもりですか。先生がそのように言ったとしても、皆さんは相続しなければなりません。そのようにすれば、たとえ先生が反対し、逃げ回ったとしても、やむを得ず解放してあげざるを得ないのです。

「家庭盟誓」の一、二、三、……。すべてのものが原理原則です。これは、すべて暗記しなければなりません。それを知らなければ、摂理の方向が分かりません。方向が分からなければ、途中で混乱が生じるのです。「家庭盟誓」と、今回お母様が講演する内容は、新しい天宙復帰の大原則として本にして出版しなければなりません。堕落したこの世界において、長子権を復帰し、家庭定着を成して逆に戻っていくのです。それで、家庭という絶対的な権限をもって発展していくようになっているのです。

真の愛を成したならば、その責任を全うしなければなりません。無責任な人には、「完成」という言葉は永遠にありません。そうでしょう？　責任を負うようになってこそ、初めて完成が可能になるのです。完成というも

のは、責任のない人とは何の関係もありません。そのようなことをはっきり理解して、夫婦生活を成していかなければなりません。責任を負わないところには完成がないのです。愛というものは、責任的基盤で決定されるものなので、責任を負う限り、そのすべては均一的な結果をもたらします。責任を負わなければなりません。

既に、私は八十歳になりました。八十歳になりましたが、クリスマスの時でも家で過ごしたことがありますか。先日の誕生日も、家で過ごすことができないようにしました。近ごろでは、先生が還暦も解放してきたのですが……。正反対のことをしてきました。今でも、先生は皆さんの世話にはなりません。毎日、毎時間、父母の子女として、真の子女として、忠告したこのすべての内容を中心として考えるのです。私利私欲を中心として考える暇はありません。

毎日、天上と地上の統一に向かって前進的発展を促進化させなければなりません。気合いを入れてあげ、強制的にでも一気に追い立てていかなければなりません。それで、霊界を動員し、霊界にいる先祖を動員するのです。その代わりに、霊界の先祖たちがする活動に、私が負けてはなりません。絶対に負けてはなりません。それで、「私についてきなさい」と言い、寝ながらでも講義し、そのようにしながら寝るのです。先生はそのように生活しています。

み言をすべて話すことができなかったならば、寝ながら話しているのです。あすの朝に説教することも、すべて夜に話しているのです。お母様は、そのような先生の秘密を知っています。夜だからといって、寝る先生ではありません。常につぶやきながら生活しているのです。

一族で、家庭的なメシヤをつくらなければなりません。十二名以上つくり、家庭を中心として自分の一族、孫の嫁まですべて育てることができなければなりません。三代、四代までしなければなりません。そして、何をしようというのでしょうか。自分の一族を拡大するのです。

氏族は、七十門徒を中心として百二十門徒まで編成しなければなりません。イエス様は、百二十門徒を中心としてザカリヤ家庭で一つになり、朝廷のすべての官吏を中心として国の形態を備えて解放しなければならなかったのですが、それができませんでした。それは、氏族的責任です。メシヤとは何ですか。真の父母でしょう？　真の父母の家庭、真の父母の愛、真の父母の血族です。

国家メシヤを配置したでしょう？　先生は独りでそのような過程を勝利し、その勝利的覇権をもってすべてを収めたので、国家的メシヤを配置したのです。神様が地上に来られ、失ったものを取り戻し、再び主人となることができる相対圏を取り戻すために配置したのです。その相対圏になろうとすれば、その相対世界の家庭に、神様が自由に出入りすることができなければなりません。そのようになれば、家庭の自由圏、氏族の自由圏、国家の自由圏、世界の自由圏が生じるのです。

国家を取り戻し、その国家全体を犠牲にして、その国とすべてのものを売ったとしても世界のために生きるのならば、彼らの貢献した国家が世界の主体国家になるのです。ですから、どれほど深刻でしょうか。

先生が教えてあげたすべての内容は、天国に入っていくことができる鍵です。ここに合わなくては、天国の門を開けることはできません。先生があげる鍵で開けてこそ天国の門が開くのであって、その鍵でなければ開きません。いくら「アメリカの誰々だ」と言っても駄目です。先生の鍵は、本質的な鍵です。たとえ金や銀でつくったとしても、それらの鍵ではいくらやっても開きません。しかし、先生があげた鍵は、真鍮でつくられていて何でもないもののように見えても、さっと開くのです。誰も、そのような鍵をつくることはできません。

神様がこの地上で人間と共に暮らすことができないのは、この統一的見解が家庭において成されていないからです。これが成し遂げられれば、神様が再び来られて暮らすことができるのです。「真の愛」と言えば、「心と体が一つ、夫婦が一つ、子女が一つ」という観念がさっとそこに集約されていなければなりません。この三つが一つになれば、真の愛の家庭は、地上天国と天上天国の出発となるのです。神様と真の御父母様を中心として一つになる時、地上天国と天上天国が建設されるのです。ですから、地上天国はどこから出発するのですか。私と息子、娘からです。家庭からです。

五) 家庭盟誓に対する私たちの姿勢

盟誓文の中の第一番は、皆さんが故郷に帰っていき、神様の創造理想を再び創建しなければならないということです。二番目は何かというと、神様の歴史的な恨を解いてさしあげる孝子になろう、忠臣になろう、聖人になろう、聖子の道理を完成しようということです。イエス様は聖子になるために来られましたが、それを成し遂げることができなかったので、私たちの家庭で、このすべての出発をすることができるようにしなければならない、ということを考えなければなりません。それが私たちの伝統です。

毎日、盟誓文を暗唱し、朝起きた時、朝食を食べる時、昼食を食べる時、夕食を食べる時にそれを考えなければなりません。それから、寝る時に考え、「私は心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになることに精誠を尽くしただろうか」と反省しながら、これを毎日の生活の標準にしていかなければなりません。夫婦同士でけんかをしては、唱えることはできません。「家庭盟誓」を暗唱することができないということが、どれほど息詰まる事実かということを感じることができなければなりません。これは盾です。

寝る時に暗唱し、また起きて暗唱しながら、「今日は何節について考え、そこに合わせて生活し、そのように生活しただろうか」と鑑定する生活をしなければなりません。それができなかったならば、あす、再びその世界に到達できるように……。そのようにして、御飯を食べて大きくなるのと同じ生活的な要素として、天国の生命的な要素を基準要素として、盟誓文を暗唱しながら鑑定しなければなりません。

家庭をもった人が「家庭盟誓」を暗唱することができなければ、偽物です。これは皆さんの家庭を代表した標準なので、ここに一致しないものは不合格であり、脱落です。これを知り、ここに標準となることができるため

には、主人である皆さん父母たちは、これをすべて暗記し、細分化して、子女たちに教えなければなりません。そして、周囲の人々もそこに同感することができるように、リードしていかなければならないということを知らなければなりません。

真の良心をもって真の父母を再び見てください。そのような良心をもって父母を愛し、夫や妻を愛し、国を愛し、世界を愛しなさいというのです。真の御父母様に対して、皆さんの態度が絶対的な相対的基準で一つにならなければならない時代に入っていくのです。

真の御父母様の家庭が定着したので、このような相対基盤を中心として、皆さんは完全に一つにならなければなりません。自らの観念があってはなりません。心と体が一つにならず、夫婦が一つにならず、子女が一つにならなくては、盟誓文を暗唱することもできず、先生を「父母様」と呼ぶこともできません。今まで呼んでいた父母は、利用してやるためのものです。先生は、そのような言葉を聞きたくはありません。それゆえに、「家庭盟誓」を徹底化できる基準をもたなければなりません。

真の父母と真の父母の子女たちが真の愛を相続して暮らす世界には、宗教が必要ありません。良心的な世界にならなければなりません。ですから、ここに「家庭盟誓」が出てくるのです。真の父母と一つになった皆さんは、「家庭盟誓」を暗唱する時、心と体が一つにならなければならず、夫婦が一つにならなければならず、子女が一つにならなければなりません。そのようにならなくては、盟誓文を暗唱することができないということを知らなければなりません。

「家庭盟誓」は、すべて「私たちの家庭は真の愛を中心として」という言葉から始まりますが、真の愛は、心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女と一つになる、その上で生活することだということを常に考えなければなりません。霊界に行けば、皆さんは、盟誓文にすぐに引っ掛かるのです。誓いというものは、そのように恐ろしいものです。常にそのように生きなければなりません。

父親がこの盟誓文と一つになっていなければ、母親も共同責任を負い、息子も共同責任を負い、個人も共同責任を負うのです。心と体が一つになり、真の愛を中心として一つになった夫婦から、その一つになった心と体の子供が出発するということは自動的な結論です。そうでなければ、家庭に真の愛がとどまることはできません。真の愛がない所に神様が臨在なさることはできません。論理的な結論です。

「家庭盟誓」は、中心に安着した場において、神様と全体が一つになった立場から説いているものです。アメリカが中心ではありません。日本でもなく、先進国でもありません。それらの世界は、ますます悲劇と、悲しみと、苦痛と、怨恨に満ちた世界になって終わっていくのです。今まで、統一教会という所は、地獄のように最も暗く、真っ暗な天地だと思っていたのですが、朝となり、これが反対の世界へ上がっていくのです。

ですから、天国の運勢が……。創造理想とは何かというと、家庭理想です。家庭理想、すなわち四位基台の完成です。四位基台は三

代から成ります。三段階に展開したものが四位基台です。神様、父母、子女です。神様とアダムとエバ、そしてアダムの子女たちです。それが本来の公式です。アダム家庭は、公式家庭です。

「家庭盟誓」の文は、真の御父母様が闘ってきた戦勝の記録です。勝利した伝統の記録です。天宙の解放圏を成す時まで、この伝統的事実を自分の生活圏に適用させ、毎日のように自分の生活を批判しながら、相対的実体圏を自らが立てなければなりません。皆さんが盟誓文を斉唱する時、盟誓文を暗唱しながら、盟誓文を中心として常に批判しなければなりません。その言葉を、天から聞こえてくる言葉と思い、私がその実体圏になっているかを批判し、そのようにできていない部分は、削り取らなければいけません。「この悪党、統一教会を滅ぼすために入ってきたのか」という警告状を出さなければならないのです。それを考えてみたことがありますか。

イスラエル民族が契約の箱をもって四十年路程を歩んだように、統一教会も、「家庭盟誓」をもって一つになり、天国に入っていくのです。イスラエル民族がエジプトから出てきたのが建国のためだったように、建国思想を徹底化させなければなりません。同様に、今私たちには全世界的に国がありません。統一教会には国がありません。それは、どこがならなければなりませんか。韓国がならなければなりません。

三　祝福家庭と家庭盟誓

一) 真の家庭の理想と価値

(1)真の家庭は創造本然の家庭

創造目的の完成は、み旨の完成です。み旨の完成は、四位基台の完成です。このようになるのです。四位基台の完成は何かというと、真の家庭を完成することです。真の家庭には、真の父母がいなければならず、真の男性と真の女性がいなければならず、真の夫婦がいなければならず、真の子女がいなければなりません。これは理論的です。最も中心は、個人の目的も真の父母であり、男性と女性の目的も真の父母であり、赤ん坊の目的や兄弟たちの目的も真の父母だということです。真の父母になって息子、娘をもとう、家庭をもとう、このようになるのです。

真の家庭が出てくるためには、真の男性が出てこなければなりません。真の男性とはいかなる人ですか。神様と一〇〇パーセント一つになった男性です。神様の理想と完全に一つになった男性であり、そのような人が神様の理想と完全に一つになった女性と一つにならなければなりません。女性にも心と体があり、男性にも心と体があるでしょう？　彼らが成熟してこそ、初めて心と体は一つになるようになっています。男性でも女性でも、心と体がすべて一つになった人が、初めて互いに横的に一つになることができる力を感じるのです。そのようなものが男女の愛です。ですから、男女は初愛を中心として、絶対的に一つにならなければなりません。

神様が主体であり、私たち人間が客体であるならば、神様が願われる理想的な愛と、人

間が願う理想的な愛が安着し得る一つの基準、センターが家庭です。それゆえに、夫とどのように向き合い、妻とどのように向き合うのですか。神様の前に恥ずかしくなく、子女の前に恥ずかしくない夫と妻とならなくては、夫婦の愛を結ぶことはできないという結論が出てくるのです。

お互いに愛し合って愛をなそうとする時、神様が笑うことができ、理想的な神様の愛の安着点、中心点を通して、今後、喜びの子女をもつ資格をもった男性と女性にならなくては、この地上に理想的家庭を立てることはできないという結論が出てくるのです。

理想的な夫婦、理想的な真の家庭は、神様と常に、共に暮らすことができます。ですから、男性は神様の性相、心の立場にならなければなりません。そして、女性は形状となって一つにならなければなりません。このようになったものが、一段階もっと大きくなって一つになるのです。心的な面が性相となり、体的な面が形状となって、この二人がここにおいて初めて実を結ぶのです。それで、神様を中心として心と体の一体圏ができあがるのです。

生命を超越していく愛から、初めて真なる家庭が築かれるのです。真の夫は、自分の妻のために命を懸ける夫です。真なる父母も、自分の息子、娘たちのために、そのようにする父母です。真の男性もそうであり、真の女性も同様です。真の男性と真の女性が出会って真の夫婦となるのでしょう？　その真の夫婦から生まれる息子、娘が真の息子、娘です。その息子、娘は、すべて真の息子、娘になるのです。そのようにして成し遂げられた家庭が、真の家庭になるのです。真の家庭においては、神様が中心軸です。その軸を中心として、アダムとエバの家庭に、神様が愛の中心として定着しなければならなかったのです。

家庭を中心として見るとき、夫婦の愛はどのようなものかというと、妻にとって、夫は神様の代身者であり、自らの絶対的な夫であり、今後息子を愛することができる中心存在です。妻は、その夫に対しながらこの世を相対的に感じることができ、相対的に考えることができなければなりません。夫は宇宙に一人しかいないのです。過去、現在、未来を通じて永遠に一つしかない存在です。また、夫にとって、妻は母の代身者であり、世界を代表した絶対的な相対です。世界を代表した娘として、愛の実体として愛することができなければなりません。

真の父母になれば、真の子女が出てきて、真の家庭が出てきて、真の氏族が出てきて、真の国が出てきて、真の世界がここから自動的に生じるのです。そうではありませんか。ですから、一番重要な名前は何ですか。「真の父母」という名前です。「真の父母」という用語が一番重要です。

真の家庭とは何でしょうか。夫婦です。夫婦は、神様の実体対象です。神様の体です。真の愛をもった神様を、皆さんは「お父様」と呼びます。神様が父です。父子関係なのです。父と息子であり、母と娘なのですが、一体です。それを知らなければなりません。縦横を合わせたものなので、そうだというのです。

父母が子女のために無限に投入して犠牲になれば、真の愛が背後にある限り、子女はその真の愛に無限に感謝するようになっているのであり、父母は大きな喜びをもって、その犠牲の立場を満たすのです。このように、犠牲的な真の愛の力は、授受作用を発展させ、真の家庭で、そして真の世界で、永遠の喜びと平和の関係を結ばせます。このようなところから、永生の理想世界が顕現するのです。

しかし、このような真の愛が欠如した家庭や、国や、世界は、抜け殻の建物にすぎず、むしろあらゆる不信と、反目と、不倫の納骨場所となってしまうのです。人間の純粋な真の愛が成長し、完成する場所が真なる家庭です。真の父母の愛、真の夫婦の愛、真の子女の愛、そして真の兄弟の愛が共に完熟し、実践される真の愛の初舞台が真の家庭なのです。

最高の真理とは、どのようなものでしょうか。父母に仕え、真の子女と共に生き、真の父母と真の子女を中心とした真の家庭を中心として、「真の家庭とはこのような家庭だ」と言うことができるものです。さらには「真の氏族、真の民族、真の国家、真の世界と真の天地とはこのようなものだ」と言うことができるものです。このような「真」という因縁ができなければ不可能なのです。

神様の真の愛の動機により、その対象として造られた人間にとって最も貴いものは、真の愛を中心とした真の家庭を成すことです。真の愛は、人間に真の幸福をもたらす根本です。真の愛の中に無限の喜びがあり、無限の自由があるのです。真の愛の中から、永遠の調和が成し遂げられるのです。

真の父母の真の愛を通して神様の真の愛を学びながら、真の兄弟の真の愛を通して真の国と真の世界人類に対する普遍的な真の愛を訓練させる、平和世界の基本核の位置が真の家庭です。それだけでなく、父母と子女の間につながっている真の愛を通して、過去と現在と未来の世代が一貫した真の愛の価値観によって連結されていく、歴史的連結の輪の基本単位も真の家庭です。

家庭を通して、すべての人を愛し得る経験をすることができます。幼い子供から年寄りまで、男性は女性全体を、そして女性は男性全体をそのようにお互いに愛することができる因縁の世界こそ、より生きがいのある理想に近い世界です。ですから、家庭は、理想世界を紹介するための教育場です。

(2)真の家庭は、本然の血統と真の愛が連結されなければならない

神様の究極的、不変の摂理目的は、真の父母を探し立てることです。真の父母は、真の愛の化身体であり、真の生命の種として来られます。真の父母から真の家庭が始まり、この家庭は、復帰されるべきすべての家庭の標本となるのです。

統一教会でいう心情圏がどのように伝授されるのかという問題は、神様の本然の愛を中心とした血統的因縁が連結されなければ、神様を中心とした本然の心情圏は、完全に一〇〇パーセント伝授されないのです。

神様が中心になって成長したアダムとエバを祝福してあげた場合には、神様を中心とし

た真の愛と、真の生命と、真の血統を受け継いだ真の夫婦が生じ、真の家庭、真の氏族、真の民族、真の世界へ拡散していったはずです。しかし、人類は、堕落したがゆえに真の父母を失ってしまいました。その結果、偽りの父母が生じ、地獄が生じました。その偽りの父母の歴史を払拭し、再び真の父母の歴史を登壇させることが神様の摂理です。

神様は、真の愛を中心とした真の父母、真の子女、真の家庭、真の国家、真の世界、そして真の宇宙を立て、真の愛の理想によって主管しようとされましたが、サタンが偽りの愛を中心として、偽りの父母、偽りの子女、偽りの家庭、偽りの国家、偽りの世界、そして偽りの宇宙を立てて主管してきたのです。

堕落後に、アダムとエバから連結した人類の血統は、サタン側に属しています。自然世界のすべてのものも同様です。そこで、反対に祝福を受けることによって、すべてのものが逆に帰っていくのです。財産、息子、娘、夫婦が神側に属するようになるのです。

そのようになることによって全宇宙が神様に連結されます。そこから、神様が思いどおりにすることができるようになるのです。そのように帰っていかないものは、サタン側に残ります。すべてのものが神側へ帰っていかなければなりません。財産、息子、娘、家庭、そして先祖まで、本然の位置に帰っていかなければならないのです。

神様の愛を中心として完全な神様の愛が顕現する時には、サタンは現れることができません。それが責任分担の完成です。責任分担を完成した直接主管圏において、愛の因縁が結ばれるのです。そこで、縦的愛と横的愛が連結されるのです。そのようになれば、その縦横の愛を通じて、神様の血統的因縁と血縁が生じるのです。血統が生じるのです。

それゆえに、その血統、すなわち神様の愛を中心として一つになった縦横の愛と因縁を結んで生まれた血統には、サタンは干渉することができません。サタンと因縁がないのです。ですから、心情を受け継ぐためには、純粋な神様の愛を中心とした本然の伝統的血統を受け継がなければなりません。

祝福結婚の儀式は、偽りの愛の因縁を清算し、絶対性を中心とした結婚の神聖な内容と価値の回復を指向します。真の夫婦の愛、真の父母の愛、真の子女の愛を回復するための儀式です。したがって、祝福結婚式に参加する当事者は、純潔と信頼を生命視し、不変の夫婦愛を誓約するのです。その真の愛の基盤の上で、真なる家庭を成し、真なる子女を養育し、生活の中で真の国家と平和世界の実現に献身することを誓うのです。

二) 真の家庭と家庭生活

(1)侍ることによって生活の天国化を実現

神様は、妄想的な神様、観念的な神様ではありません。抽象的な神様ではありません。生活的な主体性をもち、私たちが生活している生活の主人として、常に共にいらっしゃるのです。侍られているだけではありません。共同的な愛を中心として、共同的な生活をしていらっしゃる神様です。夢のような話です。

神様を心の中に迎えて侍り、私たち人間が体の立場から完全に一つになることのできる

起源をつくらなくては、この悪魔世界を清算することはできません。このような観点から見るとき、侍りの時代、すなわち侍義の救援時代だとみなすのです。侍ることによって救いを受けるのです。神様は、あの空の遠く彼方にいらっしゃるお方ではありません。私たちの生活圏内の主体者として、神様に侍らなければなりません。

皆さんは、神様がいらっしゃるということを一日に何度自覚しますか。二十四時間中に、何度、神様がいらっしゃる、ということを感じますか。侍ることによって救いを受けようという人が、二十四時間中の一、二時間程度侍ればよいのですか。空気よりも、切迫して必要なものが神様です。水よりも、切迫して必要なものが神様です。御飯より、もっと貴重なものが神様です。しかし、皆さんはそのように感じていますか。

今から、皆さんは侍る生活をしなければなりません。今までの信仰生活は、信仰によって救いを受けましたが、今後は、侍ることによって救いを受ける時代です。本来、堕落しなかったならば、私たちは、神様に侍ることによって行くべき道を行くようになっているのです。侍るには、皆さんの生活と心で、共に侍らなければなりません。

侍る生活をしなければなりません。希望の天国は迎えましたが、侍って実践しながら生活する天国は迎えていません。すなわち生活的な面において、主体であられる神様を知らないのです。

神様は、宇宙の中心存在であられるので、その近くに行けば、千年、万年、主管を受けたとしても、もっと主管を受けたいと思うのです。神様を中心とした侍る道理がそのようになっているので、今日、私たち人間もそのような位置で主管を受けることができるならば、それ以上の幸福はないという事実を、私たちは考えてみることさえできなかったのです。

皆さんは、侍る生活をしなければなりません。なぜ侍る生活をしなければならないのでしょうか。神様の愛を受けるためだ、という事実を知らなければなりません。したがって、まず神様に侍らなければなりません。神様に侍らなければならないのです。

一日二十四時間の生活圏内で私が見聞きしたすべてのことは、何のためでしょうか。神様のためです。神様のために見て、聞かなければならず、感じるのも、神様のために感じなければなりません。私たちは、地上で生活していますが、天上世界の生活と連結させて生活しなければなりません。

神様が喜ばれ、悲しまれることを常に鑑別しながら暮らす人は、悪人になろうとしてもなることはできず、天の法度に背こうとしても背くことはできません。そのような男性は、どれほどの美人が誘惑しても負けません。そこに同化することができないのです。

今日、家庭を脱皮する不幸な青年男女がたくさんいますが、その原因は、どこにあるのでしょうか。それは、天倫の法度に一致した愛が失われてしまったからです。ですから、

家庭を中心として、その家庭に神様を定着させることができる、天地父母が顕現しなければならないのです。

(2)家庭生活の中心は真の父母

最後に残るものは何でしょうか。神様プラス人間、すなわち神人であり、神人の生きる道、神人の生活観です。人生観も同様に神人の人生観であり、神人の世界観です。そして、それは神様に対して人間が漠然と知るといった程度の立場ではなく、人間が離れようとしても、永遠に離れることができない立場です。神様と人間は、本来離れてはいけない立場から離れていったので、離れてはならない立場以上の立場に到達しなければなりません。そのような立場で、神人が一つになった生活的な舞台、世界的な舞台を要求していかなければなりません。

皆さんは、侍義時代、すなわち侍る生活をする時代において、正確な中心をもっていかなければなりません。神様に侍るにおいては法度があります。その法度に背く時は、神様は非常に憤慨されます。子女を愛している父母が、その子女の一言の言葉によって胸に釘が刺さったり抜けたりする思いを味わうのと同じように、神様も、人間を愛していらっしゃるがゆえに、怒りも多いお方なのです。万が一誤れば、神様から怒りを買うようになります。それゆえに、先生も先生なりに、常に神様を喜ばせてさしあげようとしているのです。

皆さんも、皆さんのことを思ってくれる人を訪ねていくでしょう？　神様も同じです。その神様を占領できる道は、誰よりも神様のことを思い、神様のために奉献しようとすることです。その人を中心として神様は訪ねていくのです。

人間においては、神様を愛することが第一の戒めですが、愛する時は、死ぬほど愛さなければなりませんか、一時的に愛さなければなりませんか。皆さんは、神様を死ぬほど愛しますか、死ぬほど愛しませんか。たとえ雷に打たれて死んだとしても、愛さなければならないのです。神様を死ぬほど愛さなければなりません。死ぬほど愛さなければならないとすれば、死ぬ前までに、できないことはありません。

この道を行くためには、愚かでなければなりません。忠臣たちは、別の見方をすれば愚かな人々です。少し愚鈍に見えます。熊のような性格をもっているのです（注：熊には愚鈍な人という意味がある）。自分の腕を切られたとしても、「ああ、ここがあまり切られなかった、もっと切りなさい」という、そのような間抜けで愚かな点がなければなりません。

熊や猪は、銃に打たれた時に、動くのに足手まといになる部分があれば、その部分を口で切り落として逃げていきます。死についてはあとで考え、まず邪魔になる部分を切ってしまうのです。そのような、間抜けで愚かな何かがなければなりません。忠臣、烈士は、愚かでなければなりません。少しは間抜けでなければならないのです。

レバレンド・ムーンとは、どのような人でしょうか。一つの芸しかない人です。愚かに、

ただまっすぐにしか行けない人です。口をちょっと閉じて適当に回っていけばいいのに、なぜしきりに悪口を言われるようにするのでしょうか。それは、多くの人々の反対を受けてこそ、一つの峠を越えていくことができるからです。ところが、皆さんは回っていく考えをしているでしょう？　では、どうして世の中のすべてのものを切って、行かなければならないのでしょうか。父と母の愛に引っ張られれば、まっすぐに行くことができないからです。今まで、神様がまっすぐな道を訪ねてこられたので、まっすぐに行かなければならないのです。

神様がそのように寂しいお方であり、孤独なお方であられるので、私が死ぬ日まで、そのみ旨とその願いを一つでも解いてあげ、その分野の一つの基盤でも拡大させ、神様のために生きることができる人を集めることが使命だ、と思って歩んできたのです。

悪口を言われ、むちで打たれても復讐することを知らず、愛で耐えてきたのは、神様の息子として生まれたからであり、そのお方のみ旨を立てなければならない責任があるからです。しかし、この伝統をいかに立てていくかということを考えながら、ふらつき、あるいは腰が曲がり、這いずりながら、「これだけは残さなければならない」としながら闘ってきたのです。

今から、皆さんは真の父母と共に生活しなければなりません。それゆえに、真の父母はおじいさんの立場であり、自らの父と母の立場であり、自分たちは長子の立場だというのです。これが違うのです。三代が共に生活するという結論です。神様が自分と共にいて、真の父母が自分と共にいて、自らの父母が共にいることを感じて生活しなければなりません。「神様はいない、死んだ」という考えはもつことができない時代に入ってきました。

父母の愛を受けようとすれば、何をしなければならないでしょうか。父母が愛する、すべてのものを愛さなければなりません。そのようにしたのちにおいて、初めて愛を受けるのです。家庭でいえば、自分の父母から愛を受けることを願うならば、その息子は、父母がもっているすべてのものを愛したのちに愛されなければならない、ということを知らなければなりません。これをしないで愛を受けようとする人は、どろぼうです。父母が貴く思うものを、すべて自分勝手にめちゃくちゃに引き継いでは、愛を受けることはできないのです。

皆さんは、先生の血と汗の代価をもって買ってきた人々です。先生の体を与えて買ってきた人々です。したがって、皆さんは、先生と同じ仕事をしなければなりません。先生は食口たちを誇りたいのです。このような立場から、公約しましょう。

皆さんは、実体の神様の立場に立っている真の父母が恋しくて、泣かなければなりません。しきりに会いたいと思わなければなりません。御飯一膳でも炊き、水でも一杯くんでおき、そのようにしながら侍りたいと思わなければなりません。そのような、切実な心をもたなければなりません。涙が先立つ心情をもっていれば、できるのです。そのようにすれば、先生を中心として心情一致が成され、先生と共に呼吸することによって、先生の人格基準と、それを後ろ盾する先生の過去と、

そこに絡まった事情がどのようになっているのかを知るようになり、さらにはそれを相続し、引き継ぐことができるのです。

エデンの園でアダムとエバは堕落して、その堕落圏内で生活したので、直接的な侍る生活をしてみることができませんでした。侍ることができなかった人間には、天国に入っていく資格はありません。しかし、皆さんは、堕落の血統を受けて生活したとしても、復帰の路程を蕩減し、地上で実体をもってアダムとエバが侍ることができなかった真の父母に侍り、神様に侍って生きてから行ったという条件を立てることによって、天国に入っていくことができる資格になるのです。それで、天国の市民権を得るようになるのです。

皆さんが考える神様に対する侍りの生活とは、どのようにしなければならないものでしょうか。神様を一体と思い、真の父母を一体と思い、生活するすべてのものが一体となって、私が生活するときに「このすべてのものは神様のものであると同時に真の父母のものであり、真の父母のものは真の父母の国のものであり、真の父母の国のものになれば、私のものである」という観念をもたなければなりません。

この宇宙も真の父母のものであり、この家も真の父母のものであり、国も世界も真の父母のものであるならば、私は真の父母の息子なので、すべてのものは私のものだ、という結論が出てくるのです。

成約時代には、神様自体が真の父母の姿をして万民の前に現れるようになります。政治によるいかなる力を投入したとしても、負けない偉大な力を統一教会がもっているのは、正にこのためです。生きている神様を私たちが直接目で見て、感覚をもって体恤することができる圏内で、体験を繰り返しながら歩んでいくのが、私たち統一教会の道です。

人間の願いは、真の父母に出会うことです。死の道を行ったとしても、出会わなければならないお方が真の父母です。歴史をすべて失い、時代をすべて失い、自らの子孫をすべて失ってしまう恨があったとしても、真の父母に出会うならば、歴史を取り戻し、時代を取り戻し、未来を取り戻すことができるのです。このようなお方が正に真の父母だということを、皆さんは知らなければなりません。

「チャム・プ・モ（真の父母）」というその名前三文字を思う時、真の父母によって歴史が治められ、真の父母によって新しい世界に戻っていくことができる起源が生じ、真の父母によってサタンを屈服させることができる内的な因縁が決定され、真の父母によって外的な世界を占領しているサタンを征服して、初めて神様を解怨成就してさしあげることができる中心が決定されるのです。したがって、真の父母と共に生き、真の父母の命令を奉じて行動することができるこの驚くべき恩賜に、皆さんがまず感謝しなければなりません。

神様を解放しようというのです。真の神様の権威を中心として、理想の境地で人類始祖と共に無限な幸福を褒めたたえながら暮らすことができる中で、侍られながら暮らされるべきだった神様が、このように悲惨になったという事実を知ったので、その神様を私たちの手で解放してさしあげようというのです。

これは驚くべき提案です。そのような内容が宗教界から出てきたという事実は、神様にとっては、限りなくうれしい知らせです。福音の中の福音です。このように見るとき、仏教を立てられたお方も神様であり、儒教を立てられたお方も神様であり、イスラム教を立てられたお方も神様であり、キリスト教を立てられたお方も神様なので、すべての宗教が、もろ手を挙げて歓迎しなければならないのです。

皆さんが真の父母と完全に一つになる時、国家があるのであり、氏族もあるのであり、民族もあるのであり、家庭もあるのです。天地のあらゆる栄光の価値を総合した実体基準が、真の父母です。真の父母を世の中のお金と換えることができますか。自分の生命と取り替えることができますか。それゆえに、昔とは違うのです。皆さんがどこに行ったとしても、真の父母に侍るために大韓民国を訪ねてこなければなりません。皆さんの息子、娘も、千代、万代の後孫も、そのようにしなければなりません。それゆえに、統一教会は違うのです。

三) 真の家庭の伝統と家法を正しく立てよう

先生が心配していることは、いかにすれば統一教会の名を後世に残すことができるかということではなく、いかにすれば先生の伝統を受け継いだ人々を後世に残すことができるかということです。ですから、今まで、伝統を重要視しなさいという教育をしてきているのです。

今まで私たちは、いい加減に生きてきたのであり、言葉もいい加減に使ってきました。しかし、今から、私たち祝福家庭も規律を立てなければなりません。腹が立ったからといって、父母が子女を自分勝手に棒でたたき、「この駄目息子」という世俗的な卑しい言葉を使ってはいけません。今からは、すべてが一新されなければなりません。神様を中心として、言葉から、態度から、生活から、一新した立場に立たなければなりません。

個人生活はどのようにしなければならないかということを、はっきり糾明しなければなりません。また、家庭生活はどのようにしなければならないかということも、はっきり糾明しなければなりません。過ぎし日に漠然と生きてきた生活を改め、これからは具体的に生きていかなければなりません。

父母は、子供のために存在します。もし父母のために父母がいるとすれば、「父母」という言葉は出てきません。今後、統一教会の原理を中心として、倫理観が形成されなければなりません。父母は、どのようにあるべきですか。子女を生む父母は、子女のために存在しなければなりません。それが倫理の第一条です。それには、説明が必要ありません。息子のために存在しようとする立場は、不幸な立場ではなく、幸福な立場です。

皆さん自身は、誰のものですか。父母のものであると同時に、息子のものです。そのようになるとすれば、父母は誰のものですか。父母は、子女のものであると同時に、神様のものです。ゆえに、皆さんは、まず神様のものとなり、子女のものになったのちに、自ら

のものとなるのです。そのようになる時、初めて完成がなされるのです。ですから、父母を敬うその法度は、地上に残っており、人間生活に残っているのです。ここから、「父母を敬い、子女を愛しなさい」という言葉が出てきたのです。父母がいなければ孤児です。父母の愛を受けてみて、子女を愛してみてください。そのようにして初めて「私」という人間が四方を分別し、上下を分別することができるのです。

伝統を残さなければならず、その次には、善なる立派な子孫を残さなければなりません。小心者の子孫ではなく、強く雄々しい立派な子孫を残さなければなりません。そのようになれば、たとえその国が滅びる運勢圏にあったとしても滅びません。滅びるべき立場から、新しい恩人が現れるのであり、追われる立場から、新しい勝利の旗がついてくるのだという事実を知らなければなりません。残すべきその伝統は、大韓民国だけでなく、万民が喜ぶことができる伝統にならなければならず、そして善の子孫も残さなければなりません。これができなければ、天の前にもっていく礼物がなくなります。

いかにして私たち祝福家庭の息子、娘たちが先生のように生き、そのように三代を生きることができるか、ということが大きな問題です。三代が共に功臣になるならば、天下にいない、あの天上世界の功臣になるのだ、ということを考えてみましたか。ですから、自らの息子、娘を抱き、今から教育して、そのような思想を入れることに精誠を尽くさなければなりません。

未来に対して、どのように暮らすことが、幸せに暮らすことでしょうか。私が幸せに暮らすことが問題なのではありません。子孫を教育しなければなりません。子孫の前に残してあげなければなりません。今まで、統一教会を指導してきた先生自身もそうですが、皆さんもかわいそうな道を歩んできました。避難民として定着することができなかったのです。荒野路程を歩んできたのです。今から、私たちは定着しなければなりません。そして、定着しようとすれば、闘って勝利しなければなりません。カナン七族を滅ぼしたように、戦って勝利しなければ定着することはできないのです。この民族を中心とした闘いにおいて、必ず勝利しなければなりません。

父母は、死んでも、天道は、残していかなければなりません。その家庭は、何のために存在するのでしょうか。自らの子女のために存在するとしても、まず神様のために生き、国のために生きなければなりません。結局は、そのことが自らの子女のために生きる道です。そのようにしてこそ、子女たちは神様の運と世界の運と共にあり、国の運と共にあることができるのです。したがって、祝福されて生んだ貴い子女たちが苦労したとしても、その子女たちに拍子を合わせるのではなく、神様と、世界と、国の運勢に拍子を合わせなければなりません。

私たちが神様から受けた純粋な血統を、いかにして保有するかが問題です。堕落した血統ではなく、純粋な血統をいかに保存していくのかというのです。彼らのために、心から心配しなければなりません。汚染されていないエデンの園においても堕落したのですから、

この罪悪世界できれいになるということは、非常に難しい問題とならざるを得ません。罪悪世界で生まれた父母は、たとえ苦労したとしても、祝福を受けて生まれた子供たちには、汚染されていない環境をつくってあげなければなりません。私たちが犠牲になったとしても、二世たちのために早くそのような環境を準備しなければならない、というのが先生の考えです。急がなければなりません。

習慣的で世俗的な家庭であってはいけません。「今はこうであるが、今後は良くなるだろう」と考えてはいけません。既に完全でなければいけません。現在が問題です。過去と現在が完全であってこそ、未来も完全であり得るのです。このような一日を、エデンの園でももつことができなかったことが、堕落の証拠です。過去と、現在と、未来が一致することができる位置が、理想的な位置です。現在を捧げることができなければなりません。地上の永遠の足場となることができるか、ということが神様の願いなのです。これは、歴史的な総合点です。

イスラエル民族がカナン復帰を成し遂げたのちに滅亡したのは、彼らが既存の環境に同化し、習慣化されたからです。より豊かに暮らし、よく食べて贅沢をする生活にすべての精神を注いだので、滅亡したのです。彼らは、異邦人であっても、相手が金持ちの家ならば結婚しました。また、権力を貪り、知識を好みました。結局、既存のカナン文化に同化され、選民の精神を売り飛ばしたので、彼らは滅亡したのです。

習慣は、最も凝り固まった悪い癖です。結婚したのち、皆さんが子供たちを育てながら習慣的な生活をするようになれば、それが体に染みついてしまいます。そのような環境の中では、特別な精誠や祈祷をする時間がありません。子供たちがそばで騒ぎ立てるので、祈祷をする時間がないのです。

私たちは、個人中心ではなく、家庭中心です。だからといって、家庭だけを中心としてすべてのものを清算するのではなく、すべてを連結しなければなりません。したがって、昔、独りで道の生活をしていた時の努力をするだけではいけません。「昔努力していた時の何倍も努力しよう」という決意と覚悟を添付させなければいけません。悪に対して挑戦していく生活は、ややもすれば疲れて後退しやすいのです。家庭をもった時は、独りでいた時の何倍も努力しなければなりません。家庭は、中心をつかんでいる立場です。私たちは、現実を避けることはできません。前後、上下、左右の関係を家庭で完成しなければなりません。過去の信仰形態ではいけません。過去の一方的な信仰態度をもっていてはいけないのです。

皆さんは、一代のために生きる家庭になるのではなく、世界と永遠のために生きる家庭にならなければなりません。また、愛の基盤を広げ、万民の心情を集めて、ろうそくのあかりをつけ、香をたいて祈りを捧げ、天と地、万民と共同の因縁を結んで生きたのちに死のう、という家庭にならなければなりません。そのような家庭になれば、いかなる苦難が迫ってきても、神様がその家庭を保護してくだ

さるはずです。天が種として残しておくのです。

皆さんは、侍る生活法度を知らないでしょう？　これは、まだ教えてあげていません。今後、時になれば、すべて教えてあげようと思っています。侍る時は、世の中のいかなる孝子よりも、歴史上のいかなる忠臣よりも、最善を尽くして侍らなければなりません。天下が、このような家庭の規範に頭を下げることができる心情的起源をつくるために行く道が、統一教会の行く道であるということを皆さんは知らなければなりません。

祝福家庭は、家庭の伝統を立て、家法をつくらなければなりません。そして、子女たちの教育基準と家庭の規範をつくらなければなりません。そのようにしなくては、もし父母が誤り、子女たちの追及を受けるようになれば、返す言葉がないのです。

これからは匕首をもって、切るべきところは切り、解剖すべきところは解剖しなければなりません。皆さんの思いどおりにしてはいけません。統一教会は、天国を成さなければならない教会なので、個人ではなく、家庭を取り戻さなければならないのです。家庭生活で模範となることができない人は、世界的な指弾を受けるでしょうし、全天宙的な指弾を受けることでしょう。

第二章　家庭盟誓の各節の解説

一　家庭盟誓第一節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、本郷の地を求め、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建することをお誓い致します。

一) 私たちの家庭は真の愛を中心として

(1)真の愛は神様とのみ関係した愛

摂理的な観点から見るとき、復帰摂理の時代は終わったとみなしています。復帰摂理時代が終われば、本然の創造理想の世界へ越えていくようになるのです。復帰摂理時代が終わるという言葉は、堕落したサタンの権限の世界が終わり、神様が地上と天上世界を直接管理する時代に越えていくということです。このような時が来るので、統一教会においては「家庭盟誓」というものを宣布したのです。

「家庭盟誓」は、一般の人が唱えるのではありません。「家庭盟誓」は、誰もが唱えることができるものではありません。「家庭盟誓」の八項目の書き出しは「私たちの家庭は真の愛を中心として」であり、それが前提となっています。それは何を意味しているのでしょうか。真の愛はサタン世界と関係ない基盤から、という意味です。

堕落することにより、偽りの愛を中心として、偽りの生命、偽りの血統が連結した世の中になってしまったので、これを克服して越えるためには何をもたなければならないかというと、真の愛と、真の生命と、真の血統の位置を占めなければなりません。そのようにしなければ、これを克服することはできません。このことを、はっきりと知らなければなりません。

「家庭盟誓」に真の愛を前提条件とした理由は、堕落がなかったエデンの園の本然の世界に入っていることをいうためです。真の愛

と、真の生命と、真の血統が、神様と共に一体的理想を成したならば、そこには偽りの愛と、偽りの生命と、偽りの血統がありません。地上で生活しても、それ自体が地上天国と天上天国になるのであり、永遠の世界の出発を形成するようになっていたのですが、これを堕落によってすべて失ってしまったのです。

今まで、歴史を通じて数多くの宗教の宗主や、数多くの聖賢、賢哲たちが現れましたが、真の愛とは何らの関係もありませんでした。このようなすべてのものを解決するために、この地上にイエス様がメシヤとして来られ、新郎新婦の基盤を築こうとされたのです。それでは、メシヤが来られて成さなければならないこととは何でしょうか。新しい家庭と、新しい氏族と、新しい国家と、新しい世界に向かって新しい皇族圏を設定しなければなりません。皇族圏の直系先祖は誰でしょうか。本然の愛と神様の直系子女であり、真の愛を中心として真の生命と真の血統の基盤を中心とした堕落していない人です。そのお方が種です。

その種から根が出てくれば、中心の幹の根となるでしょうし、そこから中心の幹、中心の芽へと大きくなっていくのです。これが縦的に大きくなることによって、そこに対応して横的世界へ拡大していくので、家庭と氏族が連結され、民族、国家、世界が連結されるのです。

「家庭盟誓」の最初の部分は、どのようになっていますか。「私たちの家庭は真の愛を中心として」です。真の愛を中心として成すのです。堕落したので、真の愛をもつことができなかった人は、家庭というものをもつことはできません。それを知らなければなりません。真の愛をもつことができなかった人は、本来神様の前に家庭をもつことができなくなっているのです。堕落とは何かというと、真の愛が腐っていることです。

それでは、真の愛とは何ですか。神様とのみ関係を結んだ愛です。自分や国家や、また世の中の習慣性や風習、あるいは国民の伝統性といったものがありますが、そのような関係を結んだ愛ではありません。神様とだけ関係を結んだ愛です。

堕落したので、神様とだけ関係を結んだ愛になることができませんでした。サタンの愛と関係を結んだのです。それが家庭だけではなく、サタンの家庭を越えて氏族、民族、国家、世界、そして天上世界にまで拡大されているのです。私たちが堕落した人間として生まれ、その生活環境で身につけたすべての習慣や伝統は、神様とは関係がありません。これを否定し、これを解決するということはどんなに難しいことか分かりません。純粋な本然の神様の愛はどのように本質的基準へと帰っていくのでしょうか。神様の愛に接するためには、自らの愛という習慣性、愛という伝統を完全に否定しなければなりません。

神様が、この地上の人間と共に生きることができないのは、この統一観が家庭で成し遂げられなかったからです。これが成し遂げられれば、神様が再び来られて共に生きるようになります。真の愛といえば「心と体が一つ、夫婦が一つ、子女が一つ」というコンセプト（観念）がそこに集約されていなければなりません。この三つが一つになれば、真の愛の

家庭は、地上天国と天上天国の出発になるのです。

神様と真の御父母様を中心として一つになる時、地上天国と天上天国を建設することができます。ですから、地上天国はどこからでしょうか。私と家庭から、息子、娘からです。

統一教会は、真の愛の理想によって神人と心身を統一する所です。神様は、真の愛と、真の生命と、真の血統をもっていらっしゃるお方であり、私たちはそこから出てきたので、私たちにも、真の愛と、真の生命と、真の血統がなければなりません。人間は、神様の真の愛を中心として、父子一体の関係をもって生まれたので、神様の心と体が真の愛によって統一されているように、私たち人間の心と体も真の愛によって自然に統一されていなければなりませんでした。ところが、サタンの愛と、生命と、血統を受け継いだ堕落人間の体はサタンの側に立ち、そして心は神側の一線に立って、これらが継続して闘っているのです。

真の愛の起源である神様は、父の立場から人間に絶対不変の真の愛を相続しようとされました。真の愛の中では完全調和と統一が成されるので、神様の真の愛は、そのパートナーである人間に完全に相続されるのです。それだけではなく、このような真の愛の属性によって、相続権と同居権、同参権が自然に生じるので、人間も神様の子女として同行することができるようになっていたのです。また、人間相互間においても、真の愛を中心として相続権、同居権、同参権を享受するようになっていました。そして、人間は神様の真の愛を中心として、各自の理想と幸福を所有し、自然にこれを先代から後代に伝承するようになっていたのです。そのような世界が創造本然の世界でした。

創造本然の人間は、その心と体に神様の真の愛をもち、それにそのまま感応しながら生活するようになっています。言い換えれば、心は、真の愛を中心として神様に感応し、体は、その心に自動的に共鳴するようになっているのです。心と体が闘うことのない真の統一の起源は、神様の真の愛をそのまま受け継いで体験するところにあります。心と体が統一体になるという人間の理想は、神様の真の愛を完全に所有する時に成し遂げられるのです。心と体が真の愛を中心として統一されるところから、真の自由と平和の理想が出発できるようになるのです。そして、心と体が統一された基盤の上で、自由で平和な個人、家庭、氏族、民族、国家、世界を成し遂げることができるのです。

真の愛は、神様と連結しています。真の愛の根は、自分を中心として連結されていません。根本的に神様と連結されているのです。そして、神様は永遠の存在なので、真の愛に連結されれば自動的に永遠の存在になることができるのです。これはすべて理論的です。

真の愛は、どこから生じるのでしょうか。真の愛は、「ため」に生きるところから生じるのであり、「自分のために生きなさい」と言うところには真の愛はありません。なぜでしょうか。天地創造の根本、出発がこの注入からだったのではありませんか。世の中のすべてのことは、自己投入です。愛の理想を探し求めてきた神様のこの宇宙創造の軸は、注

入からです。引っ張り込むことからではなく、投入するところから始めたのです。自らの生命を投入しても忘れてしまうことができる立場になることが、真の愛の道理だということを知らなければなりません。

真の愛とは何でしょうか。自らの生命までも投入し、また投入しようというこのような立場、与え、また与えて忘れることができる立場からのみ、真の愛が始まるのです。真の愛は、天地を貫くのです。死の世界も貫いて上がっていくのです。生命の世界でも、強い心でも、どこでも貫いていくことができるのです。愛の通じない所はありません。愛は、秘密の部屋にも通じるのです。

真の愛とは何でしょうか。投入して忘れてしまい、投入して忘れてしまうことです。立派な父母とはどのような父母でしょうか。投入して、投入して忘れてしまう父母です。「私が大学に行かせてあげたので、私が老いれば養って、その代価を払わなければならない」と言って、それを手帳に記録して計算書をあらかじめ準備する父母は、偽りの父母です。そのような父母は、神様のように理想的な孝子に対することはできません。

真の愛は、いったい何をするのでしょうか。皆さんの心と体が闘っているのを、すべて統一することができるのです。今まで、心と体が統一しなかったのは、真の愛がなかったからです。偽りの愛をつくっておいたからです。真の愛でなければ一つにすることはできません。堕落は、偽りの愛によるものだったので、真の愛でなくては一つにする道がないのです。

真の愛とは何でしょうか。全体を投入し、また投入し、また投入しようとすることです。永遠に投入するところから真の愛の真の相対を中心として、一つになることができる道ができるのです。

真の愛とは、天理を立てるためのものです。ですから、愛も原理原則に基づくのです。愛は原理上にあるのでしょう？　自由も原理主管圏、すなわち原理上にあるのであって、原理を否定するものではありません。

(2)真の愛の基盤は真の家庭

真の愛の第一の故郷は、真の家庭です。そこには真の父、真の母、真の夫、真の妻、真の子女がいるのです。それが真の愛の家庭基盤です。

家庭には、男性と女性がいます。それでは、その男性と女性は、どのような男性と女性ですか。創造理想から見るとき、再創造過程に適合した男性と女性です。すべてのものは同じです。男性と女性は、心と体が一つにならなければなりません。心と体が一つになるならば、男性が一つの主体、プラスになり、心と体が一つになった女性をマイナスとして、それと一つになろうとするのです。

このようにして、夫婦が大きなプラスになり、子女と一つになろうとするのです。家庭は、この原則に従って、主体と対象によって一つになるのです。プラスとマイナスがこのように一つになったものが父母になり、夫婦になり、兄弟になり、このように主体と対象によって一つになるための三段階の内容を備えて結束したものが家庭です。

心と体が一つになり、夫婦が一つになり、父母と子女が一つになる、それ自体の力は何でしょうか。愛の力です。真の愛の力です。それでは、真の愛の力は、どこから出発するのでしょうか。皆さんが結婚する時、相手が自分よりも百倍、千倍、万倍、無限大に素晴らしいことを願うのです。無限大です。

そのような心は、どこから来たのでしょうか。神様から来ました。人間もそうであるように、神様も、御自身の対象が無限大の価値になることを願っているのです。ですから、絶対的であり、永遠であり、唯一的な対象の愛を中心として願うのです。その愛の力は、どんどん大きくなろうとするのです。小さなところから大きくなっていこうとするのです。真の愛だけが大きくなることができるのです。そのようにして、この愛を通じて宇宙と連結されるのです。すべて同様の公式です。

人間は、なぜ生まれたのでしょうか。それは愛のためです。真の愛のためです。真の愛とは、いったいどのようなものでしょうか。宇宙のすべてのものを与えても得ることができない価値をもっているものです。その真の愛をつかめば、神様をつかむことができます。神様の本体をつかむことができます。ですから、結婚というものは偉大なものです。どんぶり勘定式ではありません。縦的に完成し、横的に完成し、神様と一体となるのです。縦横の完成や前後完成という、すべてのことがそこで成し遂げられるのです。

皆さんは真の人間になりましたか。真実の子女がいるかというのです。子女のために、父母は投入して忘れてしまい、また投入します。そして夫は妻のために、また妻も夫のために投入して忘れてしまい、兄弟もやはり同じように投入して忘れてしまう、このような基準が、創造理想の愛を中心として、真の神様が願った理想的な出発点だったのです。

父母は家庭の王であり、氏族の中心は氏族の王になるのであり、民族の中心は民族の王になるのであり、世界の中心は世界の王になるのです。アダムとエバがこのようになるのです。神様を主体にすれば、人間は対象になるのです。それで、家庭の中心の王、すべての中心の王になれば、神様もここで王になるのです。プラスであり主体です。いくら大きくても、この公式に適合しなければなりません。

神様は、相対のためにこの宇宙を造りました。神様も独りでいれば、孤独です。皆さんも独りでいれば孤独でしょう？　ですから、相対が必要です。

パートナーが必要なのです。それは何のパートナーですか。愛のパートナーです。そのような愛の主体である神様が投入して忘れ、無限に投入して忘れてしまう観念をもって始めるならば、その相対となるパートナーも、無限に投入し、無限に注入し、刺激することができる相対として立たなければなりません。神様の愛は、投入して忘れてしまう思想です。このような思想なので、自ら自身を消耗させる奉仕と犠牲の精神によって宇宙が生じ始めたのです。

宇宙の存続が始まりました。それで、神様も愛の相対が必要です。皆さんも愛の相対が必要でしょう？　神様も真の神様なので、真の愛を中心として真の相対と愛し合うことが

できる、そのような位置を中心としてこの地上に定着しようとするのです。

定着する基盤は何かというと、家庭です。これが基礎です。これが単位です。公式は単位を通して連結するのです。神様が喜ぶことができ、神様が踊ることができ、神様が笑うことができ、神様が歌うことができる定着的出発地はどこでしょうか。それは国でもなく、世界でもなく、いかなる男性や女性でもありません。男性と女性が一つになって神様の相対的立場で定着することができる家庭です。そこから、すべてのものが出発するのです。すべての出発です。理想、自由、幸福、すべてのものの出発です。すべて同じ公式です。

真の愛を実践しなければなりません。「家庭盟誓」を暗唱する時は、必ず心と体が一つになり、夫婦が一つになり、息子、娘が一つになった上で唱えるのです。

偽りの愛が始まることによって、心と体が分裂し、夫婦が分裂し、兄弟が分裂したので、蕩減復帰の原則によって一つになり得る家庭を取り戻すためには、心と体が一つになり、夫婦が一つになり、兄弟が一つになることのできる位置を再び築かなければなりません。そのようにすることによって、天上天国と地上天国とが連結されるのです。

二) 本郷の地を求め

(1)本郷の地の真の意味

本郷とは、どのような所でしょうか。行きたくて、見たくて、暮らしたい、そのような所です。私たちの心が行きたいと思い、心と共に体が行きたいと思う、そのような所です。心が慕うと同時に体も慕い、永遠に安息することができて幸福の基台だと誇ることができる本郷を、私たちは訪ねていかなければなりません。今までの歴史過程において、数多くの人々がこのような本郷を慕い、追求し、欽慕する途中で死んでいきました。また、今までの数多くの宗教人や哲人たちも、この本郷の地を探すために苦労してきたということを、私たちは知らなければなりません。ですから、本郷の地は必ず現れなければならないのです。

本然の園は、理想の園です。有無相通（注：あるものとないものを互いに融通すること）の世界であり、兄弟の感情が万宇宙のどこにおいても通じる世界です。今日のように、民族的な感情、あるいは国家の主権的な違いをもって論議できるような理想と主義の世界ではありません。民族の差別、あるいは国家の主権など、そのようなすべてのものを越えて論議する世界です。人間の経済的な事情や文化などという条件の違いをもって論議するのではなく、心情をもって論議する世界です。

本来、人間始祖が堕落していなければ、その本郷はどこでしょうか。アダムとエバが生きたエデンの園であり、その村であり、その山河であることに間違いありません。今日、堕落した父母の血統を受けて生まれた人間たちは、「本郷！」と言えば、自分たちが生まれた所を思い浮かべますが、今日の人類が追求し、慕っている理想的な本郷というものは、あまりにもでたらめなものです。

今日、統一教会が探し求めていく最高の目的地はどこでしょうか。失ってしまった本郷を捜し求めていかなければなりません。その

本郷には両親がいらっしゃり、兄弟がいて、親戚がいます。そこは、彼らが悲しみの中で私たちを迎えるのではなく、永遠の喜びと幸福の中で迎えることができる所であり、そしてその喜びが一時的な喜びで終わるのではなく、永遠に続く、そのような本然の場所を私たちは訪ねていかなければなりません。

本然の地は、悪が宿る所ではありません。悪と絶縁し、あふれる本然の愛を中心として、永遠無窮に幸福を謳歌して暮らす永遠の統一世界です。本郷というものは、幸福を謳歌し、父母の愛と家庭の愛に浸り、天地万物を主管しながら天地が喜ぶ中で永遠に生きたい所です。

私たちが本郷の地を慕うのは、そこには誰よりも近い父母と兄弟と親戚がいて、常に私を導いてくれ、いつどのような時に訪ねていっても常に私を変わらず迎えてくれるからであり、私が困難な目に遭えば、それに同情し慰労してくれ、私を喜んで迎えてくれるからです。

本郷が慕わしく、恋しくて訪ねていったとしても、もしそれがなければ、切に恋い慕った心情はなくなり、かえって嘆息の条件をもって帰ってくるようになるということを知らなければなりません。本郷の地には、必ず迎えてくれる人がいなければなりません。

本郷というと、皆さんは何を連想しますか。本郷には自らの愛する父母がいて、愛する村があり、愛する家があり、愛する兄弟がいます。私たちが故郷を遠く離れて外国に行くようになれば、その本郷の範囲は広くなり、祖国、すなわち国までが本郷に入ってくるようになります。また、宇宙、あるいは天宙という見地から見れば、この世界が私の本郷になります。このように、眺める範囲が大きくなればなるほど、その本郷の範囲もそれに比例して大きくなっていくということを、皆さんは生活過程においてよく感じるはずです。

本郷を訪ねていかなければなりません。エデンで堕落せずに完成していれば、私たち人類の先祖は神様と同苦同楽（注：共に苦しみ共に楽しむ）できるそのような本郷の基地に行くのです。宗教指導者や父母や先生の指導を受けることなく、良心の命令に従って自らの行くべき道、天理の大道を行くのです。「良心を教育しよう」という言葉を聞いたことがありますか。良心は、自らの一生において知らないことがありません。

皆さんは、みな故郷をもっているでしょう？　ところで、神様の本郷はどこでしょうか。神様の本郷の地があれば、その本郷から一族が生じ、その一族から民族が生じ、民族から国家と世界が生じ、それによって地上に天国が生じるはずです。この地球星に神様の本郷の地があるとすれば、行きたいですか、行きたくありませんか。行きたいのです。ひどく愚かな母、父、お兄さん、お姉さんが暮らす故郷であっても行きたいと思う人間であるのに、神様の本郷に行きたいとは思わないでしょうか。神様の本郷は、私たちすべての故郷であるのに、行きたいと思わないならば、それはうそです。

神様がこの地上に着地し、家庭をもって生活できる所ができるようになれば、そこは、

人類全体を代表した位置になるのです。ゆえに、神様が生活を出発したその家庭基地は、人類の本郷の地になるのです。それゆえに、神様が暮らすその根本の出発地が故郷になるのです。

堕落したがゆえに、神様を中心として、その出発地から出発することができませんでした。家庭がそのような立場になることができなかったのです。そのような故郷がありません。先生が現れることによって初めて、真の愛を中心として神様と真の父母が一つになって着地して出発することができる起源を備えたのです。そこは、人類の本郷の地とならざるを得ません。復帰されたそこが本然の形態の出発基地と同じなので、そこは、神様の愛を交わすことができる真の愛の基地であり、人類の本郷の地となるのです。

神様が願われる国、すなわち祖国は、どこでしょうか。人類の祖国は、どこでしょうか。人類の真の父母が来られるその国が祖国です。それが道理です。祖国はどこでしょうか。（人類の真の父母が来られる国です）。人類の本郷の地はどこでしょうか。アフリカなど、国は数多くありますが、人類の真の父母として来られたそのお方の生まれた故郷が、宇宙とこの歴史的な世界の本郷の地になるのです。

神様が願われる祖国は、どこでしょうか。人類の本郷の地は、どこでしょうか。真の御父母様が誕生された故郷こそ、歴史的であり、宇宙的であり、世界的な本郷の地になるのです。

先祖と、思想と、伝統を受け継がなければなりません。それをしなければ、継子の扱いを受けます。韓国民族は選民にならなければなりません。そのようになるためには、先生が内外をひっくり返さなければなりません。韓国が本郷であり、祖国であるとすれば、すべての世界的な文明は、韓国で成就しなければなりません。私たちが韓国を本郷の地とするためには、今日、忠誠、精誠、愛、犠牲の祭物になることを覚悟しなければなりません。そのようにしなければ、韓国は本郷としての資格を失うようになります。良いものをつくるためには、実践が必要です。血と汗と涙を流しながらでも成し遂げなければなりません。

もし韓国が神様の願われる、この世界の本郷の地となり、宇宙万民の祖国となれば、その国の新しい文明は世界を支配し、その国の言語は世界語になり、その国の男女は世界的な男女になるはずです。本来の父母を中心として生まれていれば、言語は一つです。

堕落したがゆえに分かれたのです。それで、韓国が祖国の地、本郷の地となり、神様が願われる国になれば、今後、韓国は持ち上げられることでしょう。神様が踊れば、韓国を持ち上げて踊るのです。今まで、神様は一日として踊ったり笑ったりすることがおできになれなかったのです。

愛の本山が韓国です。人類の愛の家、愛の故郷、愛の国を成し遂げることができる本郷の地は韓国です。それで、真の父母であるというこの人は、真の愛を中心とした絶対不変的な家庭理想を中心として、国家形態、世界、天国、地上と天上天国を連結する直通行路を開拓したのです。外国でもそのようなことを知っています。ですから、自らの国を捨て、韓国に来て生活しようとするのです。

地上天国で神様の家族として生活した人々が行く所が、霊界の天上天国です。天上が私たちの本郷の地です。天上天国が私たちの本郷の地なのです。しかし、人間の堕落後、今までそのような地上天国が築かれることはなかったので、天上天国は空いています。天上天国に入っていった人はいないのです。

(2)私たちが求めていかなければならない本郷の地

懐かしい本郷の地は、どこですか。父と母がいる所です。それは、間違いありません。今の人間世界は、堕落したアダムとエバが神様の前から追放され、失楽園したのちに結婚して、息子、娘を生むことによって繁殖した五十億人類によってできている世界です。「そうではない」と言う人はいません。このように病気になったので、行くべき道が分からないのです。事件が起こり、孤児として流れてきました。出発が不明確であり、目的地が不明確です。人類は、どこに行くべきかを知らないのです。どのようになるのか、誰も知りません。それを知らないので、神様が五十億人類に教えてあげようと、まず先生に教えてくださったのです。統一教会に入ってくれば、神様を知らない人はいません。

堕落することによって、私たちは本郷の地を失い、故郷を失ってしまったのです。本来、私が堕落しないで生まれていれば、この世で生きて死ぬ時に、どこで死にますか。本郷の地です。それで、死んでも本郷の地に埋めてもらいたいと思うのです。暮らすならば、どこで暮らしますか。本郷の地です。故郷の地で暮らすはずなのに、生まれてみると怨讐の地であり、悲しい地であったのです。

今、生きているこの場所は、私たちが本拠地とし、幸福の基台であると賛美することができる地でしょうか。違います。それゆえに、通り過ぎなければなりません。家庭よ過ぎ去れ、国よ過ぎ去れ、世界よ過ぎ去れ、共産主義も民主主義も過ぎ去れ！　先生が願うのは、本郷の地の愛主義であり、父母の愛を分け、血肉を分けた兄弟主義です。イエス様は、漠然とそのようなことを叫びましたが、今は具体的です。

本郷を求めなければなりません。本郷は、どこでしょうか。イエス様の本郷は、どこでしょうか。イエス様が死ななければ、イスラエルの国がイエス様の本郷になっていたはずです。世界の祖国の出発は、イスラエルの国を中心としてなされていたはずです。イエス様がこの地上で負う責任と、担当しなければならない使命とは何でしょうか。本郷の地を創建しなければならないということです。堕落したすべての人類の前に本郷の地となるためには、すなわち故郷の地となるためには、天が探し立てた父母が登場しなければなりません。そのようにならなければ、本郷の地が現れることはできません。父母がいないのに、兄弟が現れることができますか。できないのです。

故郷には誰がいますか。親戚がいて、兄弟がいて、父母がいなければならず、それから家庭を中心とした所有物がなければなりません。なぜ故郷を恋しがるのでしょうか。自らの命の心情的な因縁がそこから始まったからです。それゆえに、自らの生命の価値を重要

視する限り、故郷を忘れてしまってはいけません。

「希望の祖国の一時が早く来てください！」。天の一国家を立てることによって、今まで天の前に怨讐であった大サタンを審判し、悪を取り除いてしまい、善だけを中心とした平和の天国をこの地上に成し遂げなければなりません。それが神様の願いであり、イエス様の願いであり、今までの摂理路程において多大な貢献をした私たちの先祖の願いだったということを、皆さんははっきりと知らなければなりません。

今までの人間たちは、恨を抱き、悔しく、かわいそうな神様であることを全く考えませんでした。よく分からなかったのです。御自身の息子、娘である世界の万民が、怨讐の鉄柵網にかかり、「死にそうだ」と言う恨みの声が天地に響きわたっているのに、神様が「ああ、お前たちは、何をそのように大きな声を出しているのだ。私はちょっと寝なければならない」と言って、腹をなでて眠る神様でしょうか。神様は、休むことなくこの地を復帰してきているということを知らなければなりません。

「本郷の地を求めて」と言いました。ですから、今までの宗教世界では、出家を命令し、独身生活を命令したのですが、統一教会はその反対です。還故郷です。「故郷に帰りなさい」というこの言葉は、宗教世界の歴史にはなかった福音の中の福音です。これは、一度しかない朗報の中の朗報です。そうであるのに、還故郷の道をのろのろ歩んでいた罪人たちがどれほど多いでしょうか！

それで、盟誓文の第一節は何ですか。「真の愛を中心として、本郷の地を求め」です。その地を訪ね求めていかなければなりません。「神様の創造理想である地上天国と天上天国を完成すること」を誓うのではありません。創建しなければなりません。私の手でつくらなければならないのです。悪魔の世界から、きれいに取り戻してこなければなりません。サタンの世界圏を完全に回復しなければなりません。それゆえに、完成ではなく、創建なのです。これが違うのです。

故郷に帰っていって孝子、忠臣になり、神様の創造理想であるモデル的家庭と国をつくりあげ、王権を成就することによって、地上天国と天上天国になるはずでした。しかし、堕落してもう一つの世界ができたので、これを神様の大家庭の理想を中心として一つにしなければなりません。そのままにしておいてはいけないのです。天上世界と地上天国を一つに連結しなければなりません。これを早めるためには、発奮し、情熱的な立場から発展させなければなりません。

「私たちの家庭は真の愛を中心として、本郷の地を求め、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建する」ということは、地上天国と天上天国を私がつくるということです。家庭を失ってしまったので、家庭をつくらなければならないということです。私たちの家庭は真の愛によって、本郷の地を中心として、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建するのです。本郷の地です。家庭を中心とした本郷の地です。国ではありません。故郷へ帰らなければならないということです。

皆さんにそのような家庭があれば、故郷の地へ帰っていき、地上天国と天上天国をつくりあげなければなりません。故郷さえ取り戻せば、今は国と世界のすべてが自然に一つになるのです。心配する必要はありません。地上天国と天上天国が自然に成し遂げられるのです。それが家庭から起きるのです。

還故郷とは何でしょうか。真の愛の根源地が神様なので、その本然の地に帰っていき、その根や枝や実と共に永遠に生きようということです。愛を中心として、平和に、幸福に、永遠に暮らそうというのが、本郷に帰っていくということの道理です。簡単なことです。

いかに本郷を連結し、神様と連結するのでしょうか。本来、皆さんが生まれた所が故郷ではないですか。すべての人々は、故郷から全世界に横的に連結されるのです。今まで、全世界の人々は、天側の故郷をもつことができませんでした。それを失ってしまいました。本然のアダムの位置を探し出すことができなかったのです。私たちがその場所を探し出していかなければなりません。そこに帰っていかなければなりません。その場から家庭を出発し、氏族を出発して、国と世界まで進んでいかなければならないのです。これは理論的です。観念的なことではありません。そのようにすれば、行くことができる道がすべて現れてくるのです。

個人の基盤の上で先祖のアダムを復帰し、イエス様の立場を復帰しなければなりません。そのようにすれば、完成時代において、再臨主である真の父母を中心として本郷に入っていくことができるのです。そこに入っていけば、すべてのものは皆さんの所有となるのです。皆さんの立場はそのような立場です。皆さんがそのような概念さえはっきりと知って歩んでいくならば、サタンは退いていくのです。ですから、氏族的メシヤの使命を完遂しなければなりません。

定着する所で何を相続してあげるのでしょうか。個人ではありません。家庭です。それを知らなければなりません。それで、「家庭盟誓」が出てくるのです。ですから、「家庭盟誓」を徹頭徹尾、教育しなければなりません。この「家庭盟誓」を見れば、第一節は、真の愛を中心として、本郷の地を求め、創造理想である地上天国と天上天国を創建しようという内容です。それ一つをもって、すべて成し遂げることができるのです。

三) 本然の創造理想

神様のみ旨とは何でしょうか。真の愛です。創造理想を完成しようというのです。神様の創造理想を完成しようとは、どういうことでしょうか。四位基台を完成しようということです。アダムとエバが結婚することによって神様と人類が一つになっていれば、万物がすべてその愛の上で一体となるので、神様を占領し、創造された被造物を占領することができる第二の主人になるのです。神様は目に見えない主人となり、私たちは目に見える主人となるのです。神様は内的な神様であり、私たちは外的な神様になろうというのです。みな神様になりたいという欲望をもっています。

神様の創造理想である四位基台の完成は、愛によってアダムとエバが神様と一つになることです。上下、前後、左右に神様が入って

くるのです。そのようにして、何をしようというのでしょうか。第一は、人間の愛と神様の愛を完成することです。神人愛の完成です。一体です。愛して一つになれば、所有権が決定します。永遠の愛には、愛の所有権が決定されるのです。夫の前の女性に対して、夫が永遠の所有権をもつのであり、女性の前の男性に対して、女性が永遠の愛の所有権をもつようになるということを知らなければなりません。

神様は縦的な父であり、縦的な主体であって、人間は横的な主体です。縦横が一つになってこそ構成体を完成させるのです。立体的な構成体というものは、縦横が一つになり、前後が一つになっていなければなりません。それで、縦的な存在とは何かというと、父子の関係です。横的な関係、東西の関係は夫婦の関係であり、兄弟の関係は前後の関係です。このように、一つの家庭に愛の理想の一つの球形を形成しようとすることが神様の創造理想です。

それでは、神様はどこにいらっしゃいますか。中央にいらっしゃいます。父として代表し、夫として代表し、母として代表し、妻として代表し、息子として代表し、お兄さんとして代表し、弟として代表できる、中心存在としていらっしゃることを願われたのが神様の創造理想です。それはどういう意味かというと、神様は、男性と女性と永遠に共に暮らしたいということです。彼らが父母になれば、父母の位置で永遠に共に暮らしたいと思うのであり、彼らが夫婦になれば、夫婦として永遠に暮らしたいと思うのであり、神様は父母であられるので、父母として永遠に人間と共に暮らしたいと思ったその基台が家庭だったのです！

本来、神様の創造理想というものは、真の父母を標準としてつくられたのです。創造のすべての始まりは……。真の父母を標準として、すべての被造物を創造されたのです。真の父母が完成する時間、すなわちアダムとエバが完成した段階に入っていき、真の父母が聖婚式を行うその時間は、神様の聖婚式と同じです。一箇所において成されるのです。神様は真の愛の主人であり、真の愛の根となられるお方なので、その真の愛を中心として、これと人間が一つになり、真の愛の根をこの平面世界、人間世界、地上世界に拡張することを願ったのが創造理想でした。

しかし、堕落によって、血統的にはサタンの血肉を受けました。このサタンの血と、サタンの血統と、地獄をすべて取り除いたとしても、天国に入っていくことは難しいのです。これをすべて取り除いたとしても、私たち人間は、神様の創造理想を中心として、神様と真の父母が真の愛を中心としてもつことができるその血統的因縁の世界とは、元から関係がないからです。

良心は最高の理想を願い、体も最高の欲望をもつのです。それゆえに、皆さんが考えても、男性でも女性でも、何を願うかというと、この世界の王になり、女王になることを願うのです。それが神様の本来の創造理想です。横的に無限大の中心存在となり、縦的には神様と同じ存在になるのです。神様以上の最高の存在がいますか。それでは、女性と男性は

何かというと、神様の聖殿です。目に見えない神様の内的な実体なのです。

神様が願われた創造理想は、最初は一粒の種を植えることです。これが公式です。一粒の種を植えるのです。そのように植えられた一粒の種が、絶対的な男性の代表です。二つではありません。女性も同じです。そのような女性がクイーンであり、そのような男性がキングです。そのようなキングとクイーンが愛で一つになることが理想です。そのように連結するところに神様が臨在されるのです。堕落世界には、そのような内容の理想的な公式基盤がありません。

愛は一体を成すのです。父子一体、夫婦一体、兄弟一体という言葉は、愛を離れてはありません。男性と女性の体は、神様の実体です。これが一つになる時は、縦的な基準を求めて上がっていくのです。この一点に集まるのです。縦的基準がまず連結されるのです。

縦は引力に引かれて下りてきます。横よりも早く下りてきます。自然に来て縦的基準がぴったり中心となり、これらが一つになって回るようになれば、この全体が一を中心として球形を成すのです。これが核となり、アダムとエバが夫婦になって一つの愛の球形体を完成するのです。その位置が息子、娘の完成した愛の実体です。その位置が天国家庭の愛の理想の完成体です。その位置が男性と女性が理想とした神様の創造理想であり、根源的な核心点を爆破、結実させたそれ自体なのです。

平和の世界において根源となるものとは何でしょうか。神様が中心になるのです。神様を中心として、神様のみ旨と神様の創造理想を中心として、その方向を一致させ、目的の一致を成し遂げるところにおいて、平和の世界が可能だったのです。神様のみ旨とは何でしょうか。これは重要な問いです。統一教会では、神様のみ旨は何であるといいますか。第一は、創造理想を完成することです。簡単です。それでは、創造理想の完成とは何でしょうか。四位基台の完成です。四位基台の完成とは何でしょうか。理想的家庭です。簡単なことです。その理想家庭になっているかということが問題です。

神様の創造理想から見るとき、真の男性と真の女性を描き、真の愛と真の生命と真の血統を連結させて、それが安着した位置から家庭が出発するならば、神様の愛と神様の生命と神様の血統が縦的に降りてきて天と地が一つになり、地で定着し、横的に拡大していかなければなりません。相対的な愛を中心として家庭ができれば、個人と家庭を中心として、氏族になり、民族になり、四方性を備えるようになるのです。

未来において、私たちが天上天国の中心になり、地上天国の中心となるのです。天上天国は縦的基準であり、地上天国は横的基準ですが、これが一つになって地上天国と天上天国が統一されるのです。これは、神様の真の愛を中心として、統一的大家族の編成を模倣したものです。これが神様の創造理想です。

真の愛を中心として、神様が人間を無限の価値をもつ者として完成させることによって、神様も真の愛の完成を成し、永遠の理想愛が宿る創造理想世界が完成するのです。

神様の愛の理想は一人では完成することができません。これは、必ず家庭を通して、夫婦の結婚を通して成されるのですが、今までこの内容が分からなかったので解決することができませんでした。堕落して偽りの父母となることによって、いまだに偽りの後孫は天国に入ることができないのです。神様が創造理想によって立てられた天国に入っていくことができません。この中間段階にとどまっているのです。イエス様も同様です。イエス様がなぜ楽園に行かれたのかというと、結婚することができなかったからです。

それゆえに、霊界にいるすべての先祖たちも、すべてばらばらになっているのです。どこに行くのかというと、どれほど愛し合っている夫婦が霊界に行ったとしても、神様の国、天国に入っていくことはできません。中間天国のようなところに入っていき、自らの心霊状態に該当する場所に行くのです。ですから、家族が十人いれば、みなばらばらになっているのです。

世界と同化することができる核、モデルケースを家庭で完成させようとするのが神様の創造理想です。それは夫婦を通じて成されます。それゆえに、もし夫婦がまっすぐ行かずに曲がるようになれば、四大心情がめちゃくちゃになります。家庭で完成した心情圏は、天国に入っていくようになっているのであり、そのようにできなければ、天国ではなく地獄に行くようになるのです。初愛の貴さを知らなければなりません。これを知ることによって、統一教会の家庭がどれほど素晴らしい家庭かということを知らなければなりません。

神様のみ旨は、創造理想の完成です。創造理想の完成は、真の愛の理想の完成です。これが堕落したので、再び戻ってくるためにはどのようにしなければならないのでしょうか。長子権復帰、父母権復帰、王権復帰、皇族圏復帰を成し、そのように生きて天国に入っていくことができる本然の基準を完成しなければなりません。これが統一教会の摂理史の主流です。創造摂理が主流ですが、堕落したので復帰摂理がすべて主流になったのです。

四) 地上天国と天上天国を創建

(1)地上天国と天上天国の出発基地は家庭

アダム家庭は、神様の理想と一致した真の愛の家庭を成さなければなりませんでした。人間始祖のアダムとエバは、神様の無形の性稟を実体的に完成し、神様のみ旨と愛を宇宙に伝えるという期待の中で創造されました。アダムとエバとその子女たちは、全人類が従うことができる根本原理を生活の中で確立しなければならなかったのです。

そのようになれば、アダムとエバの後孫たちは、心と体を一つに完成し、神様と一つになった個人、夫婦が一つになった家庭、また子女たちと一つになった家庭を築き、全地上に自由と、平和と、幸福と、希望の満ちあふれた安定した基盤が成し遂げられていたはずです。その典型が家庭や国家にとどまることなく、世界と全宇宙に広がっていくのが神様の理想でした。家庭で成された天国の模型が国家全体に拡大され、国家圏の天国が全世界に拡大され、世界圏の天国が全天宙に拡大されるのです。

人間の最も基本的な心性と人格は、家庭から形成されます。家庭は、愛と人格、そして生命の出発であり、その根本基台となります。人の一生というものは、家庭の基盤の上で父母の愛によって生まれ、息子、娘の位置から夫婦の位置、父母の位置、祖父母の位置へとその位相を異にしていく中で愛の人格体として完成し、愛の中で暮らしたのちに、最終的に天国に行くようになっているのです。これが創造原理です。

家庭を通して歴史と国が生まれ、理想世界が始まります。これがなければ、個人の存在する意味もなく、血統の伝承もありません。したがって、家庭は、すべての価値と理念、そして制度と体制を優先する、最も貴い人間の愛と生命の本拠地となるのです。

神様を歓迎し、真の父母と共に、地上で家庭を中心として神様に侍りながら生きることによって、地上の家庭から地上と天上天国の家庭となり、統一された世界へ入っていくのです。ですから、皆さんの家庭で神様が暮らすことができなければなりません。神様が暮らしたいと思われるエデンの家庭を築かなければなりません。神様は、アダムとエバの家庭で暮らすことができなかったので、皆さんの家庭に神様をお迎えして暮らさなければなりません。

氏族的メシヤとして、皆さんの一族が神様に侍らなければなりません。皆さんの国が神様に侍らなければなりません。皆さんの世界が神様に侍って暮らし、天地が神様に侍って暮らさなければなりません。そのように神様に侍り、共に暮らすことができる出発基地が家庭です。私たちの家庭が地上天国と天上天国の出発基地であるということを知らなければなりません。

神様は真の愛の本体なので、真の愛と連結されればすべてが同じ体となります。父母は、神様を身代わりした生きている神様であり、夫と妻は、お互いにもう片方の神様であり、息子、娘は、もう一つの小さな神様です。このように三代が真の愛を中心として築いた家庭組織が天国の基盤です。そのような基盤を築かなければ、天国は築くことができません。家庭というものは、宇宙の中心です。家庭完成は宇宙完成の基礎となるので、家庭で愛するのと同じように宇宙を愛すれば、どこでも無事通過です。このような場合、神様は、全体の宇宙の父母であり、愛の複合的な中心の位置にいらっしゃるのです。

神様を中心として一つになる時、千態万状に回るようになるのです。したがって、父母が子女を愛するのを見習って、兄弟間においても、兄は弟を愛さなければならないのです。そのように愛して一元化された家庭には、家庭愛が花開くのです。またこれは、社会愛になることができます。これがさらに進めば、民族を愛する民族愛になります。このように愛すれば世界ができるのです。しかし、今日の世界においては、これが漠然としているのです。

アダムとエバが堕落していなければ、神様は、何をしてあげようとされたのでしょうか。神様は、祝福によって結婚式をしてあげ、息子、娘を生ませて神様が喜ぶことができる家庭を編成し、これを繁殖させて氏族と民族を編成しようとされたのです。これがさらに広

がっていけば、その世界は、何主義の世界でしょうか。神主義の世界であると同時に、アダム主義の世界です。その世界に理念があるとすれば、それはアダム主義の理念であり、そこに宇宙観があるとすれば、アダム主義の宇宙観であり、天宙観があるとすれば、アダム主義の天宙観であり、生活観があるとすれば、アダム主義の生活観です。

五色人種の皮膚が色とりどりなのは構わないのです。それは環境によって変わったことなので、数多くの民族の皮膚の色が異なるのは構わないというのです。それでは、どうして数多くの民族の言語が異なるようになったのでしょうか。人類始祖が堕落したので、天が分立させたのです。

兄弟を通して国民が形成され、人類が形成されるのです。兄弟は前後を表示するものですが、それは肉となるのです。平らになっているところに肉がついたのです。ここから円形が生じるのです。ですから、円形をつくるのが兄弟であり、国民です。兄弟が広がって国民になるのです。ですから、兄弟愛というものは世界愛と通じるのです。多くの兄弟たちが育つ家庭は、世界の人類を抱いて理想的な地上天国と天上天国をつくるモデルのようなものです。それゆえに、兄弟はここから広がっていくのです。

地上天国と天上天国の民を愛さなければなりません。これは兄弟です。三つの愛がそこから成されるのです。兄弟同士で愛することができる、このような一つのモデルが天国の軸です。理想的天国建設の一つの軸です。地上の軸です。地上軸、天上軸となり、地上の国と天上の国が交代して天国を育てていくならば、天は発展していきます。なぜ神様が人間を造られたのかというと、縦横の理想構成を願ったからです。なぜ子女を必要とされたのかというと、横的な前後を中心として球形を成さなければならないからです。それで、創造されたのです。

家庭は、どのような家庭でしょうか。神様は、おじいさんの位置です。アダムは、現在の家庭を代表しているのであり、息子、娘は、未来です。神様は、過去の象徴であり、父母は、現在の象徴であり、息子、娘は、未来の象徴です。このような愛の理念を中心として、一つの家庭で四大心情圏と三大王権が展開しなければなりません。この心情が完成すれば、どのようになるでしょうか。神様が地上の表面に姿を現され、家庭においてはおじいさんの位置に立たれ、その家庭を治めて天上天国と地上天国が一つになって完成できるようにされるのです。それで、繁殖した子女たちは、二つの国の相続者として連結されるのです。

家庭は、地上天国と天上天国のモデルです。そこには、祖母、父母、夫婦、赤ん坊まで、四代の系列があります。これを拡大すれば、世界各国においても、祖母、父母、自らの夫婦、赤ん坊のような四代の段階になっています。個人は家庭のために、家庭は氏族のために、氏族は民族のために、民族は国家のために、国家は世界のために犠牲にならなければなりません。より大きなもののために犠牲になるという原則を中心として外国に出て行ったとき、自らの家庭の父母、祖母、自らの夫婦、息子、娘以上に、また自分の国の人以上に世界の国の人を貴く思うならば、天国の本

宮と一致した位置で完成し、天国のどこへでも入っていくことができるのです。

神様を中心として地上天国と天上天国が統一され、縦的に神様と真の父母を中心として横的にカイン、アベルが一つになるのです。愛のゆえにつくったので、地上天国と天上天国は愛で一つになるのであり、神様の本然的な理想を中心とした主体と対象も、愛の理想を中心として一つになるのです。この宇宙、創造世界は愛から始まりました。それゆえに、神様も愛を中心として一つにならなければなりません。地上天国と天上天国の対応的な主体は何かというと愛です。

人間の完成は、真の愛を中心として心と体が永遠に一つになり、そのようになった男性と女性が永遠の夫婦の愛を成し、そのような夫婦の愛を成した父母が真の父母の立場となって、そのような父母を中心とした歴史が、先祖から千年、万年変わることなく継続することによって、これを縦から横的に拡大するのです。そのようになった世界は、地上天国と天上天国になります。そこで天地合徳が成就されるのです。

統一教会の原理の驚くべき点は何でしょうか。今までは、地上天国と天上天国がどのように一つにならなければならないかという理論的な根拠を知りませんでした。それは、真の愛を中心としてアダムとエバから始まるのです。神様は、内的なアダムの人格を身代わりし、アダムは、神様の外的な人格の代表者なのです。この二つが一つになるのです。

それゆえに、神様の愛はアダムと共に出発するのですが、一つは縦的な出発であり、もう一つは横的な出発です。理論がちょうどそのようになっています。そのようになることによって、地上天国と天上天国が一体となるのです。それを理論的に説明することが可能です。今までの既成教会の神学をもってしては、それは不可能です。彼らは、創造主は神聖なものであり、被造物は卑しいものと見ているのです。そのように見ていながら、愛の理論をどのようにして立てることができますか。一遍に問題になるのです。彼らが主張しているように、神様は、何でも思いどおりにすることができるお方でしょうか。違います。神様にも思いどおりにできないことがあるのです。愛を中心としては、神様も思いどおりにすることができないのです。

家庭というものは、世界を縮小させた横的な基盤です。ここから、国家と世界が展開していくのです。家庭とは何でしょうか。家庭は、世界の横的な縮小型であり、絶対的な中心の前に相対的な基準です。それでは、私とは何でしょうか。絶対的な中心がとどまることができる基台です。

家庭は、すべての人類の男性と女性を縮小したものです。人類といえば、それは男性と女性です。家庭は、すべてのものを拡大することができる種です。種から繁殖して家庭、そしてその家庭が増え、それらの家庭が連合して数が増大することによって氏族となり、民族となり、国家、世界、天宙まで拡大していくのです。家庭は機関車です。ですから、トンネルを過ぎて目的地に走っていくようになれば、一番後ろを走っていた皆さんの国と世界は、自動的に天国に到着するのです。

(2)天国創建は祝福家庭の任務

「家庭盟誓」の第一節は環境復帰です。失ってしまったすべてのものを蕩減復帰しなければなりません。今までの宗教は、出家を要求し、独身生活を要求してきましたが、統一教会において初めて還故郷を命令したのです。「還国」です。世界的にとてつもない事件が起きたのです。宗教界にとってこれ以上の幸福はありません。それは言葉だけではありません。

本郷の地を求め、それから何ですか。地上天国と天上天国を創建しなければなりません。追放されたので、すべてを失ってしまったのでしょう？　求めて何をするのですか。地上天国と天上天国を築かなければなりません。私が創造しなければなりません。失ってしまったので、すべてつくらなければなりません。盗まれたので、再び取り戻してつくっておかなければならないのです。千年、万年かかってもしなさいというのです。それで、統一教会では還故郷を唱えたのです。これは、宗教界にない出来事です。

地上天国と天上天国は、アダムとエバが失ってしまったので、私たちが取り戻さなければ、神様もそれを取り戻すことはできません。悪魔は、さらにそれを破壊しようとするのです。地上天国と天上天国は、私たちが取り戻さなければなりません。「本郷の地を求め」と言いました。ですから、今まで宗教世界では、出家を命令し、独身生活を命令したのですが、統一教会はその反対です。還故郷です。「故郷に帰りなさい」というこの言葉は、宗教世界の歴史にはない福音の中の福音です。これは、一度しかない朗報の中の朗報です。

「本郷の地を求め！」です。この地球星が本郷の地です。本郷の地において、本然の創造理想である地上天国と天上天国を完成するのです。何を通してですか。愛を通してです。みな本郷に帰っていくことができる愛の道に従ってきたのです。堕落した人々の本然の愛を復帰して、再創建するのです。

地上天国と天上天国が一つになり、そこで神様の真の愛を中心として、一致した家庭生活をした人が、地上で暮らしたのちに天国の家庭へ移動していくのです。ですから、個人救援時代ではありません。

キリスト教では、個人救援というのですが、それは違います。家庭救援が神様のみ旨です。堕落は家庭で起きたので、復帰も家庭で成さなければなりません。そのような時代が来ました。今までの地上の歴史時代においては、なかったことです。初めて家庭が、新しく定着時代に入ってきたのです。

「本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建することをお誓い致します」。ここに「創建」という言葉を使いました。どうして「創建」というようになったのかというと、これは、私たちが再びつくらなければならないからです。ただそのままできるのではありません。つくらなければなりません。再創造しなければなりません。地上地獄になっており、天上地獄になっているので、私たちが再びこれを再創造しなければならないのです。

「本郷の地を求め、本然の創造理想である地上天国と天上天国を創建することをお誓い

致します」。私たちがつくらなければならないということです。私個人において、地上天国と天上天国になるのが家庭です。家庭においてつくらなければならないので、「家庭盟誓」です。これをつくることができなければなりません。それは私たちがつくらなければならないのです。

「家庭盟誓」の第一節は、還故郷です。故郷の地の環境へ帰っていくのです。ですから、「本郷の地を求め、本然の創造理想である地上天国と天上天国」と言ったのです。そこで失ってしまったのでしょう？　創造は誰がするのですか。私たちがしなければなりません。私がしなければなりません。家庭がすることができなかったので、アダム家庭がしなければなりません。

先生が、その基盤をすべて築いてあげました。反対されなければ、今はそのようなみ言と内容をもってどこに行こうと、自動的に覇権を掌握することができます。どこかに行って、口を開けて話さなければなりません。眠っている町中の人々を起こして「集まってください」と言うのです。それでも集まらなければ、棒でたたいて、強制的にでも引っ張ってきて、三十分、一時間、二時間、説教するのです。「悪い話であれば反対しなさい」と言うのです。聞けば、有り難く思うようになっているのです。

そのような絶対的権限をもって、一方的に一気に推し進めても、副作用がない環境条件ができあがってきているというのに、これを目で直視しながら行動することができなければばかだというのです。そのような者たちは、乞食に奪われてしまうのです。僕になるのです。

私たちの一片丹心とは何でしょうか。失ってしまった本郷の地を取り戻し、本郷の祖国を創建しようというのです。今日、「再建」という言葉を言うでしょう？　再建とは、あるものを取り壊して再びつくることです。統一教会の群れは、再建ではなく、創建しようというのです。これは材料もなく、このこぶししかありません。

本郷の地がありますか。本郷の国がありますか。ありません。ないので創建するのです。創建するのですが、何を材料にするのでしょうか。皆さんのこぶしが材料であり、皆さんの体が材料であり、皆さんの骨が材料です。この体を動かし、骨を削り、すべての血と肉を注ぐようになれば、世界の金銀財宝が飛んでくるのです。それで、材料を購入しようというのです。

皆さんにとって、「家庭盟誓」の文をもったということは有り難いことです。他郷で悲しく歩んできた宗教圏でしたが、「家庭盟誓」は、「帰郷しなさい」と言っているのです！　「還郷しなさい」と言っているのです！　「故郷へ帰りなさい」と言っているのです！　忘れることのできない言葉です。

(3)還故郷と氏族的メシヤの使命完遂

個人的なゴルゴタを越え、家庭的なゴルゴタ、氏族、民族、国家的なゴルゴタを越えて世界的なゴルゴタに向かっていかなければなりません。天は、私たちを前に立てていくことを望んでいるのではなく、今まで天が前に立って私たちの行くべき道を開拓し、私たちに「来なさい」と言っているのです。このような道を行くことができなければ、滅びます。

滅びなければなりません。千回、万回、死ぬようなことがあったとしても、この道を行かなければなりません。

今日、韓国人の手によってこのような本郷が創建されれば、世界の人々は、私たちを祖国の民として迎えることでしょう。私たちは、天が願われる園に向かって、きょうも歩んでいるのであり、あしたも歩んでいくことができる準備をするために集まったのです。ですから、力と精誠をすべて捧げ、世の中の何ものよりも貴く思いながらこの道を行かなければならないというのが、生まれながらの生涯の目的であるということを、皆さんは絶対的に知らなければなりません。

故郷へ帰っていくのです。今はすべて追い出されています。追い出されたので、復帰していかなければなりません。完成した家庭として訪ねていくことができるのです。それで、本郷の地に訪ねていって何をしようというのでしょうか。そこで暮らすのではありません。

失ってしまった地上天国と天上天国を、私が捜し出して築かなければなりません。今は、サタンが本郷の地を占領しているので、天国をつくらなければならないのです。なぜこれをしなければならないのでしょうか。真の父母が築き上げたものを相続してあげようというのです。真の父母が来て、世界的舞台において本郷の地を訪ねていき、アダム家庭が失ってしまったものを復帰して地上天国と天上天国を完成することができる基盤を築き上げたのです。先生が世界的基盤を築いたので、皆さんは、氏族的基盤を築かなければなりません。

なぜ氏族的メシヤとしての責任分担を果たさなければならないのでしょうか。第一の理由は、皆さんの父母を救ってあげなければならないからです。父母は第一のアダムの立場であり、皆さんは第二のアダムの立場です。父母を復帰し、再創造してアダムの使命を完遂しなければなりません。第二の理由は、皆さんには故郷が必要だからです。氏族的メシヤの使命を果たすことによって、自分の故郷をもつことができるようになるのです。結局、氏族的メシヤの責任分担を果たさなければならない理由は、アダム家庭を完成するためです。具体的には氏族を教育しなければなりません。

氏族的メシヤがいなければ、家庭基準を中心としてすべて連結されません。それが連結できなければ、皆さんの故郷はあり得ません。先生の故郷はあっても、皆さんの故郷はありません。家庭をすべて復帰しておけば、今後入籍時代が到来します。入籍時代が到来すれば、部族の編成が起こり、入籍する順序の系列ができるのです。先に入籍する人々がお兄さんになり、彼らを先祖のように侍る新しい体制ができます。全世界をすべてそのようにして、初めて地上天国の完成が成されるのです。

統一教会の教団は、氏族です。私の血が共に動じるのです。私が涙を流せば涙を流さなければならず、私が喜べば喜ばなければなりません。血族です。五色人種を超え、文化背景の異なるすべての国家基準を越えて、壁を突き崩して一つに団結した新しい天国創建のための民族です。この民族が神聖になれば、天国の「創国」が顕現するのであり、そのよ

うな神聖な「創国」の民族として生きていく時、「創世界」が展開するのであり、その世界の上に天宙的な地上天国と天上天国が連結するのです。

今、先生は、皆さんに「メシヤ」という名前を与えました。氏族的メシヤです！　それでは、皆さんはどのようにしなければなりませんか。メシヤとして何をしなければならないのでしょうか。国家的メシヤ、世界的メシヤ、天宙的メシヤになることができるすべてのものを準備しておいたのです。皆さんのために山のように大きな宝物を準備しました。皆さんがメシヤになりさえすれば、宝石の山のようなものが連結され、水が流れ下っていくように、皆さんにすべて相続されるのです。

地上天国で生きた人が、死んで入っていく所が永遠の天の国、天国です。それでは、ここでどのように一体となるかを考えなければなりません。これからは、ほかのことを考える必要はありません。自分を中心として、このすべてのことを完成して解決し得る最後の終着点にとどまっているということを知らなければなりません。そして、これをどのように完成するのかという問題が残っているのです。

それは、私自身の心と体の問題であり、家庭の夫と妻においては、自分と相対の問題であり、父母を中心として子女がいれば、親と子の上下関係の問題です。これが、皆さんの家庭全体が共通に連結された完成の表題となっていることを知り、どれか一つでも偏れば、すべてが傾くようになるというこの事実を、皆さんは知らなければなりません。

先生が願っていることは、今日の統一教会の青年男女を、どこにおいても通じることができる人々にすることです。国が慌しくなる時に、どのような分野でも任せることができる人々をつくらなければなりません。

じっと座って土ばかり掘って農作業だけしているのならば、いっそのこと死んでしまったほうがよいのであって、そのようなことで何ができるのですか。土を掘るにしても、一度行けば、村の人々が想像もできない仕事をしてくるのです。十年後、二十年後にそれを知る時が来るはずです。私たちがそうです。とんでもないことをしながら、ほかの人ができないことをするために準備している人々です。行こう！　行こう！　本郷の地に早く行こう！　本郷の地に早く行こう！　しよう！　しよう！　早くしよう！　あらん限りの力を尽くして闘おう！　しよう！　しよう！　早くしよう！　一致協力して何をしようというのですか。真のみ旨を立てようというのです。

私たちは、きょうも行き、あしたも行かなければなりません。皆さんを指導する先生も、この道を歩んでくるために袋だたきにも遭ったのです。監獄にも、何度も行きました。先生の監獄生活を計算すれば、何年くらいになると思いますか。監獄にも入り、むちで打たれて血を吐いたこともあり、悲しみと迫害の中で、ありとあらゆる恥ずかしさと惨状も味わいました。父母の恨も、親戚の恨も、国の恨も、民族の恨も、数多くの宗教の恨も受けました。

しかし、行くべき道がそれよりももっと大きく、もっと貴いということを知っていたので、それらは問題にならなかったのです。ですから、きょうまで歩んできたので、あした

もまた行かなければならず、あした行けば、あさってもまた行かなければならず、今年行けば、来年もまた行かなければならず、十年、二十年、四十年の人生を歩んできたならば、また生涯が終わる時まで行かなければなりません。そのようにして行くべき本郷の地が残っているのです。その本郷の地とは、どのような所でしょうか。行きたい所、行って会いたい所、会って暮らしたい所です。

その道が、今日の世の中のどのようなものよりも、私の周囲のどのようなものよりも貴い道であるということを知り、どのようなものよりも切実であるがゆえに、それらをすべて捨てていかなければならない運命があるのです。ですから、今日、これが私たちの行く統一の道であり、師が歩んでいく道であるということを皆さんは知らなければなりません。生涯の最後まで行かなければならないのです。

家庭の最終着点の美化を完成しなければなりません。芸術的な家庭理想を備え、神様に侍り、真の御父母様が自分の家庭に来られれば、永遠に離れたくないと思われるような家庭を築かなければなりません。同じように神様も永遠に離れたくないと思われるような家庭を築かなければなりません。万民のすべての責任者、指導者、さらには天国にいる真の御父母様の直系の息子、娘、そして皇族圏があるとすれば、どのような皇族圏もその家に行って暮らしたいと思うことができるようなモデル的家庭を築かなければなりません。それが私たちの責任です。

天は、このことを今の時代の当面の課題として提示しているということを知らなければなりません！　成就しなければなりません！　責任をもった中心者にならなければなりません！　そのようになれば、神様が願われる地上天国、永遠の家庭の出発がなされるのです。

二　家庭盟誓第二節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り、天宙の代

表的家庭になり、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣、世界

では聖人、天宙では聖子の道理を完成することをお誓い致します。

一) 神様と真の御父母様に侍って

「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り」です。神様と真の御父母様に侍らなければならないのですが、エバが堕落することによってアダム家庭が追い出されてしまったのです。神様と真の父母に侍らなければなりません。神様と真の父母が縦的な父母と横的な父母であり、二つの父母が一つになることによって、初めて私が出てくるのです。

神様は縦的な父母であり、完成したアダムとエバは横的な父母であって、この二つの父母が一つになったその上で統一が成され、天国と神様が連結されるのです。ですから、神様と真の父母に侍らなくては何もできません。それで一つになって天宙の代表的家庭になるのですが、その家庭はどのような家庭でしょうか。その家庭は、堕落する前のアダムとエバ以上の立場なのです。

成約時代は、真の御父母様を中心として神様に侍って暮らす時代です。これは、エデンの園の家庭的基盤において暮らすことではあ

りません。世界的頂上を越えて暮らす時代だというのです。

神様は父母です。今まで、神様は漠然としていました。統一教会は、神様とどれほど近いでしょうか。縦的な私の父です。私たちの良心とは何でしょうか。神様は縦的な創造主として、真の愛を中心とした霊的な父の立場から私たちにすべての血統をつないでくださるのですが、それを相続した代表的立場が縦的な良心の立場です。したがって、良心は「縦的な私」です。良心は、縦的な天の父から受け継いだ私であるというのです。私は二人です。縦的な私と横的な私、この二人です。

堕落した家庭から出発したので、神様を中心として真の御父母様に侍り、真の家庭の秩序を立てていくことによって神様のみ旨が初めて成就されるのです。私たちは、家庭を中心として神様に侍るということを誇らなければなりません。そして、真の御父母様に侍っているということを誇らなければならず、真の氏族圏と民族圏をもったということを誇らなければなりません。

祝福は、真の御父母様に侍り、神様に侍り、天国に入っていくことです。霊界まで参加させるのです。霊界は、弟の立場です。後のアダムと共に自らの子孫に従って祝福を受け、共に入っていくことができる天地の解放圏が展開するのです。

皆さんも、この世界に真の勝利の基台を備え、神様に侍り、真の御父母様に侍って、個人の恨と、人類の恨と、今までの数多くの歴史的な恨をすべて蕩減しなければなりません。さらに進んで神様の恨を解いてさしあげなければならず、地上の恨を解かなければなりません。そのためには、「神様の前で幸福を謳歌し、賛美することができる真の息子、娘になろう」という思いが切実でなければなりません。そのような立場で、孝子、孝女となり、忠臣、烈女となって、真の御父母様に侍りたいという切なる思いをもってこそ、今日の重い十字架を踏み越えていくことができるのであって、そのような強い信念と強い欲望がなくては、この十字架を越えることは難しいのです。

霊界は、いくら距離が離れていても神様を目の前で見ることができます。時間と空間を超越しているので、神様に侍って暮らすのです。霊界に行っても、神様のみ声は聞こえますが、神様の体は見えません。今後、真の御父母様が霊界に行けば、神様の体が現れるのです。なぜでしょうか。地上で体をもった父母に侍ったからです。そのようにして霊界でも体をもつようになるので、より刺激的であり、より幸福になるのです。今は、神様を見ることができないので、神様と共に喜びを感じることはできません。ですから、天国の王宮が空いているという言葉が出てくるのです。

二) 代表的家庭、中心的家庭となって

(1)アダム家庭が代表的家庭、中心的家庭

アダム家庭は一家庭でしたが、未来の世界を築くことができる中心であり、国家の中心、家庭の中心だったのです。アダム家庭は、全体の理想を実現することができる一つのモデル家庭です。それは、アダム家庭が完成していれば、氏族も完成し、国も完成し、世界も

完成し、天宙も完成するはずだったという話です。そのようなアダム家庭になっていれば、その家庭がすべての理想の代表的家庭であり、中心家庭である、このような言葉が出てくるのです。

「神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり」、アダムとエバは、頂上の代表的家庭です。「天宙的家庭になり、中心的家庭となり」、中心、頂上の代表の位置から地上に着陸する時に中心家庭になります。アダム家庭は、すべての最高の愛を中心として降りてきた根の家庭です。根の家庭なのです。最高の位置に立ったものがこの地上に来るようになれば、平面的な根になるので、中心家庭になるのです。

アダムの位置は、世界人類の過去と現在を代表した位置であり、頂上の位置です。数億万年の人類先祖の頂上です。最初は、この一つしかありませんでした。アダムとエバは頂上で結婚し、地上の中心家庭として着地して世界に拡大していくようになっているのです。そのような位置で天国の孝子となり、天国の忠臣となり、国をもって忠臣となり、国をもって聖人となり、国をもって聖子の道理を果たさなければならなかったのですが、アダムは、それを成すことができなかったのです。

第二節は何でしょうか。「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣……」、このように続いていきます。それは、何を意味するのでしょうか。天宙の中心家庭は、アダムとエバです。アダムとエバが中心家庭であり、代表家庭です。代表は一つしかありません。中心も一つです。それが種です。アダムとエバがその種です。そして、祝福を受けた家庭の種は、すべてイコールです。皆さんの家庭も全く同じでなければなりません。

アダムとエバは、真の愛に絶対的に侍る道を通ることによって、家庭から国家、世界、天を無事通過するのです。家庭から国家、世界、天に直行するようになっています。今までの歴史時代の思想観は、そのような内容になっていませんでした。すべてジグザグに上がっていったのです。このように、万年不破の愛を中心として、一体的な家庭拡大の理想に従って歩んでいかなければなりません。家庭のモデル形態は変わりません。それが代表的家庭であり、中心的家庭です。堕落せずに完成したアダム家庭が天宙史的な代表家庭になるのです。代表的家庭、中心的家庭になるのです。「家庭盟誓」の第二節にあるように、中心家庭であると同時に、代表家庭だというのです。頂上、すなわち神様の前まで上がっていき、アダムとエバと神様の三者が一つになるのです。

アダムとエバが天地の中心です。全世界の人類を代表した中心家庭です。ここから上がっていくのです。国の大統領の家庭があります。世界の大統領も家庭があります。神様も家庭があります。同じです。これをしっかり押さえれば、世界版図なので、八段階に拡大されれば標準は一つになるのです。これが大きくなり、軸が一つになるのです。家庭という軸を中心として一つになるのです。

私は家庭軸の代表なので、世界に一つしかない位置に立つのです。それで、王子、王女

になりたいと思うのです。欲望は、神様を占領し、この地上における最高の男性、女性となって最高の神様の相対になることです。そのようになることによって、神様が私のものになると同時に、神様がつくられたすべての被造世界も私のものになるのです。愛は、一体になることです。所有権が決定されるのです。これは驚くべき言葉です。

「家庭盟誓」の第二節に「代表的家庭となり、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣」と続いていくでしょう？　孝子の道理、忠臣の道理、聖人の道理、聖子の道理をすべて愛によって連結させなければなりません。そのようにすれば、アダムとエバの代表的家庭です。一番頂上の家庭です。頂上で結婚すれば、地上に着陸するのです。天上で愛を中心として着陸すれば、中心家庭になるのです。それは聖子の家庭であり、聖人の家庭であり、忠臣の家庭であり、孝子の家庭です。それが永遠の種となり、それが実を結ぶことによって拡大していくのです。千代、万代、この原則に立脚した人になることによって、間違いなく天国の民になるのです。

アダムとエバの家庭という一つの起点を中心として、氏族は、その周りを形成するのです。家庭は核です。核は、移動することができません。そのような家庭を中心として、氏族、民族、国家、世界、天宙、神様を解放させることができる位置を備えなければなりません。神様と同居することができなければなりません。

神様が家庭に同居でき、氏族、民族、国家、世界、天と地に同居できる家庭的価値の内容を備えてこそ、堂々と天国に入ることができるのです。アダム家庭は、世界家庭の代表です。時間的な未来にそれを残しておきましたが、彼が行かなければならなかった所は、全世界家庭の代表の位置です。それで、今日蕩減復帰の原則によって私たちが立った位置は、世界的代表の位置です。

アダム家庭は代表的家庭です。ここにおいて神様は一番頂上にいらっしゃるので、一番頂上に立たなければなりません。その前でプラス・マイナスとして一つになることができる最高の位置に連結されるのです。代表的です。代表的家庭です。ここで植えたので、植えたものは、後代を通じて広がっていくのです。家庭、氏族、民族、国家、世界、天宙、天と地を中心として、この中心地に植えつけられて連結されるのです。

それで、代表的家庭なのですが、家庭は、地上に植えなければならないので、平面図上で中心的家庭になるのです。八段階です。全宇宙の中心になります。このような種を植えれば、ここから家庭が広がり、氏族、民族、国家、世界が展開していくのです。全く同じ価値の種です。同じです。

アダム家庭において、天がアダムとエバに祝福した種、それは結婚の種です。結婚の種がそのようになっているので、今日人類が家庭をもつようになれば、それは世界家庭として、種から実を結んだものなので、アダム家庭の種も、今日その数千万代の子孫となった種も、その価値は同等になります。種の価値が違っていていいでしょうか。松ならば、松の種を一つ植えれば、それが世界へ広がっていき、数千万の松の中から数億個の種ができたとしても、その種はすべて一つの種と同じ

価値をもった松として培養されなければならないということです。

(2)祝福を受けた家庭は本然の家庭と同じ価値

祝福というものは、堕落していない本然的な神様の愛と連結され得る基準なので、堕落していないアダムとエバの家庭と同じ価値をもたなければなりません。そうであってこそ同じ種になるのです。夫婦を中心として兄弟がいれば、その兄弟に神様が対するのは同じだというのです。どんなに広がっていっても、一つの家庭がもつ価値は、アダム家庭のもつ価値と同じです。同じ種の価値をもたなければなりません。

祝福を受けた家庭は、名実共に世界を代表した家庭です。したがって、世界を代表した家庭として、真の父母の血族と氏族、民族、国家の数多くの血族の前に恥ずかしくない、神様を身代わりした家庭にならなければならないということは間違いのない事実です。このような意味で代表的家庭であり、中心的家庭です。そのようになることによって、アダムとエバの家庭と私の家庭が同じ価値になるのです。それが結論です。ですから、皆さんは、ここではこのように生き、あそこではあのように生きるということはできません。

祝福を受ける位置は……。大韓民国の金氏ならば、金氏の息子として祝福を受けるのではありません。神様の直系である堕落前のアダムとエバと同じ位置で祝福を受けるのです。それはどういうことでしょうか。その家庭を中心として、全体を代表しているということです。アダム家庭が全体の代表となり、アダム家庭の一点を中心として宗族が連結され、氏族が連結され、世界まで発展して一つにして、しっかり押さえておけば、一点を中心として球形と円形に発展するのです。それと同じです。

それと同じように、中心者であるアダムと同じ本然の種の位置を自分が再び譲り受けたので、アダムが成そうとしていた氏族、民族、国家、世界型と、等級は違っても同じ内容の価値をもたなければなりません。

真の父母の家庭、これは種です。種が完全な種であれば、その種を植えて繁殖した数億万の家庭があっても、種は同じ価値をもちます。イコールです。神様が定着される家庭の基準は、何千代、何万代、何億万代になったとしても同じ価値を認められるので、種はイコールです。それゆえに、私たちの家庭は代表的家庭です。大韓民国を代表しているのです。

それで、盟誓文の第二節に「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様に侍り、天宙の代表的家庭となり」としたのです。代表は頂上です。その次には中心家庭になるのです。縦横に連結するようになれば、縦横が連結される位置です。代表的家庭であり、中心家庭です。そのようになれば、宇宙はすべて皆さんのものです。

「代表的家庭となり、中心的家庭となって」、これを考えなければなりません。皆さん、祝福を受けた家庭は五十億人類の五十億分の一ではありません。逆です。五十億人類を代表しているのです。代表的家庭であるアダムとエバの二人で出発したものを失ってしまったので、代表的家庭として、世界中のす

べての男性と女性に推薦させて、その代表者一人一人として残った者を引き抜いてきて組み合わせた結婚です。代表的家庭は、地上の頂上でしっかり押さえれば中心的家庭になります。

ですから、中心的家庭となって、家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子、イエス様の恨、このようなすべてのものを解いたというのです。先生がこれを完成したので、皆さんに相続してあげるのです。ゆえに、従ってきて収拾すればいいのです。

皆さんが結婚する時、一対一の男性と女性として行くのではありません。人類を代表した位置で結婚した家庭だということを考えなければなりません。真の愛を結ぶ夫婦は、人類を代表した位置で結ぶのです。アダムとエバと同じ位置です。八段階です。一、二、三、四、五、六、七、八、八段階です。アダムとエバは、この頂上にいるのです。これがすべてアダムとエバの伝統を相続して大きくなっていくのです。これが王権です。

天宙の中心家庭は、アダムとエバです。アダムとエバがその中心家庭であり、代表家庭です。代表は一つしかありません。中心も一つです。それが種です。アダムとエバが祝福を受けて結婚した家庭の種です。その家庭の種はすべてイコールです。皆さんの家庭も全く同じでなければなりません。

「祝福を受けた家庭は復帰された家庭だ」と言うとき、アダム家庭とその内容の価値は違いますか、同じですか。皆さんの家庭に行けば、皆さんの家庭は家庭の王宮です。また、氏族の王宮であり、国家の王宮であり、世界の王国であり、天宙の王宮です。皆さん、男性に尋ねれば「王になりたい」と答え、また女性に尋ねれば「女王になりたい」と答えるでしょう？　いったいそれはどういうことでしょうか。本来のアダムとエバは、王であり、女王だったということです。

世界を代表し、宇宙を代表するのです。家庭を代表するのはもちろんのことです。王と女王です。それが種です。皆さんはその結実です。実というものは、同じ種から出てくるのです。種と同じ価値をもっているのです。同じ脈絡です。皆さん、男性と女性の二人を連れていって植えつけておけば、堕落しなかったアダムとエバになり、家庭の王国、国の王国、天上・地上天国の王国の基地となることができると思いますか。統一教会で真の父母を通じて祝福を受けた家庭がそのような対等な価値をもたなければ、雷に打たれるのです。

真の父母を中心とした家庭は、神様の愛を中心とした直系の血統圏内に入っていくのです。このような真の父母の歴史性の結実として世の中に現れたものが祝福家庭です。祝福家庭は世界的です。世界の平面図上で祝福されるのです。その下には、数多くの国家があり、氏族があり、家庭があり、数多くの個人がいるのです。逆になったのです。これを代表しています。したがって、アダム家庭が世界的家庭を完成することによって統一世界を成し遂げていれば、その価値と私において成し遂げられた価値は同じです。種です。世界的種なのです。

先生が神様の家庭において孝子になり、国において忠臣になり、世界の聖人になり、天

宙の聖子になったように、皆さんもそのような伝統を受け継がなければなりません。それを受け継がなければ、代表的、中心的家庭になることはできません。代表的なアダム家庭は、家庭の中心であると同時に天宙の中心です。中心は一つです。代表は頂上であり、中心は垂直です。家庭、氏族、民族のこの八段階をしっかり押さえれば円形になるでしょう？

皇族圏の直系先祖は誰でしょうか。本然の愛の神様の直系子女であり、真の愛を中心として真の生命と真の血統の基盤を中心とした堕落していない人です。そのお方が種です。その種から根が出てくれば、中心の幹の根となり、そこから中心の幹、中心の芽へと大きくなっていくのです。これが縦的に大きくなるにつれて、それに対応して横的世界へと拡大していくのです。ですから、それを見れば、家庭と氏族も連結され、民族、国家、世界も連結されるのです。したがって、真の根と真の幹と真の芽に連結している枝も、すべて真の愛の枝となるので、そこで結ばれた実は、本然のアダム家庭と同じです。

中心の幹の根となることができ、中心の幹となることができ、中心の芽になることができる種の起源が結実として現れる時、その結実・・家庭を中心とした夫婦を中心として・・を植えておけば、一族を中心として、その一族の新しい中心の根となり、中心の幹となり、中心の芽となるのです。それゆえに、実には同じ価値があるのです。

統一教会の食口は、「アダムとエバと同じように、私は天地を代表して立った」と思わなければなりません。そして、宇宙を代表していると同時に、平面的にはすべての国と世界を代表している家庭だというのです。縦的な基準においても代表的であり、横的な基準においても代表的な中心です。これは最高の代表家庭です。地上においては、これが横的な世界の中心にもなるのです。そのようになってこそ、同じ皇族圏としての心情をもって天国に入っていき、神様に侍り、王に侍り、王の一族として暮らすことができるのです。そのような所が天上天国だということを知らなければなりません。

神様と真の父母に侍り、代表的な家庭となり、中心家庭となって、家庭ではもちろん孝子孝女、国では忠臣烈女、世界では聖人、天地では聖子の道理、このような天が願ったすべてのものを私たちの家庭では完成しようというのです。父母として子女教育をなし、国家では民族教育、世界では……。そして、天と地ではその天国の一族として、家庭の一員としての合格者になることができるようにしようというのです。

時間と場所に関係なく、古来すべての人間は、みな自分が中心存在になりたいと思ってきました。それは人情の常です。私たちはみな、それが人間としてもっている共通の内容であることを知っています。

それでは、人間は、どうしてこのような欲求をもつようになったのでしょうか。それは、自分が生まれたのちにもつようになったのではありません。生まれながらにしてそのようなものをもって生まれてきているのです。ですから、生まれてみると、そのようにならざるを得なかったのです。本然の基準にこれがあり、避けることができないものとして、歴

史性とともに私たち人間に連結されているので、誰彼を問わず自分が一番の存在になりたいと思うのです。

三) 家庭では孝子、国家では忠臣、世界では聖人、天宙では聖子の道理を完成

(1)必然的に行かなければならない孝子、忠臣、聖人、聖子の道

家庭において、孝子孝女とは、どのような人のことをいうのでしょうか。父母のために心と体を犠牲にしても、それを超えて父母を愛したいと思う人のことを孝子孝女というのです。愛国者とは、何でしょうか。国家のために自らの一身を顧みず、いくらでも犠牲になり、投入して忘れてしまう人が真の愛国者です。十回投入して忘れてしまう人と、十一回投入して忘れてしまう人がいるとすれば、十一回投入して忘れてしまう人が主体になるのです。

この原則によってのみ、すべてのものが平和に収拾されるのです。愛を除いてしまえば、「ため」に生きる道を除いてしまえば、それを成し遂げる道はありません。

家庭には孝子が必要です。父母と絶対的に一つになった息子のことを「孝子」といいます。国の忠臣は、国の中心存在と絶対的に一つにならなければなりません。これが宇宙の存在的実相です。世界には聖人がいて、聖人と絶対的に一つになりたいと思い、それを越えて天宙では、すなわち天と地を中心としては、中心である神様と絶対的に一つになりたいと思うのです。

「孝」というものは、孝子に従っていこうとします。年を取って老いていきますが、彼らの父母のことを思う心情に従って、未来の自らの後孫や父母に属するすべての兄弟までも、その孝子に任せようとするのです。神様に向かい、神様が願われる家庭と世界を神様のために創建するのです。誰がですか。私がです！　駄目でも私に任せ、後援することができるそのような情緒的な神様であることを知って、信念をもつ人は滅びることはありません。

神様は、御自身の愛の相対が自分よりも優れていることを願っていらっしゃるので、神様に命令して暮らすことができる位置にまで行くことができるのです。孝子が父母に「来てください」と言えば、来ますか、来ませんか。来るでしょう？　どのようなことでも新しいことをしなければならないのが孝子の道であり、忠臣の道であり、聖人と聖子の道理です。

「家庭盟誓」の第二節に出てくるように、家庭では孝子、国家では愛国者、忠臣にならなければなりません。この孝子とは、地上のサタン世界における孝子のことではありません。歴史上初めて現れる孝子です。神様は、アダム家庭を失ってしまった恨を残したのです。それで、真の父母を探し出すために、さまよい歩んでこられました。それゆえに、真の父母というもの自体が、どれほど貴いものなのかということを知らなければなりません。

妻を探し求めていく夫が、その愛の前に絶対服従するとすれば、妻は幸福でしょうか、不幸でしょうか。絶対的に幸福だというので

す。夫を探し求めていく妻もそうであるならば、その夫も絶対的に幸福だというのです。父母の前に絶対服従することができる者を「孝子」といい、国の前にそのようにすることができる者を「忠臣」といい、世界の前にそのようにすることができる人を「聖人」といい、天地の前にそのようにすることができる人を「聖子」というのです！　アーメン。

それは、すべて私を教育してくれる教材であり、教本だったのです！　アー、舌まで踊りながら、メン！　腹の肉、腹の皮、はらわたまで踊りながら「メン」です。メン（man）とは「人」のことです。「アーメン！」と言えば、「アー！　驚くべき人だ」という「アーメン！」です。そのような意味を考えながら「アーメン！」と言うのです。分かりましたか。

「どんなに難しくても、孝子の道を取り戻す道であり、忠臣の道を取り戻す道であり、聖人と聖子の道を築いていく道であるので当然だ」と言うことができる信念が必要です。父母のためには、自分一身だけではなく、自らの妻子を犠牲にしたとしても、孝子の道を行こうという思いをもたなければなりません。

この孝子に対して父母が一つになり、「父母まで犠牲にしてでも国を救わなければならない」と言えば、忠臣の位置に立つのです。それから、この忠臣に対して国が一つになり、「国まで犠牲にしてでも世界を救おう」と言うとき、聖人の道理を果たすようになるのです。それが、アダムの行くことができる創造の理想です。私が孝子にならなければならず、忠臣にならなければならず、聖人になり、聖子の道理を果たさなければなりません。「家庭全体をすべて犠牲にしてでも聖子の道理を果たそう」と言うことができなければなりません。

家庭において孝子という場合は、すべての息子、娘の中で、一番犠牲になりながら投入したがゆえに孝子となるのです。国においても、どの氏族、どの国民よりも投入したがゆえに愛国者となるのです。聖人も、世界のためにより投入した人が聖人になるのであり、天地のためにより投入した人は、イエス・キリストのような王子になることができるのです。そのように生きなければ、天国に行くことはできません。天国は、そのように生きた人が行く所であって、そのように生きることができなければ、天国に行くことはできません。

ここに来て仕事をするのは、食べて暮らしていくためではありません。出世するためでもありません。天国の民となり、天国の孝子、忠臣、烈女、聖人、聖子の道理を果たすために集まっているのです。神様が求め、神様が好まれる家庭と、神様が好まれる家族を愛し、そのような家庭において生きたのちに行った人が地上天国と天上天国の民となり、家族になるということを知らなければなりません。

皆さんは、真の意味で国を愛したことがあり、真の意味で兄弟を愛し、真の意味で先生を愛し、真の意味で先生の家庭を愛したことがありますか。蕩減復帰原則において、いかなる孝子よりも、いかなる忠臣よりも優れていなければならないのではありませんか。それが原理の教える教示ではありませんか。そのような基準に立ったことがあるかということを、皆さんは知らなければなりません。

神様の救援摂理は、家庭を通しては村を救わなければならず、村を通してはその社会を救わなければならず、社会を通しては国家を救わなければならず、国家を通しては世界を救わなければならず、世界を救ったのちは、霊界を救わなければならず、このようにして霊界と世界を救って神様を解放しなければなりません。このような救援摂理の道があるので、どうしてもそのような結論を下さざるを得ないのです。それで、孝子は天に通じ、忠臣は天に通じ、聖人は天に通じるという結論が出てくるのです。

今まで、皆さんは何をしましたか。天の孝子になり、国の忠臣になるために努力したと思いますか。ここに該当する精神は、まさしく一にも孝と忠であり、二にも孝と忠であり、十にも、百にも、千にも、万にも孝と忠であると言わなければなりません。私が死ぬとしても、いかにしてこのような位置に上がっていって死ぬのかということが問題です。これが、今まで摂理のみ旨を担ってきた人々の生活でした。忠の位置に到達するためには家庭が責任を果たさなければならず、氏族まで責任を果たさなければならないという結論が出てくるのです。

完成した私は、世界人類を代表した家庭における孝子であり、歴史的国家を代表した忠臣であり、世界を代表した聖人であり、天の摂理全体を代表した聖子として完成した私であるという自信をもってこそ、個人からサタン世界を完全に越えて天に帰っていくのです。そのような私です。

そのような孝子、忠臣、聖人、聖子として完成することができる私であり、そのような夫と妻が夫婦的孝子であり、夫婦的忠臣であり、夫婦的聖人であり、夫婦的聖子です。それから、そのような国家的夫婦であり、そのような世界的夫婦であり、そのような天宙史的な夫婦であり家庭であるということができる家庭が、創造理想的み旨を完成した家庭になるのです！　アーメン！　アーメン！　アーメン！　そのような家庭を完成することに自信があるという人は手を挙げて誓いましょう。そうです。万歳！　万歳とは何かというと、すべてのものが億万年まで「万事亨通」（注：万事滞りなくうまくいくこと）ということです。永遠に継続するという意味です。

「ため」に生き、また「ため」に生きようとする人が中心存在になるのです。間違いありません。家庭において孝子とは何かというと、父母のために生きる人です。そのように生きれば、その家庭の中心存在になり、家庭の相続を受けるのです。愛国者も同じです。国王のために生き、国のためにすべてを投入して、投入して、犠牲となり、もっと犠牲になろうとするならば、国の責任を負うことができる人になるのです。そのような人が大統領や首相になるのです。そのような人が必ず中心存在になります。

ですから、私の良心は「そこまで行きなさい」と言うのです。「家庭では孝子になり、国家では忠臣になり、世界では聖人になり、さらには、天地において聖子の道までも行きなさい」と教えてくれるのです。

家庭で心安らかに暮らす人々は間抜けです。家庭天国の垣根の中にしかとどまることができません。必ずそのようになるのです。それで、代表的家庭となり、中心的家庭とならな

ければならないというのです。孝子、忠臣、聖人、聖子の道理は、私が行く道です。私が必然的に行かなければならない道です。それゆえに、家庭では孝子にならなければなりません。その次に、国では忠臣です。忠臣というものは、生まれつきその道理を外れることがありません。夜でも昼でも焦点を合わせていかなければなりません。一生の間、先生は、み旨という焦点を失ったことがありません。寝ても覚めても、布団から起きれば続けます。千年、万年続けるのです。

家庭で本物の孝行をする人は、国の忠臣の道と直通するのです。国に本物の忠誠を尽くす人は、聖人の道と直通するのです。それを知らなければなりません。道は一つです。二つではなくて、一つです。ですから、結論は何かというと、家庭において父母を絶対的に愛していこうという道が孝子の道であり、国のすべての国民と主権者を絶対的に愛していこうという道が忠臣の道です。

私たちが正しく行動すれば、国が生きるのであり、私たちが正しく行動できなければ、国が滅びるのです。私たちが正しく行動すれば、世界が生きるのであり、私たちが正しく行動できなければ、世界が滅びるのです。歴史時代のいかなる家庭とも比較にならず、天情を中心として団結した家庭、そして孝子、忠臣、烈女を中心として団結した家庭とも比較にならない、そのような千人、万人の前に模範となり得る驚くべき家庭のモデルを、統一教会が提示しなければなりません。

男女を問わず、愛国愛族する人にならなくては、天国の民となることはできません。サタン世界の忠臣以上の位置に統一教会の男女が立たなくては、天国の民となることはできません。サタン世界の孝子以上の位置に行かなくては、天国家庭の食口になることはできないのです。統一教会では「食口」と言うでしょう？　サタン世界の孝子、孝女以上の因縁から脱け出て、それ以上にならなくては、「食口」という名で呼ぶことはできないのです。

忠臣も、一人でなるのではありません。統一教会でいう忠臣は、一人でなることはできません。家庭を成した夫婦であってこそ忠臣になることができるのです。それゆえに、皆さんは、忠臣という立て札を立てるためには、孝子を生まなければなりません。

今日、国家では個人を表彰しています。忠臣烈女や孝子孝女を表彰しているのですが、これは、あくまでも個人を表彰しているのであって、家庭を表彰しているのではありません。今まで、家庭を中心として表彰した国家はありませんでした。同じように宗教においても、家庭の構成員を目標としてきた宗教はありませんでした。

真の孝子、本物の孝子に対する父母は、王様よりももっと難しいのです。言葉一つにも注意し、行動にも注意するのです。それはなぜでしょうか。家庭において王様に侍ることができることを見せてあげなければなりません。そのように侍ろうとすれば、息子、娘も父母に対する時、いい加減に対することができないのです。子女を敬って丁寧に対する父母にその子女たちが対する時、どれほど大切に思いながら侍るでしょうか。一言でもいい

加減に言うことができないのです。何度も考えてから言うのです。

「家庭では孝子になりなさい」と言うでしょう？　孝子になって何をするのでしょうか。「孝子になりなさい」と教える父母は、みな自分の利益のためにそのように言うのだと思うかもしれませんが、それは違います。「父母の愛の上にあなたの愛をプラスさせなさい！」。このようになるのです。そのようになってこそ球形が生じるのです。大きくなるのです。運動する存在は、すべて大きくなるでしょう？　運動すると、なぜ大きくなるのでしょうか。すべて愛というものを中心として作用するので、大きくなっていこうとするのです。

人の夫になり、人の妻になるということは簡単なことではありません。息子、娘は、自分の息子、娘ではありません。この世界の息子、娘です。世界の息子、娘の父母になるということは簡単なことではありません。また、先生になることは、簡単なことではありません。また、そのような父母の前に孝子孝女となることは、簡単ではありません。それゆえに、家庭において完全に「ため」に生きる訓練を、祖父母から、父母から、夫婦から受け、自らの息子、娘にもそのようにし、「ため」に生きることができるモデル的形態の家庭を築くようになれば、その家庭は天上世界のどこに行こうと、どの国、どの村に行こうと歓迎を受けるのです。

聖書に「生きようとする者は死に、死のうとする者は生きる」という言葉があります。ろくでもない者たちが死ぬことを言っているのではありません。忠誠を尽くして孝子、忠臣、烈女になった立場においても生命を捧げて死のうとする基準の人々や、堕落した世界の孝子以上、堕落した世界の忠臣以上になった、そのような天の側の人を中心として言っている言葉です。そのような人々が、その立場に立っても生命を捧げようとする時は生きるというのです。地獄のどん底にいれば、生命が何百個、何千個になっても、神様とは関係ありません。露骨に言えば、そのような意味のみ言になるのです。

神様が救援摂理を行う理想には、そこからすべて区別しなければなりません。その中には、神様のためにすべての生命を捧げて感謝することができる、特別な何かがなければなりません。アダムとエバの背反的な歴史の基準を越えなければなりません。それを知らなければなりません。神様が現れなければ、堕落する以前のアダム、その人類の先祖以上に神様が現れることを願いながら、御飯を食べずに、寝ないで待つことができる、心情的に孝子、忠臣、烈女以上の位置に入っていかなければなりません。

孝子は地獄には行きません。地獄に行かなければならない場合には、再臨主が来られる時まで保留されるのであって、地獄には行きません。中間霊界というものがあるのです。皆さんは、孝子になろうと思いますか、愛国者になろうと思いますか、聖人になろうと思いますか、聖子になろうと思いますか。父母に孝行しなくても、愛国者になった場合には、父母への孝行を完成したものの上に立つのです。

統一教会で忠臣になるのならば、世の中にいない忠臣になろうと思いますか、世の中にいる忠臣になろうと思いますか。孝子になるとしても世の中にいない孝子、忠臣ならば歴史にいなかった忠臣、聖人ならば歴史にいなかった聖人、聖子ならば歴史にいなかった聖子の道理を果たしてこそ、神様に侍ることができるのです。このように悔しく無念な恨がエバの一日の失敗によって生じるようになったのです。これを知る時、今日私たちが統一教会において血統を転換し、所有権を転換し、心情圏を転換するためにどれだけ深刻にならなければならないか、ということを知らなければなりません。

真の愛を中心とした対象となり、御自身よりも何千倍も優れていると言うことができる愛の相対を迎えるようになれば、神様は、自動的に解放されるのです。それゆえに、孝子の中の孝子、烈女の中の烈女、忠臣の中の忠臣、聖人の中の聖人、聖子の中の聖子にならなければならないという事実を知らなければなりません。そのようにならなくては、神様を解怨することはできません。それ以上にならなくては、解放することができないのです。

イエス様に従っていったとしても、楽園にしか行けません！　独身生活するのです。ほかの宗教では、すべて「出家をしなさい」と言い、「独身生活をしなさい」と言いますが、統一教会では何でしょうか。「出家しなさい」と言いますか。「故郷へ帰りなさい」と言うのでしょう？　そして、「結婚しなさい」と言うのでしょう？　反対です。どのような理由で、そのようにするのでしょうか。宗教は必要ありません。宗教を克服した位置に立ったのです。

天国の孝子になり、天国の忠臣になり、国をもって忠臣になり、国をもって聖子の道理を果たさなければならないのですが、アダムはそれを成すことができなかったのです。先生の恨は何かというと、青春時代の血気旺盛な時代に孝子の道理を果たすことができなかったことです。時を逃したのです。また忠臣の道理を果たすことができなかったのです。国が生きることができるならば、いかなる冒険を冒してでも先頭に立ち、愛国者としての血を流しながらも感謝することができる、その道を歩んでみることができなかったのです。

なぜ私は、歴史をつづりながらこのような衝撃的な宣言と刺激的な話をするのでしょうか。これが神様の事情なのです。その事情は死んでいません。胸に積もり積もった恨を、いまだに解くことができずにいるのです。真の御父母様の胸に積もり積もった恨を、解くことができないでいるというのです。青春時代において、神様の前に孝子の道理を守ることができなかった真の御父母様の恨！　国をもつことができずに忠臣の名誉をもつことができなかった恨！　万国を代表して聖人の道理を果たすことができなかった恨！　天と地の勝利の覇権を備えて包括することができず、神様を解放して聖子の道理を果たすことができなかったその恨！　このような恨が残っているのです。

孝子、愛国者、聖人、聖子、これらがなぜ必要なのでしょうか。父母に孝行したといっても、長くても百年くらいです。ずーっとすることはできません。父母は、千年、万年生きることはできません。生涯孝行しても、百年未満です。しかし、愛国者は一代を越える

のです。愛国者の伝統は、祖父母から父母、自らと自らの子孫にまで相続されるのです。そうでなければ、国が成り立ちません。聖人の思想は、愛国者を超越するのです。宇宙全体を愛した上で生きなければなりません。ですから、聖人の道は、愛国者の道を超越し、聖子の道は、聖人の道を超越して最高の位置に立つのです。地上天国と天上天国の法律、その両国の法律をすべて尊重し、内外の縦横の関係を維持しているのです。

真の御父母様は、どのようなお方かというと、家庭においては歴史始まって以来初めて現れた孝子であるということを、皆さんは知らなければなりません。天国においては、一人の忠臣と同じ位置、代表的な忠臣の位置に立っているのです。それから、聖子の道理を果たした聖子の位置に立っています。それゆえに、今皆さんがもたなければならないものは、真の御父母様の思想です。

息子として、孝子として、忠臣として、聖人、聖子の道理をすべて経たように、皆さんもそれと同じ伝統を真の父母に従って受け継ぎ、全世界のたった二人の息子と娘であるという心情をもたなければなりません。世界を代表した息子と娘の位置に行き、真の父母によって祝福を受けたという事実は相対圏を許されるということです。そして、祝福家庭は、先生の家庭と生活を共にしたという心情的体恤圏をもたなければならないということを皆さんは知らなければなりません。

東洋哲学の「三綱五倫」を中心として見れば、五倫の中には「父子有親」というものがあるでしょう？　有親が良いのですか、一身が良いのですか。父子有親とは何ですか。血筋が一つになっており、愛の根と幹が連結しているのですから、父子有親ではなく、父子一身です！　そして、夫婦一身です。それから、何でしょうか。「君臣有義」です。君臣は有義ですか。君臣一身です。何をもってですか。愛をもってです。それゆえに、家庭において、愛を中心として絶対的に「ため」に生きることができる中心存在は、孝子だというのです。国を中心として見るときも、絶対的に「ため」に生きる愛をもって王様のために歩んでいくようになれば、その人を忠臣というのです。

(2)聖人と聖子の違い

聖人と聖子の異なる点は何でしょうか。聖子とは、堕落していない本然的アダムとエバが、神様の愛を中心として、神様の生命体として、神様の血統として一つに結ばれた位置から出てくるものです。神様の息子、娘の血統を受け継いだ位置から聖子が出てくるようになっているのです。しかし、聖人はそうではありません。ゆえに、堕落した世界には聖子がいないのです。聖人までは出てくることができます。今まで、聖人たちは、外的な相対的世界の道理は教えてくれましたが、内的な主体的な道理は教えることができませんでした。なぜでしょうか。父母が現れず、聖子が現れなかったからです。父母と聖子の道理を植えつけるものが再臨の思想です。それがメシヤ思想です。

この世の聖人の中で、最も中心の聖人は誰でしょうか。イエス様です。イエス様の血統は、既に腹中にいる時から聖別されていたので、サタンのどのような条件にも引っ掛かり

ませんでした。神様を中心として、神様の愛によって身ごもったその赤ん坊は、最初の真なる愛の結実体です。したがって、そのお方は、偽りの愛とは関係がありませんでした。そのような聖子として生まれた方は、イエス様以外にはいません。釈迦牟尼もそのような人ではありません。マホメットも、孔子も違います。しかし、イエス様は、心情圏を中心として神様のひとり子になるのです。

歴史時代において、血統を清めて最初に生まれた息子がイエス様です。したがって、神様の前において、その息子は長子であり、ひとり子となるのです。宗教圏において、このように血統を清めて生まれた聖子は、イエス様しかいないので、「聖子」と言うことができるのです。

イエス様は聖人の中の聖人です。初めて血筋を清めることによって、初めての愛の先祖になることができたのです。

イエス様は、神様の愛を中心として、国家的基準で生まれた血統を転換させた、神様の第一号の息子であり、ひとり子です。有史以来、そのように血統を清めて生まれた聖人はいません。孔子であろうと、釈迦であろうと、マホメットであろうと、誰であろうと、そのような伝統的な背後の血統を清めて生まれたお方は、イエス様お一人しかいません。

イエス様は、ひとり子の聖者であり、聖人の中の聖人です。イエス様は、真の愛を中心とした一代目の先祖です。

世界的な人物になるためには、どのようにしなければならないのでしょうか。人倫道徳だけを中心としては、そのような人物になることはできません。人間のみを中心としてはなれないのです。人間のみを中心としては、国を越えることができません。国を越えることができる内容は、天にあるのです。天宙思想をもつことなくしては、国を超越することはできません。それゆえに、聖人たちは、人間だけを紹介したのではなく、神様を紹介したのです。聖人の列に加わった人々を見れば、その人たちは、神様を崇拝しましたか、しませんでしたか。神様を除外して聖人になった人はいますか。また、聖人たちは、人倫の道理のみを教えてくれたのではなく、それとともに天倫の道理を教えてくれたのです。

聖人の道理とは何でしょうか。世界の人々に生きることができる内容を教えてあげることです。自らの国の民のために生きる人は忠臣です。自らの家庭のために生きる人は孝子です。神様は、孝子よりも、忠臣よりも聖人を好まれるのです。聖人の中でも最高の聖人がいるとすれば、その最高の聖人は救世主となるのです。皆さんは、それを知らなければなりません。統一教会は、この道を行かなければなりません。

忠臣は、一つの国における忠臣ですが、聖人というものは、国家を超え、万民を超えて、万世に栄光の基台を築き、万国の解放圏をつくり、自らが勝利したすべての栄光を与えても、もっと投入しようとする人です。そのようになる時に聖人の道理となるのです。五色人種を超え、文化背景やすべての階級を超え

て、投入して、投入して、また投入しながらその平等的価値を追求していく人が聖人です。

聖人とは、国境を越えて世界の人を愛する人です。したがって、聖人の道理は人種を超えて世界を収拾していくのです。

聖人とは、どのような人でしょうか。家庭を捨ててでも天と世界のために生き、国を捨ててでも天と世界のために生きる人が聖人です。それでは、どのような人がより大きいのでしょうか。孝子よりも、国のために生きる忠臣のほうがより大きく、国のために生きる忠臣よりも、聖人のほうがもっと大きいのです。皆さんは何になろうと思いますか。

「聖子」と言えば、神様の息子のことですが、聖子は、神様はもちろん、天と地を愛そうとされるのです。天と地の愛の圏だけではなく、天国の王宮法まで愛そうとされるのです。聖子は天国の王子なので、天国の王宮法も守り、地上世界の王宮法もすべて守らなければなりません。その上で天国の王孫たちも愛し、天国の民たちも愛し、地上の国の王孫たちも愛し、地上の国の民たちも愛さなければならないのです。

そのようにして、二つの世界の宮殿と、二つの世界の民を愛することができるようになる時に、神様の息子であるというのです。神様の息子は、この地上の民も必要であり、この地上の王族たちも必要であり、あの世の民も必要であり、あの世の王族も必要とするのです。そのようになってこそ聖子になるのです。

宗教の出発は、どのようになされたのでしょうか。聖人たちがすべて宗主となっています。宗教の主人になっているのです。この人たちが精誠を尽くし、道を通じて神様の教訓を受けることができる位置から出発したのです。しかし、より高い位置に上がっていくようになってからは、徐々に世俗化されていってしまったのです。

それゆえに、世界が混乱する中にあるこのような時に、本質的で明確な内容をもって正しい道へと指導することができる宗教体制がありません。ブロック的な体制はありますが、世界全体をカバーして収拾することができる宗教がないというのです。宗教も実験済みです。すべて実験済みです。政治も実験済みであり、すべての思想も実験済みであり、すべて失望的な帰着点に到達しました。今はもう、進んでいこうとしても進んでいくことができない限界線にぶつかっています。

今まで、神様が共に暮らすことができる家庭がなく、国がなく、世界がなかったということは繰り返して言うまでもありません。皆さんは、常にこのような概念をもたなければなりません。私自身においても、神様が共に生きることができず、家庭においても生きることができず、国においても生きることができず、世界においても生きることができなかったのです。そのような神様を再びお迎えし、堕落した世界のいかなる孝子、いかなる忠臣、いかなる聖人、いかなる聖子よりも、高い位置において神様に侍って生活しなければならないという、そのような信仰のモットーを強化しなければなりません。

「聖人」といえば、世界人類を愛する人々です。今まで、宗教指導者たちが聖人になってきましたが、聖人の中でも大聖人は誰かという時、人類のために血を流し、いくらでも命を投げ出そうとすることができ、それを続けてきた人が聖人の中のナンバーワンであるという論理が成立するのです。そのような意味で、歴史を通じてキリスト教が数多くの血を流してきたので、キリスト教が第二次大戦以後に世界を統一したのです。

私たちは、命を投げ出して生きているのです。既に覚悟した体であり、天の前に誓った体です。ゆえに、たとえ客死する運命であっても恨みはありません。神様がその場に訪れてこられて、私の体を引き取ってくださることができる孝子となり、国王が訪れてこられて、その場を整えてくれる忠臣になったとすれば、またそのような聖人になり、聖子になったとすれば、それ以上の幸福はありません。

そのようになれば、倒れたその場所は名勝地になるのです。天下の万民を蘇生させることができる祝祭の基台となり、記念の基台となるのです。そのような悲しい場所によって、数多くの後代の若者たちが新しく生まれ、その国を身代わりして活火山のように爆発するのです。そのような材料を統一教会はたくさんもっています。

歴史は、何を通してつづられてきたのでしょうか。堕落した世の中であっても、人倫道徳を中心としてつづられてきたのです。その道徳の中心は何でしょうか。愛です。父母の前における孝子とはどのような人かというと、父母をより一層愛する人であり、国の前における忠臣は、より一層国を愛する人です。そして、国を越えて世界の前に愛を教えようとするのが聖人の道です。世界を自らの家庭よりも、自らの国よりも愛そうとするのが聖人の道理です。聖子の道理は何かというと、天と地のすべての法よりも、王宮法を中心として「最高の愛を実践しなさい」と言うのが聖子の道理だということを知らなければなりません。

アダムが堕落しなければ、家庭の王であり、氏族の王であり、民族の王であり、国家の王であり、天地の王になっていたのです。堕落した人間世界ではありましたが、この道理を備えるために孝子を育ててきたのです。忠臣を育ててきたのです。聖人を育ててきたのです。聖子を育ててきたのです。

(3)人間が行かなければならない真の道

人間が願う最高の願いも、愛を通じた願いです。神様の願われるすべての願いも、愛を通じた願いです。神様がもし孝子の位置にいるとすれば、父母のための愛を通じた孝子を願うようになるのです。夫婦をもったならば、愛を通じた夫婦、また愛を通じた父母、このようなことを願うようになるのです。

自らの体を燃やして犠牲になっていく所に、家庭の光が現れるのです。それを孝子といい、国のために全国民が犠牲となって光を発するところに国の忠臣が現れ、そして、世界の聖人、天地の聖子が現れるということを知らなければなりません。

心と体が一つになり、全宇宙のために生きることのできる人は、宇宙の中心存在になる

ということを知らなければなりません。「孝子」と言えば、家庭において、父母に対してより「ため」に生きる人が孝子になるのであり、国において、国王と民に対してより「ため」に生きる人が愛国者となり、世界を中心として、より「ため」に生きる人が聖人となるのです。そして、天地を中心として、より「ため」に生きる人が神様の息子になり、聖子になることができるのです。

孝子というものは、父母に面倒をかけるのではありません。父母に面倒をかけさせるのです。忠臣とは、国に面倒をかけるのではなく、国に面倒をかけさせる人です。聖人は、世界に面倒をかけるのではなく、世界に面倒をかけさせる人です。また、天地の前に面倒をかけるのではなく、面倒をかけさせることによって聖子の道理を果たすということを知らなければなりません。

今や世界は、真の御父母様を中心として動くことができる時になったのです。世界途上においてサタン世界の孝子、サタン世界の忠臣、サタン世界の聖人、サタン世界の聖子の道理はありましたが、天国を中心とした孝子と、忠臣と、聖人と、聖子の道理、標準はありませんでした。それを私たちが創建しなければならないということを皆さんは知らなければなりません。

皆さんの家庭は、天と地を与えて買った以上の価値をもっているということを知らなければなりません。皆さんの祝福家庭の価値が、これほど途方もないものであったという事実を知らなかったでしょう？　けんかをしたり殴ったり、このようなことをしてはいけないのです。この途方もないものが、地上において天国を代表した孝子の基盤をつくるのであり、忠臣の基盤をつくるのであり、聖人の基盤をつくるのであり、聖子の基盤を経ていくことによって、神様がアダムを中心として願われた理想世界になるのだということを知らなければなりません。

真の御父母様は、そのような立場に立っているので、あの世に行き、孝子たちに対する中心のプラス、すなわち主体になるのであり、忠臣の主体になるのであり、聖人の主体になるのであり、聖子の主体になるのです。皆さんの父母の理想、皆さんの国の理想、忠臣の理想、聖人たちの世界理想、天と地の理想、そしてイエス様が願われた願いを皆さんの一身で蕩減することによって、解放が成されるのです。これが建国理想であり、建国理念の中心であり、一番の基調となるのです。

聖子になってくれることを誰が願うのですか。神様が願われるのです。聖人は、誰が願うのでしょうか。世界が願うのです。国は、何を願うのかというと、忠臣を願うのです。家庭は、孝子を願うのです。まさしくこれが真なる真理の道です。真なる父母がいるとすれば、「あなたは孝子になったので忠臣になってはいけません。忠臣の道を行ってはなりません」とは言いません。

真なる父母は、その孝子に「あなたは家庭を犠牲にし、忠臣の道を求めて国に仕えなければならず、聖人の道理を果たさなければならず、聖人の道理を犠牲にして天が願われる道を行かなければならず、天地を犠牲して神様を探し求めていかなければならない」と教えてあげなければなりません。このような概念があるということを知らなかったのです。投入して犠牲にならなければなりません。そ

のようにしなくては、一つの世界、一つの国は永遠に現れません。

理想的な人間、人間構成、人格の完成において必要となる、孝子、忠臣、聖人、聖子のような前進的なものを教えてあげなければなりません。自らの息子に「孝子、忠臣、聖人、聖子の道理を果たし、最後は神様まで行かなければならない」ということを教えてあげなければなりません。そのように教える父母がいるとすれば、神様が御覧になるとき、「いやあ、あの人は父母の役割を果たしている。あの人は先生の役割を果たしている。あの人は主人の役割を果たしている」と思われるでしょうか、思われないでしょうか。

「あなたには父母の資格があり、先生の資格がある」と言われる時は、主人の資格があるのであり、さらには、王になることができる父となるのです。西欧の人々に孝子という概念がありますか。忠臣の概念がありません。聖人の概念がありません。聖子という概念がないのです。ですから滅びるのです。

皆さんは、神様よりも優れた者になりたいという欲望をもっているでしょう？　そのような欲望をもっているでしょう？　そのようになることはできるのです。嘆き悲しんでいらっしゃる神様を慰労する孝子であれば、神様を慰労することができるように、神様よりも次元が高くなくてはならないのではありませんか。泣いていらっしゃる神様を慰労しようというのに、神様よりも劣っていて神様を慰労することができますか。そうではありませんか。理論的なのです。

そのようになることができる世界が、今後、迎えることができる私たちの永遠なる本郷の地なのです。行きたいですか、行きたくないですか。頑固な性格では行くことはできません。東西南北に通じることができません。平面上の三六〇度も通じることができないのに、どうして縦に三六〇度回ることができるのですか。「東西が軸になり、反対に三六〇度回りなさい」。このような自由自在に行くことができる立場になっていないではありませんか。

家庭完成、親族完成、国家完成、世界完成、天宙完成、神様解放までです！　神様を救ってあげなければなりません。親不孝者を迎えた父母の心を解放するためには、孝子の中の孝子にならなければなりません。神様はかわいそうな神様であることを知らなかったのです。無念でかわいそうな事情を抱えてきた神様が私たちの父であったということを思うとき、千年、万年痛哭し、地を這ってでもその涙を止めることができる悲運をもって生きる孝子の道理を守らなければならないのが、今日地上で救いを受けなければならない人々の責任であるということを知らなければなりません。深刻なのです。このようなことを誰が教えてくれるのですか。

苦労の道から出発し、苦労の生涯で終わったとしても、いかにして神様の心情を解放してさしあげ、いかにして神様のために生きる立場に立つかということが、孝子として天に向かう、天の子女が取るべき態度です。天国に対して、先生は、そのようにして愛国心を残したいのであり、聖人が完成させることのできなかったその世界を、聖子の名をもって完成圏に移行させたいのです。先生は、そのように真剣です。

神様が自分を御覧になって勇気をもたれ、悪なる世界を倒そうと思いながら進み出る、そのような神様になられるとすれば、その瞬間から、神様の活動舞台が自分によって生じるのです。それは、自分にとって、ある貴い立場や玉座、また栄光の立場において、一生ではなく何世代にもわたって、それ以上のものをプラスしても及ばない喜びの 賜 です。「自分は、歴史を越えてまでも、迫害に対して立ち向かっていこう」と思うのが、永遠の歴史を代表した孝子、孝女が行くべき道ではないかと思うのです。それが永遠の国に対する忠誠の道ではないですか。

人間がいなければ、神様は愛から解放されません。父母は、孝子を迎えることによって、心情世界が解放され、王は忠臣、また聖人は今後の世界の大統領、そして神様も、聖子が孝子の道理で愛の対象者としてすべてを成して、初めて解放されるのです。そのような意味です。驚くべき言葉です。

先生は、一生の間、不平を言うことができませんでした。批判してみることができませんでした。孝子の道、忠臣の道は、不平がありません。批判というものはあり得ません。完全な主体の前に、愛の関係を結んだ以上、不平や批評をすることはできないのです。夫が過ちを犯せば、すべて自分の過ちです。私の過ちです。妻が過ちを犯しても、私の過ちであるということを知らなければなりません。「私は、あなたが嫌だ」と言ってはいけないのです。

神様の前に、孝子の表札を掛けることができませんでした。孝子は忠臣となり、忠臣は聖人となり、聖人は聖子とならなければなりません。天上世界と地上世界の統一のための家庭を中心として、聖子の道理が地に埋まっています。初臨のメシヤであるイエス様が来られ、「小羊の婚宴」を中心として祝福できる世界が現れなかったので、先生の時代にこれを表面化しなければなりません。

なぜ神様は、これほどまでに孝子を好まれ、愛国者を好まれ、聖人を好まれ、聖子を好まれるのでしょうか。それは、宇宙の核だからです。宇宙の核です。孝子は一代先祖であり、忠臣は二代先祖であり、聖人は三代先祖であり、聖子は四代先祖です。三段階です。段階から見れば、三段階を意味します。これが愛によって連結されるのですが、「ため」に生きる一方通行の愛の天理を中心として、理想圏が動くようになっているのです。

真の愛とは何でしょうか。真の血統とは何でしょうか。真の生命とは何でしょうか。神様が真の血統であり、真の生命であり、真の愛であられるとするならば、神様は何をされたのでしょうか。自らを投入して新しい理想的な世の中をつくろうとされたのです。ゆえに、人間が理想を探し求めていくためには、家庭ならば家庭において、自らのすべての生命と血統と愛を投入しなければなりません。家庭のためにそのように生きる人が孝子になるのであり、国のためにすべてを投入する人が忠臣になるのであり、世界のためにすべてを投入する人が聖人になるのであり、天地のためにすべてを投入する人が聖子になるのです。さらに進んで、天地と世界と国家と家庭全体を一つにして率いていくことができるお方が神様であられるのです。

一日の生活は、天と同行するものでなければなりません。天が私の中に入っており、世界が私の中に入っており、国が私の中に入っており、家庭が私の中に入ってきていなければなりません。何を中心としてですか。孝子の愛、忠臣の愛、聖人の愛、聖子の愛、神様の愛を中心としてです。ですから、愛を中心として父母を思い、国を思わなければなりません。

どのようなことをより一層思わなければならないでしょうか。父母よりも国のことを思わなければなりません。国よりも世界のことを思わなければならず、世界より天のことを思い、この全被造世界よりも神様のことを思わなければなりません。神様の愛が最も大きいので、ここにそれよりも少し小さな世界の愛が入っていくことができるのです。それから、愛の国もいくらでも入っていくことができます。

今後、個人別に実績の統計を出す計画です。真の父母と成約時代の安着とは何ですか。さまよい歩いていた天が、すべて帰ってきて、そこで生活をしなければなりません。その国で生活をしようとすれば、税金を納めなければなりません。そのような忠臣が必要であり、孝子が必要です。家庭には孝子が必要であり、国には忠臣が必要なのです。忠孝の道がすべての国家形成の基本ではありませんか。自分は飢えるような困難なことがあっても、また死ぬようなことがあったとしても、天に侍り、国を滅ぼしてはいけないのではありませんか。

人間に必ず必要なものは、孝子の道理、忠臣の道理、聖人の道理、聖子の道理です。堕落したので、聖人が必要なのです。聖子の道理を完成するのです。それゆえに、神様のすべての相対圏は、私から、天から、世界から私たちの家庭にまで連結することができるのです。それがこの世で生きている間に成し遂げなければならない道です。完成する道です。

このような言葉を初めて聞いたでしょう？このような話は、具体的にはアメリカでのみしてあげたのであって、ここでは初めてです。ですから、孝子にならなければならず、忠臣にならなければならず、聖子にならなければなりません。自分がどこにありますか。自分というものがありますか。母の骨と父のものしかありません。国でいえば、王様は父と母の骨です。そこに接ぎ木されて大きくなろうとするのです。私が家庭をもたなければ、国の前に立つことができないので、家庭も国の前に……。サタンの国の前には破綻させられるのです。国が必要ですか、必要ではありませんか。

愛は、自分を主張するところからは徐々になくなり、逃げていきます。「ため」に生き、より「ため」に生きるならば、ますます大きくなっていくのです。それゆえに、真の人は「ため」に生きるところから存在するのです。真の夫も「ため」に生きるところから、真の父母も「ため」に生きるところから、真の孝子、真の王、真の国家も、「ため」に生きるところからのみ存在するのだということを知らなければなりません。

三　家庭盟誓第三節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、四大心情圏と三大王権と皇族圏を完成
することをお誓い致します。

一) 四大心情圏と

(1)人間の完成は四大心情圏の愛の完成である

「家庭盟誓」の三節は、堕落していない本然の世界のことを語っています。本然の世界に帰るのです。幼児が成長したのちに結婚をするということ、これは、夫婦の位置を尋ね求めていくことであり、父母の位置を尋ね求めていくことです。神様と一体になる位置を尋ね求めていく道です。四大心情圏の完成は、人間完成に向かって私が行かなければならない道です。

人間が神様を中心として結婚し、初愛を結ぶ位置は、すべての完成の結実点であり、中心となります。したがって、結婚は、天地人の合徳であり、縦横、前後、左右、全体を完成することです。結婚は、真の子女、兄弟、夫婦、父母理想の真の愛の完成地です。アダムとエバの夫婦は、神様が最も愛する実体対象である第二先祖であり、第二創造主の立場です。そして、そのような立場は、第一神様が第一創造主として感じるすべてを相続し、子女、兄弟、夫婦、父母の位置を神様の代身として喜びを感じながら体恤するためのものです。

ここにおいて神様は第一創造主であり、アダムとエバは第二創造主、そしてアダムとエバの子女は第三創造主の立場となるのです。第一、第二、第三創造主、すなわち神様とアダムとエバとその子女は、四位基台を中心とした公式的な範疇となり、すべての人類が従わざるを得ない存在の根本原則となるのです。

結婚の初日、すなわち結婚して愛の関係を結ぶその位置が中心の位置です。結婚して初愛の関係を結ぶ、凹凸が一つになる位置です。初愛の男女が関係するその位置から子女の愛が完成されるのであり、兄弟の愛の目的が完成されるのであり、夫婦の愛の目的が完成されるのであり、父母の愛が出発するようになるのです。四大心情圏が一つになる位置です！　それを考えてみたことがありますか。兄弟の愛が完成する位置、夫婦の愛が完成する位置、それから父母の愛が始まる位置です。

アダムの完成、エバの完成が成されれば、アダム自体は息子の完成者となるのです。神様の心情をもって愛を受けることができる完成した息子、また、天の父母と天の子女の心情を中心として兄弟の因縁を備えた立場から兄として完成した人間となるのです。それゆえに、ここまで上がってきた時、父母と父子の関係の愛を中心として、常に一つになっている代表的な兄となるのです。ですから、創造理念とは、兄の心情の完成であり、それから新郎の心情の完成です。四大心情圏を知っているでしょう？　新郎の心情を完成し、父としての完成の位置まで行かなければなりません。父として完成する位置で相対理念を成し遂げなければならないのです。

四大心情圏を知っているでしょう？　結婚する瞬間、初愛が結ばれるその瞬間は、息子、娘の完成であり、兄弟の完成であり、夫婦の完成であり、未来の父母の完成です。四大心情圏完成の焦点となっているのです。そこから爆発するのです。そこから種となって蒔かれるのです。それゆえに、自分の妻は自分の妹です。双子としての神様の息子、娘です。妻は天国の王女であり、自らは天国の王子で

す。アダムとエバは天国の王子であり、天国の王女です。

このようになった家庭は、どのような家庭ですか。神様は、おじいさんの立場です。アダムは、現在の家庭を代表しているのであり、息子、娘は、未来です。

神様は過去の象徴であり、父母は現在の象徴であり、息子、娘は未来の象徴です。このような愛の理念を中心として、一つの家庭で四大心情圏と三大王権が展開しなければならないのです。この心情圏が完成すれば、どのようになるのでしょうか。神様が地上の表面に現れ、家庭において祖父の立場に立たれてその家庭を統治され、天上天国と地上天国を一つにして完成することができるようにするのです。それで、繁殖した子女たちは、二つの国の相続者として連結されるのです。

真の愛には、最初は子女完成があり、二番目は兄弟完成があり、三番目は夫婦完成があり、四番目は父母完成があります。これを延長したものが男性と女性であり、兄弟であり、夫婦であり、父母です。このすべての家庭を一つにしたものが世界となり、天国となるのです。目に見えない神様を実体として完成した四大心情圏を備えるようになれば、どの家庭にも息子、娘がいて、兄弟がいて、夫婦がいて、父母がいるのです。同様に、どの社会に行っても、そのような形になっているのです。

人間は、誰もが父母、夫婦、兄弟、子女の、この四大原則の中で生きるのです。人間の息子、娘である以上、誰もがこの過程を経なければなりません。誰かの娘にならなければならず、誰かの息子にならなければなりません。息子、娘が大きくなって兄弟となるのです。兄弟は何になるのでしょうか。母と同じように、また父と同じようになるのです。アダムとエバも兄弟であり、夫婦となり、そして父母になるのです。同じです。

ですから、妻というものは妹です。エバは妹です。夫は兄です。そして、神様の前には息子、娘です。神様の息子、娘として、男性は男性の行くべき道があり、女性は女性の行くべき道があります。学校を経て、男性の道理、女性の道理を果たし、父母に似ていくのです。父と母と同じように結婚するのです。

人間は、誰もが息子、娘として生まれ、兄弟として大きくなり、夫婦となって父母になっていくのです。これは、人間において必然的な公式過程です。これを経ることができなかった人は、あの天上世界に行って不幸なのです。夫の愛を知らない人、父母の愛を知らない人、また兄弟の愛を知らない人、子女の愛を知らない人は、神様の近くに行くことができません。ですから、統一教会では、四大心情圏を主張するのです。

「家庭盟誓」の三節とは何でしょうか。天国のテキストブックです。アダムとエバが完成し得なかったものが四大心情圏です。息子の完成の終着点、兄弟の完成の終着点、夫婦の完成の終着点、父母の完成の終着点が結婚生活です。結婚生活をして神聖な息子、娘を生まなければなりません。それが結実です。父母が子女を愛することは、千年、万年変わりません。

結婚した夫婦の位置というものは、とてつもない位置です。歴史時代において人類が望

んできた子女としての希望峰が花開く位置であり、兄弟として花開く位置であり、夫婦として花開く位置です。そして、夫婦として愛した神様が創造を始められたように、息子、娘を生むことをもってアダムとエバが創造を開始するのです。それで、実体的創造主の立場となり、私を中心として平面的創造主の立場から息子、娘を生むのです。

夫婦の位置は、神様の家庭において子女が一つになった位置であり、兄弟が一つになった位置であり、夫婦が一つになった位置であり、父母が一つになった位置です。四大心情圏を中心として見る時、夫婦の位置は自分を完成させてくれる絶対的な位置なのです。

したがって、夫は、妻に理想的な神様の息子を迎えさせる位置であり、天の兄を迎えさせる位置であり、天の夫を迎えさせる位置であり、天の父を迎えさせる位置なのです。そして、妻も、夫にとってこれと同様の位置に立つようになるのです。

このような夫婦は、神様が体恤されたのと同じように、子女を生み、その子女を通して自分たちが成長してきたすべてのことを、実体的に体恤することによって喜びを感じるようになるのです。

結婚して夫婦が真の愛をなす位置は、神様と人間の愛と、生命と、血統の根源となる王宮の位置であり、理想のための地上天国と天上天国の出発地です。このような真の愛によって結実した子女は、真の愛を中心とした夫婦一体を完成し、神様に侍って暮らす家庭となり、平和と理想の出発基地になるのです。そして、半分である男性と女性は、一体となって神様の相対となり、神様の理想愛を完成させるようになるのです。

すなわち、真の愛を中心として、神様が人間を無限な価値者として完成させることによって、神様もその真の愛の完成を御覧になって、神様の創造理想である永遠の理想愛が宿る家庭理想を立てて、理想世界を完成しようとされるのです。

いくら優秀な男性であっても、愛というものは独りで成すことはできません。それゆえに、自らの家庭で四大心情圏を完成しなければならない、ということを教えてあげました。世界平和は簡単なことです。心と体が一つになり、夫婦が一つになり、父母と息子、娘が一つになれば、すべて終わるのです。天下は統一されるのです。天国は、そこから始まるのです。平和な世界も、そこから出発するのです。

子女の心情、兄弟姉妹の心情、夫婦の心情、父母の心情を四大心情といいます。人間が完成するためには、神様の真の愛のもとで四大心情を完全に体得しなければならないということです。この基台が理想的な家庭です。人間に対する神様の創造理想が成就される最小単位が、四大心情圏を完成した家庭です。真の愛の主人であり、起源であられる神様は、父の立場で人間に絶対不変の真の愛を相続しようとされたのです。真の愛の中からは完全調和と統一が成されるので、神様の真の愛は、子女である人間に完全に相続されるのです。

男性は、女性に幼児の心情圏を完成させてあげ、兄弟の心情圏を完成させてあげ、夫婦の心情圏、父母の心情圏、これら四大心情圏

を完成させてあげるのです。また、反対に女性も、パートナーに対する四大心情圏を完成させてあげ、それぞれがお互いを完成させてあげなければなりません。愛の関係を結んだのちにおいては、自らの妻は、昔自分と一緒に生まれた子供と同じです。その次は兄弟です。別れることはできません。その次には、自分の妻であると同時に母の代身です。それを破壊すれば、子女の心情、兄弟の心情、夫婦の心情、父母の心情をすべて破綻させることになるのです。

愛の関係とは何ですか。一つになることをいうのです。二人が愛の関係を結べば、既にそれで終わりです。それゆえに、自分の妻を妹のように思わなければならないのであり、双子のように生まれ、死ぬ時も一緒に死ななければなりません。それほど重要なことです。これが完全になってこそ、完全な神様の息子、娘になるのです。

四大心情圏の定着基地が分裂することによって、子女は子女なりに、兄弟は兄弟なりに、夫婦は夫婦なりに、父母は父母なりに別々になる、このようになるのです。どこに行ったとしても、一つにならなければなりません。ゆえに、動機が一つになり、過程も結果も永遠に一つにならなければなりません。四大心情の完成の定着地は、夫婦を中心として愛が一体となる位置です。夫婦の愛が一体となる時、アダムとエバも完成されるのですが、神様まで完成されるのです。

ゼロ点から一八〇度が始まり、三六〇度が始まるのです。ところが、そのゼロ点がありません。四大心情圏のゼロ点がめちゃくちゃになっているのです。めちゃくちゃな兄弟、めちゃくちゃな子女、めちゃくちゃな夫婦、めちゃくちゃな父母になっているのです。これを一つに収拾してすべてが完成するゼロ点ができれば、子女の愛の台風が吹き、兄弟の愛、夫婦の愛、父母の愛、宇宙の愛の台風が吹くのです。

今から方向を一八〇度転換し、神様の心情圏に向かって立たなければなりません。そのようになるためには、四大心情圏を完成しなければなりません。四大心情圏とは何でしょうか。子女の心情圏、兄弟の心情圏、夫婦の心情圏、父母の心情圏です。家庭においては、おじいさんが神様の位置にいるのであり、横的なアダムとエバは、完成圏において垂直の神様と直接連結する位置にいるのであり、自らの息子、娘は、未来世界を代表する位置にいるのです。過去、現在、未来の三大王権を相続する基盤が私たちの家庭であるということを、はっきりと記憶しておかなければなりません。

縦的な神様の心情圏においては、四大心情圏が完成されなければなりません。子女の心情圏の完成、兄弟の心情圏の完成、夫婦の心情圏の完成、そして父母の心情圏の完成です。アダムとエバがそのように完成していなければならなかったのです。それゆえに、縦的な四大心情圏を完成し、神様の悲しみを解放しなければなりません。

四大心情圏の完成は、結婚して愛を中心として一つになることによって可能です。もしこれが壊れれば、子女の心情圏の未完成、兄弟の心情圏の未完成、夫婦の心情圏の未完成、父母の心情圏の未完成となるのです。霊界に行くには、このような心情圏を完成していか

なければならないのですが、堕落したがゆえに、これまでその心情圏を完成したことはありません。それゆえに、蕩減復帰しなければならないのです。

(2)家庭は四大心情圏を体恤する基盤

父母は、神様の代わりに、実体父母の立場から子女を神様の子女として養育するのです。そのようにすることによって、目に見えない無形の神様が子女を養育したことを、私が実体的に感じるのです。神様も、そのようにしながら大きくなられたのです。神様も子女の時代、兄弟の時代、夫婦の時代、父母の時代を通じて発展してこられたのです。

自分を中心として自分の息子、娘を生んで育てながら、目に見えない神様の過去の歴史、すなわち目に見えない神様の幼児時代の第一創造主、無形の創造主の姿を見るのです。第二創造主、すなわち目に見える創造主の立場から幼児を育て、兄弟として育てて夫婦にすることは、神様がアダムとエバを息子、娘から兄弟として育ててきたのと同じようにして、無形の内的なすべての実相を平面上で実体的に見るためです。これが自分の息子、娘です。

四大心情圏の完成は、神様を中心として、過去、現在、未来の表出化された対象が愛によって結実することです。その位置は、結婚して夫婦が愛によって一体となることです。ですから、一体となるその位置は独りではできません。神様を中心としなければなりません。神様が介在していってこそ、夫婦を中心としたところに王の位置が出てくるのです。そこにおいて、愛の一体が成されなければ王権が生じません。王権とは何かというと、王と女王のことですが、縦的な神様が介在してこそ、初めて王権が生じるのです。

そのようになって、初めて神様自体が、地上に生まれたばかりのアダムとエバと完全に一つになるのです。これが一つとなり、息子、娘を横的に展開させることは、すべて同じ一つの四位基台を成すのと同じです。三人の息子がいれば、その息子たちの四位基台は、同じモデル形態とみなすのです。そのようになれば、その価値は、アダムとエバの家庭と同じです。種というものは価値が同じだというのです。

二代目の創造主の基準は約束されていますが、三代目の創造主である息子、娘、孫を見ることができなかった、ということを知らなければなりません。皆さんが孫にならなければならない、ということを知らなければなりません。その孫は、第一の目に見えない神様と第二の神様が育ってきたすべてのものを再現させ、神様も喜び、父母も喜ぶことができ、自らの過去の全体歴史を展開させて、二つの愛の世界を感じさせることができる存在です。そのような立場に立ったものが、アダムでもなく、神様でもなく、孫なのです。

それゆえに、神様も息子、娘を崇拝されます。神様も孫を崇拝されるのです。ですから、アダムも自分の息子、娘を崇拝しなければならないということです。息子、娘を誤って育ててはいけません。ゆえに、皆さんの家庭において堕落した子供が生じれば、家庭の脱落という、途方に暮れるような事態が起きるということを知らなければなりません。

四大心情圏と三大王権を完成しなければなりません。おじいさんは神様の代身です。お父さんは二世の中心になっているので、この

世界の家庭の王になるのです。父と母に、国王と皇后のように侍らなければなりません。そして、おじいさんに、神様のように侍らなければなりません。それで、二つの愛を受け、神様の代わりに父母の二つの愛を受けることによって、孫の時代に入っていけば、地上天国と天上天国の拡大世界へ越えていくのです。

目に見えない良心をもってアダムとエバを愛していたところから、目に見える実体をもってアダムとエバの愛する息子、娘を愛するようになったのです。ゆえに、神様とアダム、エバが孫を愛する位置は異なります。それゆえに、結実を結ぶのです。二重になるので、結実を結ぶというのです。正、分、合です。

正から分かれ、神様がアダムとエバを創造される時に、子女から兄弟、夫婦を経て父母に上がってきたのと同じように、ここでも子女の愛、兄弟の愛、夫婦の愛を経て、父母の愛へ上がっていかなければなりません。ですから、父母の愛は、必ず縦横が連結されなければならないということを、はっきりと知らなければなりません。それゆえに、天と地に縦的な基準が起きるのです。その次には、父母を中心として、ずっと拡大されていくのです。すべての歴史は、父母を中心として発展していきます。これが公式発展です。父母を中心とした家庭形態をもって発展していくのです。

神様も成長してこられました。実体として創造されたアダムとエバが、子女、兄弟、夫婦、父母となることによって、無形の心の中にある子女、兄弟、夫婦、父母を第二の御自身として体恤されることによって、真の愛の理想を完成した神様として、無限な喜びを感じられるのです。

私たち人間も、神様と同じ喜びを感じるために、誰もが子女、兄弟、夫婦、父母の位置に立つようになります。人間は、誰もが四大心情圏を中心として家庭を形成するので、家庭は、理想の心情圏を体恤するための基地となるのです。

私たちにおいても、神様のように実体の四大心情圏を体恤する者だけが地上天国や天上天国、どこでも一つになることができます。そのような理想的人間になるために、家庭を望むようになるのです。それゆえに、人間は、誰もがみな本然の家庭を探して、愛のすみかを復帰しなければなりません。

四大心情圏と三大王権が分かったでしょう？　皆さん夫婦は、これを成し遂げなければなりません。そのようになれば、霊界から地上まで、いつでも思いのままに往来することができるのです。四大心情圏の完成は、結婚して愛を中心として一つになることによって可能です。もしこれが壊れれば、子女の心情圏の未完成、兄弟の心情圏の未完成、夫婦の心情圏の未完成、父母の心情圏の未完成となるのです。霊界に行くには、このような心情圏を完成していかなければならないのですが、堕落したがゆえに、これまでその心情圏を完成したことはありません。それゆえに、蕩減復帰しなければならないのです。

四大心情圏は、夫婦によって愛の一体を成したところで結実し、三大王権は、アダムとエバが息子、娘を生むことによって初めて完成するのです。息子、娘を生んだのちにおいて初めて三大王権が完成するのです。霊界を

代表しているのは、おじいさんを代表した神様であり、アダムとエバは現在を代表しています。過去、現在、未来です。現在を代表したアダムとエバを中心として、未来を代表した息子、娘が出てくるのです。

私たちの地上生活は、そのまま霊界に移っていくのです。それを知らなければなりません。それでは、霊界に行って、どのように横的に連結するのでしょうか。私の家庭で感じたものが宇宙の家庭で感じる、そのような世界に入っていくのです。世の中で縦的父母を中心として、もちろん神様圏を中心としての縦的父母ですが、横的父母を中心として家庭において生活したのちに永遠の縦的世界、父母の世界へ行くのです。その世界は天国なので、それは一代ではありません。数千代がすべて入っていくのです。

この世において、神様を中心としておじいさん、父母、自分の息子、娘と暮らしていたことを拡大させた世界なので、そこに入っていって暮らそうとすれば、地上において、姉として、妹として、それから妻として、母としての責任、また兄として、弟として、夫として、父として、一家庭において感じた責任を横的に感じることができる因縁ができていなければなりません。そのようになって初めて和するのです。

皆さん、このような話は初めて聞いたでしょう？　四大心情圏と三大王権を復帰し、皇族の愛をもっていくべき祖国が天国です。死んでみてください。いくら優秀な人であっても、ここに引っ掛かるのです。その時になって「文総裁の言うことを聞いていれば良かった！」と後悔しないように、早く決定して祝福を受けてください。それが最も早い解決方法です。そのようにしながら学ぶのです。

男性と女性が和合して、失ってしまった天国の家庭を取り戻し、神様を王として侍らなければなりません。ですから、おじいさんは神様の代身です。おじいさんを神様の代身として侍らなければなりません。自分の父母は、五十億人類の家庭を中心とした王です。その息子、娘に対しては未来の王のように侍らなければなりません。神様のように、現代家庭を代表した王のように侍る父母の道理を受け継ぎ、千代、万代にその道理を残していく世界が地上天国になるのです。アーメン！

二) 三大王権と

(1)　三大王権は創造理想の基本型

本来、アダムが完成すれば天国の父が完成し、エバが完成すれば天国の母が完成し、そして家庭の主人になれば、家庭的天国の王権が生まれるのです。したがって、アダムとエバは個人的王であり、家庭的王であり、氏族的王であり、民族的王であり、国家的王であり、世界的王になるのです。

アダムとエバは、何をしなければならないのかというと、神様の形状を完成させなければなりません。神様の形状は、人類の父母であると同時に万国の王です。アダムとエバが堕落することによって三大権限を失ってしまったのです。人間の中で、アダムは、初子であり長男です。長子権をもっています。アダムは、神様の長男です。長子権をもっているのです。その長子が父となるのです。長子権、父母権……。父母になって何をするのですか。のちには王になるのです。三大権限とは何で

しょうか。一つは長子権、その次は父母権、それから王権です。三大権限を賦与してもらうために、私たち人間は生まれました。

父母を復帰しなければ、すなわちアダムが完成しなければ王権が樹立されません。アダムは王子です。エバは王女です。息子は男性としての王であり、娘は女性としての王です。その二人が王権を立てなければならなかったのです。そのようにしようとすれば、四大心情圏の上に三大王権を立てなければなりません。三大王権を立てるようになる時は、氏族を中心として既に三代、四代を経ていくので、宗孫（注：宗家の一番上の孫）を中心として、何十年間の何百家庭が一つにならなければなりません。王族圏の愛の心情を体恤できなかった人は、天国に入っていくことはできません。

神様は天上の王であり、アダムは地上の王であり、アダムの息子は天上と地上の王として育つのです。ある人に「あなたの家庭はどのような家庭になることを願いますか」と尋ねれば、「私のおじいさんも王になり、私の父も王になり、私も王になることを望みます。それが人間の最高の欲望です」と答えるのです。皆さんは、三大王権の息子、娘であるということを知らずに生きています。三大王子になるためには、おじいさんを天国の王のように侍り、自分の息子、娘を王子のように侍ることができなければなりません。そのような家庭の出発こそ、神様の理想を中心としたアダム家庭の出発だったのです。そこにはアダムの国があり、アダムの世界、アダムの天地がすべて内包されているのです。

アダムとエバは、神様の息子、娘でしょう？　神様の息子、娘なので、天国の王子であり、この地上の王子なのです。天国の王子であると同時に、成長すれば地上の王となるのです。王孫です。それゆえに、天国の王宮における法度を守り、その道理をすべて実践し、神様の愛を中心として縦横、前後、左右に一つの理想的なモデルとなるのです。

東に行こうと、西に行こうと、南に行こうと、北に行こうと、前に行こうと、後ろに行こうと、どこに行こうと理想的なモデルとなるのです。なぜかというと、この中心の位置に立っているからです。その位置というものは、中心を中心として東西南北、上下関係、どこにおいてもすべての核となるです。そのような立場を見るとき、どこに行こうと、皆さんは模範とならなければなりません。

おじいさん、おばあさんとは何でしょうか。天国が派遣した全権大使です。ゆえに、おじいさん、おばあさんを神様のごとく侍らなければなりません。自分の父母は、現在の五十億人類の家庭の王であり、自分は未来の王権の伝授を受けようとする王子、王女です。そのような伝統をもっています。それでは、人間の目的とは何でしょうか。天国の過去の王権、現在の王権、未来の王権を伝授してもらうために生きるのが人間の目的です。ですから、みな王になりたいのであり、女王になりたいのでしょう？　そのような主流思想を基盤として、ここに相対的な兄弟の心情圏の国民となるのです。これは、直系の長孫（注：最初に生まれた孫息子）を中心として王族に千年、万年継承するのです。

本然の理想家庭は、天父王、すなわち天国の王であり、地父王、すなわち地上の王です。天国の王であり、地上の王ということです。天父王は神様の位置であり、地父王は父と母の位置であり、子女は王子であり、息子、娘の位置になるのです。その三代を家庭として見れば、おじいさんは神様の代身であり、地父王は父と母の家庭を代表し、息子、娘は王子、王女となるのです。この三時代は、すべて王権を代表した代表者ということになります。おじいさんは過去を意味し、父母は現在を意味し、息子、娘は未来を意味するのです。これらが連結して、過去、現在、未来まですべてが入っていくのです。

三代圏を成すことができなかったのが堕落なので、三代圏をもつことができる再創造主、第三創造主の位置に立って、地上天国と天上天国を建設しなければならないのです。そのような使命がこの手にあるということを忘れてはなりません。三大王権です。神様の天の国と、地上の国と、未来の国を完成しなければならないのであり、神様の愛と真の父母の愛の二大実体圏を完成しなければならないのです。第三代が地上天国の権限をもっています。皆さんは、その権限をもっていません。その基準を立てるために、第三次アダム勝利圏の世界を建設しようとするのです。それを目前において、サタンの血統の断絶、祝福家庭の全面解放の世界的宣言をしなければならないのです。そのようにしなければ、第四次本然世界の解放圏を成し得ません。

四大心情圏と三大王権を完成した家庭が理想的な家庭です。それで、おじいさんは神様と同じであり、父母は世界家庭の王であり、自分自身は天上と地上の王権を継承する未来の王です。神様は天国の王権であり、父母は地上の王権です。息子、娘はこれを相続する王です。このような三大王権が結実しなければならない所が私たち理想家庭です。

おじいさんは、過去を代表しているので、天国の特使として送られた家庭の天国大使です。父と母は、現在の地上天国の王です。孫は、父の愛を受けることができるのであり、おじいさんの愛も受けることができます。アダムとエバは、神様の愛しか受けることができませんでした。アダムの愛を受けることができる存在がいなかったのです。神様も一代しか愛することができませんでした。二代目の孫まで愛さなければならないのです。

そこから拡大していくのです。三代が一つの範疇です。それで、おじいさんを神様のように侍らなければならず、父と母を世界の王のように侍らなければならず、孫を未来の天国と地上天国の王のように侍らなければなりません。二重になるのです。三代は、おじいさんの愛と父母の愛を受けることができます。二重になるのです。ここから、地上天国と天上天国が展開していくのです。

私たちの三大王権とは何ですか。神様は、アダムしか愛することができませんでした。アダムとエバの一代しか愛することができなかったのです。孫をもたなければなりません。孫をもって初めて四位基台が完成するのです。孫をもてば、神様は孫を愛し、アダムは息子を愛し、二人の結合が生じるのです。それゆえに、ここから生まれる者は、地上と天上天国の出発が地上で合成して顕現する者です。

四大心情圏は、夫婦によって愛の一体を成したところで結実し、三大王権は、アダムとエバが息子、娘を生むことによって初めて完成するのです。息子、娘を生んだのちにおいて初めて三大王権が完成するのです。霊界を代表しているのは、おじいさんを代表した神様であり、アダムとエバは現在を代表しています。過去、現在、未来です。現在を代表したアダムとエバを中心として、未来を代表した息子、娘が出てくるのですが、正から分かれたこれが合わされなければならないのです。

アダムとエバが完成して夫婦を成し、ここに神様が介在され、神様がアダムとエバを創造された時と同じようにここから息子、娘が生まれてくる時、その第三の息子、娘は神様の代身であり、第二アダムの代身です。ゆえに、三大王権の表出の実体は孫なのです。その孫は、おじいさんの愛も受け、父の愛も受けるのです。これが一つです。したがって、これが三大王権です。

おじいさんとおばあさんは、神様の代身として振る舞わなければならず、父と母は、世界の大統領の代身として振る舞わなければならず、その息子、娘は、天国の王のごとく、王子、王女として振る舞いながら生きなければならないというのが家庭の理想であり、創造された神様の愛の本来的な家庭です。

家庭は天国の王宮であり、その構成員は天国の王族を代表するのです。おじいさんは、神様から見れば王子、王女の代表です。父母は、すべての国家世界の王子、王女の代表です。誰もがみな、そのような欲望をもっているでしょう？　全く同じです。

子供たちは、未来の全宇宙の王子、王女の代表です。これほど価値のある場所のセンターが私たちの家庭です。本当に誇らしいことです。このような素晴らしい理論基盤の上に私たちが立っているということは、本当に貴いことです。「私は中心家庭として、理想的夫婦の代表的な家庭であることを自負します」と、このように言うことができるようになる時は、未来のあらゆる万物まで、すべてが歓迎するのです。そのような価値の家庭、歴史的家庭の背後が分かりますか。これがまさしく、神様が創造された理想家庭の組織です。皆さんは、その位置まで行かなければなりません。神様は、おじいさんの位置です。その場に行けば、誰もがその前で敬拝するのです。

おじいさん王権時代、それから父王権時代だけなく、天国王権時代と地上王権時代を一つにした統一的な理想が三大王権です。おじいさんは一代で、父は二代です。二代にしかなりません。三代になりません。孫がいて、父の愛とおじいさんの愛を受けなければならないのです。

本当に不思議です。先生も息子、娘を生んで育てましたが、孫が友達です。友達になりました。年を取れば取るほど孤独になり、環境が変化し、縮んでいくのです。ですから、孫と結託するようになるのです。それによって一人のおじいさんも完成し、父も完成し、このようにして一つの種になります。それゆえに、てっぺんがここまで連結すれば、すべて連結されなければなりません。二つが連結されれば、これが一つの種になるのです。

神様は、アダムとエバが堕落することによって、三代の位置に立つことができませんでした。二代目で堕落したのです。ですから、今、アメリカの家庭において最も悲惨なこととは何でしょうか。おじいさんとおばあさんが孫に会うことができない、ということです。おじいさんは、幼児から成長しておじいさんになったので、幼児に帰っていかなければなりません。

その友達が誰かというと、孫です。年を取ればぼけるでしょう？　ぼければ幼児のようになります。幼児のようになっていくのです。健忘症が出てくるようになれば、言葉もすべて忘れてしまうでしょう？　それゆえに、一つにならなければならないのです。おじいさんになってみると、自分の息子、娘よりも孫のほうがもっとかわいいのです。慕わしいものが自分の息子、娘ではなく、孫なのです。そのようなものです。ですから、アメリカの年を取った人々は、どれほど悲惨でしょうか。

おじいさんを愛し、尊敬することは、過去をすべて受け継ぎ、過去の世の中を学ぶことになるのです。父からは現在を学ぶのであり、子女を愛し、子女を貴く思うということは、未来を学んでいくことです。おじいさんとおばあさんを通し、父母を通して何を受け継ぎ、何の血統を受け継ぐのかというと、真の愛です。真の愛を受け継ぐのです。おじいさんとおばあさんは年を取っていますが、その二人は真の愛で一つになっていて、父母が一つになっているので、私たちもそのようになり、未来を受け継ごうというのです。真の家庭にならなくては、絶対に未来を受け継ぐことはできないということを知らなければなりません。

家庭のこの三代を見るとき、それは宇宙を見るのと同じです。宇宙の愛は、現在と未来を代表した真の家庭にあるのです。真の家庭でおばあさんを愛し、母を愛し、姉を愛して……。おばあさんがいなければ不安定です。おじいさんがいなくても不安定であり、どの人がいなくても同様です。このようになってこそ、そのまま天国に移っていくのです。祖父母、父母、子女がそのまま天国に行くのです。真の祖父母を愛し、真の父母を愛し、真の子女、真の家庭、真の国家、真の宇宙を愛した人が天国に行くのです。その模型の教科書が家庭です。これを思う時に、神様のことを思えば永遠の未来になるのです。神様を愛しながら「私の愛は未来のために行きます」と言うとき、永遠の未来になるのです。

今から地上天国時代に入っていくので、私の家庭は王の家庭となるのです。ですから、どれほど模範的にならなければならないでしょうか。王が自分勝手に生きることができますか。王と王妃、王子や王女たちは、その国の法をすべて守らなければなりません。それだけでなく、王宮の法もあります。法の中に王宮法があるのです。

宮殿において貴族たちが暮らしていくための法があるでしょう？　イギリスでも韓国でも、王の血筋を引く者たちは、どれほど暮らしにくいでしょうか。先生はその道、その復帰の道をすべて歩んできました。そのようにしてみなければ、天国を意識することができません。皆さんは、天国を治める王の位置に上がっていくことができません。女王に侍ることを知らずに、どうして男性の王になれますか。そうではありませんか。

先生の教えは、歴史の最初であり、人類の希望の始まりであり、幸福と平和の始まりです。天国のあらゆることの出発なのです。したがって、先生の在世時に因縁を結んだ皆さんの家庭は、皇族圏に立つのです。間違いなくこのような生活をした場合には、その完成の程度に比例した基準の霊界に行って暮らすようになるのです。自分とは関係ない話だと思ったなら、大きな誤算です。

(2) 三大権限の復帰が人類歴史

三大王権には、必ず第一創造主、第二創造主、第三創造主の概念が入っていなければなりません。この概念が入っていなければ、三大王権は出てきません。ですから、神様は過去の先祖であり、アダムは現在の先祖であり、アダムとエバの息子は未来の先祖です。先祖の概念が入っていなければなりません。その概念が入っていなければ、三大王権が出てこないのです。それから、皇族圏は直系を中心として、相対的関係をもって、そのままついていくのです。

復帰歴史の総合的な結論として、長子権復帰、父母権復帰、王権復帰、皇族圏復帰です。長子権復帰の目的は、父母権復帰です。父母権復帰の目的は、王権復帰であり、王権復帰の目的は、皇族圏復帰です。これが四大心情圏です。おじいさん、父、自分たち夫婦が三大王権を象徴します。おじいさんは過去を象徴し、父母は現在を象徴し、自分たち夫婦は未来を象徴します。そして、おじいさんは霊界の特権大使として自分の家庭に送られた方なので、おじいさんの言葉に絶対服従する家庭は繁栄します。

救援摂理歴史は、カイン、アベルが一つになって母を取り戻し、父を取り戻す歴史です。失ってしまったので、これを取り戻さなければすべてのものは無駄になるのです。母を取り戻し、父を取り戻したのちには、家庭を取り戻すのです。そのようにすることによって、永遠の理想家庭をこの地上で成し遂げるのです。

最初は長子権復帰であり、二番目は父母権復帰です。これが一つになって初めて王権を復帰するのです。本来、アダム家庭は王宮です。アダムとエバは王と皇后なのです。男性は天を象徴し、女性は地を象徴するのですが、二つの世界の王権が堕落しないで完成していたならば、理想的な家庭になっていたはずです。それがアダム家庭の理想です。その次には皇族圏です。

三大王権とは何ですか。おじいさんは天国の王であり、父と母に対しては地上の王として侍るのです。自分たちは未来の王です。そのようになれば、天国の王であるおじいさんの訓示と父母の訓示に、絶対服従しなければなりません。孝子の道よりも忠臣の道を行こうとするので、絶対服従しなければなりません。アダムの息子、娘である孫は、父の愛も受け、おじいさんの愛も受けます。アダムは、父の愛しか受けることができませんでした。おじいさんの愛を受けることができなかったのです。アダムの息子は、おじいさんの愛を受けなければなりません。それで、三代になるのです。おじいさんの愛を受けてこそ、初めて横的に拡大されるのです。

三段階を経ていかなければなりません。それが一つのモデルです。それが四位基台です。

三代を連結させなければなりません。それゆえに、孫は、おじいさんの愛を受ければ、地上で天国と接するのです。天国の王孫の後継者となるのです。地上でも同じです。

堕落は三代を経てきたのです。おじいさんは旧約時代であり、父と母は新約時代であり、自分は成約時代であり、今後息子は世界時代に越えていくのです。これを家庭で連結しなければなりません。ところが、これを連結させなければならない家庭において、父母を失ってしまい、長子権を失ってしまい、王権を失ってしまいました。しかし、父母と王権は既に備えられました。父母権と長子権、そして王権を復帰できる道を真の父母が築いておいたので、これを伝授するのです。

王権を中心としたこのような基準があるので、皆さんは氏族的メシヤです。国の王権、世界の王権、天上の王権を代表して、皆さんに氏族的メシヤの称号を付与したということは、皆さんが氏族的王であるということです。氏族的真の父母です。

本来、堕落していなければ、私たち人類の先祖は神様の息子、娘となり、地上天国と天上天国の王子、王女になるはずでした。それは世界的です。根源であると同時に最後です。アルファであり、オメガです。アルファから善の父母が出てくることができずに悪なる父母が出てきたので、これをすべて取ってしまわなければなりません。それゆえに、悪なる父母として始まったすべてのものを消化することができる、真の父母が現れなければならないのです。

真の父母と一つになって伝統を相続し、皆さんの家庭が主体的伝統をもって万国を統治できる基盤となり、主体性をもつことができる家庭になる時、天国の皇族圏内に入籍するのです。このようにして入っていく所が天国です。天国は誰でも入っていける所ではありません。「その道を行こう」と三代が決意しなければなりません。おじいさん、おばあさんから、父と母、夫婦、息子、娘まで、段階は四段階であり、夫婦を備えた系列は三代です。

民主世界には、王という概念はありません。民主世界は兄弟主義です。ですから平面的に見るのです。それが兄弟主義世界なのですが、兄弟主義世界では互いに争いをします。あなたの物、私の物としながら、争奪が繰り広げられるのです。民主主義は、闘う概念ではありませんか。与党と野党が闘い……。その内容とは何でしょうか。王権を互いに奪おうとしているのです。大統領は何ですか。王権ではありませんか。これが行ったり来たりして、搾取するのでうまくいかないのであって、絶対的な王が現れれば問題がありません。絶対的な平和の世界が来るのです。

民主世界の政治の姿は闘争の体制です。ですから、私たちが父母の位置に上がっていかなければなりません。そのようにすれば闘いを止めることができます。すべての兄弟たちが父母を中心として一つになるのです。ほかに方法はありません。まず真の父母を取り戻し、そこから真の子女、真の国家、真の平和を含むすべてのものが取り戻されます。それ以外に方法はありません。

神主義は、真の父母を中心とした思想です。神主義は、垂直圏に属しているのですが、その垂直と平衡を合わせ、世界の形体のすべてを合わせて球体理想として現れるのです。愛は球体です。その球体はどこにおいても垂直と通じるのです。ですから、その表面は理想圏になります。それゆえに、表面圏である世の中は、不平を言うことはできません。サッカーボールが転がっていって止まる時、どの面でも垂直と通じる平等な面をもっているのです。ですから、その価値観によって平等な世界、バランスの世界に到達するのです。そのことをはっきりと知らなければなりません。

神主義を中心として統一するのです。真の父母は家庭の王です。家庭は、ほかの様々な家庭と交わることによって自動的にできます。

そのようになれば、氏族の王が出てきます。また、氏族は、ほかの様々な氏族と合わさって民族となり、民族の王が出てくるのです。国家、世界、天宙も同じです。このように、王たちが連結して神様までつながるのです。ですから、神様は、王の王になるのです。

三) 皇族圏を完成することを

(1)天国は愛の皇族圏が行く所

天国は、神様の愛を中心として王子、王女となり、王と皇后の愛を受けた皇族たちが入っていく所です。今日、キリスト教では「イエス様を信じて天国に行くのだ」と言っているでしょう？　どのようになるか、行ってみなさいというのです。文総裁の言っていることが正しいか、正しくないか、行ってみれば分かるはずです。それは、理論に合っていません。今までのすべての宗教は理論に合っていないのです。

アダムとエバは誰ですか。神様が被造世界の王だとすれば、アダムとエバは、その王の愛の相対者であり、皇族圏を相続する皇太子です。王子、王女です。堕落していないアダムとエバはそうだというのです。全宇宙の大王であられる神様を中心として生まれた長男と長女が、アダムとエバだったということをはっきりと知らなければなりません。

天国に入っていくことができる人々は、神様の愛の直系子女であり、天国の王孫として……。神様の前に王子、王女の門を経なければなりません。天国はどこでしょうか。王孫として、皇族として行く所です。この地上で模範的な兄弟の友愛の直系子女と傍系的子女となり、模範的な一つの一族と国家を形成した立場で、皇族の名誉をもって生きたのち、そのまま移動していく所が天国です。

今から皆さんは、真の愛を中心とした皇族にならなければなりません。アダムが直系子女とすれば、傍系子女であるその兄弟や姉たちは、すべて民となるのです。それゆえに、天国の王子、王女の愛を備え、その権威と威信を堂々ともち、生涯の路程において足どりも堂々と威信をもって入っていかなければならない所が本郷の国、天国であるということを知らなければなりません！

世界を愛さなくては、入っていくことができません。世界が私のものであり、世界の人類が私の一族だといって愛してこそ、入っていけるのです。神様の代わりに、彼らの痛み

を私の痛みのごとく感じることができる位置に立つことができなければ、天国の王子、王女となることはできません。神様はそのようなお方です。そのような方が、王子、王女の位置に立つことができなければならないのです。それで、長子権復帰、父母権復帰、王権復帰です。

その次には皇族圏復帰です。最後にこの門をすべて通ることなくしては、本然の世界で神様と出会うことはできません。先ほど話した根を探し求めていって結果が一つとなり、すべてのものが自由天地で循環するにおいて、衝突することなく歓迎一色で自分を迎えてくれることができるのかというのです。天上世界に行こうと、地獄世界に行こうと、その人が通り過ぎればみな頭を下げるのです。

長子権復帰ができなければ、父母権復帰ができません。本然の兄弟を失ってしまったので、再び取り戻したその基盤の上で父母の位置に上がっていくのです。復帰は反対に行くのです。父母を取り戻したのちに父母、すなわちアダムとエバが王になるのです。氏族を中心とした王権、王権を中心として傍系的な血族が広がり、一族が広がることによって皇族圏が広がっていくのです。これが復帰摂理の全体の結論です。これは伝統的結論なので、誰もがこのようにならなければなりません。そのようになってこそ、真の父母の息子、娘になるのです。

四大心情圏と三大王権を、私たちの家庭で成し遂げなければなりません。これを完成した人々は、今日、イエス様を信じる必要はありません。先生も必要ありません。そのまま、神様の玉座の前に直行するのです。そのようになれば、神の国の皇族圏が始まるのです。皇族圏が始まろうとするならば、このように生き、今後、先生の息子、娘と同じ血統にならなければなりません。何の話か分かりますか。先生の息子、娘と姻戚を結んでこそ、皇族圏を連結させることができるということです。

完成した家庭とは、何を中心として築かれるのでしょうか。四大心情圏と三大王権、皇族圏の生活をすることによって初めて家庭理想、神様の創造理想が完成するのです。そして、王家にならなければなりません。王家は、王を中心として一つにならなければなりません。それで、皇族圏内で暮らしたのちに行く所が天国です。そこで暮らしたのちに移っていく所が天国です。

四大心情圏と三大王権を成したのちに皇族圏に入っていくのです。それを中心とした真の愛の位置が皇族圏の位置です。天国まで無事通過です。それが神様のアダム家庭に対する理想です。そこに真の息子と真の娘の完成があるのです。兄弟の完成がそこにあります。そこに夫婦完成と父母完成があるのです。

長子権復帰は父母権復帰であり、父母権復帰は王権復帰です。王権を復帰することによって皇族圏が広がるのです。皇族とは生活舞台のことをいうのです。そのような時代に入ってきました。それで、勝利して反対に越えていくのです。越えていけば、何をするのでしょうか。家庭で失ってしまったので、家庭を取り戻すのです。

天国の国民、天国の氏族と国の民というものは皇族から始まるのです。したがって、本来私たちがもたなければならない位置に帰っていこうとすれば、天国の真の愛を中心として、皇族的心情圏を体得しなくては、天国に帰っていくことはできません。そのようになっていないことが神様の恨です。

神様が王子をもち、王女をもって、王子と王女を愛することができなかったのが恨です。そして、王孫を中心として孫をもつことができませんでした。アダムとエバが成長しながら、王子、王女として、王の代を引き継ぐことができる位置において愛をなすことができなかったのです。すべて中間、すなわち原理結果主管圏内で堕落してしまいました。ですから、神様の愛を中心として神様と直接話し合うことができる相手とならなかったのです。天地創造の大偉業を中心として父と息子がお互いに相談し、歴史を編成していく、そのような相談相手とはならなかったのです。

堕落していなければ、天地の王権と天地の父母権と天地の長子権を中心とした直系の息子、娘となって、この地上の王宮となり、天国の王宮になっていたはずです。また、そこにおける傍系的なすべての兄弟たちは、直系の王宮の伝統を横的に受けることができるのであり、これと一つになって生きた人々が天国に行くようになっていたのです。

それでは、天国とは何かというと、愛を中心として、皇族の伝統を通過したその家庭と一族が入っていく所だということを否定することはできません。それゆえに、前にいる人も、枝のほうにいる人も、同じ皇族の生活環境で生活した人が天国に行くようになっているのです。それゆえに、すべての家庭は、愛を中心とした、皇族の伝統的生活をしなければならないという結論が出てくるのです。

私が求めている人は天国の皇族です。天国の愛の皇族です。皆さんは種にならなければなりません。種になるということは、収穫されて倉庫に入っていき、北風や冷たい雪、寒風が吹き寄せる冬の季節を越え、明くる年に南方から吹いてくる春風と春の日ざしを受けて新しい芽が芽生え、その太陽の光とともに方向を備えて自分自体内に創造力を発揮し、生命力をつくりだすことができる、そのような種になることです。そのような種になってこそ、生命の芽となるのです。

(2)皇族圏とは

皇族圏とは何でしょうか。アダム家庭において、兄のカインがいて、弟のアベルがいました。アダムの息子、娘として、カインとアベルの兄弟が生まれたのです。カイン、アベルです。環境には必ず主体と対象がなければなりません。この主体と対象が一つにならなければならないのと同じように、カインとアベルが一つにならなければなりません。一つになったその家庭を中心として、堕落した世界の家庭と一つにならなければならないのです。これが皇族圏というものです。

兄が中心者なので中心となり、自らの直系の兄弟たちは右側になり、復帰しなければならない立場にいるものは左側において、それを一つにしなければなりません。堕落したので、このようなことが起きるのです。堕落しなかったならば、アダム家庭の兄弟が一つになれば終わりです。ですから、世の中のサタン世界を救おうとするので、カインとアベル

の兄弟が一つになったものをアベルとし、サタン世界をカインとして、それを一つにすることによって、長子権復帰、父母権復帰、王権復帰の基準を立て、これに弟が従順に従うことができるようになる時に皇族圏が成立するのです。

それゆえに、堕落した世界の息子、娘も、長子権の直系子女を通じて次子の立場に立ち、長子の立場に入っていくことによって、地上天国と天上世界で共に同居することができるのです。これが、皇族圏です。

皇族圏というのは、自分の息子、娘ではありません。堕落した世界の人たちですが、本来は堕落していない第一王子にならなければならない人たちです。堕落し、悪魔に群がり、サタン世界の長子権をもって天国を破綻させてきましたが、アベルがいくつもの恨の峠を越えて、それらを開拓し、自然屈服させることによって、長子が次子となり、次子が長子権を中心として、天地大道を完全に変えなければならないのです。そのような場において、真の父母を中心としたこのような基盤が広がったというのです。

本来、皇族圏はありません。これは、堕落した世界の息子、娘を、悪魔を弟にするのです。皇族に参与することができる立場に立たなくては、サタン世界のカインが天国に入っていくことはできません。カインも、皇族圏、神様の次子の愛の圏内に入らなければなりません。長子として天を破綻させて長子権を失ったからといって、追放すると考えてはいけないのです。

弟の位置に立ったので、兄と父母たちが愛さなければならない環境圏を立てて愛することによって、堕落していない天国に入っていくのです。天国には、皇族愛を受けた人々が入っていくのです。このようなモデル家庭ができましたが、残っているものとは何かというと、世の中が残っています。

皇族圏とは何ですか。今は、家庭しかないのに、皇族圏とは何ですか。それはカインです。カインを救ってあげなければなりません。王子の道理を身代わりし、誤っている世界の王権を教育し、導いていかなければなりません。カインとアベルを救って弟にし、王家のすべての伝統を教えて弟の立場に導いていってこそ、地上の後孫たちも、王孫としてあの世に入っていくことができる皇族圏に連結されるのであり、地上にいるこのすべてのカイン世界が兄弟の因縁を結ぶことができなくなれば、皇族圏は地上に残るようになります。

ですから、カインを忘れてはならないのです。自分の家庭が皇族圏になるのではありません。その家庭と自分の家庭という兄弟が一つになることによって、世の中の王権をすべて引き継ぎ、カイン家庭を弟の位置に立てて、引き連れて入っていかなければならないのです。そのことをいうのです。ここで収拾されれば、カイン、アベルが逆さまに一つになるのです。それについて言っているのです。

皇族圏とは何でしょうか。これはアダムとエバの直系子女のことではありません。この堕落した世界が残っているので、皆さんが復帰されたとしても、祝福家庭を中心として、皆さんの息子、娘を中心としてカイン圏、氏族的メシヤ圏、世界カイン圏が残っているのです。それを復帰して長子の立場に立たなければなりません。サタンの反対を受けたアベ

ルが、天の長子の立場である長子権を復帰し、昔長子だった兄を弟にして、共に天国に入っていくことができる、そのような責任を中心として皇族圏と言っているのです。

カインとアベルは横的に怨讐となったので、横的に一つにならなければなりません。それで、誤って逆さまになっている兄弟を……。アベルがお兄さんになり、カインが弟となることによって、堕落していない本然の神様の息子、娘を中心として、カインとアベルの兄弟が復帰されて天国に入っていかなければなりません。それで、故郷に帰って孝子、忠臣、聖人、聖子の道理をなし、神様が来られて成そうとされた、家庭における公式的なテキストのすべての内容を完成すれば終わりです。

長子権、次は父母権、その次は王権、その次に皇族圏です。皇族圏とは何ですか。神様の前で、大きな事件が起きました。どのような事件かというと、み旨を成してみると、願わなかった女性と息子、娘が生まれたのです。そして、その直系の息子、娘が生まれたというのです。ここから悲運の歴史が始まりました。

今までこれを知らなかったので、収拾する道がなかったのです。向こうの群れは五十億人類なのに、こちらは息子、娘が数人しかいません。文総裁がそのような立場にいるとすれば、十三人の息子、娘しかいないのです。十三人しかいません。カイン・アベルをどのように収拾するのですか。

どこに収拾する道がありますか。怨讐を愛さなくてはできません。アベルが愛をもって教育しなければならないのです。蕩減復帰した長子権をすべて復帰したのちには、彼らを自らの皇族圏として認定しなければなりません。皇族のように認めてあげなければならないのです。皇族として認めてあげなさいというのです。

長子権を中心として次子までも上がっていくことができる道をつくったので、アダムの体が過ちを犯したのですが、縦的な再臨主が来られて長子権復帰をなし、次子圏を認定することによって、第一アダム、第二アダムも一つの体と同じ位置に立てられるようになったのです。ここから皇族圏が出てきたのです。

皇族圏とは、すべて堕落したサタン側の長子として生まれてきたのですが、天の側の長子権復帰を願って承認されれば、サタン側の長子が弟となるロイヤルファミリー（皇族）として扱われるのです。このことは、堕落していないアダムの体と同じ扱いをするということです。それが兄弟になります。再臨主はエルダーサン（長子）アダムであり、これはヤンガーサン（次子）アダムになるのです。

縦的な王権が主体です。この縦的な王権と横的な皇族圏が一つになり、より大きな統一された世界をつくるのです。そこで神様と連結されるのです。最高の相対と連結されるというのです。マイナスの立場で、より大きなプラスと一つになって発展するのが理想世界です。これが再創造の公式です。統一教会のこの概念以上の代案はありません。ですから、大統領であろうと、何であろうと、みなレバレンド・ムーンのあとに従ってこなければならないのです。

神様も皇族圏をもつことができませんでした。先生が国さえ取り戻し、王権を備えるようになれば、皇族圏を編成していくのです。

憲法によって一遍に秩序が確立するのです。今、統一教会の教会員たちは、そのようなことを知りません。「それは何の話ですか」と言うのです。霊界にはそれがありません。「天国が空いている」という話は、そういうことです。中心がないので空いているのです。これは唖然とすることです。

五十億人類は、長子権の直系王権を受け継いだ王家の親族です。その皇族圏の心情を体恤した人々が天国に入っていくようになっているのです。それゆえに、全世界的に平面化された王族圏を中心として、それを実体化させた世界統一の心情圏を体恤する生活をしなければなりません。そこから、真の父母も長子の上の真の父母です。真の父母の王権です。このような王権を中心として、周辺の王族を率いていかなければなりません。天国は、このような家庭の兄弟はもちろん、父母を中心として、王権を中心として、王族を率いて王権に侍って入っていく所です。そのような心情を体恤して入っていく所が天国です。

先生のみ言を中心として見るとき、どれほど遠い関係にあるのかを、皆さんははっきりと知るようになるはずです。みだりに会うことができる先生ではありません。血統内の血統、心情内の心情を主流的な立場で収拾しておかなければ、永遠の主流世界へ行くことはできません。神様は、愛でいらっしゃるので、永遠の主流圏の相続権を、堕落した後孫である姦夫の子女たちに接ぎ木させ、真のオリーブの木の実と同じ価値を認めて天国の倉庫に入れようとされるのです。それで、このような立場のことをいうのが皇族圏なのです。

皇族圏とは、本来ここに生まれた息子、娘は皇族になるのです。神様が完成した成約時代と真の父母時代を発表する時は、五十億人類の世界万民をすべて皇族として扱うのです。皇族圏として認めます。しかし、皇族圏の資格は認めません。皇族圏に入ってくることは許可するのですが、皇族になるためには蕩減復帰原則によって、個人からこの世界まで、誰よりもアベルを愛したという歴史がなければなりません。

(3)皇族圏は直系子女ではない

皇族圏は、先生の直系ではありません。先生の直系は蕩減を越えています。今まで、堕落した人々が長子権の権限をもってすべての人々を地獄に連れていくようなことをしてきたのですが、今は長子権を譲渡し、自分たちは次子圏に立っているのです。そのようになったので、次子の立場から、王族として全く同じく認められて神側に入っていくことによって、サタンとサタンに属するすべてのものは、神様を讒訴するただの一点もなくなってしまうのです。ですから、公平な神様です。皆さんの一身と一族を中心として、一国を中心として、各自がこれを成し遂げなければならないということが今の使命です。

皆さんが先生の直系の子女だと思うことは、大きな錯覚です。復帰された立場から見れば、復帰された女性と復帰されたカイン、アベルがいます。そして、本来、先生の直系の子女であるカイン、アベル、すなわち先生の子女とお母様がいます。二つの流れがあるのです。復帰して世界が一つになれば、そのカイン圏

の人々をどのようにするのですか。これを殺せば大変なことになります。

本来のアダム家庭においては、それは皇族になるはずでした。皇族だったのです。それがサタン的な存在の前に引っ張られていったので、原状復帰されれば、本来の権限に接ぎ木してあげなければならないのです。それで、復帰された女性と子女たちを皇族圏に加入させてあげるのです。全世界の人々を皇族圏にしなければなりません。

皇族には二つの法律があります。国家の法律を守らなければならず、皇族の法律も守らなければなりません。アダムの子孫である五十億人類が皇族圏に立つためには、先生の直系の息子、娘を中心としてカイン、アベルです。絶対的に一つにならなければならないということです。実際には、皆さんが先生のいる所に直行してくることはできません。祝福家庭は、サタンにもどこにも属さず、天の側にだけ属したカイン、アベル、長子と次子の立場にいます。皆さんの中で、何人が選択されるかが問題です。

五十億人類が皇族圏にいるといっても、直接関係をもっているかどうかが問題です。先生の直系の血統と皆さんの子女が結婚することによって皇族圏と一つになり、カイン・アベルがなくなるのです。ここに集まった女性たちの最大の願いは、いかにして自らの子孫を先生の子孫と結ぶようにするかということです。

再臨主の直系子女たちには蕩減条件がありません。蕩減条件に引っ掛かりません。これは何かというと、直系ではなく、地上でカイン圏の女性とカイン圏の息子に残してあげるのです。お母様を中心として見てもそのようになるのです。聖進の母親と聖進を中心として、全くそれと同じことが起きるのです。カイン圏をすべて皇族圏として認めるのです。

復帰された弟の位置に立て、皇族の扱いをすることによって、サタンが讒訴する道理がなくなるのです。なぜサタンがそれを認めるのかというと、「自分の息子だ」と言うことができる条件が成立しないからです。皇族圏というものを認めなければ、堕落したサタン圏内に皇族から外れた群れがいるという話が出てくるので、サタンが残されるのです。しかし、皇族圏を認めるので、サタンはなくならなければならないのです。これは重要な話です。これを混乱させてはいけません。

今まで、歴史を通じて、数多くの宗教の宗主や数多くの聖賢たちが現れましたが、真の愛とは何の関係もありませんでした。このようなすべてのことを解決するために、この地上にイエス様がメシヤとして来られ、新郎新婦の基盤を築こうとされたのです。それでは、メシヤが来られてなさなければならないこととは何でしょうか。新しい家庭と、新しい氏族と、新しい国家と、新しい世界に向かって新しい皇族圏を設定しなければなりません。

皇族圏の直系の先祖は誰でしょうか。本然の愛と神様の直系の子女であり、真の愛を中心として真の生命と真の血統の基盤を中心とした堕落していない人です。そのお方が種です。その種から根が出てくれば、中心の幹の根となり、そこから中心の幹、中心の芽へと大きくなっていくのです。これが縦的に大きくなることによって、そこに対応して横的世界へ拡大していくので、家庭と氏族が連結され、民族、国家、世界が連結されるのです。

地上に生まれたすべての人間で、真の父母を通して生まれた人は一人もいません。真の母と真の父、すなわち真の父母の血統を受けずに生まれた者は天国に入っていく道がありません。神様の創造理想から見れば、真の父母の血統を受け継ぎ、天上天国と地上天国の王権の主人である真の父母に侍り、その親族圏内で愛を中心として真の御父母様と共に暮らしたのち、自らも結婚して子孫を残し、そのまま移っていく所が天国です。ですから、皇族圏の愛を中心とする体恤的な経験をもっていない人は、天国に入っていくことができません。はっきりしています。

今までの愛の理想を、すべて総括的に標準として収拾してみれば、歴史になるのです。摂理史の主流思想になるのです。摂理史の主流思想とは何でしょうか。大きく見れば四種類です。今までの堕落したこの世の主流思想や、創造以前の主流思想は、第一が長子権復帰です。長子権の創立です。それから二番目が父母権であり、三番目は王権、その次には皇族圏です。このように四種類です。この四種類がすべて入っていきます。アダムが長子にならなければならず、アダムの兄弟が皇族にならなければなりません。アダム家庭において、アダムが堕落していなければ、長子が王になると同時に、次子は王族になるのです。

姉や次子は王族になるのです。この長子権を千年、万年引き継いでいくことによって、国となり、世界となって人類になっていたはずです。ですから、主流の王権は一つであり、それは、皇族圏を中心とした王権であり、父母権を中心としてすべて一つの世界になるのです。根は一つです。二つではありません。

(4)皇族圏を中心として天国が編成される

真の父母と一つになって伝統を相続し、皆さんの家庭が主体的伝統をもって万国を統治できる基盤となり、主体性をもつことができる家庭になる時、天国の皇族圏内に入籍するのです。このようにして入っていく所が天国です。天国は、誰でも入っていける所ではありません。「その道を行こう」と三代が決意しなければなりません。おじいさん、おばあさんから、父と母、夫婦、息子、娘まで、段階は四段階であり、夫婦を備えた系列は三代です。

アダムとエバは、神様の息子、娘として、神様から王子、王女としての教育を受けることができませんでした。それから、兄弟の教育を受けることができませんでした。兄弟の教育を受けていれば、兄弟の因縁を中心として、天下の万民が一つになることができていたはずです。神様の兄弟が人類ではありませんか。そうでありませんか。そこで長子権の宗孫（注：宗家の一番上の孫）を中心として、兄弟が横的に広がっていったものが氏族となり、国となって、世界へ拡大していったはずです。このように本来の人間たちは、天の王宮において王子権、皇族圏の心情を体恤して生活した人々なので、天国に行くのです。天国は、誰でも行けるようにはなっていません。

天国の皇族圏を中心として民族を編成していく時代です。今後、すべてブルドーザーで押しならしていく日が来るのです。私が教えるすべての原理のみ言、教えるすべてのものを中心として世界へ行く時、この世界の伝統

を遮る韓国人がいるはずはなく、この世界の伝統を遮る統一教会があるはずはありません。根を抜いてしまわなければなりません。

私が父と母を捨て、妻子を切り捨てた薄情な歴史時代を回想しながら、目を閉じて断行しなければならないのです。天国の伝統を立てるためにメスを入れなければならない時は、メスを入れる度胸がなければなりません。

皆さん、今は夢のような話みたいでしょう？　しかし、行ってみてください。悪魔の愛を中心として、悪魔の生命と悪魔の血統を受け継いだ者が、天国の純潔な神様の愛を中心として、神様の生命と神様の血統圏内に、統一的に理想化された皇族圏内に入っていくことができますか。自動的に地獄に入っていくのです。地獄に入っていってそれを望むことができますか。

望むこともできないのです。何代、何十年かに一度、方向を合わせて望むことができるのです。なぜでしょうか。父母を愛する本性的欽慕の心情があり、愛のその吸引力の方向性が残っているので、何年かに一度、その回っていく運勢に自分の運が一致し、体と心が合う時があるのです。それも、アダムとエバが十五、十六歳まで育った基準があるがゆえにそうなのであって、それもなければ完全に不可能です。そのような怨恨の垣根を残しているのです。これをけ飛ばしてしまい、いかに平準をつくるかということが大きな問題です。

本来は、夫婦同士で尊敬語を使うでしょう？　士大夫の家門では卑しい言葉を使いません。そのような国は韓国しかありません。天の法がすべてそうです。それ以上です。これは、神様が介在していませんでした。国家は介在していたとしても、これが天地の道理と連結されていなかったのです。ゆえに、統一教会の教えを受けなければなりません。そのようにしなければ、皇族圏に帰っていく道がないのです。

女性たちが誤ったことと男性たちが誤ったことを、すべて正してあげなければなりません。少しでも曲がれば、サタンが罠で捕まえようとするのです。「この者は誤った者なので、私が連れていきます」と言うのです。ですから、真の父母は、すべてを正してあげなければなりません。男性と女性が、生涯にわたって行く道を正してあげなければならないのです。それは何かというと、四大心情圏です。この点に行って、四大心情圏と三大王権と皇族圏を体験するのです。

いくら高速道路が敷かれたとしても、車がなく、ガソリンを買うお金がなければ、免許証は役に立ちません。皆さん自身が消化しなければなりません。先生の家庭に似ようとしなければなりません。皆さんの家庭は、自動車と同じです。コントロールできる運転手が必要であり、様々なものが必要です。運転の仕方を学ばなければならず、お金も稼がなければなりません。そして、負債を負ってはなりません。負債を負えば、霊界に行って恥ずかしいのです。私が何をプラスしてあげるかを考えなければなりません。そのようにしなくては皇族圏に入っていくことはできません。科学的に組織されている所が天国です。そして、家庭が天国の縮小体です。

四　家庭盟誓第四節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形
成し、自由と平和と統一と幸福の世界を完成することをお誓い致します。

一) 神様の創造理想

「家庭盟誓」の四節は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形成し、自由と平和と幸福の世界を完成することをお誓い致します」です。ここから幸福が広がっていくのです。神様が願われる創造理想的家庭から、幸福と自由と理想が成し遂げられるのです。

「神様の創造理想である天宙大家族を形成し」です。天宙大家族は大きな家庭です。堕落していない皇族圏によって天宙の大家族を形成するのですが、それを成し遂げることができなかったのです。皇族たちが連結された平和の基準を通して、天宙の兄弟の友愛をもった一族にならなければなりません。天宙大家族を形成するのです。

大家族を形成すれば、その次には神様も自由と平和と幸福になるのです。神様も、神様の息子、娘も、どこでも遮られることがありません。自由と平和は遮られることがないのです。そして、統一も遮られることがありません。平和と自由と統一の大家族理念を造成して幸福の世界を完成することを誓うのです。そのような意味がすべて入っているのです。テキストブックです。

神様の理想は、世界がすべて一つの家庭になることです。一つの家族です。四大心情圏と三大王権を完成した人々が満ちあふれたところなので、神様を中心として一つの家庭なのであって、二つの家庭とはなり得ません。私たちは、創造理想である天宙大家族を形成して、世界が一家族になるのです。

創造理想とは何でしょうか。統一教会では、「アダムとエバを中心とした四位基台の完成である」　と言います。四位基台の完成は、神様の創造の面から見るとき、み旨の完成です。四位基台を完成しようとすれば、そこには完成したアダムと完成したエバがいなければなりません。

そのように、完成した女性と男性が一つになって完成した子女を繁殖していたならば、完成した勝利をもった創造理想の実体、主体、あるいは被造世界の中心となる人間完成体、人間完成圏が成し遂げられていたのです。それを中心として、神様と神様の愛が連結されることによって、神様が創造しようとされたすべての理想が実現されるのです。真のアダム、真のエバ、すなわち完成したアダム、完成したエバ、完成した子女、このような神様の前につくられた四位基台を中心とした家庭が、神様の愛と連結されることによって、すべての創造理想が実現されていたのです。

最後に残されるものは何でしょうか。愛を中心として神様と人間関係が残される、このようにみなさなければなりません。神様を中心として人間との不変の愛です。この愛の法度は、誰も変更させることはできません。いかなる力をもっても変更させることはできません。このような愛を中心として、人間関係、

すなわち人間対人間の関係と、神様を中心とした関係が残されるのです。

その世界のことを何というのでしょうか。その世界のことを地上天国というのです。天国の世界です。その世界のことを地上天国といい、そこで生活したのちに天上に行って永遠の理想生活をするようになるのですが、そこを天上天国というのです。私たちは、常にこのような概念をもっていなければなりません。

「神様のみ旨」と言えば、創造理想を実現することです。それでは、創造理想とは何でしょうか。創造理想とは、「統一原理」で糾明したように四位基台の完成です。このような定義を下しています。それでは、その四位基台とは何でしょうか。それはもちろん、神様とアダムとエバと子女のことをいうのです。

それでは、この四位基台の中心は何でしょうか。それは神様でもなく、アダムとエバでもなく、子女でもありません。皆さんは、四位基台というものについて語りますが、この中心に何をおいて連結されるのでしょうか。何がセンターを設定するのかということが問題です。それは、神様でもなく、アダムとエバでもなく、子女でもありません。真の愛のみが中心を設定することができるのです。

父母と子女が、完全な愛の一体を成した真の家庭は永遠です。それは、永遠であると同時に絶対的です。その愛の起点というものは、唯一であり、不変であり、絶対的です。そのような愛は、神様にだけあるのではなく、父にだけあるのでもなく、母にだけあるのでもありません。家庭基盤の上で成立するのです。愛を中心とした家庭の信義というものは、愛が絶対的なので、絶対的です。それから、すべての関係においてもこれは絶対的です。

そこにおいて、一つが侵犯されるということは、全体の破壊を意味するので容認することはできません。したがって、四位基台自体は、愛が侵犯される問題があるので、その愛を審判するものが自らの生命を凌駕するものであったとしても、これを擁護して保護しなければなりません。最も恐ろしいことは、この愛の基盤が壊れることなのです。それが一つの核になって拡大されたものが世界です。アダム家庭でその息子の家庭が生まれて、父母の家庭と息子の家庭が一つにならなければなりません。それで、四位基台が展開すれば、この四位基台は、未来において霊界の四位基台に移動するのです。

平和の世界をどのようにしてつくりあげるのでしょうか。平和の世界は一つです。統一の世界も一つです。なぜ一つでなければならないのでしょうか。神様の創造理想が絶対的だからです。絶対的な創造主の創造理想は絶対的です。絶対的に一つしかありません。二つあるものを絶対的とはいいません。永遠に一つです。一つしかないその中心的存在が神様なのですが、神様の創造の偉業、創造理想のみ旨を成し遂げることができませんでした。アダムとエバが堕落したがゆえに、めちゃくちゃになってしまったのです。

未来において、私たちが天上天国の中心となり、地上天国の中心となるのです。天上天国は縦的な基準であり、地上天国は横的な基準ですが、これが一つになって地上天国と天上天国が統一されるのです。これは、神様の真の愛を中心として、統一的大家族を編成す

ることを模倣したものです。これが神様の創造理想です。

人間は、誰もが幸福と自由と愛と理想を希求しています。その理想を希求するにおいては、刻一刻と変わるような理想は願いません。そのような観点から私たち人間世界を見れば、人間は変わるのが常であり、変遷していく歴史の中に生きているのです。そのような観点から見るとき、今世界人類は、理想や自由や真の善などを探し求めていますが、既に壁にぶち当たって疲れ果て、呻吟しているという現象を私たちは直視するようになっているのです。

真の自由の主人、平和の主人、幸福の主人、善の主人、愛の主人、理想の主人がいるとすれば、その主人は、私たち人間よりも次元が高く、変わることのない絶対的な一つの中心存在でなければならない、ということを私たちは考えるようになるのです。

それでは、皆さんが相続するというならば、今までの勝利的なすべてのサタン世界の覇権的基盤を中心として、神様の心に刺さった恨の釘を抜いてしまうことも貴いことですが、神様の創造理想をもって、超民族、超国家、超人種、超宗教的に理想的国家形態は成し遂げなければならないのです。神様の創造理想は、一つの世界であり、一つの大宇宙家族理想なのですが、それを展示することができるある国、ある国家がない、この現在の世界においては、先生の手を経て出発しなければならないということを、皆さんは知らなければなりません。

天国はどのような所かというと、主体的な神様の愛を中心としてすべてが一つとなって和合し、お互いに喜ぶことができる家庭を世界的に展開させた所です。そこが神様の理想とされる天国です。結局、神様の愛を中心として調和した大家族理念の世界圏が成されて、初めて天国になるのです。そのようになってこそ、神様が構想された世界となるのです。

人間世界に真の愛を完成したならば、政治的に、文化的に、また環境的に何か問題が起こるでしょうか。真の愛の世界では、解決することができない問題はありません。真の愛の世界は、まさしく歓喜と理想が充満した自由と平和と幸福の世界です。真の愛の同位権、同参権、相続権によって、喜びと幸福が無限に、そして永遠に拡散していく世界です。今日、世界人類が抱いている難問題は、真の愛の完成によってのみ、その根本的な解決が可能なのです。

善の基準は、愛の中心である神様です。今日、全人類が苦痛と混乱の現実から逃れようとこれほどまでに身もだえし、自由と平和をこれほどまでに渇望しているのは、人類の本心が善の基準を探し求め、愛の中心を探し求めているからだということを示しているのです。愛の中心を求めて、地上に永遠の幸福の世界を築こうとすることは、万民共通の願いであり、方向です。

本来、人間を造られた神様の目的は、霊的な基準にある妄想的、空想的な国家理念を成し遂げることではなく、生きている間に自分が汗を流しながら、生活しているその基盤の上に家庭と氏族を編成し、民族と国家を編成

して、神様が愛される希望の国、希望の天国を成すことだったという事実を知らなければなりません。このような国を成し遂げて神様の愛を受けなければならないというのが本来の創造理想です。このように、地上に何の基盤もない霊的な国だけを願ってきたというようなことは、神様の願いではないということをはっきりと知らなければなりません。

二) 天宙大家族を形成し

(1)天宙大家族の基本は家庭

アダムとエバを真の父母として生み殖えた人類は、一つの大家族を築き、アダム文化圏の平和世界を成し遂げていたはずです。したがって、復帰歴史の帰結は、真の父母と真の愛を中心とした真なる家庭を探し立て、これを中心として編成されるようになっているはずです。この時、中心である真の家庭は、人類の願いであると同時に、神様の願いです。この真の家庭は、真の愛と真の生命の始源となり、人類の平和と幸福の起点となります。

第四節は何ですか。天宙大家族です。世界が兄弟であり、一つの血統です。神様のように保護しなければならないのです。ですから、神様の王宮に座っていたとしても、この第四節は成し遂げなければなりません。天宙の大家族を形成し、自由と平和と統一と幸福の世界を成し遂げなければなりません。先生の心情は、そのような心情です。天宙大家族主義者です。自由と平和と統一と幸福を植えつけてあげなければなりません。その言葉は何を意味するのでしょうか。先生の歴史を表しているのです。先生の歴史が表題です。はっきりと知らなければなりません。

神様が立ててこられた家庭を中心として、天下が要求する標準を立てようとするので、祖父母のモデル型、父母のモデル型、夫婦のモデル型、子女のモデル型がなければなりません。韓国は、親族大家族主義です。七代が一つの家で暮らすことができる主義をもって、何百名、何千名が、一つの家族として生活することができる伝統的歴史を、皆さんがつくっていかなければなりません。

統一教会の氏族的メシヤの道と、どうしてこのようにぴったり一致しているのか分かりません。そして、今後皆さんの家庭が、お互いに大家族を抱き、世界の前に誇っていく競演大会時代が来るのです。そして、一族の家庭が祝福を受け、一族で賞金をもらう時代が来るのです。その人々は、すべて皇族になることでしょう。

「神様の創造理想である天宙大家族を形成し」とは、神様のみ旨である大家族を完成しなければならないということです。ゆえに、サタン世界を切ることはできません。

自分がいくら王権を備えたとしても、アダム家庭の王権はないので、堕落していない王権を代表しようとすれば、サタン世界のすべての人を大家族へと収拾し、同じ自由と平和と統一と幸福の位置に立った者にしなければなりません。そこにおいて初めて自由と平和と統一と幸福なのです。私たちの理念は平和統一です。

神様の理想は、世界がすべて一つの家庭になることです。一つの家族です。四大心情圏と三大王権を完成した人々が満ちあふれたところなので、神様を中心として一つの家庭なのであって、二つの家庭とはなり得ません。

私たちは、創造理想である天宙大家族を形成して、世界が一家族になるのです。その立場は、父子の関係において最高の立場であり、夫婦の関係において最高の立場であり、兄弟の関係において最高の立場です。また、家庭、氏族、民族、国家に対する関係においても、最高の立場とならざるを得ません。

中心にいらっしゃる神様は、父にもなられ、国の中心にもなられるのですが、その国の代表者は、その国民を子女のように愛するのです。また、神様が世界の中心としていらっしゃるのですが、その世界の代表者は神様を中心としているので、万民を兄弟のように愛するのです。そのような大家族社会であることに間違いはありません。

神様の創造理想は、大宇宙大家族です。自分一人だけではありません。天地のすべての人が一つの家族なのです。

人類は、氏族と宗族と皮膚の色の問題を超越して、神様を父母として侍る大家族世界を成し遂げなければなりません。

私たちが神様の計画を知ろうとすれば、まず神様のみ旨が何であるかを知らなければなりません。神様は、永遠、不変、唯一、絶対的なお方です。したがって、神様のみ旨も永遠、不変、絶対的でないはずはありません。神様が人間を創造される時の目的と理想があったので、その目的が成し遂げられていたならば、その世界は、愛によって統一された世界であり、神様を父として侍り、全人類が兄弟姉妹として仲むつまじく暮らす単一世界となり、人間大家族の世界となっていたはずです。

生きていらっしゃる神様は、永遠、絶対、不変のお方です。したがって、そのお方のみ旨も、永遠、絶対、不変とならざるを得ません。神様が人間を創造される時、目的と理想をもって創造されました。その目的が成し遂げられた世界は、愛によって統一された世界であり、神様を父として侍り、神様を中心として全人類が兄弟姉妹として仲むつまじく暮らす人類大家族の世界です。

平和というものは、すべての人類が個人、家庭、社会、国家、世界において神様の真の愛と真理を共有し、それを実践することによって人類が兄弟姉妹であることを悟り、地球大家族社会を成し遂げた時においてのみ実現されるものだということを、はっきりと悟らなければなりません。

天宙大家族をつくりあげなければなりません。一つ一つの単位は家庭ですが、それはカイン、アベルの時から一つの家庭ではありません。全世界の家庭は、天宙的大家族理想を中心として、いかなる環境においてでも、意地を張って自分だけを中心として、周りから孤立して凝り固まるのではなく、環境に合わせて生きていかなければなりません。人類は神様の息子、娘の大家族です。このような大家族にならなければならないのであって、ただ盲目的に生きるのではありません。その大家族形成において、地上世界というものは天上世界の基準に合わせて生きなければなりません。

(2)天宙大家族社会は、共生、共栄、共義の社会

理想的な社会や国というものは、すべての人が国境と皮膚の色を超越して相互協力しながら調和をつくりだし、幸福に暮らしていく社会です。この社会は、人々が一人の神様の息子、娘であることを自覚し、真の父母を中心として一つの兄弟となった大家族社会であり、そこは血統と所有権と心情を復帰した祝福家庭が、真の父母の言語と真の父母の文化のもとで自由と平和と統一の世界を成した世界です。神様の心情文化の中で、人々は共生、共栄、共義の生活をするようになるのです。

未来に到来する世界は、神様と人間と万物が調和を成した新しい心情文化と真の家庭による愛の文化の世界です。真の愛によって互いに「ため」に生きながら、和合、協力して共に生きる、共生、共栄、共義の世界です。未来の歴史は、「人類一兄弟姉妹」を念願する人類が人種を超越した真の愛による真の家庭と真の父母中心の真なる家庭理想によって、「世界一家庭」の夢を実現する歴史でなければなりません。

理想世界は、永遠、不変、絶対的な神様を父として侍り、全人類が兄弟姉妹として「ため」に生きながら仲むつまじく暮らす人間大家族の世界です。この世界を成し遂げるための神様の摂理を全体的に指導されるお方を「救世主」、あるいは「メシヤ」と呼びます。真の愛の回路がふさがった世界において、「ため」に生きる生活をもって模範を示されるこのお方は、人類理想の動機であり、目標です。

私たちの理想世界は、経済的には共生主義であり、政治的には共栄主義であり、倫理的には共義主義の社会です。共生主義とは、神様の真の愛を基盤とした共同所有をその中心内容とします。共生主義社会の基本となる典型は家庭です。単純な物質的所有だけではなく、神様の愛を基盤とした共同所有です。

家庭におけるすべての財産は、たとえ法的には父母の名義になっていたとしても、実質的には父母と子女、すなわち全家族の共同所有となっています。それと同時に、家族の個々人は、各々部屋と衣類、お小遣いをもつようになります。このように、家庭においては、全体目的と個体目的が調和を成すようになっています。このような愛が基盤となった家庭の理想的な所有形態が社会、国家、世界へ拡大されたものが、理想社会の所有形態です。

神様と人間の本然の関係は、真の愛を中心とした関係です。神様と私の共同所有、全体と私の共同所有、また隣人と私の共同所有など、様々なケースはありますが、神様の真の愛が中心となった感謝する心をもって共同所有するようになっているのです。

神様の愛を完成した人間がつくりあげる理想世界においては、全体目的と個体目的は自然に調和するようになっています。人間には欲望もあり、愛の自律性もあるので、個人所有や個体目的は許されています。だからといって、無制限な個人所有、あるいは全体目的を害する個体目的を追求することはありません。完成した人間は、自らの良心と本性によって、自分の分限に合った所有量を取るようになるのです。

特に、真の愛による万物の真なる主人の人格をもった理想的な人間の経済活動は、愛と感謝を底辺とするので、欲張ることや不正は

あり得ないのです。同時に全体目的に反して地域や国家利益が強調されることはあり得ず、経済活動の目標は、利潤の追求でなく、全体の福祉に焦点が絞られるのです。

共栄主義は、神様の真の愛を基盤として共同参加し、自由、平等、幸福の理想が実現される政治を追求する主義です。共同政治参加の形式は、代議員を選出することになります。しかし、政治の単位が愛中心の家族であり、政治はその愛中心の家族関係を拡大したものであることを理解するとき、代議員の候補者はお互いに敵対関係にはなり得ません。一人の神様を父母として侍る兄弟関係によって、周辺から推薦され、奉仕するための使命感をもって候補になるのです。

そして、いくつかの選出段階の過程を経る時や最後の決定には、人為的な条件が介入されるのではなく、神様のみ旨に従って決めなければなりません。すなわち、祈祷と厳粛な儀式によって抽選で当選者を確定する方式になるのです。神様のみ旨と天運によって当落が決定するので、みな感謝し、結果を喜ばしい心で受け入れるのです。

共義主義は、真の愛を中心とした普遍的な倫理道徳を守り、構成員すべてが善と義の生活を追求する主義のことをいいます。これは、神様の真の愛による絶対価値のもとで、万民が倫理道徳を普遍的に実践する道義社会を指向する理想となるのです。

理想世界は、理想家庭と完成した人間を前提にしています。真の愛による理想的な父母、理想的な夫婦、理想的な子女の統一的な調和が理想家庭の要件になります。また、完成した人間は、真の愛によって心身の調和、統一を成した人になります。

このように完成した人々が、真の愛の基地である家庭生活、またその拡大である社会生活において、自律的に善と義を行う最高の愛の世界、道義世界がまさしく理想世界です。

理想世界の国家の重要機関と部署は、共同目的のもとで、お互いに円満な授受作用をしながら調和します。ちょうど人体の様々な器官が頭脳の指示による共同目的のもとで、合目的的、あるいは自律的に協助し合うのと同じです。

三) 自由と平和と統一と幸福の世界を完成

(1)私たちの理念は、統一された一つの世界

神様の世界的、宇宙的な家庭となり、自由と幸福と統一と平和の世界を完成しなければならないというのが「家庭盟誓」の第四節です。代表的な家庭となり、すべて統一するのです。四大心情圏がそうではありませんか。そして、送り出すのです。いくら統一された四大心情圏を成したからといっても、それで終わるのではありません。その家庭を中心として世界を収拾しなければならない責任があるのです。

世界の不安と、サタン世界の混沌と不幸と不自由な環境を収拾しなければなりません。「家庭盟誓」の第四節は、そのことをいっているのです。「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様の創造理想である天宙大家族を形成し、自由と平和と統一と幸福の世界を完成することをお誓い致します」なのです。

「神様の創造理想である天宙大家族を形成し」とは、神様のみ旨である大家族を完成しなければならないということです。ゆえに、サタン世界を切ることはできません。

自分がいくら王権を備えたとしても、アダム家庭の王権はないので、堕落していない王権を代表しようとすれば、サタン世界のすべての人を大家族へと収拾し、同じ自由と平和と統一と幸福の位置に立った者にしなければなりません。そこにおいて初めて自由と平和と統一と幸福なのです。私たちの理念は平和統一です。共産主義と一つとなり、統一するのです。

今までの聖賢たちは、外的世界をいかにすれば一つにすることができるかということばかり考えました。しかし、統一教会の異なる点は何かというと、内的な私たち自身からどのように整備して一つにするかという点です。統一がないところには平和はなく、自由もありません。統一が成されたその上に幸福もあり、自由もあるのです。統一が最も重要なのです。

統一の基盤の上においてのみ平和があり、幸福があり、自由があり、希望があります。皆さんの心と体が一つになっていないのに、そこに自由がありますか。会社に行っても、心と体が世界大戦をして安定していないのに、自由がありますか。自由という言葉自体も嫌うのです。心と体が闘っているのに、そこに幸福がありますか。ですから、皆さんも人生問題において悩むのでしょう？　これは、根本的な大きな問題です。心と体が一つになっていないのに、どこに幸福があり、どこに平和があるというのですか。

問題は、すべてこの線上で起きるのです。平和もここで成され、幸福もここで成され、自由もここで成され、希望もこの線上で成されるのです。これが駄目になれば、すべてのものが壊れていくのです。共産党の輩の話です。マルクスやヘーゲルのような人は、よく見ると心と体が闘っていたのです。ですから、それが人の根本だと思ったのです。堕落ゆえにそのようになったということを知りませんでした。堕落したという事実を知らなかったのです。ここから闘争概念が出てきました。

統一がないところには自由はなく、統一がないところには幸福もありません。統一がないところには平和もありません。統一がないところには希望もないということを知らなければなりません。そのようになっているか、いないか見てみましょう。皆さんの心と体が一つになっていないのに、幸福ですか。心と体が闘っているのに、幸福ですか。そこに自由がありますか。お互いがよく回らなければならないのです。

平和は、お互いにバランスがとれていなければならないのですが、バランスがとれていますか。皆さんは、夫婦同士お互いによく調和していますか。皆さん夫婦が、朝二人でけんかすれば、その一日は幸福ですか。そのようなことはありません。それを知らなければなりません。統一が成された基盤の上に自由があるのです。統一がなければ幸福もありません。統一がなければ平和もなく、統一がなければ希望もないのです。

統一がないところには幸福はありません。幸福もなく、希望もないのです。すべての人間が願う幸福や希望やすべての平和や自由も、

その基盤の上に立たなければなりません。統一の基盤の上ですべてのものが成されるのです。父母と子女の間でも、統一の基盤の上に自由があり、幸福があり、真の喜びがあるのです。このようになっています。それを考えてみてください。今日、人類は、自由を求め、幸福を求め、平和を求めています。それは、どこで探し出すのですか。どのように探し出すのですか。統一的基盤の上で、主体と対象、縦と横、あるいは前後左右の関係において、その相対的主体と対象関係において、幸福や平和や自由が成し遂げられるのです。今まで、これが分からなかったのです。実際そうですか、そうではありませんか。

平和というものは、統一の土台がなければ成し遂げられません。平和や幸福という言葉があるでしょう？　そして、自由という言葉があります。このすべてのものが一つにならないところでは何も存在しません。夫婦がけんかするところに平和がありますか。一つになるところに平和があるのでしょう？　夫婦が一つにならなくて幸福がありますか。幸福が逃げていってしまうのです。自由も同じです。男女がぶつかり合うところに自由がありますか。対立するところには平和や自由はありません。自由も統一の土台の上にあるのです。

息子、娘が一つになり、平和の国を取り戻すために統一がなされるところに自由が生じます。また、平和と幸福が生じます。私の夫までそこで踊る家庭になれば、幸福と平和圏が生じるのです。踊った人がその次には「おお、有り難い！」と言って、一家が踊り、国が踊り、世界が踊るようになれば、神様も歴史的に解放された息子、娘として宣布し、万国の万民がすべて統一王国の国民として改善されていくのです。

平和というものは、水平線上におかれるのであって、傾斜したところにおかれることはありません。皆さんは、みな自由を求めているでしょう？　「自由！　自由だ、自由！」と、そのようにするでしょう？　その自由は、どこで暮らすことを願うでしょうか。統一された水平線上で暮らしたいと思うのです。その上に自由があり、その上に幸福があり、その上に平和があり、その上に希望があり、その上にすべてのものがあるのであって、傾斜したところには何もありません。皆さんの個人の希望、個人の自由がどこにありますか。心と体が一つになった上にあるのです。幸福がどこにありますか。皆さんの心と体が一つになった水平線上にあるのです。希望もそこにあるのです。

神様の愛と人間の愛の出発が同じでなければ、この方向が二つになります。方向が異なり、目的が異なるようになるのです。そのようになれば、平和の世界、統一の世界を成し遂げることはできません。統一や平和、また幸福や自由や平和や希望がすべてなくなるのです。

一つになるところに自由があるのです。目も、焦点が一点に合う時は気分が良いのです。鼻が詰まれば大変ですが、鼻が通れば自由です。耳も自由です。手も自由です。体も自由です。一つにならなければ、自由はなく、平和もなく、幸福もなく、統一もありません。バランスのとれた平らなところに、すべての

創造の完成があるのです。とがっているところには、とどまることができません。

世界的に勝利した真の父母を通して、すべて学んで知っているので、皆さんは家庭的天国だけつくればいいのです。先生は世界的天国をつくらなければなりませんが、皆さんが真の父母になろうとすれば、心と体を一つにし、夫婦が一つになり、子女が一つになって、アダム家庭が堕落することによって失ってしまったものを取り戻せばいいのです。これが始まりです。平和、幸福、自由、統一、天国を取り戻さなければなりません。そのようになれば、万事亨通（注：万事滞りなくうまくいくこと）です。ＯＫなのです。

理想的な社会や国というものは、すべての人が国境と皮膚の色を超越し、相互協力しながら調和をつくり出し、幸福に暮らしていく社会です。この社会は、人々が一人の神様の息子、娘であることを自覚し、真の父母を中心として一つの兄弟になった大家族社会であり、そこは、血統と所有権と心情を復帰した祝福家庭が、真の父母の言語と真の父母の文化のもとで自由と平和と統一の世界を完成した世界です。神様の心情文化の中で、人々は共生、共栄、共義の生活をするようになるのです。

(2)愛だけが自由と平和と幸福の要素

堕落がなかったならば、真の愛によるアダム家庭は、どのように生み殖えていったでしょうか。アダムとエバは、真の愛による理想的な真の夫婦になり、さらには真の父母となって、その子孫と全人類の真の先祖になっていたはずです。アダムとエバを真の父母として生み殖えた人類は、一つの大家族を成し、アダム文化圏の平和世界を成し遂げていたはずです。したがって、復帰歴史の帰結は、真の父母と真の愛を中心とした真なる家庭を探し立て、これを中心として編成されるようになっているはずです。この時、中心である真の家庭は、人類の願いであると同時に、神様の願いです。この真の家庭は、真の愛と真の生命の始源となり、人類の平和と幸福の起点になります。

人類にとって最も緊急に必要なものは、真の父母による真の愛の革命です。根本的な変革なくして、人類の幸福や平和の世界を願うことはできません。今日の諸問題は、真の父母が中心になった真の家庭主義と神様の真の愛主義によって整理されなければなりません。皆さんは、これまで先生が世界的に展開してきた平和運動と、真の愛主義の理念を深刻に評価しなければなりません。青少年に対する真の愛と純潔運動、また国境、文化、人種、宗教を超越した真の愛による「真の家庭運動」等を教団的行事としてのみ考えてはいけません。

世界平和は、まず平和な国家がなければなりません。そして、国家の平和は、家庭の平安が前提とならなければなりません。世俗的な人々が一般的に願ってきた権力や富や知識は、平和と幸福の必要条件となることはできません。真の幸福は、愛の所有に比例するのではなく、外的な生活の便利さによって左右されるものでもありません。真の愛とともにいる時に、真の平和と真の幸福を得るようになるのです。真の平和も、無限の幸福も、真の愛によって人のために生きて与える時、そ

して与えたものが全体を回って再び訪ねてくる時にだけ、確実に得るようになるのです。

今人類は、総体的危機時代を迎えています。特定分野の準備や努力だけでは不十分です。

指導者たちは、時代の良心となって積極的に模範を見せながら、平和世界の基本単位であり、前提条件である真の家庭を創造し、それを人々に指導する運動に乗り出さなければなりません。先生が主管する三億六千万双祝福結婚式の儀式は、先生が生涯を捧げて理想家庭に対する教育をしてきた一つの結実です。祝福儀式に参加する者は、既に神様に婚姻を約束し、神様の真の愛を中心として、真なる夫婦、真なる父母となって、真なる家庭を成すことができる人々です。平和世界実現のために、真の家庭運動を通じた歴史的な真の愛の革命がとうとうと進行しているのです。

愛がないところには、幸福もありません。平和もありません。男性と女性は、どのようにすれば平和になることができますか。男性と女性が平和であろうとすれば、凹凸を中心として一つにならなければなりません。それは、男性と女性の夫婦同士しかありません。ほかの男性やほかの女性と幸福になることができますか。それは、大きな事故です。すべてそうです。ほかの男性やほかの女性とでは、自由になることはできません。事故です。ゆえに、愛を除いてしまってはすべてのものが未完成だということを知らなければなりません。

理想や自由や平和や統一や幸福というものは、愛を中心として展開するのです。男性世界、女性世界において、自由というものは、愛で一体となっていない場においてはあり得ません。この地上の自由の出発基地はどこでしょうか。お金でもなく、物質でもなく、知識でもありません。愛から出発しなければならないという論理が出てくるのです。出発点が一つなので、目的点、定着点が変わってはいけません。

自由と平和も一つです。一つになるところに自由があります。しかし、自由だけあったのでは、立つ場所がありません。自由は実体ですか、何ですか。男性と女性がいれば、お互いに気兼ねすることなく一つになって行動するのです。そのようになるためには、何が必要ですか。ただ二人だけでいたのでは、一つになることはできません。これが問題です。

何が一つにするのですか。自由が一つにするのではありません。男性と女性が自由でいたければ逃げていくでしょう？　それが自由ですか。夫を忘れることができず、行く途中で帰りたいと思い、行く途中で涙を流すことが自由ですか。違います。すべてのものは、愛を中心としなければならないのです。愛を除けば、すべて壊れていきます。

父母が愛で一つになる時、一つになったその場が自由の天地です。そこに平和が訪れ、幸福があるのです。また、兄弟同士がみな一つになろうとすれば、何が一つにするのですか。自由が一つにするのではありません。「平等」という、そのような言葉が一つにするのでもありません。愛が一つにするのです。父母と息子、娘、また小さな子供たちと年を取った人たちを、何が一つにさせるのですか。何が、おじいさんと孫を一つにするのですか。自由が一つにするのですか。何かの主義が一

つにするのですか。愛です。愛なのです。国もそうです。国の大統領が一つにするのではありません。国を愛する愛国者が一つにするのです。人類もそうです。博愛、愛を中心として一つになるのです。これは、どうすることもできません。

天国は、本然の神様の愛から出発しましたが、それは天上天国と地上天国の出発地です。自由の出発地、幸福の出発地、理想の出発地、平和と統一の起源がそこにあるのです。驚くべき話です。それを肝に銘じなければなりません。

真の愛がなければ、自由もなく、平和もなく、統一もなく、幸福もありません。真の愛を中心としてのみ、すべてのものを完成することができます。真の愛を中心とした自由、平和、統一、幸福の完成時代です。

歴史的な闘いを終息させるためには、神様に帰らなければなりません。まず神様を中心として、個人の心と体が一つにならなければなりません。そして、そのような真なる男性と真なる女性が、神様を中心として真の家庭を築くことによって、その中に再び神様を迎えるようになるのです。したがって、真の愛を中心とした真の家庭こそ、神様が宿る地上基地となるのであり、さらには真の国家と真の平和世界の出発地となるのです。そして、これによって、真の自由と幸福の世界が開かれるのです。

五　家庭盟誓第五節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世
界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します。

一) 主体的天上世界と対象的地上世界の統一

(1)天上世界が主体である

第五節は何かというと、「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界……」、天上世界は、私たちの主体の位置にあるのです。そこには、数多くの氏族と数多くの民族が入っています。このような天上世界の秩序を基準として、地上もこれに合わせていかなければならないという話です。

「毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一」です。一つになるためには分かれてはいけません。地上世界は、神様の創造理想である超家庭的基準を中心として一つになって暮らすだけではなく、常に主体的な天上世界に合わせて暮らしていかなければならないということです。ゆえに、皆さんの生活において、体恤的な愛を感じなければなりません。霊界を感じることができ、神様が悲しまれること、喜ばれることを感じることができる体恤的生活にならなければなりません。

宇宙には、霊界があり、肉界があるということを知らなければなりません。ここで、天宙大家族をつくりあげようとすれば、地上天国と天上天国を一つにしなければなりません。そのような使命があるのです。

それで、「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」なのです。毎日です。一年に一度ずつではありません。「毎日、主体的天上世界と」です。天上世界の天国があるのです。その次に、対象である地上世界があるのです。天上世界と地上世界の何ですか。「統一に向かい、前進的発展を促進化」です。そのように休むことなく、興奮し、刺激的に発展させて、一つにしなければなりません。休む暇はありません。天上世界と地上世界の大家族になろうとすれば、天地を一つにしなければなりません。

皆さんは、主体的天上世界を知りません。一日に何回霊界のことを考えますか。全世界的に見るとき、霊界に行っている人が多いでしょうか、それとも現在この世界にいる人が多いでしょうか。皆さんは、今考える時、どのように考えましたか。霊界のことを考えましたか。今、この世のことだけを考えるのは、しっぽのことしか考えていないということです。

堕落することによって、霊界の観念がなくなったのです。ですから、ここで私たちの家庭は、毎日、主体的天上世界があるということを知らなければなりません。どちらがプラスかというと、霊界です。心がプラスなのと同じです。体は世界を代表し、心は霊界を代表しているのです。心はプラスと同じであり、体はマイナスと同じです。ですから、主体的な心の世界を無視する生活をすれば、地獄に行かなければなりません。体が心を打ったのと同じように、心の世界を否定したのですが、これを反対にしなければなりません。

今まで、皆さんが生活する中においては、毎日、天上世界が主体になっているという観念をもっていませんでした。そのような観念を、ひと月に一度ももちませんでした。それではいけません。毎日考えなければなりません。一日生活圏がすべて主体的天国に向かい、今日その相対である地上の完成形態を備えなければ、未来に天上世界の完成基盤を成すことはできません。直接的関係です。毎日、一年、一生を通じて、その直接的関係を築いてこそ、あの世に行ったのちに、そこが自らの第二の活動舞台となり、居住地になるのです。

神様を中心とした霊界が主体です。今、霊界に連結されているあらゆる階層というものは、ないのと同じです。オリジナルは、神様が主体であり、地上の真の父母が主体です。先生が教えることが神様の本質的な内容と一致しなければ、すべてのものが駄目になっていきます。この柱がつぶれていくのです。ですから、それらの内容が一致しなければなりません。内容が一致しなければならないのです。

「家庭盟誓」の第五節は何ですか。「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい……」、統一です。霊界と肉界の統一です。これが問題です。皆さんは、一遍にこの網の目に引っ掛かるのです。それを越えるために、先生も血の涙を流し、恨に満ちた峠を越えてきたのです。

皆さんは、統一教会の背後に潜んでいる秘密を知りません。何も知らないのです。また知る必要もありません。それを知れば、どれほど多くの重荷を負わなければならないでし

ょうか。真の御父母様がこのように苦労されるのに、私が昼食を一食だけでも恵んでもらえば、涙がぽろぽろ出るのです。私はそれを願いません。蕩減条件に引っ掛かって、真の御父母様たちが歴史的な恨をすべて清算するために苦労したことを中心として回想することは、神様も願わず、真の御父母様も願いません。

それを忘れてしまい、希望に満ちた地上天国の名を呼び、真の父母の代身者として意気も高らかに天下を自らの舞台とし、天地を自らの国の舞台として飛躍しなければならなのです。跳躍でなく、飛躍しようという欲望をもって走り、力強く生きていかなければなりません。

統一圏内に、皆さんは、個人から家庭、氏族まで八段階です。八段階まで統一的内容を経ていかなければならない道があるというのに、一つも知らなかったのです。これを見過ごす国があり、主体国があるという時、皆さんが霊界に入っていって、この法の統治を受けなければならないとすれば、どうするつもりですか。個人的に拘束されるのです。

霊界へ行けば、皆さんの夫婦もすべて別れ別れになります。家庭に十人の家族がいれば、すべて別れ別れになります。一つの所に行くことはできません。それを知らなかったので、そのようにしているのでしょう。そのようなことをすべて知った上で見れば、天上世界の影のように地上世界があるのです。すべて実体がなければなりません。映像も実体に従って似ていくのです。一つになっていくのです。

霊界と地上に通じる道を探すために、地獄からすべてを遍歴し、踏査しながらその内容を明らかにしたのです。皆さんは、歴史的な宝物を手に入れたのだということを知らなければなりません。「家庭盟誓」の第五節で何といっていますか。「毎日、主体的天上世界」です。毎日、主体的天上世界に対して知らなければなりません。これが分かるのです。

「主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい」です。対象的地上世界は、実と同じです。ここと、この霊界は同じです。ですから、統一です。霊界と地上を統一することができるという事実です。そのようになることによって、地獄の門と天国の門が開き、天国に入っていくのですが、それを一刻でも早く促進化させなければなりません。強制的に、たたいてでも追い立てていかなければなりません。

それでは、なぜ地上が重要なのでしょうか。なぜ地上が重要かという問題を考えるとき、人間が生まれた所は天上世界ではありません。地上世界です。すべてのものを造られた神様がこの被造世界を存在するようにした所も、この地上です。また、その地上の主人として造られたのがアダムとエバ、すなわち人間です。

そのような人間を造って何をしようとされたのでしょうか。このように見るとき、人間を造られた目的は何でしょうか。人間を造られた目的は、地上に天国をつくるためです。統一教会の言葉を借りて言えば、創造理想を完成することです。それでは、神様のみ旨とは何でしょうか。創造理想を完成することです。その創造理想は、どこで完成するのでしょうか。霊界ではなく、地上で完成しなければなりません。地上が問題です。

地上生活が絶対的に重要です。地上がどれほど重要であるかということを知らなければなりません。キリスト教徒たちは、世の中を捨ててみな天国に行こうと考えるでしょう？妄想的です。地上で完成しなければならないのです。地上生活の重要さを知らなければなりません。地上生活の重要さを覚醒しようというのです。地上生活の重要さを忘れてはならないのです。霊界に行けば、千年、万年、常にその生活に反映されるのです。これがすべて種です。ここで種を蒔いたものが、天上世界で実として刈り取られるのです。ゆえに、完全な種をよく蒔かなければなりません。地上世界の重要さを覚醒しましょう！　もう一度覚醒しなければなりません。

(2)天上世界と地上世界を統一させなければならない

アダム家庭は、神様が造られた地上世界の相対的なすべての主体と対象の核であり、神様は天上世界の主体と対象の核です。それで、地上天国と天上天国の二つの核が合わさって一つの統一された天国になるのです。地上世界の天国の核になることができるアダムと天上世界の家庭の主人となる核が一つになるのです。

堕落した世界をすべて整理し、一つの世界にしなければなりません。真の愛は、一つです。絶対的に一つです。真の愛を中心として連結された国は、全体が一つです。霊界と肉界は内と外と同じです。今、二つの世界が一つになることに拍車をかけるのです。強制的にでも、早く行かせなければなりません。たたいて追い立てなければなりません。

霊界を解決しなければなりません。その世界は、地上で解決しなければなりません。霊界に入っていって引っ掛かってはいけません。この地上ですべて解決しなければならないのです。これは、観念ではなく実在です。先生も、そのような世界が現実と同じであるということを感じたので、迫害が多くても問題ありませんでした。反対して迫害することが観念ならば、これは実在です。そのようにしてこそ生き残るのです。霊界が実在するということをいかにして実感するかということは、最も重要なことです。

自然のすべての現実と同じように、霊界の事実をそれ以上にはっきりと知らなければなりません。霊界は膨大な世界ですが、そこにはイギリス人やアメリカ人だけが行っているのではありません。世界各国の人の中で、心霊状態がぴったり合う人同士で集まっているのです。五色人種が一箇所に集まっているのです。

ドイツ人や、どこどこの人や、昔見た世の中の人の形態は知っていますが、心の世界を見るので、心の世界がどれくらい美しいか、そこにどのくらい近くなるかという問題がかかってくるのです。心の世界がより美しい人と一つになろうとするのです。ですから、「一つになってはいけない」と言っても一つになるのです。何千年、何万年前の人であっても、ぱっと会えばすぐに分かるのです。先生の話を観念や夢のように思い、事実として感じることができないでしょう？　言葉だけではなく、事実として感じて生きることができるかが問題です。この世は影です。影と同じです。

天上世界には境界線がないので、その世界で愛の心をもつようになれば、人と出会うたびにすべて通じるのです。心は老いません。心は、長生きすればするほどもっと美しくなるのです。心は美しくなるのですが、霊界で神様を中心とした息子、娘の見た目が醜くてもいいのですか。深い愛の中で和合して暮らす人は、みな美男美女になるのです。

女性たちだけではなく、男性たちも同じです。すべての問題を祈祷し、先生の教えと導きを受けなければなりません。エデンで堕落していなければ、神様に侍って暮らすはずでした。神様が実体をまといたいと思って創造されたのがアダムの体なので、先生を中心として霊界も通じるようになるのです。神様の愛を完成させるのは、神様御自身ではありません。人間を通して完成するのです。

今まで、誰が霊界の中心的な役事をしたのでしょうか。イエス様が中心でした。イエス様と聖霊です。神様を中心としてイエス様と聖霊が一つになるために体制を整えてきた基盤である地上のキリスト教を中心として、神様とイエス様と聖霊の名を通じて、キリスト教文化の体制を形成してきたのです。霊界がそのようになっているので、地上もそのような形態になり、霊界と肉界の二つがすべて合わさって一つにならなければなりません。同じです。

そのようにして、霊的世界と肉的世界が、いつ一つに統一されるのでしょうか。再臨時代になって統一されるのです。そのようになれば、再臨される主は、霊界のすべての体制的内容を相続し、引き継いで地上に来られ、世の中をその体制に一致する環境に追い立てていって収拾するのです。世の中を収拾して上がっていくのです。

天上世界と地上世界を連結させることができる内容は何ですか。それは、一時的に存在したものをもってはできません。時間と空間を超越したものであり、過去においても同じであり、今日においても同じであり、未来においても同じ内容にならなければなりません。そして、その内容は、私たちの日常生活において、接している四方の環境の、すべてのものが拒否せずに常に好む内容にならなければならないのです。夜でも昼でも好むことができる内容にならなければなりません。そのようになってこそ幸福なのです。

そのようなものは何かというと、愛です。それは、お金では不可能です。知識でも不可能です。そのようなものは、一方的なものにしかなりません。権力もやはり同じです。その時代的環境によって、権力の限界はありましたが、その権力をいかにして拡大させるかという問題を考えてみたとき、「私」という個人的権力を国家的に拡大させるためには、そこには何が橋渡しとならなければならないでしょうか。また、国家的権力を世界的権力へ拡大させるためには、何が橋渡しにならなければならないでしょうか。やはりこれも、橋となることができる何かがなければならないのですが、それが愛です。

霊界は、先祖が暮らしている所であり、肉界は子孫が暮らしている所ですが、この二つは、カイン・アベル関係です。霊界は天使長世界であり、肉界はアダム世界です。これが一つになって統一されれば、天上天国と地上天国になって共に暮らすようになるのです。

地上世界と天上世界が一つにならなくては、天国になりません。霊界と肉界が一つになり、天使長世界とアダム世界が一つになるのです。カインとアベルが一つになることによって、真の父母がいらっしゃることができる基準ができるのです。堕落する以前の状況へ戻っていくのです。

真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かって前進しています。前進的発展です。出ていく時も、前進的発展をして促進化させなさいというのです。いかなる制裁を加えたとしても、私がこの地上で先祖から受け継いだ罪の皮を完全に脱がなければ、天に飛翔し、解放された天国の神様の愛を受けることができる懐へ帰っていくことはできません。家庭復活です。家庭が行くにおいては、世界に遮るものがあってはなりません。

神様を中心として、地上世界と天上世界が一つになるのです。真の父母を中心として、統一的立て札をもってくることによって、ここで一つになるのです。創造される時、神様は絶対信仰、絶対愛、絶対服従により、「ため」に生きる愛をもって創造されたので、私たちも、このような全体、全般、全権、全能の基盤の上に立たなければなりません。創造本然へ帰っていき、そこで愛の対象を取り戻すためには、絶対信仰と絶対愛、そして絶対服従の心情をもって、投入し、忘れてしまうのです。神様がなされたすべてのものを再び取り戻すために、私たち自身も、神様を身代わりして、この世界に対して絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなければなりません。

皆さんの心と体の焦点が合わないのです。これを是正しなければなりません。それゆえに、宗教は体を打つのです。それで、三年から五年の間で、習慣性を通じて、心の命令に絶対順応することができるようにしなければ、天上世界の道に直行することはできません。ここから京釜線の線路を通じて北韓と連結しようとすれば、レールの幅が同じでなければなりません。また、中国と連結しようとしても、レールの幅は同じでなければなりません。それと同じように、人間が地上世界で生きた幅と霊界に行く幅も同じでなければなりません。その軌道は何かというと愛です。霊界の愛と地上の愛が同じでなければ、統一はできません。

霊界をはっきりと知らなければなりません。「家庭盟誓」の第五節を見れば、「私たちは真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」となっています。ですから、霊界を知らなければなりません。霊界を知らなければ、完成時代に入っていくことはできません。それで、先生は、成約時代のみ言とともに霊界の内容を教育しようとするのです。

神様は、思いどおりにすることができません。怨讐世界を殺そうとすれば、一瞬にして殺すことができる能力をもっているのですが、これを処断することができず、手をつけることができないのです。そのような血族が残されているのが堕落世界であるということを、今日の宗教圏は知らなかったのです。

真の父母の名をもって、初めて霊界のすべての実相を詳細に知り、堕落の動機からサタ

ンの秘密、そして神様の秘密までを探り出して知り、このようなことを明らかにした内容が統一教会の原理です。今、地上世界と天上世界に分かれて、混乱状態の相反的な歴史をなしているすべてのものを和合させるために、これをもって、霊界の根本や実相から、地上の人生の根本までのすべてを解消して連結させようとしているのです。

「毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい」です。統一です。霊界と肉界の統一です。これが問題です。皆さんは、一遍にこの網の目に引っ掛かります。先生もそれを越えて立つために、一生涯血の涙を流し、恨に満ちた峠を越えたのです。

私たちは、毎日地上天国を成し、大家族を成すのですが、その大家族はどこを標準として生きるのかというと、天上世界です。天上世界がより大きな大家族です。毎日のように、相対的な世界のカイン的大家族が拍子を合わせ、統一を形成しなければなりません。内容がそのようになっています。「統一に向かい、前進的発展を促進化する」のです。前進的発展です。そのように一つになってじっとしているのではありません。発展していくのです。

家庭時代から氏族時代、氏族時代から民族時代、このようにして世界化へと進んでいかなければなりません。これができなければ、途中ですべて解散してしまい、めちゃくちゃになるのです。仕事をしても、どこに行っても、座っても、休んでも、いつも主体的霊界の前に対象として一つになり、それが停止しないで、発展に発展を重ねることによって、家庭から氏族、民族、国家、世界の峠を越える立場に立ち、そのようにして、初めて地上天国と天上世界に入っていくのです。このサタンが蠢動したすべてのものをきれいに整理して、統一的神様の本然の理想世界を完成するのです。ですから、促進化しなくてはいけないのです。順序がそのようになっています。

真の御父母様がこの地上に現れて知ることによって、恨多き峠を越えて、平坦な高速道路をつくらなければならないので、川があれば橋を架け、山があれば穴を開け、今や地上の家庭が天上まで直行することができる高速道路を設定したということを知らなければなりません。ですから、先生は、万国の高速道路の建設を主張しているのです。霊界と肉界がすべて行き来する時代になってくるので、それをするのです。主体世界と対象世界が和合することができる対等な世界に発展していくので、今からこの世界は、霊界と統一化される急変の時代へ前進することができるのです。

先日、世界文化体育大典を行ったでしょう？　八つの団体を集め、そこで真の父母を宣布し、救世主の宣布をしたことを知っていますか。世界の著名な人々がみな集まりました。世界教会協議会（ＷＣＣ）の責任者は誰ですか。マール・グレゴリオス（Mar Gregorios）氏が前会長ですが、この人は有名な人です。そのような人を集めて「私がメシヤです。私が救世主です。私が真の父母です。私に侍りなさい！」と宣布したのです。

なぜそれをしたのですか。それをしなければ、大統領選挙が終わって、その就任式をしなかったのと同じことになるのです。それでは、事務処理ができません。サタン世界と地上世界を清算する手続きを踏むことができな

いのです。引き継ぎができません。先生が発表することによって、天上世界や地上世界において、相続が起きるのです。霊界で相続が起きれば、地上で従っていくのです。それゆえに、仏教、儒教、キリスト教が怨讐だったのですが、今からは怨讐となり得ません。一つになるのです。このようになることによって、霊界の統一が起きるのです。

二) 前進的発展を促進化することを

(1)毎日、前進的発展を促進化しなさい

前進的な発展というものは、絶対に止まってはいけないのです。いつも前進しなければなりません。発展しなければなりません。前進的発展です！　これは、東西四方に発展しなければなりません。

むやみやたらに盟誓文を立てたのではありません。ですから、心と体が一つにならず、夫婦が闘っていれば、盟誓文を唱えることができません。息子、娘を中心として、一つになることができなければ、覚えることはできないのです。家庭がどれほど貴重なのかを知らなければなりません。そのような家庭の盟誓文をもったということは、歴史始まって以来のすべての天上世界が注視します。

あのようにできる地上の幸福者がどこにいるのかというのです。霊界に行ったすべての先祖がうらやむのです。ですから、私たちの母親は、何も知らずに祝福をしてあげるのですから、どれほど喜びますか。先生が初めて還故郷の話をし、万民の解放圏を中心として、すべて共に祝福してあげるので、父母もそのケースに入っていくのです。このようにして秩序が立つのです。

前進するにも全力を尽くしてするのですが、促進化するというのです。統一に向かって前進的発展を促進化するのです。前進的に発展するにも、棍棒でたたいて促進化させるというのです。「家庭盟誓」の五節は、何ゆえに出てきたのですか。地上無事通過、天上無事通過です！　地上と天上地獄の門は関係なく、天国の門にだけ入っていくための行列ができ、動き始めています。「統一に向かって前進的発展を促進化！」とは、激しく追い立てなさいということです。弟がたくさんいる兄ならば、弟を張り飛ばしてでも祝福されるようにしなければならないのです。自分の息子が祝福されないと問題が生じます。

家庭時代から氏族時代、氏族時代から民族時代、このようにして世界化へと進んでいかなければなりません。これができなければ、途中ですべて解散してしまい、めちゃくちゃになるのです。仕事をしても、どこに行っても、座っても、休んでも、いつも主体的霊界の前に対象として一つになり、それが停止しないで、発展に発展を重ねることによって、家庭から氏族、民族、国家、世界の峠を越える立場に立ち、そのようにして、初めて地上天国と天上世界に入っていくのです。このサタンが蠢動したすべてのものをきれいに整理して、統一的神様の本然の理想世界を完成するのです。ですから、促進化しなくてはいけないのです。順序がそのようになっています。

今日、統一教会の食口たちは、「霊界を中心として毎日歩調を合わせよう」ということを、数カ月に一度くらいしか考えません。ですから、自分勝手になるのです。これを毎日のように検討するのです。大家族を築いても、

また堕落するかもしれません。これを保護するために、前進的統一に向かって、前進的発展を「促進化」するのです。拍子を合わせていくのです。

その次には「することをお誓い致します」です。まだ天上天国の統一は成されていないというのです。促進化して、そこに合うようにしていかなければなりません。これが、絶対必要です。

「家庭盟誓」の五節は何ですか。私たちは、毎日このように暮らしているのですが、地上天国を築いて、大家族を成したとすれば、その大家族は、どこに標準を合わせて生きていくのかといえば、天上世界です。天上世界がより大きい大家族です。相対的な世界のカイン的大家族が、毎日のように拍子を合わせて統一を形成しなければなりません。「統一に向かって」です。内容がそのようになっています。

「統一に向かって前進的発展を促進化すること」、前進的発展といえば、そのように一つになってじっとしているのではありません。発展していくのです。家庭時代から氏族時代、氏族時代から民族時代、このようにして世界化に行かなければならないのです。それで、「前進的」といいました。停止する日には滑り落ちます。停止する日には地獄と連結します。一歩でも前進してこそ、繁栄と天国に連結します。そういうことです。前進的発展です。「発展」を促進化させなければならないというのです。絶えず発展するように催促させなさいということです。前進を早くしなさい、早くしなさいということです。

統一に向かって一つになって行くのですが、前進的とは何ですか。統一して静かに遊んでいるのではありません。前進しなければなりません。世界が、霊界が残っているというのです。統一しても定着できません。さらに進んでいかなければならないというのです。前進的発展を促進化しなければなりません。早くしなさいというのです。促進化することを誓うのです。

前進的です。いつも進んでいかなければならないのです。停止してはいけません。「前進的発展を促進化！」です。発展しながらも促進化させなさいというのです。重要な言葉です。地上において、版図は小さくても、世の中の相対的世界を中心として、自分が暮らす環境に、天国と同じ模型的基準を備えた模型をつくっておいてこそ、あの国に移すことができるというのです。それはやむを得ないのです。そのようなことは、文総裁が適当に言っているのではありません。天国と地上世界のすべてのことを総合して、天が願う道は、このように行かなければならない道であるがゆえに、「家庭盟誓」が出てきたというのです。

育たなければなりません。停止は、死んでいること、死亡と通じるのです。皆さんが統一教会に入る時、み言を聞いてどれほど喜びましたか。今、それ以上に喜びますか。私の喜びを越えて世界の喜びと一つになろうというのが神様の心であり、願いであり、み旨なのです。先生もその道を行っています。ですから、私の喜びが私の喜びではありません。世界の喜びと一つになろうとする努力をしています。すべて天に始まって、自分に帰りま

した。人間によってふさがってしまったというのです。

「家庭盟誓」の五番目は何ですか。「私たちは真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を」です。前進的発展です。新しい人になるのです。生きている者は育ちます。統一教会に入る時、喜んだその心が、ますます大きくなっていきますか、なくなっていきますか。大きくなっていくのです。前進的発展を促進化させなさいというのです。生きているものは育つのです。育つことができないものは死にます。霊界との相対的価値を失ってしまうために、失われてしまうというのです。それで、前進的発展を促進化させなさいというのです。

促進、急ぐのです。寝てばかりいて、怠惰で、食べて楽しんで、そのようなものは、歴史にありません。忙しいというのです。一生は短いのです。それで、「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」です。休まないで走りなさいというのです。先生のようにということです。眠ることもせずに走りなさいというのです。

「主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」。毎日のように前進しなければならないというのです。停止すれば、死亡が展開します。死亡が展開するのです。ですから、停止してはいけないのです。「前進的発展を促進化」し一歩でも、毎日毎日、前に行くべきだというのです。「そのようにすることをお誓い致します」というのです。ですから、天上世界に要求されるすべての内容を、地上世界で寸分も違わないように前進的発展をしなければなりません。

「真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化」すると言いました。統一に向かって前進すればいいのに、前進的発展を促進化させなければならないと言いました。激しく追い込まなければならないのです。たたきなさいというのです。地上でぐずぐずして歩調を合わせることができなければ、激しく追い込まなければなりません。

私たちの「家庭盟誓」の五節に、「前進的発展を促進化することを」というのがあるでしょう。一つにして前進するのはよいのですが、その促進化は、棍棒で何度もたたいてするというのです。強制です。子牛のように強制的に引っ張ってきて祝福してあげれば、祝福を受けたその人が、霊界に入っていくときに地獄には行きません。長い時間かからずに天国に行くというのです。ですから、強制的にでもしなさいというのです。

毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一、主体世界と対象世界が統一されなければなりません。統一に向かって前進的発展、前進していく発展です。「前進的発展を促進化することをお誓い致します」。促進化、早く早く早くするようにするというのです。停止してはいけません。停止すればいつの間にか落ちていくのです。地獄と通じ、死亡と通じるのです。停止は落ちていって地獄と通じ、

促進は発展と通じるのです。休まないで走りなさい、走りなさいというのです。先生のように、眠ることもせずに走りなさい、走りなさいというのです。そして、自分が考えた世界に私が関係を結ぶのであり、考えない世界にどのように関係を結ぶのですか。それでこそ統一がなされるのです。共に考えてあげなければなりません。相対的に考えてあげなければならないのです。

(2)真の愛のハイウェイを築こう

今までの霊界や地を、神様は見たくないというのです。完全に清算してしまわなければなりません。それを皆さん自体が、一つ一つ救援するのではありません。イエス様の代身として一族の家庭を清算したのちに、氏族的メシヤ、国家的メシヤ、世界的メシヤ圏の地上天国、天上天国を完成しなければならないのです。イエス様の心情圏を体恤して、イエス様が十字架の死の位置に行きながらも果たせなかった、家庭の恨を解いてあげなければなりません。神様もそれを願っています。ですから、皆さんを通してそれを解いてあげなければなりません。その上に皆さんの家庭を築かなければなりません。

皆さんは、今までのキリスト教のように信じる、そのような習慣的な統一教会だと考えるなというのです。そのような統一教会ではありません。深刻です。全体に対して教えるみ言を中心として、皆さんの世俗的な家庭観念を撃破しなければならないのです。霊界と地上世界において、そのような観念をすべて清算しなければなりません。清算したのちに、新しい世界を成し遂げなければなりません。

神様は、このように汚された地を再び回復されようと、人間と関係を結ぶ救援摂理をしてきていらっしゃいます。堕落することによって、神様を裏切った立場にいる人間たち、万物とも比較できないほど完全に落ちた人間たちに、神様が再び向かい合うために、救援摂理をしてきていらっしゃるのです。サタンが支配し、サタンが讒訴する人間を神様が主管されるために、橋を架ける役事をしてこられましたが、それが旧約時代を経て、新約時代を経て、今に至っています。

「家庭盟誓」の五節は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、毎日、主体的天上世界と対象的地上世界の統一に向かい、前進的発展を促進化することをお誓い致します」です。これは、世界がすべて同じ家庭だというのです。天地において、すべて主体的天国の対象的立場で一つにならなければなりません。一つになるだけではなく、まだ地上には地獄が、サタン圏が残っているので、これを早く促進化させなければなりません。一日の時間が惜しいのです。そこに二代、三代が展開すれば問題になります。ますます困難が繁殖していくということを知らなければなりません。至急だというのです。

二〇〇〇年までに、すぱっと断ち切って総進軍しなければならない時代だというのです。急進的な発展を催促するので、急進的な滅亡の形態が世の中に展開し、すべて分立されて地獄に落ちていくのを、皆さんが死ぬ前に目で見ることができるのです。復帰の型をもっていく私たちの家庭が果たさなければならない使命と不可分の内容を中心として、盟誓文として設定したということを知らなければなりません。

祝福を受けた家庭は、先生が来ることを願いますか。皆さんの家に来ることを希望しますか。いつ行くか分かりません。ですから、宴のお膳をすべて売って十年間待ちながら備蓄しておいて、来るや否や何時間以内に祝宴できるように準備することができる心をもたなければなりません。

そのような家には、先生がどこかに行こうとしながらも訪ねていくというのです。行くことができなければ、車が家の前で故障して、その家に訪ねていくことができるようになるというのです。精誠を尽くさなければ考えられません。先生が霊界を知らなければ、この道を行くことができません。霊界のお父様が先生のお父様です。

ですから、霊界の秘密を誰よりも知っているのです。避難中にも空腹になった時は、先祖を動員するのです。道端の過ぎゆくお客さんのために、宴のお膳を準備するようにして接待するのです。そのようなものもたくさん恵んでもらいました。そのような話をすれば、うそのようなことが多いので話しません。

結婚するまでは、アダムとエバに所有権はなく、すべて神様のものです。堕落していなければ、どうなるでしょうか。ですから、所有していればどろぼうです。国でも誰でも、すべてどろぼうです。アダム家庭で結婚する前の所有は、神様の所有です。アダムが堕落することによって人間が所有権をもったという事実は、神様を追放したということです。追い出したのです。物質の所有権、愛の所有権、家庭の所有権を破壊しました。

この怨恨を知っている神様の前に、この怨恨を知っている真の父母の前に、これを蕩減しようとすれば、世界万民が真の孝子になり、忠臣にならなければなりません。そのためには、「体までも祭物としてください。自分がもっているすべての宝物、自分の生命までも捧げます」と言い、「これを父母のものとして神様に返してください」と言うことができなければなりません。

メシヤはどのような位置に来るのですか。メシヤは、愛を中心として、地上の法も愛することができ、天国の王宮法までも愛することができなければならないのです。地上にそのような世界をつくるために来られるのです。そして、天上世界と地上世界が合徳されるのです。天上世界と地上世界を何によって一つにするのですか。天上世界にプラスになり、地上世界にプラスになることとは何ですか。神様を中心とした愛です。

真の御父母様がしなければならないことは何ですか。地上世界と天上世界のふさがった道を、すべて開いてハイウェイをつくっておかなければならないのです。ハイウェイを地獄から、ダンベリーから、霊界の地獄から天上までつくっておかなければなりません。

地上世界から天上世界まで行くことができる大きなハイウェイを、まっすぐに築こうというのです。この道は、真の愛の道でなくてはなりません。真の愛のハイウェイをつくり、終着と出発が同じ高さ、同じ広さの道を地上と天上に築いてみようというのです。その目的成就は、地上天国を達成したのちに可能なのです。

神様の命令によって、天上世界と地上世界のすべての飛び石を片づけてハイウェイを、

鉄橋をおくのです。出発すれば、休まずにロンドンまで走ることができるその道をつくろうというのが先生の希望です。それは、簡単なことですか、難しいことですか。難しいことです。

どれほど難しいですか。死ぬようなことが一度や二度ではありません。途中でストップできません。なぜですか。冷遇されたことを耐えることはできません。無視されたことを忘れることができないのです。昼が来ても夜が来ても、それを忘れることができないので、昼も夜も走るのです。ついてくる者が一人もいないようにして神様に会うのです。神様は、あの人類の果てにいらっしゃいます。そこに行って会い、談判することができて、覇権を握ってもってくるまでは休む時間がないのです。

こうして霊界を統一して、地上の闘いで地上統一をしたのです。サタンの偽りの家庭出発によって壊されたすべてのものを、真の父母が来て、神様に一八〇度反対した場で再び一八〇度背を向けて結婚することによって、地獄と天国が分かれるのです。天国は、家庭で入っていくところであることを知らなければなりません。

六　家庭盟誓第六節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、

天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成すること

をお誓い致します。

一) 神様と真の御父母様の代身家庭として

「家庭盟誓」の六節とは何ですか。「私たちの家庭は真の家庭を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」です。

真の御父母様は何をしたのですか。真の御父母様の代身家庭となり、真の御父母様が動けば天運が従っていくのと同じように、皆さんも真の御父母様と完全に一つになり、天運を動かす家庭となって天の祝福を周辺に連結させなければなりません。自分一人ではいけないというのです。周辺に自分と同じ家庭をつくるのです。そのような主体的家庭になることを誓うということです。

「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として」、神様と真の父母の代身家庭にならなければなりません。このようになることによって、真なる家庭となり、天宙を動かす家庭として、神様の祝福を自分だけが受けるのではなく、周辺に連結させる家庭を完成するのです。

動けば福となり、福を分け与えてあげることができる家庭になりなさいということです。皆さんの周辺に原理を知らない人がいれば原理を伝えてあげ、反対しても共に生き残って、どのようにしようと闘わずにそれを通過させていくのです。それからさらに周辺に教えてあげ、どんどん拡大させなさいというのです。一人で生きてはならないというのです。

「神様と真の御父母様の代身家庭として」。皆さんは、神様の家庭と真の父母の代身家庭です。神様と真の父母の代身家庭は、天運を動かす家庭です。「天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」。

私だけが祝福を受けて良い生活をするというのではありません。結局は、王族となり、全体の人々を民族にしなければならないというのです。

天の代表的家庭になり、この地上に平和と幸福と自由をもたらす仕事をしなければならないのです。それで、いつも天地に歩調を合わせなければなりません。その次には、神様と拍子を合わせたので、家庭を中心として周辺に天運を移してあげることができる家庭にならなければならないというのです。それが六節だというのです。結局は、そのようにして真の御父母様の代身家庭と天の心情的統一圏が築かれ、心情文化世界が今日の全世界に出発するというのです。それが盟誓です。

先生だけが真の父母ではなく、皆さんも真の父母にならなければなりません。皆さんもやはり完成しなければならないのです。先生は大きい木になりましたが、細胞が繁殖するように、皆さんは細胞のようにならなければならないというのです。大きい木である先生に似て出てきた種です。根本に似たのです。

世界的にすべて勝った真の父母によって、皆さんは、すべてを学んで知っているのです。先生は、世界的天国をつくらなければなりませんが、皆さんは、家庭的天国だけつくればよいのです。皆さんが真の父母になろうとするなら、心と体が一つになり、夫婦が一つになり、子女が一つになって、アダム家庭が堕落することによって失ってしまったものを取り戻さなければなりません。これが、平和、幸福、自由、統一、天国の始まりです。万事亨通だ、ＯＫだというのです。

「家庭盟誓」の六節は、何というのですか。真の御父母様の代身家庭として天運を動かすというのです。創造理想がすべて従っていくようになっています。天の祝福を周辺に連結させる家庭にならなければなりません。それを築いておくのです。そして、神様の祝福世界と天上世界において、天国の功臣になれるかどうかという問題は、心情文化世界に絶対に血筋を汚さない歴史を何代、何千年残せるのかということにかかっているというのです。ぴたっと公式になっています。

六番目、「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成する」です。自分だけが幸せに生きようとしてはいけないというのです。私たち祝福家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として・・ですから、天運が神様と真の御父母様と共にあるのです・・天道を動かす、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成するというのです。その言葉は、「私たち祝福家庭は、どこに行っても全体に福を分け与えることができる中心家庭になる」ということです。

水が流れていって、うず巻きができるのも一つの条件です。同じ道理で、統一教会では、蕩減路程によって成し遂げられていくことを皆さんは知らなければなりません。自分一人ではありません。先生を身代わりし、神様を身代わりした家庭として動いてこそ、天運が協助してくれるということをはっきり知ることを願います。

二) 天運を動かす家庭となり

天運が訪ねてくる道がどこかということを、私たち人間は知らなければなりません。天運は、永遠に動くのです。天運は永遠の道を行くのですが、その道は、永遠の原則に従って変わらずに巡り巡っていくというのです。巡り巡っていきながら、因縁を合わせていきながら興亡盛衰の道をつづっていくのですが、ここに立っている私たち人間が、どのようにこれに合わせていくかということが問題です。

天運を誰が調整するのですか。この宇宙を創造なさった主人が調整するのです。その主人とは誰ですか。宗教的術語では神様であり、そのほかにも様々な名詞がありますが、それは問題ではありません。しかし、ある中心存在がいなければならないのです。その中心存在がいることをはっきりと知って、その中心存在が行く道に確実に従っていくようになるときには、万事が亨通するのです。

天理の運勢が巡っていくのですが、その天理の運勢は、いい加減にいくのではありません。秩序と軌道があり、法則があるために、それを通じて動くのです。それゆえに、天運に隷属しているすべての存在は、「ため」に生きる存在としてあるのです。

個人に運があるように、家庭や国家にも家運と国運があり、さらには世界の運、そして、天と地の全体には天運があります。いくら良い運をもって生まれた人でも、その家庭が傾く時は共に困難を経験するのであり、個人運と家庭運が良い人でも、もっと大きい国運が傾けば共に没落するしかありません。さらに、すべてのものを包括して、すべてのもののためにある天運の方向と進行によって、国運や世界の方向が決定するのです。世の中で天道を立てるということは、すなわち個人や国家の行く道を天運に合うようにするということです。

天運は、善の人が必要とするすべてのものを供給するようになっています。それゆえに、欲をもって「私がこれをどのようにする」と考えてはいけません。善であろうとすれば、必ず私が高い位置に行くか、低い位置に行くか、その二つの道しかないのです。低い位置に行くようになれば、すべてのものが自然に供給されるようになっています。空気と水も満たされ、天運も入っていくようになるので、このくぼみが埋められるのです。

「天運を動かすこと」が六節でしょう。「真の愛を中心として、真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭」になります。真の御父母様のすべての受難は、自分が幸せに暮らすためのものではありません。すべての人類を自分が解放させて天運を振り分けてあげ、天運を移してあげるためのものです。真の父母に従ってくる天運を、そのまま譲り渡してあげなければならないのです。祝福の基になりなさいということです。分かりますか。いくら促進化され、一つになっていても、その人が地上に来て、自分自体の福ばかり受けていってはいけないのです。地上に功績を立てて、すべての人が満足し、大きい天運の恩恵を受けることができるものを譲り渡していかなければなりません。

文総裁が一言言えば、世界がそのとおりになるので、みな恐れるのです。それは、ただそのまま成されるのではありません。歴史の行く道が明確なので、そのような時を知って話すのです。先生が予言して、それが当たるのではありません。そうなるようになっているのです。皆さんも、天運の方向をすべて見分けることができるようになれば、未来のすべてのこと、千年後のことも「このようになるはずだ」と明確に話すことができるのです。

先生はそれを知っているので、天運の風が吹くようにしたのです。低気圧になっていれば、高気圧の風が吹くようになっています。私たちが全力を尽くして、最大の低気圧の精誠を尽くせば、神様の高気圧の愛圏が押し寄せてくるので台風が吹くのです。このような話を信じなかったでしょう。この天運の風をつかみ取らなければなりません。

先生を見て、おばけのような人だといいます。世の中の誰も知らないことを知って、天運がどのように巡っているのかを知っています。今、大韓民国の国運がどこに行き、アジアの運がどこに行き、世界の運がどこに向かっているのかを知っているのです。これを縛りつけておけば、すべて引きずられます。走る千里馬のおしりにくっついているはえは、血を吸い込みながらも千里を行くのです。そうなのです。天運にしがみついて落ちなければ、万事がＯＫだというのです。

世界を抜け出すことができない人々は、天運を扱えません。それゆえに、統一教会は、世界を乗り越えなさいというのです。天運をもって越えなさいというのです。それで、天運をもって神様を中心として神様と対等な位置に立ち、神様から「あなたは、この地上に天運を活用できる主人である」という名前を受け、み印を受けてきて、初めてメシヤになるのです。そうしてこそ救世主、真の父母になるのです。それゆえに、先生一人をおいて全世界が打ってきましたが、本来、善の人は打ちません。

天運に乗ろうとするなら、先に天運が行く道がどのようなところかを知らなければなりません。そこは、万民が喜ぶところ、楽しんで飲み食いするところではありません。すべてが嫌う位置です。その場は、どのようなことでも常に感謝して、責任を遂行しながら栄光を神様の前に返して、自分自ら感謝することができる位置でなければならないのです。そのような位置に立つ人が天運に乗ることができるのです。それゆえに、皆さんは、必ず勝利しなければなりません。

大韓民国に、神様の愛を中心として、天上天下の代わりをし、歴史を身代わりし、「ため」に生きる愛をもって、万国の愛、万民の愛の権限、自らの権限ではなく全体の権限を身代わりし、自分は影になって彼らを太陽にして、「太陽の光になりなさい」と言うことができる慕心の位置に立てば、神様が私を訪ねてこられて、直接太陽の光になってくださるというのです。天国を移していくことができる力が、万福を移してくることができ、天運を左右できる力が、真の愛の道の前には同伴するというのです。

今、天運が韓国の地に発動できる時になったので、皆さんは、この民族のために、再創

造するところに同参しなければならないのです。堕落したために、主体は、再創造しないといけないというのです。思想をもって神様の代身相対をつくっておかなければならないのです。それゆえに、家庭を新しくつくらなければならず、国家を新しくつくらなければならず、世界を新しくつくらなければなりません。皆さんは分かりませんが、このような使命が天道という命題のもとに、二十四時間、時間を超越して作用しているので、皆さんがこれを受け入れて新しい人生の春を迎え、世界を抱いて歌っていくことができる、人生行路の成功者にならなければならないのです。

自分だけが幸せに生きようとしてはいけないというのです。私たち祝福家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として・・ですから、天運が神様と真の御父母様と共にあるのです・・天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成するというのです。その言葉は、「私たち祝福家庭は、どこに行っても全体に福を分け与えることができる中心家庭になる」ということです。そのように生きられなかったのではないですか。

三) 天の祝福を周辺に連結させる家庭

「家庭盟誓」の六節は何ですか。「神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり」です。神様のすべてを相続し、天運を動かす家庭となり、周辺に神様の祝福を分けてあげなければならないのです。周辺とは誰ですか。カイン世界のことをいうのです。それが必要です。自分一人で天国に行きますか。周辺にいる人、全員がつるはしを持って、「こいつ！　お前だけ天国に上がっていこうというのか。み旨がそうなっているのか。私が『統一教会は嫌いだ』と言えば、むちをたたきながらでも死ぬまで忠告しなければならないのに、なぜしなかったのか」。いつか、このようなことが起きるというのです。

「天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」。これは何かというと、祝福の基です。私が祝福を受けたのは、私一人がうまくいくためのものではありません。先に呼ばれれば、全世界の兄弟たちの家庭を私と同じ家庭にしなければならないのです。「天運に従って、私と同じ家庭をつくるための家庭になります」というのです。一人だけのためのものではありません。「家庭において『家和万事成』を成して、すべての家庭が和合して統一することができるようにします」、そのような意味です。

自分たちだけ幸せに暮らすのではないのです。自分だけ幸せに暮らしてはいけないのです。神様は、そうではありません。父母は、そうではありません。息子、娘がもっと幸せになるようにしなければならないというのです。四方にすべて連結させる家庭を完成しなければなりません。

今から皆さんが、天の祝福を周辺に伝えてあげなければ、霊界の先祖が皆さん自身を蕩減させるのです。反抗するというのです。絶えず道を妨げて妨害するというのです。「盟誓文にこのようになっているのに、なぜ行動しないのか、こいつ！」と言います。ですから、すべて分けてあげなさいというのです。それをしなければ、霊界に行って引っ掛かり

ます。重要な一つの契約文書です、契約文書。盟誓文です。

「家庭盟誓」の六節は、「私たちの家庭は真の愛を中心として、神様と真の御父母様の代身家庭として、天運を動かす家庭となり、天の祝福を周辺に連結させる家庭を完成することをお誓い致します」です。祝福の基になりなさいというのです。それでこそ、一つになった天と地のすべてのものを備えて、その場を中心として神様が下さった祝福の基になるのです。福の泉になりなさいというのです。

私だけが祝福を受けて良い生活をするというのではないのです。結局は、王族となり、すべての人々を民にしなければならないということです。神様と真の父母の代身家庭は、天運を動かすのです。天のすべての祝福を、万民の前に平等に分けてあげる家庭的祝福の基になるというのです。神様と真の父母の家庭は一家庭です。一家庭ですが、祝福家庭がたくさんいるので、全世界に拡張して神様の家庭と真の父母の家庭を身代わりし、福を分けてあげる機関になるのです。福を分けてあげる家庭にならなければなりません。全員が福を受けるようにしてあげるというのです。

大豆のもやしに毎日水を与えれば、水は流れていきますが、もやしは育ちます。皆さんの立場は、ただ、何と言いましょうか、水に溺れたねずみのように哀れですが、統一教会が大きくなっていけばよいのです。先生の身の上は悲惨で、ダンベリーの監獄に入っていって指弾を受ける人になりましたが、これで神様のみ旨が拡張されると考えていった先生の道は、ダンベリー以後に一躍飛躍したというのです。そのような事実を皆さんは見たでしょう。

誰の名によってですか。先生の名前によってではありません。この宇宙の名によって、神様が共にいてくださったのです。天道が連結されているがゆえに、神様が運行できる道にならなければならないので、宇宙が協助して、勝利に向かって前進するようになっているということを知らなければなりません。

家庭における孝子とは何ですか。愛を中心とした孝子です。国の忠臣とは何ですか。愛を中心とした忠臣です。世界において、四大聖人とその教えを中心として文化圏を収拾し、世界的な新しい背景を形成したのも、愛を中心として民族を越えて世界の人を愛そうという者たちです。

このようなことを見るとき、最後に天運に帰結するにおいて、旗手となることができる人は、どのような人でしょうか。神様は、天も愛して地も愛します。ですから、天地を愛することができる愛のチャンピオンでなければなりません！　そのような結論を得ました。

七　家庭盟誓第七節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結された為に生きる生活を通して、心情文化世界を完成することをお誓い致します。

一) 本然の血統と連結した

「家庭盟誓」の七節が重要です。簡単ではあっても重要なのです。「私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と」です。本

然の血統です、堕落していないアダムの、堕落と全く因縁のない本然の血統を受け継いで、「血統と連結した心情文化世界を完成することをお誓い致します」です。私たちの世界は、心情文化世界です。神様のただ一つの愛を中心とした、統一家族、一つの家族です。高いも低いもなく、五色人種が一つの家族生活をしなければなりません。今後、そのような時が来ます。

神様を中心とした本然の血統です。その本然の血統を受け継げば、本然の心情文化が展開されるのです。本然の血統を失ってしまったところには、心情文化は生まれません。文化というものは、歴史性を通して連結するのです。家庭を中心として、社会を中心として、国家と世界を中心として、これが連結しなければならないのです。

「本然の血統と連結した心情文化世界を完成することをお誓い致します」。純潔な血統を残すのが問題です。そのようにしなければ、自分たちと心情文化世界が中断されるのです。あの膨大な天国が私が暮らすことのできる心情的基盤になっているのですが、心情文化世界ができなければ、その世界が断絶されるのです。それゆえに、心情文化圏を中心とした生活をしなければなりません。

「本然の血統」とは何ですか。アダムとエバを中心として、純潔な真の父母の直系子女の血筋を、千年、万年残さなければなりません。この環境は、めちゃくちゃです。私たちは、節操を守り、貞操を守ることによって、めちゃくちゃな中ですべての最高の福を受けることができる位置に行くのです。これは、先生の特権です。誰も手が出せません。誰も根本の根になり得ないのです。

本然の血統は、堕落した血統ではありません。サタンの血統を根絶した、堕落したものを蕩減復帰した血統です。接ぎ木をしたのです。根を抜いて接ぎ木をすれば、三代以後には、本然の血統の種を受けるというのです。接ぎ木をした木から種を受けたものが、本然の真のオリーブの木にならなければならないというのです。そのためには、三代を経なければなりません。自信がありますか。

皆さんは、偽りのオリーブの木でしょう。偽りのオリーブの木が接ぎ木される以上にならなければなりませんが、母の腹中に再び入っていって出てくることはできないのです。三代を経て、そこで収めた種を植える時、真のオリーブの木にならなければならないのです。三時代を経なければなりません。深刻です。

統一教会で最も重要なことは、本然の血統を汚さないことです。それは何かというと、皆さんの子孫が、アダムとエバが堕落したように血統を汚すことがあってはいけないというのです。「本然の血統と連結した心情文化世界を完成することをお誓い致します」です。

エバが行ったたった一度の失敗によって破壊された本然の血統を、億千万世にわたって蕩減条件を立てて取り戻したというのですから、考えただけでもむごたらしいというのです。血統関係とは、本当に恐ろしいのです。

本然へ帰るのです。七節は、そのことです。本然の血統、本然の血統は、神様を中心とし

た血統です。本然の血統と連結された「ため」に生きる生活を通じて、心情文化世界を成し遂げようというのです。血筋、数千代の清い血筋を残さなければなりません。千年、万年。男女が一瞬のうちに行った堕落が、このような歴史的な世界史を、願わない世界を霊界と肉界に広げてしまったというのです、これをどのようにしますか。深刻に考えてみたことがありますか。

本然の血統とは何ですか。堕落した血統ではないのです。皆さんは、堕落した血統と連結した夫婦でしょう。いくら誇っても、それを否定できません。本然の血統には、堕落していない本然の神様が連結しています。今から、「ため」に生きる生活を通して、心情文化世界を創造しなければなりません。神様は、それができなかったのです。本然の血統圏を中心として、地上に創造理想の根本である「ため」に生きる方策を連結できなかったので、心情世界は、地獄と連結しているというのです。それゆえに、これを天国側に転換させるには、本然のものに変えなければならないというのです。

真の愛を中心として、本然の血統、血筋です、血筋！　千年、万年、子孫が汚さないように精誠を尽くす第一代先祖にならなければならないのが統一教会の祝福家庭です。その前に、二度と堕落したものを見ることができないというのです。何百倍の世界的途上において堕落した代表的な家庭になるので、許しがない時代に越えていきます。恐ろしい時代が来ます。

それゆえに、私は、この話ができません。今は、結論を話すことができません。堕落した祝福家庭から生まれた息子、娘を、神様は見ることができないのです。これは、罪の中の罪を犯したので、地獄に逆さまに打ち込んでも、神様は見ることができないというのです。そのように、男女関係の愛において、支流を通じることは恐ろしいということを知らなければなりません。

堕落後、アダムとエバから連結した人類の血統は、サタン側に属します。自然世界のすべてのものも同じです。そこで、反対に祝福を受けることによって、すべてのものが逆に帰るのです。財産、息子、娘、夫婦が神側に属するようになるのです。そのようになることによって、全宇宙が神様に連結します。そこから、神様が思いどおりにできるようになるのです。そのように帰らないものは、サタン側に残ります。すべてのものが神側に帰らなければならないのです。財産、息子、娘、家庭、先祖まで本然の位置に帰るべきだというのです。

二) 為に生きる生活を通して

「家庭盟誓」の七節で、「私たちは真の愛を中心として、本然の血統と連結した」の次に付加すべきものがあります。「為に生きる生活を通して」、これを入れなければなりません。「本然の血統と連結した為に生きる生活を通して、心情文化世界を完成」するのです。「為に生きる生活を通して」を入れなければならないのです。「為に生きる」では漠然とします。具体的な為に生きる生活を通して、個人、家庭、全体の生活を通して、心情文化世界を完成するというのです。

「真の愛を中心として、本然の血統と連結した為に生きる生活を通して」、「ため」に生きる愛です。愛を感じることができなければなりません。神聖なのです。愛を主管できなければなりません。自分の思いどおりにしてはいけないのです。為に生きる生活を通して「心情文化世界」をつくるというのです。心情文化世界とは何ですか。神様の愛の文化世界であり、根本的な文化世界を追求するのです。どこかに愛があるならば、真の愛が関係していないものがないのが文化世界です。

私たちの中で、他人に主管されることは死んでもできない、と考える人々が多いと思います。しかし、一つ知らなければならないことは、今まで、人間たちの「ため」に存在するものに主管されて暮らすことがどれほど幸福なのかという事実を、夢にも考えることができなかったのです。

霊界の組織を見れば、天地の大主宰であられる神様、その神様は、宇宙万有の存在の中で、「ため」に存在する中心存在であるがゆえに、その方に支配されることが、どれほど幸福でしょうか。それが分からなかったのです。千年、万年支配されても、感謝することができる理想的統一圏が、ここに成立することを知っているので、神様は、「ために存在しなさい」という原則を立てざるを得なかったのです。

「ため」に生きる人になりなさい。これが、天宙生成、形成の根本です。神様も「ため」に存在していらっしゃるのです。天宙のすべてのものの中で、これに逆らうものはありません。このように主体的、生成の根源、エキス的、核心的な位置に立ったその人は、天宙、神様までも歓迎するのです。先生のような人がそうです。皆さんは、それを知らないので実感できないのです。霊界も先生を中心として動いているのです。そのような世界を知らないでしょう。ですから、いい加減にしているのです。

愛は、一人では成り立ちません。愛は、どこから出てくるのですか。私から出てくるのではなく、対象から来るのです。対象から出てくるので、私が頭を下げて対象のために生きなければならないのです。「ために生きなさい」という天理が、ここから生じるのです。限りなく高貴なものが私を訪ねてくるので、それを受けようとすれば、敬って「ため」に生きなければならないのです。「ために生きる哲学」を成してこそ、愛されるのです。

真の愛を中心として「ため」に生きる人は、夜でも昼でも、天宙万宙、どこに行こうと歓迎を受けるのです。皆さんは、いずれ霊界の展示場に展示されるのです。人間の博覧会をする所が霊界です。霊界では、地上でどのような生涯を送った人間なのか、すぐに展示されるのです。そこでびりになってみたいですか、全員が称賛する人になってみたいですか。どちらですか。最高に称賛を受ける人になってみたいでしょう。そのようになるためには、先生が話すとおりに生きなければならないというのです。最高に称賛を受けようとする前に、最高に「ため」に生きなさいというのです。そのような人は、間違いなく中心者になるのです。

永遠という概念、これは、自分のために生きるところには不可能なのです。皆さんが運

動するのを見ても、押してあげ、引いてあげる相対的方向が、大きければ大きいほど速く回るのです。知恵の王である神様が「ため」に存在する法度を立てたのは、永遠であり得るようにするためです。

「ため」に生きる人は滅びません。また、「ため」に生きる人は、霊界が絶えずコーチしてくれます。絶えず新しいものと関係を結ぶようにしてくれるというのです。新しいものと関係を結ぶので、その人は、自然に有名になり、世界的に知られるようになります。

理想世界の体制は、どのようになっているのでしょうか。家庭体制を拡大したものだというのです。その家庭教本の原則に一致できる心情圏を完成した人ならば、どの家庭に行こうと、兄弟のように接し、息子、娘のように接するようになります。だからといって、夫婦のように接しなさいという話ではありません。

また、自分のおじいさんやおばあさんと同じ年代の人は、自分のおじいさんやおばあさんのように接して、自分の息子、娘と同じ年代の人々は、自分の息子、娘のように接するのです。どこかに行って、自分の息子、娘のような子供たちが歩いていれば、「来なさい」と言って、弁当を分けて食べるのです。このようにすることのできる世界をつくらなければなりません。

「ため」に生きる世界でなければ、平和世界は訪れることができないのです。そうですか、そうではありませんか。「ため」に生きる哲学の論理を、生活哲学から生涯哲学に発展させることなくしては、この世に平和の世界が訪れることはできません。統一教会が出てきたので、それが可能なのです。

一つになることができ、平和の起源になることができるその道は、どこにあるのですか。神様御自身だけでなく、真の人間は、「ため」に生きる存在だという原則を立てざるを得なかったのです。それゆえに、真の愛は、「ため」に生きるところから、真の理想も「ため」に生きるところから、真の平和、真の幸福も「ため」に生きる位置で成立するのであって、「ため」に生きる位置を離れては見いだすことができません。これが、天地創造の根本だということを、私たち人間は分かりませんでした。

しばしば世の中で言われることは、「ああ！　人生とは何か」ということですが、人生観、世界観の確立、その次には、宇宙観の確立が問題になるのです。これをどのように確立するのですか。系統的段階と秩序をどこにおき、その次元的系列をどのように連結させなければならないのかという問題は、最も深刻です。しかし、「ため」に存在するという原則に立脚して見るときに、最も価値ある人生観は、私が全人類のためにいて、全世界のためにいて、国家のためにいて、社会のためにいて、家庭のためにいて、妻のためにいて、子女のためにいるという立場で幸福な自我を発見できるならば、これ以上の人生観はないと思うのです。

統一教会に来るようになれば、地上で幸せに生きなさいとは言いません。ひどく貧しく、激しく苦労して死に、道端に倒れて犬もかみつかない死骸を残したとしても、その場には、

花が咲く日が訪れるはずです。そこには、すべての神聖な人々が集まって都城をつくるはずです。統一教会の群れを、国のために、世界のためにうんざりするほど苦労させて、孝子、忠臣にしてみようというのが先生の考えです。「行かない」と言えば、張り飛ばさなければならないのです。足でけ飛ばしてでも、現在の悲惨さを、現在の困難を克服させるのが愛です。

三) 心情文化世界を完成することを

心情文化世界は、本然的神様の文化世界であり、堕落していない完成したアダム文化世界です。文化は二つではありません。一つしかないのです。言語も一つであり、風習も一つであり、習慣も一つであり、伝統も一つしかない、このような統一の世界になるのです。そこにおいてのみ、神様が個人と共にお暮らしになり、家庭で共にお暮らしになるということを知らなければなりません。

心情文化世界とは何か知っていますか。神様の心の世界や、天上世界、地上世界、真の父母の心の世界、すべてが一つだというのです。それで、「心情文化世界を完成することをお誓い致します」、これが、私たちの理想です。文化は二つではありません。一つです。

堕落した世界は、文化が複雑多端です。心情文化世界でなくては、個人から天宙まで連結することができないのです。ジグザグです。今まで世の中は、ジグザグに上がったり下がったりしたので、何千年かかってもまだ終着点に行くことができないというのです。心情文化世界では、あっという間に行くのです。ただ真の愛によってのみ可能なのです。

「私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結した心情文化世界を完成する」です。私たちの家庭は真の愛を中心として、本然の血統と連結した・・本然の血統です。血統が重要です。血統が変わってはならず、汚してはいけません・・心情文化世界を完成するというのです。心情文化ということは、すべての生活において、真の愛によって「ため」に生きるという思想が入っていなければならないというのです。心情文化世界といえば、全体を代表した「一つの垣根」をいうのです。心情圏、氏族をいうのです。

本然の血統と連結した心情文化世界を完成しなければならないのです。アダムとエバは、堕落していない純潔な神様の真の愛を中心とした血統の関係を結ばなければならないというのです。それで、私たちの文化には、サタンが存在せず、神様が喜ぶことができる文化圏を形成しなければならないのです。心情文化世界を成し遂げなければなりません。真の愛を中心として、心情文化世界の内容も一つであり、方向も一つです。一つです、二つではありません。

本然の血統を失ってしまったところには、心情文化は生まれません。文化というものは、歴史性を通して連結するのです。家庭を中心として、社会を中心として、国家と世界を中心として、これが連結しなければならないのです。

「本然の血統と連結した心情文化世界を完成することをお誓い致します」。純潔な血統を残すのが問題です。そのようにしなければ、自分たちと心情文化世界が中断されるのです。あの膨大な天国が私が暮らすことのできる心

情的基盤になっているのですが、心情文化世界ができなければ、その世界が断絶されるのです。それゆえに、心情文化圏を中心とした生活をしなければなりません。

本然の血統と連結した、神様の血統がある心情文化世界には、どこに行っても神様が訪ねてこられるというのです。心情文化世界では、すべてが拡大して和動するのです。このように息をするようになれば、細胞たちも拍子を合わせていくので、同じように息をしなければならないというのです。神様の真の愛において、「ため」に存在する原則において一元化され、より「ため」に生きることができるのです。そのようにすることによって、神様に栄光をお返しすることできる道があるのであって、自分のために生きなさいというところでは、神様に栄光をお返しできません。

神様の心の世界や、天上世界や、地上世界や、真の父母の心の世界も一つだというのです。それで、「心情文化世界を完成することをお誓い致します」です。これが、私たちの理想です。文化は二つではありません。一つです。それを通してこそ、個人天国、家庭天国、氏族天国、民族天国、国家天国、天上天国、永遠の世界の天国に連結するのです。その心情でなければ、個人、家庭、氏族を連結できません。

今後、理想的な世界においての主流、あるいはその基台になることができる文化の源泉は何ですか。原料になる文化として、誰もがみな必要とする文化とは何ですか。心情文化です。父母が子女を見なければならず、子女には父母がいなくてはなりません。兄弟がいないのもいけません。私の民族がいなくてはならず、私の国がなければなりません。すべてそうです。私の世界がなければならず、私の天と地がなければなりません。これが心情の文化です。それゆえに、東方に明けてくるきらびやかな文化というのは、どのような文化ですか。心情の文化です。これから私たちは、心情的な文化世界を創造するのです。

真の愛の文化というものは、家庭文化のことをいうのです。皆さんが食べて生きるその生活は、真の父母の文化圏で生きなければならず、一つの文化圏で生きなければなりません。一つの文化を中心として、一つの言語と一つの文字を中心として生活しなければならないのです。

ソドムとゴモラをすべて燃やす時、ロトの妻が後ろを振り返って塩の柱になったのと同じように、今後皆さんの文化全体を火で燃やして捨てるこのような時、そこに未練をもって後ろを振り返れば塩の柱になる、このような歴史的転換時代が来ることを、皆さんは知らなければなりません。真の父母と一日生活圏内に生活しながら、同じ文化と同じ言語と文字を書かずにいるとすれば、霊界でそれ以上恥ずかしいことがないというのです。

統一された言葉を使わなければ、過去のような文化の差が生じるのです。本当に困ります。霊界に行ってもそうです。習慣性は、永遠に続くのです。そのように難しいのです。しかし、地上では直すことができます。今まで慣れたことよりも、もっと新しいものを習慣化させれば、地では取り消すことができます。今しなければなりません。今しなければ、

霊界に行って問題になります。霊界に行って引っ掛かってしまいます。

統一教会の四十年開拓の基盤の上に、真の父母と成約時代を迎えた私たちは、真の父母主義の実践によって、新しい心情文化世界を創建していかなければならないのです。神様と人間が、真の愛の父子関係として統一される時、その愛の調和の中で、人間は、理想と幸福の実体になります。

真の愛の心情文化世界へ委譲しなければなりません。旧時代は堕落時代です。旧時代の堕落性を脱いで新時代に向かう、理想時代に向かう宗教、哲学、政治、経済、文化全般を、真の愛の心情文化世界へ転換しなければなりません。この世界は、堕落したので真の愛の心情文化世界ではないというのです。

真の愛を中心として楽しく生きなければなりません。動物と話し、すべての万物と和合して神様と和合しなければならないのです。そのようになれば、国境というものがありません。文化が違いません。愛の文化です。愛の文化は、趣味文化であるがゆえに趣味生活が愛です。自分が妻を愛して、息子、娘を愛そうとすることを世界版図ですることができるのです。すべて自分の家庭を拡大した文化祝典の対象圏です。それゆえに、楽しむ心情文化世界が地上天国文化だというのです。趣味文化です。趣味文化は、堕落していない本然の愛の文化です。趣味文化は、天国の文化だというのです。

本然の血統と連結した心情文化世界は、心情世界です。真の愛が表面化した世界です。心情を表面化させ、世界化させる時代になることによって、統一の心情文化世界、単一文化世界、統一文化世界が訪れるのです。戦争がなく、紛争がない一つの世界、地上天国と天上世界になるのです。心情文化世界になれば終わりです。そのすべてのものが思いのままであり、私たちの家庭が地上で天国の皇族圏に入っていくことができ、内外の内容を整備して、そこにすべて一体化することができることを願って、このような盟誓文を設定したことを知らなければなりません。

八　家庭盟誓第八節の解説

私たちの家庭は真の愛を中心として、成約時代を迎え、絶対信仰、絶対愛、
絶対服従によって、神人愛一体理想を成し、地上天国と天上天国の解放圏を
完成することをお誓い致します。

一) 成約時代を迎えて

(1)成約時代とは何か

成約時代というのは、これからの新しい時代のことをいうのです。家庭から氏族、民族、国家、世界まで、一つの平和世界を成し遂げることができる統一された世界になるこの時のことをいうのです。これは、全体を代表したのです。家庭ではありません。世界を越えて、全体を越えて成約時代に行くのです。四大心情圏と三大王権を中心とした新しい家庭を通して、世界版図を越えて成約時代の型を備えるようになる時、初めて一つの世界、平和世界になるのです。

成約時代とは何ですか。真の父母と真の神様をお迎えして、真の神様が、愛と、生命と、血統の因縁を中心として、万国の主体の代わりに天下の中心的位置に立ち、神様の全権行事を代行できる人間覇権時代に戻っていくというのです。希望に満ちた時代が来ます。遅れないように、このことを早く準備してくれることを願います。

神様の復帰摂理は、創世以後に何千万年の歴史を経てきたのですが、まだ、その基準を立てていません。統一教会の時代に、先生が来て初めて明らかにすることによって、これが可能になったのです。それゆえに、成約時代を発表して真の父母を発表したのです。これは世界的な事件です。事件というよりは、新しい世界を創建できる一つの起源となるのです。真の父母という思想と成約時代というその言葉自体がそうだというのです。

成約時代は、何の約束を成すのですか。神様が人間と共に創造したその約束を成すというのです。復帰摂理時代ではなく、救援摂理時代が成されるのではありません。創造理想世界が成されるのです。それゆえに、真の父母という名前は、人間よりも神様が先に考えたのです。真の父母の顕現とは、創造理想です。太初から神様が創造した理想の根本がそこにあるのです。ですから、天がじっとしていることはあり得ません。世界的大変革、大変化時代に入ってくるのです。

旧約時代の万物、新約時代の息子、娘、成約時代の自分たち夫婦、それから神様です。堕落によって、神様を地上にお迎えすることができずにサタンを迎えてしまい、神様と離別したので、今から神様をお迎えしてすべてを連結しなければなりません。それゆえに、皆さんの所有物は、皆さんのものではありません。万物は旧約時代に該当するものであり、息子、娘は新約時代に該当するのです。

旧約時代は、万物を犠牲にして息子、娘の行く道を築くためのものであり、息子、娘が犠牲になるのは、父母が来る道を築くためです。再臨主、真の父母がこの地に来られて苦労するのは、神様をこの地にお迎えするためなのです。サタンを地に迎えたので地獄です。神様をお迎えしなければなりません。これは、真の愛でしなければなりません。

今まで摂理的な聖書の歴史、六千年の歴史を経てきたのも、この一つの道をつくるためだったというのです。イエス様の時代において、成約時代に連結させて地上と天上を一つにしようとしたのですが、それが失敗したのです。それで、二千年を延長して新約時代を迎え、四百年間にわたるローマの迫害によって、多くの血を流しながら世界拡張運動をしてきたのです。新約時代の拡張運動によって、多くの殉教者が出ました。血を流しながら世界的に蕩減を拡大してきたのです。

神様は、それを延長させて、世界的基準において再蕩減することを願われて、救援の摂理を世界的に拡大してこられました。それでは、新約時代を中心としてそれを越え、どのように成約時代になっていくのでしょうか。成約時代とは、神様と人間との一体圏のことをいうのです。真の愛によって一体圏を成して、平等な価値の内容を連結する立場になるのです。神様だからといって縦的だけでなく、人間だからといって横的だけではありません。縦と横が一つになるのです。

堕落して偽りの父母が生まれたので、真の父母が出てこなければならないということは、歴史的な事実です。堕落というものを認める限り、これを否定する道理がありません。堕落したがゆえに、約束を果たすことができなかったのです。旧約は昔の約束、新約は新しい約束、それから成約時代です。論理的な基準に合うのです。成約時代は、何の時代ですか。サタンと暮らすのではなく、神様と暮らすのです。そのようにしようとすれば、堕落圏が整備されなければなりませんが、すべての国と世界が帰ってくることができる時なので、サタン世界の整備が可能だというのです。

天国の内容をはっきりと知ることによって、その内容に違反し、原則に違反する偽りであることが分かるので、偽りの世界を清算できるのです。個人が行く道、家庭が行く道、氏族が行く道、民族が行く道、国家が行く道、世界が行く道、天国が行く道まではっきりと知らなければ、処方して代案を提示することは不可能だというのです。

今、特別に「侍義」というのは、生活化天国時代のことをいうためです。それで、侍義を掲げてきたのです。復帰歴史というものは何かというと、神様の創造理想を再現するのです。

それゆえに、神様が理想とされたすべてのものが、神様を中心として天上世界と地上世界に展開するのです。天上世界と地上世界は、堕落によって本然の基準が立っていないので、これをサタン圏内の支配を受ける環境で、新しい創造理想、新しい創造世界と同じものとして再現しておこうというのが救援摂理だというのです。

人類歴史を見れば、旧約時代、新約時代、成約時代、このように三時代があります。ここでいう旧約時代はどのような時代ですか。祭物を犠牲にして子女を救済する時代です。神様の息子が来る準備をするのです。

新約時代は、イエス様が祭物となって父母を迎える時代です。それゆえに、再臨時代を迎えて新郎新婦を立て、父母を迎えるための準備をしてきました。成約時代において、先生が中心となり、今まで真の父母という名前をもって四十年以上苦労してきたのは、神様を地上にお迎えするためです。そして、神人一体になるのです。

真の父母と成約時代というのは、アダムとエバが完成して堕落していない位置に帰らなければならないのです。そして、全世界の女性は、お母様の分身として扱うのです。アダムも一人でエバも一人です。これが、重要です。アダム一人、完成したアダム一人、エバも一人にならなければなりません。

成約時代とはどのようなことをいうのですか。成約時代とは、約束が完成するという言葉であり、人類を祝福してあげるということです。結婚できないのは旧約であり、結婚することを希望したのが新約であり、結婚することが成約です。神様を中心としてアダムとエバが結婚し、神様の愛を中心とした生命力をアダムとエバの生命に連結させて血筋を残そうとするのが神様の創造理想ではないですか。そのようになっていれば、真の父母になりました。真の愛とは偉大なものです。

真の父母というのは一組しかいないのです。人類の一組しかいない父母であるというので

す。歴史に初めて登場した、空前絶後の真の父母が顕現した時代が成約時代であるというのです。

(2)真の御父母様の勝利による成約時代宣布

一九九二年を中心として、すべての世界にメシヤ宣布をして、真の父母宣布をしてきたのです。これですべて追い込んで、今回のアメリカを中心として、一九九三年に入って五月十三日から「真の父母と成約時代」を発表したのです。そのようにすることができる環境をすべてつくったというのです。皆さんが知っているように、アメリカは、全世界を代表した国です。キリスト教文化圏において最終定着地となる国だというのです。今、真の父母を中心として、新しい時代に転換するのです。成約時代に入っていくというのです。

今回宣布したことは、地上では初めてのことでした。今まで神様は、この時をどれほど待ち焦がれていらっしゃったかというのです。歴史時代に神様はどれほど悲惨な位置にいましたか。今希望の時代が迫ったというのです。真の父母を宣布できる時代に入ってきたというのです。これは歴史的です、宇宙史的な事件です。今まで、歴史にこのようなことはなかったというのです。

一九七二年から一九九二年までの二十年期間は、韓国を中心として、キリスト教の使命を越えていく期間です。この期間、私は、国家的な次元において旧約時代に相当することを成したのです。真の御父母様が六〇年度に結婚式を行い、世界的舞台であるアメリカで成してきたことは、旧約時代と新約時代の関係と完全に一致するのです。内容が同じです。そのようにして、この期間に真の父母の世界的な定着が完了したのです。それで、成約時代を発表しました。今からは、神様と共に暮らすのです。私たち統一教会員たちは、神様と共に暮らすのです。

成約時代とは何でしょうか。中心である真の父母の家庭が、堕落圏世界において完全に勝利して越えた時のことを意味するのです。そのようになれば、その環境には「文総裁の家庭をやっつけよう」と言う怨讐はいなくなります。そのような人たちは、闘って負けたのでいなくなるのです。いくら射撃のチャンピオンであっても、オリンピックに出て負ければ、「自分が一等だ」と言うことができますか。自分がもっているチャンピオン杯を渡してあげなければならないのです。

成約時代と真の父母という言葉は、サタンと何の関係もない言葉です。サタン世界に成約時代と真の父母という言葉があれば、サタンは退かなければならないのです。これは特権です。それで、再臨の時代が来て、これがすべて完成するのです。

今、先生が考えていることは、アダム時代、イエス時代、真の父母時代です。なぜ三代ですか。アダム時代は蘇生、イエス時代は長成、真の父母時代は完成時代です。この三代圏を中心として、旧約時代のエデン復帰、新約時代のエデン復帰、成約時代のエデン復帰、このように展開するのです。今では、成約時代の先生しかいません。

成約時代は、家庭へ帰るのです。統一は個人からです。この峠を越えなければ、千年、

万年、天国に入っていくことはできません。長子権を復帰することができません。自然屈服させなければならないのです。強制屈服ではありません。説得屈服です。皆さんは自然屈服ですか、強制屈服ですか。説得されたのですから、自然屈服しなければならないでしょう。

このようにして、地上天国と天上天国の家庭的エデンにおいて成し遂げようとしたことが、何千年を経て勝利の覇権が立てられ、すべての国家が、真の父母の家庭をモデルにして、同一の立場で一時に家庭を中心とした金型を取ることができるブループリント（青写真）があるのです。それをすべて配布しなければなりません。それによって型を取りさえすれば、どこでつくろうと、がちゃんがちゃんと出てくるのと同じように、全世界五十億人類の家庭が、家庭的に接ぎ木して解放され、失ってしまった国と天国に帰るのです。この時が成約時代、約束を成す時代です。

旧約時代に失ってしまったものを復帰しなければなりません。旧約時代は万物を犠牲にして、新約時代は息子を犠牲にして、成約時代は父母を犠牲にしました。ですから、このようなすべてのことを中心として、自分の家庭の父母、自分の息子、娘、このすべてを否定しなければなりません。否定して、天からサタンが奪っていったものをすべて主人の前に返すために、取り戻したすべてのものにサタン世界以上の愛を加えるのです。そして、それを天にお返しし、すべて否定する位置に入っていくことによって、歴史的旧約時代、新約時代、成約時代を越えていく条件とみなすことができる一時が来るのです。清算する時が来るのです。

この準備のために、また祝福家庭が復活の原則を通して引っ掛からないで解放されるために、このような話をするのです。万物は旧約時代、アダムは新約時代、自分の実体は成約時代、これは神様を中心として一八〇度、方向を元に戻さなければならないというのです。

自分の前にあったものが、反対に父母の前に帰らなければならないのです。神様の前に行かなければなりません。愛を復活させていかなければならないのです。私個人が蘇生であり、家庭が長成であり、氏族は完成です。この三段階が一つにならなければなりません。

今日、歴史的路程において、最も重要なこととは何かというと、選民圏が生じたということです。この時代になり、世界的途上において、蘇生、長成、完成の三段階基盤と連結させようというのです。イスラエル民族は蘇生級、キリスト教は長成級、そして統一教会は完成級です。イスラエル圏を中心としたものが旧約時代ならば、キリスト教は新約時代であり、統一教会は成約時代です。

成約時代とは何かというと、成し遂げるということです。何を成し遂げるのでしょうか。個人的に成し遂げ、家庭的に成し遂げ、氏族、民族、国家、世界的に成し遂げるのです。何を中心としてですか。神様の愛と、神様の生命と、神様の血統を中心として連結するのです。単一血統、単一愛、単一生命の伝統です。このようになれば、サタンが離れなければなりません。接ぎ木をすることによって、サタンの血統的因縁がなくなるのです。

氏族的メシヤを派遣すれば、成約時代が来るのです。氏族的メシヤを派遣することによ

って、すべての家庭が蕩減路程なくして氏族的メシヤに接ぎ木されれば、地上世界と天上世界の垣根がなくなるのです。天国の民へ帰ることができるというのです。天国皇族圏に入っていくことができるというのです。

それで、氏族的メシヤが自分の父と母を父母の位置に立てることによって、自分の故郷が天国と直結し、自分を生んでくれた父母は、堕落していない完成した父母の血統として復帰される立場に立つことができるのです。そのようにすることによって、皆さんの故郷の地全体が天国に帰るという驚くべきことが起きるのです。最も重要なことは、成約時代は神様と共に生きるということです。

ですから、この三大要件、血統転換、所有権転換、心情圏転換を早くしなければならないのです。それで、四大心情圏、三大王権、皇族圏を皆さんの家庭で実践しなければなりません。これさえ連結させれば、すべて終わるのです。これが、祝福家庭がしなければならない最後の任務です。これが、最後の宿命的な任務です。

真の父母を中心とした成約時代というのは、神様を中心とした祝福のことをいうのです。すべてのものを超越して、万民、人類の解放を提示するこのような再臨理想の完成によって、平和統一世界になるのです。真の父母を中心とした成約時代を迎えることが、世界的に繰り広げられる祝福結婚だというのです。

成約時代は、完成基準で祝福したので、万民が平面的基準に立ち、その後孫が祝福を受けることができるのです。地上に五十億人類が、三代先祖の子孫が生きているのですが、彼らに三代先祖の解放圏と祝福を与えてあげることによって、それを分割する立場ですべて共通の恩恵を与えることができるというのです。なぜなら、父子関係の因縁と連結しているからです。そのような時が来たというのです。至急な時が来ました。

今は、所有権を復帰しなければなりません。旧約時代には万物を犠牲にして、新約時代には息子を犠牲にして、成約時代には父母を犠牲にして神様をお迎えしたので、今から何をしなければなりませんか。皆さんが父母の代身の位置に立たなければなりません。息子、娘は新約時代であり、万物は旧約時代です。この旧約時代、新約時代、成約時代が、ありったけの神様の真の愛を中心として、脱線することによってサタンが主人になったことをすべて蕩減し、本然の主人のところに帰ってきて、これを捧げてさしあげなければなりません。

二) 絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって

(1)創造原則と絶対信仰、絶対愛、絶対服従

神様が宇宙を創造される時、絶対信仰の上でされました。神様が語ったことは絶対に成るというのです。できないことがないというのです。また創造は、愛の対象をつくるためです。絶対愛です。疑心がありません。二つの心はないというのです。その次には、絶対服従です！　絶対服従とは、神様御自身までも存在意識がないというのです。

神様が絶対信仰の上で万物を造り始められました。絶対愛の対象のために造り始めたのです。絶対服従して、自らの意識観念がなかったというのです。完全にゼロです。完全に

無であるというのです。無に帰ることによって、自動的な循環運動が展開されるのです。完全にすべて与えて、何もないので下に戻ってきます。これが、宇宙運動の起源となっているのです。完全に投入したあとには戻ってくるのです。

創造される時、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に創造されたというのです。完全真空状態になるので、絶対有の限りなく小さなところまでいってくっつくのです。一つになるというのです。それゆえに、これが自動的に一つにさえなれば、完全に満たしてしまいます。運動が展開するというのです。

絶対無の立場で自分が投入すれば、投入したその世界は、絶対の有圏、高気圧圏が完全に占領する大革命的な運動が展開するのです。このような原則を利用すれば、文総裁が絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に、宇宙を中心として投入していくようになる時は、世界が自動的に一つになり、高気圧圏がすべて満たしてくれる時が来るというのです。闘わないで自動的な統一世界が顕現するという論理を見いだすことができるのです。

神様は、アダムとエバを絶対信仰の上に立てたいと思われたというのです。絶対信仰の上に、創造した理想世界の愛の安着地がそのようにならなければならないので、絶対信仰の上に、絶対愛の上に、絶対服従の上に立つことができるアダムとエバの家庭となることを希望されたのです。ところが、アダムとエバは堕落してしまいました。絶対信仰基準を破綻してしまったというのです。絶対愛基準を蹂躙したというのです。絶対服従基準をすべて放棄してしまったというのです。このような人は、どこへ行きますか。地獄に行かなければならないでしょう。

神様が創造される時、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上で、理想的な絶対愛の統一世界を願って創造されました。神様御自身がそうであるために、私たちも、その神様の相対圏を訪ねていくためには、必然的に絶対信仰、絶対愛、絶対服従をしなければなりません。

自分が死の境地に行っても、生命が途絶えても、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準に立たなければなりません。それでこそ、絶対信仰の上で絶対愛を取り戻すために、絶対投入しながら投入して忘れてしまう歴史を経てこられたお父様の息子として、その姿に似ることができるのです。それで、イエス様がこの地に来られて、天国に行くための宣言の標語として、「生きんとする者は死に、死なんとする者は生きん」と言われたのです。

アダム家庭で失ってしまったものを再び取り戻してくるのです。絶対信仰、絶対愛……。絶対愛とは何ですか。神様の創造の目的は、愛の相対者を探し出すことです。ですから、絶対的な愛のパートナーを取り戻すためには、神様御自身が絶対愛を標準として投入してきたというのです。したがって、絶対服従は、自らの意識構造まですべてなくなるのです。私のすべてを投入して忘れてしまうのです。神様御自身が、天地を創造した創造主としての価値的内容を認められません。最後まで降りていくのです。最後まで降りていきながら投入されるので、相対は上がっていきます。上がっていって神様が立っている位置を越え、自動的に二人とも生き返るのです。

神様を愛さなければなりません。神様を絶対信仰しなければならないのです。絶対信仰し、神様を絶対愛して絶対服従しなければなりません。なぜそうなのかというと、神様の愛を中心として、神様が相続してくださる所有権を認めてもらうためです。神様が絶対信仰の上で、絶対愛の上で、絶対服従する立場で天地を創造されたのです。神様が絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に立てておいたものが被造万物の創造理想です。

そこの中心存在が、神様の愛の対象であるアダムとエバです。それゆえに、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上で立てたその基準が、絶対信仰と絶対愛と絶対服従です。キリスト教も信仰と希望と愛です。その中で第一は何ですか。（愛です）。ぴたっと同じです。絶対信仰の上に万物をつくられ、絶対愛の上につくられ、絶対服従は、自分という意識がありません。相対としての存在意識だけなのです。希望とは、今現在ではありません。未来に願うことができる相対的な実践のことをいうのです。同じ内容です。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。この圏内において、すべてのものが成されるのです。神様御自身が愛の相対を造られる時、絶対信仰をもって造られました。「私がこのようにした」、このあとに造られたのです。絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、自分自身を完全に投入されたのです。絶対愛の上で絶対信仰であり、絶対愛の上で絶対服従です。これが、霊界の主流思想です。永遠の霊界の主流思想です。また、地上の主流でもあります。地上天国と天上天国、二つの世界において主流だというのです。ですから、皆さんがそのコンセプト（概念）をもたなければなりません。このコンセプトさえもてば、どこでも通じるのです。どこでも通じるというのです。

神様が全権をもって創造される時、絶対信仰、絶対愛、絶対服従で投入して創造されたのと同じように、皆さんもそのような立場に立たなければなりません。神様が創造された主体的理想圏内の相対になって一つになれなければならないのです。皆さんが知らなければならないことは、原理のみ言のすべての内容は、先生が絶対的に信じているということです。それを知らなければなりません。

絶対愛するのです。他の何もありません。自分の世界を捨てて、家庭を捨てて、妻を捨てて、子女を捨てても、それ以上に絶対愛するのです。絶対服従するのです。自らの一生、生命もすべて投入するのです。投入して忘れてしまうのです。今まで皆さんは、観念的に絶対信仰、絶対愛、絶対服従を考えていたかもしれませんが、それは観念ではありません。実際に皆さんが、すべて行わなければなりません。

愛の調和のポケットに、すべての平和の世界、統一の世界がないはずはないという論理は、統一教会の食口が千万年研究しても先生以上に研究することはできないので、否定する道がないという結論が下され、絶対信仰、絶対愛、絶対服従といえば、すべて終わるのです。皆さんが結婚して、「私を絶対に信じますか。私を信じますか」と聞くでしょう。新婦が結婚した初夜に、「私をどれだけ愛しますか」と言うとき、「心と体が一つになって絶対に愛します。心身一体になって絶対に愛します。絶対に信じます」と言うでしょう？

真の父母の思想は簡単です。絶対信仰、絶対愛、絶対服従を中心とするのです。愛を中心として絶対信仰であり、これは一つの概念です。愛は中心です。

それから、服従とは実践です。愛を成すためには、愛を中心として服従しなければなりません。服従するそれ自体の概念は、もっと大きいことを成し遂げようとするので、自分を投入しなければならないというのです。自分を中心としてこれが育つ時には、それ以上大きくなることはできません。投入すれば、いつでも、どこでも継続して、神様の無限な愛の伝統が伸びていくのです。問題は、夫婦の二人だというのです。それで、ジャルジンを中心とした宣言とは何かといえば、最初は絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。創造した神様の本然の位置に帰るのです。

堕落とは何かといえば、絶対信仰をもつことができなかったということです。これを知らなければなりません。絶対信仰、絶対愛、絶対服従です！　これを神様が強調したのです。なぜですか。自らの愛の理想をすべて相続してあげようとするので、神様と同じでなければなりません。

絶対というのは、一つしかないということです。それは、一つに通じる道です。二つではありません。どのようにして、そのような一本道を連結することができるのですか。「ため」に生きる概念をもって連結するのです。神様もそのような概念をもって創造されました。絶対信仰、絶対愛、絶対服従だというのです。神様においても、他の概念は全くありません。ゼロ、ゼロだというのです。

ところが、アメリカの人々は、個人主義になり、「自分が一番高いのであって、レバレンド・ムーンとは何だ。統一教会の教主なら教主なのだろう。私とは関係ない」。このようにしています。レバレンド・ムーンが絶対信仰、絶対愛、絶対服従と言うので、「そのような言葉がどこにある。独裁の王が言うことだ」と、このように言っています。独裁の王は神様です。神様が本物の独裁の王です。偽りの独裁の王はサタンです。それを知らなければなりません。神様に「主人になるな」と言えば、主人にならないでしょうか。永遠に違うというのです。

(2)絶対信仰、絶対服従すれば、天国に直行

第四次アダム圏を解放して定着しなければなりません。真の御父母様が霊界に行く前に、このことをすべて教えてあげなければならないのです。先生は、絶対家庭を中心として、絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。ですから、神様がその家庭のために生きるのです。そこに永遠の真の愛の道が連結するのです。皆さん自身が絶対信仰をすることができなければ、絶対愛が植えつけられないというのです。芽が出てくれば育てなければなりません。育てようとするなら、自らのすべての血肉を投入して、犠牲にならなければなりません。

蕩減が必要ありません。救援が必要ないのです。それで、絶対信仰、絶対愛、絶対服従という原理のみ言を中心として、天と地の法度に従わなければなりません。今から、新しい法が出てきます。憲法が出てくるのです。地上で絶対信仰、絶対愛、絶対服従すれば、永遠の天国が築かれるのです。皆さんが、地

上において自然に天の世界をすべて見て、感じて、知って暮らすのです。

祝福家庭とは何かといえば、霊界も肉界も、神様の真の生命の血筋が連結することができる基盤を相続した人です。それゆえに、神様が思いのままに主管することができるのです。ですから、今から神様が、蕩減条件なく全権をもって思いのままに復帰歴史を処理されるのです。

皆さんがそのような実力をもった相対的立場に立てるか立てないかということが問題なのであって、決意をもって絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準と一つになる時は、一瀉千里にすべてのものが、線を引くように水平世界になることができるというのです。神様と神様の絶対愛と血筋が一つになった位置に立っている真の息子、娘にさえなれば、この宇宙のすべてが息子、娘に相続されるので、それを所有するようになるというのです。愛で一つになれば、私のものになるのです。

祝福家庭は世界的です。天宙的なのです。先生を代行できる直系の息子、娘のようなものです。先生が祝福してあげる時は、私よりももっと成功し、私のあとについてきなさいという思いでしてあげたのです。ですから、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の心さえもてば、先生がしたことをすることができるのです。神様が創造される時、そのような心情をもって出発されました。

主体である神様が、「私が言えば、実体愛の対象が生まれる」と言われたのです。絶対信仰です。絶対愛の相対に会うというのです。愛の主人になるためには、相対がいなくてはできません。それゆえに、愛の前には神様御自身も絶対服従するというのです。絶対順応するところで循環運動が展開されるのです。

エデンの園で神様が創造されるその時に、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって創造されました。絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神人愛一体圏をつくるのです。地上天国と天上天国が神人愛一体圏となり、絶対的な神様のように、息子、娘のすべての権限も自由に行使することができ、自由奔放な世界になって、どこにでも通じることができるのです。そのような活動をすることができる能力者になって、初めて神様を解放させることができるのです。

不信することによってすべて壊れました。神様に対して絶対愛ができずにこのようになったのです。神様を絶対愛して、神様の前に絶対服従できないことによって堕落したがゆえに、真の父母がこのすべての蕩減の道、高速道路をつくっておいたのです。ですから、真の父母に対して絶対信仰、絶対愛、絶対服従すれば、天地が夜も昼も叫んで十回起こしても順応するのです。一夜に百回起こしても、不平を言ってはいけません。それが服従です。従順は、自分の素性はもって従っていくことですが、これにはそれがありません。一日に何千回しても、順応しなければならないのです。

神様を中心として、地上世界と天上世界が一つになるのです。真の父母を中心として、統一的立て札をもたらすことによって、ここで一つになるのです。神様が創造される時、絶対信仰、絶対愛、絶対服従をもって「ため」につくられたがゆえに、私たちもこのよ

うな全体、全般、全権、全能の基盤の上に立たなければなりません。創造本然に戻ってきたので、ここで愛の対象を取り戻すために、絶対信仰をもち、絶対愛、絶対服従の心情をもって投入して忘れてしまうのです。神様がなされたすべてのものを再び求めて、私たち自身も神様の代身として、この世界に対して絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなければなりません。

皆さんの家庭は、歴史と天地を代表した家庭です。絶対信仰、絶対愛、絶対服従の上に絶対、唯一、不変、永遠の家庭であり、そこで神様をお迎えした永遠の家庭となり、それが永遠の氏族になり、永遠の民族になり、永遠の天国になる時、地上天国時代から天上天国に直結して一つの世界になるのです。

(3)一体の基準は絶対信仰、絶対愛

神様を愛で完成させて解放させなければならない道が復帰の道であり、真の父母が立てた道というものを考える時、真の御父母様が神様の前に、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の道を行ったのと同じように、皆さんも真の御父母様の前に、そのような絶対信仰、絶対愛、絶対服従の道を行ってこそ、先生が水平となって従っていくのです。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。エデンにおいて、アダムとエバに願ったことが、与えられた戒めです。「私が愛の相対を取り戻すためには、絶対的な基盤の上で万物を創造したので、その上に上がっていかなければなりません」ということです。ですから、絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなさいというのです。服従とは、自分という意識がありません。

復帰の道がどれほど険しいですか。そこまできたことを蹂躙してはいけません。それでは、父母の資格がないのであり、新郎の資格をもてないのであり、兄さんの資格をもてないのであり、兄弟の資格をもてないのです。そのような心情があるので絶対信仰です。絶対信仰しなければなりません。絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。それで、先生が投入して忘れてしまって、時間さえあれば導いてあげるのです。ですから、私がこのように思想によって育てて、誰よりも愛する人を皆さんに分けてあげるのです。

皆さんは、天使長の後身ですが、結婚する相対がいますか。アダムの体を切って接ぎ木してあげて、弟のようにして結んであげるのです。そうです、サタンは、弟を打ち殺したでしょう。ここは、どのようにしますか。弟を打ち殺すのですか。思いの限り生かすことが兄だというのです。それで、絶対信仰して、絶対愛して、絶対服従しなさいというのです。

蕩減の道が残っています。しかし、先生がすべての道に大通りを築いておきました。皆さんの家庭が、すべてこの道を越えていかなければならないのですが、先生が代表的にして、サタン世界のすべてのものに高速道路を築いておいたので、真の父母を絶対信仰、絶対愛、絶対服従できる一体的心情圏を通じれば、先生のあとに接ぎ木されて、先生が開拓した道を自由に越えていくことができます。ですから、絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。アダム家庭において、神様が絶対理想からつくられたその基準を中心として、また真の愛

の理想を中心としてつくられたその基準を中心として、相対的な面において先生の相対となり、一体となってこの環境的個人を越え、氏族、親族を連結するのです。家庭時代を経て親族時代に入りました。

この方は、善の個人的な父母以上の父母であり、国以上の国であり、世界以上の世界であり、悪なる人々の父母以上、国王以上の方になったという事実を知らなければなりません。この方を支えて絶対的に愛することによって、サタン世界、堕落した世界のすべての凶悪な環境も勝利的に越えていくことができるというのです。このような主体的な方のみ旨の前に、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって一つになっていくという決意を誓うことが、堕落した世界を救援して再創造する統一教会の信条にならなければなりません。

偽りの愛によって分かれた心と体を一つにすることができるのは、真の愛しかありません。真の愛を行うのです。真の御父母様の命令に絶対服従しなければならないのです。その上でこそ、そのことが可能なのであって、絶対信仰、絶対愛、絶対服従以下では不可能なのです。

絶対に先生と離れてはいけません。絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなければできません。離れれば、皆さんにすきまが生じるのです。すきまが生じてはいけません。では、先生は、信じるにふさわしいですか。私がそのように生きましたか、生きていませんか。

成約時代に家庭を定着させなければなりません。そのために、絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。それで、心身一体理想を成して地上、天上天国の解放圏を築こうというのです。それが最後です。家庭定着のことをいうのです。地上、天上天国をつくって解放圏を築くのです。天とすべてを清算してしまわなければなりません。

皆さんと私が分かれる時が来るというのです。自分たちは民家であり、先生の行く道は高い位置だというのです。縦的な位置に行くので、縦的な位置が横的に越えて入っていくことができますか。続いて上がってくるべきではないですか。角度が同じでなければなりません。角度がずれれば落ちるのです。それで、絶対信仰、絶対愛、絶対服従、この縦的基準を中心として、絶対的に一つにならなければなりません。絶対愛、絶対服従です。

どのようなことがあっても、先生が言う家庭的基準において、神様が祝福してくださり、すべての相続権を受け継ぐことができる人にならなければなりません。そのようになろうとすれば、絶対信仰の上に愛を行わなければならないのです。絶対愛、絶対服従しなければなりません。一家を放棄し、一国を放棄してでもこの道の前に立ち、アダムとエバに戒めを命令しても守ることができなかった先祖の恨を解いて、解放的勝利の家庭として、天国に直行する家庭にならなければなりません。それが、文総裁が許すことができる特使だというのです。特使、特権的特使を付与するのです。これがうそなのかどうか、死んでみてください。がちゃっと引っ掛かります。そのように深刻だというのです。

三) 神人愛一体理想を成して

(1)神人愛一体理想が神様の創造目的

真の愛の主体者であられる神様は、真の愛の相対者として人間を立てました。神様の愛の理想は、人間を通じてのみ完成するのです。神様の創造目的は、神人愛一体の絶対的愛の理想世界です。人間は、神様の最高最善の愛の対象として造られました。それゆえに、人間は、創造物の中で唯一、神様の実体をもった対象です。無形の神様の前に見える体で生まれました。人間は、完成すれば神様の聖殿になります。神様が自由に、また平安に、いつでも入って滞在なさることのできる有形の実体です。神様の絶対的な真の愛の全体的理想は、人間を通じて、父母と子女の縦的関係によって実現し完成します。

神様の愛と人間の愛が、どこで一つになるのかという論理を、今まで誰も分かりませんでした。これが分からなくては、「天のお父様」という言葉は荒唐無稽です、荒唐無稽！関係ないというのです。アダムとエバは神様の体です。それゆえに、アダムとエバが完成すれば、男性の心の中には神様の性相が入っていき、女性の心の中には神様の形状が入っていくのです。アダムとエバの実体の結婚式は、神様の結婚式だというのです。霊界に行ってみれば、それがはっきり分かります。

知ることができなかったこのような理論が、すべて当てはまるのです。それゆえに、皆さんが神様の愛を占領してこそ、その欲望がぎっしり満たされ、「これでよし」と言うのです。

人間が完成すれば神性をもち、天のお父様が完全であられるように、完全で神的価値を成し遂げるのです。神様は絶対者ですが、真の愛の理想は、一人では成し遂げることができません。愛の理想は、必ず相対を要求するからです。ここで私たちは、神様の真の愛と人間の真の愛の出発と完成が、お互いにどのような関連をもっているのかを知らなければなりません。万一、神様が、真の愛の絶対的な対象体として人間を立てずに、他の方法を通じて御自身の真の愛の出発と完成を成そうとなさったとするならば、どのようになりますか。神様と人間の真の愛の理想は、各々動機が異なるようになり、二つの愛の方向と目的は異ならざるを得なくなります。

神様は、愛の根であり、生命の根であり、血統の根であり、地上天国と天上天国の根です。アダムとエバの結婚の時には、神様がアダムとエバの心に入っていって一体的愛を成されるのです。神様は、縦的な真の父母であり、アダムとエバは、横的な真の父母です。そのような二つの父母の血縁を受けて生まれたので、心は縦的な私であり、体は横的な私になるのです

このようにして神人愛一体圏を形成するので、心身一体愛を完成した者は、神様の息子、娘になります。神様の王子、王女になれば、神様と父子の関係となって神様の全体を相続することができるのです。このような子女が、真の愛を中心とした夫婦一体を完成すれば、神様に侍って暮らす家庭になるのであり、その家庭は、平和と理想の基地になるのです。半分である男性と女性が一体となり、神様の相対として理想愛を完成させるようになるというのです。

すなわち、神様は、真の愛を中心として、人間を無限の価値者として完成させることによって、神様も真の愛の完成を成し、永遠の理想愛が宿る創造理想世界を完成されるのです。

心身一体を成し、夫婦一体を成し遂げれば、当然、神様に帰るようになっているのです。真の愛の基盤は、神様を中心として定着するようになっています。それが完成統一一体圏です。そこが統一の基盤なのです。そのようになった場合には、神様自体も統一します。神人一体を分離するものは何もありません。それを分ける力はどこにもありません。

創造主と人間との真の愛を中心として、完全、完成を願う神様は、人間と一体となる条件が必要でした。それで、神様は、人間始祖に与える戒めが必要だったのです。人間が、成長期間を経て育っていく未完成段階にいることを御存じだった神様は、子女である人間に最も貴い真の愛を相続してあげようとされ、そのための条件が戒めでした。

(2)神人一体はどのように成されるのか。

子女の完成基準、兄弟の完成基準、夫婦の完成基準、父母の完成基準は、いったいどこで立てられるのでしょうか。神人一体圏は、いったいどこなのでしょうか。神様が息子、娘として創造された人間が、成熟して一つになる場合に、神様はどのような立場になるのですか。これは重要です。宇宙の根本を明らかにするには、この内容を明らかにしなければなりません。それを解決できなければ大変なのです。

先生が最も苦心したこととは何ですか。神人愛一体をどのように形成するのかということが一番の問題でした。理論的にどのように説明すべきかというのです。これが、解明できなければ、理論的に体制が定着できません。人間の愛の根本的位置が設定されなければ、すべてのものがずれていくのです。

神様の愛と人間の愛……。それが問題になります。神様の愛と人間の愛は、色が同じか違うかという問題です。大きな問題です。神様の愛と人間の愛が、どこで結びつくのですか。これが、結びつかなければ、神人愛一体の拠点を見いださなければ、神様も人間も共に定着できません。神様が喜ばれ、人間も愛を通じて喜ぶ、そのような場が違った場合には、大変なことになるというのです。

神人一体は、どのようにするのですか。神様は、真の愛の縦的なお父様です。真の愛を中心としたお父様です。そのようになれば、神様が近いですか、遠いですか。皆さんの目に見えますか、見えませんか。なぜ見えませんか。近いので、より近い場合には、永遠に見ることができません。霊界に行っても、神様を見ることができないのです。だからといって、いらっしゃらないのではありません。いらっしゃいます。愛を見た人はいません。空気を見た人もいないのです。

先生が根本問題を追求する時、神人一体圏は、いったいどこなのかを考えました。これは、重大な問題です。これを解決せずには、出発点と終結点が合わないのです。そのような中で、雷のようにきらりとひらめく悟りとは何だったのでしょうか。真の愛は、直短距

離を通るということです。それはどういうことかといえば、垂直は一つです。水平に対して九〇度以外にはありません。これは最高の直短距離です。九〇度なのです。

原子世界は、陽子と電子を中心として回ります。分子世界は、プラスイオンとマイナスイオンが運動するのです。その運動は、中心を中心として運動するのです。男性と女性も運動します。何を中心として運動するのですか。愛を中心として運動します。神様と人間も運動します。神人一体という言葉は何ですか。合同という言葉も使います。何を中心として一体ですか。父子一体、夫婦一体とは、何を中心として言う言葉ですか。愛を中心として言う言葉です。

父子間で、夫婦間で一体である、一体だというのです。それが神様と人間で神人一体です。何を中心としてですか。お金ですか、権力ですか、知識ですか。それが愛だということは、間違いありません。何の愛ですか。真の愛、神様的な愛です。神様的な愛とはどのような愛ですか。絶対的愛です。絶対的愛とは何ですか。永遠と通じるのです。永遠の愛です。

神人一体、神様と人との一体圏です。神様が喜ばれる理想の基準と、人間が願う基準が食い違えば大変なことになるのです。正に、正面で一体とならなければなりません。水平で一体になり、垂直に一体とならなければなりません。これを、前後、左右、九〇度に合わせれば、上弦と下弦と右舷と左舷、十二箇所に九〇度の角度でどこに合わせても、すべてぴったり合うのです。

結婚は、なぜするのですか。愛を完成するためにするのです。横的に左右、東方と西方を男性と女性だとすれば、その男性と女性の真の理想は、直短距離に通じることなので、直面に対して横的な愛の直短距離というのは一つしかありません。それは、九〇度以外にはありません。これが、このように横になれば、楕円形になるのでいけません。すべて同じではありません。平等な位置で、すべてが同じ基準として立つのは、九〇度以外にはないのです。神人一体という愛の結集場所というのは、九〇度以外にはありません。

神様は、御自身の体としてアダムを先に造られました。アダムは、神様の息子であると同時に、体をもった神様御自身でもあります。それから、アダムの相対者としてエバを造られ、横的な愛、すなわち、夫婦の愛の理想を完成しようとされました。エバは、神様の娘であると同時に、神様の横的愛の理想を実体として完成する新婦でもあったのです。

アダムとエバが完成し、神様の祝福のもとで結婚して初愛を結ぶ場は、すなわち神様が実体の新婦を迎える場なのです。アダムとエバの夫婦の愛の理想が、横的に結実するその場に、神様の絶対愛の理想が縦的に臨在、同参なさるので、神様の真の愛と人間の真の愛が、縦横の起点を中心として一点から出発して一点で結実、完成するのです。

アダムとエバは、どのような立場ですか。その立場は、私たち人類の横的な理想の愛を中心として和合する位置であり、九〇度に合わせる位置であり、焦点を設定する位置です。その位置は、この前後、左右、上下、どこに合わせても合います。それは、どういうこと

ですか。神様は、二性性相の主体であられるので、その愛の焦点に合わせたアダムとエバの心の中に神様が入っていかれるのです。それゆえに、堕落していない人間始祖の結婚式は、神様の結婚式になるのです。

神様は、どこに入っていかれるのですか。神様は、アダムの心の中に入られ、エバの心の中に入っていかれるのです。二性性相でしょう。この二つが、一つの根を中心として入っていって打ち込まれるのです。そして、息子、娘に連結します。愛で連結し、心と体を中心として、霊を中心として根を合わせるのです。

そこから生まれた愛の息子、娘が地獄に行きますか。誰も思いのままにできません。絶対的な体、絶対的な心、絶対的な霊、絶対的な男性、絶対的な女性が、絶対的な神様の愛を中心として、生命の起源であり、愛の起源であり、血筋の起源である生殖器を中心として統一が展開するのです。

アダムとエバは、見えない神様の二性性相から来たのです。見えない二人が一人のような立場に立っているのです。真の愛を中心として、一つになっているというのです。そのようになっているものは、男性格位と同じなので、その男性格位の相対的立場に立った息子、娘を再現させるのです。それは、彼らが成長して愛を中心として夫婦になる時、あの上にいらっしゃった神様が、その場に共に降りてこられて、一つは見えない父母の位置に立ち、一つは見える父母の位置に立って愛で一つになるためだというのです。

縦横は、どこで一つにならなければならないのでしょうか。天地合徳は、どこで展開するのですか。縦的基準の前で展開するのです。愛が行く道は、直短距離を通じるのです。文総裁はこの一言を解決すること、これがどこで定着するのかという問題で、本当に苦心しました。宇宙の根本を解明するにおいて、縦的愛と横的愛があるということを知りました。なぜ分かったのでしょうか。垂直にさっと上がっていくことはできません。そのようになれば、私が身動きできずにぴたっとここに立たなければならないのです。

そこを離れて縦的に愛すれば、私がぴたっとこのようにならなければなりません。これがどこに行って回るのかというのです。回ることができません。このような問題、どのように連結させるのかという問題、天地の愛があれば、その愛がどのように合徳するのかという問題が大きい問題でした。しかし、一つ分かったことは何かというと、愛は直短距離を通じるということでした。

文総裁が宇宙の根本を明らかにしていく時、最も苦心したことは何ですか。愛がどのように動き、どのように定着するのかという問題でした。愛は直短距離を通るというこの一言を知ることによって、すべてのことが解決するのです。

愛が上から来て、天が高くて地が低いとすれば、真の愛が天から地に訪ねてくる時、どのような道を通して来るのでしょうか。最大の直短距離なのですから、何ですか。垂直ですか。これは、垂直一つしかありません。直短距離です。愛が一番早くて直短距離を通るというときに、それは、天上世界と地上世界に接着する完全水平の中で一点しかないとい

うのです。二つではありません。絶対的に一つです。

神様の愛と人間の愛は、どこで出会うのですか。その結着点はどこですか。そこは、愛の結着点、生命の結着点、血統の結着点になるのです。そこでなければ、愛と生命と血統を連結できる道がありません。その場は、いったいどこですか。男性と女性の生命が連結するところです。男性と女性の血統、血が交差するところです。神様の生命、神様の愛、神様の血統、そして、男性と女性の生命、男性と女性の愛、男性と女性の血統がこの一点を中心として連結するのです。これを中心として子孫が生まれるのです。

アダムとエバが善の子女をもつ真の父母になることは、すなわち神様が永存の父母位を実体的に確定されて、神様が人間の血統を通じて子々孫々に繁盛することによって、天上天国の市民を無限に広げたいと思われた理想を成就なさるようになるということです。

(3)神人愛一体理想を正しく理解しなければならない

神様が創造当時の理想として願った真の愛、その偉大な真の愛を中心として、人間との真の愛の関係を結んで一つになることのできる、このような神人愛一体の家庭を築いたとすれば、今日私たちは、天国に行くのか地獄に行くのかと心配する必要がなく、そのまま天国にすべて入っていくようになるのです。

ここで問題になることは、神様の真の愛と真の人間の真の愛が、主体的真の愛と相対的真の愛として一つになって一点から出発しなければ、神様の真の愛と人間の真の愛が異なり二つの愛の出発になるので、二つの愛の方向と目的地になるというのです。このようになる時は、神様と人間が願う絶対的理想世界は見いだすことができません。

結婚とは何ですか。自我の完成です。男性と女性の完成と同時に横的なすべてのものの完成です。ここで子女と兄弟がいるために、この線が入ります。兄弟がいて、夫婦がいて、父母がいるので、天国の上弦下弦、右舷左舷、前弦後弦が一つになって理想的球形となり、神様は、結婚するここにぴたっと入られるのです。家庭にとどまるようになっているというのです。神様が生活をしなければなりません。このスペースに入っていった球形のすべての力は、この基準を通じないものがありません。

それで、神様がどこにいらっしゃるのか、夫婦を中心にするとしても、どこにいらっしゃるのかという時、それは何ですか。子宮です。そこにいらっしゃるというのです。愛の根がそこにあるというのです。歴史始まって以来、先生によって、霊界がこのように構成されていて、このような内容によってなっているということが明らかにされたのです。これは、誰も知りません。

アダムとエバの堕落は、神様の真の愛の理想を破った不倫の犯罪です。守らなければならない戒めが必要だった堕落前のアダムとエバは、未完成段階、すなわち成長期間に堕落しました。人類先祖の初愛の結合は、神様御自身の愛の完成でもあるので、当然神様も、アダムとエバも、宇宙万象も、歓喜と祝福の中で酔う幸福な祝宴の連続でなければならな

いのです。神様の愛と生命と血統が、人間の中で始原を成しながら定着する、幸福な儀式でなければなりません。そのような彼らが、下部を覆って木の後ろに隠れて不安に震えました。天道を拒む偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統の根源をつくった不倫の関係を結んだからです。

神様が入っていかれる位置にサタンが入っていってしまいました。アダムとエバとサタンが結婚したでしょう。同じことです。アダムとエバが堕落しなければ、神様の真の愛と人間の愛が一点で結着するのです。一点で出発しなければなりません。二つの点になれば、二つの世界になるのであり、二つの方向になるのです。神人一体となって、一つの方向に行くようになれば、一つの方向に現れる個人も完成であり、一つの方向に現れる家庭も完成であり、一つの方向に現れる氏族、民族、国家、世界が完成するのです。愛で一つになります。これが、理論に合うのです。

既成教会と統一教会が異なることは何ですか。統一教会は、神人一体の愛を中心として定着させたのです。既成神学では、神様は神聖で、人間は俗であり罪なものとして定義します。それでは、神様の愛と人間の愛がどのように一つになることができますか。それは、説明することができないのです。

絶対的な神様は何でもできると考えているので問題なのです。したがって、キリスト教が行くところは、血をたくさん流してきました。神様の命令だとして、侵略して奪取したのです。独裁者を出しました。世界は、そのようにはなっていません。神様の本性から見る時、そのようになることはできないというのです。

四) 地上天国と天上天国の解放圏を

(1)地上と天上天国建設は真の愛によって

アダムとエバが堕落しなければ、神様が何をしてあげようとされたのですか。神様が祝福によって結婚式をしてあげ、神様が喜ぶことができる息子、娘を生むようにして、神様が喜ぶことができる家庭を編成し、これを繁殖させて氏族と民族を編成しようとされました。これが、もっと広がれば、その世界は何主義の世界ですか。神主義の世界であると同時に、アダム主義世界です。

その世界に理念があるならば、これは、アダム主義理念であり、そこに宇宙観があるならば、アダム主義宇宙観であり、天宙観があるならば、アダム主義天宙観であり、生活観があるならば、アダム主義生活観だというのです。そして、五色人種がいて、まだらになっていてもかまわないというのです。それは、環境によって変わったことなので、数多くの民族の皮膚の色が異なっていてもかまわないというのです。それでは、どうして数多くの民族の言語が変わったのですか。人類始祖が堕落することによって、天は分立させたというのです。

一つの国を見れば、国が形成されるためには、その国の主権がなければなりません。民族がいなければなりません。国土がなければなりません。そのような観点で、地上に天国を実現するという問題をおいて考えてみるとき、天国の主人は誰ですか。主権者は誰ですか。間違いなく神様が主権者です。そして、

民族は誰ですか。民族は万民です。それでは、国土はどこですか。地球星です。

先生が八十歳までの一代ですべてのものを、霊界を完全に解放するのです。地上天上、夫妻なら夫妻、家庭が天国に入っていくのです。夫婦で天国に入っていかなければならないのであって、一人で入っていくことはできません。地獄の門、天国の門をすべて開いておいて、戻りながら上がっていくのです。自分の先祖が列をつくって番人になり、案内してくれます。

昔は、サタンが自分の欲望を中心として穴を掘っておいて、千年も万年も行くことができないようにしていました。そして、使いをさせるのです。今では、それをすべて撤廃してしまいました。うそのようでしょう。そのようになるのです。見ていてください。なぜですか。霊界の事実がどのようになっているのかすべてよく知っているからです。それをしなければ、後代になって引っ掛かるのです。

地上世界と天上世界の地獄まで平準化させなければなりません。その道を開拓し、平和の天国基地まで、地獄の門を打破して天国の門を開門することができなければならないのです。神様が自由自在に往来できるようにしなければなりません、地上世界と霊界、どこでも……。地獄という恨の門は、神様には意味がないというのです。それをすべて押し倒しておかなければなりません。そのことを誰が知っていますか。

それでは、文総裁がしたこととは何ですか。地上世界と天上世界の地獄までふさがっていた個人的門を壊してしまったのです。それで、ハイウェイを築いておかなければなりません。平準化しなければならないのです。それは、地上ではありません。霊界がすべて平準化しなければならないのです。ですから、家庭的平準化、氏族的平準化、民族的平準化、国家的平準化、世界的平準化、天宙的平準化にならなければなりません。それは、何によって成されるのですか。男性と女性の家庭形成によって成されるようになっています。

真の御父母様は、実体世界において、超民族的な祝福の因縁を中心として祝福しています。これが連結することによって、地上で個人解放、家庭解放、氏族解放、民族解放、国家解放圏が築かれます。その解放圏は、霊界で築かれるのではありません。このように、天国の愛の国まで連結させることができる基盤は、地上にあるので、真の父母を中心としたすべての霊界と肉界が一つになり、統括的な面において総清算して、個人祝福、家庭祝福、氏族祝福、民族祝福、国家祝福、世界祝福、天宙まで祝福の完成を成さなければなりません。

それで、霊界と肉界の祝福家庭の一体化圏が展開することによって、堕落していないアダムを中心とした天国理念の基盤が、歴史始まって以来のすべての家庭を中心として同一的な価値の位置で成立するのです。その地上天国の顕現と天上天国が顕現するところにおいて、神様が臨在されるのです。神様は縦的な父母であり、真の父母は地上を平準化できる横的な父母です。それで、「七・八節」を中心として天地父母天宙安息圏を宣布して、新しい時代が出発することによって、「九・九節」を中心として完全に越えていかなければなりません。

潮水が出ていく時は、悪いものが出ていきます。入ってくる時は、一番後ろから出ていったものが先に入ってくるのです。蕩減復帰するために、同じ水、同じ月を見れば、中間に立ち、この二つが入って一つになる時、そこにぴたっと引っ掛かるというのです。歴史的にこれが一時に水平になる時、プラス・マイナスのように祝福してあげることによって、サタンを完全に追放できるのです。偽りの父母を追い出して真の父母と一つになるのです。

それをしたがゆえに、地獄を撤廃して霊界にいる先祖を結婚させてあげるということが起きるのです。今、数億、数百億、数千億が結婚するのです。霊界を天国にリードするのが私たちの先祖です。地上の後孫は、父の位置と息子の位置を縦的に真の愛を中心として一つにするのです。東洋と西洋を連結させることができる始発点が、真の愛を中心とした家庭基盤です。

これから国家、民族的なグループが連合できる時代に入っていくのです。それで、地上の国と氏族、家庭が連合して統一圏に越えていくのです。このように越えていくことによって、世界は急速に変わります。ここに反対する人々は、サタンが来てほっておきません。今までサタンは、地獄に連れていこうとしましたが、天国に連れていくというのです。このように協助して、先祖まで天国に連れていこうとするので、天国に行くことを妨害する者が存在しません。解放圏ができることによって、急速に未来の世界化時代に越えていくというのです。

霊界は、真の父母主義とアダム主義が現れることを願い、イスラムの群れや孔子の群れや釈迦の群れも、すべて願っているというのです。ですから、統一的な方向を経なければならないので、地上においても真の父母の役事が世界的な基準に上がっていくようになる時、すべての宗教の境界線はなくなり、統合運動が霊界の動きに従って自動的に展開し、その結果が地上で現れるようになるというのです。

それで、統一教会が世界主義になることによって、どのようなことが展開するのかといえば、霊界の霊人たちがみな霊界にいるのではありません。その目的は、地上で完成して逆に入っていかなければならないので、すべて再臨します。すべて地上で活動するのです。世界に広がっている統一教会の食口が先頭に立って、「動きなさい！　動きなさい！　動きなさい！　動きなさい！」と言うことが、数千億になる霊界の霊人たちの願いなのです。ですから、ここに合わせて霊界と一つにしておけば、神様が主管する世界になるのです。真の父母の名前の前に、一つの統一された世界が永遠に継続されるのです。

今、霊界の解放圏まで成し遂げました。霊界と地上の平準化運動を、今しているというのです。春が訪ねてきます。天国の春、地上の春が訪ねてくるのです。今までは、天国に春が来て、地上は夏だったのですが、今は、地上で夏が行き、冬が行き、永遠に続く天国の幸福の理想、すべてを消化して新しい生命を復活させることができる春の季節が地上に訪ねてくるので、地上には、平和の時代が訪ねてきます。それで、統一教会の先生が今していることは何ですか。「世界平和統一家庭連合」をはじめとして、すべて「平和」という言葉が入っているのです。

今、解放時代を迎えたということを考える時、この地球を中心とした宇宙が、どれほど称賛しているか分かりません。どれほどきょうを喜んでいるか分かりません。それで、今年に入ってきょうまで、祝賀する雰囲気一色になったと思うのです。今、私たちがしようとするすべてのことは、天運が従っていきながら助けてくれるのです。天運をつかもうと努力していますが、天運が私たちのあとに従いながら助けるというのです。これは何かというと、神様と霊界が、数多くの先祖と数多くの善の人々を動員して、この地を助けることができる時が来たというのです。解放圏を成すことができ、変革できる時代が来たというのです。

(2)解放圏を完成することを誓おう

神様を何によって解放するのですか。力によってですか。知恵によってですか。神様解放とは何ですか。北朝鮮にいた人々が韓国に来て喜び、韓国にいた人々が北朝鮮に行くようになれば、北朝鮮が解放されて韓国が解放されるでしょう。それは何ですか。神様は、あの天国の玉座にいらっしゃいますが、サタン世界の家庭、あのどん底でも喜ばれます。貧しく暮らす人の家庭に行っても、誰彼問わず、神様を第一に侍れば喜んで幸福を感じられるというのです。

そして、今まで統一教会においては、このような歴史過程を経ながら、先生を中心として解怨成就の話をしてきましたが、解怨とは何ですか。解放しようというのです。ごみ箱のどん底に入っていっても、そこに神様が共にいらっしゃることができる喜びの場があるのかというのです。心を解放しようとするならば、ごみ箱までも自分の心に合わないものがなく、すべて「良い」と言うことができる立場にならなければなりません。それでこそ解放されるのです。それが引っ掛かれば解放されません。

真の愛を完全にもってこそ、神様が創造なさったこの世界のすべてのものを、私が再現させることができます。それは、どういう意味ですか。真の愛の完成を成した人は、神様のようにつくってみたければつくり、なくしてみたければなくして、思いどおりの生活をすることができるというのです。何であっても自由自在にできます。直感をもって、全能的な体験をすることができるというのです。

真の愛をもてば、すべて征服できます。神様も征服でき、サタンも征服できます。ですから、先生を通して神様が解放されるのであって、神様を通して先生が解放されるのではありません。ですから、霊界で堕落の時から取り戻そうとしてきたその価値的なすべてのものを、地で成し遂げようというのです。そのことが成されれば、天地がひっくり返ります。

先生の八十年の生涯で、神様を解放しなければなりません。そのようにしようとするので、霊界から地上世界に至るまで、すべて蕩減復帰し、解放圏のためにイエス様が死んだ事実を解いておかなければならないのです。そうでなければ、再臨する道がないというのです。キリスト教文化圏によって統一天下ができる時は、すべての条件を越えていけますが、統一天下ができない基盤において、来られる主人に侍ることができずに反対する時は、すべてサタンの罠に捕らえられていくのです。

それゆえに、文総裁は、荒野に追い出されて一人です、一人。父母までも私を理解できませんでした。ですから、ここから再び上陸して、歴史的なすべての蕩減路程を四十年以上歩んできたのです。

先生の時代は、すべてのものが解放です。すべてのものが解放された位置に立ちました。その解放された価値は、到底言い表すことができません。歴史時代に数多くの先祖から、神様の分別的歴史の価値を積み重ねて、積み重ねて、積み重ねて解放圏をつくったという事実を考える時、それ自体である私たち祝福家庭は、全体の解放された位置にいるので、すべての被造世界の汚れたものから光栄なものまで、全体を身代わりした祭物だというのです。祭物のような位置に立っているということを知らなければなりません。

心情圏は、どれほど素晴らしいところですか。億千万金を与えても買うことができません。地球ほどのダイヤモンドを与えても買うことができないのです。そのように貴いのです。宇宙を与えても取り替えることができないほど貴いのです。心情圏を中心として、主体と共に相対関係を結ぶので、宇宙が私のものになるのです。神様までも私のものになるのです。そのような人間の価値基準を自ら知って、その中で解放者として天宙を闊歩しながら、愛で抱いてすべてを指示し、私の要請によって天下万象が和合し呼応する、そのような自由解放圏をもつことができる人間の特権が、どれほど驚くべきものなのかというのです。これが統一教会の誇りです。

私たちの先祖が真の御父母様です。真の御父母様の恩恵によって従っていくのです。あの下の霊まですべて清算しなければなりません。これが、二次になる時は、完全に門を越えていくことができます。蘇生、長成、完成を越えれば、三次、この二〇〇〇年までに真の御父母様は、この地に真の父母として来て偽りの父母が傷つけたすべてのものを整備できるように、一つの新しい天地法を発表します。天地解放法です。

それで、最近、「家庭盟誓」の文に八節が加えられたでしょう。「成約時代を迎え、絶対信仰、絶対愛、絶対服従によって、神人愛一体理想を成し、地上天国と天上天国の解放圏を完成することをお誓い致します」です。解放ではなく、解放圏です。皆さんの家だけではいけません。皆さんの国、皆さんの世界を、地上で完全に責任をもたなければならないのです。

真の御父母様の勝利圏を相続しようとするならば、絶対服従、絶対従順、絶対信仰で生きなければなりません。血を流して、汗を流して、すべてのものを犠牲にしても、真の御父母様のために生畜の祭物になるという心情一致圏を中心として、真の御父母様が愛する以上の愛をもっていてこそ、真の御父母様が解放されるのです。真の御父母様が人類を愛する以上に愛する、そのような社会になってこそ、神様の解放圏が生じるというのです。そのようなことができる息子、娘をもつことによって、初めて息子、娘を称賛し、息子、娘を愛しながら自分が喜ぶことができる解放圏が生じるというのです。

神様を軸にした東西南北三六〇度の平面圏は、永遠不滅の九〇度が定立するのです。絶対、唯一、永遠、不変の四大圏が成立するというのです。絶対は東、唯一は西、永遠は南、不変は北で四大圏です。この四大圏が、絶対心情の中心に平面の九〇度を立てれば、それをどのように延長させて回しても、妨害になるものがないのです。地上天上、東方を中心として、逆にこれを一八〇度反対に回しても同じです。東西南北を反対にしても、天宙のすべてが共に和合するというのです。そこに反発する障害物は、一つもないというのです。それが解放圏です。分かりますか。解放圏です。地上天国、天上天国の解放圏とは、そのことをいうのです。

偉大だということは、顔や体が偉大なのではなく、思想が偉大なのです。神様までも動かざるを得ず、神様までも私についてこなければならないという精神、それが偉大なのです。愛の目的を達成できない神様を、私は愛で解放することを主張するのです。愛の目的を成就できない恨をもった神様が、今日レバレンド・ムーンと出会って解放されたということは理論によるものです。妄想ではありません。体系的な理論、科学的なデータによる実証的結果によってこれを主張するのです。